

ONE PIECE —LOG
COLLECTION : ELEANOR

春風駘蕩

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——痛みのない教訓には、意味がない。人は何かの代償なしに何かを得ることはできないから。

海賊王ゴールド・ロジャーが残したひとつなぎの大秘宝を求めて、数多の海賊たちが往く時代。

麦わら帽子を被った少年モンキー・D・ルフィと不思議な少女アイザック・エレノアは、海へと飛び出した。

荒くれ者たちが集うこの時代、彼らがこの世界にもたらす変革とは一体なんなのか。壮大な冒険の序章が、幕を開ける。

綴られるのは、
妖術師ウイザードと呼ばれた少女の記録——。

目次

第0話	“ROMANCE DAWN”	2
第1章 英雄の器		
第1話	“コビーの夢”	49
第2話	“海賊狩りのゾロ”	64
第3話	“虎と狐と鼠”	78
第4話	“英雄の器”	94
第5話	“ルフィとコビー”	106
第2章 道化のバギー		
第6話	“海を識る女”	121
第7話	“道化のバギー”	134
第3章 海賊旗が呼んでいる		
第1話	“最初の一步”	195
第2話	“キャプテン・ウソップ”	208
第3話	“偽れぬもの”	222
第4話	“嘘つきの誇り”	234
第5話	“坂道”	246
第6話	“リミッター”	263
第7話	“無音の男”	278
第8話	“虚構の信頼”	291
第8話	“犬と少女と老人”	149
第9話	“町長の宝物”	165
第10話	“VERSUS!!”	178

	第19話	“賢者と愚者”	306
320	第20話	“海賊旗が呼んでいる”	
	第4章	戦うコック	
	第21話	“二人の賞金稼ぎ”	335
	第22話	“バラティエ”	346
	第23話	“新入り二人”	361
	第24話	“戦うコック”	374
	第25話	“落ち武者”	388
	第26話	“ならず者たちへの洗礼”	
399	第27話	“頂点に立つ男”	413
	第28話	“トリオ”	427
	第29話	“同じ夢”	444
	第30話	“信念の槍”	458
	第31話	“また逢おう”	472
	第5章	アーロンパーク	
	第32話	“アーロンパーク”	486
	第33話	“偉大なる航路（グランドライン）の怪物”	496
	第34話	“魔女ナミ”	512
	第35話	“たった一人の戦い”	
526	第36話	“今こそ立ち上がれ！”	
	第37話	“魚人海賊”	555

	第38話	妖術師(ウイザード)エレノア	572
	第39話	私と一緒に死んで!!!	
585	第40話	三人目	599
	第41話	回れ風車	612
	第6章	船出の時	
	第42話	偉大な海から来た女	
626	第43話	機械鎧(オートメイル)技師	
	ウインリイ		639
	第44話	道化、再び	650
	第45話	天の采配	665
	第46話	船出の時	
	第7章	再会の約束	
	第47話	いぎ、偉大なる海へ	
697	第48話	腹の内	710
	第49話	再会の約束	725
	第50話	記憶を受け継ぐ者	
739	第8章	賞金稼ぎの巣	
	第51話	最初の島	753
	第52話	賞金稼ぎの巣	768
	第53話	ウイスキーピークの稼ぎ頭	781

第54話	“夜は終わらない”	794
第55話	“三つ巴”	810
第56話	“秘密結社”	828
第57話	“前へと進め!”	843
第58話	“罪人たち”	858
第9章	強者の誇り	
第59話	“古代の島”	871
第60話	“世界一の大喧嘩”	887
第61話	“強者の誇り”	902
第62話	“卑怯者”	916
第63話	“死ぬまであがけ”	930
第64話	“リベンジマッチ”	946
第65話	“鋼”	963

第66話	“裏方の仕事”	978
第67話	“エルバフの槍”	994
第10章	冬に咲いた桜	
第68話	“悲劇は突然に”	1011
第69話	“雪空の襲撃”	1027
第70話	“いらぬプライド”	1044
第71話	“魔女のいる城へ”	1061
第72話	“悪魔の研究者”	1077
第73話	“野生の力”	1092
第74話	“雪上の戦い”	1071
第75話	“二人のバケモノ”	1125
第76話	“傷ついた心”	1141

第77話	“医者の意地”	1158
第78話	“人間失格”	1174
第79話	“お前を否定する”	1191
第80話	“君の背中を押すために”	1207
第81話	“冬に咲いた桜”	1224
第11章	砂漠の王国〈前編〉	
第82話	“偽りの英雄”	1240
第83話	“仲間の印”	1255
第84話	“炎の男”	1274
第85話	“君に加護あれ”	1289
第86話	“砂漠の王国”	1304
第87話	“雨を呼ぶ粉”	1318

第88話	“枯れたオアシス”	1333
第89話	“過去の大罪”	1349
第90話	“真理の扉”	1368
第91話	“帰還者達”	1386
第92話	“倒すべき敵”	1401
第93話	“虎穴へ入る”	1415
第94話	“悪意が蠢く”	1430
第95話	“手も足も出ない”	1446
第12章	砂漠の王国〈後編〉	
第96話	“焰”	1459
第97話	“先に行け”	1472
第98話	“正体不明(アンノウン)”	1487

第 108 話	“裸の王様”	1642
第 107 話	“クソ食らえ”	1628
第 106 話	“無能”	1610
第 105 話	“祈りよ届け”	1593
1577	第 104 話 “タイムリミット”	
	第 103 話 “守ってみせる”	1562
	第 102 話 “白旗を振れ”	1547
1532	第 101 話 “傷の男（スカー）”	
1517	第 100 話 “漢を見せろ野朗共”	
	第 99 話 “当ててみなよ”	1502

第 119 話	“森の司令塔”	1810
第 118 話	“同志よ”	1796
第 117 話	“嘘つきの子孫”	1779
第 116 話	“海底探索王”	1764
第 115 話	“怯える天使”	1750
第 114 話	“夜”	1734
第 113 話	“サルベージ王”	1718
第 112 話	“遺物の記録”	1703
1687	第 111 話 “おしかけ考古学者”	
	第 13 章 空へのロマン	
	第 110 話 “切れない絆”	1671
	第 109 話 “別れの時”	1658

- | | | | | | |
|-------|-----------|------|-------|---------------|------|
| 第129話 | “生贄の祭壇” | 1960 | 第138話 | “強者共の宴” | 2090 |
| 第128話 | “罪人” | 1946 | 第137話 | “空の主” | 2075 |
| 1932 | | | 第136話 | “都市の遺言” | 2061 |
| 第127話 | “不法入国者8名” | | 2047 | | |
| 第126話 | “神の住む島” | 1919 | 第135話 | “優しく残酷な試練” | 2032 |
| 第125話 | “スカイピア” | 1904 | “ | | |
| 第124話 | “天国への門” | 1889 | 第134話 | “スカイ・アドベンチャー” | |
| 第123話 | “白い海” | 1872 | 第15章 | “神の住む島へ中” | |
| 第14章 | “神の住む島へ上” | | 第133話 | “神官” | 2018 |
| 第122話 | “天まで届く道” | 1857 | 第132話 | “鬪腰の右目” | 2005 |
| 第121話 | “空へのロマン” | 1842 | 1991 | | |
| 1825 | | | 第131話 | “引き裂かれた島” | 1975 |
| 第120話 | “朝までには戻る” | | 第130話 | “お前は誰だ” | |

第167話	“麦わらVS銀ギツネ”	2508
第166話	“返せ!”	2494
第165話	“人間球技”	2481
第164話	“見届けやがれ”	2467
第163話	“何でもあり”	2453
第162話	“人取り合戦”	2438
第161話	“ヤオ・リン”	2425
第160話	“行き先決定”	2409
第17章	人取り合戦	
第159話	“ピースを繋ぎ合わせる”	2394
第158話	“庭に埋めた罪の証”	

第175話	“一流の職人達”	2622
第174話	“一家とファミリ”	2607
第173話	“ガレーラカンパニー”	
第172話	“船大工の島”	
第171話	“海列車”	
第18章	ガレーラカンパニー	
第170話	“厄介な女”	
第169話	“青雉”	
第168話	“仲間は渡さない”	2537
第167話	“一流の職人達”	2522

2636

25942580

25672553

第20章 暴走海列車

第193話 // 奴らを追え!

第194話 // 死を覚悟せよ

第195話 // 暴走海列車

第196話 // 同志よ!!?

第197話 // 謎のヒーロー

第198話 // 刺客達

第199話 // 口ほどにもない

2979

第200話 // 恐怖の楔

第21章 世界を敵に回してでもへ前編

第201話 // 合流

第202話 // 不夜島

30223006

2993

296529512936292229072892

第203話 // 突撃!!?

第204話 // ここは請け負った

3053

第205話 // 行け

第206話 // 最悪の事態

第207話 // 死にたい

第208話 // 生きたい!

第209話 // 世界を敵に回してでも

第210話 // 鍵を獲れ

第22章 世界を敵に回してでもへ後編

第211話 // 騎士道

第212話 // 戦手交代

31683153

31383124

3109309430803066

3037

3302	第221話	君想う、故に君在り	3287	第231話	報せ	3441
	第220話	迎えに来たよ		第235章	白と赤と黒	
3271	第219話	燃える島からの脱出	3256	第229話	ごめん	3414
	第218話	ココロの正体	3240	第228話	義兄弟の誓い	3400
	第217話	砲撃開始		第227話	獅子の船	3387
3224	第216話	強欲(グリード)		第226話	義理を果たす	3373
	第215話	大總統		第225話	恨み辛みは水に流して	3358
	第214話	狙撃の王様	3209	第224話	納得の血筋	3344
3181	第213話	恩義は返すもの	3194	第223話	拳骨のガープ	3331
	第23章	君の名は		第222話	仁義を通す	3318

第232話 “白と赤と黒”

3454

第233話 “おれの女に手を出すな”

3468

外伝 Episode of STORY

ONG WORLD

第壹話 “最悪の冒険”

3481

第貳話 “弱肉強食世界”

3495

第参話 “空飛ぶ船”

3508

第肆話 “伝説の海賊”

3523

第伍話 “突撃と奪還”

3538

第陸話 “搾取される村”

3552

第漆話 “雨隠の蜜事”

3566

第捌話 “計略の海”

3582

第玖話 “男達の意地”

33599

第拾話 “自由を求めた男”

33613

第拾壹話 “支配を望んだ男”

36263

第拾貳話 “宣戦布告”

36393

第拾参話 “仁義激突(ブレイクアウト)”

”

第拾肆話 “大乱闘”

36703

第拾伍話 “天空大決戦”

36843

第拾陸話 “絶えぬ王の血筋”

36993

第拾漆話 “終幕と幕間”

37143

第24章 恐怖の島の支配者(前篇)

第234話 “覇氣使い”

3727

第235話 “霧の海”

37423

第236話	“ガイコツ紳士”	—	3771
第237話	“魔の島へ”	—	13757
第238話	“スリルとサスペンス”	—	
3876	第239話	“恐怖の島の支配者”	
3801	第240話	“怪物達の歓迎”	3817
	第241話	“死者達の闘技場”	
3832	第242話	“No. 66”	
	第243話	“魔人と鬼神”	
	第244話	“50年の軌跡”	
	第245話	“影を取り戻せ!!?”	
			387738623847

	第246話	“仏の沙汰は僧が知る”	3892
	第247話	“目覚める若者達”	
3923	第248話	“鬼神”	
	第249話	“進撃のオース”	
	第250話	“一丸となる力”	
	第251話	“命の火”	
	第252話	“希望の双星”	
	第253話	“狂戦士対決”	
	第254話	“陽の下へ”	
			4034401840013985396939533938

4153	第262話	〃空からの訪問者〃			
4139	第261話	〃伝説からの誘い〃			
	第26章	太古ノ王へⅠ	4126		
	第260話	〃命の紙(ビブルカード)〃		4112	
4096	第259話	〃最期の大演奏〃			
	第258話	〃なにもなかった〃			
	第257話	〃暴君の蹂躪〃	4080	4065	4050
	第255話	〃悪夢の終わり〃			
	第256話	〃無粋を晒すな〃			

	第272話	〃旅は道連れ世は情け〃	4291		
	第271話	〃古の悪魔〃			
	第27章	太古ノ王へⅡ	4274		
	第270話	〃ハッピーバースデイ〃			
	第269話	〃メダルの怪物〃	4258	4242	4227
	第268話	〃空っぽの少女〃			
	第267話	〃ヒノ・エール〃			
	第266話	〃オーバーテクノロジー〃		4212	
	第265話	〃価値なき宝〃			
	第264話	〃孤島の国〃	4197	4183	4169
	第263話	〃地図にない島〃			

	第291話	“王の落とし胤”		4614
	第29章	古代の王〈Ⅳ〉		
	第292話	“流刑島の姫”		4628
4643	第293話	“一人は皆の為に”		
	第294話	“居場所”		4663
	第295話	“力が欲しいか”		4681
	第296話	“これでいい”		4701
	第297話	“不気味な会合”		4719
	第298話	“狂気の儀式”		4738
	第299話	“奪われたもの”		4757
4777	第300話	“神様なんていない”		

第301話 “虚の王国”

第0話 “ROMANCE DAWN”

「——俺の財宝か？ 欲しけりやぐれてやるぜ…探してみろ、この世の全てをそこに置いてきた」

死刑台の上で、死を目前にしながらも笑つてみせたその男、世界最悪の犯罪者 “海賊王” ゴールド・ロジャー。

彼が放つた一言は、全世界の男たちを海へと駆り立てた。

力こそが正義、荒くれ者共が暴れまわる大海賊時代の幕開けである。

海賊王の処刑から22年の時がすぎた現在でもその興奮は醒め遣らず、腕に覚えのある者たちは海で冒険に挑み、力無き人々は海賊たちの暴力に怯え、世界は未だ混沌の最中であつた。

そんな時代に一人、あまりにも無謀で大きな夢を抱いて、最弱の海と呼ばれる東の海イーストブルーから飛び出した少年がいた。

その名を、モンキー・D・ルフィ。

しかし、その隣にはもう一人同行者がいた。夢に命をかける無謀な少年の行く末を見届けるため、“彼女” もまた荒くれ者たちの海へと挑む。

その名を、アイザック・エレノア——。

??

広い広い海原を、一艘の小舟が漂っていた。

遠くからみれば木片にしか見えないであろうその小舟の上には、二つの人影が見えた。

その片方、赤いシャツに半ズボンを纏い、そして麦わら帽子を被った少年が、心地よさそうに小舟の先頭から海と空を眺めている。

無謀にも海を小舟で進んでいるこの少年の名はモンキー・D・ルフィ。海の危険など知ったことかと言わんばかりに笑顔を浮かべる彼は、ぐんつと背筋を伸ばして気の抜けた声を漏らす。

「いんやあく、気持ちのい〜い日だ。絶好の航海日和だな〜！」

「……よく呑気に笑っていられるね」

ケラケラと笑って青い空を見上げるルフィに、小舟の後ろに座っているもう一人の船員クルーが、可愛らしい声で非難がましい意見をぶつけた。

その姿は、なかなか奇妙だった。全身をすっぽりと覆うフード付きマントに身を包み、青い目以外の顔の部分は全く見えない。背丈はルフィの半分程度しかなく、声を出さなければキノコの置物ぐらいにしか見えないだろう。

明らかに不機嫌そうな同乗者に、ルフィは何を怒っているのかと不思議そうに眉を寄せて振り向いた。

「なんだよ、エレノア。こんな気持ちのいい天気なのによく。何に怒ってんだよ?」

「うん……確かに風も天気も波も穏やか、絶好の航海日和で昼寝でもしたら最高だろうね。……でもさ」

フードの奥の青い瞳をギラリと光らせ、エレノアと呼ばれた船員はくいつと傍にあつた袋を持ち上げてみせる。

しわくちやになったその袋から、芯だけになったリングゴが一つだけコロんと転がり落ちる。このリングゴの残骸こそ、彼女の不機嫌さの原因である食料の現状であった。

「どういふ神経をしていたら一週間分の食料を3日で食い尽くしちゃうのかな君は……?」

「あ、ヤベエ本気でキレてる」

「当たり前だ!!?」

ドカーンと噴火でもしそうな勢いでエレノアはルフィを怒鳴りつける。さつきまで陽気に船旅を楽しんでいたルフィも流石に神妙な顔で向き直った。

「一番近くの島まで余裕でたどり着ける量だったんだよ本当なら!!? それをなんで予定の半分以下の期間で全滅させちゃうのかな!!? そんなに死にたいのかな君は!!?」

「腹減ったからつい」

「聞いた私がバカだったよ!!?」

無謀というか阿呆な少年の考えにエレノアはハーツと深く深くため息をつく。迂闊だったのは自分の方だ、この男の考えのなさを考慮しなかった自分が一番悪い、と割と失礼なことを平気で考えて自己嫌悪に陥る。

「こうなったらあとはもう無心で漕ごう。体力馬鹿の君なら丸一日漕いでれば予定を前倒しして次の島に着けるでしょ」

「おう、サラツとひどいなお前」

「あん?　なんか文句あんの?」

「……めんなさい」

キラーンと光るエレノアの目に本能的に命の危機を感じ取ったルフイは、命じられるままにオールをつかんでえっさほいさと漕ぎ始めた。触らぬ神に祟りなし、という言葉は誰から聞いたのだったか。

ほぼ波任せだった船の推進にルフイの漕ぐオールが加わり、小舟はぐんぐんと前に進んでいく。その後方でエレノアが舵を操作し、進路がずれないように微調整を加えていった。

「前方異常なし。全速前しーん」

「あいあいさ……つて逆だろ!!? 船長はオレだぞ!!?」

「あ。ごめんごめん」

いつの間にか立場が逆転していると気づいたルフィが慌てて修正する。すでに上下関係が構築されている気がしなくてもなかったが、それを指摘するとめんどくさそうだったのでエレノアはあえて何も言わなかった。

そんな調子で航海を続ける二人だったがある時、舵取りをしていたエレノアがピクツと顔を上げ、進行方向から右手に視線をずらした。

「……ルフィ、警戒して。なんか近づいてくるよ」

「ん? おう、わかっ……」

オールを漕ぐ手を止めたルフィが、様子の変わったエレノアの向いた方向をにらんで袖をまくる。敵が来るのかと身構える二人だったが、ふと奇妙な音が聞こえて来るのに気づいた。

ヒュルルル、と何かの風切音がみるみるうちに近くなっていき、急に小舟の上に何か落下してきた。足元に結構な衝撃が走り、一瞬だけ小舟が宙に浮いた。

「わっ」

ぐわんと揺れた小舟にしがみつき、ルフィとエレノアは落とされまいと腰を落とし踏ん張る。いち早く立ち直ったルフィは、落下してきた何かを両手で持ち上げて

みせた。

「……なんだこいつ。変なパンダだな」

「いや、鳥じゃない？」

落ちてきたのは、人の背丈ほどはある大きな鳥だった、のだが目の周りや羽が黒く、丸く黒い耳もあるため確かにパンダにも見えた。つまるところかなり不気味な生き物だった。

だがどんなに気持ち悪い生き物であろうとルファイには関係がなかった。せつかく手に入れた食料を前にダラダラとよだれを垂らし始める。

「なんにしてももうけた！ これで飢え死にせずすみそうだ！」

「!!？」

「ルファイ、食べることには賛成だけどき」

「!!？」

「それよりも下、下」

「ん？」

目を細めたエレノアの指摘に、ルファイは言われるがままに視線を下に向け、そして「げ!!？」と目を見開いて固まった。

なんと鳥がぶつかった拍子に傷ついたのか、小船の船底には穴が空きゴボゴボと海水

が入り込んでいたのだ。

食われることを恐れた鳥が飛んで逃げようとするが、そうはさせるかとルフィが鳥の横腹を掴み船底の穴に押し付ける。栓をしたおかげで浸水はある程度止められ、辛うじて今の所沈没は免れていた。

「クエーツ!!? クエーツ!!?」

「動くなよ……いまお前のケツで穴塞いでるんだからな。エレノア、今のうちに塞いでくれ」

「んー、そうしたいのは山々なんだけどさ……」

ルフィがエレノアに頼むが、返答は曖昧だった。何か不都合でもあったのかと尋ねようとしたルフィだったが、それよりも先に辺りの異常に気がついた。

夜が訪れたわけでもないのに、辺りが急に暗くなってきたのだ。見上げれば燦々と太陽が輝いているのに、ルフィとエレノアの周りだけがひどく暗い。小舟が何かの影の中に入り込んでいるとルフィが気づいたのは、頭上から声が聞こえてきてからだだった。

「バルーン! 早く逃げて!!? 殺されちゃうわよ!!?」

顔を上げて振り向いてみれば、小船の近くにはかなり大きな船が一隻。下から見える帆や旗に描かれたマークから察するに、昨今になって増えてきた海賊船の一つだろう。船の大きさからしてかなり大規模な一団が乗っているようだ。

「……っはー、でっけー船」

「ガレオン船か……この辺りじゃ珍しいね。かなりの大物が乗ってるのかもしれない。気をつけて」

冷静なエレノアの言葉もあまり聞かず、ルフイが呆然と口を開けて船を見上げていると、また鳥がバタバタと逃げ出そうとして暴れ始めた。

沈んでたまるかとルフイが再び「こんにやる！」と押さえつけていると、近くに寄つて来た海賊船の縁からバラリと縄梯子が降ろされてきた。縄梯子はスルスルと伸びていき、ちょうどルフイとエレノアの目の前に先端が届いた。

「？」

目の前に降ろされた縄梯子に首をかしげるルフイと警戒するエレノアに、船の上から声がかけられた。

「——その鳥を捕まえてくれて礼をいうぞ。さあ、そのハシゴを登つてその鳥をこっちに渡してくれ」

銃を担いだ男が一人、二人を見下ろしてそう言った。逆光のために顔はよく見えなかったが、辛うじて笑っていることだけはわかった。

だが、エレノアの青い瞳はその男が浮かべている笑顔が、いやらしくゆがんだ下卑たものであることを見抜いていた。

「——なんてことしてくれたのよ!!?」

繩梯子を登り、海賊船の上にとどり着いたルフィとエレノアを最初に出迎えたのは、一人の少女の激しい叱責の声だった。

船の中央のマストに、ショートヘアーの少女が縛られて立たされている。その周囲を柄の悪い男たちが取り囲んでいて、ニヤニヤと少女を見下ろしたり、あるいは訪問者たちであるルフィとエレノアを睨みつけてきたりしている。どう見ても、あまりいい雰囲気ではなかった。

海賊たちに囲まれている少女——アンは微塵も臆する様子はなく、船に上がり込んだルフィたちをキツと睨んで声を張り上げた。

「バルーンを連れてくるなんて……見てたわよ!!? あんたたちが捕まえているところ

!!?」

「?」

「なんだお前。あのパンダの飼主か?」

「パンダじゃないわよ!!? 怪鳥よ!!? それにペットじゃなくて友達!!?」

くわつと凄まじい表情で吠えるアン。縛られているのになかなかの気迫だ。

一方でアンの罵倒を聞いていたエレノアが、ふと耳にした名前に目を見張った。

「怪鳥^{ルック}!? ……なるほど、狙われるわけだ」

「ん? エレノア、なんか知ってんのか?」

「えつとね」

仲間が何を理解したのかわからず、首を傾げたルフィにエレノアが説明しようとした時、海賊の一人が船室から飛び出し、仲間に声を張り上げた。

「船長のお出ましだ!!? 並べ野郎ども!!?」

その声に、船員たちの間に緊張が走った。ぞつと顔を青く染めた彼らは急いで二列に並び、船室から続く道を作った。微動だにしない直立の姿勢は小刻みに震えて、冷や汗が滝のように流れ出している。

ただ船長を迎えるだけの雰囲気とは思えない張り詰めた空気に、ルフィとエレノアは訝しげに目を細めた。

「なんだ? どうしたんだあいつら?」

「お出迎えにしては……ずいぶん大仰だね」

「きた……あいつが!」

船員たちの表情は、まるで死を目前にしているようだ。

そんな二人の疑問に答えたのは、船員たちと同じように震えながらも、必死に耐えているアンダ。恐怖に屈しそうになっているものの、それを押し殺しているようだった。

エレノアはアンのそばまで寄り、声を潜めて尋ねてみることにした。

「……彼らがあそこまで怯えるなんて、何者なの？ この船のキャプテンは」

「……“六角”のシユピール。この辺りで恐れられている海賊で、魔術使いよ」

「！」

アンが言った言葉に、エレノアが何故か目を細めた。反対にルフィは口をへの字に曲げ、意味がわからないといった表情を浮かべた。

「魔術……？」

「ええ、そうよ。あいつの怒りに触れたら、街一つだつて簡単に消し飛ばしたつて話もあるんだから」

「……………ふーん」

なぜだかはわからないが、エレノアはどこか不満げな声で相槌を打っていた。フードの下で目を細め、海賊たちが作る道の先に現れた男を睨みつけた。

そこに、六角のシユピールはいた。面長の顔で、自分の髪を左右で三つ、合計六つに束ねていて、独特な髪型は確かに六本の角のように見える。一度目にすれば忘れる方が難しそうな、インパクトのある見た目だ。

しかしそんな見た目を別にしても、常人とは思えない怪しさと不気味さを感じさせる雰囲気か漂っていた。

「ご苦労だったな。…それにしても小舟で二人旅とは妙な連中だな」

小さな細い目からじろじろと無遠慮な目を向け、ルフィとエレノアを見下ろすシユピール。明らかに見下したような視線に、対象ではないアンも嫌悪感で表情を歪ませた。

だが、当のルフィとエレノアは何やら顔を寄せ合うと、ヒソヒソと囁き始めた。

「……なー、エレノア。あれさ」

「……うん。私も思った」

反対にシユピールの顔を無遠慮に観察しながら、何かを同意し合う。訝しげな表情になるシユピールに氣遣うことはなく、ちらちらと視線を向けては聞こえない大きさの言葉を交わす。

そしてやがて口にした。

「「すげー変な頭」」

決してこの船では、言うてはならないことを。

「ん？」

ザワツ……と海賊船に冷たい風が吹き抜ける。誰もが目を見張り、耳を疑い、あるい

は気絶した仲間を抱きかかえ静かに狼狽する。

この船では船長が絶対であり、逆らうことは許されない。機嫌を損ねでもすれば船員でさえもタダではすまず、まず生きては帰れない。なんのためらいもなくばかにしたこの二人が、タダですむはずがなかった。

捕らえられているアンも、サーツと顔面を真っ青にして震え始めた。

「あんたたち……!!?　なんてことを!!?」

「だって見ろよあれ」

「おっかしー」

船の空気が凍りついて行くことを全く気にしていないのか、当の本人たちはケラケラと笑い転げている。その無謀さに、アンは開いた口が塞がらなかった。

「……………!!?」

シュピールの額に無数の血管が浮き出し、ピクピクと痙攣を始めた。毎日セットに時間をかけ、自慢とも言える髪型をバカにされた魔術使いは、凄まじい殺気とともに震える声を張り上げた。

「こいつらを牢にぶち込んでおけ!!?」

??

「いー景色だなー」

「牢屋にしては破格だよねー」

ガレオン船の奥の倉庫の横に位置する鍵付きの部屋に、ルフィとエレノア、アンは入れられた。ジメジメとした船室はどう考えても居心地最悪であったが、二人ともそんなことを感じさせないほどあっけらかんとしていた。

「……あんたらを殺してやりたいわ」

「やめてくれ」

「……何言つてんだか。殺されそうだったのは君の方でしょ」

「まあ、そうだけど……」

自分が危険なことをしていた自覚はあるのか、アンはそれ以上反論できずに唇を尖らせた。

膝を抱えて丸くなる少女に、エレノアは小さくため息をつくとぼりぼりと頭をかき、隣にちょこんと腰掛けた。

「そもそもさ、なんで君は捕まってたの？ どう見ても一般人にしか見えないけど」

「かわいいからよ」

「……………」

間髪入れずに応えたアンに、じとつと疑わしげな視線を送るエレノア。本気で言っているのか、とでも言いたげだったが口にはしなかった。

「お、おう。そうか」

「……あつそ」

ルフィは戸惑いながら、エレノアは興味を無くしたように目をそらし、再び海を眺める作業に没頭し始めた。あまり突っ込むのも後々めんどくさそうだと顔に出ているが、幸いアンには見えていないようだった。

「そういうあんたたちこそ、なんでこんな海を小舟で旅してんのよ」

アンはそう言つて、色々と見た目に差がありすぎる二人組に改めて問いかける。小舟で旅をしていたことといい、関係性の見えない見た目といい、一体何者であるのかさえ判断がつかなかった。せめて旅の目的ぐらいは聞かせてもらおうと、アンはじとつとした視線で二人に尋ねた。

そんな案に、ルフィが満面の笑みを浮かべて答えてみせた。

「ひとつなぎの大秘宝スビーを探しにいくんだ」

その言葉に、アンは一瞬だけ思考が停止する。数秒固まっていた彼女はようやく再起動を果たし、ルフィの方を振り向いて大きく目を見開いた。

「ハア!?？」

あんぐりと口を開けて言葉も出ない様子のアンに、ルフィはしししと誇らしげに笑っていた。

「それって……偉大なる航路グランドラインに向かうってこと!!? たった二人で!!?»

「おう。けど今は仲間探しかな」

「まだ私だけなんだけどねー」

「……………!!? バカすぎる……………!!?»

のんきに笑っているルフィとエレノアに、アンは開いた口が塞がらないと言った様子であきれかえり、壁に後頭部をぶつける。

「バカすぎるわよあんたたち……………!!? あの海賊王が死んでから20年……………誰もいまだ見つけていない、そもそも実在すら怪しい伝説よ!!? 本気で死にいくようなもんじゃないの!!?»

アンは自分で言って、よりその夢の無謀さを感じ取ったらしい。肩をすくめ、小馬鹿にしたようにため息をついた。

「はっ……………呆れた。何を考えているのかと思ったら……………そんなバカなことを……………」

「……………それでいいんだよ」

かける言葉さえ見つからない様子のアンに、逆にエレノアの方が呆れたように言った。

視線を向ければ、フードの下の青い目を光らせているエレノアの姿が目に入る。その声は、ルフイの夢を笑うアンに少しだけ怒りを覚えているように棘が混じったものだった。

「私は、つまらない男についていくつもりなんてない。とんでもない大法螺を吹いて、それを現実に変えるくらいの野望を持つてくれなきゃ、私はこいつと一緒にいこうなんて思わなかったよ」

「……相棒が相棒なら、あんたもあんたよ」

「そんなことは百も承知だよ。ね、ルフイ」

「ああ。俺は命をかけて、この夢を追うって決めたんだ」

エレノアに背中を押されたルフイはそう言つて、麦わら帽子の以前の持ち主——故郷の村に長く停泊していた優しい海賊・シャンクスとの約束を思い出していた。

彼に憧れ、彼と彼の仲間の後を追ひ、海賊になりたいと夢を持った。だがシャンクスは、共に行くことを許してくれなかった。

自ら頬にナイフで傷をつけ、度胸を示して見せたが彼の答えは変わらなかった。『お前のようなガキを連れて行けるか』、と頑なに拒んだのだ。当時のルフイはただバカにしているのだと思い、憧れながらも反発していた。

だがとある事情でルフイが窮地に陥った時、その真意を知ることになった。海の主と

も言える巨大な海生物に食われかけたルフィを、シャンクスは文字通り身を張って助けてくれた。

左腕を、犠牲にして。

彼は知っていたのだ。海の過酷さも、ルフィの非力さも。

だが彼は怒らなかつた。友達の命に比べれば安いものだ、笑ってみせたのだ。

ルフィは改めて、シャンクスという男の偉大さを知ってより強い憧れを抱き、己もそんな男になりたいと思つた。

麦わら帽子は、彼との別れの時に渡された物だつた。

——この帽子を、お前に預ける。

俺の大事な帽子だ。

いつかきつと返しに來い、立派な海賊になつてな。

「この帽子に、シャンクスに誓つたんだ!!?」

少年の大いなる野望は、10年の時を超えてもなお健在であつた。

「俺は、海賊王になるつてな!!?」

「……………」

「ルフィ」

誇らしげに帽子をかぶるルフィに、アンは氣圧されたように呆け、エレノアはウンウ

ンと満足げに頷く。

アンはドクンドクンと騒ぐ胸を押さえ、ルフィとその頭に在る麦わら帽子をじつと見つめる。

「……大事なものだっただ。その帽子」

「ああ、俺の大事な宝だ」

迷うことなくそう言つてのけるルフィに、アンはふと考える。

自分には、そこまで胸を張つて言えるものがあるだろうか。命をかけてでも、世界に喧嘩を挑んでも貫きたいと思う意志が、守りたいと思う何かがある。

その脳裏に、自分の親友の姿が浮かんだ。

「……私にとっては、バルーンがそうだわ」

それだけは、はつきりと言える。誰になんと言われようと、彼は自分の大切な宝である。親友

「見ろエレノア。クジラだ」

「おお！」

「聞きなさいよ!!?」

最もその熱意は、この場にいる二人の耳には全く届いてはいなかったが。

そうやって、居心地の悪い牢屋での時間を過ごす三人だったが、しばらくして寝つ転がっていたルフィがおもむろに起き上がった。さすがにこの空間に飽き飽きしてきたらしい。

「……飽きた、出よう(´▽´)」

「そだね」

「何言つてんのよ……そんなことが出来るならもうとつくに……」

呆れたように吐き捨てるアン。鍵もないのにどうやって出るといふのか。

そう思っていたアンの視界の端で、青白いスパークが走った。

「……………え？」

振り向いたアンが見たのは、スタスタと歩き去って行くルフィとエレノアの背中だった。二人とアンの間には牢の格子があり、変わらず道を塞いでいる。

アンは恐る恐る格子の扉に触れ、音を立てないようにゆっくり押しに行く。すると扉は、キィとわずかな音だけを漏らして簡単に開いてしまった。

「な、何……？ どうやったの……？」

アンは呆然となりながら、扉とエレノアたちを何度も見比べて声を漏らす。

エレノアは立ち止まると、小首を傾げて見せた。

「んー、手品？」

アンは肩を落とし、それ以上は深く聞かなかった。はぐらかされたような、聞いてはいけないような気がして気が咎めたが、やはり気になって仕方がなかった。

「……ねえ、あんたももしかして、魔術を使えるの?」

「んーん。魔術なんて私は使った覚えはないよ」

「でもまー。似たようなもんか?」

「かもねー」

どうということはない、とでもいうように笑い合うルフィとエレノアに、アンは驚きを隠しきれない。

得体の知れない二人組であったのに、だんだんとその背中に頼もしさを感じ始める。もしかしたら、と思ったアンは、歩いて行く二人を思わず呼び止めていた。

「ねえ。バルーン取り戻すの手伝ってよ。あんたたち、ひとつなぎの大秘宝^{ピース}を目指すくらいなんだから強いんでしょ?」

「やだよ。自分でやりなさい」

「俺たち、船壊れたから代わりのもん探さねえと」

にべもなく断られ、アンはムツと表情を険しくさせる。

少しくらい考えてくれてもいいだろう、とせつかく湧いた先ほどの頼もしさは一瞬で消え去ってしまった。

「ケチ!!?」

「あんたの友達でしょ。そんな風に人に頼る前に自分でなんとかしなさい」

「いーだ!!?」

呆れた目で拒否するエレノアにアンは実にブサイクな顔で舌を出し、ふんと鼻息荒く外に向かって駆け出して言った。

「……子供だなー」

エレノアはそんな彼女に呆れた視線を向け、やれやれと肩をすくめてルフィとともに通路の奥へと歩き出した。

「おう。俺たちが乗ってきた船より良い船ができたな!」

「材料は腐るほどあるからね。ま、相手は海賊だし文句は言わせないよ」

ムン、と胸を張るエレノアだったが、ふと彼女のフードの下の耳が何かを捉えた。

「……あれは」

すぐに窓際に寄って外の様子を確認下エレノアは、目を細めて声を漏らした。

外にあったのは、大勢の海賊たちに囲まれながら、武器を手に一人の男と戦っているアンの姿だった。

「ハアツ……ハアツ……どう? 私だって、ただの可愛くてか弱い女の子じゃないのよ

「！」

「くっ……くっそっ!!?」

どこで調達したのか、丈夫そうな鉄棍を突きつけたアンが、挑戦的な目で倒れた男を睨みつけ、呼吸も荒く笑みを浮かべた。

「さ、いいでしょう!!?」 約束通りバルーンを返して!!? あんまりしつこいとあんたもただじゃおかないわよ!!?」

荒くれ者の一人を倒したアンが、離れたところから見下ろしていたシユピールに向かって怒鳴る。

どうやらアンはエレノアたちに言われた通り、自分の力だけで親友を取り戻す決意を固めたらしい。それも、海賊と賭けをするという形で。

「……………」

シユピールはしばらくアンと倒れた手下を見下ろしていたが、おもむろに手下に向かって掌を向けた。

その瞬間、アンによって打ち負かされた手下の体が、なんの前触れもなく業火に包まれた。手下の全身が発火し、あつという間に火達磨と化したのだ。

「ぎゃあああああ!!?」

突然のことに手下は悲鳴をあげ、他の手下たちにも戦慄が走る。その凄惨さにアンも

言葉を失って硬直し、体が震えるのを感じた。

人一人を生きたまま燃やしておきながら、シュピールに全く心が揺れた様子はない。鬱陶しいから、役に立たないから、邪魔だから、そんな悪意だけでこの男は命を奪って見せたのだ。

それが、東の海を震え上がらせるシュピールの恐るべき姿であった。

「馬鹿め……小娘一人にいいようにあしらわれやがって……」

「……………!!?」

「……………まあいゝ」

不意に、シュピールはアンの足元に何かを投げつけてきた。アンは目を見開き、チャリンと音を立てて滑ってきた、いくつかの鍵がぶら下がったリングを拾い上げた。

「！」

「檻の鍵だ。好きにしろ」

その言葉に、アンは急いで檻に向かって走った。

シュピールが約束を守ったことに驚きながら、他のことを一切考えずに親友を助けようとして無我夢中になっていた。

「バルーン！　すぐに助けてあげるからね!!?」

「クエーツ!!?」

アンが掲げた鍵に、バルーンも檻の中でバサバサと暴れて喜びをあらわにする。あと数センチで鍵穴に届く、自分の宝物が戻ってくると確信した、その時だった。

ドンツ!!?

「!?」

衝撃がアンの体に走り、全身から一瞬で力が抜ける。つんのめったアンは、そのままバルーンのいる檻に向かって顔面から倒れこみ、ズルズルと崩れ落ちた。

「……………ククツ」

血を流し、ピクリとも動かなくなったアンに向かって、シュピールの含み笑いが響いた。魔術師はブルブルと肩を震わせ、やがてこらえきれないとばかりに盛大に笑い転げ始めた。

「クハハハハハハハ!!?」 海賊が約束なんざ守るわけないだろうが、馬鹿な娘だぜ!!?」

「ぎやはははははははは!!?」

「……………!!?」

部下たちもシュピールとともに笑い始め、耳障りな合奏となってアンの耳に突き刺さった。

シユピールたちの嘲笑に、アンはうつ伏せに倒れ伏したまま悔しさに涙をにじませる。騙されたことへの悔しき、ばかにされたことへの恥、そして何より、のこのこ海賊なんかの言うことを信じてせっかくの機会を不意にしまったことが悔しかった。

バルーンへの申し訳なきで、溢れ出る涙を止めることができずにいた。

そんな時だった。ガチャリと音がして船室の扉が開いた。

中からひよつこりと顔を出したのは、間の抜けた顔のルフィと苦虫を噛み潰したような顔のエレノアだ。

「……ん？ あ、変なところに出ちゃった」

「ー」

せっかく檻から逃げ出してきたのに、わざわざ自分から海賊たちの目の前に出てきた二人に、海賊たちの嘲笑じみた視線が集まる。

ずかずかと我が物顔で海賊たちの真ん中に踏み入ったエレノアは、血の中に倒れるア
ンと煙を吐く銃を持ったままのシユピールを見やって、小さくため息をついた。

「……これ、あんたが？」

「あ？ だとしたらなんだ？」

なおも小馬鹿にしたように笑うシユピールに、フードの下のエレノアの青い目が細まる。ルフィも表情こそ変わらないが、何かを考え込むように海賊たちを見つめていた。

「……………」

やがて、海賊たちの眼差しが訝しげなものに変わり始めた頃、ようやく二人は固く閉ざしていた口を開いた。

「アメンボみたいだよな、その頭」

ルフィとエレノアが乗り込んだ時以上の衝撃が、シユピールの配下たちの間に走った。ある者は顔を青ざめさせ、ある者は恐怖に涙を流し、ある者は白目を剥いて気絶し、ある者は悲鳴を上げて頭を抱えた。

だがそれ以上に、二度も自慢のヘースタイルをばかにされたシユピールの怒りは燃え滾り、爆発寸前にまで届こうとしていた。

「あいつらまた……!!?」

倒れたまま動きを止めていたアンもあまりに怖いもの知らず、もとい馬鹿な二人組に顔をしかめる。夢のために命を懸けると言っておきながら、せつかく助かった命を軽々と捨てようとしているとしか思えない言葉に怒りが募ってきた。

すると、ルフィとエレノアは自らアンの方へ近寄り、倒れたままのアンに呼びかけ始める。

「オメーこんなところで何寝てんだ?」

「違うわよ!!? 撃たれたの!!? ほら、ココ!!? せつかく死んだふりして隙を窺っ

てたのに……!!?」

空気の全く読めない質問に、アンは自分で言った死んだフリも忘れてわめき散らす。黙っているつもりだったが、もう我慢の限界だった。

だが、その表情もすぐに変貌することとなる。

ドンツと音がして、ルフィの体がくの字に折れ曲がった。アンは悲鳴を上げて目を覆い、目の前で人が殺されたことに愕然となる。

額に血管をいくつも浮き立たせたシュピールが、激情のままにルフィの腹に向けて銃弾を撃ち放ったのだ。今度の弾は掠るだけではなく、正確にルフィの急所を狙って撃ち込まれたものだった。

「ヒヒヒ……バカな奴らだ」

まだ把握できていないのか、エレノアはその場に立ちすくんだまま一歩も動けずにいる。相棒が殺されたことに多大なショックを受けているのだろう、と海賊たちは下卑た笑みを浮かべた。

が、その下衆の表情は次の瞬間目を見開いた間抜けなものへと変わった。

銃弾を受けたルフィがそのまま踏ん張り、衝撃に耐える一方で、背中の肉が長く伸びていく。銃弾は一向に肉を貫くことはなく、肉の膜に包まれて勢いを完全に殺されていた。

「ふんっ!!?」

突如、ルフィの上げた威勢のいい掛け声とともに、銃弾を包んで伸びていた皮膚がビヨンと元に戻り、逆に銃弾を弾き飛ばす。

跳ね返った銃弾はシユピールの頬をかすめ、一筋の傷を刻みつけた。

「あーびっくりした」

「……………は?」

シユピールも、そして配下たちも目の前で何がおきたのか全くわからず、あんぐりと口を開いたまま帽子を被り直すルフィを凝視する。さすっている腹に別段変わった部分はない。何かを仕込んでいる様子は、全くなかった。

「何、今の……」

アンもまた、目の前で死んだものと思っていた男が平気な顔をしている姿に言葉を失う。

度胸は只者ではないと思っていたが、本当に普通の人間ではなかったと言うことなのか。

「バツ……バケモノだ——!!?」

「たっ、弾を弾き返しやがった——!!?」

「も、燃えろ!!?」

銃を捨てたシュピールは箒を手にし、魔力を込める。すると赤い閃光が箒から迸り、ルフィとエレノアの目の前に真つ赤な業火が発生した。人間一人を軽く焼き殺せる威力の炎が、二人に向かって襲いかかっていく。

しかし、その熱が届く寸前にエレノアが動いた。赤く燃える炎の前に躍り出ると、外套の下から出した小さな両手のひらを拍手のようにパチンと打ち鳴らし、炎に向かって突き出した。

その瞬間、エレノアの掌の前にゴボゴボと水分が凝縮し、あつという間にエレノアたちを守る水の盾が生み出される。水は炎を一瞬で呑み込んで押さえつけ、ジュウツと一瞬のうちに消し去ってしまった。

シュピールの顔が、また面白い形で固まっていた。

「うっせ————!?？」

「……おいおい、触媒使つてその程度かよ三流」

宙に手のひらを向けたまま、エレノアは厳しい口調でシュピールに吐き捨てる。フードの下で光る青い目はどこか鋭く、苛立たしげな雰囲気は漏れている。

「『賢者の石』なんて反則級の代物使つてその程度なの？ よくそんなんで魔術師なんて名乗れたね？」

「なっ……!?？ ななななななんのこどだ!?？」

エレノアが漏らした単語に、シユピールはギクリと肩を揺らした。表情がこわばり、慄くようにエレノアから距離を取っていく。

「凶星か、というようにエレノアは肩をすくめ、深いため息をこぼした。

「誇りも矜持も持ち合わせちゃいない……錬金術師の風上にもおけないね、お前」

「錬金術師……？」

訝しげな声を漏らすアン。それはそうだ、魔術師だけでも現実では信じがたかった名称なのに、その上金を人工的に作り出す技術だという錬金術などと口にするのだから。

だが、エレノアにふざけている様子は無い。困惑する案に、エレノアは丁寧語り始めた。

「万象一切の創造原理を理解し、世界の輪を己の手の中で作り出すことであらゆるものを再構築する術……そして、理の根源を探求し追求する科学者、それが私達錬金術師」

「……………!?? 何故、貴様がそれを……………!??」

「バーカ。あれだけ錬成反応出したりや素人でも気づくでしょ。プロが周りにいないからって調子に乗って隠す努力もしてこなかったの？」

バカにしたようにいうエレノアが見つめるのは、シユピールの持つホウキ。その根元に取り付けられている赤い宝石だ。

「最初にあった時から、そのホウキが怪しいと思ってたんだよね……錬金術の効果を何

倍にも増幅させる増幅装置、賢者の石」

鋭い視線を向けられたシユピールは明らかに動揺し、今更宝石が付いた箒を背中に隠す。凶星だ、というのはその反応で明らかだった。

魔術などと言う得体の知れない力を謳って人々を恐れさせ、東の海を支配した気になつている詐欺師。エレノアには、そんなことのために自分と同じ力を使つていゝことがどうしても許せなかつた。

「あんたは魔術使いなんかじゃない。ただのペテン師だ」

「で、出てこいハンマー!!?」

ホウキの赤い宝玉が再び発光し、シユピールの手の中に巨大なハンマーが出現する。銃も炎も効かないのならば、自分の手で直接叩き潰してやろうとも思つたのだろう。

短絡的なシユピールの思考に、エレノアはまた呆れたため息をついた。

「往生際の悪い……」

「そんなもんきくか!!?」

迫るハンマーに一歩たりとも引かないエレノア。彼女の前にルファイが立ちほだかり、グルンとその場で勢い良く回転する。

すると、振り上げた右腕が回転の威力で長く伸び、鞭のようにしなりながらシユピールの顔面に叩きつけられた。シユピールは顔面に裏拳を叩きつけられ、鼻血を噴き出し

ながら吹き飛ばされていった。

誰もが、その光景に目を疑った。

誰も手が出せないと思っていた魔術師シユピールを、得体の知れない力で無力化した少女も、異形としか思えない身体で叩きのめしてしまった少年も。

全てがまるで、夢でも見ているかのようだった。

「腕が伸びた……!!? さっきの炎といい錬金術といい……なんなのよ一体!!?」

「ん? ああ、俺、昔悪魔の実を食ってさ。——全身ゴム人間なんだ」

そう言つてルフィは、自分の頬を掴んで左右に引っ張つてみせる。すると頬は異常なほどに伸び、それなのにルフィは全く痛そうなそぶりを見せなかった。

体が、ゴムとなつているのだ。

「(バ)……………ゴム人間……………!!?」

戦慄の表情を浮かべた海賊たちが、青年を凝視する。

悪魔の実、その悪名は、誰もが知っていた。食べれば様々な海の悪魔の力が身につく、物によつては相当な高額で取引される海の秘宝。さらには能力を得た代償として、海に嫌われて二度と泳げなくなるという呪われた代物。

それを食し、能力を得たという事実には恐怖で言葉を失つていた。地上において、能力者に勝てるなどとは考えられなかった。

「そのまま一生伸び縮みしてろー!」

その時、頭上から鋭く蔑んだ声が響く。

その場にいた全員が見上げてみれば、ホウキの上に乗って宙に浮いたシュピールが、バルーンを縄でつないでルフィ達を見下ろしている姿が見えた。全員がルフィの力に呆けていたすきに、バルーンを連れ出したようだ。

一瞬でも目を離してしまったことをアンは後悔しながら、シュピールを憎々しげに睨みつけた。

「! シュピール!」

「まさか本物の錬金術師がいたとはな……カラクリを見破られるとは思わなかった。だがもはやそんなことはどうでもいい!!?」

シュピールが見下ろしているのは、ルフィとエレノアだけではない。

自分が従えていたはずの部下たちまでも、まるでゴミのように見下していた。その視線に、部下たちは背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「怪鳥^{ルック}は手に入れた。もうお前にもこの船にも用はない……!!?」

縄に繋がれたバルーンを誇らしげに見せ付けながら、シュピールは強大な魔力をホウキの宝玉に集めていく。その力は、蜃気楼のように大気を歪ませてしまうほどで、その場にいた誰もが恐怖で顔を引きつらせた。

「船ごと沈むがいい!!?」

シユピールが高らかに宣言するとともに、ルファイたちの乗るガレオン船にべきりと嫌な音が鳴る、その次の瞬間。

ベキベキベキベキイイツ!!?

まるで前後から強烈な圧力がかけられたかのように、甲板に大きな亀裂が走る。ガレオン船は大きくのけぞるように変形し、中心から真つ二つにへし折れていく。強烈な圧力により、船はみるみる瓦礫の破片と化し、海へと沈み始める。

「!!? ああのヤロウ仲間ごと!!?」

「ぶわーっ!!? 水だあああ!!? 溺れる——っ!!?」

当然、船の上にしき足場のないルファイ達も耐えられるはずはなく、傾いていく甲板に必死にしがみつきながら、轟音の中に埋もれていく。

「た……助けて……!!?」

「シユピールのヤロー!!? 許さねえ!!?」

瓦礫が浮かぶ海のとど真ん中で、シユピールへの怨嗟の声が響く。

船長に見放され、その上足場も奪われた男達は、もう姿の見えないシユピールに媚びへつらうこともなく口々に罵り続ける。それが無駄なことだとわかつていても、抑えき

れない怒りを打ちまけずにはいられなかった。

そんな中、海面にボコボコと気泡が浮き始めたかと思うと、三つの人影が勢いよく顔を出し、そこらにあつた瓦礫にしがみついた。

自力で浮き上がったエレノアは苛立たしげに、アンに助けられてようやく顔を出せたルフィは涙目になりながら荒い呼吸を繰り返した。

「……ぶはっ。アンニヤロ……タダですむと思うな」

「た……助かった!!? 命の恩人だお前は!!?」

海の悪魔の呪いで全く泳げなくなったルフィが、助けしてくれたアンに礼を言う。

だが、それに返事はなかった。

ルフィにしがみついたまま、肩を震わせて嗚咽を漏らしていたのだ。

「……ッ!!? バルーンはね、怪鳥^ルの最後の生き残りって言われてるの!!? でもっ

……あいつが欲しいのはその生き血だけ……怪鳥^ルの血は魔力を持つっていうから

……!!?」

「……そうだ。だから聞き覚えがあつたんだ。怪鳥^ルの血も、錬金術の効率的な触媒になるから」

エレノアはようやく、シユピールがバルーンに固執していた理由を理解した。

賢者の石とは別に、魔力を持つ怪鳥の血を手に入れれば、より強い力を手に入れるこ

とができる。そうなれば、もうシユピールに怖いものはない。

「あの子は……私とずつと一緒だった!!?」だから私がどこにいても必ずついてきちゃう……私が、あの子の一番の枷になつてゐる!!?」

アンは、自分の存在がいちばんの障害であることに気がついていて、どこにいても、自分が誰のもとに捕まっていようと、親友は自分の元に来てしまう。

それが、何よりも悲しくて仕方がなかった。自分を許せなくなりそうだった。

「友達なのに……あの子に何にもしてあげられない……!!?」私のせいで、あの子がひどい目にあつちやう!!?」私……悔しくて仕方がない……!!?」

「……じゃあ、なおさら諦めたらダメ」

後悔の涙を流すアンに、そつと優しい声がかげられる。

赤くなつた目で見上げてみれば、そばにびしょ濡れになつたエレノアの青い瞳が見える。その目は先ほどまでとは違う、わがままな女の子を見守る母のような、そんな慈愛に満ちた眼差しに変わつていた。

ザパツと音を立て瓦礫の上にルフィが立つ。その姿は、出会つた時と何も変わららない、自信満々で堂々とした不敵な笑みが浮かんでいる。

「お前の宝だろ」

アンの肩をポンと叩き、エレノアは瓦礫の上を飛び跳ねていく。海賊たちの視線を集

めるのも全く気にせず、軽々と猫のように跳ねる。

折れたマストの根元に降り立ったエレノアは、濡れて重くなったフードを邪魔だと言わんばかりに脱ぎ捨てる。その際、ずっと影に隠れていたエレノアの顔がようやく日の元に晒された。

「……………? エレノア、あんた……………!!?」

アンは、太陽のもとにさらされたエレノアの姿に絶句する。

小さいとは思っていたが、本当に背丈は10歳未満の子供にしか見えない。だが、黒いメツシユが幾筋も入った純白の髪の下顔は、この世のものとは思えないほど完璧に整っている。

いたずらっ子のようにつり上がった目も、長いまつ毛も、桜色で艶やかな唇も、伸びた鼻も、玉のような肌も、金色に輝く瞳も、全てが絶妙な間隔で揃っていて、見た者は息を呑む他にない。

目を引くのは、髪の上に鎮座している黒い獣の耳とお尻から伸びている長く太い尻尾。縞々の模様が入ったその尻尾が、ゆらゆらと動いて存在感を放っている。

だが、それ以上に圧倒的な存在感を放っているのは、大きく広がる真つ白な——翼だった。

大きく、そして美しく広がるその翼には所々にメツシユのように漆黒の羽根が混じ

り、太陽の光を反射してまばゆく輝きを放っている。汚れを微塵も知らない、異形の貌かたちを。

その姿は、まさに。

「——天使——」

誰かが、無意識に呟いた。それはさざ波のように静かに浸透し、誰もがシユピールへの罵倒など忘れて見惚れていた。

とん、と甲板の上から飛び立ったエレノアが、大きく翼を羽ばたかせる。キラメキをこぼしながら飛翔し、海賊たちの視線を独り占めにする天使の少女はマストが伸びた場所にまで飛翔し、その真上へと降り立った。

「錬成!!?」

エレノアが触れたマストが、閃光を帯びて変形していく。支柱はより太く、先端は二股に分かれるとU字型に曲がり、天に向かって伸びていく。支えとなる足場までもが、閃光の中で変形していく。海賊たちをすくい上げるようにして瓦礫が集まっていき、一枚の大きな板となっていく。

数秒も経たないうちにマストは、ゴムのない巨大なパチンコへと変貌した。

「ルフィ、後は任せた!!?」

「おう!!?」

エレノアの声で、ルフィは巨大パチンコの方へと駆け出していく。

パチンコの支柱の両端に腕を伸ばすと、ぐるぐると巻きつけてガツチリと固定する。自身がパチンコのゴムとなるとルフィは走りの推進力を利用し、反対側まで長く長く腕を伸ばしていく。

「ゴムゴムのオ……………ロケット!!?」

パチンツ!!?と凄まじい勢いで、ルフィは文字通り空を飛ぶ。

シユピールのいる場所を正確に把握しなければならぬ、エレノアとの完璧なコンビネーションで追い詰めに行ったのだ。

「……………あんたたちなら、本当に海賊王とその船員になれる気がしてきたわ」

「でしょ?」

呆れたように、腰を抜かして瓦礫の上に腰掛けるアンに、エレノアは誇らしげに胸を張った。

その姿に、アンは乾いた笑い声をこぼす。

「それにしてもまさか、あんたが『天族』だったなんてね」

アンはそう言って、エレノアの白く美しい翼を眺め、ため息をついた。

天族、それは伝説に謳い継がれる、神聖なる存在。

獸の耳と尻尾を持ち、背に生やした翼は陽の光に照らされて美しく輝くという。あらゆる知識を集めたその頭脳に際限などなく、その由来は神が与えたもうた力であるともいわれている。

人よりもはるかに長い寿命を持ち、時に仙人のように語られることもある、神秘と謎に満ちた種族。

何よりも、天族にはある言い伝えがあつた。

『天族の乗る船は、絶対に沈まない』

船乗り語り継がれるそんな伝説が、この海には広く知れ渡っている。

ゆえに天族は、船乗りたちにとっては喉から手が出るほど欲する存在であつた。

アンは、海風に髪を揺らす天使のようではなく正に天使な少女を見つめ、首を傾げて見せる。

「なんだって、伝説の天使様が海賊なんか？」

「ちよつと縁があつてね……彼の行く末を見届けることにしたんだ」

「……物好きね。でも、そうしようと思つたのは、わかる気がする」

アンは羨ましげな微笑みを浮かべ、エレノアの隣に腰掛けた。

日差しに照らされるエレノアの横顔は、どこか誇らしげに見えた。アンがなんとなく呟いた一言に、随分と気を良くしようだった。

アンは、そんなエレノアがどうしようもなく羨ましく思えた。

「あんたたちは、本当にすごいわね。……私は、最後まで頼ってばかりで」
「アン」

自嘲気味に目を伏せたアンは、ギリギリと拳を握り締める。自分のせいで親友を危険な目に合わせた、その事実が、自分自身を責め続けているのだろう。

今、ルフイがシユピールを撃退したとしても、また同じようなことが起こるかもしれない。その時にまた自分が親友の枷になることが、怖いのだ。

そんな彼女に、エレノアは慈愛に満ちた眼差しを送る。

「あんなこと言ったけどね、私はあんたがああ言ったから戻ってきたんだよ。……あんたが友達のことを強く思ったから、手助けしてやろうと思ったんだ。自分を、そんなに卑下しないで」

アンは思わず、あっけにとられながらエレノアの青い瞳を凝視する。

自分よりもひと回り近くは小さいはずの少女に慰められているというのに、全く屈辱など感じない。まるで、早くに亡くした母になだめられているかのような安心感がある。

そんな、不思議な感覚であった。

「——自分に、負けないで」

「エレノア……」

それだけで、心に巢食っていた闇が少しだけ晴れた気がする。

まだ闇の全てが晴れたわけではない。だがそれでも、肩に重くのしかかっていた不安という重荷が、少しだけ取り払われた気がした。

やはり最後まで、二人には助けられてばかりだ。

アンは、そんなことばかり考えながら、安らかな微笑みを浮かべた。

「……ところでエレノア。アンタ、アレどうすんの？」

「……聞かないで」

ジト目で見つめてくるアンに、エレノアは目をそらして現実逃避する。

ついでに甲板まで復活させてしまったのが悪かったのか、海賊たちは本気でエレノアを天の使いか何かだと思ってしまったようで。

みんな一斉にエレノアに向かって平服してしまっている、この光景を見なかったことにしていた。

——ゴムゴムの!!? 銃弾^{ブレット}!!?

そんな中、遙か遠くから聞こえてくる咆哮と鈍い音が、少年の揺るぎない勝利を伝えていた。

??

小舟はいく。さらに先の海へと。

大いなる夢と野望を持って、小さな船は波をかき分け進んでいく。止めるものなどない、振り返ることなくまっすぐに突き進んでいく。

目指すは、偉大な冒険の海だ。

「しししし！ 食料も手に入って得したな！」

「運がいいんだかなんなんだか……ま、いいけどね」

行き当たりばったりな旅路を心から楽しむルフィと、それに頭を抱えながらも笑みを浮かべるエレノア。

結局、シユピールは空を飛んだルフィによって成敗され、空の彼方の星になってしまった。

だが解放されたバルーンに頭を啜えられて意気揚々と戻ってみれば、すっかり改心した海賊たちがエレノアの作った小舟にせつせと食料を詰め込んで祈りを捧げていたのだ。

異常な光景を目にしたルフィは、それでも愉快そうに笑い転がっていた。

「お前だって、あいつが持ってた箒持ってきてんじゃねーか。おあいこだろ」

「ああ、これ？」

エレノアはそう言って、シユピールから回収した箒——正確には飾り付けられた

真つ赤な宝石のような結晶を持ち上げて見せた。血のように赤く、怪しげな光を放つそれを、エレノアはフンと鼻で笑って見せた。

エレノアは賢者の石を箒から外すと、宙に向かつて放り投げる。そして、両手をパンと合わせる、青い閃光を纏わせて石を挟み込んだ。バシバシと眩い光が発生し、一瞬ルフィの目をくらませる。

やがて光が収まり、エレノアが閉じていた手のひらを開くと、赤い結晶はサラサラと崩れて塵と化し、風に乗って霧散していつてしまった。

「……こんなものはね、こころしたほうがいいんだよ」

満足げに眩き、空に消えていく結晶のかげらを見やる。ルフィもしししと笑い、エレノアの判断を賞賛する。

錬金術に關してはよくわからないが、あれは相当嫌なものだったことはわかった。持つておくよりも、跡形もなく壊した方が都合がいいのだろう。

一仕事終えたエレノアは、大きく伸びをするとコロンと寝転び、空を見上げてくつろぎ始めた。

「……さて、次の島に着くまで何してよっか」

「そうだな。ま、のんびり行こうぜ！」

楽しげに笑い、ルフィもまた寝転んでしばしの船旅を堪能することに決めていた。

旅は始まったばかりだ。

先の見えぬ無謀な旅だが、彼らに未だ絶望はない。それらを全て越えていく、止まらない熱い想いが体を突き動かすのだ。人が生きていく限り、それらは決して、止まらない。

「ルファイ！ エレノア！」

遙か頭上で、バルーンに乗ったアンが大きく声を張り上げた。もうその顔からは、バルーンと共に生きていくことへの不安も迷いも、微塵も感じられなかった。彼女たちは、乗り越えたのだ。

ルファイとエレノアは、満面の笑顔を浮かべるアンを見上げると、自分たちも大きく手を振って応えた。

「なれるといいね——海賊王に!!?」

「なるさ!!? 必ず!!?」

「まかせておいてよ、必ず私が見届けるから!!?」

互いの姿が見えなくなるまで手を振り、その姿をしかと目に焼き付ける。この奇跡のような出会いが再び起こるように願いを込めて、笑い続ける。さよならは、言わなかった。

この後、偉大なる航路にて、グランドライオン「麦わら」のルフイ、そしてウイザード「妖術師」のエレノアと言
う名の二人の海賊が、名を挙げることとなる――。

第1章 英雄の器

第1話 “コビーの夢”

声が、聞こえる。

大切なものを失うまいと、奪わせまいと必死に呼び止める、“家族”の音が。

「……………」

「……………!!?」

しかしその声は、何かに邪魔をされて声となつて届かない。

ひどい雑音のように、くぐもつた音としてしか認識できなかった。

「…………ア、エレノア!!?」

「しつかりしろ、エレノア!!? 意識をしつかり持て!!?」

ぼやけていた意識がようやくはつきりしてくる。

だが自分の身に走る激痛のせいで、再び気を失いそうになるのを必死にこらえるしかなく、返事を返す余裕もない。

ひどい耳鳴りがして、“家族”の声もどこか遠く感じてしまう。

「嘘だろ…………こんなことがあっていいのかよ!!?」

「こんな……こんなバカな……!!?」

これは、自分で選んだ結末だというのに、まるで我が事のように嘆く声が聞こえてくる。

思わず歯を食いしばり、悔しさに軋ませる。

自分の苦痛のためではない、“家族”を悲しませていることに対してだ。

「……くしょう……畜生……!!?」

——痛みを伴わない教訓には意義がない。

なぜか、師匠が耳にタコができるほどに言い聞かせてきた言葉が蘇る。

今の状況は、まさに彼の言った通りのことであつた。

「持……っ……て……い……か……れ……た……!!?」

——人は何かの犠牲無しには、何も得ることなどできないのだから。

失った　を押さえながら、彼女は涙を流し続けていた。

??

「……………あー、嫌な夢見た」

気だるげな声とともに、エレノアは目を覚ました。

揺れる小船の底で横になっていたせいか、身体中のあちこちが痛くて仕方がない。特に腰が痛くて仕方がなかった。

ずれていたフードをかぶりなおしてから、エレノアは「ん〜」と大きく伸びをした。

「んん……………寝覚め最悪」

「おう、起きたかエレノア!」

「おはよ、ルフィ。航路は順調?」

交代で睡眠をとり、変なところに船が行かないように互いに航行していたはずだと思いつきながら、エレノアは尋ねた。

するとルフィは、なんともおかしげな笑顔を見せた。

「いや、それがよ。この船はまず遭難ってことになっちゃうな」

「は? また方角間違えたの? しょうがないなあ…………」

海賊を目指しているくせに、航海術に関しての知識を一切持ち合わせていない無鉄砲な船長に呆れながら、エレノアはルフィと場所を交代する。

どれほど予定とずれたか確認しよう、と思ったエレノアだったが。

「……………何これ?」

「いやー悪い悪い。いつのにかこんなことになってよ」

目の前に広がる光景に、言葉を失う。

航路がずれていたならいい。また修正すればいいのだから。

方角が間違っていたのならいい。小出でも方向を変えればいいのだから。

だが、すぐ目の前に巨大な渦巻きが広がっている光景を目にしたならば、固まってし

まっても許されるのではないだろうか。

「いやー、参った参った。あつはつは」

「……最悪だ。全くもって最悪だ」

一艘の船の上で、全く正反対の反応を見せる二人。

天気の良い日が続く東の海のと真ん中で、明るく笑う少年と暗く沈んでいる少女の明

暗の差ははつきりくつきりと見えた。

「まさかこんな大渦に巻き込まれるなんてなー」

「……私はあんたに見張りを言っておいたはずなんだけど？」

「悪い、居眠りしてた」

「ぶつ殺してやるこのやろう!!？」

我慢の限界に達したエレノアが、火山の爆発のごとき勢いで怒鳴りつける。

仮にも船員の命を預かる船長がなんたることか。小一時間説教をかましてやりたい

ところだったが、生憎そんな暇は彼らには与えられていなかった。

「何をどうしたら渦巻きの中に巻き込まれたりなんかするのさ!!?」

「いけると思ったんだけどなー」

命の危機を迎えながら、のほほんとそう言ってくれるルフィの前で、エレノアのどこかからブチツと音がした。

無言のままパチンと手を合わせたエレノアは、につこりとルフィに向けて笑顔を見せる。

訝しげな表情で首をかしげたルフィの真下に両手を叩きつけると、バチバチとすさまじい青色の閃光が走った。

途端にルフィとエレノアの乗る小舟が形を変え、生き物のように動き出す。まるでルフィを捕らえるように木の板が捲れあがり、驚愕の表情で固まるルフィを包み込んでいく。

ものの数秒で小舟は、真ん中が膨らんだ筒状に——一つの樽となつて荒波の中に放り出された。

「しばらくその中で反省してなさい!」

「ギャ————!!? ごめんなき————い!!?」

いち早く脱出したエレノアが見下ろす下で、ガタガタと樽の中に閉じ込められたル

ファイが悲鳴をあげた。

しかし今更謝罪が受け入れられるはずもなく、その上どうしようもなく、ルフィの入った樽は渦巻きの起こした波の中に飲み込まれ、そのまま見えなくなってしまった。

「……………フンだ。さすがに面倒見きれないよ」

空中に浮きながら、エレノアは拗ねた様子で渦巻きを見下ろす。

だがしばらくそうしているうちに、エレノアの表情がバツの悪そうなものに変わっていく。

一応樽は隙間無く作ったし、浮力もあるだろうからそのうちどこかに打ち上げられるはずだ。それにあの男の生命力なら、きっと生き延びて冒険を続けるだろう。

「……………」

だがそう考えながら、エレノアはその場からしばらく動かなかった。

未だ轟々と唸りを上げている渦巻きを睨んでいると、やがてあたりの海を見やって何かを考え始めた。

「……………この辺りの波の動き、地形、風の動きから見て……………」

あらゆる情報をその場で仕入れ、脳内で無数の計算式を積み重ねていく。

そして出来上がった答えを元に、エレノアはやっとその場から動き出し、進行方向を調整した。

「……全く、世話の焼ける船長だよ。本当に」

本気で呆れた声で、エレノアはそう呟くのだった。

数刻後、エレノアはある島の岬に降り立っていた。

そこから見下ろせる場所には、一隻の帆船が停泊している小さな入江があった。

停泊している帆船はそう大きいものではない。しかし、黒い穂にドクロのマークが描かれたそれは、まず無視できないものであった。

「……ドクロの横顔に、ハートマーク。『金棒』のアルビダの船か」

賞金首のリストに載っていた情報と照らし合わせ、その船の主人が何者なのかを推測する。

脅威としては大したことはないが、少なくとも一般人にとつては恐るべき存在である。強烈な金棒の一撃は人体を簡単に粉碎し、気に入らないもの、自分に従わないものを容赦無く排除する危険な人物という情報が、エレノアの中にはあった。

他に特筆すべき点といえば、自分のことを絶世の美女と思っていることだろうか。

実際は横にも前にも大きい、いかつい中年の女であるが。

「めんどくさいなー。でも、ルファイが流れ着くとしたらあの辺りなんだよなー」

もし自分の想像通りなら、まず間違いない面倒臭いことになる。なぜ我が船長は自ら

トラブルを引っさげてきてしまうのだろうか。

「……………ん？ あれは…」

唸っていたエレノアは、棧橋の方から大きな樽を転がしてくる眼鏡の少年の姿を見つめる。どこことなく気弱そうな雰囲気、彼は常にビクビクしながら、見覚えのある酒樽を近くの小屋の中へと運び込んで行ったのだ。

「……………嫌な予感」

思わず呟いた、そのしばし後。

「あ——よく寝たあ——!!？」

思いつき聞き覚えのある声が響き渡り、エレノアは頭を抱えた。

今回に至ってはあの男は悪くない。ただ運と巡り合わせ、そしてタイミングが恐ろしく悪かったただけだ。

「ああもう何やってんのよあのバカ船長!!？」

??

「一番イカつい、クソババアです!!!」

その瞬間、覚悟を決めた男の叫びが響き渡った。

いかつい顔にをそばかすを散らし、まるまると肥えた体で大きな金棒を担いだ東の海の女海賊・アルビダを含め、海賊たちが言葉を失う中、ぶちぶちと嫌な音がその場で鳴る。

「このガキヤ——!!!」

「うわあああああ!!?」

言つてはならない言葉でアルビダの怒りを買ったのは、海賊船に不運に乗り込んでしまったドジな少年、コピー。

アルビダに怯え、雑用としてこき使われる毎日だった彼が、タルの中から現れた麦わら帽の青年の言葉を聞いた時、彼の中で何かが変わった。

『ぼくでも…海軍に入れるでしょうか…?』

『ルフィさんとは敵ですけど!!? 海軍に入つて、えらくなつて、悪い奴を取りしめるのが僕の夢なんです!! 小さい頃からの!!! やれるでしょうか!!!』

海賊王になるという青年——ルフィの野望を聞き、口について出たのはそんな言葉だった。

こんなところで、憎むべき海賊に顎で使われるようでは到底叶うまい、しかしどうしても諦めきれない夢が、少年に“勇氣”を与えた。

——僕は正しいことを言つたんだ!!?」

後悔なんてない!!!

「よくやったコビー！　そこで見てろ！」

「ルフィさん!?」

コビーの勇気を見届けたルフィが、彼をかばうためにアルビダの前に出る。

ゴム人間ゆえに痛みを感じないがための方法だったが、コビーにとつては身を呈して守ろうとしているようにしか見えない。

怒り狂った女海賊の金棒が、ルフィの頭を粉碎しようと振り下ろされた、その瞬間。

「…まったく、私はこういうのに弱いんだからさあ」

ガキイイーン!!?

と、金棒に向かって突き出された小さな足が、重い一撃を受け止めて見せた。

鈍い金属音が響き渡り、ビリビリと空気が振動した。

「あたしの金棒を……!?」

目を見開くアルビダをよそに、ルフィの前に出た小さな足の主・エレノアが呆れた目を向けた。

「おー、エレノア！　もう来てたのか！」

「全くあんたってやつは……」

「え？　え？」

喜ぶルフィと何が起こったのかわかっていないコビー。

能気な船長に呆れながら、運よく生き残っていたことに感心する。いつもいつも、たいした悪運の強さである。

エレノアはルフィから視線を外し、視線を右往左往させているコビーに優しい眼差しを向けた。

「君、コビー君、だっけ？ 聞いたよ、君の啖呵」

「あつ……ハイ」

「かつこよかったよ、すごく」

「……………!!?」

慈愛に満ちたエレノアの言葉に、コビーは感極まったかのように目を涙で覆った。

今まで否定され続けた自分の夢が、初めて肯定されたように思えたからだ。

「いきなり出てきたくせに、あたしの邪魔をしてんじゃないよ!!」

制裁を邪魔された上に無視されたことで怒りが頂点に達したアルビダが、再び一撃をお見舞いしてやろうと金棒を振り上げる。

近づいてくる殺気に反応したエレノアはすぐさま後退し、ルフィと入れ替わるように配置を替える。

「ルフィ！」

「おうー！」

前に出たルフィが、後ろに回した腕を振り回す。悪鬼のような形相のアルビダの目前に向けて、真正面から強烈なストレートパンチをお見舞いしてみせた。

ゴムの凄まじい伸縮性を利用した、一撃で巨体の女海賊をノックアウトしてみせる人外のパワーを披露して見せたのだ。

「う、腕が伸びた……!?」

「ば、化け物だ——!!」

船長が一撃でぶっとばされたことにどよめき、おののくアルビダ海賊団の船員たち。

一瞬怯みそうになった海賊たちだったが、頭に手を出されたことで頭に血が上った面々が殺気立ち始めた。

「デメエら——!!」

「あ、アルビダ様をよくも——!!」

手に武器を備え、ルフィたちに襲いかかる手下たち。

コビーが悲鳴をあげる中、勇ましく拳を構えるルフィの前に立ったエレノアが、パン、と両手を合わせて地面に叩きつけた。

「フン」

バシンと青い閃光が走り、地面がボコボコと隆起して拳の形を作り出すと、長く伸び

て手下たちに激突し始めた。蛇のようにのたうつ土の塊をまともに受け、海賊たちの意識は一瞬で刈り取られていった。

「ぎゃあああああああ!!」

木っ端のように軽々と空中に投げ出され、どきどきと積み上げられていく海賊たち。ルフィと同じくらいの猛攻を何度も食らった手下たちはなすすべなくぶっ飛ばされ、今度こそ手下たちの心が折れる。

腕が伸びる化け物に、地面を操る化け物。船長すらも敵わない敵を二人も相手にする勇氣など、東の海の一海賊である彼らにあるはずもなかった。

「それ以上やるってんなら、悪魔の実を食った能力者としての私、錬金術師が相手になるよ？」

「……………!!?」

相手が悪いことをようやく理解したのか、エレノアに睨みつけられた下っ端たちは青い顔で後退していく。

そんな彼らに、ルフィは無然とした態度で指を突きつけた。

「コビーに一隻小船をやれ！ こいつは海軍に入るんだ!!? 黙って行かせろ」

「ルフィさん……」

感動の涙を流すコビーは、ぐちゃぐちゃの笑顔でそう呟くしかなかった。

??

「いや〜よかったなあ、おまえ!」

「は、はい! ……それにしてもあのゴムゴムの実を食べただなんて、驚きました!」

ルフィとエレノアに代わって小舟を漕ぐコビーが、恐縮したように答える。

海の秘宝たる悪魔の実を口にしたものは初めて見たので、どうしても珍しいものを見る目になってしまふのだ。

「えっと……エレノア、さん?も何かあるんですよね? さっきの蹴りの時、金属音がしてましたけど」

「ん? あー、まあ、仕込みみたいなものかな。詳しい中身は秘密だけ!」

興味を向けられたエレノアも律儀に答え、フードの中で微笑む。

詳しい話を聞きたく思ったコビーだったが、エレノアがシーッと人差し指を立てて見つめてくるので追及することはできなかつた。

「それで? これからどうするの?」

「おう! それなんだけども、これからコビーがいく海軍基地に捕まってるやつつてのがさ。すげーやつなんだってさ!」

「……ああ、『海賊狩り』のゾロか!」

近くにある島の話の思い出したエレノアは、納得したように呟く。

聞き耳を立てていれば誰もが震える、東の海でもかなり有名な凶悪な賞金稼ぎの名だ。いい噂は聞かないはずだったが、ルフィはどこか期待するような笑顔でエレノアに告げる。

「いいやつだったら仲間になろうと思って」

「えーっ!!? またムチャクチャな事をオーっ!!!」

「いいんじゃない? ぶっ飛んだ船長にぶっ飛んだ仲間。バランス取れてるみたいだし
さ」

「あなたも大概ムチャクチャですね!!?」

「つてわけでいくぞ海軍基地ーっ!!!」

「あいあいさー!」

「いやほんとにムリですってムリムリムリ!!!」

楽しげな声と必死な声、悪乗りした声を乗せながら、小舟は次の目的地へと向かう。

第2話 海賊狩りのゾロ

「魔獣ねーっ」

前の島を出発してしばらくして。

ルフィ・エレノア・コビーは船を操り、順調に目的地である島を目指していた。

凶悪さで有名な男が収監されているという、海軍基地のある島を。

「そうですよルフィさん。ロロノア・ゾロは『海賊狩り』の異名を持つ恐ろしい男です」
「聞いたことある。確か血に飢えた獣のように賞金首を嗅ぎ回って海をさすらうやばいやつなんだっけ？」

「はい。人々は、人の姿を借りた魔獣と呼んでいます」

「おーこわ、と肩をすくめるエレノアに苦笑するコビー。」

二人だけで海を旅するぐらいだ、その程度の噂話ではちつとも怖さなど感じないのだから仲間にしようなんてバカな考えは…」
「でも俺は、別に仲間に決めたわけじゃなくて、いいやつだったら…」
「悪人だから捕まってるんですよ!!?」

「コビー、諦めなよ。こいつこういう時は頑固だから」

はしゃいでいるルフィの方に呆れた目を送りながら、エレノアは船の前方に振り向いた。

もう、島の影が見えていた。

「それにほら……もうすぐつくよ」

??

海軍基地のある島はコビーのいた島よりも大きく、そして立派な建物が並んでいた。

民家や店が並ぶ町の向こう側に見えるのは、黒々とした煙と無数のパイプが通る建築物。そのさらに先、島の中央辺りに見える岩山などから察するに。

「小さな鉱山の経営で生活している島、か」

小さな島だが、ちゃんとした資金源を持つているのだな、と初めて炭鉱を見たエレノアが感嘆の声を上げる。

が、町の様子を見ていたその目が、訝し気に細められた。

「…の割には、ちよつときびれてるみたいだな」

「まあでも、ここでお前とはお別れってことだな！」

「だいぶ長いことお世話になっちゃったね」

「はい……！ お二人には感謝してもしきれません!!？ いずれは敵同士ですけど」

まだ海軍に入ったわけでもないのに、感涙したコビーが二人に頭を下げる。

エレノアには少し気になることもあるが、いずれ敵になる相手とこれ以上なれ合うのもどうかと思いい口を閉じる。

「こ、この島で僕はきつと、立派な海兵として頑張つていきま……ぶつ！」
「おつと、ごめんよ」

が、コビーが大きな一歩を踏み出そうとした時、近くを通りがかった少年の担いだ大きな角材が激突し、情けない声をこぼして倒れこんでしまった。

顔面から倒れたものの大した怪我ではないようで、ルフィもエレノアも少年もさして心配はしていなかった。

「コビー君、大丈夫？」

「悪い悪い……お!!」

そこでようやく、ルフィたちが見慣れないよそ者であることに気が付いたのか、少年が目を輝かせた。

「何？ 観光？ どこから来たの？ メシは？ 宿は決まつてる？」

「あ、いや、ちよつ……」

「メシ!! お前メシ屋知つてんのか!!」

「俺んちだよ！ 決まつてないならすぐ来いよ！ 親父！ 客だ！」

「ちよつと勝手に……」

エレノアの返事も聞かず、何か作業を行っていた大柄な男に声をかける少年。

筋骨隆々な体を動かして振り向いた男は、見慣れない連中と自分の息子を見て眉を寄せた。

「あー？ なんだったって、カヤル」

「客！ 金ヅル！」

「なに?! でかした!!」

道具をほつぽり出して向かってくる、カヤルという名の少年の父親に、エレノアは呆れた表情を浮かべた。

「……おい、仮にも客の前で金ヅルはないでしょ」

ほぼ無理やり連れてこられたさきにあつたのは、武骨なつくりの酒場だった。

しかし男の妻らしき女性が作る料理は大したもの、殺風景なテーブルの上が多様な料理で華やかになった。

「いや、ホコリっぽくてすまねえな。炭鉱の給料が少ないんで店と二足のワラジこつちってわけよ」

「フーン……」

バクバクと料理を平らげていくルフィをほっぽって、きよろきよろと辺りを見渡すエレノア。

すると、別のテーブルでたむろしていた炭鉱夫たちが陽気な調子で声をかけてきた。「なに言ってるんでえ親方！ その少ない給料を困ってる奴にすぐ分けちまうくせによー！」

「奥さんもそりゃ泣くぜー！」

「うるせえや!!」 文句あんなら酒代のツケさっさと払え!!」

怒鳴りながら、ゲラゲラと笑い合う親方と炭鉱夫たち。かなり慕われているようで、フードの下でエレノアは柔らかに微笑んだ。

「うんめえなここのメシ」

「それにすごくいい人たちですね……こんなところで働けるならやる気も出るつてもんですよ」

「……………そうだね」

ルフィの感想もコビーの感想も間違っではない。

しかし何か気になるエレノアは曖昧にしか頷かず、じつと外の様子を眺めていた。

もつと酒場というものは騒がしいイメージがあるが、ここにはそれがあまり見受けられないのが不思議だった。

「随分食ってるが大丈夫か？　うちのカミさんのメシは高エぞ？」

「だいじよーぶ、私がちゃんと持ってるから」

ものすごい勢いで料理を平らげていくルフィが気になったのか、親方が注意してこるがエレノアはその心配をきっぱり否定する。

もとから食うやつなのだ、そのためにエレノアは金銭の類を大目に持ち歩いている。が、そんな余裕は通じなかった。

「はい、30万ベリー」

「高エよ!!!」

「ただのぼったくりじゃん!!!」

「だから言ったら『高い』って」

してやったり顔でにやりと笑う親方に、エレノアは徐々に殺意が芽生えてくるのを感じた。

食うだけ食った後で高額な料金を要求してくるとは、なんとという卑劣な。

自分たちは海賊だが、あまりに横暴だと言わざるを得なかった。

「めつたに來ない客にはしつかり金を落としてもらわねえとな」

「エレノア、頼む。〃宝払い〃だ」

「嘘でしょ…?! ヤバい足りるかな…!!」

「逃がさんぞ金ヅルども」

船長にまるっと問題を押し付けられ、エレノアは財布の中身を確認しながら顔を青ざめさせる。

ギリリと目を光らせ迫る親方の迫力は、相当なものだった。

「まいどありい!!」

「うう……今後の生活費が……この出費は痛すぎるよ……!!」

「ほんとすまん。いつかちゃんと返せるように俺、頑張るから」

「僕が言うのもなんですけど、ほんとにこの先大丈夫なんですかね?」

ぶるぶる震えて涙を流すエレノアと、それを慰めるルフィ。

いきなり別のピンチに追われる二人を見ると、何となくこのまま分かれるのが心配になるコビーだった。

「私たちのことはいいよ。あんたは自分のことをまず考えなさい」

「んで、この島の基地にいるのかな。そのゾロつてやつは……」

ルフィがそう言った瞬間、ガタガタガタツと騒がしい音が響いた。

何事かと振り向いてみれば、何やらルフィ達を恐ろしげに凝視しながら身を隠している他の客達がいる。

「え、え? い、いったい何が?」

「いい、いや……なんでもねえ」

何も悪いことや怖がられることはやっていないのにこの脅えよう、コビーはとにかく不思議に思うしかない。

先ほどルフィが口にしたあの男の名前が原因だろうとあたりをつけたエレノアは、とりあえず話題を変えようとルフィ達に向き直った。

「そーういや、この島の海兵ってモーガン大佐ってやつだったよ……」

ガタガタガタツ。

また騒がしい音がしたかと思うと、さつきよりも離れた炭鋳夫やほかの客たちの姿が見える。

「……ねえ、さつきから何なの？ なにがしたいのあんたら」

「き、気にすんな!! ほら、もつと食うか?」

「さりげなくぼろうとしないですよ」

ちよツとイライラしてきたエレノアがジト目を向けるも、島の住民は視線を合わせようともしてくれない。

気になるが、明らかに面倒ごとのようだし、関与しないほうがいいだろうと放置する。

「……そーういえばこの海軍基地って、大佐の補佐にヨキ中尉ってやつがいるんじゃないか?」

ふと思い出した知識を、コピーに確認してみると。

「「ペツ!!？」」

さつきまで怯えて離れていた連中が、一斉に苦虫を噛み潰したような表情で床に唾を吐いた。

「……………」

なんかのコントか？そう思ったエレノアだったが。

もう、何も喋ろうとはしなかった。

何かと騒がしい店を後にして、並んで歩くルファイ達。

その表情は、三者三様であった。

「なっはっは！ おんもしろかったなあ、さつきの！」

「笑い事じゃないですよ！ 海軍であるはずのモーガン大佐にまであんなに脅えるなんて…僕なんだか不安になってきましたよ」

「ま、普通じゃないことしかわかんないよね」

陽気に笑うルファイだが、確かにこの状況は異常だ。

頼りにするべき海兵にまで怯えていては、平穏などどこに求めればいいのか。どう考えても何か問題があるようにしか思えない。

着いて早々、不穏な気配が立ち込めているのを感じていた。

「…ルフィ、コビー。私はちよつとここらで情報収集してくるよ」

「えっ？ あつ、はい！」

「おう！ じゃあまた後でな！」

二人に手を振り、エレノアはその場に残る。

その影が見えなくなつてから、エレノアは他の島民の目に入らないように近くの建物の陰に入った。

「……………さてと」

エレノアは呼吸を落ち着けてから、フードの端を広げて周囲の音をよく拾えるようにした。

その瞬間、エレノアの特異な耳には島民たちの声が集められていく。半径一メートルしか届かないようなささやき声も、誰にも向けられていない独り言も、果ては家の中の会話までも。

——ヘルメツポのバカ息子がまたやらかしたらしいぞ！

——あいつ、親父がモーガン大佐だからって威張り散らしやがつて……。

——ヨキのヤロウも同罪だ！

あいつだつてもとはただの炭鉱経営者だつたくせによ！

——金で買った官位つてだけなのに威張り散らしやがって！

——あいつらのせいで何人泣かされたことか！

——けど、変に逆らつてモーガン大佐の怒りに触れたら…。

——気に入らない奴はかたつぱしに処刑なんて狂つてる！

すると出るわ出るわ聞きたくもない嫌な噂が。

モーガン大佐といえば、東の海で悪名を轟かせていた海賊を捕らえたことで名を挙げた一兵卒であつたはず。つまり、人柄や能力ではなく結果で出世した輩だということだ。

そして詳しい話を聞いてみれば、欲に目がくらんだ炭鋹の元経営者であるヨキは、モーガン大佐の威光を利用してやりたい放題やつているらしい。炭鋹もいまだ彼の個人資産であるうえ、権力を酷使して炭鋹夫たちの給料すらも搾り取り、懐を潤しているという。

自らの力で横暴にふるまう支配者と、そのおこぼれにあやかつて権力を振りかざす卑怯者、そして父親の権威を笠に着るバカ息子。

早速あまりの腐敗ぶりに怒りも湧いてこなかつた。

「……これは、コビーくんも一緒にどっかに移つたほうがいいかもな」

げんなりしながらもうやめようかと思つたが、不意に気になる会話が聞こえてきたた

めにもう少し続けることにする。

—— ねえ、お母さん。あの腹巻のお兄ちゃん、大丈夫かな？

—— ダメよ、あの人に関わったりしたら。海兵に殺されちゃうわよ！

—— でも、あのお兄ちゃんのおかげで私、狼に食べられずに済んだんだよ!!？

—— それでも、この島でモーガン大佐に逆らったりしたらどんな目に遭うか！

—— でも……！

—— どこかの家庭から聞こえる親子の会話らしい。

モーガンの息子のせいで危険な目にあつたらしいが、腹巻のお兄ちゃんのおかげで助かったのだとか。

「……腹巻のお兄ちゃん？」

ふと気になったエレノアは、なるべくその男が何者なのかを調べるために聴覚を集中させる。

すると、うまい具合にその男について噂している集団を捕まえることができた。

—— おい、聞いたか。あの腹巻きの剣士……ゾロってやつ、まだ処刑場で粘ってるらしいぞ。

—— ほんとかよ！ あのバカ息子が言った約束を本気で信じてるのか!!？

—— ああ……だが無茶だよな。1ヶ月も飲まず食わずで過ごすなんて。

——それができたら釈放してやるなんて言ってたが……本気かどうか。
「……………ふーん」

まさかな、と考えながら、自分の勤が当たったことを察するエレノア。

聞いた話をまとめれば、腹巻のお兄ちゃんことロロノア・ゾロが捕まったのは、モーガンのバカ息子が放し飼いにしていた狼を斬ってしまったため。

囚われの身となった彼は、バカ息子の言うことを真に受けて1ヶ月の断食に挑んでい
るのだとか。

なんとバカな男なのだろうか。後先考えないことといい、バカ息子の言うことを信じ
ることといい。

だが、それがいい。

「こりや、ルフィの言った通りにしといたほうがいいかもな……手放すには惜しい男だ」
フードを直し、エレノアは海軍基地がある方を見やる。

きつとあの二人も行っていることだろう。

予定を決めたエレノアが、海軍基地へと向かおうとした時だった。

——相変わらず汚い店だな、ホーリング。

聞いているだけでいやな気分になる声が聞こえ、エレノアは顔をしかめさせながら振り向いた。

声の出どころは、さっき出てきたばかりの親方の店だった。

第3話 “虎と狐と鼠”

「…これは中尉殿。こんなムサ苦しい所へようこそ」

「あいさつはいい。このところ税金を滞納しておるようだな、お前のところに限らず、この町全体に言える事だが…」

ホコリっぽい酒場の中で、親方と細身の海兵が睨み合う。

細長い顔立ちで、かなり後退した髪や鋭い目つきが嫌味っぽさを感じさせる、神経質そうな男が嫌味を垂れる。この鼠を思わせる男こそがヨキ、この島の海軍基地の中尉だ。

親方も負けず睨みつけるが、両脇に一人ずつ待機している屈強な海兵に阻まれてあまり効果を見せなかった。

「すみませんね。どうにも稼ぎが少ないもんで」

「ふん…そのくせまだ酒をたしなむだけの生活の余裕はあるのか…ということは給料をもう少し下げてもいいという事か？」

「なっ！」

せめて皮肉で対抗しようとするが、逆にそれを利用して更なる横暴のきっかけを

作ってしまおう。

ただでさえスズメの涙である給料を下げられては、自分たちは飢え死にすることは間違いない。それをわかって、反抗的な態度を咎めているのだ、この男は。

「なんだその反抗的な目は？　大佐の耳にこの事が入ればどうなるか、わからないわけではあるまい？」

「てめエ……ふざけんな!!」

我慢の限界に達したカヤルが、つい握りしめていた使い古しのぞうきんを投げつけてしまう。

ヨキの顔面に命中し、びちゃつと張り付いたぞうきんを見て、部下の海兵が眉を吊り上げた。

「中尉!! ……つのガキ!!」

殴りかかりそうになった時、張り付いたぞうきんを外して捨てたヨキが手を振るった。

大した力ではなかったが、体格の差でカヤルは盛大に殴り飛ばされてしまった。

汚らしいものに触れてしまったというように、手袋を捨てたヨキは顎で部下の海兵に示す。すると部下は頷き、腰に下げていた剣をすらりと抜き始めた。

「子供だからとて容赦はせんぞ………みせしめだ」

「!! 逃げろカヤル!!!」

明らかに殺傷する気配の海兵に親方は慌て、息子のもとに走ろうとするがどう見ても間に合わない。

殴られたカヤルは動くことができず、迫りくる刃を前に固く目をつむることしかできなかった。

が、その刃が届くことはなかった。

カヤルと海兵の間に割り込んだエレノアが、刃に向けて自分の片足を盾にしたからだ。

「!!?」

ガキン!!! と。

名刀ではないが鋭い切れ味の刃はエレノアの足を両断することなく、逆にぼつきりと根元から折れてしまった。

「…ええ!!?」

予想外の事態に海兵はおののき、使い物にならなくなった自分の剣を呆然と見下ろす。

それはヨキも、そして親方も同じようで、突然割り込んできた相手を思わず凝視してしまっていた。

「あ、あんた……」

「よ、親方。さつきぶり」

「な、なんだ貴様は?! どこの小僧だ!?!」

「どうも、通りすがりの小僧……って誰が小僧だ!!」

ローブのせいで仕方がないが、性別を間違われたエレノアはくわつと目を吊り上げる。

見慣れない相手に警戒する海兵とヨキに相對し、怒りを抑えたエレノアは呆れたため息をついた。

「さすがにさあ、海兵がちよつとおいたしたぐらいの子供に手を上げるのはやりすぎなんじゃないかなあ? しかもそれ、確実に殺せるやつでしょ」

「お前には関係ない、引っ込んでおれ!!」

「おー怖い怖い。さすが中尉殿は言うことが違いますなあ……勘違いしたネズミヤロウが」

心底見下したような冷たい声に、ヨキの血管がぶちりと切れる。

腰に下げた銃を抜くと、エレノアに照準を合わせながら海兵たちにも視線で命じ、剣を抜かせた。

「……………!! っいつつ……」

一人の少女を相手に、大の大人が三人がかりで襲い掛かろうとしている姿に、周りの者たちも思わず止めに入ろうとするが、当のエレノアに慌てる様子はなかった。

おもむろに出した両手のひらをパチンと合わせたかと思うと、自分の足元にポンとおいて見せた。

「ほい」

その瞬間、青い閃光が走って周囲を明るく照らし出す。

と思つた直後、何の変哲もない床がいきなり変形し、太い角材へと形を変えて急速な勢いでヨキたちに向かつていったのだ。

!!!?

ヨキと海兵たちはそれぞれ腹やあごに強烈な一撃を受け、白目をむいて転倒する。

ガタガターンと埃を巻き上げて倒れていく姿に、エレノアは満足そうにため息をついた。

「……なんてことを」

しんと静まり返つた酒場の中で、誰かの声が妙に響いた。

無理もない。今日出会つたばかりの客が、誰もが逆らうことができなかった相手に喧嘩を売つたどころか、よくわからない力で一瞬でのしてしまったのだから。

転んだ拍子に頭を打つたらしいヨキはよろよると顔を上げ、わなわなと肩を震わせる

と耳障りな金切り声を上げた。

「き、貴様あ!!! 殴ったな!!? このヨキ様を殴ったな!!?」

「キンキンうつとうしい声で騒ぐからき、物理的に黙らせてやったんだよ。文句ある?」

「このつ…言わせておけば…!!」

グラグラ視界が揺れる中、憎々し気に睨みつけるヨキだが、エレノアにはそれはただの虚勢にしか見えない。

激昂するヨキに、我に返った海兵が真つ青な顔で耳打ちをした。

「マズいですよ中尉! こいつの今の技…錬金術とかいうやつですよ!! さすがに分が

悪いですって!」

「つ!!! 覚えていろ!!! このことは大佐に報告させてもらうからな!!!」

相手が悪いことを理解したヨキは顔を引きつらせ、思わずその場から後ずさる。

意識が混濁しているもう片方の海兵を促すと、ヨキはありがちな捨て台詞を吐いて店の外に向かった。

追撃しようかと踏み出しかけたエレノアだったが、その前に親方やカヤルが慌てて立ちふさがった。

「やれやれ…」

「お、おい…自分が何したかわかってんのか?! 中尉は本気で大佐にばらすぞ!!」

「今からでも遅くねえ！ 見つからねえうちに逃げたほうが…」

その場にいた全員が一齐にエレノアの身を案じるが、彼女にとってはそれは余計なお世話である。

思わずため息をつき、心配そうな表情を浮かべている大人たちを睨みつけた。

「ちよつと待つてなさいよ、腰抜けの筋肉だるまども」

「!?」

思わぬセリフに固まる炭鉱夫たちを一瞥し、包围を潜り抜けてエレノアは歩き出す。

呆然と見つめてくる腑抜けたちに、エレノアはフードの下から小ばかにしたような目を向けた。

「ガワだけで何もできないあんたらの代わりに、私がこの島の海軍基地をぶつ潰してきてやるからさ」

??

「おれは、偉い」

海軍基地の最上階にある執務室で、豪華な椅子に座った男がつぶやいた。

呟いたというよりも、その言葉を自分がかみしめているようなはつきりとした声だった。

「はっ、何しろ大佐でありますから!! モーガン大佐」

「その割には、近頃町民どもの『貢ぎ』が少ねエンじゃねえか？」

「はっ！ その…」

大佐の言葉に思わず部下は顔を青くさせる。

モーガン大佐が就任してからというもの、すでに税金以上の徴収が連日行われ、町民たちの財布は火の車となっている。

無論海兵たちもさぼっているわけではないが、どんどん額が吊り上がっていく税率は海兵たちから見ても無茶苦茶に思えた。

「懐は問題じゃねえ…、要は俺への敬服度だ!!」

しかしそれを口にすることはできない。

それだけの迫力を、モーガンは常に放っていたからだ。

「親父っ!!!」

「大佐っ!!!」

「どうしたヘルメツポにヨキ。騒々しいぞ」

息子と部下が同時に執務室に駆け込んできても、モーガンは面倒くさそうに視線を向けるだけで振り向きもしない。

それでも気にせず、ヘルメツポは赤く腫れた顔を涙で濡らしながら怒りをこらえて言った。

「ブツ殺してほしい奴が、いるんだよ!!!」

ヘルメツポの隣で、顎を赤くしたヨキもうんうんと強くうなずいた。

??

「急げ！ 明日にはお披露目だぞ!!？」

屋上に集まった海兵たちが慌ただしく動き、横に倒された石の塊にロープを通す作業を施している。

本来巡回やら訓練やら、治安を守るための仕事に専念しているはずの彼らが、今はなぜか一心不乱に石像の至るところにロープを結ぶ作業に集中している。

それも何かに急かされているように引きつった顔で、異常な光景であることは確かだ。

「注意しろ！ 少しでも傷がついたら大佐に何をされるかわからんぞ!!？」

両手を広げた、片腕が斧になった大男の像。

そのモデルこそ、この島で恐れられている男、モーガン大佐であった。

「…うゝわ、やっぱろくでもないところだった。どうしよつかなこれ」

その光景を、いつの間にか基地内に侵入したエレノアは、扉の影から引きつった顔で凝視する。

権力の象徴を無駄に金をかけた像で示そうとしたり、それをよりによって海兵にやら

せていたり随分やりたい放題だ。きつとその資金源も島の住人たちの税金によるものであろう。

大した英雄である。

「……つと、こんなところで油売ってる場合じゃないね」

この島の海兵の腐りっぷりに呆れていたエレノアは、本来の目的を思い出してその場を離れる。

目的地は、あの男の得物が隠されている場所だ。

「ゾロくんの剣はどこかしら……つと」

聞くところによれば、彼の得物は刀なのだとか。

取引材料というわけではないが、持つて行つてやればいい印象を抱いてくれるのではないだろうか。

そう思つて通路を歩いていたエレノアだったが、片っ端から部屋を開けて言つてもなかなか見つからない。

武器庫か倉庫か、とにかく刀を隠しておくのによさそうな部屋は全部探したつもりだが、それでも一向に見つからなかった。

首をかしげるエレノアだがそのうち、何やら前方が騒がしいことに気がついた。

「……………んっ？」

目を凝らせば、向こう側から何者かが走ってきている。

よく目を凝らせば、抱えられた男が盾にされ、悲鳴を上げながら全力疾走している。

よくよく目を凝らせば、抱えている男は頭に見覚えのある麦わら帽子をかぶっているのが見えた。

「どけどけく!!! 刀はどこだああああ!!!」

「アンタ何やってんだああああ!!!」

船長が、大勢の海兵を引き連れながら前方から向かってくるといふありえない状況に、エレノアは思わず目をむいた。

なにがどうしてこうなったというのか。

「エレノア! ゾロの刀知らねえか!!」

「あ、うん。今探してるところ……ってそれどころじゃないでしょ!!!」

「じゃあ仕方ねえ。おい!! 早くお前の部屋どこか教えるよ!!」

「だ……だがらやべろっで!!!」

「……ああ、こいつが例のバカ息子」

ルフィに引きずられる変な髪形の男に、ヨキに似た匂いを感じて納得するエレノア。なるほど、腐っても大佐の息子であるために海兵の盾にしたのか。

「で、もしかしてゾロ君の刀って、そいつが持つてるの?」

「ああ、こいつの部屋にあるって!!」

「そうかなるほど。じゃあ吐け。今すぐキリキリ吐け」

「おばえらぎつきがらおでのあづがいぎづすぎだろ!!」

「……なんて?」

涙声すぎて何と言ったのか判別できず聞き返してしまった。

だがそんな中、エレノアの耳は窓の外、磔場のあたりから騒がしい声がしているのを捉えた。

「ん? なんかあそこでもやってるな……って」

途中で立ち止まり、様子をうかがっていたエレノアは、思わず目を見開いた。

「コビー君!!」

磔になっている男、おそらくはロクノア・ゾロの足元近くに、肩を赤く染めたコビーが倒れこみ、泣き叫んでいた。

彼のことだ。不当な理由で逮捕されたゾロのために、こつそり縄を解きに来たところを狙い撃ちされてしまったのだろう。

あの様子では急所は外れたようだが、このままでは殺されてもおかしくはない。

「ルフィ、ゾロ君の剣は任せた!!」

「おう! さっさと言えっての!!」

「いでいでいで言うつでイツでんだろが!!!」

ルフィに断りを入れてから、エレノアはパンツと手のひらを打ち合わせ、窓と壁に向けて叩きつける。

閃光とともに、邪魔な壁は分子レベルで分解され、砂のように崩れて大きな穴が開く。

「待っててね、コビーー!」

自分一人がぐるぐるに十分な穴をくぐったエレノアは、そのままコビーたちの方へ体を傾け、思いつきり壁を蹴って滑空を始めた。

??

「モーガン大佐への反逆につき、お前たち二人を今、この場で処刑する!!!」

磔にされたままのゾロと、侵入した罪に問われているコビーに一齐に銃が付きつけられる。

絶体絶命のピンチに、コビーは真っ青な顔で涙を流した。

「ロロノア・ゾロ…、ためエの評判は聞いてたが、この俺を甘くみるなよ。貴様の強さなどおれの権力の前には、カス同然だ…!!!」

「全くその通りでございます!! さあお前ら、大いに後悔するがいい!! このモーガン大佐に、引いてはこのヨキ様に逆らったことをな!!!」

片腕が斧になった大男、海軍大佐にしてこの島の実質的な支配者モーガンと、そのお

こぼれで威張り散らしている海軍中尉ヨキがゾロとコビーを睨みつける。特にヨキは、鬼の首でも取ったようないやらしい笑みを浮かべていた。

「構えろ!!」

(おれは…、こんなところで死ぬ訳にはいかねえんだ………!!!)

自分を狙う銃口を睨み返しながら、ゾロはままならない現実を呪う。

始まりは、自分が通う剣術道場でのことだった。

師範の娘・くいなにいつも負けてばかりであった少年ゾロは、毎日のように挑んでは連敗記録を重ねていた。

何度挑んでも勝ち星を上げられないことに感情があふれ出し、情けなく泣きじゃくりながらくいなに自分の悔しさを吐露してしまった時、くいなもまた弱くなっていく自身への悔しさを初めて打ち明けた。

ゾロはそんなくいなの言葉を逃げだといいいのけ、いつか最強の剣豪の座をかけて努力を諦めないことを誓わせた。

だが、約束は果たされなかった。

階段で転んで頭を打ったくないなが、あっさりとその世を去ってしまったのだ。

動かないくいなに詰め寄っても返ってくる声はなく、ただ悔しさと悲しさだけが募るばかり。

だから、彼は誓った。

—— おれ、あいつのぶんも強くなるから!!!

天国までおれの名が届くように、

世界一強い大剣豪になるからさ!!!!

そう、くいなの父である師範に誓い、くいなの剣を受け継いだ。

だから彼は、約束を違わない。

こんなところで約束を破るわけには、絶対にいかなかった。

(約束したんだ………!!)

理不尽が、彼と巻き込んでしまった少年を貫こうとした瞬間。

ガギギギギン!!!

上空から突如割り込んだ影が、大きく伸びて銃弾の雨を受け止めてみせた。

純白の翼のように見えたそれは、鋼の硬さを以って銃弾の衝撃をはじき、ゾロとコ

ビーを守り抜いた。

「きかないよ、そんな鉄くずなんか」

海兵たちに背を向けながら、自身の翼を広げた影……エレノアが小馬鹿にするように

告げる。

目の前に現れた異形を前におののく海兵たちを他所に、天使の少女はにつこりと笑い

かけた。

「な、なんだお前?!」

「エレノアささささん!!!」

初めて見る少女に驚くゾロと、再び間一髪で救われたコビー。
二種類の声を受けたエレノアは、満足げにうなずいて見せた。

第4話 // 英雄の器 //

「な、なんだあいつは……!!」

「あのガキ……!! って天族うゝゝゝ!!?」

突如海兵たちの前に現れた、巨大な翼をもつ少女に驚愕の声が続々と上がる。

特にヨキは、聞き覚えのある声に怒りが再燃しかけたところで、その相手が伝説の存在であったことを知って、これ以上ないほどに目を見開いていた。

「ば、バカな!! 天族が実在したというのか!!?」

「嘘だろ……!! 船乗りの守り神が何で海賊狩りを……!!」

海兵たちにとっても、天族の存在は神聖的なものである。

海を守る彼らにとつて、自分たちにとつても守り神であるはずの存在が敵の味方をするという事が信じられなかった。

そんな視線を丸ごと無視して、エレノアは磔になったままのゾロのもとに近寄った。

「よ。なんかうちの船長があんたを勧誘するって聞かないもんだからさ、どうしようかと思つてただけど……人を見る目はあるみたいだね」

「え、エレノアさん、その羽根……!」

「……………!! お前、あの野郎の……………?」

「詳しい話はあとにしようか。……………どうせもうすぐここに来るし」
得意げな顔で、エレノアがそう言った直後。

「ゴムゴムのオ……………ロケットオ!!」

声と同時に、エレノアたちのすぐ近くに飛び込んでくる影が一つ。

盛大に砂埃を巻き上げて降り立ったそいつ……ルフィは、パンパンとズボンをはたきながら立ち上がり、へたり込んでいたコビーに手を上げた。

「よおコビー。大丈夫か?」

「大丈夫じゃないですよ!!! ほら、こんなに血が!!!」

「そんだけ叫べるなら大丈夫でしょ」

「……てめエら一体、何者なんだ」

どこからか走らないが、猛スピードで突っ込んできて平気な顔をして居るルフィと、伝説の天使の少女が和気あいあいと話合っている様にゾロは呆然とする。

するとルフィは、恥ずかしげもなくこう言った。

「おれは、海賊王になる男だ!!!」

しばしそのセリフに目を見張っていたゾロだったが、ルフィが差し出した三本の刀を見て我に返った。

「あ、そうだゾロ。お前の宝物どれだ？ わかんねえから3本持つてきちゃった」
「三本ともおれのさ…俺は三刀流なんでね…」

満足げに不敵な笑みを浮かべるゾロを見て、エレノアは挑戦的な目を向けた。

その背後には、包囲網を組む数十人の海兵たちがいる。

「さてゾロ君。ここで私たちと一緒に海軍と戦えば、晴れて政府にたてつく悪党だ。このまま死ぬのとどっちがいい？」

「てめエ、天族のくせに悪魔みてエな奴だな…」

小悪魔的な眼差しに、ゾロはやや呆れたようにつぶやく。

だが、すぐにその挑戦を真つ向から受け止める不敵な笑みを浮かべる。

「まあいい…ここでもくたばるくらいならなつてやろうじゃねエか…、海賊に!!!」

「そう来なくつちやね！」

勧誘が成つたことに満足し、エレノアはパチンと指を鳴らす。

そのままゾロの縄を解きにかかるエレノアを前にして、海兵たちは完全に引け腰になつていた。

無理もない、彼らは船乗りの守り神に引き金を引いてしまったのだ。

「た、大佐!!! あんなのが相手じゃ、我々にはどうにも…!!!」

戦意を喪失しかけている海兵たちが、助けを求めてモーガンに視線を集める。

命令したのは彼なのだから、彼にこそこの状況を何とかしてほしい、そんな責任転換の意志が表れていた。

しかしこの男は、微塵も臆した様子ではなかった。

「うろたえるんじゃないやねエ!!? 神だの天使だのが実在してたまるか!!! 確かにありや、ただの人間じゃねエ: 噂に聞く、あの『悪魔の実シリーズ』の何かを食いやがったに違いねエ」

「…あの海の秘宝を!!?」

「まさか…じゃあ今の能力は悪魔の…!!!」

自分が最も偉いと信じ、神をも恐れない彼にとって、先ほど銃弾を弾いたのも何かしらのトリックがあるのだと考える。

根拠のない憶測だったが、それだけ悪魔の実の力という説得力は大きく、海兵たちに活力が戻り始めた。

「銃^{ピストル}が駄目なら斬り殺せ!!!」

「「お…うおおおお!!」「」

いまだためらう海兵はいるものの、命令を受けた海兵たちは一斉に剣を抜いて突進を開始する。

もはやヤケクソな勢いだったが、追い詰められた人間の勢いと力はすさまじいもので

あった。

「早くほどけ早く！」

「せかすなよ。この結び目固くつてよオ」

「わー!!!? きてますきてますつて!!!」

迫りくる海兵たちにゾロとコビーは焦る。

ルフィはなぜかのんびり縄をほどきにかかっているが、動けないゾロや戦えないコビーには危機が刻々と迫ってきている。

段取りの悪い船長と友達を見て、エレノアは深いため息をつき、パチンと両手のひらを打ち合わせた。

「おれに逆らう奴ア全員死刑だア!!!」

モーガンの盛大な宣言とともに、海兵たちの刃が一齐に振り下ろされる。

だが、響いたのは肉が裂けて血が噴き出す音ではなく、無数の金属同士がぶつかり合う甲高い音。

パラパラとちぎれ落ちた縄を踏み、解放された男が船長の前に刃を携えて立ちふさが
る。

両手に一本ずつ、口に一本の刀を構え、数人の海兵の刃をたつた一人で受け止めたゾロが、そのままの体制で海兵たちを睨みつけた。

「てめエらじつとしてろ。動くど斬るぜ」

「ひい……!! ……!!!」

凄まじい殺気を放つ男の目に、海兵たちは恐怖で顔を真っ青にする。

ルフィは目を輝かせ、コビーは安堵のせいか気絶するように倒れこみ、エレノアは感嘆の口笛を吹く。

するとゾロは、ルフィの方をぎろりと睨みつけた。

「海賊にはなつてやるよ…約束だ!! だが、いいか!! 俺には野望がある!!! 世界一の剣豪になることだ!!! こうなつたらもう名前の浄不浄もいつてられねエ!! 悪名だらうが何だろうが、俺の名を世界中に轟かせてやる!!! 誘つたのはてめエだ!! 野望を断念するようなことがあつたら、その時は腹切つておれにわびろ!!!」

「いいねえ世界一の剣豪!! 海賊王の仲間なら、それくらいなつてもらわないとおれが困る!!!」

「ケツ、言うね」

壮大な野望に壮大な野望で返され、ゾロは獰猛な笑みを返した。

目的は違えども、ともに野望をかなえるために同じ船に乗る仲間が一人、ここに集つた瞬間だった。

新たな仲間の誕生に、エレノアは満足げに笑う。

「なにボサツとしてやがる!!! とつとそいつらを始末しろ!!!」

動かない部下を怒鳴りつけるモーガンの声に、ルフィとエレノアはキツと視線を鋭くする。

「しゃがめ、ゾロ!! ゴムゴムの…鞭!!!」

「死にたくなけりやとつとと下がりな…! 祈^イ禱^バ風^ウ矢^{!!!}!!!」

ちようどよくゾロの周りで集まった海兵に、そして銃を構えたまま待機している海兵たちに、ルフィとエレノアは標的を定める。

ルフィの足が回し蹴りの勢いで勢い良く伸び、強烈な鞭の一撃をお見舞いする。

そして両手を合わせたエレノアの周囲で空気が凝縮し、数条の風の矢となって銃を持った海兵たちの腕に突き刺さった。

「…!!!」

バタバタと倒れていく部下に、モーガンの怒りがさらに募っていく。

「や…やった!! すごいっ!!!」

「てめえらは一体…!!!」

コビーは称賛するが、人外の技を見せつけられたゾロは瞠目する。

それに対して二人は、自信満々に言っただけだ。

「ゴム人間と」

「錬金術師だ!!!」

あつげにとられているのは海兵たちもだった。

もう一人が能力者だったことも驚きだが、何も無い空間からなにか武器のようなものを作り出したエレノアの姿を見て、全員の表情が恐怖と後悔に彩られていく。

「あ、あいつも悪魔の实の能力者だったのか…?!」

「ていうかやつぱりあの天族本物じゃないか?!」

「た…大佐!! あいつら…!! 我々の手にはおえません!!」

「ムチャクチャだ!! あんな奴ら…!!」

「それに…、ロロノア・ゾロと戦えるわけがない…!!」

次々に弱音を吐き、後ずさっていく海兵たち。

彼らにモーガンは、平坦な声で言い放った。

「大佐命令だ。今…、弱音を吐いた奴ア…頭撃つて自害しろ」

「!!」

「このおれの部下に、弱卒は要らん!!! 命令だ!!!」

「……!!」

あまりにも理不尽な命令に言葉を失う海兵たちだが、次第に全員が銃を掲げ、自分のこめかみに銃口を当てていく。

ただモーガンが強いからではない、恐怖が体の奥底に染みこんでしまっているために、逆らうことができないのだ。

(わ、私は言っていない!! 言ったのは他のやつだ…!! し、死にたくない…!!)

ただ一人ヨキだけが内心で言い訳を吐いているが、内心で無理かもしれないと思ったために、自分も肅清対象に入っているのではないかという恐怖心を抱いていた。

「どうかしてるぜ、この軍隊は…!!」

徹底した恐怖政治に、ゾロが思わず嘆息する。

だがその時、じつとそれを見ていたエレノアが大きく息を吸いこみ始めた。

「おいぼんくらどもオ!!! 耳の穴かっぼじつてよく聞きなさい!!!」

腹の底まで響いてくるほどの怒号に、海兵たちはビクウツと肩を震わせて、引き金を引こうとしていた指を硬直させた。

情けない顔をさらしている海兵たちに、エレノアは心底軽蔑した目を向け、怒鳴りつけた。

「尻尾ふって生きながらえるだけがあんたたちの生き方なの!! あんたたちにとってこいつがどんだけ怖いかは知らないけど、矜持プライドを捨てても従った結果がこれなの!!? 情けないぞ海兵共!!!」

思わぬ相手からの説教に、海兵たちの顔に戸惑いと迷いが生まれる。

その声は、敵に対する怒りの感情などではなく、まるで母親が子供を叱るときに向け
る慈愛のようなものを感じたのだ。

「てめエの意志を、いつペンでも通してみろよ!!! 男おの子ども!!!」

「:!!!」

悲痛な顔を浮かべていた海兵たちの目に、小さくも確かな火が灯る。

なにか、大切なものを思い出したかのような、そんな熱い炎が。

「な、なんなんだあいつは…?!」

崇高な意思も、正義感もなく、ただ権力が欲しくて中尉の座を手に入れた男であるヨ
キは、その光景が理解できなくて戸惑うほかにない。

そんな彼に、エレノアはギン、と鋭い目で睨みつけた。

「あんた、散々あの男の下で甘い汁すすってたんだろ…?」

「!!!」

標的にされたことに気づいたヨキはぶわっと脂汗を吹き出させ、一步を踏み出したエ
レノアに恐怖に満ちた表情を見せた。

エレノアは唯一、この男だけは許すつもりはなかった。

強いものに媚びへつらうもそれを恥とせず、むしろ同調して力のない人々を踏みにし
り、子供まで手をかけようとした性根の腐った野郎。

この男がいてもいなくても、この島は腐っていただろう。

だが、それでもエレノアには、この男を許すつもりはなかった。

ほかならぬ島の人々の声を、その耳で聞いたのだから。

「五体満足でいられると思うなよ!!!」

「ヒツ……お、お前たち!!!? 私を守れエ!!!?」

完全に腰を抜かしたヨキが、自分の屈強な部下たちを盾にする。

ためらいながらも、上司の命令を忠実に守ろうと、海兵たちが再びエレノアに斬りかかる。

「身分も低い、称号もねエやつらは……!!! このおれに逆らう権利すらない事を覚えておけ、おれは海軍大佐『斧手』のモーガンだ!!!」

「おれはルファイ! よろしくっ」

モーガンの相手は、ルファイが務めるらしい。

横目でそれを見たエレノアは、必死にその光景を見届けようとしているコビーの姿に気が付いた。

「ルファイさん!!!? エレノアさん!!!? こんな海軍つぶしちやえ!!!」

声援を受け、エレノアはぐつとサムズアップで答える。

「うおおおこの化け物がア!!!」

「こんなナマクラで、私を止められるわけないでしょ!!?」

気合の咆哮とともに振り下ろされた新品の剣が、エレノアが振るった翼によつて真つ二つに両断された。

再び使い物にならなくなった自分の剣と、金属の輝きを放つエレノアの翼、そして、エレノアの両手のひらの間で渦巻く炎を目の当たりにし、海兵達は腰を抜かす。

そして、エレノアの次の標的が自分であることに気づいたヨキは、涙を流しながら後ずさった。

「仕置の時間だ………歯あ食い縛りなア!!!」

ごうごうと唸りを上げていた炎が徐々に形を成し、一本の長い槍へと変わる。

空気を焼く炎の槍を構えたエレノアが紡ぐ乱雑な祝詞が、ヨキの魂魄に恐怖を刻み込んだ。

「^{ゲイ・ボルク}必穿朱槍!!!」

「ぎやあああああああ!!!」

伝説の天使が操る炎の槍が全力で投擲され、ヨキの胸に突き刺さる。

直後、込められた力が爆発し、欲深な罪びとの体は真つ赤な炎に包まれたのだった。

第5話 「ルフィとコビー」

炎に焦がされ、真っ黒になって倒れていくヨキ。

どさつとその体が地面に落ちるのを確認すると、エレノアの翼が徐々に金属の輝きをなくし、普通の白い羽に変わっていく。

ふと近くからずしんと重いものが倒れる音が聞こえてくる。

振り返ってみれば、伸びた腕をバチンと引き戻すルフィと静かにたたずむゾロ、倒れ伏すモーガン大佐の姿があった。

「ナイス、ゾロ」

「お安い御用だ。キャプテン船長」

声を掛け合い、戦闘態勢を解いていく二人を見たエレノアは、次いで立ち尽くしているほかの海兵たちに目を向けた。

「さア、あんたたちの頭は倒れたよ!! どうするの?！」

「た…大佐が負けた…!!」

「モーガン大佐が倒れた!!!」

ピクリとも動かない大佐や、真っ黒こげになったヨキを見て海兵たちは言葉を失う。

そして、ぶるぶると肩を震わせたかと思うと、一斉に拳を突き上げて声を解き放った。

「やったア——っ!!!」

「解放された!!!」

「モーガンの支配が終わったア!!!」

「海軍バンザーイ!!!」

「ザマーミロ、ヨキの奴め!!!」

一斉に武器を放り捨て、仲間と抱き合い、手のひらを打ち合わせ、歓声を上げる海兵たちを見て、ルフィやエレノアは呆れた表情を浮かべた。

「なんだ。大佐やられて喜んでやんの」

「……みんな、モーガンが恐かったただけなんだ……!!!」

「てかどんだけヨキのやつ嫌われてたのよ?」

自分の意志で従っていたわけではないことを知り、コビーは安堵の表情を浮かべる。海兵に憧れる彼の夢が、壊れずに済んだのだ。

だが、そんな空気をぶち壊すバカがこの場にはまだいた。

「き、貴様ら何を喜んどのかあ!!? た、大佐に対しこの仕打ち、部下の分際で許されると思っているのかあ!!!」

黒焦げになったヨキが、はしゃいでいる海兵たちを怒鳴りつける。

もう恐怖の対象であつたモーガンは盾にできないというのに、金で買った地位が彼に虚栄を抱かせていた。

その様に思わずエレノアは顔をしかめる。

「うつわ…あいつしづといな」

「こゝ、殺せ!! あの不届き者どもを殺せエ!!!」

恐怖政治の中でも、ヨキのように自ら媚びへつらうことで甘い汁をすすっていた海兵が一部にはいたようで、ほかの海兵やルファイたちに武器を向け始めた。

だが、そんな彼らの背後に、ぬうんと大きな影が差し、びくつとその体が震えた。

恐る恐る振り向けば、島の住民たちである炭鋹夫たちが実にいい笑顔を浮かべて集結していた。それも、数十人の集団で。

「おいおい、困りますなあ? 素直に負けを認めてもらわねばいつまでたつても終わりませんぜ」

「海兵様も暇じゃねエんだろ?」

「う、うるさいどけ貴様ら! ケガしたくなかつたらさつさと…」

武器を持つていることで優位に立っていると思つたのか、屈強な炭鋹夫たちを前にヨキも引かない。

が、炭鋹夫たちにとって、武器など己の拳だけで十分だつた。

「炭鉱マンの体力、なめてもらっちゃ困るよ中尉殿」

ゴキゴキと鳴り響く拳を見せつけられ、ヨキや海兵たちの顔が真っ青に染まりきつた。

「ぎやあああああああ!!!」

バキゴキボカグシャ!!!

人体から鳴っていいものではない音が鳴り響き、その後ぼろクズのようなになったヨキたちが放り捨てられる。

これまでのうつぶんが見事に表れたやられっぷりに、エレノアが思わず口笛を吹いた。

「…親方」

「嬢ちゃんにばかり任せたまんまじや、カミさんやカヤルに顔向けできねエよ」

妙にすつきりした表情で汗を拭く親方に、エレノアは肩をすくめる。

漁夫の利というか、来るのが遅いと言いたかったが、一応は炭鉱夫も一般人だ。モーガンのような猛者を相手にするのは酷だろうと、大目に見ることにした。

「お前さんに言われてハツとしたよ。おれの家族は俺の宝だ。俺が守らねエでどうするんだってな」

「…うん、じゃ、許す」

きつとこれで、彼らは学んだことだろう。

たとえ相手がどんなに恐ろしくとも、大切なものを守るために立ち向かう勇気を。力を合わせれば、戦えるという事を。

ま、いいかというように、エレノアはため息をつくとき笑みを浮かべた。

「よっしゃ——!!! 酒持って来い酒——っ!!!」

「島中のみんなにこの事を伝えろオ!! モーガンのクソ野郎は倒れたア!!!」

炭鋤夫や海兵たちが、この場にはいない仲間や家族に朗報を知らせるために走り出す。みんな実に晴れやかな顔で、希望に満ち溢れた顔をしていた。

「……ところでなんであのバカ息子倒れてんの?」

「あいつ、コビーを人質に取りとうとしてたんだ」

「ああ……」

無様に倒れているヘルメツポの方を見たエレノアが、納得のため息をついた時だった。

刀を鞘に納め終えたゾロが唐突に、糸が切れた人形のように倒れ伏したのだ。

「ゾロ!!」

??

「はア、食った……!!! さすがに9日も食わねエと極限だった!!!」

ルフィとエレノアが最初に入った酒場のテーブルで、久方ぶりの食事を楽しんだゾロが息をついた。

なんてことはない、先ほど倒れたのは空腹が限界に達したためであった。

「水もなしによくやる…」

「じゃあ、どうせ一カ月は無理だったんだな！」

「おめエは何でおれより食が進んでんだよ」

「すいません、なんか…僕までごちそうに…」

「いいのよ！ 町が救われたんですもの！」

「その通りだア！！ 救世主が遠慮なんてするんじゃねエよ!!!」

「ほらもつと食ってくれよ!!!」

「全く、調子いいんだから…」

登場が遅れたことがやっぱりちよつと気になるエレノアは、一緒になって騒いでいる炭鉱夫たちをジトつとした目で睨みつける。

そこへ、エレノアが声だけを聴いた、ゾロに砂糖で握ったおにぎりを渡しに行った少女とカヤルが話しかけてきた。

「やっぱりお兄ちゃん、すごかったのね！ お姉ちゃんもありがとう!!」

「お前ら、こんなにすごかったんだな!!!」

「すごいのは君の方さ。私は君がヨキに立ち向かわなきや、手を貸そうとは思わなかった：誇つていいよ。無謀なのは間違いないけど」

カヤルの勇気をたたえようと、彼は照れ臭そうに頭をかく。

その様子に親方がわがことのように喜び、新たな酒瓶を開け始めた。

「それで、ここからどこへ向かうつもりだ？」

一息ついたところで、ゾロがルフィとエレノアに尋ねる。

海賊になったたはいいが、今後のはつきりとした予定を聞いておく必要があった。

それに対する、ルフィの答えは。

「『偉大なる航路』へ向かおう」

仲間ができたときに向けて決めていたことを、告げた。

「んまつ、また無茶苦茶な!!」

当然コビーは驚きあきれる。

いまだルフィの仲間は二人だけ、強いのは確かだが、たった三人だけで迎えるほど偉大なる航路は優しい航路ではない。

そんなものは常識であった。

だが、エレノアもゾロも特に反対する様子はなかった。

「どの道『ワンピース』をを目指すにはそうするつきやないけど……」

「いいんじゃないか?」

「いいってお二人まで!!」

「別に、お前は行かぬエんだろ……?」

「い…いか…行かないけど!! 心配なんですよ!! いけませんか!? あなた達の心配し
ちやいけませんか!!!」

「いや…それは」

「忠告として受け取っとくよ」

一緒に行くわけでもないのに、わがことのように案じるコビーのゾロは押され、エレ
ノアは苦笑する。

臆病なくせに妙にお人好しな彼のことは心配だが、ちゃんと意思を表示する勇氣を手
に入れたようでエレノアは安心した。

「ルフィさん、ぼくらは…!! つきあいは短いけど、友達ですよね!!!」

「ああ、別れちゃうけどな、ずっと友達だ」

何の迷いもなく帰ってきた言葉に、コビーは安堵と喜びが混じった表情を浮かべる。

それは彼が、何よりも望んだ言葉だったからだ。

「ぼくは…小さい頃からろくに友達なんていなくて…ましてや、ぼくのために戦ってく
れる人なんて絶対いませんでした。何よりぼくが戦おうとしなかったから…!!」

これまでの彼は、ただ愛想笑いを浮かべて流されるばかりであった。

人との付き合いも、困難も、自分が傷つかないようにうまくやろうとしただけで、立ち向かおうとしたことがなかった。

芯のない生き方をしていただけの少年は、たった一つの出会いによって変わったのだ。

「だけど、あなた達三人には……!! 自分の信念に生きること教わりました!!!」
ルフィの生き様は、コビーの理想だった。

自分の信じた道をまっすぐに進む彼の生き方が、途方もなくまぶしかったのだ。
が、ルフィはそう言ったコビーに呆れた目を向けていた。

「だから、俺たちは『^{グランドライン}偉大なる航路』へ行くんだよ」

「まア、そうなるな」

「あつ、そつか。いや!! 違いますよ、だから今、行くことが無謀だつて……」

「……ぶつちやけ、私は君の過去のほうが心配」

「え?」

「アルビダの海賊船（かいぞくせん）にいたでしょ? 素性が知れたら入隊なんてできないよ?」

エレノアの指摘に、コビーはハツとなる。

海兵たちは圧政に加担していたが、性能が落ちていたわけではない。

海軍の諜報能力があれば、自分が海賊の一味であったことなどすぐにはばれてしまうのだ。

「失礼！」

コビーが焦りで冷や汗をかいていると、酒場のドアを開けて一人の海兵が顔を出した。

エレノアはその海兵中佐の顔を見て、時が来たことを察する。

彼の顔は無表情でありながら、義務感と申し訳なさがにじみ出ている複雑な表情だった。

「…そろそろお暇しないとね」

「すまないな…：反逆者としてだが、我々の基地とこの町を實質救ってもらったことには一同感謝している。しかし…」

「わかっている。私たちが海賊を名乗る以上、黙っているわけにはいかないよね」

例え少人数であろうとも、海賊と海軍は敵同士である。

恩人であろうとも、この定めは覆されはしなかった。

「即刻、この町を立ち去ってもらおう。せめてもの義理を通し、本部への連絡はさける」

「おい海軍っ!! なんだ、そのいいぐさは!!」

「てめエらだってモーガンにや抑えつけられてビクビクしてたじゃねエか!!」

「我々の恩人だぞ!!」

「嬢ちゃんも一言ぐらい文句言つてやれよ!!」

町民や炭鋤夫たちが一齐に海兵を非難するが、エレノアはそれを視線で制する。

必死に擁護してくれるのはうれしいが、本来こんな事件はあるはずがないことなのだ。

海軍と人々の間に禍根を残さないために、大ごとにはしないほうがいい。

「仕方ないよね、ルフィ」

「じゃ…行くか。おっさん、ごちそうさま」

「……………」

「お、おい…ほんとに行っちゃまうのか?」

親方は惜しむように言うが、エレノアが黙って首を振ると肩を落として黙り込む。

そのままルフィとゾロと共に去ろうとした時、一人立ち尽くしているコビーに気づいた中佐が眉を寄せた。

「君も仲間じゃないのか?」

「えー…ぼく……………」

ずつと一緒に行動していたのだから、仲間だと思っていたのだろう。

コビーはびくつと肩を震わせると、迷いながら口ごもる。

何度も何度も言いかけながら、やがて彼は引き絞るように意思を発した。

「ぼくは彼らの……仲間じゃありません!!!」

きつく歯を食いしばり、拳を握りしめるコビーを見て、ルフィが何やら考え込む。

その顔を見ただけで何をする気か察したエレノアは、ふつと微笑むと先に酒場の入り口をくぐった。

「ルフィ、先行くよ」

「おう」

「ゾロ、先行つて船、用意しておくから」

「ああ」

エレノアと入れ替わるように、ルフィがコビーの方に一步踏み出す。

これから彼が口にするのは、友を想うゆえの暴言。

彼に勇気を引き出させるための、背中を押す悪口。

聞こえてくる殴打の音に苦笑しながら、エレノアは町民や炭鉱夫たちの間を抜けて、

一足先に港へ向かった。

——ぼくは!!!

海軍将校になる男です!!!!

「……………頑張れ、コビー君」

強く響いた男の信念に、エレノアは満足そうに微笑むと、再びフードをかぶって顔を隠した。

しばらくして、頬に痕が付いたルフィとあきれた様子の子のゾロが港の方に合流した。

「たいしたサル芝居だったな。あれじゃばれてもおかしくねエぞ」

「さあ？ 最初からあの中佐さん気づいてたかもよ？」

「あとはコビーが何とかするさ、絶対！」

「何にしてもいい船出だ。みんなに嫌われてちゃ、後引かなくて海賊らしい」

「…そうだね」

これが、海賊としてあるべき姿。

そう思っても、エレノアは少し寂しい気持ちが出た。

その時だった。

「ルー！ ルー！ ルフィさんっ!!! エレノアさん!!!」

出航間近の三人のもとへ、かけられる声。

振り向いてみれば、吹っ切れた表情のコビーが、見事な姿勢で立派な敬礼を見せていた。

以前までの弱気な姿などどこにもない、一回りも成長した姿だった。

「ありがとうございます!!! この御恩は一生忘れません!!!」

これまでの感情や官舎がいつばいに詰まった言葉で、コビーはルフィたちを見送った。

「海兵に感謝される海賊なんて聞いたことねエよ」

「ししししー！」

「にやはは」

「また逢おうな!!! コビー!!!」

友達の声援エールに、ルフィは満面の笑顔で答える。

泣きそうな顔で見送るコビーの背後に、ザツといくつもの靴音がそろった。

「全員敬礼!!!」

島にいた海兵たちが、全員そろってルフィたちに敬礼を見せていた。

これまで前例などなからう、海兵が一海賊に感謝の意を示した瞬間だった。

その後ろで、炭鉱夫や町民たちがありつけたけの感謝を伝えようと大きく手を振り、歓声を上げて見送りに集まってくる。

その光景がどうにもおかしくて、エレノアは腹を抱えて笑いながら、ゾロは苦笑しながら、ルフィは大きな笑い声を残しながら手を振り、小舟に乗り込んでいった。

「いい友達をもったな」

「はいっ」

中佐の言葉に、感極まったコビーが涙を決壊させる。

そして、三人を乗せた小舟が見えなくなったころ、一人の海兵が慌てた様子で駆け込んだ。

「中佐！ 大変なことが……！」

「？ どうした？」

見送りに顔を出さなかつた海兵が持つてきた書類に、中佐は眉を寄せる。

そしてそれが何なのかを理解した瞬間、驚愕に目を大きく見開いた。

「これは……手配書？ ってこの顔は……！」

WANTEDと大きく書かれた顔写真付きの書類を見た中佐は思わず、すでに遠く見えなくなっている小舟に視線を戻す。

手配書に乗っている顔は、あの少女と全く同じ顔であったのだ。

あの海賊団にいるはずの彼女がこの町に来たという情報は、海軍にとって重要なもの。

報告すれば、相当な恩賞があるはずの情報だ、だが。

「……この貸しはデカいぞ、ウィザード妖術師殿」

中佐は、約束を取った。

せめて彼女がこの先の海を、無事に出航できることを願って。

第2章 道化のバギー

第6話 “海を識る女”

波に乗り、風に乗り、小舟は進む。

世界一の剣豪の名を求める強者を、新たな同乗者に迎えて。

「おい、俺はさつそくで悪イが、この一味に不安を覚えた」

「……だいたい予想はつくけど、何かな？」

「あー……はらへったー」

小舟の先頭で、ルフィとエレノアを前に神妙な顔でゾロは言う。

具体的には、のんきな顔で空腹を訴えながら、そのくせ操舵などはほつとんどやっていない、というかできない船長を見つめて。

「さすがに船長のお前が航海術を持ってねエってのはおかしいんじゃないか？」

「お前こそ海をさすらう賞金稼ぎじゃなかったのかよ」

「おれはそもそも賞金稼ぎだと名乗った覚えはねエ。ある男を探しにとりあえず海へ出たら、自分の村へも帰れなくなっちまったんだ」

「……それは何とも」

「仕方ねエからその辺の海賊船を狙って、生活費を稼いでた…それだけだ」

航海術を持っていない船長も船長だが、迷子癖のある海賊狩りも大概である、とエレノアは内心で呆れる。

というかそんな男に獲物にされた海賊たちがあまりに憐れであった。

「なんだお前、迷子か」

「その言い方はやめろ!!」

遠慮なくルファイが口にした不名誉な呼び方にゾロが叫ぶ。だが傍から見れば、ルファイの言葉は間違つてはいなかった。

ゾロはどっかかりと座りなおすと、呆れた目でルファイを見やった。

「全く…！ 早エとこ、航海士」を仲間に入れるべきだな」

「航海術ならエレノアが知ってるじゃねエか」

「あのね、私の本業は錬金術師なの。私が知ってるのは必要最低限の航海術なの。本業の人がいないと、偉大なる航路」に挑むのは無茶だよ」

「錬金術か…」

エレノアの言葉に、以前見せられた不思議な力を思い出し、ゾロが何やら考え込む。

そしてやがて何か思いついたのか、ルファイに呆れているエレノアの顔をじつと覗き込んだ。

「おい、この間やってた妙な力…錬金術は今使えるのか？」

「ん？ まあ、理解さえできれば基本的にどこでも誰にでも使えるものだけど…」

「じゃ、たのむわ」

「……………」

おもむろにゾロは、自分が飲み干した空の酒瓶に海水を入れ、手ごろな重りの石とともにエレノアに差し出す。

意図が分からず、首をかしげながらもそれを受け取るエレノアに、ゾロも不思議そうに首をかしげた。

「ん？ 石をパンにしたり、水を酒にしたりできるんじゃねエのか？」

「ふざけんなア!!! どっかの聖人の所業じゃないのよ!!!」

「なんもねエ所から炎を出したり、風を吹かせたりしてたじゃねエか」

「魔法じゃないんだから!! できることとできないこともあんの!!!」

錬金術を使えば何でも作れると思ったゾロが、食糧問題を解決しようと提案した考えにエレノアが怒りをあらわにする。

しかもそれは神話やおとぎ話の登場人物がやるような奇跡であり、物理法則を超えたむちやくちやなことだった。

「いい!?! 錬金術の基本は『等価交換』なの!!! 水は水にしかできないし、石は石にしか

できない!!! 何かを得ようとしたら、それと同等の代価が必要なの!!!」

「?」なんだかわかんねエが、案外勝手がきかねエんだな」

「限度があるつつの!!!」

「メシ……」

あまりエレノアが言ったことが理解できていないようだが、とにかくどうにもならないとわかったゾロが文句をこぼす。エレノアにとつてはたちの悪いクレームだった。

ギヤーギヤーと騒ぐ一同だったが、徐々にその勢いが弱くなつていった。

胃袋が限界に達しつつあったのだ。

「ダメだ……騒いだら余計におなか減った……」

三人仲良く小舟の上で倒れ、雲一つない青空を見上げる。

空腹のせいで思考も働かず、無駄な時間だけが過ぎ去つていった。

そんな中、青空の中心にぼつんと黒い影があるのに気が付いた。十字の形の影は、遠く天を舞っている鳥のようだ。

「お、鳥だ」

「でけエな、わりと……」

「目算で全長10メートルぐらいか……」

距離と目で見える大きさを計算し、エレノアはそれだけ大きな鳥であることを予想す

る。

ぼーっとそれを見上げていた三人だったが、やがてルフィががばつと体を起こしてエレノアたちの方へ振り向いた。いきなりきらきらと目を輝かせ、やる気を取り戻している。

「食おう!! あの鳥っ」

「やめときなよ。私と違って空なんて飛べないでしょ」

「おれにまかせろ! 『ゴムゴムのロケット』!!?」

言うが早いか、ルフィは小舟のマストを伸ばした手で掴み、ゴムの伸縮を利用して勢いよく飛び出していった。

子供のおもちやのような原理でまっすぐに空を飛び、悠々と飛んでいる鳥の方へと迫っていく。その姿に、見上げていたゾロが感心したように息をついた。

「なるほどねえ……」

「…ねえゾロ君、私なんか嫌な予感がするんだけど」

エレノアの脳裏にそこはかとなく浮かぶ嫌な予想は、残念ながら当たってしまった。

予想よりデカかったカモメのような鳥が、自分の口の前に飛び出したルフィをパクツと啜えてしまったからだ。

「!!?」

予想外の事態にルフィもエレノアもゾロも固まり、声も出せずに目を見開く。

その間に、ルフィを唾えた巨大カモメはさつさとどこかに飛んで行ってしまった。

自分の巣かどこかに、エサとして持って帰るのかもしれない。

「ぎゃ——っ!!!」

「あほ——っ!!!」

悲鳴を上げるルフィに、ゾロもエレノアも血管を浮き立たせて怒鳴る。

しかしそんな場合じゃないと我に返り、二人でオールを持ち出すと思い切り漕ぎ、巨大カモメにさらわれた船長を追いかけ始めた。

「一体何やってんだてめエはア!!!」

「すみませんすみませんウチのアホ船長がほんとにアホですみません……!」

文句を垂れるゾロに、手のかかる子供の保護者のようにエレノアがぺこぺこ頭を下げる。それだけで、これまでの旅で似たようなことが何度もあったのだと感じさせた。

必死にオールを漕いで追いかけるも、空を飛んでいるカモメはどんどん遠くへ行ってしまうて追いつくことができない。

そんな中、エレノアたちの進行方向上に水飛沫が立っているのが見えた。同時に、人の声も聞こえてくる。

「お——い止まってくれエ!!」

「その船止まれエ!!」

「ん!! 遭難者か、こんな時につ!!」

「ゾロ、そのまま止めないで全速力」

「あア!!?」

「いいから」

バシヤバシヤと手足をばたつかせている三人の男たちに向かって、こぎ続けるゾロが突入する。

小舟が直撃する直前、パンツと手のひらを打ち合わせたエレノアが海面に触れる。

その瞬間、穏やかだった海が男たちの周囲だけうねり始め、まるで巨大な手のようになつて男たちを押し上げた。

「うお」

「どわああつ!!」

空中に投げ出された三人が、ぼとぼと小舟の空きスペースに落ちていく。

うまい具合に働いた錬金術と思わしき力に、ゾロが感心した目を向けた。

「使い勝手いいな、それ」

「でしよ?」

汚名返上とばかりに、エレノアはゾロの称賛の言葉に胸を張る。

一方で救い出された男たちは、自分たちを押し上げた妙な現象に目を見張り、戦慄の表情をエレノアに向けた。

「な、なんだいまのは?!」

「ま、まさかバギー船長と同じ能力者…?!」

「バギー…? もしかして『道化』のバギー?」

聞き覚えのある名前にエレノアが聞き返すと、調子を取り戻したのか男たち——海賊バギーの手下たちがナイフを取り出して凄み始めた。

「そ、その通りだ。おい、船を止めろ。俺たちア、あの海賊『道化』のバギー様の一味のモンだ」

「ああ?!」

しかしその迫力は、空腹と船長の愚行で苛立つゾロには遠く及ばなかった。

「あつはつはつはつは——っ」

「あなたが『海賊狩り』のゾロさんだとはつゆ知らずっ! しつれいしましたっ」

数分後、ぼこぼこにされた手下たちが気色の悪い笑顔で仲良くオールを漕いでいた。

といつてもオールは二本しかなかったので、二人が漕いで一人がおべつかを使うという形になっていたが。

「まア、こうなるとは思ってたけどね」

「こいつらのお陰でルフィの奴を見失っちゃまった。とにかくまっすぐ漕げ」

呆れた口調でエレノアが見やり、ため息をつく。

内心では苛立つ手下たちだが、
「海賊狩り」や得体のしれない力を持つ相手には逆らえず、しぶしぶ従っていた。

「気になつてたんだけど、バギー一味が何で海の真ん中でおぼれてたのさ?」

「それだつ!! よく聞いてくれやした!! あの女のせいだつ!!」

「そう、あの女が全て悪いっ!!」

「しかもかわいいんだけっこう!!」

「……!」

不要な一言をこぼした仲間を一人が殴りつける間に、もう一人が事のあらましを簡単に説明した。

商船を襲い宝物を奪った三人は、成果を喜びながら船長バギーのいる島に戻ろうとしていた。

その途中、小舟の上でぐったりとしている若い娘を見つけた。

なかなかかわいらしい顔にメリハリの利いた身体つきの少女に手下たちは油断し、病弱なふりをしていた彼女に宝物と舟を奪われたのだという。それも、空の宝箱とボロい

舟を入れ替えられる形で。

慌てて追いかけようとした矢先、娘はまるで予知でもしたかのように発生する天気を当てて見せ、手下たちがスコールにのまれているうちにさつさと逃げてしまったのだとか。

「——つてゆう次第なんですよ！」

「ひどいでしょ!!」

「ふくん…海を知り尽くしてるね、そいつ。航海士になつてくれたら安心なんだけどな」
正直手下たちの愚痴はどうでもいいが、天気を予知してみせた娘の能力は気になる。それだけ正確な予報ができるなら、航海士としての実力は相当なものになるだろう。

「あいつは絶対探し出してブツ殺す!!」

「それより宝をまずどうする」

「そうだけ、このまま帰っちゃバギー船長に……!!」

「そのバギーつてのは…?」

「この辺の海で幅を利かせているっていう、海賊の名前だよ」

ゾロが尋ねると、手下ではなくエレノアが答えた。

「大砲好きで有名で、どつかの町で子供に自分の鼻をバカにされたからって、その町一つ消し飛ばしたって話だよ。『悪魔の実シリーズ』のどれかを食ったって聞いたことが

あるけど……」

「嬢ちゃん、詳しいな。船長のファンか？」

「冗談！ 私、仁義をわきまえないやつって嫌いなんだよね。知ってるのは、いずれぶつかるだろうから情報を集めてるだけ」

「なにおう!!？」

船長をバカにされ、一味が口ほどにもないと言われたと感じたのか手下たちがいきり立つ。

が、にらみを利かせるゾロが怖くて手が出せずにいた。

そんな彼らを気にすることなく、エレノアは深く考え込み、フードの下で顔をしかめていた。

「…悪魔の実か…一応気をつけておくか」

やがて、小舟はある島の港に到着する。

なかなか立派な港町で、それだけ財貨もため込んでいるのだろうと思わせるたたずまいだ。

「つききました、お二方!!」

もはやゾロたちの下っ端になったように、へこへこと手下たちがゾロとエレノアを迎

える。

しかしそれだけ騒いでも、町の人間が誰一人として出てこないことが気にかかった。

「なんだ……がらんとした町だな。人氣がねエじやねエか……」

「はあ、実は、この町。我々バギー一味が襲撃中でして」

手下の返答に、エレノアは頭痛を感じたような頭を押さえた。

いつかぶつかるかもと考えていた海賊のいる島にたどり着くとはなんと幸先悪いのか。しかもこの展開、ルフィがこの島に来ていてもおかしくはない。

厄介事ばかり持ち込む船長に、呆れるほかになかった。

「じゃあとりあえず、そのバギーつてのに会いに行くか。ルフィの情報が聞けるかも知れねエ」

「待ってて。ちょっと居場所探ってみるから」

エレノアは歩き出そうとしたゾロを制し、フードの口を開けて周囲の音を集め始める。

人の姿が見えないのなら都合がいい。余計な音を拾わずにルフィの声だけを拾うことがたやすくなるだろうからだ。

しばらくその場で音を集めていたエレノアだったが、やがてその表情が険しくなり始めた。

「…あのさ、ゾロ君」

「あ?」

とても言いづらそうに呼びかけるエレノアに、ゾロは早くも嫌な予感がする。

やや迷ってから振り向いたエレノアは、心底申し訳なさそうに目をそらしながら、聞き耳の結果を伝えた。

「重ね重ねごめんね………なんか、うちのバカ船長、捕まってるみたい」

「はあ!!?」

聞こえてきたのは、数十人の海賊たちの宴の声と、わめきたてる船長アホの声。そしてぎしぎしと縄がきしむ音と、甲高い金属音。

これらの音から察するに、何らかの形でバギー一味に取っ捕まったルフィが縄で縛られ、檻にでも入れられてもがいているのだろう。

考えうる最悪の展開に、ゾロもエレノアも言葉を失って立ち尽くしていた。

第7話 “道化のバギー”

「ナミ、てめエどういうつもりだア!!! せつかくこのおれが部下に迎え入れてやろうつてのに!!! あア!!!」

酒場の屋上に、道化のような赤い大きな鼻が特徴的な海賊、バギーの怒声が響き渡る。偶然出会ったルフィをダシにして、バギーに取り入って “グランドドライン 偉大なる航路” の海図を手に入れようとした泥棒の娘・ナミだったが、部下になった証にと縛られて檻に入れられたルフィを大砲で吹き飛ばすように言い渡された。

迷っているうちに他の部下に無理矢理点火させられそうになり、カツとなつてその男を棍棒で殴り飛ばしてしまったのだ。

「なんだ、お前今さらおれを助けてくれたのか?」

「バカ言わないで!!!」

檻の中からルフィが不思議そうに等も、ナミは吐き捨てるように否定する。

彼女は海賊が嫌いだった。憎むほどに。

だからバギーのあの命令にだけは、従いたくなかつたのだ。

「勢いでやつちやつたのよ!!! ……たとえマネ事でも、私は非道な海賊と同類にはなり

たくなかったから!! 私の大切な人の命を奪った、大嫌いな海賊と同類には…!!」

「……あー、それで嫌いなのか、海賊が…」

最初に出会い、仲間になろうといった時にどうして完全否定されたのかと思っていたルフィは、その言葉に納得する。

だが、彼女の心情など彼らは察しない。

裏切り者を処刑しようと、部下たちが一斉に襲い掛かっていった。サーカス団の曲芸師のごとく軽やかに、たった一人で立ちふさがるナミに襲い掛かっていく。

「ハデに死ねエ!!」

振り回した棍棒をたやすくよけられ、至近距離にまで接近されてしまう。

死を覚悟したナミだったが、ふいに鈍い音がして目を見開いた。

「女一人に何人がかりだ」

鞘に納めたままの刀で、手下たちの顔面をめり込ませるゾロと、顔面に容赦なくケリを入れたエレノアが割って入った。

騒ぎの中心に向かって急ぎ、ようやく間に合ったのだった。

「ゾロオ!!! エレノアア!!!」

嬉しそうに名を呼ぶルフィを無視し、エレノアはへたり込んでいるナミに目を向けた。

「ケガはない？」

「…ええ、平気…」

「やー、よかった、よくここがわかったなあ!! 早くこつから出してくれ」

「……………もうさア、ほんつとにあんたつてばさア、いい加減にしてくれる?」

「おまえなあ、何遊んでんだルフィ…! 鳥に連れてかれて見つけてみりや今度は檻の

中か、アホ!」

「ドアホ!」

面倒くさそうに刀を肩に担ぎ、罵倒するゾロと肩をすくめるエレノア。

困惑気味に見つめてくるナミは、殺気を漂わせながら近づいてくるバギーの姿を目にして表情をこわばらせた。

「貴様、ロロノア・ゾロに間違いねエな。おれの首でもとりに来たか?」

「いや…興味ねエな。おれはやめたんだ、海賊狩りは…」

「おれは興味あるねエ。てめエを殺せば名が上がる」

「やめとけ、死ぬぜ」

「ウオオオやつちまエ船長!! ゾロを斬りキザめエ!!」

「本気で来ねエと血イ見るぞ!!!」

「……………! そつちがその気なら……………!!」

ナイフを指の間に挟み、戦闘準備に入った船長を手下たちがはやし立てる。

船長が負けるなどとは微塵も思っていない、自信にあふれている手下たちに囲まれたアウェイな状況で、エレノアはルフィを閉じ込めている檻に近づいた。

「うっわ、この鉄格子ゴツう…壊すのちよつとめんどくさいな」

「そう言わず頼む」

船長のほぼ自業自得で入っているのだから、もう少しこのままにしておいてやろうかと思うエレノア。

悩んでいる間に、肉が裂ける音が背後から聞こえてくる。

振り返ってみれば、バギーの胴と腕を一刀両断したゾロが刀を収めようとしている姿が見えた。

「……………なんて手ごたえのねエ奴だ…」

「…終わった？」

戦闘音がほぼ、というか全く聞こえなかったエレノアは拍子抜けして目をしばたかせた。

ゾロの手に負えなければ自分も加勢しようとか、手下は自分が担おうとか思っていたのに、あまりにも決着が早すぎた。

(いくらゾロ君が強くても、一海賊団の頭がこんなにもあっさり…?)

聞いていた話や、バギーの賞金額のことを想いながらエレノアは首をかしげる。

現に船長が倒されたというのに、手下たちはへらへらと笑ってばかりで激昂も狼狽えもしていない。

「へっへっへっへっへ…」

不気味な笑い声が気になったが、戻ってきたゾロに気を取られて考えが及ばなかった。

「おいエレノア！その檻は壊せねエのか？」

「え、いや壊せないわけじゃないけど…こいつにはもうちよつとここで反省してもらおうかと思って」

「そうか、その手があつたか」

「やめてくれ！」

割と本気で考えているゾロとエレノアの提案に、焦つたルフィががしやがしやと檻を揺らす。

この間にも手下たちは手を出そうとはせず、むしろ先ほどよりも馬鹿にした様子で笑い声をあげていた。

「へっへっへっへっへっへ！！？」

「あーっはっはっはっは！！？」

さすがに不審に思ったエレノアが、意図を読もうと視線を巡らせる。

誰一人として、この状況で慌ててなどいない。まるで、船長が倒されることが予想通りだったとでも言うようだ。

「何が、そんなにおかしい!!?」

「笑つてないでこの檻の鍵を渡して!!? 私たちはあんたたちと戦う気はないよ!!?」

「……………? おつかしな奴らだなア……………」

気味の悪さに、ゾロとエレノアが声を張り上げた時だった。

エレノアは、先ほどまで真つ二つにされて倒れていたバギーが姿を消していることに、そしてその場に、一滴の血も流れていないことに気が付いた。

そしてようやく、手下たちの嘲笑の意味に気が付いたのだった。

「!!? ゾロっ!!?」

「ゾロ君!!?」

「何よあの手!!?」

その場のバギー一味以外の全員が、目を見開いて驚愕する。

ゾロの脇腹に、一本のナイフがひとりで突き刺さったのだ。いや正確には、手首から先の人間の手がナイフを握り、空中に浮遊してナイフを突き立てていた。

異様な光景に、ナミヤルファイが声を張り上げた。

「ぎゃつはつはつはつはつは!!?」

血を吐き、がくつと膝をついたゾロをバギー一味があざ笑う。

ゾロは乱暴に抜かれたナイフと、それを持つ人間の腕を切り払おうとしながら、激痛に顔をしかめる。

「くそつ!!?」　なんだ、こりやあ一体!!!」

浮遊する腕はゾロの剣を悠々と避け、嘲笑するようになるとナイフを弄ぶ。

そのありえない現象に、エレノアはハツと息をのんだ。

「手が浮いて……………まさか、バラバラの実の能力!??」

「その通り!!?」　それが、おれの食った悪魔の実の名前だ!!!　おれは斬っても斬れない

バラバラ人間なのさ!!!」

歓声を上げる手下たちやルフィたちに見せつけるように、バギーはバラバラになった自分の体を元通りにくつつけて見せた。

こういう原理か、斬られた服までもが元通りにくつついている。悪魔の実らしい、異常な能力であった。

だがエレノアは素直に驚く暇もなかった。

膝をつくゾロの出血がひどくなっていたからだ。

「……………!!?」　急所はずれてる……………でもあの出血はまずい!!?」

いったん引こうと、ゾロのもとへ向かうエレノア。

しかしその直前、彼女の体を大きな影が覆った。

「!!」

とつさに足を振り上げ、迫ってきた巨大な人影を受け止める。

ガキン!!!と甲高い音を立て、エレノアの足に人影の鋭い爪がぶつけられ、押されたエレノアはルフイの檻に押し付けられた。

「よオ、ガキイ!!! おれの名を知ってるかア!?!」

背中走る激痛に呻きながら、モヒカンヘアーに葉巻を啜えた大男を睨みつける。

シャツを盛り上げる分厚い筋肉に覆われた大男は、鉤爪のついた迷彩柄の機械の腕を押し付けながら、猛獣のような目でエレノアを見下ろす。

いかつい顔に浮かんでいるのは、他の人間を見下すような嗜虐的な目だった。

「……………!!? 迷彩に鉤爪の機械鎧オートメイル……………まさか、“徹甲”の錬金術師ブレスロー・ガンツ

!!?」

「大当たりイ!!!」

名前を言い当てられ、大男は心底嬉しそうに笑い、掴んだエレノアの足を振り回す。

投げ出されたエレノアは慌てることなく、風を錬成してふわりとその場に降り立った。

「嬉しいねエ嬉しいねエ!!? おれ様の名がここまで有名になっていようとはア!!!」

何か琴線に触れたのだろう、先ほどよりもテンションを高くしながらガンツは機械の腕を振るう。

エレノアは目を細め、不機嫌そうに大男を睨みつけた。

「いやつはアア!!! “タイガークロー”!!!」

そのまま、虎のように強力な横なぎがエレノアの足に振るわれる。

エレノアはそれに逆らうようなことはせず、後ろに弾き飛ばされる勢いを利用して距離を取る。

一方で、ガンツは生身ではありえない音を立てるエレノアの足に肩眉を上げた。

「その足………お前もワケありだな!!? いったいどんな業を背負ってやがるんだア!!!」

追撃しようと向かってくるガンツ。

エレノアはパンツと両手のひらを合わせ、屋上に手を叩きつける。

すると、地面からぼこぼこと無数の木の柱が伸び、ガンツの進行を妨害した。

「!・ 錬成陣もなしに………!!!? 面白れエ!!!」

ガンツは一瞬目を見開くも、すぐにまた獰猛な笑みを浮かべて障害物を破壊していく。

少しの足止めにはかならなかったが、その間にエレノアはルフィたちのいる方へと戻った。

「なんなのよ、こいつら…!!? バラバラになったり地面を変形させたり…!!? バケモノばっかじゃない!!」

絶句するナミの後ろで、バギー一味の戦い方を見ていたルフィが顔を怒りでゆがませる。

そしてやがて、爆発した。

「後ろから刺したり不意打ちしたり卑怯だぞ!! デカツ鼻ア!!!」

言っではならない言葉をためらいなく口にしたルフィに、バギーやナミの戦慄の目が集中する。

特にバギーは一瞬だけ呆けたかと思うと、すぐさまその顔を怒りで真っ赤に染め上げた。

「誰がデカツ鼻だアああ!!!」

怒りのままに、今度はルフィに突き刺してやろうとナイフを握った腕を発射する。

ビュン、と矢のように飛んだナイフだったが、なんとルフィはそれを歯で噛んで止めて見せた。

ナイフの刃をかみ砕き、ルフィは笑顔でバギーに告げる。

「ぎいや——つ大砲がこっち向いたア——つ!!!」

「ぬあくくくつ!!! あれには、まだ『特製バギー玉』が入ったままだぞ!!!」

町を一発で破壊して見せる威力の砲弾が向けられていることで一味は慌てだす。

そのすきに、ゾロがナミを檻の近くに寄せた。

「よし、点火だ!!!」

「ほいきた!」

「え……」

ゾロの合図で、指先に特殊な砂粒を纏わせたエレノアが手を大砲に向けると、パチンツと指を鳴らして見せた。

砂粒がすり合わされ、エレノアの手で火花が散る。

それが空気中のチリやホコリに伝わっていき、大砲の導火線でポツと炎に変化した。

「よせ!!! ふせろオ——つ!!!」

バギーが叫ぶも、もう遅い。

火は大砲の火薬に点火され、凄まじい威力の砲弾がバギーたちに襲い掛かる。

ダウン!!!と轟音とともに屋上が吹っ飛び、爆風が煙幕のように屋上に広がっていった。

「今のうちだ……!! とところでお前、誰だ」

「私…、泥棒よ」

「そいつはウチの、航海士だ」

「バツカじゃないの、まだ言ってるの!? そんなこと言うひまあったら、自分がその檻から出る方法考えたら?!」

「あー、そりやそうだ。そうする」

「いや、問題ない。てめエは檻の中にいろ!!」

ゾロはそう言い、ルフィが入ったままの檻を持ち上げていく。

しかしその負荷はかなりのもので、刺されたわき腹の傷からブシツと鮮血が噴き出した。

「オオ…!!」

「おい、ゾロ、いいよ! 腹わた飛び出るぞ」

「痛い痛い痛い!! 見てるだけで痛いって!!」

「飛び出たらしまえばいい、おれはおれのやりてエようにやる! 口出しすんじゃないねえっ!!!」

あまりの痛々しさに、ルフィやエレノアから制止の声が上がるがゾロは頷かない。

ナミはその姿を、困惑気味に見つめるほかになかった。

「あいつらどこだ!!!」

「いません船長っ!!! ゾロも!! ナミも!! 檻まで!!!」

「バカな!! あれは五人がかりでやつと運べる鉄の檻!!」

煙が徐々に晴れていき、散々暴れた連中が姿を消していることに怒りを燃やすバギーたち。

そこからあまり離れていない建物の屋根の陰で、檻を置いたゾロが息をついていた。

「ふう…」

「くそつ、この檻さえ開けば!!! 開けば!!!」

「悪いけど、錬成反応で居場所バレるから自分で何とかしてよね」

「厄介なモンに巻き込まれちまった…!! だが一度やりあったからには、決着^{ケリ}をつけなきゃな!!!」

何とか逃げられたが、このまま終わらせるつもりはなかった。

不意打ちで手傷を追わせられた分や、バカにされた分も返さねば気が済まない。そういうゾロに、エレノアは呆れた目を向けるばかりであった。

がれきや気絶した部下たちが転がる、ボロボロの酒場の屋上。

積みあがった瓦礫を投げ飛ばし、ホコリまみれになったバギーが立ち上がった。

「ナメヤがつてあの四人組っ!!! ジョ——ダンじゃねエぞ、おいっ!!!」

名もないコソ泥一味にコケにされ、苛立つバギーが怒りの声を上げる。

その横で、ガンツは物足りなさそうに舌を鳴らし、次いで待ち足りなさそうな舌なめずりをしていた。

「あのガキイ…!! おれ様に恐れをなして逃げやがったかア…? だが逃がさねエぜ!!
全ての錬金術師を凌駕するおれ様の實力は、まだ半分も披露できてねエんだからなア
!!!」

獲物を探す獣のような顔で、ガンツは目標をどのよう_にいたぶつてやろうかと考えるのだった。

第8話 “犬と少女と老人”

ガリガリと檻を引きずり、人気のない通りを歩いていく。

一步を踏み出すたびにゾロの脇腹からは血が流れ、地面に点々と跡を作っていく。

その都度、エレノアが足で地面を蹴り、痕跡を消していった。

「もう、だいぶ酒場から離れた。とりあえずすぐには追っっちゃ来ねエだろう。おい、ほんとにこの檻は壊せねエのか……!!」

「ごめん……錬成反応は目立つからさ。とりあえず鍵開けはやってみるけど期待はしないで」

「ちくしょう、これが開かねエとあいつが来ても何もできねエよ!!」

ガシガシと檻を噛むルフィだが、鉄の檻はそれぐらいでは壊れてくれない。

ゴトン、と檻を置き、ついにゾロはうつぶせに倒れた。

「もうダメだ、血が足りねエ。これ以上歩けん……!!」

力尽きて意識が遠のきかけるゾロ。

しかし、倒れた目の前にいた白い犬を目にし、ぎよつと慄いた。

「……何だこの犬は……!!」

「犬？ あ、犬だ」

「置物かと思った…」

一軒の建物の前でじつと鎮座したまま、ピクリとも動かない犬を見てルフィとエレノアが寄ってくる。

注目されても、白い犬は視線を向けもしなかった。

「おい、ゾロ。こいつ全然動かねエよ」

「知るか…そんなもん犬の勝手だ。とにかく今はお前が、その檻から出ることを考えろ」
気にはなるが、確かに犬がいるぐらい気にする暇はない。

ゾロが体を休めている間に、エレノアは懐から取り出した針金でカギを開けられないか挑戦を始めた。

暇を持て余したルフィが、檻の前の犬が生きているのか確認しようとずん、と目をつつく。

さすがに怒った犬がルフィにかみつ き、即座に喧嘩に発展した。

「何すんだ犬っ!!」

「ワンワン!!」

「ためエ、今の事態わかってんのか!!?」

「うるせエ騒ぐなっつってんでしょうが!!! あと傷開くよ!!!」

倒れたままのゾロと、鍵開けを放り出したエレノアが怒鳴りつける。

人が必死になっているときに一体何をやっているのかと。

「犬め!!」

「あーもう無理!! めんどくさくなった!!」

「くそ…血が足りねエ!!」

打つ手がなくなった三人は、その場で仲良く仰向けに寝転ぶ。

そんな三人のもとへ、あきれ顔のナミが近づいた。

「あんた達、一体何やってんの三人して…こんな道端で寝てたら、バギーに見つかったやうわよ!」

「「よオ、航海士」」

「誰がよ!!!」

勝手に仲間に任命されていることで、ナミがくわつと豹変する。

だがそれも一瞬のことで、訝し気にエレノアの方に視線を変えた。

「ていうかあんた、さっきやってた変な力でそいつの傷ふさいだりできないの?」

「あ、そらそうだ」

「その手があるじゃねエか。よし、やれ」

「あー、いやー、それは…」

ナミのもつともな指摘に、珍しく申し訳なきようにエレノアは頭をかく。

ツンツンと指をつつき合わせ、言いづらそうに告白した。

「その…私って、作ったり形を変えたりするのは得意なんだけどさ…元通りに直したりするのは苦手で…内臓がくっついたり腸が蝶結びになったりするかもだけど……やる？」

「やめろ!!!」

そんなリスクを背負ってまで治療されたくない、というか前よりひどいことになりそうだったのでゾロは断固拒否する。

何でもできそうで頼りがいのあるイメージがあっただが、不得意な分野もあったようだ。

「じゃあしようがない。一応、お礼のつもりで来たわけだし」

「礼？」

そう言ったナミが、ルフイの目の前にチャリンと何かを落とす。

リングに束になったそれは、何かしらの用途の鍵だった。

「あ、鍵!!!」

「あのださくさで盗んでくるとは大したもんだ…」

「まあね…我ながらバカだったとは思うわ。他に海図も宝も何一つ盗めなかったもの、

そのお陰で」

「は——っ!! ホント、どうしようかと思つてたんだこの檻!!」

「……は……これで一応逃げた苦勞が報われるな」

手が届く距離に置かれた鍵に、ルフィは目を輝かせ、エレノアは感心し、ゾロは安堵のため息をつく。

早速開けようと手を伸ばしたルフィだったが、それよりも前に檻の前にいた白い犬がぱくりと鍵を啜えた。

「あ」

止める間もなく、先ほどの腹いせのつもりか、犬は鍵を飲み込んでしまった。

呆然となる一同、その中でいち早く立ち直つたルフィが、白い犬につかみかかった。

「このいぬウ!!!」 吐け、今飲んだのエサじゃねエぞ!!!」

ガシャンガシャン通り越しに乱闘を再発させるルフィと犬。

そんな時、どこかから雷のような怒鳴り声が響き渡つてきた。

「くらっ!! 小童ども!!」

「シユシユをいじめるな!! よそ者めっ!!」

突然聞こえてきた声に、パット動きを止めるルフィたち。

振り返つてみれば、鎧を着た真っ白な髪に眼鏡の老人と、赤毛のショートヘアの少女

がルフィを険しい表情で睨みつけていた。

「シユシユ？」

「誰だ、おっさんとガキ」

聞きなれない名前に眉を寄せ、人の気配が薄い町に現れた老人と少女を見て、首をかしげる一同。

ぽかんとしているルフィたちに、老人と少女は胸を張って答えた。

「わしか、わしはこの町の長さながらの町長じゃ!!!」

「そして町民代表だ!!!」

数分後、いまだ檻から出られないルフィのもとに、少し疲れた様子の町長・プードルと町の娘・アルモニが戻ってきた。

「ゾロは？」

「休ませてきたよ。となりは町長の家なの」

「避難所へ行けば医者がおると言うところのに、寝りやなおるといつて聞かんのじゃ。すごい出血だというのに!!!」

「おバカですいません、ウチのものが」

妙な意地を張っているゾロが迷惑をかけたと、エレノアが深々と頭を下げる。

ナミはアルモニが持ってきたエサを食べている白い犬を見下ろし、思い切って尋ねた。

「この犬、シユシユって名前なの？」

「ああ」

「こいつ、ここで何やってんだ？」

「店番だよ。私たちはエサを上げに来ただけなんだ」

「あー！ 本当。よく見たらここお店なんだ。ペットフード屋さんか…」

視線を上げれば、店の看板がちゃんと出ている。

プードルはペットフード屋を見上げ、懐かしそうに目を細めた。

「この店の主人は、わしの親友のじじいでな。この店は10年前、そいつとシユシユがいつしよに開いた店なんだ。二人にとつては思い出がたくさん詰まった大切な店じゃ。わしも好きだがね」

「ほら、この傷みて。きつと海賊と戦って、お店を守ったんだよ」

「だけど！ いくら大切でも海賊相手に店番させる事ないじゃない。店の主人はみんなと避難して…」

「…たぶんだけど、ご主人はもう、亡くなってるんじゃないかな」

「！」

エレノアが呟いた予想に、プードルとアルモニのほうで驚いた様子で振り返る。先に答えを当てられたことが予想外のようだった。

「お前さん、なぜそれを…」

「部屋の窓のホコリのたまり方がさ。数か月はたつてそうだから」

「…うん、そうだよ。三か月前に病院へ行つたきり、病気で…」

親交があつたのか、アルモニが寂しそうな表情でうつむく。

ナミは少女の悲しげな横顔を見つめ、次いでシユシユにも視線を向けた。

「もしかしてそれからずっと、おじいさんの帰りを待つてるの？」

「みんなそういうがね…わしは違うと思う。シユシユは頭のいい犬だから、主人が死んだ事くらいとうに知っておるだろう」

「じゃ、どうして店番なんて…」

『宝物だから』

ナミの疑問に、エレノアが答えた。

振り返るとエレノアは、じつとシユシユと視線を合わせて目を細めている。まるで会話でもしているようだ。

「『ここは、大好きだったあの人のものだから。あの人がいないときは僕が守るって、約束したから、守りたいんだ』……だって」

声からわかる、真剣な思いが伝わってくる。

エレノアのその言葉は、シユシユの声の代弁そのものだった。

「お前さん……！」

「シユシユの言葉がわかるの？！ すごい！！！」

「……………ホントに、ご主人様のごことが大好きだったんだね」

「困ったもんよ。わしが何度、避難させようとしても、一步たりともここを動こうとせんのだ。放つときや餓死しても居続けるつもりらしい」

プードルは呆れながら、主人との約束を守り続ける忠犬をまぶしそうに見つめる。

人間よりも強い愛で宝物を守り続ける小さな存在に、いつの間にかルフィたちも黙り込んでいた。

その時だった。

「グオオオオオオオ……！！！！」

大気を震わせるすさまじい咆哮が、ナミたちの耳朵を襲った。

人間ではありえないその咆哮に、プードルとアルモニはさつと顔を青く染めた。

「な……何、この雄叫び……！！」

「……………こりやあいつじゃ！！ “猛獣使い” のモージじゃ」

「ぎゃ——っ！！！」

何者かはよくわからないが、こんな声を発する奴が普通なわけがない。

不利を悟ったエレノアは、いまだ動けないルフィをいったん放置してその場で回れ右をした。

「よし、戦略的撤退!!」

「「逃げるオ——っ!!!」」

「ルフィ、後でねーっ!!」

「あーあ、なんか来ちまったよ。鍵返せよ、お前エ」

「ガウ」

めんどくさい事態になったと嘆きながら、ルフィは頑固にその場を動かないシュシュを睨む。

店の陰から様子をうかがっていたエレノアは、ルフィのもとに巨大な獅子にまたがった着ぐるみの男が近づいてくるのを見ながら、しばらく放っておいても大丈夫だろうとその場を後にした。

「……さて、と。まア、あいつらが店に近づかなきゃ死ぬことはないでしょ……」

シュシュが心配なわけではないが、向こうも人のいないペットフード屋に用はないだろうと放置する。

ゾロが復活するまで時間をつぶそうと店の裏の通りを歩いていると、轟音とともに何

かが吹き飛ばされてきた。

「お」

反対側の民家に突っ込んだそれ——破壊された檻から抜け出したルフィを目にし、エレノアはやれやれと肩をすくめた。

「よつ。うまい具合に檻が壊れたもんだねエ」

「あーつ、やつと窮屈なところから出られた!!? これでようやくあいつら全員、ぶっ飛ばして、泥棒ナミに航海士やつてもらおうぞ!!」

「はいはい……ま、そんだけやる気があるならいいけどさ」

めげない船長に呆れながら、エレノアはルフィとともにぶらぶらと港町を歩く。

しばらく通りを散歩し、シユシユのペットフード屋の近くに戻ってきたとき、彼らはそれを見た。

「ワンワン!!」

響き渡る、シユシユの鳴き声。

威嚇のものとは違う、深い悲しみを帯びたその声が向けられている方向を見て、二人は絶句する。

そこは、火の海になっていた。

バギーの手下のモージが操るライオン、リッチーが店を荒らし始めたのを止めようと

して、怒りを買ってしまい火をつけられたのだ。

「ワン!! ワンワン!!」

炎にのまれる、主人との大切な思い出の店が灰に変わっていく光景を前に、シユシユは吠え続ける。

その目から、ぽろぽろと涙を流しながら。

『…あなた、なんでこんなことやってるのよ。ご主人はもういないってわかってるでしよ?』

エレノアの脳裏に、シユシユとの対話が蘇る。

『このままここにいたら、いつか本当にあいつらに殺されるよ? 何をそんなに……』

『宝物だから』

『ここは、大好きだったあの人のものだから、守りたいんだ』

『そのためなら、ぼくはここでずっと戦い続ける』

小さな忠義者は、そう胸を張って答えて見せた。

そんな彼が泣き続ける姿を見て、エレノアの手に力がこもっていった。

「畜生、あの犬おれにまで噛みつきやがって…あーあー、血が出てる」

バリバリとペットフードを箱ごとむさぼるリッチーの背中に乗ったまま、モージは傷

跡の残る自分の腕を抑える。

腹が立ったが、ずいぶん大事そうにしていた店を燃やしてやってからは随分すつきりした。

それでもぶつぶつ言いながら一味のもとへ戻る途中、立ちふさがる二つの陰に気が付いた。

「……? てめエは…オイ……!!」

「しゃべるな、下郎」

殺したはずの麦わら帽の男がびんびんした様子で立っていることに、モージは驚愕を抑え込むのに必死になる。

しかしエレノアは、そんな声すらも耳障りというように遮る。

フードの下の目を怒りでめらめらと燃やすエレノアの隣で、ルフィは小馬鹿にしたように笑った。

「あれくらいじゃ死なないね。おれはゴム人間なんだから」

「ごむ人間? 悪運の強さは認めるが、多少頭は打ったか…バカなことはい出すし……」

モージはリッチーの背中から降り、ぽんとその背中をたたく。

直後、新たな獲物を用意されたりリッチーはすさまじい咆哮とともに二人に襲い掛かっ

た。

「また、おれの前に現れるってのもバカだ!!! 頭をかみ砕いてやれっ!!!」

「ガルルルルルル!!!」

向かってくる巨大な獅子の前に、エレノアは片足を差し向ける。

柔らかい肉を食いちぎろうとその足に噛みつくリッチーだが、ガキンと金属音がして牙が通らないことに困惑する。

「そこどころか、数百キロはあるはずの自身の体が、徐々に持ち上げられていくのだ。

「どうしたネコ野郎、しっかり味わいなよ」

バリバリと爪を立て、顎の力を強めるリッチーだが、一向にその足が傷つく様子はない。

慌て始めたリッチーの視界の端で、エレノアはまた指をパチンと鳴らし、手の上に炎を錬成して見せた。

「!? 火がっ…」

屋上にいなかったモージは、エレノアが見せた不思議な力に驚愕で目を見開く。

エレノアはリッチーを抑え込んだまま、手のひらの上の炎の形を徐々に長く変えていく。

「所詮は私も同じ穴の貉……あんだ達のやる事にとやかくいうつもりはなかったけ

ど、流石に我慢の限界だよ。お前と同類になんて思われたくない……!!」

炎は十字の形に変わり、一振りの炎の剣へと形を変えていく。

ごうごうと燃え盛り、空気を灼剣を振り上げ、エレノアは獅子を睨みつけた。

「『選定金剣』!!!」

振り下ろされた炎の剣が、リッチーの腹で炸裂して大爆発を起こす。

憐れな獅子は業火に呑み込まれ、同時に自身が行った所業の裁きを、主に代わって受ける羽目になった。

ぶすぶすと煙を吐きながら倒れていく自分の獣に、モージは言葉を失った。

「!!!? リッチー……!!?」

なにが起こったのかいまだにわからない。

とにかく、猛獣を失った自分は非常にピンチに陥っているという事だけはわかった。

「なんだ……お前ら……何なんだ!!!」

「答えるつもりも、話すつもりもない……!!?」

怒りを声ににじませ、ザクザクと近づいてくるエレノアにモージは焦る。

飛び散る火花が、彼に恐怖を刻み込んでいた。

「よ……よしっ! お前にな! 好きだけ宝をやろう!!? そ……それと、ここは一つ穏便に……!!?」

「喋るなど言っている!!!」

「もう謝らなくていいよ。今さら何しようよ、あの犬の宝は戻らねえんだから」
穏やかな声で、ルフイはモージに告げる。

しかしその脳裏によみがえるシユシユの姿に、ごうごうと怒りの炎が燃え盛っていた。

「だからおれはお前を、ブツ飛ばしに来たんだ!!!」

シユシユの無念に代わり、ルフイがモージに向かって手を伸ばす。

着ぐるみに見える自分の胸毛を掴まれたモージは、普通じゃありえない光景に目を見張り、恐怖で涙を流した。

「うわつ、手が…まさか、お前…バギー船長と同じ『悪魔の実』の能力者…!!!」

「思い知れ」

「あ…あああおい!!? や…やめてくれエあああ!!!」

懇願むなしく、二人と一匹分の怒りを込めた拳がモージの顔面を貫き、男の体を地面に叩きつけた。

たとえその宝が戻ってこないとしても、因果は悪漢に戻ってきたのだった。

第9話 “町長の宝物”

放火され、燃え尽きてしまったペットフード屋を前にして、ナミがわなわなと肩を震わせていた。

傍らには呆然と店の跡地を見つめるシユシユの姿があり、今度こそ死んでしまったように佇んでいた。

「どいつもこいつも……………!!?」 海賊なんてみんな同じよ…………!! 人の大切なものを平気で奪って!!!」

「……………」

「シユシユ…………」

自身の海賊への怒りを再燃させ、声を震わせる姿に、プードルもアルモニも表情を暗くさせる。

そこへ、多少怒りを収めたルフイとエレノアが戻ってきて、怒りをにじませるナミに見つかった。

「ん?」

「! あら、海賊、生きてたの………… てつきりライオンに食べられちゃったのかと思った

わ

「おい…何言い出すんじや」

「あんたが海賊の仲間集めて町を襲い出す前に、ここで殺してやろうか!!?」

「おいやめんか、娘っ!!?」

「こんなところで暴れないでよっ!!?」

バギーにぶつけられない怒りを向け、理不尽な暴言を吐くナミをプードルとアルモニが抑える。

エレノアはそれをじつと見つめると、黙ってシユシユのもとへ向かい、鎮座したままのシユシユの前に箱を置いた。

「やっ」

ライオンに食われずに済んだペットフードの箱を渡し、エレノアとルフィがその隣に座る。

シユシユはそれを見て、二人を不思議そうに見つめた。

「……ゴメンね、これだけしか取り返せなかった。あのクソ猫、バリバリ食べ尽くしやがって」

エレノアは黒い炭だけになった店を眺め、ポンポンとシユシユの肩をたたく。

その目に、形だけでも宝物を直してやれない自分への不甲斐なさや悔しさをにじませ

て。

「私はものを自由に作れても、元どおりにしたりはできない。他の錬金術師も、見た目は完璧に同じにできてても、全てを同じにはできない……でもさ、目には見えないものは、どんなになっても変わんないと思うよ」

トン、とシユシユの胸をたたき、じつと目を見つめる。

目に見えない主人の思いは、燃え尽きたわけではないのだと、そう伝えようと。

「あんたの……主人の思いは、まだ……ここで生きてる………違おう？」

シユシユはじつとエレノアを見つめ、やがてその口にペットフードの箱を啜える。

そこで初めて、シユシユはペットフード屋の前から離れた。

店を守るといふ、主人との約束は守れなかった。だが思い出は消えたわけではない。

壊れた『物』は、また直せる。だが形のないものは壊れることはないのだと、賢い

シユシユは気づいてくれたのかもしれない。

「ワン!!?」

去り際に、シユシユはルフイとエレノアに吠えた。

それは二人に対する、感謝の咆哮のように聞こえた。

手を振り、避難所がある方に向かっていくシユシユを見送るルフイたちをじつと見つ

めていたナミは、おもむろにそばによって片手を上げた。

「どなってごめん！」

「ん？ いいさ、お前は大切な人を海賊に殺されたんだ。なんかいろいろあつたんだろ？ 別に聞きたくねエけどな」

「……」

なんということはないと、ズボンの尻を叩いて土を払うルフィに、ナミはこれまでとは異なる眼を向ける。

ほかの海賊とは違う何かを、感じたのかもしれない。

そんな中、ずっと何かをこらえるように黙り込んでいたプードルが怒号とともに両手を振り上げた。

「……………ぬぐぐぐぐ……………!!! わしは、もう我慢できーん!!!」

「うわっ！」

「酷さながらじゃ!! さながら酷じゃ!! シュシュや小童どもがここまで戦っておるというのに!! 町長のわしがなぜ指をくわえて我が町が潰されるのを見ておらねばならんのじゃ!!!」

「ちよつと町長さん、おちついてよ！」

「そうだよ！ 町長じゃ相手にならないって！」

「男には!! 退いてはならん戦いがある!!! 違うか小童つ!!!」

「そうだ!!! おっさん!!!」

「のせるな!!!」

「あーもう…血の気が多いんだから…」

勝手に盛り上がって、怒りを爆発させるプードルにルフィが賛同し、手が付けられなくなる。

アルモニは言っても止まらない町長に困った目を向け、深いため息をついた。

「せめてここに、お爺ちゃんやパパやお姉ちゃんがいてくれたらなあ…」

「お爺ちゃん? パパ?」

「うん。パパ達はね、すごい人なんだよ! パパとお爺ちゃんの力があって、この街はこんなに立派になったの!!?」

「そうじゃ!! 40年前さながらっ!! ここは、ただの荒地地じゃった…!! そこからわしらは全てを始めたのじゃ」

アルモニの自慢に反応し、プードルは聞いてもいない町の歴史を語り始める。

それだけで、町長がこの町に相当な思い入れがあることが分かったが、肩入れしすぎなのではないのかとも思う。

しかし次に続いた言葉に、ルフィたちは言葉を失った。

「……に、おれ達の町をつくろう。海賊にやられた古い町のこととは忘れて…」

かつて海賊に故郷を奪われたトラウマのある人々にとって、それは願いだっただ。

過去の記憶を乗り越えようと、懸命に努力を続けた人々の努力の結晶。それがこの町だった。

それを再び奪われることは、プードルには耐えられなかった。

「…初めはちつぽけな民家の集合でしかなかったが、エイブラハムとヴィルヘルムの知恵や技術をかりて少しずつ少しずつ町民を増やし、敷地を広げ店を増やし、わしらは頑張った!!」

「ヴィルヘルム…?」

「そして見ろ!!」そこは今や、立派な港町に成長した!!」今の、この町の年寄りがつくった町なのじゃ!!」わしらのつくった町なのじゃ!!」

聞こえた名前に、エレノアが反応するも気づかず、プードルはさらにヒートアップしたのか槍を掲げて勇ましく吠える。

覚悟を決めた男の姿は、とても大きく見えた。

「町民達とこの町はわしの宝さながら!!!」己の町を守れずに何が町長か!!!」わしは戦う!!!」

今も酒場の屋上でたむろしているはずの悪の海賊に向けて宣言した、その時だった。ルファイたちを、凄まじい衝撃と轟音が襲い掛かった。

「!!!?」

一列に立ち並ぶ民家や店が、まとめて薙ぎ払われていく。

その威力は、一度目にしたことがあるものだった。

散々酒場の屋上でバギーがブツ放した特別な砲弾、それを今度は、ルフィたちが体験することとなったのだ。

「ぬあつ!!」

「きやあ!!」

瓦礫や砂塵と一緒に吹き飛ばされ、地面に転がされるナミたち。

いち早く起き上がったプードルが、怒りに顔をゆがませた。

「んぬ…わしの家まで!!!」

「あ!!! ゾロが寝てんのに!!!」

今吹き飛ばされた家には、傷つき休んでいるゾロが眠っているはずなのだ。

最悪の結果が脳裏をよぎり、プードルやアルモニの表情が変わった。

「死んだか…!! 腹まきの小童…!!」

「うそでしょオ…!!」

「おい、ゾロ、生きてるかあ?!」

黙々と立ち上る土埃と瓦礫の山の中に向けて、外から必死に呼びかける。

すると、ガラガラと瓦礫の一部が盛り上がり、二日酔いの後のように頭を抱えたゾロが体を起こした。

「あ——寝ぎめの悪い目覚ましだぜ」

「よかつた！ 生きてたか！」

「……何で生きてられるのよ……!!」

「ほんつと頑丈だな、あの人……」

ルフィは仲間の無事を素直に喜ぶが、ナミもエレノアも無事でいることに呆れるほかにない。

プードルも安堵しながら、破壊された自宅を見て胸を押さえた。

「……!! 胸をえぐられる様じゃ……!! こんな事が許されてたまるか!!! 二度も潰されてたまるか!!! こんな事では、亡き我が友エイブラハムに合わせる顔がない!!!」

「町長……」

「突然現れた馬の骨に、わしらの40年を消し飛ばす権利はない!!! 町長はわしじゃ!!!」

わしの許しなくこの町で勝手なマネはさせん!!! いざ勝負!!!」

「ちよつ……ちよつと待つて町長さん」

「勝負つて……そんな騎士道精神海賊が持つてゐるわけないじゃん!」

「はなせ娘つ!!!」

「あいつらの所へ行つて何ができるのよ!! 無謀すぎる!!」

ナミやアルモニが必死に止めるも、老人とは思えない力でプードルは引きはがそうとする。

それでも引き留めようとする二人に、プードルは叫ぶ。

その目に、涙をためながら。

「無謀は承知!!!」

その必死の形相に、思わずナミとアルモニの手が離れる。

怒りや悲しみ、悔しさが入り混じった男の姿に、娘たちは二の句を告げなくなっていた。

「待つておれ、道化のバギーっ!!!」

止める間もなく、プードルはがしやがしやと鎧を鳴らしながら走り出していく。

アルモニはなおも引き留めようとするが、自身の中にあつた同じ気持ちや無力感が邪魔をして、その手は力なく落とされた。

「町長……」

「行かせてあげなよ。理屈や正論じゃ納得できないものつてあるから……」

呆れながら、どこかほほえましそうにプードルを見送るエレノアが、アルモニの肩をたたく。

今の今まで寝ていたゾロには人物関係はわからないが、とにかく状況が変わりつつあることは察していた。

「なんだか盛り上がりすぎてきてるみてエだな！」

「しししし！ そうなんだ」

「笑ってる場合かつ!!」

「あんた達ねエ……」

のんきに笑う二人に、エレノアが多少は空気を読めと肩をすくめる。

しかし二人のことはとりあえず放置し、エレノアは気になっていたことを尋ねようと、アルモニの顔を覗き込んだ。

「ところでアルモニ？ あんたの言ってたパパって、エイゼルシュタイン教授のこと？」

「！ パパのこと知ってるの!!」

「……まあ、ね」

予想が当たった、とエレノアは興味深そうに街を眺める。

田舎の島にしてはなかなか発展していると思ったら、自分の知る人物が関わっているとは。しかも、町長の友人だとか。

町を見渡すエレノアに、アルモニはどこか誇らしげに語り始めた。

「あなたにわかるかは知らないけど、パパもお姉ちゃんもすごい力を持った人たちな

の！二人がいれば、海賊になんて絶対負けなのに……今はなんか、偉い人の所で働いてて来られなくて……」

「……………その偉い人とはどういう関係で？」

「なんだっけ……元々の故郷の友達だとかなんとか。体を悪くしたお爺ちゃんの代わりにパパが助けに行つてるとか何とか」

臆げな記憶を辿り、首をかしげるアルモニ。

エレノアはそんな彼女を静かに見つめ、何やら考え込むような仕草を見せる。

「…私も、パパみたいに町みんなの力になりたいのにうまくいなくて……。パパも教えてくれないし……だから、町長の気持ちはわかるつもり」

悔し気に言葉を漏らすアルモニを、エレノアはじつと見つめる。まるで、過去の自分とアルモニを重ねてみているように。

やがてエレノアは、フードの下で不敵な笑みを浮かべた。

「よし、いっちゃやったるか！」

「え？」

「大丈夫！おれはあのおっさん好きだ！絶対死なせない!!」

ルフィもエレノアの決断に賛同し、ぱしんと拳を手のひらに当てる。

アルモニは一瞬言葉を失い、出会ったばかりの者たちがなぜか立ち上がろうとしてい

ることに戸惑う。

「な、なんで？　なんで何の関係もないあなた達が…」

「いーからいーから」

ぐいぐいとアルモニの肩を押し、待つてろと言わんばかりに道の端に寄せていく。

あまり波風を立てずに終わらせようと考えていたエレノアの体は今、やる気に満ち溢れていた。

「初代と二代目……二人の『十賢』が築き上げた町か……ちよつと興味が出てきたな」

その誉れ高き名をつぶやき、エレノアは笑みを浮かべる。

『十賢』。それは高い技術と深い知識を有する者に、高名な一部の錬金術師に与えられる、術師の尊敬の象徴。

そういう立場や地位があるわけではない、しかしそう呼ぶにふさわしいと多くの人に認められた証を有する者の名であった。

アルモニの父がああ賢者というのには驚いたが、彼が『十賢』の名を手にしたルーツがここに見えた気がする。

ぐつぐつと屈伸し、コンディションを高めていくエレノアに続くように、ゾロも刀の調子を確認し始めた。

「あんたも行くの？　お腹のキズは」

「治った」

「治るかつ!!」

「ハラの傷より…やられつばなしで傷ついたおれの名のほうが重症だ。いこうか!」

「ああ、いこう」

「どんときやがれってんだ!」

一人はプライドを傷つけられた分を返しに。

一人は自分が気に入った人物を死なせず、野望へ続く地図を手に入れるために。

一人は知り合いが作り上げたという町に単純に興味を持ち、これ以上好き勝手させないために。

三者三様のやる気を見せる海賊たちに、ナミは極めて面倒くさそうに顔を手で覆った。

「あつきれた…」

第10話 “VERSUS”

「ひゃ——っはっはっはっはっは!!」

「やれやれエ船長オ!!!」

「バ……バケモノめ……!!!」

「おれは後に “偉大なる航路”^{グランドドライン}を制し!! 全世界にハデに輝く財宝を全て手中に収める

男だ!!! 世界の宝はおれのもの! この世におれ以外 “宝” を持つ者など必要ない!!!」

正々堂々と戦うことなく、プードルの首を切り離れた手で掴み上げ、バギーはあざ笑う。

じたばたともがき、首を掴む手を殴りつけるが、それは自分で自分を傷つける行為と同じだった。

「そんなにもこの町が大切だと言うんなら、一緒に消し飛べてさぞ本望だろう」

「なんじやと貴様……!! わしと戦え!!!」

「おいおい……自惚れんな……ブツ放せ!!!」

「この町は潰せん!!! わしと戦えエ!!!」

大砲の砲門を向けたまま、バギーは手下に点火を命じる。

抵抗むなしく、町もろともブードルが散つてしまふかと思われたその時、バギーの目が大きく見開かれた。

「! 麦わらの男っ…!!!」

老人の首を掴んでいた自分の手が、探していた生意気な麦わら帽の青年に外される。帽子のつばの下から、ルフィは不敵な笑みを浮かべて見せた。

「約束通り、お前をブツ飛ばしに来たぞ!!!」

「よくもノコノコと自分から…!! 貴様ら!!! 現れたな!!!」

怒りを再燃させるバギーの目の前に、散々暴れて逃げ回っていた連中が次々に姿を現していく。

ナミもまた標的に数えられながら、隣にいるゾロに口を酸っぱくして忠告していた。

「いいい? 戦うのはあんた達の勝手だけどね、私は海図と宝が手に入ればそれでいいの」

「ああ、わかつてる」

「ていうかなんであんたもいるの?」

「えつと…なんか気になっちゃって」

エレノアはさらつと一行に交じっているアルモニを見やり、てへつと舌を出す少女に呆れてため息をつく。

解放されたプードルは、血を吐きながらも立ち上がり、自分をかばうように立っているルフィたちを押しつけようとした。

「小童共…アルモニ…何しに来たんじや、余所者や小童はひつこんでおれ。これはわしの戦いじやぞ!! わしの町はわしが守る!! 手出しは無用じや!!!」

そう言つて、取り落とした槍を拾つて再び突撃しようとするプードル。

するとルフィは彼の後頭部を掴み、手ごろな場所にあつた壁に手加減しながら叩きつけた。

「!!?」

ごんつ、と鈍い音が響き渡り、いきなり頭部にダメージを負つたプードルは、白目をむくとその場にずるずると崩れ落ちる。

突然のことに誰もが反応が遅れ、理解するまでに時間がかかっていた。

「……な!!!」

「は!!」

「町長—!!」

「……………」

ルフィの蛮行に、ナミやアルモニだけではなくバギーも面食らっていた。

ゾロやエレノアだけが取り乱さずにいる中、ナミとアルモニはすさまじい形相でル

フィに詰め寄った。

「あ……!! あんた!! なんてことすんのよ!! 何で町長さんを……!!」
「邪魔!!」

身もふたもない言葉に今度こそ絶句する二人。

ゾロはため息をつくくと、地面に倒れたプードルを面倒くさそうに見下ろした。

「上策だな……」

「ほつといたらこの人、間違ひなく死に行く気だもんね。気絶してもらった方がこつちも安心だし」

「無茶するなっ!!」

「町長になんてことすんのさ余所者っ!!」

仮にも老人に対して行かう所業ではないとナミは怒り、慕っている町長への乱暴にアルモニは怒鳴りつける。

ルフィはそんな二人の猛抗議も気にすることなく、大きく息を吸い込むとバギーに向かって声を張り上げた。

「デカツ鼻ア!!!」

再びその場にいた全員が絶句する。

自分が最も気にしている言葉を二度にもわたってはつきり口にされたバギーは、わな

わなと肩を震わせると悲鳴のような怒号を上げた。

「ハデに撃て!!! バギー玉ア!!! 消し飛べエ!!!」

慌てて点火された大砲から、四発目の砲弾が発射される。

今度は身を隠す壁も、盾にする瓦礫もありはしない。受ければ致命傷は確実の強力な砲弾が、見る見るうちにルフィたちに迫っていった。

「何言い出すのよバカア!!!」

「ぎゃ——っ!!!」

「おいルフィ!! 逃げるんだ!!! 吹き飛ばぞ!!!」

「さーて、それはどうかなア…?」

大慌てでその場から退避しようとする面々だが、ルフィとエレノアだけはまったく動揺する様子はない。

ルフィは4人の前に陣取ると、両足を踏ん張って足場を確保し、再び大きく息を吸い込んでいく。

「そんな砲弾がおれに効くかつ。 ゴムゴムの…風船”っ!!!”」

今度は声として発するのではない。体の中に取り込み、ゴムの体を膨らませることで自身を大きく丈夫な風船に変える技を繰り出した。

目を見開く周囲の目の前で、風船となったルフィの腹に砲弾が優しく受け止められ

る。

ゴムの体は伸びに伸び、限界にまで達すると今度は砲弾を反対側へ弾き飛ばす。面食らった様子で固まるバギー一味のもとへ、砲弾は容赦なく牙をむき、大爆発を起こしたのだった。

「……………先に言えよな」

「言ったでしょ。それはどうかなって」

呆れるゾロとエレノアの前で、元に戻ったルファイが上機嫌にブイサインを送る。

「よっしゃ!! 敵がへった!! やるか!!」

「あんた一体何なのよっ!!」

「バケモノだ——っ!!!」

「人騒がせな…」

「にやははは」

異常な現象にナミやアルモニが騒ぎ立てる。

バギーも大概ものすごい能力を持っていたが、それまで普通の人間だと思っていたルファイまでもが人外だと知って驚くほかになかった。

「説明してよ!! だいたいおかしいと思ったわ!! ライオンと戦ってきた時からね!!」

「人間業じゃない…何なの今の風船みたいにくくれたの!!」

「ゴムゴムの風船だ!!」

「それが何かって聞いてんのよっ!!」

説明になつていない、ただの技名を自信満々に語られ、ナミとアルモニは仲良く絶叫する。

しかし、身内で話し合っている暇などなかった。

「よくもまあハデにやってくれたもんだ……」

吹き飛んだ酒場の瓦礫の中から、立ち上がる人影と声が届く。

無傷で立つ、船長バギーと参謀長カバジ、そして機械腕の男ガンツ。二人は手近な位置にいた手下やライオンのリッチーを前に差し出し、盾にすることで砲弾を防いでいた。

「旗揚げ以来最大の屈辱ですね、船長」

「おれアア、もう怒りで、何も言えねエのよ……」

「クックククック……」

役目を終えた手下を、使い捨ての道具のように放り捨てる彼らにナミは絶句する。

そんな彼らの後ろで、今の今まで気絶していたモージが呻きながら目を覚まし、惨状に気がついた。

「げっ!! 麦わらの男に変なガキ!! バギー船長、あいつらにはお気をつけを!! 奴も

「悪魔の実」の能力者なんです!! 「ゴム人間」なんです!! ガキの方も妙な力を使うんです!!!」

「ゴム人間!?!」

「うん、ほら」

モージの指摘に、初めて知ったナミが振り向くとルフィが頬を引つ張って肯定する。バギーはようやく納得がいったという表情で目を細め、ルフィを睨みつけた。

「……悪魔の実を……!!! バギー玉もはね返す訳だ……しかし、モージ……知ってたんなら」
おもむろにモージの襟首をつかむと、バギーは自分の手を切り離し、ルフィに向かって発射させた。

報告を怠った罰と、そのせいで手ひどい一撃を食らった腹いせのために。

「なんで、それを早く言わねえんだ!!!」

「一応、言いました!!!」

モージの名誉のために言うが、彼はちゃんと報告していた。

ただ意識が途切れてまともにしゃべれなかったのと、バギーが早とちりしただけで言うには言っていたのだ。

しかし憐れなモージは目前に迫ったルフィに蹴り飛ばされ、再び気絶させられてしまった。

「開戦だ!!」

「よっしゃー!」

崩れ落ちるモージを合図に、ルフィたちは戦闘態勢に入る。

するとバギー一味のカバジとガンツが勢いよく飛び出し、ルフィに向かって鋭い刃を突き出した。

「バギー一味参謀長『曲芸』のカバジ!! 一味の怒り、この私が請け負う!!!」

「ひやはははア!! 今度こそおれの最強の力の餌食になりやがれエ!!!」

間抜け面を切り裂いてやろうと振るわれる剣と爪。

しかしそれは、横から差し出された刀と地面からせりあがった土の盾によって阻まれ、奇襲は失敗に終わった。

「剣の相手ならおれがする!」

「こいつの相手は私に任せて、ルフィは本命をどうぞ!」

雪辱を果たそうと燃えるゾロと、やや不機嫌そうな様子のエレノアが、そういつて構えなおす。

ガンツは取り逃がした獲物が自分から現れたことで歓喜し、土の盾を破壊して自慢の鉤爪を振り回した。

「ヒャハア!!!」

力任せながら、油断ならない膂力のそれをエレノアは軽々と躲し、とんとんとステツプを踏みながら距離を取る。

隙を突き、顎でも打ち抜いてやろうと地面に手をつき、土の柱を錬成していくが、ガントツの鉤爪はそれをやすやすと切り裂いて見せた。

「うおお！ すっげエ!!」

「なんて切れ味なのよ……!!」

体格差では圧倒的な不利な組み合わせに、目的を一瞬忘れたナミが絶句する。

その隣で、なぜかアルモニがエレノアを信じられないというような目で凝視していた。

「『オクトパスクロウ』!!」

機械の腕の手甲に刻まれた円陣が輝くと、案の定名の通りタコの足のように伸びてしなる爪がエレノアに襲い掛かる。

縦横無尽に向かってくるそれらの凶器をエレノアは紙一重でかわし、その奇妙な攻撃の原理を考察する。

「錬金術で長さや柔らかさを自在に変化させてるのか……? それだけなの?」

「ちよこまかよけやがって!! お前の能力はその程度かア!!」

再び陣が光り、爪の数が倍になる。

それでもエレノアを捕らえることができず、次第にガンツの表情が苛立ちに満ちていく。

「逃げてばかりじゃ退屈だぜエ!! ちつとは向かってきたらどうだア!!」

挑発するも、エレノアは避け続けるばかりで今度は錬金術を使う様子もない。

それが、お前は術を使わずとも十分な存在だとも言われているようで、ガンツは怒りに顔をゆがませていった。

だが、その怒りはよそにまで影響を与えた。

「きゃああつ!!!」

傍観していたアルモニのすぐ近くに、ガンツの触手の爪が迫ったのだ。

さすがのエレノアもそれには焦り、地面を錬成してアルモニを守る盾を作り出す。

それは触手の一撃を受けて扶けはしたものの、アルモニを守るには十分な強度だった。

「もらったア!!!」

意識がそれた隙を狙い、ガンツが残りの爪をエレノアに向かわせる。

エレノアの目はアルモニに向いていて、ガンツの攻撃は避けられそうにない。

勝った、とガンツが口元を笑みに歪めた瞬間だった。

「少しは頭を使いなよ……」

バシンツ!!!と凄まじい閃光が走ったかと思うと、エレノアの姿が一瞬見えなくなる。まぶしさに思わず目を腕で覆うガンツだったが、くらんだ視界の中で急速に迫る人影がうつすらと見えた。

「ぶっア!!」

顔面に突如強烈な蹴りを食らい、ガンツの体がぐらりと傾ぐ。

鼻を押さえながらたたたらを踏んで後ずさると、自分の顔面を蹴り飛ばした不屈き者を睨もうと目を凝らす。

そして、その表情を驚愕でゆがませた。

「……ちよつとぐらい遊んでやろうかと思っただけど、気が変わった」

ガシヤン、と金属音を立てて、ガンツを蹴り飛ばした張本人が降り立つ。

その声はエレノアのものであったが、姿は全く変わっていた。

「え!! だ、誰?」

ナミが戸惑うほどに、エレノアの変貌はすさまじかった。

7、8歳ほどだった背丈はナミより少し低いぐらいにまで伸び、胸や尻も非常に育ってローブを下から持ち上げている。

フードの下から除く顔立ちも大人びて、鋭く尖った視線がガンツを射抜いている。

まるで急速に大人になったように、エレノアの体は大きく変わっていた。

「おお、久々に見たな、あれ」

「あ、足が伸びっ……いや、なんだその姿は?!?」

「あんたごときに錬金術を使うのはもつたいない……だから、あんたの好みに合わせて迫撃でお相手させてもらう」

言うが早い、エレノアはガンツに向かつて突進する。

慌てて触手爪で迎撃しようとするガンツだが、以前よりも速くなったエレノアには微塵もかすらない。

それどころか、高く跳躍したかと思うと襲い来る触手爪を足蹴にし、踏み越えてどんどん加速していく。

「しかと見ておけド三流……錬金術をそんな見戯と一緒にするな!!!」

怒りをにじませた目をフードの下に見て、ガンツは初めて恐怖で顔をゆがませた。

「う……うおおああ!! 来るなあああ!!!」

悲鳴を上げて、残った生身の腕を振り回すが何の意味もない。

急接近していくエレノアの右脚のすねから、シャキンと刀のような刃が展開して爪先に装填される。

銀色に輝く刃が、一直線にガンツに襲いかかる。

「アラロンドナイト
縛鎖清刃!!!」

両足が真つ平らに開かれるほど振り上げられた足が、ガンツの身体を斬り裂く。

ドパツと噴き出す鮮血に彩られながら、ガンツは心底信じられないという表情で膝をついた。

「バカな……!!」このおれが……誰にも負けたことのない最強のおれが……!!

「最強だとか無敵だとか……あんまりそういう意味のない大言を口にしないほうがいいよ。器が知れるだけだから」

ひけらかすだけの強さに、成長など見込めるはずもない。

少なくともエレノアの知るうちに、己こそが世界で最も優れていると天狗になった錬金術師同業者は他にいなかったと記憶していた。

「じゃあね、自称・最強さん。格の違いが分かったかな?」

せめてものはなむけにそう告げ、エレノアは悠々と降り立つ。

爪先から伸びた刃が収納されると同時に、もう一度パンツと手に平を合わせたエレノアは光に包まれ、元の子供の姿に戻っていた。

傍らでは、カバジの曲芸剣技と卑怯な戦法に苦戦したゾロがカバジを仕留め、終了とばかりに刀を収める。

最初の戦いは、ひとまずルフィ側の勝利で終わった。

「ガンツを一撃で……!!」ただものじゃねエなあのがキ……!!」

ガンツの力が相応のものだと認識していたバギーは、それを圧倒したエレノアを思わず凝視する。

沈黙が支配する中、ほっと一息をつくエレノアのもとにふらふらとアルモニが近づいていった。

「錬金術……あなたが、錬金術師……？」

「！ アルモニ……」

今になって、アルモニに今の術を見せたのはやりすぎだったかと後悔する。

アルモニが父ヴィルヘルムのこと尊敬しているという事は、彼が錬金術師であることも知っているのだろう。

彼のもとで学びたいとも言っている彼女からすれば、海賊である自分がそれを使っているのは嫉妬的になるのではないだろうか。

気づきはしたものの、もう遅い。アルモニはエレノアの目の前で立ち止まり、うつむいていた。

「……………」

「へ？」

こぼれた声はよく聞こえなかった。

さっと上げられたアルモニの顔は、興奮と尊敬でキラキラと輝いていた。

「すごい——いい!! なたたつて錬金術師だったのね!!? すごいじゃない!! あのみか
つく海賊を一撃でのしちゃったよ!!」

「お、おお?」

「ねエ教えて!! あたしに錬金術を教えて!!? まだ基礎もできてないけど、陣もなしに
自分の体を変えられるなんてすごい錬金術師だよね!!? あたし頑張るから錬金術を教
えてよ!!? ねエおチビちゃん、教えてよ!!」

「おチツ…!! それが人にものを頼む態度か!!」

不名誉な呼び方にムツとなるエレノアだったが、アルモニは全く気にせずエレノア
の肩をガツと掴む。

その予想以上の力に、エレノアは圧倒されていた。

「そもそも私は海賊だよ!! あんたにものを教える資格も義理も…!!」

「なんでもするから!!? だからお願い!!? 弟子にしてよ!!? ねエねエねエねエ!!?」

「あーもううつとうしい!! ルフィ、あとは全部任せたら!!」

ぐいぐい迫ってくるアルモニを押し返し、エレノアはその場からの一時離脱を選択す
る。

ぽかんと突っ立ったままの他の者をほったらかしにし、逃げ出したエレノアを追って
アルモニも走り出していった。

「待つて——!!」

「…何だ、あのガキ…」

「ルファイ……………おれは寝るぞ」

思いもよらない展開にバギーも呆然とし、体力の限界に達したゾロも頭に巻いた布を外してその場に倒れる。

「おう、寝てろ。あとはおれがやる」

残されたルファイは、当初の目標であるバギーに挑戦的な笑みを浮かべた。

ここから先は、船長同士による決闘の時間だ。

一味の期待を一身に背負い、猛る闘志を抱いた若き海賊は懸賞首に挑みかかった。

「弟子にして——!!!」

「もう勘弁してよ!!!」

ただし追われたままのエレノアには、それどころではなかった。

第11話 “最初の一步”

「ゼエ…ゼエ…!! あの子なかなか根性あるな…!! とうとう町一周しちゃった…!!」
アルモニに追われ、敵と戦ったすぐ後に走り続ける羽目になったエレノアが、息切れしながらこぼす。

本気で逃げ続けたのだから、振り切ったはずだろうと後ろを振り向く。

「さすがにもう追っては…」

「弟子にしてくれるまであきらめないっ!!」

「ふぎや——っ!!?」

必死の形相で、至近距離にまで張り付いていたアルモニを目にして、エレノアが悲鳴をあげた。

おそるべき執念である。

「なんなの!! あんたのその底なしの根性は一体何なの!!?」

「だから言ってるじゃない!! 私はパパみたいみんなの役に立ちたいんだよ!! そのためなら、私はなんだってやってやる!!!」

「……!! 強情なっ!!」

「パパもお姉ちゃんも教えてくれない……!! どうせ使えないって!! 才能がないからムダだって!! あたしは真剣なのに……真剣にパパやお姉ちゃんに認めてもらいたいのに!!!」

「……………」

アルモニの慟哭に、エレノアはなぜか言葉に詰まった。

心の底から悔しそうな表情や、握り締められた手に表れている感情に、何か思うことがあつたらしい。

しばらくしてエレノアは徐々に速度を落とし、途中で立ち止まった。

アルモニは思わず笑顔になり、大きく肩を揺らして息を切らせながらエレノアを見つめた。

「はア……………はア……………教える気になつてくれた?!!」

「……………悪いけど、私はあんたの師匠にはなれないよ。その資格も暇もない」

「……………ツ!! 資格がないなんて思わない!! あなたはすごい錬金術が使えるし、それをひけらかしたりしない!!! 暇がないなら、私があなたの行くところについていく!!! だからっ……………!!!」

「……………私は海賊だよ」

「じゃああたしだって海賊に……………!!!」

「いい加減にしろ!! 軽い気持ちでその言葉を口にするな!!!」

「軽い気持ちなんかじゃやない!! 真剣にあたしは錬金術師になりたいんだ!!!」

何度言っても、アルモニは諦めるつもりはないらしい。

弟子を取るつもりも、況してや他人に錬金術の手ほどきをする気などないエレノアは難しい顔で黙り込み、真剣な表情を見せるアルモニを見つめ返す。

やがてエレノアは、大きなため息をついた。

「しよががない……これだけはあんたに見せたくなかつただけだ」

エレノアは観念したようにつぶやくと、自分が履いていた長いブーツのジッパーをおろしていく。

太ももまで覆う、刃を収納するためのスリットなどを備えた特殊なブーツをするすると脱ぎ、その下に隠された自分の足をアルモニの前に晒していく。

露わになったのは、銀色の機械の足だった。

「……何? その、足……」

「……錬金術師の……私の業だよ」

甲冑などではない、太ももから下がまるまる金属でできた足に成り代わっているのだ。

エレノアが抱える想像以上の闇に、アルモニは言葉を失った。

「これはね、人として侵してはならない神の領域に踏み込んだ私の罪なんだ。師匠にだって禁じられていた、錬金術師の最大の禁忌…それを侵してしまったの」

「……………!!」

「私は後悔なんかしちゃいない。こんな姿になつてまで、取り戻したかったものがあるから…でもだからこそ、私はあんたに錬金術を教えるわけにはいかない。教えていいはずがない」

アルモニに才能がないから、やっても無駄だからと否定したわけではない。

罪を犯した自分にはそんな資格がないから、エレノアはアルモニに錬金術を教えようとは思わなかったのだ。

「教授があんたに教えないのもそう…：錬金術は誰もが幸せになれる都合のいい力なんかじゃない。相応のリスクを覚悟しないと、命の危険だつてありうる。あんたの父親や姉は、あんたにそんな風になつてほしくないから禁じているんじゃないのかな」

アルモニの父親も姉も、彼女を軽んじているのではない。

娘を愛し、妹を心配しているからこそ、大きなリスクを背負う錬金術から遠ざけようとしていたのだと、エレノアはそう感じていた。

「…でなきやあの人、自分の娘にそんなことを言うはずがない」

「どうしてそんなことわかるの…?」

「…私が認めた、偉大な錬金術師だからだよ」

エレノアは、かつて相對した偉大な術者を思い出す。

賢者にふさわしき実力と人格を有したあの男を、エレノアは高く評価していた。

「私なんか頼らなくても、きつとこの先素敵な師匠に出会えるよ。……海賊に教えを請おうなんて思わなくてもね」

厳しいかもしれないが、これがアルモニにとつても最良の答えだとエレノアは思う。俯いてしまったアルモニを置いて、エレノアは先へ行こうと歩き出した。

「じゃあね」

「……でも!!」

去っていく小さな背中に、アルモニは叫ぶ。

自分を卑下し、アルモニを傷つけない断り方をしてくれた彼女を、アルモニは嫌えなかった。

「あなたは…助けてくれたよ? 海賊に殺されそうになった私を…助けてくれたよ?」

エレノアは振り向かず、その場でアルモニの言葉を聞く。

アルモニは惜しそうに唇を噛み締めながら、命の恩人にして尊敬する先輩に笑顔を向ける。

「あなたに弟子にしてもらおうのはあきらめるよ……でもね!! 錬金術はあきらめない

よ!! つか絶対すごい錬金術師になって、今日助けてもらった恩を返せるくらいになってみせるよ!!! …そんな事ぐらい、願ってもいいでしょ?」

「…そっか。じゃあせいぜい頑張りなよ」

実に前向きなアルモニの決意に、エレノアは内心で微笑ましさを感じながら振り向く。

そこまで固い決意と情熱があるならば、攻めてもの選別に言葉を送るぐらいはしてやろうと、優しい笑みを浮かべた。

「一つだけ教えてあげるよ。錬金術の基礎は『等価交換』…あなたが本気でそこまで錬金術師を志すなら、その思いを失わないで」

言葉の意味を探るアルモニに苦笑し、エレノアは彼女なりの声援エールを送る。

「あなたの夢がその思いに釣り合うかどうかは……あんた次第だよ」

「……………!!! うんっ!!!」

アルモニは一瞬あつげにとられながら、エレノアのアドバイスに希望を抱いたのか満面の笑みを浮かべる。

大きな一歩を踏み出しつつある少女をまぶしそうに見つめ、エレノアはアルモニに見送られながらその場を後にした。

そこから時間をかけ、バギーたちがいた場所へと戻ってきたエレノア。

もういい加減、ルフィたちも問題を解決して静かになつていゝ頃だろう、と予想して、路地裏から顔を出した。

「やー、ただいま…」

とりあえず労つてやろうと片手をあげる。

が、帰つてきたのは仲間の声ではなかつた。

「あつちにも仲間がいたぞ!!」

「捕まえるオ!!」

「ふぎや——っ!!?」

険しい形相で、槍やらモップやらで武装した町民らしき男たちに追われ、エレノアは悲鳴をあげながら走り出した。

海賊ゆえに仕方がないが、あまりに急なことで理不尽にしか思えなかつた。

「あんたたち何やつてんのよオ!!」

「文句はこいつに言つてよ!!」

「なっはっはっはっはっは!!」

前を走る、財宝を抱えたナミやゾロを担ぐルフィたちを怒鳴りつけるも、ナミも不本意だつたのか怒号が返ってくる。

のんきに笑うルフィの笑い声が妙によく聞こえた。

このまま港まで追いかけられ続けるのかと思つた時、町民たちの前に割り込む影があつた。

「ワン!!!」

「うおっ」

思わず足を止めた町民たちの前で、ペットフード屋の番犬シユシユが勇ましく吠えた。

思わぬ事態に町民たちは戸惑つて立ち止まり、ルフィたちは驚きの声をあげる。

「シユシユ!」

「犬っ」

「おい、シユシユ!! そこをどけ!!」

「あいつら悪い海賊なんだ!!」

「ワン!! ワン!!」

魚屋のオヤジや本屋の主人に言われても、シユシユはその道を譲ろうとはしなかつた。

宝物の仇をとつてくれた恩人たちを逃がすため、忠犬は必死に時間を稼ごうとしてくれている。

「グルルル…!! ワンワン!!」

「どうして邪魔をするんだシユシユ!!」

「シユシユ!! そこを通せ!!!」

「ワン!! ワン!!! ワン!!!」

怒鳴られても、シユシユは決して動こうとはしない。

その姿は、かつてペットフード屋を一匹で守り続けていた時よりも大きく、たくましく見えた。

「はあー、怖かった。シユシユのお陰で何とか逃げきれたわ。なんで私達がこんな目にあわなきやなんないの?」

「いいだろ、別におれ達の用は済んだんだから!」

「そりやそうだけどさ」

とんだとぼつちりにぶつぶつ言いながら、ナミはバギーから奪った財宝を抱え直す。財宝にこだわるだけあって、バギーのお宝は質が良かったらしく、それなりに儲かって機嫌がいいらしい。

そうこうしているうちに、一行は自分たちの船が停められている港にたどり着く。ルフィはナミが乗ってきたと言う船を見て目を輝かせた。

「これ、お前の舟なのか？ かつこいいなー!! いーなー」

「……そうは思わないけど、私は。バカな海賊から奪ったの」

「…ああ、あいつらの」

ナミの言葉に、エレノアはこの島にくるきつかけとなった三人組のことを思い出す。

そういえば今、どこで何をやっているのだろうか。

「待ってたぜ泥棒女っ!!」

そんなエレノアの考えが何か作用したのか、ナミの船の中から三つの影が立ち上がった。

そのタイミングの良さに、エレノアは呆れてしまう。

「あ…あんだ達は…」

「ここにいれば帰ってくると思ったぜ」

「ぐっしっしっし。まさか、この港で盗まれた船に出会えるとは思わなかった」

「おれ達を忘れたとは言わせねエぞ…!!」

「うん。よく覚えてるよ」

頭痛を覚えながら、エレノアはバギー一味の三人組の標的となっているナミの前に立つ。

何か言いかけていた三人組は、立ちふさがるエレノアを見てさっと顔を青ざめさせ、

ついで驚愕と恐怖に引きつらせた。

「!!!? ぎいや~~~~~!!!」

三人組はまるで悪魔か怪物にでも遭遇したかのようになり、泣き喚きながら叫び声をあげ、自ら海へ飛び込んで逃げ出してしまった。

後に残されたルフィは不思議そうに三人組が消えた方を眺め、首を傾げた。

「知り合いだったのか?」

「…さあね♪」

何やら上機嫌のナミは朗らかに笑い、なぜか隣に立っているエレノアの頭を撫でた。

「よし、行くか!」

「ナミ、その帆、バギーのマークついてるけどいいの?」

「そのうち消すわ」

血が減って動けないゾロを乗せ、財宝を積み込み、ルフィたちは出航準備を終える。

風は良好、波も穏やか。絶好の航海のチャンスにルフィたちは早速船を出した。

「おい、待て小童共!!!」

だいぶ沖に出た四人の方へ、大きな声がかけられる。

意識を取り戻したプードルが、ルフィにやられた傷跡もそのままに波止場に立っていた。

決死の覚悟を決めて突撃しようとしたらそれを妨害され、気絶している間になんのか関係もない連中に大切な街を救われていた。

その悔しさよりも先に、プードルの口からはこらえきれない思いが溢れ出していた。

「すまん!!! 恩にきる!!!」

滂沱の涙を流しながら、送られた感謝の言葉にルフィは明るく笑う。

「気にすんな!! 楽に行こう!!」

「言葉もないわ……!!!」

自分の喜びを、感謝をそれ以上の言葉にすることもできず、プードルは「良い」海賊たちの姿が見えなくなるまで見送る他にない。

その隣に、慌てて駆け寄ってきたアルモニが立ち止まり、息を切らせながらも声を張り上げた。

「エレノア——っ!!!」

名を呼ばれ、振り向いたエレノアは大きく手を振るアルモニに目を丸くする。

何事かと首をかしげるエレノアに向けて、アルモニは大きく叫んだ。

「私っ!!! つか立派な錬金術師になるからっ!!! その時また逢おうね——っ!!!」

「……………そんな大声出さなくても、わかってるよ」

呆れながらもエレノアは、後輩の希望に満ち溢れた表情を見て安堵のため息をつく。

きっと彼女は、大きく成長することだろう。

挫折も失敗も経験し、大きな夢を持った少女は高く羽ばたいていくことだろう。

その光景を見られないこちは確かに残念だが、あの笑顔を見られただけで満足だ。

「……………」

ルフィはそんなエレノアを愉快そうに笑い、エレノアはなんとなく腹が立って肘でつつく。

遠く離れていく船の影を追い続けていたアルモニは、やがてぎゅつと強く拳を握りしめた。

「よし!! やるぞ!!」

ここに、大きな夢を持った少女の一步が、踏み出された。

第3章 海賊旗が呼んでいる

第12話 “キャプテン・ウソツプ”

「無謀だわ」

二艘並んで海を進む船の上で、真剣な表情のナミがそう呟く。

それに真面目に頷いたのは、悲しいことにエレノア一人だけであった。

「まあ……そうだよね」

「何が？」

「このまま “偉大なる航路” に入ること！」

「冒険に耐えられるだけのちゃんとした船…：装備…：食糧…：船員の数…：数えだしたらきりがないよ」

ローブの下から手を出し、指折り必要なものを数える旅にエレノアの表情は険しくなっていく。

一直線に “偉大なる航路” を目指してきたものの、あらゆる物資が不足している今の状態で挑めばたちまち返り討ちにされるだろうことは明らかだった。

「ひとつなぎの大秘宝^{ワッソンズ}を求め、猛者がうようよしてる海だし、そいつらが乗ってるのも

強力なやつだよ」

「あんた、あの変な力で船作ったりできないの？」

「ムリムリ。錬金術師っていうのはどっちかっていうと研究者寄りだからさ、修行を積んだ本業の人にはかなわないよ」

「どっちにせよ、ちゃんとした準備が必要不可欠なことね」

頼りにはできないと察したナミはため息をつき、肩をすくめて進行方向に目を向ける。

ともかく今は、次の島に到着することが先決だ。

「ここから少し南へ行けば村があるわ。ひとまずそこへ！　しつかりした船が手に入ればベストなんだけど」

「小さな村みたいだし…望みは薄そうかなア」

「肉を食うぞ!!!」

不安げに舵をとるナミとエレノア、能天気な腹を鳴らすルフィに眠りこけるゾロ。

連携が取れているように取れていない一行はやがて、周囲を崖で囲まれたある陸へとたどり着いたのだった。

「あつたなー。本当に陸が！」

「なに言ってるの。当然でしょ。地図の通り進んだんだから」

「それにしても正確だよ。これから頼りにしてるよ」

ルフィの感想に呆れながら、ナミは自分の船のマストをたたむ。

今の今まで眠っていたゾロも目を覚まし、船を岸につける用意にかかった。

「村はこの奥だっけ？」

「うん。でもあんたの言う通り小さなところね」

地図を確認しながら陸の方を見ると、確かに崖の一箇所には坂道がある。エレノアが耳を傾けると、その先から何やら人の声が聞こえてくるのを感じた。

しかし、それとは別に気になる声も聞こえてくる。

ヒソヒソと何人かの子供と、年長らしい男性が囁きあっているものだった。

「ところで、さつきから気になってたんだが」

「…ああ、あれ？」

ゾロも気配か何かで気づいたのか、エレノアが見つめている方に胡乱げな視線を送っている。

見れば、岸にある草むらが妙にガサガサと揺れていた。

「あいつら何だ」

「!!!」

つい口に出した時、ガサガサと草むらをかき分けて三人の男の子たちが飛び出して行

くのが見えた。……一番年上らしい青年を置いて。

「おいお前ら!! 逃げるな!!」

「うわああああ見つかつたア~~~~~つ!!」

青年が手を伸ばすも、子供達は一目散に逃げていつて振り返りもしない。

一人取り残された青年は呆然と立ち尽くすも、ジツと自分の方に向けられている視線にハツと我に返り、堂々と仁王立ちして視線を受け止め始めた。

「おれはこの村に君臨する大海賊団を率いるウソップ!!! 人々はおれを称え、さらに称え、我が船長、キャブテンウソップと呼ぶ!! この村を攻めようと考えているならやめておけ!! このおれの八千人の部下共が黙つちやいなからだ!!」

「その八千人の部下、さつき尻尾巻いて逃げてつちやつたみたいですけど? キャブテン」

「ゲツ!! ばれた!!」

「せめて嘘は貫き通そうよ。ばれたって言つちやつたし」

「ばれたって言つちまつたア~~~~つ!! おのれ策士め!!」

「はつはつはつはつはお前面白エな~~~~つ!!」

「おい、てめエおれをコケにするな!!」

急によくそこまで話せるもんだと感心しながら、エレノアは妙に鼻の長い青年をじつ

と見つめる。

ただの村人のようだが、どこかで見た覚えがするのが不思議だった。

「おれは誇り高き男なんだ!!」 そのホコリの高さゆえ人が、おれを「ホコリのウソツプ

”と呼ぶ程にな!!」

「ほぅ…」

嘘を見破られてなお、大口を叩いて自分を大きく見せようとする胆力に興味がわく。

いたずら心が湧いたエレノアはつい調子に乗って、強者のような低い声を発して青年——ウソツプに向けてフードの下から目を光らせた。

「ならば答えてもらおうか…ホコリのウソツプ殿。私の質問に…」

「……………!!」

異様な気配を感じたのか、ウソツプはゴクリと唾を飲んで後ずさる。

他のものも息を呑み、風もないのにローブの端を揺らすエレノアに視線を集め、発せられる言葉を待った。

「お腹すいたんだけど、ここはん屋はどこ?」

シリアスな声で告げられた間抜けな質問に、その場にいた全員がずっこけたのはいうまでもない。

「なに?! 仲間とでかい船を?!」

坂を越え、村の食事処に入ったルフイたち。

訪問の目的を聞いたウソツプは驚きながら、どこか羨ましそうに興奮しながら身を寄せてきた。

「ああ、そうなんだ」

「は——つ、そりや大冒険だな!! まあ、大帆船つてわけにやいかねエが船があるとするりや、この村で持つてんのはあそこしかねエな」

「あそこつて?」

「この村に場違いな大富豪の屋敷が一軒建つてる。その主だ」

ウソツプは言いながら、視線をどこか別の方に向ける。おそらくその先に、件の屋敷があるのだろう。

「だが主といつても、まだいたいけな少女だがな。病弱で…寝たきりの娘さ…!!」

「え……どうして、そんな娘がでつかいお屋敷の主なの?」

「ワケありみたいだね」

「おばさん!! 肉追加!!」

「おれも酒つ!!」

「はくい!」

「てめエら話、聞いてんのか!!」

「あーいいからいいから。こいつらのぶん私とナミが聞くから」

放つたらかしにされて怒るウソツプをエレノアとナミが抑える。

いちいちこのくらいで説明を中断されては、いつまでたつても本題に入れない。

怒りを収めたウソツプは、渋々二人に説明を再開する。

「……もう1年くらい前になるかな。かわいそうに病気で両親を失っちゃまったのさ。残されたのは莫大な遺産とでかい屋敷と十数人の執事たち……!! どんなに金があつて贅沢できようと、こんなに不幸な状況はねエよ」

「ふーん……」

重い話を聞かされ、ナミは頬杖をつきながら考え込む。

何か思うところがあるのか難しい表情の航海士の様子になり、エレノアが視線を向けていると、ややあつてからナミは机を叩き、体を起こした。

「……やめ! この村で船のことは諦めましょ。また別の町か村をあたればいいわ」

「さんせー。まだそんなに資金がたまつてるわけでもないしね」

「そうだな。急ぐ旅でもねエし! 肉食つたし! いっぱい買い込んでいこう!」

「……ナミ、こいつの首輪は任せるよ」

「うん……大変ね。あんたずつとこいつと一緒にだつたんでしょ?」

「…もう慣れたよ」

「ところでお前ら」

遠い目になるエレノアの肩を、ナミが憐れみの目になりながらポンと叩く。

すると、勇敢なる海の戦士を自称するウソツプがずいっと身を乗り出してきた。

「仲間を探していると行ってたな……！ おれが船長キャブテンになつてやつてもいいぜ!!!」

「「「めんなさい」」」

「はえエなおい!!!」

即座に拒否されたウソツプは、若干涙目になりながら叫び声を上げてうなだれる。

そこへ、前髪の色素が薄い、長い黒髪の女性がパタパタと駆け足で近づいてきた。

「ウソツプ君！ そろそろじゃない？」

「ん？ …おつといけねエ。もうこんな時間だ。ありがとな、ロゼー！」

「なに？」

「悪いな、おれはこれから用事があるんだ。まア何もねエ島だが、出発までゆつくりしてればいいさ。じゃあな！」

「おー」

先ほどとは打って変わって明るく、それもどこか使命感を感じさせるキリツとした表情で立ち上がり、どこかへと去っていくウソツプを見送る面々。

急なことで、エレノアは不思議そうに首を傾げて青年が去った方を見つめた。

「…何しに行つたんだろ、あの人」

「ギア？」

「彼にしかできないことだよ。ほら、追加のお肉とお酒っ!!」

他人のはずなのに、どこか誇らしげな笑みを浮かべている給仕が気になり、エレノアは思い切つて尋ねてみることにした。

「店員さん…ロゼ、だっけ？ ウソツプにしかできない事つていったい何なワケ？」

「それは私の口から言うには野暮かなア…」

ニコニコといたずらっぽいなみだけ返し、肝心なことは教えてくれないロゼにますますわからなくなる。

すると、食事処の扉が開き、三つの小さな人影がルフィたちの席の前に立ちはだかつた。

「『ウソツプ海賊団、参上っ!!』」

突然のことにルフィたちは目を丸くし、小さな乱入者たちを思わず凝視した。

「なにあれ…」

「さー、何だろうな…」

「…この声つて確かさっきの」

「? ……!! おい…キャプテンがいないぞ…」

「まさか…やられちゃったのかな…!!」

「お…おい海賊たちっ!! われらが船長キャプテンウソップをどこへやった!! キャプテンを返せ!!」

座っている面々の中にウソップがいないことに気がつき、ウソップ海賊団のメンバー・ピーマン、にんじん、たまねぎがざわつき始めた。

ロゼはそんな三人を見やると、クスクスと微笑ましそうに笑みをこぼしていた。

「は——っ、うまかった! 肉っ!!」

「!!」

「え…肉…っつて!!」

「まさか…キャプテン…!!」

「小骨が引つかかるのが難点だよねエ…」

「ほっ、骨エ…!!」

ルフィが特に意味もない感想を口にする、面白いように勘違いして慌て始める。

ついエレノアが便乗すると、さらに顔を青くして狼狽し始めた。なんとも素直で想像力豊かな少年たちである。ナミも思わず笑いそうになるほどだ。

「お前らのキャプテンならな…」

「な…何だ!! 何をした…!!」

「さつき……喰っちまった」

さらなるゾロの悪ノリで、少年たちは今度こそ恐怖で真っ青になって震え上がった。

「ぎいやああああ鬼ババア~~~~っ!!」

「なんで私を見てんのよ!!!」

ナミを凝視ながら悲鳴をあげ、そのままぶつ倒れる三人。

余計なことを言っただけで笑うゾロに抗議するナミの横で、こらえきれなくなったロゼが腹を抱えて大笑いしていた。

しばらくして、目を覚ましたウソップ海賊団に事情を確認し、ようやく和解がかなった。…目を覚ました時、ナミの顔を前にしてまた一悶着はあったものの。

「あんた達のキャプテン…何しに行ったの? 時間って言ってたけど」

「あ、そうか。キャプテン、屋敷へ行く時間だったんだ」

「屋敷って病弱な女の子がいるっていう?」

「うん」

「何しに行ったんだよ」

「うそつきに!」

誇らしげに答えるにんじんに、ナミもエレノアも思わず呆れる。

あの男らしいといえればあの男らしいが、それが自慢できることかと言われればそうは思えなかった。

「ダメじゃねエか」

「だめじゃないんだ！ 立派なんだ！ な！」

「うん！！ 立派だ！！」

「そうよ、立派なのよ？」

ピーマンやたまねぎが嬉しそうに言うのと、ロゼもそれに同意する。

詳しい話を聞いてみれば、確かに胸を張ってもいいと言える行為であった。

両親を失い、自身も病気がちになって屋敷にこもりっぱなしになった屋敷の主人の少女。

夢見る少年ウソップはそんな彼女の元へ毎日のように通い、想像できうる限りのホラ話を聞かせているのだと言う。内容は常に、勇敢な海の戦士である自分が主人公の冒険譚だ。

悩んでいることも馬鹿らしくなるほどのホラ話に励まされ、少女の顔にも笑顔が戻ってきたそうだ。

「いいやつじゃん」

「へー、じゃあお嬢様を元気づけるために、1年前からずっとウソつきに通ってるんだ」
「二途でしょ。カヤお嬢様も最初はふさぎ込んで本当に体調も悪かったんだけど…ウソツプ君のウソに励まされて随分体もよくなつたみたいよ」

「うん。おれはキャプテンのそんなおせっかいな所が好きなんだ」

「おれはしきり屋などが好きだ」

「ぼくはホラ吹きなところが好き!!」

「とりあえず慕われてんだな」

「敬われてんだか貶されてんだか…」

思わず半目になって、呆れるべきか感心するべきか悩むエレノア。

話を聞いたナミは、ニヤニヤしながらロゼの方に身を寄せていた。

「1年もずつと通いつめるなんて、大した奴じゃないの」

『病は気から』っていうぐらいだしね…一緒にいてくれる人がいるってだけで、お嬢様も救われたんじゃないかな?」

「そうだといいいね。だからこの村も、ウソつきな彼に怒ったりするだけで疎んだりはないの。むしろ毎朝騒いでくれるお陰で、はたらく時間だーってやる気になる人もいるくらいなのよ」

「へー……」

嘘つきの意外な信頼に声が漏れる。

塵も積もれば山となるというか、誠実さはともかく愛されているらしい。

「……………私も、彼には救われてる」

「？」

不意に聞こえてきたロゼのつぶやきに、エレノアが聞き返そうとするが、ロゼはハツとして愛想笑いを返す。

気にはなるが、聞かれたくないことでもあったのかと、エレノアは気にしないことにした。

すると、急にルフィがその場で立ち上がって告げた。

「よし!! じゃあやつぱり屋敷に船をもらいに行こう!!!」

「なんでそうなった!!?」

思わぬ船長の決断に、エレノアは目を向いて驚愕した。

第13話 “偽れぬもの”

「こんにちは——つ、船くださいーい。さあ入ろう」

「あいさつした意味あんのか……」

「ごめんね。うちのアホ船長がほんとにごめんね」

「ああ……止めてもムダなのね」

「ムダだな。つきあうしかねエだろ」

我が道を行くルフィに、出会ったばかりのウソツプ海賊団はおろか、ナミとゾロもあきれほかにない。エレノアも先程から頭が上がらない。

が、そんな船長の暴走を止めるものがたった一人だけいた。

「あーもう！ 閉まつてる門から入っちゃだめよ！」

「ぐえつ!!」

「あれ？ ロゼ？」

門を乗り越えようとするルフィの襟首を引っ張り、強制的に地面に引き摺り下ろしたのは食事処の看板娘ロゼ。

ロゼは尻餅をついたルフィを見下ろし、ハア……と大きなため息をついた

「なんか不穏な話してたからついてきたのよ。真つ向から入っても捕まるだけだよ?」

「じゃあどうすりやいいんだよ」

「…仕方がないわね」

ルフィの態度を見て、今見逃せばまた同じことに挑戦しかねないと思つたのだろう。

苦笑しながら、別の入り口がある方を指差した。

「私、いつもこの屋敷に食料とか届けてるから、一緒に行つてあげる」

「いいの? そんなことして…」

「あのまま正面から侵入されるよりはマシでしょ? 私の連れてつて事にしといた方が都

合がいいわよ」

優しい、やんちゃな子供を見守る姉のような表情で、ロゼはルフィたちを誘つた。

広い広い屋敷の庭に、若い娘のおかしそうな笑い声が響く。

娘は屋敷の窓から身を乗り出し、すぐそばの庭木に背を預けて腰を下ろすウソツプの話を真剣に聞いていた。

「あはははは…で、その金魚はどうしたの?」

「その時切り身にして小人の国へ運んだが、いまだに食いきれないらしい。そしてまたもや手柄をたてたおれを人は称えこう呼んだ」

「キャプテーン!!」

「そう…キャプテ…」

いつもの締めくくりをしようとしたウソツプだったが、不意に聞こえてきた知った声に思わず固まる。

「げっ!! お前ら何しに来たんだ!!」

「この人が連れて来たって…」

「誰? ロゼも一緒になって…」

「こんにちは、カヤ!」

「いきなり押しかけて申し訳ありません。しがない旅人です」

「あ! お前がお嬢様か!」

白いワンピースに肩口で揃った金髪、儂げな雰囲気を感じさせる娘を見たルフィがそう気づく。

やや慌てた様子のウソツプはすぐさまルフィの肩を叩き、偉そうな顔を作った。

「あー、こいつらはおれの噂を聞きつけ遠路はるばるやってきた、新しいウソツプ海賊団の一員だ!!」

「ああ!! いや! 違うぞおれは!!」

よく回る口に思わず頷いたルフィが否定し、本来の要件を説明しようと試みる。

「頼み？ 私に？」

「ああ！ おれ達はさ、でっかい船がほしいん…」

「君達、そこで何してる!! 困るね勝手に屋敷に入つて貰つては!!」

だがそこへ、若い男の怒鳴り声が響き渡る。

黒い丸メガネをかけた燕尾服の男が、白衣を纏つたふくよかな男性とともにこちらに向かつてくるのが見えた。

「まアまア…そんなにいかり肩ではお嬢様に余計な恐怖を与えてしまいますよ」

「しかしコーネロ医師…!!」

「あのね、クラハドール、この人達は…」

「今は結構！ 理由なら後できつちり聞かせて頂きます!! さあ、君達帰つてくれたまえ。それとも何か言いたい事があるかね？」

「あのさ、おれ達船がほしいんだけど」

「ダメだ」

ルフィの頼みもあつさり拒否し、クラハドールと呼ばれた執事は侵入者たちを睨みつける。

コーネロと呼ばれた医者も、困り顔でルフィたちを見やって顎に手をやっていた。

「困るねエ…過剰な接触は病人にはよくないとウソツプ君には前々から言っているはず

「なんだが……」

「……あなた、もしかしてこの村のお医者者？」

「ええ。小さな病院を営んでいる者です。まあ、平凡な腕前ですよ」

「平凡なんてとんでもない！ コーネロ先生は立派なお医者様ですよ！ 病気がちなカヤもこの人によく助けられてたんだから!!」

「……ふーん」

妙に力説するロゼに驚きながら、エレノアはコーネロ医師をじつと見つめる。なぜかその目には、敵意が宿っていた。

「それに彼のウソは刺激が強すぎる！ あまり興奮させてはただでさえ弱い体だということに……!!」

「で、でもコーネロ先生？ カヤは彼が励ましてくるようになってかなりよくなっただって……」

「ロゼ……医療に疎い彼のウソと、医者である私……どちらが正しいと思うのですか？」

「……!! そ、それは……」

表情は穏やかながら、有無を言わせない雰囲気を漂わせてコーネロはロゼを諫める。勢いをなくしたロゼは、ウソツプに申し訳なきような目を向けて引き下がった。

「門番がよく見かけけるそうだが、なぜそうまでしてここに来るんだい？ 何の用がある

というんだい？」

「ああ……それはあれだ……おれはこの屋敷に伝説のモグラが入っていくのを見たんだ
!! で、そいつを探しに……」

侵入したことを咎められ、押されながらもウソツプはさらに嘘を重ねる。

するとクラハドールは、不意にくつくつと嘲笑した。

「フフ……よくも、そうくるくると舌が回るもんだね。君の父上の話も聞いているぞ」

その言葉に、ウソツプの様子が変わる。

必死に誤魔化そうとしていた表情は、怒りをこらえた険しいものに変わっていた。

「君は所詮、ウス汚い海賊の息子だ。何をやろうと驚きはしないが、ウチのお嬢様に近づ

くだけはやめてくれないか!!」

「……………!! そういえばどっかで見えた顔だと……」

エレノアはクラハドールの言葉に驚き、そして引つかかっていた疑問の答えを知る。

反対にウソツプは、執事の辛辣な言葉により怒りを募らせていた。

「……………ウス汚いだと……!!」

「君とお嬢様とでは住む世界が違うんだ。目的は金か？ いくらほしい」

「言い過ぎよ、クラハドール!!! ウソツプさんに謝って!!!」

「この野蛮な男に何を謝ることがあるのです、お嬢様。私は真実をのべているだけなの

です!!」

主人の擁護もはねのけ、クラハドールは今度は気の毒そうな目をウソツプに向けた。

「君には同情するよ…恨んでいることだろう。君ら家族を捨てて村を飛び出した。財宝狂いの馬鹿親父」を」

「クラハドール!!!」

「てめエ、それ以上親父をバカにするな!!」

「……何をムリに熱くなっているんだ。君も賢くないな。こういう時こそ得意のウソをつけばいいのに……本当は親父は旅の商人だとか……実は血が繋がっていないとか……」

「うるせエ!!!」

我慢の限界に達したのか、ウソツプはついにクラハドールの顔面に向けて渾身の拳を振りぬいた。

予想外に力がこもった一撃をまともに受けたクラハドールはその場に倒れ、赤くなつた頬を抑えてウソツプを睨みつけた。

「う……く……ほ……!! ほら見ろ、すぐに暴力だ。親父が親父なら息子も息子というわけだ……!!」

「黙れ!!! おれは親父が海賊であることを誇りに思ってる!!! 勇敢な海の戦士であることを誇りに思ってる!!! お前の言う通りおれはホラ吹きだがな!! おれが海賊の血を

引いているその誇りだけは!! 偽るわけにはいかねえんだ!!! おれは海賊の息子だ!!!
血でも吐ききそうなほどの激情とともに、ウソツプははつきりと告げる。

飄々とウソをつき続けていた彼からは思いもよらないほどの熱が伝わり、エレノアはウソツプへの評価を改める。

「……………ヤソツプ。あんたの息子は、立派に育ってるよ」

おのれの信念をまつすぐに持っている彼は、立派な男の姿を見せていた。

「クラハドールくん…!!!」

「海賊が…『勇敢な海の戦士』か…!!! ずいぶんとねじ曲がった言い回しがあるもんだね…だが…否めない野蛮な血の証拠が君だ…!!! 好き放題にホラを吹いてまわり、頭にくればすぐに暴力…!!!」

コーネロに起こされながら、クラハドールは吐き捨てるように言う。

その目は心底、ウソツプを見下し嫌悪するものだった。

「あげくの果てには財産目当てにお嬢様に近づく…!!!」

「何だと、おれは…!!!」

「何か企みがあるという理由など、君の父親が海賊であることで十分だ!!!」

「てめえまだ言うのか!!!」

世間一般的な自分の意見が通じないとわかりこき下ろす彼に、ウソツプが再び殴りか

かろうとする。

だがその腕にロゼがしがみつき、突進しかけたウソツプを引き留めた。

「もうやめてよウソツプ君!!」

邪魔をされたことで眉間にしわを寄せて睨むウソツプだったが、ロゼの必死な表情を見て思わず息をのんで動きを止める。

「…もう、これ以上カヤにいやなもの見せないで……!!」

「……………!!」

「悪い人じゃないんです、クラハドールは……！　ただ私のためを思って、過剰になっているだけなの……!!」

「……………出て行きたまえ……」

涙を流す娘たちを目にし、怒りがこもっていたウソツプの手から力が抜けていく。

クラハドールを介抱したコーネロはそんな青年をじっと見つめ、感情を抑え込んだような低い声でそう告げる。

「ここは君のような野蛮な男の来る所ではないよ。二度と、私の患者に近づかないでくれたまえ」

「……………!!」

「ああ…、わかったよ。言われなくても出てってやる。もう二度とここへはこねエ!!!」

クラハドールやコーネロをいまだ冷めぬ感情のまま睨むと、ウソツプはいかり肩で荒々しい足取りとともにその場を後にする。

戸惑いながらその背を見送ったロゼは、すがるようにコーネロの方を向いた。

「コーネロ先生……!! あの……ウソツプ君はそんなひどい人じゃ……!!」

「ロゼ……わかつているよ。私もそこまで心が狭いわけじゃない。ただ今の彼には……頭を冷やす時間が必要なだけさ……」

落ち着かせるように穏やかな声で答えるコーネロに、ロゼはほっと安堵する。

このままウソツプが誤解されたままというのは、ロゼにとつては辛いことだった。

「それに、人と付き合うには必要な距離というものがある……カヤお嬢様とウソツプ君の距離は少し、近すぎるのも事実だ。クラハドール君も口がうまい方ではないからね。どうしても、ああいうきつい物言いになってしまうのさ」

「……………」

「君も、お嬢様にシンパシーを感じている節があるからだろう……ウソツプ君に味方したくなるのは」

コーネロがそう言うと、ロゼは気まずげに目をそらす。

確かにカヤとは仲がいいが、つきあいの理由には、自分の同情のようなものが混じっていることは否定できなかつた。

コーネロは困ったようにため息をつく、遠い空を静かに眺める。

「君のご両親が……そして君の恋人がなくなってもう何年になるか。あの日から、君もずいぶん明るくなった」

「……先生やカヤが、ウソツプ君が……村のみんながいてくれたからです。そうじゃなかったら……もうすでに私は……」

「……それで、あの……以前お話ししてくれたことなんですけど……いつになったら……」

期待するような様子でロゼがそう尋ねると、コーネロはロゼの肩を強くつかんで目を合わせた。

その口元は、優しい笑みの形を作っていた。

「ああ君の言いたい事はよくわかってるよ。君の思いが報われるときは近い」

「！ それじゃあ……」

「だがなロゼ……今はまだその時期ではない………わかるね？ ん？」

「………そう。そう……ですよね……、まだ……」

しゅんとした様子で肩を落とすロゼを、コーネロはポンポンと肩をたたいてなだめる。

その様子は患者を気遣う医者に見えたが、傍から見れば異様な雰囲気纏って見えた。

「そう。いい子だね、ロゼ」

ロは笑っていても、ロゼを見つめるその目に宿った感情は、測ることはできなかつた。そんな二人の様子を、クラハドールに追い出されながらエレノアが眺め、深いため息をついた。

ウソツプとかなり仲が良いようだったが、もしかすると彼は彼女にもホラ話を聞かせていたのかもしれない。

「……………な〜んか、嫌なにおいがするなア…」

フードの下の彼女の目が、疑わし気に細められた。

第14話 // 嘘つきの誇り //

「……まさか、彼がヤソツプの息子だったとはね。驚いたよ」

「おれもだよ。あいつと顔そっくりだったし、なんか懐かしい感じがしてたからさ。さつきはつきり思い出した」

「私も……いつも聞かされてたんだよねエ」

ルフィと並んで歩きながら、エレノアは感慨深げにため息をつく。

今はルフィの恩人の海賊、// 赤髪// のシャンクス（フル）の船員をやっているはずのヤソツプ。その息子と偶然会えたなど、驚くほかになかった。

「『悲しい別れだったが仕方がなかった。理由は一つ、海賊旗がおれを呼んでいたからだ』!! つて、いつつも言ってた」

「ああ! ヤソツプは立派な海賊だった!!」

「……それ、あいつに聞かせてやったら?」

「お! そうだな!! 行ってくる!」

エレノアの提案を即座に採用し、ルフィは風のように走り去っていく。

行動の早い自由な船長を見送ると、エレノアはやれやれと言った様子で肩をすくめ

た。

「……………さて」

気になるのは、何やら辛い過去を持つている様子のロゼと、それに付け込んで何か企んでいる様子のコーネロ医師。

ずいぶんあの医者を信頼しているようだったが、エレノアにはどうにも得体が知れない男のように感じた。

「あのヤブ医者…何か怪しいことやつてそうなんだよな…。ほつとくのも後味悪いし…どうすつかなア…」

介入するべきか、放置するべきか。

海賊である自分が割つて入つたところでどうなるかなど目に見えている気もするが、何もしないというのも後味悪い気がした。

——それで…計画の準備はできてるんだろうな。

「んっ…」

ふいに聞こえてきた、聞き覚えのある“声”に足を止める。

場所はそう遠くない、船とは反対の海岸の方からだ。

——いつでもイケるぜ。

“お嬢様暗殺計画”

「……………場所は、こつちの方か」

さすがにそこまで物騒な話を聞かされてしまつては、放置するという選択肢を取る気にはなれなかつた。

「しかし、あんときやびびつたぜ。あんた達が急に海賊をやめると言い出した時だ。あつという間に部下を自分の身代わりに仕立て上げ、世間的にキャプテン・クロは処刑された!!」そして、この村で突然船を下りて、3年後にこの村へまた静かに上陸しろときたもんだ」

海岸で、サングラスにハットという変わった格好の男・ジャンゴが会話の相手にそう言う。

その相手は何と、カヤの執事であるはずのクラハドール——いや、真の名をクロという、計画された略奪を行うことで有名だった海賊だった。

「それで、おれへの莫大な遺産の相続は成立する。ごく自然にだ。おれは3年という月日をかけてまわりの人間から信頼を得て、そんな遺書が残つていてもおかしくない状況を作り上げた!!」

「……………そのために3年も執事をね。あいつも大概だが、おれなら一気に襲つて奪つて終わりだがな」

「…それじゃ野蛮な海賊に逆戻りだ。金は手に入るが政府に追われ続ける。おれはただ、政府に追われる事なく大金を手にしたい、つまりは平和主義者なのさ」

「ハハハハ。とんだ平和主義者がいたもんだぜ。てめエの平和のために金持ちの一家が皆殺しにされるんだからな」

「おいおい皆殺しとは何だ。カヤの両親はおれの仕業じゃねエぞ。あれはあいつの…」

続々と恐ろしい計画の内容が出てくるが、そこへもう一つの足音が近づいてきて二人の声が止まった。

「お呼びでしたかな？」

「！ おっと…噂をすればなんとやらだ」

ジャンゴは新たな参加者を面白げに出迎え、笑い声をこぼす。

岩場の陰から姿を現した大柄な男は、にやりといやらしい笑みを浮かべていた。

「どうだいお医者様よ。金持ち夫婦や善良な市民を毒殺しておきながら、村の全員に慕われている気分ってのは？」

「そうだな…一言でいうなら、『反吐が出る』といったところかね」

ロゼやクラハドールに向けていたものとは全く異なる、残虐性がにじみ出た不気味な笑みを浮かべたコーネロがそう言う。

「あやつらはみな、この私を立派な医者だと信じきっているからなア…おまけに、中には

『死者をも蘇らせられる』という噂まで信じている者もいる……まったく滑稽な話だ」
「その噂の大本が何言つてやがんだか……で？　ほんとにできんのかよ」

「無論そんな神の所業ができるはずもない……だが、この石があればいずれそれも可能となるやもしれん。そんな面倒なことをするつもりはないがな」

コーネロはそう言うのと、自分の指にはめている紅い宝石が付いた指輪を撫でる。

ルビーとは違う、濁った血のような輝きを放つそれは、得体のしれない不気味さを感じさせるものだった。

「伝説の中だけの代物とさえよばれる幻の術法増幅器……『賢者の石』!!　我々錬金術師がこれを使えばわずかな代価で莫大な錬成を行える……!!　おかげで私はずいぶんと儲けさせてもらつたよ!!」

「見た感じ、ただの濁った宝石にしか見えねエがな……そんなすげエもんなのか？」

「手に入れるのにずいぶんと苦労したがな……だが、それに見合う結果は確かに得られた」
クログがそうつぶやき、コーネロの持つ指輪をじつと見つめる。

「こちらもまた、主に向けていたものからは考えられないほど心の醜さが表れた笑みが浮かんでいた。」

「死者をも復活させられるという医者だ……その名は馬鹿にはできんだろうな」

「お前たちとは一度袂をわかつたが、感謝はしているぞ。どんな難病であつても、死を目

前にしてしようと恐れることはない!! 噂が噂を呼び、よその島からも私を頼る患者が誘い込まれ、私のもとにはがっぼと金も名誉も舞い込んでくるのだからア!!!」
こらえきれなくなったように、コーネロは欲望に満ちた哄笑を上げる。

ジャンゴは難しい話によくわからん、といったふうに関をすくめ、クロに視線を戻した。

「まあいい……そんな事はいい……とにかくさつさと合図を出してくれ。おれ達の船が近くの沖に停泊してから、もう一週間になる。いい加減野郎どものシビレが切れる頃だ」
平和な島に、悪意の嵐が訪れようとしていた。

「……最悪。イヤな話きいちゃったなあ」

一部始終を聞いたエレノアは心底面倒くさそうに吐き捨て、がっくりと項垂れる。

あの時感じたいやな感じはコーネロの悪意だけではない。あの紅い宝石——賢者の石の気配でもあったのだ。

それを聞いてしまったあとでは、錬金術師として見逃すことはできなかつた。

「しよーがない、とりあえずルフィ回収すつかな」

崖の上で聞いていた船長がなぜか下に落ちていっているらしい。

とりあえずはクロたちがいなくなるまで待たねばなるまいと、その場に腰を下ろして

空を見上げるのだった。

「え———っ!!!」

「カヤさんが殺される!!」

「村も襲われるって本当なの!! 麦わらの兄ちゃん!! フードの姉ちゃん!!」

「ああ、そう言ってた。間違いないエ!!」

「…それでなんで、お前はここで寝てたんだよ」

「それがなー、おれは崖の上にいると思うんだよなー」

ゾロの指摘に不思議そうにルフィは首をかしげる。

執事と医者その他にいた、もう一人の男が何かしてきたと思っただらいきなり強烈な眠気に襲われたのだ。

何が起きたのか不思議でならなかった。

「ま、先に情報が入ったならよかつたけどね」

「そうね。逃げれば済むもの、敵もマヌケよね!」

「そうか! それもそうだ! じゃ、おれ達も早く逃げなきゃ!!」

「そうだ!! 大事なものの全部整理して!!」

「…貯金箱とおやつと…!! 船の模型とそれから…!!」

「急げっ!!」

「やばいつ!! 食料、早く買い込まねエと肉屋も逃げちまう!!」

「どうでもいいわ!!」

慌てて自宅に向かうウソツプ海賊団に交じり、走り出そうとするルフイの頭をはたきながら、エレノアは漠然とした嫌な予感に眉を寄せていた。

数分後、エレノアたちが村の方に向かおうとしていた時。

ピーマンが道の向こう側からとほとほと歩いてくる青年の姿に気づいた。

「あ!! キャプテン!!!」

「…よお!! お前らか! ってお前っ!! 生きてたのか!!」

「生きてた? ああ、さつき起きたんだ」

「このアホ、ずっと寝てたのよ」

「そんな事よりキャプテン!! 話は聞きましたよ!! 海賊達のこと早く、みんなに話さなきゃ!!」

せかすピーマンだったが、ウソツプの反応はどこか鈍い。

なぜかためらっている様子の彼は、やがて背をのけぞらせるほどの笑い声をあげた。

「はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!! いつものウソに決まってるんだろ!!」

あの執事のやろうムカついたんで、海賊に仕立ててやろうと思ったんだ!!」
その発言に、ウソツプ海賊団だけではなくエレノアたちも目を見開く。

どう考えても、それはウソだった。しかしウソツプは、そちらが真実であるかのよう
にふるまっていた。

「え——っ!! うそだったんですか?!」

「な——んだ、せつかく大事件だと思ったのに」

「くっそー、兄ちゃんも姉ちゃんもキャプテンのさしがねか!!」

悔し気にルフィとエレノアを睨む面々だったが、当然二人にそんな覚えはない。

首をかしげる二人をよそに、ウソツプ海賊団の少年たちは冷めた目でウソツプを見
やっていた。

「…………でも、おれちよつとキャプテンをけいべつするよ」

「おれもけいべつする!!」

「ぼくもだ! いくらあの執事がやな奴でも、キャプテンは人を傷つける様なウソ、絶対
つかない男だと思つてた……!」

彼らなりの信念に反している今回のウソは気に入らなかつたらしく、少年たちはウ
ソツプを避けるようにして家路につく。

遠く離れていく少年たちの背中を、ウソツプは思い詰めるような表情で見送ってい

た。

その夜、クロとジャンゴ、コーネロが会話していた海岸でウソップはルフィたちを前に本当の思いを吐き出していた。

「おれはウソつきだからよ。ハナっから信じてもらえるわけじゃなかったんだ。おれが甘かった!!」

「信じるも信じないも、甘い甘くないも事實は事實。黒猫海賊団はこの村に襲い掛かるよ」

「ああ、間違いなくやってくる。でも、みんなはウソだと思ってる!! 明日も、またいつも通り平和な一日が来ると思ってる……………!! だから、おれはこの海岸で海賊どもを迎え撃ち!!! この一件をウソにする!!! それがウソつきとして!! おれの通すべき筋つてもんだ!!!」

決意の表情で立ち上がり、ウソップはルフィたちに宣言する。

包帯の巻かれた左腕を握りながら、ウソップはあふれ出す思いをぼろぼろと口にしていった。

「エレンア……………お前の言う通りだよ!! ついたウソは、貫かなくちゃなア……………!! 腕に銃弾ぶち込まれようともよ……………ホウキ持って追いかけて回されようともよ……………!! こっちは、

おれの育った村だ!!」

痛む胸を押さええながら語られる真剣な思いを、エレノアは黙って受け止める。

無謀でも無茶でも、彼の意思は本物だった。

「おれはこの村が大好きだ!!! みんなを守りたい……!!! こんな……わけもわからねエウちに……!! みんなを殺されてたまるかよ……!!!」

「とんだお人好しだぜ。子分までつき離して一人出陣とは……!!」
「でも……そんなお人好しは大好きだよ」

青年の願いに、若き海賊たちは動いた。

拳を鳴らし、剣を差し、屈伸をして各々で構え始める。

「よし、おれ達も加勢する」

「言つとくけど、宝は全部私のものよ!」

思わぬ言葉を聞き、ウソップはあっけにとられた様子で顔を上げた。

ただ自分の覚悟を聞き届けてほしくて口を開いたつもりだったのに、なぜ一緒に命をかけてくれるなどと言ってくれるのか全く分からなかった。

「え……お前ら……一緒に戦ってくれるのか……?! な……何で……」

「だって、敵は大勢いるんだろ?」

「怖エって顔に書いてあるぜ」

「お!! おれが怖がつてるだど!! バカいえ!! 大勢だろうと何だろうとおれは平気だ!!! なぜなら、おれは勇敢なる海の戦士キャプテン・ウソップだからだ!!!」

「キャプテン、足」

「あつ!!」

エレノアの指摘に、ウソップは必死に震える自分の足をたたく。

それでも止まらない震えに情けない気持ちになりながら、ウソップは虚勢の鎧を引きはがしてしまった。

「……………!! くく……………くそつ!! 見世物じゃねエぞ!! 相手はキャプテン・クロの海賊団、怖エもんは怖エんだ!!!」それがどうした!! おれは同情なら…」

「同情や慰めがあんたへの侮辱なんてわかってるよ」

ウソップと視線を合わせ、エレノアはフンと鼻で笑う。

そんな安い理由で戦うつもりなど微塵もない、単純に自分の利害が一致したというものもあるが、男を見せようとしている者を放っておけないだけだ。

「笑ってやしねエよ。立派だと思うから手を貸すんだ」

「同情なんかで命懸けるか!」

「……………お前ら……………!!」

感極まり、涙を流す青年に、エレノアはフードの下で優しく笑いかけた。

第15話 “坂道”

「この海岸から奴らは攻めてくる。だがここから村へ入るルートは、この坂道一本だけだ。あとは絶壁!!」

「つまり、この坂道を死守できれば、村が襲われることはない…と。よくできた島だね」

「そうか、簡単だな」

「口で言うのはな! あとは戦力次第…お前ら、何ができる?」

前方に見える坂とそこから先で広がる海を前にし、ウソツプが全員にそれぞれ確認する。

規模もまだわからない海賊団と戦うには人数は今一つ不安だが、武器がそろってればまだ希望はあるとウソツプは考えていた。

「斬る」

「のびる」

「盗む」

「創る」

「隠れる」

「お前は戦えよ!!」

しかし、この場では彼が最も非力かもしれないが。

その数分後、作業を終えたウソツプは額に流れる汗をぬぐい、その出来栄に満足げに笑みを浮かべた。

唯一村に通じる坂道、そこは一面大量の油に覆われており、てかてかとわずかな光も反射して輝いていた。

「よし、完璧だ!! これでもう、奴らはこの坂道を登れない!!」

「こんな大量の油、どっから調達したのよ…?」

「奴らが、この坂でツルツル滑ってもがいてるスキにブチのめす作戦だ。とにかく何が何でもこの一本の坂道は守り抜く!!」

「逆に自分達が滑り落ちなきやいいけどね」

「ま、それはそれぞれ気を付けるってことで」

「お前、よくこんなちよこざいな事思いつくなー」

「そりやそうだ!! おれはチョコザイさとパチンコの腕にかけては、絶対の自信を持つてる!!!」

自信満々に、ウソツプは作戦の成功を確信する。

しかし、エレノアは何やらじつと海岸を見つめ、ふいつと坂に背を向けた。

「…ちよつと私お手洗いに行つてくるよ」

「あ、おれも便所」

「お前から…もつとこつ緊張感で物をだなア」

せつかく希望が見え始めたのに、その氣分に水を差すなどというようにウソツプが抗議するが、エレノアもルフィも気にしない。

催してしまったのだから仕方がない、そんな風に坂を上つていくと、エレノアはまっすぐ村の方に向かつていった。

「おい、エレノア？ 便所じゃねエのか？」

「んー…ちよつとした保険かなア？」

あいまいに答え、エレノアは用を足しに行つたルフィといったん別れる。

そしてエレノアが戻つてきたときには、東の空はすでに明るみ始めていた。

「おまたせー」

「遅いぞお前から!! 夜明けまでもう時間ねエぞ!!」

「レデイのお手洗いは長いのよ…仕方ないでしょ？ むしろあんたも肝心な時に漏らし

たりしないでよね」

「するかっ!!!」

ナミの冷やかしにウソツプが怒鳴って返し、エレノアは「そつちの方が緊張感ないでしょ…」と言わんばかりのジト目を向ける。

ふと、その視界の端で光がさす。

時間は、刻一刻と迫っていた。

「夜明けだ。来るぞ…」

今、大切な場所を守るため、たった五人で一海賊団に挑む無謀な戦いが始まる――。

ところがどっこい、明るくなっても何も来なかった。

「来ねエなア…朝なのに………」

「寝坊でもしてんじゃねエのか？」

「そんなバカな………」

誰かがこぼしたあほな予想にエレノアが呆れる。

一方でエレノアは、自身のいやな予感が的中していたことに焦りを感じていた。

ナミもまた、同じ予感を抱いていた。

「あのさ、気のせいかしら。北の方でオーツて声が聞こえるの………」

「北?!」

ナミの指摘に、ウソツプは顔色を変える。

予想外の事態に、ウソツプの脳裏は真っ白になった。

「おい、どうした?!!」

「き…北にも上陸地点がある…!! まさか…」

「海岸間違えたのか?! もしかして!!」

「だってよ、あいつらこの海岸で密会してたからってつきり!!」

「急ごう!! 村に入っちゃまうぞ!! どこだ、それ!!」

「忘れたの? 私たちの船があるところだよ!!」

「あつちか!!!」

「まずいつ!! 船の宝が取られちゃうっ!!」

自分たちの予想が大幅に外れたことで、一同は激しく狼狽する。

若干一名別件で慌てていたが、ウソツプはなるべく冷静になるように努めながら別の策を必死に考えた。

「ここからまっすぐ北へ向かって走れば3分でつく。地形は、こことほぼ変わらねエから、坂道でくい止められればいいんだが!!」

「20秒でそこ行くぞ!!!」

「ちつきしよおせつかくの油作戦が台なしだ!!」

「急げ!!!」

一斉に走り出そうとした五人だったが、一人だけ遅れている者がいることにゾロとエレノアが気付いた。

振り向けば、ナミが坂道でツルツルとこけそうになっていた。

「おいナミ!! 何やってんだ」

「きやあ助けて落ちるっ!!」

「あんた自分で落ちたらやばいって言ってたじゃないの!!?」

まさか味方が仕掛けた罠に自分をはまるとはと、エレノアはナミに呆れた視線を向ける。

するとナミの手が、ゾロの腹巻きとエレノアのフードをがっしりと掴んだ。

「は」

「え!!」

不意にかかった力で二人はバランスを崩し、そのままナミの方に引きずり降ろされていく。

そのまま油のワナに足を取られ、三人仲良く坂の下の方に滑り落ちていった。

「うわあああつ!! 手エ離せバカ!!」

「うにやあああ!!」

「あ、ごめん。……!! しめたっ」

対して悪びれていないような謝り方をするナミが、何かを思いついた。

そのままゾロを引つ張り、その体を足場にして油の罨の上を乗り越えていったのだ。

「!! ……うがががががつ!!」

「ありがとゾロ!!」

「何してんのさ——っ!!」

ナミの思わぬ暴挙に、滑り落ちるエレノアが抗議の声を上げる。

罨の向こう側に着地したナミは一度だけ二人の方に顔を向け、

「わるいっ! 宝が危ないの!! なんとかはい上がって!!」

それだけ言って、自分の船のある海岸に向かって全力で走りだしていつてしまった。

「あの女殺す!!」

「あとで覚えてろよオ!!」

足蹴にされたゾロは怒り、放置されたエレノアも怒りの声を上げる。

なんとかか追いつこうと必死に坂を上ろうとするが、どうやっても滑ってまっすぐ進む

こともままならない。

「くっそーっどうすりゃいいんだ登れねエ!!」

「ゾロ!! 正面突破は無理だ!! 別の方法を考えよう!」

「べつったって…もう敵は来てるんだぞ!! あいつらだけでどうにもなんねえだろ!!」

「大丈夫。そのための保険は準備してあるから」

エレノアは不敵な笑みを浮かべると、いったん油の坂を滑り降り、海岸の波際にまで下がった。

「とりあえず先行くよ!! どりゃあああああつ!!」

エレノアはそのまま全力疾走し、坂に向かつて突撃する……と思いきや途中で方向を変え、坂の両脇にある崖を駆け上がっていった。

切り立った壁面を斜めに走り、落ちる前に足を踏み出して上りきる。

そして油の仕掛けられていない場所で降り、ウソップたちを追って走り出していった。

「その手があったか………ん?」

置いて行かれはしたが、感心したような声を上げるゾロだが、ふと気づく。

「つつか飛べよお前なら!!」

「踏み潰して村へ進め野郎どもオ!!!」

「ウオオオオ——っ!!!」

「きた——っ!!!」

場所は変わって、本当の襲撃地点で会った北の海岸。

キャプテン・ジャンゴに率いられたクロネコ海賊団が、なぜか先に到達していたウソツプとナミを蹴散らさん勢いで迫る。

二人はほとんど何の準備もしていないうえに、主戦力が行方不明という絶体絶命のピンチに陥っていた。

「ぎゃあああああ!!!」

だが、海賊たちの凶刃が届くことはなく、男たちの悲鳴が響き渡った。

「いてエ!!!」

「うぎゃ——っ!!!」

「な……何だア!!!」

見れば、坂を上っていた海賊たちの足元で無数の罌が炸裂していた。

落とし穴に落ち、虎ばさみに挟まれ、トゲを踏んで刺さり、起き上がった板に顔面を強打される。

「いたたたた! 見てるだけで痛いっ!!!」

「何だあの大量のワナ……おれは知らねエぞ!!!」

あちこちで上がる悲鳴や血しぶきにナミが目をそらし、ウソツプは危険な罌の数々に目を丸くする。

戸惑う二人のもとに、少女の呆れた声が届いた。

「もー、どうせこうなるとは思ってたけど、もうちよつと考えて行動しなよ。ナミ」
振り向けば、ようやく二人に追いついたエレノアがため息をつく姿が見えた。

畏に驚く様子はない、という事は、あれらは全部彼女が仕掛けたものだという事だ。

「保険がきいてよかつたよ」

「お前の仕業か!! いやちよつと待て! あんなもの仕掛ける時間なんて…つてトイレか!!」

「せいかーい」

「あんたつてやつはもー♡ ホント頼りになるんだからも♡」
「現金だなア…」

手際の良さ、というか用意の周到さにウソツプが驚愕し、他二人よりも役に立つとナミが嬉しそうに抱き着いてくる。見事な手のひら返しであった。

「…つてあれ!! ちよ、ちよつとエレノア!! あいつらは!!」

「まだ来てないつてことは…たぶん迷ってるな。あいつら揃いも揃ってバカだから」
深いため息をつくとき、ナミも納得したように落胆の様子を見せる。しかし言うておくが、約一名はナミの自業自得のせいで遅れていた。

ジャンゴは思わぬ邪魔が入ったことで、その顔を怒りに歪める。

たかが子供一人に邪魔されたこともだが、自分の命がかかっている状況での邪魔が最

も腹立たしかった。

「あのガキのしわざだと……!! 舐めやがって!!! 罠がどうした!! 仕掛けられる数にも限りがあんだろ!!」

「このガキどもがア——っ!!!」

それは手下たちも同じようで、憤怒に顔を歪めながら傷ついた足を引きずって襲い掛かってくる。

残った罠は自分の武器などを使って解除し、見る見るうちにエレノアたちに迫っていった。

「余計怒らせちゃってんじゃないのよ!!!?」

「やれやれ……」

できればここで引いてほしかったのか、エレノアは面倒くさそうに自分のブーツを脱ぐ。

そして、その下から露わになる金属の輝きに、ナミとウソップは言葉を失った。
「え」

エレノアは金属でできた自分の足を地面に突き立て、すねの部分を左右に開く。

すると、その中から黒い三つの筒が起き上がり、その先端を海賊たちに向けて回転を始めた、次の瞬間。

ドガガガガガガガガガ!!

突如筒が火を噴き、無数の弾丸を海賊たちに向けて吐き出し始めたのだ。

咄嗟に引いた海賊たちはかすった程度で済んだが、突然発砲された恐怖のせいか完全に引け腰に担っていた。

「ぎゃああああああああああ!!!」

「な、なんだア?!」

「あのガキ…足に何仕込んでやがんだア!!」

悲鳴を上げて避難する海賊たちは、容赦なく銃器を使った少女を目にしてゾツと顔を青くさせる。

それは、ナミとウソップも同じだった。

「0.7ミリ連射式機関銃…初めて使ったけどなかなか使い勝手いいな」

「ど、どうなってるのよその足!!」

「なんつー危ねエモン持ち出してきてんだよおめエはア!!」

至近距離で機関銃を使われてビビったウソップが抗議する。ナミは幼い少女の足に機関銃が仕込まれていたことを知って、驚愕で腰を抜かしかけていた。

エレノアはもう少しお見舞いしてやろうとスイッチを押すが、銃口はそれ以上弾丸を吐き出すことはなかった。

「あり？」

「弾切れか!! 今の内だア!!!」

チャンスと見たジャンゴが命令を下し、海賊たちが再び向かってくる。

しかしエレノアは慌てることなく、もう一方の足を出して同じように銃口を差し向けた。

「おかわり!!!」

「ぎゃああああああああ!!!」

再び乱射を食らい、海賊たちは這う這うの体でエレノアから距離を取る。

しばらく回転を続けた機関銃が動きを止めると、エレノアはそれを足の中に戻した。

「今度こそ弾切れ……でも、だいぶ戦意は削れたかな？」

そうつぶやくと、エレノアは今度は両手をパンツと打ち鳴らす。

青い光とともにエレノアのシルエットが大きく伸び、大人の姿となった彼女が身構えると、海賊たちは引きつった顔でジャンゴに助けを求めた。

「あ、あのガキムチャクチャだ!!!」

「何しでかすかわかんねえぞ?!」

「チッ」

情けない部下もそうだが、こんな場所で足止めを食らっていることにいら立ったジャ

ンゴが舌打ちする。

そう、こんなところで時間を浪費している場合ではないのだ。

「おいてめエら!!! そんな奴らにかまつてねエでさつさと村を襲え!!! これはキャプテン・クロの計画だという事を忘れたか!! あの男の計画を乱すような事があつたら、おれ達は全員殺されちまうぞ!!! わかってんのかバカヤロウどもつ!!!」

ジャンゴの発破に、海賊たちは一斉に顔を青くする。

一人、一人とその表情に恐怖による活力をみなぎらせ、自身を奮い立たせるような雄たけびを上げて突撃を再開する。

今度は、引き返すことはなかった。

「やばいな……どんだけ恐れられてんのさ、キャプテン・クロ……!!!」

恐怖による統率のすさまじさに、エレノアは冷や汗を流す。

銃を使い切った以上、エレノアに残されているのは錬金術と体術のみ。

しかし、それを使うには敵の数はあまりにも多すぎた。

「てめエら邪魔だア、そこをどけエ!!!」

応戦するナミとウソップだが、一人を止めたところでまた別の敵が襲い掛かるため手に負えない。

不意をつかれ、ウソップは石斧の一撃を頭部に受け、その場に膝をついてしまった。

「ウソツプ君!! くっ……!!」

助けに行きたいのはやまやまだったが、エレノアも自分の目の前の敵の相手に忙しくその場を離れられない。

悠々と先へ進もうとする海賊の一人。

その足に、昏倒しかけたウソツプが必死の形相で縋り付いた。

「……………!! ……この……!! この坂道!! お前らを通す訳にはいかねエ……!! おれはいつも通りウソをついただけなんだから!! 村ではいつも通りの一日が始まるだけなんだから」

「クソガキ黙れ!!!」

容赦なく蹴り飛ばされ、血を流しながらウソツプは地を転がる。

援護しようとして棍棒を振り回すナミだが、別の海賊に殴り飛ばされて崖に叩きつけられてしまう。

「あうっ!!! い……たア……!!!」

残るはエレノアだけだが、応戦している間にわきを通られてしまい、すべての人数を止めることができずにいる。

決壊した閉止めのように、次々に海賊たちが村へと向かっていつてしまう。

「畜生、待て……!!! 村へ行くな!!!」

「うるせエ邪魔だア!!!」

妨害しようとは必死に掴みかかるウソツプだが、脳を揺らされて力が出ず、軽く足蹴にされてしまう。

ナミも当たり所が悪かったのか、しばらくその場から動くことができずにいた。

「やめてくれ頼むからっ!!! みんなを殺さないでくれエえ!!!」

悲鳴にも似た懇願をあざ笑うかのようには、海賊たちは続々と村へと侵入していった……かに思われた。

エレノアが、ふと小さくつぶやくまでは。

「私の役割は……もうほとんど終わってるんだよね。………遅いんだよあんたたち」

ウソツプやナミが、エレノアに聞き返そうとした時だった。

「うっぎやああああ!!!」

大きな悲鳴とともに、先へ進んでいた海賊たちが吹き飛ばされてくる。

ジャンゴのもとまで落ちてきた海賊たちは、ジャンゴに抗議するような引きつった形でまくし立てた。

「何なんですかジャンゴ船長……!! この村にあんなのがいるなんて……!! 聞いてません!!!」

怯える海賊たちの視線の先。

そこには、腹立たしげに剣を構える腹巻きの剣士と、肩を怒らせる麦わら帽の男がいた。

「何だ今の手ごたえのねエのは」

「知るか！ これじゃ気が晴れねエ!!」

「ナミ、てめエ!!! よくもおれを足蹴にしやがったな!!!」

「ウソツプこの野郎!!! 北つて、どっちかちゃんと言つとけエ!!!」

ナミに対して怒りを燃やすゾロと、涙目でウソツプに抗議するルフイ。

本命の戦力の到着を見越していたエレノアは、にやりと不敵な笑みを浮かべて腕を組んだ。

「…何だ、あいつら……」

呆れたような、戸惑うような言葉を漏らすジャンゴに、エレノアは自信たつぷりに答えて見せた。

「うちの主戦力の、アホ船長とアホ剣士です」

第16話 “リミッター”

「お………お前らこんなに強かったのか………!!」

「うん」

「あんた達おつそいのよ、来んのが!!」

「てめエが、おれを落とし入れたんだろうがよ!!」

「あれは事故よ、仕方ないでしょ。三人とも落ちるより一人でも助かった方がいいじゃない」

「じゃあお前が落ちろ!!」

「戦闘力ほぼないでしようがあんたは!!」

「だいたいだなー!! 北とか北じゃないとかさうゆうのでわかるわけないだろ!!」

「何イ?! お前自信持つて、まっ先に走り出したろ」

「あれは何となくだよ、何となくっ!!」

喧々囂々と、仲間内でもめている若者たちを見てジャンゴは眉間にしわを寄せる。
あんな輩に邪魔されるのは癪だが、とにかく先へ進まなければならぬ。

「おい野郎ども。まさか、あんなガキ二人相手にくたばつちやいねエだろうな」

「……………!!」

「……お……おう……!!」

すでに強烈な一撃を食らい、足に力が入っていない海賊たちは、かろうじてジャンゴの方を見る。

ジャンゴは懐からひもの結ばれたリングを垂らし、それを自分の前でぶらぶらと左右に揺らした。

「いいか、おれ達はこんな所で、グズグズやつてるヒマはねエ。相手が強けりゃこつちも強くなるまでだ……!! さア、この輪をじつと見ろ………!!」

奇妙な行動に、ルファイたちは怪訝な顔で首をかしげた。

「何やってんだ、あいつら」

「……さアな」

「催眠術よきつと……!! 思い込みで強くなるうとしてんの! ばっかみたい!」

「……ヤバイかも」

「え?」

嘲笑するナミの横で、真剣な声でエレノアが呟く。

訝しげな視線を受けたエレノアは、冷や汗を流しながら動作を続けるジャンゴを睨みつけた。

「人間ってね、普段は身体に負担をかけないために、自分自身に制限リミッターを設けてるの。……もしあの催眠術が、その制限リミッターを解除できるのだとしたら!!？」

「そんなバカな……!!」

思わずそう返すナミだが、エレノアの言う事だと万が一という事もある。

ジャンゴはそれにこたえるように、海賊たちに揺れるリングをかざしながら集中する。

「ワーン!! ツー!!」

そして最後に自分がそれを見ないように、帽子のつばを勢いよく下げた。

「ジャンゴ!!!」

「ウオオオオオ—— ツ!!!」

その途端、疲労困憊の様子を見せて言った海賊たちが一斉に起き上がり、凄まじい雄叫びを上げて見せた。

ルフィとゾロにやられた傷も、エレノアから受けた負傷も微塵も感じさせなかった。

「うそっ!! あんなにフラフラだったのにつ!!」

予想外の事態にナミが目を見張る。

勢いづいた海賊の一人が近くにあった崖を殴りつけると、硬い岩に大きな亀裂が入っていき、轟音を響かせながら表面が粉々に砕け散った。

「崖をえぐりやがった……!!!」

「そんな…!! 本心に催眠が、かかっている!!」

「一人でも崖をえぐるつてのに、あの人数じゃ…!!!」

敵の勢いが増し、ナミたちは撤退を余儀なくされる。

ゾロとエレノアが壁となるように前に出て、やや焦燥を感じながら構えた。

「お前ら坂の上へ上がってる!! ここはおれ達がやる…!!」

「ちよつとキツイかもだけど…やるつきやないか!! ルフィ!! …ルフィ?」

不安は残るが退くことはできないと戦闘準備を整える二人だが、もう一人の反応がな
いことに気づく。

呼びかけられたルフィが、その場で大きく両腕を掲げた。

「うおああああ——っ!!!」

「お前も催眠にかかっているのかア!!!」

阿修羅のような形相で、ものすごい咆哮を放つルフィの目に理性はない。

遠く離れた場にいるはずのジャンゴの催眠を受け、潜在する力が100%発揮されて
いた。

「そうだった…ルフィってばああいう暗示とかにムツチャクチャ弱いんだった…」

「そ…そうにしてもなんて単純な奴なの。人の催眠にかかるなんて…」

「アホですから」

呆れたようにつぶやくナミに、エレノアは自分が恥を感じる。

そうこうしているうちに、ルフィは一斉に向かつてくる海賊たちに一人突進し、ジャブのように拳を繰り出す。

その勢いにゴムの伸縮が加わることにより、猛烈な連撃が繰り出された。

「ゴムゴムの銃乱打^{ガトリック}!!!!」

まさに、拳の機関銃による圧倒的な攻撃が炸裂し、海賊たちがさつきよりも盛大に吹き飛ばされていく。

木っ端のように空中に投げ出される海賊たちを、ルフィはなおも追いかけた。

「ぬああああ!!!!」

「いやああああ!!!!」

催眠を受けて力を増したところで、相手も同等の力の底上げがなされれば意味がない。

しかし悲鳴を上げて逃げ惑う海賊たちを無視し、ルフィはクロネコ海賊団の海賊船の船首に貼りついた。

そして彼は、硬い船首を力づくで引きはがし始めたのだ。

「ぬうああああああっ!!!!」

「いけーっルフィーっ!!」

「まさにアホの一念…!!」

即席の武器を手にしたルファイが、再び海賊たちにずんずんと迫っていく。

そのごり押しに、エレノアは呆れるほかになかった。

「おれ達を殺す気だア~~~~っ!!」

「船長なんとかして下さい——っ!!」

「ワン・ツー・ジャンゴで眠くなれっ!! ワーン、ツーツ!!」

今度はルファイ一人に向けて、窮地を逃れたジャンゴがリングを見せる。

理性を失っている相手に聞くかは疑問だったが、あの化け物に対する対抗手段はそれ

以外になかった。

「ジャンゴ!!!」

「すかーっ」

奇しくもジャンゴの術は成功し、ルファイは船首を抱えたまま深い眠りに落ちる。

しかし巨大な船首はゆっくりと傾ぎ、海賊たちのいる方へと倒れこんでいった。

「うわああ~~~~っ!!」

「ぎゃああ——っ!!!」

ズシイン!! と船首が起こした風圧が海賊たちを吹き飛ばし、より甚大な被害をも

たらず。

こんな状況で、立ち向かおうとするものはさすがにいなかった。

「やりやがったあのガキ…!! これじゃ計画もままならねエ…!」

キャプテン・クロの完璧な計画が狂いつつあることに、ジャンゴは焦りで顔を真っ青にさせる。

一方でナミたちは安堵の表情を浮かべ、一休みするようにわき道に腰を下ろしていた。

「なんか、ほぼ全滅って感じするわね」

「おい…そんな事よりあいつが船首の下敷きに!!」

「大丈夫死にやしねエよ。お前は自分の出血の心配してろ」

「…ゾロ君。構えてた方がいいよ」

「あ?」

余裕の表情で刀を担ぐゾロに、エレノアが警告する。

彼女の耳は、海賊船の中に要る二つの気配を捉えていた。

「船の中に誰かいる」

「…そうか」

強さはともかく、動ける敵はまだ残っていると知ったゾロは表情を引き締める。

油断して傷を負うなど、剣士にあつてはならない恥だ。

「おいおいブチ!! 来て見ろよえれえこつた、船首が折れてる!!!」

「なに、船首がア!!? おいおい、どういう理由で折れるんだ!!」

そしてエレノアの言う通り、船の中で待機していたらしい別の声が響く。

その声を聴いたジャンゴは安堵の笑みを浮かべ、計画はまだ失敗していないことを喜んだ。

「今さら何が飛び出すんだ……?!」

警戒するゾロをよそに、ジャンゴは両手を大きく広げて、船の中のもう二人にの戦闘員を呼び寄せた。

「下りて来いっ!!! ニヤーバン兄弟^{ブラザーズ}!!!!」

ジャンゴの呼び声に、彼らは船の上から大きく跳躍して海岸に降り立った。

猫の耳とカギヅメを付けた、細身の男と太つちよの男。デコボコの組み合わせながら、降りるタイミングはぴったり同じだった。

「およびで、ジャンゴ船長」

「およびで」

数メートルはある高さから着地しても、二人の番人はびくともしていない。凄まじい身軽さだ。

「なにあれ」

「すげエ…あの高さから着地した…!! ねこみてエだ」

「見た目からネコだもんね」

ウソツプやナミが驚愕の声を漏らすと、エレノアも感心したように二人の門番を見やる。

見た目はかなりふざけているが、油断ならない相手なのは確かだった。

「ブチ、シヤム。おれ達はこの坂をどうあつても通らなきゃならねエんだが、見ての通り邪魔がいる!! あれを消せ!!」

「そ…そんなムリつすよオ、ぼく達には。なア、ブチ」

「ああ、あいつ強そうだけまじで!!」

しかし、呼び出された番人たちは困惑したようにそう答え、ぶんぶんと首を横に振る。さつきまでの自信満々な態度がウソのようだった。

「な…!! なんだ、あいつら切り札じゃなかったのか!!」

「…完全にびびってる……!!」

予想外の反応にウソツプたちは戸惑い、ゾロは戦意をそがれたのか呆れた顔になる。

番人ブチとシヤムは肩をすくめながら、呼び出したジャンゴに困り顔で苦言をぶつけていた。

「だいたいぼくらはただの船の番人なんだから」

「そうそう、こんな戦いの場になり出されても」

「シヤム!! さっさと行かねエか!!!」

「え!! ぼくですかア!!?」

「急げ!!!」

「わかりましたよ行きますよっ!!!」

シヤムゴの劍幕に押され、シヤムはどたどたとみつともない走り方でこちらに向かつてきた。

べそまでかいて、こっちが悪い気さえしてきてしまう。

「おい、お前から覚悟しろ——っ!!! このカギツメでひっかくぞーっ」

「……!!! あれをおれにどうしろっつうんだよ……!!!」

「ゾロ君、油断大敵」

「あ?」

毒気を抜かれてしまうゾロだが、エレノアはそんな彼に忠告する。

最初から最後まで、エレノアは敵を侮ることはなかった。

「奇襲・騙し・嘘……卑怯な戦法は海賊の十八番おはこだよ」

「!!?」

ゾロはハツとなり、とっさに刃を盾にする。同時にエレノアも右足を振るい、隙を見せたゾロをかばう。

勢いを増したシヤムの鉤爪が襲いかかったのは、それとほぼ同時であった。

「こいつ…!!?」

「貴様おれを、今見くびってただろ…!!! だが、そのガキの助言に救われたな!! おれは今ネコをかぶっていたのに!!!」

常人であればまず騙され、奇襲を受けていたであろう演技にゾロは冷や汗を流す。

ギン、と甲高い音とともに鉤爪を弾き、距離をとった両者がにらみ合った。

「やっぱり…そんなこつたるーと思つたよ」

「まさかあいつ…弱くねエのか!!?」

「ゾロ!! 刀は?!?」

ナミの指摘に、ゾロは軽くなった自分の腰を見下ろす。

刀と鉤爪をがちあわせている間に、ゾロは残り二本の刀を失っていた。

「やられた…!! なら私が…!!」

眉間にしわを寄せ、代わりに相手をしようと前に出ようとしたエレノアだったが、その足がガクンと沈んだ。

「え…!!?」

エレノアの表情に、初めて驚愕が現れる。

力の入らない自分の足を呆然と見下ろし、ついで何かしたはずのシヤムを睨みつけた。

「まあ、てめエらもちつたアやるようだが、クロネコ海賊団「ニヤールバン兄弟」のシヤムを甘くみねエこつた……」

ゾロの刀を背中に背負つたシヤムが、片手でポルトらしき金属を弄ぶ。

その様に、エレノアの目に怒りの火が灯つた。

「ネコババってやつか……なかなかシヤレがきいてるじゃないの!!」

「……ウソツップ君、昨日はどうしちゃつたんだらう。いつもの彼らしくない……」

紙袋いっぱい食材を詰め、ロゼは定時の食料品の配達に向かう。

その間も気になっているのは、昨日暴行事件を起こしたという青年のことだった。

「メリーさんに撃たれたつて聞いたけど……クラハドールさんがそこまでひどいことするなんてやつぱり考えられない……。やつぱり何か誤解があるんじゃないのかしら……?」

いつもの道を歩く途中、ロゼは見覚えのある燕尾服を目にし、立ち止まった。

「……? クラハドールさん……? こんな朝早くから海岸の方に何の用だらう……?」

普段なら朝早くに屋敷での業務にかかっているはずの彼が、用のないはずの海岸方面

に向かっている。

気にはなつたが、ロゼは配達の方を優先した。

「メリーさん、今日のぶんの食材持つてきましたよーっ」

裏口の扉を叩き、ロゼは執事長を呼ぶ。

しかし今日は、すぐに出てきてくれるはずの彼からの返事はなかった。

「開けてくだ…カヤ!!」

首をかしげるロゼ。

すると、扉を押しよけるように開き、荒い呼吸のカヤが倒れかかってきた。

「ちよっ…何考えてるのよ!! こんな時間に一人で出歩くんなんて…!!」

「お願い…行かせて…:ウソツプさんのところにいかないと…!!」

「…:!! で、でもウソツプ君…カヤに乱暴したって噂になつてて…:!!」

「ウソじゃなかった!!」

血を吐くように、カヤは叫んだ。

目を見開くロゼにすぎるように、カヤは今しがた知った真実をロゼにまくしたてるように語った。

「今!! この島に…海賊が来てるの!!! あの人…:クラハドルが!! 海賊だったの!!!」

「……………?!? 嘘…でしょ…?」

信じられない言葉に、ロゼは絶句する。

しかしカヤの表情は嘘を言っているようには見えず、そんな嘘を言う理由も考えられなかった。

「メリーも襲われた…!! 部屋で、血まみれになって倒れてたのっ!!! メリーが全部…本人の口から聞いたって……………?!? 私…ウソツプさんになんてことを…」

「カヤ…!! 落ち着いて…まずは冷静になつて」

「クラハドールの目的は…この屋敷と財産だつて…村のみんなが死んでしまふくらいなら…そんなものもういらない!!! お願いよ、ロゼ!! ウソツプさんはきつと…クラハドールの所にいる!!!」

「……………」

涙を流しながら、カヤは通せんぼしている体になっているロゼに懇願する。

無理もない、彼女は大切な友人であるウソツプの言葉を信じず、ひどい罵声をぶつけてしまったのだから。

しかしそれでも、ロゼは縦に頷くことはできなかつた。

「カヤ…悪いけど私…そんな話を聞かされてあなたを行かせるわけにはいかない…!!
あなたは私の友達だから…そんな危ない海賊の所へあなたを一人で行かせるわけには

「いけない…!!」

カヤの肩を掴み、ロゼは真剣な表情で決意する。

カヤに罪があるのなら、村のみんなの言うことをまんまと鵜呑みにしてしまっていた自分にもあるはずだ。

「私も行く!! 私だって…この村が好きだから!!」

大切な友達をみすみす死なせるものかと、ロゼの目は燃えていた。

第17話 “無音の男”

「くっ…アンニャロー関節はずしやがったな…!!?」

がしやがしやと自由の利かない右脚をたたき、エレノアは悔しさを声に出す。

シヤムは弄んでいたボルトをポイツと放り捨て、嗜虐的な笑みを浮かべて爪を研いだ。

「まずい…!! 片足を封じられた!!!」

「じゃあ、もうあいつ動けねエじゃねエか!!! どうすんだよ!!!」

ナミとウソツプが焦燥じみた声を発するのをわき目に、悠々とシヤムはエレノアの方に近づいていく。

しかしその前に、怒りで目を吊り上げるゾロが割って入った。

「エレノア…手エ出すなよ。こいつらはおれが相手をする。お前は休んでろ」

「…頼むよ。男の子の意地^おってやつは、わかっているつもりだから」

接近戦での不利を悟ったエレノアは、おとなしくその場をゾロに譲って後ろに下がる。

敵は、何もこの場にいる者だけではないのだ。

「私も、今後に備えて体力温存しときたいからさ…!!」

エレノアがナミたちのいる方へ下がると、刀一本だけを手にしたゾロにシヤムとブチが襲い掛かる。

しかし慣れない一刀流での戦闘の上、だまし、ふいうち、二対一という卑怯な戦い方に翻弄され、ゾロは徐々に押されていく。

シヤムが邪魔だとはるか後方に投げ捨てた刀との距離が、実際よりも遠く感じた。

「やばい！ ゾロが押されてる。エレノア!! ここから援護できないの!!」

「ゾロ君がそれを望まないんだもの…それに、下手に手を出さないほうがいいよ。標的がこっちに移るから」

「だ、だがそんなこと考えてる場合じゃ…!!」

パチンコで援護しようとしたウソップにそう釘をさすと、彼は悔し気に顔を歪める。

ナミは冷や汗を流しながら、坂道の下の方に転がっているゾロの刀に目を向けた。

「でもこのままじゃまずい…私が刀を取りに行くわ！ ゾロに渡せば必ず勝つてくれるはず！」

「だったらおれがっ!!」

「無理しないの、あんたもエレノアも動けないでしょ!!」

「ムチャだよナミっ!! あの催眠術師もいるんだよっ!!?」

今のところ催眠術しか見せていないが、あの男の戦闘能力は未知数。戦う術に乏しいナミが向かうのは無謀だ。

しかしナミはエレノアの制止を振り切り、ブチとシャムを抑えるゾロの横を抜けて刀のすぐ近くにまで走っていく。

「これさえ渡せば!!」

「刀に何の用だ」

あと少しで手が届きそうになった時、ナミは肩に激痛を感じて転倒する。

例のリングを血にぬらしたジャンゴが、億劫そうに倒れたナミを見下ろした。

しかし、その表情が一瞬にして驚愕と恐怖に彩られた。

「……………あ……!! ……あ……いや!! ……これは……その、事情があつてよ……!!」

様子の変わった船長と同じく、船員たちも一点を見つめてがたがたと体を震わせ始めた。

ゾロと戦っていたシャムとブチもまた、真つ青な顔で凍り付いていた。

「……………うわ……………」

「あう……………」

「キ……………キャ……………キャプテン……………クロ……………!!」

「……………殺される……………」

時間切れだった。

いつまでたつても来ない襲撃に業を煮やしたクロが、苛立ちの表情で坂の上に立っていた。

「もう、とうに夜は明けきつてるのに、なかなか計画が進まねエと思つたら…何だ、このザマはア!!!」

大気を揺るがす、凄まじい怒号。

対象でないナミとウソツプも疎むほどの怒りが、場を完全に支配していた。

「まさか、こんなガキ共に足留めくつてるとは…クロネコ海賊団も落ちたもんだな。えエ!!? ジャンゴ!!!」

「だ…だがよ!! あんた、あの時その小僧、放つといても問題ねエって…そう言つたじゃねエかよ!!!」

「ああ、言つたな…言つたがどうした…!! 問題はないはずだ。こいつが、おれ達に立ち向かつてくることくらい、容易に予想できていた。ただ、てめエらの軟弱さは計算外だ。言い訳は聞く気はない」

「な…軟弱だと、おれ達が…?!」

「……!! 言つてくれるぜ、キャプテン・クロ…」

クロの言葉に、ブチとシャムが反応した。

すぐ近くにいるゾロさえ無視し、聞き捨てならないことを言ったクロを睨みつけた。

「確かに、あなたは強かった。だが、そりや3年前の話だ……!! あんたがこの村でのんびりやってる間、おれ達は遊んでたわけじゃねエ!!」

「おおともよ、いくつもの町を襲い、いくつもの海賊団を海に沈めてきた……!!」
「何が言いたい」

「おい!! やめねエかブチ!! シヤム!!」

「計画通りに進めなかっただけで、やすやすと殺される様なおれ達じゃねエ!!」

「ブランク3年のあんたが現役の、しかもこの『ニャーバン兄弟』に勝てるかってことだ!!」

ブチとシヤムから、怯えながらもはつきりと告げられた宣言。

それはくしくも、クロの出現で死の恐怖に怯えていた船員たちに希望の火を灯した。

が、エレノアにはすぐにかき消されるか細い火に見えた。

「……………あいつら、死んだな」

「あんたは、もう俺たちのキャプテンじゃねエんだ!!」

「黙って殺されるくらいなら殺してやる!!」

ゾロを放置し、ブチとシヤムはクロに向かって全力で疾走する。

常人では確かに対応できないほど速く、彼らの自信の裏付けともいえる力を表してい

た。

「シヤアアア!!」

二人のカギヅメが、クロの体を切り裂こうと左右から食らいつく。

しかし彼らが切つたのは、クロが持っていた革のバッグひとつのみ。どこにもいないクロに、ブチとシヤムははつと目を見開いた。

「誰を、殺すだど?」

そして彼らは気づく。

何年鍛錬を積もうとも、覆すことのできない実力の差というものがあるという事を。

「“抜き足”か…!!」

「何だ、あの武器は」

エレノアは静かに驚き、ゾロはクロの装備している武器に目を見張る。

グローブの指先に備わった、刀ほどの長さを持つ爪。鋭い輝きを放つそれに、クロネコ海賊団はヒツと悲鳴をこぼしていた。

「回り込まれたか!!」

振り返るブチとシヤムだがもうそこには誰もいない。

その直後、二人の肩に回される冷たい感触に再び凍り付いた。

「お前らの言うことは正論だな。今ひとつ体にナマリを感じるよ」

「いっ!!!」

「ヒイ!!!」

ブチとシャムの身軽さを軽く超える速さで回り込んだクロが、二人の間に立つて首に手を回していた。

少し動けば、二人の頸動脈はスパッと軽く切り裂かれるだろう。

「確かに、おれはもう、お前らのキャプテンじゃねえが……計画の依頼人だ……!! 実行できなきや殺すまで!!」

凄まじい殺気に、ブチとシャムはボロボロと涙を流す。

神速とも呼ぶべき速さに、エレノアはごくりとつばを飲み込んだ。

「……話に聞いてた通り、ゾツとするね。『百計』のクロの無音の移動術。暗殺者50人集めても気配を感じる間もなく殺されるという、無音殺人術サイレントキリングの使い手。あの奇妙なメガネの押し上げ方は、『猫の手』で自分の顔を傷つけないようにするための独特の癖……!!」

屋敷にいたときから見せていた独特の動きに、エレノアは納得する。

戦闘時以外の、それも「いい人」を演じていた時にも見せていたあのクセの意味に、戦慄を禁じえなかった。

「ブランクなんてとんでもない……!!! ああ、あの男は3年間、自分の爪とぎを欠かしたこ

とはなかったんだ……!!!」

クロネコ海賊団はより深い恐怖に落ちる。

唯一の希望であつたニヤールバン兄弟さえも赤子扱いという現実には、絶望に支配されていた。

「3年もじつとしてるうちに、おれは少し温厚になつたようだ……5分やろう。5分で、この場を片づけられねえようなら、ためエら一人残らず、おれが殺してやる」

「ケツ……」

「……お優しいこつて」

「畜生オツ!! こんな奴が3年も同じ村に住んでたなんて……!!!」

クロの持つすさまじい残虐性にゾロもエレノアもそう吐き捨て、ウソツプはそれに気づかなかつたことに恐怖を隠しきれない。

しかし反対に、クロネコ海賊団はわずかながら力を取り戻していた。

いや、恐怖を生への執念が上回つたというべきであろうか。

「5分、5分ありやあ何とかなる!! あいつだ!! あいつさえぶつ殺せば!!! おれ達はこの坂道を抜けられるんだ!!!」

「そうさ、さつきまでおれらが押してた相手だ!!!」

「対して強かねエ!! 5秒で切りさいてやる!!!」

「う……うおおおやつてやるぞオっ!!!」

「数の差で踏み潰しちまえエ!!!」

傷ついた船員までもが、武器を手に立ち上がって進み始めた。

相手は非戦闘員二人に、足を封じられた子供一人、そしてニャーバン兄弟にてこずる剣士一人、そして船首の下敷きになった男が一人。

押しつぶせば、何とかなるといふ希望が生まれていた。

「ゾロ!! 刀っ!!!」

しかしそこで、ナミが動いた。

肩の負傷を手で押さえながら、ゾロの刀をまとめて空中に蹴り飛ばす。

「てめエは……………!!! おれの刀まで足蹴に……………!!!」

「……………お礼は?」

怒りをあらわにするゾロだが、ちょうどいい位置に落ちてきた自分の刀を手にしてにやりと笑みを浮かべた。

「ああ……ありがとう!!!」

「動けないからって、バカにすんなよ!!!」

三本揃えば、もはや敵はない。

そしてエレノアも臆することなくパンツと両手のひらを打ち合わせ、パチンと指を弾

いて火炎を生み出した。

「虎……狩り……!!!」

「燃え盛れ……!!」
ガラテイーン
 「太陽現剣……!!!」

上段からのゾロの斬撃と、エレノアの手に見れた炎の剣から放たれた円月状の斬撃が、ニヤーバン兄弟と黒猫海賊団を残らず吹き飛ばした。

多大なダメージを負った海賊たちを前に、ゾロは不敵な笑みをクロに向けた。

「心配すんな……5分も待たなくてもお前らは一人残らず、おれ達が始末^{ツブ}してやる」

クロはその宣言に、不機嫌そうにメガネのふちを押し上げる。

だがエレノアは、フラフラの体で起き上がりとうしているブチに気づいた。仕留めきれなかったらしい。

「……あいつ、まだ生きてる……タフな脂肪で致命傷はさけたか……」

警戒するエレノアは、すぐに異変に気付いた。

ジャンゴがブチに向けて、あのリングをかざしていたからだ。

「ぬ……っフ……ン!!!」

「やば…… またあの催眠か!!!」

ただでさえ怪力を有するブチがあのパワーアップを手にしたらと思うと、エレノアはゾツとするほかにない。

混戦の中、ナミは今度は破壊された船首の方へと向かっていった。

「みんな大ケガして戦ってるってゆうのにコイツったら!! 起きろオ!!!」

「ぶっ!!」

走りながら、下敷きになったまま眠りこけているルフィの顔を踏んづける。

ジャンゴがその背に向けてリングを投げ飛ばすのを見て、ゾロとエレノアとウソップは悲鳴を上げた。

「ナミ危ないよけろっ!!!」

「あれは…チャクラムっ!!!? ただの催眠の道具じゃなかったのか!!!」

「間に合わないっ!!!」

声に気づき、振り向くナミだがもう遅い。

その体を切り裂こうと、チャクラムの刃が食らいつつこうとした瞬間だった。

「お前かナミイ!!! よくも顔フンづけやがっ…」

船首を押しつけて起き上がったルフィの後頭部に、チャクラムの刃が深々とめり込んだ。
だ。

突然の痛みと驚愕にルフィは目を見開き、前のめりに倒れかける。

一応ナミの危機は去り、エレノアとゾロは呆れたように安堵のため息をついた。

「なんて間の悪い奴、というか…いい奴というか…!!!」

「ほんつと悪運強いなア……………何にしてもこれで…」

「いつ…てエ〜〜つ!!!」

天に轟くルフィの叫び声に、二人は戦局が代わったことを察する。

クロネコ海賊団もまた、風向きが不利な方を向き始めたことに気づき、絶望の表情を浮かべた。

「あいつが復活したア〜〜つ!!!」

「まずいつ……………!! これじゃ5分以内は……………!!!」

動揺する彼らに、クロの無慈悲な声が届く。

「皆殺しまで、あと3分」

「そんな…無茶だ…ジャンゴ船長とブチさんと言えどたった3分であいつらを仕留めるなんて…!!!」

「ブチ！ 考えてるヒマはねエぞ、お前はあのハラマキとガキを殺れ!! おれが麦わらの小僧を……………!!」

ジャンゴは冷静に、何とか3分以内にルフィたちを退ける方法を指示する。

やれることをやらねば、キャプテン・クロは容赦なく全員を殺しにかかるだろう。それだけは避けねばならなかった。

だが、その時だった。

「クラハドール!!! もうやめて!!!」
この場にあつてはならない声が、響き渡ったのは。

第18話 “虚構の信頼”

「カヤ!! ロゼも!! お前ら…何しに…!!」

この場にははならない娘たちに向けて、ウソツプは叫ぶ。

クロもこの展開は予想外であったようで、大きく目を見開いていた。

「これは驚いた……お嬢様……なぜここへ……?」

「メリーから全部聞いたわ」

「…今でもちよつと信じられません…あなたがまさか…!!」

「………ほう、あの男まだ息がありましたか。………ちやんと、殺したつもりでしたが

………」

紡がれる残酷な言葉に、二人はぞつと身を震わせる。

実際に目にしてもなお、目の前にいる男と自分たちの知っている人物と結びつかないのだろう。

「………ごめんなさい、ウソツプさん…!! 謝つても許してもらえないだろうけど……

私……!! どうしても信じられなくて……!!」

「そんなことはどうでもいいっ!! 何で、ここへ来たんだ、おれは逃げろって言ったんだ

!!! お前は命を狙われてるんだぞ!!! ロゼも何やってんだよ!!!」

「あなたは戦ってるじゃない!!! 私達はウソツプ君にあんな酷い仕打ちをしたのに!! そんなに傷だらけになって戦ってるじゃない:!!!」

「おれはだから:!!! ゆ〜!! 勇敢なる海の:」

「クラハドール!!! 私の財産が欲しいのなら全部あげる!!! だから、この村から出て行って!!!」

ロゼに肩を借りながら、カヤは力の限り叫ぶ。

それだけでも大変な苦痛だろうに、優しい彼女は大切な友人のために体を張った。

「……………違いますね、お嬢様。:金もそうだが、もう一つ私は『平穩』がほしいのです。ここで3年をかけて培った村人からの信頼はすでに、何とも笑えて居心地がいいものになった。その『平穩』とあなたの『財産』を手に入れて、初めて計画は成功する」

計画の遂行に異常な執着を見せるクロに、エレノアは言葉を失う。

それこそが、クロが東の海で恐れられている最大の理由だった。

「つまり、村に海賊が攻め入る事故と、遺書を残しあなたが死ぬことは絶対なのです」

「逃げるカヤ!!! ロゼ!!! そいつにや、何を言っても無駄なんだ!!! お前の知ってる執事じゃないんだぞ!!!」

ウソツプの叫びにも、カヤは従わない。

懐から取り出したのは、自衛のために両親が残した一丁の銃だった。

「村から出て行って!!!」

「なるほど……この3年であなただいぶ立派になられたものだ……」

銃器を出すという、令嬢には考えられない選択にクロは逆に感心したような声を上げる。

大して狼狽もせず、懐かしそうに虚空に目をやっていた。

「憶えていますか？ 3年間いろんなことがありましたね。あなたが、まだ両親を亡くし床に伏せる前から、ずいぶん長く同じ時を過ごしました。一緒に船に乗ったり、町まで出かけた……あなたが熱を出せばつきつきりで看病を……」

その思い出が脳裏をよぎったのか、カヤの表情に迷いが生じる。

その隙をつくかのように、クロは優しい口調で次々に記憶を掘り起こして行った。

「共に苦しみ、共に喜び笑い……私は、あなたに尽くしてきました！ 夢見るお嬢様にさんざんつきあつたのも、それに耐えたことも……すべては貴様を殺す、今日の日のためつ!!!」

「カヤ……ダメ!!」 これ以上聞かないで……!!!

肩を震えさせ、涙を流しながら膝をつくカヤをロゼが必死に抱きとめる。

もう何も聞かせたくないと覆いかぶさるも、クロは執拗に主人に悪の感情を叩きつけた。

「かつてはキャプテン・クロを名乗ったこの、おれが、ハナつたれの小娘相手にニコニコへりくだって、心ならずも御機嫌取ってきたわけだ…」

「やめて……!!! もうやめてよ!!!」

「わかるか? この屈辱の日々…」

「クロオオオオ——っ!!!」

我慢の限界に達したウソツプが、激情をあらわにしながらクロに殴りかかる。

しかし、以前殴られたのは善良な執事を演じていたがゆえに手を抜いていたから。当たるはずはなかった。

「ウソツプ君……そういえば君には…殴られた恨みがあつたな…」

悠々と自慢の速度で避けようと振り向くクロ。

だがその足が動くことはなかった。

「!!!?」

何かに足を取られたクロは、そのままウソツプの渾身の拳を受ける羽目になる。

盛大にぶつ倒れるクロに向けて、吐き捨てるような罵声が届いた。

「耳障りなんだよ……さつきから!!!」

パリパリと青い閃光を走らせ、フンッと大きく鼻を鳴らすエレノアに海賊たちの視線が集まる。

そのまま倒れこんだウソップは何が起こったのか自分でもわかっていないようだったが、エレノアの怒声に彼女が何かやったのだと察した。

「ルフィ？ あいつ、殴られたことが相当腹立たしいみたいだよ」

「ああ…任せろ!!」 あと100発ぶち込んでやる!!」

エレノアはそれらをまるつと無視し、やる気を漲らせているルフィにハツパをかけた。

「何だ?!」 キャプテンクロが何もせずに殴られた…?!」

「さっきの妙な光は一体…?!」

元船長がただの村の男に殴られたことに、クロネコ海賊団の間に動揺が走る。

現最強だと思われていたニヤーパーン兄弟を軽くあしらっていたクロの異変に、戸惑いを隠せずにいた。

「今だアあああ——っ!!!」

その時だった。

場に似合わない甲高い歓声とともに、クロに向かって襲いかかる小さな影があつたのは。

「ウソップ海賊団参上っ!!!」

「覚悟しろこのやろう羊っ!!!」

「羊このやろお——っ!!」

「何してんだあんたたち——っ!!?」

ボコボコと自力で調達したらしい棒状の道具を振り下ろすウソツプ海賊団の面々に、エレノアは悲鳴をあげた。

クロネコ海賊団やウソツプも戦慄の表情を浮かべ、やめろとい叫びながら届かない手を伸ばした。

「……………やっぱりだ!! キャプテンは戦ってた!!」

「なんで言ってくれなかったんですか、汗くさいじゃないですかっ!!」

「違うよ!! 水くさいじゃないですか!!!」

「何くさくてもいいっ!! とにかく、お前らこっから離れる!! 逃げるんだ!!」

「いやです!! キャプテン!!」

「そうだ!! おれ達だつて戦います!!」

「逃げるなんてウソツプ海賊団の名おれです!!」

勇ましく吠える三人だったが、背後で立ち上がる黒幕に気づくと、その表情を真っ青に染め上げた。

しかしクロは少年たちに構うことなく、ギロリとエレノアを睨みつけた。

「下らんマネをしてくれる…さっきの妙な現象…貴様、錬金術師だな?」

「まあね？」

悪びれずに答えるエレノアに、クロネコ海賊団の驚愕の表情が向けられる。

「何イ!!? 錬金術つてあのヤロウと同じ!!?」

「やべエじやねエか、他にもいるのかよあんなことできる奴が!!?」

「やっぱ変だと思つたぜさっきのトゲといいよオ!!?」

圧倒的に不利になりつつあると、クロネコ海賊団の士気がどんどん下がっていく。

クロは彼らに構うことなく、立ち尽くしていた元部下に目を向けた。

「ジャンゴ!!!」

「お…おう!!」

「その小娘と小僧はおれが殺る。お前はカヤお嬢様を任せる。計画通り遺書を書かせて

…殺せ。それに…アリを3匹。目障りだ」

「引き受けた」

もはや時間など気にははられない。

命令をこなすくらいでなければ命はないと、ジャンゴは帽子の下で冷や汗を流した。

まずいと判断したウソップは、倒れたその場から自分の仲間にかんだ。

「ウソップ海賊団つ!!!」

「はいっ、キャプテン!!」

「い…言つときますけど…おれ達は逃げませんよ!!!」

「キャプテンをあんな目にあわされて逃げられるもんか!!」

「キャプテンの敵を取るんです!!!」

整列しながら、勇気を振り絞るウソツプ海賊団。

そんな彼らに、ウソツプは告げた。

「二人を守れ」

その命令に、少年たちは目を見開いて言葉を失った。

「もつとも重要な仕事をお前達に任せる!!! カヤとロゼを連れてここを無事に離れろ!!!」

できないとは言わせないぞ!! これはキャプテンの命令だ!!!」

「は…!! はい、キャプテン!!!」

思わぬ指令にあっけに取られていた彼らだったが、確認するウソツプに思わず背筋を正す。

座り込むカヤを立ち上がらせると、ロゼの力も借りてすぐ近くの森の中に走っていった。

「バカが。おれから逃げられるわけがねエだろ」

その後をジャンゴが追うが、入り組んだ森ではそうそう接近を許すまい。

この森で冒険と称して遊び続けてきた彼らにとつては、絶好の逃げ場所であった。

「上手いこと口が回る……!」

「結局、逃げろつてことじゃねエのか」

嘘つきもここまでくれば一つの才能だと、ゾロもエレノアも呆れながら感心する。

安堵の雰囲気が始めた中、クロが嗜虐的な笑みを浮かべてメガネを押し上げた。

「……お前達、何か忘れてるんじゃないのか?」

「何?」

「この島に住み着いた海賊が……おれ一人だと誰が言った?」

クロの言葉に、ウソップはハッと思い出す。

そうだ、この場にはいないが、クロと密会していた人物はもう一人いたはずだ。

「やべっ……あのヤブ医者のこと忘れてた」

「しまった!! あのジジイがまだ村にいるじゃねエか!!」

うっかりしていたと頭を抱えるルフィとウソップに、ゾロはため息をつきながらエレ

ノアの方に振り向いた。

「おい、エレノア!! まかせて大丈夫か!!」

「オッケー……あのジジイには、私もだくいぶ思うところがあるんでね……!!」

準備は万端、というようにエレノアはフードの下で笑う。

片足でどうにか立ち上がると、ウソップ海賊団が向かった方に体を向けた。

しかしそこへ、クロが立ちはだかった。彼女こそ排除すべき最大の障害だと判断したらしい。

「おれが通すと思ったか？」

「押しとおる!!!」

自由に動けないエレノアに向けて、クロが自慢の猫の手を振り抜く。

細い体をたやすく切り裂いたと思われるが、クロの猫の手が貫いていたのはただの布切れだけであつた。

「!!? どこへ…!!?」

「キャ……………!! キャプテン・クロオ!!! 上だア~~~~っ!!!」

流石に動揺するクロだったが、クロネコ海賊団のものの悲鳴のような声に釣られ、視線を頭上に向ける。

「……………!! 何だと…!!?」

「あ…ありやアまさか……………!!!」

「天族ウ~~~~!!!?」

大きく目を見開き、初めて驚愕をあらわにするクロを、大きな影が覆う。

白く大きな翼を広げたエレノアが、バサバサとそれを羽ばたかせながら不敵な笑みを

浮かべていたのだ。

その真の姿には、ナミやウソップでさえも驚愕を隠せなかった。

「ウソオ!!」

「マジかつ……!!?」

「あんた達につきあつてるヒマはないんだよ!!」

エレノアは大きく翼を羽ばたかせ、カヤたちが向かった方へと進路を変える。

それを見送ったルフィとゾロは、改めて自分たちの相手と向き直った。

「あつちはエレノアに任せるとして……」

「さつさと片付けるとしようかね」

「後ろ! 来てるか!! あの催眠術師!」

「ううん、見えない! このまま歩いてやろう!!」

深く入り組んだ森の中を、肩と口ゼを引っ張るウソップ海賊団が駆け抜けていく。

その足取りに迷いはなく、手を引かれていなければ危うく見失ってしまいそうなほどだ。

「たいしたものね……!! この林が庭っていうのもあながち過言じゃないかも!!」

「この林の中でおれ達を捕まえられるもんか!」

「安心して、カヤさん、ロゼさん！ 僕達が必ず守ってあげるから!!」

「そうさ!! ウソツプ海賊団の名にかけて!!」

「……………ええ…、……………ありがとう…」

微笑みながらも、カヤの顔色は悪い。

もともと病弱な彼女が走り続けているうえに、精神的なショックが何度も重なったためにその負担は予想以上に大きくなっていた。

しかしそれでも、あの海賊が少年たちを追うことはできない、そう思われていた。

カヤたちを隠していた木々が、瞬く間に両断されていく光景を見るまでは。

「何処だ、チビどもオ~~~~~~~~!!!! この、おれから逃げられると思うなよ!!」

戦慄するカヤたちに向けて、ジャンゴが凄まじい怒号を発する。

戦う姿をまだ見ていない彼らは、自分たちの想定が大きく間違っていたことをようやく察した。

「あいつだ!!」

「何だ…!!? ただの催眠術師じゃなかったのか……………!!?」

「このままじゃ見つかる!! 早くもつと奥に……………!!」

とにかく逃げる他に方法はない。

走り続ける一同の目の前を、見覚えのあるシルエツトが横切った。

「…おや？ 君たち…こんなところで一体何をやってるのかな？」

「!! コーネロ先生!!」

ロゼは大きく目を見開き、不思議そうにこちらを見つめてくる医者のもとへ急いだ。なぜここにいるのかなど気にはなりはしたが、そんなことを気にしていられる状況ではなかった。

「先生、ここは危険です!! 危険な海賊たちが村を襲おうとしています!! 早く村の人たちに避難を…!!」

「何と…!! それは非常に困る…!!」

「困るとかの話じゃないよ先生!!」

「早くみんな逃げないと…!!」

カヤたちも追いつき、逃げるようにコーネロを促そうとするが、彼は一向に動こうとはしなかった。

すると次の瞬間、コーネロの背後の土が突然盛り上がり、赤い閃光とともに巨大な壁となつてカヤたちを取り囲んだ。

「うわあああああゝゝゝっ?!?!?!」

目を疑う現象に、少年たちは悲鳴を上げて後ずさると、ある木の幹に追い詰められて

しまった。

コーネロは自分の背後にそそり立つ壁に視線を向けることなく、どこかほの暗いものを感じさせる笑みを浮かべてロゼたちを見つめていた。

「うっ……かつ、壁が……!!」

「何だこれ!!? どうなってるんだ!!?」

慌てふためくウソツプ海賊団の面々とは真逆に、ロゼは無言のまま立ち尽くしていた。

信じられない考えが脳裏をよぎり、思考が停止しかけていた。

「……コーネロ、先生?」

「おーおー、ここにいたか……」

微笑を浮かべたままのコーネロに向けて、ジャンゴが気安げな声をかける姿が目に入る。

海賊と村の医師、なれ合うはずのない二人が顔見知りであるという事実には、ロゼの体に震えと恐怖が走った。

「お前の錬金術ですぐ居場所が分かったぜ……手間が省けた」

「いえいえ。こちらも、今後の活動のためには協力は惜しめませんよ」

「先生……!!? 何を言って……!!?」

「…賢い君なら、答えに気が付いてもいいかと思つたんだが……意外と愚かだねエ」
それでも信じられないと声を振り絞る彼女に、コーネロは暗い笑みを浮かべて告げて
みせた。

「私も、海賊だよ？　ロゼ君？」

第19話 “賢者と愚者”

「そんな……私達を……だまして……」

呆然自失といった様子で、ロゼが呟く。

コーネロはさもおかしそうに笑みを浮かべ、聞かれてもいないことをペラペラと語り始めた。

「理由はクラハドール君……いや、キャプテン・クロと同じさ。町を襲い、海賊船を沈めて財宝を求める暮らしも嫌いじゃなかったがねエ……もつと簡単に財と名声が手に入る方法を思いついたものでね。そっちに鞍替えしたのさ」

「……………たくさんの人を……救ったって……」

「この指輪はね、錬金術という万能の力を自在に使いこなせるようになる魔法の指輪なんだ……私が傷を治したり病を治したりしたのは、これのおかげなんだよ？」

「みんな……………あなたを信じて……」

「居心地はよかったですねエ……バカな民衆が何も知らずに私を尊敬しがめていると思うと正直、笑いをこらえるのが大変でしたよ」

ガクンと、限界を迎えたロゼがその場に膝をつく。

信じたくない事実を本人から突き付けられ、立っていられる方がおかしかった。

「ロゼさん、しつかりして!!」

「こいつはケツサクだ!! 長年ダメされ続けたお人好しがもう一人いたとはな!!」

「さて、愚かで賢い君に一つ提案だ……私は確かに正規の医者ではないが……これまで行ってきた医療行為は本物だ。そして、私の言ったこともね?」

爆笑するジャンゴをウソップ海賊団が睨みつけるが、相手は微塵も気にしてはいない。

青い顔でうつむくロゼの耳元で、コーネロはにやりといやらしくゆがめた口で問いかけた。

「最愛の恋人に会いたくはないか、私は君にそう尋ねたね?」

ピクリ、と、氣力を失ったロゼの肩が震える。

するとジャンゴが、顎に手を当てながら自分の乏しい知識を掘り起こした。

「人体錬成つつうんだったか? 錬金術師が長年方法を探し続けているとかいう秘法中の秘法っての」

「この賢者の石があれば、数多の錬金術師が挑み続けてきたそれを成功させることも可能となるやもしれん……それができるのは私だけだ。君が本当に恋人に会いたいと思うのなら……カヤお嬢様をこちらに渡してもらえないかね?」

ロゼの手がギュツと握りしめられ、全身に震えが走る。引き結ばれた唇は血の気が引き、見開かれた眼には迷いが生じる。

「いまだ想い人のことを忘れられない彼女にとって、その言葉はまさに悪魔のささやきであつた。」

「ロゼ……!!!」

「駄目だよロゼさん!!! そんな奴の言う事なんか聞いたら!!!」

「絶対ウソだ!!! キャブテンだつてつかない最悪のウソだ!!!」

「聞いたら絶対後悔するよ!!!」

必死に引き留めようとするウソツプ海賊団が、カヤとロゼを背中に庇う。

しかし今日の前にした人知を超えた現象の後では、もしかしたらできるのではないかという考えがよぎってしまう。

もしロゼがそれを信じてしまえば、一巻の終わりだった。

「ロゼ……いい子だから、こちらにおいで」

コーネロのささやきが、ロゼの心のスキを突く。

差し伸べられた手に抗いがたい誘惑の力を感じ、ロゼは大量の脂汗をかきながら身を震わせる。

カヤはその隣で、悲痛な表情でロゼを見つめているだけだった。

「お前の願いをかなえられるのは私だけだ、そうだろうか？ 最愛の恋人を思い出せ」

必死に呼び止める少年たちの声が、遠くなっていく。

妖しく響くコーネロの声だけが、ロゼの心を侵していく。もはや悪魔のような形相になりつつあるコーネロが、さらに心に傷を抱えた少女に近づいていく。

「さあ!!!」

最後通告のように放たれた強い催促の声に。

彼女は答えた。

「ふざけないで!!!」

はつきりとした拒絶の言葉に、コーネロやジャンゴはおろか、ウソップ海賊団とカヤまでもが目を見開いた。

「……あの人にもう一度会いたいのは…確かに私の本心……!!! でも、それを大切な友達を犠牲にしてもかなえたいだなんて思わない……!!!」

「……………!!! ロゼ……!!!」

「そんな……人の心を弄ぶようなあなた達と一緒にしないで!!!」

コーネロに対して抱いていた尊敬の念はこの瞬間消え去り、ロゼはしっかりと自分の

足で立ち上がる。

確かにその目に、未練はある。

しかしそれを上回る思いが、ロゼを引き留めていた。

「……………そうか、君はもつと賢い人間だと思っていたのだがなア…」

呆れたようにつぶやき、コーネロは手ごころな枝を拾い上げる。

ほんぽんと触り心地を確かめるようにしながら、コーネロはどこか虚空を見つめながらつぶやいた。

「こちら側にくれば命は保証され、そのうえ不幸にも死んだ恋人が戻ってくる!! そのために他人を渡すくらい簡単なことだろうに……………」

「不幸だなんてよく言うぜ……………この女たちの両親もろとも毒殺したのはお前だろうに」

「おいおい……………ここで言う必要があったのか?」

「……………どういう、事ですか?」

理解できない、したくない事実を聞かされ、ロゼは再び言葉を失う。

そんな彼女に、コーネロは悪魔のような笑顔を見せた。

「君たちの両親と恋人を殺したのは……………私だという事さ」

立ち上がりかけた足から、力が抜けていく。

持ちこたえていた心に今、深い亀裂が入った音を聞いた気がした。

「ウソ……………!!?」

「奇跡を信じさせるには、それ相応の悲劇が必要でな……………ちようどいい所に目障りな笑顔を振りまくカップルがいたもんだから、強制的に協力してもらっただけのことよ」
「気の毒なこつた…自分を救ってくれた医者が、実は自分の家族や恋人を殺した張本人だなんて知つちまつたら、おれ達が来なくても自殺してたんじゃねエか?」

「そんなもの、私の知つたことではない。この計画が成功した暁には、私は他の島へ移ることになっている。噂が噂だ…よそでも十分稼がせてもらおうとしよう」

コーネロは満足げに、誇らしげに自分の所業を白状すると、拾った枝に右手の指輪をかざした。

バチバチバチツ!!と凄まじい紅色の閃光が走つたかと思うと、ただの枝は見る間にその形を変えていく。光沢のある黒い金属に変化し、それが筒となつて六つ円状に連なる。

見る見るうちに、コーネロの手の中に凶悪な銃器が作り出された。

「さア…冥土の土産はこんなもんで十分だろう。カヤお嬢様以外の面々にはさつさと退場してもらわねば」

ガシャン、とコーネロは銃口をカヤたちに向けて冷ややかな笑みを浮かべる。

引き金にはすでに指がかかり、銃弾を発射する準備は整っていた。

(悔しい……こんな奴らに……!!!)

(ごめんなさい……!!! ごめんなさいウソツプさん……!!!)

「くつそ——っ!!! お前らみたいな極悪人にカヤさんを殺されてたまるかア!!!」

「もし死んでも化けて出てやるからなア!!!」

「そんでいつか呪ってやるからなア!!!」

小さな体で必死に二人を守ろうとする少年たちだが、そんな事では盾にもなりえない。
い。

じりじりと後ずさっていくも、今度は木々に邪魔されてろくに距離を稼ぐこともできなかつた。

「じゃあね、ロゼ。あの世でご両親によろしく……」

無慈悲な宣告とともに、ついにコーネロが引き金を引く。

すると銃のバレルが回転をはじめ、銃口から無数の弾を少年たちに向けて発射し始めた。辺り一面に砂埃が立ち上がり、カヤたちがその白煙の中に包まれる。

「おいおい……お嬢様だけは殺すなよ……?」

「はははははははは……!!!」

残酷な哄笑を上げるコーネロと、その容赦のなさに呆れるジャンゴ。

だが不意に、その笑みが途切れた。

いったん銃の発射を止めると、立ち込めていた土煙が徐々に晴れ始める。

「くっだらねエことペラペラペラ垂れ流しやがって…酔っぱらいの戯れ言のほうがまだましだよ」

そこにあつたのは、無残な子供たちや娘の死体などではなかった。

金属の輝きを放つ、白と黒に彩られた翼が、カヤたちを守る盾となつてそこに広がっていたのだ。

「貴様…!!」

「「姉ちやア~~~~ん!!!」」

「エレノアさん……!! あなた…」

コーネロは驚愕と苛立ちに眉間にしわを寄せ、少年たちは歓声を上げ、カヤとロゼは困惑の声を上げる。

フードの下に隠されていた正体を知り、誰もが言葉を失っていた。

「天族…!! それにエレノアだと…!! まさか…」

ジャンゴは初めて聞いた気がしない名とその正体に、何かを思い出しかける。

しかしそれよりも先に、エレノアはウソツプ海賊団に視線を戻した。

「ここは任せて、あんた達は行きなさい」

「!! ま、まかせて大丈夫なのか!! なんかずいことできる奴だぞ!!」

「何にも心配することなんてないよ……」

不敵な笑みを浮かべた彼女は、その場でパンツと手のひらを合わせて地面につける。

青い閃光が走り、土が盛り上がって形を変えていく。

見る見るうちにそれは、流麗な装飾の施された短い槍へと形を変えていった。

「私のもつとすごいから」

ひゅんひゅんと手ごころな長さに作りかえたそれを操るエレノアは、天から遣わされた戦士のように美しく勇ましい。

しかしコーネロは、自分と同じ力を使っていることに驚愕の目を向けていた。

「うぬ！ 錬成陣も無しに地面から武器を錬成するとは……これが天族の力か……」

「……何だ、たいそうなこと言っておいてあんた自身は三流じゃないのさ」

「何だと!!」

呆れた目を向けるエレノアに、コーネロは激昂する。

エレノアはそれを無視し、へたり込む二人の娘の方に視線を戻した。

「カヤ、ロゼ……話はそこで全部聞いてたよ。できれば……あんた達が知る前に決着付けたかったけど……」

「エレノア……私……」

「でも、それはあんた達がそこで立ち止まっている理由にはならないでしょ」

「!?」

傷心の娘に向けるには辛らつな言葉に、思わずウソツプ海賊団が驚愕の表情を向ける。

しかしエレノアは、あえて厳しい声と表情で二人に告げた。

「こんな奴らに、そんな情けない顔は見せるな。弱音を聞かせるな。あんた達の家族の命がこいつらに奪われたってんなら、これ以上こいつらにでかい顔をさせるな!!!」

笑って悲しみを吹き飛ばせるぐらい、堂々としてみる!!!

ガシャン、とエレノアは作り物の足を踏み鳴らし、その存在を強調する。

ぬくもりのないその足を見つめ、カヤとロゼはあふれ出しそうになる涙を抑え込んだ。

「立って歩け!!」 前へ進め!!! あんた達には、立派な足がついてるでしようが!!!」

ググつと表情を歪めた二人は、残された力を振り絞って立ち上がる。

立ち上がった二人を連れ、ウソツプ海賊団が再び森の中に飛び込んでいくと、ジャンゴが忌々し気に眉間にしわを寄せた。

「……!!」 逃がすわけねエって言うてんだらうが!!!」

チャクラムを操り、執拗にカヤたちを追うジャンゴを、エレノアはあえて見逃す。

彼の相手は、自分ではないとわかっていたからだ。

自分が相手をすべきものは、目の前にいた。

「来なよド三流……本物の錬金術師を見せてあげる……!!!」

「ほぎげ、小娘!!!」

コーネロは侮辱された怒りを、そのまま銃器に乗せて放つ。

襲い掛かる無数の銃弾の雨を、エレノアは短槍を振り回して盾にしながら防ぐ。

しかしそのあまりの多さと、故障している義足によつて徐々にエレノアは追い詰められていく。

エレノアの頬を汗が伝うほど、その威力はすさまじかった。

「いかに優れた錬金術師であろうとも、私の持つこの力は伝説の代物!!! 一介の錬金術師ごときがかなうと思うな!!!」

「石の力に頼りつきりのくせによくそこまででかい顔ができるもんだ……」

エレノアのつぶやきに、コーネロは「カチーン」と額に血管を浮き立たせる。

バチバチと指輪の宝石をスパークさせると、周囲の土を操つてエレノアを包囲している。

次の瞬間盛り上がった土が形を変え、全く同じ形の大砲が数十も作り出された。

「はははははは!!! 実に!! 実に素晴らしい力だ!!! これ一つで私は神の領域に立っているも同然!!! どうだマネできるか!! 貴様にこれほどの芸当がマネできるかア!!!」

「……格が違うつつつてんだよ、クソガキ……!!?」

エレノアはさして慌てる様子もなく、打ち合わせた手のひらを地面に押し当てる。

青い閃光が、辺りをまばゆく照らし出した。

「アシジエリカ・リンク
破魔指輪」

バチンツ!!!と閃光が走り、自身を取り囲んでいた砲やコーネロの銃を貫く。

すると閃光を受けた銃器は、見る見るうちに腐り落ち、さらさらと土に還っていった。
「!?!?」

自分の作り出したものが、あつさりと破壊されたことにコーネロは驚愕で凍り付く。
つまらなそうにそれを睨むエレノアの周囲で、さらに強い閃光が迸った。

「ヘタクソが。あんたの創るものはガワだけで、肝心の中身が揃っちゃいないんだよ
………あんたが持っているものは見た目だけ取り繕った欠陥品ばかり、見てるだけでイライラする」

バキバキと土が盛り上がり、木々の残骸をも呑み込んでそれは一つの塊を作り出して
いく。

それは徐々に、金属でできた巨人を模っていく、エレノアはその肩の上で仁王立ちする。

まるでそれは、神や仏さえも従えているようにも、それらが起こす奇跡を代行してい

るかのようにもだった。

「神？ 伝説？ ただの人間がその域に達することができないでしようが!! 死んだ人間も蘇る!!? 何の覚悟もない人間が、軽い気持ちでそんな言葉を口にするんじゃない!!!」

ぐらりと、生み出された仏像がコーネロに向けて拳を構える。

小屋一軒分はありそうなほど巨大な拳が、コーネロの頭上から光を奪い去った。

「よく見なさい……!! 私こそがあんたの言う神の領域に近づいた者……その罰を受けた咎人の姿だ!!!」

エレノアの怒号とともに、巨人がその拳を振り下ろす。

大気をも震わせながら、顔を真っ青に染め上げるコーネロに渾身の一撃が襲い掛かった。

(………鋼の義肢 オートメイル 機械鎧、ああ、そうか……こいつは手を出したのか……!! 錬金術師の間では暗黙のうちに禁じられている『人体錬成』に………神の領域を犯す最大の禁忌に!!!)

コーネロはようやく気付く。

この娘は自分のはるか先を行く存在であったことに。

伝説の力を手にしようと、己は足元にも及ぶはずがなかったという事に。

「青銅巨兵!!!!」

そして、カヤの、ロゼの、二人の両親と恋人の、そして自分の怒りを全て込めた一撃が、愚かな老人を叩き潰したのだった。

第20話 “海賊旗が呼んでいる”

地面に己の拳を突き立てる、土塊の巨人。

その体が徐々に崩れ落ち、元の土くれや木の破片に戻っていく。

大きな砂の山になった巨人の山から降りたエレノアは、ググつと背伸びをして肩の力をほぐした。

「ん？」

ぐりぐりと肩を回していると、大の字になって倒れ伏すコーネ口の指から零れ落ちたものに気が付いた。

近づいて拾い上げてみれば、それは少しの抵抗を残してぼろりと崩れてしまった。

「……………完全な物質であるはずの『賢者の石』が何もしてないのに崩れた……………あんまり質のいい代物じゃなかったのか……………？ どの誰だよ、こんな悪趣味なもの創つたのは……………」

エレノアは気になり、元の持ち主であるコーネ口を見下ろす。

恐怖の形相で白目をむくコーネ口の、ぼこぼこになった顔を見下ろしてちよつとやりすぎたかと反省する。

が、ロゼとカヤの両親のことを思い出してまだ足りなかったと思いなおす。

「まあ、これで前ほどの錬金術も使えないだろうし……おとなしくなるでしょ」

前ほどの腕がなければ、村で大きな顔をすることもできまい、とエレノアは老害を放置することにする。

もう顔も見たくない相手に背を向けて、カヤたちの声を探して歩き始めた。

すると、そこからさほど遠くないところで腰を下ろす血だらけのウソップと、ボロボロになったウソップ海賊団の姿が目に入った。

「……あれ、終わってる」

「よオ、エレノアか！ 見せてやりたかったぜおれの華麗な活躍を!!」

「ほんとですよ!! すごかったんですよキャプテンの最後の一撃!!」

「ハイハイ……」

エレノアは適当に流し、血まみれのままのウソップのもとに向かう。

聞かずとも、彼が勇敢に戦ったことなど簡単に察せた。動けなかったはずの彼がここにいる時点で、相当な無理をしたことはわかりきっている。

エレノアは自分の羽根を一枚ちぎると、清潔な布に錬成してつなぎ合わせる。長く伸ばしたそれを、ウソップの傷口に合わせて巻き付けた。

「……ちようどいい、お前たちに頼みたい事があつたんだ」

手当てを受けながら、ウソップはカヤとロゼ、ピーマンたちの方を真剣な表情で見つめる。

「今……ここで起こったことを全部、秘密にできるか?」

「え?! 秘密に?! どうして、そんなことするんですか?!」

「そうですよ!! おれ達村のために戦ったのに!!」

「キャプテンだつてみんなから見直されますよ!!」

「村の英雄に……勇敢な海の戦士になれるんじゃないの?」

「ウソップさん、みんなの誤解を解かなきゃ……」

「誤解も何もおれは、いつも通りホラ吹き小僧と言われるだけさ。もう終わったことをわざわざみんなに話して、恐怖をあたえることはねえ」

「……確かに、今回みたいなことがない限りこの島を襲おうなんて海賊は現れないだろうけど……でもそれじゃ」

「村のみんなだつて、そのへんは安心して毎日を暮らしてる。このまま何もなかったことにしよう。何も起きなかった……みんなウソだつたんだ……」

最初の宣言通り、ウソップは今日のことをウソで片付けると決めたらしい。

それが、最善だと信じて。

「強制はしねエが……」

「いえ!! できます!! それが一番村のためになるのなら」

「おれだって!!」

「ぼくも!! 一生黙ってる!!」

「カヤ、ロゼ。お前らは、つらいか……?」

「………いいえ」

「あなたがそれでいいなら……私もそれに従うよ」

ロゼもカヤも、呆れたようなわかっていたような微妙な微笑みを浮かべて了承する。

エレノアは、いまだ顔色が悪いロゼの目を見て息をのむも、意を決してそろそろと近づいて行った。

「……あのさ、ロゼ……あのジジイが言ったことなんだけど……その」

「……いいの!!」

死人さえよみがえらせると言われる石を壊したことを言おうとしたが、ロゼははつきりとエレノアの言葉を遮る。

無理やり笑みを作った彼女は、悲しげな表情のエレノアに首を振った。

「確かにシヨックだったけど……私は今生きてる。私もカヤも……みんなのぶんをちゃんと生きてる。だから……大丈夫」

「ロゼ……」

「いいの。私はもう、吹っ切れてるから!!」

どう見ても、いまだに引きずっているはずだ。

しかしそれを必死に抑えようとしている彼女に、エレノアは自分の無力感を感じずにはいられなかった。

その心の傷は、時間が癒すほかにないのだ。

「ありがとう!! お前たちのお陰だよ。お前たちがいなくなったら、村は守りきれなかった」

「何言つてやがんだ。お前が何もしなきゃおれは動かなかったぜ」

「おれも」

「私はあのジジイが気に入らなかつただけだし」

「どうでもいいじゃないそんな事。宝が手に入ったんだし♡」

ウソツプはその後、海岸の方で戦ってくれていたルフィたちに礼を言う。

海賊クロとその一味を見事撃退した彼らは、さすがに疲弊の色を残しながら何ともなような風を見せていた。

その強さをありがたく思いながら、ウソツプは自分の決意を彼らに伝えた。

「おれはこの機会に一つ、ハラに決めたことがある」

その日、いつものウソツップのウソが聞こえてこず、戸惑う村の人々をよそに、ウソツップ海賊団の解散が、船長キャプテンの口から告げられた。

「……！ ふーっ、とれた！」

「バカだな。のどを鍛えねエから魚の骨なんかひつかかるんだ」

「あんたらに言つとくけどね、フツー魚を食べたらこういう形跡が残るもんなのよ」

「言つてもムダだよ。何回注意しても聞きやアしないつたらないんだから……」

「あんたもご飯食べてるときに油の臭いまき散らさないでよ!!」

呆れたようにエレノアが言うと、怒りの形相でナミが抗議する。

椅子の上で、カチャカチャと自分の義足のねじやらボルトやらをいじくっているエレノアだが、油も同時に差しているようでおいが漂ってきていたのだ。

「ていうか……あんたが天族だったつてこともだけど、両脚義足だつてのには驚いたわ。普通にとんだりはねたりしてるんだもん」

「腕のいい技師に作つてもらつたからねエ……でもいい加減メンテナンスしてもらわないとあちこちガタがきてんだよなア。近いうちにバラして調整してもらわないと」

「おい……まさかとは思うが、それでまだ本調子じゃないとかいうんじゃねエだろうな」

「ま、そんな感じかな」

不自由な義足でかなりの強さを誇るのに、それ以上力を増したらいったいどれほどの実力者になるのか、とゾロは戦慄する。

ルフイは知っていたのか、それとも気にしていなかったのか、とくには口を挟まずに魚の骨を食うのに夢中になっていた。

「大型の鳥はね、飛ぶためにははばたく以上に風に乗る必要があるからさ……走れるぐらいにはなつたけどまだまだだよ」

「あつ、助走かア……」

「そ。しかも生身の足よりも機械鎧は重いからね……あんまり長い時間飛べないんだよ。具体的には4〜5分くらい」

「いったいどういう事情があつてそんな足になるわけ？」

「……………女の意地、かな？」

「なにそれ？」

自嘲気味なエレノアの言葉の意味が分からず、ナミが聞き返すがもう返事は返つてこない。

開いた皿を片付けてくれたロゼは、初めて見る精巧な作りの義足を見つめ、次いで痛々し気にエレノアを見つめた。

「あなただって……見た目以上にハードな人生おくらせてるのね」

「天族ってだけでも生きづらい世の中だからね……どう聞いてもまゆつばものの伝説ばっかりだし。狙われやすいの、よっと」

最後のパーツを義足にはめ込み終え、エレノアは膝を立てる。

適当に動かして動作に問題がないのを確認すると、翻していたローブの裾を戻した。

「……生き血を吸えば、永遠の命を。血肉を食らえば、不死の体を。純潔を奪えば、不変の栄光を。真に受けるのもバカらしい伝説だけど、結構そのバカが多いんだよ。この世には」

「……………」

伝説の種族が抱える闇の歴史の片鱗に、ナミもロゼも閉口する。

聞くべきではなさそうな話に、この小さな少女はどれほどの痛みを抱えてきたのだろうとつい思ってしまう。

ゾロも何か思うところがあつたのかじつと見つめるが、やがてふっと視線を外した。

「メシは食った。そろそろ行くか」

「そうだな」

「寂しくなるね……もうちよつとゆっくりしてつてくれてもよかつたのに」

「ま、海賊ですから」

ロゼが言うと、エレノアはしんみりさせてしまった空気を換えるように茶目つ気を込めて答える。

思わず笑みを浮かべていると、店のドアが開いてカヤが顔を出した。

「ここにいらしたんですね」

「よう、お嬢様っ」

「寝てなくて平気なの？」

「ええ、ここ一年の私の病気は、両親を失った精神的な気落ちが原因でしたので……」

「あのヤブ医者 of 言うことだったしねエ……計画の信憑性を持たせるつもりでウソの申告をしてたかもよ？」

「あはは、それもあるかもね……」

「ウソツプさんにもずいぶん励まされたし……甘えてばかりいられません。それよりみなさん……」

カヤはルフィたちの方を見ると、期待を込めた笑顔に向けた。

それはまるで、自分の子供にプレゼントを準備し、渡す時を待ち望んでいた親のような笑顔だった。

「船、必要なんですよね！」

「くれるのか!! 船っ!!」

それに最も喜んだのは、少年のような目をした麦わら帽の船長だった。

「へえ…」

「キララヴェル！」

「うおーっ」

「素晴らしい！」

彼らが最初に到着した海岸で、一味は歓声を上げる。

そこに停泊していたのは、羊の船首が付いた一隻の船。大きいとは言えないが、一味には十分ありがたい立派な帆船であった。

「お待ちしていましたよ。少々、古い型ですがこれは私がデザインした船で、カーヴェル造り三角帆使用の船尾中央舵方式キララヴェル『フレイン・スルゴーイング・メリー号』でございます」

包帯を頭に巻いたカヤの執事、メリーが笑顔でルフィたちを迎える。

カヤから事情を聞いた彼は、何とか礼のできる方法を考え、今回のサプライズを敢行したのだ。

「あなた方ですか。ウソツプ君と共にクロネコ海賊団を追い払ってくれたのは。私ももっと大柄な人たちかと…」

「これ、本当にもらつていいのか!!」

「ええ、ぜひ使つて下さい」

「動索の説明をしますが、まずクルーガーネットによるヤードの調節に關しましては……」

「あ、いいですいいです」

「船の説明なら私が聞くわ」

「苦労かけるねエ……」

首をかしげる船長に代わり、ナミがメリーから操舵の方法を聞く。

ナミがいなければ、出向前に暗礁に乗り上げるところであつた。

「航海に要りそうなものは全て積んでおきましたから」

「恩人のためならまだ物足りないくらいだけ……」

「ありがとう! ふんだけけつたりだな!!」

「至れり尽くせりだ、アホ」

話を聞くに、ロゼも食料などの手配を手伝つてくれていたらしい。

正直、自分たちがこの島に来なければ悲しい事実を知らずに済んだのかもしれないと

エレノアは思う。

しかし前を向いて歩きだそうとしている彼女にそんなことを言うのも野暮だと思ひなほし、ため息をこぼすだけにとどめた。

その時だった。

ゴロゴロと坂を転がりながら、悲鳴を上げて近づいてくる影に気が付いたのは。

「うわああああああああ止めてくれ——っ!!」

「……ウソツプさん！」

「よしきた」

どうやらありつただけの荷物を詰め込んだのはいいが、重すぎてバランスを崩してしまつたらしい。

海に落ちる前に、ルフィとゾロが足を出してウソツプの顔面を踏みつけることで、うやく回転は止まつた。

「……………!! わ……………わりいな……」

「うん」

もっとやり方があるのではと思つたが、ウソツプの自業自得でもあるので誰も何も言わなかつた。

「……やつぱり海へ出るんですね、ウソツプさん……」

「言つておくけど、止めないよ。……そんな気がしてたし」

「なんかそれもさみしいな」

眉尻を下げ、カヤとロゼはただウソツプを見送る。

本物の海賊になるという彼を、二人とも止められる気はしなかった。

「今度この村に来るときはよ、ウソよりずっとウソみてエな冒険譚を聞かせてやるよ!!」

「うん、楽しみにしてます」

「体には気を付けてね」

「お前らも元気だな。また、どっかで会おう」

「…ん?」

「なんで?」

不思議そうに返され、ウソツプは言葉に詰まる。

二度と会うこともないとしても思われていたのだろうか。

「あ? なんであつてお前、愛想のねエ野郎だな…。これから同じ海賊やるつてんだから、

そのうち海で会つたり…」

「何言つてんだよ、早く乗れよ」

「ウソツプ君待ちだよ、今」

「え?」

戸惑うウソツプに、ルフィは当たり前前だろというように答えた。

「おれ達もう仲間だろ」

思わぬ誘いに、ウソツプは今度こそ言葉を失った。

なぜ弱い自分にか、他にもっとすごい奴はいるだろうとか、様々な思いが頭の中をよぎる。

だがウソツプは、ぶるぶると頭を振ってそれらの考えを振り払った。

「キャ……!! キャプテンはおれだろうな!!!」

「ばかいえ!! おれが船長だ!!!」

こうして波乱を繰り返し、4人目の仲間が集う事となった。

遠く離れていく帆船——今は海賊船ゴーイング・メリー号を、カヤとロゼ、メリーは静かに見送る。

その表情には、隠しきれない寂しさがにじみ出ていた。

「彼はいつの日にか、ホラを現実にてきるような男になるのかもしれないね……」

「……そうかもしれないわ」

「カヤ、あなたはこれから、彼の励ましに見合うようにならなきゃいけないよ?」

「ええ……!!」

ロゼの励ましに、カヤは涙をぬぐいながら力強くうなづく。

そんな彼女に、ロゼはいたずらっぽい笑顔を浮かべて横目を向けた。

「さうて、私もお店で頑張らなくちゃなア…… カヤには、負けられないから」

「……………!! フフツ、私だって!」

悲しみを乗り越えようとしている娘たちの強い姿に、メリーは思わず目頭をハンカチで拭う。

両親を亡くした病弱な娘や、生きる希望を失った不幸な娘たちは、明日に向かって大きく一步を踏み出そうとしていた。

「新しい船と仲間に!!」

「!!!」乾杯だ——つ!!!」

新たな門出を祝う一同は、知らない。

彼らがいなくなった後も、元気にホラをふき続ける小さな守り人たちが生まれたことを。

第4章 戦うコック

第21話 “二人の賞金稼ぎ”

「できたぞ!! 海賊旗!!! ちゃんと考えてあったんだ、俺たちのマーク!」

「……そういえば、時々紙になんか書いてると思つたら」

満面の笑みを浮かべて、ヘタクソなドクロマークが描かれた旗を掲げるルフィに、エレンオアはジト目でそうこぼす。

身内の鼻屑目でも、その出来はあまりにひどかった。

「コイツには……つまり絵心つてもんがねエんだな」

「ううん……もしかしてこれって芸術なんじゃないかしら」

「どういう芸術? キュビズム?」

「海賊旗は『死の象徴』のはずだろ……まア、ある意味恐怖だけだよ」

「どうだ?」

「よし、描きなおそう」

「えエ——っ!」

情け容赦なく切り捨てるエレンオアに向けて、ルフィの悲しげな叫びがこだました。

頼りにできないルフィに代わり、ウソップがデザインを担当する。

その結果でできた海賊旗に、ナミは満面の笑みを浮かべた。ルフィの描いたものをまともにしたような、麦わら帽をかぶった立派なドクロのマークに賞賛を送る。

「うん！ 上手いっ！」

「こんなところか」

「同じマークとは思えねえな」

「いいな!! あと帆にも描こう!!」

「じゃ、そっちは私に任せて」

「昔から人ん家の壁に、よく落書きしてたからな。けっこう、おれは芸術に長けてるんだぜ」

「助かるよ。デザインの例がある方がやりやすいからね」

できた海賊旗を確認したエレノアは、貼られたままの帆に向けてパチンと合わせた掌を当てる。

青い閃光が走ると、無地の帆に残ったペンキが吸い込まれて、みるみるうちに海賊旗と同じマークが描かれていった。

「おおーっ!! 相変わらず便利だなアお前の力は!!」

「へっへっへん」

「よし！ 完成っ！！ これで『海賊船ゴースト・メリー号』のできあがりだ！！」

完成した立派な海賊船に、若者達は満足げな声をあげてはしゃぐ。

が、色々と作業を続けていた船員達はその場でボタンと仰向けに倒れてしまった。

「は——っ、疲れた！」

「じゃ、お茶でも淹れておくよ。でも味は期待しないでね」

まだ体力に余裕のあるエレノアが、船内に備わっているキッチンに向かう。

その途中、ふとナミが寝返りをうちながら視線を向けた。

「ところで、エレノア？ 天族つてのはみんなあんたみたいに錬金術使ったり、大きくなったり小さくなったりできるの？」

「知らなくい。私が会ったことのある同族は母さんだけだったもん」

ナミの疑問に、エレノアは困ったように首を傾げた。

「その母さんも……私が小さい頃に死んじゃったし」

「あ。ごめん……」

「気にしないで、もうずいぶん昔の話だから」

言葉を失うナミに、気にするなと言うように手を振る。このご時世、肉親を亡くした人間など探せばどこにでもいるものだ。

「ただ私は物心ついたときには体の年齢を変えられるようになってたし……種族での能

力なんだと思うよ？ 足はまア……………錬金術を使って伸ばしてるんだけど、種族的にも相性がいい力なんだと思う」

「まねできそうにねエな」

「そうでもないさ。私の弟子は人間だけど、*“国家錬金術師”*になるぐらいの実力があつたし」

「…？ 何その…国家？」

「国家錬金術師っていうのは…」

ゾロとナミが聞きなれない名称に聞き返し、エレノアが答えようとした時だった。

ドカーン！と轟音が響き渡り、遠くにあつた岩場が吹っ飛んだ。

船に備わつた大砲の練習で、ルフイに代わつてウソップが狙撃したらしい。

「スゲー——当たつた、一発で!!」

「うげっ!! 当たつた、一発で!!」

「……………」

「あー、うん、いいわ。先にアイツらどついて来ちゃいなさい」

話の腰を折られ、頬をひきつらせるエレノアの肩を、ナミは同情しながらポンと叩いた。

ルフィとウソツップの脳天に仲良く一つずつたんこぶを作らせたのち、エレノアは全員の分の紅茶を淹れる。

設備の整ったキツチンは見事なもので、エレノアも心地よく作業を進められた、が。

「うん、普通ね」

「普通にうまいな」

「ああ、普通だな」

「修行が足んねエぞ」

「文句あるなら飲むなっ!! こういうのはあんまり得意じゃないんだよ!!!」

振舞われた紅茶の出来は、仲間達には不評であつたらしい。

不満げな彼らの眼差しに抗議しながら、エレノアはどっかりと椅子に腰を下ろした。

「でもまあ、こんだけ立派なキツチンがあるなら欲しい役割が出てくるね…」

「ああ! 偉大なる航路^{グランドライン}に入る前にはそいつが必要だ」

「長旅には不可欠な要因だな」

「そう思うだろ?」

ルフィが何を言いたいか察した一同は、船長らしい台詞が聞けたことに安堵する。

が、この男の考えはやはりずれていた。

「やっぱり海賊船にはさ、音楽家だ」

「アホかてめエっ!!」

「めずらしくいいこと言うと思っただらそうきたか!!」

「あんた航海を何だと思っただらなの?」

「だって海賊つつつたら歌うだろ!! 当然みんなで」

「そう思っただのはあんただけだよドアホ」

仲間全員から一斉にツツコミを受けながらも反論するルフィに、エレノアはジト目を向けて本気で呆れたため息をつく。

そんな時だった。

「出て来い海賊どもオーっ!!! てめえら全員ブツ殺してやる!!!」

そんな怒鳴り声が聞こえた直後、樽が蹴り潰される激しい音が響く。

いきなり暴れまわっている見知らぬ男に怒りを燃やし、ルフィは険しい表情で甲板に飛び出していった。

「おい!! 誰だお前!!!」

「誰だもクソもあるかア!!!」

サングラスをかけた男は、ルフィ以上の怒りを燃やしながら幅広の刀を振り回す。

怒りのままに暴れる男を、ウソップとナミは船内から恐る恐る窺っていた。

「相手何人だ」

「一人…かな」

「じゃ、あいつに任せとけ」

ゾロはそう言い、ルフィが騒ぎを収めるまで気長に待つ体勢に入る。

しかしウソツプとナミの後ろにいたエレノアが、ピクピクと耳を動かしながら首を傾げた。

「…いや、もう一人いるね。でも…」

「え？」

「…死にかけてる」

そんな中、ズダン！と言う鈍い音を立てて男が倒れ込んだ。ルフィにいい一撃をくらったらしい。

「く……か……!! 紙一重か…」

「分厚い紙一重だね、賞金稼ぎのジヨニー」

「ジヨニー…?」

ジト目を向けるエレノアがサングラスの男の名を言い当てると、彼だけでなくゾロも驚きの表情を浮かべた。

「え…、ゾ…ゾロの兄貴?!?!」

「どうした! ヨサクは一緒じゃねエのか」

「それが……!!」

「知り合いか、なら話が早い。多分、下の小舟に乗ってるのがそうじゃない?」

「何?」

エレノアの一言で、ゾロは慌てて船の端に駆け寄っていく。止められている小舟を確認すると、ロープを伝って横になっていた男をメリー号に移した。

真つ青な顔で氣を失っている彼に、ゾロは眉間にしわを寄せた。

「病氣?」

「ええ……数日前までピンピンしてやがったのに、突然青ざめて氣絶をくり返す……!! 原因は、まったくわからねえ」

医学に乏しいジョニーという男は、もうどうしたらいいかわからないという様子で俯いている。

一方でエレノアは、冷静に男の症状を診断していた。

(歯が抜け落ち……傷が開いて出血……この症状は……)

「ナミ、キッチンのライム使うけど、いいよね?」

「……ええ、こいつらにはあたしが説明しとくわ」

「全く、たかが『壊血病』程度で大騒ぎしちゃって……」

大きなため息をついたエレノアは、本気で一味の先行きに不安を覚えながらライムを

探した。

「壊血病は、一昔前までは航海につきものの絶望的な病気だったの。でも原因はただの植物性の栄養の欠乏、昔の船は保存のきかない新鮮な野菜や果物を載せてなかったから……」

「お前すげーな、医者みてエだ」

「おれはよ、お前はやる女だと思ってたよ」

「船旅するならこれくらい知ってる!! あんたたち、ほんといつか死ぬわよ!!」

「感心しとらんでさっさとライム絞れポケどもっ!!」

「ら……了解っ!!」
ラジャー

持ってきたライムを絞り、果汁を別の器に移しながら怒鳴るエレノアに従い、ルフィとゾロは作業を手伝う。

絞られたライムを飲んだ瞬間、真っ青になっていた男の顔色が戻りその場で小躍りまです始めた。

「ひやつほー!!? 治ったアー!!?」

「治るか!!! そんな急に!!!」

「いいからもう寝てなさいよ……」

エレノアもナミも、ヨサクに呆れて小言を漏らす。

病は気からと以前エレノアは言ったものの、ヨサクのそれはただのバカな勘違いにしか思えなかった。

「申し遅れました、おれの名はジョニー!!」

「あつしはヨサク!! ゾロの兄貴とはかつての賞金稼ぎの同志!! どうぞ、お見知りおきを!! あんた方には何とお礼を言ったらいいのやら、さすがにあつしアもうダメかと思つてやした」

「しかしあらためて驚いた。『海賊狩り』のゾロがまさか海賊になつていようとは」

「ブヘエツ……!!!」

「ぬあつ!!!? 相棒オ——!!!」

「いいから黙つて休んでろ!!」

血を吐いて倒れるヨサクに、ゾロはややハラハラしながらおとなしくしているように頼む。

ピクピクと痙攣しているヨサクを見下ろし、ナミは深刻な顔で一味の顔を見渡した。

「これは教訓ね……」

「長い船旅にはこんな落とし穴もあるつてことか」

「あいつだつてこの船に遭わなきゃ死んでた訳だしな」

「船上の限られた食材で長旅の栄養配分を考えられる『海のコック』……この船に足りて

いない一つは、それだね」

「よし決まりだ!!」海のコックを探そう!!! なにより船で美味しいもん食えるしな!!!」

「アニキアニキ! 海のコックを探さんなら、うつつつけの場所がある。まー、そのコックが付いて来てくれるかは別の話だけど」

ジョニーはそういうと、この先の海にあるという店の話を語ってみせた。

「二」海上レストラン!!」

「そう、ここから2、3日船を進めれば着くはずだ。でも気をつけねエとあそこはもう偉大なる航路^{グランドライオン}のそばだ」

「…やばい奴らが入り込んでるってわけね。賞金首チェックしとこ」

「よかつたら案内しますぜ」

「たのむ——っ!!」

ジョニーの提案に、ルフィ達はノリノリで拳を突き上げる。

こうして一味は一旦進路を変更し、新たな仲間を勧誘すべく海上レストランを目指すのだった。

第22話 バラティエ //

「着きやしたっ!!! 海上レストラン!! ゴロの兄貴!! ルフィの兄貴!! ウソツプの兄

貴!! ナミの兄貴!! エレノアお嬢!!」

「なんで私がアニキなのよ…」

「私だけなんでお嬢?」

「ん?」

「おおっ」

「ああっ!!!」

ジョニーの声で、ルフィたちは慌てて船首の方へと集まる。

そして進路上に停泊しているその船の外観に、彼らは歓声をあげた。

「ど——— つすかみなさんっ!!!」

「でっけー魚っ!!!」

「うわ———っ」

「ファンキーだな、おい!!!」

魚の船首を備え、派手ながらも清潔そうな装飾の施された船がそこにはあった。

華やかで愛嬌のある店の佇まいに、一同が期待を寄せていた。

その時だった、一隻の大型船が近づいてきたのは。

「え？ か…海軍の船!!」

「おっと…」

カモメを模したマークを掲げた戦艦の登場に、メリー号の上で動揺が走る。

ざわめく一同を差し置いて、甲板に一人の男が顔を出すと、エレノアはさっとフードをかぶって顔を隠した。

「見かけない海賊旗だな…おれは海軍本部大尉 “鉄拳” のフルボデイ。船長はどいつだ、名乗ってみろ」

「おれはルフィ。海賊旗はおととい作ったばかりだ!」

うろんげな目でメリー号を見やる、鋼鉄のグローブをはめた海兵・フルボデイに、ルフィは全く臆する様子もなく名乗る。

その後ろで音もなく下がるエレノアに疑問を抱いたナミが、訝しげな表情で彼女を見下ろした。

「…なんでいきなり顔隠してんのよ?」

「んー、一応念のために?」

要領を得ないエレノアの答えに首をかしげるも、ナミはそれ以上追求することなく口

を閉ざす。

この少女に謎が多いのは今更だし、幻の種族ゆえの理由か何かがあるのだろう、と自分を納得させたらしい。

「運が良かったな、海賊ども。おれは今日定休でね。ただ食事を楽しみに来ただけなんだ。おれの任務中には気をつけな。次に遭ったら命はないぞ」

「……胆に銘じておくよ」

脅しのようなフルボデイの捨て台詞に、エレノアはやや警戒しながら呟く。

賞金こそかかっていなくとも海賊は海賊、問答無用で沈められる事態にならなかっただけでも得だと、エレノアはフルボデイに背を向けた。

「おい、やべエぞ!!! あの野郎大砲で、こっち狙ってやがる!!!」

だが、その目論見が甘かったらしい。

ルフィ達が油断した隙に、部下に命じたフルボデイが大砲を用意させていたらしい。

甲板でフルボデイが親指を下に向けた瞬間、砲門が火を吹いて勢いよく砲弾を吐き出した。

「撃ちやがったア~~~~っ!!!」

「ン任せろっ!!!」

絶叫するウソップに代わり、ルフィが向かってくる砲弾の前に立つ。

その場で大きく息を吸い込むと、ボンツと自らを巨大な風船のように膨らませて砲弾を受け止めた。

「なぬ——っ!!!」

「なに…!!?」

「返すぞ砲弾っ!!!」

かつてバギーにやってみせたように、受け止めた砲弾をゴムの張力で跳ね返すと言う離れ業を披露する。

が、今回は受け止めかたが悪かったのかもしれない。

「あ、直撃コース…向こうに」

エレノアがポツリと呟いた直後、跳ね返った砲弾は狙いを大きく外し、バラティエの屋根の一部に炸裂した。

「!!!どこに返してんだバカッ!!!」

爆音と瓦礫が飛び散り、黙々と煙が立ち上る大惨事に、ルフィ達もフルボデイも言葉を失って立ち尽くす。

エレノアもまた顔を真っ白にして立ち尽くし、ほろりと涙を流した。

「慰謝料……修理費……はうっ」

恐ろしい勢いで貯金が消えていく様を幻視したエレノアは、ぽてりと枯れ木のように

倒れ伏したのだった。

「オーナー、本当に大丈夫なんですか!!?」

予想外の襲撃を受けたバラティエ、その直撃を受けた店主の部屋。

そこでは、木製の義足をつく、血まみれになった大柄な老人が憤怒の形相を浮かべていた。

「大丈夫じゃねエつつつてんだろぅが!!! いいから早く店へ戻れ!! 働け!!!」

「しかし!! 店長の体が…!!」

「てめエらおれを怒らすのか!!」

「……!!」

「客にメシを食わしてやるのがコックだ!!! おれの店を潰す気か、ボケナスども!!!」

若いコック達の心配も鬱陶しいと怒鳴りつけ、バラティエのオーナー・ゼフは砲撃の犯人に対して怒りを燃やす。

「連れてきました!! オーナー!! 犯人はコイツらです!!」

しばらくすると、一人のコックがルフィとエレノアを担いで店主の元にやってくる。

連れ込まれたエレノアはルフィに先んじて膝をつき、フードを取り払うと完璧な土下座の体勢で深々と頭を下げた。

「この度はうちのものが多大なご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びします申し訳
 (ぎ)ぎいませんでした」

「すまん、おっさん」

「もつとちやんと謝れボケエ!!! …本人にもしつかりと反省させます」

「…おい、お前海賊じゃなくてただのどつかの母ちゃんだろ」

ガゴン、と容赦なくルフィの頭を殴りつけるエレノアに、ゼフは冷や汗を流しながら
 呟く。

少なくとも荒くれ者には見えなかった。

「ず…ずびばぜんでじだ……」

「本人もこの通り反省して入ります。本来ならばお詫びの品や弁証と言った誠意をお見
 せする場なのでございませうが、あいにく我々は航海を始めたての弱小海賊でござい
 ましてお渡しできるものが何一つなく……」

「もういいもういい…丁寧すぎてケツがかゆくなってきた」

エレノアの話し方に疲れたのか、単に慣れていないのかゼフはうんざりした顔で手を
 振る。

誠心誠意謝罪されていることはわかるが、性に合わない言葉遣いを受けても困るだけ
 であった。

「金がねエンじゃ働くしかねエよな…」

「そうだな。ちゃんと償うよ」

「……ちなみに、どのくらいの期間に」

「1年間の雑用タダ働き!! それで許してやる」

「い…1年!!?」

思ったよりも高く代償がついたことに二人は驚きの声をあげる。

だがエレノアは、諸々の慰謝料を省みて妥当だと諦める他になかった。何割かはフルボデイのせいだが、あれはあれで仕事をしただけなのだから。

が、この男は納得しなかった。

「1週間にまけてくれ」

「おいナメンな…人の店を砲弾で破壊し、料理長のおれに大ケガを負わせといて、たった1週間のただ働きで落とし前はつくめエよ…」

強面の顔をさらに険しくするゼフに、エレノアはこれ以上怒らせるべきではないと諫めようとするが、長年の夢がかかっているルフイは一步も引かなかった。

そしてついには、心底お怒りの様子のゼフがノコギリを取り出してみせた。

「…よし小僧。そんなに時間が惜しいのなら、手っ取り早いケジメのつけ方を教えてやろう。足一本、置いてけや!!!」

自分と同じように片足になったら許してやろうとうことか。

流石に等価ではないだろうと冷や汗を流すエレノアは、困ったように目をそらした。
「あ…足一本と申されましても」

ためらいがちに服の裾を持ち上げ、自分の金属の足をゼフに見せる。

すると流石に驚いた様子のゼフが、大きく目を見開いてエレノアの足を凝視した。

「私もうこんなんですし」

「おお!!? ……そ、そうか。そりや悪いことを…」

初心者とはいえ海賊相手に凄んでいたゼフは、少女が思った以上の苦難を抱えていることを知って同情する。

が、すぐに我に返った。

「つて、おれアてめエに言っただよボケナス!!! //料理長ドロップ!!!」

しれっと場を流そうとしたルフィに、ゼフは怒りの一撃を食らわせる。

しかしゼフの攻撃は、傷ついた店主の部屋には強すぎたようで、踏みつけたその場がめこつと沈み込んだ。

「ぬ」

あ、しまった。

そんな表情のまま、ゼフはルフィを踏みつぶしたまま床を踏み抜き、階下のダイニン

グへと勢いよく落ちていった。

「ああああああ!!!」

「…なんて元気なケガ人」

片足とは思えない暴れっぷりを披露したゼフに、エレノアは戦慄の表情を浮かべて体を震わせる。

しかしいくらなんでも一年は長すぎると、なんとか代価にできるものはないかと当たりを見渡し、ふと思いついた。

「…直せなくても、作りかえるぐらいはできるか。ちよつとぐらいは誠意を見せとかないかね」

自分でできることといえば、そもそもこのぐらいのことではしかないのだとエレノアは苦笑する。

リフォームリフォーム、とエレノアは両手のひらを合わせ、青い閃光を部屋中に走らせた。

「こんなもんか！ よし」

数分後、元の形とは大きく異なりながらも綺麗に作り直された部屋がそこにはあった。

瓦礫から元の形を想像し、より豪華な仕様になるようにデザインした結果、万人が唸

る内装に変えることができたとエレノアは満足げに頷いた。

——海賊クリークの手下を逃がしてしまいました!!

“クリーク一味”の手掛かりにと、我々7人がかりで、やつと捕まえたのに……!!
その時、自分の耳が階下で起こる騒ぎを捉える。

気になる名前を聞いたエレノアは、眉間にしわを寄せて記憶を辿った。

「……クリーク?」

不穏なことを聞いたと、エレノアは店の外側から下の様子を伺う。

聞くところによれば、悪名高いクリーク海賊団の一人を七人がかりで捕らえたはいいが、尋常ではない生命力で逃げ出してきたらしい。

しかしすでにボロボロの様子のは、バラティエのコックらしい逞しい腕の男に滅多打ちにのされてしまっているようだ。

「代金払えねェんなら、客じゃねエじゃねエか!!」

「いいぞコック!!」

「海賊なんてたたんじまえ。パティさん!!」

「客じゃねエ奴ア消え失せろ!!!」

客商売とは思えない形相と口調で海賊を叩き出したコックは、エプロンの端を持ち上げて客達の拍手喝采を受ける。

いつもよくあることのようにだ。

「さーどうぞ『お客様』どもっ!! 食事をお続けくださいさーい!!」

わつと歓声が上がリ、乗客達はバラティエに喝采を送ると、また食事に戻っていく。エレノアは久しぶりに感じる恐怖に、ブルブルと肩を震わせた。

「……お、おっそろしい店だな、海賊より海賊みたい……オーナーさんにも逆らわないようにしとっ」

よくもまあルフィはあの男に逆らったものだ。

できるだけ早く贖罪を終えてこの船を降りたいものだ。割と切実に。

「……雑用一人で1年か。じゃあ私も合わせて半年……さつきリフォームした分で5か月……いや、4か月にしてもらえないか交渉するか」

「……こういうことはどちらかといえばナミの方が得意そうだが、巻き込むのも気がひけるために今回はなし。」

いきなり前途多難だ、とエレノアは肩を落とすのだった。

バラティエのコック・パティに蹴り出され、空きっ腹を鳴らしながらうずくまる海賊・ギン。

空腹に苦しむ彼の前に、コトリとピラフが盛られた皿が置かれた。

「食え」

そう言つてギンの隣に腰を下ろすのは、金髪にぐるぐるとぐるを巻いた眉が特徴的な若い男、バラティエ副料理長のサンジ。

ギンは目の前に置かれた食べ物に目を輝かせると、飛びつくようにそれを口に掻き込んでいった。

「面目ねエ……!! こんなにうめエメシ食つたのは……おれははじめてだ……!!」

温かく美味な料理を口に入れるたびに、ギンの目からはポロポロと涙がこぼれる。

海賊として生きてきた、あくどいことばかりをやつてきた彼にとつてその暖かさは、苦しいくらいに幸せなものであった。

「……………!!! 面目ねエ、面目ねエ!! 死ぬかと思つた……!! もう、ダメかと思つた……………」

「クソうめエだろ」

ただただ感謝の言葉しか出ないギンに、サンジは誇らしげに笑うのだった。

「……………どうなることかと思つたけど、探し物は見つかったね」

「おう!!」

二人の様子を見ていたエレノアは、ルフィに任せするように肩を叩く。

同じく、離れた場所でその様子を見ていたゼフの元に行き、エレノアは姿勢を正した。

「オーナー、さっきの件なんですが…」

「…てめエがアレ、直したのか」

「あ…」

少し慌てていたからだろうか、家主の許可なく勝手にリフォームを行ったと今更になって気づいた。

真つ青になるエレノアを、ゼフはフンと鼻で笑った。

「見てくれは良くてもところどころ雑だ。修理費は確かに浮くが、あれじゃせいぜい二か月分つてところだ」

「……………じゃあー!」

「あの小僧と一緒に5か月…!! カッチリ働いてもらうぞ」

「はい!!」

不敵な笑みを浮かべて背を向けるゼフに、エレノアは感謝の笑顔を見せる。

天族としての姿を見せても何も言わないところをみるに、なかなか懐が広い人らしい。

「とりあえず、着替えはこっちで貸してやるから着替えて来い。」

「はい! ……って、あれ? オーナー? あんな荒くれどもばっかりのレストランなのに、なんで女子の制服が…」

「一応募集に性別は不問だったんだが、誰一人来なくてホコリをかぶってただけだ。数だけはあるからてきとうに選べ」

「りよ、了解…」

それなりに願望はあったのだな、とエレノアはゼフの印象が少し変わるのを実感する。

さて先ずは仲間に事情を説明しなければ、と歩き出そうとしたエレノアの耳が、また声を拾う。

——行けよ、ギン…。

——ああ…悪いな、怒られるんだろ…。

おれなんかただメシ食わせたから。

——なーに…。

怒られる理由と証拠がねエ。

皿が割れる音と、海に落ちる音が届き、エレノアはふつと笑みを浮かべる。

荒くれ者しかいないレストランに、とんだお人好しがいたものだ。

「サンジ!! 雑用!! てめエらとつと働けエ!!」

ゼフの怒号に急かされる二人を見やりながら、エレノアは期待に胸を膨らませる。思った以上の成果が得られそうだ。

「∴彼の勧誘は任せたまよ、ルフィ」

第23話 “新入り二人”

「今日からお世話になります、新入りの雑用のエレノアです。よろしくお願いします！」
「おれはルファイ!! どうぞよろしく!!」

荒くれ者のコック達を前に、大人の背丈となったエレノアは丁寧に、ルファイはいつも通り堂々と自己紹介する。

ルファイはいつもの格好にエプロンを、エレノアは用意があった女性用のウエイトレスの格好に自前でフードを追加し、耳と尻尾と背中の翼が隠れるような改造を施していた。

そんな彼らを待ち受けていたのは、戦場であった。

「3番のオードブルおまちっ!!?」

「はいっ!!?」

「6番のデザートまだか!!?」

「あと20秒待って!!? 先に7番の前菜出しちゃおう!!」

「8番の注文取ったの誰だア!!?」

「今運びまーす!!」

注文に次ぐ注文、運んでも運んでも舞い込んでくるオーダーに汗だくになりながら、エレノアは修理費等のために奔走していた。

「いや、使えるわあの新入り」

「店に手エ出された時アブツ殺してやろうかと思つたが、こんだけ動けるならこれからもいてほしいぐらいだ」

「あとかわいいいな」

初めは歓迎していなかった気性の荒いコック達も、真面目でひたむきなエレノアにほだされてデレデレとした笑みを浮かべるようになっていた。

男しかない職場は、やはり誰もが辛かつたらしい。

「あ、パティ！ 5番のお客様はたまご使わないで。アレルギーあるから」

「なにイ!? わ…わかつた!!?」

「あと12番のお客様はデザートおまけしてあげて。プロポーズしそうな雰囲気」

「ちくしよう爆発しちまえ!!!」

「そして何より気配り上手で話し上手だ。今日一日で常連を3人も増やしちまつた」

「マネできねエ…!!!」

同時に、相当な世渡りの能力を發揮する海賊の娘に、戦慄の目まで向けるようになっていた。

その傍で、ルフィは暇そうに腰かけた椅子を傾けて遊んでいた。

「やることねえんなら皿でも洗つてろ雑用!!」

「よしてきた」

袖捲りをして洗い場に向かうルフィに舌打ちしながら、コックの一人であるカルネは隣で魚をさばくパティに目を向けた。

「——しかしいいのかい、パティよオ」

「何が」

「さっきお前が店でボコボコにした野郎はクリークの一味の者だったそうじゃねエか」

「ああ、そんなこと言つてたな」

「もしかしてそれつて『首領・クリーク』？ 東の海で最強最悪つて言われてる?」

「おう、それだそれ」

オーダーを取つてきたエレノアが興味を示すと、カルネは待つてましたとばかりに語つてみせた。

「50隻の海賊船の船長達を総括する『海賊艦隊』の首領なんだから、怪物なんだよま

さに!!」

「総数5千人を越える大艦隊なんだつて? 所詮は数だけそろえた烏合の衆じゃないの

?」

「だが、例えばさっきの野郎がこのレストランであんな目に遭ったとクリークに伝えたとしたら、象の大群がアリでも踏み潰すかのように、このレストランはミンチにされちゃうだろうな」

「じゃあ、あの男にやおとなしく御馳走してやった方がよかつたのかい。それじゃあほかの『お客様』に失礼だろうが!! 海上レストラン『バラティエ』名物、戦うコックさんの名が泣くぜ!!!」

「私もそう思うよ」

わざとビビらせるような説明をするカルネにパティは胡散臭そうに鼻で笑い、エレノアもジト目で同意する。

「大艦隊って言ったって、一人ひとりが象ほどの脅威があるとは思えないな。そんなにやばい勢力なら、すでに『グランド偉大なる航路ドライン』で頭角を現していたっておかしくないと思うし」

「それ見ろ、おれ達が今まで一体どれだけの海賊どもを追い払ってきたと思ってるんだ?」
「頼もしいね」

パティが大きな腕で力こぶを作ると、よく言ったとエレノアも不敵な笑みを浮かべる。

その裏では、パリンパリンと甲高い音が連続で鳴り続けていた。

「んでてめエは何枚皿割ってんだよ!!!」

「あ、わりい。数えんの忘れてた」

「それを謝んのかっ!!」

別の洗い物を命じられるルフィに、呆れた目を向けるエレノア。

そこへ、パティが小さく耳打ちしてきた。

「おい新入り、張り切ってくれんのはありがたいが、サンジに目エつけられねエように
氣い付けろよ」

「なんで? 紳士っぽかったけど」

「女癖が悪イんだよ。今も店内で客くどいてるぐらいだしな」
ダイニング

「またか!!! だいたい俺はあいつが『副料理長』やってることだけでムナクソ悪イんだ」

「しょうがねエよ。あいつは店一番の古カブなんだから」

「…そんなに長くいるんだ」

かなり若かったために勘違いしていたが、意外と年季が入っているのだなと驚く。

ということとは相当幼い頃からこの店にいるということか。

「熱ぢい!!!」

「厨房から出てつてくれエ!!!」

「すみませんすみませんウチのアホがほんとにすみません」

その横で、使ったばかりを大鍋を洗おうとして手を焼かれ、のたうちまわるルフイにコック達から怒号が飛ぶ。

エレノアはもう、平謝りする他になかった。

「あんたはもういいから、注文取ってきて。お客が何を食べたいのか聞いてくる、これだけ」

「むい」

「ちゃんとパーティが教えたように接客するのよ!!」

「わかった」

不器用な上に馬鹿力なこの男には、もう厨房で任せられる仕事はないと、エレノアはダイニングに追い出す。

そこはかたなく漂う疲弊感に、パーティは思わずエレノアの肩を叩いていた。

「…苦労してるな、お前」

「いつつもこんな感じさ……もう慣れたよ」

「……ちよつとだけつまみ食いしてけ、オーナーには黙つとくから」

できたての料理を少しだけよそつてくれるカルネに、エレノアは不覚にも泣きそうになった。

その向こうで、今度はルフィが客と大騒ぎしている声が聞こえてきた。

「な……!! 何てことするんだお前はア」

「てめエが何てことするんだ!!!」

厨房に重たい沈黙が降りる。

全員が新入りウエイトレスに同情の眼差しを抜け、いたたまれなさそうに顔を歪める。

がつくりと肩を落としたエレノアは、くつと涙をこらえて厨房を後にした。

「……………すみません、行ってきます!!!」

「カルネ……!! おれアあいつが不憫でならねエ……!!」

「あとでうまいまかない食わせてやろう、な?」

気苦労の絶えないエレノアを目の当たりにし、パティは男泣きする。

なんであんな船長について行っているのか、疑問でしかなかった。

「あんたは一体何やってるの!!? ……ってああ、みんなか」

「あ、エレノア! その制服かわいいじゃない!」

「コイツと一緒に半年ってのはさぞ大変だろうなア……」

「もつと叱つてやってくれ。このアホおれに鼻くそ飲ませようとしやがって」

騒ぎの聞こえた方に行ってみれば、ルフィが注文を受けに行っていたのは仲間達の席

だった。

みんな雑用期間で足止めを食らうことに文句はなさそうではあったが、エレノアは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「なんかホントごめんねー。こんなことになっちゃって」

「そんなに落ち込むことはないよエンジンル…むしろ君が犯した罪のお陰で、僕らはこうして出会う事が出来たのだから」

「ん？」

肩を落として謝罪するエレノアの腰を、甘ったるい声をかけながら一人の男が抱いてきた。

「君の話は聞いているよエレノアちゃん…横暴な船長とあのクソジジイのために、ここに縛り付けられてしまったんだらう？ 可哀想に…でも安心して。僕がいる限り、君に孤独なんて許さないから♡」

気障つたらしい言葉でエレノアを慰める、副料理長サンジの姿がそこにはあった。

デレッツデレに緩んだ顔で、エレノアとナミのいるテーブルに口説きにやってきたのだ。

「ああ海よ、今日という日の出逢いをありがとう。ああ恋よ♡ この苦しみにたえきれぬ僕を笑うがいい。僕は君達となら海賊にでも悪魔にでもなり下がれる覚悟が今でき

た♡ かしなんとという悲劇!! 僕らにはあまりに大きな障害が!!」

「サンジくん…ブレないね、君」

「障害つてのア、おれのことだろうサンジ」

エレノアが呆れていると、雷のように低い声がかけられる。

料理長ゼフの登場に、サンジはげつと忌々しげに顔を歪めた。

また小言を言われるのかと思えば、ゼフの口から出てきたのは驚きの一言であった。

「いい機会だ、海賊になつちまえ。お前はもうこの店には要らねエよ」

その言葉にサンジは目を見開き、すぐに怒りに顔を歪めた。

エレノアも驚き、その場に立ち尽くしてゼフとサンジを交互に凝視した。

「…おいクソジジイ。おれは、ここの副料理長だぞ。おれが、この店に要らねエとはどういふこつた!!」

「客とは、すぐ面倒起こす。女とみりやすぐに鼻の穴ふくらましやがる。ろくな料理も作れやしねエし、てめエはこの店にとつてお荷物なんだとそう言ったんだ」

今にも嘔みつきそうな勢いでサンジが反論すると、ゼフはそれ以上に忌々しそうに吐き捨てる。

「知つての通りてめエはコックどもにケムたがられてる。海賊にでも何にでもなつて早くこの店から出てつちまえ」

「何だと、聞いてりや言いてえこと言つてくれんじやねエかクソジジイ!!! 他の何をさしおいてもおれの料理をけなすとは許さねエぞ!! てめエが何を言おうとおれはここでコックをやるんだ!! 文句は言わせねエ!!!」

「料理長の胸ぐらをつかむとは何事だ、ボケナス!!!」

「うわ!!!」

「おつとつと!」

ゼフに掴みかかったサンジだが、ゼフの背負い投げによってテーブルの上に叩きつけられる。

とつさにエレノアが手を伸ばし、犠牲になりかけた料理をとつて避難させた。

「てめエが、おれを追い出そうとしてもな!!! おれは、この店でずっとコックを続けるぞ!!! てめエが死ぬまでな!!!」

「おれは死なん。あと100年生きる」

「……オーナーならホントに生きてそうなのが怖いな」

「口の減らねエジジイだぜ……!!!」

背を向けるゼフに宣言するも、ゼフはもう振り返りもしない。

肩を怒らせていたサンジだったが、心配そうに見つめてくるエレノアに気づくとすぐに表情を変えた。

「ごめんよ、エレノアちゃん…怖いもの見せちゃって。あのジジイにはあとできつく言っとくからさ」

「なに言ってるの。こちとら海賊だよ？ あれより怖いものなんでもっとたくさん目にしてきたんだから」

「でもこれで許しが出たな。これで海賊に」

「なるか!!」

「はいはい、もういいから！ ルフィもサンジくんもさつさと注文取りに行って」

「使い物にならないテーブルを片付けながら、エレノアは二人に元の業務に戻るようにならなければならない。告げた。」

「が、席を移動した先でまた問題が起きた。サービスと言ってデザートをつけてもらったナミが、色っぽい表情でサンジに迫り始めたのだ。」

「ところでねえ、コックさん？」

「はい♡」

「ここのお料理、私には少し高いみたい」

「もちろん!! 無料ただで♡」

簡単に色仕掛けに乗るサンジに、エレノアは呆れて深いため息をつく。

パティの言っていた通り、女性にはとことん甘い性格のようだ。逆にゾロやウソップ

には微塵も気遣いなどしていない。

流石に、これ以上は見逃せなかった。

「サンジくん。その料理の分、君のお給料から天引きしとくからね」

「うっ!!! お…お金のことになると急にシビアになるね、エレノアちゃん……」

「『等価交換』だからね、ビタ壺文容赦はしないよ」

「…そのそつけない所も素敵だよ」

バツサリとサンジの給料カットを宣言し、エレノアは注文を厨房に運ぶ。

ことに金勘定で彼女は容赦をするつもりはなかった。

そんな、年上であろうが男相手だろうが臆することのないエレノアに、ゼフは思わず唸り声をあげていた。

「おい雑用。タダ働き一週間にまけてやるから、お前んとこのあの娘うちにくれ」

「いやに決まってるんだろ。何言ってるんだおっさん」

横暴な提案を、テーブルで茶を飲んでいたルフィは即座に拒否する。

厨房からは、コック達の期待の眼差しが刺さりそうなほどに送られていたが、その要求は流石に飲むことはなかった。

「ところでためエは何をくつろいでんだ雑用っ!!!」

無論、サボっていたルフィはサンジに容赦のないかかと落としをくらっていた。

エレノアは自由の日はいまだ遠いことを感じ、深いため息をつくのだった。

第24話 “戦うコック”

ルフィとエレノアのバラティエでの日々が始まって、数日後のこと。

店内は、懐きとざわめきでいつもとは違う騒がしきを見せていた。

「ドクロの両脇に、敵への脅迫を示す砂時計……とーとー来たかア。『^{ドン}首領・クリーク』の海賊船」

徐々に近づいてくる海賊旗に、エレノアは目を細めながら呟く。

その一言で、バラティエは一層大きくざわめき始めた。

「見ろパティ!! マジで来ちまった!! 追い払ってくれるんだろうな!!」

「ま……まさか間違いじゃねエのか!!? 兵力五千人の海賊艦隊の首領^{ドン}だろ……!!? たった一人の部下の仕返しのために、わざわざ来るわけ……」

「来てるんだよ、間違いなくその船が!!」

「そうとは思えないな」

まさか自分のせいではあるまいかと真っ青になるパティだが、エレノアは冷静なまま呟く。

というか、やや困惑気味にクリーク海賊団の船を見つめていた。

「何言つてやがんだ!!? 現にあんなデカイ船が…!!」

「うわさに聞くクリークの性格から考えても、部下をそこまで大切にする男には思えない…:…むしろその逆で、瀕死の部下一人平気で見捨てる残虐な奴だと思う。…:…何よりも」

エレノアの視線の先にあるのは、艦隊とは名ばかりのたった一隻の巨大な船。

しかもその船体は深い裂傷が刻まれ、幽霊船と見間違えそうなほどに哀れな姿をさらしている。

「あんなボロボロの船一隻で、仕返し?」

獣の形をした船首は半分がえぐられ、別種の恐怖を抱かせるが、やはりどう見ても普通の状態ではない。

いつ沈んでもおかしくないように見えた。

「あれほどの巨大ガレオン船が、ああもいたためつけられるなんて…」

「まず人の業じゃねエ…:…なんかの自然現象につかまっちゃったんだろう」

「確かにそう見えるけど…:…でも、なんだろあの傷」

サンジの分析も、帆の状態を見る限り大体は正しいとエレノアは思う。

しかし船体に刻まれた傷跡は、暴風雨で傷ついたにしては断面が綺麗すぎる気がした。

「斬撃の痕みたいだ」

それができる人間を一人知っているが、^{グランドライオン}偉大なる航路でもないこんな田舎の海に出向いてくるとは思えず、ますます疑問がつのつた。

そうこうしているうちに、ガレオン船から二人の男がバラテイエに渡つてきた。

現れたのは、以前バラテイエを訪れたギンと、彼に支えられる大男。おそらくは海賊艦隊の首領クリークと思われた、が。

「すまん……水と……メシを貰えないか……、金ならある、いくらでもある……」

その声はあまりにも弱々しく、ギンに支えられてやっと立っているくらいに衰弱しきつていた。

「な……………」

「なんだありや……威厳も迫力もねえ、あれがクリークか？」

その姿からは、東の海を震撼させたおそろしき海賊であるなど考えられず、コックや乗客達に動揺が走る。

「……頼む、水と食料を……!!」

「お願いだ!! 船長を助けてくれ!! このままじゃ死んじまうよ!!!」

倒れこむクリークに寄り添い、懇願するギンだが、誰一人として手を貸そうとはしない。

腫れ物を見るかのように、冷たい目を向けるだけであつた。

「はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!! 　こりやいい!!? 　傑作だ!!? 　これが 　あの名だたる大悪党 　『首領・クリーク』の姿か!!?」

「今度は金もあるんだぜ!!? 　おれ達は客だ!!!」

「すぐに海軍に連絡をとれ!!? 　こんなに衰弱し切つてるとは政府にも、またとねエチャンスだろう!!! 　何も食わせることアねエぞ!!? 　取り抑えとけ!!?」

「そうだ!!? 　そいつが元氣になつた所で何されるかわかりやしない!!?」

「日頃の行いが悪いんだ、ハラすかして死んじまえ!!?」

「クリークを復活させたら、まずこの店を襲うに決まつてる!!? 　一杯の水すら与えることはねエ!!?」

パティに賛同し、客達からも罵倒の声がぶつけられる。

どんなに衰弱していても、助けることなどあり得ないと思うまでに、クリークの悪名は知れ渡つていた。

「…悪いけどさ、あんたの気持ちはよくわかるよ。 ……でもそのクソ野郎のことだけは信用できない」

「……………!!? 　あんた…」

「『ダマし討ち』のクリーク……海兵になりすまし、海軍の船上で上官を殺し、その船を乗つとることで海賊としてののろしを上げた凶悪な男……!!?」

他の客と同じように、冷めきつた目で顔を伏せるクリークを見下ろすエレノアに、ギンはなおもすがるような目を向ける。

しかし、クリークの所業を知っているエレノアに、そんな眼差しは意味がなかった。

「時には『海軍旗』をかかげて港に入り町や客船を襲い、『白旗』を振って敵船に襲いかかったり……勝ち続けるためだけに手段を選ばない、仁義も何も持ち合わせてない最低の男だよ」

「何もしねエ、食わせてもらつたらおとなしく帰ると約束する……!!? だから頼む……助けてくれ……!!」

「断る。どんな甘い考えで、命乞いする海賊が助けてもらえらると思つてるの?」

震える体で土下座し、恥も何もかも捨てて懇願するクリークにもエレノアは容赦無く、吐き捨てるだけだった。

「わたし達は世の嫌われ者……あんだだつて散々あくどいやり方で生きてきたんだ。それにふさわしい最後までらい覚悟できなきや、あんたは三流以下だよ」

「お願いしますから……!!? 残飯でも何でもいいですから……!!?」

「首領……!!?」

船長の情けない姿に、ギンは苦しげに顔を歪めて涙を流す。

その哀れな姿に、乗客達からも悲痛な表情が向けられるも、エレノアは頑として睨みつけたままであった。

「けっ、新入りの辛辣さにや同情するが、土下座なんぞ意味ねエつての…!!?」

「おい、そこをどけ。パティ」

流石にちよつと厳しすぎやしないかと眉間にシワを寄せるパティが、突然真横にぶつ飛ばされた。

邪魔なコックを蹴り飛ばしたサンジは、以前と同じようにできたての料理を盛った皿をギンに渡した。

「ほらよ、ギン。そいつに食わせろ」

「サンジさん!!?」

ギンから料理を受け取ったクリークは、人目も憚らず、行儀悪く素手でかき込む。

ポロポロ涙をこぼしながら、空腹の痛みが癒されていく感覚を堪能した。

「すまん…!!!」

「ちよつとサンジくん?!」

「おいサンジ!!!」 すぐに、そのメシを取り上げろ!!! てめエ、そいつがどう言うやつか新入りの話を聞いてなかったのか!!!」

見過ごせないとエレノアが怒鳴り、カルネがエレノアに賛同する。

「この男、本来の強さもハンパじゃねエ……!!? 飯食つたらおとなしく帰るだと? ことに限つてありえねエ話だ。そんな外道は見殺しにするのが、世の中のためつてもんだ!!!」

カルネが言い切つた瞬間だった。

料理を全て平らげたクリークが、恩人であるはずのサンジに強烈なリアットを喰らわせたのだ。

「だから言ったのに……案の定やつてくれるじゃない、死に損ないの恩知らずが」

吹っ飛ばされるサンジに、エレノアは呆れたため息をつく。

とつさに跳んで距離を稼ぎながら、クリークが噂通り、いや噂以上の外道であったことに怒りを燃やした。

「いいレストランだ。この船をもらう」

「言わんこつちやねエ!!? これがクリークなんだ!!! この船をもらうだと!!!」

「うちの船はボロボロになつちまつてな、新しいのが欲しかったんだ。お前らには用が済んだらここを下りてもらおう」

恩義も何も抱いていない、傲慢な要望にバラティエに緊張が走る。

食料を要求しただけでは飽き足らず、船まで奪おうというのか。

その間にエレノアはバラティエの裏手に回り、一般人の客達を裏口から誘導していた。

「はい、落ち着いて船にお乗りください。押さないで押さないで。落ち着きましたらまた海上レストラン・バラティエをご利用ください。」

「言ってる場合かア!!? この船を奪われるかもしれねえんだぞ!!?」

「何? じゃあみすみす明け渡すつての?」

「うっ……い、いや……そんなつもりは毛頭ねえが……!!?」

ジト目でいうと、コックは気まずそうに目をそらす。

一方で無茶な注文に怒りを燃やすカルネ達は、断固とした態度でクリークに向き合っていた。

「この船を襲うとわかってる海賊を、あと百人おれ達の手で増やせつてのか……!!? 断る!!!」

「断る……? 勘違いしてもらっちゃ困る。おれは別に注文してるわけじゃねえ、命令してるんだ。誰も、おれに逆らうな!!! それとだ……そこにいる女。そいつをこっちによこせ」

さらにクリークは、誘導を終えて戻ってきたエレノアを指差した。

半分以上聞いていなかったエレノアは目を丸くし、コック達は驚愕の表情でクリーク

を凝視した。

「その女はおれをさんざんバカにしてくれやがった……この、おれにたてつきやがった……!!! 見せしめにぶつ殺してやりてエが、その前に色々と使わせてもらおうとしよう」

「なんだと………?!?!」

「辛いだろうなア……溜まりに溜まつてる百人以上の野郎の相手をするのは。ブツ壊れようが死んじまおうが解放する気はねエがな……!!!」

下卑た笑みを浮かべてエレノアを見つめるクリークに、彼女を気に入っているコック達の怒りが集まる。

それは無論、サンジも同じであった。

「……クソ外道が」

「サンジさん、すまねエ……おれは……こんなつもりじゃ……」

ギンにとつても、今回のことは予想外の事態であつたらしい。

申し訳なきさうにうつむく彼を、流石にエレノアも責めるわけにはいかなかった。するとサンジは、よりよるとややおぼつかない足で立ち上がった。

「てめエは……?!?!? なんて取り返しのかねエことしてくれたんだ………! おい、ど

こへ行く、サンジ!!?!」

「厨房さ。あと百人分、メシを用意しなきゃならねエ」

「なにイ?!」

サンジの答えに、パティ達は驚きの声を上げる。

厨房に行こうとするサンジを取り囲み、コック達は銃を構えて止めた。

だがサンジは、それを敢えて受け入れるように胸を張った。

「わかつてるよ…相手は救いようもねエ悪党だつてことくらい…。でもおれには関係ねエことだ。食わせて、その先どうなるかなんて考えるのも面倒くせエ……………」

思わずエレノアの眉間にしわがよるが、一応の言い分は聞こうと我慢する。

するとサンジはわかっているというように頷き、エレノアとまっすぐ向き合った。

「あいにくうちのウエイトレスを渡すつもりはさらさらねエが、メシは別だ……食いてエ奴には食わせてやる!!! コックつてのは、それでいいんじゃねエのか!!!」

「……………それがあんたの矜持つてことか」

誰かに理解されなくとも、譲れない思いがあることを察したエレノアは、売られたと勘違いしたことを恥じる。

固い意志を持った彼をじつと見つめ、ニツコリと微笑みを浮かべた。

サンジの股間を思いつき蹴り上げながら。

「でも寝てろ」

「サンジイ———!!!」

泡を吹いて倒れるサンジに、コック達が銃を捨てて慌てて駆け寄る。

確かに殺しても止めるつもりではあったが、あのような止め方をされたサンジを放っておくわけにはいかなかった。

「私は自分を渡す気はないし、敵に情けをかける気もない。……食いたいなら、食後のデザートだけでもたらふく食わせてやるよ!!?」

エレノアはその場でブーツを脱ぎ、自身の鋼の足をさらしながら構える。

思わぬものの登場に、パティ達や気絶しかけていたサンジは目を見開いた。

「んなアっ…!!?」

「エレノアちゃん…その足……!!?」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべた瞬間、エレノアの義足の膝部分から一発の砲撃が飛び出す。

流星に驚いたクリークにその一撃が炸裂し、バラティエのドアを粉碎しながら思いつき吹き飛ばした。

「や、やるじゃねエか新入り…!!?」

「いつけね、扉壊しちゃった…オーナーに怒られちゃうな」

「なに、店を守るためだ。小せエ被害さ…」

ガシャン、と義足を戻すエレノアをコック達が讚える。

だが、壊れた扉から立ち上る煙の中から起き上がった影に、その場にいた全員が言葉を失った。

全身を金色の鎧で覆ったクリークが、苛立たしげに顔を歪めて立ち上がったのだ。

「やってくれたなクソ女……!!? クソマズいデザート出しやがって、最低のレストラんだぜ……………」

「う!!! ウーツ鋼の鎧!!?」

「くだらねエ小細工を……!!? たたみかける!!!」

「オオツ!!?」

「ま、待って!!? むやみに突っ込んだら…………!!!」

今度は自分たちの番だと、パティ達が武器を手に躍りかかる。

クリークは不機嫌そうに鼻を鳴らし、鎧の各部を展開させると、そこからいくつもの銃口を露出させた。

「うっとうしいわア!!!」

「うわああああ!!!」

クリークの全身から発射される銃弾の雨にさらされ、コック達は重傷を負う。

エレノアもまた被弾し、勢いを受けてテーブルに激突した。

「あぐっ!!?」

「エレノアちゃん!!?」

「……なつ、なんつー野郎だ…!!? 全身武器とは……!!?」

「虫ケラどもが…この、おれに逆らうな…!!? おれは最強なんだ!!! 誰よりも強い鋼の腕!!? 誰よりも硬いウーツ鋼の鎧!!! 全てを破壊するダイヤの拳!!! 全身に仕込んだあらゆる武器!!! 50隻の大艦隊に五千人の兵力!!! 今まで全ての戦いに勝ってきた!!? おれこそが首領と呼ばれるにふさわしい男!!!」

過剰なほどの武器を備えた我が身を見せつけ、吠えるクリーク。

力を見誤ったコツク達に動揺が走る中、クリークはなおも逆らった者達に凄んでいた。

「おれが食料を用意しろと言ったら黙ってその通りにすればいいんだ!!! 誰も、おれに逆らうな!!!」

「だから…聞くわけないってさつきから言ってるでしょうが」

不機嫌そうにエレノアは立ち上がり、クリークを睨みつける。

立ち上がった際に、彼女の義足からポロリと銃弾が落ち、そのまま踏み潰される。

まだやってやるといふ無言の意思表示であったが、そんな彼女の前に立ちはだかる人影があった。

「新入り、挑発するのもそれくらいにしておけ」

「！ オーナー・ゼフ……」

「百食分はあるだろう……さっさと船へ運んでやれ……」

大きな袋に詰められた食料を床に置き、ゼフはクリークを見やる。

鬱陶しそうに腕を組むその姿に、エレノアは我慢できずに詰め寄っていた。

「どういふつもりですか……敵に塩を送るような真似……本当にこの店乗っ取られますよ」

「その戦意があればの話だ……なア グランドライオン 偉大なる航路の落ち武者よ……」

「……?!? まさか……」

ゼフの言葉に、エレノアはハツとした様子でクリークとギンを見つめる。

傷ついた船、衰弱した船長、一人も現れない船員、いくつもの要素が、ゼフの一言で一つに重なった気がした。

そして、ガレオン船があのような傷を負った原因も。

「貴様は…… 赫足 のゼフ」

一方で、ゼフの顔と名を目の当たりにしたクリークは、その表情を驚愕に固めていた。

第25話 “落ち武者”

クリークがこぼした二つ名に、エレノアはまたも目を見開いた。

「“赫足”のゼフ……!? あ……蹴り技の達人……!!」

「噂に聞いた海難事故で、死には至らずともその大切な足を失ったとみえる。貴様にとって片方の足を失うということは戦闘不能を意味するハズだ」

「戦闘はできなくとも料理ができる、この両手があればな。てめエ、何が言いてエんだ。はつきり言ってみろ」

嘲りの言葉も気にした様子はなく、ゼフはクリークを睨みつける。

クリークもまた悪名高い元同業者を前にしながらも、見下した調子を崩さずに告げた。

「“赫足”のゼフ、お前は、かつてあの悪魔の巣窟グランドライオン 偉大なる航路へ入り、無傷で帰った海賊おとしこ。その期間丸一年の航海を記録した『航海日誌』をおれによこせ!!!」

「……………!!!」

傲慢で身勝手な要求に、エレノアの表情に嫌悪感が浮かぶ。

冒険の知識と経験を記載した、血と汗の結晶たる航海日誌を求めると、本当にこの

男に矜持はないらしい。

『航海日誌』か。確かに…おれの手元に、それはある。だが、渡すわけにはいかんな。航海日誌はかつて航海を共にした仲間達全員とわかっ我々の誇り、貴様にやるには少々重すぎる!!!」

「ならば奪うまでだ!!! 確かにおれは『^{グランドライオン}偉大なる航路』から落ちた!! だが腐つても最強の男『^{グランドライオン}首領・クリーク』。たかだか弱者共が恐れるだけの闇の航路など渡る力は充分にあつた!! 兵力も!! 野心も!! 唯一つおしむらくは『情報』!!! それのみがおれには足りなかつた!!!」

クリークのその言葉は、『^{グランドライオン}偉大なる航路』そのものに対する不満に思えた。

ある種の責任転嫁のようなその態度に、エレノアは完全にクリークを格下だと判断した。

「ただ知らなかつただけだ。航海日誌はもらう、そしてこの船も!! 手土産にまずはその女を奪つてやる。せいぜい日々うるおいに役立つてもらうぞ!!!」

「…ほんつと、バカだね」

深い深いため息をつき、エレノアは自分のフードとケープを外す。

それらを勢いよく放り捨てると、露わになった翼を広げて牽制してみせた。

「あんたごとき私にはもつたないっての!!?」

「ん な っ ……?!?!」

「何イ——?!?!」

ゼフとルフィを除く、エレノアの正体を初めて知った者たちが驚愕の声を上げる。

クリークもまた大きく目を見開き、信じられないといった様子でエレノアを凝視していた。

「…本物か…?!」

「ふはっ……はははははは!!!! なんてこった、ここにきてようやくツキが巡ってきたよ
うだぜ!!? まさか天族まで手に入るなんてな!!!」

「へえ? 無知なくせに私のこと知ってるんだ」

「知らない奴らがこの海にいると思うか!!? 血肉を食らえば不老不死になる伝説の種族
…!!! さすがにまゆつば物だと思っていたが、実在していたとはおれは運にも恵まれて
いるらしいな!!!」

間違った知識を堂々とさらすクリークに、エレノアは呆れかえる。

以前からこういう勘違いした輩とは遭遇することはあったものの、ここまで馬鹿な姿
をさらすものはいなかったはずだ。

『航海日誌』に『不死の力』!!! それさえあればもうおれに恐れるものはねエ!!! 今度

こそ…おれが『^{グランドライン}偉大なる航路』を制して『^{ビッグブルー}ひとつなぎの大秘宝』を……!!!
!!!」

「黙れド素人」

雷のように低い、怒りを押し殺した声に、クリークの笑い声が途切れる。

射殺せそうなほどに縦に鋭く裂けたエレノアの瞳孔がクリークを見据える。ここまであの海をバカにしている姿を見ると、逆に同情の念さえ湧いて来そうだった。

「お前のような世間知らずのクソガキに……あの海に挑む資格はない。知らなかっただけ？ 知っていたらあの海を渡れたとでも？ あんたに足りていないのは知識でも兵力でもない!! その足りないおつむだよ!!」

「てめエ……!!」

ふつふつと怒りを煮えたぎらせ、額に血管を浮き立たせるクリークを放置し、エレノアは自身の豊かな胸に手を当てる。

この身体をクリークなどに渡すなど、天地がひっくり返ってもあり得ないと思っ

た。
「私のこの身体は……!! 髪一本血の一滴に至るまですでに売却済みだザマーミロ!!」

仁王立ちし、人目もはばからずにそんなことを告げるエレノアに、全員の視線が集まる。

痛々しいくらいに空気が静まり返り、若干の呆れをはらんだ驚愕の視線が突き刺さった。

「……(´▽`)で言うことか」

ゼフが思わずそうつぶやくと、エレノアもちよつと恥ずかしかったのか黙り込む。

その後ろで、がつくりと膝をついたサンジが血反吐を吐きそうな勢いで項垂れていた。

「ウソだろエレノアちゃん……!!」

「売却つて……」

「まさか!」

「いやいや、おれじゃねエよ」

パティやカルネの視線がルフィに集まるが、当の本人はぶんぶんと首を振ってその可能性を否定する。

何となくコックたちに安堵が広がる中、クリークはエレノアの爆弾発言を気にした様子もなく、フンと鼻で笑って見せた。

「お前がどこの誰のものだろうとおれには関係ねエ……!! おれが奪うと言ったら奪う……!! てめエはおれのものだ!!!」

「……オーナー、暴れますけどいいですよね?」

「好きにしろ。さすがにあんだけ言われちまったらおれも我慢の限界つてもものがある」

女を道具か何かとしか見ていないクリークに、能面のように無表情になったエレノア

が指を鳴らす。

元海賊のゼフも思うところがあり、多少の店への被害は仕方がないと迷わず許可を出した。

「ちよつと待て!! エレノアはお前なんかに渡さないし、海賊王になるのも、おれだ」

「な…雑用っ!!」

「おい、引つ込んでろ。殺されるぞ!!」

「引けないね、ここだけは」

そんな会話で自分を無視するなど言わんばかりに、ルファイが前に出る。

ただの雑用が話に割って入ったことに、クリークは不機嫌そうに眉間にしわを寄せた。

「何か言ったか、小僧。聞き流してやってもいいんだが」

「いいよ、聞き流さなくて。おれは事実を言ったんだ」

「遊びじゃねえんだぞ」

「当たり前だ」

凄まじい殺気をぶつけるクリークと、それを柳のように受け流し、不敵な笑みを浮かべるエレノア。

そこへ、コックたちとは違うささやき声が響いてきた。

「さっきの話聞いてたろ、あのクリークが渡れなかったんだぞ。な！ 悪いことはいわねエよ。やめとこうぜ！ あんなどこいくの！」

「うるせエな、お前は黙ってろ」

エレノアとルフィが視線を向ければ、慌てた様子のウソップがゾロに詰め寄っている。

また食事を楽しみに来たのに、今回の騒動で足止めを食らっていたらしい。

「戦闘かよルフィ、手をかそうか」

「ゾロ、ウソップ。いたのか、お前ら」

「別にいいよ、座ってて」

その会話から、クリークは二人がルフィの手下だと判断する。

たった二人しか仲間がないことに、クリークの表情に嘲笑が浮かんだ。

「……ハ：ハッハッハッハッハッハッハッハ。そいつらはお前らの仲間か、ずいぶんささやかなメンバーだな!!」

「何言ってるんだ、あと二人いる!!」

「おい、お前それ、おれを入れただろ」

「ナメるな小僧!!! 情報こそなかったにせよ、兵力五千の艦隊がたった七日で壊滅に帰す、魔海だぞ!!!」

クリークが発した事実には、バラテイエに動揺が走る。

恐ろしき海だとは聞いていたが、それほどまでの戦力が数日で退く羽目になったなど、信じられなかった。

「な…七日!!？」

「クリークの海賊船団がたった七日で壊滅だと!!？」

「一体、何があつたんだ……!!！」

「きいたかおいつ!! 一週間で50隻の船が」

「面白そうじゃねエか」

「…むしろ私からしてみれば、よくあんたたちごときが七日もつたと思うよ」

コックたちやウソツプはおののくも、グランドライン“偉大なる航路”を甘く見ている節のあるクリークに対し、エレノアの視線は冷たかった。

「無謀というにもおこがましいわ!! おれは、そういう冗談が大嫌いなんだ。このまま、そう言いはるのならここで待て。この場で、おれが殺してやる!!」

クリークはそう言うと、ゼフが用意した食料袋を背負って店を後にする。

項垂れているギンを放置し、エレノアに向けてにやりと憎たらしい笑みを浮かべて見せた。

「…いいか、貴様ら全員に一時の猶予をやる。おれは今からこの食料を船に運び、部下

共に食わせてここへ戻ってくる。死にたくねエ奴はその間に店を捨てて逃げるといい。おれの目的は航海日誌とこの船とその女だけだ。もし、それでも無駄に殺されることを願うなら、面倒だがおれが海へ葬ってやる。そう思え。お前は、別れのあいさつでも済ませておけ……」

そう言い残し、去っていくクリークの背を見送り、バラティエには重い沈黙が下りる。しばらくして、不甲斐なさにくすぐまるギンが震える声を漏らした。

「……………!! サンジさん、すまねエ!! …おれは、まさか…、こんなことになるなんて……………!! おれは……………」

「おい、てめエが謝ることじゃねエぞ、下ツ端。この店のコックがそれぞれ、自分の思うままに動いた。ただ、それだけのことだ」

ギンを擁護したのは、意外にもゼブだった。

海賊に料理を出そうとしたサンジを叱らなかつたり、自ら食糧を差し出したりと、この料理人の考えは読み取りづらかった。

そんな中、エレノアは呆れた様子でギンを見下ろしていた。

あんな船長についていく者もそうだが、艦隊が全滅するほどの被害を受けてもまだ向かおうとしているクリークにはあきれほかにない。

「しっかし、七日も航海してあんたたちは何を学んできたのさ? ただ兵力をそろえた

だけじゃ渡れる海じゃないってわかってもいいでしょうに」

「……………!! わからねエのは事実さ、信じきれねエんだ… 偉大なる航路^{グランドライン}」に入つて七日目のあの海での出来事が現実なのか… 夢なのか、まだ頭の中で整理がつかねエているんだ。…突然、現れた…」

がたがたと震え、怯えながらギンは語る。

「偉大なる航路^{グランドライン}」に入つて7日目に遭遇した、恐るべき災害のことを。

「たつた一人の男に、50隻の艦隊が壊滅させられたなんて…!!」

「え!!」

「ばかな!!! たつた一人に『海賊艦隊』が潰されただど!!」

ギンの告白を聞いた全員が驚愕し、思わず立ち上がりながらギンを凝視する。

航海のせいで狂つたのではないかと思えるほど荒唐無稽な話で、ギンの正気を疑うばかりだったが、見る限り彼は正常な様子であった。

「わけもわからねエままに、艦隊の船が次々と沈められていって…あの時、嵐が来なかつたら、おれ達の船も完全にやられてた」

「…不幸中の幸いってことか…」

エレノアはクリークたちの妙な悪運に感心しながら、自分の考えが間違っていないかたことを確信する。

船に刻まれた傷跡は、自分が予想した通りのもの。そしてそれをやってのけた人物も、自分の考えている通りの相手であろうと。

「ねエギン、あんたの言うその男って……鷹のようにするどい目をしてなかった？」
「何だと!!？」

エレノアの質問に反応したのは、ギンだけではなかった。

ひどく取り乱した様子の子のゾロが、跳ね上がるような勢いで身を寄せ、エレノアを凝視していた。

そのことには触れず、エレノアはため息をついた。

「……そうか、彼に出会って生き延びただけでも、運がよかったと喜ぶべきか……それとも不運だったのか」

冷や汗を流し、エレノアは苦笑する。

「偉大なる航路^{グランドライン}」のどこかにいるたった一人の遭遇するというのが幸運なのか不運

なのか、判断はつかないが相当低い確率であろう。

今日のエレノアは驚かされてばかりだった。

「鷹の目」に遭うなんて」

第26話 “ならず者たちへの洗礼”

「た…た…たかのめ…!!?」

エレノアが呟いた単語に、ウソツプは戦慄の表情を浮かべる。
が、すぐに訝しげな表情に変わった。

「だれだそりゃ」

「さー、誰だろうなー」

「おれの探してる男さ…」

「え!!」

「あ、なるほど…あんたの野望をかなえるには確かに手っ取り早い相手だ」

ゾロの一言で、エレノアは察する。

世界の剣士の頂点を目指す彼にとって、その人物と相対することは最終的な目標と言
えるだろうからだ。

「ジョニーの情報じゃあ、この店にも…」

「鷹の目”の男か…」

「真つ赤な目の男ならこの店に来たことがあるけど」

「ああ、ワイン飲みすぎて目エ真っ赤にしてた奴な」

「体に引火して爆発したどっかのバカか」

「ありやみごとだったよ」

「……………!! あのヤローガセネタか……………!!」

「そう簡単に会えるはずないって…」

クリークたちが「偉大なる航路^{グランドライン}」に入って7日目遭遇したことが幸運(?)だっただけで、本来は探してもそうそう会える人物ではないことをほのめかす。

それはそれとしてぬか喜びさせられたゾロは、不満そうに顔を歪めていた。

「…艦隊を相手にしようってくらいだ。その男、お前らに深い恨みでもあったんじゃない?」

「そんな覚えはねエ! 突然だったんだ」

「昼寝の邪魔でもしたのか…あるいはただ暇だったのか…」

「ふざけるな!! そんな理由でおれ達の艦隊が潰されてたまるか!!」

「彼ならそれも有り得るってことだよ。…彼なら偉大なる航路^{グランドライン}に入りたての素人海賊艦隊でいど、歯牙にも留めないはずだから」

知ったように語るエレノアに不思議そうな視線が集うが、当の本人は呆れたようにギンを見下ろすだけで気にした様子はない。

ゾロも彼女の素性の知れなさは気になったが、今さらな事だと考えて視線をそらし

た。

「く——っ、ぞくぞくするな——っ!! やっぱそうでなくちゃな——っ」

「てめーは、少しは身の危険を知れ!!」

はしやぐルフィとビビるウソツプの様子に、ばかばかしさを感じたという理由もあるだろうが。

「おいおい!! このノータリン共!! 今の、この状況が理解できてンのか!!? 今、店の前に停まつてんのはあの『海賊艦隊』提督、『首領・クリーク』の巨大ガレオン船だぞ!!! この東の海で最悪の海賊団の船だ!!! わかつてんのか?! 現実逃避はこの死線を越えてからにしやがれ!!!」

「…さて、相手がいったいどれほどのものか」

「何イ!!?」

警戒を促すパティに、エレノアの面倒くさそうなつぶやきが耳に入る。

完全に甘く見ているように見えるが、自然体で立つエレノアには何かに裏付けされた自信が見えるような気がした。

「艦隊つつつても、どうせ数の暴力に頼ったザコ集団にしか思えないんだよね…しかも食べたばかりとはいえ、失った体力がそう簡単に戻るとは思えないし」

「そ…そりゃあそうかもしれないねエが」

「情けない顔をしてんじやないよ」

なおも不安を隠せないコックたちに、エレノアの厳しい視線が向けられる。

咎めるような、強い力を秘めた眼差しに、コックたちは息をのんで背筋を伸ばした。

「ここはあんた達の宝でしょ。失いたくなきゃ、せいぜい死力を尽くしなさい」

そしてついに、その時が訪れた。

かろうじて浮いているガレオン船の船上から、無数の男たちの雄叫びが聞こえてきたのだ。

「押しよせて来るぞ、雄叫びが聞こえる!!」

「守り抜くぞ、この船はおれ達のレストランド!!」

「……ざつと数十人つてところか」

不安げながらもやる気をみなぎらせるコックたちと、冷静に敵の数を測るエレノア。

それぞれが戦闘準備を整え終えた直後、海賊たちが次々にバラティエに向けて飛び込んできた。

「どけどけコック共オ~~~~っ!!」

ロープを伝い、ガレオン船の上から迫ってくる荒くれ者達。

その時だった。

エレノアの感覚が、以前にも感じたことのある殺気を感じ取ったのは。

(……………!!? この気配は……………!!)

その気配の持ち主に思い至った瞬間、まるで何かが爆発したかのような衝撃とともに、バラティエが揺れた。

その原因は、半ばから真つ二つに両断されたガレオン船が沈み始めたためであった。

「何が起きたア!!!」

「首領・クリーク!!! 本船は……!! 斬られました!!!」

「斬られた? 斬られただと!!? この巨大ガレオン船をか!!? そんな……………!!! バ

力な話があるかア!!!」

突然の事態に、クリーク海賊団もバラティエのコックたちも狼狽し、揺れる船内でパニックになる。

エレノアは窓の外から見えるガレオン船の状態に、予感が当たったとばかりに頬を引きつらせた。

「こんな芸当ができるのは……間違いはない!!!」

「錨を上げろ!!! この船ごとをもってかれちまうぞ!!!」

「はいっ!!!」

ゼフのとつさの判断で、ようやく落ち着きを取り戻したコックが走る。

錨を外したことで、バラティエは波に揺られまくったものの転覆せずに済み、徐々に波が落ち着くまで耐えきることができた。

そこでふと、エレノアは大事なことを思い出した。

「やべ…メリー号にナミもヨサクもジョニーもほったらかしだった」

「くそっ!! もう手遅れかも知れねえぞ!!!」

ハツとなるエレノアだったが、荒波の中から聞こえてきた声に安堵する。

見れば放り出されたヨサクとジョニーが、号泣しながら荒波の中を泳いできていたのだ。

「アニギ〜!!」

「ア〜〜〜ニギイ〜〜〜つ!!!」

「ヨサク!! ジョニーツ!! 無事か!! 船は!? 船がないぞ!! ナミはどうした!?!」

「それが…ずいばせんアニキ…!!! もうここにはいないんです!!」

バラティエにたどり着いたヨサクとジョニーを引き上げると、二人は信じられないことを口にした。

「ナミの姉貴は!!」

「宝、全部持って逃げちゃいました!!!」

「…な!!! 何だとオオオオ!!!」

不甲斐ないと泣きじやくる彼らから話を聞くと、メリー号の上で時間を潰していた時のこと、手配書を見ていたナミの様子がおかしいことに気づいた。

何事かと尋ねようとすると、ナミはいきなり着替えたいから見ないでほしいと色つばく頼んできたという。

訝しく思いながらも、簡単に籠絡された二人は言うことを聞き、背を向けたところを海に蹴り出されてしまったらしい。

慌てて戻る暇も与えず、ナミはさつさとメリー号を操ってその場を離れてしまい、追いかけてようとした時には突然起きた大波に呑み込まれ、見失ってしまったらしい。

「くそっ!! あの女!! 最近おとなしくしてると思ったら油断もスキもねエっ!!!」
「この非常事態に輪をかけやがって!!!」

勝手な事ばかりする女泥棒に、ウソツプもゾロもエレノアも頭を抱えて嘆く。
やっぱり信用なんてするんじゃないやなかつた、と。

「待て! まだ船が見えるぞ!!」

「何?」

ルフィの指摘に、一同は慌てて同じ方向を見る。

確かにその方向にメリー号らしき船影が見え、ほっと彼らは安堵した。

「まだ追いつける…か」

「ヨサク！ ジョニー！ お前らの船は!!」

「それは、まだ残つてやすが」

「エレノア！ ゾロ！ ウソップ!!」

「あんた…まだこりてないの？」

「ほつとけよ、あんな泥棒女。追いかけて何になる」

「でも船は大事だろ、あの船は……!!!」

裏切つたナミを追うか、放置するか、意見が割れる一同であつたが、そこヘルフィの制止がかかつた。

「おれはあいつが航海士じゃなきや、いやだ!!!」

船長としては失格なわがままであつたが、ゾロたちは目を見開いて固まる。

そして、しようがないというように深いため息をついて肩をすくめた。

「わかつたよ。……………世話のやける船長だぜ。おい、ウソップ！ 行くぞ!!」

「お…おう」

「待つて、ゾロ」

ヨサクとジョニーの船に乗り込もうとした彼を、エレノアが呼び止めた。

その目は、沈みかけているガレオン船に向けられ、真剣な表情が浮かんでいる。

「まだちよつとここを離れるのは早いかも」

「あ?」

「あいつだア!!!」

ゾロが聞き返そうとした時、クリーク一味の一人が声を張り上げた。

「首領クリーク!!! あの男です!!! 我々の艦隊を潰した男!!!」

「ここまで追つて来やがったんだ!!!」

「おれ達を殺しに来やがった!!!」

男の声に、全員の視線が集まる。

特にゾロは大きく目を見開き、食いつく勢いで現れた男を凝視した。

「まさか…あれが…『鷹の目』の男…?!」

波に揺られる、棺桶の形をした小舟。

その中心に設置された椅子の上でくつろいでいる一人の男を見て、クリーク一味に絶望が広がっていった。

「あいつが…一人で50隻の船を沈めたってのか…?!?」

「…じゃあ、たった今クリークの船を破壊したのも?!?」

「普通の人間と変わらねエぞ…。特別な武器を持つてるわけでもなさそうだ…」

「武器なら背中にしよつてるじゃねエか!」

ゼフが見つめているのは、男の背中に備えられている十字架——いや、剣。

まさかと言葉を失うバラティエの面々に、エレノアは不敵な笑みを浮かべて口を開いた。

「そう…彼こそが世界中の剣士たちの頂点に立つ男、*“鷹の目”*…!!? ジュラキユール・ミホーク!!」

まさに鷹のように鋭い目を一瞥させ、ミホークはエレノアに視線を向ける。

ぞくりと寒気が海賊たちを襲うが、その視線を真っ向から受けているエレノアに緊張している様子はなかった。

「……単なるヒマつぶしに逃した獲物を追ってきたつもりだったが、思わぬ相手と再会したな」

「久しいね…ミホーク。よくもまあこんな田舎の海に来たもんだ。あいにく海上レストランは今、休業中だよ」

「ランチを楽しむ気はない…すぐに終わるからな」

軽口をたたきあう二人に、驚愕の目が向けられる。

やけに知っている風であったが、まさか本当に互いを知った仲であったことに驚きを隠せなかった。

「……!!? 顔見知り、だと…」

「嬢ちゃっ…!! 姐さん、一体あんた何モンなんですか!!?」

ゾロも、今まで年下扱いしていたジョニーも言葉を失うが、エレノアは時に気にせず
にミホークだけに注目する。

ミホークはふと、エレノアに剥き出しに金属の足に視線を向けた。

「妖術師……両脚を失つて一線を引いたと聞いたが……まだ健在だったようだな」
ウイザード

「あいにく……私の好奇心はこの程度じゃ止められやしないよ。……それに」

痛々しい義足を、誇るように見せるエレノアの口元に、優しい笑みが浮かぶ。

それを見たミホークは、どこか意外そうに眼を見開いていた。

「元気にやつてるってこと伝えないと、この脚を捧げた相手が泣くからさ」

「……驚いたな、お前がそんな表情を見せる相手ができたとは」

「女は変わるものさ……」

ふっと自慢げに足を撫でるエレノアに、ミホークは興味深そうに目を細める。

しかし、そんな余裕気な表情が癪にさわったのか、クリーク一味の一人が目を吊り上げた。

「おい……!!? こつちを無視してんじやねエぞ!!?」

両手に持った銃の引き金を引き、座ったままのミホークを狙い撃ちする。

前触れもなく放たれた弾丸を前に、ミホークは微塵も狼狽する様子もなく背中
の剣を抜き、静かに剣先を向ける。

すると、弾丸は自ら意思を持っているかのように軌道をそらし、擦ることもなく海へと落ちていった。

「え……………!!? は…ハズれたぞ!!」

「外したのさ。何発撃ち込んでも同じだ。切っ先で、そつと弾道をかえたんだ」

何が起こったのかわからない男が慌てっていると、音もなくなつたゾロが代わつて説明した。

びつくりして後ずさる男たちをよそに、ゾロは驚愕と期待が入り混じつた笑みを浮かべ、ミホークを凝視していた。

「あんな優しい剣は見た事がねエ」

「柔なき剣に強さなどない」

「その剣でこの船も割つたのかい」

「いかにも」

「なるほど…最強だ」

思わずつぶやき、ゾロは確信する。

この男を追い求めた自分の判断は、間違つてなどいなかった。

「おれは、お前に会うために海へでた!!」

「……………何を指す」

「最強」

頭にバンダナを巻き、最初から全力で向かうために気力を高める。

剣を抜いて構えてみせるも、ミホークから向けられる気迫に微塵の変化もなかった。

「ヒマなんだろ？ 勝負しようぜ」

不敵な笑みを浮かべるゾロに対して、ミホークが見せたのは落胆の表情。

彼にとつて、実力の高さをあえて見せたというのに、それでも向かってくる者など愚の骨頂でしかなかった。

「哀れなり、弱き者よ。いっばしの剣士であれば剣を交えるまでもなく、おれとぬしの力の差を見抜けよう。このおれに刃をつき立てる勇氣はおのれの心力か…はたまた無知なるゆえか」

「おれの野望ゆえ、そして親友との約束の為だ」

最初から闘志を全開にしているゾロに、億劫そうにゾロを見やるミホーク。

だが、そこへエレノアによる擁護の声が届いた。

「まーまー、そう敵しいことに言わず、一手死合つてやってよ……たぶん落胆はしないだろうから」

「……………」

「時間はあるんでしょっ？」

本来であれば、そんな提案に乗る必要もない。

しかしミホークは、意味深な笑みを浮かべるエレノアの瞳の奥に見える確信めいたものに興味を抱き、目の色をわずかに変えた。

「お前がそこまで推す男か……!! 少し、興味が出てきた」

退屈のぎに、確かに何かいいものが見られるかもしれない。

ミホークの様子の変化は、そんな感情の表れに見えた。

第27話 “頂点に立つ男”

破壊された巨大な海賊船の上で対峙する二人の剣士。

向かい合うその視線には、非常に大きな温度差があった。

「こんなに早く会えるとは、正直考えてなかったぜ…」

「無益」

三本の刀を構えた若き剣士の目は闘志に熱く燃え、対して、十字架の大剣を背負った剣士の目は冷めている。

東の海で最も知られた剣士と、世界の頂点に立つ剣士。

そのカードを、その場にいた誰もが息をのんで凝視していた。

「世界最強の剣士と…海賊狩りのゾロ…!!」

どれほどの死闘が繰り広げられるのか、固唾をのんで見守られる中、ヨサクとジョニーはゾロの勝利を確信していた——わけではなかった。

冷や汗を流すその顔には、もしもの時を想像した不安がよぎっていた。

「アニキに敵う奴なんているわけねエ!!」

「そう…彼は強い。おそらくは東の海では無敗の剣士…」

「で…ですよね?!」

エレノアの言葉に希望を抱いた二人が振り向くが、エレノアの表情に笑顔はない。

ただ静かに、対峙する二人を見つめるだけであった。

「だから、知らない。自分よりも強い剣士を…決着はたぶん、一瞬でつくよ」

エレノアが呟いた直後、海上にどよめきが起きた。

完全に武装したゾロとは真逆に、ミホークは首から下げていた十字架を外し、仕込んでいた小さな刃を抜いただけであったのだ。

「オイ、何のつもりだそりゃあ」

「おれは、うさぎを狩るのに全力を出すバカなケモノとは違う。多少名を上げた剣士がいたところで、ここは『赤い土の大陸』。『偉大なる航路』により四つに分される海の中

でも、最弱の海『イースト・ブルー』。あいにくこれ以下の刃物は持ちあわせてはいないのだ」

「人をバカにするのも、たいがいにしろ…!! 死んで後悔すんじゃないぞ!!」

過少に評価されていることに怒りを燃やしたゾロが、猛烈な勢いでミホークに斬りかかる。

交差した剣を左右に振りぬく力技『鬼斬り』を初手で放ち、すまし顔をゆがませてやるつもりであった。

だが、その一撃は発動しなかった。

両手の剣の交差した中心に突き立てられたナイフによって、
“鬼斬り”が止められてしまったのだから。

(こんな………バカな事があるか………!!!)

これまで幾人もの海賊を斬り倒してきた剣技でミホークを吹き飛ばそうとしても、一歩も前へ進む事が出来ない。

何度刃を振るおうとも、ただのおもちやのような刃によって剣撃は防がれ、いつペンの傷をつける事すらもかなわない。

目の前にいるはずなのに、あまりにその距離が遠く感じられる。敵の姿が巨大に見える、向かい合ってるはずなのに、はるか上を見上げているように感じられる。

自分の感覚までもが信じられなくなり始め、ゾロの表情に焦りが見え始めた。

「……これが世界だよ、ゾロ君」

余裕をなくしていくゾロに向けて、エレノアはつぶやく。

これまでたった一度の敗北もなく、己の道を進み続けてきた彼に立ちはだかる、巨大な壁。

見た事もないほど大きく、分厚く、越えられる未来を予想させないその壁に、ゾロは相対していた。

「あまりに広く、険しく、遠く、目指す未来がかすんでしまうほどに絶望的な道……それがこの先に待つ『偉大なる航路』。どんなに強靱な魂を持った剣士であろうとも、たやすく心折られてしまう修羅の道……!!」

「ウソだろう兄貴!!! 本気を出してくれ!!!」

「アニキイ!!!」

ヨサクとジョニーからの声援を受けても、ゾロの猛攻が届く気配は見えない。

徐々に息を切らし、動揺が剣に表れ始めると、ミホークは落胆したように冷たい眼差しを向けるのだった。

「なぜあいつが肩入れするのかわからんな……何を背負う。強さの果てに何を望む。弱き者よ……」

ミホークの嘲りの言葉に、ゾロの怒りが燃え上がる。

同じく、兄貴分をバカにされたことでヨサクとジョニーも身を乗り出しかけた。

「アニキが弱エだとこのバツテン野郎オ!!!」

「ためエ思い知らせてやる、その人は……!!」

「やめなさい!」

憤慨する二人をルフィが押さえつけ、エレノアが怒鳴りつける。

自分も飛び出したいのを必死に我慢している船長に頷きながら、エレノアもまたじつ

と攻防を見守り続ける。

「ちゃんとガマンしろ…!!!」

そしてじきに、隙を見せたゾロがミホークに弾き飛ばされる。

それでもゾロは立ち上がり、敵を見据えて剣を構えなおす。

フラフラになった体に叱咤しながら、ゾロは両方の剣を上段に掲げる。『虎狩り』の構えに入る。

だが、それが炸裂する直前、懐に入ったミホークのナイフに胸の中心を突き刺され、ゾロの動きが止まった。

「アニギイ~~~~っ!!!」

勝負あり、と誰もが戦慄の表情を浮かべる。

しかし、ミホークはわずかながら目を見開いていた。

心臓の直前まで刃をつき立てられているゾロが、なおも前に進もうとしていたのだ。

「このまま心臓を貫かれないか、なぜ退かん」

「シアね…わからねエ…ここを一步でも退いちゃったら、何か大事な今までの誓いとか約束とか…いろんなモンがヘシ折れて、もう二度とこの場所へ帰って来れねエような気がする」

「そう、それが敗北だ」

冷たくそう告げるミホークに、ゾロは不敵な笑みを返す。

「へへっ……じゃ、なおさら退けねエな」

「死んでもか………」

「死んだ方がマシだ」

死を目前にしながら、それでもなお己が道を進もうとしている若き剣士の姿に、ミホークはしばし言葉を失う。

未熟な小僧を前に動きを止めた世界最強の剣士に、エレノアは満足げに笑みを浮かべていた。

（気づいてくれた？ ミホーク……）

自分が言った、後悔はしないという言葉の意味を察してくれたことを願い、エレノアは心の中で誇らしげに笑う。

（私が彼に期待しているのは……剣の腕でも、その剛力でもない……!!? あの海を渡る資格……!!? 彼の持つ、たぐいまれなる兵の魂!!!）

最弱東の海海に生まれながら、世界に挑もうとしている彼の姿を見続けてきたエレノアは、確信していた。

いずれ彼は、己の野望をかなえうる器であると。

（今はまだ若き稚魚……!!! けどいずれ大海を越え、天にも昇る竜ともなりえる逸材……）

!!! 私には彼に、その可能性を見た……!!!

ゆえに彼女は、この戦いを薦めた。

彼が目指すべき世界の頂、その片鱗を知ってほしかったから。

そこへ目指す意志の炎を、より一層強く燃え上がらせるために。

「小僧……名乗ってみよ」

「ロロノア・ゾロ」

「憶えておく、久しく見ぬ『強き者』よ。そして剣士たる礼儀をもって、世界最強のこの黒刀で沈めてやる」

その炎は、世界最強の剣士にも確かに届いていた。

いずれ己に近づきうる逸材として再認識し、真の武器を自ら抜き放ってみせたのだ。

「黒刀『夜』を抜いた……!! 次で決まる………!!!」

相手が本気を出したことを察知し、ゾロも構えを変える。

片方の刃を逆手に持ち替え、三本の刀の切っ先が三角を描く。ゾロの有する剣技のうち、最大の破壊力を有する一撃の構えだった。

「散れ!!!」

「三刀流奥義!!!」

持ち手を中心に、刀を回転させる。

高速で回転する刃を携え、ゾロは急接近するミホークを見据え、渾身の一撃を以つて迎え撃つ。

そして、次の瞬間。

「三・千・世・界」!!!

二人の剣が激突し、砕けた刃が四散する。

ゾロの奥義はミホークには届くことはなく、口にくわえた一本を残してバラバラに砕け散る。

海賊狩りと呼ばれた男の、初めての敗北であった。

だがゾロは、啞えていた刀を鞘に戻すと、ミホークに向かって己の全身をさらす。

訝しむミホークに向けて、ゾロは不敵な笑みとともに答えた。

「背中の傷は、剣士の恥だ」

「見事」

そのやり取りの直後、ミホークの刃がゾロの胸を切り裂く。

おびただしい量の血を噴き出させながら傾いでいくゾロが、ゆつくりと海の中へと沈んでいった。

「ゾロオ——っ!!!」

最後まで見守っていたルフィが、悲痛な声を上げて吠える。

悲鳴を上げるヨサクとジョニーに向けて、エレノアがぼんと肩を叩いて促した。

「ヨサク、ジョニー。助けてあげて」

「いつ…言われなくてもわかってますよ!!!」

「姐さんの薄情者オ!!!」

「チキシヨオツ!!! チキシヨオオ——ッ!!!」

慌てて海に飛び込むヨサクとジョニーの横で、ルフィがミホークのもとへと飛び出していた。

ミホークはそれをやすやすと躲すも、次にはなつた一言は怒り狂つたルフィを一瞬で黙らせた。

「若き剣士の仲間か…貴様もまた、よくぞ見届けた…!!! 安心しろ、あの男はまだ生かしてある」

目を見開くルフィの目に、ガレオン船の残骸の上にゾロを引き上げるヨサクとジョニーの姿が映る。

同時に、血反吐を吐きながらも呼吸をしているゾロの姿も。

安堵で言葉を失うルフィの横で、ミホークはゾロに告げた。

「我が名、ジュラキュール・ミホーク!! 貴様が死ぬにはまだ早い」

外套を揺らし、ミホークははじめて名乗りを上げる。

それは、いずれまた相まみえることを信じての行為。

ゾロがそれだけの器だと確信しての、ミホークなりの未熟者への声援エールであつた。

「己を知り、世界を知り!! 強くなれ、ロロノア!!! おれは、先幾年月でも、この最強の座にて貴様を待つ!! 猛己が心力挿して、この剣を越えてみよ!!!」

ミホークの言葉が、大気を揺るがせる。

世界最強という肩書を背負つた男による、強き言葉がゾロに贈られた。

「このおれを越えてみよ、ロロノア!!!」

エレノアにとって、その言葉が聞けただけで十分だつた。

そしてエレノアの厚意は、ミホークにとつても有益な事であつたようだ。

「お前の言う通りだつたな……有意義な時間だつた」

「それは何より」

ミホークは満足げなエレノアに微笑みを見せ、次いでルフィに目を向けた。

「小僧、貴様は何をを目指す」

「海賊王!」

「ただならぬ険しき道ぞ。このおれを越える事よりもな」

「知らねエよ!! これからなるんだから!!!」

べーっと舌を出し、ミホークの言葉を微塵も気にしないことを表すルフィ。

その姿を横目で見ながら、エレノアはウソップとヨサク、ジヨニーに目を向けた。

「ウソップ君！ ゾロの具合は？」

「無事じゃねエよ!! でも生きてる!! 氣い失つてるだけだ!!」

「アニキ!!」

「アニギ返事してぐれえ〜っ!!」

動かないゾロに、必死に呼びかける一同。

その時、ゾロの右手が唯一砕けなかった刀——亡きくいなの刀を掲げた。

「…ル…ルファイ…? …聞…コえ…るか?」

「ああ!!」

途切れそうなか細い声で、ゾロはルファイに問う。

今にも氣を失いそうになりながら、致死量ほどの血を流しながら、それでもゾロは戦おうとしていた。

険しき道を、見据えながら。

「不安にさせたかよ…おれが…世界一の劍豪にくらいならねエと…お前が、困るんだよな…!!! ガフツ!!」

「アニキ!! もう喋らねエでくれ!!」

「アニギ!!」

両の目から、涙があふれる。

初めての敗北を経験し、頂点の遠さを知りながらも、立ち止まるという選択を捨てようとしていた。

再び、立ち上がろうとしていた。

「おれは、もう!! 二度と負けねエから!!! あいつに勝つて大剣豪になる日まで、絶対に、もう、おれは負けねエ!!! 文句あるか、海賊王!!」

「しししし!! ない!!!」

悔しさをも糧にし、ゾロは誓う。

いつかその時まで、敗北する姿など決して見せたりはしないことを、歩き続けることを。

「いいチームだ。また会いたいものだ、お前達とは…」

ミホークにとつても、その姿はまぶしかった。

なにか、ひどく懐かしいものを見ているかのように。

「お前の目は…確かなようだな」

「当然だよ。………じゃあねミホーク。いずれ、あの海で」

「…そう願おう」

ややエレノアにのせられたことも気にせず、ミホークは素直に満足する。

まるで、後の楽しみが増えた、そう喜んでいるようにも、エレノアには感じられた。

「ウソツプ君、ヨサク、ジヨニー!! ゾロを頼んだよ」

「え!! 姐さんは?!」

「まだ仕事が残ってるからね……あの恩知らず共はここで潰しておく」

エレノアが視線を向けると、残っていたガレオン船の大きな残骸が吹き飛ばされる光景が目に入った。

ちようど、クリークが乗っていたあたりだ。

「!!!ぬは——つ!!!」

どうせクリークが余計な事でもしたのでだろう。

ミホークが去り際に邪魔な相手をあしらい、余波でクリーク一味がぼたぼたと吹き飛ばされていく。

エレノアはその姿に少しだけ機嫌をよくし、ポキポキと拳を鳴らして残った一味を睨みつけた。

「ウソツプ!! 行ってくれ!!」

「……………!! わかった!! おれとゾロは必ずナミを連れ戻す!! お前らは、しっかりコックを仲間に入れとけ!!」

ルフィの合図で、ウソツプはゾロを乗せた船を出発させる。

ミホークに殴りかかった際に外れてしまった麦わら帽を投げわたし、ウソップは大きな声で約束した。

「6人ちゃんと揃ったら!! そんなときや行こうぜ グランドライン 偉大なる航路!!!」

「ああ!! 行こう!!!」

荒波にさらわれる形で、ウソップたちを乗せた船はナミを追って進んでいく。

それを見送ると、エレノアのそばに立ったサンジが面倒くさそうにつぶやいた。

「…やつと来るぜ、疫病神がよ」

「おっさん!! あいつら追い払ったら、おれ雑用やめていいか?」

「……………! 好きにしろ」

むしろ都合だ、というようにゼフはやすやすすと了承する。

さらに小さくなった残骸にしがみつき、海から這い上がる海賊たちを見据えながら、コックたちは再び臨戦態勢に入る。

「さア、あらためまして…………!! 暴れようか!!!」

エレノアの瞳が縦に裂け、その激情をあらわにした。

第28話 “トリオ”

ミホークの襲来という未曾有の“災害”が去り、それでもなお航海の意思を見せるクリーク。

苦言をこぼす部下は撃ち殺し、恐怖によつて支配すると、再びバラティエに毒牙を向けようとしていた。

しかし戦うコック達も、ただやられるだけではなかった。

「向こうもやる気みたいねー…」

「うほ——っ！ 燃えてきた!!」

「パティとカルネは？」

「やる気満々だ、もう戦闘態勢さ！ こういう時はたのもしいぜ、あいつら!!」

「こういうときだけな…操作室行つて『ヒレ』開いて来い」

「え……いいのか?! 敵に足場与えることになるんだぜ!!」

「店中戦場にしちゃクソジジイがうるせエだろ」

「なんか言つたかクソガキ」

「オー、うるせエつつつたんだよ」

圧倒的な戦力を前にしているとは思えない、やる気に溢れた様子のコック達に、ク
リーク一味の殺気も膨れ上がる。

何よりも略奪を成功させなければ、自分たちの命がないのだ。

「その船を渡せコックどもオ——っ!!!」

「渡すわけないっての」

ダンツと踏みならした義足の脛から刃が生え、陽光を受けて鋭く輝く。

ルフィも手すりを掴んで腕を伸ばすと、ゴムの張力を利用して勢いよくクリーク海賊
団に向かって行った。

「『ゴムゴムの…ロケット』!!! と!! 『大鎌』っ!!!」

ゴムパチンコそのものの動きで接近し、伸ばした手で多数の男達にリアアットを食ら
わせる。

予想できない動きに、海賊達は為す術もなく海へと叩き落とされて行った。

「やるじゃねエか雑用オっ!!!」

「『偉大なる航路』にや、こんな奴らがウヨウヨいるつてのか…」

ルフィに賞賛が送られ、サンジは驚愕の目を外せなくなる。

これまで戦う姿を見ていなかったためか、大きな口を叩けるだけの力があることに感
心していた。

その時、何やら金属が噛み合う音が響き、バラティエの魚の船首が振動を始めた。

「出動————っ!!! バラティエ海戦兵器!! 『サバガシラ1号』!!!」

「死にたくねエ奴アはだしで逃げ出せエ!!!」

その中から、キコキコとペダルを漕ぐ音とともに、パティとカルネの威勢のいい声が響く。

魚（サバ？）が独立して動き出し、二人乗りの船へと変化したのだ。

「なんじゃいあの謎のギミックは…」

「かっこいい——っ!!!」

エレノアは呆れるだけであつたが、こういう合体・変形などの男のロマンに目がないルフィは目を輝かせる。

少年の期待の眼差しを受けながら、コックコンビに操られるサバガシラ1号は、口の中に仕込んだ大砲を発射し始めた。

「パティ!! カルネ!! やっちまえ!!!」

『ヒレ』開くぞオ————っ!!!」

パティとカルネが先制攻撃を開始するとともに、サンジに言われて店内に戻ったコックの一人が合図を出す。

するとバラティエそのものが揺れ始め、海中から何かがせり上がってきた。

「存分に戦つてやろうじゃねエか、海賊ども」

不敵に笑うゼフが言うと同時に、それは海の上に姿を現した。

バラティエの真下に折りたたまれていた大きな木板が、まさにヒレのように開いて水平に広がる。

本来であればより多い来客のための足場が、今回は戦闘の場のために用意された。

「海の中から足場が現れた!!!」

「おもしろ——っ!!!」

「……いいじゃない」

ルフィほどではないにせよ、カラクリには多少興味があるエレノアも感心する。

ロボには興味はないが、内部機構には大いに興味をそそられていた。

「海賊相手に!! コックに何ができる——っ!!!」

「海のコックをナメンじゃねエ——っ!!!」

足場は海賊達にとつても好都合。

武器を手に、ざばつと勢いよく上がった彼らを、怒号をあげながらコック達が迎え討った。

しかしコック達よりも早く、両方の爪先に刃を備えたエレノアが突撃し、かまいたちのように素早く振るった。

「いっくよー!!」
モラルダ 大怒剛劍!!!」

「「「ぎやあああああああ!!!」」」

舞うように、華麗に剣技を見せるエレノアによって、勇ましく向かってきていた海賊達
 達が吹き飛ばされた。

空腹に苦しんだ直後とはいえ、荒波を超えてきた猛者達が気持ちいいほどに吹っ飛ば
 される光景は、コック達の度肝を抜いた。

「うおおおおお!!!」

「す…すげエぞ新入り!!? 義足とは思えねエ!!!」

華奢で不自由な体で、いったいどんな力を秘めているのか。

出番を散らされた感のある戦うコック達は、呆然と天族の娘が暴れまわる姿を眺める
 ことしかできなかった。

「ぎやつはつはつはつはつは!! やれやれエ!! 戦うコックさんの力を見せてやれ!!!」

「おうパティ!! 余所見してんじやねエ!! ヤツを狙うぞ!!!」

「よっしやクリーク!! 覚悟しろ!!!」

砲撃をあらゆる場所に向けながら、好き勝手に暴れていたパティとかルネ。

彼らが次に標的にしたのは、不甲斐ない部下を見下していた親玉クリークだった。

だが、体当たりで吹っ飛ばしてやろうとしたサバガシラー号が、突如その動きを止め

る。

サバガシラー1号の鼻先に手を置いたクリークが、凄まじい剛力で押しとどめてみせたのだ。

「おれは首領・クリーク。世界の海を制す男だ………!! てめエらの遊びにつきあつてるヒマはねエ!!!」

相手が予想以上の力を見せたことに、エレノアは警戒の度合いを上げる。

ただの卑怯者ではなく、あれだけの人数を支配できるだけの力があると、評価を改めなければならなかった。

「…思つてたよりやるな」

「それはおれだつての!!!」

憤慨するルフィだが、クリークは気にも留めない。

サバガシラー1号の鼻先をつかむ手に力を込め、なんと片手で持ち上げて投げ飛ばしてしまった。

「うわああああ——っ!!!」

「やべエ——店につつ込む——っ!!!」

信じられない事態にパティもカルネもパニックになり、迫り来るバラティエを前にひしつと抱き合つて騒ぐ他にない。

そんな二人に向けて、深いため息をついて向かう黒い影があった。

「サンジ!!!」

高く跳躍したサンジは、*“赫足”*のゼフを彷彿とさせる足技を披露し、猛スピードで迫るサバガシラー1号を蹴り返してみせたのだ。

コック達がほっと安堵の息をつくそばで、エレノアも目を見開いて素直に驚いていた。

「お、サンジくんやるな……それに引きかえあんたたちは……!!」

「む……無茶言うんじゃないやねエよ新入り!!」

「ありやサンジの奴の方がおかしいんだ!!」

「ハイハイ……」

「サンジてめエ……!!」

「あーもう、うるさいなア……」

元気に這い出してきたパティとカルネに呆れながら、エレノアが向かってきた敵の一人を切り捨て、踏みつけて海に蹴り落とすと、もう足場の上に残っている海賊の姿は見えなくなる。

ほとんど無傷のコック達は、全くと言っていいほど出番がなかったことを嘆く他になかった。

「あ、あの女……!! ほとんど一人でこれだけの数をのしちまった……!!?」
「やべエ……!! なんてこんな奴が最弱イーストンブルの海にいるんだよ……!!?」

海に蹴り出された海賊達が、戦慄の表情でエレノアを凝視する。

クリークに負けずとも劣らない恐怖を感じ、逆らう意思が砂城のように崩れ落ちて行つた。

そんな時だった。

波間に紛れて近づくと、奇妙な人影に気づいたのは。

「何をやってんだか、君達は……」

「ん?」

呆れたような声が聞こえると同時に、エレノアに強烈な風が襲いかかった。

風はただ吹き飛ばそうとするだけではなく、含まれた水しぶきでできた小さな刃を運んで、エレノアやコック達の体を切り裂いてきたのだ。

「ぐっ……ん?」

思わぬ攻撃に、エレノアの表情に初めて苦悶が浮かぶ。

防御が間に合わなかったコック達や、隙ができたパティたちに突然打撃が襲いかかり、一瞬でほぼ全員が昏倒させられてしまった。

「ハア——ッハッハッハッハ!! てっぺき!! よって無敵!!」

「真打が登場だぜエ〜!!?」

腹と背中、両手を巨大な真珠のついた盾で武装した大男と、見るからに柄の悪そうな男三人組が、倒れたコックたちに派手な名乗りをあげた。

男たちは皆似たような顔つきながら、それぞれ坊主、モヒカン、黒髪を跳ねさせていると個性的な頭をしていた。

「おおっ!!! パールさん!! それにエレメント・トリオだ!!!」

「エレメント・トリオが戻ってきた!!!」

「…何そのダサイ名前」

傷を押え、半目になったエレノアがボソツと呟くが、幸いにも聞こえていなかったらしい。

「パティ!! カルネ!! 無事か?!」

「ハア——ツハツハ!! 無事じゃね〜よ、この、おれの殺人パンチ パールプレゼント をくらっつちまったんだからよ!!」

硬い真珠と鋼鉄の盾による殴打で、皆大きなダメージを負って立てずにいる。

新たな助っ人の参上で、クリーク海賊団の士気が再燃し始めた。

「あの人たちが来たからにはもうお前の好きにはできねエぞ!!」

「そうだ!! 悪魔の实の能力者だろうが、敵じゃねエ!!!」

傷を負っているエレノアを見て、調子に乗り始めたようだ。

ばかにしたように笑っていると、エレノアの姿をよく見たエレメント・トリオの表情が変わった。

「ひよ——っ!! なかなかかわいいこちゃんがいるじゃねエか!!?」

「それにい〜い身体してんじやねエかア〜!!!」

「真っ裸に剥いてさっさと楽しもうぜエ〜!!!」

「やっちまえ!!? ゲルプ!!? ブラオ!!? ロート!!?」

刻まれ、肌を所々露出させてしまっているエレノアに気分が上がったのか、下卑た声をあげて鼻の下を伸ばす男たち。

羞恥に頬を染めることはなかったが、エレノアは嫌悪感に眉間にしわを寄せた。

「まずはその邪魔な布切れ!! みくんなまとめて切り刻んじやうよオ〜!!!」

ゲルプと呼ばれた男が、複雑な模様の描かれた指ぬきグローブを掲げてエレノアに向ける。

すると、先ほどと同じ風の刃が生み出され、一斉にエレノアに襲いかかった。

「なんだありゃあ!!?」

「あいつらも…悪魔の实の能力者か!!?」

鍊金術を見たことがないコックたちは、勘違いしながら目を見開く。

パールとともに海から出てきたことからそうじゃないことは分かり切っていたが、悪魔の実が身近にない彼らにとってはその程度の常識も知らなかった。

「風属性か…」

「次は俺だア!!」

服をさらに切り裂かれながら、かろうじて躲すエレノアに今度はブラオが挑む。

海水に手をつつ込み、その流れを操って水の槍を作り出す。

エレノアのスカートが貫かれ、その勢いによって大きく引き裂かれてしまった。

「水属性…!!」

「隙だらけだぜエ〜!!! おらア!!!」

今度はロートが、オイルライターを構えて啗う。

シユボツと火がともされると、突然その勢いが増して蛇のよりのたうつと、エレノ

アに食らいついてきた。

「今度は火…!!?」

「何だこいつら!! 魔法使いか何かか?!?」

「新入りイ〜〜!!!」

「エレノアちゃん!!?」

翻弄されるエレノアに、動けないコックたちは悲鳴をあげるしかできない。

体に攻撃が当たるとはなかったが、そもそもトリオはエレノア自身を狙っているわけではなかった。

みすばらしく衣服をボロボロにされたエレノアの生肌を、徐々に晒しているようにしているだけであった。

「ひゃつはア!!! おいロート!!! 今チラッと見えたぞオ!!!」

「ズリイぞゲルプ!! 場所替われ!!!」

「もつと剥いてやろうぜ、ブラオ!!!」

「……………なんで最近の錬金術師って、こんな下品で最低な奴らばかりなんだろうな」

最近出会う同業者がゲスばかりなことを思い出し、エレノアはこぼれそうになる自分の胸を隠しながら嘆く。

あれが世間一般的な錬金術師だと勘違いされることだけは、断固として止めたかった。

「風!!!」

「水!!!」

「火!!!」

「三つの属性をそろえたおれ達に死角はねエ!!!」

「あんまり逆らうならア……!!!」

「真つ白いお肌が傷だらけになつちやうよオ~~~~!!?」

さらに辱めてやろうと、エレメント・トリオは同時に錬金術を発動させる。

くだらない目的に利用される三つの力を半目で見やると、エレノアは静かに掌を合わせた。

「防陽冷盾^{スツエル}」

その瞬間、トリオが出現させていた風、水、炎が霧散し、跡形もなく消えてしまった。

「「……………は!!」」

両手をあげた間抜けなポーズで固まる三人に、エレノアは激情を押さえ込んだ能面のよくな表情を見せた。

「三人がそれぞれ得意な属性の錬金術を使う陣形…そんなもの、各個撃破すればたいした脅威じゃないんだよ」

パンツともう一度掌を合わせ、今度はそれを自分の刃に当てる。

すると、刃が真つ赤に熱され、空気が揺らぐほどの高熱を発し始める。

大気をも焼く烈火の刃を振り上げ、エレノアは軽やかに舞うように走り出し、トリオに迫った。

「その命、すべて貰い受ける……!!?」

慌てふためく三人に向けて、エレノアは刃を容赦なく振るう。

その姿はまるで、死を目前にした罪人を裁く死神のような恐ろしさであった。
 「ザバーニーヤ
 心音殺奪!!!」

目にも止まらぬ速さで斬り倒された三人は、手を出そうとしたことを激しく後悔しながら吹き飛ばされる。

いつも以上に力のこもったその一撃は、半分以上エレノアの私怨によるものであった。

「がはっ…!!?」

「エレメント・トリオがやられたー!!!?」

「格の違いが分かったかな? 三流錬金術師諸君」

血反吐を吐き、海に沈んでいく三人に海賊たちは慌て、エレノアは満足げに笑みを浮かべる。

勝ったことよりもまず、色々と危ない自分の格好をどうにかしたかった。

「身の危険!! 身の危険!!」

「え?」

だがその時、ガツンガツンと何かをたたき合わせる音と、興奮した荒い呼吸が聞こえてきた。

「身のキケ——ン!!!」

「うわわわわ?!」

エレノアが振り返ると同時に、バラティエの足場に炎が撒き散らされた。

慌てて飛び退いたエレノアは、もう一人残っているパールの相手をしていたサンジを睨みつけた。

「あんた何しちゃったの!?!」

「い…いやおれア別に」

「なんか鼻血出したらああなっただんだ」

困ったように頭をかくサンジと、鼻くそをほじるルフィ。

変わって答えたのは、狼狽した様子のクリーク海賊たちだった。

「やべエ!! 出ちまった!! ジャングル育ちの悪いクセ!!!」

「猛獣の住むジャングルで育ったパールさんは、身の危険を感じると火をたいちまうクセがあるんだ!!!」

「何その迷惑な病気!!!」

「おれに近づくんじゃね——っ!! ッファイヤーパ~~~~ル!!! 大特典!!?」

興奮し、味方のいうこともクリークの命令さえも聞かなくなったパールが、取り出した真珠を発火させて投げつけまくる。

一気に炎が燃え広がり、あたり一面火の海へとなってしまった。

「あつあつあつ!!!」

羽に引火したら一大事と、エレノアは慌てて海の中に飛び込む。

正直濡れて動きづらくなるのが嫌だったが、背に腹は変えられなかった。

「ぶはっ!!!」

一旦顔を出すと、サンジが火を恐れることなく、パールに蹴りかかっている姿が目に入った。

懐にやすやすと入り、防御を抜いてダメージを負わせているものの、火の勢いはますます強くなるばかりであった。

「ハア…ハア…!!! こうなったらこの辺の海水錬成して氷漬けに…!!!」

「ぬあ!!!」

どうにか援護できないかと考えていた時、ゼフのうめき声が聞こえてハッと目を見開いた。

その先にあつたのは、苦悶の表情を浮かべて倒れふすゼフと。

「もうやめてくれ、サンジさん。おれはあんたを殺したくねエ!!!」

「く……!!!」

「オーナー!!!」

その頭に銃を突きつけている、ギンの姿だった。

「ギン!!」

「ギン、てめエ…!!!」

料理長^セが踏み^フにじられている光景に、サンジの目に怒りの炎が灯った。

第29話 “同じ夢”

「過去にどれだけスゴかった男でも、こうなっちゃただのコック。頭を撃ち抜くのも簡単だ」

「あんの野郎店主の義足を!!」

「畜生オつ、店主!!」

倒れ伏したゼフの後頭部に銃口を突きつけるギンに、コックたちから悔しげな声が飛ぶ。

しかし最も悔しげな表情を浮かべているのは、他ならぬギンの方に見えた。

「この男を助けたいだろ？ 頼むサンジさん、おとなしくこの船を降りてくれ!!」

「船を降りろ？ やなこつた」

わずかな期待を込めてサンジを見るギンだが、一秒もたたずに返ってきた答えに目を見開く。

コックたちも、あまりの非情さに愕然としていた。

「バ…バカ野郎サンジ!!」

「挑発すんじゃないねエ!! 店主が………!!」

「なんてマヌケな姿だよクソジジイ。そんなんじや示しがつかねエだろ？ 戦うコックどもに!!」

「フン…チビナスにア何も言われたかねエな」

「何がチビナスだクソ野郎っ!!! いつまでも、ガキ扱いすんじやねエ!!!」

こんな状況下でも罵り合う二人に、コックたちから困惑の目が向けられる。

一体何がそこまで彼らに壁を作るのか。

だが、その考えは間違いだったことに気づいた。

「ギン。その銃、おれに向ける」

思わぬ言葉に、エレノアも目を見開いてサンジを凝視する。

それは、憎み合うものが口にするとは到底思えない選択肢であった。

「……………死ぬ気?」

「まあね」

憎たらしげに笑みを浮かべるサンジに、コックたちはおろかギンも困惑する。

たかが店を明け渡すだけで助かるのに、なぜ命を張るような真似をするのか、全くわからなかった。

「そんなに死にたきや…殺してやるぜ、いぶし銀にな!! 超天然。パ〜〜ルプレゼント
“ッ!!!”

動かないギンに代わるように、パールが真珠の盾でサンジを殴りつける。

防御もできずに超硬度の打撃をくらってしまった彼は、吐血しながら膝をついた。

「サンジ!!! このっ…」

「手エ出すな雑用っ!!!」

飛び出しかけたルフイを制し、サンジはぼたぼたと血を流しながら唇を噛む。

その表情には、激しい悔恨の念が浮かんでいた。

「卑怯じゃねエかよギン…そんな条件どっちものめねエよ!!!」

「あんた…どうしてそこまで…?!」

「何でだ!! 簡単だろ、この店捨てりゃ全員、命は助かるんだぜ!!! ただ店を捨てるだけ

でみんな…」

「この店は、そのジジイの宝だ!!!」

困惑するギンは、はつきりと言い切ったサンジにかける言葉を見つけられずにいる。

たかが店としか思えない彼には、サンジがこだわり続ける理由がわからなかった。

「おれはクソジジイから何もかも取り上げちまった男だ。力も!!! 夢も!!! だからおれ

はもう、クソジジイには何も失ってほしくねエんだよ!!!」

「こんな時に下らねエことほざいてんじゃねエ……チビナスが」

「うるせエな!! おれを、いつまでもガキ扱いするなっつってんだらうが!!!」

罵る間にも、パールの猛攻がサンジに襲いかかる。

意識が飛びそうになるのを必死にこらえ続けるうちに、サンジの脳裏にはかつての記憶が蘇っていた。

「……………!!」

サンジはかつて、別の海上レストランで見習いをしていた。

今ほど食べ物大切にすることばかりはなく、誰にも理解されない夢を見ながら日々を必死に生きるだけであつた。

そんな時、ある嵐の中でレストランは襲撃を受ける。

現役の子供であつたゼフが率いるクック海賊団は食料以外の全てを略奪しようとした。

それにサンジが反抗した時、高波にサンジはさらわれた。

そして気がついた時には、ろくな植物も生えていない小さな島に、彼を救い出したゼフとともに流れ着いていた。

残された食料を二人で分け、別々の場所で助けを待ち続けていた二人であつたが、一カ月二カ月を超えたところでサンジは限界を迎えた。

ゼフの食料を奪おうとさえ思っていた。

だがそれはできなかつた。

ゼフの食料袋に入っていたのは、島ではなんの役にも立たない財宝の山。そしてゼフは、「赫足」と恐れられた片足を失っていた。

「……てめエの足をてめエで食って、おれに食糧を残してくれたんだ……。……。おれを生かしてくれた」

縁もゆかりもない、命をも狙おうとした子供をゼフは生かした。

なぜなら彼らは、「同じ夢を抱いていたから」。

いつの日か、「偉大なる航路^{グランドライン}」で「オールブルー」を見つけるといふ夢を。

「レストランは渡さねエ!! クソジジイも殺させねエ……たかがガキ一匹生かすためにでけエ代償払いやがったクソ野郎だ。おれだつて死ぬくらいのことしねエと、クソジジイに恩返し出来ねエんだよ!!!」

血まみれになりながら、鈍い痛み of 走る体に鞭打ち、サンジは立ち上がる。

己が仁義を貫くために。

「^{ゼフ}恩人にどれだけ拒否されようとも、コックたちに嫌われようとも、その意志だけは曲げられなかった。」

「なぜ……立ち上がるんだよ、サンジさん……!!!」

「ハ——ッハッハッハッハッハッハ!! まだ受け足りねエか、おれの攻撃^{プレセント}を!!! キミに勝ち目はナイんだぞ!! 結果が全ての勝負の世界!! やられた奴が敗けなのさ!!」

人質とろうが店質とろうがブチのめした奴の勝利だ!! 違いますか首領・クリーク!!!」

「そういうことだ」

「そうでしよう!!」 ギンさん!!」

嘲笑するパールが同意を求めるが、ギンからの返事はない。

それを勝手に同意と判断し、パールは心底可笑しそうに嗤った。

「つまり貴様はおれ達に手出しもできずに散っていくのさ、それでもなお、ナゼ立ち上がる!!」 フンバるだけ無駄なのに」

「一時でも長く、ここがレストランで在るためさ」

迷うことなく答えたサンジに、コックたちに動揺が走る。

「あ……!! あの野郎死ぬ気かよ!!」

「クソガキが……」

誰もが信じられないと言った表情で凝視するものの、ニヤリと不敵に笑うサンジの表情に本気であることを察する。

あちこちから息をのむ音が聞こえる中、ギリツと歯をくいしばる音が響いた。

「……………男つて、ほんとバカ」

「うウ……………!!?」

無言で事の成り行きを見守っていたエレノアが、そう言ってパチンと手を合わせる。

同時に、怒りを押し殺したような唸り声を漏らしたルフィが、天に向かって勢いよく足を伸ばした。

「そういうバカは、好きになれないんだよっ!!!」

バチイツと自らの翼に触れて、含んでいた水分を残さず分解し、もう一度手を合わせて今度は船の残骸に触れる。

メキメキと音を立てて、木片が集まって一振りの太い槍へと変化していく。

それを持ったまま、突如エレノアは天高く飛び立った。

「何する気だあいつらっ!!!」

全員が目を見張って空を見上げる中、槍を携えたエレノアは頭上で振り回すと、黒く染まった槍の穂先をバラティエに向ける。

一方でルフィも、長く伸ばした足を渾身の力で引き戻し、足元に向かって振り下ろした。

「^{オノ}ゴムゴムのオ……戦斧^{オノ}!!!」

「^{ドゥリンダナ}不毀剛槍^{ダナ}!!!」

同時に二つの強烈な一撃が炸裂し、バラティエの「ヒレ」が一発で粉々に砕け散る。

その衝撃により、海中にいたコックたちや海賊たちがまとめて吹き飛ばされそうになった。

「ううわあああ——っ!!!」

『『ヒレ』が砕けたア——っ!!!』

「あの小僧共、妙なマネを……!!! ギン!! ゼフの頭をブチ抜け!!!」

「……しかし……」

苛立つクリークの命令にギンはためらう。

サンジへの義理のために、彼に戦わないように人質をとつたのは確か。

しかし自分たちへの攻撃ではなく、船への攻撃に関しては約束を破つたと判断するわけにはいかなかった。

「頭冷えたか大馬鹿鹿野郎ども……」

「エレノアちゃん!!! どういうつもりなんだ?!?」

ふわりと降り立つエレノアと、フンツと鼻息荒く拳を上げるルフイにサンジの怒号が飛ぶ。

そんな彼に、エレノアは気だるげな目を向けた。

「もういい……うだうだうだうだ面倒臭いこと考えるのはやめにした。この船をアイツらに渡したくないってんなら、今ここで私がブツ壊してやる」

エレノアの暴言に、コックたちはおろか海賊たちも目を吊り上げた。

「ああ!!? 何つったあいつ今!!!」

「船を沈めるだど!!？」

「ふざけんなア——っ!!!」

「おれ達の海賊船だぞ!!」

「フザけんなア——っ!!!」

怒号が一齐に向けられるも、エレノアは表情一つ使えない。

流石に聞き捨てならないサンジが、珍しく険しい視線をエレノアに向けた。

「いくら君だつてな……それだけは許さねエぞ……!!? おれが今まで何のために、

この店で働いてきたと思ってるんだ」

「それと君が代わりに死ぬことに……何の関係があるの?」

「君が、おれの受けた恩のデカさよこの店の何を知ってるんだ!!」

サンジの剣幕に、今度はルフィがムツとした様子で向かった。

胸ぐらに掴みかかり、本気で怒りをあらわにする。

「だからお前は店のために死ぬのかよ。バカじゃねエのか!!?」

「何だど!!?」

「死ぬことは恩返しじゃねエぞ!!! そんなつもりで助けしてくれたんじゃねエ!!! 生かし

てもらつて死ぬなんて、弱エ奴のやることだ!!!」

ルフィにもエレノアにも、サンジの決断は許せるものではなかった。

同じ命懸けで救われた者として、その命を無駄に散らす行為など、二人には許せるわけがなかった。

「じゃあ他にケジメつける方法があんのか!!」

「まあケンカはよせよ、キミ達。キミらの不運は、ただこのクリーク海賊団を相手にしちまったことだ。どうせ何もできやしねエだろ!! あの人質がある限りな!!」

敵を差し置いて喧嘩を始める三人に、パールがニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて向かってくる。

燃える盾を振り上げ、無防備な三人に襲いかかった。

「ファイヤーパールで燃えて死ねエ!!」

空気を焼くその重い一撃が放たれようとした時だった。

ドゴオン!!と鈍い音がして、パールの鉄壁の鎧が一瞬にして砕け散った。

それをやってのけたのは、奇妙な形のトンファーを携えた、ギンだった。

「悪いなパール、ちよつとどいてろ」

「何で…!!? ギン…さん…!!?」

「ギ!! ギンさん、なんでパールさんを!!?」

「ギン、てめエ!! 裏切るのか!!!」

「申し訳ありません、首領・クリーク。…やはり我々の…命の恩人だけは、おれの手で葬

らせて下さい」

クリークや一味から非難の声上がるが、ギンは決意を秘めたような表情でトンファーを構える。

どこか吹っ切れた様子のある彼に、エレノアは満足そうに笑みを浮かべた。

「そうだ……それでいいんだよ、ギン」

予想通りだ、とでも言いたげなエレノアにギンの訝しげな、しかしなんとなく答え合わせをしたがっているような目が向けられた。

「あんたも彼も譲れないものがある。そんなやり方で奪ったって、あんたにはきつと後悔だけが残る。恩や情が邪魔をして踏ん切りがつかないってんなら……一度真っ向から存分にぶつかればいい」

「……そのために、あんなことを言っておれをたきつけたのか」

「エレノアちゃん……だからあんなことを……」

「このままサンジくんがやられたままだったら、本気でこの船を沈めるつもりだったよ」

「フン………悪女め」

サンジはどこかほっとしたように、ギンは呆れたような笑みを浮かべ、天族の少女の胆力に震えを覚える。

「……ほ、ほらうまくいった」

「うそつけ!!! てめエは本気で船壊す気だったろ!!!」

引きつった顔で嘯くルフィには、サンジのツツコミが入った。

ゼフはエレノアをじつとりとした目で睨みながら、フンと鼻で笑った。

「……小娘が、でけエ口叩きやがる」

「くぐつてきた修羅場の数が、あんな奴とは比べ物にならないもんで」

「いくつだてめエは……勝てんのか、あの小僧は」

「勝ちますよ。背負ってるものが違う」

自信満々に言い切るエレノアに、ゼフはもう聞くまいというように視線を外してサンジたちに注目する。

エレノアも軽いため息をつくと、ルフィとパンツと手を合わせて背を向けた。

「ルフィ、親玉は譲るよ……私はまだ疲れた」

「おう!!? まかせとけ……あいつはおれがブツ飛ばす!!!」

肩を落とし、そのままバラティエの中に入っていくエレノアに、ハツと我に返った。パティが声を荒げた。

「……は? お、おい!!? こんだけ引つ掻き回して引つ込むつもりかよ!!? 何考えてやがんだてめエは!!!」

ピタツと足を止めたエレノアは、ブルブルと肩を震わせると、振り返ってパティを鋭

く睨みつけた。

「着替えるんだよ!!!」

「……あ、スマン」

エレメント・トリオにボロボロにされた服のことを忘れていたパティは、思わず素に戻って頭を下げた。

ゼフの隣を通って船内に入り、壁に背を預けると、エレノアは深いため息をつく。「………なんでこう、男の子つてのはバカな事くり返しちゃうんだろうな……」

そのせいでハラハラさせられるのは、いっだって女の方だ。

自分が両足を捧げた相手もそうであったと、またため息を吐いてしまふのだった。それからしばらくしてだった。

血相を変えたパティとカルネが、船内に飛び込んできたのは。

「!!? 何?! どうしたの?!?」

「伏せろ新入り!!」

「クリークの野郎が、猛毒ガス弾をぶっぱなしやがったア!!」

「なっ……!!?」

ゼフを引っ張り込んでドアを閉める二人の言葉に、エレノアは目を見張る。

慌てて両手を合わせた直後、物凄い衝撃とともに扉がぶちあけられ、毒々しい色の煙

が侵入した。

第30話 “信念の槍”

危険な毒ガスがバラテイエを包み込む。

海賊たちは防毒マスクをつけ、コックたちは海の中に飛び込んで難を逃れる。

街一つを滅ぼせるという殺傷能力を持った兵器の中、エレノアたちも生き残っていた。

「……………!! 海賊が戦闘に毒ガスを使うなんて……………!!」

「あつぶねエ……………!! この妙な風…お前がやってんのか……………!!」

「と、とにかく助かったぜ……………!!」

ドアの隙間から漂ってくるガスに恐怖していたパティとカルネだったが、エレノアの周囲に巻いている風の壁によって命拾いしていた。

片足のゼフの身を案じながら、エレノアはガスが薄まって行くのを確認してから扉を恐る恐る開いた。

「ルファイたちは…無、事……………!!」

外の様子を伺おうとした彼女の目に飛び込んできたのは。

マスクを顔面に押さえつけられるサンジと、大量に吐血しながらマスクを押さえつけ

ようとしているギンの姿だった。

「まさか…ギンはさっきのを食らって…!!?」

「お前はついてく男を間違えたらしいぜ…!!」

「クリ——ク!!!」

サンジとルフィが、部下をも見殺しにするクリークに怒りを燃やす。

呆然としていたパティとカルネも、外に出てようやく状況を理解し始めた。

「サンジ!!」

「うおっ!! あのつ端野郎毒ガスくらいやがったんだ!!」

血まみれのギンを見て即座に察する二人に、サンジが必死の形相で怒鳴りつける。

「パティ!! 解毒剤あったろ!!」

「おお…、あ…あるにやあるが、でもありや食当たり用のだけ!! 大体その野郎は敵なん

…」

「なんでもいいから持って…!!」

「それじゃダメだよ!!」

サンジの取ろうとしている対処を、エレノアが止める。

クリークの毒ガス弾がどんな種類のものかもわからない以上、手当たり次第に薬を使うのは逆に危険であった。

焦るエレノアの目に、転がっている防毒マスクが目に入った。

「パティ!! そのマスク持つてきて!! 多少なりとも助剤を含んでるはずだからそれで何とかもたせるよ!!」

「ま、マスクつてこれか!!」

「2階へ運んでよく呼吸させて!! 解毒は私がかするから!! 早く、パティ!!! カルネ!!!」

「わ!! わかった!」

「おれもかよ」

慌てて向かってきたパティとカルネがギンを抱え上げ、バラティエの二階のテラスに連れて行く。

まだ毒の余韻が残っていきそうな一階よりも空気がきれいそうという考えのようだが、エレノアも正しいと考えた。

「死なせない…私の目の前で、あんたは死なせない…!!」

パンツと掌を合わせ、わずかに残っている毒ガスの痕跡に触れる。

毒々しい色のガスが一瞬にして集まり、エレノアが取り出した瓶の中に液体となつてこぼれ落ちた。

「絶対死ぬなよ、ギン…!!」

「！」

「フン…無駄だ…。もって一時間つてどこか…」

クリークは目の前で苦しむ部下に、つまらなそうに鼻で笑う。

忠義を尽くしてきた部下に対するあまりの暴言に、ルフィは血管が切れそうなほどの怒りをあらわにした。

「あんな奴になんか、殺されるな!!! 意地で生きろ!! わかったな!!! あいつは、おれがブツ飛ばしてやるから」

「よせ…!!! あんたじゃ…あ、あの男に、勝てない…」

「バカ、落ちつけ!!! 真正面から飛び込めばあいつの思うツボだろ!! 死ぬぞ!!!」

「死なねエよ」

サンジとギンの制止も聞かず、ルフィはクリークに向かって走り出す。

先ほどまで散々だまし討ちに会い、身体中に傷を負っているにもかかわらず、ルフィはクリークの顔面に拳を突き立てることだけを考えていた。

「撃ちたきや好きだけ撃ってみろ!!!」

「おい!!! クソツ、勝手にしろっ…!!!」

無謀な突撃に、サンジもかける言葉が見つからない。

勢いの衰えない彼の背中を、黙って見送るしかできなかった。

「おい、下っ端!! しつかりしろよ!!」

「さあ、空気吸え!! いい空気いっぱい吸え!! 水飲むか?」

「そうだ、おれの特製プリン食うか?」

「バカ、中毒者に毒くわしてどうすんだよ」

「毒とは何だコラ、てめエに人のこと言えんのか!!」

「おれの肉料理は世界一の…」

「ガフツ!!!」

「死ぬな下っ端ア!!」

毒が回っているためか、それとも周りがうるさすぎたのか、血を吐くギンにパティとカルネは慌てる。

任されたばかりだというのに、ギンはいまにも死にそうになっていた。

「よく持ちこたえさせたよ、あんたたち!!」

「新入りイ!!」

そこへ現れたエレノアに、二人は期待と困惑の混じった目を向ける。

二人だけではどうにもならなかったために、きてくれたことは喜ばしい。だが正直エレノアにどうにかできると思えなかった。

「ちよつと離れて、ギンの体内の毒を中和するから!!」

「ち、中和!!」 できんのかよそんなこと!!」

「毒の成分さえわかればね。それに少し手間取った!!」 でも、もう大丈夫!!」

目を見開くパティを、エレノアは説明する時間も惜しいとばかりに押しつける。

パンツと手を合わせ、激しく痙攣するギンの胸に手を当てた。

「間に合えよ……!!」 「祝福健康」……!!」

青い閃光が辺りを照らし出し、ギンの体を蝕む毒素をまとめて消し去る。

先ほど集めた毒を解析し、その成分を「理解」さえできれば、あとは手順通り「分解

」して取り除くことができるはずだった。

「……これでもう、これ以上ギンの体内に毒が回ることはないよ」

「ほ、ほんとかア!!」

「毒を分解して、無害な物質に作りかえた……でも、毒に侵された部分は、私じゃ直せな
い……!!」

普通じゃない解毒方法ではあっても、万能ではない。

これ以上手の出しようがないエレノアは、自分の未熟さと無力さに歯噛みする他にな
かった。

「あとは、ギン自身の回復力に懸けるしか……!!」

「お、おとお…!! が、頑張れよ下っ端ア!!」

「死ぬんじやねエぞ!! クリークの奴は雑用が…いけるかなあ?」

「バカ!! そこはおまえ、信じてだなア…!!」

「無理だ…! あの人に、勝てるわけ…!!」

「そのへんは…」

眉を寄せるパティとカルネに、エレノアはなんということはないという表情を向ける。

その目は、いままさに激闘の音を響かせる海上に向けられていた。

「心配する必要はないと思うよ」

鋼の鎧に無数の武器、無敵を誇ってきたクリークはいま…名もなき若き海賊によって猛攻を食らっていた。

体に槍が突き刺さりながら、爆撃を何度も食らいながら、それでも立ち向かってくる青年に、クリークは煮え湯を飲まされ続けていた。

「…あの野郎、やりやがるぜ…」

「……」

「ね? 言ったでしょ?」

剣山のようなマントで身を守っても、それごと殴りつけられて膝をつくクリークを見

て、エレノアは笑みを深める。

「…ウーツ鋼の鎧もダイヤモンドの拳も、全身に仕込んだ無数の武器も、結局は人間が作った武器。なら、人間の力で壊せない道理はない」

爆撃によって黒焦げになりながらも、硬いウーツ鋼の鎧に幾度も掌底を叩き込み、ヒビを入れるルフィが、駄目押しとばかりに両腕を伸ばす。

「そしてそれら、ただの道具は…己の奥底を貫くたった一本の槍にはかなわない」
「『ゴムゴムの…!!』」

消して砕けぬ槍を備えた彼の目に、クリークは完全に気圧されていた。

「『信念』という大槍には!!!」

「『バズーカ』!!!」

両腕から繰り出される渾身の掌底が、鎧もろともクリークの腹のど真ん中を貫く。

鎧を破壊した威力がそのままクリークに襲いかかり、意識が一瞬で刈り取られかける。

だがクリークはしぶとく、さらに隠し持っていた網をルフィに絡ませた。

「うかれるな!!!」

「うわっ!! 生きてた!!」

「クハハハハ!! 逃げられんさ、鉄の網だ!!! 下は海だぜ!!! 勝負あつたなカナヅチ

小僧オ!! 引きずり込めばためエは溺れ死ぬ!!」

死なば諸共、いやルフィだけを溺れさせて自分だけは助かろうという魂胆か。

しかしそれでも、ルフィは諦めていなかった。

「勝負の果てに笑うのは常に、おれだと決まってる!!」

「手足が出せれば、こっちのモンだ!!」

網の間から手足を伸ばし、クリークに向かって勢いよく伸ばす。

クリークの顔を両足で挟み込むと、両足をぐるぐるとねじってきつく縛り上げた。

「ためエら援護しろ!!」

「は!! はい首領・クリーク!!」

危機を悟ったクリークが部下たちに命令する。

だがそんな彼らは、ギロリと恐ろしい目で睨みつけてくるサンジに止められていた。

「止めとけ、オロすぜ」

「ひいつ!!」

部下たちの援護もなく、使える武器もなく、クリークはもうされるがままだった。

ねじれた両足が元に戻り、それによって挟み込まれたクリークの体が回転する。

「〴〵ゴムゴムの〴〵オ!!! 〴〵大鎚!!!」

回転の勢いをつかせたまま、ルフィは敵をハンマーのように振り下ろし、船の残骸に

向けて叩きつける。

鎧を失ったクリークは、その一撃に耐えきることではできなかった。

「ああああああああ!!!」

「首領・クリーク!!!」

「やったぜ雑用オオ!!!」

「や……や、やりやがった……!!! 海賊艦隊提督首領・クリークを……」

クリーク海賊団の悲鳴が、コックたちの歓声が響き渡る中、死闘を終えたルフィは目を閉じ、鉄のあみに囚われたまま海へ落ちて行く。

たった一人で立ち向かった青年に、ゼフは呆れたような目を向けて呟いた。

「……………クリークのかき集めた艦隊も武力、百の武器も毒も武力なら、あの小僧の『槍』も同じ武力ってわけだ」

言葉を失うサンジに向けて、ゼフは皮肉げに笑ってみせた。

「下らねエ理由で……その槍を噛み殺してるバカを、おれは知ってるがね……………何してる。さっさと助けてやれ。あいつは浮いちゃ来ねエぞ。悪魔の实の能力者は海に嫌われカナヅチになるんだ」

「!!! バ……バカ野郎、それを早く言えばクソジジイ!!!」

ゼフの一言で我に返ったサンジが、慌てて海に飛び込む。

その必死な姿に、ゼフもエレノアも苦笑する他になかった。

「おれが最強じゃねエのかア!!」

その時、ひび割れたような怒号が響き渡る。

エレノアとルフィを抱えて海から上がったサンジが視線を向ければ、そこには白目を剥き、血反吐を吐き続けるクリークが駄々をこねるように暴れている光景があった。

「誰も、おれに逆らうな!!」 今日まで全ての戦闘に勝ってきた!! おれの武力に敵うものはありえねエ!!!」

「やめてください首領!!!」

「そんなに叫んだら体が:~!!!」

「首領を抑えろ!!! もう意識は失ってる!!!」

「おれは勝ち:~ガ:~勝ち続ガ:~ア!!! 勝ち:~おれは最強の男だ!!!」

勝者であり続けることにこだわり、自分の敗北を認められずに立ち上がろうとしている哀れな男に、エレノアは不快げな目を向ける。

その声が、唐突に途切れた。

「首領・クリーク:~おれ達は敗けました。潔く退いて、ゼロから出直しましょう」

未だ青い顔色のギンが、クリークの腹に拳を入れ、強制的に黙らせたのだ。

自分の倍はある体格のクリークを肩に担ぎ、ギンは不敵に笑った。

「世話になったな、サンジさん……」

「おオ……おととい来やがれ」

「おい下っ端!! お前毒吸ってんだぞ猛毒っ!!」

「しかも、てめエを殺そうとしたその男連れてどうしようってんだ!!」

まだ何か企んでいるのかとパティたちが騒ぎ出すが、ギンは吹っ切れた様子で、眠りこけているルフィに目を向けた。

「サンジさん……その人が目エ覚ましたら言っといってくれるかい。『グランドライン 偉大なる航路』でまた会おう』ってよ」

「……まだ海賊やる気なの?」

「よく考えてみたら、おれのやりてエことはそれしかねエんだ。いつの間にか首領・クリークの野望は、おれの野望になってたらしい……」

以前よりも生き生きとした表情でそういうギンだが、突然口から大量の血を履いて体を傾がせた。

目を見開くエレノアたちだが、ギンは構うことなく立ち続けていた。

「もしかしたら……おれは。もうあと数時間の命かも知れねエな……悪いな……せつかく毒抜いてもらったってのに……」

「……あんたの命だ。自分のために使うってんなら、好きにしなよ……」

「ああ……時間がねエから覚悟が決まるつても間拔けな話だがいい葉だよ。今度はおれの意志でやってみようと思う……好きな様に。そしたらもう、逃げ場はねエだろ？」
死にかけて大言を口にするギンに、エレノアは呆れた目を向ける。

それでも、無駄死にを望んでいるわけではなさそうであるために文句はなかった。

「何が首領への忠義だ！ おれは今まで首領クリークの名を『盾』に逃げてただけだ。覚悟きめりゃあ、敵が恐エだのためエが傷つかねエ方法だの、下らねエこと考えなくて済むことをその人に教えてもらったよ……!!」

エレノアはギンをじつと見つめ、やがて深いため息をつくとき、翼を使って一階に降りる。

もう一度手を合わせ、ガレオン船の残骸に触れると、バラバラだったそれは一瞬で集まっていき、一隻の小型の船へと変化した。

「……餓別。出来はそこまでよくないけど、どうせあんたたちの乗ってきたものだから、好きに使いなよ」

「……………!! 十分だ……もつたいねエくらいだ」

少女が見せる不思議な技に見とれていたギンは、これ以上ない贈り物に不敵な笑みで答える。

海賊たちや気絶したクリークとパールを積み上げ、沈みそうになる船に乗ってから、

ギンは改めて振り返った。

「じゃあな。ありがたく貰ってくよ。返さなくていいんだろ？ この船」

「返しに来る勇気があつたら来てみれば？」

「ああ…また歓迎してやるよ」

「おっかねエレストランだな」

挑発じみた捨て台詞に苦笑し、ギンはわずかな期待を抱いて、サンジとエレノアを見おさめる。

そんな彼を、他のコックたちも勇ましい態度で見送った。

「おーよ、脳ミソに打ち込んだけ。ここは戦う海上レストラン『バラティエ』だ!!」

海賊よりも恐ろしいコックたちのいるレストランを後にし、落ちぶれた海賊たちは再び海へと向かうのだった。

第31話 “また逢おう”

最後の皿洗いを言えたエレノアは、一階でサンジと語らっているルフィを見下ろす。

しばらくの間眠っていた彼と、サンジは伝説の海オールブルーへの夢を語っていた。

「ルフィも起きた……これで取りあえず、ノルマは終わったってことでいいんですよね?」

「小僧はともかくてめエはちと惜しいが……まア仕方がねエ。さつさとどこへでも行っちゃまえ」

相変わらず優しさのかけらもないゼフであったが、これしか彼は口にできないのだと理解しているため気にならない。

しかしふと、神妙な顔つきでゼフはエレノアを見つめてきた。

「だがその前に、少しばかり茶番につきあっちゃくれねエか」

「え?」

驚くエレノアに、ゼフは前々から決めていたある芝居について明かす。

エレノアは思わず顔をしかめ、ジト目でゼフを睨んだ。

「……………彼に、彼自身を解放させるおつもりで?」

「おれアもともとあんなクソガキの贖罪なんざ必要としちゃいねエ……目障りなんだよ、

あいつのことは」

「それが最後の命令なら……わかりました」

腑に落ちないといった様子でため息をつくエレノアは、サンジを見下ろすゼフに呆れた目を向ける。

あの二人は最後まで、憎まれ口を叩き続けるのかと。

「…最後まで笑い笑って見送ってやればいいのに。意地っ張りどもめ」

そんな毒舌にも気付かず、ゼフは楽しそうに夢を語っているサンジに笑みを浮かべていた。

「うれしそうな顔しやがって…バカが」

「メシだア——っ!! 野郎どもオ——っ!!!」

「おい誰だ、今日の当番は」

「おれ様と!!」

「あ、おれ様よ!!」

「なんだ極道コンビかよ。たいした味じゃねエな、どうせ」

「黙って食えこのアホのポイル共っ!!」

クリーク一味が去り、いつも通りの柄の悪さが戻ってきたバラティエであったが、こ

の日は少し違っていた。

「ん？ おい…おれ達の席は？」

「めしは？」

「おめエらのイスはねエよ」

「へっへっへ、床で食え床で!!」

「椅子がねエ!! …んなことあるかよ、レストランだぜここは」

いつもしないような意地悪を言い、ばかにしたような態度で笑う彼らに、サンジもルフィも訝しげな表情を浮かべる。

エレノアだけが、ブスツとした様子で黙り込んでいた。

「しょうがねエな」

「何かへんだな、あいつら…」

「いつもへんだよ、あいつらは。エレノアちゃんも何で黙ってるんだ？」

「…別に」

「おい今朝のスープの仕込みは、誰がやったんだ?!」

文句を言いながら床に座っていると、唐突にパーティがスープのもらった皿を手を立ち上がった。

それを見たサンジは思わず笑みを浮かべるが。

「…おう！ おれだ、おれ！！ うめエだろ！！ 今日のは特別にうまく…」

「こんなクソマズいもん飲めねエよ！！ ブタのエサかこりやあ！！」

パティはそれを、なんのためらいもなく床に叩き落とした。

このレストランではご法度である、食べ物を粗末にするという禁忌を、パティは犯したのだ。

「おい、人間の食べ物はお口に合わなかったかいクソダヌキ」

「はん…ここまでマズイと芸術だな、吐き気がするぜ。クソでも入れたか？」

「悪イが今日のは自信作だ。てめエの舌がどうか…」

「ウエツ、まずっ！！」

「飲めねエ飲めねエみんな捨てちまえっ！！」

「ぺっぺっぺっこりや飲めねエ！！」

怒りをあらわにするサンジの前で、コックたちは次々にスープを床に捨て、絨毯をし始めた。

エレノアはわかっていたように何も言わなかったが、それでも険しい表情でパティたちを見つめていた。

「てめエら一体何のマネだ！！！」

「てめエなんぞ所詮『エセ副料理長』だ、ただの古カブよ！！」

「もう暴力で解決されるのはウンザリだぜ」

「マズイもんはマズイと言わせてもらおう」

「何だと…」

絶句するサンジの背後で、ガチャンと皿が落ちる音がする。

振り返れば、不快げな顔をしたゼフがサンジを睨みつけ、床に落としたスープを指差していた。

「おい何だこのヘドロみてエなクソまずいスープは!!! こんなもん客に出されちゃ店がつぶれちまうぜ!!!」

「ふざけんなクソジジイ!!! てめエの作ったスープが、これとどう違うってんだよ!!
言ってみろ!!!」

「おれの作ったモンと…? うぬぼれんな!!!」

激昂したゼフは、サンジを殴った。

料理人として一度も手を使って人を傷つけたことなどない彼が、サンジにだけ初めて拳を振るったのだ。

それはつまり、サンジを料理人としてではなく、ただの一人の人間として扱ったという意味にも取れた。

「てめエが、おれに料理を語るの、百年早エぞチビナス!!! おれア世界の海で料理して

きた男だぜ!!!」

「……………!!! クソ!!!」

悔しさと怒りに顔をくしゃくしゃにしたサンジが、苛立ちをぶつけ損ねたまま背を向ける。

しんと静まり返ったバラティエの中で、エレノアはジト目を向けた。

「…大根役者どもが」

「このスープメチャクチャうめえのにつ!!!」

「そんなことは……………このみんな知ってるみたいだよ。ねエ?」

「……………そうだよ」

エレノアが聞き返すと、コックたちは苦虫を噛み潰したような表情で答えた。

「あー、恐かった。あいつマジでキレんだもんなー」

「サンジの料理の腕はここにいる全員が認めてる」

「こうでもしねエと聞かねエのさ、あのバカは……………!! なア…小僧共…」

どんなに喧嘩しようとも、嫌おうとも、仲間が努力してきたことも、その実力も知っている。

これは素直に本音を伝えられない彼らなりの、サンジへの優しい嘘だった。

「……………あのチビナスを、一緒に連れてってやってくれねエか。……………」

”

グランドドライン
偉大なる航路^{オーナー} はよ……あいつの夢なんだ」

「全く店主も面倒くせエことさしてくれるよなア」

「ヒヤヒヤしたよじっさいよー」

「おれスープおかわり!!」

「おれも」

「おれもだ!!」

もうサンジの目が届かないことをいいことに、コックたちは自分でこぼしたスープをもったいなさそうに見下ろしてから厨房に向かう。

本当に素直じゃないと呆れながら、エレノアは扉の外でうずくまっているサンジのことは黙っておこうと決めた。

「……で? どうする? 船長」

「いやだ」

「何———っ!!?」

が、コックたちによるせつかくの演技は、ルフィにとっては気に入らない結果だったらしい。

「どういうことだ小僧!! 貴様、船にコックが欲しいんじゃないのか?! あの野郎じゃ不服か」

「ううん。素質は充分……というか期待以上だと思おうよ」

「でもあいつはここでコックを続けたいって言ってるんだ。おっさん達に言われてもおれは連れてけねエよ」

「あいつの口から直接聞くまで納得出来ねエってわけか」

「わけだ」

「当然の筋でしょ？」

「……まあ確かにな。だが、あのヒネくれたガキが素直に行くと言えるかどうか……」

「言えるわけないっすよ。あいつはかたくなにアホだから」

「これでは無理やり連れて行くのと変わらない。」

サンジが自分から行くという言葉を聞ければいいが、彼の性格を見る限り難しく思えた。

だがその時、店に大きな衝撃が響き渡った。

バラティエの扉をぶちあけながら、人間の上半身と魚の下半身の形をした影が飛び込んできたのだ。

「何事!？」

「サンジ!!」

「何だこいつは!! 人魚か!？」

「魚人島からはるばるうちのメシを食いに!!」

「こんなに不格好な人魚はさすがにいないと思うよ……これただのパンサメに食われた人間だ。……つてヨサク!!」

「ああ……エレノアの姉貴……!!」

見覚えのある男がまた瀕死になっているという光景に、エレノアは大きく目を見開いた。

冷えた体を温めるために、コックたちが用意してくれた毛布で体を包み、温かい飲み物を飲みながらヨサクは語った。

「追いついたわけじゃねえんすけどね。ナミのアネキの船の進路で、大体の目的地がつかめたんす」

「ふーん。じゃ連れ戻せるじゃん」

「それが、その……そのアネキの目的地つつうのが、あつしらの予想通りだとしたらとんでもねえ場所……!!」

「それであんただけ知らせに戻ってきたと……」

結構な距離があつただろうによくやる、とエレノアは半分感心し半分呆れる。

実力はともかく根性は相当なものだ。

「まあ、詳しいこと後で話しやす! とにかくおふた方の力が必要なんです。あつしと

来て下さい!!」

「よし! 何かわかんねエけどわかった!! 行こう!!」

「いろいろと言いたいこともあるしね…」

「待てよ」

早速準備を進めようとする四人の元に、サンジから制止の声がかかった。

「おれもいくよ。連れてけ」

「え!!」

「サンジ、お前…」

「つきあおうじゃねエか、『海賊王への航路』。バカげた夢はお互い様だ、おれはおれの目的の為にだ。お前の船の『コック』おれが引き受ける。いいのか? 悪いのか?」

「いいさ!! やった——っ!!」

急な心変わりルフィは戸惑いながらも喜び、ヨサクとともに手をつないで回りだすが、エレノアは心配そうな表情を浮かべていた。

「……いいんだね?」

「ああ…ゴメンよ。バカ共のヘタクソな演技につきあわせちまって」

「てめエ知ってたのか!!」

「筒抜けだよ。てめエらバカだから」

「何イ!!?」

早速戻ってきた毒舌に反応しかけるが、サンジはあざ笑うようにゼフを見やるだけであつた。

「…つまり、そうまでしておれを追い出してエんだろ? なアクソジジイ」

「てめエは何でそういう口の聞き方しかできねエんだ、コラ!!」

「どうしてこう……素直になれないのか」

どっちも本当に伝えたい思いがあるだろうに、それを口にしない、いやできない姿にエレノアは歯噛みする。

もどかしくて仕方がなかった。

「…フン、そういうことだチビナス。もともとおれはガキが嫌いなんだ。くだらねエモン生かしちまったと後悔しねエ日はなかったぜ、クソガキ」

「は……上等だよクソジジイ。せいぜい余生楽しめよ」

そんないつも通りの憎まれ口を叩きあつた後、サンジは準備のために自室へ向かう。コックたちからしばらくの航海のための食料を分けてもらいながら、エレノアは一人に別れと感謝の言葉を述べていった。

ものすごく引き止められたが。

「遅いっスね、コックのアニキ」

「もう来るよ。…ほら」

サンジの買い出し船に乗って待っていると、片手にカバンを下げたサンジがやってくる。

そんな彼に、背後から巨大なスプーン状の武器を振り上げたパティとカルネが襲いかかった。

「積年の恨みだ!!!」

「覚悟しろサンジ!!!」

これまでの怒りをぶつけようとするが、当然のごとく二人は瞬殺された。

「勝てねエって、お前らじゃ」

「行こう」

「? いいのか? …あいさつ」

「いいんだ」

のびている二人を気にすることなく、コックたちの方に振り返ることもなく、サンジはルフイたちを促して出発しようとする。

そんな彼の背に向けて、ゼフが小さく口を開いた。

「おい、サンジ。カゼひくなよ」

「……!!!」

その何気無い一言が、引き金となった。

ゼフから初めて聞いた気遣いの言葉が、サンジの胸にこれまで積み重ねてきた感情を思い起こさせる。

溢れ出す涙をこらえることができず、サンジはその場で膝をつき、ゼフに向かって深々と頭を下げていた。

「オーナーゼフ!!! ……長い間!!! くそお世話になりました!!! この御恩は一生…!!!
忘れません!!!」

「くそつたれがア!!! さみしいぞ畜生オオ!!!」

「ぎびじいぞ——っ!!!」

サンジが初めて口にした感謝の言葉に感極まり、気絶していたはずのパーティとカルネが号泣しながら本音を口にする

それを皮切りに、他のコックたちもボロボロと涙をこぼしながらサンジとの別れを惜しみ始めた。

「ぎびじいぞオ!!!」

「かなしいぞ畜生オ!!!」

「……バカ野郎どもが……!! 男は黙って別れるモンだぜ」

そういうゼフの目からも、隠しきれない涙の雨がこぼれ落ちる。

ともに同じ時を過ごしてきた彼らの心は今、なんのしがらみもなく繋がっていた。
エレノアとルフィは顔を合わせ、満面の笑みを浮かべる。

「また逢おうぜ!!! クソ野郎ども!!!」

多くの仲間に見送られながら、忠義の男サンジは大海へと踏み出したのだった。

第5章 アーロンパーク

第32話 “アーロンパーク”

「うわああああん……」

広い広い海のと真ん中で、なぜか一人の男が号泣する声が響く。

海上レストラン『バラティエ』の荒くれコックたちに見送られ、男泣きしながら出発した一行であったが。

「……なんであんたが泣くのよ、ヨサク」

「だつて感動じだんでやんず!!! あつばれな別れつぷりでじだコックのアニギ……!!!」

「お前、この進路ちゃんとおつてんだらうな……」

当のサンジはとつくに泣き止んでいるというのに、ほとんどバラティエにいなかったはずのヨサクが一番泣いているという謎の状況。

チクチクと地道にフードを直すエレノアがジト目になってしまふのも仕方がなかった。

「あー早くナミ連れ戻して “偉大なる航路” 行きてーなー!!?」

「やけに嬉しそうだな。ナミさんが帰って来てもまだ、たった6人だろ？ 本当に6人で『偉大なる航路』へ行く気かよ」

「あの海をナメるなって、いつも言ってるんだけどねエ…」

「仲間集めなら『偉大なる航路』でもできるさ！ なんとって『楽園』だもんなー」

「『楽園』？ 『海賊の墓場』だろ!!？」

不思議そうな顔で尋ねるサンジに、ルフィは夢と期待に満ちた表情で答えてみせた。

「レストラン出る前にさ、オーナーのおっさんが教えてくれたんだ。『偉大なる航路』

を『楽園』と呼ぶ奴もいるんだと!!？ ししし!!？」

「……………クソジジイがそんなことをね……………まア、おれはナミさんとエレノアちゃんが

一緒なら、たとえ三人だけでも…」

「甘すぎるっすアニキ達!!」

呑気に笑うルフィと、二人の美女と一緒に航海する光景を妄想して鼻の下を伸ばすサンジ。

そんな二人に、ヨサクは鬼のような形相で待ったをかけた。

「だいたいアニキ達はエレノアの姉貴の言う通り『偉大なる航路』を知らなさすぎる!!!

今回だってその辺の知識があれば、ゾロのアニキ達もあつしと一緒に引き返してきたはず!!! ナミの姉貴が向かった場所がどんなに恐ろしい奴のもとかってことくらい理

解できたはずなんす!!!」

「メシにすつか」

「そうしよう?」

「そこになおれ!!!」

「なんかごめんねヨサク」

せつかく忠告のつもりで話しているのに、全くのガン無視をかまして食事の用意を進めようとしている二人に、ヨサクは思いっきり怒鳴りつける。

気を使ってくれるエレノアはともかく、この二人の認識はあまりにも酷すぎた。

「これから行く場所について、あんたがたも知っておかなきゃならねエ!!? そもそも
グランドライン
 “偉大なる航路” が海賊の墓場と呼ばれるのは…」

「君臨する三大勢力… “海軍本部” “七武海” “四皇” のせい、でしょ?」

「その通りつす!!? わかってるのはあんただけつすよ!!!」

「そんな泣かなくても…」

「七ブカイ?」

聞きなれない名称にルファイが首をかしげる。

エレノアは苦虫を噛み潰したような顔で振り向き、深いため息をついてからこの海の常識を教えてやることにした。

「簡単に言えば、世界政府公認の七人の海賊達のこと。未開の地や海賊を略奪のカモとして、その収穫の何割かを政府に収めることで海賊行為を許された海賊達だよ」

「他の海賊達にいわせりや『政府の狗』に他なりやせんが、奴らは強い!!!」

「あの『鷹の目』だって七武海の一人だからね。正直この先で対するものは避けたいよ」

「やれやれと言った様子で肩をすくめるエレノアだが、ルフィにとつてはとんでもない真実であつたらしい。パンパンとサンダルを鳴らして興奮しまくっていた。

「そりやすげーっ!!? あんなのが7人もいんのかよ!!? 7ブカイつてすげエ!!?」

「…で? なんでナミの行き先に七武海が関連するわけ?」

「相変わらず海の知識に乏しい船長にジト目を向けながら、エレノアはヨサクに注目を戻した。

「ヨサクはやつとかというようにため息をつき、神妙な顔で身を乗り出した。

「問題はその七武海の中の一人、魚人海賊団の頭『ジンベエ』!!?」

「魚人か! おれ、まだ会つたことねエよ!」

「魚人といやあ『偉大なる航路』の魚人島は名スポットなんだろう? そりやあ、もう世にも美しい人魚達がいるって話だぜ」

別の注目度また話が脱線しそうになり、エレノアはルフィとサンジをギロツと睨みつ

けた。しかしすぐに自分を落ち着かせ、ヨサクに話の続きを促した。

「『海侠』のジンベエ？ あの人が何をしたっていうの？」

「ジンベエは『七武海』加盟と引きかえに、イーストブルとんでもねエやつをこの東の海へ解き放ちまいたがった」

「こういうのかな」

「お前、そりゃキモい魚だよ」

「あんた達に集中力はねエのか!!？」

「あいつらはもういいから、さっさと話進めてよ」

さつきから全く関係ない話で盛り上がっている二人にヨサクがキレかけるが、半ば諦めたエレノアは放置を決めた。

ヨサクもあまり込み入った話をしてもし方がないと思ったのか、同じようにため息をつくと続きを話した。

「ややこしい戦いの歴史はとっばらいやす。今あつしらが向かっているのは『アーロンパーク』!!! かつて『七武海』の一人ジンベエと肩を並べた魚人の海賊『アーロン』の支配する土地です!!!」

「『ノコギリ』のアーロンか…個人の實力なら、首領クリークをしのぐだろうね。あんたがそこまでビビるのも仕方がないか」

ヨサクが告げた海賊の名から以前見た手配書の賞金額を思い出し、エレノアは眉間にしわを寄せる。

普通に考えれば、これまであつてきた賞金首たちの額を大きく上回る魚人が相手なのだ、ヨサクが恐れるのも仕方がない。

「……………でもよ…、お前途中で引き返してきたんだろ？ 何でナミさんがそこへ行くつてわかるんだ？ 同じ方角の別の場所かもしれないねエだろ」

「あつしとジヨニーに少し心当たりがありやしてね……………!!? 進路踏まえてよおく今思い返してみると…!!? 確かに姉貴はアーロンの手配書ばかりじつと見てた。そしてアーロン一味が最近また暴れ出したつてことをあつしらが口走つた直後…」

「宝をもつて船を出したと…確かに偶然にしてはできすぎてるね」
「きつと何らかの因縁が…」

なかなか見えてこない真相に真剣な表情で悩むエレノアとヨサク。

その横で、ルフィはさつき書いた魚人の絵を新しく描き直したものを見せていた。

「みる!!? これは!!?」

「そりやさつきの魚を立たせただけじゃねエか。しかしナミさん、その魚人に何の用なんだらうなア。もしかして彼女は人魚だったりしてな！ あのかわいさだもんなー」

「いや関係ないでしょ」

タバコの煙をハートの形にして、デレデレしただらしない顔を見せるサンジに、エレノアは冷たい目を向ける。どうしてさっきからこの男はこんなことしか考えられないのか。

サンジのセリフを聞いたルフィは、戸惑った様子で自分の魚人の絵にオレンジ色の髪を付け足した。

「……え？」

「ブッコロスぞてめエ!!?」

「あんたがたあつしの話ちやんと理解したんですか!?!?」

ナミが変な化け物に変えられたことでキレるサンジに、流星に我慢の限界に達したヨサクが叫ぶ。

そんな彼に、ルフィは相変わらずの笑顔を見せた。

「ああ、強い魚人がいるんだろ。わかったよ」

「いいえ、わかってやせんね!!? だいたい強さをわかってねエ!!?」

「そんなもん着きやあわかんだろうがよ」

「そうそう、心配しないでよヨサク」

「あつしの話した意味がねエ!!!」

せっかく真剣な話をしていたのに、警戒させることもできなかったヨサクは思わずが

くりと膝をつく。

その肩をエレノアがよしよしと優しく叩いてやっていた。

「とにかく飯にしようぜ。何が食いたい?」

「骨ついた肉のやつ!!!」

「あつしモヤシのため!!!」

「カルパッチョでも頼もうかな」

「よし!!? 任せろ!!?」

吹っ切れたのか一緒になって騒ぎ出したヨサクに苦笑しながら、エレノアもリクエストを出す。

しばらくして香り出すいい匂いに、ルフイは実に幸せそうな笑みを浮かべた。

「ん——いいよなー、コックがいると」

「おれはお前らなんかより、早くナミさんにお食事作ってさし上げてエよ。あ、エレノアちゃんもいつぱい食べてくれると嬉しいな!!?」

「はいはい」

「あつし! モヤシ! 大盛りで!」

さりげなく口説いてくるサンジを適当にあしらいながら、エレノアはヨサクが教えてくれた航路の先を見つめる。

メシ済ましちまったのかな!! おれが食つちまうかな!! なアフカ爺いいかな!!」
「ぐがー……」

流石におかしいと思ったのか、訝しげな顔で首をかしげるタコの魚人は傍で仰向けになつて眠りこけている魚人の老人に話しかける。

しかし老人は大きないびきをかいたまま、反応することはなかった。

第33話 “偉大なる航路（グランドライン）の怪物”

アールンパークを目指すルフィたちの前には、ある一匹の訪問者の姿があった。

小舟がまるまる隠れてしまうほどの巨大な影を前にして、ヨサクを除いた三人は訝しげな半目を向けていた。

「何だ、こいつ」

「でけエ……………」

「おや珍しい」

「うわああああああああ海獣だアああああああ!!!」

ヨサクの悲鳴が響き渡る。

ルフィたちの前に現れた影、その正体は十メートルは超える巨体に大きなヒレを持つ、牛の顔を持った怪物。海獣と呼ばれる、陸の動物の特徴を持った巨大な水棲生物の一種だった。

「牛だーっ!!! でけーっ!!!」

「牛か? 泳ぐか? フツ….:カバだろ」

「いや、これは海牛! “偉大なる航路”^{グランドライン}の生き物だよ。…ちなみに哺乳類か魚類かは私

も知らないや」

「のんきなこと言ってる場合っスか!!? こいつどう見てもこつちを狙ってますよ!!!」

ボケーっとした顔で小舟を覗き込んでくる海牛にヨサクはさつきから騒ぎっぱなしであった。

件の海牛はサンジの作っている料理に興味を惹かれたのか、クンクンと鼻を鳴らして匂いを嗅ぐ。

「狙いはメシだ!!! 早く渡してください、船をひっくり返されちゃう!!!」

こんなところで海の藻屑となるなどごめんだ、とヨサクは料理を持っているサンジに促す。

が、そんな提案をこの男がのむはずがなかった。

「『ゴムゴムの銃』^{ピストル}!!!」

料理に気を引かれていた海牛の横つ面に、情け容赦ないルフィの拳が炸裂する。

海牛の巨体が一瞬海上に浮き、口から漏れた血とともにざぶんと海に沈み込むのを見届けると、ルフィはビシツと指をさした。

「おれのメシに手エ出すな!!!」

「やった!! すぎえ!! ルフィの兄貴!!!」

出会ったら即逃げようと考えていたヨサクだったが、この船に乗っているのは常識外

の連中ばかりであったことを思い出して内心かなりホツとしていた。

しかし小舟の上であまり力が入っていないなかったのか、海牛はすぐさま眼を覚ますと凄まじい形相で向かってきた。

「モオオオオ!!」

「うわっ!! 怒りをかっためてエッス!!」

「もう一発か!!」

「バカ野郎どもオ!! 腹空した奴をむやみにブツ飛ばすな!!」

即迎撃に入ろうとするルフィとヨサクの脳天に、サンジのかかどが食い込んだ。

サンジは料理を装った皿を持つと、慈愛のこもった目で海牛を見つめた。

「きつとこいつはケガでもして自分でエサをとれねエんだ。なア：そうだろう?」

「優しいねエ…」

「なんて愛だ…」

「……………?」

空腹な奴にのみもたらされるサンジの深い愛に、ヨサクやエレノアは思わず閉口する。

実際は飼い主にエサの時間に呼ばれたはいいが、出るところを間違えただけとは夢にも思えない。

「さア、食べ」

ホカホカと出来立ての料理の皿を差し出し、笑みを浮かべるサンジ。

そんな彼の前で、海牛は大きな口を開く。：エレノアに向けて。

「死ねコラア!!!」

「あんたら何やってんスカ!!!」

サンジとエレノアの渾身の蹴りを受け、海牛がまた空中にブツ飛ばされる。

先ほどと180度も違う塩対応に、思わずヨサクは絶叫していた。

「あのヤロー今、エレノアちゃんを食おうとしやがった!!」

「恩を仇で返しやがってあのヤロー……」

スパー、と不機嫌そうにタバコの煙を吐くサンジに、危うく餌にされかけたエレノアが靴を鳴らす。

今度こそ仕留めたかと思いきや、再び水面が盛り上がりさつきよりも凄まじい怒りを燃やした海牛が顔を出した。

「モオオオオ!!!」

「来たア!!! 船沈める気でやすよ!!!」

「…ねエ知ってる?」

慌てふためくヨサクをよそに、顔に影を落としたエレノアがポツリと眩く。

「海獣の肉つてねエ……抵抗の強い水中だとかかなり引き締められてお肉がおいしくなるんだってさ……」

「!!?」

につこりと黒い笑みを浮かべるエレノアに、その場にいた誰もがゾツと背筋を震わせた。

無論海牛も例外ではなく、燃えたぎっていた怒りが一瞬で鎮火し、エレノアから距離を取ろうとザバババツと後ずさる。

しかしその時にはすでに、エレノアは海牛のすぐ目の目にまで跳んでいた。

「いくぞー！ 旅神鎌劍^{ハルベ}!!!」

鋼鉄の義足、そして卓越した脚技による一撃が、海牛の首に炸裂する。

すでにルフィとサンジによる度重なる攻撃を受けていた海牛は耐えきれず、白目を向いて海に倒れ込んでいった。

「今日の食材ゲッツ」

満面の笑みで小舟の上に着地する天使の少女。

その変貌ぶりに、男子たちは味方とわかっていながらもゴクリと唾を飲み込んでいた。

「ほら、食卓に上がるのがイヤならさっさと引きなさい」

「鬼っスね…エレノアの姉貴」

その後、気が付いた海牛を脅しつけ、小舟を引かせることにし、快適な速さでアールパークまでを目指すこととなる。

ポロポロの海牛を無理やり働かせるエレノアに、ヨサクは戦慄の目を向けるばかりであつた。

「さ——メシだ」

「あいよ」

「おなか減つたア」

「ムチャクチャだ、この人達」

「ヨサク、茶ア!!」

「茶ア!!」

「へ——い」

否応がなく見せつけられる化け物つぷりに、もう突つ込む気にもなれず、いつのまにかお茶汲み係になつてしまうヨサク。

そしてそんな旅の果てについて、目的地である島が見え始めた。

「見えたぞ、アールン・パーク!!!」

「コラ!! 疲れるなカバ!!」

「やっぱあれだよ、あんた達のが効いてんのよ…」

徐々に衰えていく海牛の泳ぐ速度に、自分のことを差し置いて呆れたように呟くエレノア。

息も切れ切れの海牛にそのまま進ませていると、目印にしていた門のような建物から向きがズレ始めた。

「おい!! 違うぞもつと左だ!!!」

「あの建物だぞ!!」

「だめだ岸にぶつかるウ!!!」

慌てて方向を変えさせようと指示を出す、もはや海牛は前に向かって泳ぐしか頭にならないほど疲弊しているようだった。

そしてついに、海牛は門の脇の岸に激突し、引つ張られていた小舟はその衝撃で空中に吹っ飛ばされてしまった。

「うほ——つまるで空を飛んでるようだ——」

「ブツ飛んでんだよ、バカ!!」

「あの海獣には悪いことしたな…」

「落ちる——つ!!!」

身動きの取れない空中でパニックになる小舟。

とつさに帆を操り、正面からの風を使って小舟の落下先を変えて操るエレノアが叫ぶ。

「林につつ込むよ!!! しっかりつかまってなさい!!!」

その直後、バキバキと枝をへし折りながら小舟が木々の中に突っ込んでいく。

幸いにも小さな森の中の下り斜面に着地したために惨事は免れたが、ソリか何かのよう滑り落ちる速度は上がる一方であった。

「うおっ!! 着地した!!!」

「でも止まりやせエン!!!」

「舌噛むからしやべんないでよ!! なんとか平地で減速して……」

森の中を抜け、小舟を止めるすべを探そうと試みるエレノア。

その進行方向上に、なぜかゾロが飛び出してきた。

「え!!? ゾロ君!!!」

「アニキイ!!!」

「ルフィ……!!!」

あつけにとられ、船の操縦を誤るエレノアと突然の事態に固まるゾロ。

その直後、凄まじい轟音とともに小舟の残骸があちこちに散らばっていった。

「てめエら一体何やってんだ!!」

「何ってナミを連れ戻しにきたんだよ。まだ見つかんねエのか? ウソツプとジョ

ニーは?」

「ヨ…ヨサク大丈夫?」

小舟の残骸の中で、血まみれになりながら怒鳴るゾロにルフィが答える。

原因とも言えるエレノアは、なぜか頭から地面に突っ込んでいるヨサクを介抱するという口実で視線を逸らした。

「ウソツプ…!!? そうだ! こんな所で油うつてる場合じゃねエっ!!」

「ん? どうした!!」

「あの野郎今、アーロンに捕まってやがんだ! 早く行かねエと殺さ…」

「殺されました!!!」

慌てて駆け出そうとしたゾロに、別行動していたらしいジョニーが叫ぶ。

一瞬彼が何をいつているのかわからなかったゾロは、呆然とした様子でジョニーを凝視した。

「…ジョニー…?」

「手おくれです…ウソツプの兄貴は、もう殺されました!!! ……………!!! ナミの姉貴に

!!!
」

その信じられない一言に、誰もが言葉を失っていた。

ルフィたちが島に到着したたちようどその時、アーロンパークでは別の騒ぎが起きていた。

島に近づく海軍の船が見えたからだ。

「第77支部?」

「ああ、そう書いてあった」

報告したエイの魚人に訝しげに聞き返す、刺々しい長い鼻を持つノコギリザメの魚人。

この男こそ、恐怖と力によって島を支配する海賊、そしてナミが所属する魚人海賊団のボス、ノコギリのアーロンであった。

「新顔だな…妙なマネしてくれるなど。誰か行ってお偉いさんと交渉してきな。2百万で手を打てねエ様なら消していい」

最も近い海軍基地である第15支部は、すでにアーロンが買収しているために危険はない。

しかし面識のない海軍支部の連中ならば、また一から交渉を始めねばならないと、面

倒そんな顔になるアーロン。

しかしそんな彼の元に、軍艦から一発の砲弾が発射されるのが見えた。

「な!! 撃つてきやがった」

「アーロンさん、危ねエ!!」

慌てて部下の魚人たちが警告するが、アーロンは椅子に座ったまま動こうともしない。

砲弾が目前にまで迫った瞬間、アーロンは大きく口を開けると砲弾を啜え、バギンとそのまま噛み砕いてしまった。

「交渉は?」

「ナシだ」

ブツと砲弾の破片を吐き捨てるアーロンはようやく立ち上がり、指示を今か今かと待っている部下たちに視線を向けた。

「よし行くぞ、海戦だア!!」

「オイ……ちよいと待ちな小童共」

アーロンの号令に、歓声をあげかけた魚人たちを止める一人の老いた魚人。

アーロンは彼の目を見ると、昂ぶっていた闘志を即座に沈静化させた。

「たかがゴミ掃除に全員で向く必要もあるめエ……わし一人で十分だ」

「フカ爺……!! あ、あんた一人で行くつてかよ!!?」

「いくらなんでもそりゃあ……」

いくら人間とはいえ、相手は訓練された海兵数十人。

老人一人に行かせるには心苦しいとためらう彼らに、アーロンは椅子に座りなおすとニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「引けてめエら……フカ爺は確かに歳だが、人間ごときに後れをとるほど衰えちやいねエよ」

アーロンのその笑みには、過去に裏付けされた確信があった。

「おかしいな…………」

「准将!! 砲弾は不発の様です」

「もう一度だ。これは開戦の合図だぞ!! 正面きつてこちらに戦闘の準備があることを知らせねばならん!! 相手は魚人。みんな、油断するな!!」

「ハッ!! プリンプリン准将!!」

島の住民からの SOS を受け、精鋭部隊を引き連れてやってきた第77支部の准将。

自分と部下たちのやる気上げるために、砲弾の炸裂は必要なことであった。

「大砲、点火します!!」

「あ?」

「!? うわ!!」

しかしもう一度発射しようとした瞬間、大砲の前に突如大柄な老人が現れた。

驚いた海兵は点火を止めることができず、発射された砲弾は真正面から老人に炸裂した。

「ちよ…直撃した!!」

「なんと愚かな…大砲の前に立つなど」

勝手に現れ勝手に自滅したとあざ笑う海兵たち。

だがその目の前に、ほとんど無傷の魚人の老人が残忍な笑みを浮かべて現れた。

「あア…? 今…なんかしたか?」

「な…!! 砲弾が効いていないだど!!」

「アーロン一味だ!!? かかれ!!? 戦闘だ!!」

「待て、落ちつけ!!」

敵が突然単体で現れたことで動揺し、我先にと襲い掛かりそうになるのを、准将が冷静に止めさせた。

「私は海軍第77支部准将プリンプリン。我々は多少なり名の通った精鋭部隊…君らが、もし大人しく…」

「うるせエ!!!」

しかし説得を一切聞く様子はなく、プリンプリン准将は魚人の老人に思いつき殴り飛ばされる。

軍艦の壁を破壊するほどのその拳により、プリンプリン准将は一撃で気絶してしまつた。

「准将オ!!!」

「よくも准将を!!!」

「討ち取れエ!!!」

大將がやられたことで、海兵たちは半ばパニックに陥りながら老人に向かって襲いかかる。

老人は小さく舌打ちすると、迫り来る海兵たちをまとめて右手で薙ぎ払つた。

「鬱陶しいわア!!!」

「ぎゃああああああ!!!」

たった一度腕を振るっただけで、海兵たちはズタズタに切り裂かれながら吹き飛ばされる。

ピクリとも動かなくなつた海兵たちを前に、老人はいらだたしげに眉間にしわを寄せた。

「おいおい……この程度で精鋭部隊なんぞと名乗ってやがるのか？ さすがは最弱の海と名高い東の海だなア……あくびが出そうだ」

そう呟き、手頃ば場所にあつた大砲に手を振り下ろす。

その瞬間、鋼鉄の筒は一瞬で叩き潰され、使い物にならなくされてしまった。

「『偉大なる航路』にいた連中と比べるのもおこがましいわ」

そこからは、ただただ地獄が繰り広げられるだけであつた。

銃弾も砲弾も刀剣も効かず、拳や蹴りで体がズタズタに切り裂かれてしまう。

存在そのものが凶器のような化け物が暴れまわる姿を目の当たりにしながら、血まみれで倒れ伏していた一人の海兵が戦慄の表情を浮かべていた。

「お、思い出した……!! あいつは……間違いない……!!」

仲間たちの血を浴び、骸を積み上げ、破壊と暴力の限りを尽くす老人とは思えない戦いぶりを見せる魚人。

その魚人の名を、海兵はたった一人だけ知っていた。

「懸賞金5千万の海賊……!! 元魚人海賊団幹部!! 『鮫肌』のフカだ!!!」

その名を思い出すには、彼はかなり遅すぎた。

もし思い出していれば、彼に挑もうなどという愚行など起こさなかつたかもしれないのに。

最後に残った一人を踏み潰し、フカ爺と呼ばれていた老人はようやく落ち着きを取り戻した。

あたりに飛び散る血痕や残骸は、もはや原形をとどめていないほど悲惨な状態を表している。

「ああ……ダメだな。たまには適度に運動せにやア、体が鈍る」

かつて『グランドライン』で名を売ったオオメジロザメの魚人は、そう気だるげに首を鳴らしながら獰猛な笑みを浮かべたのだった。

「昔ほど動けねエってのア………悲しいもんだな」

第34話 “魔女ナミ”

「お前、もういつペン言つて見ろ、ブツ飛ばしてやるからな!!!」

「やめろルファイ!! ジョニーにや関係ねエだろ!!?」

「デタラメ言いやがって!!! ナミがウソツプを殺すわけねエだろうが!!! おれ達は仲間

だぞ!!!」

「信じたくなきやそうすればいいき…!! でも、おれはこの目で…!!」

ナミがウソツプを殺したというジョニーの言葉によって、一味の中でよくない波紋が広がってしまう。

誰もが狼狽し、戸惑い、罪もないジョニーにきつい言葉を浴びせかけてしまう。ルファイには珍しく、自分でもどうしようもないくらいに感情を持って余ってしまった。

その時だった、最も聞きたい声が聞こえてきたのは。

「誰が仲間だった? ルファイ」

背後から聞こえてきた声に、ルファイたちは目を見開いて一斉に振り向く。

言葉を失い、立ち尽くすルファイたちの前で、冷たい表情を浮かべたナミが気だるげに肩をすくめていた。

「何しに来たの？」

「何言ってるんだ！ お前は俺の仲間だろ、迎えに来た!!」

「大迷惑。仲間!!」 笑わせないで、くだらない助け合いの集まりでしょ？」

真剣な目でナミを見つめ、大きな声で告げるルフイに、ナミは冷たく吐き捨てるように返す。

不穏な空気が流れる中、サンジがナミの姿を見て満面の笑みを浮かべて手を振った。

「ナ!! ナミさ〜ん♡ おれだよ、憶えてる!! 一緒に航海しようぜ!!」

「サンジ君、悪いんだけど今そのテンションやめて」

「えエ…」

「ひっこんでろ!! 話がややこしくなんだろうが!!」

「アンだとコラ、恋はいつでもハリケーンなんだよ!!」

エレノアの咎める視線にがっくりと肩を落とし、ゾロの非難に逆に食ってかかる。

全く関係のない因縁が燃え上がる中、ジョニーが我慢の限界とばかりに声をあげた。

「言ったでしょう!! この女は魔女なんす!! 隠し財宝のある村を独り占めするために、アーロンに取り入って平気で人も殺しちまう!! こいつは根っから性の腐った外道だったんすよ!!! 兄貴達はずっとダメされてたんだ!!! この女がウソップの兄貴を刺し殺す所をおれは、この目で見た!!!」

ナミを指差し、自分の見てきた悲劇と抱いた怒りをぶちまけるジョニー。

その必死な形相をつまらなそうに見やったナミは、やがてフツと冷笑を浮かべた。

「…だつたらなに？ 仕返しに私を殺してみる？」

「!! ……なに!!？」

「二つ教えておくけど、今『ロロノア・ゾロとその一味』をアーロンは殺したがってる。ゾロがバカなマネをしたからね。いくら、あんた達の化物じみた強さでも、本物の『化物物』には敵わないわ」

アーロンの戦力を笠に着て、憤怒の形相に変わるジョニーを微塵も恐れないナミ。

これまでで見せてきた笑顔の全てを否定するような冷酷な態度を見せる彼女に、ゾロは今にも殺しそうなほど殺気を迸らせて目を細めた。

「そんなことアどうでもいい、ウソツプはどこだ」

「海の底」

「てめエいい加減にしろ!!」

「いい加減にすんのはてめエだクソ野郎!!」

思わず斬りかかろうとしたゾロの腕に、横から割って入ったサンジの蹴りが炸裂する。

サンジはそのままゾロの前に立ち、ナミをかばうように睨みつけた。

「剣士つてのア、レディにも手をあげんのか？ ロロノア・ゾロ」

「なんだと？ 何の事情も知らねエてめエが出しゃばるな!!!」

「ハッ…屈辱の敗戦の後とあっちゃイラつきもするか」

「あア!!？」

「鷹の目」との戦いのことを持ち出され、ゾロの目に剣呑な光が宿る。

相手に強者と認められたとはいえ、手傷さえも負わせられなかつた屈辱を思い出させられ、ゾロは頬をヒクヒクと痙攣させた。

「……おい、口にア気をつけろ。その首飛ばすぞ」

「やってみろ大怪我人が」

度重なる挑発に、ゾロの標的が目の前のぐるぐる眉毛のコックに変更される。

殺し合いでも始まりそうなほど緊張感が高まり、互いが得物を構えあつてじりじりと力を溜め始めた。

「いい加減やめれ」

「!!？」

が、ぶつかり合う寸前で割つて入つたエレノアにより脳天に一撃ずつ食らわされる羽目になつた。

頭を抑えて悶絶する二人を見下ろし、エレノアは深いため息をついた。

「あんた達がはり合つてどうすんのよ……時間のムダよまったく」

「そういうこと!! ケンカなら島の外でやってくれる? 他所者がこれ以上この土地のことに首つっこまないで!!!」

勝手に喧嘩を始める二人に嫌悪の混ざった目を向け、ナミは腰に手を当てて告げる。完全にルフィたちのことを邪魔者としか見ていないようだ。

「まだわかんないの!! 私があんた達に近づいたのはお金のため!!! 今の一文なしのあんた達なんかには何の魅力もないわ!!! 船なら返すから航海士見つけて、”ひとつなぎの大秘宝”でも何でも探しに行けば!! さっさと出て行け!! 目障りなのよ!!!」

まくしたてるように罵声を浴びせかけ、ナミはルフィたちを睨みつける。

徐々に彼らとの間に壁と距離ができていくのが見えるようで、エレノアは悲しげに眉をひそめることしかできずにいた。

「やいほうなら」

一応の挨拶といった風に告げ、ナミはルフィたちに背を向ける。

その宣告にルフィはしばらく黙りこくり、やがてゆつくりと体を傾がせ、ぱたりと仰向けに倒れこんだ。

「ねる」

「寝るウ?!? この事態に?!? こんな道の真ん中で?!?」

「島を出る気はねエし、この島で何が起きてんのかも興味ねエし…ちよつとねむいし、ねる」

「…勝手にしろ!!! 死んじまえ!!!」

馬鹿にしているとしか思えないルフイの態度に、ナミは激高したように叫び、足早にその場を離れていく。

その背を見つめていたエレノアは、彼女の姿が見えなくなる寸前で呼び止めた。

「ナミ!」

「…!! なによ…」

もういい加減にしろ、とでも言いたげな視線を受けながら、エレノアは悲しげに目を細める。

その視線は、ナミの手の甲に巻かれた包帯に向けられていた。

「左手の傷、もういいの?」

「……………!!!」

エレノアの指摘に、ナミは一瞬しまったというように目を見開くが、唇を噛んで視線をそらすとそのまま走り出していつてしまう。

返事ももらえなかったエレノアは、呆れたようなため息をついて肩をすくめた。

「…頑固者め」

エレノアの心配するような態度に待ったをかけたのは、ヨサクとジョニーだった。

「あんた達おかしいぞ!! あのカレ女はあの通り!! ウソツプの兄貴も殺された!!!

おれ達アアロンに狙われてるんだぜ!! 何の理由があつて、ここに居すわるんだ!!

あつしもジョニーの言葉を信じる!!」

「短エ付き添いだつたが、おれ達の案内役はここまでだ。みすみすアアロンに殺された

くねエしな!!」

「おう」

「いろいろ世話になつちやつたね…」

流星にこれ以上は危険に付き合わせるわけにもいかないだろうと、ゾロもエレノアも快く彼らを見送る。

敬愛するゾロに対しては最低限の礼儀を尽くし、ヨサクとジョニーは深々と頭を下げてその場を後にした。

「じゃまた、いつか会う日まで!」

「達者でなー、兄貴達!!」

「お前らもな!」

「体に気を付けて!」

一人、二人と抜け、馴染みのない道の端に取り残されたルフィたち。

木の幹に背を預けて寝転がったゾロは、ブスつとした顔で虚空を眺める。そんな彼に、サンジが無遠慮に声をかけた。

「オイ」

「あア!!」

「ナミさんは本当にあの長つ鼻を殺してねエのか?」

「どうかね、おれが一度『小物』つてハツパかけちまったから、勢いで殺っちまったかな」

「小物!!」

ゾロの一言に、サンジの目がぎらりと剣呑に光を放つ。

嫌な予感がすると腰を浮かせたエレノアよりも早く、サンジは再びゾロに片足を振りかぶった。

「ナミさんの胸のどこが小物だ…ぶごはア!!!」

「ぶごッ!!!」

「セクハラア!!! …あ」

至極どうでもいい反論を持ち出したサンジの横つ面に、エレノアの怒りの回し蹴りが炸裂する。

しかしその瞬間、一つだけうめき声が多かったことに気づき、エレノアは思わず頬を引きつらせて言葉を失った。

サンジの顔とエレノアの足に挟まれるように、いつの間にか混ざっていたウソツプが巻き込まれていたのだ。

「生きてたよ」

「いや、死んだぞこりゃ…」

「……………ゴメン」

涙目で崩れ落ちるウソツプに、エレノアはそう返すことしかできなかった。

「ウソツプ——つ!!! お前これ、ナミにやられたのか!!!」

「…ゴメン、本当にごめんさい」

目を覚ましたルフィは、ボロボロで倒れているウソツプを目の当たりにして激しく狼狽する。

エレノアは珍しく、しゅんと落ち込んだままウソツプに頭を下げるばかりであった。

「おおルフィ、お前来てたのか」

「ああ」

「あ、おれも来たぜ。よろしくな」

「てめエいつか殺すからな!!」

思ったよりも早く復活したウソツプは、自分の怪我の間接的な原因がヘラヘラと会話に入ってきたことで怒りを燃やす。

だがすぐにそんな場合ではないと表情を変え、ルフイたちに向き直った。

「問題はナミだ。おれはあいつに命を救われた!! どうやらあいつが魚人海賊団にいることにはワケがあるとおれは見てる!!」

「やっぱりね…いろいろな納得いかないもの」

ナミが自分が殺したと言っていたのに、ピンピンしている様子のウソツプにエレノアが安堵のため息をこぼす。

先ほどのナミの言葉にも、色々と矛盾が混ざっていたのだ。

「さっきあの子、わかりにくいけど言ってたもの……アーロンが探してるから逃げろって」

「…そういうことか」

「ナミさんってば素直じゃないんだからもオッ♡」

本当にアーロンに殺させる気なら、居場所を知らせるなり何も教えないなりすればいいのに、彼女はそうしなかった。

危険を知らせたり忠告したりと、どう考えてもルフイたちを逃がそうとしているよう

にしか思えない。

しかしその意図がわからず、考え込むエレノアたちの元に近づくある一人の女性があった。

「無駄だよ。あんた達が何をしようとアーロンの統制は動かない」

「！ ノジコ」

腰に手を当ててそう告げる、左肩にタトウを彫った青い髪の美しい女性に、ウソツプが反応を返した。

「だれだ？」

「ナミの姉ちゃんだ」

「ンナ!! …ナ!! ナミさんのお姉さま♡ さすがお奇麗だ〜♡」

「無駄つてのはどういことだ？」

約一名無駄にテンションを上げている男がいるが完全に無視し、ゾロがノジコと呼ばれた女性の発言の意味を尋ねる。

全員の注目を受けると、半端な覚悟で聞くのなら承知しないと云った風に、ノジコは敵しい目をルフィたちに向ける。

「お願いだからこれ以上この村に係わらないで。いきさつは全て話すから、大人しくこの島を出な」

ますますわけがわからないと、眉を寄せるゾロとエレノア。

しかし、事情を知っているらしいノジコに対して、彼は全く興味を示すことはなかった。

「おれはいい。あいつの過去になんか興味ねえ!!」

はつきりと言い切ったルフィは、そのままノジコに背を向けて気ままに歩き出してしまった。

あまりの態度に、エレノアも流石に厳しい声で呼び止めていた。

「ちよつとルフィ!! どこ行くの?!」

「散歩」

「オイ(っ)ら……」

わざわざこんな島にまでやってきたというのに、事情も聞く気がないらしいルフィに訝しげな目を向けるノジコ。

エレノアたちは苦笑し、しょうがないと言った風に顔を合わせた。

「……………あいつはっ」

「気にしないで。ああいう人だから」

やれやれと肩をすくめるエレノアに、ノジコは戸惑ったように眉を寄せる。

どうしたらいいのかと迷っている彼女に、後頭部で腕を組んだゾロが不敵な笑みを浮

かべた。

「話ならおれたちが聞く。聞いて何が変わるわけでもねエと思うがね」

「…うん、そうだね」

たまにはいい気遣いを見せるじゃないかと、ゾロに感心した目を向けるエレノアであつたが、振り向いた時にはすでにゾロは大きないびきをかいていた。

「つて寝てるし!!」

「言つたそばから寝てんじゃねエよ!!!」

有言を微塵も実行できていない彼に、ウソツプとサンジとエレノアから非難が殺到するが、ゾロは全く起きる気配を見せない。

呆れる三人は呆然と立ち尽くすノジコに気づくと、やる気を見せるように背筋をピンと伸ばした。

「……………おれは聞くぜ!! 理解してエ」

「おれも♡」

「一応聞いとこうかな」

ウソツプは単純に恩人を心配して、サンジは綺麗なお姉さんの話を聞きたくて、エレノアは今後の方針を決める参考として、ノジコが話し始めるのを待った。

ルフィやゾロを含め、五者五様の反応を見せる一味に、ノジコは思わず困ったような

笑みを浮かべていた。

「なるほど…ナミが手こずるわけだ…」

その態度に毒気を抜かれてしまったノジコは語り始める。

今のナミを形作った、辛く悲しい過去について。

第35話 “たつた一人の戦い”

その悲劇は、今から8年前のとある日に起きた。

戦災孤児であつたナミとノジコは、元海兵であつたベルメールに引き取られ、貧しくも強かに生きていた。

家にお金があまりないことを気に病み、ナミは時々本屋から万引きをしては、村の駐在のゲンに叱られるということをくり返していた。

ベルメールはそんな娘の手癖の悪さに呆れながら、娘たちを深く愛し、日々を生きていた。

しかしそこへ、悪夢がやってきた。

“偉大なる航路”^{グランドドライン} からやってきた新魚人海賊団を名乗るならず者どもが、瞬く間に島を占拠してしまった。

さらに彼らは圧倒的な力で島の人々を脅し、毎月大人10万B^{ペリー}、子供5万B^{ペリー}の金銭を奉納することを要求してきたのだ。

小さな村ゆえ、あつという間に干上がってしまいそうな要求ではあつたが、幸いその段階では犠牲者は出ていなかった。

しかしゲンには、村のはずれにすんでいるベルメールのことが気がかりだった。女手一つで娘二人を養っているあの家に、20万^{ペリ}Bもの大金があるとは思えなかったからだ。

無事に逃れてほしいという願いもむなしく、ベルメールの家は魚人たちに見つかり、襲撃された。

元軍人の体さばきで応戦するベルメールであったが、アーロンの手によって抵抗むなしく抑え込まれてしまった。貯金も10万^{ペリ}Bしかなく、どう考えても絶望的であった。そこでゲンが提案する。二人の娘をいなかったことにし、奉貢の額をごまかすというものであった。

一度は娘たちの無事を考え、その案を呑んだベルメールであったが、たとえ血のつながりはなくとも母でありたいという願いから、アーロンに娘がいることを告白してしまう。

その結果、ベルメールはナミとノジコの目の前で、残酷に殺されてしまったのだった。悲劇はそれで終わらなかった。

以前からナミが描き上げてきた海図が魚人たちに見つかってしまい、その精度の高さに目を付けたアーロンがナミを連れて行こうとしたのだ。

無論ゲンたちは必死に抵抗した。しかしやはり魚人の力には敵わず、ナミは連れてい

かれてしまった。

その後、一人で戻ってきたナミの左肩には、アーロン一味の刺青タトゥーが彫られていた。彼女はアーロン一味に入ることと引きかえに、好きなだけ金銭を受け取れる契約を結んだのだと村人たちに告げた。

育ての親の思いを踏みにじったとナミは村人たちに嫌われ、その場から姿を消した。

しかしノジコだけは、急遽建てられたベルメールの墓の前に座っていたナミから本当の思いを知ったのだ。

アーロンから、1億ペリBで自分の村を買うのだと。

自分が村を取り戻すまで、一人で戦うことを決めたのだと。

「8年前のあの日から、あの娘は人に涙を見せることをやめ、決して人に助けを求めなくなつた……!! あたし達の母親のように、アーロンに殺される犠牲者を、もう見たくないから……!!」

ナミのそばで、ずっと彼女が孤独に戦い続けてきた姿を知っているノジコは、血を吐きそうな表情でエレノアたちに語った。

「わずか10歳だったナミがあの絶望から一人で戦い生き抜く決断を下すことが、どれほど辛い選択だったかわかる？」

「……………村を救える唯一の取り引きの為に、あいつは親を殺した張本人の一味に身

をおいてる訳か……」

「ああ愛しきナミさんを苦しめる奴アこの、おれがブツ殺してやるア!!!」

「落ちつけ騎士道コック」

憤慨するサンジの脳天に、呆れた表情のエレノアのかかどが突き刺さる。

「ゴガンツ!と鈍い音がし、あまりの痛みでサンジはその場にうずくまった。

「え……エレノアちゃん、なにを……!!!」

「ノジコはそれをやめろつて言いに来てんだよ。私達がここで騒げば、ナミは魚人たちに疑われ、8年の努力が無駄になる。……そういうことでしょ?」

「そういうことさ。だからこれ以上……あの娘を苦しめないでほしいの!!!」

村の解放を願い、ずっと一人で悲しみや痛みを抱え続けてきた義妹の戦いを、ムダにしてほしくない義姉は切に願う。

かといって、納得することなど彼らにできるはずもなかった。

「だ……だからつてほつとくのかよ!!! お前あいつとけつこう仲良かったじゃねエか!!!」

なの……」

「だから何もしないんだよ……あの娘がそれを望んでいないから」

エレノアとて、何も思わないわけではない。

しかしナミが望んでいるのは、このまま何事もなく自分の願いが叶うこと。部外者で

ある自分たちが引つ掻き回し、事を荒立ててしまうのは間違っていると、そう考えていた。

ギリギリと握りしめられている拳を目にし、ノジコは羨ましそうな笑みを浮かべた。

「…いい友達、持ったんだね」

「姉にそう言われるとはちよつと鼻が高いかな」

相手を想うからこそ、自分の感情を抑え込む。

それができるエレノアという存在に、ノジコはナミが少しでも救われていることを感じた。

「ん？」

しかしその時、ピクンとエレノアの耳が真上に立ち、ある一つの声を捉えた。

——聞く所によると、キミは海賊から宝を盗むらしいな。

まあ相手が海賊なんだ、君を強くとがめるつもりはない。

しかし泥棒は泥棒、罪は罪だ。

村のはずれから聞こえる、そんな粘っこい声。

無数の足音や金属音が聞こえることから、武装した集団であることが。そして罪だの咎めるだの言った発言から、海軍に所属するものと予想する。

だが、エレノアはその声に激しく嫌な予感を覚えていた。

——わかるかね？

罪人から盗んだもの、ならば当然その盗品は我々政府が預かり受ける。

一瞬何を言っているのかわからなかったエレノアだったが、徐々にその意味を把握すると大きく目を見開いて絶句する。

——今までに貴様が盗み貯えた金を、全て我々に提出しろと言ったんだ!!!

信じられない内容に、エレノアはその場で呆然と立ち尽くす。

ナミの家で起きている騒ぎを知らないノジコは、突然表情を変えたエレノアに訝しげな視線を向けた。

「……どうしたの？ こわい顔して……」

「……悪いんだけどさ、ノジコ。ナミの覚悟、ムダになるかもしれないよ」

震える声でつぶやかれた言葉に、ノジコはますます眉間にしわを寄せる。

エレノアは自分の中で燃え上がった怒りにのまれかけながら、ノジコに伝わるように要点だけを伝えた。

「今、海兵がナミの家にいる。……ナミを、泥棒として。集めた金を……没収するって」

「……………!!!」

「ノジコ!!!」

エレノアの言葉で察したのか、徐々にノジコは顔を真っ青に染め上げ、勢い良くその

場から走りだした。

何が何だかまるでわかっていない男たちは、慌ててエレノアに事情を聞こうと視線を向けた。

「お……おい!! 何が起こってるんだよ!!?」

問われるエレノアだが、正直それにこたえている余裕はなかった。

今も聞こえてくる会話から、島に訪れた海兵たちのどうしようもないほどに腐った性根が伺えてしまったからだ。

「……クズどもが……!!」

?

「これまでだ!!! 武器を取れ、戦うぞ!!!」

「「「うおオオ——っ!!!」」」

刀を手にした、帽子に風車をつけた全身傷だらけの駐在ゲンの号令に、村人全員が雄叫びを上げて応えた。

「私達は8年前、一度は命を捨てとどまり! 誓った。奴らの支配がどんなに苦しく屈辱でも、ナミが元気でいる限り、耐え忍ぶ戦い”を続けよう!! だがこれがあいつらの答えだ!!!」

ナミの覚悟を、ゲンたちはノジコを問い詰めて知っていた。

しかしアーロンはもとから村を解放する気はなく、買収した海兵にナミのことを伝え、せつかく集めた金品を丸ごと没収するように仕向けたのだ。

ナミの孤独な8年間の戦いを愚弄する所業に、村人たちの怒りが限界を迎えた。

「この村の解放という突破口が閉ざされてはこの島の支配圏にもう希望はない!!! もとよりあの娘の優しさをもてあそぶあの魚人どもを我々は許さん!!!! 異存は!!!」

「あるわけねエ!! 行こう!!!」

「これ以上あいつらの支配なんか受けるか!!!」

「村人全員いつでも戦う覚悟と準備はあったんだ!!」

「戦うぞ!!!」

全員が全員不退転、玉砕を覚悟した形相で武器を取る。

クワや草刈り鎌など、まともな武器はほとんど揃っていない。武器を所持していたものは、アーロンによって反抗の意志ありと判断されて罰せられていたからだ。

とても戦いに勝てる格好ではない。しかしそれでも、村人たちは止まるわけにはいかなかった。

「待つてよみんな!!!」

しかしそこへ、息を切らせて駆け付けたナミが飛び出してきた。

アーロンパークを背にし、村人たちを止める壁のように手を広げる。

「ナミ……………!!」

「もう少しだけ待ってよ!! 私、また頑張るから!!! はは…もう一度、お金を貯めるから

!!! 簡単よ今度は…」

「……………!! ナツちゃん…」

何ということはないと平気な笑顔を張り付け、ナミは村のみんなを説得しようと試みる。

こんな結末を迎えても、それでも一人で村人たちを守ろうとする健気な姿に、ゲンの目から涙がこぼれた。

「……………!! もういいんだ……………!!! 無駄なことくらいわかってるだろう…我々の命を一人で背負って……………よくここまで戦ってくれた……………!!! お前にとってあの一味に入ることは、身を斬られるより辛かったろうに……………!!! よく戦った」

「ゲンさん…」

ゲンに強く抱きしめられ、ナミは呆然と立ち尽くす。

ナミの想いを知り、知らないふりをして自分の負担にならないようにしてくれた彼女の気持ちに、ナミの目にも涙がにじんでいた。

「お前はこのまま、村を出ろ」

「え!! ちよ…」

「あんたにはさ……!!」 悪知恵だつてあるし! 夢だつてある!!」

「ノジコ……!!」

ナミを安心させようとみんなが浮かべる笑顔に、ナミは焦燥に駆られる。

止めなければ、思いとどまらせなければ、この笑顔がすべて失われる。そう予感したナミは、ナイフを抜いてゲンたちにつきつけた。

「やめてよみんな!!」 もう私……!! あいつらに傷つけられる人を見たくないの!! 死ぬんだよ……!!」

「知っている」

だがそれでも、ゲンたちの覚悟を変わらなかつた。

大切な家族の想いを踏みにじつた悪党にこのまま屈し続けることなど、許せるはずもなかつたのだ。

「無駄じゃ。わしらは心を決めておる!!!」

「ナミ」

「どきなさい!!! ナミ!!!」

ナミが持つナイフの刃を掴み、ゲンは大きく怒鳴る。

かつて悪さをしてしかられた時よりもすさまじい声に、そしてゲンの手から流れる血に、ナミの体はびくつと硬直してしまった。

「いくぞみんな!!! 勝てなくてもおれ達の意地を見せてやる!!!」

呆然と立ち尽くすナミを置き去りにし、村人たちは総出でアーロンパークに向かって前進する。

誰もその顔に、恐怖など抱いていない。たとえ死んでも、最後の瞬間まで抗うことを決めた彼らに、迷いなどありはしなかった。

「アーロン……!!!」

座り込むナミの目に、左肩の刺青タトゥーが眼に入る。

忌々しい、8年もの月日を、母を、そして家族を、全て奪い取っていく憎い男の紋章に、ナミの怒りが膨れ上がる。

それが目に入る事さえ憎くて、ナミは刃を自分の肩に突き立てていた。

「アーロン!!! アーロン!!! アーロン!!!」

何度も何度も、自分の左腕が真っ赤に染まっても刃を突き立てることをやめない。

痛みなどほとんど感じない。村人たちを止められなかった自分を責め、傷ついていく自分の心の痛みの方が、はるかに苦しく辛かったから。

その時不意に、深々と傷をえぐるナミの手が、小さな手に止められた。

「そんなことしても、何の意味もない………あんたが痛いだけ」

「エレノア……!!!」

背後に音もなく降り立った、鋼の義足をもつ天使。

悲しげに見つめてくる金の瞳に、近づいてくる麦わら帽の青年に、ナミはきつと鋭い目を向ける。

今はもう、誰の顔も見たくはなかった。何もできなかった自分の姿を、誰にも見てほしくはなかった。

「ルフイ……!! なによ……!! 何も知らないくせに……!!」

「うん、知らねエ」

「だって、あなたは何も言ってくれないから」

「あんた達には関係ないから……!! 島から出て行って……!! 言ったでしょう!!」

「ああ、言われた」

地面の砂を振りまき、八つ当たりのような拒絶を見せる。

ボロボロとみつともなく涙があふれて止められず、体の震えも抑えられない。

一度突き放した相手に言うのはおかしいとわかっている。だがそれでもナミは、何も言わずにそこにいてくれていた彼らに、縋らずにはいられなかった。

「ルフイ………エレノア………助けて……」

ナミが初めて見せた、弱々しく縋り付く姿。

ルフイは無言で近づくと、ナミの頭に自分の麦わら帽子をかぶせる。

誰にも触らせようとしなかった、傷つけられた時には烈火のごとき怒りを見せた、大切な帽子を。

「当たり前だ!!!」

ルフィもまた、自分の胸の内で燃える激昂を解き放ち、凄まじい怒号を放つ。

彼の向かう先にはすでに、戦闘態勢に入った仲間たちが待っていた。

「いくぞ」

「!!!オオツ!!!」

それぞれ武器を手に、アーンパークへと集った村人たちだったが、その門の前には先客の姿があった。

「おいっ!! 大丈夫かあんた達!! アーンにやられたのか!!」

「悪いがそこをどいてくれ、おれ達も魚人に用がある!!」

閉ざされた門の前に陣取っているのは、血まみれで座り込む二人組の男たち。

ゾロたちと別れたばかりの、ヨサクとジョニーであった。

「フン…ナミの姉貴の詫びのつもりで挑んだが、紙一重で敗けちゃった……!!!」

「林の中で真相聞いてりゃ、おれ達のとんだ勘違い。姉貴にや会わせる顔がねエ」

「悪いが勝機もねえあんた達にこの扉は譲れねエ!!」

「ここへ必ずやってくるある男たちを、あつしらは待つてるんでね」

「……………!!? ある男達!!」

自分たちが挑み、敗北した相手の元に村人たちを向かわせまいと、その場を微塵も動こうとしない二人の賞金稼ぎ。

そんな二人の目に、ある一団の姿が映る。

目に見えるほどの怒りを燃やし、倒すべき敵の元へと近づいていく5人の戦士。

その一人、黒髪の青年が大きく拳を振り上げ、固く閉ざされた門を力尽くでぶち破った。

「アーロンっての、どいつだ」

「何だ…あいつア」

無作法に侵入してきた青年たちに、デツキチエアに座っていたアーロンは苛立たし気に目を向けた。

第36話 “今こそ立ち上がれ！”

「アーロンつてのア、おれの名だが……？」

デッキチエアに不遜にもたれかかったまま、島の支配者は横柄に答える。

気だるげに、そして不機嫌そうに向ける目には、黒髪の青年とフードの少女が映っていた。

「おれはルフイ」

「エレノア」

アーロンと同じく不遜に答える二人の海賊。

自分の城に無遠慮に足を踏み入れられ、激しい怒りを宿した目は真っ直ぐにアーロンを見つめ、射抜く。

「そうか……てめえらは何だ？」

「海賊」

会話すら鬱陶しいとばかりに短く答え、ズンズンと進んでいく二人。

その前に魚人達が立ちはだかり、下卑た笑みを浮かべてその肩を押しとどめた。

「おい、待てよめエ」

「へへへ、どこへ行くんだ。まずはおれ達に話を通してもらわねエと困るぜ」

「なあおい……」

「止まらねエと……」

力も劣る、下等種族である人間を見下している魚人達はへらへらとルフィ達を見下ろす。

邪魔をする魚人達に、二人は無言で手を伸ばした。

「どけ」

「!!?」

ゴキーンツ!!! ドシヤアツ!! と。

いらだたしげに答えたルフィが二人の魚人の後頭部をつかんで互いにぶつけあわせ、エレノアが軽くその場で投げ飛ばす。

大した力を入れていないように見えたために、見ようによつては勝手に倒れたように見えていた。

「!」

「な……」

同胞が簡単にのされたことと、仲間に出されたことに目を見開くアールンとその

一味。

突き刺すような視線も気にせず、二人はアールンの目前にまで進んでいく。

「海賊がおれに何の用だ」

傲慢な態度を崩そうともしないアールンに、フンツと鼻息荒く向かおうとするルフイを抑え、エレノアがアールンを見つめた。

「交渉しに来たんだ」

「交渉だア……？」

「そ。交渉」

ギロリと見下すアールンに微塵も臆さず、エレノアはフードの下でニヤリと笑う。

「あんた、1億ベリーであの村を売ってやるって言ったんだってね」

「ンア？ ああ……ナミとの約束か。シャハハ、どつから聞きつけたかは知らねエが、て

めエには関係ねエ話だぜ」

「あるさ。あの村を、私が買おうと言ってるんだ」

エレノアの言葉に、魚人たちの表情に苛立ちが生じた。

見るからに子供の戯れ言だが、下等種族と見下している人間から、そんな冗談のような提案を聞かされること自体が不快な様であった。

「おいおい冗談きついで。おれは相手がナミだったからあんな破格の値段で売ってや

るって言ったんだ。何処の馬の骨ともしれねえ奴にそんな額で売るつもりは……」

「10億ベリ」

ほんのはした金とでも言うように、エレノアは表情一つ変えずに告げた。

一瞬だけ無音になるアーンパークだったが、少し遅れて魚人達に驚愕と動揺した様子が見られた。

「何……?」

「ニユ〜!!?」

一部の魚人達は舐められていると思ったのか、エレノアに対して怒りの視線を向ける。ハチだけが、本気で驚愕した様子で大きく目を見開いていた。

その中でも、アーンパークはひととき強くエレノアを睨みつけ、ギリギリと牙を食いし始めた。

「……………おい小娘、このおれを前に大したハツタリをかませるもんだな……!!」

エレノアはアーンパーク達の怒りの形相も微塵も気にした様子はなく、テクテクとアーンパークの柱の方に歩いていく。

訝しげに見つめてくる魚人達の前で両手をパチンと合わせたエレノアは、叩きつけるように柱に触れた。

その瞬間、青い閃光とともに柱の色が変わり始めた。

「……………!!?」

目を見開くアーロン達の前で、ただの石柱がみるみるうちに眩しい輝きを放ち始める。

エレノアの姿が全て映るほどの反射性を持つ、黄金色の金属の塊に。それがなんなのかわからないものは、アーロンの一味にも島の住民達にもいなかった。

あつという間にエレノアの触れた石柱は、大きさもそのままに黄金の塊へと変化した。

「……………どう? これで10億ベリーには十分だと思うけど」

キラキラと眩しい輝きを前に、エレノアは自信満々に尋ねる。

エレノアという言葉に、一切の偽りはなかった。本気でエレノアは、ココヤシ村を買うつもりだった。

「お、黄金……………」

「さあ、どうなんだい? 私はちゃんと10億ベリー出して見せた。あんた達も、ちゃんと約束を守って見せたらどうなんだい? それとも、あんた達魚人海賊団は約束も守れないようなクソつたれな集団なの?」

目の前で起きている信じられない光景に、魚人海賊達は言葉を失い、立ち尽くす。

ただ一人、アーロンだけがエレノアを凝視し、その目に見る見るうちに怒りを募らせ

ていった。

「……人間ごときが、このおれ様たちをコケにしやがって……!!」

ビキビキと顔の血管を浮き立たせるアーロンに気づき、魚人たちはようやく我に返った。

理解のできない、不可思議な力を使うようだが、所詮は下等生物であると思いなおしたようだ。

「バカが!! てめーらごときと対等な約束なんざ成立するわけねエだろうが!!!」

「テメエが黄金を作れるってんなら、一生俺たちの下で使つてやるだけだア!!!」

正確な海図を描けるナミだけではない、無限の黄金を生み出せる少女も手に入れれば、アーロン帝国実現の大きな足掛かりとなるだろう。

そう考えた不埒者たちが少女を狙い、下卑た表情で襲い掛かる。

「雑魚はクソ引つ込んでろ!!!」

「?!? ぐあああつ!!!」

しかし魚人たちの手がエレノアにかかる直前で、黒い蹴りの嵐が魚人たちに襲い掛かる。

海のコックの足技によって、強大な力を持つ戦士たちが冗談のように吹き飛ばされる光景に、アーロンはより強い怒りの炎を燃やした。

「——もう、エレノアちゃんたら一人で突っ走らないでよ」

「別に、おれ負けねエもんよ!!」

「バーカ。おれが、いつてめエの身イ心配したよ!!」

不満げに返すルフィに、サンジは呆れたように返す。

言われなくとも、ルフィがこの程度の相手にやられるとは思ってさえいなかった。

「獲物を独り占めすんなっつってんだ」

「そうか」

「えー、だつてムカつくんだもん」

「お…おれは、別にかまわねエぞ、ルフィ、エレノア」

「…たいした根性だよお前は…」

ルフィとエレノアのもとに、ぞくぞくと仲間たちが集まっていく。

少し離れたところで胸を張るウソップには、ゾロが呆れたように肩をすくめた。

「ロロノア・ゾロ…!!」

「だろ!! あいつだろ!! おれをダメしやがったんだ!! まんまとのせられた…いや

!! のせてやったんだがよ!!」

「長エ鼻の男が…、生きてる…!!」

「死んだはずじゃ…!!」

「海賊か……なるほどてめエらそういうつながりだったか」

ウソップがピンピンした様子でこの場にいることに、魚人たちの間に動揺が走る。

散々ここで暴れまわったゾロと、ナミの手によって死んだはずの男がともにいることで、アーロンは彼らの関係性を一瞬にして理解した。

無論、ナミとの関係も。

「最初から、ナミを逃がすつもりはなかったわけだね」

「シヤハハハ!! たった5匹の下等生物に何ができる!!!」

表には出さないが、エレノアの内心もぐつぐつと煮えたぎっていた。

同じ女として、大切なものを守ろうとしたナミの想いを踏みにじった彼らが許せなかったのだ。

ナミが願ったから、手を出すことをよしとしなかった。

だが約束が破られた今は、もう彼女たちを止めるものは何もなかった。

「バカヤロオ、お前らなんかアーロンさんが相手にするかア、餌にしてやる!!! 出てこ

い、巨大なる戦闘員よ!!!」

身の程を知らず挑んできた人間たちを嘲笑し、ハチが自分の唇を掴んでラツパのように吹き鳴らす。

その直後、ごぼごぼと海面に泡がたち、波がうねり始めた。海の底から、何か大きな

生物が上がってこようとしているようだ。

「な……まさか……」

「何だ何だ何事だ!!」

「ゴサを潰した『偉大なる航路』の怪物か……!!?」

アーロンパークの外から見守っていた村人たちの表情に、戦慄が生じる。

たった一体で村を一つ壊滅させた本物の化け物が呼び出されたことで、あの勇敢な青年たちもただでは済まないと恐怖が芽生えてしまっていた。

「出て来い、モーム!!!」

ハチの声で、ついにその怪物が姿を現す。

海上にそびえたつ巨大な体、頭から生える二本の太い角、人間数人をまとめて呑み込めるような巨大な口。

『偉大なる航路』に生息する怪物が。

「モオ……」

頭にでかいたんこぶをつけ、涙目で上がってきた。

「出たア……!! 怪物だ……!!」

「は……?」

「あれが……海牛モーム……!!!」

ウソツプが悲鳴を上げ、ハチが戸惑ったような声を上げ、村人たちが言葉を失う。その場にいた者たちが様々な反応を見せる中、モームは辛そうな顔で辺りを見渡した。

その目に、真下から見上げてくる小さな少女の姿が入った。

「ああ、どんな奴が出てくるかと思っただら……君かア」

聞こえてきたその声に、モームはびくつと体を震わせる。

エレノアだけではない、そばにいるルフィもサンジも、モームにとつては恐るべき恐怖の対象であった。

ガタガタと震えるモームに、エレノアはフードの下でにつこりと笑みを浮かべた。

「今晚の食材に決定だね」

それは端から見れば、天使のような慈愛に満ちた笑顔。

しかし視線を向けられているモームにしてみれば、自分の命を虎視眈々と狙う悪魔の笑顔にしか見えなかった。

「ンモ……!!!」

「待てモーム!! どこへ行く!!!」

ぶるりと身を震わせたモームは、そろそろと海の中に潜っていこうとする。

ハチが慌てて呼び止めるが、もつと怖い存在に睨まれているからには逃げる以外の選

択肢はなかった。

だが、そんな彼の背にアールオンがぎろりと目を向けた。

「モーム…何やってんだためエ…まアお前が逃げてエンなら、別に引き留めはしねエが？　なア、モーム」

その瞬間、モームの背筋にぞくつ!!と寒気が走る。

エレノアの殺気を上回る強大な負の気配に、モームの恐怖心は簡単に上書きされた。

逃げれば殺される、逃げなくても殺される。退路を完全に阻まれ、モームはついに牙を剥いた。

「モオオオオオオ!!!」

「きたア!!!」

「よっしやモームに続けエ!!!」

「出しやばった下等種族の末路を教えてやる!!!」

やけになったモームを筆頭に、武器を手にした魚人たちが波のように押し寄せてくる。

ウソップはこの世の終わりのような悲鳴を上げるが、反対にゾロとサンジ、エレノアは好戦的な笑みを浮かべて得物を構えた。

「おれがやる!!! 時間のムダだ!!!」

だがそれより先に、鼻息を荒くしたルフィが拳を合わせて前に出た。闘牛のように、憤怒の形相で向かってくる魚人たちを睨みつけていた。

「ぬうア!! ふんっ!!!」

怒涛の勢いで向かってくる魚人たちを前に、ルフィは相撲の四股を踏むように地面を踏みつけ、足を深々とめり込ませる。杭のように自分の足を打ち付け、ルフィはその場に体を固定した。

「何をする気だあんにやろ」

「いい予感やしねエな」

「とりあえずいったん回避しとく?」

そこはかとなく漂う嫌な予感に、ゾロたちは頬を引きつらせて目を合わせる。

どんどん距離を詰めてくる魚人たちを前に、よけることも逃げることもできなくなつたルフィを、ウソップは戸惑つたように凝視した。

「おい、逃げる!!」

「何?! 何すんだあいつは?!」

「知らねエ!!!」

「ろくでもないってことだけは確か!!!」

慌ててその場から離れていくエレノアたちをよそに、ルフィは腕を伸ばすとモームの

頭の角をがっしりと掴む。

驚きで足を止める魚人たちに構わず、ルフィは渾身の力で腕を引き、モームの巨体を引きずり回す。自分の体を限界までねじり、徐々にモームを振り回す勢いを強めていった。

「『ゴムゴムのオ』!!! 『風車』!!!」

「ぎああああああ!!!」

それはまるで、台風のような力であった。

モームの巨体を武器に、集まっていた魚人たちをあつという間に一網打尽にしてしまう。加速したモームの重量をまともに受けた魚人たちは、何が何だか理解もできない間にのされてしまっていた。

ばらばらと吹き飛ばされていく同胞たちを目の当たりにし、アーロンの目が天に向かって吊り上がっていった。

「おれはこんな奴ら相手しに来たんじゃねエぞ!! おれがブツ飛ばしてエのは、お前だよっ!!!」

激しく息を切らせ、ルフィはアーロンに指を突きつける。

たのもしさなど感じられない不安な姿であったが、その声には無視できない力を有していた。

名指しで呼ばれたアローンの額に、無数の血管が浮かんだ。

「そいつは丁度よかった。おれも今、てめエを殺してやろうと思ったとこだ」

「どうやら…我々もやらねばならんらしい」

「同胞達をよくもオオオ!!」

「種族の差つてやつを教えてやらなきやな、チユツ♡」

「久々に骨が折れそうじゃのウ…」

アローンの怒りに呼応するように、幹部の四人が続々と立ち上がる。

入って来て早々にこれだけのことをやらかした人間たちに、彼らもまた怒りを燃やしていた。

「主力登場か…」

「あのサメのおじーさんどっかで見たな…」

「危ねエだろうがてめエ!!」

「おれ達まで殺す気かア!!」

「あ…」

殺気を膨らませる5人の魚人たちに、ゾロは刀を抜きながら舌なめずりをし、エレノアは妙な既視感に首をかしげる。

一方で危うく巻き込まれかけたサンジとウソップに小突かれるルフィは、何かやらか

したというように引き攣った表情を浮かべていた。

そんな彼らを呆然と見つめるのは、村人たちであった。

「『偉大なる航路』の怪物を…振り回すなんて…!!」

「なんと…破壊力…信じられない…!!」

魚人たちにも劣らない力を見せつけた麦わら帽の青年に、村人たちは開いた口が塞がらない。

絶望しかなかったこの状況に、希望の光が察したように思え始めていた。

「魚人と渡り合える人間がいるなんて。これが、この世の戦いなのか…!!」

第37話 // 魚人海賊 //

「こんなことなら初めから我々が戦うべきだった。アーロンさん、あなたは大人しくしててくれ」

「あんたに怒りのままに暴れられちゃ、チュツ♡ このアーロンパーク粉々に崩壊しちゃまうぜ!!」

「また建て直させるのも面倒じゃからなア」

「……………」

道着を着たエイの魚人クロオビが、オネエっぽい格好の着物を着たキスの魚人チュウが、大柄なサメの老人フカが、座ったままのアーロンを止める。

その後ろで、背中を丸めたタコの魚人ハチが何かを溜めむような体勢になっていた。

「んんん!! くらえ……………」

明らかに何か企んでいる様子のタコの魚人に、エレノアたちは警戒心をあらわにする。

「あのタコ、何かやる気だ」

「タコは、まず塩ゆでにしてスライス。オリーブ油とパプリカで味をつければ酒のつま

みに最適だ」

「いや、あれ確かにタコだけど人だから。料理人目線で話さないで?」

「おい、ちよつと困った話を聞いてくれ」

戦闘前とは思えない気の抜けた会話をしているが、敵の動向から目を話すことは決してしない。

しかしただ一人ルフィだけが、仲間にも聞いてもらおうと手招きをしていた。

「視界ゼロ、たこはちブラーック」!!!

「『蛸墨』か!!!」

準備を終えたハチは、ルフィたちに向かって口から大量の墨を吐き出した。

警戒していたエレノアたちはかろうじて降り注ぐ黒を躲すことに成功する。が、ルフィはなぜか墨の直撃を受けて真っ黒になってしまった。

「あ——っ!!!」

「バカお前、何でよけねエ!!」

「あ——!! 前が見えねエ——っ!!!」

影のように真っ黒になったルフィが、慌てて辺り構わず手を振り回す。

身動きもできない彼の前に、巨大な瓦礫を持ち上げたハチが近づいていった。

「おいルフィ!!! よけろオ!!!」

「うん、問題はそこだ。なんと動けねエんだが、見えねエし」

「……え、今なんて?」

言葉を失ったエレノアが見てみれば、先ほどモームを振り回す際に突っ込んだ足がそのままになっている。

しかも思った以上に深く突き立てすぎたのか、全く抜ける様子がなかった。

「は」

「何であいつは……!!」

「てめエ自分でつつこんだ足だろうが!!」

あまりの船長のアホさに、全員から呆れた視線が集中する。

格好の獲物に、ハチは容赦なく瓦礫を振り下ろした。

「たこはちブラック・オン・ザ・ロック」!!!

凄まじい轟音とともに、巨大な瓦礫がルフィを押しつぶす。

あまりにもあつけない最期に周りにいたものたちが呆然となるが、一瞬瓦礫に青い閃光が走ったかと思うと、ボロボロと巨大な塊が崩れ始めた。

「ほん……つと——に……情けない。なんでこの人について行くこうなんて思っちゃったんだらうなア……うらむよほんと……」

「おおー、いいぞエレノア」

パリパリと電流が走る両手を挙げたエレノアが、じとつとした半目で虚空を睨む。

すでにフードは脱ぎ捨てられ、長い手足の大人の姿に変化している。魚人たちを相手するために、全力の戦闘形態に変身したのだ。

「同感だ……」

「すげエぞ、エレノア!!」

「まア、レディーを傷つけるようなクソ一味よりは百倍良いってことで」

「……………そういうことにしとくか」

ほつと安堵の息をつく一味に、エレノアも仕方がないといった笑みを浮かべる。

一方で、エレノアの真の姿を見た魚人たちには動揺が走っていた。

「ニユ~~~~ツ!!? て…天族ウ~~~~!!?」

「まさか実在してたとはな……チュツ♡」

「ありやあ…昔一度だけ見た見た錬金術とかいうもんじゃな。あの小娘……見た目で侮つていと痛い目に遭うぞ」

「ならばあの小娘はフカ爺に任せよう」

ハチやが戸惑いの表情を見せる中、フカは冷静にエレノアの能力を分析する。

年の功ゆえか、多少変わったものを見た程度で慌てるような愚は見せなかった。

「…人間にしちゃあ少しはやるようだが…海賊がそんな騎士道を振りかざすとはしよせ

ん生ぬるい」

「……へ、おれの騎士道が生ぬるいかどうか試してみるか、サカナマン？ これでも、おれは半生を海賊に育てられてんだ」

「貴様は魚人という種族の本当のレベルを知らんようだな」

冷笑するクロオビに、サンジは皮肉げな笑みを浮かべて右足をあげて構える。

二人が睨み合う隙に、どうにかルフィの足を抜こうとウソツプが体を思いつきり引つ張っていた。

「何を遊んでやがるんだ、あいつらは!! このアーロンパークで!!! 殺す!!!」

「うわあああああ!!! おい、てめエいい加減抜ける!!」

気づいたハチにまた瓦礫を用意され、ウソツプは必死の形相でルフィを抱えて走り出す。

すると瓦礫を構えたままのハチの背後で、不敵な笑みを浮かべたゾロが剣を抜いた。

「おいタコ、あいつら今忙しいんだ。おれが相手してやるよ」

「ニユ!!! ロロノア・ゾロ!!! そうだ忘れてた!!! お前、よくもおれをダメしたな!!!」

別に騙したわけではなく、うまいこと言いくるめて案内させただけなのだが、今更否定するつもりもない。

六本の腕でそれぞれ剣を持つハチに、ゾロの笑みは凶暴なものに変わっていく。

「そうだ!! また思い出したぞ!!! てめエはおれの同胞をいっぱい斬りやがったんだ!!!」

「そんな古い話興味ねエな。お前が、おれをどんな因縁で殺したがってようが関係ねエ……もう状況は変わってんだよ。お前らが俺たちを殺してエンじゃねエ!! おれ達がお前らを殺してエンだ!!!」

逃げ惑う間に二組の組み合わせができ、ひとまず安堵したウソツプは汗を拭きながら親指を立てた。

「よ……よしゾロ、そのタコはお前に譲るぜ。ナイス………しまった!! 離しちまった!!!」

長く長く引つ張られていたルフィの体が、ゴムの張力で元の場所に戻っていく。

と思いきや、ルフィは引つ張られた反動で向こう側にいたチュウの腹に激突してしまった。

「…失敬」

「てめエはやつぱり、おれに殺されてエようだな!!」

「うわああああああああああああ!!!」

偶然とはいえ、攻撃した張本人であるウソツプにチュウの殺意が向けられ、ウソツプは半ば号泣しながら逃げ出した。

あつという間に消えていく狙撃手の姿に、エレノアは思わず立ち尽くしていた。

「はやつー！」

一度は逃走したウソツプだが、チュウの注意が村人たちに向けられると、今度は自分の意思で攻撃して引き寄せる。

逃げたり挑んだり忙しい彼の戦いに苦笑し、エレノアは肩をすくめた。

「……勇ましいんだか情けないんだか」

「余所見していると死ぬぞ、小娘」

気を抜いていたエレノアは、背後から声が聞こえた瞬間右足の脛を盾にして飛び退る。

ギヤリン！と耳障りな金属が鳴り響き、オレンジ色の火花が飛び散った。

エレノアは一旦体勢を立て直し、自分を襲った魚人の顔を見て大きく目を見開いた。

「『鮫肌』のフカ……!! 『海峡』のジンベエの右腕と呼ばれた男か。タイヨウの海賊団が解散した後は行方知れずになったって聞いたけど……ここにいたとはね」

「女子供をいたぶる趣味はないんじゃないか。ウ……まアこれもわしら魚人に逆らった罰じゃと思つてあきらめるがええわ」

皺だらけの顔を凶悪に歪め、フカは両拳を構える。

そしてエレノアが反撃に出る隙も与えず、弾丸のごとき鋭い突きを放つてみせた。

「『阿羅削り』!!!」

エレノアは真正面から受け止めようとし、寸前で感じた嫌な予感から慌てて受け流しに移行する。

しかし防御が甘かったのか、鈍い衝撃とともに先ほどより身激しい火花が飛び散った。

「……………?!? 削れてる……………?!?」

「わしの肌は魚人の中でも相当危険らしくてなア……………若エ頃はすれ違うだけで相手がズタズタになっちまったものよ」

ブーツが裂け、機械鎧オートメイルの装甲がヤスリで削られたように抉れているのを目にし、エレノアのこめかみを冷や汗が流れる。

もし生身の肉体であったならば、一撃で出血多量に持っていかれる重傷を負っていただろう。

『『鮫肌拳』……………!!!』 くらってみりゃあその恐ろしさがわかるだろうよ』

「フン……………相手にとつて不足はない!!!」

だがそれでも、エレノアはフカの前から逃げようとはしなかった。

むしろ自分にふさわしい相手だと、その目に強い闘志を燃やして構えをとった。

続々と対戦カードが組まれていく中、一步後ろで引いていたアーロンがゆっくりと近

づいてきた。

「アーロンさん、あんたはここで暴れねエでくれって言っただろう」

「暴れやしねエき。だがちよつとな」

アーロンはニヤリと笑うと、ルファイが突き刺さった石床に指を突き立て、バキバキと塊ごと持ち上げていく。

何をするつもりかはわからないが、こちらも口クでもないことは確かだった。

「お前はおれが!!! ブツ 飛ばす!!!」

身動きの取れないルファイはアーロンの顔面を殴り飛ばそうともがくが、逆に腕を掴まれ拘束されてしまう。

触れることすらも満足にできない人間に、魚人の海賊は残虐な笑みを見せつけた。

「てめエら本気でおれ達に勝てるんでも……?」

「だったらどうした」

「なめてると痛い目見るよ?」

「思ってるよバ——カ!! 手エ離せ!!」

「何か、言いたそうだな」

「いや……結構!!!」

アーロンは実に愉しそうに笑いながら、拘束したルファイを高々と持ち上げる。

その視線の先にあるのは、チャプチャプと波打つ深い海だ。

「じゃあ、こういうゲームはどうだ？ 悪魔の实の能力者はカナツチだ。まあ、この状態なら能力者じゃなくても沈むがな…!! シヤハハハハハハハハハハ!!」

「まさか…海へ!!?」

エレノアが意図に気づくが、時はすでに遅かった。

同じく気づいたルファイが殴りかかり、噛みつき、やめさせようともがくがアーロンにはさほど効かず、ぽいっとゴミでも放るように海に投げ捨てられてしまった。

「ルファイ!!」

「てめエ!!!」

「なんてむごいことを…!!」

「今助けに…!!」

ザブーン！と勢いよく沈んでいくルファイを目の当たりにし、エレノアたちの表情に焦りが生じる。

慌てて飛び込もうとするサンジであったが、寸前でその肩をエレノアが掴んで止めた。

「待って!! 海の中じゃ魚人には敵わない!! こいつらの思うツボだよ!!!」

「ルファイを助ける方法は一つだ………!!」

「こいつらを陸で秒殺して海へ入るのか、上等だぜ」

アーロンの前で待ち構える、三人の魚人の戦士たち。

もう一人は勇敢な海の戦士が引き受け、どこか遠くへ引きつけて行ってくれたが、残った連中も相当に強力な奴ばかりだ。

ルフィの息が続く間に倒しきるのは、困難と判断できた。

「やるぞ!!!」

「おう!!!」

だがそれでも、希望を繋ぐためには無茶でもやってみせるしかなかった。

「シヤハハハハハハハハハハ!!!」

アーロンの腹立たしい哄笑が辺りに響き渡る。

魚人海賊団の幹部たちも、同じように馬鹿にした態度で笑い声をあげていた

「九体満足ごたいでいられると思うなよ、タコ助!!!」

「アツハツハツハツハツハ!! ゲームゲーム!!!」

「腐ったマネしてくれるぜ、クソ魚野郎ども!!!」

「フン……そう焦るな。どう転ぼうと貴様ら全員生き残れる希望などないのだ」

「覚悟できてんでしようね……!!! もう容赦しないよ!!!」

「ほぎげ小娘……頭が高エと思いい知れ」

敵の大將を倒すため、そして自軍の大將を救い出すため、三人のの戦士たちは自分にあてがわれた敵を見据え、闘志を燃やす。

「穿て!!」
「ゲイ・ジャルグ紅薔薇槍!!!」
「ゲイ・ボウ黄薔薇槍!!!」

パンツ!とエレノアが両手のひらを打ち鳴らし、地面を力強く叩く。

青い閃光とともに勢い良く伸びていく二本の槍を振り回し、魚人の大男に斬りかかる。

長さの異なる、異なつた意匠を持つた槍の穂先がフカの分厚い胸板に食らいつく、かに見えたが、激しい火花を散らして弾かれるだけであつた。

「硬つたア…!!」

魚人の肉体の強靱さは有名な話だが、ウロコを貫くこともできなかったエレノアはその表情に驚愕をにじませながら飛び退る。

まるで全身余すことなく鎧を着こんだ武者を相手にしているかのようだ。

「そんなナマクラでわしのウロコが貫けるかア!!!」

「うおウ!!?」

ただ硬いだけではない。

フカの鱗の一つ一つは小さな刃のように鋭く、空気を切り裂いて甲高い音を響かせている。

フカが腕を振るうだけで、荒く重いヤスリのようにエレノアに襲い掛かってくる。とつさに跳躍して躲すが、掠った衣服の一部がビリビリと簡単に引き裂かれ、肌の一部がさらされてしまった。

「ニャロ……」

ローブが引き裂かれ、わき腹が丸見えになってしまったエレノアが、フカを睨みつける。

作り出した槍も刃が欠けてしまい、使い物にならなくなったために投げ捨てるしかなかった。

その時、エレノアの耳がドサツという音を捉える。

「!? ゾロ!!?!」

「くそ……何でこんな時に……!!」

見れば苦痛の表情を浮かべたゾロが倒れこんでいる。

体に雑に巻き付けた包帯からは、すでにじわじわと血が滲み始めている。アーロンパークに到着してすぐ暴れまわり、先ほどから続けているハチとの戦闘で傷が開いてしまったようだ。

「やっぱりあの傷が深すぎたんだ……」

「そりゃそうだ、常人なら死ぬか半年は歩けもしね工程の傷なんだ……!! 兄貴ずっと我

慢してたのか!!」

「あれほどの戦闘して平気な顔してやがるからおかしいと思ったぜ!! バカかあの野郎」

苦悶の表情を浮かべるゾロに、エレノアは心配そうな眼差しが送られ、サンジは憎まれ口をたたきながら焦燥を浮かべる。

思わず駆け寄りかけた彼に、突然すさまじい衝撃が襲い掛かった。

「エイッ!!!」

サンジのみぞおちに突き刺さる、エイの魚人による正拳突き。

闘牛の突進か、それ以上の衝撃がサンジに襲い掛かり、体格では半分以下のサンジの体が勢いよく吹き飛ばされる。

アールンパークの塀に激突し、突き破り、そのままはるか遠くまで撥ね飛ばされていった。

「サンジくん!!!」

「よそ見とは…ずいぶん余裕だなア!!!」

絶叫するエレノアの背後に、フカがもう一度腕を振りかぶる。

真正面から迫りくる巨大な拳を目にし、エレノアは即座に後方に跳躍し、両足を振って上げて盾にする。

しかし衝撃を完全に殺しきることはできず、エレノアは口から血を吐きながら海面に叩きつけられた。

「片付いたぜ、アーロンさん…」

「ロロノア・ゾロはどうするよ」

「海へでも捨てとけ。たわいもねエ奴らだな…つまらん。おいハチ!! 起きろ!! いつまで寝てやがる……!!」

気だるげに腕を振り、フカたちはアーロンのもとに集まっていく。

先ほどのゾロとの攻防で瓦礫の山の下敷きとなったハチが、遅れて瓦礫を吹き飛ばしながら立ち上がった。

「ンニユ~~~~っ!!! このタコ野郎がア!!! もう怒ったぞ、おれはてめエをブツ殺す

!!! おれ様を魚人島で一人を除けばN.O. 1の剣豪「六刀流」のハチと知っているのかア!!! 貴様ら人間など、天地がひっくり返ってもこのオレには勝てねェんだぞオ!!!!

ニユ~~~~っ!!! ニユ?」

「誰に言つとるんじやお前は…」

すでに起きている者は誰もいないのに、怒りのままに叫ぶハチにフカから呆れた目が向けられる。

これで本当に終わりか、と絶望が村人たちの間に走った時、ザッと地面を踏みしめる

音が響いた。

「六刀流か、くだらねエ。一体、何がすごいんだ!!」

たった一本残った刀を掴み、どう猛な笑みを浮かべたゾロがほとんど満身創痍の体で立ち上がる。

突けば倒れそうなほど弱っているというのに、常人ならば思わず射すくめられるほどの迫力に満ちた目で、余裕の態度をとる魚人たちを睨みつけていた。

「これだけは言つとくがな、タコ!! おれには会わなきやならねエ男がいるんだ……:そいつにもう一度会うまでは、おれの命は死神でも取れねエぞ!!!」

ギラリと光る眼で射抜かれ、ハチは眉間にしわを寄せて睨み返す。

すると、コツコツと靴音を響かせ、壁に空けられた穴を通つてサンジが戻ってきた。額から血を流しながら、煙草をくわえて不敵な笑みを浮かべるその姿は、狩人のような静かな殺気に満ちていた。

「な——んだ……あいつの正拳パンチが40段なら、いつもくらつてたクソジジイの蹴りは400段だな……」

一撃で仕留めたと思つていたクロオビは、存外丈夫な人間に不快げな目を向ける。

その背後から、ざばつと水飛沫をたてて影が飛び立った。

「……あー、ビックリした」

ずぶ濡れになりながら地面に降り立ったエレノアは、ぶるぶると体を振って水滴を落とし、髪をかき上げて肩をすくめた。

相当な力を加えたはずだが、思ったほどダメージを負っていないことにフカは眉を寄せてエレノアを睨みつけた。

「鱗の硬さは健在、動きの切れもまあまあ……でも肝心の力はパワーだいたいぶ衰えてるみたいだね、おじーちゃん？」

「……どうやらあれだけやってもわからんらしいのう。これだから最近の若い奴はア……!!」

小悪魔のような、馬鹿にした態度にフカは苛立たし気に牙をむき出しにする。

子供かどうかはともかく、女ということもあつて手加減してやろうと思っていたのかも知れないが、フカの理性はそこで完全に切れた。

「あああああ!!!」

今もなお逃げ回っている嘘つきの彼も、彼なりの戦いを続けるのだった。

第38話 // 妖術師（ウイザード）エレノア //

「この古いぼれの手を煩わせるな!!!」

凶器の正拳が突き出され、エレノアの顔面に迫る。

まともに直撃すれば肉が大きく抉り取られそうな鋭さに瞠目しながら、エレノアは両方の義足を振るって、内蔵された刃を展開して受け止めた。

ギャリン、と激しい火花と金属音を撒き散らしながら、エレノアは力強く義足の刃を振るった。

「手早く終わらせる！ // スケツニンゲ不治魔劍!!!」

ただ真正面からぶつけるのではない、魚の鱗をそぐように斜めから刃が食らいつく。

しかしフカの鱗ははがれることはなく、あまりの硬さにエレノアの刃の方が弾かれてしまった。

「ムダだというのがわからんのか!!!? わしのウロコは千の刃さえも通すことはない!!!」

動きを止めてしまったエレノアに、フカが猛烈な拳打を浴びせかける。

義足を盾に猛攻を受け流すエレノアであったが、もともとが不自由な義足であるために徐々に押され始めてしまう。

やがて、エレノアの生身の体にもフカの鱗がかすり始めた。

「くっ……!!」

「そらそらどうしたア!!」 息が上がっておるぞ!!」

懸命に立ち回るエレノアだが、ついにはバランスを崩して決定的な隙を見せてしま
う。

歴戦の戦士であり、凶暴なサメの魚人がそれを見逃すはずがなかった。

「『鮫肌拳』『刺鯁』!!」

掘削機のごとき勢いで迫る貫手に、エレノアは慌てて義足を持ち上げて防御を図る。

しかし凶悪なウロコの刃はガリガリと義足の装甲を削り取り、内部の構造までもを破
壊していく。

備えられた刃はそれに巻き込まれ、バキンッ!!と音を立てて根元から折れてしまっ
た。

「あああああ!! エレノアの姉御の刃が……!!」

ヨサクが悲鳴を上げ、窮地に陥るエレノアを凝視する。

なんとか体勢を立て直したエレノアが後ずさり、反撃に出ようとするが、がたがたに
された義足はまともに立つこともできなくなり、よろよろとおぼつかない足取りで膝を
つく羽目になる。

「武器なら……いくらでも作れる!!!」

虚勢をはり、地面から槍を作り出すが歩くこともできない以上ろくな戦闘は期待できない。

槍を支えに何とか立ち上がるエレノアに、フカがさらなる追撃を始めた。

「『波羅丸』!!!」 『緋刺』!!!」 『牢啼刃』!!!」

ヤスリのようなウロコが槍を、残った義足の装甲を削り、破壊し、エレノアを追い込んでいく。

猛攻はエレノアの肌を掠り、刻まれた一条の傷跡から鮮血が迸った。

（耐えて……!!）

もはや戦いにすらなっていない、一方的な殺戮に周囲から悲鳴が上がる。

ゾロやサンジは自分の敵を相手するのに手いっぱい、助けを求める余裕さえなく身を守ることにしかできなかった。

「いい加減しぶとい奴じゃ……」 『破魔線』!!!」

いい加減苛立ちが限界に達したフカが、向けられる義足を払って体勢を崩させる。

ハッと目を見開いて狼狽するエレノアに、再び鋭い勢いの貫手が放たれた。

バランスを崩したエレノアの防御を抜き、フカの鱗が大きくわき腹をえぐり、肉片をあたりに撒き散らした。

「うああああ!!」

腹部に走る激痛に、エレノアの口から悲鳴が上がる。

勝利を確信してにやりと笑うフカ、しかし突き出した腕を引き抜こうとした彼から、なぜか笑みが消えた。

「……!! 手間が……省けた……!!」

自分の脇腹をえぐる凶悪な凶器の腕を、エレノアが素手で掴んで止めている。

鱗で手が切れて血が噴き出すのも構わず、決して逃がしはしないという気迫を込めてしがみついている。

目を見開くフカの口の中に、エレノアは半壊した自分の義足を突っ込んだ。

「もがっ!!」

「買い替え時だったんだよね!!」

不敵な笑みを浮かべたエレノアは、パンツと手のひらを合わせるとつつこんだ義足に触れる。

バキツ!!と閃光とともに義足が半ばから崩れ、半分以上をフカの口に残したままエレノアの体が落下する。

（脚を…!!?）

意図が読めず、狼狽するフカが義足を外そうとするが、無理につつまれたためか抜

くことができない。

もがき苦しむ魚人の老人に向けて、虎耳の天使はパンツと打ち合わせた両手のひらを向けた。

「吹っ飛ばせ!!」

手のひらの中で生み出された風の弾丸がはじけ、エレノアの体を吹き飛ばす。

もがいているフカには全くダメージになつていなかったが、大きく辺りの塵や鉄粉が舞い上がり、一瞬にして大きな距離を稼ぐことに成功していた。

ゴロゴロと地面を転がりながら、エレノアは自分の右手に白い手袋をはめる。

「打撃だの斬撃だの物理攻撃には強いみたいだけど………これはどうかな?」

以前にも使った、陣が描かれた特殊な手袋。

笑みを浮かべたエレノアは、パチンと大きく指を鳴らした。

「大佐の真似事だけど………本物に負けないクオリティを約束しよう!!」

特殊な布で覆われた指と指がこすれ合ったことで、手袋から火花が発生する。

空気中に舞った塵と鉄粉に火花は燃え移り、導火線代わりとなつて空気中を走つていく。

驚愕に目を見開くフカの口の中の義足に火花が到達すると、カツと強く大きな閃光が発生した。

「カンタレラ 皇殺猛毒^{!!!}」

義足が真つ赤に染まり、直後に凄まじい爆発が生じる。

深紅の業火に魚人の体は呑み込まれ、ビリビリと大気を振動させる轟音と衝撃があたりに四散した。

少し煙に巻かれながら、エレノアはちろつと舌を出して流し目をよこした。

『粉塵爆発』……水場が近かったからちよつと心配だったけど、うまくいつてよかったよ」

「ぐ……オ……」

口の中という、ウロコのない無防備な部分を強烈な熱で焼かれ、フカの巨体が震えた。いくら丈夫とはいえ、体内を焼かれても動けるほどではない。たった一瞬で、優位な位置にいたはずの老人は大きな負傷を被っていた。

「コンの……ガキが……!!!」

それでもぎろりと殺気のコもった目を向けられるのは、下等な種族を相手に膝をつくことを忌むプライドか。

だがそれでも、片足を失って動けないエレノアに近づくこともできずにいた。

「ツツぶはア!!!」

その時、すぐそばに水面から勢いよくサンジが顔を出した。

口元に血をにじませながら、新鮮な空気を求めて盛大に咳き込む彼に、エレノアとゾロが注目する。

「お前っつ!!」

「サンジくん!」

「ぶはア!!! ぶほっ!!! あ~~~~ぶはア!!!」

なんとか呼吸を落ち着けると、サンジは陸の上上がって腰を下ろす。

海中にはいまだルフィが囚われているはずだが、そちらはもう解決しているのだろうか。

「…安心しろ、あいつは無事だ」

「本当か」

「半分な」

「半分!」

「どういうこと!」

「事情は後だ…!!!」

ぎろりとサンジは、同じく息を切らせて陸地の上がってきたクロオビを睨みつける。

同じくゾロも剣を手に突進するハチに、エレノアはぶるぶると首を振って正気を取り戻すフカに視線を戻す。

戦いはまだ終わっていない、だが決着はもうすぐそこに迫っていた。

「さて、じゃあ…終わらせますか」

両手のひらを打ち鳴らし、フカに向き合うエレノア。

まともに立つこともできないのに、余裕の表情を崩さないエレノアにフカの怒りは高まっていく一方であった。

「小娘がア!! なぜ貴様のようなガキに……わしらの悲願が邪魔されねばならん!!! 薄汚い人間どもが……!!! 魚人の怒りを知るがいい!!!」

フカの言葉の端々から見えるのは、単純な選民意識などではない。

人より長く世界を見てきた、人間と相對してきたが故の、経験と記憶からくる怒りと憎しみ。

決して拭い去ることなどできない、人間との間に刻まれた溝であった。

「……あんた達の痛みは知ってる。私もさんざん、人間の悪意を目の当たりにしてきたから。……でも、だからって関係ない別の誰かにその憎しみをぶつけることは違うでしょ……!!」

エレノアには、彼の気持ち痛いほどよくわかった。

世界の理不尽を、人間の身勝手さを目の当たりにしてきたのは、彼女も同じであったから。

だからこそ、エレノアはそこから引くわけにはいかなかった。

「あんた達みたいなの奴らのせいだ………これ以上あの子が涙を流すなんて、私には耐えられない……!!」

思い出される、ナミの涙。

気丈に悪い女を演じ続けた強い彼女が見せた、本当の想い。

二度とそんな涙を見たくないから、エレノアはこの場所に来たのだ。

「私の友達の島を荒らしてんじゃないよ……!! ハナつたれども!!」

「……?!? てめエ……」

フカは憎悪にゆがんだ形相のまま、わずかに目を見開く。

グラグラと槍を支えに立ち上がるエレノアの背後に、見覚えのある影が見えた気がしたのだ。

まるで巨大な山のようにそびえたつ、強大な覇気を発する一人の男の姿を。

「この島は!!! 私の縄張りにする!!!」

すべての人間を圧倒する叫びとともに、エレノアがはつきりと宣言する。

知らない人間が聞けば、小娘の戯言のような傲慢な一言だ。

しかしその一言は、彼ら魚人からしてみればやすやすと口にしていいものではなかった。

「……………!!!! 小娘エ……………!!!! 貴様アああ!!!!」

さらなる激昂とともに、フカはよろよろとおぼつかない足取りのままエレノアに突進を開始する。

この娘だけはこの手で殺す、そんな殺意をあらわにしなから。

「もおお、お前本つつ当許さん本気でブツ殺してやる!!!」

六本の剣の切っ先を一転に集める独特な構えを取ったハチに、ゾロはヨサクとジョニーから預かった剣を構えた。

しかし相手の防御を崩す構えで突撃するハチにたいし、ゾロはそれをあえて攻撃で防ぐ。

凄まじい剛の剣の一撃によって、直撃したハチの剣は全て根元からバラバラに砕かれた。

「これで、おれとお前の剣の重みの違いが理解わかったか？ タコ助……………!! 気が済んだろ」
 呆然となるハチに、ゾロの凶暴な双眸が突き刺さる。

そしてゾロは、渦を巻く竜のように三本の剣を構えた。

クロオビは水中で散々痛めつけた生意気な海賊を相手に、愚か者を見るような目で魚人空手の構えを取る。

「……………まだわからんようだな、根本的な力の差が……………水中だろうと陸上だろうと同

じことだ。その上お前はおれを怒らせた。『魚人空手』の精髓で殺し……」

堂々と告げるクロオビの体に、サンジの蹴りが深々と突き刺さる。

魚人の皮膚をやすやすと貫く強烈な蹴撃に、クロオビの意識が一瞬途切れかけた。

「首肉!!! 肩肉!!! 背肉!!! 鞍下肉!!! 胸肉!!! 腿肉!!!」

クロオビの全身に、サンジの急所を狙った蹴りが次々に突き刺さっていく。

魚人の力にも匹敵する連撃を受け、クロオビは反撃も防御もできずにいた。

「燃え盛れ、滾れ、この手に集え………星の光を宿した聖剣よ!!?」

パアンツ!!とひと際強く合わせた掌が、青い閃光を撒き散らす。すると周囲から光が収束し、エレノアの手元で集まって形を成していく。

光と熱が徐々に剣の形を成し、風を飲み込んでさらに強く輝きと熱さを増していく。

雄叫びとともに向かってくるフカに向けて、エレノアは高々と掲げた光の剣を振り下ろした。

「『龍巻き』!!!」

「『羊肉シヨット』!!!」

「『勝誓王剣』!!!」

三人の強者によるそれぞれの攻撃が、凶悪な魚人たちに炸裂する。

ハチは斬撃の竜巻に巻き上げられ、クロオビは強烈な足技で吹き飛ばされ、フカは巨大に膨れ上がった光の剣に呑み込まれていく。

それぞれの想いを載せた一撃は、容赦なく魚人たちを戦闘不能にし、崩壊したアールンパークの上に叩きつけた。

「悪イが、てめエは眼中にねエ」

しゅるりと手ぬぐいを外し、気だるげにゾロが息をつく。

「デザートは…要らねエか」

タバコをくゆらせ、面倒くさそうにサンジが呟く。

「これでもだいたい加減したんだ、感謝しなよ…シンベエへの貸しき」

がくりと膝をつき、息を斬らせたエレノアが誰にもなく告げる。

全員既に満身創痍には違いない。しかしすさまじい力を見せた彼らは、人間の上位に属する種族であるはずの魚人たちを倒して見せたのだ。

「クロオビ…ハチ…フカ爺…」

倒れ伏す幹部たちを見て、アールンが呆然とつぶやく。

いつそ哀れなその姿に、ゾロたちは改めて不敵に笑って見せた。

「しよせん雑魚。この「ゲーム」はおれ達の勝ちだな」

耳に届いたその言葉に、アールンの顔中に血管が浮かび上がる。

もう種族がどうなどさしたる問題ではない。大切な同胞たちを完膚なきまでに叩きのめしたこのゴミどもを、血祭りにあげなければ気が済まなかつた。

「てめエら、よくもおれの大切な同胞達を次々と……少し調子に乗りすぎじゃねエのか!!!?」
目前から迸るすさまじい殺気を前に、フラフラの一回は表情を変える。

どう考えても圧倒的に不利な状況だが、まだ倒れるわけにはいかなかつた。

「オイ……ルファイが半分無事つてのはどういう意味だ」

「とりあえず死にやしねエつてこつた。でも、そのためには俺が、もう一度海底へ行かなきゃいけねエ」

「……それ、あいつが許してくれるとは思えないね……」

一難去つてまた一難。

勝利の時は、まだまだ夢の果てにあつた。

第39話 「私と一緒に死んで!!!」

重い沈黙が降りていた。

目の前で繰り広げられていた信じられない光景に希望を抱き始めた矢先、それを簡単に覆い潰す絶望を目の当たりにし、言葉も出なかった。

「淡い……夢だったのか……!!」

「……あ……あのサメ野郎何しやがった？」

「わからねエ。水をかけられたと思ったら、三人とも血イ吐いて吹き飛んじまった!!」

圧倒的な身体能力を持つ魚人たちを相手に、見事勝利を手にしたエレノアたち。

しかしいま彼女たちは、たった一人の魚人を前に力なく倒れ伏してしまっていた。

「かはっ……!! 撃水……か……!!」

「おオ……よく知ってんじやねエか。てめエら程度の人間なら、直接手を触れなくても少量の水がありや十分に殺せる……これが魚人と人間の力の差だ」

口から吐血しながら、手のひらで水滴をもてあそぶアーロンを睨みつける。

信じられないことだが、アーロンはその場から一歩たりとも動かず、本気さえ出していないかった。

「フザけんな……!!」胸肉シユート!!」

激痛をこらえ、サンジがアールロンに蹴りをお見舞いする。

しかし炸裂するよりも前に、無造作にアールロンが放った水滴が体に衝突する。

それはまるで散弾銃のような衝撃を有し、サンジの体を軽々と吹き飛ばしてしまつた。

「オエ……!!」

「さつさとくたばれ。たいした価値はねえんだぜ? てめえらの命なんざア……」

とどめを刺すことも面倒くさそうに、もだえ苦しむサンジを見下ろすアールロン。

ゾロもエレノアも、はるか上から見下してくるアールロンに反抗する余力さえ残されていなかった。

「アールンツ!!!」

そんな時だった、絶望に染まりつつあつた空気を切り裂く声が上がつたのは。

「ナミ……」

「ナミさん………♡」

肩に乱雑に包帯を巻き、硬い意志のこもつた目でアールロンを睨むナミに、エレノアたちや村人たちの視線が集まつた。

アールロンはさも愉し気に笑みを浮かべると、足元の惨状を見せつけるように手を広げ

た。

「今ちようどどこぞの海賊どもをブチ殺そうとしてたところだ。何しにここへ？」

「あんたを、殺しに……!!!」

「殺しに!! シヤハハハハハハハハ!!」

ナミの言葉に、アーロンは馬鹿にするような盛大な笑い声をあげた。

「おれ達といた8年間…お前がおれを何度殺そうとした…? 暗殺…毒殺…奇襲…結果

おれを殺せたか!!? 貴様ら人間ごときにやおれを殺せねエことぐらい身に沁みてわ

かつてるはずだ…!!!」

エレノアはその言葉で、ナミが味わってきた8年間の苦しみの片鱗を感じて唇を噛む。

ただ耐え続けただけではない。彼女は8年もの歳月の中、光を求めて必死に抗い続けていたのだ。

「いいか…おれはお前を殺さねエし…お前はおれから逃げられん…!!! お前は永久にウ

チの“測量士”でいてもらう…だが、おれも知つての通り気のいい男だ! 若い女を監禁などしたくねエ。お前には、できれば望んで測量士を続けてほしいもんだ」

にやにやと笑いながら、アーロンはエレノアの壊れかけの義足を踏み潰す。

痛みはないが、立ち上がるための足を踏みにじられるという屈辱で、エレノアの表情

は険しくなった。

「……おれはこれからここに居るお前以外の人間を、全員ブチ殺すことになるわけだが……お前が、もしまた『アーロン一味』に快く戻り、幹部として海図を描くというのなら、そこに居るココヤシ村の連中だけは助けてやってもいい……!! まあ……こいつらはダメだがな。暴れすぎた。要はどっちにつくかだ……」

ぞくりとナミの背筋に寒気が走る。

アーロンの残酷な提案、いや最早一択しか残されていない強要からは、絶望しか感じられなかった。

「今の内におれについて村人と共に助かるか、この貧弱どもについてみんなで、おれと戦ってみるか……!! ……最も頼りのこいつらがこのザマじゃあ惨劇は目に見えるがな……!! ナミ……!! お前はおれの仲間か？ それともこいつらの仲間か……?」

「……!! てめエ……!!」

アーロンにナミを解放する意思是さらさらなかった。

ルフィたちを選べば村人たちが、村人たちを選べばルフィたちが殺される。

『希望』を選んで『宝』を奪われるか、『宝』を選んで『希望』を捨てるか。どの結果を選んでも、ナミの心は折られることは間違いなかった。

「ごめんみんな!!」

だがナミの顔に、絶望はなかった。

少しだけ迷ったナミは、村人たちに笑みを見せて決断を伝えた。

「私と一緒に、死んで!!!」

「「「いよしきたア!!!」」」

彼らは『希望』にすべてを託すことを決めた。

どんな結果が待っているようとも、力に屈しない未来を選んだのだ。

その決意に、彼は応えた。

「ブウ——ツ!!! ……つっぱア!!!」

突如アーンパークの端の物陰から、盛大な水の柱が立ち上がった。

噴水のごとき水の勢いと人の声に、アーンは表情を変えて目を見開いた。

「何だ!?!」

「きたか! あとは足枷を外すだけだ!!」

「! ……なんだ、そういうことか…」

「了解イ…!!」

理解が追い付いていないアーンをよそに、エレノアたちは全てを把握して笑みを浮かべる。

サンジの言葉と、今この場にいない彼のことを思い出したことで、己がなすべきこと

を見出した。

「30秒!! それ以上はもたねエ」

「それで充分だ!!」

満身創痍の体を無理矢理起こし、ゾロとエレノアがよろよろと立ち上がる。

その間に、サンジが勢いよく水中に潜っていった。

「あんなところに噴水はねエぞ!! まさか、あのゴム野郎か!!?」

すぐさまサンジを追おうとしたアーロンだが、その頬に小さな痛みが走る。

つう…と流れ落ちる赤い血を目にし、アーロンはぎろりと突きつけられる刀の持ち主を睨みつけた。

「気にすんな。なんでもねエよ、半魚野郎」

「その言葉は二度と口にするなど言つといたはずだぜ、瀕死のロロノア・ゾロよ…」

怒りに燃えるアーロンと不敵に笑うゾロ。

すると今度は、アーロンの顔面にパキッと黄色い液体が炸裂した。

「〃卵星〃 つ!!! 援護するぞ、ゾロ!!!」

「ウソツプ君!! いったいどこから…」

魚人の一人を引き連れて逃げていったもう一人の声を聞き、エレノアは辺りを見渡す。

そしてサンジが吹き飛ばされてできた穴から覗くウソツプの姿を目にし、カクツと肩を落とした。

「存分に戦え!!!」

「そこかア!!!」

「遠いよウソツプ君…」

だいぶ安全な場所で構えている彼に、ゾロとエレノアから呆れた視線が向けられる。ため息をつきながら、ゾロは槍を支えに立っているエレノアに横目を向けた。

「おい、片足のためエはいい加減休んでろ。邪魔だ」

「冗談! できるわけないじゃん…:せっかくこいつの顔面に一発ブチ込めるつてのに」

好戦的な笑みを浮かべ、エレノアはアローンを見据える。

ナミが耐えてきた8年間を自分でも叩きつけなければ気が済まないほど、彼女自身も怒りを燃やしていた。

「コックの兄貴だ!!! 海中で何が起きてんのか知らねえが、コックの兄貴の行動が」

「なんだ!!!」

「ゾロの兄貴!!! エレノアの姉御!!! フンバレ—————つ!!!」

エレノアとゾロがアローンを海中に向かわせないように振る舞っていることから、ヨ

サクとジョニーが察して応援の声を上げる。

海中での異変に気付いているアーロンは、立ちほだかる二人を心底邪魔そうに睨みつけた。

「悪魔の実の能力者は海中じゃあその能力はもちろん、もがく力すら奪われ死ぬはずだ。そいつが、まだ生きてるとすりゃあ誰かがこの戦いゲームに水を差してることになる!!!」

「水を差すウ？ もともとそんな正当なゲームじゃなかったでしょうに!!!」

「何にせよ邪魔者は確かめる必要がある!!! おれの前に立ちほだかるってこたア、まずはてめエらが死にてエらしいな!!!」

アーロンの殺意が、まずはエレノアとゾロに向けられる。

エレノアたちの意図を察したウソツプが、注意を引こうと大声をあげてアーロンを狙うが、彼が今構えているのは攻撃力皆無の輪ゴムであった。

「今だ、いけつゾロ」

「あんた何がしたいのよっ!!!」

背後でそんなやり取りが行われていたが、当のアーロンは完全に無視していた。

「『その『自慢の鼻』へし折ってやる!!!』」

「バカが……へし折れねえから『自慢の鼻』だ!!!」

エレノアとゾロによる同時攻撃が放たれるが、アーロンは何と自分のノコギリのよう

な鼻で受け止め、微動だにしない。

驚愕に目を見開く彼らに、アーロンは徐々に鋭く尖った鼻を押し付けていった。

「お前らがもし!! 万全だったならば……!! ……あるいは傷くらい残せたかもな!!!」

「くうっ……!! ……ん!!」

ギリギリと鼻先が迫り、二人の顔に焦燥が浮かぶ。

その時ふと、背後で動いた影に気づいた二人が視線を向けた。

なぜか全手のひらを前に出し、プルプルと目を瞑って震えているハチの姿に、その場
にいた全員に困惑が生じた。

「は!!!? しまった!! 輪ゴムが飛んでくるかと思った!!!」

「何イ——っ!!!?」

「何——っ!!!? しろ!! 俺の狙いはあいつだったんだ!!!」

「アーロンって叫んでたでしょ」

目論見が外れたが、これ幸いとアピールするウソップにナミのツツコミが飛ぶ。

いつの間にか目を覚ましていたハチは、憤怒の表情でゾロたちを睨みつけた。

「お前らの思い通りにはさせんぞ……!! ロロノア・ゾロ!!! それから……えつと……まア

いや!! 海に入ったお前らの仲間を殺してやる!!!」

会話らしい会話をしていないエレノアだけ名前がわからなかったようだが、すぐに考

えるのをやめてハチが海に飛び込む。

先に海に入っていたサンジのことを見ていたのだ。

「しまっ……!!」

「くやしがることはねエ……どのみち、てめエら全員死ぬんだよ!!!」

アーロンの鼻が二人の得物を弾き、ゾロを踏みつける。

バランスを崩したエレノアの胸に、アーロンの鼻が深々と突き刺さった。

「うわあああ!!!」

「エレノアア!!!」

返しが付いた凶悪な刃を受け、たまらずエレノアは悲鳴を上げる。

アーロンは残虐な笑みを浮かべてエレノアの首を掴むと、もはや形を保っていない義足をぐしやりと握りつぶした。

「たいそうなオモチャをぶら下げやがって……邪魔なんだよオ!!!」

怒りのままに、邪魔なエレノアの衣服を引きちぎる。

女を辱める行為に村人たちの間から悲鳴が上がりかけるが、その直後に見えたものにしんと静まり返った。

エレノアの衣服の下に見えた、おびただしい傷跡を目にして。

(何だこのガキの体は……!!! 見える傷跡だけでも全部致命傷ばかりじゃねエか!!!)

腹部に、胸に、背中に、肩に、無事な部分がほとんどないほどの、痛々しい傷跡。

自分が付けたものだけではない、もつと前からあるらしい傷の数々に、さすがのアーロンも絶句する。

海賊ゆえ、傷を負うことはあっても致命傷が残ることはあまりない。そんな傷を追えば魚人と言えど死ぬ可能性が高いからだ。

しかしエレノアは、それだけの傷を受けながら生き延びている。

そしてそれを悟らせないほど、気丈に戦っていた。

(「こいつ……!! ただのガキじゃねエ!! 天族ってだけじゃねエ……何か得体の知れねエ凄みを感じる……!!」)

もうまともに動くこともできないはずの少女を相手に、アーロンは気圧されていた。

まるで、少女の姿をした化け物を相手にしてしまったかのように。

(「こいつらは今……!! 確実に、ここで殺しておかねばならん存在だ!!」)

「にや、ははは……」

「ア?」

怒りではない、恐怖や焦りにも似た感情を抱いて身構えたアーロンに、エレノアの口から笑い声がこぼれる。

「……大人しくしてればよかったのに……ホントバカだね……!!」

「…そういうことだな…てめエでてめエがおかしいか…」
「そつちじゃないよ…」

エレノアがそうつぶやいた直後、はるか遠くから大きな水飛沫が上がる。

深い深い海中から、ゴムの張力で飛び上がった青年が、歓喜の声を上げた。

「戻ったア——つ!!!」

「遅エよ、バカ…!!!」

「にやははは…!」

耳に届く雄叫びに、ゾロとエレノアは勝利を確信した笑みを浮かべる。

血まみれで身動きの取れない二人を目にしたルフイは、空中から勢いよく自分の腕を

伸ばした。

「ゾロ!!! エレノア!!!」

伸ばされた手は二人の体にぐるぐると巻き付き、しつかりと固定する。

途端に感じる引つ張られる力に、二人の顔色は真っ青に染まった。

「オイ…やめろ…」

「ちよ…ま…まさか…」

「交替だ!!!」

「うわああああ!!!」

「うにゃあああ!!!」

「「「ドアホーツ!!!」」」

空中のルフィが、引つ張り上げた二人をそのまま後ろに投げ飛ばす。

強制的に戦線離脱させられたエレノアとゾロは悲鳴を上げ、あまりの暴挙にヨサクとジヨニーたちから怒号が響き渡る。

構わずルフィは、自分が倒すべき敵を鋭く見据えた。

「『ゴムゴムの……鐘』 つ!!! と…… 『鞭』 つ!!! 『銃弾』 つ!!! 『銃乱打』 つ!!!」

立ったままであったアロンに、ルフィの連続の猛攻が襲い掛かる。

数々の敵を倒してきた豪華な必殺技の連撃により、アロンの巨体が建物の壁に吹き飛ばされていった。

だが彼は、けろりとした表情で体を起こした。

「…なにか…やったか?」

「き…効いてねエ!!!」

人間であれば過剰なほどの攻撃を食らい、アロンは平気な顔をしている。

しかしルフィも、予想通りといった様子で指を鳴らしていた。

「うん、準備運動」

一方で、思いつきり吹っ飛ばされた二人は、アーロンパークの入り口でぐったりと倒れ伏していた。

あまりにも雑な扱いに、怒る気にもなれなかった。

「あいつ……コロス……」

「……もうツツコむ気にもならない……もう、無理だ……寝よう」

「おオ……」

しかし、十分役目を果たしたことを思い出すと、二人はあっさりと意識を手放したのだった。

第40話 “三人目”

さざ波の音で、エレノアは目を覚ました。

あちこちが痛み、骨が軋みを上げるのをこらえて背中を伸ばす。

ふとその目に、アールンパークに近づいてくる一隻の軍艦を捉え、不快げに目を細めた。

「……ゾロ、きたよ」

「んア？ ……………ああ」

しばらく隣で眠っていたゾロを揺さぶり、どうにか起こす。

彼にも近づいてくる軍艦の姿を見せると、満身創痕の体に叱咤して二人で立ち上がった。

「しよがねエ、もうちつとやってやるか」

「ほいきた」

もうあつちは片が付いているだろう、そう考えたゾロとエレノアは最後の一仕事だと気合を入れ直した。

ルフィの放った最後の一撃により、完全に崩壊したアーロンパーク。その瓦礫の頂上に立ち、ルフィはナミに大きな声で告げる。

「お前は俺の仲間だ!!!」

「……………うん!!!」

ナミの痛みと苦しみが染み付いた部屋を破壊し、力の限り暴れまわった若き海賊の青年に、ナミは涙に濡れた目を向ける。

母の仇は、悲しみと憎しみの鎖は砕かれた。

8年もの間囚われ続けてきた娘はついに、自由を手に入れたのだ。

「よくやった」

「アーロンパークが落ちたア!!!」

それは皆、同じ気持ちであった。

理不尽な支配を受け、屈辱の中で生きながらえ続けてきた彼らに舞い降りてきた希望。

溢れ出す涙を止める術を、誰も持っていなかった。

「そこまでだ貴様らア!!! チツチツチツチツチ!!!」

その時だった。歓喜の声を上げる島の住人たちの間に、空気をぶち壊す耳障りな雑音が混ざってきたのだ。

アーロンに買取され、ナミから一億ベリーを奪った外道である海軍大佐ネズミが、いやらしい笑みを浮かべてそこに立っていたのだ。

「あいつは…!!」

「なんと言う今日は大吉日!!!
ラッキーデー いや、ごくろう。戦いの一部始終を見せてもらった。ま

ぐれとはいえ貴様らの様な名もない海賊に魚人どもが負けようとは思わなかった」

海兵たちを引き連れ、我が物顔でアーロンパーク跡地に入り込むその男に、住人たちから嫌悪の目が向けられた。

悪魔に魂を売った最低な人種に、誰もが歯を食いしばった。この男がいなければ、ここまでひどい事態にはなっていなかったかもしれない。

「だが、おかげでアーロンに渡すはずだった金も、このアーロンパークに貯えられた金品も全て私のものだ!!! 全員武器を捨てろ!!! 貴様らの手柄、この海軍第16支部大佐ネズミがもらったアあ!!!」

強欲にも、アーロンの持っていた全ても奪い取ろうとネズミが海兵たちに命じる。

しかし、邪魔な住人たちに手を上げてでも金銭を求めるその汚い心の持ち主に、ついに天罰が下った。

「うるせエハイエナどもがア!!!」

「あああああつ?!」

赤黒い無数のトゲが地面から生え、海兵たちが吹っ飛ばされていく。

ボチャンボチャンと海に沈んでいく海兵たちに呆然となるネズミの後頭部が、万力のような力で締め上げられた。

「ゾロ!! エレノア!!」

狙っていたかのようなタイミングで現れた二人の仲間に、ナミが笑顔を見せる。

ゾロはどう猛な笑みを浮かべて、ギリギリとネズミの頭を握りつぶさんばかりに締め上げた。

「人が大いに喜んでる所に」

「水差すんじゃないよ」

エレノアも怒りに満ちた笑みを浮かべながら、立ち尽くしている住人たちにキツと視線を向けた。

「ぶっ潰せ野郎ども!! 魚人でないならこいつらなんかにあんたたちが敗れるかア!!!」

「うおおおお!!!」

「ぎゃああああ!!!」

その言葉でハツパをかけられた住人たちが、雄叫びをあげて海兵たちに襲いかかった。

助けを無視し、魚人に媚を売り、拳銃を守るべき人々を足蹴にして甘い汁をすすつて

いたクズどもに、住人たちの溜まりに溜まった怒りが爆発したのだった。

数分後、一箇所にまとめられた海兵たちは、顔中腫れあげたボロボロの状態で山積み
にされる。

一応残っていた理性により、人死にまでは出ていなかった。

「おぼえらおでに手エ出してびろ、ただじゃすばないがらなア？」

「まだ言つてんのか…」

「あきれた連中…海軍の矜持も何もないただのゴミクズじゃないか」

もはや誰かもわからないほど殴られたネズミが、それでも傲慢な態度を崩さずに罵倒
する。

エレノアでさえゴミを見るような目を向けていると、棒を持ったナミがネズミの正面
にしゃがみこんだ。

「ノジコを撃つた分と…ベルメールさんのみかん畑をぐちゃぐちゃにしてくれた分
…」

「あア!!」

ばかにするように声をあげたネズミの顔面に、ナミの渾身の薙が炸裂する。

さらに顔を膨らませ、血を吐いたネズミが地面に叩きつけられた。

「イよっしー」

「ありがと！ ナミ、スツキリしたよ」

「あと千発くらい入れてやれ!!」

思わずガツポーズを取るエレノアに、ナミはブイッと指を二本立てて答える。

そしてしくしくと泣いているネズミの頬を掴むと、力の限り引つ張つて鋭く睨みつけた。

「あんた達はこれから魚人達の片付け!! ゴサ復興に協力!! アーロンパークに残った金品には一切関与しないこと!! あれは島のお金なの。それともう一つ、私のお金返して」

「いで——いで——ゆるとーりにしばす!! がえすつすがえすつす!!」

痛みに耐性のないネズミはすぐさま約束し、手が離れたことで慌ててその場から逃走を開始する。

と言つても船は住民たちに占拠されてしまったために、海に飛び込んで泳いで支部まで戻る羽目になっていた。

「覚えてろこの腐れ海賊ども!!! 麦わらの男!!! 名前をルフィといったな!!! お前が船

長なんだな!!? 忘れんな!!! テメエらすごいことになるぞ!!! おれを怒らせたんだ!!!

復讐してやる!!!」

「……………まだ反省が足りないようだね」

「ヒイイイイイ!!」

散々ボロクソにされても偉そうな態度を崩さないネズミに見えるように、エレノアが手袋をつけた右手を掲げる。

何をしようとしているのかはわからないがとにかくヤバそうだと察し、ネズミたちは悲鳴を上げて全力で泳いで行った。

「すごいことになるってよ」

「何で、おれが海賊王になること知ってたんだ」

「そうじゃねエだろ。バカだなお前」

「おい、どうする!! マジですごいことになったらどうする!!?」

「負け犬の遠吠えってやつだよ。気にしないのが吉さ」

慌てふためくウソツプに、肩をすくめて安堵を促す。

エレノアは心底疲れたという様子でため息をつき、もう一度ネズミが泳ぎ去った方を睨みつけた。

「さて、と」

「ん? おい、エレノア。なんだそりゃ」

「ああ、これ?」

おもむろにエレノアが取り出した棒状の何かに、ゾロが訝しげな目を向ける。

エレノアは少し得意げに、取り出したそれを見せた。

「いやア、さっきのネズミ野郎があんまりにムカつくからさア……………ちよつと制服に仕掛けておいたんだよね」

そう黒い笑みを浮かべて取り出したのは、何かやばい気配を発する小さなスイッチ。ドクロマークが描かれたそれを見たウソツプは、ぎよつと目を見開いた。

「げっ!!?」

「もう一発くらつとけ」

一切の情け容赦なく、エレノアはスイッチをポチツと押す。

その瞬間、ネズミ大佐が泳いでいるあたりの海で、どかーんと激しい水しぶきが上がったのが見えた。

「……………悪魔かお前は」

「てへ♡」

小悪魔の笑みを浮かべ、可愛らしく舌を出して頭を小突くエレノアだが、やった所業を考えればもう悪魔にしか見えなかった。

ウソツプやゾロは戦慄の視線を向けるが、他のものたちはもうネズミのようなクズに構っている暇などなかった。

「さあ、みんな!! 私達だけ喜びにひたってる場合じゃないぞ!!」

「この大事件を島の全員に知らせてやろう!!!」

「アーロンパークはもう滅んだんだ!!!」

歓声をあげ、この場にはいない人々に朗報を伝えるために一斉に走り出していく。

もう見ることはないときえ思っていた光景をもう一度よく見渡しながら、ナミは穏やかな笑みを浮かべた。

—— 終わったよ、ベルメールさん。

8年もかかったけど、やっとみんな、自由になれた!!

晴れやかな気持ちで、ナミは遠い天に行ってしまった母に心の中で伝えた。

「うぎやあああああつ!!!」

村の唯一の治療所から、凄まじい悲鳴が上がる。

死んでいてもおかしくない傷を負っていたゾロは、戦いが終わると問答無用でベッドの上に叩き込まれてしまい、ほとんど麻酔も無しの治療を受けさせられていた。

「バカモンが!! こんな大傷自分で処理しておつて!! お前らの船にや、船医”もおらんのか?!”」

「いやー…知識はあつても技術がないもんで…」

「医者かー、それもいいな…でも音楽家が先だよな」

「あなたのその謎のこだわりは一体何なわけ？」

「だって海賊は歌うんだぞ？」

旅を始めたときから微塵も変わっていない彼の謎の持論に、エレノアは思わず眉間にしわを寄せる。

しかしその目は、全く別のことを考えていっぱいになっていた。

「しっかし……ちよつとばかし暴れすぎちゃったかしら？」

なんとか海を泳ぎきり、支部の通信室にたどり着いたネズミ大佐。

彼は憤怒の形相で、八つ当たりのようにある電伝虫に取り付けられたダイヤルを回した。

「もしもし!!」

『はい、海軍本部』

「もしもし!!? 本部か!!? こちら海軍第16支部大佐ネズミ!!!
M・Cマソン・コード00733!!

本部に要請する!!!」

『そう怒鳴らなくても聞こえてるよ』

怒りのままにまくしたてるネズミに、通信の向こう側の海兵は鬱陶しそうな声を返す。

所業はともかく性格は伝わっているのか、ネズミに対する態度はかなり悪かった。

「いいか!! 麦わら帽子をかぶった『ルファイ』という海賊!! 背中に羽根を生やした『エレノア』という女海賊!! 並びに以下4名の『その一味』を我が政府の『敵』とみなす!!!」

『ルファイ……とエレノア………ん? どっかで聞いた名だな』

通達された名前をメモする海兵だが、耳にした名前に覚えがあることを思い出して手を止める。

構わずネズミは、憎い連中を追い詰めるために通話を続けた。

「かのアールンパークの『アールン一味』を討ち崩す脅威、危険性を考慮の上その一味の船長の首に賞金を懸けられたし!! 特にエレノアという女は危険だ!!!」

『了解』

「写真を送信る!!!」

ネズミが用意した写真が、電伝虫を通じて相手側に伝わる。

すると、写真を受け取った海兵の表情がみるみるうちに強張り、驚愕の形で硬直してしまった。

「もつとマシな写真は撮れなかったのか」

「ええ、あれしか」

『……………早急な事実確認の後、上に承認を求める。だがその前に一つ』
「あア!!」

先ほどの海兵とは異なる声が聞こえてきたが、それに気づかず、それに気づかずにネズミは偉そうな態度のまま反応する。

ネズミよりも上の階級であつた海兵は、ギリつと歯をくいしばると大きく息を吸い込み、ビリビリと振動する怒号を放つた。

『貴様の目は節穴かア!!?』

「へ……!! えつ、いや!! 危険で凶悪な海賊と判断したからこそこうして……!!」

『もしくは貴様の頭がぼんくらかだ!!! この女が危険だと!!? そんなことはとうにわかってるわ!!! 貴様は“ウィザード妖術師”の顔も知らないのか!!!?』

突然怒鳴られたネズミの思考が停止しかける。

支部では最も偉く、怒られた経験が全くと言っていいほどない彼には、通信相手が何に怒っているのか全くわからない。

通信相手の海兵は、怒りを押し殺した低い声で丁寧グランドライオンに説明してやることにした。

『奴こそ懸賞金1億の賞金首!!! すでに“グランドライオン偉大なる航路”では名の売れた世界政府の敵……あの“白ひげ”の娘だぞ!!!』

「……………え?」

全くの予想外の真相に、ネズミはしばらくの間考えることを放棄してしまった。

第41話 “回れ風車”

——また夜がやってきた。

波は今日も静かだった。

島を上げた盛大な宴はその夜も、また次の夜も終わることはなかった。

人々は今のために生きたのだ。

笑うために生きたのだから——。

「えー、おれ様が!! 魚人の幹部を仕留めた、キャプテ〜ンウソツプだ!! 歌います
!!!」

「いいぞ兄ちゃん!」

「サインくれ!」

「あははははは、この2人踊れるぞ」

「ぎやはははははは」

「6曲目!! 『ウソツプ応援歌』!!」

急遽建てられた高い台の上で、メガホンを持ったウソツプが音頭をとる。

ヨサクとジョニーが村人達と代わる代わる踊り明かし、騒がしいくらいに笑い声が響

き渡る。

自由を掴み取った人々の心は、晴れ渡っていた。

大きな喧騒が聞こえる村の広場から少し離れた、Dr. ナコーの診療所にて。

ナミは、自ら傷つけた肩の治療を受けていた。

アロンによって刻まれた刺青を大きくえぐるように突き刺したナイフの傷は、思わず目を背けたくなるほど深いものだった。

「消える？」

「完全には無理じゃな。傷は多少残る。刺青ちゆうのはそういうモンじゃ」

「ごめんねナミ。私をもっと修復の錬金術が得意だったら……」

「ううん、いいの。自分でやったことだから」

そういつてナミは、刻まれた傷に自分で触れる。ドクターのおかげで出血は止まっているが、痛みはまだ残っている。

体ではない、心の方の痛みだ。

「……うん、一生消せないのよね……」

「……………」

切なげな声で呟くナミに、エレノアもどこか思うところがあるように目を伏せる。

傷は消えない。体の傷も、そして何より心の傷も。

けれどエレノアは不憫に思ったりはしない。彼女は、その傷を抱えて歩き出そうとしているのだから。

「じゃ、あたしはもうちよつとみんなと踊ってくるわ。……ナミ、安静にね」

「いつてらっしや〜い」

カタカタと急遽作った代わりの義足をつき、エレノアは診療所の扉をくぐる。

ひらひらと手を振り、見送るナミは微笑を浮かべると、治療を続けるドクターに声をかけた。

「ねえドクター、彫って欲しい刺青があるんだけど」

「んん?」

「これっ」

訝しげに眉を寄せるドクターに、ナミはあるデッサンの紙を渡した。

「ベルメールよ……お前の娘たちは実に逞しく立派に育ったよ……まるで生前のお前を見てるようだ……」

島の外れの崖の上、ポツリと一つだけ立てられた簡素な墓。

今は亡きベルメールが眠るその場所に、ゲンがトクトクと酒をかけていた。

みんなが願ってきた時がきたことを、彼女が命をかけて守り抜いた娘達の無事を報告するために。

「我々はこれから、精一杯生きようと思う。あまりにも多くの犠牲の上に立ってしまった。だからこそ精一杯、バカみたいにな…笑ってやろうと思うのだ…!!」

「それが一番、いい行供養になると思いますよ」

穏やかな笑みを浮かべていた彼に、松葉杖をついたエレノアが小さな花束を手近づいていった。

「……君か。それは…ベルメールに？」

「一応は……ここで亡くなつたすべての方々に贈るつもりで」

ゆつくりと膝をつき、花を添える。

ゲンが静かに見守る中、スウツと息を吸い込んだエレノアは、眠りについた者達を想った声を紡いだ。

「——祈りは遙か…旅立つ君に届け…♪」

やさしい歌声が、風に乗って響き渡る。

ゲンには聞き覚えのないその歌は、旋律は、不思議にも胸に染み渡り心を震わせる。「眠れ、安らかに…想い抱いて往けよ…♪ この胸の痛み…色褪せてしまわぬうちに…」

♪

眠りにつく我が子を見守るような、あるいは旅立つ愛しい人に送る声援エールのように、エレノアは美しい歌声を紡ぐ。

顔も知らない、それでも仲間の家族のために、力強く歌う。

「唱え、その想い…愛しき人のために…♪ 歌え、この音を…彼の人が迷わぬように…」

その歌声を届ける相手は、もうこの場にはいない人たちだ。

だがエレノアの見せる眼差しは、確かに祈りを届ける相手を見定めているように思えた。

旅立った者たちがどこへ行ったのか、知っているようだった。

歌い終えたエレノアは、穏やかな微笑をたたえて黙祷を捧げる。

ゲンはただ、一枚の絵画のようなその姿をじっと見つめていることしかできなかった。

「鎮魂歌レクイエムか……!」

「それでも海賊の先輩ですから…何度か、家族を見送ったこともあります」

「……そうか、辛いな」

「そうですね…」

この天使の少女が、想像もできない過酷な経験をしてきたことは、彼女の体の傷跡を

目の当たりにした村人たちから聞かされた。

それでも痛みを表に出すことなく、他者のために祈りを捧げるのできる彼女を、ゲンは眩しく思えた。

「生ハムメロン!!!」

そんな空気を吹き飛ばす、騒がしい声が響いてゲンはギョツとなる。

声の主に心当たりのあるエレノアは、心底あきれた様子で振り向いた。

「あり……この辺は食いもんねエな……まいった。戻ろ」

「待て小僧っ!!!」

両手いっぱい骨つきの肉を持ったルフィががっかりした様子で立ち去ろうとするが、すぐさまゲンが呼び止める。

立ち止まったルフィは、ゲンとエレノアの前に立っている簡素な墓に首を傾げた。

「? 墓か……誰か死んだのか」

「ああ……死んだよ、昔な」

「いやそれはどうも、このたびはゴチューショーさまでした。ん?」

「……………ご愁傷様ね」

「それでした」

全くと言っていいほど礼儀のなっていない態度に呆れるが、一応は死者を悼む気持ち

を持つているようなので何も言わないことにする。

しかしゲンには、いまのうちに言っておかなければならないことがあった。

「おい小僧よ。…ナミはお前の船に乗る海賊になる…危険な旅だ。…もし、お前らがナミの笑顔を奪うようなことがあったら…私がお前らを殺しに行くぞ!!!」

「まー別におれは奪わねエけどさ…」

「わかつたな!!!」

幼い時から見守ってきた、もはや娘と言つても過言ではないほど大切に思ってきた少女を送り出す。

それを止めることのできない彼なりの、せめてもの意地であった。

「……………わかつた」

否定を許さないゲンの迫力に、アーンにも臆さなかつたルフィはゴクリと口の中の肉を飲み込んで頷く。

一人の父親を前に気圧されているルフィの珍しい顔に苦笑し、エレノアはもう一度ベルメールの眠る墓に目を向けた。

「……………安心していてください。きつとあの人の旅は、いつも笑い声が絶えない…そんなバカみたいに光に満ちた旅になりますから」

彼女の魂はここにはないかもしれない。

しかしせめてこの誓いだけは聞いていてほしいと、祈りを込める。

やがておぼつかない足取りで立ち上がったエレノアが立ち去ろうとした時、不思議な感触の風が吹いた。

——頼んだよ…。

幻聴のような、本当にささやかな声。

はつと振り向いたエレノアの目には、墓の隣で腕を組んで浮かべて立っている、気の強そうな笑顔の女性の姿が見えた気がした。

「あつしらはまた本業の賞金稼ぎに戻りやす。兄貴達にいろいろなお世話になりやす。た」

「ここでお別れつすけどまた、どっかで会える日を楽しみにしてるつす」

「そうか、元気でな」

「兄貴達も」

すつかり傷の癒えたヨサクとジョニーが、お決まりのポーズをとってゾロたちを見送る。共に過ごした時間はなかなか楽しいもので、エレノアは少しばかり寂しさを感じた。

同時にエレノアは、海賊が村人全員から歓迎されながら送られるという珍しい光景に

苦笑する。

しかしそこには、一人足りなかった。

「しかし来ねエな、あいつ」

「来ねエンじやねエのか？」

「来ないかもねー」

「来ねエのかナミさんは!!? オオ!!?」

「お前な!! 生ハムメロンどこにもなかったぞ!!」

未だ姿を見せないナミにサンジは慌てふためき、今か今かと到着を待ち望む。

一方でエレノアは、港で交わされているゲンたちの会話に耳を傾けた。

「何?! 宝を全部置いてく?! あの1億ベリールをか?」

「金を持たずに旅に出るのか? 第一あの金はナミが命をはって…」

「また盗むからいいってさ……」

ノジコとゲン、ドクターの会話にエレノアは首をかしげる。

あのがめつきの理由は村のことが一因であったことは確かだが、生来のももの含まれてきたように思える。

そんな彼女が自ら宝を手放すというのは、どうにも違和感を拭えなかった。

「……………なんかすんごい嫌な予感が」

絶対に何かが起こる。

証拠はないがそう確信していたエレノアの耳に、当の本人からの叫びが届いた。

「船を出して!!!」

見れば、道の向こう側からナミが走り出し、一直線にメリー号に向かってくるのが見える。

その手には何も持たず、一心不乱に駆け込んできていた。

「走り出したぞ!!!? 何のつもりだ?!」

「船を出せつてよ……とにかく出すか」

「ウソツプくん、ゾロくん、帆をはって!」

「お……おオ!!!」

戸惑いの表情を浮かべたゾロたちだったが、エレノアの号令でそれぞれ出航の支度に入る。

ナミの行動に困惑していたゲンは、やがてはつと何かに気づいた様子で目を見開いた。

「まさかあいつ……我々に礼も言わず、別れも言わずに行こうというのか?!」

「そんな……」

「生まれナツちゃん!!!」

「礼ぐらいゆつくり言わせてくれ!!!」

一緒に居られる時間を惜しみ、またまともに礼も言えずに別れることを恐れ、村人たちがナミの前に立ちほだかる。

その間にも、帆を張ったメリー号が進み出し、気づいた村人たちが振り向いて叫んだ。

「あ…あいつら船を出しやがった!!! 君らにも、まだ改めて礼を…」

「いやいや…私達全員海賊なんで。そういうのガラじゃないんで」

恩も何も返せていない村人たちが呼び止めるが、困り顔のエレノアがパタパタと手を振って遠慮する。

海賊の自分が英雄扱いされるのは性に合わないのだ。

そしてついにナミは港へ到着し、一切速度を落とさないまま人々の間を駆け抜けていった。

「ナミ待て!!! そんな勝手な別れは許さんぞ!!!」

慌てるゲンたちの隙間を、スルスルと抜けていく。

ダンツと力強く跳躍し、振り向くことなくメリー号に飛び乗るナミは、おもむろに自分の服の裾を開いた。

その直後、ぼとぼと落下する無数の財布に、村人たちの目が点になった。

「あ!!? あれ!! サイフがないぞ!!?」

「おれもだ！」

「わしのも!!」

「私も!!」

「おれのも!!!」

そこで初めて、自分の懐が物理的に軽くなっていることに気づき、村人たちは慌てて体を探る。

やがて芽生えた嫌な予感に、恐る恐る船の上に視線を集めた。

「みんな、元気でね♡」

いたずらっぽいな笑みを浮かべ、お札を一枚掲げてみせる村一番の問題児の姿に、村人たちはようやく我に返った。

「!!!やりやがった、あのガキヤ——ツ!!!」

被害にあった全員、ヨサクやジョニーたちも一緒になつて怒号をあげる。

別れの余韻に浸る暇も与えない、最後まで村を騒がせてくれた小娘に、村人たちは完全に涙の悲しみも忘れ去っていた。

「おい、変わつてねエぞ、こいつ」

「また、いつ裏切ることか」

「ナミさん、グ——ツ!!」

「あくあ、締まらないなあ、もう」

「だっはっはっは」

海賊たちもナミのブレなさにあきれ、しかしなぜか安堵も覚えてしまう。

これが一番、彼女らしいと思っただのだ。

「この泥棒猫がア——っ!!!」

「戻って来オイ!!!」

「サイフ返せエ!!!」

「この悪ガキイーっ!!!」

「いつでも帰ってこいコラア!!!」

「元気でやれよ!!!」

「お前から感謝してるぞオ!!!」

もう怒っているのか笑っているのかもわからない。

思いの丈を全てぶつける叫びをあげ、村人たちは新たな冒険者たちに声援を送り続けた。

ナミもまた、満面の笑顔でそれを受け止めていた。

「じゃあね、みんな!!! 行って来る!!!」

大切な家族に大きく手を振り、ナミは旅に出る。

母に誓った夢を叶えるために、大きく強く育った自分を誇りに思ってもらえるように。

隣に立つエレノアは、そんな彼女をまぶしそうに見つめるのだった。

「……いい所だね」

「うん……!!」

陽気に海へ出る優しい海賊たちを、崖の上に立った墓が、そしてその根元に立てられた風車がじつと見送る。

その後ろ姿が見えなくなるまで。

——空は快晴、風は軟風。

風車がよくまわる——。

第6章 船出の時

第42話 “偉大な海から来た女”

「うわちゃー…やばいよナミ。私の所持金が尽きそうだ」

甲板の上に並べた貨幣を前に、エレノアが愕然とした表情を浮かべる。

新聞売りのカモメから新聞を買ったナミは、そんな彼女に呆れた視線を送っていた。

「いや…あんた所持金が尽きそうって、いくらでも作れるでしょ」

「わかってないなア。……一応説明すると、錬金術師にはある二つの暗黙のルールがあるんだよ」

ガツクリとうなだれながら貨幣を財布に入れ直したエレノアが、やれやれといった風に肩をすくめてナミに向き直り、人差し指を立てた。

「一つ “金を造るべからず”。あまりに多すぎる金を急に造つちやえば物価が大きく変動して、札束がただの紙切れになることだってある。よつぽどのバカじゃなきゃそんなマネはしないんだよ」

「ふーん…難儀ねエ。もう一つは？」

「もう一つは “人を創るべからず”。人間が人間を作り出そうなんてのは神への冒瀆

だって、倫理的な理由ですつと禁じられてきたの」

「……それはなんかわかる気がする。そんな事が出来ちゃったら、もはやそいつの事を人間なんて思えないわ」

凄まじい力を持つイメージのある錬金術師だが、思った以上に制約が強いらしい。

しかしそういう事情があつたにせよ、ナミにはエレノアがそこまでの素寒貧になる理由がわからなかつた。

「そもそもあんた、いつそんなにお金使つてるのよ？ 胃袋が無限のルフィじゃあるまいし」

「これだよこれ」

困り顔で、エレノアは自分の義足をコンコンと叩く。

もはや以前ほどの動きは見せられず、松葉杖なしでは移動も困難なほどの衰れな相棒の姿に、エレノアは深いため息をついた。

「機械鎧オートメイルを維持するにはいろいろ物入りなんだよ。油も特殊だし、予備パーツも安くはないし、メンテナンスも欠かせないし……私の場合、中の武器の整備にも使うからさ、あつても足りなくなるばっかりさ」

「不便ねエ……」

「ナミ、次の島にいたららお金貸してくれない？ 一回全部専門の人に預けなくちゃい

けないから、ちょっと困ってるんだよ」

「いいわよ？ 利子つくけど」

「……他あたるわ」

「いいじゃねエか貸すぐらい。お前、もう金集めは済んだんだろ？」

「なに言ってるの、あの一件が済んだからこそ今度は私のために稼ぐのよ。ピンポー海賊なんてやだもん」

何やらシートを引いて何かをいじくっていたウソツプが口を挟むが、今や一味の財布の紐を担う彼女にしてみれば看過できない状況らしい。

するとその時、どこからともなく吹き飛ばされてきたルフィがウソツプと激突した。

「さわるなア!!!」

「うわア!!!」

「ぎいやああああ!!!」

ルフィはそのまま甲板を転がり、今まさに作っていたタバスコ星なる香辛料入りパチンコ玉を目に食らったウソツプが盛大な悲鳴を上げる。

原因たるサンジは、メリー号の一部に植えられたミカンの樹々の前で仁王立していた。

「ここはナミさんのみかん畑!!! このおれが指一本触れさせねエ。ナミさん!! 恋の警

備万全です!!」

「んっ! ありがとサンジくん♡」

「いいように使われちゃってまー…」

ナミに色仕掛けされ、ベルメールの形見でもあるミカンの木の護衛役に抜擢されたサンジにエレノアは呆れた目を向ける。

「プライドもへつたくれもない。」

「…しかし、世の中もあれてるわ。ウイルスでまたクーデターか」

「あれま、昔は陽気な街なんて呼ばれてたのに…時代は変わるもんだねー」

買ったばかりの新聞の記事に目をやるナミは、書かれている不穏な内容に眉を寄せ
る。

すると、新聞と一緒に挟まれていたらしい二枚の紙がヒラヒラと落ちた。

「ん?」

足元に落ちたそれに目を向けたナミは、一瞬固まってから大きく目を口を開く。

ナミが見せる驚愕の表情に、気になった他の面々も顔を寄せていき。

「あ…」

「あ…」

「あ」

「ぐー……ん?」

「お」

「あ、やば」

エレノアを除く全員の表情が、驚愕で固まった。

「「「あああああ———っ!!!」」」

こぼれ落ちたのは、二枚の手配書。

一人は、東の海で暴れまわった名だたる海賊たちを討ち取ったことで名をあげた新屋。
ルーキー。

「麦わら」のルフイ、懸賞金3千万ベリ。

前例のない最初の懸賞金額に対してもちろん驚きはある。

しかし問題なのは、ともに落ちてきたもう一枚に書かれた名と懸賞金額であった。

「妖術師」エレノア、懸賞金1億ベリ。

「い……1億ベリイ……!!!?」

少なくとも東の海では聞いたことのない億越えの手配書に、ナミたちはルフイの手配

書のこととも忘れるほどに驚愕の悲鳴をあげていた。

「あちゃ……やっぱりあのクズ大佐から伝わっちゃったかア……ていうかこれ、絶対あの

クズ大佐からの嫌がらせだよな」

しまったと顔に手を当てるエレノアは、もうすでに支部に戻っているであろうネズミに憎々しい感情を抱く。

もう1発ぐらい仕込んでおけば、このイライラを解消できたかもしれないのに。

「え……エレノアちゃんの首に、1億の賞金が……!!?」

「ど……どういふことよ?!?」

「……!!!」

「どうつて言われても……」

聞き捨てならない情報に、ナミたちが一齐にエレノアに詰め寄る。

困り顔で後ずさると、エレノアはその場でくるりと背を向け、翼を大きく左右に広げてみせた。

「こういうことだとしか」

翼を通すために、背中が大きく開いた衣服をまもっているエレノアの白い背中。

そこには華奢な肩甲骨から生える翼に挟まれるように、白い牙のようなひげをたくわえたマークが彫られていた。

「し……白ひげのマーク……!!?」

世界で最も恐れられているといっても過言ではない大海賊の証を目にし、一同はゴクリと息を飲む。

只者ではないとは思っていたが、ここまでとは予想だにしていなかった。

「思い出した……!!?」
ウィザード「妖術師」
イーストブル「つつつたら超有名な女海賊の名前じゃねエか!!?」
 なん
 でそんな奴が東の海にいるんだよ!!?」

「リハビリ」

エレノアの回答は単純明快であった。

一瞬理解が遅れたウソツプは、エレノアの義足と松葉杖を見てようやく落ち着きを取り戻していった。

「……………ああ、そうか」

「そりゃあ……その足じゃ グランドライン「偉大なる航路」の航海なんざ耐えられないわな」

「昔より体力落ちちゃってさ……一時期戦線離脱して、ある伝手からルフィのところまで世話になってたんだよ」

やれやれといった風に肩をすくめ、自由の効かない足を睨みつける。

そもそもこんな状態でなければ、こんな騒ぎになることもなかっただろうが、自分で選んだ結果であるために我慢する他にない。

「だからって1億ベリーなんて……何したらそんな額が付くのよ!!?」
 だいたい、なんでそんな大事なこと黙ってたのよ!!?」

ややヒステリー気味にナミが詰め寄る。

ルフィを超える賞金首であったことを隠されていて、少しばかりショックを受けているようだ。

「……だって」

そんなナミに気まぎれに目をそらし、エレノアはすぐそばにいるもう一人に視線を向ける。

そこには、自分の手配所を凝視してわなわなと肩を震わせる青年の姿があった。

「ルフィが絶対わめきそうなんだもん」

「なんで船長キャプテンのおれよりおまえの方が懸賞金が高いんだよ!!? もの申すぞ3千万ベリー

!!!」

「あー……」

「……いやあんたも最初の額にしては十分高いから」

みっともないほどに声を張り上げるルフィの姿に、ナミたちの興奮が冷めていく。

自分たち以上に取り乱している者の姿を見て落ち着きを取り戻したようだ。

「……考えてみりや、妥当かもしれないねエナ。世にも珍しい『天族』で不思議な『錬金術』の使い手、そのうえ名高き『白ひげ海賊団』の仲間クルだ。海軍にとつちや、何しでかすかわからねエ女を放置するには危なすぎる逸材ってわけだ」

「そう考えてみると、1億ベリーでも安い気がしてきたわ」

「くっそー、絶対いつか超えてやるからな？」

「あーハイハイ…勝手にしてよ」

恨めしげに睨みつけてくるルフィを適当にあしらひ、エレノアは深いため息をつく。すると、別のやる気をみなぎらせていたルフィが、船の遠い前方に見える影に気づいた。

「おい、なんか島が見えるぞ？」

「見えたか……」

「ようやく、グランドドライン偉大なる航路に近づいてきたね」

ぞろぞろと興奮気味に集まってくるルフィたちの後ろで、エレノアが意味深な笑みを浮かべる。

一同が今目指している場所。そこにある町こそ、東の海からへ渡る玄関口にして、この時代の始まりとなった場所であった。

「海賊王が死んだ町……!!」

「行く?」

ルフィの答えは、もう決まっていた。

「ウ——ッ!! でっけー町だー」

大きく発展した、多くの人々で賑わう町の入り口でルフィが大声を上げる。

かつて海賊王ゴールド・ロジャーが生まれ、処刑された町。終わりと始まりの町、それがここ『ローグタウン』である。

「ここから海賊時代は始まったのか」

「よし!! おれは死刑台を見てくる!!」

「ここはいい食材が手に入りそうだ。あといい女♡」

「おれは装備集めに行くか」

「おれも買いてエモンがある」

「貸すわよ、利子3倍ね」

「気を付けてよ、骨の髄までしゃぶりつくされる前に」

「…おう」

エレノアの忠告に、ゾロはわずかに頬を引きつらせる。

ギリリと目を光らせるナミの言葉が、同にも冗談に聞こえなくなってきたようだ。

ふと考えたエレノアは、武器屋に向かおうとしていたゾロの元に追いついた。

「あ、ゾロ。刀買いにいく前にちよつとつきあつてよ。片足になつちやつたから戦いづらくつてさ」

「ん? ああ、前に言つてたメンテナンスとかいうのか? この町でいいのか?」

「うん。ていうか、この町じゃなきやダメなんだ」

松葉杖をつきながら、笑みを浮かべているエレノアだったが、しばらくするとその表情に憂いを混ぜ始めた。

「……でも怒られるだろうなア。前に来てから1年しかたつてないもんなア……憂うつ」

「あ？ 海賊のお前が誰に怒られんだ？」

「うちの整備士に」

ガツクリとうなだれたエレノアは、困ったような顔でそう返した。

「これでよし」

ある一軒の店先で、一人の小柄な老婆がスパナを置いた。

義足の調整を受けた初老の男性は、目に見えるほどに調子のよくなつた義足に笑みを浮かべた。

「おつ、いい感じですよ。さすがピナコ先生」

「どうだい。思いきつて機械オートメイル鎧イロにしてみないかい？」

「はは……冗談でしょう？」

煙管を燻らせる、ピナコと呼ばれた老婆の提案に、男性は苦笑いを返した。

「確かに便利かもしれませんが、手術後の痛みとりハビリが大変だというじゃありませんか」

んか」

「いい年して何をビビってんだい。右手と左足をいつぺんに機械鎧オートメイルにしたガキも、両足を取り換えた女もいるつてのに」

「私にはそんな勇氣はありませんよ。じゃあ」

ズボンの下に義足を隠し、ややぎこちない足取りで去っていく男性に、ピナコは肩をすくめてため息をこぼす。

彼女が店の中に戻ろうとした時、店先で寝そべっていた黒い犬が顔をあげて吠え始めた。

「ん？ なんだい、デン」

振り向いたピナコは、通りの向こう側からやってくる二人組の片割れを目にし、ニヤリと笑みを浮かべた。

「——おや、来たね」

デンと言う名の、左前足が特製の義足となった飼い犬が駆け寄っていくのを見やり、ピナコは中にいるもう一人の家族に向けて声を張り上げた。

「上客が来たよ、ウインリイ！」

エレノアは朗らかな笑みを浮かべ、出迎えてくれたピナコに片手をあげて応えた。

「やつほー、ピナコさん。また頼むよ」

「フン……元気そうじゃないか、エレノア」

第43話 機械鎧（オートメール）技師ウィンリィ

「デーン！ ひつさしぶりだねエ〜会いたかつたぞオ〜♡」

一目散に出迎えてくれた黒い犬に抱きつき、エレノアは思う存分撫でまくる。

デンも久しぶりに会えた客人に思いつきり甘え、ベロベロと顔中を舐め回していた。

「コラコラ。あたしより先に犬に挨拶とは随分じゃないかい」

「にやははは…ごめんごめん」

放つたらかしにされたピナコがニヤリと笑みを浮かべ、我に返ったエレノアは苦笑する。

かなり親しい仲に見える二人を見下ろし、ゾロは目を丸くした。

「こいつがお前の義足を作った奴か」

「ん？ あア違う違う。ピナコさんもオートメール機械鎧技師だけど私の作ったのは……」

デンと戯れる手を止め、関係性を説明しようと顔を上げたエレノアだったが、不意にその耳がピクリと動いた。

「コラア！！ エレノア！！」

「おっとー！」

とつさに手を伸ばし、飛んできた金属製の棒状のものを受け止める。

寸前でスパナを受け止め、冷や汗を拭う仕草をするエレノアの元に、若い娘の怒鳴り声が響いてきた。

「メンテナンスに来る時は先に電伝虫使えって言ってるでしょ——!!!」

「ちよつとちよつとウインリイ!! あいさつ代わりにスパナ投げんのホントにやめてつてば!!!」

ドストロスと荒々しい歩き方で店の奥から顔を出したのは、金の長い髪をポニーテールにした作業着の少女。

快活さと気の強さが表情に表れた、若々しさに溢れた彼女はエレノアと向き合おうと、やがて満面の笑みを見せた。

「あはは! ひさしぶり!!」

変わらぬ親友の笑顔の出迎えに、エレノアも嬉しそうに笑い声を上げていた。

「んな——!!!」

が、歓迎ムードはそれで終わりだった。

エレノアの義足の成れの果てを目の当たりにした少女ウインリイは、まるで宝物を壊されたかのような悲壮な表情で固まってしまった。

「いやーごめんごめん。こんななっちゃった」

「あ…あああ、あんた!? 何がどうなっただらあたしが丹精こめて作った最高傑作の超高級機械鎧オートメイルがこんなことになるのよ!!」

「ちよつと魚人とバトつちやつて、ごめんね？」

「ぎよじつ…バカじゃないの!!」

あまり悪びれる様子のないエレノアの前で、ウィンリィはよろよろと壁にもたれかかって頭を抱える。

流石にエレノアも多少は罪悪感を抱いていた。

「あーも…あんたといいエドといい、あたしの顧客はなんで機械鎧を大事にしないやつらばっかりなのよオ…」

「あ、エド来たんだ。元気にしてた？」

「ええ、そりやもう元気でしたよ…機械鎧がポロツポロになるぐらいにはね…」

長く顔を見せていかなかった幼馴染のことを思い出し、ウィンリィは深いため息をつく。

思えばあいつらとこの子は似たところが多いな、と嘆きながら。

「……………こんなガキが、あんな高性能な義足を作ったのか」

ベテランの風格を見せるピナコではなく、ウィンリィのような若い娘があれだけの代

物を作ったのだと知ったゾロが思わず呟く。

すると、見知らぬ顔ぶれがいたことを思い出したピナコとウィンリイが視線を向けた。

「どちらは？」

「ロロノア・ゾロ。今世話になってる海賊一味の切り込み隊長さん」

「…悪くねエな、その呼び名」

「そうかい、あたしはピナコさ。んで、こっちは孫のウィンリイ」

「は、はじめまして」

「おう」

ピナコは海賊と紹介されたにもかかわらず堂々と、ウィンリイは少し緊張しながら挨拶を交わした。

普通ならそう歓迎されるものではないだろうが、エレノアに対する信頼の方が優っているのだろう。

「リハビリを1年で切り上げるとは、お前さんも思い切ったことをしたね。本来なら2、

3年がかかるところだよ」

「船長が17歳で旅立って決めてたらしくってさ。機会がその時しかなかったんだよ。…時々後悔するけど」

「それでまたこっちに転がり込んでちゃ世話ないわよまったく……」

困ったようにエレノアにぼやくと、二人の技師はエレノアの機械鎧オートメールの点検を始める。といつても、その必要がないほどに悲惨な有様となっていたのだが。

「残った方もだいがガタが来てるね。こりゃア、まとめて交換しちまった方が早い」

「あんたはもう……あたしが丹精込めて作った機械鎧をこうもスタボロに……」

「でも武装と自爆機能は役に立ったよ？」

「ならばよし」

「おめエかよ!!! あんな危ねエ兵器取り付けたのは!!!」

海賊たちに使っていた銃器や刃、魚人の戦士に使っていた爆薬のことを思い出し、思わず声を上げるゾロ。

役に立ったのは確かだが、義足につけるような機能でないのは確かだった。

「んじや、一応身体検査だけしとこっか。どうせ自分で大ききかえられるだろうけど」

「まーね……じや、ゾロ君。あとでね？」

「おオ……」

メジャーを持ったウィンリィに促され、エレノアは松葉杖をつきながらその場を後にする。

残されたゾロが、工房のあちこちにおかれている機械鎧機械鎧の部品を眺めていると、煙管

の煙を吐いたピナコが不意に口を開いた。

「……………あの子は元気でやつてるかい？ 東の海じやよその情報なんざそうそう入って

来ないし、あの子もあの子で手紙の一つもよこさないからあたしや心配でね」

「海賊に手紙出せつてのも無茶じゃねエのか？」

「はっ！ そりやそうだ!!」

ゾロの冷静なツツコミに、ピナコは豪快に笑つて返す。

妙に肝の座つた様子の老婆に呆れながら、ゾロはずっと気になっていたことを思い切つて尋ねた。

「……………あいつの両脚、何があつてああなつた？」

「あたしの口からは何とも言えないね……ただあの娘がここに転がり込んできた時には驚いたもんさ…… 偉大なる航路^{グランドライン}にいるはずの海賊が車イスに乗つて現れたんだから」

ピナコは作業機の席に着き、いくつかのコードや部品を取つて組み立てていく。手慣れた様子でパーツが組み上がつていき、見覚えのある機械^{オートメイル}の部品になつていく。

「伝説上の存在とさえ言われる天族、そしてあの『白ひげ』の娘が何であんな姿になつちまつたかはあたしもよくは知らない……だがあの子は今のあの姿を嘆いちゃいない。誇つてさえいる……あたしにできるのは、あの子が望む代わりの脚を作つてやることだけさ」

ふとピナコは手を止め、制作途中の部品を置いて肩を落とす。

ゾロはじつと、何か思い出している様子のピナコを見下ろしていた。

「あの脚が苦痛じゃなかったはずがない……あの海へ戻ると告げたときも、大人でさえ悲鳴を上げる機械鎧オートメールの手術に耐えたときも……あんな小さい身体のどこにあれだけの強さがあるのかと思つたよ」

そしてまた作業を再開し、呆れているような、不安そうな複雑な表情を浮かべてため息をこぼした。

「そして、そこまで強いからこそどこかで何かの拍子にくじけてしまった時、立ち直れるだろうかと心配になる」

「……………長い付き合いなのか?」

「あの子の弟弟子が、あたしの馴染みの酒飲み仲間の子供でね……その付き合いでそれなりの時間を一緒にメシを食ってきたんだ」

ちらりと向けられた先にあるのは、壁に貼られた無数の写真。

ピナコの若い頃の写真や、ウィンリィの幼い頃の写真、見知らぬ金髪の少年たちの写真、そしてエレノアがともに写っている写真を見て、ピナコはふつと笑みを浮かべた。

「まったく、三人そろって心配ばかりかけさせるんだから……」

苦笑するピナコを、ゾロは何も言わずに見つめる。

そうこうしているうちに、エレノアとウィンリイが戻ってきた。

「ぼっちゃん！ おわったよ」

「おオそうかい…それじゃ、ぼつぼつ始めようかね」

ある程度組み立てた部品を広げ、ピナコとウィンリイはエレノアの足元に陣取る。

調べた座高の高さをメモした紙を見ながら、ピナコはブツブツと呟いた。

「身長は変わらないから、お前さんの分は作るのは楽だね」

「いつつも気になってるんだけど…あんたどっちが本当の姿なわけ？」

「知らない。結構ポンポン姿変えるからわかんなくなっちゃった」

「ますますわけがわからん種族だ…」

あつげらんかんといった感じに答えるエレノアに、ゾロは思わず険しい顔になる。

構わずピナコとウィンリイはエレノアの義足の分の作業工程を確認し始めた。

「既存の部品を組み立てて、微調整、接続、仕上げと…まア半日もあれば十分か」

「急がせちゃって悪いね。連絡手段ないから急な訪問になっちゃったし」

「いいわよ、あんたなら仕方がないし。…どこぞのバカは連絡ならいつでもできるくせ

なっしなっし」

「あはは…」

ウィンリイの言うどこぞのバカのことを思い出したのか、エレノアは困ったように笑

い声をこぼす。

いつかそのうち再会できるのだろうか、そんなことを考えていた。

「…おれは、もういいのか？」

「あ、うん。手間かけちゃってごめんね？ 私はしばらくここにいるから、気にしないで」

「そうか、なら後で迎えに来るか？」

「ううん。足ができればあとは一人で十分だよ。……つてそうだった」

手持ち無沙汰になったゾロに礼を言い、エレノアはパタパタと手を振る。

ふと、思い出したように目を見張り、出て行こうとしたゾロを呼び止めた。

「この前の通りをずつと行つたところに刀を売つてるところがあるからそこにいくといいよ。店主さんケチだけど、刀を見る眼はいいから」

「そうか…わかった。助かる」

「じゃ、後でねー」

「おう」

今度こそ出ていくゾロの背中を見送り、エレノアは一仕事終えたように息をつく。

静かになった工房で、ウィンリイがためらいがちにエレノアの元に近寄っていった。

「エレノア…」

先ほどとは打って変わった不安げな声に、エレノアは訝しげに眉を寄せて振り向いた。

「…また、あの海に行くのね」

「うん。あの人たちのところに、一日でも早く追いつきたいからさ」

ウィンリイの問いに、エレノアはどこか誇らしげに答える。

それ以外に自分が選ぶ選択肢はないのだ、とでも言うような堂々とした態度に、ウィンリイは納得していないように見える。

「両足がこんなことになって……辛い目にしか会ってないのに、どうしてそこまでするの……？」

「あの場所で見えない景色があるからさ。…この体を突き動かす好奇心を、私は止められないし止めたくない。だから行くんだ」

「まったく…頑固なところはあいつと一緒か」

この場にいらない、ずっと旅に行つたままの幼馴染達のことを思い出し、ウィンリイは困つたように肩をすくめ、やがて笑みを浮かべる。

命知らずのバカが手助けを求めているのなら、存分に付き合つてやるだけだ。

そんな思いを抱いているように見えた。

「それじゃ、冒険に耐えられる完璧な足を用意するから待つてなさい！ あ!!? でも

あんたももうちょっと大事に使いなさいよね?」

「あー、はいはい。わかってるってば」

耳にタコができるほど聞かされた小言に顔をしかめ、それでもエレノアは笑顔になる。

心配や迷惑をかけてばかりの自分を、ここまで助けてくれる友達の貴重さを、改めて実感しながら。

「ありがとね、ウィンリィ」

「アンタたちの願いを支えるって決めたんだから…頑張りなさいよ?」

そう言っつて腕まくりをするウィンリィは、誰よりも頼もしく見えた。

第44話 “道化、再び”

「……………やっぱ三本あるとおちつく」

武器屋で仕入れた新たな相棒たちの重さを実感し、ゾロが感慨深げにつぶやく。

死んだ幼馴染に瓜二つな娘や、手に入れた妖刀をめぐる騒動があったものの、望んだ以上の結果が手に入ったことで彼は上機嫌だった。

「アイツの勧めた店で正解だったな…迎えに行くついでに礼も言っておくか」

時間まで適当に町をぶらつくふうと思っていたゾロは、そういつてうる覚えの機械オートメイル工房への道を辿った。

「オオツ!! おいおい何だ、このファンキーな魚はっ!!」

ある魚屋の店先で、ドンツと目立つようにおかれた象のように長い鼻の巨魚を目にし、サンジが興奮した声をあげた。

「こいつア『エレファント・ホンマグロ』。このあたりじゃ見ねエだろ? どうやら南海から泳いできたらしいんでエ。そこを、おれが一本釣りよ!!」

「おめーが釣ったのか!!」

「切ろうか？」

「いや……まるごともらおう!!」

「気前がいいねエツ、あんちゃん。まいどっ」

一流を自負する料理人としての血が騒ぎ、一人では抱えきれない巨魚を即購入してしまおう。

捌き甲斐のありそうな巨体が包まれるのを待ちながら、あらゆるレシピを脳内にピツクアツプしていった。

「さてどう手を加えるか……エレノアちゃんは確か酸味の効いたさっぱりした味が好きだったっけ？ あの娘の笑顔がありやあおれは……おれはア……♡」

人の目も気にせず、にへらとだらしない笑みを浮かべるサンジは、妄想の中のエレノアの笑顔で鼻血を吹きそうになる。

ふとそこで、義足を壊されて不自由していた彼女の様子を思い浮かべた。

「義足の修理に行つてるつつつてたっけか。どのくらいかかるんだ……」

行きは腹立たいがアホ剣士が送っていったが、やつにも用事があるから帰りは一人で戻ってくることになるだろう。

ウズウズと体を震わせた彼は、やがてハツと天啓を受けたかのように目を見開いた。

「いや……おれが迎えに行けばいいじゃねエか!!」

「これ、くだ…さいっ!!」

またある一件の服屋では、両手いっぱい衣類を抱えたナミがレジの店員のおばちゃんに会計を頼む。

そのあまりの量に、店員はつい疑うような目を向けていた。

「これ全部!! お金はあるだろうね」

「あるわよ、失礼ね」

疑われたナミがちゃんと会計をすませると、コロツと機嫌をよくした店員は満面の笑顔を見せて見送った。全く現金なことである。

「またよろしくね——っ」

好みの衣類を安くたくさん買ったことで、ホクホク顔で歩いていたナミであったが、ふとその表情がしかめられた。

「ん? 空気が変わった……………」

航海士として研ぎ澄まされた感覚が、天候の急激な変化を察知して警告を与える。

ナミは自身の知識と経験から、そう遠くないうちに激しい雨が降り注ぐことを予測し、不満げに目を細めた。

(……………気圧も落ちてる…こりゃ一雨来るか……………あとでエレノアも誘おうと思っ

たのに……)

出会った頃から戦いやルフィの面倒を見てばかりで、オシャレやシヨツピングを楽しむ余裕もなかったのだから、せめてこの街でくらい羽目を外させてやろうと思っていたのだが。

そう考えたナミは、やがてにつと笑みを浮かべて店に引き返した

「しようがない、迎えに行つてやるか！ すいませーん、おばさーん。でつかいビニールあるー？」

「ビニール？ 雨の日でもあるまいし」

「いやー、ちょうどいい所にお前がいて助かった。そういやおれ、さつきライオン見たぜ。しかも変な着ぐるみマンが乗つててよオ……」

「何でおれが重い方なんだよ!!」

ちようどいいところでウソツプを見つけたサンジは、彼をアゴで使いながらエレファントオオマゴグロを抱えて通りを歩く。

向かう先はもちろん、人づてに聞いたオートメイル機械鎧工房だ。

「ずいぶん人氣が薄れてきたな……」

同じく工房を目指すゾロは、通りから徐々に人の姿が薄くなつていくことを訝しむ。

そういえば天気も悪くなってきたな、と人ごとのように天を見上げ、マイペースに歩いていた。

「異常に気圧がおちてく。早く船に戻った方が無難かも」

ナミは予想以上に早く変化していく天気_に急かされるように、小走りになつて工房に急ぐ。

修理が遅れていたら、豪雨の中を船に戻らなければならぬかもしれないからだ。

「お」

「あ」

「ん」

そして工房の店先で、四人は測つたかのようなタイミングで集まつた。

互いの顔を見合わせていた彼らの中で、ナミは深いため息について肩を落とした。

「みんな考えることは一緒ってわけね…」

「何でためエがまだここにいるんだよコラ」

「うるせエな。おれの勝手だろ」

「オートメイルが機械鎧専門の工房か…」

早速喧嘩を始めるゾロとサンジをよそに、オートメイル機械鎧にやや興味があつたウソップが工房の看板を見上げて感心した声をあげる。

痛々しい姿にウソツプからツツコミが飛び、エレノアはガツクリと天井を仰いで深く息を吐いた。体を起こすだけでも今は辛いらしい。

「…毎回毎回、この神経繋ぐ瞬間イヤなんだよね……あー死ぬかと思った」

「だらしないうこと言わないの。もつとキツイ手術を耐えたくせに…はい、動かしてみても」
ウインリイに急かされ、エレノアは準備運動のように新調した義足を動かしてその調子を確かめる。

ギシギシと小さく軋む機械鎧オートメイルを凝視していたナミは、思わずゴクリと息を飲んでた。

「知らなかった……機械鎧オートメイルってあんなに苦痛を伴うものなの？」

「さア…どんな苦しみかは、足を失った本人にしか理解できないよ。だが生身の脚よりもおそろしく手間がかかるし、不自由になることは間違いないね」

「何言ってるのばつちゃん！ かつこいいじやない機械鎧オートメイル！ オイルの匂い、きしむ人工筋肉、唸るベアリング…そして人体工学に基づいて設計されたごつくも美しいフォルム……ああつ、なんてすばらしいのかしら機械鎧オートメイル!!」

「機械オタクか」

「うるさい長つ鼻」

恍惚とした表情で機械鎧オートメイルへの愛を語る少女にウソツプから呆れた視線が向けられる

も、少女は毅然として言い返す。

音の変化から具合を確かめ、微調整を繰り返すこと数分。

「さ、完成だよー！」

ピナコの声で、ようやくエレノアは椅子の上から降り、新しく生まれ変わった自分の足の調子を確かめた。

「どうだい？」

「うん、いい感じー！」

「アンタの翼のこと考えて、今回は炭素の比率を高くして軽さを重視したの！ 一応強度も上がってるけど、今回みたいな無茶はしないでよね」

「毎回ありがとうね、ウィンリイ」

他の仕事も山積みだっただろうに、それらを後回しにして助力してくれた二人には感謝しかない。

改めて礼を考えていると、ススツとウィンリイとピナコの前にお盆に乗った紅茶が差し出された。

「お疲れ様ですお嬢さん方……紅茶などいかがでしょう？」

「おや、気が利くね」

「ちようどのど渴いてたのよね……ってこれウチの茶葉じゃないのよ!!」

キザなサンジの気遣いに、一瞬流されそうになったウインリイだったが、目の前の男が勝手にキッチンを使ったことに気づいて怒鳴り声をあげる。

エレノアはじとつとした目でそれを見ていたが、やがて何かを思いついたのかにやりと笑みを浮かべた。

「サンジ君、ちよつと力貸してくれる?」

「何だいエレノアちゃん♡ 君の為ならおれはどんなことだって……」

女性に頼られるとなればやらずにはいられまい、と意気揚々と振り向くサンジ。

その顔面に、鋼の蹴りが襲いかかった。

「えっ……ちよつ! ちよつとエレノアちゃん!!」

間一髪それを躲したサンジだが、続いて何度も振るわれる蹴りに困惑しながら逃げ惑う。

「あぶっ!! 危なっ!!!」

「フフツ……♪ 軽くていい子だね!!」

反撃できないサンジとは裏腹に、エレノアは新たな義足が予想以上にいい具合であることに上機嫌になっている。

突然の事態に呆然となっていたゾロたちは、やがて理由に気づいたのかポンと手のひらに拳を当てた。

「どうしたエレノア、ついにそのエロコックに制裁与える気になったか？」

「おおいぞ。おれ達の分もやっちゃまえ」

「ふざけんなマリモに長つ鼻コリア!!! ……違うよね?!? そんな考えないよねエレノア

ちゃん!!!」

「違うよー」

必死の形相で蹴りをかわし続けるサンジに、エレノアは気の抜けた声で答える。その間も、鋭い蹴りは絶え間なく突き出されていた。

「作動確認もかねての組手さ。ここしばらく動けなかったからカンを取り戻さない」と

「そ…それならそうと言ってくれればア!!!」

「なるほどねー…」

「ただしまあ…そういう意図もないと言えばウソになるね」

ちよつと頬を擦りかけ、のけぞったサンジがよろける。

その瞬間、エレノアの瞳がキラーンと怪しい光を放った。

「私の友達に色目を使うな!!!」

「ごめんなさい!!!」

親友を毒牙にかけさせないと、女たらしへの制裁が見事に決まる。

相変わらず義足とは思えない威力の見事な蹴りに、ナミたちやウィンリイたちから賞

賛の拍手が送られる。

サンジ一人だけが不幸な目にあっていたが、ほぼ自業自得であるために誰も同情しなかった。

「ていうか私…錬金術って戦いのイメージないんだけど、必要なの？ さつきみたいの」「私の師匠がさー、『精神を鍛えるにはまず肉体を鍛えよ』ってさ、こうやって日ごろから鍛えておかないとならないワケ」

「それでヒマさえあれば組手やってんの？ そりゃオートメイル機械鎧もすぐ壊れるわよ」「まア、こっちはもうかかっていいけどねエ」

最後にもう一度具合を確かめると、エレノアはブーツでオートメイル機械鎧を隠して身なりを整える。

体をすっばりとロープで覆うと、エレノアはウィンリイに親愛のまなざしを送った。

「よし、足はできた。……じゃ、行くね」

「ああ…またここも静かになるねエ」

「向こうの海でエドとアルに会ったら言つといてよ！ たまにはメンテしに戻って来いって!!」

「はいはい…って言っても、あいつらと気軽に会えるとは思えないけどね」

面倒なことづけを頼まれたエレノアは面倒そうに手を振り、振り返ることもなく工房

を後にする。

それに少しだけ寂しそうな表情を浮かべ、ウィンリイは不満げにため息をついた。

「いくよー、みんな」

「う、うん……」

そんなあつさりした別れでいいのかと戸惑うナミたちも放置し、錬金術師はさつさと集会所へと向かってしまった。

仕方なく跡を追おうとした彼らを、突如ピナコが呼び止めた。

「アンタたち……あの娘のこと頼んだよ」

「……おう」

ピナコの願いに、今の仲間たちは言われるまでもないと力強く頷き、今度こそ工房を後にする。

その姿が見えなくなる直前、工房を飛び出したウィンリイがエレノアに向かって声をあげた。

「エレノア！ ……いつてらっしやい」

「……………うん！」

不敵な笑みとともに振り向く親友を見送り、ウィンリイは今度こそ満足げな笑みを浮かべる。

遠く見えなくなっていく若き海賊たちの背中を、ピナコはどこか遠い目で見送っていた。

「さて……あの子が見出した仲間、世界の深淵に至れるのかねエ……なア、オールデイ？」

「ところであいつは？」

「死刑台を見るって……言ってたわよね……」

「死刑台のある広場って向こうだよな？」

それぞれの用事を終えた一同は、本来ならばいち早く工房にきていなければならぬ人物を探して広場に向かう。

そこで何やら騒がしい音を聞きちったエレノアが、そこはかとなく漂う嫌な予感に立ち止まった。

「……………みんな、アレ」

エレノアの予感は当たった。

死刑台を見学するだけだったはずの青年は、事もあるうに死刑台の上で首と両腕を拘束され、今まさに命の危機にあつたのだから。

「な!!! 何であいつが死刑台にっ!!!?」

開いた口が塞がらず、誰もがなぜそんなことになったのか想像だにできなかった。

「罪人!!! 海賊モンキー・D・ルフィは、っつけあがつちまつておれ様を怒らせちまつた罪により『ハデ死刑くくくくく』!!!」

死刑台の上にはいたのは、拘束されたルフィだけではなかった。

かつて一度戦った、〃道化〃のバギーが分厚いカツトラスを持って大騒ぎしていたのだ。

「ハデに騒げ!!!」

「ひゃーっほオ!!!」

「動くんじゃねエぞてめエら!!!」

広場はすでにバギー一味の手によって占拠され、暗雲漂う恐ろしげな雰囲気に変貌してしまっている。

そんな状況の中、当の本人は妙に落ち着いた様子でうつ伏せにされていた。

「おれ死刑つて初めて見るよ」

「てめエが死ぬ本人だよ!!!」

「ええっ!!!? ふぎけんな——っ!!!」

「てめエがふぎけんア!!!」

ようやく自分のおかれた状況を理解したルフィだったが、もう彼は動ける状態ではなくなってしまうている。

海賊王を目指していた彼は、冒険が始まる遙か前で絶体絶命のピンチに陥っていた。

「これよりハデデ死刑を公開執行する!!!」

「いやだ——っ!!!」

稲妻が走る黒雲の下、青年の叫びと道化たちの哄笑が響き渡るのだった。

第45話 天の采配

「おい!! たしぎは、まだ戻らねエのか!!」

ローグタウンの海軍の派出所の中で、ひとりの男が苛立たしげに怒鳴り声をあげる。

口いっぱいにタバコをくわえた白髪の男は、いつまで立っても戻ってこない部下に呆れて天井を仰いでいた。

「たしぎ曹長は武器屋へ刀を取りに行く……!!」

「何時間かかってんだそれに!! 海賊達の日撃情報が入ってる。お前ちよつと行つて呼んで来い」

「はっ!! スモーカー大佐!!」

「しよ〜がねエな、あのトロ女……!! 海軍本部の恥だぜ……」

慌てて走っていく海兵を見送ると、男はモクモクとタバコの煙を撒き散らし、険しい顔で足を組んだ。

その時、暇を持て余す彼の元に、ボタンと乱暴に扉を開けて一人の眼鏡の男が顔を出した。

「よう、スモーカー! 部下のかわいいこちゃんとはちゃんとよろしくやってるかア?」

開口一番からからかう気満々のセリフに、スモーカーと呼ばれた男は忌々しげに顔をしかめた。

「…おい、ヒューズ。てめエはおれを犯罪者にでも仕立て上げてエのか。あんなガキに興味ねエよ…」

「そう怖エ顔すんなって、女つ気のないお前へのおれなりの心配だよ」

「余計なお世話だバカヤロウ」

子供なら真つ先に泣き出しそうな剣幕にも、ヒューズという名の男は飄々とした態度を保ったまま歩み寄る。

やがてその表情は、懐に持った写真を見つめてでれつとだらしないもの変わった。

「家族はいいぞオ〜〜? どんなに危険な任務についても何が何でも帰るつてやる気が漲る。とくに娘が可愛くつてよオ…『パパ大好き』つて言ってもらえた日にや一億の賞金首だつて仕留められそうだけ!!!」

「わかつたからいちいち娘自慢してくるんじゃないやねエよ!! しかもわざわざ報告のたびに!!!」

「娘だけじゃない!! 妻も自慢だ!!!」

「そういうのはマスタングの奴にやれ!!!」
そして黒焦げにされてこい」

鬱陶しそうにあしらうと、スモーカーはソファに預けていた背を起こして座りなお

す。

こんな適当な態度ばかり見せる男が中佐だと言うのだから、今の海軍も随分と甘くなつたものである。

「まあ、冗談はこのぐらいでおいといてだ……」

「最初からそうしやがれつての……」

「本部から新しく賞金首になつた連中の手配書が届いたぜ。なかなかの大物が揃つてやがる」

ヒューズが渡してきた手配書の束を受け取り、スモーカーはそれをパラパラと流し見る。

どれもこれも大した額ではないために興味もわかなかつたが、ある一枚の手配所を目にするると彼の片眉がピクツと上げられた。

「……ほう？ ウイザード 妖術師イーストブル がこの街に？」

東の海ではまず見ない高額賞金に、スモーカーは初めて表情を変えた。

かの有名な女海賊がいるとなれば、ここでくつろいでいる場合ではなかつた。

「……数年姿を見せねエもんだから死んでんのかと思つたら……」

「おれア、あの娘には借りがあつて頭上がらねエから、見つけたときは頼むぜ」

「てめエはそれでも海軍本部中佐か」

「だって仕方ないじゃないの!!! うちのカミさんと娘の友人なんだもん!!! エリシアちゃんなんか超なついでるんだもん!!!」

「てめエの家庭事情なんざ知るか」

涙目で悔しそうにハンカチを噛むヒューズを適当にあしらいながら、スモーカーは擽猛な肉食獣のような目で手配書を睨む。

するとそこへ、先ほど出て行った者とは別の海兵が慌てた様子で飛び込んできた。

「大佐!! スモーカー大佐、大変です!! 海賊が死刑台の広場で騒ぎを!!! あつ、ヒューズ中佐……」

「よつ、おれの用事は終わったから気にすんな」

「はっ……し……失礼しまし……」

「で? 何があつたつて?」

緊張した様子で敬礼する部下に、スモーカーは仕事を促す。

「不要な話をしている場合ではないと思ひ出した海兵は、すぐさまスモーカーに向き直った。

「え……えーとですね」

「海賊が死刑台の広場でバカやってんだな、思ひ出した。一等部隊を港へ行かせろ。二等部隊は通りから広場を隠密包围。残りは広場の射程距離に待機、以上だ」

「は…はいっ」

即座に指示を出したスモーカーは、自分のジャケットを羽織るとやや気だるげに外の基地に向かって歩き始めた。

町に出て、問題の起こった広場の方へと歩いていると、そこへ一人の女性が息を切らせて駆け寄ってきた。

「スモーカーさん!! 遅くなりました!!」

「たしぎイ!!! てめエトロトロと何やってた!!!」

「ご…ごめんなさいっ!! すぐ支度を」

「ほい、たしぎちゃん。ジャケット持って来といたよ」

「あ…ヒューズ中佐!! ありがとうございます!! いつこちらへ？」

「いまさっきだ」

眼鏡をかけた黒髪の女性は、ヒューズからジャケットを受け取ると気恥ずかしそうに頬を染め、整備が終わったばかりの刀を掲げる。

やや頼りなさげだったたしぎと呼ばれた女性は、その瞬間から生真面目そうな海兵へと変身を遂げた。

「ちよ…ちよつと腰が抜けてて」

「ヌケてんのは気合いだけじゃ足らねエのかっ!!!」

「(ざ)……めんなさい」

「ついて来い。もう広場で事は起きてる!!」

「はいっ」

しかしスモーカーにしごかれているのは変わりなく、早足で彼の後を追う。

ヒューズはやれやれといった様子で彼らの後ろ姿を眺め、同じく問題の起きた広場の方へ足を向けた。

「あつ、大佐!! 中佐!! 曹長!!」

「状況は？」

「民間人が取り抑えられています」

広場を見渡せる高さにある基地の中に入り、スモーカーたちは現時点での状況を確認する。

双眼鏡を持った部下が、騒ぎが起こっている死刑台とその周辺を見て報告する。

「まず今、広場にいる賞金首は3人。『金棒』のアルビダ、『道化』のバギー、『麦わら』のルファイ」

「ん?! ルファイ?! 知らねエ名だ」

「ほれ、さつき持ってきた手配書に載ってた賞金首になりたての奴だ。3千万Bペリーの大物だつてよ」

「3千万!! そりや久々に骨がありそうだな」

「いえそれが……」

やや興味を引かれた様子のスモーカーが声をあげるが、部下の反応は戸惑い気味であった。

「その男今……殺されそうです」

部下から双眼鏡を受け取ったスモーカーとヒューズが、交代で死刑台の様子を見て呆れた声をあげた。

「あらら……」

「なるほど、海賊同士のいざこざか」

「す……すぐに突撃を!!」

「バーカあわてんな………」

「しかしぐずぐずしては……!!」

海賊たちが暴れ出すことを危惧してか、焦燥している様子の部下に、スモーカーはギリと怒りの形相で睨みつける。

「おれがこの町から、海賊を逃がしたことがあるか?」

少なくとも部下に見せるものではない凄まじい迫力に、海兵は背筋をピンと伸ばしてブルリと震えた。

「い……いえ!! ありません」

「なら黙ってろ」

「海賊が海賊を始末してくれようってんだから、世話ねエよな…」

たしぎにも様子を見せてやろうと双眼鏡を渡したヒューズが、そういつて気の抜けた態度で肩をすくめる。

そう問題は起きそうにないなどと樂觀視している様子の彼に代わり、スモーカーは淡々と指示を与えた。

「いいか、あの『麦わら』の首が飛んだらバギー、アルビダ及びその一味を包围、たたみかけろ」

「ごめんなさい、助けてください」

「助けるかボケエ!!!」

死刑台の上で拘束されているルフイは、面倒臭そうな表情でバギーに頼む。

が、当然その願いは却下された。

「フン……我々に逆らえば当然こうなる」

「あたしの見込んだ男も、ここまでか……………」

「あのクソアマも来やしねエ……」

カバジや縁あつてともにいるらしい、恐ろしく容姿が変貌したアルビダ、両腕が機械鎧オートメイルになったガンツが呟く。

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら、バギーは優越感に浸った様子でルフィを見下ろした。

「最後に一言何か言つとくか？ せつかく大勢の見物人がいる」

「……………」

「まーいいいさ、言うことがあろうがなかるうが、どうせ誰も興味など…」

時間の無駄だと切り上げようとしたバギーだったが、ルフィは死刑台の上で拘束されたまま、誰もが言葉を失うことを口にした。

「おれは!!! 海賊王になる男だ!!!」

何の恥も臆することもなく、堂々とその言葉を口にした瞬間、広場は沈黙に包まれる。

そして何人かは嘖き出し、そんなバカなといった様子でルフィを嘲笑し始める。よりにもよつてこの町で、そのうえ死刑台の上でそんな大それたことを言うなど、頭がおかしいと評価されてもおかしくはなかった。

「言いたいことは…それだけだなクソゴム!!!」

「その死刑待て!!!」

バギーが下卑た笑みを浮かべてカットラスを振り下ろそうとした瞬間、広場の外側から三つの人影が飛びこんでくるのが見えた。

「サンジ!!! ゾロ!!! エレノア!!! 助けてくれエ!!!」

「きたなゾロ、エレノア。だが一足遅かったな…!!!」

駆け込んでくる三人組の中に、見覚えのある二人が混じっているのを尻目に、バギーの余裕は崩れなかった。

「とにかくあの死刑台を壊すんだ!!!」

「おう!」

「わかってるよ」

瞬時に戦闘態勢に入った三人は、内心激しい焦りと戦いながら真っ直ぐに突進した。

そんな三人を、アルビダの指揮のもとバギー一味が阻んだ。

「やっちまいなお前達つ!!!」

「やっちまいますアルビダ姉さん!!!」

曲芸師のように跳ねながら、バギーの部下たちが一斉に襲い掛かってくる。

一人一人は一撃で片付くような雑魚ばかりだが、その人数もしつこさも異常でなかなか死刑台に近づくと出来ぬ事がある。

「どけ邪魔だア!!!」

うつとうしい海賊達を蹴散らしながら、エレノアは一直線にルフィのもとへ急ぐ。そんな彼女の前に、凄まじい笑みを浮かべたガンツが立ち塞がった。

「クソガキ!!!」

以前よりも一回り大きくなり、そして両腕に備えられた機械鎧オートメイルを振りかざし、ガンツはエレノアに鋭い爪を向けた。

「てめエにやられてからおれはさらに改造を重ね、大幅に性能を上げた機械鎧オートメイルを両腕に備えた!!! 今度こそてめエに復讐を……」

「邪魔だつっの!!!」

「ぐげふっ!!!」

うだうだと恨み言と自慢を口にしようとした彼は、面倒くさそうに舌打ちしたエレノアによって一蹴され、大した見せ場もなく沈められてしまった。

厄介な敵が一人減ったが、それでもまだルフィのもとには届かず、三人は歯を噛みしめて険しい顔になる。

「ぎやはははははははは!! そこでじっくり見物しやがれっ!!! てめエらの船長はこれにて終了だア!!!」

手こずっているエレノアたちを見下ろしながら、バギーが再びカトラスを高々と振

り上げる。

稲光に照らされ、カットラスの刃が不気味な光を放った。

(あの死刑台さえ蹴り倒せば……………!!!)

(死刑台さえ斬り倒せば……………!!!)

(射程範囲まで近づければ……………!!!)

刻一刻とルフィの首に迫る刃に、一味は冷静ではいられない。

焦りが表情に現れ始めたとき、それまで黙っていたルフィがふいに口を開いた。

「エレノア!! ソロ!! サンジ!! ウソップ!! ナミ!!」

突然名を呼ばれ、目を向けたエレノアたちの前で。

彼は、笑った。

「わりい、おれ死んだ」

その笑顔は、今際の際に見せるものにしてはあまりにも清々しく。

まるで家に帰る子供が別れを告げるような、己が死ぬことなど微塵も感じさせない、この状況には不釣り合いすぎる笑顔。

エレノアはそれを目にした瞬間、全ての思考を停止させてしまっていた。

「……………え」

思わずエレノアの口から声が漏れたとき、広場に眩い閃光が落ちる。

天から落とされた槍のようにそれは突き刺さり、続いてすさまじい轟きを町中に響かせる。

やかれた死刑台がゆっくりと傾いでいき、崩れ落ちる中、誰もが言葉を失って立ち尽くしてしまう。

そんな中、黒焦げになったバギーを置いて、青年が満面の笑みで立ち上がった。

「なははは、やっぱ生きてた。もうけっ」

暢気に落ちてきた帽子をかぶりなおす船長の姿に、ゾロもサンジも半ば呆然となっていた。

「おい、お前。神を信じるか？」

「バカ言つてねエでさっさとこの町出るぞ。もう一騒動ありそうだ」

ついガラでもないことを言ってしまったサンジに、すぐさま正気に戻ったゾロが促す。

冷静になってみれば、周囲には何人もの海兵の姿が見える。このまま突っ立ったままではろくなことにはなるまい。

「……………同じだ」

エレノアもまた、目の前で起きた現象に呆け、立ち尽くしていた。

だがそれは、ただ信じられない光景を目の当たりにした衝撃のためだけではなかった。

「あの時と、同じ感覚だった……!!」

自分がいつの日か感じた、心臓を貫くかのような衝撃。続々と背筋に走る震え。

あの海でも数えるほどしか感じたことのない予感のようなものを、あの麦わら帽の青年から感じ取れたのだ。

一方で、海軍基地の中で一部始終を見ていたスモーカーとヒューズも、あまりの衝撃に言葉を失っていた。

今まで数々の海賊を拿捕してきたスモーカーでさえ、目を疑う光景を目の当たりにしてしまったのだ。

「……………おい、スモーカー。あいつ今…笑ったよな」

「ああ……………おれも見た」

なかなか衝撃から立ち直れず、立ち尽くしたまま顔も見合わせられない二人が呟く。

そこへ、彼らから指示が来ないことで慌てた様子の部下が口を挟んだ。

「大佐!! 海賊たちの拿捕を」

「おい、お前…死刑台で笑った海賊を見た事があるか？」

「わ…笑う…?!? どんな虚勢をはった大物でも死の瞬間は必ず青ざめ、絶望に死ぬものです」

「笑ったんだよ、あの麦わらの男が!!!」

そんなバカなといった態度で返す海兵に、スモーカーは焦燥じみた表情を浮かべながら怒鳴りつける。

彼らは思い出していた。ずっと昔にも、同じ光景を見た事があるのだと。

「忘れもしねエ…22年前!!! この町のあの死刑台で笑った、海賊王 G・ロジャーゴールドと同じ様に!!!」

ヒューズのこめかみを、冷や汗が流れていく。

ただのルーキーと高をくくっていたのに、ふたを開けてみればこの体たらく。

ごくりとつばを飲み込んだのは、はたしてどちらだったのか、それすらもわからないほど緊張が走っていた。

「あいつらはどつちへ？」

「西の港へ向かいました」

「一等部隊が向かつてるはずだな」

「い…いえそれが…突然の雨で火薬類が全てやられ、今、装備の仕直しに派出所へ……」

「じゃあ港は素通りか!!!」

用意した策がすでに役立たなくなっていることに、スモーカーは愕然と目を見開く。

まさかと思つて風を見れば、案の定予想外の方向へ吹き抜けていつている。

「風は西向き……あいつらの船には追い風つてことか……!!」

「これが全て偶然か……!!? まるで『天』があつた男を生かそうとしてる様だ!!!」

あらゆるものがあの麦わら帽の青年を助けているような、そんな突拍子もない考えで浮かんできて、スモーカーはギリツと表情を改めて目つきを鋭くする。

スモーカーの中の本能が、あの男は危険だと吠え続けていた。

「あの男だけは……!!! 絶対にこの島から逃がしちやならねエ!!!」

第46話 “船出の時”

——これらは止めることのできないものだ。

“受け継がれる意志”

“人の夢”

“時代のうねり”

凄まじい勢いの豪雨が降り注ぎ、ローグタウンを闇の中に包む。

人一人いなくなつた真つ暗闇の中で、フードを被つた二人組が立っていた。

——人が「自由」の答えを求める限り、

それらは決して——止まらない

海賊王G・ロジャー

雨に濡れ、凍えるような冷たさの中にありながら、男たちはただ無言で佇んでいる。

そのうちの一人、顔の左半分には竜の鱗のような刺青を刻んだ男が、不意にニヤリと不

敵な笑みを浮かべた。

「海賊か……それもいい……」

刺青の男の反応にもう一人の男、眼鏡をかけた大柄な男が目を向ける。

フードの下から覗く金の髪を強風に揺らし、金の瞳をどこかへ向け、何かを待ち望んでいるような強い眼差しを浮かべた。

「ようやく……時代が動く時が来たようだな……」

二人は目を合わせることもなく、ただ無言のままに嵐の中を歩いていく。

世界の全てを敵に回した彼らの見ているものは、まだ誰にも分からなかった。

大勢の海兵たちに追われながら、ルフイたちは懸命にメリー号を停めた位置へと戻る。

その背中を、なぜだか強風が後押ししているようだった。

「風がひどくなってきた」

「しつこいなあいつら、止まって戦うか」

「やめとけキリがねエ。それにナミさんが早く船に戻れつつってたんだ」

「すごいなー、ナミの予報ドンピシャだよ」

感心したようにエレノアがつぶやいていると、彼女の耳が突如ピクンと立ち上がった。

「ロロノア・ゾロ!!!」

走り続ける一同の前に、一人の黒髪の女性が立ちはだかる。

刀を提げた、ジャケットを羽織ったその顔を見た瞬間、ゾロの表情がわずかに険しくなった。

「あなたがロロノアで!! 海賊だったとは!! 私をからかってたんですね!! 許せな
いっ!!!」

「お前あの娘に何をしたア!!!」

「?」

「てめエこそ海兵だったのか」

全く面識のないはずのサンジがなぜか激昂するのを尻目に、ゾロは無言で刀を構えた。

女性もまた刀を抜き、ゾロに対して強い怒りをあらわにしながら突っ込んできた。

「名刀『和道一文字』回収します」

「……………やってみな」

互いに戦う意思を見せた直後、甲高い音を響かせて刃が激突する。

三人の盾になるように前に出たゾロが、目線だけをルフィに向けて短く告げた。

「先行つてろ」

「おう」

ルフィもゾロの意思を尊重し、この場を彼に任せて走り続ける。

その背後で幾度も剣がぶつかり合う音を聞きながら、ルフィたちはただまっすぐにメリー号の元へと急いだ。

「あの野郎レディに手エ出すとは…」

「はいはい後で後で!!」

「行くぞ!!」

そのままにしておけばゾロに突撃して行きそうなサンジを引きずり、エレノアはルフィの後に続く。

すると再び、彼女の耳が何者かの立てた音を捉えた。

「待って!… まだ前に誰がいる!!」

「またか」

面倒臭そうにルフィが視線を向ける。

しかしエレノアは、豪雨の中に姿を見せた、巨大な十手を背負った白髪の男性を前にし、大きく目を見開いた。

「来たな、ウイザード麦わらのルフィ”。妖術師”のエレノア」

「ウイザード白猫”のスモーカー!!?」

海軍の中でも有数の実力者が現れたことに、流石のエレノアも立ち止まり、真剣な表情で立ち止まる。

自然系ロギアの能力者であるスモーカーは自分の体を煙へと変え、ルフィたちに向かって勢いよく噴き出させた。

「お前らを海へは行かせねエ!!!」

「うわっ何だ何だ何だ!!?」

白煙にまわりつかれ、ルフィは狼狽しながらもがく。

しかし煙はルフィを拘束したまま離れず、なのにルフィからは全く掴むことができない。

「このバケモノがア!!!」

サンジがスモーカーの腕に強烈な蹴りを叩き込むが、煙の体は四散するだけで全く攻撃が当たらない。

今までよりも数段あり得ない光景に、サンジは驚愕の表情で固まっていた。

「い!?!?」

「ザコに用はねエ…『ホワイト・ブロー』!!!」

隙を見せたサンジの腹に、スモーカーの白煙の拳が突き立てられる。

サンジはそのまま民家の壁に叩きつけられ、ズルズルと地面にへたり込む。

「サンジ!!! んニヤロ…『ゴムゴムの銃レistol』!!!」

ルフィもまたスモーカーの顔面を殴り応戦するが、当然のごとくそれはすり抜けてし

まう。

同じ能力者であっても、今の彼らにはそれだけの実力の差ができていた。

「お前が3千万ベリーだと!!」

落胆したように声を荒げ、スモーカーは煙の腕に徐々に力を込めていく。

ルフィを地面に叩きつけ、拘束しようとしたスモーカーであったが、突然彼の腕に強烈な衝撃が走った。

「ぐあっ!!?」

煙であるはずの自分の体に走った痛みにも、スモーカーはルフィを掴む手を緩めてしま
う。

動きを止めたスモーカーからルフィを救出し、エレノアは冷や汗を流しながら後ず
さった。

「ルフィ!! 行って!! あんまり長くはもたない!!」

「すげエ!! 当たった!! 何でだ!!」

「チツ……覇気か」

素直に驚いている様子のルフィに対し、スモーカーはいらだたしげに眉間にしわを寄
せている。

エレノアは黒く染まった右足を構え、油断なくスモーカーを睨みつけた。

「だがそれはいつまでもつんだ!!？」

「うっ!!？」

「ぎゃー!!？ またかー!!!」

再び煙の拳を放ち、防御したエレノアを吹き飛ばし、もう一度ルフィを拘束して地面に押さえつけた。

たった2回ぶつかっただけですでに息を切らせているエレノアに、スモーカーは興味を失せたように目を離した。

「今のためエは相手にもならねエ……悪運尽きたな」

「それでもなさそうだが……!!」

背中中の十手に手を伸ばすが、もう一つそれを掴む手があることに気づく。険しい表情で振り向いたスモーカーは、驚愕で大きく目を見開いていた。

「……ためエは……!!!」

「悪いが……その手を離してもらおうか」

「何だ!!？ 誰だ!!？ 誰だ!!？」

「…………ウソ」

スモーカーの背後に立っている二人の人物に、エレノアもまた大きく目を見開いて硬直していた。

彼らは、こんなところにいるはずのない人物たちであったからだ。

「政府は、てめエらの首を欲しがってるぜ」

「世界は、我々の答えを待っている……!!!」

忌々しげに睨みつけるスモーカーに対し、刺青を持つ男は挑戦的な笑みを浮かべる。

エレノアはその男にはもちろん、無言で佇んでいるもう一人の眼鏡をかけた男に対して、最も驚愕をあらわにしていた。

「ししょっ……」

「突風だア!!!」

「うわあああああ!!」

その瞬間、なんの前触れもなく吹き荒れた風が様々なものを吹き飛ばしていく。

エレノアや押さえつけられていたルフィも例外ではなく、ゴロゴロと自分の意思とは関係なくスモーカーたちから引き離されて行った。

「ルフィ、エレノア走れ!!! 島に閉じ込められるぞ!!! バカだけエ嵐だ!!!」

どこぞへ飛ばされそうになっていた彼を捕まえ、追っ手を振り切ったらしいゾロが駆け寄ってくる。

復活したサンジもその後続き、感心したように空を見上げていた。

「グズグズすんな!!!」

「わ、何だ?! 何だよ一体!!!」

「ナミさんが言ってたのはこういうことか〜っ!!!」

バタバタと騒がしく走り去っていく一同。

その中に囲まれながら、エレノアは今だに信じられないと言った様子で眉間にシワを寄せていた。

「どうして……あの人が……?!?!」

遠く嵐の中に消えていく若者たちを、その中でも一人の青年の背中を見送りながら、刺青の男は笑みを浮かべていた。

「フフ……行つて来い!!! それが、お前のやり方ならな!!!」

「……あれはきつと、立派になるだろうな」

「無論だ……!!!」

眼鏡の男のつぶやきに、刺青の男は不敵な笑みを浮かべて答える。

その横顔に向けて、予想だにしない二人組の登場に、スモーカーは怒りのようなものを滲ませながら鋭い目を向けた。

「なぜ、あの男に手を貸す!!! ドラゴン!!! ホーエンハイム!!!」

「男の船出を邪魔する理由がどこにある」

射殺しそうなほどに鋭い視線に、男は変わらぬ不敵な笑みをみせ続けるのだった。

「……ダメだったか」

拿捕された海賊の姿も消え、スモーカーやたしぎが手ぶらで戻ってきたことで、ヒューズは内心わずかな安堵を覚えていた。

エレノアがこの場で捕まっていなかったことに、海兵らしからぬ安心を覚えてしまっていたのだ。

「こりやア…ロイの奴に伝えておかねエとならねエな…」

「そっちは任せるぞ…」

「おう」

何かを決心した様子のスモーカーを見送ると、ヒューズもぞくぞくする体をこすつてなんとか落ち着きを取り戻そうとする。

きっと縁はないだろうと思っていたデカい山が、自分たちの前にそびえ立っているように感じていた。

「荒れるぞ、久しぶりに!!!」

客足の途絶えた工房の中で、天気を見ていたウインリイが雨戸を閉目ながら尋ねた。

「ばっっちゃーん！ 雨ひどくなってきたよ!!」

「そうさな……もう店じまいにしようかね」

港の方を見ていたピナコは、やがて肩をすくめると店の中に戻っていく。だがその時、ハツと体を起こしたデンが唸り声を上げ始めた。

「デン？ 客かい？」

訝しげにピナコが外に目を向けると、確かにフードを被った大柄な影が見える。

客には見えないが、気になったピナコは相手によく目を凝らした。

「ん？ あんた何やってんだい、こんなところで……」

フードの男は、眼鏡を店の中からの光で光らせて振り向く。

ピナコの姿をその目に映すと、困ったような表情で肩をすくめた。

「ピナコ……おれの家が無くなった」

「……………ホーエンハイム……………!!」

来客の顔を目にし、ピナコは大きく目を見開いて立ち尽くす。

構わず男、ホーエンハイムは店の中に入り、唸り声を上げるデンに手を伸ばした。

「ごめんな、驚かせて」

親しげに撫でようとするが、なぜかデンはホーエンハイムに向けて大きく吠え続け、近づけさせまいと距離を保つ。

男の表情に、困ったような苦笑が浮かんでいた。

「これ、デン！」

「……昔から、動物には嫌われてばかりだ」

「ほんとに……昔から何ひとつ変わらなないね、あんたは」

ようやく衝撃から立ち直ったピナコは、呆れたように肩を落とす。

その時様子の變化に気づいたウインリイが、奥の部屋から声をかけてきた。

「どうしたのばっちゃん？　こんな時にお客さん？」

「……気にしなくていいよ。先に休んでな」

余計な心配をかけさせまいと、ピナコはウインリイに手を振って戻るように促す。

ホーエンハイムに視線を戻すと、やや咎めるように睨みつけた。

「どういう風の吹き回しだい……？　世界政府のお尋ね者のお前さんが……!!」

「ん……忘れ物……取りに来たんだ……」

ホーエンハイムは店の中を見渡し、壁に貼られている写真を見つける。

その端を手でつまむと、振り向いてピナコに問うた。

「この写真もらっていいか？」

「どれでも好きだけ持って行きな」

「いや、これ一枚でいい。四人で撮ったのこれしかないんだ」

その一枚を剥がし、ホーエンハイムは服の内ポケットにしまう。

フウと息を吐くと、ホーエンハイムは感慨深げな表情でピナコを見下ろした。

「ピナコ……お前やつぱりいいやつだな。昔から何ひとつ変わらないおれを不審な目で見る事もなく、普通り接してくれた」

何を今更、というふうに片眉を上げるピナコだが、ホーエンハイムの様子が何処と無く真剣そうに見えたために口を挟まなかった。

「お礼にいい事を教えてやるよ」

「？」

「じきに世界は大きなうねりの中に立たされることになる。今のうちにどこにでも逃げられる用意だけはしとけ」

「……この世界は年がら年中ヒドイ事だらけさ。なんで今さら逃げなきゃならないんだい」

忠告の意味がわからず首を傾げ、ピナコはホーエンハイムを見据える。

苦笑しながら肩をすくめると、どこか誇らしげに腰に手を当ててホーエンハイムにきっぱりと告げた。

「それに、ここを帰ってくる場所にしてる奴らがいるんでね」

「……………忠告はしたぞ」

言いたいことは言い終えたのか、ホーエンハイムはそのまま嵐の中に戻ろうとする。

せつかなやつだと呆れるピナコだったが、やがて慌てた様子でその背中を呼び止めた。

「ホーエンハイム！ あの娘に会っていかないのかい……？」

「……………もう会ったよ」

それつきり、ホーエンハイムは振り向くことはなく、暗く重い嵐の中に姿を消していく。

自分の仲間が待つ場所へ向かいながら、ホーエンハイムは自分の眼鏡を光らせた。

「いずれ……また会う日が来るだろう、エレノア」

その目に宿しているのは、何か大きなことを成し遂げると決めた、男の覚悟であった。

「『約束の日』は……近い」

「うっひゃーっ、船がひっくり返りそうだ!!!」

船首の羊の首につかまりながら、ルフイは興奮した声を上げる。

レインコートを着たナミは、進行方向上に灯っている強い光を指差した。

「あの光を見て」

「島の灯台か」

「『導きの灯』、あの光の先に、グランドラインの偉大なる航路の入り口がある」

ナミの言葉に、ルフィはニツと笑みを深める。

答えを知っているながらも、ナミは試すようにルフィに尋ねた。

「どうする?」

ルフィの表情が、その問いの答えを物語っている。

すると甲板に出ていたウソップが、凄まじい嵐の中に対して臆したように戸惑いの声を上げていた。

「しかし、お前何もこんな嵐の中を……なア!!」

「よっしゃ、偉大なる海に船を浮かべる進水式でもやろうか!!」

「オイ!!!」

いまにも船が沈没しそうなほどの嵐なのに、いそいそと酒樽を用意するルフィにツツコミを入れる。

だが、いまの彼を止める無粋な者は他にいなかった。

「おれはオールブルーを見つけたために」

「おれは海賊王!!!」

「おれア大剣豪に」

「私は世界地図を描くため!!」

「私は今度こそ……自分の脚であの海に挑むため!!!」

「お……お……おれは勇敢なる海の戦士になるためだ!!!」

それぞれの抱く大いなる野望を口にし、酒樽の上に片足を乗せる。

若者たちはその足を大きく掲げ、決意の固さを表すように力強く振り下ろした。

「いくぞ!!! 偉大なる航路!!!」

第7章 再会の約束

第47話 // いざ、偉大なる海へ //

「おい大変だエレノア!!! 光がとぎれた、やべエな!! // 導きの灯// なのにな」

「当たり前でしょ。灯台の灯なんだから途切れもするつての!!」

「そのために航海士わたしがいるんですよ? 大丈夫、方角くらい覚えてるから」

船首にぶら下がって騒ぐルフィに、エレノアとナミが冷静に指摘する。

しかしナミは「偉大なる航路」グランドラインの海図に目を向けると、眉間にしわを寄せてしまった。

「……………しかしまいったな……………このまま進むと噂通り……………」

自分の考えが正しければ、このまま進めば大きな問題が待っている。

ナミは一旦全員を船内に呼び、海図を広げてある一点を指差した。

「偉大なる航路」の入り口は、山よ

「山?」

「そう! 海図を見てまさかとは思ってたんだけど、これ見て」

ナミが指す場所には、頂上から四方向に川が流れ落ちている山が描かれていた。

しかし航海術を何も知らない男性陣は、困惑気味に首を傾げるだけであった。

「導きの灯」が差してたのは間違いなく、ここ「赤い土の大陸」にあるリヴァースマウンテン」

「……………まさかこの運河を上るってどういうの？」

「だってそう描いてあんだもん」

唯一彼女の言いたいことを理解したエレノアの訝しげな質問に、ナミが胸を張って答える。

その態度に、ウソツプがじとつと呆れたような視線を向けてきた。

「つてかエレノア。おまえ「偉大なる航路」から来たんなら行き方知ってんじゃないよかよ？」

「何でもかんでも答えを求めようとするんじゃないよ……………つていうか、これに関しては私も知らないよ。なぜなら飛んできたから」

どちらかといえばこの長鼻の青年は、前持つて情報を得て安心感を持つて挑みたいと考えているようで、エレノアはため息をついてきつぱりと答える。

ゾロはゾロで、また別の疑問に首を傾げていた。

「大体なんでわざわざ「入り口」へ向かう必要があるんだ。南へ下ればどつからでもは入れるんじゃないのか？」

「あ、それは無理だよ」

「そうだ!! それは違うぞお前っ!!」

「そう、ちゃんとわけがあんのよ」

「入り口から入った方が気持ちいいだろうが!!」

「「違うっ!!」」

ずれた考えを持っている船長の頭を、エレノアとナミが同時に叩く。

その時、嵐で転覆しないかと外の様子を伺っていたウソツプが声をあげた。

「おい!! あれっ?! 嵐が突然止んだぞ」

「本当だ、静かだ」

「……………え…そんなまさか…嵐に乗って「入り口」まで行けるはずなのに…」

「お———っいい天気だ——っ!! どういうこったこりゃー、はっはっはっはっはっは!!」

予想だにしない不思議な現象に、一味はぞろぞろと甲板に出ながら辺りを見渡す。

その中で唯一、エレノアだけが大きく目を見開いて硬直していた。

「ナミ!! マズイよ!! 「カムベルト風の帯」に入っちゃった!!」

「やっぱり!!」

状況を理解したナミは慌てて方角を確認し、エレノアは船内からオールを持ち出してくる。

何が起きているのかわかっていない男性陣は、様子の変わった彼女たちに困惑気味に視線を集めるだけであった。

「カームベルト？　なんだそりゃ」

「お、向こうはまだ嵐だ。こっちは風もねエのにな…」

「のん気なこと言つてないで早く帆をたたんで漕げ!!　嵐の軌道に戻さないと!!!」

「何あわててんだよ。お前、漕ぐつてこれ帆船だぞ?」

「何で、またわざわざ嵐の中へ」

「いいから言うこと聞け!!!」

面倒臭そうに反論する男連中に、エレノアが我慢の限界とばかりに怒号を上げる。

それでも動きの鈍い男どものために、エレノアはナミに代わつて説明役に回つた。

「ゾロ君…何で南に下りて行けないのか説明するとね。　グランドライン偉大なる航路はさらに二つ

の海域にはさみ込まれて流れてるの。それが、この無風の海域カームベルト、風の帯”!!!」

「カーム風”ね…どうりで風がねエ。——で?　それが一体…」

「要するにこの海は………」

海賊たちがこの海域を最も恐れる最大の要因を教えようとした時だった。

凄まじい轟音とともに、麦わらの一味の乗る船が大きく揺れたのだ。

「うわっ、何だ地震か?!!」

「バカ、ここは海だぞ」

突然の事態に、船の上で棒立ちになってしまふ一同。

そして船の揺れが止まった瞬間、彼らは気づく。船の真下に見える、無数の巨大な水棲生物たちに。

そしてメリー号が、その中で最も大きな生物の鼻先に乗っていることに。

「大型のね…海王類の巢なの」

やや現実放棄気味の引き攣った笑みを浮かべ、エレノアがようやく答えた。

先ほどまではしゃいでいた一味も、この展開には驚愕のあまり声も出せずにいる。

海王類は鼻先に乗る海賊船には気づかず、きよろきよろと辺りを見渡すだけであった。

「い…いいいな、とにかく…!! こいつが海へ帰っていく瞬間に思いつきり漕ぐんだ!!」

「お…おう!!!」

ようやく再起動を果たしたルフィたちが、エレノアの持ってきたオールを手に即座に動けるように構える。

海王類たちはしばらくすると、何事もなかったかのように海中に戻っていく。

すると、鼻先に異物が乗っていることが不快だったのか、残った一匹の海王類が体をフルフルと揺らし始めた。

「……ンニツ……!! ツキシ!!!」

「「「「なにいよいよ~~~~っ!!!?」」」」

まさかのクシャミ、しかも小島ほど巨大な生物が大きく体を揺らしたことで、メリー号は空中へと投げ出されてしまった。

全員が半泣きで船体にしがみつく中、クワツと目を見開いたエレノアが叫んだ。

「クソつたれエ!! ホントに退屈しないよこの旅はア!!!」

怒りのままにパンつと掌を合わせ、その身に風の鎧を纏う。

みるみるうちに大きく強くなっていくそれを携え、エレノアは船体に掌をくつつけ、風を帯びたまま思いつき押し出した。

「『有翼飛鞋』!!!!」

自らが強力な暴風となり、エレノアはメリー号を元の海域に押し戻す。

しかしいくら錬金術の力があるとはいえ、船一隻を動かすことは相当な負荷がかかっていた。

「うおおおっ!!!」

ミシミシと体がきしむのを感じながら、エレノアはメリー号に体を押し付ける。

その決死の奮闘の甲斐あり、船はどうか『風の帯』を抜け出すことに成功し、荒々しい暴風雨の中に戻る事ができた。

「…よかった…ただの大嵐に戻った…」

「これでわかった？ 入り口から入る訳」

「ああ…わかった…」

窮地を脱した一味が、甲板の上にぐったりと倒れる。

偉大なる航路に挑む直前でこんな事態に出くわすとは、幸先悪いとしか言いようがなかった。

すると不意に、ナミがハツとした様子で体を起こした。

「とりあえずこれで行き方はわかったね…」

「そうね………やっぱり山を登るんだわ」

「まだ言ってるんのかお前、そんなこと」

ナミは急いで船室に戻り、海図をもう一度広げて全員に見せた。

その指が示すのはやはり、带状の大陸の真ん中にある巨大な山であった。

「海流よ。四つの海の大きな海流が全て、あの山に向かっているとしたら、四つの海流は運河をかけ登って頂上でぶつかり、^{グランドライオン}偉大なる航路へ流れ出る!!! もう、この船はその

海流に乗っちやってるから、あとは舵次第」

「そう言えば聞いたことあったね…^{グランドライオン}偉大なる航路は入る前に半分死ぬって話。誤って運河に入りそこなえば船は大破——海の藻屑………つまり成功するか失敗するか確

率は二分の一ってわけだ」

普通に考えればあり得ない話だ。

だが海図の正確さとナミの航海士としての勘が、この考えが正しいと告げている。するとルフィが、訳知り顔で目を光らせた。

「ははーん、要するに『不思議山』なんだな?」

「まあ、わかんないでしょうけど…」

「ナミさんエレノアちゃんすげーぜ♡」

女性陣の言うことには基本的にイエスマンなサンジが賞賛の声をあげるが、ゾロは未だ訝しげに海を見つめていた。

「聞いたことねエよ、船で山越えなんて」

「そんなゾロ君に一つ、いいことを教えてあげよう…」

年上の風格を漂わせながら、エレノアが人差し指を立てる。

小悪魔的な笑みを浮かべた天使の娘は、あの海で生まれ生きてきた者としての経験の一つ言つて聞かせた。

「あの海に最もふさわしくない言葉…それは『ありえない』って言葉だよ」

妙な説得力を孕んだエレノアのセリフに、ゾロは思わず言葉を失つて凝視する。

すると、進行方向を見つめていたルフィが声をあげた。

「不思議山が見えたぞ!!!」

「待て、その後ろの影は何だ!! バカでけエ!!!」

大興奮してはしゃぐルフィの横で、視界に映る赤い何かを見たウソップが目凝らす。

同じく視線を向けた一味は、大きく目を見開いて絶句した。

船の向かう先に広がる、巨大な崖。はるか高くそびえ立つその大地は、彼らの行く先を阻むように存在していた。

「あれが… 『赤い土の大陸』か、雲でてっぺんが見えねエ!!!」

「吸い込まれるぞ!!! 舵しっかり取れ!!!」

「まかせろオ!!!」

「すごい」

「ウソみてエだ…本当に海が、山を登ってやがる…」

まるでたきが逆流しているような激流の前に、一味は慌ただしく動き出す。

エレノアもまたロープをしっかりと押さえつけながら、船員たちに挑戦的な笑みを見せた。

「ようこそ野郎ども…!!! ここが地獄の一丁目にして、世界で一番偉大な海の入り口だア!!!」

海流の向かう先に、荘嚴な作りの巨大な門の入り口が見える。

伝説の海へと挑む冒険者たちを迎えるその入り口へと、メリー号は半ば引き摺り込まれながら突き進んでいった。

「ずれてるぞ。もう、ちよつと右!!! 右!!!」

「おもかしいつばあゝゝゝい!!!」

「おらアアゝゝゝつ!!!」

船内でウソツプとサンジが、舵を思いっきり倒して方向を変えさせようと奮闘する。だが、力を入れすぎたのか、船の要である舵は根元からポツキリと折れてしまった。

「ぶつかる————つ!!!」

突然の悲劇に、全員が悲壮な顔で凍りつく。

しかし船が門柱に激突する寸前、帽子をゾロに投げ渡したルフィが飛び出した。

「『ゴムゴムの……風船』 つ!!!」

大きく息を吸い込み、巨大な風船となったルフィは船と柱の間に割って入り、クツシヨンとなる。

ゴムの弾力は強く、門柱に激突するところであつたメリー号は強引に入り口の中へと入り込んだ。

「助かつた!!!」

「ルフィ捕まれ!!!」

「ぬ!!!」

ゾロがすかさず手を差し出し、腕を伸ばしたルフィがそれを掴む。

ルフィが船に戻ってきた瞬間、一味は歓声をあげて最初の関門を突破したことを実感した。

「!!!入ったア——っ!!!」

激流は船を運び、山頂まで一気に流れていく。

頂上を超え、船は一瞬浮遊するとそのまま、偉大なる海の元へ一気に斜面を流れ落ちていった。

「行け——っ!!!」

あとはもう突き進むのみ、船首につかまったルフィが大はしやぎする中、エレノアはただ命を拾ったことに安堵のため息をついていた。

しかし、その時だった。

——どこにいるの!!!

凄まじい“想い”が、他人には聞こえない声となってエレノアの耳朵を叩く。

顔をしかめたエレノアは、声の主を探して鋭い目をあたりに向けた。

「誰……?」

「おい何だ、何か聞こえたか？」

「知るか——行け——!!!」

「風の音じゃない？ 変わった地形が多いのよ、きつと」

聞こえたのは自分一人かと思っていたが、異なる音を他の者も聞いていたらしい。

ますます困惑気味に視線を巡らせるエレノアに、再び同じ声が聞こえてきた。

——いつになったら会えるの!!!?

激流の音に負けない声にエレノアの眉間にシワが寄る中、一味の表情に動揺が走り始めた。

船の進行方向状に、巨大な障害物が見えたからだ。

「オイ…何だありや…」

「ナミさん!! 前方に山が見えるぜ!!」

「山? そんなハズないわよ! この先の“双子岬”を越えたら海だらけよ」

一味が騒いでいる間にも、エレノアに耳には声ならぬ声が届き続けている。

エレノアはその大きさもだが、声に含まれている苦しみや悲しみにも苦痛を感じてしまっていた。

——ずっと待ったよ!!!

だから…!!!

前方を凝視していたルフィが、やがて驚愕をあらわにしながら大きく口を開けていく。

激流の水飛沫や視界の狭さに邪魔され、相当近くまで近づいてようやくその正体に気づくことができた。

「山じゃねエ!!! クジラだア!!!」

「アイランドクジラア?!」

この場にいるはずのない超巨大なクジラを目の当たりにし、ルフィもエレノアも呆然となつてしまつていた。

彼らが立ち尽くしている間も、押さえつけられているエレノアの耳には、悲痛な声が届き続けていた。

——みんなのところに行かせてよ!!!

「ブオオオオオオオ!!!」

天に、山に向かって吠え続けるそのクジラは、ただただそのことだけを願ひ続けていた。

第48話 “腹の内”

「なんで西の海ウエストブルーにしかないはずのアイランドクジラが!!!」

そびえ立っている、そういう表現が正しいほどに巨大な影が、メリー号の進行方向上に見える。

猛スピードで坂を駆け下りている今、それは迫りくる恐怖に他ならなかった。

「どうする!!! 戦うか!!!」

「バカね戦えるレベルじゃないでしょ!!!」

「でも進路をふさがれてる!!!」

いきなりの窮地に、麦わらの一味はパニックに陥る。

しかしその中で、多少は修羅場慣れしているエレノアが大きく声をかけた。

「大丈夫!!! 向こうはこっちに気づいてない!!!」

「でもこのままじゃぶつかるぜ。左へ抜けられる、とり舵だア!!!」

「舵折れてるよ!!!」

「何とかしろよ、俺も手伝う!!!」

船の方向を帰るには舵を操作する他にない。折れた舵の残った部分でどうにかしよ

うと、男性陣が船内へ駆け込んで行った。

「そうだ、いいこと考えた!!」

「やめて——っ!!! なんかもう嫌な予感しかないからア!!!」

別の方法がないかと思案するエレノアは、何を思ったのか船内に入るルフィに悲鳴のような声をあげる。

そうこうしている間にも、クジラの巨体はみるみるうちに間近に迫りつつあった。

「とり舵っ、とり舵イ~~~~っ!!!」

「だめだ曲がらないっ!!!」

折れた舵を体ごと押すも、船の方向が変わる気配はない。

万事窮すかと思われたその時、メリー号の前方に備えられた大砲が唐突に火を噴いた。

その反動により、メリー号の勢いは大きく削がれ、最悪の事態は免れた。

「よしっ!! 船止まったか!!」

撃つたのはもちろんルフィ。なぜか誇らしげな様子で、自分の活躍に胸を張っていた。

しかし、メリー号の船首がクジラの体にぶつかり、バキツと音を立ててへし折れてしまった。

「最…悪…死んだかも…」

船首が折れてルフィが呆然となり、ナミやエレノアが頭を抱える中、一味はゴクリと息を飲んで凍りつく。

しかしクジラは、一切の反応を示すことなくその場に佇むだけであった。

「に…逃げろ今の内だア!!!」

「何だ一体どうなったんだ!!!? 砲撃に気づいてねエのか!!!? それともトロいだけか!!!」

「知るか、とにかく今の内だ!!!」

一刻も早くこの窮地から抜け出そうと、バタバタと慌ただしく駆け回るゾロたち。

その時、それまで沈黙していたクジラが再び口を開け、強烈な咆哮を放った。

「ブオオオオオオ!!!」

「あ~~~~~~~~っ!!! 耳が——っ!!!」

「おめエもさっさと漕げよ……ってスマンお前、耳良いんだったな!!!」

「漕げ!! とにかく漕げ!!! コイツから離れるんだ!!!」

あまりの煩さに、耳を抑えてごろごろと転げ回るエレノアだが、あいにく彼女を介抱する暇さえない。

すると、涙目でうつ伏せになるエレノアの前に、ズンと立ちはだかるサンダルを履いた足が見えた。

「お前、一体おれの特等席に……何してくれてんだア!!!」

さらなる嫌な予感がするも、もう遅い。

次の瞬間には、怒りの形相を浮かべたルフィが、何をトチ狂ったのかクジラの目に向けて腕を大きく伸ばし、拳を叩き込んでいた。

「アホ——っ!!!」

信じられない奇行に走った船長に、仲間全員からツツコミが入る。

一層の事気を失ったほうが気が楽だったかもしれないが、攻撃を受けたクジラ自身をそれを許してくれなかった。

その巨大な目が、ギョロリと彼らの方を向いたからだ。

「こつち見たア〜っ!!!」

「かかって来いコノヤロオ!!!」

「てめエ、もう黙れ!!!」

まだ喧嘩を売ろうとしているルフィに、男たちによる容赦ない蹴りが叩き込まれる。

するとついに、クジラが動き出した。大きく口を開け、あたりの海水ごとメリー号を飲み込み始めたのだ。

「うわあああああ!!!」

「ルフィ!!!」

突然生じた流れでルフィだけが投げ出され、一味はクジラの口の中へ吸い込まれて行く。

狼狽する彼らの中で、唯一冷静だったゾロがキツと目を向けた。

「よし、お前ら!!! エレノアに捕まれエ!!!」

「「おう!!!」」

「いやいやいやムリムリムリ!!! 飛べってか!!!? あんた達全員ぶら下げて飛べってか!!!?」

全身に組み付かれたエレノアが目を剥き、無理難題にいやいやと首と手を振る。

一見冷静に見えたゾロも、実際はかなりパニックに陥っていたらしい。

「フギャ——っ!!!」

そして全員の抵抗も虚しく、メリー号は一味を乗せたままくらい闇の中へと引き摺り込まれていってしまったのだった。

「どぶ思ふ」

明るい青空の下で、誰かが問いかけた。

しかしそこ問いに答えられる者はいにくこの場にはおらず、困惑気味の表情を浮かべるだけであった。

「どう思うって……どう思えばいいのよ……」

「おれは、てつきりクジラにのみこまれたつもりでいたが、こりやあ夢か……!!」

「……ああ、たぶん夢だ……」

エレノアたちが甲板の上で見つめているのは、なんの変哲も無い小島。小さな小屋やデツキチエアが置かれている、普通の小島だ。

問題は島自体ではなく、なぜ島がクジラの口の奥にあるのか、ということであった。

「——で？ あこの島と家は何なの？」

「………幻だろ」

「………じゃあこれは？」

現実を認識し切れていないナミたちが棒立ちになっていると、不意に目の前の海面が大きく膨らんだ。

現れた白い巨大な物体に、彼らはようやく再起動を果たした。

「大王イカだ!!!」

太い触手をシユルシユルと伸ばし、襲いかかってくる大王イカから必死に逃げ惑うナミとウソツプ。

一方でゾロ、サンジ、エレノアが迎撃に入ろうと身構えた瞬間、三本の大きな鉾が、大王イカに突き刺さった。

その銚を繋いでいる縄が伸びてきているのは、目の前の小島の家の中からだった。

「人は居るみてエだな」

「人だといいな」

「どんな魑魅魍魎がいるのやら……」

目の前の脅威は去ったものの、まだ油断はできないと構えと緊張を解かない一味の實力者たち。

沈黙が続く中、物陰から覗いていたウソツプがヤケクソ気味に声を発した。

「撃つか!! ああ島大砲でドカーンと……!!」

「待て!! 誰か出てきた……!!」

仲間が迂闊な行動に出る前に、ゾロが家をにらんだまま告げる。

果たして家の中から現れたのは。

「花だ!!!」

「花!!」

「いや、違う!! 花っぼい人だ」

多くの視線を受けながら、家の扉を開けて一人の初老の男性が姿を現した。手に持った縄から、銚を撃つたのは彼だということはわかった。

「何だ、あいつ……」

「あんな爺さんが大王イカを一撃で!!」

「…ただの漁か、おれ達を助けてくれたのか」

老人は見知らぬ青年たちに目を向けたまま、大王イカを貫く鉞と縄をずると引き始める。

やがて仕留めた獲物を島に引きずりあげると、彼はそのままデツキチエアに寝そべった。

「なんか言えよてめエ!!!」

てつきりかにかリアクションがあるものと思いきや、一言も発することなくくつろぎ始めた老人にウソツプのツツコミが飛ぶ。

騒がしい青年に、老人の目がぎらりと光った。

「や…戦るなら戦るぞコノ野郎。こつちには大砲があるんだ!!」

「……………やめておけ…死人が出るぞ」

「……………!! ……へえ、誰が死ぬって?」

「私だ」

「お前かよ!!!」

ボケか本気かよくわからない老人の返答に、サンジが苛立たしげな声を上げる。どうにも調子を狂わされるようだ。

「ナメやがってあんにやろ」

「とりあえずサンジくん落ち着いて…おじーさん、教えてほしいんだけどさ。あなたは一体何者で、ここはどこなのかな？」

「……………人に質問するときはまず自分から名乗るのが礼儀つてもんじゃないのか？」

「……………そ、その通りです。すみません」

「私の名はクロツカス。双子岬の灯台守をやっている。歳は71歳、双子座のAB型だ」
「よし、殺そう」

「落ち着いてエレノアちゃん!!!」

この中ではかなり精神年齢の高いエレノアだったが、老人の馬鹿にしているようなやりとりには限度を迎えたらしい。

慌ててサンジが止めに入ると、クロツカスが不機嫌そうな表情で睨んでいた。

「ここがどこかだと？ お前ら、よくも私のワンマンリゾートに入り込んでそんなデカい口がたたけるもんだな。ここがネズミの腹の中に見えるか?!」

「…や…やっぱりクジラに食われたんだ」

「どうなんの私達…!!! 消化されるなんていやだ」

青い顔でまた慌て始めるナミたち。

しかしあるものに気づいたエレノアが、訝しげに眉間にシワを寄せて首を傾げる。

「でも出口ならあっちにあるみたいだよ？」

「出られんのかよっ!!!」

視線を横にずらせば、確かに大きな鉄製の扉が見つかった。

しかしその向こう側には何もなく、ただただ青空が広がっているだけだった。

「何でクジラの腹に出口が…それに…何で空に扉が!!?」

「いや…待て、よく見ろ。この空…雲も…こりや絵だ…!! クジラの胃袋に絵が描いて

あるんだ!!」

「遊び心だ」

「てめエー体何やってんだよここで!!!」

「もういいもういい…もうほっとこうよ。出口あるならさっさとおいとましょ」

数分も話していないエレノアであったが、すでにこの老人とのやりとりが苦手になっていた。

邪魔に思われているようだし、さっさとお暇しようと全員が船を操舵しようとした時だった。

「何だ!!?」

「始めたか…」

唐突に海、いやクジラの胃袋が荒れ始め、メリー号や小島が大きく揺れ始めた。

——どこにいるの!!?

胃袋が荒れ始めると同時に、エレノアの耳に再びあの「声」が響いてくる。

焦燥じみた表情のウソップが、何が起こっているのか知っているはずの老人を睨みつけた。

「おい!! 何を始めたんだ!! 説明しろ!!」

「このクジラが、「レッドトライン」に頭をぶつけ始めたのだ……!!」

「何!!?」

クロツカスの答えに、ナミはハツとなる。

飲み込まれる前に見たものを思い出したのだ。

「そういえばこのクジラ……額に、スゴイキズがあつた……!! ……それに、空に向かって吠えてもいたし……!!」

「? ……どういうことだ?」

「苦しんでるのよ……!!」

ナミの考えがわかつたのか、ウソップの目を見開き、老人の方を鋭く睨んだ。

「そうか!! ……それが狙いか、あのジジイ!!」

「体の中からこのクジラを殺す気なんだ」

「悪どい殺し方やがるぜ……!!」

「……………そうなのかな……？」

ただ一人、エレノアだけが納得いかない様子で首を傾げている。

しかしその根拠もないために、余計な波紋は生じさせないと黙る他になかった。

「謎が解けたらさっさとここ出るぞ。ボヤボヤしてるとおれ達の方が溶けちまう」

「まア捕鯨をとやかく言う気はねエし、クジラを助ける義理もねエ。脱出しよう」

むしろ被害者のような感情を抱いているゾロとサンジは、情を抱くこともなく作業に入る。

「……………どうして君は……………君は何に苦しんでいるの……………」

エレノアは思案しながら、それでも考えるのは後にしようと作業を手伝う。

しかし普通の海とは勝手が違うのか、なかなか扉に近づくことができずにいた。

「オイ……………こう胃が荒れてちや出口までたどり着けねエぞ」

「早くしねエとおれ達の命もルフイの命も気がかりだ。あいつは胃袋こごへは来てねエはずだ。口の外へはじき出されるのを見た……………!!」

全員が焦る中、ウソツプが背後でドボンと音がするのに気がつき、振り抜いて目を見開いていた。

「おいっ!! ジイさんが飛びこんだっ!! 何する気だ!! 溶けちまうぞ!!」

「出口へ向かつてる。おれ達も早く出よう。クジラが、これ以上暴れ出す前に」

「漕いで漕いで!!!」

老人の行動に誰も気を止めず、操舵作業が続けられる。

そんな中、目指している扉の横の小さな扉が勢いよく開かれ、三つの人影が飛んでくるのが見えた。

「マズイぞミス・ウエンズデー、下は胃酸の海だ!!」

「いや————っ!!!」

水色の髪をポニーテールにした女と、スーツに王冠をかぶった男という妙な二人組と、よく知っている麦わら帽の青年の登場に、一味は目を丸くしていた。

「ル……ルフィ……!!」

「よオ!! みんな無事だったのか! とりあえず助けてくれ!!」

何が何だかよくわからず、棒立ちになっている間に、ルフィは他の二人と一緒に胃酸の海に落ちていった。

ぶくぶくと沈んでいく船長に呆れ、ナミが深いため息をついた。

「ルフィは置いといて、また変なのが二人いるんだけど……!!」

「……さっきの人、どつかで見た事ある様な……?」

妙な既視感に眉を寄せるエレノアだが、まあついでだとルフィとほか二人も引き上げしておくことにした。

三人が甲板の上に引きずり上げられると、荒れ狂っていた胃酸の海が徐々に穏やかになって行くのに気づいた。

「クジラが大人しくなった…」

クロツカスが姿を消してからそうだったように見え、エレノアはますます謎が深まって行くのを感じた。

一方でゾロは、目を覚ました見知らぬ訪問者に疑わしげな目を向けた。

「——で？ お前らは何なんだよ……………!!」

「私の目が黒いうちは、ラブーンには指一本触れさせんぞ!!」

詰問しようとした時、再び姿を現したクロツカスが勇ましい声で威嚇した。

その対象である男女は、ややあつてニヤリと不敵な笑みを浮かべて立ち上がった。

「フフフ……………」

「ホウ…だが我々はもう鯨の腹の中」

意味深な笑みを見せる二人は、背負っていた大型のバズーカを構え、砲口を扉の横に向けた。

「この胃袋に風穴を開けることだってできるぞ!! もう我々の捕鯨の邪魔はさせん!!」

「ゴロツキが……………!!」

男女の持つバズーカから砲弾が放たれると、クロツカスはなんと自ら飛び込み、爆発

に呑まれた。

クジラの胃の壁には傷一つなく、火傷を追ったクロツカスが胃酸の海の中へと落ちて行つた。

「あの、おっさん自分から弾を…!!!」

「まさか…このクジラを守つたの…?!」

「オホホホホ!! ムダな抵抗はよしなさいっ!!」

「そんなに守りたきや守ってみろ!! このクジラは我々の町の食糧にするのだ!!!」

呆然となるナミたちをよそに、男女は次なる砲弾を用意して別の場所を狙う。

エレノアはその構図に、ようやく納得したように表情を強張らせた。

「…やつぱり…」

「え?」

「あのおじいさんからは、クジラに対する悪意が一切感じられなかった…!!」

そう確信したエレノアは、これ以上の暴拳をやめさせようと思いつて踏み出した。

が、それよりも早くルフィの拳骨が男女の脳天に振り落とされていた。

「何となく殴つていた!!」

事情を全く理解していなかったが、結果オーライだったのでエレノアは親指を立てて

おいた。

第49話 “再会の約束”

「——このクジラはアイランドクジラ。西の海にのみ生息する世界一デカイ種のクジラだ。名前はラブーン」

砲撃を受け、傷ついた身体を手当てしながら、クロツカスはルフィたちに語ってくれた。

誤解は解け、両者の間にもうわだかまりはなかった。

「そしてこいつらは近くの町のゴロツキだ：ラブーンウエストブルの肉を狙っている。そりゃあこいつを捕えれば街の二、三年分の食料にはなるからな。だが私がそれをさせん!!」

メリー号の甲板に転がされている二人組を睨むクロツカスに、エレノアは自分の勤が外れていなかったことに安堵する。

ちよつと意地は悪いが、彼がクジラのことを本当に大切に思っていることがわかったからだ。

「こいつが『赤い土の大陸』にぶつかり続けるのにも、リヴァース・マウンテンに向かつて吠え続けるのにもわけがある。——ある日、私がいつもの様に灯台守をしていると、気の良い海賊どもがリヴァース・マウンテンを下ってきた。そして、その船を追うよう

に小さなクジラが一頭。それがラブーンだ」

クロツカスはまるで昨日のことにように、ラブーンや彼らと初めて会った時のことを思い出す。

世間一般的な海賊とはかけ離れた陽気な彼らからは、悪意など微塵も感じられはしなかった。ちょうど、ルファイたちのように。

「西の海ではラブーンとともに旅をしていたらしいが、今回の航海は危険極まるウエストブルと西の海においてきたはずだった。——本来、アイランドクジラは仲間と群れをなして泳ぐ動物だが、ラブーンにとつての仲間はその海賊達だったのだ」

真剣な様子で話を聞いているルファイたち。

クロツカスはその口元に笑みを浮かべ、かつての日々を思い起こす。それは長い様な短いような、濃厚で何物にも代えがたい時間だった。

「——船は故障して岬に数か月停泊していたから、私も彼らとはずいぶん仲良くなっていた。そして出発の日——私は船長にこう頼まれた」

『「こいつをここで二、三年預かっててくれないか。必ず世界を一周し、ここへ戻る』

それは、海賊達とクジラが交わした約束、夢の実現と再会を願う決意の表れであった。ナミとエレノアは、悲しげな表情を浮かべて水路の壁を、ラブーンの方を見つめる。

「——だから吠え続けるの……身体をぶつけて壁の向こうに……」

「……そっか、あの声……この子の声だったんだ……」

「どういうこと?」

「さつきからこのクジラの咆哮と一緒に聞こえてたんだ……『どこにいるの?』『会いた
い』って声が」

エレノアのつぶやきに、クロツカスもまた目を伏せながらうなずく。

「そうだ……もう……50年も前の話になる……」

その言葉に、一味は思わず息をのんだ。

人によつては、すでに天命を終えているかもしれないような長い時間が飛び出したこ
とで、誰もが言葉を失っていた。

「そんなにたつても……まだ仲間の生還を待つてるの……!」

健気で、愚かで、痛々しく約束を信じている一人ぼっちのクジラ。

エレノアは思わず、体の内側に響き渡る哀し気な咆哮に身を震わせていた。

?

「しかしすげエ水路だな。腹にこんな風穴開けてよく生きてんな。これも遊び心か?」

「医者遊び心だ。間違えるな。私はこれでも医者なのだ。昔は岬で診療所もやってい
た。数年だが船医の経験もある」

「船医?! 本当かよ!! じゃ、うちの船医になつてくれ」

「バカいえ。私には、もうお前らの様に無茶をやる気力はない」

ルフィの勧誘を、クロツカスは呆れたような表情で断る。

ラブーンに呑み込まれる前のことを話したら、余計に行く気をなくすことだろう。

「医者か……それでこのクジラの体の中に！」

「そういうことだ。これだけデカくなってしまうともう外からの治療は不可能なのだ。

開けるぞ」

クロツカスは水路の端にあつた巨大な扉の端の梯子を上り、ハンドルを回して装置を

動かす。

扉はゆっくりと開き、たまっていた空気が流れていくのを感じると、ルフィはいち早

く元気な声を上げた。

「フ——ッ出たア!!! 本物の空!!!」

考えてみれば、こんな事態に巻き込まれたそもそもの原因は彼のような気もするが、

今さら考えても仕方がないとエレノアは目をそらした。

その先には、いまだ気を失っている謎の二人組の姿があつた。

「はいっらどうしよう」

「捨てておけ、その辺に」

「あーい」

ゾロの指示通りに、エレノアは二人組を容赦なく甲板から蹴り落す。

ドボンドボンと海面に水飛沫が立つと、その衝撃で二人組はようやく目を覚ました。

「うばっぷ、何だ!!」

「い…胃酸の海!!」

「違うっ!! 本物の海だ!! ミス・ウエンズデー」

「どうやらあの海賊達にノされてたようね、Mr. 9!!」

すぐさま先ほどの調子を取り戻した二人組は、謎の名前で呼び合うと忌々し気にエレノアたちを睨みつけた。

少なくとも、捕鯨の邪魔をされたことは覚えているらしい。

「——で? お前ら何だったんだ?」

「うっさいわよ!! あんたには関係ないわ!!」

「いや待てミス・ウエンズデー。関係ならあるぜ? こいつらが海賊である限りな!!」

「それもそうね、Mr. 9。我が社には大ありね。覚悟なさい!!」

いきなり激昂したり意味深な笑みを浮かべたりと、怪しいことこの上ない二人組にエレノアは呆れたように目を細める。

二人組はびしっと挑戦的に指を突きつけると、不敵な笑みを浮かべてみせた。

「それではまた会おうじゃないか田舎海賊ども!!」

「そしてクロツカス!! このクジラはいつか我々が頂くわよ!!!」

返事を聞く事もなく、二人組はものすごい勢いで泳ぎ去って行ってしまった。

その後ろ姿を、サンジは暢気ならしのない笑みを浮かべて見送っていた。

「ミス・ウエンズデーか。なんて謎めいた女なんだ♡」

「……………やっぱりどつかで見たような気がするな」

女性の方に妙な既視感を覚えているエレノアが首をかしげるが、どうしても思い出せず悶々としてしまう。

やがて諦めたエレノアはまあいいやと肩をすくめると、クロツカスの手に細長い装置を持たせた。

「はい、クロツカスさん」

「ん? 何だこれは」

クロツカスは肩眉を上げ、あからさまに危険なおいのするボタンを見下ろす。

エレノアは満面の笑みを浮かべ、クロツカスにビシッとサムズアップを送った。

「あいつらがまた変なことしようとしたら押ししてください。半径数メートルにわたって吹っ飛ばしますから」

「なんつー危ないモン渡しとんのじゃ!!?」

アーロンパークでも似た様なことをやっていたのを思い出し、ウソップが後ずさりな

がら目を見開いて叫ぶ。

小悪魔どころか悪魔のような笑みを浮かべるエレノアには、もう恐怖しか感じられなかった。

「しかし50年もこの岬でね。まだ、その仲間の帰りを信じてんのか。ずいぶん待たせるんだな、その海賊達も」

「バ——カ。ここは『偉大なる航路』だぞ。二、三年で戻るつつた奴らが50年も帰らねエんだ……もう答えは出てる。死んでんだよ、いつまで待とうが帰って来やしねエ……!!」

能天気到的外れなことをのたまうルフィに、サンジが吐き捨てるように返す。

冷たいサンジの言葉に、海賊とクジラの友情に内心感動していたウソップが食って掛かる。

「てめエは何でそう夢のねエことを……!!」

「そういう海だよ、ここは」

噛みつかんばかりだった彼の肩を掴み、静止したエレノアが押し殺したような声で止める。

様々な感情が渦巻いている金の瞳を向けられ、ウソップはうつとうめいて大人しくなった。

「いつの日かまた会おうといった友人が…翌日には物言わぬ骸となつて海面を漂っている。そういうことがよくある場所なんだよ」

「そう…事実は想像よりも残酷なものだ」

エレノアの体験したかのような言葉に、クロツカスもどこかくやしそうにうなずいた。

彼が知つた情報は、それほど悲しい結末だつたのだ。

「彼らは逃げ出したのだ、この『偉大なる航路』からな。確かな筋の情報で確認済みだ」

「な…なにイ…!!?」

「……………このクジラを置いて…!! まさか…でも逃げるには『風の帯』を通らなきゃ…」

!!

「そうとも…故に、生死すら不明。だが、たとえ生きていたとしても二度とここへ戻るまい。季節・天候・海流・風向き、全てがデタラメに巡り、一切の常識が通用しないのがこの海。『偉大なる航路』の恐怖は、たちまち弱い心を支配する」

クロツカスの語つた真実に、サンジは腹立たしそうに眉間にしわを寄せる。

自分が思つていた以上に残酷な話に、ラブーンに対して大した思い入れはないとはいへ、相応の怒りが込み上げてきたようだ。

「そして心の弱いそいつらは、ためエの命惜しさに約束の落とし前もつけずにこの海か

らとつとズラかったって訳だ」

「見捨てやがったのか、このクジラを!! そいつらを信じてこいつはここで、50年も待ち続けてんのに!!! ヒドいぞそりやあ!!!」

「それがわかっているんだったら、どうして教えてやらないの? このクジラは人の言うことが理解できるんでしょ!!」

「言つたさ。包み隠さず全部な。だが聞かん」

クロツカスは事実を知つた時の自分の悲しみを、そしてそれをラブーンに知らせる時の葛藤を思い出す。

しかし、ただ待ち続けると言う苦しみを続けるよりはと、必死にラブーンに真実を告げたものの、彼は理解しなかった。納得したがらなかった。

自分の家族が死んだなど、自分を捨てて逃げてしまったなど、信じたくはなかったのだ。

「……そりやあ、認めたくないよ。自分の生きる意味が失われちゃうんだもの」
胸に当てた手にギュツと力を込め、苦しそうな表情のエレノアが呟く。

生きる理由を持ったまま苦しみ続けるのと、生きる理由を亡くしたまま生き続けなければならぬ。どちらが辛いかなど、他人が推し量れるものではないだろう。

その時だった。それまで無言で寝転がっていた麦わら帽の船長の姿が、忽然と消えて

いることに気が付いたのは。

「……………ルフィ?」

いやな予感がしたエレノアが、辺りを見渡して冷や汗を流す。

ほかの面々も青年の姿を探していると、どこからか威勢のいい掛け声が耳に届いた。

「うおおおおお!!」

声のする方を見れば、確かにルフィの姿を見つけた。

しかし大きな丸太を持ち、ラブーンの体をサンダルで駆け上がっている彼の姿を見れば、言葉を失ってしまうのも仕方がなかった。

「は
は!!」

「何やってんだあのバカはまた」

「ちよつと目を離れたスキに…」

「山登りでも楽しんでんのかね」

「……………あのさ、私今すつごい嫌な予感してるんだけど」

今さら彼の奇行に驚いている暇はない、とあきれた様子で目をそらす一味だが、漠然とした不安が胸中に渦巻くエレノアはそうは思えなかった。

そうこうしているうちに、ラブーンの体を上ったルフィはその鼻先へとたどり着いていた。

「『ゴムゴムのオオオオオ!!』」

彼は大きく腕を伸ばし、抱えた丸太——自分がへし折ったメリー号のマストを振り上げる。

その光景に、エレノアはサーツと自分の中の血の気が引いていくのを感じた。

「『生け花』!!!」

ルフィの持ち上げたマストが、次の瞬間ラブーンの鼻先にできた新しい傷に深々と突き刺さった。

ぶしゅうつと噴き出す鮮血に、全員の目が点になっていた。

「……………ありやマストじゃねエか? おれ達の船の…」

「そう、メインマストだ」

理解が追い付いていない一味だが、すでに内心は不安でいっぱいになっている。

エレノアに至っては、気を失わないようにするので精一杯になっていた。

ラブーンは最初は平然とした様子であったが、やがてじわじわと痛みが広がったのか、顔中に汗を噴出させ始めた。

「ブオオオオオ!!!」

「『何やつとんじや、お前~~~~っ!!!』」

「船壊すなア!!」

再び咆哮を上げて、狂ったように暴れ始めたラブーンに、一味もクロツカスも思わず悲鳴じみた怒号を放っていた。

ラブーンは鼻先でしがみついているルフィに気づくと、叩き潰してやろうと地面に思い切り自分の体ごとぶつかかる。だが、かえってマストが深く突き刺さり、自分の体を傷つけてしまい、さらに苦しむ羽目になっていた。

「ブオオオオ!!!」

「へへ、ば——か!!!」

バカにしたように笑うルフィに、ラブーンが再びぶつかっていく。

ちよつと掠っただけでボールの様に吹っ飛ばされながら、ルフィはラブーンの目を拳でついたり止まる気配がない。

何度も何度も、ルフィとラブーンは勝負ともいえないぶつかり合いを繰り返していた。

「ルフィ…!!?」

エレノアはただ戸惑ったように青年を凝視するほかにない。

確かに何を考えているのかわからない彼ではあるが、理由なく誰かを傷つけるようなことはしない。

そして、何度目かの激突の後、ルフィは向かってくるラブーンに向けて叫んでいた。

「引き分けた!!!」

ルフィの口にした言葉の意味が分からず、その場で固まるように動きを止めたラブーン。

ルフィは不敵な笑みを浮かべたまま、ラブーンに向けてまた告げた。

「おれは強いだろうが!!!」

「……………」

戸惑ったように見つめてくるラブーン。

理解が追い付いていないラブーンに、ルフィは自信たつぷりに告げた。

「おれとお前の勝負は、まだついてないからおれ達は、また戦わなきゃならないんだ!!!」

お前の仲間は死んだけど、おれはお前のライバルだ」

そこでようやく、ラブーンはルフィの言葉に隠された想いを理解した。

この人間は、自分にまた生きる理由を与えようとしてくれている。大好きだったあの人たちの代わりに、この場所で待ち続ける理由になってくれようとしているのだ。

「おれ達が『偉大なる航路』^{グランドライン}を一周したらまた、お前に会いに来るから、そしたらまたケンカしよう!!!」

ラブーンの間目から、ぼろぼろと涙の雫が零れ落ちていく。

わかりにくいうえに、乱暴で身勝手に一方的な約束だが、それでもその言葉はラブー

ンの胸に刺さった。

彼の言葉は言外に表していた。「生きろ」と。

「ブオオオオオオオオ……!!!」

ラブーンンの咆哮が、再び岬に響き渡る。

聞こえてくる“声”に、エレノアは目に涙をにじませながら笑みを浮かべた。

それはこれまでのような悲しみに満ちた咆哮ではない。一度失いかけた存在理由をもう一度手にしたことへの、歓喜の咆哮であったからだ。

第50話 “記憶を受け継ぐ者”

「あ——っ!!!」

ラブーンが無謀な行為をやめさせ、新たな約束の証として、ルフィがラブーンの鼻先に大きな海賊マークを描き終えた時だった。

海図を広げ、今後の進路を確認していたナミが突如叫び声をあげたのだ。

「何だよ、お前うるせーな——っ」

「何事ですかナミさん!! お食事の用意ならできました♡」

「は——船の修理ちよつと休憩、メシか?」

「ぐ——」

「羅針盤が……!!! 壊れちゃった……!!! 方角を示さない!!!」

各々でメリー号の修繕が住むまでの時間を過ごしていた男たちが、ナミの異変に気付いて集まってくる。

クロツカスと話し込んでいたエレノアも何事かと振り向き、事情を知って思いっきり呆れたため息をついた。

「呆れた……!!! ほんとに何も知らなかったんだね」

「命を捨てに来たのか？ 言ったはずだ。この海では一切の常識が通用しない。その
コンパス
羅針盤が壊れているわけではないのだ」

「…じゃあ、まさか磁場が?！」

クロツカスとエレノアの言葉で、ナミの表情が驚愕のものに変わる。

理解が早くてよろしいと、エレノアは満足げに頷いた。

「そ。『偉大なる航路』にある島々が鉱物をたくさん含んでいるから、航路全体に磁気
異常をきたしているんだ。さらにこの海の海流や風には恒常性がないからね…何も知
らずに海へでれば確実に死ぬよ」

「確かに…方角を確認する術がなきや絶望的だわ」

てつきりいまの準備で十分だと思っていたナミは、くるくる回り続けている
コンパス
羅針盤を
見て愕然となっていた。

「し……知らなかった」

「おいマズイだろ、そりゃ!! 大丈夫か?!」

「知らないナミさんも物知りなエレノアちゃんも素敵だ!!」

「ちよつとあんたら黙っててよ!!」

本気でどうしたらいいのかと悩み始めるナミに、あちこちから抗議や余計な声がかか
るが、エレノアはやれやれと手のかかる子供を見るような表情でナミの隣に歩み寄つ

た。

「『偉大なる航路』を航海するには『記録指針』が必要だよ」

「ログポース？ 聞いたことないわ」

「磁気を記録することのできる特殊な羅針盤のことだよ。ほら、こういうの」

「こういうのか？」

「そう、それ」

エレノアが差し出した、リストバンドのような形状のコンパスと同じものをルフィも取り出す。

文字盤もない、針だけが揺れている不思議なそれに、ナミは興味深そうな視線を向けた。

「その『記録指針』がなければこの海の航海は不可能だ」

「まあ『偉大なる航路』の外での入手はかなり困難だけどね」

「なるほど…でもちよつと待って」

「うん」

ナミの言いたいことを理解しているのか、エレノアも真面目な表情で頷く。

そして二人で同時に、呑気にサンジの料理を頬張っているルフィの頭を殴りつけた。

「なんであんたがそれを持ってんのよ!!!」

頬を張り飛ばされ、ルフィは口にしていた料理をぶっと吐き出してしまった。

怒るよりも先に、なぜ怒られたのかわかっていない様子でログポースを二人に差し出した。

「…これは、お前。さっきの変な二人組が船に落としていったんだよ」

「あいつらが？」

「何でおれを殴る」

「ノリよ」

「ノリか」

とりあえず理不尽なことには変わらないが、痛くはないために深くは追求するつもりはないらしい。

不思議そうにログポースを見つめるナミに、クロツカスが説明を続けてくれた。

「『偉大なる航路』に点在する島々は、ある法則に従って磁気を帯びていることがわかっていて。——つまり、島と島が引き合う磁気を、この『記録指針』に記憶させ、次の島への進路とするのだ」

ゆらゆらと不規則に揺れる指針は、ナミとエレノアの持つものとで方向が違って見える。

これが異なる島の磁気を記憶し始めているということなのだろう。

「まともに己の位置すらつかめないこの海では、『記録指針』^{ログポース}の示す磁気の記録の身が頼りになる。始めはこの山から出る7本の磁気より一本を選べるが、その磁気はたとえ、どこの島からスタートしようともやがて引き合い：一本の航路に結びつくのだ。そして最後にたどり着く島の名は」

『ラフテル』

エレノアの告げた名が、一味に緊張を走らせる。

それこそが彼らの最終的な目的地であり、全ての海賊たちが探し続けている場所の名だからだ。

「『偉大なる航路』^{グランドライン}の最終地点であり、歴史上にもその島を確認できたのは海賊王の一団だけという……伝説の島」

「じゃ……そこにあんのか!!」^{ワッ}ひとつなぎの大秘宝^{ピース}は!!!」

「さあな。その説が最も有力だが、誰もそこにたどり着けずにいる」

余裕の表情を見せ、曖昧に口を閉ざすクロッカスだが、ルフィはそんな彼に不敵な笑みを浮かべて見せた。

「そんなもん、行ってみりゃわかるさ!!!」

ルフィの返事に、クロッカスはどこか満足げな笑みを返す。

正直気になって気になって仕方がないウソップだが、彼にこれ以上聞いても仕方がない

と思っただのか渋々身を引く。

そしてルフィほどではないにせよ、ワクワクした様子で佇んでいるエレノアに視線を向けた。

「しかしさすが^{グランドライン}偉大なる航路^グで生まれたって言うだけあつてよく知ってるな」「へっへっん。記憶力や知識には自信があるんだよねー」

一味の知恵袋とでもいうべき知識量に感服する彼に、エレノアはいたずらっぽい笑みを浮かべる。

クロッカスはそんな彼女を、意味深な眼差しで見つめていた。

「小娘でも…やはり天族か」

「??？」

クロッカスのつぶやきの意味がわからず、エレノアは訝しげな表情で首をかしげる。

代わってナミがその意味について尋ねてみた。

「クロッカスさん…天族に関して何か知ってるの?!」

「……まあ、私も生涯で天族に会ったことがあるのは二度だけでな。詳しいとは言えん」

「二度も…?!」

「普通の人間なら姿を見ることさえなく一生を終えると言われるのに、会ったことがあるという彼の話に全員が驚愕する。」

クロツカスは難しげな表情を見せ、かつてのことを思い出しながら語り始めた。

「……以前に会ったことのある天族の言うことには、彼女達は『記憶を受け継ぐ者』の一族らしい」

「記憶を……受け継ぐ？ どういうことそれ？」

「うまくは言えんが……天族の女子には代々、先代から受け継いだ記憶を次世代に継承する宿命があるのだと聞いた。己が体験した最も大切な記憶を、途絶えさせることなくつなげていく使命があるのだと」

そんなばかなと切って捨てるような話だったが、この場にいる全員ばかりにするようなことはできなかった。

語り聞かせるクロツカスの表情が、あまりにも真剣な様子だったからだ。

「親から子へ、子から孫へ……長い長い年月をかけて記録を蓄積していく『生きた図書館』。膨大な知識と経験を内包していると言われるがゆえに、全知の力があると言いつえられていられるのだとな」

「………そうなの？」

「いやいやいや知らない知らない。そんな壮大な昔話聞いたこともないよ」

もはや伝説かホラ話のようなクロツカスの話を、エレノアはブンブンと首を振って否定する。

少なくとも彼女自身には、母親からそのような使命を授かった覚えはなかったようだ。

「私が乗っていた船にも天族は乗っていた。……ウソか本当かは判断しかねるがな」

またもや気になる締めくくりで、クロツカスは話を終えてしまう。

不完全燃焼気味のエレノアだったが、それでも期待に満ちた眼差しをはるかな海の先へと向けていた。

「『記憶を受け継ぐ者』か……この先の海に、私と同じ生き残りがいるのかな」

探そうと思っても見つかるものではない、伝説の種族の生き残り。

そんな彼女が密かに抱いた新たな目標を、クロツカスは意味深な笑みを浮かべて見つめていた。

「さー、行くかつ!! メシも食ったし」

「お前一人で食ったのかつ!!」

「うおつ!! 骨までねエし!!!」

話している間に、ルフイはサンジが用意した料理を他のものの分まで平らげてしまったらしい。

ギャーギャーと騒がしくなるのを尻目に、ナミは手に入れたログポースをじっと見つめていた。

「『記録指針』か……!! 大切にしなきゃ……これが航海の命運を握るんだわ」

「私の分をスペアにしなよ。命綱は多いくらいで十分さ!!」

「そうね! ありがと!」

気前のいいエレノアの提案に礼を言い、ナミは彼女の掲げるログポースと見比べる。

その時、ある悲劇が起きた。

「おのれクソゴム!!! おれはナミさんとエレノアちゃんにもつと!! 二人にもつと食つてほしかったんだぞコラア!!!」

「うおっ!!!」

レディたちに自分の料理を食べてもらえる機会を失ったサンジが、怒りに任せてルフィを蹴り飛ばす。

宙を舞った麦わらの青年は、そのままナミたちのいる方へと吹っ飛ばされた。

「え?」

その時、パリンという音が二つ同時に響き、ガラスのかけらが辺りに飛び散った。

ナミとエレノアは呆然と、砕けたログポースの残骸を凝視し、ついでサンジにギギギと壊れた人形のように視線を向けた。

何を勘違いしたのか、サンジは能天気にはラツと笑みを浮かべていた。

「お前ら二人とも頭冷やして来オ——い!!!」

とんでも無いことをやらかした二人を、ナミが怒りのままに海に向けて蹴り落とす。その後ろで、エレノアはログポースの哀れな残骸を前にガツクリとくずおれていた。「……わ……私の『記録指針』……パパが誕生日にくれた想い出の品だったのに……」

「しつかりしてエレノアア!!」

さらつと聞こえてきた情報に、ナミは青い顔でエレノアにすがりつく。

エレノアの父親から、つまりは大海賊「白ひげ」から贈られた品が粉々になったというのは、第三者からしても悲劇であった。

「おいっ!! そいつはすげエ大事なモンだったんじゃねエのか!!」

「あわてるな。私のをやろう。ラブーンの件の礼もある。……お前さんはまア、気の毒だったとしか言いようがない」

「ちくしよーっ!!??」

流星のクロツカスもいたたまれなかつたらしい。妙に気遣わしげな優しい口調が、エレノアにとっては逆に辛かった。

その時、突き落とされたサンジとルフィがようやく海面から顔を出してきた。と、思いきや。

「ふはっ」

「ふはっ」

「ぶはっ」

「ドウバ——っ!!」

「「ん!!」」

二人の他に、見覚えのある顔が陸地に這い上がってきた。

思わず見つめ合う両者だったが、サンジは相手の一人が女性、ミス・ウエンズデーだとわかると途端に態度を変えた。

「お手を、ミス・ウエンズデー」

「まあ、ありがとう」

「おいつ!! 頼みがある」

エスコートしたままその場を去ろうとするサンジを、Mr. 9と呼ばれていた男が呼び止めた。

「ウイスキーピーク? 何だそれ」

「わ…我々の住む町の名だ…です」

眠りこけたままのゾロを除く一味が再集合した前で、Mr. 9とミス・ウエンズデーが神妙な表情で正座していた。

彼らからの要求に、ナミは意地の悪そうな笑みを浮かべて問いかける。

「船が無くなったからそこへ連れて行って？ それは少しムシが良すぎるんじゃないの？」
Mr. 9。クジラ殺そうとしといてさ」

「お前ら一体何者なんだ？」

「王様です」

「うそつけ」

「いいで!!!」

ボケに走ったMr. 9の頬をつねり、サンジが冷たい声を発する。

すると謎の二人組は、恥も外聞も捨てていきなり土下座をして見せた。

「いえません!!! しかし!!! 町へ帰りたいんです!!! 受けた恩は必ず返します!!!」

「私達だつてこんなコソコソした仕事やりたくないんですが、なにせ我が社は“謎”がモットー。何も喋るわけにはいかないのです。あなた方のお人柄を見こんでお願い申し上げます」

「……………やめておけ。何を言おうとロクなもんじゃないぞ、そいつらは」

口調こそ丁寧な二人組を、クロツカスは冷静に淡々と評価する。

エレノアもナミも同じ考えであつたが、彼女たちの船長は深くは気にしている様子はなかつた。

「いいぞ、乗つても」

思わず呆れながら、エレノアは深いため息をつく他になかった。

それからしばらくして、出港の準備が整ったメリー号の上で、ナミがログポースを確認していた。

「……………そろそろよかろう。『記録』がたまったはずだ。海図通りの場所を指したか？」

「うん、大丈夫!! ウィスキーピークを指してる」

クロツカスの確認にそう返し、ナミはワクワクとした様子で進路を再確認した。

行き先は先ほど決めたように、Mr. 9とミス・ウエンズデーの故郷であるという島だ。

「いいのか? 小僧、こんな奴らのためにウィスキーピークを選んで。航路を選べるのは始めのこの場所だけなんだぞ」

「気に入らねエ時はもう一周するからいいよ」

「……………そうか」

なんとも無鉄砲ながら、スケールの大きな返事をくれるルフイに、クロツカスも微笑ましげな笑みを浮かべる。

過ぎた時間は長くない、しかしそれでも彼らにとって忘れられない時間となってい

た。

「じゃあな、花のおっさん」

「記録指針ありがとう!!」

「…お世話になりました」

「行ってこい」

クロツカスの激励を受け、ルフィは満面の笑みを浮かべる。

そして彼は、もう一人の友人に向けても挨拶を交わした。

「行ってくるぞクジラア!!!」

「ブオオオオオオオ!!!」

ラブーンもまた、ルフィたちとの再会を願って激励の咆哮を上げる。

唯一エレノアのみがその咆哮の意味を理解し、可笑しそうに笑い声を嘯み締めつけた。

海流と風に乗る、みるみるうちに見えなくなっていく小さな海賊船の後ろ姿を眺め、クロツカスはただ一人、この場にはいない仲間へと問いかけていた。

「あいつらは…我々の待ち望んだ海賊達だろうか…なんとも不思議な空気を持つ男だ。

なあ…ロジャーよ」

そんなつぶやきに、風だけが不思議な響きを返していたのだった。

第8章 賞金稼ぎの巢

第51話 “最初の島”

——船はゆく。

今日の天候は冬、時々——春。

しんしんと真つ白な雪が降り続ける海の上を、メリー号は静かに進む。

あつという間に降り積もった新雪を遊び道具にしたルフィは、作り上げた雪だるまに最後のひと工夫を加えた。

「おっしや、できた!! 空から降って来た男 “雪だるさん” だア!!!」

「はっはっはっは…まったく低次元な雪遊びだな、ためエのは!!」

「何っ!!」

「見よ、おれ様の魂の雪の芸術っ!! “スノウエレノア”!!!」

「うおおスゲエ!!! 今にも動き出しそうだ!!!」

造形が得意なウソップが、エレノアをモデルにした雪像を披露し大きく胸を張る。

質感といい表情といい、100点を与えてもいいぐらいに完璧な雪像。それに向けて、ルフィは自分の雪だるまを叩いて腕を発射させた。

「よし、雪だるパンチ!!!」

「何しとんじやおのれエ!!!」

「がア——っ!!! 雪だるさん!!!」

渾身の力作の顔を破壊され、怒り狂ったウソツプが雪だるまを蹴り崩す。

ギャーギャーと騒ぎ始める二人に、分厚いコートに身を包んだナミが呆れた視線を送っていた。

「この寒いのに何で、あいつらあんなに元気なの」

まあ、あれだけ動き回っていれば身体もあつたまるだろうと放置しておくことにする。

が、一人だけこのアホ二人組に突撃していった。

「雪かきしろっつってんでしようがこのアホども!!!」

いまだに騒いでいるルフィとウソツプの両方に蹴りを放ち、エレノアが鼻息荒く仁王立ちする。

やけに不機嫌そうな彼女に、ナミは理由を察してか苦い表情を見せた。

「エレノア……あんた、今のはほぼ私怨よね」

「……ノーコメント」

「ナミさん!! エレノアちゃん!! 恋の雪かきいか程に!!!?」

「止むまで続けて、サンジ君」

「イエツサー♡」

目をハートマークにしたサンジが、デレデレしたまま懸命にスコップで雪を捨てる作業を続ける。降り積もった雪をどんどん処分しなければ、重みで沈没してしまうからだ。

ちなみにこんな天気の中でも、ゾロだけが暢気に胡坐をかいて昼寝をしていた。頭に雪を積もらせながら。

「おいキミ、この船には暖房設備はないのかね」

「寒いわ」

「うっさいわね、あんた達客じやないんだから雪かきでも手伝ってきなさいよ!!」

「ナミ、もうあれはほっといてもいいから」

船室では、毛布と厚着で身を守るMr. 9とミス・ウエンズデーが不満げな声を上げ、ナミがそれを怒鳴りつける。

何かと不遜な二人組に、エレノアはもうあきらめられているようだ。

すると突如、船の外ですさまじい閃光が走り、続いて轟音が鳴り響く。天空で走る稲妻に、ナミは戦慄の表情を浮かべていた。

「雷…!!? 一体どうなってるの!!? この天候は。さつきまでは暑いくらいポカポカの

晴天だったのに」

「話には聞いてたけど本当にめっちゃくちやだな…!! リヴァース・マウンテンから発せられる磁場が天候を狂わせてるってのは聞いたけどここまでとは…!!」

「クロツカスさんの言ってた通り、季節も天候もデータラメに巡ってる!!」

「……………それよりナミ、進路の指示を」

「え？ あ…あ——っ!!!」

エレノアに指摘され、ナミは慌てて記録指針ログボイスを確認する。そして目にした船の状態に、悲鳴のような大声を発してしまった。

「なに？ 何だ、どうした!!!」

「何事っすかナミさん!!!」

「うそ…!!! 180度船を旋回!! 急いで!!」

「180度？ 何で引き返すんだ」

「忘れ物か？」

「違うわよ!! 船がいつの間にか反転して進路から逆走してるの!!! ほんのちよつと

『記録指針』から目を離れたスキに!!!」

航海士にあるまじき失態に、ナミは慌てて仲間たちに指示を飛ばす。いくら異様な海の状態に目を奪われていたからといって、真逆の方向に向いているまで気づかないなど

ありえないミスだ。

「油断大敵だよ、ナミ」

「波に遊ばれてるな」

「あなた本当に航海士？」

エレノアだけでなく、いまだに信用しきれない謎の二人組にまで馬鹿にしたような視線を向けられ、ナミはキツと目を鋭くする。

それにも構わず、ミス・ウエンズデーが諭すような押揄うような口調で告げた。

「ここはこういう海よ。風も空も波も雲も、何一つ信用してはならない。不変のものは唯一『記録指針』のみ!! おわかりかしら？」

「偉そうにウダってないでさっさと手伝え!!!」

「うお!!」

「そしてあんたもわかってんならさっさと見え!!!」

「注意喚起のつもりだったんだよ!!!」

船内から動くこうともしない二人組の背中を蹴り飛ばし、エレノアの服の襟を掴んで投げ飛ばす。

開き直ったナミには、もう正論など何の意味も持たなかった。

「ブレイスヤード右舷から風を受けて!!! 左へ180度船を回す!! ウソツプ三角帆

を、サンジくん舵取って、エレノアは前方の見張り!!!」

「イエツサー!!!」

「まかせろナミさん!!!」

「人使いのありがたい女だ…」

「うるさい!!!」

急な指示に文句を言いながら、船員達は船を動かすために各々の仕事に取り掛かる。

船の上では、全員が団結しなければたちまち全滅する。多少の不満があろうとも、それは前に進むために呑み込まなければならぬのだ。

「おい待て、風が変わったぞ!!!」

「うそっ」

「春一番だ」

「何で!!!」

「ゾロ!!! 起きろ!!! 緊急事態だぞ!!!」

「ぐー」

とはいえこの海では、当たり前前の作業さえまともにこなすこともできない。

急に変わる風向き、変化する天候、あらゆるものがデタラメで、一貫した指示では対応しきれないのだ。

「おい!! 向こうで今イルカがはねたぞ、行ってみよう」

「あんたは黙って!!!」

「波が高くなってきた!!」

「ナミさん霧だ!!!」

「十時の方角に冰山発見!!! ……ごめんねギン!!! あんた達よく1週間もったわ!!! 並み

の艦隊なら確かに全滅するわ!!! 私が甘かったア!!!」

「何なのよこの海はア!!!」

文字通り、気まぐれに荒れ狂う海に翻弄されながら、一人を除いた麦わらの一味と同行者2名があわただしく船の上を走り回る。

伝説の海の洗礼を真正面から受け、それでもなお若者たちは諦めることなく、奮闘し続けるのだった。

穏やかな風が吹き抜ける、心地のいい昼間。

怒涛の試練の数々を潜り抜けたメリー号、そのうえでルフィたちは、疲労困憊の様子で倒れ伏していた。

「ん~~~~~……」

幽鬼のようなうめき声が聞こえる中、気の抜けた声が響く。

のそりと体を起こしたその男は、大きなあくびをこぼして寝ぼけ眼をしばたかせた。
「くはっ、あ——寝た……ん？」

今の今まで眠り続けていたゾロが、肩をほぐしながら立ち上がる。

そして、足元でぐったりとうつぶせになっている仲間達を見下ろし、訝し気に眉を寄せたため息をついた。

「……おいおい、いくら気候がいいからって全員ダラけすぎだぜ？」

(お前……!!)

先ほどまでの困難に一切手を貸していなかったというのに、呆れた様子でぼやくゾロに一瞬で殺意が集まる。

だが、疲れ果てた彼らにもはや動く気力など残されてはいなかった。

ゾロは困惑気味に肩眉を上げ、そしていつの間にか船に乗っている見慣れない二人組の方を向いた。

「……なんでお前らがこの船に？」

「おそ——つ!!!」

「今そいつらの町へ向かってるんだ」

「まさか送ってやってんのか？ 何の義理があるわけでもなし」

「うん、ねエよ」

約束の岬からずつと寝続けていた彼には、Mr. 9とミス・ウエンズデーが乗っていることに純粋な疑問がわく。

そして同時に、この謎の二人組に対する疑惑が沸き上がるのを感じた。

「おーおー、悪いこと考えてる顔だ……。名前……何だったかな、お前ら……？」

「ミ……Mr. 9と申します」

「ミス・ウエンズデーと申します……………」

「そう……どうもその名前を初めて聞いた時からひつかかってたんだ、おれは」

「……………!!」

「どこかで聞いたことがある様な……ない様な……？」

最初から何か確信を持っているような、見透かされているような感覚に、二人は後ずさりながら大量の冷や汗をかく。

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべ、ゾロは二人組の顔を覗き込んでいた。

「まあいずれにしろ」

その顔が、唐突にがくりと沈み込む。

後頭部に感じる衝撃に顔をしかめながら振り向けば、そこには怒り心頭の様子で拳を構えるナミの姿があった。

「……あんた達今まで、よくものんびりと寝てたわね。起こしても起こしてもグーグーと

……!!」

「あア!!」

何を怒っているのか全く分からないゾロは、不機嫌そうに手をあげてきたナミを睨みつける。

が、再び思いつきり拳骨を食らい、痛みと困惑で目を白黒させる羽目になっていた。

「????」

「気を抜かないでみんな!! まだまだ何が起こるかわからない!!」

ようやく疲労困憊から立ち直ってきた一味を前にして、ナミが堂々とした態度で告げる。

「今やつとこの海の恐さが認識できた。 グランドライン 偉大なる航路」と呼ばれる理由が理解できた

!! この私の航海術が一切通用しないだから間違いないわ!!!」

潔いと言えば聞こえはいいが、言っていることは実に情けない開き直りである。

一味の重要なポジションである航海士がそんな不安になることを言っているのかと、ウソツプは思わず呆れた様子で凝視してしまった。

「大丈夫かよ、オイ」

「大丈夫よ!! それでもきつと何とかなる!! その証拠に…ホラ!! 一本目の航海が終わった」

不敵な笑みを見せるナミ。その目が見据える先に、それはあった。

水平線のど真ん中に鎮座する、サボテンのような丸っこい形の山の影。まだ少し遠く、おぼろげな影ではあるが、それこそルフィたちが求め続けていた場所の証であった。

「島だア!!!」

「でっけーサボテンがあるぞ!!!」

「ここがウイスキーピーク!!!」

「よかつた、無事に着いた…!!!」

歓声を上げる者、ほっと息をつく者、感嘆の声を上げる者、ようやくたどり着いた最初の目的地に、様々な反応が見られた。

すると、Mr. 9とミス・ウエンズデーが船の欄干の上に立ち、久々に不敵な笑みをルフィたちに見せてきた。

「それでは我らはこの辺でおいとまさせて頂くよ!!」

「送ってくれてありがとうハニー達、縁があつたならいずれまた!!」

「バイバイベイビー」

格好をつけて飛び降りると、二人はすさまじい勢いで島に向かって泳ぎ去っていく。

結局最後までよくわからない奴らだったと、ナミたちは呆れた様子でそれを見送るのだった。

「行っちゃった……」

「一体何だったんだあいつらは」

「ほっとけ!! 上陸だ——っ!!!」

「正面に川があるわ。船で内陸へ行けそうよ」

もう会うことはないだろうとさっさと切り替え、一味は上陸のための準備に取り掛かる。

だがここで、ウソップが思い出したように不安を抱き始め、やや青い顔でナミの方に視線を向けた。

「バ……バケモノとかいんじゃないか……!!」

「可能性はいくらでもある。ここは『グランドライン偉大なる航路』だ」

「そしたら逃げ出しやいいだろ」

「ちよつと待った。私達にはこの島に滞在しなきゃならない時間があるってことを忘れないように」

「何で」

ナミの注意に、ルフィは訝し気に眉間にしわを寄せて振り向いた。

その問いに、代わりにエレノアが答えた。

「この『ログホース記録指針』に島の磁気を記録させなきゃ、次の島に行きようがないんだよ」

「それぞれの島で『記録』のたまる早さは違うから、数時間でいい島もあれば数日かかる島もある」

「じゃあ、そこがすぐにでも逃げ出してエ化け物島でも、何日も居続けなきゃならぬエこともあるってのか…!!」

「そういうこと」

直面した問題に、ウソツプはさらに表情を青くし、他の面々も僅かばかりの緊張を見せる。

しかしただ一人、ルフィだけはそんな様子を一切見せていなかった。

「まあそしたらそんな時考えるってことで、早く行こう!! 川があるのに入らねエなんておかしいだろ!!」

「ま——あんたはそうだろうけど」

「ルフィの冒険なんてたいがい出たとこ勝負だもんね」

「あいつの言う通りだ。行こうぜ、考えるだけムダだろ」

「ナミさんのことはおれが守るぜ!!」

「お…おいみんな聞いてくれ…!! きゅ…急に、急に持病の『島に入つてはいけない病』が」

話している間に、島は輪郭がはつきり見えるほど近づきつつある。

どれだけ不安要素があろうとも、上陸して記録ログをためなければ話は進まないのだ。

「…じゃ、入るけどいい？ 逃げ回る用意と戦う準備を忘れないで」

ナミの確認に、全員が黙ってうなづく。

そして、島の中心にまで続いている川に入った時、エレノアの耳にある話し声が届いた。

「おい、ありや海賊船じゃないのか」

「何!? ほ…本当だ!!!」

案の定、島に住んでいる者達がいたのか、初めて見る海賊船に向けて驚きの声が向けられる。

「みんなに伝えろ!! 海賊だ!!!」

「海賊が来たぞオ!!!」

最初にメリー号を目撃した二人組が騒ぎ始めるのをきっかけに、その動揺は岸边近くに見える町中に広がっていく。多少のいざごぎは覚悟するべきか、と一味が身構え始めた。

だが、返ってきた反応は、ルフイたちの予想をはるかに違うものであった。

「ようこそ!!! 歓迎の町ウイスキーピークへ!!!」

花吹雪が舞い、陽気な音楽が奏でられる。

海賊を相手にしているとは思えないような、まるで英雄の外線を迎えるような笑顔と
歓声がぶつけられてきたのだ。

第52話 // 賞金稼ぎの巣 //

湧き上がる歓声、あこがれと期待に満ちた眼差し、風に乗って舞い降りてくる花吹雪。予想だにしない盛大な歓迎を受け、誰もが言葉を忘れてしまっていた。

「おお?」

「何だ化け物どころか歓迎されてるぞおれ達」

「どうなってるんだ……!?」

当然ルフィたちは困惑し、しかし向けられる好意的な感情に喜色を浮かべ始める。

キラキラと輝く子供の笑顔や、麗しき娘たちの黄色い歓声に、サンジやウソップは目を輝かせた。

「か……かわいい娘も、いっぱいいるぜ……!!」

「感激だア!!! ……やっぱ海賊ってのはみんなのヒーローなんじゃねエのか!!!」

「うおおお———い!!!」

何が何だかわからないとはいえ、歓迎されて機嫌を悪くする輩はそういない。

盛大な歓声に迎えられるまま岸に船をつけた一味は、整列した民衆の前に進み出た大柄な男と向かい合った。

「いらっつ……!! ゴホン、マーマーマーマ〜♪ いらっしやい、私の名はイガラツポイ。驚かれたことでしょうか、ここは酒造と音楽の盛んな町ウイスキーピーク。もてなしは我が町の誇りなのです」

長い髪をいくつもの筒状に丸めた、奇抜な髪形の男性、イガラツポイに紹介を受け、ルフィたちは思わず警戒を解く。

すでに敵意はないと判断したのか、そういう事なのかと納得した様子さえ見せていた。

「自慢の酒なら海のようにたくさんございます。あなた方のここまでの冒険の話を肴に宴の席を設けさせては頂けませぬ、ゴホン、マーマーマ〜♪ 頂けませんか……!!」

「喜んで〜っ!!」

町の雰囲気呑まれ、騒ぎ始めるルフィたちに呆れた視線を送るエレノア。

「ねエ、ところでこの島の『記録』はどれくらいでたまるの?」

「ログ? そんな堅苦しい話はさておき、旅のつかれを癒してください!!」

「わ」

「さアみんな宴の準備を!! 冒険者達にもてなしの歌を!!」

あれよあれよという内に、イガラツポイ達に町の中へと連れ込まれてしまう麦わらの一味。

記録指針の期間についての質問もはぐらかされたナミと視線を合わせれば、やはり彼女もすでに疑っている様子。

エレノアは小さくため息をつくど、やがてにやりと黒い笑みを浮かべた。

「それじゃ、前夜祭といきましようかね……」

「宴だア!!!」

すでに宴を楽しむ気であるルフイに呆れながら、エレノアはこれから起こる別の「宴」に思いを馳せる。

はたして罠にかかったのはどちらなのか。

沈みゆく夕陽には、真相を目の当たりにすることはできそうになかった。

「そこで、おれはクールに、こう言ったんだ。『海王類どもめ、おれの仲間達に手を出すな!!!』」

しやつくりをこぼしながら、ビシツと指を突き出した鼻の長い青年に向かって、娘たちの黄色い歓声が響いた。

「すてき——っ♡キャブテン C・ウソップ!!!」

「まア、あの『カインズルト 凧の帯大脱走』に関しちやあ、さすがのおれも少々震えたね… 『武者震い』ってやつだ」

酒場の一席を占領したウソツプが、ジョッキを片手に持つと娘たちの前で胸を張る。その堂々とした態度は、海王類たちを前にガタガタと震えていたことなどつゆほども感じさせなかった。

「うっぷ!!」

「まいった」

「どあ——つすこいぞ10人抜きだア!!!」

「おりや——っ!!」

「やつほ——ウ!!!」

「うあ——つこつちの姉ちゃん達は12人抜き!!! 何という酒豪たちだア!!!」

また別の席では、町の酒豪たちを相手にゾロとナミとエレノアが住人達と呑み比べ対決に励んでいる。

あたりには空の瓶やジョッキが転がっていて、すでにいくつもの熾烈な戦いが繰り広げられていたことが伺えた。

「おかわり——イ!!!」

「もーかんにん」

「うげ——こつちで船長さんがメシ20人前を完食!! コックが倒れたー!!!」

その隣の席では、腹を風船のようにばんばんに膨らませたルフィが、空の皿をもつて

催促する。相変わらずの底なしの胃袋である。

「うおおつ!! こつちのにーちゃんは!! 20人の娘を一斉にクドこうとしてるぞオ!!
何なんだこの一味はア!!」

そのさらに隣の席では、両手どころか背中にも数人の麗しき女性たちを侍らせたサンジがだらしない笑みを浮かべている。

一味は歓迎ムードでいっぱい酒場で、存分に宴を楽しんでいた。

「はっはっはっはっ、いや実にゆガ：ガ、ゴホン!! マーマーマ〜♪ 愉快な夜だ…!!
皆さんも楽しんでいただけている様で何よりです」

イガラツポイが朗らかな笑顔を見せながら話すが、みんな酒盛りやら料理やらに夢中になっていて一切注意を向けていない。

「いやホント、何よりで……………」

ただ一人、歓迎の町の町長は騒ぎはしやぎ続ける若者たちを前に、静かに笑みを浮かべ続けるのだった。

ウイスキーピークに、静かな夜が訪れる。

客人たちの笑い声ももう聞こえてはこない。酒豪のゾロたちもとうとう潰れ、ルフィも胃袋に限界を感じ、サンジやウソップは美女たちの膝の上で心地よい眠りに落ちてい

た。

「騒ぎつかれて…眠ったか…よい夢を…冒険者達よ…」

月光を背にそびえたつ巨大なサボテンの形の岩を眺め、イガラツポイが小さくつぶやく。

その表情から、客人に向けられていた笑みは完全に消えていた。

「今宵も………月光に踊るサボテン岩が美しい…」

「詩人だねエ、Mr. 8………!!」

一人佇むイガラツポイの背後から、複数の声と足音が聞こえてくる。

「君達か…」

現れたのは、一足先にウイスキーピークへとたどり着き、仲間へと得物の情報を伝えていたMr. 9とミス・ウエンズデー。そしてナミと飲み比べをしていたシスター、またの名をミス・マンデー。

「奴らは？」

「堕ちたよ………地獄へな…」

「ああ神よ、…ウツプ。よく飲むよく食う奴らだわ。こつちは泡立ち麦茶で競つてたつてのに…!!」

先ほどとは打って変わって、冷たい表情を見せるイガラツポイ改め、Mr. 8。

彼らこそウイスキーピークを拠点にし、やってきた海賊達をカモにする賞金稼ぎ達。酒と音楽で迎え、相手を油断させてから捕らえるという手法で、これまで稼ぎ続けてきた者達であつた。

ルフィたちも例外ではなく、全員の身ぐるみをはいだ後に賞金首は捕え、後の者達は始末する算段であつた。

「しかしわざわざ『歓迎』をする必要があつたのかねエ。あんな弱そうなたつた6人のガキにだよ……!!」 港でたたんじまえばよかつたんだ。ただでさえこの町は今、食糧に困つてんだからね。……どうせクジラの肉も期待してなかつたし」

「そういう言い方つてないじゃないのよ!!」

「そうだぞ、我々だつて頑張つたんだ!!」

「まーまー落ち着け。とりあえずこれを見る。奴らについてはちゃんと調べておいた」

まんまと騙された連中に落胆の様子を見せるミス・マンデーたちに、Mr. 8はある2枚の手配書を見せる。

そこに描かれていた顔写真と賞金額に、一同は驚愕をあらわにした。

「な……何イ!!? い……1億と!!?」

「3千万B^{ベリ}!!?」

「海賊どもの力量を見かけで判断しようとはおろかな、ミス・バン」……べ、マ……マ……

「……♪ ミス・マンデー」

「……あいつらが……!!」

「め……面目ない……」

咎めるような視線に、ミス・マンデーたちは素直に非を認めて頭を下げる。

欲に駆られて真正面からぶつかっていれば、ただでは済まなかつたのだと理解したよ
うだ。

「……だがまあ……もう片はついている。社長ボスにもいい報告ができそうだ……。さつそく
船にある金品を全て押収、奴らを縛り上げ……」

さつそくいガラツポイが、貴重な食糧を消費して罫にはめた賞金首カモたちを収穫しよう
とした時だった。

「……なア悪イんだが、あいつら寝かしといてやってくれるか。昼間の航海でみんな疲れ
てんだ……」

「昼間サボってた分、こういう時にこそしつかり頑張っておかないとねーゾロくん……」

唐突に聞こえてきた男女の声に、Mr. 8達はぎよつと目を見開いて振り向く。

ルフィたちの眠りこけている酒場の屋根の上で、刀を抜いた男と翼を広げた女の姿を
目の当たりにし、まさかという表情で固まってしまった。

「ミ……Mr. 8!! ミス・マンデー!! いつの間にか二人、部屋から逃げ出して……」

「貴様ら……!! 完全に酔い潰れたはずじゃ……!!!」

「劍士たるもの、いかなる時も酒に呑まれる様なバカはやらねエモンさ」

どやどやと集まってくる賞金稼ぎ達に不敵な笑みを見せながら、ゾロは馬鹿にしたように告げる。

その隣でエレノアは、若干呆れたような目を賞金稼ぎ達に向けていた。

「つまりこういうことだろ……? ここは『賞金稼ぎ』の巣、意気揚々と『偉大なる航路』に入ってきた海賊達を出鼻からカモろうってわけだ……!!」

「けっこうそれ……この先の海じゃ使い古された手なんだよねエ……」

後頭部で腕を組み、つまらなそうに身体を傾ける天族の娘の言葉に、賞金稼ぎ達は悔し気に歯を食いしばる。

しかしその表情も、二人が口にしたセリフで一瞬で驚愕のものに変化した。

「相手になるぜ、『バロックワークス』」

「!!!? き……貴様らなぜ我が社の名を……!!!」

社の規則である『秘密』。それがさっそく侵されていることに動揺の声が広がり、焦燥じみた冷や汗が噴き出していく。

そんな彼らを、ゾロはさも滑稽そうに見下ろしていた。

「昔おれも似た様なことやつてた時に、お前らの会社からスカウトされたことがある。

当然ケったけどな」

面白いように慌てている賞金稼ぎ達を見下ろし、ゾロはくつくつと笑い声をこぼす。船に乗りこんだMr. 9とミス・ウエンズデーの名を聞いた時点で、ゾロはその正体に気づいていた。そしてわざわざ正面から叩き潰すために、今の今まで泳がせていたのだ。

「……………!! こりや驚いた…!! 我々の秘密を知っているのなら消すしかあるまい…また一つ…いや二つ、サボテン岩に墓標が増える…!!」

何も知らないカモを狩り続けていた彼らが、初めて経験する畏にかかるといふ展開に、静かに怒りを燃やすMr. 8とその配下たち。

雲で陰っていた月が再び顔を出した瞬間が、開戦の合図であった。

「殺せつ!!!」

Mr. 8のの命令で、一斉に銃を構える賞金稼ぎ達。

しかしその時には、ゾロとエレノアの姿は屋根の上から消え失せていて、どこにも見当たらなかった。

「いないっ…!!! どこへ消えた?!!」

「……です」

慌ててあたりを見渡す賞金稼ぎ達のもとに、気の抜けた声が届く。

ハッと気づいた時には、賞金稼ぎ達の中に交じった二人が暢気に視線を交わしているのが見えた。

「…オシ」

「戦りますか?」

不敵な笑みを浮かべ、チャキリと各々の武器を構えるゾロとエレノア。

見下され、侮られているのだと察した賞金稼ぎ達は、怒りのままにエレノアたちに銃口を向けなおした。

「…野郎ナメやがって!!!」

「撃て!!!」

暢気に突っ立ったままの格好の標的に、全方向から銃弾が襲い掛かる。

しかし、困んだ状態で飛び道具で攻撃するのは愚行中の愚行、再び姿を消した二人にかすりもせず、賞金稼ぎ達は互いに銃弾を受ける羽目になった。

「バカどもが……………!!!」

「また消えたぞ!! 速いっ!!!」

「さっさと殺せ!! たかが剣士一匹と小娘一匹…」

不甲斐ない部下たちに眉間にしわを寄せるMr. 8だが、その顔の真横にスツと刃が突き出される。

気づけばいつの間にか背後に回ったゾロが、不敵な笑みとともにMr. 8の髪に刀を差し入れて佇んでいた。

「聞くが、増やす墓標は一つでいいのか……………?」

少しでもズレれば、一瞬で首から上が胴体から離れるかもしれない恐怖に固まるMr. 8。

微塵も動く事が出来ないMr. 8に気づいた賞金稼ぎ達が、再び銃口をゾロに向けた。

「いたぞ、そこかア!!!」

「バ…バカよせ!! おれごと撃つ気か、やめろ!!!」

このままでは自分も死ぬと慌てたMr. 8が怒鳴ると、引き金にかけられた賞金稼ぎ達の指が止まる。

その際にMr. 8は、なぜかどこからともなくサックスフォンを取り出し、思いつきり吹き鳴らした。

「ツイガラツパ!!!」

吹き鳴らされたサックスフォンから無数の弾丸が飛び出し、周囲に飛び散って食らいついでいく。

仲間のはずの賞金稼ぎ達も犠牲になるが、その中にゾロとエレノアの姿はなかった。

「おっかないなア…あのサックス」

物陰に隠れ、いったん出直したエレノアが機械鎧オートメイルをトントンと踏み鳴らしながら眩く。

しかし言葉とは裏腹に、その表情はわくわくと期待と興奮に輝いていた。

「さア…新しく生まれ変わった私の相棒の力、ぞんぶんに試させてもらおうかね…!!」

親友の手によって新調された、自らの攻撃の要たる義足が、月光を反射して武骨ながらも美しい輝きを放った。

第53話 ヲウゐスキークの稼ぎ頭

「照準よし、力場安定、発射用意完了……!!?」

シヤキン、と展開した爪先の刃を携え、エレノアは再び賞金稼ぎ達のいる方に躍り出る。

賞金稼ぎ達はすぐさま気づき、銃口や武器を向けてくるがそれよりも早く、エレノアの刃が目にも留まらぬ速さで突き出された。

「『魔竜殲剣』!!!」

無数の刺突をくらい、空中に縫いとめられる賞金稼ぎ達。

最後に繰り出された鋭い一撃により、格好の的となった賞金稼ぎ達は一齐に吹っ飛ばされ、血反吐を吐いて家々に突っ込んでいった。

「ぎゃあああ!!!」

「ほんつとに軽いね、この子…」

バタバタと倒れ伏していく賞金稼ぎ達に目を向けることもなく、エレノアは新たな機械鎧オートメイルの予想以上の性能の高さに嘆息する。

そして感心しながらも、次々に襲い掛かってくる男たちをひらりひらりと躲し、軽々

と屋根の上に飛び乗り、翻弄し続けていた。

しかしそのうち、不安定な足場に追い込まれ囲まれてしまう。調子に乗って、周囲の確認をおろそかにしてしまったようだ。

「今だア!!!」

「囲んで袋にしちまえエ!!!」

「ここでならさつきのような回避はできまいと、賞金稼ぎ達が馬鹿の一つ覚えのように殺到してくる。

エレノアは呆れたため息をつき、パンツと手のひらを打ち合わせた。

「的が多いと、絞る必要がないから楽だね」

重ねた手のひらの間で急激な気圧の変化が生じ、それによって凄まじい勢いの風が収束し弓の形を作っていく。

それを夜空に向かって構え、光と風でできた矢をつがえると、エレノアはそれを真上に向かって撃ち放った。

「ワイジャヤ・ヴァジユラ
雷 霆 神 矢 〃!!!」

「ぎやああああ!!!」

撃ち上げられた矢は、空中で無数に分裂して周囲に降り注いでいく。

まるで夜空の星が全てやとなって降ってくるかのような幻想的な光景が生み出され、

賞金稼ぎ達はその無数の光に貫かれていった。

ぼとぼと落下していく賞金稼ぎ達を見て、Mr. 8 達は冷や汗を流して凍り付いていた。

「……………!! やはりさすがは1億の賞金首……………!! そう簡単には首を取らせはせんか……………!!」

「とうかこいつが本当の船長なら納得がいくぞ……………!! あの手配書は海軍のミスだな……………!!」

「なるほど……………だったらそのつもりで戦わなきゃね……………そうよね、あんなニヤケた奴が3千万なんておかしいと思った……………!!」

まともに時間稼ぎにもならないほどの力量差に、Mr. 8 達は警戒をさらに上げる。

なぜか船長であるルフィが勘違いされていて、格下に思われてしまうルフィの人徳のなさにため息がこぼれた。

(……………なんか知らないけど、うちのアホ船長がデイスられてる……………)

否定したいが、正直事実を知らなければエレノアも同じ感想を抱いていたので黙っておくことにする。とうか単純に説明するのが面倒くさかった。

「『イガラツパ』!!」

「よっ」

渋い顔で立ち尽くすエレノアに向けて、Mr. 8の散弾銃が襲い掛かる。

余裕の表情でそれを躲していると、Mr. 9とミス・ウエンスデーのペアが動いた。

「いくぞ、ミス・ウエンスデー!!!」

「ええ、Mr. 9!!! 来なさいカル——っ!!!」

「クエーツ!!!」

先行するMr. 9に続き、ミス・ウエンスデーが指笛を吹き、何かを呼び寄せる。

それに答えたのは、凄まじい跳躍で屋根の上に飛び出した、ダチヨウと見間違えそうなほどに大きなカルガモだった。

「お手」 じゃなくてここへ来なさい!!!」

なぜか屋根の端で手を差し出すカルガモに怒鳴り、ミス・ウエンスデーが自分から駆け寄っていく。

いまい何がしたいのかわからない残念な美女に、エレノアはつい半目で立ち尽くしてしまった。

「あれは放っておこう…」

「ハツハツハツハツハ!! 余所見をしてもいいのか? この、おれのアクロバットについて来れ…」

「あーうっとうしい」

「を才!!!」

金属バットを両手で持ち、妙に派手な動きで向かってきたMr. 9を、エレノアは容赦なく蹴り飛ばし、屋根の上から蹴り落す。

だんだん敵の扱いが雑になり始めていた。

「ああああ!!!」

「はい、おしまい」

悲鳴も破壊音も聞こえないふりをし、深く深くため息をつく。

だんだんこの賞金稼ぎ達の相手をする事自体が、恥ずかしく思えてきていた。

「もつとマシな奴いないのオ…?」

「マシな奴!!! それは私つ!!! 覚悟しなさい、M s. エンジェル!!!」

肩を落とすエレノアに、先ほどのカルガモの背の上に立ったミス・ウエンズデーが叫ぶ。

うんざりした様子で振り向いたエレノアに、ミス・ウエンズデーは自分の衣服、いくつもの円が重なった模様をぐるぐると回しながら見せ始めた。

「さア…私の体をじつと見…」

「スキだらけっだっつーの」

「きやああああ!!!」

何かしらの幻惑でも見せようとしていたのだろうが、そんなもの見なければ何の意味もないだろうとエレノアは容赦なく刃の蹴りを放つ。

ミス・ウエンズデーが涙を浮かべてのけぞっている間に、エレノアは懐から宴でとつておいた肉をひと切れ摘み出した。

「ほれ、ごはんだぞー」

「クエツ!!!」

「なに釣られてんのよカルー!!!」

鼻先にぶら下げられた食べ物に、カルガモは涎を垂らして身を乗り出す。

主人に制されても止まる様子はなく、右に左に揺さぶられる肉をじつと凝視し続けた。

「ほくらほくら………とつてこーい」

「クエーツ!!!」

「いやああああ!!!」

頃合いを見計らったエレノアが、ポイッと適当な方向に肉を放り投げる。

完全に釣られたカルガモは、背中にミス・ウエンズデーを乗せたまま肉を追いかけ、そのまま屋根の上から悲鳴とともに落下していつてしまった。

「イガラツパ!!!」

ぼりぼりと頭をかいて立ち尽くしていたエレノアを、再びMr. 8の散弾銃が狙う。いち早く察したエレノアが屋根から飛び降り、それを躲すと、Mr. 8は忌々しそうに舌打ちして顔を歪めた。

「ちよこまかと…!! 私の真の恐ろしき、よく噛みしめろ」

「あの散弾銃ショットガンちよつと厄介だな…どう攻略するべきか」

避けるのはたやすいが、接近するのは難しいとさすがに攻めあぐねるエレノア。

すると、すぐそばの瓦礫の下から血まみれになったMr. 9が勢いよく顔を出した。

「ドウあアア〜!! よくも非道い目にあわせてくれたモンだ…!! 許すまアじ!!!」

「知らないよそんなの」

「カッ飛ばせ仕込みバット!!!」

呆れた様子で棒立ちになっているエレノアの右脚に、Mr. 9が突き出した金属バットの先端が絡みつく。

からめとられた義足によって、エレノアの動きがかなり制限されてしまった。

「ハツハツハツハ脚一本封じたぜ!!! 今だ!! やっちまえMr. 8つ!!! ハツハツハツ

ハツ逃がさねエぞ!!!」

「その通り!! 下手に動くとおなたの大切な仲間の命まで奪うことになるわよ」

「ハツハツハツハいいぞ、ミス・ウエンズデー!! これで貴様は逃げられもせず!! 攻撃

もできねエというわけだ!!」

さらに視線を向ければ、さつき落下していったミス・ウエンズデーが、眠りこけているルフィののど元に刃をつきつけているのが見える。

命の危機にあるというのに暢気に鼻提灯を膨らませているルフィを見て、エレノアのごめかみに血管が浮き立った。

「…あいつ後でボコる」

「砲撃用ゝ意!!!」

「はア!!?」

静かに怒りを燃やすエレノアに顔を向け、Mr. 8がネクタイを引っ張る。

すると筒状に丸められた髪の間から砲身が覗き、エレノアに照準が定められた。

「イガラツパツパ!!!」

「オモチャかあんたは!!!」

六問の大砲が火を噴く寸前に、エレノアはその場から大きく飛翔して直撃を防ぐ。左右に動くことはできずとも、上に逃れる事ならば可能であった。

驚愕に大きく口を開けて固まる賞金稼ぎ達の前で、エレノアはもう一度。パンツと手のひらを打ち合わせた。

「バースユバタ祭火神雨!!!」

エレノアの右手の平の上で、青い光と風が眩い渦を巻く。

見る見るうちに輝きを増していくそれを、エレノアは弓矢の形に変えて、Mr. 8達の目前に向けて撃ち放つ。

すると一気に風と光が炸裂し、凄まじい衝撃があたりものを吹き飛ばしていく。まるで爆弾が至近距離で爆発したかのような威力に、彼らの意識は一瞬にして刈り取られてしまった。

「二丁上がりイ!!」

誰一人動くものがいなくなった中、満足げな笑みを浮かべたエレノアが静かに降り立つ。

月光を背に一人天を舞うその姿は、実に幻想的であった。

どこかから聞こえてくる轟音が、ある一軒のボロ家のベッドの上にいる男の眠りを覚ました。

申し訳程度にかけられた毛布を蹴飛ばし、涎を垂らしていた彼は、不機嫌そうに眉間にしわを寄せ、気だるげに体を起こした。

「……………んア? 何だ、外がずいぶん騒がしいな…」

バリバリと金色の髪をかきむしると、その頂点でピンツと一房アンテナのように立ち

上がる。

あくびをこぼす彼に、ボロ家の外から入ってきた大柄な人影が説明した。

「昼間に来た海賊が暴れてるらしいよ、兄さん…なんかもうほとんどやられちゃってるんだって」

「かーっ!! なっさけねエなア!! 『おれ達だけで十分だ』なんて大口叩いといてザマアねエゼ!!」

ベッドの上で胡坐をかき、話にあつた同僚たちの不甲斐なさを嘆いて、完全に馬鹿にしたように吠える。

やれやれと言つた様子で肩をすくめていた彼は、やがて面倒くさそうに腰を上げると、壁に掛けてあつた赤い外套を掴んで歩き始めた。

「しようがねエ。ちよいと暴れてやるか」

口ではそんな風に言いながらも、彼の表情は獲物を待ちわびた狩人のように、確かな興奮を滲ませていた。

「ぎゃあああああああ!!」

「ミ……ミス・マンデー!!!」

女性にしては大柄な体躯を持つミス・マンデーが、顔面を一人の剣士に掴まれて悲鳴

を上げる。

額から血を流したゾロは、獰猛な獣のような笑みを浮かべながら、さつきこの女性から受けた一撃のお返しとばかりにさらに力を強めた。

「どうした力自慢。力比べが望みじゃねエのか？」

「あ……ああ!!」

ミス・マンデーはまともに返答することもままならず、どうかゾロの手を外させようともがき続けるも、さしたる効果を見せられないでいた。

周りにいた賞金稼ぎ達は、自分たちの上司にあたる女性が手も足も出せずにいる光景に戦慄の表情を浮かべ、腰を抜かしかけていた。

「うわああ!! ミス・マンデーが力で敗けたア!!!」

「あり得ねエ!!! ウソだア!!!」

「続けようか バロツクワークス」。ケンカは洒落じゃねエんだぜ?」

口元を流れ落ちる自身の血をなめ、ゾロは挑発的に彼らに告げる。

明らかに馬鹿にされているとわかっていても、挑もうと思う恐れ知らずはこの場になかった。

しかししばらくすると、何かに気づいた様子の彼らはその表情を一変させ始めた。

「……………!!! は……はははははは!!! 調子に乗っていられるのも今のうちだ!!!」

「あ?」

急に態度を変え、ドサツとミス・マンデーを打ち捨てたゾロを挑発し始める賞金稼ぎ達。

訝し気に眉を寄せたゾロは、次の瞬間背後に感じた殺気にゾクリと震えを走らせた。

「うおお!!」

とつさの判断で、ゾロがその場から跳躍すれば、さつきまで彼が立っていた場所に巨大な拳が突き立てられた。

凄まじい轟音とともに、地面にミス・マンデー以上の亀裂を走らせたその影、分厚く大きな鎧を纏ったその人物は、辺りを見渡して呆れた様子を見せた。

「うわア…ホントにみんなノされちゃってるよ。頼りないなアホント……」

見るからにいかつい鎧の大男は、見た目に似合わない幼い子供の声で、あちこちに転がっている賞金稼ぎ達を見やる。

鎧の大男は兜の奥の目を光らせると、周囲の惨状の原因であるゾロをじろりと睨みつけた。

「とりあえずお兄さん。恨みはないけど捕まってくれないかな? ボクらにも生活があるんだ」

「やっちまえエ!! Mr. 10!!!」

「ウィスキーピーク一番の稼ぎ頭ア!!!」

鎧の大男が告げると、たちまち勢いを取り戻していく賞金稼ぎ達に呆れつつも、ゾロは萎えかけた注意を引き戻し、再び構えた。

「……ようやく、主力の登場つてところか」

にやりと笑みを見せ、ゾロは和道一文字を咥え、残りの二本を両手で持つ。

全力の状態である三刀流の構えをとったゾロに対して、鎧の大男は右足を一步引いて身体を斜めにする拳法の構えをとった。

「バロツクワークス稼ぎ頭Mr. 10。『海賊狩り』のゾロ……相手にとって不足はないですよ!」

「面白エ。他の奴ら相手じゃちと不完全燃焼気味だったんだ……お前が相手なら楽しめそうだ」

相手が確かな実力の持ち主であることを察し、ゾロは自身の闘気を高めていく。

ピリツとゾロと鎧の大男の纏う空気が張り詰め、かすかな風の音だけが響く静寂があたりを支配し始めた。

ちなみに、両者が睨み合っている間に、他の賞金稼ぎ達はこれ幸いとスタコラサツサとその場から逃げ出していたのだった。

第54話 “夜は終わらない”

「……さてさて、ゾロ君が帰ってくるまでヒマだなア…。一人で飲むのもつままないし、どう時間をつぶしていようか……………」

片っ端から叩きのめしてやった賞金稼ぎ達を、適当な場所に放り捨てると、エレノアは頭上の綺麗な月を見上げながら考える。

戦闘の後だからかすっかすり目もさえている。しかし、暇をつぶせるようなものは何も残っていないことに本気で悩んでしまっていた。

「……ん？」

そんな時、エレノアの耳がどこから聞こえてくる戦闘の音を捉える。

ゾロがまだどこかで賞金稼ぎ達を相手にしているのだろうかと思えば、ふと相手の方の声に何か引つかかるのを感じた。

「あれ？ 何だろ……聞き覚えのある声を聞いた気がする」

気になったエレノアは、使命感のようなものを抱きながら、音のする方へと歩き始めた。

「おらア!!!」

「はっ!!!」

凄まじい金属音とともに、ゾロの剣と鎧の大男の拳が激突した。

かとおもえば、衝撃をいなしたゾロが鎧の腕を弾き、接近して胴に向けて刃を振るう。しかしゾロの剣の速度を見切った大男は刀の腹に掌底を放って反らし、反撃とばかりに拳を突きだす。

「チツ…!! 無駄にだけエ身体しやがって…!!!」

「好きでこうなつたんじやないやい!!!」

それを紙一重で躲し、ゾロは力尽くで鎧の防御を抜くために斬撃を放ち続けた。大男もそれを反らし、一進一退の攻防が繰り返される。

すると、不意に体勢を落としたゾロが三本の刃を真下から振り上げ、大男の両腕をかち上げた。

「!!!?」

ゾロの馬鹿力が加わったことで、大男の体がわずかに浮き体勢が崩れる。

そのすきに、ゾロは曲げた足をバネのように伸ばして大きく跳躍し、防御が緩んだ顔面に狙いを定めた。

「おれとやるには……ちつとばかり経験がたりなかつたな」

「しまっ……!!!」

「そのツラ拝ませてもらおうぜ!!」

空中でコマのように回転したゾロが、その勢いに乗せた斬撃を放つ。

強烈な横薙ぎは大男の兜に直撃し、ガアン!!と凄まじい音を立てて弾き飛ばした。鎧の中の素顔を見てやろうと、ゾロがにやりと笑みを浮かべた時。

中身が詰まっているはずの鎧の中から、勢い良く鋭く尖った刃が突き出された。

「!!? うおっ……!!!」

間一髪、ゾロは大きく背中を反らすことで放たれた刺突を躲し、大きく後方に跳躍することで距離を稼ぐ。

驚愕で乱れた呼吸を整えていると、暗い鎧の中から口惜しげな舌打ちが聞こえてきた。

「あくくくつそオ…今のは入ったと思っただけどなア…!! いいカンしてやがるぜ」
海賊狩り”…!!!」

膝をついた鎧の首から、ずるずると金髪の小柄な青年が姿を現してきた。

向けられる金の鋭い瞳にゾロは大きく目を見開き、僅かにタイミングがずれていれば頸動脈を切られていたという事実冷や汗を流す。

「……………なんだア? あのゴツイ鎧の中はずいぶんとちっこい奴が入ってたんだな…」

内心の動揺を悟られないよう、精一杯の虚勢のつもりで挑発の言葉を発するゾロ。しかしその瞬間、ゾロの前に姿を現した金髪金目の青年のこめかみに、ビキイツ!!と太い血管が浮き立った。

「誰が豆つぶドちびか——っ!!!」

「うおおおおおおお!!」

パンツと両手のひらを打ち合わせた青年が地面を叩いた瞬間、土が巨大な拳の形となつてゾロに襲い掛かつてきた。

慌てて飛びのいたゾロは、その攻撃に強い既視感を覚えた。

「この技……こいつ……!!! 錬金術師か!!!」

「逃がさん……!! おれをチビといったその罪!!! 万死に値する!!!」

予想以上の強敵の出現にゾロは戦慄するが、攻撃した本人は相手の態度の変化など微塵も気にしていない様子であった。

ただただ、自分の外見に対して告げられた言葉に激しい怒りを燃やしていた。

「ちようどいい……他の錬金術師の実力がいかほどのものかはからせてもらうぜ……!!」
だがゾロも、いつまでも呆気にとられているようなタマではない。

刀を構え、いかなる攻撃が来ようとも対処できるように気合いを入れなおした。

そんな彼の周囲を、大きな影が覆い隠した。

「よそ見していると危ないよ、お兄さん」

「!!! 中身が少ねエと思つたら……まだ中にもう一人いたのか!!!」

先ほど金髪の青年が着ていた鎧が近づいてくるのが見え、ゾロは咄嗟に二人で鎧の中に入っていたのだと考える。

こうなればもう一人の顔も拝んでやろうと、背後から殴りかかつてきた鎧の兜を弾き飛ばした。

「なっ……何イ!!!」

だが、その考えは叶わなかった。

弾き飛ばした兜の下には、文字通り何もなかったからだ。

「あーっ!!! また僕の頭が!!!」

「あの野郎……!!! 鎧の中身空っぽだったぞ!!! どうなってやがる!!!」

あまりの驚きで思いつき後ずさるゾロの前で、鎧は首を探して右往左往していた。

何度見直しても、鎧の中はがらんどろで何かが入っているようには見えない。まるで亡霊かなにかのような不気味さに、ゾロはしばらく開いた口がふさがらなかつた。

「見られたからには……!!! その口閉じさせてもらうぜ!!!」

鎧に兜を手渡した金髪の青年が、そう言つてゾロを鋭く睨みつける。

手の甲から伸びた刃に手を添え、青年は獰猛な笑みを浮かべながらゾロに向かって突

撃していった。

「おれからいくぜ!! そらそらそらア!!!」

「ぐっ……!」

鎧から出たことで素早さを増した攻撃に、距離を測り損ねたゾロが苦悶の声をこぼす。

素早くも相当に重い攻撃を放つ腕を狙うも、甲高い金属音とともに弾かれて火花を散らすだけであつた。

(こいつも機械鎧……!!?)

攻撃といい義肢といい、仲間とよく似た攻撃を繰り出してくる相手にゾロはかなりの苦戦を強いられていた。

苦し紛れに力強く横薙ぎを放つも、青年が急に後方に引き下がって空振りに終わった。

「このっ!」

「よっ!!! あとは頼むぜ、アル!!!」

「任せて、狙い撃つ!!!」

軽々と宙に浮いた青年が、後方に控えていた鎧と位置を入れ替わつた。

鎧が地面に描いた奇妙な模様に触れると、青い閃光が走って地面が盛り上がり、

幾丁もの銃を生み出していった。

「南ノ果^{ムスベル}テノ炎^{ヘイム}ノ世界^ム」!!!」

目を見開いて固まるゾロに向かって、作り出された銃が一斉に火を噴く。

避ける暇さえ与えず放たれた銃弾は、ゾロを中心とした大きな爆発を生じ、激しい炸裂音を響かせた。

「っしやあ!!! ざまア見やがれ!!!」

自分のもつとも嫌いな言葉を口にした相手を仕留めたことで、青年は思わずその場でガッツポーズをとる。

そのまま小躍りまで始める彼だったが、爆発地点で上がっていた炎がゆらりと揺らめくのに気が付いた。

「三刀流……!!!」

聞こえてきた声に、青年と鎧はさつと表情を変えて身構える。

防御態勢に入った二人に、炎の中から飛び出してきた修羅が三本の刃を振りかざした。

「狒^{ひひだるま}火達磨^ま」!!!」

炎を纏ったすさまじい一撃が、青年と鎧に襲い掛かる。

鎧の一部に浅く、青年の左足の甲にも傷が刻まれるも、それ以上の目立った外傷はつ

けられずに終わった。

ザザッと地面を滑った一人と一体は、冷や汗を流しながら舌打ちした。

「やっぱ強エな…!!」

「うん…!! 東の海で噂イーストブルになってただけのことはあるね…!!」

「だが…おれ達兄弟の相手じゃねエ…!!」

青年はさらなるやる気をみなぎらせた笑みを浮かべ、自分の拳を打ち付けて気合いを入れなおす。

鎧はそんな青年にやれやれと言った様子で肩をすくめるが、自らその隣に立って拳を構えていた。

「ケツ…同時に来ると厄介だな。錬金術師つてのがこうもやりづれエ相手とは…」

炎を振り払ったゾロもまた、青年たちに険しい視線を向けていたが、その目は明らかに高揚で燃えている。

航海を始めてようやく出会えた好敵手に、戦闘意欲が刺激されて仕方がないようだった。

「こっからは本気でいくぜ…!!」

「うん!!」

「上等だ…!!」

再び向かい合った両者が、互いの武器を携えてタイミングをはかる。次で決着をつける。そんな気迫が高まり始めた時だった。

「エ~~~~ド~~~~く~~~~ん♪」

不意に、聞きなれた女の声が響き渡ってきた。

「ア~~~~ル~~~~く~~~~ん♪」

ゾロはいい所で邪魔をされたといった様子で顔をしかめるが、相手はまた違った反応を見せていた。

雷かなにかに撃たれたかのように、ビクウツ!!と大きく全身を震わせたのだ。

「……………この声は!!」

「まさか…まさか……………!!!」

青年と鎧は、壊れた人形のようにぎこちない動きでゆっくりと振り向いていく。

ただ事ではない様子を嗅ぎ取ったゾロは、一体何が起ころうとしているのかと青年たちの背後へと目を凝らした。

「二人とも……………こんなところでなくやってるのかにやア~~~~?」

はたして現れたのは、ゾロがやはりよく知っている女錬金術師だった。

しかしいつもの彼女とはどうにも様子が違って見える。具体的に言えば、その顔に浮かんでいるのは奇麗な笑顔なのに、纏っている雰囲気は穏やかではなかった。

「あ……………あ……………!!!」

「姉……………弟子……………!!!」

「は？」

訝し気に眉を寄せるゾロは、凄まじい殺気を放っているエレノアに、青年と鎧は聞き捨てならない言葉を発したのを聞いた。

青年と鎧は、もはやゾロのことなど忘れたかのように凍り付き、ガタガタと震えながら立ち尽くしていた。

「あ……………姉弟子!! な…何でこんな所に……………!!!?」

「し……………白ひげ」の船にいるはずじゃ……………!!!」

エレノアに真っ直ぐ見据えられている一人と一体は、どうかかこの窮地を脱しようと思死に頭の回転させているようだ。

が、徐々に近づいてくる天使の娘の前に、恐怖でまともに思考することもできずにいる様でもあった。

「……………あいつら、まさか知り合いなのか……………?」

呆然とゾロが呟いていると、青年たちのすぐ近くまで歩み寄ったエレノアがこてんと

首をかしげた。

「政府の狗に成り下がったと聞いたのに……今度は賞金稼ぎに転職ですか……ずいぶんいいご身分ですねエ……？」

「い、いやいや待って待って待ってくれ姉弟子!!」

「こつ……これには海より深く海より広いワケがあつて……!!!」

滝のような冷や汗を流し、極寒の河に放り込まれた後のように震える二人が言い訳を口にしようとする。

だがそんな二人の言い分は微塵も聞かず、エレノアは自分の両手のひらをパンツと打ち合わせた。

「問答無用!!」

その手が地面に触れた瞬間、先ほど青年たちが放っていたものとは比べ物にならないほどの青い輝きが迸った。

「師匠に代わってお仕置だア——!!!」

「ぎゃあああああああ!!!」

エレノアの触れた地面が変形し、まるで大河の洪水のような勢いで造形された拳の嵐が青年たちに襲い掛かった。

青年たちは悲鳴を上げて逃げ惑い、やがてつんのめるように転んでしまった。

「まっ……!! まま待つてくれ姉弟子!!! 話を!! 話を聞いてくれ!!!」
「聞きません……黙って死ね」

なんとか距離だけでも稼ごうと、しりもちをついたまま後ずさる青年と鎧。

しかしエレノアは、傍からはあまりに憐れな彼らに一切の遠慮も手加減もしなかつた。

「カラドボルグ虹霓之劍!!!」

「ぎやああああああ!!!」

青い閃光を纏う手刀を地面に突き立てた瞬間、光が地面を伝って青年たちの真下で炸裂する。

次の瞬間、凄まじい輝きとともに地面が爆発し、青年と鎧は空中に勢いよく投げ出されていった。

「もう勘弁してくれ姉弟子イ~~~~~!!!」

「ごめんなさア~~~~~い!!!」

「フフフフ………逃がさないよ……!!!」

ひゆるるる……どこかへ飛ばされていく青年と鎧を、エレノアは底冷えする笑みを浮かべたまま追いかけていく。

一人残されたゾロは、獲物を横から搔つ攫われた虚無感と嵐の後のような寂寥感に、

反応することもできずにいた。

「……なんだありや」

そんな眩きにこたえてくれるものは、この場のどこにもいない。

肩をすくめたゾロは、やがて呆れたように視線を外し、気だるげに歩き始めた。

「とりあえずまア……終わりだな。飲みなおすか」

この何とも言えない虚無感は、酒でしか埋められないような気がしていた。

「どわっ……!!」

「やぐつと追いついたよ……エルリック・エドワードにエルリック・アルフォンス……」

町中を駆け回り、逃げ続けていた青年と鎧は、やがて行き止まりに追い詰められていた。

壁に背を押し付け、それでもなお逃げようとしている彼らに、エレノアはボキボキと拳を鳴らして近づいて行つた。

「さくて……どう料理してあげようか……」

「まっまっまつ待つてくれ!!! おれ達ホントに賞金稼ぎになつたわけじゃないんだ!!!
なっ!!」

「うん!! そうなんだよ姉弟子!!!」

金髪の青年・エドワードの必死の命乞いに、鎧・アルフォンスもブンブンと残像が残るほどの勢いで首肯する。

しかしエレノアは、そんな懇願を鼻で笑ってあっさり却下した。

「そういうわりには、さつき『一番の稼ぎ頭』とか言われていい気になってたみたいですけどねエ…?」

「はウっ!!!」

「出たよ地獄耳!!!」

ゾロとのやり取りや、他の賞金稼ぎからの評価を聞かれていたらしく、エドワードもアルフォンスもギクツと思いい切り目をそらした。

少なくとも、いやいや賞金稼ぎをやっていたわけではなかったようだ。

「だいたいどんな理由があつて『国家錬金術師』が賞金稼ぎみたいな闇の世界に………ん?」

問い詰めようとしたエレノアの耳に、ふと気になる声が届いた。

——社長の言葉はこうだ、『おれの秘密を知られた』。

——どんな秘密かはもちろん、おれも知らねエ。

——我が社の社訓は『謎』……。

社内の誰の素性であろうとも決して詮索してはならない。

ましてや社長の正体など言語道断。

——…それで、よくよく調べ上げていけば、ある王国の要人がこのバロックワークスに潜り込んでるとわかった。

物騒な会話に、そして聞こえてきた気になる単語に、エレノアの眉間にしわが寄った。

「……………王国の要人？」

「!!? な…何で姉弟子がそのことを…!!」

「まさか…!!」

思わず口をついて出ていたエレノアの声に、エドワードとアルフォンスはハッと顔色を変えた。

先ほどの命の危機の顔色とは違う、大事なものが危険にさらされているかのような、そんな必死さを感じさせる様子だった。

「すまん姉弟子!!! 詳しい説明は後だ!!!」

「何てこった…!! あの人が危ないっ!!!」

「あつ、ちよつと…!!」

エドワードとアルフォンスは、エレノアを押しよけるようにして走り去っていく。

一瞬怒りを忘れて立ち尽くしていたエレノアは、続いて聞こえてきた何者かの声に、思考が停止するのを感じた。

—— 罪人の名は、アラバスタ王国護衛隊長イガラム!!

…そして、アラバスタ王国 “王女” ネフェルタリ・ビビ……!!!

「ウソオ!!!」

偶然耳にしてしまった驚愕の事実には、エレノアは思わず目を見開いた。

第55話 “三つ巴”

カルガモのカルーの背に乗り、ミス・ウエンズデー、改めネフェルタリ・ビビは闇の中を急ぐ。

背後から迫る、裏切り者を始末するために遣わされたペアをまくために。

「見つかった………!! 急いでカルー!! サボテン岩の裏に船が泊めてあるわ!!」

「クエーツ!!」

「キャハハハツ!!」

「無駄なあがきだ」

必死なビビたちを嘲笑うように、バロックワークスから派遣されたエージェント、Mr. 5とミス・バレンタインは嘲笑うように追いかけていく。

その時、ビビたちの向かう先に、丸太を担いだ見覚えのある大柄な人影が割り込んだ。

「ミス・マンデー!!」

「行きな! ここを抜けたら船に乗れる」

思わず立ち止まったビビに、ミス・マンデーは背後に親指を向けて先へ行くように促す。

戸惑うビビに、ミス・マンデーは彼女を庇うように立ち、Mr. 5ペアを見据えた。

「あたしは、ここであいつらを食い止める」

「だけど…」

「あの怪力剣士と魔術女のお陰で、どのみちあたし達は任務失敗のバツを受ける。どうせなら、友達の盾になってブチのめされたいもんだ……!!」

事情は知らないが、ビビが何かしらの想いを背負っていることを察していた。

ビビのペア、Mr. 9もビビを逃がすために犠牲となったことで、ビビはためらうように歯を食いしばった。

「行きな!!!」

「ありがとう!!!」

ミスマンデーはそんな彼女の背中を押し、自らが盾となって丸太を構える。

Mr. 5はそれを、安い三文芝居でも見せられているかのような苛立たしげな表情で眺めていた。

「Mr. 9に続きお前もか、ミス・マンデー」

「キャハハ、茶番ね」

Mr. 5に賛同するように、ミス・バレンタインも大きな嘲笑の声を上げる。

雄叫びとともに丸太を振りかぶるミス・マンデーの前で、Mr. 5は自分の服の袖を

まくり上げ、大きく振りかぶった。

「この…バロツクワークスの、恥さらしがア!!!」

Mr. 5の腕がミス・マンデーに触れた瞬間、ミス・マンデーの上半身が一瞬で爆炎に包まれた。

凄まじい爆発に、ビビはカルーの背に乗ったまま大きく目を見開くも、悔し気に顔をしかめて逃走を続けた。

「おれは全身を起爆することのできる爆弾人間。この『ボムボムの実』の能力ちからによって遂行できなかった任務は、ない!!!」

倒れたミス・マンデーを蹴りどかしたMr. 5は、なぜか自分の鼻の穴に指を突っ込み、中にたまっていたものをほじくり丸め始める。

それを親指の先に乗せ、中指を丸めるとビビに向けて構えてみせた。

「おれ達からは決して逃げられねエ。鼻ノーズ・ファンシー・キャノン空想砲!!!」

Mr. 5の指が、丸めた鼻くそをビビに向かって弾き飛ばす。

悪魔の実の力によって小さな爆弾となったはなくそが、急速な勢いでビビに迫った、その時だった。

突如ビビの背後で地面が盛り上がり、壁となつてはなくその爆発を受け止めたのだ。

「ふい~~~~っ!!! 間一髪だったぜ!!!」

「まにあつてよかつた!!」

自分への攻撃が防がれたことで、驚愕で立ち止まったビビの前に、二つの影が割つて入る。

小柄な金の髪の青年・エドワードと鎧の大男・アルフォンスが、汗をぬぐうようなしぐさをしながらビビを守るように立ちはだかつた。

「ミ……Mr. 10!!? どうして……?!」

「どうしてもこうしてもあるかよ!」

「ボク達はもともと、あなたを助けるためにここにいるんですから!!!」

「え……どういうこと……?! それに……あなたは一体……?」

ウイスキーピークでたびたび顔を合わせていた鎧の大男だけでなく、初めて見る青年に救われたことで、ビビはより困惑した様子を見せる。

一方でMr. 5は、突然現れた二人組を忌々し気に眉間にしわを寄せて見つめていた。

「……そうか、組織の中に裏切り者がいるという報告はあつたが、それが貴様らのことだつたとは」

「それにMr. 10、あなたが本当は二人組だつたとはね。その無駄に大きな鎧がいい隠れ蓑になつていたワケね?」

「んん？　それで、なぜアラバスタの王女をかばう」

「いろいろ事情があるんだよ」

律儀に答えることなく、エドワードは手の甲から刃を生やししながら身構える。

Mr. 5もこの場で問いただすことに価値を感じず、青年と鎧の大男をただの障害として扱うことを決めた。

「まア……いいさ。いずれにしろおれ達の敵だろ、邪魔だな」

「キャハハ、そうね邪魔ね。だったら私の能力で……地面の下にうずめてあげるわ」

鼻くそを準備し始めるMr. 5と帽子を外したバレンタインの宣告に、エドワードとアルフォンス、そしてビビに緊張が走る。

「いくぞ、アル。5番以上の相手だ……氣イ引き締めろ」

「うん……!」

「手エ貸そうか？　錬金術師」

そんな二人に、すぐ近くの屋根の上から聞いた声が届けられる。

振り向いた青年は、先ほどまで敵対していた緑髪の剣士が、どこか苦虫を噛み潰したような表情で近づいてくる姿を捉えた。

「お前……!!」

「海賊狩りのゾロさん!!」

「畜生つ、なんて、しつこい奴。こんな時につ!!!」

「早まるな。助けに来たんだ」

さらに警戒を強める二人に、ゾロは眉間にしわを寄せて制止をかける。

困惑で目を見開く三人に、ゾロは刀を構えると青年たちと同じ方向を睨みつけた。

「かなり不本意だが…おれもあいつらと事を構えねえといけなくなっちゃまった。安心しろ。エレノアの奴にはあとでとりなしてやる」

「ああ、それは正直ものすごく助かる」

ゾロの最後の言葉に、途端に態度を変えたエドワードとアルフォンスは視線をMr. 5とミス・バレンタインに戻す。

エレノアにあのまま追いかけて回されるのは、ゾロと敵対するよりも相当恐ろしかったらしい。

「いずれにしろおれ達の敵だろ、邪魔だな」

一人が加わったところで、Mr. 5の態度に変わりはない。能力に相当な自負があるのか、ゾロたちをさしたる障害とさえ認識していないようだった。

不安げなビビが見守る中、三人と二人が激突を目前に緊張を高める、そんな時だった。

「ゾロ~~~~~!!!」

「今度はなに?」

両者が相対する通りに、今の今まで眠りこけていた麦わら帽の男の声が木霊する。エドワードは、異様に腹を膨らませたその男に訝しげな目を向けた。

「！　ありやあ確か……3千万の賞金首の」

一瞬目を見開いたゾロだったが、それがルフィだとわかるとすぐさま警戒を解いた。が、当のルフィはなぜかゾロを仇かなにかのように鋭く睨みつけ、獣のように荒い呼吸をくり返していた。

「ルフィ……どうした。手伝いなら要らねエぞ。それともお前もあの女に借金か？」

「おれは、お前を許さねエ!!!　勝負だ!!!」

「「はア!!!」」

突然の宣戦布告に、ゾロの他にエドワードとアルフォンスも思わず声を上げて呆けてしまった。

「てめエはまた何をわけのわかんねエこと言い出すんだ!!!」

「うるせエ!!!　お前らみたいな恩知らずはおれがブツ飛ばしてやる!!!」

「恩知らず………!!!」

「そうだ!!!」

何をそんなに怒っているのか全く分からないゾロが若干呆れていると、ルフィは全身から怒りを噴出させるように怒号を放った。

「絶対許さん…おれ達を歓迎してうまいもんいっばい食わせてくれた親切な町のみんなを!!! 一人残らず、お前らが斬ったんだ!!!」

「……………!! いや…そりゃ斬ったがよ…」

「な…なんてニブイ奴なの」

「姉弟子が不憫だ……………!!!」

「何であんな人のところにいるんだ……………!!!」

自分が今まさにカモにされていたこともつゆ知らず、ズレたことを吠えるルファイ。

ゾロは血管を浮き立たせながら固まり、ビビは言葉を失い、エドワードとアルフォンヌは一緒にいたエレノアに同情し地面に膝をついた。

「おいルファイ…よく聞けよ。あいつらは実は全員」

「言い訳すんなアア!!!」

「なにイイ!!」

説明しようと口を開いたゾロに、ルファイは全力で拳を放つ。

家屋を粉碎するほどのその威力に、ゾロは大きく目を見開いて頬を引きつらせた。

「殺す気かア!!!」

「ああ、死ね!!!」

正気かと疑うゾロに、ルファイはにべもなくそう言い放つ。

その後もルフィは避け続けるゾロに向けて殴りかかり、あちこちに瓦礫や砂塵を撒き散らしていった。

「ためエ、話を聞けエ!!!」

どうにか止めようと叫ぶゾロだが、頭に血が上ったルフィに聞き入れる様子はない。

次第にゾロの方の堪忍袋の緒も、切れる寸前まで迫っていった。

「…なアおい、アル？ おれ達はどうすりゃいいんだ？」

「…取りあえず、放っておいたらいいんじゃないかな。あ、王女様は危ないからこつちね」

「あ…はい」

取り残されたエドワードとアルフォンスが、戸惑いながらもビビを背に庇う。

同じく呆れた様子のMr. 5とミス・バレンタインも、自分たちのやるべきことを思い出して視線を戻した。

「Mr. 5……あつちは別に私達の邪魔をしたいわけじゃなさそうよっ」

「そうらしいなミス・バレンタイン。じゃあ、おれ達は速やかに任務を遂行するとしてようじゃねエか。アラバスタ王国王女ビビの抹殺と、不穏分子の排除を……」

一斉に駆け出すMr. 5のペアに、エドワードが一步前に出て刃を構える。

アルフォンスにビビを任せ、バロックワークスの強者である二人を迎え撃とうとし

た。

「かかってきやがれ…!!」

「いい加減にしろてめエ!!!」

相打つ覚悟も決め、刃を振りかぶったエドワード。

だが両者が激突する寸前に、ゾロに蹴り飛ばされたルフィがぶつかり、四人はまとめて吹っ飛ばされていった。

「あ、しまった…あのチビも巻き込んだしまった」

「兄さ——ん!!!」

いい感じにカッコつけていたのに、まさかの味方からの攻撃で邪魔をされ、アルフォンスが思わず絶叫する。

吹き飛ばされたMr. 5とミス・バレンタインは、瓦礫をどかしながら忌々し気に顔をしかめた。

「見事にまア邪魔してくれるモンだぜてめエら…」

「あーもー何なの一体」

「そんなに仲間同士で殺し合いてエんなら、コトのついでに全員……」

「…オイ」

受けた痛みを倍にして返してやろう、そんな怒りを抱いて立ち上がった二人。

その時、背後で上がっていた土埃の中から、ゆらりと影が立ち上がった。

「さつきからさんざんナメたこと言いやがって……しかも今度は敵とまとめてブツ飛ばしやがった……!!!」

パンツと炸裂音が響くと、次の瞬間青白い閃光が走る。

それは一振りの水でできた太い槍を生み出し、ミス・バレンタインを殴り飛ばしてゾロに向かって勢いよく投擲された。

「だアレエがアミジンコどチビか——っ!!!」

「うおっ!!!」

ドカアツ!!と地面に突き刺さって弾けた激流の大槍に、ゾロは戦慄の表情を見せながら飛び退る。

自分に非があることを理解していないゾロは、エドワードに苛立たしげな視線を向けた。

「チビ!! てめエまで正気失くしてどうすんだよ!!!」

「また言った……!!! 三回だ……!!! 三回だぞコノヤロー……!!! てめエはもう三回もおれをチビと言った!!! その罪……万死に値する……!!!」

「面倒くせエ……!!!」

凄まじい殺気を放ち、ずんずんと近づいてくるエドワードに、ゾロは呆れながらも警

戒を深める。

兄と呼ぶことからわかるように、青年の力をよく知っているアルフォンスは、ゾロを氣遣つてうしろから声をかけた。

「ゾロさん!! 氣をつけて!! 兄さんあんなんだけどホントに強くて…」

「うるせエ!!! 今それどころじゃねエんだよ!!!」

しかしゾロが警戒していたのは、エドワードだけではなかった。

青年と同じ場所から、ずるずると何かを引きずつてもう一人の青年が顔を出したのだ。

「あー、いい運動して…やつと食いもん消化できた…」

すつかり元の体形に戻ったルファイが、ボコボコにしたMr. 5を引きずつて建物の中から出てくる。

その光景に、ビビは信じられないといった様子で固まった。

「ミ…Mr. 5!! ウソ…!! バロックワークスのオフィサーエージェントを」

「やつと本気出せる…」

「ルファイ…てめエ事態を余計にややこしくしやがって」

敵の一人を瞬殺しておきながら、まだ勘違いしたままの船長にゾロは目を吊り上げる。

仲間ではなく、町人に偽装した賞金稼ぎの言葉を信用するとは何事か、と怒りが込み上げてきたのだ。

「このウスラバカどもが!!! 全員まとめて叩きのめしてやる!!! 死んで後悔するな!!!」
 「上等だア~~~~!!!」

突如始まった三人の男たちによるバトルに、ビビもアルフォンスも困惑するほかになかった。

「ちよつと……どうなってんの!? あの二人……仲間じゃなかったの!?

「何で兄さんまで!!!」

「ゴムゴムのオ~~~~っ!!!」

「鬼~~~~」

「毒ノ川~~~~」

ルフイに対して怒りを燃やすゾロと、恩知らずを成敗しようと思気込むルフイ、身長のことでもバカにされて怒り心頭のエドワード。

まったく違う方向を向いた青年たちが、雄叫びとともに激突した。

「バズーカ~~~~!!!」

「斬り~~~~!!!」

「ヴァーガル~~~~!!!」
 「嵐ノ海~~~~!!!」

ルフイの掌底、ゾロの斬撃、エドワードの大槍の水飛沫が激突し、凄まじい轟音と衝撃があたりに四散する。

それだけでは勢いは収まらず、三人は激情のままにさらなる一撃をぶつけ合った。

「ぬあああああつ!!!」

雄叫びとともに、全力の攻撃の応酬が繰り広げられる。

アルフォンスは完全に正気を失っている三人に、呆れたまま立ち尽くすばかりであった。

「あーあ…」

「……………どうしよう…逃げたいけど、今のうちに通つちやつて平気かしら」

「…たぶん、やめておいた方が…」

さっさとこの場から逃げ出したいビビだが、いやな予感を覚えたアルフォンスがそれを止める。

すると、家屋を粉碎しながら飛び出した三人が、ビビとアルフォンスのすぐ近くで再び激突した。

「があああああ!!!」

「うあああああ!!!」

「おらああああ!!!」

「きゃああああ!!」

「わああああ!!」

ビビたちはもはや、巻き込まれないようにその場で小さくなるしかない。

その時、ルフィとエドワードにノされていたMr. 5ペアがうめき声とともに起き上がった。

「畜生……!! こんな奴らにコケにされたとあつちや、バロツク・ワークス” オフィサーエージェントの名折れだぜ!!!」

「その通りよMr. 5!! 私達の真の恐ろしさ!! あいつらに見せてあげましょう!!!」

「いくぜ!! ミス・バレンティン!!」

「ええ、Mr. 5!!!」

任務を果たすため、そして屈辱を晴らすためにエージェントたちが激闘の中に飛び込んでいく。

が、それは完全に誤った選択でしかなかった。

「ゴチャゴチャうるせエな!!!」

ギロリ、と向けられた血まみれのエドワードの目に、Mr. 5とミス・バレンティンは恐怖でその場に凍りついてしまう。

エドワードはパンツと手のひらを合わせ、地面に触れて青い閃光を迸らせた。

「どいつもこいつも……木っ端微塵に吹っ飛びやがれ!!!」

エドワードを中心に、凄まじい勢いで土が盛り上がり、大量の大砲を作り出していく。そして戦慄の表情を見せるMr. 5達に、全ての砲門が突き付けられた。

「霜^{ヨトウ}ト丘^ンノ巨人^{ヘイム}ノ国^{クニ}!!!」

エドワードの咆哮とともに、無数の大砲が一斉に火を噴く。

Mr. 5とミス・バレンタインは、その容赦のない砲撃に呑み込まれ、涙を流しながら吹っ飛ばされていった。

「……………ウザってエ!!!」

「何だあいつら」

「ものたりねエ……!!!」

ぐしゃっと落下していく二人に目もくれず、ルファイたちは苛立たし気に背を向ける。

その堂々とした立ち姿に、ビビはただただ圧倒されるばかりであった。

「…そんなバカな……………!!!
…なんて強さ!!!
こんな人がどうしてオフィサーエー
ジェントじゃなかったの…?!?!」

「兄さん……………」

ビビやアルフォンスのつぶやきにこたえることなく、ルファイ、ゾロ、エドワードの視線は再び互いに向けられた。

「さあ決着つけようか」

「おお」

「望むところだ」

示し合わせたように、三人は一斉に拳と武器を振りかぶる。

もはやそれは誰にも止められない、そう思った時だった。

「はいそこまでー」

突如、三人の真下から石柱が伸び、それぞれのあごにクリーンヒットする。

打撃の効かないルフィも、突然脳を揺さぶられたことで目を回し、三人は一瞬で無力化されてしまった。

「まったく、ナミに話を聞いてみれば……：妙なことに巻き込まれたもんだよ」

「そうよ。危うく10億ベリーを逃す所だったのよ!! わかってんの!!」

「いやそんな話は一言もしてない」

いきなりの展開に立ち尽くしていたビビとアルフォンスの前で、呆れた様子のエレノアと目を光らせるナミが近づいてきた。

「……あなた達……何の話を、どうして私を助けてくれたの!!」

「そうね……：その話をしなきゃ……。ちよつとね……契約をしない?」

「契約?」

困惑気味に繰り返すびびに、ナミは怪しい笑みを浮かべて頷く。

が、その前にいまだに殴り合いを続けるルフィたちを黙らせる必要があった。

「あばれるなっ!!」

三人の脳天にそれぞれ拳骨を落とすナミに、残された三人は冷や汗を流すのだった。

第56話 “秘密結社”

「なっはっはっはっはっはっはっはっはっはつな——んだ早く言えよ〜っ！！ おれはてつきり、あのもてなし料理に好物がなかったから怒ってあいつらを斬ったのかと思ったよ〜っ！！」

「てめエと一緒にすんな!!!」

「あっはっはっはっはっはっは っ まー気にすんなよ」

「だが少なくともお前がおれをチビと呼んだことは間違いないよな」

「兄さん…」

勘違いやすれ違いで勃発した三つ巴の戦いは、一人の天使の介入によって終息した。激突したゾロとエドワードは、ここまで騒ぎが大きくなつた原因の青年に向けてじろりときついまなざしを送りながらも、一応は落ち着いたようだ。

そしてその仲間であるナミは、ミス・ウエンズデーと名乗り、秘密犯罪会社パロツクワークスへと潜入していたアラバスタ王国の王女・ビビに命を救つた代価として、そして彼女を故郷まで送り届ける報酬として法外な金銭を要求していたが。

「それはムリ!! 助けてくれたことにはお礼を言うわ、ありがとう」

はつきりとそれを断られ、ナミは意外そうに目を見開いた。10億ベリーなどという大金、当たり前ではあるが。

「なんで？ 王女なんでしょ!! 10億ぐらい……」

「……………アラバスタという国を？」

「ううん、聞いたこともない」

「『偉大なる航路』有数の文明国と称される、平和な国だった……昔はね……」

「昔は？」

「ここ数年、民衆の間に『革命』の動きが現れ始めたの。民衆は暴動をおこし、国は今乱れてる」

ビビの告白に、エレノアはピクリと片眉を上げて視線を鋭くする。

偽名を名乗っていた時から想像もできない悲痛な表情で語るビビは、次第にその目に怒りを滲ませていった。

「だけど、ある日私の耳に飛び込んできた組織の名が『バロックワークス』。どうやら、その集団の工作によって、民衆がそのかざれていることがわかった。でもそれ以外の情報は一切が閉ざされていて、その組織に手を出すこともできない」

諜報・暗殺・盗み・賞金稼ぎ、様々な仕事が社長の命令で下されるというバロックワークスは、最終目標を理想国家を建国することとしているらしい。

しかし、それと暴動に何の関係があるのかと、誰もが首をかしげていた。

「——そこで、小さい頃からなにかと私の世話をやいてくれているイガラムに頼んだの」「ちくわのおっさんか」

「………なんとか、その噂のしつぽだけでも掴んで、このバロックワークスに潜入できないものかと……そうすればきつと、我が王国を脅かす黒幕とその目的が見えてくるはずだから」

「で、おれ達は偶然王女が潜入していることを知って、恩を売……助力するために秘密裏に潜り込んだってわけだ」

「威勢のいい奴らだな」

一部聞き捨てならない言葉が聞こえてきた気がするが、少なくとも我欲で犯罪に加担していたわけではないようだ。

エレノアの向ける視線からトゲが消え始めたことで、エドワードとアルフォンスはほっと胸をなでおろしていた。

「……なるほど、読めてきたよ」

ビビの話から、エレノアは大体の事情を察し始める。

「バロックワークスの言う『理想国家』の建国………その実態はざぱり『アラバスタ王国の乗っ取り』!!」

「そう…早く国に帰って真意を伝え、国民の暴動を押さえなきやバロツクワークスの思
うツボになる」

「なるほどね、そういうことか…これでやつと話がつながった。内乱中ならお金もない
か」

決死の覚悟を決めている様子のビビを見て、ナミは仕方がないと肩をすくめる。

だが、エレノアはいまだ訝しげな表情で、エドワードとアルフォンスの方を見やつて
いた。

「ていうか…何だつてあんた達がアラバスタの王女に力を貸すのよ」

「…アラバスタの王族が所有する、王家に認められた者だけが入れる書庫にある資料が
欲しいんだよ」

姉弟子に隠し事は無意味と悟ったのか、エドワードは言いづらそうにしながらも応え
る。

アルフォンスも、叱られる子供のように大きな体を縮こまらせていた。

「正直言えば、それを手に入れるためだけに国家錬金術師になったと言つても過言じゃ
ねエくらいに大事なものなんだ…だからおれ達は、命がけであんたを守らなきやな
らねエ」

「資料……ねエ」

じつと見つめてくるエレノアから、エドワードとアルフォンスは必死に目をそらす。そちらの話には注目せずに、ルフィはビビに問いかけた。

「おい、黒幕って誰なんだ？」

「そーいやおれ達もまだそれは聞いてなかったな」

「うん」

「社長の正体!!? それは聞かない方がいいわ!! 聞かないで!! それだけは!!! いえな

いつ!! あなた達も命を狙われることになる…」

「はは…それはごめんだわ。なんたつて一国を乗っ取ろうなんて奴だもん。きつとんでもなくヤバい奴に違いはないわ!!」

必死に首を振るビビに、ナミも苦笑しながら賛同する。

深く考えずに依頼を呑む気だったが、詳しい話を聞いて恐怖の方が勝ってきたらしい。

このまま断ることも考えていたが、残念ながらそれは全くの無駄となってしまうた。「ええそーよ。いくらあなた達が強くても、王下七武海の一人“クロコダイル”には決して敵わない!!!」

ビビがそう言った瞬間、辺りの空気がピシリと凍り付く。

誰もが言葉を失い、言ってしまったビビは自分の口をふさいで目を見開く。

そんな彼らの様子を、それぞれゴーグルをつけたラッコとコンドルが見つめ。

そしてどこかへと飛んでいくのが見えた。

「ちよつと何なの!!? 今の鳥とラッコ!!! アンタが今私達に秘密を喋ったってこと報告に行つたんじゃないの?! どうなの!!?!」

「ぐああああ最悪だア!!! できるだけ目立たないように王女様を連れ出すつもりだったのに!!!」

「ごめんなさいごめんなさい!!!」

ビビの襟首を掴み、がつくんがつくと揺さぶるナミの剣幕に、ビビは泣きながら謝り続け、アルフォンスは頭を抱えて天を仰ぐ。

しかし一方で、ルフィ、ゾロ、エドワードは何やら期待に満ちた表情を浮かべていた。

「おいおいマジか」

「七ブカイだつてよおい!!!」

「悪くねエな」

「あんだ達…」

天と地ほどの反応の差を見せる6人に、エレノアは半目で呆れかえる。涙を流すビビは、必死に怒るナミとアルフォンスに謝罪を続けていた。

「ほ…ほんとにごめんなさいっ!!! つい口が滑っちゃって」

「『ついで済む問題か!! その一言でなんで私達まで道連れにされなきやなんないの!!!』^{グランドライン}偉大なる航路」に入ったとたん七武海に命を狙われるなんてあんまりよ!!!」

「さつそく会えるとは運がいいぜ」

「どんな奴だろうな」

「黙れ、そこ!!!」

能天気な事ばかり言うルフィたちに怒鳴りつけると、ナミは肩を怒らせてずんずんと歩き出した。

「短い間でしたけどお世話になりました」

「おい、どこ行くんだナミ……」

「顔はまだバレてないもん!! 逃げる」

顔が割れてなければまだ逃げ切れる望みはがあると、泥棒としての逃走の経験が長いナミは即座に離脱を決意する。

が、その背中にエレノアが忍びなさそうな目を向けた。

「……………ナミ、多分もう手遅れ」

エレノアの視線の先にいるのは、先ほど飛んで言ったはずのラッコとコンドル。

ラッコはスケッチに鉛筆を走らせると、写真と見間違わんばかりに緻密なナミたちの顔を描いて見せた。

「わっ、うま——い」

感心して拍手を送るナミ。

その間に、ラッコとコンドルは再びどこかへと飛んで行ってしまった。

「これで逃げ場もないってわけね!!!」

「チツ、もう射程範囲外に入っちゃったか…」

情報が渡る前に撃ち落としてやろうかと、風の弓矢を構えていたエレノアだったが、意外に素早いコンドルの飛行にやむなく諦める。

残されたルフイたちは、目を合わせるとにやりと笑みを浮かべた。

「……………取りあえずこれでおれ達はみんな、バロツクワークスの抹殺リストに追加されちゃったわけだ…」

「なんかぞくぞくするなー!!」

「ようやく面白れエ仕事になってきたぜ…!!」

「なんでこんなことに…」

「前途多難だなこりや…」

「……………!!!」

「わ…私の貯金50万ベリーくらいなら」

膝を抱えるナミと膝をつくアルフォンスに、ピビは慰めの言葉を必死にかけ続ける。

その時、突如彼らのもとに勇ましい声がかけられた。

「ご安心なされいっ!!」

一味が振り向けば、そこにはびびと同じ服装を纏ったMr. 8、あらためアラバスタ王国護衛隊長イガラムがいくつもの人形を抱えて立っていた。

「ダイ」…ゴホッ!! ママママ♪ 大丈夫!!! 私に策がある!!!」

「イガラム……………!! その格好は?!」

「…まさかそれ身代わりのつもりですか」

「うはーっ、おっさんウケるぞ、それ絶対!!」

「もうっ…ばかばっかり」

どう見てもひどい趣味の女装にしか見えないイガラムの格好に、ルフィは大いに笑い、ナミとアルフォンスはさらに沈み込む。

「いいですか、よく聞いて下さい。バロックワークスネットワークにかかれば今すぐにも追手はやってきます。Mr. 5ペア”没落となれば、それはなおのこと…!!!」

「元8千万の賞金首が相手か……」

改めて突き付けられた問題に、エレノアは渋い表情で黙り込む。

イガラムも神妙な表情で、王女を託すと決めた海賊達を見下ろした。

「ところで王女をアラバスタへ送り届けて頂く件は……………」

「ん？ 何だそれ」

「こいつをウチまで送ってくれとよ」

「あ、そういう話だったのか。いいぞ」

「あ、おれ達も乗っけてってくれ」

「おう、いいぞ」

「8千万つてアーロンの4倍じゃない断んなさいよ!!!」

自分を長年苦しめ続けていた相手をはるかに超える大物相手に、どれだけ能天気なのだとなミは怒りを爆発させる。

しかしそのうち、ナミの形相は不気味なぐらいに落ち着き始めた。

「…と、これまでの私ならあわてていたけど今は違うわ」

「?」

「なんせこつちには1億の賞金首のエレノアがいるんだもの!!! 8千万くらいどうつてことないわ!!!」

「うん、ごめんムリ」

向こうがトラならこつちにはクマがいる、というような自信満々な様子で、ナミはエレノアに抱き着く。

しかし返ってきた言葉に、ナミは目を点にして凍り付いた。

「……今、なんて?」

「あのさ……見ての通り私、両足もってかれた上に体力落ちちやって、賞金がかけられたころの戦闘能力は残ってないんだよね」

「畜生め!!」

「何イイ~~~~!!?!?」

残酷なエレノアからの告白にナミは崩れ落ち、エドワードとアルフォンスは驚愕に叫び声をあげた。

「どういうことだ姉弟子!!? あんだけ強かった姉弟子に何があつたんだよ!!?」

「さっき両足もってかれたって……まさか姉弟子!!!」

「あー……えっと……そのことについてはまた後で」

言いつらい何かがあるのか、ものすごい形相で詰め寄ってくる二人にエレノアは曖昧な笑みで返す。

イガラムはそれに訝し気な眼差しを送りながら、ビビに向かって手を差し出した。

「では王女、アラバスタへの『永久指針』エターナルポースを私に」

ビビは迷いながら、イガラムに懐から砂時計のような形をした羅針盤を渡した。

聞きなれない単語に、ナミは顔色を戻して振り向いた。

「エ……?! エターナルポースってなに?!」

『記録指針』の永久保存版だよ。一度記録させた島の磁力を決して忘れず、永久にその島の身を指し続ける指針」

「そう……そして、これはアラバスタの地の磁力を記憶したものです」

ビビから受け取った『永久指針』を懐にしまい、イガラムは人数分の人形を抱えなおす。

見た目は完全に出来損ないだが、まだ情報が伝わっていないのであれば有効な手ではあるように思えた。

「いいですか、ビビ王女。私はこれからあなたになりすまし、さらに彼ら6人分のダミー人形を連れ一直線にアラバスタへと舵を取ります。バロックワークスの追手が私に気をとられているスキに、あなたはこの方々の船に乗り、通常航路でアラバスタへ。私も通ったことはありませんが、確かこの島から『記録』を2、3たどれば行き着くはずですよ」

自ら囿となることを決断したイガラムは、不安げな表情を見せるビビに懽然とした態度を見せる。

危険な旅であろうとも、彼は決して恐怖の色を見せたりはしなかった。

「無事に……祖国で会いましょう」

「では…王女をよろしくお願ひします」

「おっさんそれ絶対ウケるって!!」

「誰にだよ」

港でルフィたちと向き合ったイガラムは、そう簡単にまとめて再度願う。

緊張感の欠片もない別れではあったが、イガラムにはそれが何よりもたのもしく見えるようだった。

「では王女、過酷な旅になるかと思いますが道中気をつけて」

「ええ、あなたも」

「Mr. 10……いや、エドワード殿、アルフォンス殿。あとのことは頼みます」

「おう」

「安心してください」

ビビと、そしてエドワードとアルフォンスとも握手を交わし、イガラムはバロツクワークスの船に乗りこむ。

これが最後かもしれない、そんな覚悟もしながら、ビビは彼の後姿を見送ったのだった。

「……………行っちゃまった。最後までおもしろいおっさんだったなー」

「あれで結構頼りになるの」

まだ少し不安気ながらも、ビビはルフィにそう告げる。

長くともにいた間柄だからこそ抱ける信頼関係に、全員が安堵を覚えていた時だった。

遠く沖へと離れていった船が、轟音とともに業火に包まれた。

「そんな…」

「バカな…!!! もう追手が…!!?」

突然の事態に、ビビも一味も目を見開いて立ち尽くす。

黒い影となつて、海の底に沈んでいく船を凝視していたルフィは、キツと表情を引き締めると赤く染まった海に背を向けた。

「立派だった!!!」

彼は務めを果たした。ならば自分たちは、彼のその覚悟に見合う働きをしてやるだけだ。

それがせめてもの手向けだと、ルフィたちは決意を立てた。

「ナミ!! ログは」

「だ…大丈夫。もうたまって」

「そいつを連れて来い、船を出す!!」

「ビビ!! 急いで、私達が見つかったら水の泡でしょ!!?」

呆然と立ち尽くすビビにゾロが告げると、ナミはビビの手を引く。

その唇から血が垂れ落ちるのを見ると、ナミはその体をきつく抱きしめた。

「大丈夫!!! アンタをちゃんと…アラバスタ王国へ送り届ける!!!」

悲しみに暮れるのではない、決意を秘めた眼差しで、炎に包まれる船を見届けるびびに、ナミは彼女の強さを見る。

それは、エレノアたちも同じだった。

「……エドくん、アルくん」

「ああ……わかってるぜ」

エドワードは今にも爆発しそうなほどに肩を震わせ、それでも歯をきつく食いしばって業火を凝視し続ける。

その目はまるで、いつか見た過去の光景を見ているかのように険しいものだった。

「あのおっさんは………王女のために命を代価に差し出した!! ならばおれ達も…この先は同等以上のものを懸けてやる!!!」

ギリツ、と。

鋼の腕がきしみを上げていた。

第57話 “前へと進め!”

未だ夜の明けぬ早朝のウイスキーピーク。

川辺に停められたメリー号の上で、わずかに明るくなり始めた空を見つめるエレノアとエドワードの姿があつた。

「……なア、姉弟子」

「……なにさ」

腕を組んで目を細めていたエドワードは、隣で静かに佇むエレノアに気まづげな視線を向ける。

「さつき言つてた両脚のことなんだが……もしかして」

「……それはアンタも同じことでしょ? まったく……弟子みんな、揃いも揃つてしようもない……」

「……悪イ、変なこと聞いて」

詳しくは語らずとも、エドワードはそれだけで大体のことを理解した。

自分やアルフォンスと同じことが姉弟子の身にも起きた。エレノアの見せるなんとも言えない表情の横顔から、かつて彼女が体験した痛みを察した。

「んっ。イカリ上げましたア!!!」

「おう、ごくろう」

視線を向ければ、周囲を警戒するゾロに錨を引き上げたアルフォンスが報告しているのが見える。

するとそこへ、何か大きなものを引きずりながらルファイが走ってきた。

「お——い、連れて来た!!」

「乗れ! いつでも出せるぞ」

「あれっ、こいつらまだ寝てるよ」

酒場で眠りこけていたウソップとサンジを、事情も何も伝えることなく引きずってきた彼に、エレノアは特に何も言わなかった。

ただ、これだけ大騒ぎしていたのに全く起きることのなかった二人には、やや呆れた視線を向けていた。

「探してるヒマなんてないわよ!!」

「だけどこここに、置いてくわけには…」

出航の準備を進める一味だったが、切羽詰まった様子のナミとビビの声がそれを一旦止めさせた。

「どうしたの?」

「カルガモがいらないのよ!! 口笛で来るはずなのにつ!!」

「こいつ?」

「おれより先に乗りこんでたぞ」

「そこかア!!!」

メリー号の上で、散々探していた相棒が先乗りしていたことでビビも思わず怒りをあらわにする。

しかしこれで全員が揃ったため、一刻も早く島を脱出しようと、帆を広げ風を受けさせた。

「舵を川上へ!! 少し上れば支流があるわ。少しでも早く航路にのれる!!」

「行くぞ!!!」

動き出した船を操り、ビビの言う通りに進める。

もはや彼女を疑う声などなく、約束を果たす同士のような関係性が生まれつつあった。

「なア! 追手ってどれくらい来てんのかなア!」

「わからない。バロツクワークスの社員は総勢2千人いて、ウイスキーピークのような町がこの付近にいくつかあると聞いてるけど…」

「千人ぐらい来てたりして!!」

「ありえますよ。社長の正体を知ることとはそれぐらいのことですから」

敵が迫っているというのに、緊張など微塵も感じさせないルフイに、ビビとアルフォンスが語る。

——ばかね…おとりなんて。

その時、耳を動かし、周囲の警戒に当たっていたエレノアは、いまもなお燃え盛る船の跡から届いた声に目を見開いた。

(……まさか、一人……?!?)

バツと振り返り、エレノアは聞こえてきた冷たい声に目を細める。

知らせるべきかと思ったが、いまこの場で新たな不安材料を投下するデメリットを考え、警戒の強化だけにとどめた。

「おいつ、何でだ?! 何で、もう船出してんだ!!? 待ってくれよもう一晩くらい泊まって

こうぜ、楽しい町だし女の子はかわいいしよオ!!!」

「そうだぞ!!! こんないい思い今度は、いつできるかわかんねエぞ!!! ゆつたりいこうぜ、おれ達は海賊だろ?! まだ朝にもなつてねエしよ!!! 戻ろうぜ、おい聞いてんのか!!!」

「エドくん、アルくん」

「ほいきぎた」

起きて早々不満を口にする二人は、エドワードとアルフォンスによる鋼の拳で黙らせてもらう。

大きなたんこぶを作つて倒れこむ二人を放置し、メリー号はウイスキーピークから少しずつ距離をとつていった。

「霧が出てきた、もうすぐ朝ね…」

徐々に明るくなつていく空と海を見つめ、胸の内に救う不安を隠そうとするようになり、ミがつぶやく。

ウソツプとサンジを除く全員が、わずかに緊張を解きかけた時だった。

「船を岩場にぶつけないようにしなきゃね、あー追手から逃げられてよかつた♡」

「な!!! 誰だ!!!?」

突然頭上から聞こえてきた声に、全員が表情を強張らせて振り向く。

船室の上の欄干に腰かけたその女は、艶やかな黒髪を風に揺らしながら、美しくも恐ろしい蠱惑的な笑みをを浮かべた。

「さつき、そこで… Mr. 8 に会つたわよ? ミス・ウエンスデー…」

「……………!!! よりによつて…」

「てめエが来たのかよ…!!!」

「まさか……………あんたがイガラムを…!!!」

「どうでもいいけど何でお前はおれ達の船にのってんだ!!」

明らかに緊迫した様子のビビとエドワード、アルフォンスの三人。

特にビビは、現れた美女に対してすさまじい殺気を向けていた。

「なんで、アンタがこんなところにいるの!!? ミス・オールサンデー!!!」

常人であれば気圧されそうなほどに濃い殺意を向けられても、ミス・オールサンデーと呼ばれた美女は微塵も動じた様子はない。

異常事態と察したナミは、視線を外さないままビビたちに尋ねた。

「今度は何?!」 Mr. 何番 のパートナーなの!!?」

「Mr. 0だ!!!」 その正体も奴とそう大差ないやべエ奴だ!!!」

「実際に社長の正体を知っていたのはこの女だけ、だから私達は、こいつを尾行すること
で…社長の正体を知った…!!!」

殺気を迸らせるエドワードだが、流れ落ちる冷や汗が彼の動揺と緊張を表している。

そんな彼を、ミス・オールサンデーは冷たい微笑で見下ろした。

「正確に言えば…私が尾行させてあげたの…」

「何だ、いい奴じゃん」

「そんなこと知ってたわよ!!!」 そして私達が正体を知ったことを社長に告げたのもあんだでしょ!!?」

「何だ悪い奴だな!!」

ルフィもようやく、目の前にいるのが招かれざる客、それも相当悪い部類の相手だと理解してか、険しい表情で腕を組む。

ビビはきつく目じりを吊り上げ、いつでも動けるように身構えながらミス・オールサンデーと相対した。

「あなたの目的は一体何なの!!?」

「さアね…あなた達が真剣だったから…つい協力しちゃったのよ…本気でバロツクワークスを敵に回して国を救おうとしてる王女様が…あまりにもバカバカしくてね…!!!」

「ナメンじゃないわよ!!!」

祖国を想う心だけではない、ビビを逃がすために命を懸けたイガラムまでもを馬鹿にしたような言葉に、ビビの怒りが爆発する。

勝算もないのに、自身の暗器を取り出そうとしたビビだったが、それよりも先にウソップとサンジ、エドワードとアルフォンスがミス・オールサンデーを取り囲んだ。

「おい、お前…意味わかってやってんのか…!!!」

「いや…何となく…愛しのミス・ウエンスデーの身の危険かと…!」

「正解だぞ眉毛の兄ちゃん…この女に容赦はするな!!」

「正直、この程度の包囲だけじゃ不十分なくらいだよ…!」

銃とパチンコで至近距離からウソップとサンジに、長い槍を作り出したエドワードとアルフォンスに囲まれ、それでもミス・オールサンデーの態度に変化はない。

しかし少しだけ、彼女の機嫌が悪くなったようだった。

「……………そういう物騒なもの、私に向けないでくれる?」

そう言った瞬間、ウソップとサンジの体が宙に浮かぶ。

自分に何が起こったのか理解するよりも前に、二人はエドワードとアルフォンスに向かって投げだされていた。

「何だ!!!」

「おおおっ!!!?」

エドワード達は慌てて槍を捨て、それぞれでウソップとサンジを受け止める。

エドワードはきつと眉間にしわを寄せ、ミス・オールサンデーを睨みつけた。

「悪魔の実か……………!!! 相変わらず薄気味悪イ……………!!!」

「うおっ、よくみりゃキレーなお姉さんじゃねエかっ!!!」

今ようやく美女の顔を真正面から見たサンジが挙げる声は無視し、能力者を前にした全員がさらに警戒を深める。

ミス・オールサンデーは相変わらずの嘲笑を浮かべたまま、困ったように肩をすくめた。

「フフフツ…そうアセらないでよ。私は別に何の指令も受けてないわ、あなた達と戦う理由はない」

何も言わずミス・オールサンデーを見上げていたルフィは、ふいにポン、と自分の頭が押されるのを感じる。

そして、自分のかぶっていた麦わら帽が宙を舞い、ミス・オールサンデーのもとへと飛んでいくのを目撃した。

「あなたが麦わらの船長ね、モンキー・D・ルフィ」

「あ!! お前、帽子返せケンカ売ってんじやねエかコノヤロー!!!」

「おれは、お前を敵と見切ったぞ出ていけコラア!!!」

「不運ね…バロツクワークスに命を狙われる王女を拾ったあなた達も、こんな少数海賊に護衛される王女も……!!!」

喧々囂々と上がる抗議の声を無視し、麦わら帽をかぶってみせるミス・オールサンデーの声に、言うほどの同情は見受けられなかった。

「…そして何よりの不運は、あなたたちの『記録指針』^{ログポース}が示す進路…!!! その先にある土地の名は『リトルガーデン』。あなた達はおそらく私達が手を下さなくても、アラバスタへもたどりつけず…!!! そしてクロコダイルの姿を見ることがすらく全滅するわ」

「するかアホーツ!!! 帽子返せ!!! コノヤロー!!!」

「コノヤローがお前は——っ!! アホーッ」

「ぜってエひねりつぶしてやるからなコノヤローっ!!」

「ガキか…」

精神年齢が低めの三人の怒号に、ゾロやエレノアから呆れた視線が向けられる。

ミス・オールサンデーは麦わら帽を放り投げると、大きく開いた自身の胸の谷間に手を突っ込み、何かを取り出した。

「遠吠えは結構。虚勢をはることなんて誰にでもできるわ。困難を知ってつつこんで行くのもバカな話」

ミス・オールサンデーはそれを、ビビに向けて投げ渡す。

手の中に飛び込んできたそれを見たビビは、困惑気味に目を見開いた。

「エターナルボース永久指針……………!!」

「それで困難を跳び越えられるわ。その指針が示すのはアラバスタの一つ手前の『何も
ない島』。ウチの社員も知らない航路だから追手も来ない」

「なに? あいつ、いい奴なの……………!!」

「な…何でこんな物を……………!!」

敵の最高幹部と聞いていたのに、こちらを氣遣うような行動をとるミス・オールサンデー懐疑的な視線が送られる。

エレノアは半目でそれを見やっつてから、傍らにいるルフィに横目を向けた。

「さてどうするよ、船長……?」

「んなもん決まってる……!!」

ルフィはすたすたとビビのもとへと近づき、永久指針《エターナルポース》を奪い取ると片手で握りつぶした。

ギョつと全員が目を剥くが、エレノアのみが分かっていたというように頷いていた。

「アホか、お前——っ!!」

突然の暴挙に、ナミから激しいツツコミが入る。ほかの面々は言葉を失いながら、ナミに任せてルフィを凝視していた。

「せっかく楽に行ける航路教えてくれたんじゃないっ!!! あの子がいい奴だったらどうすんのよーっ!!!」

信用するしない以前に、せっかくの選択肢が無言で潰されたことも物申したかったよ
うだ。

しかしルフィはそれを無視し、ミス・オールサンデーに向けて怒りの形相を向けた。

「この船の進路を、お前が決めるなよ!!!」

「………そう、残念……」

ルフィの剣幕を受けても、ミス・オールサンデーの様子に変化はない。

なぜか、その反応を予想していたかのような穏やかさを見せていた。

「もうっ!!」

「あいつはちくわのおっさんを爆破したからおれはきらいだ!!」

「よく言つたぜ麦わら!!! おれもお前に賛成だ!!!」

「兄さん…」

鼻息荒く言い切るルフィを、満面の笑みを浮かべたエドワードが肩を叩いて称賛する。

その横でアルフォンスはただただ呆れ、ルフィと船長がたどる今後の苦難を考えて頭を抱えていた。

「…私は威勢のいい奴はキライじゃないわ…生きてたらまた逢いましょう」

「いや」

ミス・オールサンデーは最後にそう言い残すと、船の近くに待機させていた巨大な亀の背中に飛び乗る。

背中に取り付けられた座席に優雅に座り、謎の美女があつという間に霧の中に姿を消していくと、ビビは安堵と不安でその場に崩れ落ちた。

「あの女…!! いったい何考えてるのかさっぱりわからない」

「だったら考えるだけムダね!」

「そういう奴ならこの船にもいるからな」

「おい、状況説明しろオ!! わけわかんねエよ!!」

一人悩むビビを、ナミやゾロが身内を例にして慰める。

ウソツプはやはり事情が全く呑み込めず、喧しく騒ぎながら仲間たちに説明を求めた。

「ミス・ウエンズデー、もしかして仲間にな!!」

「あ、おれ達も今日からしばらく世話になるぜ、よろしくつ!!」

「うるせエつ!! ヤロウに興味はねエんだよ!!」

「おい、ジョーキョーを説明しろ!!」

「うわつ!! ダチョーがのつてるぞ!!!」

「クエツ」

「兄がご迷惑をかけます…」

「うおおおおつ!!? 何じゃこの鎧の大男は!!?」

新たな三人が旅に加わったことで、麦わらの一味にはさらなる喧しさが加わる。

初対面ながらすさまじい勢いで縁を紡いでいく一味を見ながら、ビビは申し訳なさそうにうつむいた。

「……………私、本当にこの船にのつていいのかしら……………みんなに迷惑を…」

「なーに言ってるの」

「そうだよ王女様」

ナミは半目でそんな弱気な事を言うビビを睨み、彼女の鼻を軽くつまんで引つ張った。

「あんたのせいで私達の顔はもうわれちやつてるのよ!!　メーワクかけたくなかったら初めからそうしてよ!!」

「う……………ごめんなさい」

もはや賽は振られた。乗り掛かった舟なのだから、航海士の自分がその船を操らなくて何とするのか。

そんな男前を見せるナミに、ビビは何も言えなくなっていた。

「そうでしょ?　ルフィ」

「朝だ——っ!!　サンジ朝メシー!!!」

「どうでもいいのかしら」

元氣よく吠えるルフィを見れば、否応なく陰鬱な気持ちも薄れてしまう。

困惑気味のビビは、なぜか気分が落ち着いてくるのを感じた。

「ギア日が昇った…とりあえず、船を進めよう!!」

霧の海を抜け、ウイスキーピークを後にする新たな仲間を迎えた一味。

広がる海を眺めていたエレノアは、航路の先に待っているという島のことを考え、小さくため息をついた。

「リトルガーデン…ねエ」

第58話 “罪人たち”

「はア…そりゃ惜しいことをしたが…まだ、おれにも活躍の場は残ってるわけだ。大丈夫!! この眠れる騎士が目覚めたからには君の安全は保障する」

「は~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つ寝ててよかつた~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つ」

ウイスキーピークを後にしてしばらくし、ようやく目を覚ましたウソップとサンジがそんな反応を見せる。

やたらとカツコつけるサンジに対し、ウソップは顔中に冷や汗を垂らしてほっとした様子を見せていた。

「ナミさんちよつとジエラシー?」

「べつに」

「まア、だが援護はおれに任せとけ!! ちまたじゃ手配書の3千万ベリーはおれの後頭部にかかつてんじゃねエかって噂でもちきりだ」

「誰が言ってるんですかそれ…」

「雪降らねーのかなー」

「ふるわけねエだろ」

「あの天候の変化は最初の海だったからだよ。リヴァースマウンテンの磁力が全てを狂わせていて……」

「？」

「ダメだ姉弟子、こいつらみじんも理解してねエ」

大変な事件に巻き込まれたというのに、全く悲壮な様子を見せない彼らに、ビビはただ呆れと困惑が混じった表情で立ち尽くしていた。

次第に一味の興味は、ビビとともに旅に加わった二人組へと変わっていった。

「しっかし……賞金稼ぎ集団の中にエレノアの弟子がいたとはな—」

「一番驚いてるのはこっちだよ!! 何だって『国家錬金術師』ともあろうものがあんな場所にいたんだか……!!」

「こっかれんきんじゅつし?」

エレノアがジトツとした目を向けながら呟いた単語に、ルフィが首をかしげて尋ね返す。

ビビだけが、驚いたように大きく目を見開いてエドワード達の方を振り向いた。

「ウソ……あなた、マルコー先生と同じ国家錬金術師なの!!? その若さで!!」

「そーう!!! 何を隠そうおれたちこそが!!! 世界政府より『鋼』の名を賜りし、最年少国家錬金術師の資格を持つ兄エドワードと!!!」

「兄にも劣らぬ鍊金術の腕前と鎧の体を持つ弟アルフォンス!!!」

「二人合わせて最強エルリック兄弟!!!」

「ビシィツ!!」とどこぞのヒーローのようなポーズをとるエドワードに、アルフォンスがひらひらと紙吹雪を散らせる。

盛大に決める彼ら兄弟に対して、エレノアは冷え切った眼差しを向けて付け加えた。

「史上最小国家鍊金術師と兄よりでかい弟と覚えてやってください」

「姉弟子——っ!!?」

あんまりな呼び名に、二人は涙目でエレノアに縋りつく。

理不尽な評価に抗議もしない点を見るに、この力関係が長年続いていたのだろうと他の面々は察した。

項垂れる兄弟に横目を向けてから、ナミはエレノアに耳打ちした。

「ねエ…国家鍊金術師って一体何者なの?」

「簡単に言えば……『王下七武海』と同じく政府に忠誠を誓うことで、多大な研究費用と援助を受けている有能な鍊金術師……軍の狗だよ」

少し興味を示している様子のナミだが、エレノアの説明はかなり偏見が混じっている気がした。

エレノアは深いため息をつき、咎めるような視線をエドワード達に向けた。

「鍊金術師よ、大衆のためにあれ」。この言葉を侵し、人々ではなく政府のためだけに術を使う人たちだから、あんまり好かれているとは言い難いかな。エドくんは自分の研究のために、世界政府に魂を売っちゃったのさ」

「言い方にトゲがある……!!!」

言い返したいが事実であるためか、エドワードとアルフォンスは悔し気に拳を震わせたまま膝をついていた。

鍊金術師自体をエレノア以外に知らないルフィは、兄弟に対して何やら期待に満ちた視線を向けた。

「ふーん…：そういうア、お前らもエレノアみたいに手を合わせてバーンってやつできるのか？」

「兄さんはできるけど…：僕はできないんだ。ご期待にそえなくてごめんなさい」

ルフィからの問いに、アルフォンスは申し訳なさそうに頭をかく。

それを聞いていたゾロは片眉を上げ、アルフォンスの背後に音もなく近寄ると、おもむろに彼の兜をがっしりと掴んだ。

「何言つてやがんだ。十分面白れエ身体してんじゃねーか」

「あつ」

そのままガポッと兜が外され、アルフォンスの顔がさらされる…：と思いきや首がない

その体に、全員からぎよつとした視線が集中した。

「ぎゃ——つ!!! 首がもげたア——!!」

「このみようちきりんな体も…錬金術が関わってるのか?」

「ボクの頭で遊ばないでくださいよ!!!」

「どどどどどなつて…」

阿鼻叫喚へと変わる船上で、ぽんぽんと掌の上でボールかなにかのように兜をもてあそぶゾロに、アルフォンスが猛抗議する。

深いため息をついたエドワードは立ち上がると、アルフォンスの鎧の胴を掴むと、その中身が見えるように傾けた。

「どうもこうも」

「こういう事で」

そう言つてアルフォンスは、自分の体をゴングンと叩く。

鋼の入れ物を叩いたような虚ろ音が響き渡り、その異様さを全員に視覚と聴覚で伝えた。

「なつ…中身がない…空っぽ…!!」

「これはね、人として侵してはならない神の領域に踏み込んだ罪つてやつなんです。ボクも兄さんも…そして姉弟子も」

アルフォンスはゾロから兜を奪い返すと、かぼつと元の位置に戻して黙り込む。

妙に重苦しい空気が漂い始めた甲板で、エレノアが鋭い目を兄弟に向けた。

「エドくん……あんた達が捜してる資料ってやつぱり……」

「……………ああ、ある国で出会った錬金術師が残したそいつには、全ての錬金術師が泣いてほしがる代物の作り方が書いてある」

もはや隠し通せることではないと悟ったのか、エドワードは少しだけ躊躇ってから語り始めた。

その目に、煌々と燃える覚悟の灯を覗かせながら。

「ある一説にはこうある……『それは苦難に歓喜を、戦いに勝利を、暗黒に光を、死者に生を約束する血のごとき紅き石。人々はそれを敬意をもって呼ぶ——『賢者の石』と』
!!!」

「ああ、前にエレノアがブツ壊してたアレか」

ルフィは以前聞いたことがあったなとほんやり思い出しながら、遠い目になった。

その言葉を深く考えず、エドワードは強く頷くと腕を組んで続きを語った。

「そう……!! 『哲学者の石』『天上の石』『大エリクシル』『赤きティンクトウラ』『第五実体』『鮮血の星』など数々の異名で呼ばれる、幻の錬金術式増幅装置。死者さえよみがえらせられるというこの伝説の代物の作り方が書かれた資料の手掛かりを、おれ達は何年も費

やしてようやくつかんだんだ」

ぐつ、と鋼の拳が握りしめられ、かすかに金属がきしむ音が響く。

青年の胸の内に宿る強い思いを感じ取りながら、聞いていた一味はだんだんと「おや？」という表情を浮かべ始めた。

「アレさえあれば、おれ達は元の体に戻れる……!!? それまでは、どんな手段を使つてもアラバスタに行かなきゃならねえんだ……!!」

そこまで言い切つたエドワードはようやく、ルフィが口にした言葉を思い出し、目をしばたかせた。

そしてしばらくして、顔からぶわつと冷や汗を噴出させ始めた。

「壊したア!!!?」

驚愕のあまり、兄弟は仲良く同時に飛びのき、メリー号の欄干に背中から激突した。

仲間達も驚愕の表情で固まる中、エレノアは冷静にエドワード達を見つめていた。

「ななななな何てことしてくれてんだあんなア!!!」

「ボつ…ボク達が何年も費やしてやつと手がかりをつかんだっていうのにイ…!!!」

「あ、これ言わない方がよかつたか?」

「いいよルフィ…そのうち言つときたかつたことだし」

ものすごい勢いでエレノアに詰め寄るエドワードと、頭を抱えて天を仰ぐアルフォン

ス。

この世の終わりのように嘆く二人にルフィは少しばかり罪悪感を感じたようだが、エレノアは静かにそれをなだめた。

「エドくん、アルくん……姉弟子として言っておくけど、アレには今後希望を持たないことをオススメするよ。……アレは人の手に余るものだ」

「んなもんわかっただよ!! 伝説級の代物なんだ……多少の無茶で釣り合いが取れるんだっただいくらでも……!!!!」

「そういうことを言ってるんじゃないんだよ!!!!」

どれほど自分たちがそれを求めていたか、それがありありとわかるほどに激しい怒りをぶつけるエドワードに、エレノアはそれ以上の激情を返す。

頭に血を昇らせていたエドワードは、その声に一気に勢いをそがれてしまった。

「姉弟子……?」

「……できればあんた達には、真実を知ってほしくない……私は怖いんだよ……強い心を持つてるあんた達が、心を折られて立ち止まってしまうことが……!!」

姉弟子の見せる、見た事もない様な重い表情に、エドワードは思わず後ずさる。

しかしそれでも、求め続けた秘宝が失われたショックからは立ち直れず、悔し気にエレノアから目をそらした。

「それでもおれ達には……『賢者の石』に頼るしかないんだよ……!!!」

安易に割って入る事のできそうにない思い空気に、一味はしんと静まり返る。

そんな中、ルフィはいつも通りの能天気な顔でエドワードの肩を叩いた。

「まーでもいいじゃねエか。ビビの国に行けば作り方がわかんדר？」

「ああ、そりやそうだ」

「悲觀的になりすぎてた!」

さつきまでの悲痛な表情はどこへやら、エドワードもアルフォンスもうっかりしていたとばかりに顔を上げた。

あつはつは、と暢気な笑い声を上げる彼らに、一味の緊迫も一氣に薄れていった。

「よくわからねエが……とりあえずお前らも目的地は同じなんだな?」

「鍊金術師がさらに二人追加か……面白れエじゃねエか」

「歓迎するぜエルリック兄弟!!!」

敵方にいた政府関係者という出自に、やや警戒気味だったゾロやサンジ、ウソップも、話せばなかなかわかる奴らと知ってか態度を軟化させる。

味方内で疑い合うような事態は免れたようだ。

「ぜってー賢者の石を手に入れてやるぞ——つ!!! 眞実がなんぼのもんじゃ——い

!!!」

「おお——っ!!」

「うお——っ!!」

エドワードとアルフォンスは、ルフィと肩を組んで海に向かって叫び始める。

仲間の選考基準がおもしろくていい奴というルフィにとっては、これ以上ないくらいに好ましいメンツのようだった。

「……………まあ、それでもあんた達がアレを求めるってんなら、私はもう止めないけどね……………」

エレノアはそんな彼らを呆れたように見やり、深いため息をついた目を反らす。どんな結果が待っているようと、彼らの決断に全て委ねることにしようだ。

ふとその目に、肩を振るわせてうつむく少女の姿が映った。

「……………本当にごめんなさい……………あなた達は自分のことだけでも大変なのに……………こんな事態に巻き込んで……………」

「ビビ……………」

自分の他にも悲しい運命を背負った己たちがいたのだと、ビビはその表情を重く沈ませる。

エレノアはその姿をじっと見つめ、その肩を叩くと、ルフィたちの方に指をさした。

「あいつら全然聞いてないみたいだよ?」

「おい!! 野郎ども!! おれのスペシャルドリンクを飲むか!!」

「[[[[「おお——っ!!」]]]]」

「……………」

シリアスな空気をもともしない男たちの歓迎の宴に、ビビのこめかみに静かに血管が浮き立つ。

彼女のこのやりきれない気持ちは一体どう消化したらいいのだろうか。

「いいの?! こんなんです!!」

「いいんじゃない? リラックスしてるなら逆に」

「シケでも来たらちゃんと働くわよあいっらだって…死にたくはないもんね。はい、あなたの」

「…………それはそうだろうけど……………なんか…気が抜けちゃうわ……………」

国を狙う悪党が待っているというのに、とてつもないプレッシャーがのしかかっているはずなのに、そんな気分を微塵も見せない連中にビビは困惑する。

そんな気持ちも微塵も知らず、男たちはサンジの作ったドリンクに舌鼓を打っていた。

「うお!! イケるクチだな、おい。うめエか!! どんどんいけよ!! アルフォンス、お前はどうかだ?」

「あ、ボクはご飯食べられないんで……」

「なーウソツプ、釣り道具作ってくれよ」

「釣りがー、いいなそれ」

「だったらおれに任せておけ。アーティスティックなつり竿を……」

「待て待て、お前だけにいいカツコはさせねえ！」

わいわいがやがやと、絶好調で船旅を満喫している一味に、ビビは戸惑うばかり。

ナミとエレノアは、そんなビビにサンジから受け取ったドリンクを渡して明るい笑顔を向けた。

「悩む気も失せるでしょ、こんな船じゃ」

ビビは戸惑いながらも、受け取ったドリンクを恐る恐る口にして海を眺める。

心地よい風が吹き、ビビの長い髪を優しくなでていく。体の隅々まで染みわたる海風を浴び、ビビの口元には次第に笑みが浮かんでいった。

「……ええ、ずいぶん楽……」

肩にのしかかっていたものが、僅かに軽くなったような気持ちになり、ビビは柔らかな表情を見せる。

彼女本来の表情が見えたことに、エレノアはほっと安堵の息を吐いた。

「おい、みんな見ろよ！ イルカだぜ」

「おお」

「わあつ、かわいい…」

遠く海の彼方で跳ねたイルカを、一味は微笑ましげに眺める。

しかし、そのイルカのもたらす影が次第に大きくなり、ついにはメリー号をも覆い隠すほどになると、ようやく一味は事の重大さに気づいた。

「デカイわ——っ!!!」

「逃げろ——っ!!」

「ほいきたキャプテン!!」

「偉大なる航路^{グランドドライン}にまともな生物などいるはずがない。

そんなことを今さら思い出しながら、一味は新たな窮地を脱するために一致団結し、総員でオールを漕ぎ始めるのだった。

第9章 強者の誇り

第59話 “古代の島”

腕にはめた記録指針ログポースの針が差す方向を、ナミはじつと凝視する。

その先にあるのは、広大な海にポツンと存在する一つの島だ。

「間違いない!! サボテン島と引き合つてる私達の次の目的地は、あの島よ!!」

「アレかア~~~~~っ!!! “偉大なる航路”、2つ目の島だア~~~~~っ!!!」

最初の困難を乗り越え、長い航海を終え、ようやく見つけた次なる目的地。

着実に夢に至るための道を進んでいることに興奮するルフィは、両手を上げて歓喜をあらわにしていた。

しかし喜びをあらわにしているのはルフィだけで、他の面々は不安が隠しきれていなかった。

「……………気をつけなきゃ……………ミス・オールサンデーの言っていたことが気になるわ」

「か……………!! か……………!! 怪物でも出るってのか!!?」

「さア、わからない」

「そろそろ食料を補給しねえとな。……この前の町じゃ何も貯えてねえし」
「——つつつてもおい……こりゃあ……」

青い顔で右往左往するウソツプを横目に、サンジはじつと島の入り口を睨む。

島を横断する形で続いている水路、その左右に広がっているのは、巨大な木々が生い茂るまさに大自然の奥地であった。

「……まるで秘境の地だぜ……生い茂るジャングルだ」

草木が囁く音や、正体不明の生物の鳴き声が反響するその地を、若者たちはごくりと息を呑みながら進む。

ふとした瞬間にでも脅威が襲い掛かってきそうなほど、森は不気味さに満ちていた。

「……ここが、リトルガーデン……!!」

「——そんなかわいらしい名前の土地には見えねえぜ？　どの辺がリトルなんだ……」

「!!」

「………大体見てよ!!　こんな植物……私、凶鑑でも見たことないわ」

聳え立つ太く高い樹々を見ながら、ナミが震える声で呟く。

普段見るような広葉樹とは異なり、柱のように立つ幹の最上部から傘のように葉が広がっている。その周囲の草木も見た事がない形状で、豊富な知識を持つナミでも答えが見つからずにいた。

その時、ガサガサと葉が擦れる音とともに生物の咆哮が聞こえてくる。

ナミは思わず耳をふさぎ、きよろきよろと辺りを見渡して慄いた。

「きゃあ!!! 何!!! 今のっ!!!」

「……ナミさんったらかわいい♡ 大丈夫さ、ただの鳥だよ。そしてここはただの密林、心配ねエ!!!」

「……ただの鳥に、〃カギツメ〃があるのかねエ」

空を見上げていたエレノアが、ふとそんなことをつぶやく。

ルフイとともに興味深そうに見つめる先に飛んでいたのは、翼にカギツメを備えた、嘴に牙を生やした鳥のような生き物。

そんなものが見えたかと思えば、今度はどこから爆発音が響き渡る。腹の底にまで響くその音に、ナミとウソップは思わずびくりと肩を震わせた。

「これが……ただのジャングルから聞こえてくる音なの!!!」

「まるで火山でも噴火したような音だぜ、今のはっ!!!」

おろおろと狼狽する二人の肩に手を置いたエレノアは、クンクンと鼻を動かして見せた。

「……うん、ウソップ君の言った通りみたいだね。硫黄の匂いがするし、気候も火山付近の島々と同じくらいの状態……たぶんこの島には、活火山があるんだよ」

「うそでしょ……!!」

島によっていろいろな環境があるのはわかってはいたが、島の中に活火山があるなどまるで古代の世界である。

頬を引きつらせるナミが次に目撃したのは、木々の間から彷徨い出て、ドサツと倒れ伏す傷だらけの大きな虎の姿だった。

「普通じゃないわっ!! 絶対、普通じゃない!!! 何で ジヤングル 密林の王者」の虎が血まみれで倒れるの!!!」

「え? わりとありふれてることじゃないの?」

「そんなもんがありふれてたまるか!!! こ……この島には上陸しないことに決定っ!!!」

何を言っているのかといった様子で首をかしげるエレノアを放置し、ナミは今後の方針を勝手に決定する。

多少の危険は航海につきものだが、できればそんなものは回避するに越したことはないのだ。

「…船の上で “記録” がたまるのを静かに待つて…!! 一刻も早くこの島を出ましょ!!! は…早くアラバスタへ向かわなきゃね」

「理由はそれだけじゃなさそうだね……まアでも、私も賛成。リスクは最小限にとどめるべきだからね」

自分の命の危険を考え発言するナミだが、エレノアはまた別の理由で頷く。

エレノアが見つめる先には、一刻も早く自分の国へと帰還することを望んでいるビビの姿がある。

だがそんな中、欄干にしがみついていたルフィが、体を震わせながら口を開いた。

「サンジ!! 弁当っ!!」

「弁当オっ!!」

「ああ!! 『海賊弁当』!!!」

生い茂り、来るものを拒む密林に向けられるルフィの目は、キラキラと興奮に輝いている。

自分自身にも止められない好奇心が、彼を突き動かしていた。

「冒険のにおいがするっ!!!」

満面の笑みを浮かべてそう告げるルフィに、ナミはぎよつと目を剥いて振り向く。

自分の提案とは全く逆の希望に、船長の正気を疑ってしまったていた。

「ちよ…ちよつと待ってよあんだ!!! どこいくつもり!!」

「冒険。ししし!! 来るか?」

「いくいく!! おれも行く!!!」

「エドくん!?!」

「兄さん!!？」

ルフィと同じくうずうずした様子で手をあげるエドワードに、今度はアルフォンスが言葉を失う。

兄が待つなどという退屈な時間に耐えられないことはわかっていたが、担っている任務のことを考えれば愚かとしか言いようがなかった。

「何言ってるのさ!!？」　ボクらはあくまで王女様の護衛でしょ!!？　勝手なこと言わないでよ!!!」

「バカを言え……おれが理由もなく出歩くわけねエだろ。おれはただ………船の上でじっと待つてることが苦痛なだけだ」

「遊ぶ気満々じゃないか!!!」

全く悪びれる様子もなくそう答えるエドワードに、アルフォンスはツツコミを入れる。

だが兄はそんなこと一切気にした様子はなく、ルフィと肩を組んでわいわいとほしやぎ始めていた。

「やっぱ男なら人生冒険すべきだよな!!」

「おうよ!!　やっぱおめーわかってんなー!!」

「ダメだあれ……誰が言っても止まりそうにない」

「サンジ弁当ーっ!!」

「弁当よこせーっ!!」

「わかったよ、ちよつと待ってろ」

実に楽しそうに島の探索に思いを馳せているルフィとエドワードを見て、アルフォンスはがっくりと肩を落とす。

エレノアがそんなアルフォンスの肩を叩いて労っていると、不安気ながらもどこか期待を寄せるような表情のビビが手をあげた。

「……………ねエ!! 私も一緒に行つていい!!」

「おう、来い来い」

「あんたまで何言うの!!」

「ええ……………じつとしてたらいろいろ考えちゃいそうだし、
“記録”がたまるまで気晴らしに!!」

未知の地に恐れを抱きながら、こんな機会は二度とないかもしれない、そんな衝動に押された王女は、ナミににっこりと笑みを見せた。

「大丈夫よ!! カルーがいるから」

「……………!!」

「本人、言葉にならないくらい驚いてるけど…」

「見ろ、アルフォンス。王女さんが行くならおれも行かなきゃダメだろ」
「ただのこじつけじゃないか!!!」

大義名分を得た、とさらに笑みを深めるエドワードにアルフォンスは叫ぶが、もはやこの二人は止められそうにない。

サンジから弁当を受け取った三人と一匹は、さっそく船を降りて密林の中へと入っていった。

「よし!! 行くぞ!!!」

「おう!!!」

「おおよそで戻って来るからっ!!!」

立ち止まってなどいられない、と小走りで進むルフィとエドワードの後を、やや申し訳なさそうにビビが、不安げにカルーがついていく。

その頼もしい背中を、ナミとウソップは呆然と見送るほかになかった。

「度胸あるな、ミス・ウエンズデー」

「さすが敵の会社に潜入するだけあるわ」

「私も散策してくるかな…」

三人の姿が見えなくなると、エレノアもそんなことをつぶやいて船を降りた。

一味の中で最も頼りになるベテランの発言に、ナミは慌てて呼び止めにかかった。

「ちよつと待つて!! あんたまで出歩く気なの!!」

「船にある本全部読み尽くしちゃったし、研究するにも材料も触媒もないし、手ごろな素材がないか探してこようと思つてさー。いつてきまーす」

エレノアは全く不安を抱いていない様子でそう告げ、ナミが呼び止める間もなく森の中へと入つていった。

するとそれに触発されたのか、ゾロも長旅で固まった首を鳴らしながら立ち上がった。

「じゃ、おれもヒマだし、散歩してくる」

「散歩?!」

「ここにも度胸の塊いたわ…」

未開の地を暇つぶしに歩くとほざく連中に、どいつもこいつも胆が据わりすぎている、とナミは頭を抱えてうつむく。

するとそこで、慌てた様子でサンジがゾロを呼び止めた。

「おいゾロ!! 待て待て!!」

「ん?」

「食糧が足りねえんだ。食べそうな獣でもいたら狩つてきてくれ」

「ああ、わかつた」

かなり仲の悪い二人だが、一味の仕事が関わればそこまで険悪にはならないようで、一見穏やかにゾロが頼みを聞き入れる。

だがそこで彼は、余計な一言を口にしてしまった。

「お前じゃとうてい仕留められそうにねエヤツを狩ってきてやるよ」

「待てコラア!!!」

何気なくゾロが放った一言にカチンときたサンジが、くわつと形相をかえて吠える。鬱陶しそうに振り向くゾロに、サンジは欄干に足をかけて怒りに満ちた目を向けた。

「あア!!」

「聞き捨てならねエ!!! てめエが、おれよりデケエ獲物を狩って来れるだと…!!」

「当然だろ!!」

ナミとウソップは、ここまでの流れでこの後の展開を予想し天を仰ぐ。

予想通り互いに火花を散らせたゾロとサンジは、燃え上がる闘志を目に宿して互いに睨み合った。

「狩り勝負だ!!!」

相容れない二人の突然の勝負の宣告。

サンジはすぐさま船を降り、ゾロの向く方とは全く違う方に向かって歩き出した。

幸い島はかなり広いために、勝負の途中で二人が出くわすということもそうそうなき

そうに思えた。

「いいか!! 肉何kg狩れたか勝負だ」

「何かの間違いだろ。望むところだ」

「…どいつもこいつもなんであいつら、あんなにこうなのかしら」

「わかるぜ、その気持ち。泣くな、おれはおめエの味方だよ…!!」

「…………お二人とも、苦勞してきたんですね」

苦勞しているのは姉弟子だけではないのだなあ、とアルフォンスは涙を流すナミとウソップに同情の眼差しを送る。

兄も大概だが、似たような人が集まる一味ではその負担もきつと大きいのだろう、と悲しい気持ちになっていた。

「「は」」

だがそこで、三人はある重大な事実気づく。

ルフィ、エレノア、ゾロ、サンジ、エドワード。現在の一味の中で、戦いに長けた人物がみないなくなってしまうことに。

「…………こうなったら戦えるのはあんただけよ」

「…………頼りにしてるぞ、弟」

「えええええっ!!? ボクですかア!!?」

覚悟を決めた目で、ナミとウソップはアルフォンスの両肩を叩く。

いきなり期待を寄せられたアルフォンスは、喜びに駆られるどころではなかった。

大きな不安を抱えたまま、三人は甲板に座り込む。その時ナミが何かを思い出したのか眉間にしわを寄せた。

「んんん……でも、ちよつと待って……」

「ん？」

「何か本で読んだ記憶があるのよ!! 聞きおぼえがあるの……」

「『リトルガーデン』にですか？」

キョトン、とした様子でアルフォンスが聞くと、ナミはすぐさま書物を納めている部屋へ急ぐ。

以前読んだ記述が乗った本を探し、ナミはバサバサと不要な本を本棚の外へと放り出した。

「これじゃない、これじゃない。どれだっけな、ド忘れしちゃった」

「そう言えばボクも、最近その単語を目にしたことがあるような……」

「あんだ目、ないじゃない」

「そういうことじゃなくてですね!! ……んん？」

ナミを手伝い、自分の記憶を頼りに本を探し続けていると、やがてアルフォンスはそ

れを見つけた。

そしてそのタイトルを目にした瞬間、アルフォンスとナミはぎよつと表情を変えて駆け出していた。

「ウ…ウソツプさん!! ウソツプさん!!」

「何だ、どうした。本は見つかったのか?」

「大変よ!! この島には…」

甲板で一人で待っていたウソツプは、血相を変えて駆け寄ってくる二人に胡乱気な視線を向ける。

しかしその時、メリー号の泊まっている場所のちょうど目の前の森の中に、巨大な影が動くのが見えた。見えてしまった。

「いやああああああっ!!!」

「ギャあああああ!!!」

「うわあああああ!!!」

「何じゃこりやああああああああああ!!!?」

同じ時、それを目撃したエドワードが目丸くして声を上げていた。

三人と一羽が凝視する先、そこに居たのはこの世にいるはずのない生物の姿。

遙か長い首を伸ばす、巨大な古代の爬虫類——恐竜の一種、雷竜であった。

「なんで陸に『海王類』がいるんだ?！」

「いや違う!!　こいつは…恐竜つ!!!」

「恐竜つ!!」

「じゃあ…ここは太古の島…!!」

「マジかよ…ここが!!」

初めて見る異形を前に、ルフィは興奮して目を輝かせる。

対してビビとエドワードは、目の前で広がる光景に信じられないといった様子で立ち尽くしていた。

「恐竜たちの時代が、ここに閉じ込められているのよ。…『グランドライン』にある島々は、その航海の困難さゆえに島と島との交流もなく、それぞれが独自の文明を築き上げているの」

「飛び抜けて発達した文明を持つ島もあれば…!!　何千年も何万年もの間何の進歩も遂げずにその姿を残す島だってある!!」

「…『偉大なる航路』のデタラメな気候がそれを可能にするのよ」

普通ならばありえない、常識では語れない光景が、今まさに目の前に広がっている。

本の知識などでは得られない驚愕と感動が、ビビとエドワードの中で溢れ出してい

た。

「だから…!! この島は、まさに恐竜達の時代、そのものなんだわ…!!!!」
 「まさに生きた化石…!! 本で知識は得ちやいたが…:まさかこの目で実際に見られるなんてな…!!!」

エドワードは歓喜で顔をくしゃくしゃに歪め、ふるぶると身体を震わせる。

知識を追い求める彼にとって、これほどの衝撃はまさに得難い宝物に等しかった。

「くうくう!!! やっぱり来てよかつたぜエ〜〜!!!」

「そんなことを言ってる場合じゃないわ…!! こんな場所、停泊するには危険すぎ…:」

ビビは興奮するエドワードにそう注意するが、当の本人はすでに聞いてはいない。

さらにそこでビビは、もう一人がさつきから静かなことに気づき、ハツと振り向いて目を見開いた。

「飛びつくなーっ!!!」

いつの間にか雷竜の首にしがみつき、よじ登っているルフイに、ビビの絶叫が響き渡るのだった。

かつてある冒険家は、この島について変わった一説を残した。

それがナミとアルフォンスが読んだ本の、もつとも有名なフレーズであった。

——あの住人達にとって…まるでここは「小さな庭」の様だ。

——巨人島「リトルガーデン」——この土地をそう呼ぶことにしよう。

探検家ルイ・アーノート

第60話 `世界一の大喧嘩`

「……………!!!」

「……………!!」

留守を任されたメリー号の上で、ナミとウソツプとアルフォンスが彫像のように立ち尽くす。

涙目で向けられる視線の先に現れたのは、あまりにも大きな人の顔であった。

「酒を持ってきているかと聞いたんだ」

木々を草むらのようにかき分け、丸い顔を出した兜をかぶった巨人は、友好的な笑みを浮かべてそう尋ねる。

しかしナミたちからしてみれば、どんなに笑顔だろうと恐怖以外の何物でもなかった。

「……………!!! す…!! 少しなら…」

「そうか、もってるか」

満足のいく答えだったのか、巨人は満面の笑みを三人に返した。

が、その顔は次の瞬間鬼のような険しいものに変わった。

「ぬあう!!!」

「ギャ—— つ!!!」

至近距離で恐ろしい顔を見せられたナミ達はまたしても悲鳴をあげ、巨人の尻に食らいついている同じくらい巨大な影に涙を流しながら目をみはる。

鋭く並んだ牙を突き立てている、二足歩行の大顎の爬虫類に。

「……!! キョ……」

「恐竜……?」

次々に現れる信じられない存在の登場に、徐々についていけなくなってくる三人。

すると巨人は、尻に食らいつく恐竜の首に巨大な斧を見舞い、一撃で真つ二つに両断してしまった。

「ギャ—— つ!!!」

「我こそが!!! エルバフ最強の戦士!!! ブロギーだ!!! ガババババ!!!」

血のこびりついた斧を天に掲げ、仕留めた獲物を誇るブロギーと名乗る巨人。

恐竜だけでも十分危険でとんでもない相手なのに、そんな生物を一人でたやすく仕留めたさらなる脅威に、ナミとウソップ、アルフォンスは限界を迎えた。

「肉もとれた!! もてなすぞ!! 客人よ!!!」

（し……死んだフリ）

(……………死んだフリ)

(ボクはただの鎧ボクはただの鎧……………)

楽しそうに恐竜の首を見せて迎えようとするプロギー。

三人はばたりと倒れたまま、意味もない死んだふりをし続けることに必死になるのだった。

「うっほ——っ!!! いい眺めだなーっ」

麦わら帽を手で押さえ、ルフィは島中を見渡せるその場所の光景に声を上げる。

長く太い首を伸ばす雷竜の頭の上は、どんな大樹の上よりも高く見晴らしが良かった。

「ここで弁当食べてえなー。火山があるのかーっ!! そういやエレノアが言ってたなー。な——んかでつけエ穴ボコもあるぞ!!」

「危ないったら!! 大人しくても恐竜よ!!」

「そうだア!! さっさとそこおれと代わりやがれ!!!」

「だからそうじゃないでしょ!!?」

「大丈夫だよ。こいつ、さっきから草ばかり食ってるし。おれのこと気づいてねエよきつと。それよりあつちいでつけエ穴ボコあんだよ」

先ほどから全く自分に興味を示していない様子の雷竜の頭の上でくつろぐルフィ。興奮するエドワードはともかく、真下から見上げるビビとカルーからしてみればいつ喰われるかと休む暇もなかった。

「ん？」

笑っていたルフィだが、不意に足元の感覚が消えたことに訝しげな声を上げる。

すると次の瞬間、ルフィは顔を上げた雷竜の口のなかに、ぱくんと飲み込まれていた。

「あ」

「食べられてんじゃないのよ——っ!!!」

思わず声を漏らすルフィとエドワードに、ほれ見たことかとビビが叫ぶ。

助けてくれると言ってくれた人が、こんなあつさりした終わり方でいいのか、とビビが頭を抱えた時だった。

ルフィを飲み込んだ雷竜の首が、半ばから一刀両断されたのだ。

「ゲギャギャギャギャギャギャ!!! 活きのいい人間だな!!! 久しぶりの客人だ!!!」

奇妙な笑い声をあげ、断たれた雷竜の喉の穴から転がり出たルフィを受け止めたのは、雷竜よりもはるかに大きな人物。巨大な剣を掲げた巨人の戦士だった。

「うっは~~~~っ!!! でっけエナーっ!!! 人間か?!!」

「ゲギャギャギャギャ、我こそがエルバフ最強の戦士!! ドリーだ!!!」

「きよ……巨人……!!」

「……………!!」

目を丸くするルフィを手のひらの上に置き、愉快そうに笑うドリー。

ビビとエドワードは、生まれて初めて見る人間の百倍は大きな人種に言葉を失っていた。

「…初めて見た…噂には聞いていたけど…」

あんどりと口を開けて立ち尽くすエドワードの横で、ビビは驚愕と同時に高揚を覚える。

凶鑑や物語でしか聞いたことがないような存在が目の前に本当にいることに、大きな感動を覚えているようであった。

「お前達、うちへ招待しようっ!!」

「う……………!! み……………見つかった」

しかしやはり離れた場所からこそそそ見ているということとは、許してはくれそうになかった。

「ガババババババ!! さア、焼けたぞ、食べえ!!」

ゴトン、と業火でこんがり焼かれた巨大な肉の塊が、ナミたち三人の前に置かれる。

見るからに美味しそうで、食欲をそそる香りがしたが、ナミたちはブンブンと首を振ってそれを拒否した。

「「しよ……食欲がありません」」

青い顔で俯くナミたち。その目が向くのは、周りに転がっている白い塊の山だった。

(おい……見ろ)

(人の骨ですね……)

(わかってるわよオ………!!)

カラカラと乾いた音を響かせ、落ち窪んだ穴から見つめてくる気がする白骨の山。

まるで自分たちの未来を暗示しているかのような光景に、三人は今にも気絶しそうになっっていた。

「遠慮などするな!! うまいぞ、恐竜の肉は!!」

「「食べたくありません」」

(おれ達も食われるみてエだな………)

(そうね、少しでも太らせて久しぶりの人間を食べようって、巨人まるだしね………)

(巨人って鉄でも食べられるんでしょうか……)

(……イケるんじゃない?)

(若いのにな……おれら)

(食べ時なのかもね……)

(やだなア……彼女もできてないのに死ぬの)

考えれば考えるほど、ナミ達の脳裏には最悪の未来しか見えない。

そんな暗い雰囲気を払拭しようと思つてか、ナミあ思い切つて肉に食らいつくブローギーに手を挙げて尋ねた。

「ブローギーさん……一つ……質問してもいいですか……？」

「ん？ どうした娘っ」

「……この島の『記録』はどのくらいでたまるんでしようか……?!」

せめていつまで逃げ隠れていればいいか知りたい。

そう考えたナミだったが、現実にはあまりにも残酷であつた。

「一年だ。まあゆつくりしていけ!! ガババババババ」

愉快そうに笑うブローギーの前で、ナミ達は一斉に背中から倒れ込むのだった。

「ゲギャギャギャギャギャ!!」

「だつっはっはっはっはっは!!」

「ぎゃっはっはっはっは!!」

香ばしい匂いを広げる肉を挟んで、二人の青年と巨人の中年の笑い声が響き渡る。

もう一人の巨人の方とは全く逆の、笑顔溢れる和気藹々とした空気がそこでは広がっていた。

「こりやうめエな、巨人のおっさん!!」

「ゲギャギャギャギャ!! おめエらの、この海賊弁当とやらもいけるぜ。ちと足りねエがな!!」

「あたり前だろ、マズイなんて言ったらぶつ飛ばすぞ!!」

「ギャギャギャ、面白エチビだ!!!」

「そーそー、おっさんからしてみれば世の中の人間はみんなチ……………誰がミジンコどチビだ!!!」

「め…………めちやくちや馴染んで……………」

出会って数分とは思えないほどに意気投合した様子のルフィ達に、ビビとカルーは戦慄した視線を送る。

恐怖心というものはないのだろうか、と正気を疑ってしまうほどだった。

「ところで、おっさんは何でここに一人で住んでんだ?」

「巨人族って確か……………偉大なる航路^{グランドライン}のどっかにあるエルバフって村に住んでんじゃないか?」

「おオ!! よく知ってるな、その通りだ……………だが村には、掟がある」

二人に尋ねられ、ドリーはサンジの作った弁当の箱を置いて語り始めた。

「例えば村で争いをおっぱじめて互いに引けぬ場合……おれ達はエルバフの神の審判を受ける。エルバフの神は常に正しき者に加護を与え、正しい奴を生き残らせる。それで俺も一騒動起こしちまって、今この島は俺とある男の決闘場つてわけだ。正しい方が勝負に勝ち……生き残る」

「……神……ねエ」

ドリーは得意げに語るが、それを聞いたエドワードの表情はやや渋いものに変わる。何か神に対して思うものでもあるのか、と思つたビビだったが、その疑念はドリーが発した言葉で一気に吹っ飛んでしまった。

「だがかれこれ100年つ、てんで決着がつかねエ……!! ゲギャギャギャ」

さも可笑しそうにとんでもないことを告げるドリーに、ビビはぎよつと目を見開く。流石のルフイとエドワードも、その途方も無い時間に対しては驚愕を禁じ得なかつた。

「100年も戦つてんのか!!」

「ばつかみてエ……!! 神様の決め事でそこまでやんのかよ」

「驚く程のことじゃねエ、おれ達の寿命はてめエらの3倍はある。ゲギャギャギャギャ
ギヤギヤ」

「いくら3倍あったって、100年も経てばケンカの熱も冷めるでしょ!! まだ戦い続ける意味があるの!! 殺し合いでしょう!!」

理解ができないビビは、先ほどまでの恐怖心も忘れて詰め寄っていた。

何が彼らをそこまで駆り立ててるのか、彼らを100年も支えているのか、問いただそうとした時だった。

島の中心にそびえ立つ火山が、突如大きな爆発を起こした。

「うわっ、でっけー山の噴火だ!!」

「さて……じゃあ行くかね……!! いつしかお決まりになっちまった『真ん中山』の噴火は、決闘の合図」

ドリーは剣を持ちながら立ち上がると、迷うことなくある場所へと向かっていく。

みれば、同じ場所に向かつてくるもう一人の巨人ブローギーの姿もある。二人の巨人が向かう広く開けた草原はまさに、彼らのために用意された闘技場のようにも見えた。

「……そんな……!! 100年も殺し合いを続ける程の憎しみなんて……!! 争いの理由は一体……」

「そんなんじゃないよ」

止めようと走り出しかけたビビが、巨人たちを凝視したままのルフィに止められる。

訝しげに眉を寄せるビビの前で、ドリーはニヤリと不敵な笑みを浮かべて見せた。

「そう、誇りだ」

そして次の瞬間、二人の巨人の操る武器が振るわれ、互いの持つ盾に激突し凄まじい衝撃を放った。

「理由など、とうに忘れた!!!」

何もかもを破壊できそうなほどに強烈な一撃が、なんの遠慮もなく互いに振るわれる。

何者をも寄せ付けけない、近づかせることを許さない凄まじい闘志が、言えない波となつてあたりに広がっていくのを、ルフイたちは感じ取っていた。

「……………あいつらはもう、神様とかどうでもいいんだ……………!! 互いの譲れないもののために……………自分の信念を最後の瞬間まで貫き通す為に……………!!! 命がけて戦い続けるんだ……………!!!」

ドリリーの言う神の采配に対し難色を示していたエドワードは、ゴクリと唾を飲みながら呆然と呟く。

結末を神に任せるのではない、自分たちが全力を振るった結果が神の采配なのだと思ひ、巨人たちは戦うのだと、そう気づいて。

「ど……………どうしたの!!!」

言葉を失っていたビビは、唐突にルフイが倒れ込んだことでハッと振り向く。

ルフィは仰向けに倒れたまま、巨人たちの巨大さにただただ気圧されていた。

「まいった…デツケエ」

「ハハハ…勝てる気がしねエ」

体の大きさだけではなく、彼らは比べることもおこがましいほどに大きく、立派に見えた。

「互いにそろそろ故郷が恋しいな、ドリー」

「だから貴様をブチのめして、おれがエルバフへ帰るんだ!!」 プロギーよ!!」

渾身の力で武器を振るい、息も絶え絶えになりながら、ドリーとプロギーは互いに笑みを見せる。

わずかにそれれば即致命傷となる全力のぶつかり合いに、ウソップとアルフォンスは体を震わせ、立ち尽くすばかりであった。

「な…な、なんちう戦いだ…!!」

「お互いの全攻撃が急所狙いの一撃必殺…!!」

「こんな殺し合いを100年も…!!?」

ナミ達の立つ場所に、巨人達の戦いはなんら影響を及ぼしていない。

しかし地響きや衝撃は、確かにビリビリと振動を伝えてきていた。

「でも…よかった…!! 今のうちに逃げられるわ!」

「行きましよう、ウソップさん!!」

「すげエ…理由もねエのに…こんな戦いを…!!」

呆れるほどに凄まじく、身の危険を感じる戦いぶりだというのに、ウソップはその戦いの様子から目を離すことができないでいた。

理由を聞けば知らないという、途方も無い戦いに、ウソップは確かに魅せられていた。

「はた迷惑なケンカよね…」

「バカ野郎!! これが真の男の戦いつてもんなんだよ!!」

あきれた様子で肩をすくめるナミに、ウソップは打って変わって得意げに胸を張って見せた。

「例えるなら…あの二人は…自分の胸に『戦士』という旗を一本ずつかかげてる…それは命よりも大事な旗なんだ!!! それを決して折られたくねエ…!!! だから、その旗を守るために今まで100年間もぶつかり続けてきたんだ」

ウソップの見つめる先で、二人の巨人は未だ凄まじい激突を見せている。

いつ終わるのかもわからないほどに激しいその戦いを、ウソップは全て見逃すまいとするようにしつかりと凝視していた。

「わかるか?!? これは紛れもなく『戦士たち』の『誇り高き決闘』なんだよ!!!」

キラキラと眩しい輝きを瞳に宿し、ウソツプは巨人たちの戦いを讃える。

その表情には、探し続けていた理想の体現を目の当たりにしたかのような感動があった。

「別に興味ないもん、私そんなの…ホラ！早く逃げるわよ！」

「おれはもう少し見てる!!」

ついていけない、といった様子でため息をつくナミに、ウソツプはそう告げて仁王立ちする。

頑としても動かないという態度に、ナミのあきれはウソツプにも向けられた。

「まさにこれなんだ!! おれの目指す?勇敢なる海の戦士”つてのは!!! おれはこういう誇り高い男になりてエ!!!」

「……………ふーん」

半目を向けるナミは、特に何も言わずウソツプの横顔を見つめる。

立ち尽くしていたアルフォンスは、瞬きすらも惜しむウソツプをじっと見つめると、やがて小さく呟いた。

「ウソツプさん、巨人になりたいんですか…」

「お前は一体何を聞いてたんだ!!?」

「冗談です、冗談。…なれるといいですね、そんな大きな海賊に……!!」

だんだんと地団駄を踏むウソップに謝りながら、アルフォンスもやがて巨人たちの方を見る。

鎧の少年も、なんとなくウソップの気持ちがかかるような、そんな心地になっていた。

「……こんな戦士達の暮らす村があるんなら、おれはいつか行ってみてエなア……!!!」

まだ見ぬ戦士たちの住まう村に想いを馳せる若き海賊。

そうしているうちに、巨人たちの戦いもついに、佳境へと入っていた。

「7万3千466戦」

「7万3千466引き分け……カ」

腕に疲れが溜まったのか、互いに武器を取り落とした彼らが、それぞれの持つ盾で互いの顔を殴りつける。

ほぼ同等の力を顔面に食らった二人は、やがてゆっくりとその巨体を地面に横たわらせた。

「ガバババババ!!! ……ドリーよ!!! 実は酒を客人からもらった……!!!」

「……そりやいい!! 久しく飲んでねエ、わけてくれ!!! ゲギャギャギャ!!!」

互いに一步も動けないほどに疲弊しながら、笑い声に敵意はない。

100年もの間戦い続ける中でも、切っても切れない縁があることがよくわかる、不思議な光景であった。

第61話 “強者の誇り”

噴火を合図に始まった決闘が相討ちに終わり、それぞれの住まいである白い山の穴へと戻ったドリーは、ルファイたちから話を聞いてまたも爆笑していた。

「ゲギャギャギャギャギャ……!!! そうか!! 向こうの客人もてめえらの仲間か!!」

鼻が長エのが一人と女が一人と……あとはなんか鎧を着た奴がいたが」

「ウソツプとナミとアルだ! なんだあいつら! 船から下りねエとか言つといてやっぱり冒険好きなんじゃねエか!」

「なら、この酒はおめえらからもらったことになるな!!」

ブローギーからわけてもらった酒樽をジョッキのように持ちながら、上機嫌に語るドリー。海賊だっただけに酒は大好物らしい。

「……………ところでドリーさん」

タイミングを見計らって、ビビがおずおずと手をあげる。

同じようにエドワードもどこか不安気に表情を硬くし、ドリーに縋るような目を向けて口を開いた。

「さつき言つてたよオ……記録がたまるのに一年かかるって話、マジ本当か?」

「その辺にてめエらチビ人間どもの骨が転がってんのに気づかなかったか？ この島に
来た奴らは、たいてい記録がたまる前に死んじまうのさ」

「…………そりゃあ、恐竜や巨人が君臨してるような島でのんびりできる奴はいねエわな」
家の周りに転がっている白骨や、先ほど食べたばかりの恐竜の残骸を見やり、エド
ワードは頬を引きつらせた。

残酷な宣告を受けたビビはがっくりと膝をつき、顔を覆って嘆きをあらわにした。

「どうしよう…!! …たとえ一年間生きのびられても…!! そんなに時間が経過したら
…その時、国はもうどうなってるかわからない」

「マルコーさんの資料も残ってるかどうか怪しいな……最悪焼かれてたら目も当てられ
ねエ」

「そうだなー、あきるしなー一年は。なんかいい方法はねエのか？ おっさん」

今後に関わる重大な問題に頭を抱えるビビやエドワード。一方彼らとは全く異なる
理由で考え込むルフィはドリーに尋ねるが、さすがのベテランもそれに対する解決策は
持ちあわせてはいなかった。

「^{エターナルポース}永久指針^{エターナルポース}ならば一つある。ただし、行先はおれ達の故郷エルバフ。おれ達アつま

り…その^{エターナルポース}永久指針^{エターナルポース}を巡って今、戦ってるわけだ。強行に奪ってみるか？」

「それじゃだめだ。おれ達が行きてエのはそこじゃねエ」

「この次の島に行きてエだけなんだよ、なア」

「ええ…アラバスタへ続く航路を見失うならば進む意味がないわ」

「ほら」

望む道のりではないとビビが首を振り、余計に絶望感が襲い掛かる。

暗い雰囲気を払拭するように、ドリーはまた豪快に笑い始めた。

「ゲギャギャギャギャギャギャ!! ならば適当に進んでみるか!!? 運が良ければ行きつ

くだろうよ!!!」

「だっはっはっはっはっは、そうすつか!! あっはっはっはっはっは!! 着いたり

してなア!!!」

「ゲギャギャギャギャ本当面白エチビ共だ!! ゲギャギャギャギャギャギャ!!!」

「いっそのことそうしちまうか!! だっはっはっはっはっはっはっは…っはっはっはっはっはっは!!!」

「あのね……」

人が本気で悩んでいるのに、なぜこうも能天気になんて笑っていられるのだろうか、とビビは軽く殺意すら覚えてしまう。

しかしドリーにしてみれば、どうしようもない問題をいつまでも悩んでいるビビの方が不器用に見えるのだろう。自分なりの助言を送り、大いに笑った彼は喉の渇きを潤すために、受け取った酒樽をグイッとあおった。

その直後、ドリーの口から真つ赤な炎が吹きあがった。

!!!?

突然の事態にドリーも、ルフイたちも目を見開いて表情を変える。

思わぬ激痛により、ドリーはぎよろりと白目を剥いてゆつくりと倒れていった。

「酒が、爆発した!!!」

「おっさん!!!」

慌てて駆け寄り、ドリーの身を案じるルフイ。

エドワードがドリーの上によじ登り、口の中を覗いて容態を確かめるが、その結果は芳しくないものであるのは明らかだった。

「どうなってんだ!!!? 何で酒が爆発するんだ!!! だって、この酒はおれ達の船にあったヤツなんだろう!!!」

何が起こっているのかもわからず、ルフイはエドワードやビビに問い詰めるように吠える。

エドワードは外から見れば冷静に、しかし内心は非常に狼狽しながら爆発の原因を探った。

「爆発する液体………ニトログリセリンか……!!!? だったらなんだってそんなもんが……!!!」

「お腹の中から爆発してるわ…!!　なんて非道いこと…!!　まさか、あの相手の巨人がお酒に爆薬を」

「お前一体何見てたんだ!!!　100年も戦ってきた奴らがこんなくだらねエことするか!!!」

「じゃあ一体誰が…」

爆発する酒など、危険すぎて扱いきれない代物を持っていた覚えなどないルフィたちは、それを持ち込んだのが何者なのかと頭を抱える。

だがその時、彼らの頭上を大きな影が覆い尽くした。

「貴様　ラ　ダ　…」

それは、まるで鬼のような形相に変わったドリーだった。

今にも倒れ、死んでいてもおかしくないほどに弱っているながら、それでも自分に牙を剥いた慮外者を決して許すまいと、先ほどからは考えられない殺気を迸らせていた。

「プロギーじゃナイ、オレ達は誇り高きエルバフの戦士なンダ。お前ラの他ニ誰を疑ウ…!!!」

親友であり、好敵手であるプロギーが犯人などとは全く考えず、今日初めて訪れたル

ファイたちに標的を定めているドリーの目に、ほとんど理性は残っていないかった。

その目にぞつと背筋を震わせたビビは、すぐさま森に向けて踵を返そうとした。

「いったん逃げましょう!! たぶん今は何を言っても無駄!!」

「逃げてでもムダだと思っぜ…王女さんよ」

青い顔で逃走を促すビビに、エドワードは赤い外套を脱いで、ルフィは麦わら帽子を外して屈伸を始める。

ポン、と渡される麦わら帽に、ビビは目を丸くして言葉を失った。

「お前、ちよつとこれ持つてさがつてろ」

「無茶よ、戦う気なの!!? 体格が違いすぎる!!」

「おっさんにや悪イけど、ちよつと黙らせる」

パキパキと拳を鳴らし、巨人を見据えるルフィとエドワード。

彼らの目に、圧倒的な質量差を持つ戦士を相手にする恐怖など、微塵も存在していなかった。

「ドリーさん聞いてよ!! 私達は何も知らないの!! 爆発したお酒のことなんて、だから暴れないで!!! じつとしてなきや、あなたの体の中はもうボロボロなのよ!!!」

「貴様ラよクも…小癩なマネをオ!!!」

ビビの制止も全く耳に貸さず、ドリーは巨大な剣を振り下ろす。地面が簡単に裂かれ

るほどの重量が襲い掛かるが、ルフィは機敏な動きでそれを躲し、突き刺さった剣の上を走ってドリリーに接近する。

「ゴムゴムの……うげっ!!!」

腕を長く伸ばし、ドリリーの顔面に一撃をお見舞いしようとしたが、逆にドリリーに盾の一撃を食らって弾き飛ばされる。

追撃を加えようと、血反吐を吐きながら剣を抜こうとしたドリリーだが、その前にエドワードが手を打ち合わせ、地面に触れて青い閃光を走らせた。

「うおらあっ!!!」

途端に地面が盛り上がり、巨大な土の手となってドリリーの剣を両側から挟んで固めてしまう。

一瞬で武器を封じられたドリリーは流石に驚愕し、厄介な敵に標的をかえて踏み潰してやろうと踏み出した。

「『ゴムゴムの』オ……」

だがその隙に、木々を支えにしがみついたルフィが腕を伸ばし、自らがゴムパチンコの弾となるように勢いをつかせ、一気に踏み出した。

「ごめんっ 『ロケット』!!!!」

強靱なゴムが元に戻る力により、ルフィが瞬く間にドリリーの腹に向かって突撃する。

その一撃は丁度ドリーの胃、酒の爆発でダメージを受けた個所にクリーンヒットし、ドリーが武器を手放して悶え苦しんだ。

「アガア——アあア——ッ!!」

とても耐えきれない激痛に苦しむドリーは、ずしすと地面を踏みつけながら後ずさり、腹を抑えて悲鳴を上げる。

しかし後ずさる間に、腹から落ちたルファイが足元に降りてしまい、そのままドリーに踏み潰されてしまった。

「ルファイさん……!!?」

「麦わらっ……!!?」

「悪魔の実の……能力者、だったか……!! あなどった……!!」

人間ではありえない力や身体能力を見せた青年たちに、ドリーは今度こそ気を失い、轟音を立てながら倒れ伏した。

ドリーが沈黙してしばらくすると、深く足の形にめり込んだ地面の中から、慌てた様子でルファイが体を起こした。

「うばっ」

「ルファイさん……!!」

「おまつ……平気なのか!!?」

「おっさんは…」

「たぶん大丈夫！　むしろこれくらいじゃなきや、安静になんてしてくれないわ……！！」

身体についた土を払いながら立ち上がったルフィが尋ねると、ビビは痛々しそうに顔を歪めて告げる。

ただ立っているだけでもひどい苦痛だっただろうに、卑怯なマネをした人間がそこまで憎かったのかと、ビビの表情は歪められていた。

「おれは怒った!!!」

「おれもだよ……!!!」

ビビから麦わら帽を受け取ったルフィとエドワードが、怒りに満ちた表情で虚空を睨みつける。

親しくなったのに、勝手に勘違いされて殺されかけたことはもちろんだが、より怒りを覚えるのはドリーにこんな非道なマネをし、誘導した何者かだった。

「あの酒はこのおっさんの言う通り、もう一人の巨人の奴の仕業じゃねエし…!!　おれの仲間はこんなくだらねエマネ絶対しねエ!!」

ギリギリと歯を食いしばり、どこに潜んでいるとも知れない卑怯者を恨む二人の青年。

ビビはそんな二人を、ただただ困惑したように見つめているだけであった。

「誰かいるぜ、この島に……クソつたれな誰かが!!」

決して許してなるものか、そんな確固たる意志を金の眼に宿し、宣言するエドワード。

だがそこに、空気を読まない火山の噴火音が鳴り響いた。

「あ……!!」

「あの山は確か………!!?」

聞こえてくる爆発音に、ルファイたちは思わず顔色を変える。

つい数十分前に鳴ったばかりのそれは、ドリーとプロギーがいつの間にか合図代わりにしていたという、島で最も目立つ音。

「決闘の、合図……!!」

あれがなったということは、間違いなく相手の巨人プロギーは決闘に赴く。

しかし今のドリーはどう見ても、先ほどのような極限の戦いに耐えきれるような身体ではなかった。

「あ……」

だがルファイたちの心配をよそに、ズシンと音を立てて巨大な手が地面につかれた。

ぼたぼたと血を吐きながらゆっくりと体を起こす満身創痍の巨人の戦士に、ルファイたちは大きく目を見開き、すぐさま止めようと駆け寄った。

「おい…!! 待ておっさん!!! 行くな!!」

「だめよドリーさん、安静にしてなきや…!!! 無理すれば死んじゃうわ…!!!」

「ボロボロなんだぞ!!! 動くんじゃねエ!!!」

口々に制止の言葉をかけるが、ドリーは構わず不敵な笑みを浮かべながら、立ち上がろうと膝を立てる。

焦点のあつていない眼には、先ほどと変わらない勝負への執念と闘志が宿っていた。

「我ここにあり、戦士ドリー!!! …せめテ…ゴブツ、エルバフの名に恥じぬ戦いを…!!!」

剣を支えにしながら、ドリーはついに立ち上がる。

そして足元で叫ぶルフィに目を向けると、その体をおもむろに掴んで放り、自身の家である白い山を降ろした。

「あ——っ!!! 何すんだこのやろう!!! この家をどけろオ!!!」

上半身の身が出た状態にされ、ルフィは地面を叩きながら抗議する。ゴム人間ゆえに全く苦痛を感じていないが、一歩たりとも動く事が出来なくなり、ドリーを止めることもできなくなっていた。

そんなルフィに、ドリーは剣の切っ先を突きつけて告げた。

「止まれねエのさ。100年も前の話だが…戦いを始めちまった…いったん始めた戦いから逃げることは、戦士という名からも逃げることだ。戦士でなくなればおれは、おれ

でなくなるのだ」

ドリーはそんな独白を終えると、剣を引いてルファイたちに背を向けた。

先ほどまで迸らせていた敵意は、強い後悔に変わっているのがはつきりとわかった。

「悪かったな…お前らを疑った…!!!」

謝罪の言葉にほつと安堵するビビとエドワードだが、それでも問題がなくなったわけではない。

満身創痍のドリーをこのまま行かせることは、むぎむぎ死に行かせることと同じだったからだ。

「これは、戦いの神エルバフが下した審判だ…!!! おれには加護がなかった…それだけのこと…!!!」

「うるせエ!!! おれは神になんか祈らねエし、信じてもいねエ!!!」

ルファイを封じる白い山をどうにかしようと思いを巡らせていたエドワードは、ドリーが口にした言葉に拒否反応を見せる。

ただ神を信じているのではない。物事を全て神の意志と受け入れ、理不尽さえも甘んじて受けようというドリーの生き方に反発しているようにも見えた。

「こんな決着を望むようなヤツが、神であっていいわけねエだろうが!!!」

「黙れ…たかだか10年や20年生きただけのお前らなどに、エルバフの『高き言葉』

が聞こえるものか……!!!」

「しるかそんなもん!!! これをどかせ!!! おいエド!! ぶっ壊せねエのか!!!」

「ダメだ……デカすぎて分解してもどっちみち埋もれちゃうぞ!!!」

どうにかドリーを止めようともかくルフィがエドワードにそう聞くが、あまりの質量にエドワードも苦戦している。

そうこうしているうちに、ドリーは覚束ない足取りのまま、決闘の場である広場へと姿を消してしまっていた。

「ウウ……!!! うーっ!!! ……!!! うーうーうーうーっ!!! せっかく、すげエ戦士に会ったと思ったのに……!!!」

悔しそうに地面を叩き、ルフィは歯を食いしばる。

ビビにはそれが理解できないでいた。荒くれ者、不法者としてしか知らない海賊が、ここまで出会ったばかりの相手のために怒ることができると考えもしなかったからだ。

それは、エドワードも同じだった。

(悪い、姉弟子……!! おれは、あんたの選択を疑ってた……!!!)

エドワードの脳裏に浮かぶのは、自分よりも先に錬金術の修業を受けていた天使の姿。

自分をはるかに上回る実力者で、国家錬金術師にだってなれるはずの彼女が選んだのは、海賊という日陰の道。

それがエドワードには、理解のできない事だった。

(本当は……海賊なんて荒くれ者のあんたをちよつとだけ軽蔑してた……でもあんたを見てたら、本当に噂でしか判断してねエ自分自身が恥ずかしくなってきた)

海賊はすべて悪だという、世界政府に属するエドワードも、僅かながらその影響を受けていた。

しかし目の前で慟哭の声を上げているこの麦わら帽の青年は、聞いてきた悪人たちのどれとも当てはまらない、俗にいうお人好しにしか思えなかつた。

(こんな会ったばかりの奴のために怒れる海賊……見た事ねエよ……!!!)

「誰だ!!! こんな事すんのは……!!!」

心の隅で抱いていたルフィへの小さくも確かな嫌悪が消えていくのを、エドワードは自覚していた。

第62話 “卑怯者”

「ぎやあああゝゝゝつ!!」

「恐竜ゝゝゝつ!!!」

「うわあああああ……あ、ボクは別に平気か」

鬱蒼と生い茂る森の中を、ナミとウソツプとアルフォンスがわき目もふらずに走っていく。

が、途中でアルフォンスは自分が襲われる心配はそんなにはない事を思い出し、頭をかきながら立ち止まった。

「ていうか二人とも早っ!!」

しかしその間にナミとウソツプはすさまじい速度で走っていき、あつとうまに姿が見えなくなってしまう。

その情けない後ろ姿に、アルフォンスは思わず大きなため息をついていた。

「困ったなあ……完全に残り残されちゃった。あんなんで言ってたような勇敢な海の戦士なんてなれるのかな……?」

さつきまで巨人たちの戦いに憧れていた時に呟いていた、誇り高き戦士になりたいと

言っていた彼の横顔を思い出すが、今の姿とどうしても重ならない。

どうしたものかと辺りを見渡していたあるは、森の中に見覚えのある人が影があることに気づいた。

「兄さん!! もしかして迎えにきてくれたの?」

自分に向かって手をあげて立っているエドワードのもとに、アルフォンスはうれしそうな声を上げて近寄っていく。

だがすぐ近くにまで寄ると、アルフォンスは何か違和感を抱いた。

「…兄さん?」

すぐ目の前にまで近づいたのに、兄は一言もしゃべってくれない。

どちらかといえばおしやべりな方であるエドワードが黙りこくっていることに、いかな予感を覚えた時だった。

「うわああああああっ!!!」

恐竜たちの住まう森の中に、アルフォンスの悲鳴が木霊した。

「はっ!!!」

走って走って、背後から迫る恐竜から逃げ続けて、ようやくウソップは我に返った。

気付けば隣にいたはずのナミとアルフォンスの姿はなく、自分一人だけが広大な森の

中に取り残されている。

「……………ナ…ナミ？ アルフォンス？」

一応周囲に声をかけてみるものの、当然返事などあるはずがない。

バタバタと忙しく走り始め、あちこち見渡してみるものの、やはり彼女たちの姿は影も形も見当たらない。

「ナミ!!! ナミ!!! アルフォンスウ!? えらいこつちや…ルフィ~~~~~」

パニックに陥ったウソツプは、狂ったように手足を動かして森の中を爆走する。

いつの間にか森を抜けたかと思うと、偶然にもそこはルフィたちが足止めを食らって
るドリーの家の前だった。

「大変だ!!! 一人が恐竜に食われた!!!」

「本当かア!!!」

山の下敷きになっているルフィにぎよつとなるものの、ウソツプはそれどころではないとルフィに訴える。

話を聞いたルフィは目を見開いて驚愕し、動けない自身を嘆くようにもがき始めた。

「恐竜から逃げるために一緒に密林を走ってたら突然いなくなつて…!!! どうしよう、おれは仲間を見殺しにイ!!!」

「ん？ おい……ちよつと落ち着け」

頭を抱えて己の無力を嘆くウソップに、エドワードが何か違和感を覚えたのか待ったをかけた。

「突然消えたつつつたか？ じゃあ……確認はしてねえんだな？」

「確認なんて恐ろしくてできるかア!!! 恐竜じゃなけりや猛獣だ!!! 他に何がいるんだ

!!!」

「恐竜はともかく猛獣ならアルが負ける道理はねえよ!! おれたちやガキの頃、猛獣だらけの無人島で修業してたこともあるんだからな!!!」

どこことなく自慢げに鼻息を吐くエドワードの言葉で、少し落ち着いたのかウソップは口をつぐむ。

エドワードはウソップが現れた森を睨み、姿を消した弟たちのことを考えて顔をしかめさせた。

「だが何かがいることは間違いねえんだ……!! おっさんの飲んだ酒に細工をしたクソつたれどもがな……!!!」

「もしかしたら……バロックワークスの追手かも……!! 2人のうちウソップさんだけが無事だったことにも納得がいく……だってあなたはバロックワークスの暗殺リストにおそらく載っていないから」

ビビは事件が起きてからその可能性を考えていたのか、ウソツプの報告で確信を得た様子で呟く。

ウソツプは聞き捨てならないビビの言葉に、訝し気に目を細めた。

「酒……?! おっさんの酒ってどういうことだ……?!」

事情を知らないウソツプに、エドワードとビビが先ほど起きた一件について説明する。

するとウソツプは、怒りを覚えると同時に焦りを抱いた様子で頬を引きつらせた。

「なにイ!!?! 胃袋で酒が爆発……!!?! じゃあそんなボロボロの体で決闘場に!!?!」

聞き間違いではないのかと聞き返すウソツプに、エドワードとビビは神妙な表情で頷く。

ウソツプはきつく拳を握りしめ、肩を震わせながら眉間にしわを寄せた。

「でもあの2人は100年間……!! 全力でぶつかって互角の戦いをしてきたんだぞ!!! たぶん……世界で一番誇り高い戦いなんだぞ!!!? そんな勝負のつき方があるかよ!!!」

ウソツプが吠えたその瞬間。

はるか離れた場所、巨人たちの決闘の広場から、真つ赤な血飛沫の柱が立ち上がるのが見えた。

夥しい量の血が噴き出し、雨のように真下に落ちていく光景を、ルフィたちはただ口

を大きく開けて呆然と凝視しているほかにできなかつた。

「誰だアアア!!!」

憤怒に満ちたルフィの叫びが、ただの木霊となつてむなしく消えていく。

何処かに潜む敵の声が、何もできずに這いつくばるしかないルフィたちを嘲笑つているように聞こえた気がした。

「…よし、ルフィ」

歯を食いしばり、ルフィと同じだけの怒りを燃やしていたウソップが、動けないルフィに変わつて自身を指さした。

つきあいは短いとはいえ、自分の目指すべき未来を指示してくれた師ともいえるべき人物に起きた凶事。放っておけるわけがなかつた。

「どこの誰だか分かんねエが!!! おれが行つて仕留めてきてやる!!!」

「お前だけにやらせるかよ!!! おっさんの吊い合戦…おれも付き合うぜ!!!」

「私も行くわ!!」

「よし! 是非ついて来てくれ!! 心強い!!」

「足ガツクガクじゃねエかよ!!!」

しかしやはり恐怖が強いのか、凍えているかのように震えるウソップを見てエドワードも呆れる。

ちよつと感心したと思えばすぐ情けない様ばかり魅せるこの男は、果たしていつになつたら頼る事が出来るのか。

だがそんなウソツプの決心を踏みにじる声が、唐突にかけられた。

「その必要はねエ…!!」

草むらをかき分け、姿を現した人影をルフィは睨みつけ、そして敵意を募らせる。その顔に、見覚えがあつたからだ。

「お前らかア!!!」

「こいつは返す!! …必要ねエ…」

「キヤハハハハ」

現れた二人組、ウイスキーピークにいたMr. 5とミス・バレンタインが、タイミングをはかつたかのように悠々と現れる。

そして、ボロボロになったカールをビビの前に放り捨てた。

「カールツ!!!」

いつの間にか姿が見えなくなっていた相棒の変わり果てた姿に、ビビは悲痛な悲鳴を上げて縋り寄る。

ウイスキーピークでは眠りこけたままだったウソツプは、Mr. 5らに見覚えこそないものの、明らかに危険な相手だということは察しているようだった。

「おい……あいつら誰だ……っ?!?!」

「まえの町にいた奴らだ!!」

「……なぜあんた達が……?!?!? カルーには関係ないじゃない!!」

「そうとも、この鳥には一切関係ねエ……!!」

ビビの抗議に、Mr. 5は忌々しそうに答える。

カルーを睨むその目は、役に立たないゴミを見るような嫌悪感が宿っていた。

「だが、おれ達が危険視していたのは、その“麦わらの男”と“錬金術師”。そいつらと一緒にいる王女をおびき寄せるために、この鳥に鳴いてもらおうと思っただが、何とも強情な奴でね……!!」

それだけで何が起きたのか察したビビは、Mr. 5を殺意を込めて睨みつける。

Mr. 5はさして気にした様子もなくビビの殺気を受け流し、次いで山の下敷きになっっているルフイを見て鼻で笑って見せた。

「だが、まア……見てみりや“麦わら”は勝手に動けなくなってた。チビもはや脅威じゃねエ……だから、もうコイツに用はねエのさ……」

「カルー……!!!! あんた達……」

懸命に仲間を守ろうとしたカルーをきつく抱きしめ、そんな優しさを踏みじった悪人たちへの闘志を募らせる。

一方でエドワードは全く関係ない理由で怒りを燃やし、ウソップはドリーたちの戦いを汚した男たちに標的を定めた。

「またチビって言いやがった…!!!」

「お前らなのか!!! 酒に爆弾を仕込んだのは!!!」

「ん? ああ、そうだとも」

プルプルと肩を振るわせるエドワードとウソップを、全く敵としてみていないMr. 5はそれがどうしたといった様子で答える。

そして、見覚えのない男が一味に混じっていることに疑問を抱いたように首をかしげた。

「てめエ誰だ…リストにいたか?」

「いいえ。でも、きつと仲間よ。消しておきましょう」

たいした脅威と認識していないのがまるわかりの態度で、ミス・バレンタインがMr. 5にそう告げる。

その馬鹿にした態度が、エドワード達の堪忍袋の緒を切らせた。

「お前らが巨人達の決闘を…!!!」
くさえ、必殺!!! / 火薬星 / つ!!!」

「消えるのはあんた達よ!!!」
クジャッキー
孔雀スラツシャ——つ!!!」

「まとめてぶつ潰してやる!!!」

ウソツプがパチンコで、ビビが孔雀の尾を模した暗器で、エドワードが地面から錬成した二振りの剣で立ち向かう。

ウソツプの放った爆薬は見事Mr. 5に炸裂し、男は一瞬で火炎に吞まれた。

「よっしやあ!!」

ガッツポーズをとるウソツプだが、ミス・バレンタインが爆風で天高く舞い上がる姿を見て目を見張る。

そんな彼に、火炎の中から飛び出した二つの黒い小さな塊が襲い掛かった。

「ノーズファンシーキヤノン
鼻空想砲!!」

丸められた鼻くそが爆発し、ウソツプが炎に包まれる。

火薬星の爆発の中から無傷で顔を出したMr. 5は、つまらなそうにウソツプを鼻で笑った。

「ウソツプ!!!」

「キヤハハハ、油断大敵よ!! 1万キロプレス!!!」

爆炎に吞まれたウソツプを案じたエドワードが振り向いた直後、空中で重量を増したミス・バレンタインが急降下しエドワードを踏みつけた。

高さと重さが加わった一撃は、たやすく少年の体を土の中にうずめてしまった。

「やあっ!!!」

「まア……落ち着け。そうカツカしねエでもおれ達ア、まだお前らを殺しやしねエよ……!!
たださらいに来ただけだ」

暗器を回して斬りかかったビビを、足を爆発させて転ばせると、Mr. 5は面倒くさそうにため息をつく。

あつという間に無力化させられた一味を満足げに見下ろし、Mr. 5は笑みを浮かべた。

「Mr. 3に言われてな……」

「Mr. 3……!!!!『ドルドルの実』の男……あいつがこの島に……!!!!」

組織の中でも有名な名に、ビビは目を見開いて歯を食いしばる。

エージェントの中でも位の高い位置に座している男がいるとなれば、どんなに強いルフィたちといえども全滅させられてしまう可能性もあった。

しかしビビの考えを読んだのか、いち早くミス・バレンタインがビビの腕をひねり上げ、その場に拘束してしまった。

「あうっ!!!」

「キャハハハ、おとなしくなさい。あなたごときが………本気でバロックワークスの追手から逃げ切れるとも思ってたの?」

ミス・バレンタインはさもおかしそうに倒れたエドワード達を、そしていまだ動けず

にいるルフィを嘲笑う。

身動きの取れないルフィは、Mr. 5の爆発する蹴りの格好の餌食となつてしまつていた。

「さすがの3千万の賞金首もあれじゃあねエ…キャハハハ」

「フフ…ウイスキーピークでの礼ができてうれしいぜ。こういうデリケートな問題に海賊風情が首を突つ込むべきじゃなかつたな。てめエの他の仲間は全員捕獲済みだ…!! 一人を除いてだがな…」

吐き捨てるようにMr. 5がそう呟くと、ルフィとエドワードはにやりと笑みを浮かべた。

彼の言う除いた一人が誰か、すぐに察したからだ。

「へエ…じゃあ残る一人を見つけなかつたら…後悔することになるぜ…」

「ああ…あいつが一番…怒らせると怖エんだ…!!」

「ほオ…まだ口がきけたか。おれの『足爆』キッキボムを顔面に受けといて…」

黒焦げになつたルフィとエドワードの言葉を負け惜しみととらえたのか、Mr. 5は見下したように笑う。

そんな彼の靴に、ルフィはペット唾を吐いた。

「べ!! おまえらしねっ!!」

Mr. 5はこめかみに血管を浮き立たせ、動けないルファイたちに執拗に爆発の蹴りを食らわせる。

何度も何度も起こる爆発に、ビビは泣きそうな表情で唇を噛んだ。

「ルファイさん……!!! エドワードさん……!!! ウソツプさん、カルー……」

「くたばれ!!!」

ビビの悲痛な声は、Mr. 5の苛立った声と爆発音にかき消されてしまった。

誰もいなくなったドリーの家の前。

爆発によって黒く焦げた土の上で、ルファイがか細くしつかりとした声を吐き出した。

「ウソツプ……エド……」

あれだけの爆発を受けても、ルファイの枷である山は動く気配を見せない。

それでもルファイは、Mr. 5への怒りの炎を鎮火させる様子を見せなかった。

「あいつら許せるか？」

「論外……!!!」

「いや!!! 許せねえ……!!!」

それはエドワードもウソツプも同じようで、ギリギリときつく握りしめられた拳が、その悔しさを物語っている。

そこでルフィは、自分の目の前の土をくちばしで掘るカルーに気づいた。

「お前……くやしいのか……!!!」

涙を浮かべて土を掘り続けるカルーは、ルフィの問いに力強く鳴いて答える。

その目の光の強さに、ルフィはニツと不敵な笑みを浮かべて頷いた。

「よし……!!」 じゃあ4人で行くかつ!! あいつらたたき潰しに……!!」

第63話 “死ぬまであがけ”

時と場所は変わり、決闘場所となっていた空き地には、プロギーが白い液体のようなものに拘束されて倒れ伏していた。

四肢を拘束され、まったく動く事が出来ずにいる屈辱で、プロギーはその原因たる細身の人間を睨みつけた。

「おのれ……」

「フツハツハツハツハツハ、やめておけやめておけ!! 私、この“キャンドルジャケット”は固まれば鉄の硬度に匹敵する。巨人族のバカ力とて一度捕えてしまえば、何の意味も持たんだガネ!!!」

そう馬鹿にしたように語るのは、髪の毛を束ねて3の形にした奇妙な風貌の眼鏡の男。

3。彼こそ身体からろうを自由に放出し、自在に操れる“ドルドルの実”の能力者、Mr.

「勝利に酔って油断したな!! “赤鬼”のプロギーよ」

「……………!!!」

「そう睨んでくれるな、コワくてかなわんガネ…!! フハハハハハハハハ…!!!」

ガシャンガシャンと巨人族の怪力を発するプロギーだが、ろうの硬度はそれを上回るのか全く破壊することができない。

恐いと言いながら微塵もそう思っていないMr. 3の態度が、プロギーの怒りに拍車をかけていた。

「よかつたじゃないカネ…!! 永い決闘に決着がついたのだ。たとえそれが人の加勢による賜物であつても、勝利とは嬉しいものだ…!!! 違うカネ?」

「!!! 貴様……まさか…!!!」

「フハハハハハ、だが最後の勝利者は私だ!!! 知っているカネ…!! かつてお前達二人の首にかかつていた莫大な懸賞金は、まだ生きている…」

「……………貴様…!!!」

「それが狙いだつたのね…!! Mr. 3!!!」

歯を食いしばるプロギーの声に、ビビの怒りに満ちた叫びが重なる。

ミス・バレンタインに腕を後ろ手に拘束されたビビが、悔し気に表情を歪めながらMr. 3の前に押し出されてきていた。

「連れて来たぜ」

「我が社の裏切り者をね」

「く……!! やり方が汚いのよ!!! ドリーさんのお酒に……!!! 爆弾を仕込むなんて!!!」
 ビビの言葉に、プロギーはハツと目を見張る。

決闘の間抱いていた違和感。その正体、そしてその理由に思い至った時、プロギーの心に大きな衝撃が走っていた。

「酒……!!? おれが渡した……あの酒にか……!!? そうだったのか……:……ドリーよ」

「フン……!! タネを明かしちまいやがつて!! 小娘が!!! キャンドルロック!!!」

もう少し焦らし、徐々に自分が犯したことへの後悔で苦しむ様でも見たかったのか、Mr. 3は舌打ちしてビビを睨みつける。

その苛立ちをぶつけるように、Mr. 3はさらにろうを放ち、ビビの両足首を固めて枷を作り出し、地面に転がした。

「Mr. 5!! 剣士と女と鎧をここへ!! 始めるぞ。特大キャンドルツツ……!! サア
 くビスセットオ……!!!」

Mr. 3が両腕から大量のろうを放出し、瞬く間に巨大なオブジェを創造していく。意思があるように蠢くそれはまず土台を作り、そして柱を、最後にテーパーのような天板を作る。

コミカルなハロウインのカボチャに似た、ケーキのような形をしたオブジェが、その場に創造された。

「な!! 何なの、あれ!!」

Mr. 3のろうに捕まり、この場に引きずり出されたナミヤゾロ、アルフォンスは、意味不明な造形物が鎮座する謎の空間に困惑の目を向ける。

そして、自分たちと同じように拘束されたビビを見て驚愕の表情を浮かべた。

「王女様……!! 麦わらさんと一緒だったはずじゃ……!!」

「ええ……それが……」

「『麦わら』なら俺が始末したぜ」

悔しそうにうつむくビビに代わって、Mr. 5があざ笑うように告げる。

愕然とするナミとアルフォンスだが、ゾロだけはその言葉をハツと鼻で笑ってみせた。

「……………お前が……………!! ハツ……」

ゾロは確信していた。自分とまともにやりあえるような奴らが、こんな組織の末端なまでにやられるはずがないことを。

それをゾロの虚勢とでも思ったのか、Mr. 3は気にした様子もなくMr. 5達に指示を与えた。

「ようこそ、キミ達。私の『サービスセット』へ!!」

完成したオブジェの土台の上、カボチャ顔の真下にゾロたちは移動させられ、立たさ

れる。

そして、カボチャ顔がゆっくりと回りだし、徐々に速くなり始めた。よく見れば、カボチャ顔の上には数本のろうそくが燃えているのが見えた。

「なに？ 上で回ってるあれ」

「こんな気分なんだろうな。ケーキにささつたらろうそくつてのは」

「風前の灯火つて意味では似てる気がしますね…」

暢気なことを言うゾロたちを放置し、ナミは自分の足をがっちり固めるろうの地面に嘆息し、困惑気味に眉を寄せる。

「動けないし…足…」

「そりや動けるようにはしちやくれねエだろうよ…なんたつて敵だぜ」

「何か降ってきた!!」

「これは…ろう？」

頭に降りかかってくる白い液体のようなものに触れ、ビビがさらに戸惑いを深める。

徐々に不安にさいなまれていく様子を満足げに見ながら、Mr. 3はおかしそうに笑った。

「フハハハハハハ!! 味わうがいい!! “キャンドルサービス”!!! 君らの頭上から降るその“ろう”の霧はやがて君ら自身を“ろう人形”に変える!!! 私の造形技術を

もってしても到達できない完全なる“人”の造形!! まさに魂を込めた“ろう人形”だガネ!! “美術”の名のもとに死んでくれたまえ!!」

「いやよそんなの!!! 何で私達があんたの美術作品になんなきやいけないのよ!!!」

恐ろしいMr. 3の計画に、ナミが冗談じゃないと叫ぶ。

美的センスの壊滅さもそうだが、そんなものに自分たちが巻き込まれるなどたまったものではなかった。

「プロギーさん!!! 黙ってないで暴れてよ!!! あなただつて“ろう人形”にされちゃうのよ!!!」

「フン……!!! そいつに何を言っても無駄だガネ……!!!」

沈黙したままのプロギーを見て、Mr. 3はくつくつと黒い笑みを浮かべて語る。

彼に親友を手にかけてさせた悪魔のような性根の男は、自分が落とし入れた相手が絶望している様を実に愉しそうに観察していた。

「そいつは今しがた気づいたのだ……!! 相手が傷を負っていることにも、気づいてやれず1000年戦い続けてきた親友ドリーを自分の手で斬り殺し!!! 勝ち誇り涙まで流して喜んじまったためエの不甲斐なさに……!!! あるいは一丁前に友のために泣いたか。フハハ、いずれにせよもう取り返しはつかねエのさバカめつ!!!」

人の友情も、誇りさえも利用した卑劣な男に、ナミやビビからの嫌悪の眼差しが強ま

る。

だがそこに、感情を押し殺した低くか細い声が届いた。

「わかつていた…!! 一合目を打ち合った瞬間から…!!! ドリーが何かを隠していることぐらい…!!!」

うつぶせにさせられ、顔を伏せさせられているプロギーが、怒りをこらえながら呟く。
Mr. 3はそんな彼の独白を耳にし、ばかにしたように笑みを浮かべる。

「んんん？ わかつていただと?! ハハッ、ウソをつけ!! ならばなぜ戦いをやめなかった。あの豪快な斬りっぷりには同情のかけらも見当たらなかつたぞ…?」

「……………『決闘』のケの字も知らねエ小僧に涙の理由などわかるものか。お前などに何がわかる…!! 弱っていることを隠し、なお戦おうとする戦士に恥をかかせると…!!
そうまでして決闘を望む戦士に!! 情けなどかけられるものか!!!」

ドリーの分の無念も背負っているかのように、プロギーはまさしく鬼のような形相で
Mr. 3を睨みつける。

身動き一つ取れない状態であるというのに、プロギーの発する気迫は凄まじくMr. 3は顔を青くして後ずさった。

「……………そして理由がわかった。わかったからにはおれがこの手で決着をつける!!! 親友ドリーへのそれが礼儀というものだ…!!!」

歯を食いしばったブロギーが力を込めた直後、それまでびくともしていなかったろうの枷がバキバキとヒビを入れ始めた。

慌てるMr. 3に代わって、Mr. 5が丸めた鼻くそを飛ばした。

「^{キャン}砲^ン!!!」

顔をあげかけたブロギーの顔面で爆発が起こり、炎に包まれたブロギーはがつくりとうなだれる。

ようやく大人しくなった巨人に、Mr. 5は面倒臭そうに顔をしかめた。

「ブロギーさんっ!!!」

「ガタガタうるせエ怪物だぜ……!!!」

「こいつは読み誤ったガネ……!!! 巨人族のバカ力のほどを……まさかキャンドルジャケットを破壊するとは。完璧に捕縛する必要があるようだ……」

冷や汗を流すMr. 3は、気圧されたことに屈辱を覚えているのか、険しい表情でブロギーを睨む。

未だろうの枷は破壊されきっていないもの、もうただの塊では抑えきれないことが証明されたことも恥辱に思っているようだ。

「^{アー}ドルドル彫刻^ッ 『剣』!!! これで大人しくしている!!!」

ろうを絞り出し、Mr. 3は巨大な剣を創造する。

ちやうど巨人族が使うのにちやうどいいサイズのそれを、Mr. 3はためらいなくプロギーの手の甲に、そして両手両足に突き刺し、地面に縫い付けた。

「動けば手足がちぎれるぞ!!! フハハハハハハ!!」

「何て非道なマネを!!!」

苦痛に顔を歪めるプロギーを嘲笑し、心底愉しそうに体を揺らすMr. 3に、ビビが悔しそうに歯をくいしばる。

どれほど怒っても動けないことが、とてつもない苦痛に感じていた。

「シア加速するぞ、キャンドルサービス!!! こいつらを、とつとつ、ろう人形”にかえてしまえ!!!」

Mr. 3の合図で、頭上で回るかぼちやがその速度をはやめ出した。

加速によってろうそくの火も風を受け、みるみるうちに火の勢いを強めていく。そしてろうそくを溶かして、さらに大量のろうの霧を降らせ続けた。

「う…何だか胸が苦しい…………!!!」

「“ろうの霧”が肺に入っちゃったんだわ!! このままじゃ体の中から“ろう人形”に…………!!!」

「フハハハハハッハッハ!! そうだそうだ、できるだけ苦しそうに死んでくれたまえよ!!」

苦悶の声と席を漏らすナミやビビに、Mr. 3は望んでいた展開なのか実に嬉しそうに笑っている。

爛々と輝く目は、徐々に近づきある作品の完成の時を今か今かと待ち望んでいた。

「苦しみに訴える苦悶の表情こそが私の求める『美術』なのだガネ!!! 恐怖のままに固まるがいい!!!」

「何が美術よ悪趣味ちよんまげ!!! よくもプロギーさんまであんな目にあわせてくれたわね!!! あんた達絶対痛い目みるわよ!!! わかつてんの!!!」

「フハハハハハハハハ!!! 好きなだけわめくがいいガネ!!!」

どんなに騒いだとしても何もできまい、という余裕でMr. 3は笑いが止まらなくなっていた。

一方でプロギーは、手足の激痛をこらえながら黙り込んでいる。その目には、これまでの記憶が走馬灯のように駆け巡っていた。

(100年……!!!) くる日もくる日も、戦って戦って……!!! 戦って戦って……戦士の村エルバフに生まれた『誇り』のみで決闘を続けた)

思い返されるのはみな、ドリーとの決闘に明け暮れた日々。

理由も忘れた戦いだったが、いつしか決闘そのものが生きる理由になりつつあった。親友と全力で戦い続けるということが、何よりも楽しく感じられていた。

なのに、最後の最後で迎える決着がこれだというのなら、いったいなんのために戦ってきたというのか。

(これが我らの結末ならば…エルバフよ…あんまりじゃないか…!!) なぜ戦いの中で死なせてくれん…!!)

神聖な決闘を望むと言われていた神に訴えるも、答えが返ってくるわけもない。

彼の神は勝者に加護を与えるもの。答えは戦いの先にあるという真理が、いまはプロギーの中で揺らぎつつあった。

「フヒハハハッハッハッハッハッハ!!! 何という表情カネ!!! いいぞ、その『悲痛』っ!!! 『嘆き』!!! 『苦闘』!!! 素晴らしい美術作品だガネ!!! フハハハ!!!」

「キヤハハハハハッ!!!」

涙を流して無念を嘆くプロギーの表情がツボに入ったのか、Mr. 3はミス・バレンタインとともにやかましく笑う。

思いつきりぶん殴りたくなるぐらいに腹立たしいのに、それができる者はこの場になかった。

「手が動かない…!! やだ…こんな死に方!! 何か方法はないの?!!」

「……………」

「もう体が固まってきた…!!!」

少しずつ近付いてくる最期の時に、ナミやビビは怯えてガタガタと体を震わせる。

白いうろが体にまとわりつき、体を震わせる様はまるで豪雪の中に取り残されているようにも見えた。

「ちよつといいですか？ ゾロさん、ブロギーさん…」

そんな時、それまで黙り込んでいたアルフォンスが唐突に声を発した。

腕を組んで仁王立していたゾロとうつぶむいていたブロギーは、話しかけてきたアルフォンスに訝しげな目を向けた。

「今からボクが両足をへし折って脱出します。あいつらを叩きのめしたらすぐにみなさんを救出しますから、それまで耐えてくれませんか」

アルフォンスからの宣言に、ナミは目を見開いて振り向いた。

横を向くだけでも苦痛だったが、アルフォンスの正気を確か目ようと思うと意外とすんなり首が回った。

「アルフォンス…!!! あんたそれは…!!!」

「今のボクにはもともと痛覚はありませんし、兄さんに頼めばいくらでも直せます。…
ここにまごまごしてるより十分勝機があります」

「そ…そうかもしれないけど…でも!!!」

「ほオ…そいつはいい考えだ」

仲間には負担を強いることに難色を示すナミだったが、ゾロは名案だと言わんばかりに声を弾ませる。

そして不敵な笑みを浮かべながら、腰から和道一文字を抜いて鞘から抜き始めた。「ノった。じゃあおれも両足、斬り落とす。一緒に、こいつら潰そうぜ」

もののついでで、とでもいうようなゾロの提案に、アルフォンスはギョツと振り向く。ナミもビビも信じられないといった様子で言葉を失い、ゾロの方を凝視していた。

「な……!! 何言ってるんですかあなたは!!! ボクの話聞いてました!!!? ボクは足をちぎっても平気だけどあなたは………!!!」

「痛みがあるうがあとで直せようが、それでもためエの覚悟は本物だろうが」

アルフォンスの拒絶を無視しながら、ギシギシとうまく動かない体に叱咤し、ゾロは二刀を構えて切っ先を自分の足に向ける。

その目に、冗談を言っている気配やヤケクソになっている様子はなかった。

「ためエは間違はなく人間だろ。仲間がそんだけの覚悟示そうつてのに、ただそれに甘えるだけなんざみつともねエマネできねエよ。ここにいちやどうせ死ぬんだ。見苦しくあがいてみようじゃねエか……!!!」

「……勝手にしてくださいよ、もう……!!!」

やめろと言いたかったアルフォンスだが、ゾロのそれは仲間を思うが故の男気。

否定する気にはなれず、諦めて深いため息をつくも、アルフォンスはがらんだ胸が暖かくなるような錯覚を覚えた。

「ガババババババ!!! 生意気な小僧共だぜ…!!!」

ゾロとアルフォンスの会話を聞いていたブロギーも、その表情に好戦的な笑みを浮かべる。

顔の半分はすでにろうで固まっていたが、胸の内にあふれる闘志は再燃を始めていた。

「おれとしたことが、もう『戦意』すら失っちまったようだ…つき合うぜ、その心意気!!!」

「う…うそでしょ!! 本気なの!! 両足を失って…エレノアみたいに羽があるわけでもあるまいしどうやって戦うのよ!!!」

「さアな」

刀を構え、ゾロはなおも不敵に笑う。

覚悟を示したアルフォンスやブロギーとともに、小賢しいばかり使う悪党どもを睨みつけた。

「勝つつもりだ」

痛みを、死を全く恐れていないような口ぶりでそう告げるゾロたちに、バロツクワー

クスの面々は思わず後ずさる。

「何だ、こいつら……………!!」

「イカレてるぜ…!!」

今まで遭遇したことのない、異様なほどに敗北を拒絶し勝利を渴望する連中を理解できず、Mr. 3は気味の悪いものでも見たように表情を歪める。

こいつらは会社にとって危険だ、とMr. 3の中の本能が告げている気がした。

「行くぞオ!!!」

「何ができるものか殺してやるガネ!!!」

ブローギーが両腕に力を込め始め、ゾロとアルフォンスが自らの両足に狙いを定める。

溢れ出る鮮血を幻視したナミが、思わず目を背けた時だった。

「「おりやあああああ!!!」」

突如、ろうのオブジェの前の森が蹴破られ、四つの見覚えのある人影が飛び出してきた。

凄まじい形相で踏み込んできた彼らは、そのままMr. 3たちを飛び越え、何か叫びながら地面を転がっていった。

「やるぞ、ウソップ!!! エド!!! 鳥イ!!!」

「オオ!!!」

「おっしやあ!!!」

「クエ——ッ!!!」

しばらくして、ルファイたちは仕切り直しだと言わんばかりに勇ましい声で吠える。

焦げてボロボロで、痛々しい外見になってはいたが、それを全く感じさせないほどに頼もしく見えた。

「ルファイ~~~~~っ!!! ウソツプっ!!」

「兄さん!!」

「カルーっ!!!」

ナミが涙を流して、アルフォンスとビビが相棒が無事であったことに安堵し喜びの声をあげる。

ナミは驚愕の表情で立ち尽くしているMr. 3たちを指差すと、今までの鬱憤を晴らすように叫んだ。

「もう、そいつらホントにもう原型なくなるくらいボッコボコにして、どつか遠くへブツ飛ばしちやつて!!」

「ああ、そうするさ!!! こいつら、巨人のおっさん達の決闘を汚したんだ!!!」

ナミに言われるまでもなく、ルファイたちの闘志は限界まで高まっていた。

男たちの真剣勝負を汚した代償を払わせるまでは、倒れるつもりなど毛頭なかった。

第64話 “リベンジマツチ”

「キミカネ……東の海” 最高額の賞金首とは。海軍本部も目が落ちたものだ」

見下した目をルフィに向け、Mr. 3はフンと鼻で笑う。

何人もの賞金首を仕留めてきた彼には、ルフィが一味の希望を背負うようなたいそうな海賊には見えなかつたからだ。

「う——わ、へんな頭」

「やかましいガネ!!」

「“3”じゃねエか“3”。燃えてるし」

「黙れ!!」

しかしルフィはそんな評価などものともせず、エドワードと共にMr. 3の奇妙な髪形を凝視する。

芸術家を自称するMr. 3にとっては聞き捨てならない反応だったが、他の者が見てもおそらく変だと言うだろう。

「その前にルフィ!! この柱を壊して!! 私達、今“ろう人形”になりかけなのよ!」

余計なものに興味が映っていることに危機感を抱き、ナミがルフィたちに懸命に叫

ぶ。

エドワードは弟とナミたちを捉えている奇妙なオブジェに目を向け、いろいろと観察してから険しい表情で頷いた。

「……なるほど、溶けたろうが霧状になって降り注ぎ、いずれは全身がろうで固まってお陀仏ってわけか……趣味の悪い芸術だな」

「なんだ、やばかったのか？」

あまりよくわかっていないようだが、何となく雰囲気で事態の危険さを察したルフィがきくと、ゾロとアルフォンスは何とでもないとといった様子で振り向いた。

「いや、問題なかった」

「平気ですよ」

そう答える二人だが、その足元は大変悲壮な状態になっていた。

ゾロの両脚からはだくどくと鮮血が噴き出し、アルフォンスに至っては片足一本で立っていた。

「ちよ……ちよつとあんた、足から血が……!!」 アルなんて片足折れてるし……!!」

「ああ、半分くらいイッたかな……ハハ」

「そのどこが問題ないのよ!!」

「とりあえずお前ら……この柱ブツ壊してくれるか？ あとは任せる」

「よしきた」

覚悟を示した男たちにこれ以上言及する必要はない。

意志を託されたルフイとエドワードは、にやりと不敵な笑みを浮かべてバロックワックスのエージェントたちを睨みつけた。

「なんだか知らねエけど、壊すぞ、あれ!!!」

「錬金術師の腕の見せ所だぜ!!!」

「よし、わかった!!! 今日のおれは一味違うぜ!!!」

「クエ!!!」

ウソツプとカルーもそれに続き、Mr. 5とミス・バレンタインを見据えてゴムパチンコを構える。

敵方の戦闘能力を知った今ならば、早々にやられるつもりはなかった。

そんな中、ナミは隣に立っているゾロの奇行に目を細めていた。

「あんた、何やってんの」

「固まるんならこのポーズがいい」

「あ、じゃあボクも何か…」

「そんな…フザけてる場合じゃ…!!!」

一度抜いた刀を掲げてポーズをとるゾロに、ナミとビビは呆れた目を向ける。

助かるかどうかはともかく、いずれは固まるのならばと好きなポーズをとっておこうというゾロの豪胆さは、二人には理解不能だった。

「それよりその足の出血なんとかしなさいよ！ 見てるこっちが痛いわ」

「じゃ見るんじやねエよ」

「だいたいね…あし切つて逃げるなんて、ばかなこと言ってるからいけないのよ」

「ちがいますよナミさん。あし切つて戦うつもりだったんです」

「そうだ」

「余計ばかりよ」

「うるせエな」

いまだろうの霧が降り続ける中、ばかな話で騒ぎだす一味に、お茶とせんべいでくつろいでいたミス・ゴールデンウィークは無表情でMr. 3に話しかけた。

「Mr. 3、あの人達緊張感がないわ」

「それはキミも同じだガネ、ミス・ゴールデンウィーク」

やる気と言うものに欠けまくっている自分の相棒に冷や汗をかきながら、Mr. 3は不機嫌そうに眉間にしわを寄せる。

自分の好きな絶望と悲劇に染まった表情が、あの男たちが現れた直後から一転希望に満ち溢れている。愉しみを邪魔された怒りは尋常ではなかった。

「どうやら我々はナメられきつっているようだガネ、実に不愉快だ。そんなに頼もしい男達には、とうてい見えんガネ」

ため息をつき、Mr. 3は手応えのなさそうな二人を邪魔くさそうに見やる。

脳裏に考えているのは、社長ボスから届けられた最重要標的の情報。それに則つて、Mr. 3はある策を用意していたのだ。

「せっかく、対 妖術師^{ウィザード} 用の兵器も考案したというのに……前菜がこれでは気がのらんガネ」

Mr. 5やミス・バレンタインも、一度敗北した相手を仕留めきれなかったことへのリベンジマツチに燃えている。

だがそれは、この男と鳥も同じことだった。

「ゴチャゴチャとうるせエ野郎どもだ………てめエらは少々やりすぎた……!! 往生しろよ!!」

「クエ!!!」

ゴーグルをかけ、自分たちを片手間で一掃し目もくれなかった連中に闘志を燃やすウソップと、大好きな友達を守れなかった悔しさをバネにするカルーが凄む。

ルフィたちの背後の木々の間に隠れていなければ、相当に格好が良かったのだが。

「さア! 援護は任せろ!! ルフィ!! エド!!」

「クエー——!!!」

息を殺した二人の応援は、やはりルフィとエドワードにはうまく伝わってはいなかった。

そしてやがて、コントのようなやり取りに焦れたのかMr. 3が動いた。自らの腕からろうを出し、ルフィに向けて大量に放ったのだ。

「やってやるガネ!!!」
「キャンドルロック」!!!

「うがっ!!」

「うおっ!!!」

エドワードは咄嗟に躲したが、相手の能力を知らなかったルフィは両足を固められてしまう。

持ち前の身体能力が著しく封じられ、ルフィはごろりとその場に転がされた。

「う」っ!!! 何だ! こりゃ!!! 足がトンカチみてエに:!!!」

「待ってる!! 今壊して:…」

「ん? おお、なんだちようどいいじゃん」

エドワードが両手のひらを打ち鳴らすが、ルフィは自分の足枷を見て何かを思いついたようだった。

続いて両上も封じようと放たれたMr. 3のろうを腕の力で飛んで躲すと、ルフィは

エドワードに向かって叫んだ。

「エド!! 柱ア!!!」

「ん? あ! おお!」

意図はわからないものの、何か策があるのだと直感したエドワードが地面に手をつき、土を錬成して一本の柱を作り出す。

ルフィはそれに片腕を巻き付けると、元に戻る力を利用してぐるぐると柱のまわりを回り、加速を開始する。

「『ゴムゴムのオ…トンカチ』!!!」

強靱なゴムの伸縮性が破壊力を増し、そしてMr. 3のろうの硬度が仇となり、ろうの枷を槌に見立てた強烈な一撃がオブジェの柱に炸裂する。

同じ硬度を持つもの同士が、全く同じタイミングで砕け散ったのだ。

「な……………!!!」

「やったっ!!! ろうの柱が倒れ…いやあああああ!!!」

ついに解放されると喜びかけたナミだったが、柱を失ったオブジェのカボチャ部分が落下してくる光景に目を剥いて悲鳴を上げる。

巨大なろうの塊に押しつぶされるのを覚悟した一同だったが、カボチャは下の部分に残っていた柱の土台に乗って空間ができ、一味は命を取り留めていた。

「あり……………」

「生きてる……………!!」

「何も変わってねエよ……………!!」

「助かった……………!!」

「な、生身だったら絶対チビってた……………!!」

「……………!!」

危うく仲間に殺されかけた一味は頬を引きつらせるが、もはや動かせるのは顔だけになつてしまつている。

状況を見守つていたプロギーも、その無茶苦茶ぶりに言葉を失つている様子だった。

「危ねーなー。お前から何で逃げねエんだ？」

「動けないのよっ!!!」

いまだに状況を理解しきれていないルフイに、ナミたちから一斉に抗議の声が上がる。

エドワードも同じく、自分の説明を聞いていなかったのかと怒り肩で詰め寄つていった。

「お前な!! 壊すなら上のカボチャ壊せよ!!!」

「でもあいつら柱壊せつて言つたじゃねエか」

「上のカボチャもふくめての柱だバカやろう!!!」

「本当にいいの!!? あの人達に命預けて、Mr. ブシドーっ!! アルフオンスさんっ!!」

「まア…そうするしかねエよな…おれは、もう腕固まっちゃったみてエだしよ」

「や…やるときはちゃんとやってくれる人ですから………たぶん」

少しずつ少しずつ、窮地に追いやられているような気がしながらも、もはやほぼろうで固められてしまったゾロたちは信じて待つほかにない。

できればエレノアやほかの面々が助けてはくれないかとひそかに思いながら、残酷に流れていく時間に嘆息するのだった。

「うかうかしてたらあいつら全員ろうで固まっちゃう!!! さっさとあれ壊すぞ!!!」

「お…おう、わかった!!」

「邪魔はさせんと言つとろうガネ!!! ドルドル彫刻^{アイツ}!!! 『鋸』っ!!!」

やや苛々した様子で拳を構えるエドワードと、ようやく何をすべきか理解したルフィ。

Mr. 3はこれ以上万が一を増やさないために、二人の青年たちをこの場で仕留めることを決めたのか、ろうで作った鋸を射出した。

「ロウの組成式は………あー、パルミチン酸かセロチン酸か!!!」

ぶつぶつと呟きながら、エドワードは迫りくる森に向かって打ち合わせた手のひらを

叩きつける。

青い閃光がろうの銚に走り、一瞬にしてろうをバラバラに分解してしまった。

「何イ!!?」
「ドルドルの銚」を溶かした…だと!!?」

「『ゴムゴムの…!!』」

自慢の能力が通用しなかったことで、Mr. 3は驚愕の声を上げる。

しかしルフィは驚く暇さえ許さず、仲間の救出の邪魔をする厄介なろうの能力者に向けて、伸ばしたゴムの拳を構えた。

「^{ビストル}銃」
「!!!!」

Mr. 3は能力で防御する暇さえ失い、ルフィの拳を真正面から受けて吹っ飛ばされてしまう。

相手を策略に嵌め、自分の手を汚さずに任務を遂行し続けてきた男は、初めて自らが血を流させられることとなった。

「Mr. 3!!」

「ばかな」

「おーっ」

Mr. 5らやナミたちがそれぞれで反応を見せ、ルフィとエドワードの戦果に声を上げる。

森の中へ突っ込んで言ったMr. 3に向けて、エドワードはキリキリと機械鎧オートメイルの指を鳴らしながら厳しい目を向けた。

「わかったか……ろうそく野郎？ お前じゃ俺には勝てねえよ!!! ルファイ!! 今のうちにあのカボチャ壊しちまえ!!」

厄介な相手は片づけた。残りの二人はそうたいした連中でもないどエドワードが掃除役を買って出る。

しかしルファイは、エドワードの背後で立ち尽くしたまま小さく答えた。

「いやだ」

どこか困惑したような、焦りをはらんだ様子で告げられた言葉に、誰もが言葉を失う。エドワードも一瞬固まり、ルファイが何を言っているのか理解するのに遅れながら慌て振り向く。

「あ!!? 何言ってるんだ!!?」

「な……」

「おいルファイ!! バカやってる場合じゃねえんだぞ」

「ルファイさんお願い!!」

ゾロやビビも、ルファイがこんな状況で冗談を言うような人間ではないことを知りながらも呼びかける。

だがルフィは、苛立ちや焦燥が混ざった声を受けても、その場から動こうとしなかった。できないようだった。

「どうしよう、おれ、お前ら助けたくねエ」

「……………?! なに、言ってるの……………」

何よりも仲間を大切にしてきたはずの船長の奇行に、ナミは戸惑った様子で固まる。誰よりもルフィ自身が、自身に起きた異常に混乱しているように見える。なのにまったく動けずにいることが、彼に起きていることの異様さを表していた。

「あんにやろ……………どうしちまったんだ?! 急がねエと仲間達の命が危ねエつてのに!! 目を醒まさしてやる!!!」

さつきから妙なことばかり言うルフィに困惑しながら、どうにかしてやらねばとウソップがカルーを呼ぶ。

しかし彼らの前に、意味深な笑みを浮かべたMr. 5とミス・バレンタインが立ち塞がった。

「やめときな。やつは、もう罠にかかっている」

「そうよ、あのコの足元が見える?」

「足もと……………?!」

ウソップはそう言われ、ルフィの足元に書かれている奇妙な黒いマークを凝視する。

ただのなんの変哲もない黒の絵の具。それがいったい何の枷となっているのか、全く分からなかった。

「あれが一体何だつてんだ……!!」

「つまり、てめエも奴らも全滅しちまうつてことだ!!」

「うおオ!!」

Mr. 5の爆発の標的にされたウソツプは、やむなく森の中への逃走を余儀なくされた。

カルーも目を見開きながら、まずは追手をまくために全速力で森の中へと駆け込んでいくのだった。

「やられた……!! あの絵描き女の仕業か!!」

「ミス・ゴールデンウィーク、あなたの仕業ね……!!」

エドワードとビビが、この異常事態を引き起こした一人に思い至って顔をしかめる。

その犯人、ミス・ゴールデンウィークは絵具と筆を構えながら、無表情の中に自慢気な響きを持たせながら答えた。

「『カラーズトラップ』。裏切りの黒。黒の絵の具にふれたらどんなに大切な仲間の言葉でも裏切りたくなるの」

見れば筆の先から滴り落ちる黒の絵の具と同じ色が、ルフィの足元に奇妙なマークを

飾っている。

ルフィはそのマークに礫にされたように、立ち尽くしていた。

「どういうこと?! 何が起きたの?!」

「彼女は感情の色さえも現実リアルに作り出す『写実画家』。彼女の洗練された色彩のイメージは絵の具を伝って、人の心に暗示をかける」

「暗示だと?! そりやまずい……………!! 暗示だの催眠だのつてたぐいの力は、あの単純バカには必要以上に効いちまうんだ」

敵の催眠術にかかるような単純な脳の構造をしたルフィには、これ以上ない最悪の相手といえる。

戦闘能力のない少女だが、ルフィは手を出す事が出来ないのだ。

「この大変な時に…!! 余計な手間かけさせんじゃねエよ!!!」

「うおっ」

苛立ち交じりに、エドワードがルフィをその場所から蹴りどかす。

カラーズトラップの範囲外に押し出されたルフィは、ハツとした様子でゾロたちに方向へ向き直った。

「はっ? な…:なんかおれ今変だった…!! よし、お前ら今助けるぞ!!!」

「…つたく」

手間がかかる、とエドワードは眉間にしわを寄せながらも安堵のため息をつく。

しかし自由になればこっちのものだ、と邪魔されないうちにオブジェを壊してしまおうと、両手を合わせて構えた。

「ぶわっはっはっはっはっはっはっは!!! そんなことより笑つとくか!!! あっはっはっはっはっはっはっは!!!」

が、今度はルフィは緊張感のない大笑いをし始めてぎよつと目を剥いて固まる。

地面にうずくまってバシバシ足元を叩くルフィの背中には、さつきと同じマークが今度は黄色で描かれていた。

「はっはっはっはっはっはっはっは!!!」

「『カラーズトラップ』 『笑いの黄色』。駄目じゃない動いちや…」
「お前ただけこういうのに弱エんだよ!?!」

気配も気取らせずにマークを描いたミス・ゴールデンウィークも大概だが、一番驚くべきは暗示の類に全く耐性のないルフィの単純さである。

このままでは一向に仲間を助けられない、とエドワードはルフィを正気に戻すことを諦めた。

「クソツ……こうなったら俺があのカボチャをブツ壊さねエと……!!!」

「だめよ、あれ壊しちゃ。Mr. 3に怒られるわ」

突撃しようとしたエドワードの背中にも、いつの間にかミス・ゴールデンウィークが絵の具を走らせる。

今度は青の暗示のマークが施され、エドワードのシャツを彩った。

「カラーズトラップ」 『悲しみの青』

「効くかそんなも……………!!」

自分はルフィほど単純ではない、と高をくくるエドワードだったが、すぐに彼にも異常が表れ始めた。

とてつもない悲しみの感情があふれ出し、自分に対して全く自信が持てなくなっていく。じきにエドワードは、地面にがつくりと膝をついて項垂れてしまった。

「生まれてきてすいません……………!!!」

「兄さ……………ん!!!」

「だめだ…戦いの相性が悪すぎる…!! 二人ともパワーが全部空回り…!!」

どうやら彼の何かしらのトラウマを刺激してしまったようだ。あっさり暗示にかかってしまった最後の希望達に、アルフォンスは絶叫しナミは唇を噛む。

ミス・ゴールデンウィークは容赦なく、二人を完全に無力化するためにさらに筆を走らせた。

「仕上げはこれ。『笑いの黄色』と『悲しみの青』を混ぜて、カラーズトラップ」 『な

『ごみの緑』

ルフィとエドワードの背中で、青と黄色が混ざって緑色がつくられる。

爆笑の暗示と悲観の暗示が半分ずつ混ざり合うと、全ての感情が平たんとなった穏やかな感情に支配された。

「お茶がうめエ」

「アホか——っ!!!」

ミス・ゴールドデンウィークとともに、シートの上でせんべいと茶を片手にくつろぎ始めたルフィたちに、仲間達からそうツツコミが上がる。

事態は刻一刻と、最悪の方へと流れつつあった。

第65話 鋼

「敵が『罨』だと教えてくれたあのマーク……!! さっきルフィとぶつかったときにはそれが背中にかかれてた。犯人はそばにいたあのやる気なさそーな女に違いねエ。原因はーっだ!!!」

ウソツプはカルーの背に乗り、Mr. 5とミス・バレンタインの追跡から逃れながら仲間のもとへと向かっていた。

ルフィに起きた異常の原因を独自に理解し、自分が倒すべき敵を見つけ出したのだ。

「急げっ!!!」

「クエーッ!!!」

カルーを走らせるウソツプは、ついに広場へと戻って来る。

だがウソツプは、全てが真っ白に染まった光景に目を見張り、立ち尽くしてしまった。ゾロも、ナミも、ビビも、アルフォンスも、そしてプロギーも、みんなろうで覆い尽くされてしまっていたのだ。

「あ——、お茶がうめエ……」

「お前ら……何を!!!?」

肝心のルフィは、エドワードとともに暢気に茶を飲んでいる。

何を考えているのかと思えば、二人は湯飲みを握りしめたまま屈辱と怒りで顔を歪め、ぶるぶると身体を震わせていた。

誰よりも二人が、動けないことをくやしがっていた。

「お茶が…」

「うめエ…」

「バカヤロウ…」

暗示に逆らうこともできず、牛のように鼻息荒く座らされ続けているルフィとエドワードに、ウソツプはぎりりと歯を食いしばる。

ウソツプを追い続けていたMr. 5の姿が見えると、ウソツプはなんとルフィたちに向かつてゴムパチンコを構えた。

「必殺!!! 〃火炎星〃!!!」

「うわあああああつ!!!」

爆炎に包まれ、二人は燃えながら吹き飛ばされる。

突然の強硬に眉を顰めながら、Mr. 5は自分の取り出した拳銃を構える。その弾は、悪魔の实の能力によつて起爆する自分の息だ。

「ブリーズ・プレス・ボム 〃そよ風息爆弾〃」

息を弾としてバレルに備えることによって、Mr. 5の射撃は不可視のものとなる。

銃口によって射線を予測していたウソップにも、これは躲すことはできず爆発を食らってカルーとともに地面に倒れ伏すこととなった。

「ハア……ハア………おい!! 目エ醒めたかよ、てめエらっ!!!」

全身を焼き焦がされながら、ウソップは二人に向かって怒鳴る。

ここまで体を張つたのに、仲間の希望を一身に背負っていたのに、情けない姿をいつまで晒しているつもりだと、その声は告げていた。

「ああ、さめた…サンキュー。もうくらわねエぞ、あんな絵の具」

「自分の単純さ加減に……腹が立つ…!!!」

黒煙の中から、座り込んでいた二人が立ち上がる。

暗示の絵の具をつけられていた衣服は、ウソップの狙撃によって燃やされ、ボロ布となつて捨てられていた。

「ハア——!! ハア——っ!!! 一人だつて死なせてたまるか!!!」

「全部まとめて……!! 倍にして返すっ!!!」

火傷の痛みを罰とこらえ、黒焦げにされながらも、ルフィとエドワードは怒りに満ちた目でMr. 5達を睨みつけた。

「もう手遅れさ、てめエら」

「その通りだガネ……!!! 手遅れにして……更なる『絶望』を味わえ!!!」

森の奥から、吹き飛ばされていたはずのMr. 3の声が聞こえてくる。

バキバキと樹々をへし折りながら姿を現したのは、白いらうの鎧。凄まじく分厚いらうで顔以外を覆った、ロボットのようになつたMr. 3だつた。

「出撃!!?」 キャンドルチャンピオン!!!」

元のMr. 3の貧弱な体からは想像できないゴツイ鎧が、ズシンズシンと地面を踏みしめながら機敏に登場する。

凄まじい重量であることが、踏み固められた地面の足跡から予想できた。

「うわあああ〜っ!!?」

「何だあいつ」

「コイツア……かつて4千2百万の賞金首を仕留めたという」

「Mr. 3の最高美術!!!」

突如登場した新たなろうの武器に、ウソップとルフィはともかくMr. 5やミス・バレンタインまでもが息をのむ。

味方にも恐れられている、Mr. 3の最大の武器が、今まさにお披露目されたようだ。
「ミアミス・ゴールデンウィーク!!? 私に塗装を施したまえ!!? 美術的に!!? あ
の生意気な麦わらボーシと金髪小僧をひねり潰してくれるガネ!!!」

「そしたら休んでいい?」

「ああ、構わんとも!!? むしろ手は出さんでくれたまえよ!!? こうなつた私はもはや無敵つ!!! 鉄の硬度を誇る『ドルドルのろう』でまるやかに体を包み込んだ、この鎧に死角はないつ!!!」

ズシンズシンと大地を踏みしめ、巨体に似合わない機敏さを見せるろうの鎧。

滑らかな光沢を有した鎧の拳をかざしながら、Mr. 3は凄まじい形相でルフィ達を睨みつけた。

「本来であれば『妖術師』ウィザードを仕留めるためにとつておきたかったが、もう出し惜しみをする気は無い!!? 貴様らを叩き潰し、あの女を打ち取ることでこの鎧にさらなる華をそえてやるガネ!!!」

自身の能力に絶大な自信を持つMr. 3は、敗北など微塵も考えていない。数々の実績が、Mr. 3に己の勝利を確信させていた。

そして、そんなMr. 3の鎧を目の当たりにしたルフィは、キラキラと目を輝かせていた。

「カッチョいい…!!?」

「見とれてる場合か!!? 戦え!!?」

敵の武器に目を奪われてどうする、とウソツプが怒号を放つ。正直言えばウソツプも

ああいったものは大好きだが、さすがに空気を読んで騒いだりはしなかった。

しかしそんな中、エドワードだけがM r. 3の鎧を鼻で笑っていた。

「ハツ…ロクでもねエ芸術だな!!?」

「何イ!!?」

カチンときた様子で睨みつけてくるM r. 3に、エドワードはびしつと義手の指を突きつける。

返される不敵な笑みには、自分とは相容れない美学に対する挑戦がありありと表れていた。

「そつちがそうくるなら…こつちだつて見せてやるぜ!!? 本物の芸術つてやつをなア!!!」

エドワードはそう告げ、自分の両手のひらを合わせて地面に力強く叩きつける。

青い閃光が地面に走り、土を盛り上げて原子を組み替え、見る見るうちに巨大な金属の塊を作り上げていく。

「鋼の…義手…!!? まさか…!!」

ただの人間にはできない、しかし悪魔の実の能力者でもないはずの青年の業にM r. 3は目を見張り、そしてエドワードの機械鎧オートメイルにハツと息をのむ。

若くしてすさまじい鍊金術の腕前を持つ青年の名に、聞き覚えがあったからだ。

（そうか……!! ウイザード 妖術師” だけではなく、なぜあんな小僧が社長に危険視されていたのかと思えば……奴こそがそうだったのか……!!）

Mr. Oからの指令にあった、王女ビビとともに葬るように伝えられた名前。

アラバスタ王国” 王女” ビビ、 ウイザード 妖術師” エレノア、” 麦わら” のルフィ、そして” 錬金術師” エドワード。

彼に与えられた二つ名は、バロックワークスにも知れていた。

「史上最年少で国家錬金術師の資格を取得した……海軍少佐クラスの権限さえも有する『人間兵器』!!」

青い閃光に照らし出される鋼の腕を見ながら、Mr. 3は合点がいったというように笑みを浮かべた。

「そうか……!!」 貴様が……” 鋼” の錬金術師……!!」

どんつ、とより一層閃光が凄まじさを増し、エドワードの周囲を錬成された金属が覆い尽くしていく。

閃光の中で金色の瞳を輝かせながら、エドワードは鋭い目でMr. 3達を睨みつけ続けていた。

「来いよド三流……!!」 おれとお前の格の違い、教えてやるぜ」

黒い鋼がエドワードを覆い隠し、さらに形を変えていく。

分厚い鋼に覆われた胴体に、地面にめり込む強靱な足、人間を驚掴みにできそうな巨大な腕、そして赤い一つ目が光る頭部。

男たちの浪漫を乗せた鉄の巨人が、強烈な蒸気を放ちながら立ち上がった。

「緊急出動!!?」エドワードロボ(仮)「!!!」

ギリギリと金属を軋ませ、誕生した巨人がMr. 3に向かつて一歩踏み出す。

自分の鎧とそう変わらない大きさの、しかし自分とは全く美的センスの異なる物体が創造されたことで、Mr. 3は腹立たし気に眉間にしわを寄せていた。

「何なのだガネ、その趣味の悪い鉄クズは…!!?」

「カツチヨいゝゝゝゝ!!!」

一方でルフィとウソップは、現実に目の前に現れた巨大ロボを前に感動で目を輝かせていた。

唸るスチームに軋む身体、いろいろゴチャゴチャしたものが付いているが、それがまた武骨な格好良さを表現していて非常に好みだった。

「おい、ウソップとカルー。お前らにはちよつとやつといてほしい事があるんだわ」

「ん?」

「クエ?」

ウソップとカルーは、エドワードロボ(仮)に乗ったエドワードにそう話しかけられ、

困惑しながらも耳を貸す。

やがて Mr. 3 はもう我慢の限界だというように、ルフィとエドワードロボ（仮）に向かつて突進を開始した。

「『チャンプファイト』!! 『おらが畑』!!!」

「『マウンテン・オリンゴス
希臘ノ最高峰』!!!」

二体の巨大ロボが、蒸気と土片を巻き上げながら激しく激突する。

ガシン!! と凄まじい轟音が鳴り響き、互いの立つ地面が大きく陥没する。巨人たちの激突には劣るが、それでも十分派手なぶつかり合いが繰り広げられた。

まるで絵空事のような戦いに、純粋な男子の心を持つルフィは感動の涙を流していた。

「『ゴムゴムの……スタンプ』!!!」

「フハハハハハ!! ムダだガネ!! このキャンドルチャンピオンに死角はないっ!!!」

ルフィもエドワードロボ（仮）の力になろうと Mr. 3 を狙うが、むき出しの顔面を狙った蹴りは簡単に弾かれてしまう。

エドワードロボ（仮）の拳がろうの鎧を砕こうと突き出されるが、鋼と同程度かそれ以上の硬度を誇る鎧は一向に傷を刻むことはなかった。

「食らうがいい!!? 『ドルドルランチャー』!!!」

Mr. 3は飛び退くルフィに向けてろうの拳を向ける。

すると拳の先端が形を変え、大砲のように大きな穴を開けると大量のろうの弾を発射し始めた。

「すつげエエ!!? でも危ねエ!!!」

一発でも食らえば口で全身固められてしまうであろう攻撃を、ルフィは目を輝かせながら逃げ回る。

エドワードは巨大な腕で防ぐが、ろうの重量を受けることで徐々にその機動力が削がれ始めていた。

「フハハハハ!!! 錬金術の行使には陣が必要と聞いていたが、貴様の場合は触れなければ発動しないようだな!!! いい情報をもたらったぞ鋼の錬金術師!!? 腕さえ封じてしまえばいいのだからな!!!」

「くつそオ、よけいなこと知りやがって……おれが姉弟子にしばかれるじゃねエか!!!」
無限に放たれるろうの弾に苦戦し、齒を食いしばり苛立ちを表すエドワード。

彼にはMr. 3や敵に馬鹿にされた拳句、不利に追い込まれることよりも、あとでエレノアに雷を落とされることの方が恐ろしかった。

「ギャーツ!!! ギャーツ!!!」

「グエ——ツ!!!」

「ちよこまか鬱陶しいんだよ……!!?」

その周囲では、カールとウソツプがそれぞれ別々に逃げ回っている。

あちこちで上がる火柱は、Mr. 5が放つ爆発する息の弾によるものだ。

「フン…逃げ回るだけのクズが、足手まといとはこのことだ!!?」

「キャハハハ無様ね!!」

みつともなく逃げ続ける一人と一匹を嘲笑い、しかしなかなか仕留められないことに次第に焦れてくる二人。

刻一刻と迫る自分が告げたタイムリミットに、Mr. 3は愉快そうに笑い声をあげた。

「フハハハハ!! 諦めろ諦めろ!! 奴らは私の『美術作品』になったのだ!!!」

「ふん!! そんなもんにさせるか!!」

「あいつらの命はお前なんかにはやらねエよ!!!」

あざ笑うMr. 3に向けて、エドワードロボ（仮）は大きく右腕を振りかぶる。

そしてまたしても砲門を構えるMr. 3に向けて、フルスイングで拳を文字通り放った。

「オラくらえ!!?」おもちゃで遊んでたらよくある事故パターン!!!」

「ぬあ!!?」

エドワードロボ（仮）の腕が関節から外れ、すっぱ抜けた拳がろうの鎧に炸裂する。

Mr. 3がバランスを崩したたらを踏むと、ろうの鎧をエドワードロボ（仮）が片腕で抑えつけ、飛び上がったルファイがMr. 3の特徴的な髪を掴む。

いまだに煌々と燃え続けている髪の毛の先についた火を手にし、ルファイはにんまりと勝利を確信した笑みを浮かべた。

「ルファイ!! 交替だ!!! その火をしつかり離すなよ!!!」

「おう!!! ……つていいのかア!!!」

エドワードはがバツと振り向くルファイをよそに、エドワードロボ（仮）の中でパチンと手を合わせ、ろうの鎧を抑え込んだままロボの中から飛び出す。

ルファイはすぐさまエドワードロボ（仮）の中に飛び込み、夢のロボの操縦に夢を馳せた。

「うおおおおおまきおわったぞコラア!!!」

「クエーツ!!!」

「よっしや!!!? あとは任せろ!!!」

そこへ、どさーつとウソップとカルーが息を切らせながら飛びこんできた。

エドワードはきらりと目を輝かせ、ウソップとカルーが走り回った後にまかれている大量の粉に向けて、パチンと合わせた手のひらを叩きつける。

するとその直後、まかれていた粉が発光し、あちこちで軽い爆発を起こし始めた。

「ム…!!? 貴様!!? なにをした!!?」

「こつちはハナつからためエなんぞ狙ってねーんだよ!!!」

「おいエド!!! 操縦できるのはうれしいけどこれよく見たらただの着ぐるみじゃねエか!!!」

「ガマンしろ!!! ……ろうが霧になるってことは……火で溶けるってことだ!!!」

「フン…!! だが、そんなことが今さらわかろうと貴様らにはもう勝機も!! 時間も
ない!! もはや持って30秒!!! それで、そいつらの心臓は停止する!!!」

「30秒もいらねエっての…!!!」

思っていたのと違ったルフィが、それでもMr. 3を抑え込む任務をやり遂げながら
叫ぶが、エドワードはそれを一喝して終わらせる。

その時、爆発が起きた地面にできた亀裂から、しゅうしゅうと大量の気体が噴き出す
音が聞こえ始めていたからだ。

「なんじゃありや…!!? ガスか!!!?」

「ああ…ちよつとの火の気で大炎上するとびきり危険な気体だ!!! どうせやるなら派手
に焼こうぜ!!!」

「なるほどな…!!?」

エドワードの考えを読み取ったウソップが、オブジェのまわりに蔓延し始めるガスを見てにやりと笑みを浮かべる。

Mr. 3達もその考えを悟ったのか、焦燥しながらもがき始めた。

「い、イカン!!? やめさせるガネ!!」

「させるか!!?」

「クソ…!! 爆発もできねエじゃねエか!!」

「私がやるわ!!!」

自慢の爆発能力が使えないMr. 5に代わって、ミス・バレンタインがエドワード達を止めるために走り出す。

だがその時にはすでに、Mr. 3の頭の火を確保したルフィが、エドワードロボ(仮)を纏って走り出していた。

「もう遅エんだよ!!!」

「みんな起きろオ!!!」

満面の笑みを見せたルフィが、Mr. 3をガスの中に向けて突き出す。

凄まじい力で拘束されたMr. 3はもはや逃れることも叶わず、ガスの中に頭から突っ込まされた。その直後。

「うあちゃああ!!!」

ガスに引火した火が、とてつもない業火となつて広場全てを埋め尽くしていく。木々も、地面も焼かれ、そしてすべてのろうが溶かされ、どろどろの液体となつて形を失つていった。

「熱っ熱イ——っ!!! おのれ麦わら!!!」

「すげー火、大丈夫か?!? あいつら」

溶かされたるうの鎧で危うく窒息しかけたMr. 3が、慌ててるろうの中から顔を出すと、思った以上の炎の凄まじさにルファイが驚愕の声を上げる。

その隙に、Mr. 3は全速力で逃走を開始した。

「よくも私のキャンドルサービスを……!!!」

「あっ!!! 逃がすかこんにやろ!!!」

あつという間に森の中に姿を消していくMr. 3を追い、ルファイも急いで森の中に急ぐ。カルーも一緒に、その後を追った。

いつの間にか姿を消したミス・ゴールデンウィーク共々、ルファイたちは許す気にはなれなかった。

「鳥!!! あいつらを許すな……決闘たたかを汚す奴は男じゃねエ!!!」

「クエツ!!!」

熱い怒りを胸に燃やし、ルファイとカルーは森の中を駆け抜けて行くのだった。

第66話 “裏方の仕事”

残されたエドワードとウソツプは、ため息をついて肩をすくめる。

すると、炎の中から何とか逃げ延びたMr. 5とミス・バレンタインが憎々しげに彼らを睨みつけた。

「ナメたマネを…!!!」

「やってくれるじゃないあなた!!! もう余興はおわりよ!!?」

もうショーだ余興だと楽しんでいる場合ではない、この手で直接たたき潰してやると意気込む二人だったが、ミス・バレンタインの背後に突然巨大な影が迫った。

ミス・バレンタインが気付いた時には、その巨大な影が彼女の顔を張り倒していた。

「まったくもう…!!? こんな炎、ボクはともかくナミさんたちがどうなっていたか…!!?」

「ぜいたく言うな、弟よ」

「助かっただけありがてエと思え」

抗議の声を受けたエドワードとウソツプは、少し鎧を焦げさせたアルフォンスにそう告げる。

アルフォンスは苦笑しながら、同じく命からがら脱出したナミとビビは安堵のため息で答えた。

「そうね…ありがとう」

「ウソみたい。私達…生きてるのね」

いまだに信じられない様子で自分の体を見下ろすビビ。

衣服はさすがに焼けてあられもない姿になってしまっているが、死なずに済んだことを考えれば儲けものだった。

「いやでも本当に助かりました…実はボクだけあの状態でも意識保ってまして」

「あ？　じゃあお前だけ無傷じゃねエか!!？」

「でも…:…:死ぬことも動くことも許されず、誰一人答えてくれることなく真の意味でひとりぼっちの時間を過ごす羽目になっていた可能性も…」

「「いやあああああああ!!」」

ぼそりとアルフォンスが呟いた、考えたくもない未来にウソツプたちは一斉に抱き合って悲鳴を上げる。

不死には不死なりの苦労があるのだと知らされ、それを聞いていたエドワードもサツと頬を引きつらせながら視線を逸らしていた。

「チツ…ろうが溶けたか!!　めんどくせエな。もう任務をしくじるわけにはいかねエん

だよ!!」

そんな中、ミス・バレンタインがやられたことに眉間にしわを寄せるMr. 5が迫る。ウソツプはすかさず、Mr. 5に向けてゴムパチンコで弾を放った。

「必殺!!! “火薬星” つ!!!」

「バカが。爆弾人間の、このおれには “火薬” は効かねエと何度も証明したはず!!!」
「くらいついたな」

腹の中で無効化してやろうと、ウソツプの弾を飲み込んだMr. 5は、告げられた言葉にハッと表情をこわばらせる。

ウソツプはにやりと意地の悪い笑みを浮かべ、安易に手を出したMr. 5を逆に嘲笑った。

「悪いな、おれはウソつきでね。そりや火薬じゃなくて “特製タバスコ星” だ!!!」

「ぐお———つ!!! 辛———つ!!!」

「だつはつはつはつは、効力は身をもって立証済みだ!!!」

いつかの自分のように口から火を噴いて苦しむMr. 5に、ウソツプは悪戯が成功した時のような愉快な笑い声を上げる。

しかしMr. 5は、辛さだけではまだ倒れなかった。

「おのれ海賊ども!!! カツカツ…カツ!!! “全身起爆” で吹き飛ば!!!」

ギリリとサングラスを光らせ、Mr. 5がウソップに組み付く。

悲鳴を上げるウソップや、救い出そうと駆け寄るエドワード達もまとめて吹き飛ばさうと、Mr. 5が能力を発動させようとした。

その時だった。

「『焼鬼斬り』!!!」

いまだ燃え続ける業火の中から飛び出した影が、三本の燃える刃を携えてMr. 5に斬撃を浴びせる。

予測しない一撃を食らったMr. 5は、もともとかなり弱っていたこともあって、さしたる抵抗もできず地に伏した。

「燃える刀つてのも悪くねエ……」

ゾロは刀が纏っていた炎を払い、静かに鞘に納める。

ほっと安堵の息をつく一同は、続いて聞こえてきた地鳴りに振り向いた。

「よオ……命あつてなによりだ」

「……フフ……ああ」

「師匠……」

安堵しているような、何もできなかったことを悔やんでいるような、複雑な表情で座り込むプロギーにウソップが小さくつぶやく。

そして彼らは、Mr. 3と彼を追っていったルフィのいる森の方へ眼を向けた。
「残る敵は、あと二人か」

「やつば変だろ、オイ。クソオカシーぜ。こんなに待つてんのに、なぜ誰も戻らねエ…」
メリー号に戻ってきたサンジが、いつまでたつても誰も戻つてこないことに疑問を抱き、首をかしげる。

ウイスキーピークでは顔を知られていなかった彼は、狩り勝負の最中に襲われることはなかったようだ。

「やつばナミさんやビビちゃんやエレノアちゃんの身に何か起きたんじゃ…!!? だとしたらトカゲ料理の支度なんてしてる場合じゃねエな、おれは。よし、探そう。ナ——ミさくらん♡ ビ——ビちやくん♡ エ——レノ——アちやくん♡」

すぐさまメリー号を降り、ジャングルの中へ入っていく。

男たちは除外し、とにかく女性陣を探すことに集中していた彼は、途中で襲い掛かってきた牙の長い猫サイベルタイガーを乗り物代わりに森の中を探し回った。

「おーい、返事してくれーっ。好きだ——っ」

ボコボコにした猫が鳴きながら走り回っていると、サンジはふと森の中に奇妙なものを発見した。

「ん？ なんだこりゃ」

猫を降りて近づいてみると、それはろうでできた一軒の小屋だった。

訝しく思いながら、中を覗いてみれば、なんとそこには探していた女性の一人、エレノアが座っているのが見えた。

「なんだよエレノアちゃんたら……♡ こんな所でくつろぎタイムなんて、おれに言ってくれたらドリンクとかいくらでも用意したのにつ!! あ、この家ももしかして錬金術で作ったり……」

サンジが警戒もせずにはドアを開けて入室すると、エレノアはやや厳しい目でサンジを見やり、眉間にしわを寄せる。

そして何か考えると、猫なで声ですり寄ってくる彼に小さな声で話しかけた。

「……………サンジくん、お願いがあるんだけどさ」

「なんなりと!!」

バツ、と大袈裟な動きで跪く彼にやや冷めた視線を向け、エレノアは無言を言わさぬ口調でさらに告げる。

「この空間に近づくとヤツがいたら、できるだけ静かに仕留めといってくれる？ 今からちよつと重要な仕事があつてさ」

「え？ あ、ああ……」

さすがにいつものノリは求められていないことを察したサンジが、戸惑い気味に小屋の外に下がる。

すると、二人の耳に奇妙な音、というか声が聞こえてきた。

『プルルル…プルルル…』

見れば、小屋の隅に置かれた籠の中からその声が聞こえてくる。

急ぎエレノアが近づき、籠の中から音の原因を取り出し、テーブルの上に置いた。

それは、大きなカタツムリのような生物だった。管のついた装置が取り付けられたそれは、先ほどから口で音を鳴らしていた。

「電伝虫じゃねエか……………!!」

知っていたのかサンジが感嘆の声を上げるが、エレノアは口元に指をあててサンジを睨む。

慌てて口を閉ざすサンジを横目に、エレノアは数回咳払いをすると、意を決したように殻に取り付けられた装置、受話器を外して口元に寄せた。

「……………はい、こちら Mr. 3」

「……………?!?!」

すると、エレノアの口から聞いたことのない男の声が響き、サンジが思わずぎよつと後ずさる。

構わずエレノアは、電伝虫が口にする答えを待った。

『てめエ、報告が遅すぎやしねエか……?』

「……一応確認しますガネ、そちらはどなたですガネ?」

冷や汗を流しながら尋ねるエレノアに、電伝虫は、いや、電伝虫の向こう側から離している人物は低く響く声を発した。

『おれだ。"Mr. O"だ……』

サンジは目を見張り、エレノアと電伝虫を交互に凝視する。

しかしすぐに表情を改めると、エレノアに言われていた通り、彼女の邪魔をするものが現れないか見張りに立った。

『おれが指令を出してから、もうずいぶん日が経つぞ。いったいどうなってる、Mr.

3』

「……………」

『何を黙りこくっている。おれは質問をしているんだ。王女ビビと麦わらの一味……………
そしてあの女は抹殺できたのか?』

エレノアは今にも吐きそうな緊張を覚えながら、遠くから聞いていたMr. 3の特徴を思い出しながら口を開いた。

「…………ええ、任務は完了しています。あなたの秘密を知った輩は全員始末しました。で

すのでもう追手は必要ありませんガネ」

『…そうか、くくろう…』

「…ですが」

満足げに返したMr. Oに、エレノアはかねてから考えていた作戦を実行する。

かなり危険な賭けにはなるが、一味を、そしてあの優しい王女を守るために必要な策だった。

「大変申し訳ないガネ……
妖術師^{ウイザード}だけが我々の包囲を破りまして、現在姿を消しています」

『………逃げました、というのか』

「い、言っておきますが社長^{ボス}!! 私の能力とあの女の力では壊滅的に相性が悪い!!! それについてはご存知でしょう!!」

一気に不機嫌そうになるMr. Oの声に、慌てた様子を装いながらエレノアが返す。

事実、情報収集をした限りMr. Oの能力は物質を作り出すもの。エレノアやエルリック兄弟ならば対処することは可能なはずだった。

『だが奴らの力にはある程度の制限がある……対処法については、どんな方法でも構わんから腕を封じろと教えておいたはずだぞ』

「そ、それはそうですが……!!? それに……もともとあの女は“白ひげ”の娘!! 下

手に手を出せばこちらが危険だガネ!! 数の差を見てすぐさま撤退したところを見るに、王女とのつながりの薄い関係性のようですし……放置していてもさほど問題はないのではないかと」

『甘エな、Mr. 3……あの女は自分の連れに手を出されて黙ってるタマじゃねエ。なぜ「麦わら」とかいう雑魚海賊と共にいるかは知らんが、近いうちに必ず報復に現れるぞ』

エレノアは過大評価されていることにやや頬を引きつらせながら、それでも向こうが自分の考えにとられていることにほくそ笑む。

しかし少なくとも、向こうの優先度に変動が起きたのは確かだと、エレノアは達成感を抱いた。

『……だが過ぎたことは仕方がねエ。今そつちに向かつてるアンラツキーズから届け物を受け取ったら、お前はミス・ゴールデンウィークと共にアラバスタへ向かえ。時機がきた……おれ達にとつて最も重要な作戦に着手する』

告げられた内容に、エレノアはごくりとつばを呑む。

いよいよ迫っているのだ。かつて初めて出会った時からその危険性を醸し出していたあの男の作戦が、動き出す時が。

『詳細はアラバスタへ着いてからの指示を待て』

「……了解」

緊張で声が震えないように細心の注意を払いながら、エレノアが受話器を置こうとした時だった。

小屋の外から、何回もの爆発音や粉碎音が響き渡ってきたのだ。

『何事だ』

「お気になさらず……!! Mr. 5達が島の生物相手に暴れてるだけでして……!! すぐにすむガネ」

『……まあいい。とにかく貴様はそこから一直線にアラバスタを目指せ。なお……電波を使った連絡はこれつきりだ。海軍にかぎつけられては厄介だからな。以後、伝達は全て今まで通りの指令状により行う。……以上だ。幸運を……Mr. 3』

びくうつ!!と肩を跳ね上げたエレノアは、思わず小屋の外にいるサンジに恨みがましい視線を送りながら慌てて誤魔化しきった。

そしてやつと向こうが通話を終える音が聞こえると、エレノアも受話器を置いてがっかりと天を仰いだ。

「……………ぶはア!!!」

それまで真面に息をすることも忘れていたようで、肺が空気を求めて悲鳴を上げている。

何より、無理矢理声を作った反動がきつくて仕方がなかった。

「あーもうやつぱこれ喉に負担かかるからキライだよまったく…!! ゲホツ、とにかくこれでビビたちへの注意は……………私に向く」

咳き込みながら、エレノアは覚悟を秘めた眼差しで虚空を見つめる。

あの男にどこまで感づかれるか心配だったが、やはり電伝虫越しには声の違いは伝わらなかつたようで、うまくいったことにしきりに安堵していた。

「ていうかサンジくんうるさい。静かにつて言つたよね?」

「あ、ごめんよエレノアちゃん! いやこのアホウドリどもが騒ぐもんでさア…」

「…………ハア、もういいよ。なんとかがごまかせたから」

小屋の外で、いつか見たラッコとハゲタカを相手に暴れていたサンジにそう告げ、エレノアはさっさと歩き始める。

そのあとに、サンジは心配そうな表情で続いた。

「さっきの電話……………内容から察するに向こうの社長ボスの」

「うん。Mr. O……………王下七武海の一人、砂漠の王「クロコダイル」

エレノアは頷くと、危険な仕事をさせてしまったことを悔やんでいるのかサンジが渋い表情を浮かべている。

ため息をつくとき、エレノアは自分の考えをサンジに語つて聞かせた。

「向こうがどれだけこつちの情報を得ているかはわからないけど、少なくともいくつか布石を打っておくことは必要だからね。……私が一味とは別行動していると知ったら、きつとあいつはそつちに注意を割く」

「…自分の身を危険にさらすことになるよ」

一人で行動しようとしていることを咎めるようなサンジの声に、エレノアは不敵に笑う。

敵がこの島にいることを知りながら、情報収集を優先させたのは自分。だからこそ、今後自分の命を懸けなければならないのだ。

「たった16歳のあの子が命かけてんだもの…!! お姉ちゃんもそれぐらい頑張らないとね!!」

そう言つてむんと胸を張るエレノアに、サンジはため息をつくと同じく笑みを浮かべた。

「だったら………とことんお付き合いますぜ、レディ?」

「ウオオオオオオオオオオオン!!!!」

広場には、今まさに凄まじい慟哭とともに巨大な虹がかかっていた。

天に向かって吠え続けるプロギーが、両目から大量の涙を流し続けているのだ。

「…泣き方まで豪快ね……!!!」

「まるで滝だぜ……!!!」

「おい見ろ!! 後ろっ、虹っ!!!」

「クエエ……!!!」

「耳が……!!!」

「わかるぜプロギージジョオ!!!」

「さすがにこのスケールの差は……!!!」

「うんざりしてくるね……!!!」

何から何までスケールの違う巨人の悲劇に、ある者は呆れ、ある者は驚愕し、ある者は同情する。

しかしそんな感情は、次の瞬間あっという間に吹き飛ばされた。

死んだと思われていたドリーが、むくりと体を起こしたのだ。

「気絶していたようだ……」

「……ドリー、お前……なぜ……!!!?」

目が飛び出さんばかりに驚愕したプロギーは、傷口を抑えるドリーを凝視して言葉を失くす。

ドリーは苦笑しながら、傍らに置かれた自分たちの武器に目を向けた。

「おそらく……………武器のせいだ…」

「武器……………!! そうか!!」

告げられた言葉に、涙をぬぐっていたウソップはハッと気づく。

ドリーとブロギーの武器は、刃こぼれだらけでひどい有様になっている。おそらく全力で振るい続けていれば、近いうちにほつきりと折れていただろう。

「100年続いた巨人達の殺し合いにや……………さすがのエルバフの武器もつき合いきれなかったってわけか…」

「途方もねエ……………豪快な奇跡だ」

「おいブロギー、抱きつくな。傷にひびく…」

「よくぞ生きていてくれた親友よつ!!! ガババババ!!!」

「ゲギャギャギャギャ…」

思わぬ偶然に救われたことで、ウソップたちも安堵のため息をつき、ドリーとブロギーも涙を浮かべて歓喜する。

ゾロに至っては、その偶然に苦笑いを浮かべていた。

「奇跡なもんか……………当然だ……………100年打ち合ってまだ原型をとどめてるあの武器の方がどうかしてるぜ。その持ち主たちもな…」

「今日は何と素晴らしい日だ!!! エルバフの神に感謝する!!!」

「オウ、プロギーよ。このおれをブツた斬って気絶させたことが、そんなに嬉しいか」
「バカ野郎、そんなこと言ってるんじゃないエ!!」

「痛っ、傷はさわるな! ゲギャギャギャ……………!!」

「ガババババババ…」

よほどうれしかったのか、それとも紛らわしいことをされたからかバシツとプロギーが肩を叩くと、また笑い声上がる。

しばらく穏やかな時間が流れていたが、その内妙な雰囲気になり始めた。

「やるのか貴様っ!!」

「オオ、叩き潰してくれるっ!!!」

「何でまたケンカしてるのよっ!!!」

突然立ち上がって睨み合う二人にナミは突っ込み、ルフィは笑い転げるのだった。

第67話 “エルバフの槍”

しばらくして、ようやく落ち着いたのかドリーとプロギーは片方の家の壁に寄りかかってくつろぐ。

プロギーの傷もそうだが、ドリーに至つては胃袋がまだ傷ついたままなのだ。絶対安静にする必要があつた。

「お前達には助けられてしまった。何か礼をしたいが……」

「ゲギヤギヤギヤギヤ!! 我ら、己の首にかかった賞金のことなどすっかり忘れておつたわ!!」

「だけどあいつらがこの島へ来たのは、元はといえば私が……いたい!」

「そういうことは言わないの!!」

暗い表情でうつむきかけたビビに、ナミが叱るように耳を引っ張る。

ルフィたちに至つては、どこからか持ってきた——ミス・ゴールデンウィークから奪ったせんべいをバリバリ食つてくつろいでいた。

「そうだぞビビ。なにをしょげてんだ?」

「せんべい食うか?」

「あんたら、それどつからもつてきたの？ …だれかあんたを恨んでる？」

ナミがそう尋ねるが、誰もビビに怒りを抱いている者はいない。

すべては偶然によるもの。誰かを恨むなど見当違いもいとこだ、といつてくれるナミに、ビビは救われる気がした。

「よし!! とりあえずせんべいパーティーだ」

「おうナミ!! もつと脱げ!!」

「いやいやそれは…ヒイ!!」

「うははははは!! ウソツプお前、目から火イ出たぞ!!」

「ばか…」

「もつかいやれ、もつかい!!」

あつという間に宴のような騒がしきになる一味に、ビビはふつと微笑みを浮かべる。

すると、ナミたちから記録ログボックス指針について聞いたゾロが険しい表情で呟いた。

「しかし…次の島へのログが一年つてのは深刻だな」

「そうよ! 笑いごとじゃないの、本当に」

「それを何とかしてくれよ、おっさん達」

「無茶なことを…」

「バカいえ。ログばかりは我らにもどうすることもできん」

巨人族を何か勘違いしているルフィに、ドリーたちも困った顔をする。

敵は全て片付けたというのに、このままでは丸々一年を無駄にして、全てが手遅れになつてしまうかもしれない。

そんな時、場の空気を読まない陽気な声が聞こえてきた。

「つは——————つ!!! ナミさ~~~~ん!! ビビちゃ~~~~ん!!! あとオマケど

も!! 無事だったんだね~~~~~♡♡ よかつた~~~~~♡♡」

「おひさ~」

いつも通りのテンションで登場したサンジとエレノアに、一味から「あ」という声が上がる。

ずいぶん長い間顔を見ていなかったために、ちよつと存在を忘れかけていたように思えた。

「よー、サンジ!! エレノア!!」

「あいつら助けにも来ねエで今ごろ現れやがった」

「あんたたちだけで十分だと思つたから、今回は裏方に回つただけだよ」

怒り心頭といった様子で詰め寄るウソツプを押し付け、エレノアはやれやれと肩をすくめる。

敵全員を任せたことに關しては確かに申し訳なく思つてはいるが、エレノアにしてみ

れば自分が加われれば過剰な戦力の認識があった。

彼らの成長を促すためには、ある程度の試練は必要だと思っただのだ。

「だいたいこつちはこつちで超重要な案件を終えてきたところで……」

「ンなんじゃこりやア!! お前がMr. 3か!!」

「ねエっ!! あんた、なんでMr. 3のことを?」

「うほうっ♡ ナミさん、君はいつもなんて刺激的なんだっ♡」

「サンジくん……」

自分の策を伝えようと口を開いたエレノアだったが、ドリーとブロギーを見て目を剥いたり、ナミたちのあられもない姿に興奮したりと忙しいサンジについて苛立ちが募る。

エレノアは無表情でサンジに詰め寄り、光を失った眼でじつと彼の眼を覗き込んだ。

「ちよつと黙れ」

「……はい」

その恐ろしさたるや、女性はみんな大好きなサンジが黙り込むほどで、それを目の当たりにしたルフィたちやドリーたちも思わず後ずさるほどであった。

そしてようやく全員が落ち着いた頃、エレノアは先ほどまで自分が経験したことを説明し、ビビたちを戦慄させた。

「……じゃあ、さっつきまで……」

「……………Mr. Oと話を…?」

「リトルガーデンについた時点で、連中が潜んでいたことは聞こえてたからね。戦力がわからない以上、こっちから攻め込むのは愚策だと判断したんだ」

クロコダイルが自分に最も強く敵意を向けていることを除き、得意げに語ったエレノアだが、仲間たちはそんな彼女に驚愕の眼差しを送っている。

敵のボスを堂々と騙すような胆力は、流石としか言いようがなかった。

「まア、あんたたちならやってくれると思ってたから、それなら後々動きやすいように手をうつておこうつてね」

「エレノアちゃんにまさかあんな特技があったなんてね」

「じゃあ私達はもう死んだことになってるの!!」

「うん。そう言つといた」

頷くとウソツツやナミはあからさまに安堵した様子でため息をついた。

純粹な驚嘆を向ける一同だったが、ビビはエレノアに心配そうな視線を向けていた。単独で危険な策を行った彼女が何を意図しているか、もしかしたら察したのかもしれない。

「これでせつかく追手は来ねエつてのに肝心のおれ達が、ここを動けねエなんて!!」

「そこなんだよねー…」

「動けぬエ？ まだ何かこの島に用があんのか？　せつかくこういうモンを手に入れたんだが……」

実はエレノアも頭を悩ませていた問題に、サンジは不思議そうな表情で懐から砂時計型の指針を取り出した。

あまりにもあつさり出された希望の種に、全員からぎよつとした視線が送られた。

「……………え!!　なに?」

「アラバスタへの『永久指針』エターナルポース　だア!!!」

「やった——　　つ　　!!!」

「出航できるぞオっ!!!」

呆然となるサンジを放置し、一味は喜びのあまり声を上げて騒ぎ始めた。

感激のあまりビビは、人目もはばからずサンジに抱きついてしまうほどだ。

「そーかそーか、アンラツキーズってのはあのハゲタカとラツコで……あいつらが運んできたのか……!!　お手柄だよサンジくん……!!」

「ありがとうサンジさん!!　一時はどうなることかと……!!!」

「いや……いや……どくくいたしまし……テへ♡　そんなに喜んでもらえるとは……」

天使に褒められ、美女に抱き着かれ、目をハートにするサンジ。

だが、エレノアの眼はすぐに光を消し、じろりと恐ろしい眼差しでサンジを見据えた。

「…でももっと早く言え。何事もまず報告・連絡・相談」
「……………ごめんなさい」

情報不足は一味の存続にもかかわる。

凄まじい殺気に、真正面から見てしまったサンジは当然、背中を向けているビビも青い顔で震える羽目になった。

「よーし、みんなせんべいパーティーだっ!!」

「おい…マズイゼルファイ!! 残り3枚じゃせんべいパーティーができねエ!!」

「そんなことやってる場合じゃないでしょ、行くわよ船長!!」
グズグズやってるヒマはないの!!」

喜びのあまりまた宴を敢行しようとしたルフィだが、すぐにナミが待ったをかける。島を脱出する術が見つかった以上、長居は無用だ。

「じゃあ丸いおっさんに巨人のおっさん!! おれ達行くよっ!!」

「そうか…まア…急ぎの様子だ」

「残念だが止めやしねエ…!! 国が無事だといいな」

「ええ、ありがとう」

過ぎた時間はそう長くない、しかし十分に濃い時間を過ごした巨人たちは、心優しい王女に励ましの言葉を送る。

見た目は怖いがお人好しな、この世で最も大きな海賊達に、ルフィたちも感謝の言葉を述べる。

「じゃあなー、もう死ぬなよー」

「師匠っ!! おれはいつか!! エルバフへ行くぜ!!」

すっかり巨人に憧れを抱いたウソップは、何度も何度も振り返りながらドリーとブローギーに別れを告げる。

やがてその騒がしさが遠く聞こえなくなったところ、二人の巨人は決意の目を海に向けた。

「……………友の船出だ」

「ああ…放つてはおけん。東の海には魔物がいる」

「ドリーよ貴様、傷は…?」

「なに…死にはすまい」

ゆつくりと立ち上がりながら、巨人たちは武器を手に歩き出す。

刃こぼれし、錆び、いつ折れてもおかしくない長年の相棒たちを手に、恩人たちが行く先を見やった。

「この戦^{オノ}斧もその剣も寿命だな…」

「未練でも?」

「未練ならあるさ。100年以上、共に戦った戦斧だ……だが、あいつらのためならば惜しくはない!!!」

「決まりだな」

そう言つて巨人たちは互いに、不敵な笑みをたたえた。

「よく見ろよ、おれのトカゲの勝ちだ!!!」

「てめエの目はフシ穴か、おれのサイの方がでけエ!!!」

メリー号に戻つたゾロとサンジはさっそく、島についた時から話していた狩り勝負の結果を競い合う。

といつても両者とも十分大きな獲物を狩つていて、一目には判断のしようがなかったが。

「いいじゃねエか。どっちもうまそうだ」

「てめエは黙つてろ!!!」

肉が食えればそれでいい、というかいがみ合う理由がないルフィにツツコミを入れてみると、ナミが呆れた目を向けて呟いた。

「あんたらしいつまでやってんの……どうせ全部は載らないんだから必要な分だけ切り出して、船出すわよ!!!」

「はい、ナミさん♡」

「なアおいウソツプ。どう見てもおれの勝ちだ」

「んん？ 興味ねエよ」

「引き分けじゃダメなの？」

「勝負に引き分けはねエっ!! おいエドにアル、手っ取り早く量ったりできねエのか!!」

「面倒くせエからいやだ」

いまだ言い合いを続ける二人を放置し、ウソツプとエドワードはさつさと出港準備を進める。

錨を上げ、帆を張ると、メリー号は再び海に向かって前進を開始した。

「このまままっすぐ進めば、島の東へ出られるんだって」

「おい、もつと肉載せられんじやないか？」

「ばか、無理だ。これ以上は保存しきれねエ」

「あんだ船沈める気？」

船長のバカな発言に肩をすくめ、一味は海へと進み出る。

しばらくすると、海に繋がる河の兩岸に立つ巨大な二つの人影に気が付いた。

「お!! あれおっさん達だ」

「見送りに来てくれたんだな」

最後まで気のいい奴らだとルフィとウソップは笑みを浮かべるが、やがて二人の醸し出す雰囲気に違和感を覚える。

彼らはまるで、何かを待っているようだった。とてつもなく大きな何かを。

「この島に来たチビ人間達が……」

「次の島へ辿り着けぬ最大の理由がこの先にある」

「お前らは決死で我らの誇りを守ってくれた」

「ならば我らとていかなる敵があろうとも」

海の方こうを見据え、ドリーとブロギーはルフィたちを送り出す。

受けた恩を、その身で返すために。

「友の海賊旗（旗）は決して折らせぬ……!!!」

「我らを信じてまっすぐ進め!!! たとえ何が起ころうともまっすぐに!!!」

二人の巨人たちの発する闘気に、誰もがごくりと息をのむ。

何かの冗談を言っている気配ではない、ルフィたちの行く先に待つ何かを、力強く睨みつけているようであった。

「……………わかった!!! まっすぐに進むっ!!!」

「お別れだ」

「いつかまた会おう」

「必ず」

汗を流しながら、ルフィは巨人達に頷く。

何が待っているかなど分からない。だが、彼らの言葉には信じて任せられるだけの重みがあった。

「!! 何かいる!!!」

そしてナミは気づく。メリー号の進む海面が突如盛り上がり、何か巨大な存在が両の目を光らせるのを。

徐々に姿を現していくそれに、ドリーとブロギーは武器を持ち上げながらにやりと口元を歪めた。

「出たか、『島食い』」

「道は開けてもらうぞ、エルバフの名にかけて!!!」

その直後、海の底から現れたそれは大きく口を開けた。

一つ一つがメリー号よりも大きい歯が並んだ、飛び出た大きな目が特徴的な赤い魚。小さな鉢で飼われるようなサイズが一般的なはずの、島よりも巨大な怪物が、姿を現したのだ。

「うわあ!!!」

「なんか出た~~~~っ!!!」

「海王類かア!!!」

「し……島食い!!!」

これまで見てきた巨大生物たちに引けを取らない怪物の登場に、ルフィたちは突然のことので右往左往する。

エレノアに至ってはその種を知っているのか、余裕を保っていた表情を引きつらせていた。

「舵きつて!! 急いで!! 食べられちゃう!!!」

「なんだ、こいつは……巨大な……!! 金魚か!! ん? 巨大金魚……!! どっかで聞いたよ
うな……!!!」

呆然と巨大魚を凝視していたウソップは、自分が呟いた言葉にハツと目を見開く。

いつだったか、そんな話を聞いたような、それとも自分で話していたような。しかし思
い出している暇は、今の彼にはなかった。

「グエーツ!! グエーツ!!」

「ウソップ、早く」

「だ……だめだ!!!」

カールが走り回る中、ナミの必死の指示を、ウソップは仁王立ちして拒否する。

震えながら、その場から動こうとしない彼の眼には、バロツクワークスに立ち向かっ

た時の覚悟が現れていた。

「まっすぐ進む!!! そ…そうだろ、ルフィ?」

「うん、もちろん」

「バカ言わないで!!! 今回はラブーンの時とは違うのよ!!!」

「わかってるよ騒ぐなよ。ほら、最後のせんべいやるから」

「いらぬわよ!!! そんなことより船を動かさなきや私達は」

「ナミ」

信じられない事ばかり口にする男たちに呆れ、他の者に頼もうとしたナミだったが、それをゾロにたしなめられる。

彼はいつも通りのポジションで欄干に背を預け、気だるげにくつろいでいた。

「諦めろ……」

「う…!!!」

ナミは涙を流し、ルフィに渡された残りのせんべいをかじる。

なぜだろうか、硬いはずのせんべいが柔らかい上に普通よりしよっぱく感じられるのは。

「ルフィ!!! 巨人達あいつらは信頼できるんだろ!!!」

「うん」

「あたり前だ！」

「正気!!? 本当にあの怪物につつこんで行くの!!?」

「だめ…もう間に合わないっ!!!」

「わああああもうだめだああああ!!!」

悲鳴を上げる一味を乗せたメリー号は、まっすぐに進み続ける。

自ら巨大魚の口の中に呑み込まれていくようにも見える海賊船を見ながら、ドリーとブローギーは小さく笑い続けていた。

「育ちも育ったり、島食い」、この怪物金魚め」

「驚くのはこいつのデカさだけじゃない…その辺の島を食い潰して出す、こいつのフンのデカさと長さよ」

「……確か…『何もない島』という名の巨大なフン…」

「ゲギャギャギャギャギャ…昔、大陸と間違えて上陸しちゃったことを覚えている…!!」

それぞれが武器を持ち上げ、なつかしい日々を噛みしめながら構える。

いつか見た光景、過ぎ去った日々、毎日の決闘で忘れかけていた黄金の日々が、今になつて思い出される。その理由は、きっと彼らのせいだ。

「懐かしい冒険の日よ」

「奴らを見ていると、どうも昔を思い出す…!!」

武器を掲げたドリーとブロギーの傷口から、軽く血が噴き出す。筋肉を限界にまで膨張させ、ドクンと血流を勢いよく巡らせる。放たれるのは、彼らが若き海賊達に贈る手向けの業だ。

「我らに突き通せぬものは、血に染まる蛇」のみよ

「エルバフに伝わる巨人族最強の「槍」を見よ…!!」

巨人達が見据える先で、メリー号の姿が金魚の口の中に消える。

しかし周囲が真つ暗になっても、ウソップはがたがた増えながらも疑わない。自分が憧れた巨人達の言葉を、信じていた。

「まつすぐ…まつすぐ…!!」

「何言ってるの、もう食べられちゃったわよ!!」

「まつすぐ…!!」

「まつすぐだア!!」

巨大魚の体の奥の奥へと進んでいく中、ルフィとエドワードも力強く吠える。

そして次の瞬間、彼らを眩しい光が包み込んだ。

「「覇国」…!!!」

暗闇が、一気に晴れ渡る。

ルフィたちを呑み込んだ巨大魚の体に大きな穴が開き、メリー号を傷つけることなく外の世界に開放する。

それを行ったのは、凄まじき威力を誇り、海をも切り裂く飛ぶ斬撃を放つてみた、巨人達だった。

「う——っほ——っ!!! 飛び出た——っ!!!」

「ふり返るなよ!! いくぞ、まっすぐ——っ!!!」

巨大魚の中から脱出し、メリー号は空を舞う。

キラキラと海の飛沫があたりを飾り、陽光を照らすその光景は、途方もないほどに雄大で偉大だった。

「でけエ……………!!! なんてでっけエんだ!!!」

「海ごと…斬った…これが…エルバフの…うう…戦士の力…!!! すげエ!!!」

人間の常識などで測れるはずもない、あまりのスケールの大きさに、ルフィはゾクゾクと身体を震わせ、ウソツプは感動のあまり滂沱の涙を流す。

砕けた武器を掲げ、世界で最も誇り高き海賊たちは、若き後輩たちを豪快に笑いながら送り出した。

「さア、行けエ!!!」

第10章 冬に咲いた桜

第68話 // 悲劇は突然に //

巨人達リトルガールデンの庭の島を抜け、一行は砂の王国アラバスタへ。

思いもよらない出逢いを果たしたウソップは、いまだ興奮冷めやらない様子でルフィと騒いでいた。

「みんな!! おれはな!! いつか絶対に!! エルバフへ!! 戦士の村へ行くぞ!!!」

「よしウソップ!! 必ず行こう!! いつか巨人達の故郷へ!!」

「エ〜〜ル〜〜バフバフ〜♪ エ〜〜ル〜〜バフバフ〜♪ みんな〜でかいぞ♪ 巨人
だし〜」

「元気ね、あいつら…:…なんだか私さっきので、どつと疲れちゃった…」

「指針見てるよ。ゆつくり休んでな」

「うん、ありがと…」

肩を組んで歌っているルフィたちに呆れた視線を向け、ナミはエレノアに記録指針を預けて欄干にもたれかかる。

命の危機を味わったこともあり、相当疲労がたまっているようだ。

「これでやつと…アラバスタへ帰れるわね」

ナミがビビに微笑むと、王女は同意するように小さく笑みを浮かべる。

偶然が重なり、思っていたよりも早く先へ進む道筋が見えた。あとはただ、指針の示す先へ急ぐだけだ。

「ま、もつともアラバスタへの航海が無事に済めばの話だけだ」

「ええ…私は、きつと帰らなきゃ…だつて今、国を救う方法は…」

答えかけたビビの表情が、悲痛に歪む。

彼女の脳裏に浮かぶのは、命を賭してビビを送り出した護衛隊長イガラムの言葉。

何があろうとも、たった一人になつてもアラバスタへ戻り、真実を伝えること。それが唯一、国を救う方法なのだ。

「必ず生きて、アラバスタへ……!!!」

「そう力む事アねエよ、ビビちゃん。おれがいる!!! 本日のリラックスおやつ、プチフルなどいかがでしょう。お飲み物はコーヒー、紅茶どちらでも…」

「サンジさん…」

思わず拳を握りしめるビビの緊張をほぐすように、サンジが用意した茶菓子を差し出す。いつも通りの気安さを見せるサンジに、ビビは笑みを浮かべてそれを受け取った。

が、差し出された茶菓子を至近距離から見つめてくる男子たちに、ビビは困り顔で固

まった。

「んまほー」

「んまほー」

「んまほー」

「おめエらの分はキツチンだ」

「「うおおおつ!!」」

勢いよく駆け出していくルフィ、ウソップ、エドワードに、エレノアやアルフォンスが思わずため息をつく。

決まった方角へ舵をとり、各々が思い思いに時間を過ごしていると、その瞬間は訪れた。

「エレノア……ごめん、私ちよつと……部屋で……」

「まア……ろうが体に入っちゃったって言ってたしね。体調がすぐれないなら………
!!」

さつきからぐったりしたままだったナミに言われ、布団でも用意してやるかと立ち上がったエレノアは、続いて聞こえたドサツというに大きく目を見開いた。

「みんな来て!!! 大変っ!!!」

「ナミ!!? しっかりして、ナミ!!!」

すぐさまビビと一緒に駆け寄り、倒れ込んだナミを抱き起こす。声を聞いた仲間達が何事かと集まってきて、血相を変えるエレノアとビビの顔を覗き込んだ。

「なんだ、どうしたビビ!! エレノア!!」

「ナミさんが……………!!! ひどい熱を……………!!!」

エレノアの腕の中に抱かれるナミ。

その顔は真っ赤に染まり、異常なほどに荒い呼吸を繰り返していた。

「ナビさん死ぬのがなあ!!!? なアビビちゃん!!! エレノアちゃん!!!」

船内のベッドに寝かされたナミを見て、サンジがボロボロ涙を流しながら問う。

倒れたナミを診察したビビは、険しい表情で首を横に振った。

「おそらく——気候のせい…。偉大なる航路^{グランドライン}に入った船乗りが必ずぶつかるとい

壁の一つが、異常気候による発病……………!!! どこかの海で名を上げたどんなに屈強な海賊

でも、これによつて突然死亡するなんてことはザラにある話」

乏しいビビの知識では、ナミの症状に該当する病気はわからず、その対処法もとれずに唇を噛む。

ならば、と同じ船に乗るエレノアたちの方に目を向けた。

「ちよつとした症状でも油断が死を招く。この船に少しでも医学をかじっている人はいないの?」

「一応医学は一通り……でもしよせんは付け焼刃だし、役には立てそうもないよ」

「同じく。……どつちかつつーとおれら外科よりだし」

期待を寄せられた錬金術師たちだが、力不足だと悔し気にうつむいてしまう。

彼らを除けば一番医学に精通しているのはナミで、その本人がこの状態ではもはやどうしようもなかった。

「でも肉食えば治るよ!! 病気は!! なア、サンジ!!」

「そりや基本的な病人食は作るつもりだがよ………あくまで『看護』の領域だよ。それで治るとは限らねエ」

病院食にも種類がある。胃腸が弱っている相手に脂肪分を多く含んだ食事を与えれば悪化してしまうように、症状にあつた食事というものが必要になる。

さらに言えば、女性陣には必ず新鮮な食材で、その他には腐りかけの素材で食事を作っているのだと豪語し、他の面々を呆れさせながらサンジは無念そうに口を閉ざした。

「病気ってそんなにつらいのか?」

「いや、それはかかったことねエし」

「あなた達一体何者なの!!!」

「単なるバカだよ」

バカは風邪をひかないを地で行く彼らを同じと思うな、とエレノアは結構辛辣なことを言う。

一方でアルフォンスは苦しむナミを、そしてそのそばで眉間にしわを寄せるエドワードを見て、痛々し気に呟いた。

「つらいに決まってるよ……!!! 40度の高熱なんてそうそう出るもんじゃない……!! もしかしたら命にかかわる病気かもしれない……!!!」

「「ぎやあああああ!!!」」

アルフォンスの言葉により、いよいよ船内はパニックに陥る。

ここまですら旅してきた大切な仲間で、重要な航海士の女性。彼女に降りかかった死の未来に、誰もが冷静さを失ってしまった。

「ナミは死ぬのかア!!!」

「ナミさん死らないでらバイベ——!!!」

「ああああああつ!!!」

「クエ——ツ!!!」

「うろたえんな!!! うるせエつ!!!」

ギャーギャーと騒ぎまくって役に立たない彼らに、エドワードが代表して怒鳴りつける。

ひとまず黙ったルフィは、焦燥の形相のまま次の方針を決断した。

「医者を探さず、ナミを助けてもらおう!!」

「わかったからっ!! 落ち着いて!!! 病体にひびくわっ!!!」

「……………だめよ」

だが、進路の変更に動き出そうとした彼らを止めたのは、ベッドで寝ていなければならないはずのナミだった。

ナミはむくりと起き上がり、仲間達にしんどそうな目を向けた。

「え……?!!」

「お、おいナミ?!」

「お——っ、治った——っ!!!」

「治るかつつ!!!」

呆れたことを言いはしゃぐルフィの頭をウソップがはたく。

戸惑う仲間達をよそに、ナミは心配そうな表情のエレノアに焦点のズレた視線を向けた。

「エレノア……私のデスクの引き出しの……」

「……わかった」

ナミの意図を悟ったエレノアは、指示通りに引き出しを開け、中から丸められた新聞を取り出す。

それを受け取ったビビは訝しげに記事を読み、見る見るうちに顔色を真っ青に染め上げていった。

「そんな……」

「おい、何だ。どうした」

「アラバスタのことか?! ビビちゃん!!」

「そんなバカな……!!!」

新聞に書かれていたのは、『国王軍』の兵士30万人が『反乱軍』に寝返ったというものだった。

もともとは『国王軍』60万、『反乱軍』40万の鎮圧戦だったはずだった。これにより、形勢は一気に逆転……いや、補給物資の点などを考えればほぼ互角の泥沼の戦いとなることだろう。

「……これでアラバスタの暴動は、いよいよ本格化するわ……」

「3日前の新聞なんだよ、それ……ごめん。ビビに見せたら不安にさせると思ってた」

「……わかった? ルフィ」

「……………」 大変そうな印象をうけた」

「そういうことよ。思った以上に伝わってよかったわ」

最も能天気なルフィがそんな印象をうけるほど緊迫した状況なのだ、船員たちは息を呑む。

しかしルフィは、いまだにフラフラの状態のナミをじつと見つめた。

「でも、お前医者に診てもらわねえと…」

「平気。その体温計壊れてんのね…40度なんて人の体温じゃないもん。きつと日射病かなんかよ。医者になんてかかんなくても勝手に治るわ…………とにかく今は予定通り…………」

「…ちよつと待っててね」

明らかに無理をしようとしているナミに一声かけ、エレノアが船室の外へ出る。

ナミの心配をするほかの仲間に代わり、船の進行方向を確認していたゾロのもとへ行くと、エレノアの表情はやや険しくなった。

「ゾロくん…君今まで何見てたのさ？ まるで見当違いの方角向いてんじゃない」

「何って…船は、まっすぐ進んでたぞ」

「うん、そうだね。直角にまっすぐだったね。でも目指してんのはこの指針の先なんだよ！！」

「そんなもん見なくてもあの一番でかい雲を目指して…」

「……………もういいよ。まったく…」

これでは永久指針エターナルポースがあつても永久に辿りつけやしない、とエレノアは深くため息をつく。

するとそこへ、ふらつきながら波が外へ出て、メリー号の進行方向をじつと見つめだした。

「！ ナミ…」

「空気が……………変わった…」

「風も近づいてきてる……………このまま向かうのはまずいね」

意味不明な発言をこぼすナミに、エレノアも奇妙な一言を残して同意する。

それを聞いていたゾロは訝し気に二人を見つめ、彼女たちと同じ方向に目をやった。

「空気？ 風？ ずっと変わらねエ晴天だぞ」

「いいから…みんなを呼んで」

「おい、てめエら出て来い!!! 仕事だ!!!」

「南にいったん舵をとるよ!! シートについて左舷から風受けて!!」

「ういつ」

意識がもうろうとしているとはいえ、凄まじき航海術の才能を有するナミの言葉は信

用に値する。

すぐさま従ったゾロとエレノアが、船室にいるルフィたちに指示を放った。

「ナミ、あとのことは私達に任せて…」

「平気だつて言つてるでしょ」

「でも…」

「いいから早く船を動かしてっ!!」

無理して役目を果たそうとするナミに、エレノアは言い返す気にもなれずに肩をすくめた。

「……まったく、ごうじよっぱりめ…」

いつ倒れてもおかしくないのに、ビビのことを思い耐え続けているナミ。

ならば本人の好きにさせてやろう、とエレノアが説得をあきらめた時、ずっと船室で悩んでいたらしいビビが一味の前に顔を出した。

「みんなにお願いがあるの」

真剣な表情で口を開いたビビに、ルフィたちは一度手を止めて視線を集める。

ビビはわずかに迷いを残しながら、先ほど決断した想いをルフィたちに打ち明けた。

「船にのせてもらつておいて…こんなこと言うのも何だけど、今、私の国は大変な事態に陥つていて、とにかく先を急ぎたい。一刻の猶予も許されない!! だから、これからこ

の船を「最高速度」でアラバスタ王国へ進めてほしいの!!」

ビビの決意に、ナミはほっとしたように笑みを浮かべ、反対にエレノアはじつと確かめるようにビビを見つめる。

「……………当然よ! 約束したじゃない!!」

「…だったら、すぐに医者のある島を探しましょう」

しかし続いてビビが口にした言葉に、全員が目を見開き、続いてにやりと笑みを浮かべる。

それはナミの意図とはズレたもので、仲間達が求めていた言葉だったからだ。

「一刻も早くナミさんの病気を治して、そしてアラバスタへ!! それが、この船の『最高速度』でしょう!!!」

「そお——さっ!! それ以上スピードは出ねエ!!」

「いいののか? お前は女王として国民100万人の心配をすべきだろ」

「そうよ!! だから早くナミさんの病気を治さなきゃ」

「よく言った、ビビちゃん!!! ホレなおしたぞおれア!!!」

「いい度胸だ…」

「どのみち、ナミがいなかったらこの一味は全滅しそうだしな!」

「さけては通れない道ってやつだね」

ルフィたちは一斉に歓声を上げ、急いで船の操舵作業に入る。アラバスタへ一刻も早く向かいたい気持ちを押し殺し、仲間のために苦渋の決断をしたビビを誰もが温かく迎えた。

エレノアもまた、ほっと安堵したように微笑み、ビビを見つめた。

「そう言ってくれるとわかってたよ」

「エレノアさん……?」

エレノアはフードを外し、虎の耳をあらわにして仁王立ちする。

眉間にしわを寄せ、エレノアは目を閉じるとじつとその場で全神経を聴覚に集中させ続ける。

仲間達が気付いて振り向く中、やがてエレノアは目を開き、ある方向を指さした。

「このまま南へ……約3日。島の『音』が聞こえる」

確証があるわけではない、しかし戯言だとは断定できない奇妙な説得力を持つエレノアの言葉に、ルフィたちはすぐさま従った。

エレノアはにやりと不敵な笑みを浮かべ、ナミを安心させるように小さな体で抱き寄せた。

「安心しなよ、ナミ……ゆっくり休みな」

「悪い……ビビ……エレノア………やっぱ私……ちよつとやばいみたい………」

ナミはそれだけ口にする、エレノアの腕の中にぐつたりと全体重を預けて意識を手放してしまう。

慌ててビビが肩を貸し、船室に戻ろうとした時だった。

「オオ!! なんだありゃああ!!」

メリー号を方向転換させていたウソツプが、後方を指さして声を上げた。

つられた他の者たちが振り向くと、目に入った光景に大きく目を見開くこととなった。

黒々とした巨大な竜巻が、メリー号の真後ろに大きくそびえたっている、悪夢のような光景に。

「あ…あれは『サイクロン』!!?」

「でけ——つ!!」

雷をはらみ、ごうごうと渦を巻く暴風の檻を凝視し、ウソツプたちが悲鳴を上げる。

ビビもまたその光景に目を奪われ、ある事実に気づいてハッと我に返った。

「…ちよ…ちよつと待って、あの方角は…」

「ざつきまでこの船が向かってた方角だ…」

「あのまますすぐ進んでたら直撃だったぞ!!」

「危ねエッ!! ギリギリセーフだなこりゃあ!!」

危機的状況を未然に回避したことで、船員たちは胸をなでおろす。

だがビビは、信じられないといった様子で自分にもたれかかる女性と、伝説の天使の少女を凝視していた。

(すごい……「偉大なる航路」^{グランドライン}のサイクロンは前兆のない風だと言われているのに……!!)

あのサイクロンを回避したのは、ナミとエレノアの一言があったからこそ。

ただ知識や経験が豊富なわけではない。まるで未来を見たかのように、凶事を回避させた二人の女性を、ビビはありえないものを見るように感じていた。

(昔、聞いたことがある……『天族』の乗った船は沈まない』という船乗りたちの語る伝説……もし今の力が、あの伝説のもととなった力なんだとしたら……!!)

「まるで天族が二人いるみたい……」

一見、華奢な女性と幼い少女にしか見えない二人。

しかしその身には、言葉では言い表せないぐらいのすごい能力が宿っているのだと、ビビは胸の内の興奮を醒ますことができずにいた。

そうとは知らず、ルフイはメリー号の向かう先を指さし、大きく声を張り上げた。

「よっしや、それじゃ急ごうか!!」

「このまま南へ!! 医者探しに行くぞ!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

仲間の窮地を救うため、一致団結して咆哮を上げる。

羊の船首が向かう先は、いまだ果て無き海原が続いていた。

第69話 “雪空の襲撃”

——しばし船はアラバスタを指す指針を無視して医者探し——

そしてちようど一日が過ぎたころ——

「ビビちゃんエレノアちゃんどうしよう、ナミさんの熱が引かねエよオ!!」

「サンジさん、カルー!! 暴れないでつたら!!」

ベッドの上で荒い呼吸を繰り返すナミを見て、サンジが騒ぎカルーが走り回る。

ビビが注意しても彼は落ち着かず、看病しているエドワードたちはぴくぴくと頬を引きつらせた。

「さすがにこの熱は異常だよ……まず間違いなく、体調不良の発熱じゃなくて未知の病原体による感染症だ」

「こんなちゃんまい設備じゃ焼け石に水だぜ。船の操舵は姉弟子に任せてるが、急いだほうがいいな……」

もつと速い足が欲しいが、メリー号は小さな規模の船でしかなく、どうしても思うほどの速度は得られない。漕げば多少早くはなるが、数日も漕ぎ続けられるほど余裕はなかった。

そんな時だった。メリー号が突如、大きな揺れに襲われたのは。

「なっ…何だア!!」

「何なの、この揺れはっ!!!」

グラグラと傾く船内で、すぐさまサンジがベッドを足で支えてナミを揺れから守る。操舵室にいたエレノアは、方向をずらさないようにしながらきつと甲板の方を睨みつけた。

「しっかり舵とんなさいよあんた達!!!」

「ナミさんに何かあったらオロすぞ、てめエらア!!」

声を上げるエレノアとサンジだったが、どうにも外でも騒ぎが起きているようで届いていないらしい。

サンジは舌打ちすると、揺れが収まったタイミングでベッドをゆっくりと下ろした。

「ビビちゃん、エレノアちゃん、ここ頼むっ!! おい、どうした!!」

サンジが扉を破る勢いで開き、そして目の前に広がっている光景に目を見開く。

頭がスツと冷えると、サンジは懐から煙草を取り出し、火をつけてまずは一服した。

「…で? …どうしたって…?」

「襲われてんだ。今、この船」

「まあ…そんなトコじゃねエかと思ったけどな……見た感じ…」

サンジは目を細め、船の前方に停留している巨大な海賊船と、メリー号に無断で乗り込んでいる見知らぬ兵隊たちを見据える。

少しすると、防寒具で全身を包み、銃を構えた彼らの間から、一人の太った男が姿を現してきた。

「フム……これで4人か……」

カバを横した被り物をした太った男は、ナイフに突き刺した肉を食いちぎりながら麦わらの一味を睥睨する。

彼は肉を食い終えると、あろうことか持っていたナイフまでバリバリとかみ砕き飲み込み始めた。

「たった4人ということはあるめエ……。まあいい……。……とりあえず聞こう……」

「なんだあいつ。ナイフも食いやがった」

「……………!!」

「えエエ、見てるだけで痛エっ!!!」

常人ではありえない、痛々しい光景にルフィたちは顔をしかめる。

しかし太った男は微塵も痛がる様子を見せず、残った柄も腹に納めて口を開いた。

「おれ達は『ドラム王国』へ行きたいのだ。『永久指針』^{エターナルポース}もしくは『記録指針』^{ログポース}を持ってないか?!

「持つてねエし…そういう国の名を聞いたこともねエ……………」

明らかに厄介そうな敵を睨み、さっさと追り返したくてサンジは即否定する。

知っていたとしても、絶対に親切に教えたくはない相手だ。

「ほら、用済んだら帰れ、お前ら」

「はーあーそう急ぐな人生を…持つてねエならお宝とこの船をもらおう」

「なに?!!」

やっていることは奇天烈でも、やはり海賊は海賊。懐に入った獲物を食いつくそうと
している。

だが太った男は、改めて部下たちに命じる前にメリー号の端の方へと近づき、異様な
ほど口を開いて船の一部に食らいついた。

「だが…ちよつと待て。小腹が空いてどうも…」

バキバキバキツ!!とメリー号の一部が文字通り食いちぎられ、太った男に咀嚼され
る。

それを見たウソップは悲鳴を上げ、ルフィは怒りに目を燃やした。

「なんだ、あいつアア!!?」

「おれ達の船を食うな!!!」

「貴様、動くな!!! ワポル様は今お食事中だ!!!」

「うるせエ!!!」

偉そうな態度で銃を突きつける太った男の部下を張り倒し、ルフィは怒りのままに太った男の方へと向かう。

その前に、脅しにも屈さない相手に驚愕していた兵士たちが慌てて立ちはだかった。

「あの野郎やりやがった!!!」

「撃て!!!」

「初めからそうすりやよかったんだ」

「何だ、やっていいのか？」

「いや待て話せばわかりあえる!!!」

船長が真っ先に暴れ始めたことで、ゾロもサンジも喜び勇んで兵士たちに各々の武器を向ける。

いよいよ船上が騒がしくなり、どったんばったんと耳障りな音が船内にまで響き始めた時だった。

「うるさアあああああああ!!!」

バターン!!と勢いよく扉が開かれ、肩を怒らせたエレノアが叫んだ。

メリー号の上にはいた兵士たちは、太った男を除いて全員がびくつと肩を震わせ、現れた奇妙な格好の人物を凝視した。

「エ…エレノア…」

「あんたたち……人がさつきから音一つ聞き逃さないように慎重に仕事してんのにぎやーぎやーぎやーぎやー………!!!」

フードの下で光る金色の光が、異常な怒気を宿して爛々と光る。

普段以上の怒りをあらわにするエレノアにサンジやゾロが言葉を失っていると、エレノアはパンツと両手のひらを合わせ、降り注ぐ雪に触れて鋭い槍を作り出した。

「はしゃぐのもいい加減にしろオ!!!」

「「ぎやあああああ!!!」」

降り注ぐ雪の数だけ、エレノアが創造した槍が一気に襲い掛かる。

その穂先は敵である兵士たちだけではなく、味方であるルフィたちにも向けつらえていた。

「ま…待て!! 落ち着けエレノア!!!」

「おれ達はむしろ被害者だよ!!!」

自ら騒いでいたわけではなく、相手を大人しくさせるために仕方なく戦っていたのだと抗議するルフィたちだが、エレノアの怒りは止まらない。

再び手のひらを合わせ、今度は大気に干渉し始めた。

『飛ばしていくよ! ミューミュー無様に鳴きなさい!』

// バイトリ・エルジエーベト
鮮血魔嬢“!!!”

空気中の元素に干渉し、振動率を増した周囲の大気を前に、エレノアは大きく息を吸い込む。

そして、何が起こっているのかもわかっていない様子の兵士たちに向けて、ため込んだ息を声に変えて解放した。

「ああああああああ!!!」

「ぎゃああああ!!!」

「み…耳があああ!!!」

とんでもない威力の咆哮…否、歌声が兵士たちに襲い掛かり、鼓膜を破壊せんとビリビリ震動させる。

ルフィたちは巻き込まれることを恐れてすぐさま伏せると、ギラリと目を光らせるエレノアを凝視した。

「完全に理性が吹っ飛んでやがる……!!!」

これでは近づいてなだめることもできない、とゾロたちはとにかく被害を免れるために距離をとる。

一方で、うまい具合に攻撃の範囲外にいたらしい太った男が、それでも不快感に眉間にしわを寄せて横目を向けた。

「うるさい女だな…落ち着いて食事も楽しめんではないか………んん!!!?」

兵士たちが苦しむ轟音を単なる騒音としか認識していなかった男は、不意に自分の歯が不躰に掴まれたことで目を見開く。

気づかぬ間に近づいたエレノアが、男の歯を上下に掴んでこじ開けようとしていたのだ。

「な、何だ貴様!!! このおれ様に対して無礼だぞ!!!」

「クハハ…バカめ、ワポール様に敵うか!!!」

「『バクバクの実』の能力で食われちまえ!!!」

兵士たちの言葉で、ゾロたちは男の見せた異様な食事風景が能力によるものだと理解する。

その言葉どおりなら、エレノアもまた餌食になってしまうのか、と身構えかけたが、すぐさまそれは止められた。

「う…!!!」

鬱陶しい相手を噛み碎いてやろうと力を込める男だが、その目が苦痛で渗む。散々硬いものを食いつくしてきた彼の歯が、ミシミシといやな音をたて始めたからだ。

「いぎや…いぎやぎやぎやぎや!!! やつ…やえつ!! やえろ!!! やえへふへつ!!!」

「ワ…ワポール様ア!!!」

「そのうるさい口を……!!」

自分の歯に襲い掛かる激痛に、泣き叫んで悶える男に、部下である兵士たちが唾然とした様子で目を見開く。

エレノアは自分の両腕を漆黒に染めながら、怒りで燃える目を男に向けて告げた。

「今すぐに閉じろこのカバ野郎!!!」

「ぎゃああああああ!!!」

「ギャ——!!!」

「ゴギイツ!!」と聞く事も苦痛な音があたりにはびき、当の本人はおろか敵も味方もぞぞと背筋を震わせる。

虫歯でもなんでもない健康な歯が、無理矢理へし折られるというあまりにも残酷な光景に、誰もが戦慄の視線をエレノアに向けた。

「はっ…歯ぎや!!! おえひやまの歯ぎやああ!!!」

傲慢な態度を貫いていた男が、バタバタと暴れて血を流す口を押さえる。

エレノアはフンツと鼻息荒く、ガタガタと震えるルフィに顎で示した。

「ルフィ、掃除」

「イ、イエス・ママ!!!」

船長のはずのルフィが、エレノアの命令にすぐさま従い、勢いよく自らの腕を伸ばす。

自分に狙いが定められていることにも気づいていない男は、面倒くさそうにマストにもたれかかるエレノアを憎々しげに睨みつけた。

「お……おのれこによ……ひやま意気なガキめが……!!」

「やあ……ビビちゃんにオマケども。ナミさんに異常は？」

「……え……これは……!!」

「お前らはトラブルを連れ込まねエと気がすまねエのか……？」

「わー、すごいことに」

ものすごいいやな音を耳にしたビビやエドワード、アルフォンスが外に出ると、倒れ伏す兵士たちや荒らされた船上が目に入る。

それ以上に目を引いたのは、しりもちをつく太った男に向かって迫る、ルフィの二つの掌底だった。

「は」

「吹き飛べエ——つ!!!」

男がようやく気付いた直後、ルフィの放った掌底がバズーカのように炸裂する。一切の防衛もできなかつた男は、何の抵抗もなく空高く吹き飛ばされていった。

「ワポル様ア——!!?」

残された兵士たちは、遠い空の果てに消えていく自分たちの主を呆然と見上げて立ち

尽くす。

エドワードとアルフォンスも、一瞬だけ見えた太った男の顔に何やら首を傾げていた。

「……………なアおいアル？ さっきの奴どつかで見た覚えねエか？」

「うん…ボクも今そのことを考えてたところだよ」

片方の大将が吹っ飛ばされるといふ呆気ない戦闘の終結に、しばらく固まっていた兵士たちがしばらくして再起動を果たす。

最も慌てていたのは、敵方の海賊船に乗っていたアフロの男とピエロのような格好の男の二人組だった。

「おいマズイぞ!!」ワポル様が、ごぶっ飛びあそばされた!!!」

「な———んということだ、ワポル様は、おカナヅチであらせられるというのに!!!
こうなってはワポル様がお沈みあそばされる前にご救出さしあげなければお死にたてまつられちまうぜ!!!」

丁寧語やら謙譲語やらが混ざった、どう聞いても使い方がおかしい言葉で、男たちは船内に引き返す。

兵士たちもすぐさま倒れた味方を抱え、自分たちの船にとんぼ返りした。

「貴様ら憶えている!!! 必ず!!! 報復してやる!!!」

「リメンバー・アス!!!」

「憶えている——っ!!!」

「プリーズ・リメンバー・アス!!!」

最後の最後まで偉そうな態度の海賊達。

そんな彼らに、エレノアはフードの下でにやりと悪魔のような笑みを浮かべた。

「いいよオ…? こっちもちやア〜んと…………お前らの顔憶えたからな」

「!!!ぎゃあああああああ!!!」

顔がよく見えなくても感じる邪悪な気配に、謎の海賊達は悲鳴を上げて船内にひっ込む。

あつという間に、カバの船首のついた海賊船は太った男が飛んでいった方へとその姿を消していったのだった。

「……………で、あいつら何?」

見知らぬ敵がいなくなると、ようやくいつもの調子に戻ったエレノアが振り向いて尋ねる。

その変わり身の早さに、ルフィとウソップはゾクリと背筋を震わせた。

「……………おれ、絶対エレノアには逆らわねエ」

「おれも」

船長なのに情けないと嘲るなかれ。

それだけ、キレたエレノアは怖かったのだ。

「ワポルウ〜？ 聞いたことないよそんな海賊」

改めてルフイたちから、事件の一部始終を聞いたエレノアは、胡乱気な視線を返した。あらゆる海賊達についての情報を持っているエレノアでさえ、ワポルなどという名は聞き覚えがなかったようだ。

「そつか…エレノアが知らないんじゃ大したことないんだらうな」

「そんなゴミのことよりも、もうじき島が近いんだからちやんと準備してよね？」

「へいへいー」

雪かきの手が止まっているゾロに、エレノアは自らもスコップを動かしながら告げる。

その下の甲板では、アルフォンスがウソップに指示されながら錬成陣を描いていた。

「えーつと…確かこの辺のデザインは……」

陣を描き終えたアルフォンスが手で触れると、青い閃光が走って木材がうごめく。

あつという間に木材はメリー号と一体化し、元の形状を取り戻した。

「おーっ!! やっぱ便利だなア錬金術つてのは!!! おれも勉強しよつかなく」

「兄さんに任せるとどんなデザインになるかわかったもんじやないから…」
「どういう意味だコラ」

兄のセンスが一般的なものとはかなりずれていることを示唆すると、エドワードはイラつとした様子でアルフォンスに詰め寄る。

しかしすぐにエドワードは、元の見た目を取り戻した個所をじつと見下ろして呟いた。

「あんま連発はしない方がよさそうだけどな」

「ん？　なんでだ？」

「錬金術でできた物質は、どうしたって自然そのままの物質と比べると質が落ちちまうんだよ」

こんなにしっかりと直っているのに、と訝し気に振り向くウソップに、エドワードは口惜しそうにため息をついた。

「例えば木材とかは、線維が一本一本複雑に絡まってできていて、錬金術でも完全にそれを再現することはできません。見た目は完全に戻せても、中身は単なる木片の塊になっていることもあるんです」

「衝撃吸収率とか膨張率とか……鉄とかガラスならともかく、錬金術で作ったものじゃほとんど代替品にはなりきれねえんだよなア…」

「そっかー…何言ってるのかさっぱり分かんねエけどわかった」

要は今後も、直せるからといって壊しまくっていいわけではないのだ、とウソップは解釈した様子で、メリー号の他の場所の修繕に入る。

それを見ていたサンジが、おもむろに肩を震わせてコートにくるまった。

「それよかよ…ここんとこ、どうも安定して寒くねエか？」

「そうだな。こういうこともまた気まぐれなんだろうな、この海は……」

「島が近い証拠だよ。近くに『冬島』があるのさ」

「冬島？」

眉を寄せるゾロやサンジに、エレノアとビビが二人で説明する。

二人が言う事には、気象学的には『偉大なる航路』^{グランドライン}の島々は4種類に分類されるのだという。『春島』『夏島』『秋島』『冬島』、そしてそれぞれの島にはだいたい『四季』があるという。

「つまりこういうこと。『偉大なる航路』^{グランドライン}を航海するには、最低でも『夏島』の『夏』か

ら『冬島』の『冬』まで16段階の季節を克服していかなきゃならない」

「まあ、例外とか未知の気候もあるけどね」

「…なるほど…そういう島が織り重なってりや、それに挟まれた『海』は尋常な気候じゃいらねエってわけか…」

「……………そうなの。だから気候の安定は島が近いことを意味するのよ……！」

「グランドライン
偉大なる航路」

初頭の気候の乱れといい、ナミが予報したサイクロンといい、そこらの人間では御しきれないものだとか改めて痛感する一同。

その時、進路を確認するために双眼鏡を除いていたサンジが、目を見開いた。

「……………確かに、見えた……!!! 島があつたぞーっ!!!」

「う~~~~おおお!!! し——まだアああああア!!!」

やがて全員の眼にも見える距離に、島が見えたことで一味は安堵の歓声を上げる。

そびえたつ台のような変わった形の山々に純白が積み重なっているのが見える、見ただけで冬島だとわかる島だった。

「白いな!! 雪だろ! 雪島か!!」

「おイルフィ!! 言つとくがな、今度は冒険してるヒマねエんだぞ。医者を探しに寄るんだ。ナミさんを診てもらつたらさすがにでるんだぞ」

「雪はいいよな………」

「……だめ。聞いてないよ」

「……ちよつと待てよ、大丈夫か?! 雪つてことは雪の化け物とかいんじゃねエのかア?!
そもそも人がいるのかどうかが大問題だ!! まずいつ!! 島に入つてはいけない病

「が!!!」

「はいみんなー、上陸準備ー」

故郷の気候からか、見慣れない雪にテンションが爆上がりするルフイは、すでに当初の目的を忘れかけている。

同時にいつもの病気を主張し始めたウソツプ共々放置し、一味は着々と上陸準備を進めていった。

第70話 “いらぬプライド”

体突き刺さる寒気に、エレノアは全身をふるぶると振るわせる。

すっかり防寒をしているはずだが、それでも襲い掛かる冷気は抑えられなかった。

「ふ——つ、こりやすげエ!! なんだあの山は…!!!」

「ねエ兄さん…この島って」

「ああ。間違いねエな」

「こんなに雪が、しやわせだ…おれ」

「しあわせ、ね?」

「それよりルフィ。お前寒くねエのかそのカッコで」

「マイナス10℃。熊が冬眠の準備を始める温度よ」

何やら目を合わせているエドワードとアルフォンスに気づきながら、見ていりだけで寒くなる薄着のルフィにエレノアはジト目を向ける。

問われたルフィは振り向くと、改めて冷気に気づいてしばらく考え込んだ。

「え? ああ…ん? 寒ブツ!!!」

「いや遅エよ!!!」

慌てて上着を取りに行つたルフィを放置し、一行はメリー号を操舵して、島から流れる川に入る。

よく見ればそれは、陸から流れ出している雪解け水が作り出しているようだ。

「雪解け水の滝だわ……この辺に船を泊められそう」

「それで……？ 誰が行く、医者探し」

「その前に人探しだね」

「おれが行く!!」

「おれもだ!!」

「よーし、行つて来い」

「なアおい。おれの記憶が正しけりや……この島は」

ナミの病状のこともあり、いつも以上に手早く役割を決めていく。

その際エドワードが何か言おうと手をあげていたが、一味がその話を聞く事はなかった。

「そこまでだ、海賊ども」

何かに反応したエレノアが振り向いた直後、唐突に向けられた敵意に満ちた声に、全員がハツと振り向いて身構える。

一味の誰も気づかぬ間に、メリー号は陸から無数の銃口に取り囲まれていたのだ。

「おい、人がいたぞ」

「…でもヤバそうな雰囲気だ…」

どう見ても歓迎的ではない、ある意味では当たり前の反応に一味は表情を険しくさせる。

しかしそれでも過剰ともいえる敵意に一味が困惑していると、取り囲む住民たちの中で、最も大柄な一人が静かに諭すように告げた。

「速やかにここから、立ち去りたまえ」

巨大な剣を背負った男性は、他の住民たちとは異なる落ち着いた様子でルフィたちを見つめている。

その時、聞こえてきた声にエドワードが眉を寄せた。

「ん…？ この声は…」

「おれ達、医者を探しに来たんだ!!」

「病人がいるんです!!」

「そんな手にはのらねエぞ!!! ウス汚ねエ海賊め!!」

友好的ではないが、とにかくナミの治療が最優先であると一味は総出で住人達に懇願する。

だが住人達は、ルフィたちに対して端から話を聞く気がない様子で、一貫して排除す

る姿勢を崩さない。

「ここは我々の国だ!! 海賊など上陸させてたまるか!!!」

「さア、すぐに碇を上げて出てゆけ!!! さもなくばその船ごと吹き飛ばすぞ!!!」

「おーおー……ひどく嫌われてんなア……初対面だつてのに」

「これが普通の反応さ……」

わかつていたとはいえ、あからさまに拒絶されたサンジが思わずぼやくとエレノアがそれを諫める。

その態度が癪に障ったのか、住人の一人が目を吊り上げた。

「口ごたえするな!!!」

「うわっ!!!」

ドンツ!!と派手な音を立てて、住人の一人が遠慮なく発砲する。

咄嗟にエレノアが躲さなければ直撃していた弾が、メリー号の甲板に突き刺さっているのを目にし、今度はサンジが目を吊り上げた。

「撃った……!!!」

「………やりやがったな………」

もはや交渉は不可能か、と力尽くで上陸する覚悟を決めたゾロたち。

特にサンジは、エレノアを危うく傷つけられそうになったことで頭に血を昇らせてい

た。

「てめエ!!!」

「待てサンジ!! 落ち着け!!!」

ところが、陸地に向かって飛び出そうとしたサンジを、突然エドワードが押しとどめた。

小柄な彼では押し返されそうになったが、エドワードは必死にサンジを押しさえてもう一度住人達に目を向けた。

「やっぱりそうだよな……!! ドルトンさん!! おれだア!!! 撃たないでくれエ!!!」

住人達の中の、リーダー格らしき大柄な男性に向けて、エドワードは声を張り上げる。すると、自分に声をかけているのだと気付いた男性は、驚いた様子で身を乗り出した。

「……………!! まさか、エルリック・エドワードか……!!」

「なんだよ……………知り合いがいたのかよ……!!」

「……………前に上陸したのは、ちがう方角だったからな……」

態度が少しだけ変化した、ドルトンと呼ばれた男性を見て、サンジやゾロがエドワードに視線を向ける。

何故島に着いた時に気づかなかつたのだという無言の問いに、エドワードは不覚と云った様子で唇を噛んだ。

「話を聞いてくれエ!!!」　そこまでいやなら、上陸はしねエ!!!　医師を呼んでくれねエか!!!?
仲間が重病で苦しんでるんだ、助けてくれ!!」

「……だが」

一応は怒りを抑えてくれたサンジを背にし、エドワードは力の限りドルトンに懇願する。

しかしドルトンは渋る様子を見せ、代わりに住民たちが好き勝手に怒鳴りつけ始めた。

「か……海賊の言うことが信用できるか!!!」

「そうだ!!」　ドルトンさんの知り合いかどうかしらねエが、おれ達をダメすつもりかもしれねエ!!!」

「てめエら……こつちが下手に出てりや言いたいほうだい言いやがつて……!!!」

やはりこちらが海賊である以上、平和的に解決するのはムリかとあきらめかけた時だった。

エドワードが突然その場に両ひざをつき、額を甲板にぶつける勢いで頭を下げた。

「兄さん………!!」

「エド………!!!」

「……おれだつてなア、下げたくねエ頭はある。でもよ………今は下げなきやいけねエと

きだろ……!!!」

気の強い、悪く言えばプライドの高いはずの彼が、恥も外聞も捨てて土下座する姿に、一味だけでなく罵っていた住民たちも絶句する。

歯を食いしばり、屈辱に耐え続けるエドワードは、啞然とする全員の前で懇願し続けた。

「頼む……この通りだ……!!! 仲間を……!! 助けてくれ……!!!」

過ぎた時間は、それほど長くはない。

だが目的の為に船に乗せてもらい、道中では危うくサイクロンに巻き込まれるところを救われた。ならばこんな時にこそ、少しでも恩を返さなければならぬ。

そんな漢気に、麦わらの青年も行動で応えた。

「医者を呼んでください。仲間を助けてください」

二人一緒になって、船長と国家錬金術師がメリー号の上で誠意を見せる。

住人達も次第に迷いの表情を浮かべ始める中、意を決した様子でドルトンが目を細めた。

「村へ……案内しよう。ついて来たまえ。それと……すまなかつた、エドワードくん」
願いが通じたことに、一味はほつと息をつく。

エレノアは嘆息し、情けなくて格好のいい男たちを微笑まし気に見下ろした。

「…思ってたより、いい男になりやがって」

「お前、すげエな」

「ごしごし…」

ルフィは頭を下げたまま、隣のエドワードに尊敬の眼差しを送る。

エドワードは微妙に頬を引きつらせたまま、それでも誇らしげに笑みを浮かべる。

そんな彼らが顔を上げたところで、ドルトンは付け加えるように言い放った。

「一つ…忠告しておくが…我が国の医者は…魔女が一人いるだけだ」

「は？」

メリー号の見張りにゾロとカルーを置き、豪雪降りしきる道を一味は黙々と歩く。

その途中でドルトンは、歩きづらそうなルフィたちに向けて唐突に語った。

「この国に、名前はまだ無い」

「は？ なに言ってるんだよドルトンさん…ここドラム王国だろ？」

ドルトンの言葉に、エドワードは訝し気に眉間にしわを寄せて問い返す。

道中、前から歩いてきた大きな熊に会釈しながら、一行はドルトンが住んでいるとい

う村へと向かう。

「つぎやあああ!!! 熊だあああつ!!! みんな死んだフリをしるおお!!!」

「気にすんな。ハイキングベアーだ。危険はねエよ」

「登山マナーの“一礼”を忘れるな」

勝手に騒いで勝手に雪の中に倒れこむウソップを適当にあしらい、一行は人通りの多くなつてきた空間にたどり着いた。

寒空の下でも活気のある、それなりに明るい雰囲気の村だ。

「……が……我々の村だ」

「なんか変な動物歩いてんな」

「さすが雪国だぜ」

「ナミさん!! 人のいる村へついたらぜ!! 村だ!!!」

「じゃあ、みんなごころうさん。見張り以外は仕事に戻ってくれ」

「一人で平気かい、ドルトンさん。海賊だぞ」

「彼らに、おそらく害はないよ。長年の勘とちよつとした縁だ。信じてくれていい……」

医者は居らずとも、ようやく腰を落ち着けられる場所にたどり着き、一味が安堵の声を上げる中、ドルトンは付き添っていた一部の住民たちに解散を告げた。

その親しげな様子に、ビビは得心が言った様子で息を吐いた。

「……国の守備隊じゃなかったんですね」

「民間人だ。ひとまずうちに来たまえ」

そう言って、自分の家へと招くドルトンに一味は疑わずについて行く。

途中、再び一行のもとに大きな影が近づき、ルフィとウソップがハッと目を見開いた。

「はっ!! みろルフィ!! ハイキングベアーだ」

（またかつ…!!）

「あら、ドルトンさん。海賊が来たと聞いたわ。大丈夫なの?」

「ええ異常ありません。ご心配なく」

「やあドルトン君。2日後の選挙は楽しみだな。みんな君に投票すると言つとるよ」

「と…とんでもないっ!! 私などっ!! 私には罪深い男です…!!」

勘違いし、普通の買い物帰りの大柄なおばさんに会釈するルフィとウソップを放置し、ドルトンはおばさんや老人と会話を始める。

その内容に、エドワードとアルフォンスは訝し気に首を傾げた。

「…選挙…?」

「何の話だ?」

「……………そのベッドを使ってくれ。今、部屋を暖める…」

詳しいことは語ろうとはせず、ドルトンは自分の家の扉を開きルフィたちを促す。

問いただしたいエドワードだったが、今回の訪問の目的を思い出し、また別の機会を待つことに決めた。

「体温が…42度?!」

ルフィたちを招き入れ、病人だと聞かされたナミをベッドに寝かせたドルトンは、ビビから聞いた症状に顔色を変える。

医者でなくとも、その数値が異常なことであることは明らかで、冷静そうだったドルトンも狼狽し始めた。

「3日前から上がる一方で…」

「これ以上上がると死んでしまうぞ…」

「…ええ、だけど病気の原因も対処方法も私達にはわからなくて」

「何でもいいから医者が要るんだ。その『魔女』ってのはどこいんだよ!!」

「つーか、この国の医者は『イツシー20』だろ?」

とにかく早くナミを苦痛から解放させてあげたくて急かすようにサンジが吠ええると、ドルトンはちらりと窓の外に目を向ける。

「『魔女』か…:…:窓の外に…:山が見えるだろう…:?!」

「ああ…あのやけに高い…」

島の外からも見えた奇妙な山のことを思い出し、サンジは確認のために窓の方を向く。

が、そびえ立つ山が映っているはずの場所には、異様な大きさの雪だるまが邪魔をし

ていた。

「〃ハイパー雪だるさん〃だ!!!」

「雪の怪物 〃シロラー〃だ!!!」

「てめエらブツ飛ばすぞ!!!」

緊張感のかけらもない二人をどつき、邪魔な雪像を破壊して視界を確保する。

一所に落ち着いていられないルフィらに茶を渡してようやく、一味は件の山々の姿を拝むことができた。

「あの山々の名はドラムロッキー。真ん中の一番高い山の頂上に城が見えるか? 今や

…王のいない城だ…」

「城?!」

「あつたまるなー」

「ああ…確かに見える」

「あの、お城が何か…?」

「人々が〃魔女〃と呼ぶ、この国の唯一の医者、〃Dr. くれは〃がああ城に住んでいる…」

標高が高く、雲でぼやけているためによく見えないが、台のような山の頂上には城の影が見える。

その山をどこか物憂げに見上げ、ドルトンがため息交じりに語ると、エドワードがうげつと顔を歪めた。

「あのバアさんまだ生きてんのかよ…」

「もう140近い高齢のはずですよね」

「ひゃ…140!!? そつちが大丈夫か?!」

「いや、わるい。よく考えたらあと100年ぐらい余裕で生きてそうだったわ」

一応は面識があるらしく、エドワードもアルフォンスも険しい表情で唸る。

二人のそんな反応をさせる老婆が一体どのような人間なのかと、一味は尋ねる前から早速不安になってしまった。

「よりもよって何でまた、あんな遠いところに…すぐに呼べないんですか?! 急患なんですよ」

「そうしたくとも通信手段がない」

「はい!!?」

聞き捨てならないセリフに全員が振り向くと、ドルトンも申し訳なさそうに眉間にしわを寄せる。

医者がいるのに、治療や診察どころか呼ぶこともままならないなど、全く理解が追いつかなかった。

「この国の人達は病氣やケガをどうしてるの?！」

「あのバアさんは、気まぐれに山を降りては患者を探して処置を施して…報酬にその家の欲しいものをありったけ奪って帰ってくようなバアさんらしくてな」

「そりやタチの悪いババアだな」

「おいおい、まるで海賊だな!!」

自分たちよりも海賊らしい『魔女』の所業に、ルフィとウソップは思わず口を挟む。

そんな二人にエレノアは物言いたげな目を向けるが、諦めて何も言わずにしていた。

「でも、そんなお婆あさんがどうやってあの山から…?」

「妙な噂なんだが…月夜の晩に彼女がそりに乗って空をかけ降りてくる所を数名が目撃したという話だ…『魔女』と呼ばれるゆえんだ…」

ドルトン自身も不審な印象を抱いているらしく、神出鬼没の『魔女』のことを思い出し難しい顔を見せる。

その雰囲気に、ウソップだけでなくビビもゴクリと息を飲んでいた。

「…それに…見たこともない奇妙な生き物たちと一緒にいたという者もいる…」

「ぐあつ!! やっぱりか!! 出た!! ほらみる!! 雪男だ!!! 雪山だもんなー!!! いると思っただ魔女に雪男だと!!? ああ、どうか出くわしませんように!!!」

「確かに唯一の医者ではあるが、あまり関わりになりたくないバアさんだ……」
「ほんとにな……」

「次に山を降りてくる日をここで待つしかないな……」

「そんな……」

「だいたいよ、国中で医者が一人なんておかしすぎるぜ!!!」

「それはもつともです……ドルトンさん、この国で一体何が……?」

簡単に会うこともできないことを知り、八方塞がりになった一味はそれぞれあーでもないこーでもないと騒ぎ始める。

そんな中、湯飲みの茶を飲み終えたルフィがナミのもとに近づき、頬を叩いて呼びかけた。

「おいナミ!! ナミ!! 聞こえるか?」

「——でお前は何をやってんだ——っ!!!」

ギョツと振り向く仲間達をおき、ルフィは朦朧とした様子で目を開けたナミに、信じられないことを告げた。

「あのな、山登んねエと医者いねエんだ。山登るぞ」

船長の発した無茶苦茶な決断に、一味は全員言葉を失う。

来てくれないのであれば自分が向かえばいいなど、確かに当たり前ではあるが、今の

状況ではあまりに危険な行為であり、それを考えたルフィに全員が待ったをかけた。

「無茶言うな、お前ナミさんに何さす気だア!!」

「いいよ。おぶつてくから」

「それでも悪化するに決まってるわ」

「何だよ、早く診せた方がいいだろ」

「それはそうだけど無理よっ!! あの絶壁と高度を見て!!」

「いけるよ」

「てめエが行けてもナミさんへの負担はハンパじゃねエぞ!」

「でもほら…もし落っこちても下は雪だしよ」

「あの山から転落したら健康な人でも即死だつての!!!」

「じゃあエレノアの背に括り付けて空飛んで…」

「重すぎるし翼凍るわ!!!」

「常人より6度も熱が上がった病人だぞ!! わかってんのかお前っ!!」

みんなで口々にルフィの蛮行を止めようとするが、妙なところで頑固なルフィは全く引く様子を見せない。

このままでは制止を振り切つてナミを連れ出しかねないと、力づくで止めることを考えた一味だったが、不意に聞こえたナミの声にハッと口を閉ざした。

「…よろしくっ」

「そうこなきやな！ 任しとけ!!」

掲げられた手をつしりと掴み、ルフイはナミに威勢良く笑いかける。

無理に笑顔を見せるナミに、仲間を疑う様子は微塵も見受けられなかった。

「…あつきれたぜ。船長も船長なら航海士も航海士だ!!」

「自分の体調わかってんのか?! ナミさんっ!!」

「おっさん、肉をくれ!」

「……………肉?」

「ナミさん、本当に大丈夫?! 何時間もかかる道よ」

提案する方もする方なら、応える方も応える方だと、その様子を見ていた全員が思わず呆れた様子で肩の力を抜いてしまった。

それでも、それ以外にできることはないのだと、それぞれで覚悟を決めるのだった。

第71話 “魔女のいる城へ”

「よし、おれも行く!!!」

「私も行くっ!!!」

「ではボクも、同行します!!!」

重病の身でありながら、ナミが自らDr. くれはのもとに向かうと決断した後、当然護衛をつける必要があった。

サンジが名乗りを上げるのは当然のことであったが、意外にもエレノアとアルフォンヌも真っ先に手を挙げていた。

「ならおれも行くぜ!!! じつとなんかしちやいらねエ!!!」

「あんたはダメでしょ」

「ああ!! 何でだよ姉弟子!!!」

「ほら、これ」

慌てて自分もついて行こうとしたエドワードだったが、エレノアにコンコンと足を叩かれて気付く。

エドワードの義足は金属製、極寒の大地では逆に危険な枷になりかねないものだっ

た。

「……………あ」

「そんなものぶら下げていったら一発で凍傷で死ぬよ、エドくん」

なまじ幼馴染の作った機械鎧オートメイルの性能がいい分、時々義足であることを忘れる困った弟子に、エレノアは思わずため息をつく。

しかしエドワードは諦めきれず、自分よりも厄介な両足を持つエレノアに指摘した。

「じゃあ姉弟子だつて…!!」

「おあいにくさま。私は事前にウィンリイに特別製の機械鎧オートメイルに換装してもらったから…じゃあね」

「くつそオ…」

「まあまあ兄さん…あとはボクに任せてよ」

肝心なところで詰めが甘いことを示唆され、エドワードは悔しさに唇をかみしめるが、アルフォンスになだめられ渋々引き下がる。

生身の体ではないアルフォンスならば、どれだけ過酷な状況であつてもうまく立ち回れるだろうと、エドワードも任せることに決めたようだ。

「お前が一度でも転んだらナミは死ぬと想え!!」

「えっ!! 一度でもかっ!!」

「待って…じつとしてて…!! ちゃんと縛っておかなきゃ…」

サンジから注意を受けている間に、ビビがルフィの背中にしっかりとナミの体を縛り付ける。

ナミの呼吸に負担がかからない程度に、けれど決して離れることがないようにしっかりと紐を結びつけた。

「これでいいわ。私はここで待たせてもらうから！ かえって足を引っぱっちゃうし」

「不本意ながらおれもな…」

「おれもだっ!!」

心配そうなビビと不満げなエドワード、そしてなぜか堂々とした態度のウソップに見送られ、ルフィたちは準備を終える。

一刻の猶予も許されない現状、仲間同士の会話も最低限にしなければならなかった。

「わかった！ ナミ、じゃあ、しっかりつかまってるよ!!」

「うん……」

「…本気なら…止めるつもりはないがせめて反対側の山から登るといい…ここからのコースには“ラパン”がいる…!! 肉食の凶暴なうさぎだ…集団に出くわしたら命はないぞ!!」

「うさぎ？ でも急いでるんだ…平気だろ？ なア」

「ああつ、蹴る!!!」

「だめですよー」

ドルトンの忠告もほどほどに聞き流し、ルフィたち四人は遥か高い山頂を目指して豪雪の中を走りだす。

ザクザクと真つ白な世界に足跡を刻みながら、目指すは「魔女」のいるという元王の住まう城だ。

「じゃ、いくか!! サンジ!!! アル!!! エレノア!!! ナミが死ぬ前につ!!!」

「縁起でもないことを言うなっ!!!」

余計なことを口にするルフィにツツコミを入れ、一同は未だ吹雪き続ける中を突っ走る。

その背中が純白にかき消されて見えなくなつてから、ドルトンがどことなく不安げな様子で呟いた。

「本当に大丈夫かね…」

「まあ…あの4人は心配ねエが」

「ナミさんの体力がついていけるかどうか…!!」

「あとはまア…あいつら任せだな」

姿が見えなくなつても、ビビたちはその場から動こうともせず立っていた。

ドルトンが促すように自宅のドアを開けても、じつと山脈の方を見上げたままであった。

「…どうした君達。中へ入りたまえ…外は寒い…」

「…いいです…私は…外にいたいから…!!」

「おれも」

「おれも！」

遠慮するビビと同じように、ずるっ!と垂れてきた鼻水をすすり、エドワードとウソップも意地を張るように誘いを拒否する。

ルフィたちが無事に戻って来るまで断固として動かない、そんな意志を見せられているように感じ、ドルトンはふつと微笑んだ。

「……………そうか…では…私もつき合おう…」

そう言つて隣に腰を下ろすドルトンに、少しだけ驚いた様子のエドワードが笑みを浮かべる。

しばらくしてドルトンは、遠い目をしながら物憂げに語り始めた。

「…昔はね…エドワード君たちの言う通り、ちゃんといたんだよ」

「え？」

「医者さ…理由あつて、全員いなくなつてしまつたんだ…」

「……………イツシー20だろ？　なんでだ？」

この島、元ドラム王国に滞在経験があるエドワードは、当時の医療を担っていた集団のことを思い出して首を傾げる。

問われたドルトンは、その質問に対し苦し気に眉間にしわを寄せた。

「一年にも満たない数カ月前に…この国は…一度、滅びているんだ…海賊の手によつて

…!!!」

「え…」

「国が…!!!?」

語られた唐突な内容に、ビビたちは驚愕をあらわにする。

しかつ直ぐに、きたばかりの頃の住人達の反応を思い出し、それぞれで納得の表情を浮かべた。

「…海賊相手にえらくピリついていたのはそのせいかな…」

「そうだな…みんな海賊という言葉にはまだどうもね」

苦笑し、ドルトンはまた遠い目になる。

襲撃を受けた当時のことを思い出しているのだろうか、その目には悲しみの他に、件の海賊達に対する怒りも混じっていた。

「…たった5人の海賊団だった…船長は『黒ひげ』と名乗り…我らにとって絶望的な力

でこの国をまたたく間に滅ぼした……」

「……たった5人の海賊に……!!? うそでしょう……!!?」

「『黒ひげ』……!!?」

予想以上の規模の小ささと、聞きなれない海賊の名にビビもウソツプもエドワードも、信じられないと目を見開く。

しかしドルトンはなぜか吹っ切れた様子で、むしろ吐き捨てるように答えていた。

「だが……この国にとってはそれでよかつたと言う者もいる……!!」

「国が潰れて……いいわけないじゃない!!」

「そうだ、そんなバカな話があるか……!!?」

「まっとうな国なら……確かにあの野郎の国なら、滅んだほうがよかつたかもしれねえ」

反論するビビとウソツプだが、それに答えたのはエドワードだった。

彼はドルトンが見せる反応の理由に気づき、納得と同時に落胆のため息をつく、その口元をヒクヒクと引き攣らせて笑みを浮かべた。

「ようやく思い出したぜエ……!!? どつかで見たことのあるツラだったんだ……最低

の国王……『ワポル』の野郎……!!」

「!!? そうだ、あの男……!!? 思い出したっ!!」

「ワポルウ!!?」

エドワードが呟いた名にドルトンがうなずき、その名にビビとウソツプが大きく反応した。

何故ならドラム王国に着く直前、突然メリー号を襲撃してきた太った海賊が呼ばれていた名こそ、ワポルだったのだから。

「君達……!!　ワポルを知っているのか!!?」

「知ってるも何も、おれ達の船を襲つてきやがった海賊の名だ……!!　まー、おれが追い払つてやったが。今思い出してみりや、確かにドラム王国がどうか……」

「ええ……間違いはないわ。はつきりと思い出した……私、子供の頃に父に連れられて行った王達の会議で……うっ!!」

危うく秘密の情報まで口にしたかけたビビの横腹を、エドワードが無言で肘で打つ。

しかしドルトンは聞き逃さなかったようで、ビビに訝しげな視線を向けていた。

「王達の会議……!!　君は一体……」

「ナンデモナーイナンデモナーイ」

「あ……いえ……その、とにかく……!!!　会いました、ワポルに!!　昨日のことです。ここへ来る途中に……」

「……………!!　それは本当かね……………!!」

ドルトンは本気で驚いた様子で、言葉も出ないようでも襲撃を受けたというビビたちを凝視している。

エドワードは頭の隅に引っかかっていたもやもやが晴れた気分で笑みを浮かべていたが、しばらくして眉間にしわを寄せて振り向いた。

「…って言うか、どういうことだ!! 国は滅んだつてのにあの野郎は健在で、しかも海賊になつてると!!」

「海賊など一時のカモフラージュだろう。ワポルはこの島へ帰ろうとして海を彷徨つているにすぎない」

「…だつたらあの船に乗つてた人達は、この国を襲つた海賊に敵わず…島を追い出された兵達なのね…」

無惨に国を追われたというのに、恥知らずにも賊に身を墮として生き延びているというのは、確かに情けない話だろう。

しかしドルトンは、納得しかけたビビの言葉を即座に否定した。

「敵わず…!! 違う!!! …あの時国王ワポルの軍勢は…戦おうとすらしなかつた…!!!」

ドルトンの言葉に、ビビだけではなくエドワードも目を見開く。

理解がまだ追いついていない彼らに対し、ドルトンは怒りと悔しさを隠しきれない様子で苦々しく語つた。

「こともあろうに……海賊達の強さを知ったとたん……あつさりと国を捨て!! 誰よりも早く国王は海へ逃げ出したのだ!!!」

国王ワポルが見せたというところでもない行動に、ビビたち三人は絶句する。

国のトップが、国民を守り導くべき存在がそれをためらいなく見捨てるなど、あつてはならない事だった。

「あれには国中が失望した……!! これが一国の……」

「それが一国の王がやることなの!!?」

ドルトンが口にしようとした言葉を、怒りを表したビビが叫ぶ。

王族の血を引く彼女が抱く憤怒に、ウソップもエドワードもかける言葉を見失ってしまった。

「ビビ……」

「ひどすぎる!!! そんなの……王が国民を見捨てるなんて」

「その通りだ……だが、とにかくもうワポルの悪政は終わった。この島は、もう残った国民達のものだ……!! 町村の復興も順調に終わっているし、いま団結して新しい国を作ろうとしている」

つい安堵しそうになるが、エドワードは脳裏によぎった不安で眉間にしわを寄せる。

ワポルと遭遇したのは、それほど遠い場所ではない。何らかの偶然が重なれば、あの

男が戻ってくる可能性もなくはないのだ。

「だから我らが今一番恐れているのはワポルの帰還、王政の復古だ。人々が不安定な今、それだけは避けねばならん!! この島に新しく平和な国を、築くために……!!」

確固たる決意を抱き、ドルトンは厳しい表情でビビたちにそう告げる。

ただの守備隊長どころではない、人々を導き守れる器を持った男の姿に、ビビは思わず胸を熱くしていた。

そんな時、どこか迷った様子を見せながら、エドワードがドルトンに耳打ちした。

「ところでよオ……ドルトンさん。気になってたんだが……ニーナは、どこいった?」

「……先にアルフォンス君が会うことになるだろう」

「つてことは……あのバアさんのところかよ?!」

先ほどとは違う理由で苦々しい表情のドルトンに教えられ、エドワードは思わず顔をしかめてしまう。

ウソツプとビビは聞きなれない名前が気になり、頭を抱えるエドワードに思い切つて尋ねてみた。

「誰だ、その……ニーナって」

「……友達だよ。おれ達が絶対に忘れちゃいけないエ……大事な」

かつての縁を思い出し、エドワードはどことなく切なげな表情で答える。

それだけ言うととたんに口を閉ざしてしまった彼に代わって、ドルトンがエドワードに感謝の視線を向けながら軽く語ってくれた。

「……この国には、もう一人…… “悪魔” がいたんだよ……エルリック兄弟は………そういうを見つけ出してくれたんだ……」

「………何もできなかったよ、おれ達は………」

ドルトンは褒め称えるが、その対象であるエドワードは全く嬉しそうではない。

むしろ、語り聞かせられることが苦痛な様に表情を歪め、ドルトンから気まづげに視線をそらしている。何となく触れてほしくなさそうな雰囲気を感じ取り、ビビもウソツプもそれ以上の追求はできなかった。

するとそこで、エドワードはハツと顔を上げてドルトンに振り向いた。

「……ん？ おいちよつと待て……じゃあ、タツカーの野郎は?」

「…… “黒ひげ” の襲撃を受けた際、そのどきくさに紛れておそらくはワポールと共に

……!!!」

「クソツ!! あの野郎……あの船にいたんならまとめて海に沈めてやったつてのに……」

エドワードはドルトンからの答えを聞き、苛立ちを表すように頭をかきむしった。

敵意どころか殺意まで感じる豹変ぶりに、さすがにウソツプは何があつたのか気にな

り、エドワードの肩を掴んで問いかけた。

「お……オイどうしたんだよ!!? 何をそんなに苛立ってんだよ!!?」

「……言いたくねエ。むなくそ悪イからな」

顔を覗き込まれ、問われたエドワードだったが、答えることはせずにまたそつぽを向いてしまう。

自分の腕と足や弟の体のことといい、うつかり踏むととんでもないことになる地雷を持つている相手ゆえに、ウソツプも渋々それ以上の追求は避けるほかになかった。

ドルトンは詳しく知っているのか、エドワードの苛立ちに同意するように嘆息し、次いでルフイたちが向かった山々の方へ視線を移した。

「それよりも……大丈夫かねエ………彼らは……ラパーン」に出遭わないといいんだが」「でも肉食つつつてもうさぎだろ!!」

「おう……うさぎの機敏さに熊の体格をかねそなえているうえに、集団で襲ってくるけどな」

「え……熊?!」

勝手に抱いていたイメージと全く異なる姿に、ウソツプもビビも思わず後ずさる。

うさぎという言葉だけで、もっと小さくて愛嬌のあるものを想像してしまったことに激しい後悔がわいてきていた。

「だ…大丈夫かしら、そんなに大きいの…!!」

「姉弟子やアルがいるから何とかなるとは思うがな…」

急いでいたために詳しい説明を忘れていたエドワードがそう呟くが、時間が経つにつれて一同には不安が募っていく。

そんな中、先ほどドルトンとすれ違った熊に似たお婆さんが、やや急いだ様子で話しかけてきた。

「ドルトンさん、ドルトンさん！ あなたDr.を探してるらしいわね」

「ええ…その通りですが…しかしたった今病人は…」

また勘違いして一礼するウソツプを無視し、ドルトンが説明しようとした時、お婆さんは信じられない情報を彼らにもたらした。

「ちようど今ね！ となり町に降りてきてるらしいわよ!!」

「な…!!?! 何ですと!!?!」

寝耳に水な言葉に、ドルトンとエドワード達は思わず大きく口を開け、その場に立ち尽くしてしまっていた。

同じ時。

しんしんと雪が降り注ぐ海上を進む、カバの船首の海賊船『ブリキング号』。

その見張り台の上で、ピエロのような男が声を上げていた。

「おお…おお、ワポル様…」

「どうした、チェス!! やつらの船は見つかったか!!」

苛立った様子で、反応を見せるピエロの男に怒鳴るつける太った男、元ドラム王国国王ワポル。

そんな彼にチェスと呼ばれた男は落ち着いたまま、しかし高揚した様子で前方を指さした。

「いいえワポル様、とうとう帰り着きました……………」

「何!!?」

「苦節何か月経ちましたことでしょうか…」

チェスの報告に、ワポルは自らも船の前方を見つめ、見えてきた影に目を見開く。

その影こそ、ワポルたちが数カ月もの間探し続けていた場所、帰るべきと思っっている故郷であった。

「我らが故郷!!! ドラム島です!!!」

「本当かア——っ!!!」

歓喜の声を上げ、ワポルは満面の笑みをたたえて騒ぎだす。

その隣に、どこことなく頼りなさげで気弱そうな、眼鏡をかけた細身の男が、ずいぶん

と疲れた様子で顔を出した。

「ずいぶん長くかかってしまいましたね……私の家もどうなっていることか……」

「まはははは!! 家などおかしぐらいにしか役に立つまい!! お前は今後おれ様の城に来るのだからな!!! あの憎たらしいガキに折られた大事な歯をカンペキに治せるお前を手放すわけねエだろうが!!!」

ワポルは途端に上機嫌になり、掴めば小枝のようにヘシ折れそうな男の背中をバシバシと無遠慮にたたく。

やや迷惑そうに苦笑する男——タツカー・シヨウは、頭をかいて答えた。

「はは……光栄です。ワポル様」

どう見ても危険など感じられない、しかしそれ以上の不気味さを感じさせる男が、笑みを浮かべてひび割れた眼鏡を光らせる。

ようやく自由を得た島に、史上最低の王と最悪の悪魔が、帰還しようとしていた。

第72話 “悪魔の研究者”

麓の状況を知ることなく、雪山の中を進むルファイたち。

分厚く積もった雪の下部分を時折エレノアとアルフオンスで固め、踏んでも少ししか沈まないようにしながら、ナミの体調を気遣って慎重に進む。

「ちよつと寒くなってきたな：風が出てきた」

「つーか、お前何で下素足なんだよ。見てるこつちが痛エだろ」

「これは、おれのポリスーだ!!」

「ポリシーでしょ」

「そうなんだよ」

いつもの格好にコートだけを着たルファイに苦言を挟むが、妙なこだわりを持つルファイはそれを断る。本人がいいと言つても、傍から見れば痛々しかったのだが。

「それよりな、知つてたか？ 雪国の人達は寝ねエんだぞ」

「あ？ 何で」

「だつて寝たら死ぬんだもんよ」

「バカいわないでください、そんな人間いるもんですか!!」

「本当だよ。昔、人から聞いたんだ」

「ウソツプか……………」

「違う。村の酒場で聞いたんだ」

「ヤソツプの方だったか……………」

根拠のない噂話を鵜呑みにするルフィを見て、エレノアは渋い顔でルフィの今後を心配する。いつか、とんでもない相手にとんでもない騙され方をされそうで気が気ではない。

「だったらなんで、あのドルトンって人の家にはベッドがあつたのさ」

「あつ、それもそうだな!! じゃあ、あれは死ぬ時の為に……………」

「そんな備えはいらない!!!」

恐ろしく不謹慎な予想を立てる彼に全員が同時にツツコミを入れる。

しかし雪国の噂は思ったよりも面白かったのか、今度はサンジが語り部に名乗りを上げた。

「じゃ、お前これ知ってるか? 雪国の女はみんな肌がスベスベなんだ」

「何で」

「そりゃ決まってるんだろ。寒いところ…肌をこすり合わせんじゃねエか。それで、みんなすべすべになっちゃうんだ。すべすべで透き通るような白い肌、それが雪国の女さ」

「やすり掛けみたいですね…」

「ふーん、白いのは何でだろうな」

「そりや勿論、降りしきる雪の色が肌にしみこんじまうからよ」

加えた煙草の煙をハート型にするサンジにエレノアだけでなくルフィとアルフォンも呆れた目を向けた。

途中、何やら大きな白いうさぎのような生き物がガチガチと噛みついてくるのを軽く躲しつつ、一行は山に向かって一直線に駆ける。

「とりあえず、あんたがアホだつてことはよくわかったよ…つと♪」

「おう、よくわかった」

「てめエにだけは言われたくねエよ!!!」

びよんびよんと足取り軽くエレノアに同意し、ルフィが言うのとそれだけは聞き捨てならなかったサンジが怒鳴りつける。

アルフォンズはそのやり取りに苦笑し、先ほどから妙に上機嫌なエレノアに気づいた。

「…姉弟子、もしかして結構テンション上がってる？ 昔から白いものが好きだったからね…」

「バレた…？ こんなにキレイな一面の純白だもん。あ…でも最近も赤も同じくらい

好きなんだよね」

「そっかー…白が好きなんだー」

思わぬレディの情報を聞けて、今度はサンジが上機嫌になる。

エレノアはどこを見てもほとんど白しか見えない光景に、フードの下の目をキラキラと輝かせていた。

「青も好きだし黄色も好き!! 緑も桜色もキレイな色はみんな好きだよ!!」

「じゃあ、キラいな色は?」

「黒!!? だいつキライ!!!」

「あ、サンジさんその白いうさぎは……」

途中で聞いてしまった情報に、黒い装いの多いサンジがガン!!とショックを受けた時、サンジの足元に先ほどから襲いかかろうとしていたうさぎが近づく。

アルフォンスがそれに気づいた瞬間、いい加減我慢の限界だったサンジが目を吊り上げた。

「つてうつとうしいんだよさつきから!!!」

「蹴らないでつて言おうとしたのに!!!」

「何なんだろうな、あいつ」

「……………なんか私、そこはかたなく嫌な予感してきた」

アルフォンスが止める間もなく、サンジは噛みつきうさぎを思いつきり蹴り飛ばしてしまう。

遠く雪原の彼方にふっ飛ばされていくうさぎを見上げ、エレノアはこめかみにつうつと冷や汗を流した。

「ナミさん、気をしっかり持つんだぜ。ちゃんと医者連れてくからよ」

「雪がだいぶ積もってんな、この辺は」

「ころルフィ。もつと、そくそくと走りなよ。ナミの体にひびくんだから」

その先も、ついつい調子で走ろうとしてしまうルフィを制しつつ迷わず突き進む一行。

海とは違い、目指す方角は記録指針ログポースのような小さなものではなく遥か高い山であるために、どんなに走り回ったって見失ったりはしないのが救いだつた。

だがその時、絶えず音を拾っていたエレノアが突然立ち止まった。

「待って……!! ストップ!! あの先に何かいる……!!」

エレノアに制され、ルフィたちは同時に停止する。

危機管理能力にたけたエレノアの言葉は充分信用に足るため、全員が何かあるのだと即座に察した。

「ん……?」

「んんん?!」

前方を見ても、エレノアの言うような何かはまだ見えない。

しかしよくよく、頑張つて目を凝らしてみると、真つ白な雪原のあちこちに大きな影が立ち上がっているのが見えた。

「な…何だよこいつら…!!!」

「白くてデケエから白熊だよ、間違いないエ!!」

一度見えれば、吹雪の中にどんどん姿を現していく何十匹もの生物たちの姿。

ルフィたちの背丈の二倍はありそうな巨体には、確かに熊のようにも見える。だが、その頭から生えている耳は、どう見てもうさぎのそれであった。

「ヤバイ……!!」

困惑の表情を浮かべるルフィとサンジ、エレノアをよそに、アルフォンスだけが固まっていた。

「すまん、私のミスだ…!!」

毛の深い雪国特有の有蹄類の引くそりに乗り、隣の町を指すドルトンが、同じそりに乗るビビたちに謝罪する。

D r. は遠い城に 있다고 言つておきながら、すでに目と鼻の先にまで来ていたと聞い

たからだ。

「昨日ドクターが山を降りて来たという情報があったもので、もう数日は下山はないとふんでいたが……!! 読み誤った……!!」

「気にすんな! あんたのせいじゃねエよ!!」

自分の不甲斐なさを悔やむドルトンだが、エドワードはそれを否定する。

国が大変な時に頼ってきたのは自分たちなのだから、多少のミスがあつても責められないものではない。

「問題は、あの4人の異常な脚力だ。おれ達が今さら雪山を追いかけた所でとても追いつけねエ。そのココアウイードって町にドクターが現れたんなら、頼んで至急城へ帰ってもらうまでだ」

「ええ……それ以外に方法はないわ……!!」

連絡手段が口頭だけというあまりに不便な現状、できることといえば自分たちで動くことだけ。ビビたちは先に体を張りに行った仲間達に分、懸命に動くことに迷いはなかった。

「許してくれ……医者すらままならんこの国をだ……」

「そ……そんな、ドルトンさんが謝ることじゃないわっ!」

「……………」

謝罪を続けるドルトンにビビは逆に申し訳なきように返すが、ドルトンの表情は未だ晴れない。

その横顔を見ていたエドワードは、どこか苦しい表情で重い口を開いた。

「あんたは充分立派だよ……ドルトンさん……おれ達と違って、ちゃんと前に進んでる……」

唐突に語り始めたエドワードに、ドルトンやビビ、ウソップは何事かと振り向く。

ドルトンはエドワードの表情からなにかを察したのか、先ほどとは逆にエドワードに同情するような視線を向けた。

「おれ達兄弟は……今でもまだ、同じところでぐるぐるぐる彷徨ってばかりさ……」

「エドワード君……」

「あの時からおれ達は……何にも変われてねエ……たった一人の女の子さえ救えねエ……そんなんでしょうもねエちっぽけな人間だよ……」

ギリギリと、エドワードの機械鎧オートメイルが握りしめられ軋みを上げる。

金属の腕が悲鳴を上げててもやむ様子のない、少年の後悔の気配がビビとウソップは猛烈に気になり始めた。

「なにが……あつたの？　あなた達と、この国に……」

「……………この国にはなア、昔…おれと同じ国家錬金術師がいたんだ」

二度目の質問で、エドワードは観念したように語り始めた。

それは身内の恥を晒すような、あるいは自分の黒歴史を晒すような葛藤があり、ビビたちは思わず息を呑んだ。

エドワードは眉間にしわを寄せ、それでも覚悟を決めて語りを続けた。

「『綴命』の錬金術師……………合成獣キメラの権威とも呼ばれた奴で、おれ達の最終目的である生体錬成に深い理解があるつてんで、おれとアルはこの島を訪れたんだ」

「合成獣……………」

「『遺伝的に異なる二種以上の生物を代価とする人為的合成』……………生物学や生物工学の発展を目的とした研究分野だ」

錬金術師の分野に詳しくないビビは、聞かされた内容に少し顔色を悪くする。

なんとというか、タツカーとやらが研究していた分野というのは倫理的に問題がありそうなものにも思えた。生物を組み合わせ、新たな種を創造する、それはまさしく神の領域に達しようとしているような、そんな印象を抱いた。

「やつは3年前……………人語を理解する合成獣」を生み出したことで国家資格を得た……………だがその後2年間、思うように研究がはかどらなかつた。国家錬金術師の資格を得たとはいっても、やつは凡人止まりだったんだ……………」

ウソツプはそれを聞き、錬金術師に対するイメージが少し変わった気がした。

エレノアといいエドワードといい、何でもできる万能のように思っていたが、人によつてはそうではないのだと、改めて彼らも人なのだ実感した。

「…さつき言ったニーナつてのは、そいつの娘だ。母親が出ていって、父親が研究ばかりでさみしがつてたけど…愛犬のアレキサンダーを相手に寂しさを紛らわせてた。おれ達は奴のもとで資料を見る合間、よく二人でニーナとアレキサンダーの相手をしてやつてたんだ。…しよつちゆう邪魔されたけど、楽しかったなア」

タツカーのところまで過ごした日々を思い出しているのか、エドワードの声が感慨深げなものに変わる。

時々大人びることもあるが、基本はまだ子供っぽい彼が年下の女の子の相手にはしやぐ姿を思い浮かべ、ビビは思わず笑ってしまう。

だがエドワードの表情は、続きを語り始めたとき曇り始めた。

「めばしい資料も読み終えて、いったん帰ろうつて時によ…タツカーが見せたいものがあるつつっておれ達を呼んだんだ。ニーナとアレキサンダーの姿が見えなくて、戻ってくるまで待つのもいいかってそれに応じたんだ」

トーンの変わったエドワードの話しに、ビビとウソツプは思わず居住いを直す。

それは、そりを操縦するドルトンから感じる気配が、怒りはらんだ重苦しいものに

変わったためでもあった。

「そしてタツカーは、おれ達に見せたんだ。…『ついに完成した。人語を介する合成獣^{キメラ}だ』…って、一匹の生き物を」

エドワードは今でも悪夢として思い出せる光景を、自身の胃が苦しくなるのも構わずに語る。

仲間に対する、一つのケジメとして。自分が、錬金術師が抱える闇を、隠し事のままにしないために。

「やつはその生き物に、おれの名を教えた。するとその生き物は、たどたどしくも口をきいた」

——えど、わー、ど？

見た目は犬で、人間の女のような長い髪を生やしたその合成獣^{キメラ}は首を傾げ、目の前に立っていたエドワードにそう答えたという。

ウソツプは大きく目を見開き、その光景を思い浮かべて感嘆の声を上げた。

どこことなく漂う嫌な予感に気づかないまま。

「……すげエ…!! そんなもんまで作れちゃうのかよ…!!?」

「その時は純粹に驚くだけだったよ……おれ達も。…だがおれ達は、すぐに気づいちゃまった」

「えっ？」

エドワードが付け加えたことで、ビビもウソップも自分の胸中のいやな予感が大きく膨れ上がるのを感じた。

エドワードはギリギリと歯を食いしばり、後悔の中に怒りを交え始める。虚空を見つめるその目が、鋭く突きさすようになっていく。

「おれがその事実に気づいた瞬間……おれには確かに奴が悪魔に見えた。やつは……確かにそう呼ばれるにふさわしい業を背負っていた」

「な……何だよ、それは」

本能的に、それ以上は効いてはいけないような気がしてきたウソップだが、ここまで聞いてやめる気にもなれず、続きを洩るエドワードに促してしまう。

そして次の言葉で、ウソップもビビも尋ねてしまったことを激しく後悔した。

「おれにそいつは……合成獣キメラだと思っていたその子は……『お兄ちゃん』って言ったんだからな……!!」

ぞっ!!と二人の背筋に震えが走る。背中に氷塊を入れられたかのような寒々しさを感じ、顔色が真っ青に染まる。

エドワードは乞われたとはいえ、こんな話を聞かせてしまったことに対する申し訳なさで眉間にしわを寄せた。

「おれは奴に尋ねた。『ニーナとアレキサンダーはどこに行つた』つてな………そしたらやつは、うつとうしそくに顔を歪めて言いやがったよ……!!」

「っ……!!?」

怒りをあらわするエドワードは、ウソツプたちが息を呑むのも構わずさらに語る。

犯された罪を察したエドワードが、真正面から悪魔に突き付けた問いに、彼は微塵も悪びれることなく答えたときのことを。

——君のような勘のいいガキは嫌いだよ。

ビビとウソツプの体に震えが走る。

研究のために、特に生物にかかわる分野においては生命がないがしろにされることは何となく知っている。

しかしタツカーとやらが侵した領域は、明らかに常軌を逸してしまっていた。

「あの野郎は……自分の娘を……!!!! いや、それだけじゃねエ………3年前の研究結果だつて……自分の妻を合成獣キメラにしやがったんだ……!!」

「ひどい………自分の家族を……研究のための犠牲にするなんて……!!!!」

「それも違う……!! 奴は……自分が国家錬金術師の資格を失うことを恐れていた……!! だから……!! 研究結果を偽るために、ニーナを犠牲にしたんだ……!!!!」

エドワードの表情は、まるで鬼のように険しく凄まじいものになってしまっている。

時がたった今でもこの状態なのだ。犯行を目撃した直後の彼の怒りがどれほどすさまじいものだったかなど、想像するも計り知れなかった。

「アルが止めなかったら、おれは奴をブツ殺してた……やつがおれと同じ国家錬金術師だと思いたくなかった……おれ達は……あんなことをしたかったんじゃない……そう……否定したかった……!!!」

ビビは絞り出すようにそう呟くエドワードに、彼ら兄弟の過去にも何かあったのだと察する。

認めたくはない。しかしそれでも自分たちのかつての行いが重なってしまふのだと、激しい苦しみに苛まれているのだと、ビビは直感した。

「今の技術じゃ……合成獣キメラにされた生物は元に戻してやれない……人でも獣でもなくなつたニーナは……ドルトンさんに預けるほかになかった。今は……あのバアさんのところにいるらしいけどな……」

ドルトンは背を向けたまま、それでも怒りや悲しみを握りしめる手に表し、唇を噛んで無言を貫く。

人でなくなった少女を引き取つたドルトンが何を感じたのか、それを問うことはこの場にいる誰にもできなかつた。

「おれ達は今も昔も変わらねエ……ただの人間だ。たった一人の女の子さえ助けてやれ

ない、ちっぽけな人間だ……………!!」

「……………急ごう!!」

自分の力不足を責め続けるエドワードに、思考の咆哮を変えさせようとしてか、ドル
トンはそりの速度を上げさせる。

今考えるべきなのは、仲間の病気を治すことなのだと、そう伝えようとするように。

第73話 “野生の力”

「え!!? もう、この町を出た!!?」

となり町へ辿り着き、とある店を尋ねたドルトンが絶句する。

聞けばDr. くればは、つい数時間前にいきなりこの店を訪れると、泣きわめく少年に治療を施すとあつという間に行つてしまったのだという。

「何てこつた、すれ違いかよ」

「さつき僕の病気を治してくれたんだ」

骨に細菌が侵入し炎症を起こすという恐ろしい病気だったらしいが、少年はもうピンピンしている。

それだけDr. くればはの技術が高いことが伺い知れ、ますます目と鼻の先で会えなかつたことが悔やまれた。

「ドクターを探してるのかい、ドルトンさん」

「急患なんだ。ドクターの行き先を知らないか!!」

「ギヤスタの方へ向かつたと誰かが言つてたぜ」

「ギヤスタへ!!」

「どこだ、それ？」

「この町から、さらに北へ向かうとある湖畔の町だ。そうだな、あと…」

「あ、それ以外の情報はいらねエ」

「行きましょう!!」ここまで来たら迷ってるヒマはないわ」

人がいいドルトンがどうでもいい情報まで口にしようだったので即座に止め、話す時間も惜しいとビビが外へ促す。

しかしその時、ドルトンたちのいる店の扉が勢いよく開かれ、一人の男性が慌てた様子で駆け込んだ。

「ドルトンさん!!」ドルトンさんはいるか!!?」

突然飛び込んできた男性は相当焦っていたらしく、荒い呼吸でドルトンの名を叫ぶ。

ドルトンは訝し気に眉間にしわを寄せ、膝をついた男性のもとに駆け寄ると、相手の顔を確認し眉を寄せた。

「どうした。君は確か今日の見張りでは…」

「おれ以外の見張りは全員やられちゃった!!!」突然、海岸から潜水帆船が浮上んできてみんなあいつらにやられたんだ!!」ドルトンさん助けてくれ!!!」おれ達の力じゃ…」
「落ちついて話せ。一体誰にやられたんだ」

一刻も早く伝えなければという焦燥のせいでうまく伝えられない男性に、ドルトンは

まずは相手をなだめることに専念する。

その甲斐あって、ようやく落ち着きを取り戻した男性は、衝撃の一言をドルトンたちに伝えた。

「ワポルの奴が、帰ってきやがった!!!」

耳に届いたその名に、店の中にいた全員が大きく目を見開いて硬直する。

忘れるはずもない、それは国中の誰もがこの世で最も嫌い、憎み、怨んでいた最低の国王が、恥知らずにも帰って来たというのだから。

「ワポルが…!!?」

「奴は今どこに…」

「あなたの村だ…ビッグホーンが今、大変なことに!!!」

聞かす早いのか、ドルトンは店を飛び出し、止められていた馬に飛び乗って走りだしてしまつた。

村人が呼び止める暇もなく、ドルトンの姿はあつという間に見えなくなつてしまつた。

「あ、ドルトンさん!!」

「おい…そこに眼鏡をかけた気弱そうな男はいなかつたか…?」

「え…!!? だ、誰だ君は…?!」

「いいから答えろ!!!」

突然怒鳴りつけてくるエドワードに困惑しながら、凶報を伝えてきた男性は必死に記憶を探る。

ワポルの帰還で頭がいっぱいになっていたが、よくよく思い返してみればそんな男がいたような気がした。

「い……いたような気が……い、いや、確かにいた!! 大人しそうだけどなんか不気味な奴が……!!」

何度も力強く頷く男性を解放し、エドワードは見たことがないぐらいに憤怒で顔を歪める。

ギリギリと食いしぼりながら、エドワードは思い出すことも忌々しいその名を口にす
る。

「タッカー……!!!」

怒りにごう、と燃え上がる金色の眼は、いまにも爆発しそうなほどに昂っていた。

「戦える者は!! 武器を取ってビッグホーンへ!!!」

国王の帰還の報は、多くの者たちの足を使って島中に伝えられた。

みんな即座に各々の家に急ぎ、使い慣れようと毎日手入れをしていた武器を手の外へ

飛び出していく。

「急げ!!」

「戦える者はビッグホーンへ!!!」

「ドルトンさんに続け!!! ワポルが帰ってきやがった!!! 武器を持って、戦うぞ!!!」

かつては兵士たちや幹部、そしてワポルの力によって抑えつけられ、屈するしかなかった弱き民たち。

しかし今は違う。またあの日々のような最悪の治世に戻るくらいならば、どれだけ傷つこうとも徹底抗戦する所存であった。

「おれ達の国を守るんだ!!! 武器を取れ!! ビッグホーンへ!!!」

国を脅かす、強力な力を持った愚者を追い出すために、人々はその目を闘志で燃やしていた。

一方、ビビとウソップはドルトンが置いて行ったそりに乗り、「魔女」が向かったというギヤスタに急いでいた。

ドルトンがワポルのもとへ向かってしまったために、道案内の不在といふかなり不安な状態だ。

「おいビビ! 本当に、こっちであつてんだらうな…!! 魔女のいるギヤスタって町は

…!!」

「そう言われるとちよつと自信ないんだけど…」

「自信ないじゃだめじゃねエか」

村のものにもらつた地図を頼りに、ビビが案内するがそれも頼りない。

土地勘がないために仕方がないが、今はこれしか頼るものがなかった。

「いいか!! もしナミ達があつとの思いで城について医者がいなくなつたらあいつらオイ何やつてんだ? つてことになる訳だ!! 王女だろ、何とかしてくれ」

「関係ないじゃないそんなこと!! だつたらウソツプさんが見てよ地図」

「馬鹿言えつ!! 一面雪だらけなんだぞ!! おれは全くわかりません!!」

無茶を言うウソツプにビビがツツコミを一れるが、騒いでいても状況が好転するわけがない。

もめるのもそこまでにして、ビビはもう一度地図で目的地を確認した。

「いい? …とにかくこの道の途中にギヤスタへの看板があるはずなの。それを見落とさないで」

「OK、任せろ!!」

勇ましく答えるウソツプだったが、そのすぐ横をギヤスタを示す看板が横切つたことに気づかない。

そして何より、面子が一人足りていない事にも気づいてはいなかった。
「……あれ!!? そういやエドのやつどこ行ったんだ!!?」

「デ〜ルリリリリイ〜シヤ〜ス!!」

バリバリバキバキポリポリゴックン!!

家屋をまるで菓子でもかじるかのように咀嚼したワポルが、腹をいっぱいにして歓喜の咆哮を上げる。

何でも食べる『バクバクの実』の能力者にとっては、この世の全てのものが食糧であった。

「いいか国民どもよ、この国にあるものは全て、おれのおかし!! おれ様がなぜに偉いのか教えてくれ、クロマリーモ!!」

「それはあなた様が王様であらせられるからです、ワポル様」

「その通りっ!! やはり家はこんがり焼いたウエルダンに限るぜエ!!」

見るも無残な姿になったどこかの誰かの家の残骸の上で、ワポルが満足げに腹をさする。

住んでいる者の悲しみなど気にも留めない。なぜなら自分は王であり、何をしても許される絶対的存在であると信じているからだ。

「して…情報ですがワポル様…!! 恐れ多くもあの麦わらの一味、我らがドラム城へ向かっているといふ情報で」

「なにいつ!!? 何故だ!!!」

「それがまたしても恐れ多くもあの賊医者、Dr. くれはがドラム城に住んでいるからだと…!!!」

「なアにをオオ!!?! あのパバアがおれの城に!!!」

それ故に、自分の考えに逆らうものは誰であろうとも逆賊であった。

自分の思い通りにならない者、言うことを聞かない者、自分に齒向かう者、邪魔なものはみんな追放し、処刑し続けてきたのだ。

「どこまでおれをコケにするのだあの反国パバアめつ!!! 叩き出して麦わら共々このおれが食い潰してくれるわ!!!」

「ああ…あの目障りな老婆ですか。ぼくも実はあのパバアに張り倒された恨みがあるんですよね…」

「おやお前も共に来いつ!!! 野郎ども、準備を!!! 城へ帰るぞ!!!」

ワポルは苦い顔をするタツカーに同意し、さっそく反逆者を処刑するために城に向かうとする。

怒りで頭をいっぴいにする彼はその時、猛スピードで接近する大きな影に気づかな

かった。

「そこまでだっ!!!」

突如声が響き、乗ってきた毛の長いカバの上に立っていたワポルをバツサリと斬り捨てる。

腹を切り裂かれたワポルが勢いよく倒れこむと、配下の二人と兵士たちが乱入してきた狼藉者を睨みつけた。

「何奴っ!!!」

「ぎゃ~~~~~~~~!! 斬られたア死ぬ〜っ!!!」

「殺す気で来たのだ。死んでくれて結構」

大袈裟に叫びまくるワポルに向けて、血の滴る大剣を構えた影、ドルトンは吐き捨てるように告げた。

それまで遠巻きに状況を探っていたビッグホーンの住人達は、ドルトンの登場にパツと表情を晴らした。

「ウヌツ…!! ドルトン!!!」

「貴様、生きていたのか…!!!」

「よくもワポル様を…!!!」

ワポルも配下の二人も、何のためらいもなく刃を向けてきたドルトンを憎々しげに睨

みつける。

ドルトンは構わず、耳障りな侵入者たちをさげすむように見下ろしていた。

「何て事なかるう。我らが『医療大国ドラム』の優秀な医師達の医療技術……そしてここに居る『綴命』の錬金術師タツカーの術をもつてすれば」

「そうとも、出でよ『イツシー20』!! 外傷部隊前へ!!」

「『手術オペを始めます』」

「ああ……私もですか」

配下の一人、黒いアフロヘアの幹部クロマーリモの合図で、数人の医者とタツカーが前に出る。

そして彼らはあつという間に、傷を受けたワポルに治療を施してしまった。

「いや……死ぬかと思ったね、実際」

「ああっ!!! いけませんワポル様、首の縫合がまだ済んでおりませぬゆえ」

頭をかいて起き上がるワポルの首から上がないことに医者たちは慌て、すぐさま首の縫合に取り掛かる。

王一人の治療に必死になる彼らを冷たく見やり、ドルトンは情けなさはらみながら元主君に告げる。

「ギア……ワポル、出て行こう……!! この土地にはもう我々は居てはいけないのだ……」

「……………ワポル？ ……………ワポルさ・ま・だ!! 我が家来ドルトンよ」

「ド…ドルトンさんはもう、あんたの家来なんかじゃないぞ!! ドルトンさんは政府側の人間で唯一国のために戦ってくれたんだ!! 命を賭けて…!! 死にかけてまでも!!」
「ハン…死ねばよかったのにな!! ドラム王国守備隊長の名の下にな、まっはっはっは。医者はいないこの国で、よく助かったものだ」

住民の一人の必死の叫びに、ワポルは実につまらなさそうに吐き捨てる。

長く自分に仕えてきたのなら、当然自分のために命を捨てるのが正しいとでもいうような態度に、住民たちの怒りは否応もなく募っていった。

「……………ドラムは、他国には医学の進んだ国だと認識されているが、誰が計り知れようか…!! 実は優れた医者は、王の城の研究施設にたった20人、他の医者達は全員『国外追放』になっていようとは」

「仕方あるまい、これが我が国の政治なのだから!!」

「そんなものが政治であつてたまるか!! 国中を見渡しても医者は城にいる20人のみ、病人が出ればお前にひれふす以外に方法はない。これでは政治どころか国中の病人を人質にとつた犯罪だ!!」

こんな男に長年仕えていたことさえ恥ずかしい、そんな感想が聞こえてくるような叫びをあげ、ドルトンはワポルたちを完全に敵と見定める。

最初の勧告にもし応じれば余計な血を流さずに済んだのに、もはや力尽く以外に解決方法はないようだった。

「いいたいことを言ってくれ!!」 やっちまえ野郎どもっ!! お前達の元隊長を!!」

「仮にも、お前は私が世話になった先代国王の息子。いつの日か、きつと目を醒ましてくれると希望を抱いていたが…無駄だった!!」

怒りが頂点に達したドルトンの姿が、見る見るうちに変化していく。

頭からは二本の立派な角が生え、全身が黒々とした毛並みに覆われていく。

ワポルのような超^{パラシニア}人系とは異なる、獣の力を秘めた海の悪魔の力が、顕現しようとしていた。

「うわっ出た ッウシウシの実」 モデル 『野牛』^{バイツン}!!!」

「く…撃て!!! とにかく撃て!!!」

兵士たちもその能力の凄まじさを肌身で知っているのか、攻撃を受ける前に仕留めようと容赦なく発砲する。

だが、放たれた弾丸は一発も当たることがなかった。ドルトンの残像が見えた後を、虚しくすり抜けていくだけだ。

「あ…当たらねエ、よけられてる…!!!」

「元部下とて容赦はせんで…フィドル^{バンフ} 突撃^{バンフ}!!!」

絶句する兵士たちに標的を定め、ドルトンは蹄でザツザツと雪を削る。

全身の力が突進の為のエネルギーに変換され、瞬く間に放たれた一撃が兵士たちをまとめて薙ぎ払ってしまった。

「……………!! ふ……………なんて迫力だ……………!!」

「強エ……………!!」

「これが……………動物系『悪魔の実』の、野生の力……………!!」

住人達は、圧倒的な力を見せるドルトンに畏怖の視線を集める。

かつては憎い男の配下にあつた彼は、もはや人々には欠かせない頼るべき英雄となつていた。

ドルトンはフンツと凄まじい鼻息を鳴らし、残るワポルと配下たちを睨みつけた。

「もう、お前達には愛想が尽きた……………!! 国の危機に先頭切つて逃げ出す様な王のいる国など……………!! 滅んだ方がよい……………!!」

「この野郎め……………生意気な口ばかりたたきやがつて……………!!」

「我らと貴様は互角の『三幹部』。我ら2人が相手では勝機はないぞ」

だがワポルたちは、それだけの力を見せつけられても全く臆す様子を見せない。

ピエロのような格好をした配下の一人、チェスはにやりとそこ意地の悪い笑みを浮かべると、突如巨大な弓矢を見当違いの方向に構えだした。

「何より…付き合いが長い…!! それが不運、お前の弱点など…熟知している…!! 見てろ」

「な…」

チエスが狙う先を見たドルトンが、武器を手に駆け込んでくる他の村の人々の姿を見つけて顔色を変える。

ドルトンの体は、考えるよりも先に動いていた。村人たちの背丈ほどに大きな矢が放たれるよりも前に、その身を盾にするために飛び出そうとしたのだ。

だが、ドルトンがその身に矢を受けることはなかった。

「マウント・スメール 須弥ノ山”!!!」

いきなり聞こえてきた、乱暴な詠唱のようなものとともに、巨大な氷の壁が創造され、放たれた矢を弾いたからだ。

城は役目を終えると粉々に砕け散り、キラキラと欠片を散らばらせて消えていく。

「(…)…これは」

「…つたくよオ、無茶がすぎるぜドルトンさんよ。一人で突っ走んのを止められるってのはおれの方な気がすんだが…?」

驚きで言葉を失っていたドルトンは、自分に向けられた聞き覚えのある声にハッと振り向く。

ザクザクと雪を踏みしめ、何となく不機嫌そうに近づいてくる一人の青年の姿に、ドルトンは思わず大きく口をあけて固まってしまっていた。

「この国の王になるべき人間が……こんなところで死んでくれるなよ」

「エドワード君……!!!」

ミシミシと機械オートメイルの拳を軋ませ、不敵な笑みを浮かべたエドワードがそう告げる。

かつて悪事を暴き、追放した悪魔を前にした少年が、再び怒りを携えて参戦を表明してみせた。

第74話 “雪上の戦い”

キラキラと氷の欠片を撒き散らし、砕けていく氷の城。

その向こう側から現れた小柄な少年に、ワポルの配下たちだけではなく庇われた住民たちも目を見開いていた。

「な……なんだ貴様は……!!」

「ん……? いや待て!! 貴様は確か……」

クロマリーモは警戒し、少年・エドワードの顔を見たチエスが目を見開く。

住民たちの何人かも、見覚えのある少年の顔に徐々に一年前の記憶をよみがえらせていった。

「あいつ……エルリック・エドワードだ!!」

「なに……!! あのタツカーを捕まえてくれた例の錬金術師か……!!!」

ドルトンを、そして自分たちを守ってくれたエドワードに、安堵と期待の視線が集まっていく。

だがエドワードに集まる視線は友好的な視線だけではない。とくにワポルたちの方からは、肝心なところを邪魔された苛立ちが向けられていた。

「エドワード君……来ていたのか。偶然とは恐ろしいものだね」
「タツカー……!!」

その中の一人、タツカーが少し意外そうな様子で声をかける。

エドワードがギリリと殺意を混ぜて睨みつけると若干怯える様子を見せたが、すぐに元の平静を取り戻した。

「正直今すぐめエのつらブツ飛ばしてやりてエが……後回しにしてやるよ」

エドワードはいったんタツカーから注意を外し、忌々しげに睨みつけてくるワポルを見据える。

さほど深くかかわった記憶はないが、それでも忘れられない憎たらしい顔だ。

「よオ……ワポル……この国に来た時、わざわざ顔を出したのにてめエ……『めんどくさい』つつつて顔すら見せなかったよな……!! あんときは怒るよりも先に呆れたぜ……!!」
「まははははは!! どこにちつぽけな田舎者に謁見する王様がいるのだ!!? カバじやな

——い!!」

「……………ちつぽけ……………」

ワポルがバカにした様子で口にした単語に、エドワードはピクリと肩を震わせてうつむく。

エドワードが身長のことを気にしていることを知っているドルトンは、またいつかの

ように暴走してしまうのかと思わず身構えてしまった。

「ああ……そうだ……!! おれはちっぽけなただの人間でしかねえ……!!! でもなア……
てめエらのようなクソみたいな野郎をたたき潰せるぐらいの力はある……マシな人間だ
……!!!」

しかしエドワードは、激昂することはなく真つすぐにワポルを睨み続けた。

見下すように訝しげな視線を向けてくる、臆病で卑怯な最低の大人たちを前に、エドワードは全力で自分の怒りをぶちまけた。

「ハツ……医療大国なんて言っても、国の王がこんなんじゃもともと先が知れてたもんだな!!!
どんなに医学が発達しようが!!! バカにつける薬はねえんだよ!!!」

「ウヌウツ……!!! ま……またしても王様であるおれ様にそのような……!!!」

カチーンとワポルの頭が怒りに支配される。

一方でエドワードのセリフを聞いたドルトンは、それに覚えがあることに驚愕する。

それは間違いなく、自分がかつてワポルに向かって言ったことと全く同じものだったからだ。

「……君という奴は」

妙な偶然に苦笑し、ドルトンは改めて国を脅かそうとしている賊を前にする。

エドワードが自分と同じ思いを口にしたことで、己がワポルたちと同罪だという思い

が否定された気がした。ずっと背負っていた重荷が、わずかに軽くなったように感じられた。

「ギア…行くぞドルトンさん!! こいつらまとめて…海に叩き出して二度と帰って来れねエようにしてやる!!!」

「……ああ……!!」

バシン、と鋼の拳を手のひらに打ち込み、エドワードは大剣を構えるドルトンと並び立つ。

元部下と余所者、取るに足らない連中に邪魔され、怒りを募らせるワポルが、部下たちに抹殺の指令を下そうとした、その時だった。

どこか遠くから、ビリビリと震える轟音が聞こえてきたのは。

「ん…何だ…地震か……?」

思わず、互いに向けていた敵意が薄れる。

そしてふと山の方を振り向くと、その場にいた全員の眼が大きく見開かれることとなった。

時は少し遡り、場所はドラムロッキーのふもとから少し登ったところ。

凍える吹雪が吹き抜ける中を、白い巨体が高々と跳躍した。

「飛んだ!!!」

驚愕に目を剥くサンジに向かって、巨大なうさぎは太く逞しい腕を振り下ろす。

足を取られそうになりつつもどうにか躲すと、振るわれた腕は一撃で新雪を大量に抉り取った。

「ウソだろ何だ、この動きはっ……!!!　ゴリラかよ!!!」

「違う!!　白熊だ!!!」

「うさぎだよ!!!」

「お前、いまゴリラだって言ったじゃん」

「おそれていた事態が現実……!!　あれがドルトンさんの言っていた“ラパーン”ですよ……!!!」

「——でこの数か!!!」

見たこともない獣が、恐るべき能力を發揮している光景に固まる一同。

サンジが目を向ければ、殴りかかってきた個体と同程度の巨体がずらりと並んでいる。

そのいずれもが、ルフィ達に対して恐ろしいほどの敵意を抱いているようだった。

「おいエレノア!!　こいつら説得してどかせられないのか!!」

「無茶言わないでよ!!　私のは単に相手の“声”が聞こえるっただけで……!!　自由に会

話ができるような便利な能力じゃないの!!! それに:!!」

船長からの無茶な指示を、エレノアは即座に拒否する。

続いて目を向ければ、取り囲もうとしてくるラパーンたちのうち、顔に傷のある一体から感じる庄に冷や汗を流す羽目になった。

「なんか……あの……あちらさん完全にお冠みたいで、説得にに応じてくれる雰囲気じゃないんだよね………具体的に言うと」

エレノアが言うと、傷のあるラパーンの、そしてその肩に乗っている子供のラパーンの眼がギリリと強く光を放った。

『おんどれ……うちのかわいい愛息子をどついでくれよったんはどこのだいつじゃ……!!!』

……だ、そうです」

「犯人はこいつです!!!」

「オロすぞでめエラア!!!」

即座に仲間を売ろうとするルフィとアルフォンスに、サンジはふざけるなど思いつきり怒鳴りつける。状況が違えば、この場で蹴り飛ばしているほどだった。

だが今は、そんなことをしている場合ではない。戦闘態勢に入りかけたルフィを制し、サンジが前に出た。

「いいか、ルフィ。お前は絶対にこいつらに手エ出さな!!!」

「なんで」

「例えば、お前が攻撃をしたとしても受けたとしても、その衝撃の負荷は全てナミさんにまで響いちゃうからだ!! 死んじまうぜ、そんなことをしたらマジで」

「わ…わかった。戦わねエっ!!」

背中に弱っているナミがいることを思い出し、ルフィは顔色を変えて頷く。

しかしそんな彼らの事情を知る由もなく、そして気遣う必要のないラパーンたちの数体が、さっそくルフィたちに向かって襲い掛かってきた。

「じゃ、どうすりゃいいんだ!?!」

「とにかくよけろ!! よけて、避けて——で、退くな!?!」

「難しいぞそれっ!?!」

うさぎの敏捷性で迫りくる、白い熊のサイズの巨体が十数体。

とにかく逃げて逃げ続け、一刻も早く山頂の城に着かなければならないのだと、ルフィたちは大変な課題を抱えることとなってしまった。

「フランシエ 腹肉…シユート!!」

最も早く向かってきたラパーンを、サンジが気絶させる程度の威力で蹴り飛ばす。

しかし思ったほど飛距離は出ず、落下したラパーンはさしたるダメージを負った様子も見せずに立ち上がった。

「く……いちいち雪に足とられてちや、ろくなケリ入れられねエな」

忌々し気にサンジが眩くと、残るラパーンたちの眼がキラーンと光る。

完全にルファイたちを敵と見定めたラパーンたちは、ルファイたちの退路を断つ様に一斉に飛び掛かってきた。

「来たア!! 一気に入つ!!!」

「援護します!! 森へ入りましょう!!!」

「何とか振り切るんだ、こいつら全部と戦ってたら日が暮れちまう!!」

「くそっ」

即座に反転したルファイたちは、まずは相手を撒いてこの状況をやり過ごそうと森の方に急ぐ。

しかし慣れない雪中と雪国の生物相手では、ろくな速度を出せない。あつという間に、一同はラパーンたちの群れに追いつかれそうになっていた。

「足止めするっ!! あんたたちは先に行きな!!!」

「すまんっ!!」

「エレノアちゃんっ!!」

「姉弟子っ!!!」

意を決し、エレノアが森に向かうルファイたちを庇い、ラパーンたちの前に飛び出す。

かまう事なく突っ込んでくるラパーンたちを見据えると、エレノアは両手のひらを打ち合わせ、雪の中に思いつきり手を突っ込んだ。

「守ってみせるっ……!!」 “金角叫盾”!!!

雪の冷たさが肌を貫くと同時に、迸った閃光が雪を見る見るうちに變形させていく。ほぼ一瞬で創造された幾つもの盾が障害物となり、ルフイたちの方にも向かおうとしていたラパーンたちをまとめて足止めしてみせた。

「さつきは本当にごめん……!!」 あなた達の宝物を傷つけたことは許せないと思う……でも!! 私達にも助けたい人がいるんだ!!! 邪魔しないで!!!」

言葉が通じるとは思えないし、聞き入れてくれるとは思っていない。

しかしそれでも精一杯の誠意を見せようと声を張り上げるエレノアに対し、返って来たのは怒りのこもった殴打の雨だった。

「……!!」 お願いだから……」

エレノアは継るようにラパーンたちを見つめ、向かってくる太い腕を躲し続ける。

懸命に雪の中を跳ねまわるエレノアだったが、やがてそれにも限界が訪れた。

踏みしめた個所が雪が多く積もっていた場所らしく、ずぼつと深く足がめり込み、バランスを崩したエレノアは激しい殴打をまともに受けてしまったのだ。

「くっ……いいパンチしてくるじゃないの……」

吹き飛ばされ、雪の上に倒れ込んだエレノアは、頭から血を流し朦朧としながらラパーンたちを見やる。

散々逃げ回ったおかげか、ラパーンたちの注意はほとんどエレノアに集中している。ルファイたちに敵意を向けている者はいないようだった。

(これでいい……!!　これで何とか、あいつらが逃げる時間をかせげれば……!!!)

説得は可能な限りなら、本命の狙いは、ルファイたちがラパーンたちを突破できる時間稼ぎをすることだ。

敵意が殺意に代わりそうな気配をひしひしと感じながら、エレノアはふらつく体を無理矢理起こし、回避のために構えた。

「ガルルルル!!　ガルルル!!」

先ほどサンジに蹴り飛ばされた子供のラパーンが、親とその仲間を応援するように吠える。

巻き込まないようにという配慮か、群れから少し離れた場所にいる子ラパーンが、大きく腕を振り回してエレノアを睨む。

その姿が次の瞬間、消え失せた。

「ガルッ!!」

途切れた我が子の声に振り向いたラパーンたちは、子ラパーンがいた雪の上がごっそ

り削れ、落下していく姿を目の当たりにする。

崖の上に積もった雪が張り出した、不安定な場所に置いてしまったのだと気付いた時には、子ラパーンは崖の下に向かって真つ逆さまに向かっていた。

駆け寄ろうとしたラパーンたちを追い抜く、翼を生やした人間に気づくまでは。

「……さつきはごめんね、おチビさん」

そんな声が聞こえてきた直後、崖の向こう側からぽーんと子ラパーンが放りだされた。

慌てて我が子を受け止めた親ラパーンは、翼の人間が作った壁にぶつかりながら我が子を抱きしめる。

「ガル……」

すぐさま崖のすれすれから覗き込めば、ゾツとするほどに高く険しい崖の真下へ白い影が落ちていく光景が見える。

その姿が見えなくなると、ラパーンたちは皆耳をへたれさせ、悲し気に目を伏せ始めた。激しい後悔に襲われているように。

しかしその表情も、背後から聞こえてきた轟音で一変してしまふ。

「……!!?」

翼の人間が作った壁、自分が先ほどぶつかったそれがゆつくりと傾ぎ、気付いた直後

には雪の中にめり込んでしまっていた。

その衝撃が伝わると、辺りに突然地響きが発生し始めた。

「なにしてくれてんだ、あのクソうさぎ共…!! ウソだろ」

「あばばばばば…!!!」

「おいサンジ、アル、どうしたんだ」

サンジとアルフォンスは、エレノアが足止めをしていた場所を見上げガタガタと震えていた。

ルフィが訝しげに尋ねると、二人して必死の形相でルフィを前に押し出した。

「おい…!! 逃げるぞてめエら」

「逃げるってどこへ…」

「どこへでもいい…!!! どつか遠くへだ…!! 雪崩が来るぞオ!!!」

サンジが絶叫し、ルフィも慌てて走り出す。

後先考えず、とにかくぜんりよつくで山をかけ降りていくサンジ達に、突如発生した白い津波がとてつもない勢いで迫った。

「あのうさぎ共、絶対許さねエぞ、畜生オ!!!」

「なんでいつもいつもこんな目に——!!!?」

「どうしたらいい!? どうしたらいいんだサンジ!? アル!!」

「知るかよ!! とにかく1にナミさん2にナミさん!! 3にナミさん4にナミさん5にナミさんだ、わかったか!! 死んでも守れ!!」

「はい!!!」

「わかった!!! だけどどうやって!!!」

「あれだ!!! あの崖っ!!」

「がけ!!!」

「走って!! 少しでも高い場所に登るんです!!!」

もはやナミのために安全に、などと考えている暇はない。

怒涛の勢いで迫る白から逃れるために知恵を絞るサンジは、途中に張り出している岩肌気づき、それを指さし方向転換した。

「来たア!!!」

「ぎゃああああ!!!」

「ひいひい!!!」

なんとか見つけた、このあたりで最も高い場所に、ルフィたちはがむしやらに急ぐ。

まっすぐに駆けおりたところを方向転換し、真横から雪崩が迫るといふ恐怖に苛まれながら、三人は何とか崖の上まで駆け上がった。

「よし!! 間にあつ……………!!」

安堵しかけた三人だったが、背後に映る光景に言葉を失う。

襲い掛かろうとしていた雪崩は、三人の予想をはるかに超える量だったのだ。

「駄目だ、高さが足りねエっ!!」

「うわあああああつ!!」

「のまれる——っ!!」

分厚い壁のように広がる雪の洪水に、ルファイたちはなすすべが見つからず絶叫する。

そんな中、アルフォンスのみがたった一つ策をひねり出していた。

「……………!! っこうなつたら……………」

アルフォンスは意を決し、事前の断りなくルファイとサンジの襟首を掴む。

そして唾然とするルファイたちを、思いつきり頭上に向かって放り上げたのだ。

「ボクの分まで……………頼みます」

「アル!!!」

「アルフォンス!!!」

大きく目を見開き、勝手に自分を犠牲にした仲間を叫ぶ二人の目の前で、アルフォンスの鈍色が、純白に呑み込まれていった。

「ヒュー……ヒュー……」

しんしんと降り続ける粉雪。

切り立った崖の下で倒れ伏したエレノアは、途切れそうな呼吸を繰り返していた。

(……あー、これはちよっと……ヤバいかもなー……身体ぜんっぜん動かないわ……骨……折れてんのかな……熱い……)

あたりの雪には全身から流れ出た鮮血が滲み、傷口から徐々に熱が奪われていくような錯覚を覚える。

かすかにも体を動かすことができず、エレノアはただ迫りくる闇を待つことしかできずにいた。

(はやく……ルファイ……たち、の……所……へ……)

まだ仲間達が困難を乗り越えたかは分からない。

なんとかして合流し、安否を確認してDr.のもとへ向かわなければと思うのだが、エレノアの体は全くいう事を聞いてくれなかった。

「……………だい、じょう、ぶっ」

そんな中、聞こえてきたたどたどしい口調の奇妙な声。

エレノアはその声の主の顔を確かめることもできず、次第に重くなる瞼に敗け、意識を手放してしまった。

「いやあ助かったぜビビ」

「よかった生きてて」

「しかし心なしか俺の顔、はれてないか？」

「し…しもやけよしもやけ!! 雪国は大変つ…そ…それより早く、この居場所と現状を把握しなきゃ」

突然発生した雪崩で死にかけて二人は、なぜかぎこちない様子で村に向かって歩く。

あの世に行きかけたウソツプを気付ける際、ビビが顔面を叩きすぎたことは、墓まで持っていくことに決めながら。

「え!!」

「うわっ!! 何だア!!」

その時、雪の中を歩いていた二人の目の前で、二つの雪像が立ち上がる。

何事かと身構えると、雪像はぶるりと体を震わせ、見覚えのある姿と声をあらわにしていった。

「ああ——まいったまいった。この、さみイのにいきなり雪崩とはついてねエな。でも、まあこれも一つの寒中水泳か」

「ブア——ツクシヨイ!!」

自らの体を抱きながら、上半身裸のゾロと盛大なくしゃみを放つエドワードが立ち上がった。

ビビとウソツプは、何の脈絡もなく現れた二人にただ唾然とするばかりであった。

「ゾロ、エド」

「ん？ ……………あ。…おう、ビビ！」

気づいたゾロが声をかけるが、なぜかウソツプを見て言葉を詰まらせる。

腫れあがった顔の中から伸びる鼻に気づき、ようやくウソツプだと気付いたようだ。

「ああ、ウソツプか。お前ら何やってんだよ、こんなところで」

「「それはこっちのセリフだ!!!」」

盛大なツツコミに対し、寒中水泳だと大真面目に語ったゾロに、三人とも呆れた視線を向けていた。

しかしゾロは気にせず、自分と同じように埋まっていたエドワードに視線を移した。

「…で、お前は何やってんだ？」

「はっ!!! そうだ!!! こんなことやってる場合じゃねエ!!!」

「な…なんだア?!」

「なに?! どうしたの一体?!?」

慌てた様子の子の彼にビビとウソツプが尋ねると、エドワードは会話の時間さえもつたい

ないと言った慌てふりで、ビビたちに叫んだ。

「ドルトンさんが雪崩の下敷きになっちまってんだよ!!!」

第75話 “二人のパケモノ”

「下がれ下がれ、ドルトンはもう死んだ!!!」

雪崩に襲われ、真っ白に染まった村の中心で、ワポルの配下たちが住民たちを解散させようと怒鳴っていた。

ドルトンが？みこまれたであろう箇所立ち、近づこうとする住民たちを牽制していた。

「ドルトンさんがあれくらいで死ぬもんか!!! お前達元部下だろう、何とも思わないのか!!!」

「おれ達は国王ワポルの家来だ!! ワポル様の敵に回れば命はない!!!」
住民たちを守るために最前線に出ていたために、雪崩から逃れられなかったドルトンを救いたいの、兵士達じゃ立ちほだかつてそれができない。

ワポルの姿はすでになく、邪魔者がいなくなつたと判断して兵士たちを残して、先に城に向かったようだ。

「文句がある奴は遠慮なくかかってくるがいい!! ドルトン抜きじゃそんな勇気もな……」

住民たちが何もできないことをいいことに、隊長格の兵士が下卑た顔で嘲笑する。

だがその顔が突如、二組の拳によって真横から思いつき殴り飛ばされた。

「ふんっ!!!」

「な、Mr. ブシドー!!」

「誰だ!!?」

「おい君やめろ!! そいつらに手を出すと」

絶対的な権力と兵力を有する相手に喧嘩を売った緑の髪と金色の髪の男たちに、住民たちはなんてことをと震えあがる。

しかしゾロは気にせず、ぶん殴った兵士から上着をはぎ取ってご満悦になっていた。

最初からそれが目的であつたらしい。

「うっはっはっは!! あつたけエっ!!!」

「かまうことねエっ、ゾロ!! あつたまつたらこいつら潰すの手伝え!!!」

「あいよ」

もう絶対に許さん、と猛牛のように鼻息を荒くするエドワードに、ゾロは即座に応じた。

そして数十人の兵士たちに対する一方的な蹂躪が、始まった。

どこを見ても、真つ白な寒空が広がる山頂の美しい城。

穏やかな雪風が外から聞こえる中、城の中の一室で一人の老婆と少年の声が変わり交わされていた。

「ドクトリーヌ、抗体の反応があるよ」

「ああ…：そうだろうね。じゃ原因は何だい、答えてみな」

「ケスチア」

「そうさ、お前が見てな」

ナミは少しだけぼんやりとしながら、どこからか聞こえてくる何かを削るような音と水音に気づく。

うつすらと開いた目に、お盆を持った小さな人影が近づいてくると、ナミは思い切つて体を起こした。

「だれ？」

突然かけられた声に、小さな人影——鹿科の角を生やしたぬいぐるみのような何か、ビクウツと後ずさる。

それは慌てて走り出し、部屋の入口の方向に向かい影に飛び込むが、なぜか全身をほとんど晒したままであった。

「逆…：なんじゃない？」

「……………!!」

「遅いわよ。隠れきれてないし、何なの？ あんたたち」

体を隠しつつ顔を覗かせるといふ本来の形にすぐに変わるが、大きな角やつぶらな瞳が半分見えているために意味がない。

指摘されたことで焦ったのか、誤魔化すように謎の生物は声を張り上げた。

「う……………うるせエ!!! 人間っ!!! それと、お前熱大丈夫か？」

「喋った!!!」

「ぎゃあああああつ!!!」

「うるうるっさいよチョッパー!!!」

ナミが驚きの声を上げると、それ以上に驚いた謎の生物が悲鳴を上げて盛大に倒れこむ。

隣の部屋にいた老婆が、聞こえてくる騒音に怒鳴り声を上げ、ナミのいる部屋に姿を現した。

「ヒ——ツヒツヒツヒツヒツヒ!!! 熱ア多少ひいたようだね、小娘!!! ハッピーかい!!!」

「……………？ あなたは？」

「38度2分…んん…まずまずだ。あたしや医者さ、Dr. くれは」。『ドクトリーヌ』と呼びな、ヒ——ツヒツヒツヒ」

老婆とは思えない高い身長に艶のある肌、さらにはサングラスに腹出しルックという若々しい姿のその医者、ナミの額に指をあてただけで正確に熱を測る。

顔に刻まれたしわだけが年齢を示しているDr. くれはは、まさしく「魔女」といった笑い声でナミを歓迎した。

「医者……じゃあここは……」

「若さの秘訣かい!!」

「ううん、聞いてないわ」

「ここはそうさ。山の頂上にある城さね」

窓の外を見れば、確かに吹雪いている以外に見えるものは何も無い。今自分がいるのは、島で最も高いという山頂の城に他ならなかった。

そこでナミはハッと我に返る。自分を背負ってここまで連れてきてくれた仲間達の姿が見えなかったからだ。

「……だったら私の他に、あと4人いたでしょう!!」

「二人は知らないが……ほかの3人ならとなりの部屋で寝てるよ、ぐつすりだね。タフな奴らだ」

慌てるナミに対し、くれはは平然とした様子で応える。

別の部屋の方を見やり、治療を終えてベッドの上に寝かせた三人の特徴を思い出し、

くれはは呆れた笑みを浮かべていた。

「麦わら帽子の小僧とぐるぐる眉毛の小僧と……あとは妙な羽の生えた小娘さ」

「そつか……いないのはアルだけか。じゃあまだ安心だわ……別の意味で丈夫だもん、あいつ」

「ヒツヒツヒ……!! 大した信頼だね」

聞きようによつては薄情なセリフだが、アルフォンスの事情を考えれば心配するだけ無駄な気もする。

その時、ナミたちのいる部屋の扉が開き、全身を包帯でぐるぐる巻きにしたエレノアがふらふらと入室した。

「……Dr. くれは。お会いできて……光栄です……」

「おや、もう起きてたのかい。お前さんもたいがい丈夫だね」

がくりと膝をつきながら、エレノアはか細い声でくれはに告げる。

重傷で動くことさえ辛かるうに、わざわざ礼をするためにやってきた律義さに、くれはは思わず険しい目でエレノアを睨んでいた。見ていていい気がしないのは、ナミも同じ事であった。

「エレノア……私のことはいいいから寝てなさいよ。見てるだけで痛々しいわ」

「ぶつ倒れてるあのバカたちの分も……私の方から礼を言っておかないと、気がすまな

「いんだよ」

治療はされているとはいえ、ところどころ血がにじんでいる姿はまともに見てなどいられない。

エレノアは全身に走る激痛を押しつけ、くれはに深々と頭を下げた。

「……………本当に…!! 本当に…ありがとうございまして…!!!! お礼は必ず……どんなに高くてもさせていただきます…ありがとう…!!!!」

「ヒ——ツヒツヒツヒ!! その怪我、忘れんじやないよ?」

痛むのも、苦しいのも、自分がしっかりと生きている証拠。

それをわかりづらく伝えるくれはに、顔を上げたエレノアは思わず苦笑を返していた。

くれははナミの方に近寄ると、ナミのシャツを捲り上げて腹部を二人に見せた。

「見な。こいつが原因だよ」

「え、何?! これ…!!」

ナミが見下ろすと、自分の脇腹に何か発疹のようなものできてきていることに気づく。

虫刺されのようにも見えるが、ハエや蚊ではならないような毒々しさを感じる症状に、ナミは困惑の目を向けた。

「『ケスチア』って虫にやられたのさ。高温多湿の密林に住んでる」

「……!! あの『5日病』の……!!?」

「よく知ってるじゃないか……有毒のダニでね、コイツに刺されると刺し口から細菌が入っちまって、体の中に5日間潜伏して人を苦しめ続ける」

「……名前だけなら、でもそれって確か……」

「40度以下にや下がらない高熱・重感染・心筋炎・動脈炎・脳炎!! 刺し口の進行から見て今日は感染から3日目ってところか。並の苦しみやなかつたはずだが、放つといても5日経てば楽になれた……ヒツヒツヒ……」

楽になれたならそんなに問題ではなかったのではないか、そう思うナミだったが、話を聞いていたエレノアは渋い表情でくれはを見つめた。

「それ、ようするに5日目に死ぬからってことですよね」

「そのとおり……」

「……………え!!?」

目の前で交わされる聞き捨てならない会話に、ナミはぎよつと目を剥いて固まる。

ようやく自身がどれほど危険な状態にあったのか理解し、戦慄するナミにくれははむしろ楽しそうに語ってみせた。

「ケスチアは100年も前に絶滅したときいていたが、一応抗生剤を持って役に立ったよ。お前達一体どこから来たんだい。太古の島の密林を腹出して散歩でもしてたって

のかい？ ヒツヒツヒ、まさかそんなわけ…」

「あ」

冗談のつもりだったのか、おかしそうに笑ってくれはだったが、ナミがそう言えばと真面目な顔で固まるのを見て目を丸くする。

エレノアも、巨人達の島でナミがしていた格好を思い出し険しい顔になった。

「心当たりがあんのかいつ、あきれた小娘だ」

「…今度から、ちゃんと準備してから島に上がろうね」

「うん…」

「寝といで。まだ完璧に治療は済んじやないんだ」

元をたどれば自業自得ではないのか、そんなことを思い頬を引きつらせるナミの額をつき、くればはナミに布団に戻るように言った。

しかし急ぐ理由のあるナミは、どうにか早く旅立てないかとくれはを見上げる。

「どうもありがとう。熱さえ下がればもういいわ。あとは勝手に治るんでしょ？」

「甘いね、お前は。病気をナメてる!! 本来なら治療を始めて完了まで10日はかかる病気だ。また、あの苦しみを繰り返して死んじまいたいなら話は別だがね。あたしの薬でも3日は大人しくしてもらおうよ!」

「3日なんてとんでもない。私達、先を急いでて…」

告げられた残酷な診断に、そんなわけにもいくかとナミは無理に起き上がろうとする。

しかしそれは、恐るべき素早さでナミを組み伏せ、メスを突きつけたくれはによつて叶わなかった。

「あたしの前から患者が消える時はね……ヒツヒツヒツ治るか!! 死ぬかだ!!! 逃がしやしないよ」

一ミリでも動けば、本気でこの老婆は自分を殺す。

本当に医者なのか疑いそうなほどに、くれはの放つ殺気は凄まじいもので、ナミは逃げ出すことも考えられなかった。

「……あの主治医怖すぎるよ」

「絶対逆らおうと思うなよ。ほんとに殺されるから」

それを間近で見ていたエレノアは、あのメスが自分に向けられたらと想像し顔を青くする。隣に戻ってきた謎の生き物、チョッパーが深刻な声で忠告する。

とりあえずいう事を聞いておこうと、エレノアは何度もうなずいて答えた。

その時だった、どこからか騒がしい声が聞こえてきたのは。

「ギャンツ!! ギャインツ!!!」

バタンツ!!と盛大に扉を開いて飛び込んできたのは、長い人の髪を生やした、奇妙な

姿をした犬のような生物。

そしてそれに食らいつこうとするルフイと、それを止めようとするサンジだった。

「いたい!! いたい!!!」

「待て肉つ!!!」

「待て待てルフイ、こいつは流石に食べそうにない。狙うならもつと別のを狙え」

腹を空かせてちゃんとした判断力を失ったルフイを、サンジは比較的常識的に引き留める。

二人とも、狙われている生物が大きな声で叫んでいることに全く気付いていなかった。

「ルフイ、サンジ……」

「何やってんのあんた達……ってあの子は……!!!」

「驚いたね、あいつらもう動くのかい」

てつきりエレノアと同じくひどい状態なのかと思っていたナミは目を丸くし、くれはは医者から見ても重症だった2人が元気に騒いでいる姿に驚きの声を上げる。

エレノアは二人の無事に安堵しながら、二人が捕らえようとしている生物に見覚えがあることに気づいた。

「お前らつ……!!!」

その時だった。エレノアの隣に立っていたチョッパーが飛び出したかと思うと、そのシルエットを大きく変貌させていく。

目を見開くナミとエレノアの前で、筋骨隆々の人の姿に変わったチョッパーが、ルフィとサンジに襲い掛かった。

「ニーナをいじめるなア!!!」

思いっきり殴り飛ばされたルフィとサンジが、家具につつこんで謎の犬から離れる。

ニーナと呼ばれた犬はすぐさま走り出し、エレノアを盾にするように回り込むと、それを見たチョッパーは安堵のため息をつき、すぐさま逃げ出した。

「何あの鼻の青い……しかもみたいな何か」

「……………!!! 悪魔の実!!!」

「あいつが何かって？ 名前はチョッパー、ただの青つ鼻のトナカイさ……————ただし、

“ヒトヒトの実”を食べて“人の能力”を持つちまっただけさ。あいつにやあ、あたしの“医術”の全てをたたき込んであるんだよ」

沈黙するルフィたちを放置し、驚愕の声を上げるナミとエレノアにくれはは淡淡々と説明する。

彼女にとっては、少し変わった力を持った一人の弟子でしかないようだ。

「……………ごめんね？ うちのバカどもは後でたつぷり叱っておくから……」

「……………」

やがて我に返ったエレノアは、背後でぶるぶると震えているニーナに誠心誠意謝罪する。

この部屋に来てから謝罪ばかりしているな、と自嘲していると、やがて落ち着いたニーナが恐る恐るナミに目を向けた。

「だい、じょう、ぶ?」

「……………!!! この子も喋った……………」

「悪魔の実の能力者……………にしてはなんか違和感があるな」

「いわ、かん? いわかん」

チョツパーほどの驚きではなかったが、十分不思議そうに見下ろすナミに対し、エレノアはニーナの存在に疑問を抱く。

なんとというか、これまで彼女が見てきた動物系ゾオンの能力者と比較すると歪なのである。具体的に言うと、知能が著しく低い点など。

「……………まさか」

しばらく考え込んでいたエレノアは、ふと思いついた可能性に目を見開く。

背筋に走った寒気を抑え込み、無言で立っていたくれはに確かめるように問いかける。

「この子……合成獣キメラなんですか……!!? しかも……ベースは犬だけど人間の特徴も見られる……!! いったい誰がこんな非道なことを……!!」

「ど……どういうこと?」

「誰かがこの子を……人間と犬かなにかの生き物を合成させたんだ。しかも……すごく歪な形で」

「……それがわかるってことは、お前も錬金術師だね?」

絶句するナミをよそに、くればは先ほどとは打って変わって冷たい声で返す。

エレノアはなぜか、くればはから強烈な敵意を向けられていることに気づき、困惑で視線を逸らすと嫌悪に満ちた表情を浮かべた。

「……はい。こんな子をつくってしまうような人と同一視されるのはしやくですけど」

「そうかい……なら、あんただけは別に放り出してもよかったかね」

「っ……!!!!」

「ニーナが助けてやってくれとせがむから治療はしてやったがね……そうじゃなきゃ見殺しにしてたところさ。……医者失格といわれようがね」

吐き捨てるようなくれはの言葉に、エレノアはバツとニーナに振り向く。

崖から落下し、意識を失う寸前に見た何者か。それがニーナだったのだとすれば、この子は自分の命の恩人であるということになる。

その恩人の言葉がなければ動かなかったというくればに、エレノアは苦しげな表情で訪ねた。

「……………錬金術師は、お嫌いですか…？」

「…ああ、大きらいさ」

迷うそぶりも見せず、くれははエレノアから視線を逸らして断言する。

心配そうなナミの視線を無視し、くれはは椅子に腰を下ろして、険しい表情のまま深いため息をついた。

「昔…人によっちゃ……………人間の体を癒す医療方面に特化した錬金術もあると聞いて興味を持ったこともあるが…この子を見たときたん失せたよ。こんな哀れな生き物を作り出すのが錬金術なのかってね」

「……………さすがにここまでひどいモノを作りたがる人はそうそういませんよ」

「ヒツヒツヒ……………だが、現にここにいる」

否定するエレノアだが、気まずげな心地になってしまふのは仕方がない。

自分は違うと自信を持って言えるが、世の中には錬金術を悪用するどうしようもない連中がいるのを知っている。

錬金術師を知らない人たちからすれば、エレノアもまたそいつらと同類なのだ。

「こいつの名はニーナ……………人間だった頃の名はタツカー・ニーナ。父親の研究のために、

その資金を得るために犠牲になった……かわいそうな娘さ」

エレノアの膝の上に顔を乗せ、眠りについてしまったニーナを見つめるくればの眼差しは、厳しい言葉とは裏腹に慈愛に満ちていた。

第76話 “傷ついた心”

「仲間になってくれ!! 頼む!!!」

復活し、様々な事情を知ったルフィが開口一番に発したのは、くれはへの勧誘の言葉だった。

くれははやる気なさげに椅子に腰かけ、恐るべき年上相手にも臆さない青年にやりと笑みを浮かべた。

「ばあさん」

「ルフィ: そう言ったね、お前の名は」

「ああ」

なぜか自信満々に答えるルフィ。

そんな彼に突如、くれはの強烈な回し蹴りが放たれた。

「口には気を付けるこつたね!!! あたしや、まだツヤツヤの130代だよ!!!」

「うぶっ!!!」

「おお: すげエババアだな」

目の前の凄まじい光景に余計なことを口にしたサンジを叩きのめすと、くれはは懲り

ない様子で立ち上がるルフィを鬱陶しそうに睨みつけた。

「あたしに海賊をやれって？ バカ言っちゃいけないよ!! 華の時間の浪費だね。あたしや海には興味ないんだ」

「興味なくてもいいじゃん、行こう!! 冒険しよう、ばあさん!!!」

「おいおい。今、口には気をつけろと言ったばかりだよ」

老婆扱いされることを嫌う、いつまでも若々しくありたいくればは勧誘を諦めないルフィにまた苛立ちを募らせていく。

反対に、ルフィたちに興味を示し始めたのは、隠れるつもりで体を晒しているチョツパーだった。

(あいつら、海賊なんだ……!!)

昔救ってくれた人が教えてくれた、いかなる荒波をもともしない『信念』を持った者達。

それが今自分の目の前にいるのだと、チョツパーは胸の内から湧き上がる高揚を自覚していた。

「は」「は」「は」

しかし彼らの眼が自分に向けられた時、それが獲物を見つけた時のものの気付く。

即座にチョツパーは、ルフィたちの前から全力で逃走を開始した。

「待て、トナカイ料理っ!!!」

「待ちなガキ共!!!」

「ぎゃああああ!!!」

悲鳴を上げるチョッパーを追いかけ、ルフィとサンジが目をケダモノに変えて追いかけてくる。

そのあとを、それより恐ろしい鬼の形相となったくれはが追いかけていった。

「待っててナミさん!! エレノアちゃん!! 精のつくトナカイ料理を作るからね♡」

「その前にお前らをあたしが食ってやるよ!!!」

「ぬあっ!! つババア!!!」

「包丁持ってんぞ!!!」

弟子を食おうと画策する小僧共を抹殺する勢いで、くれはがどこからともなく包丁を持ち出して投擲してくる。

もはや全く医者とは思えない凶行に、ルフィたちは肉を諦めないまま逃走に移行した。

「料理はいいから大人しくしててほしいわ…」

「ねー、ニーナ♪」

「おと、なし、く?」

「そ、大人しくね」

ベッドの上で体を起こすナミと、ニーナを膝の上に乗せて遊ぶエレノアが呆れたため息をつく。

ふとナミは、ドアの外に吹いている雪風にぶるりと体を震わせた。

「お城の中のはずなのに………雪……」

「体冷やしちゃだめだよ。閉めてくるよ……」

「寝てろよ、ちゃんと!!」

絶対安静を言いつけられたナミに代わり、エレノアがニーナに断ってからドアを閉めようと腰を上げる。

しかしその前に、「戻ってきたチョッパがエレノアを止めて叱りつけた。

「お前まだ熱があるし……お前は全身骨折しまくってるんだから!!」

「ないわよ。もう、ほとんど引いたみたい」

「私もこの程度ケガの範囲に入らないよ」

「いやそれはウソでしょ」

「でもだめだ。ドクトリーヌの薬は良く効くから熱はすぐひくんだ。だけど、ケスチアの細菌は、まだ体に残ってる。ちゃんと、まだ抗生剤打って安静にしてなきゃ、また」
口では厳しい事を言いつつも、ナミとエレノアの看病のためにはきびきと準備を進め

るチョッパー。

自分に課せられた仕事を全うしようとするその姿に、ナミもエレノアも嬉しそうに笑みを浮かべた。

「ありがとう」

「ん？」

「あんたが看病してくれてたんでしょ？」

「う……!!! うるせエなっ!!!」

何故かナミたちに礼を言われると、チョッパーが態度を変えた。くれはを除く人間に對して何か隔意があるのか、返された言葉は強い拒絶を含んでいる。

だが、大して表情と声は喜びのあまりでれっでれに緩んでいた。

「に……人間なんかにお礼を言われる筋合いはねエ!!! ふざけんな!!! コノヤローが!!!」

「感情が隠せないタイプなのね」

「うき、うき? にこ、にこ?」

「うん。うきうきニコニコしてるね」

セリフと全くあっていない、心底嬉しそうな様子にナミは呆れ、エレノアは首を傾げる。ニーナとまた戯れる。

しばらくして我に返ったチョッパーは、ナミが先ほどの海賊の青年たちが仲間だとい

うごことを思い出し、恐る恐る近づいてきた。

「…お前ら、海賊なのか……………」

「ええ」

「そうだよ」

「ほ…………本物か…………!!」

「本物よ」

「ド…ドクロの旗を持つてるのか…?!」

「船についてるよ」

そろりそろりと、ナミに蹄の先で触れようとするチョツパーの姿は、待ち望みながらも目にするのできなかったものを前にして興奮する子供そのもの。

ナミは微笑まし気にチョツパーを見つめ、思い切って尋ねてみることにした。

「海賊に興味あるの？」

「ねエよバカ!! ねエよ!!! バカ!!!」

「わかったわかった、ごめんごめん」

「そこまで否定せんでも…」

悪戯する姿を見つかって慌てるように、勢いよく後ずさって壁に激突するチョツパーを見て二人は呆れ、ニーナはあくびをこぼす。

ふと、ナミはあることを思いつき、エレノアに目配せするとチョツパーに問いかけてみた。

「…でも、…じゃあ、あんたも来る？」

「お!!？」

「海よ!! 一緒に来ない？」

「そしたらナミも私も助かるしね。船に医者がいればここに3日もいる必要はないし」

尋常じゃないほどに目を見開き、口をあげたままにして驚愕するチョツパーに、ナミとエレノアは続けて提案する。

「どれだけ意外だったのだろうかとも思うが、降つて湧いたチャンス逃すつもりは二人ともなかった。

「それに今、うちの船には…」

「バ……バ……バカいえ!! おれはトナカイだぞ!! 人間なんかと一緒にいられるか!!」

しかしやはり、人間に対して壁をつくるチョツパーは、簡単には領いてはくれない。それでもチョツパーの表情には、並々ならぬ海へのあこがれと期待があった。

「……………大体お前ら……おれを見て……怖くないのか……………!! おれは……トナカイなのに2本足で立つてるし、喋るし……」

「そんなの外の海じゃ珍しくもないよ……私ほどじゃない」

「なに、あんた私達を恐がらせたいわけ？」

「……………青っ鼻だし……」

いろいろと理由を言われては否定することを繰り返し、ナミとエレノアが勧誘の圧を強める。

しかし、最後に呟かれた一言の意味が分からず、ナミたちは首を傾げる。

そこへ、城の中を一周してきたルフイたちが勢いよく飛び込んできた。

「そこにいたかトナカイ……!!!」

「ギャ——ツ!!!」

「待てエ!!!」

まだトナカイ料理を諦めていないようで、とたんに逃げ出したチョツパーを追いかけあつという間に姿を消してしまう。

しばらくすると、バタバタと騒がしい部屋の外から、若干疲れた様子のが戻ってきた。

「はア、すばしっこいガキどもだ……………」

「ご迷惑かけてすみません……」

「感心しないねエ小娘ども……あたしのいない間に許可なくトナカイを誘惑かい？」

「……あら。男をくどくのに、許可が必要なの？」

「ヒ——ッヒッヒッヒッヒッ!! …いや、いらぬいさ!! 持っていきたくや持つてきな!」

好戦的に言うナミに、くればは虚を突かれたように片眉を上げると愉快そうに笑う。

しかしその目は、あまり笑ってはいなかった。

「……………だがね、一筋縄じゃいかないよ! あいつらは心に傷を持つて……………あたい医者でも治せない大きな傷さ……」

くればは椅子に腰を下ろすと、笑顔のまま重い雰囲気を放つてナミたちに語り始めた。

城に住む二人の化け物たちになつた、胸糞悪い昔話を。

「チョッパ―は……この世に生まれた瞬間に……親に気味が悪いと見離された」

「え……!!?」

「『青つ鼻』だったからさ……!! あいつはいつでも群れの最後尾を一人寂しく離れて歩いた。生まれたての子供がだよ!!」

「……………ひどい……」

「そしてある日——『悪魔の実』を食つちまって奴は、いよいよバケモノ扱い。トナカイ達はあいつを激しく追い立てた——もう完全に普通のトナカイじゃなくなつてたのさ」

想像を絶するほど過酷な過去に、ナミもエレノアもかける言葉が見つからない。

想像するだけで悲しみに胸が痛くなる話だが、くれははまだ口を閉ざしてはいなかった。

「…それでも仲間が欲しかったんだね…今度は人として…人里におりた。——だがその姿もまた完全な人型じゃない。どういうわけか「青つ鼻」は変わらない」

エレノアはそこで、チョツパーが先ほど口にした言葉の意味を理解する。

自分が迫害される最たる理由だった青い鼻、それがある限り自分は受け入れられることはないのだと、チョツパーは半ばあきらめてしまっていたのかもしれない。

「何が悪いのかわからない。何を恨めばいいのかもわからない。ただ仲間が欲しかっただけなのにバケモノと呼ばれる。もうトナカイでもない…人間でもない…あいつはね、そうやって………たつた一人で生きてきたんだ……」

続いてくれはは、エレノアの膝の上で寝息を立てているニーナに目を向ける。

彼女もまた、理不尽な運命によって苦しめられている被害者。くれはが語った簡単な概要を聞いただけでも、ナミは気が滅入りそうであった。

「ニーナも同じさ……最初はドルトンの奴が憐れんで引き取ってたけど………人目にはやはりバケモノにしか映らない。好奇や畏怖の目にさらされて…ニーナは日に日に弱っていった。見かねてあたしが連れてきてみれば………思った以上にチョツパーと

仲良くなってね」

ナミとエレノアの脳裏によみがえるのは、危うくルフィに食糧にされかけたニーナを救うため飛び出したチョップの姿。

ナミに対しても怯えまくっていた彼が、迷うそぶりも見せず立ち向かった光景は、彼の想いの強さを表していた。

「初めてだったのさ……自分と全く同じ境遇の相手と出会ったのは。思っちゃったんだらうね……『自分たちは仲間だ』って……」

くればは静かに語り終えると、真剣な表情で見つめてくるナミたちを見据える。

彼女たちが抱く思いがどれほど真剣なものなのか、確かめるように。

「お前達に……あいつらの心を癒せるかい？ 兄妹のように生きる二人を……引き離せるかい？」

ナミとエレノアは、くればの問いに即答することはできなかった。

優れた力を持った相手を誘いたかっただけで、その過去さえも背負えるほど気負っていたわけではない。

それを指摘されてしまったようで、二人ともぼつが悪そうに黙り込んでしまった。

「……一人いたんだがね。……あいつが心を開いたただ一人の男が……昔ね」

くればは不意に遠くを見つめ、また別の過去を語り始めた。

懐かしそうな、それでいて寂しそうな、そんな複雑な感情が、くれはの横顔からうかがい知れた。

「…ドラム王国に生きてたそいつの名前はD r. ヒルルク…チョッパ―に名を与え、息子と呼んだ…ヤブ医者だ」

「なんだ…終わりか」

「やっぱこいつらガワだけだな…拍子抜けだ」

バタバタと倒れ伏す兵士たちを足蹴にし、ゾロとエドワードは鬱陶しそうにつぶやく。

ゾロは船においてきた自前の刀の代わりの刀剣を放り出し、つまらなそうにその場から歩きだした。

「……………すいこ」

「よし!! よくやったゾロにエド!! おれの指示通りだ」

ビビはあつという間にドラムの精鋭たち出遭った兵士たちをのしたゾロたちを凝視し、ウソツプはいつもの調子の良さを見せる。

あつけにとられていた住民たちは、我に返るとすぐさま兵士たちがいた場所に集まり、降り積もる雪をかき分け始めた。

「ド……!! ドルトンさんを探すんだ!!」

「ありがとうきみっ!!」

「急げ!! 掘りまくれ!! 雪を溶かせ!!」

ザクザクと雪を掘り進め、皆が一致団結してドルトンを探す。

事情を全く知らないままに戦いを挑んだゾロは、必死な様子で雪を掘る住民たちを不思議そうに見下ろしていた。

「……で? 何なんだこの騒ぎは一体」

「この島で一番頼りになる奴が雪崩で埋まってんだ!!」

「おれ達も手伝うんだよ」

エドワードとウソツプも、雪に埋もれたドルトンを救おうと住民たちに混ざり、あちこちを掘りまくる。

分厚い雪の下では姿が見えない、おおよその場所をとにかく手当たり次第に探すほかになかった。

「ドルトンさん……!! 生きててくれ!!」

「んおおお!!」

「急ぐんだ、急げ急げ!!!」

そうして数分、みんなで雪を掘り続けていた時だった。

エドワードの右腕の指先が、途中で何か固いものにぶつかつたのだ。

「ん……？ 何かあつた!! ーここか!!? 待つてろドルトンさん……今助けて……!!」

きつとドルトンに間違いない、とエドワードは全力でその場所を掘り進めていく。

ようやく見え始めた鈍色を、エドワードが渾身の力で引つ張り出した。

「……………兄さ〜ん」

目の前に持ち上げた、見覚えのある兜と聞き覚えのある声に、エドワードは思わず絶句する。

しばらく無言で立ち尽くしていたエドワードは、ギギギとぎこちない動きで辺りを見渡し、頬を引きつらせた。

「誰か……誰かアあああ〜〜!!!! 弟が……!!!! 弟が!!! 雪崩に巻き込まれて……バ・ラ・バ・ラになつちやつたんですウ〜〜!!!!」

「な……何だつて?!!」

「何て痛ましい……!!!!」

アルフォンスの頭部のみを掲げたエドワードの叫びに、聞いてしまった住民たちがぎよつと振り返る。

雪崩によつて起きてしまった凄惨な事件に、人々は思わず手を止めて同情の眼差しを送っていた。

「おい、なんかものすごく勘違いされてるぞ」

真相を知るゾロやウソップ、ビビだけが、若干居心地悪そうに住民たちの方を見つめるのだった。

「生き埋めになったまま凍りつくかと思った…!! 恐かった…!!」

雪崩によってあちこちに散らばってしまったアルフォンスの体は、エドワードの尽力によつてなんとか集められた。

一刻も早くドルトンを探さねばならないのに、余計な体力を使ってしまったエドワードはもうすでにフラフラになってしまっていた。

「いた!!」

「ドルトンさんを見つけたぞ!!」

「いたか…」

「よかった…」

「だれだ、ドルトンって」

聞こえてきた声にエドワードたちは安堵し、名前を知らないゾロを放置して住民たちの方に急ぎ向かう。

しかし事態の解決を喜びかけたエドワード達は、仰向けになったドルトンの姿を目に

して表情を凍り付かせた。

「何てことだ……!!」

「手遅れだった……ドルトンさんの心臓は、もう……止まってる!!!」

住民たちを、そしてエドワードを救うために己が身を顧みなかったドルトンは。

既に物言わぬ身体へとなり果ててしまっていたのである。

「そんな……!!」

「酸欠状態に陥ったのか……!! おいあんたら手伝え!!! 人工呼吸をやる!!!」

「……!!!! む、無理だ……!! ちゃんとした知識もないのにそんなこと……!!」

「だが放っておいたらドルトンさんはほんとに死ぬぞ!!!」

庇われたエドワードが、責任感からかほほうろ覚えの応急措置を試みる。

しかし明らかに門外漢であるエドワードに預けることは咎められ、住民たちに止めら

れてしまう。

なすすべなしか、と誰もが絶望しかけた時だった。

「ドルトンは生きている。体が冷凍状態にあるだけだ……!!」

「我々に任せてくれないか……!!」

そんな言葉が、エドワードと住民たちに向かってかけられた。

驚きに目を見開き、慌てて振り向いた全員が、その場に整列していた20人分の白衣

に言葉を失った。

「グイッシー20」!!」

かつて国を裏切った者たちが、現在の国の要である男を救うと、そう告げたのだ。

第77話 “医者の意地”

突如として現れたイツシー20に、住民たちは警戒しながらもかすかな希望を抱き始める。

ドラム王国が誇る医療技術の粋を有する彼らならば、心配が停止したドルトンももしかしたら蘇生させられるかもしれない。

「さて、信用出来ねエぞ!!」

それでも、かつて国を裏切つてワポルと共に逃げ出した連中に、信頼を預けることはできない者もいた。

ましてや、彼らが救うと言っているのは、新たな国の長となるべき男、ドルトンなのだから。

「ワポルに…!! 王の権力に屈したお前らにドルトンさんを任せろだ?! 一体ドルトンさんをどうする気だ…」

「彼を救いたくば言う通りにしろ!!」

だがイツシー20は、そんな住民たちを一喝して黙らせた。

思わず口を閉ざした住民たちの前で、イツシー20たちはサングラスを外しながら愁

いを帯びた目でドルトンを見下ろした。

「おれ達だつて医者なんだ………!!! 奴らの〃強さ〃にねじふせられようとも医療の研究は常に、この国の患者達のために進めて来た!!」

医師達が見ているのは、ドルトンだけではなかつた。

ドルトンを通して、誰かのために命を削り続けたある一人の〃医者〃のことを、重ねていた。

その名は、Dr. ヒルルク。

ヒルルクは、かつてろくな医学を修めることなく医者として活動を始めたため、人々から嫌われていた。

それでも人を救いたいという意志は並の医師とは比べ物にならないほどに大きく、誰よりも優しい医者だった。ヒルルクはワポルの悪政から逃げ回りながら、二つの意味で違法な治療行為を続けていた。

チヨツパーと出会つたのも、その最中だった。

人間に追われ、心も体もボロボロになつた彼をヒルルクは体を張つて救い、傷を癒した。心を開いたチヨツパーは、ヒルルクを父のように慕い、時に喧嘩をしながら、笑顔にあふれた一年を過ごした。

だがそんな時間も長くは続かなかつた。ヒルルクは重病に侵されており、数日もたない命だった。

それを知っていたヒルルクは、傷が癒えたチョツパーを力尽くで追い出し、Dr. くれはに懇願し数日の命を数週間にまで引き延ばした。

ワポルの悪政によつて腐ってしまった国を、自分の医療で癒すために。

かつてどうしようもない悪人で、同じくらい重い病に苦しんでいた自分を治療した“桜”を、この国に咲かせるために。

チョツパーはそんなヒルルクの想いを知り、どうにか自分も力になろうと山へ入った。

かつての同族に追い回され、崖から突き落とされ、傷だらけになりながらも見つけた“万能薬”のきのこを、ヒルルクのもとに届けた。

ヒルルクはそれを目にし、涙を流しながらチョツパーを抱きしめた。「お前ならきつと医者になれる」と、そう言いながら。

そのきのこが、食えば数時間も持たない猛毒と知りながら。

彼はチョツパーを家に置き、最後の仕事を果たすためにワポルの城に向かった。病で倒れたというイッシー20を救うために。

しかしそれは罠だった。ワポルは自分の言うことを聞かず、抵抗を続ける医者達を根

絶するために、ウソの情報でヒルルクをおびき寄せたのだ。それを知ったヒルルクは膝をつき、涙を流して安堵した。

——よかった…。

病人はいねエのか…。

その言葉は、ドルトンの心にかつてない痛みをもたらし、イツシー20にも動揺を走らせた。

求められていなくとも、嫌われていようとも、患者のために全てを捧げた本物の医者
が、そこにはいたからだ。

最後を悟ったヒルルクはその場で胡坐をかき、持ち出した器に酒瓶から液体を注ぎ、
ドルトンたちに向かつて語った。

自分は死なない。自分のことを覚えている者がいる限り、人は死なないのだと。

受け継ぐ者がいる限り、人は決して死なないのだと、涙を流し震えるドルトンに語り
聞かせた。

ヒルルクは、それを伝えると笑って杯を煽った。

自らを爆炎で吹き飛ばしながら、それでもいい人生だったと、満面の笑顔で命を絶つ
たのだ。

自らに毒を吞ませてしまったチョッパーを想って。

「……とあるヤブ医者に……『諦めるな』と教えられたからだ……!!
もう失つてはならないんだ!!
そう言う……『バカな男』を……!!」

その事件以来、ドルトンはワポルに従うばかりであった自分を恥じ、反旗を翻した。どれだけ愚か者と笑われようと、踏みにじられようと、先代の意志を継ぐために、ヒルルクの遺志を継ぐために、かつての国を取り戻そうと戦い続けた。

イツシー20の中にも、事件以来強い迷いが生じていた。
ヒルルクの「意志」は、多くの人達の中で生き続けていた。

「大変だよ、ドクトリーヌ!!」

ナミの病室でくつろいでいたくれはを、飛び込んできたチョツパーが呼んだ。

慌てた様子の彼に対して、くれはは何もかもわかつているというように穏やかなままだ。

「ワポルが……帰って来た!!!」

「……………そうかい」

チョツパーの報告を聞いても、時間が来たか、といった様子の反応しか見せなかった。

雪カバの背に乗り、切り立ったドラムロツキーの山肌を進んだワポル。

最後まで他者を使いながら山頂に到達したワポルは、堂々とそびえたつ純白の城が健在であることに歓喜の声を上げた。

「見ろ、何もかもが元のままで!!! さア、ドラム王国の復活だア!!!」

「お待ちくださいワポル様…城のてっぺんに妙な旗が…!!!」

「ん?」

さつそく中に入ろうとしたワポルだったが、配下たちに言われて城の天辺に目を凝らす。

国旗が飾られていた筈のその場所には、桜の花びらを纏った骸骨のマークが踊っている。掲げた覚えも作った覚えもないマークだ。

「何だ、あの髑髏の旗は。ドラム王国の国旗はどうした?」

「ヒ——ッヒッヒッヒッヒッヒ!! 燃やしちまったよ、そんなモンは」

怒りに燃えるワポルに向かって、小馬鹿にした様子の子のくれはが告げる。

正面の扉から堂々と姿を現した老婆を前に、ワポルの怒りはまた一段階高まった。

「ぬ!!! 出エたなDr. くれは!!! 〃医者狩り〃最後の生き残り!!! この死に損ないめがっ!!!」

「この城はね…ヒルルクの墓にしたんだ。お前らのような腐ったガキ共の来る所じゃない」

いよ。出て行きな、この国から!! …もうドラムは滅んだんだよ……!!!!」
傍らにチヨツパーを従え、くれはは臆する様子もなくワポールに告げる。

ワポールは耳に届いた聞き覚えのある名前に、不快げに眉間にしわを寄せた。

「墓!! あのバカ医者の子墓だど!!?! まっはっはっは笑わせるな!!!」

自分の政治に逆らい続け、最後は自ら爆死した見たこともないほどの馬鹿。

存在するだけでただただ不快でしかなかった男の墓に、自分の自慢の城を使われたと知った愚王は、クレハに対する敵意をより強めていた。

だが、そんな彼の怒りを上回る怒りが、勢いよく近づいていた。

「おおおおお前らア、さっきはよくもやってくれたな!!!」

城の奥から物凄い突進をしてきているのは、海上で、街で、そして山中で散々逆らってきた麦わら帽の男。

そのあとに金髪の見覚えのない男と、忌々しいフードの小娘を見つけた時には、麦わら帽の男は己が腕を大きく伸ばしていた。

「ん?」

「ワ…ワポール様、麦わらですっ!!!」

「〴〵ゴムゴムのオ〴〵!!!」

「おい」「え…」「あ」

ワポルの目の前に突撃するルフィに、サンジとエレノア、くれはとチョッパーが思わず声を上げる。

次の瞬間には、目を見開いて硬直するワポルに、ゴムの伸縮を利用した拳が突き立てられていた。

「銃弾ブレットオオ〃!!!」

「ワポル様ア——つ!!!」

完全に予想外だった予告なしの一撃により、ワポルの樽のような肥満体は大きく吹っ飛ばされる。

チエスとクロマリーモが間一髪で足を掴んでいなければ、崖から下に一直線だったところだ。

「何事だい……………!!!」

「あくあ…やっちゃった」

「お!! あいつらは……………!! 何でここに?」

くれはは急な展開で目を丸くし、エレノアは顔を手で覆い、サンジは知っている顔がいることに驚く。

しかしエレノアの反応に至っては、王に対する暴挙への後悔ではなかった。

「私が今度こそ歯アぜんぶ折ってやろうと思ってたのに…」

しかしエレノアが突如発した、地の底からひびくような異様な圧と声、そして脱ぎ捨てられたフードの下の容姿によって、二人の幹部は途端に黙らされた。

「……天族……!!!」

「その男に王たる資格などない……拾った王冠で偉くなつた気になっているただの俗物……我が宿願と同一視するなど片腹痛いわ……!! 失せろ下郎ども……!!!」

「う……おオ……!!」

知らぬうちに、エレノアの口調も雰囲気も、全てが豹変していた。

射殺するような冷たい眼差しも、重くのしかかるような声の圧も、まるで彼女に別人が乗り移つたかのような変化で、誰もが言葉を失う。

ルフィでさえ、エレノアの変化に対し険しい表情で振り返っていた。

「……エレノアちゃん……?」

「……ん? なに?」

恐る恐るといった様子でサンジが問いかければ、途端に異様な雰囲気は霧散していつも通りの反応が返ってくる。

あまりの変化に絶句し冷や汗を流すサンジのそばで、くれははチョッパーも見たことがないほど衝撃を受けたような表情を見せていた。

「お前……まさか……」

小さな眩きは誰の耳に届くことはなく、ルフィもエレノアが元に戻ったことで改めて敵に向き直る。

途中に何があろうとも、ワポルに対する怒りが微塵も揺らぐはずもなかった。

「もう許さねエぞおれは!!!」

「それよりおめエは寒くねエのか」

「え？」

「ホラみなさい」

「『王様』って言わなかったかあいつ!! 海賊じゃねエのか」

「そっちかよ!!!」

サンジとエレノアの指摘で我に戻ったルフィは、全く違う点で驚愕をあらわにする。

そしてすぐに、自分に先ほどから突き刺さる雪山の冷たさにもようやく気が付いた。

「フン……!!! バカめ、やつとてめエの無礼に気づいたらしいな。そうとも、このお方こ

そこのドラム城の主……」

「おい!!! 寒いぞ、ここの」

「だから言っただろうが!!!」

「マイナス50度だよ」

「あいつらおれらをナメてるぞ!!!」

国王をぶん殴ったことに対する恐怖など微塵も抱いていない、一切の畏怖も抱く様子のないルフィたちにチェスとクロマリーモの額に血管が浮かび上がる。

タツカーもまた、王族を相手にしながら一切の敬意を払わない連中を相手に、戸惑いの表情を浮かべていた。

「ウガ——ッ!!!」

「ワポル様っ!!!」

そのうちに、ようやく正気に戻ったワポルが怒りの咆哮とともに起き上がった。

口や鼻から血を流しながら、日に何度も自分を虚仮にしてくれたルフィに強烈な殺意を湧き上がらせた。

「まっはっはっ……まっはっはっ………麦わらア……!! おれ様、もう怒ったぜ……!!! 食い殺してやる……」

「あ——…ちよつと待つてくれるか。服、取りに行ったから」

「いねエのかいっ!!!」

なのに当の本人は、自分をブツ飛ばしたことにさしたる反応も見せずに姿を消していた。

怒りを持って余したワポルがだんつと地面を踏みつけるが、何も事態は好転しなかった。

「…………聞くけど……………!! あいつ…伸びたぞ!!」

「ああ、伸びるな…ゴム人間だ」

「な…何だ、それ…!!!」

「バケモノさ」

目の前で見られた異様な光景に、思わず問いかけるチョッパ―に、サンジは得意げに語って聞かせる。

「たいしたことではないとでも言うような軽い反応に、チョッパ―は思わずサンジを見上げたまま固まってしまっていた。

「ドルトンも死に…ここには反国ババアと麦わらの一味……そして不老不死の力を持つ天族もある、まっはっは。こいつらを消せば、もうおれ様に歯向かおうって生意気な輩はいなくなるわけだ…」

「そうですね…晴れ晴れとしたドラム復活の日になるでしょう。お任せをワポル様。すぐに掃除いたしますので」

「どういうつもりか知らねエが!! おれ達の留守中に城に住みつくとはいい度胸だDr. くれは!!!」

「…………おや? これは私もやらないといけない流れですか?」

国王に戻り、勝手気ままな政治を再開させる第一歩として城に戻るために邪魔なくれ

はを見据え、三人の男たちが身構える。

送られて続いたタツカーに厳しい目を向けてから、くれはは意地の悪い笑みを浮かべてワポルたちを見据えた。

「ヒーツヒツヒツ。あたしや別にこんなボロイ城に興味はないさ…だがコイツがね…ここにヒルルクの墓標を立てるんだってきかなくてね」

くれはが告げると、その隣でチョッパーがめきめきと自分の体を変形させていく。

両の眼に怒りの炎を燃やしながら、チョッパーは頭上ではためく海賊旗を背にしてワポルたちを睨みつけた。

「ドクターはこの国を救いたかつたんだ!!! だから、おれは…お前達を城へは入れない!!! あのドクターの『信念』は絶対に下ろさせないぞ!!!」

断固とした意思を掲げ、チョッパーはワポルたちの前に立ちはだかる。

そんな彼を、クロマーリモは一丁前の人間の意地を見せる化け物と嘲け、見下すような目を向けた。

「フン!!! 神聖な城をカス医者^{エレキ}の墓にだと!!! まずお前から死ぬDr. くれは!!!」

「静電気^{エレキ}マーリ…」

燃えやすい素材である自分のアフロの一部をちぎり、まずはくれはに向かつて投げ飛ばそうとしたクロマーリモ。

だがその寸前、突然自分のアフロが燃え上がり、一瞬で彼は火だるまになった。
「もぎやああああああ!!!?」

突然のことで、クロマリーモはもちろんワポルやチエス、タツカーも驚愕で固まり、燃え上がるクロマリーモから距離をとった。

「なっ…何だ!!? いきなり火がつ!!?」

「熱イッ!!! 雪っ雪っ!!!」

クロマリーモは何とか火を消そうと、自ら冷たい雪の中に潜って鎮火を試みる。

大の大人が慌てふためく姿を、エレノアが掌の上でパリパリと閃光を走らせながら、フツと鼻で笑った。

「……………大気中に雪が大量にあるからね……………レンズもたくさん作れるんだよ。人を簡単に焼き殺せるぐらいにね……………!!!」

「……………収れん火災…だと!!! バカな…!!!」

どうにか火を消したクロマリーモを診ていたタツカーが、エレノアが口にした言葉で信じられないとばかりに硬直する。

窓際に置いた丸いガラスや、ビニールの上にたまった水分がレンズとなり、光を収束させて熱を発生させ、火災を起こすという自然界の現象。それを再現したのだと聞かされれば、この反応も仕方がなかった。

「すげエなお前………」

「いやーあつたけーあつたけー。ん？ もう始まつてんのか？」

「おいルフィ!! てめエ、それナミさんのジャケットじゃねエのか!! 脱げ、お前それ

!!」

ただただ驚くしかないチョッパーとは異なり、ルフィとサンジはこの程度気にする必要もないとばかりに反応を見せない。

衝撃を受け、狼狽しているのは敵対しているワポルたちだけであつた。

「大丈夫かクロマリーモ!! ワポル様!! やつら予想以上にできますぜ!! あなどつた!!」

「ああそのようだな……殺すぞ、あいつら。見せてやる……『バクバクファクトリー』!!!」
チエスの申告で、ワポルも己の中の優先度を変えたいらしい。

最優先抹殺対象が、くればからルフィとエレノアに変更された。

第78話 “人間失格”

「チエス…!! 今朝からのおれ様の献立を言ってみろ…」

「はっ!! …えくく船内にて“大砲のバターソテー”1門と“生大砲”1門、“砲弾と火薬のサラダ”に村で“焼きハウス”一軒分となっておりすが」

「何食ってんだお前」

「雑食この上ねエな…」

チエスが読み上げるリストに、ルフィとサンジが揃ってツツコミを入れ、エレノアが半目になる。

人間の食べ物ではないものをさもそれっぽく語る光景は、あまりに滑稽だった。

「見るがいい…:食後こそバクバクの真の能力…!! 食物はやがて血となり肉となる…!!

“バクバク^{シヨック}食”!!!」

ワポルが叫んだ直後、樽のような体が見るみるうちに變形していく。己の口で取り込んだあらゆるものを、己の肉体に変換させているのだ。

そうして自身を改造し、ワポルは煙突の生えた家のような体を持った、より大きな体へと変貌した。

『ワポルハウス』!!!」

「家?!」

「スゲ——っ!!!」

「驚くのはまだ早い……!!! これが王技!! “バクバク工場”^{ファクトリー}!!!」

ギラリと光ったワポルの目が、目の前の二人の配下に向けられる。

ワポルはニヤリと笑うと、ギョツと目を剥く二人に向かつて大きく口を開け、思いつきり食らいついた。

「ぎゃああああ!!!」

突如始まった凄惨な行為に、ルフィとサンジ、エレノアは顔色を変えてどよめく。どう見ても、相手か自分の目がおかしくなったとしか思えない光景だった。

「仲間を食ってんぞ!!!」

「共食いだア——!!!」

バリバリポリポリと、ワポルはチェスとクロマーリモを噛み砕き、ゴクリと飲み込む。すると頭と両腕の煙突から煙を噴き出させ、体内の機関をフル稼働させた。

「さア見るがいい “奇跡の合体”!!! いでよ!!!」

「何……?! まさか二人の人間が……」

「合体?!」

戦慄するルフイ達の前で、ワポルの腹の扉がゆっくりと開かれていく。

暗い穴の中に二組の光が灯り、大きな腕がドア枠をつかんで、創造された巨体を外へと引きずり出す。

「我こそは…：ドラム王国最強の戦士…：チエスマーリモ!!」

現れた怪物が、元の二倍近くにもなった体で立ち上がり、ルフイ達を見下ろす。

しかしその姿はどう言い繕っても、融合とか合成とかではなく。

「いや、肩車したただけじゃねエのかよ」

「すっくっすっく——!!!」

「すっくくねエだろ!!!」

ただ縦にくっついただけのような、いうほどの変化はなくサンジががっくりと肩を落とす。

ただエレノアとくれはだけが、異様な能力を見せたワポル達を油断なく睨みつけていた。

「ここまで体を張って…：宮仕えも本当に大変ですね…：では私も。ちよつとこの毛カバ借りますね」

「ん？ おお…：使え使え。好きに使え」

「モフツ!!」

見た目以上に戦闘能力を増した二人を見て、タツカーも少しやる気になったのか、後ろに控えていた毛カバの方に向かう。

複雑な模様が描かれたゴム手袋をはめると、大砲や銃などを背に積んだ毛カバに手をかざした。

「私は戦いとは無縁の研究者でね……代わりに君にやつてもらおうことにするよ」

嫌な予感がした毛カバ・モブソンだったが、いざ逃げようとするよりも早く、タツカーがゴム手袋でモブソンと銃器に触れた。

その直後、最低最悪の所業が再び行われた。

「モ”オオオオ!!」

バシン、と赤い閃光が走り、モブソンと銃器がメキメキと無理やり形を変えさせられていく。

生物と武器が粘土のように形を変えていく光景は、錬金術の行使を初めて生で見るチョップパーに大きな衝撃を与えた。

「なっ……何だありやあ……!!?」

「! 賢者の石!」

目を見開くエレノアの前で、変形した毛カバと銃器が一つになっていく。

背負っていたバズーカや大砲は背中から、ライフルやピストル、マシンガンは体のあ

ちこちから生えていき、毛カバはあつという間に痛々しい姿に変わり果てていった。

「ワポール様のおかげで…国家錬金術師だったころとは比較にならないほど研究がはかどりましたよ……こんなこともできるほどに。感謝してもしきれないぐらいです」

「そうだろうそうだろう!!! もつとおれ様を褒め称えろ!!! 安心しろ…今後はもつとたくさんの材料が手に入るぞ!!! まっはっはっはっは!!!」

これまで散々足として使ってきた乗り物のあげる、悲痛な叫びにも関心を向けず、ワポールとタツカーは愉快げに笑い続ける。

愚王と悪魔による身の毛もよだつ会話に、ルフィ達は背筋に震えを走らせていた。

「なんだあれ…!!? すげエ痛そう!!!」

「あれも錬金術によるものなのか……!!? ワポールとやつてることは変わらねエが悍ましさは段違いだな…!!!」

「あのクソガキ……また性懲りもなく」

鳥肌を前進に立たせるルフィ達とは異なり、くれははその表情を強烈な怒りで歪めていく。

医者として、いや人間としても失格な姿に、怒りが爆発しそうになったその時だった。

「……………おとう、さん」

チョッパー達の背後から、か細い声が聞こえてくる。

ハツとエレノアが振り向き、ワポルやタツカー達も鬱陶しそうに目を向けた。

「ん……!!? まさか…ニーナかい…?」

かつて自分が犠牲にした娘を前にしたタツカーが、不安げな、しかし喜びを帯びた目で見つめてくる合成獣キメラの前に言葉を失う。

チョッパは首だけ向けて、戦場に足を踏み入れようとしている妹分を止めようとした。

「来るな、ニーナ!!?」

「おとう——」

「なんだ。まだ生きてたのか…」

だが、思わず駆け出そうとしたニーナにかけられたのは、そんな心ない言葉だった。

目を見開き、停止したニーナを見やり、タツカーは意外そうな顔でぼりぼりと頭をかいていた。

「思っていた以上に出来損ないになっちゃったから、そのうちどこかでのたれ死んでい
るもんだと思ってたけど…そうかDr. くれはのところに行ったのか。もの好きな人
ですなああなたも…」

「…お前…それ以上口を開くんじゃないよ…!!」

実の娘に向けて絶対に行つてはいけない言葉を吐き続けるタツカーに、くれはと

チヨツパーはギリギリと歯をくいしばる。

事情をよく知らないサンジも、タツカーがどうしようもない下衆であることを察し、不機嫌そうに眉間にしわを寄せていた。

「そうだなア……せつかく生きてるうちに再会できたんだ。そのうち再利用させてもらおうか」

「お前……ニーナによくも……!! 絶対許さねエ!!」

返す言葉も見つからず、タガが外れてしまった父親を前に絶句するニーナに代わり、チヨパーが激しい怒りを燃やす。

しかし彼の後ろには、それ以上の憤怒の炎を燃やす女が立っていた。

「さすがに……我慢の限界だよこの野郎……!!」

パリパリとエレノアの両手に閃光が走り、彼女の凄まじい怒りが表される。

それに気づかぬ、自身に危機が及んでいるなど微塵も考えていないワポルは、自信満々にルフィ達を嘲笑った。

「ドラム王国憲法第一条『王様の思い通りにならん奴は死ね』!! ——これがこの国の全てだ!!! なぜならこの国はおれの国で……この城はおれの城だからだ……!!」

そう言つてワポルは、城の天辺に掲げられた海賊旗——ヒルルクの信念の証を睨みつける。

「よりによって、あんなへボ医者の旗なんかかかてるんじゃねえよ!!!」
「ぜ!!!」
城が腐っちゃまう

ワポルの掲げた片腕の大砲が、ドカンと火を吹いて砲弾を発射する。

勢いよく飛び出した砲弾は城の屋根を破壊し、ヒルルクの旗をガラガラと真っ逆さまに崩落させた。

「まっはっはっはっはっはっはっ」

「……海賊旗。おいトナカイ、あの旗……」

哄笑の声をあげるワポールから目をそらし、ルフィは落下する旗を呆然と見つめる
チョッパーを見る。

言葉を使い、目を見張っていたチョッパーは、やがて歯をくいしばるとワポールを強く
睨みつけた。

「何してんだ、お前……ドクターのドクロマークに!!!」

「……ケツ、くだらん。殺っちゃまえ……!!!」

チョッパーの怒りも意に介さず、ワポルの命令で配下達がチョッパーに向けて武器を
構える。

しかしチョッパーはそれを持ち前の敏捷さでかわし、一直線にワポルの目の前に接近
していった。

「ドクターは!! お前だって救おうとしたんだぞ!!!」

目を見開くワポルの襟首を掴み、片手を大きく振り上げたチョッパー。

だがその拳が振り下ろされることはなく、悔しげに顔をしかめた彼は引きしぼるように告げた。

「おれは……お前を殴らないから、この国から出て行けよ!!!」

「……………あ?」

てつきり殴られると思っていたワポルは、チョッパーの降伏勧告に呆れたような声を出す。

その言葉に唾然としたのは、くれはも同じだった。

「何言い出すんだいチョッパー!!! そいつが説得に応じる奴だとも思ってたのかい!!!」

「……………だって……やっぱり……………」

チョッパーは未だ迷っていた。

どんなにクズで最低な相手でも、ヒルルクが最期まで救おうとした人間。それを自分が傷つけてもいいのかと。

だが葛藤するチョッパーに、ワポルが放った砲弾の火がまともに炸裂した。

「チョッパー!!!」

煙を上げて倒れこむチョツパーに、くれはは叫び、ワポルは下卑た笑みを浮かべる。思わず眉間にしわを寄せるエレノアは、この場から一人姿を消したものがいることに気づいた。

「……ん？ ルファイは……？」

「おい邪魔口!!!」

辺りを見渡したエレノアは、探している青年の声が頭上から聞こえてきたことに驚く。

「ワポル様、あれを……!!!」

「ん!! 麦わら!!!」

声を聞いた全員が視線を上げれば、城の先頭によじ登っているルファイの姿がそこにあった。

折られた旗を、ナミから借りたコートの袖で結んで縛り付け、掲げるようにしてワポルを見下ろしていた。

「ウソツパチで、命もかけずに海賊やってたお前らは!!! ……この海賊旗^はの意味を知らねエんだ!!!」

怒りをにじませた声で吠えるルファイだが、ワポルにはそんな感情を向けられる覚えはなかった。

意味のわからないことをほざく平民を、ワポルは全身を震わせて嘲笑していた。

「その旗の意味だと!! 麦わらア! まっはっはっは!! そんな海賊どものアホな飾りに意味なんぞあるか!!!」

「だからお前はヘナチヨコなんだ!!」

「何イ!!?」

ルフィは理解しようともしないワポルを、心の底から軽蔑し吐き捨てる。

決して悔つてはならないものを、この愚王は汚したのだから。

「これは!! お前なんか冗談で振りかざしていい旗じゃないんだ!!」

「カバめっ!! 冗談でなきや王様のこのおれが海賊旗などかかげるか!!! その目障りな旗をいちいち立て直すんじゃないやねエよ!!!」

一方的に訳のわからないことを言われて激昂したワポルが、今度はルフィに照準を合わせて大砲を発射させる。

威力は先ほど見せた通り、人間一人簡単に吹き飛ばせる凶悪な一発だ。

「ここは、おれ様の国だと言ったはずだア!!! 何度でも折つてやるぞそんなカバ旗など!!!」

「くっ…!!! また…!!!」

「よける危ない!!!」

サンジやチョッパーが呼びかけるが、ルフィはその場から一步も動こうとはしない。迫りくる砲弾も見えないまま、己の怒りを吠え続けた。

「お前なんか折れるもんか。ドクロのマークは…『信念』の象徴なんだぞオ!!!」

直後、砲弾が再び炸裂し、尖塔が炎に包まれる。

爆音と衝撃が辺りに四散し、柄狩り瓦礫がエレノア達の頭上に降り注いだ。

「ルフィ!!!」

「直撃したよ」

「吹き飛ばカバめ!!!」

「なんともまア……意味がわからないな」

言うだけ言って吹き飛ばされた、何処の馬の骨ともわからぬ男の最期に、ワポルもタツカーもチェスマーリーモも呆れて笑いが止まらない。

しかし、そんな余裕も長くは続かなかつた。エレノアだけが、表情一つ変えずその場に佇んでいた。

「ほらな。折れねエ」

ルフィはまだ、そこに立っていた。

己の手で旗を掲げ、自らが支えとなつたまま、黒焦げになりながらも立ち続けていた。そこに宿る遺志を、代わりに表すように。

「な……………!!! バカな!!! イカれてやがる!!!」

「これが一体どこの誰の海賊旗かは知らねエけどな…これは命を誓う旗だから、冗談で立ってるわけじゃねエんだぞ!!!」

ルフィの掲げる不動の信念に、ワポル達は言葉を失い立ち尽くす。

己の道を阻む敵を貫く槍にして、決してくじけることなく己を示し続ける旗。

その姿に、ワポル達は圧倒されていた。

「お前なんか、へらへら笑ってへし折っていい旗じゃないんだぞ!!!」

大気を震わせるような、ルフィの堂々とした言葉。

エレノアはゾクゾクと背筋を震わせ、微かに笑みを浮かべ、その隣のチョツパーはただ、目を奪われていた。

——これが海賊…!!!

その眼に映る姿は、亡き父から聞いたものとまるで同じ。

あらゆる荒波に挑む不屈の意志を見せる猛者の姿を、チョツパーは確かに目の当たりにしていた。

すると突如、立ち尽くすチョツパーに向けてルフィが視線を移した。

「おいトナカイ!!! おれは今からこいつらブツ飛ばすけど、お前は どうする?」

「おれは…?」

思ってもみなかった誘いに、チョツパーはつい考え込んでしまう。

何をすべきなのか、してもいいのか、そんな迷いがチョツパーの行動を阻害してしまっていた。

それを見逃すワポルではなかった。

「このカバ野郎めが!!! そんなに旗を守りたきやずつと、そこで守ってる!!!」
 「!!! ……………やめとけよ、その辺で!!!」

またしても船長を狙おうとしている砲門に、サンジがすぐさま走り出す。

だがその瞬間、サンジの背中に強烈な痛みが襲いかかった。

「アウ!!!」

「イツたか、背骨……当然だ………暴れすぎだよ。ドクターストップ!!!」

ビタツと動きを止めたサンジに向けて、くればが思いつきり飛び蹴りをかます。

うつぶせに倒れたサンジは、激痛に加えてくれはに上からのしかかられてしまい、身動きが取れなくなってしまう。

「まっはっはっは何をしてるんだおめエラカバ共が!! 見物している、奴を塵にかえてやる!!!」

「ワポル様、危ない……!!!」

「ん?」

内輪揉めをしているようにも見えるサンジ達をみていたワポルは、チェスマーリモの声で我に返る。

油断していたワポルに、二つの影が襲いかかったのだ。

「やめろオ!!!」

「いい加減にしやがれイ!!!」

振り上げられた拳と義足は、チェスマーリモと改造された毛カバによつて阻まれてしまふ。

攻撃を阻まれても、闘志を絶やさずにいる二人に向けて、ルフィが城のてっぺんから声援を送った。

「そ〜〜〜さっ!!! やっちまえトナカイ!!!」

「ヒツヒツヒ、ハナつたれどもがいつちよ前に根性みせやがって」

ようやく動いた弟子と患者の戦意に、くればは楽しいに笑みを浮かべる。

一方でエレノアとチョッパの前に立ちふさがった配下達は、見下すような笑い声をあげて相手を睨みつけた。

「ムハハハハ、残念だったな。ワポル様にはこのおれが指一本触れさせんつ!!!」

「ちよつと困るなア…私の雇用主なんだから」

チェスマーリモは目の前に立つチョッパを見やり、人でも獣でもない奇妙な生物を

観察し、改めて嘲笑う。

「しかしおかしな生物がいたもんだ。一時期国民が雪男だと騒いでいた元凶はお前だな。どうせ誰からも好かれねエ人生を送つて来たんだろう、哀れな怪物よ」

ニーナが心配そうに見つめる中、チョツパーはチエスマーリモの挑発に表情を険しくする。

かかった、と思つたチエスマーリモは、さらに追い詰める言葉を重ねた。

「一人ぼっちのお前が何のために、この国を救おうつてんだ!!! 笑わせるな!!!」

「うるせエ!!! 仲間なんていなくなつておれは戦えるんだ!!! ドクターの旗がある限りおれは……!!!」

いまにも飛び出しそうなほどに怒りを募らせるチョツパー。

挑発に乗せられるまま、不用意に飛び出しそうになつた時だった。

「仲間ならいるさ!!! おれが仲間だ!!!」

城の天辺から飛んできたルフィが、勢いよくチョツパーとチエスマーリモの間に着地する。

盛大に雪煙を上げたルフィは、帽子を押さえながらゆつくりと立ち上がった。

「にっしっしっし」

「麦わら帽子!! お前大丈夫かつ!?!」

「おれは平気さア、ゴムだから」

「ゴム?」

さつきも聞いたが、今だに信じられない不思議な体の持ち主に、チョツパーは目を丸くしたままになる。

ルフィはチョツパーに目を向けると、試すように問いかけた。

「おいトナカイ。お前、あいつを仕留められるか?」

「なんて事ねエ!!! あんな奴」

「エレノア、そいつ頼むぞ」

「もとよりそのつもりだつての…!!?」

「じゃあ決まりだな」

揃った三人の勇士が、誇りを踏みにじる愚者達とそれぞれ相對する。

譲れぬ信念を巡る戦いが、今ようやくやく始まろうとしていた。

第79話 “お前を否定する”

「おれの相手は邪魔口だ!!!」

「おのれ麦わら、ビュンビュンと飛び回りやがって…!!!」

「…もう迷わないぞ…!!!」

「お前がおれを倒せるって!!!? えエ!!!? 化け物!!!」

「完膚なきまでに叩き潰す!!?」

「はア……なんだか面倒なことになってしまったな…」

並び立った三人が、目の前のそれぞれの敵に闘志を燃やす。

若干一名やる気が見られないが、それでも場の緊迫感が増す一方であった。

「モ……モブウ……!!!」

「さつきからメソメソうるさいよ………仕方がないじゃないか、私に戦う力はないんだから」

ポロポロと涙をこぼし、全身の痛みに苦しむモブソンにタツカーは鬱陶しそうに吐き捨てる。

そのうちその口元に、にたりと悪魔の笑みが浮かべられた。

「戻してやるからしっかり働け」

エレノアは耳に届いたその言葉に、きつく拳を握りしめた。

決して出来もしない口約束を平然と口にする男に、尋常ではない殺意が募った。

「あんたにはもう……!! 人の心がないんだね……!!」

「は……何を怒ることがある? 医学に代表されるように、人類の進歩は無数の人体実験

の賜物だろう? 君も科学者なら……」

「黙れ……!!」

同類扱いされるだけでなく、錬金術師としての矜持をも汚され、エレノアの眼に強烈な火が灯る。

後ろにいるニーナから隠すように、タツカーの前で両手を合わせ、自分の体を成人サイズに変える。

「あんたのやったことは……!! 誰かの役に立つものなんかじゃない……!! あんただけが喜ぶあんただけの業……!! ただのエゴだ!! こんな……命をもてあそんで!!」

「命?! はは!! 命ね! たとえばそう!!? “鋼”の錬金術師!! 彼の手足と弟!! あれも君が言う命をもてあそんだ結果……」

「違う!!!」

ケタケタと狂ったように笑うタツカーをエレノアは即座に否定する。

しかしタツカーの口は止まらず、意地になっっているようにしか見えないエレノアに対して嘲笑する言葉をつづけた。

「ちがわないさ!! 目の前に可能性があったから試した!!」

「ちがう!!」

「たとえそれが禁忌であると知っていても試さずにはいられなかった!!」

「黙れ!!! あの子たちとお前は違う……!!! 私……!!!」

ギン、と貫くような鋭い目でタツカーを睨むと、饒舌に語っていた口が慄いたように閉ざされる。

ざわりと髪を揺らし、殺気を迸らせ、エレノアは決意する。

目の前のこの男だけは、絶対に息の根を止める。

「私はお前を……!!! 全力で否定する!!!」

「ああもう……うるさいなア、済んだことをいつまでも」

「まっはっはっはっは!!! わけのわからんことを言いやがって……!! それより不死だ!!!」

不死の生き血がおれ様の目の前にあるぞ!!! タツカー!!! さっさとあの女をとっ捕

まえて連れて来い!!!」

面倒くさそうにため息をつくタツカーに、会話の内容など一切理解しないワポルが口うるさく喚く。

「どいつもこいつも……馬鹿ばっか……!!」

あきれ果てるエレノアは、改めてタツカーと彼の従える毛カバに身構える。

「仕方がないですね……ほら、行っておいで」

「モブウウウ!!」

タツカーに命じられ、元に戻りたい一心のモブソンがガシャンと銃器を準備する。神経に繋がれた撃鉄や導火線が、大砲と銃に火を入れた。

チョツパーはそれを横目に、自身はチエスマーリモに向き直り、懐から一つの金色の丸薬を取り出して掲げた。

「『ランブルボール』の効力は3分!!! 3分でお前を倒す!!!」

チエスマーリモはただの丸薬を大層に構えるチョツパーに、見下した笑みを浮かべながら火のついた矢を構えた。

「お前に何ができるんだって!! 『雪解けの矢マーリモ』!!!」

「モ」ブウウウウ!!」

「『ランブル』!!! 『フネ!脚力強化』」

チエスマーリモの放った火矢と、モブソンの放った砲弾が一斉にエレノアとチョツパーに襲い掛かる。

翼をはばたかせたエレノアと獣の姿になったチョツパーは、向かいくるそれらを素早

く躲していく。

「ハッ!! 何をするかと思えば変形か!! つまり、てめエは悪魔の实の能力者だな。ドルトンと同じ動物系!! トナカイ人間か!!」

「違う!! 人間トナカイだ!!」

「同じだ!! 貴様ら動物系の『三段変形』ならおれは知り尽くしている!!!」

同じ幹部であったドルトンもまた、獣の力を備えた能力者。

人と獣、そしてその中間という三つの姿への変形は確かに脅威だが、見る限りチョツパーはドルトンと同じ怪力型であると予測でき、

「『ドビツクリマーリモ』『四本大槌』!!! パワーで、おれに勝てるものか!!!」

『ジャンピングポイント
飛力強化』

四つの大槌を別々に操り、チョツパーに向けて振り回すチェスマーリモ。

だがそれらは、さらに異なる姿に変わったチョツパーによつて空振りへと終わった。

「なんだ、あの形態はつ!!!」

チョツパーの姿は、跳躍力に特化したような形態に変化していた。

素早さに特化した細身の人の半身に、崖を昇る強靱な両足。怪力型とは明らかに異なる変化に、チェスマーリモは言葉を失った。

「『人獣型』はさっきのチビトナカイじゃねエのか!!? コザかしい!!!」

『毛皮強化』
ガードポイント

高く跳躍したチョツパーを打ち落としてやろうと、もう一度大槌を振るうチェスマーリモ。

しかし今度は、分厚く毛を生やした丸々とした姿に変わったチョツパーに受け止められ、ノーダメージで終わった。

「きかねエ」

「そうか…!!!」 ランブル 決闘か!!! 悪魔の实の変形の波長を狂わせて…三種類以上の変形能力を得る、戦うための薬か!!!」

「そうだ…!!!」 5年間の研究で、おれはさらに4つの変形点を見つけたんだ!!!」

「『七段変形』だと!!!?」

ぶるぶると雪を払うチョツパーに、エレノアは驚愕と感心で笑みを浮かべる。

かつてはただ力任せに突っ込むことしかできなかった。しかし今のチョツパーは己の能力をさらに進化させた、戦う医者へと成長していた。

その勇姿は、ルフィのドツボにはまっていた。

「な…七段変形面白トナカイ!!!」

「どうしちまったんだい、あいつは」

「七段変形と聞いて嬉しさの限界を超えちまった様だ」

「てめエおれとの勝負はどうしたア!!!」

キラキラと目を輝かせ、その場に正座してチョツパーの戦いを観戦するルフィに、放置されたワポルが怒鳴る。攻撃をせず待っているあたり、律儀なのか馬鹿なのか。

「そんなみせかけに惑わされはしねエぞ!!!」

「みせかけじゃないさ、アームポイント腕力強化」

今度は二本足で立ち上がったチョツパーの両腕が、分厚い筋肉で膨れ上がる。

直後、高速で振るわれたチョツパーの蹄が、一瞬でチエスマーリモの大槌を粉々に砕いて見せた。

「言つとくけどおれの『鉄の蹄』は岩だつて砕けるんだ!!」

武器を破壊され、簡単に対応させない数々の変形を見せるチョツパーに、チエスマーリモさすがに警戒を深め始める。

そんな中、後方に控えていたタツカーが舌打ちし、モブソンに命じた。

「ならば重火器はどうですかねエ...?」

モブソンの体から生えた重火器の照準が、エレノアからチョツパーに向けられる。

一対一の攻防だと思ひ込んでいたチョツパーが目を見開いた時、謳うような声がある。場を響いた。

「標的設置……発火、ギルティソーン磔刑茨冠!!!」

パチンと指を鳴らす音が聞こえ、火を吐こうとしたモブソンの砲身が、その瞬間真っ赤に熱を帯びる。

ギョツと目を剥いた直後、モカバの周囲で強烈な閃光が走った。

ドカン!!と凄まじい轟音と衝撃波が走り、モブソンに備わった大砲がまとめて吹っ飛んだ。

「モ」ブウウウウウ!!」

「なっ…!!?」

「あんたの相手なんて、ここから動く必要もないさ」

自分の手駒が一瞬にして丸裸にされ、絶句するタツカーにエレノアが小馬鹿にするように告げる。

何が起こっているのかわからない様子のタツカーに、エレノアは気だるげに手袋をはめた指を構えた。

「細い銃口ならともかく、そんなバカデカイ派手な武器で助かったよ…狙い撃ちするのに、大した労力を使わずに済んだよ」

理解が追い付かず、立ち尽くすタツカーから興味が失せたように、エレノアは痛みで苦しむモブソンを見やる。

危機を脱したチョッパは、もう一度人獣型に戻ると自身の蹄の先端を合わせて身構

えた。

「お前の弱点はもう診た。これで終わりさ!!」^{スコルブ}『診断』

蹄の間を覗き込み、照準を合わせるようなポーズをとる。

それを見たルフィは、全く見当違いな期待を寄せ始めた。

「ビ……!!! 光線だ……絶対光線だ!!!」^{ビーム}

「でるかアホ」

「うっさいなお前っ!!!」

サンジによる冷静なツツコミを受けるルフィは放置し、チョッパはチェスマーリモを見据える。

チェスマーリモは構わず、新たに備えた四つの戦斧を振り回しながら突撃を始めた。

「おれを見ただア!!! それがどうした!!! このおれに死角などないぞ!!! 攻撃もできねエ変形バカが、終わるのはためエの方さ!!!」

巨大な四つの刃が、生意気な化け物を切り刻んでやろうと迫る。

ようやく再起動を果たしたタツカーも、苦悶の咆哮を放つモブソンに慌てふためきながらも命じ、少しずつ後ろに下がった。

「ぶ、武器がだめなら……踏み潰せ!!! いけよ早く!!!」

「モ”ブウウウ!!!」

「……………ごめんね、私の力でも、君を助けてあげることはいできない。ニーナと違って、生物でも兵器でもなくなつた君は…長くても数時間と生きられない…!! だから……………痛みの中で苦しみ続けるよりは、いま楽にしてやるのが一番の救済なんだ」
 パンツ、と合わせたエレノアの両手のひらが、青い閃光を走らせ周囲の空気を酸素と水素にわける。

パチンともう一度指を鳴らすと、エレノアの右手に業火が生まれる。

見る見るうちに一振りの剣の形をつくるそれを、エレノアは両手で掲げながら頭上に構える。

「……………己の罪を、業火の中にて悔やむがいい」

高速で接近したチョツパーが、チェスマーリモの真下で強靱な両腕を構え。

ドスンドスンと猛烈な勢いで向かってくるモブソンに向けて、エレノアの備える炎の剣が威力を増しながら振り下ろされる。

「刻蹄……………!! 『桜』!!!」

「ク逆滅剣……………!!」

チェスマーリモのあごに蹄が食い込み、桜のような跡を刻みつけると、モブソンが凄まじい威力の炎の渦に焼き焦がされる。

相当な実力者である幹部と自慢の技術を使用した兵器が宙に舞い、タツカーは大きく

目をあけて言葉を失った。

「んなっ…!!？」

思考が停止している様子の彼にも、爆炎が容赦無く牙を剥く。

悲鳴もあげることなく炎に飲み込まれたタツカーに、高速で接近したエレノアは渾身の回し蹴りをたたき込んだ。

「これは……ニーナの分だ!!！」

顔面に強烈な一撃を食らった黒焦げのタツカーは、骨ごとほとんどの歯をへし折られながらゆっくりと倒れていく。

その際、懐から零れ落ちた赤い宝石付きのペンダントを見つけると、エレノアは何も言わずにそれを両手で挟み、青い閃光を走らせて破壊した。

「フンツ……石を使っても、やっぱり雑魚は雑魚だったね」

「3分」

「やった————!! トナカイ——!!！」

ハットに着いた雪を払い、人獣型に戻るチョッパードと着地するエレノアの姿に、ルフィは思いつき歓声を上げる。

しかしただ一人ニーナのみが、倒れてピクリとも動かなくなったタツカーを見つめ、悲し気に立ち尽くしていた。

「…………おと、う、さん」

「…………本気、出させやがって…!!」

うつむいている合成獣キメラにやりきれなさを覚えながら、限界を迎えたエレノアがどきりと倒れ伏す。

服の下に見える包帯から血が滲んでいく姿に、くれはは心底呆れた様子だった。

「やつぱり…無茶してやがったね……………とんだ激痛だっただろうに、ばかな小娘だ」

ドクターストップを受けたサンジのように止められないように、痛みを必死でこらえて戦っていた錬金術師の女。

くれははその姿に、少しでも表情を綻ばせた。

「だがその頑張りに免じて……………少しは認めてやるよ、お前たち錬金術師をね。ヒ——ヒツヒツヒ!!」

余談ではあるが、二人の戦闘中に姿を消したワポルに今さらながらきづいたルフィが猛然と駆け出していくのだが、あえて語る必要はあるまい。

「おい、ちよつと乗りすぎじゃねエのか?!」

「傷を負ったドルトンさんを放っておけるか!! おれ達だって戦うさ!!」

「わかったけど進まねエぞこれじゃあ!!」

ぎしぎしと軋みを上げるゴンドラの中で、ウソップが必死に漕いでいる住民達に苦言をこぼす。

ワポルが城に向かったと知った人々が、ならば自分体も決着をつけると乗り込んだはいいが、重すぎてなかなか進まないでいた。

「ドルトンさん、無理しないで」

ギャーギャと騒がしい中、ビビがゴンドラの隅で荒い息をつくドルトンに向けて声をかける。

イツシー20の手によって蘇生したドルトンは、本調子ではないにもかかわらずワポルとの決着を望み、住民たちの制止を押しつけて乗りこんだのだ。

——何様のつもりだ、ドルトン。

バカにつける薬がない:!!

この、おれに:バカだと!!

民を救う正義の使者にでもなったつもりか!!!

つけあがるな一家来が!!!

思い浮かぶ、かつてヒルルクの件の直後にワポルに戦いを挑み、敗北した時の記憶。

圧倒的な戦力を誇るワポルに手も足も出ず、地に伏した自分にワポル達が吐いた言葉

だった。

——国民の信頼もあるお前は優秀な守備兵だ。

考え直せよドルトン。

——あのイカレ医者にそそのかされて少し夢を見たただけだ!!

地位を捨て、国を滅ぼし、ためエに何のメリットがある!!

——ごめんなさいと一言、言えたら許してやるぞドルトン君。

まっはっはっはっはっは。

思い出すたびに、その浅ましい姿に怒りが募り、自分自身の情けなさも許せなくなる。

一体自分は、どれほど長い間目を曇らせていたのか。どれだけの事実から目を背けて

いたのか。

「何が地位だ……!!!
!!! 何が王だ!!!
!!!」

鬼のような形相で悔しさをあらわにするドルトンに、ビビやエドワードはかける言葉

が見つからない。

誰よりも国を想い、誰よりも苦しんだ男の慟哭は、聞く人の胸を締め付けた。

「必ず……この国を終わらせてやる……!!! 歴史が何だ……!!! 国の統制が何だ!!! 国に “心

”を望んで何が悪い!!!
!!!」

きつく歯を食いしばるドルトンは、しばらくして懐に手を伸ばす。

自身の腹にまいたあるものを取り出し、マツチを用意して使う準備を整えようとした。

「いいか、みんな。城へついて…私が城内へ入ったら……」

「もういいって…ドルトンさん」

体にまいたダイナマイトを出そうとした時、それをエドワードが片手で止める。

考えを見破られていたような態度に驚くドルトンだが、一度決めた覚悟を早々曲げられないと出された手を押し返そうとした。

「エドワード君……!! 止めてくれるな……ここは、私の手で決着を」

「だからもういいんだって……!! あんたが城に行つて自爆したところで……この国はすでに滅んでる」

苦笑するエドワードが、そしてアルフォンスが見つめる先にあるのは、ワポルがいると思われる城。

その天辺から伸びている、肌色をしたなにかだ。

「……………見ろ!! 城のてっぺんに誰かいるぞ!!」

「兄さん。この国は……………ドクロに敗けたんだね」

「そういう事だ……………あいつらを敵に回した時点で、この国は終わっちゃまってんだよ。ほんつと…最初から最後までバカな王様だぜ」

住民たちが見上げる中、城の天辺から伸びたそれが勢いよく引き戻されていく。

先端に硬く構えた手のひらを備えたそれは、なぜか城の尖塔から顔を出したワポルに向かつて迫る。涙目で喚くワポルに、やがてその一撃は炸裂した。

「バズーカッ!!!」

放たれた両の掌底が、再びワポルを空に輝く星屑へと変える。

国を捨てて逃げ出し、傲岸不遜に舞い戻ろうとした愚王は今度こそ追い出され。名も無き国は、本当の意味で自由を手に入れたのだった。

第80話 “君の背中を押すために”

「よし、おれが見てきてやる。みんな後から来るといい!!」

城の前の停留所に着いたゴンドラの中から、ウソップが顔を出す。…ゾロを盾にしな
がら。

「おい、引つ張るな」

「よし、援護するぞ!!」

「てめエ、ビビってんなら後から来りやいだろうが!!」

「び…びびってねエよよ!!! なぜなら、おれは」

的確な指摘に即座に否定するウソップだが、震えながらゾロを押し出す格好はどう見ても勇ましきからは程遠い。

そんな彼らに向かつて、勢いよく迫るある人影があった。

「おりやああああああああああああああ!!!」

「なにいいーっ!!!?」

「ルフィ!!!」

「あ、ゾロ、ウソップ」

鬼気迫る形相で飛来したルフィは、狙っていた二人が仲間だと知るとすぐに闘志を収める。

が、一度ついた速度は止められず、そのまま二人のもとにつっこみ盛大に雪煙を巻き上げた。

「何してくれてんだてめエっ!!!」

「なーんだ、その服なんか見覚えがあったから、またあいつの仲間かと思ったよ。お前らも登ってきたんだな」

普通に立ち上がり、のんきに笑うルフィだが、ふっ飛ばされたゾロとウソップはそうそう怒りが収まらない。

ルフィはこの場に仲間達がいることに疑問を抱き、鼻血を垂らして沈黙するウソップに目を向けた。

「ウソップ、お前登れねエとか言っただけか?」

「はっはっはバカいえおれはそこに山があれば登る男だぜ。しかしこの絶壁はちよつとした冒険だった——」

「ロープウェイで登ってきたの、ルフィさん。ナミさんとサンジさんとエレノアさんは無事なの?!!」

「ああ、元気になった」

「よかった」

饒舌にホラを吹き始めるウソップを放置し、ビビが急いで駆け寄ってくる。

ひとまず安堵していると、ソロは薄着のルフィに訝しげな目を向けた。

「——で？ お前は城のてっぺんで何してたんだ」

「王様をブツ飛ばしてたんだ」

「…じゃあ、やはり…さつき空へ飛んでいったのはワポル…!! あとの三人はどうしたんだ!!?」

「トナカイがブツ飛ばした。そうだつ!! おい聞いてくれよ、新しい仲間を見つけたんだ」

「なにっ?!」

駆け寄ってきたドルトンは、ルフィの返答に驚愕をあらわにし、そして近くの木々の影に隠れようとして失敗している見知らぬ生物と、一匹の合成獣キメラを発見する。

そのわきで、ようやく到着したエドワードとアルフォンスが、雪原のど真ん中に倒れ伏すタツカーを目にして目を剥いていた。

「おい!!! こいつタツカーじゃねエか!!?」

「何で黒こげに…!!! 顔もなんかすぐくむごたらしいことに…!!?」

「そっちはエレノアがやった」

「ちくしょう!! 先を越されちまったか…!!」

国について真つ先にやりたかったことを先取りされ、悔しげに地団太を踏むエドワード。

そんな彼らに近づくと、小さな存在があつた。

「エド、ワード…お、にい、ちゃ」

「……………!! ニーナ…!!」

たどたどしい声で呼ばれ、エドワードとアルフォンスは思わず立ち尽くす。

別れた時と何ら変わらない、一目見ただけで後悔が募る姿を前に、二人は視線をそらしてしまった。

「……………何だ……………久しぶりだな」

何か話しかけたくとも、その資格がないようでどうしてもそれ以上話題が思いつかない。

奇妙な沈黙の中、ドルトンは目を見開き、倒れ伏すタツカーやチェス、クロマーリモ達を凝視していた。

「……………あの、ワポルたちを……………トナカイ!!」

ドルトンはハツと振り向き、こちらを警戒している様子のチョッパーを見つめる。

人でも獣でもないその奇妙な姿は見たことがない、しかし彼の鼻の奇妙な色は、忘れ

るはずもなかった。

「…青い鼻…君は…!!! あの時…!!!」

ヒルルクが死んだとき、怒りを携えて向かってきた青い鼻の化け物。

あの時は何の力もなく、ただ逃がしてやることしかできなかった彼が戦ってくれたのだと知り、ドルトンは思わずその場で深々と頭を下げていた。

「ありがとう、ドラムは、きつと生まれ変わる!!!」

全身全霊で感謝を述べるドルトンに、チョッパーも思い出したらしい。

逃げることなく、かつてワポールから逃がしてくれた人間をじつと見つめていた。

それを見ていたエドワードは、少しだけ緊張をほぐして笑みを浮かべ、しやがみこんでニーナの頭を撫でてやった。

「今回おれ達…踏んだり蹴ったりで役立たずだったな!! アル!!!」

「迷惑しかかけられなくて申し訳ない…」

「いや…君達にも救われた…!! なんとお礼を…」

慌ててドルトンが、そんなことはないかと否定する。

そんな中、次々にゴンドラの中から降りて来た住人達が集まり、そして木々の間に立っているチョッパーを目にしてどよめき始めた。

「ああつ!!」

「な…何だあの変な生き物は」

「ト…トナカイ?! …違う」

「バ…ババ…化け、バケ…!!!」

「おい、よさないか!!」

「バケモノだ——っ!!!」

即座にドルトンがやめさせようとするが、最後の最後でよりによってウソップが叫んでしまう。

チョップパーはガンと目を剥き、その場から走り去ってしまった。

「バカ野郎!! おれが見つけた仲間ってあいつなんだぞ!!!」

「なにイ、あれが?!?!」

「シヨック受けて逃げちまったじゃねエか!!」

せつかく見つけた仲間への暴言に、ルフィがウソップを殴りつける。

すぐにルフィは、走り去ったチョップパーを追いかけた。

「ぎゃああああ!!!」

「待てよ!!! バケモノオ!!!」

「オイ」

人には言うなといっておいて、ルフィはまだ名前もよく知らない新たな仲間を呼びな

がら駆け出していく。

あつという間に見えなくなっていくその小さな背中に、エドワードは目を丸くしていた。

「…あいつ、確かあのバアさんの…」

「おい、お前達つ!!!」

どこであつたのか、と思い出そうとしていると、聞こえてきた怒鳴り声に思わず全身を震わせる。

エドワードだけでなく、その場に集まった全員が、現れた人物を前に目を剥いて硬直していた。

「うゲゲゲエっ!!!」

ド…ドド…ドドド…ド…!!! Dr. くれは!!!

「ハッピーかい? そのケガ人を連れて病室へ入んな!!! 一人残らずだ」

「は…はいっ!!」

いきなり現れたにもかかわらず、ぶつけられた命令に逆らえない住民たちとエルリツク兄弟。

バタバタと騒がしくなる城の前から、くれはは城の影でコソコソしている二人を見つけて突撃した。

「お前達も病室へ戻んな!!!」

「ギャ——っ!!!」

ナミとサンジが隠れる城の壁を蹴り砕き、悲鳴を上げさせるくれば、この老婆から逃げることは、誰にも不可能な様だった。

「うげアガガガラバババ!!!」

「ふぎやああああああ!!!」

城の中の治療室から、とんでもなく痛々しい悲鳴が上がる。

しばらくして治療を終えたくればは、血まみれのゴム手袋を捨ててナミたちのいる病室に戻ってきた。

「ヒツヒツヒ、やつぱり悪化してたよ。無理するからさ」

「相変わらず怖エバアさんだ」

「師匠せんせい並みだよね」

医者とは思えない恐ろしさを久々に目の当たりにし、エルリック兄弟は互いに身を寄せて震える。

少しの沈黙の後、おずおずとアルフォンスがくればはに話しかけた。

「Dr. くればは……あの、ニーナのことなんです……」

「心配いらぬよ……今のところ目立ったケガもしてないし病気になったこともない。

しいて言うなら……少し体が育ったことぐらいかね……」

「……そうか。ありがとな……バアさん」

「口の聞き方には気をつけな、小僧共」

ペこりと頭を下げる兄弟に、くれはは少し厳しい態度を返す。やはり錬金術に対する隔意はあるようだが、以前会った時よりも幾分か和らいでいる気もしなくもない。

くれははワインの瓶を煽ると、ベッドの上のドルトンに目を向けた。

「ドルトン……この城の『武器庫』の鍵つてのはどこにあるんだい。知ってるね?」

「武器庫……なぜ、あなたがそんなものを」

「どうしようとあたしの勝手さね」

「あのカギは昔からワポルが携帯していたので、ずっとそうなら……ワポルと一緒に空へ」

「なに、本当かい? 困ったね」

くれはは本気で残念そうな表情を見せるが、ドルトンはその理由がわからず首を傾げる。

その時、話を聞いていたナミがきらりと目を光らせた。

「ドクトリーヌ? ウチの船員の治療代なんだけど……タダに!! ……それと、私を今すぐ

退院させてくれない?」

「ん? そりゃ無理な頼みだとわかって言ってみただけかい」

数時間前にもやったやり取りに、くれはは呆れたように目を細める。

「ビビもナミの病状のことを考え、安静にしているように言おうとしたが、その前にナミが懐から鍵の束を取り出した。」

「武器庫」の鍵、必要なんでしょう？」

「な……なぜ君がその鍵を?!」

「本物なのかい?! どういうこつた」

「スつたの」

「お前……」

悪びれる様子もなくそう答えるナミに、くれはだけでなくエドワードも呆れかえる。先ほどワポルとひと悶着遭つたらしいが、その際に盗むとはとんだ胆力である。

「このあたしに条件をつきつけるとはいいい度胸だ。ホンツトに呆れた小娘だよ、お前は」
「お恥ずかしい……」

恥ずかしげもなく鍵を見せびらかすナミに代わり、アルフォンスが頭を抱える。

くれはは渋々鍵を受け取り、上着を肩にかけながらナミに背を向けた。

「……………いいだろう。治療代はいらないよ。ただしそれだけさ。もう一方の条件はのめないね、医者として」

「ちよつと待つて、それじゃ鍵は渡せないわよ、返して!!」

約束が違う、と慌てて鍵を取り戻そうとしたナミだったが、その前にくれはが鼻先にビシツと人差し指を突きつけた。

「いいかい小娘。あたしはこれからちよつと下に用事があつて部屋をあけるよ。奥の部屋にあたしのコートが入ってるダンスがあるし、別に誰を見はりにつけてるわけでもない。それに背骨の小僧の治療はもう終わってるんだが」

いったん言葉を止めてから、くれはは有無を言わさぬ口調でナミたちに告げる。言葉以外の何かで、ナミたちに察するように促しながら。

「いいね。決して逃げ出すんじゃないよ!!」

言うだけ言って、くれははナミたちのいる病室を去っていく。

足音が完全に聞こえなくなつてから、啞然としていたエドワード達の間でナミが肩をすくめた。

「…コート着てサンジ連れて今のうちに逃げ出させてさ…」

「私にも…そう聞こえた」

「ははは…素直じゃねーの!!」

医者としての義務を果たしつつ、ナミたちの望むように願いを聞いてくれた優しい医者、エドワード達は苦笑する。

ドルトンが不思議そうに見つめてくる中、ふとエドワードは辺りを見渡して首を傾げ

た。

「……そーいやア、ニーナはどこに行つたんだ？」

まん丸の月が天に昇る夜。

木々の間で月光に照らされながら、チョッパは荒い息をついて座り込んでいた。

(ずいぶん逃げ回つたな………いつの間にか夜だ…今夜は、満月か………)

「お——いトナカイ………!!」

耳を澄ませば、城の前で麦わら帽の人間が大声で騒いでいる。

何度逃げて、どんなに撒こうとしても、仲間になれとあきらめずに追いかけてくる

青年から、チョッパは必死に身を潜めた。

「一緒に海賊やろう——つ!!」

「…おいルフィ、もう諦めろよ。これだけ呼んでも探しても出て来ねエんだ」

「海賊になんてなりたくねエんだよ、あいつは」

「それは違うぞ。おれは、あいつを連れていきてエんだ!!」

「だからそれはお前の都合だろうが!!」

「トナカイ——ッ!! ドナガイ………!!」

仲間らしき人間達に止められても、声がかれそうなほどにチョッパを呼び続けている

る。

チョッパーは思わず飛び出したくなるが、どうしても迷いが生じて踏み出すことができずにいた。

「……………いか、ない、の？」

不意に駆けられた声に、チョッパーはハツと息を呑んで振り向く。そこにいた妹分の不思議そうな眼差しに、チョッパーは返す言葉が見つからなかった。

「ニーナ……………」

「いき、たく、ない、の？」

「い、行きたくないわけじゃないさ……………だけど行けない……………!!! おれは……………!!!」

本当は行きたい、でも本当に行ってもいいのだろうか。くれはやニーナを置いて行ってもいいのか、そんな迷いがありありと見て取れた。

それを見ていたニーナはやがて大きなため息をつき、立ち尽くしているチョッパーの尻に向かって大きく口をあけた。

「ガールルルル!!!」

「ギャ————ツ!!!」

突然尻にニーナの牙が食らいつき、悲鳴をあげたチョッパーがたまらず飛び上がる。

その勢いによって、チョッパーはついにルフィ達の前に姿を現してしまっていた。

「あっ……」

「トナカイ!!! おい、お前いつしよに海賊やろう!!」

「……無理だよ……」

「無理じゃねエさつ!!! 楽しいのにつ!!!」

「意味わかんねエから」

ルフィが懸命に誘うが、やはりチョッパーは頷くことができない。

それでも伝えなければならぬことがあると、ニーナに背中を押してもらったことに感謝しながら口を開いた。

「おれは……お前達に……感謝してるんだ!!」

「……………チョッパー……………」

「だっておれは……………トナカイ!!! 角だって…蹄だってあるし……………!! 青つ鼻だし

……………!!!」

どうしてもルフィの誘いに乗れなかったのは、また拒絶されるかもしれないと言う不安から。

長く孤独に生きてきた彼にとって、存在を否定されることは何よりも恐ろしいことだった。

「そりゃ…海賊にはなりたくないけどさ…!! おれは“人間”の仲間でもないんだぞ!! バケモノだし…!!! おれなんかお前らの仲間にはなれねエよ!!! …だから…お礼を言いに来たんだ!!!」

胸の内にしこりのように残る未練に蓋をし、チョツパーはルフィ達に笑顔を見せる。一度でも仲間と読んでくれた感謝を込めて、精一杯の想いを。

「誘ってくれて、ありがとう…おれはここに残るけど、いつかまたさ…気が向いたらここへ」

「うるせエ!!! いこう!!!」

チョツパーの心を縛り付けていた迷いと躊躇いの鎖が、ルフィの大きな声で弾け飛ぶ。

どんなしがらみも壊して、広い世界に連れ出してくれるようなその言葉に、チョツパーは大粒の涙を流す。

ニーナはそんなチョツパーの背に、優しく満足げな笑顔を向けるのだった。

「……お前、挨拶していかなくていいのか?」

ルフィ達とともに行くことを、くれはに伝えに行つたチョツパーを待つ間、エドワードがアルフォンスに尋ねる。

ナミの病状やビビの事情のこともあり、あまり長くいられないため、二人ともニーナとそれほど話す時間が取れていなかった。

「いいよ。兄さんこそ、ニーナとあんまり話せてないじゃないか」

「いいんだよ…話せることなんざほとんどねエしな」

救うことができなかつた少女と何を話せばいいのか、未だ出发点から動けずにいると自覚している少年たちは、待つことしかできない。

寝かされたエレノアがそんな彼らを横目で見ていると、何やら城の中から騒がしい声が聞こえてきた。

「何だ、城の中が騒がしいぞ…」

「まったくヤボなんだから…人の別れの夜にどうして静かにしてあげられないのかしら」

わーきゃーとやかましい住民たちの声に、ナミが思わず眉間にしわを寄せる。きつと涙の別れになるだろうに、空気を読んでやることもできないのかと。

だがそんな中、城からソリを引いたチョッパーが猛スピードで向かってくる姿が見えた。

「おい来たぞ、あいつが!!」

「え!!? どういうこと!!」

「追われてるっ!!!」

「おーい、ロープウェイ出す用意が…」

「ん？」

何事か、と一斉に視線を集める一同は、しばらくしてようやく気づく。

鬼気迫る表情で向かってくるチョッパが、背後から迫る包丁を投げまくるくればから必死に逃げようとしていることに。

「みんな、そりに乗って!!! 山を下りるぞオ!!!」

「待ちなア!!!」

「!!!!!!」
「んな、何イ~~~~~~~~っ!!!」
「!!!!!!」

明らかに殺す気には見えない老婆を前に、ルファイたちは一目散にそりに乗り込み、走り出していった。

第81話 “冬に咲いた桜”

その日、人々は目撃した。

月光を背に天を走る、青く輝く鼻を持つトナカイが引くそりに乗り、愉快な悲鳴をあげる青年たちの姿を。

空を飛び笑い声をあげる、魔女のそりを。

城の停留場と、かつてのくればの家の間につながれたロープ。

その上を滑りきったそりは、あつという間に雪山を駆け下りていった。

「うは——っ!!! いい〜〜〜気持ちだったア!! おい!! もつかいやつてくれ!!」

「バカッ!! 出航するのよ、もう!!」

「ほんつと勘弁して!!」

「し!! し…死ぬかと思った…」

「つぬお!!! ん!! ここはどこだ!!?」

「あ、サンジさん気がついた?!」

恐怖やら快感やら、思い思いに騒ぎ続けるルフィたち。

それをじつと見つめていた二組の視線に、気づくことはなかった。

「あんな別れ方で…よかったので？」

「ヒーツヒツヒ…預かってたペットが一匹もらわれてただけさね!! 湿っぽいのは、キライでね」

足元にニーナを連れたいはは、目尻に涙を溜めながらドルトンにそう返す。

素直になれない老婆に苦笑していたドルトンは、いきなり頭を叩かれて我に返った。

「来な!! 船出つてのは派手でなきやいけないよ!!」

くれははドルトンを促し、すでに指示を与えておいた住民たちの方へと向かう。

並べられた大砲、そしてくれはが用意した特別な砲弾。

あとはもう点火するだけのそれらを見回し、くれはは声を張り上げた。

「用意はいいかい、若造共!!」

「へいっ!!!」

「撃ちなア!!!」

くれはの号令で、駆り出された住民たちは大砲に火を入れ、次々に発射していく。

ドンツ、ドンツと打ち上がる光を前に、同じく手伝わされたドルトンが戸惑いの目を

向けた。

「Dr. くれは。一体、何を…」

「黙って見てな」

くればはそう返し、打ち上げた砲弾を——今は亡きヒルルクに託されたものが詰め込まれたそれを見上げる。

全ての大砲が砲撃を終え、住民の一人が報告に駆け寄ってきた。

「Dr. くればは!! 全弾打ち上げました!!!」

「ライトアップ!!!」

くればはの命令で、空中に飛び散った砲弾の中身に光が当てられていく。

それが作り出した光景に、ドルトンや住民たちは思わず言葉を失い、立ち尽くしていた。

それは、城から遠く離れたルフィたちの目にも届いていた。

いや、その光景はチョッパーのために広がっていた。

ある男が国を癒すために残した努力の結晶。それが今、息子を海へ送り出すために咲き誇っていた。

「ウオオオオオオオオオオオ!!!」

「すげえ……………」

「……………ああ」

「奇麗……」

滂沱の涙を流し、歓喜の咆哮をあげるチョツパーと同じように、ルフィたちも目の前に広がる光景に息を飲む。

まるでこの世のものとは思えないような、あまりに美しいその光景には、生半可な感想など余計なものではなかった。

「……いいか……!!!」

この赤い塵はな、ただの塵じゃねエ!!?

コイツは大気中で白い雪に付着して……そりゃあもう鮮やかなピンク色の雪を降らせるのさ!!!

「何という幻想的な……」

「ヒツヒツヒツヒツ……バカの考えることは理解できないよ……」

夜空にいつばいに咲き誇るピンク色の輝きを仰ぎ見て、ドルトンやくれは、国中の者たち全員が驚嘆の声をあげる。

白く染まった永遠の真冬の国に咲いた、満天の“桜”に。

「ギア……行つといで。いってらっしゃいバカ息子おにいちゃん……」

大きな一歩を踏み出した家族を見送るように、“桜”は堂々と咲き誇るのだった。

—— 後に ——

語り継がれるこの“ヒルルクの桜”は、まだ名も無きその国の自由を告げる声となつて夜を舞う。

ちようど、この土地でおかしな国旗掲げる国が誕生するのは、もう少し後の話だ。

「…もう島を、出た頃でしようかね…」

“桜”が咲き続ける下で、腰を下ろしたドルトンがとなりのくれはに話しかける。

膝にニーナの頭を寄せたくれはは、持ち出したワインを丸々一瓶口にしていた。

「医者としての最高の心と…最高の腕を継いだトナカイとは…」

「ヒルルクが命を懸けた“桜”が起こした奇跡があるとすりや、あのヘツポコトナカイが海へ飛び出したことと、ウチの娘が兄離れたことくらいかね…」

グブリグブリとワインを飲み干し、くれはは一味が去った方向を見やる。

その表情は、明るく喜びに満ちたものであった。泣き虫だった息子が見せた成長が、何よりも嬉しいようだ。

「いっぱしの男ぶりやがって……ヒツヒツヒツヒ…」

「この国も生まれ変わりますよ。彼のように……」

「ドルトンさ——ん!!」

小さな体に大きな勇気を抱いて旅立ったトナカイを思い、ドルトンも感慨深げに呟いていた時だった。

大砲の後片付けをしていた住民たちのうち、二人が慌てた様子で向かってきたのだ。

「大変だ! 大変なこと思い出しちゃった!!」

「どうしたんだ」

「これ! これを見てくれ!! あいつらだったんだよつ!! 間違いねエつ!!」

二人はドルトンとくれはに、二枚の手配書を見せる。

そこに写っていた見覚えのある顔に、ドルトンたちはやや驚いた様子を見せた。

「3千万ベリーと1億ベリーの賞金首……彼らが……」

「ほう……大した悪党じゃないか。ヒツヒツヒツヒ……」

しかしさほど衝撃を受けた様子はない。むしろ彼らの強さに納得がいったように、感心した目を向けていた。

「……これをどこで?」

「それが……あなたに報告すんのをすっかり忘れてたんだが。一週間くらい前に突然口ベールの街に旅人らしい男が一人現れたんだ。めずらしく雪の降らない日だった。

どつから上陸したのかわからねエが」

「とにかくそいつは……この国を襲ったあの海賊『黒ひげ』を追っていると言つてた」
「——でも、とつくにこの国を去つたことを知つたら……」

——じゃあもう一つ聞くけど、麦わら帽子をかぶつた海賊と羽の生えた女がここへ来たか？

食後だったのか、爪楊枝で齒の間を掃除していた男は、訝しげに首を降る彼らにそんなことを尋ねたという。

知らないと答えると、男はニヤリと笑みを浮かべて、二人の海賊の手配書を渡して付け加えた。

——もしコイツらがここへ来たら、おれは10日間だけアラバスタで、お前らを待つと伝えてくれ。

じゃ、頼んだよ。

用件だけ伝えると、男は返事を待つこともなく足早に立ち去ろうとした。

慌てて住民はそれを引き止め、せめて名前だけでも教えてくれと頼んだ。すると男は、不敵な笑みを浮かべて口を開いた。

——おれは『エース』。

そのルフィとエレノアつてのが来たら、そう言つてくれりやわかる。

エースと名乗った男は、そういつて立ち去っていった。

どうやら飯屋で金も払わずに出てきたらしく、店主に怒鳴られながらあつという間に島を後にしてしまったのだとか。

礼儀正しいのか礼儀知らずなのか、よくわからない相手であつたと、住民たちは語つた。

話を聞き終えたドルトンは、安堵のため息をついて住民たちの不安を否定する。

彼らが心配するような人物たちでないことは、もはや明らかだつたからだ。

「なるほど……だがその伝言は伝えるまでもないさ」

「え？ どうして」

「彼らの次の目的地はアラバスタだからだ。……心当たりがあつてね……」

ドルトンの脳裏に蘇るのは、一味と共にいたエルリック兄弟と水色の髪の少女。

ワポールも出席していた数年前の王たちの会議で、幼くも王族としての気品と覚悟を備えた聡明な少女の顔と、ぴったり重なる。

ドルトンがワポールのやり方に拒否感を覚え始めたのも、思えばその時からだつた。

（どんな事情で海賊達やエルリック兄弟と一緒にいるのかは知らんが、何か考えあつたことだろう……立派になられたものだ……!!）

どんな事情があつたとしても、その目に秘めた覚悟は確かなもの。

大願があるのならどうか叶えて欲しいと切に願ひ、ドルトンをはるか沖を見つめていた。

一方でくれはは、手渡された手配書を見つめて黙り込んでいた。

「Dr. くれは……どうしたんです。ぼんやりして……」

「……お前達……ゴール・D……ロジャーを知つてるかい……」

「D? ……ゴールド・ロジャーのことですか? それならば知らない方がおかしい世の中ですよ」

「……今はそう呼ぶのかい? どうやらウチのトナカイは大変な奴について行つちまつたらしいね……」

くれはは手配書に写る、麦わら帽の少年と天使の少女を見て、笑みを浮かべる。

その名に刻まれた「過去」に、想いを馳せるように。

「生きてたのか、Dの意志と賢者の意志は……」

そのつばやきは誰にも届くことはなく、唯一耳にしたニーナも、その意味を理解することとはなかつた。

「アツハツハツハツハツハ!!」

「めでてーめでてーっ!!! 月が出てるし桜が咲いたぞ!!!」

思わぬトラブルに見舞われ、ようやく改めてアラバスタに向けて出発することができたメリー号。

その甲板上はすでに、ドタバタと騒がしい宴の場へと変貌していた。

「チョッパァー!!! チョッパァーコノヤロー!!! てめえいつまでそこでブーツとしてんだ!!!」

「飲め!!! こつち来て飲め!!!」

「おいナミ、みろ。ヨサクに習ったんだ」

「いや、しかしいい夜桜だったぜ。まさかこんな雪国で見れちまうとはな!!!」

「ああ、こんな時に飲まねエのはウソだな!!!」

島を出る際に見えた、とんでもなく美しい光景を肴に、いつもは仲が悪いゾロとサンジが互いに酒を注ぎ合う。

鼻の穴に割り箸を突っ込んだルフィやウソップは、欄干に腰掛けて黄昏ているチョッパァーを呼びながらさらに騒いでいた。

「……お前の父ちゃんはずげエな。聞く話じゃ……医者としてはまだまだ素人の域を出なかつたみてエだけど」

島の方を見つめて佇むチョッパァーの元に、未だ興奮冷めやらない様子のエドワードと

アルフォンスが近づいた。

少しだけ警戒していたチョツパーだが、ヒルルクのことを褒められていると気づき、話を聞くことにしたようだ。

「だが……錬金術師としてなら、きつと歴史に名を残す偉業を残してたかもしれねエな。その気合と根性は、もつと讃えられるべきだった……!!?」

今まで誰も見たことがない、素晴らしい景色を作り出した偉大なヤブ医者。

知識や技術は無くとも、それを補って余りある尋常ではない根気と熱意。世の錬金術師の何人が、それだけの想いを抱いているであろうか。

「会って話をしてみたかったなア……!!? おれたちがあと10年早く生まれてたらなあ………」

「うん……!! 生きてる間に会ってみたかった……!!」

お世辞やおべっかでもなんでもない、本心から讃える言葉だった。

チョツパーはただ、自分を褒められるよりもくすぐったい気がして、どう返したらいいのかわからずにいた。

だが、全員が全員感動に浸っているわけではなかった。

「ちよつとあんたら!! 少しはこつちの心配をしたらどうなの?」

「なんだ、生きてたからいいじゃねエか」

「カルーあなた、どうして川で凍ってたりしたの!!？」

「クエー……」

毛布を分厚く巻いたカルーが、ビビに抱きしめられながらガタガタと震えている。

メリー号に戻った彼らを出迎えたのは、川の水面上に半身を出して凍り付いていたカルーの憐れな姿だった。

「足でも滑らせたんだろ？ ドジな奴だな、はははは」

「黙ってMr. ブシドー!!」

「ゾロってやつが川で泳いでいなくなったから……」

「大変だと思つて川へ飛び込んだら凍っちゃつたつて」

「あんたのせいじゃないのよ!!」

元凶たる剣バカに、ビビが怒りのゲンコツを落とす。

ひとまず落ち着いたビビは、カルーの言葉を代弁したエレノアともう一人、チヨツパーに驚きの視線を向けた。

「トニー君、あなたカルーの言葉がわかるの？」

「おれはもともと動物だから動物とは話せるんだ。こいつの方が異常なんだよ」

「あははは……何でだろうね」

多少違うが、どうみても人間のエレノアが普通に動物の言葉を理解していることが、

チョッパーには不思議でならなかった。

対するエレノアが苦笑していると、ナミが思わぬ特技を持つチョッパーに目を輝かせる。

「すごいわチョッパー!! 医術に加えてそんな能力もあるなんて!」

「バ…バカヤロー、そんなのほめられても嬉しくねエよ!! コノヤローが」

「嬉しそうだなー」

「ところでナミさん、〃医術〃って何のことだ?」

相変わらず褒められ慣れず、思いつきりニコニコ感情をあらわにしてしまうチョッパー。

そんな中、口を挟んだサンジは改めて新たな仲間について、詳しく知ることとなった。

「何イ!! チョッパーお前、医者なのか!」

「あんた達、チョッパーを一体何者のつもりで勧誘してたの?」

「七段変形面白トナカイ」

「非常食」

「……………!!」

予想外の返答に思わず逃げ出そうとしたチョッパーを、すぐにナミが抑える。

ふとチョッパーは、自分の身の軽さに気づき慌てて振り返った。

「あ……しまった!! おれ慌てて飛び出して来たから医療道具忘れてきたっ!!」
「このことじゃないの? そりに乗ってたけど……」

狼狽するチョツパーだが、エレノアが持ち上げた荷物を目にして一瞬固まり、目を見開くと慌ててそれを受け取った。

「おれのリュック!! 何で……?!」

「何でって、あんた自分で旅の支度したんじゃないの?」

「……………ドクトリー又か……結局、あんたの考えてること全部見透かされちゃってたわけだ」

追い出すようにきつい物言いをしていた彼女が、涙をこらえて荷物をまとめる姿が目に見え、

最後の最後まで面倒を見てくれた恩人の心意気に、チョツパーはジーンと胸が熱くなるのを感じていた。

「素敵な人ね……」

ナミとエレノアも、そうそう真似できない愛の深さを持つ医者进行を思い浮かべ、微笑みを浮かべる。

少ししんみりとした空気が流れていたが、それをぶち壊す騒がしい声がまた聞こえてきた。

「アツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ!!」

「おい、チョッパ、おめえもやるかういヒヨツハー、おええおやうあ!!」

「うっさいお前ら!!! すな!!!」

鼻の穴と口の端で割り箸を挟み、ざるを持つてドタドタ駆け回るルフィたちにナミがツッコミを入れ、エレノアはあきれ返る。

真似しようとしたチョッパはもちろん止めていた。

「よ——し、てめえらみんな注目——っ!!!」

宴がヒートアップしてきた時、頃合いだとウソツプが船室の上上がり笛を鳴らす。

いい感じに酒が入って、みんなほとんど聞いていないも同然だったが、一味の盛り上げ役を買って出たウソツプは構わず続けた。

「えー、ここでおれ達の新しい仲間『船医』トニートニー・チョッパの乗船を祝し」

「カルーあなた飲みすぎよ!!」

「クエーツ!!」

「おい、クソコック。もつとつまみ持って来い」

「おオ!!? てめえ今なんつった?! おれをアゴで使おうとはいいい度胸だ」

「お酒たりないよー!!?」

「サンジ、恐竜の肉もうねエのか!!? いっぱい積んだだろ!!」

「あんたが全部食べちゃったんでしょうが!!!」

「ルフィてめエおれの分まで食いやがったな!!!?」

「喧嘩しないでくださいよ!!!」

「あ——あらためて乾杯をしたいと思う!!」

ワイワイガヤガヤギャーギャーと、小さな海賊船はたちまち笑い悲鳴と歓声に満ちる。

ずっと孤独に生きてきた、化け物と呼ばれたトナカイにとつて、それはみたことも体験したこともない感覚だった。

「おれさ……こんなに楽しいの、初めてだ!!」

「新しい仲間に!!! 乾杯だアア!!!」

「「「「「「カンパ——イ!!!」」」」」」」

ガツシヤアアアン!!?と、掲げたジョッキが音を鳴らす。

皆で満面の笑顔を浮かべ、新しい仲間の乗船を全身全霊で祝福する。

孤独だった化け物はもう、一人ではなくなつたのだ。

第11章 砂漠の王国〈前編〉

第82話 “偽りの英雄”

とある国、とある場所の地下深く。

輝かしい名を持つ『表』の仮面の下におぞましい悪意を持つその男は、一人の女が持ち込んだ報告にピクリと片眉を跳ね上げた。

「何、王国で海賊が暴れてる？」

男は葉巻の煙とともにため息をこぼし、うつとうしそうに舌打ちした。彼が今の地位に立つてから、しばらくはなかった面倒事だったからだ。

「この国にはおれがいると知らんのか……」

「さアね……サー・クロコダイル。暴動中の国は海賊のいいカモなのよ……いくの？」

「いや……」
自分の秘書である女にそう答え、男——サー・クロコダイルはにやりと笑みを浮かべる。

「あいつらがもう向かっている」

「いやいやもう、ほんと。なんも知らねエから、おれはっ」

「おい何目エそらしてんだ。ちゃんとおれの目を見ろ。じゃあ聞くがな、しつかりアラバスタまで持つ様におれが、ちゃんと配分しといた8人分の食料が夜中の内に、なぜ消えるんだ？」

ほお袋をリスの様に膨らませたルフィが、睨みつけてくるサンジから必死に目を逸らして答える。冷や汗をかきまくっていて、怪しいことこの上なかった。

「ムダな抵抗はよせ。てめエはポーカーに向かねエ人間なのさ」

「あつ、口のまわりに何かついてる」

「しまった!!! 食べ残し!!」

「おめエじゃねえかア!!!」

「ふべエ!!!」

犯人を見つけたサンジがそれ見たことかと思いつきルフィを蹴り飛ばす。

口の中の食べ物のかけらをブツと吐き出して転がっていくルフィに、義足の整備を行っていたエレノアが深い深いため息をこぼした。

「ああナミさん、見ただろ。あんにやるひどいんだくく!! 鍵付き冷蔵庫買ってくれ

よオ♡」

「そうね。考えとくわ。命にかかわるから…」

ちやうど会話の一端を聞いていたナミが、本気で不安げな表情で答える。

エレノアは眉間にしわを寄せ、メリー号の欄干に腰かけて釣り糸を垂らしている一人と二匹にじろりと目を向ける。

「……………おい、そこの共犯ども。そこになおれ」

「!!!」

もぐもぐと口を動かしていた彼らは、顔を真っ青に染めて凍り付くのだった。

「英雄？ クロコダイルはアラバスタの英雄なの?!!」

ボコボコにしたルフィたちを積み上げて山にしたナミが、ビビに驚きの眼差しを向けた。

ビビは神妙な表情で頷き、エレノアも同意するように苦虫を噛み潰したような微妙な表情で先を引き継いだ。

「そう。『王下七武海』っていうのはようするに世界政府に雇われた海賊。七武海が財宝目当てに海賊同業者を潰すのも、『海軍』が正義のために海賊悪を潰すのも、国の人達にとつてのありがたさは変わらないってわけさ。結果は同じだからね」

「まあ、そりゃそうだ」

エレノアがやれやれと困ったように肩をすくめると、サンジも納得の声を上げる。こ

の一味があまりに海賊らしからぬため忘れそうになるが、世間一般的に見れば海賊は犯罪者である。

「…しかし、そのアラバスタの英雄が実はアラバスタを乗っ取ろうとしてるとは、みんな夢にも思ってたねエんだろうなア」

「『世界政府』公認の肩書は、それだけ強い力を持つてるんだよ。疑おうともしないんだから…」

「とにかく、おめエクロコダイルをよ!!! ブッ飛ばしたらいいんだろ!!!」

「結論を言えばね？」

今からやる気を漲らせるルフィを適当にあしらいい、エレノアは腕を組んで胡坐をかいているエドワードに目を向けた。

「そういうえばエドくん、アルくん。バロックワークス内の力関係ってどうなってたの?」「ん? ああ…」

問われたエドワードがそう言えばという風に居住いを正す。

バロックワークスに潜入していたのはビビだけではない。エドワードとアルフォンスも別ルートで一緒に調査していたのだ。

「Mr. O……クロコダイルが一番偉くて、そのパートナーがミス・オールサンデー。その下のメンバーは番号順に地位が高くて、同等の実力者同士で男女のパートナーを組ん

でんだよ。……でも確かMr. 2は一人だったような」

「リトルガーデンで戦ったMr. 5以上のペアは『オフィサーエージェント』って呼ばれてまして、有事の際にしか動かない実力者なんです。それ以下……つまりボクらの地位にいた人たちは『フロンティアエージェント』。平社員として資金集めをするのが仕事でした」

「そ……か、じゃあ!!! クロコダイルをよ!!! ブッ飛ばしたらいいんだろ!!!」

「お前、絶対理解してねエだろ」

先ほどから発言が空回りばかりしているルフィを放置し、極めて冷静なメンバーが顔を見合わせ合う。全員、考える作業は船長にはまったく不向きなのを分かっていた。

「……つてことは間違いなく、バロックワークス社最後の大仕事、アラバスタ王国の乗っ取りとなれば」

「ああ……残る『オフィサーエージェント』が全員終結することになる」

真剣な表情でそう答えるエドワードに、数名が知らず知らずのうちにこくりと息を呑む。逆に闘志を漲らせている者もいるが、全体で見れば半分もいない。

ふとその時、エレノアが訝しげな表情でエドワードとアルフォンスの方に視線を向けた。

「……………とこころで気になってたんだけどさ」

「ん？」

「エドくん……いや、あの場合アルくんか。パートナーは誰だったの？」

エレノアの質問に、エドワードとアルフォンスを除いた全員がハツと目を見開く。

彼らの言う通りなら、フロンティアエージェントである彼らにも女性のパートナーが、つまり敵がもう一人いるはずだった。

「あ！ そういえば……!!」

「ペアがいるって話だったな、お前!!」

「ミス・テューズデーはどうしたの?!」

「ああ……あの人は……」

一斉に問い詰められるエドワードだったが、その表情はあまりにも緊張感がない。忘れていた、という感想が全面に現れていた。

「……………まア、気にすんな」

「「「「いやいやいやいや」」」」

「とにかく大丈夫だ。心配するようなことにはならねエから」

「「「「おいおいおいおい!!」」」」

ヘラヘラと笑ってごまかすエドワードだが、一味としてはそうはいかない。不確定要素を抱えたまま敵に挑むなど恐ろしくて仕方がなく、ルフィでさえも待ったをかけてい

た。

しかし質問した当のエレノアはエドワードの方を見て何事か考え、やがて引き下がった。

「……君がそう言うなら」

「オイいいのかよ、敵がまだほかにもいるんなら警戒したほうが……」

「まあ……10番のエージェントならここに来ることもないでしょ。平気へいき」

一味でも慎重派なエレノアに気にするな、と気の抜けた態度で言われてしまったため、ナミたちも納得できずとも引き下がるほかにない。

奇妙な緊張感が漂う中、急に表情を引き締めたエドワードが真剣な眼差しを全員に見せた。

「だが……問題が一つある」

トーンの変わったエドワードの声に、一味はハッと意識を切り替える。

隣に座るアルフォンスも、表情こそ読み取れないもののかんりの緊張が感じ取れて、非常に重要な情報であることが伝わった。

「王女さん………あんたはまだ知らねエかもしれないもののかんりの緊張が感じ取れて、実はごく最近ある一組のペアがオフィサーエージェントに加わることになった」

「え……!!?」

初耳だ、といわんばかりにビビが目を見開き、どういふことかと問い詰めるようにエドワードの方に身を乗り出す。

オフィサーエージェントということは、少なくともエドワード達よりもはるか上に位置する実力者。かなり警戒しなければならぬ相手ということだ。

「で、でもそれなら私達のナンバーにも変化が……!!!」

「そう……そのあまりの強さゆえに、Mr. 1以下全員のナンバーを下げなきゃならないほどの実力者だ」

「ミ……Mr. 1って……クロコダイルの次に強いやつって事だろ!!? そいつらよりも強いつてのにかよ!!?」

「確かな情報だ……聞きやあそいつらは、自らバロックワークスに売り込み、何千万の賞金首をいくつもみやげにすることで実力を示したとんでもねえ強者だってことだ……!!! それまでそんな奴らが裏の業界にいたなんて話はなかったのに……たった数カ月で頭角を現したやべえ奴らだ……」

エドワードのもたらした情報に、ナミとウソップ、チョッパー、カルーが顔を引きつらせてごくりとつばを飲み込む。

好戦的な笑みを浮かべていたルフィやゾロ、サンジも、さすがに警戒したように険しい表情を浮かべていた。

「そいつらこそが謎多きエージェント……： Mr. 0.5^{ハーフワン}と Miss・リープデイ[〃]!!!」

エレノアの鋭い視線を受けながら、エドワードは冷や汗をかきながら引き攣った笑みを浮かべる。

彼の知った新たな敵に関する情報がどれほど恐ろしいものなのか、それだけで十二分に伝わってきた。

「覚悟しておけ、お前ら……：じかに目にしたわけじゃねエがこいつら、マジで化け物らしいぜ」

とある港町に、人々の悲鳴が響き渡る。

アラバスタの沿岸に存在する『ナノハナ』は今、海賊に襲われていた。

「ごらんなさい、グラトニー。人間はどうしようもなく愚かだわ」

「おろかおろか」

「私達が介入しなくても、あの男ならきつと自分でここまでの惨劇を作り出せた。まったくもって度し難いわ、人間って」

あちこちで血が流れ、怒号と悲鳴が木霊する惨状の中で、その男女は別世界のような優雅な時を過ごしていた。

艶やかに波打つ長い黒髪の、眼帯をした長身の美女と、まるでボールのような肥満体型の男。あまりに不釣り合いな二人が、惨劇の前に平然とした顔をしていた。

「流血は流血を、憎悪は憎悪をよび、ふくれ上がった強大なエネルギーはこの地に根を下ろし血の紋を刻む……何度くり返しても学ぶ事を知らない。人間は愚かで悲しい生き物だわ」

ゾツとするほどに美しい顔立ちの女はそう呟くと、その口元に艶やかな笑みを浮かべる。豊満ながら引き締まった見事な肢体の彼女がそんな笑みを浮かべるため、常人ならば正気を失くしそうな蠱惑的な魅力を醸し出していた。

「まア……だから私達の思うツボなんだけどね」

「つぼつぼー」

「おい、そこで何をやってる!!」

すると、悲鳴の中でも顔色一つ変えない二人に気づいた海賊の一人が、どすどすと荒々しい歩調で近寄ってきた。

優雅に過ごしていた女がピクリとこめかみを動かすと、それに気づいた男も不機嫌そうになり、刃を突き付けてきた海賊を睨み始めた。

「この状況で余裕かましやがって……ちつとは人質らしくしねエかこのクソアマ……」

歯牙にもかけていないような態度が気に入らなかつたのか、口汚く女を罵ろうとした

海賊の男。

だが、大きな黒い影が彼に襲い掛かり、耳障りな声がぶつりと途切れた。

「食べちゃダメだつてば、おバカさん」

困り顔で、そう男に告げる女。

そのすぐそばでは、ほきほきブチブチと耳をふさぎたくなるような恐ろしい音が鳴り響いていた。

「バルド、港の連中からの連絡が途絶えた」

町の中心、町の運営を行う町長の職場にて、一人の眼帯の大男が部下からの報告に眉を寄せた。

ナノハナを占拠した海賊、バルドは電伝虫による情報網を作っていたが、その一部が繋がらなくなつたらしい。

「どういうことだ？」

「…だれか歯向かう気でいやがる」

「バカな！ 兵士は反乱軍の相手ですうそう向かつて来れねえし、外部の連絡手段もおさえてある。住民が助けを呼べるはずは…仲間が裏切りを？」

「まさか！」

「…フン、しよせんはクズの寄せ集めだな……不測の事態が起こるとすぐに崩れる」

不測の事態にざわめき始めた時、部屋の間で椅子に縛り付けられていた初老の男が吐き捨てた。

ナノハナの町長を務める彼は、一度起こった異変に右往左往する彼らを見下すように睨み、不敵な笑みを浮かべる。

「そうそう貴様らの思い通りにはならんということだ。今のうちに降伏することを考えておけ。この国にはあの方が……」

不遜な態度で優位性を示そうとした彼だが、次の瞬間破裂音と共に彼の耳が吹き飛ばされる。

突如襲い掛かった激痛に、町長は椅子ごと倒れてその場を転げ回った。

「うああああああ!!」

「ムダ口たたくくんじゃねエ。次は尻の穴増やすぞ」

ガシャン、とバルドは自身の銃器を搭載した機械鎧オートメイルを鳴らし、町長を冷たく見据える。

その目に、殺人を厭う様子は微塵も感じられない。次は確実に本気でやりかねなかった。

「さつさとそのネズミ片付けて来い」

バルドが部下に告げ、何人かが武器を手に部屋を出て行ったちようどその時、

机の上に置かれていた電伝虫に通信が入り、電伝虫が顔マネをしながら音声を発し始めた。

だがそれは、望んでいた声とはまるで異なっていた。

『助けてくれ、化け物が仲間を食つ…』

「化け物!!? 何を寝惚けて…」

『あつ…ぎゃあああああああ!!!!』

恐怖に引き攣った顔で、ボロボロと涙を流しながら叫ぶ電伝虫。

それが顔マネをする場ではいったいどのような惨劇が起こっているのか、悲鳴だけではなく肉を引き裂きすり潰すような悍ましい音が聞こえてきていた。

さすがに表情を変えて硬直するバルド。そこに、先ほど出て行つた部下の一人が慌てた様子で駆け込んできた。

「バルド!! ネズミどころじゃねエ!!! なんかよくわからんがとんでもねー奴がこの町に…!!!」

驚愕と焦燥で冷静さを失つた様子 of 部下は、急に白目を剥いてその場に倒れ込んだ。

すると、おびただしい鮮血が噴き出す彼の後ろから、見覚えのない一人の美女が姿を見せた。

「な……何だてめエ…!!!」

バルドは目を見開いて後退るも、何とか高圧的な態度を保ったまま銃器を向ける。

正体不明の女は町長室の唯一の出口にいるため、一度場所を変えることもできず、逃げ場が無くなって不安にさいなまれていた。

「何だっつてんだこのクソアマがアああああ!!!」

「うるさい男はキライよ」

状況の異様さと恐怖感から、早々に敵と見定めたバルドが引き金を引きかける。

だがそれよりも速く、女はバルドに向かって自分の腕を軽く振っていた。

「『黎明の腕』」

その瞬間、バルドの機械鎧オートメイルは鋭利な刃物で切断されたようにキレイにバラバラにな

り、バルド自身も全身を切り裂かれる。

何が起こったのかもわからないまま、バルドは悲鳴一つ残せず、その場に崩れ落ちた。

「あ……あなたは……一体……!!?」

町長は椅子に縛られたまま、突然現れた美女を凝視して問いかける。

女は無言で町長のもとに近寄り、小さく指を振る。すると町長を縛り付けていた縄がはらりと切られ、女は自由になった町長に優しい微笑みを見せた。

「……………お礼なら『砂漠の王』に。私達はただの使いよ」

町長はその笑顔に、見る見るうちに歓喜の表情を浮かべていく。

今やアラバスタの新たな守護神のように扱われる英雄・クロコダイル。その使いであるという彼女が、悪人のはずなどなかった。

「クロコダイル!!! クロコダイル!!!」

大量の宝物が入った袋を担ぎ、称賛の声もまともに受け取らずに町を後にする男女。その背中に、町の人々はまるで天の使いを見るような心酔した声を上げ続けるのだった。

第83話 “仲間の印”

「ルフィ!! てめえがエサ食っちゃまうからいけねエんだろうが!! エサがなきや釣れるもんも釣れねエよ!!!」

「お前らだつて食つただろ」

「おれ達はエサの箱のフタの裏についてたヤツ食つただけだ!!」

じりじりと肌を焼く天気の中、青年たちのギャーギャーと騒がしい声が聞こえる。

船室から顔を出したビビは、食糧調達を命じられた仲間達がどれだけの戦果を得られたのかを確かめに向かった。

「ルフィさん、ウソツプさん、エドワードさん、何か釣れ：カル~~~~~ツ!!!」

「グエ———ツ!!!」

「あなた達カルーに何してんのよ!!!」

しかし、餌の代わりに釣り糸でぶらさげられる自分の相棒の姿に目を剥き、ビビが思いつきルフィたちをぶん殴る。

たんこぶを作つて伸びた三人を鼻息荒く睨んでいると、船の進行方向上を見やつたビビの目に奇妙なものが映つた。

「あれは何？ 煙……!!!」

「何だ、ありや」

「わたあめかな」

「ナミさん来て!! 正面に何かあるみたい!!」

海面上にもくもくと上がる白い何かに、ピビが慌てて海に詳しいナミを呼ぶ。

それより先に、エドワードがちらりと目をやっただけで、何とということは無いというように息を吐いた。

「……ああ、気にすんな。大丈夫だ、ただの蒸気だからな」

「ただの蒸気が海から?!?!」

「ええ、ホットスポットよ」

「何だそりや」

「マグマができる場所のこと。あの下には『海底火山』があるのよ」

「海底なのに火山なのか?」

「そうよ。火山なんてむしろ地上より海底の方にたくさんあるんだから」

「海の面積は惑星の表面の7／8割だって言うからね」

「へ——」

「どうでもいいや、食べねエんじや」

初めて知る知識に、ビビとチョツパーがへーと感嘆の声を上げる。

ナミはどこか楽し気な笑みを浮かべ、白く不確かな蒸気がしつかりと存在を示している光景を見つめた。

「こうやってね、何千年何万年後、この場所には新しい島が生まれるの」

短命な人間にも、長命な巨人族にさえ決して見る事はできない、遠い未来。

それを思い浮かべるだけで、何とも言えない高揚が胸の内から沸き立つようであった。

「…ナミさんステキ♡」

「なにか…すごい場所みたい。ここは…」

「そうよ」

「『偉大なる航路』^{グランドライン}も少しずつ変わっていくんだね…」

「何万年って…おれ生きてられるかな」

「…そこは死んどけよ、人として」

「不老不死とかさすがに笑えねえよ」

感動するビビやエレノアとは真逆に、空腹が頭の中を占めているルフィはつまらなそうに舌を出す。

そうこうしているうちに、メリー号は件の蒸気の中に真正面から突っ込んでいった。

「うわーっ」「ウエホッ」「エホッ」

「硫黄くせえ!!」

「なんも見えねエ、湯気だらけだ!!」

「我慢して…すぐ抜けるから」

上記の規模がかなり広いために、辺りは霧の中のように真っ白に染まる。

さらにはひどい匂いと熱さで苦しめられつつも、何とかホットスポットを突っ切った時だった。

釣り糸でぶらさげられたままだったカルーの首に、見覚えのない奇天烈な格好の大男が掴まっていた。

「オカマが釣れたああ!!」

「シィ〜〜まったア!! あちしつたら、なに出合いがしらのカルガモに飛びついたりしてんのかしら!!」

ハツとなって手を離れた騒がしいオカマは、そのまま海に向かって真っ逆さまに落ちていった。

「いやーホントにスワンスワン」

ぼたぼたと全身から雫を垂らした、バレリーナのような変態的な格好のオカマは、片

手を掲げてルフィたちに深く頭を下げる。

一方思わず彼を助けたルフィたちは、心底呆れた視線を向けていた。

「見ず知らずの海賊さんに命を助けてもらうなんて、この御恩一生忘れません!! あと温かいスープを一杯頂けるかしら」

「ねエよ!!!」

「こつちがハラへってんだ!!」

妙に凶々しいオカマにみんなでツツコミを入れ、そのせいでさらに空腹がひどくなることに険しい顔になる。

オカマはふと視線を移し、ビビを見つけると気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「アラ!! あなたカ——ワイ——わねー好みよ♡。食っちゃいたい、チュツ♡」

「ダメに決まってるでしょ」

やや引き攣った顔になるビビの前に立ち、エレノアがジト目でオカマを睨む。

それを気にせず、ルフィが海に沈んだ時のオカマを思い出して呟いた。

「お前、泳げねエんだなー」

「そうよう、あちしは悪魔の実を食べたのよう」

「へー!! どんな実なんだ?」

「そうねい。じゃあ、あちしの迎えの船が来るまで、慌てても何だしい。余興代わりに見

せてあげるわ」

期待の視線を向けられ、オカマは雫を払いながら立ち上がると、その場で大きく腕を振り上げた。

「これがあちしの能力よーう!!!」

そう叫んだオカマが振り上げた手を突き出し、なんとルフィの顔面に強烈な張り手を見舞いする。

ルフィはたまらず吹き飛ばされ、船室の壁に勢い良く激突した。

「うべっ!!!」

「ルフィ!!!」

「何を……」

突然のことにやはり敵か、と身構える仲間達。

しかしその表情は、次の瞬間驚愕に変わり固まっていた。

「待——つて待——つて待——つてよ——う。余興だつて言つたじやな——いのよ——
——っ!!!」

「な……?!?」

「ジョ……ダンじゃな——いわよ——う!!!」

やたらと高いテンションのまま手で制するオカマが、聞き覚えのある声で笑う。

小馬鹿にするような表情で騒いでいるのは、格好こそ違うもののルフィと寸分たがわぬ姿だった。

「……………はっ☒ おれだ!!!」

「そっくり!!? びびった?! ビビった?! が——っはっはっはっは!!!」

ルフィが目を白黒させる前で、オカマはルフィの顔でしてやったりと爆笑する。格好が奇天烈なままだけに、その異様さが際立っていた。

「左手で触れればホラ元通り。これがあちしの食べた『マネマネの実』の能力よ——う!!!」

「声も……」

「体格まで同じだったぜ……………!!!」

「姉弟子みてエだ……………でもこっちの方がもっとすげエ……!!!」

「スツ、スゲ——ツ!!」

「まア、もつとも殴る必要性はないんだけどね——いつ」

全員が驚愕で絶句し、騒いでいると、オカマは順々に仲間達の顔に触れていく。

そしてまた右手で自分の顔に触れ、自分の姿までもを変えてみせた。

「この右手で……………」

まずはウソツップに。

「顔にさえ」

次にゾロに。

「触れれば」

次はチョッパー。

「この通り」

今度はエドワード。

「誰の」

さらにエレノア。

「マネでも」

ガリガリに痩せた金髪の青年に。

「で〜〜〜きるってわけよう!! 体もね♡」

そして最後にナミに変わり、性別まで超越していることを前をはだけて示して見せ、全員を吹き出させる。

その後、鬼の形相のナミに思いっきりしばかれた。

「やめろ!!」

「ア〜〜ウチ!!!」

涙を流して崩れ落ちるオカマ。

しかしエレノアとエドワードは、オカマの能力とは別に驚愕の表情を浮かべていた。

「あれ…今の…!?？」

「どういうこと…!?？」

「さて、残念だけどあちしの能力はこれ以上見せるわけに」

目をこすりながら絶句するエレノアたちをよそに、オカマは名残惜しそうに居住いを正す。

するとルファイたちが、面白い芸の持ち主を揃って持ち上げ始めた。

「お前すげー!!」

「もつとやれー」

「さくらくらくに〜」

「ノリノリじゃない」

「メモリー機能つきいっ!! 過去に触れた顔は決して!! 忘れな〜い」

オカマが右手でポンポンと顔に触れるたびに、面白い様に様々な顔に変化していく。

その中の顔の一つに、ビビが目を見開くのも気づかないまま。

「ど——うだったあ!!? あちしのかくし芸っ!! 普段、人には決して見せないのよう

!!」

「「イカス——!!!」」

「ジョー——ダンじゃな——いわよ——う!!」

「「ジョー——ダンじゃな——いわよ——う!!」」

「やってろ」

あつという間に意気投合したルファイたちが、肩を組んではしゃぐのを横目にナミが肩をすくめる。

すると彼女の目が、遠くから近づいてくる一隻の船を捉えた。

「それよりさ、なんか船が近づいてきてるけど……あんたのじゃない?」

白鳥の船首を持つ船の存在と、聞こえてくる船員たちの声を示すと、オカマはハツと表情を変えて振り向いた。

「アラ! もうお別れの時間!! 残念ねい」

「「エ」——ツ!!」

「悲しむんじゃないわよう。旅に別れはつきもの!! でも、これだけは忘れないで」

オカマは見事な跳躍で自分の乗っていた船に飛び移ると、涙で濡れた目を向けて親指を立てる。自分自身の寂しさにも蓋をしながら。

「友情つてヤツア……つき合った時間とは関係ナツスイング!!!」

「「また会おうぜ——!!!」」

「さア行くのよお前達つ!!!」

「ハッ!!! Mr. 2・ボン・クレール様!!!」

泣きながら別れの言葉を送るルフィたちを背に向け、オカマ——Mr. 2は船員たちに告げてあつという間に去っていく。

あまりにもさりげなく聞こえてきた単語に、ルフィたちは危うくそれを聞き逃しかけた。

「Mr. 2!!!」

「あいつが………Mr. 2・ボン・クレール!!!」

「そんな……!!!」

「ビビ!! エド!! アル!! お前、顔知らなかったのか!!!」

「すまねエ……Mr. 1とMr. 2のペアの情報はまだ手に入つてなかったんだ」

「噂には聞いてたのに……Mr. 2は……」

目を見開くルフィたちに、エドワードとアルフォンス、ビビは申し訳なさそうに眉間にしわを寄せる。

噂でしか聞いたことがないのなら仕方がない、とルフィたちは自身らの迂闊さを呪いかけた、が。

「大柄のオカマでオカマ口調、白鳥のコートを愛用してて背中には『おかま道』^{ウエイ}と」

「気づけよ」

どう考えてもたった一人を表しているような情報の多さに、全員が呆れた視線を集める。

しかしビビはそれどころではなく、Mr. 2がみせた顔の一つに戦慄の表情を浮かべていた。

「…さつき、あいつが見せた過去のメモリーの中に…父の顔があったわ…!! あいつ一体…父の顔を使って何を…?!」

「……………てめエが例えば王になりすませるとしたら…相当よからぬこともできるよな…」

「そりゃ厄介な奴を取り逃がしちまったな」

「あいつ敵だったのか…?」

「迂闊だった…!! 何であんなホンワカしちまったんだ…?!」

「確かに…敵に回したら厄介な相手よ…!!」

頭を抱えるエドワードらに、不安を隠せないウソップたち。

敵に回すと恐ろしい能力を前に、一体どうしたらいいのかと思考が詰まりかけていた。

が、ある男がそれを否定した。

「そうか?」

何を困った顔をしているんだ、と片眉を上げるルフイに、全員ががっくりと肩を落とす。

この男の能天気さは今に始まったことではないが、今はやめてほしかった。

「あのねエ、ルフイ……」

「まあ待ちなよ。確かにこの人の意見に根拠はない。でもそう臆する必要はないのは正し……」

「今あいつに会えたことをラツキーだと考えるべきだ……対策が打てるだろ」

しかし、何とエレノアとゾロがルフイの肩に手を置き、彼の言葉を肯定する。

その顔には、勝利の糸口を見つけたような不敵な笑みが浮かんでいた。

数日後なる日、麦わらの一味の背後にとある訪問者の姿があった。

「ニッヤ——ッ」

「なんか出たア!!!」

ウロコの生えた巨大な猫が、招き猫のようなポーズで浮上してきたのだ。

悲鳴を上げるウソツプとチョッパーのそばで、エレノアがどこか懐かしそうに感嘆のため息をついていた。

「海ねこかア……」

「つつア”ア”　くくつ!!!」

「海獣だくくつ!!!」

「4日ぶりのメシだア!!!」

「メシだア!!!」

「進路よし…と。そろそろ着いてくれないかな…」

「メシ——!!!」

空腹のあまり化け物のような目で吠えるルフイに、海ねこは本能的な恐怖を抱いたのかザザツと後ずさる。

船の進行方向とは真逆に距離をとられ、ルフイたちは慌てだした。

「うおつ、引きやがった!」

「船、バック!!　バック!!」

「できるかア!!」

「逃がすんじやねエぞ、確実に仕留めろ!!!」

「はい、やめー」

しかし狩りに集中していた男たちは、背後から近づいてきたエレノアによって欄干に蹴り飛ばされる。

海ねこはその隙に、冷や汗をぬぐうようなしぐさを見せて海中へと逃げていってし

まった。

「騒がしてごめんねー」

「な…なんで!! エレノアちゃん…!!!」

「食べちゃダメなの!」

「アラバスタで海ねこは神聖な生き物だからさ」

抗議の声を上げる惨事たちに、エレノアはやれやれと肩をすくめる。

空腹に苦しむルフィは、無意味にガシガシと欄干にかじりついて涙を流した。

「く…食いもんが逃げた…」

「だけど安心して。もうすぐお腹いっぱい食べられるから」

「本当か?! 今度は何ネコが出るんだ?!」

態度を豹変させ、ルフィが歓喜の表情でビビに振り向いた時、進路を確認していたナ

ミが急いでビビのもとに顔を見せた。

「ビビ! 風と気候が安定してきたみたい」

「アラバスタの気候海域に入ったな。海ねこが出たのもその証拠だ」

目的地が着実に近づいてきていることに、思わず笑みを浮かべるビビとエドワード。

そこでゾロがさらに後方を見やって、不敵な笑みを浮かべる。

「後ろに見えるあれらも…アラバスタが近い証拠だろ」

その言葉に、ビビは視線を上げて表情を引きつらせる。

水平線上のあらゆる方向から、何隻もの帆船が向かってきていたからだ。それも、すべて同じマークの刻まれた帆を張って。

「船があんなに!! いつの間に!!?」

「おい、あれぜんぶバロックワークスのマーク入ってんじやねエか!!!」

「社員たちが集まり始めてるんだわ…!!」

「あれは、おそらく『ベリオンズ』!! オフィサーエージェントの部下達ですよ…」

「敵は200人はかたいね…」

「それも、ウィスキーピークのザコとはわけが違う」

「い…いい…!! 今の内に砲撃するか!!!」

「行つてぶつ飛ばした方が早エよ! いや待て!! メシ食うのが先だろ!!」

オロオロと気をはやらせるウソップと無謀に突撃しそうなルフィ。

ゾロとサンジがそれに待ったをかけ、不敵な笑みを浮かべた。

「バカ、気にすんな。ありやザコだ!!」

「そうさ! 本物の標的を見失ったら終わりだぜ。こつちは8人しかいねエんだ」

そう気持ちを改めて引き締めた彼らは、敵に備えて考え出した案を実行に移すのだった。

「とにかくしつかり締めとけ。今回の敵は謎が多すぎる」

「相手が海賊ならともかく、暗殺者だの殺し屋だのが多いんじゃないもんねー」

ぐるぐると左腕の二の腕に包帯を巻き、ゾロとエレノアが告げる。

きつちりと、外れないようにまかれた自分たちの包帯を見て、ナミとビビは感心した表情を見せた。

「なるほど」

「これを確認すれば仲間を疑わずに済むわね」

「やるなアお前……」

「そんなに似ちまうのか？ その……マネマネの実”で変身されちまうと……」

「そりやもう”似る”なんて問題じゃねエ。”同じ”なんだ。おいしいなー、お前見るベきだったぜ」

「おれアオカマにや興味ねエんだ」

「おれ達なんか思わず躍ったほどだ」

「あんな奴が敵の中にいるとわかると、うかつに単独行動もとれねエからな!!」

一人だけ、船室のみにいて邂逅することがなかったサンジが訝しげに尋ねるが、実際

に目の当たりにしたウソツプたちは舐めて見ることを許さない。

多少過大評価になろうとも、厄介な能力者に警戒しすぎることはないはずだった。

「なあ、おれは何をすればいいんだ?！」

「できることをやればいい、それ以上はやる必要ねエ。勝てねエ敵からは逃げてよし!!

精一杯やればよし!!」

「お前それ、自分に言ってるねエか?」

「間違ってるはいませんけど……」

「クエ!!!」

「おれにできることか……わかった!!」

不安げな顔でチョツパーが拳を握ると、ウソツプもそれで自分を鼓舞する。

ルフィは全員が包帯を巻き終わったことを確認すると、立ち上がって拳を突き出した。

「よし! とにかく、これから何が起こっても左腕のこれが仲間の印だ」

全員が包帯を巻いた左腕を突き出し、準備が完了したことを示す。

この先、これ以外の何も信用してはならない。決して揺るがぬ絆の証が、彼らの間に出来上がった。

「……………じゃあ、上陸するぞ!!! メシ屋へ!!! あとアラバスタ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

主に船長による大きな不安と、救国の決して揺るがぬ願い。

様々な想いを乗せ、まだ見ぬ敵の本体が待ち受ける砂漠の王国へと、麦わらの一味はついに足を踏み入れるのだった。

第84話 “炎の男”

『ナノハナ』のとある一軒の飯屋で、その事件は起こった。

席の一つに腰かけカウンターのの上に突っ伏した男を、客たちが遠巻きに見つめてい
る。その視線は、哀れなものを見るような物であり、同時に恐ろしげなものを見るよう
であった。

「店主と会話してる途中で突然死んじまったらしい」

「こいつは旅の男だ：旅路で知らずに “砂漠のイチゴ” を口にしたんじゃねエかとみん
な言ってるよ」

「“砂漠のイチゴ”？」

「赤いイチゴの实の様な姿をした毒グモだ。間違つて口に入れちまつたら数日後に突然
死ぬ。そしてその死体には数時間、感染型の毒がめぐる。だから誰も近づけずにいるん
だ：砂漠じゃ知らねエことは命取りになる」

ひそひそと語りながら、客の一人が男を気の毒そうに見る。

食事中に急死したために、顔が飯の中につっこんでしまっている。最期としてはあん
まりな姿だ。

「見ろ、肉を持ち上げた瞬間の手。そのまま固まっちゃまって…いかに『砂漠のイチゴ』の毒が強力かを物語ってる…!!!」

可哀想だとは思うが、ここは飯屋。このまま毒の塊となっている彼を放置しては店の運営にもかかわる。

どうしたものか、と遠巻きに店主が考え込んでいた時だった。

「ぶほ?!」

「うわ!! 生き返った!!!」

突如、突っ伏していた男が飯を吐きながら体を起こしたのだ。

てっきり死んでいるものと思っていたのに、突然息を吹き返したため、周りの客たちは安堵より先に驚愕が勝っていた。

「ん?」

「だ…大丈夫?」

「ん」

「きゃああ!!!」

何事か、と辺りを見渡す男に女性客が話しかけると、あろうことか男は女性客のスカートで汚れた顔をぬぐい始める。

ようやく落ち着いた男は、食事を再開しながら困り顔でため息をついた。

「ふう…いや…まいった…寝てた」

「「寝てたア!!」」

「しかし何の騒ぎだいこりゃ」

「「おめエの心配して騒いでたんだよ!!」」

本人としては普通に食事を楽しんでいたらしい。騒がしい店内に少々迷惑そうにしていた。

「この店はコント集団を雇ってんのかい？」

「いや…そうじゃねエが。まア…無事ならよかった」

自分が事の発端とは全く思っていないようで、男は呆れた視線をまわりの客に向ける。

ホツと店主が安堵するのもつかの間、男はまたしても糸が切れたように皿に突っ伏し、いびきをかき始めた。

「「「うをいつ!!」」」

男が無自覚のボケを連発し、客たちが全員でツツコミを入れる。これこそコントの様であった。

一度食事を中断した男は、思い出したように懐から二枚の紙を取り出し、店主に話しかけた。

「ところでおやつさん。こんな奴らが、この町に来なかったか？　羽生やしたキレーな……」

「よくもぬけぬけと大衆の面前でメシが食べられるもんだな」

もはや驚くまい、とうんざりした顔になる店主が答えようとした時、また別の声か男にかけられる。

振り向いた客たちは、そこに立っていた葉巻を啜えた男——スモーカー大佐に驚愕の目を向け、ザザツと後ずさった。

「〃白ひげ海賊団〃の二番隊長がこの国に何の用だ。〃ポートガス・D・エース〃」

「し……白ひげ〃!!? 海賊〃白ひげ〃の一味か……!!?」

「そーういやあいつの刺青マーク見たことあるぞ」

「なんでこんなとこに……!!?」

スモーカーからもたらされた情報に、客たちは今度は戦慄の表情を話題の男に向ける。

名指しされた男、エースはスモーカーに大胆不敵な笑みを浮かべてみせた。

「………ある女と弟をね、探してんだ」

海兵の実力者に睨まれても、エースの顔から余裕は消えない。

そんな彼に、もう一つ好戦的な声がかけられた。

「こんなところで会えるとは、今日の私はかなり運がいい…」

コツコツと靴音を鳴らし、純白の外套を羽織った黒髪の優男がエースの方へ近づいていく。その手にはめられるのは、奇妙な円陣の描かれた白い手袋だった。

「お前の炎と私の焰……どちらがより熱いか、ためすとしようか？」

「それが嫌なら、大人しく捕まるんだな」

「却下。そりゃゴメンだ」

小馬鹿にするような態度でエースは椅子の上で足を組み、二人の海兵を挑発する。

激昂こそしないが、二人の海兵は明らかにエースの対する戦意を高めつつあった。

「…おれア今別の海賊を探してるとこだ。お前の首なんかや興味ねえんだがな…」

「じゃ、見逃してくれ」

「そもいかない」

「おれ達が海兵で、お前が海賊である限りな…!!」

「つまらねエ理由だア…楽しくいこうぜ」

拳を構えるスモーカーと、指を鳴らす動作を見せる優男、そしてとくに構える様子のないエース。

まさか自分の店で戦うのか、とハラハラし始める店主をよそに、場の緊張感が高まり始めたその時だった。

「ロケットオー!!!」

「ぐあア!!!」

「を!?!」

突如、スモーカーの背中に何かが激突する。

スモーカーはそのまま吹き飛ばされ、啞然としたままの優男を放置し、エースを巻き込んで店の奥へとつつこんで行った。

「うは——っ!!! メシ屋だ!!! ハラへったー!!!」

「あーもう……すみません、うちのものが。弁償させていただきますので……」

「おっさん、メシメシメシ!!!」

「あ、ああ……いや、多分危ないから逃げた方がいいと思うよ?」

乱入してた麦わら帽の青年は、自分が何をしたかもわかっていないようでナイフとフォークを持って店主を催促する。

ペコペコ頭を下げるローブをかぶった少女に困惑しながら、店主は言われた通りに調理を始めた。

「…んのヤローが、どこのどいつだ…!! あ、どうも、お食事中失礼しました」

一方、いきなりふっ飛ばされたエースは怒りをこらえて立ち上がり、破壊してしまつた民家に頭を下げて歩き出す。

だが、一言文句でも言つてやろうと飯屋に戻つた時、エースの目は驚愕と歓喜で大きく見開かれていた。

「おい!! ル……………」

「麦わらアア!!!」

「ウゲ!!!」

声をかけようとした瞬間、復活したスモーカーがエースを押しつけて怒鳴りつける。食事を堪能している途中で呼ばれたルフィは、睨みつけてくるスモーカーを不思議そうに凝視していた。

「やっぱり来たか、この国へ……………食うのをやめろ!!!」

「やっべ……」

隣でエレノアが引き攣つた声を出すと、ルフィも次第に思い出してくる。

一度しか会つていないうえ、視界も悪かつたためあまりよく思い出せないが、格好と声には確かに覚えがあつた。

「あの時のケムリばもばいもめうい!!! 何でこんな所なんべばんべもばびび!!!」

口に含んだ食べ物をブツと吐き出しながら、ルフィは驚愕の声を上げる。

ルフィはすぐさま出された料理をかき集め、口の中に放り込んで走り出した。

「も——ああ〜〜おむ〜〜《どうも》ちそうきまでした《!!!》」

「待てエ!!!」

「む! まさか妖術師か?」
ウイザード

「ごめんなさ——い!!!」

スモーカーがルフィを追い、放置されていた優男がエレノアに気づいて振り向くと、エレノアも急いでルフィに続く。

店主が「お代…」と呟くのも無視し、海賊と海兵の大捕物が開始された。

「あんたつて子は!! どうしてこうもトラブルばつかひつさげて戻ってくるのかな?!」
悪かったつてばば

「まうばつぱば!!! とりあえず逃げるしかねエや
んくくみいゴクン…ほう!!!」

「いや何て言ってるのよ!!!」

そもその始まりといえば、島に着いた瞬間ルフィが飯屋を求めて全力疾走を始めたためであった。相変わらず欲望に忠実な船長に呆れながら、エレノアは心の内でビビたちに謝るほかになかった。

「たしぎイ!!!」

「は!!! はいっ!!! なんでしようかスモーカーさん!! タ!! タオルですか!! 暑いで

すよね、この国…」

「そいつらを抑えろ、麦わら」と妖術師ウイザード「だア!!!」

「麦わらっ?!? し…仕留め…!!!」

「邪魔ア!!!」

「きやあ!!!」

立ちはだかろうとしたたしぎだが、エレノアに蹴り飛ばされ、ルフィの曲芸のような動きであつさり突破されてしまう。

「たしぎ!! 海兵どもを緊急招集!!! 町をくまなく回つて“一味”を探せ!!!」

「はいっ!!!」

「ではいい加減……私も本気を出すとしようか」

周りが慌ただしくなっていく中、ルフィたちの動きを見ていた優男が動く。

手袋をはめたまま指を鳴らすと火花が散り、あつという間に凄まじい業火が生み出された。

「こういう空気の乾燥とチリに満ちた空間は……私にとって絶好の戦場だ」

「ヤバイ………あれはマスタング大佐!! “焰”の錬金術師だ!!!」

背後で広がる炎の気配に気づいたエレノアが、目を見開いて頬を引きつらせる。

マスタングの前方に集まった焰は見る見るうちに太い焰の槍を生み出し、エレノアとルフィに向けて勢いよく放たれた。

「レディ・クロエ火 燐 “!!!”」

大気をも焼く業火の槍が、ルフィたちに襲い掛かる。

エレノアはいったん立ち止まり、パンと掌を打ち合わせて地面をたたくと、瞬く間に土の壁が創造されて焔の槍を受け止める。

だがあまりの威力に、分厚い壁は一撃で粉々に破壊されてしまっていた。

「やはり一筋縄ではいかんか…」

「では我輩の『芸術』がお相手しようか」

やや不服気にマスタングが呟くと、その背後からまた別の声が響く。

「これにはマスタングも驚きの表情を浮かべ、我に返ると慌てて横に飛びのいていた。

「ぬうううあああああ!!!」

突然現れた、見上げるほどの巨人を持つ豪傑が、雄叫びとともに奇妙な模様の刻まれたナツクルダスターを振りかぶった。

「見よ、これぞ我がアームストロング家に伝わりし秘技!!!」
アイアン・パイセツプス 金剛不壊!!!」

青い閃光が走り、土がまるで生き物のように蠢いて無数の巨腕となる。

ギョツと目を見開いたエレノアは、決死の形相になりながら迫りくる土の塊を全力でかいくぐる。

地形をも変える大技を放った豪傑は、不敵な笑みとともにエレノアを見やった。

「フフフ……これも避けるか」

「ちよつと少佐ア!! 街壊さないでくださいよ!!!」

「何を言う!!」

集まってきた海兵たちのうち、金髪の男性と顔にほくろのある女性が咎めるように叫ぶが、豪傑は全く反省するそぶりを見せない。

「破壊の裏に創造あり!!? 創造の裏に破壊あり!!? 破壊と創造は表裏一体!! 『壊し』で『創る』!! これ大宇宙の法則なり!!」

軍服の上を脱ぎ捨て、鍛え上げられた見事な肉体美を見せつける豪傑に、上司や部下からは呆れた視線が向けられる。

「なぜ脱ぐ」

「て言うかなんて無茶苦茶な錬金術……」

がつくりと肩を落とす海兵たちは、とんでもない爪痕が残る『ナノハナ』の町に目を向けてため息をつく。これでもまだ、ウィザード「妖術師」を相手にしてマシな被害であるというのだから。

「『豪腕』の錬金術師、アームストロング少佐まで……! こりやちよつと厄介だな」
冷や汗をかきながら、エレノアは未だ向けられている敵意に辟易していた。

騒ぎは、仲間達の方にも聞こえていた。

はるか遠くから聞こえてくる怒号と悲鳴、それらが徐々に、近くなってきているのだ。

「何?」

「海軍だ。何でこの町に……!!」

「:しかもえらい騒ぎ様だぜ:海賊でも現れたか」

敵に潜入を気取られないために、住民の格好（ナミとビビはサンジの独断でセクシーな踊り子）に変装した一味だが、海軍が近くにいるとなれば厄介なことになる。

一体だれを追っているのか、友の影から覗き込んでみれば、見覚えのある麦わら帽が走り回っているのが見えた。

(((((お前か——つ))))))

思わずがくーつとずつこけてしまうゾロたち。

それに気づいたルフィは、あろうことか満面の笑みで方向転換してきた。

「よう!! ゾロ!!!」

「なにィ——つ!!!」

「麦わらの一味がいたぞオ!!!」

「バカ!! てめエ一人でマいて来い!!!」

「お! みんないるなー!!」

「あなたやっぱなんもわかってないじゃないですか!!!」

「何してんだよ保護者!!!」

「ごめんね!!! ほんとにみんなごめんね!!!」

半泣きで一緒に向かつてくるエレノアが、非常に憐れでこっちも涙が出てくる。

やむなくメリー号に戻るために走り出す一味だが、それよりも先にスモーカーが動いた。

「お前達下がつてろ!! 逃がすかつ!!!」
「ホワイトブロー!!!」

普通の人間には避けられない、触れない煙の拳がルフィを捕えようと迫る。

自分が逃げるだけでも精一杯なエレノアが蹴り飛ばそうとした時、彼女の目の前に割り込む人影があった。

「『陽炎』!!!」

赤々と燃える炎が、壁のように広がってスモーカーの拳を受け止める。

不発に終わったスモーカーは、そして他の海兵たちは目を見開き、すぐにその人物に対する警戒を高めた。

「……………!!!? てめエか」

「やめときな。お前は『煙』だろうがおれは『火』だ。おれとお前の能力じゃ勝負はつかねエよ」

小馬鹿にするように笑う男の身体は燃えている。否、灼熱の炎となっている。

その背に庇われるエレノアとルフィの表情も、男の登場に対する驚愕で固まってい

た。

「誰なの……!! あれ」

「エース……!!」

「変わらねエな。ルフィ、エレノア。とにかくコレじゃ話もできねエ。後で追うから前ら逃げろ。こいつらはおれが止めといてやる。行けっ!!」

信じられない、といった様子で名を呼ばれたエースは、自身も喜ばしそうに笑みで返す。

そしてすぐに、じりじりと包囲してくる海兵たちを睨み、真っ赤に燃える拳を構えた。

「行くぞっ!!」

「え!! なに、あいつ誰なの!!」

迷うことなく応じたルフィに戸惑いながらも、ナミたちは好機とばかりに急いで走り出す。

海兵たちは追おうとするが、立ちほだかるエースとその隣に立ったエレノアを前に踏み出せなくなっていた。

「エース一人でこいつら相手にする気? …私にもやらせなよ」

「エレノア……リハビリは足りてんのか?」

「私を誰だと思ってるの? あれなら十分なくらいさ」

「ならいい…!!」

先ほどの引き攣った表情とは打って変わり、頼もし気に笑みを浮かべ大人の姿に変わるエレノアに、エースは満足げに頷く。

パチン、とエレノアが指を鳴らすと、エースの物とよく似た炎が煌々と燃え上がった。

「久しぶりに、一緒に暴れようか!!」

二人の放つ炎によって、砂漠の王国の気温がさらに数度上昇する。

海兵たちはその光景に、戦慄と焦燥の表情を浮かべて後退った。

「ウソだろおい…!!」
ウイザード 妖術師 だけじゃなくて何で 火拳 まで…!!?」

「ひるむな!! こっちは大佐たちがいるんだ…数ではこちらが勝っている!!」

怖気付く部下を怒鳴りつけ、上官らしき海兵が銃を構える。

噂こそ知っているものの、海兵の中でもかなり上の実力者である大佐と少佐がいる以

上、敗北はまずないと高をくくっていた。

「海賊どもを討ち取れエ!!」

吠えるような号令とともに、海兵たちが一斉にエースとエレノアに向かって突撃す

る。

男女の海賊はそんな彼らに、全く崩れない余裕の笑みを浮かべていた。

第85話 君に加護あれ

「兄ちゃん!! さつきの奴は…お前の兄貴なのか?!!」

「ああ、おれの兄ちゃんだ」

メリー号に戻った麦わらの一味は、船長が語った事実には驚愕をあらわにする。

ルフィは誇らしげに、先ほど助けてくれた青年を思い浮かべた。

「まあ別に兄貴がいることに驚きやしねエがよ、なんで、この『偉大なる航路』^{グランドライン}にいるんだ」

「海賊なんだ。『ひとつなぎの大秘宝』^{ワンピース}を狙ってる。エースはおれより3つ年上だから、3年早く島を出たんだ」

「しかし兄弟そろって『悪魔の実』を食っちゃまってるとは…」

「うん、おれもびびった。ははは」

それ以上の言葉を失くしていたウソップの前で、ルフィもまた予想外といった反応を見せている。訝し気に振り向く仲間に、ルフィは驚きの言葉を放ってみせた。

「昔はなんも食ってなかったからな。それでも、おれは勝負して一回も勝ったことなかった。とにかく強エんだ、エースは!!」

「あ…あんたが一度も…!! 生身の人間に!!」

「やっぱ怪物の兄貴は大怪物か」

「そ〜〜さ負け負けだった、おれなんか。だっはっはっはっは。でも今やったらおれが勝つね」

「それも根拠のねエ話だろ」

愉快そうに笑うルフィに、全員の呆れた視線が集まる。この青年の絶対的ともいえる自信はどこから来るのだろうか、と。

しかしその余裕の笑みは、次の瞬間別のものになつた。

「お前が、誰に勝てるって?」

「ただいま〜」

ひょいっと気軽な素振り、二人の男女が船の真下から飛び移ってきた。

件の兄は欄干の上に、仲間である天使はバサバサと翼をはばたかせて甲板に降り立ち、一味ににやりと笑みを見せた。

「エ〜〜〜ス〜〜つ!!」

「よう。あー、こいつアどうもみなさん。ウチの弟がいつもお世話に」

「~~~~~や、まったく~~~~~」

歓喜の声を上げるルフィをよそに、その兄エースは一味にぺこりと頭を下げる。それ

につられてゾロたちも、思わず礼儀正しく対応していた。

「エース。何で、この国にいるんだ？」

「ん？ 何だ、お前らドラムで伝言聞いたわけじゃねエのか」

「ドラムで？ いたの？」

「あー、いいさ別に。たいした問題じゃねエから。とにかくまあ、会えてよかった。おれアちよつとヤボ用でこの辺の海まで来てたんだな。お前らに一目会つとこうと思つてよ」

不思議そうに尋ね返してくるルフィとエレノアに手を振り、エースは話を変える。

エースは不意に不敵な笑みを浮かべ、二人にある誘いを持ちかけた。

「エレノア…おれと一緒に『白ひげ海賊団』に帰るか？ ルフィと仲間も一緒に連れてよ」

「ううん、まだ帰るつもりはないよ」

「おれもいやだ」

「プハハハ…あー、だろうな。言ってみただけだ」

断られることは承知で言ったのか、エースに落胆する様子はない。

その提案を間近で聞いてしまったウソップは、先ほどの攻防で一瞬見えたエースの背中を思い出して、ごくりと息を呑んでいた。

「『白ひげ』…『白ひげ』って、やっぱその背中の刺青マーク本物なのか？」
 「ああ、おれの誇りだ…」

本気でそう思っているらしく、エースはその名を噛みしめるように頷く。
 その誇らしげな眼は、弟であるルフィにも向けられていた。

「『白ひげ』はおれの知る中で最高の海賊さ。おれは、あの男を『海賊王』にならせてやりてエ…ルフィ、お前じゃなくてな…!!」

「いいさ！ だったら戦えばいいんだ!!」

「返事なんか聞かなくてもわかっているくせに…」

世界でもっとも有名な海賊の一人の名を聞いても、ルフィは勇まし気に挑戦する意思を見せる。

エレノアも意地の悪い質問をぶつけたエースに、呆れた視線を返していた。

「私達はみんな…あの人を『父』と呼んで慕う家族。私はまだリハビリが終わってないし、あの海の航海に耐えられる状態じゃないけど…私が帰る場所は最初から決まってるよ」

エレノアの返答もエースにとっては望ましい答えだったらしく、満足げな眼差しで彼女を見つめていた。

しばらく三人の様子をうかがっていたサンジは、不意に船室の方を指さした。

「オイ、話なら中でしたらどうだ？ 茶でも出さずせ」

「あーいや、いいんだ。お気づかいなく。おれの用事はたいしたことねエから。ホラ。お前に、これを渡したかった」

「ん？」

エースは懐を探り、白い何かを探し出すとルフイに渡す。

受け取つたルフイがそれを広げてみるが、それは何も書かれていない、何の変哲もない紙にしか見えなかった。

「そいつを持つてろ！ ずつとだ」

「なんだ、紙きれじゃんか」

「そうさ。その紙切れがおれとお前をまた引き合わせる」

「へ——……」

「いらねエか？」

「いや……いる!!」

兄が渡すものなのだから、きつと何かしらの意図があるのだろうと、ルフイは何も聞かずに受け取る。

エースはじつとルフイを、そしてエレノアを見つめ、ふつと優しい笑みを浮かべた。

「できの悪い弟と危なっかしい女を持つと………兄貴は心配なんだ。おめエらもコイツ

にや手工焼かどうか、よろしく頼むよ……」

その言葉の全てから感じる温かい想いに、一味は思わず言葉を失う。

海賊らしからぬ優しさに閉口していると、エースは欄干を降りて、メリー号の真下に停めてあつた奇妙な小舟に飛び降りた。

「ええっ!!? もう行くのか!!?」

「ああ」

「もうちよつとゆつくりしてけばいいじゃねエか!! 久しぶりに会つたんだし」

「言つただろ。お前らに会いに来たのはコトのついでなんだ」

欄干から身を乗り出して引き留めようとするルフィに、エースはどこか殺気を纏いながら答える。

そのただならぬ様子に、エレノアは悲痛な表情で確かめた。

「……あの人を追うんだね」

「ああ……あいつは海賊船で最悪の罪……『仲間殺し』をして船から逃げた。隊長のおれが始末をつけなきゃならねエ。……おれは、あいつだけは許さねエ」

固い決意を感じさせる声で答えると、エースは遠い海の彼方を見つめる。

次いでエースは、ルフィとエレノアにまた頼もしい不敵な笑みを浮かべてみせた。

「次に会う時は、海賊の高みだ」

エースの言葉に、ルフィもエレノアもニツと笑みを浮かべて応える。

言葉はいろいろな、何を思っているかなど口にしなくともわかると、そう伝えるように。

「ウソよ…ウソ…！！ あんな常識のある人がルフィのお兄さんなわけないわ！！」

「おれはてつきりルフィにワをかけた身勝手野郎かと」

「兄弟つてすばらしいな…ニーナ元気かな」

「弟想いのイイ奴だ…！！」

「わからねエもんだな…海つて不思議だ」

「あれもまた…この世の謎だな」

「解明できる気がしないや」

「ちよつとみんな…」

存在も名も初めて知った、ルフィとは似ても似つかない兄に、ビビを除いた全員が戦慄の表情を見せる。止めようとするビビ自身も、いまだに信じられてはいなかったが。

出航の準備を進めるエースを見下ろしていたエレノアは、やがて意を決して飛び降りた。

「エースっ！！ ちよつと待って」

「ん？」

振り向いたエースは、眼前に真っ白くて温かい、柔らかいものが降ってきたことと

動きを止める。

大きく翼をはばたかせて降り立ったエレノアは、エースの頬を両手で挟むと、やさしい微笑みを浮かべながら。

唇を、重ねた。

「!!!!!!!!!!?!?」

突然の事態に、メリー号の上にいたルフィ以外の全員が目を見開いて絶句する。

ルフィのみが嬉しそうに笑うその前で、唇を離れたエレノアは強くエースを抱きしめた。

「おまじないっ!! 君が無事に帰って来られますようにっ…」

「ぷはは…!!」 そいつは、よく効きそうだな

エースも全く驚いた様子を見せず、天使からの抱擁を受け止め、頼もしく答えてみせる。

久方ぶりの再会を果たした二人は、またしばらくの別れを惜しむようにきつく抱きしめ合うのだった。

「安心しろ、エレノア…!! おれは絶対にお前の前から消えたりしねエ…!!! 約束だ…

!!!

「うん……!!!」

永い様な短い様な時間、二人はかたく触れ合う。

ようやく離れると、エレノアはメリー号の錨に飛び移り、エースの出航を見送る。満面の笑みを浮かべて離れていくエースに、慈愛に満ちた笑みを見せながら。

「またな——っ!!!」

船上が異様な沈黙に支配されていることも気にせず、ルフィは暢気に兄の出発を見送る。

その下で錨の上に乗ったエレノアは、愛しい男の背中に熱く濡れた眼差しを送り続けていた。

「……元氣そうでよかった」

エースの姿が見えなくなった段階で、エレノアは名残惜しそうに視線を背け、錨綱を登ってみんなが待つ甲板に戻った。

「……さ!!! 私達は私達のやるべきことをこなさなきゃ!! ほらみんないつまでも衝撃を受けてないで持ち場に戻って……」

「ちよおくと待ちなさい……!!!」

全員が黙り込んでいるのは、エースという常識的な兄と出会った衝撃と勘違いし、エ

レノアは厳しめに叱咤しながら持ち場に向かう。

が、いきなりその肩をがっしりとナミがつかんで止めた。

はっ!!と自分がやらかしたことに我に返るが、時すでに遅かった。

「さっきのルフィのお兄さんとの関係……………詳しく聞きたいんだけどなア…?」

「……………も、黙秘権を行使します」

「却下します…!!」

「ビビ!!?」

「何よ何よあの意味深なやり取りに別れ際のキス……………気になって仕方ないじゃないの!!」

顔を真っ赤にしたナミとビビに両側を固められ、エレノアは羞恥に固まりながら連行されていく。

奇妙なテンションの向上を見せる娘二人に、ウソツプが戸惑い気味に視線を向けた。

「オ…オイ、いきなりどうしたんだよお前ら?」

「一度でいいからやってみたかったのよ、コイバナ」

「わ…私も…!! そういう話に縁がなかったから…!!」

「たっ…助けっ…」

「変なことに興味持つてんなーお前ら…」

波乱万丈の人生やら使命やらで一時忘れかけていた乙女の感情が爆発し、涙目になるエレノアに迫るナミとビビにルフィが呆れた視線を向ける。

ナミは小さくため息をつき、ルフィに面倒くさそうな視線を返した。

「女心にうとい朴念仁は黙ってなさい。どうせ理解なんてしてないでしょ」

「バカにすんなよ!!! そんなもん…!! おれにだってわかるぞ!!!」

明らかに見下されているのは心外だったのか、ルフィが険しい表情で待ったをかける。

そしてルフィは、自分なりに解釈した兄との関係について一言告げた。

「エレノアがそのうち、おれの姉ちゃんになるって話だろ?」

「ふぎやあああああああ!!!」

よりによってルフィが、自分たちの関係を正確に言い表した表現を口にしたことで、エレノアの羞恥は限界に達する。

顔どころか全身を真っ赤に染める勢いで、ゴロゴロと甲板を転げまわるエレノアを見て、男性陣は戦慄の表情を浮かべていた。

「こ…こいつ!!! 話の重要個所的に正確に理解してやがる…!!!」

「ありえねエだろ…!! ルフィのくせに!! バカのくせに!!!」

「ちくしょう…!!! いいなア、ルフィの兄貴の奴…!! 羨ましいなアおい…!!!」

「そっかー…姉弟子にも春がきたのかー…」

「なんだろうなア…遠いところに行っちゃったなー…」

「しっかりしろ、弟子」

エレノアに相手がいことが発覚したこともそうだが、それをルファイが理解していることの方に驚愕が勝る。

あつという間にメリー号の上では、妙に気恥ずかしい黄色い空間が形成され始めた。

「さア吐きなさいエレノアア!!!」

「許してええええ!!!」

渴いた砂漠の海に、エレノアの悲痛な叫び声が木霊するのだった。

所変わって、『ナノハナ』の街中では無数のうめき声が響き渡っていた。

その出どころは、思わぬ妨害により黒焦げになって、救護班による手当てを待つ海兵たちだった。

「甚大な被害だな。海兵の半数以上が戦闘不能の上、まかれるとは…」

「アラバスタは広い…一度逃がすと手に負えねエぞ。ポートガスにアイザック…!! 余計なマネしやがって!!!」

特に負傷した様子のないマスタングとスモーカーが、被害を改めながら苦い表情にな

る。

「麦わら」を捕えるためにかなりを無茶を通したというのに、その結果がこれでは目も当てられなかった。

「スモーカーさんっ!! 遅くなりました!! 麦わらの一味は…!!」

「たしぎ、てめエどこに行つてた…」

「それが!! 町のまったく逆に!!」

「ぐ…軍曹さんっ!!」

自分の失態に恥ずかしそうに赤くなるたしぎだが、彼女がいても状況は変わらなかつたと思われる。それだけ、「火拳」と「妖術師^{ウイザード}」二人の協力は脅威であつた。

そんな中、スモーカーはまた別の理由で険しい表情を浮かべていた。

「……これをどう思う…奴らと一緒に「ビビ」がいたんだ」

「「ビビ」…!!? ネフェルタリ・ビビ王女が…!!? どうして麦わらの一味と一緒に!!?」

「それと…マスタング。お前のところのあの兄弟の顔も見えたぞ……どうなってる」

「エ…エルリック君達もですか!!?」

「さア…見当もつかないな」

咎めるような、というか詰問するような視線を向けられるが、マスタングはさして気にする様子もなくはぐらかす。

スモーカーはいい顔をしなかったが、いつものことなのか諦めたようで視線を逸らす。その目は、麦わらとは別の者に敵意を向けていた。

「さらに……この国には一人……イヤな男がいる……おれは『七武海』が嫌いなものを知ってるよな」

「………サー・クロコダイルですか？」

何故そんな事を聞くのかと、たしぎは不思議そうに問い返す。

マスタングも表情こそ不思議そうだったが、その目に浮かんでいるのはスモーカーと同じ光だった。

「でも彼は立場的に言えば、政府や海軍の味方ですし」

「奴は昔から頭のキレる海賊だった……大人しく政府に従う様なタマではないよ、元からね」

「たしぎ……これだけは覚えておけ……!! 『海賊』は……どこまでいこうと 『海賊』なんだ!!!」

スモーカーの目には、『麦わら』も『妖術師』ウイザードも『砂漠の王』も同じに見えているらしい。凄まじい敵意に、同じ海兵であるはずのたしぎも思わず息を呑んでいた。

だがその圧は、マスタングに視線が移ったことで若干薄らいでいた。

「……おいマスタング。あの筋肉ダルマはどこにいった？」

「彼には少し………伝言を伝えてある」

不意にそう尋ねたスモーカーに、マスタングはどこか悪戯をもくろむような意味深な笑みを浮かべ、応えるのだった。

第86話 “砂漠の王国”

「さアあんた達!!! ぼーっと突っ立ってないでさつきと働きなさい!!!」

突然やる気を漲らせるナミが裁縫道具を持ちながら、いまだ衝撃から立ち直っていない男性陣を鼓舞する。その頬はまだ赤かった。

「なんだ、お前ら変に生き生きしてんな」

「何でかしらね…!! さつきから妙に元気なのよ」

「まだ顔があつい……」

海賊に襲われ、少女らしい時間を過ごすことのなかったナミ。王女としてそういった話題には疎かったビビ。

そんな二人が身近な女性から（無理矢理）聞き出した話は、少々刺激が強かったらしい。

「ところでお前、兄貴からいったい何受け取ったんだよ」

「さー、わかんねエ。紙きれだ」

足元でうつぶせになり、沈黙しているエレノアを放置し、ルフィは不思議そうにナミの手元を見やる。

いったん貸した麦わら帽のリボンに、エースからもらった紙を縫いつけてもらったののだ。

「本当に紙きれだな。メモでもあるわけじゃないし」

「何なんだろうな」

「ああ、わかんねエけどエースが持つてろって言うんだから持つてるんだ、おれは!! だからしつかり縫いつけてくれよ!!」

「リボンの裏にね…わかった」

一度、バギーに破られた麦わらを補強してくれたナミにとつて、その程度のことには造作もない。そう時間もかからず、ナミは作業を終えて麦わら帽をルフィに返した。

「はい、どうぞ」

「おお、ありがとうナミ! ここなら安心だ。絶対なくさねエもんな」

「なくさねエ意味あんのか?」

「……あるから渡したんだよ」

不思議そうに首をかしげるウソップに、やっと回復してきたエレノアがしんどそうにぼそりと呟く。が、まともに聞いている者はほぼいなかった。

「ルフィさん、これを着て!」

しばらくすると、船室に引っ込んでいたビビが人数分のロープを持つて戻ってきた。

「え!! 何だよ。暑いじゃねエか」

「暑いから着るんだよ。砂漠じゃ日中50℃を越えるから、肌を出していると火傷すんの」
「何で。おめエら涼しそうじゃん」

「私達だつて上から、ちゃんと着るわよ」

「え———— つ!!! 着ちやうのオオオ!!!?」

「あんたは女好きなのかただエロいだけなのかどっちよ!!!? 火傷するつつつてんでしょ
うが!!!」

「そうか、しょうがねエな」

せつかくセクシーな衣装を選んだサンジが号泣し、エレノアは額に青筋を立てて怒鳴りつける。無論、彼女もいつものローブをかぶつて準備を終えていた。

その時、船の進路を見ていたチョップパーがぎよつとした声を上げた。

「ああつ!! あれつ? 島の端つこに出ちやつたぞ☒」

「ん? ああ、違う違う。ここは島の端じゃなくてサンドラ河の河岸。向こうにうつすら対岸が見えるでしょ?」

「あ、ホントだ」

エレノアが指さした方向を見て、チョップパーはほつと安堵する。

ビビはそれを見て、改めて目的地を説明するために、一緒に持ってきた地図を広げて

見せた。

「目的地はここ!! 『ユバ』という町。サンドラ河を抜けてこの町を目指すわ!!」

「そして『ユバ』には反乱軍のリーダーがいるってわけか」

「そいつをブツ飛ばしたらいいんだな!!」

「やめて!!!」

拳を構えるルフィにビビがすかさずツッコむ。さつきからこの男は、暴れることしか考えていないのではないだろうかと不安になった。

「反乱軍は説得するの。もう二度と血を流してほしくないから……」

「『70万人』の反乱軍をだぜ? 止まるか?」

「……………止まるか……ですって……?」

ゾロの指摘に、ビビはピクリと反応し視線を強める。

確かに、人から見れば無謀にしか思えない考えかもしれない。だからといってビビは、止まるつもりはさらさらなかった。

「……ここから『ユバ』への旅路で全てわかるわ……バロックワークスという組織が……この国に一体何をしたのか……!! アラバスタの国民が一体どんな目にあっているのか……!!」

旅の道中であつても伝えきれなかった、故郷が受けてきた悲劇の数々が彼女の脳裏に

蘇る。それが王女ビビビ、怒りという名の活力を与えていた。

「止めるわよ……!!! こんな無意味な暴動……!!! ……もう、この国をバロツクワークス
の好きにはさせないっ!!!」

「ビュ……!!!」

悲痛な叫びに、その姿をすぐそばで見てきたナミが言葉を失う。

どんなに危険な目に遭っても、死にかけても、この少女は故郷のことばかりを気にかけてきた。その意志は、ルファイたちにも痛いほどに伝わっていた。

「よしー わかったビビ!! 行こう!!!」

「ならば我輩も同行させてもらおうか」

闘志をたぎらせ、一刻も早く目的日に向かおうとしたルファイたちのもとに、聞き覚えのない声が割って入る。

固まった彼らは、メリー号の後方からゆらりと姿を現す巨漢を目の当たりにし、全員で絶句してしまっていた。

「………詳しい話を……聞かせてもらおうか。『麦わらの一味』……!!!」

「しよ………少佐……!!!」

眩く輝く頭皮、見上げるほどの鍛え上げられた巨体、そして術式の刻まれたナツクル
ダスター。

『ナノハナ』で大暴れしたもう一人の錬金術師の登場に、若き海賊達は戦慄の表情を浮かべていた。

が、想像していたような展開は起こらなかった。

「なんたる悲劇!!! 国を救う英雄が…実は国を脅かす悪魔だったという真実!!! そしてただ一人その真実を知り、幼い頃からの護衛を犠牲にしながらも、懸命に国を救おうとする健気な王女!!!」

ビビやエドワードから話を聞いたアームストロングが、滂沱のごとく涙を流してギリギリと拳を握りしめながら身を震わせる。その壮絶な姿に、一味は全員警戒とは別の理由で一步距離をとっていた。

「我輩感動!!!」

「おっと」

「ぎゃあああああ!!!」

感涙のあまり抱きしめようと突進してきたが、とつさにエレノアがビビの肩を引いて救出する。代わりにエドワードとウソップが剛力の犠牲となっていた。

「(…)いつ、さつき海兵たちと一緒にいた…」

「そう…国家資格を持つ『剛腕』の錬金術師アームストロング・ルイ・アレックス少佐。まさかつけられてたとは」

「我がアームストロング家に伝わる追跡術である!! …そんなことよりも、だ」

全身の骨がバキバキにされてぐったりしているエドワードとウソップを置き、アームストロングはいったん涙を止める。

そしてビビの前で跪き、深々と頭を下げ、謝意を表した。

「ネフェルタリ・ビビ様……不甲斐なくもそのような悪魔に『七武海』の称号を与え、放置していた我々世界政府に代わり、謝罪させていただきます!! …… 本当に…申し訳ない!!!」

「ア…アームストロングさん…!!! 顔を上げてください!!」

「いや!!! 願わくばこの罪、貴殿と共にアラバスタを救う手助けをすることで拭きたい…!!! どうか…同行を許可していただきたい…!!!」

「おいおい!! …まさかあんたもついてくるつもりかよ!!? おれ達海賊だぞ!!」
勝手な希望にサンジが待ったをかける。

ビビやエルリック兄弟がいるとはいえ、海賊の一味の話信用するなど人が好過ぎるのではないかと、どうにも疑ってしまっていた。

アームストロングはそれに対し、険しい表情で首を横に振った。

「確かに海賊は…世界政府の立場からいえば捕えなければならぬ敵……しかし!! このようなどまし討ちで拿捕するような真似は、我輩の美学に大いに反する!!! ……頼む。我輩にも共に戦わせてくれ」

「おう。いいぞ」

「おいルフィ!!?」

自分が海賊だということを忘れてはいないかと、能天気に応じるルフィにゾロがツツコむ。

話にならないと、今度はバツが悪そうな様子のエドワードに振り向いた。

「おいエド!!」

「あー…悪イ。だがまア……少佐なら大丈夫だと思っぞ」

「軍人にあるまじきレベルのお人好しだからねー」

本来政府側の間人である兄弟は、アームストロングの人柄をよく知っているのか困り顔で肩をすくめる。

アームストロングはさらにやる気を見せ、ビシツとアラバスタを指さして目を輝かせた。

「ギア!!! いくぞ若者たちよ!!! 正義のため!! 友情のため!!! 無辜の民の血が流れる事態を防ぐのだ!!!」

「おお——っ!!!」

いつの間にかアームストロングのやる気に触発され、あるいはやけくそになったル
ファイたちが一緒に騒ぎ始める。

その暑苦しさに、ナミは思わず頭を抱えていた。

「……頭痛いわ」

「はは……」

ビビやエレノアが苦笑し、一気に仲を深めていく男たちに呆れた目を向ける。

そんな中、エレノアは一人目的地を見やり、深いため息をついていた。

「しかし………よりによって『ユバ』かア」

「ついたぞ!!!『ユバ』!!! いや——なんもねエな、ここはっ!!!」

数時間の航海の後、一行は再び陸地に降り立つ。

しかしそこは『ナノハナ』とは打って変わって、人の気配が一切感じられない廃墟の
様相を晒していた。

「リーダーを探すか!! どの辺にいるんだ?!」

「違うのルファイさん。ここは、まだユバじゃないわ」

「ここは『緑の街エルマル』。ユバにはあと半日は北西に向かって進まない」と

「半日も!!?」

「緑の街? 緑なんかどこにもねエぞ!!」

「…ええ、今はね……!!」

振り向いたルフイの指摘にビビは悲痛な表情を、エレノアやエドワードらは苛立った態度を見せる。

そんな四人を訝しげに見ていると、海岸付近にいたウソツプが突然声を上げた。

「うお——つ何だこりゃあ、カメか?! アザラシか?!」

ざばつと飛沫を上げて陸地が上がってきた、甲羅を背負った奇妙な生物にウソツプは後ずさる。

「あつ、クンフージュゴン!」

「クンフー!!」

「やめとけウソツプ。近づくと危ねエぞ」

クンフーと聞いて思わず構えるウソツプを慌てて止めようとしたが、すでに遅かった。

次の瞬間には彼は、ボコボコにされて地面に転がされていた。

「強エから」

「ハウツ!!!」

「敗けんな」

見るからに水棲の生物に、陸地であつという間にのされたウソツプの情けなさに、ゾロが思わず呆れた声を上げる。クンフージュゴンもやや物足りなさそうにしていた。

ふとその横を見れば、下したクンフージュゴンの前でうおーつと勝ち鬨を上げたルファイがいた。

「あつちで勝つてるヤツいるけど」

「勝つてもダメだよ。勝負に敗けたら弟子入りするのがクンフージュゴンの掟らしいから」

「武闘派だな」

「素晴らしい精神の生物であるな!!」

ペコーリとルファイに頭を下げるクンフージュゴンに、アームストロングが感嘆の声を上げる。

が、それだけで終わらないのがルファイだった。

「「クオツ!!」」

「違う、構えはこうだ!!」

「弟子増えてるわよ!!!」

「そしてこうである!!!」

「やめろヒゲ!!」

何十匹ものクンフージュゴンに教えを授けるルフィにビビが叫ぶ。なぜかそこに、上半身裸になったアームストロングが加わっていて、收拾がつかなくなっていた。

数分後、メリー号を止めた岬では、食糧を啜えたクンフージュゴンの群れが泣きながらハンカチを振っていた。

「さア行くか、ユバへ!!」

「うむ!!」

「お前らのせいですいぶん食糧減ったぞ!!」

「チョッパーとエレノアが説得してくれなかったらえらいことになってたのよ!!」

「うん…『お供するっス』ってずっと言ってた」

「食糧で手を引いたけどね」

義理堅いのか薄情なのか、よくわからない武闘派精神の連中にエレノアとチョッパーが呆れた声をこぼす。

良かれと思ってやったルフィは、一方的な言われように唇を尖らせた。

「連れて行きやいだろ」

「あんな大所帯じゃどこの町へも入れなくなるじゃない!! ばかねっ」

「ていうか海の生き物に砂漠を進ませる気か」

「海？ あいつらがいたのは河じゃなかったか？」

「……ううん。海よ」

ビビは語る。かつては栄華を誇ったサンドラ河も、昨今はその勢いを失い海に侵食されつつあると。

「…じゃあ、さつきジユゴン達のいた辺りの河の水は…」

「海水よ。飲み水にも畑にも使えない水」

「それで枯れたのか？ この町は…」

「いや…まれに降る雨水を確実に貯えて何とか保ってたつて聞くよ。私が前にいた時は、この辺りは緑がいっぱい活気ある町だった」

「……がねエ……」

ゾロがあたりを見てみれば、人骨や瓦礫が残る哀れな景色ばかりで、ビビが言うような栄えた光景など想像できない。

ビビもそれには反論できないようで、切なげに町の跡を見ながら目を伏せた。

「……3年、この国のあらゆる土地では、一滴の雨さえ降らなくなってしまった」

「さつきの港町は大丈夫だったのか？」

『『ナノハナ』は隣町の『カトレア』というオアシスから水を供給してるから無事なの』

ビビの悲痛な声に、なぜかエレノアとエドワード、アルフォンスも険しい表情を見せていた。

「降雨ゼロなんてアラバスタでも過去、数千年あり得なかった大事件……だけどそんな中、一カ所だけいつもより多く雨の降る土地があつたの」

「……そうか、それが首都『アルバーナ』。王の住む宮殿のある町か……」

「そう……人々は、それを『王の奇跡』と呼んだ。——あの日、事件が起きるまではね……」
思い返されるのは、王都アルバーナにとある積み荷が運び込まれた時。

見慣れない男たちが、今にも壊れそうな荷車に一杯に乗せた砂袋が、事故によりその中身を晒される。

心配して手を貸そうとしたが、男たちは妙に慌てた様子で走り去ってしまった。「王にこの荷物を運ばなければならぬ」と言い残し。

不審に思っていた国民達の中、ある一人がこぼれた中身を掬って呟いた。

「ダンスパウダー」と。

第87話 “雨を呼ぶ粉”

「『ダンスパウダー』だと…!!?」

ビビからその名を聞いた直後、アームストロングが表情を変える。

明らかに動揺している彼やエドワード達、ナミに、ルフィが首を傾げた。

「なんだ、知ってんのか?」

「別名を『雨を呼ぶ粉』といつてな…昔、とある雨の降らない国の研究者が作り出した代物だ」

エドワードらがその実態は、霧状の煙を発生させ空に立ち昇らせ、空にある氷点下の雲の氷粒の成長を促し、降水させるといふもの。つまりは人工的に雨を降らせる粉である。

気象学に長けたナミも、その発明にはかなり詳しかった。

「それが『ダンスパウダー』よ」

「ははーん、『不思議粉』か」

「雨を降らすんだろ、要は」

小難しい話は微塵も理解できない者達だが、ゾロの一言で疑問の大半は解決した。

しかしそこで、ウソツプが訝しげな表情で待ったをかける。

「ん？ だつたらこの国にはうってつけの粉じゃねエか」

「最初はな。『ダンスパウダー』を開発した国も、その名の通り踊るように喜んだって話だ。……だがそれには大きな落とし穴があつた」

エドワードが険しい表情でその理由について説明する。

一科学者として、その技術の素晴らしさは評価したいが、それがもたらした悲劇を嘆いているような、そんな様子だつた。

「風下にある隣国の『干ばつ』………わかる？」

「『人工降雨』は、つまりまだ雨を降らすまでに至らない雲を成長させ、雨を落とすというものだから……」

「そうか……!! 放つときや隣国に自然に降るはずだつた雨さえも奪つちまつてたわけか!!」

「そう……それに気づいたその国はついに戦争を始め、たくさん命を奪う結果になつた……」

「以来、世界政府では『ダンスパウダー』製造・所持を世界的に禁止しているのである」
世界政府に属する者として、かつて起こつた凄惨な事件については詳しいらしい。

話を聞いたウソツプは、それがアラバスタに持ち込まれたという事件について眉間に

しわを寄せた。

「………使い方一つで、幸せも悪魔も呼んじまう粉か…」

「その『ダンスパウダー』が大量に運び込まれた時、国では王の住む町以外は全く雨が降らないという異常気候………!!」

「王を疑うのが普通だよな。その粉で国中の雨を奪ってやがるんだと…」

「なんだビビ、そりゃ、お前の父ちゃんが悪イぞ!!」

「バカ!! ハメられたって話でしょ!!!」

「…今思えば、その時すでにクロコダイルの壮大な作戦は始まっていたの」

ビビは悲痛な表情で当時のことを語る。

王父にそんなものを求めた記憶はない。しかし送り主の不明な『ダンスパウダー』は次々に運び込まれていて、否定はもはや何の意味ももたらさない。

「全てはクロコダイルの仕組んだ罠……!! 彼の思惑通り……反乱は起きた!!」

町は枯れ、人は飢え、その怒りは国を燃やしさらなる悲劇が積み重なる。

クロコダイルは国の平和も王家の信頼も、雨も町も、人の命までも奪い全てを狂わせた。

「…なぜ、あいつにそんなことをする権利があるの?! ……私は!!! あの男を許さないっ

!!!」

溢れ出しそうな涙を必死に抑えつけ、ビビは痛々しい叫びを響かせる。

そんな時、離れたところにあつた廃墟が突如、轟音とともに崩れ落ちた。その跡から姿を現したのは、ぐるぐると腕を回すルファイたち。

「……………——つたく、ガキだな、てめエら……………」

「……………あんた達一体、何を……………!!」

「……………さつさと先へ進もう。ウズウズしてきた」

呆れたため息をつくゾロやエレノアを放置し、猛り始めた内なる闘志のままに、ルファイは向かうべき砂漠の先を見据えて告げた。

しかし、勇ましく歩き出したルファイだが、次第にその進みは衰え始めた。

理由は言うまでもない、砂漠のあまりにも過酷な環境のせいだ。

「ア——…ア——…」

「あんまりア—ア—言わないでよ、ルファイ!! 余計ダレちゃうじゃない…」

「ア——……焼ける…汗も出ねエ……………」

「口元を覆いなよ。自分の息の方が外の空気より涼しいし、水分も逃げないから」

「お前はまだマシだろ……………おれなんて腕と足に鉄の塊ぶらさげてんだぞ…」

舌を出して唸るルファイにナミが文句を言うが、ルファイとしても口にしたくてやってい

るわけではない。

全身を毛皮で覆われたチョップパーや、オートミール機械鎧のエドワードにしてみれば、この世の地獄のようにも感じられていた。

「姉弟子は……ずいぶん砂漠に詳しいな」

「あれ？ 言つてなかつたっけ？ 私はこの砂漠で修業してたんだよ」

「つてことは……例の一月生き延びろつてやつか？」

「そう、それ」

アラバスタで育つたビビと同じくらい、エレノアは慣れた様子で軽快に歩いていた。が、エドワードとの会話の途中、その目は遠いものを見るようになった。

「……今さらながら無茶苦茶だったよな、アレ」

「……よく生き延びたよね、私達」

「お前達は一体どんな過去を背負つているのであるか？」

渴いた笑い声をこぼす三人に、思わずアームストロングが困惑の声を上げる。

ナミも聞こえてきた内容に、疑問を抱かずにはいられなかった。

「砂漠でサバイバルと錬金術にどんな関係があるのよ……？」

「まーなんつーか……錬金術の極意を知るための精神的な修行？ 1ヶ月以内に答え

を見つけないきゃ失格つてせんせい師匠に言われて、必死にな……」

「厳しい師匠だったんだなア」

「で……いま何より問題なのが」

サクサクと一歩ずつ確実に進んでいたエドワードとアルフォンスの足がふと止まる。

そして次の瞬間、兄弟はがっくりとその場に膝をついていた。

「師匠の家が……」ユバ「にあることなんだよなア……」

「どうしてよりによつて……」

「あら、だったら都合がいいじゃない。ついでに挨拶していきなさいよ」

「そうだな……挨拶しにいつて……そんで死ぬんだ……」

「短い人生だったなア……」

「あんたたち一体何を背負つてるわけ?!?!」

何を気にする必要があるのか、とあきれていたナミは、絶望しているエルリック兄弟に驚愕の声を上げる。いったい何をやらかしたのかと。

「まー二人に関しちゃ、ものすごい爆弾背負っちゃつてるわけだしねエ……」

「それは姉弟子だつて同じだろうが!!!」

人ごとのようにため息をつくエレノアだったが、エドワードの激しいツツコミを受けて同じように項垂れる。

しかしこんなところで立ち止まっても仕方がないと、三人は悲痛の表情で歩き始

めた。

「あー…行きたくねエ…」

「遺書でも書いとく?」

「……………一応もらつとく」

「師匠と会うのにどんだけ覚悟決める必要があるんだよ」

何が彼らをそこまで追い詰めているのか、とウソップが尋ねるが彼らが答える様子はない。

ルフィはそんな彼らを放置し、涎を垂らしてサンジの方を向いた。

「おいサンジ、弁当食おう。『海賊弁当』」

「まだダメだ。ビビちゃんの許しが出るまではな」

「ビビ! 弁当食おう。力が出ねエよ」

「だけど、まだ『ユバ』まで4分の1くらいしか進んでないわ、ルフィさん」

「ばかだなー、お前。こういうことわざがあるんだぞ? 『腹が減ったら食うんだ』」

「ねーよ」

砂漠越えの厳しさをまだ痛感していない能天気な船長に、サンジやビビは思わず渋い顔になる。

それでもここでやる気をなくされては困ると、ビビは妥協案を提示した。

「わかった…じゃあ次に岩場を見つけたら休憩ということはどう？」

「よ〜〜し!! 岩場ア……………岩場〜〜〜つ!!」

やっと休めると喜ぶルフィだが、それはそれでかなり厳しい我慢を強いられることを知り愕然とした声を上げるのだった。

「重い…重いぞ、暑いし…」

「お前がジャンケンで負けたせいさ。黙って運べ」

「落とさないでよ、ルフィ！」

「ア〜〜……………」

数十分後、またしても気まぐれを起こし、重い荷物をそりでまとめて運ぶ役割を担う羽目になったルフィが喚く。

身軽になったウソップが前方を確認していた時、ゴォグルに何かが映った。

「ややつ!! 前方に岩場発見!!」

「ほんとかつ?!? 休憩タイムだ—— つ!!!」

「速エな」

「いく前に荷物置いてけ!! なんかすごく不安!!」

途端に元気になって、まだ影も形も見えない岩場に向かって全力疾走するルフィに、

エレノアが慌てて待ったをかける。

「あのアホは全く……」

やれやれとか当たたをすくめていると、あつという間に見えなくなったルファイが急いで引き返してくる姿が見えた。

「大変だ——っ!!」

「なんだ!! あいつ戻ってきたぞ……」

ひどく狼狽した様子で、重い荷物を一旦放り出して戻って来るルファイに、全員が警戒を強める。

その間を駆け抜け、ルファイはチョツパーのもとに向かった。

「大ケガして死にそうな鳥がいっぱいいるんだ!! チョツパー来て治してやれよ!!」

「う……うん、わかった!!」

「鳥……!!?」

「ちよつと待つてルファイさん、その鳥って……まさか……!!」

一大事だと心優しいチョツパーが応じようとした時、ビビとエレノアがぎよつと表情を変える。

いやな予感を抱いた一味が件の岩場に向かうと、全員の表情が愕然としたものに変わった。

「荷物が全部消えてるぞ——っ?!?!?」

「やられた…」

「11人分の荷物をまとめたそりが忽然となくなっていたことに、ルフィたちは悲鳴を上げる。」

ビビやエレノアは膝をつき、強い後悔にその表情を歪めていた。

「さつきここに本当に死にそうな鳥が!!」

「『ウルサギ』は旅人をダメにして荷物を盗む『砂漠の盗賊』よ。ごめんなさい、話しておくべきだった…」

「鳥がケガしたフリを!!? …そりやサギじゃねエか!!」

「そう、サギなの」

「ボケとる場合か」

人の善意に付け込むとんでもない種がいたものだと、ウソツプはアラバスタの自然の容赦のなさに戦慄する。

サンジはそれにまんまと騙された船長の襟首を掴み、噴きあがる怒りを叩きつけるほかになかった。

「あれは3日分の旅荷なんだぞルフィ!! 鳥なんか盗まれやがって!! この砂漠のド真ん中でよりによって全員の荷物を全てだど!!? 水も食料もなく、どうこの砂漠を

…

「だつてダメされたんだから仕方ねエだろうが!!」

「てめエの脳みそは鳥以下か!!」

「何を——っ!!!」

「やめろ、お前ら!!!」

言い合いを始めるルフィとサンジを、ゾロが厳しい口調で止める。

抱いている怒りは同じものの、それをどうにか抑え込んだ彼は先へ進むためにやるべきことを考える。

「…ちよつと休もう…カツカすんのは全部暑さのせいだ。頭冷やせ。夜中には『ユバ』に着くんだよな?」

「ええ……………」

「その町がオアシスならそれまでの辛抱だ。死ぬほどのことじゃねエ!!」

「…このことは忘れよう。考えると余計ノドが乾いちまう。10分休んだら出発だ」

「…………それが懸命だね」

一味の冷静な部分を担おうと努めるゾロに従い、エドワードとエレノアも続く。それを聞いて、サンジもようやく留飲を下げた。

その時ルフィは、離れた砂漠の真ん中でこれ見よがしに水を飲む鳥たちを発見した。

「アアアアアあいつらだアアアア!! おれ達の荷物を返せ——っ!!」
 「ゴア——♪」

自分を騙したワルサギたちを見つけ、ルフィは怒号を上げる。

馬鹿にするように鳴き、荷物を持って逃げだすワルサギにルフィの怒りは爆発し、全力で走り出していた。

「ルフィ!! だめよ追っちゃ!!! あんたここへ戻って来れるの!!!」

「そうか、そっちの方が面倒だっ!! ルフィ!! 戻れ——っ!!!」

「戻るのである麦わらア!!!」

仲間達の制止の声も聞かず、ルフィは取られた荷物を取り戻すためにあつという間に砂漠を駆け抜けていく。

ワルサギたちはそれすら愉しむように笑っていたが、その首に不意に鋭い光が走った。

「ゴアツ……!!!」

ドスドスドスツ!!と血を吐き、バタバタと何羽かのワルサギたちが倒れていく。

目を見開く一味の前で、そのそばに舞い降りたエレノアが一羽のワルサギを持ち上げ、ザクツと首を両断した。

「ヒイイっ?!」

悲鳴を上げるウソツプたちを放置し、エレノアは両断したワルサギの首を口元に持ち上げる。こぼれだす赤い血をぐびりぐびりと飲み干し、忌々し気に砂漠の先を睨みつけた。

「チツ…何羽か逃したか」

「…やっぱあいつ怖エよ」

「…きつと、前もあいつらに同じ目にあわされたんだらうな」

グイツと真つ赤に染まった口周りを拭うエレノアはそれはそれは恐ろしく、その容赦のなさにも改めて恐怖を抱く。

その衝撃に、全員がワルサギを追いかけたままの船長を忘れてしまっていた。

「うううわあああゝゝゝつ!!!」

「今度はなんだアーツ!!!」

「何かに追われてるわっ…!!!」

砂漠の向こう側から聞こえてくる青年の叫び声に、一味は何事かと我に返る。

見れば激しい砂埃を起こす何かから、ルフィと一頭のラクダが逃げ込んでくる姿があった。

「…サンドラ大トカゲ!!!」

「でけエっ!!!」

海王類にも匹敵するのではないかと、とも思える巨体を俊敏に動かし、逃げるルフイとラクダを追いかける爬虫類に、全員が息を呑む。

だがその前に立ちはだかったエレノアは、にやりと不敵な笑みを浮かべてみせた。

「…運がいい…!!! これで滅った食糧の心配をせずに済む…」

そう呟いた直後、エレノアの両脚からシャキンと刃が展開される。

猛然と向かってくるサンドラ大トカゲを見据え、エレノアは翼を羽ばたかせ大きく宙に躍り出た。

「『壊神^バ戦斧^ラ』!!!」

天空から急降下したエレノアの刃が、猛烈な速度で振るわれ大トカゲの首に食らいつく。

さしたる抵抗もなく、大トカゲも天使の刃によって首を両断され、絶叫一つなくズズンと地に墜とされた。

「な…なにもそこまで…」

「…あの子が相手だと怪物に同情しちゃうわ…」

「おい男ども!! ボサツとしてないで解体手伝え!!!」

「ハイっ!! ただいまっ!!!」

凄まじい血の匂いに頬を引きつらせる一味だったが、ややイライラした様子のエレノ

アに逆らう愚行は犯さなかつた。

第88話 “枯れたオアシス”

「——で…何なんだ。このラクダは…」

なんとか食糧を確保できたのはいいが、とゾロはルフィの傍らを睨む。

その先で仏頂面で佇んでいるのは、先ほどルフィと一緒に逃げていた一頭のラクダである。

「シア…さっきの鳥を追ってたらよ、あいつら飛んで逃げやがって。そしたら前からコイツがトカゲに追われて走ってきたんでとりあえずおれも走ったんだ」

「野生のラクダではなさそうね。ちゃんと鞍がついてる」

「乗れるな!! こいつに乗ってけば楽だ!!」

「おお、そりや助かるなア、2人は乗れそうだぜ」

「やっぱ砂漠にはラクダがつきものだ」

アクシデントも乗り越え、ついでにいい拾い物をしたと気分を上げ始める一味。

問題が起こったのは、ルフィがさつそくその背に乘ろうとした時だった。

「…じゃ、まずおれが…」

「ヴオオヴオ!!」

「うぎ!! 何だ!!」

勝手は許さん、とラクダが背に乗ろうとしたルフイの頭に噛みつく。

何を嫌がっているのか、とチョッパ―が通訳の役目を買って出た、すると。

「『おれは通りすがりのヤサラクダ。危ねエところを助けてくれ、ありがとう。乗つけてやつてもいいが…おれは男は乗せねエ派だ』って言ってる」

「ヴオ…」

「コイツ生意気だぞ!! 誰が命を救ってやったと思ってるんだ!!」

「おめーじやねーだろ」

ウソツプがぷりぷりと怒りをあらわにするが、ラクダは舌を出してなおも拒否する。

しかし、代わってナミが頬を撫でると、先ほどとは打って変わってデレデレした態度を見せだした。やはり女が好きらしい。

「いいコじゃない♡ キミ何て呼んだらいい?」

「アホ」

「ボケ」

「タコ」

「じゃ マツゲ っ て こと で」

「ヴオ」

「お前それ一番変だぞ」

恩知らずにせめて不名誉な名をつけてやろうと男性陣だったが、最終的にナミの独断で呼び名が決定してしまう。

ナミは不満の声も気にせず、ラクダ——マツゲの背に乗るとビビに手を差し出した。

「ビビ！ 乗って！」

「ううん、大丈夫。エレノアさんこそ……」

「へーきへーき。乗りな」

「これで少しは早く“ユバ”へ着けそう」

遠慮するビビを半ば無理やり乗せ、エレノアとナミがほつと安堵のため息をつく。

再び目的地の方角を向いたナミは、手綱を握ってマツゲに前進を命じた。

「それ行けっ、マツゲッ！」

「ちよつと待て——っ！！！！」

「ホラみんな急いで！ はぐれたら、あんたら生きて砂漠を出られないわよ？」

「フザけんなー！！！」

自分たちだけ楽をしておいて何を勝手なことを抜かしているのか、とルフイたちから抗議の声が上がる。

しかしその間にも、ナミとビビを乗せたマツゲはあつという間に砂漠の向こうへと突

き進んでいってしまふのだった。

それからの行程は、さらに過酷を極めた。

腹をすかせたルファイがそこらにあつた毒を持つサボテンを食べて、幻覚を見て暴れそうになったり、マツゲを見失いかけたり、砂嵐に巻き込まれかけたりと、次々にトラブルが舞い込んでくる。

既に蓄積していた肉体的疲労に加え、そんな厄介事による精神的疲労も重なり歩みは徐々に落ちていく。

それでも一行は、着実に目的地である『ユバ』へと近づいていた。

「夜になっちゃったわね……」

「しかし何だ、この昼と夜の温度差は」

「……………砂漠の夜は氷点下まで下がるから」

「ニツキシツ!!! 氷点下ア?!!」

あまりの寒さに震えあがる一味は、一刻も早く『ユバ』に着こうと急ぎ歩を進める。

その願いが届いたのか、ビビの目に暗闇の中で灯る光が映った。

「あそこ!!! 明かりが見える?!!」

「着いたのか?! ユバに!!!」

「砂が舞っててよくわかんねエや…!!!」

ほっと安堵の息をつく面々だが、視界がひどすぎるためにルフィは険しい顔で目を凝らす。

そんな一味の中で、エドワードとアルフォンスは遠い目で立ち尽くしていた。

「——とうとう、来ちまったなア…」

「うん…」

「……師匠…留守だといいなア!!」

「うん!!」

「あんた達…」

がくがくブルブルと生まれたての小鹿のように震える兄弟に、ナミが呆れた目を向ける。『ユバ』が近づいてくるにつれ、兄弟の反応もよりひどくなっていた。

だがその時、光が見える方を見つめていたビビが声を上げた。

「…何かしら、この地響き?!」

「……………!! …町の様子がおかしい…!!!」

まるで地震でも起きてきているかのような揺れに、全員が嫌な予感を覚えて立ち止まる。

闇に目を凝らしていたエレノアが、その正体に気づいてハッと目を見開いた。

「砂嵐だっ!!!
!!! 町が砂嵐に襲われてる!!!」

砂嵐が収まるのを確認し、一味は急ぎ『ユバ』へと足を踏み入れる。

しかしそこはもはや、かろうじて町の形を保っているだけの廃墟にしか見えなかった。

「そんな…」

「こりやひでエ……………!! あのエルマルって町と大して変わんねエぞ……………!!」

「水は!!?」

「ここはオアシスじゃねエのかよ、ビビちゃん……………!!」

「砂で地層が上がったんだ……………オアシスが飲み込まれて……………!!」

かつて商売の要であった豊かな水源の慣れの果てに、ビビが愕然とした声をこぼす。

全員が絶句していると、水場があったと思わしき場所で一心不乱に砂を掘る人影があることに気づいた。

「旅の人かね……………砂漠の旅は疲れただろう。すまん、この町は少々枯れている……………」

見ればそれは、やせこけた一人の老人だった。

今にも倒れそうなほどに疲弊しながら、それでも握りしめたスコップから手を離さない彼は、突然現れたルフイたちに目を向けた。

「だが、ゆっくり休んでいくといい……………宿ならいくらでもある……………それが、この町の自慢だか

らな……」

「あの……この町には反乱軍がいると聞いて来たんですが……」

顔を隠したビビが恐る恐るといった様子で訪ねると、途端に老人の態度が豹変する。砂だけを見つめていた目は、刃物のような鋭さでルフイたちを射抜いた。

「反乱軍に何の用だね……貴様ら、まさか反乱軍に入りたいなんて輩じゃあるまいな!!!」
「うわっ!! 何だ何だいきなりっ!!!」

急に激昂し始めた老人が、手当たり次第に物を投げつけ追い出そうとする。

しかしやはり疲れ切っていたらしく、投げるものが無くなると老人はその場につくりと項垂れてしまった。

「……あのバカ共なら……もう、この町にはいないぞ……!!!」

「何だとオ……っ!!!?」

「そんな……!!!」

落胆の声を上げるルフイたちに、老人は目を逸らしながら告げる。その表情はどこか、身内の恥を晒すような居心地の悪そうな様子があった。

「……物資の流通もなくなつたこの町では、反乱の持久戦もままならない……反乱軍は『カトレア』に本拠地を移したんだ……」

『カトレア』?!?」

『ナノハナ』の隣町じゃねエか、王女さん!!」

「おい……!! おれ達ア何のために……」

何日もかけて砂漠を越えて来たというのに、それが全くの無駄であったという事実
にルフィたちが嘆き喚く。

その時、ふと会話を聞いていた老人の目が驚愕で大きく見開かれた。

「王女……!! ……今……王女と……!!」

「おいおっさん!! ビビは王女じゃねエぞ!!」

「言うな」

「あの……私はその……」

馬鹿正直に話しそうになるルフィに、ウソツプがツツコミを入れる。

今やこの国で王族は悪役、正体を知られれば何をされるか分かったものではない。

だが老人の表情には、微塵の敵愾心も感じられなかった。

「ビビちゃんなのか……!! そうなのかい!!? それに……エドワード君とアルフォンス君
のかい……!!?」

「……え!!」

「生きてたんだな、よかった……!! 私だよ!! わからないか!! 無理もないな、少し
やせたから」

親し気に話しかけてくる老人に、ビビやエドワード達は呆気にとられる。

だがその表情は、次第に悲痛に歪められていった。

「……………!! トトおじさん……………!!」

「そうさ……………」

「そんな…!!」

「ウソだろ…おっさんなのか…!!」

老人の正体に気づいたびびたちは、かつては豊かに肥えていた老人、トトの変貌に愕然とする。

痛々しくやせ細ってしまったトトは、涙を流しながらビビに縋りついた。

「私はね…ビビちゃん!! 国王様を信じてるよ…!! あの人を決して国を裏切るような人じゃない…!!」 そうだろう!!」

必死に確かめようとするトトに、ビビもまた泣きながら力強く頷く。

思い出されるのは、トトの息子コーザとアラバスタの明るい未来を夢見て過ごしていた幼き日々のこと。

子供ゆえの意地の張り合いで喧嘩しながらも、『砂砂団』というチームを作って一緒に遊ぶ仲であったコーザのことが、脳裏によぎる。

正義感にあふれ、干ばつで枯れた村のみんなのために王に直訴したり、攫われかけた

ビビを救うために大ケガを負ったり、子供たちの中でも頼れる少年だった。そんな彼は今、反乱軍のリーダーとなつてゐる。

かつて信じていた王に裏切られた憎しみを糧に、戦うことを選択してしまつたのだ。

「…反乱なんてバカげてる…!!! …あの反乱軍を…頼む!!! 止めてくれ!!! もう君しかないんだ!!! …たかだか3年…雨が降らないから何だ…!!! 私は国王様を信じてる…!!! まだまだ国民の大半はそうさ…!!!」

泣き崩れるトトの前に膝をつき、ビビはその願いを受け止める。

もはや王家の信頼は地に墜ちたと思つていたのに、まだここにも信じてくれてゐる者がいたのだと、噛みしめるように。

「何度もねエ…何度も…何度も止めたんだ!!! だが何を言つても無駄だ…反乱は止まらない。反乱軍の体力も、もう限界だよ…次の攻撃で決着をつけるハラさ。もう追いつめられてるんだ…!! 死ぬ気なんだ!!! 頼む、ビビちゃん…あのバカどもを止めてくれ!!!」

自分の力が及ばなかつた無念が、痛いほどにトトから伝わってくる。

ビビは優しい笑みを浮かべ、トトの肩に手を置いて涙に濡れる顔を上げさせた。

「トトおじさん、心配しないで。反乱は、きつと止めるから!」

「……………ああ、ありがとう……………!!!」

トトはビビの笑顔で安堵したのか、どこか憑き物が晴れたような笑顔を見せる。

それを無言で見つめるルフイたちに気づかないまま、ビビは自身の中の覚悟を再確認する、その時だった。

「……………!! 何か近づいてくる」

「!! 敵襲か?」

ピクツと耳を振るわせたエレノアの一言で、全員が警戒を開始する。

トトも急な事態に表情を強張らせたが、やがてある方向を見やって肩の力を抜いた。

「……………ああ、大丈夫。敵じゃないよ……」

安堵のため息をつくトトが見ている方に、一味が訝しげな視線を向ける。

やがて一味は、『ユバ』に向かって近づいてくる大きな影に気づいた。

「サンドラ大トカゲ!!!? 昼間のよりもずっと大きいわ!!!」

ビビが戦慄の声を上げるが、やはりトトの表情に狼狽の色はない。

その時、同じく身構えていたエレノアとエドワード、アルフォンスが、ヒクヒクと頬を引きつらせ始めた。

「……………あれは、まさか」

「だよねエ……」

「ウソでしょ……………町がこんなだからいけないと思ってたのに!!!」

「私を心配してね……3人とも残ってくれたんだ」

「何だ?! 何が来るんだ!?!」

何が向かってくるのか、と戦々恐々とするウソツプをよそに、それはついに姿を現す。巨大で危険な砂漠の狩猟者サンドラ大トカゲ、それを軽々と担ぐ二人の筋骨隆々な男たちが。

「あ?」

「ど……どうもお久しぶり………です」

「メイスンさん、シグさん、お久しぶり」

男たちの一人、強面でひげ面の方が、びくびくしながら挨拶をするエドワードとアルフォンス、いつも通りのエレノアを睨みつける。

後ろにいたもう一人も、三人に気づいて目を丸くした。

「ん……? おオ?! なんだか懐かしい気がしたと思っただら!!」

「エレノアに………エド………か?」

確認するように名を呟いたシグと呼ばれた巨漢は、エドワードを見下ろすとやがてギリと目を光らせる。

そしてエレノアとエドワードの頭をガツと掴むと、乱暴にかき混ぜるように撫でまわした。

「よく来た。大きくなったな」

「あたたた…!!」

(ちぢむ……………!!)

「こっちは？」

「アルフォンスです。ごぶさたしてます」

「そうか、すごく大きくなったな」

鎧姿に特に驚く様子もなく、シグはアルフォンスの頭もなでる。

久しぶりに撫でられた、と喜んでいるのはアルフォンスだけだった。

「こんなところに撫でられた、と喜んでるのはアルフォンスだけだ」

「実は偶然立ち寄ることになりました…」

「少し邪魔をするのである」

申し訳なさそうにアルフォンスが頭を下げると、アームストロングが割って入る。

すると、途端にシグの視線が剣呑になった。見るからに海兵の格好の男が海賊ととも

にいることに、疑念を抱いたらしい。

「……海兵が何の用だ」

「シグさん…!! この人とは今協力してて…」

「いや、不要だアイザック嬢!!! 隔意は自分で払うのがせめてもの礼儀!!!」

エレノアが事情を説明しようとする前に出るが、アームストロングはそれを手で制す。そして彼はなぜかその場で上着を全て脱ぎ捨て、鍛え上げられた己が肉体を見せつけるポーズをとった。

「見よ!! 我輩の誠意を!! その瞳にとくと刻むがよい!!」

何を伝えたいのか全く分からない、しかし本人は大真面目に筋肉を誇示する。

シグはしばらく黙っていたが、やがて軽く息を吸い、己の筋肉を膨張させて上着を破裂させた。

「ぬうッ!!!」

自身と同等の肉体を見せられ、アームストロングが目を見開く。

呆然と立ち尽くすエレノアは、隣を歩き去っていった緑髪の剣士を思わず二度見していた。

「…ん? ゾロくん?」

「ふんっ!!!」

「ゾロくん!!!」

なぜか対抗心を燃やしたらしく、ゾロまで筋肉で服を破る謎の行動を見せる。

めきめきと筋肉を軋ませ、半裸の男たちが恐ろしい形相で睨み合う、謎のポージング対決が始まる。

やがて彼らは、がっしりと手を組んで満足げな表情を浮かべるのだった。

「……………いや、何してんの？」

本気で意味不明な行動にエレノアはかける言葉が見つからない。

完全に置いてけぼりになったナミは、小声でエレノアに尋ねてみた。

「……………あれがあんた達の錬金術の師匠？」

「ううん。あの人は師匠せんせいの旦那さんのカーティス・シグさん」

「ダンナ……………つてことは女か!!」

思わぬ事実にウソツプが目を見開く。

旦那だという男ですでに相当なインパクトなのに、これ以上の人物がいるのかと思わ

ず戦慄せんれいの声を上げてしまった。

「師匠せんせいの身体の具合は？」

「そこそこ元気だがまア病弱にはかわり無いな。おいイズミ、エルリックのチビ共とエレノアが来たぞ」

ゾロやアームストロングとすっかり意気投合したらしいシグが、一軒の家屋の中に向けて話しかける。すると、声がすぐに返ってきた。

「エドとアルとエレノアが？」

「起きれるか？」

「大丈夫、今日は少し体調がいいから」

家屋から、軋むような音が聞こえてくる。ベッドに横になっていたのだろうと察し、エドワードとアルフォンスが顔を見合わせた。

「先生、具合悪くて寝てたんだ」

「また身体悪くなつたんじゃないかねー?」

ひそひそと囁き合い、師の体の具合を心配する兄弟。

すると次の瞬間、兄エドワードの姿が忽然とその場から消えた。

「もぎやああああああ!!!」

いきなり扉が蹴り開けられたことで、ふっ飛ばされたエドワードがボールの様に転がっていく。

目を見開いて絶句する一同は、ギギギときこちなく振り向き立ち尽くす。

「お前の噂はユバ^{ユバ}までよ~~~~~~~~く届いてるぞ、馬鹿弟子が」

呆然とした視線にさらされながら、その女性は獰猛な獣のような笑みを浮かべて、ルイたちの前に姿を現した。

第89話 “過去の罪”

「軍の狗に成り下がったって？ ああ？ なんとか言え!!!」

「無理です師匠」

「エレノア……おいおい、海賊のあんたとエドが一緒とは思わなかったね」

ぼろくそになったエドワードをルファイたちが心配する中、イズミと呼ばれた女性はエレノアを見て目を丸くする。

そしてその隣に立つアルフォンスに訝しげな視線を向けた。

「ん？ この鎧はどちら様？」

「あつ……おつ……弟のアルフォンスです。師匠せんせいつっあああ、あのっ」

「アル！ ずいぶん大きくなって！」

声や反応で気づいたのか、イズミは満面の笑顔であるに手を差し出す。

ほつと安堵の息を吐き、アルフォンスも握手の手に応じた。

「いやあ、師匠せんせいも変わらないよう……で？」

が、次の瞬間アルフォンスの巨体は、ぐるりと宙を舞って地面に叩きつけられていた。その鮮やかさたるや、アームストロングやゾロが感嘆の声を上げる程であった。

「鍛え方が足りん！」

「師匠せんせい具合悪かったんじやなかったんですか〜〜〜」

「何を言う！ お前達が遠路はるばる来たというからこうして…」

腹立たしい、と声を荒げるイズミだったが、それがまずかつたらしい。

「ごぼつ!!と大量に吐血し、周りにいた全員を絶句させた。

「血イ吐いたア!!? 医者〜〜!! 医者〜〜!!」

「おめーだろ!!!」

「おれだア!!!」

「無理しちゃダメだろ、ほら薬」

「いつもすまないねエ」

「お前、それは言わない約束だろ」

「あんな…!!」

シグに口元の血を拭われ、ひしと抱き合う夫婦にルフィたちは何とも言えない表情で目を逸らす。

チョップパーがギャーギャー騒ぐ中、しばらくしてエドワードが気まずげに愛想笑いを浮かべた。

「え〜と……………あらためて」

「お久しぶりです」

「おじゃまします」

「うん、よく来た！」

バシン、とエドワードの肩を叩き、イズミは笑顔で弟子とその仲間達を迎えるのだった。

「は——まさか事件の黒幕が“七武海”なんてねエ……」

「それで反乱軍を追ってか……たいした度胸だねエ、我が国の王女様は」

「いや、まったくだ」

「見ててヒヤヒヤしたもんだぜ、この王女さんはよ」

「でも結構ノリノリで悪役演じてたよな」

「今でも別人なんじゃないかってくらいはっちゃけてたわよね」

「あの……あんまり当時のことを掘り返さないでいただけますと……その……」

「あんまり危ない事しちゃダメだぞ、子供なんだから」

「我輩も同意見である」

「ボクは平和に生きたいと思ってるんですけど兄さんがねエ……」

「なんだよ、おれのせいだよ！」

「……………!!!」

「二人分はちゃんとあるから飲め、ほら!!」

カーティス夫妻の食卓は、これまでにない騒がしきで包まれていた。

理由は簡単、普段は二人、時に三人だけの空間に、十人もの客人が加わっているからだ。

「にしても大所帯になったもんだ。全員海賊なんだって？ みんな随分若そうだが……」

「将来性があると言ってやってよ」

イズミが不思議そうにエレノアに目を向けると、エレノアはどこか誇らし気に胸を張る。

それに対し、エドワードも口を尖らせて肩をすくめた。

「おれ達だって、まさか海賊と一緒に行動する羽目になるなんて思いもなかったんですよ。成り行きで仕方なくて……」

「そのわりには結構楽しんでたわよね……」

「兄さん、政府に仕えるよりよっほど向いてるんじゃないの？」

「誰が悪人ツラだコラ!!!」

好きかって言われるのが我慢ならなかったようで、エドワードがナミやエレノアに怒

鳴り返す。

その目の前を、ルフィの手が勢い良く伸びていった。

「あつ!!? そりやおれの肉だぞ!!!」

「うおつ、危ねっ!!?」

ウソツプに肉を奪われたルフィが取り返そうとしたらしいが、伸ばされた手は空を切る。

しかし勢いは死なず、ルフィの手が壁に激突し、大きな罅を入れてしまった。

「あ……」

我に返るルフィだが、時すでに遅し。

次の瞬間には、怒髪天をついたイズミの手によってボツコボコにのされてしまっていた。

「なにうちの店をブツ壊してくれとんのじゃゴルア!!!」

「ご……ごべんなざい……」

「あーあー、派手に壊してくれちゃって……」

「すみません……すぐ直させますので」

哀れなほどにたんこぶだらけになっているルフィを放置し、エレノアとエドワードが壊れた壁に近づく。

エドワードが前に出て手のひらを打ち合わせ、青い閃光を走らせ壁を元通りに錬成してみせた。

「やっぱりいつ見てもハデね〜」

「私は結構好きな色かも……」

「へへへ……!」

その技術のすごさを見直したナミヤビビに褒められ、エドワードは照れ臭そうに笑う。

それを凝視し固まる、師に気づかないまま。

「……エドワード……お前」

イズミの口からこぼれた声に、エドワードは表情を改める。

師が向けている、鬼気迫った険しい表情に、浮かれていた気分が一瞬で消え去った。

「あれを見たのか?」

ドクン、とエドワードの中で動悸が強まる。

過ちを見透かされたように、エレノアとアルフォンスも思わず肩を震わせた。

「……な……何を……」

「見たんだろう?」

「……見ました」

嘘偽りを許さない厳しい声に、エドワードは観念したように頷く。

イズミはじつとその横顔を見つめ、やがて不意と目を逸らした。

「さすがはその年で国家資格を取るほどの天才……つて事か」

「天才なんかじゃありません。おれはあれを見たから……師匠は……」

話題について行けず、訝し気に二人を交互に見るルフィたちをよそに、室内は重苦しい沈黙に支配される。

イズミは窓の外を見やり、遠い目になって口を開いた。

「……あそこには、この町の住民が何十人も眠っている」

つられて視線を向ければ、確かに少し先の広場にいくつもの簡素な墓が立っているのが見えた。住人たちのだろう、と全員が悟った。

「意外なことに、死者は子供の方が少なくつてね……みんな自分の子だけは守ろうと必死になって……食べ物全部与えて飢えて……最後は衰弱し死んだ。うちもどうか旦那が獲物を仕留めては、食料を与えようと頑張ったんだがね……どうしても間に合わないことも多かつた」

それは、どれだけの痛みだっただろう。

救おうと、助けようと努力し続け、それが届かなかつた悲しみは、苦しみは。

ルフィたちには、想像することさえ難しかった。

「そんな時にね、子供達に頼まれるのさ……『お父さんとお母さんを生き返らせて』ってな」

ぐっ、とエドワードの表情が苦痛に歪む。

隣のアルフォンスも体を揺らし、兄弟は咎められているかのような態度を見せた。

「生きていればいつか命は尽きて、肉体は土に還り、その上に草花を咲かせる」

かつて弟子たちに語った言葉を、今一度イズミは口にする。

決して忘れていないと示すように、エレノアがその続きを継いだ。

「魂は『想い』という糧になり、周りの人々の心に生き続ける。世のあらゆるものは流れ、循環している。人の命もまたしかり」

「そう……自分ではこんなにもわかりきっているのにな。未だに子供に死を納得させるのはむずかしい」

やるせなさを感じさせる背中を、イズミは弟子たちに向ける。

エドワードは少しの間悩んでから、表情を見せないイズミに問いかけた。

「……師匠せんせいは命を……死んだ人を生き返らせたいと思つた事はありますか？」

「あるよ」

悩む素振りも見せず、イズミは答える。その現実離れした言葉に目を見張るナミたちをよそに、イズミは背を向けたままエドワードに尋ね返した。

「エド、お前は軍の狗でいてよかったと思つた事はあるか？」

「………いつ、いつ人間兵器として召集されて、人の命を奪うことになるかわからなくて……わいです」

「それでもその特権を利用して成し遂げたい事があるか？」

「成し遂げねばならない事があります」

「師匠わたしの教えを破つといて粹がるんじゃないよ、このガキ!!」

ようやく振り向いたと思えば、今度は容赦のない蹴りがエドワードを襲う。

今度は恐怖で絶句するウソツプやチョツパーの前を通り過ぎ、イズミは倒れこむエドワードの前に歩み寄つた。

「アル、その鎧の中……空っぽだな」

ハッと顔を上げ、アルフォンスがイズミを凝視する。

次いでイズミは、苦痛に顔を歪めるエドワードとエレノアを睨みつけた。

「エドもエレノアも機械鎧オートメイルだろう」

「どつ……」

「どうしてわかつたつて？ さつきお前を投げ飛ばした時！ 左右でちがう足音！

以前よりもぎこちない歩き方！ 気付かないと思つたか、私をなめるなバカ者。………言え、何があつた」

有無を言わさぬ覇気を伴って、イズミは告げる。

エドワードとアルフォンスは、観念したようにすべてを語り始めた。

彼らが願ったのは、若くしてこの世を去った母を取り戻すことだった。

流行り病で亡くなった母を諦められず、兄弟は「人造人間^{ホムンクルス}」という命を生み出す禁術に手を出すことを決意する。

イズミに弟子入りしたのもそのために、散々禁術に手を出すことを、人を生き返らせようとは思うなど釘を刺されたにもかかわらず、研究を重ね続け、ついに実行に移った。

結果は、完全な失敗だった。

錬成の過程においてエドワードは左脚を、アルフォンスは全身を奪われ、生み出された人造人間^{ホムンクルス}もまともな人の形を成していなかった。

エドワードは咄嗟に右腕を犠牲にしてアルフォンスの魂のみを取り戻し、鎧に定着させることで窮地を脱したが、失ったものはあまりにも大きすぎた。

兄弟は人体錬成を諦め、失った肉体を取り戻すことを目的にする。エドワードはそのために、より大きな支援を受けられる国家錬金術師になることを決意した。

たとえば、どれほどの地獄を見ることになろうとも。

そして、今に至るのだ。

「……エドとアルにそんなことが…」

「……馬鹿弟子どもが」

耳にしてしまった、エルリック兄弟の壮絶な過去に、ルフィたちはかける言葉が見つからない。

イズミは険しい顔を手で覆い、腹立たしさを隠さずに呟く。

「…しかしまさか、お前までアレに手を出すなんてね」

「……すがりつけるものが、それしかなかったので」

「誰にくれてやった。その両足」

押し殺したようなイズミの静かな問いに、エレノアは表情を綻ばせながら、なぜか誇るように答えた。

「……この世で最も、愛しい人に」

「…そうか、お前にもそんな相手が現れたか」

顔を伏せるイズミはその表情に気づかず、ただ嘆かわしいと眉間のしわをさらに深くする。

誰も口を開けない、重い沈黙が降りていた時だった。

「ん？」

ふとエドワードが、違和感に気づいてエレノアを凝視する。

何か、ものすごく聞き捨てならない要素を聞きのがした様な気がした。

「おい……ちよつと待て姉弟子。え？ あんたの愛しい人つて……ひよつとしてエースのことか？」

「…わざわざ言わせないでよ、恥ずかしい」

やがて他の者もおかしな部分に気づいたのか、我に返ったように勢いよくエレノアに振り向く。

頬を染めるエレノアに、エドワード達はまさかと目を見開いた。

「………つてことはあいつ、いつペン死んだつてことか？」

「なっ……!!」

エドワードの言葉に、いち早くルファイが反応する。

慕っている兄が一度命を落としたなど、到底看過できる話ではなかった。

「エースが一回死んだつてどういうことだ!!! 何でそんなことになったんだ!!!」

「ちよ……ちよつとルファイ!! 落ち着きなさいよ!!!」

思わず掴みかかりそうになったルファイをゾロやウソップが止めにかかるが、彼らもエレノアに驚愕の視線を向けている。

泰然とした態度で佇んでいるエレノアに、イズミは険しい表情で口を開いた。

「何があった、全て話せ」

問われてエレノアは、事件があった時から数日前のことを思い出す。

忘れようもない、鮮烈な出会いを。

—— 偉大なる航路グランドラインに威勢がいいガキがいやがる。

グラララララ…!!?

「……こりやまた無鉄砲なやつが現れたもんだね」

2年ほど前、まだエレノアが「白ひげ」の船にいた時のこと。

購入した新聞に目を通していたエレノアが、一面に写っていた若き海賊についての記事に思わず呆れた声を上げた。

「なんでもここ最近で、ものすげエ勢いで名を上げてる海賊らしいぜ」

「『火拳』のエース……まだ10代か。なんかそのままでもない速さで燃え尽きちやいそうな子だね」

「ゼハハハハ!!? なかなか辛辣だな、エレノア!!」

半目で頬杖をつくエレノアに、兄弟の一人であるティーチが豪快に笑う。

若くして無謀ともいえる暴れっぷりを披露する青年に、エレノアはなぜか妙な興味を惹かれていた。

「Dか……あんたの名前にもあるよね。なんか意味あんの？」

「さてな……詳しくは言えねエが、探せば他にも結構いるんじゃないか？ なんなら本人に聞いてみりゃいい!!？」

「そんなもんか……」

自身の中の奇妙な衝動に気づかないまま、エレノアはしげしげと記事を見つめる。

そんな時、エレノアの耳がピクリと震え、遠くから近づく気配を感じ取った。

「……ティーチ、4時の方向から大型船の接近を確認。みんなに警戒を………促さなくともいいや」

「んあ?」

「魚人海賊団の船だ」

エレノアの見つめる方向にティーチも目を向け、納得したように肩の力を抜く。

向かってきていたのは、魚の船首を持つ知人を乗せた海賊船だった。

「アラデイン、久しぶりだね。今日は一体どんな要件なの？」

突然来訪した魚人の海賊達に、エレノアが真っ先に挨拶に向かう。

船医を務めるイタチウオの魚人を迎え、エレノアは久方ぶりの邂逅に笑顔を返した。

「急ぎ、おやつさんに取り次いでくれ……うちの船長が厄介なことになっている」

「……ジンベエが?」

魚人海賊団の船長を務める実力者に関わる話題と聞き、エレノアは訝しげにアラディンを見つめ返した。

そこには、惨状が広がっていた。

割れた大地、焦げた草木、あちこちに激戦の跡が刻まれた島の端で、一人の人間の青年と魚人の男がうつぶせに倒れこんでいた。

「もう5日も勝負がつかねエ…!!?」

「死んじまうよ2人とも!!? エースく!!」

青年の仲間らしい男たちの声が聞こえ、その青年こそが話題の若き海賊「火拳」のエースであることが伝わる。

エレノアはその凄まじさに、やれやれと肩をすくめていた。

「これはまた派手にやりあって……」

「どつちも早く応急処置が必要なレベルだよ」

「じゃ、行く?」

「いや………まだだ」

「白ひげ」海賊団の船医マルコに確認すると、そんな返答が返ってくる。

エレノアとしては、なぜか今すぐにでも向かいたい衝動があったが、巻き込まれても

困るとその言葉に従った。

「にしても……『七武海』のジンベエと互角にやりあうとはなかなかの実力者……!!?」
 ここで両者相打ちとなると惜しいな……!!?」

「おめエのお眼鏡にかなうたア大したやつだ。男を見る目は母親譲りだからな」

感心したように、やや興奮した声を上げていると、エレノアの背に聞きなれた声がか
 けられる。

一味で最も強く、大きく偉大な海賊の姿を目にし、エレノアは意外そうに目を見開い
 た。

「パ。パ……」

「グララララ……!!?」 そんだけの根性を見せた野郎だア……ちつとは期待に答えてや
 ろうじゃねエか」

「白ひげ」と呼ばれるその男は、満身創痍になりながらも戦おうとしている青年を見
 やり、楽し気に笑みを浮かべた。

「おれの首を取りてエつてのはどいつだ? 望み通りおれが相手してやろう……!!」

「『白ひげ海賊団』……!!!」

激戦の最中、海岸に現れた巨大なクジラを模した船。

その上に立つ何人も強者たちと、比較にならない覇気を放つ男を前にして、青年の仲間達は戦慄の声を上げた。

「おれは一人で構わねエ」

そう言つて、世界最強と謳われる海賊はその島に降り立つ。

そこからはあまりに一方的だった。全員で立ち向かうが、誰一人として敵わず、弾き飛ばされる。まるで遙か高い山を相手にしているような虚しさだった。

「『炎上網』!!!」

その時、エースが咄嗟に動く。自らの身体から炎を噴き出し、自分と仲間の間に灼熱の壁を作り出したのだ。

「船長!!!」

「エース船長オ!! 何すんだよ」

「お前ら逃げろ!!!」

「……………何だ…今更腰が退けたか…」

勇ましく挑んで退くつもりか、と白ひげは目を細めるが、エースの目に臆した様子はない。

見覚えのある目に、白ひげはいつの間にかにやりと笑みを浮かべていた。

「仲間達は逃がして貰う…!!! そのかわり…おれが逃げねエ……………!!!」

「ハナツタレが、生意気な……」

己を犠牲にしても仲間を、そして己が誇りを守ろうと立ち塞がる若き命。

火炎を纏い、まっすぐに突っ込んでくる無謀ながらバカにできない逸材に、白ひげは可能な限りの全力で応えてみせた。

「グラララ………まだ立つか……今死ぬには惜しいな、小僧」

なすべ全てが防がれ、圧倒的な力を前に膝をつくエースに、白ひげは懐かしさを覚えながら笑う。

娘の勘がここまでの中していることに、驚嘆を隠せないまま。

「まだ暴れたきや、この海でおれの名を背負って好きだけ暴れてみる………!!! おれの息子になれ!!!」

「フザけんア!!!」

敵として、命を狙ってきた相手にかけるとは思えない、異質な言葉。

受け入れることなどできるはずもなく、最後の抵抗とばかりに吠えたエースは、そのままゆつくりと倒れていく。

その体を、瞬時に舞い降りた一人の天使が全身で受け止めた。

「……なんだろう。なんかやっど………見つけた気がする」

ゾクゾクと全身に走る震えに困惑しながら、エレノアは深い眠りについたエースをじっと見つめ続けていた。

ずっと探していたなにかが、目の前に現れたような気がして。

第90話 “真理の扉”

「よう。見てたぜ、この間の暴れっぷり」

エースが白ひげの船に乗ってから数日後、目をさましたエースが欄干に背中を預けて空を見上げていると、そんな声がかけられる。

「おれは4番隊の隊長サッチってんだよ。仲間になるんなら仲良くしようぜ」

「……………」

「ははは、何だよまだ寝ぼけてんのか？」

親し気に話しかけてくるコックに応えることなく、エースは以前の凶暴っぷりが嘘のようにぼんやりとしている。

敗北の無力感が今更襲っているのかと思ったが、そうではないらしい。

「…そうだ、氣イ失った後の事教えてやろうか。お前の仲間がお前を取り返しに来たんで、おれ達で叩き潰した。…なに、死んじやいねエ。この船にのってる……………」

サッチの声がどこか遠くから感じるように思いながら、エースは聞かされた報に少しだけ安堵する。

そこでエースは、ようやく自分の意識がしっかりしてくるのを感じた。

「……………ここは、まだこの世なのか」

「おいおい…!! やっぱまだ寝ぼけてんのか? しっかりしろよ若いの!」

「……………妙な夢を見た」

「ん?」

訝し気に振り向くサッチをよそに、エースは少し前のことを思い出す。

負傷の痛みに苦しみ、何度か目をさましていた夜中のこと。苦悶に歯を食いしばるエースの額に、ひんやりとした心地のいい手が触れてきたのだ。

——大丈夫…。

ここにあなたの敵は、一人もいないからね…………。

うつすらと瞼を開ければ、月光に照らされ幻想的に輝く、白い天使が頭上から見下ろしていた。

慈愛に満ちた黄金の瞳を向け、膝の上にエースの頭を乗せ、髪を撫でるその姿にエースはしばし言葉を失い、見惚れてしまった。

「あんな綺麗なヤツ、初めて見た……………てつきりもう、おれは死んであの世にいらんだと思っただ…」

「……………あー…………」

夢見心地のように、遠い目で記憶をたどるエースに、サッチは困ったように天を仰ぐ。

面倒なことをやらかしたものだ、他の誰かを嘆くように。

「安心しろよ、お前はまだ生きてる。お前が見たものも夢なんかじゃねエ」

「天使が海賊船に乗ってるってのか…!! バカにすんじやねエ…現実と妄想の区別ぐらいつく…!!」

「ははは…確かにありやあ浮世離れしてるわな」

流石に意識がはつきりしてきたのか、自分が口にしたことを恥じるように頭を抱えるエースにサッチは苦笑する。エースのすぐ近くに、件の天使が立っていることを言わずに。

「……? お前、何言ってる…」

「——うん、それだけ元気なら心配はいらなそうだね」

聞こえてきた、覚えのある声にエースはぎよつと目を見開き、振り向く。腰に手を当てて見下ろしてくるのは、身長こそ小さいが昨晚自分のそばにいた天使で間違いなかった。

ほつと安堵のため息をつき、茫然となるエースを見下ろすエレノアは、満足げに何度もうなずいてみせた。

「……………!!! ほんとにいやがった…」

「なにさ、人を化け物かなにかみたいにな」

思わず呟いたエースに唇を尖らせ、エレノアは欄干の上に腰を下ろす。そしてしげしげと、初めてまともに顔を合わせた青年を見つめた。

「あんたが…ポートガス・D・エースでいいんだよね？ 私はエレノア、錬金術師さ」

「……………天族に錬金術か、もう何を聞いても驚かねエぞ」

「にやははは！ 初めてあつた人はみんなそう言うのさ」

多少の驚きはあるものの、さすがになれて来たらしいエースにエレノアはからからと笑う。

少し警戒したままの彼と若干距離を開けつつ、エレノアは頬杖をついた。

「まあ、今後どうするかは君が自分で決めなよ。でもその間少しは手伝ってくれるとありがたいかな」

エースはその言葉に、どうしても疑う気持ちを隠せない。喧嘩を売ったのは自分なのに、船長の命を狙ってきたのに、自由にしておく意味が全く理解できなかった。

「錠も枷もつけずに……………おれを船に置いていいのか……………!」

「? じゃれてくれるなら…あの人も逆に喜ぶと思うよ?」

何を言っているのか、と本気で不思議そうに首を傾げ、エレノアはまた笑っていた。

それからしばらくの間、エースは白ひげ海賊団の船『モビーディック号』で過ごすこ

とになった。その間彼は、何度も何度も白ひげの命を狙い続けた。

しかし白ひげは、就寝中であろうといつであろうとそれを察し、わりと手加減なく襲撃を防ぎ続けた。それこそハエでも払うように。

エースはそのたびに傷だらけになり、時に海に叩き落とされ、癒えたばかりの身体には生傷が絶えない。

その体に手当てをするのは、いつもエレノアの役目だった。

「まったくもう……!! 毎日毎日よくもまあ飽きもせず挑めるもんさ!! いい加減理解しなよ……あの人は若造に首を取れるほどヤワじゃないんだって……!!」

「うるせエ!! おれの勝手だ!!」

腕に包帯を巻かれながら、エースはエレノアに強気に吐き捨てる。

だがすぐに、険しい表情で頭を抱えてしまった。

「……さすがに折れて来たか。無理もないよ、パパはホントに大きな人だから」

「エレノア、包帯足りてるか?」

「うん、大丈夫」

船医のマルコに尋ねられ、エレノアは首を振って治療器具を片付ける。

良好に語り合う二人を見つめていたエースは、本気で不思議そうに疑問の声を上げた。

「お前ら何であいつのこと、親父”って呼んでんだ……う？」

「あの人が——…息子”と呼んでくれるからだ」

マルコはそれに、本気で嬉しそうな笑顔を浮かべて応える。

誇らしげな、すべてを満たされているような満面の笑みで、マルコは語ってみせた。

「おれ達ア、世の中じゃ嫌われ者だからよい。……嬉しんだなア……ただの言葉でも嬉しんだ」

それがまだ信じられないような心地で、エースはマルコを凝視する。自分が求めている物を目の前で見せつけられているような、そんな苦しい様子で。

そんなエースを見て、エレノアは小さくため息をついた。

「あんた、命拾いしてこんな事まだ続ける気なの？ ……そろそろ決断しなよ。今のあんたじゃパパの首は取れない。この船を降りて出直すか……ここに残って“白ひげ”のマークを背負うか……!!」

このままここで、彼が何もできないまま無力感に苛まれ続けるのを見ていられないと、エレノアは決断を迫る。

それでもなかなか領けないでいるエースを、じっと見つめていた時だった。

「……？ どうした、エレノア」

不意に顔を上げたエレノアが、どこか遠くに注目し始めたことで、マルコが表情を変

える。

やがてエレノアは、瞳孔を縦に裂くと船に向かって声を張り上げた。

「敵襲ウ!!!」

小柄な体からは想像できない、大気を震わせる号に船内にいた全員が顔色を変えて振り向く。

エレノアは船上を駆け抜け、自身が察知した危険を知らせ始めた。

「海中から複数、中型の船影を確認!!! 総員迎撃態勢!!!」

「野朗共!!! 氣イ引き締めろ!!!」

「お…おい!! 敵なんてどこに…!!!?」

突然のことに呆気にとられていたエースが、一拍遅れてエレノアの後を追いかける。

するとそこで、水面にうっすらと見えるいくつかの大きな影に気がついた。

「潜水艇だ!!? 取り囲まれてるぞ!!!」

「一人たりとも船に入れるなア!!!」

目を見開くエースをよそに、エレノアの知らせを聞いた船員たちが戦闘態勢に入っていく。

そしてついに、モビーディック号を取り囲むように、深海魚を模した海賊旗を掲げた何隻もの潜水艇が浮上していった。

「マジで来やがった…!!」

「ボサツとしないで！ 巻き込まれるよ!?？」

何かとんでもない能力を見せつけられ、啞然とするエースの肩を叩き、エレノアも大人の姿になって戦闘態勢に入る。

一気に騒がしくなる中、潜水艇から飛び出した海賊達が一斉にモビーディック号に飛び移ろうとした。

「ザコどもに構うな!!？」 狙うのは天族の小娘だけだ!!？」

「〃白ひげ〃から不死の生き血を奪えエ!!」

「狙いはエレノアだ!!？」 指一本触れさせるなよ野郎共!!」

不確かな伝承を真に受けた、超常の力を欲する不埒者達が、下卑た笑みを浮かべて白ひげの娘を狙う。

その何人かが、とてつもない衝撃を受けてあつさりと吹き飛ばされていった。

「グララララ…!!？」 おれの娘に手エ出そうなんざ1000年早エぞ!!」

意気揚々と、そして半分怒りを滾らせた白ひげが薙刀を振り回し、大事な家族を狙う敵をまとめて叩きのめす。

奇襲が完全に成功していたならば、かなり苦戦を強いられていたであろうその戦いは、エレノアが事前に察知したことで白ひげたちが優勢に立っていた。

「チツ……………撤収だ!!?」

分が悪いと判断した敵陣のリーダーらしき海賊の合図で、生き延びた者達が慌ててモビーディック号から飛び降りる。

あとを追う暇さえ与えず、襲撃者たちはあつさり海中へと逃げ去っていった。

「……………なんだったんだあいっらは?」

「騒ぐだけ騒いで帰っていきやがった」

突然の襲撃に内心期待していた白ひげ一味は、がっかりした様子で敵がいた海面を見下ろす。

エレノアもそれを見送り、やれやれと肩をすくめた。

「やれやれ…不死の力なんてないってのに馬鹿な人たちは絶えないねエ」

「……………よくあるのか?」

「ここんとこ大人しかかったただけどね。まーでも最近は月一ぐらいでやってきてるかも」

とんでもないものを見せられた気分で、エースが呆れた様子のエレノアを見つめる。

誰もかれもが、戦いは終わったものだど油断し気を抜いていた。異常な危機察知能力を持つエレノアでさえ、索敵を怠ってしまっていた。

ゆえにそれに気づいたのは、エースだけだった。

「エレノアアア!!!」

突如、ハツと目を見開いたエースがエレノアを横から突き飛ばす。

目を見開いたエレノアが何事か、とエースを睨みつけた時、それはついに牙を剥いた。何も無い甲板に突然現れた、カメレオンの様な姿の海賊が、奇妙な光沢をもつ刃を突き出してきたのだ。

一瞬前までエレノアが立っていて、エースが割って入った場所に。

「エース!!!」

エレノアが叫んだ目の前で、エースの胸に刃が深々と突き刺さるのが見える。

次の瞬間、炎であるはずの彼の体に傷が入り、おびただしい量の血があたりに撒き散らされた。

「し…しくじった!!?」

「てめエ…!!!」

狙いが外れたことで狼狽を見せる、
レプレプの実^{カメレオン} モデル・避役の海賊が目を見開く。

その男も次の瞬間には、真つ黒に染まったエレノアの蹴りを食らい、顔面をへこませて海に叩き落とされていった。

「エース…!!!」

だがそんな者に構っている暇はなく、尋常ではない量の血を吐いて倒れるエースのもとにエレノアは急ぐ。

すぐさまマルコやほかの船医が治療を試みるが、一目見ただけでその表情は曇っていた。

「ゴホツ……!!?」

「エース!!? 意識を保って!!? エースつてば!!」

「こいつは……海楼石でできた暗器か……!!? この傷じゃもう……!!?」

「そんな……」

残された武器、その特殊な性質により防ぐことがままならなかったのだと知り、エレノアは悲痛に顔を歪めてへたり込む。

徐々にエースの呼吸はか細くなり、命の火が消え始めていることを目に見える。エレノアはその姿に、とてつもない恐怖に苛まれた。

「エース……!!? こんな……こんなやつてないよ!!? 私を庇って……私のせいだなんて……そんなのもうイヤなのに……!!!」

今でも覚えている、大切な家族が永遠の眠りにつく光景。

他ならない自分の無力のせいで誰かが死んでいく姿が、もう二度と見たくないその光景が、エレノアを責める。

そしてそれは、エレノアにある「決断」を迫った。

——もう……これしかない……!!!

キツと決死の覚悟を決めたエレノアが、マルコたちをわきにどかす。

自分の指を噛み千切ると、嘔き出した血を甲板に押し付けて素早く複雑な文様を描いていった。

「お……おいエレノア……?」

「みんな離れて……!!! 師匠、すみません……!!!」

困惑するマルコたちをよそに、エレノアは険しい形相で師に謝罪し、黙々と文様を描き続ける。

脳内に思い浮かべるのは、かつて師のもとで修業していた時に見た、論文の一部。あの禁術について書かれていた、明らかに燃やされた痕のある資料。

「おめエ……何するつもりだ……!!!?」

白ひげは娘の鬼気迫る様子に何かを察したのか、いつになく緊迫した様子で目を見開く。

それにこたえることなく、エレノアは完成した円陣の淵に手をかざし、ありつたけの力を込めてそれを発動させた。

「エレノアアアア!!!」

眩い閃光が視界を埋め尽くす中、マルコたちの悲鳴が聞こえた気がした。

「……………え？」

気がつくとそのこは、見覚えのない真つ白な空間の中だった。

「()は……………どこ？　なんで私、こんな……………」

どこを見渡しても、何も見えない。壁も床も、まるで真つ白い液体の中に飛び込んだような、しかし自分の姿は見えるという異様な空間に立たされていた。

そんなエレノアの耳に不意に、緊張感に欠ける聞き覚えのある声が届いた。

『やア』

「！…誰？！？」

『()だよ()、あんたの目の前』

他に誰かいたのか、とエレノアがあたりを見渡すものの、人影一つ見当たらない。

が、ふと気づいた時には、白い影のような何かが、不気味な笑みを浮かべて立っているのによく気が付いた。

「……………だからあんた誰よ」

『おお！　よくぞ聞いてくれました!!？』

パンツ！と手を叩き、なぜか楽し気に影は口を開いた。

見た目の怪しき以前に、エレノアはそれにはあまり近づくべきではないと感じていた。

『私はあんた達が“世界”と呼ぶ存在。あるいは“宇宙”。あるいは“神”。あるいは“眞理”。あるいは“全”。あるいは“一”。……そして、私はあんただ』

「…悪いけど、戯言に付き合ってる暇ないんだよね」

『そうかたいこと言わないでよ。せつかく来たんだからさ？ ……ていうか見てもらわなきゃ困るよ』

意味が分からない、と目を細めるエレノアに、影は人差し指を突き付ける。

正しくは、エレノアの背後に鎮座している巨大な扉を指さしていた。

『もう代価はもらっちゃったんだからさ』

ギョツと目を見開くエレノアが振り向くと同時に、扉が突如微かに開く。

その直後、扉の中から無数の黒い手が飛び出し、エレノアの全身に絡みついた。

『ようこそ、身の程知らずのバカ野郎——ここまで来たあんたには、眞理を見せてあげるよ』

悲鳴を上げる余裕さえなく、エレノアは扉の中へ引きずり込まれていく。

そしてエレノアは、そこで地獄を見た。

ありとあらゆる情報が。生命の誕生から死に至るまでのメカニズム、元素と分子の融

合に関わる何もかも、あまりに膨大過ぎる情報が、一気にエレノアの脳内に刻み込まれていったのだ。

「うわあああああああ?!!」

脳が弾けるのではないかと思わせる衝撃で、エレノアがたまらず悲鳴を上げる。

いつの間にかエレノアは最初の白い空間に戻っていて、扉がまた閉じられ沈黙しているのが見えた。

「ハア……………!!? ハア……………!!」

『どうだった? 面白いものが見えただろ』

荒い息で肩を揺らすエレノアに、影は楽しげに尋ねてくる。

だがエレノアは、笑っている暇など微塵もなかった。

「……………いらぬい」

『ん?』

「こんな知識いらぬい!!! これは人間が見てはいけぬいものだ!!! 手に負えるものなん

かぢやぬい!!!」

喚き散らし、刻み込まれた一切を否定しするように頭を振る。

本能的に、これは手を出してはならないたぐいにものだと察し、全てを捨て去りたくなっていた。

「私が欲しかったのは眞理なんかじゃない!! ただエースを取り戻したかっただけだ……!!? あんなもの見せて欲しいなんて頼んだ覚えはない!!」

『…そうは言ってもねー。さつきも言ったように、もう代価はもらっちゃったんだよね』

影はそんなエレノアに、肩をすくめてため息をつくしぐさを見せる。

キョトンとした様子で、エレノアは影に振り向いた。

「……代価?」

『そ、代価!』

楽しそうに笑う影の言葉で、エレノアは気づく。

自分の右脚が、分解されあとかたもなく消えていることに。消えたそれが、影の右脚となつていることに。

『あなたのいう人間の手に負えないものを一部とはいえ与えたんだ……もらうものはきつちりもらわなきゃね』

目の前で笑う影に、エレノアの心はとてつもない恐怖で支配される。

そして気付く。目の前のこの得体の知れない何かの声は、自分の声そのものだということ。

『等価交換、でしょ? 錬金術師』

不気味に笑う影の笑顔が、エレノアの記憶に深く刻みつけられた。

「うああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

右足に襲い掛かる激痛に、エレノアがのけぞりながら絶叫する。

ドバドバと溢れ出す鮮血が、全身から力を垂れ流していくのを感じた。

「なんだこりゃア……………!!!」

「エレノアの足が……………!!!」

マルコやサツチ達が戦慄の声を上げ、異様な光景に立ち尽くす。

白ひげでさえ冷や汗をかき、娘を襲う現象に言葉を失くしていた。

「……………!!!? エー……………ズ……………!!!」

そんな中でもエレノアは、自分の体を引きずり脛をこじ開ける。

血を流していたエースの胸は、いつの間にか塞がっている。あとこそ残っているものの、破損した肉体は全て修復されていた。

「返せ……………!!!? そいつはお前のじゃない……………!!!?」

エースの魂は、彼の中にはない。だが、まだ間に合う。

断たれた足を縛って止血し、重い体を引きずってエースの近くに近づくと、エレノアは両手を頭上に掲げていく。

「足だろうが!!?」 両腕だろうが!!?」 心臓だろうがくれてやる!!! 返せ!!!」

決死の覚悟を決め、エレノアは仰向けになるエースを見下ろす。

過ごしたときは、それほど長くはない。しかしそれを補って余りあるほどに、エレノアは無自覚の内にエースを強く想っていた。

「私の家族を返せ!!!」

パンツ…!!と掲げた掌が打ち合わされ、音が響き渡る。

その姿はまるで、神に対して祈っているようにも見えた。

『へエ、やるじゃないか』

どこにもない、ただ一人の中にのみ存在する、巨大な扉がある真っ白な世界。

そこで足を組んで腰を下ろしていた影は、鍊成されていく左脚を見て、感嘆の声を上げていた。

第91話 // 帰還者達 //

エースはふと、目をさました。

朝になれば勝手に目が覚めるように、ごく普通に。

「お……おとおお!! エース!! 目が覚めたか!!」

「ウソだろ……!! 信じられねエ!!」

「……おれは、何で……何があった……?」

サツチやほかの面々がエースに気づき、歓喜の声を上げているが、エースにはその理由がわからない。

自分がなぜベッドで寝ていたのかも、全く理解できなかった。

「エレノアに感謝しろよ……!! あいつは命がけでお前を助けたんだからな」

「今回ばかりは、おれでもお手上げだったからよい」

「お手上げ……? お前……船医だろ……なのにお手上げって……」

「……見りゃわかるよい」

訝し気に問いかけるエースの、マルコは悲痛に顔を歪めて促す。

嫌な予感があったエースは、恐ろしく気怠い身体に叱咤しながらマルコの視線の先、医

務室の方へ向かう。

そこでエースは、絶句した。

医務室のベッドの横になる、両足のない天使エレンの姿を目にして。

「お前……!! 足が……!!」

「錬金術の禁術とやらで……自分の両足を犠牲にしてお前の魂を呼び戻した……らしい」

「その結果が……これかよ!!!」

失った足がひどく痛むのか、ベッドの上で冷や汗をかいてうめいているエレノアに、ナースたちが懸命の看護を施している。

がつくりと膝をついたエースは、エレノアの痛みを自らも感じているように、くしゃくしゃに顔を歪めた。

「何で……おれのために……こんな……!!!」

ずっと敵愾心を燃やし、やさしくかけられた言葉も払いのけて来たのに、命を懸けて救ってくれた。

誰にも望まれずに生まれてきた彼には、そうする意味がまだわからなかった。

「なんで……お前は、おれにそこまでの事を……!!!?」

「あなたに生きてて欲しいから……。理屈じゃないの……。ただ……。体が勝手に動いた」

高熱で苦しみながら、エレノアはか細い声で答える。

その顔に、無理矢理作った、しかし本心からの笑顔を浮かべて。

「あなたに会えて……よかった。そう思えるの」

エースにはまだ、理解できない。いや、頭が納得することを拒む。

それでも彼の中には、形容しがたい暖かい何かが生まれていた。幼き日に遭った、二人の兄弟からもらったものと同じ何かが。

その日の夜、エースは一人白ひげのもとを訪れていた。

それまで抱いていた敵愾心をすべて捨てた、真剣な様子を伴って。

「話つてのは……何だ？」

「……おれはさつきまで、真つ暗な闇の中にいた」

樽ごと酒をかつ食らう白ひげの前で、エースは語り始める。

「そこは何もなくて、ただ身体が引つ張られる感覚だけがあった……何でそんなところにいるのかもわかんなかったけど……このままじゃまずいって事だけはわかった」

白ひげにとつて、目の前で一味に誘った者が手にかけられた光景は最低なものだったのだろう。明らかに腹立たし気に眉間にしわが寄っていた。

「そんな時、あいつがおれの手を引いてくれた。取り返しのないところに行きかけ

てたおれの手を掴んで、あそこから引つ張り出してくれた。……そして目が覚めて……あいつが払った代償を知った」

黙り込む白ひげの前で、エースは徐々に項垂れ、身を震わせる。

自分が作ってきた心の壁が、どれだけの痛みをあの日使にもたらしたのか。それを身に沁み、湧き上がる想いを自覚しないまま。

「おれは……あいつの想いに応えなきゃならねエ……おれの持てる全力で……応えてエ……!!!

……頼みがある……“オヤジ”」

顔を上げ、拒み続けてきた呼び名を口にするエースの目に浮かぶ、新たな炎。

白ひげはそれを目にし、にやりと笑みを浮かべた。

「……覚悟決めやがったか……グララララ」

数日後、エレノアの熱がようやく引いたという知らせに、エースは船内を全速力で駆ける。

背中を見たほかの船員たちを驚かせ、気にせずエースは医務室へ向かう。

「おいエレノア!!! 見てく……」

ドアを蹴り破る勢いで入室したエースが、初めて見せる笑顔でエレノアを探す。

が、上半身をあらわにしてナースに背中を拭いてもらっている彼女を見て、その表情

が固まった。

「レデイの部屋に入るときはまずノックが基本です…!!」

「ず…ずまん……ずびばぜんでじだ…!!」

「にやははは…気にしてないからいいよ」

鬼の形相と化したナースにポッコポコにされ、地に伏したエースにエレノアは恥ずかしそうに笑う。

エレノアが服を着替えてから、エースは改めてエレノアに向き直った。

「見てくれエレノア…!! ホラ!!」

そう言つてエースが背中を見せると、そこに刻まれているのは海賊マーク。

白ひげの息子であることを示すマークを、エースは誇らしげに見せた。

「…!! そつか…決めたんだね」

「ああ…!! ——これからはおれがお前を……家族を守る…!!」

真剣な表情のエースが見つめるのは、太腿の半ばから先が無くなったエレノアの両脚。

以前の気の強さは健在ながら、かつての力を奪われてしまった命の恩人にして、今や誰よりも強く想う女。

「…これから、よろしく頼む…!!」

「……………うん。よろしくね、エース」

華が咲くような柔らかな笑みを浮かべるエレノアに、エースもまた笑う。

その後、互いが互いに抱く想いに気づくまで、そう時間はかからなかった。

時は戻り、『ユバ』のカーティス宅。

エレノアの持つ過去を聞き終えた麦わらの一味とカーティス夫妻は、沈黙の中にあつた。

誰もが信じられないといった様子で、エレノアを凝視していた。

「……………店を出て五軒となり……………」

顔を手で覆っていたイズミがふと口を開き、全員が訝し気に振り向く。

直後、イズミの両目がギラリと光り、凄まじい怒気が噴き出した。

「……………カンオケ屋があるから自分のサイズに合ったのを作つて来い!!」

ボキボキと拳を鳴らす師の殺気に、弟子達だけでなくルフィ達も震えあがる。

涙目で距離をとるエレノアたちだったが、やがてイズミの殺気は何事もなかったかのよう霧散していった。

「冗談はさておいて……………あれほど人体錬成はやるなどといったのに 師弟そろってしよーもない……………」

「やっぱり師匠せんせいも……」

「内臓なかをね、あちこち持つて行かれた」

呆れたようにイズミが眩き、自らの腹をさする。

そのため息はエレノアたちに向けてか、それとも自分に対してか。

「大馬鹿者だよ、ほんとに」

「すいません」

「ばかたれ！」

「すいません」

「おろか者！」

「はいっ」

「くそ弟子！」

「おっしゃる通りで」

「豆!!」

「……………はい……」

「……………頑張ったんだね」

次々に襲い掛かる罵倒の直後に、イズミは悲し気にエレノアと兄弟を見つめる。

思わぬ優しさに、エレノアもエドワードもアルフォンスも、一瞬ほかんと呆けてし

まった。

「いえ……これは自業自得ですし、慰めてもらおう資格なんて……」

「ああ……」

「うん」

「このばかたれが、無理しなくていい」

戸惑い気味に返答する弟子たちを、イズミは優しく抱き寄せる。

そのぬくもりに、弟子たちは目を見張り、やがて苦し気に顔を歪めていく。

「すいません」

「すいませ……ごめんなさい」

「ごめんなさい」

ルフィたちやシグたちが痛々しそうに見つめてくる中、心と体に大きな傷を負った弟子たちはただ、謝り続けた。

そしてイズミは、エレノアに羨望のような目を向け、深いため息を吐いた。

「……人体錬成、その中でも死者の蘇生を成功させたか……我が弟子ながら恐ろしいやつだよ」

「………たんに運が良かっただけです。ゼロから人間を創造したわけじゃなくて……破損した肉体を修復し、魂を向こう側から呼び戻して繋ぎ合わせる……最初から最後まで必死

でした。……………手遅れだった家族も、いますし」

「時間が遅ければ、間に合わなかったわけか…」

エレノアとエルリック兄弟の違い、それは人間を創造したか修復したか。

どちらも神の所業に近く思えるが、聞いてみればかなりの難易度の違いがあるよう
だ。

ナミはそれを聞きながら、ずいぶん前にエレノアと交わした会話について思い出していた。
——

「………女の意地、かな？」

「……あれってそういう意味だったんだ」

今なら、あの時どこか誇らしげだった表情の意味が分かる。

ルフィはじつとエレノアの横顔を見つめ、やがてその場で深々と頭を下げた。

「ありがとう、エレノア……!! おれの兄ちゃんを……助けてくれて……!!」

「……もう……家族を失いたくなかったからね。代償は大きかったけど……私は後悔して
いない」

エレノアは苦笑し、ルフィの肩を軽く叩く。

イズミはそれに、悔し気な微笑みを見せていた。

「しかし、私でさえできなかつた域にまで達しちまうとは、天才つてやつかねエ」

「…天才なんかじゃありません。私達はあれを見たから…」

「いや、あれを見て生きて帰つて来ただけでも十分に天才と呼べるだろう。わが弟子ながらたいしたものだね」

代償として、体の一部を奪われる。それがどれだけ恐ろしいことか。錬金術には全くもつて疎いチョッパーにも、背中に震えが走る。

やがてイズミは、表情を改めてエレノアたちに向き直つた。

「でも、ケジメはつけなきゃならないんだよ。破門だ」

わかりきつていた言葉に、それでもエドワード達は息を呑む。

「私はね、お前達をそんな身体にするために錬金術を教えたんじゃないんだよ。もう弟子とは思わない」

「師……」

「アル」

「やることあるんだろう。今日はもうさつきと休みなさい」

背を向けてしまったイズミに、エレノアたちは寂しげな目を向ける。

だが、告げられた決断は覆らない。考え着く中でも最も優しい処分に、エレノアもエドワードも反論はしない。

「お世話になりました!!」

深々と頭を下げる弟子に、イズミは決して痛みに歪む表情を見せなかった。

「あいつ、一人目の子供を身籠もつた時に病気をしてな。頑張つただけど産んであげられなくて、その時二度と子供ができない身体になって…一晩中謝られたよ。あいつは何も悪くないのにな」

砂塵が吹き抜ける夜の『ナノハナ』の町を、シグとエドワード達が歩く。

夫であるシグが、当時の妻の悲しみを癒せない無力感に、どんな思いを抱いていたことだろうか。

「その時から人体錬成を考えてたんだろいなア、結果あのザマだ。気付いてやれなかったおれもバカだけだよ」

深い深いため息に、エレノアたちも悲し気に目を伏せる。

ただ一人、家族を奪われずに済んでいるエレノアを見やり、エドワードは夜空を仰いだ。

「……何が足りなかったんだろいなア。おれ達も師匠せんせいも…」

「兄さんの理論は完璧だった…あの時はそう思えた」

「…東の海で聞いた話なんだけどね」

果てしない無力感を抱いているエドワード達に、エレノアは迷うように口を開く。

慰めにしかなりそうにないが、言っておいた方がいいような、そんな気がしていた。

「人の…生き物の魂はみな不滅のもので、肉体が死ぬとそこから離れ、また別の肉体に宿るんだって。俗にいう……輪廻転生」

エレノアが何を言いたいのか察したのか、エドワード達は納得したようにハッと息を呑む。そしてやはり、自分の不甲斐なさを嘆くように顔を伏せてしまった。

「師匠せんせいや…おれ達が人体錬成を行ったときにはすでに……」

「……母さんの魂は、別の誰かに生まれ変わっていたと」

「エースは肉体を離れて間もない間に向こう側から呼び戻された。だから蘇生に成功した…そういうこと？」

「可能性としては……」

ぼりぼりと頭をかき、エドワードは肩を落とす。しんと黙り込んでしまった兄弟から、エレノアは辛そうに目を逸らした。

「輪廻転生…か。そう言われてみれば、納得しちやいそうなものがあるね……」

「俺たちが研究を始めた時には、すでに遅かったわけだ」

「あの…ごめん。傷口に塩を塗るような真似して」

「いや、いいんだ。むしろ大事なことが聞けた……もうどこかのだれかのものになっち

まつてたんなら、呼び戻せるわけないよな……かなわねエな、姉弟子には

おれ達何やってんだろうな、とエドワードは虚空を見つめる。

ここではないどこかを見つめる弟弟子を見ながら、エレノアも目を細めた。

「……………サッチは、救えなかつた私を恨むかな……………」

救えた彼とは異なり、間に合わなかつた家族のことを思い、エレノアはずきりと胸が痛むのを感じていた。

翌日、一時の休息を終えたルファイたちは、トトやイズミたちと向かい合い、別れを惜しんでいた。

「すまんね、ビビちゃん…エルリック君たちも…とんだ醜態をみせた…」

「ううん、そんなこと……………」

「…じゃ、おれ達行くよ…色々ありがとうございました、せんせ…」

「やめな。破門だと言つたはずだよ……とにかく、体には気をつけな」

「……………すみません」

最後までで厳しいイズミに、兄弟とエレノアは気まずげに頭を下げる。

そんな中トトは、ちゃぶちやぶと音を立てる、中身が詰まった小さな樽をルファイに手渡した。

「ルフィ君、これを持って行きなさい……」

「うわっ、水じゃん!!」

「水——!!?」

思わぬ饑別にルフィが目を輝かせる。

昨晩ルフィは、せめてもの手助けになろうと一緒に砂を掘り続けていたらしい。途中ほとんど邪魔になっていた上、途中で眠ってしまったようだが。

「出たのか?」

「昨夜、君が掘りながら眠ってしまった直後にね、湿った地層までたどり着いたんだ。なんとかそいつを蒸留して水をしほり出した」

「おおーっ!! なんか難しいけど、ありがとう大切に飲むよ!!」

「正真正銘ユバの水だ……すまんね、それだけしかなくて……」

申し訳なさそうに頭を下げるトトだが、一味にとってはかけがえのない贈り物である。

少しばかりやる気が上昇し、エドワード達も顔を上げた。

「じゃあ……先生、お元気で」

「待ちな!!!」

背を向けようとしたエドワード達を、イズミが大きな声で呼び止める。

何事か、と振り向く弟子たちに、イズミは腕を組んで告げる。

「……お前達はもう私の弟子じゃない。だが……見捨てたわけじゃない」

ハツと目を見開き、エレノアと兄弟はイズミを凝視する。

突き放した弟子の手前、どこか言い辛そうなイズミは、それでも我慢して先を続けた。

「もう……錬金術について何かを教えるつもりはないが……一人の人間としてなら話を聞いてやってもいいとは思っている」

シグやメイスン、トトが微笑ましげに見つめてくるのを恥ずかしく思いながら、イズミはキツとエレノアたちを見据えた。

「お前達が相手にしようとしているのは、国の信頼を受けている強大な敵だ。……どんな結末を迎えることになるかと、決して折れるな。私の弟子だったなら……最後まで全力で戦え」

「……!!! はい!!!」

彼女らしい、厳しさと優しさが詰まった声援に、エレノア、エドワード、アルフォンヌは力強く答える。

形なき応援を受け取ったルファイたちは、使命を果たすため、元来た道を引き返していくのだった。

第9 2話 〰倒すべき敵〰

「ジヨ~~~~ダンじゃな——いわよ~~~~う!!!」

地下深くのとある一室に、彼らはいた。

アラバスタ王国に毒牙を突き立てている秘密組織のエージェント、その実力者たちが集結していた。

「一体いつまで待たせる気なの?!」 タコパぐらい出しなさいよう!! 回るわよ?! 回る

あちしは白鳥の如し!!」

「Mr. 2 静かにお待ちなさいよ」

「ホンツツとだよこの〰バツ〰!! 腰にくるんだよおめーが騒ぐと!!!」

「あなたもよ、ミス・メリークリスマス」

「フォ——フォ——フォ——……!!!」

Mr. 2 ボン・クレールを筆頭に、個性豊かな暗殺者たちが同じテーブルにつき、騒いでいる。

そこに姿を現したのは、二人の美女と丸い体の男だ。

「フフフツ……みんな仲良くってわけにはいかなそうね……」

「……………もつとも、その必要はないのだけれど…………」
 「ないない」

触れるだけで怪我をしそうな蠱惑的な美女と異様な風体の男に、エージェントたちが一斉に振り向く。

「ミス・オールサンデー…と、ああ…噂の新入り」

「あらサンデーちゃん、最近ドウー!!?! 新しい子はよろしくねい!!」

「うっさいつつつてんだよこの『バツ』!!」

ハイテンションに自分たちの上司を迎えるMr. 2をよそに、Mr. 0. 5ペアが席につく。

要員全員が揃っていることを確認し、ミス・オールサンデーが笑みを浮かべた。

「長旅御苦労様、よく集まってくれたわね。これだけの面子が集まるとさすがに盛観」

「ここはどこなんだ、ミス・オールサンデー」

「そうね…あなた達はバンチに引かれて裏口から入ったのよね」

Mr. 1の問いに、ミス・オールサンデーは疑問も当然だとばかりに頷く。存在そのものが秘密の組織ゆえに、集合場所も他人には秘されなければならないのだ。

「町はわかるところうけど…ここは人々がギャンブルで一獲千金を夢見る町、『夢の町』

『レインベース』。そしてあなた達のいるこの建物は…『レインベース』のオアシスの真

ん中にそびえる建物。この町の最大のカジノ「レインディナーズ」、その一室よ」

アラバスタの民も想像できまい。ある英雄が経営するカジノの真下に、国を揺るがす悪人たちのアジトが設立されているなど。

「他に質問がなければ話を進めるわ」

「そ——ともさ!! さっさと始めな、それ始めな、やれ始めな」

「だけどその前に……紹介しなきゃね」

せつかちなミス・メリークリスマスが促すも、ミス・オールサンデーは焦らない。

計画の黒幕について語るのに、口上を省略することなど無粋な行為であるからだ。

「あなた達がまだ顔も知らない我が社の社長^{ホース}!! ……今までは私が彼の「裏の顔」とし

て、あなた達に働きかけて来たけれど、もうその必要はなくなった……わかるでしょ?」

「いよいよというわけだ……」

いたずらっぽい笑みを浮かべて、ミス・オールサンデーが口にした直後、その男が口を開いた。

アラバスタ王国において絶大な支持を受ける、「王下七武海」の一人にして砂漠の絶対的強者が。

「作戦名『ユートピア』——これが我々バロックワークス社の最終作戦だ」

「ク……クロコダイル!!」

戦慄がエージェンツ全員に走る。

予想をはるかに超える大物の登場に、誰もが自分の目が信じられない様子で固まってしまうていた。

「……………さすがに御存じのようね…彼の表の顔くらいは…」

「…こいつはえらい大物が出て来たもんだね」

「知ってるも何も…なぜ『七武海』の海賊が!!？」

「あちし達は海賊の手下だったわけなの!!？」

「フオ……………」

「確かに…そう考え着かない絶好の隠れ蓑よね」

「かくれみのー…」

「あんたがおれ達の社長ボスなのか？」

半ば探るように、もう半分は疑うようにMr. 1が尋ねると、クロコダイルの目が細められる。

そしてー凄まじい殺気がその場にいた全員に襲いかかった。

「不服か？」

その瞬間、エージェンツたちにぞくりと寒気が走る。

何人もの猛者を相手取り、そしてその首を獲ってきたベテランの強者たちが、向けら

れる気迫に息を呑む。

格が違うと、一瞬で理解した。

「…不服とは言わないけど、『七武海』といえば政府に略奪を許された海賊。なぜ、わざわざこんな会社を…」

「おれが欲しいのは金じゃない、地位でもない、『軍事力』」

「軍事力…?!」

「順序良く話していこう…このおれの真の目的、そしてバロックワークス社最終作戦の全貌」

不敵な、そして何より不気味な笑みを浮かべ、クロコダイルは語り始める。国どころではない、世界をも揺るがす壮大な野望の全てを。

全てを聞き届けたエージェントたちの表情に浮かぶのは、恐怖ではなく高揚だった。

「そんなものが本当にこの国に存在するのう!!? それを国ごと奪っちゃおうって訳なのかい?!」

「——つまり、おれ達の今回の任務は…その壮大な計画の総仕上げというわけか」

「そういう事だ。バロックワークス社創設以来、お前らが遂行してきた全ての任務はこの作戦に通じていた。そして、それらがお前達に託す最後の指令状」

ミス・オールサンデーの手によって、エージェント全員に通ずつ司令書が配られて

いく。

それぞれが封を切り、内容を頭に刻み込み、そして笑みを浮かべる。これまでの仕事の集大成、興奮しないわけがなかった。

「いよいよ、アラバスタ王国には消えてもらう時がきた…」

ボウ、とテーブルの上の燭台で蝋燭の火が揺れる。

エージェントたちが受け取った司令書が火に吞まれ、一切の痕跡を消去されていった。

「それぞれの任務を貴様等が全うした時、このアラバスタ王国は自ら大破し…!! 行き場を失った反乱軍と国民達はあえなく我がバロックワークス社の手中に落ちる…!! !!

一夜にしてこの国は、まさに…!! !! 我らの『理想郷』^{ユートピア}となるわけだ!!!」

自身も高揚を覚えているらしく、クロコダイルは満面の笑みを浮かべて目をギラつかせる。

そこにいるのはただの海賊ではない。野心も実力も上に座す、とてつもない悪党だ。

「これがバロックワークス社最後にして最大の『ユートピア作戦』。失敗は許されん。決行は明朝7時!!!」

「了解」

そしてここには、同じ理想を掲げる悪党たちが8人同席している。

あまりにも危険で、恐ろしい雰囲気漂っていた。

「武運を祈る」

「あ!!? 何やってんだ、お前」

最初にそれに気づいたのは誰だったか。

最初は意気揚々と砂漠を歩いていたらルフィが、突然ぶすつとした様子で立ち止まってしまったのだ。

不意のことで、ビビは訝しげにルフィを見つめた。

「……? どうしたの……? ルフィさん」

「やめた」

「は!!?!」

予想外の一言に、ルフィ以外の全員が絶句し目を瞠る。

いきなり想像だにしないことを考えるのはいつものことだが、今回に限ってはそれどころではない。

「やめた」 って……!!? ルフィさんどういうこと!!?」

「ちよつとルフィ、こんなところでお前の気まぐれにつき合ってるヒマはないんだよ!!
ホラ立って!!」

エレノアが先へ促そうとするものの、ルフィはその場で腕を組んだまま動かない。それどころか、ビビに対してなぜか咎めるような視線を向け、眉間にしわを寄せた。

「戻るんだろ」

「そうだよ。昨日来た道に戻ってカトレアって町で、反乱軍を止めなきやお前、この国の100万の人間が激突してえれエ事態になっちまうんだぞ!!! ビビちゃんのためだ!!」

「さア行くぞ!!!」

「つまんねエ」

「何を!!? コラア!!!」

言うことを聞かないルフィにサンジがキレるが、それでもルフィは動かない。

ルフィはビビを見つめたまま、厳しい表情で口を開いた。

「……………ビビ」

「なに?」

「おれはクロコダイルをぶっ飛ばしてエんだよ!!!」

アラバスタ王国に着いたときから口に行っている言葉に、ビビはドキッと動悸が激しくなるのを感じる。

見ないようにしていた真実を、突きつけられたように。

「反乱してる奴らを止めたらよ……クロコダイルは止まるのか？ その町へついてもおれ達は何もすることはねエ。海賊だからな、いねエ方がいくらいだ」

「……………それは……………」

「お前はこの戦いで、誰も死ななきやいって思ってるんだ!! 国のやつらも、おれ達もみんな!!」

凶星だったのか、ビビの表情に悲痛げな顔色が混じる。視線がそれてしまうところが、嘘が苦手な彼女らしい。

仲間たちもルファイが言いたいことがわかったのか、黙って船長の話を聞き続けた。

「『七武海』の海賊が相手で、もう100万人も暴れ出してる戦いなのに、みんな無事ならいいと思ってるんだ!!! 甘いんじやねエのか」

「ちよつとルファイ!! あんた少しはビビの気持ちも……」

「ナミさん!! 待った……」

「だけど……っ!!」

正論とはいえ、ズケズケと遠慮なしに告げるルファイに、たまらずナミが口を挟むが、意外にもそれをサンジが止める。

彼自身言わなければならぬと思ひ、言えずにいたことを、ルファイが代表して口にしてるからだ。

「何がいけないの!! 人が死ななきやいいと思つて何が悪いの!!!」

「人は死ぬぞ」

その言葉に、ビビの頭にカツと血がのぼる。

決して言われたくない、考えたくなかつた真実を突きつけられ、ビビは激情のままにルフィに殴りかかつていた。

「やめてよ!!! そんな言い方するの!!! 今度言つたら許さないわ!!! 今それを止めようとしてるんじゃない!!!」

息を呑む仲間たちをよそに、ビビは溜め込んできた悲痛な思いを口にする。

ずつと言えずにいて、溢れ出すのをこらえていた感情の全てが、堰を切つたようようにぶちまけていた。

「反乱軍も!! 国王軍も!!! この国の人達は誰も悪くないのに!!! なぜ誰かが死ななきやならないの!! 悪いのは全部クロコダイルなのに!!!」

「じゃあ何でお前は命賭けてんだ!!!」

今度はルフィが、我慢の限界だと言わんばかりにビビを殴りつける。

目を剥いたみんなが制止しかけるが、すかさず殴り返したビビの剣幕に押され、誰も手が出せずにいた。

「この国を見りや一番にやんなきやいけねエことぐらい、おれだつてわかるぞ!!! お前

なんかの命一個で賭け足りるもんか!!!」

「じゃあ一体、何を賭けたらいいのよ!!! 他に賭けられるものなんて私、何も!!!」
必死にルフィを殴るビビの目に、涙がたまっていく。

それをこぼれないように耐えるビビに、ルフィは凄まじい形相で吠えた。

「おれ達の命くらい一緒に賭けてみる!!! 仲間だろうが!!!」

その瞬間、ビビは息を呑み、涙が一気に溢れ出す。

考えもしなかった、乱暴ながら優しい言葉に、ビビは声も発することもできず、その場に泣き崩れてしまった。

「…なんだ、出るんじゃないか。涙。本当はお前が一番くやくして、あいつをブツ飛ばしてエんだ!!!」

散々殴られ、鼻血を垂らすルフィは、ポンポンとビビの肩を叩いて彼女を慰める。

感情のままに泣き続けるビビの姿を見て、エレノアたちの表情にも活力が漲っている。大切な仲間の涙に、戦意が滾っていた。

「教えろよ、クロコダイルの居場所!!!」

遙か遠い砂漠の先を睨み、ルフィは帽子に手をかける。

その目に、揺るがぬ闘志を燃やして。

場所は変わって、『カトレア』。

現在は反乱軍の拠点となっているその町を、ある少年が訪ねていた。その少年が向かい合っているのは、一人の青年だった。

「たのむよ!!!」

「ダメだ」

「何でだよ、おれだつて反乱軍に入る権利はあるはずだぞ!!! 国王が憎いんだ!!! 一緒に戦わせてくれよ!!!」

小さな体に、トンカチやらノコギリやらありつただけの「武器」を担ぐ少年カツパに、青年・コーザはにべもなく告げる。

カツパは納得できず、すぐさま厳しい表情のコーザに噛み付いた。

「おれも戦いたいんだよ!! ケガだつて死ぬことだつて恐くねエ!!!」

「じゃあ…帰れ…意見の不一致だ。おれ達は、みんな恐いし…戦いたくねエんだ」

思わぬ言葉に、カツパは一瞬言葉を見失つて目を瞠る。しかしすぐに我に返り、不満の丈を思い切りぶつけ始めた。

「…じゃあ何で戦うんだよ!!! おかしいじゃねエか!!!」

「戦いが始まつちまつたからさ…国が、それを望んだんだ…戦いたいんじゃない、戦わなきゃならなかった。理解できようができませんがお前には関係ない…帰れ…!!!」

コーザの隣には、肩と右腕を失った男がいる。戦の最中、コーザをかばって負った重傷であり、決して消えぬ痛みである。

少年の想像をはるかに超える痛みと悲しみが、この先の戦場にはあるのだ。

「帰れと言ってるんだ!!! ここは子供ガキの来る場所じゃない!!!」

大人でさえ臆するほどの剣幕で、コーザは少年に怒鳴りつける。

カッパは怯え、いまにも泣き出しそうな様子で踵を返し、立ち去るのだった。

「……どうした、コーザ。子供相手に怒鳴りちらすとはお前らしくもない……」

拠点のテントの中で、額に×字型の傷がある、褐色の肌でサングラスをかけた男が呆れた様子で尋ねる。

コーザの態度が、彼なりの優しさだと理解しながら、それでも厳しいと思わせる態度を訝しく思ったらしい。

「……昔のおれを見てみたいで……腹が立った……!!! ……おれは何も変わっちゃいないな……」

コーザも自分自身を嫌悪し、険しい表情で俯いている。

何年も続く反乱で、何百何千もの同志が斃れているのに、いまだに決着のつかないことが不甲斐なくて仕方がないと言うように。

褐色の男は、そんなコーザに物憂げな目を向けていた。

「すまねエな……旦那。あんたを巻き込んだら……」

「……この国の者達には、恩義がある」

そう呟いた褐色の男が、サングラスを外して顔を上げる。

赤い瞳が目立つその男は、重苦しい表情で眉間にしわを寄せ、ゴキゴキと手の骨を鳴

らしてはつきりと告げた。

「ゆえに、これ以上この国が醜く腐ってしまう前に……神の御許へ導くまで」

その男の目には、そう簡単には拭い去れない憎悪がこびりついて見えた。

第93話 “虎穴へ入る”

長い長い、砂漠の旅。

国を救うため、大きく進路を変えたその道は、ついに終わりを迎えようとしていた。

「見えた!! ——あれが『レインベース』よ!!」

「着いたのか~~~~~~~~っ!!」

オアシスを中心に発展している町を見つけ、ルフィが歓喜の声を上げる。

どんなにのどが渴いても、腹が減っても耐え続けた彼は、ついにその努力が報われたことでのため込んだ涙を解放した。

「よ——し!! クロコダイルを!! ぶっ飛ばすぞ!!」

「みドウ——（水）!!!」

「うるせえなア、お前ら……」

泣きながら喜ぶ二人に、ゾロやエレノアは深いため息をつく。

だがその目からは、いまだに鋭い光が消えてはいない。

「ところでよ、バロックワークスはおれ達がこの国にいることに気づいてんのか」

「……………おそらくね」

コクリと頷き、ビビはレインベースを見やる。

向かう先にあるのは、真の敵が我が物顔で経営するカジノがある敵の懐だ。

「Mr. 2にも遭ってしまつたし：Mr. 3がこの国に入っているのだから：まず知られていると考へて間違いないと思うわ」

「それがどうしたんだ」

「顔がわれてるんだ、やたらな行動はとれねエつてことさ」

「何でだよっ!!」

「『レインベース』には、どこにバロツクワークスの社員が潜んでるかわかんねエんだ」
「私達が先に見つかつたら、クロコダイルにはいくらでも手の打ちようがあるでしょ？」
「暗殺は奴等の得意分野だからな…!!」

誰にでも化けられる男のほか、強さも能力も未知数のエージェントたちが潜んでい
る。警戒しすぎるに越したことはないはずだつた。

「よ——し!! クロコダイルをぶつ飛ばすぞ——っ!!!」

「聞いてたのかよてめエ!!!」

ずっと同じことしか吠えていないルファイに、いい加減頭に来たウソツプがツツコミを
入れる。

しかし他でもないビビが、ルファイの決意に対して同意を示した。

「…でもね、ウソツプさん。私も…やつぱりルフィさんに賛成っ!! 今ほとにかく全てにおいて時間がないの。考えてるヒマなんてないわ」

「……『虎穴に入らずんば虎子を得ず』…か」

小耳にはさんだ、大事を成すためには自ら危険を冒す必要があるという意味のことわざを呟き、眉間にしわを寄せる。

やがてその顔に、不敵な笑みが浮かべられた。

「どちらにせよ後で暴れるんだ…!! せいぜい派手にやろうじゃないの」
??

——では我輩は一度ここから離れる。

部下や同僚たちにこの事実を伝えねばならぬからな!!

ビビ王女をどうかよろしく頼むぞ!!

麦わらの一味とエルリック兄弟!!

町に着くと、砂漠を同行していたアームストロングは、キリツと姿勢を正してルフィたちに告げる。

途中にさしたる危険はなかったものの、強者が一人加わっていたという安心感はかなりのものだった。

——こっちは任して、さっさと行ってくれ少佐。

——じゃあな、ヒゲのおっさん!!

——短い間であったが…楽しい時間であった!!!

寂しくなるが無事を祈っておるぞ——っ!!!

——ギヤーツ!!!

エドワードが熱い抱擁の犠牲となっていたが、もはや慣れたもので誰も気にしない。恨みがましい視線を受けながら、一行は豪傑といったん別れた。

「……大丈夫かな、少佐のやつ」

「まア…なんとかするしかないでしょ」

何よりもこちらの動きを悟られないようにすることが重要だが、少佐の見た目では非常に難しく思える。

しかしそうは言っても、唯一の海軍側の味方。一人でも頼れるものがあることを喜ぶべきだった。

「あいつらにまかせて大丈夫かな」

「お使いくらいできるでしょ。平気よ」

「そうかね…どうせ、またトラブル背負って帰って来んじゃねエのか?」

「…準備運動でもしておきましょうか」

「かるう〜くな!」

疲労を回復するため、一味はルフィとウソップに水の確保を頼んで小休止を取っていた。

が、嫌な予感はあるものなのか、騒がしい声が聞こえて来たと思えば、ルフィたちが猛スピードで向かってくる姿が見えた。いつか見たような光景である。

「あア…案の定…」

「ゲツ…あいつら海軍に追われてるぞ!!」

「ウソでしよう!!? ——で何でこっちへ逃げてくんよ!!」

「ねえっ!! トニー君がまだ来てないわ!!」

「放つとけ、てめエで何とかするさ!!」

小用をたしに行ったのか、姿の見えないチョッパーが気がかりだが、今はそれどころではない。

ここで海兵に捕まるわけにはいかず、一味は休憩も半ばに走り出す羽目になっていた。

「おい、みんな!!! 海軍が来たぞオ!!!」

「お前らが連れて来てんだよっ!!!」

大きな水樽を担いで走るルフィだが、災難の元凶たる彼が言うのでは苛立ちが募ってしまう。

一気に騒がしくなってしまう街中を走り、エドワードが険しい顔で舌打ちした。

「マズインじゃねエか?! 町の中を走るとバロックワークスに見つかっちゃう」

「もう手遅れだと思うぜ」

そう呟くゾロの視線の先には、道の端に腰かける人相の悪い男たち。

その手にあるのは、誰かの人相書きか顔写真か、とにかくこちら側に不都合なものはずである。

「じゃ、行こう!!」

「え……」

「クロコダイルのそこだ!!! ビビ!!!」

ルフィの宣言にビビは一瞬言葉を失くすも、こくと頷いて前を向く。

決意を秘めたビビの目に映るのは、ワニのオブジェが屋根に飾られた、オアシスの中心に座している建物だった。

「あそこに……!! ワニの屋根の建物が見えるでしょ!! あれがクロコダイルの経営するカジノ、レインディナーズ!!」

行くべき目的地を確認した一味は、徐々に周囲に集まり始める海兵たちに顔をしかめる。

考えなしに走っているのは、間違いなく包囲されかねない速さだ。

「散った方がよさそうだぜ」

「そうだな」

「よしっ!! じゃあ後で…!! “ワニの家”で会おうっ!!」

ルフィの号令に従い、一味は全員バラバラに方向を変える。海兵たちの数を何か所にも分散させつつ、向かう先を悟らせないためだ。

エレノアはかなりの人数が自分に向かっていることを察しながら、近くにいるエドワードとアルフォンスに目を向けた。

「エドくん、アルくん!! そっちは頼んだよ!!」

「おう!!」

「姉弟子も気をつけて!!!」

合流を約束し、三人の錬金術師は全力で逃走を図る。

二人に関しては別に見つかっても問題はないが、ここで目立つわけにもいかなかった。た。

そうして一味は、幾度もピンチを乗り越え、カジノの中へと足を踏み入れていた。

「クロコダイル——っ!!! 出て来い——っ!!!」

一番に室内に突入したルフィが、カジノの中に向けて大声で叫ぶ。

だが中にいるのはまっとうな客たちだけで、迷惑そうに軽く目を向けるだけで、何の反応もなかった。

「そんなんで出てくるわけないでしょ!! バカねっ!!」

「相手は国の英雄だぞ!! 店の客まで敵に回す気かよ!!」

「よし!! じゃ……どうする!! おい、ちよつと待て!! ビビがいなきや誰がクロコダ

イルだかわかんねエぞ」

「そういえばビビはどこにいるの?!」

「「ビビ——っ!!! クロコダイル——っ!!!」」

「オイ」

結局ルフィと同じことをしているナミとウソップに、ゾロが呆れた視線を向ける。

そこでエドワードとアルフォンスが懐に手を入れ、得意げな顔で一枚の手配書を取り出して見せた。

「こんなこともあるか……!! 姉弟子がクロコダイルの昔の手配書をよこしてくれた」

「おーっ!! でかした!!」

「ホントにできる女だな、あいつ……」

簡単というか呆れた声を上げるゾロだが、当のエレノアやサンジ、ビビとチョッパー

の姿が見えないことに思わず顔をしかめる。

だが、この場にいない四人を待っている暇は、残されていないようだ。

「追いつめたぞ麦わら!!!」

「困りますお客様、当店政府関係者は立入禁止に……」

「湖に囲まれたこの店じゃあもう逃げ場はねエ!!」

「ゲ、ケムリンだ——っ!!!」

カジノの従業員を押しわけ、突っ込んでくるスモーカー大佐を見つけ、ウソップが目
を剥く。

途端に悲鳴がこだまする惨状となったカジノの奥で、従業員が一人の美女、ミス・オ
ルサンデーのもとに駆け寄った。

「大変です、マネージャー支配人!! 何者かが……」

「VIPルームへお迎えしなさい」

「え……」

「クロコダイルオーナー経営者の命令よ」

ぽかんと呆けた顔になる従業員に、ミス・オールサンデーは蠱惑的な笑みを浮かべて
みせた。

「おい、あれ見ろ!!」

スモーカーから逃れようと、カジノの中を駆けるルフィたちは、カジノの奥で何やら動きがあることに気づく。

従業員たちが列になり、一つの通路にルフィたちを手招きしていたのだ。

「どうぞこちらへ!! VIPルームでございます!!」

「〃かかつて来い〃 つてことじゃないかしら?」

「話のわかる野郎じゃねエか!!」

「うっし!!! 行くぞーっ!!!」

あからさまな挑発を真に受け、ルフィがさらなる闘志を燃やして、迷わずVIPルームに向かって走る。

スモーカーはそれを見て、ルフィに対する敵意をさらに強めた。

「特別待遇だど!! ……あいつらクロコダイルとどんなつながりが……!!! 次第によつちやまとめて死刑台送りだ……!!!」

まったく異なる理由での闘志を燃やし、海賊と海兵は黒幕の懐へと突入していった。

そうして一行は、全員仲良く檻の中にお邪魔することとなった。

鋼鉄の格子に囲まれた中で、ルフィとウソップは間抜けな顔を晒し、無言で立ち尽くしていた。

「こうみょうなわなだ」

「ああ、しようがなかった」

「敵の思うツボじゃない!! 避けられた罠よ!! バツツカじゃないの!!? あんた達!!!」

大真面目にアホみたいない言訳を口にする二人に、ナミがそれ見たことかと泣き叫ぶ。

止められなかった自分自身が、恐ろしく情けなくて仕方がないようだ。エドワードもアルフォンソも、その場で膝をついて項垂れるほどに。

「それより、おれさつきから力が抜けて…」

「何だ、ハラでも減ったのか?」

檻の格子を掴んでいたルフィが、いつもの覇気を失くして眉尻を下げる。

燃料切れかとあきれた視線を向けるウソップだが、どうやらそうではないようだと言し気に首を傾げる。

その時、黙り込んでいたスモーカーが立ち上がり、突然ルフィに足払いをかけて十手をのどに食い込ませた。

「ぐわっ!!!」

「ギャ——!! ルフィ!!! て……てててめエ!! やるならやるぞ煙野郎っ!!!」

「スモーカー大佐……!! 今はそんな場合じゃ……!!」

いきなりの暴挙に、というか海兵としては当然の行動にウソップが身構え、アルフォンスが止めようとする。

だがすぐに、今の彼からはさほどの敵意は感じられないことに気づいた。

「……なんだ……？ 力が入らねエ……！！ ……水に落ちた時みてエに……」

「……ああ、だろうな……」

「な……なんだてめエ、ルフィに何をした!!?」

急に弱ってへロへロになつてゐるルフィに、ウソップがスモーカーに向かって吠える。

スモーカーは顔色一つ変えず、ルフィとルフィを押さえつける十手に目を向けた。

「この『十手』の先端には『海楼石』って代物が仕込んである。とある海域にのみ存在する不思議な石だそうだ……おれより詳しい奴はそこにいるだろ」

「……………ああ」

スモーカーに睨まれ、エドワードが居心地悪そうに頷く。

彼がここにいることに、すぐにでも詰問が始まりそうな気迫を感じたが、スモーカーもさすがに状況を読んだようで何も聞かない。

「海軍本部の監獄の柵の全てに使われてるコイツは、『悪魔の実』の能力を封じ込めちゃう力を持つてる……!! まだまだ謎が多い鉱物だが、この石が海と同じエネルギーを発

してることはわかってる。ようは『海』が固形化したもんだ…」

「それでルフィが弱っちまうのか……………!!」

「まだ成分の解明も終わってねエもんで、おれ達にも分解はできねエ…!!」

解説を終えたエドワードが、悔し気に檻を睨みつけて歯を食いしぼる。

まさに、悪魔の实の能力者にとっての天敵、そして錬金術師にとっても難敵である物質であるということだ。

「…じゃあこの柵も同じもので……………」

「——でなきやおれは、とつくにここを出てる。お前らを全員、二度と海へ出られねエ体にしてからな…」

「ギャ~~~~~待て待て、おい、こんな状況で戦ってどうすんだ!!!」

「スモーカー大佐…!!」

すぐに復活するスモーカーの敵意に、ゾロが反応して刀に手をかける。

その時、緊張が走る檻の中に不意に、味めて聞く声が届いた。

「その通りさ、やめたまえ」

聞こえてきたその声に、ルフィたちは一斉に振り向く。

豪華な装いに身を包んだその男は、優雅に椅子に座って小馬鹿にするような笑みを向けた。

「共に死にゆく者同士、仲良くやればいいじゃねエか……!!!」

「クロコダイル……!!!」

「オーオー……噂通りの野犬だな、スモーカー君。おれを最初から味方と思つてくれてねエ様だ。だがそう……そりゃ正解だ」

凄まじい殺気を放つスモーカーに、クロコダイルはむしろ楽しそうに語る。

どれだけ寒気を催す殺気をぶつけられようと、檻に囚われた狂犬は手も足も出せない。その構図が、たまらなく愉しいようだ。

「てめエにや『事故死』してもらふことにしよう。『麦わら』つて小物相手によく戦つたと政府には報告しておくさ、ハハツ。何しにこの国へやつてきたのか知らねエが、どうせ独断だろ。政府はおれを信じてるからな、ここへ海兵をよこすハズがねエ……」

「あいつが『七武海』の一人か……」

「お前が、クロコダイルか……!!!」

初めてその姿を目にした麦わらの一味が、一斉に怒りの感情を抱く。

ビビを、大切な仲間を悲しませ続けた元凶が今、目の前にいるのだと実感して。

「おい!!! お前エ!!! 勝負しホ……」

「だからその柵に触るなつて!!!」

「『麦わら』のルフィ。よく、ここまで辿りついたな……まさか会えるとは思つてもみな

かった。ちゃんと消してやるからもう少し待て……」

また檻を掴んでへろへろになってしまふルフィに、クロコダイルはにやにやと下卑た笑みを浮かべる。

その顔はまさに、悪党の親玉と評するにふさわしい醜悪なものだった。

「まだ主賓が到着してねエ。今おれのパートナーに迎えにいかせたところだ」

第94話 “悪意が蠢く”

「や〜れやれ…すっかり遅刻しちやっただじゃないの」

『レインベース』の裏通り。

しんと静かなその場所で、エレノアが忌々しげにため息をつく。

「私一人に何人かかかってくるつもりなのよ。こんなに兵力無駄にしちやってまア……………別に全然余裕だけど」

彼女が腰掛けているのは、柄の悪い人相で凶器を持った男たち。バロツクワークスに属する賞金稼ぎたちだ。

全員まとめてボコボコにされているのに対し、エレノアに至ってはかすり傷ひとつない。

「さてと…いい加減いかなきゃみんな待つてるかも……………」

待ち合わせ場所である『レインデイナーズ』から少し離れてしまったことを悔やみ、エレノアが腰をあげる。

しかしその直後、表情を変えたエレノアは勢いよく飛びのいていた。

黒い刃が、壁を斬り裂いて襲いかかってきたからだ。

「あら……一瞬で片付けて上げようと思ったのに、思ったより勘がいいのね」

ガラガラと家屋を崩し、賞金稼ぎたちを吹き飛ばした二人組が、瓦礫を踏み越えて姿を現わす。

しかしエレノアは、彼女たちの姿を目にする前から、表情を引きつらせていた。

「でも本当にかわいそうな子……苦痛がその分長引くことになっちゃったわね……!!」

「……………最つ悪だ」

蠱惑的な笑みを浮かべ、長く伸びた爪を見せつける眼帯を巻いた美女を凝視し、エレノアは頬をひくつかせる。

一目で、油断ならない敵と本能が告げていた。

「冥途の土産に名乗ってあげる。バロックワークス・オフィサーエージェント、ミス・リープデイ」

「みすたーはーふわん」

「悪く思わないでほしいんだけど、社長の命令だから仕方がないのよ………あなたには最初に死んでもらうわ」

不敵に笑う美女、ミス・リープデイとにんまりと笑う丸い男、Mr. O. 5。

組織の中でも凶悪と噂される二人組が、エレノア一人に向けられていた。

「せめて苦しめないように殺してあげるわ」

「そいつはどうも……………」

いつそ慈悲深い言葉に、エレノアは笑みを浮かべる。

だがそれは、ヤケになったがゆえにこぼれたものではない。

「愁傷さま」

自分の狙いが当たったことに対する、安堵の笑みだった。

「サンジのマネ。『肉くつたのお前かー!!』」

檻の中に囚われたままのルフィが、一発芸を披露してウソツプを爆笑させる。

そんな緊張感のない二人に、ナミの鉄拳が容赦なく襲いかかった。

「まじめに捕まれ!! こんなに深刻な事態になんであんた達は…!!」

「だって出られねえんだからヒマじゃねエかよっ」

「出られないから深刻なんじゃないのよ!!! このまま殺されちやかもしれないのにつ!!!

——で、あんたは何寝てんの!!?」

「お、朝か」

「ずっと朝よ!!」

さつきからぐーぐーといびきをかいていたゾロが、眠気まなこをこすつてようやく起き上がる。

ツツコミに忙しいナミに、檻の外のクロコダイルが小馬鹿にするように呟いた。

「……………威勢のいいお嬢ちゃんだな…」

「何よ…!! そうやって今のうちに余裕かましてるといいわ…!! こいつらがこの檻から出たらあんたなんか雲の上まで吹き飛ばされておしまいよ!! そうでしょ!! ル
ファイ!!!」

「あたりめエだこのオ!!!」

「……………ずいぶんと信頼のある船長の様だな、麦わらのルファイ…」

拳を構えて、微塵も臆した様子を見せないルファイに、クロコダイルは笑みを見せる。
完全に見下した、嘲笑の目を向けて。

「……………信頼…クハハ、この世で最も必要な物だ」

「なにあいつつ!! 人をバカにして!!」

「やや…やめとけて、いまにも怒るぞあいつも」

自分たちを一切問題と思っていない余裕の態度に、ナミが目を剥いて肩を震わせる。
ウソツプが止めても聞きそうになかった。

場の雰囲気が悪悪になってきた時、地下の部屋に新たな客人が訪れた。

「クロコダイル!!!」

険しい形相で、肩を上下させるビビが、階段の上からクロコダイルを睨みつける。

それに対するクロコダイルの表情は、醜悪な愉悦だった。

「…やア…ようこそ、アラバスタの王女ビビ。いや…ミス・ウエンズデー。よくぞ我が社の刺客をかくぐつてここまで来たな」

「来るわよ…!!! どこまでだつて……………!!! あなたに死んでほしいから……………!! M
r. 0!!!」

「死ぬのは、このくだらねエ王国さ…ミス・ウエンズデー」

暗器を構えたビビが、憎い男に向かつて走り出す。

策も何もない。頭に血が上った王女はただ、国の敵に一矢報いることしか考えられていなかった。

「待てビビ!!! ここを開けろ!! おれ達を出せ!!!」

「ビビ!!!」

「王女さん!!!」

無謀な挑戦を止めようと叫ぶ一味だが、ビビがその足を止めることはない。憎悪に燃える目で仇敵を見据え、暗器を思い切り放った。

狙いは外れず、クロコダイルの首に食らいつき、見事にその頭部を斬り裂いてみせた。

「うおおっ!!!」

「ムダだ…」

歓喜の声を上げるルフイたちだが、エドワードやアルフォンスが返すのは悔しげなうめき声のみ。

次の瞬間には、急所を斬られたクロコダイルの身体が、サラサラと砂つぶに変わり、ビビの真後ろで復活していたのだから。

「気が済んだか、ミス・ウエンズデー」

目を見張るビビの首に片腕のフックをかけ、不敵な笑みを見せる。

一気に血の気が引いたビビは、悲痛な表情で言葉をなくした。

「この国に住む者なら……知ってるハズだぞ。このおれの『スナスナの実』の能力くらいな……ミイラになるか？」

「!! ……す……砂人間……!!!!」

「自然系か……!!」

「コラお前エ!!! ビビから離れろぶつ飛ばすぞ!!!」

一味のある者は絶句し、ある者は激昂し、ある者は歯を食いしばる。

圧倒的な実力の差を見せつけられたビビは、なすすべもなく並べられた椅子の一つに座らされた。

「座りたまえ………そう睨むな。ちょうど頃合………パーティーの始まる時間だ。違うか？ ミス・オールサンデー……」

「ええ……7時を回ったわ」

クロコダイルの確認に、ミス・オールサンデーはフツと微笑んで頷く。入念な準備が進められてきた計画が、ついに実行される。

悪夢の時間が、始まるのだ。

「なぜそんなことを……!! ……国王様……」

『ナノハナ』の港町は今、騒然としていた。

突如町を訪れた一団、その最前面に立つ男性の言葉に、理解が追いついていなかったからだ。

「正式に謝罪しているのだ!!! この国の雨を奪ったのは私だ!!!」

「コブラ様……何をそんな冗談……!!!」

「………国王様……!!!」

「よって、あの忌々しいダンスパウダーの事件を忘れるために、この『ナノハナ』の町を消し去る」

信じられない言葉が連続して放たれ、住人たちは皆呆然と立ち尽くす。

しかしアラバスタ王国国王コブラの表情に、冗談やからかいの意図は全く見受けられなかった。

「不正な町だ、破壊して焼き払え!!!」

「はっ!!!」

王の命令で、付き従っていた兵士たちが動き出す。

言葉をなくし立ち尽くしたままの住民たちを追い払い、あたりの建物を破壊し始めたからだ。

途端に街には悲鳴がこだまし、騒がしきは頂点に達した。

「おい国王!!! お前が雨を奪うから!!! 町は、みんな枯れてくんだ!!!」

それを止めようと立ちふさがったのは、以前反乱軍に入りたいと抗議した少年カツパだった。

コブラは彼を無表情で見下ろし、あろうことか無言のまま蹴り飛ばした。

「みんなの敵をおれが取ってやる!!!」

「キミ! だめよやめなさい!!!」

地面の倒れながらも、立ち向かおうともがくカツパを町の女性が慌てて止める。

そこへついに、王を最も憎んでいると言っても過言ではない男が、馬を操って駆けつけてきた。

「コーザ!!!」

「コーザさん!!!」

国を憂うもう一人の英雄の登場に、住民たちの表情が少し晴れる。

コーザは町を襲う光景に目を見張り、ギリギリと歯を食いしばりながらコブラを睨みつけた。

「何のマネだ…貴様…」

「謝りに来たのだ」

「フザけるな、黙れ!!! …なんて侮辱だ…!!!」

「ダンスパウダーでこの国を枯れさせているのは、私だ」

「黙れと言ってるんだ!!! くそつたれ!!!」

謝罪と言いながら、全く悪びれる様子のない王の姿に、コーザの怒りが爆発する。

誰よりも言ってはならない男が、何よりも言ってはならない言葉を吐いているのだから、当然の感情であった。

「枯れた町に倒れた奴らが、どんな気持ちで死んだかを知ってるのか!!! お前に恨みや

怒りをもってたわけじゃない…!!! どいつもこいつも最後までお前を信じて死んだんだ!!!」

コーザの剣幕にも、コーザを追って駆け込んでくる反乱軍を見ても、コブラは表情一つ変えない。

それがさらに、コーザの激情をさらに煽り続けていた。

「ウソでもせめて『無実』だとお前が言わなきゃ、彼らの気持ちはどうなるんだ!!!」

コーザがそう、本音を叫んだ直後だった。

コブラの兵士たちが突然、コーザに銃口を突きつけて発砲したのだ。

「キャ——!!!」

「コーザ!!!」

目の前で起きた残酷な光景に、逃げ回っていた住民たちが悲鳴をあげて目を覆う。

駆けつけてきた反乱軍も、リーダーを襲った悪意に言葉をなくしてしていた。

「コーザさん!!!」

「リーダー!!!」

「コブラア~~~~~!!!」

額に傷のある男も、同志を無慈悲に傷つけた男に対し、まるで鬼のような形相で吠える。

怒号と悲鳴が響き渡る中で、不意にコブラはにんまりと、別人のような満足げな笑みを浮かべた。

「そろそろ時々間だ々々わねエいつ!!!」

口調も、表情ももうコブラではなかった。

コブラがそれをみせた時には、住民は逃げ、反乱軍はコーザのもとに駆け寄り、注意

をそらしてしまっていた。

「コーザ!!　しつかりしろ!!!」

「国が…本当はみんなが…その答えを知りたがったから…!!!　おれ達は戦ってたんじゃないのか!!!　少なくとも、おれはそうさ」

安否を確認しようとして声をかける仲間をよそに、コーザは悔しげに顔をしかめてうめき声をこぼす。

額に傷のある男が、コブラに凄まじい殺気に向けて襲いかかろうとした時だった。

「巨大船が港につつ込むぞ——っ!!!」

港に向かって、あまりに大きすぎる船が迫っていた。

不自然にボロボロの状態のそれは止まる気配を見せず、火の手が上がる街に倒れこんできた。

「何だあの船はア!!!」

「うわああ!!!」

「倒れるぞ!!!」

「港から離れろ!!!」

さくらなる悲鳴が起こる『ナノハナ』の町。

逃げ惑う人々の間を、一組の男女が悠々と通り抜けていった。

「最終作戦にしては……骨のない仕事だったわ」

「今までに一度でも骨のある仕事があったか?」

つまらなそうに呷くミス・ダブルフィンガーと、あきれた様子のMr. 1。

二人から少し離れた場所では、やかましく笑うコブラいや、コブラになりすましていたMr. 2・ボン・クレールが撤収を始めていた。

「が——つはつはつはつはつはつはつは!!!! ど——うだったかしら!! あちしの王^{キング}つぷりは!!!」

「最高——っス♪ Mr. 2・ボン・クレール様!!!」

元の姿に戻ったMr. 2に合わせて、兵士を装ったバロックワークスの社員たちが逃げていく。

全ては偽り、計画された演技だったのだ。

彼らの誤算はただ一つ、それを目撃してしまった少年がいたことだ。

「……あの国王は……!!!! ニセ者だったんだ!!! ……!! 大変だ……!! みんなだまされてるんだ……!! 早く伝えなきゃ」

先ほどコブラに吠えていたカツパが、真実に気づいて愕然となる。

どうにか我に返ったカツパは、すぐさま誰かに伝えねばと踵を返そうとする。

だが、それは叶わなかった。

「いけないボウヤね……………何を知ってしまったのかしら」

「…あのオカマ野郎、くだらねエミスしやがって…!!」

Mr. 1とミス・ダブルフィンガー、組織の中でも凶悪な二人が、少年に気づいてしまっていた。

「誰だ…」

「黙っててくれつつても…無駄だろうな…」

町はもはや地獄と化していた。

あちこちで火の手が上がり、悲鳴と怒号が混じり、傷ついた人が倒れていく。

その中には、カツパの姿もあった。

「おい、ボウズ!!! 大丈夫か!!!」

「非道い!!! まさかこれは…!!! 国王軍が…!!!」

血まみれで地に転がるカツパに気づき、反乱軍の青年たちが慌てて駆け寄る。

カツパは朦朧とする意識の中、真実を伝えようと必死になっていた。

「……………ちが……………!! ゲホ!!! ちが…」

「血…?! ああ、わかった!!! 血はすぐに止めてやる。あまり喋るな、すぐに医者に診せ

てやるから」

「なんて奴らだ!!! こんな子供を!!!」

だが、カツパの声は届かない。

違う、と口にしようとしても、それが言葉として形になってくれなかった。

傷を負ったコーザは、そんな少年の姿に眉間にしわを寄せた。

「コーザ!!!」

「…この国を…終わらせよう…!!!」

「信じた己が……バカだった…!!! もはや慈悲は………必要ない!!!」

戦いに、ためらいがあった。何かの間違いであることを心の何処かで信じて、出す必要のない犠牲が出てしまった。

思いを踏みにじられた彼らは、もはや止まらなかつた。

「全支部に連絡を……!!! ……これを最後の戦いにする…」

「戦うのかコーザさん!! でも武器が全然揃ってないんだ…!!!」

「待て…!!! ……港に突っ込んできた巨大船は『武器商船』だ。武器なら腐るほどある」

「………ほんとか」

「…まるで天の導きだな…」

人々を苦しめる運命を定めながら、救いの手を差し伸べるのか。

皮肉げに笑い、コーザは立ち上がると人々に見えるように壇上に立ち、片腕を掲げる。

「聞け反乱軍……!! 現アラバスタはもう死んだ!! これが最後の戦いだ……アルバーナを攻め落とすぞ……!!」

和解の時はもう来ない。その火蓋は、今まさに切って落とされた。

つもり続けた悲劇が今、憎しみの炎となって激しく燃え上がるうとしていた。

「アルバーナに総攻撃を仕掛ける!!!」

「チャカ様!!! どうか御判断を!!!」

「我々はあなたに従います!!!」

また王宮でも、大きな騒ぎが起こっていた。

突如行方知れずになったコブラが街に現れ、破壊活動を始めるという暴挙に出たというのだから。

報告を聞いた護衛部隊の一人、チャカは険しい表情で頭を抱える。

決してそのようなことをする人物などとは思わない。

しかし現にその目で見たとという者がここまで多く現れたのならば、その信頼は揺らいでしまった。

「かくなれば我らの本分を全うするまでだ!!!」

もはや真偽を確かめている時間はない。

王やもう一人の守護者がいない今、ここまでの大事を決断できるのは自分一人しかないのだ。

「私達はアラバスタ王国護衛隊!!! 国王不在にして滅びる国などあつてはならぬ!! 目に見える真実を守れ!!! この国を守るのだ!!!」

賽は投げられた。抗う他にすべはない。

積み重ねてきた誇りが、この窮地に立ち向かうことを選ばせた。

「反乱軍を迎え撃つ!!! 全面衝突だ!!!」

最大最悪の悲劇が、始まろうとしていた。

第95話 “手も足も出ない”

レインデイナーズの秘密の部屋に、クロコダイルの哄笑が響き渡る。

ビビたちに見えないその光景を教えてやったことが、愉しくて仕方がないように。

「始まつちまつたか」

「なんて作戦を…!!」

血も涙もない、人の道を外れた計画の全貌を聞き、両腕を縛られたビビが歯を食いしばる。

目の前にいるこの男が、もうビビには悪魔にしか思えなかった。

「どうだ、気に入ったかねミス・ウエンズデー。君も中ほどに参加していた作戦が今、花開いた…耳を澄ませばアラバスタの唸り声が聞こえてきそうだ!!!」

人と人が殺し合うのに必要なのは、まさしく『正義』。

己の想いこそが正しいと信じ、それをかなえるために他の全てを敵に回す。クロコダイルはそれを、見事に利用してみせたのだ。

「…そして心にみんな、こう思っているのさ。おれ達がアラバスタを守るんだ…!!!」

「やめて!!! なんて非道い事を…!!!」

「ハハハハ………!! 泣かせるじゃねエか……!! 国を想う気持ちで国を滅ぼすんだ……!!」

「……外道つて言葉はコイツにピッタリだな」

「……あの野郎オ……つ!! この檻さえなけりや……!!」

一発といわず、何十何百発でもぶん殴りたい衝動に駆られるルフィやエドワードだが、悲しいことに海楼石の檻はびくともしない。

クロコダイルは満足げに、計画が完遂されるその瞬間を待っていた。

「思えば……へ漕ぎ着けるまでに数々の苦勞をした……!!」

クロコダイルが笑みを浮かべ、重ねてきた仕事の積み重ねを思い出す。

社員集めに始まり、ダンスパウダー製造の為の『銀』を購入する資金集め。

滅びかけた町を煽る破壊工作。

社員を使った国王軍濫行の演技指導。

それらはすべて、同じ結果に向かっていった。王への信頼の崩壊へと。

「なぜ、おれがここまでしてこの国を手に入れたかわかるか、ミス・ウエンスデー」

「あんたの腐った頭の中なんてわかるもんか!!」

「……ハツ……口の悪い王女だな」

ビビの叫びも、クロコダイルは気にしない。

スモーカーやミス・オールサンデーが意味深な沈黙を貫く中、ビビが突如椅子を倒し、立ち上がった。

「オイオイ……どうした。何をやる気だミス・ウエンズデー」

「止めるのよ!!! まだ間に合う……!!! ここから東へまっすぐ『アルバーナ』へ向かえば……!! 反乱軍より先に早く『アルバーナ』へ回り込めれば……!! まだ反乱軍を止められる可能性はある!!!」

「……ホオ……奇遇だな。オレ達もちょうどこれから『アルバーナ』へ向かうところさ。てめエの親父に一つだけ質問をしにな……!!!」

クロコダイルを押しつけて進む決意を抱いたビビに、クロコダイルはニタリと口角を上げる。その顔に、ビビはハツと息を呑んだ。

「一体……これ以上父に何を……!!!」

「んん？ 親父と国民とどっちが大事なんだ、ミス・ウエンズデー」

通路をどうにか通り抜けようと、隙を窺うビビを嘲笑い、クロコダイルは懐から一本の鍵を取り出した。

「クク……!! 一緒に来たければ好きにすればいい……」

「鍵イ!!! この檻のだな!!! よこせこの野郎!!!」

一発で気づいたルフィが、檻の中から手を伸ばして吠える。

渡すはずもなかったが、クロコダイルは不意にそれを床に向かって落とす。するとその真下の床が開き、鍵はその穴に真つ逆さまに落ちていった。

「え…!!? 穴が!!!」

「お前の自由さ…ミス・ウエンズデー」

鍵が落ちたのは、秘密の部屋の真下にある大きな空間だった。

周囲には分厚いガラスが張られ、レインディナーズの周囲の泉の中が覗けるようになっていた。

さらにその空間の四方には、用途の不明な四つの通路があった。

「確かに『反乱軍』と『国王軍』の激突はまだ避けられる。奴らの殺し合いが始まるまであと『8時間』つてどこか…時間があるとは言えねエな…ここから『アルバーナ』へ急いでもそれ以上はかかる。反乱を止めたきや今すぐにここを出るべきだ、ミス・ウエンズデー。さもなくば…ハハ…!! 何十万人死ぬことか…!!」

クロコダイルの意図が見えず、困惑の表情を浮かべるビビ。

その時、彼女の耳が何かが水中から上がる水飛沫の音と、生物の唸り声を捉えた。

「無論、こいつらを助けてやるのもお前の自由、この檻を開けてやるといい。もつとも…ウツカリおれが鍵をこの床の下に落とすしちまったがな」

下卑た笑みを浮かべ、ビビを見下ろすクロコダイル。

その視線の先、真下の空間には、巨大な爬虫類の怪物がのそりとはい出てきていた。

「バナナワニか……!!」

「な……なんなの?! あのバカでかいワニ!!」

「……………ここは……………!! 水の中の部屋だったのか!!」

「変なバナナだ」

「ばかだな、よく見ろ。ありやワニからバナナが生えてんだろ。変なワニさ」

頭からバナナに似た突起を生やした、見た目通りのバナナワニ。

どしどしと巨体を思った以上の速さで動かしたそいつは、地面に落ちている鍵に気づくと、啜えてそのまま飲みこんでしまった。

「おい、どうしたビビ!!」

「バナナワニが檻の鍵を……………飲みこんじゃった……………!!」

「何イ……………つ!!」

ビビが伝える衝撃の報告に、一味は絶望的な表情で固まる。

エドワードは部屋の外が見える窓、水中を睨みつけ、同じバナナワニが何体も泳いでいる姿を見て歯噛みした。

「マズイぜ……………バナナワニは海王類でも食っちゃうほど獰猛な連中だ……!! 王女さんじゃ取り戻すのはムリだぞ……!!」

「しかもあの数……!! 飲みこんだやつはどれですか……!!?」

「ア……こいつは悪かった……奴ら、ここに落ちた物は何でもエサだと思いやがる……!!」
「なんてヤツっ!!!」

「さて……じゃあ、おれ達は一足先に失礼するのでしょうか……」

恨みがましい一味の目を受け、平然としながらクロコダイルが背を向ける。

ミス・オールサンデーを伴い、アルバーナに通じる通路に向かうが、クロコダイルは言い忘れたというように足を止め、振り向いた。

「——なお、この部屋はこれから一時間かけて自動的に消滅する。おれがバロツクワークス社長として使ってきたこの秘密地下はもう不要の部屋。じき水が入り込み、ここはレインベースの湖に沈む」

「罪なき100万人の国民か……未来のねエたつた6人の小物海賊団か。救えて一つ、いずれも可能性は低いがな、^B賭^Eけ^T金^Tはお前の気持ちさ、ミス・ウエンズデー。ギャンブルは好きかね」

檻の中のルフィやスモーカー、そして膝をつくビビを見て、クロコダイルは嘲笑する。計画の全てが順調に進む、その状況さえも愉しむように。

「二国の王女もこうなつちまうと非力なモンだな。この国には実にバカが多くて仕事がいやすかった……若い反乱軍やユバの穴掘りジジイ然りだ……!!」

「何だと!! カラカラのおっさんのことか!!」

「なんだ、知ってるのか…もうとつくに死んじまつてるオアシスを…毎日もくもくと掘り続けるバカなジジイだ…ハッハッハッ…笑っちゃまうだろ? 度重なる砂嵐にも負けずせつせとな…」

「何だとお前つ!!!!」

無謀な、しかし決して揺るがぬ意志で戦い続ける男をもバカにするクロコダイルに、ルフィがいち早く激昂する。

そんなルフィに、クロコダイルは心底呆れた様子で目を向けた。

「聞くんが『麦わら』のルフィ。『砂嵐』ってやつがそう何度もうまく町を襲うと思うか………?」

「…まさかてめエ」

クロコダイルが何を言おうとしているのか察したエドワードが、まさかといった様子で表情を強張らせる。

クロコダイルはにやりと笑い、手のひらの上で小さな砂塵を巻き上げてみせた。

「お前がやったのか……!!」

「せんせい師匠もいたんだぞ……!!」

「殺してやる……」

すべてを理解した全員が、その目に怒りの炎を燃やして睨みつける。

信頼を壊し、人々を追い立てただけではない。自らの能力によって追い打ちをかけたのだと、この瞬間理解した。

理解し、今ここで何もできないことに愕然としていた。

「げっ!! 水が漏れてきたぞ!!」

いつの間にか床の一部が開き、そこから少しずつ水があふれ出していることに気づく。まだたいした量ではないが、このままここでじっとしていれば間違いない溺死するだろう。

自動的に消滅するという意味が、今やつとルファイたちにわかった。

「このままじゃ部屋が水でうまつちまう!! ビビイ!! 助けてくれ、何とかしてくれ!!!」

あと一時間の命なんておれはやだぜ」

「騒ぐなてめエは…」

「バカ野郎、これが騒がずにいられるか!! 死ぬんだぞ放つときやあ、わかってんのか!!」

いやに落ち着いているゾロにウソツプが嘔みつくが、ゾロ自身も険しい表情を浮かべている。

ルファイは檻の格子にしがみつき、項垂れているビビに向かって叫んだ。

「ビビ!!! 何とかしろっ!!! おれ達をここから出せ!!!」

「ルフィさん……!!!」

「クハハハ……ついに命乞いを始めたか麦わらのルフィ!!! そりやそうだ、死ぬのは誰でも恐エもんさ……」

動けないビビに無茶を言うルフィに、クロコダイルが待っていたとばかりに笑う。

己が命を惜しんで、見苦しく泣き喚く姿さえも、彼にとってはシヨ一の一環なのかもしれない。

だが彼は、そんなつもりで吠えたわけではなかった。

「おれ達がここで死んだら!!! 誰があいつをぶっ飛ばすんだ!!!」

ビリビリと空気を震わせて届いたその叫びに、クロコダイルの方がピクリと震える。

笑顔のまま振り向き、ルフィに向けられたクロコダイルの目には、凄まじい圧力の殺気が宿っていた。

「……………自惚れるなよ、小物が……」

「……………お前の方が、小物だろ!!!」

空気が凍り付きそうな視線を受けながら、ルフィは一切臆さない。

先にナミやウソップが限界を迎えそうな圧を受けながら、ルフィは真正面から喧嘩を売ってみせた。

「来い」

通路に入ったクロコダイルは、開いた地面から顔を出したバナナワニに命じる。

力の差を理解しているのか、獯猛さで知られるバナナワニが素直に言うことを聞き、ビビの方へと向かって言った。

「さア、こいつらを見捨てるなら今の内だ、ミス・ウエンスデー。反乱を止めてエんだろう？」

ビビの反応を楽しむように、クロコダイルが笑みを見せる。

近づいてくる怪物のその大きさに、凶悪さに息を呑むビビが立ち尽くし、目を見開いて硬直する。

どう戦えばいいか、全く分からなかった。

「よし勝て!! ビビ!!!」

「だからムリだっつってんだろ!!!」

「王女様!! 逃げてください!!!」

「で…でも助けてくれ」

「無茶言ってるのお前じゃねエか!!」

檻の中のルフィたちには、ただ見ていることしかできない。声援を送ろうとも、何の気休めにもなりそうになかった。

そしてさらに、悲劇は続いた。

「おい、窓の外を見ろ!! あいつら順番待ちしてやがる!!」

「完全にエサ扱いだな…」

窓の外に見える、列をなして入り口に向かうバナナワニたちを見て、エドワードやゾロが目を細める。

ビビは迫りくる恐怖に必死に抗い、震える体で暗器を構えた。

「やる気らしいな…好きにしろ。全部殺せばどいつかの腹の中に鍵がある」

呆れたようにクロコダイルが吐き捨て、ふいと背中を向ける。

その直後、最初に入ってきたバナナワニが大きく口を開け、巨体に似合わぬ俊敏さでビビに襲い掛かり、背後の階段をかみ砕いた。

「は…速エっ!!! 一瞬で石の階段を食いちぎった!!! なんちゆうアゴだ!!!」

紙一重でそれを躲したビビだが、あまりの恐怖でそれだけで息が切れ始めてしまう。

どうにか突破口を探そうと努めるが、考える暇もなく鈍器のように硬い皮がビビを弾き飛ばした。

「しっほ!!!」

「畜生オ!!! どうにもなんねエぞ、こんなバケモノ!!!」

「王女さん逃げろ!!! 立て!!! 食われちまうぞ!!!」

さすがに無謀だとわかり、ビビをどうにか逃がそうと檻からルフィたちが叫ぶ。それに答える余裕も、今のビビからは失われていた。

そんな声を、クロコダイルは通路を進みながら堪能する。王女が無謀な試みに失敗するのも、あきらめて逃げ出すのも、愉悦には違いなかった。

その時だった。

ミス・オールサンデーが所持する小電伝虫に、通信が入ったのは。

「……連絡が……」

思わぬタイミングで来たことで、ミス・オールサンデーは訝しげに小電伝虫を取り出し、ボタンを押して応じる。

その向こうにいるのが、社員の誰かだと考えて。

「なに?」

『……その声は、ミス・オールサンデー……いや、ニコ・ロビンって呼んだ方がいいかな?』

「……………」

電伝虫から届いたその声に、ミス・オールサンデーだけでなくクロコダイルも目を見開き、ハッと息を呑む。

次第にクロコダイルの目が、忌々し気に吊り上げられていった。

「てめエ…
// 妖術師^{ウイザード} // …!!!」

『やア…久しぶりかな？ クロコダイル…』

彼が最も警戒する天使が、不敵な声で話しかける。

反撃の狼煙を、上げるために。

第12章 砂漠の王国〈後編〉

第96話 “焔”

通路の半ばに居るクロコダイル達の会話が聞こえ、ナミたちがハツと目を見開く。耳に届いたその声は、間違いなく仲間の声だった。

「オイ、聞いたか……!!」

「エレノア……!! いつになっても来ないと思ったら……」

ナミたちの表情に希望の兆しが混じっていく。

クロコダイルはそんな彼らに気づくことなく、電伝虫越しに不敵な笑みを浮かべている天使を睨みつけた。

「おい……!! てめエの方にはあいつらを向かわせたはずだぞ……!!? どこで油売ってやがる……!!」

『にやはははは……!! 逃げ回るのは得意分野さ……あんたのことだから、私に対しては自分に次ぐ実力者を差し向けてくれると確信していたよ。国をひっくり返す作戦の最中であろうと、貴重な戦力をね……!!』

「てめエ……!!」

『誰がバカ正直に真正面から戦うのですか』

クロコダイルは、自分がまんまと乗せられたことに気づき、憤怒で鬼のような形相に変わっていく。計略を立てる側である自分が逆にはめられたという、屈辱に身を震わせて。

「エレノア〜!!! 助けてくれエ!!! 捕まっちゃまってんだよオ〜〜っ!!! 時間がねエんだ!!!」

『…案の定ウチの連中はそっちにいますよ。——任せなよ、すぐに行く…』
ウソツプの絶叫が聞こえたのか、思わず苦笑する声が聞こえる。

ルフィたちとエレノアの間には、かなり強い信頼ができていたことを悟ったのか、クロコダイルは心底呆れた様子でため息をついた。

「オイオイ…天下の^{ウィザード}妖術師様も随分目が衰えたな。こんな弱小連中のために何を熱くなくてやがる…なんなら、おれがお前を雇ってやってもらいたいんだぞ？」

『…へエ。あんたともあろう者がずいぶん破格な話を持ち出すじゃないか。……でも願ひ下げだね』

クロコダイルの提案に、エレノアは意外そうに笑うが、すぐにそれを一蹴する。どれだけ好待遇をうけようが、拭いきれない嫌悪感を放ちながらエレノアは告げる。

『——お前に私の王となる資格などない。戯言を抜かすな』

ビキリ、とクロコダイルの顔の血管が太く浮き上がる。

確かに相手は、世界最強と謳われる海賊の娘で、恐るべき実力者の一人。しかし、己もまたそこらの海賊とは一線を画する強者、バカにされるのは我慢がならなかった。

「小娘が……!!! 上等だ……!!! こいつらの最後の希望がてめエだつてんなら、おれがこの手で殺してやる」

『そのまま返すよ、若造……!!?』

バキン!!と小電伝虫がクロコダイルの手によつて碎かれる。

怒りで拳を震わせていたクロコダイルは、アルバーナに向かう通路を半ばで引き返し、カジノの方へ向かっていった。

「いくぞ」

「いいの?」店の前のミリオンズはまだ社長ボスが誰なのか知らないわ」

「別に社長ボスとして行くわけじゃねエ。おれもお前もナンバーエージェント以外には顔は割れちやいねエんだ。クロコダイルとして、店の経営者オーナーがてめエの店先で起こったゴタゴタを見物するのに何の不思議がある」

逃げ回っているというが、エレノアの力を考えればミリオンズごときでは足止めにもならないだろう。

そう考えたクロコダイルは、先ほどバナナワニによつてかみ碎かれた階段にしがみつ

いているビビに気がつく。檻の中からルフイたちも、それに心配する声をあげていた。「何する気だ、ビビ!!」

「この部屋に水が溢れるまでまだ時間がある!! 外に助けを呼びに行くわ!!」
「そうだ…エレノアだけじゃねエ。サンジやチョッパーもいる!!」

クロコダイルに顔の割れていないサンジや、人相を多少変えられるチョッパー。まだ頼れる仲間が残っているのだと気付かされ、ルフイたちは唯一動けるビビに期待の眼差しを送る、が。

「おい!!! 危ねエ!!!」

階段をよじ登っていたビビの首に、砂を纏った金色のフックが巻き付く。

一瞬で砂になり、ビビのもとに接近したクロコダイルは、目を見開くビビを床に向かって叩きつけた。

「くだらねエマネするんじゃねエ!!!」

苛立たし気に瓦礫の上につづけられたビビは、額から血を流して項垂れる。

脳を揺らされてしまったのか、ビビはぐったりしたまま動かなくなってしまった。

「ビビ!!! 目エ覚ませ!!!」

「ワニが来るぞ!!!」

「そんなに仲間が好きなら…揃って仲良くここで死にやあいだろ。じきに水は、ワニ

のエサ場”を埋め尽くし、この部屋を沈め始める」

砂から人の姿に戻ったクロコダイルが、階段の上に立ってビビとルフィたちを見下ろす。

もはや自身の野望は止められないのだと確信し、ビビたちを嘲笑いながら、表に向かつて歩き出した。

「何ならあの生意気な小娘もここへ運んでやろう…死体でよけりやあな……………!! ハ…!!!」

「くそオオオ!!!」

悠々と階段をのぼり、姿を消すクロコダイルに、ルフィが悔し気な咆哮を漏らす。

そこで、それまでのやり取りをじっと見つめていたスモーカーが、無表情で腕を組んだまま声をかけた。

「おい、お前ら……」

「何で、てめエそんな余裕なんだよ!!! お前も何か方法考えろよ!!!」

「お前らどこまで知ってるんだ……………クロコダイルは一体、何を狙ってる…!!!」

“王下七武海”という存在そのものを疑問視している彼にとって、この事態は予想の域を出ない事件だった。クロコダイルと共にいた、黒髪の美女のことを除いては。

「クロコダイルの傍らにいた女…あいつは世界政府が20年追い続けてる賞金首だ。額

は確か七千万を越えてる……………!!」

「な!! ……七千万!!? ……だ!! ……と。そ…それがどうした!!」

「クロコダイルとかわからない額…」

「あの2人が手を組んでた時点で、こいつはもうただの国盗りじゃねエ。放つときや世界中を巻き込む大事件にさえ発展しかねねエってこつた」

スモーカーが真顔で口にした言葉に、ナミもウソップも絶句する。

なにをバカな、と一笑に付したくなるような無茶苦茶な考えだったが、それをさせない圧が今のスモーカーからは感じられた。

「『世界』ですって!! どういうこと!!?」

「…そりやちよつと話がデカすぎ…」

「……………何言つてんだお前ら」

戸惑いの声を上げるナミたち。だが、ルフィはそれに一切興味を示さず、怒りをあらわにする。

「…あいつをブツ飛ばすのに…!! そんな理由要らねエよ!!」

「……………そうか」

呆れているような、わかりきっていたというような態度で、スモーカーは軽くため息をつく。

そしてその視線は、足元を満たし始めている大量の水に向けられた。

「——で？　ここをどう抜けるんだ」

「太モモまで来てるぞ!!　うおおおっ!!!」

「死ぬーっ!!!　死ぬーっ!!!　ギャ——!!!　ギャ——!!!」

「いやーっ!!!」

「あ…なんかおれ力が抜けてきた」

「やべー!!!　やべーな!!!　我慢しろ!!!　アル!!!　持ち上げてくれ!!!」

「姉弟子助けて~~~~~!!!」

スモーカーが指摘したこと、一味は頭に昇っていた血が退いて現実を直視した。いや、してしまった。

何もしなくても着々と死が近づいてきていることを、今さらになって思い出したらしい。

「ビビ~~~~っ!!!」

最後の希望、ビビは手をついたまま立ち上がれずにいる。体に残る痛みが、彼女から抗う力を奪っていた。

それでもビビは、歯を食いしばって力を振り絞る。

——今までずっと助けてもらったんじゃない…!!

見殺しになんてしてたまるもんか!!

短くも濃厚な時間、共に過ごした時間が、ビビに諦めるといふ選択肢を取らせない。決して逃げたりしないという確固たる意志で、立ち上がるうともがく。

そんな彼女に、死神は容赦なく近づく。大きく口を開けたバナナワニが、ビビを一口で飲みこもうと飛び掛かった。

「……よく頑張ったわね」

だが、死神は間一髪のところまで退けられた。

ふわりと体が浮く感覚とともにかけられた、優しくも力のこもった声を耳にして。

ビビは目を見開き、自分を抱えて階段の上に降り立つ金髪の女性を凝視する。

「あなたはちゃんと戦った…!! 私達は見ていたわ…!!」

「……!!? ミス…ミス・チューズデー?!」

誇るように見つめてくる、眼鏡をかけたその女性の登場に、ビビが一番信じられない気持ちで言葉を失くす。

檻の中のナミも、ビビが呟いた名称にハッと息を呑んでいた。

「ミス・チューズデーって……あんだ達のペアの…?!」

「中尉……!! ナイスタイミング——っ!!」

何が起きたのか、と立ち尽くすナミの横で、エドワードとアルフォンスが格子から腕

を出して親指を上立てる。

眼鏡をはずしたミス・チューズデイは、それに軽く頷いて微笑みを浮かべた。

「!! まだバナナワニが……!!」

「動かないで。巻き込まれるわ」

背後からなおも狙ってくるバナナワニに警戒の声を上げるビビだが、ミス・チューズデイは安心させるように肩に手を置く。

次の瞬間、バナナワニの腹辺りから聞き覚えのある声が届いた。

「『食事中は極力音を立てません様に』」

「『その美しさは何より甘美で危険』——」

バチツ!!と空気中に青い閃光が走り、バナナワニの腹の下で一気に熱が広がる。

ギョツと目を見開いたバナナワニは、自身の腹に叩きつけられる衝撃に白目を剥いた。

「『アンチマナー反行儀キツクコース』!!!」

「『レディ・エリザベト血濡れの令嬢』!!!」

強烈な蹴りの一撃と、猛烈な爆炎の槍が炸裂し、バナナワニの巨体が空中に浮かぶ。

衝撃と熱がバナナワニの腹に食らいつき、バナナワニは唾液を撒き散らしながら吹っ

飛ばされ、水の中に叩きつけられた。

「オツス、待ったか!!」

「手助けは必要かね? 鋼の!!」

加えた煙草を突き付けるサンジと、不敵な笑みを浮かべるマスタング。

二人の男の登場に、檻の中に捕らわれた青年たちは歡喜の咆哮を上げて彼らを迎えた。

「遅エんだよクソ大佐ア!!」

「サンジさん……何で大佐と一緒に……!!」

泣き叫び、憎まれ口をたたきながらも歡迎するエドワードとは反対に、アルフォンスは困惑したまま海軍大佐を凝視する。

サンジは檻の中のナミを見つけると、途端にきりつとしていた表情をでれつと崩した。

「ナミさーん♡ ホ…ホレ……」

「失礼、レデイ」

しかしその前に、ズスイツとマスタングが割つて入る。

まるで捕らわれた姫を迎える騎士のように、氣障つたらしくナミの手を取つて、キラキラした笑みを見せた。

「このような武骨な檻に閉じ込められたままなど心苦しいが…もう少しご辛抱を。必ず

や私があなたを救い出しますゆえ」

「え……ええ……ありがとう」

ナミは手を取られ苦笑するも、ある種の確信を抱いていた。ああこいつ、あのコックと同類だ、と。

当然この男が、愛しい女性を口説きかけているマスタングを放置しておくはずもなかった。

「おいこのクソ優男。どういう了見で勝手にナミさんを口説いてんだてめエ……!!!」

「おや……? これは予想外だ。女性を口説くのに横入りをする無粋な輩がいたとはな……!!!」

「やんのかああ!!!?」

「消し炭になりたいようだな……!!!」

額をぶつけ合う勢いで、ドスの効いた声で睨み合う二人。同族嫌悪とでもいうのか、単に根本的に気が合わないのか、状況も忘れて互いを牽制する。

そんな二人に呆れたナミが、いい加減にしろと言う意味も込めて二人に叫んだ。

「いいからさっさと……ここ開けてよ!!!」

「ア……イ!!!」

「果てしなきバカだなあいつら」

睨み合いを始めたと思えば、全く同じ反応で返答する二人に全員があきれ果てる。

だが、時間はのんびりことを済ませてくれそうにはなかった。

「グルルルル!!!」

「ガルルル」

「ゴルルル!!!」

最初の一体に続き、何体ものバナナワニが唸り声を上げて水中から姿を現していく。

それは同胞をやられた仕返しなどではなく、獲物を先取りされずに済んだという歓喜のようにも見えた。

「つかくくく!!! 出てきやがった次々と……………!!!」

「行けー!!! サンジ全部ブツ飛ばしてくれエ!!!」

「大佐アくくく!!! ぶちかましちまえ!!!」

「何本でも房になってかかってくるがいい、バナナ頭共」

「レディーに手を出すような行儀の悪い奴らには、片っ端からテーブルマナーをたたきこんでやる…!!!」

ウソツプやエドワードが、苛立たしげにバナナワニを睨みつけるサンジとマスタングにエールを送る。

足技の使い手と『焔』の錬金術師はそれに答えるように、示し合わせたように揃って

構えてみせた。

「とにかく時間がねエぞ、秒殺で!!! 瞬殺で頼む!!!」

唯一檻を開けられるのは、あるバナナワニが飲み込んだ鍵のみ。

それを手に入れるのは、片っ端からバナナワニを仕留め、腹の中を調べるほかにない。そんな中、それまで黙っていたスモーカーが不意に口を開いた。

「今…三番目に部屋に入ってきた奴を仕留めろ」

「え？」

「何だ?! お前…わかんのか?」

「てめエらの耳は飾りか? …今の声、カギ食ったヤツと唸り声が同じだろ」

スモーカーの一言に、その場にいた全員がハツと目を見開くのだった。

第97話 “先に行け”

「出たアア!!!」

二人の強者により仕留められ、うなり声が一致したバナナワニの口から、唾液や胃液まみれの『何か』が吐き出される。

膝上まで満ち始めた水の上に落ちたそれを、ルフイたちはぎよつと凝視する。

「お…檻の鍵……!!!?」

「鍵つぼくねエぞ!!!」

「何だありやあ!!!」

予想外の、全く求めていなかったものが出てきたことで、誰もが驚愕する。

すると、出てきた『何か』—— 蠟でできたボールの表面に、ピキピキと亀裂が走り始めた。

「“ドルドルボール”…解除……!!!」

すると次の瞬間、蠟のボールはぱかつと左右に開き、一人の見覚えのある男が立ち上がる。まるで、卵からかえった雛のように。

「オオ……!!! み……水!! 水だガネ、奇跡だガネ」

「なに——っ!!!」

現れた男、Mr. 3は辺りを満たす水を飲み、歓喜の声を上げる。後ろで絶句するルフィたちに気づくことなく、ミイラのように乾いた身体を水で癒し続けた。

「ぷは——っ、生き返った!! 死ぬかと思つたガネ!!! 我ながら素晴らしい作戦だったガネ。ん?! しかし、この“ドルドルボール”に付着した“鍵”の様なものは一体……!!」

任務の失敗を咎められ、クロコダイルに体中の水分を奪われたあげく、ワニの巣に放り込まれた彼は自画自賛する。

だがそこでようやく、後ろの檻の中にいるルフィたちに気づいた。

「ギャ——!!! お前らは!!!」

「あ——その鍵はア~~~~っ!!! よこせ——っ!!!」

悲鳴を上げるMr. 3と同時に、ルフィたちもMr. 3が見つけた鍵を見て叫ぶ。

しばらくその姿を凝視したMr. 3は、少しの間思考すると、やがてにやりと下卑た笑みを浮かべた。

「…現状把握だガネ……」

「てめエがMr. 3か……大人しくその鍵を」

「これでどうだア~~~~っ!!!」

外にいるサンジがMr. 3から鍵を奪おうと近づくが、それより前にMr. 3は大きく腕を振りかぶり、手にいれた鍵を投げ飛ばしてしまった。

鍵は宙を舞い、弧を描いてどことも知れない水中に沈んでしまった。

「フハハハハ!!! ……お前が誰だか知らんが、奴らの味方の様だな!! 鍵が欲しくば探すがいい!!! ……ただし…大人しく探せるかどうかは責任持たんガネ!!!」

「くだらねエマネしやがって…」

「ちよつと待てサンジ!!!」

余計なことをしでかしたMr. 3に制裁を啜えようと、サンジとマスタングが怒りをあらわに近づいていくが、それをウソツプが止めた。

「……そいつの『ドルドル』の能力で……この檻の合鍵造れねエかな……」

数秒後、檻の鍵はあっさりと開かれた。

ウソツプの言う通り、Mr. 3の作った蠟の鍵によって。

「オー……やるもんだ口ウソク人間」

「えへ♡ え? ヘブツ!!!」

「よくよく考えれば、おれらが合鍵造ってもよかったな」

「でも材料ないし……」

用のなくなったMr. 3をサンジが蹴り飛ばし、ルフィたちはようやく檻から解放される。ビビとミス・チューズデイも、急ぎそれに合流した。

「急ごう、時間がねエ!!」

「ええ、奴らがいったん行こうとした通路がきつとアルバーナ方面よ……でもあの通路にはまだバナナワニがたくさん!!!」

Mr. 3の登場で忘れていた、とビビが表情を変える。

だが振り向いたナミは、あきれた様子でビビの肩に手を置き、首を振った。

「心配ないみたい」

「うらア!!! もう居ねエのかア!!!」

「くそ——水に浸かってちや本気出ねエ!!!」

「……私があれ一匹にどれほど……」

「いや、おかしいのはあいつらの強さの方だから気にすんな!!」

ルフィとゾロ、エドワードらによって既に全滅しているバナナワニたちに、ビビががつくりと肩を落とすが、同じ分類であるウソップがそれを慰める。

その時だった。戦闘の余波を受けたらしい壁が砕け、大量の水が流れ込んできた。

「うわあつ!! 壁が壊れたア!!!」

「アホオ!! やり過ぎだ!!!」

「通路まで壊れたぞ!!」

「脱出だ!! 脱出するぞ!!」

不測の事態に右往左往する一味と海兵たちは、あつという間に激流の中にのみこまれていった。

町で起きた騒ぎによって、人気のなくなったレインディナーズの店先。

すると、オアシスの岸にぎばつと人の手がかけられ、青年たちが仲間を背負いながら這い出していった。

「おい、生きてるか? ルファイ!! —— まったく、能力者つてのは厄介なりスク背負つてんな」

「ウソツプさんしつかり!!」

「まったく何やってんのあんた!! しつかり泳ぎなさいよっ!!」

「重っ!! アル重っ!! 沈むかと思っただぜ!!」

「手間をかけてごめんよ兄さん…」

「ホントに水の中だと無能なんですから…」

「ぐふっ…!!」

「……………!!」

「ガハッ」

能力によつて泳げない者、泳ぎに向かない身体の者、不測の事故に遭つた者が、仲間や傍にいた者によつて救出される。

その中で、ゾロがスモーカーを担いで岸に上がったのを見て、サンジが目を剥いた。

「うわつ、スモーカー!! おいおいゾロ、てめエ何敵連れてきてんだよ!!」

「うるせエ、不本意だよ。…どうせくたばり損ないだ」

「…まあいい。とにかく先を急ごう!」

ずぶぬれで弱っているスモーカーを見て、氣にする必要もないとサンジが全員を促す。

エドワードはマスタングを見やり、フンと鼻で笑つてそつぽを向いた。

「…報告は後回しだ。先に行くぜ、大佐」

「仕方がないな………ならせいぜい勝手に暴れてくるといい」

「エド……!! あんたコイツとどういう関係なわけ……!!」

「いわゆる…直属の上司です」

「不本意ながらな!!!」

ナミの詰問に、エドワードは本気でいやそうに吐き捨てる。

もともと海軍の側の人間であるのはわかっているが、本来敵である自分たちの前で親

交があるように話されれば疑ってしまうのも当然だった。

それを察し、マスタングが説明を始めた。

「エルリック兄弟とホークアイ中尉には、ある仕事を託していたのさ……軍で度々話題に上がる謎の組織バロックワークスの調査をね」

「あんた……ナノハナでエレノアを捕まえようとしてたんじやないの……？」

「最初はそのつもりだったんだがね……事情が変わったのさ」

マスタングの脳裏に浮かぶのは、『ナノハナ』でのエレノアとの戦闘。

エレノアはマスタングを相手にしながら、こう話しかけてきたのだという。

——ウチの弟子たちが世話になってるみたいだね……。

『あいつらも忙しそうで何よりだよ』

『……!! ああ……、こちらも気苦勞に耐えないよ、特に今はね……!!』

何かしらの意思を伝える意思を感じ、マスタングはエレノアとの対話を試みた。案の定、暗号の様に真意を隠しながら、エレノアは饒舌に語ってきた。

『気をつけることだね……!! 組織つてのは内側から崩されるのが一番効くんだ……!! 政

府から信頼の厚い連中ならなおさらさ!!』

『……せいぜい参考にさせてもらおう……!!』

『せめて……!! もう少し気を使ったらどうなの!! ただでさえこの国の人達はよそ者の

せいで困ってるっていうのに……!!』

『仕方がないだろう……!! 我々がお国の事情に関わるわけにはいかないんだからな!!』

『いまさらだつての!! 一から十まで横から引つ掻き回されんのが一番腹立つんだよ!!!』

会話はわずかそれだけ、しかしマスターグは、隠された意図から多くの情報を手に入れる事ができた。

内側の敵……この場合差すのは世界政府による公認の海賊“七武海”。

エルリック兄弟のことを話したということは、彼らに任せた案件が深く関わるということ。すなわち、行方不明のビビ王女と謎の組織バロックワークスに連なるもの。

ビビの故郷はここアラバスタ。そこにいる“七武海”はただ一人、“砂漠の王”クロコダイル……すなわちバロックワークスを統べる黒幕こそ、あの男だということ。

そしてよそ者に引つ掻き回されるという言葉……この国の状況と照らし合わせて考えれば、反乱が起こった背景にも何者かの介入があつたということを示していた。

「……まったく口の軽いお人好しな娘で困るよ」

困った様子で嘆息し、しかしありがたそうに笑みを浮かべるマスターグ。

ナミは聞かされた真相に、たまげたように目を見開いていた。

「エレノア……そんなことしてたんだ……!!」

「——で、レインベースでの君らのやり取りを聞き、困っているだろうと踏みこんでみればこの男とはちあわせしたというわけだ」

「おれ一人で十分だったのによ……!!!」

忌々しそうにエドワードが愚痴る。事情は知らないが、ただ嫌っているのではなく、いいように使われているのが気に入らない様子が伝わる。

いつも通りの彼に苦笑し、マスタングはルフィたちに向き直った。

「ウイザード妖術師」から君達に伝言を預かっている……『先に行け』と」

たったそれだけの伝言に、ルフィたちは息を呑む。

大きなハンデを背負った彼女が残した想いを、言葉に表さない確固たる覚悟を察して、返す言葉を失くした。

「彼女はここで、バロックワークスのエージェントの一組を足止めする気だ……その意思を組んでやれ」

有無を言わさぬ口調で、マスタングはルフィたちを見つめる。

しばらく見つけ合った若き海賊と海軍大佐は、やがてルフィが目を逸らすことで互いに背を向け、歩き始めた。

「いくぞ!!!」

「……だいぶロスしちゃったな。 ビビちゃん、間に合うか?」

「わからない」

全員が己の成すべきことを再確認し、使命を果たすために動き出す。

アルバーナに向かって走り出しながら、不意にサンジがナミに目を向けた。

「ナミさん、『ナノハナ』で買った香水持ってるか？」

「え…ええ…何で？」

「体につけるんだ」

「(こ)う？」

「ア~~~~あの世の果てまでフォーリンラブ♡」

「いや、マジでイッチまえお前」

意図はわからないがナミは従い、チョツパーには不評だった香りの強い香水を振りかけ、サンジを悩殺する。

それに呆れていたゾロだったが、フツと表情を変え、突き出された十手の刺突を刀で防いだ。

「ロロノア!!! 何故おれを助けた」

「『船長命令』をおれはきいたただけだ…別に感謝もしなくていいと思うぜ? コイツの気まぐれさ、気にすんな」

不本意だ、といわんばかりに睨みつけてくるスモーカーに、ゾロもまた忌々しいとい

うように眉間にしわを寄せる。

ルフィが助けると言うから従っただけで、彼としては別に放っておいても構わなかったのだ。

「…じゃあ…おれがここで職務を全うしようと…文句はねエわけだな？」

「見ろ…!! 言わんこつちやねエ、海兵なんか助けるからだ!!」

サンジは呆れ、鋭く睨みつけてくるスモーカーに構える。

しかしスモーカーは仕掛けることなく、ただゾロたちを見据えるだけだった。

「ツア——シ!!! 野郎ども『アルバーナ』へ一目散だつ!!!」

「クロコダイルは何処だ——つ!!!」

「あ、気がついた」

「うおっ!! けむりっ!! やんのかお前っ!!!」

「ぐあア!!! スモーカー!! おイルフィやめとけ、逃げるぞ!!!」

ずっと気絶していた二人が起き上がり、十手を持って睨んでいるスモーカーに身構える。

何を考えているのか全く分からない青年を見つめ、スモーカーはやがてため息をついた。

「……………行け」

「ん？」

「―だが今回だけだぜ…おれがてめエらを見逃すのはな…：…：次に会ったら命はないと思え。『麦わら』のルフィ…」

何か思うところがあつたのか、スモーカーは鋭くルフィを見据えながら告げる。ルフィもそんな彼を、じっと見つめるばかりだった。

「あそこだ!! 麦わらの一味だア!!!」

気づけば、街中でまいた海兵たちがルフィたちを見つけ、駆け寄ってくるのが見える。それを見た一味は、ボサツとしている場合ではないと急ぎ駆けだした。

「さアっ!! 行こうぜ、海軍が来る。アルバーナはどつちだ!?!」

「向こう!! 東へ真つすぐよ」

「おいルフィ急げ、何してる!!」

「ああ」

一人スモーカーと相対していたルフィが、ゾロたちに行く。

しかしその前にもう一度スモーカーに向き直り、嬉しそうに笑みを浮かべた。

「おれ、お前きらいじゃねーなア〜!! しししし!!」

「さっさと行けエ!!!」

「うわっち!!!」

癪にさわったのか、声を荒げたスモーカーが十手を振り回す。

慌ててルフィが逃げていくと、ようやく留飲を下げ、代わりに意味深な笑みを浮かべているマスタングを睨みつけた。

「マスタング…てめエ何で黙ってやがった」

「君には伝えておきたかったんだが…あの男の魔の手は国中に広がっている。油断をみせれば食い殺されかねなかつたのでね」

「しかも…いつの間に『ウィザード妖術師』と組んでたんだ。てめエが海軍つてこと忘れてんじやねエだろうな」

場合によっては味方であろうと容赦はしない、そんな意志を感じさせるスモーカーに対し、マスタングは飄々とした態度で応えた。

「利用できるものは何でも利用するべきだろう…？　そうしたまでさ、私は…」

全く悪びれる様子のないマスタングに、スモーカーは呆れてもはや何も言えない。これが下の階級なら拳骨でも見舞っているところだが、例えそうであつてもやる気にはならなかつた。

「大佐!! 追われたいんで!!」

「……………ああ…疲れた」

「疲れた?!」

追いついてきた部下たちに、スモーカーは気だるげに告げ、自身の愛車がある方へ向かう。

サドルに腰かけながら、付き従ってきた海兵の一人に億劫そうに命じた。

「オイ…今追ってつた奴ら、無駄だから呼び止める…そしてここに招集。本部にも連絡を。現在アラバスタ王国周辺にいる軍の船を全て、この国に集めろと」

「援軍を呼ぶのですか?! …ですがあんな少数海賊相手のために上官が船を動かしてくれるかどうか」

「おれがいつ上官の意見を聞いたんだ!!?」

「あ…いえ…はい…!! す…すぐにつ!!」

ギロリ、といつぞやと同じ殺気のコもった目で睨まれ、震えあがった海兵がすぐさま応じる。

それに苦笑するマスタングは、同じく集まってきた自分の部下たちに目を向けた。

「大佐! おれ達はとうするんです?」

「…返さねばならん借りがあるからな」

煙草をくわえた金髪の男に問われ、マスタングはふと虚空を見やる。

別にその方向にいるわけではないが、手を貸さなければならぬ相手が一人、この町にいるからだ。

「……マスタング隊全員に通達。これより、この町に潜伏している秘密組織のエージェントを拿捕する。それ以外は放置せよ」

「了解……!!」

敬愛こそしていないが、信頼している上官の真意を悟りながら、マスタング隊の海兵たちは敬礼を向けた。

第98話 “正体不明（アンノウン）”

海兵たちから逃れ、反乱軍と国王軍が激突する首都アルバーナに向けて、ルファイたちが急ぐ。

だが、その距離はあまりにも遠すぎることにエドワードが気付く。

「おい!! もしかしてこのまま走ってアルバーナへ行くなんてことねエよな!!」

「そうだ “マツゲ”!! “マツゲ”はどこに行ったの?!!」

「この町に馬小屋とかあったぞ!!? 馬、もらおう!!」

「——でも町には海軍が……」

「ご安心あれ……前を見な!!」

人の足で間に合うはずもないと一味は愕然とするが、サンジはそれに不敵な笑みを見せる。

頼れるもう一人の仲間が、もうすぐ到着するからだ。

「あつ!! いたぞ!!! お——い!!! みんな——!!」

ナミの香水の匂いを嗅ぎつけたチョッパーが、手綱で操る巨大な生物を停止させる。

ガシャガシャと似合わぬ速さで現れた巨大な甲殻類を目の当たりにし、ルファイたちは

驚愕で目を見開いた。

「カニ!!!」

「これは…!!!」

「うまそ——!!!」

一味全員が乗れそうなほどに大きいそのカニは、どことなくいやらしい顔つきで一味を見下ろす。

その上にはチョッパーだけではなく、マツゲも得意げな顔で乗っていた。

「乗ってくれよ!!!」

「乗れるのかア?! うほーっ!!!」

「顔が、でもちよつとやらしーわよ!!」

「またスゲーの連れて来たな」

「マツゲの友達なんだ!!! マツゲはこの町の生まれでこの辺には友達がいっぱい
るんだ!! エロいけど」

「すごいっ!!!」

「コイツ、結構速エンじゃねエか?!」

たのもししい援軍にビビは歓喜の表情になる。

少なくとも人の足よりは格段に有効だろうと、一味は急ぎヒッコシクラブの背中に飛び乗っていく。

「よ——し、行くぞ——っ!!! 出発!!!」

頭と胴体が一体であるため、口の端に括り付けた縄を操ってチョッパーが発進を命じ、ヒッコシクラブが走り始める。

だがその瞬間、ビビの体に砂が巻き付いたことに、ルフィとゾロが気付いた。

「止めるチョッパー!!!」

「ビビ!!! あいつだ!!!」

突然のことで誰もが硬直してしまいうち、いち早く動いたルフィがビビのもとに駆け寄り、引っかかったフックを引きはがす。

しかしそのかわりに、ルフィがヒッコシクラブから引きはがされてしまった。

「ルフィさん!!!」

「お前から先行け!!! おれ一人でもいい!!!」

砂漠の王のフックに捕まったルフィが、宙を舞いながらゾロたちに告げる。

その顔に浮かぶのは、格上の敵を前にした恐怖ではなく、仲間をただ信じて勝利を確信している笑みだった。

「ちゃんと送り届けろよっ!!! ビビを宮殿^{うち}までちゃんと!!!」

「バカが…このまま進めチョッパー!!! 『アルバーナ』へ!!!」

「わ!! わかった!!!」

「おい、ゾロ!! あいつら二人とも置いてくのか?!!」

組織最強のエージェント二人の足止めを買って出たエレノアと、組織のトップに立ち向かうルフィ。放置するには、あまりに不安が大きすぎた。

「ルフィさんっ!!!」

「大丈夫よビビ!! あいつらなら大丈夫っ!!!」

自分の代わりになったルフィを心配するビビだが、ナミがそれを止める。

自身も不安を抱きながら、それでも笑みを浮かべてビビを安堵させようと努める。

「気の毒なのはあいつらの方!!」今までルフィとエレノアを敵に回して…無事でいられた奴なんて一人もいないんだから!!」

これまであらゆる強者たちと戦ってきたが、ずっと彼らは勝利を掴み取ってきた。どれだけ危険な敵であろうと、それだけは揺るがない事実だと、ナミはビビや自身を鼓舞させる。

「いいかビビ。クロコダイルは…あいつが抑える。『反乱軍』が走り始めた瞬間にこの国の『制限時間』は決まったんだ。『国王軍』と『反乱軍』がぶつかればこの国は消える!!!」

向かう先、アルバーナのみを見つめるゾロが、有無を言わさぬ厳しい口調で告げる。ただならぬ覚悟を、その声ににじませながら。

「それを止められる唯一の希望がお前なら……何が何でも生き延びろ……！！！！」
 先、ここにいるおれ達の中の……誰が……！！ どうなつてもだ……！！！！

「ビビちゃん……コイツは君が仕掛けた戦いだぞ。数年前にこの国を飛び出して、正体も知れぬエこの組織に君が戦いを挑んだんだ」

いつも仲が悪いサンジも、この時ばかりはゾロに賛同するように告げる。

仲間を想い、立ち止まりかけたことを咎められたようにビビは口をつぐむが、サンジはさらに優しく付け加えた。

「……………ただしもう、一人で戦つてるなんて思うな」

「ビ……ビ、ビビビ！！！！ 心配すん……パイスン……スンばいなよ！！！！ おれガツ……ガツツいて……」

ガクガクブルブルと脅えっぱなしのウソップが、それでも虚勢を保とうと勇ましさを示す。

仲間達全員が、ビビに先へ進むことを促す。何よりも、残してきた二人の仲間の想いを無碍にさせないために、それをビビに気に病ませないように。

「ルフィさん！！！！『アルバーナ』で！！！！ 待ってるから！！！！」

「おオオオ！！！！」

覚悟を決めた仲間の叫びに、ルフィも雄々しく吠えることで応えた。

「くあつ…!!」

吹っ飛ばされたエレノアが、小さくうめき声をあげて地面を転がる。

すぐに立ち上がるが、向かってくる敵の姿を映した目には焦りが滲んでおり、徐々に彼女から余裕が奪われていることがわかった。

「^{カトヤンガ}壊神剛槌!!!」

パンツと閃光を纏った手で地面に触れ、作り出した巨大なトゲ付きの鉄球を振り回し、眼帯の美女に向けて撃ち放つ。

凄まじい重量と硬度を持つ、当たればひとたまりもない威力のそれが迫るも、美女に狼狽する様子は見受けられない。

「^{黎明の手}」

ミス・リープデイがヒュンと腕を振るうと、眼前に迫っていた鉄球が一瞬でバラバラに切り裂かれる。まるで紙でできていたかのように、あっさりと抵抗もなかった。

「やわらかそうな肉〜!!!」

「うにゃっ?!」

啞然としていたエレノアに、今度はMr. 0. 5が大きく口を開けて襲い掛かってく

る。

幸いミス・リープデイよりも遅かったために簡単によけられたが、躲されたMr. O. 5が噛みついた家屋の壁がごっそりと食いちぎられるのを見て、顔を真っ青にさせた。

「フフツ…!! 最初の勢いはどこに行っちゃったのかしら？ そんなものじゃ私達は死ねないわよ…!!!」

「…おいおいふざけないですよ。なんなのさ…そのとんでもない爪…!!!」

じりじりと追い詰めるように、恐ろしく長く伸びた爪を見せつけ、蠱惑的な笑みを浮かべて近づいてくるミス・リープデイに、エレノアは悪態をつく。

相手を見くびっていたわけではない。しかしそれを踏まえても予想を超えた強さに、驚愕が勝っていた。

「エドのヤツウ…!! 情報は正確に伝えやがってたの…!!! あいつら本物の化け物じゃないのさ…!!?」

この場にはいない弟子たちに苛立ちを感じるが、ぼやく間もなくミス・リープデイの爪が振るわれる。

間一髪で交わしたエレノアは、さつきまでいた場所が大きくえぐられている光景にぞつと背筋を震わせる。

「困ったわね…本当はあなたには死んでもらうわけにもいかないのだけど…社長から

の命令だからね。妥協案として四肢でも斬り落とさせてもらおうかしら?」

「お断りだよ!!!」

「そう…じゃあ殺すわ」

触れただけであらゆるものを切り裂いていく爪に、もはやエレノアは接近を諦める。

どこまで伸びるかもわからない爪に戦々恐々としながら、攻撃の合間を見計らつて地面に両手のひらをついた。

「攻撃がダメなら…!!! ハハハハハ界滅竜毒!!!」

ボコン!!とミス・リープデイトMr. 0. 5の周囲で土が盛り上がり、見る見るうちに鋼鉄の棺のような物が作り出されていく。

女性を模したそれは、一切の隙間なく塞がれて完全にエージェントたちを閉じ込めてしまう、が。

「〃黎明の腕〃!!!」

振るわれた爪が、それすらも簡単に斬り裂いてしまう。

呼吸もできないよう密閉した封印を破られ、さすがのエレノアも大きく目を見開いて絶句する。

そんな彼女に、美女は残酷な笑みを浮かべてみせた。

「フフ…!!! もうおしまいなの…?」

あまりの衝撃に動けなくなるエレノアに向かって、Mr. O. 5が再び口を開けて飛び掛かっていく。

だがその時、Mr. O. 5のこめかみから鮮血が噴き出し、遅れて甲高い破裂音が響き渡った。

「…!!? グラ…Mr. O. 5!!!」

突然の出来事に、ミス・リープデイの表情が変わる。

しかし次の瞬間、彼女の周囲から強烈な熱波と衝撃が襲い掛かった。

「ザ・クイーン・アントワネット業火絢爛!!!」

白に近い赤がミス・リープデイを飲み込み、華奢な体に食らいつく。地面を焦がすほどの熱がその場一帯に充満し、ミス・リープデイを吹き飛ばした。

咄嗟に顔を腕で覆ったエレノアは、凄まじい炎を放つてみせた相手に思い至り、驚きで目を見張った。

「手を貸そうか…? ウイザード妖術師!!!」

「大佐……」

「焔の錬金術師……マスタング・ロイ!!!」

家屋の壁に叩きつけられた美女が、忌々しげにマスタングを、そして続々と現れる海兵たちを睨みつけながら呟く。

憤怒を抱いていたその顔はすぐにとりつくろわれ、ハツと鼻で笑いマスタングに皮肉をこぼした。

「海兵が海賊と共闘するなんて……知られたら一大事じゃなくって？」

「なに……利害が一致したから利用しているまでのことだ」

肌に火傷を負った美女は、さほど気にした様子もなく立ちあがる。

しかし顔を上げるよりも前に、先ほどのMr. O. 5と同じように片足から鮮血が噴き出し、がくと膝をついた。

「ぐっ……!!」

「……!! この命中精度は……中尉か!!」

見えない攻撃に、狙撃されたのだと直感したエレノアは、それを可能とする海軍有数の狙撃手スナイパーに思い至って納得の声を上げる。

マスタングは驚嘆の声を上げるエレノアに、得意げに笑みを見せた。

「本当の意味で『鷹の目』と評される中尉ならば、この程度造作もないことだ」

『近くに水場があるのでどうしても不安になってね…』

「ああ……濡れると役に立たねエからな」

「湿気たマツチとかいうなよ!!!」

小電伝虫越しにホークアイから、部下の一人のハボックからバカにするような視線を

向けられ、思わずマスタングは声を荒げる。

部下たちからさんざんいじられたマスタングは気を取り直すように咳ばらいをし、エレノアに呆れた視線を向けた。

「貴様が苦戦するのだからどれほどの脅威かと思えば……拍子抜けだったな」

「違うよ大佐……そうじゃないんだよ」

「……やつてくれるじゃないの」

肩をすくめていたマスタングは、冷や汗を流すエレノア、そして美女の声に思わず目を見張る。

ミス・リープデイは、足を撃たれたとは思えぬほどスムーズに立ち上がり、マスタングを見据えていた。撃たれた傷跡も、いつの間にか見えなくなっている。

「困ったわね……人柱候補が次々に」

「食べていい？」

「食べちゃダメ……でも、そうね」

Mr. O. 5までもが、けろりとした様子で戻ってきている。

涎を垂らして見つめてくる相棒に、ミス・リープデイは何事か考えながら、にやりと笑みを浮かべた。

「逃げられないように両足を食いちぎるくらいならいいかしら」

その笑みに、エレノアの背筋に本能的な寒気が走る。

同じくマスタング達も表情を変える横で、パチンと指を鳴らして火種を起こし、灼熱の炎の斧を作り出した。

「喰らえ……!! ブラフマーストラ 羅刹王斬!!!」

生み出された斧が回転し、リング状の炎の刃へと変わる。

大気をも焼き焦がすそれを頭上に掲げたエレノアは、それを迷わずミス・リープデイとMr. O. 5に向けて思い切り投げ飛ばした。

「ねーラスト。アレ……食べていい?」

「ええ……いいわよ」

強烈な熱を持ったそれが迫りくるも、やはり二人の表情が劇的に変化することはなかった。

今度は涎を垂らしたMr. O. 5が前に立ち、大きく腹を見せて立ち塞がった。

「オーブンセサミ 亡者の扉!!!」

にんまりと異形の男が嗤った直後、放たれた炎の刃に変化が生じる。

Mr. O. 5の腹の中心に向けて飛んでいったそれが、あつという間に勢いを失って最後には跡形もなく消えてしまったのである。

あんぐりと口を開いて呆ける一同の前で、Mr. O. 5は不満げに腹を撫でた。

「味はいまいち……がっかり」

「ウソでしょ……!!?」

さすがのエレノアも、目の前の光景に絶句せざるを得ない。

ミス・リープデイは、そんな彼女たちにつまらなそうに目を細めていた。

「こんなところで何度も死んでいられないのよ……遠くからちよつかいかけられるのもうつとうしいし……そうだわ」

名案を思いついた、とでもいうように、ミス・リープデイは相棒にちらりと目を向ける。悍ましい黒い笑みを浮かべて。

「Mr. 0. 5、食べておいで」

Mr. 0. 5はその言葉に嬉しそうに口角を上げ、素早い動きで宙に飛び上がる。

啞然となる一同の目の前を飛び越し、ホークアイがいるであろう方角へあつという間に駆け抜けていってしまった。

「悪魔の实の能力者か!!?」

「オイオイ……!! こりやちよつと分が悪すぎりやしやせんかイ!!?」

「それならもつとやりようがあつただけどね……」

戦慄の表情を浮かべるハボックやマスティングをよそに、エレノアの表情は彼らよりも悪くなる。

その手には、素早く錬成された石の槍が握られていた。

「^{ドゥリンダナ}不毀剛槍!!!」

生み出した石槍を振り回し、エレノアがミス・リープデイの体を薙ぎ払う。

きやしやな体は骨を砕かれながら宙を舞い、カジノのあるオアシスの中に叩き落とされる。

だがすぐにまた、平然とした様子で水中から這い上がってみせた。

「ヒドイじゃない。せつかくの晴れ着が台なしだわ」

「水に落とされても平気なのか…?!」

「マジのバケモンかよ…!!!」

悪魔の实の共通の弱点であるカナツチ、それが通用しないとわかり、余計にマスタング達に動揺が走る。

悠然と立つミス・リープデイに、エレノアが頬を引きつらせながら尋ねた。

「さつきから思ったんだけどさ…あんだ。なかに何人入ってるの?」

不意の質問に、マスタングが訝しげな横目を向ける。

構わずエレノアは、意味深な笑みを浮かべるミス・リープデイを、正確に言えばその胸の中心に目を向けて冷や汗を垂らしていた。

「ざっと聞いただけでも数百から数千…いやもう数万はいるよね。どこからそんな大

量に取り込んできたのさ……怨嗟の声で耳がおかしくなりそうなんだけど」

「待て、ウィザード妖術師……何を言っている」

「……そのえげつない再生能力と赤い錬成反応、そして私が感じる無数の気配……信じがたいけど間違いないわ」

エレノアが初めて見せる、余裕を失くした狼狽の表情。

その事実気づいてしまったがために、エレノアは足止めを買って出た自身の軽率な考えを激しく後悔していた。

「賢者の石持つてんでしょ……しかも完全な」

「……あら、バレちゃった？」

エレノアの問いに、ミス・リープデイは愉し気な笑みを見せつけるのだった。

第99話 “当ててみなよ”

「『賢者の石』……………だと!?!」

エレノアが口にしたその単語に、マスタングが大きな反応を見せる。

無理もない、それは伝説上にしか聞かない、幻の存在なのだから。

「おい…冗談にしてはタチが悪いぞ」

「言つとくけどねエ……………私だつて言いたくないよ。だつて本当にそうだったらシャレにならないんだもん」

「残念だけど、ご名答なのよね…ここまでたどり着いたごほうびに見せてあげる」

恐ろしい笑みを浮かべたミス・リープデイが、自分の胸の中心に爪を突き立て、ぎちぎちと肉を開いていく。

悍ましい行為の果てに見えたのは、心臓部分に鎮座する赤い宝石のような物体だった。

「見えるかしら? 『賢者の石』よ…この石を核に造られた人間、それが私達よ」

「…笑えねエ…」

「…化け物め!」

ミス・リープデイが爪を離すと、すぐに肉が再生して傷口が消えていく。

もはや疑う余地もない。この謎の美女は、常識をはるかに超えた力を秘めているのだ。

その時、エレノアの耳が遠くで鳴る風の音を捉えた。

「砂嵐……!! クロコダイルか……!!」

びゅう、と砂塵を撒き散らす砂の暴風が、南に向かって流れていく。

ここまで突発的な発生は自然界ではありえず、あの能力者が何かしたのだと判断できた。

「……ねエ ウイザード 妖術師」。あの砂嵐の子供が見えるかしら？ このあたりの卓越風は常に

北から南へ吹いているわ。もしも……あれが卓越風に乗って成長しながら南へ下つていくと、大きくなった砂嵐はどこへいくと思う？」

訝しげに砂嵐を凝視していたエレノアに、ミス・リープデイは挑発するように語りかける。

その意味深な口調に、エレノアの胸中にいやな予感が渦巻いた。

「……………まさか」

『ユバ』よ」

「……………!!! 貴様ア~~~~!!!」

「落ちつけ!!」
妖術師ウイザード「!!!」

師が、その家族がいる幾度も苦しめられ続けた町に再び脅威が迫りつつある。

それを遊戯かなにかのように愉しもうとしている敵に、エレノアの怒りが錬金術として爆発する。

炎と金属が、パンツと手のひらを合わせたエレノアのもとに集い始めた。

「スダルシャンチャクラ
憤怒転輪」!!!」

巨大な鉄の輪が高速回転を始め、それに高熱の炎が纏われる。大気も地面も溶かすほどのそれが、エレノアの蹴りによって放たれ、大地をえぐりながらミス・リープデイに迫る。

あつという間に業火が美女を呑み込み、とてつもない爆発を起こして建物ごと吹き飛ばしてしまった。

「……やっぱ恐エー」

咄嗟に物陰に隠れたハボックやほかの部下たちが、その威力に冷や汗を流す。

周囲への被害も何も考えず一撃を見舞ったエレノアは、肩を上下させて黒煙の上がる方を睨みつけていた。

「………焼け死んだかね?」

「あの再生力はあなどれん、気をつけろ」

一向に復活する様子が見受けられず、終わったのかと恐る恐る銃を構え、近づいていくマスタング達。

その時、エレノアの勘が何かを感じ取った。

「ハボックさん!!!」

気配のした方へ、急ぎ叫ぶエレノア。

しかしその時にはすでに、地面から突然伸びた腕が、ハボックの腰を貫いていた。

「がっ…!!?」

「ハボ——ック!!!」

気づいた他の部下、ブレダとファルマンが振り向いて銃を構えるが、見る見るうちに体が再生していくミス・リープデイが接近し、襲い掛かる。

辛うじてそれを躲すことはできたが、恐るべき切れ味の爪を前に反撃もままならなくなってしまった。

「ハボック!! しっかりしろ!!!」

「ダメね、もう助からない」

倒れ込んだハボックを案じ、一刻も早くこの脅威を排除しようとするマスタングだが、味方を巻き込む距離に迫られてしまいそれも叶わない。

だが、我が物顔で暴れるミス・リープデイの背後から、決死の覚悟を決めたエレノア

が踊りかかった。

「まだだ!!!」

両手にいくつもの小さな短剣を構え、ミス・リープデイに向けて投擲する。

短剣は全身の急所に突き刺さるが、やはりすぐさま再生し、一切の傷が消えていった。

「無駄よ!! まだまだ私は死なない!!!」

「んなこたアわかってんだよ!!!」

声を荒げたエレノアが、右腕を大きく掲げてさらに迫る。

手袋を一瞬で改造し、指の先に鋭い鉄の爪を備えたエレノアが、ミス・リープデイの胸の中心にそれを突き立てた。

「ああああああああああっ…!!!」

「その石の力を借りるだけだ!!! よこせ!!!」

一切の迷いなく、エレノアは美女の胸を引きちぎり、赤く輝く宝石を握りしめ一気に引き抜く。

賢者の石を奪われた美女は、次の瞬間塵となってその場に崩れ去っていった。

「大佐!!! 早く治療を!!! 私は無理!!!」

「そうか…!!! 治療系の錬金術は専門外だが、たしかに石の力で底上げすれば…」
手に入れた賢者の石を、エレノアがマスタングに向かって投げ渡す。

意図を理解したマスタングが、希望を垣間見た表情でそれを受け取り、さつそく術を行使しようとした、その時だった。

マスタングの脇腹に、黒く鋭い刃が突き刺さった。

「……………あ」

「乱暴に扱つては、淑女レディに嫌われるわよ……………マスタング大佐」

マスタングの表情が、一瞬で苦痛と絶望に染まる。

引きちぎられた賢者の石が、あつという間に美女の上半身を再生させ、驚異的な凶器を振るわせていた。

急所を貫かれたマスタングは、どきりとその場に倒れてしまった。

「大佐ア!!!」

ブレダとファルマンが大佐の前に降り立ったミス・リープデイを狙い、迷いなく発砲する。

しかしそれすら意に介さず、美女は二人の海兵に向けて爪を一閃した。

「言つたはずよ、『賢者じつの石いしが核だ』と。私達はあなた達人間より真理に近い存在、進化をとげた新たな人間の形……でも言っておきましょうか？」

バタバタと血を流して倒れていく二人を凝視し、エレノアは呆然と立ち尽くす。

その一瞬の隙を美女は見逃さず、一瞬でエレノアの目の前に接近し、天使の脇腹を

深々と突き刺し、斬り裂いた。

「あなたは優しすぎたわ……優しすぎるから、こうしてつけいられるスキが生まれる。だからこうして……無力に誰も助けられずに死んでいく」

目を見開き、掠れた呼吸を繰り返すエレノアの耳元に、美女は嘲笑うように語りかける。つつ、と頬を撫でる手が、絶句するエレノアに恐怖を刻み込む。

「あなたの敗因は……そういう事よ」

ミス・リープデイはさらに、エレノアの胸に向けて爪を振るう。

衣服がぼつくり切れたかと思うと、遅れて夥しい量の鮮血が噴き出し、辺りを真っ赤に染めていく。

天使は白い肌を汚され、ゆっくりと地面に墜ちていった。

「さて、せっかくだから同僚たちの応援に回ろうかしら。目の前で友人が冷たくなっていくのを見ながら、あなたも逝きなさい」

じわりじわりと、地面に鮮血が広がっていく光景を、マスタングは苦痛に顔を歪められながら見つめるほかになかった。

「ハボック……ファルマン……ブレダ……ウィザード妖術師……おいお前達!!! 返事をしろ!!!」

誰も応える者のいない、無人のオアシスの町で、マスタングは悲痛な叫びを上げ続けていた。

場所はかわり、首都アルバーナの西門付近にある岩場。

そこにはMr. 1以下のオフィサーエージェントたちのほとんどが勢ぞろいし、向かってくるというビビたちを待ち構えていた。

「問題は、どこで待ち受けるかよ…敵は仮にも我が社のNo. エージェント。6人消してきた海賊団…」

「そうねい!! ナニセ当のビビ王女が元パロックワークス社員だつてんだからね〜いっ!!」

「回んじやねーよこのオカマ!!」

クロコダイルから指令が下されたのは、少し前のこと。

捉えた少数海賊達が脱走し、反乱軍を止めるためにここ、アルバーナへ向かっているという情報もたらされたのだ。

反乱が止まれば、これまでの苦労が水の泡。なんとしてでも阻止しなければならなかった。

「——でも『ダマシ』ならあちし、負〜けナ〜イわよ〜う!!!」

「……まあ私達が一気にカタを付けてもいいけど…どうする?」

「フン…」

「待〜ちなアこの『バツ』共め、フザケンじゃないよ!! おめーらの出る幕なんてなにキマツてんだろ!! そうだろMr. 4!!」

「う」

「ノロいつてんだよおめーはよ!! あ腰痛つ!! あたしらが一番にいかしてもらおうよ!! 要は王女^{ビビ}を消せばいいんだろ!!」

例え格下の弱者であろうと、敵として立ちほだかる以上は排除すべき存在。多少の違いはあれど、それぞれ戦うことに意欲的になっていた。

だがビビたちを待っている間に、南門のある方角から凄まじい地響きと雄叫びが聞こえ始めていた。

「オイオイオイオイっ!! それ大丈夫かい!! やれ大丈夫かい!! 本当に来るんだろうね、王女と海賊共は。もう反乱の雄叫びが聞こえてんじやねーかね!!」

せつかくやる気になっていたのに、とせつかちなミス・メリークリスマスがぼやく。ビビたちの姿は、いまだ影も見えてはいなかった。

「これじゃ先に反乱軍が到着しちゃうよっ!! 止める気あんのかいまったくっ!!!」

「…間に合わないってケースも多分にあるのよ。何しろ『レインベース』で彼らは大幅に時間をロスしてるんですもの」

「何?! そうなのかい?!」

初耳だ、とミス・ダブルフィンガーの話に驚くミス・メリークリスマス。

それに対し、Mr. 2・ボン・クレイが踊りながら不思議そうな顔を向けた。

「じゃあ…!!! 反乱が先に始まつちやつたらバ、あちし達はドウーすればいいのう!!!」

「…ドウーもしなくていいんじやなくつて? 戦争が始まつちやえばたとえ王女といえど、もう何もできないわ」

ぶつかり合うのは何千何万もの人々。

一旦戦いが始まればそこはもう地獄。その中からリーダーであるコーザを見つけ出すのは、どう考えても不可能だろうと、ミス・ダブルフィンガーはたばこの煙を燻らせた。

「消せと言われたヤツをおれ達は消せばいいんだ…!!! それくらいも判断できねエのか、オカマってのは」

「ヨツツツポドオカアマ拳法食らいたいらしいわねい!!! おオ!!!」

「おやめなさいつたらあなた達」

「あつ!!! 腰イ!!! 腰にきたつ!!! Mr. 4 マツサージを」

味方とはいえ、誰もかれもが個性も我も強いワンマンな暗殺者たち。仲良くしろという方が難しい連中だった。

そんな中、双眼鏡を除いていたMr. 4が非常にゆつくりと声を上げた。

「きい~~~~~~~~てえ~~~~るう~~~~ぞお~~~~……」

「何イ!!? さつさと言わねエかい、このウスノロダルマ!!!」

実はずっと前から呼びかけ続けていたのだが、あまりにのんびり喋るうえにケンカに邪魔され、全く届いていなかった。

焦れたミス・メリークリスマスがMr. 4から双眼鏡を奪い、覗き込むと、その目が驚愕に開かれた。

「カ……………!! カルガモ!!!」

砂を蹴って向かってくる、六つの影。そして六匹の大きなカルガモの背に乗っている人らしき影が、徐々に迫りつつあった。

「あっち見て!! 『反乱軍』が見えたわよう!!! ス~~~~ゴイ数ねいっ!!! アレを止めようつて王女はとんだイカレポンチねいっ!!! でもその王女イカレポンチがこつちから来てるのねいっ!!!

“あやふや”!!!

Mr. 2・ボン・クレールが待ちかねたというように明るい声を上げる。

だがミス・メリークリスマスは、先ほどとは打って変わって焦りを滲ませながら口を開いた。

「Mr. 1……………王女ビビ一人消せばそれでいいって…? じゃあおめー、どれが王女ビビだか当ててみなよ」

ミス・メリークリスマスの声に、Mr. 1がすぐさま同じ方向を見やる。

双眼鏡がなくとも見える位置に、すでにカルガモたちは迫っている。

問題は、その背に乗っている誰もかれもが、同じ格好をしているということだった。

「んげげ!! あいつら全員同じマントを!!」

「…しかもあの鳥はアラバスタ最速の『超カルガモ』!!」

「オノレ!!! これじゃあどいつが王女何だか…!! あやふやじゃないのようっ!!!」

自分の得意分野をそのまま返されたように感じたのか、Mr. 2・ボン・クレールが悔しげな声を上げる。

ミス・メリークリスマスはすかさず、相棒であるMr. 4に合図を送った。

「やっちまいな!! Mr. 4!!!」

Mr. 4はバズーカを担ぎ、一味に向けて砲弾を放つ。

しかしそれを見たカルガモたちは、機敏な動きで左右に分かれ、紙一重で爆発から逃れた。

「よけた!!! 速いわねいつ!!! あの鳥達!!!」

「南へ2人抜けたっ!!! 別れる気だ!!!」

「南門へ向かうつもりだね。南門は反乱軍の真正面!!! となりやあのだつちかがビビか

…!!!」

カルガモたちは三方向へ分かれ、それぞれ別の門の方へ分かれていく。

よく見れば一匹に二人のつっている騎もあるためため、余計にどれに誰が乗っているのかわからなくなっていた。

「あの2人はあたしらに任せな!!! 行くよMr. 4!!!」

「うう~~~~んん~~~~」

「コイツら……!!!」

「西門へ入るつもりよっ」

「追うぞ」

「あアン!!!? ドウツ!!!」

影の一人がMr. 1を狙撃し、Mr. 2・ボン・クレーを轢き飛ばし、迷いなく別々の門へと入っていく。

明らかな挑発に、全員の闘志に火がついた。

『『アルバーナ』に5つある門の内西から狙える門は3つ!! そこからバラバラに入ろうってわけね…!! 同じよ!! 中で抹殺するわ!!!』

「逃がしやしないわよオ~~~~う!!!」

エージェントたちは異様な脚力で、アラバスタ最速のカルガモたちを追い、首都へと侵入していった

「うっふっふっふ!! よくここまでついて来てくれたわね!!」

「何イ!!」

西、南西、南、三つの門から侵入したカルガモに乗った一味は、ある程度門から離れると唐突に歩みを止めた。

「ストップストップ!! あなた達勘がいいわ。そう! 私こそがビビ王女♡」

「何言つてやが…言ってるの? 私が真のビビだよ!!」

街中で、遺跡近くで、言雄なる三つの場所で立ち止まった一味が、追いかけてきたエージエントたちを出迎える。

「()まで来りやいかしら………♡」

「ん!!」

まるで、罨にかかった獲物を確かめるように。

「ギア正体を見せて上げましょ」

そして彼らは、纏っていたマントを脱ぎ捨ててその正体をあらわにする。

足りない人数をごまかすために用意した、かかしを辺りに投げ捨てながら。

「()残念、ハズレ()」

その中に、ビビの姿はどこにもなかった。

(ありがとう、みんな……!!)

門から少し離れた砂漠で、ビビは悲痛な表情で感謝の念を送る。

囿となった仲間達の想いを、決して無駄にはしないと覚悟を決めて。

「……………急がなきゃ…反乱軍はすぐそこまで来てる」

「ああ」

「はい」

「行くわよ、みんな!!」

全員が突入するまで身を細めていたビビが、同じく姿を隠していたエドワードとアルフォンスを伴い、立ち上がる。

南門に、エージェントの誰もいなくなったことを確認し、一直線に走り出した。

——ここで止めなきゃ、何もかもが無駄になる!!

すべての想いを背負い、王女と護衛達は砂漠を駆け抜けていった。

第100話 漢を見せる野朗共

砂漠の向こうに、大きな砂埃が見える。

その正体が、王宮に向かってくる反乱軍だと知りながら、ビビたちは決してそのから動こうとはしなかった。

「いいのよ？ カルー、ここにいなくても…」

「グエツ」

「踏みつけられても知らないから…!!」

ガタガタ震えるカルーも、ビビの言葉に首を横に振る。

相棒として、友として、自分だけ逃げるなどあつてはならない選択だった。

「…ペットは飼い主に似るってやつかな」

「ああ…確かにそっくりだ」

エドワードとアルフォンスもそんな頑固者を見やり、自分たちも似たような物であると苦笑する。

今の兄弟にとって、ここにいるのは自分の願いの為ではない。

仲間の願いをかなえるためだ。

「全体散るな!!! 南門一点突破!!! 次いで全門内部から討ち崩す!!! 覚悟を決めろ!!!」
「「「ウオオオオ——!!!」」」

戦闘の馬に乗るコーザの声で、背後に続く反乱軍が咆哮を上げる。

何があるうとも決して止まりはしない、退きもしない、そんな不退転の覚悟を感じさせる咆哮だった。

そんな彼らの前で、ビビは一人、両手を広げて立ち塞がった。

「止まりなさい!!! 反乱軍!!!」

怒号が響き渡る中であっても、非常によくとおるビビの声が放たれる。

だがそれは、突如背後から撃ち込まれた砲弾による爆発で、無残にかき消されてしまった。

「おい!! 今あの辺りに人影がなかったか?!!」

「人?!! …バカ言ってる場合か!! それより奴ら、もう撃ち込んできやがった:!!!」
進行方向上で突然起こった砂埃に、反乱軍は怒りをさらに募らせる。

彼らにとつては、自分たちを近づかせまいとする国王軍側の牽制に思えたようだが、その実態は違った。

「なによ…なによ…これじゃ視界が…」

「しまった…!!! 敵はもう向こう側にも混じってるんだ!!!」

狙いすましたかのように目の前で上がる砂埃に、ビビやエドワードが愕然とした声を上げる。

だがもう遅い。唯一声が届きそうだったタイミングが、今の砲撃によつて奪われてしまった。

「怯むな!!! 突っ込めエ!!! ただの砂埃だ!!!」

「だめよ!!! みんな止まって!!!」

「我らが国の為!!! 王を許すな!!!」

視界は砂埃で、声は反乱軍の咆哮で妨げられ、ビビの制止の声は届かない。

怒りに燃える反逆者達には、真実を伝えようと足掻く力なき王女の声は、あまりに遠すぎた。

——リーダー!!!

一瞬、ほんの一瞬だけ、コーザの耳に聞き覚えのある声が届く。

だがそれは、耳鳴りか錯覚としか思えないほどか細く、遠い声だった。

「どうした、コーザ」

「……………!! ……いや…何でもない…!!」

知っている声に気をとられたコーザだが、すぐに首を振つて視線をアルバーナに戻す。

リーダーである自分が、こんな調子ではだめだと自分に叱咤し、進軍速度をさらに上げた。

「待って、話を!!!」

「いいか、これが最後の戦いだ!!!」

「リ……」

誰か一人でもいい、と声を張り上げるビビだが、反乱軍の勢いは一切止まらない。

無数の馬たちの蹄が迫る中、目を見開いた彼女に大きな影が覆いかぶさった。

「行くぞ!!! 反乱軍!!!」

「来るぞ、砲撃用意!!!」

「アルバーナを攻め落とせエ!!!」

「数に怯むな、打って出ろ!!!」

王女の必死の叫びも虚しく、反乱軍は南門に辿り着き、長い階段を駆け上がり王都へと侵入していく。

あつという間に、突破しようと咆哮を上げる反乱軍と、それを防ごうと武器を構える国王軍が激突する、泥沼の地獄が作り上げられてしまっていた。

「アル!! アルフォンス!!!」

誰もいなくなった砂漠で、エドワードが弟に呼びかける。

エドワードもビビもカルーも無事だったが、唯一アルフォンスだけがその鎧の体をボロボロにしていた。

「アルフォンスさん……あなた……私達を庇って……!!?」

「クエー……」

「……!! 平気……です……!!!!」

「ごめんなさい……こうまでしても……!! 反乱は始まってしまった……!!!!」

迫りくる反乱軍に、ビビはいつの間にか巻き込まれ、危うく踏み潰されそうになった。それを身を挺して守ったアルフォンスに、ビビは申し訳なくて仕方がなかった。

「……だけど止めるわ!!! 何度はね返されたって……!! 船でちゃんと学んだのよ!!! 諦めの悪さなら!!!」

キツと涙をこらえ、ビビは顔を上げて首都を見据える。

まだ止められる。ここで諦めたら、それこそすべてが終わってしまう、そう自分を鼓舞する。

そこに、新たに蹄の音が近づいてきた。

「ビビ!!! こっちに乘れ!!!」

「ウソツプさん!!!」

「その鎧のはもうダメだつ!!! 急がねエと反乱はひどくなる一方だぞ」

白馬にまたがったウソツプが、真剣な表情でビビを呼ぶ。

だが、一瞬それに応じかけたビビは、ウソツプが口にした言葉に違和感を覚え、表情を凍らせる。

「どうした、早くこつちに……!!!」

「……………ウソツプさん……!! 証明して……………!!!」

訝しげに尋ねてくるウソツプに、ビビはかたい表情で問う。

ウソツプは得意げな顔で、ビビたちに布を巻いた左腕を見せた。

「おい、おれを疑うのか!! ほら」

その行為で、ビビたちは違和感が正しかったことを確信した。

———いいか、あのオカマ野郎の変身は完璧だ。

いつ、この中の誰かになりすましてビビの命を狙ってくるかもしれないねエ。

仲間を少しでも妖しいと感じたら……………この包帯を取って“印”を見せあう。

それができなきやニセ者だ。

ゾロが提案した、仲間と仲間に変装した敵との見分け方。

目の前のウソツプがそれを完全にできなかつたことで、ビビ達はすぐさま、目の前の

彼が敵だと判断できた。

「カルー!!! いけ!!!」

「クエー——ッ!!!」

「アルフォンスさんっ?!? エドワードさん?!?」

エドワードが前に立ち、それに応じたカルーがビビを背中に背負って走り出す。

予定と違う反応に、ウソツプにすり替わった敵は、にやりと黒い笑みを浮かべてエドワード達を睨みつけた。

「……全員が同じ印を巻いていたと0ちゃんから報告があったのにねい」

その顔に左手が触れ、一瞬で変化が起こる。

凄まじき変身能力を持つエージェント、Mr. 2・ボン・クレーは、忌々し気に目を細めた。

「チィ……!!! 何でバ……レたのカ……シラね……うい♡」

「やっぱり……!!! Mr. 2……!!!」

エドワードが右腕に刃を生やし、ボロボロのアルフォンスが無理矢理体を起こす。

立ちほだかる一度は友と呼んだ青年たちの前で、Mr. 2・ボン・クレーは独特な拳法の構えを取った。

「おどきなさ……い!!! 友^{ダチ}達でも容赦しないわよ……う!!!」

「ここから先には……!! 王女様のところへは行かせない……!!」

「かかつてこいやオカマ野郎!!」

「エドワードさん……!!」

「振り向くなア!!」

ビビは遠くなつていく二人に、悲痛な声を上げる。

だが、組織でも指折りの実力者である男を相手にし、エドワードとアルフォンスはとうに決死の覚悟を決めていた。

「あんたはただ……!! 前に向かつて進みやがれ!! この反乱を……あいつらの野望を止めてくれ!!」

「逃くくがさなくくくいわよくくくう!!」
「オカマデヤ——ツシュ」
「!!」

優先すべきはビビの命だと判断し、Mr. 2・ボン・クレーはとんでもない跳躍でエドワード達の頭上を跳び越えようとする。

だがその足に、エドワードがすぐさま縋りついた。

「ぶべばっ!!」

「行かせねエつつつてんだろうが……!! げふっ!!」

しがみつくエドワードは、強烈な蹴りを受けて吹っ飛ばされてしまう。

すぐに向かおうとするアルフォンスも、歪んだ鎧ではうまく動けないのか簡単に蹴り

飛ばされてしまった。

「コザかしいのようっ!!!」

「行かせるかよオ!!!」

だがどんなに足蹴にされ、張り倒されようと、兄弟は決してMr. 2・ボン・クレイから手を離さない。

その懸命な努力は、ついに実を結んだ。

「デふっ!!!」

しつこい兄弟の奮闘に苛立っていたMr. 2・ボン・クレイが、突然後頭部に衝撃を受けて吹っ飛ばされる。

奇妙な体勢で、砂地の上を顔面から滑っていった。

「だバダバださバダバダバダ!!!」

遠く離れた岩場に激突するMr. 2・ボン・クレイを、着地した二匹のカルガモが睨みつける。

満足げな彼らに、エドワードとアルフォンスは大きく目を見開いた。

「お前ら!!!」

「よくやったな、エルリック兄弟。男だぜ!!!」

にやりと笑みを浮かべ、一味のコックが悠々と歩み寄る。

兄弟を背にした彼は、敬礼するカルガモたちにちらりと視線を送った。

「おめエらも…さがつていいぞ」

「サンジさん…!!」

「おつせエよ…色男!!」

「そのオカマ、おれが引き受けた」

サンジに促され、兄弟は傷だらけの体に叱咤して立ち上がり、王都に向かって走り出す。

ちょうどそのタイミングで、Mr. 2・ボン・クレールが復活して怒号を上げた。

「ジャマすんじゃないわよ——う!!! 誰!!? あんた誰!!?」

「行け!!!」

「おう…!!」

振り向きそうになるエドワード達に吠え、サンジはMr. 2に向かって駆ける。

Mr. 2・ボン・クレールもまた、新たな邪魔者に対し怒りを燃やし、突進を始めた。

「アアンタ!!! ジョ〜〜ダンじゃな——いわよ——う!!! 死になサ〜〜〜イ!!!」

「とりあえずてめエにや、ウチの狙撃手の大切なゴーグル…返して貰おうか」

互いに面識のない、しかし敵対していることだけを理解している男二人が、激しくぶつかり合った。

「ウエあ!!!」

兵士の一人を叩き伏せ、戦場を駆けていたコーザはいったん物陰に潜る。

その顔が苦痛に歪むのを見た仲間の一人と傷の男は、コーザを案じる様子を見せた。

「コーザ!!! お前、まだナノハナでの銃弾が……!!!」

「ここは戦場だぞ、そんな事はどうでもいい!!!」

自分の痛みすら斬り捨てるコーザに、二人は何も言えず口を閉ざす。

銃弾の飛び交う地獄を見やったコーザは、斃れてしまった自軍の馬を見やって眉間にしわを寄せた。

「馬を何とか奪いたい……!!! この通りを抜けて中心街を通れば、宮殿のある北ブロックへ入れる!!!」

「宮殿へ!!! 何をする気だ!!!」

「国王に降伏を要求する!!!」

「バカ言え!!! 北ブロックにはチャカヤペルを含んだ国王軍本体がいるんだぞ!!!」

「おれたち反乱軍だつてまだ集結しきつてない!!! 他の町からまだ援軍だつてやってくるんだ!!!」

「お前一人先走る必要はないだろ!!!」

戦いはまだ始まったばかり、戦況も明らかになつていない状況下でそんなムリを通す

必要はないと仲間は止めるが、コーザの決意は固かった。

「……もう遅いくらいさ。ここは任せるぞ、旦那!!! 手を貸せ!!!」

「おい、コーザ!!!」

一人で向かってしまうコーザの背中を、傷の男は険しい表情で見やる。

その時、背後から迫ってきた国王軍の兵士がいたが、傷の男は振り向きもせず顔面を掴む。

「死にたくなければ大人しく寝ていろ……!! 我は今……機嫌が悪い……!!!」

ゴキイ!!と頭蓋骨をやられた兵士が、白目を剥いて倒れこむ。

多大なダメージを受けているが、傷の男が加減したのかまだ死んではいなかった。

コーザの願い通り、この場を引き受けようと腰を上げた傷の男だったが、その目にあ
る乱入者の姿が映った。

「おらア!!!」

即席で作った槍を振り回し、エドワードが兵士と反乱軍を殴り飛ばす。

どちらも腕にバロックワークスの刺青が見えたためだったが、周囲からすれば正気を
疑う暴挙だった。

「クソツ……!! ややこしくて仕方ねエ……王女さんともだいぶ引き離されちゃった……

!!」

「どこに潜んでるかわかったもんじゃありません!! もっと目立つような目印があればいいのに……!!!」

戦いを煽る人間がいる以上、先にそちらを叩かねば止めることは難しい。

そう思つて戦場を走りつつ、ビビの姿を探す兄弟だったが、もはやそれすらも難しくなっていた。

険しい顔で立っているエドワードに、兵士を装ったエージェントの一人が銃口を向けた。

「チツ…余計なマネしやがって…死……ねんっ!!?」

「ストライク!!!」

「ボクの頭を弾代わりにしないでよ!!!」

だが、とっさに反応したエドワードがアルフォンスの兜を投げつけ、見事に命中させる。

頭を取り戻しに行くアルフォンスをよそに、エドワードは歯を食いしばった。

「とにかく追いつかねえと…!!!」

「お…おい!! き…君は!! エリック・エドワードか!!?」

いざ動こうとしたエドワードに、兵士の一人が信じられないといった様子で声を変える。

訝し気に眉を寄せたエドワードは、次の瞬間思わず目を見開いた。

「あ!! なんか見覚えのあるような……」

「なんで君がこんな所にいるんだ?! ここは君のような子供がいていい場所では……!!」

「それどころじゃねーんだっての!!! さっさと王女さんのところに……」

巻き込まれただけ、とでも思ったのか、親切心を働かせて近寄ってくる兵士にエドワードは焦りを見せる。

ここで足止めを食っている場合ではないのだ、と伝えようとした時だった。

「エルリック・エドワード……鋼の錬金術師……!!!」

凄まじい殺気が、エドワードに襲い掛かった。

兄弟にはとんと見覚えのない褐色の男が、サングラス越しに濃厚な殺意を表していたのだ。

だがその格好に、兵士の一人が愕然とした表情を見せた。

「国家錬金術師……世界政府の……狗……!!!」

「き……貴様!!」 その額の傷……まさか……!!!? 世界的指名手配犯の……国家錬金術師殺し

の……「傷の男」……!!!」

いつだったか王宮にもたらされた、凶悪な犯罪者の手配書。

それと全く同じ顔が目の前にあることに動揺し、兵士は咄嗟に銃口を突き付けてい

た。

「よせ!!」

いやな予感がしたエドワードが止めたが、すでに遅かった。

ガシツと顔面を掴まれた兵士は、青い閃光を食らったかと思うと、全身から血を噴き出させて白目を剥いた。

「神の道に背きし錬金術師、滅ぶべし!!」

倒れこむ兵士を放置し、傷の男はエドワード達に向かってゆっくりと近づいていく。

その姿は、まさに狂人のそれであった。

第101話 “傷の男（スカー）”

凄まじい殺気を放ちながら、見下ろしてくる傷の男。

崩れ落ちる兵士の姿に呆然となり、エドワードとアルフォンスは一步も動く事ができないでいた。

これまで相対してきた敵の誰よりも危険な存在に、何一つ行動を起こせないでいた。その金縛りが解けたのは、全くの偶然だった。

彼らのすぐ近くで起きた爆発が、兄弟の意識を現実に戻した。

「……っアル!! 逃げろ!!!」

「……逃がさん!!」

走り出したエドワードとアルフォンスを、傷の男は鬼の形相で追いかける。

瓦礫が転がる、戦闘中の町の中を、エドワードとアルフォンスは必死に走り抜けていった。

「“傷の男”^{スカー} って…聞いたことがある!! 素性も武器も目的も不明で神出鬼没の…額に大きな傷があるってことしか情報が無い謎の人物!!! 国家錬金術師や政府関係者ばかり殺してるって…!!!」

「ちくしょーこのややこしい時に!! 人にうらみ買うようなことは………いっぱいしてるけど……あいつら以外に命狙われるスジあいはねエぞ!!」

「兄さん、こっつちー!」

素早さに自身のあるエドワードだが、ボロボロになつて動きづらいアルフォンスがいるためにそれほど速度が出せない。

アルフォンスは意を決し、わき道に入ると一度足を止めた。

「こんな路地に入つてどーすんだよ!!」

「いいから!!」

アルフォンスは急いでその場にしゃがみ込み、素早く地面に錬成陣を描いて力を込める。

すると次の瞬間、地面の土が盛り上がつてあつという間に壁が出来上がった。

「これでほかの人を巻き込まずに済む!! とりあえずはこれで……」
時間稼ぎにはなるだろう、と安堵する兄弟だったが。

青い閃光が走つたかと思うと、壁は傷の男によつて粉々に破壊されてしまった。

「でえええええ!!」

足止めもできず、悲鳴を上げてまた走り出すエドワードとアルフォンス。

傷の男はすぐ横の建物に手を当て、青い閃光を走らせて壁を破壊し、兄弟の目の前で

崩れさせて障害物を作り出した。

「…冗談だろ…？ あんた何者だ。なんでおれ達をねらう？」

「貴様ら『創る者』がいれば『壊す者』もいるという事だ」

退路を断たれたエドワードは、ゆっくりと近づいてくる傷の男を凝視し、冷や汗を流す。この非常時に、ここまで執着するなど普通とは思えなかった。

「…錬金術師とは元来あるべき姿の形を異形の物へと変成する者…それすなわち万物の創造主たる神への冒瀆。我は神の代行者として捌きを下す者なり!!!」

傷の男は、サングラスの下からでもわかる濃厚な殺気でエドワードを射抜く。

エドワードは緊張で頬を引きつらせ、傷の男から視線を外さないままアルフォンスに向けて吠えた。

「アル!!! 先行け!!!」

「!? で…でも!!」

「お前以外に…誰が王女さんを守れるんだよ!!! いいからいけ!!! …あとで必ず追いつく」

パン、と両手のひらを合わせ、エドワードは瓦礫の中から適当な金属の棒を見つけ、錬成してナイフを作り出す。

構えを取るエドワードに、明確な敵対行動ととらえた傷の男は、にやりと笑みを浮か

べた。

「いい度胸だ……」

その瞬間、アルフォンスが急いで走り出し、傷の男がエドワードに接近する。

エドワードは咆哮をあげながらナイフを振るうが、傷の男はそれを簡単に躲し、エドワードの右腕を掴む。

だが、閃光が走った瞬間、エドワードと傷の男は互いに弾き飛ばされた。

「ぐあつ!!」

たたらを踏んだ傷の男が、しびれた手を見下ろして眉間にしわを寄せる。

命拾いしたエドワードは、衝撃で敗れた上着を脱ぎ捨て、鋼の右腕をあらわにする。

「クソツ……!!」

「機械鎧オートメイル……なるほど『人体破壊』では壊せぬはずだ」

「オイオイ……そう言うことは……錬金術師を恨んでるくせにてめエがやってんのも錬金術じゃねエか」

傷の男の一言で、エドワードは彼がどんな力を使ったのかを理解し、ぎろりと睨みつける。

「錬金術の錬成過程は大きくわけて『理解』『分解』『再構築』の三つ、てめエは二つ目の『分解』で錬成を止めてるわけだ………てめエだつて神の道に背いてんじゃねエか!!!」

自分と同じ力を使いながら、それを神の裁きだと豪語する傷の男に怒りを燃やし、エドワードは合わせた両手のひらを地面に叩きつける。

生み出された無数の銃を携え、エドワードはそれを一齐に撃ち放った。

『三千世界に屍を晒しやがれ：天魔轟臨！』これがおれの……！！ 三千世界……！！

放たれた銃弾が雨あられと傷の男に迫る。

だが傷の男は一切の狼狽を見せず、また建物の壁を破壊して雪崩を起こさせ、撃ち込まれた銃弾を防ぎきってしまった。

「ふむ……両の手を合わせる事で輪を作り、循環させた力をもつて錬成する訳か」

作り出した障害物を塵にし、道を作りながら、傷の男はまたエドワードの方へと近づいていく。

掲げた手をゴキリと鳴らし、凄まじい殺気をぶつけた。

「ならばまずはそのうつつとうしい右腕を、破壊させてもらおう」

「さっせつかよ……！！」

またあれに触れられれば、今度こそ右腕を破壊される。そう察したエドワードは突き出される傷の男の右腕を蹴りどかし、決死の覚悟で挑んだ。

「ちとら師匠せんせいと姉弟子にしこたましごかれてんだ……近接格闘じゃそうそう負けねえんだよ……！！」

至近距離から放たれる、破壊の力を持った掌底を紙一重で何とか躲しながら、エドワードはどうか距離を稼ごうとする。

だが、傷の男は現在のエドワードのはるか上の技量を有していたらしい。

一瞬の隙を突かれて右腕を掴まれ、機械鎧オートメイルは一瞬のうちにばらばらにされてしまった。

「神に祈る間をやろう」

「…あいにくだけど、祈りたい神サマがないんでね」

ガラガラと足元に落ちていく義手の破片を見下ろし、項垂れたエドワードは吐き捨てる。死を覚悟しても、臆した姿だけは見せまいとする意志のようだった。

「一つだけ聞かせろ……あんた…何で反乱軍の方にいたんだ？」

「……傷を負った我を、この国の民が救ってくれた。事情も聞かず、素性もしれぬ我に優しくしてくれた……それが今やこのザマ」

傷の男は、悲鳴と爆発音が響く王都を見渡し、どこか切なげな様子で応える。

狂気に満ちた殺人鬼のようにしか見えない彼が、初めて見せたまともな姿に、エドワードは思わず顔を上げる。

「ゆえに我は……この国を裁き再生に手を貸すことを決めた。その使命の邪魔をするものは全て滅ぼす……だが!!」

再び怒りを爆発させた傷の男が、エドワードに見せつけるようにサングラスを外す。その下から露わになった赤色の目に、エドワードは目を見開いていた。

「我が民を血の海に沈めた世界政府に属する者を、見逃す理由とはならぬ……!!」

「……赤い目に褐色の肌……!! イシユヴァールの……!!?」

傷の男の言葉とその特徴的な外見に、エドワードの中にある情報がよぎる。

とある海軍将校が起こした悲劇から発展した、国一つを巻き込んだ争い。数百万人を巻き込み、7年もの攻防が続いた最悪の事件を。

「この目には今でも焼き付いている……罪なき子供に鉛弾を撃ち込みながら、さも正当な制裁であるかのようにもたらされた破壊と絶望……!! 親も子もその友人も……!! 何もかもが火に吞まれ、焼き尽くされていく地獄を……!!」

怒りが形となつて背中に見えるほどに、傷の男からは殺気が迸っている。

それを真正面から受け止めさせられ、エドワードはその庄に思わず息を呑んだ。

「この世を歪める元凶たる世界政府……そしてそれに媚びる国家錬金術師……!! すべてを滅ぼすまで我は……破壊し続ける……!!」

冥途の土産だというように語り終えた傷の男が、今度こそエドワードを仕留めるために右腕を構える。

だが彼は気づいていなかった、エドワードが残った左腕で、地面に小さく陣を描いて

いたことに。

「そんなにほしけりや持つていきやがれ…!!」

エドワードは両の目に意志の炎を甦らせ、青い閃光を走らせる。

至近距離まで接近していた傷の男は、さすがに表情を変えて動きを止めた。

「何イ!!?」

「ハメシユ・アヴァニム
五つの石…!!!」

エドワードの足元で地面が隆起し、人頭大の石が五つ錬成されて飛び出し、傷の男に命中する。

不意のことに加え、顎や鳩尾にそれを受けた傷の男はうめき声をあげ、衝撃で吹き飛ばされていった。

「くっ…小癩な!!」

揺れる視界を抑えてどうにか起き上がるが、その時にはすでにエドワードの姿はなく、痕跡も見つからない。

してやられた、と気付いた彼は、ビキビキと顔中に血管を浮き上がらせた。

「逃がさぬぞ…決して!!」

さらなる怒りを燃やした傷の男は、苛立ち交じりに近くの瓦礫を殴りつけ、粉々に砕く。そしてまるで荒ぶる獣のように、大きな咆哮を上げるのだった。

一方で、傷の男から命からがら抜け出したエドワードは、バクバクとうるさく脈動する心臓をなだめようとしていた。

冷静を保っていたが、目前に迫る死の感覚に、まともではいられなかった。

「…くそ、土壇場でやったけどどうまく描けてなかったらモロに反動リバウンドきてたな……分の悪い賭けやつちまった」

途中で陣に気づかれればそこで終わり、片手で久々に描いた陣も、うまくできていなければ不発の可能性もあった。

勝利とは言えない苦い結果だが、エドワードは自分の任務を思い出し、ぎりりと歯を食いしばった。

「待つてろよ、王女さん……!!」

王宮に続く道、そこには数名の兵士たちが見張りに立っていた。

緊張した面持ちで警戒に当たっていた彼らは、道の向こうから走ってくる少女と鎧に気づき、槍を構えて立ち塞がった。

「生まれ貴様らっ!!! 反乱軍か!!」

「この北ブロックを抜けければ宮殿しかないぞ!! この事態をわかってるのか!!? 戦いに関せぬ者ならすぐにこの町から離れる!!!」

少女は見張りの兵士たちの前で立ち止まり、荒い呼吸を落ち着けるように膝に手を置く。その傍らで、鎧の方もがくりと膝をついていた。

「おい、聞いてるのかお前達!!! ここは遊び場じゃないん……」

「わかってます……」

声を荒げる兵士は、少女が顔を上げたことで言葉を失くす。

視界に入った少女の顔は、忘れられるはずもない自分達の主の娘のもの。かつて姿を消してから数年分成長した姿だったからだ。

「ビビ王女?!」

「チャカの元へ案内しなさい!!! やってほしい事があるの!!!」

狼狽する兵士たちをよそに、ビビは確固たる意志を伴いながら告げた。

「ビビ様だ!!」

「本当だ!! 王女が戻られたのか!」

「……なぜこんな時に……!!!」

王宮に通されたビビは、アラバスタ最強の戦士の一人チャカの前にいた。

チャカはビビの無事を喜ぶ暇も与えられず、告げられた命に思わず目を見開いていた。

「正気ですかビビ様…!! そんな事をしたら…!!」

「そんなことしたら何? この国が終わっちゃう? 違うでしょう!! ここがアラバスタじゃないもんね?!」

反論を封じ、ビビは頷くまで決して動かないというように強い目を向ける。

すぐ後ろに控えるアルフォンスは、そんなビビの背中に、初めて会った時以上の大きさを感じていた。

「アラバスタ王国は、今傷つけあつてる人達よ!!! 彼らがいてここは初めて“国”なのよ!!! …この戦いを数秒…!! 止めることができればそれでいい!! 数秒間みんなの目を引くことができれば…!! あとは私が何とかするから…:…:…!!!」

ビビの必死の言葉に、チャカは思わず言葉を失くす。

確かにビビの言う通りにすれば、きっかけは作れるかもしれない。だがそれには、あまりにも大きな代償が必要だった。

「この宮殿を、破壊して!!!」

王女の言葉に、今度はまわりから様子をうかがっていた兵士たちが騒然となった。王女の命令は、従うには躊躇われるほど突拍子なく、大それたことだった。

「何を言い出すんです、王女様!!!」

「ここは4千年の歴史を持つ由緒正しき王宮ですぞ!!!」

「バカな考えはおやめ下さい!!! ビビ様!!」

「王女!!!」

たった一人の判断には重すぎる命に、兵士たちは思いなおすようにビビに叫ぶ。

だがチャカはそれ以上反論することはなく、黙り込んだままビビをじつと見つめていた。

「チャカ様、判断を誤りなさるな!!! 国王は不在なのだ!!! そんな勝手なマネ許される

わけではない!!!」

「…ビビ様」

しばらくの間があつて、チャカはビビに口を開く。

永くアラバスタ王家を守り続けてきた戦士は、ビビの前で深々と跪いた。

「おっしやる通りに!!!」

異例の命令を受けたアラバスタの兵士たちは、すぐさま準備に取り掛かった。

その中には、自ら手伝いを買って出たアルフォンスの姿もあった。

「……まさか本気でやるつもりとは……!!!」

「アラバスタの歴史はどうなつちまうんだ………!!!」

爆破の準備を担った者以外の兵士たちは、いまだに信じられないといった様子で王宮

を見つめる。本当にこれでいいのか、とその表情は語っていた。

「しばしお待ちを。すぐに準備が整います」

テラスで一人、尖塔が続く王都を見下ろしていたビビに、チャカが話しかけた。その表情には、何をしても悔やみ切れないといった苦いものが滲んでいた。

「この事態を、何と申し上げればよいのか…」

「いいの、わかっている。あなた達には反乱軍を迎え撃つほかに方法はなかった。イガラムを欠いて、2年以上の暴動をよく抑えていてくれたわ」

忠臣の心労を少しでも労いたいと、ビビは微笑みを浮かべる。

だが彼女の表情も、次第に悔しさをあらわにした苦痛に歪んでいた。

「ごめんね、急に国を飛び出したりして……だけどもまだ終わりじゃないの……!!! もし、この反乱を止める事ができても……!! あいつが生きてる限り……この国に平和は来ない

……!!!」

今もどこかで暗躍しているはずの、悲劇を引き起こした最悪の男。

あの男がまだこの国にいる限り、民も兵士も、そして仲間達も危機にさらされ続けることとなる。

特に、あの男の相手を引き受けた麦わら帽の船長は。

「わたし……彼らのことが心配で……!!!」

「ビビ様」

痛々しい顔でうつむくビビを見て、チャカはいつしか誇らしげな笑みを浮かべていた。

「2年見ない間に、あなたはずいぶんいいお顔になられた…この戦争が終結を見た折には、例の海賊達と大晩餐会でも開きたいものですね」

「チャカ……」

チャカの言葉に、ビビは旅の道中のルフイの言葉を思い出す。

この戦いが終わったら、腹いっぱい食わせる。無限の胃袋を持つ彼も、そんなこと言っていた。

少しだけビビは緊張をほぐし、穏やかな顔で王都に目をやった。

「……お…王女様!!!」

「アルフォンスさん…?」

「ん!!? 何事だ!!?」

「宮殿内に……」

王宮内からアルフォンスが慌てた様子でテラスに駆け込んでくる。

その足が躓き、ガシャンと倒れ伏して鎧のところどころが碎けて飛び散るのを見て、

ビビは目を見開く。その時、彼女の耳に最も聞きたくない声が届いた。

「困るねエ……………!!! 物騒なマネしてくれるじゃねエか…ミス・ウエンズデー」

ビビはその声に、ハツと表情を変えて目を見張る。

王宮の上から見下ろしてくる諸悪の根源に、ビビは恐怖で顔色を真っ青に染めた。

「いいもんだな、王宮つてのは……………クハハハ!! クソ共を見下すには……………いい場所だ……………!!!」

「クロコダイル!!!」

第102話 “白旗を振れ”

時は少し遡り、ビビ達がレインベースを後にした少し後。

とある高い塔のような建物の最上階で、ミス・チューズデイことホークアイ・リザは窮地に陥っていた。

「くっ……!!」

ギリギリとMr. 0. 5の大きな手で上半身を掴まれ、拘束されたリザは苦悶の声を上げる。

数百メートルは離れて狙撃していたのに、簡単に居場所を嗅ぎつけられたことが今だに信じられない。

「もうおわり? おわり? 食べていい?」

ピストル
銃で頭部を撃ち抜かれながら、Mr. 0. 5は痛がる様子も見せず、がばつと大きく口を開く。

するとそこへ、小さな黒い影が勇ましく吠えながら飛びかかった。

「ハヤテ号!!?」

「あううううるさい~~~~~じゃま~~~~~」

黒い犬に噛み付かれ、鬱陶しそうに Mr. O. 5 が振り払おうとする。

その隙にリザが拘束から逃れると、ハヤテ号と呼ばれた犬と一緒にやってきた同僚の方へ駆け寄った。

「中尉!!」

援護にやってきたフュリー少尉は、リザとともにハヤテ号に翻弄される Mr. O. 5 に向けて発砲し、窓際に追い込んでいく。

だが、多少よろけさせることはできても、しばらくして弾切れを起こし、突き落とすことは叶わなかった。

「弾切れ? 弾切れ? それじゃいただきまゝ〜す」

やっと鬱陶しい邪魔がなくなると、Mr. O. 5 が満面の笑みでまた口を開く。

だが次の瞬間、その顔面に岩石のような拳が突き刺さり、Mr. O. 5 はあつという間に窓の外へ吹き飛ばされた。

「少佐…!! 今までどこに?!」

「民間人と兵士に偽装した連中に邪魔されてな……片づけるのに時間がかかってしまった」

目を見開くりザとフュリーに、ところどころから血を流すアームストロングが、荒い呼吸で顔をしかめた。

異形の男と戦闘を繰り返していた二人に、アームストロングは悔しげに歯をくいしばる。

「この様子では、真相については我輩が伝えるまでもなかったようであるな……」

「大佐とエレノアさんが今、エージェントの一人と交戦中です」

「ならば、あの怪物の相手は我輩が担わねばならぬな」

未知数である、敵の組織のNo. 2の実力者達。

味方の最大戦力が対応していると聞けば、自分も力を振るわねばと、アームストロングは拳を鳴らす。

「あう……痛い……」

一方、塔の真下に墜落したMr. 0. 5は、全身に赤い閃光を走らせながら泣き喚く。しばらくわめいていた彼だったが、ふとした瞬間に黙り込み、ガバツと体を起こして立ち上がった。

「……………わかった」

その声は、アームストロング達には届かなかった。

彼らには、Mr. 0. 5がいきなりどこかに向かつて走り出したように見えていた。

「ぬ!!?」

「移動した…?」

「追うぞ!!!」

「え、ぎやあああああああああああ!!!」

突然動き出したMr. 0. 5に嫌な予感を覚え、アームストロングは突然リザとフュリーを抱えて塔から飛び降りた。

ズシン、と地面を陥没させてアームストロングは着地し、リザとフュリーを下ろして走り出した。

「この方向は………もしや王宮か!!? 先に向かった王女ビビを狙うつもりか!!!」

「急ぎましょう……!!」

突然の落下でヘロヘロになったフュリーを引きずり、アームストロング達はものすごい速度で走っていくMr. 0. 5を追い続けた。

「チャカ様……!!?」

「悪夢だ………何て事に………!!!」

「後方には、もう反乱軍が迫ってきてるぞ……!!!」

王宮の外に締め出された兵士たちが、目の前に広がっている光景に絶句する。

王国最強の戦士が、それに助太刀しようと立ち塞がった鎧の大男が、たった一人になすすべなく叩きのめされているのだから。

「チャカ!!! アルフォンスさん!!!」
「弱エってのは…罪なもんだ…」

クロコダイルは血に濡れたフックを掲げ、血まみれのジャツカルの獣人と鎧の大男を踏みつける。

誰も、この男に傷をつけることさえ叶わなかった。命を削る水を飲んだ四人の戦士も、同じ悪魔の実の能力者も、錬金術師も、誰も触れることさえできなかった。

「ビビ!!!」

「王女さん…!!!」

そこへ、息を荒げさせ、困惑した様子のコーザと機械鎧を破壊されたエドワードが姿を現わした。

「コーザ!!! エドワードさん!!!」

「……………これは、どういうことだ…!!!」

エドワードは弟の体がボロボロにされていることに、コーザは国王コブラが磔にされ、血を流している姿に絶句していた。

自分の目が信じられないと、大きく目を見開きながら。

「お前……………!! 昔使った『抜け道』から……………!!!?」

「……………おれの目はどうかしちまったのか……………!!!? ………………国王軍を説得に来たつも

りだったか………!!!」

戰場を駆け抜け、国王の最後の良心に訴えかけるつもりだったコーザ。

だが今日の前に広がっている光景は、そんな考えや自分の根底を吹き飛ばしてしまうほどに衝撃的だった。

「その国王が……『国の英雄』に殺されかけてる……!!! 信じ難い光景だ………!!!」

「クハハハ!! 面白エ事になったな!!!」

ワナワナと震えるコーザを、クロコダイルは実に愉しそうに嘲笑する。この状況を、本気で喜んでいるようだった。

ミス・オールサンデーもまた、コーザにクスリと笑みを浮かべていた。

「今まさに、反乱の最中だったのに……!!! 互いの軍の統率者リダがここで顔を合わせちゃうとは、もはやこの戦争は首をもがれたトカゲの殺し合いだ………!!!」

「困惑してるみたいね……簡単よ? あなた達がイメージできる『最悪のシナリオ』を思い浮かべればいいわ」

「コーザ、あのね……」

「ネフェルタリ・ビビ………!!!」

どこから説明すれば、と悩みながら口を開くビビだったが、それを阻むもう一つの声。エドワードを追って、王宮内へ侵入を果たした傷の男までもが、肩を震わせながら立

ち尽くしていた。

「何がどうなっているのかは我にもわからん……!! だが一つだけ聞かせろ……この国の雨を奪ったのは、誰だ……!!?」

「……………!! 何もかも」

「おれさ!! ……コーザ、スカー、お前達が国王の仕業だと思っていた事全て——我が社の仕掛けた『罟』だ」

自慢げに語るクロコダイルに、コーザと傷の男は太く血管を浮き立たせる。

怒りに燃える二人の姿さえも、クロコダイルは愉快そうに眺めていた。

「お前達は、この2年間……面白い様に踊ってくれた。王族や国王軍が必死におれ達の影をかき回ってたつてのにな……!!! お前はこの事実を知らねエ方が幸せに死ねただろうに……!!! クハハハハハ!!!」

「聞くなコーザ……!!!」

「国王……!!!」

杭で両腕を貫かれ、王宮の壁に磔にされたコブラが、愕然としているコーザに語りかける。

多くの血を流しながら、彼の目から力は失われてはいなかった。

「お前には、今やれる事がある……!!! 一人でも多くの国民を救え!!!」

「アと…半時モセズ、宮殿広場が吹き飛ばされるのだ!!」

「何だと……!!?」

「まだ息があつたのか……!!」

余計なことを言うな、とでも言いたげにクロコダイルがチャカを見下ろす。

思わず飛び出しかけたコーザだが、その前にビビが飛びついて押し倒した。

「ダメよ!!!」

「おい!!!」 どけビビ、何のつもりだ!!! これから戦場になる広場が爆破されたら」

「戦場にはさせないっ!!!」

一刻も早くみんなに知らせねばとコーザは焦るが、ビビはそれをあえて遮る。その必死な表情に、頭に血を昇らせていたコーザは思わず口をつぐんだ。

「あなたはまだ気が動転してるのよっ!!! 広場が爆破されることを今、国王軍が知った

ら……!!! 広場はパニックになる……!!! そしたらもう戦争は止まらない!!! 誰

も助からない!!! そうでしょう?」

「ホウ、ご立派な判断だ……!!!」

逼迫したこの状況下で冷静にものを考えられるビビに、クロコダイルは思わず感心した声を上げる。

それを無視し、ビビは真剣に耳を傾けるコーザに懇願する。

「やるべき事は始めから決まってるの……!!! この仕組みられた反乱を止める事よ……!!
!! それはもう、あなたにしかできない!!!」

「それをおれが、黙って見てるとでも思ってるのか?」

さらりと砂が舞い、ニヤリと笑みを浮かべるクロコダイルがビビの背後に現れる。

だがそこへ、青い閃光を迸らせる傷の男の掌底が迫り、クロコダイルはチツと舌打ちしながらビビから離れた。

「ウオオオオオオオオ!!!」

「おっと危ねエ……流石のおれもそいつは効くぜ」

「貴様は……!!! ただ殺すだけでは事足らん!!!」

怒り狂う傷の男が、余裕の表情で立ちふさがるクロコダイルを執拗に狙い、右腕の掌底を振るう。

その時、鬼の形相で元凶に襲いかかる傷の男に迫る影があった。

「失せろ……!!!」

傷の男は振り向くことなく、近づいてきた存在の顔面を掴み、人体破壊の力を容赦なく振るう。

だが襲いかかった存在・Mr. O. 5は止まらず、目を見開いた傷の男の脇腹を握りつぶし、力尽くで放り捨てた。

「スカー!!!」

血を吐いて、王宮の壁に叩きつけられる同志にコーザが声を上げるが、クロコダイルは構わずビビ達に近づいていく。

フックを振り上げ、今度こそビビを狙うクロコダイルだったが、その寸前で立ちほだかる二人の姿があつた。

「エドワードさん!!! チャカ!!!」

甲高い音を立てて、クロコダイルのフックが剣と機械の左足に防がれる。

いまにも倒れそうな二人は、血反吐を吐きながら鋭くクロコダイルを睨みつけた。

「我…アラバスタの守護神、ジャツカル!!! 王家の敵を、討ち滅ぼすものなり………!!!」

命寸分でもある限り、私は戦う」

「ウチの姫さんに手エ出そうとしてんじゃねエよ……!!!」

「……………そういうのを、バカってんだ……………」

鬱陶しそうに葉巻から煙を吸うクロコダイル。

そのこめかみに突如銃弾が食らいつき、一瞬クロコダイルの意識が脇にそれ、エドワードが思わず振り向いた。

「中尉!!!」

「サー・クロコダイル……!!! これ以上の手出しは許さないわ……!!!」

王宮の壁の上で銃を構えているリザに、エドワードやアルフォンスはニツと笑う。

エドワードの位置からは見えないが、壁の向こう側にはリザを押し上げたアームストロングの姿もあった。

「コーザ、ビビ様、思うままに!! ……まだ私にとって数分の足止めくらいはできましよう!!!」

「うん」

「チャカ……!!!」

クロコダイルからビビを守るため、チャカとエドワードは満身創痍の体で立ちほだかる。

ビビは頷き、扉の外にいる兵士たちに向けて声を張り上げた。

「降伏の白旗を!!! 今すぐ降伏しなさい!!! 『国王軍』!!!」

ビビに告げられた命令に、兵士たちは困惑する。

それはつまり、王が国民に屈したと認めるようなもの。いまだけなら事態は収束するかもしれないが、どんな影響があるか分かったものではなかった。

「ビビ様!! 何て事を……!!! 降伏?!!」

「そんな事したらこの国は一体どうなるんだ!!!」

ドヨドヨとぎわめく兵士たちだが、ビビの隣に立つ青年に気づくと目を見開く。

まだここにたどり着いていないはずの、反乱軍のリーダーの姿に、誰もが驚きの目を向けた。

「おい見ろ、あれはっ!!!」

「コーザだ!!!」

「反乱軍のリーダーがなぜここに!!!?」

「言う事を聞いてくれ!!! おれ達はもう勝利も!! 勝負も望まない!!! この戦いを止めてほしいんだ!!!」

疑惑の目を向けられながら、コーザは必死に兵士たちに叫ぶ。

立ち位置からすれば、この場で殺される可能性もある敵軍のリーダーの声に、兵士たちは口を閉じざるを得なかった。

「反乱軍にはおれが知らせる、この戦いは無意味なものだったと!!! これ以上戦う理由はない!!! もうムダな血を流さない為にだ!!! 白旗を振ってくれ!!! 頼む!!!」

命をかけたその懇願に、反論する兵士は誰もいなかった。

「王の首は目前だ!!!」

「時計台が見えた!!!」

「宮殿広場に出るぞオ!!! 攻撃準備!!!」

「撃ち込み用々意!!!」

防衛陣を突破し、王宮のすぐ目の前にまで迫った反乱軍。

津波のような勢いで走り続けていた彼らは、宮殿広場を挟んだ先に見えた光景に気づき、目を見張った。

「待て!!!」

「え!!!」

何人かが気づき、隣を走る仲間とその異様な光景を伝える。

コーザを先頭に整列した兵士たちが、一斉に白い旗を掲げている姿に、反乱軍の誰もが驚愕の声をあげた。

「白旗!!! 国王軍が白旗を掲げてるぞ!!!」

「コーザさん!!!」

「戦いは終わった!!! 全体、怒りを治め武器を捨てろ!!! 国王軍には、もう戦意はない!!!」

ビビが必死の思いで願う中、反乱軍の歩みは徐々に落ち着き、やがて完全に停止してしんと静まりかえる。

ホツと安堵の息をつくコーザは、反乱軍の先頭にいる同志の一人を見つめた。

「本当に……?! コーザさん……!!!」

「ああ……もう戦いは……」

泣きそうな顔になる仲間に、コーザが真相の全てを伝えようとした時。

コーザの背後から放たれた銃弾が、彼の体を貫いた。

「おのれ国王軍!!!」

「コーザ!!!」

「コーザさあん!!!」

白旗を血で染め、倒れていくコーザに敵味方双方から悲鳴が上がる。

煙を吐く銃を手に、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべる兵士に、すぐ近くにいた兵士が掴みかかった。

「貴様、なぜコーザを撃った!!!」

彼は知らない。奇妙な刺青を刻んだその男が、国を脅かす組織の工作人員の一人であることを。

そして突然吹き荒れた砂まじりの風により、それを知る機会は失われることとなってしまった。

「何だ、急に砂塵が……!!」

「ハ……反乱軍……!! 聞け……!!!」

混乱に陥る宮殿広場で、コーザが必死に呼びかけようと途切れそうな声をこぼす。

だがそれは誰にも届かず、砂塵の中から放たれた別の銃弾によってさらなる混乱が呼ばれた。

「撃つて来やがった!!! あいつら!!!」

「この塵旋風は一体何なんだア!? 前方が見えねエっ!!!」

「奴ら!!!」

「どうにもならねえよ、バロツクワークス^{おれ}ア^た両軍に潜入してんだ!!!」

視界を完全に遮る塵旋風の中、反乱軍にいた別の工作員が啞う

もう止まらない、止められない。疑惑は疑惑を呼び、止まりかけた怒りをさらに強く燃え上がらせていった。

「……………!!! いけない!!!」

「何が降伏だ……………!!! これが『国王軍』のやり方か…!!! 汚ねエマネしやがって!!!」

「お願い!!! みんな止まって!!! 戦わないで!!!」

「止まれ……………!!! 『反乱軍』!!! ……この戦いは…!!!」

ビビが叫ぼうと、コーザが呼びかけようと、もうその炎は収まりはしない。

歩み寄る決意を踏みにじられた両軍は、もはや互いを敵としか認識できなくなった。

「迎え撃て、『国王軍』!!!」

アラバスタ史上最悪の戦いは、こうして始まってしまった。

第103話 “守ってみせる”

そこはまさに、地獄だった。

同じ国を想い、己の正義を張り続けていた民たちが、今や憎悪の炎を標に激突する。それはもう、ただの殺し合いだった。

その光景を目の当たりにしたアームストロングは、何かを思い出しているのか、ただ歯を食いしばったまま立ち尽くすばかりであった。

「やめて…」

「よく戦ったわよ、お嬢ちゃん…だけでももう…声なんて届かない」

「逃げなさい!!! ビビ!!! その男から逃げるんだ!!!」

愕然と膝をつくビビにミス・オールサンデーは笑い、コブラはせめて娘の命だけでも救おうと声を張り上げる。

だがビビは、決して首を縦に振ろうとはしなかった。

「いやよ!!! まだ…!!! 15分後の“砲撃”を止めれば、犠牲者を減らせる!!!」

「あーすれば反乱は止まる…こーすれば反乱は止まる…目エ覚ませお姫様…見苦しくてかなわねエゼ、お前の理想論は」

呆れ果てたクロコダイルが、走り出そうとしたビビの首を掴み、持ち上げる。

しぶとく抗い続けるビビを、心底鬱陶しそうに見下ろしながら、クロコダイルは眉間にしわを寄せた。

「理想」つてのは、実力の伴う者のみ口にできる「現実」だ……!!」

「……………!!」 見苦しくつたつて構わない……………!!」 理想だつて捨てない!!! お前なんか
にわかるもんか……………!!!」 私はこの国の王女よ!!! お前なんか屈しない!!!」

「可愛気のねエ女だ……………」

「わたしはこの国を——」

人の思いの全てを踏みにする悪魔に対して、ビビは自分の想いを叫ぶ。彼女の心をこ
れまでずっと支えてきた、揺るぎない信念を。

クロコダイルはそれすらも、醜く嘲笑った。

「…広場への砲撃まで——あと15分…まだまだ反乱の「援軍」はここに集まってくる。
ためエラの運命も知らず…爆破領域に次々と…」

地獄はまだ終わらない。15分後の最後の瞬間まで、クロコダイルは炎が燃え広がる
のを心待ちにしていた。

「唯一の懸念はあの女だが……………」

「もう片付けたわよ」

ふと思い出したクロコダイルが呟くと、どこからともなく現れたミス・リープデイがそれに答えた。

外の光景に絶句していたリザは、音もなく現れた美女の言葉に大きく目を見開いた。「思ったより時間がかかっちゃったわ……余計な二人まで相手にしちゃったし。〃焰〃の大佐も一緒にやっちゃったけど……些細な問題よね」

「…………え？」

ミス・リープデイが口にした言葉に、咄嗟に銃口を向けていたリザは凍りつく。

耳に届いたその情報を脳が理解を拒み、呆けたようにその場に立ち尽くしてしまっ

た。「さて……どつちから逝く？ 鎧くん？ 鋼〃の子？ やっぱりここは中尉さんかしら？」

あなた忠義が厚そうだものね……………すぐに上司の後を追わせてあげるわよ」

ニヤリと蠱惑的に嗤うミス・リープデイの顔を見て、ようやくリザの思考は回り直す。

エドワードとアルフォンス、ビビまでもが言葉をなくして固まる中、ワナワナと震えたりザは銃の引き金に力を込めた。

「きつ……………さまあああああああああああ!!」

悲鳴のような咆哮をあげ、リザはミス・リープデイに向けて発砲し続ける。弾が続く限り、美女の肉体に銃弾で穴を開け続ける。

やがてカチカチと引き金が虚しい音を立てると、ミス・リープデイは平然とした様子で口から垂れた血を舐めた。

「終わり？」

リザは大粒の涙を流し、その場にごくりと膝をつく。

完全に心を折られ、諦めてしまった女海兵に、ミス・リープデイは落胆したようなため息をついた。

「本当に愚かで弱い、悲しい生き物ね」

「クハハ…違エねエ」

誰も自分の前に立ちふさがる者がいなくなり、静かになったテラスでクロコダイルが囓う。

だが、たった一人だけ立ち上がる者がいた。

「中尉…王女様…：逃げるんだ」

ガシヤガシヤと、いまにも崩れ落ちそうな状態のアルフォンスが、リザを庇うように立つ。

とどめをさす邪魔をされたミス・リープデイは、不快げに眉間にしわを寄せた。

「困った子ね、先に死にたいの？」

構わず首でも絶つてやろうと鋭い爪を伸ばすが、アルフォンスが自分の体でそれを防

ぐ。体を貫かれ、それでも立ち塞がった。

だんだんと、ミス・リープデイの表情に苛立ちが混じり始めた。

「余計な事しないで、坊や。その女は死にたがっているんだから!!」

「させない!!!」

美女が振るう爪の連撃に、アルフォンスは自分が破壊されて行くのも構わず盾になり続ける。

リザはその痛々しい姿に、苦しそうに首を振った。

「アルフォンス君……エドワード君……私を置いて逃げなさい」

「いやだ!!!」

「逃げなさい!! あなた達だけでも!!!」

「いやだ!!!」

「アル……!!!」

血まみれで倒れ伏すエドワードも、アルフォンスが徐々に死に近づきつつある姿に顔をしかめる。

止めねばならない。だがそれをためらわれる気迫が、今のアルフォンスにはあった。

「いやなんだよ!!! 目の前で人が死んでいく……!!! いやなんだ!!! 自分の非力のせいで人が死ぬなんてもう沢山だ!!!」

ガシャンと、アルフォンスの右腕が切り裂かれ、地面に落とされる。着々と破壊が進んでいく。

だがそれでも、アルフォンスが見せる目からは、強い光が消えていなかった。

「もう……誰も殺させない!!! 守ってみせる!!!」

その気迫に、ミス・リープデイもいつしか押されるように後ずさっていた。

だがそこに、突如砂の風が吹き荒れ、アルフォンスを横から吹き飛ばしてしまった。

「くだらねエマネするんじゃないよ……!!!」

倒れこむアルフォンスに、クロコダイルは忌々しい者でも見るように顔を歪める。

そうして改めて、クロコダイルはビビに向き直った。もう誰もお前の味方はいなく

なった、そう見せつけるように。

「さっき……国王軍に広場の爆破を知らせていれば、例えパニックになろうとも何千人何

万人の命は救えたはずだ……」

「やめろ!!! やめてくれ!!! クロコダイル!!!」

「全てを救おうなんて甘っちょろいお前の考えが結局、お前の大好きな国民共を皆殺しにする結果を招いた。最初から最後まで、どいつもこいつも笑わせてくれたぜ、この国の人間は!!!」

ビビの努力を、想いを全て踏みにしりながら、クロコダイルは容赦なく告げる。

「2年間、我が社へのスパイ活動、御苦労だったな…結局お前達には何も止められなかった。反乱を止めるだけの王国を救うだの、お前の下らねエ理想に付き合わされて、無駄な犠牲者が増えたただけだ……!!! 教えてやろうか…」

これまで堪え続けてきた涙を、ボロボロとこぼすビビを見下ろし、クロコダイルは口角をさらにあげる。

哀れな王女を、絶望の底に突き落とすために。

「お前に国は救えない」

ビビをつかんでいた手が、サラサラと砂となって崩れる。

悍ましい高笑いが、痛々しい悲鳴が、怒号が合わさる中、ビビはテラスの上から硬い地面に向かって一直線に落ちていく。

全てが終わった。誰もがそう思った時だった。

「バカな…」

天を仰いでいたクロコダイルの目が、驚愕により大きく見開かれる。

砂に隠れた太陽の中に、巨大な鳥と人の影が見えたからだ。

「クロコダイル~~~~~!!!」

巨大な隼の背に乗り、樽[!]を背負った麦わら帽の海賊が、眼下にいるクロコダイルに向けて吠える。

落下中のビビも、エドワードもアルフォンスもアームストロングも、全員が目を見開いて呆然となっていた。

「ルフィさん!!!」

「麦わらア…」

「モンキー・D・ルフィ!!!」

天空から急降下した隼は、ビビに向かって一直線に飛翔する。

ルフィが手を伸ばし、泣きじやくるビビの体をしっかりと受け止めた。

「ふうっ!!! 間に合った!!!」

「……………ルフィさん…!! ペル…!!!」

彼が生きていた事実に喜びながら、ビビは自分の不甲斐なさに涙を流した。

クロコダイルの言う通り、自分には理想を叶えられるだけの力がなかった。そのために、こんな事態を引き起こしてしまったと。

「広場の爆破まで時間がないの!! もうみんな…やられちゃったし……………!! 私のも」

声「はもう…誰にも届かない!!! このままじゃ国が…!!!」

「心配すんな」

泣き続けるビビを抱きとめ、ルフィはにと勇ましい笑みを浮かべる。一人ではないのだと、もう一度教えるために。

「お前の声なら、おれ達に聞こえてる!!!」

隼、ペルはゆつくりと降下し、安全な高度でルファイとビビを下ろす。

一度ミス・オールサンデーに挑み、大敗した彼は、麦わら帽の青年に真剣な眼差しを送った。

「気をつけるよ!! ルファイ君」

「いっぱい肉食ったしな!! 血はモリモリだ!! もう……!!! 負けねエヤ」

勇ましく答え、ルファイは戦いの前の準備運動を始める。

その姿を見下ろし、クロコダイルは苛立ちを見せながら葉巻を燃やし尽くした。

「どうやってあの傷で流砂から……!!!」

眉間にしわを寄せるクロコダイルは、ふと自分の頭上が妙に明るいくことに気づく。

同時に、空気さえも灼かれるような高温を感じ、ハツと表情を変えて振り向いた。

「シウコアトル神灼大蛇!!!」

そこには、炎を纏った天使の姿があった。

太陽と見間違えうほどの高熱の炎を身に纏い、砲弾のような凄まじい勢いで急降下してきている。

そしてその炎の蹴撃は、槍のように鋭くミス・リープデいの腹に突き刺さり、地面を削りながら王宮の外へと蹴り飛ばしていった。

「あああああ!!!」

「があああああ!!!」

ミス・リープデイは防ぐことも叶わず、王宮の外の市街に落下していく。

あまりに突然のことで、エドワードらやMr. O. 5までもが反応が遅れていた。

「ラスト……!!!」

「よそ見をするな、Mr. O. 5!!!」

思わず声をあげて追いかけようとしたMr. O. 5は、不意に聞こえてきた声にハツとなる。

その直後、とてつもない爆発が生じ、ミス・リープデイと同じように市街の方へと吹き飛ばされていった。

「エレノアさん………!!!」

「大佐ア!!!」

鋭い眼差しを向けるマスタングに、リザはさつきとは異なる涙を流す

死んだと聞かされていた者たちが次々に復活し、ビビやリザの表情に活力が戻っている。

「だから明らかにおれの方が重傷なんじゃねエのかつて言いてエんだ!!!」

「うっさいわね、男のくせにギャーギャーと!!! 私は足をケガしてんのよ!!! 立てない

の!! あくくやばい、貧血つ……」
 「ウソつけ!!」

ビビは戦乱の中から聞こえてくる、待ち望んでいた賑やかな声に口を手で覆う。汚れていたり包帯だらけだったり、血まみれだったりしているものの、生きてこの場に集いつつある。

「あああああくくくくつ!!! ルファイが生きてるぞくく!!!」

「トニー君っ!!!」

「何イイ!!!? ルファイ!!!?」

「ビビもいるぞ!!!」

「な!!!? な!!!? だから言っただろつ!!! おれにはわがつでだ!!!」

「そうか!!」

「わかってたつてやつ顔かよ」

「ウソツプさん!! ……サンジさん!!」

「オくくビビちゃん、何てこつたこんななに傷ついて」

泣きながら喜ぶウソツプに、サンジやチョッパーが呆れた声を漏らす。すると次の瞬間、ウソツプの頭に青い金属の棒が叩きつけられた。

「ウソツプくくくつ!!!」

「ホゲエ!!!」

「誰が宴会の小道具作ってって頼んだのよっ!!!」

「立ってんじやねエかてめエ!!!」

「ナミさささささん♡」

「ナミさん………!!! Mr. ブシドー………!!!」

片足から血を流すナミと、ほぼ全身血だらけなゾロが声を荒げる。

エドワードもアルフォンソもホツと涙を滲ませ、ついでにアームストロングは号泣していた。

「ちや……ちやんとあつただろうが大技も………!!! っていうかあれはエドとアルも一緒に作つたんだぞ………!!!?」

「あとであんたら全員死刑よっ」

「……アア……チョツパー、頼みがある……おれ達の死体は荒野へ埋めてくれないか……」

「すでに致命傷だささささッ!!!」

「おいチョツパー……おれも助けてくれ、死にそうだ……」

「誰か起こして………!!!」

「クラ、てめエ!! 何でナミさんがケガしてんだオロスぞ!!!」

「元氣じゃねエか」

誰一人欠けることなく、仲間たちが再び集まってくれた。

ビビには何よりもそれが、嬉しくて仕方がなかった。

「悪い、みんな。おれ達、あいつにいつペン負けちまったんだ」

王宮のテラスの淵に腕を伸ばして捕まったルフィが、背を向けたまま語る。

この場にはいないエレノアも、自慢の耳でしっかりとその言葉を聞いていた。

「だから、もう負けねエ!!! あとよろしく」

「さっさと行つてこい……」

「お前で勝てなきや誰が勝てるってんだ!!!」

船長の宣言に、一味は聞くまでもないと言うように答える。

満身創痍のエドワードとアルフォンスも、渾身の力で立ち上がり領いた。

「終わりにするぞ!!! 全部!!!」

「!!!!!!」

拳を掲げて、離れた場所に立つ仲間たちに答えるエレノアは、改めてミス・リープデ

イに向き直る。

強烈な一撃を受けたミス・リープデは、戦慄の表情でエレノアを凝視していた。

「やっとならね………化け物!!!」

「あの傷と出血でどうやって!!!」

「焼いて塞いだ!!」 2、3回死ぬかと思ったけどね!!」

見ればエレノアの胸と腹には、痛々しい火傷の跡がある。

自らの意思で傷口を焼き、流血を止めたのだと察したミス・リープデイは、その覚悟の凄まじさに絶句した。

「あんたさつき言つてたよね……『まだまだ死なない』って」

バチイツ!!?とかつてないほどに凄まじく、エレノアの両手のひらから閃光が走る。

あたりに無数の刃を生み出しながら、天使は不敵な笑みを浮かべた。

「私も同じだよ!!!」

どこからか聞こえてくる轟音に、マスタングはやや口惜しげな表情を見せていた。できるときなら、自分があの女の相手をしたかったと言うのに。

「リベンジマッチはあの女に任せるとして……私はこちらの不穏分子を排することとしてしようか」

「いたいゝあついゝ……」

「やってくれたな化け物共……!!! 私の部下を傷つけた代価は、高くつくぞ!!!」

「どくが…… 焔の錬金術師」

部下の分の怒りも全て燃やし、制裁を加えようと意気込むマスタングだったが、それ

を遮る別の声が耳に届く。

振り向けばそこにいたのは、ゴキゴキと骨を鳴らす褐色の戦士。深い悔恨と憤怒に燃える眼を持った、噂の国家錬金術殺しだった

「我は奴らにまんまと乗せられ……数え切れぬ罪を犯した。罪なき命を奪い、この国を血で穢す一役を担った……!!! この罪は……それを裁かねば贖えぬ……!!!」

「オイオイ勝手に話を進めるなよ……!!!」

Mr. O. 5だけを睨みつけ、いまにも飛びかかりそうな威圧感を放つ傷の男。

だが、戦いを望んでいるのは彼らだけではない。敗北を味わわされてきた兄弟もまた、雪辱を払うことを望んでいた。

「鋼の……」

「負けっぱなしは性に合わねエ……!!!」

一体の異形に、四人の男たちが狙いを定める。

その凄まじい気迫に、Mr. O. 5も冷や汗を流していた。

「「そいつはおれの獲物だ……!!!」」

第104話 『タイムリミット』

「砲撃手を探すって!!? どうやって!!!」

街中で戦いが繰り広げられる中、ビビの言葉にウソップが思わず目を見開く。

反乱を止めるという目的が果たされなかった今、大勢の人々を救うにはそれしかないのは確かだが、到着したばかりの彼らにはいきなりすぎた。

「考えてるヒマはねエだろ。時間はあと10分しかねエんだ」

「でもお前つ、直径5kmってことは、少なくともここから2.5kmは離れた所から狙ってんだろ!!」

「いいえ!! 違う…!! おそらく…砲撃手はこの広場の近くにいるわ…!!」

「なんでだよ、そんなことしたらその砲撃手ごとドカーンと…」

言いかけたウソップは、その可能性に気づいてハッと声を途切れさせる。
他の者も、ビビの言いたい事に気づいてその表情を険しくさせた。

「……………そういう男だつて事ね、クロコダイルは…………」

「味方が死んでもいいのか……………!!?」

「食えねエ野郎だ……………!!!」

「…………じゃあさっさと……………!!」

部下の命すらもゴミのように扱うクロコダイルに呆れながら、一刻も早く役目を果たさなければと足を踏み出しかける。

だがその直前、ゾロとサンジが刀と足を突き出し、ビビの背後に迫っていた悪漢を叩きのめした。

「うげエっ!!」

「見つけたぜビビ王女オ!!!」

「おめエを殺せばどこまで昇格できる事やら!!!」

「『ビリオンス』!!!」

最終作戦に関わっていたバロツクワークスの雑兵たちが、ビビたちを取り囲んで下卑た笑みを浮かべていた。

その数は、戦乱の中であることを踏まえても把握しきれなかった。

「10分ひく…何秒だ」

「オイオイ、話してる時間ももったいねエぞ」

「2秒だ」

ならばとつとと片付けてしまおうと、ゾロとサンジが互いに顔を見合わせて示し合わせ、各々の武器を持って踊りかかる。

しかしその直前、包囲の後ろの方にいたビリオンズの何人かが、まとめて空中に吹き飛ばされるのが見えた。

「なっ…何だア!!？」

突然のことに、ビリオンズだけでなくゾロとサンジも目を見開く。

煙が一瞬晴れ、倒れ伏す悪漢たちの中心に立っている、筋骨隆々の豪傑の姿を目にし、ゾロは言葉を失くした。

—— ダチ公…!!!

—— 来い!!!

シグは立ち尽くすゾロに、手をくいと曲げて挑発するように促す。

この国で出会った新たな友の無言の激励に、ゾロの胸にさらなる激情の炎が湧きあがった。

「ウ…ウオオオオオ!!!」

雄叫びとともに、ゾロは残るビリオンズに襲い掛かる。

サンジが唾然とするのをよそに、あつという間にビリオンズは片っ端から叩きのめされ、悲鳴と破壊音があたりに響き渡った。

「先行くわ!!!」

「散り散りになれ!! とにかくまず塵旋風の外へ出るんだ!!」

「逃がすかよオ!!!」

ゾロたちが気を引き付けている間にと、ビビたちは一斉に広場から駆け出した。

それを追おうと、ほとんど満身創痍のビリオンズたちが立ち上がるうとするが、それよりも先に突然地面が盛り上がり、手の形になつて彼らを思い切りぶつ飛ばしていた。

「ギャ~~~~~!!!」

「人ん家の近くでドンパチドンパチ……あんた達は近所迷惑つて言葉を知らんのか……!!!」

ぼたぼたと落下していくビリオンズたちを、からころとサンダルを鳴らしてその場を訪れた一人の女性がねめつける。

にやりと獐猛な笑みを浮かべつつも、隠しきれない苛立ちをあらわにしているその女性性は、バキバキと拳を鳴らして彼らの前に仁王立ちした。

「若い奴らが頑張つてるんだから、わたしらもちつとは手助けしてやろうかと思つてき
てみれば……あとはあんたたちみたいなさつかりとはね。がっかりだよ……!!?」

馬鹿にされているとわかり、すでにポロポロのビリオンズに怒りの色がにじむ。

裏稼業の人間が、エプロン姿のどう見ても一般人にのされたとあつては、プライドが許さなかつた。

「いきなり出てきて意味わかんねエ説教かましやがつて……!!」

「てめー何者だ!!」

声会荒げて吠える、子供なら間違ひなく鳴き喚く人相の悪い悪漢たち。

そんな彼らに、イズミは自分を親指で指しながら高々と名乗ってみせた。

「主婦だツ!!!」

「又ウツ!!!」

バリバリと閃光を走らせ、傷の男が破壊の右腕を振るう。

再生する手間を惜しんだのか、Mr. 0. 5はその場から飛び跳ねて躲すが、そこへマスタングが炎の槍を放ってくる。

だが危うくエドワードとアルフォンスを巻き込みかけ、エドワードが目を剥いた。

「あつつぶねエなオイ!!!」

「どけ、傷の男!!! 巻き込まれたいのか!!!」

「貴様の方こそ邪魔だ!!!」

「大佐、前!! 前!!」

それぞれ、自分がこの異形を討ち取ると意気込んでいるため、まともな共闘もできていない。人数では非常に有利になっているはずなのに、軍配はどちらかといえばMr. 0. 5の方に偏って見えた。

「いたいく…あついく……もうおこった」

しかしそれでも、何度も破壊され焼き焦がされを繰り返されたために、Mr. O. 5はその丸い顔に怒りを滲ませていく。

すると不意にその口が大きく開かれ、その中で赤い閃光が走ったかと思うと、無数の瓦礫や焰が一斉に吐き出され始めた。

「憎^ッしみの叫^ル!!!」

家屋の壁や、マスタングやエレノアの炎。今まで彼が飲み込んできた物の全てが吐き出され、弾丸としてエドワード達に襲い掛かる。

それぞれ傷を負ったエドワード達は咄嗟に動けず、攻撃を食らいかけるが、突然目の前に分厚い土の壁が作り出され、盾となってくれた。

「少佐!!!」

「無事であるか、お前達!!!」

メリケンサックを構えたアームストロングが、安堵した様子でエドワード達のもとに駆け寄ってくる。

そして、異様な力で暴れまわるMr. O. 5に視線を移し、冷や汗を流した。

「…驚いた…!! 食うだけでなく、食ったものを吐き出すこともできるのであるか…!!!」

「ナメるな、肉ダルマが…!!!」

「待て!! 傷の男!! ……ええい!!」

怒りに振り回され、策を講じる事なく突っ込んでいく傷の男に顔をしかめ、マスタングもそれに続く。

しかし触れただけで破壊する手も、全てを焼き尽くす炎も、俊敏に動き回り何もかもを呑み込む不死身の化け物には通じていなかった。

「倒すどころか、攻撃をくらわせることもできぬとは…!! 一体、どうすればよいというのか…!!」

「……………別に、倒す必要はねえんだ」

「何……………?」

何か思いついた様子で、エドワードが真剣な表情を見せる。

アルフォンスはそんな兄に驚愕の視線を向け、すぐに何をしようとしているのか察したのかハッと顔を上げた。

「おれ達がやらなきゃならねエのは……………ビビを狙う敵を退けること…そして広場の爆破を防ぐこと……………!!」 とにかくあいつらを行動できなくすれば、事態を収束させられる…

!!!

「だ、だが…!! そんな事があれにできるのか……………!!?」

「策ならある…!! 少佐、手伝ってくれ!!」

王宮から移動した、アラバスタ王家に伝わる地下聖殿。

最強最悪の兵器についての情報があるというその場所に、コブラとクロコダイル、そしてミス・オールサンデーはいた。

今や読める者はいなくなったとされている古代の文字、歴史の本分^{ポーンゲリフ}で記されたその情報を、ミス・オールサンデーは読み解いた。

古代兵器についての情報は、何もないので。

激昂したクロコダイルは、用済みになったミス・オールサンデーを手にかけて、その場を後にしようとしたが、コブラがそこに最後の悪あがきとして聖殿を崩壊させる仕掛けを発動させる。

砂になれるクロコダイルはその無駄なあがきを嘲笑するが、訪れたもう一人の挑戦者に思わず目を見開いていた。

「てめエ……………!!!」

ガラガラと崩れていく聖殿に姿を現したのは、王宮でもう一度敗北を与えたはずの若き海賊^{ルーキー}。

腹の傷もまだ塞がっていないはずの、麦わら帽の青年だった。

「追いつめたぞ……………!! ワニ!!!」

「……………なぜ生きてるんだ。殺しても殺しても、なぜためエはおれに立ち向かってくる、えエ!! ………………麦わらア!!!」

クロコダイルの脳裏に、得体の知れない恐怖に似た感覚が走る。

何度も死にかけ、地に伏せても立ち上がり食らいついてくるその執念は、なり立ての海賊とは思えないしつこさで、理解が追いつかなかった。

「何度殺されりゃあ気が済むんだ!!!」

「……………まだ返して貰ってねエからな……………!! お前が奪ったものを……………!!!」

「おれが奪った……………? 『金』か……………? 『名声』か…………… 『信頼』か!! …… 『命』か?

…………… 『雨』か!!?」

「『国』!!!」

馬鹿にしながら吠えるクロコダイルに、ルフィはたった一言告げる。

その答えに、クロコダイルはさらに呆れたように吐き捨てた。

「国……………!! 可笑しな事を言う奴だ…国はこれから貰うのさ…おれがこの地の王となり支配する事だな……………!!」

「おれ達がこの島に来た時には、もうとつくになかったぞ……………!! あいつの国なんて

……………!!」

ルフィの脳裏に浮かぶのは、嘆き悲しむビビの姿。

この島に着いてからの彼女は、まだ心からの笑顔をを見せていない。道中何度も見せていた笑顔を、一切見せなくなってしまうた

その元凶を睨みつけ、ルフィは赤黒く濡れた拳を握りしめた。

「……ここが本当にあいつの国なら、もつと……!!」 笑ってられるはずだ!!」

「……………イキがったところで水も持たねエお前に何が……………」

馬鹿の一つ覚えの様に突っ込んで来るルフィを、クロコダイルは嗤う。

だが、その拳が自身の顔面に突き刺さったことで、その表情は途端に変わった。それも一度ではない、何度もルフィの放った拳は、クロコダイルの実体を捉えていた。

「てめエ……まさか……………!!」

倒れ込んだクロコダイルは、ルフィの腕から滴っている赤色に目を見張る。

傷を負ったままこの場に來たと思っていたが、本当はわざと傷をふさがないままにしていたのかと、戦慄の表情を浮かべた。

「血で!!?」

「血でも砂は固まるだろ!!」

なんてことはないという風に言い放つルフィだが、流れる血は致命傷に近い。

これ以上流し続ければ命にもかかわるはずなのに、青年はそれをものともしていなかった。

「クツ……………ハハハハハハハハハハ……………いいだろう。『レインベース』…『王宮』…そしてこの『地下聖殿』へと二度地獄を見てなお、このおれに挑んできたお前の執念に報いてやる……………!!!」

ただの若造ではない、確かな自身の障害となりうるイカレた存在であると認識し、クコダイルは哄笑を上げる。

左腕のフックに手をかけると、蓋の様にかぶせていた部分を取り払い、液体の滴る別のフックを取り出した。

「海賊としてだ…てめエはどうあつてもおれをブチのめしたいらしい。そして、おれもお前を目障りな『敵』と認めよう」

「とれた…何だ?」

「『毒針』さ」

「そうか」

やはりルフィは、動じた様子もなく答える。

卑怯だ何だと騒がない彼に、クコダイルも好戦的な笑みを浮かべた。

「一端の海賊では、ある様だな…海賊の決闘は常に生き残りを賭けた戦いだ。卑怯なんて言葉は存在しねエ…!! 地上で爆発が起きればここも一気に崩れ落ちるだろう」

次から次へ瓦礫になり変わっていく聖殿の中で、歴戦の猛者と若き勇者は、己の全て

を賭けて相対するのだった。

「これが最後だ。決着をつけようじゃねエか!!」

異なる場所では、町を破壊しながらエレノアとミス・リープデイが鎬を削っていた。

よく言えば、エレノアが一方的に攻撃し、ミス・リープデイはそれを軽々と躲し続けた。

「……しつこい子ね……!! まだ私に勝てる気でいるのかしら……!!?」

「あたり前だ……」

「言ったはずよ……!! 私達は進化した人間……あなた達とはそもそも格が違うの。根性だの気合いだのでは埋め尽くせない格の差があるのよ……!!」

「知ったことか……!!」

パンツと手のひらを合わせ、エレノアは両手に一振りずつナイフを生み出す。

そして目にも留まらぬ速さで接近し、ミス・リープデイの両腕を斬り飛ばした。

「ッ吸血魔剣!!!」

「だから意味がないって……言ってるでしょう!!!」

斬り落とされた両腕を瞬く間に再生させ、ミス・リープデイは伸ばした鋭い爪を振るう。

スパッとエレノアの頬が斬り裂かれるが、押し寄せる痛みをもとせず、エレノアは地面に手を付ける。

「ブラマダッタ創世宝弓!!!」

生み出されたいくつもの大砲が、一斉に発射されてミス・リープデイに炸裂する。爆発が美女の肉体を吹き飛ばすが、平然とした様子でまた爪を振るってくる。

「カトヤンガ壊神剛槌!!! カラドホルツ虹霓之劍!!!」

傷つけても殺しても再生し続ける敵に、エレノアは何度も錬成を繰り返して立ち向かう。その間に何度わが身に刃を受けても、決して止まろうとはしなかった。

「とうとう自棄になったのかしら? 仕留めることもできない大技ばかり放って……意味がないと教えてあげているのに」

「おおおおお!!!」

敵の爪であちこちを切り裂かれ、血だらけになりながらもエレノアは猛進を止めない。

その鬼気迫る様子に、ミス・リープデイは内心焦りを抱き始めていた。

「策なんて何の意味もない……わかっているのさそんな事は!!! あんた言ったよね! 『まだまだ死なない』って!!!」

獯猛な笑みを浮かべて向かってくるエレノアに、ミス・リープデイはハッと気づく。

エレノアが錬成を行った場所に、大量の塵が舞い上がっていることに。「だったら死ぬまで焼き尽くすだけだ!!」

パチン、とエレノアの指がならされ、大きな火花が散る。

それは辺りに舞う塵に引火し、あつという間に自身とミス・リープデイを包む炎の壁を生み出した。

「集え、騎士よ、我が元に!!」
ナイト・オブ・ラウンス
「円卓騎士」!!!」

まるで城のように広く高く燃え上がる炎の壁の中で、エレノアはその手に業火の剣を握りしめ、ミス・リープデイに踊りかかっていた。

争乱の中を、ゾロがひたすら走る。

広場を狙う砲撃手を探し、相変わらずの方向音痴を発動させ、全く見当違いの咆哮へと爆走し続けていた。

「あ、見ろ!!!」
「ロロノア・ゾロだ!!!」

「おお、あいつが…!!!」

「くそつ!!!」
海軍か、この町まで来てたとは。時間がねエつてのに………!!!」

気づけば、数人の海兵たちが集まっている場所に遭遇してしまう。
だがなぜか、海兵たちもゾロを見て驚きの表情を浮かべていた。

「お前何でこんな所に………!!!」

「一体何をやってんだよ!!!」

「そりゃこつちのセリフだよ」

「戻れ!!! 一つ手前の角を北へ!! 広場へ出られる!!」

「戻って右です!!! こつちじゃない!!!」

「アホかお前は」

「アホ? 何だ☒」

全くの外れの場所に来ているゾロに海兵たち、ハボック、ファルマン、ブレダ、フユリーは必死に道を示す。

ゾロはただ、困惑した様子で目を瞬かせるのだった。

「早くっ!! ウソツプさん!?!」

「あ………あり………ありが………ありが………☒」

ビビとその護衛を務めるウソツプも、困惑した様子で振り向いていた。

襲い掛かってきたビリオンズを、純白の制服を纏う兵たちがたたき伏せてくれたからだ。

「あなた達を援護します!!!」

「広場の爆発を止めて下さいっ!!! さあ急いで!!!」

刀と銃をそれぞれ構え、たしぎとリザは真剣な表情で託す。

本来なれば敵同士の間係を踏み越え、事態の収束を願った彼らが、助太刀を買って出ていた。

第105話 “祈りよ届け”

クロコダイルとルフィの戦いは、苛烈を極めていた。

クロコダイルの放った毒の一撃を受け、体にしびれを感じながらも、ルフィは未だ力の限り暴れ続けていたからだ。

「……なぜそこまで……!!!」

青年の執念を目撃したクロコダイルは、いまだに信じられない様子で思わずこぼす。他人を信用せず、道具としか見ていない彼には、その硬い意志は理解できなかつた。

「お前の目的はこの国にはねエ筈だ!!! 違うか!!!? 他人の目的の為に……!!!? そんな事で死んでどうする、仲間の一人や二人……!! 見捨てれば迷惑な火の粉はふりかからねエ!!! 全くバカだ、てめエらは!!!」

「……だからお前はわかつてねエって言ったんだ……」

呆れてバカにしているような、恐れているような追いつめられた様子で、クロコダイルはルフィに問う。

ルフィはそれに、感情を押し殺した低い声で答えた。

「ビビは………あいつは人には死ぬなって言うクセに……自分が一番に命を捨てて人を助

「けようとするんだ……放つといたら死ぬんだよ。お前らに殺されちまう!!」

「——わからねエ奴だ……だからその厄介者を見捨てちまえばいいとおれは……」

「死なせたくなエから『仲間』だろうが!!」

「 unnecessaryなものを、害にしかならないものを切り捨ててきたクロコダイルの言葉を一蹴し、ルフイは力強く吠える。

一瞬気圧され、黙り込んだ彼に、ルフイは続けて口にした。

「……だからあいつが国を諦めねエ限り……おれ達も戦う事をやめねエんだ!!」

「……たとえてめエらが死んでもか」

「死んだ時は、それはそれだ……!!」

「ああああああああ!!」

炎が舞う、軌跡が宙で渦を描く。

真つ赤な炎の剣を振り回し、エレノアは大きく翼を羽ばたかせてミス・リープデイに突っ込んで行く。

舞い散る羽や自身の翼にまで引火し、それでもエレノアは止まろうとはしなかった。

「……!!」 正気なの!!? あなた自身が自分の炎で死にかけているじゃない!!? どうして

そこまで命を賭ける必要があるの!!?」

「……………!! 進化した人間様には…!! 私共の考えなど分からないでしょうね…!!」

焼かれ炭化した身体を切り捨て、再生させるミス・リープデイが、わけがわからないといった様子で叫ぶと、エレノアはその目に烈火を燃やして吠えた。

大気をも焼き焦がし、自身も焦がしながら、激情に突き動かされる天使は炎の剣を振るい続けた。

「私が懸けているのは命だけじゃない…!! 私のことなちつぽけなもので、代価になるなんて最初から考えてない……………私が求めるものは、等価交換の法則さえ覆す大きなものだ…!!」

「一体何だつていうの……………!!?」

「“未来”だよ…!!」

振るわれた剣が、ミス・リープデイの爪を焼き斬る。

切り離された爪が崩れる直前、エレノアの肩を切り裂くが、構わず美女の肩に炎の刃を食らいつかせた。

「あの子が夢見る…!! 私達がつかみたい先の世界…!! この命でそれを手に入れられるなら…!! いくらでも燃やしてやる…!!」

「イカレてるわ…!!」

「そいつは誉め言葉だね…!!」

恐れを振り払うように、両手の爪を左右に振るってエレノアの胸を裂くが、溢れ出す血潮さえ燃料に変えてエレノアが剣を燃やす。

その顔に浮かぶのは、狂気じみた獰猛な笑みだった。

「私はこの海で最も偉大な男の娘で!!! この海で最も誇り高き男の女だ!!!
イカれてないはずがないだろうが!!!」

あたりを爆炎で吹き飛ばしながら、エレノアの剣はミス・リープデイを狙い続けた。

ふらふらと、青年の足取りがおぼつかなくなる。

砂漠のサソリから取られたという毒が、ルフィの体を侵し始めたのだ。

「お前なんかじゃあ…ハア…!!! おれには勝てねエ、はア…!!!」

「…やつとしばり出した言葉がそれか…今にもくたばりそうな負け犬にはお似合いの虚勢…!!! 根拠もねエ…!!!」

一度倒れ、力づくで立ち上がったルフィの言葉を、クロコダイルは嘲笑う。

だがルフィは、今一度両足でしっかりと立ち上がり、勇ましく仁王立ちしてその言葉を継げた。

「おれは『海賊王』になる男だ!!!」

青年の言葉に、クロコダイルは顔をしかめる。

若造が口にするには大層な、絶対に叶わないと言い切れる言葉に、クロコダイルの機嫌は一気に降下した。

「!! ……いいか小僧……この海をより深く知る者程そういう軽はずみな発言はしねエモンさ。言つたはずだぞ、てめエの様なルーキーなんざこの海にやいくらでもいるとな!!!」

苛立ちをぶつけるように、クロコダイルは毒仕込みのフックを振りかざす。

毒の回つたルフイの身体では、とうてい躲せそうにない鋭さで、クロコダイルが攻めた。

「この海のレベルを知れば知るほどに、そんな夢は見れなくなるのさ!!!」

「……おれはお前を……越える男だ……!!!」

ルフイはそれを躲し、地面に思い切り踏みつけ、フックを叩き折つてみせた。

凄まじい轟音とともに、半身を破壊されたMr. 0. 5が建物を粉碎しながら吹き飛ばされてくる。

既に戦場は王都を抜け、砂漠の方にまで弾き飛ばされていた。

「む………お前らうぎい」

砂まみれで起き上がったMr. 0. 5は、不満げに唇を尖らせて体を丸める。

すると途端に、Mr. 0. 5の腹を中心にバチバチと閃光が走り、異様な空気が漂い始めた。

「まともて飲んでやる」

めきめきと、異形の腹に変化が生じ始めたその時だった。

Mr. 0. 5の立っていた砂地が突然陥没し、巨大な穴となつて異形の体を呑み込んだのだ。

「え？」

「破壊しても破壊しても足らぬなら……もはや我にとれる手段はただ一つだ……!!!」

砂地に手を当てた傷の男が、青い閃光を走らせて地面を操る。

砂地の穴はさらに巨大化し、Mr. 0. 5が跳んでも届かないほどの規模になつていく。さすがに焦るMr. 0. 5だが、我に返つた時にはすでに遅かつた。

「ギンヌンガガブ原初ノ亀裂」

「マツスルフォール猛者試練」

バチンと、エドワードとアルフォンスが互いの左腕を合わせ、アームストロングとマスタングがそれぞれでメリケンサックを砂地に叩き込む。

あつという間に砂が鍊成され、巨大な石の棺と大樹が生み出され、Mr. 0. 5を覆つていった。

「お前は……ここに永久に封印する……!!!」

オロオロと辺りを見渡すMr. 0. 5に吐き捨て、傷の男はさらに穴を深くしていく。

異形の男の頭上に、生み出された棺と大樹が崩れ落ち、見る見るうちに穴を埋め尽くしていった。

「迷え……彷徨え……そして……死ぬ……!!」
ミノタウラス・ラビュリンス
 怪物の棲まう迷宮「!!!」

隙間なく埋め尽くされていく砂と瓦礫により、Mr. 0. 5は身動きもできずに埋められていく。

何度も赤い閃光が走るのは、その間に何度も呼吸を止められたためか。わずかに開いた隙間に向けられるMr. 0. 5の目は、相棒を求めて涙に濡れていた。

「もが……!!! むうううう……!!!」

やがてうめき声も聞こえないほどに、砂漠の穴は完全に埋められていく。

完全に反応が消えたことを確認してから、エドワード達はようやく深く息を吐いた。

「……終わった……か」

「あとは広場の爆破をどうにかして防ぐのみである……!!!」

がつくりと膝をつく男たちだが、まだ事態は何も解決していない。

がくがくと震えそうな体に叱咤し、再び立ち上がる時、アルフォンスが天空

に舞う大きな影に気づいた。

「……ありやあ」

「『隼』のペル殿……!!」

アラバスタの戦士が、何か巨大な球体をもって天空へと昇っていくのが見える。

何が起こっているのか、それを男たちが察した直後、球体は眩い光を放ち、ペルを呑み込んですさまじい轟音と衝撃を辺りにもたらした。

「……あいつら……」

「やったのか……」

「……国を……守ったのであるな……ペル殿……!!」

ちょうど、王都の中心の全てを吹き飛ばせる規模のその爆発に、エドワード達は一番の問題が解決したことを理解する。

一人の勇敢な戦士が犠牲になり、国が救われたのだと。

だがその考えは、浅はかだったことに気づかされた。

「……オイ、……ウソだろ……」

視線を王都の方へ戻したエドワードは、聞こえてくる音に愕然とした表情になる。

慌てて階段を駆け上り、爆発の中心だった時計塔前の広場の方に戻っていくと、目の前に広がっている光景に言葉を失った。

「待つて……!! やめなさい、あなた達……」

「曹長、危ない!!!」

「ウオオオオオオ!!!」

「なに……」

バロックワークスの残党の掃討に関わっていたたしぎは、武器を振るう手を止めない民衆を見て目を見開く。

あの爆発を聞いていたはずなのに、誰一人として反応を示さない。

その目は未だ、自分が倒すべき敵に向けられていた。

「なぜ……!!!? ……止まらないの……!!!?」

王都に蔓延する狂気に、たしぎは絶句する。そして、王都に向かう前にスモーカーに言われた言葉が、脳裏によぎっていた。

時代の節目には、必ずこういう光景に遭遇するのだと。

「——いを——てく——い!!!」

呆然と立ち尽くすたしぎたちの耳に、不意にその声は届いた。

時計塔の、開かれた文字盤の中から、水色の髪の少女が力の限り叫んでいるのが見えた。

「戦いを!!! やめて下さい!!!」

爆弾の場所を見抜き、狙撃手を止めたビビが、それでも止まってくれない民に向かって叫び続けている。

風に邪魔され、届かなくても、何度も何度も必死の願いを叫んでいた。

「戦いを!!! やめて下さい!!!」

「ビビ……………」

「王女さん……!!!」

「…戦いを!!! やめて下さい!!! ……………!!! 戦いをやめて下さい!!!」

「…バカね」

力のない自分を嘆き、それでも足掻き続ける少女の悲鳴。

それを唯一聞いていた彼女の仲間達は、そんな痛々しい姿に目を細めていた。

「……………!!! あんたたち、何ボーツとしてんのよ!!!」

「な…何だよ!!!」

「殴つてでも蹴つてでもいいから反乱を止めるのよ!!! さア早く!!! 行つて!!! 一人で

も多く犠牲者を減らすのよ!!!」

目に涙をにじませたナミが、ビビの想いを無駄にしまいと男たちに促す。

力尽くでも無理矢理でも構わない、仲間が必死に戦ってきた結果がこんなものでは救われないと、何かをやらねば気がすまなかった。

「戦いをやめて下さい!!!」

「ビビ……!!!」

「戦いを!!! やめて下さい!!! 戦いを……!!! やめて下さい!!!」

少女が叫び、民は狂気に突き動かされ続ける。

この世の地獄のような有様に、目を見開いて絶句していたアームストロングの脳裏に、かつての悲劇がフラッシュバックしていた。

「ぐ……!!! ……うおおおおおおお!!!」

忘れようもない、悲しみと怒りの光景。

それを思い出させられたアームストロングは、雄叫びとともにその拳を振り上げるのだった。

「……どこの馬の骨とも知れねエ小僧が……!!! このおれを誰だと思ってやがる!!!」

「お前がどこの誰だろうと!!! おれはお前を越えて行く!!!」

聖殿での戦いは、最終局面に入っていた。

崩れていく瓦礫の中、ルフィはクロコダイルを空中に蹴り飛ばし、大きく息を吸い込んで体を膨らませ、その上で思い切りねじる。

回転を加え、吐き出した息で宙に飛び上がると、身動きの取れないクロコダイルに向

けて拳を構えた。

「?ゴムゴムの」…」

「^{デザート}砂漠の」…」

連続で突き出されるジャブに、クロコダイルは砂でできた刃で応戦しようとする。

これが最後の一撃だと直感し、互いに残された渾身の力の全てを込めた。

「^{ストーム}暴風雨」!!!」

「^{ラズバード}金剛宝刀」!!!」

猛烈な勢いで放たれる拳の嵐と、砂漠をも切り裂く砂の刃が激突し、凄まじい衝撃波があたりに撒き散らされた。

「がああああああああ!!!」

炎の剣がさらに熱を増し、全身に裂傷と火傷を負ったエレノアが獣のように吠える。

塞がれた傷跡も開き、夥しい量の血が流れているのに、それでも天使の勢いは止まらなかった。

——腹部の傷は致命傷だった…!!!

流れた血の量は相当なはず……なのになぜ…!!?

何故この子の目は……一度も死なないの!!?

再戦当初から衰える事のない凄まじい威圧感に、ミス・リープデイは冷や汗を流す。これまで見下してきた脆弱な人間が見せる異様な力に、戦慄が止まらなかつた。

「いい加減墜ちなさい…!!! 暑苦しいのよ!!!」

だが異形の美女は、それを認めるわけにはいかなかった。

認めたが最後、自身が下等生物に屈したのだという忌々しい記憶が刻まれることとなるからだ。

「? 大恐寒!!!」
ジャヴオル・トローン

ミス・リープデイの伸ばした爪が無数に分かれ、針の雨となってエレノアに襲い掛かる。

くらえば今度こそ細切れになるであろうその凄まじい攻撃に、エレノアは真正面から挑んでいった。

「——剣を掴みし刻より、我が運命は定まれり」

炎の剣から漏れた火の粉が、花卉のようになつて辺りに飛び散る。

刀身がさらに熱を増し、白みを増していった。

「我が前に蔓延るは数々の苦難、数々の敵。されどわれはその歩みを止めず………全ては、我が『王』の翼とならん為に!!!」

目前に迫る針の雨に刃を振るうと、それらは一瞬で焼き斬られ、灰となつて四散して

いく。

目を見開くミス・リープデイに、エレノアの構えた炎の剣が唸りをあげた。

「アヴァロン・ロード
騎士王譚”!!!」

剣が美女の胴体を真つ二つに斬り裂いた直後、とてつもない勢いで火柱が上がり、龍のように二人を呑み込み天へと昇っていく。

同時に、離れた地面から一人の男が飛び出し、空中にその姿を晒された。

「……何であんなトコから飛び出してくんのかは分からねエが……!!」

「……………そうさ、とにかく……!!!」

天空に飛び出した男、クロコダイルの姿と炎の柱を目撃した一味は、それが示す事実
に思い至り、徐々に笑顔を浮かべる。

事態の最も厄介な敵が、今まさに討ち取られたのだと。

「あいつらが勝ったんだ!!!」

歓声を上げる彼らだが、まだ事態は何も解決してはいなかった。

反乱軍と国王軍の戦いは、いまだに止まる気配を見せていなかった。

「……………もう敵はいないのに……………!!!
これ以上血を流さないで……………!!!」

ガリガリと爪を立て、血を滲ませるビビが身を震わせながら悲痛な声を漏らす。

もう敵はいない、戦う理由はない。なのに狂気に突き動かされ、倒れていく民を助けられない自分が不甲斐なくて仕方ない。

「戦いを……!! やめて下さい!!」

力の限り、ビビはもう一度叫ぶ。

それが天への真摯な祈りとなって届いたのか、もしくはエレノアの起こした火柱が上昇気流を起こし、雲を呼んだのかは分からない。

だが確かにそれは、一粒の雫となって「奇跡」を生んだ。

「……エルリック・エドワード!!」

「……!! 少佐、わかるか……?」

「……………!!」

反乱軍の一人を殴り飛ばしてから、天に掌を伸ばしたエドワードの呟きに、アームストロングはハッと息を呑む。

カツン、ポツンと、放置された大砲や家屋にそれがあたり、たしかな音を響かせ始めた。

「雨……」

徐々にその勢いを強めていく雨粒により、王都から徐々に狂気が薄れていくのを感じた。

「もうこれ以上……!! 戦わないで下さい!!!」

時計塔の上から、戸惑いの表情で動きを止めた民たちに向けてビビが叫ぶ。

舞い上がっていた砂塵は雨で消され、視界が澄み、ビビの姿がはっきりし始めた。

「けむりが雨で晴れていくぞ……!!」

「……ビビの声が、届いた……」

「ビビ様」

「ビビ様だ」

「ビビ……!!」

「王女は不在のハズでは……」

「今降っている雨は……!! 昔の様にまた降ります。悪夢は全て……終わりましたから

……!!!」

何が起こっていたのか、自分自身も理解できていない様子の民に、ビビは告げる。

長く苦しい夜が、明けようとしていた。

降り始めた雨は、家屋を焼いていた炎を消し、辺りには煙が充満し始める。

その中心で、剣を振り下ろした体勢で固まるエレノアと、その目前に伸ばした爪を突き付けるミス・リープデイが相對していた。

「完敗よ。悔しいけど、貴女みたいな娘に殺られるのも悪くない。その迷いの無い真つ直ぐな目、好きよ」

ふつと微笑んだミス・リープデイは、その体を徐々に崩れさせながらエレノアをほめる。

振り続ける雨に濡れながら、エレノアはそれを見届けていた。

「けど覚えておくことね。私達は単なる氷山の一角、あなた達がどれだけ足掻こうと、いずれは手も足も出せなくなる相手が次々に現れる。あなた達が挑もうとしている世界は……そういうものよ」

さらさらと塵になりながら、ミスリープデイはエレノアたちを嘲笑う。お前達のやったことは全くの無駄なのだ、そう言い放つように。

「楽しみね、その目が苦悩に歪む日は……すぐ……そこ……」

肉も骨も崩れ、赤い宝石のみとなったミス・リープデイは、カツーンと音を立てて地面に墜ちる。

それを見下ろしたエレノアは、フツと意識を手放し、その場にどさりと倒れ伏した。

第106話 “無能”

「…だが!!!」

しんと静まり返った、アルバーナの広場に一人の男の声が響き渡る。

狂気から覚めても、理不尽な苦しみを受けてきた怒りと憎しみはそう簡単には消えはしなかった。

『悪夢』なんて言葉では済むはずがない!!! おれ達は “国王” のナノハナ襲撃をこの目で見たんだ!!!」

「そうさ!!! コーザさんも撃たれた!!!」

「今までにあった国王軍の乱行もそうだ!!! この反乱で倒れた者達が納得するものか!!!」

再び、敵対する意思が燃え上がりそうになり、ビビは悲しげに眉間にしわを寄せる。

だがそこに、王宮の方からチャカの怒号が響き渡った。

「武器を捨てよ!!! 国王軍!!!」

「チャカ様!!!」

「おま…ゴホン、マ…マ…お前達もだ!!! 反乱軍!!!」

続いて響いた声に、国王軍の間で戸惑いの声が起こる。

一人の少年を抱いて姿を表したのは、ビビを守るためにウイスキーピークで散ったと聞いていたアラバスタ王家護衛隊長イガラムだった。

「イ…イガラムさん!!!」

「隊長殿!!!」

「イガラム…!!!?」

「…イガラムさん!!! 生きておられたのかっ!!!」

「あれはウイスキーピークの変態オヤジ!!!」

「生きてたのね…!!!?」

「?」

初対面であるチョツパーを除き、イガラムが乗った船が爆破される光景を目撃していたゾロ達も目を見張る。

イガラムはざわざわと人々の注目が自分に向いていることを確かめ、抱えた少年に視線を落とした。

「おい…話せるか?」

「うん」

少年、カッパはイガラムの腕の中で体を起こし、国王軍と反乱軍両方に必死な表情を

見せる。

あの時伝えられなかった真実を、ちゃんと教えるために。

「…違うんだ!! おれがやられたのは別の奴で…みんな聞いて!! おれ、見たんだよ…

!!! ナノハナを襲った『国王軍』は…みんなニセ者だったんだ!!!」

自分自身もまだ困惑が大きく、うまく伝えられないカツパだったが、どうにか誤解があつたことを伝える。

アラバスタの民は、その真実に思わず息を飲んでいた。

「国王だつて…ニセ者さ!! …誰かのワナだったんだよ!!!」

「……………そうだ。この戦いは…始めから仕組まれていたんだ」

カツパに追随するように、仲間を支えられたコーザが満身創痕の体で声を発する。

敵意をむき出しにしていた反乱軍は、二人の様子にあつという間に昇つていた血が下がっていくのを感じた。

「この国に起きた事の全てを…私から説明しよう……………全員、武器を捨てなさい!!」

ガシャン、ガシャンと両軍の兵達の手から武器が落ち、中にはがくりと膝をつくものも現れる。

そんな中ビビは、慌てて時計塔を降りると外に飛び出し、きよろきよろと辺りを見渡し始めた。

「ビビ様」

「……………みんな、どこ？」

仲間の姿が見えないことに、ビビは不安げに表情を歪めていた。

??

「オイ」

冷たい、しかし優しく降り続ける雨の中、ゾロがふとイライラした様子で口を開く。

全身に鎧のように包帯を巻いたウソツプが立ち止まってばかりで、歩きづらいことこの上なかった。

「お前しつかり歩けよ!!？」

「ああ…それが聞いてくれ…『これ以上歩くと死んでしまう病』に」

「じゃ、そこにいろ」

「待てったら!!」

全身の骨をボロボロにされた彼も気の毒だが、戦闘により一味はほぼ全員かなりの傷を負っている。

加えて砲撃手を探して町中を駆け回り、反乱を止めるために暴れたため、歩くことさえ辛いのが大半だった。

「つたくしようにねえなあ」

「何で足を」

面倒くさくなったゾロは、倒れ込んだウソップの足をつかんで引きずっていく。

その途中で一味は、青年を抱えた中年の男性と、全身を赤黒く染めた天使が近づいてくるのに気づいた。

「お、いたか」

「うつす、ただいま」

心底しんどそうに、エレノアが片手を上げて応える。

中年の男性、コブラは背中にルフィを抱えたまま、ゾロ達を不思議そうに見やった。

「……………君達は？」

「…………アア、あなたのその背中のやつ、うちのなんだ」

「引き取ります。ありがとうございます」

申し訳なさそうにサンジが頭をかき、エレノアが頭を下げると、コブラの様子が変わった。

「…………では君らかね。ビビをここまで連れてきてくれた海賊達とは」

「ア？」

「オイ、あんたは誰なんだ？」

訝しげに眉を寄せ、ビビと親しい関係をうかがわせるコブラに、一味は若干の警戒を

抱く。

そこへ、息を切らせたビビが駆け寄ってきて、満面の笑みを浮かべた。

「みんな!!?」

「ビビ」

「王女様!」

一味の輪に飛び込みかけたビビだったが、その前に父であるコブラの姿を見つけ、驚きで目を見張った。

「パパ!!?」

「パ…パパ?!? ビビちゃんのお父様!!?」

「あんた国王か」

ゾロ達はひとまず安堵し、ルフィを優しく下ろして壁にもたれ掛けさせるコブラを見つめる。

コブラは小さく笑みを浮かべ、眠りこけるルフィを見やっていた。

「一度は死ぬと覚悟したが彼に、救われたのだ」

コブラの脳裏に浮かぶのは、クロコダイルを討ち取った直後のこと。

崩壊する聖殿の中、ミス・オールサンデーは解毒剤だという薬をコブラに渡し、聖殿とともに果てようと覚悟した。

だがルフィはそれを許さず、コブラとミス・オールサンデーを抱え、聖殿からの脱出に挑んだのだという。

「クロコダイルと戦ったその体で、人2人かかえて地上へ飛び出した。信じがたい力だ……」

「……………じゃあその『毒』ってのは、もういいんですね」

「……ああ、中和されたはずだ……。だが、怪我の手当てをせねば……。君達もな」

傷だらけのルフィとその仲間達を見やり、コブラはどう感謝の言葉をかけるべきか迷うそぶりを見せる。

すると、気だるげに腰を下ろしたゾロが、ビビに向けて口を開いた。

「それよりビビ、早く行けよ。広場へ戻れ」

「え？」

「そりやそうだ。……せっかく止まった反乱に……王や王女の言葉もナシじゃ……シマラねエもんな」

「……………ええ、だつたらみんなの事も」

「ビビちゃん、わかつてんだろ？」

いまにも倒れそうなほどに、傷付いた彼らをそのままにしてはおけない。

ルフィ達こそ、この奇跡の功績者として称えられるべきだとビビはためらうが、サン

ジはそれに不敵な笑みを返した。

「俺達あ فدツキだよ……」

「国なんてもんに関わるつもりはないさ」

「おれ達が出るとちよつと面倒なことになりそうだしな」

「右に同じくです」

「おれはハラがへつた」

「勝手に宮殿へ行つてるわ。へトへトなの」

「…ほら、ちゃんと役目を果たしておいで」

エレノア達に促され、ビビは困り顔で苦笑し、コブラとともに広場の方へと走って行く。

その背中が小さくなり、見えなくなったところで、一味はズルズルと崩れ落ち、バタバタと倒れていった。

「やれやれ……」

緊張の糸が切れ、深い眠りについてしまった一味を見下ろし、アルフォンスが肩をすくめる。

唯一疲労を感じていないアルフォンスは、どうやって仲間を運んでやるべきかと悩む、その時だった。

「……………もはや、格好の餌食だな。麦わらの一味…」

「マスタング大佐……………!!？」

ハツと振り向き、鋭くこちらを見つめてくるマスタングに気づくと、アルフォンスは思わず警戒を深める。

半壊した鎧の体で構えるアルフォンスに、マスタングは意味深に目を細めた。

「クロコダイルという共通の敵が倒れた今、彼らを放置する理由などない……………今の彼らなら、そう苦勞なく拿捕できるだろう」

場が異様な緊張に包まれ、アルフォンスは言葉をなくす。

格上の実力者であるマスタング、そして銃を持って取り囲んでくるハボック達に、突破できる要素は皆無だった。

ゆつくりと発火布の手袋を掲げていくマスタングに、アルフォンスの緊張が強まった。

「…こうひどい雨では、私は完全に無能になってしまうな」

「……………そうですね」

「火薬シケつちやつたしなあ」

「こりやもう役立たずだわ」

だがマスタングは困った様子で頭をかき、忌々しげに雨天を見上げる。

部下達も肩をすくめ、濡れてしまった銃を担いで、残念そうに深いため息をついた。「さて、この中に素手でもいいから『麦わら』や『妖術師』^{ウィザード}を相手取りたい猛者はいるか？」

「ムリムリ。命がいくつあっても足りねエよ」

「そんなブラックな職場だとは思いたくねエっす」

マスタングの無茶な提案に乗るものは誰一人としていない。

あつという間に、先ほどまで漂っていた緊張感は消え去り、仕事終わりといった雰囲気になっていった。

「我々は戦力差を鑑み、戦略的撤退を選択する」

くるりとマスタングは一味に背を向け、部下達もそれに続いて行く。

アルフォンスは今だに信じられないといった様子でその背中を見つめ、安堵で肩を落としました。

「大佐……」

「こんな時だ。……無粋なことはしたくないだろう」

言葉こそ不本意といった感じだが、背を向けたマスタングの表情は安らかで、満足げな笑みが浮かんでいた。

「……だったらクロコダイルさんが……この男が……全ての元凶だと……」
「何て事だ……信じられない……」

広場の中心で、大の字になって気絶しているクロコダイルを囲み、反乱軍が戸惑いの声を漏らす。

そこへ、複数の海兵達を率いたたしぎが現れ、クロコダイルを取り囲んだ。

「バロツクワークス社の所有していた『ダンスパウダー』を積んだ人工降雨船を発見したそうです」

感情を見せない、抑揚のない声で、たしぎは白目を剥いたままのクロコダイルを見下ろし、告げる。

己の無力を、何もできなかった自身を恥じながら、海楼石の手錠を取り出した。

「秘密犯罪会社バロツクワークス社『社長』、王下『七武海』海賊、サー・クロコダイル。世界政府直下『海軍本部』の名のもとに、貴方から『敵船拿捕許可状』及び、あなたの持つ政府における全ての称号と権利を、剥奪します」

カシャン、と乾いた音を立て、クロコダイルの手に手錠が繋がれ、その力が完全に封じられる。

その様子を、建物の陰から覗く、一人の男の姿があつた。

「……今回は、見逃してやる……だが覚えていろ、『世界政府』……!!」

傷口を抑え、今だに燃え続ける憎悪の炎を目に宿しながら、傷スカーの男は海兵達に向けて吐き捨てる。

「我は必ず……!! 貴様らの息の根を止めに戻つて来るぞ……必ずな……!!」

ズルズルと足を引きずり、傷の男は広場に背を向け立ち去つて行く。

まんまと乗せられ、罪なき人々にまで手をかけてしまった自分が、この場にいることは許されない。そんな思いを抱くように、傷の男は人知れず姿を消すのだった。

沈痛な表情で俯く、反乱軍の全員。

その中でも特に心の傷が大きい様子で、コーザが血をにじませるような声を漏らした。

「俺たちは、取り返しのつかない事をしたんだ……」

「リーダー……」

ビビはそんなコーザに、ただ痛ましげな眼差しを送ることしかできない。

誰にも負けないくらいこの国を愛していた彼にとつて、この惨状はあまりにショックが大きいことだろう。

——……みんなにかけける言葉が見つからない……。

もつと自分がうまくやれていれば、もつと早く事件の真相をつかめていれば。

そんな後悔ばかりが胸中に湧き出して、ビビは苦痛に顔を歪めていた。

「悔やむことも当然……やりきれぬ思いも当然」

そんな彼らの元に、その男は語りかけた。

咄嗟トツラに作られて行く人垣の道を進み、国王コウワは威厳を持った声で告げ、民達を見つめる。

「失ったものは大きく、得たものはない」

「国王……」

「——だが、これは前進である!!? 戦った相手が誰であろうとも、戦いは起こり終わったのだ!!?」

その言葉に、人々はハツと息を飲む。

到底償えない大罪を自分達は犯してしまった、だがそれは俯き絶望したままでいい言い訳にはならない。

ここから彼らは、始めなければならぬのだ。

「過去を亡ナきものになど誰にもできはしない!!? ……この戦争の上に立ち!!! 生きてみせよ!!!」

民を守り、導く王の言葉に、アラバスタの民達はいっしか涙を流していた。

怒りも悲しみも、全てを背負ってなおも君臨し続けている王の偉大さに、言葉も出なかつた。

「アラバスタ王国よ!!!」

絶望を祓い、民に希望を示す王の言葉は、何よりも強く人々の心に響いた。

——後に歴史に刻まれる戦いと、

決して語られることのない戦いが——

終結した——。

途切れることなく降り続ける雨の中を、一組の夫婦と若い男、そして片腕のない鎧が歩いて行く。

その背に背負った若者達に、イズミはあきれた様子でため息をついた。

「やれやれ……暴れるだけ暴れたら疲れて眠っちまうとは……身体はデカくなっても中身はガキのままだね、こいつら……」

「ああ……」

「そうですねエ……」

背負い切れず、適当な布に乗せて引きずっているものもいるが、海兵に見つかることを考えれば、置いて行くわけにもいくまい。

人数の問題ではない、自分の背中で眠りにつくエドワードに目を向け、イズミはふつと微笑んだ。

「……………だが、重くなったな」

思い出されるのは、3人の弟子達がそれぞれ自分の元を訪れたときのこと。やむなく大きな錬成を試み、その凄まじきを目撃した子供達が、息を切らせながらやってきたのだ。

——おぼさん！

おれ達を弟子にしてよ！！

言い方はともかく、師になるつもりはなかったイズミはそれを断った。だが三人のそれぞれの身の上を聞き、突き放すことができなかつたのだ。

——……………力が……！！

力が足りない……………！！！！

その中の一人、エレノアの懇願は、いまでも耳に残っていた。

——私は守られてばかりで……何にもできない……！！！！

母さんも……！！ 家族も……！！

何もかも奪われてばかりだ……！！！！

——私は…………！！

自分で守れる力が欲しい……………！！！！

守られるだけじゃ、何にもできない……！！！！

また何かを奪われる……そんなのはいやだ!!!

——私は……こんな世界に……!!!

こんな残酷な世界に……!!! 負けたくないんです!!!

その真剣な目に、揺るがぬ信念の炎を宿した目に、イズミは白旗をあげる羽目になった。

大罪をおかしているようと、心と体に傷を負おうと、それでも立ち上がり進むことを決意した弟子達が、その背にあった。

「……ほんとに、大きくなつたねエ」

決して本人は認めようとはしない誇らしさが、イズミの中には芽生えていた。

——もはや強制される事のない雨は——

留まる事なく、王国に降り注ぐ——

だがそんな束の間の平穏に、彼らは再び動き出そうとしていた。

「手酷くやられたもんだねエ………ちよつと勘が鈍つたんじゃないの? おばさん」

炭のように焼け焦げた、広場から離れた町の中。

凄まじい爆発跡の中心に転がる、血の赤色の宝石を見下ろし、バロツクワークスの残党の一人が悪態をついていた。

「ちよつと手を貸すだけでよかつたのにこんなザマになつて、大赤字つてどころじゃないでしょ」

あきれたため息をつく男のそばで、唐突に地面がボコンと盛り上がる。

するといきなり地面が割れ、泥だらけになつたMr. O. 5が顔を出した。

「……ふつかーつ」

「……お前もだいぶやられたみたいだな、グラトニー暴食」

「うん、おなかすいた」

「まア待て……」

疲れた様子で腹をさするMr. O. 5に、男はやや険しい表情を向ける。

そして懐に手を入れ、地面に転がっているものと同じ赤い宝石を何個か取り出すと、バラバラと足元にばら撒き始めた。

「先にこつちにたらふく食わせてやらないと………つていつても、あんまりいま手持ちがないんだよね。ガマンしなよ」

落とされた宝石が、泥の中に沈む。

そう思われた直前、宝石がぐにやりと形を変え、先に落ちていた宝石の中に吸い込まれて行く。

全てを飲み込んだ直後、宝石は赤い閃光を放ち、みるみるうちに美女の姿を取り戻していった。

「……………ふう、生き返ったわ」

「^{ラスト}色欲ともあろう者が、おれの手を煩わせないで欲しいんだけど？」

「悪かったわよ、我ながらちよつと熱くなっちゃったんだもの……………でも収穫はあったわよ」

「へエ……………」

コキコキと首を鳴らし、蠱惑的な笑みを浮かべて男を見やるミス・リープデイ……………いや、ラスト。

その目には、これまでになかった凄まじい怨念が宿っていた。

「覚えておきなさい ^{ウィザード}妖術師……………次はこうはいかないわよ」

第107話 “クソ食らえ”

「この馬鹿者!!」

海軍船の中の一室、医療設備が整ったその部屋の中で、マスタングがリザに叱責の声をあげた。

脇腹にきつく包帯を巻き、椅子に腰掛けた彼からは、負傷者の弱々しきは全く見受けられなかった。

「敵の言葉を信じて戦意喪失だど!! ホークアイ中尉ともあろう者が呆れるな!!」

「申し訳ありません」

「うろたえるな! 思考を止めるな! 生きる事をあきらめるな!!」

自身の失態を本気で気にしているのか、リザも首をすくめて不覚だったと言う表情を見せる。

マスタングは一旦深き息を吐き、荒ぶった自分の感情を落ち着けた。

「軍人なら、私の副官ならもっと毅然としていろ」

「はい」

「引き続き私の背中を任せる。精進しろ」

「大佐も人の事言えないでしょーが。司令官がこのこと戦場に出て来ちまって」
 「うるさいな!!!」

近くのベッドで横になっているハボックやファルマン、ブレダに呆れた視線を向けられ、マスタングはキツと彼らを睨みつける。

「あまり怒鳴らんでください。腹に響く」

「貴様それが命の恩人に対する言葉か」

「それは感謝してますがもうちよつと上手く焼いてくださいよ。このヤケドっ腹じゃ女の子に嫌われちまう」

「ゼイタク言うな!! お前達はレア!! 私はミディアム!! どうだ私の方がヒサンだらう!!!」

「誰が焼き加減の話をしてますか!!!」

ギヤーギヤーと騒ぐ男達だったが、すぐに自身の傷に手を当ててうめき声をあげる。

馬鹿な姿を見せる彼らに、唯一軽症で済んでいると言えるフユリーが溜め息をついた。

「はいはい……どっちも大人しくしてくださいね〜」

「クソオ……!! せめて患者が男しくないこのむさくるしい空間をどうかしてくれ……!!!」

「うるせエよクソ大佐が!!!」

声を揃えて怒号をあげるハボック達が、また腹部を抑えて悶絶する。

しばらくして痛みが引いてから、ハボックがしみじみとした様子で呟いた。

「しかし……あの麦わらの一味があそこまでやるとはな。完全に侮っていた」

「仮にも『妖術師』がいる一味ですしねエ……素質はあつたつて事でしようや」

つい最近まで名前も聞いたことがなかった小さな海賊一味。

妙にこだわるスモーカーから話を聞いただけの彼らでは、ここまでの騒ぎを引き起こ

すなど考えもしなかった。

リザも同意しながら、悔しげに表情を歪める。

「……砲撃時刻を知っても、援護する事しかできませんでした。選べる正義がなかった

と……たしぎ曹長も悔やんでいました」

「……つい最近まで同等だと思っていた連中が、悪名を上げて駆け上がっていく。この海では駆け上がらなければ死ぬしかない事を彼らは知っているのだろうか……だが、それを知ってお前達は どうする？」

部下達の真意を確かめるように、マスタングはじろりと横目を向ける。事件の収束に微かにしか貢献できなかったことについて、どう思っているのかと。

「進むか死ぬか。私について来たお前達は、それを覚悟して来ただろう」

挑発するようなマスタングの言葉に、手酷くやられる一方だったハボツク達はニヤリと意欲的な笑みを浮かべる

そう、こんなところで折れている暇などないのだ。

「ここからだ。我々も、立ち止まっている暇はないぞ」

マスタングには野望があつた。ここにいるのは、そんな彼の意志に賛同し、付き従つてきた熱意ある戦士ばかりだつた。

各々がやる気を再燃させる中、フュリー一人が言いづらそうに手を挙げた。

「……実は大佐、本部から先ほど通達がありました」

「何？」

「……………落ち着いて聞いて下さいよ？」

何か不都合な連絡でもあつたのか、と思わず身構えるマスタング達だったが、フュリーがもたらしたのは予想外の報告だつた。

「今回のクロコダイル討伐に関して、マスタング大佐とスモーカー大佐、たしぎ曹長に政府上層部より『勲章』が贈与されることになつたと……」

「……………何だと……!!？」

「それでその……………みなさん一階級ずつ昇格が決定したので……………勲章の授与式に向いてほしいと……………」

その内容で、フユリーが非常に難しい表情になっていた理由がわかった。

自分たちがほとんど手も足も出せなかったクロコダイルの討伐。麦わら達が手にしたその功績を、さも海軍のもののように発表すると言うのだから。

そんな漁夫の利のような結果を、マスタングが望むはずがなかった。

「フザけるな!!! 我々がクロコダイルを仕留めただと…!! それができなくて、どれだけの血と涙が流れたと思っっている…!!!」

「大佐…!!!」

「フユリー少尉…お前達…:…これから言うことは他言無用で頼むぞ…!!!」

ギリギリと歯を食いしばり、悔しさをあらわにするマスタングに、部下達も同じ気持ちなのか険しい顔になる。

ガン、と自分の腿に拳を打ち付け、マスタングはこの場にはない憎たらしい連中に吐き捨てた。

「クソ食らえだ!!!」

「おーい、木材はもつとあるかな」

「こつちも足りねエなア!!!」

「ウチのが余ってるぞ、使ってくれ」

戦火の跡が痛々しい街中、戻ってきた住民達による復興の音が、あちこちから響き渡ってくる。

もはや同じ国民同士で争う理由はない。心身ともに傷を負ったのならば、協力して癒していけばいいのだ。何年何十年かかっても。

「…遅しいな、この国は…」

「王女がかわいいからな！」

「関係あんのか？」

「あるさ」

備品の買い出しに出向いたサンジとウソップも、そんな国民達の強さに感嘆の声を上げる。

ビビが関係しているかはともかく、素晴らしい国であるのは確かだ。

「畜生オ!! 家から家へと貫通してるぞ、何だこの穴は!! まるで蹴り砕いたような形跡だな」

「？」

「おいウソップ、あつちに何かあるぜ」

途中、壁に大穴を開けられた家の前で頭を抱える男を見つけたが、サンジはなぜか急いでそれから目をそらす。

て。
 ショートカットのために自分がぶちあげたことは、墓場まで持つて行こうと心に決

「へくく面白本ばかり！ いいの？ ほんとに貫つてつて」

「ああ構わん。私は全部読んだからね」

「ありがとう。……でも」

コブラのもとを訪れたナミは、彼の所有する膨大な数の本を前に目を輝かせる。

だがその視線はちらりと横に、がっくりと項垂れるエドワードとアルフォンスに向けられ、気の毒そうに歪められた。

「ああ……彼らには気の毒なことだったな」

「まさか……欲しがってた資料があつた図書館が、反乱の戦火で全焼しちゃうなんてね」

「何のために……!!? 何のためにおれ達は……!!!」

「すべて水の泡……おしまいだア……絶望だア……」

この世の終わりかのように嘆く彼らに、コブラも不憫そうに眉尻を下げる。体に巻かれた包帯や崩壊を防ぐ布が、さらに痛々しく見える。

その時、イガラムがあつと声をあげた。

「陛下、シエスカならもしかして心当たりあるのでは？」

「む？ ああ！ 彼女か!!」

イガラムが挙げた名に、コブラもその手があったかと手を叩く。

エドワードとアルフォンスは、聞き覚えのない名前に思わず顔を上げてコブラを見つめた。

「誰？ 蔵書に詳しい人？」

「詳しいと言うか…あれは文字通り『本の虫』ですな」

うーん、と困ったような表情で頷くイガラムに、兄弟とナミは不思議そうに首を傾げた。

そして案内されたとある家で、兄弟はまたも驚かされた。

「うわっ、何だこの本の山!!」

「本当に人が住んでるの、ここ!!?」

扉を開けてまず目に入ったのは、室内を埋め尽くす大量の本の山。

本棚にも収まり切らないほどのそれらが、視界をほとんど埋め尽くしてしまっていた。

「シエスカ！ いないのか？」

「おーい！」

「とても人が住んでる環境には思えないけど……」

あきれた様子でナミが呟いていると、ふとその耳が何かを捉える。

よくよく本の山の中を見てみると、女性の細い腕と「助けてー」というか細い声が聞こえているのに気づいた。

「兄さん人がっ!! 人が埋まってる!!!」

「掘れ掘れ!!」

兄弟達は急ぎ、女性の上に降り積もっている大量の本をどかす作業に入る。

数分の救出作業ののち、ようやく山の中からメガネをかけたシヨートカットの女性を救い出すことに成功した。

「あああああすみませんすみません!! うっかり本の山を崩してしまつて…このまま死ぬかと思いました、ありがとうございますっ!!」

「どーいたしまして…」

すでに全身ボロボロなのに、人命救助の力仕事をする羽目になったエドワードはそれしか言えない。ナミもアルフォンスもぐったりとしていた。

「は、私がシエス力です。私、本が大好きなもので図書館に就職が決まった時はすごく嬉しかったんですが…でも本が好きすぎてその……」

「仕事にも本ばっか読みすぎてクビになっちゃったわけか」

「はい………病気の母をもっといい病院に入れてあげたいから働かなくちゃならないん

ですけど……」

趣味や好きなものを仕事にしてしまった者によくあることというべきか、自業自得とも言える話に思わず嘆息する。

自分でもわかつているのか、シエスカも頭を抱えてうなだれていた。

「ああ〜本当に私ってば本を読む以外は何をやってても鈍くさくてどこに行っても仕事もらえなくて……そうよ、ダメ人間だわ社会のクズなのよう……」

（大丈夫かよ、このねーちゃん……）

単に蔵書の手がかりを求めていただけなのに、なぜこんな切ない話を聞かねばならぬのか。

なんだか愚痴を聞くような流れになっていたが、エドワードは意を決して彼女に尋ねてみた。

「あ——……ちよつと訊きたいんだけどさ、マルコー・ティム名義の研究書に心当たりあるかな」

「マルコー・ティム……マルコー……ああ！ はい、覚えてます。活版印刷ばかりの書物の中で珍しく手書きで、しかもジャンル外の書架に乱暴に突っ込んであったのでよく覚えてます」

「……本当に図書館にあったんだ……て事はやっぱり丸焼けかよ……」

一瞬明るい顔になる兄弟だったが、すぐにまた絶望の表情に変わる。

あげてから落とされると言う深いダメージに、ナミも思わず同情の視線を送っていた。

『『ふりだしに戻る』だ…』

『どうもおじやました』

「あ…あの、その研究書を読みたかったですか？」

「そうだけど今となつては知る術も無しだ……」

「わたし、中身全部覚えてますけど」

ふらふらと退出しようとしたエドワードとアルフォンスに、シエスカはなんと言うことではないと言うように答える。

そのため兄弟は、一瞬だけ理解が追いつかず間拔けな顔を晒してしまった。

「『は？』」

「いえ、だから…一度読んだ本の内容は全部覚えてます。一字一句まちがえず。時間かかりますけど複写しましょうか？」

その言葉の意味をようやく理解し始めると同時に、エドワードとアルフォンスの顔を希望の光が照らしていく。

思わずエドワードは、シエスカの手をがっしりと握って涙を流していた。

「ありがとう本の虫!!!」

その賞賛の言葉は、あまり嬉しくなさそうだった。

「存ぜぬと言っているのが聞こえんのか、帰れ!!!」

「ウソをつくところの国の為にならんぞ!!! 海賊の隠匿は重罪だ!!!」

「海賊など知らぬ!!」

王宮の前では、傷ついた海賊たちを匿っているチャカが凄まじい剣幕で海兵達を睨みつけていた。

やましいことなど一切ないと、堂々たる姿はまさに守護神だった。

「よっ、お疲れ」

「ああ、お帰り。いるものはあったかね？」

「んくボチボチだ」

「町がこの状態だ。これだけ買えりや充分だろ」

「まあな」

その隣を、買い物から帰ったサンジ達を通り抜け、親しげに挨拶を交わす。

彼らが階段が上がっていくと、引き下がらない海兵達にさらに凄んでみせた。

「海賊がここにいる証拠でもあるのか!!?」

「いや……それは……」

「いつまでやっておるのか!!」

言い淀む海兵達に、今度は後ろから叱責が飛んでくる。

振り向けば、大量の木材をかついたアームストロングが、首をすくめる海兵達に厳しい視線を向けていた。

「いないものを探している暇があれば、町の復興を手伝うがいいわ!! 堂々とサボりおつて!!!」

「しよ……少佐……いい、いえ!! 決してサボっていたわけでは!!!」

「よやおっさん。ケガの具合はどうだ?」

「問題ない。中の子らにもよろしく言っておいてくれ」

「おう」

ビシツと親指を立て、相変わらずの鋼の上半身を見せつけるアームストロングにサンジとウソツップも応じる。

えつちらおつちらと階段を上っていた二人は、そういえばといった様子で顔を見合わせた。

「あいつら目エ覚ましたかな」

「起きたら起きたで騒がしいけどな」

常に一味に騒ぎを持ち込む船長と、それを叱りながら一味を見守る天使。彼らはずっと、ビビとチョッパの看病の元で長い眠りについていた。

第108話 “裸の王様”

「いや——っ!!! よく寝た〜っ!!!」

開口一番、目覚めて早々に元気な青年の声が王宮に響き渡る。

その騒がしさに、隣で深い眠りについていたエレノアも、ひどく鬱陶しそうに顔を歪めて体を起こした。

「あっ!!! 帽子は!!! 帽子!!! ハラ減ったア!!! 朝メシと帽子は!!!」

「うるさいなアもう……!!!」

「起きて早々うるせエなアてめエは………それに朝メシじゃねエ、今は夕方だ」

「帽子ならそこにあるぜ。宮殿前で兵士が見つけてくれてたんだ」

「おお、よかった!!!」

言われてルフィは、探せばすぐにあつた帽子を手にとつて頭にかぶる。

約束の証であるこれがなければ、やはり締まらないようだった。

「よかつた、二人とも元気になつて……」

「元気? おれはずつと元気じゃねエか」

「バカね…熱とかスゴくて大変だったのよ!!! ビビとチョップパーがずつとアンタ達の事

看病してたんだからっ!」

「そうなのか!! ありがとうな!!」

「手間かけてゴメンねエ……」

ホツとした様子で片づけを始めている二人に、ルフィとエレノアは一緒に頭を下げる。

するとそこへ、日課のトレーニングを終えて戻ってきたゾロが顔を出した。

「……おお、ルフィにエレノア。起きたのか」

「ああゾロ久しぶり!! 久しぶり?」

自分で言った言葉に、ルフィは不思議そうに首を傾げる。

安静にしていなかったことや勝手に包帯を取ったことで、ゾロがチョツパーに叱られているの尻目に、ルフィは違和感を感じた。

「久しぶり☒」

「ま、そういう気分にもなるだろうなア」

違和感の原因が分からず首を傾げたままのルフィに、ウソツプやサンジはさもありませんとため息をつく。

んん?と傾いたままの船長に、仕方がないと教えてやると、案の定ルフィは驚きで大きく目を見開いた。

「3日☒ おれ達は3日も寝てたのか？」

「そりや重傷だわ……我ながらよく暴れたもんだ」

あんぐりと口を開けて固まるルフィを見て、エレノアも納得の声を上げる。

かくいう彼女も全身裂傷だらけ火傷だらけ、傷がないところを探す方が難しいという具合で、痛々しいことこの上なかつた。

「……………15食も食い損ねてる」

「何でそういう計算速いのあんた」

「しかも一日5食計算だ」

「フッフ…食事ならいつでもとれるように言つてあるから平気よ」

しまった、と悔しげな顔になるルフィにナミたちが呆れ、ビビが苦笑しながら告げる。

すると不意に扉が開き、一人の恰幅のいい女性が腰に手を当てて声を発した。

「船長さんが起きたつて？ あと30分で夕食だから待つてくれないかい？ 一人で食べるよりみんなと食べた方がうまいからね」

「な………!!」

現れた女性を見て、ルフィがぎよつと目を見開く。

大柄な樽のような身体に、くるくると巻かれた髪を持つその姿は、ウイスキーピーク

で犠牲になったイガラムと瓜二つだったからだ。

だが、その顔にはしつかりと化粧が施されていたことに、一同は固まっていた。

「おお、ちくわのおっさん!!! 生きてたのか!!!」

「て……てめエやつぱりそんな趣味が……!!!?」

「?」

「違うのみんな」

最後に見た女装姿を、さらにグレードアップさせたイガラムらしき女性を前に一味が固まっていると、ビビがまた苦笑して間に入る。

「彼女はテラコッタさん。イガラムの奥さんでこの宮殿の『給仕長』なの」

「ビビ様と夫が世話になったね」

「紛らわしいなオイ!!!」

「似た者夫婦にもほどがあるぞ」

「姉か妹って言われた方が違和感ないですよ……」

夫婦は次第に似てくると言うが、あくまでそれは内面についてだったような、とエドワードは人類の神秘について悩む。

女装したイガラム、もといテラコッタは空腹なルフィにつこりと笑みを見せた。

「よく食べると聞いてるからね、夕食までのつなぎに果物でもつまんどいてくれるかい

「？」

「わかった」

「手品かよ!!!」

言われるより早く、または言われた瞬間に机の上から消えた果物の山に、サンジやウソップがぎよつと目を剥く。

当然ルフィは、この程度の量で満足するハズもなかった。

「おばちゃん、おれは3日分食うぞ!!!」

「望むところだよ！ 給仕一筋30年、若僧の胃袋なんかには負けやしないから存分にお食べ!!!」

意気込むルフィに腕まくりをして答えるテラコッタ。

そして彼女はその後、厨房という名の戦場で格闘することとなった。

「んん!!! んん!! んんん!!! んん」

王族が使用する長いテーブルの上に、一杯に並べられた料理の数々を、ルフィがバクバクととんでもない速さで、しかし一つずつ味わいながら平らげていく。

そこに気品などかけらもない、空腹を満たすためだけの食事だった。

「気品のかけらもない…!!!」

「この大食堂での会食は、もっと静かなものであるハズ……」

「ほら、どいたどいた、邪魔だよ!!!」

「言うだけあるね、だが負けないよ!!!」

唾然とする兵士たちを押しわけ、給仕の女性たちが忙しく料理の皿を運ぶ。

テラコッタがどれだけ作っても、どれだけ運んでもどんどん追いついてくる。汗を流しながら、テラコッタは健啖家たちに闘志を燃やして鍋を振るまくっていた。

「早く食べ、なくなっちまう!!!」

「おいルフイ、今おれの皿から取ったな!!!」

「んが!!!」

「そういうおめエもそりやおれんだろが!!!」

「いいなア……」

「さア追加だよ!!!」

「いただきまくす!!!」

「クエー!!!」

「飛ばすな!!!」

「おいおい、そんなに慌てて食ったらお前」

「……………!!!」

「量ならあるから!!」

ルフィに負けじと、どうか自分の分を奪われまいと仲間達も皿に手を伸ばす。いつの間にか混ざっていたマツゲも笑い、騒がしさはみるみる高まっていく。

何食も食べ損ね、抑圧されたルフィの食欲の凄まじさを知っている彼らは、ただ自分の分を奪われまいと必死になっていた。

「…なんて騒々しい食卓だ…」

「見てられん………」

「下品すぎる」

「じじ様もよく笑ってられるものだ…」

王族の優雅な食事風景に慣れた兵士たちにとっては、大騒ぎしながら口を動かす食卓はひどいものだったらしい。

だが王女がそれを見て大笑いし、楽しそうにしているのを見ると、兵士たちの態度も徐々に変化していく。

最後には兵士たちも一味の輪に混ざり、宴が行われ始めた。

国王も、護衛達も、給仕長も、誰もかれもが愉快そうに笑い声をあげ、その時間を堪能していた。

次に一味が案内されたのは、それはそれは大きく豪華な浴場だった。

美しい彫刻が施された像から、滾々と湧き出るお湯がプールの様な広さの湯船に溜まり、真つ白な湯気を立ち昇らせていた。

「ウオ——!!」

「宮殿自慢の大浴場だよ。本来雨季にしか使わんのだがね」

「スゲ〜〜!!! ゴージャス!! ゴージャス!!!」

「こりやすげエ」

「おれが一番だア!!!」

「いやおれだア!!!」

一番風呂を目指して走りだすルフィとウソップ。

だが濡れた場所ではしゃいだ代償か、二人ともずるつと足を滑らせ、後頭部をしたたかに打ち付けていた。

「へぶ!!」「ハバ!!!」

「楽しいかお前ら」

「おーい、ゾロ。アル洗うのちよつと手伝ってくれ」

「おう」

「おれもやるぞ!!」

呆れた様子でため息をついたゾロは、エドワードに呼ばれてすぐに手を貸しに行く。兄弟二人して片腕をやらせられ、しばらくは日常生活もかなり不便になりそうだったため、チョッパーも率先して手伝いに行った。

「いや、会食は実に楽しかったよ。時期が時期だけに清楚にすますつもりだったが…君達にかかれれば何でも宴にかわってしまふ様だな」

「おいゾロ見ろよ!!? 修業」ができるぞ!!」

「何のだよ」

打たせ湯に向かい、水しぶきをあげながらにんと口に行っているルフィたちにゾロはまたも呆れる。肩こり程度を癒す水量で何が鍛えられるというのか。

その近くで、エロい顔のサンジがイガラムの肩に手を回していた。

「で? 女湯はどっちだ? ん? ん?」

「アホか!! いえるわけなからうが、ビビ様もおるのだぞ!!!」

「あの壁の向こうだ」

「国王コノヤロー!!!」

「お!! おっさん、イケるクチだな!!」

誰よりも率先して覗きを望む国王にイガラムが咆哮するが、ウソップたちはむしろ親しみを覚え、彼の案内する場所へいそいそと向かっていった。

一方女湯では、湯船に腰まで浸かったエレノアがホウ、とため息をついていた。

まだ痛む全身を沈めるわけにはいかないが、半身をつけておくだけでもずいぶん疲れが抜ける気がした。

「気持ちいい〜」

「ホントにね〜…」

洗い場でビビに背中を流してもらっているナミが、広い浴場を見て羨ましそうに笑う。

長い航海のおかげで、こんなにゆっくりできたのは実に久しぶりの事だった。

「こんな広い風呂がついた船ってないかしら」

「あるわよきつと、海は広いもの」

「ウチのモビーにはなかったなア〜…男所帯だったからみんなシャワーで済ましちゃうんだよ。こういうおつきなお風呂に入ってみたかったんだよねエ〜」

「あはは…」

最強の海賊団の船での生活も、女性にとっては意外と不慣れな部分もあったらしい。

少しの間だけ湯船に前進を浸からせたエレノアが蕩けた表情で呟くと、ナミもビビも苦笑を浮かべた。

「巨人もいた、恐竜もいた、雪国には桜も咲いた………海にはまだまだ想像を越える事がたくさんあるんだわ!!」

「ごしごしとナミの背中をこすりながら、高揚した様子でビビが呟くと、ナミがその顔をじつと見つめる。

ハッと我に返ったビビは、ばつが悪そうに口を濁らせた。

「あつ、その……」

「交替」

「う……うん、ありがとう」

座る方向を反転させ、ナミがスポンジを手取る。

気恥ずかしさを感じながら、ビビがナミに背中を任せようと振り向いた。

そして、仕切りである高い壁の上から覗く、いくつもの視線に気がついた。

「ん?」

「ちよつとみんな何してるの!!?」

「あいつら………」

「ルフィやチョッパーまで混じってやんの」

ゾロを除くほぼ全員が顔の上半分(チョッパーはほぼ全身)を覗かせているのを見て、

ビビは顔を赤くし、ナミとエレノアはため息をつく。

目を見合わせた二人は、おもむろに立ち上がると男たちの前でバスタオルに手をかけた。

「ダブル幸せパンチ!!」

「ぐあつ」

「一人10万よ♡」

「二人とも!!!」

恥じらいを捨てた捨て身の攻撃で、男たちはバタバタと壁から真下に落下していく。ビビは顔を真っ赤にして抗議するが、ナミもエレノアもこの程度で臆するほどか弱くもなかった。

男子たちを追い払ったナミとエレノアは、ビビを誘って湯船に体を沈める。

そこでナミは、時折何かを考えこんでいるビビに思い切つて尋ねてみた。

「……………迷ってるんでしょ……………」

「え?」

「今夜にでもここを出ようかと思っててね」

「え?! ほんと!?!」

「だってもう居る理由がないじゃない。船長も目を覚ましたし、港にはたぶん海軍も構えてる。船もそろそろ危ないわ」

ナミの言葉に、ビビはハツと我に返る。

忘れていたがナミたちはみんな海賊、いつまでもこの国にいられるわけではなく、いつかは旅立たねばならない。

別れの時が、迫りつつあったのだ。

「……………ありがとう」

浴場の床に大の字に寝ながら、コブラが呟く。

鼻血を垂らして口にした言葉に、ルフィたちから軽蔑の視線が送られた。

「「「「「エロオヤジ」」」」」

「そつちじゃないわ!!! ………………国をだよ」

自業自得とはいえ、とんでもない風評被害にコブラは怒鳴る。

だがすぐに表情を改め、床にべたツと手をつけて、ルフィたちに深々と頭を下げた。

「オイオイいいのかよあんた! 国王がそんなマネして…!!!」

「これは大事件ですぞ、コブラ様……………!!! 王が人に頭など下げてはなりません……………!!!」

「イガラムよ、権威とは衣の上から着るものだ。…だがここは風呂場、裸の王などいるものか」

慌てるイガラムを制止し、コブラは頭を下げることをやめない。

礼として渡せるものは、今のこの国には何も無い。食事や風呂ではとても返しきれない恩に報いるには、せめて態度で示さねば気がすまなかった。

「私は一人の父として、この土地に住む者として心より、礼を言いたい。どうもありがとう」

一国をまとめる偉大な王、そんな彼が今この時だけみせる姿に、ルフィたちはまた笑う。

こうして一味は、更けていく夜を笑顔で楽しむのだった。

そんな時間も、やがて終わりが訪れる。

王宮にもたらされたある情報が、イガラムとチャカに衝撃をもたらしていた。

「どうしましょうイガラムさん……………!! すぐに彼らに伝えねば……………」

「ああ勿論だ。しかし、これは大変なことになってきた。無事にこの島を出られるとよいのだが……なんとという手回しの早さ……………!!」

彼らが手にしているのは、海軍から渡されてきた三枚の手配書。

見知った顔が三つ撮られたその手配書には、絶対に無視できない懸賞金の額が提示されていたのだ。

ロロノア・ゾロ 懸賞金6千万B^{ペリー}——

モンキー・D・ルフィ 懸賞金1億B^{ペリー}——

アイザック・エレノア 懸賞金2億B^{ペリー}——

その額はそのまま、恩人たちに向けられる敵意が跳ね上がることを示していた。

「この額ならば『海軍本部』の？将官”クラスが動き出す……！！……もう後には引けんぞルフィ君……！！ 君達は……”七武海”の一角を落とすのだ……！！」

一刻も早くこの凶報を知らせねばならないと、イガラムは息を荒げさせながら走る。額をどうにかできるわけではないが、警戒を促すことぐらいはできる。そう思っ、ルフィたちが休んでいるビビの部屋を目指したイガラムだったが。

「大変ですぞ……！！」

バタン、と荒々しく扉を開けたイガラムは、窓際で椅子に座るビビと床に座り込むエリリック兄弟を見て言葉を失くす。

恩人たちの姿は、その部屋のどこにも見当たらなかった。

「………?! ビビ様………!! エドワード君……アルフォンス君………」

「………よう」

「………んんんは」

「彼らは………?!?!? ルフィ君たちは……どこへ………?!?!?」

「なあに？ イガラム…そんなに慌てて…」

微塵も驚いた様子のないビビたちに、イガラムは訝し気に眉を寄せる。
逆に狼狽しているイガラムに、ビビはふっと困ったように笑った。

「海よ？ 海賊だもん」

第109話 “別れの時”

「んー…快適だ」

砂漠を走る六つの影、アラバスタ最速の超カルガモの背に乗った一味が、それぞれで道中を楽しむ。

徒歩で砂漠を歩いていたところに比べれば、なんと楽なことか。

「砂の国ともお別れか…おれ様を筆頭に大変な戦いだつたなア。…おいルフィ、いつまで食ってんだ」

「アラバスタ料理は最高だぞ。サンジ、今度作ってくれよ」

「ああ、おれも興味あつてな。テラコッタさんにレシピを貰ってきた。香辛料も少しな」
バクバクとカルガモの背でメシを食い続けるルフィに、ウソツプが半目を向けるが、ルフィはまったく気にしない。

だが次第に一味は、黙り込んでいるナミとエレノアに気づきその表情を曇らせる。

「……………ナミ？ エレノア？ ……………具合が悪いのか？」

「肉一コやろうか、一コだけ」

「……………ナミさん、エレノアちゃん。…ビビちゃんの事だろう…？ 気持ちはわかるよ

……でも……考えたって始まらねエ。……そりゃあれだけ仲良くしてたんだもん……
だけどホラ、顔を上げなよ……」

今の一味に、ビビとエルリック兄弟の姿はない。

それがどうにも、ぽっかりと穴が開いてしまったような寂寥感を味わわせているのだらうと、ルフイたちは女性陣を心配した。

「私達……諦める……ビビの為だもんね……」

切なげに、ナミは微笑みを浮かべながら仲間告げを告げる。

エレノアは目を逸らし、ナミの気持ちを案じて眉間にしわを寄せた、が。

「10億ベリ」

「「「つつたりめエだア!!!」」」

「金の話かよ!!!」

「一緒にすんなア!!!」

ナミが全く異なることを後悔していると知り、全員が声を荒げてツツコミを入れる。特にエレノアは、私たちとひとまとめにされたことに不服を示した。

「ウソツプく——ん!!!」

「うわく!!! ウソツプが落ちたア!!!」

「ナミ!!! てめエ紛らわしいマネしてんじやねエぞ」

「? なに騒いでんの? あんた達。ビビの事なら心配したって仕方ないでしょ?」

「おい!! ウソツプが落ちた」

「放つときなさいって……」

「お前のせいだろ!!」

ギャーギャーわーわーと騒ぎながら、一味はメリー号に向かって疾走を続ける。

三人の仲間を、置いて。

「カルー!! カルーはおるか?!」

「クエ〜?」

「ムダだよ、イガラムさん」

「なぜです、せめて自分達の立場を教えてやらねば……!!」

「カルガモ部隊に送らせてますから……カルーでも追いつけませんよ」

決して見過ごせない知らせを伝えねばとイガラムはカルーを呼ぶが、エドワードとアルフォンスがそれを止める。

知らせを聞いた彼らは、さしたる驚きを示しはしなかった。

「——それに同じよ。………それを知っても彼らは喜ぶだけで、何も変わらない」

苦笑しビビは、納得しきれないイガラムをそうなだめる。

ビビの言う光景が浮かんだのか、イガラムも唸りながら肩を落とした。

「みんなの事なら平気よ。さア出てって」

「しかし……………」

「私達、眠るから。明日は早いでしょ!?!」

「ア…………ああ…そうです…そうでした。明日は国中にあなたの声をお聞かせせねば」

「わかつてる。おいでカルー、一緒に寝よ」

どうしようもない話をいつまで続けるつもりか、とビビは退出を促す。

ビビの口から王女の仕事についての言葉が出たことで、イガラムも我に返ったように頭をかいた。

「エドさんもアルさんも…お休みなさい」

「…ああ。おやすみ……………ビビ」

「おやすみなさい……………ビビ様」

素直に応じるエドワードとアルフォンスだが、彼らの表情には悔しげな様子が浮かんでる。

やがてパタンと扉が閉じられ、カルーだけになると、ビビはベッドの中で彼の頬を撫でた。

「静かね……………カルー……………こんな静かな夜は…久しぶり…」

それに応える者は、誰もいない。

先に眠りについてしまったカルーはいびきをかくだけで、広い部屋に一人きりになったビビの声虚しく消えていった。

「ここには冷蔵庫荒らしと格闘するコックさんも、夜な夜なトレーニングを始める剣士も……寝ぼけて枕を投げってくる航海士も……誰もいない」

大きな喪失感を抱えたまま、ビビはナミから告げられたことを思い返していた。

——よく聞いてあんた達、『12時間』猶予をあげる。

部屋でくつろいでいたルフィたちに、もたらされた一本の電話。

海軍から逃げ延びたMr. 2・ボン・クレイが、メリー号を預かっているという知らせだった。

さっさと行かねば、何をするか分かったものではない。

『私達はサンドラ河で船を奪い返したら、明日の昼12時ちょうど!!「東の港」に一度だけ船をよせる!! おそらく停泊はできないわ……』

ナミはそう言って、ビビとエルリック兄弟に選択肢を与える。

三人とも一味にいた理由はもうなく、このまま一緒に行くかどうかは彼らの意志次第だったからだ。

『あんだ達がもし…私達と旅を続けたいのなら、その一瞬だけが船に乗るチャンス!!
その時は…歓迎するわ!! 海賊だけどね……………!!』

『一国の王女と国家錬金術師だからな、これがおれ達の精一杯の勧誘だ』

『来いよビビ!! エド!! アル!! 絶対来い、今来い!!』

『やめろつてルファイ!!』

『何だよお前ら、来てほしくないのか?!』

『そういうんじゃないエだろ、あいつらが決めることなんだ!!』

当然仲間達はともに行くことを望むが、ビビはその未来を大いに悩む。

その横で、ビビ程の立場にないエドワードとアルフォンスは、その呼びかけに悔し気に首を横に振った。

『…悪いんだけどよ、おれ達はダメだ』

『うん…………この旅で結構痛感しました』

二人が見ているのは、なくなった自身の右腕と鎧の体。

特殊な技術で作られた義手は航海中に用意できるわけがなく、アルフォンスの身体も直せるのはエドワードだけ。

今の彼らには、^{グランドライン}偉大なる航路の航海は危険が過ぎた。

『おれは腕がこんなんで、アルもボロボロのままだしな。今のおれ達がついて行つたと

しても、絶対に足手まといになっちまう』

『ボクもこんな状態で……いつ何があるかわかったもんじやない。本当は……一緒に生きていとは思ってますけど』

本気で悔しそうに、エドワードもアルフォンスも答える。

今ほどかつて罪を犯した自分たちを恨んだことはないだろう、そんな表情だった。

しかしエドワードは、残念そうに見つめるルフィたちにとつと笑みを見せた。

『ただよ……おれ達がちゃんと元の体を取り戻したら、必ず追いつくって約束するよ。お前らとの旅は最高だった……!! あんなに楽しい旅は生まれて初めてだった!!! でき

るならこのまま……お前らと一緒に起きたかったよ』

『うん……ボクも……できるならもつといろんな冒険をして、いろんなものを見たい……

!! でも……今一番やってみたいのは……!!』

期待に満ちた様子で、アルフォンスもルフィたちを見つめる。

そしてその視線は、照れくさそうにサンジに向けられた。

『サンジさんのご飯……お腹いっぱい食べてみたい』

サンジはアルフォンスの言葉に、思わず笑みを浮かべる。

肉体を失い、感覚の全てを失った不便な身体の青年の願いに、自分の料理が望まれるというの、料理人冥利に尽きるというものだ。

『国家錬金術師の資格も、元の体に戻るために必要だったから取っただけで思い入れもねエ!! おれ達がやるべきことをやって、資格も捨てて、さっぱりした時には……お前ら、また仲間に誘ってくれねエか?』

『当たり前だ!!』

『待つてるぜエド!! アル!!』

再びの仲間入りに意欲的な兄弟を、ルフイたちも当然歓迎する。

エドワードは満面の笑みを浮かべると、続いてビビに視線を向ける。

———そういうわけだ……おれ達はいったんここまでだが、あんたには選択肢がある……。

行くか、ここに残るか……!!

あんたの自由だ。

ビビはその呼びかけに、非常に悩んでいた。

王族としての責任を全うし、不自由なく暮らすのか。世間に後ろ指をさされながら、自由の世界に飛び出すのか。

一朝一夕では出せそうにない決断だった。

(明日の昼12時……東の海なら……カルーの足で4時間……ここを8時に出れば間に合う……)

遅くなれば、ルフィたちが海軍に捕まってしまう。

自分の行動一つで、大切な人たちが窮地に追いやられてしまうのだ。

(自分が海賊になるなんて……考えたこともなかった……そんな人生の選択なんて……この機を逃したらもう一生有り得ない。王女であることをつまらないと思つた事はないし、反乱が終わつても……国はまだ大変な時期……)

行きたいという思いと、行きたくないという気持ち。

胸の中で揺れ動くその想いに苦しみ、ビビは不安気にカルーの頬を撫で続けた。

「……私が行くななら……あなたも行くわよね……ねえカルー……あなたは……どうしたい？」

メリー号の上で、バサツと純白のコートが翻る。

それを纏つた大柄なオカマが『オカマ道』の文字を一味に見せつけた。

「ん待つつつつつつつてたわよアンタ達つ!!! おシサシブリねいつ!!!」

「さア着いたぞ……」

「よ——し荷物下ろせ。ありがとなお前ら」

「お前達ともここでお別れだ……氣イつけて帰れよ」

「王とかちくわのおっさん達によろしくなア!!!」

「元気でなア〜!!!」

「「「「クエ〜〜ツ!!」」」」

一味は完全にMr. 2・ボン・クレーを無視し、さっさと荷物を運びこむ作業に入る。ここまで運んでくれた超カルガモ部隊に盛大に感謝の言葉を投げかけ、走り去つていく彼らを見送つた。

「また…!! ……また!! いつの日か会おうなア〜!!! ——つてちよつと待てやア!!!」

カルガモたちの姿が見えなくなると、そこでMr. 2・ボン・クレーの怒りが爆発した。放っておかれたのが相当不服の様だ。

「何だよ」

「何だじゃナ〜〜イわよ——う!!! そーゆー態度つてヨクないんジャナ〜〜イ!!!?」

「ダチに対して!!」

「ダチつて何だよ。お前、敵だったんじゃねエか。ダメしやがつて」

「ダメしてないわよ——う!! あちしも知らなかつたのよ——う!!!」

一度は仲良くなつたとはいえ、やはりルフィにも不信感はあるらしい。

Mr. 2・ボン・クレーもそれを詫びながら、やがて落ち着いた様子で船の縁に腰かけた。

「——でもまあ…もういいジャンナイ、そんな事」

「オイ、横にずれろ」

「あ、ゴメンねい。バロックワークス社は滅んだの、あちし達はもう敵同士なんかじゃない…」

「敵同士じゃなくても何でお前、おれ達の船に乗ってんだよ」

「はふー、コノスツトコドツコイ」

「何だと!!?」

心底呆れた、という様子で肩をすくめるMr. 2・ボン・クレーの態度に、イラツとしたルフィが声を荒げる。

だがオカマは、そんな彼の勘違いをただすように説明を始めた。

「いいいい!! あちしが今、この船に乗ってなかつたらこの船はドウなつてたと思つてんの!!」

「海軍に奪われてたかもね」

「かもねじゃないわ!! 確実にやられてた!! 今この島がドウいう状態にあるか知つてる!!? 海軍船による完全フォーサよ!!! 封鎖つ!!! スワン一匹も逃げられない」

オカマの語る状況に、ルフィたちはハツと息を呑む。

彼の言う通りなら、自分たちは出航さえままならなくなるところだったのだ。

「……じゃあお前……海軍からゴーイングメリー号を守ってくれたのか……？」

「なぜだ!!」

「何で!?」

「友達、だからよう」

涙を滲ませて親指を立てるMr. 2・ボン・クレーに、ルフィたちの警戒心はどこかに吹っ飛ぶ。

恩人に対していつまでも壁を作るなど、あつてはならない事だった。

「やっぱりお前はイイ奴だったんだア!!! ジョウダンじゃないーわよう!!」

「ジョウダンじゃなーいわよう!!!」

いつぞやのように肩を組んで騒ぎ始めるルフィたちに、ゾロとナミ、エレノアは半目でのため息をつく。

お涙頂戴なやり取りに流されるほど、剣士や女性陣はお気楽ではなかった。

「——つまりMr. 2……海軍の『海岸包囲』によってお前も島を出られなくなり……」

「味方を増やしたかったわけだね？」

凶星を刺されたMr. 2・ボン・クレーがびくつと反応し、船の欄干に背中をぶつける。

しかしすぐに復活し、泣きながら開き直ったように拳を掲げた。

「そうよ?!? こんな時だからこそ!!! こんな時代だからこそ!!! つどえ!!! 友情の名の下に!!! 力を合わせましょ〜う!!!」

「うおおおお!!!」

「……………もお」

もはや何を言っても無駄だろう、そう結論を下してエレノアはナミとともに肩を落とす。

ゾロやサンジに至っては、そもそも問題とも思っていない様子で作業を続けていた。

「よろしくお願ひしまーす」

「いたのか……」

近くに停泊していた白鳥の船首の船、その上に乗っているMr. 2・ボン・クレーの部下たちを見て、エレノアは深いため息をつくのだった。

第110話 “切れない絆”

「撃て、撃てエ!!!」

海軍の軍艦から放たれた砲弾が弧を描き、メリー号とスワン号に降り注ぐ。

片方から降り注いだそれらを全て叩き落とす一味だが、同時に船の反対側に砲弾が突き刺さり、さらなる傷を負わせてしまった。

「くっそくっそ!!! 砲弾で来い!!! はね返してやるのに!!!」

「まったくジヨくダンじゃナイわよーう!!!」

「こんな鉄の槍を船底にくらい続けたら、沈むのは時間の問題だぞ!!!」

飛来してくるのは、丸い砲弾ではなく黒い槍。

破壊ではなく穴を開けることに特化したその砲弾は、獲物を捕らえる狩猟具のようであつた。

「何とかしてよあんた達!!!」

「おい!!! もう穴防ぎきれねエよ!!!? エドもアルも戻ってきてくれエ!!!」

「一度には一面を守るのがやつとだ!!!」

「8隻相手じゃ手数が違うすぎる!!!」

「白兵戦ならこつちに分があるつてのに!!! 追おうが逃げようが…コイツら絶対にこの陣営を崩さねエ!!!」

軍艦は二隻ずつ並び、メリー号とスワン号を前後左右から取り囲み、一定の距離を保つて完全に包囲している。敵を捕らえることに集中した陣営だった。

その様子を、南側の陣営の軍艦に乗る海兵達が喜ばしげに嘲笑っていた。

「黒艦部隊名物『黒ヤリの陣』」

「てめエらごときに破れるかア!!! アホ——!!! ア~~~~~ホ~~~~~つ!!!」

「ムカつくあいつら」

「おいおいっ!! 催眠術師!! お前海賊だろうが!!!」

「左の奴誰だっけな……」

ルフィは軍艦に乗っている海兵、ジャンゴに怒鳴り、ゾロはもう一方の軍艦に乗っているフルボデイに首をかしげる。

どういふ経緯で二人がコンビを組んでいるかなど、彼らは知る由もなかった。

「ここで会ったが100年目だ!!! その一味…!!! 今日ここで沈めてやる!!!」

「ギアこの輪をじつと見ろ! 今日こそおれが変じやねエ事を証明してやる!!!」

意気込むジャンゴとフルボデイだが、突然ジャンゴの乗る軍艦が爆発で傾き、フルボデイの方を巻き込んで沈没していく。

ブクブクと沈む軍艦に、大砲を撃ったウソツプが唾然となっていた。

「あーあー」

「ウソツプ君やるねエ……」

「あーあー」

感心した声を上げるエレノアだが、賞賛している事態ではない。完全だった包囲に、確かな隙が生じていた。

「よ……よオし!! 計算通りだ、おれにかかりやあんなモンあだぜ!!!」

「鼻ちやんスゴイわ!! やったわねい!! 南の陣営が崩れたっ!!! あそこを一気に突破しよう!!!」

歓喜の声を上げるMr. 2・ボン・クレールが、急いでその突破口へ急ごうとする。

そこへ慌てた様子の部下が駆け寄り、彼を驚愕させた。

「ボン・クレール様、大変です!!」

「ナ……ニよ——う!!!」

「黒檻”です」

「ウゲツ!!」

「黒檻”のヒナか!!!」

耳に届いた報に、Mr. 2・ボン・クレールだけでなくエレノアも表情をひきつらせる。

彼女に取つては最悪の相性の相手が登場したと聞けば、焦るのも仕方なかった。

「何なんだ!?!」

「この海域をナワバリにしてる本部大佐だよ!! 昔マジで捕まりかけたんだ!!!」

「厄介な奴が出てきたわ!!! さつさとトンスラぶつコクわよう!!!」

「ハッ!! Mr. 2・ボン・クレール様!!!」

すぐさま逃亡の用意を始めるスワン号の乗組員。

だが麦わらの一味は、前進の姿勢を崩そうとはしなかった。

「ずいぶん弱らせたようね……」

「我らの『黒ヤリの陣』で落とせぬ船はありません」

「調子に乗るんじゃないの。ああいう輩はナメると最後に噛みつかれるのよ」

メリー号の北側を進む軍艦の上で、状況を見定めていたタバコをくわえた美女ヒナが
呟く。

メリー号に乗る一味、その中でも白虎の耳を持つ天使を見つめ、その視線を鋭くさせ
た。

「『^{ウイザード}妖術師』……今度こそ逃がさないわよ」

一方メリー号では、Mr. 2・ボン・クレーとの間で一悶着が起きていた。

せつかく切り開いた突破口に向かわず、一味は前を向いたまま進もうとしていたからだ。

「何やってんのアンタ達イ!!! 逃イ——ゲルのよう!!! あの南の一点を抜ければ被害を最小限に逃げ出せるわ!!! このまま進めば必ずやられるわよう!!!」

「行きたきや行けよ。おれ達はダメだ」

「ダメだつてナニが!!!」

「ボン・クレー様急いでください、おれ達だけで逃げましょう!!!」

焦るMr. 2・ボン・クレーにそう言い、一味は前方を、アラバスタの方を目指す。

「『東の港』に12時……!! 約束があるの。回り込んでる時間はないわ、つつ切らなきゃ」

「ハン!!! ……バカバカしい!!! 命はる程の宝でも港に転がつてるつての!! 勝手に死になサイ」

何をこだわる必要があるのか、とあきれた様子で背を向けるMr. 2・ボン・クレーに、ルフィは東の港を目指したまま笑って告げた。

「仲間を、迎えにくんだ!!!」

その言葉に、Mr. 2・ボン・クレーは愕然とした表情で硬直する。

しばらくの間黙り込んだ彼は、やがてメリー号の縁の上に立つと、自身の部下達を見下ろして仁王立ちした。

「ボン・クレー様……!!?」

「……ここで逃げるは、オカマに非ず!!!」

戸惑いを見せる部下達にMr. 2は、いや、ベンサムは覚悟を決めた表情で告げる。

これから自分が行うわがままに、彼らを巻き込むことを詫びながら。

「命を賭けて友達を迎えに行く友達を……見捨てておめエら、明日食うメシが美味エかよ!!!」

ハツと息を飲む部下達を満足げに見やり、ベンサムはルフィ達に振り向く。

滂沱の涙を流しながら、彼は自分の覚悟を彼らに示した。

「いいか野郎共及び麦ちゃんチーム、あちしの言う事よおく聞きねい!!!」

有無を言わせぬその姿に気圧されたルフィ達は、頷かずにはいられなかった。

着実に包囲を狭めていたヒナの部隊。

だがの動きに、不意に変化が訪れた。

「ヒナ嬢!!! 奴ら2船に分かれました!! 『あひる船』が南下!!!」

「『あひる』はどうせ囿でしょ?」

「いえ…それが……!!」 麦わらの一味は全員『あひる船』に乗ってます!!」
「ヒナ嬢!! 囷は『羊船』の方です!!」

一味のものではないスワン号を狙う必要はないため、さほど脅威とは見ていなかった。

だが麦わらの一味がそれまで乗っていた船を捨て、スワン号に乗り換えるとは予想外だった。

「追いなさいすぐに!! もう一度陣を組むのよ!!」

若干慌てながら、ヒナは標的の乗るスワン号に狙いを移し、全隊に命令を下す。

さしたる時間もかけず、再び船を包囲し直した時だった。

「が——っはっはっはっはっはっはっはっはっはっ、アンタ達のお探しの『麦わら』のルフイってのは……あちしの事かしら!!」

メリー号に対する警戒を完全に捨て、スワン号にのみ注目していたヒナ達の目に飛び込んできたのは、麦わらの一味。

だがその誰もが、それらしく変装を施したスワン号の船員達であった。

「なんてねい」

「ヒナ嬢!! 『羊船』が東へ抜けます!!」

「が——っはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

ルフィの顔をした、派手な格好の男が頬を叩くと、一瞬でその姿は大柄なオカマのものに変化する。

騙された、と気づいた時にはもう遅かった。

「ヒツ、かかったわねい……あちしたちは『変装』のエキスパート、そして……麦ちゃん達の友達……!!」

自ら囮となることを買って出たベンサムが、怒りと悔しさに顔を歪めるヒナ達の前に出る。

カカン、と彼は勇ましく四股のような構えを取り、ヒナ達を睨みつけた。

—— 男の道をそれるとも

女の道をそれるとも

踏み外せぬは人の道

散らば諸友

真の空に

咲かせてみせよう

オカマ道ウエイ

Mr. 二・盆暮

あやふやこそが彼の信条。

それ故に、固く貫き通さねばならぬ道があると、己の生き様を見せつけるように。彼は、友の敵の前に立ち塞がった。

「かかって来いや」

「ヒナ屈辱」

海上で、業火が昇る。

砕け散っていくスワン号、消えていく男達の怒号、その全てを目に焼き付けながら、ルファイ達は涙を流した。

「ボンちゃん!! おれ達、お前らの事絶つつ対、忘れねエがらな」ア~~~~!!!」

もう涙のせいか遠さのせいか、友の姿は見えやしない。

だが彼らの目にはしっかりと、最後まで勇ましく戦い続ける彼の姿が映っていた。

——散らば水面に

いとめでたけれ

友の華

『少しだけ、冒険をしました』

少女の声が、拡声器を通して国中に響く。

国を救うため、傷だらけになりながらも戦い続けた王女の語りに、国民全員が真剣に

耳を傾けていた。

『——それは暗い海を渡る“絶望”を探す旅でした：国を離れて見る海はとても大きく：そこにあるのは信じ難く力強い島々。見た事もない生物：夢とたがわぬ風景。波の奏でる音楽は、時に静かに、小さな悩みを包み込むように優しく流れ。時に激しく、弱い気持ちを引き裂く様に笑います』

若者も老人も、男も女も、みんながそれを優しい笑顔で聞き届ける。

その中には国王や、反乱軍のリーダーだった青年、枯れた町の町長と肉屋夫婦の姿もあつた。

『……暗い暗い嵐の中で一隻の小さな船に会いました。：船は私の背中を押してこう言います。「お前にはあの光が見えないのか？」』

王女の言葉は、彼女の気持ちを表した詩のようで、当事者ではない国民達には全ては理解できない。

だが王女の臉には、その光景が広がっていた。

『闇にあつて決して進路を失わないその不思議な船は、踊る様に大きな波を越えて行きます。波に逆らわず、しかし船首はまっすぐに：たとえ逆風だろうとも』

王女の臉の裏には、ともに旅をしてきた9人の姿が浮かぶ。

過酷な海を陽気に、笑顔を決やすことなく突き進んできた彼らの姿が。

『——そして指を差します。「見ろ、光があつた」——』

人はそれを信じないだろう。

だが誰かに認められなくても、一笑に付されようとも、この真実だけは否定させたくなかつた。

『……………歴史はやがて、これを幻と呼ぶけれど、私にはそれだけが真実』

東の港に近づいていくメリー号にも、その演説は届いていた。

それが示す結果に、ルフィは焦りをにじませた表情を浮かべていた。

「聞こえたる、今のスピーチ。間違いなくビビの声だ」

「アルバーナの式典の放送だぞ。もう来ねエと決めたのさ…!!」

「ビビの声に似てただけだ…!!」

「行こう、12時を回った…」

「来てねエわけねエだろ!!! 下りて探そう!! いるから!!!」

別れを嫌がるルフィやチョッパーに、他の仲間もどこか寂しげな表情を見せる。

仕方がないこととはいえ、もう顔も見られないのかと思うと、やはり悲しみがよぎつた。

「おい、まずい!! 海軍がまた追つて来た!!」

「一体、何隻いるんだよ」

「船出すぞ!!! 面舵!!!」

いつまでも待つてはいられない、と一味はすぐさま出航の準備を進める。

待ち続けようと、しかし辛そうに眉間にしわを寄せるルフィに、エレノアがポンと肩に手を置いた。

「諦めなよ、ルフィ…みんなの時とはワケが違うんだ」

姉貴分のその言葉で、渋々アラバスタの方から視線を逸らしたルフィ。

その時響いた声に、全員がハッと息を飲んだ。

「みんなア!!!」

振り向いた先に見えたのは、美しく身を飾ったビビの姿。

護衛としてか、左右にエドワードとアルフォンスを立たせた彼女が、大きく手を振りながらルフィ達に笑顔を見せていた。

「ビビ!!!」

「カルー!!!」

「ホラ来たア!!!」

「エドとアルもいるぞ!!!」

「船を戻そう、急げ!!!」

「ビビちゃん♡」

「海軍もそこまで来てるぞ!!!」

急ぎ迎えに行かなくては、と一味が慌てて港に向かおうとする。

だがその前に、ビビは一味に向けて大きく声を張り上げ、告げた。

「お別れを!!! 言いに来たの!!!」

「?! ……今、何て…?!」

距離のせいとか、ビビの声は波と風の音に遮られ、上手く聞き取れなかった。

いや、わずかに聞きたくないと思ってしまったためか。

『私…一緒には行けません!!! 今まで本当にありがとう!!!』

カルーに持たせた拡声器を使い、ビビはルフイ達に最後の言葉を伝える。

言えずにいた想いを伝えるため、ありつただけの感謝の気持ちをぶつけるため、ビビは笑顔で叫んだ。

『冒険はまだしたいけど、私はやっぱりこの国を愛してるから!!!』
——だから行けませ

ん!!!』

「……………そうか!」

『私は——』

ルフイはその言葉に、ようやく納得の表情を見せる。

言葉を続けようとしたビビは、不意にこぼれてきた涙で思わず身を震わす。遠くなつていく一味の姿に、怒濤の勢いでこれまでの思い出が駆け抜けていったのだ。

『…私は、ここに残るけど……!!』

決して友好的ではなかった出会いと、そんな自分を信じてくれた優しさ。

危険な旅路なのに絶えることのなかった笑い声と、もたらしてくれた喜び。

大変なことも多々あったけれど、その全てがビビにとつての宝物で、忘れられないものになっていた。

『いつかまた会えたら!!! もう一度、仲間と呼んでくれますか!!!?』

返事はない。王女が海賊とつながりがあると知れば、立場が危うくなる。その優しさが今は、寂しくて仕方がない。

「……おい、王女さん」

だが隣から声を発したエドワードに、ビビは気づかされる。

遠く去っていくメリー号の後部で、一味が左腕を天高く掲げて並んでいる光景に。

——これから何が起こつても、左腕のこれが仲間の印だ。

そう言つて刻んだ、×印。他の誰も知らない、仲間だけが知っている絆の証。

言葉はいらない、言う必要もないほどに当たり前のことだと、仲間達は告げていた。

ビビはそれに、自身も左腕を掲げることに応じて。

隣でカールが、エドワードとアルフォンスが、雄叫びをあげながら応じているのを感じながら、ビビはずっとその場に立ち尽くしていた。

一味の船が見えなくなるまで、ずっと。

「…行っちゃったね」

「なアに、すぐに追いつくさ……」

一味を追い、海軍の船もその場からいなくなつてようやく、兄弟は語り合う。

しばらく感慨深げに海を見つめていたエドワードは、やがて神妙な顔で再び口を開いた。

「……アル。おれはさ……姉弟子の話聞いて、確かめておかなきゃならねエことを思い出したんだ」

訝しげに振り向くアルフォンスに、エドワードはやや険しい表情で呟く。

逃げていた事柄に立ち向かう覚悟を決めた、そんな真剣な表情だった。

「おれ達は何か……大きな勘違いをしている。それをただしておかねエと、この先の道でまたつまづくことになつちまうと思う」

「勘違い……!!」

「二度、戻ろうと思うんだ……おれ達の故郷『リゼンブル』に……おれ達の原点に」
それは兄弟にとつて、忘れてはならない戒めのようなもの。

もう二度と振り返らないと決めていたそれを、エドワードはあえてもう一度暴くつもりになっていた。

「……うん。一緒に行こう」

さほど迷うそぶりも見せず、アルフォンスもそれに頷く。

自分たちの悲願を叶えるため、そして新たに持った夢を叶えるために。

第13章 空へのロマン

第111話 “おしかけ考古学者”

砂漠の国を後に、船は進む。

大切な仲間達を置いて行き、新たな冒険を求めて、一味は指針の指す方へ進んだ。

「もう追ってこねエな…海軍の奴ら…」

「ん——…」

「ん——…」

「ん——…」

進行方向の安全確認を行っていたゾロが呟くと、彼の後ろから覇気のない声が聞こえてきた。

「つき離れたんだろ!?？」

「ん——…」

「ん——…」

「ん——…」

「…あのな」

耐えかねたゾロが、船室の前の欄干の下でうつぶせになっている、自分を除くほぼ全員を睨む。その全員が漏れなく、情けない泣き顔になっていた。

ゾロを除けば唯一平常のエレノアが、呆れた様子で仲間達に横目を向けた。

「何よその気のない返事……決めたことでしょう？」

「……さみし……」

ビビヤカルー、エルリック兄弟との涙の別れを終えた一味だが、やはり寂しさは堪えきれなかったらしい。

涙や鼻水でぐちゃぐちゃの顔のまま、何もする気になれずにいるようだ。

「めそめそすんな!!? そんなに別れたくなきや、力づくで連れてくりやよかつたんだ」

「うわあ野蛮人……」

「最低……」

「マリモ……」

「三刀流……」

「待て、ルフィ。三刀流は悪口じゃねエぞ」

「わかつたよ、好きなだけ泣いてろ」

やや乱暴なことをゾロが言うのと、ルフィたちはここぞとばかりに蔑んだ目を向けてくる。

呆れたゾロは、隣でぼんやりと佇んでいるエレノアに訝しげな目を向けた。

「……お前はあつちに混ざらなくてもいいのか？」

「そんな子供じゃないもの……それに、死に別れたわけでもないしね」

やれやれと肩を竦め、エレノアはふっと微笑みを浮かべる。

寂しさが無いわけではない、だがそれを押し殺さず、抱えて前に進もうとする意志が、彼女の目には感じられていた。

「生きてこの世界のどこかでいてくれてるなら……それで十分じゃないのさ。違う？」

みんな

「おお……」

「大人だ、大人がいるぞ」

子供じみた駄々をこねる自分達とは違う、立派過ぎる男らしさを見せるエレノアに、ルフィたちは途端に恥ずかしさを覚えて頬を引きつらせた。

そんな視線も無視し、海風を受けて別れの余韻に浸っていたエレノアだったが、不意にその眉間にしわが寄り始めた。

「……ていうかさ、いい加減出てきてくれないかな？」

ギロリ、とエレノアの目がルフィたちに、ではなく、その下の船室の扉に向けられる。するとその声に答えるように、扉が開かれた。

「あら、もうバレちゃったの？さすがね」

「……………」

聞き覚えのある、というかありすぎるその声に、全員の目がぼかんと見開かれる。

そして、その声の主が——バロックワークスのNo. 2だったニコ・ロビンが姿を現した瞬間、一味はパニククに陥った。

「組織の仇討ちか!!? 相手になるぞ…」

「何であんたがここにいんのよ!!?」

「キレーなお姉サマ〜っ♡」

『敵襲〜!!! 敵襲〜っ!!!』

「あああああああつ、誰?」

ある者は戦闘意志を全開にし、ある者は喚き散らし、ある者は見惚れ、ある者はひとしきり騒いで首を傾げたりと、その場は無茶苦茶になる。

訝しげな目を向けていたルフイは、ようやく思い出したのか素直に驚きの目を向けた。

「あ! ……何だ、お前じゃねエか!!? 生きてたのか」

「そういう物騒なもの、私に向けないで——って前にも言ったわよね?」

ロビンは能力を発動させ、ゾロの剣やナミの天候棒をはたき落とす。

武器を手放させられ、慌てて距離をとったナミは、物陰からきつくロビンを睨みつけて叫んだ。

「あんたいつからこの船に」

「ずつとよ——下の部屋で読書したりシャワー浴びたり。これ、あなたの服でしょ？
借りてるわ」

「何のつもりよバロックワークス!!？ あんたも気づいてたなら言いなさいよー」

「面倒だったのでつい」

「ついで済むか!!？」

ポリポリと頭をかくエレノアに、目を吊り上げたナミが怒鳴る。敵の組織の幹部がいたのに、それを報告しないなど何度自分の心臓を潰せば気が済むのかと。

そんな大騒ぎの中、ロビンは気の抜けた顔で佇むルフィに色つぼい流し目をくれて口を開いた。

「モンキー・D・ルフィ」

「ん??？」

「——あなた、私に何をしたか…忘れてはいないわよね…？」

その言葉の直後、メリー号は妙な静けさに包まれる。

波のさざめきのみが聞こえる奇妙な沈黙の中、不思議そうに首をかしげるチョッパー

の横を通り過ぎ、エレノアがルフィに近づいた。

「おい、あんた何やった？ お姉ちゃん怒らないから正直に言いな」

「ぎゃあああ!!」

ガツ!!とエレノアの手が、ルフィの顔を掴んで指を食い込ませる。ルフィの顔は原型を留めないほどに変形し、船長は悲痛な悲鳴を上げてみ悶えた。

「な…ナニっつておいルフィてめエ、キレーなお姉さんにナニしやがったんだオオ!!」

『速やかに船を降りナサーイ』

「サンジくんウソツプくんうるさい」

「おいお前!!? ウソつくな!!? おれはなんもしてねエぞ!!?」

いらん想像をしたらしいサンジが羨望の眼差しで騒ぎ始め、無表情のエレノアとともにルフィに掴みかかる。

身に覚えがないルフィは否定の言葉を吐くが、ロビンはそれにフツと笑みを浮かべて首を振った。

「いいえ、堪え難い仕打ちを受けました。責任…とつてね」

ビキイツ、とエレノアのこめかみに血管が浮き出る。

その怒りはそのままルフィの顔を掴む手に伝わり、彼の頭蓋はめきめきと嫌な音をたて始めた。

「有罪」
ギルティ

「さて!!? ほんとに待て!!? ほんとに知らねエぞ!!? それなんでかすげエ痛エんだからやめろ!!」

真つ黒に染まったエレノアの手を掴み、必死に引きはがそうともがくルフィ。

なんとか離してもらったルフィは、手の形に赤く染まり若干変形した顔をロビンに向け、咎める目を向けた。

「意味わかんねエ奴だな。どうしろっていうんだよ」

そんなルフィの問いに、ロビンは笑みとともに答えた。

「私を、仲間に入れて」

「は!!?」

呆ける一味にロビンは語る、自分は死ぬつもりだったのだと。

望んだ情報は手に入らず、闇の世界に生き続けることに疲れ切った彼女は、崩壊する神殿と運命を共にしようとした。

だが、青年はそれを認めなかった。

死を求めるロビンの言葉を無視し、毒に侵された身体で、はるか上の地表まで登り続けたのだと。

「死を望む私をあなたは生かした……それがあなたの罪……」

ロビンはそう告げ、ルフィに自分の要求を伝える。

死にたがっていた自分を生かしたのだから、最後まで自分の面倒を見る、と。

「私には行く当ても帰る場所もないの——だからこの船において」

「何だそうか。そらしようがねエな、いいぞ」

「ルフィ!!!」

「心配すんなって!!? こいつは悪い奴じゃねエから!!!」

あまりの展開に待ったをかける仲間達に、ルフィは満面の笑みを浮かべて応えてみせた。

「8歳で『考古学者』、そして『賞金首』に」

「考古学者!?」

「そういう家系なの。その後20年、ずっと政府から姿を隠して生きてきた」

予想もつかない特殊な経歴に、取調室のように机と椅子を用意したウソツプが感嘆の声を上げる。

船長がいいと言ったからといって、はいそうですかとすぐには信用はできないと、急遽事情聴取の場が設けられていた。

「子供が一人で海に出て生きて行けるわけもなく…色んな『悪党』に付き従う事で身を

守ったわ」

「…なかなかハードな人生経験をお持ちのようで」

「お陰で裏で動くのは得意よ？ お役に立てるはず」

謎多き美女は深くまで語らない。それ故に幼き頃から経験したであろう彼女の闇が創造され、エレノアは低い声で嘆息する。

それに気づかないウソツプは、興味を惹かれたのは少しずつ質問を増やしていった。

「ほほう、自信満々だな…何が得意だ？」

「暗殺♡」

「ルファイ!!! 取り調べの結果、危険すぎる女だと判明!!!」

だが、やっぱり敵側にいた女という印象があり、そして何より冗談に聞こえないからかいにより、慌てて泣きながら逃げ出す。

その下では、ロビンの出した手をじっと見つめていたルファイとチョツパーが、コロんと転がされ遊ばれていた。

「ぐわ!!？」「うえ!!？」

「聞いてんのかお前エら!!!」

「軽くあしらわれちゃって情けない」

くすぐすられ、けらけらと暢気な笑い声をあげる二人にウソツプが怒鳴りナミが呆れ

る。

最初は押されていた彼女だが、次第に落ち着いて来たのか、今では一步引いて監視するつもりになっているようだ。

「どうかしてるわ!!?」今の今まで犯罪会社の副社長やつてたその女は、クロコダイルのパートナーよ!!? ルフィの目はごまかせても、私はダメされない…妙なマネしたら、私達がたたき出すからね!!?」

「…えっ、私もやるの?」

「フフ……ええ…肝に命じておくわ」

鋭い視線にも臆さず、ロビンはくすくすと笑い声をこぼす。

その手がふいに懐に入り、じやらじやらと音を立てる袋を取り出して、ナミに見えるように机の上に置いた。

「そういえばクロコダイルの宝石、少し持ってきちゃった」

「いやん♡ 大好きよお姉様っ」

「「おいおいおい」」

物欲を刺激されたナミが、すぐさま目をお金に換えてすり寄る。
耐えられた時間はおそらく、一秒もなかったことだろう。

「ナミがやられた!!?」

「悪の手口だ」

「こちらの性格が完全に把握されている、とゾロとウソツプは戦慄の目でロビンを睨む。

一味の弱点を知られているという事実には冷や汗を流す二人の横を、明らかに浮かれた様子である男がゆらりゆらりと通り過ぎていった。

「ああ恋よ♡ 漂う恋よ♡ 僕はただ漆黑にこげた体をその流れに横たえる流木…雷と
いう名のあなたの美貌に打たれ、激流へとくずれ落ちる僕は流木…おやつです♡」

「まあ、ありがとう」

「あれは当然ああだしな」

「ああ、あれはもう最初からナシの方向で」

「よくもまあ、即興であんな小っ恥ずかしいポエム考えられるもんだ…」

予想通りといえば予想通り、そして情けない様を見せるサンジに、残った三人は頭を抱える。

だがゾロとウソツプはすぐに、こうしてはいられないと表情を引き締めた。

「おれ達が最後の砦ってわけだ」

「まったく世話の焼ける一味だぜ!!! なアエレノア!!?」

「ん?」

力強く、屈して生るものとウソツプが話しかける。

だがエレノアの表情に危機感はなく、むしろ気張っている二人に呆れた目を向けていた。

「私は別にいいけど？」

「オイ!!!」

「何もそう殺気立たなくたっていいじゃないのさ」

何言ってるんだ、とツツコミを入れるウソツプに、エレノアはくすくすと肩を揺らす。

そして一瞬のうちに、昏い笑みをたたえた寒気を催す雰囲気醸し出し始めた。

「妙なことをすればその場で叩き潰せばいいんだから」

「うわ怖っ!!?」

「……おめエが一番危険だわ」

ククク、と凄まじい気迫を放つ天使に、ゾロとウソツプは本能的な恐怖を感じて後退する。一味で最も恐ろしい彼女の言葉は、本気に聞こえて笑えなかった。

「悲しいわね。私はぜひ、あなたとも仲良くしておきたいと思っただけどね……」

天族の最後の末裔さん

「それは奇遇だねエ……私もあんたとは話しておきたいことが山ほどあるんだ、オハ

ラの悪魔〃さん」

ロビンはエレノアのそんな笑みものともせず、意味深な笑みを返す。同じくエレノアも、好敵手を見つけたような鋭い目を向けて口元を歪める。

二人とも美しい顔立ちをしているがために、昏い雰囲気を纏うと恐ろしさが漂って仕方なかった。

「…こんなんでの先大丈夫なのか」

「ウソツプ——!!?」

「ア!!?」

先行きに不安を抱き、顔を引きつらせるウソツプは、不意に声をかけてきたルフイに胡乱気な声で振り向いた。

「チヨツパー」

「ぶ。ぶ。っ!!」

振り向いた先で、頭からロビンの手を生やしたルフイを見てしまい、思いつきり噴き出してしまう。つぼに入ったのか、ウソツプはそれまでの警戒も忘れて笑い転げるのだった。

「どうせこうなると思ってたよ」

「……………いいわね」

肩を竦めるエレノアの隣に立ち、ロビンは小さな声で呟く。

いまだ警戒したままのゾロに、ロビンはどこか羨ましそうな表情で問いかけた。

「……いつもこんな賑やか？」

「………ああ、こんなもんだ」

「そ」

そうしてロビンは、常人なら見惚れてしまいそうな笑顔を見せる。

対するゾロは益々疑いの目を向け、美女の真意を探ろうと鋭い視線を向けて眉間にしわを寄せる。彼の手は未だ、腰の刀に添えられ続けていた。

「航海士さん、ところで……『記録』は大丈夫？」

「西北西にまつすぐ♡ 平気よロビン姉さん！」

「……お前……絶対宝石貰ったろ………」

「サンジおやつまだかア!!」

「ちよつと待て!!？」

新しい仲間が正式に加わったところで、一味は次なる島に向けての航海作業に入る。指針が差す方角へ船は進み、延々と続く航路の先を目指した。

「ナミ、次の島は雪が降るかなア」

「……あんたまだ雪見たいの」

「アラバスタからの『記録』をたどると次は……『秋島』だね」

「秋かア!!?? 秋も好きだなー!!??」

さっそく次の島に期待しているらしいルフイは、船首の上に乗って前方を見つめる。久々に、大した騒ぎの起きないのんびりとした航海を堪能していた時だった。

「……………ん??」

ピクリ、とエレノアの耳が何かを感じ取る。

顔を上げた彼女は、何か大きなものが船に近づきつつあることを察し、仲間達に視線を向けた。

「…なんか来るね」

「なに?」

危険察知においては百発百中を誇る天使の反応に、一味はすぐさま警戒態勢に入る。そうして身構えていた彼らが気付いたのは、欄干や甲板にぶつかる、コツンカツンという乾いた音だった。

「…雨か? いや、雨じゃねエ…」

「あられか…?」

「……………そのどれでもないよ」

雨粒とは異なる、小さな固形物に、一味は首を傾げる。

そんな中で、エレノアだけが近づきつつある、空から降ってきているものの正体に気

付いていた。

「船だ」

メリー号を軽く超える巨船が落下してきたのは、そのすぐ後の事だった。

——人が空想できる全ての出来事は、起こりうる現実である。

物理学者ウィリー・ガロン

第112話 // 遺物の記録 //

「うううわああああああ!!!」

メリー号を襲う無数の残骸、それがもたらす急な波の荒れに、ルファイたちは翻弄され悲鳴を上げていた。

「捕まれ!!! 船にしがみつけ!!!」

「何!?!? これ何!!!? ねエ何!!!?!!」

「夢つ!!! そうさこれは夢つ!!!」

「夢!?!? よかったア!!!」

「あいにくだけど……全部本物。現実だよ」

あまりに予想外な事態により、完全にパニックに陥るナミとウソップとチョッパー。唯一落ち着いた様子のエレノアはロープを手繰り、ゾロたちとともに船の維持に努めていた。

「ルファイ!!! 船を守れ、もうもたねエぞ!!!」

「よし!!!? ……ん? ウソップ☒」

必死にバランスを取りながら、ルファイは降ってくる残骸を蹴散らそうと走り出す。

が、その途中で、何やら座禅を組みぶつぶつと呟くウソップに気づいた。

「案ずる事なかれ、こうやって落ちついて目を閉じて——そしてゆっくり目を上げると、ほ——らそこには静かな朝」

「だから夢じゃねーっつの」

「ギャ~~~~ツ!!!」

この非常時に現実逃避に努める彼に、呆れ顔のエレノアが手ごろにあつた、どこかの誰かの頭蓋骨を投げつける。

悲鳴を上げた彼は、慌てて飛んできたそれをはね飛ばし、さらにパニックに陥った。

「ああああ人骨~~~~!!?」

「ちよつとエレノア!!! こつちに投げないでよ!!!」

「また落ちて来るぞ~~~~!!!」

ばらばらと降り注ぎ、飛沫を上げ続ける残骸の雨の中。

それが終わるまでの間、一味はただ必死に船の上を駆け回り続けた。

「何で……空から船が降ってくるんだ……!!?」

その現象が起こって数分後。

ようやく波が落ちつき、残骸が降り注ぐこともなくなったころ、ずぶ濡れのルフィが

真つ青な晴天を見上げて眩く。

仲間達も同じように、何の変哲もない空を見上げて呆然としていた。

「奇つ怪な…!!?」

「空にや何にもねエぞ…」

「え、そう? わりとありふれた話だと思っけど…」

「「お前の経験談は普通じゃねエだろ!!」」

「ひどくない?!?」

唯一けろつとした顔をしているエレノアに、ほぼ全員から厳しい意見が叩きつけられ、彼女を若干落ち込ませる。

「偉大なる航路」のベテランである彼女の慣れは、今この場において全く役に立ちそうになかった。

「あ!!!」

そんな中、ふと自身が持つ記録指針に目を落としていたナミが唾然とした声を上げ、一味の注意を引きつけた。

「どうしたナミさん!!?」

「どうしよう、記録指針が…!!! 壊れちゃった!!? 上を向いて動かない…!!!」

何事か、と振り向いたサンジにナミは記録指針を見せる。

本来、水平線上のどこかを差しているはずの指針が、糸で引かれるように殆ど直角を向いて止まってしまっていたのだ。

この海で唯一の道標なのにと慌てるナミだったが、それに首を振る者がいた。

「……違うわ。…より強い磁力をもつ島によつて、新しい『記録』にかきかえられたのよ……………!!?」

「……………ということは、次の目的地は」

ナミにそう告げたロビンの隣で、エレノアが視線を上げる。

何も無い、島などあろうはずもない青空に向けて、エレノアは目に見えて高揚した様子で笑みを浮かべた。

「『空島』か……!!」

紡がれたその名に、一味の間に動揺と期待が走る。

言葉の響きでわかる、どのように常識はずれな島なのかと、誰もが想像力を働かせ出した。

「『空島』——つて何よ!!!」

「浮いてんのか、島が!!!」

驚愕するルフィとナミだが、双方の反応は全く異なっていた。

ナミはそんなものが実在するのかと目を剥き、ルフィは未知の島に目を輝かせる。他

の船員にいたっては、大半がナミと同じような反応を示していた。

「あの船やガイコツはそこから落ちて来たのか!!? ——だが空に島らしきモンは何も……」

「ううん。そうじゃなくて……正確には浮いているのは“海”。空島はその海に浮かぶ島の一つなんだよ」

「海が!!?」

「ますますわかんねエ………」

詳しい話を聞こうとするゾロたちだが、エレノアの説明を聞いても全く意味が分からない様子で、眉間にしわを寄せる。

ルフィはそもそも深く考える気がないようで、湧きあがる好奇心のままに空に注目したまま声を上げた。

「空に海が浮いてて島があんだな?!? よし、すぐ行こう!!! 野郎共!!! 上に舵をとれ!!!」

「上舵いっばーい!!!」

「できるわけないでしょ」

「とりあえず上に舵はとれねエよ、船長」

興奮のあまり、常識が頭から吹っ飛んでいる船長と狙撃手にツツコミを入れ、エレノアがやれやれと肩を竦める。

それを横目に、ロビンは疑わし気なナミに向き直って続きを語り始めた。

「正直、私も『空島』については見たこともないし、大して知ってるわけでもない……」

「それでしょ!!? 有り得ない事よ!!? 島や海が浮かぶなんて!!? やっぱり『記録指針』が壊れたんだわ!!?」

「……ナミ、また私が言ったこと忘れてるね」

そんなことがあつてたまるか、と声を荒げるナミに、エレノアがジトツとした視線で釘をさす。

似たような会話を、『偉大なる航路』の初めの方でしたなと思ひ出しながら、ビシツと人差し指をナミの鼻先に突き付けた。

「『ありえない』ことが起こるのがこの海……どんなパニックが起ころうと、どんなに信じられないことが起きようと、『記録指針』だけは疑つてはいけない」

フードの下から覗く金の眼に気圧されながら、冷や汗を流す航海士にエレノアは続げざまに突き付けた。

「今考えなきやいけないのは、『記録指針』の故障箇所じゃなくて、空へ行く方法だよ」
ごくりと息を呑み、黙り込んでしまうナミからエレノアは指を離す。

やれやれとまたため息をつく彼女に、ロビンが近づいて耳元に口を寄せた。

「『妖術師』さん、あなた空島に行ったことは?」

「ないね………トライしたことはあるんだけど、自力で」

遙か高い空を見上げ、エレノアはどこか懐かしそうに答える。

何かヒントになるのでは、と呆けていた仲間達も近寄り、エレノアの経験談に耳を傾けた。

「まだ禁忌を犯す前なんだけど………持てる荷物を最低限に抑えて、極限まで飛行能力を向上させた状態で全力上昇してみただけ………」

「………そ、それでどうなったんだ!!?」

「結果は大失敗」

興奮したまま、鼻息荒く詰め寄ってくるウソップに、エレノアはがっくりと肩を落として首を振る。

かつて挑んだ上空に向けられた眼差しは、悔しそうに細められていた。

「上空9000m時点で体力に限界がきて、そのまま自由落下………あれは流石にちよつと怖かった」

「9000mはいったのかよ!!」

むしろそんな高くまでよく一人で飛べたな、と翼のない一味は驚愕の目をエレノアに向ける。そして失敗した後どうやって助かったのだろうかと、別の疑問を抱いていた。

そんな彼らの視線を無視し、エレノアは続けて口を開いた。

「まあそれでも……見えたものはあつた。上空一万メートル……鳥でさえ容易にはたどり着けない空の彼方。そこに……私は『海』を見た」

変わらずエレノアの視線は、天空に向けられている。

じつと身動き一つせず、空を見つめ続ける彼女の横顔には、凄まじい執念が垣間見えていた。

「摂理が理解できなくても、疑つてはいけけないのは自分のこの目。疑わないことが、この海を進むたった一つの常識だよ」

「棺桶開けて何やってるんだ？ あいつ」

「何かわかんのか？」

「さア……」

衝撃から立ち直つた一味は、唐突にロビンが始めた謎の行動に首を傾げる。

彼女は降り注いだ残骸の中からカンオケらしきものを見つけ、中のものを取り出して並べ始めたのだ。

「趣味悪いわよ、あんた」

「死者と美女つてのもまたオツなもんだな〜♡」

遠くからナミが引いた目で見つめる中、ロビンは無数の破片から一つの頭蓋骨を復元

する。

その頭蓋骨にあげられた不自然な穴を撫で、ロビンはじつと眼差しを向けた。

「ここにあってる穴は人為的なもの」

「…はーん、そこを突かれて殺されたってわけか、コイツは」

「いいえ、これは治療の跡よ…『穿頭術』。でしょ？ 船医さん」

確認するようにロビンが問うと、チョツパーは怯えながらも首肯する。

暴かれた遺体よりも、それを平然と行っているロビンに怯えているようにも見えたが、医者としての性分かその遺体の違和感に注目が向かっていた。

「……うん、昔は脳腫瘍をおさえる時、頭蓋骨に穴を開けたんだ。でも、ずっと昔の医術だぞ……!?」

「……そう、彼が死んでからすでに200年は経過してるわ」

ロビンは語る。遺体の歳は30代前半、航海中病に倒れ死亡。

他の骨に比べて歯がしつかり残っているのは、タールが塗り込んであるせい。この風習は『南の海』の一部の地域特有のものだから、歴史的な流れから考えて、落下してきた船は過去の探検隊の船。

そこまで読み取ったロビンは、確認するように過去の記録を探るエレノアに目を向けた。

「…思い出したよ。『南の海』の王国プリスの船『セントブリス号』。2008年前に出航してる。ほらコレ」

図書室から戻ってきたエレノアは、自分の持つ情報が正しいことを示すための資料を持ってくる。

その資料に乗っていた写真には、確かに降ってきた船と同じマークと船首が記録されていて、ナミたちに感嘆の声をあげさせた。

「骨だけでそんな事まで割り出せるの……!?」

「遺体は話さないだけ、情報は持っているのよ」

ロビンの慧眼の凄まじさと冷静さに、ナミは思わず戦慄の目を向ける。こんな異常な状況の後で、よくもあれだけの仕事ができるものだ。

一仕事終えたロビンだったが、残骸がちらほらと浮かぶ当たりの海を見渡して口惜しげなため息をついた。

「探検隊の船なら色々な証拠や記録が残っていた筈だけど…」

「海に沈んじゃってるからねエ…」

調べられるなら調べておきたかった、と嘆くロビンとエレノア。

そんな二人の視線の先で、バシャバシャと水飛沫を上げて騒ぐルフィとウソップの姿が目に入った。

「ルフィ!!? しつかりしろー!」

「ぶわっぶっばばすぺて〜」

「あんた達何やってんのよオ!!!」

またしても面倒ごとを引っぱりこんでくる気か、と思わず怒鳴り声をあげるナミ。

だが彼らが持ち帰ったものは、彼女をも黙らせる存在感を放っていた。

「おいみんな!!! やったぞ!!! すげエもんみつけた、これを見る!!!」

ウソツプに救出されながら、ルフィは自身が見つけ出したものを見せつける。

非常に古い、よくぞ残っていたと言えるほどに状態の酷い地図。それに刻まれていた名称を目にして、一味はわつと驚愕をあらわに群がった。

「『空島』の…:地図!!!?」

「『スカイピア』…:本当に、空に島があるっていうの!!!?」

「やったぞウソツプ〜〜つ!!! チョッパー!!! 『空島』はあるんだ〜〜つ!!! 夢の島

だ!!! 夢の島へ行けるぞオ!!!」

「夢の島ア!!!」

空に浮かぶ島、そして海の実在をほのめかす、年季の入った物品の登場により、ルフィたちはひたすらに興奮の声を上げて騒ぎだす。

しかしそんな彼らの側で、ナミは呆れた様子でため息をついていた。

「…騒ぎ過ぎよ。これはただの『可能性』にすぎないわ。世の中にはウソの地図なんていっぱいあるんだからっ！」

諭すように告げるナミだったが、ルフィたちの表情を見て息を詰まらせる。

高揚を一気に鎮火させられた彼らは、とんでもなく悲しそうな顔でナミを見つめ、虚ろな目で固まっていたからだ。

そんな彼らの悲痛な視線に、ナミは思わず罪悪感を抱かされた。

「あ……ごめんっ、あるある……きつと……あるんだけどっ」

「行き方がわからないんじゃないかねエ……」

慌てて訂正するナミに同意し、エレノアは険しい顔で首を傾げる。

行く気満々になっているところに言うのは何だが、道がわからなければ行きようがないのだ。

「航海士だろ、何とかしろ!!!」

「何とかなるもんとならないもんがあるでしょ!?!?」

「関係ねエ!!? 空に行くんだ!!! そうだエレノア、もう一回チャレンジだ!!!」

「あんたら抱えて飛べっか!!? ムチャいうなアホ!!!」

「怒ってるナミさんもエレノアちゃんもカワイーなあ……♡」

細かいことを考えずに吠えるルフィと、彼の無茶ぶりに怒りを抱くナミとエレノア、

そんな二人に見とれるサンジ。

ギヤーギヤーと双方が騒ぎ、收拾がつかなくなりそうになった段階で、ナミがキツと表情を改めた。

「…ラチがあかないわ！ とにかくこれじゃ船の進めようがない…!!? だって指針は「上」を向いてるんだもん」

「とにもかくにも今必要なのは、ロビンの言う通り「情報」だね」

「あれだけ巨大な船が本当に空に行つてたんなら、この船が空へ行く方法も必ずある。さっきの船に何かしらの手がかりがあればいいけど…」

「でも船はもう完全に沈んじまつたぞ」

やけくそになつたわけでもなく、行動しなければ何も変わらないと意気込むナミに、ウソツプが難しい顔で指摘する。

そんな彼に、ナミは拳を掲げて言い放つた。

「沈んだんならサルベージよっ!!!」

「よっしやあああ!!!」

「できるかア!!!」

船長と同レベルの無茶を吐くナミに、ゾロによる怒号が響き渡るのだった。

「はっはっはっはっ、いやいやいや…」

ルフィは自身の装いを見下ろし、若干呆れた調子で笑い声をあげる。

樽と革を組み合わせた、その場の材料でできた潜水服。それを着せられたルフィ、ゾロ、サンジが、命じたナミに視線を向けて口を開いた。

「お前はホントにムチャさすなあー」

「……………」

「ナミさん♡ おれが必ず空への手掛りを見つけてくるぜ」

「よろしくね♡」

「安心して行つて来い。おれの設計とエレノアの技術に不備はない」

さすがに困惑するルフィだが、こうしなければ空にいけないとあれば話は別だ、と海に視線を向ける。

その先で、何か巨大な魚が、もつと巨大な魚に捕食される姿を見て、全員が動きを止めた。

「じゃ、幸運を祈つてるわ」

「アレを見て本気で祈れと!!」

何か言いたげなルフィ達だったが、ナミは一切の躊躇なくロープを伸ばし、ルフィたちを海に潜水させる。

エレノアは吹っ切れたナミの容赦のなさに、思わずぶるりと背筋を震わせた。

第113話 “サルベージ王”

ごぼりごぼりと、海中から気泡が上がってくる。

海中深くに沈んだ船を目指す三人の生存を示すそれらを見下ろし、チョツパーは備えた管から声を届けた。

「こちらチョツパー、みんな返事して」

『こちらルフイ、怪物がいっぱいです。どうぞ』

『ここは巨大海へビの巣か!?!?』

『こちらサンジ、うわっ!!?!? こっち見た!!?!?』

返ってくる声を聞き、不安気だったチョツパーはますます三人が潜った場所に心配そうな目を向ける。本当に無事で戻って来られるのだろうか。

しかし、命じた本人であるナミは、全く臆した様子もなく力強く頷いた。

「OK」

「OKか!!?!?」

「何とかなるわよ、くよくよしないの!!?!?」

自分が危ない目に遭っていないからと、ナミは無茶苦茶なことを平気で断言する。

いろいろと物申したい他の仲間達だったが、本氣の目をしたナミの氣迫のためか、そういう気分になれずにいた。

「チョッパ、ブレーキしっかりね！」

「うん」

「いやあ、おれ行かなくてよかった」

「…あなたは行かなくてよかったの？」

「いやア……行きようがないっていうか……沈まないんだよね、軽さに特化しすぎて」

「そういうこと」

ホツと安堵の息をつくウソツプの後ろで苦笑するエレノアに、ロビンは納得の声をこぼす。

しかしその時、エレノアは自身の能力である異常な聴力が、何かの声を捉えたのを感じた。

「……なんか近づいてきてるね」

「そうみたいね」

エレノアが向いた方向に、ロビンも視線を向ける。ナミたちも、二人が別の方を向いていることに気づき、警戒を始める。

そしてその声の持ち主が、離れた海の向こう側からその姿を現し始めた。

「サ〜ルベ〜ジ〜サルベ〜ジ〜♪ サ〜ルベ〜ジ〜サルベ〜ジ〜♪」
「何だありや…」

奇妙な歌とともに、その船はメリー号の近くへと近づいてくる。

シンバルを持った猿の上半身の船首が付いた、メリー号の数倍の大きさの船。それに乗った数十人の船員が、陽気に笑いながら現れたのだ。

「全体〜…止まれっ!!!」

「アイアイサー!!!」

「船が沈んだ場所はここかア!!!」

「アイアイサー!!? 園長^{ボス}!!!」

「園長!!? つまりそいつアおれの事さ!!!」

船員たちに呼ばれながら、猿の船首の海賊船のボスが声を上げる。

シャツとオーバーオールを着こなした、ほとんど猿と同じ顔をした大男だ。

「引き上げ準備〜〜〜!!! 沈んだ船はおれのもんだア!!! ウッキッキー!!!」
「!!!」

「また妙なのが出てきたわ、こんな時に…」

異様なテンションで騒ぐ一味の登場に、ナミが呆れた調子でため息をつく。

こういう派手で、意味不明な登場をする奴はろくな奴らではないと、ナミはこれまでの航海で学んでいた。

その横で、大男の顔を見たエレノアがわずかに目を見開いた。

「『サルページ王』 マシラ…!!? 特定の海域をナワバリにしてる…懸賞金2300万Bの海賊だ!!!」

「ホホウ…? お前、おれのことを知ってるのか。なかなか殊勝なやつだ…」

懸賞金の額から言えば、大した海賊ではない。しかし名を言い当てられたことが気に入ったのか、マシラと呼ばれた大男はにやりと笑みを浮かべる。

それどころか、心底嬉しそうにでれつと満面の笑顔にまでなっていた。

「な、なかなかみつ、みみ見る目があるじゃねエかウキキイ…!!!」

真つ赤になり、オイオイと手を振る彼からは、全く脅威というものが感じ取れない。船員たちが囁し立てているのが、余計に緊張感を削いでいく。

そんな姿に、ナミはより一層ぐつたりと肩を落としていた。

「なんなのアレ…」

「まいったなア…この辺はあいつのナワバリだったのか…厄介なことになりそう…」

「ナワバリ?」

「そうとも……この海域に沈んだ船は全ておれのものだ。てめエら手エ出しちやいねエだ
ろうな……!!? んん!!」

ポリポリと頬を掻き、困ったというよりは面倒くさそうに呟くエレノアに、マシラが強く反応する。

そして今度は、ナミたちが何か邪魔になるのではないかと凄みをきかせ始めた、が。

「あの人……サルベージするつもりらしいわよ……?」

「あ……ああ、そんなこと言ってるんなア」

「マシラは二つ名の通り、サルベージにこだわってる変わった海賊なんだ。邪魔したり
縄張りに入ったりする奴には容赦がないらしいよ」

「じゃあ何? これってチャンスなの?」

「ゴチャゴチャ言ってるじゃねーっ!!! おれ様の質問に答えやがれウキ——っ!!!」

マシラを全く脅威と感じていないナミたちは、どうしたものかと早速談議に入る。

無視されたと思つたのか、マシラは怒号を上げて今にもメリー号に乗り込みそうになるが、それより先にウソップが手を挙げた。

「すいません質問してもいいですか?」

「おめエがすんのかよっ!!!」

出鼻をくじかれたように、マシラが目を見開いて叫ぶ。

だがすぐに平静になり、どこか得意げにウソツプに向き直った。

「いいだろう、何でも聞いてみる」

「これから船をサルページなさるんですか？」

「なサル？」

できるだけ刺激しないようにと、丁寧な言葉づかいで問いかけたウソツプだったが、マシラは全く関係ないところに食いついた。

「おい……そんなにおれは『サルあがり』か？」

「サルあがり？」

「『男前』って意味だ!!! そう思うか？」

一瞬、何を言っているのかわからず固まるウソツプだったが、あまりにもマシラがうれしそうだったので、波風を立てまいと適当に頷いた。

「ええ」

「いやまいったなあ♡」

適当な、しかも意味も全く分かっていないおべっかだったのに、単純なのかマシラは一層でれつと照れる。褒めれば褒めるほど、海賊マシラへの警戒心が薄れていった。

「……………で、本当はどういう意味なんだ？」

「サルから成り上がったばかり……要するに猿と大差ないってこと」

「誰から教わったんだあいつ……」

エレノアに耳打ちし、真の意味を知ったウソツプは思わず呆れた目をマシラに向けて。果たしてその言葉を教えた者は彼に悪意があつたのだろうか。

氣力を削がれかけた一味は、何とか氣持ちを立て直しマシラに向き直つた。

「——で？ サルベージすんのか？」

「そりやおめエ、するもしねエもそこに船が沈んでりや引き上げる男さ、おれア!!? 浮いてりや沈めて引き上げる男さ!!! おれ達に引き上げられねエ船はねエ!!!」

ウソツプがまた問うと、マシラは先程とは打つて変わつて力強い声で答える。

目的は不明のままだが、サルベージに並々ならぬ執念を燃やしていることがわかり、ナミ達に緊張が戻る。

エレノアは少し考え、マシラに向けてもう一度声をかけた。

「じゃあ、見学させて貰つていいですか!!?」

「ん?」

「名高い海賊マシラさんのサルベージがどんなのか見てみたいんです!」

「……………そうか! そんなにおれ達のサルベージが見たいか。よし、いいだろう。見学してくがいい!!?」

聞いたことがないくらい、媚びた可愛らしい声で問われ、マシラはまた氣分をよくし

ながら了承する。

船員たちも注目されるのが嫌ではないらしく、みるみるやる気を募らせていく。それを確認してから、素に戻ったエレノアがウソツプ達に視線を戻した。

「…はい、とりあえず様子見しようか」

「なかなか小悪魔ね、あなた…」

「エレノアはすげーな」

男心をくすぐり、狙い通りに操ってみせた天使に、ロビンは冷や汗を流し、チョツパーは感嘆の声を上げる。

その時、マシラの船の方でさわがしい声が聞こえてきた。

「園長!!? 大変です」

「何だ」

「海底へ『ゆりかご』を仕掛けに行った船員が」

「海王類にやられたのか」

「いえそれが、何者かに殴られた跡が…!!?」

船員からもたらされた報告に、マシラだけではなくナミ達もぎくりと体を強張らせる。そんな事をする奴に、心当たりしかないからだ。

何より、今この状況で自分達に関連があると疑われない方がおかしかった。

「何イ……!? 誰か海底にいるってのか……!!!?」

「あいつら……!!?」

「まずい、まずいぞ」

どんなに鈍い奴だって、出会った直後にそんな事態が起これば怪しむに決まっている。案の定、マシラの目がぎろりとナミ達に向けられた。

「おいお前らア!!!」

「ひイ!!!」

やっぱりバレた、そう直感し、ナミとウソツプ、チョツパーが震えあがる。

エレノアとロビンはすぐさま戦闘に備えて身構えるが、マシラが襲い掛かってくることはなかった。

むしろ彼は、エレノア達にも案じる視線を向けてくれていた。

「海底に……!!? 誰かいるぞ!!? 気をつけろ!!!」

（バカでよかったア……）

（りよ……良心が……）

マシラのとんでもない鈍さに、ナミたちはほっと安堵のため息をつき、エレノアは罪悪感から明後日の方角を向いていた。

「さっさと『ゆりかご』仕掛けて来い、サルベージを開始する!!!」

「「「アイアイサ~~~~!!」」」」

マシラの号令で、船員たちはバタバタと舟の上と中を走り回る。

その間マシラは、見学を申し出たエレノアたちに人懐っこそうな満面の笑みを見せ、手を振っていた。

その間もずっと、ウソップが空気を海中に送り続けているとも知らずに。

「おいおめエら!!! あいつらはカボチャだと思え!!! 見学がいるからって…キ…ウキキ…!!?」

キリツと表情を引き締めようとするが、どうしても照れがきてしまうのか顔がにやけてしまう。彼の部下たちも同じようで、ずっと緊張でガチガチに固まってしまった。

「緊張するココねエぞ、おめエら!!!」

「「「アアイアアガ————!!!」」」」

「…何かプライドみたいなのがあんのかな」

「イイとこ見せてくれようとしてんのね」

相変わらず騙し続けているため、申し訳なきを覚えてしまうウソップ。

とうとう耐え切れなくなったのか、エレノアが作業を見守るマシラに思い切つて質問を投げかけた。

「あのく…準備に時間がかかるならもう一個だけ聞かせてもらえませんか？」
 「ん？ お、おう何だ。言ってみろ」

「こんな大掛かりな道具を使って、一体何を探してるんですか？」

サルベージという事は、何か特別な物を探しているという事だろう。

それも正規の組織ではなく、海賊という真つ当ではない身の上でならば、ただの調査ではないはず。

するとマシラは、エレノアにやりと不敵な笑みを浮かべてみせた。

「おれ達はな………『黄金郷』を見つけるのよ!!?」

「『黄金』!!!?」

マシラの口から飛び出した言葉に、エレノアとナミが同時に反応する。

だが詳しく聞こうとした丁度その時、海中からずしんと大きな音がして、エレノアの注意がそちらに移った。

『ゆりかご』セット確認しました!!!』

マシラ側の船の管から、部下の声が聞こえてくる。

同時に、メリー号に備わった管からも、ルフィたちの驚愕の音が響き渡りかけた。

『何だコリ…』

慌てて管を手で塞いだウソップとナミだったが、さすがに聞こえたらしいマシラが訝

し気に振り向く。

すぐさまウソツプが誤魔化しようと、マシラの船で特に目立つ船首を指さして叫んだ。

「な…何だア!!? そのサル!!? サルは何ですかア!!?」

「おお…これか…ウキキ…お前…お目が高いな。そう、コイツはただの船首じゃねエ!!!

発進だ!!! “船体ハンター”!!!」

「アイアイサー!!!」

誤魔化せたというより、丁度動かすタイミングだったようで、マシラは特に気にした様子もなく次の行程へ進ませる。

すると、船首の猿が突然動き出し、船が沈んだ真上まで移動を開始すると、海中へ潜り始めた。

「わあ!!? すげエ!!!」

「本当にすげエ!!!」

「何が?」

「そつとしいてあげて…」

男心をくすぐられ、目を輝かせるウソツプとチョツパー。理解ができず、戸惑いの声を上げるナミの肩を、遠い目のエレノアがポンと叩いて宥める。

そんなやり取りの間にも、マシラたちは着々と何かの準備を進めていた。

『船体ハンター』結合完了!!!』

「よ——し!!!」吹き込み」行くぞオ!!!」

「「「アイアイサー!!?」」」」

マシラが一本の管を持ち、部下たちに吠える。その管は海まで続き、海中に沈んだ何かまで届いているようで、その意図に気づいたナミがまさかといった顔で目を瞠った。

「まさか…息を吹き込んで船を持ち上げる気………?!? そんなムチャクチャな………!!」

「…やるだろうね」

力技にもほどがある、そしてなにより無謀すぎると絶句するナミの横で、エレノアが目を細めた。

「仮にも彼は……『偉大なる航路』の海賊だよ」

その直後、海中から大量の泡が吹きあがり、徐々に巨大な影が浮き上がってくるのが見える。

それを確認し、海中からまた興奮した声が上がってきた。

『船体、浮きました——っ!!!』

「今だ引き上げエエ!!!」

「「「アイアイサー!!!」」」」

「空気の追加!!? 遅れるなア!!!」

「「「アイアイサー!!!」」」

巨大なふいごのような装置を動かし、マシラの部下たちがどんどん空気を海中に送り込んでいく。

そのまま浮力を得た船が、海面まで上がってくると思われたその時だった。

『ギャアアアア〜っ!!!』

海中から響き渡る悲鳴に、マシラたちの動きが止まる。

すぐさま確認に動いた部下が、戦慄の表情でマシラに叫んだ。

「園長!!? 海底の船員が!!?」

「どうした!!? 何があった子分共!!!」

『船の中に何者かが!!! ああア〜〜〜…』

船長に助けを求める船員の声が、弱々しく消えていく。

先ほども現れた、大事な部下を傷つけた何者か。それが再び手を出してきたという事実、マシラは凄まじい形相で激昂の咆哮を上げた。

「おのれ、よくも俺の子分達を!!! 何奴だアア!!!」

自身の怒りを表すように、天に拳を突き上げて吠えるマシラ。

だがその目は、何かを待っているようにエレノアたちの方に向けられ、緊張感を台な

しにしていた。

「……あの、別に撮影とかはしてないので」

「何!!?」

どうやらシャッターチャンスをつくっていたらしく、申し訳なさそうにナミが謝るとシヨツクを受けた様子で立ち尽くす。

が、怒りは本物なのかすぐに我に返り、部下たちの方に目をやって告げる。

「引き上げ作業を続けてろ!!!」

「アイアイサ——」

マシラはそう命じてから、自身は海に向かって勢いよく飛び込んでいく。

ブクブクと泡が無くなってから、メリー号に残った面々はようやく顔を見合わせた。

「…大丈夫かしらあいつら。出くわしたら……」

「案外仲良くなつてたりして」

なかなかにお人好しの様だし、とエレノアはたいして心配することなく、樂觀的に答える。実力的にも、後れをとりはしないだろうと。

「………ん?」

だがその時、エレノアはまた新たな存在が近づきつつあることに気づき、訝し気に首を傾げる。

それに気づいたナミが、不思議そうにエレノアに問いかけた。

「どうしたの?」

「…なんか海中から近づいて」

一体何なのか、それを理解した時には。

ルフィたちのいる沈没船は、バキバキと捕食されてしまっていた。

「あ」

第114話 夜

「園長〜!!!」

「園長〜!!!」

目の前に広がる光景に、マシラの部下も麦わらの一味も、全員がパニックに陥る。

それが全く現実とは思えないほど、あり得ない事だった。

「なに、コレ〜〜〜!!!? コレなに☒ なに大陸!!!」

「知らねエ!!! 知らねエ!!! おれには何も見えねエ!!! なんも見てねエ!!! これは夢な

んだ!!!」

「夢!?! ホント?!?」

「「あ——夢でよかった♡」」

「…だから」

散々騒いだ後、勝手にホツと安堵の息をつくナミたちに、エレノアはつい半目になる。

そしてもう一度目の前にあるもの、沈没船をバリバリと咀嚼する、あまりに巨大すぎるカメに目を向けた。

「現実逃避やめれつての」

「あのコ達全員、船ごと食べられちゃったの？」

「みなまで言うなア~~~~っ!!!」

あつげらんかとロビンが呟き、事実を受け止めきれないウソツプが泣きながら叫ぶ。喚こうが哭こうが、吸気ホースが伸びていることからして間違いないかった。

「うわあああ!!! ルファイ達はやっぱり食われたんだ~~~~っ!!!」

「なかなかのサイズじゃない？」

「いやいやまだまだ小さいほうでしょ」

「のんきか!!!」

慌てふためくチョツパーたちとは裏腹に、なぜかエレノアとロビンは和気藹々とカメのサイズについて語り合っている。

異様に胆が据わった二人は放置し、ウソツプがキツとナミを睨みつけた。

「だいたいお前だぞ!!! こんな『偉大なる航路』の海底へあいつらを行かせたのは!!! 根拠もねエのに大丈夫なんてためエが言うからあいつらは……!!?」

「……………そうね」

さすがに自身に責があるかと自覚があつたのか、ナミはうつむきながらうなずく。そして顔を上げ、我が物顔で残骸を食い散らかすカメに目を向けた。

「ごめんっ!!!」

力強く叫び、肩手を挙げたナミはそれ以降口を閉ざす。

シーンと静まり返ってしばらくして、我に返ったウソツプが目を剥きながら振り向いた。

「…終わり!!」

「……………!!? そうなんだがなんか違う……………!!!」

絶対こいつ反省していない、というか悪いとさえ思っていないと、ナミ以外の全員がぞつと背筋に震えを走らせる。

だが、責任の擦り付けをしている場合ではなかった。カメの口に続くホースが、徐々に引つ張られていたからだ。

「ヤバいね……………ホースごと海底へ引きずりこまれる……………!!?」

「いやあああああ!!!」

「ロビン!!? おめエ強エんだろ!!? 何とかしてくれ!!!」

「あれはムリよ……………おつきいもの」

「じゃあエレノア!!!」

「同じくデカすぎてムリ」

主戦力三人が潜ってしまったことが仇となり、カメを撃退する者がいないことで、一味は混乱に陥る。

しかし同じ状況にあるマシラの部下たちに、絶望する様子はなかった。

「野朗共!!! ロープを手繰り園長を救えエ!!!」

「「「ウツキツキ~~~~~!!?」」」

部下の一人の号令に、全員が一致団結して行動に移る。船長不在にしてこのまどまりは、本人のカリスマがなせる業なのか。

そんな美しくも頼もしい男達の姿に、泣き叫ぶばかりだったウソツプは殴られたような衝撃を受けた。

「そうだ……こんな時だからこそ団結力が試される」

「ウソツプ!!!」

「おう!!!」

同じく我に返ったナミに呼ばれ、ウソツプも雄々しく吠える。

今こそ勇敢なる海の戦士らしく、困難に立ち向かって見せる時だと身構えたのだが。

「ホースを切り離し安全確保」

「悪魔かてめエは!!?」

「悪魔だ~~~~~!!!」

非常すぎるナミの決断に出鼻をくじかれ、欄干に頭をぶつけながらツツコミを入れる。本気にしか聞こえないナミの目に、チョッパーが同じく悲鳴を上げた。

まさに混沌とした状況、誰もが正気ではいられない異常事態の中で。

「夜」は訪れた。

「へ×」

とつぷりと、太陽が地球の裏側に潜ったような真つ暗闇が、辺りを包む。

夕暮れなど見た覚えはない。間違いなく真昼だったのに、辺りは完全な真つ暗闇へと変わってしまっていた。

「夜になった……………!!?」

「ウソよ…まだそんな時間じゃないわっ!!? エレノア!!? これどういうこと!!?」

「わ…わからない…!!?」

「じゃあ何なんだ!!? ルフィ……………!!! ゾロ……………!!! サンジ……………!!!」

続いて起こった異常な光景に、ウソツプたちはさらなる混乱に苛まれ、エレノアやロビンでさえも冷や汗を流す。

そしてその狼狽と恐怖の症状は、マシラの部下たちに最も強く表れていた。

「……………アア……………!!? 不吉な……………!!! 突然来る夜は怪物が現れる前兆」

「船を沈められちまう……………!!! 早く園長を救出しろ!!!」

「……………!!? 怪物……………?」

奇妙な単語を耳にし、耳を澄ましていたエレノアが思わず反応する。

もう少し詳しく情報を得ようとした時、海中からなにかが飛び出し、メリー号の甲板にどしやつと落下してくる。

それが一味の船長であることに気づき、ナミが慌てて駆け寄った。

「ルフィ!!? どうしたの!!? 死んじゃったのっ」

「あんたよく無事で…」

「船出せ!!! さつさとここ離れるんだ!!!」

「やべエぞあいつは………!!!」

ルフィに続き、ゾロとサンジも慌てた様子で這い上がってくる。本気で焦り、何かから逃れたがっているような緊迫した様子だ。

「無事ならまあいいさ。とりあえずあの大陸亀から逃げよう」

「カメ? いや海には猿がいたんだ!!?」

「きつと海獣の一種だ」

「そいつが途中までルフィと仲良くしてたんだが」

「サル同士だからな」

「おれ達が船から拾ったこの荷物見て急に暴れ出しやがったんだ」

「暴れる事ゴリラのごとしだ!!?」

「……なんかあんた達妙に仲良くなってるない?」

示し合わせたように何があつたかを語る二人に、エレノアは思わず呆れた目を向ける。お互いへの対抗心がひっこむほどの何かがあつたという事なのか。

珍しい二人の反応に呆れながら、ウソップは状況を教えてやった。

「そいつはマシラってサルベージ野郎さ!!?　しかしお前ら、あのカメの口からよく逃げられたな」

「カメ?　なんだカメって」

「アレ」

本気で自分達に何が起こっていたのかわからず、キョトンとした顔で首を傾げるゾロとサンジの背後を、エレノアが指をさす。

振り向いた二人は、至近距離で浮いている巨大な亀を目の当たりにし、一拍遅れて目を見開いた。

「ウオオ!!!　何じゃありゃあ!!!」

「気づけよ!!!　お前らあれに食われてたんだぞ船ごと!!!」

あれだけ派手に食われてたんだから気付くはずだと、ウソップが困惑気味に吠える。あの窮地に気がつかないとは、どれだけ鈍いのか胆が据わっているのか。

そのうち、溺れて気絶していたルフィも覚醒し、空の闇を見て目を丸くした。

「ぶは——あり?　何で夜なんだ?」

「ルフィ!!? 手伝え、船出すぞ!!!」

「ん待てエ!!! お前らア!!!」

逃げるが勝ち、と漕ぎ出そうとした時、海中から勢いよくマシラが飛び出してくる。もはや先ほどの気やすさはない。完全にルフィたちを、縄張りを荒らした不屈き者として狙いすましていた。

「…おめエらこのマシラ様のナワバリで…財宝盗んで逃げきれれると思うなよオオオオオオオオ!!!」

「財宝!!!? 財宝があつたの!?!?」

「ああ!!? いっぱいあつた」

「マズイ、あいつに船の上で暴れられたら………!!! 追い出すぞ!!? 手伝えエレノア!!!」

衝撃から立ち直ったゾロは、敵に懐にまで乗り込まれたことに危機感を抱き、すぐさま刀を構える。

一刻も早くここを離れねば、とエレノアを呼ぶが、彼女からの反応はなかった。

「おい、どうした!?!」

無言で立ち尽くす天使にゾロが再び叫ぶ。が、すぐにその表情は固まり、大きく目と口が開かれる。

荒れ狂っていたマシラでさえ、海に浮く大陸亀でさえ、呼吸を忘れたように硬直し、次第にガタガタと震え始めた。

そこにあつたのは、人影だった。

天を覆う闇の中に浮かび上がる、どんな山よりも高く立つ、数人の槍を持った巨人の影。それが、ルファイたちを見下ろしていたのだ。

まるでそれは、この世のものとは思えないほどの、恐怖の光景だった。

「怪物だああああ!!!」

もはや、ナワバリだの財宝だの言っている場合ではない。

見た事のない悪夢の光景から逃れる事だけを考え、海賊達は必死に船を漕ぎ、闇の中から飛び出していく。

力の限り、体が動かなくなるまで、彼らは舟を漕ぎ続けた。

「……あり得ねエ……」

「ああ……あのデカさはあり得ねエ……」

数分か、数十分か。

どれだけ来たか分からなくなるまで漕ぎ続けたルファイたちは、ぐったりとした様子で元の青色に戻った空を見上げ、呆けた声を上げていた。

「あれだけの距離にいて……気づかなかった。この私が……!!?」

「……今日は何かがおかしいぜ……」

「巨大ガレオンが降ってきたと思つたら」

「指針を空に奪われて……」

「妙なサルが現れて船を引き上げる」

「でも船ごと食っちゃうデツケーカメに遭つて」

「夜が来て……」

「最後は巨人の何十倍もある『大怪物』」

「……さすがにあれにはビビつたね。ドーも……」

思い思いに呟いてから、全員が深い深いため息をつく。安堵か、気が抜けたのか、それすら頭が回らないほどに、誰もが氣力を削がれていた。

が、さすがに聞き捨てならない声に気がつき、我に返った。

「……出ていけ……!!」

船に乗り込んだままになっていたマシラが、とてつもない勢いで蹴り飛ばされていったのは、言うまでもなかった。

??

「………しかしあの怪物はデカかつたな………」

「……………うん……もう会いたくないや」

邪魔者がいなくなつてようやく、ルフィたちは会議に入る。

驚くことが多すぎてまだ思考がまとまらないが、とにかく情報を整理しなければ話が進みそうにない。

しかしふと、ウソップの目は気になる態度を見せる仲間に向けられた。

「……ところでエレノアはなんで落ち込んでんだ？」

「どっか具合悪いのか？」

「……………あれの出現に気づかなかつたのが結構きつい……」

壁に額を押し付け、ずくと肩を落としているエレノアが、重い声で小さく呟く。自分自身を全否定されたような、そんな落ち込みっぷりだった。

「私の耳は数km離れてたつて気配を拾える……………なのにあれは、目視できる距離にあつてまったく気づかなかつた……………こんなの初めてだ」

「地獄耳も役に立たなかつたわけか……」

これまで何度も一味の窮地を救つてきた、自慢の耳が通用しなかつたという事実は確かにショックだろうと、ウソップは同情の目を向ける。

エレノアは顔を伏せながら、険しい表情で虚空を睨みつけた。

「一体何だったんだ、あれは……」

「何の為に海底へ潜ったの?!」

考えこむエレノアは、すぐ近くで怒りの声を上げるナミに訝しげな目を向ける。

真下に積み上げられた無数の残骸、それも財宝とは一切呼べなさそうな代物を見下ろし、ナミは鬼の形相になっていた。

「こんなガラクタばかり持つてきて、空への手掛かりなんて一つもないじゃない!!?」

「だからなかつたんだ何も!!?」

「ああ、それがほんとなんだよナミさん」

サビきつた鎧を着て遊ぶルフィをよそに、ゾロとサンジが釈明をする。

言い訳をする余裕もないほどの残念な成果を前に、二人はむずかしい表情で何があつたのかを詳細に語つた。

「あの船は明らかにすでに何者かに荒らされた後だつた——でなけりや何かしらの理由で、内乱が起き殺し合つたかだ」

「だつたら尚更情報が必要じゃない!!? いい!?? これからも私達が空へ行くというのなら、あの船に起こつた事はもしかして私達の身にふりかかるかもしれないって事なの!!?」

凄まじい剣幕で、ナミは役立たずの三人を怒鳴りつける。

彼女がつい先ほどもで、三人を生贄に窮地を逃れようとしたことを知つたなら、一体

どんな反応を返すだろうか。

「『情報』が命を左右するのに何、このサビた剣!!? 食器!!? 生タコつ!!? 必要なのは『日誌』とか!!? 『海図』とか!!? そうゆうの!!?」

「あああああつ!!?」

「やっぱついていつときやよかつた…」

怒りのままにガラクタを蹴りつけ、ルフイを鎧ごと殴り倒すナミを見て、エレノアが頭を抱える。

実力者三人を行かせるより、頭が回るものを行かせた方が確実に成果を得られたと思うが、後の祭りだった。

「大変そうね…」

「大変なのはこれからよ。ホントばかばかり。これで完全に行き先を失ったわ!!?」

「……………はい」

肩を怒らせたまま、ずんずんと歩き回るナミ。

そんな彼女にロビンがぼんと渡したものの、見覚えのある砂時計の形をした指針を見て、エレノアが軽く目を見張った。

「えっ『永久指針』……………!!?これ…」

「まさかあのサル……………」

「船から盗つといたの、一応」

いつの間に、と感嘆と驚愕の目を向け、エレノアは思わず絶句する。

同じく言葉を失くしていたナミは、やがてぶるぶると肩を震わせると、ボロボロと涙を流してロビンを凝視した。

「私の味方はあなただけつ……………!!!」

「相当苦労してるのね……………」

「いつものことです」

異様な反応を見せるナミにロビンが呟くと、エレノアが目を逸らして返す。一味の苦労を一身に背負う久々の気遣いは、今のナミには刺激が強すぎたようだ。

「『ジャヤ』」

「……………きつと彼らの本拠地ね」

永久指針に刻まれた土地の名に、ナミとエレノアが目を細める。

空島の手掛かりになるか、そして他にも様々な謎を抱えてしまった今ではあるが、このまま彷徨っているよりは格段に状況が変わる事だろう。

二人で進路を確かめっていると、復活したルフィが興味を示してきた。

「ジャヤ? お! そこいくのか」

「アンタが決めるんですよ!!?」

「オ~~~~シジャヤ舵いっば~~~~い!!」

やれやれと肩を竦めたエレノアが応えると、いつも通り何も考えていない様子でルフィが叫ぶ。

そのまま進路を変更しようとした時、突如ウソップがハッと手を止めた。

「はっ!!? おい!!? ちよつと待て…このままそのジャヤつて場所へ行くとしたら、そこでまた『記録』は書き換えられちまうんじゃねエか?」

重要なことに気がついた、と真剣な様子で告げるが、ルフィは何が大変なのかと首を傾げる。

少し考えたウソップは、ルフィにもわかりやすいように言い直した。

「つまり『空島』は行けなくなる」

「ええ!!」

「ジャヤ舵やめだ~~~~!!」

完全に空島に行く気になっているのに、ここで進路の変更などしてたまるか、とすぐさまルフィは航行を止めに入る。

慌てふためく彼に、半目になったエレノアが何と言う事はないというように告げた。

「別に大丈夫だよ。『記録』が貯まる前にジャヤを出ればいいんだから。情報収集と食料調達だけやればいいじゃん」

「うん、じゃあそんな感じで」

「多少運も必要ね」

あつさりと今後の進路が決定され、一味は作業を再開する。何とも行き当たりばつた
りな航海に頭痛を覚えるも、エレノアはそれを無視して自分も作業に加わる。

「よし野朗共行くぞ!!!」肉の国「ジャヤへ!!!」

「おう!!!」

「夢見てんじゃないわよ」

「ナミさんロビンちゃん、『レディ限定未だかつてないタコ焼き』できたよぉ♡」

何とも言い難い、気の抜けた雰囲気のまま、一行は未知の島の手掛かりを求めて船を
進める。

その最中、エレノアは何か言いようのない寒気を感じ、肩を震わせていた。

「……………? なに、この嫌な予感…」

第115話 “怯える天使”

穏やかな波が続く海を、メリー号は進む。

マストの天辺に昇り、望遠鏡を覗き込んだウソツプは、目を皿のようにして前方の様子を伺っていた。

「まだか？ ウソツプ」

「ああ、まだ見えねえな」

「そんなに遠くはねえんだろ？ あのサル男がさつきの地点を“ナワバリ”つつつてたくらいだ」

「——ええ、気候もさつきからずつと安定してるからおそらくもう、ジャヤの気候海域にはいるのよ」

“偉大なる航路”において多発した、異常な気象や現象。それが無いことは、島が近いことを表すというのは、これまでの航海で確認済みだった。

記録指針を確認していたナミは、さらなる正確な情報を得ようと傍らに立つ天使に目を向けた。

「エレノア、あとどれくらいかわかる？」

「……………」

気楽に、これまでと同じように問いかけたナミだったが、返ってきたのは沈黙のみ。一瞬固まった彼女は、訝し気にエレノアの方に振り向いた。

「……エレノア？」

「!? ……え？ あ、ああ……うん。数キロ進めば着く距離だよ」

「……どうしたのよあんた、ぼーつとしちゃって」

「ごめんごめん。大丈夫だよ」

ぱたぱたと手を振り、苦笑を浮かべるエレノア。

どこことなく普段の彼女と異なる雰囲気を感じ、気になったナミだが、それを問い質すことはなかった。

「つあああああ!!! 撃たれた〜!!!」

ドサツ、という音の直後、チョツパーが上げる悲鳴が響き渡る。

驚いた全員が振り向き、甲板に墜落した海鳥と、それに駆け寄るチョツパーに視線が集まった。

「撃たれたってお前……!! 銃声なんて聞こえてねエぞ」

「ほら銃弾!!? 角度から見ても船の正面からだ!!?」

衝撃を受けつつも、呆れた目を向けてくるウソツプに、チョツパーはウソではないと

伝えようと素早く海鳥にメスを走らせ、弾丸を摘出してみせた。

「まだ見えてもいない島から狙撃を？　チョッパ、それはムリよ」

「だつておれ、ずっと見てたんだ」

「ハハ…そりゃどんな「視力」でどんな「腕前」の狙撃手だよ。エレノアだつて何にも言わなかつたんだ。どつかで撃たれて偶然、今落ちたのさ」

普通に考えれば、そんな代物も腕前の持ち主もあるはずがない。

そういう海だとわかつてはいるが、さすがに過敏になり過ぎだとウソツプは苦笑を浮かべ、チョッパの不安を笑い飛ばす。

——その場に立ち尽くし、真つ青な顔で固まる天使の姿に気づかないまま。

「…間違いない…あの人が…あの島にいる…!!」

まだ見えぬ、永久指針が示す先にある島。

そこから感じる声を聞き取ってしまった彼女は、ただひとり言葉を失くしていた。

？

「うっは〜!!?　いいな〜!!?　いい感じの町が見えるぞ!!?」

それからしばらくの航海の後、その島は見え始めた。

港町は騒がしく、多くの船や人々の姿が見つかると、カラフルに彩られた見るからに栄えた島だった。

「ちよつとリゾートつばいんじゃねエのか!!? おいおい〜」

「リゾート!!?」

「急げメリー!!?」

「ホント、ちよつとゆつくりして行きたい気分〜♡」

ルフイたちも街並みを見渡し、その賑わいに期待を寄せ始める。最近寄った島は賞金稼ぎの巣だったり、未開の地だったり、極寒の国だったり、反乱中だったりとろくな思ひ出がなかったからだ。

が、徐々に港に近づいていくにつれて、一味の顔が引きつり始めた。

港に並ぶ船の全てにおいて、妙にドクロマークが目立っていたからだ。

「しかし港に並んでる船が全部海賊船っぽく見えるのは気のせいか?」

「も…もーウソツプったら! 海賊船が港に堂々と並ぶわけないじゃない?」

「ハハハ!!? だ…だよなー」

まさかそんな、ありえないだろうと。絶対にあつていいはずがないとナミとウソツプは互いの妄想を笑っていた。

が、聞こえてくる喧騒が、その淡い希望を粉微塵に踏み砕いてしまった。

「殺しだア!!!」

「何なんだようこの町はア〜〜〜〜〜〜〜〜〜つ………」

虚勢も保てなくなり、涙を流して嘆きの声を上げるナミたち。

むしろやる気を漲らせるルフィやゾロ達とは真反対の彼らを見やり、エレノアはかたい表情でため息をついた。

「噂にたがわぬ無法地帯っぷり……さすが嘲りの町『モックタウン』」

島に上陸すると、その凄まじさはより一層の危うさを感じさせた。

右を見れば乱闘が起こり、左を見ればギャンブルがらみの殺し合いが。そしてどこを見ても、誰一人として武器を持っていない者はいない。

まさに世間一般的な海賊が集まる場所、荒くれ者のための街だった。

「何だかいろんな奴らがいるな、ここは」

「楽しそうな町だ」

ワクワクとした顔で、ルフィとゾロがメリー号を下りていく。

恐れる様子など微塵もない二人を見送りながら、ナミが冷や汗を流して息を呑んだ。

「……………無理よ、……………あの2人が騒動を起こさないわけがない!!?」

「……………まあ……………ただでさえヤバそうな町だ…限りなく不可能に近いな…」

「それじゃダメなのよっ!!?」

「あっ、ナミ!!」

「行くわよエレノア!!? いざって時止められるのは私達だけよ!!!」

意を決し、ナミがメリー号から飛び降りてルフィたちを追いかける。同時にエレノアを呼び、少しでも安心材料を増やそうと試みる、が。

エレノアはその呼びかけに、一步も動くことなく首を横に振った。

「……やだ」

「は!!?」

「やっぱりちよつと調子悪いわ……奥で休んでるからナミ、あいつらのことよろしく……」

「えっ……ちよつとエレノア!!?」

呆気にとられた様子で振り向くナミに背を向け、エレノアは船室の中に引っ込んで行ってしまう。

不自然なほどにやる気のない彼女を不思議に思い、ウソツプたちも啞然とした様子でその背中を見送ってしまった。

「何なのよもう……!!? って待ってルフィ!!? ソロ!!?」

険しい表情で荒い息をつくナミだったが、気付かぬうちにかなり先に進んでいた二人に気づき、慌てて走っていく。

不安げな顔でナミとエレノア、双方の背中を見ていたウソツプは、思わずチョッパー

と顔を見合わせた。

「……あいつ本当に調子悪そうだったな……」

「おれちよつと診てくるよ」

一味において有力な戦士である天使が見せた不調に、チョツパーは心配そうな顔で船室に向かう。

それを見やったサンジは、やや名残惜しそうにしながら欄干に向かって歩き出した。

「何だよ、ナミさんが行くんならおれも行くぞ」

「お前は行くなア!!!」

いつの間にかロビンもいなくなり、美女がいないこの場に残る理由はないと降りようとするサンジに、これ以上行かせてたまるかとウソツプが縋りついた。

「お前まで行つちまつたら……この……この船がもし……襲われれ……行か”ない”でぐれ”よ”オ!!!」

「……………わ……わかつたよ……離せ!!??」

男に縋られても全く嬉しくないが、拒むといつまでもこのままになりそうだったために、サンジは渋々船に残ることに決める。

そんなやり取りを横目に、チョツパーは船室のドアを叩き、中にいるエレノアに気遣いの声をかけた。

「お——いエレノア……!!? 大丈夫か? どつか具合でも悪いのか!??」

わずかな間、中からの返事はなく無音が続く。

だが少ししてから、やや気だるげながらもいつもと変わらない調子で声が返ってきた。

「……大丈夫、ちよつと気持ち悪いだけだから。少し休めば大丈夫だと思う……」

「ホントか!?? おれは医者なんだから遠慮とかすんなよ!!?」

「うん………わかった」

さして疑う事もなく、チョツパーは引き下がる。医者として体調不良は見過ごせないが、エレノアの場合本気で不調があるなら自分で言うだろうと納得する。

それ故に、知る由もなかった。

無理矢理いつもの調子の声を作ったエレノアが、扉の向こう側で膝を抱え、ガタガタと震え続けていたことなど。

(………いる。この島に……あの人……!!?)

絶えず聞こえてくる、その男の声。

それを聞いた瞬間から、エレノアは真面な正気を保つ事ができず、呼吸さえ乱し始める。

(エースが迫っているはずなのに………どうして………何で………!!?)

ポロポロと涙をこぼし、怯えを前面に出してエレノアは身を縮こまらせる。

こんな姿は誰にも見せられない、見せてはならないと微かな虚勢を取り繕い、船室に逃げ込むだけで彼女は精一杯だった。

(もし今…あの人と会っちゃったら…私は……!!! 怖いよ…助けて、エース……!!?)

この場にはいない、もつとも愛おしくて最も縋りつきたい相手を支えに、堪え続ける。そうしなければ、今にも狂って叫び出しそうなほどに、彼女は恐怖を抱いていた。

——アイツらの言う「新時代」ってのはクソだ。

海賊が夢を見る時代が終わるって……!!?)

——人の夢は!!!

終わらねエ!!!!

——いけるといいな、「空島」へよ。

それまで……アイツを預けておくれ。

ゼハハハハハハハ…。

どれだけ塞いでも聞こえてきてしまう、意味深に囁くその声。

エレノアはそれがきこえなくなることだけを祈り、体を丸くし続けるのだった。

??

三人が返ってきたのは、小一時間は後だった。

その間にルフィとゾロは、唾然とするほどの変貌を遂げていた。

「ル……ル……ル……ルフィ!!! ゾロ!!!」

ウソツプが目を見開き、無言で見上げてくる二人と不機嫌そうなナミを凝視する。

なんとルフィとゾロは全身血まみれ、まだ新しい傷口から血を流していて、目を疑うばかりの変わり果てた姿になっていたのだ。

「お前ら、何だそのケガ!!! 何があつたんだ!!!」

「ナミさんっ!!! ナミさんは無事か!!!」

「ああっ!!! い!!? い!!! い!!! 医者ア~~~~っ!!!」

「だからおめエが診ろよ」

一味の実力者二人の痛々しい姿に、ウソツプたちはあつという間にパニックに陥る。最も落ち着くべき医者が最も慌てふためき、全く收拾がつかなくなっていた。

しばらくたって、ようやく少し落ち着いてから、二人の手当てが始まる。そこでやっと、ウソツプは二人に詳しい事情を聞き出しに入った。

「で? 大怪獣何モゲラと戦つてきたんだ?」

「海賊だ。いいんだ、もう済んだから」

「あア」

「あんた達が済んだって私の気は済んでないのよ」

なぜかどこか満足げなルフィに、ぎろりとナミが腹立たしげな目を向ける。

本人は全く傷を負っていないのに、何があつたのかこの場で最も苛立っていて、ウソップたちは思わず距離を置いてしまった。

「何よ!!? 男なら売られたケンカは全部買つてブツ飛ばしちゃえばいいのよつ!!!
いえ!!? こんなハラ立つ町いつそ町ごと吹き飛ばしちゃえばいいんだわ!!?」

「お前、最初に何て言った」

「過去は過去よ、古い話してんじゃないわよ!!? ハッ倒すわよあんた!!!」

もめごととは起こすなと最初に約束させたのはどこのどいつだ、とゾロがぼやくが、頭に血が昇つたナミは止まらなかつた。

何が起こつたのか欠片もわからず、ウソップはルフィの耳元に口を寄せて問いかけた。

「おい、何で無傷のあいつがあんなに荒れてんだ?」

「さあ、わかんねえ」

「そうだ、『空島』の話は聞いたのか?」

「そらじま!!!」

今一番聞きたかつたのはそれだ、とチョッパーが尋ねると、ナミは殺意を全開にして睨みつけ、彼を怯えさせる。まるでその単語を口にする者全員が憎いような凄まじさ

だった。

「知らないわよ、もう。『空島』って名前を出しただけで店中が大爆笑……私、そんなに面白い事言った!!? 何なの一体っ!!」

「『必殺ケチャップ星』!!」

『毛皮強化』!!!
ガードポイント

また怒りを爆発させる彼女の標的から逃れようと、ウソツプは死んだフリを、チョツパーは毛皮で身を守る体勢に入る。

馬鹿にされ、ルファイたちが反撃しなかったのが相当に気に入らないのか、もはや誰に当たり散らそうが関係ない、とナミは自身の不満をぶちまけ続けた。

「ずいぶん荒れてどうしたの?」

「なんか騒がしいね……?」

「ああっ♡ お帰りロビンちゃん!!? エレノアちゃん!!? お食事になさる? お風呂

呂になさる!?」

タイミングをはかったように、エレノアが船室から顔を出し、ロビンがメリー号に戻ってくる。ルファイの注目は、途端に彼女たちそれぞれに向けられた。

「ロビン、どっか行ってたのか」

「ええ、服の調達と……『空島』への……『情報』でしょ?」

「エレノアはウンコでも行つてたのか」

「いや別にお腹痛かつたわけじゃなくて…」

袋を背負い、何かの紙を持ったロビンにふーんと返してから、てつきり一緒に来ると思つていたのか、不思議そうにエレノアの方を見やるルフィ。

するとそこで、ナミがキツと目を吊り上げて二人に怒気を向け始めた。

「そうよあんたよ!!?」 ロビン!!! あんたが『空島』がどうか言い出すからこんな事になつたの!!! 肝心な時にエレノアもいないし!!! もし在りもしなかつたら海のモクズにしてやるわ!!!」

「?」

「…マジで何があつたの?」

「あ…今はそつとしといてやってくれ——っていか近づかねエ方がいいぞ」

不思議そうに首をかしげるロビンと、引いた様子で後退るエレノアにウソツプが注意を促す。もはや手負いの獣のような扱いになりつつあつた。

そんな波から目を逸らし、ルフィはロビンからそれ——一枚の地図を受け取り、広げて中を見た。

「お!!?」 宝の地図だつ!!?」

「ただの地図だろ、どこだ?」 コリヤ」

「この島よ」

何だ何だと、一味が一斉にルフィの持つ地図に集まってくる。

ロビンも同じく地図を覗き込むと、地図に描かれた島の端の方を指さした。

「左にある町の絵が現在地『モックタウン』。そして対岸…東にある×印があるでしょう？　そこにジャヤのはみ出し者が住んでるらしいわ」

「はみ出し者？」

問い返す声に、ロビンは小さく頷き答える。

島でまともに聞いたならば、爆笑とともに一蹴されるであろうその男の名とともに。

「名前は『モンブラン・クリケット』。夢を語りこの町を追い出された男、話が合うんじゃない？」

「モンブラン……」

ロビンの口から紡がれたその名を、思わずエレノアが反芻する。

その音は、不意にエレノアの視界に小さな歪みのような物を生じさせ、彼女を大きく困惑させた。

「…？　やっぱ本当に調子悪いのかな……」

第116話 “海底探索王”

「さつそく変なものに出くわしちまったな」

地図に示された、はみ出し者の住まいに向かう一味は、その前にある奇妙な一団と遭遇する。

その風貌は何というか、少し前に遭遇した一団と非常に類似した雰囲気を持っていて、一味を大いに困惑させていた。

「でもあいっじやねエみてエだぞ」

「ああ、まアそれがよかったか悪かったかは別だがな」

「とにかく見たんだよおれ達は!!? なア!!?」

「うん!!? あのスルベージの奴、やっぱりこの島の奴なんだよ。帰って来るとこ見たんだ」

「ふ——ん、別にまた会ってもいいけどな、おれは」

慌てながら、ウソツプとチョツパーが語る。どうやら彼らは、モックタウンの近くで件の海賊、マシラの船を見かけていたらしい。

そんな彼らに痺れを切らしたのか、相對していた一団の長が声を張り上げた。

「オウオーウ!!? ニーチャンニーチャン!!? そっちでゴチャゴチャ言ってるんじやね
——ぞお!! ウォ——ホ——!!」

椅子の上にふんぞり返り、ハラハラと息をつくその男の第一印象は、オランウータン 狸々そのもの。
声といい表情といい、人語を介していることを除けばかなり人間離れして見えた。

「フン…!!? まったく、どこの誰かと思つてハラハラしたぜ」

「『海底探索王』 ショウジョウ：懸賞金3600万の海賊だよ」

「あのサルと似たような二つ名だな…顔も」

なんとも言葉に表しにくい相手を見やり、ひそひそとエレノアたちは囁き合う。ル
フィのみが、一切臆する様子もなく海賊ショウジョウと向き合っていた。

「思い切つた顔してんな——何類だ?」

「人類だバカヤロー」

「ウォーホー!!? おめえら!!! ウチの大園長を怒らすんじやねエぞ!!!」

かなり失礼な質問だったが、幸いにもショウジョウはさほど怒りを見せない。

が、先に部下の方がルフィたちに向かつて怒りの声を上げ始めた。こちらはこちら
で、全員がダイバースーツを着込んでいるという奇天烈な格好だ。

「ま——いーからいーから。おめーら海賊の様だな、知つとるか? 『七武海』の一角、あ
のクロコダイルが落ちたんだ。実力的に言つて、そのイスはまさかしておれに回つてく

んじやねエかって、もーハラハラして待つてるおれだ」

「へ……お前七武海に入りにエのか」

「あ？？」とにかくおれのすげエところはどいうとこかって言うのと、生まれてこのかた25年髪の毛を切った事がねエってとこだ。なア、お前びつくりしたか？」

まったく関係のない話をされ、返答に困ったエレノアたちは黙り込む。

そしてやはり唯一ルフィだけが表情一つ変えず、真顔で口を開いた。

「ばかみてエ」

「うわっ、びつくりした!!!」

「てめエ大園長に」

「いーからいーから、まったくお前の解答にはハラハラさせられるぜ」

いきり立つ部下を制し、シヨウジヨウは深い息を吐く。しかし再びルフィたちに向けられたシヨウジヨウの目は、全く笑っていないかった。

「い——か、おれの怒りという名のトンネルを抜けると、そこは血の海でした」

「……いちいちめんどくさいなこの人」

回りくどい、脅しにユーモアを持たせたいのかよくわからない彼の言い回しに、調子を狂わされたエレノアが苛立ち交じりに呟く。

同じく待ちくたびれたのか、心底面倒そうにルフィがシヨウジヨウを睨んだ。

「どうでもいいけどおれ達、行きてエ場所があんだよ、どいてくれ!!?」

「あほたれエ!!! ここの海はこのおれのナワバリだ!!! 通りたきや通行料を置いてゆけ!!!」

やはり、結局はそう言う事が目的で呼び止めたらしい。さつきとは打って変わって声を荒げ、シヨウジョウが椅子から立ち上がって両腕を掲げだした。

「何だ、ナワバリ」って、マシラみてエな事言つてやがる」

「『海底探索王』はマシラと同じく特定の海域で長年活動してる海賊だよ。名前からして理由はサルベージじゃない?」

「そんな事言つてたか?」

「何イ!!! マシラア!!? マシラがどうした!!?」

またひそひそと囁き合っていると、会話の内容が聞こえてしまったようでシヨウジョウが反応を示す。

その変化を特に気にせず、ルフィは平然と答えた。答えてしまった。

「ん? あいつならおれ達が蹴り飛ばしてやったんだけど、でも」

「け…蹴り飛ば…!!! …トバ!!! 『兄弟』をよくもオ!!!」

「え?」

ルフィの答えを聞いた途端、シヨウジョウはより一層の怒りをあらわにして騒ぎ出

す。

呆気にとられるルファイたちを放置し、シヨウジヨウは突然マイクを取り出し、大きく息を吸い込み始めた。

「おいちよつと待てつて、蹴つたけどあいつまだちゃんとききて」

「マシラの敵だア!!! 音波!!! 破壊の雄叫び!!!」

ルファイの言葉も聞かず、シヨウジヨウはマイクに向かって大声で吠える。

途端にすさまじい音が響き、ビリビリと強烈な振動があたり一帯に発生していく。その振動は、辺りにあるもの全てを徐々に破壊していった。

「……………!!!? 船が……」

「うわあア~~~~!!!」

ウオ——ホ——と、声が響くと同時に、ベキベキと木材が端から解体されていき、あつという間に船がボロボロになっていく。

船の上にいる者もその影響を受け、音の凄まじさに悶え苦しめられた、が。

「ぎゃああああ」

「大園長!!? その技を船の上で使つては……!!!」

「だめだ、怒りで我を忘れてる……………!!?」

その影響下にあるのは、標的のルファイたちではなくシヨウジヨウの乗る船で、今のと

ころ巻き込まれているのは彼の部下だけだった。

要するに、完全な自爆にしかなくなっていなかった。

「——で、何やってんだあいつら」

「さ——。でもすげエな、声で船が壊れてくぞ！」

ほぼ破壊音の影響を受けていないルフィたちは、シヨウジヨウの船が見る見るうちにボロボロになっていく光景をおかしげに眺め、けらけらと笑う。

だが、彼らの方も全く問題がないわけではないと、次の瞬間気付かされた。

「ぎいやあああああ!!! 耳が…耳があああ!!!」

「ヤベエ!!!? 人より数倍耳がいいエレノアが!!!?」

「ああ…耳がいいのも考えもんだな」

凄まじい聴力を有するエレノアが、耳を抑えて甲板の上を駆け回る。それに気づいたルフィたちは、しまったと彼女に同情の目を向ける。

ナミはそれを見てやれやれと肩を竦め、一味全員に向かって声を張り上げた。

「みんな!!!? ボーツと見てないで今の内に先へ進むのよ!!!? エレノアが再起不能になる前に!!!?」

「ハ——イ♡」

「お! ナミがもう鬼じゃねエ」

「そりやあれだけ発散すりやな」

いつもの調子によく戻った航海士に安堵し、びくびく体を震わせるエレノアを抱えて一味は動き出す。

その時、ミシミシという嫌な音を耳にし、ウソップが表情を変えた。

「ちよ……待て、まずい!!! やっぱりこの船にも影響が!!!」

「修理箇所からみるみる崩れてく!!! ただでさえ船体はもうボロボロだつてのに!!?」

「全速前進!!!」

気づかぬうちに、シヨウジョウの船と同じように板が剥がれ始めているのを目にし、一味は慌てて船を漕ぎだす。

周りの被害など一切見ず、吠え続けるシヨウジョウの破壊音から、一味は一目散に逃げていった。

??

「まったく、あのオランウータンめつ!!!」

ガンガンとくぎを刺し、ウソップが声を荒げる。

せつかく修復を終えた愛するメリー号がまたボロボロになり、さらなる修復を強いられた彼は非常に不機嫌だった。

「船をさらに破壊してくれやがってよオ!!!」

「気がつきやいつの間にかボロボロだな、この船も…かえ時か？」

「勝手な事言つてんじやねエぞてめエまで!!!」

くわつ、と目を見開き、ウソツプが不穏な発言をこぼしたゾロに怒鳴る。

そんな彼に、ウソツプの隣で槌を振るっていたルファイがニツと笑みを見せた。

「文句言つても仕方ねエウソツプ！ゴーストメリー号もおれ達の大切な仲間なんだ、頑張つておれ達でよ！直してやろうぜ!!？」

「私もできる限りやるからさ」

「ルファイ…!!？ エレノア…!!？ おめエらア……………」

物を直すのが苦手な天使と、最も船を壊している男からの言葉とはいえ、本気で船を想う言葉を聞いたことでウソツプはほろりと涙を流す。

が、つい力のこもつたルファイの槌が、メリー号の一部をバキツと破損させてしまった。

「あ」

「てめ——!!!」

——そんなやり取りを交えながら、再び海を進むこと数時間。

一味はついに、地図が示す目的へと辿りついていた。

「着いたわ、地図の場所」

「ここに例の…誰だっけ？」

「モンブラン・クリケット」

「——その夢を語る男が住んでるのね？」

何かしらの情報さえ手に入れば、そんな軽い期待を持ってその場所を訪れたルフィたち。

彼らの目の入ってきたのは、聞いていた話からは想像もできない、凄まじい大きさを誇る豪邸が聳え立っている光景だった。

「す…すげエ!!!」

「あれがそいつの家なのか!!! スッゲー金持ちなんじゃねエのか!!!」

予想をはるかに超える展開に、ルフィとウソップ、チョッパーは目を輝かせながら歓声を上げる。

だが、期待を上げまくる彼らとは真逆に、サンジとゾロは非常に冷めた表情を浮かべていた。

「バーカ、よく見ろよ」

「夢見る男ねエ…少なくとも見栄っ張りではある様だな」

「? なにが☒」

まるで違う反応を見せる二人に、訝し気に三人が首を傾げる。

その間にも、停泊する位置を探すため、メリー号が少しずつ豪邸に近づいていく。そうすることで、ルファイたちは真実を目の当たりにすることになった。

「げ!!! ただの板!!!」

「なに——っ?!?」

「当の家は半分だけ、あとはベニヤ造りだ」

「ずいぶんとケチな男らしいな……」

豪邸に見えていた部分は、精巧に描かれたただの絵。裏側に回ると、比較にもならないほどこじんまりとした小さな家がぼつんと建っているだけという貧相な光景が広がっていた。

その家も、半分だけでしかも崖のすれすれという、とんでもなく住み辛そうな立地だった。

「しかしまたなんでこんな微妙な建て方を……」

奇妙すぎる家に、その持ち主のひねくれ具合を想像して目を細めるエレノア。

じつと、妙に古臭い造りをしたその家を見つめていた彼女だったが、不意に頭に鈍い痛みが走った気がして、眉間にしわが寄った。

「……?」

前触れなく起こった頭痛、一瞬で消えてしまったそれを訝しく思いながら、エレノア

は不思議そうに半分だけの家を眺める。

そしてロビンに、一体こんな場所に住むのは何者なのかと問いかけた。

「一体、どんな夢を語って町を追われたの？」

「くわしくはわからないけど……このジャヤという島には、莫大な黄金が眠っていると
言ってるらしいわ」

その言葉に、いち早くナミが反応する。

続いてウソツプが、さらに続いて他の面々が振り向き、ロビンが呟いた言葉に興味深
げな表情を見せた。

「黄金!!」

「どっかの海賊の埋蔵金か何か!!」

「さア……どうかしら」

そこまで詳しい情報は得られなかったとロビンは苦笑し、肩を竦める。

一瞬で金に目がくらんだナミは、すぐさまあたりに鋭く目を走らせ、続いてチョツ
パーに視線を移して命じた。

「掘るのよチョツパー!!?」金が出るわ」

「え!?? 掘ったら出るのか!??」

「出ないよ」

「え?!」

ザクザクと角で地面を掘り始めるチョツパーを、すぐさまエレノアが止めて彼を非常に困惑させる。

そんなやり取りに呆れた目を向けつつ、ウソツプが家の周りを見渡してため息をついた。

「こんな辺境に一人暮らしかア……」

「こんにちは——!!? おじやまします!!?」

「おめエはイキナリかよ!!」

何も無い平地を見ていたウソツプは、遠慮なくドアを開けて家の中に入るルフイに目を吊り上げる。

他人の家であろうと構わず上がるとは、相変わらずどれだけ凶太い神経をしているのか。

「ん? 誰もいねエな……こんにちは——!!!」

「ばか、待てて、ヤベエ奴だったらどうすんだ!!」

「おいみんなー留守だ!!?」

自由気ままに、そしてそれぞれで勝手に辺りの散策を始める一味。

そんな中、近くに置かれた切り株の上に置かれたあるものに気づいたナミが、近付い

て覗き込み思わず笑みを浮かべた。

「！ 絵本……— ずいぶん年季の入った本ね。『うそつきノーランド』だって、あはは」
 「『うそつきノーランド』?!?」

見つけたそれ、ボロボロの絵本に描かれていたタイトルを読むと、別の場所を見ていたサンジが振り向く。

ナミが持っている本に気づいた彼は、描かれている絵を見て笑い声をこぼした。
 「へー、懐かしいな。ガキの頃、よく読んだよ」

「知ってるの？ サンジ君。でもこれ『北の海』発行つて書いてあるわよ」

「ああ、おれは生まれは『北の海』だからな。みんなにや言った事なかったか？」

「初耳だな。お前も『東』だと思つてたよ」

「育ちはな、まアどうでもいいさ」

思わぬ繋がりを知り、感嘆の声を上げるウソップにサンジは手を振って遮る。

そして興味を示しているナミやほかの面々に、自身の知る情報を語ってみせた。

「こいつは『北』では有名な話なんだ。童話とは言つても、このノーランドつて奴は昔、
 実在したつて話を聞いた事がある」

「………本当だよ」

サンジの説明を裏付けるように、エレノアがなぜか微かに険しい表情で頷く。

「モンブラン・ノーランドは数百年前、『北の海』のとある王国の探検家だったそうだよ。えーと……」

一味の視線が集まると、エレノアは目を閉じ、覚えている内容を思い出しながら語り始めた。

くすりと笑える、どうしようもない滑稽なある男のお話を。

むかしむかしのものがたり

それは今から400年も昔のお話——

北の海のある国に、モンブラン・ノーランドという男がいました

たんけんかノーランドの話は、いつもウソのような大ぼうけんの話だけど村の人達には、それがホントかウソかもわかりませんでしたあるとき、ノーランドは旅から帰って、王様にほうこくをしました

『私は偉大なる海のある島で山のような黄金をみました』

ゆうきある王様はそれをたしかめるため2000人の兵士をつれて、偉大なる海へと船をだしました

大きな嵐やかいじゆう達との戦いをのりこえて

その島にやつとたどりついたのは、王様とノーランド

そしてたった100人の兵士達

しかし、そこで王様たちが見たものは、何も無いジャングル

ノーランドはうそつきの罪でついに死刑になりました

ノーランドのさいごの言葉はこうです

『そうだ！』

山のような黄金は海にしずんだんだ!!!』

王様たちはあきれてしまいました

もう誰もノーランドをしんじたりはしません

ノーランドは死ぬときまでウソをつくことをやめなかったのです

(北海民話『うそつきノーランド』)

第117話 嘘つきの子孫

「あわれ、嘘つきは死んでしまいました… 勇敢なる海の戦士」に…なれも…せずに…
「おれを見んなア!!! 切ない文章勝手にたすなア!!?」

悲しい表情で、絵本を読み終わったナミがため息をつき、そんな彼女にウソツプが目を吊り上げて怒鳴る。何を勝手に人と絵本の登場人物を重ね合わせているのかと。

「北の海」では知らない人は少ない、有名なお話なんだよね。いわゆる子供の教育話みたいに扱われてて……」

「そうそう、ウソばかりついているとノーランドみてエに死刑になるぞつて……エレノアちゃん!!」

幼い頃に読んだ記憶を思い出しているのか、懐かしそうに何度もうなずいていたサンジが、隣を見てぎよつと目を剥いた。

ナミと同じく、絵本の内容をそのまま暗唱していたエレノアの目から、ぼろぼろとめどなく涙があふれ出していったのだ。

「…え? あ、あれ? なんで……!!?」

「おいおい、この話のどこに泣く要素があったんだ? 感受性よすぎだろ」

「いや、私だつてこんなんでも泣いたり……あれ!! あれエ!!?」

異常な反応に、エレノア自身が戸惑いながら何度も瞼を拭う。拭つても拭つても、次々に溢れ出して止まってくれない。

何よりも、自身の胸の奥が締め付けられるような痛みを訴えているのが、不思議でならなかった。

「ぎゃあああ……っ!!」

そんな彼女の涙を止めたのは、背後で聞こえたルフィの悲鳴だった。

何やら海面を覗き込んでいた彼が、突然ドボンと水飛沫を上げたのだ。

「え!! ルフィが海に落ちた!!」

「!!? 何やつてんだ!!? お前!!」

慌てて救出に向かおうとしたウソップだったが、その足が突如止まる。

ルフィが落ちた丁度その場所から、勢いよく大柄な男が這い上がってきたからだ。

「てめエら誰だ!! 人の家で勝手におくつろぎとはいい度胸」

頭頂部に栗の形をした髪を生やした、煙草をくわえた中年の男が怒気をあらわに地面に登る。

そしてルフィたちをぎろりと睨みつけ、ピツと拳法の構えを取つてみせた。

「ここらの海は、おれのナワバリだ。狙いは『金』だな、死ぬがいい」

いうが早いか、男はまず手近にいたサンジに襲い掛かり、鋭い蹴りを放つ。咄嗟に躲したサンジに、間髪入れずまた蹴りが放たれ、続いて鋭い貫手が放たれる。

咄嗟に足で受け止めたサンジだったが、動きを止めたその瞬間に、男は懐から銃を抜いて引き金を引いた。

「うわあっ!!!」

危うく脳天に銃弾を食らいかけ、サンジは慌ててのけぞって躲し、草地に倒れこむ。

苦戦するサンジに、チョッパードとナミが狼狽し始めた。

「サンジくく!!! ああああああ」

「サンジ君っ!!!」

「ご心配なくつ、当たってねエよ!!? ——だがちよつと待てエ!!!」

「バカが、ナメてかかるからだ…」

この程度で苦戦して情けない、とゾロが加勢に入りかける。が、いざ斬りかかろうとした時、ゾロは訝し気に顔を歪めて立ち止まった。

優勢だった男が、突如胸を抑えてその場に倒れ込んだのだ。

「ん?」

「オイ…オツサン!?」

相対していたゾロとサンジ、ウソップに助けられて陸に上がったルフィも、いきなり

の事で戸惑うも、慌てて男のもとに駆け寄っていった。

「タオルをもつと冷やしてきて、窓は全開に！」

「まさか潜水病とは……」

倒れた男を、彼の家に運びベッドに寝かせ、急遽看病が始まる。

冷やしたタオルや水を用意しながらエレノアがぼそり呟くと、ルフィが振り向いて尋ねた。

「このおっさん病人なのか」

「うん、ダイバーがたまにかかる病気さ。本当は持病になったりするものじゃないんだけど」

水圧の変化によって、体内にたまった気ほうで大きなダメージが蓄積されていく重大な病気なのだと、チョップパーは語る。

が、至極わかりやすい説明でも、船長の頭では理解ができなかったようだ。

「——ああ、怪奇現象ってわけか」

「……わかんないなら聞かなくていいよ」

「この人はきつと、その気ほうが体から消える間もないくらい、毎日毎日無茶な潜り方を続けてきたんだ」

「一体何の為に……!?？」

「わからないけど……危険だよ。場合によっては“潜水病”は死に至る病だ」

心配そうに表情を歪め、チョップパーは男の手当てを続ける。

濡らしたタオルを絞り、男の額に乗せてやると、エレノアはフウ吐息をつき、眠り続ける男に呆れたような微笑みを向けた。

「……相変わらず……無茶をするやつだな。お前の子孫達は……」

「エレノア……?」

奇妙な雰囲気を感じ、ナミが訝しげにエレノアを見つめる。

しかし再び彼女が振り向いた時には、先ほど感じた違和感は微塵もわからなくなってしまうていた。

それから、しばらくたってからの事。

外で何やら騒がしい声がきこえたかと思うと、いきなり見覚えのある二人組が家の中に飛び込んできた。

「おやつさん!!! 大丈夫かア!!!?」

必死の形相で、海賊マシラとシヨウジョウが大声を上げる。

そして、なぜか因縁あるルフイたちが、せつせと看病する姿を目の当たりにしてしば

しの間固まっていた。

「??」

「うわ~~~~~!!? おれ達を殺しに来やがったア!!!」

「ギャ~~~~~!!!」

途中の海で絡んできた海賊達が再び現れたことで、ウソップとチョッパーが慌てだす。

ようやく再起動を果たしたマシラとシヨウジヨウは、ベッドの上で寝かされている男に気づくととたんに怒りをあらわに詰め寄ってきた。

「おめエらここで何してんだア!!?」

「おやつさんに何をしたア!!!」

「何だお前ら、今このおっさんを看病してんだからどっか行けよ」

「バカ!!? まともに話なんか聞いてくれるか!!? 相手は野生なんだぞ!!! 窓から全

員避難せよ!!?」

「…野生つてあんた」

狼狽するウソップや呆れるエレノアに構わず、鬱陶しそうに眉間にしわを寄せ、ルフィが告げる。

するとマシラたちは、途端に足を止めてダーツと感動の涙を流し始めた。

「いいいゝ奴らだなあ」

「聞いてるよっ!!」

予想外過ぎる反応に、出鼻をくじかれたウソツプはごちーんとその場にひっくり返るのだった。

家の外では、向かい合ったルフィとマシラ、シヨウジヨウが和気あいあいと話し合うのが見える。

その姿に、残された仲間達は呆れた視線を向けるのだった。

「何であいつらものすごい打ち解けてんだ」

「通じるモンがあんだろうよ」

「もしくは思考回路がほぼ同レベルとか」

「ひでエな!!?」

ぼそつと毒を吐いたエレノアに、ウソツプが目を見開いて後退る。

しかし否定できないのが何とも悲しく、それ以上のツツコミは出てこなかった。

そのうちに、ようやくこの家の主が目を覚まし、起き上がった。

「ルフィ!!? 気がついたぞ!!?」

「起きたか、ひし形のおっさん!!? 聞きてエ事があんだよ」

チヨツパーに呼ばれ、ルファイがいそいそと家の中に戻つて来る。背後ではなぜかシヨウジヨウがマシラを蹴り飛ばしているのが見えたが、全員が放置した。

戻つてきたルファイに、男——モンブラン・クリケツトはたばこの煙を吐きながら、やや気だるげに口を開いた。

「迷惑かけたな、おめエらをいつもの金塊狙いのアホ共だと思つた」

「え!?? 金塊をお持ちなの!??」

「狙うな狙うな」

途端に目を輝かせるナミを、ウソツプがすぐさま止める。金が絡むと文字通り眼の色を変える彼女は、今はおとなしくしていてもらわなければ。

「おれに…聞きてエ事つてのは何だ?」

「〃空島〃に行きてエんだ!!? 行き方を教えてくれ!!?」

「空島?」

臆することも恥じることもなく、堂々と問いかけたルファイに、クリケツトはピクリと眉を動かす。

そしてそのすぐ後に、盛大な笑い声をあげ始めた。

「ウワツハツハツハツハツハツハツハツハツハ!! お前ら空島を信じてるのか!!?」

「オイ、やめろ病人だから〜〜〜!!」

モックタウンでの屈辱が蘇ったのか、鬼の形相で殴り掛かりそうになるナミを抑えこみ、ウソップが冷や汗をかく。

一緒に発の雰囲気にもた戻りかけた時、エレノアが一步踏み出しながら呟いた。

「あるよ」

ばさりと、フードが脱ぎ捨てられ、翼が広げられる。

白と黒に彩られたその姿が露わになると、笑っていたクリケットも固まり、大きく目を見開いていった。

「私は遥か高い天の先で……海を見たんだ。『空島』は……存在する」

「……天族か……!!?」

ジジ……とたばこが灰に変わり、ボロボロと膝の上に落ちていくことにも気づかぬほどに、クリケットは呆けて沈黙する。

そうしてしばらく黙り込んでいた彼は、やがて遠い眼差しになりながら再び口を開いた。

「……お前さんのようにあると言った奴を知ってるが、そいつは世間じゃ伝説的な大うそつき、その一族は永遠の笑いだ」

「……!!?」

「おれじゃねエよ!!?」

はつ、とルフィがウソップに振り向き、即座にウソップが否定する。構わずクリケットは、机の上に置かれたボロボロの絵本の方を見やった。

『うそつきノーランド』。そういう昔話がある」

「……………!!?」

「だからおれじゃねエって!!? 名前違うだろ」

また変な勘違いをしているルフィに、再びウソップがツッコむ。

それに呆れたため息をついたエレノアは、埒が明かないと二人をわきに押しつけ、じつとクリケットを見つめだした。

「その子孫が……………あんたなんですよ。そしてここがその昔話の舞台……………!!?」

「え!!?」

「…じいさんのじいさんの…そのまたじいさんの…おれの遠い先祖さ。迷惑な話だ。奴の血なんざおれには蚊程も通つちやいねエだろうに…」

クリケットは忌々し気に吐き捨て、続ける。

モンブラン家は当時、国を追われ肩身せまく暮らすも、人の罵倒は今なお続く。しかし一族の誰一人、彼を憎む事はなかった。

それはノーランドが類まれなる、正直者だったからだ、彼は語った。

「到着した島は間違いない、自分が黄金都市の残骸を見つけたジャヤ。それが幻だった

とは到底思えない」

絵本にある一節、『そうだ！山のような黄金は海にしずんだんだ!!』という最期の言葉。

面白おかしく描いてあるが、実際は大粒の涙を流した無念の死だったという。

「…ノーランドは地殻変動による遺跡の海底沈没を主張したが、誰が聞いてももはや苦し紛れの負け惜しみ、見物人が大笑いする中、ノーランドは殺された」

「じゃあ!!? だからおっさんはそのモンブラン家の汚名返上の為に海底の黄金都市を探してるのか!!?」

「バカ言うんじゃねエ!!!」

ドンツと再び銃が火を噴き、ウソツプの頭のすれすれを撃ち抜き彼を黙らせる。硬直した彼を睨みつけるクリケットの顔は、凄まじい怒りに満ちていた。

「大昔の先祖がどんな正直者だろうと、どんな偉大な探検家だろうが、おれに関係あるか!!! そんなバカ野郎の血を引いてるってだけで、見ず知らずの他人から罵声を浴びる子供の気持ちがお前らにわかるか!!! おれはそうやって育ってきたんだ!!!」

ありつたけの怒号でありながら、どうしようもないほどの悲痛な叫びにも聞こえる声で、クリケットは吐き捨てる。

それだけで彼がどんな幼少期を過ごしたのか、骨身にまで伝わってくるようであつ

た。

「だが、そうさ。この400年の間には、一族の名誉の為にとこの海へ乗り出した者も数知れねエ。その全員が消息不明になったがな。おれはそんな一族を恥じた——そして家を飛び出し、海賊になった」

「へ——おっさんも海賊なのか」

「別になりたかつたわけじゃねエ。ノーランドの呪縛から逃げ出したかつたんだ。——しかし10年前………冒険の末、おれの船はなんとこの島に行き着いちゃった」

くしくもモンブラン家を、ノーランドを最も嫌い続けた彼だけが件の地に行き着いた。

絵本の通り黄金郷のかけらも見あたらない島の岬に立つと、もう彼に逃げ場は残されてはいなかった。

——決着^{ケツ}をつけようぜ、ノーランド。

一族の汚名をそそぎたいのではない、先祖の無実を証明したいわけでもない。

ただ、自分の意志でも覆す事ができない意地が、自分の中に居すわってしまったのだ。仲間達に呆れられ、見捨てられても、決して譲れない意地が。

「おれの人生を狂わせた男との、これは決闘なのさ。おれがくたばる前に……白黒はつきりさせてェんだ……!!」

文字通り命を懸けた男の覚悟に、ウソップは思わず熱くなった目頭を押さえる。

無言でクリケットを見つめていたルフィは、ふと気になったことについて問いかけた。

「……じゃああいつらは？ さる達は何でここにいるんだ？」

「……そりやまた海底にかける男達の、拳で語る熱いドラマがあつたんだろうなア」

そんな壮大で、バカにされることを覚悟の上とした挑戦に必死につき合っているのだから、何かの縁があつたのだらうとウソップは勝手に思う。

が、その期待は悪い意味で裏切られることとなつた。

「あいつらは絵本のファンだ」

「ファンかよ」

「ずいぶん簡単なつながりね」

「5、6年前になるか、おれの噂を聞いて押しかけていた。『ノーランドの黄金は絶対あると思うんだ』ってな」

がつくりと肩を落としたウソップたちの前で、クリケットはフツと笑う。

来る日もくる日もたった一人で潜り続け、孤独の中で先の見えないいつかを求め続ける日々。

そんな生活の中にズカズカと入り込み、勝手に手下になつて暴れまわる彼らを、クリ

ケツトは嫌えなかった。嫌えるはずがなかった。

「ああいう一途なバカには正直、救われるんだ……わかるか……?」

心底穏やかそうな表情で、クリケツトは語る。

ウソツプはまたしても涙を流し、溢れ出す涙を拭い続けた。

「わかるぜ、そうだよな……本物の同志つてのは、ただそれだけで心強く……」

「まーでもさるの話はおいといてよ」

「じゃ聞くな!!! 歯アくいしばれ〜!!!」

せつかく感動的な話を聞かせてくれているのに何だその態度は、とウソツプが厚顔不遜なルフィに掴みかかる。

それを押しのけ、ルフィはクリケツトに詰め寄った。

「だから……!!? おれは『空島』に行きてエんだよおっさん!!!」

「……フッフ、せつかちな奴だ……だから話してやったろ。『空島』の証言者はその『うそつきノーランド』、こいつに関わりやおめエらもおれと同じ笑いだ」

そう言つてクリケツトは、別の机に置かれたものの中から、一冊の本を取り出す。

絵本以上に年季の入ったそれを見て、不意にエレノアが目の色を変えた。

「え!!!? そいつ空島にも行った事あんのか?!?」

「残念ながら行ったとは書いてねエが……」

「…ノーランドがついたというウソにも、自分が行ったという事はなかったはずだ」

驚きの顔になるルフィに断ってから、クリケットはボロボロの本をペラペラとめくつていく。

覗き込んでいたナミは、書かれている内容にハッと大きく目を見開いた。

「航海日誌…まさかノーランド本人の!!?」

「そうさ、その辺…読んでみる」

「すごい…400年前の日誌なんて……」

クリケットに促され、ナミは震える手でページをめくる。

うっかり壊してしまわないように細心の注意を払いながら、ナミはあるページの一部分を読み上げた。

『海田歴1120年6月21日快晴、陽気な町ヴィラを出航』

『記録指針』に従い港より、まっすぐ東北東へ進航中の筈である。

日中出会った物売り船から珍しい品を手に入れた。「ウェイバー」というスキーの様な一人乗りの船である。

無風の日でも自ら風を生み走る不思議な船だ。コツがいるらしく私には乗りこなせなかった。目下、船員達の格好の遊び物になっている』

「…ウソツ!!? 何これ欲しい!!?」

「「いいから先読めよ!!?」」

まったく関係がなさそうな部分に興奮する彼女に、男性陣から強く叫ぶ。

名残惜しそうにしながら、ナミはさらにページをめくり、気になる記載を見つけて興奮混じりに読み上げた。

『この動力は「空島」に限る産物らしく、空にはそんな特有の品が多く存在すると聞く。

「空島」と言えば探検家仲間から生きた「空魚」を見せて貰った事がある。奇妙な魚だと驚いたものだ。

我らの船にとっては未だ知らぬ領域だが、船乗りとしてはいつか「空の海」へも行ってみたいものだ。

「モンブラン・ノーランド」

見つけた一節に、ルフィたちは互いに顔を見合わせる。

ようやく見つけた、探し求めていた情報の一端を見つけたのだと、全員が確信を持った。

「「空の海」だって…」

「エレノアとロビンが言ってた通りだ!!?」

「それにこの時代じゃ「空島」があつて当たり前前の様に書いてあるぞ」

「やっぱりあるんだ!!!」

「やった~~~~!!」

ようやくまともな、次の目的地にいたるための手掛かりを得られたと、ルフイたちは喜びをあらわに騒ぎだす。

そんな若者たちの狂喜する姿を、クリケットは穏やかな笑みで、そして何か決意を秘めた眼差しで見守り続けていた。

第118話 “同志よ”

「おオ!!? おやつさん!!? 体の具合はどうだ?」

「絶好調だ」

なぜか殴り合いのケンカをしていたマシラとシヨウジヨウが戻ってきて、クリケツトの身体を案じる。

ニツと笑みを見せたクリケツトは、二人に問いかけた。

「黙って聞けお前ら、あいつらが好きか?」

「? 何でそんな事」

「どうしてもあいつら、 “空島” へ行ってエらしい…」

マシラとシヨウジヨウは、クリケツトの問いに眉間にしわを寄せる。

いろいろあつたが、なんだかんだで気に入っている彼らが挑もうとしている険しい壁、その高さを思つて表情が歪められていた。

「 “空島” って……行くとしたら方法の一つ」

「あいつらだけじゃ即死だぜ、おやつさん……!!?」

「だからだよ……」

そう問い返す二人に、クリケツトは不敵に首を鳴らしてもう一度問いかけた。
「おれ達が一丁……手エ貸してやらねエか」

「いいかおめエらまず……『空島』についておれの知ってる事を全て教えてやる」

家の前に整列させた、サンジとゾロ、そしてロビンを除く麦わらの一味に向けて、クリケツトが語り始める。まるで教師と生徒のような立ち位置だ。

「何もかもが不確かな事だが、信じるかどうかはおめエら次第」

「うん、信じる」

「早エよ」

即座に頷くルフィに早速ウソツプがツッコむ。

構わずクリケツトは、背後に広がる海を見やって目を細めた。

「この辺の海では、時として真昼だつてのに一部の海を突然『夜』が襲う奇妙な現象が起きる」

「あつた!!? おう!!? あつたぞそれ!! なア!!?」

「おう!!? 夜が来てほんで、その時怪物が現れたんだ」

「巨人の事か。あいつらがどこからやって来るかつて謂れもあるが、今はおいとけ」

興奮しながら頷くルフィたちを宥めつつ、先を続ける。それもまた空島と関係がない

わけではなかったが、今話すべきは空島に行く方法について。

クリケットにとって重要なのは巨人についてではなく、*夜*の方だった。

「突然来る*夜*の正体、それは極度に積み上げられた雲の影だ」

「積乱雲の事？ 雲がかかるとの程度でできる闇じゃ…」

「…… *積帝雲*」

困惑の声を上げるナミに、エレノアが呟く。

クリケットは話が早いというようににやりと口角を上げ、満足げに笑みを浮かべた。

「そうだ。そう呼ばれる雲がある」

「な…何なのそれ？」

「空高く積み上げるも、その中には気流を生まず雨に変わる事もない。そいつが上空に現れた時、日の光さえも遮断され、地上の『昼』は『夜』にもかわる」

語られた夜の正体に、ナミが愕然とした様子で目を見開く。

ルフィやウソップは全く理解していない様子だったが、エレノアは納得がいった様子でうなづいていた。

「一説には *積帝雲*は何千年何万年もの間変わる事なく空を浮遊し続ける *雲の化石*だという」

「積み上げて気流を生まない雲!? そんなバカな事…」

「あるわけがないと思うのも自由。おれは別に信じろと言つてゐるわけじゃない」

氣象についての知識に自信があつたナミは、自分の理解を越えた情報に言葉を失くす。そういう海だとわかつてゐるが、受け止められるかどうかは別だつた。

エレノアはナミを見やつた後、隣でぼかんとしている青年二人に半目を向けてため息をついた。

「『不思議雲』つて事だよ」

「なるほど、そうか」

「そうなるな、未だ説明されねエ雲だ」

エレノアの博識ぶりに、チョツパーが感嘆の目を見せるのを横目に、クリケットはギリりと強く目を光らせる。

「いいか、『空島』がもし存在するといふのなら、そこにしか可能性はない」

「そうか!!? よしわかつた!!? その雲の上に…」

「だから行き方がわかんないんだつての」

話もまだ半分も終わつてゐないのに、喜び勇んで飛び出そうとしたルフイをエレノアが小突く。

バタバタと今すぐに出発しようとする彼を押しとどめながら、エレノアは真剣な眼差しをクリケットに向けた。

「……で、行く方法はあるんでしょう？ クリケットさん」

「ああ、ここからが本題だ。言っておくが、命を賭ける」

威圧感を増して続きを話すクリケットに、ルフィももがくのをやめて座り直す。

じつと見つめてくるクリケットの表情は、少しでも聞き逃せば即命に係わるのだと、決死の覚悟を試しているようだった。

「ノックアップストリーム 突き上げる海流」この海流に乗れば空へ行ける理屈の問題だ。わかるか？」

放たれた単語に、エレノアがひゅつと息を呑んで固まる。そして、すぐさま狼狽を顔中に表し、勢いよく立ち上がって声を張り上げた。

「危険すぎる!!! あれを利用するっていうの!!!」

「それって………船が吹き飛ばされちゃう、海流なんでしょ？」

「そうか、吹き飛ばばいいんだ、雲の上まで。ははは」

「海流で？」

「だけど、それじゃそのまま海に叩きつけられるって話を……モックタウンで」

暢気に笑うルフィや、困惑気味に尋ねるウソップやナミ、チョッパーをよそに、エレノアはクリケットに厳しい目を向ける。

しかしクリケットは、そんなエレノアの視線をもとめせずに頷いた。

「普通はそうだな。大事なのはタイミングだ。まず海流に突き上げられるって状況も口

で言やあ簡単だが、おめエらがイメージする程さわやかな空の旅にはならぬエ」

言われた通り、期待の表情で楽しい旅を想像していたチヨツパーに、エレノアが呆れながら振り向く。

見ればルフィも似たような様子で笑みを浮かべていたため、エレノアは厳しい表情で首を振った。

「ノックアップストリーム突き上げる海流」はいわば、災害だもの。本来断固回避すべき対象なんだよ」

天使が口にする、今まで聞いたことがないほどの險しさを孕んだ声。

いつになく真剣で、不安気な彼女の様子に、一味全員が思わず息を呑んだ。

「……………一体どういう原理で海流が上へ上がるの？ 私達、今までそんな聞いた事なかったし……」

「そのバケモノ海流の原理つてのも、当然予測の域を越えない。そこに突っ込んでまで調べようつてバカはいねエからな」

心底不思議そうにナミが尋ねると、クリケットは定説を語りだす。

海底深くの大空洞に低温の海水が流れ込み、下からの地熱で生じた膨大な蒸気の圧力により、海底での爆発を引き起こす。

海を吹き飛ばし、空への海流をも生み出す、約一分間は続く大爆発だと。

「……………コツパ微塵になれつてののか？」

「そうなる可能性もある……事実、おれのダチはそいつに巻き込まれて、生死不明になった」

遠い目になったクリケツトが、どことも知れぬ空を見上げて呟く。

隠しきれない悲しみを滲ませた彼の背中に、ウソツプは思わず言葉を失くして凝視してしまつた。

「ダイビングの途中の事だつた……おれとは別の場所で探索をしていたアイツは、爆発の予兆に気付けなかつた。…後に見つかつたのは、奴がよくかぶつてた帽子だけだ」

ゴクリ、と誰かが飲み込んだ唾液の音がやけに響く。

親友を殺した災害に頼るといふ皮肉が、彼をどんな心地にさせているのだろうか、エレノアはそんな感想を抱いていた。

「よ……よし!!?」
「空島」を諦めよう!!?」

顔中に冷や汗を垂らし、ウソツプが断言する。隣ではナミも、心底怯えたように何度も頷いていた。

聞けば爆発の位置は毎回違い、頻度も月に五回程度。何より海流に乗れたところで、運よく空島が真上になれば何の意味もない。何に引つかかることもなく、海に叩きつけられて海の藻屑と消えるのみだと。

「残念だナルフィ、こりや無理だぜ。なにせおめエ、ラツキーの中のラツキーの中のラツ

キーの中のラツキーぐらいのラツキー野郎じゃなきや行けねエって話だ」

「大丈夫さ、行こう」

「大丈夫だったって、お前またそんな根拠のねエ事を軽々と…」

事の重大性を理解していないのか、都合のいい未来しか想像していないのか、ルフィは未だ暢気に嗤ったまま。

ウソツプは思わず涙を流し、停泊したままのメリー号を指さした。

「だいたいよ…今のゴーイングメリー号を見ろよ…あの痛々しい姿…!!? このままじゃ巨大な災害になんて立ち向かえねエよ」

「確かにな、あの船じゃ…たとえ新品の状態でもムリだ」

「何イ!!?」

クリケットが思わず厳しい視線を向けて呟くと、カチンときたウソツプが目吊り上げる。見るまでもなくわかりきったことだが、人に言われると癪に障るのだ。

「スピード…重量…強度…あの船じゃ爆発と同時に粉碎して終わりだ」

「…でも…?…?…? だろ!!? ムリだ、やっぱり」

「—だがその点は心配するな。マシラとシヨウジヨウに進航の補助をさせる。勿論、事前に船の強化をした上でな」

「オ——ウ!!? 任せろ、おめエら!!」

「よろしくな——!!??」

家の中から体を出して声を上げるマシラとシヨウジヨウに、ルフィが元気に答える横でウソツプたちは肩を落とす。

その表情はありありと、余計なことをしやがってと嘆く気持ちが表示されていた。

「あんたね、わかつてんの!!??」

「何だよ」

「そもそも…：そうよ!!?? 私たちがこの島に滞在していられる時間はせいぜいあと一日よ。それを過ぎたらもう記録指針はこの次の島の方角を指し始めるわ」

「だよなー!!?? だよなー!!?? 間に合わねエよ」

ナミが示す現実的なタイムリミットに同調し、ウソツプが安堵したように叫ぶ。空島への地図を手に入れた時のやる気はもはやどこへやら、今はひたすら行かずに済む理由を探していた。

「なアおっさん!!?? 預言者じゃあるまいしわかりやしねエと思うが、次に「突き上げる海流」の上空に、偶然「積帝雲」が重なるであろうって日は約何日後? いやいや…何ヶ月後? いや何年後になるかなア!!??」

とどめの一発を食らわしてやれば、この船長もさすがに諦めるだろうと期待を抱き、ウソツプがクリケットに問いかける。

クリケットは海を見やっつてから、フツとたばこの煙を吐き出した。

「明日の昼だな、行くならしつかり準備しろ」

「間に合うじゃねエかア~~~~!!!!」

「? 何だ、そんなにイヤならやめちまえ」

行きたくなくてたまらないウソツプの本心を見破っているのか、呆れた様子でクリケットは目を細める。

愕然となるウソツプの横で、ルフィを除いてエレノアだけが好戦的な笑みを浮かべ、やる気を漲らせていた。

「やめないさ……やつとあの海に辿り着くことができるんだ……この絶好の機会を逃してなるものですか……!!!!」

もう止められる要素は何もない、止めてくれる者も見つからない。

着々と無謀な挑戦を行う外堀が埋められていく中、ウソツプはキツとクリケットを睨みつけた。

「ウ……ウソだろ!!! だいたいおかしいぜ!!! 今日初めて会ってよ!!? 親切すぎやし

ねエか!!?」

指を突き付け、ウソツプは自分の不安を隠すように喚き散らす。挑む勇気がないことを、助力を買って出た男の怪しさを吠えた。

「空島」なんてよ…!!? 伝説級に不確かな場所に行く絶好の機会が…!!? 明日だと!!? その為に船の強化や進航の補助をしてくれる!!? 話がウマすぎるぜ!!」

一方的な暴言に、思わずナミとエレノアが止めに入ろうとするが、何を考えてかルファイが止める。

クリケットも何も言わず、ただウソツプの発言を受け止めただけだった。

「一体、何を考えてやがるんだ!!! お前は『うそつきノーランド』の子孫だもんア!!! 信用できねエ!!!」

散々言いたい事を吐き捨てたウソツプは、肩で息をしながらクリケットを睨みつける。

しんといやな沈黙がその場を漂い、誰も口を開けなくなつた。

「おやつさ——ん!!? メシの支度が出来たぜ——!!! 今日のは格別だぜ!!!」

「コイツスゲー料理うめーんだ!!? ハラハラするぜ」

「だから一流コックだつってんだろ。ナミさ——ん、ごはんでき…」

サンジとマシラたちが満面の笑みで飛び出してくるが、外の空気の悪さに気づいてすぐに黙り込む。

しばらくの無音が続いたのち、おもむろにクリケットが口を開いた。

「マシラの——…あいつのナワバリで日中『夜』を確認した次の日には、南の空に」

積帝雲”が現れる……”

サクサクと草地を歩きながら、クリケットは穏やかな声で話す。そこにウソツプへの怒りは微塵もなく、淡々と事実だけを述べていく。

「月に5回の周期から見て、”突き上げる海流”の活動もおそらく明日だ。そいつもここから南の地点で起こる。100%とは言い切れんが、それらが明日重なる確率が高い」ウソツプの隣を通り過ぎた彼は、不意にエレノアに視線を向ける。

それを受けたエレノアは、真つ直ぐに背筋を伸ばし、自身もクリケットを強く見つめ返した。

「……ノーランドの航海日誌にはな、お前らと一緒にいる天族のことも書かれてあつた。船員として共に船にいたと……ノーランドの”ウソ”の一つとして伝えられてきた」

ハツと目を見開き、ナミが息を呑む。

伝説上の存在と思われていた天族の實在、それもまた『うそつきノーランド』がついたウソならば、前提は大きく覆されることになる。

彼の冒険の全てが嘘だったという真実が。

「ノーランドのついたウソの一つが本当だった……それだけでもおれア、救われてんだよ」

笑みを浮かべ、クリケットは自宅に向けて歩いていく。

出会った当初よりも柔らかくなった、心の底から救われたような様子で、クリケツトはウソツップに語り掛けた。

「おれは、お前らみたいなバカに会えて嬉しいんだ。さア、一緒にメシを食おう。今日は家でゆっくりしてけよ、同志よ」

ウソツップはその言葉を最後に、その場にドサツと崩れ落ちて尻餅をつく。

それを見届けたルフイは、もう我慢の限界だと言わんばかりに両腕を上げ、家に向かって走り出した。

「メシだ——!!? ウソツップ急げ」

「オウ、早く来い——!!?」

「おいチョッパー、ロビンちゃん呼んで来い」

「うん」

わいわいがやがやと、一気に騒がしくなるクリケツトの家を背に、ウソツップはがっくりと頂垂れる。

自身が彼にどれだけ情けない姿を見せたのか、今さらになつて自分の心に突き刺さっているようだ。

「最善を尽くすしかなさそうね…空へ行く為に。でも…最終的には運任せ」

「ナミ…おれはミジメで腰抜けか？」

「おまけにマヌケね…気持ちにはわかるわよ」

ナミとて、この挑戦に不安や恐怖を抱いていないわけではない。

だが、その不安をもっともらしい理屈で隠し、誰かを傷つけて逃げようとすることは違うと、それだけはわかっていた。

エレノアはそんなウソツップに苦笑し、指をさして立ち上がるように促した。

「ちゃんと謝んなさい」

「おやっさんごめんよオオオオ!!!」

「うわ!!? てめエ鼻水つけんな!!?」

ウソツップの号泣とクリケットの怒号。

そして仲間達の笑い声が、クリケットの家に響き渡った。

第119話 “森の司令塔”

狭く苦しいクリケットの家は、客人を招いたこともあつてさらに狭さを増していた。

しかし、そんなことを感じさせないほどに、家の中は騒がしく愉し気に賑わっていた。

「いや、今日はなんて酒のうめエ日だ!!!」

「さア食べ食べ、まだまだ続くぞサンマのフルコースは!!?」

秘蔵していた酒を開け、シヨウジヨウが確保しサンジが調理したサンマ料理が運ばれてくる。

全員が明日の昼の挑戦を心から楽しみにし、大いにそれまでの時間を堪能していた。

「オウねーちゃん、こつち来いここ座れ!!」

「てめエナミさんをハベらそうなんざ100年早エぞ!!!」

「いけるなおめー」

「まだ量の内じやねエよ」

「さアさ飲めや歌えエ!!! ここぞノビちまう奴はおいて行くぞ!!!」

普段はもつとおとなしく飲むエレノアでさえ、ローブを脱ぎ散らかしてはしゃぐ珍しい姿を見せる。

同じく歓声を上げるルフィたちを見て、ロビンがふつと微笑みながら、ノーランドの遺した航海日誌を読んでいた時だった。

『髑髏の右目に黄金を見た』

「ずい、とクリケットがロビンの視界の横から顔を出し、そう告げる。

するとジョッキを空にしようとしていたナミが、耳ざとく目を光らせて反応した。

「黄金?？」

「涙でにじんだその文がノーランドの書いた最期の文章……その日、ノーランドは処刑された。このジャヤに来てもその言葉の意味は全くわからねエ」

ぐびぐびと酒を飲み干し、クリケットは虚空に向かつて語る。

「どんなに馬鹿にされようとも、呆れられようとも、何年も挑戦を続けてきた謎を挑発するよう。」

「髑髏の右目だア!!! コイツが示すのはかつてあった都市の名か、それとも己の死への暗示か……後に続く空白のページは何も語らねエ。だからおれ達ア潜るのさ!!! 夢を見るのさ海底に!!!」

「そうだぜウキキイ!!!」

「ウオーホー!!!?」

「おれ達ア飛ぶぞ——!!!?」

「空へ飛ぶぞー!!!」

「夢を見ずして何が人生だ!!! 夢見てこそその人生だア!!!」

「いつになくはしやいでるわね、あんた…」

真つ赤な顔でジョッキを掲げるエレノアに、やや引いた様子でナミが呟くが、その声ははしやぐるファイたちの声にかき消されて届かなかつた。

「ジャヤ到着の日!!? 1122年5月21日の日記」

「ノーランド!!?」

「ノノノノランド!!?」

航海日誌に目を通すことなく、クリケットは語る。

何度も何度も目を通した、どんなに憎くてもどうしても捨ててゐる事ができなかつた、先祖の遺した品に刻まれた言葉をなぞる。

——その島に着き我々が耳にしたのは、森の中から聞こえる奇妙な鳥の鳴き声と、大きな、それは大きな鐘の音だ。

巨大な黄金からなるその鐘の音は、どこまでもどこまでも鳴り響き、あたかも過去の都市の繁栄を誇示するかの様でもあつた。

広い海の長い時間に咲く文明の儂きによせて、たかだか数十年生きて全てを知る風な我らには、それはあまりにも重く言葉をつまらせる。

まるで小説の一節のように荒唐無稽な、しかしどうしても心を惹きつける響きを持ったその文章。

ルフィたちも、マシラたちも、皆がその文に心を奪われていた。

「我々はしばし、その鐘の音に立ち尽くした——!!!」

「あ——!!? イカスぜ、ノーランド!!!」

「素敵、巨大な黄金の鐘だつて」

「おっさん何だよ、やっぱノーランド好きなんじゃねエかつ!!!」

わつ、と読み終わると同時にクリケットは歓声を浴び、両腕を掲げる。

彼はその興奮が冷めやらないまま、家の奥からごそごそと何かをくるんだ布を持ち出し、開いてみせた。

「これを見ろ」

「うわっ!!? 『黄金の鐘』!!!」

そこから現れたのは、まさしく本物の黄金でできた鐘。

しかし、その大きさはノーランドの文に描かれていたほどの雄大さはなく、せいぜいナミが両手で持てるくらいの小ぶりさだった。

「——で、どの辺が巨大なんだ?!?」

「別にこれが、その『鐘』というわけじゃねエ。鐘型のインゴットだ。これを3つ海底

で見つけた!!?」

「何だよあるんじゃない、黄金都市」

「そーいう証拠にやならねエだろ。この量の金なら何でもねー遺跡からでも出てくる」
「貧乏な一海賊からしてみれば、十分なお宝のように思えるが、あくまで彼らが探しているのは『黄金都市』」。

満足するにはまず足りない、文字通りスケールが違った。

「それに、前文にあった奇妙な鳥の鳴き声：おい、マシラ」
「オウ」

目を輝かせて黄金の金に頬ずりをしているナミをよそに、クリケットはマシラに促す。

するとマシラは、もう一つ布で覆われたものを持ち出し、鐘よりも一回りは大きな黄金の塊を見せた。

「わっ!!? まだあんのか」

「こつちのはデケエな!!?」

「これで全部だ。10年潜ってこれだけじゃ割に合わんが…」

「うわあつ…綺麗……………!!?」

「何だこれ、ペンギンか?」

「『サウスバード』!!?」

くちばしが妙に大きく、逆に体が小さい奇妙な風貌の鳥。

見たことがないと目を丸くする一味の中で、エレノアが感嘆の声を上げて黄金を凝視した。

「『黄金の鐘』に『鳥』……それが昔のジャヤの象徴だったのかねエ……」

「わからんがこれは……何かの造形物の一部だと思ふんだ」

クリケットが示す箇所を見ると、確かに欠けた跡が見える。つまりは今のこの姿より、もっと大きな形をしていたのだと、ますますルフィたちを興奮させる。

ニコニコと赤ら顔で笑い続けるエレノアが、更なる説明を付け加えた。

「この鳥は『サウスバード』と言ってね、ちゃんと現存する鳥なんだ。日誌の通り鳴き声が変わでね……森の中じゃすぐく目立つから見つけやすいんだ」

「さすがだな。よく知ってる」

「あとはこの鳥の習性として、頭が常に……」

上機嫌に語り続けていたエレノアだったが、不意にその言葉がピタリと止まる。

そして次の瞬間、サーツととんでもない勢いで血の気が引いていき、真つ青な顔でわなわなと肩を震わせ始めた。

「あ——ツ!!!」

「しまったア!!!」

「!?? 何だ!!!?!! どうしたんだ!!!」

エレノアだけでなく、クリケツトたちも愕然とした様子で声を上げる。

状況が理解できず、困惑するルファイたちに向けて、クリケツトは焦った様子で声を張り上げた。

「こりやまずい、おいお前ら南へ行け!!? 南の森へ!!!」

「は!?? 何言つてんだおっさん、アホか!??」

「この鳥を捕まえて来るんだ!!? 今すぐ!!!」

「何で!!!? 何が☒」

「鳥が…何だよ!??」

頭を両手で抱えて天を仰ぐエレノアを見やり、ウソツプが訝し気に問う。

それに答える時間すら惜しいというように、クリケツトは険しい表情で一味全員を見据えた。

「いいか!!! よく聞け…!!? お前らが明日向かう『突き上げる海流』、この岬から

真つすぐ南に位置している…!!? そこへどうやって行く!!!」

「船でまっすぐ進めばいいだろ」

「ここは『偉大なる航路』だぞ!?? 一度外海へ出ちまえば方角なんてわかりやしねエ!!」

「？」

クリケットの言葉に、ナミがあつと息を呑んで硬直する。

目指すのはまず島ではなく海。記録指針を使って航海し続けていたために、この海において決まった方角に向かって航海を行う難しさを忘れていたのだ。

「じゃ…どうすれば真つすぐ南へ進めるの!?!」

「『サウスバード』の習性を利用するんだ!?!? 『記録指針』がなかった大昔の船乗りのように!?!」

ビシツと黄金の鳥の像を指さし、エレノアが覚悟を決めた様子で告げる。

それにコクリと頷き、やや落ち着いたクリケットがあらためて説明を始めた。

「ある種の動物は体内に正確な磁石を持ち、それによつて己の位置を知るといふ」

「うん…ハトとかサケは、そんな能力があるつて聞いた事あるけど」

「じゃあゾロ、お前は動物以下だな」

「てめエが人の事言えんのかよ!?!?」

「『サウスバード』はその最たるものなんだ。どんなに広大な土地や海に放り出されようとも、必ず正確な方角を示し続ける!?!?」

バシバシと黄金を叩き、エレノアは可能な限り一味全員に鳥の姿を目に焼き付けさせる。

一分一秒がとにかく惜しい、すぐにこの課題に取りかからなければと、エレノアはとにかく仲間達を急からせた。

「とにかく!!! この鳥がいなきや何も始まらねエ!!! “空島” どころかそこへ行くチャンスに立ち合う事もできんぞ!!!」

「えー!!!?」

ガーンとショックを受け、ルフィたちが目を剥いて叫ぶ。

宴でいい気分になっていたところに、いきなり降つて湧いた大問題。あまりにも急ぎで、文句を言わずにいられなかった。

「何で今ごろそんな事言うんだよ!!!?」

「もう真夜中だぞ!!!? 今から森に入れて!!!?」

「ガタガタ言うな、時間がねエんだ!!! おれ達はこれから、お前らのボロ船の強化にあたる!!!? 考えてみりや宴会やつてる場合じゃなかったぜ!!!」

「だから今ごろ言うなって」

さらに看過できない問題が浮上し、一味とクリケットたちはますます焦りだす。どちらを欠かしても、遠い空の果てにある島には辿りつけやしないのだ。

「いいな、夜明けまでに “サウスバード” を一羽、必ず捕まえて来い!!!」
?

「うわ…真っ暗!!?」

数分後、クリケツトにせかさされたルファイたちは、虫取り網や縄を片手に近くの森の中に足を踏み入れていた。

月明かりがほとんど入って来ないほど暗く、そして険しい樹々の中で、思わずそのままの感想が溢れてしまった。

「全くこういう事はせめて昼間に言えよな」

「ごめんごめん。ひっさびさに浮かれてうっかりしてた」

「おい、鳥は?」

「どこにいるかわかったら、全員で探しにや来ねエだろ!!?」

苦笑を浮かべるエレノアに、暗さに怯えるウソツプが思わずぼやく。チョツパーにいたっては、宴の料理を食べ過ぎて苦痛を訴えているほどだ。

手掛かりもあまりない、真っ暗闇の中を探すには、全員最悪のコンディションといえた。

「手がかりは変な鳴き声って事だけだ。姿はさつき黄金で見た通り」

「あんなフザけた形の鳥いんのか? 本当に」

「それに変な鳴き声ってのもあいまいすぎる!!? わかるもんか!!?」

「その辺に關しては大丈夫」

喚く一味の前で、エレノアは口の前で指を立てて、全員に黙るように促す。
素直に従い、黙り込んだ一味の耳に、その声は届いた。

「ジョ〜〜〜」

「「「「うわっ変な鳴き声」」」」

「でしょ?」

暗さを帳消しにできそうなほどに、特徴的な手掛かりを得られたことで、ルフィたちはようやく少しだけ安堵の息をつく。

そして各々で、こなさなければならぬ課題に徐々にやる気を見せていった。

「よし……こうなったらとにかくやるしかねエ」

「網は3つある。3手に別れて探そう!!?」

「じゃ行くか。変な鳥を………ぶっ飛ばすぞ——っ!!」

「オー……いやいや捕獲だからね?」

仕留めでは意味がないだろうと、エレノアが応じかけて慌てて指摘を入れる。

これでこっちは何とかなるだろうと、やや余裕、というか油断を持つて取り組み始めた一味だった。

「いやああああああああ!!!!」

数分後、尋常ではない悲鳴を上げたエレノアが号泣しながら走り出す。

背後から迫るギチギチギチツ…!!といういやな音から必死に逃げ、ゾロの背後に回つてしがみついた。

「おれを盾にすんじゃねエよ!!!」

「ムリっ…ムリいいい!!! 私この世で一番ムカデがムリなの——!!!」

「意外ね」

迫りくる細長い…いや、太長く節だった無数の足を持った生物から、エレノアは必死に距離をとる。

ゾロは一切狼狽することなく、通常サイズよりも何十倍も大きなそれを片手で叩きのめした。

「……………いやにデケエな」

持ち上げてみて、その巨大さに改めて眉を寄せる。

ロビンはそれに目を細め、そして今度は自身の背後に回ってガタガタと震えているエレノアの肩を叩き、おもむろに口を開いた。

「いちいち討ち取っちゃうのは、よくないわ。可哀想よ…」

「おれに挑んできたコイツが悪イ、おれに意見するな」

「そうそう、根絶すべきなんだよムカデなんて!!?」

「…お前はお前で何があつた？」

涙目になりながら、明らかに異様な憎悪をムカデに燃やすエレノアにゾロが思わずこぼす。標的と定めた相手に容赦がない彼女だが、この殺生に關しては大いに私情が挟まつているようにしか思えなかつた。

続いてゾロは、エレノアが盾にしているロビンに厳しい目を向ける。なんだかんだで入り込んでいるが、元は敵であつた組織の女を。

「だいたい…いいか、まだシツポは出さねエ様だが、おれはお前を信用しちやいねエんだ。それを忘れんな…」

「ゾロくん…」

一向に態度を軟化させることのない、厳しいままの彼に、エレノアはやや責めるような目を向ける。

ゾロは返事も聞かず、颯爽と目的のサウスバードを探すために歩き出してしまふ。が、その背中に、エレノアが悲し気に声をかけた。

「そつちはいま来た道だよ」

小つ恥ずかしい指摘をされ、思わずゾロはその場で固まつてしまふ。

エレノアは相変わらずの彼に呆れた目を向け、どうしたものかと考えこむように深いため息をつき視線をそらした。

「鳥の声……こっちね。……そこのぬかるみに気をつけて」

一方疑いをかけられていたロピンは、まったく気にした様子を見せず、むしろ意欲的に先に進んでいく。慣れているのか、ゾロがあまりに間抜けすぎたのか。

とにかく疑念があると告げようしたゾロは、目論見が失敗したことで何とも言えない表情になった。

「オイ……………待てて…」

先に進まれては、自分の方が立場が弱いようだと、ゾロは急ぎロピンの後を追っている。その途中、注意されたにもかかわらず、ぬかるみに足を取られて転びそうになっていた。

「やれやれ……ん？」

そんな彼に呆れた視線を送っていたエレノアは、ふと背後でキシキシと音が聞こえて振り向く。

そして、至近距離に近づくと何十匹もの巨大ムカデの群れの姿に、振り向いたことを激しく後悔した。

「いやあああああああああ!!!」

またも泣きながら走り出し、ムカデを引き離そうと必死になる天使。

その哀れで滑稽な姿を、ある木の枝にとまった一匹の鳥が、にやりと冷酷な笑みを浮かべて見下ろしていたのだった。

「ジヨ~~~~」

第120話 朝までには戻る

背後から迫る気配に、本能的な反射で頭を下げる一人と一匹。

その咄嗟の判断が生死を分け、ルフィとチョッパーの頭上を鋭い鎌が通り過ぎ、代わり一本の木が真つ二つに両断された。

「おかしいだろ!!? こんなカマキリ!!! 何なんだこの森はア!!!」

「あー!!! 網が!!!」

スパスパスパつ、と背後から追ってくる一匹のカマキリにより、二人が持っていた虫取り網が細切れにされてしまう。明らかに昆虫の能力の域を超えていた。

「てんとう虫だ!!!」

「でけエよ!!! 痛エ!!!」

別の場所では、坂道から雪崩のように転がってきた無数の巨大なテントウムシに襲われ、青年達を慌てふためかせる。

なんとかサンジが蹴り飛ばし、ナミを死守するも、守護の範囲外だったウソップはボロボロにされた。

またある場所では、現れたオケラ集団を相手にゾロが思い切りケンカを買い、片っ端から畳んでいく。が、その数の多さに早くもうんざりし出していた。

「何がどうなってるんだこの森はア!!?」

「サウスバード」だ!!? アイツが森中の虫に命令してるんだ!!? 自分の縄張りに入ったやつを排除するために!!!」

同じくオケラと格闘するエレノアが、森の中で確認したサウスバードの声から、彼が全ての黒幕だと断定する。

彼女らの頭上、高い木の枝の上にとまった件のサウスバードは、にやりと笑いながら高らかに鳴いてみせた。

「ジョ~~~~ジョジョ~~~~!!!」

「あんだとこのデブ鳥がア!!!」

「…何を言われたの?」

馬鹿にするような響きを持ったその鳴き声に、エレノアは思わず怒りをあらわにして怒鳴り返し、ロビンを困惑させる。

しかし手の届かない位置にいるサウスバードの悪意は止まらず、一味は次々に現れる森の刺客に翻弄され続けた。

「ナメクジだ!!! 塩まけ塩!!!」

「サンジ!!? サマーソルトキックだ!!!」

「よ——し!!? 関係あるかア!!!」

「もういやだ、逃げてばっかり!!? かかって来い!!!」

「だめだよルフィ!!? “くまばち”は猛毒を持つてる」

「ホタルだああああ…あ、きれい」

「いやああゴキブリ〜」

「ぶただあああああ」

「なんで!!?」

虫だけでなく獣まで操り、ルフィたちを攻撃し、そのたびに嘲笑う鳴き声を上げるサウスバード。

そんな攻防が、かれこれ小一時間は続いた。

「だめだ…姿すら一羽も確認できなかつた…」

「おれ達は見たんだけどよ、虫だらけで鳥どころじゃねえんだよ」

「走ってばっか」

なんとか森の住人の攻撃をしのぎ切り、再び集合を果たした麦わらの一味。

しかし誰の手元にも、今回の目的であり、襲撃の主犯であるサウスバードは捕えられ

ていなかった。

「まいったな、7人いてゼロだと!!?　しっかりしろおめエら!!?」

「おめエもだろ」

「私もうこれ以上走れないわよ!」

自分も失敗しているのに柵に上げ、怒鳴るルフィに仲間達から文句が上がる。

このまま一羽も捕まえられないまま、タイムリミットを迎えてしまうのか、空島を諦めざるを得ないのか、そんなことを考え始めた時だった。

バサバサという羽音とともに、聞き覚えのある憎たらしい鳴き声が響いた。

「ジョジョ〜ジョジョ〜!!?　ジョツジョツ!」

『お前らなんかに捕まるかバ——カ』って…」

「何を!!?　わざわざそれを言いに出てきやがったのか!!?　撃ち落としてや…!!!」

余裕綽々と言った様子で、敗者の顔を見に来たサウスバードの姿に、一味の目に再び怒りの炎が灯る。

生け捕りなど関係なく、仕留めてやろうとウソツプがパチンコを構えようとした、その刹那。

「……調子にのるなよ、肉の分際で」

ガツ!!とサウスバードの頭部に、小さな少女の手がかかる。

ハツと目を見開いたサウスバードだったが、時すでに遅くがっちりと首に手を回され、全身を拘束されてしまっていた。

慌てもがく彼に、一瞬で同じ木の枝に飛び移ったエレノアが語りかけた。

「腿も手羽もマズそうだけど……腹の足しにはなるよねエ？」

ニタリと、フードの闇の中で悪魔のように口が歪められるのが見え、サウスバードの全身にぶわつと冷や汗が噴き出す。

ガタガタと震えた彼はやがて白目を剥き、カクンと事切れるように気を失った。

「……同情はしねエな」

「ああ」

散々攻撃され、バカにされ、あらゆる恥辱を与えてきた標的に起こった悲劇。それを見て一味は、ようやく少し留飲を下げる事ができたのだった。

だが、岸边へ戻ってきたルフィたちを迎えたのは、予想だにしない光景だった。

「ひし形のおっさん!!!」

「マシラ!!! ショウジョウ!!!」

表情を変えたルフィが、血まみれで倒れるクリケットや、ボロボロになったマシラのもとに駆け寄る。

海には氣を失つたシヨウジヨウが、ぷかぷかと枯れ木のように浮かんでいるのが見え、慌ててサンジが救出に飛び込んでいった。

「くそ……何者の仕業だ……!!! オイ、手伝え」

「うん!!?」

「見ろ!!? ゴーイングメリー号が!!! 何てこつた!!? 誰だ、こんな事しやがつたの

は!!! 畜生オ!!? 誰だア!!!」

すぐさま救助と治療が始められる中、ウソツプは船の前身を破壊されたメリー号を見つけて愕然となる。

明らかに自然に起きた壊され方ではない、悪意ある破壊跡に、ウソツプはまるで我が事のような痛みと苦しみを抱いていた。

「すまん………」

「あ!!? おっさん、おいおっさん気がついたか」

「ほんとに……すまん……おれ達がついていながら情けねエ……!!?」

体を痙攣させながら、クリケットが体を起こそうとする。

動くだけでも相当な苦痛だろうに、ルフィたちを安心させようと無理矢理に平気なふりをしようとする。

血を吐いてでも、無茶を通そうとしていた。

「だがよ、ちゃんと……!!? まだ時間はある、日が昇る前にちゃんと船を強化してよ……」

「動かないで!!? これ以上傷がひどくなったら……」

「とにかく何があつたか話せよ!!!」

「ルフィ!!!」

立ち上がり、作業に入ろうとするクリケットをエレノアが必死に止め、ルフィがまず事情を聞き出そうと声を上げる。

そんな彼らのもとに、ナミの悲痛な叫びが届いた。

「金塊が……奪られてる………!!!」

彼女が告げた事実には、一味全員が目を見開いて立ち尽くす。

目の前で血まみれでいるこの男が、文字通り命を懸けて集めたかけがえのない財産。それが丸々、なくなっているというのだから。

だがクリケットは怒ることもなく、苦笑とともにひらひらと手を振った。

「……ああ………ああ……いいんだ……そんなのはよ。忘れろ、これは。それよりお前ら……」

「そんなのはって何だよ!!! おやつさん、10年も体イカレるまで、海に潜り続けてやっとな見つけた黄金じゃねエか!!!」

「黙れ……いいんだ……これアおれ達の問題だ……」

なんとという事はないと振る舞うクリケットに、納得できないとウソツプが吠える。が、クリケットはそれに厳しくきつい口調で拒絶の言葉を吐いた。

「聞け、猿山連合軍総出でかかりやあ……あんな船の修繕・強化なんざわけはねエ……朝までには間に合わせる。お前らの出航に支障は出さねエ」

いまだ血を流すその姿は、あまりにも痛々しい。

しかし自分が手に入れた宝よりも、理不尽に傷つけられたであろう誇りよりも、青年達の夢の手助けを優先させようとする姿に、ウソツプは思わず黙り込んでしまった。

「いいか、お前らは必ず……!!? おれ達が空へ送ってやる!!!」

「おやっさん……!!?」

「……だからよ、お前らは」

固い覚悟を持って、立ち上がろうともかくクリケットに、誰も何も言えなくなる。

そんな中、ある木に描かれたマークを見つけたゾロがルフィを手招きした。

「おい、ルフィ……」

「……ベラミーのマーク……!!!」

それは、二人にとって非常に見覚えのあるマークだった。

ジャヤに到着し、酒場で空島についての情報を集めようとした彼らを一方的に襲っ

た、夢を追う海賊を嘲笑い見下す現実主義の海賊達。

じつとそのマークを見つめるルフィに、いやな予感がしたナミが声を上げた。

「……ダメよ!!? ルフィ!!? バカな事考えちゃ!!?」

「ナミ……それ以上言わないで」

「何言ってるのよ!!? 出航予定まで、もう3時間ないのよ!!?」

止めようとしたナミを、今度はエレノアが手で制す。

二人とも、ルフィが何をしようとしているのか察し、しかし全く真逆の反応を見せる。

このまま止めるか、行かせるかを。

「海岸に沿ってつたら昼間の町に着くかな」

「ええ、着くわよ」

「オイ……小僧、どこへ行く……!!!」

クリケットもまた、ロビンに位置を確かめるルフィの意図を察し、自由がきかない身体で止めに入ろうとする。

傷つけられた自分の誇りを、他の誰かに尻拭いされるなど、彼にとってはまっぴらごめんだった。

「てめエ、余計なマネすんじゃないぞ!!? 相手が誰だかわかって……」

「止めたきゃこれ使えよ………」

その目前に、ゾロが自身の刀のうちの一本を差し出す。

殺す気にならなければ、今のルフィは止められないと、彼は言葉にせずに告げる。そう断言できるほどに、今のルフィは怒りに満ちているのがわかっていた。

「朝までには戻る」

静かな怒りを周囲ににじませ、ルフィは短く告げて歩き去る。

クリケットの傷つけられた誇りは、すでに彼にとつての誇りにもなっていたのだ。

??

そして、それから数時間。

日が昇り、約束の時間である朝までかかったメリー号の修復・強化がようやく終わつた……のだが。

「何やってんのよ!!! あいつついたらも——っ!!!」

腰に手を当て、怒りを全身で表したナミの荒ぶる声が響き渡る。

既に準備を終え、マシラとシヨウジヨウは自分達の船に戻っている。そして一味も全員乗り込み、出発の時を今か今かと待っていた。

なのに、肝心の船長がいつまでたつても戻って来なかったのだ。

「朝よもう朝!!! 約束の時間から46分オーバー!!!? 海流に乗れなくなるわよ!!!?」

だいたい帰りは金塊持つてるんだから重くて遅くなるでしょ!!!? そういう計算でき

てないのよあいつの頭では!!?」

「いや…最初から時間の計算なんてしてねエと思うぞ」

「ああ、100%な」

確信を持ったウソツプの眩きに、サンジが至極真面目な顔で答える。

仲間に対してあまりに辛辣な評価だったが、それを酷いと思わせないのでルフィの非常識さだった。

「町でやられちゃったんじゃないかな…」

「負けなら時間に間に合っても許さないわ」

「どうなんだよお前は」

チョッパーの眩きに、ナミはキツと鬼の形相で答え他の面々を呆れさせる。

だんだんとナミの堪忍袋の緒が限界に近づき始め、同時に焦りが大きくなり始めた時、ようやく、待ち望んでいた男の声がかきこえ始めた。

「お——い!!?」

「あいつだ……!!?よかった、帰って来た!!」

森の奥から、大きな袋を背負ったルフィが息を切らせては知ってくるのが見え、一味と猿山連合軍はようやく安堵の表情を浮かべる。

ルフィは少し前まで漂っていた緊張感になど気付く筈もなく、何やら興奮した様子で

仲間達の元へ向かっていた。

「やったぞ~~~~!!?」

「ルファイ急げエ!!! 出航時間過ぎてんぞ!!!」

「…ん? 金塊以外になんか持つてるな、あいつ」

ふと、エレノアは妙にテンションの高いルファイに疑問を抱き、訝し気に目を凝らす。

そしてルファイは、自身が獲得したものを誇らしげに掲げてみせた。

「これ見ろ!!! ヘラクレス~~~~!!!」

「…何やとつたんじや——!!!」

キシキシと身動きする、全世界の男子が憧れると自ら豪語した甲虫の王。

それをさも財宝かなにかのように見せびらかすルファイに、その場にいた全員から凄まじい怒号が上がるのだった。

「うわっ!!? すっげエな~~~~!!!」

顔中あざだらけたんこぶだらけにされたルファイが、特別な進化を遂げたメリー号を前に歓声を上げる。

白い翼に大きな尾羽、赤いトサカを生やしたニワトリの要素をふんだんに施されたその姿に、男子たちの眼がキラキラと輝いていた。

「『ゴーイングメリー号フライングモデル』だ!!!」

「飛べそくそく!!!」

「だろう!!?」

「私、あれ見ると不安になるわよ…」

「まア、そうだな。鶏よりハトの方がまだ飛べそうな…」

「いやそういうことじゃなくて!!?」

興奮する彼らとは真逆に、ナミは引きつった表情でメリー号を見つめる。

ニワトリだろうがハトだろうが、改造された今のメリー号は、ただコスプレしたようにしか見えなかったのだ。

ただ、善意でやつてもらった強化であるため、はつきりと文句を口にすることは彼女にもできなかつた。

「さア船を出すぞ!!? 準備はいいか野朗共!!?」

「アイアイサくく!!?」

「ウオくホくく!!?」

危険な賭けに挑戦するため、麦わらの一味と猿山連合軍が威勢良く吠えて動き出す。

それに合流する前に、ルフィは満足げに笑いながら、黄金の入った袋をクリケットの前に置いて差し出した。

「さつさと船に乗れ、時間がねエ。空へ行くチャンスを棒に振る気か……!! バカ野郎が」
 そっけないクリケツトだが、その表情は喜びが滲んで見える。

ルフィはそれ以上の反応を望むことなく、いつもの様に明るく笑ってみせた。

「うん、ありがとう船」

「礼ならあいつらに言え」

「ああ！ありがとうおめエら!!? ヘラクレスやるよ!!?」

「ホントかよ、いいのかよ!!! お前メチャクチャいい奴じやねエか!!!」

キシキシと鳴く甲虫を差し出され、マシラとシヨウジヨウたちはまるで黄金の山でも差し出されたように狼狽する。

やはりこの男と彼らは、根本的な部分がどうしようもなく似ているらしい。

「とにかく急ごう、船に乗れ!!! 間に合わねエぞ!!!」

「おれ達が先導するからついて来い!!!」

「ルフィ!!? 急いで!!!」

「ああ!!?」

全員にせかされ、ルフィは急いでメリー号に向かう。

その背中を見つめていたクリケツトは、もう一度笑みを浮かべると、自身を慕ってついてきてくれた部下たちに向けて声を張り上げた。

「猿山連合軍!!!」

「「ウオ〜ホ〜!!!」」

「「アイアイサ〜!!!」」

「ヘマやらかすんじゃないやねエぞ!!! 例え何が起きようと!!! こいつらの為に全力を尽くせ!!!」

力強い、最終ボスからの気合いの叱咤に、猿山連合軍はより一層の雄叫びで応える。
ルフィたちはそれに、思わず高揚し笑みを浮かべた。

「よし!!? 行こう!!?」

「みんな出すわよ!!?」

「よっしゃあ!!?」

ルフィが乗り込み、ようやくメリー号は岸を離れていく。

その最中、クリケットがメリー号の後部に集まった一味全員に向けて、力強く語り掛けた。

「小僧!!? おれ達ア、ここでお別れだ!!? 一つだけ、これだけは間違いないエ事だ…!!」

「? 黄金郷」も「空島」も!!! 過去に誰一人「無い」と証明できた奴アいなエ!!!」

「……………うん!!?」

「バカげた理屈だと人は笑うだろうが、結構じゃねエか!!? それでこそ!!?」

「ロマ

ンだ!!!」

胸を張り、夢に人生をかけた男は雄々しく吠える。

誰の目も、声も気にしない、己の信じた道を突き進んできた男からの、力いっぱい
応援だった。

「〃ロマン〃か!!!」

「そうだ!!! 金を……ありがとうよ………!!!? おめエら空から落ちてくんじゃねエ

ぞ!!!?」

「ししし!!!?」

「大丈夫だつて!!!?」

感謝と叱咤を口にするクリケットに向けて、今度はエレノアが胸を張って答える。振
り向いた彼に、伝説の天使は不敵に笑ってみせた。

「この天族私がいる限り……この船は絶対に沈ませない!!!」

「そうか……!!!?」

もうどの誰が信じているかもわからない、迷信のような天族の言い伝え。それを
きつと本当にしてみせると、目の前で告げる少女にクリケットはまた笑う。

否定されなければ、決して嘘にはならないのだと、逆に目の前の天使に背中を押され
たような気がした。

「じゃあな、おっさん!!!」

「いろいろありがと、クリケットさん!!?」

「おやっさん、黄金郷はきつとあるぜ!!!」

「おっさん、無茶すんなア!!!」

「余計なお世話だア!!!」

憎まれ口をたたきながら、クリケットはルフイたちに大きく手を振り、その姿が見えなくなるまで見送り続ける。

そうして一味と連合軍は、決死の覚悟を求められる挑戦へ向かうのだった。

第121話 “空へのロマン”

まっすぐに南を目指し、三隻の船が海を進む。

その先に待っているのは夢の島か、あるいは現実の死か。いずれにせよ覚悟を試される試練の前に、シヨウジヨウが声を張り上げた。

「いいか、現在午前7時だ!!? 現場付近に到達するのがおそらく午前11時頃、おやっさんが話したように、“突き上げる海流”の立ち上がる位置は毎回違うからそれ以前に到着して、位置を正しく、“探索”しておく必要がある」

「頼りにしてるよ、“海底探索王”」

「おうよ!!? ウオツホウ!!?」

メリー号から見上げ、応援の言葉を送るエレノアに、シヨウジヨウはやる気を漲らせ、力強く吠える。

そして彼女の仲間にも注意喚起を行おうとした彼だったが。

「少し予定より遅れちゃった…オイ!!? 聞いてんのか!!?」

「ほら!!? 正面向いた!!?」

当の本人たちはというと、苦勞の末に捕らえたサウスバードで遊んでいた。

どこを向かせても、南を向かなければ落ち着かない厄介な性分の生物を見て、その不思議な生体にキヤツキヤとはしゃいでいた。

「いや——かわった鳥もいるもんだな」

「ホントに南しか向かねエんだ、コイツ!!? コンパスみてエだな、面白エ〜」

「ジョ〜ジョジョジョジョジョ〜!!」

「あいつら…!!? あとで超しばく」

ビキツ、と振り向いたエレノアがこめかみに血管を浮き立たせ、わなわなと拳を震わせる。

なのに苛立ちの原因であるルフイは、緊張感の欠片もない態度でヘラヘラと笑っていた。

「まーそんなにあせつてもしようがねエからさ! 楽に行こうぜ!!?」

「誰のせいでこんな急いだと…」

思わず小言を言いそうになるエレノアだったが、すぐに諦めて大きなため息をつく。彼に説教したところで、すぐ似たような事になるのは経験済みだった。

しかも、マシラとシヨウジヨウまでルフイの気の抜きように納得の表情を浮かべていたのだから、もうどうしようもなかった。

「——だがそりやそうだ。何時間も緊迫し続けたってしかたねエ」

「成程な………よーし、野郎共。気を抜きながら全速前進」

「ウツキツキ………」

「は……いい天気だ……」

「ウオ……ホ………」

「大丈夫かオイ……」

ぐてえ……と船までのんびりしているようにへたり、目的の海域までゆっくり進んでいく。急いでいるとはいえ、まだ時間には余裕がある、そんな油断が三つの集団にあった。だがある時を境に、エレノアの纏う雰囲気豹変する。大きく目を見開いた彼女は、突然はるか遠い海の方を見つめて立ち尽くした。

「……?!?!」

「どうかしたの?」

「………来る!!!」

エレノアの確信を持った叫びに、ルフイたちもすぐさま表情を変える。

その少し後に、双眼鏡で前方の様子を伺っていたマシラの部下がハツと息を呑んだ。

「園長!!! マズイツす!!!」

「どうしたア!!!」

「南西より!!! 夜が来てます!!! 積帝雲です!!!」

部下の報告に、一気に船上は騒然となる。

気づけば確かに、前方に黒々とした雲が迫り、辺りを真っ暗に染め始めているのが見える。ちょうど、ルファイたちが向かっている方角でだ。

「本当か!!? 今何時だ!!?」

「10時です!!! 予想よりもずっと早い!!!」

「マズイな……………!!? ショウジョウ!!! 行けるか!!?」

「ウータンダイバーズ!!! すぐに海へ入れ!!! 海流を探る!!! ウオ〜〜ホ〜〜!!!」

ショウジョウが部下たちに命じ、ダイバーたちが潜った直後、自慢の雄叫びを辺りに反響させていく。

ビリビリと音波が広がっていき、周囲の海流を探り続けた数秒後。数人のダイバーたちが勢いよく顔を出していった。

「反射音確認!!? 12時の方角、大型の海流を発見!!?」

「8時の方角、巨大生物を探知!!? 海王類と思われまます!!?」

次々に報告を上げていくダイバーたちだが、目的の海流はまだ見つからない。

ルファイたちが息を呑み、手に汗を握りながらそれを待っていると、一人のダイバーが焦りながらも顔を出して叫んだ。

「10時の方角に海流に逆らう波を確認!!! 巨大な渦潮ではないかと!!!」

「それだ!!! 船を10時の方角に向ける!!! 爆発の兆候だ!!! 渦潮をとらえろ!!? 退くなよ!!!」

目的の化け物海流の位置を掴み、マシラがすぐさま舵を切らせる。

一刻を争う、僅かに判断を誤れば即座に命取りになる状況の中、確実に役割を果たそうと懸命に船員たちが動き出す。

その直後、凄まじい揺れがメリー号と二隻の船を襲った。

「うわあ!!!」

「何だ!!! 波が急に高くなった!!!」

「うわあ〜沈んじまうぞ!!!」

「爆発の前震だ!!? 気をつけろ!!!」

「航海士さんっ!!? “記録指針”はどう?」

グラグラと大波に揺られ、立つことも難しくなった小さな船の上で、唯一ロビンが冷静にナミに確認する。

ナミは言われた通り記録指針を見下ろし、ピンと針が頭上の雲を差していることを確認した。

「ずっとあの雲を指してる!!! 風の向きもバッチリ!!? “積帝雲”は渦潮の中心に向かっているわ!!!」

「どうやら今回、当たりの様だぞ兄弟」

「ああ、爆発の規模も申し分なさそうだ!!?」

「行けるのか!!」

「ああ、行ける!!?」

マシラはそう吠えると、メリー号に向けてフックを引つ掻け、かたく固定し引つ張り始める。

何をどうしたらいいのかもわからないままの一味は、その行為に眉を寄せた。

「何だ!!?」

「渦の軌道に連れて行く!!」

「……そしたら!!? どうしたらいいの!!?」

凄まじい揺れで、とても何かできるとは思えない。

そう尋ねるナミに、マシラは有無を言わさぬ鋭い声で命じた。

「流れに乗れ!! 逆らわずに中心まで行きやなる様になる!!」

繋がれた二隻が向かうのは、巨大な渦潮の中心だった。

すり鉢のように渦を巻く激流に乗り、マシラの船がメリー号を中心へと誘っていく。

そんな悪夢のような光景に、詳しい方法を聞かずにいたナミたちは愕然と固まってしまった。

「飲み込まれるなんて聞いてないわよオ!!!」

「行くぞ〜!!! 〃空島〃〜!!!」

唯一歓喜の声を上げるルフィ、そして、緊張の面持ちながら期待を目に輝かせるエレンア。

顔を引きつらせていたその他の面々は、次の瞬間言葉を失った。

「ギャオオオアアオオオオアアアアアア…」

激流に巻き込まれたのか、どの船よりも巨大な海王類が一頭、悲鳴をあげながら飲み込まれていく姿が見えたのだ。

もがき、吠え続けながら空気を求めていた海王類は、やがてブクブクと沈んでいく。そんな光景に、ナミやウソップ、チョッパーは恐怖の形相でガタガタと震えるばかりだった。

「じゃあおめエら!!! あとは自力で何とか頑張れよオ!!!」

「ああ、送ってくれてありがとうな〜!!!」

「待て〜!!!」

メリー号をうず潮の流れに乗せた後、すぐさま離れていくマシラとシヨウジヨウの船に、ウソップがたまらず悲鳴を上げた。

「も!!! 勘弁じでぐれエ!!! 恐エえつつうんだよ!!! 帰らせてくれコノヤロー!!! 即死

じゃねエかこんなモン!!!」

「あああああああ~~~~!!!」

「ジヨ~~~~!!!」

「こんな大渦の話なんて聞いてないわよ!!! サギよサギ~~~~!!!」

数時間前までの決死の覚悟はどこへいったのか、情けなく泣き叫ぶ二人と一匹と一羽。

予想をはるかに超える衝撃の絵面に、全員正気を失いかけていた。

「引き返そうルフィ!!!? 今ならまだ間にあう、見りゃわかるだろ!!!? この渦だけで充

分死んじまうんだよ!!!? “空島”なんて夢のまた夢だ!!!」

「案ずるな童ども!!!」

渦潮を見つめたまま動かないルフィに、必死に説得を試みるウソップ。

だがその背中に向けて、恐怖を吹き飛ばすような勢いでエレノアの荒々しい声がかけられた。

「私がいる限り……この船は沈まない!!! そうだろ、船長!!!」

「……ああ!!!」

雄々しく問いかけるエレノアに、ルフィがそう答えて振り向く。

凄まじい光景を凝視していた彼の顔は、夢に挑む期待と希望でキラキラと輝いてい

た。

「夢のまた夢の島!!! こんな大冒険逃したら一生後悔すんぞ!!!」

((た………楽しそ………!!?))

その満面の笑顔に、ウソツプたちは即座に説得を諦めて涙を流す。

こうなつてはもう止まらない、止まってくれはるはずがない。散々一味を引つ張り回す無茶苦茶さ加減は、こんな逆境などものともしないのだ。

そしてその隣には、いつもは味方のはずの天使の姿もあるのだからもうどうしようもない。

「諦めろ……唯一止められそうな奴があの様だ」

「わあすつごいいいい笑顔。…見たことないわよエレノアのあんな顔!!! 何があんたをそ

こまで駆り立てるのよ!!!」

「ホラ、おめエらが無駄な抵抗してる間に……」

ギヤーギヤーと喚くナミたちを呆れた様子で見やっていたゾロが、ふと顎で示す。何事かと振り向いたウソツプとナミは、またしても絶句し固まった。

「大渦にのまれる」

「ぎゃあああああ!!! ああああああ!!!」

波に飛ばされたメリー号が、大渦の中心に向けて宙を舞っていた。

帆を動かそうがオールで漕ごうが、もう何をやっても意味はない。先ほどの海王類の末路が脳裏によぎり、激流に飲み込まれる未来に絶望するウソツプだったが。

だが海面に降り立ったメリー号は、ちやぶんと思った以上に穏やかに着水し、一味を唾然とさせた。

「あ?」

思わぬ現象に、間抜けな声が零れる。

ふと周囲を見渡してみれば、あれだけの激流が跡形もなく海面から消え去っているのが見えた。

「何!!? 消えた!!? 何でだ!!?」

「何が起きた!!?」

「あんなでつけエ大渦の穴が!!? どういう事った!!?」

「消えてないよ」

動揺の声を上げる一味に、エレノアが真剣な調子で呟く。

フードに隠された彼女の顔に、一筋の冷や汗が垂れ、何かを覚悟した引き攣った笑みが浮かべられた。

「構えろよ野郎共……すぐに来る……!!」

「まさか……!!?」

何が起こるのか、エレノアの表情で察したナミが顔色を変える。その時だった。

「待アてエ〜〜〜!!!」

聞き覚えのある声が、波の消えた海面を突き進みながら近づいてくる。

思わず視線を集めた一味は、巨大な丸太に帆を立てただけの、簡素な海賊船が近づいてくる姿に目を丸くさせた。

「ぜハハハハハハハハ!!! 追いついたぞ、麦わらの一味!!! そしてエ：エレノアア!!!」

「あれは…モックタウンにいた…!!?」

「誰だ?」

面識のあるルフィとゾロ、ナミは訝し気に。そして初対面であるウソップたちは不思議そうな表情で、向かってくる髭面の大男を見やり首を傾げる。

そんな中、エレノアはよろよろと後ずさり、ギラギラと悍ましい目で凝視してくる大男を凝視した。

「ティーチ…!!!」

「てめエの一億の首と!!! 天族を貰いにきた!!! 観念しろやア!!!」

怯えるエレノアの声に、ティーチと呼ばれた男は両腕を広げて笑みを深める。

彼が口にした聞きなれない情報に、ルフィは警戒心を保ったまま困惑の声を上げた。

「おれの首!!? "1億" って何だ」

「——やはり知らねエのか…!!? おめエの首にや "1億B" の賞金が懸かってんだよ!!?」
 そして "海賊狩り" のゾロ!!! てめエにや "6千万B" だ!!!」

ティーチは懐から、三枚の手配書を取り出して掲げる。

それらは間違いなく、ルフィとゾロ、エレノアの顔が映った写真が張られた、政府が発行する手配書。その額は、ティーチが語ったものと同じ額が掲載されていた。

「本当だ…!!? 新しい手配書だ!!? ゾロ!!? 賞金首になってんぞ!!! エレノアに
 関しちゃ2億だ!!!」

「何イ!!!? おい待て!!? おれは!!? おれのもあるだろ!!?」

「ねえ」

「よく見ろよ」

「ねえ」

「……そうか、アラバスタの件で額がハネ上がったんだわっ…!!?」

双眼鏡で確認し、本物であることを確かめたウソップにサンジがすり寄るが、ウソップはにべもなく彼の願望を否定する。

ナミがあつと心当たりで愕然としていると、その横でルフィががつくりと膝をついて

項垂れた。

「またエレノアに負けたア~~~~!!」

「いらんことで嘆くな!!!」

いつか見たような、船長でありながら懸賞金額を船員に越えられる悔しさに、ルフィが嘆き吠えるのを、ナミが目を吊り上げて怒鳴る。

そんなやり取りなど気にせず、ティーチは欲望で満ちた眼差しを一味の天使に固定し、嗤いかけていた。

「ゼハハハハハハ!!! 言っただぜエレノア……!!? 次に会う時や……おめエを攫っていくつてなア!!!」

「何? あいつ、あんたのストーカーか何か?」

個人に対し、並々ならぬ執着を見せる謎の男に困惑するナミが、様子のおかしいエレノアに問いかける。

黙り込み、欄干に背中を預けて耐えていた天使は、やがてうつむきながら口を開いた。
「……………!!! ああ、そうだったね……ティーチ。私も……ちようど……」

仲間達が聞いたことがないほど、低く抑揚のない声がエレノアから紡がれる。

それに戸惑いを見せ、固まるナミたちをよそに、エレノアはフードの中で目を光らせる。

凄まじい、怨念の様な殺意を灯した目を。

「あなたを殺しに行きたいと思つてた……!!!」

ざわり、とフードの中から髪が蠢き、得体の知れない気配が天使から漂う。

至近距離にいたナミはそれに当てられ、ゾクツと体を震わせて顔を真っ青にし始める。気配の変わったエレノアに、一味の全員が息を呑んで固まった。

「おいおめエら!!? 余所見するな!!!」

「来るぞ、〃突き上げる海流〃……!!!」

だが、その時送られてきたマシラとシヨウジヨウからの警告に、ハツと我に返る。

音が、足元から聞こえる。何かがゆっくりと浮上してくるような、思わず逃げ出したくなるような音が、徐々に近づいてきているのがわかった。

「アン? 何だ☒」

「全員!!! 船体にしがみつくか船室へ!!!」

「エレノア何やってんの!!!? あんたも早く!!!」

「え? あっ!!!」

「海が吹き飛ぶぞオ……!!!」

慌ただしく動き出すルファイたちとは真逆に、ティーチは困惑気味に片眉を上げ、足元を見下ろす。その次の瞬間。

海が、爆ぜた。

大気を震わせる轟音があたりに響き、大量の海水が天に向かって登り、凄まじい勢いで伸びていく。

ティーチの船をバラバラに吹き飛ばしながら、メリー号を乗せた海流が天に一気に突き上げられていったのだ。

「行けよ、『空島』!!!」

荒れ狂う波に転覆させられないよう苦戦しながら、マシラとシヨウジヨウが姿の見えなくなつた一味に向けて言葉を贈る。

きつと命懸けの挑戦の先に栄光を掴んでみせてくれと、願いを込めて。

ビリビリと震える大気と地面に、ジャヤで待つていたクリケツトもまた、にやりと笑みを浮かべた。

第122話 天まで届く道

「うわあああああああ~~~~!!!」

激流に乗り、羊の船が空へ向かう。

船員たちは皆、しがみつくことに精一杯で、見る見るうちに遠く離れていく海面に、いまだに信じられないといった表情になっていた。

「ど……………!!! どうなってるんだコリヤア?!?!?」 水柱の上を船が垂直に走ってるぞ!!!」

「うほ~~~~~!!?」 面白エ~~~~~!!! どういう原理だア!!!」

超規模の爆発に乗り、吹っ飛ばされるといふ話だったのに、まるで船は平地を進むかのように激流に乗っている。

ただ異なるのは、異様な速度と視界が全て垂直になっていることだけだ。

「よーし!!!」 これで空まで行けるぞ~~~~~!!!」

「行け~~~~~!!!」 メリ~~~~~!!!」

どよめく一味の中で、ルフィとエレノアのみが歓喜の表情で拳を突き上げ、ずぶ濡れになりながら天空の先を見据える。

黒々とした雲の海は、徐々に目前に迫りつつあった、だが。

「ちよつと待った…!!　　そうウマイ話でもなさそうだぞ」

「どうした!?」

「何だ!?　　忘れ物でもしたのか!?」

「船体が浮き始めてる…!!」

サンジが異変に気付き、一味に一大事を伝える。

それまでは何事もないように激流の上に乗っていたメリー号だったが、やはり真下の重力の影響を受けているのか、船底が激流から離れ始めていた。

それが示す未来に、ウソツプたちは顔色を一気に青褪めさせた。

「このままじゃハジキ飛ばされるのが、オチだぞ!!」

「…そそ!!?　　そんな事言つたつてお前…!!　　どうしろつてんだよ!!?　　おれ達アしが

みつく事で精一杯だ!!」

一度この爆発に乗ってしまった以上、できる事は何も無い。とうか一切教えられない。いない。

災害に自ら突つ込んでしまった今、一体何をしたらいいかなど誰も思いつかなかった。

「ああつ!!!　　何だ…あれ!!!」

そんな中、チョッパが目を見開き、船の前方を指さして叫ぶ。

釣られて振り向いた一味は、激流の先から飛び出し、急速に近づいてくる巨大な影を目撃し、一斉に顔を強張らせた。

「海王類!!!」

「さつき、渦にのまれた奴だつ……!!!」

「ぶつかる~~~~!!!」

渦に飲み込まれ、そのまま姿を消した憐れな被害者が、今度はメリー号を潰す障害となつて襲ってくる。

考える時間さえもないまま、今のメリー号の速度と海王類の落下速度が加わり、あつという間にその巨体が壁のように迫ってきた。

「月を見上げる兎とて、理性の無い時もある。暴れる巨人をとつ捕まえて、勇氣凛々に進だ!」

しかし巨体が激突する寸前、鈴を鳴らしたような声とともに、メリー号の周囲に銀色の閃光が幾千も走る。

ぎやりぎやりと鎖のように連なり、大気を裂くその刃を操りながら、エレノアが直角の甲板を走り、海王類の前に飛び出した。

「行くぞ!」
「ウルカー・カリゴランの拘引網!!!」

連接刃は、まるで蛇のように空中でのたうち、海王類の巨体に巻き付くとその体に刃

を走らせていく。

そして次の瞬間、どばつと真つ赤な鮮血を噴き上げながら、細切れになつてメリー号の周囲に散らばつていった。

「た、助かった…!!?」

「見ろ、おれ達だつてああなるのは時間の問題だ!!」

「バラバラに!!?」

窮地を脱したものの、全く安心できない状態には変わり無いと、一息つく間もなくゾロが告げる。

思わずぎよつと目を向くチョツパーの横で、サンジが険しい表情で舌打ちした。

「オイオイそんな事言つてもよ!!! こんなもん爆発の勢いで昇つちまつてんだから今更自力じゃア…」

「やっぱただの“災害”なのか!!?」

「うわあ!!! 色んなもんが降つてくるぞ!!! “突き上げる海流”の犠牲者だ!!!」

「ああ、おれ達ももうお終いだ、このまま落ちて全員…海に叩きつけられて死ぬんだよ!!!」

ゾロもサンジも、ウソップもチョツパーも、誰もが自分達が迎える最悪の未来を予想して頭を抱える。

覚悟を決めたとはいえ、このまま何もできないまま終わりを迎えるのか、と悔しさが表れ始めた時だった。

「帆をはって!!? 今すぐ!!!」

沈痛な表情で俯くウソツプの耳に、雄々しい声が響いてくる。

ハツと目を見開き、顔を上げた彼らの目に入ってきたのは、ロープを掴みながら前方を見据えるオレンジの髪の毛の娘。

「これは海よ!!? ただの水柱なんかじゃない!!? 立ち昇る『海流』なの!!! そして下から吹く風は、地熱と蒸気の爆発によって生まれた『上昇気流』!!!」

力強い声に呆然となる男達に向けて、ナミは振り向いて身を浮かべる。

数秒前の絶望的な諦め顔はどこにもない、勝利を確信した余裕の表情が、今の彼女にはあった。

「相手が風と海なら航海してみせる!!? この船の『航海士』は誰!!!」

頼もしく、そして情けなくもこの場の誰よりも男らしい問いに、ルフイたちは一斉に希望を見出し始めた。

「んナミさんですつつ!!!」 オオ、野朗共、すぐにナミさんの言う通りに!!?」

「オオ!!!」

いったい自分は何をしているのか、と自身を叱咤し、男達はすぐさま不安定な足場で

動き出す。

この状況を乗り切るため、そして誰も見たことがない景色をその目で目の当たりにするために、各々が凄腕の航海士の指示を全うしていく。

「わあっ!! ヤバいぞ!! 水から船が離れそうだ!!」

「落ちる——っ!! 落ちるぞナミ、何とかしろオ!!」

「否!!? 案ずるな童共!!」

慌てふためくウソツプとチョッパーに、不敵な笑みを浮かべたエレノアがナミを見ながら告げる。

そして——一味を、不思議な浮遊感が包んだ。

「飛んだア~~~~!!」

激流の上を走っていたメリー号が、何と空中に浮いていたのだ。

マシラとショウジョウウたちによる修復・強化の賜物か、それとも気流と慣性がうまく釣り合ったのかは定かではないが、とにかくメリーは、天を舞っていた。

「すげエ、船が空を飛んだ!!」

「この風と海流さえつかめば、どこまででも昇って行けるわ!!」

思わぬ光景を目にしたことで、青年たちは誰もが興奮したまま騒ぐ。ロビンでさえ、体験したことのない感覚に笑みを浮かべてみせている。

船首に捕まりながら、ルフィはワクワクと高鳴る鼓動耳をに身を任せ、迫る黒雲を凝視し続けた。

「あの上に、一体何があるんだ……!!!」

「届け……!!? 届け……!!!」

その後ろで、マストにしがみついたエレノアが、まるで祈るような表情で天を見つめ続ける。

待ち侘びた瞬間に歓喜しながら、何かを求めるように。

「空の彼方へ!!! 届けエ~~~~!!!」

天まで貫く激流の柱の轟音に負けないほどに、その声は広く、強く響き渡るのだった。

「ゼハハハハハハハハ!!! まいったぜ!!! 逃げられた!!!」

ぶかぶかと浮かぶ丸太船の残骸の上で、黒ひげの男がおかしげに笑う。

獲物に逃げられた悔しさはそこにはない。その様は、思う通りにいかなかったことそのものを、面白がっているようにさえ見えた。

「ゲホ……ゴホ……!!? あいつら……運がいい」

「のんきな事言つてやがるぜ、せつかくの獲物をとり逃がしちまったつてのによ。何とかしろよ船長!!! さっさと追つて仕留めようぜ」

「ゼハハ、わめくなバージェス……この世から消えちまったわけでもねエ」

感心しながら咳き込む男の隣で、逸る別の仲間、覆面をした大男を宥めつつ、ティーチは意味深に嗤う。

その視線は空の向こうに、遙か先に存在するかもあやふやな空の島に向かった、白虎の天使がいる方に向けられたままだった。

「すぐにまたハチ合うさ、この『偉大なる航路』にいる限りな!!!」

「その通り、この世は全て、強い望みの赴くままに……」

待ち遠しそうにまた笑うティーチに頷くように、もう一人。

巨大な銃を担いだ細身の男が、何もかもを見透かすような口調で、言葉を紡いだ。

「巡り合う、歯車なのである」

??

——時は少し遡り、そして場所は大きく変わって。

アラバスタ王国の一角、誰も使う者がいない貸家の一つにて。

「今日で丸々10日……収穫無しのようなね」

以前よりも活気が徐々に強くなってきた通りを抜け、二人の海兵がその家を目指していた。

二人はそれぞれ名を、ロス・マリア少尉とブロッシュ・デニー軍曹という。アームストロングの部下である。

「あの天才二人でも苦戦することがあるとは……世の中広いですね」

「まあでも、国家錬金術師といえどまだ15歳だしね。まだまだ苦手な事も多いでしょ」
二人とも片腕を失くし、ボロボロになったエルリック兄弟の護衛のため、常にそばにいることを任務づけられた二人。

だが今のところ、兄弟が貸家にこもりつきりなため、やる事がほとんどなく暇を持て余していた。

「ですけど、ホントにあれが本物なんですかね？見ました？あの資料のタイトル……」

思わずそう呟き、デニーはその時の事を思い出す。

膨大な資料を一字一句覚えているという、驚異的な能力を持つ娘・シエスカが全ての資料を複写し終えたという事で、それを受け取りに向かったのだ……が。

「マルコー・タイム著の料理研究書『今日の献立一〇〇〇種』だものねエ……」

渡された資料の内容を確認し、マリアもデニーも呆然と立ち尽くす。

そして思わず、デニーはシエスカをぎろりと睨みつけていた。

『君！……これのどこが重要書類なんだね!!?』

『重……!?? そんな！ 私は読んだまま覚えてたまま写しただけですよ!??』
『という事は同姓同名の人が書いた全く別の物!?? お二方、これはムダ足だったので
は?』

どんな目的で資料が必要だったかなどまったく知らなかったシエスカが泣きそうになるのを見て、デニーはすぐに冷静に戻る。

これは兄弟も落ち込むのでは、と心配になったマリアは、じつと資料を見つめるエドワードに気づき、訝し気に首を傾げた。

『これ本当にマルコーさんの書いたもの一字一句まちがないんだな?』

『はいっ！ まちがいありません』

何か間違いを犯してしまったのか、と不安になるシエスカに、エドワードはやがてニツと笑みを浮かべた。

『あんたすげーよ、ありがとな』

エドワードはその後、何やらさらさらとメモを書き、銀行でそれを伝えれば報酬を渡せるとシエスカに渡して伝えると、アルフォンスとともに慌ただしく資料を持って飛び出した。

メモに書かれた額に驚愕の声を上げるシエスカとマリアを置き去りに、エドワードは満足げに資料を抱え、この貸家へ駆け込んだのだ。

『鍊金術師よ、大衆のためにあれ』……って言葉があるように、鍊金術師は術がもたらす成果を一般の人々に分け隔てなく与える事をモットーにしている』

貸家を現金速払いで借り上げたエドワードは、資料を広げながらデニーに語り始めた。

いったい何の話か、と片眉を上げる彼に、エドワードは真剣な表情で先を続けた。

『けどその一方で一般人にそのノウハウが与えられてしまう事を防がなければならないんだ』

『ああ、なるほど。技術をばらまいて悪用されては困りますね』

『そういう事』

『で、どうやってそれを防ぐかってーと……鍊金研究書の暗号化だ』

得意げに笑うエドワードの手にある、見た目は単なる料理本でしかない資料。

だがそれは特殊な方法で紐解けば、書いた本人にしかわからない高度な鍊金術理論の詰め込まれた宝の山となるのだと、少年は語ってみせた。

『書いた本人しかわからないって……そんなのどうやって解読するんですか』

『知識とひらめきと、あとはひたすら根気の作業だな』

『うわ……気が遠くなりそうですよ』

『でも料理研究書に似せてる分、まだ解読しやすいと思いますよ。錬金術つてのは台所から発生したものであって言う人もいる位ですしね』

げんなりとした表情で天を仰ぐデニーに、アルフォンスは苦笑をこぼしながら返した。

少なくとも、旅行記風に書く兄よりはわかりやすいはずだと。

『さて!!? サクサク解読して真実とやらを拜ませてもらおうか!!!』

長年求め続けた、欲しいものを手に入れるための手掛かり。

それを目前にし、意気揚々とエドワードとアルフォンスは、最初のページを開いた。

そしてそれから10日。

兄弟からは、何の反応も返ってこなかった。

「…おれには正直チンプンカンペンでしたよ」

「私もよ」

天才と謳われる二人がこうも苦戦するとは、どれだけ難解な暗号なのだろうかと、二人は眉間にしわを寄せる。

錬金術にうとい自分達では、確実に溶けはしないだろうと確信しながら、マリアと

デニーは貸家の扉を叩いた。

「お二人とも、そろそろ遅い時間ですよ」

「……………ふっ……………ぎげんな!!」

いい加減食事休憩だの睡眠だのとるべきだろうと目に入った二人の耳に、エドワードの怒号が届く。

息を呑んだ二人は、怒りの形相で資料に拳を突き立てるエドワードに気づき、戸惑いながら近づいていった。

「なっ…何事ですか?!? 兄弟喧嘩ですか? まずは落ち着いて…」

「ちがいますよ」

「では暗号が解けなくてイラついてでも…?」

「解けたんですよ」

比較的落ち着いた、しかし奇妙な雰囲気を漂わせるアルフォンスに尋ねると、普段の彼とは明らかに違う様子で答えが返ってきた。

「暗号、解いてしまったんです」

「本当ですか?!? 良かったじゃないですか!!?」

「良い事あるか畜生!!」

それがなぜこうも荒れてしまうのか、と訝しみ、それでも祝おうと笑顔を浮かべるデニーに、エドワードはまた声を荒げる。

黙り込んだ二人の前で、少年は苛立たし気に齒を食い縛り、顔を抑えた。

「『悪魔の研究』とはよく言ったもんだ、恨むぜマルコーさん…姉弟子…!!? あいつこの事知ってやがったな…!!」

「……いったい何が?」

戸惑いの声を上げるマリアに、兄弟はしばらく口を閉ざす。

重い沈黙が流れたしばらく後に、覚悟を決めた様子でエドワードが再び口を開いた。

「錬成を増幅させ、ズブの素人でも莫大な錬成を成功させられる神秘の石………当たり前だ…!!? そんなとんでもねエもんが、大した代価もなく作れるはずがなかった…!!」

ガンツ、ともう一度拳が資料の上に叩きつけられ、辺りに鈍い音が響く。

虚空を睨みつけるエドワードの目に宿っていたのは、怒りと、それに勝る恐怖の色だった。

「『賢者の石』の材料は……生きた人間だ!!!」

とある海賊達が未知の世界へ足を踏み入れようとしている丁度のその時——兄弟は、恐るべき真実を目の当たりにしていた。

そしてそれが、世界そのものを揺らがす真実の一端でしかないことを。彼らはまだ、知らない。

第14章 神の住む島へ上

第123話 “白い海”

何秒か何分か、はたまた何時間か。

妙に抵抗の軽い水の中を進み続け、何度も意識が途切れそうになりながら、じつとその瞬間が来るのを待つ。

「ぶはア!!!」

そしてその辛抱の末に、一味は新鮮な空気の中へと勢いよく飛び出した。

補修箇所をバラバラに砕かれ、破片を撒き散らしながら、メリー号と麦わらの一味は再び青空を拝む事ができた。

「ケホ!!? ……ハア、ハア…!!?」

「……………!!? まいった…何が起きたんだ。全員いるか…………?」

「…ああ、いるよ。間違いない」

全員が甲板の上を見渡し、互いの無事を確認しあう。

何しろ、海上から一万m以上も高い場所を目指して飛んできたのだ。いつの間にか誰かなくなっているもおかしくはない。

だが、辺りを見渡した瞬間、全員の思考が停止した。

「!??!? ……何だ?!?!? ここは!!! 真つつつ白!!!」

視界に入ったのは、一面真っ白の世界だった。

右を見ても左を見ても、広がっているのは白だけが彩る世界。見上げるばかりで間近で見た事などない、空に浮かぶ白色の上に一味はいた。

「雲…?!?!?」

「雲の上…?!?!? 何で乗ってんの…?!?!?」

「そりゃ乗るだろ、雲だもんよ」

「「イヤ乗れねエよっ!!!」」

何を言っているのか、と言わんばかりに訝しげな顔をするルフイに、全員からツッコミが飛ぶ。

常識がズレている相変わらずの船長に向けて、エレノアが満面の笑みを浮かべて告げた。

「……喜べ、みんな。『空の海』へようこそ」

「まだ信じられない…?!?!?」

髪についた、海水とはまた異なる雫を払いながら、ナミが思わず声をあげる。

目の前に広がるこの景色は、全て夢か幻なのではないかと思えてしまうほど、あまり

に幻想的で浮世離れしすぎていた。

「でも見て。『記録指針』はまだ、この上を指してる!!?」

「——どうやらここは『積帝雲』の中層みたいね……」

「まだ上へ行くのか……? どうやってだ……」

「それはわからないけど」

「方法はあるはずだ。海はたしかにあつたんだからな」

衝撃からまだ立ち直れていないのか、辺りを見渡すだけで動けずにいる仲間達をエレノアが鼓舞する。

満足げに笑う彼女を見つめていたナミは、ふと思ひ出したように彼女の肩を叩いた。

「……ところでエレノア?」

「ん? 何?」

「さっきのことなんだけど……」

ナミの脳裏に浮かんだのは、突き上げる海流に乗る直前の出来事。

いざ無謀な挑戦を行おうとするルフイたちを追って現れた、丸太船に乗った男達の事が、今になって気になったのだ。

「あの黒いひげの奴って、あんたの知り合いか何か——」

黒い髭の大男の口ぶりから察するに、何か深い縁があるらしいエレノアに尋ねてみる

ナミ。

だがその瞬間、ナミは目の前から放たれた凄まじい威圧感に、凍り付いた。

「……黒ひげが、なんだって？」

辺りの空気が氷点下まで下がったかのような、そんな寒気を覚えたナミは、思わず呼吸も忘れて固まる。

一切の表情を消し去り、瞳孔を全開にしたエレノアの豹変に、ナミは息を呑んで立ち尽くした。

「なっ……!!? なんでもありません!!」

「……そう、ならいいよ」

慌ててナミが首を振ると、エレノアはブイとそっぽを向き、威圧感も消える。

だが、不機嫌そうな雰囲気はそのまま、ナミは冷や汗をかいたままごくりとつばを呑みこんだ。

（……一瞬、ものすごい殺気を感じた。エレノアに殺されるかと思った……!! あいつ……あんたに何したのよ!!）

得体のしれない、奇妙な空気を発していた黒い髭の男ティーチ。

何があつたのか非常に気になったが、思わぬ逆鱗に触れてしまったナミは、それ以上の質問をする気になれなくなった。

というか、すぐにそれどころではなくなったからだ。

「第1のコース!!? キャプテン・ウソツプ泳ぎま——す!!」

「おう!!? やれやれ!!?」

「オイオイ、無茶すんな。まだ得体の知れねエ海だ!!?」

「海は海さ、はっはっはっはっはっ!!?」

聞こえてくる声に振り向くと、上半身裸になったウソツプが欄干の上に立ち、ルフィ達に向けてポーズを決めている。

未知の海を泳いでみたくなったのだろう、勇ましく宣言した彼は、そのまま勢いよく白い海に飛びこんでいった。

「……………」

「顔……………出さねエぞ……………」

ウソツプが飛びこんで数分、普通なら息が続かず戻ってくる頃合になっても、一向にウソツプが顔を出さない。

途端に全員の顔色が悪くなり、だんだん不安な気持ちになってくる。そんな中、ぼそりとロビンが聞き捨てならない呟きをこぼした。

「思うんだけど……………ここには『海底』なんてあるのかしら」

ロビンのもっともな指摘に、今度こそ全員がハッと顔色を変える。

考えてみれば、ここは空に浮かぶ「雲」。白い海のようにとはいえ、陸地があるはずがなかったのだ。

「まさか……!!!」

「あの野郎雲から落ちたのか!!!」

「ウソツプ……!!!」

「だから言つたんだあのバカ!!!」

安易な挑戦で、命の危機に陥つたウソツプを案じ、全員があつという間に混乱に陥る。右往左往し始める彼らを見渡し、エレノアが大きなため息とともに声を発した。

「落ち着け、野郎共」

「でもウソツプがア……!!!」

「ほれ」

涙目で振り向くルフィに、エレノアは何かを掲げてみせる。

彼女の手に握られていたのは、何の変哲もないただのロープ。しかしその端はしゆるしゆると動いていて、メリー号の外に続いていたのだ。

「ロープ……!!! まさか……いつの間に!!!」

「備えあれば憂いなし……アホは繋いでおくのが定石だ……よオ!!!」

まるで躰のなつていない犬に対して言うように、呆れた様子で肩を竦めるエレノア。

だが次の瞬間、ピンツと張ったロープに引つ張られ、非常に軽い彼女の身体は宙に浮きかけていた。

「ふぎやああああ!!!」

「何やってんのよあんたア!!!」

「がんばれエレノア~~~~!!!」

あわやウソツプとともに落下しかける寸前、エレノアはメリー号の欄干をガシツと掴み、窮地に耐える。

慌てて仲間達も彼女の体を掴み、そしてロープを掴んで必死に引き上げようとする。

「ふんんぎぎぎぎぎぎ」

「ぐぬうつ……!!!」

何故だか、いつも以上に力が必要になったが、決して諦めることなく一味はロープを引き続ける。

そして、全員で息を合わせ、渾身の力で引つ張り上げ、空中にウソツプを釣りあげてみせた。

「やったア!!? 上がった……!!?」

仲間が窮地を脱したことで、歓喜の声を上げかけたルフィ達だったが。

釣り上げられたウソツプを追うように、巨大なタコや妙に薄っぺらい巨大海蛇が現

れ、一味に向けて牙を剥いてきた。

「何かついてきたぞオ!!!」

「いやああああ!!!」

「ツアアアアアアアアア!!!」

「——そうビビる程のモンでもねエだろ」

絶叫するナミやチョッパーを背にし、ゾロが気だるげに刀に手をかける。

空高く跳躍し、巨大タコの目の前に移った彼は、手早く仕留めようと鋭く刃を抜いて

一閃する。

その直後、斬撃を受けたタコは、まるで風船のように破裂したのだった。

白い海に浮かぶ薄っぺらい海蛇と、破裂したタコの残骸を見下ろし、一味は呆然と立ち尽くす。

勝利を喜ぶには、あまりにも衝撃が大きすぎたのだ。

「…さて、妙な生物だぜ? こりゃ…魚類かどうかも疑わしい…」

「風船みてエだな、あのタコは…」

「一応生物だろ、動いてた…」

自分達の知る生物とは明らかに異なる在り方に、ゾロやサンジが思わず唖る。

“偉大なる航路”で散々非常識な存在とやり合ってきた彼らだが、それを嘲笑うかのようには現れる新たな事柄に、最早呆れる他になかった。

「雲の中に生物がいるなんて……………」

「やはりここは… “雲” というより “海” と考えた方がよさそうね」

そもそも雲に乗れる時点でいろいろとおかしいが、実際に乗ってる以上、自分達の常識は通用しない。

あらためて、未知の世界に対する警戒を持ち直そうという時だった。

「ギヤアアアアアアアア!!」

「うるつつせエな、今度は何だウソツプ!!!」

「ズボンの中に……………!!? なんかいいた……………」

一際大きな悲鳴を上げたウソツプが、ズボンのポケットから取り出した何かを見せ、ばたりと倒れ込む。

びちびちと跳ねるそれを持ち上げ、ロビンが興味深そうに凝視し始めた。

「これが………… “空魚” じゃない?」

ウソツプが持ち帰ってきたその魚は、まさしく未知の生物だった。

ヒラメの様に平たく、それでいてヒレやウロコは羽毛のよう。普通の魚よりも浮きやすそう、見るも不思議な外見の生物だ。

そこで彼女が考察したのは、この『海』が、地上の海よりも遥かに『浮力』が小さいのでは、ということだった。

「——それで風船になったり平たくなったりか？」

「より軽くなる為ね……」

「そういえばウソツプくんを引き上げる時、あれでもだいたい抵抗が弱かったような……浮力が地上の海より弱いのか……」

「そうか？ おれはむしろ重かったぞ？」

「鱗が羽毛みたいだし……『肉食』っぽい口も変……!!?」

地上ではまず見えない魚の姿に、ナミも興味深そうに凝視する。

ほぼ同じ見た目の海蛇や、浮いているタコの残骸を見やっていると、何処からともなく香ばしい匂いが漂ってきた。

「ソテーにしてみた」

「こりやうめエ!!!」

「まだ検証中ですよ!!!?」

許可も得ないまま、未知の食材を料理に変えてしまったサンジ。そしてそれを早速口にするルフィに、ナミは目を吊り上げて怒鳴り声をあげる。

何もかもが新鮮で、謎ばかりの海に興奮を止められない一味だったが、そんな中で一

人、混乱した様子で声をあげる者がいた。

「え……わ……!!？」

「おい、どうしたチョッパー」

声に気付いて振り向けば、何か真新しいものを発見できないか、と双眼鏡で当たりを見渡していたチョッパーが、ある一点を凝視して後退っていた。

「チョッパー、船か？ 船がいるのか!!？」

「いや……うん、いたんだけど………船はもういなくて!!？」

「何だよ」

「そこから牛が四角く雲を走って、こっちに來るから大変だくくくく!!！」

「わかんねエ、落ちつけ!!！」

「何だっつーんだ」

自分が何を見たのか、何が起こったのか理解が追いついていないようで、支離滅裂な事ばかりを口にするチョッパーに、ルフィたちは首を傾げる。

そんな彼らに向けて、ざっと身構えたエレノアが鋭く声を発した。

「敵襲つてことだよ!!！」

唐突な報告に、慌ててルフィたちが、チョッパーが凝視していた方角に振り向く。

そして、近付いてくるそれを目の当たりにして、またしても目を見開いた。

「!!? 人だ、誰か来る!!」

「雲の上を走ってるぞ!!」

白い海の上を向かってきたのは、鹿喰牛の仮面をつけた半裸の何者か。

槍と盾で武装した、明らかに敵意を有したその男に気付き、一味全員が警戒をあらわにしていった。

「おい、止まれ何の用だ!!」

「排除する…」

「聞く耳持たずか…!!?」

身構える一味に向けて、物騒な眩きをこぼした謎の男は、猛スピードのまま高々と跳躍する。

それを迎え撃とうと、ルフイとゾロとサンジとエレノアが前に出る、が。

「ヴ!!」「ぐはっ!!」「ブへっ!!」

「フンツ!!」

あつという間に、エレノアを除く全員が手痛い一撃を貰い、呆気なく甲板に倒れ込む。唯一エレノアにのみ弾かれ、再び宙を舞った謎の男は、そのままメリー号を跳び越えて白い海に降り立ち、また走り出した。

「え!!? ちよつとどうしたの!!? 3人共っ!!」

「ギャー、ギャー!!!」

一味の実力者三人があつさりとやられる光景に、ナミやウソツプは慄き、チョツパーは泣き叫ぶ。

先手を打たれ、混乱に陥る一味に、再び謎の男が襲い掛かろうとしたその時だった。

「そこまでだア!!!」

バサバサツ、と大きな羽搏きの音が響き、大きな影が急速に接近する。

影は大きな槍を突き出し、謎の男と激突すると、彼を白い海に叩き落としてみせる。

ボウン、と海に沈んだ謎の男を見下ろし、影はメリー号の上に降り立った。

「何!!? 今度はだれ!!?」

「ウゥム、我輩『空の騎士』!!!」

「ピエ——!!?」

ナミの困惑の声に、影は——銀色の鎧をまとった老人は、傍らに立つ巨大な、斑点模様が目立つ鳥とともに応える。

勇ましい名乗りを上げた彼は、謎の男が沈んだ方を見やり、息をついた。

「去ったか……………」

「何なのよ一体…………!!? あいつは何者だったの!!?」

先ほどから、事態が急に動き過ぎていて、考える間もないナミが声を荒げる。

荒ぶる彼女を放置し、目をキラキラさせたチョツパーと、真剣な面持ちになったエレノアが鎧の老人に頭を下げた。

「助けてくれてありがとう」

「見ず知らずの我々のために、かたじけない」

「ウム、よい。やむを得ん。これはサービスだ」

老人は気さくに手を振り、船医と天使の感謝の言葉を受け取る。

ナミは妙に硬い口調のエレノアに訝しげな視線を送つてから、倒れ込んだままのルフイたち三人をキツと睨みつけた。

「それに何よあんた達、だらしない!!! 3人がかりでやられちゃうなんて!!?」

「いやまったく……不甲斐ねエ」

「なんか体が……うまく動かねエ」

しかし、一方的にやられた三人も、自身に起きている異変に眉を寄せている。

首を傾げる彼らを見やり、ロビンが納得したように呟いた。

「……きつと、空気が薄いせいね……」

「……………」

「ああ……そう言われてみれば……………」

彼女に指摘され、三人は思い出したというように辺りを見渡す。見えるわけではない

が、考えてみれば体が重いのはそのせいだろうだ。

「おぬしら青海人か？」

「？ 何それ」

急に聞きなれない単語で尋ねてくる老人に、ナミが訝しげに見返す。

助けてくれたことから、悪い人間ではないとは思うのだが、どうにも初対面ということもあつて、うまく警戒心が拭えないようだった。

「…そうだ、あなたは誰？」

「我輩『空の騎士』である。青海人とは雲下に住む者の総称だ——つまり、青い海から登ってきたのか」

「……………うん、そうだ」

「ならば仕方あるまい……ここは『青海』より7000m上空の『白海』。さらにこの上層の『白々海』に至っては一万mに及んでいる。通常の青海人では、体が持つまい……」

「!!? そうか……エレノアがさつき普通に戦えていたのは、普段から空を飛べて空気が薄いのに慣れてるから……………!!!」

翼をもつ種族である彼女を見やり、ナミが思わず納得の声をあげる。

上空と地上、気圧の変化を人より多く経験している彼女なら、この環境にすぐに適応していても確かにおかしくはないのかもしれない。

が、そんな彼女達のすぐそばで、ルフィたちが息を整えているのが見えた。

「おっし!!? だんだん慣れてきた」

「そうだな、さつきより大分楽になった」

「いやいやいやいや」

「…あれは例外の青海人だと思ってください」

常人離れた適応能力を見せる彼らに、老人は思わず待ったをかけるが、呆れた顔のエレノアに制されていた。

それをいつものことだと流したウソツプは、この機会を逃すべきではないと、老人に對し質問を投げかけようとする。

「——それよりさつきの奴、海の上を走つてたのは何でなんだ?」

「まあまあ待て待て…質問は山程あるだろうが——まずビジネスの話をしようじゃないか。我輩、フリーの傭兵である。ここは危険の多い海だ。空の戦いを知らぬ者なら、さつきの様なゲリラに襲われ、空魚のエサになるのがオチだ」

だが老人はそれを遮り、ルフィたちに真剣な表情で向き直る。

疑問の面持ちで見つめてくる彼らに向けて、老人は胸を張りながら一つの提案を持ち掛けた。

「1ホイッスル500万^{エクストル} Eで助けてやろう」

老人がそう述べて、ルファイたちの間に沈黙が降りる。

全員が目丸くして、謎の単語を連発した老人を凝視する中、最初にルファイが答えを口にした。

「何言つてんだおっさん」

第124話 天国への門

「ぬ!!? バカな…格安であろうが!!? これ以上はIEもまからんぞ!!? 我輩とて生活があるのだから!!?」

ルフィたちの訝し気な反応に、老人は慌てたように返す。

断れるとは思わなかった様子で食らいついてくるが、状況を理解できていない彼らにしてみれば、老人のの反応の方が予想外だった。

「だからそのエクストルって何なんだよ。ホイッスルがどうつてのも」

「ああ…えつと、空の騎士さん。私達正規のルートでここに来てないから」

「は!!?」

首をかしげるルフィに変わり、申し訳なきようにエレノアが割って入る。

すると、聞き捨てならない言葉を聞いたナミが、ハツと目を見開きながら振り向いた。

「ちよつと待つて!!? 他にもこの『空の海』へ来る方法があつたの!!? あんたそんな事一言も…!!?」

「うん、ごめん…なんとなくあの空気ですういう事は言えなくつてさ」

若干殺気を込めながら睨みつけられ、エレノアは思わず目を逸らす。

一方で老人はルフイたちの反応で、如何にして彼らがこの海に辿り着いたかを理解したらしい。ひどく驚いた様子で青年達を凝視し始めた。

「……何と!!? あのバケモノ海流に乗ってここへ!!? ……まだそんな度胸の持主がおったか…」

「?」

「……普通のルートじゃないんだ……やっぱり…」

この海の住人でさえ、この反応。

危うく死ぬところの、無謀な挑戦を乗り越えたばかりのナミは、愕然と甲板の上で膝をつき項垂れる。

あんな恐ろしい思いをしなくてもよかったのではないかと。

「着いたからいいじゃねエか」

「死ぬ思いだったじゃないのよ!!! そもそもあんたが教えてくれればこんな大変な思いは……!!!」

「すまんすまん。そう楽ばかりしては今後の度胸がつかんと思つてな」

「いらぬわよそんな度胸!!!」

「冗談だ……ちゃんと理由がある」

悪戯つぼく苦笑しながら、エレノアは凄まじい剣幕で向かってくるナミを制する。

ただ一人、詳しい情報を持つているらしい少女が攻められている光景に何か思ったのか、老人がルフィに視線を向けた。

「1人でも船員を欠いたか？」

「いや、全員で来た」

「他のルートでは、そうはいかん：1000人で空を目指し何人かが到達する、誰かが生き残る、そういう賭けだ。——だが、突き上げる海流は全員死ぬか全員到達するか、それだけだ」

老人にそう言われ、ナミはハッと我に返る。

他にcoming方法があるというだけで、必ずしもそれが安全とは限らないのだと、彼女は気づかされる。同時に、何故この天使がその方法を提示しなかったのかも。

「0か100の賭けができる者達はそうはおらん。近年では特にな。度胸と実力を備えるなかなかの航海者達と見受けた」

老人はルフィ達に、本気で感心しているらしい一瞥をくれ、懐を探り出す。

そして取り出した小さなそれ——紐のついたホイッスルを青年たちの目の前に放り出した。

「ホイッスルとは、一度、この笛を吹き鳴らす事。さすれば我輩、天よりおぬしらを助けに参上する!!!」

返事も聞かないまま、老人は欄干の上に立ち、巨大な鳥と並び立つ。

自身の姿を、青年たちの目に焼き付けさせようとするように。

「本来はそれで空の通貨500万E頂戴するが、1ホイッスルおぬしらにプレゼントしよう!!? その笛でいつでも我輩を呼ぶがよい!!」

「待つて!!? 名前もまだ…」

「我が名は『空の騎士』ガン・フォール!!」

「ピエ~~~~~!!」

「そして相棒ピエール!!」

名乗った一人と一羽は、軽やかに空中に飛び出す。

そして老人ガン・フォールが相棒の背に乗った瞬間、彼らの影にある変化が起き始めた。

「言い忘れたが、我が相棒ピエール、鳥にして『ウマウマの実』の能力者!!? つまり翼を持った馬になる!!」——即ち……

騎士を背に乗せた鳥が、見る見るうちに自身の姿を変貌させていく。

立派な翼はそのままに、両足は蹄を持って四本に増え、尾羽は豊かな尻尾に、顔が長く伸びて鬣が生える。

その姿はまさに、伝説上にて天空を美しく飛翔する幻獣そのもの。

「うそ……!!? 素敵……!!! ペガサス!!?」

「そう!!! ペガサス!!!」

「ピエ~~~~~!!!」

目を輝かせるナミの前で、騎士は変身を遂げた相棒の背に跨り、その姿を誇る。

：しかし実際のところ、格好がいいのはシルエットだけで、斑点模様も顔つきもそのまんまな、何とも言えない見た目になっていたのだが。

(いやア、微妙……)

「勇者達に幸運あれ!!!」

「オカシな生き物になったぞ、アレ」

全員が思わず黙り込み、ばっさばっさと飛び去っていく騎士と天馬(自称)の後姿を見送る。

突然の奇妙な来訪者が姿を消してしばらくし、ようやく我に返った一味は、互いに顔を見合わせた。

「……結局、何も教えてくれなかったわ」

「……そうだ……ホント……何も」

「これでフリ出しに戻ったぞ」

次から次へと妙な事が起こり、正直ついていけないルフィたち。

なのに知りたい事を何も理解できていないという状態に、誰もが肩を竦めるばかりだった。

「——で、どうやって上へ行くんだ？」

「よし、じゃあおっさん呼んで聞いてみよう」

どうしたものか、とこぼれた呟きを聞いて、ずつとウズウズしていたルフィが、笛を手にする。

そして、思いつきり吹き鳴らそうとした寸前で、ウソップとナミが彼にしがみついた。「ちよちよちよ!!? ちよつと待つてルフィ!!? これは緊急事態に助けしてくれるってヤツでしょう!!?」

「また、あの仮面つけた妙な奴が現れた時どうすんだよ!!!」

「エレノア、また『地獄耳』でなんか探れねエか?」

「少し待て:いや、その必要もなさそうだ」

ばたばた騒がしい三人を放置し、ゾロが何か手掛かりを得られないかと、索敵や探知に信頼の置けるエレノアに問いかける。すると彼女は、くいつと船の前方から見える景色を、顎で示してみせる。

つられて視線を向ければ、何か白く長い者が、雲の向こうに聳え立っているのが見えた。

「なア、あそこ見てくれ！」

「? 何かしら…滝の様にも見えるけど」

「変な雲だろ？」

「よし、決まりだ。あそこへ行ってみよう」

とりあえずの目印を見つけた、と一味は進路を変更する。

辺り一面真っ白な平面のため、大した障害もなく難なく近くまで進む事ができた一味だった、が。

「…その前にでつかい雲……」

見つけた滝のような何かの前に、大きな雲が立ちはだかる。

そのまま突っ切つてしまいたいところだが、ここは何が起こるか分からない未知の世界。慎重にならざるを得なかった。

「どうする?」

「『空の海』の上に浮いてんだから、同じ『空の海』じゃねエだろ」

「……じゃ、どんな雲だ……?」

「ただの雲ならそのまま進むんだけど」

「触つたらわかるだろ」

ただの障害物なら、ブツ壊してしまえばいいと、ルフィが思いつき腕を伸ばして雲

を殴りつける。

するとルフィの拳は、ばいんと大きく跳ね返った。

「わっ!!? はじいた」

思わぬ現象に、興味を抱いたルフィは一層目を輝かせる。

好奇心のままに飛び掛かってみると、全身を包むやわらかな感触に、さらに歓喜の表情へ変わった。

「うおお!!!」

「見ろ!!? 乗れた!!? 沈まねえぞふかふかする!!! 綿みたいだ!!!」

「スゲ~~~~~~~~!!!」

「……………どういう現象!!?」

「まるで夢の光景だよ……………」

「不思議」

「うお!!? おれも行く!!?」

ぼよんぼよんと、触れて跳ねる雲を堪能するルフィに誘われ、ウソツプとチョッパーも一緒になって飛び込んでいく。

地上の常識ではまず考えられない光景に、またも度肝を抜かれるナミの隣で、エレノアも感嘆の声をあげていた。

「……でもそうなるよこの盛り上がった雲のある場所は船じゃ通れないわけか……」

「ねエ!!? 上から船の通れるルートを探せない!!?」

「おう!!? よし!!?」

突っ切れないのなら、回り込める道を探すしかない、と未だに遊んでいるルフイたちにナミが呼びかける。

すると彼に、雲の向こう側に回ったウソツプが興奮気味に声をかけた。

「オイ!!? ルファイ、あっち何かあるぜ」

「何だ何だ」

「コラー!!!」

仲間と船をほったらかしにして先へ行こうとする船長に、ナミの怒りの声が飛ぶ。

さっそく暴走しそうになる彼らを何とか落ち着かせるのに、さらに時間をとられることとなった。

「門?」

「ああ! あの滝みたいなのヤツの下にでつけエ門があった。ここ抜けたらわかるさ」

ようやく雲の堪能から戻ってきた三人から情報を得て、メリー号は進行を再開する。

とはいえ、遊ぶことに夢中だった三人の案内はポンコツで、何度も道を間違えそうに

なるも、何とか雲でできた道を進みきることに成功する、そして。

「…あ!!?」

「なっ!!?」

「確かに…わかるね、一目で」

一味はついに、〃空島〃への『入り口』を目の当たりにする。

高くそびえたつ雲の柱の根本、そこには大きな目立つアーチとともに、『HEAVEN
, S GATE』という文字が躍っていたのだ。

「それに見て。あの滝みたいな雲はやっぱり滝なのよ…!!? さっきの性質の違う雲の上を流れてるんだ」

圧倒される一味の中で、ナミは聳え立つ雲の正体に気付く。

地上より一万mも上に存在する海、そしてそのさらに上から流れているであろう滝の上を見上げ、一味は自分達の目指す目標の高さを再確認した。

「〃天国の門〃だと…」

「縁起でもねエ、死に行くみてエじゃねエか…」

「…いいや、案外おれ達アもう全員死んでんじやねエのか?」

「そうか、その方がこんなおかしな世界にも納得がいくな」

「死んだのかおれ達!!?」

「天国から楽しみだ!!! こっから行けるんだ、やっと!!?」

次々に襲い掛かる摩訶不思議な光景を前に、一味の興奮と期待はさらに膨れ上がっていく。

全員が胸を躍らせる中、エレノアの耳がピクリと震え、門の近くに現れた何者かの気配を捉えた。

「見ろ、あそこ。誰か出てきたぞ?」

エレノアの忠告で、ルフイたちの視線もそこへ集中する。

空の海に到達して、遭遇する三人目の人間は一体どんな存在か。そんな期待の中で、彼らの前に現れたのは。

「観光かい? それとも…戦争かい?」

丸い顔に多くのしわを刻んだ、背中から小さな羽を生やした、カメラを持った一人の老婆だった。

予想とは大きく異なる、しかし明らかに地上の人間とは異なる姿をした人間の登場に唾然となる一味をよそに、老婆はカメラを光らせながら告げる。

「どっちでも構わない。上層に行くんなら、入国料1人10億Eおいていきなさい。それが『法律』」

「天使だ!!! 天使ってあんなんなのか……!!? 梅干しみてエだ」

「エレノアとは大違いだな」

「……………」

老婆の問いに答えることなく、非常に失礼な感想を好き勝手述べるルフィとウソツプ。

その横で、大きく目を見開いて老婆に目を奪われていたエレノアが、不意に感じた痛みで顔を歪めた。

「…………？　また……この頭痛……」

急な鈍痛に、エレノアは訝し気に頭を押さえる。

些細な反応で、一味は誰も彼女に注意を払うことなく、老婆の口にした単語の意味を測りかね、互いに不安げに囁き合った。

「10億EってBだといくらなんだ？」

「…………あの、お金……もし……もしなかったら……………？」

「通っていいよ」

「いいのかよっ!!!」

「——それに、通らなくても……………いいよ」

恐る恐る訪ねたナミに、老婆は意味深に笑みを浮かべて答える。

それに首を傾げる一味に構うことなく、老婆は続けて口を開いた。

「あたしは門番でもなければ衛兵でもない。お前達の意志を聞くだけ」

「じゃあ行くぞ、おれ達は空島に!!? 金はねエけど通るぞばあさん」

「そうかい、8人でいいんだね?」

「...? うん...!!? でもよ、どうやって登ったら」

門はあるが、その先に見えるのは滝だけ。一体どのようにして進めばいいのか、と尋ねようとした時だった。

突如、メリー号が不自然に揺れ、船体が大きく持ち上げられた。

「え!!?」

「ギヤ——!!? ギヤ——!!!」

「〃白海〃名物『特急エビ』……………」

驚愕で目を見開くルフィたちをよそに、メリー号を持ち上げたそれ、巨大なエビが動き出す。

船体を両腕のはさみで挟み、巨大エビはすさまじい速度で運び出す。それが向かう先は、門の向こうに聳え立つ巨大な滝の方だった。

「うわあつ!!! 動き出した!!!」

「滝を昇る気か!!!」

座波座場と垂直な雲を昇り、巨大エビがさらに上へと進んでいく。

滝を昇った先はまだ続きがあり、きしめんのようになる長い雲の道が、雲の中へと伸びているのが見えた。

「どうなってるんだこりや……!!! 雲が帯状になつて、まるで川みてエだ……!!?」

「自然にできたものとは思えないわ」

「自然じゃねエだろこんなもん!!?」

まるで、神が作った遊興施設を逆に上つているかのような心地で、一味は雲の中へとつっこんでいく。

そんなルフィたちの目の前に、大きく目立つように作られたある文字が目に入った。

「何か書いてあるぞ!!!」

「出口だ!!!」

「神の国、スカイピア?!」

「出口ではない……入り口なんだ!!!」

巨大エビに運ばれるまま、圧倒されてばかりの麦わらの一味。

永遠のように長く感じられる、しかし一瞬のように短い不思議な旅の後で、彼らはいに、その領域へと足を踏み入れた。

純白の海のご真ん中に浮かぶ、同じく真っ白な雲の陸地へと。

「島だ……!!! // 空島 // だ……!!!」

—— 『天国の門』 監視官アマゾンより、全能なる
神の国『スカイピア』への不法入国者8名、
// 神^{ゴッド} // 及び神官各位。
// 天の裁き // にかけられたし。

第125話 “スカイピア”

「うほー!!! この島、地面がフカフカ雲だ!!!」

「ギャ〜!!! 空島〜!!!」

目指し続けた島にたどり着いたルフィ達は、一目散に陸地に飛び込んでいく。

そこで感じた初めての感触は、本当に自然のものか疑うほどの、凄まじい柔らかさ。全てがクッションでできているのかと思うほどの、弾力があつた。

「おい、錨はどうすんだ!? 海底がねエんだろ、ここは!!!」

「んなモンいいだろ、どうでも。早く来てみる、フカフカだぞこの浜辺は!!!」

「どうでもつてお前……」

錨を下げようとするゾロが問うが、未知の体験に夢中なルフィはただ笑うだけ。

船乗りとして、何より船長としてそれでいいのか、というような返答に、ともにしやぐウソップとチョッパー以外が呆れ返っていた。

「……………しかしたまげたな、この風景にや…まるで夢だ……」

「私にとつては夢も同じさ。ずっと来たいと思つてたんだから……………」

ルフィ達ほどではないかもしれないが、ゾロも目の前の景色に感嘆の声を上げる。隣

に立つエレノアに至っては、いまにも泣き出しそうなほどに感極まった様子だった。

「アイツらのハシヤギ様ときたら…ハハ、しようがねエなひやつほくう!!!」

「おめエもだよ」

余裕ぶるが、全く興奮を隠しきれていない様子のサンジが、浜辺に思いつき飛び込む。ゾロの呆れの声も、今の彼には通用しなかった。

その時甲板の方から、騒がしい悲鳴と羽ばたきの音が聞こえてきた。

「ジョジョジョジョ」

「痛い痛い、ごめんごめんっ!!?」

見るとそこでは、荒れるサウスバードと一方的に突かれるナミの姿がある。

地震の怒りをぶつけまくったサウスバードは、そのまま何処かへ飛び去っていった。まいった。

「あ、アイツか」

「逃がすの忘れてた……………」

「人も住んでるみてエだ。別に、生きていけるだろ」

「錨は?」

「刺した……………例の…フカフカの雲がこの島の基盤らしい」

一仕事終え、ゾロは改めて雲に浮かぶ島を見る。

驚きが強すぎて、もはやうまく言葉が出てこない。しばらく無言で佇んでいると、同じく島を凝視していたロビンが口を開いた。

「ねえ… スカイピア」 って…」

「ええ… ルフィの見つけた地図にあつた名前よ！ 空から降ってきたあのガレオン船は200年も前に本当に、ここに來てたのね」

何があつたのかは、誰も情報を残せなかつたためにわからず終い。しかし、たつた一っだけ残した真実があつた。

彼らは確かにこの海にたどり着き、長い長い旅をしてきたのだと。

「あの時は正直、こんな空の世界想像もつかなかつたけど」

笑みを浮かべ、ナミは思い切つて甲板から海に降り立つ。

ぱふつ、と明らかに軽い水飛沫を足に感じ、その心地よさにさらに満面の笑みを浮かべた。

「ほら!!? …ハハ、体感しちやつたもの!!? 疑い様がないわ!!?」

「ズルいぞナミ… 私も行く!!?」

モックタウンで嘲笑されて以来の、地上でのしかめっ面が嘘のようにはしゃぐ彼女の後を追ひ、エレノアも両手足を広げて海に飛び込む。

激しい水柱が上がる光景を見やり、ロビンはふと背後に佇むゾロに振り向いた。

「……………あなたは？」

「……………？」

「航海や上陸が……………冒険だなんて考えた事なかった」

くすくすと笑い、大騒ぎする一味を見つめる、謎多き美女。

船長が許可したとはいえ、微塵も心を許す気になれないゾロは、険しい表情でロビンを睨み続けていた。

「は……………っ!!! ここは何なんだ!!! 冒険のにおいがプンプンすんぞ!!!」

「う……………ん」

「ここなら海軍も追って来ないし羽を伸ばせる!!! ビーチなんて久しぶりっ」

「港ばっかとまつてたからなア!!!？」

「そもそもこうして穩便に到着することも珍しかったしね……………」

「あくくこちら船長、楽しすぎて何から始めたらいいのかわかりません、ドーゾ」

「こちらウソツプ。ひとまずここでのんびりしねエか!?!？」

「のんびりか……………いいな!!? 却下!!?」

「却下はダメな方だよルフィ」

思い思いに過ごし、滅多にない穩やかな堪能するルフィ達。追ってくる敵はなく、戦う相手もない、本当に珍しい静かな時間である。

「……………やつと来れたんだな、私は……………『空島』に」

「一番はしゃいでたものね、あんた…天族の憧れか何かだったの？」

「それは…!!？」

どこか遠くを見つめ、感慨深げに呟くエレノアに、そういえば今回はずいぶん熱心に取り組んでいたなど、ナミが苦笑まじりに尋ねる。

その問いに、エレノアは待つてましたとばかりに勢いよく振り向き。

「……………なんでだったっけなア？」

と、心底不思議そうな表情で首を傾げた。

「オイ!!!」

「いや、ほんとに思い出せないんだよ。何かの昔話で興味抱いたんだったかな…?」

先ほどとは打って変わって、エレノアは眉間にしわを寄せて虚空を見上げる。何かで自分の中で引つかかっているような、そんな気持ちの悪さを覚えながら、悩み込んでしまふ。

そんな時だった。あたりを散策し、珍しい木の実を見つけて食らいつこうとしたりしていたルフィ達が、何かを見つけた。

「おい、あそこに誰かいるぞ!!!」

「また…!!? ゲリラか?!?」

「笛!!? 笛は!!?」

急に現れる人影に嫌な思い出しかない一味は、遠く岩場の上に立っている人影に向けて即座に身構える。

だが、よく目を凝らしてみると、そのシルエットにハッと目を見開いた。

「待て違う!!? ……天使だ!!!」

「天使!!?」

「ん? 呼んだ?」

視界に入ったのは、金色の変わった髪型の、背中に小さな翼を生やした少女。

門にいた老婆とは比べ物にならないほど美しい彼女は、豎琴を鳴らしながら、驚愕の表情で固まっているルフイ達にニツコリと笑いかけた。

「へそ!!?」

「あ!!?」

唐突な謎の言葉に、ルフオは思わず目を丸くする。

呆然と立ち尽くすルフイをよそに、少女は足元にすり寄ってきた白い小狐を抱き上げ、一味の方へと歩み寄ってきた。

「青海からいらしたんですか?」

「……………下から飛んで来たんだ。お前、ここに住んでんのか?」

「はい、住人です」

少女はルフィが四苦八苦していた硬い木の実を受け取ると、手慣れた様子で底をくり抜き、飲めるようにして渡してくれる。

それだけで、彼女が心優しく気遣いのできる、まごうことなき善人だと言うことが理解できた。

「私はコニス。何かお困りでしたら力にならせてください」

「ああ、それが君の視線で心に火傷を…」

「邪魔」

早速ナンパをしようとしたサンジを黙らせ、ナミが前に出る。

せつかく出会った、いきなり襲いかかってこない、きちんと話を聞いてくれそうな貴重な存在。逃すわけにはいかなかった。

「知りたい事がたくさんあるのよ、とにかく私達にとってここは不思議な事だらけで……」

「はい、何でも聞いて下さい」

まずは情報収集を、とナミが自らも歩み寄りかけた時だった。

白い海の間こう側から、ザバザバと水飛沫の音が近づいてくるのが見えた。

「おい、海から何か来るぞ!!!」

「ナメクジだ!!!」

「あ、父です」

少女がなんということはないように告げ、近づいてくる水飛沫に手をあげる。

よく見れば、こちらに向かつてきているのは、板の上にハンドルを取り付けたような奇妙な乗り物の上に立つ、少女と似たような格好の男性だ。

「コニスさん、へそ!!!」

「ええ。へそ、父上!!?」

「イヤ何言つてんだおめエら!!?」

「あれは何?!? あの乗り物!!?」

「よく見りゃカツコイイなアレ!!!」

「あ……『ウエイバー』の事ですか?」

やはり奇天烈に聞こえる挨拶に面食らうルフィだが、他の一味はそれぞれどこではない。

初めて見る、帆も櫂もないのに動いている乗り物に、全員の視線が釘付けになっていた。

「はいすいません、止まりますよ」

男性はくいつとハンドルを操作し、浜辺の上に乗り上げようとする。

が、なんらかの操作を誤ったのか、勢いが死なないまま思いつきり砂の上に転び、そのまま近くの木々に激突していった。

「みなさん、おケガはないですか」

「おめエがどうだよ!!!」

血だらけになった男性を前に、サンジが目を剥いて吠える。空の島での第一住民との遭遇がこれとは、なんとも締まらなくて仕方がなかった。

「ねエルフィ。あんたああゆうの海底から持つて来なかつた!?」

「ああ、持つてきたな」

「あれが『ウェイバー』だったんだ……!!? ノーランドの日誌で読んだ風がなくても走る船……!!」

一方でナミは、日誌を読んでからずっと気になっていた乗り物の現物を前にし、興奮気味に目を輝かせる。

言葉をなくす一味の元に、復活した男性が人の良さそうな表情とともに近づいた。

「お友達ですか、コニスさん」

「ええ、今知り合つたんです、父上。青海からいらしたそうで」

「そうですか、それは色々戸惑う事ばかりでしょう。ここは『白々海』ですいません」

「え!?? いやそんな」

「申し遅れましたが、私の名は『バガヤ』ですいません」

「いやいやこちらこそ」

なんとも無駄に低姿勢な彼に、思わずウソツプがいちいち反応してしまう。

男性の方も、ルフィ達が穏やかな害意のない人物と判断したのか、乗り物にくくりつけた網を手に親しげに話しかける。

「そうだ、ちょうどいい。今、漁に出ていたのですが、『白々海』きつての美味中の美味!!? 『スカイロブスター』など捕れましてね、家にいらつしやいませんか。『空の幸』を『ごちそうしましょう』」

「いいのか!!!? 行く行く!!!」

「空島料理か、おれも手伝わせてくれ!!?」

食べ物話を話題に出され、食に目がないルフィと道の料理に期待をするサンジが前のめりになる。

そのまま一緒に何処かへ向かいそうになるが、その前にナミが手を挙げて二人を呼び止めた。

「その前に聞いていい? これどんな仕組みなの?」

ナミが指差す方へ、少女が訝しげに視線を向ける。

そして、父と呼んだ男性が乗ってきた乗り物を指しているのだと気づき、驚きの表情

を返した。

「……………まあ、*ダイアル*をご存じないのですか？」

「*ダイアル*?!?!」

「ううわわあ、おお?!?! 走ったぞ?!?!」

浜辺で板の上に乗り、ハンドルを握ったルフィが、急な加速に目を見開く。

ガタガタと凄まじい揺れに襲われ、なんとか耐えようとする彼だったが、奮闘空しく波でバランスを崩し、空中に天高く巻き上げられてしまった。

「こけた」

「この上ない大転倒だな」

「ああ大変、おケガはないかしら?!?!」

「何て事だ、すいませんウェイバーをお貸ししてすいません」

「お気になさらず、自業自得ですので」

盛大に海に突っ込んだルフィを見て、慌てふためく少女と男性、コニスとパガヤだが、ゾロ達の反応は非常に冷たい。

やがて、地上の海と違うのならカナヅチの呪いは効くのだろうか、と誰かが言い出し、観察が始まった。

「あぶ……」

「沈んだ」

「ダメか」

しかし案の定、僅かにも耐える様子もなく、ぶくぶくとルフィは白の中に沈んで行く。あつという間に大人しくなった船長の姿に、やれやれと肩をすくめていた一味は、しばらくしてからようやく我に返った。

「危ねエな!!?」 下へ突き抜ける寸前だったじゃねエか!!?」

「おめエがアホな事言ってるから出遅れたんだろ!!!」

「いえ、私が初心者にアレをお貸ししていません!!?」

「何でおめエまで飛び込むんだよ!!!」

あわや、ボーツと見ている間に死にかけてたルフィを、慌てて救出しに飛び込んだゾロ達が、互いの迂闊さを叱り合う。

なぜか一緒にチョップパーまで飛び込んでいたが、そちらも無事に救出された。

「『ウェイバー』の船体は、動力を充分に活かす為、とても軽く作られているのです。小さな波にさえ舵を取られてしまうので、波を予測できるくらい海を知っていなければならなくてすいません!!?」

「……そういえば、ノーランドの船員も誰も乗れなかったって書いてたな」

400年前の資料、ウェイバーについて書かれた些細な文面を思い出し、エレノアが納得したように頷く。

不規則な海を進む、不思議な動力を持った一人乗りの船。確かに、それが簡単に乗れるわけがない」

「そんなに難しいのか?!? おれも乗ってみたいのに〜」

「子供の頃から練習して、私も乗れたの最近なんです」

「訓練すれば10年程で」

「長エよ!!! ものすげエ根気いるぞ!!!」

まるで青春の全てを捧げなければ乗れない、とまで言われる代物の説明に、やってられるかとウソツプが叫ぶ。

自分たちには無理か、とため息をついていると、彼の肩をエレノアが叩き始めた。

「ウソツプくん、あれ」

「ん?」

仲間が示す方向に、ウソツプがつかられて振り向く。

呆然と棒立ちになったエレノアの視線の先にあったのは、思わず二度見するような光景だった。

「おーい!!?」

「乗つとる!!!」

ルフィはともかく、現地のよく知っている人間であるコニスですら10年かけてようやく乗れるはずのウエイバー。

それを、なんとナミが片手を上げながら、自由自在に操っているではないか。

「何と…!!! すごいですね、信じられません…!!!」

「んナミさん、君がサイコー♡♡」

「何で乗れるんだ?!? あんなのに!!!」

「考えてみりや、ナミが乗るためにできてるような乗り物だもんね…」

航海士が見せた驚きの光景に、コニスとパガヤも哑然となる。

移ろいやすい『偉大なる航路』の天候の変化さえ読み取つてみせるナミならば、確かに可能かもしれない凄まじい才能の片鱗だった。

「おいナミ!!! おっさん家にすぐ行くから早く下りろ!!? アホく!!?」

「当たんな」

「先行つてて!!? おじさん、もう少し遊んでていい!!?」

「ええ、どうぞ。気をつけて下さい!!?」

すつかりウエイバーの乗り心地が気に入ったのか、満面の笑みを浮かべて手を振るナミ。

パガヤも彼女ならば事故も起こさなと思ったのか、気前よく自身の相棒を貸し出した。

「……何でアイツ、あんなスイスイ……ものスゴイ揺れるんだぞ、アレ」

それを面白くなさそうに見つめるのは、うまく乗りこなせなかったルフィ。

扱いの難しい乗り物を、まるで自分の手足のように自在に操るナミをじつと凝視していた彼は、つばでも吐くように口を開いた。

「沈め」

「ガキか!!!」

が、言い切る前に叩き落とされたサンジのかかと落として、ルフィは自分で噛んだ舌の痛みに悶える羽目になった。

第126話 神の住む島

パガヤとコニスの案内で、比較的急な傾斜に造られた、真つ白な階段を昇っていくル
ファイたち。

その途中、視界の端に映った景色に、ウソツプが興味深そうに振り向いた。

「おい、向こうに何か工事現場みてエなのがあるぞ!!？」

「ん? 何だ何だ?」

何事か、とルファイたちも同じく視線を向けると、そこにあつたのは角ばった雲。

何人もの人々が工具を持ち寄り、そこから直方体に切り取った雲を運んでいる姿が目
に入った。

「“雲切場”の事でしょうか? これから加工する為の雲を切り出す現場です」

「切れるもんなのか雲って…」

「何もかも常識を無視してやがる」

「あなた方は白海から白々海へ“ミルキーロード”を通ってきたのでは!?!」

啞然としたまま、目を奪われる一味にパガヤが確認する。

言われてルファイたちは、天国の門からこの島にたどり着くまでに通った、きしめんの

ようにうねる雲の道の事を思い出した。

「あれは人工的な雲の運河です。元からある自然の雲は2種類あり、あなた方が船で進んで来たのは『海雲』。そしてそこにフカフカと浮く歩ける雲、それが『島雲』」

「そうか……海底がないから全部浮島なのか」

ウソツプが直に体験し、危うく一万メートル上空から落下しかけたことを思い出す。

環境や生態などで驚かされてばかりの一味の中で、ふとロビンが根本的な疑問を口にした。

「普通の雲ではあり得ない事よね、泳げたり…乗れたり…」

「ええ、雲を作り出す凝結核が他とは異なるのです」

詳しい説明を求めるロビンに、パガヤが丁寧な説明を始める。

青海に存在する謎多き鉱物『海楼石』。それに含まれる『パイロブロイン』と呼ばれる角質の粒子が、火山によって空に運ばれ、水分を得て生じた密度の差により、『海雲』と『島雲』が形成されるのだという。

「あ〜〜成程アレだ!!!」

「あ〜〜ア!!? そうそうアレだよな! 子供の頃よく遊んだよ……………」
 『角質の粒子』

「知ったかぶりやめい」

「——まあ……とにかくさき程言いました『ミルキーロード』や、ビーチにあった雲でできたイスなど、あれらは『雲切場』で切り出した『島雲』をさらに圧縮するなどして密度をかえる事で、人が作り出した雲なのです」

難しいことが苦手な二人がわかった顔で頷くのを、エレノアが冷ややかな視線を向ける。元々期待などしていないが、アホが分かったふりをするのは、何とも言えない見苦しさがあつた。

そんな会話を続けながら、一味はパガヤとコニスの案内のもと、二人の住居に辿り着いた。

「ウソツプのアホー!!!」

「イヤ何でおれだよ」

ある一つの巻貝の穴に向けて、ルフィが適当な一言を聞かせる。

理不尽な悪口に、華麗なツツコミを入れるウソツプに、コニスはおかしそうに笑い声をこぼす。

「ふふっ……じゃあその貝の殻頂を押ししてみてください」

「カクチョウウって何だ?」

「殻のてっぺんだろ。押したってどうなるもんでも……」

訝しみながら、コニスに促されるままに貝の先端を指で押してみるルフィ、すると。

『ウソツプのアホー!!!』『イヤ何でおれだよ』『ふふっ……じゃあその』

「うわ!!? ウソツプが貝にバカにされた!!!」

「違うだろ、お前の声じゃねエか!!?」

「へー!! すごいエな、音を記憶したのか」

先ほど発した声と寸分違わぬやり取りが再生され、ルフィたちはぎよつと目を見開いて巻貝を凝視する。

同じく目を丸くしたゾロが、不思議な能力を持つ巻貝を見つめて聞き返した。

「この貝が『ダイアル』か!!?」

「はい、それは『音^{トーン}貝^{ダイアル}』。音を録音・再生する習性がある白々海産の貝殻です。主に

音楽を録音して使うんですが」

「成程、コリヤスゲエな!!!」

「この手の品は地上……青海にも流通してるよ。パパの船にもいくつかあったし、利用もしてたんだ」

「つてことはおめエ、知ってたな!!?」

「コニスの説明に割って入るのは忍びなくてな……」

知ってたなら教えろよ、と言いたげなウソツプたちの視線に、エレノアは申し訳なき

そうに頭をかく。せっかく現地の人がわざわざ説明してくれているのに、横取りするの
もそれはそれで失礼だろうと。

「白々海の貝つて海底がねエのにどうやって生きてんだ」

「浅瀬の漁礁で取れるんです」

「これが『ダイアル』なら…でも、これで『ウェイバー』が動くとは思えないけど」

「いいえ、ウェイバーの動力はこっちです。これは小さめですけど」

ロビンに問われ、コニスはまだ別の種類の貝を取り出す。手のひら大のそれは音貝と
は少し形や模様が異なり、大きさもわずかに大きい。

コニスの指示で、ルフィはそれを持つたまま、風を穴の中に入れるように振り回して
みる。

「『プレスダイアル風貝』。例えば30分風に当てておけば、30分分の風を自在に排出できるん
です」

言われた通り数秒風に当ててから、自分の顔に穴を向けて殻頂を押す。

するとルフィの顔に、自分が回した勢い分の強さの風が噴き出し、思わず感嘆の声が
上がる。

「大きさにより風を蓄えられる容量は違いますけど、これを船尾に取りつける事で軽い
船なら動かせます」

「それが『ウェイバー』……!!?」

「そうか、これで風吹き出して走ってたのか、アレは!」

「私はウェイバーが精一杯なんですけど、本当は他にもいろいろあるんですよ。スケート型のものやボード型のものや……」

「……ゲリラが使ってたのはそれが」

海の上を自在に走り、素早い動きで襲い掛かってきた仮面の男の事を思い出し、エレノアは思わず唸る。

ということとはつまり、スケート型のウェイバーを乗りこなしていた彼は、相当に訓練を積んだ、優れた使い手ということになるのだろう。

「いいなくウェイバー乗りてエなく。あいついいなく。せつかく一コ持つてんのになく」

「持つてゐるつたつて、ありやボロボロじゃねエか。それに200年経ってんだ、動くわけねエよ」

「それはわからんぞ?」

あれだけ盛大に失敗しておきながら、まだ挑戦するつもりなのか、ルフィが窓辺から海を走るナミを眺めてぼやく。

どうしようもない、とウソツプが肩を竦めて船長をなだめていると、エレノアがそれ

を否定した。

「元々『貝』は貝の死骸を使うから、殻自体が壊れてない限り半永久的に機能するんだ」
「本当か!?」 ほらっ

「でも乗れねエだろ」

「いい〜な〜」

懲りるということを知らないのか、鬱陶しいほどにウェイバーに執着するルフイ。

視線が外に釘付けになったままの彼を放置し、ロビンが興味深げな視線をコニスに、そして部屋に備えられた大きな貝に向けた。

「他にもまだ種類がありそうね、『貝』。この照明もそう?」

「ええ、『灯貝』^{ランプダイアル}です。光をためて使います」

興味をそそられたチョツパーが、灯貝についた紐を引っ張って点灯を試し、目を輝かせる。

普通に火をつけて使うランプとは比べ物にならないほどお手軽な、それでいて安全そうな道具に、一味の感嘆の声は止むことがなかった。

「直接の資源じゃないですけど、空島の文化は『貝エネルギー』と共にある文化です。他にも炎を蓄える『炎貝』^{フレイムダイアル}、香りをためる『匂貝』^{フレイバーダイアル}、映像を残せる『

映像貝』^{ビジョンダイアル}、色々あります」

「面白いな~~~~面白いな~~~~」

「空の生活とは切り離せないものなんです」

聞けば聞くほど、ルフィの好奇心は刺激され身体が疼き始める。

普通の生活だけでもこれだけ興奮させられるなど、地上にいたままなら想像することさえできなかっただろう。

その時、キッチンの方でギャーギャーと騒がしい声が聞こえ、一味の注意がそちらに向けられた。

「楽しそうだな、サンジ」

「空の食材にうかれてんだろ」

自分の知らない空色のソースを、ただ腐っているだけとは知らずに舐めてしまったサンジの苦しみも知らず、暢気に笑うウソップ。

しばらくすると、期待以上に香ばしい良い匂いが漂い、待ち望んでいたその食材の料理が姿を見せた。

「さア出来たぞ!!!」空島特産果物添えスカイシーフード満腹コースだ」

「んまほ~~~~!!!」

パガヤが見せたスカイロブスターをメインに、色とりどりの野菜と果物で彩られた料理が披露され、ルフィがさっそく歓声を上げる。

一仕事終え、満足げなサンジだったが、室内にいる人数が一人足りないことに気付き、表情を変えた。

「おい!!? ナミさんはどこ行つたんだ!!?」

「いるだろ海に……」

きよろきよろと辺りを見渡すサンジに、やはり気になるのは女か、と呆れた様子で返すゾロ。

窓辺に寄つたウソツプが、まだウエイバーを堪能しているのかと海に目をやるが、そこにナミの姿は見当たらなかつた。

「いや、いねエ……」

「じゃ、ちよつと遠出してんだよ。放つとけつて!!?」

既に興味が料理に変更されているルフイたちは、バクバクと美食に口をつけ、あまり大事と捉えていない。

しかしその横で、何やら不安げな表情になつたパガヤとコニスが顔を見合せていた。

「ち……父上……大丈夫でしょうか……!!?」

「ええ、コニスさん。私も少し悪い予感が……」

「何だ? どうした」

何かを恐れているような、冷や汗を垂らした二人にルフィが訝し気に問いかける。

若干血の気が引いた青い顔のコニス、ルフィたちの視線が集まるとごくりと息を呑みながら、微かに震える声で語り始めた。

「この『スカイピア』には何があつても、絶対に足を踏み入れてはならない場所があるんです。その土地はこの島と隣接しているので、『ウェイバー』だと、すぐに行けてしまう場所で……」

「足を踏み入れちゃならない？ 何それ？」

「……………聖域です」

険しい表情で問いかけたエレノアに、コニスは言い辛そうに答える。

まるで、それについて口にするそのものが憚られるように、怯えた様子でその場所の名を口にした。

「神の住む土地……『アップパーヤード』」

コニスの台詞に、一味全員が目を見開く。

予想もしない大物の名前があがったことで、興味と関心が大きく膨れ上がっていた。

「『神』がいるのか!!? 絶対に足を踏み入れちゃならない場所に……!!」

「はい、ここは『神の国』ですから、全能の神『ゴッド』神・エネルギーによって治められているのです」

相当に信心深いのか、あるいは別の理由か、真剣な表情でそう答えるコニスに、ルフィは不意に笑みを浮かべる。

その意味深な笑みにいやな予感を覚えたウソツプは、慌てて彼の肩を掴んで目を合わせた。

「おいルフィ!!! てめエ今、何考えてる!!! 話をよく聞けよ!!! 足を踏み入れちゃならないっていうのは、絶対にそこに入っちゃならないって意味なんだぞ!!! ルフィ!!!」

「あーそーそー入っちゃいけね工場所があるのか」

と、聞いているだけで恐怖心が沸いて来たのか、凄まじい剣幕で釘を刺すウソツプだが、ルフィがそれを聞き入れている気配はない。

それどころかむしろ、目の奥で不穏な輝きを強めていることに、全員が気付いていた。「そうか…絶対に入っちゃいけね工場所かア………」

((絶対入る気だ……))

ワクワクと好奇心を隠しきれていない船長に、ルフィを除く全員が顔を引きつらせた。こうなったルフィに関しては、ろくな思い出がなかった。

エレノアも、不気味な笑みを浮かべる船長を見やり、重く深いため息をこぼしていた。「子供ってさア…『やるな』って言われると逆にやりたくなる習性があるんだよね」

「ああ、そういう…」

母親的、あるいは姉的な立場に立つことが多いエレノアは、この先起こるであろう騒動を思つて肩を落とす。

一味で最も気苦労を重ねているであろう彼女に、ロビンが労わるような視線を向けているのが、何とも切なく見えた。

「ん？ でも神様なら入っちゃいけねエとことか入つても許してくれんじゃねエのか？ 優しいだろ？」

「いえ…でも神の決めた事を破るのは神への冒瀆ですし…」

「…そうか、まあいいやどっちでも」

ぼりぼりぼりぼりと、スカイロプスターを殻ごと噛んだルフィが、口いっぱい頬張つたそれを一気に飲み込む。

ナミがいなくなった海を見やると、ルフィは不敵な笑みと共に立ち上がった。

「おし!!? とにかくナミを探しに行こう!!? あ、でもちよつと待て。これ食つたらな」

「そんな悠長な事言つてる間にナミさんの身に何か起きたらどうすんだお前」

「おいとけ、すぐ戻つて来るんだからよ」

さして、というか全くと言つていいほど慄く様子もなく、移動を始める麦わらの一味。

青年達の私の強さに一瞬圧倒されていたコニスとパガヤだったが、ややあつて我に返

り、再度不安げな表情で忠告を口にした。

「……ですけど、彼女が本当にそこへ向かったかどうかともわかりませんし、くれぐれも無茶だけはなさらないで下さい……!!？」
「神」 エネルの怒りにふれては本当に大変な事に……」

執拗に、本気で恐れている様子で、ルフイたちに注意を促す空の住民達。

それを横目で見やっていたエレノアは、冷めた表情でそっぽを向き、呆れたため息をついた。

「……………神か、くだらんな。まだそんなことをのたまう輩がいるのか」

その声には呆れただけでなく、鬱陶しそうに吐き捨てるような響きがあった。

第127話 “不法入国者8名”

「……うゝ」

空島で出会った父子の家を後にし、ナミを迎えに出向の準備を始める麦わらの一味。

その途中、不意に頭を押さえたエレノアが、険しい顔で唸り声をこぼした。

「どうしたエレノア？ お前ホントに調子悪そうだぞ」

「なんか頭いたい………めまいがする……」

「空島の環境の違いがいまさらきたか？ とりあえず休んどけ」

「そうしたい……」

いつになく弱った様子の彼女を心配し、ウソップがメリー号に引つ込むこと提案すると、エレノアは素直に言うとおりにする。

相当に辛いらしく、ふらふらと覚束ない足取りでメリー号に向かっていく。

「本当に古いものですね」

「直るかな」

「さア、解体してみなければ何とも……」

その最中、ルフィは技師であると聞いたパガヤに、地上の海で拾ったウェイバーらし

き残骸を見てもらう。場合によっては、修理して使える可能性がある」と聞いたからには、是が非でも自分で乗るつもりのようなようだ。

「おいルフィ行くぞ、早く乗れ！」

神の事や不可侵の島の事を聞いた今、早く移らねば余計な火種を抱え込むかもしれない。

いまだに戻つて来ないナミもあり、さつさと出港しようとゾロがルフィを呼ぶ。

「ん？ おっさん、あれ何だ？」

「え？」

ふとルフィが、島の頂上まで続く階段を降りてくる複数の人影に気付き、パガヤに指し示す。

ザツザツと規則的な足音が徐々に近づき、揃いの制服を纏った何者かの姿が、ルフィたちの視界に映った。

「その不審な船、待て!!!」

「誰だ？ あいつら」

何らかの組織の一員らしき彼らを前に、ルフィは訝しげな表情になる。

すると次の瞬間、ルフィはすさまじく困惑した顔になり、近付いてくる一団を凝視した。

「全隊、止まれ~~~~~!!!」

白いベレー帽をかぶった、軍隊らしき謎の集団。

屈強な体つきの彼らが、障害物一つない砂地を匍匐前進で進み、ルフィたちの元に向かつてきたのだ。

「へそ!!!」

「へそ!!?」

「どうも、へそ!!?」

「イヤ何言ってるんだお前ら!!!」

「いい加減慣れなよ……」

空の海におけるあいさつの、奇妙な響きにまだ慣れないルフィが目を剥くが、エレノアはそれに冷たい声を返す。

頭痛のせいかな、船長に対する扱いがいつもよりぞんざいになっていた。

「何で匍匐前進してたんだあいつら」

「わからねエ……たぶんあいつら変態だ!!!」

「へ——あれが変態か」

「だから急いで船に乗れつつあったんだ、ルフィの奴……」

「おいルフィ、放つとけ!!? 早くナミさん探しに行くぞ!!!」

先にメリー号に乗り込んでいたゾロたちが、なかなか戻って来ないルフィと、それに絡んで見える男達に目をやって、顔をしかめる。

だが、そんな彼らに集団のリーダーらしき男：マツキンリーが、大きな厳しい声で告げた。

「あなた達ですわね!!! “青海” からやって来られた不法入国者8名というのは!!!」

「ええっ?!? 不法入国!!!」

マツキンリーの台詞に、パガヤとコニスは驚愕で後退る。

しかしルフィは、身に覚えがない罪状に首を傾げ、マツキンリーに訝しげな視線を返した。

「ん? 何だそれ」

「弁解の余地はありませんよ。 “天国の門” 監視官アマゾンより “映像具” による写真が届いていますので!!!」

「……まさか!!!? そんなバカな!!!? 何かの間違いでは!!!?」

自宅にまで案内し、うまい料理を共に楽しみ、ルフィたちの人柄を理解したつもりになつていたパガヤが、思わずマツキンリーに反論する。

一方でメリー号の上の面々は、互いに目を見合わせ、ルフィと同じように訝し気に眉を寄せた。

「……………何だよ、不法入国って……………」

「入国料一人10億Eだったかしら…確かに払ってないものね」

「……………でもそれでも通っていいって……………!!? あのばあさん」

「言い訳はおやめ下さいまし、認めて下さい」

構わないと言われたのだから通ってきたのに、なぜ咎められる謂れがあるのかと食って掛かるが、集団のリーダーが耳を貸す素振りはない。

思わずムツとなる一味に対し、マツキンリーは穏やか口調で続けて告げる。

「…ですがまだ、そうあせる事ありません。『不法入国』、これは『天の裁き』における第11級犯罪でしかありません。罰を受け入れればあなた方はその場で安全な観光客となれます」

「何だ、それを早く言えよ。心外にやかわりねエが、罰つてのは一体何なんだ?」

知らなかったとはいえ、確かに法を犯したなら罰があるのは当たり前。

しかもそれを受ける事で難を逃れられるならと、理不尽とは思いながらも一応聞いてみることにする。

「簡単な事です。入国料を10倍払ってくださいまし。1人100億E——つまり8人で800億E。この場でお支払い下さればあなた方の罪は帳消しにさせて頂きます!!」

「？」

が、提示された罰金の額の凄まじさに、驚愕と戸惑いが同時に押し寄せた。

いまだに空における通貨の相場が分からないが、聞くだけでとんでもない額というのだけはなぜか伝わっていた。

「は……は、800億E……!!? ……だからそのEつてのはBで言うといくらなんだ」

「B…… “青海”の通貨ですね。Bだと…『1万E』で『1B』になります」

「つまり800万Bつてこと!!?」

「高エよ!!! 米何t買える額だコラア!!!」

真剣に食費と食糧について頭を悩ませ続けているサンジには、余りに見過ごせない額に思わず口から怒号が溢れる。

しかしマツキンリーは、反対に困ったように顔をしかめ、ため息交じりに言葉を返す。

「何をおっしゃるのですか!!? ならば本来の入国時に80万Bお支払い下さればよかったです」

「それでも高エつつうんだよ!!!」

「先に言っておきますが、我々ホワイトベレーは神官の直属にある部隊、反論は罪を重くしますのでご注意を」

国に入るだけで一味の、というかある一人の食費をどれだけ賄えることか、とさらにサンジが憤然となる。

渋る彼らを前にし、マツキンリーは無を言わさぬ雰囲気で凄み始める。これ以上文句を重ねるようならば、実力行使に訴えても構わないという意味表示のように。

「ちよつと待つて!!!」

その時だ。

海の彼方からウェイバーを駆り、焦った様子の子のナミが戻ってきたのは。

「ああつ!!? ナミさん無事だったんだね♡」

「ルファイ!!! その人達に逆らっちゃダメよ!!!」

何やら怯えたような、冷や汗を流した険しい表情で、ナミが凄まじい勢いで海を滑つてくる。

ルファイはそんな彼女を訝しげに見ながら、不満げに眉を寄せて叫んだ。

「逆らうなつて、オイナミ!!? じゃあ800万Bの不法入国料払えるのか!!?」

「……よかつた、まだ罰金で済むのね」

一瞬、ほつとした様子で肩を竦めたナミ。

だが次の瞬間、ウェイバーのハンドルを目いっぱい回し、最高速度をそのままに砂浜の上に勢いよく飛び上がった。

「…800万Bつて高すぎるわよ!!!」

宙を舞ったナミと、彼女の操るウェイバーが、マツキンリーの顔面に炸裂し思いきり

吹っ飛ばす。

強烈な一撃を食らった彼はそのまま壁に激突し、血反吐を吐いて砂浜に倒れ込んだ。

「オイ」

「ハッ!!! しまった!!? 理不尽な多額請求について……!!! あ、おじさんウェイバーありがとう。楽しかったわ!」

「いえいえどうもすみません。そんな事よりあなた方、大変な事に……!!?」

即座にしまった、と息を呑むナミは、すぐさまパガヤに向き直ってウェイバーを返す。慌てた様子で脂汗を流す彼をよそに、ナミはぼーっと突っ立っていたルフィの腕を掴んで歩き始める。

「さア、逃げるのよルフィ!!?」

「わ!!? 何でだよお前、ケンカ仕掛けたんじゃねエのか!!?」

「“神”とかつてのにかかるとヤバイのよホントに!!? 今のは事故よ!!?」
「待て……!!」

身勝手に一方的な結論を残し、さっさとメリー号に戻ろうとする。

しかしその途中、倒れ込んだマツキンリーが、血塗れの顔でルフィたちを睨み、怒りに満ちた声で呼び止めた。

「……逃げ場などすでにありはしない!!! 我々に対する数々の暴言、それに今のは完全

な公務執行妨害、第5級犯罪に値している……!! “神” エネルの御名において、お前達を
“雲流し”に処す!!!

「“雲流し”、そ……そんな!!!」

ギラリと、マツキンリーの目が剣呑な光を発する。

そして告げられた罪状と罰の名に、コニスとパガヤがハツと息を呑み、目を見開いた。
何を慌てているのかわからず、ルフィは呑気な声でコニス達に尋ねた。

「何だそれ。 “雲流し” って気持ち良さそうだな」

「良くありません!!? 逃げ場のない大きさの島雲に船ごと乗せられて、骨になるまで
空をさま迷い続ける刑です、死刑です!!!」

コニスの説明で、ウソップやチョップは思わずぞつと背筋を震わせる。

彼らの脳裏には、何十年も空を漂い朽ち果て、そしていずれ地上へと落下していく自
分達の姿が浮かぶ。

それはまさしく、自分達が空島に至るまでに遭遇した船と、全く同じであった。

「成程……それで何も無い空から船が……」

「引っ捕えろ!!!」

「ハッ!!!」

納得したように、何度も頷くエレノアの前で、マツキンリーの指示のもとに軍人たちが

が動き出す。

本気の体勢を見せる彼らを目にし、コニスが思わずルファイたちに叫んだ。

「逃げて下さい!!? 敵いません!!!」

「よしなさい、お嬢さん。それは犯罪者をかばう言動に聞こえますよ」

マツキンリーがぼそりとこぼした一言に、コニスはつと口を噤む。

その態度は、法の番人に逆らうことに対する忌避感よりも、また別の物に対する恐怖感が表れて見えたが、それに気づく者はこの場にいなかった。

「撃て!!!」
// ミルキアロー 雲の矢!!!」

「ナミ!!! 邪魔だ、船に行つてろ!!!」

「きや!!? ……うんっ!!!」

ナミを押し退け、前に出るルファイのもとに、幾本もの矢が迫る。しかし、矢は全くの見当違いの方向へ飛んでいき、ルファイにかすりもしない。

それもそのはず、矢を放った目的は攻撃ではなく、矢に取り付けられた貝から発生した雲に乗り、スケート型のウェイバーで接近することだったのだ。

「な——るほど!!?」

即席の雲の道を作るという、摩訶不思議な戦い方に、ルファイは思わず感嘆の声をあげる。

だが彼は、それでやられるような軟な男ではない。急接近し振るわれる刃を躲し、ヤシの木に腕を巻き付かせたルフィが、不敵な笑みを彼らに返した。

「面白エモン持つてんなアお前ら!!?」

「何?」

「何だアイツは…!!?」

目にもとまらぬ素早さで攻撃をかわされたことに、軍人たちは驚愕をあらわに表情を変えろ。

ルフィはヤシの木から手をはなすと、ぐるぐると空中で回り、無作為に拳と蹴りを繰り出し始める。

「『ゴムゴムの』…」

「まさか…悪魔の実…!!」

思わぬ敵の能力を目の当たりにし、マツキンリー達は目を見開く。

驚愕のあまり、自分達に迫る拳と蹴りが目前に迫るまで、何の反応も取れなかった。

「『花火』…!!」

どばあん!と文字通りの花火のような勢いで弾けた攻撃が、マツキンリー達を吹っ飛ばす。

白目をむき、ばたばたと落下していく彼らのすぐそばで、深いため息を漏らす声が響

いた。

「——ところでナミ……ウチの船の今の経済状況は？」

キン、と刀を鞘に納め、靴を踏み鳴らし、義足に刃をしまい込み、他の軍人たちを瞬く間に片付けたゾロたちが息をつく。

そんな最中にかげられた問いに、ナミは大きくため息をつきながら、肩を落として答えた。

「残金5万B」

「さんさんたる数字だな……そんなにないのか？」

「そうよ、もつてあと一日二日ね」

「何でそんなにピンボーなんだ!!? 船長として言わして貰うけどな……おめエらも少し金の使い方ってもんを考えて」

「お前の食費だよ」

憤然と危機管理能力について叱るルフイだが、自身がその原因となっている自覚がないことに逆に怒りをぶつけられる。

倒れ伏す軍人たちのことなど、歯牙にもかけていないような様子だった。

「……あのホワイトベレーを」

「やつつけちゃった……!!? 青海の人は、ここでは運動能力が落ちるハズなのに……」

見た目からは想像もできない、恐るべき強さを見せるルフィたちに、コニスもパガヤも開いた口が塞がらない。

一波乱乗り越えたと息をつく一味だったが、そこに不敵な笑い声が響いた。

「ハハハハ、バカ者共め……我々の言う事を大人しく聞いていればよかつたものを……我々ホワイトベレー部隊はこの神の国の最も優しい法の番人だ。彼らはこう……甘くはないぞ……!!?」

血を吐きながら、意味深な笑みを見せるマツキンリーに、ウソツプやナミが思わず顔色を変える。

負け犬の遠吠えなどではない。自分達を圧倒したルフィたちをも恐れぬ、確かな自信が、今の彼の言葉からは感じられたのである。

「これでもはや第2級犯罪者、泣こうがわめこうが………
アップリヤード 神の島”の神官達の手によつて、お前達は裁かれるのだ!!!
 へそ!!!」

盛大な捨て台詞を吐き、集団のリーダーはルフィたちを鋭く睨み嘲笑する。

意味深に嗤つたまま、よろよろと引き上げるために踵を返すマツキンリーだったが、彼の去り際の耳に、深いため息の声が届いた。

「……神か。ありもしない偶像にすがらねば、お前達は生きて行くこともできんのか……?」

呆れ果てたような、つまらなそうな声の響きに、マッキンリーの足がつい止まる。

同じくルフィたちも、唐突に挑発するような言葉を発した仲間の方を凝視し、眉間にしわを寄せ始めた。

「!!? 何……?」

「お……おい、エレノア!!?」

「いつの時代であろうが、どの世界であろうが、人間とはすがれるものがなければたやすく折れるもののような……くだらん」

ふん、と鼻を鳴らしたエレノアは、半目で彼を見つめたままなおも続ける。

その眼が放っていたのは、いつもの彼女では考えられないほどに冷たく、渴き切った、別人のような眼差しだった。

「お前達の『神』に伝えておけ……いや、もうすでに聞いているのか。お前がどれだけ偉いかなど知ったことではないが『私の邪魔だけはするな』と」

呆然と立ち尽くすマッキンリー達に向けて、エレノアはそう告げるのだった。

第128話 // 罪人 //

「私達、ハメられたんだわ!!? あのおばあさん言ってたじゃない、『通つていい』つて。それで通つたら『不法入国』!??」

一旦窮地を脱した途端、ナミが凄まじい剣幕で怒りを爆発させる。

とんでもない賭けに勝つて、ようやく目的の空島に着いたのに、待っていたのはのんびりできるどころか犯罪者扱い。怒るのも無理はなかった。

「詐欺よ!!? こんなのだ!!」

「まったくだぜ——まああそこでもし『通つちやダメだ』つて言われてもどうせ力づくで入国しただろうつて事はおいといてよ」

「おだまり」

ぼそりと呟くウソツプをギロリと睨み、ナミはフンと鼻を鳴らす。彼女の怒りが収まるには、まだ相当時間がかかりそうだ。

と、そこへ、かなり距離を置いた場所に立ったパガヤが、ため息混じりに口を開いた。

「——とにかく大変な事になりました。第2級犯罪者となつてしまわれては、私達はお力には……」

「なんか遠くないか？」

「——まあでもいいじゃねエか別に。追われるのには、慣れてんだしよ」

追われ逃げるのはいつものことだ、といつも追われる原因になっている自覚がないル
フィが笑いながら答える。

するとその目が細められ、肩をすくめるナミに咎めるように向けられた。

「そんな事よりお前、なんで帰って来ちまったんだ？」

「は×」

「せっかくおれ達、これからあの『絶対入っちゃならない場所』へ大冒け……いや……お前
を探しに行くところだったのに」

「おい、せめて本音は隠せ」

「ホントにあんたはわかり易いわね。何が大冒険よ!!!」

もののついでに迎えに行くような言い方に、エレノアが半目で呆れた声を発するが、
ナミはそれ以上に聞き捨てならない言葉に食ってかかる。

彼女は一度、『神』の力の片鱗を目撃していた。青海人らしき男とそれを追う者達、
そして天より降り注ぐ巨大な雷。思い出しても恐怖が蘇る光景に、ナミはまたブルリと
肩を震わせた。

「私は絶対二度と行かないからねあんな島!!!」

「ならば先に行くといい」

鼻息荒く、断固たる拒否反応を示すナミ。

そんな彼女に返ってきたのは、遠く海の彼方を見つめて佇む、エレノアからの冷めた一言だった。

「……は☒」

「私にはやることがある……それが終わるまではこの国を離れるつもりはない。命が惜しいなら先に降りる準備をしておけ……私は残る」

コキコキと首を鳴らし、いつもの彼女とは思えない粗暴な言葉と態度で仲間達に告げる天使。

凄まじい違和感で呆然となるナミ達をよそに、エレノアは鋭い視線を虚空に向け、冷たい声のまま続けて言った。

「別に引き止めはしない……空島」があつたと言う事実だけでお前は十分のようだしな………」

「おいおいおいおい!!!」

「ちよつと待ちなさいエレノア!!! しつかりしてよ!!!」

おもむろに、船の外に向かって歩き出そうとした彼女に、ナミとウソップが慌ててしがみつく。

放っておけば、本気で全員をおいて飛び立っていたであろう雰囲気、全員が驚愕の表情を見せていた。

「言つたじゃない!!? あこの島にはとんでもない奴らがいるつて!! 神だか何だか知らないけど神懸かつた力だけは本物だつて!! あんたにまでルフィみたいな事言いだされたらこつちはどうすりゃいいのよ!!?」

常に自分の味方だと思つていた少女からの、思つていた正反対の反応に、思わず涙目になつてしまふナミ。

そして縋り付かれたエレノアはというと、キョトンとした様子でしがみつくと二人を見つめていた。

「そ……そうだよね? 何言つてるんだろ私……」

「……エレノア、お前ホントに大丈夫か? 最近妙だぞ?」

「いやほんとにゴメン……自分でもよくわかんなくなつてる」

ころつと変わるエレノアの態度に、ウソツプは訝しげな目を向けて問うが、本人も戸惑つている様子で、大きく首を傾げている。

奇妙な様子に、若干の不安を覚えるナミだが、それを振り払いメリー号に向けて歩き出した。

「とにかく追つ手が来るのは確かよ!!? さつさと出るわよこの国」

「出るだどくく!!? アホ言え、お前は冒険と命とどっちが大事だア!!」
「命よ!!」 その次はお金」

目を剥くルフィに即答し、ナミは憤然と歩き出す。

空島に挑むきつかけも、考えてみればただの意地でしかなかった。それが達成された今、留まる理由などありはしないのだ。

だがそこで、ウソツプがある重大な問題が立ち塞がっていることに気がついた。

「——でもそうだ。そういやおれ達、この空島へ来る事に必死で、下へ帰る事なんて全然考えてなかった。安全に帰れる道はあんのか?!? おれ達 “青海” に帰れるのか?!?」
「……………今となつてはもう…安全とは言えませんが…青海へ下る道はありません」

まさかここで旅路は止まってしまふのか、と急に不安になるウソツプに、まだ若干距離が開いているが、先ほどよりはマシな態度になったコニスが答える。

「その為には一度、下層の “白海” へ下りて遥か東—— クラウド・エンド “雲の果て” と呼ばれる場所へ行かなければなりません」

それがある方を見やるコニス。

しかし不意に、一味を見つめていた彼女は俯き、表情を曇らせ怯えたような様子になり始めた。

「ですけど…やっぱり逃げる事でさえお勧めはできません…空の海とはいえ広大ですし

…

「何だよ、どういう事だ!!?」

「あいつらからは逃げられないって言いたいんでしょ」

なにやら意味深な沈黙に入るコニスとパガヤを、ナミがみなまで言うなというように制する。

お人好しな二人のことだ、ルフイ達の実力を見たとはいえ、軍を相手に逃げ切れるとも思えず、身を案じてくれているのだろう、と。

「でも、それをいうならこの国のどこにいても同じ事だよ」

「とにかくここに居ちや2人にも迷惑もかけるし、居場所がバレてる!!? 船を出しましょう」

二人を安心させるようにエレノアが答え、すぐさま動き出そうとナミが歩き出す。その際、コニス達に笑顔と感謝を述べることも忘れずに。

「コニス! おじさん! 色々ありがとね」

「あ!!? そうだおっさん、さっきのメシ一品残らず全部持つてっていいか?」

「ええ、勿論どうぞ」

「やったサンジ、弁当箱!!!」

「抜け目ねエなア」

ナミのことでバタバタしたせいで食べ損ねた空島料理のことを思い出し、よだれを垂らしてパガヤ宅に戻るルフィ。それを追うサンジとウソップ。

階段に引き返していく三人に気づくと、ナミは思わず険しい表情で声を張り上げた。

「ちよつとどこへ行くの?」

「メシ貰つて来る。野朗共、先に冒険準備を整えとけ!!?」

ルフィの返答に、ナミは思わず頭を抱える。

国を出るのに、弁当が必要なほど時間はいらぬ。なのに欲しがるということは、途中で是が非でも寄り道をしていく気満々ということである。

「アイツ…完全に行く気でいるわ!!? ホント恐いのよ!!?」

「知るかよ」

「あなたの恐怖はわかったからいい加減落ち着きなよ」

「おれアどつちでもいい。おれに当たるな」

帆を張る用意を始めるゾロに怒鳴るナミだが、ゾロは鬱陶しそうにため息を着くだけでまともに相手をしない。

それに不満げな顔をしたナミは、メリー号に這い上がってきたチョッパーにっこりと笑みを向けた。

「チョッパー♡ あんたは私の味方よ、ね」エ…?」

「え？」

「オドすな」

笑っているのか、起こっているのか、よくわからない恐ろしい表情におののくチョッパ。

暴君つぷりを披露するナミに、ゾロは呆れながら首を左右に振った。

「わかつてんだろ?!? ルフィを説得できねェんじや全員でデモおこそうが聞きやしねエ」

「いいわよ、じゃ私行かない」

「あア、そうしろ」

「命が惜しいならそういう選択も悪くはないだろう…私は違うが——」

ふんつ、とそっぽを向くナミに、ゾロはまたため息をつき作業を続け、エレノアは肩をすくめてまた海の彼方に目を向け始める。

だがその瞬間、自身が発した言葉に気づいたエレノアが、ハッと目を見開いて口を押さえ、よろよろと後ずさり始めた。

「…!!? 私また…!!? 何で…さつきから何言って…あ…あれ…!!?」

「エレノア…?」

きよろきよろと辺りを見渡し、体を揺らがせる天使の少女。

足元が覚束なくなり、欄干にへたり込んだ彼女は、頭を両手で押さえて荒い息を突き出す。

「ちが……これは……私じゃな……!!!」

何事か、と表情を変えたナミ達の視線の中で、エレノアは大きく肩を上下させ、みるみるうちに顔色まで悪くしていく。

ぐるぐると、目の焦点さえもがまともに合わなくなり出した直後、エレノアの体がぐらりと傾いだ。

「エレノア!!?」

一斉に上がる悲鳴じみた仲間達の声をよそに、エレノアはごとりと、甲板の上に横たわった。

「おい、船の方の様子が変わだ……」

弁当箱に料理を華やかに詰めるサンジと、それをよだれを滝のように垂らして見つめるルフィ。

そこに、メリー号の方を双眼鏡で見ていたウソップが、訝しむ声で呼びかけた。

「どうしたんだよウソップ」

「見てみる、アイツら何か騒いでる!!?」

「宴か!?」

なにかしらの異変が起こっているものと察し、サンジが差し出された双眼鏡をひつたくるように掴む。

レンズの中を覗き込み、レディーの姿を探した瞬間、彼はハッと顔色を変え出した。

「ああ!!! ナミさん!!!」

彼が目撃したのは、異様な速度です逆向きに進んでいくメリー号、その上で悲鳴をあげる仲間達。

その中でも特に、上半身だけ水着になっていたはずが、いつの間にかシャツを着直していたナミの姿だった。

「なんでTシャツ着ちゃってんのオホホホホ……!!!」

「どこ見て何喋ってんだおめエは!!!」

「何だあいつら、どこ行くんだ!!!」

心底どうでもいいことに泣き叫ぶサンジに、ウソツプのキレたツツコミが入る。ルフィも訝しげに、勝手に動いているメリー号を凝視するが、緊張感は皆無だった。

だが、船の上ではそんなのんびりしている場合ではない。以上事態に早速遭遇してしまっているからだ。

「ちよつと待って!!! 何これ、何なの!!!」

「アアアアアアアア!!!」

混乱の声を上げるナミと、泣き叫ぶチョツパー。

逆向きに爆走するメリー号。そうなっている原因は、船を真下から掴んで移動している、ミルキーロードにいたものよりもさらに巨大なエビだった。

「どこかへ連れてく気だ、おれ達を!!!」

「こつちも大変だ!!! エレノアが……!!!」

「く……ア……!!!」

号泣するチョツパーが、頭を押さえて横たわるエレノアのそばで悲痛な声を上げる。

様子が変わったと思った直後、エレノアは今度は苦しげに顔を歪ませ、引きしぼられるような苦悶の声をこぼしていた。

「どうしちゃったのエレノア!!! こんな時に……だからチョツパーに診てもらつとけつて

言ったのよ!!!」

「船医さん、彼女は一体どうしたの?」

「わかんねエ……!!? 急に頭を抱えて苦しみだしたんだ、でも該当する病気が思いつかないんだよ!!!」

あまりのも突然の事態、そしてゆっくり考える暇もない緊急事態に、誰もが冷静ではいられなくなる。

その間もエレノアは、きつく歯を食いしばりながら、苦痛に身を震わせていた。

「頭が……われる……!! 何かが私の頭の中で……暴れてるみたい……!!」

「ギャー!!? ヤベーどうしよう!!? 誰か助けてくれ!! 医者……!!」

「だからあんたでしようが!!」

ドタバタと、狭い甲板で慌てふためくチョッパに、ナミの鋭いツツコミが入る。

だが、そんなコントを呑気にやっている場合ではなかった。

「おい!!! 全員船から飛び下りろ!!! まだ間に合う!!! さっさとこいつを陸に連れてけ

!!!」

「だって船は!!! 船持っていかれたら」

「心配すんな!!? おれが残る!!!」

「そんな!!? あんた一人残ってどうなるの!!?」

たとえエビをどうにかしたとして、方向音痴のこの男がいかにしてみんながいる場所へ戻ってこられるというのか。

そもそもどうやってエビを止めるのか、と問おうとした時、船の通った後を見ていたロビンがぼそりと呟いた。

「……いいえ、そんな事もできない様にしてあるみたい。大型の空魚達がホラ……」

ロビンに言われ、ナミ達はハッと彼女が見ている振り向く。

視界に入るのは、白い海に水飛沫を立てる、いつか見た巨大な海蛇のような空魚達。彼らの持つ鋭い牙の並んだ口が、ガチンガチンと噛み合わされている。

完全に、過ぎ去っていくナミ達を餌と認識し、追ってきていた。

「口を開けて追って来るわ……………!!? 飛び込んでも勝ち目はなさそう…」
「エビをやっつけたらどうだ!!?」

「何をしてもきつとムダね。おそろくもう…始まっているのよ」

「『天の裁き』か…………」

パガヤが言っていた、*“神”*を名乗る存在が下すという罪人への処分。

突然始まったことといい、有無を言わさぬ流れといい、まさに自分勝手な神がもたらすであろう裁きに他ならない。

思わずゾロが嫌悪感をむき出しにし、吐き捨てるように呟いた。

「追っ手を出すんじゃない、おれ達を呼びよせようってわけだな。横着なヤローだ」

「じゃあまたあの島へ!!」

未だ、目の前で起こった実物の裁きの恐怖を忘れていないナミが、エビが向かっている方向を見やって表情を硬ばらせる。

まさか自分も、あのいかづちを落とされて跡形もなく消されてしまうのだろうか、そんな恐怖が彼女の中で荒れ狂った。

「ルフィ~~~~~!!! ウソツプ……………!!! サンジ君!!!」
航海士の悲痛な叫びも虚しく、神の使いによって運ばれる船は、遠く白い海の彼方へと消えていった。

第129話 “生贄の祭壇”

異変に気付いた時には、すでに手遅れだった。

超巨大エビに運ばれたメリー号はすでに海の彼方、後に残ったのは穏やかに波打つ白い海だけで、ナミ達の姿は見えなくなってしまうていた。

「なんでTシャツを」

「んまだ言ってるのかよ!!! おいルフイ!!! えれエ事つたどうする、どうしよう!!!」

「あいつらどこ行つたんだ?」

「どこっってお前そりや……………」

呆然と呟くルフイとサンジに、慌てふためいたウソツプが叫ぶ。

が、ふとした瞬間に頭が冷えたのか、二人と一緒にになって真顔で首を傾げた。

「どこ行つたんだ?」

「……………超特急エビは神の使い、運ぶ物はいつでも“神”への供え物」

唯一、メリー号もろとも仲間を攫った存在について知っているであろう男に尋ねると、帰ってきたの硬い声と表情。

冷や汗を顔中に浮き上がらせ、引きつった顔になったパガヤは、ゴクリと息を呑みな

がら答えた。

「ならば行き先は『神の島』の北東——『生け贄の祭壇』です」
告げられた言葉に、三人はギョツと目を見開く。

今しがた神の住む島について話していたところに、その本人がもたらした災難であると聞かされれば、冷静ではいられなかった。

「生け贄!!? ナミさんとエレノアちゃんとロビンちゃんとその他が生け贄にされるのか!!? 神の奴の!!? ンの野郎フザけんじゃねエぞオ〜〜!!!」

「お待ち下さい!!? かし…!!? すいません違うのです!!!」

どこの誰とも知れない、そもそも人間かどうかとも怪しいような存在に女性陣がどんな目に遭わされるかと、怒りを燃やすサンジ。

それに。パガヤは、言葉が足りなかったというように待ったをかけた。

『天の裁き』において、罪人の受ける罰は2つ、『生け贄』そして『試練』、そう聞いたことがあります——つまり彼らは今、神の手中にあるいわば『生け贄』という名の、人質。——したがって今、実際に裁かれているのはここにいるあなた方3人なのです!!!」

困惑するルフイ達に、パガヤはウソツプの持っていたスカイピアの地図を使って説明を始める。

ナミ達が連れていかれたのは、神の島の北東に位置する生け贄の祭壇。そこへたどり着く方法は、島に張り巡らされた大小様々なミルキーロードからなる迷路を進む他はない。

大量の空魚がいる中では、島を回って入ることもかなわないため、神の示した道を進む以外に行く方法はないのだと。

「至れり尽くせりだコリヤ、とにかく仲間と船を返してほしけりや正面から入ってきやがれと…」

「それがおれ達への『試練』で『天の裁き』か…!!?」

「ーまあでもナミが言ってた『神官』ってのブツ飛ばしたらいいんだろ? なははははははは…」

「そんな安易な……………」

「いけません、油断されては!!? 神官達5人の強さは、おそらくあなた方の想像を超えるものです」

呑気に笑うルフィを案じてか、パガヤは腰を浮かせて注意を促す。

油断している彼らを心配しているというよりは、彼らが相手をしようとしている者達がいかに危険か知っていて、畏怖している様子だった。

「その上、何より『神の島』には『神』エネルギーがいらっしやる」

??

「ぐあ!!!」

ゴボゴボと自分の口から空気が漏れ、ゾロの肺を圧迫感が襲う。

上下から迫る牙をなんとか防ぐ彼は、一瞬の浮遊ののちに、再び白い水面に叩きつけられた。

「出てきた!!? ゾロ!!!」

「サメだ!!! 空サメにゾロが負けてる!!!」

巨大な口を開けて、ゾロを丸呑みにしようとする空のサメが、空中に高々と飛び上がり、また水中に沈んでいく。

それを目の当たりにしたチョッパー達は、それ以来ゾロと空サメの姿が見えないことに不安を抱き始めた。

「あ……あがつて来ない……食べられちゃったのかな……!!!」

「ギャ~~~~!!? ゾロが食われたア~~~~!!!」

「……………食べられたんなら雲が赤く染まる筈」

「何コワイ事言ってるの!!? ロビン!!?」

ぼそりと想像するのも恐ろしいセリフを吐くロビンに戦慄しつつ、ナミとチョッパーは奮闘していたゾロの姿を探す。

すると次の瞬間、水面で巨大な水柱が立ち上がった。

「あアウザってエ!!!」

固く拳を握りしめたゾロが、空サメの横つ面をぶん殴って飛び出してくる。

涙目で頭部をひしやげさせた空サメは、なんとも哀れみを誘う格好で水中に落下していった。

「ハア……ハア……まいったな。これじゃ岸へも渡れねエ……一体どこなんだここは……」

「間違いない事は『神の島』の内陸の湖だつて事」

ずぶ濡れになった衣服を絞り、苛だたしげに呟くゾロにロビンが答える。

足場がある祭壇の周りは雲の海で囲われ、その中では無数のヒレが泳ぎ回っているのが見える。確実に、巨魚達はゾロ達を狙っていた。

「まるでここは生け贄の祭壇ね……」

「まだ空サメがうようよいるぞ」

「えらいトコに連れて来てくれたもんだ、あのエビ……」

ゾロが実践してみせたように、泳いで海の向こうの陸まで渡るのとは不可能そうである。

唯一の足場である祭壇には草木もなく、コケばかりで、腹を満たせるようなものも何もありません。なかつた。

「……ここで飢えさせる事が天の裁きかしら」

「そんな地味な事するもんなのか？ 神つてのは」

「さア……会つた事ないもの」

肩をすくめて、軽い口調でゾロに答えるロビン。

それに険しい視線を向けていたゾロは、やがて不安げに船室の方を見つめるチョツパーに視線を移した。

「エレノアは今どうなつてる？ チョツパー」

「うなされてるよ……あんなに弱つたエレノアは見た事ない」

「何か起こるんじゃないかと思ってたわ……あいつ、空島に来る前からおかしかつたもん」

チョツパーと同じく、船室のベッドで一人沈黙しているエレノアのことを思い、心配そうに表情を歪めるナミ。

無言でそれを見つめていたロビンが、ふと口を開いた。

「何か持病を持つていたとかは？」

「わからない。そんなのエレノアから聞いた事がなかつたし……そういうそぶりも見せない

かったから。天族特有の病気なのかも……」

「そういうの誰にも言わなそうだものね、あの子」

仲間の窮地のためとあらば、敵陣に一人突っ込み陽動役を買って出るような性格である。

自分の不調で仲間負担をかけまいと、表面上は平気な顔を取り繕って耐えていても、おかしくはなかった。

「……今から私、突拍子もない事言うけどいいかしら？」

「何だよ」

「あの子時々……別人みたいに雰囲気が変わる事があつた気がして……!!？」

ナミの脳裏に浮かぶのは、彼女がに今すぐにも空島から脱出すると叫んだ時のこと。

それに対しエレノアは、ひどく冷めた様子であしらい、単独でも残ることを望んだ。常に仲間の安全を想う彼女では、考え難い反応である。

「………そういやア、こつちに来てからちよくちよく口調が変わってたな。気のせいだと思ってたが……」

「元からああ言う喋り方だったわけじゃないの？」

「ううん、普段のあいつはもつとこう……オカンっぽかった」

「オカン!!?」

「ああ…そんな感じだったな」

考えてみればエレノアは、普段から姉や母など年長者を気取り、支える側に回っていた気がする。

しかしこの海に来てからの彼女は、目的のために手段を選ばない、自己中心的な口ぶりが目立っていたように思えた。

「天族はこれまで伝説上の存在って言われてきた……だから正直、何が正常で何が異常なのかおれにもわからない……今のエレノアには、細心の注意を払うべきだ」

「そうね……」

ルフィ、ゾロ、サンジに次ぐ実力者であり、ルフィの数少ないストッパーでもある。知らず識らずのうちに負担が溜まっていたのかもしれない。

何より仲間を襲う異変なのだから、どうにかして助けてやらねばと、チョッパーは気合を入れ直した。

「ー何にせよ、船底がこのあり様じゃ船降ろすわけにもいかねえし、とにかく船を直しとけ、チョッパー」

「え!? おれ!? わかった」

そこで、何やら退屈そうに辺りを見渡したゾロが、破損したメリー号の船底を見やり

ながらチョッパーに告げる。

慌てて頷く彼に背を向けると、ゾロは雲の海の向こう側、鬱蒼と広がる森を見つめ始めた。

「直しとけつて……あんた、何かする気？」

「どうにかして森へ入る。とりあえずここは拠点にしといた方がいいと思うんだ。きつとルフィ達がおれ達を探しにここへ向かつてる。言うだろ、『道に迷ったらそこを動くな』」

「あんたが一番動くな」

新たなシャツを着ながら、訝しげに見下ろしてくるナミにそう返す。

しかし悲しいことに、彼がそのセリフを吐くには、日頃の行いにおける信用が圧倒的に足りていなかった。

「この島には神がいるんだろ。ちよつと会って来る」

「やめなさいつたら!!? あんな恐ろしい奴に会ってどうすんのよ!!?」

「……さアなそいつの態度次第だ」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、頭上の枝から垂れ下がっている適当な蔓に狙いを定める。

その傲岸不遜な態度に、チョッパーは思わず感嘆の視線を向けていた。

「ゾロ……神様より偉そうだ」

「神官だつてこの島にいるのよ!!? とにかく、神は怒らせちゃいけないもんなの!!
? 世の中の常識でしょう!!」

「悪いがおれは、神に祈つた事はねエ」

あまりにも不遜な言葉と態度に、ナミは思わず顔を覆つて天を仰ぐ。

構わずゾロは祭壇の上に登り、蔓を引っ張つて強度を計りつつ、密林にもう一度視線を向けた。

「信じてもいいねエしな、だから何の義理もねエ」

「うお~~~~!!?」

「ああ神様、私はコイツと何の関りもありません」

感激した様子で目を輝かせるチョツパーの隣で、ナミは思い切り頭を抱える。どうしてこうも血気盛んな奴が元気で、常識人がダウンしているのかと。

そこに、もう一人の常識人が手を挙げ、ゾロの方へ進み出た。

「私も一緒に行つていいかしら?」

「あア!!? いいが足手まといになるなよ」

「ちよつと……ロビンまでどこ行くの!!?」

「ちよつと様子見ね……いざという時の逃げ道ぐらゐは把握しておこうと思つて」

知識面や度胸面で頼りになるロビンまでもが、未知の森に興味を示したことで、ナミはいよいよ悲痛な顔になった。

何故こうも強い人というのは、恐れを知らないのだろうか。

「ーそれにこれ見て…この祭壇、作られてから軽く1000年を経過してるわ。こういう歴史ある物って…疼くのよね、体が…」

普段、あまり表情に乏しいロビンが、ここぞとばかりに意欲的な笑みを見せてくる。考古学者として、謎に包まれた人工物を放置してはられない質のようだ。

「宝石のかけらでも見つけて来たら、少しはこの船の助けになるかしら」

「私も行きマス」

「ええ!!」

付け加えられたロビンの一言で、探索に消極的だったナミの態度が180度豹変する。

思わずギョツと振り向くチョッパは、異様に輝いているナミの両目に何故だか戦慄を覚えてしまった。

「あんなに恐がつてたのに……」

「エレノアの苦しみに比べたらマシよ!」

とても勇ましい様子で答えた彼女だったが、すぐにチョッパは気づく。

宝石と聞いたナミの目がお金Bに変わっていることに。

「…ウン!!? ア…ウウン!!? アーアアー!…」

「それは何、言う決まりなの?」

祭壇の上では、声の調子を整えたゾロが、用意した蔓に掴まって雲の海の上を渡っていく。

ロビンもそれに続き、最後にナミが危なっかしく渡りきり、三人はあつという間に向こう岸の密林の中へと入っていった。

「じゃあチョッパー、船番とエレノアの事頼むぞ!!?」

「よろしくね!!?」

「すぐ戻るから」

「おう!!? みんな気をつけて行けよ!!! 無事に帰って来いよ」

チョッパーは大きく手を振り、密林の奥へ進んでいく三人を見送る。

たった一人、船の番と仲間の看病を任された彼は、やや緊張した面持ちで息をついた。「ナミはゾロ達がいるから大丈夫かな、おれは恐くて行けないもんなア。みんな勇気があつてすげエなア、おれもその内勇敢になれるかな…!!?」

船番という役目がなくても、チョッパーには森に入る勇気がなかった。

ナミから聞かされた“神”の所業のことが恐ろしく、一步を踏み出せなかったのだ。

「……とにかくおれは今、やれる事をやろう！ 危険な森で一人で船番なんて信頼されてる証拠だ……!!? エレノアが動けない今、頼りになるのはおれだけだし!!?」

不安がないわけではなかったが、それを押し殺して気合を入れ直す。仲間なのだから、役割ぐらい果たさなければいる意味がない。

苦しむ仲間が船室にいるために、この役目はより一層の重要性を持つているのだ。

「そうだ!!? おれは一人でこの危険な場所に……はっ」

しかし、そこでチョツパーは気づく。

一番強いゾロがない今、自分を守ってくれる者など誰もいないのだということに。

(一番危険なおれだっ!!!)

雷に打たれたような衝撃を覚えながら、チョツパーはその場に立ち尽くす。

しばらくの間固まっていた彼は、ややあつて我に返ると、船のマストにかけられた笛——空の騎士から贈られたそれに目をやった。

「………よ………よし!!?」

領いたチョツパーは、思い切つて笛を首から下げる。

有事の際、それに遭遇した者が笛を吹いてもいいというナミとの決め事を思い出し、ホツと安堵の息をついた。

「これがあつてよかつた……!!? これでもしもの時は『空の騎士』が助けてくれるぞっ

……

「……気張りすぎだよ」

冷や汗を拭う仕草を取っていたチョツパーは、不意に背後から聞こえた声にビクツと全身を震わせる。

そんな彼に、エレノアは億劫そうな表情のまま、やれやれと肩をすくめた。

「そんな調子じゃ本当に何か起こったときに全力で動けないよ」

「!!? エレノア!!? お前……大丈夫なのか?!? 起きてても?!?」

「うんにゃ、正直今でも吐きそうなぐらい気持ち悪い」

「寝てろ!!!」

全く安心できない返答に、チョツパーは相手が病人であることも忘れ、思わず荒々しい声で吠える。

エレノアは気にした様子も見せず、気だるげに髪をかきあげ、チョツパーの隣に腰を下ろした。

「寝てられるわけないでしょ、仲間が危ないかもしれないのに……大丈夫、平気だよこれぐらい」

「ホ、ホントか? ホントに大丈夫なんだな?!?」

「ダイジョーブダイジョーブ……今でも索敵ぐらいはできるから……」

平然とした様子で、エレノアはチョッパに手を振る。そこに頭痛で苦しむ様子は見受けられず、まあ大丈夫かとチョッパの気を緩めさせる。

だが、二人は気付いていなかった。

巨大な鳥の背に乗り、槍を手に近づいてくる「神」の刺客の存在に。

「何だ、殺していい生け贄はお前ら2人か？」

「敵襲うううー！！！！」

「ピイイイ~~~~~！！！！」

すぐ目の前に現れた、見知らぬ敵意を全開にした男。

直後、少女の声と笛の音が、高らかに森島中に響き渡ったのだった。

第130話 “お前は誰だ”

焦げ臭さと、血の匂いが辺りに立ち込め始める。

ゴキーン、と鈍い打撃音が響いた直後、黒く焦げた甲板の一部に激しく叩きつけられる人影があった。

「ぐ……ア……!!?」

「うわあああああああ!!! やめろ~~~~~!!!」

血反吐を吐き、甲板を転げるエレノアと壊されていくメリー号を前にし、チョッパ―が悲痛な叫び声をあげる。

しかしそんな声にも構わず、槍を振り回す男は、攻撃の手を緩めることはしなかった。
「やめてくれよ!!! そいつも船も傷つけるのはやめてくれ!!!」

「この……いい加減に!!!」

額から血を流したエレノアが、フードの下から男を睨みつけ、グツと力強く飛び出し蹴りを放つ。

しかし男はそれを難なく躲し、至近距離に近づいた彼女の腹に槍を叩きつける。

「フン……」

「びっふっ!!!」

「エレノア!!! ウウ……………!!! くそオ!!!」

マストに叩きつけられ、ぼきぼきと嫌な音がエレノアの体から鳴る。ローブの下はすでに打撲痕と切り傷、火傷だらけになっていて、意識も若干遠のきかけていた。

「…もうやめてくれ!!! おれは…ふ…!!? 船番なんだ…!!! この船をよろしくと言われているんだ…!!!」

「……………さア……………どうする? フザ…!!!」

「ク〜カカ、クカカカカカカカカカ!!!」

「仲間は襲うなと言う…船は傷つけるなと言う…己は死にたくねエと言う。困ったな……………!!!」

槍を下ろした男は、傍で鳴く巨大で不気味な鳥に尋ね、自身の目を覆っていたゴークルを外す。

イライラとした様子でチョッパーを睨みつけたその男、神官の一人であるシユラが、吐き捨てるように呟いた。

「あアわがままな畜生共だ、実に腹立たしい。そんなに生きたきやなぜ弱い!!!」
「わア!!!」

ドスツ、と槍が突き出され、慌てて避けたチョッパーの背後のマストに突き刺さる。

途端に、槍が刺さった箇所が燃え、メリー号をさらに壊し始める。

「やめろ!!? それは燃えるヤリ!!! くっ……ぐウウウ!!!」

目を見開いたチヨツパーは、炎上を始めたマストに全身で抱きつき、渾身の力を込める。

すぐさまマストはメキメキと軋みをあげ、半ばから折られた直後、チヨツパーによって雲の海に投げ込まれ鎮火された。

「このやろ……!!!?」

それ以上の炎上を防ぐためとは言え、自らの手で船を壊してしまった悔しさから、涙目で拳を繰り出すチヨツパー。

しかしシユラは、まるで拳が来る位置をわかっているかのように、軽々と躲してみせた。

「何の犠牲もなく……お前は生きようというのか……? 誰かが生きるといふ事は……誰かが死ぬという事だ……この世とはそういうものさ……」

「……!!? クソみたいな言い分だね……!!?」

悟ったような、そしてそんな自分を見せびらかすように語るシユラに、膝をついたエレノアが唾を吐きながら告げる。

シユラはさして気にした様子も見せず、フンと小馬鹿にするような態度で話し始め

た。

「お前からここが…『生け贄の祭壇』だと知ってたか…?」

「あ…ああ!!? そんな事言つてた…」

「そうだ。お前達の仲間の残りが今、必死にここへ向かつてるところだ…!!?」

戸惑いの表情を返す二人に、シユラは語り聞かせる。

島には四つのエリアがあり、それぞれを司る神官がいる。そして一つのエリアに足を踏み入れた標的には、他の神官は手を出さない決まりがあるのだと。

「——だが、この『生け贄の祭壇』はどのエリアにも含まれない、いわばフリーエリア…誰が手を出そうが構わねエわけだ。しかし…まアそれは『試練』を受ける者達が死んでしまつてからの話」

人質として祭壇に置かれている『生け贄』と、それを助けに来る『罪人』。

祭壇に到達するまでの試練が終わるまで、少なくとも生贄の者達は生きていられるのだと、シユラは二人に語る。

「…じゃあ、ルファイ達がここへ助けに来てくれたら、おれ達も逃げていいのか?」

「ああ、そういう事だ…逃げられるものならな…このフリーエリアから…」

不穏なシユラの呟きも聞こえないほどに、チョッパ―はホツと安堵の息をついて肩を下ろす。

対してエレノアは油断することなく、ボロボロの体を引きずり、なんとか戦う姿勢を取り戻そうと奮闘していた。

「——しかしだ…それはつまり本来の『裁き』のルールであつて例外の場合少々、形を変えろ」

「例外…!?」

「——そう、例えば…生け贄が3人、向こうの森へつるを使つて勝手に脱走してしまつた場合…」

「へ…そんな場合か」

自分で言つてから、チョツパーは思わず凍つたように立ち尽くす。

まるで見てきたかのようなシユラの発言、そして自分が置かれているこの凄惨な状況に、ようやく彼の理解が追いついた。

（犯人はあいつだ!!!）

「神」に対しまりにも不適な態度を貫いていた一人の男と、それに影響されてついで行つた二人の女性。

その選択のせいでこんな状況に陥っているのかと、エレノアとチョツパーは愕然と頭を抱える他になかつた。

「誰かが逃げた罪は誰かが死んで詫びろ、『犠牲』という名のこの世の真理だ。——ま

た帰って来るとすればなおの事……己の過ちをより深く知るために、お前達の命を“神”に差し出せ!!!”

まさかの身内の裏切りに、呆然となる二人を氣遣うことなく、シユラは鳥の背に乗って空中に飛び立つ。

そして再びチョッパーに急接近し、鋭く尖った槍の穂先を構えた。

「い!!! いやだア~~~~!!!”

泣き喚きながら、せめて一発だけでもと振りかぶるチョッパー。

しかしそれも難なく防がれ、槍が彼の肩に突き刺さり、ポツと勢いよく炎が噴き上がった。

「チョッパー!!!? もういい……もういいよ!!! 死んじやう……もうここから逃げて!!!”

「いやだア!!!”

助けてに行こうとして、頭痛や体の痛みで動くこともままならないエレノアが叫ぶが、船番にこだわるチョッパーは退こうとしない。

このままでは確実に、二人とも殺される。残酷な笑みとともに、今度はエレノアに向けて槍を構えてくるシユラを前に、二人の表情が絶望に染まりかけた、その瞬間だった。

「少々待たせた」

ガキン、と甲高い音を立てて、空中で二振りの槍が激突する。

標的を仕留め損ねたシユラは、ギロリと視線を鋭くし、目の前で槍を構える空の騎士を名乗る老人を憎々しげに、同時に好戦的に睨みつけた。

「……!!! あんたは……!!!」

「空の騎士……!!!」

「フン……こりや珍しい客が来た、ガン・フォール!!!」

再び甲高い金属音とともに、それぞれの相棒の背に乗った戦士達が距離を取る。

仕切り直すように、空中で大きく宙返りをした両者は、相手を注意深く見定めながら、自身の得物を握り直した。

「なかなかの相手だ、不足ない。少し手荒に行こうぞ、ピエール」

「先代の老いぼれが何用だ!!? 遊んでやるか……フザ」

「吠えておれ!!!」

「この島にや、神〃は2人といらん!!!」

互いに吠えあい、一斉に向かい合って接近する。

シユラの突き出した槍が空の騎士の頬を裂く。だがその時にはすでに、シユラの胸に空の騎士が構えた籠手が突きつけられる。

ドンツ、と凄まじい衝撃波を放ち、神官を大きく吹き飛ばしてみせた。

「——もうひと押し必要だ……ピエール!!?」

「ピエ〜!!!」

反動でやや後退するも、気を抜くことなく再び速度を高めて天を舞う空の騎士とピエール。

ビリビリと痛みが走る胸を押さえたシユラは、ニヤリと意味深な笑みを浮かべ、向かってくる老人と鳥を見定めた。

「……わかつていてここへ来たのだろうか……!!? お前はすでに犯罪者なんだぜ……!!? あア腹立たしき愚か者への怒りの求道思い知れ」

傷を負いながらも、微塵も臆した様子を見せない神官の一人。

そして彼は、相棒の背に乗って空を舞いながら、大きく手を振り上げた。

「紐の試練!!!」

??

「井戸が…そんなにおかしいか?」

「ええ……樹の下敷きになるなんて考えられない。自然と文明のバランスがとれていないのよ」

巨大な樹の根に絡め取られた井戸を見て、ロビンが訝しげな表情で呟く。

ゾロにはただの過去の遺物でしかないが、考古学者である彼女は全く別の面をみる。全くぬぐいきれない違和感を示す、島を調べるための重要なヒントとして。

「……まあ何にしても、この雲の川を攻略しねエと……この森を歩き回る事はできねエな……神に会うどころじゃねエぞ」

辺りに張り巡らされたミルキーロードを見上げ、ゾロが億劫そうに呟く。

見渡す限りに伸びた雲の道は、まるで迷路のようなややこしい様相を見せている。なんの準備もなしに足を踏み入れるのは、あまりにも危険に思えた。

「文明はこの樹の成長を予測できなかった……こんなケース初めて見たわ」

「おいナミ!!? 上から何か見えたか!!?」

いまだにブツブツと呟いているロビンを放置し、ゾロは大樹の枝に登ったナミに呼びかける。

高いところから全貌を調べると、蔓を伝って上に向かった彼女は、しばらくの間黙り込んでいたようだった。

「神の住む島……アツパーヤード……」

「おい何とか言ったらどうなんだ!!? 神はいたか!!?」

「……何か見えたの?」

呆然と、自身の目を疑っているような響きが頭上から聞こえてくる。

ゾロとロビンが案じるような声をかけてくるが、一切反応することもできないまま、ナミは覗き込んでいた双眼鏡から目を離れた。

「この島……まさか!!!」

ある重大な秘密に到達し、絶句するナミ。

その位置からそう遠くない、ある一件の奇妙な古い家の中で、ごそごそと何者かが蠢く音が響いた。

「……何だア、今日は妙に島がざわつきやがる。うるせエなア……!!!」

鬱陶しそうに吐き捨てたその人物は、ぼりぼりと頭をかきながら、眠たげな目を「声」が聞こえる方へと向けるのだった。

??

祭壇の真上の空間を、二羽の鳥が飛び交う。

それぞれの背中に乗る戦士達が、互いに得物を振りかざし、激突を繰り返す。お互いの姿しか見えていないような、狂気的な形相だった。

「オ……オオ……!!! 何やってんだかわかんねえ…スゲエ…」

「…互角にやり合ってる…」

その光景を、エレノアもチョッパも啞然とした様子で見上げるばかり。

目で追うのも難しいほどの激戦に、息を呑んでいるエレノアとは異なり、チョッパの体にはぞくりと寒気に似た震えが走っていた。

「……もはやお前達と交渉できるとは思っておらぬ!!!」

「フン!!! 相変わらず生ぬるい!!!」

戦士達が互いに振るう槍は、常に相手の急所を狙い続ける。

わずかな判断の差が勝敗を、そして生死を分ける凄まじい戦い。まるで獣のような咆哮をあげ、空の騎士とシユラがぶつかり合っていた。

「おおおおおお!!!」

「ああああああ!!!」

一進一退、お互いにわずかにも退かない、互角の戦いが繰り広げられる祭壇の真上。

その均衡が、ある瞬間を境に明確に崩れ始めた。空の騎士とピエールの動きが、目に見えて鈍り始めたのだ。

「!!?」

「様子がおかしい……!!?」

ガクン、と見えない力で封じ込められたように、空の騎士が顔色を変えて固まる。

その様に、唯一真実を知るシユラのみがニヤリとおぞましい笑みを浮かべた。

「………かかったな……!!? カハハハ、どうかしたかガン・フオール!!!」

「おのれ……!!! 何をした………!!!」

「死ぬ者に、答えは要るまい」

キツと目を鋭くし、不調を見せる自身の体への戸惑いを押し殺す空の騎士。

次の瞬間、シユラの突き出した槍が騎士の鎧を貫き、反対側にまで突き抜ける。その後、凄まじい量の炎が噴き出し、老人の体を包み込んだ。

「摩訶不思議 “紐の試練” ……!!! “神の島” ……入るはいいが我ら5神官の険しき試練…ちよつとやそつとで破れるものと思うな!!!」

ガフツ、と血を吐き、白目を剥く空の騎士。

シユラが槍を引き抜いた直後、老人の体は力なくピエールの背から離れ、雲の海のと真ん中へと沈んでいった。

「“神” エネルは貴く、遠いお方だ」

「空の騎士~~~~っ!!!」

窮地を救ってくれた恩人の、予想もしない展開にチョツパーが悲鳴をあげる。

ぶくぶくと雲の海面に気泡が上がるが、その勢いは弱すぎ、見る者にとんでもなくらしいの不安を抱かせた。

「ピエ~~~~!!! ピエ~~~~!!!」

「()には空サメが……………!!!」

「()の…!!!」

残されたピエールも騒ぎ、飛び込むには危険すぎる海にチョツパーが頭を抱える。

その瞬間、ぎりつと齒を食いしばったエレノアがローブを脱ぎ捨て、一気に羽ばたいてシユラへと肉薄していった。

「いい加減にしろオ!!!」

「! お前は…」

目の前に現れた天使に、シユラの目が大きく見開かれる。だが、それも一瞬のことで、振るわれた蹴りも容易く払われ、逆に叩き落される羽目になる。

ゴキイツ、とひととき嫌な音が響き渡り、甲板を陥没させたエレノアは、がくりと力を失い項垂れた。

「ホウ…!!? こいつは珍しい生け贄だ……そうだ、お前だけは直接連れて行こう。きつと『神』エネルギーもお喜びになるだろう」

「うわああああエレノア…!!!」

沈黙したエレノアに、その珍しくも美しい容貌に興味をそそられたのか、ニヤリと笑みを浮かべたシユラが無遠慮に近づく。

無力感に苛まれ、叫ぶことしかできないチョッパの目の前で、シユラの手がエレノアに触れようとした、その時だった。

「ん?」

ゆらりと、倒れ込んでいたエレノアの体が、不自然な動きで起き上がる。

糸で吊られ、無理やり立たされたかのような奇妙な体勢で、天使はシユラの目の前に立ちはだかつた。

「……………? え……………」

「? 何だ……………」

チヨツパーも同じく、様子のおかしい仲間の姿を凝視し声を途切れさせる。

先ほど、確かに彼女は氣を失っていたはず。そう思い、シユラとともに訝しげに見つめ続ける。

その直後、目にも留まらぬ速さで繰り出されたエレノアの拳が、凄まじい威力をもつてシユラの腹を貫いた。

「!!??」

くの字に折りたたまれるほどに、シユラの体が強烈な一撃で宙に浮く。

白目を剥いたシユラは、途端に大量の血を口から吐き出し、かすかなうめき声もあける間も無く吹っ飛ばされる。

ドボンッ、と彼が海に沈んだところで、エレノアが盛大な舌打ちをこぼした。

「薄汚い手で触るな下郎が…………!! この程度の力しか持てぬフヌケに、我が身穢させるわけなからうが」

ゴキバキと手を鳴らし、剣呑な青紫色の光を瞳に宿したエレノアが、凄まじい怒りを

あらわにした声で呟く。

シユラの相棒の鳥が逃げ去り、チョツパーも腰を抜かす前で、エレノアはふと自身の手を見下ろした。

「……脆いなア、この程度で震えが走るか。今代の子孫はちと脆弱なようだ……この調子では心もとないな」

ブルブルと震える手を見下ろし、落胆した様子でため息をつくエレノア。

そんな彼女の前で、ガクガクと膝を震わせていたチョツパーは、震える声で思わず尋ねていた。

「……………お前……………誰だ……………?!?!」

エレノアはじつと、へたり込むチョツパーを見やり黙り込む。

すると、突如エレノアは顔をしかめ、頭を押さえて体をぐらつかせ始めた。

「むウ……………今はまだ、さほど起きていられんようだ。残念だが今日はここまで……次なる機会を待つとしよう」

グラグラと頭を揺らしながら、エレノアが気だるげに呟く。

そしてふと、その視線が静かにさざめく雲の海の方へと向けられ、大きなため息がこぼれた。

「だが、行き掛けの駄賃……………そして此奴を守った礼だ。助けてやろう」

そういつてエレノアは、スウツと息を吸い込み、なにやら喉奥で骨を動かすような仕草を見せる。

チョツパーからいぶかしむ視線が送られ出した時、彼女の喉奥から甲高い音が響き渡った。

「!!!」

それはおよそ人の声では出せないような、奇妙な周波数の音。

放たれたそれが森の奥にまで広がり、余韻を響かせた直後のことだった。

「ジョ~~~~~!!!」

「ジョ~~~~~!!!」

バサバサと枝葉をかき分け、いくつもの巨大な影が飛び出してくる。

その姿は、大ききこそはるかに違えども、地上の海で間近で目撃したあの特殊な性質を持つ鳥と全く同じものだった。

「……………でつかいサウスバード……………なんで……………?」

「…此奴の身、今しばし頼むぞ……………。約束の日……………まで……………」

嘩然と、頭上に舞い降りた巨大なサウスバードに目を奪われるチョツパー。

言葉をなくして固まる彼に向けて、エレノアは眠たげにそう告げると、そのままぱたりと倒れこみ、また寝息を立て始めたのだった。

第131話 『引き裂かれた島』

目の前にあるソレに、ゾロたちは啞然と立ち尽くす。

ソレは激しく見覚えがある物で、まず間違いなくここにあることは間違っていると確信できる代物で、訳がわからなくなっていた。

「……どういう事だ？ ……何で地上にあったもんがここに……同じものだろう？」

「……いいえ、違うわ！ ……これは地上で見たものの『片割れ』よ」

愕然と声をこぼすゾロに、ロビンが強く否定の言葉を吐く。

蔦に覆われ、細部がよくわからなくなっているものの、よくよく見れば異なる部分があるかと伝える。

その事実によって、段々とソレの、いやこの島の正体が判明し始めた。

「つまりこの島はもともと地上にあった島なのよ……そもそも……この島は『島雲』でできていない事が不思議だった……」

「……おかしな家だとは思った……あの家には2階があるのに、2階へ上がる階段がなかったから……」

思い返されるのは、空島に挑む前夜のお祭り騒ぎ。狭い室内に何人も入り、窮屈な思

いをしながらも精一杯騒ぎまくった、あの夜のこと。

夢を追い続けた男の住処は、あまりに異様な建ち方をしていたことが思い出された。

「……あんな絶壁に家を建てる理由もない……あの海岸は、『島の裂け目』だったんだ

……!!! ここは引き裂かれた島の片割れ、ここは……!!! 『ジャヤ』なのよ!!!」

崖のスレスレに、まるでケーキを半分に分けたかのような形で建つ、一軒の家。

ジャヤのクリケットの住まいと瓜二つのそれがそこに悠然と建っていたのだ。

「……じゃあ昔、何らかの理由で……あの島は真つ2つに割れて……その半分が空へ来た」と

「——かつて地上にあつて……ノーランドが確認した『黄金郷』は海に沈んだわけじゃ

ない……!!!」

海に潜り続けて、見つかるはずもない。音波で探つても、痕跡が見つかる訳がない。

莫大な黄金を秘めた遺跡は、實在さえ今や疑われた空の海に、神が住む島として浮き

続けていたのだから。

「400年間……ジャヤはずつと……!!! 空を飛んでたんだ……!!!」

誰も予想しなかったであろうその真実に迫り浮き、ナミは思わずゴクリとつばを飲

む。

そして、両拳をブルブルと震わせたかと思うと、天に向かって勢いよく突き出し、満

面の笑顔で歓声を上げ始めた。

「うお~~~~~っ!! ありがとう神様♡」

見たことのないくらい喜びようを見せ、航海士ははしやぎまくる。

モックタウンでバカにされ、*「築き上げる海流」*で危うく死にそうな目に遭って、妙な連中に命を狙われ、さまざまな災難に襲われ続けたこの旅。

その苦勞を帳消しにできるほどの感動が、今のナミを満たしていた。

「ああ…苦勞の末行きついた空島…それが*「黄金郷」*だったなんて…日頃の行いがいい私への、これはご褒美ね♡ 神様」

「お前…この島の*「神」*が恐かったんじゃねエのかよ…」

「神!? …ああ…ナンボのもんよ!!? 金より値打ちあんの!?」

呆れた様子で半目を向けるゾロに、ころつと表情を変えてナミが返す。

散々危険だと、さっさと脱出すべきだと騒いでいたと言うのに、いつそ清々しいまでの掌返しに、二人ともこめかみから冷や汗を流した。

「…あなたさつき『神様ありがとう』って…」

「言ってる事メチャクチャだな、コイツ…」

頬を引き攣らせるゾロとロビンだが、莫大な黄金への欲に取り憑かれた今の彼女に、正論など意味をなさないだろう。

一向に興奮が収まる様子のない彼女が、そのうち落ち着くのを待っていた時だった。

「うるせエガキ共だな……人ん家の前でよ……!!!」

「!? 誰だ!!」

「ヒイツ!!? ゴメンナサイゴメンナサイ嘘ですちやんと感謝してます神様!!!」

「……………」

不意に、家の片割れの中から聞こえてきた声に、即座に警戒体制に入る二人。

途端に頭を抱え、ゾロたちを盾にして泣き言を吐く波にまた呆れながら、家の中からのつそりと体を起こした相手を、油断なく睨みつける。

「さつきからギャーギャー……てめエらだな……? あの『バケモノ海流』に乗ってやってきやがったのは」

「!!? 何でそれを……」

険しい視線を向けるゾロたちは、顔を出した声の主——白い髭とハットが目立つ、大柄な老人の発言に目を見開く。

「ここまでどうやってきたかを言い当てられ、ますます警戒を強めるゾロたちに老人は気難しそうな表情をさらに響め、ため息混じりに語り始めた。

「おれの名は……グロースター・アーレン。お前達と同じで……『突き上げる海流』に吹っ飛ばされてこの天国まで来ちまった……黄金狂いの考古学者よ」

??

さあつ、と静かな風が吹き抜ける夜の始まりの頃。

島のあちこち、各々が司る領域に陣取る三人の男たちが、島からふたつの強者の声が消えたことに反応を示す。

「サトリとシユラが落ちたか…^{マントラ}心剛を乱したな。未熟者め……………」

仲間がやられても、彼らにそう狼狽する様子は見られない。

むしろ、自分が強く目立つのに邪魔な存在が二つなくなつたことに精製しているような、そんな響きを感じさせていた。

「哀しき戦士の声を感じるか、ホーリー……」

「ワン!!!」

「……………何度戦り合おうと結果は明らか……」

今の彼らが注目しているのは、島中の罨を打ち破つて進んでくる無数の声の主たち。

島を、空の海を支配する自分たちに、ただならぬ闘志を燃やして向かってくる、ゲリラの中でも選りすぐりの実力者達である。

「……………妙な声を感じた気がしたが…所詮往き着く先はみな同じ……………」

遺跡に腰を下ろし、小石を手で弄びながら佇んでいた長髪の男も、近づいてくる声に眉間の皺を深くさせる。

その足元で、もこもこと島雲が一人でに形を変え、人に似た姿に形取られていく。ま

るで、神懸かった力で命が生み出されているかのように。

「おれの結末は…変わらんない」

ギン、と赤く血のように輝く目が、森の向こう側に向けられる。

その直後、戦いの始まりを告げる合図として、凄まじい威力の爆発が島のどこかで起こった。

「来たなシャンディア」

??

「チョッパー!!?! エレノア!!?! どこ!!?!」

時と場所が変わり、メリー号のある祭壇まで戻ってきたゾロ達三人と、その後をついてきたアーレン。

だが、視界に入った変わり果てたメリー号の姿に、ナミは顔を真っ青に染めて息を呑み、大声で呼びかけ始めた。

「何があつたの!!?! 2人とも!!?!」

「メリー号のマストがねエぞ…!!?!? どんな奇抜な改造を施したんだ、あいつら」

「そんなわけないでしょ!!?!? 敵襲を受けたのよ!!?!?」

原型をほとんど留めていない船の姿に、呑気な感想をこぼすゾロにナミは怒鳴る。

船番を務めているはずの仲間達の姿が見えないことに、まさかと言う考えを抱いたそ

の時、アーレンが唸るような声を発した。

「……どうにか、敵は退けたようだがな。見ろ」

「!!? ヒイ!!!」

アーレンが顎で示した方に目をやり、即座にナミが悲鳴をあげる。

島雲と陸の境に浮いていた、血まみれになった見慣れない男の姿に、ゾロとロビンも僅かに表情を変える。

彼の腹部に残る陥没したような傷跡に、ぞくりと寒気を覚えていた。

「神官の一人のシユラだ……だが、こうもこいつがあつさり……?」

「……チョッパー!!? 遅くなってごめん!!? エレノア!!! いるんでしょ!!? 返事して!!!」

2人とも!!!」

「……………八つ裂きにされたのかしら」

「コワイ想像やめてよ!!!」

「おいおめエら!!! いねエのか!!? 何かあったのか!!?」

神官というのはよく分からないが、この状況を見るにこの男に襲撃されたのは間違いない。

それを撃退したのがどちらかは知らないが、二人とも無事では済まないだろうと、ナミは戻ってくるのが遅れたことを申し訳なく思いながら呼び続けた。

「……べ……」

そしてやがて、メリー号の中から細かい声が聞こえる。

恐る恐る顔をのぞかせたチョッパは、ゾロ達の姿を目にすると、だーっと滝のように涙を流して声を発した。

「別になんもコワイ事ながつたぞ」

「……………わかつたわかつた、あんたは強いから。あつた事全部話しなさい」

男の意地か、必死に虚勢を張るチョッパに呆れるも、ひとまず安堵したナミが肩をすくめる。

そして船に戻ろうとした時、祭壇に続くミルクィロードの一本から、聴き慣れた騒がしい声が聞こえてきた。

「おオ!!? ホラ見ろ!!? ゴーイングメリー号だ!!! あれが祭壇だア!!?」

「ア~~~~~~~~!!? ナミさ~~~~ん♡ エレノアちゃん♡ ロビンちゃん♡ 恋の試練”越えてきたよホホ~~~~っ!!?”」

「恐かつたか?!? お前ら!!? このキャプテン・ウソップが来たからにはもう安心だ!!!」

「何だ…試練つてあれだけだったのか……………」

振り向けば、カラスの船首のついた小舟に乗ったルフィ達が向かってくるのが見え

る。

続々と、計ったようなタイミングで仲間が集まってきたことに、ホッと安堵の息がこぼれた。

「あつちも元氣みたいね…一安心」

思わず眩き、未だ船の中から姿を見せないもう一人の仲間のもとに向かおうとするナミ。

その際、小舟に乗るルフィが、ゾロ達と共にいる見慣れない老人に気付き、訝しげな表情を浮かべた。

「ん？ 誰だ、あのおっさん」

「えエ〜〜〜!!?! おっさんがひしがたのおっさんの友達〜!!?!」

老人が口にした正体に、ルフィ達は思わず一斉に驚愕の声をあげる。

ナミ達が試練の生け贄に連れて行かれたり、実はそれはコニスが敵を呼んだからであり、それを告白したコニスが危うく殺されそうになったり、間一髪で空の騎士が助けに入ったり、試練に挑んで死にかけたり、神官と戦って辛くも勝利を勝ち取ったりと、目まぐるしく事態が動き続けた今日一日。

それらに負けず劣らずの衝撃で、ゾロ達を除く全員が口をあんぐりと開けて硬直し

た。

「…ああ、クリケツトの奴が世話になったみてエだな」

「『突き上げる海流』に吹っ飛ばされて行方不明になったって……!!!
生きてたのか!!?」

「小船一つを犠牲にな………流石にありやあ、二度とゴメンだ」

ぶるりと両肩を震わせ、アーレンが嫌そうに顔を歪める。

それに深い同情を覚えるも、詳しい話を聞かなければとウソップが我に返り、アーレンと視線を合わせるために向き合った。

「それが何だってこんなところで……」

「バカやろ、おれの事より大事な事があるだろうが!!?」

「!!? そうだ、空の騎士とエレノアが!!」

アーレンの指摘で、チョップパーも衝撃から立ち直って動き出す。

再集結を果たした一味は慌てて、船と仲間を守るために奮闘した二人が、静かに横になっっている船室に駆け込んでいった。

「——ただでくれた笛一コの為に……ここまで戦ってくれたのか……!!?」

「空の騎士が来てくれなかったら、おれ達も船もダメだった」

「色々聞きてエ事もあるが……眼を覚ますまで待とう。おめエもありがとな」

「ピエ〜」

深い眠りにつく空の騎士を見下ろし、サンジが思わず感嘆の声をあげる。

その義理堅い心がなければ、全員船を失ってどうしようもなくなっていたところだったのだ。感謝しても仕切れない行いである。

「…で、エレノアちゃんはどうしちまったんだ？ 別人みたいになったつつつたが……」

「うん…今度は見間違いでも聞き間違いでもなかった。本当にエレノア…知らない奴みたいになってた。匂いも変わってたし」

「何がどうなってんのか……あとで本人に確かめるべきだな」

困惑しっぱなしのチョッパーからそれ以上聞くことはできず、サンジは一旦追求をやめる。

一旦全員で船室から出て、燦々たる有様を晒すメリー号を見渡し、やや億劫そうに肩をすくめる。とにかく、やることや確認することが山積みになっていた。

「船もこの状態、日も落ちてきてるしエンジェル島へ帰るのは明日になりそうだな——とりあえず森へ下りて、湖畔にキャンプをはろう。もしもの時はここよりいくらか戦い易いだろ」

「うおーっ!!? やったー!!! キャンプだ〜〜!!! 宴だ〜〜!!!」

キャンプと聞いて、楽しいことが何より好きナルフィが途端にはしやぎ出す。

それに待ったをかけるのは当然、試練の間常にビビりっぱなしだったウソツプである。

「えエ!? おい、ちよつと待てよ、ここは敵陣だぞ!!? キャンプって…」

こんな危険な場所で、そんな目立つようなことをしていいのかと苦言をこぼす、一味で最も臆病な男。

だが、それで一味の頭が止まるはずもなかった。

「よーし…えーみんな色々な報告ご苦労!!? それぞれの情報で色々な事がわかってきたな」

通常に戻ったウソツプが、紙にまとめた情報を木の幹に貼り、ばんばんと棒で叩いて示す。

ナミ達から、そしてチョッパーから集めた情報は、彼を怯えから解放するだけの力を有していたようだ。

「だが、何と言っても今回の目玉情報はコレだっ!!? この島は何と、猿山連合軍が探し求めていた『黄金郷』だったのだ!!?」

「マジで——っ!!?」

「さっき言ったでしょ!!?」

焚き火で焼いた空サメをかけるルフィが、ウソツプのセリフに驚愕を示す。

が、それはすでにナミの事前の説明で明らかになったことであり、他の面々に驚いた様子は無い。

驚くよりも前に、強い興奮と期待が湧き上がっていた。

「黄金かア、こんな冒険待ってたんだ!!?」

「そう来なくちゃ、話が早いわ!!?」

「コラコラルフィ!!? お前さっきのゲリラの忠告、忘れたのかよ!!?」

「神が怒るぞ!!?」

「フフ……面白そうね……!!」

「まあ、海賊がお宝目前で黙ってるわけにやいかねエよな」

「敵も充分……!!? こりゃサバイバルって事になるな」

急速に開けていく先の道に、一味は各々で好戦的な笑みを浮かべる。

単なる好奇心から進んできた道が、莫大な財宝という海賊らしい獲物に繋がったのだ。おとなしくしていることなど、できるはずもなかった。

「ケツ……こんな状況でずいぶん気楽な連中だ」

「よ……しやるか!!! 黄金探し!!!」

アーレンが呆れた様子で吐き捨てるのをよそに、ルフィはさらにやる気をみなぎらせる。

その目は、まるで子供のようキラキラと輝いて見えた。

第132話 〃髑髏の右目〃

グググツと、熱された石で煮込まれた空サメのシチューが、あたりに香ばしい匂いを漂わせる。

サンジが主導で料理を完成させる中、一味はそれぞれで薬を作ったり船を修理したり、各自の分野で明日のための準備を行なっていた。

「…やっぱりね!!? こういうことだったのか…!!?」

「大した腕だな…:おれが数年かけて辿りついた真実にたつた一日で追いつくとは」

二枚の紙を見比べ、満足げな笑みを浮かべるナミに、アーレンが感嘆の眼差しを送る。彼と情報を比較しあつたナミは、いくつか問答を繰り返すと、散らばっている仲間達を呼び集める。

「じゃあみんな! 明日、どう行動すべきか!!? 作戦会議を始めるわよ!!?」

「おオ!!?」

チョップやウソップは一時作業を中断し、ナミの元に集まる。

サンジの用意したシチューの周りに輪を描くように腰掛け、互いに顔を合わせる形をとる。が、約一名いまだに顔を見せていないことに全員が気づいた。

「エレノアは？」

「船室で寝てる。うなされてるけど、さつきよりはだいぶましになってた」

「そうか…寝て治りやいいがな」

主治医のチョップパーの診断に、ゾロは一応の安堵を見せる。

あまりにも唐突な体調の悪化で油断は禁物だが、具合が多少よくなっているのならばこまで不安になることもないだろう。

「んまいですね〜!!? このシチューはまた」

「お前さん、さつき空サメ丸々一匹食ってなかったか」

「まアあれはつなぎだな」

空の騎士もまだ目を覚さないため、一味はエレノアに申し訳なきを感じつつも、先に夕食を取ることにする。

そんな空気の中でも相変わらず呑気なルフィを放置し、ナミが咳払いで仲間の注目を集めた。

「いい? まずノーランドの絵本のおさらいよ。彼が初めて“黄金郷”を見たのは40年前。それから数年後、再びジャヤを訪れた時には…もう、黄金遺跡はなかった。そうよね、アーレンさん」

「……………あア」

一味の輪に加わり、シチューの注がれた皿を手にしたアーレンが神妙な表情で頷く。気難しい印象を覚えるこの老人だが、礼儀さえきちんと弁えていけば、そう話しくい相手でもないようだ。

「——つまりその数年の間に、ジャヤの片割れであるこの島は上空へやってきた」

「“突き上げる海流”に乗ってか」

「ええ、それしか考えられない。海底での爆発位置は毎回違うとクリケットさんが言っていたから」

「あの規模だもんな……島も飛ぶぞ」

実際に天空を登ってきたウソツプは、今や感心した様子で十数時間前のことを思い出す。

本来は絶対に避けるべき災害と称される自然現象。それが島の真下で起こったとならば、どれだけの被害が生じるかなど、想像するだけで恐ろしい。

しかしそこで、納得いかない様子でゾロが口を挟む。

「——でもよ、ジャヤでおれ達が入った森とこの森が同一とは、とても思えねエが」

「それは……きつと“海雲”や“島雲”を作る成分のせいね。この空島を包む環境は動植物を異常な速度で育む力があるみたい」

ジャヤと同一の島だと言われても、あまりにもかけ離れた景色であるため、ゾロはい

まだに信じられない気分でいるらしい。

そこにロビンが予測を立てるが、検証する暇がないため、ああそういうことかとなんとなく理解するくらいしかできなかった。

「だとすれば森にのみ込まれた文明にも納得がいくわ」

「空の騎士を助けてくれたサウスバードもこんなにでかかったんだ」

「それだが…そのサウスバードがエレノアちゃんの命令を聞いてそいつを助けたんだ？」

「それがわかんねえんだ。サウスバードはみんな、空の騎士を『神様』、エレノアを『真祖様』って呼んでて…」

「神?!?!?」

困惑気味に当時のことを思い出すチョッパ。

その際に聞こえた単語に、シチューを口いっばいに頬張ったルフィが思わず目を見開く。

「じゃ何だ、このおっさんブツ飛ばしたらいいのか?!?!?」

「いいワケあるかア!!! このストンキョーが!!!」

ピエールがビクツと震えるが、その前にウソップが鬼の形相で怒鳴りつけ、空の騎士はなんとか危機を乗り越える。

続いてサンジが、先ほどから黙り込んだままのアーレンに目をやり、訝しげに問いかける。

「あんたは何か知ってるのか？ この島に長エこといるんだろ？」

「さてな……調べようにもあたりはみんな連中のナワバリだ。うかつに調査に行ったらじき餌食にされらァ」

ガツガツとシチューをかきこんでから、アーレンは肩をすくめる。

相変わらずの険しい表情だが、話を聞いている間に警戒心が薄れたのか、際ほどよりは柔らかい雰囲気になり始めた気がした。

「だが……あたりに点在する遺跡を調べてわかったことはいくつかある。〱空島〱の民には、〱元から空にいた連中〱と〱後からやって来た連中〱がいる……そして元々〱神の島〱には、〱後からやって来た連中〱が住んでいたって事だ」

アーレンがスプーンで示すのは、メリー号が置かれた祭壇の側面部分。

何やら生物と人が描かれたような、奇妙な模様が彫られたそれを示すが、ルフィたちにはそれが何を表しているのか全くわからない。

しかしそれを疑う必要がないほど、長年この島に潜み続けた男の言葉は重く感じられた。

「島にいた連中の名は〱シャンディア〱。この島に……つまりはジャヤに住んでいた先住

民族が、奴らの祖先だつて事らしい」

一通り語り終えて、アーレンはまたシチューにがつつき始める。

あまり急かしても意味はない判断したナミは、それ以上問いただすことはせず、さつきまで見ていた二枚の紙を持ち出しながら、一同の目を見渡した。

「——とにかく、ノーランドの航海日誌に書かれてた『黄金郷』についての情報を思い出して！」

「黄金を見た」

「つつたりめエだこのスツトコドツコイ!!!」

今更すぎる一文を自慢げに声に出すルフイに、またウソツプが鬼の形相で怒鳴る。

一味の頭の知能に関しては既に諦めているゾロたちは気にせず、何か真実をつかんでいるらしいナミに注目しながら、自身の記憶を掘り起こした。

「それも『巨大な鐘型の黄金』だつて言つてたな」

「……日誌の……最後のページに理解できない言葉があつたわ。ノーランドが死ぬ間際に残したという文章」

一日があまりに濃厚だったために、そしてかなり抽象的な表現だったために、あまり重要そうには思えなかつた不思議な一文。

思い出すのに苦労しているゾロたちを見かねてか、アーレンがため息混じりにその単

語を口にした。

「……『罽鞞の右目に黄金を見た』」

「それよ!!?」

「おれもどうかその謎については解決できてな……ジャヤの地図と、何とか手に入れたスカイピアの地図の縮尺を合わせて、おれが今住んでる家の位置を合わせてみた。するとだ……」

アーレンに視線で促され、ナミが全員の目に入るように二枚の紙を置く。

一枚は、沈没船の中からルフイが見つけたスカイピアの地図。もう一枚は、ロビオンが手に入れてきたジャヤの地図。

二枚の地図をアーレンが重ね合わせ。かつての姿を取り戻させていく、すると。

「ほれ、こいつが400年前のジャヤの姿よ!!」

わかたれていた二つの島が一つとなり、過去の姿が描き出される。

スカイピアの丸い形の陸地に、ジャヤのコの字型の陸地。それらが合わさり現れたのは、海上からおどろおどろしく空を見上げる、骸骨の顔だった。

「……………ドクロに見える!!」

「どう?」

「スゲエ!!?」

なんともスケールの大きな謎解きに、ルフィたちは思わず感激した様子で絶句する。その謎に一人でたどり着いたアーレンの隣で、つい先ほど知ったばかりで興奮したままのナミは、誇らしげに笑みを浮かべている。

賞賛の言葉も求めないほどに、気づいた真実に驚愕しているようだ。

「……じゃ『髑髏の右目』ってのは……」

「……だ！」

「ノーランドが言いたかったのは島の全形の事よ!!? だけど今島は半分しかないんだもの、この謎が解けるわけがなかった」

今ならノーランドの当時の絶望も、それをホラだと笑った者たちの気持ちもわかる気がする。地上にないものをどれだけ探そうとも、わかるはずのない壮大な真実なのだから。

「明日は真つすぐにこのポイントを目指せばいいのよ。その間、船も放つとけないから2班に分かれて動きましよう!!?」

「位置はおれが把握してる。案内してやつから何かあつたら頼むぜ」

みるみるうちにやる気をみなぎらせていく一味に、アーレンがニヤリと不敵な笑みを見せる。

友と共に黄金郷を探し続け、災害に巻き込まれた先で出会った千載一遇の機会。ア―

レンにとつても、願ったり叶ったりの状況のようだ。

「間違いない!!? この場所で莫大な黄金が私達を待つてる!!!」

それまでの不満や苛立ちを帳消しにする勢いで、期待をあらわにするナミたち。

そんな中、ふとした疑問を抱いたウソツプが真顔に戻り、アーレンに訝しげな視線を向けた。

「おっさんは何で……初対面のおれ達にそんなに手を貸してくれんだ? 一応は黄金探しのライバルだぜ?」

「…………クリケツトはおれの……まア幼馴染みてエなもんでな、あいつの苦労は昔から知ってた」

アーレンはやや言いづらそうに目を逸らすも、すぐに観念したように語り出す。

はしゃいでいたナミたちも、クリケツトから聞いた過去を思い出し、思い出しながら話し続ける老人を見つめて黙り込んだ。

「ヒデエもんだつたよ……顔も知らねエどつかのクソガキが、あいつを見て笑いやがる……『見ろ、うそつきの末裔だ』『関わったら一緒に死刑にされるぞ!』……………親もそれを一緒にになって笑いやがる。先祖の因果だつってな……」

吐き捨てるようにつぶやくアーレンに、ナミたちも思わず表情を険しくさせる。

迫害を受けた本人の話もだが、それを見ていた関係者の話も、十分に心を抉る内容で

ある。老人たちがこうもひねくれた性格になったのも、わかる気がした。

「おれア偶然この島に流れ着いたが、気分は今の方が断然マシだ……あいつを笑うバカがどこにもいねエからな。だがそれ以上に……あいつを一人にしちまった後悔が残った」

眉間に皺を寄せていたアーレンだったが、不意にその口元に笑みが浮かぶ。

訝しげに見つめるルフイたちに、アーレンは先ほどとは真逆の、心底嬉しそうな笑みを返し、優しい声で告げた。

「だからアイツの夢を笑わなかったおめエらにや……ちつとだけ借りがあんだよ」

カラン、と空になった鍋の中で、用の済んだ器と匙が投げ込まれる。

一切の残しがなくなったそれを片付けるサンジを横目に、ぼんぼんと腹を叩いたルフイが、待ち遠しくて仕方がないといった風に夜空を見上げた。

「ふくく食った食った。明日は黄金!!? 晴れるかな」

「そりや雲の上だからな」

空を覆う雲がないのにどうやって曇るのか、と冷静なツツコミを受けるが、能天気な彼が気にした様子はない。

敵に追われているとは思えない、だらけた様子 of ルフイたちを見ていたロビンは、ま

だ煌々と燃えている焚き火を見下ろして口を開いた。

「夜も更けたわ。用のない火は消さなくちや、敵に位置を知らせてしまうだけよ」

それは一味の安全を考えた彼女なりの、世間一般的な最善の判断である。

しかし、それを聞いた途端ルフィとウソツプは顔を顰め、呆れた様子で肩をすくめた。

「バカな事を…聞いたかウソツプ、あんな事を言ったらア…火を消すつてよ」

「仕方ねエさ、そう言つてやるな。ロビンは今まで闇に生きてきた女…知らねエだけだ」

「……………どういう事…?」

何か、自分の知らない重要な目的があるのか、と戦慄の表情になるロビン。

戸惑い立ち尽くす彼女の前で、ルフィとウソツプががつくりと両膝をつき、まるで人

生そのものを否定荒れたかのような嘆きの声を上げ始めた。

「キャンプファイアーするだろうがよオ普通!!」

「キャンプの夜はたとえ、この命尽き果てようともキャンプファイアーだけはしたいの

が人道」

「バカはあんたらだ」

大声でアホなことを宣う二人に、ナミの冷酷なツツコミが飛ぶ。

十人に聞けば、十人がロビンと同じ答えを返すであろう当たり前の考えのはずだが、

騒がしく楽しむことが大好きな彼らにはそんな常識は当てはまらないようだ。

軽く頭痛を覚えながら、ナミはギロリとルフィを睨みつけた。

「いい加減にしなさいよ!!! この森がどれほど危険な場所かって事ぐらいわかってるでしょ!!?」

「知らん」

「神官もいる!!? ゲリラもいる!!? エレノアだってまだ復活してない!!? それ以前に夜の森はただそれだけで危ない所なのよ!!? 猛獣だって化け物だっているかも知れない!!?」

「化け物も~~~~!!?」

一戦力がダウンしているのに、これ以上厄介な敵を増やしてたまるか、とナミが強く警戒を促す。

当のルフィは全く胃に解した様子はなく、宴を邪魔されることに不満を表していたが、これだけは譲れないとナミは続けて言い放とうとした。

「オイ!!! 小僧!!!」

その時、アーレンが凄まじい形相で声を上げる。

その荒々しい声にナミは、長年この島でサバイバルしてきた彼なら、自分の味方をしてくれるはずだ、と振り向くが。

アーレンはゾロとサンジと共に、綺麗に組まれた太い枝を背に親指を立てていた。

「組み木はこんなもんか？」

「あんたらもやる気満々か!!!」

満足げに確かめてくるアーレンに、裏切られたとばかりにナミが叫ぶ。

まともな思考の男は他にいないのか、と頭を抱えるナミに、アーレンは火種である松明を掲げながら笑って告げる。

その背後に輝く無数の目と、唸り声に気づかないまま。

「心配すんな、猛獣はむしろ火を恐れんだ。おれはそうやって生きてきた」

「後ろ後ろ!!! もうなんかいるわよ!!!」

涙を流して恐怖をあらわにするナミ。

が、事態は彼女の想像もつかない状況に変化していくとは、誰も思わなかった。

第133話 “神官”

「アツハツハツハツハツハツハ!!?」

「おうおうおうおうおう~~~~~~~~!!?」

「ウオウオ〜!!?」

「ノツて来いノツて来い!!? 黄金前夜祭だ〜!!」

酒を飲み始め、赤い顔で笑い転げるナミ。

ボウボウと燃え盛るキャンプファイヤーのまわりで、ルフィたちが輪になって踊る。森の中から現れた空島の狼たちも一緒になって、大騒ぎになる。

警戒とか準備とか、そう言った真面目な雰囲気はもはやどこにもなかった。

「……………雲ウルフも手なずけたか」

楽しそうに騒ぎまくる青年たちを見やっていたロビンのすぐそばに、それまで横になつていたものが歩み寄り、腰を下ろす。

ロビンやゾロの視線を受けながら、空の騎士ガン・フォールは苦笑を浮かべた。

「…………フフ…………エネルの住む地でこんなバカ騒ぎをする者は他におらぬぞ…」

「ジジイか…やつと起きやがった」

「動いてもいいの?」

「迷惑をかけた…助けるつもりが…」

「何言ってる、充分さ。ありがとよ……………」

彼の助けがなければ、まず間違はなく一味の旅は止まらざるをえず、死ぬまでこの島に閉じ込められるところだっただろう。

勇気に感心した、という曖昧な理由だけで命をかけてくれた彼にこそ、感謝の言葉が贈られるべきだ。

「おお!? 変なおっさん!!? 起きたのか!!? ありがとな!!? 踊ろう!!?」

「踊ろう!!? 空の騎士!!?」

「お前医者だろ」

酒を手には、キャンプファイアーの周りで踊っていたチョツパーが、ルフィと一緒になつてガン・フォールを誘う。

老騎士は困ったように笑い、ついで物思いに耽るように黙り込む。彼の雰囲気が変わったことで、ゾロたちは訝しげな視線を老人に向けた。

「……さっきのおぬしらの話を聞いておった…この島の元の名をジャヤというそうだが、何ゆえ今…ここが『聖域』と呼ばれるか……………わかるか?」

老人の問いの意味がわからず、全員が首を横に振る。

誰も答えられないことを分かっていたのか、ガン・フォールはさして気にした様子を見せず、自分が腰を下ろしている地面に触れ、少しだけ掬い取る。

「……………おぬしらにとつて……………ここにある地面は当然のものなのだろうな……………」

「……ん？ そりやそうだろう……」

「……………だが空には……………これはもともと存在し得ぬものだ。『島雲』は植物を育てるが生む事はない。緑も土も本来、空にはないのだよ」

求めても得られるものではなく、時々地上から化け物海流によって流れてくるものを待つ他にない。

そのために、空に生きる民はいつも憧れ続けるのだという。自分たちが求めてやまない、命あふれる大地が、無限に広がっている地上の世界を。

「……我々はこれを『大地』^{ヴァース}とそう呼ぶ……空に生きる者達にとつて永遠の憧れ、そのものだ」

サラサラと手のひらから溢れていく土を見下ろし、ガン・フォールは静かに語る。

目の前にあるはずのそれが、なぜだか手の届かない遠くにあるように見えているような、切なげな表情だった。

「……なんか楽しそうだね」

そこに、気怠げな響きを持ったもう一人の仲間の声が届く。

踊り続けていたルフィも足を止め、半目で見つめてくるエレノアに、あつと驚きの目を向けて振り向いた。

「お!!? エレノア!!? 起きたのか!!?」

「そりやそんだけ騒いでたら起きるよ………う!!?」

メラメラと猛々しく燃える炎をみやり、呆れた様子で肩をすくめるエレノア。

だが、突然口元を押さえたかと思うと、真つ青な顔で勢いよく走り出し、一味から離れた密林の中に顔をつ突つ込む。途端に、うめき声と何かを撒き散らす音が発せられた。

「おえええええ……」

「大丈夫じゃなさそうだな、どう見ても」

「きぼぢわるい……死んぢやう……」

ひとしきり吐き終えたのか、げつそりとした様子で戻ってくるエレノアに、ゾロが思わず同情の視線を送る。

黄金探しを前にした宴の真つ只中なのに、それを楽しむ余裕が全くない彼女は、あまりにも哀れだった。

「かわいそうになア……せつかくの黄金前夜祭なのに」

「肉やるよ、なっ!!? 食えばきつと治るさ!!」

「やめてやれ、マジで死ぬぞ」

流石に気の毒になったのか、珍しくルフィが自分のかじっていた肉を差し出す。普通にありがた迷惑だ、と船長を制したナミは、ぼんやりと座り込んでいるエレノアを心配そうに見つめ、躊躇いがちに勧める。

「辛いなら船で横になってた方がいんじゃないや……」

「ん〜ん……寝てても頭痛いままだから起きてた方がまし……」

「難儀ね」

異常な状態を見せる天使に、ロビンも思わず冷や汗を流す。一体どんな病気になったら、こんなひどい有様になるのかと、戦慄を覚えているようだ。

やがて、エレノアの頭がぐらりと傾き、その場でどさつと背中から倒れ込む。仰向けになった彼女は、目をぐるぐると回したまま気を失っていた。

「ふぎゆう……」

「…眠っちゃったわ」

「どうしちゃったのよ、あんた……!」

意識を失つてもなお、苦しげに顔を歪める仲間には、ナミは心底不安に苛まれる。

その様を、アーレンが思わず息を呑んで見つめる。しかしそれはエレノアの苦しむ姿に対してではなく、エレノアの容姿そのものへの関心だった。

「……………天族……!!?」 伝説は聞いていたが実際に見るのは初めてだ……」

「会う人会う人……みんなそう言うわよね。気持ちはわかるけど」

「ひし形のおつきさんも驚いてたしなア〜」

親友と全く同じ反応を見せる老人に、ルフィが懐かしむように呟く。

かくいうゾロたちも、エレノアの正体を初めて知ったときはほぼ同じような反応を見せたため、大きな声で指摘することはなかった。

「あいつ一体どんな病気にかかってんだ？ あんなへ口へ口のあいつみたことねエよ」

「診察はしてるけど、全く原因がわからないんだ。熱もないし、感染症の類でもない……ただひどい頭痛に襲われ続けているみたいなんだ」

訝しむように問うゾロに、難しい表情でチョッパーが返す。一味の健康を担う彼にとっては、自分の力が及ばないことが悔しくて仕方がないようだ。

だが、チョッパーが表情を険しくしていたのは、それとは別の理由もあった。

「気になんのは、あいつが別人みたいになったって話だ……やっぱり見間違いないじゃなかったんだな」

「うん……！ 思い返せば、『空島』についてやる気を出し始めたときから様子がおかしかったわ！」

「『天族』と『空島』……空の住民……何か関わりがあるのか？ 見た目もほとんどそっくりだったしな」

普段の仲間からは考えられない態度や口調が思い出され、一味をより一層の混乱に陥れる。

思考の渦に飲み込まれ、唸りながら悩み出した彼らを見ていたアーレンが、しばらくして懐から何かを取り出してみせた。

「……………いつを見ろ」

アーレンが差し出した紙に、一味は一斉に集まる。そして、驚愕で目を大きく見開く。取り出された紙、ノートのパージに描かれていたのは、奇妙な人の絵。

その背には翼が生え、獣の顔と尻尾を持っていて、どう考えても普通の人間ではあり得ない姿をしている。

それを囲うように描かれた、小さな羽を生やした人々の姿も、一味に困惑をもたらしていた。

「これ…エレノア？？」

「なんだこの絵。みょうちきりんな絵だな」

「壁画のスケッチだ……………おれが調査していた遺跡に、そいつが描かれていた」

ルフィたち全員に自分のスケッチを見せ、アーレンがエレノアに視線を戻す。

自分の見つけた壁画の絵、それと彼女の姿を何度も見比べ、間違いがほとんどないことを確かめる。やはり、描かれていたのは天族に違いないようだ。

「思うに、天族はシャンディアの連中にとつて……神の遣いのように神聖視される存在だったんじゃないか。島のあちこちにばらまかれた遺跡のかけらに、そいつと似たようなものが描かれていた」

「“真祖”というのは……どういう意味なのかしら」

「わからねエ……」

神の島、ジャヤの片割れの島に棲まう固有種、サウスバードが口にしていたという単語。

その謎も深まり、一味はますます険しい表情で考え込む。ルフィに至つてはすでに眠りに落ちていたが、ロビンなどは好奇心が刺激されたのか、強い光を目に宿し始めていた。

「……………人伝に聞いた話だがよ」

沈黙が続いたとき、ふとアーレンが思い出したように口を開く。

ナミたちの注目が再び集まったことを確認すると、アーレンはハットの下から鋭い目を向け、ナミたちに問いかける。

「天族が……記憶を受け継ぐ一族”って呼ばれてるのは知ってるか？」

「！ 前にそんな話を……クロッカスさんが」

「知ってるなら話が早エ……その記憶を受け継ぐつてのは、ただ口頭で歴々と語り継

ぐって意味じゃねエらしい」

聞き覚えのある話を持ち出され、困惑しながらもナミが続きを促す。

頷いたアーレンは顎に手を当て、自身も眉唾ものと思っていた言い伝えについて、思出ししながら青年たちに語り聞かせた。

「天族の『記憶の継承』ってのは…存在そのものに刻み込む儀式らしい」

「存在そのものに……？」

「よくはわからんが…生まれる前から、天族の子は一族の記憶を刻み込まれ、そいつを生涯をかけて守り抜き、次代に伝える宿命を背負つてると聞いた」

儀式と言われ、ウソツプが微妙に嫌そうな顔になる。

ついさつきまで、生け贄だの試練だのと、未開の地らしい理屈で追い回されたばかりなのに、そんな非科学的な話を聞かされ、拒絶反応が出てしまったらしい。

「そんな事ホントにできんのか？」

「ホントかどうかはおれも知らん。だがもし……その記憶つてのがとんでもねエ代物だったら、この嬢ちゃんみたいに苦しんでもおかしかねエンじゃねエか？」

アーレン自身もあまり信じていないのか、もつと別の解釈があるのではないかと疑っているようだ。

だが、彼らの視線は、深い眠りに落ちている天使に向けられている。原因不明の何か

に襲われ、抗うこともできずに苦しんでいる仲間に。

「この嬢ちゃん頭の中には今……何が隠されてんだろうな」
??

同じ頃、神の島に聳え立つ巨大な豆の木、その中腹にある島雲の中心に建てられた神の社。

そこに戻ってきたある男を、巨大な体を持つ神官が迎えた。

「ッ神」、神官達がお着きに」

「扉を開けよ」

帰還した主人の命に従い、神官長ヤマが扉を開かせる。

だがそこに広がっていた光景、三人の神官が互いに得物を突きつけ合い、暴れている場面に遭遇し、彼は大きく目を吊り上げて怒鳴り声を上げた。

「…またか、何をしている!!? お前達!! しようのない……」

「黙れ……」

苦言を口にするヤマに、銀色の長髪が目立つ優男風の神官が、苛立たしげな声で告げる。

整った顔立ちなのに、両目に宿した悍ましいまでの威圧感が台無しにされている彼は、他の二人の神官をぎろりと睨みつけ、口汚く吐き捨てる。

「コイツらが足手纏いなせいでおれが存分な力を發揮できない…おれ一人に任せただ方がよほどいい働きをする」

「シャンディアの裏切り者が…ずいぶんでかい口を利きやがる。貴様の實力など本来、どれ程のものか思い知らせてやろうか。悲しみの求道『鉄の試練』でな!!!」

優男の睨みもものともせず、変わった形のサングラスをかけた剣を持った男が、優男に憎々しげな態度をぶつける。

それに対し怒りの視線を向けるのは、腕を組もうとして失敗し続けている、蜘蛛のような髪型をした大男だった。

「くだらん…取るに足らぬわ、貴様らの試練など…!!! おれの『沼』こそ最上の試練、試してみるか」

部下に指摘され、間拔けな顔で己の失敗を悟る大男に、優男はペツと唾を吐く。

パチパチと彼の両腕から迸る赤い閃光は、その場に控える全ての者たちに、本能的な恐怖を感じさせていた。

「興味がないな…おれの『骸』は貴様らの常識より外れたもの、最初から比べるまでもない」

三者三様、鋭く敵意のこもった目で睨み合う神官たち。味方であることは間違いないのだが、そうと全く感じさせないほどに、関係は最悪のようだ。

我慢の限界に達したヤマが、睨み合う三人に再び怒号をあげる。

「ええい!!? いい加減にせいっ!!! 神の御前であるぞ!!!」

「御前? その神はどこにおられるのだ」

叱りつける声に、神官たちは訝しげな視線を返す。三人ともわざわざこの社に集められたのに、呼び出した当人の姿がいまだに見当たらないのである。

だが、三人が互いを睨みながら、主人の姿を探していたそのときだった。

「スキあり!!!」

突如、バシツ!と空気が弾ける音が響いたと思つた直後、三人の体に衝撃が走る。

軽い打撃を受けた神官たちはその場に倒れ込み、その間をある一人の男が、目にも留まらぬ速さで走り抜けていった。

「ヤハ!!? ヤハハハハハ!!?」

高らかな笑い声をあげ、男は社の中心に備えられた椅子に飛び込む。

だらりと横になり、頬杖をつく様は傲岸不遜そのもの。他者を見下している印象を受ける目も同じく、彼があらゆるものを格下と認識していることを示していた。

「我が、神なり。ここにいるじゃあないか……修行をしろお前達、まだまだ甘い。サトリやシユラの様に情けない事にはなりたくあるまい」

「何をなさる!!!」

「……相変わらずの戯れか」

「そんな事を言う為に我々をここへ？」

「ヤハハハハ、退屈だったのだ。まア座れ」

突然、戯れの相手にされたことに憤慨する三人に、神エネルギーがバカにしたように笑う。

この場で口答えしてもどうしようもない、そもそもなんの意味がないと判断したのか、渋々座り直す三人の神官に、エネルギーはニヤニヤと笑ったまま口を開いた。

「——お前達、あの青海人をあまり気に止めてない様だが……：奴らの狙いは黄金だぞ」

しゃくり、と召使いの女性が持つてきた果物の中からリンゴを手に取り、齧りながらそう伝える。

神官たちは途端に表情を変え、驚愕した様子で腰を上げかけた。

「奴らがなぜその事を……!!!」

「もともとこの島は青海にあった島だ。青海人がそれを知っていてもおかしくはない。当然、明日動くだろう。シャンディアも再び攻めて来る…」

本物の神のように、何もかもを見透かしたように語るエネルギーに、神官たちはあまり驚く様子を見せない。

まるでそれができて当然というように、報告ではなく告げられた情報にのみ戸惑いを

覚えていた。

「——そこで明日は、この『神の島』全域をお前達に解放しよう。どこにどう試練をしようとも構わん。ルール無用に、暴れていいぞ」

「——なぜ急にそこまで……」

気怠げに告げられたエネルの決定に、神官たちは訝しげな視線を返す。

なんの気まぐれか、それとも悪戯か、と険しい表情を見せる彼らに、エネルはニヤリと笑みを深めて告げた。

「実はな……もうほぼ完成している。『マクシム』がな……」

その言葉に、神官たちはたちまち目の色を変える。

エネルはその反応を待ち侘びていたとでもいうように、そしてその日が待ちきれないというように、爛々とあやしい光を目に宿し、部下たちに告げるのだった。

「さっさとこの島に決着をつけて、旅立とうじゃないか、夢の世界へ」

第15章 神の住む島へ中

第134話 “スカイ・アドベンチャー”

「見ろ!!! 言った通りだろ、ここに誰かいたんだ!!!」

夜が明けて、さあ今度こそメリー号を修理しなければ、と祭壇の上に集った麦わらの一味。

しかしそんな彼らの目の前にあったのは、すでに一応の船の形を取り戻しているメリー号の姿だった。

「見たんだおれは、やつぱりあれは夢じゃなかった!!!」

興奮と混乱でごちゃ混ぜになった顔で、ウソツプがみんなに叫ぶ。

昨晚、小用をたすために目を覚ました彼が、ふと祭壇の近くを寄った時、彼は見た。

何者かがメリー号の元において、木槌を振るっていた。そしてウソツプに気づくと、にこりと笑みを見せたのだ。

「確かに……折れきったマストまでちゃんと直ってる」

「……………だが言っちゃ悪いが下手くそだな」

「いいやつがいるもんだ」

「…………おれアてつきり…オバケかと……………」

即座に気絶したため、ウソツプ自身夢かもしれないと思っていた。

しかし現に目の前に、鉄板や材木が打ち付けられている、お世辞にも安心とまではいえないが、航海には十分な修繕跡がある。

何者かがいて、メリー号を修理したことは間違いがなかった。

「…………しかしこんな辺境で誰が船を直してくれるってんだ。この『神の島』におれ達以外敵しかいねエ筈だぞ……………」

訝しげに問うゾロに、ウソツプを含め誰も答えられない。

険しい表情で首を傾げていたナミはふと、黙り込んでいるエレノアに視線を移した。

「エレノア、あんた何か……………ってそれどころじゃなかったわね」

「おれも何も感じなかった。誰かいたなんてありえねエんだがな……………」

謎の頭痛に苦しんでいた彼女の姿を思い出し、ありえないとナミが首を横に振ると、アーレンも心底不思議そうに首を傾げる。

そこで、同じくメリー号を見渡していたルフィが、ある疑問を口にした。

「でもフライングモデルじゃなくなってるな、ウソツプ」

「そこなんだ、それを考えてた」

まさしくそこが一番の謎だと、顎に手を当ててウソツプが考え出す。

メリー号の今の姿は、地上で一旦クリケット達の手によって追加された、いわゆる強化形態。本来の姿は、空の海にいる以上一味しか知らないはずなのだ。

仲間しか知らないのに、誰一人として関わっていない。あまりに謎が深すぎた。

「ホラホラ！ あんた達何サボってんの？」「脱出組」は昨日の後片付け！『探索組』は冒険準備！」

「よーし！！？ おれが食料のふり分けをやるぞ！！？」

「ルフィ…それだけはおれがさせねえ」

「それより船を下へおろさなきゃ」

「そうだな、ロープ持って来い！」

答えの見つからない疑問にいつまでもかまけていられないと、ナミが全員に促す。

今優先すべきは、黄金を見つけて出して一刻も早くこの島を脱出すること。謎解きは後でいくらでも時間を見つければいい、と全員が動き出す。

それでもウソツプは、物言わぬ船首でしかないメリーを凝視し続けていた。

「なあ、メリー…誰だったんだありゃあ…」

「……………」

そんな彼をじっと見つめ、エレノアがぎゅつと唇を噛み締めていたことに、誰も気づかずだった。

メリー号を海雲に移し、再び一味は一箇所に集まる。

ナミはその中心にしやがみ込み、アーレンが完成させたかつてのジャヤの地図を広げる。

「さてと、地図を見て！『探索組』のルートはこうね、南へまっすぐ。この“右目”に何らかの遺跡があるはずだから、まア、敵もろもろに気をつけて黄金持って来て!!？」

「簡単に言いやがって」

「何だお前、黄金黄金言ってるくせに来ねエのか？」

「そうよ、だってコワイじゃない」

何を言っているのか、と真面目に返すナミに、チョップパーは思わず戦慄の目を向ける。

今この場で最も黄金を求めている人物でありながら、自らは決してそこに向かわない歪んだ性格に、今更ながら恐ろしさを覚えていた。

「その間、私達はメリー号でこの島を抜けるわ。こつちも危険よ」

「神官もゲリラも、どつから現れるかわかったもんじゃねエからなア…」

ルフィ達とエレノア(?)の奮闘のおかげで、5人いるという危険な神官のうち2人が打倒されている。

しかしだからと言って全ての脅威が去ったわけではない。宝を探す方も、逃げ道を確認

保する方も、それなりの覚悟を決めておく必要がある。

「なるべく早く遺跡付近の海岸へ行くから、そこで落ち合いましょう！　そしてそのまま空島脱出、これで私達は『大金持ち海賊団』よ!!?　好きな物買い放題♡」

「やった~~~~!!!!」

すでに莫大な黄金を手に入れた未来を想像しているのか、目を輝かせたナミが高揚した声をあげる。他の者も同じく、まだ見ぬ栄光を夢想し、気の早い歓喜を見せる。

準備を整えた彼らは、陸と海、未知の脅威が待つ二つの道を突き進み始めた。

「おーし!!?　そんじゃ行くかア!!!」

「おお!!!」

そう、勇ましく進み出したルフィ達『探索組』だったが、事態は早速面倒なことになり始めていた。

「おい!!?　どこ行くんだゾロ!!!　そっちは逆だ!!?　〃西〃はこっちだぞ!!!」

〃髑髏の右目〃に位置する島の南側を指すはずの一行。

しかしゾロは先ほどから見当違いの方向に、そしてルフィは全く違う西を指し、そして何故か東に向かおうとしていた。

「まったくお前の方向音痴にはホトホト呆れるなア」

「おいルフイ、お前は何でそう人の話を聞いてねエんだ。『ドクロの右目』なんだから右だろうが!! あっちだ!! バカかてめエっ!!?」

「バカはお前らだ」

先ほどからずっと同じ調子で迷いそうになる二人に、アーレンが険しい顔で頭を抱える。

本当にこんな奴らを信用してついでにこさせてよかったのか、と。

「何だ南か、それを早く言えよ」

「言ったわバカヤロー」

冒険に最も意欲的で屈強な男と、腕の立つ剣士。

探索組の要とも言える二人が、今のところまるで役に立っていないことを嘆き、アーレンは深いため息とともに先に進む。

流石のロビンも、肩を落とす老人に哀れみの視線を送っていた。

「でもおれはこの森、もつとコワイとこかかと思っただけ、なーんだ大した事ねえな
くくがはは」

「へくくくチョッパ、お前今日は強気なのか」

「そうなんだ、がはは」

「つたく…気イ抜きすぎだぞ」

不調のエレノアとともにメリー号に残され、かなり恐ろしい目にあつたチョツパーは、この時とても安心していた。

アーレンはともかく、一味で最も強いルフィとゾロ、そして腕の立つロビンがいる以上、自分はそうそう危険に晒されることはないだろうと、たかを括つていたためだ。

「だが確かに、正直拍子抜けだよなア。昨日おれ達が森へ入つた時も別に何も出なかつたぜ。神官の一人とも会わずしまい。お前の気持ちもわかるぜ、チョツパー」

「だ!!? だろ? がはは」

「……………おかしな人達ね、そんなにアクシデントが起こつて欲しいの?」

「はっ……………何も出て来ねエのは当たり前だ」

緊張感のかけらもない、暢気な会話を続ける4人に、アーレンは呆れながらも笑みを見せる。

彼自身も油断していた。通い慣れたこの道を、屈強な若者を護衛として連れているために。

「この森には神官もおいそれと手出しができねエ『主』がいるんだからな」

ガハハ、と笑うアーレンと興味深そうに視線を向けるルフィ達。

そんな彼らを見つめる、巨大な影が一つあつたことに気づくまで、わずかばかりの間を要した。

??

「風よし!!? 舵よし!!? んー実には快適。巡航は順調だ」

穏やかな風を、船の先端に立って受け止めるウソップが呟く。

欄干に背を預け、昨晚よりはマシな顔色になったエレノアが聞き流していると、ウソップは不意に眉間に皺を寄せ始めた。

「しかしノロイなコリヤ。おい航海士! 何とかしろ」

「何ともなりません、キャプテン・ウソップ」

雲の道を進むメリー号だが、着実とはいえその速度はあまりに遅い。

起伏が激しいために、今の所、^{ダイヤル}貝の力で推し進めるほかになく、ナミの技量で同行できる者ではない。

急ぐ旅なのに、随分とのんびりした航海に、ウソップが不満をこぼしていた時だった。

「この国の…歴史を少し……話そうか…」

唐突に、空の騎士ガン・フォールが口を開き、ナミ達の注意を引く。

何をいきなり、と訝しげに見つめてくる青年達に、ガン・フォールは虚空を見つめたまま語り始める。

「我輩…6年前まで『神』であった…」

「頭打ったか、おっさん」

「……………この『神の島』がスカイピアに姿を見せたのは…おぬしらの知る通り400年も昔の話だと聞く」

余計な一言を口にしたウソツプが、馬に変形したピエールに噛みつかれるのをよそに、ガン・フオールは続ける。

その際、エレノアが鋭い視線を向け出していることには、気づいていなかった。

「それまでの『スカイピア』はごく平和な空島だったそうさ。たまに『突き上げる海流』に乗ってやってくる青海の物資は、空の者にとつてはとても珍しく重宝される」

空島にある地面は全てそうやって得られたものだという。

『神の島』ほど巨大な大地が空に来ることはまずあり得ず、奇跡と称されるほどである。当然空に生きる者達はそれを喜び、『聖地』として崇めた。

それゆえに、先に『神の島』に住んでいた者達を認められず、戦いは始まってしまったのだとも。

「アーレンさんが言ってた……………」

「うむ」

「なのに島を追い出しちゃったって事や?」

「そうさ。『空の者』が私欲の為に彼らの故郷を奪い取った…」

本気で後悔している様子で、ガン・フオールはうなづく。

間違っているのは空の住民で、神であった自分で、正しかったのは島の先住民達、シャンディアなのだ。

この戦いは、彼らにこそ正当性があるのだと。

「それ……ちよつと切ないわね」

「なのに我が物顔で、神官達が好き勝手に勝手してるわけか……胸クソ悪いね」

「じゃ、おめエらが悪いんじゃないかよ!!？」

「ピシツ、と指を突きつけて詰るサンジとウソツプ。

次の瞬間、起こったピエールにまとめて頭に噛みつかれる様を横目に、ガン・フオールは思わず悲痛げに俯いていた。

「……そうだな。おぬしらの……言う通りだ……」

「……今更後悔したって、遅いのにな」

自身を嫌悪するようにそう呟く老人に、エレノアが吐き捨てるようにこぼす。

ふと目にしたその目の冷たさに、ナミはぞくつと背筋を震わせると、慌てて話題を変えさせようとガン・フオールに視線を向けた。

「エネルは？ 何なの？ 神、エネル」

「我輩が神であった時……どこぞの空島から突如、兵を率いて現れ、我輩の率いた『神隊』と『シャンディア』に大打撃を与え、神の島に君臨した……6年前の事だ」

さらにガン・フオールは語る。

彼の部下であった神隊はいま、何らかの労働を強いられている。それが何かはわからないが、少なくとも碌でもないことのはずだと。

しかしシャンディアにとっては、誰が神であってもやることは変わっていないのだとも

「ーなぜシャンディアは、私達に攻撃を？」

「今、労働を強いられると言った『神隊』、時に船を手に入れ逃げ出す事があるのだ。シャンディアにとっては当然敵である、逃さず排除しようとする…!!? それと間違えたのだろう」

「何だ、間違いで命狙われちゃたまんねエな」

呆れた調子で、サンジが吐き捨てる。最初の邂逅で痛い目を見たことを、いまだに根に持っているのかもしれない。

それが勘違いや、よその下衆と混同されてのことなら尚更のことだ。

「聞いてりや、神」 エネルってのはまるで恐怖の大王だな」

「コラコラコラお前滅多な事言うもんじゃねエぞ!!? 全能なる、神」は全てを見ている

のだ!!!」

「…いつからあんたスカイピアの人間になったのよ」

ビクツと全身を震わせ、サンジに大きな声で吠えるウソップに、エレノアが半目でボソリと呟く。

しかしガン・フォールは、そんなサンジの評価でさえ生ぬるいというように、重苦しい表情で言葉を続けた。

「恐怖か……いや、それよりも性質が悪い。エネルはお前達のように国外からやって来る者を犯罪者に仕立て上げ、裁きに至るまでをスカイピアの住人達によって導かせる。これによって生まれるのは、国民達の『罪の意識』」

ガン・フォールの言葉に、サンジとウソップはある娘のことを思い出す。

エンジェル島で出会ったコニスは、まさしくガン・フォールの言った通りの行動をとった。ルフイ達を騙したことを悔やむ彼女の姿は、とても痛々しく見えた。

「己の行動に罪を感じた時、人は最も弱くなる。エネルはそれを知っているのだ」

「……『迷える子羊』を己で生み出し支配する、『神』の真似事ってわけか」

「そう……食えぬ男よ……」

「……エンジェルビーチへ着いた時は、ここは楽園にさえ思えたのに、とんでもない……」
「かつての黄金郷も、随分な所に飛んで来たものよ……」

口元を手で覆い、戦慄を抱くナミに、その隣でエレノアはやれやれと肩をすくめる。

ロマンを求めて来てみれば、遭遇したのは血みどろの戦いと、考えるだけでも唾棄す

べき悪意の所業。気分がなえて仕方がなかった。

そんな彼らに向けて、ガン・フォールはふと気になったことを問いかけた。

「……おお、そうだおぬしら。その……昨晩から騒いでおるオーゴンとは一体……何なのだ？」

「……え☒」

??

「悪い!!? ミスった!!!」

「逃げろ〜!!! 大蛇だ〜!!!」

「ウワバミバキバキバキツ!と背後から大木がへし折られる音が聞こえてきて、ルファイ達をおいたてる。

人間が10人も輪になっても届かないほど太い巨体をうねらせ、巨大な密林を突き進む巨大な生物に追われ、5人は必死に走り続けた。

「ギャ〜!!!」

「何でてめエがここにいんだよ、空の主!!!」

「何て大きき、これも空島の環境のせいかしら」

「ジジイふぎげやがって…!!?」

ギャーギャーと喚くも、それで背後の怪物が止まってくれるわけではない。

異様な巨体を誇る大蛇は、鋭い2本の牙を見せつけながら、ルフィ達に迫った。

「ジュララララララララ!!!」

背後から聞こえてくる咆哮に、咄嗟の判断で、全員がバラバラに飛び退る。

直後、彼らがいた場所を大蛇が勢いよく通り過ぎ、そのまま直進上に聳えていた大木の幹に、牙がずぶりと突き立てられる。

「あの巨体で!!? 何て動きしやがる」

「牙に触れるな!!! 猛毒で骨まで溶かされるぞ!!!」

「毒……………?!?」

アーレンの忠告で、ゾロはハッと大蛇が噛み付いた幹を凝視する。

ジュウジュウと音を立て、牙が突き立てられた箇所が腐り、溶けていく光景が全員目の映る。思わず、男達全員の顔が引き攣った。

「こりゃ逃げた方が……………」

「良さそうだな」

「確かに」

「コエ〜!!?」

もはや、まとまって逃げることは得策ではない。

ルフィ達はなりふり構わず（一人は泣き叫びながら）走り出し、迫り来る巨大な怪物

から逃げ続けるのだった。

第135話 “優しく残酷な試練”

気がつくと、そばには誰もいなかった。

大蛇から一目散に逃げ、後先考えずに走り続けた結果、5人はそれぞれ全く見覚えのない森の中に、たった一人だけ立ち尽くしてしまっていた。

「困ったわ……………コースへ戻っても誰も来ない」

さほど焦った様子もなく、ロビンがつぶやく。

土地勘はなくても方角は覚えているため、一人で向かうことは可能だが、それでも先に行つていいのかと多少の迷いがあった。

「ヤベエ!!! ハググレ〜た〜!!!」

臆病なチョッパーは、あれだけ頼りにしていた仲間が一人もいなくなつてしまったことに大いに焦る。

さらに言えば、どこに向かえばいいのかも、全くわからなかった。

「やつちまつたア〜…!!? どうすんだコレ!!? おれ一人じゃ絶対ヤベエぞ!!?」
方角はわかる、見覚えもある。

しかし今襲われてはひとたまりもないという絶望的な状況に、アーレンは頭を抱えて

吠える。

「ん？ あいつらどこだ？ ちょっと目を離すとコレだ……」

呆れた調子で、姿の見えない仲間達にため息をつくゾロ。

そして彼は、なぜだか自信満々な様子で、全くの見当違いの方向に進んでいく。

「やれやれ……まったくあいつら、さては迷子かしようがねエな」

やれやれと肩をすくめたルフイもまた、なんとなくて選んだ道をまっすぐにつきすすんでいく。

黄金を探すという重要な役目を担った彼らは、早速暗礁に乗り上げてしまったのだった。

??

「ーもう下へついているかな……」

「ええ……すでに待ち構えてございます……」

神の社でくつろぐ“神” エネルと、その世話をする神官や侍女達。

ゆつたりと余裕たつぷりに、状況の動きを聞き探っているエネルに、神官の一人が呆れた声をかけた。

「“神”……ここまで嚴重を期する必要があるのでしょうか。相手はたかだかシャン

ディアに青海人数名……」

「ヤハハハハ!!? 祭りには賑やかな方がいいじゃあないか……」

数でも戦力でも、圧倒的なほどの差があるというのに、それを楽しもうとしている神の思考がわからず、神官はため息をつく。

エネルはそれに、反対に咎めるような半目を返す。

「ーそれに貴様……見くびっているぞ……空の戦い」その底力!!」

ますます呆れる彼に、エネルは改めて神の島に集ったもの達の人数を語る。

まずエネル側に神兵が50、神官が3。シャンディアの戦士が20。青海人が森に入ったのが5と、脱出しようとしているのがガン・フォールを除いて4。

「締めて84人!!? 生き残り合戦というわけだ、ヤハハハ!!? 今より3時間後……これが一体何人に減るか当てようか!!?」

「……まったくすぐにそういうゲームになさる……」

「いいじゃあないか! おいお前、当ててみる」

「えっ!!? わ……わたくしですか……いえ……そういう事はわたくし全くわかりませんので……」

「あ……ん? 何だお前……ノリが悪いなア……勘でいいんだ勘で」

いきなり当てられた次女が慌てて首を振り、エネルはがっかりした表情になる。

仕方なく彼は、まともに答えを返しそうな神官に視線を移し、ピシツと指を突きつけ

た。

「じゃお前だ！ 当ててみる」

「……はあ」

神官は気の抜けた声を返すも、真面目に彼なりの計算を始める。

神官や神兵は確かに実力者だが、相手もそれに拮抗しうる精鋭揃い。青海人は放置しても、双方に大きな被害が出ることは間違いないはずだ、とそう考える。

「3時間あれば……30人は落ちましような。……したがって50人という所で」

「ヤハハハハハ……!!? 成程な……50人か……」だがそれでは少し甘いんじゃないか？ お前はこの戦いをナメているぞ」

自分で問いかけておきながら、エネルギーが嘆くように首を横に振る。

神官は多少の苛立ちを覚えるも、それを言葉にしたりはしない。機嫌を損ねて痛い目に遭うのも嫌だが、このような戯れはいつものことだからだ。

「……では『神』はどのようなお考えで……」

「よし……私がズバリ答えてやろう。3時間後、この島に立っていられるのは84人中……5人だ」

ニヤリと笑みを見せる『神』。

彼の耳には今、確かに島のどこからか響き渡ってくる、誰かの悲鳴が届いていた。

「う……うわああああああ!!!」

「チクシヨウ……チクシヨウめがア!!!」

生い茂る木々の間、悲鳴じみた怒号を上げながら、銃やバズーカを放つシャンディアの戦士達。

破裂音や爆発音が立て続けに起こるが、迫り来るその巨大な影は、止まる様子を見せなかつた。

「おのれバケモノがア!!!」

怒りを声に表すも、彼らの顔には明確な恐怖が現れ、体には震えが走る。

そんな彼らを追うのは、バキバキと木々を薙ぎ倒して突き進む、巨大な人形の「何か」だ。

『オオオオオオオオ!!!』

太い木を踏み潰し、あらわになったその姿は、例えるなら真つ黒な泥人形。

土を固めて作つたような、両手足くらいしか起伏のない奇妙な体に、血のように輝く赤い目が悍ましさを抱かせるその異形が、泣き声のような咆哮を上げて向かってくる。

その方に乗っているのは、銀の長髪を靡かせる鋭い目の優男……神官の一人だった。

「…なぜ負けることがわかっていて挑んでくるのか…相変わらず貴様らの精神は理解できません。〃神〃 エネルの力がどれだけ規格外かなど、身に染みているだろうに……」

「おのれクロウリー…裏切り者のバケモノが!!! シャンディアの誇りを失った貴様などに……!!!」

異形を思い通りに操り、侵入者を追い立てる、クロウリーと呼ばれ罵倒される神官。シャンディアの戦士達は凄まじい憎悪の視線を向け、彼に対して攻撃を始めるが、それらは全て泥の人形に防がれ、無意味に終わっていた。

「争う事も無駄と思え…… 骸の試練〃は誰にも突破できぬ最難関!!? 多少腕が立つくらいで挑む事は、自殺行為に等しい……」

『オオオオオオ!!?』

『オオオオオオオオ!!!』

バチツ!とクロウリーの手のひらから赤い電流が迸り、地面に突き刺さる。

すると途端に地面が盛り上がり、クロウリーが乗っている泥人形とほとんど同じ泥人形が二体、咆哮とともに生まれ出てくる。

あまりにも恐ろしく、正気を疑う光景だった。

「()は最も易しい試練なのだが………生存率は100%、試練に負けても死ぬわけではない……!! 抵抗してもしなくても………結果は同じ事……」

ずうん、とシャンディアの戦士達が、泥人形の影の下に飲まれる。

見上げるほどの、どんな猛獣よりも遙かに巨大なそれを目の当たりにし、彼らは一瞬にして血の気を引かせていく。

「だがここまでたどり着いた褒美くらいはくれてやってもいいだろう…」

「うわああああああ!!!」

戦士達の悲鳴を最後に、彼らの姿は泥人形の下に埋もれていく。

直後、彼らがいた場所からは、バキバキボリボリと碎け潰される、耳を塞ぎたくなるような音が鳴り続けていた。

「せめて我が血肉となり……………終わりを共に目撃させてやろう」

??

「おぬしらに初めて会った時、我輩が傭兵をかって出たのも、青海人では『空の戦い』についてゆけぬからだ」

「『空の戦い』?」

脱出組の方では、突然始まったガン・フォールの授業に全員が戸惑いの表情を浮かべる。

老人が用意させたのは、樽とその上にのせられた一つの貝。その前に、大きなハンマーを担いだサンジがスタンバイさせられている。

「見ておれ」

「何の為にやるの？ こんな事」

「やればわかる。その貝を思いきり砕いてみよ」

どこからどう見ても、ただ貝が壊れるだけのなんの意味もなさそうな実験。

とはいえ、最近傷つくことが多いメリー号を心配するウソップからすれば、十分に不安になる光景だった。

「そーつとだぞ!!？ サンジでめエ甲板に穴でも開けやがったらタダじゃおかねエぞ!!」

「思いきりやればよい」

「テメー他人の船だと思ってテキトーな事言うなア!!」

「いいから思う存分やっちゃいな」

「エレノアコラア!!! ふざけたこと言ってるじゃねエぞ!!」

「……まアやれつつうんならやるが……」

「待て〜!!! そんなに振りかぶらなくても」

戸惑いながらも、さしたる労力ではないと大きくハンマーを振りかぶるサンジ。

ウソップの悲鳴を無視し、ガン・フォールやエレノアに言われるまま貝を狙い、渾身の力で振り下ろす。樽ごと砕ける、そう確信しナミ達は思わず身構える。

しかし、ハンマーが貝に触れても、なんの音も衝撃も響かなかった。

「？」

「……………何やってんだ。いくら加減しろって言ってもそれじゃお前……」

まさか気を使いすぎて、力の微調整もできなかったのか、とウソツプが呆れを見せる。だが、最もこの場で訝しげな表情を浮かべていたのは、他ならぬハンマーを振り下ろしたサンジだった。

「……いや、おれは思いきりやったぞ。甲板に穴開けるくらいの気持ちで……!!？」

「オイ」

「なのはこの貝に……………まるで衝撃を吸い込まれたみてエに……」

首をかしげ、貝を凝視するサンジに、ウソツプ達も徐々に困惑し始める。

ガン・フォールは一切の狼狽を見せず、不思議そうに貝を見つめるサンジに、次なる指示を与える。

「……では貝の穴を空樽に向け、裏の殻頂を押ししてみよ……………」

サンジは言われた通り、樽の上に乗せていた貝を手につと、樽の横に押し付け、殻頂を凹ませるように押ししてみる。

すると次の瞬間、ドンツ!!?と凄まじい衝撃が迸り、樽が爆発したかのように弾け飛んだ。

「きゃ!!!」

「きや~~~~~つ!!!」

「つ…」

「うおオッ」

いきなりの現象に、ナミは小さく、ウソツプは盛大な悲鳴をあげて騒ぎ出す。

エレノアは爆風に顔を顰め、サンジは反動で大きく吹き飛ばされ、欄干に背中を強かにぶつける羽目になる。

そして爆発の中心では、問題の貝が無傷の状態で煙を吐いているのが見えた。

「それが『衝撃貝』。与えた衝撃を吸収し、自在に放出する」

とんでもない光景を見せつけた貝を前に、サンジとウソツプは思わず目を見合わせる。

ナミ達と合流する前に遭遇した、玉の試練の担い手を名乗る神官サトリ。その男が使っていた攻撃法と、全く同じ現象だったのだ。

「ていうか先言つとけ!!! ビビっただろ!!!」

「古代の空島にはさらに凄まじい貝が存在したと聞く。

リジェクトダイアル
「排撃貝」

という絶滅種は、

この『衝撃貝』の10倍もの放出力を誇ったそうだ」

ビシッ、ビシッとチョップで抗議するサンジを放置し、ガン・フォールは続ける。

サンジは吹き飛ばされるだけで済んだが、
 “排撃貝”は使用すれば、使用者の命さえ危ぶめる諸刃の剣なのだ。

「さすがにほとんど使われる事はなかった様だな……………」

「…………そんな危なつかしい貝があるのか…………!!? ……まるで兵器じゃねエかよ」

「“貝”つてもっと日常的なものかと思つてた」

「…危険さつてのは、便利さを求める道の途中に必ず現れるものなんだよ。使う人間次第でね」

他にもガン・フォールは語る。料理を温める熱 ヒートダイヤル 貝も、槍に仕込めば高熱を発する熱の槍に。火を蓄える炎 フレイムダイヤル 貝も、鳥の口に仕込めば火を吐く怪鳥に。

使い方次第で、いくらでも生活から戦場にまで使い分けられるのだと。

実際にその脅威を目の当たりにしたナミ達は、ただ圧倒されるばかりだった。

「…それが “空の戦い” ……!!?」

「そうだ。貝の種類すら知らぬ青海の者では見極める事もできん。数ある “加工雲” 然り…………」

重苦しく締めるガン・フォールに、ウソツプやナミは思わずごくりと息を呑む。

知らずに戦っていれば、確かに翻弄されるばかりで、まともに戦えたとは考えにくい。

実際に、ルフィ達もそれで大いに苦しめられたのだから。

「じゃあよ……あの、おれ達の動きを先読みするマントラってのにも何か理由が？」

「〃心綱マントラ〃か……あれは我輩も使えるわけではないのでな。うまく説明できんのだが……」

もう一つ、ルフィ達を苦しめた神官達の戦い方を思い出し、ウソップが問う。

だがそれに関してはガン・フォールもあまり詳しくはない様で、難しい表情になるも、視線はある一人にまつすぐに向けられていた。

「……その者の方が詳しいはずだ」

「あ」

「そーいやア……思えばちよくちよく心当たりが」

あ、と声を漏らし、3人は思い出す。

島を見つげるとき、情報を集めるとき、危険を探るとき、自分たちの仲間はいつも真つ先にそれをこなしていた。

それらは確かに、神官の持つ力に酷似していた。

「……あれは〃聞く力〃。全ての存在が放つ声や気配を聞き取る……誰の中にも宿る力だよ」

「誰の中にも？」

「じゃあ……おれ達にもできるってことか？」

「それはあんた達次第……人によっては一生引き出すことのできない力なんだ。鍛錬する

ことそのものに才能が必要だからさ……」

問われたエレノアは、まだ体調が万全でないからか、ややしんどそうにしながらも素直に答える。

その表情はなんとというか、後回しにしていた問題を鼻先に突きつけられている様な、そんな複雑そうな表情に見える。

「聞く声によつては、相手の次の動きを読む事も、遠く離れた場所の声も聞き取る事もできる……… “偉大なる航路” には、少し未来を読む人間だって存在してるらしいよ……」

「エレノアがよくやつてるあれか」

「神官共は “神の島” 全域——エネルギーはこの国全域までその力が及ぶ。あの力ばかりは得体が知れぬ……」

納得した様な、説明されてもよくわからない様な、そんな微妙な反応を返すウソツプ達。

刺して期待をしていなかったエレノアは、欄干に背中を預けると、小さなため息と共に釘を刺す様に告げた。

「ちなみに、いまの私は体調が最悪だから期待しないで………数メートル近くに接近されても気づかなかつたくらいだから……」

昨日、チョッパーとメリー号に残された際に受けた襲撃。

その時に役に立てなかったことが、結構なショックだったらしい。やや落ち込んだ様子で、自分を苛む様に俯いていた。

だがその時、仲間達が浮かべている驚愕の表情に、エレノアは思わず首をかしげた。

「……………!!!」

「…? どうしたのよ、あんた達…」

固まっているナミ達やガン・フォールに、不思議そうに問いかけるエレノア。

その時彼女は、背後から聞こえてきたパリツという音に、全身の血が凍りついた様な錯覚を覚える。

「……………まさか…!!!」

彼女は唐突に理解する。

そして、自身の背後に降り立った、とてつもない存在に戦慄の表情を見せ、咄嗟に拳を構えながら勢いよく振り向く。

その直後、突如エレノアの意識は、糸が切れた様にぶつりと途切れた。

「エレノアアア!!!」

悲痛な仲間達の声は、突如全身から煙を上げるエレノアには届くことなく。

焦がされ、黒く染められた天使は、声すら上げられないままに、甲板の上にドサリと倒れ込んだ。

第136話 都市の遺言

どきつ、と。

黒い煙を上げたサンジが、同じく黒焦げになったエレノアの隣に、仰向けに倒れていく。

その姿はまるで、糸の切れた人形の様だった。

「エレノア~~~~!!! サンジ君~~~~!!!」

「サンジー!!! ギャ~~~~!!! ギャ~~~~!!!」

悲鳴をあげるナミとウソップだが、二人ともその場から動くことができない。

二人とガン・フォールの目の前には、不気味な笑みを浮かべて欄干の上でしゃがむ神の姿があるからだ。

「ヤハハハ…バカな奴らだな。…別に私はお前達に危害を加えに来たわけじゃないというのに…」

「ならば何をしに来た!!!」

「ヤハハ、冷たい言い種じゃあないか…実に6年ぶりだぞ…先代神ガン・フォール」
怒りと警戒をあらわにし、姿を表したエネルギーに怒鳴るガン・フォール。

しかしエネルギーは、老騎士の凄まじい殺気をものともせず、心底愉快そうな笑い声を響かせるばかりだ。

「ぢきしよう!!! こいつ…サンジとエレノアを……………!!! 殺しやがったア~~~~」

意識を失ったサンジを抱きかかえ、ウソップが号泣しながら彼の胸に耳を当てる。

いまだに目の前で起こったことが信じられず、ガタガタと震えるナミは、しばらくしてからある一つの間違いに気がついた。

基本的に、人間の心臓は左側にあるのだ。

「待ってウソップ!!! そっち!!? 右っ!!!」

「ゲッ!!! 心臓が動いてるっ!!!」

自身の勘違いによく気づき、今度は歓喜の声をあげるウソップに、ナミもホッと息をつく。

だが、そんな声も煩わしかったらしく、エネルギーが徐に指を刺した瞬間、ウソップの全身にも何かが迸り、彼も黒焦げとなって倒れ込んだ。

「黙ってれば……………何も……………しない……………いいな?」

何が起こったのかもわからない。しかしブスブスと煙をあげるウソップを目の当たりにし、ナミは慌てて口を手で押さえてコクコクと頷いた。

「結構」

エネルはその場が静かになったことに満足してか、ニヤリと笑い指を下ろす。

しかし今度は、鬼の様な形相になったガン・フォールが食ってかかった。

「貴様一体何を企んでおるのだ!!!」

「……6年前、我らがこの島に攻め込んだ時捕えたお前の部下共は、元気に働いてくれているぞ。腕力もある実にいい人材だ」

激昂する老人の反応そのものを楽しんでいる様に、エネルは口元の歪みをさらに強くする。頂点の座を追われ、落ちぶれて死にかけて彼を見下すことが、愉しくて仕方がないようだ。

「だがその6年掛かりの大仕事も……どうやらもう終わりに近づいている。同時に私もこの島に用事がなくなる。というわけで、お前に別れの挨拶でもと……ここへ来た。それだけの事……」

あからさまに相手を馬鹿にした態度だが、それを咎められる者は誰もいない。

迂闊に手を出せないガン・フォールはただ、ギリギリと歯を食い縛ることしかできず、その手で殴り飛ばせない自身を心底悔やむ。

「——しかしこのスカイピアの住人共はつくづくめでたい奴らだ。この島をただ『大地』の塊としか見ていないのだから」

「!?? どういう事だ……」

「我々がこの島を強硬に奪い取った理由、青海のハエ共がこの島に踏み込む理由、そしてシャンディアが帰郷に固執する理由も相違あるまい」

自身が「神」の座を追われた理由が、大地以外にあるのか、とガン・フォールは新たな「神」に訝しげな目を向ける。

しかしそれに、エネルは答えることはない。嘲笑ったまま、老人を見下ろすだけである。

「……何だと言うのだ……!!!」

「ヤハハ……だからめだたいと言っている。黄金の存在もその価値も……知らぬはこの国に住む当人ばかりよ!!?」

「心綱」によるものか、あらゆる事柄を見通していても言いたげな物言いに、ガン・フォールもナミも表情をこわばらせながら、困惑する。

空に住む者にとつて最も焦がれる大地。それをさも下らないものの様にいう彼の真意が、全く掴めないでいた。

「くしくもゲームは最終戦、このサバイバルを制した者が莫大な黄金を我がものとする。ヤハハハ……聞こえるか? 賑やかな祭りの騒ぎ」

困惑を残したまま、エネルは不意に欄干の上で立ち上がり、二人に背を向ける。

ガン・フオールは慌てて腰を上げ、去ろうとするエネルギーに声を張り上げた。

「待て!!? 神隊は解放するのかわ!!?」

「…それは神のみぞ知る事だ」

その言葉を最後に、エネルギーの姿はまるで最初からそこにいなかったかのように、掻き消えてしまった。

??

「…ここは初めて来た場所だな。逃げてるうちにこんな所に迷い込むたア……」

鬱蒼としげる密林の間。

ごろごろと小石の様に遺跡のかけらや、古い人骨が散乱している場所を、アーレンがゆつくりと歩いていく。

傍には誰もいないが、彼の歩みはどこか堂々としていた。

「行けども行けども、見つかるのは骨壺ばかりか。この辺は昔の墓場だな……そんなでこいつが、ここらの死者全員分の慰霊碑と。そいつに刻まれてんのが……」

ザクザクと雑草を踏み越え、歩き続けていたアーレンの足がふと止まる。

その視線の先にあつたのは、大きな板状の意思に刻まれた、奇妙な形状の文字と、それに連なる様な幾つもの絵だった。

「『歴史の本文』……!!?!!? ……こいつだけはどうにもならねエ……読める奴がいなきや、手

も足も出ぬエ」

読める者がいない、というより読むことが禁じられている謎多き文字。

それを前に立ち尽くしていたアーレンだったが、しばらくするとニヤリと笑みを浮かべ、懐から取り出した手帳と睨めっこを始める。

「……………」が、そいつは普通の考古学者の話よ。おれくらいの学者の手にかかりや、まわりの絵や文の長さでだいたいの内容は推測できる……………なるほどなるほど」

ぺろりと唇を舐め、ペラペラと手帳をめくっていく。

数年間で自身が写しとってきた、あたりの遺跡に遺された無数の文字と絵。それらを総合し、照らし合わせることで、そこに託された製作者の意図を、限りなく正確に読み取ろうとする。

やがて彼の目が、ぎらりと鋭い輝きを放った。

「悪魔の呪い……………生贄の儀式……………他所者の来訪……………そして真祖の再臨……………!!! だいたいわかってきたぜ……………この島でかつて、何が起こったのか……………!!!」

彼は文字が読めるわけではない。

かろうじて、文章同士を比較することにより、いくつかの単語を読み解き、片言程度には文を理解できる様になっただけ。

しかしそれだけでも、十分に彼が優秀な考古学者であることを表していた。

「そして……真祖とやらの正体も」

パタン、と新たに記入を済ませた手帳を閉じ、懐にしまい直すアーレン。

その目は、ギロリとさらなる森の奥—— “髑髏の右目” へ向けられ、眼光がさらに鋭さを増した。

「さらなる情報を得るためにや……やっぱ、中心に行かにやアならんか」
??

——ちよつと!!?

どこ行くの変な騎士!!?

“神” エネルがさつたと思つた直後、突如襲撃してきた二人の服神官たち。

倒れたエレノアたちを庇い、なんとか撃退したナミだったが、そんな彼女をおいて、ガン・フオールは船を飛び出そうとしていた。

——すまぬが我輩、エネルを追う!!!

——何言つてんのよ!!?

——レディを1人にする気!!?」

——だからすまぬと言つておる!!?

我輩の部下達の命の危機なのだ!!?

いや!

ともすれば……この国の危機やも知れぬ!!

と、そんなやりとりがあり、ガン・フォールはまだ傷も癒えきっていない状態のまま、ピエールと共にそらへっ飛び立ってしまった。

残されたナミは愕然となるも、どうにか落ち着きを保ち、いまだ意識の戻らない三人を船室に引きずっていく。

「……………とりあえずこいつらの応急手当てを……!!? 生きてるんでしようね!!? 3
人共……!!?」

何が起こったのか、今でも全くわからない。

とにかく三人の安全を確保しなければ、と四苦八苦していた時。

突如、パン!と音が響き、メリー号とカラス丸のすぐ近くに、新たなミルクィロードがつながってきたのが見えた。

「え……何!!? 何何!!!」

いきなりのことで、ナミはぎよつと目を見開くと、思わずサンジとウソツプを盾にして、エレノアを抱えて身を隠そうとする。

すると、ぎゅつと身を縮こまらせる彼女の耳に、妙に騒がしい音が届き始める。

「あ!!? へそ!!? ナミさ……ん!!!」

「え?」

聞き覚えのある声に、ナミは顔をあげて目を凝らす。

そこにはパラリラパラリラと、街中なら間違いなく迷惑行為に取られる騒音を撒き散らしながら向かってくる、大型のウエイバーが一機。

それに乗っていたのは、エンジェル島で出会った空の住人、パガヤとコニスだった。

「コニス!!? おじさん!!! 何で、ここにいるの!!? ていうかラッパうるさい!!!」

ガン・フオールに匿われ、安全なところにいるはずの二人がなぜ、と困惑し、ついでに空気の読めていない騒音にイラつかされるナミ。

その時、ウエイバーを操っていたパガヤがいきなり慌て出した。

「ちよつ…ダメです!!? 降りてはダメです!!?」

「離せ〜!!!」

ウエイバーの上から飛び出そうとしている、一人の少女の姿を目にし、ナミは首を傾げる。

コニスたちとは異なる外観の格好をした、気の強そうな少女だ。少なくとも、エンジェル島に住んでいた人々とは印象が異なっただけに見える。

「誰?!? その子」

「青海人つ!!? 排除してやる!!? あたいはシャンドラの戦士だ!!!」

「だから何なの、私とやんの?!?」

コニス達と一緒にメリー号に乗り込み、ナミを見るや否や、貝のついた棒切れを突きつけてくる謎の少女。

ナミは思わず、ガン・フォールから預かったままの衝撃貝付きの籠手を向けながら、胡乱げな目で問う。が、他の三人を見たコニスには、それに応えている暇はなかった。

「まあっ！ 大変っ!!? 皆さんまるコゲだわ!!? すぐに手当てを」

「…!!? 真祖様……!!?」

沈黙しているエレノア達を前にし、息を呑むコニスの声に、謎の少女も振り向き目を見開く。

そして、きつと唯一無事な姿のナミを睨みつけ、怒りで肩を震わせ始めた。

「お前ら真祖様をよくもこんな目に……!! 絶対ゆるさない!!」

「さつきから何なのよあんだ!!? ホントに誰よ!!」

「とにかくすみません、今我々が来た道に進路を!!? “雲貝”で新しく作った川です。直接白々海へ出られます」

ギャーギャーと、顔を出して早々騒いでばかりの少女に辟易するナミに、パガヤがやや慌てた様子で促してくる。

この間も、ウェイバーから流れる騒音は止まらないままだった。

「敵に見つかる前につ!!?」

「だったらもつと静かに登場してよ!!?」

本当に逃す気あんののか、というナミのツツコミが虚しく森の中に響き渡っていた。

そんな、耳を塞ぎたくなる様なナミ達のやりとりも、エレノアには届いていなかった。泥の様に重い闇に囚われた彼女は、ぼんやりとした思考の中、もはや自分のものではない様に感じる手足に意識を向ける。

だが、鉛の様に重くなったそれらは、ピクリとも動いてくれなかった。

(……………身体……………動かないな……………)

指先一つ、全く動かない。

脳と全身の繋がりが完全に切断されてしまったようで、少し頑張っただけで、エレノアはすぐさま諦めてしまった。

(最悪だよ……………自分の体調管理を怠って…チョッパーにもみんなにも心配かけちゃって…ざまアないなまったく……………)

意識を失う前、どうにか覚えているのは、倒れていく自分に駆け寄ってくる必死の表情のナミとウソップ。そして、現れた男に立ち向かっていくサンジ。

薄れゆく意識の中で見えたのは、閃光と轟音を迸らせる、雷だった。

(自然系悪魔の実「ゴロゴロの実」の能力者……………なるほどなア、「覇気」の扱いも知

らない連中じゃあれの相手は務まらない……明確な弱点のあったクロコダイルとは違って、生身じゃまともに触れる事もできない……)

改めて、前半の海の易しさに苦笑が溢れ、続いてそんな場所で苦戦している自身に呆れる。

体調さえ万全だったなら、一矢報いることはできた。だがそれだけで、あの男に勝つことは決してできなかつただろうと、自身の無力さが悔やまれる。

(……教える事はできるけど、私にその資格はない……いずれ一味を去る私が過度に干渉したら、あの子達の成長を妨げる……でもこれは、ただのいいわけだよ……)
自分の身勝手な思考に、ますます呆れが増す。

縁を利用し、かの海へ戻ることを望んだ。しかし共に旅をするもの達に過剰に力を貸すことを拒んだ結果が、この様である。

情けなくて、みつともなくて、涙が溢れそうであった。

(身体ももう……指先一本動かせない……もう……自分の身体じゃないみたいだ……)

これが罰なのなら、まだまだぬるいとさえ感じてしまう。

そしてこれだけでここまで傷ついている自身の弱さは、どうしようもなかった。

(……私、死ぬのかな……やだなア……パパにもみんなにも……エースにも会えない

まま……こんな空の果てで終わるなんて……まだあの人に……伝えなきゃいけないのに……（ん？）

より一層深く沈んでいく自身を思い、嘆きをこぼすエレノア。

その時ふと、自身の思考の淵に浮かんだ奇妙な一言に、困惑が生じた。

（伝えるって……何を……？）

どこからきたのか、なぜ浮かんだのかわからない、意味深な思考のかけら。

それを探ろうと、エレノアが今にも途切れそうな意識を傾けようとした時だった。

——やれやれ……未熟な此奴にはまだ早すぎる相手だったな……

しかしまあ……私にとつては非常に都合がよい。

ぎくり、と。エレノアの体が硬直する。

全く聞き覚えのない、しかしどこかで知っているその声に、エレノアは大きく目を見

開き、ゆっくりと振り向いた。

（……誰？）

——お前は休んでおればよい……目が覚めた時には、もう全て終わってしよう……

!!?

エレノアの目に映ったのは、自身に向かって近づいてくる細い腕。

伸ばされたその手は、一方的にエレノアの目を塞ぎ、闇の奥へと押しやる。そして自

身が代わりに、表へと泳ぎ出でていく。

——しばし、借りるぞ。

お前の身体を——。

その声を最後に、エレノアの意識は完全に闇に閉ざされた。

第137話 空の主

ブオンツ！と唸りを上げ、ナミが操るウエイバーが停止する。

その力強さは、以前に彼女が借りた普通のウエイバーとは比べ物にならないほどであり、思わず満足げな笑みが浮かんでいた。

「…確かにお返ししましたよ」

「ええ、ありがとう。すごく気に入った!!?」

メリー号の甲板に戻り、パガヤから渡されたウエイバーの感触を改めて確かめる。

青海で拾った時から想像もできない、新品同様のその姿に、ナミは感嘆しつばなしだった。

「段違いのスピードだね……………!!?」

「ええ、ジェットダイアル噴風貝^はは数百年前の絶滅種でして、私も驚きましたよ。お預かりしたウエイバーにこれが搭載されているとは…」

パガヤも自分が修理したウエイバーの威力に、驚きを隠せないようである。

通常の風具をはるかに上回る、凄まじい力を誇った貝ダイアルの一種。最早幻の存在と言っても過言ではないそれを修繕できたことが、いまだに信じられないようである。

しかし、すぐに彼の表情は曇り、悩ましげなため息が零れた。

「——しかしさて、これからどうしましょう。みなさんがご一緒ならスカイピアの果てへご案内するつもりだったのですが」

「……ん、とにかく船は約束した海岸へつけなきや。無事だとは思うのよね」

一度裏切ってしまった後ろめたさと義務感から、一味を外海へ逃がそうと追って来てくれたパガヤ親子。

しかしやつとのことで到着したところ、一味の半分は島に入ったまま何処にいるのかわからないという。しかしそんな二人に対し、ナミは然して気にした様子を見せていなかった。

「1人はともかく、あの4人が揃ってれば敵もないわよ……」

「“5人組”なんて島にいないよ」

何も問題ない、と肩を竦めるナミだったが、そこへ楽観的な考えを切り捨てるような声が響く。

振り向いたナミは、パガヤ達と一緒にやってきた、ゲリラ達の仲間だという少女・アイサを見やった。

「多くても2人組……5人で動いてる奴らがいたらわかるもん、あたい！」

膝を抱え、体を小さく丸めながら告げるアイサに、ナミはハッと思い至る。

まるで見てきたかのように、離れた場所にいる誰かの様子を言い当てるこの力は、神官やエレノアが使っていた例の技で間違いない。

「『心綱』…神や神官が…エレノアも使えるってやつね…」

「生まれつき使えるんだ、あたいは!!? …だから恐いんだ…」

ぶるぶると肩を震わせ、目に涙をためるアイサ。

彼女にとつては、深い森の奥で行われている殺し合いは、目の前で行われている殺戮劇に等しいのかもしれない。

そんな印象を抱くほどに、少女は怯え、嘆き悲しんでいた。

「『声』が消えていく恐怖が、あんた達にわかるもんか……!!!」

「また泣くの」

「泣いてない!!! バカ青海人、バカ!!?」

呆れたようにナミが指摘すると、アイサはくわつと目を吊り上げて怒鳴る。

それでも涙を止められずにいるアイサを見つめ、コニスが痛ましげに語った。

「アイサさんは…ウェイバーが壊れたらしくて、空魚に襲われているところを私達を通りかかって……」

「何するつもりだったのよ」

「知らない!!? ……でもじつとしてられないじゃないか???」

ナミの眩きをかき消そうとするように、アイサが再び叫ぶが、すぐにまた膝の間に顔を伏せ、身を震わせる。

小さく漏れ聞こえる幾つもの名前は、神の島で斃れていく仲間達の名前であろうか。あまりにも痛々しい少女の姿に、ナミ達は何も言えなくなってしまった。

メリー号でそんなやり取りが行われていた時。

暗く深い、ある道を歩いていたあの男が、ハッと目を見開いて足を止めた。

「はっ」

真つ暗闇で、しかしなぜかわずかにぼんやりと見渡せるその道を歩き続けていたル
フィ。

しかししばらくすると、彼の目指す先は完全に塞がれてしまっていた。

「……………えっ、行き止まり!?? ……ここまで歩いてきてそりやねエだろ〜」

森の中でゲリラと戦い、遺跡を踏み抜いたかと思うと、いつの間にか落ちていた謎の
空間。

遺跡の欠片や樹の破片、そして妙になまあつたかい液体が足元を満たすその空間の果
てがこれと知り、ルフィは思わずがつくりと肩を落とす、が。

「あつ……まさかカラクリ扉かな……? そうか、……突き破れば進めるかもな」

ポン、と掌に拳を当て、ひらめいたと目を輝かせる。

基本的に、壊せるものが目の前にあるのなら、それは彼にとって行き止まりなどではないのだ。

「ゴムゴムのバズーカ!!!」

ぐいんつ、と伸ばした腕から放たれる掌底が、目前の壁に炸裂する。

しかし、触れた瞬間に感じたその壁の感触は岩や土などではない。愚に愚にした、妙な弾力に富んだ『何か』だった。

「あり? びくともしねエや……」

決して力を抜いたわけではないのに、と首を傾げるルフイ。

彼の立つ謎の洞窟が大きく揺れ出したのは、そのすぐ後の事だった。

「ちよつと……!!? ダメよ!!!」

ドボンツ!と雲の海で水飛沫があがり、アイサを抱えたナミが顔を出す。

自ら飛び込んだアイサは、自分を引き留めようとするナミの手を払い除けようと思いきり暴れ、盛大な喚き声をあげる。まるで獣のような有様だ。

「待ちなさいつたら!!!」

「何だよ!!? はなせ!!? あんたには関係ないだろつ!!?」

「関係ないけど!!? 見殺しにできないじゃない、あんたみたいな子供つ…!!?」

「あたいは戦士だ!!?」

「わかったから、子供の戦士」

「……………!!!」

「にらんでも恐くないもん」

馬鹿にされている、と痛感したアイサがナミを睨むが、もつと恐ろしい者と相對してきたナミには、雀の涙ほどの恐怖も与えない。

アイサを無理矢理にウェイバーの上に引き上げていると、甲板からパガヤ達がハラハラした様子で見下ろしてくる。

「……………!!? 大丈夫でしょうか!!?」

「平気平気。ホラ暴れたってムダよ、乗って」

「離せ〜みんなを助けるんだ〜!!!」

「ブツわよあんた。ウチの船員でさえ、もう3人やられてんのよ!!?」

ウェイバーの上に引き上げられてなお、アイサは暴れる事を止めない。

むしろ、ナミが助けようとする意図を見せれば見せるほど、彼女に対して激しい拒絶を見せていた。

「真祖様をこんな目に遭わせるやつらなんか信用できるか!!! 離せ〜!!! あたいは

あんた達になんか助けて欲しくない!!!」

「真祖って…エレノアのこと言ってるの？ サウスバードといいアーレンさんといい、エレノアの何を知ってるのよ？」

ゲリラの少女が口にする単語に、ナミは訝し気に問い返す。

それにぎろりと鋭い視線を返したアイサは、涙と海水で顔をぐちゃぐちゃにしながら、悔しさを前面に出した形相で口を開いた。

「真祖様は…!!? あたいらにとつてとんでもなく大事なお方だ!!! それをこんなポロポロに…!!!」

「だから落ち着きなさいって…!!?」

「あたいらはあの方と『約束』してんだ!!! だから…シャンドラを絶対に取り戻さなきゃならないんだ!!!」

ギヤーギヤーと叫び、手ごろな位置にいるナミにぼかぼかと怒りをぶつけるアイサ。

オロオロと困惑した顔で、様子を見守るパガヤとコニスによそに、ナミは険しい表情で大きなため息をこぼした。

「…わかんないことだらけだわ」

仲間が今どうなっているのか、仲間の一人と連中にどんな因縁があるのか。

考えたくても、解き明かすためのピースが足らず、思考がそこで止まってしまう。

そんな彼女の視界に、ある異様なものが映った。

「え×」

思わず声を漏らし、ナミは動いているそれを凝視する。

木々の間から顔を出し、海雲をぐびぐびと呑み込んでいる、比較することも馬鹿らしくなるほどに巨大な顔が——ルフィたちを散々追い回していた大蛇が、そこにいたのだ。

「ええ!!?」

何故だかイライラした様子の大蛇を前にし、ナミ達はギョツと目を剥いたまま、その場で硬直する。

鬱陶しそうに、気だるげにのそりのそりと動く大蛇は、突如目を見開き、のたうちながら苦し気な咆哮を上げ始めた。

「ジュララララララララララ!!!」

「きやああ~~~~~~~~!!!」

超巨大怪物が見せる突然の奇行に、至近距離にいたナミとアイサが悲鳴を上げる。

大蛇は彼女達に気付いた様子はなく、ひたすらに自身を襲う謎の苦しみに悶え、咆哮をあげて暴れ続けていた。

「何なのこのデカさ!!!」

突然の異常事態に、ナミは完全に冷静さを失ってしまふ。

そんな彼女の前で、大蛇はさらに大きく体をうねらせ、泣き叫ぶような咆哮をあげて動き出した。

「ウガ……!! ジュラララララララア……!!」

「いやあああ……っ!!」

「ああっ!!? ナミさんそっちは森の中!!」

「ナミさ……ん!!」

突然迫ってきた大蛇に、ナミは完全にパニックに陥り、神の島に船首を向けたままスロツトルを回し、森の中に突っ込んでいく。

大蛇にその意志はないものの、自身を襲う激痛に突き動かされるまま、ウェイバーを追うように森の奥へと突っ込んでいった。

「……………ど……………ど、どうしましょう。森へ入ってしまった……………」

瞬く間の出来事に、パガヤとコニスは啞然と固まったまま立ち尽くす。

一刻も早く神の地から逃げ出さねばならないのに、また一人侵入してしまったと、思わず頭を抱える。

そんな時だった。

神による一撃で眠りについていた一人が、船室から顔を覗かせたのは。

「!!? ああ!!? エレノアさん!!! 目を覚まされたのですね!!? 大変なんです!!?
今ナミさんが『空の主』に追われて森の中に……!!!」

エレノアの姿に気付いたコニスが、慌てて状況を説明しようとして声を張り上げる。

だが、声をかけられた当人は、ゆらりと体を揺らすだけで、然したる反応を見せない。ぎろりと、鋭い目で神の島を睨みつけるだけだった。

「……………え…エレノア…さん…?」

「……………懐かしい声が……………聞こえたな」

コニスとパガヤの戸惑いの声に答えず、エレノアは——エレノアの姿をしたその人物は、フツと笑みを浮かべる。

だが、森に向けて一歩を踏み出そうとした彼女は、途端にぐらりと体を傾がせる。

「…あアいかん……………身体がだるい…」

「う、動いてはダメです!!! 襲撃を受けたばかりで傷だらけなんですよ!!!」

「今はとにかく安静に……!!!」

駆け寄る二人に、その人物はバツと掌を示し、制止させる。

ぐんつと背筋を正し、先ほどよりも力強く仁王立ちした彼女は、寧猛な笑みを浮かべて体ごと神の島に向き直った。

「…ああ、そこにいるのか」

そう呟いた直後、彼女のロープが細切れになり、白い翼が開かれる。

あらわになった彼女の姿に、唾然となるコニスとパガヤ。彼女達の前で、その人物は大きく翼を羽ばたかせ、弾丸のような勢いで天空に飛び出していく。

「エレノアさ〜ん!!!」

呆気にとられていたコニスが我に返った時には、すでに彼女は神の島の上空へと飛翔してしまっていた。

??

神の島の中心を貫き、雄々しく天に向かって聳え立つ巨大な豆の木。

その幹をスケート型のウェイパーで登る、一人の戦士の姿があった。

「この『ジャイアントジャック巨大豆蔓』の頂上に『神の社』!!! エネルがいる!!!」

鬼のような形相で、怒りと闘志を目に燃やす彼の名はワイパー。

故郷を奪還するため、戦い続けてきた古代都市シャンドラの民・シャンディアの末裔。島で最も強かった戦士の血を継ぐ者である。

「決着をつけてやる……!!! 忌々しい400年の歴史に!!!」

彼の狙いはただ一つ、『神』エネルの首を取り、故郷を奪還することのみ。

只管に頂上を目指していた彼は、不意に宙に跳び出す。直後、彼が進もうとしていた場所に、白く長い刃が刺さり、豆の木の表面を斬り裂いた。

「ワイパー……それ以上蔓を登ると、〃神の社〃へ到達する……誰が通過を許可したんだ!!」
「？」

「……………オーム!!!」

立ちはだかる神官の一人に、ワイパーは憤怒と憎悪の目を向け、背負ったバズーカを構える。

双方、決して油断できぬ相手を前に、殺意と緊張感が漂い始めていく。

しかしそこに割り込む、新たな戦士の姿があった。

「〃神の社〃など、もはや目指しても無駄である!!!」

「ガン・フォール!!!」

遺跡の上に降り立ち、マントをたなびかせる空の騎士ガン・フォール。

戦士ワイパーも神官オームも、前触れなく現れたかつての空の国の長を、胡乱気な視線で迎えた。

「てめエがなぜここに……!!! まだ〃神の座〃に未練があんのか!!!」

「……未練はないが……まだ責任を取り終えておらぬ……—今、この上にある〃神の社〃を見てきた所だ……!!!?」

苛立たし気に吠えるワイパーを一瞥し、ガン・フォールはオームを睨む。

彼の脳裏に浮かぶのは、相棒ピエールの背に乗り一足先に確認してきた、〃神〃エネ

ルの住まい——その慣れの果ての光景だった。

「惨劇……全壊しておったよ。勿論エネルギーの姿はない。もはや要らぬ長物と、そういう意味であろうな……おぬしら一体何を望んでおるのだ!!! オーム!!!」

「それを知ってどうする……先短い老兵よ」

!!!

槍を突き付け、強い口調で問うガン・フォールに応えたのは、オームではなかった。

瓦礫を踏み越え、木々の間から姿を現した五人目の神官・クロウリーが、濁った眼を三人に向けて告げる。

「この先に何が起ころうとも……貴様がその結末を目にする事はないだろうに」

途端に迸る、凄まじい濃度の殺気に、ガン・フォールとワイパーだけでなく、味方のオームまでもが冷や汗を流す。

しかし、最も危険な男が動き出す直前、天空からひゆるる……と何かが落下し、轟音とともに降り立つ。

「ア……効いた……あんの鳥許さん!!!」

「おぬしか……!!?」

「……ん? ……は……!!!?」

ガン・フォールが目を見開き、のそりと起き上がった男に驚愕の目を向ける。

ある一羽のサウスバードに弁当ごと攫われ、そして空中で捨てられた経緯を持つゾロは、周りに集う男達を見渡し、納得した様子で刀に手をかけた。

「アア……見るからに凶暴そうなのがいるな……オイ、黄金よこせ」

「やれやれ哀しいな。我が『鉄の試練』、誰一人逃れられぬのに……!!」

「てめえら全員……邪魔をするなら排除するのみだ!!」

「エネルの居所!!! 神隊の居所を教えて貰おうか!!!」

「己が立場をわきまえられぬ愚者共が……せめて我が血肉として供養してくれようぞ」

互いに強烈な殺気を迸らせ、睨み合う5人の戦士達。

そしてそこに、また新たな参戦者が勢いよく顔を出し、強烈な咆哮をあげて降り立った。

「どうなってんだ!!! この洞窟はア……!!!」

「ジュラララララララララ!!!」

涙を流しながら、神の島の中層に姿を現した空の主と呼ばれる大蛇。

それを横目に、ゾロが、オームが、ワイパーが、ガン・フォールが、そしてクロウリーが、目の前にいる者を敵と見定め、臨戦態勢に入る。

「まあ御仁方々、言いてエ事は色々あるだろうが……主張したくば、まずはここで生き残る事だ」

話など必要ない、己の道の邪魔をする者として、全員を排除するつもりになっていた。

第138話 “強者共の宴”

視線を横に向ければ、なぜか泣きながら荒い息をついている大蛇の姿が映る。

それが何故かなど考えるつもりはさらさらなく、ゾロは苛立たし気に舌打ちをこぼす。

「あの大蛇……とうとうこんなトコまでやってきやがった」

森の中では、真面に相手をする暇はないと逃走を選んだ相手だったが、こうもしくこく追ってくるのなら戦う外にない。

だがそこには、ゾロ以上にイライラとした様子の戦士が一人いた。

「……いつもいつも……まとめて消えろ!!!」

自分の、自分達の『悲願』を果たすのに邪魔な敵が多く集まっていることに、ワイパーは鬼の形相をさらに険しくし、バズーカを構える。

そして、もつとも目立つ標的である大蛇に向かって、強烈な熱の砲撃が放たれ、大きな爆発を引き起こした。

「ジュララララララ!!!」

「……………厄介な武器持ってやがる」

危うく巻き込まれかけたゾロは、ザザツと遺跡の上を滑りながら、ワイパーを睨みつける。

もとより狙ったつもりもないが、敵にさしたる傷を負わせられなかったことに、より一層不機嫌さをあらわにした。

「何も知らねエ青海人が…!!? 昨日今日空へ来たお前らに、渡せるもんはここにねエぞ!!!」

「他人事をいちいち把握する気はねエな!!? 空の事情はおれ達にや関係ねエ!!?」
 「だろうな!!? 元々消す腹!!? 不都合もない!!! くだばれ!!!」

問答すら鬱陶しいというように、熱を持ったバズーカが再び灼熱を放つ。

それをまた躲したゾロは、咆哮とともに飛び掛かってくる大蛇の攻撃を何とか躲す。ボゴントツ!と碎ける遺跡の破片の焼けるような音に、ゾロの頬が引き攣った。

「そうだあいつは…キバに毒を持ってやがるんだ」

戦士からは爆炎の砲撃、大蛇は猛毒、相對する敵は皆危険な武器を備えており、生半可には突破できそうにない。

その時、ゾロは不意に感じた寒気に、自身に接近する巨大な存在に気付いた。

「グルルル…ワン!!!」

「!!? こつちもキバか!!?」

響き渡る獣の鳴き声に、刀を構えて待ち構える。

だが、振るわれたのは牙ではなく、固く握りしめられた拳だった。

「シツ!!?」

「うお!!!」

ぶんとと迫った獣の前足による拳を、ゾロは紙一重で躲す。

大きく跳び退り、襲い掛かってきたその獣——ゾロの背丈を遥かに超える巨体を持つ犬の見せた拳闘の構えに、ゾロは思わず目を見開いた。

「な!!! 何だこの犬の動きは!!!」

まるで人間のような動きを見せる巨大犬に、ゾロは一瞬戦闘中であることを忘れて凝視する。

その巨体の頭上に座り、奇妙な形状のサングラスをかけた神官、オームが嘲笑うように告げた。

「コイツの名はホーリー!!? 言っておくがおれは^{スカイブリーダー}“空の畜産家”。動物に対し並の仕付けなどでは留まらない、完全なる“二足歩行”、次いでは“拳闘”までたたき込んだ…!!? とくと味わえ!!!」

「限度つてあるだろ」

自慢げに語るオームに、ゾロは呆れた声をこぼす。動物として超えてはならない一線

を越えているような、そんな微妙な感想を抱かされてしまった。

その時、地面が大きく震え、メリメリと遺跡の一部が大きく盛り上がり始めた。

「若造共が…常々言つてあるはずだがな」

残るもう一人の神官、クロウリーの眩きあたりには響くと、盛り上がった地面が徐々にその形を変えていく。

腕ができ、足ができ、赤黒く輝く二つの目が出来上がる。見る見るうちに生まれ出たそれは、まるで雷鳴のような咆哮をあげ、進軍を開始した。

「オオオオオオオオ!!!」

「なんじゃありや……!!!?」

ズシンズシンと遺跡を踏み砕き、ゾロの方に向かって進む巨大な異形。

我に返ったゾロがあわてて飛びのくと、異形が振り上げた巨大な腕が叩きつけられ、凄まじい轟音と衝撃が撒き散らされた。

「クロウリー!!? 貴様おれの邪魔をするな!!!」

「敵はただ潰す……おれの前にいたお前が悪い」

ゾロと同じく飛びのいたオームとホーリーは、異形の肩に乗るクロウリーに憎々しげな目を向ける。

が、クロウリーは殺気のこもったそれらを気にした様子もなく、むしろ鬱陶しそうに

顔を歪め、吐き捨てるのみだ。

「ふざけやがって、何だあのデク人形共は…!!? “三十六” ……!!?」
地響きとともに、その巨体を見せつける異形に、ゾロが唸るように呟く。

再び、その巨大な腕が振り上げられる直前、ゾロは刀を構え、異形に向かって思い切り振り抜いた。

「^{ポンドほう}煩悩鳳!!!」

放たれるのは、かつて巨人達が見せた強烈な一閃。

放てる者はそういない、卓越した技術と剛力によって生み出される “飛ぶ斬撃” が、真つ直ぐに異形に向かい、その腕を斬り飛ばした。

「…ムダだ」

だが、異形の肉体が損壊しても、クロウリーの表情に変化はなかった。

彼の足元で、ボコボコと異形の傷口が盛り上がり、あつという間に代わりの腕が生え、ほとんど元通りになってしまう。

その光景に、ゾロは信じられないとばかりに言葉を失った。

「なんだこいつらは…!!? どうなってるんだ!!?」

「“骸の試練” ……もともと命を持たぬ者を、いかにして殺すのだ? 青海の剣士よ

…」

立ち尽くすゾロに、クロウリーはにやりと不気味な笑みを見せる。

その頭上では、ホーリーを操るオームを狙い、ガン・フォールがピエールと共に槍を振りかざしていた。

「ガン・フォール……シユラゴときに一度やられた男がまだ懲りぬか!!?」

鎧に隠されてはいるが、隠しきれていない包帯の跡を指し、オームが嘲笑する。ガン・フォールは顔をしかめつつも、気を抜くことなく敵を見据え続ける。

「もはや槍を振る事もままならぬのではないか!? 老いぼれ!!!」

「さりとて退けぬ!!! 今より貴様らが何をやらかすのかわからぬのだからな!!!」

「フン……!!? 思い上がるな……」

雄々しく吠え、槍を振りかざすガン・フォールに、オームは心底心外だというように鼻を鳴らす。

彼にとつて、ガン・フォールやワイパーの闘志は、天才に挑むような愚行と相違なかった。

「それを知ろうとも神の高き心、貴様になど理解できん!!!」

??

ザク、ザク、と島雲が切り取られ、ぽーんと穴の底から放り捨てられる。

かれこれ一時間ほど続いているその作業に、アーレンは一度手を止め、額に浮かんだ

汗を拭う。

その時、彼の近くに一枚のハンカチが差し出された。

「…よオ、来たのか嬢ちゃん」

「あら、先に来ていたのね」

「まあな」

アーレンはハンカチを受け取り、腰を下ろしながら汗を拭う。

アーレンの開けた穴を下りてきたロピンは、その深さに感心したようにため息を吐き、目を細める。たった一人ですいぶん掘り進んだものだ。

「上にあつた遺跡は、ただ『島雲』に侵食された都市の一部に過ぎないのね……まだ下へ行けそう……」

「…力仕事ならおれがやる。敵が出てきたら頼むぜ」

「わかつたわ」

ロピンにハンカチを返し、アーレンはナイフで島雲を掘り進める作業に戻る。

ロピンはハンカチを鞆にしまい、能力で穴の壁に腕を生やす。アーレンが切り取った島雲の塊を、列になった腕で一つ一つ運び出していく。

黙々とナイフを動かす老人を見下ろし、不意にロピンが口を開いた。

「外の様子がどうなってるか……わかる？」

「あ?」

「あなたも使えるんでしょう? 妖術師さんが言っていた『聞く』力を……」

アーレンは一瞬手を止め、少し考えてから、また作業を再開する。

視線は真下の島雲に向けられたままだが、意識はロビンに尋ねられたとおり、気配を探るために周囲に向けられる。

「……緑の髪の毛の兄ちゃん、シャンディアの若頭……それに元・神のじいさんに神官が二人……大蛇が一匹…………そんでよくわからんがヤバそうな気配がたくさんだな」

「どうやってその力を?」

「さあ……神官やら試練から逃げ回ってるうちに、何となくわかるようになってた。この島全域ぐらいなら聞き取れるぜ」

サク、サクと島雲を切り取り、近くのロビンの手に渡していく。

感心した眼差しを向けるロビンに対して、アーレンの表情は何処か虚しそうで、気落ちした様子を見せていた。

「ま、聞こえても戦う術は手に入れられなかったがな……着いたぜ」

アーレンに言われ、ロビンは貫通した島雲を見下ろす。

最後は切れ目を入れるだけで、ふたのように開いていく。できた道に、アーレンが先に入り、続いてロビンの手を取って降り立つ。

そこには未到達の遺跡があり、二人はゆっくりとその場所を進む、すると。

「……800年前突如滅びたシャンドラの都市……そんな風には思えない。今まだこんなにも堂々と……こんなにも雄大……」

そこに広がっていた光景に、ロビンとアーレンは言葉を失くす。

空島に辿り着いた時の感動に負けずとも劣らない、自分の目を信じられなくなるほどの光景が、そこにあつた。

かつての姿とそう変わらないままの、悠然と存在する遙か昔の都市が。

「……………これが、黄金都市『シャンドラ』!!!」

??

「よせワイパー!!! 我輩は……」

『我輩』……何だ!!! 敵じゃねエと言いつてエのか!!! おれ達にとつちやあてめエもエネルも同類なんだぞ、ガン・フォール!!!」

「……………!!! 聞く耳も持たぬか」

天を舞うガン・フォールに向けて、ワイパーが燃焼砲を放つ。

自身に対する敵意を止めさせようと説得を試みるワイパーだったが、同士以外を全て敵と認識した彼は止まらない。

その真下から、大きく口を開いた大蛇が襲い掛かる。

「ジュラララララララ!!」

「ピエ~~~~!!」

「野郎……!!」

因縁など微塵もない、ただ只管に破壊を撒き散らす怪物蛇をいい加減鬱陶しく思い、ワイパーが砲撃を放つ。

だが、額に真面に受けたというのに、大蛇はぶるぶると顔を振り、無傷の顔を見せつけ、再び襲い掛かった。

「ジュララララ!!」

「バーンバズーカ燃焼砲が効かねエとは、どんなウロコだ……!!」

大蛇の異常なまでの強靱さに舌打ちし、ワイパーは思わず歯噛みする。

そのすぐ近くでは、胸に傷を受けたゾロがぐくりと膝をついていた。

「……………!! 今……………何を……」

「……………フン、青海人はこれだから困る……」

血を流すゾロに、オームは小馬鹿にしたように吐き捨てる。彼の手にある白い刀が、もくもくと形を変えている。

「鉄雲」と呼ばれる種類の雲を操る彼にとって、間合いなど一切関係が無いのだ。

「この刀もまた『鉄雲』なのさ——つまり刀身はこの刀の柄に仕込まれた貝から追加さ

れる『鉄雲』により、どこまでも敵を追う!!!」

語りながら、オームが再び剣を振るうと、白い雲の剣はしなりゾロを追う。

紙一重でそれを躲し、刃を食い縛るゾロに、オームは完全に彼を格下と見下した態度で笑みを浮かべた。

「理解できたかね、青海の剣士君」

「まるでムチだな…理解したよ。白々海は曲芸戦士の集まりだつてな」

「ムダ口を叩く暇があるのか?」

息を切らせつつも、フツと不敵に笑うゾロの耳に、もう一人の厄介な敵の音が響く。

ずしん、と遺跡を砕きながら振るわれた、二体の土塊の異形の一撃に、ゾロはますます険しい形相でクロウリーを睨みつける。

「貪り尽くせ、飢えた呻き」

クロウリーが手から赤い雷を迸らせると、次々に地面が盛り上がり、新たな異形たちが生み出されていく。

たった一人で、巨大な異形の軍団を作り上げていく男に、さすがのゾロも顔を引きつらせ始めた。

「『沼雲』…『島雲』…『紐雲』…そして『鉄雲』。あらゆる種類の雲を組み合わせ、我が力を注ぎ込んで創り出したのがこの『骸雲』!!?たとえ四肢をもごとくと、首を

斬ろうと、不死なる軍勢は止まりはしない!!!」

「不死だア……!? いよいよバケモノじみてきたな」

誇張とは思わない、悍ましい力を目の前で見せつけられ、迫り来る異形たちを迎え撃つ体勢に入るゾロ。

異形たちはそんな彼を見据え、次々に飛び掛かり、剛腕を砲弾の様に振り落としていく。

「〃ヘルタースケルター
傀儡兵〃!!!」

爆発と勘違いしそうなほどに凄まじい一撃が、幾度もゾロに向けられる。

幸いなのは、異形たちの動きが見た目通りやや鈍い事か。どうにか飛び退り、躲したゾロのこめかみを、いくつもの汗粒が滴り落ちていく。

「さつきから何なんだ、あいつのあの感じ……!!!」

ゾロが戦慄していたのは、異形たちの放つ一撃の重さなどではない。

今も尚感じられる、異形とクロウリーから感じられる奇妙な気配のせいだった。

「数えきれぬエ量の蟲が蠢いてるみてエだ……!!?」

ごくりと息を呑むゾロ。

その姿を見据え、異形たちの攻撃から離れていたオームが、自身の側に立つホーリーに語り掛ける。

「ホーリー……別れて戦おうか……!!? ——この『上層遺跡』……少々賑やかに
なってきた様だ……!!!」

彼が呟いた直後、巨大な豆の木の方から新たな人影が飛び出し、それぞれで遺跡の上に降り立っていった。

「何とも……『空の主』までいるとはな……!!?」

「加勢しますぞ、オーム様」

「『メ〜!!!』」

彼らの姿は、まるで人と山羊を掛け合わせたかのような奇妙な姿。

神兵と呼ばれる、特殊な訓練を受けた者達が、ゾロとワイパーたちを敵と見定め、嘲笑を見せる。

だが、現れたのは彼らだけではなかった。

「お前ら……」

「どうやら残りは」

「おれ達だけらしいな」

「お前をエネルの元へ到達させてやるぞ、ワイパー!!?」

士官の試練や、神兵たちの襲撃を越えて生き残ったゲリラ達が、ワイパーの側に集まってくる。

傷だらけになりながら、なおも闘志を絶やさずにいる彼らに、クロウリーが鬱陶しそうに眉間にしわを寄せ、ため息交じりに声を漏らす。

「羽虫がわらわらと…!!?」

「!! クロウリー…!!?」

「このシャンディアの裏切り者…恥さらしが!!」

クロウリーの眩きで、彼の存在に気付いたゲリラ達が、その顔に強烈な怒りと憎悪をあらわにし始める。

ギリツ、と軋みを上げる彼らの得物が、彼らの激情の凄まじさを表していた。

「貴様だけは許さん!!!」
 「神」に屈しただけでは飽き足らず…!!? 同胞をためらいなく手にかけてきた貴様は、これ以上ないほどの苦しみを与えて殺してやる!!!」

「…なんだかよくわかんねエが…邪魔な奴らが潰しあつてくれるんなら僥倖だな」

睨み合う神の兵達とゲリラ達、下手をすればゾロをほったらかしにしそうなほどに凄まじい、強い殺気のおつかり合いに、ゾロがにやりと笑う。

どちらが正しいか正しくないかなどどうでもいい。自分の前に立ちただかるのなら、それは彼にとつての獲物なのだ。

「片っ端から斬り捨てるだけだ…!!?」

刀を三本とも抜き、ギラリと獣のような獰猛な笑みを浮かべるゾロ。

二つの陣営と、一人の乱入者、巨大な怪物たち、そして苦悩する老騎士、様々な意志を巻き込む戦いが勃発しようとした、その時だった。

「……鎮まるのだ、子供達よ」

突如として響き割ったその声に、その場にいた誰もが目を見開き、硬直する。

聴覚ではない、まるで脳に直接叩きつけられるかのような凄まじい強さを持った“声”に、戦場が集ったすべての戦士たちが顔色を変え、その声の主を探した。

「誰だ……!!?!」

「この地はかの者達が眠る場所……己が誇りを貫くために命の灯を燃やし尽くして戦い抜いた地……そして我が一族が願いを託した約束の地……!!」

はっ、とようやくその声の主を見つけ出し、全員の視線が集中する。

碎け、積み重なった瓦礫の上に降り立っていたのは、人の姿とはかけ離れた容貌の人物。

不機嫌そうに腕を組み、悠然とそこに佇む一人の女の姿がある。

「醜き欲と荒ぶる御霊の穢れで汚してくるな……然らば我が怒りの鉄槌を持って、汝らに裁きを下さねばならぬぞ」

目を見開き、唾然としたまま絶句する戦士達の前で、目を閉じたその女は——エレノアの姿をしたその女は、バサツと翼を広げる。

まるで、自分の姿をその目に焼き付けろと、そう告げるかのように。

「もう一度言う……鎮まるのだ。子供達よ」

「し……し……!!? 真祖様……!!?」

驚愕の声を上げ、後退るゲリラ達と、戸惑う神官と神兵達。

多様な感情を一身に受けながら、降臨した天使は瞼を開き、青紫色に輝く瞳を見せつけた。

第139話 “目覚めた亡霊”

「奴は……まさか」

「あれは……報告にあった青海人の一人か？　だがあの姿……まるで空の住人のようだな」

遺跡の上に降り立った、空の住民達と酷似した姿を持つ侵入者の一人を凝視し、クロウリーとオームがこぼす。

同じくガン・フオールも、初めて真面にエレノアの姿を見て、戸惑いの声を漏らしていた。

「あれは……あの娘か!?　だが雰囲気が全くの別物……どうしたというのだ!!!」
「ピエ〜〜!!?」

ほどけた髪を風になびかせ、悠然と佇む天使の前に、空の民は言葉を失くす。

だが、それ以上に衝撃を受け、固まっていた者達がいた。

「あ……ああ……!!?」

「ウソだろ……まさか本当に……!!!」

「真祖……なのか!!!」

ワイパーが、ゲリラ達が目を大きく見開き、ぎろりと鋭い視線を向けるエレノアを仰ぐ。

どこか、人間離れた殺気を孕んだそれを受け、その場にいた者達は敵味方関係なく硬直する。研ぎ澄まされた刃の切先のような鋭さに、ごくりと溢れたつばを飲み込まされる。

「ジュララララ…!!?」

大蛇でさえ、突如姿を現した天使を凝視し、固まる。だが、彼に関しては警戒というよりも、強い驚愕による硬直のようにも見える。

そんな中、誰よりも先に我に返ったゾロが、エレノアの姿をしたその女に向かって吠えた。

「おいエレノア!!? お前なんでこんなところにいやがる!!! 調子悪いつててめエで言っただからひっこんで——」

「おい、そのマリモ」

「ああ!!?」

どこぞのコツクのような不名誉な仇名で呼ばれ、ビキツ!と剣士のこめかみに青筋が立つ。

だが、続いて向けられた鋭い視線に、怒りが全て吹き飛ばされた。

「邪魔だ。しばらくそこでおとなしくしておけ」

従わなければこの場で殺す、とでもいうような凄まじい殺気に、ゾロは確信する。

これは、自分の知っている仲間ではないのだと。

「何だ…貴様は？ 地を這うだけの者がよくもまあ我々の姿をマネたもの……」

「…黙るがいい」

神聖な試練の最中に水を差されたオームが、得体のしれない姿を晒している天使を睨みつけ、口汚く吐き捨てる。

だが、向けられる敵意を一切意に介さず、むしろ苛立たし気に睨み返し、天使は冷たい台詞を放つ。

「…よくもこの地をここまで荒らしてくれたものだ……：我らが願う踏みじるだけに飽き足らず、我が誓いをも邪魔立てする慮外者共めが」

青紫色の瞳が、オームと神兵達を射抜き、彼らの背筋にゾクリと震えを走らせる。

彼らは困惑する。目の前にいるこの女は、尋常ではない威圧感を放ち、まるで巨大な怪物のように立ちはだかるこの存在は、一体何者なのかと。

「不敬であるぞ、神の紛い者を崇める小僧共。誰の許しを得て私にその様な目を向けて
いぬ」

「…あれこれ考える必要もなさそうだ…」

一筋の冷や汗を垂らし、オームは鉄雲の剣を構える。

油断ならない、青海の剣士とさえ比べる事も馬鹿らしい何かだということは、この邂逅で十分に理解した。

故に彼は、自身らを害しかねないあの天使を、この場で討つ事を選択する。

「“神”は高き御方!!! それを嘲笑いおつて………そして何より俺を見下ろすな青海人の分際で!!!」

鞭のようにしなる、鋼鉄の硬度を誇る刃が、凄まじい速度で天使に迫る。

避けることなど叶わない、何処までも追いかける鉄の雲の刃が、天使の首を斬り飛ばさんと襲い掛かる。

しかしそれは、気だるげに振るわれた天使の手で、ガキンツ!と呆気なく弾き返された。

(ハジいた…!!?)

手を抜いた覚えはない。むしろ今の一撃で全てを終わらせるつもりで振り抜いた刃は、黒い光沢を有した天使の手で無効化された。

啞然となるオームの横を、斬撃貝を備えた神兵達が勢いよく通り過ぎ、天使に一齐に襲い掛かった。

「オーム様に加勢しろ!!!」

「あの妙な青海人を討ち取れ!!! メ〜〜!!!」

盾ごと敵を斬り裂く、強烈な切れ味を誇る斬撃員を手に、左右上下から一斉に飛び掛かる神兵達。

気圧されていたゾロが駆け寄ろうとした時、天使が鬱陶しそうにため息をこぼした。

「不敬だと言っているだろうに…」

天使がそう呟き、おもむろに瞼を閉じる。そして次の瞬間。

ドクン…ツット。

カッと瞼が見開かれると同時に、まるで空気が数十倍に重くなったかのような圧が、天使を中心に放たれる。

それはまるで津波のように、周囲にいた戦士達全員に叩きつけられた。

「…ア」

「ガ…カツ…!!??」

至近距離でその圧を受けてしまった神兵達は、そしてホーリーが、次々に白目を剥き、その場に崩れ落ちていく。

ブクブクと泡を吹き、意識を飛ばされていく神兵達の中心で、平然とした様子の天使が呆れた様子で肩を竦めていた。

「ふむ…やはりこの体では効果が落ちるな。未熟にもほどがあるぞ、我が血縁ながら情

けない……!!?」

目の前で起こった光景に、神官達やゲリラ達、ゾロやガン・フォーラらは絶句し、天使を凝視し立ち尽くす。

気をすっかり持っていないければ、彼らも神兵達と同じように、意識を彼方に飛ばされそうになっていた。

「……………てめエ、誰だ……!!? そいつの体で何をしてやがる……!!」

滝のように噴き出す冷や汗に気付かないふりをしながら、ゾロがよく知る仲間、剣の切先を向ける。

正直に言うならば、挑んだところで勝てる気が微塵も起きない。雑魚の様に叩き潰されることを理解しながら、ゾロは悲痛げに顔を歪める。天使に殺気を向け続けた。

「…すまん、しばらくこの者は預かる。用事が終わればすぐに返すのでな………そう目くじらを立てんでくれ」

「何を…」

心底申し訳なきように、しかし確かな意志を感じさせる表情で、エレノアの姿をした天使がゾロに告げる。

納得がいかない彼は、この場で問い詰めようと一歩踏み出しかける、だが。

「ジュララララララララ!!!」

詰め寄ろうとした矢先に、ひととき強烈な咆哮を上げた大蛇が、大きく口を開きながら天使に向かって突進してくる。

遺跡を破壊しながら向かってくる巨体に、ゾロやワイパーは咄嗟に距離をとつていった。

「空の主!!!」

「!!? しまった!!? あいつがまだいるんだった!!! よけるエレノアア!!!」

中身が異なるとはいえ、散々大暴れした怪物に狙われていることは変わらないと、ゾロがその場に佇んだまま天使に叫ぶ。

しかし、彼の注意は意味をなさず、棒立ちのままの天使に大蛇の巨体がズズンツ!と激突する、そして。

「ジュララララララララ!!!」

「にはははははは!!!」

ボロボロと涙を流し、ぐりぐりと巨体をこすりつけて吠える大蛇と、それを平然と受け止め、愛おしそうに皮膚を撫でる天使の姿を目の当たりにし、全員の目が点になった。

「……は。」

「ジュララララララララ!!! ジュラララララララララア!!!」

「にははははは!!! どうしたどうした!!? 私がわかるのか!!? そうかそうか、お前

はいいい子だなアチビよ!!!」

大蛇はまるで幼子のように泣き叫び、だばだばと辺りを濡らしながら、己よりはるかに小さな天使に甘える仕草を見せる。

それを天使は心の底から嬉しそうに受け止め、豪快な笑い声を響かせて自身も頬ずりを行っていた。

「ジュララララ…ジュラララララララララ!!?」

「んん? そうか…セトラとはぐれてずつと彷徨っていたのか…かわいそうに、いったいどれだけの寂しさと苦しみだっただろうな」

「ジュラララララ!!?」

「ああ、わかつているとも…私にも色々あった…:…こんなに遅くなってしまったが、こうしてここに辿り着いた。もう残る障害はあつてないようなものだ!!?」

ゾロたちには欠片も理解ができない、大蛇の放つ言葉を正確に聞き取り、天使はうんうんと痛ましげに頷く。

ごつごつとした水色の皮膚を撫でながら、天使は大蛇の目を見つめ、慈愛に満ちた笑顔を向けた。

「一緒に鐘を鳴らしにいきましょう……みんなに届くようにな」

「ジュララ」

大蛇は天使の誘いに、にっこりと顔をほころばせて鳴く。

唾然としている周囲を完全に放置し、一人と一体が固く心を通わせあっていた。

「……………空の主」を……………手懐けやがった……………!!？」

「ほ……………本物だ……………本物の真祖様だ……………!!!」

「真祖様がまた降臨されたんだ……………!!!」

「神の島」において最も危険と呼ぶに相応しい生物が、こうも容易く無力化されているという信じがたい光景に、ワイパーは驚愕を隠し切れない。

徐々にゲリラ達の顔に歓喜が広がり始めた時、彼らは頭上に大きな影が差し始めたことに気付いた。

「オオオオオオオオオ!!!」

「おわああああ!!!」

我に返ったゲリラ達は、慌てて左右に散って振り下ろされてきた巨腕を回避する。

ズシン、ズシンと地響きを鳴らし、土塊の異形を操るクロウリーが、大蛇と戯れる天使に強い敵意とともに迫った。

「おれの邪魔をするなア!!! エインシエン!!!」

「クロウリー……………!!! 外法に手を出した大馬鹿者めが!!!」

向かってくる巨体に、そこから感じ取れる気配に気づき、天使は——エインシエン

と呼ばれた女は表情を変える。

強烈な怒りの形相となり、黒く染めた拳を構えたエインシエンだったが、彼女が動くよりも先に、大蛇の巨大な尾が鞭のように振り回された。

「ジュララララララ!!!」

涙で濡れていた目に、大蛇は明確な怒りを宿し、クロウリーの異形を弾き飛ばす。

バラバラと分解し、吹っ飛んでいく異形たちを睥睨した彼は、突如自身の頭をエインシエンの前に差し出した。

「ジュラ!!?」

「…乗れというのか? 共に戦うと?」

「ジュララララ!!!」

「くくっ………一丁前に男らしいことを言いおつて」

にやり、と不敵な笑みを見せる大蛇に、エインシエンがどこか嬉しそうに微笑みをこぼす。

とんつ、と軽く跳躍した彼女が大蛇の頭部に乗ると、大蛇は獯猛に牙を見せつけながら、ボコボコと復活していく異形たちに向き直った。

「ならばゆくぞ!!! お前の今の力を見せてみる!!!」

「ジュララララララララ!!!」

雄々しい咆哮とともに、天使を乗せた大蛇が異形の軍勢に向かって突っ込んでいく。赤い雷を迸らせるクロウリーは、向かってくる巨体に舌打ちをこぼし、新たに生み出した異形たちをぶつけ、迎撃を行い始めた。

「真祖様に加勢しろオ!!!」

「裏切り者を討ち取れエ!!!」

「オイ!!! お前ら!!!」

異形の軍団に、巨大な怪物を付き従えて向かっていく天使を目の当たりにし、ゲリラ達が追従するように攻撃を再開する。

ワイパーのみがそれに懐疑的な目を向け、大蛇の頭上で仁王立ちする天使を睨みつけた。

「『空の主』を従えただけで凶に乗るな!!!」
アイゼンファン
 「鉄の扇」!!!」

激突する異形と大蛇の戦いに、呆気なくあしらわれたオームが仕切り直しだと言わんばかりに剣を振るう。

扇の形に変わり、エインシエンに向かって放たれた鉄雲の刃は、次の瞬間真横からの斬撃に弾き飛ばされた。

「待てよ。てめエの相手はおれだぜ…」

「青海の剣士………生意気な事を!!?」

邪魔をされたことに怒り、眉間にしわを寄せるオームに、ゾロが剣を突き付けて不敵に笑う。

そこに、大蛇の頭に乗ったままのエインシエンが高慢な態度で語りかけた。

「マリモよ、そんな無礼者は任せたぞ。其奴程度ならお前でもなんとかなるだろう………適材適所というものだ」

「てめエ!!! おれをナメてんのか!!!」

「相性の問題だ、相性の」

あからさまに下に見た物言いに、ゾロが敵前という事も忘れて怒鳴り声を返す。

エインシエンは一切臆することなく、むしろさらに煽るように、小馬鹿にした笑みを構浮かべて鼻を鳴らしてみせた。

「それともなんだ？ 其奴の相手は厳しいから私に任せたいのか？ ん？」

異形を尾で薙ぎ払う大蛇さえも、エインシエンの態度に同調してかゲラゲラと嗤い出す。嘲笑を受けたゾロは、カッチーンと頭に血を昇らせ、やけくそ気味に全ての刀を構えてオームに向き直った。

「あとで覚えてろクソ女ア~~~~!!!」

絶対一人で叩きのめし、あのふざけた言葉を撤回させてやる、と新たな意気込みを抱き、神官に向かって突撃する。

単純な剣士を横目に苦笑しながら、エインシエンはもう一人の戦士にも、今度は穏やかに語り掛けた。

「カルガラの子孫の子よ……お前の力も貸してくれぬか」

「!!? 何をふざけた事を……!!」

「頼むよ……」

突如懇願されたワイパーは、疑惑と拒絶とあらわにしながらエインシエンにバズーカを構える。

危うく牙をむきかけた大蛇を制し、悲痛な微笑みを見せたエインシエンが、今にも泣き出しそうな声をワイパーに聞かせた。

「約束なんだ……!!」

その声に、顔に、バズーカの引き金にかかったワイパーの指が止まる。

引けば仕留められる、そんな距離にありながらも、避ける素振りを見せようとしない天使に、初めてワイパーの表情に迷いが生じる。

一瞬の硬直が起きた、その時だった。

「きやあああ」

「待て、メ……!!」

「メ……!!?」

ボフンツ、と遠く離れた、巨大豆蔓の方から、女の悲鳴と男の怒号が響いてくる。

何事か、と振り向いた戦士達は、猛スピードで飛んでくる彼女達に驚愕の目を向けた。

「!!? ナミ…!!?」

「アイサ」

「娘つ!!!」

ウエイバーに乗り、腰にアイサをしがみつかせ、神兵達から逃げてくるナミ。

必死の形相で、泣きわめきながら逃げる彼女達を追う神兵達が、斬撃貝を構えてさら

に加速を開始した。

「仕留めろ〜メ〜!!!」

次の瞬間、辺りに血の花が咲く。

だがそれはナミたちのもではなく、ナミ達と神兵達の間割り込んだゾロとワイ

パーに蹴り飛ばされた、神兵達の血反吐だった。

同時にナミ達はガン・フォールに抱えられ、神兵達から引き離されていた。

「アイサ!!! ここでは何してる!!!」

「ナミ!!! てめエまで何でここに!!!」

「ああつ!!? ゾロっ!!! エレノア!!! みんなは!!!」

「ワイパー!!?」

振り向くゾロとワイパーの前で、ナミとアイサがほつと安堵の息をつく。

ひとまず傷を負っていない事を確認したガン・フォールは、船にいたはずのナミがこの戦場にいる事を厳しく詰問する。

「おぬしらなぜこんな場所へ来た!!?」

「なぜって…!!? だって…すつごい大つきなヘビが…」

来るつもりは一切なかったのだ、と叫ぶナミ。

だがその時、空を舞うピエールの位置と、異形に噛みつき破壊を続けていた大蛇の口が、運悪く重なってしまう。

そして彼らは、パクリと大蛇の口の中に飲み込まれてしまった。

「あ」

「…!! アノアホ…」

思わず間拔けな声を漏らすエインシエンと、絶句するゾロの声が重なる。

ごくりと喉を鳴らす大蛇に、エインシエンがペしペしと平手を当てながら、呆れた目を向けた。

「こら、チビよ。むやみやたらに口に入れるな。それだからさつきのように腹を下すのだ」

「ジュラ…」

「…まあいい、うっかり消化せぬようにだけ気をつけてくれ」

「ジユラ！」

「いやおかしいだろその会話!!!」

まるで粗相をした子供を叱る母親のような台詞に、振り向いたゾロが大声で待ったをかける。

仲間が怪物に食われるという衝撃的な一幕なのに、平然としている天使が異様に見えて仕方がなく、ゾロは刀を突き付けて再び吠えた。

「吐けエ!!! 今すぐに吐き出させろ!!!」

「案ずるなマリモ…そうすぐには溶けぬ」

「いやそういう問題じゃねエだろ!!!」

「そうわめくな………少なくとも外にいるよりは安全だ…!!!」

ギヤーギヤーと喚くゾロを放置し、エインシエンはぎろりと周囲を睨む。

いつの間にか、大蛇の周囲は完全に囲まれていた。今も数を増やし続ける土塊の異形が、四方からエインシエンを標的として、距離を詰めてきている。

様々な咆哮から、耳をふさぎたくなる耳障りな咆哮が響いてきていた。

「オオオオオオオ!!!」

「アアアアア!!!」

「アレをどうにかせねばならんな…チビよ、しばし時間を稼いでくれ」
「ジュラララ!!」

バシン!と尾で地面を叩き、任せろと言わんばかりに吠える大蛇に、エインシエンがフツと笑みをこぼす。

そして視線が上げられると、彼女の顔は戦士の物に変わっていた。

「どーにもこの『真理』とやらはややこしくてかなわぬな……私はこう言うクリエイタイプな戦いは苦手なんだがなア……」

響き渡る異形の咆哮に顔をしかめ、エインシエンはパンツと手のひらを打ち合わせる。

その視線は、一体の異形の肩の上に乗るクロウリーに向けられ、ビキビキと彼女のこめかみに血管が浮き立った。

「——まあ、あいつらを救うためには、四の五の言っていられんかのオ」

第140話 天災妃（ディザスター）エインシエン

「……まさか」

遺跡を歩き、ふとしたところを眺めていたロビンが、思わず声を漏らす。

そこは、さして重要そうでもないただの壁。見渡していなければ、見過ごしていそうなほどにさりげなく、その文章は刻まれていた。

「……………こんなに無造作に、『歴史の本文』の古代文字が。この文字を扱えるのは、『歴史の本文』を作った人々の他にいないはず……」

「こいつにや絵がねエからわかんねエな、何々……?」

ロビンとともに遺跡を散策していたアーレンが、険しい表情で目を細める。

長い経験で、難解な古代文字の解説に長けた彼だが、さすがにこの一文は読めないらしい。

見かねたロビンが代わりに読み上げてみせる。

『真意を心に口を閉させ。我らは歴史を紡ぐ者。大鐘楼の響きと共に』

祝詞のように、確かな存在感を放つその一文をまじまじと見つめ、アーレンは低く唸る。

その隣でロビンが、遺跡に目をやって眉間にしわを寄せる。

「町の書物の類は全て燃やされていた……都市の歴史は絶やされていた……!!?」

「つーことは……だ、そういうことをした『敵』がいたってわけだ。そしてその『敵意』と戦い……滅びた……!!?」

思わずアーレンの喉が、ごくりと音を鳴らす。

徐々に明らかになってくる真実に、冷や汗と震えが止まらなかつた。

『『大鐘樓の響きと共に』ってこたア…… 歴史の本文』は黄金の鐘と一緒にあるって事だな』

「でも……にはない……4つの祭壇の中心にあるはずなのに」

かつての都市の最たる象徴でもあつた、ノーランドも記していた黄金の遺物。

その姿が欠片もない事を訝しみ、二人は今一度辺りを見渡す。この場所に辿り着いてまだ数十分、調べきるには途方もない時間が必要になりそうだ。

「こんなにも栄華を極めた都市が………なお守ろうとした『歴史』……!! —— 過去、世界に何が起きたというの……?」

「……へっ、いまさら震えがきたぜ。おれ達ア、一体何を知ろうとしてんだらうな………!!?」

恐怖か武者震いか、いまだ止まらぬ震えに、アーレンは不敵な笑みを浮かべる。

その時、ロビンの視界にあるものが映る。

遺跡には似つかわしくない、年代的にもあるはずのない、鉄でできた一本の道がそこにあつたのだ。

「……これは、トロツコの軌条……!? 何かを運び出した跡」

「……まだ新しいな。だが……何をどこに運んだ? 何のために……?」

鉄の錆び具合を確認し、まず間違いなく遺跡とは全く別の年代、それも数年以内に用意されたものだと確信する。

奇妙な存在感を放つそれに夢中になっていた二人は、背後に降り立った一つの気配に、気づく事ができなかつた。

「ヤハハハ」

「……!!? てめエは!!!」

聞こえてきた、この島において最も危険な存在が上げる笑い声に、アーレンがハッと顔色を変えて振り向く。

その瞬間、老人の前で閃光が迸り、瞬く間に体を焦がされたアーレンが、その場に力なく崩れ落ちた。

「学者さん……!!!」

「長らくうつとうしかつたネズミが……ようやく出てきたか。なかなか優秀だった

が、賢しすぎるのも考えものだな。こうして命を自ら縮めるのだから」

アーレンの側に駆け寄り、さりげなく容態を確認しながら、ロビンは現れたその男—— エネルを見上げる。

何をしたのかもわからない、一瞬の凶行に、彼女のこめかみを冷や汗が伝っていた。

「—— あなたは？」

「神」

鮮やかな赤いリングをかじり、簡単に、しかし高慢に告げる空の海の支配者。

その目は、危険な野望を抱いてキラキラと輝いていた。

??

ズバンツ！と遺跡の一部が斬り裂かれ、危うく自身も両断されかける。

慌てて次の障害物に身を潜めながら、ゾロは内心の焦りを押し殺し、悪態をついていた。

「ハアツ、ハアツ、ハア……まいったな。あの、のびる剣厄介だ……!!？」

遺跡の中を駆け回り、反撃の機会を探し続けるも、一定の距離を保ったまま狙つてくる相手にどうしても苦戦を強いられる。

息を整える間もなく、また雲の刃が襲い掛かり、すぐさま飛びのく。逃げ続けるしかない状況に、徐々に苛立ちが募り始めていた。

「どうなってんだよ、なんでおれの居場所がわかるっ…!!!」

空の戦士達がいこなす未知の力に、歯噛みする他にないゾロ。

そこから少し離れた場所では、蠢く何体もの土塊の異形を前に、ゲリラ達が武器を手に奮闘していた。

「くたばれ!!! バケモノ!!!」

異形の頭部に向けて、一人がバズーカの一撃をお見舞いする。

轟音とともに吹っ飛ばされ、上半身を失う異形だが、次の瞬間には破損部分が盛り上がり、すぐに元の形状を取り戻してしまう。そんな攻防が、もう何十回も続けられていた。

「ジュララララ!!!」

「チビ!!!」

それはやがて、空の主と呼ばれる大蛇にまで及び始める。

強靱な尾で敵を薙ぎ払っていた彼の皮膚に、異形たちの手が掛かり、指が食い込んで締め付け始める。

すかさず振り払い、粉碎するものの、すぐにまた復活し再び迫ってきていた。

「すまぬチビよ……もうしばし耐えてくれ!!?」

「ジュラ!!!」

大蛇の頭の上に乗り、掌を合わせたエインシエンはひたすら目を閉じ、集中を続ける。一切のぶれのない、ぴたりと静止した姿勢を保つ彼女に、異形の肩に乗るクロウリーが見下した態度で吠える。

「諦めるのだ……天災妃^{デイザスター}」。貴様ではおれを倒すことはできない。真なる不死であるおれを、お前は殺せない!!!」

「若造がナメた事を……!!!」

苛立たし気に、頬をひくりと震わせたエインシエンがぼやく。

身動き一つせず、大蛇の上に立ち続ける天使に、クロウリーは赤い閃光を走らせ、異形を差し向けた。

「おれの目的に……お前は邪魔だ、エインシエン!!!」

「真祖様!!!」

異形を粉碎し続け、援護に回っていたゲリラ達が目を見開き、声を上げる。

異形たちの巨腕が振り上げられ、エインシエンを大蛇ごと叩き潰そうと迫る。それでも動こうとしない彼女に、巨腕が触れようとしたその時だった。

「どいてろ、青海の真祖!!!」

かすかな異臭があたりに漂い、続いて青い閃光が宙に走る。

まっすぐに放たれた砲撃は異形の頭部を呑み込み、強烈な熱で巨体を一瞬で塵にし、

大きく崩れさせる。

クロウリーが舌打ちをこぼす目の前に、鬼と呼ばれる青年が降り立った。

「ワイパー……よそ者は全員排除するのではなかったのか？」

「裏切り者のためエに言われたくねエんだよ……優先事項を考えただけだ」

見損なつた、と言うように告げるクロウリーに、心底腹立たしそうにワイパーが返す。

ガチャリと再びバズーカを構え、照準を合わせた彼は、返答とともに引き金を引き絞つた。

「〃シャンドラの灯〃をともすのに……ためエが一番邪魔だつてなア!!!」

爆音とともに、クロウリーの乗っていた異形の頭が吹き飛ばされる。

間一髪飛び移り、別の異形の肩に移動した裏切り者を追い、照準を合わせ直すワイパー。その背に、ちらりと片方を半目にしたエインシエンが、笑みを浮かべて語り掛けた。

「カルガラの子よ……恩にきる」

「うるせエ!!! 策があるならさっさとやれ!!!」

「承知した……!!?」

心底不本意だ、と言わんばかりに怒鳴り返すワイパーに、エインシエンは苦笑をこぼしながら集中を再開する。

その真下で、避け続けていたゾロが立ち止まり、ある一点を凝視しながら刀を構えた。
「神に祈れ、青海の劍士」

「バアカ、おれは一生神には祈らねエ!!!」

姿の見えないオームに乱暴に返すと、ゾロはバンダナを頭に巻き、自身の視界を半分にする。

得物の一本を口に咥え、渦を巻くような構えをとった彼に対し、遺跡の向こう側に陣取ったオームが呆れたように鼻を鳴らした。

「哀しいな、好きにしろ」

「おれはお前が見えねエが、そののびる劍が……お前の居場所を教えてくれるよ」

「フフ!!? わかった瞬間が貴様の死ぬ時だ」

一度、ゾロの放った跳ぶ斬撃を舵いてみせたオームが、小馬鹿にした態度で構えをとる。

一方的に狙い撃て、そしてより強い一撃を放てる自身が敗北する未来など、一切考えないままに。

「二世三十六煩惱……二世七十二煩惱……」

その姿を目にしないまま、ゾロは氣力を高めていく。ほんの一瞬の勝機を見逃さぬよう、ただ只管に集中を続ける。

相手が見せる一瞬の隙を、自身の最大の技で迎え撃つために。

「三世……………百八煩惱」

遺跡の向こう側で、オームが突きを放ち、鞭のようにしなる鉄の雲の刃を撃ち出す。

ガリガリと石を削り、真っ直ぐにゾロの心臓を狙った一撃が、目前の遺跡の壁を貫いて迫る、その刹那。

「三刀流……………!!!」

三本の刀全てを振るうことで放たれる、今のゾロが打ち出せる最大級の斬撃。

金属音とともに放たれたそれが、今度はオームの放った刃を弾き、オームの身体に食らいつく。

その身を斬り刻まれたオームは、声もあげられないままに倒れていった。

その頭上では、遺跡を足場に宙を舞い、クロウリーの目前にまで肉薄したワイパーが片手を突き出す。

その手に握られている貝を見下ろし、クロウリーがワイパーを睨みつける。

「『衝撃貝』か……………この程度でおれを仕留められると……………!!!」

「いや……………その十倍のエネルギーだ」

馬鹿にされた気分で、貝を構えるワイパーに赤く光る腕を振り上げたクロウリーは、告げられた言葉に目を見開く。

その反応を待つことなく、ワイパーが貝の殻頂を押し、蓄積されたエネルギーを一気に撃ち放った。

「リジエクト排撃^{リジエクト}!!!!」

とてつもない衝撃が、クロウリーの全身を駆け巡り、足元の異形の表皮にまで到達する。

ごぼつ!と大量の血を吐き散らしたクロウリーが、異形の身体を転げ落ちていく様
に、横目を向けたエインシエンが笑みをこぼした。

「……………!! あやつめ…」

撃ち出された一撃は、使用者の命すら縮める諸刃の剣。

衝撃が残り、煙を上げる右腕を押さえるワイパーに呆れた目を向けながら、エイン
シエンは周囲の異形たちを今一度睥睨した。

「よくやってくれた、子らにカルガラの子孫にマリモにチビよ…!! 巻き込まれぬうち
に下がれ!!!」

「あ?」

「真祖様の言う通りに!!!」

「空の主の近くに寄れ!!!」

突如力強く叫ぶ天使に、訝し気に振り向くゾロとワイパー、そして素直に応じるゲリ

ラ達。

彼らが動き出したのを確認すると、エインシエンはパリツと自身の身体に黒い雷光のようなものを走らせる。

「不得手でも……使えぬわけではないという事だ」

合わさっていた掌が離れていくと、彼女の全身から凄まじい圧が迸る。それは背中に生えた翼に集まり、漆黒の光沢を帯びさせていく。

メキメキ…と軋む音を響かせ、エインシエンの背後に翼が大きく広がっていく。

「ラマン・ファウンデイト開關の天撃！！！！」

そして天使の翼が大きく羽ばたき、大蛇の頭の上から無数の羽根が撃たれ、槍となつて周囲に降り注いでいく。

一本一本が凄まじい威力を誇る、数えきれない黒い羽根の槍が、異形たちを尽く貫き、瞬く間に破壊していく。

「オオオオオオオオオオ……！！」

「アアアアアアアア……！！！！」

異形たちは跡形もないほどに破壊され、苦悶の呻き声をあげ、ただの土塊に戻つていく。

辺りは黒い煙が立ち上る、凄まじい惨状となる。その中を、辛くも猛攻を潜り抜け、必

死の形相となったゾロが駆け込んできた。

「オイイ!!! 巻き込まれるとこだっただろが!!!」

「だから退けと言ったのだ………しかしどうも、思ったほど威力が出んかったな」

辺りの惨状に、そしてゾロの罵倒の声に、エインシエンは自身も納得いつていない様子で首を傾げ、頬を搔く。

大蛇の真下で、その巨体に庇られる形となったワイパーは、辺りの様子の変化に頬を引きつらせた。

「……………これでまだ全力じゃねエってフザけてんだろ」

「ムダ……だ……!!?」

その時、ガララと遺跡の欠片を崩し、何かがよろよろと起き上がる。

黒く焦げた、人の形をしたそれは、見る間に筋繊維や血管、内臓などが再生されていき、半裸となったクロウリーに戻っていく。

まるで、時間が遡っているかのような光景に、息を呑む声が聞こえる。

「言ったハズ……だ……お前に……おれは倒せナイ………!!! この力がアる限り………」

おれは、不死身ダ……!!!」

彼の身体に走る閃光は地面にも伝わり、足元が盛り上がってまた新たな異形の兵团を作り始める。

最初からやり直し、そう告げるような最悪の光景に、ゾロやゲリラ達の表情が歪んでいった。

「あれだけ食らってまだ再生すんのかよ…!!!」

「の…ようだな」

「言ってる場合か!!!」

眼の上に手を当て、除くようにしながら暢気に返すエインシエンに、ゾロとワイパーが思わず声を荒げる。

だが、二人の厳しい視線の前でも、天使の態度に変化はなかった。

「案ずるな……先ほどのはただタネをまいただけだ。もう奴らは……次の私の攻撃を避けられぬ」

再び、エインシエンの掌がパンツと打ち合わされ、青い閃光が走る。

その際、エインシエンの表情が歪み、心苦しうにクロウリーに——彼の胸の中心を見つめる。

「…すまぬな、もうお前達をもとに戻してやることは叶わぬ。しよせんは無力な人でしかない私を恨んでくれて……かまわない」

バチツ、と両手の指が鳴らされ、青い閃光が周囲に四散していく。

拡散した閃光は、クロウリーの身体と異形たちの身体、赤い閃光に重なるように伝わ

り、その奥に突き刺さっていった。

「せめて輪廻の輪に還り、安らかに眠れ……!!」

バシバシ……と粉塵を導火線とし、辺りに走る閃光が、徐々に勢いを強めていく。

その直後から、クロウリーと異形たちに変化が表れ始めた。

「咲き誇れ、仇花よ……あるがままに」

ビキツ、バキツと音が鳴り、動きがぎこちなくなつた異形達の全身にヒビが入つていく。今まで何度か再生を繰り返していたはずの身体が、端からボロボロと崩れ、瞬く間に土に還っていく。

その日々の間からは——名前も種類もわからない、無数の花々が顔を覗かせ始めた。

「……?!? 花が……」

「オオオオオオオオオオオオオオ……!!」

異形たちが、苦悶とも歓喜とも取れない奇妙な咆哮を上げ、身悶えする。

驚愕に目を見開くゾロたちをよそに、そこにあつた異形達はボロボロに崩れ、何の変哲もない花を咲かせていく。

まるで、異形たちの命が、別の物に作りかえられているようだ。

「ブリテンズ・アルカディア
幻想の花園……!!!」

「!!!」

一面、美しく咲き誇る花畑となった遺跡の中心で、エインシエンが大きく手を広げる。その声を最後に、全ての異形たちは、完全に動きを止めてしまったのだった。

「ぐおおおおお!!!」

ただ一人、異形達と同じく肉体から花を咲かせ、苦悶の声を上げていたクロウリーが、怒号と共に後退る。

自分の肉に爪を突き立て、花が根付いた部分を無理矢理引きはがし、クロウリーはその場から大きく飛びのいた。

「ハア……ハア……やはり強いな、天災妃………異能の力を手に入れても勝てぬか」

大きく肩を上下させ、滝のように汗を流すクロウリーだが、不遜な態度が変わった様子はない。

エインシエンはそんな彼に、怒りを抱きながらも悲痛な表情を見せる。

「だが……全力ではないな。明らかに力が衰えている。そんな事で……神」 エネルには勝てぬぞ」

「戯けが!!? 童に心配されるほど落ちぶれてはおらんわ」

負け惜しみにしか聞こえないクロウリーの忠告を、エインシエンは一蹴し顔をしかめる。

その場にいる全員から敵意を受けるクロウリーを見つめていた彼女は、やがて吐き捨てるように告げた。

「せめてもの情けだ……失せろ」

「!? てめエ……」

「半人前にとどめをさすほど暇ではない……疾く鐘の元へ向かおうぞ、カルガラの子よ」

クロウリーから目を逸らし、ワイパーを見つめるエインシエン。

その眼には、熱く潤む彼女の想いが覗いて見えていた。

「約束を果たそうぞ」

エインシエンの真っ直ぐな眼差しに、反論を口に仕掛けていたワイパーが押し黙る。

その間に、エインシエンを見上げていたクロウリーは、傷付いた身体を引きずり、その場から歩き去っていった。

「なんだ……やらねエのか」

「ここで争つても何の益もない……さっさとあの娘らも出してやらねば」

「あつ!!! 忘れてた……」

物足りなそうに刀を鞘にしまったゾロは、エインシエンの指摘に顔をしかめる。

ほったらかしだった、大蛇の胃の中にいる仲間の事を思い出し、消化される前に救い

出してやらねばと視線を戻す、だが。

「ワイパー!!?」

響き渡ったその声に、全員の視線が向けられる。

遺跡の外側、平地に姿を現した一人の女ゲリラ——ラキの姿に、ワイパーたちが表情を変える。

「…あやつは…?」

「ワイパー!!? 話を聞いて!!」

「お前、なぜここに…」

それぞれ別の場所からエネルギーを討とうと、異なるルートを目指していたはずの仲間が、この場にいることに訝しむワイパー達。

ラキは慌てた様子で駆け寄り、ワイパーたちに声を張り上げていた。

「ワイパー、エネルギーは…」

彼女が道中で得た、「神」に関わる重大な真実を口にしようとした、その時。

「稲妻」
!!!!

一迅の雷が天より落とされ、ゾロたちがいる地面を粉碎してみせた。

第141話 “残り7人”

その一撃は、天から降り注ぎ雲の大地を割った。

巨大豆蔓にまとわりつくように広がっていた島雲は、最も強烈な一撃を受けた箇所を中心に、バラバラと崩れていく。

「地盤が……!!? 砕けた!!!」

「……………!!? エネルっ!!! ……奴しかない!!! 遺跡が落ちるぞ!!!」

「ジュラララ!!!」

ガラガラと粉碎され、真下に落下していく遺跡の破片。その上で狼狽える、戦いを乗り越えたばかりの戦士達。

急遽駆けつけたラキもまた、崩落に巻き込まれ目を見開いていた。

「ワイパー!!!」

「おのれ……………!!! あの小童がア~~~~!!!」

この空のどこかで、戦いを見物しているであろう最強にして最悪の存在に、怒れる天使の凄まじい怒号が迸った。

無数の破片はそのまま、下の層へと落下していく。

崩落したのは、風船のようにできた空間の上側。雷によって砕かれたそこは、ロビンとアーレンのいるシャンドラの遺跡へと落ちてきていた。

「遺跡……………!?」 ……なぜ上からこんな遺跡が……………」

「……………くそ!!?」

「剣士さん……………まさか…一緒に落ちて……………!??」

突如始まった状況に、倒れたアーレンの容体を見ていたロビンが眉間にしわを寄せ
る。

その際、大きな瓦礫がごろりと浮き上がり、チョッパを抱えたゾロが腹立たしそうに顔を出した。

「死ぬとこだ!!! チキショー……………!!!」

「ええ……………死ぬはずよ……………ふつうは」

「……………おう、おめエか。…つてジジイ!!? 何があつた!!?」

ロビンがなぜか先回りしていることには触れず、すぐに黒焦げになったアーレンに気づいて目を見開くゾロ。

「神」エネルギーと遭遇し、アーレンが襲撃されたり、少しの間「黄金の鐘」について質問を行ったりと色々あつたのだが、それをロビンが語る暇はなかった。

「……………ここはどこだ」

「お探しの黄金都市。でも、黄金はないわ」

「あ？」

不思議そうに辺りを見渡し、眉を寄せるゾロに、ロビンが淡々と告げる。

そこから少し離れた場所では、島雲の中に顔を突っ込んだ大蛇とそれを掴んで引つ張り上げようとするエインシエンが、四苦八苦している姿があった。

「ジユギ…ジユギツプ」

「なぜこんな器用な落ち方をしとるのだお前は!!! 踏ん張れエ〜!!! こんなところで

死ぬなア〜!!!」

息ができず、はっしと尻尾で体を支えて顔を抜こうとしている大蛇の体を、エインシエンが気合の咆哮を上げて引く。

周りの景色は、全く視界に入っていないようだ。

「ぬおらア!!!」

「ジユララララ!!!」

渾身の力で、ようやく大蛇の巨体を引つ張り上げること成功するエインシエンと、窮地を脱して荒い息をつく大蛇。

ゼーゼーと息を枯らしていた一人と一体は、しばらくしてようやく周りの景色に気づ

き、その表情を満面の笑みに変えていった。

「……見よ、チビ」

「ジュラ」

「やつとだ……やつと……」

あたりに広がる、彼女達の記憶と重なる光景。

400年の時を経てなお雄々しくそびえ立つ古代の遺跡を前にして、エインシエン達は言葉もなく立ち尽くしていた。

「いたた、ありがと変な騎士」

「ちようど地盤が雲で助かった」

「……(ハハ)ど(ハハ)!!?」

すぐ近くの物陰では、偶然大蛇から吐き出されたナミとガン・フォールが、驚愕の表情で辺りを見渡す。

大蛇の胃袋で再会を果たしたはずのルフイと、アイサの姿が見えず、ナミは不安げにその姿を探し続けていた。

「しかし……見た事のない場所だ……!!? ここは一体」

「……まさか、ここが……」

そこから離れた場所にいるワイパーが、ガン・フォールのつぶやきに反応するように

声を漏らす。

すぐそばには、落下の衝撃で気を失った仲間の戦士の姿もあつたが、それを完全に忘れるほどの景色が広がっていたのだ。

「ここがおれ達の、故郷……」

「ああ……ああああああ……!!!」

「ジュララララ……」

遺跡を目の当たりにし、エインシエンはボロボロと涙を流し、ふらふらとそこでさまよい始める。

自分の見ているものが、夢か幻に思えてしまう。だが、視覚だけでなく嗅覚をも刺激する光景は、間違いなく本物であると確信させてくれていた。

「ちよつ……!!? エレノア!!? エレノアつてば!!! その大蛇マジで危ないんだから……!!! さつさとこつち来て……!!!」

大蛇とともにいる仲間に、事情を全く知らないまま離れ離れになったナミが小声で叫ぶ。

森で散々追い回された記憶のせいで、わざわざ大蛇の前に出る勇氣などわくはずがなかった。

「見よ……見よチビよ!!? 苦節400年……!!! 我らはようやくここへ戻ってきた……」

!!? 探し続けていた場所にようやつと辿り着いた……!!?」

ナミの心配をよそに、エインシエンはおぼつかない足取りのまま、巨体を引きずる大蛇とともに進み始める。

その姿はまるで、迷子になっていた子供が、ようやく家に帰れる手がかりを見つけたかのような、そんな様に見えた。

「ほれ!!? 向こうへ行つてみよう!!? 鐘は確かあの辺りに雄々しくそびえ立って……」

「ジュラ……!!?」

「……何やってんのかしら……? ……何か探してる様にも見えるし。ルファイがまた中で何かやってんのかしら……」

大蛇と天使の奇行を、物陰から訝しげに伺うナミ。

大蛇は町並みを見渡し、狭い通路を覗き込み、終始ご機嫌そうに探索を続ける。エインシエンも全く同じように、旧き街を懐かしそうに歩き回った。

「ああ……ああ……懐かしいなあ、嬉しいなあ………!!! あそこでいつも……カルガラとノーランドと一緒に酒を飲んで……セトが鍛錬をせがんできて………クロウリーが術を教えてくださいも……あの日まで……いつも………!!!」

まるで見えない糸に引っ張られるように、衝動の赴くままに動いていたエインシエン

の足が、はたと止まる。

その視線が向かうのは、ぽっかりと大きな穴が空いた、都市の中心部である。

「……………!!! なぜ無いのだ…あの美しく荘厳な…あれほど偉大だった鐘は、一体どこへ消えてしまったんだ?!?!」

「ジュララララララララア!!!」

ボロボロと涙を流し、求め続けた目的のものが見つからないことを嘆く、天使と大蛇。痛々しさを感じさせるその様子を見つめ、ナミが息を呑んでいたその時だった。

「何のつもりだ……………?!?!? 何を騒いでいるんだ『空の主』、うっとうしい蛇め!!!」

ハッ、とエインシエンの耳が反応し、顔色を変えた彼女が背後を振り仰ぐ。

そびえ立つ高い遺跡の上にいる、バリバリと閃光を走らせている一人の男を目撃すると、エインシエンは慌てて友に向かって吠えた。

「よけろチビイ!!!」

「愚かなり、^{エル・トル}神の裁き!!!」

天使の叫びは虚しく届かず、大蛇の全身を雷の柱が飲み込む。

光に覆われた大蛇は、一瞬にして黒焦げとなり、白目を剥いて体を傾がせていく。そして、大木のように轟音を響かせ、倒れてしまった。

「チビ…」

「さんざんバズーカを撃ち込んでもビクともしなかった『空の主』が…一撃…」
呆然と、目の前で沈黙する大蛇を凝視し、絶句するエインシエン。

その一部始終を目撃したワイパーは、エネルが放ったあまりにも無慈悲な威力の攻撃に、冷や汗を流して立ち尽くす。

彼はキツと表情を変え、遺跡の上で佇むエネルに突如砲撃を放った。

「ヤハハハハハハ…何をする、ひどい仕打ちじゃあないか。……せつかくお前の故郷へ案内してやったというのに、ヤハハハ」

バチバチと放電しながら、エネルは一瞬にして別の遺跡の破片の上に移る。

轟音のおかげで正気に戻った、遺跡に集められた戦士達は、ギロリと鋭い目を向けて彼を囲み始める。

敵意と警戒を見せる戦士達に、エネルは片手を上げて近づくの制止した。

「——しばし待て…ゲームはまだ終わってはいないのだ………!!？」

「ゲームだ?!？」

「…そうさ、お前も…その後ろの面々も参加者………」

それは、この島に入って3時間が経過した時、84人のうち、一体何人が無事立っていられるかという『生き残りゲーム』。

自身の参戦と、途中参加者も認めるといふ他愛もない戯れであると、鋭い視線の中心

に立ちながらエネルは語った。

「私の予想は残り5人……!!? ……あと3分でその3時間がたつ」

エネルの台詞に、遺跡の陰に隠れていたナミが息を呑む。

途中、ゾロから預けられたチョッパーは自分の腕の中。まだ自分は見つかっていないとすれば、あの場にいる誰かが犠牲になってしまう。そのうちの3人は、自分の仲間だというのに。

「——つまり今、この場に8人もいて貰っちゃあ困るというわけだ。神が『予言』を外すわけにはいくまい」

「……………8人?」

ぎくつと顔を強張らせたナミは、しばらくして眉間にしわを寄せ、こつそりゾロ達の方を覗き込んでみる。

一瞬バレたのかと思つたが、自分を入れてもまだ一人足りない。誰のことを言っているのか、と考えた時だ。

「エネル!!?」

ゾロ達の背後に、新たな訪問者が姿を現す。

片腕を失い、血まみれの様相を晒したまま、それでもらんと輝く目をしたその男

——クロウリーに、ゾロとワイパーが顔をしかめる。

「あの野郎……」

「クロウリー……裏切り者が今更なんのようだ……!!?」

鬱陶しそうに睨みつけてくる二人を無視し、クロウリーはズルズルと足を引きずり、エネルの方へと近づいていく。

今にも崩れ落ちそうに見えるのに、幽鬼のように神の元へと向かっていく。まるで生者には見えなかった。

「おれはまだ負けていない………」

「ヤハハハ……何を言っている？ もはやお前に戦う力は残っていない。『不死』の力を得てなお亡霊に敗北する様な弱者を……私が連れていくわけがないだろう」

「言っていただろう!!! お前に下れば、おれを生かしていくと!!!」

怒りをあらわにし、クロウリーはエネルに向かって吠える。

忠義や畏怖など一切ありはしない、屈辱を押し殺して頭を垂れた辛抱の月日を裏切られ、激昂する男の姿がそこにはあった。

「いずれ鐘の元に共に連れて行ってくれと!!!」

「……お前、そのために……!!!」

「ヤハハ……ああ、言ったな。だが私はこうも言ったはずだ」

エインシエンが目を見開き、クロウリーを凝視する側で、エネルが指先に閃光を溜め

ていく。

鬼の形相で睨みつけてくる、自ら異形に堕ちた男に、エネルギーは残酷的な笑みを見せて告げた。

「弱者は必要ないと」

カツ！と光が弾け、続いてゴロゴロと雷鳴が轟く。

放たれた閃光はクロウリーの胸の中心を貫き、彼の全身に強烈な熱と電撃を浴びせかける。

胸の中心を黒く染めたクロウリーは、その場できりと膝をついた。

「クロウリー!!!」

「……………!!! エル……………マ……」

誰かの名を口にし、白目を剥いたクロウリーがうつ伏せに倒れこむ。

赤い電流が迸るが、クロウリーの体は一向に再生せず、やがて消えて静かになる。それ以降、彼はピクリとも動くことはなかった。

「……………さて、誰が消えてくれる。…そつちで消し合うか、それとも私が手を下そうか……………」

沈黙したクロウリーから興味をなくし、エネルギーは改めてゾロ達を見やる。

残るは7人、あと2人消えなければならぬ。そう考え、ゾロ達は互いに目を合わせ

始めた。

「…………お前、どうだ」

「私はイヤよ」

「おれもだよ。…あんたは」

「…論外だ」

「だろうな」

「おれもごめんだな……」

「我輩も断固拒否する!!?」

全員が全員、自ら墜ちることを拒否する。

自然と視線は背後に、物陰に隠れるナミに向けられ、彼女はとっさに抱えていた
チヨツパーを身代わりに差し出すすが、殺気は全く消えなかった。

「…………!!?」 ねエちよつと待つて!!? わたし…」

「…………お前が消えろ」…………」

必死に説得を行おうとしたナミだったが、顔を出した途端、彼女はギョツと声を途切
らせる。

再び視線をエネルギーに向けなおしたゾロ達が、それぞれの得物を“神”に突きつけてい
たのだ。

「不届き」

笑みを浮かべたまま、凄まじい気迫を発し始めるエネルギー。

顔を出し、その気迫を直に受けてしまったナミは、ぞくりと背筋を震わせ、尻餅をついてへたり込んだ。

「ヤハハハハハハハハ……!!? ……この私に……!!? 消えろと……!!? さすがはゲームの生き残り共……だがお前達、誰にもものを言ってるのかわかっているのか」

強烈な殺気を受けながら、ゾロ達全員の表情に変化はない。

エネルギーは微塵も驚いた様子を見せず、むしろ愉快げに肩を揺らし、戦士達を見渡していく。

それぞれが、彼にとっての愉快な見世物であるかのように。

「……ヤハハ……スカイピアの幸福を望む老いぼれに、ひたすらに“故郷”を望む戦士……黄金を狙う盗賊共……そして死に体の亡霊……。悩み多きこの世だ……子羊が何を望もうと構わんが、この国にはそもそもその間違いがある……!!?」

「……くだらぬ事を言っておるヒマがあつたら、“神隊”の居場所を答えよ!!!」

ガン・フォールはエネルギーの凶行に怒りながら、かつての部下達のことを案じて吠える。自分が敗北して数年、彼らに関する情報は全く入手できなかったのだ。

エネルギーはニヤリと笑みを深め、待っていたとばかりに語り始めた。

「『還幸』だよ、ガン・フオール」

「『還幸』……………?？」

「……………そうだ、私には還るべき場所がある。私の生まれた空島では、『神』はそこに存在するものとされている」

ゾロ達の訝しむ視線を全く意に介さず、エネルは恍惚とした様子で話す。

その目に映っているものは間違いなく、ゾロやワイパー達には見えることがない、彼だけの見える未来の景色である。

「『^{フエアリーヴァース}限らない大地』と人は呼ぶ……………!! そこには……………見渡す限りの果てしない大地が広がっているのだ」

ナミはぞつと、別の恐怖で身を震わせる。

何を言っているのか、何を夢見ているのかもわからない、イカれた人間の演説を聞かされ、嫌悪感が背筋を冷やす。気味が悪いことこの上なかった。

「それこそが私の求める『夢の世界』!!! 私にこそふさわしい大地!!! 『神の島』など……こんなちっぽけな『大地』を、何百年も奪い合うなどくだらぬ小事!!? ……いいか! お前達の争いの原因はもつと深い……根本にある。よく考える……」

雲でもないのに空に生まれ、鳥でもないのに空に生きる。空に根づくこの国そのものが土台、不自然な存在なのだ、エネルは語る。

土には土の、人には人の、神には神の、還るべき場所があると。

「……………まさか貴様!!!」

『まさか』という程の事ではない、私が“神”として自然の摂理を守るだけの事」

愕然とした様子で、凝視してくるガン・フオールに、エネルは不気味な笑みを見せながら告げる。

傲慢で残酷で、しかしそれを口にすることが許される、絶対的な力を有したその男が、自身の最終目標を口にする。

「———そうだ!!! 全ての人間を……この空から引きずりおろしてやる……!!!」

第142話 “恐怖こそが神”

ざわつ、と古代都市に集った戦士たちの間に戦慄が走る。

エネルが口にした還幸という言葉の意味、それが表す残酷な未来を創造し、表情を驚愕と怒りに変えていた。

「国を消す気か!!!」

「それが自然……」

「思いつがるなエネル!!! “神” などと言う名はこの国の長の称号にすぎんのだぞ!!!」
「今まではな……」

誰よりも強く激昂するガン・フォールの叫びに、エネルは全く気にした様子もなく続ける。

人の命を余りに軽んじ、踏みにじろうとする男の狂った思考に、かつての神は荒ぶる声を止める事ができなかつた。

「人の生きるこの世界に “神” などおらぬ!!!」

「……元・神ガン・フォール、 “神隊” を心配していたな……。6年前……我が軍に敗れ私が預かっていた、お前の部下650名……」

肩を上下させ、鋭い目で睨みつける老人に、狂人は意味深に嗤いながら告げる。はつ、と息を呑んだガン・フォールは、嫌な予感を覚え、エネルギーを睨む目の力をより強めた。「今朝ちようど、私の頼んだ仕事を終えてくれたよ……—この島の中でな……—そしてさつき言った筈だ。今、この島に立っているのは……ここにいる6人のみだ……残念な事をした」

その瞬間、ガン・フォールの表情は凍りつき、その場に立ち尽くす。

一瞬間が理解することを拒むが、すぐに凍った思考が怒りで煮立ち、さらなる憎悪が目の前の男に対して芽生えていく。

「おぬし……」

「別に好きで手にかけてたわけではない……私のこれからの目的を話してやったら……ヤハハハ、血相かえて挑んできたのだ……」

「……………エンジェル島に……家族のおる者達だぞ……!!!」

ギリツ、と食いしばった歯を軋ませるガン・フォールの前で、エネルギーは嗤う。神とはとても言えない、異質な化け物のような顔で。

「そうだな……早く家族も葬ってやらねば……」

「貴様、悪魔かア!!!」

怒りが限界に達したガン・フォールが、エネルギーに向けて槍を振るう。

技術も何もない、怒りのみによる力任せの突進は、バリバリと雷に変化したエネルギーの身体を容易くすり抜けていく。

すぐ横を通り過ぎた時、彼の頭の上下に、エネルギーの両手の指が突き出された。

「2000万V…放電^{ブレイク}!!!」

エネルギーの指の間を、2000万Vの強烈な電流が迸り、老人の頭を容赦なく貫く。

ガン・フォールは声すら上げられずに沈黙し、ガシヤンと槍を手放して、力なく頭から倒れ込む。

「ガン・フォール、この世に『神』はいる…私だ」

不敵に、そして何より不気味に嗤いながら、エネルギーは邪魔な老人を見下ろし、不遜に語る。

そして、その場に集った戦士達に向けて、己が手に入れた大いなる力を、存分に見せつけた。

「雷!!!? ……そんなの、人間が敵うわけじゃない…!!?」

「たわけが」

怯え切った表情で、思わず後ずさるナミ。幾度も見せられた、セツナに終わるエネルギーの攻撃の正体に、どうしようもない絶望を抱く。

だが、そんな彼女を背に庇い、エインシエンが吐き捨てるように言っただけのける。

「奴は……『神』などではない——ただのクソガキだ!!」

ぎろりと、憤怒の目を向け、犬歯を剥き出しにして唸るエインシエン。ゴキリ、と拳を鳴らした彼女は、余裕の顔で佇むエネルを見据えると、突然凄まじい勢いで加速し拳を振り上げる。

ナミが我に返った時には、エインシエンは既にエネルの目と鼻の先にまで迫っていた。

「ムリよエレノア!!! そいつに勝てる奴なんて、この世界のどこにも……」

「……これだけ力を見せてまだあらがうか………なんと愚かな女よ」

ガン・フオールと同じく、無謀に向かってこようとする存在を返り討ちにしてやろうと、放電する掌を向けるエネル。

だが、その表情は突如驚愕に固まり、目が見開かれる。

次の瞬間、エネルは顔面に拳を食らい、砲弾の如き勢いで吹っ飛ばされていた。
!!?!

何が起こったのか、と目を剥くエネルは、漆黒に染まった拳を振り抜いて睨みつけてくる天使を凝視し、遺跡の中に突っ込んでいく。

エネルが激突した瞬間、衝撃で遺跡全体が震え、無数の破片が辺りに散らばった。

「……そんな……ゴロゴロの実の………自然系ロキアの能力者を素手で殴った……!!」

「……………!! なんつー怪力してやがる…!!」

ビリビリと地震のように震える足場に、ロビンとゾロが戦慄の表情を向ける。たった一撃の見せた威力に、その力の凄まじさを感じて言葉が出なくなる。

だが突如、エインシエンの振るった腕に裂け目が生じ、夥しい量の鮮血が噴き出した。「何だ…?!? どうした?!?」

「…やはり全力での戦闘には耐えられんか、情けない…?!?」

どくどくと溢れる血を押さえ、エインシエンが忌々し気に自身の身体を見下ろす。真つ赤に濡れた腕は、まるで凍えているかのようにぶるぶると痙攣を繰り返している。

その様に、啞然としていたエネルの顔が、またしても嗜虐的なものに戻った。

「ヤハハハ…驚いたぞ。まさか私に傷をつける者がいようとは…?!? だが…それなりのリスクがあるようだな……………」

「この程度がリスクになるものか…確かに私がこれ以上力を振るえば、この器は容易く壊れよう…だがな」

嘲笑を向けるエネルに、エインシエンはにやりと不敵に笑みを返す。見ているだけで痛々しい、血が滴る腕の震えを無理矢理に抑え、再びエネルに拳を構えた。

「それより先に貴様を潰せば済む話だ!!!」

ずしん、と地面にヒビが入るほどに踏みしめ、自身を固定する。

先ほどとは異なり、今度は警戒するように黄金の棒を構えるエネルギーに狙いを定め、インシエンはその場で強烈な正拳突きを放った。

「グリーク・トライスター
「三星の狩人」!!!!」

大気が尋常でない威力で叩き出され、まるで砲弾の様にエネルギーに向かって飛ぶ。

しかしそれは、エネルギーが寸前で雷に変化し移動したことにより、誰にも当たらず遺跡を破壊するだけで、不発に終わってしまう。

「ぐぬう……!!!」

さらなる傷を負ったインシエンが、ビキビキとこめかみに血管を浮き立たせて呻く。

それを押し殺し、すぐさま第二射を放とうとした天使の目前に、不気味に嗤うエネルギーが立ちはだかった。

「5000万V……」

ドンツ、とインシエンの胸に、エネルギーの掌が押し付けられる。

すぐさま押し退け、離れようとした刹那、エネルギーの全身が強く放電し、彼の手から雷が迸った。

「インドラ
雷象」!!!!」

焦りに目を見開いたインシエンの胸を、凄まじい量の雷が突き破り背中まで貫く。

象の姿を横つて雷が飛び出し、エインシエンは黒煙を噴き上げさせ、仰向けに倒れてしまった。

「ヤハハハ…さすがに驚かされた。だが…それだけだ。『神』に敵う道理などなし…これで5人だ」

殴られ、赤く染まった頬を殴り、若干の冷や汗を見せたエネルギーが、安堵した様子を見せながら呟く。

気を取り直すように、動けずにいたゾロ、ナミ、ロビン、ワイパーに向けて大きく手を広げ、声を張り上げた。

「ヤハハハ、よくぞ生き残った!!? これから私が旅立つ夢の世界『限りない大地』へ、お前達を連れて行こうじゃあないか!!!」

突如提示された、戯言としか思えないエネルギーの誘い。

当然頷く筈もなく、胡乱気な表情となったゾロがエネルギーを睨みつけた。

「…何だと」

「私はこれより、そこに紛れもない『神の国』を建設しようというのだ。その地に住めるのは選ばれた人間のみ!!! こんな数時間のサバイバルにも耐えきれない今までの部下共では、居て貰っても国のレベルを下げるだけなのだよ!!!」

ゾロたちの返事も聞かないまま、エネルギーは自分の理想に寄ったまま、雄弁に語り続け

る。

冷やかな、しかし警戒をさいだ現に混ぜた視線が向けられる中、比較的冷静なロビンが、いつもと変わらない調子で口を開いた。

「それをもし断つたら……………」

「断る…………？　なぜだ、私の決定だぞ。ここに居れば、この国と共に奈落の底へ落ちてしまふのだ」

「確かに…………あなたの能力なら、それもできるのでしようけど、むやみにこの国を破壊してはあなたの欲しがる物も落としてしまふのでは？」

「……………『黄金の鐘』か…………」

ロビンの問いに、エネルはスツと目を細めて黙る。

何故だか、その沈黙にいやな予感を覚え、ロビンのこめかみを一筋の汗が伝っていく。何かを、見透かされている気がした。

「心配に及ばん、すでに目安はついていて…お前のとった行動を思い返せば、考えられる場所は一つ。……………きつとお前と同じ場所を、私は思い描いている……………!!？」

ロビンの目が、驚愕と焦りで大きく見開かれる。

彼女の態度が変化したことに、エネルはにやりと意味深に笑みを浮かべる。

「……………意外そうだな。——その条件を使えば、うまくおれを出し抜けるとでも考え

たか？ おれを甘く見るな……………!!？ ……浅はかなり!!!」

ハッと我に返り、ロビンが能力を使おうと手を交差させる——その寸前で、エネルギーはロビンの目の前に移動していた。

「ロビン!!!」

「おれは打算的な女が嫌いだね」

息を呑み、硬直するロビンに、エネルギーが人差し指を突き出す。

彼の手から雷が一直線に放たれ、ロビンの胸を貫く。ナミが悲鳴を上げ、顔色を変えたゾロがすぐさま倒れ込むロビンを受け止め、鋭く睨み上げた。

「女だぞ」

「……………見ればわかる」

小馬鹿にした、どうでもよさそうな態度に、ゾロの中で何かが切れる。

激情のまま刀を抜き、棒立ちのエネルギーに斬りかかるも、エネルギーは黄金の棒を振り回し、首を狙ったその斬撃を容易く受け止める。

「…ん…いい腕だ」

「イカレてんのかためエは!!!」

「『燃焼砲』!!!」

効いていない事を理解しながらも、ゾロは立ち向かうことを止められない。

ゾロがもう一本の刃も抜き、再び切りかかろうとした時、ワイパーが持つバズーカが火を噴いた。

「『電光』!!!」

だが、爆炎の砲撃が炸裂する寸前で、エネルギーが轟音とともに雷を放つ。

大木を貫く威力を誇るはずの一発が、たやすく掻き消されてしまう光景に、砲撃を放ったワイパーが絶句する。

「……まだわからんか。お前達の扱えるエネルギーなど、私にとっては無に等しいのだ!!!」
圧倒的な力、人が抗っても何の意味も持たない力を見せているのに、一向に膝をつかない戦士達に、エネルギーは心底呆れた様子を見せる。

唯一恐怖で固まっているのは、ナミ一人だけだった。

「やれやれ………これから共に『限りない大地』に旅立とうと言うのに……何もそう殺気立つ事もあるまい……」

「誰がそこへついていくって言ったんだ!?!?」

以下に凄まじい力があるうとも、そして自身らの攻撃が通らなくても、それで屈する理由にはならないと、ゾロがまた突っ込んでいく。

「お前の言う『夢の世界』にも興味はねエしな!!!」

「ダメよゾロ!!! 相手が悪すぎる!!!」

「体に教えねばわからんのだろう… 『神の定義』 ……………!!!」

ゾロの振るう刃が、エネルの身体を両断する。

だが、雷そのものである体は、一度霧散するだけで、しばらくすると元の形に戻っていく。棒で受け止める事さえ、彼にとっては戯れでしかないのだ。

「お前達がどう足掻こうと太刀打ちできない圧倒的な力……そこで覚える 『絶望』」

不意に、ゾロの両手の刀をエネルが掴む。

武器と言えど、金属には違いない刃に、エネルから発せられた電流が伝わり、ゾロの全身に襲い掛かった。

「全ての希望が絶たれる事は、『死』に同じ……」

「く……うああ!!!」

「ゾロ!!!」

「人にとって…死は最大の『恐怖』!!! だから人は地に顔をうずめ、神に慈悲を乞う!!」

黒煙を上げて膝をつくゾロの頭を、エネルが異様な力で踏み潰す。まるで万力で頭を潰されているかのような重さに、傷付いたゾロは起き上がる事ができない。

「仕方のない事さ、生物は恐怖の前にひれ伏すようにできている。本能というものだ」
ピクリ、とゾロを踏み潰すエネルのこめかみが震える。

振り向いたエネルの顔面に向かって、大きく跳躍したエインシエンが左の拳を振りかぶる姿に、エネルの目が細められる。

「小童ア~~~~~!!!」

「それに従わぬ亡霊は、とつとと消えろ」

漆黒の拳が炸裂する直前、エネルの雷化した腕が、エインシエンの心臓に突き刺さる。肉体を貫いた腕は、爆発のような膨大な放電を始め、エインシエンの身体ががくがくと痙攣した。

「エレノアア!!!」

仲間に襲い掛かる、余りにも残酷な責め苦に、ナミが泣きそうな声で叫ぶ。

腕を抜き取られたエインシエンは膝をつき、それでも意識を保ったまま、地面に手をついて項垂れる。

その様を、エネルは実に愉快そうに見下ろしていた。

「ヤハハハ……意識を保っているのはスゴイが、もはや立つこともままならんようだな!!
? ただの人がよくぞここまで見苦しくあがいた!!!」

「……………!!!」

「だがもう終わりだ……いい加減消えろ」

歯を食い縛るエインシエンに、エネルが再び手を向ける。

だが、その手がエインシエンの頭部に触れようとした直前、バズーカを捨てたワイパーがエネルギーに組み付いた。

「何のつもりだ……自ら殺されに……?」

足を腰に回し、自分にしがみつくワイパーに、エネルギーは訝しげな目を向ける。

しかしそこで、エネルギーの表情が固まる。突如、自身の身体から力が抜け、立つことも苦しくなってきたのだ。

「何だ……」

「『海楼石』ってモンを知ってるか、エネルギー!!」

告げられたその物質の名に、エネルギーはハッと目を見開く。

海の力を持ち、能力者を完全に無効化させてしまう謎多き物質が、自分の腰に触れているシューターに仕込まれていると聞かされては、慌てざるを得ない。

途端に態度を変え、慌て始めるエネルギーを見上げ、エインシエンが不敵な笑みをこぼした。

「……いけ、カルガラの子よ」

「くたばれ!!? 『排撃』!!!」

ドンッ!と、自らをも殺しかねない一撃が、再びワイパーの手によって放たれる。

心臓部分に正確に炸裂したその一撃により、エネルギーは大量の血を吐き散らし、どさっ

と仰向けに倒れた。

「まさか……………倒したの……………!!??」

しんと静まり返った戦場で、ナミが恐る恐ると言った様子で尋ねる。

利き腕を押さえ、膝をついたワイパーに、エインシエンが肩を揺らして声を漏らす。

「にははは……………やつてくれたな、カルガラの子よ……」

「ロビン……………!!? エレノア……………変な騎士……………!!?」

ようやく、本当に片が付いたのだと安心し、倒れた仲間の元へ向かおうと歩み寄ってくるナミ。

だが、その安堵は長くは続かなかった。

倒れたエネルギーに向けて、突然巨大な雷が降り注いできたからだ。

「……………え?」

「……………まさか自分の心臓をマッサージして……」

ドクン、どくんと、倒れたエネルギーの身体から、止まっていたはずの脈動が再開する音が聞こえる。

やがて、エネルギーは何事も無かったかのように起き上がり、ぐいっと口元に付いた血を拭い取ってみせた。

「——人は……『神』を恐れるのではない……『恐怖』こそが『神』なのだ」

第143話 「死ねない!」

「戦士ワイパー、言ったじゃあないか… “やめておけ” と………!!?」

平然と、口元をわずかに赤く汚しただけの姿で、エネルギーはワイパーに啜う。

命懸けの一撃を叩き込んだのに、それが完全なる不発で終わったことで、ワイパーの身体から力が抜け、どっと膝をついてしまう。

「ホラみろ」

「おのれ…しづとい奴…!!」

意地悪く口元を歪める男に、怯えて腰を抜かしたナミの隣で、血反吐を吐くエインシエンが忌々し気に唸る。

怒りのままに、もう一度拳を叩き込んでやろうと握りしめるが、最早体は鉛のように重く、引きずって動くこともできない。

「憐れなもんだ…戦士ワイパー」

「……おれの名を…!! 気安く呼ぶな…!!」

憐憫の視線を向け、呟くエネルギーにワイパーが吠える。

自身の骨の髄にまで届いた衝撃、今にも意識をと罰されそうなほどの激痛を感じなが

ら、ワイパーはふらふらと立ち上がる。

その目に、確固たる意志の炎を燃やしながら。

「……………800年前、この都市の存亡を賭けて戦った……………誇り高いシャンドラの戦士達…!!? その末裔がおれ達だ……………ある日突然故郷を奪われた…大戦士カルガラ」の無念を継いで400年……………!!! 先祖代々……………ただこの場所を目指した……………!!!」

ギン、と鬼と呼ばれた戦士の目が「神」を射抜く。

師にかけの弱者などではない、首一つになっても必ず殺してみせると言わんばかりの殺気が、彼から迸っていた。

「…やつと辿り着いたんだ、お前が邪魔だ!!!」

右腕から煙を上げ、それでもなお立ち続けるワイパー。

それをつまらなそうに見やったエネルギーは、おもむろに自身の持つ棒を振り回し、ワイパーのシューターを破壊し、彼を転ばせた。

「さっきのは…効いたぞ、ワイパー。海楼石とはくだらんマネをしてくれた。並の人間では「排撃」など一発で自殺行為。まだ立ち上がるとは流石じゃあないか…だが相手が悪い」

また嗜虐的な笑みが浮かび、エネルギーの棒が背中の中の太鼓を叩く。

すると、太鼓が瞬く間に雷に変化し、巨大な黄金の鳥に変化し、ワイパーに向かって

飛翔を始める。

「3000万V…^ヒ雷鳥!!!」

雷の巨鳥に貫かれ、白目を剥いたワイパーが仰向けに倒れていく。

雷鳴が轟き、戦士が沈黙する傍を、ゾロが素早く駆ける。そして、エネルギーが砕いたシューターの一部——海楼石が仕込まれた部分を拾い上げ、エネルギーに迫った。

「貴様もか、青海の剣士」

「やらなきややらんだろうがよっ!!!」

海楼石で能力を封じ、同時にぶった切ろうという考えか、刃を抜いてゾロが走る。

だがその時には既に、エネルギーの別の太鼓も雷に代わり、雷でできた肉食獣へと変化し、ゾロに襲い掛かっていた。

「^{キテン}雷獣!!!」

「ゾロ!!!」

「ぐアアアアア!!!」

雷の獣に肩に噛みつかれ、絶叫を上げるゾロ。海楼石を持った手は届くことなく、ゾロは力なく崩れ落ちてしまう。

ふっ、と満足げに笑うエネルギーは、視界の端に映る、がくがくと身体を震わせながら立ち上がるようにしている天使に、思わずため息をこぼした。

「しぶとい亡霊め……」

「まだだ…!!? まだ…!!!」

口から大量の血を吐き、焦点のほぼあつていない目を向けながら、エインシエンは拳を構える。

とうに最初の勢いはない。だが、不気味ささえ抱かせる執念が、彼女の瀕死の身体を突き動かしていた。

「まだ死ねぬのだ!!!」

「5000万V…」

ドドドン、とエネルの太鼓全てが雷に変わり、それらがすべて合わさって、巨大な無数の羽虫に変わる。

雄叫びを上げて突進してくるエインシエンに、それらが一齐に阻止かかった。

「^{テカサ}雷蟲!!!」

全身を余すことなく貫かれ、感電させられ、天使の身体が幾度も痙攣する。

ジユウ…!と耳をふさぎたくなるほど嫌な音が響き、焦げ臭いにおいが辺りに立ち込め、やがてどさりと倒れ伏す。

静かになった天使を見下ろしていたエネルが、ため息交じりに問いかけた。

「なぜ立つ。どうせ死ぬのだ、楽に逝けばいいものを…承らえてどうなる…これに耐え

る意味があるのか」

エネルが問いかけたのは、背後に立つワイパー。

全身をしびれさせられ、黒焦げになりながらも、彼は雄々しく地面に立ち、エネルを睨みつけていた。

「400年と…言ったか？ お前達が故郷奪回の戦いを始めてから…だがここへ辿り着いた戦士はお前一人、それと亡霊が一人。直、この国も青海へと堕ちてゆく…今さら目障りなだけで、なぜ立ち上がる…!!？」

圧倒的な力を持つ「神」を自負するエネルにも、その思考はわからなかった。

終焉が決まりきっているというのに、何もできぬまま終わると決まっているのに、なぜ生き急ぐ必要があるのかと。

その問いに、ワイパーは仁王立ちしながら、力強く真つすぐに答えた。

「先祖の為!!!」

「……………少しはマシな答えを期待した。もはや意識も定かではあるまい」

落胆した様子で息を吐いたエネルが、バリバリと放電を始める。

義ラグラと今にも倒れそうになっているワイパーが、己の誓いを思い返しかけた時、天より降り注いだ雷が、彼の全てを呑み込んだ。

「^{エル・トール}神の裁き!!!」

??

遺跡の上に頭を乗せ、意識を失っていた大蛇。

しん、と沈黙していた彼は、やがてパチツと目を開けたり、突如にかつと嗤ったりし、最後には地面につく程大きく口を開ける。

その奥から、二人と一話がごろごろと転がり出てきた。

「うぷ」

「んがっ」

「ビエ!!!」

それぞれ地面に落下すると、頭を打ったり背中を打ったりして、呻き声がこぼれる。

どうにか立ち上がったアイサは、きよろきよると見覚えのない景色を見渡し、戸惑いをあらわにした。

「……………わ、石の地面っ……………!!? でも…やっと出られた。何だろ…ココ…」

今の今まで大蛇の腹の中にいたため、外で何がどうなっていたのか全く分からない。まるで自分を置いて時間が過ぎ去ったかのような感覚だった。

興味深げに当たりを見渡していたアイサは、突如走り出したルフィに気付き、慌てて後を追いかけた。

「ルフィ!!?」

「出ったア!!! 出られたア~~~~っ!!!」

不意に立ち止まったルフィは、自らの解放感をこれでもかと表し、両手を突き上げて満面の笑顔を浮かべる。

狭くて行き止まりの空間など、彼にとっては牢獄でしかなかった。ついさつきまで、大蛇に食われて彷徨っていた彼には、美味すぎる空気だった。

「うはーっ、見ろ!!? なんてでつけエんだ!!! どこだここは!!? 遺跡だな!!!」

辺りに広がる景色に、ルフィはワクワクする気持ちを押しえられない。

遥か下で夢を抱き、いくつもの冒険を経てここへ辿りついた彼の表情は、とてつもない歓喜で溢れていた。

「ここにあんのか!!? でつけエ “黄金の鐘”!!!」

「……………もしかして……………ここ…あたいた達の故郷……………」

「わ……………でつけエ穴が……………」

アイサも同じく、壮大で荘厳な遺跡を見上げ、言葉を失くす。言い伝えでしか知らない遙か昔の故郷の姿に、ただ圧倒されるばかりだ。

しかし、ルフィがまたいきなり走り出したことで、アイサはハッと我に返った。

「え!!? ルフィ!!?」

慌てて後を追いかけると、遺跡の一角に巨大な穴が開いているのに気づく。

そしてその傍には、見覚えのある顔がいくつも横たわっているのにも気づいた。

「ゾロ!!! おいお前!!! 何やってんだよ!!! エレノア!!!」

全身黒焦げになり、倒れ伏す仲間達と、同じ状態に陥っているガン・フォールとワイパー、そして見覚えのない長髪の男。

その姿に、ルフィは驚愕と怒りできつく歯を食い縛った。

「お前らがいて何で……こんな事になってんだ……!!!」

今まで航海を共にしてきたからこそわかる、仲間達の強さ。

なのに今、彼らは力なく横たわっている。納得はできなかつたが、おそらく戦って敗北したことだけは伝わる。

そして彼は、その場にもう一人の仲間の姿がないことにも気がついた。

「ナミは? あいつがいない!!!」

「ワイパー!!! うわ~~~~さん、ワイパーまで!!!」

「……あのバズーカの奴だ!!! あんなに強エの………みんな誰にやられたんだ!!!」

黒こげで、何の反応も返さないワイパーに縋りつき、泣きじやくるアイサ。

ルフィも彼と一度戦ったため、その強さは理解し、そして信じられない気持ちでいっぱいになる。

一体、誰と戦ってこんな惨状になったのかと。

「エネルだよ!!! ……こんな事できるの、あいつしかいない……!!!」

「エネル……つて、神か?」

「蛇の中にいる間ずっと、心綱が効かなかったから、ここで何が起きたかはわかんないけど……!!?」

困惑し、泣くことしかできないアイサと立ち尽くすルフイ。

その時、二人の耳に、微かに響く誰かの呻き声が届いた。

「……え!!? ロビン!!!」

「航海士さん……連れていかれたわ」

荒い息をつき、俯せになったロビンが、途切れそうな声でそう告げる。

ロビンを抱き起こそうとしたルフイは、その言葉に一瞬固まり、続いて混乱した様子で目を見開く。理解が追い付かなかつたらしい。

「……おい……待て……ゆつくりでいいよ……神のやつに連れてかれたのか?!? ナミは

!!? どこへ?」

「…………わからない…………よく聞いて…………」

ゆつくりと言いながら、自身が一番慌てた様子で再度問いかける。

だがロビンは、彼よりも明らかに落ち着いた様子で、しかし確かに焦った様子で、詳

しい事情を語り始めた。

「……………このままだとこの国は…このスカイピアは消滅してしまう……………」

「空島が!!」

「……………あ…あたい達の村も!!?」

「〃全て〃よ……………!!!」

絶句する二人に向けて、ロビンは語る。

〃神〃が考える、この国の最悪の終焉の形を。

「空にいる全ての人々を地上へ還すと———」

ロビンの説明は、ルフィにわかりやすいように簡略化されて行われた。

エネルの目的、鐘楼の行方、必要最低限の情報だけを抽出し、時間を惜しみながらもできる限りの全てを伝える。

ロビンが語り終わると、ルフィは険しい表情で認識の確認を行う。

「……………じゃあエネルは…後で必ず、その〃黄金の鐘〃のある場所に現れるのか!!」

「ええ…それが確実。…下手に探し回って行き違っては、もう取り返しがつかなくなる

……………」

広大な島を我武者羅に走り回っては、確実に追いつけない。ましてや、彼は地図において、ゾロに次いで頼りなさすぎるルフィである。

詳しい場所を語ろうとしたロビンを遮り、アイサが声を上げた。

「大丈夫だよ!!? あたいわかる!!! この島で『声』が2つ動いてる…きつとナミと、エネルだ!!!」

「…………おれを、そこへ連れてけ!!!」

ルフィは怒っていた。

仲間をここまで傷つけられたこと、自分が求める鐘楼を奪おうとしていること、そして、ここまで他人に自分の旅を好き勝手されていることに。

鼻息荒く、ルフィがアイサの案内で走り出そうとした時だった。

ぐらりと、それまで黙っていたポロポロの天使が、幽鬼の様に起き上がったのだ。

「ギャ——ツ!!!! ゾンビィ〜!!!!」

「おオ!!! エレノア!!? お前起きて大丈夫なのか……………」

人間離れた動きで立ち上がった彼女の姿に、アイサやピエールは悲鳴を上げ、ルフィはやや驚いた様子を見せる。

意識があつたことを喜ぶルフィだったが、やがてその表情は、訝しげに歪められていった。

「……………お前、誰だ☒」

「……………『麦わら』の…………ルフィ……………」

ルフィは気づく、目の前のこの天使は、自分の仲間の姿をした別人であると。そしてエインシエンもまた、気付く。この青年が、普通の人間とは異なる体のつくりをしていることに。

「『ゴム』の……………能力者……………!!!」

「おい!!! お前誰だ!!!? エレノアにスゲエ似てるけど……………わかるぞ!!! 違う奴だな!!! 誰だア!!!」

「……………耳元で騒ぐな……………お前の『声』はあまりに強すぎる……………!!!」

警戒心をあらわに、鋭い目で睨みながら怒鳴りつけるルフィ。

エインシエンは顔をしかめ、拳を構えるルフィに鬱陶しそうな目を向け、じつとその目を見つめ返した。

「……………エネルギーと…戦うつもりか」

「そうだ」

「あれは天災そのもの……………『天災妃』と謳われた私でさえ、今の姿では傷をつけることもままならん化け物だ……………それでも行くのか…?」

「当たり前だ!!!」

試すように問うと、ルフィは馬鹿にするなど言うように吠える。

血まみれで、黒く染まった自身の姿を見せてなお、ルフィに臆した様子はない。その

様に、エインシエンは興味深そうに目を見開く。

「あいつは『黄金の鐘』を狙ってんだ!!! あいつにだけは、鐘は渡さねエ!!!」
「……………にはは」

思わず、エインシエンの口から笑みがこぼれる。

自身の特性を理解しているからではない、理不尽を強いる神への怒りからくる闘争心だと理解し、エインシエンはゴキゴキと首を鳴らし始めた。

「ならば私と共に来い。足で走るよりは…速いだろう」

そう告げると、エインシエンは自身の翼を広げ、ルフイに向かって手を差し出す。

彼女の手に青年の手が重なると、天使の翼は、いつも以上に力強い羽搏きを見せ、彼らを遙か天空へと誘ってみせた。

そこには、巨大な黄金の船が鎮座していた。

幾つものプロペラを左右に並べ、眩い輝きを放つその船の名は『マクシム』。

エネルギーが捕らえた神隊に作らせた、『限りない大地』に向かうための唯一無二の船である。

その上にエネルギーは、恐怖に屈して降伏したナミを伴って乗り込み、それを動かす時を待っていた。

だがふと、彼の表情は不快げに歪められ始める。

「——やはり……生き残った5人の……誰でもない様だ……」

「え？」

「——実に不愉快……私の『予言』は外れだったというわけか……」

そう言い、エネルは船の上から真下の地面を見下ろす。

彼の態度に、ナミはハツと息を呑み、同じく船から身を乗り出し、下を覗き込む。その途端、彼女の顔に喜色が浮かんでいった。

「死に損ないが今更何の用だ……」

忌々し気に、エネルが訪問者達を睨みつける。

バサツ……と翼を畳んだ血濡れの天使は、苛立ちを見せる神に対し、不敵な笑みを見せつけた。

「そう上手くいかせると思うな……小童ア………!!!」

「エレノア!!!」

「にははは……しつこくてすまんア……重い奴だとはよく言われる」

思わず歡喜の声を上げるナミをよそに、エインシエンが肩を揺らして告げる。

その隣には、やる気を漲らせるルフィの姿があり、見下ろしてくるエネルに憤怒の目を向け、荒く鼻息を吹かせていた。

「だが………諦めるわけにはいかんのでのオ……」

「お前かア!!! エネルって奴はア!!!」

「ルファイ!!!」

ビリビリと大気を震わせる怒号が、虫けらを見る目を見せるエネルに叩きつけられる。同じく駆け付けたアイサとピエールが、その様子をハラハラと見守る。

各々の初邂逅が、今ここに叶っていた。

「何やってんだ、お前……おれの仲間によ」

「どのゴミの事かな」

第144話 “神を墜とす者”

黄金の船の甲板の上と地上、高低差を挟み、ルフィとエネルギーが睨み合う。

片や怒りをありありとあらわにし、片や完全に見下した様子で嘲笑を浮かべている。まったくルフィを、障害とさえ認識していなかった。

「口を慎めよ……私は神だ!!?」

「お前のどこが神なんだ!!!」

不遜に告げるエネルギーに、ルフィは力の限り吠える。

その隣に立つエインシエンは、無言のまま目を細め、何かを思案するように眉間にしわを寄せる。

「ルフィ!!? 気をつけ……」

一味の頭のようにやくの登場に、思わず声援を送ろうとしたナミだったが、そこにエネルギーの鋭い目が向き、思わず息を呑む。

エネルギーはルフィに視線を戻し、嗜虐的な笑みを浮かべて口を開いた。

「……………ヤハハハ……聞こえてきた天使達の宴……!!? 住人達がスカイピアの運命を知った様だぞ、ヤハハハ……足場を失う前に一体、どこまで逃げられるかな」

「お前のどこが、神なんだ!!!」

「今にわかる」

どこまでも人を見下した、悪意しかない言葉を聞き、ルファイがついに動く。

ビヨンと伸びる腕を黄金の船の一部に巻き付け、エネルギーと同じ高さにまで一気に飛ばす。

その様に、エネルギーがつまらなそうに息をついた。

「……成程……貴様もただの人間ではないらしい……だが『超人系』か……話にならない……!!! おれの前では何もかもが無力っ!!? 故におれは、神なのだ!!!」

同じ悪魔の实の能力者とはいえ、自然の膨大なエネルギーそのものとなるエネルギーとは比較にならない、人の原型を留めたままの青年。

まったく話にならないと、エネルギーは雷を手に発生させ、巨大な一撃を繰り出した。

「『神の裁き』」

「ルファイ!!!」

「うわあああ!!!」

カツ!!と眩しい光に飲み込まれ、ルファイの姿が見えなくなる。

まさかこれで終わりなのか、とナミやアイサたちが言葉を失くした時、いつの間にかナミの隣に降り立ったエインシエンが苦笑を浮かべて呟いた。

「……キアて…私の賭けはハズレか否か…!!?」

「え…」

初めて隣に降り立ったエインシエンに——エレノアの姿をした別人に気付き、目を見開くナミ。

そんな彼女達をよそに、閃光が徐々に消えていく。

そして、傷ひとつないルファイが、不思議そうにエネルを見ている姿が露わになった。

「うまくよけた様だな……………!!」

感心した様子のエネルの眩きに、ナミが思わず首を傾げる。

アイサやピエールも訝しげな目を向ける中、エインシエンのみが、深い笑みを浮かべてルファイたちを見つめていた。

「6000万V…ジャムブウル雷龍^{!!}!!」

エネルの背後に、巨大な雷の龍が生まれ、ルファイに向かって大きく口を開けて飛翔する。

巨大な顎に食らいつかれ、先ほどよりも大きな雷光の爆発が起こる。

「ルファイ^{!!}!!」

またしても、最悪の光景を想像して悲鳴を上げるナミ。

だが、光が晴れるとまた、不思議そうに眉を寄せるルファイの姿が見え、彼女達に困惑

をもたらした。

「1億V!!?」
ザァーリ
 “放電”!!!」

じれったくなつたのか、エネルギーが直接ルフィの元に向かい、その身に自身の手を置いて、情け容赦のない放電を食らわせる。

だが、普通なら原型さえ残らないであろう雷撃を受けてなお、ルフィは平然としていた。

「ゴムに雷が、効くわけないだろう」

「やめろオ!!!」

エインシエンの小馬鹿にした眩きが響くとともに、ルフィがエネルギーを払い除ける。

弾き飛ばされ、甲板の上を滑りながら後ずさつたエネルギーは。

これ以上ないくらいに脛と口を全開にし、全身で驚愕を示していた。

「にはは…にはははははは!!!」

厚顔不遜、余裕綽々と言つた態度で相手を踏みにじつていた“神”が見せる、余りにも間抜けすぎる姿に、エインシエンがたまらず笑い声をあげた。

「しかと目の前にいる男を見ろ…神を気取る井の中の蛙よ!!! ここに…お前の死神がいるぞオ!!!」

「うおアアア!!!」

エインシエンの煽りに乗ってか、ルフイが雄叫びとともに駆け出す。

エネルは呆然と固まるも、しばらくすると我に返り、どうせ超人系如きでは自分に攻撃は当てられないのだと自身を叱咤する。

しかしその予想は裏切られ、ルフイの重い一撃が思い切り腹に直撃し、血反吐を吐きながら吹っ飛ばされることとなった。

「完全に『雷』の力が無効化してる……!!! 『雷』が効かない人間が、この世に存在するなんてきつとエネルでも予想できなかった出来事」

「にはは………よもや、今の今までチビの腹の中にいたことで、奴に気配を気取られなかったとはな……!!!」

倒れ伏すエネルと、それを見下ろすルフイ。

見上げる者と見下す者。先ほどとはまるで真逆な様に、エインシエンが愉快そうに肩を揺らす。

「奴にとつて『麦わら』は……世界でたった一人の『天敵』というわけだ」

ナミは呆然と、見え始めた希望を凝視し、続いて隣に立つ天使を見やる。

もはや、疑う余地はない。ここにいるのは自分が知っている仲間ではない、その姿をした、別の誰かなのだと。

「何だと言うのだ………貴様……!!!」

息を呑むナミの前で、忌々し気に顔を歪めたエネルギーが体を起こす。

無敵であるはずの自分が、こうも圧倒されるといいう状況に、困惑よりも先に苛立ちが募る。

歯を食い縛る彼に対し、ルフィは鼻息荒く名乗ってみせる。

「おれはルフィ!!? 海賊で、ゴム人間だ」

「……………ゴム?」

「雷なら効かねエ!!!」

空の海においては聞きなれない単語に肩眉を上げるエネルギーに、構わずルフィは突っ込んでいく。

再び、唯一の弱点であるゴムの拳が叩きつけられようとした時だった。

「心綱」

突如目を閉じたエネルギーが、そのままルフィの拳をひらりと躲す。

動きを先読みされたルフィは目を見開き、しかしすぐに新たに別の攻撃を繰り出していく。

「ゴムゴムの鞭!!! 槍!!!」

次々に繰り出される素早く重い一撃が、ことごとく避けられていく。

悔し気に顔を歪め、さらなる一撃を叩き込もうとしたルフィは、次の瞬間不意をつか

れ、エネルギーの持つ棒で思い切り殴り飛ばされた。

「んぎ!!!」

「凶にのるな」

呻き声をあげるルフィに、エネルギーは鋭い突きを放つ。

喉を突かれ、黄金の船の壁に押し付けられたルフィは、気道を潰されて苦しげな声を上げた。

「シビレさせるだけが雷ではない……効かんとわかればそれなりの戦い方がある」

「ふん、打撃も効かねエよ!!!」

喉に食い込む棒を振り払い、反撃として一発の拳を放つルフィ。

だがそれすらも躲し、エネルギーは挑発するように軽々と跳躍し、ルフィから距離をとつた。

「……………チキショー……………!!? こいつも動きが読めるっていうアレか」

思ったように攻撃が当たらないことに、ルフィがどうしたものかと顔をしかめさせる。

そう思ったのはエネルギーも同じようで、何かを思案したかと思うと、自身の持つ黄金の棒に強烈な電流を走らせ始めた。

「^{グローム・パドリング}雷 治 金!!!」

雷を受け、黄金の棒が眩く輝く。するとシンプルな形状だったそれが、見る見るうちに刺々しく危険な形状に変化していく。

あつという間に、エネルの得物は鋭い双刃槍へと変貌していった。

「棒が…刃物に精錬されてく……!!?」

「形ある雷と思え!!! 貴様などと遊んでいるヒマはないのだ!!!」

驕り高ぶった声と態度で、エネルが刃を振るかざしルフィに迫る。

刃が目前に迫ると、ルフィはたまらず飛びのき、黄金の船を足場にエネルから大きく離れた。危うく体が両断されるところだった。

「ヤハハ、弱点はやはり斬撃か!!?」

「ああ」

「ゆうな!!!」

素直に頷くルフィに、弱点を自ら晒すなどナミが怒鳴る。

次の瞬間、エネルが突如雷に変化し、甲板の中に沈み込む。そして一瞬にして、エネルの姿が消え去ってしまった。

「消えた」

「〃麦わら〃!!? 後ろだ!!!」

ピクツ、と両耳を反応させ、エインシエンがルフィに吠える。

その直後、ルフイの背後の壁から、エネルギーが飛び出し槍を振るう。黄金の中を自ら伝導し、奇襲をかけたのだ。

間一髪受け止めたルフイだが、触れた瞬間強烈な熱に襲われ、悶絶する羽目になる。

「熱ち!!!」

「ヤハハ!!?」 電気は効かずとも、矛にたまる「電熱」は別か!!?」

生意気な相手が苦しむ様に、エネルギーは愉快そうに笑い声をあげる。

だが、両手に火傷を負いながらも、ルフイはキツと鋭い目を向け、自身の片脚を天に向かつて構えた。

「『ゴムゴムの…戦斧』!!!」

頭上に長く伸ばされた、ルフイの片足。

表情を変えたエネルギーの前で、ルフイは片足を勢いよく引き戻し、エネルギーに向けて思い切り踵を叩き込んだ。

たまらず叩き落とされ、甲板に突っ込んだエネルギーは、激昂し声を荒げた。

「おのれ小僧がア〜っ!!!」

「『ゴムゴムの…銃乱打』!!!」

さらなる猛攻を叩き込もうと、ルフイが無数の拳をエネルギーに振るおうとする。

だが、最初の一発が炸裂しようとしたその時、エネルギーの手がルフイの手首を掴み、た

やすく止めてしまう。

「いい!!?」

「手が増えたわけでもあるまい!!」

伸びた腕を振り回し、エネルギーはルフィを甲板に叩きつける。

甲板が陥没するほどの衝撃で、ルフィの姿が一瞬見えなくなる。その様を見下ろし、エネルギーはぐいっと口元にはじんだ血を拭う。

「空島観光…悪い時期に来たものだな、青海人…私は神だぞ!!! 何事も意のままにする!!! 私の想う世界を創るのだ!!! 青海からひよつこり現れた訳もわからん小僧に、それを邪魔されてなるものか」

ボコツ、と穴の中から睨みつけてくるルフィに、エネルギーはふと足を止める。

これから始まる余興を見せつけてやろうと、そういった残酷で嗜虐的な笑みを浮かべながら。

「…どうだ、一緒に見物でもするか!!? この国の果てゆく姿を…!!?」MAX2億V

「!!!」放電「!!!」

黄金の船の中心、玉座の様になった装置の元に移動したエネルギーが、自身の力を膨大に放出する。

そのエネルギーは瞬間に船全体に流れ、内部の奇行を動かし始める。

「……見ろ。…浮くぞ…私を “限りない大地”へ導く方舟…… “マクシム”!!!」
 ヒュンヒュンと、船の左右に備わったプロペラが動き出し、大きな浮力を生み出して
 いく。

その力は徐々に、巨大な船を空中に浮かび上がらせていく。ガリガリと天井を削りながら、まさに神の乗り物であると、そう見せつけるように。

「どうしよう、ルファイ!!? 私達…!!!」

「ガタガタ騒ぐな!!?」

「だって…!!? でも!!?」

「未来の海賊王の仲間がよ…情けねエ顔すんじやねエ!!!」

不安げな声を上げるナミに、ルファイは自身の麦わら帽を投げ渡しながら告げる。

その目はエネルギーに向けられたまま、喚かずに、疑うことなく黙って見ていると、そう背中で語っていた。

「カイゾク王? そいつはどここの王様なんだ…?」

「世界の偉大な海の王だ!!!」

「ご立派だな………決着をつけようじゃあないか…この空で!!!」

誇らしげに吠えるルファイに、エネルギーは不気味に笑みを返して告げる。

睨み合う二人をナミが凝視していると、ふと隣から、心底可笑しげな声が響き、ギョツ

と振り向いた。

「にはは……デカい口をたたきおつて……小僧が。この老兵にまた火をくべてくれおつたな……？」

ぼたぼたと鮮血を垂らすエインシエンが、爛々と目を輝かせた獣の笑みを浮かべ、仁王立ちするルフィを見つめる。

ぎしぎしと軋む義足を動かし、青年の隣に立つと、天使は確かめるような目を向ける。「だが……まだお前には……聞く」事はできんか……なら、少しばかり手伝うとするか」

「そうか」

それぞれの持つ願望のため、それを阻む敵を見据えるルフィとエインシエン。

傍から見ればよく見た組み合わせだが、実際は全くの初対面の二人。そんな二人が並び立った時、黄金の船に突如、ズンツと震えが走った。

「ヤハハハハハハ!! ……この方舟の究極の機能への回路が、すでに開き作動している。名を『デスピア』、絶望という名の、この世の救済者だ!!」

「……何をやる気……？」

見れば、天井の土を破って浮上を始めた黄金の船の後方に、モクモクと煙があがっている。

何かの装置から発生したそれは天空の雲と混ざり、見る見るうちに辺りの空を真っ黒に染め上げていった。

「…雷雲か」

「そうさ、私のエネルギーによって、『デスピア』は極めて激しい気流を含む『雷雲』を排出する!!!」

目を細め、始まった何かよからぬことに顔をしかめるエインシエンに、エネルギーが楽しみに語りだす。

その間も黒雲は広がり続け、神の島全体を覆い尽くしていく。

「やがて雲はエネルギーを増幅させながら、スカイピア全土を闇と共に包み込む。それらは私の合図で何十本もの雷となり、この国の全てを破壊する!!!」

すると、おもむろにエネルギーが黒雲に向けて、指先から小さな電流を飛ばす。

放たれたそれは黒雲の中で増幅し、あつという間に育つと、槍のように飛び出し、真下に落とされた。

「今…何を…!!?」

「……………どこかの島に落ちたな」

ビクツ、と身を振るわせたナミに、犬歯を剥いたエインシエンが腹立たしそうに答える。エネルギーの狙いが分かり、それを止められなかったことに悔しさを抱く。

突然の凶行を成したエネルは、満足げに笑みを浮かべて肩を揺らす。

「天使達を…少しからかってやったのだ…」

「神なら何でも奪つていいのか!!!」

「そうだ。『命』も『大地』もな」

激昂するルファイに、エネルは堂々と答える。

ぶんぶんと得物を振り回し、今一度自身に抗う敵を見据えた空の支配者は、不敵な笑みを浮かべて大きく吠えるのだった。

「さア!!!? 貴様には消えて貰おう!!! 宴の準備は始まったのだ!!!」

腕を広げ、挑発を行うエネルに、即座に乗せられたルファイが拳で応える。

鋭く放たれたそれは、やはり容易く躲されエネルに届くことはない。たった一度でも当たればいいのに、それが叶わない事が歯痒くて仕方がなかった。

「くそ——っ!!!? あの動きを読むやつ何とかならねエか!!!」

「任せろ…援護くらいはできる」

「ん?」

エインシエンの眩きに、ルファイが訝し気に振り向く。

何をするつもりなのか、と目線で問いかける彼に、エインシエンはにやりと口角を上げ、口の前に指を立ててみせる。

「『心綱』がお気に召さん様だな。当然だ…それも私の圧倒的な力の理由!!!」
迂闊に手が出せず、動きがないルフィたちに、エネルは優越感に浸りながら鼻を鳴らす。

一度驚かされはしたものの、もう手も足も出せまいと高をくくる彼に、ルフィの背後に立ったエインシエンが雄々しく吠えた。

「——構わず突っ込め!!!」

「おう!!!」

疑うことなく、ルフィはエインシエンの指示通りに真っ直ぐに突っ込んでいく。

策を講じた様子はない、本能のままに拳を振るうつもりだと読んだエネルは、詰まらなそうに得物を構えた。

「『ゴムゴムの』…」

「何をしようと所詮、貴様は雷が効かんだけの無能者!!! 同じことを繰り返した所で…」

躲した際に、腕でも斬り刻んでやろうと、気だるげに槍を構えるエネル。

だが、その刃を振り回そうとしたその時。

ずぶんつ、と。

周囲の音が消え、冷たい感覚が体に走る。

エネルは突き刺さる強烈な殺気に凍り付き、そして考える間もなく、心臓を貫かれる

自身の姿を見た。

「うおおあああ?!?!」

いきなり見えた最悪の未来に、エネルギーは声を上げて冷や汗を噴き出させる。

自分が一切の傷を負っておらず、そして誰も近くにいない事に気がついた時には、ルフィの拳は目前に迫っていた。

「銃乱打!!!」

先ほどは躲せた拳の乱打が、今度は全てあますことなく炸裂する。全身に拳の雨を食らい、エネルギーの意識がぐらぐらと揺さぶられる。

吹っ飛ばされる様を見やり、腕を組んで佇むエネルギーがにやりと笑った。

「聞こえ過ぎるのも問題だな……そうやって、本物と偽物の区別もつかなくなる」
 「……まさか……『殺気』だけをぶつけて……あいつのあの力を攪乱させたの……!!?」

武に通じているわけではないが、エネルギーの奇妙な反応を見ていたナミが、まさかと言った様子でエネルギーに目を向ける。

殺気だけで幻覚を見せたエネルギーが見守る中、ルフィは間髪入れずに腕を伸ばし、エネルギーに向かって猛然と突っ込んでいく。

「もう逃がさねエぞ!!!」
 「ゴムゴムの……!!!」

「く…待て…!!!」

「バズーカ!!!」

エネルの止める声に応じるはずもなく、ルフィの掌底が見事に決まる。

またしても吹っ飛ばされ、甲板の上を転がるエネルを追い、ルフィは今度は右腕を伸ばし、きつくねじっていく。

「仕留めろ!!? 麦わら!!!」

「ゴムゴムの…!!!」

近づいてくる、自身を唯一苦しめる死神の一撃に、怯えの表情を見せるエネル。

どうにか回避をしようとする彼だが、幾度も強烈な一撃を貰った体は動いてくれず、見る見るうちに回転する拳が迫り来る、そして。

「^{ライフル}回転弾!!!」

遠慮なしの渾身の一撃が、エネルのどてっばらに食らいついたのだった。

第145話 天の国の終焉

血反吐を吐き、甲板の上に倒れるエネルギー。

その姿を目にし、ハラハラと息をのんでいたナミは、ようやく喜びに目を輝かせ始めた。

「……………やった……………!!! ……でも舟が……………!!!」

「……………止まらない」

恐怖の時間は終わったのか、と安堵しかけるも、船の機械は黒雲を吐き出し続けている。

あの危険な雷雲をどうしたらいいものか、と空を見上げ、エンジンとともに考え込んでいた時だった。

「……………!!! バカめ……………!!? これ……………これしき……………」

地に伏したはずの男が、相変わらずの見下した響きを声に混ぜながら、よろよると体を起こしていく。

相当な傷を負っているはずだが、それを押し殺して立ち上がりとする師のプライドの高さに、思わずエンジンが舌打ちをこぼす。

「貴様さえいなくなれば……私の天下なのだ」

「往生際の悪い……!!」

「再び……!!? 誰もが私に怯え……崇め!!? 奉る……!!! ……私の……世界……貴様などが

……この私に敵うものか!!! 不可能などありはしない、私は全能なる神である!!!」

笑みを浮かべたまま、殺意を増したエネルギーの目がぎろりとルフィたちに向けられる。

その鋭さに、ナミが思わず背筋を震わせる。

「……見てろゴム人間………亡霊………墮つ島の絶望………もう誰にも止められん

………つ!!!」

「やめろ!!!」

いまだ、空島を滅ぼす意思を絶やしていない事を悟り、ルフィが再びエネルギーに向かって駆けだす。

今度こそ仕留めてやる、そう意気込む彼だったが、そこにエインシエンがハツと目を見開き、叫んだ。

「いかん!!! 退け 麦わら!!!」

「雷治金!!!」

彼女が叫んだその直後、黄金の船の壁に触れたエネルギーが、溶かしたそれを引きずり出す。

ひねり出された黄金はルフィの腕に巻き付き、そのまま巨大な球体となつてがっちり固まつてしまった。

「あ……熱い……っつ!!!」

「ルフィ!!!」

「〃麦わら〃!!!」

雷によつて精錬された黄金の塊、それが放つ熱に苦しめられ、ルフィが目を向いて悲鳴を上げる。

失態に気付き、声を上げたエインシエンも思わず顔色を変える。

「何を……あアっ!!? ……!!! 抜けねエ!!! 抜け………!!! え、え!!!」

「……ハア……青海のゴム人間……何も無理に私がお前と……勝負する必要などないのだ……」

「外せエ!!! この野郎!!!」

「またお前に手を出して……噛みつかれてはかなわんからな」

ガン、ガンと球体を殴りつけ、外そうと試みるルフィだが、やみくもに殴っただけでは傷ひとつつけれられない。

エネルはその様を見て調子を取り戻したのか、満足げに厭らしい笑みを浮かべてみせていた。

「このまま別れようじゃあないか。この金塊は……貴様の善戦を称え………くれてや

る……………!!!」

おもむろに近付いたエネルが、ルフィの腕を拘束する球体を軽く蹴る。

すると球体はごろごろと転がり始め、船の傾きによつて加速し、ルフィの腕と一緒に引つ張つていく。

黄金の重量に、ルフィもたまらず引きずられていった。

「うわっ……………!!! わ!!? わわわア!!!」

「くっ……………!!?」

「貴様さえ封じてしまえば……………また元通り…私の天下だ!!! 私に敵う者などこの世にいない!!!」

球体はそのまま船から落下し、ルフィが危うく船のへりを掴んで止まるも、彼はそれ以上動けなくなつてしまう。

それを見下ろし、エネルが可笑しげにつぶやいた言葉に、エインシエンが思わず吐き捨てるように吠える。

「この世にだと……………!!? ……そんなもん!!? ……いくらでもおるわ…!!!」

「下の海には……………もつと怪物みてエな奴らがうじゃうじゃいるんだ!!!」

ルフィもまた、自身の知見の狭さを知らずにいる男に怒りの声を上げる。

エネルはその反論に、鬱陶しそうに顔を歪める。自身が至高の存在であることを否定

された彼は、苛立った様子でルフィの元に近づいていく。

船の縁にしがみつくとルフィの指を踏みつけ、エネルは残虐な笑みを浮かべた。

「お前なんか」

「口の減らん小僧だ…堕ちろ、空島と共に…!!?」

とんつ、とエネルの足が、ルフィの指を蹴り飛ばす。

指が離れ、黄金の重量によって、ルフィの身体はたまらず船の真下に落下していく。落ちていく彼の顔が、悔しさでくしゃくしゃに歪められる。

「お前なんか…!!!」

「やだ…ルフィ——っ!!!」

真つ逆さまに陸地に落下していくルフィの姿を目の当たりにし、ナミが絶望した表情で悲鳴を上げる。

身を乗り出した彼女だったが、不意に後ろに押しやられ、代わりに飛び出していく天使の姿を目にする。

「どいてろ小娘!!? 私がいく!!!」

「エレノアっ…!!?」

「最早、奴以外に小童は倒せん!!!」

バサツ、と血塗れで黒焦げの翼を無理矢理羽搏かせ、エインシエンがルフィにもとに

一直線に飛ぶ。

見る見るうちに距離を詰めていくと、エインシエンの視界に、こちらに近づいてくる一つの影が映った。

「ルフィだ!!! 鳥馬ちゃん、ルフィが落ちてくる!!!」

「ピエ〜ッ!!!」

「お前達……!!! ダメだ!! 逃げろ!!!」

馬の姿に変わったピエールと、その背中に乗ったアイサが、ルフィを助けようと向かってきている。

ルフィに手を伸ばしていたエインシエンは顔色を変え、アイサたちに思いきり叫び、危険を知らせる。だが、それはあまりに遅すぎた。

「畜生オ〜ッ!!! 勝負しろオ〜ッ!!!」

「〃麦わら〃!!!」

「ルフィ、今助ける!!!」

「忌々しい!!? 全て無駄な事……!!!」

「エレノア!!! アイサ!!! ピエール!!! 危ない!!! 避けて!!!」

「エネルギー!!!」

ルフィの悔しげな声、ナミの悲痛な声、そして、エネルギーの悪意に満ちた声。

あらゆる音をかき消すように、エネルギーの放った雷が、天空から青年達の頭上に降り注いだ。

「//神の裁き!!!」

その閃光の中で、無数の羽根を散らせて堕ちていく天使の姿が、ナミの視界に映った。

遺跡の中、ゾロたちが倒れていた場所からそう遠くない位置にて、ガラガラと瓦礫が崩れる音がする。

崩落したその中で、アイサがピエールに縋りついてしゃくりあげる声を上げていた。

「……………鳥馬ちゃん……………!!? ごめんね、あたいをかばって…!!!」

「ピエール……………」

弱々しい声で哭くピエールが、すぐ近くの瓦礫の上を見やる。

放射状に陥没したその中心では、より一層の火傷を負ったエインシエンが横たわり、沈黙している。

アイサ達の分の雷撃も受け止めた彼女は、死人とほぼ等しい状態だった。

「真祖様まで……………!!! どうすりゃいいんだい……………!!!?」

「アイサ……………!!! アイサ……………!!!」

「え……………ルフィ?」

もう、あの男を倒すことはできないのか、と嘆くアイサの耳に、唯一の対抗策を持った青年の声が届く。

まさか、と期待を込めて振り向いた彼女の目に映ったのは、何故か頭から遺跡に突っ込み、もがいているルフィの姿だった。

「助けてくれーっ!!!」

「どんな落ち方したんだよ——っ!!!」

奇跡的な、滑稽な姿になっているルフィに、アイサが怒鳴りながらも手を貸す。

どうにか頭を引き抜いたルフィは、力尽くで頭上に黄金の球体を持ち上げる。これで行うのか、歩き回れることはできそうだな。

「くっそ〜!!! 取れねエなこの金玉!!!」

「金玉ゆうな!!!」

女子に対して、思慮の欠片もないルフィの物言いにまた怒鳴るアイサ。

ルフィはそれに答える事はなく、倒れたエインシエンを見やっつてから、天空を怒りの形相で睨みつける。

「エレノアはもう動けそうにねエな……とにかくさつききのロビンのいたツルの所に戻ろう!!!? エネルの勝手にはさせねエ!!!」

「わかった」

「これくらいでおれを止められると思うなよ!!! 舟を追うぞ!!? 行き先はわかってんだ!!!」

ふんっ、と鼻息荒く吠えたと、ルフィは遺跡の上を乗り越えて、船の見える方へと駆け出していく。

アイサはそれを呆然と見ながら、慌ててエインシエンの襟を掴み、あとを追いかけていった。

??

ゴロゴロと唸りを上げる雷雲、その真下の、巨大豆蔓の根元の近く。

負傷した仲間達を運び終えたロビンが、空に浮かぶ黄金の船の姿を目に捉え、悔し気に顔を歪めていた。

（やっぱり舟は…大鐘楼へ…!!? 航海士さんや彼らはどうしたかしら…まさかあの舟に乗ってるという事は…）

「ロビ〜ン!!!」

いまだ何の音沙汰もない青年達の事を案じていた彼女は、不意に聞こえてきた声に我に返る。

振り向くと、ロビンの方に突然、三つの人影と鳥影が飛来してくる光景が目映る。

「うわ——っ!!!」

「え!?」

「そいつら頼む!!」

咄嗟に能力を使い、腕を網のように張って受け止める。

どさどさと飛んできた者達、アイサとピエール、意識を失ったままのエインシエンが地面におりると、ルファイが巨大豆蔓の幹にしがみついて告げた。

「ギャアアア手が生えた~~~~」

「船長さん、その腕の黄金はなあに？」

「ロビン!!」? この蔓のてっぺんに「黄金の鐘」があるんだな!!」

異様な光景に泣き叫ぶアイサや、ロビンの不思議そうな質問には答えず、ルファイは幹を登ったまま問う。

その圧に、ロビンは思わず圧倒されてしまい、黙り込む。ルファイはそれに焦れたように、さらに確認を重ねた。

「エネルはその鐘を狙ってるんだな!!」

「それは……「鐘楼」があるとすれば……そこしかないわ。……だけでも……」

「よし!!」

ロビンがうなずくや否や、ルファイはさっさと豆蔓を登って上へ行ってしまう。

片腕に想い枷をつけているというのに、彼はあつという間に蔓を登り、姿が見えなく

なってしまう。

唾然としていたロビンは、少しして同じく立ち尽くしていたアイサの前にしゃがみ込んだ。

「ねえあなた…航海士さんはどこ？ オレンジの髪の毛のこ…」

「え？ ナミ？ ナミならあの舟に………あれ!!? 空から…“声”が1つしか聞こえない」

アイサはエネルギーの船の方に目をやるが、彼女の心綱ではその気配を感じ取れない。

しかしそのかわりに、彼女達の耳に届いた声があった。

「いた!!?」

アイサとロビンが振り向くと、そこにはウェイバーに乗って向かってくる波の姿があった。

そしてその近くには、島雲の上に横たわるサンジと、真つ逆さまに突き刺さっているウソツプの姿も見つかった。

「うお!!? ロビン!!?」

「アイサ!!? よかった!!? 無事なのね!!?」

「航海士さんっ!!? 長鼻くん、コックさん」

「ナミ!!?」

「アイサ!!? ルフィはどこ!!? 一緒じゃないの!!?」

ナミが無事だったことで安堵したのか、感極まって抱きついてくるアイサを受け止め、ナミがすぐに問いかける。

その横で、誰かのように顔を引っこ抜いたウソップは、ロビンの近くで寝かされている見知った者達の姿に目を剥いた。

「エレノア!!? ソロ!!? チョップー!!? 変なおっさん!!? ヒゲのおっさん!!
…げっ!!? ゲリラ!!!」

誰も彼もが、身体に火傷を負って深い眠りに落ちている仲間達の姿に言葉を失くす。

特に、他の者よりも遥かに重傷を負っているエインシエンの状態を見て、戦慄でぐくりと息を呑んだ。

「ヒドイわ……体が一部炭化してる……!!! もう虫の息だわ……!!!」

「チキシヨーム、みんなやられちまって……!!? おれ様さえいたなら……」

大口をたたくウソップだが、誰もそこにツツコミを入れる者がいない。

構っていられる状況じゃないから、というのもあったが、他の誰が行っても同じだっただろうという考えもあったようだ。

一人を除いて再集結を果たした彼らに、アイサがその一人の行方を伝える。

「ルフィなら今、ナミを助けに蔓を登ってったよ!!? エネルの所に行ったんだよ」

「ええっ!?? しまった、すれ違い!!?」

「たつた今よ、止めようとしたんだけど…」

「間の悪い奴め…!!? もう時間がねえんだぞ!!? すぐに脱出しねえと!!?」

“神”の恐るべき野望を知った今、滅びゆく場所に居続ける理由はない。

黄金だの財宝だのに拘っている暇はない。巻き込まれないうちに、この災害から離れなければと、ウソツプは叫ぶ。

ナミは少し悩む素振りを見せてから、ウソツプにコクリと頷いた。

「…いいわ、私がすぐウェイバーで追いかける!!? みんなは何とか先にメリー号へ!!?」

この面子の中で動けるのは自分だけ、と危険な場所に近づく覚悟を決めるナミ。

そして、さっそく出発しようとウェイバーのアクセルを握った時。

“神”を名乗る悪魔が、天空の船の上で手を広げ、不気味な笑みを浮かべた。

「さア… “宴”を始めようじゃあないか。万雷^{ママラガン}“!!!”」

直後、空島全体を覆う黒雲から、無数の雷が雨のように降り注ぐ。

放たれたそれらは、空島どころか白海や白々海の全域にある島に降り注ぎ、破壊をもたらしていく。

まさにそれは、神の手によるこの世の終焉のような光景だった。

深い、深い闇の中。

泥の様に手足に絡みついてくるその中で、朧げな意識をどうにか保つエインシエンの脳裏に、あるやり取りが再生されていた。

——なぜあなたは、私の部下としてついてきてくれるんだ？

それを問うたのは、かつての友。

人のために、命のために、危険な海に航海に乗り出し、そして大きな功績を重ね。

しかし最後には無残な最期を遂げた、もつとも大切に思っていた存在だった。

——なんだ、藪から棒に。

——不思議に思ってたな。

あなたは私よりもはるかに……それもそこらの怪物よりも強いのに、私などの部下で満足なのかと思ってたな。

——何を今さらな事を……。

はっ、と鼻で笑い、エインシエンは答えた。

ぽかんと呆ける彼に苦笑を向けながら、彼女は続けて言った。

——強さの優劣などどうでもいいのだ。

私は私の力を捧げるにふさわしい「王」としてお前やあいつを見出しただけ

の事……一族の悲願を果たすためにな。

この力を正しく使ってくれる者……その条件に合っていたからだ。

そう言ってから、また彼女は笑う。

口にして初めて気づく。自分の告げたこの理由が、只の上っ面だけの言葉になっ
てい
ることに。

自分の本当の想いは、また別のところにあるのだと。

——……いや、それだけではないかもな。

単に気の合う友達に、手を貸してやりたかっただけ。

深い意味などないよ。

その答えに呆け、しかしやがて満面の笑みを返す友に、エインシエンもまた笑みを返す。

本心を口にし、解放感に浸っていた彼女は、青空に遠い目を向けた。

——いずれ来たる約束の日……その日までにきつと、私はこの「記憶」を繋いでみ
せる。

かの人との約束を果たしてみせる……!!!

それが私の、願いだ。

そんなやり取りを思い出し、闇の中にいるエインシエンはふつと微笑む。

そして彼女の脳裏には、もう一人の友との出会いの事も蘇っていくのだった。

第16章 神の住む島へ下

第146話 “遙か昔の出逢い”

——それは、遙か昔のお話。

まだ彼女が、その呼び名をつけられる前の頃——。

「嵐に次ぐ嵐……!!? 大渦に……雪……!!! ……まだ島は見あたり……ません……」

穏やかな海を、一隻の船が進む。

帆はボロボロ、船体は傷だらけ、風を辛うじて受け止め、浮いているその船の上で、船員の一人が息も絶え絶えになっていた。

「ホ……報告します……!!? 提督……我が船の食料はついに底をつき……これより我々は

……遭難致します……」

「コックが倒れた!!?」

「くそオ……ついに食料が……」

空腹のあまり、限界を迎えてしまったコックを囲み、他の船員達が嘆きを口に作る。かくいいう彼らも胃袋はすつかからかで、今にも倒れそうな状態である。

その時、船のすぐそばの海面でドボンツ、と激しい水飛沫の音が響いた。

「て!!? 提督!!?」

「何だ何だ」

「提督が海に…!!! 落ちた」

何事か、と集まってくる仲間達に、その光景を目撃してしまった一人が信じられないとばかりに目を見開いて返す。途端に、船上は騒然となり始めた。

「ここは『偉大なる航路』だぞ!!?」

「身投げなのか!!? おれ達を見捨ててて!!?」

「提督—!!? 提督—!!?」

危険な生物がうようよいる、気を抜けば急激な気象の変更に襲われる。

そんなとんでもない場所に飛び込むなど、自殺行為以外にあり得ない、と船員たちが頭を抱えて狼狽える。

すると今度は、反対側の海からも水飛沫があがった。

「うわあああ副官まで落ちた——!!!」

「そんなバカな!!! あの副官が!!?」

二度続いた、それもこの船において重要な位置にある者達の飛び込み。

異常事態に、だれもが冷静ではいられない。

「…空腹に耐えられず死を選んだのでは……!!?」

「バカいえ!!? あのと人は2度もこの海から帰還している偉人だぞ!!? 精神力ならおれ達より遙かに強い筈」

「じゃあ何だ、この几帳面にたたんだ服とクツ!!?」

足を指差し、ちよん、と丁寧にたたまれた衣類を指す船員の一人。まるで、身投げする準備のようなそれに、いよいよ正気ではいらなくなる。

だがその時、海面にとある奇妙な物が浮かび上がってきた。

「え!!? くり」

「くり?」

それに気づいた誰かが声を上げると、それにつられた他の者も訝しげな視線を向ける。すると、反対側からも慄きの声上がり始めた。

「おい、こつちにはネコだ」

「いや、ライオンだ!!!」

ぎぱつ、と船の両側から顔を出した栗と獅子の耳。

それらは見覚えのある、今先ほど身投げしたと思われるいた男女の特徴的な体の一部である。

二人は船をよじ登り、平然とした様子で甲板に這い上がる。思わず船員たちは、目を丸くしてそれを迎えた。

「提督っ!!? 副官っ!!? お……おかえりなさい」

「あア、いま戻った」

「なかなかすばしっこいもんだ…ホラ」

そう言つて二人は、片手に握つた太いロープを船員に手渡す。

不思議そうに、ずっしりと思ひそれを引つ張つてみたところ、ざばあつ!と巨大な海生生物が顔を出し、船員たちに驚愕をもたらした。

「うおおおおおおつ!!!」

「んな!!! 何ですかコリヤ!!! て…提督!!!」

「まさかコイツら海中で仕留めたので!!!」

「メシにしてくれ」

「ハラがへった」

それは、船にも負けない巨体を誇る魚類であつた。海中ならまず間違ひなく餌になるしかない、獯猛で危険な生物が二体である。

しかしそれを為した男は全く驕ることなく、気だるげに船室に向かつていく。

「なまけているとやはり………勘がにぶるな………」

呟く男の隣で、ぶるぶるぶるつ!と全身を震わせる、純白の獅子の耳と鬣、尾を持つ、翼を生やした真つ白な女。

青紫色の目を輝かせ、アイザック・エインシエンは大きな欠伸をこぼした。

「大時化です!!! 提督くっつ!!! 副官くっつ!!!」

「見えている…さっさと倉庫から予備のをとって来い!!? 6番の箱の中だ!!?」

「はっ…はいイ!!!」

グラグラと揺れる船内を、船員がバタバタと駆け回る。

エインシエンはそれに呆れた目を向け、落ち着けと言わんばかりの怒号を放って、素早く指示を放った。

「……もうこの航海は2年以上続いている…過去2度の一ヶ月の航海にくらべたら…まるで奇跡だな……………」

「にははは…!!? 奇跡なものか……………単にお前がこの海に慣れてきただけの事よ!!!」

「そんなものか?」

「そうだと!!?」

とんでもない嵐の中を揺さぶられながらも、むしろ楽し気に航海日誌をつける男——
—モンブラン・ノーランドに、エインシエンはからからと笑う。

その時、二人の表情が変わり、ノーランドが思わず天使の方に振り向いた。

「ん? なアエインシエン——今何か聞こえたか?」

「…ああ、聞こえた」

「え？ 何の話を…？」

何か、通じ合ったふうに見せる上官二人に、会話が聞こえた船員が訝し気に問いかける。

「いや…何か美しい鐘の音のような…」

「提督…!!!」

なんとも言い表しにくい、しかし確かに耳に残っている音について説明しようとした時、甲板から大きな叫び声が響いてくる。

すぐさま船室を飛び出したノーランドが目にしたのは、目を疑う光景だった。

「大波だア…!!!」

ゴゴゴゴゴ…!と轟音を響かせ、まるで巨大な壁のように迫り来る大波に、船員たちは完全にパニックに陥る。

直撃すればひとたまりもない、逃げ場のない天災を前に、だれもが絶望を抱いていた。

「よけろ!!! 飲み込まれるぞ!!!」

「よけるってどうやって?!!」

「舵切れ舵…!!!」

意味がないとわかっていながら、それでも泣き喚き駆けまわる船員達。

だが、この二人だけが平然と、その場に佇んでいた。

「こりやデカいな……………任せていいか、エインシエン」

「ああ、承知した」

ノーランドの気の抜けた命に、エインシエンもなんとということはないというように答え、前に出る。

すたすたと船の舳先近くに進み出た天使は、ゴキゴキと拳を鳴らし、大波に向かって構えた。

「我が『王』の霸道……………邪魔をする者は皆、まとめて粉碎する……!!!」

ミシミシッ……と足場が軋み、異様な威圧感が彼女から迸りだす。

漆のように黒く染まつていく拳を構えたエインシエンは、獣のような獰猛な笑みを見せつける、そして。

「『突進む方舟』!!!」

裂帛の気合いとともに、大波に向かって拳が振り抜かれる。その直後、とんでもない暴風が放たれ、大波の中心に激突する。

直後、ぐぐつ……と大波が歪んだかと思うと、次の瞬間。

どつばああん!!と凄まじい轟音を上げて粉微塵に弾け飛んでしまった。

「『ええええええ……!!!』」

目の前で起こった、我が目を疑う光景に、ノーランドを除く全員が目と口を全開にして棒立ちになる。

そんな彼らに、エインシエンは腰に手を当てて、快活な笑みを見せた。

「道はできた。そら……さっさと行くぞ」

黒々とした雲が広がる嵐の先、天使が切り開いた海の道の先に、その島はあった。

船員たちは久しぶりの陸の感触に歓喜し、年甲斐もなくはしやぎまくっていた。

「……やア~~~~…さすがは船乗りの守り神 “天族” …!!」

砂浜に降り立ち、ぐいっと大きく伸びをする、ロープを頭からかぶったエインシエンに、船員の一人が興奮気味に話しかける。

先ほどの光景を目の当たりにした興奮が、尾を引いているようだ。

「あなたの言う方向に舵を取ったら本当に島が!!」

「うむ、嵐をしのげそうだ………ついでにちと、様子を見にいつてみようか……」

称賛をあつさり流したエインシエンは、彼に聞こえないような小さな声で呟く。

ノーランドははしやぐ部下たちを見やり、疑うような視線を向けた。

「お前達、本当に聞こえなかったのか………?」

「いいえ、鐘の音なんて誰も。なア」

「あア、空耳でしょう、お二人共!!?」

はしやいだまま返してくる部下たちに、ノーランドは不思議そうに首を傾げる。果たして、エインシエンも耳にしたあの音が聞き間違いなどと言う事があるのだろうか、と。そんな彼らの耳に、ある音が届いた。

「ジヨ〜」

それは、島を飛ぶ奇妙な姿の鳥が出した啼き声だった。

常にノーランド達の方を向き、間の抜けた音を出すその鳥の姿を目にし、船員たちは思わずぶつと嘖き出していた。

「ぶ……提督!!? お二人の聞いた音つてのは!」

「ぎやははははは……!!?」

「コラコラからかうな。こんな珍妙な鳥の声などと間違うものか」

「バカにしすぎだ、小童共」

ゲラゲラと笑い転げる部下たちに、バカにするなどノーランドは声を上げ、エインシエンは不機嫌そうに半目を向ける。だが、その笑い声は不意に途切れた。

カラアア……ン!

そんな、言葉では表現しがたい美しい鐘の音が、全員の耳に届いたからだ。

「驚いた……なんて美しい音色だ……」

直前までノーランド達を笑っていた者も、何も言えずその音色に酔いしれてしまう。ただ只管に心奪われる、そんな素晴らしい音だった。

「——人がいるようだな、やはり」

「詳しく聞きにいこうか」

「ああ」

「ちよ……ちよちよちよつと提督っ!!!」

我に返ったノーランドとエインシエンが、待ちきれないとばかりに歩き出し、部下たちが慌ててをその後を追う。

が、その足も次の瞬間止まる事となった。

「む? ……誰か倒れているぞ」

一行は砂浜に横たわる、腰布だけを巻いた一人の青年の姿を見つける。

青年は顔を上げると、悔し気に歯を食い縛り、ノーランド達を睨みつけた。

「……………しまった…侵入者……………!!!」

「ノーランド、この小僧、様子がおかしいぞ」

「おい、君……………!!?」

ノーランドとエインシエンが声をかけようとするが、青年はバツとその場から逃げ出

してしまふ。

「待て、お前っ!!!」

慌てて後を追いかけるノーランドだが、すぐに青年は捕まえられた。

さほど距離を稼ぐこともなく、青年はよろよろと力なく倒れ込んでしまったからだ。その体を診察した船医は、ある恐るべき事実を口にした。

「『樹熱』です。何の処置もされていない……………」

「うげっ!!? き…………『樹熱』!!?」

「や…や、やべ〜〜ぞこの島ア!!!」

「疫病じゃないか!!!」

船医の診断に、ノーランドを始めとする全員が戦慄の表情で後退る。

大の大人が情けなく見えるほどに、恐怖を抱かせる恐るべき疫病。それがこの島に蔓延っているのだと知らされ、誰もが怯える。

しかしそんな中で、エインシエンはじつと、島の奥に真剣な眼差しを送っていた。「あの鐘の音が…もし本当にそうだとしたら……………これはまずい事態になる…………!!!」

険しい表情になったエインシエンは、横たわる青年の肩を掴み、その顔を覗き込んで尋ねた。

「小僧、健康な連中は全員どこにいった、しっかり答えろ!!! 何をしている!!!」

有無を言わさぬ、強い口調で問いかけるエインシエン。

青年はしばらく、彼女を憎々しげに睨みつけていたが、やがて固く閉ざしていた口を開き、語り始めた。

「娘を祭壇へ」

雨が降り続ける中、太鼓の音が辺りに響き渡る。

一人の美しい娘を、泉の中心に建てられた祭壇の上に置き、何十人もの戦士達が泉の周りを囲む。

「太陽の神……雨の神……森の神……大地の神よ……この娘の血と引きかえに……村をお救い下さい」

それは、島を襲う悪霊を祓うための儀式だった。

突如体に印が浮かび、高熱に襲われいずれば死に至るという、悪魔の呪い。それを祓うために、同じく呪いに襲われた神官が最期に神より下された答え。

それこそが、この生贄の儀式だった。

「来た、神がおいでに!!?」

「カシ神様だ……!!?」

するとやがて、泉の奥から長く太い、巨大な影が泳ぎ出てくる。

水面に顔を出したそれ——水色の皮膚が目立つ大蛇はゆつくりと鎌首をもたげ、祭壇の上に備えられた娘を見下ろし、ちろちろと舌を出す。

「カシ神様」「なんて神々しいお姿だ」「カシ神様……………」

それは、異様な光景だった。しかし、彼らは真剣だった。

ただの怪物に襲われる娘の姿なのに、それこそが村を救う唯一の手段だと信じ、必死に祈りを捧げ続ける。

未開の地にはありがちな、根拠も何もないまさに神頼みの儀式だ。

「どうか母を…………」「どうか息子を」「父をお助けください」

そしてついに、カシ神と呼ばれた大蛇が、娘に向かって大きく口を開く。

娘の命が儚く、無残に、無意味に散らされようとしたその時。

カシ神の首が突如、真つ二つに両断された。

「カシ神様!!!」

「キャ——!!!」

「何て事を!!!」

自分達をすくう神に起きた惨劇に、村人達は混乱に陥る。

何が起こったのか、と慌てふためいていた彼らは、祭壇の上で刃を手にした男の姿に
気付き、すぐさま怒りをあらわにした。

「神殺しだア!!!」

「あいつは誰だ!!? 殺せ!!!」

「おれ達は呪われる——っ!!!」

大罪を犯した者の存在を認めるとともに、激しい憎悪の声を上げ始める村人と戦士達。

あつという間に、辺りは悲鳴と怒号が轟く地獄へと変貌した。

「娘を殺せ!!!」「侵入者もだ!!!」「すぐに血を捧げる!!!」「祭壇で血を流せーっ!!!」

鬼のような形相で、罵倒の声を上げ続ける彼らを、血の滴る剣を手にした男、ノーランドは険しい表情で睨み返す。

それを呆然と見上げる生贄の娘に、ノーランドはそつと語り掛ける。

「儀式は終わりで。恐かったろうな…」

そう言って、ノーランドは娘の手首の戒めを切り裂き、抱きかかえる。

雨で冷えた体に触れた、男の本心から案じる言葉に、娘はやがて目を潤ませ、わつと声を上げて泣き始める。

「もう大丈夫!!! 死ぬ必要などない!!!」

縋りついてくる彼女を抱き寄せ、ノーランドは雄々しく村びたたちの前に立ちはだかる。

堪えようのない怒りが、彼を突き動かしていた。

「カルガラ——っ!!!」

「そいつを殺してくれー!!?」

「神の怒りをお鎮め下さい!!! 大戦士カルガラ様——っ!!!」

一方で、恐るべき大罪を犯したよそ者に対して、戦士達の方もついに動き始める。

泉を泳ぎ、祭壇へと渡った一人の男、多くの戦士達の中でも特にすさまじい覇気を放つ大戦士——カルガラが、槍を手にノーランドに襲い掛かったのだ。

「——私は『北の海』ルブニール王国から来た探検家……」

「貴様が何者だろうと関係ない!!! 排除するのみ!!!」

ノーランドの言葉になど一切耳を貸さず、カルガラは凄まじい速度で突っ込んでくる。

歯を食い縛ったノーランドは剣を掲げ、真正面から振るわれたカルガラの一撃を受け止め、睨み合った。

「……そうやって排除してきたのか……!!? 全て……!!! 微々たるも重要な……!!?」

「進歩」を!!!」

「貴様には何を言われる筋合いもない!!! この場で神々に償え!!!」

双方、己の中にある怒りに突き動かされ、各々の得物を手にぶつかり合う。

のちに伝わる二人の男の出逢いは、こうして最悪の形で果たされたのだった。

第147話 “神殺し”

「……なんかやったみてエだ。えらい騒ぎだぞ」

「提督……本当にあの人は……」

「神を殺したつてよ、どういう事だ……!?？」

「騒ぐな童共……」

「けど副官!!」

どよどよと、森の向こう側から聞こえてくる悲鳴や怒号を耳にし、不安に苛まれるノーランドの部下達。

エインシエンは平然としたまま、仕方がないとしてもいうように肩をすくめる。何かが起こっているのはわかりきっていたが、一切の狼狽を見せなかった。

「何れにせよ、私にしてみれば接触の必要があったのだ……必要とあらば、救う必要もな……」

フードの下でフツと笑みを浮かべたエインシエンは、不意に森の奥へと駆け出す。唾然となる部下達を置き、声が聞こえてくる方へと飛び込んだ。

カラン、と放り出された刃物が金属音を響かせる。

ノーランドと一進一退の激しい攻防を繰り返していたカルガラが、うずくまっていた生け贄の娘に投げつけたのだ。

「さア、そのナイフで命を断て。村を救う為の生贄が命を惜しみ涙を流すなど、恥を知れ!!!」

カルガラの厳しい声に、娘は大きく目を見開くも、やがて意を決するように目を閉じ、刃物を掴む。

そのまま自分の喉元に突き立てようとする姿に、ノーランドは血相を変えて駆け寄った。

「バカな事……やめないか!!!」

「……………あウ!!!」

バシツ、と娘を払いのけ、刃物を手放させると、娘は悔しげな声をあげて倒れこむ。

その隙をカルガラは見逃さない。背を向けたノーランドを貫こうと、笑みとともに槍を突き出した。

「まア……………そう荒ぶるな、戦士よ」

しかし鋭く突き出された刃は、突如現れた何者かに激しい火花を散らして受け止められる。

カルガラは目を見開き、黒く染まった足を上げて自身の突きを止めた、顔を隠した謎の女を睨みつける。

「何だ……? 貴様も邪魔をするのか……!!?」

「生憎、この男を殺されるわけにはいかなくてな」

威嚇するような低い声を発するカルガラだが、その背中には嫌な汗が噴き出して止まらなくなっていた。

姿形、声はただの人間の女なのに、漂う気配は只者ではないことを示している。得体の知れない覇気を前に、カルガラの本能が警鐘を鳴らしていた。

だが、彼もただ慄くばかりではなかった。

「て……提督——っ!!!」

「……………お前達」

「この島では数百年間、侵入者を許さんという戒律が堅く守られている。我々シャンドラの戦士を甘くみるな」

周りの森の奥から姿を見せた、部下達に刃を突きつける戦士達。

失態に顔をしかめるノーランドやエインシエンに、カルガラは依然険しい表情のまま続けて告げる。

「加えて『神殺し』の大罪!!! お前達2人死んだくらいでは贖えん!!! 貴様等100人

の命をもって償って貰うぞ!!!」

「……何かと言えば『命』『生け贄』『血』……それで神が喜ぶのか」

ノーランドはエインシエンに庇われる立ち位置のまま、カルガラに、戦士達に、村人達に鋭い目を返す。

「この儀式は我々に対する侮辱だ!!!」

「ノーランド……」

「過去の偉人達の功績を無下にする様なこの儀式を私は許さん!!! 人々の幸せを望み

……海へ乗り出した探検家や研究者達へのこれは、侮辱だ!!!」

島と島の交流が断たれる『偉大なる航路』においては仕方ないことかも知れない。知らないことが罪でないこともわかっている。

それでも彼の有する矜持が、間違った解決法を行い続けようとすする島の住人達に対し怒りを燃やす。知患者の一人として、この状況を許すわけにはいかなかった。

「人の命を望むとされるお前達の神にとつても!!? これは侮りではないのか!!!」

カルガラはただ、そう叫ぶノーランドを睨み続ける。侵入者の戯言と切り捨てているのか、その気迫が緩むことはない。

構うことなく、ノーランドは村人全員に聞こえるように再び吠えた。

「私に……時間をくれ。お前達の村の『悪霊』……!!? 私が祓ってみせる。それができ

なければお前達のやりたい様にやるがいい」

「何イ!!？」

「バカな事を!!！」

「貴様、神にでもなつたつもりか!!！」

大言を口にするノーランドに、村人達は総じて激しい怒りをあらわにする。

人にどうにもできないからこそ、神にすがろうとした結果がこの状況。その原因である男の妄言を受け入れることはできなかった。

「バカバカしい……お前は今、ここで死ぬんだ!!! 逃げ出すに決まっている!!!」

「ふざけたことを抜かしているのはどちらだ!!！」

カルガラもまた、不信のあまりノーランドとエインシエンに向かって強く吠える。

しかしそれ以上の強さで、エインシエンがカルガラに、そしてすべての戦士と村人たちに怒りの声を聞かせた。

「鐘楼を託せし子供達よ……神だ生け贄だと失う事ばかりを吠えたて、恥を晒し続け己が御魂を穢すつもりか!!？」 犠牲を強いる者が……自ずから救いの手を差し伸べぬ者が!!？」 神であつてたまるか!!！」

フードの下から覗く、凄まじい迫力を放つ眼差しに、カルガラは思わず息を呑む。

彼女の背後に立つノーランドでさえ、その氣迫に言葉を失くしていた。

「人が生きるこの世に神などいない——神とはすぎるものではない。己が生き様を違えぬ為の導だ。忘れるな……!!?」

ぶちぶちっ!と勢いよくフードが外され、脱ぎ捨てられたそれが宙を舞う。

その下から露わになった、翼を背中から生やした白い獅子——天族の全貌に、村人達全員が怒りを忘れて立ち尽くした。

「…真祖様……!!?」

「真祖様だ……!!!」

「生きて……まだ生き残っておられたのか……!!!」

「この姿……見覚えがないとは言わせぬぞ、誇り高きシャンディアの戦士達よ。約束はまだ……果たされておらんゆえにな」

どよめきが広がる中、エインシエンは鋭い視線を向けたまま語りかける。

全ての人間の敵意が一時的に消えたことを確かめると、エインシエンは背後に立つノーランドを手で示す。

「この男は優秀な学者だ………何より素晴らしき功績をいくつも残した、偉人と呼ぶにふさわしき男だ。私の期待を裏切ることはないよ」

絶対的な自信を目に宿し、部下達を人質に取る戦士達を説き伏せようとする。

しかしやはり、彼らから疑いの表情が消える事はない。小さくため息をついたエイン

シエンは、肩を竦めてから続けて口を開く。

「もし……この男が成し遂げられなかった時は、私を代わりの生け贄にするがいい。十分な代替品にはなるだろう」

「副官……!!?」

「何言ってますか副官!!!」

「村の者の命が懸かっているのだ………これぐらいのリスクを背負わねば話にならないだろう」

思わず、自身らに突き付けられる刃の事も忘れて声を上げる部下達に、エインシエンは苦笑を浮かべる。

再び村人達の方に向き直ると、エインシエンは彼らに向かって、深々と頭を下げて懇願を示した。

「後生だ」

その姿に、またどよめきが広がる。

侵入者であり、大罪人であるノーランド達のためにそこまでの事を行うなど信じられないと、村人の誰もが返す言葉を失くしていた。

「……何故その男にそこまで」

「なに………惚れ込んだ男に対する信頼だ」

「エインシエン……」

カルガラの問いに、一切臆することなく答えるエインシエンに、ノーランドも思わず唇を嚙む。

キツと表情を変えた彼は、自身を睨みつけるカルガラを見据え、胸を張って声を張り上げた。

「――逃げずに私がお前達の村を悲劇から救う事ができたら、こんな儀式を二度と行わないと私に誓え!!」

その啖呵に、再び村人や戦士達から険しい視線が送られるものの、最初の頃とは異なり怒号が返ってくることはない。

しばらくの間、雨音だけが大きく響き渡る緊迫した空気が流れるが、やがて村人の中の一人、最年長の酋長が口を開いた。

「――やってみろ……その間、この船員達は捕えておくぞ」

「酋長」

カルガラが口を挟むが、酋長はそれに答えない。

ホッと安堵した様子で笑みを浮かべるエインシエンを見つめた彼は、老体ながら強い視線でノーランドを見下ろし、告げた。

「心苦しいが……真祖様の命の期限は明日夕刻」

「望むところだ」

そうして、島の住民と船員達の命を懸けた、長い一日が始まった。

??

「おーい、着替え持ってきてくれよ、着替え」

「風邪ひいちまう……つたく」

「イツキシ!!」

村の中心にある大きな広場。

急遽作られた、丸太を組んで作られた檻の中で、ノーランドの部下達は頭を抱えて天を仰ぐ。

誰一人逃げないようにと言う処置だった。

「あ……何て事に……」

「明日の夕方、副官は殺されるんだア」

「バカ言え、提督とあの人を信じろ」

「信じるも何も、もしもこの森に“コナの木”がなかったら」

「それもあると信じろ……」

ノーランド達の部下達は皆、やれやれと言った様子で互いに顔を居合わせ、大きなため息をこぼす。

船長の実力や上官の信頼を疑いたくはないが、人の命を勝手に懸けられては、文句を言いたくなくても仕方がなかった。

「いつつも思うんだが、副官はどうも自分勝手すぎるぜ。危ねエ状況にも全く怯まず突撃していくし、ヤベエ奴が相手でも満面の笑顔で暴れるし…」

「それで無傷で帰ってくるんだから何にも言えねエけど、正直見ててハラハラすんだよなア…」

「こつちの心配も考えて欲しいもんだよ」

普段言いたくてもなかなか言えない不満を口にし、あちこちから苦笑がこぼれる。

そんな彼らに、離れた位置にある檻の中からぎろりと鋭い視線が突き刺さった。

「悪かったな、ワンマンすぎる副官で」

「うげっ!!? 聞かれてた!!」

「気にするな…あとで一人ずつ思いきりしばくだけだ」

「それ一番恐エヤツ!!」

低く、吐き捨てるような響きで放たれたその言葉に、部下達は思わず檻の端に後退る。

彼女が入っている檻の中には、エインシエンの他に生贄にされかけていた娘——

ムースの姿もある。エインシエンはため息をつくど、申し訳なさそうに眉尻を下げ、目を伏せた。

「まア……お前達には本当に悪いと思つてるよ。故郷に家族のいるお前達に傷を負わせたくはないから、ついな……」

「副官……」

数時間前の勇姿からは考えられないしおらしさに、部下達は思わず罪悪感に駆られた様子で黙り込む。

本気で気にしているのかもしれない、そう思いかけた時、部下の一人である船医がぼそりと言葉を漏らした。

「とか言いつつ、ただ単にあんたが暴れたいだけなのでは？」

「うん、まアその通りなんだが」

「[[[[「おい!!!」]]]]」

あつさり態度を変え、表情もころつと変えてみせたエインシエンに、部下達全員から鋭いツツコミの声が飛ぶ。

騙された、と嘆く彼らに、天使はけらけらと心底可笑しげに笑い声をあげていた。

「なアお嬢ちゃん、あんたも不憫だな。こんな戒律しぼりの村に生まれてよ」

「ウチの国に生まれてりや、貴族とでも結婚できようつて器量なのによ、なアー」

「よせ！ さつきまで殺されかけてた娘だぞ。もう少しおめエらは……」

しばらくして手持無沙汰になった部下達は、エインシエンと同じ檻の中にいるムース

に話しかける。

生贄に選ばれるだけあって、確かに見目麗しい容貌をしている。今の内に美女と話しておきたいというスケベ心が芽生えたようだ。

しかし当のムースは、不思議そうに部下達を見つめ、疑問を口にしました。

「あの方は……………」

「——あの人は、王国じゃあ名のある探検家でね、『植物学者』でもある……………」

ムースの問いに、部下の一人が思い出したように説明を始める。

考えてみれば、いきなり現れて命を救うと言い出した見知らぬ男に、怪しさや疑問を抱かない道理はないだろう。

部下達はどこか誇らしげに、自分達が船長と仰ぐ男について語った。

「世界中の……………未知の島々に踏み込んで新種の植物を発見しては研究してるんだ。探検家の中でも偉業を成し遂げた植物学者は多い。国の発展にも欠かせない重役だ」

話し始めると、部下達の表情に苦笑が浮かび始める。

何事か、と首を傾げるムースをよそに、部下達全員がくつくつと笑い声を漏らし始めていた。

「——ただお人好しがすぎて……」

「『こういうのはほっとけない人で……………』」

「信頼はしてるがね」

道中に起きた様々な騒動を思い出しているのか、部下達は皆呆れた様子を見せる。だが、誰一人としてノーランドを恨んでいる様子を見せない。

心労や疲労を帳消しにするほどの信頼が、彼らの間には感じられた。

「いざつて時にや…何とかしてくれる………」

「副官も妙な人に惚れ込んだもんだよ……」

「やかましい」

部下達全員に呆れた目で見られ。エインシエンは憎まれ口を返すも、彼女自身も笑みを消さない。

檻の中にありながら、そして一日経たぬうちに死が迫っているというのに、怯えを一見見せない天使は、森の奥を見やって鼻を鳴らした。

「種族としてどうしようもない性分なんだ……せめて笑って見逃してくれ」

そう言つて、エインシエンは後頭部で腕を組み、檻に凭れ掛かる。

ぼたつ、ぼたつと顔にかかってくる水滴に知らぬふりをしながら、やがてエインシエンは大きな寝息をたて始めるのだった。

第148話 悪霊祓い〃

「酋長…なぜあのままカルガラにやらせなかつたんです!!? この島に侵入した時点で、奴らはこの地の戒律を犯しているんですよ!!?」

部族の家屋、その中でも最も大きな、長が住む家にて叫び声が響く。

無言で腰を下ろす酋長に対し、戦士たちは口々に不安と不満を口にし、険しい視線を向ける。

「カシ神を殺したんだ、あの男は!!!」

「このままではきつと災害をよんでしまう!!!」

「真祖様も真祖様だ!!! 何故あの男にあそこまで命を懸けられる…!!!」

今なお苦しみ続ける、呪いに襲われている村人や戦士達。

その姿を考えるだけで、侵入者の戯れ言を信じて悠長に待つていられない。今にも飛び出し、彼らの首を掻き切ってしまったかかった。

「明日になれば答えが出る。村を救ってくれようというのだ…待つても損はあるまい…」

「悠長な事を…!!! 人間に何ができる!!! 村は悪霊に取り憑かれているんだ!!!」

「神と会話できた神官の遺言を無視して…おれ達が無事でいられると思うのですか!!?」
「カルガラ!!? あんたも何とか言ってくれ!!」

何故か、本気で侵入者たちの戯れ言を信じようとしている酋長に見切りをつけ、戦士達は自分達が最も尊敬する最強の男に視線を移す。

同じく、険しい表情で座り込んでいた彼は、やがて無言で立ち上がり出口に向かった。

「……少しでも村の危機を感じたら…おれはすぐにでもあの男の首を取りに行くハラだ。明日の夕刻を迎えなくてもな」

「……好きにせい…神官のジジイも死に…私には神の声を聞く力もない」

無力な自分を嘆いているのか、どこか覇気の薄い酋長の言葉に、カルガラはますます顔をしかめさせる。

そんな彼の背中に、酋長は語りかけた。

「……ただな…懸命な人の言葉くらい…私にも聞こえる。それだけだ」

カルガラはその言葉に応えることなく、さっさとその場を後にしてしまう。

しばらくの間、居心地の悪い奇妙な緊張感が漂うが、それを遮るように一人の男が立ち上がった。

「…おれも戻る」

「クロウリー…お前の考えはどうなんだ!!?」

「よせ!!」

我関せず、と言った様子でその場を去ろうとする彼に、仲間が声を荒げるが、別の仲間がそれを止める。

彼らに背を向けたまま、彼——クロウリーは、小さな声で呟いた。

「……………おれの妻が救えるなら……神であろうと余所者であろうと……………悪魔にだってすがつてみせる」

ぎろり、とクロウリーの鋭い目が、咎めるような目を向ける仲間達に向けられ、ハツと息を吞ませる。

カルガラに負けずとも劣らない威圧感に、誰もがびくりと肩を震わせる。

「真祖様に……………あの男に……本当にその力があるのならな」

途端に、声を荒げかけた仲間は気まずそうに目を逸らし、クロウリーはその間にさつさと酋長の家を後にしてしまう。

しんと静かになった屋内で、仲間達は深いため息をこぼし、目を伏せた。

「……………そうだった……あいつの妻も危険な状態だったな……………」

「元があまり強くない体だ……………不安は一層強いだろうよ」

遠くなつていく戦士の足音を聞きながら、仲間達は迂闊な自分の発言を悔やむように、重い表情になつていった。

村の中を少し歩き、クロウリーは自分の家に入る。中には一人の女性が横になり、青白い顔で荒い呼吸を繰り返している。

クロウリーは彼女の、自分の妻エルマの傍に腰を下ろし、熱い頬を優しく撫でた。

「……クロウリー」

「喋るな……寝ておけ」

夫の帰りに、思わず体を起こそうとするエルマだが、クロウリーはすぐにそれを止める。

仲間にも見せないクロウリーの微笑みを見つめた彼女は、夫の顔色がいつにもましてひどいことに気づき、悲し気に唇を噛み締める。

「ですが……随分やつれておいでです。ずっと私の看病を続けて……もし、あなたまで倒れられたら……村の守りが……」

「いいんだ……構うな」

エルマは自分の頬に触れるクロウリーの手を掴み、縋るように胸元に持つていく。

クロウリーはその手を握り返し、愛おしげに彼女の髪を撫でつけてやった。

「案ずるな……たとえ何を犠牲にしようとも、お前は必ず救ってみせる……」

「クロウリー……」

表情も声も優しいが、夫の目にはその言葉が本心であることを示す、危険な輝きが覗いて見えていた。

エルマはそれを止められない事を察し、悲しげに目を伏せる他になかったのだった。

その異変は、明くる日の朝に突如やってきた。

寝ぼけ眼で見張りをする戦士と、檻の中で眠りこけるノーランドの部下達。

そんな彼らを、いきなり大きな揺れが襲ったのだ。

「来た…やつぱり来た!!？」

「地震だ!!？」

グラグラと足元が不安定になり、バキバキとどこか遠くから大地が裂ける音が聞こえてくる。

家屋もいくつかが倒壊し、怪我人が何人も出てくる惨状の中、人々はみな一斉にパニツクに陥った。

「き…きた、神の怒りだー!!!」

「カシ神様の祟りだー!!!」

「じ…地震?!？」

「ギャ——」

「ちよつと!!? 出してくれここ!!?」

「騒ぐな!!? 大人しくしてろ!!!」

檻の中から出る事の叶わない部下達が、今この時だけでも出してもらおうと声を上げるも、戦士達はそれを端から拒否する。

この状況でただ一人平静を保っていたのは、エインシエンただ一人であった。

「提督は無事だろうか…」

「提督……!!?」

不安げに空を見上げ、この島のどこかにいるであろうノーランドの事を案じる部下達。

そのうち揺れも収まり、少しの余韻を残し、島は数分前までの静けさを取り戻している。そうしてようやく、人々も落ち着きを取り戻していった。

「カルガラが森へ向かった。神殺しの男さえ殺してくれれば、ひとまず神の怒りもおさまるだろう…」

「お前達がこの村に来なきやこんな事には…」

「さつきの地震の被害だけでも笑い事じゃ済まないんだぞ!!!」

「儀式を邪魔されなきや、今頃みんな………!!!」

「待ておい、早まるでない!!!」

落ち着いたら今度は、この厄災をもたらした余所者たちに対する怒りが込み上げてきたらしい。

武器を手にも、鬼のような形相で向かってくる戦士達に、別の檻の中からエインシエンが慌てて制止の声をかける。

「お前からそが悪霊だ!!! 今ここで殺してやる!!!」

「お!!! おい待て約束が違う!!!」

「やめ…やめてくれ」

「待て待て、よせ、危ねー!!!」

真祖と畏れ敬う女からの制止も聞かず、島の戦士達は槍を手に勢い良く突っ込んでくる。

だが、その殺戮は防がれた。

ノーランドの部下達の入る檻の前に、一人の青年がドカツと座り込んだからだ。

「小僧…」

「セト!!! そこをどけ!!! おれの妻は昨晚、こいつらのせいで…!!!」

「……おれの憧れるシャンドラの戦士達は、もっと誇り高いはずだ!!!」

青年・セトはそう言つて、槍の穂先を突き付ける戦士達に凄む。

「悪霊の呪い」に侵され、死にかけて彼は、ノーランド達によって一命を取り留めた。

それ故に、約束を果たせぬまま一方的に命を奪うことを良しとは思えなかったのだ。

そんな青年の勇氣に笑みを浮かべたエインシエンは、次いで虚空を見上げて顔をしかめた。

「……………ちと、遅いか」

時はさらに過ぎ、昨日儀式が行われたのと同じ頃に……………つまり、生贄を生かすタイムリミットを迎えてしまった。

再び振り始めた豪雨の中、最後の希望を背負ったノーランドの姿は、まだ見えていない。

「儀式の準備を……………!! 真祖様を…祭壇へ!!!」

酋長の言葉に応じ、エインシエンが檻の中で立ち上がる。

悔し気に唇を噛む戦士達に促されるまま、天使は苦笑を浮かべて祭壇の方へと向かう。

「申し訳ありません…申し訳……………!!!」

「お許し下さい……………お許し下さい……………!!!」

「気にするな、シャンドラの子らよ。これは私が言い出した事だ……………お前達が気に病む事ではない」

神のように崇める存在を、自分達の延命のために贄にすることが相当に悔しいのか、ギリギリと歯を食い縛る姿はひどく痛々しい。

しかし、それ以上に悔し気に顔を歪める、ノーランド達の姿があった。

「おい!!? なア、も…もうちよつと待ってくれよ!!!」

「提督は帰つて来るんだからよ!!?」

「あと…2時間!!? いや1時間!!?頼むよ!!?」

「おい小僧!!? 何とかしてくれよ!!? 止めてくれ!!?」

「副官を殺さないでくれ〜〜!!!」

これまで苦楽を共にしてきた、危険なことに巻き込みもしたが、窮地を救ってくれた大切な仲間が、無意味に殺されようとしている。

そんな暴挙を許せるはずもなく、探検隊の全員が涙を流して叫んでいた。

「ちよつと待て…!!?」

そんな中、泣き叫ぶ探検隊の中で、船医がひととき大きな声を上げる。

訝しげに振り向く戦士達に、彼は堂々と胸を張って吠えてみせた。

「生贄にするなら、おれもくわえろ!!! 多いに越したことはないだろう…!!?」

船医の宣言に、仲間達はおろか戦士達も目を見開く。

つまらぬ時間稼ぎかと思えば、檻の中から戦士達に向けられる視線は真剣そのもの

で、決して嘘や虚勢などではない事を示していた。

「何だと……!? 正気か!!!」

「せつかく真祖様に救われた命を無駄にする気か!!!」

「おれだつてバカな事言つてるとは思うさ……けどな……」

きつく歯を食い縛る彼の肩は、小刻みに震えている。勇ましい言葉を口にしても、隠しきれない恐怖がそれに表れている。

しかし、それを抑え込むほどの誠実な心が、彼に命を懸けさせていた。

「仲間を見捨てて生き延びて、どうやって胸がはれるんだよ!!!」

ノーランドやエインシエンとは比べ物にならない、只の非力な人間でしかないはずの船医。そんな彼が見せる気迫に、戦士達は思わずごくりと息を呑む。

するとその行為は、彼の仲間の気持ちにも影響を及ぼしたようだ。次々に、船医に付き従うように、探検隊の全員が立ち上がり始めたのだ。

「だ……だつたらおれも死んでやるよチクシヨウめ!!?」

「おれもだ!!!」

「おれも!!!」

続々と顔を上げ、檻の外に手を伸ばして連衡を促す探検隊の面々。

鬼気迫る彼らの姿に気圧され、戦士達はつい戸惑いの表情を浮かべ、傍らに立つ酋長

に視線を向ける。

「酋長……」

「……望むようにしてやれ。生け贄達を残らず祭壇へ」

呆れたような、しかし何処か感嘆した様子の酋長に従い、戦士達は他の侵入者たちも檻から出し、縄で縛って祭壇の方へと連れていく。

大人しく引きずられながら、探検隊の面々は口々に、ノーランドへの不満をぶちまけ始めた。

「提督のバカヤロ……!!!」

「本当に死んだら化けて出てやるからな……!!!」

涙を流し、恐怖で全身をがたがた振るわせ、それでも逃げる素振りを見せない部下達に、エインシエンは心底呆れた様子でため息をついた。

「……お前達は大バカ者だ」

「腰抜けとして生き続けるくらいなら!!? 最後までいいカツコつけてもいいでしょうが

!!!」

「提督……!!!」

吠えなきややつてられるか、最後の最後に見苦しく喚いてやる、と言わんばかりに思いのたけをぶちまける彼ら。

エインシエンはふつと微笑むと、森の奥に自身の耳を向け、そつと目を閉じた。
……答えを言え……。

おれは今……何を殺した……。

聞こえてくるのは、ノーランドと村の大戦士カルガラの会話の声。

そして感じ取れるのは、先日ノーランドが斬り殺した大蛇、それより一回り小さい大蛇の、薄れていく命の気配だ。

——ヘビだ。

——違う!!?

おれは今、戒律を破り“神”を殺したんだ……。

しかしお前は……それを“ヘビ”だという。

戦士や村人を殺す“呪い”を“治る病”だという……!!?

倒れ込んだ大蛇の上で、カルガラは激しい戸惑いを抱いていた。

自身が槍を突き立てた、神と崇める存在。そうしてしまったことをひどく恐れながら、同時にノーランドが口にする希望に、強い期待を抱いていた。

——本当にお前は……おれの大切な村を救ってくれるのか!!?

村は……!!!

救えるのか!!?!!!

——救える!!!

そこまで聞き届け、エインシエンは意識を引き戻す。

肩の荷が下りたような気分で、エインシエンは部下達と戦士達全員に聞こえるように、優しい声で語りかけた。

「案ずるな……もうじきに、帰って来るよ」

轟音を響かせて雨を降らせた雲は、やがて静かに遠くへ去っていった。

それはまるで、島に住まう部族と余所者の探検隊の中にあつた隔たりが消え去つていく、その様を示していたようにも見えた。

??

「チュラ、チュラララ」

とある日の朝。

木陰から姿を現した小さな水色の蛇に、探検隊の面々は絶叫をあげて逃げ惑つていった。

「へびだくくくくつ!!!」

「ママシだぞ!!!」

「噛まれるな!!! しっ!!? しっ!!? あっち行け!!!」

「こいつは………」

好奇心が旺盛なのか、人を全く恐れずに近付いてくる毒蛇の仔。

棒を振り回し、距離を保ち、必死に逃げる部下達をよそに、ノーランドは戸惑いの表情を浮かべ、小さな毒蛇を見下ろしていた。

「おいカルガラ…」

「驚いた…——となると孫もいたのか…あのへびの…」

ノーランドの隣で毒蛇の仔を見下ろしていたカルガラも、興味深げにつぶやく。

その口ぶりを聞いたノーランドは、やがてぶつと噴き出し、カルガラも一緒になって大笑いを始めていた。

「…はっはっはっはっはっは!!? ヘビか…!!?」

「くくつ、ワツハツハツハツハツハツハ!!?」

「…何だかわかんねエ、あの2人は…」

和気藹々と語り合い、笑いあう二人に、ノーランドの部下達も村の戦士達も皆、呆然とした様子でその背中を見送る。

立った数日、その間に起こった男達の変化に、ついて行けていないようだ。

「10日前は祭壇で殺し合いをしてたつてのに…!!?」

「今じゃあんなに仲良しだ」

「カルガラはずっと提督の看病してたしな」

「にはははははは!!」

変われば変わるものだ、と呆れた様子を見せる部下達に、エインシエンが二人にも負けない大ききさの声で笑う。

「それぞれゆずれぬ信念を持った者同士…通じ合うものがあつたんだろうさ。あれは私にもマネできん……にはははは」

いまいちわからない、と言つた様子で肩を竦める部下達をよそに、エインシエンは毒蛇の前にしやがみ込む。

すりすりとすり寄ってくる小さな頭を撫で、天使は自分も二人の輪に加わろうと、速足でその後を追いかけていった。

「それでこそ、私が『王』の候補に選んだだけあるよ」

第149話 “戒律を超えて”

「我々に見せたいものとは一体何だ、カルガラ」

カルガラ達とノーランド達の和解が成つてから、数日。

カルガラの案内のもと、密林を歩く探検隊の先頭で、ノーランドが訝し気に問いかける。

理由も聞かされぬまま、もうずいぶんと歩いてきていた。

「ついてくればわかる…おいお前達、そっちは崖だぞ。ここから下りるんだ…」

「下りるぞ？」

密林の中を下りるとはどういうことか、と肩眉を上げるノーランド。

その問いに答えるように、その入り口は姿を現した。

密林のど真ん中で口を開ける、蛇の顔を模した入り口。喉奥には階段が設けられ、深く穴の奥へと誘う。

ノーランド達は息を呑みながら、階段の奥へと足を踏み入れていく、すると。

一度耳にした、かの美しい鐘の音と共に、信じられない光景を目の当たりにした。

「言葉も出ないか……？」

「私も『記録』では知っているが………実物を見るのは初めてだ」
島の一部に開いた巨大な穴の中。

そこは、あらゆるものが黄金でできた都市だった。

神殿らしきピラミッド、高くそびえ立つ柱、そして都市の中心に座す巨大な黄金の鐘楼。眩い輝きを放つ黄金がそこかしこから顔を覗かせ、見る者の心を奪う。

ノーランド達も例外ではなく、誰もが言葉を失くして立ち尽くしていた。

「『黄金都市シヤンドラ』。おれ達はこの都市の生き残りだ」

「黄金郷………夢を見てる様だ……」

自分の目が信じられないと言った様子で、ノーランドが呟く。

その横を、彼の部下達が満面の笑顔で通り過ぎ、夢のような光景に飛び込んでいった。

「うっひゃー!!? 黄金だらけ!!? 財宝都市だくくく!!!」

「ヤッホ——!!?」

「こら!!? お前達っ!!?」

「見苦しいザマをさらすでないわ!」

「いいんだ。鐘楼以外の黄金や財宝なら、船に積めるだけ積んでゆけ!」

「え!!?」

「村の者達も承諾済みだ。お前達には礼をしてもし足りない恩がある。一族を鬼病から

救ってくれたのだ、これくらい……」

「ひゃ——!!? 太っ腹だぜ大戦士〜!!?」

満面の笑顔でそう答えるカルガラに、調子に乗った探検隊の面々ははしやぎながら、遺跡の中を駆け回る。

思わず頭を押さえるエインシエンの隣で、ノーランドが問いかけた。

「……しかし、お前達はずっとこの都市を守ってきたのでは……!!」

「そうだ……『都市』を守ってきた。財宝を守ってきたわけではない……!!! 正確に言えば、この石」

カルガラはそう言って、遺跡の中心に座している巨大な黄金の鐘楼のもとに誘う。

その根元に刻まれた、奇妙な文字の羅列に、ノーランドは訝し気に眉をひそめた。

「……? 何だこれは……文字か?」

「『歴史の本文』と呼ばれている。おれ達にも読めん。確かな事は、このシャンドラという都市がこの石を守る為に戦い滅びたという事」

「そして……それを託したのが我ら天族の先祖という事だ」

誇らしげに胸を張るカルガラと同じく、エインシエンも不敵な笑みを浮かべる。

三人の前に鎮座する黄金の鐘楼は、まるで何者にも決して穢されぬと示すように雄々しく、美しく存在している。

その堂々とした姿を見上げ、カルガラは続けて語る。

「それ程の『想い』をおれ達は守り続けなければならぬ。先祖が戦い生き証を守り抜く事は、子孫の務めだ。おれ達は先祖を神のように尊敬している」

勇ましい言葉と横顔に、エインシエンがフツと笑みを見せる。

見下ろしてきた大戦士に、エインシエンは挑発的な表情を向け、じつと力強い視線を向けた。

「これからも頼むぞ……勇敢なる、誇り高き戦士達よ。お前達ならきつと……いずれ来る『約束の日』まで戦い続けられる……!!?」

「ああ!!!」

何が彼らの間で通じ合っているのか、歴史を知らないノーランドには想像もつかない。

しかし、何かとても大事な縁が繋がっているのだということだけは察せられ、言葉を挟めずにいた。

「この鐘の音には……言葉がある」

圧倒されたままのノーランドに、カルガラは続けて語る。

死んで天に迎えられた先祖達の魂が、迷う事なくいつでもこの島に帰って来られる様に。

“おれ達はここにいる”と。古代都市の確かな栄華を誇示し、海の果てまで知らしめるのだと。

「——だから、都市を誇るこの鐘を“シャンドラの灯”と呼んでいる」

「……………道理で…堂々とした音が鳴る…」

「そう思うか!!？」

「ああ」

しばしその姿に見とれるノーランドとエインシエン。

その時、エインシエンの首に巻きつく小さな毒蛇の鳴き声に気付き、ノーランド達の視線が集まった。

「——お前も好きなのか……………？ この鐘の音が……………」

「チュララララ♪」

「…………お前もいつか…あんな大蛇になるのかな」

「ワハハハ、100年は先の話だろうな!!？」

祖父の、そして父親の巨大さを思い出しながら、果てしない未来を想像して笑い声がこぼれる。

カルガラは改めて、島の大恩人である二人に向き直った。

「——おい!!？」 気の済むまでここにいろよ、ノーランド。もつと旅の話聞かせてく

れ。シャンドラ滅亡から400年…お前達はこの島で始めての客なんだ!!? 精一杯もてなしたい」

「それはありがたい。森に入つて植物採集もしたいし、*“樹熱”*の処理も最後まで面倒見たいんだ」

カルガラの申し出に、ノーランドはうれしそうに目を輝かせる。

遺跡のあちこちでは、財宝をあさる探検隊の声はまだ聞こえていて、すぐには戻つて来そうにないとエインシエンを呆れさせる。

その時、はしやぐ彼らの姿を見やっていたエインシエンの顔色が、一瞬で変わった。「それに触るなア!!!」

どん!と爆音のような大声と、津波のように強烈な圧が放たれ、はしやいでいた探検隊に襲い掛かる。

本能的な畏怖で、彼らは一斉に硬直し、目を見開き驚愕をあらわにしながら、元凶たるエインシエンに振り向いた。

「な……………何すんですか副官!!!」

「あなたにそんな本気の殺気ぶつけられたら、おれ達ホントに死にますよ!!!」

「…その宝石から手を離せ…!!?」

恨みがまし気に吠える部下達に応えることなく、エインシエンは険しい表情のまま近

付いていく。

彼女が見つめている先にあったのは、部下の一人が手にしている大きな赤い宝石のような何かだった。

「カルガラ……あの赤い宝石は……？」

「ああ……昔奪った積み荷の中にあつたんだが………」

ノーランドの問いに、カルガラはなぜか苦虫を噛み潰したような表情で答える。

それを手にした時のことを思い出し、そしてその時の感触が蘇り、カルガラの顔に嫌悪感が大きく表れていた。

「触れた瞬間……恐ろしく嫌な気配を感じてな、たまらずどこかへ投げ飛ばしてしまったものなんだが………いつの間に紛れ込んでいたんだ………」

「……たしかに、不気味な気配を感じる……まるで無数の虫が蠢いているようだな」

離れた位置に立つノーランドにも、その宝石の放つ得体の知れない「何か」を感じ取れたのか、鳥肌を撫で擦る。

男達の訝しむ視線の先で、エインシエンは部下からその宝石を奪い取り、自分の掌の上に乗せた。

「……それがどうしたんだ、エインシエン」

「………見ておけ」

尋ねたノーランドにそう答えると、エインシエンはピンツと宝石を指で弾き、空中に放り上げる。

何を？と訝しむノーランド達の前で、宝石が落下を始める前に、エインシエンは自身の両拳を黒く染め、凄まじい気迫を伴って大きく振りかぶった。

「まつ、待て!!!」

「ロマン・グラディエール 剣奴の衝撃!!!」

止める声が響いた直後、エインシエンの拳が宝石を挟み、とてつもない威力の一撃が両側から叩きつけられる。

それが放った轟音と衝撃波は地面に深く亀裂を刻み、天空にまで及び、頭上にあつた雲をも両断してみせた。

「……………空が……………割れた……………!!!」

ビリビリと震える地面と森と身体、そして頭上に広がっている有り得ないような光景に、その場にいた全員が唾然とした様子で硬直していた。

「真祖様……………!!! 都市を傷つけないでくださいらんか!!!」

「い……………いきなり何を……………!!!」

じーんと未だ退かない鼓膜の震動に耳を押さえながら、ノーランドとカルガラが抗議の声を上げる。

そんな二人と部下達の咎める視線の先で、エインシエンは両拳を離し、無傷の宝石を彼らの目の前に落とした。

「ゲーツ!!? き…傷一つ…ついてない…!!?」

「ウソだろ…!!? 本気出せばマジで島を割るぐらいの副官の一撃が!!?」

「こいつはそういうものだ…この壊し方を私はまだ知らん…」

頭上の光景と、目の前に転がる宝石の有様。

異様な状況を目の当たりにし、目を見開いて立ち尽くすノーランド達の前で、エインシエンは険しい形相で吐き捨てるように告げる。

その表情はまるで、親の仇を見るような憎悪に満ち、近寄りがたい雰囲気や放つている。

「…これに宿る無数の気配、これは非常に良くないものだ。手を出せばその者自身が呪われよう…本物の悪魔が宿っている」

「それほどの代物か…!!」

真祖と畏れ敬う存在からもたらされた警告に、カルガラは思わずごくりと息を呑む。

しんと静まり返った遺跡の中心で、エインシエンはぎろりと鋭い視線をカルガラに、亡き都市の末裔達に向けた。

「カルガラよ、これは誰の手にも触れぬよう…そして誰の目にも触れぬよう、厳重に保管

しておくことだ。かの鬼病をも凌ぐ厄災が訪れようぞ」

「……………ああ…わかった…!!?」

有無を言わさぬ命に、そして己が目にした光景に、カルガラは冷や汗を流しながら頷く。

その間もエインシエンは宝石を睨み、ぐるる…と低い唸り声を漏らし続けていた。

島での日々は、さらに過ぎる。交流が始まり、約一週間が過ぎた頃のことだ。

焚火の前に夕食を共にしていたカルガラとノーランドは、間に腰を下ろしたエインシエンに不思議そうな視線を向けた。

「王?」

胡坐をかき、ぴくぴくと耳を震わせ、上機嫌に尻尾を揺らしていたエインシエンが口にした単語に、男達が声を合わせて聞き返す。

訝しむ視線を向けられた彼女は、フンツと自慢げに鼻を鳴らし、強く頷く。

「そう…王だ!!? 私の一族には、お前達シャンディアのように“文明”を託すほかに、“王”を見出すという宿願を抱えているのだ」

「私は以前にもその話を聞いたが……………その王とはどういう存在なんだ?」

「うむ、話せば長くなるのだが……………どこから話したものか」

ノーランドの質問に、エインシエンは顎に手を当てて深く考えだす。

杯に注がれた酒をぐびぐびと飲み干し、げふつと豪快なげつぷをこぼしてから、少しく赤くなつた顔で再び口を開いた。

「我ら天族がその長い生の中で出逢う、己の全てを捧げるにふさわしい存在……己の全てをかけて尽くし、導かねばならぬ唯一無二の存在だ。私がノーランドと共に船に乗っているのは、それを見出す為でもあるのだ」

「うゝむ……説明されてもよくわからんな」

「関係性はなんでもいい……夫婦でも、友人でも、義兄弟でも、主従でも……常に隣に仕え、覇道に付き添う存在であればいいのだ」

エインシエンにそう語られ、ノーランドもカルガラも首を傾げる。

王と言え、一国に一人が存在し、政治を担い民の繁栄を図る役職の事を想像するが、彼女が言うものはそれとは異なるように思う。

少なくとも、この危険な海でそんな人間が見つかるとは思えなかつた。

「なぜそんな相手を探す必要があるんだ？ この海に……命を懸けてでも」

「かつて……我等の『父』と交わした約束があるのだ。いずれ来る『約束の日』までに、立ち向かえる力をつけるようにと——」

「立ち向かう？ 誰にだ？」

興味がそそられたのか、ノーランドはやや食い気味に尋ねる。

長年同じ船で過ごし、苦楽を共にしてきた友人であり仲間である彼女の秘密が知れるのではないかと、と気分が乗っているようだ。

ぐびぐびと杯を飲み干したエインシエンは、やがて小さく笑みを浮かべた。

「そうだな……お前達にも聞いておいてもらおう。そのうち話すつもりだったしな——
——遙か昔の話だ……」

そうして、彼女は語り始めた。

自身の一族の起源、数百年にも渡る宿命を如何にして背負うことになったのかを。

そして、その宿命を受け入れる理由となった、ある男の話を——。

……長い、長い話を語り終え、エインシエンはふうと一息つく。

ノーランドとカルガラは目を見開き、目の前にいる天使が背負う宿命に、そしてその意志の強さに言葉を失くす。

しばらく黙り込んでいた二人だったが、その内笑い声がこぼれだした。

「……………なるほど、それは確かに重要な『使命』だ……!!!」

「それが……先祖がおれ達に遺志を託した理由か……!!!」

心底可笑しそうに、くつくつと声を漏らすノーランドとカルガラは、しばらくの間腹

を抱えて肩を揺らす。

男達は互いに肩を叩くと、満天の星空を見上げて思わずため息をこぼした。

「それはいつになるのだろうか……途方もなく気の長い話だ」

「きつとおれ達は、その瞬間を見る事はないだろうな……その力を持った始祖様方にかできん事だ」

巷では伝説とも謂われる、そして島では神の使いとしてあがめられる存在からもたらされた真実に、男達は笑いを止められなくなっていた。

楽しそうに杯を交わし合う二人を見やったエインシエンは、小さく笑みを浮かべると、自身の腹に触れる。

「今度こそ……今度こそうまくいく。きつと……いや必ず……!!」

自身に再度確かめるように呟き、腹を優しく撫でるエインシエン。

その表情は、ノーランド達にも見せたことがないほど慈愛に富み、同時に悲しみを帯びているように儂く見えた。

——そしていつか……私自身がその意志を託す側に回るのだ……。

ここに宿る新たな命に……使命を。

男達は、エインシエンのその様子に気付いていないのか、左右でゲラゲラとまた笑い声をあげている。

天使は呆れたため息をこぼしつつ、その騒がしさに安堵の息をこぼすのだった。
——許せよ、まだ見ぬ我が娘達よ…。

大事な大事な… “約束” なんだ… …… !!!

第150話 “またいつの日か”

その日は、突然やってきた。

島中の植物の調査を続け、島の外の野菜を紹介したりと、島の人々との交流も続いたある日。

いつものように、カルガラに会おうとした時の事だった。

「やあ、みんな。カルガラはいるか？」

朗らかな笑顔と共に、親友の姿を探すノーランド。

しかしそれに対して返ってきたのは、島の人々の嫌悪と憎悪に満ちた視線だった。

「……おい、どうした。みんな急によそよそしくなって……」

「——元々……他所者だろ、あんた達……」

険しい表情で目を逸らす彼らに、ノーランドも探検隊の面々も困惑する。

呆然と立ち尽くすノーランド達に向かって、同じく鋭い目をしたセトが告げる。

「カルガラはもう……あんた達に会いたくないって」

「セト!!!」

「……………いつになったら帰るの? ……あんた達」

辛辣な一言を発したセトに、他の村人が咎める声を上げる。

あからさまに険悪な空気を残し、去っていく村人達を見送り、ノーランド達は返す言葉を見失っていた。

「……………!!? 何だか…急に嫌われちゃったみたいですね」

「……………な…長居しすぎたかな」

「おいおい待てよおめエら、昨日まであんなに気イよくしといて急にそんな」

「やめろ」

あまりにも急な態度の変化に、一言返そうとした部下を制し、ノーランドは踵を返す。ここ最近、顔を合わせていないカルガラと話しておきたかったが、もはやそういう気分ではなかった。

「作業を続けよう。…まだ回ってない森がある……………」

何が起こっているか分からずとも、今行っている調査を放置するわけにはいかない。

それは自分の植物学者としての義務であり、それ以上に、一人の友人としての責務であつた。

「……………やはり私は、どうしようもない愚か者だ」

胸の痛みを堪えて、調査に戻っていくノーランドの、どこか小さく見える背中。

それを見送り、ただ一人エインシエンが、痛々しく顔を歪めていた。

それから、村人達との交流は途絶えてしまった。

一度、ノーランドがせめて最後にとカルガラの元を訪ねたが、返答に矢を射かけられ、冷たい言葉を浴びせかけられるだけだったという。

「今日は鐘が…鳴らなかつたな…」

「ああ…初めてじゃないか？ 提督は？」

「岩場の方に」

「副官…あんた何か知ってるんじゃないのか？ この島のことには詳しいんだろう？」

探検隊の面々も、余りの状況の変化についていけず戸惑うばかり。

その中で船医が、離れた所で膝を抱え、座り込んでいるエインシエンに問いかけに向かう。

それに対しエインシエンは、ウソをついた。

「……いや…わからない…私が持っているのはあくまで『歴史』だけだ……『文化』については知らん」

「そ、そうか…」

どこか投げやりな、突き放すような響きを持った答えに、船医はそれ以上追及できず、引き下がる。

去っていく男の気配を感じ、エインシエンはぎゅつと、唇を噛み締めていた。

暗く静かな密林を、エインシエンは一人寂しく歩く。

木々の合間から覗く星々を見上げ、自身の心を表すような重いため息をつき、ぼんやりと立ち呆ける。

「夜分に失礼する…」

「！」

そんな時、密林の間から届いた男の声にハッと我に返る。

勢い良く振り向き、目を凝らした先にいたのは、端正な顔を義憤で歪めた村人の一人。

「クロウリーか……」

「真祖様……少し……いいか？」

鬼病に侵された妻を救われ、一際強くノーランド達に感謝を抱いていた彼。

彼もまた、他の村人と同じく嫌悪を帯びた目を向けていたが、同時に何故、という疑問の視線も向けている。

エインシエンはクロウリーの目をじっと見つめると、観念したように肩を落とした。

「〃身縫木〃の事だな…」

「やはり…知っておられたか」

ため息交じりに応えたエインシエンに、クロウリーはフツと視線をある方角に向ける。

その先には、島の民が黄金都市と同じくらいに大事にしていた、特別な場所がある。「この島で死んだ過去数百年の先祖達の魂が、鐘の音に導かれてその身を宿す、白色の木々……」

黄金の鐘が死者の魂を導く灯なら、身縊木は帰ってくるための器。どちらも欠かすことはできない、先祖を神のように崇める彼らにとつての宝。

しかし今はその場所には、無数の切り株しか残されてはいなかった。

「それを、私達が切り倒した」

「戦士達は怒ってすぐに武器を手にしたのだが——おれは妻を……みんなあんた方にたくさん命を救われているから」

「……………そうだな、怒るのも無理はない」

反論もなく、肅々と怒りを受け入れている様子のエインシエンに、クロウリーはきつく歯を食い縛る。

知っていて、なぜ止めなかったのか。それを聞かぬうちは、この地を去られては困ると、クロウリーは激しい怒りを抱いていた。

「いくら樹木の研究の為とはいえ……真祖様が黙認した事とはいえ……もう村の人達の怒り

は収まらん……だからせめて、出航の前に理由だけでもと……」

しかしクロウリーも、ノーランド達と過ごすうち、彼らが決して浅慮な考えの持ち主ではない事を理解している。それ故に、今のような状況を招いたことが、信じられないようだった。

「……樹熱というのはな、感染すれば致死率は90%を越える鬼病でな……ノーランドの故郷では10万人も死んだ。近年の研究で、致死率は3%にも満たなくなつたがな」

じつと視線を外すことのないクロウリーに、エインシエンはやがて重い口を開き、答えを返す。

できれば、自分一人が罪を背負い、封印しておきたかつた真実を。

「……………だが樹熱の本当に恐ろしい所は、植物にも感染するという点だ。これによつて変異した病原体は、さらに感染率を上げて他の生物に襲いかかる。人から森へ、森から人へ……そうやって島そのものを滅ぼした例を……私はこの目で見てきた」

ゾクリ、とクロウリーの背筋に震えが走る。

終わったことだと思われていた鬼病の脅威、それがまだ終わっていないのだから、という事実。

そして、彼女が言わんとしている真実を、察したがために。

「『身繕木』の林は……すでにこれに感染されていた」

クロウリーは目を見開き、絶句する。

うつすらと予想していた、しかし目の前で口にされた衝撃的な真実を突き付けられ、戦士は呆然と立ち尽くす。

エインシエンはそんな彼の反応をよそに、淡々と続きを口にした。

「見つけた時にはすでに手遅れで、手の施しようがなかった………放置しておけば、前回以上の『呪い』がお前達を襲っていただろう。だから切ったんだ」

「何だと………」

「だからノーランドはお前達に吠えた。人が1000人死ぬ事態でさえ、樹熱」にとつては序の口なのだ」

エインシエンはクロウリーに背を向け、その顔を見せようとしない。

クロウリーが冷静であれば、彼女の握りしめられた拳がぶるぶると震え、血が滴っていることに気付いただろう。

だが、クロウリーがそれに気づいたのは、この問答の後だった。

「なら………ならどうして、それを伝えなかつた!?? 教えてくれていれば………!!?」
「こんな風に仲違いする事は!!!」

「教えていたら!!?」二人とも負い目を抱いていた!!!」

怒りを孕んだ声で吠える、疑問でいっぱいになったクロウリー。

しかしそれを遮るように放たれた慟哭に、クロウリーの勢いは完全に削がれてしまった。

「片方は人命のために……友が神のように尊敬する先祖の帰る場所を奪い!!! もう片方はそれを友にさせてしまった事になる!!! そうなれば……もう以前のように語り合う事はできないじゃないか!!!」

クロウリーは天使の——いや、苦悩を抱いたただの一人の女の叫びに、返す言葉も失くす。

「……先人の想い、それは私にとつても重いものだ。いつか来る『約束の日』まで戦い続けた彼の者達の還る場所を……数多の血に濡れた戦士達の安らげる故郷を……どうして奪えよう」

そこにいたのは、師を前にしてなお堂々と啖呵を切る女傑でも、強大な力で困難をねじ伏せる戦士でもない。

胸に突き刺さる、後悔と罪悪感に苦しむ、儂い女しかいなかった。

「……私には……壊す事しかできない。壊れてしまった仲を直す事はできないんだ……それが、たまらなく恐かったんだ……!!!」

眉間にしわを寄せ、きつく歯を食い縛るエインシエンは、やがてフツと渴いた笑みを浮かべる。

自嘲気味な、非力な自分を嘆くような、そんな弱々しい姿で。

「結局……私が臆病すぎるせいで全部……壊してしまったがな……」

「真祖様……」

「できるならこの事はカルガラ達には伝えなくてくれ……あいつらは優しいから、きつと泣く……」

動くことのできないクロウリーを放置し、エインシエンは歩き出す。

ノーランド達のもとにも、カルガラ達のもとにも向かわず、己自身に向けた怒りを紛らわせられる場所へと、一人去っていく。

「憎むのなら……この私を……どうしようもない最悪の女を憎んでおくれ……」

重い足を引きずり、天使は密林の奥へと向かっていく。

ふと、その足が止まり、縋るような眼差しをクロウリーに向けて、語りかけた。

「全ての植物を調べ終えた……感染源が無くなった以上、お前達を樹熱の病魔が襲う事はない。もうじき……出航する」

翌日の朝。

ノーランド率いるルブニール王国所屬の探検隊の船は、出航の時を迎えていた。

島は静かで、人影一つない。

その様を見やり、エインシエンは深いため息をこぼしていた。

「…見送りになど……来てくれるはずもなし………当然か」

自分が招いた結果ゆえに、彼女の心はギシギシと軋みを上げている。

一つの友情を、臆病風に吹かれて跡形もなく壊してしまった。その負い目から、ここしばらくノーランドとも口を聞けていない。

遠い眼差しを島に向け、佇んでいた時だった。

「全員、聞け——っ!!」

「!?? ノーランド…?」

突如、出航の準備を行っていた部下達を集め始めるノーランド。

訝しげに振り向いたエインシエンと、集まった部下達に向け、ノーランドは驚きの決定を下した。

「えくくくくっ!! 黄金を全部おいてくくくく!!」

「なっ…何を…!!」

驚愕で目を見開く、島の人々から受け取った黄金の山を持った部下達と、ノーランドを凝視するエインシエン。

固まってしまった彼女に、船医が申し訳なきように頭を下げた。

「副官…すまねエ、昨日の話…おれもムースちゃんから聞いちゃったんだ」

「……………!!? 伝えたのか…!!?»

「あんた一人に背負わせるわけにはいかねエだろ…」

「バカ者…!!!」

「村人の怒りももつともだ」

悔しげに、心底苦しそうにうつむき齒を食いしばるエインシエンの前で、ノーランドも険しい表情になる。

その表情を見たエインシエンは、たまらずその場に伏せ、ノーランドに深々と土下座を見せた。

「すまんノーランド…!!! すまん…!!! 私が…私が事実を伝えていればこんな事には…!!!」

「いいんだ、エインシエン…君も苦悩したんだ。誰にも責められやしない…」

悲痛な声で謝罪する、強者でありながら弱々しい様を見せる天使に、ノーランドは痛々しそうに首を振る。

もう一度島に目を向けたノーランドは、伏せたままのエインシエンに向け、重い口をどうにか開いた。

「見納めておけ。もう二度と…来る事のない島だ」

「…ああ」

彼とて、大切な事を言わなかったことに対する怒りはある。だがそれは、自分達の仲を案じるがためのもの。

それを咎めることは、このいまにも心をおられそうになっている友の前では、決してできなかった。

「よし、出航だ。マリージュアへ進路を取り、北の海へ連絡!!? ルブニール王国へ帰郷する!!!」

ノーランドの号令に、もはや吹っ切れたのか部下達が大きな声で応える。

修復を終えた帆を張り、風をつかんだ帆船が海原に向かって颯爽と進み出した、その時だった。

鐘の音が、あたりに響き渡った。

もう二度と鳴ることのないと思っていた、あの黄金の鐘楼の音が。

「提督!!? 黄金の鐘が!!!」

「…なぜ」

予想だにしない事態に、ノーランドも部下達も、そしてエインシエンも困惑で言葉を失う。

その時、彼女の耳に、聞き覚えのあるもの達の必死な叫び声が届いた。

「鳴らせ——!!? 鳴らせ——!!?」

「もつと強くだ!!? ノーランド達に聞こえる様に!!?」
「うおおおおくくく!!!」

セトが、戦士達が、村の者達が、ムースが、そしてクロウリーが、黄金の鐘を総出で揺らし、かつてないほどの音を響かせる。

遠い海の前へ旅立ってしまう、かけがえのない恩人達に、何とかして届かせようと。

(おれは……!!? おれ達はなんて愚かだったんだ……!!!)

鐘楼につながる鎖を引き、巨大な鐘を力一杯揺らす。

涙を滝のように流しながら、胸に突き刺さる後悔の痛みに耐えながら、伝えたい思いを鐘の音に乗せ、叫び続ける。

(許せ!!! もう二度とここに来ないなんて言わないでくれ!!! おれはまだ……あんだ達と話したいことがたくさんあるんだ!!! まだ礼を言い切れてないんだ!!!)

「鳴らせエくくく!!! おれ達の大恩人に聞こえる様に!!!」

血反吐を吐くようなその叫びが、森の奥から伝わってくる。

知らぬうちに、エインシエンの目尻からは、絶えることなく涙が流れ出していた。

「あいつら……!!?!!?!!」

「提督!!? あれ!!!」

途切れそうな細かい声で、呆れた声をこぼすエインシエン。

すると今度は、森の奥から飛び出してきた赤い髪の戦士の姿に気づき、ノーランドと共に目を奪われた。

「ノーランドオ〜!!!」

滂沱の涙を流すカルガラが、海に出て行くノーランド達に向かって吠える。

これを最後になどしたくないと、自分の行いを、自分の浅慮さを心の底から恥じ、力の限り叫ぶ。

「エインシエン〜!!!」

名を呼ばれたエインシエンが、弾かれたように身を震わせる。

怒りも憎しみも感じない、ただ友を真摯に想う声に、より多くの涙が溢れ、顔中がぐちゃぐちゃになってしまった。

「また来いっ!!!」この地でおれは、お前達を待っている!!? ここでずつと鐘を鳴らし続ける!!! また来る日のお前達の船が、海で迷わないように!!! 嵐の中でも、この島を見失わないように!!!」

カルガラもまた、涙と鼻水で顔中を汚し、構うことなく叫び続ける。

離れてしまった心の距離を、言葉で飛び越えさせようとするように、全身全霊をもつて呼びかけ続ける。

「鐘を鳴らして、君等を待つ!!!」

またいつの日か必ず会おう!!! 親友よ!!!」

「バカ者共め…教えるなどあれほど言ったではないか…!!」

「…:…また来てもいいのか…? …戻るとも…:…必ず戻る!!」

ノーランドもエインシエンも、もうまともに立っていられなかった。膝から崩れ落ち、むせび泣きながら、嬉しさに目を熱くさせる。

二人はもう一度カルガラを凝視し、同じくらいに力強く叫び返した。

「またいつか、必ず会おう!!!」

新たな再会の誓いを胸に、異なる海で生まれた親友達が、別れを告げる。

必ず相見えようと、その姿が見えなくなるまで叫び続けた。

だが、その誓いが果たされることは、二度となかった。

第151話 “最低の女”

その知らせがエインシエンの元に届いたのは、ノーランド達との航海から五年が経つてからの事だった。

自宅、と言うよりお気に入りの寝床である木の根元で微睡んでいたエインシエンは、息を切らせて走ってくる友人の姿に、片手を挙げてこたえた。

「……おオ、久しぶりだなノーランド。今日は何の用だ？」

「エインシエン……聞いてくれ、朗報だ!!？」

心の底から喜ばしそうな表情を見せてくる彼の話は、至極簡単だった。

ルブニール王国の探検隊の“偉大なる航路”航海の許可が、聖都マリージョアから正式に下されたという知らせだ。

「そうか……許可が出たか」

「ああ……これでやつとまた会いに行ける!!？」

満面の笑みを浮かべるノーランドに、エインシエンも思わず破顔する。

腰を上げた彼女は、いそいそと木の洞にしまっておいた大量の物資を探り、ぼいぼいと引つ張り出し始める。

「少し待て……あいつらに持つていく土産を準備しなければ。この5年でいろいろ考えたんだが、どれもピンとこなくてな……」

「ああ、いや、すまん！ 実はな……」

「？」

久しぶりに友人を尋ねられると、いつも以上に気分が乗っていたエインシエンだったが、ノーランドはそれに申し訳なきように制止をかける。

訝しげに振り向く天使に、ノーランドは王から付け加えられたある命について聞かせる。

その瞬間、エインシエンは大きく目を見開き、固まった。

「は☒ あの王が『偉大なる航路』に☒」

「そして許可が出たのは私だけだ……部下達は置いてゆく事になった」

「何を考えているんだあの男は!!!」

思いもよらない、正気を疑うような命に、エインシエンは思わずノーランドに詰め寄ってしまう。

彼に責はなくとも、かといって納得できる話ではなかった。

「考え直せ、ノーランド!!! ロクな航海経験を積んでいないこの国の兵士を連れて行つた所で、何の役にも立たんどころか足手纏いになるだけだ!!! いたずらに殺すだけだぞ

!!!

「仕方がない……そう言う条件で航海が認められたのだから」

「……………!!! せめて……!!? せめて私が一緒に……」

「それもダメだ」

「何故だ!!!」

あの海の恐ろしさを知るが故、そして何よりあまりに無謀な条件に、ノーランドの身を案じる。

だがそれ以上に、ノーランドはエインシエンの身を案じる眼差しを向け、諭すように優しく語った。

「身重の女を、あの海に連れて行けるわけがないだろう」

有無を言わさぬ、確信した様子の言葉に、エインシエンの動きがピタリと止まる。

グツと唇を噛み締めたエインシエンは、ノーランドに背を向け、ばつが悪そうなか細い声で問い返す。

「……………いつから気付いていた」

「ずっと前からだ。君はふと……自分のお腹に触れていることが多かったからな。無意識だっただろう?」

言われて気付いたのか、苦虫を噛み潰した表情で自分の腹部に触れる。

圧倒的な力を持ちながら、そういった抜けた部分を見せる友人に、ノーランドは思わず苦笑をこぼしていた。

「天族の妊娠期間というのは、ずいぶん長いんだな？」

「……『記憶の継承』に恐ろしく時間がかかるんだ。短くても……10年、胎の中で我が子を留めねばならん」

「ならば余計に連れては行けないな……君の使命なのだから」

正論を返され、エインシエンはもう反論することもできない。それはかつて、自分が彼に語った、一族の、そして自分自身に課した責務だったからだ。

「大丈夫!!? 土産は私が持つていく。伝言があるならちゃん伝える! 無事に戻つて来るとも……私は君の『王』なのだから」

「ノーランド……」

快活な笑みを見せ、ノーランドは友人を安堵させようと告げる。

横目を向けた天使は、しばらくの間迷うような素振りを見せていたが、やがてため息をこぼし、呆れたような笑みを返した。

「その言葉、違うなよ」

トン、とノーランドの胸に拳を当て、誓いを立てさせる。

そうしてようやく、二人は面と向かって、声を上げて笑う事ができた。だが、その約束が果たされる事はなかった。

??

その知らせが届いた事は、まさに晴天の霹靂というにふさわしかった。

いつぞやと同じく寢床でくつろいでいたエインシエンの元に、かつての部下達が血相を変えて駆け込んできたのだ。

「副官!!? 副官!!!!」

「何だ、どうしたんだお前達…」

胡乱げに体を起こしたエインシエンは、急に胸中に湧き上がってきた嫌な予感に、険しい表情で部下達に向き直る。

そしてもたらされた信じがたい情報に、天使は思わず呼吸を忘れるほど硬直し、目を見開いた。

「ノーランドが……虚言の罪だ?!?!」

自分の耳がおかしくなったのか、と疑うほどに唐突で、脈絡もない事態。

部下達に詰め寄るも、彼らの見せる表情は、決して趣味の悪い冗談を口にかけている様子はない。

「何なんだそれは!!! なぜそんな事になった?!?!」

「わかりません……もうすぐ公開処刑が始まるって!!!」

「ふざけるな!!!」

意味もなく怒鳴ってしまったエインシエンは、突如膨れ上がってきた恐怖感に突き動かされ、部下達を置き去りに走り出す。

だがいまの彼女に冷静な思考は残っていない。疑問符ばかりが浮かび、まともな思考すらできずにいた。

——何があつた……!!?」

何があつたんだノーランド……!!!

混乱の渦に陥りながら、エインシエンは王国の中心、王都の広場に向かう。

平和な時には催し物に使われるその場所には、今は高い台が造られ、その上に拘束されたノーランドと、刃を手にする兵士二人の姿が見える。

サーツとエインシエンの背筋に寒気が走り、思考がより一層の鈍化を始めた。

「ノーランド!!!」

「おい待て何だあの証言者、あんな奴ア知らねエぞ!!!」

すでに裁判が行われていて、全く見覚えのない男が証言台に立っている。

すかさず割り込もうと向かうエインシエンと部下達だが、偽物の英雄の処刑を見ようと集まった民衆に阻まれ、近付くこともできなかつた。

「どけ…邪魔だ!!! 邪魔だと言っているだろうが!!!」

「誰だそいつア、おれ達の仲間じゃねエぞ!!!」

「おい、ちよつと道を開けてくれ!!?」

「提督〜!!!」

部下達の声が聞こえたのか、項垂れていたノーランドが顔を上げる。

そこに浮かんだ感情は、疑いをかけられた無念と、自分を助けようとしている友人と部下を案じるものだ。

「何があつたんですか!!?」

「カルガラ達には会えたんですか!!?」

「ノーランドオ〜!!!」

一向に退いてくれない民衆を相手に、エインシエンはひたすらに叫び続ける。

そんな彼女の姿を目に止めたルブニール王国の国王が、傍に立った兵の一人に横目を向けて告げる。

「取り押さえろ。あの女は生かして捕らえておけ」

王の命令で、十数人の兵士達が槍を手にし、民衆の方へ向かう。

そして抗議を続けるエインシエンと部下達に槍の切っ先を突きつけ、あるいは拘束していった。

「何をするっ……やめろ!!!」

両腕を掴まれ、身動きを封じられるエインシエン。

本気を出せば簡単に抜け出せるが、すぐ近くにいる民衆への危険から、思い切り暴れることができない。

だがやがて、我慢の限界が訪れた。

「おのれ………やめろと言っているだろうがア!!!」

自身の有する『王』の気迫を用い、兵士も民間人も見境なく、まとめて無力化させようと試みる。

だがその寸前、背後から振り下ろされた一撃がエインシエンの脳を揺らし、彼女から意識を刈り取った。

「副官く!!!」

「がふっ……」

尋常ではない動揺、そして余裕のなさから防御も取れなかった天使は、頭から血を流して倒れこむ。

ようやく静かになった広場に、裁判官の声が大きく響き渡った。

「探検家モンブラン・ノーランドを、虚言の大罪で『打ち首』に処すつ!!!」

それを皮切りに、民衆から凄まじい罵倒の声がかかる。

ウソつき、ウソつき、ウソつきと。自分達を乗せ、英雄を気取ろうとした男に対し、容赦のない罵詈雑言が叩きつけられる。

その様に、ノーランドの部下達は涙を流して叫び続けた。

「提督がウソなんかつかア〜!!!」

「提督〜〜!!!」

「やめろ………やめてくれ!!! ノーランドオ〜〜!!!」

だが、そんな彼らの声は、民衆の上げる騒音でかき消され、そして誰も聞き入れようとはしない。

無情にも、泣き叫ぶ天使の前で刃は掲げられ。

「うわあああああああ!!!」

次の瞬間、あつけないほどに軽々と、彼女の「王」の首が宙に舞った。

??

——まったく…やってくれたものだ、あの男は。

ジメジメとした、暗く狭い独房の中で、鎖をつけられて横たわる獅子の耳を持った天使。

自由を奪われた彼女の耳に、ふとそんな声が届いていた。

——この私が危うく死にかけてというのに、その結果がこれではな…!!!

——失った兵の補充はいかがいたしましたしょう。

——そのうちでよい。

——人間などどうせそのうち増える…。

——だが……天族を一匹手に入れられたことは唯一の僥倖だったな。

あの男がムダに名が大きいせいで、奪う事もできなかつたが……「ウソつき」の部下がどうなろうと誰も気に留めまい!!?」

これで不死の生き血は私の物!!?」

それだけは役に立ったな、ハハハハ……!!!

他に聞く者がいないのをいい事に、ルブニールの王は高らかに嗤う。

冷たい石の床に伏せ、その声を聞いていたエインシエンは、ゆっくりと体を起こす。やがてその髪は、じわじわと黒く闇の色に染まっていった。

「……………我等が父よ。これが人間という種なら……果たして数百年も耐え抜いて守る価値があるのか……?」

風が吹き抜ける王城のど真ん中で、片膝を抱えたエインシエンが呟く。

あたりに動く人の姿は一つもなく、夜の闇がもたらす冷たさの中、無表情で漆黒の髪と翼を風に揺らす。

その下の肌には、悍ましさを催す異様な文様が浮かんでいた。

「なア、ルブニールの王よ………あの海は生きているだけでも幸せな地獄だと言われているだろうか……お前がワガママを言わなければ、そんな目に遭わずに済んだのだぞ。何を被害者のようなツラをしている……？」

傍に転がる一つの首に向けて、エインシエンは恐怖感を催させる低い声で語りかける。

恐怖で固まった形相で、虚空を見つめるもの言わぬ王の首を踏み潰し、エインシエンは唸るような声で吐き捨てる。

「おかげで私は『王』を失った……!!? キサマらの首でチャラにできるような安い首ではないのに………一体私は、これから何を支えに生きていけばいいのだ……!!?」

彼女が腰掛けているのは、無数の無惨に引きちぎられた肉の上。

破壊された王城の中、どす黒い赤色に染まった玉座の間の中心で、天井に開いた大穴から夜空を見上げた黒い天使は、物憂げにつぶやきをこぼした。

「あア……何と醜く、浅ましい存在であろうな。創造主共よ……!!!」

この日、ルブニール王国の王族の血は途絶えた。

そして、たった一人で一国の精鋭達を屠り、血河を築き上げた最強最悪の女を、世界政府は『天災妃』と呼び、高額の賞金首とした。

それからの日々、エインシエンは他の部下達の力も借りず、ただ一人で海を渡り続けた。

商船に、海賊船に、海軍の船に乗り込み、あるいは小舟を漕ぎ、約束の島を目指し、只管に旅を続けた。その先で見つけた光景に、彼女は絶句し立ち尽くした。

「これは……沈没したわけではない。何かに真下から吹っ飛ばされている……島を吹き飛ばすなど、一体何が起こったんだ……!!?」

半分だけ残ったセトの家、そして変わり果てた島を前に、愕然とした声が溢れる。そして旅の先で彼女は、信じがたい大災害について知ることとなった。

「これが……『突き上げる海流』!!! これなら確かに島をも吹き飛ばしかねない……だが、だったら吹き飛ばされた島はどこに……!!?」

状況を整理し、理解した彼女はさらに島の、友達の行方を探る。

その先で彼女は、かつて耳にした空の果てにある『空の海』に行き着く。

「気流……時期……『突き上げる海流』の位置……!!! つまりジャヤの半分は……雲の海に……!!」

そうと知ってから、エインシエンの行動の指針は決まった。

移動し続ける空の海を目指し、その身一つで天を舞い、果てを目指し続けた。

幾度となく失敗しようとも、海に落ちようとも諦めず、ただひたすらに友の行方を追
い続けた。

「…………ぐっ…ぬうう…!!!」

大樹の下で雨宿りをするエインシエンの口から、うめき声が溢れる。

ここ最近の彼女は、わずかに飛ぶこともできなくなっていた。胎の中の子が、少しず
つ大きくなってきていたのだ。

「ハア……ハア……重いなア……子というのは、命とはこんなにも重いものか……!!?
まだまだ……先のことだと思っていたのだがな……」

ノーランドが処刑されてから、そしてカルガラ達の行方を追い始めてからすでに5年
近く。

子を宿したエインシエンの動きは、日に日に鈍くなり始めていた。

「…私は何て……醜いんだろうなア……!!? 望んで孕んだお前を……煩わしいとなど
思ってしまうなんて……!!!」

重い腹を撫で、荒い息をつくエインシエンは、不意に脳裏によぎった感情に自己嫌悪
を抱く。

育ち続ける命に申し訳なさを抱きながら、エインシエンは頭を抱えた。

(どうすればいい!!?) 伝えねばならん “言葉” は空の彼方……行く道は険し過ぎる……私
 が逃げれば……如何にして彼の地へ約束を果たしに行ける……!!?)

ぐちゃぐちゃになった気持ちを持って余し、エインシエンは雨雲の空を見上げる。なん
 の答えも見出せない自分に、誰でもいいから答えを示して欲しかった。

(我等が父よ…… “始まりの一人” よ……!!?) 私はどうしたらいい……!!?) どうすれ
 ばこの想いを、彼方に旅立った奴等に伝えられる……!!?)

悔しさに顔を歪め、俯くエインシエン。

その時、エインシエンの腹の奥から、どんつと衝撃が伝わった。

「……また蹴つ……!!?’」

不意のことに、エインシエンは目を丸くする。

その時、彼女の脳裏にある方法が浮かび、その動きを硬直させた。

「……………そうか、その手があった」

自分の腹を、その奥で未だ眠りにつく我が子を凝視し、エインシエンは呆然と呟く。

ぞくつと怖気が走る手段だったが、当時の彼女には、それが最も確実に魅力的な道筋
 に見えていた。

(…………)の方法を使えば、まだ見ぬ我が子はまた……余計な重荷を背負う羽目になる。た
 だでさえ重過ぎる宿命を背負わされるのに……私のワガママで、より一層の責を背負わ

される………だが、それでも)

「ごめんなア………こんな女が母親で」

怖気付きそうになった彼女を引き止めたのは、今でも鮮明に思い出せる友人達の顔だった。

もうどこにいるかもわからない彼らとの再会への希望が、彼女を魔女に変えてしまった。

「いや……私に母を名乗る資格などないな。一族の想いすら踏みにじる……約束一つ満足に果たせぬ、最低の女だ」

自嘲気味に笑い、エインシエンは両手で自分の腹を撫でる。

それが漆黒に染まっていくと、エインシエンは鬼気迫る形相で、黒い閃光を迸らせた。「うまくいくかはわからぬ………だがそれでも、何か」を残さねば……私は私を許せぬまま逝く事になるんだ……!!? 許しは乞わない……ただ……否定はしないでおくれ」

答えの返つてこない、一方的な願いを口にしながら、エインシエンは胎の子に向けて、長い長い細工を行うのだった。

第152話 // 鐘を鳴らせ //

空は、昼間だというのに真つ暗だった。

黒々と広がる、目指し続けていた雲が、全ての光を遮ってしまっていた。

「……………もうすぐだな。気紛れな災害と、空の海が重なる日がようやく来た……」

「……………かか様？ どこにいくの……？」

数ヶ月の間にひどく老けたように見えるエインシエンの傍らで、一人の幼子が不安気に母を見上げる。

エインシエンはフツと悲し気な笑みを見せると、幼子をギュツと強く抱き寄せる。これ以上ないくらいに、強く、優しく。

「遠い遠い……………空のある島にな。……………友達との約束を…果たさなければ」

「エイジアを置いてくの……？ やだ…ヤダよ!!？ エイジアも連れて行って!!!」

「それはならん……………お前には、私がダメだった時のために遺っていて欲しいのだ」

縋りついてくる娘に、エインシエンは胸を押し潰されるような感覚を覚えながらも、首を横に振る。

力の全てを使い果たし、衰弱しきった今の彼女には、娘の行く末を見届ける時間も余

力も残されてはいなかったからだ。

「……めんよ。お前をこんな残酷な世界に置き去りにする事を……恨んでくれて構わない。お前には教えるだけで……何にもしてやれなかった」

「イヤだ……ヤダよう……!! いかないで……かか様!!?」

泣きじやくり、服を掴んで離さない幼子は、いやだいやだと首を振る。

エインシエンは娘の頬をそつと挟むと、涙に濡れた目でその瞳を覗き込み、語り掛けた。

「エイジア……お前はお前の『王』を見出せ。きつとこの記憶を……来るべき『約束の日』に繋いでおくれ」

そう言つて、エインシエンは娘から離れ、背を向けて歩き出す。

後を追おうとする幼子を置き去りに、エインシエンは大きく翼を羽ばたかせ、天空に向かつて勢いよく飛び出す。

そのまま母は、漆黒の空に向かつて真つすぐに飛翔した。

「かか様!!!」

幼子の見つめる先、母の姿は遠く消え去つていく。

その後の行方を知る者は、誰もいなかったという――。

??

——そして、時は現代に戻る。

「ヤハハハハ!!! ここは空!!! 神の領域だ!!! 全てが目障り!!! 人も木も土も!!! あるべき場所へ還るがいい!!!」

悠然と空を舞う神の船『マクシム』の上で、スカイピアの“神” エネルが高らかに啜う。

頭上に広がる黒雲を操り、無数の雷を叩き落とす彼は、壊れていく空の国を眺め、不気味な笑みを浮かべ続ける。

「全て青海に降る雨となれ!!! ヤッツハハハハハハハ!!! 我は神なり!!!」

その声を聞く者は誰もいない。

ただ一人空に居すわり、数多の命を蹂躪する神の声が、辺りに響き渡った。

それを、ただ眺める事しかできない神の島にいる人々。

ルフイとナミを除く麦わらの一味もまた同じだったが、そんな中、耳にした言葉に反応し、振り向く者の姿があった。

「黄金の鐘………?!?!? 貴様、今そう言ったのか……?」

「ええ」

ロビンの頷きに、ボロボロのまま目を覚ましたワイパーが目を見開く。

右往左往するウソツプのことなど一切気にならない様子で、ロビンを凝視していた。

「それをエネルギーは狙ってるのか…!!? なぜわかる…どこにあるんだ…」

「おい待てよ、そんなこと言ってる場合か、早く逃げよう死んじまうよ!!?」

「このデケエ蔓の…頂上付近だ」

ゴロゴロと辺りに響く轟音と、走る稲光に怯えるウソツプを放置し、同じく目を覚ましたアーレンが上を指差す。

「遺跡の地図にゃ…都市の中心部に大鐘楼はあつたと記されてた…だが今は…そこには蔓がそびえ立ってる。この島が空に來た時に…蔓に突き上げられて飛ばされたんなら…もつと上空にあるはずだ」

老人から情報を得たワイパーは、何を思つてか巨大豆蔓に向かって駆け出し、しがみついて登ろうと試みる。

それを目にしたアイサが目を剥き、慌てて彼を呼び止めた。

「ワイパー!!? 駄目だよ!!? 今登つたつて!!? 空を飛んでるエネルギーには追いつけないよ!!!」

あまりに無謀な挑戦だと、絶望に染まり始めた少女は悲痛な声を上げる。しかしワイパーは止まらず、傷だらけの身体を無理矢理動かす。

その時、空を見上げていたウソツプが何かに気付き、仲間に声を張り上げた。

「蔓から離れる!!」 何か落ちて来る!!」

咄嗟の判断で、全員がその場から跳び退る。するとその直後、巨大豆蔓の一部分が焦げた状態で落下し、ズシンと大きな音をたてる。

危うく潰されかけたウソツプは、サーツと顔中から血の気を引かせて固まった。

「…蔓の………先端……!!」 上で何が…」

「〃神〃が……好き勝手暴れてんだろうよ……!!?」 クソツタレ…」

「お!!?」 お!!?」 おいまさかルフイ達の死体も一緒に落ちて来てやしねエか!!?」

島一つを空に縛り付ける程の、尋常ではない頑丈さを誇る巨大豆蔓でさえ、エネルギーを受けてこの有様となっている。

人のなす事全てが無意味と絶望するには、十分すぎる光景だ。

「ワイパー!!?」 ほら!」 そんな体じゃ無理だよ!!?」

「………この真上にあるんだ……大戦士カルガラの切望の鐘が……」

アイサがワイパーの腕を引き、何とか退かせようとするが、大戦士の血を継ぐ男は天空を見上げたまま動こうとしない。

その時、降り注ぐ雷に注意していたウソツプたちの表情が、異様なものを目にしたことで強張り始める。

「………何だア……ありやあ………!!?」

それは、雷を生む黒雲に現われた異変だった。

黒々と広がっていた雲の一部が、徐々に形を変え球状の塊になっていく。それはさらに凝縮され、そしてゆっくりと移動を始めていたのだ。

「まさか…エネルギーがやってんのか…!?」

「…エンジェル島の…真上だよ……………!!!」

「雷雲が球状に…」

「悪夢だ——!!! この世の光景じゃねえ~~~~~!!!」

その光景を目の当たりにしていたのは、ウソツプたちだけではない。

巨大豆蔓の半ばにいるルフイとナミも、島から避難する空の住民達も、シャンディアの者達も、皆がその光景に目を奪われている。

多くの人々の視線を一点に集め、エネルギーはまたにやりと嗤った。

「『雷迎』!!!」

ゆっくりりと、降りていく雷雲の塊が、エンジェル島に触れる、その瞬間。

ピカッ!と稲光が迸り、凄まじい熱が放出される。

辺りを真っ白に染める程の閃光が迸り、そこにあつた何もかもを呑み込んでいく。

そして、ようやく光が消えた時、そこには何も残されてはいなかった。

「何だ今の爆発は…!!? しかもまだ『雷の雨』は続くのか…!!!」

「とんでもねエ気流と幕放電の巢窟……!! 島を丸ごと消しとばしやがった……!!!」

「もう……行きて帰れる気がしねエよ……!!!」

「……………エンジェル島を……消しおったのか……!!?」

後に残っていた、海雲に開いた巨大な穴。

黒く焦げた跡を晒した、見るも恐ろしい光景に、誰もが立ち上がる気力を失くす。

ガン・フオールはがくりと膝をつき、大きな悲しみと怒りに頭を抱える事しかできなかった。

「何という……!!! 何という……!!! 非道を……!!! ……エネルギー!!!」

暗い暗い闇の中、エインシエンは漂い続ける。

限界を超えて、余りにも力の差がありすぎる肉体を酷使し、無情な攻撃を受け続けた彼女は、最早意識も定かではない。

そんな彼女の耳に、その声は届いた。

—— お前も見ただろ……!!!

“黄金郷” はあつたじゃねエか……!!!

—— ウソじゃなかった。

ウソなんかついてなかった!!!

だから下にいるおっさん達に教えてやるんだ!!!

“黄金郷”は空にあったぞって…!!!

鐘を鳴らせば聞こえるはずだ!!!

じやなきやおっさん達は!!?

死ぬまで海底を探し続けるんだぞ!!!

エネルギーなんか取られてたまるか!!!

でつけエ鐘の音は、きつとどこまでも聞こえるから!!?

だからおれは!!!

黄金の鐘を鳴らすんだ!!!

そんな、確固たる決意を感じさせる青年の声が、傷付いた天使の耳に届く。

その瞬間、焦げた天使の指がピクリと動いた。

「……………じゃあ…あいつは…」

「…確かに言ってた…でも、この状況で…」

あおむけに横たわるエインシエンの反応に気付かず、ゾロはロビンの言葉に顔をしかめる。

この状況で、まだ動く気力があるのは凄まじい、と思わず感嘆してしまう。

「鐘を鳴らすだと…!!?」

「やると言ったらやる奴だ。ナミが連れ戻そうとしても、あいつは戻りやしねエ……あいつの狙うものは、エネルと同じだからだ」

険しい表情のまま、ゾロは頭上を見上げて呟く。

あの頑固さは厄介ではあるが、この場にいてもただ滅びを待つばかりなのは事実、と立ち上がる意思を固め始める。

だがそこに割り込む、ある男の怒号があつた。

「だとしたらなおさら不可能だ……!!」

「!!? クロウリー!!!」

「ためエ……!!?」

「おれだって……何度もあの男を討ち取ろうと画策してきた……!! 思いつく限りの全てをやってきた!! それでもダメだったんだ!!」

ぼとぼとと血肉を落しながら、クロウリーは血走った目でゾロたちに吠える。

もはや、人の身体を保つことさえ難しいほどに疲弊した姿。なのに、未だ彼は強烈な気迫を放っていた。

「400年……!! 400年だぞ!! おれがこんな化け物にまで成り果てて、求め続けたというのに……!! あいつはその全てを嘲笑い!! この海の頂点に君臨し続けているんだ!!!」

「クロウリー……」

「お前達に何ができる!!! あの意味を持った『災害』に……!!? 一体誰が立ち向かえるというのだ!!!」

その慟哭に、その場にいた全員が返す言葉を失くす。

彼が何者なのか、知っている者はたった二人だけ。しかしそれでもなお伝わる憎悪と無念に、咄嗟の反応が出てこない。

だが、その沈黙も長くは続かなかった。

「あ!!? 危ねエ、また何か落ちて来る!!!」

「何だ……」

また、頭上から落下してくる物体に気付いたウソツプが、悲鳴を上げて飛びのく。

だが、落ちてきたそれは最初の者よりもゆつくりと、そしてぱさつと軽い音をたてるだけで終わり、ウソツプ以外を拍子抜けさせた。

「ぎゃああああく〜っ!!? 全員ふせろ〜!!!」

「葉っぱ……」

「え!?」

「……………!? 何か書いてあるよ!!!」

落ちてきた巨大豆蔓の葉を見やったアイサは、一部に何か文字が書き込まれているこ

とに気付く。思わず駆け寄り、何と書いてあるのかとすぐさま覗き込む。

「メッセージ!!! ルフィとナミからだ」

「何て書いてある!!!」

恐る恐る葉に近づき、同じく文字を見下ろすロビンに問いかけるウソップ。

書き込まれたそれを見たロビンは、その内容に目を見開き、困惑気味に声で読み上げた。

「……………この巨大な蔓を… 西に切り倒せ」

「何イ!!!」

謎の指示に、ウソップは勿論ゾロも困惑の声を上げる。

二人の無事が知れたのは良かったが、いきなりもたらされた要件に理解が及ばない。この状況で、一体何をさせるつもりなのかと。

「そうすればどうなるん……………!!? うわっ!!? 見ろあれ!!!」

首を傾げるウソップは、再び視界に入った異様な光景に大きく目を見開く。

そこには、先ほどエンジェル島を消滅させた巨大な黒雲が再び作られ、今度は神の島の上空に留まっている光景があったのだ。

「さっきのより……………数倍だけエ……………」

「……………もう逃げられねえんだ!!!! この国からは!!!!」

「終わりにする気か…!!? ああの野郎…」

愕然と、もうどこにも逃げ場がないことを示され、頭を抱えて天を仰ぐ。

その中で、刃に刻まれたメッセージと巨大豆蔓を交互に見ていたアーレンが、ハツと何かに気付いた様子で息を呑んだ。

「あいつらまさか…この蔓登ってエネルギーのところに行く気じゃねエだろうな…!!」

「そんなムチャクチャな…!!」

「じゃあお前、上行つて止めて来い」

「止まる奴かよ!!」

「———どうあれ、無茶でも何でも、やって貰うしかねエだろうがよ」

嘆くウソツプに向けて、ゾロが不敵に笑いながら告げる。

その時、ゾロたちのいる場所にも雷が降り注ぎ、足場が砕かれ瓦礫が舞う。咄嗟に怪我人を引つ掴み、一味は雷から距離をとった。

「地面のある場所へ!!! ここじゃ遺跡につき落とされる!!!」

島雲はもう役に立ちそうになく、そして地面も徐々に雷で叩き割られている。

迫り来る「神」の猛攻を忌々しげに睨んだゾロは、重い体で刃を構え、巨大豆蔓の方に狙いを定めた。

「とにかくやるぞ。舟の方に蔓を倒しやいいんだな」

何をするつもりであっても、できるか分からなくとも、自分にできるのは指示に従うことのみ。

悔しいが、この状況を打破するには、仲間を託すほかにないのだ。

「アレを落とされる前に、エネルの居場所へ辿り着けるのは、今、この空島であいつらしか——」

「……ならばその役目……!!! 私が担おう……!!!」

勢いよく飛び出そうとした時、それを押しとどめるように背後から声が響く。

しゃがれた、痛々しさを抱かせるその声に、前屈姿勢になっていたゾロはハッと振り向き、絶句した。

もはや立つこともままならないはずの天使が、凄まじい形相でそこにいたからだ。

「うおおお!!! エ……エレノア!!! ボ……ボロボロじゃねエかムリすんなよ!!!」

「うって出ねばどのみち死ぬ………なればここで命を張らねば……何もできぬまま終わる……!!!」

本人よりも痛みを感じている様子でウソツプが叫ぶが、エインシエンは全く取り合おうとしない。

ぼたぼたと全身から血を流し、ぎしぎしと軋む音を響かせ、がくがくと痙攣を続けながら、そびえ立つ巨大豆蔓を見上げる。

「そんな最期は…御免なのだ」

吐き捨てるように呟くと、エインシエンはぐつと飛び出す体勢に入る。

その間も、全身からブシブシと血が噴き出し、辺りを真っ赤に染めていく。その様は、自ら死に向かって駆け出そうとしているようにも見えた。

「オイオイ…!!! それ以上動いたらマジで死ぬぞ!!! だいたいそんな体でまともに動けるわけがな——」

もう力尽くで止めるしかない、と手を伸ばすウソツプ。

だが、その手が触れるより先に、エインシエンの姿が消え失せた——いや、目にも止まらぬ速さで飛び出していた。

「かかしとして恥を晒して死ぬくらいならば…派手に死んでやろうじゃないか」

直後、ゴツ!と爆風が吹き荒れ、ウソツプたちを吹き飛ばす。

バキバキバキツ!と背中の翼から嫌な音が響くのも構わず、エインシエンは巨大豆蔓に向かって飛翔し、瞳を青紫色に燃やした。

眼下から聞こえてくる“声”に、エネルギーは呆れたように目を細める。

あのゴム人間をこちらに到達させようとしているようだが、今の彼にしてみれば、もはや意味のないことではない。

「往生際の悪い事だ……まだわからんのか。もはや暴れても逃げても……手遅れ」
すぐ近くで、その圧倒的な存在感を示している黄金の鐘楼を見やり、エネルギーは満足げに笑う。

あとはこれを持って、自分の目的地へと急ぐだけ。少しばかり重い荷物を運ぶだけの、単純な作業だ。

「私の目的は全て果たした——あとは、この国を『雷迎』で積帝雲ごと破壊し、私は『限りない大地』へと旅立つのみ」

にやにやと笑う間も、頭上の黒雲は雷を降らせ、『雷迎』は完成を間近にしている。数年に及ぶ準備の大成があつという間で、不思議とまた笑みがこぼれる。

「ヤハハハ……こうなるとまた名残惜しくもあるものだな」

天空に君臨する彼は、微塵も想像していなかった。

自分が見下してきた人間の手によって、遙か下まで叩き落とされることなど。

第153話 “届け!”

黒雲が浮かぶ真下を、エインシエンが砲弾のような勢いで飛翔する。

翼には既に感覚がなく、常人ならば気絶しているほどの激痛が走っている。それでも飛び続けていた彼女は、不意に眉をひそめ、振り向いた。

「……む」

「く……ハデに穴ア空けやがって!!?」

すぐ横を、同じく凄まじい速さで追いかけてくる、緑髪の青年剣士。

雷に碎かれ、見る見るうちに悪くなっていく足場に悪態をつく彼に、エインシエンは感嘆するような声を上げた。

「お前も来たのか、マリモ」

「死にかけてたためエだけに任せられるか!!!」

血まみれで黒焦げ、動いているのが信じられないほどの重傷を晒すエインシエンに怒鳴り、ゾロは自身の刀を構える。

それにフツと苦笑をこぼした天使は、改めて目の前に聳え立つ巨大豆蔓を睨みつけた。

「……その罪なき命、訳あつて貰い受ける」

エインシエンは祝詞を口にしながら、ジャキン、と軋みを上げる両足の義手から、それぞれ刃を展開させる。

同時に、ゾロが和道一文字の柄に手をかけながら飛び出し、巨大豆蔓の幹に向かう。

「一刀流居合……」

雷が無数に降り注ぐ中を潜り抜け、三本の巨大な蔓が絡まってできた蔓に接近した二人が、カツと目を見開きながら、刃を抜き振り抜いた。

「エッジ・ザ・アズライール告死の刃翼」

「ししそんそん獅子歌歌」

ギイン!!と強烈な金属音が鳴り響き、二本の銀色の閃光が走る。

迸った光が一本ずつ、巨大豆蔓の表面を滑ったかと思うと、次の瞬間スパッと半ばから両断してみせた。

「いよし!!! やったぞ!!? 斬った!!!」

切断された豆蔓の一部を目の当たりにし、ウソップが思わず歓声を上げる。

だが、ゾロが刃を鞘に納めた次の瞬間、エインシエンの両足の義足がバキツ!とひしゃげ、素足との境目から大量の血が噴き出す。

そのうえ、空中に留まったままの二人に、雷が雨となつて降り注いだ。

「ガフツ……!!?」

——おのれあの小僧……!!!

この後に及んで好き勝手しておって……だが!!?

既に限界を迎えている肉体に雷を食らい、エインシエンは白目を剥きながら地面に叩きつけられ、自身を口から吐いた血でさらに汚す。

しかし、痛々しい姿を晒しながらもその口元には、不敵な笑みが浮かんでいた。

「もはや……その座からひきずり下ろされるのも時間の問題………」

あとは、麦わらの少年がきつと決着をつけてくれる。

今自分ができる使命は、果たす事ができたのだとそう思い、勝利を確信したエインシエンが空を見上げ。

微塵も揺らいでいない巨大豆蔓を目の当たりにし、笑みが消えた。

「……………なぜ、倒れない」

三本ある蔓のうちの二本を断たれ、完全にバランスを崩しているはずなのに、一切動いて見えない巨大豆蔓。

その様に、ギリギリのところまで保たれていたエインシエンの精神は、ガラガラと崩れ始めてしまう。

「あ……ああ……!!!」

——ここまでやって……こんなにも犠牲を払い続けて!!

ただの一度も……あいつらに言葉を伝えることも許されぬのか……!!?

ボロボロと涙があふれ、がくがくと身体が震える。

抑え込んでいた絶望が思考を支配し、最早指一本動かす事ができなくなっていた。

——たった一度の奇跡さえ……!!!

お前は許さぬというのか!!!

神よ!!!

「うおおおおおおお!!!」

悲痛な雄叫びを天に向かって放ち、「天災妃」は己が嘆きを晒す。

そんな彼女を嘲笑うかのように、巨大豆蔓は揺らぐことなく悠然と、その場に在り続けていた。

刻一刻と、「神」がもたらす絶望が迫り来る中、未だ最後の希望がその場所へ辿り着く様子はない。

抵抗しようとした者達が次々に倒れていく中、その男も傷付いた身体を引きずり、絶望に抗おうとしていた。

「無理だよワイパー、やめて!!!」

「黙ってる、あの鐘は…カルガラの遺志を継ぐおれ達が鳴らしてこそ意味がある…!!
あの麦わらに何の関係があるんだ!!」

もはや立っているだけ、彼の凄まじい気力が図れるほどの重傷のワイパーが、無関係
なはずの余所者が戦っている現状に吠える。

これでは、何百年もの間抗い続けた先祖の行いは、全くの無駄にされかねないと、怒
りをあらわにしていた。

「あいつがなぜ…麦わらに託してんだ!!」

「放つとけロビン。あんな重傷マン達に阻止されるもんか。あの蔓を倒すのが先だ!!
上でルフィ達が待つてる!!?」

鬼の形相で睨みつけてくるワイパーに視線を向けるロビン。

それを遮るように、ゴーグルを装着し、ゴムパチンコと弾を用意したウソツプが、勇
ましい声とポーズで告げる。

「ゾロとエレノアが半分以上斬つてくれてるし、全体は傾きかけてんだ!! おれ様の
火薬星の舞い”を炸裂させる事で、ヤツは大きな悲鳴と共になぎ倒されるのだ!!」

誰もそれに答えない、と言うかその余裕がない。

一味の実力者二人が、命懸けで放った一撃でもまだ倒れない巨大豆蔓を相手に、彼の
力で行かできるとも思えなかったのだ。

しかしウソツプはそんな視線に気づかず、雄叫びと共に走り出した。

「——やはりこの海賊団……おれ様こそが砦なのだ!!! 出動だ、うおおお」

「待っ……」

なおも呼び止めようとするワイパー。

そこに、ロビンがぼそりと、独り言のように語りかけた。

「400年前……青海である探検家が『黄金郷を見た』とウソをついた」

「!?」

「世間は笑ったけれど、彼の子孫達は彼の言葉を信じ、今でもずっと青海で『黄金郷』を探し続けている」

どこか、羨ましそうな響きをもって語る美女の言葉に、荒ぶっていたワイパーは思わず動きを止め、耳を傾ける。

立ち尽くしていたクロウリーも、同じく目を見開き、ロビンを凝視していた。

「黄金の鐘を鳴らせば『黄金郷』が空にあったと彼らに伝えられる、『麦わら』のあのコはそう考えてる。素敵な理由じゃない? ——ロマンがあつて……」

小さな呟きに、アーレンからもつい苦笑がこぼれる。親友がよく口にしていたフレーズが彼女の口から出たことが、可笑しく思えたらしい。

「……こんな状況なのにね……脱出の好機チャンスを棒に振ってまで……………どうかしてるわ

…」

微笑みを浮かべ、巨大豆蔓に向かって突進していくウソップを見つめるロビン。

だが、後ろに立つ二人は、それを見ていなかった。ロビンを凝視し、わなわなと肩を震わせ続けるだけであった。

「……………そいつの、その…子孫の名は…？」

「……………モンブラン・クリケット……………」

「ならば400年前の……………!!？」

歯を食い縛るような、ギシツと軋む音に、ロビンは訝しげにワイパーたちの方へ振り向く。そして、驚愕で大きく目を見開く。

「先祖の名は、ノーランドか」

戦士は、そしてシャンディアの裏切り者は、泣いていた。

ぼたぼたと両の目から滝のように涙を流し、ぐしゃぐしゃになった顔でロビンを凝視し、語られた言葉を噛みしめていた。

唾然となるロビン、そして同じく二人の変化に気付いたアーレンをよそに、クロウリーがふいに歩き出した。

「ワイパー… 貝」をよこせ……………おれがやる」

「クロウリー…!!？」

ワイパーの手から貝を奪い取り、颯爽と巨大豆蔓に向かつていくクロウリー。
ワイパーはそれと呼び止めようとしたが、通り過ぎ様に見えた彼の横顔を見て、その手が止まる。止めざる得ないほど、鬼気迫る目を見てしまったからだ。

——何？

技術を学びたい？

遺跡を走るクロウリーの脳裏に、いつかの会話が蘇る。

まだ彼らとの仲がこじれる前、もつとも大切だった妻を救ってくれた恩人に、頭を下げに行つた時のことだ。

——もしまた、あの樹熱のような病魔に襲われた時、お前達のような善人が来てくれるとは限らない……おれ達はとてつもなく幸運だった。

——…だろうなア。

それで…海の外の知識を得たいと？

——おれには力がない……死にゆく妻を救う事も。

——そんなのもうごめんだ……!!!

——だから…頼む。

真剣な表情で、どうしたものかと考えこむ栗の頭をした彼に、クロウリーは諦めず首を垂れる。

やがて彼は、ノーランドは困ったように笑いながら、クローリーに手を差し伸べた。

——まずは頭を上げてくれ。

調査の合間に時間を作ろう。

そう言ってくれた『師』の優しさを、クローリーは一度も忘れたことがなかった。

——なんだあの空は……!!?

——村を守れ!!!

何かが起こる!!!

突如「夜」に包まれた島で、来る災害を前に何もできなかつた時も。

——エルマ……目を覚ましてくれ!!!

エルマア!!!

空の海に至つた衝撃で、物言わぬ骸となつてしまつた妻を目の当たりにした時も。

——我は神なり!!!

——何が神だ……!!!

この地を、貴様らに奪われてなるものか!!!

先祖の願いを、友との約束を秘めた島を奪う輩に攻め入られた時も。

——これは……エインシエンが壊せなかつた……!!?

かつて真祖が忌み、島の奥に封じた赤い宝石を見つけ出した時も。

——上等だ：もはやこの身、ただ碎ける時を待つのみならば：！！
異形に墮ちようとも、我が本懐遂げてみせようぞ！！

悪魔が宿つていると言われたその宝石を呑み、誰もが恐れ忌む化け物になり果てた時
でさえも。

師との約束を、返しきれないほどの恩義を、一時たりとも忘れたことはなかつた。

——シャンドラの灯を：ともせエエ！！！！

そう叫び続け、島を、黄金の鐘楼を、約束を守るために日夜戦い続けた。

知った顔がいくつも没し、同じ時を生きられなくなつても、クロウリーは戦い続けた。
だがやがて、それでも抗うことのできない最悪の存在が現れた。

——ヤハハハ…。

面白いな、本当にどれだけ壊しても死なないのか？

不老不死とは本当におそれいった！

リングをかじり、片手間のように見せながら自分を組み伏せる男の顔を、クロウリー
は憤怒に歪んだ形相で見上げる。

彼にエネルは、醜悪な笑みを浮かべて語り掛けた。

——命が惜しいなら私に下れ。

働きによつては、お前の望みも叶えてやつてもいいぞ？

「神」は寛大なのだ、ヤハハハ!!!

命よりも、誇りよりも、約束も恩返しも果たせなくなる事を恐れたクロウリーは、弱い自身への怒りに狂いながら、それに応じた。

応じてしまったのだ。

だが、今の彼はもう、そんな恐怖と絶望に縛られてはいなかった。

「ハア…ハア!!?」 畜生、何なんだビクともしねエ、本当に植物か!!? 次は3連…

「どいてろ」

「え」

ボカン、ボカンと火薬の球を炸裂させ、息を切れ切れにさせるウソツプを退かし、クロウリーが巨大豆蔓に向かって跳ぶ。

そして、ほとんど黒い炭となった腕で貝を構え、豆蔓に突き付ける。

——すでに罪を背負ったこの身で…償えるとは思わぬが!!!

今だけ………たった一度でいい!!?」

おれに力を貸してくれ………エルマ!!!!

遠い空の果てか、はたまた地の底か。

手も届かない、声も聞こえない遠くへ行ってしまう最愛の妻に助力を乞いながら、ク

ロウリーは貝の殻頂を押し潰す、そして。

「『排撃』!!!」
ドンツ!!と。

地震でも起きたのかと思えるほどの衝撃が、巨大豆蔓の最後の一本を半ばから大きく
抉る。

その反動により、クロウリーの右腕は肩から跡形もなく吹き飛んでいた。

「んな…!!? なんじゃありやあ!!!」

「クロウリー!!!」

「ばかな…リ…『排撃員』!!!」

腕から煙を上げ、巨大豆蔓から滑り落ちていくクロウリー。

その目の前で、しんと沈黙を保っていた巨大豆蔓は、メリメリといやな音をたて、ゆっ
くり傾き始めた。

「おお…お…倒れるぞオ…!!!」

ウソツプの咆哮が響き渡る。

それはいわば、麦わらの一味による反撃の狼煙のようだった。

「傾いてきた…!!? ルファイ…行くわよ!!!」

「思いつつきり頼む!!!」

動き始めた辺りの景色に、ナミはウエイバーの後ろにルフィを乗せ、準備を始める。任された大役に、彼女の表情には緊張が表れていた。

「『噴風貝』の『最速』!!? ——まだ出した事ないのよね。だって強すぎて私でも制御しきれないだもん……!!」

「んじゃそれで!!!」

「OK!!!」

ルフィの応答を合図に、ナミがウエイバーのギアを限界まで回す。

その瞬間、かつてないほどの加速が二人を襲い、巨大豆蔓の上を勢いよく駆け上がっていった。

エネルはその声を耳にし、鬱陶しそうに眉間にしわを寄せていた。

「やれやれ、せっかちな者共だな……なぜ『雷迎』の完成を待てない——仕方ない。ここへ近づけぬ様に……『神の島』を少々砕いておくか……」

そう呟き、エネルが指を振り下ろす。

直後、神の島全域に雷が降り注ぎ、無慈悲な破壊をもたらしていった。

「遺跡がむき出しに……!!!」

「地盤を砕くつもりである!!!」

「嬢ちゃんが危ねエ!!??」

「ゾロもだ畜生!!!」

地盤が砕かれ、遺跡が壊れ、破壊されていく神の島。

ただ見守る事しかできないウソツプたちは、本物の神に祈るように、天を仰ぎ続けていた。

「ムダだ…エネルギー…」

「クロウリー…!!??」

「貴様には落とせやせん……………シヤンドラの地に生きた、誇り高い……………戦士達の歴史を……………あの雄々しき真祖の生き様を……………!!!」

片腕を失くし、その身を崩れさせながら、クロウリーは無知なる神に唾を吐く。

もはや、その栄光は長く続かない。神を騙った怪物は、必ず墜とされるのだと確信し、クロウリーが吠える。

「どこにあらうと力強く!!! 生み出し…育む!!! この雄大な“力”を!!! お前には落とせやしない!!! お前がどれだけの森を燃やそうと!!! どれだけの遺跡を破壊しようとする!!! 大地は負けない!!!」

その言葉の通り、神の島は墜とされなかつた。

どれだけは貝の雨が降り注ぐごうとも、雄大な大地は揺らぐことはない。

そしてついに神の元に、最後の希望たる青年が拳を携えて到達した。

「いけ…麦わら…」

「どいつもこいつも……………」

「黄金の鐘を渡せエエエ!!!」

苛立つエネルを前に、ルフィが雄叫びを上げるように吠える。

万事が自身の思うようにならなくなってきたことで、エネルは徐々に余裕をなくし始めていた。

「もうよい貴様ら……!!! ウンザリだ……この大きさを充分だろう……………!!? 国ごと消

えろ!!! 『雷迎』!!!」

自身に顔を及ぼす輩も、足元で騒ぐ矮小な輩も、潰しても這い出してくる輩も、まとめて消してやろうとエネルが最後の裁きを下す。

迫り来る黒雲に、ルフィがツッコもうとしたその時だった。

ズンツ、と真下からせり上がった凄まじい気配に、ルフィは思わず真下を見下ろした。

「………… 『聖杯献火』」

そこにいたのは、ほとんど死人の我が身を無理矢理立たせ、両拳を構えるエインシエ
ン。

がくがくと身を震わせる彼女の髪が次の瞬間、炎のような輝きを放った。

「この命………魂!!? 全てをこの一撃に捧げよう……我が名はアイザック・エインシエン!!! 八百の歴史を背負いて、いずれは——」

それはまるで、自身の命を燃やしているかのような。

猛々しく美しくも、儂く次の瞬間には消え失せていそうな、見る者の目を奪う輝きを纏い、天使は最後の力を振り絞る。

そして、天空を覆う黒雲の塊に、視界も虚ろな彼女が狙いを定める。

「神を墜とす者なり!!!」

(皆……力を貸してくれ……!! 遠き時代の我が孫娘よ……許せ!!? 我が悲願のために、お前を使うこの私の蛮行を!!!)

ぶしゅっ! ぼきん!と壊れていく身体を無理矢理使い、天使は天空に向けて両の拳を放つ。

命の火を燃やしながら、エインシエンは今の自身に放てる最大の一撃を放った。

「^{ヘラクレス・フエアウエル}無双の終撃!!!」

それが放たれた瞬間、エインシエンの足場が隕石でも落ちてきたかのように陥没し、彼女の全身から夥しい量の血が噴き出す。

大気を貫く、神を墜とす一撃は、やがて黒雲の塊の真下に直撃し。
まるで風船を割るかのように、粉微塵に吹き飛ばしてみせた。

第154話 “友よ、君に捧ぐ”

竜の咆哮のような、大気が震える轟音が響き渡る中。

突如晴れ渡った空の上から、神々しい太陽の輝きが満遍なく降り注ぎ、空の民とシャンディア達を照らす。

「“雷雲の塊”が………!!? 消えた!!!」

「——何が起きたんだ………!!!」

もはや、全てが救われる奇跡を願ひ、本物の神に祈ることしかできなかった彼らは、明るい光の中に晒されたことで戸惑いの声をあげる。

雷を受け、倒れ込んでいたゾロもまた、その光景に言葉を失っていた。

「アイツがやったのか……!!!」

「うおおお——っ!!! うおおお~~~~っ!!!」

すぐ真上から迫っていた絶望の塊が消失したことで、歓喜の声をあげるウソップ。

それに鬱陶しそうに顔を歪め、続々と目を覚ましたサンジとチョップは、何が起きているのかと首を傾げる。

「鳴らせエ麦わらア!!! “シャンドラの灯”を!!!」

「聞かせてくれ小僧……!!!!」島の歌声を!!!!」

ワイパーとガン・フオールは、「神」に挑む麦わらの青年に向け、力の限り叫ぶ。

もう、自分たちにできることはやり尽くした。全てを、遥か真下の地上で待つ友のため、戦うあの青年に託し、吠え続ける。

「頼む」麦わら」!!!! 聞かせてくれエ!!!」

エインシエンもまた、巨大豆蔓の上を駆け上がる青年達に向けて祈り、願う。

あたりを自身の血で真つ赤に染め、体が弾け飛びそうな激痛に苛まれながら、血反吐を吐きながら叫ぶ。

「私の声はもう……届かないんだ!!!」どんなに声を枯らして叫んでも……!!?」どんなに涙を流しても……届きやしないんだ!!!」だけど!!!」

ぼろぼろと流れ落ちる涙。蘇るかつての悲しみと後悔。

しかしそれを打ち消すほどに眩しい、最愛の友達との記憶が走馬灯のように脳裏をよぎり、亡霊をこの世に繋ぎ止める。

手を伸ばした先にある未来を夢見て、エインシエンは声を張り上げる。

「きつと届く……きつと伝えられる!!!」あの鐘の音なら……きつとあいつらの元に届くんだ!!!」だから……頼む!!?」麦わら」!!!」

巨大豆蔓の上から飛び上がり、ルファイが巨大な黄金の球を纏った拳を振りかぶる。

黄金の船を背にし、さらなる天空の果てを指すエネルギーに向けて構える彼に、エインシエンが吠えた。

「『シャンドラの灯』をともせエ~~~~!!」

その声が届いたのか、ルフィは自身の腕を後方に伸ばし、ぎりぎりと捻っていく。

長く伸び、振れるごとに蓄積していく威力を実感しながら、ルフィは空に君臨する“神”を睨みつけた。

「じゃあな!!! お前ごと鳴らしてやる!!!」

「おのれ…『雷迎』が!!! 青海のサル共が!!! 不屈き者共がア~~~~!!!」

エネルギーは忌々しげにルフィを睨みつけ、己が身を完全なる雷に、巨人の姿に変えて襲いかかる。

弱点である斬撃を用い、ゴムの体に突き立て、再び突き落とそうとするも、ルフィはその度に抗い、空にとどまり続ける。

「『ゴムゴムの』オ~~~~!!!」

同じ高さにとどまるルフィを、エネルギーが忌々しげに睨み、新たに精錬した刃を構える。

怒りに燃える“神”を前に、ルフィはいよいよ溜め込んだ力を解放し、その一撃を撃ち放った。

「『黄金回転銃』!!!!」

—— お前が再びジャヤに着いたら—— 消えた我らをどう思うかな。

もう少し待て、今伝えるから。

おれ達はここにいます!!!

シャンドラの灯をとませ!!!

—— そうだ。

聖地は再び歌うのだ。

……… いつかきつとな。

—— 上等だ……もはやこの身、ただ碎ける時を待つのみならば……!!!

異形に堕ちようとも、我が本懐遂げてみせようぞ!!!

私は—— “偉大なる航路” のジャヤという島で、巨大な黄金都市を見た。

黄金郷は存在する。

—— “黄金郷” も “空島” も、過去誰一人無いと証明できた奴アいねエ!!!

それでこそ “ロマン” だ!!!

……… かか様?

どこにいくの……?

—— 遠い遠い……… 空のある島にな。

……… 友達との約束を……果たさなければ。

エネルギーを押し潰し、黄金の球体を砕きながら、ルフイの拳が黄金の鐘楼に激突する。衝撃を受けた鐘楼は大きく揺れ、中の舌も内側で揺れ、ぶつかる。

400年に及ぶ、無念の旅路。

幾百、幾千にも及ぶ多くの者達が戦い、そして散っていった、
「約束」をかけた信念のぶつかり合い。

その終止符が、ついに打たれた。

「届け~~~~~!!!」

——おっさん？

聞こえるか？

「黄金郷」はあつたぞ!!!

——400年間ずっと、「黄金郷」は!!!

空にあつたんだ!!!

全身全霊を込めた青年の叫び。

遙か遠い空の下にいる友達のためだけに奏でられた音色が、400年ぶりに響き渡った。

カラアーン!!?!

その音はまさに、この世のものとは思えない美しさ。

地の底まで、魂の奥底にまで伝わってくるようなそんな音色が、何度も何度も奏でら

れる。

それを聴いた全ての者達が、呼吸さえ忘れたように聞き入っていた。

「やりやがったあんにやろう~~~~~~~~!!」

「何て美しい……………」

「キレイな音だなー、何だコレ☒ 何だ?!?」

麦わらの一味は、その美しさにただ圧倒され。

シヤンディアの戦士達と空の民は、鳴り響くその音色にひたすらに感涙し、立ち尽す。

「いつか…こんな時が来ると…信じた…」

「…………ノールランドの聞いた鐘の音ってのは…」

「スー…これは…………大地ヴァースが歌ってるのかしら…」

「神は、いるのか……………!!?」

まるで抗い続けた戦士達に、勇気をもって立ち向かった彼らに向けて、本当の神が祝福を授けたかのような。

力強く、雄々しく、その音を響かせ続ける鐘楼に、人々は心を奪われていた。

「——何という奇跡…400年の沈黙から…もはや二度と鳴る事のない鐘と、半ば諦めていた……………!!! 大戦士カルガラ、聞こえますか。『シヤンドラの灯』の響き」

「……………聞いているか？ ノーランド。ずいぶん待たせた」

はるか昔に起きた、悲しい出来事。

それを語り続ける役目を負った酋長も、その役目を引き継いだワイパーも、ただじつとその音に耳を傾け、涙を流す。

「やつと…『約束』が果たせた…!!!」

地面に大の字に倒れ込み、天を見上げるクロウリーもまた、滂沱の涙を流し、長い奮闘の日々を思い返す。

そして、ようやく下す事の出来た荷の重さに、清々しい心地で目を閉じる。

「ジュラララララ…ジュララララララララ!!!」

「聞こえるか…!!! ノーランドオウ!!! 聞こえるか…!!! カルガラア…!!!」

遺跡で目を覚ました大蛇ノラも、滝のように涙を流し歓喜の咆哮を上げる。

その方向に合わせるように、エインシエンも狂喜の叫び声を上げ、遠い空の果てにいる友達に呼び掛けていた。

「400年…!!! 400年も!!! 待たせてしまつて本当にすまない…すまない!!! だが

…ようやく届けられた…ようやく伝えられた!!! 私の旅は…ようやく終わった!!!」

娘に自身の記憶を刻み、その子にも受け継がせ、罪を刻み続けた長い時。

その全てがいま、報われた。

願ひ続けた宿願が果たされ、亡霊の心を縛っていた呪縛は、粉微塵に弾け飛んでいった。

「私は、ここにいます!!! ここにいますぞ…友よ~~~~~!!!」

遠い遠い、何処にいるかもわからない友達に向けて。

エインシエンは力の限り、叫び続けるのだった。

——鐘の音は——

去る都市の——栄華を誇る“シャンドラの灯”。

戦いの——終焉を告ぐ、“島の歌声”。

400年の——時を経て鳴る、“約束の鐘”。

浮寝の島の旅路は長くも、遠い記憶は忘れがたし。

——かつて人は、その鐘の音に言葉を託した——

遠い海まで届ける歌に、誇り高い言葉を託した。

「鳴った」

「うん」

「聞こえたかな、おっさん達に」

「ええ…きつと」

力を出し切ったルフィは、清々しい気持ちで傍らのナミに問いかける。

ナミも優しい微笑みを浮かべ、それに頷いてみせた。

——『おれ達はここにいる』

青い空は何処までも広く、高く、明るく晴れ渡っていた。

??

「おれは後でいい」

「だめだ、すぐに手当てしないと」

鐘の音がどこか遠くへ消えていき、静寂が戻ってきた頃。

手当にやってきたチョッパーに意地を張ったゾロが、くいつと顎で別の重傷者を示す。

「おれより……………アレ…何とかしてやれ。死んじまうぞ……………!!?」

ゾロが示す方に目をやれば、仰向けに倒れる銀髪の男の姿が目に映る。

慌てて駆け寄り、彼の身体の状態を確認したチョッパーは、驚愕で目を見開きその場で硬直した。

「これは…!!!」

(何だこの身体……………!!? 普通じゃねエ!!? それに……………この状態じゃもう手の打ちよ

うが……………)

身体の端から、ボロ炭のように崩れていく身体。命の全てを絞り出したかのように乾

いた姿。

通常の生物ではありえない光景に、チョッパーは呼吸も忘れて息を呑んだ。

「……………もう……………いい……………」

呆然となるチョッパーに、うつすらと瞼を開いたクロウリーが告げる。

今にも途切れそうな声で、かつてとは比べ物にならない弱々しい様を晒し、疲れ切った様子でため息をつく。

だが、その表情は見るからに誇らしげで、満足げだった。

「おれは……………すこし……………長く……………生き過ぎた……………いい加減……………眠りたい……………」

「てめエ……………」

「無念を遺す事を拒み……………外道に堕ちたこの身だ。……………向こうで……………奴らに詫びまくらねばならん……………気の遠くなる……………役目が待っている」

ふっ、とその口元笑みが浮かぶ。

長きに渡り、求め探し求めた約束の音色が耳朵に蘇ってきたのか、安らいだ顔で天を仰ぐ。

その様子に、チョッパーはもう何も口を出すことはできなかつた。

「最期に……………久しぶりに……………あの鐘の音を聴けた……………もう……………思い残す事はない」

そのまま瞼を閉じ、大きく息を吸い込むクロウリー。

全ての動きが停止する直前、ハッと彼の目が見開かれた。

「……ああ、そうか。そこにいたのか。待っている……今……そこに行くから………みんな……」

渴き切った目から、また涙があふれる。

焦点の外れたその目に映る、最愛の妻や友達のを最後に脳裏に焼き付け、クロウリーは小さく笑う。その途端、彼の肉体の崩壊は一気に進んでいった。

「……礼を言うぞ……我が……友……達……よ………」

その一言を最期に、クロウリーは瞼を閉じ、塵となっていく。

最後に残った赤い宝石がコーンと地面に落ち、粒子となって風に消えていった。

「……馬鹿者め」

赤い染みの広がる地面に腰を下ろすエインシエンは、事切れた男の最期の言葉に呆れるように吐き捨てる。

心配そうに見下ろしてくるノラを背に沈黙していた時、彼女に近づくある女の姿があった。

「エレノア……いいえ、*天災妃*、アイザック・エインシエンと呼ぶべきかしら」

「……*オハラ*の悪魔か」

緊張か戸惑いか、ややこわばった表情で声をかけたロビンに、エインシエンはため息

交じりに視線を返す。

警戒音をあげるノラを制し、真剣な眼差しを向けてくる美女に向き直る。

「どんな呼び方でもいい……ここに居るのはただの残滓。消え損なつたただの亡霊ではない……それも、もう長くない」

「あなた達は何者なの……？ 何の為に、悠久の旅をし続けているの？」

「焦るな……その答えは、いずれ君の旅の中で知る事だ」

声を出す事すらもう苦痛なのか、青白い顔で天を仰ぎ、黙り込む亡霊。

しばらくの間沈黙していた彼女は、やがて鋭い視線でロビンを見つめ、掠れた声で告げた。

「ニコ・ロビン……巨大豆蔓の元を目指せ。『大鐘楼』はまだそこにある」

「!!?」

「君が『真の歴史』を望むのなら……君もまた、繋がなければならない。険しい道だが……奴らと一緒になら、きつと大丈夫さ」

小さな笑みを見せ、それ以降目も向けなくなったエインシエンに、ロビンは困惑し後退る。

彼女を無視し、エインシエンは顔を摺り寄せてきたノラの頬に、そつと優しく触れる。

「……………チビよ」

「ジュララララ……」

「長い長い旅が終わり……私の『時間』も尽きた……いずれここにいる私も……消える」

すりすりと巨体を摺り寄せるノラを、エインシエンは愛おしそうに見つめ、涙を流す。

徐々に自分の意識が薄れてくるのを感じながら、ぼやけていく眼の奥に健気な大蛇の顔を焼きつけていった。

「お前は……もう少し遅刻しておいで。カルガラの子供達を……今しばし見守っていておくれ」

「ジュララ……ジュララララ」

「泣くな……大丈夫、鐘はまた何度でも鳴る……その音が響く時、私達はここに戻ってくる」

ぼたぼたと涙を止める事の出来ない、400年の時を越えて唯一残った友。

そんな彼に、エインシエンはにっこりと笑顔を見せて願った。

「だから……笑って見送っておくれ、ノラ」

徐々に存在の薄れていく、愛しい存在の最期の願い。

ぶるぶると身体を震わせていたノラは、やがて同じように笑みを見せる。無理矢理作った、しかし友を見送るために浮かべた優しい笑顔を。

嬉しそうに頷くエインシエン、その眼が不意に、大きく見開かれた。

「……………おお、おおお……………!!? そうか……………そうか、届いたか……………!!?」

虚空を見つめ、顔中をぐしゃぐしゃにして笑うエインシエン。

彼女の目には確かに、自分に向かって手を伸ばす、愛した二人の男達の姿が映っていた。

「こんな遠い所に……………迎えに来てくれたのかい……………? ああ……………ごめんよ、すぐにいくから……………!! もう……………絶対に……………離れたりはせんぞ……………友よ……………!!!」

すうつ……………と肉体という器から、自分という存在が抜け出ていくのを感じる。

全身に絡みついていた柵の全てから解放されたような気分で、エインシエンは飛び出し、男達の腕の中に飛び込んでいく。

その光景を、永い眠りから目覚めた子孫が、切なげな表情で見送っていた。

「……………おばあちゃん」

小さな呟きをこぼし、エレノアは重い瞼をそれ以上開けていられず。

ゆつくりと、再び意識を手放すのだった。

第155話 敵はもういない

「——よし、こっちはなんとか終わった」

ふう、と汗を拭うチョッパーの見下ろす先で、エレノアが寝息を立てる。

血塗れであちこち骨折し、火傷だらけだった身体にはきつちりと包帯が巻かれ、痛々しさが軽減されている。

呼吸も穏やかで、一安心した一味全員がほっと息をついていた。

「こんだけボロボロになってんのに……ホントに丈夫だな、天族つてのは」

「傷痕は残りそうだけどね。無茶するんだから……」

「しばらくは目エさまさないだろうな、ゆっくり寝かせてやろう」

「そうね」

バクバクと、共に見つけてきた食糧を食いまくるルフィも、眠ったままのエレノアをじっと見つめて頷く。

あらかた食い終えてから、ルフィたちは満足げに息をつき、互いに目を合わせあった。

「ふ——…食った食った」

「すっかり夜だな」

「どうする？ 船に戻る」

腹を摩り、夜空を見上げるルフイたちにナミが尋ねる。

が、それを聞いたルフイとウソツプは呆れたような半目になり、やれやれと肩を竦め始めた。

「ナミ、お前何言ってるんだ？」

「どうしたの？」

「ウソツプ、あんな事言ってるぞ」

「人間失格だな……」

「何なのよっ!!?」

意味深に馬鹿にされ、苛立つナミ。あれだけ大騒ぎがあつた後なのだから、休むのが当然なのではないのかと怒りをあらわにする。

ルフイ達はそれを真つ向から否定し、ある事を実行に移すのだった。

「()は——?」

全身を襲う鈍痛に顔をしかめ、ワイパーが目を覚ます。

辺りを見渡せば、同じように怪我を負った者達が寝具に横たわり、治療を受けている光景が目に見える。

そしてすぐ近くには、ガン・フォールの姿もあった。

「シヤンドラの遺跡内である」

「ガン・フォール……貴様!!? “空の者” ……!!?」

「あつ、まだ動いちや……」

思わず声を荒げ、飛び掛かりそうになるワイパーだが、傷の為かほとんど動く事ができない。

そのうえ治療に当たっていたコニスにも止められ、渋々寝具に戻らざるを得なかった。

「安静にしている。戦いの負傷者に区別はない」

「酋長……!!? ……黄金の鐘は……!!? おれ達にはまだ、アレを守り抜く使命が……」

「急ぐなワイパー……少し成り行きを待て……」

諭すように語りかける酋長に、ワイパーがまた声を上げるも、彼はそれを冷静に宥める。

まるで、喧嘩を終えて怪我をした悪ガキを宥めるように。

「遠い過去に、例えどんな壮絶な戦いの理由があつたとして———今生きる我々にはこの空が故郷……」

「酋長」

「聞け…ワイパー、少なくとも大地は、何者をも拒んではない」

「……………そうだとも」

同意の頷きを見せるガン・フォールに応じるように、酋長は背を向けて歩き出す。

進んだ先にある垂れ幕、それを大きく開き、その先にある光景を、戦いを終えた戦士達全員に見えるように晒してみせた。

「少なくとも……………!!? 人々は今、誰一人、戦いなど望んではない」

そこで開かれていた饗宴に、ワイパーはひたすらに圧倒される。

空の者も、シャンディアも、青海人も、大蛇も、拳句の果てに雲ウルフ達まで一緒になつて、大きな炎を囲んで騒ぎまくっている。

酒を躲し、美食を躲し、歌と踊りを躲し、いがみ合っていた全ての者達が満面の笑顔を浮かべている。

その中心にいたのは、あの麦わら帽子の青海人だった。

「宴だ〜!!」

心の底から楽しむ、歓喜の声に、ワイパーは呆れて笑いしか出てこない。

いつしかガン・フォールや酋長まで一緒になつて大笑いする始末。

そんな騒がしく、明るい宴の中。

深い眠りにつく天使の少女が、フツと小さな笑みを浮かべるのだった。

?

「本当だ…!!? 本当にあつたぞ!!! あの人の言った通りだ!!!」

昼夜問わず続けられた宴の後、参加した誰もが力尽き、眠りこけていた翌朝の事。あの知らせを受けたシャンディアの者達が大声を上げ、続々と集まっていた。

その目的は、失われたと思われた秘宝を引き揚げる事だ。

「おい!!? 力がある奴をもつと呼んで来い!!!」

起きる気力もないほどに疲れ切っていた者、そして傷付いていた者達だが、かの鐘楼が戻って来るという想いで体を叱咤する。

そのうち、空の民までもが笑顔で手助けに入り、鐘楼を引く人数はとんでもない数になつていった。

「おっしや…!!? おれも手エ貸すか!!?」

「感謝するぞ、青海のあんた!!!」

「お礼ならあの人……真祖様に。場所を知っていたのは彼女よ」

アーレンも腕まくりをしながら向かい、シャンディアの一人が情報を齎してくれたロビンに感謝を述べる。

それを軽く受け流しつつ、ロビンはやや険しい表情を浮かべていた。

——求めなければ見つかる事のない石 “歴史の本文” ……

「ここで…諦めがつくと思っただのに…。」

彼女が求める過去の遺物、それに刻まれた真実。

果たしてそこにあるものは自分の求めるものなのか、と愁いを見せ、ロビンは戦士達の後を追いかけた。

「見るからに誇らしい……………!!?」

「だが、横の柱が一本折れてしまったな」

数時間をかけ、巨大豆蔓の上から引き揚げ、大地に戻した黄金の大鐘楼。

ただ美しさに圧倒される空の民とは逆に、シャンディアの戦士達は神妙な様子で、その神々しい姿を凝視していた。

「ほら、ここを見ろ。これが『歴史の本文』…」

「我らの先祖が…都市の、命をかけて守り抜いた石…!!?」

台座にあるのが、アラバスタのように青海で度々見つかる『歴史の本文』。

今の世に読める者は一人もいない、いてはならないという古代の失われた文字が掘られたそれを、戦士達は息を呑みながら見つめる。

好奇心に駆られたのか、戦士の一人が酋長に振り向いた。

「一体何が書かれているんです、酋長…」

「知らずともよい事だ………我らはただ——」

酋長が若者の問いを一蹴しようとした時。

まるで謳うように、その場を訪れた美女がある一文を読み上げてみせた。

「『真意を心に口を閉させ。我らは歴史を紡ぐ者、大鐘楼の響きと共に』」

ギョツと目を見開き、酋長は声がした方へ振り向く。

同じく戦士達も、じつと真剣な眼差しを鐘楼に、古代の遺失物に向けるロビンを凝視し、言葉を失くして立ち尽くす。

「おぬし……なぜその言葉を」

「シャンドラの遺跡に……そう刻んであったわ。あなた達が代々これを守る『番人』ね」

「まさか……読めるのか!?」 その文字が……!!!

酋長の問いに答えることなく、ロビンは鐘楼の文字に向かって近づくと、

空の民は何のことかと言った風な様子で、戦士達はごくりと息を呑み、文字に目を通す美女を凝視する。

やがてロビンは、刻まれた長い一文を解説し、内容を語った。

「神の名を持つ『古代兵器』、『ポセイドン』……そのありか」

ざわつ……!と場が騒然となり、戦士達は互いに顔を見合わせる。

何故、古代兵器などと言う物騒なものが、大切なものとして刻まれ、守るよう言い聞

かされてきたのかと。誰もが戸惑い、狼狽える。

ロビンも、自分が求めた一文ではない事に落胆し、その場を離れようとした。

だがそんな彼女を、鐘楼の一部を見つめてしゃがみこんだアーレンが呼び止めた。

「…おい嬢ちゃん、ここに彫つてあるのつてよオ……」

「え？」

老人が指さす物に、ロビンがすぐに踵を返し、一文に目を通す。

そして驚愕で目を見開き、思わず数歩後退ってしまった。

『我らここに至りこの文を最果てへと導く』

海賊ゴール・D・ロジャー』

ロビンが読み上げた文章に、アーレンも同じく尻餅をつき、後退る。

空島に来て数年、しかしそんな稀有な状況にあらうとも忘れたことがない、大犯罪者の名前がそこに刻まれていたのだから。

「『海賊王』じゃねエか…!!? ——まさか、この空島に来ていたのか!??」

「なぜこの文字を扱えるの…!!?!!?」

置いてけぼりにされている空の住民達をよそに、ロビンとアーレンは確かに刻まれた一文をこれでもかと凝視し、息を呑む。

すると、様子を一変させた二人を見ていたガン・フォールが、訝し気に問いかける。

「……………ロジャーと書いてあるのか？」

「知ってるの？」

「あ。そういやア…昔、海賊のダチがいるつつつてたな。それがか…!!？」

「20年以上前になるが、この空にやってきた青海の海賊である。その名が刻んであるのか」

当時のことを思い返しているのか、遠い目になったガン・フオールが虚空を見つめてこたえる。

しばらく黙り込み、考えていた様子のロビンは、しばらくするとハツとした様子で目を見開いた。

「……………そういえば『歴史の本文』には2種類の石がある。『情報を持つ石』と…『その石のありかを示す石』……………まさか…『真リオ・ポーネグリフの歴史の本文』とは……………!!!」

何かに思い至った様子のロビンに、アーレンは困惑気味に視線を向ける。

ロビンは彼に構わず、沈黙したままの酋長に向き直り話し始めた。

「酋長さん、この『歴史の本文』は、もう——役目を果たしているわ」

「……………役目を？」

「そう…」

ロビンは語る。『歴史の本文』とは、その一部はつなげて読むことで、初めて意味を

成す仕様になっていなのだ。

そうしてできる文章こそが、『空白の歴史』を埋める真の歴史を示すのだと。

「——だから、もう……」

「では……」

この石の役目は終わっている、そう告げようとしたロビンの目の前で、酋長は突如膝をつく。

ボロボロと涙を流し、安心しきった表情で、ロビンの告げた事実を受け止めていた。

「我々は……もう……戦わなくていいのか……？　そうか……先祖の願いは……！！？」　果たされたんだな……！！？」

「ええ……」

シャンディアの戦士達が心配そうに駆け寄る、歓喜を見せる酋長を見やり、ロビンはまた沈黙し立ち尽くす。

ある人物の最期の一言が、脳裏に過ったからだ。

『君が『真の歴史』を望むのなら……君もまた、繋がなければならない』

過去の天族の一人、かつてノーランドに付き従った女の告げた言葉の意味は、こういう意味だったのだ。

そして彼女が伝えようとした遺志についても、ロビンは険しい表情で考え出す。

——つまり私も、今までに読んだ『歴史の本文』の文章を…導かなければならない…。

“偉大なる航路”の最果て——『ラフテル』へ!!？

より一層、海賊王を目指すあの青年の旅についていく理由ができた。

そう決意を新たにするロビンの元に、ようやく落ち着いたらしい酋長が笑顔と共に話しかけた。

「時に娘………あんた達オーゴンをほしがっていたな。青海では『大地』よりも価値があるのだと…この折れた鐘楼をどうだ。鐘の方はやれんが…」

「ああ、それはいい考えだ。もともとあんた達には何とかして礼をしなきゃならんのだから!」

「いいの? それはみんな喜ぶわ!」

酋長の提案に、空の民全員が同意の声を上げる。

しかしアーレンはそれに渋い顔をし、にこにここと笑うロビンに耳打ちを行う。

「おいおい…適当言いやがって。こんなに乗せたらあの船沈むぞ」

「フフ…!」

「いや、フフ! じゃなくてよ」

いくらお礼であつても、こんなでかいものを贈られても困るだろうと伝えたいが、完

全な善意であるために断りにくい。

どうしたものかと頭をかくアーレンをよそに、ふとガン・フォールが不思議そうにロビンに声をかけた。

「女よ……あの麦わらの小僧だが、かつてのロジャーと似た空気を感じてならぬ。我輩の……気のせいか……？」

顎に手を当て、首を傾げて訝しむ彼に、ロビンは答える。

青海にまだ残る謎であり、大いなる真実につながるであろうその一欠片についてを。

「彼の名はモンキー・D・ルフィ。私も興味が尽きないわ」

「“D”？ 成程、名が一字似ておるな……!!？」

「そう……それがきつと……歴史に関わる大問題なの」

ただ面白い事を聞いたというように笑うガン・フォールとは真逆に、ロビンは意味深な微笑みを浮かべ、そう呟いた。

「おい見ろ、ロビンとおっさんだ!!」

「おっい!!？ ロビ……ン!!？ 急げ急げ!!？ 逃げるぞ、黄金奪ってきた」

「アホ!!？ 言うな!!？ 後ろ見ろよ、みんな一緒に帰ってきてる」

「コリヤ一気に帰ってきたな」

「ヤベーー!!? 巨大大砲だ!!?」

「ギャ~~~~!!? 大勢いるぞ!!!」

鐘樓の柱をえつちらおつちらと運び、麦わらの一味の元に向かう空の住民達。

すると遺跡に着いた時には、既に大荷物を抱えたルフィたちが慌てて駆け出そうとする姿が目映った。

「何騒いでやがんだあいつら…」

「船に乗れ!!? もうここにはいられねエ!!? ほら見ろ大漁つ!!! 金持ちになった!!!」

袋にパンツパン」

眉間にしわを寄せるアーレンは、ルフィが担いでいる鞆の中から覗く黄金に目を見開く。

あのひと袋だけでも、相当な額になる量である。いつの間になんなものを手に入れたのか。

「ん? おいまさかあいつら、もうここを出る気じゃ」

「おい待てお前ら!!! 待ってくれ!!?」

お礼として持ってきた巨大な黄金の柱を持ったまま、空の住民たちは思わず声を荒げる。

そんな彼らに、ウソツプがいきなり格好良くポーズをとり、声を張り上げた。

「待て待て待てと呼ぶがてめエら!!?」

「おオ!!? 言つてやれウソツプ!!?」

「命を賭けて!!! はるばる来たこの空島の!!! 世に伝説『黄金郷』!!! 誇り高き海賊様がつ!!? 手ぶらでオチオチ帰れるかってんだア!!?」

「ロビンちゃ〜〜ん、急げ、捕まるぜ〜〜!!」

言うが早いか、ルフイたちは一目散に走りだし、ぽかんと呆ける住民達を置き去りにしてしまう。

その光景に、ロビンもアーレンも思わず声を上げて嗤ってしまった。

「捕まるって何の話だ!!? おれ達は礼を……」

「おいあんた達…!!? このオーゴン受け取ってくれるんじゃ」

「ふふつ、いらぬみたい」

「ガツハハハ!!? そりやそうだ!!?」

その返答に、空の住民達は皆そりやないよばかりに目を見開き、固まる。

苦勞してここまで運んできたのに、それ以上に何もお礼を受け取ってもらえないなど、彼らの誇りが許さなかった。

「逃げろ〜〜!!?」

「「「待てエ〜〜!!?」」」

片や誰も取り戻す気のない黄金を背負って逃げ出し、片やお礼として受け取ってほしい巨大な黄金の塊を担ぎ、あとを追いかける。

何ともおかしな大捕物が始まるのだった。

第156話 「私は誰」

真つ白な雲の海を、船は行く。

探しに探した黄金の山を積み、空の民に案内されながら、青い海に帰る道を進んでいく。

「黄金!!? 黄金!!? 黄金!!?」

「ついにおれ達は、大金持ちだぞ!!? 何買おうかつ!!?」

キラキラと美しい輝きを放つ財宝の前に、青年達は大いにはしやぎまくる。

無理もない。これまで彼らは食費に追われ、赤字が続く貧乏海賊だったのだ。多少羽目を外しても誰も咎めない。

「でつつつつけエ銅像買わねエか!!?」

「バカ言え何すんだ、それで。ここは大砲を増やすべきだ!!? 10門買おう!!?」

「ナミさん♡ おれ、鍵つき冷蔵庫がほしい♡!!?」

「おれなア! おれはなア!!? 本が買って欲しいんだ!!? 他の国の医学の本読みてエんだ」

「酒」

「ちよつと待つて待つて、あんた達」

目を輝かせるルフィ達だが、一番理性を外していそうなナミが冷静に待つたをかける。

航海士兼金庫番である彼女は、はしやく彼らを見張っていなければ不安で仕方がないようだ。

「お宝の山わけは、まずここを降りてからよ！ あんたらの好き放題買物したら、何も身にならなそう……」

言いながらナミは、ちらりと視線を仲間の一人に向ける。

そこには、ウソツプ手製の車椅子に腰かけ、全身を包帯まみれにしたエレノアがぼんやりした様子で空を見上げている姿がある。

出航した時から、ずっとこの状態で黙ったままなのだ。

「……………」

「…で、あれは一体どうしたんだ？」

「さつきからあなのよ……………やっぱまだ、あの人が取り憑いたままなんじゃ…」

突如別人に入れ替わるという、摩訶不思議な現象を目の当たりにした一味には、何が起こつてもおかしくないという不安がある。

意を決し、ルフィがエレノアの元に歩み寄って声をかけた。

「おいエレノア!!? しつかりしろ!!? それともお前、あいつなのか!!!」

「…ああ、うん。別に何ともないよ………ただ」

どこか夢心地な様子で、エレノアが反応を返す。

その目は、何も遮るもののない青い空——そのさらに遠くにある場所を探しているように見えた。

「散々人の体で好き勝手されたのに………あの人の過去とか痛みとか知っちゃったから……怒るに怒れなくてさ。どうしたもんかと………」

今回の冒険で、最も被害を被った彼女の眩きに、ルフイたちはかける言葉を失くす。

もうこの場にはいないあの人物、彼女が見せた凄まじき覚悟と無念は、無視しがたい迫力を有していた。

「400年前の天族か………とんでもねエもん見ちまったな」

「『記憶の継承』って………ああいう事なのかしらね。大昔の人が現代に蘇るなんて、不思議な話」

「そんなにスゴかったのか?」

「ああ、スゴかったぞ。バケモンみたいに強かった」

「…それでエレノア………あいつはあの後………」

「………消えた。私の頭痛と一緒にね。それからかな………なんか、私の中の大きな何か

が消え去ったみたいでさ、それがちよつと……寂しい……虚しい？ 変な感覚なんだ……」

恐る恐ると言つた風に尋ねるウソツプに、エレノア自身もよくわかつていない様子で答える。

初めての感覚、初めての現象の体験、それらを未だ上手く消化しきれないようだった。

「……ん、まあいいや。とにかくこれでいつも通り！ みんなには心配かけちゃったね」「本当に大丈夫かア？ 一番ボロボロになつてたじゃねエか」

「へーきへーき」

身を案じる仲間達を安心させようとしてか、エレノアは車椅子に腰かけたままにこつと笑顔を向ける。

しかし今の彼女の姿は痛々しいという外になく、その言葉をそのまま受け取るのは難しい、と言うか不可能だった。

「チョツパーのおかげでだいぶ良くなつたからさ、心配ご無用!!? にやははは——
ごべふつ!!!!」

「ぎゃ——つ!!?」

気楽そうに笑っていたエレノアが、突然大量に吐血したことで、チョツパーを始めとする全員が騒然となる。

挙句、顔の下半分と胸元を真っ赤に染めたエレノアがガツクリと項垂れ、より一層の悲鳴が一味から上がるのだった。

「だから言っただろうがバカ!!?」

「ああああエレノアちやア〜くん!!!」

「エレノアが死んだ——っ!!!」

「医者ーっ!!? 医者〜っ!!!」

「だからあんただっての!!!」

「騒がしい奴らだぜ…」

ブクブクと血の泡を吹いて悶絶し、全身を痙攣させるエレノアを巡って全員が慌てだす。

そんな青年達の大騒ぎを、アーレンは欄干に腰かけたまま、やれやれと肩を竦めて見つめていた。

長い、長い雲の海の旅。

途中エレノアがまた血を吐いたり、空の生物に襲われたり、色々な騒動を経てから。ついに一味は、空の海の果てへと辿り着いた。

「みなさん！ 前方をご覧下さい」

「見えました、〃雲の果て〃です！」

案内を買って出てくれたコニスとパガヤの声で、一味は進行方向にある大きな門に気付く。

その先はもう一本道。もはや懐かしき青い海に繋がっている、空の海の出口である。

「へ——！ あそこから降りられるのかーっ!!?」

「あ——、降りちまうのかー、おれ達」

「いざ降りるとなると………確かに……名残惜しいな」

「このまっ白い海ともお別れだ」

「空島楽しかったなー、恐かったけど」

空の海に至るときは、散々無茶だ死んでしまうと騒いでいたウソツプやチョッパーが、寂しそうにあたりの景色に目をやる。

苦勞して辿り着いた分、手放すのが惜しくなったようだ。

「——あの門抜けたら………〃雲の川〃で一路青海つて具合か………」

「また来れるかしら、〃空島〃……!!?」

「……ばかりはなー……」

他の面々も同じようで、真っ白な世界を見渡し、臉に焼き付けようとする。

その時だった

「よっ」

メリー号の欄干の上に登ったアーレンが、勢いよく飛び出したかと思うと、門の端にあつた足場に降り立ったのだ。

一味はギョツと目を見開き、帽子をかぶり直すアーレンに振り向く。

「え!? おっさんどこ行くんだ!!」

「悪いな、小僧共!!? おれはここでお別れだ!!」

「ええ!!」

「し…下まで降りねエのか!!」

てつきり青海まで一緒についてくるつもりだと思つていた、かなりの苦楽を共にした老人の突然の別れに、ルフイ達は戸惑いの声を上げる。

アーレンは不敵な笑みを浮かべ、バツと大きく手を広げて答える。

「ここにはまだ手付かずの遺跡がゴロゴロ転がつてんだぜ!!? 考古学者として、ほっぽり出して行く奴アトんだ大バカだろうが!!」

「アーレンさん…」

「で!!? でもよ!? クリケツトのおっさんの事はどうすんだよ!!? このままじゃあんな、死んだつて思われたまんまだぞ!!」

「心配すんな、郵便配達人を手配しておいた」

アーレンが指を差した方に、一味は視線を向ける。

すると、聞き覚えのある特徴的な鳴き声と共に、一匹の鳥——サウスバードが飛来し、ルフィに襲い掛かった。

「ジョージョージョー!!?」

『おれを忘れるな』って」

「あ…空に一緒に連れて来ちゃったサウスバード!」

「そいつにおれが書いた手紙を持ってくように言つといた。運が良けりや届くだろ」

押し倒したルフィの上に乗るサウスバードの足を見ると、確かに何か巻き付けられているのに気づく。

それでも納得しきれない様子の子ナミたちに、アーレンは満面の笑みと共にさらに続けて言った。

「いいか、小僧共!!! おれとクリケット達はついに“黄金郷”の存在を証明した!!! だがそれは…おれのロマンが終わったわけじゃねエ!!! ここはおれにとって宝の山だ!! ? 黄金なんて目じゃねエくらいにな!!!」

実に満足げに、自分と友が抱き続けた夢を誇る老人。

だが、彼の目はまだ強く輝きを放っている。偉業を成した今でも、まだ自分は満足しきつてはいないというように。

「ここには隠された秘密がいくつも残されてる!!? 島の元の住民も知らねエようなな!!! そいつを解き明かしてこそ、おれの夢は叶うつもんだ!!! それが、おれのロマンだ!!!」

「……そうか!!?」

「ありがとうよ、クリケットの願いを果たしてくれて!!! おれの夢を守ってくれて!!!」
 アーレンはそう言つて、新たな旅に向かう青年達を見送る。全身全霊で感謝を告げ、次なるロマンを求める同志達を送り出す。

コニスとパガヤも同じく、大恩ある彼らに力の限りの感謝を贈った。

「ではみなさん!!? 私達はここまでですので!」

「お元気で、みなさん!!?」

「あばよ、てめエら!!? ありがとうなア!!!」

「コニスもおっさんも、ヒゲのおっさんも白いのも元気でな!!!」

「ええ!!? ではすぐに帆をたたんで船体にしがみついでいて下さい!!?」

船はもう、じきに門の入り口を潜ろうとしている。

別れを告げることにばかりかまけていたルフイたちは、慌てて海を下る準備に取り掛かる。

「おい!!? おっさんの言う通りに!!? だいぶ高速で行くみてエだ!!?」

「そりや、7000mの坂道だもんな!!? 急げ!!?」

「おう!!」

「黄金とエレノアも部屋に運んじまえ」

「荷物扱いすんのやめてくんない!!?」

下りる際に吹っ飛ばされてはこの地に来た意味がない、と黄金の山を室内に運び込む。ついでにゾロがエレノアを車いすごと運ぼうとするも、本人に睨まれ拒まれた。

ものの数秒で、一味は準備を終え青海に降りる用意を整えた。

「——さて…船長。次の島への記録もバツチリ!!?」

「んんそうだ!!? ここ降りたらまた、新しい冒険が!!! 始まるんだ!!!」

ナミが記録指針を見せ、それを見たルフィが次なる冒険に心を躍らせる。

ありえないとされてきた伝説の島に着いても、彼もまだ満足などできない。指針が次の島を指すのなら、進むのが彼の生き方なのだ。

「野郎共、そんじゃあ……!!! 青海へ帰るぞオ!!!」

「「「「「おお!!!」」」」」

ルフィの号令で、やる気を昂らせる仲間達も声と拳を上げて応じる。美しく雄大な空の島を見納めに、懐かしき青い海にいざ帰ろうとする。

その時、彼らに向かって、コニスが声を張り上げた。

「みなさん、落下中お気をつけて!!?」

「落下中☒」

奇妙な一言に、一味は目を丸くして振り向く。

落下中とはどういう意味なのか、と問い返そうとしたその直後。

スポン、と。

半ばで消えた雲の海の道から飛び出したメリー号が、遥か高い空中に放り出された。一味は目玉が飛び出るほどに驚愕し、意味もないのにコニス達に手を伸ばす。

コニスとパガヤは、目と口を全開にして硬直するアーレンを横に、にこやかにルフィたちを見送る。

そして、ルフィたちとメリー号が落下を始めたその瞬間。

「いきますよっ!!?」 空島名物『タコバルーン』!!?」

ポツポーツ!と、コニスの吹いた笛が汽笛のような音を鳴らし、雲の中に響き渡る。

直後、雲の中から飛び出した巨大な影が、メリー号に覆いかぶさった。

「ぎゃああタコくくく!!!」

「まさか最初に見たあいつ…!!?」

「コノヤ…」

落下するメリー号、それにへばりついてくる巨大なタコに、ゾロがすかさず刃を抜き

かける。

しかし、彼らに襲い掛かったのはタコではなく、がくんと足場が揺れる感覚だった。

「おいみろ、すげーぞコレ!!?」

何が起こったのか、と戸惑う一味に、ルファイが周りを指差して騒ぐ。

釣られて上を見やった仲間達は、メリー号の真上に広がるタコの、風船のように広がるその姿に、しばらくの間目を奪われた。

「減速した……」

「うわゝ面白エゝゝゝゝ!!!」

「バルーンだっ!!?」

「何だコリヤ!!?」

「お…おれア、おれア、もうついにあの世に逝ってしまうものかと…」

完全に死を覚悟した一味は、ほっと安堵の息を吐いてその場にへたり込む。海の藻屑とならずに済んで、力が抜けてしまったようだ。

そんな彼らの耳に、あの音色が届いた。

400年にも渡る戦いを終わらせた黄金の鐘の音が、再び空の彼方から奏でられたのだ。

「うっはっはっはっ!!? いいなコレ…」

「ああ、い〜い気持ちだ〜…」

空の民から、恩人達に贈られる祝福の音に、そして巨大なバルーンに揺られる心地良さに、ルフイ達はしばしの間浸り、微睡む。

大冒険の幕間、次の航海までの骨休めに、一味はのんびりとした時間を享受する。

——ふと見上げると、目に映る空

夢か現か、雲の上の神の国

遙か上空1万m

耳を澄ますと聞こえる鐘の音

今日も鳴る

明日もまた鳴る

空高々に鳴る鐘の音が

さまよう大地を誇り、歌う

遙か彼方に住まう、多くの友人達。そして長い贖罪の旅尾を終えた過去の戦士達に見送られながら。

一味は、ゆらゆらと遊覧飛行の旅に耽るのだった。

だが、ある一人の少女だけが、重い表情で黙り込んでいた。

(……………今回の事で、私は一つ思い出した事があった……)

揺れるメリー号の上、未だに残る全身の鈍痛に顔をしかめながら、エレノアはある一つの事実について考える。

それは、あの海に挑んだ前後の、さりげない会話の事だった。

(ナミに言ったあの話は……間違っていた——私は、空島に挑んだ事なんて一度もなかった……)

空島に異様なほどの執着を見せた自分に、ナミが訝し気に問いかけてきた時の事。

何故だったのか、その時のエレノアは答える事ができなかった。

だが、普通ではありえない経験をした今なら、はつきりとわかっていた。

(あれは私の記憶ではなく、私の先々々の天族……………アイザック・エインシエンの記憶……………全くの別人の記憶だった。それを私は……まるで自分の記憶のように思っていた……………)

その真実を目の当たりにし、エレノアは背筋に寒気が走るのを自覚する。

やがて仲間達にも聞こえないような小さな声で、天使は呟いた。

「『今』の私は……………一体誰なの」

それに対する答えは、今のところ、影も形も見当たらなかった。

第16・5章 庭に埋めた罪の証

第157話 “遠い空の先へ”

「……………そうか、彼の方の無念は…晴らせたのか」

ばたばたと海風に髪をなぶられながら、その女は一人呟く。

それに反応する、顔に傷跡のような刺青を刻んだ男が、寂しげに青空の先を見つめる女に問いかける。

「何か聞こえたのか？ ニューラ」

「…ああ、遠い遠い果ての空から、約束の鐘の音がな」

「それって……………『うそつきノーランド』にあつたでつかい黄金の鐘のか？！？」

「ああ、そうさ」

二人の会話に、鉄パイプを武器に持ち、ハットを被った金髪の青年が強く反応する。

顔の左側に大きな火傷の後を残した彼は、静かに頷く女に興奮気味に顔を寄せる。好奇心で、その目はキラキラと強く輝いていた。

「……………!!？」 どこかの誰かが見つけたんだな…すげエな、どこの誰なんだ？！」

「ギアな…ただ私としては、もうあの“声”に煩わされる事がなくなつて一安心してい

るところだ」

ふん、と鼻を鳴らしながらそう告げる女。だがその横顔は、やはり少しは気が薄れて見え、寂しさを表している。

しんと静まり返った雰囲気の中、女は仕切り直すように青年に振り向いた。

「……それで、サボ。私に何か用か？」

「ああ！ ホーエンハイムさんが重要な話があるつて！ 何でも……」

はっ、と我に返った青年が、慌てて居住いを正して女に向き直る。

次の瞬間には、青年の気配は鋭く研ぎ澄まされ、一人の戦士のものに変貌していた。

「……『約束の日』の正確な日時がわかったつて」

「!!!」

その言葉に、女と刺青の男は僅かに目を見開き、そして眉間にしわをよせた険しい表情になる。

ピリツ、と張りつめた空気の中、女が青年に頷きを返した。

「…すぐに行く。他の幹部も今、集められる連中は全員集めておけ」

「了解……!!?」

帽子のつばを下げ、笑みを浮かべた青年が颯爽と二人の前から去る。

足音が遠く去っていき、再び風の音だけが響く中、フツと息を吐いた女が物憂げな表

情で口を開いた。

「……手間をかけるな、ドラゴン」

「気にするな、お前の宿敵は我々の仇敵でもある。……：……：我らは同じ未来を見ているのだ」

何処か申し訳なさそうな、落ち込んだ様子を見せる女に、刺青の男はそう言うて旁うように肩を叩く。

彼の優しさに心底感謝するように微笑みを浮かべた女は、再び遠い空の彼方を見やり、それはそれは恐ろしい形相で嗤ってみせた。

「さて……この世界を破壊する日も近いな」

それはあまりに危険で、凄まじい憎悪の響きを持った声で。

傍らに立つ刺青の男も、似たような笑みを浮かべ、同じ空を見て嗤っていた。

「……この音は、やはりそういう事でしょうか」

ボウルに入れた生地をこねていた手を止め、その女は独り言ちる。

ピコピコと、頭から生えるウサギの耳を動かし、遠く空の彼方から聞こえてくる音色を確かめる。

すると、そんな彼女の背中に、大きく逞しい男の手が添えられた。

「どうした？ エクレール……疲れたのか？」

「……いいえ、少し……気になる。声」が聞こえたもので」

ぼんやりとした様子で、空を見上げて答える女。

彼女の背後に立った、長い足と鍛え上げられた身体、そして大きく裂けた口を持つ男は彼女を——自分の妻を優しく、しかし強く抱きしめる。

そうしなければ、この女は勝手に何処かへ行つてしまひそうな気がしたからだ。

「無理はするな……お前が望む事とはいえ、倒れては元も子もない。……お前はもう十分傷ついたので。あまりおれを心配させるな……」

心の底から案じる声、背中に感じる温もり、そして鋼でできた自分の両腕に触れられる感触に、女は蕩けるような微笑みを浮かべる。

日課であるドーナツ作りを中断し、手を拭つた彼女は、この世で最も愛しい男の胸に縋りつき、彼の顔に両手で触れる。

「その言葉だけで、私は幸せです。あのまま堕ちて……使命を果たせぬまま、世を、人を恨んで怪物に成り果てる所を救われたのです。まだ非力ではありますが、どうしても私は……カタクリ様、あなたのお力になりたいのです」

「………エクレール」

「どうか、笑つて見守つていてください……私は身も心もあなたのもの。いつまでも、

あなたのお側にいられますように……」

万人が瞬間に魅了されるような笑顔を見せ、女は少し背伸びをし、自分の顔を夫の顔に近づける。

唇同士を触れ合わせ、彼と互いの温もりを堪能しあうと、女はリンゴのように頬を染めてまた笑った。

「遙か過去からの使命のためではなく、あなたの為に存在していたいのです——
—我が王よ」

自身を抱きしめる力がより強くなるのを感じながら、女もまた、自身の熱を伝えるように、愛しい男に体を擦り付けた。

シヤラン、と、髪留めに付いた鈴が音を鳴らす。

その音に混じり、遠く離れた空から聞こえてくる音色に、二人の少女がピコピコと馬の耳を揺らして顔を上げた。

「……ねエ、ふら。聞こえた？」

「うん……聞こえましたよ、める」

広く畳が敷き詰められた部屋の中心で、少女達は並んで頷き合う。

声音も容姿も全く同じ、口調と瞳の色のみが異なる彼女達が、音の余韻を聞き届けな

がらため息をついた。

「鳴ったわね、途切れてしまった願いが」

「鳴りましたね、使命と願いに苦悩した彼の方の約束の音が」

その胸に宿るのは、安堵か寂寥感か。

もうその者が苦しまずに済むことに対してか、その者の残滓がすべて消えてしまったことに対してか。二人には判断がつかなかった。

「少しずつ、少しずつ動いてる……この時代が」

「大きなうねりを呼んでいる……この世界に」

「もうすぐですわね」

「もうすぐなのね」

二人の少女は、細めた目で障子の外を見やる。

かつては清らかな自然と人があって、美しかったというこの国。今や汚れた空気と汚れた水、そして外敵によって穢され、見る影もない。

それを未だ取り戻せない事を嘆き、少女達は重いため息をついた。

「あと2年で二十年……長いわね」

「長いですね……待ちきれなくてたくさん死んでしまいました」

「侍達がたくさん死んだ……母様も死んでしまったわ」

「悲しいですね」

「悲しいわね」

示し合わせたように目を伏せ、耳を垂らし、二人の少女はまた遠くの空を見やる。

自然の要塞で守られた、そして同時に閉じ込められたこの場所に、いつまでいなければならぬのか。変わる時はいつなのかと、少女達は常に焦っていた。

「本当にいるのでしょうか……世を照らす明けの光は」

「本当に来るのかしら……世を変える約束の人は」

「本当にできるのか……彼の“神”を討ち亡ぼす事は」

そう呟いた途端、少女達の胸にどす黒い炎が浮かび上がる。

ハッと我に返ると、少女達は心を沈め落ち着こうとする。が、そうするより先に、記憶に焼き付いた仇敵の顔が浮かび上がり、少女達の表情はますます険しくなった。

「でも……それより先にやる事があります」

「ええ、斬らなければならぬ奴がいるわ」

「それが私達の願い」

「それが私達の最初の使命」

シヤラン、とまた鈴が鳴る。

何処かの部屋で聞こえてくる、贅の限りを尽くしたどんちゃん騒ぎ。憎い憎いあの男

がはしやく様が脳裏に浮かび、勝手に手に力が籠もる。

湧きあがる殺意を押さえるのに必死になりながら、少女達は天井を仰ぐ。

「…いつか見つかるのでしょうか、私達の“王”は」

「見つかるといいわね、私達の“王”が」

「おでん様みたいな人がいいですね」

「だけど、あの方のような“王”はもう早々現れない……本当に悲しいわ」

「あと2年………待ち遠しいですね」

「待ち遠しいわね……二十年は」

こうした会話が何度続いたことか、と二人一緒に苦笑し、少女達は肩を竦める。

いずれ来るその時を、少女達はいつまでもいつまでも待ち続けていた。

「やーやー……思わぬ報せが入ったものですね。あの音色をまた聞く事になろうとは………鳴らしたのは誰かな？ 我が王かな？ 赤っ鼻かな？ いやはや思いもよらんだ……」

海を見渡せる崖の上で、栗鼠の耳と尾を持った女が笑みを浮かべて呟いた。

小さな体で懸命に背伸びし、遠い遠い海の彼方を覗き込もうとするような姿を見せる。

「昔見たのが懐かしいねエ……………鳴らそうかと思つたけど、部外者の僕が口を挟んでいいものじゃないし。いや〜よかつたよかつた……………だけどそれはあの人を呼び起こせた誰かがいるつて訳で……………そっちの方が心配だねエ」

ふりふりと大きな白い尾を左右に振り、虚空を見上げる栗鼠の女。

ぱたぱたと雀に似た翼を羽搏かせ、顔も知らない誰かに想いを馳せる。

よくやった、と称賛する気持ちが半分と——大丈夫なのか、と案じる気持ちが半分で。

「大丈夫かねエ……………僕は割と早くにシヤンクスに出会えたから平気だったけど、出会えなければいずれ“初代”に完全に吞まれる事になる。約束を果たしてくれた誰かさんにも、ちゃんと“王”がいるといいんだけど」

むう、と頬を膨らませて、女は険しい顔で腕組みをする。

天族としてこの世に生まれた以上、自分達はいつか出会う事になる。

だがその時、味方として出会うか敵として出会うかは当人達次第。争わない未来を期待したくとも、簡単にはいかないと嘆きをこぼしていた。

その時だ、一人佇む女の元に駆け寄る、一つの人影があつたのは。

「リジー！　そこで何やってんの〜？　ゴードンがご飯だつて」

「あーい、わかつたよ……………ウタ」

紅白に分かれた髪色を持つ少女に呼ばれ、女は海に背を向けて歩き出す。

自らの「王」に託された宝物——望まぬ重荷を背負わされた、何に変えても守りたい存在を視界に映しながら、女は島の中へと歩を進める。

「二人で誰に向かつて話してたの〜？ おつかしいの！」

「『世界の歌姫』様は手厳しいなア……僕だつて泣いちゃうぞ？」

「泣いたら笑わせてあげるよ!! 私の歌は、みんなを幸せにするんだから!!!」

この少女がいつか、「王」のもとで心からの笑顔を浮かべられるように。

たった三人しかないこの島で、彼女を見守り続ける為に。

「……凶星じゃ。しかし同時に吉兆でもある」

遠く遠く、夜空が輝く空の下で、その女は一人眩く。

ヒクヒクと動く狼の耳を動かし、届く「声」に耳を傾ける。

頭上に輝く星は数多い。その中でもたった一つ、禍々しい輝きを放つ光が瞬いていることに、女は思わず目を細めた。

「いずれ来たる決戦の日が近い………我等が父と、『最初の一人』の悲願が果たされる日が近い。じゃが……同時に世が大きく荒れる時が来る」

鐘の音を運んできた風は、今や囁々と唸るような響きを奏でている。

このうねりが齎すものはたして、喜劇か悲劇か。未来を予言する事しかできない女には、まだまだ見通せない光景だ。

「我等が父は望むまいが……急がねば。我等の使命を果たす為に。どうか我が『王』よ、見ていてほしい……そして願わくば、見守っていておくれ」

そう呟き、女はまた別の空に目を向ける。

遠く果てより響いた、確かに聞こえた鐘の音……その余韻が少しずつ消えていくことに、少し寂しそうに目を伏せ、女は誰かに向けて語り掛ける。

「エインシエン……お前はよく頑張った。後はゆつくりと、休むがいい……」

「……………ひ、めひひひひ。随分懐かしい声が聞こえましたね……とつくに虚しく消え去っているものと思っていました、まだしつこくこの世に縋りついていましたとは」

暗く、深く、湿っぽい闇の中、じやらりと金属音が鳴り響く。

四肢を封じ、地の底に縛り付ける太く長い鎖の枷を見下ろしながら、湾曲した角を持った女が不気味な笑い声を漏らす。

闇の中でもわかる爛々とした目の輝きが、下りの外よりもさらに外を見つめ、にたりと悍ましく歪められる。

「鬱陶しかったんですよね……見つともなくわんわん泣いて、嘆いて。消えてくれたのは本当に重畳です……あの方が目覚める予兆でもあるんですから、めひひひひひひ……!!!」

血に染まった監獄の檻の中、一人笑い続ける女。

その姿に、見回りに来た看守達は物陰に身を潜めながら、がたがたと身を震わせ息を呑んでいた。

「……檻の中にいながら、この悍ましき……!!!」

「イカれてるぜ………やっぱり異名は伊達じゃない……史上最悪の天族“狂姫”ジル・ド・ララ……!!!」

過去の亡霊が響かせた音色は——世界各地で、同胞達に報せを届けた。

それが何を呼び起こすのかは……まだ、定かではない。

サクサクと草を踏み、四人がある丘の上に向かって歩く。

スコップやバケツを片手に、一人の老婆が先陣を切って向かう先にあるのは、焼け焦げた家の跡地。

そのすぐ横の地面を指差し、老婆——ピナコは立ち止まった。

「家の裏だよ。たしか……この辺だ。ここにあれを埋葬した」

過去への決別のつもりで自ら焼いた、自分達の家。

数年ぶりにその場所に立ち、エドワードはきつく唇を噛み締め、アルフォンスは拳をきつく握りしめる。

不安げにウエンリイが見つめる中、ピナコは兄弟に尋ねる。

「やめるかい？」

「……いや、手足の付け根が痛む。天気が変わりそうだから早く済ませよう」

痛みだけではない、別の理由で右腕を押さえながら、エドワードはスコップを握り直す。

今にも血を吐きそうな形相の彼に、ウインリイが恐る恐る声をかける。今のエドワードを、正直見ていられなかったのだ。

「ねエ……ホントにやるの？」

「ああ……」

「うん……」

「ホントのホントに必要なことなの……その……だって……エドとアルの……お母さんを」

兄弟が見下ろす先の地面、そこにあるのは、かつて彼らが作り出した人間擬き――

彼らの母が。

いや、母と思わしき何かが埋められている。それを今から暴こうというのだ、ウエンリイが止めたがるのも無理はなかった。

「気になる事があるからつていきなり戻つてきて……それで、二人のお母さんの遺体を調べるなんて。やつぱりやめようよ……こんなのおかしいし……二人だつて!!」

「やらなきやダメなんだ……!! 黙つて見てろ……!!?」

そうきつい口調で言つて、エドワードはスコップを振り下ろし、地面に突き立てた。

ザクツ、ザクツと何度も地面を削る音が響き、辺りに土が積み上げられる。

数十分もの間、ひたすらに地面を掘り返す作業が続けられているが、未だ探し物は見つかつていない。

無意識に、見つける事を拒んでいるからかもしれないなかつた。

「いけない、降つて来ちまつたよ」

「ね……ねエ!!? 一度やめにしない? ぬかるんできたら掘りにくくなつて……」

元からかなり悪かつた天候が完全にへそを曲げ、ぽつぽつと雨粒が落ち始めた頃合に、ピナコとウインリイが止めに入ろうとする。

だが丁度その時、ガシャンと音を立てて、兄弟が膝をつく姿が目に入った。

ピナコとウィンリイは慌てて二人に駆け寄り、腹部を押さえて蹲る彼らに寄り添う。

「!!? エド!!?」

「胃が……ねじ切れそうだ……」

「臓器なんてないのに……体の奥底が……苦しい……!!」

「当たり前だよ!!? お前達にとつちや最大の精神的^{トラウマ}外傷だ!! ……もうやめよう。お

前達が壊れちまう」

兄弟にとつて最大の罪、母を蘇らせようとして失敗し、異形の姿にしてしまった。その罪の意識は、彼らの心を今でも蝕んでいる。

自らの傷を自ら抉るような真似をして、無事で済むわけがない。

だがエドワードは二人の制止に、強く首を横に振ってみせた。

「確認しないと……前に進めないだろ。錬金術師は……真理を追い求める者だ。自分に都合の良い所だけ見て……それで済まされて良い訳がない」

キツ!と青年の目に、意地の炎が灯る。

目を逸らし続けてきた己自身の罪に、向き合う覚悟を決め、再びスコップを構えた。

「逃げて……たまるか!!」

第158話 “庭に埋めた罪の証”

それから、長い時間が過ぎた。

悪天候の中、何度も襲う苦痛に耐え、時に嘔吐しながら、兄弟は母の骸を探し続けた。見ている痛々しいほどに、しかし決して諦めることなく。

そしてついに、見つけた。

母の骸、それに生えていた長い髪の一部を。

「ぼっちゃん……アル……ウインリイ………母さんの髪は栗色だった……」
泥で汚れたそれを水で洗い、持ち上げるエドワード。

悲壮な表情で固まる彼に、そして彼が持つ髪の一部を目の当たりにし、ピナコ達はた
まらず愕然となった。

「……………黒だ……!!!」

驚愕も冷めないうちに、エドワード達はさらに遺体を暴き、全体を探し出す。

骨を規則正しく並べ、ピナコがさらなる正確な情報を把握する。そのおかげで、信じ
がたい事実が露わとなっていた。

そこから示される、兄弟の母の特徴が見当たらないという真実だ。

「これは、お前達の母親ではない」

ピナコがそう断言した瞬間、エドワードはがくりと膝をつき、アルフォンスは頭を抱えて項垂れる。

あまりにも残酷な真実に、兄弟の心が悲鳴をあげる様子が目に見えるようだ。

(全く別人…いや…別の『もの』!!?) やはり無関係なものを作って、この子らは身体を持って行かれたのか。あまりにも理不尽な…!!)

「……………は、は…はは…はは、ははは」

兄弟と同じく、愕然と並べられた遺体を見下ろすピナコとウインリイ。

棒立ちとなる二人のすぐそばで、天を仰いでいたエドワードが突如、壊れたように笑い声をあげ始めた。

「兄さん……………!!?」

「そうだ。死んだ人間はどんな事しても元に戻らない、これは真理だ」

アルフォンスが震える声で、案じる様子で話しかけると、ピタリと兄の笑い声が途切れる。ぶつぶつと呟く姿は、見ていられないほど悲惨であった。

「人体錬成の完璧な理論だの、禁忌だのと…何をやってるんだ、おれは」

「エド…」

「エド、しっかりおし。気をたしかに持つんだ!!?」

「大丈夫だよ」

かける言葉が見当たらないピナコとウインリイに、エドワードが告げる。

その声に、投げやりな印象はない。それどころか、以前にもまして力強さを感じられるようにも思えた。

「ただ証明されただけだ……姉弟子の推測が。あれは母さんじゃなかった……おれ達は母さんの魂を取り戻すことはできなかつたんだ。そりやそうだ……母さんはもう、こちら側にはいなかつたんだから」

小さな声で呟くエドワードを、三人は唾然とした様子で凝視する。

何かが、彼の中に起きていた。何かが、彼をはつきりと変えてみせていた。

「あの日から今さつきまで、これは絶望の象徴だつた……だが今は、これが希望につながる」

「え？」

「なんて事だ……答えはスタート地点にあつたんだよ、アル」

戸惑い、硬直する弟に、エドワードははつきりと告げる。

その目に、確かな希望の光を見出して。

「お前は元に戻る!!!」

「なア、ぼっちゃん」

掘った穴の中に、母ではないとわかった何者かを戻してから、エドワードが口を開いた。

ピナコは打ちひしがれている様子の彼を見やり、沈痛な表情で耳を傾ける。

「ちゃんと墓……作りたい」

「……墓石になんて刻むんだい？」

「……………わかんね」

悲痛に顔を歪めるエドワードは、じつと名も無き誰かが埋められたそこを見下ろす。今一度自分の罪を、見つめ直そうとするように。

「わかんねーけどこれ……あの時、たしかに動いておれを見ていた。たった一瞬でも人間だった。おれ達が作って死なせてしまった……人間だ。墓、作るよ」

エドワードの決意に、ピナコは勿論、アルフォンスもウィンリイも何も言う事ができない。

重い空気の中、意を決した様子でアルフォンスが声をかける。

「兄さん……これが母さんじゃないなら……その……」

言い辛そうな様子の弟に、エドワードは真剣な表情で振り向く。

戸惑いも困惑もないその顔は、彼が何を言わんとしているか、予想していたようだ。

「今のボクは…人体錬成が不可能だって言うなら、兄さんが錬成してくれたボクの魂は…姉弟子の錬成したエースは……」

「ああ、確認しなきゃならない事が沢山ある」

庭を掘るために用意した道具を担ぎながら、エドワードは険しい表情で考え始める。その際、今一度ピナコの方に視線を向けた。

「ばっちゃん、おれとアルは間違いなく母さんの子供だよな」

「ああ、そうだよ。二人とも出産の時はあたしが取り上げたんだ。間違いなくトリシャとホーエンハイムの子供さ」

「うん。うん、よし」

訝しげに首を傾げるピナコを放置し、エドワードは歩き出す。

何かに辿り着いたことは確かだが、それが何なのかわからず、アルフォンスもウインリイも眉間にしわをよせていた。

場所を変えて、以前にロツクベル家が使っていた工房兼自宅のリビングにて。

ピナコがお茶を入れるためにその場を後にしている間に、持ってきていた電伝虫を片付けたエドワードが、ボリボリと頭をかきながら入室してきた。

「……次会う時…顔合わせづらいな」

「師匠はなんて……？」

「切られちまった。……当たり前だよな」

久しぶりの帰郷で発覚したある真実の確認のため、師であるイズミにある質問をしたのだが、突如切られてしまい、答えを聞けずじまいなのだ。

深いため息をつけてソファに腰かける兄に、アルフォンスがやや焦れた様子で詰め寄った。

「いい加減聞かせてよ兄さん。一体どう言う根拠があつてボクが元に戻れるって……それに母さんが母さんじゃなかったって……」

「落ち着け……その前に二人に質問なんだが……」

迫るアルフォンスを手で制しつつ、エドワードは二人を見つめる。

突如その顔が、照れで赤く染まり始めた。

「ウインリイを……その……よ……嫁にすんのどっちだ……って兄弟ゲンカした事、覚えてるか？」

「え？ ああ、そういえばそんな事あったね」

「なつかしー！ 5歳位の時だっけ？」

「アルに聞いて知ったんだけど、両方ふったってな」

「うん、ふったふった」

「理由は？」

遠い昔の事ゆえか、思い出したくなかったからか、記憶から消えていた黒歴史ともいえる思い出話を始めるエドワード。

アルフォンスとウィンリイは訝しみながら、せーのと同時に答えを返した。

『あたしより背の低い男はいや』

その瞬間、エドワードが吐血しながら吹っ飛んだ。

思っていた以上に酷い理由で、衝撃に耐えられなかったようだ。

「身長で男の価値決めんなよ!!? 鬼!!? 悪魔!!? サイテー!!? 悪女!!?」

えー、と困り顔でうめくウィンリイに、エドワードは力の限り叫ぶ。

背の低さが死活問題である彼にとっては見過ごせない、あまりにも残酷な理由に、吠えかからずにはいられなかった。

ぜーぜーと荒く息をつくエドワードに、ウィンリイが再び問いかける。

「なんの関係があるの」

「おれが知らないアルの記憶の確認だよ。他に何かないか？」

「エドが寝てる間に○○を○○○○で○○○○とか覚えてる？」

「うんうん、ボクとウィンリイで○○な兄さんの○○を○○○○とか」

「○○な○○○○○○って」

「もういい……聞きたくない……」

水を向ければ出てくる出てくる、ろくでもない思い出の数々。

悲しみに煤けるエドワードが「お前ら憶えてろよ……」とかすれた声で嘆くが、すぐに復活して真剣な表情に戻った。

「つまりだな、おれの知らない……知り得ない記憶、その鎧の身体になる前……10歳までの記憶があるって事は、あの日、おれがその鎧に定着させたアルは本物のアルって事だ」二人の（ウィンリイはほとんどついて来れていない様子だが）注意が集まったことを確認し、エドワードは語る。

砂漠の国での姉弟子との再会と、語らいについて。

「これは以前……姉弟子にも確認してある事だ。別れる前……師匠のところまで厄介になつたときに聞いたんだが——」

——なア……姉弟子。

今からスゲイヤな事聞くけど、いいか……？

師に破門を言い渡されてから少しして。

それは、姉弟子の失った足についての過去を聞いて、エドワードが抱いたある疑問についての事だった。

『? 何さ、急に改まって』

『姉弟子の推測がもし合つてたとして……そうなると、おれ達が錬成させた母さんは、母さんじゃなかつたつてことになる。だつたら……その、おれが錬成したアルの魂や、姉弟子が蘇生させたエースは……!!?』

『…ああ、そんな事か』

自分達はもしや、思つていた以上にとんでもないものを生み出したのではないか。今この世界に生きているかの者は、果たして本物なのだろうか。

そんな問いに、エレノアは酷く呆れた様子で半目を向けて告げた。

『本物に決まつてるでしょ。私があの人を間違えるわけないじゃない』

『そ…それを証明する根拠はあるのか!!?』

『あるよ、だつて…』

ふつ、と不敵に笑い、エレノアは語った。

自分が間違うはずがないと、確固たる根拠をもつてして。

—— エースからルフィの事を聞いたのは、エースを取り戻した後なんだもん。

アルフォンスは、エドワードの疑問に、そしてそれに揺らぐことなく答えた姉弟子の答えに愕然となる。

本物かどうか怪しい、死の淵から引き揚げられた人間。

しかし、それが自分が知るはずのない記憶を有していたのならば、本物と判断しても何の問題もないだろう。

それが自分にも当てはまる以上、自分も本物のアルフォンスと認識して問題はないのだ。

「じゃあ、アル。お前の10歳以降の記憶：鎧の身体になってからの記憶はどうだ？」
「？」

「エースと違って、脳ミソを持ってないのに、鎧になってからの記憶と経験はどこに蓄積されている？」

そう言われて、アルフォンスは少し考える。

確かにこの身体はただの鉄の容れ物、中身がないのに、一体どこに保存しているのか。

唯一変わったところと言えば、背中側にある兄の血の紋くらいのものである。

「これは？」

「それはあくまでお前の魂を定着させるためだけの印だ」

言わば目印。考えたり覚えたりといった機能はない、魂を繋ぎとめるための命綱ではない。

故にエドワードは、ある突拍子のない可能性を見出していた。

「思うに、どこかに存在するアルの肉体は、今も活動していて脳は働いている」
こんどはさらに驚愕をあらわにし、アルフォンスはガタツとソファから飛びあがりかける。

ウィンリイは全くついて行けていなかったが、突如腰を上げたアルフォンスにびくつと身体を震わせていた。

「そんなムチャクチャな…!!? 根拠は…」

「根拠はある!!! Mr. 2・ボン・クレーの食った悪魔の実、『マネマネの実』の能力だ!!!」

エドワードの脳裏に、敵の組織の一員として争い、後に麦わらの一味を逃すためにその命を懸けた男の背中が蘇る。

触れた者の顔を覚え、肉体もろとも変身することのできる悪魔の実の能力者——その特殊性が、エドワードにある事実を見せた。

「あいつはあの時……サンジをのぞく全員の顔をコピーした。その後コピーした顔を披露したその際、その場にはいない顔が1人出てきた……あれは間違いなく、おれと同じだけ成長したお前だった!!?」

皆は単に、能力の凄まじさに感嘆し驚いていたが、エレノアとエドワードはその瞬間思考を止めていたくらいだ。

絶句するアルフォンスを放置し、エドワードはさらに続けて語った。

「なぜ、あの時ボン・クレーは鎧の姿にならなかつた？ それはあいつの能力がお前の今の身体ではなく、お前の本来の肉体をコピーしたからだ」

「……………!!? ボクの身体は…門よりこちら側にある…!!?」

「錬金術において、人間は『肉体』と『魂』と『精神』の三つから成ると言われているが、おれは『肉体』と『魂』をつなぐのが『精神』だと考える。アルの魂と消えた肉体はどこかで精神によってつながってるんじゃないか？」

言ってからエドワードは、機械に置き換わった己の左脚を見下ろす。

あの日の痛みは、今でも忘れはしない。何より痛かつたのは弟が消えたことだが、今注目しているのは当時の足の痛みについてだ。

詳しく言うならば、自分が無意識のうちに口にしていたある言葉について。

「おれはあの日、無意識に『持つて行かれた』と言った。『死んだ』ではなく『持つて行かれた』んだ、お前は」

痛みを堪えながら、なぜ自分がそういったのか。

無意識故に疑問に思うことはなかったが、意識してみると不自然な台詞であることに気付く。そうして、真実が少しずつ見え始めていく。

「持つて行かれたのは母さんを錬成するための材料としてではなく、真理の扉の『通行

料”：そうだ、あいつはたしかに“通行料”だと言っていた。そして、おれはまた右腕という“通行料”を払ってお前の魂を引っ張り出した”

それは、心理の扉を開いた者にしかわからない独特の感覚であろうか。

ただの物理現象の失敗ではない、禁忌を犯したことによる悲劇がもたらした、その者の深層意識が抱く感想であろう。

そして、扉の前にいるかの者の存在が、その感覚を強めていることは確かだ。

「母さんは“死者”だ。こちら側にもう存在しないものをあの扉から引っ張り出すのは不可能だ。だがアル、お前の魂を引っ張り出させた事：そして姉弟子がエースの魂を取り戻せた事……それがお前らが“生者”として存在する証だとおれは思う」

ここで再び、エレノアの仮説が役に立つ。

輪廻転生、生まれ変わりが実在するとして、別人に転生した以上その者の存在は消える。探したところで、引きずり出そうとしたところで、見つかるはずはないのだ。

だが、兄弟は母らしき何かを生み出した。

生きて動く何かを——何者かの魂をあの肉の塊の中に入れてしまっていた。

「あの時、真理の扉の中で手を伸ばしたおれは……母さんのようなものに手が届かなかった」

今度はエドワードが、アルフォンスに詰め寄り問いかける。

片腕片足を代価に門の知識を手に入れたエドワードに対し、アルフォンスは全身。エドワード以上の代価を支払い、より多くの知識を得ている筈なのだ。

「アル、思い出せ！ お前が手を伸ばした先に…おれの見たものよりさらに先には…」
アルフォンスの記憶の扉が、事件のショックで封じられた彼の記憶の鍵が、ゆつくりと開かれていく。

とてつもない情報の波の中、絶る者を、助けを求めて、扉の向こう側に見えた影に向かって必死に手を伸ばしたあの時。

自分を見て唾う自分自身——心理の姿が、そこにはあったのだ。

「…ボクがいた!!? 母さんはいなかった………!!!」

「そうだ!!? あそこにいるのはお前だ!!?」

わなわなと手を震わせアルフォンスは身を震わせる。

そうすると、次々に封じられた記憶が蘇っていく。

会心の出来だった錬成陣の中心から見えた、中身の消えた子供の衣服、そして血だまりとその中にある兄。

それが見える位置にあったものを思い出し、アルフォンスは声を震わせた。

「思い出した………ボクはあの時…母さんだと思っていた者の中から兄さんを見ていた………!!!」

「……あれにお前の魂が定着しなかったのは不幸中の幸いか……」

真つ当な人の姿を保っていない、出来損ないの肉の人形。

そんな物の中にアルフォンスの魂が宿っていれば、今以上に悲惨な生を送る羽目になつていただろう。

喜びも安心もできないが、少なくともましだとは思える結末であつた。

「そうか、あれは母さんじゃなかつた……」

「許してくれとは言わない。全く関係ない者を錬成してお前を巻き込んで……おれは……」

命を弄んだ、という表現では物足りない、残酷な所業。

それを自分達が行つてしまったのだと知らしめられ、沈痛な表情で彼らはうつむく。

途中、話についていけずとも、重い空気は感じて黙つていたウィンリイと、お茶を持つて物陰に潜んでいたピナコが、険しい顔でため息をつく。

そんな時だつた。

片づけたはずの電伝虫から、一本の電話が入つたのは。

第159話 『ピースを繋ぎ合わせる』

「? 誰だろ……はい、ロックベルで…」

訝し気に、席を立ったウインリイが電伝虫の元に向かう。

兄弟の話にほぼ全くついて行けず、しかし空気の重さはわかってしまったため、気分転換も兼ねているように見えた。

「……え? エドに…ですか?」

「どうした、ウインリイ?」

「カーティスって人から……あんだ達の師匠なんだよね?」

「師匠から?」

寝耳に水な、先ほど気まずく会話を断ち切られたばかりである師匠からの連絡に、エドワードは眉間にしわをよせ、立ち上がった。

「師匠?」

『エドか?』

慌ててウインリイから受話器を取ったエドワードに、イズミが即座に口を開く。何処かその口調は、急いでいるように聞こえた。

「どうしたんですか」

『私の家系と旦那の家系を調べていた』

「え？」

実力のある錬金術師として、プライドに関わる質問をしたため、怒りを抱いてもおかしくはないと覚悟していたエドワード。

しかしイズミの声にそんな様子は感じられず、エドワードは緊張した面持ちで師の言葉の続きを待った。

『私があの子を錬成した時は、旦那の髪と自分の血とあの子の遺骨を使った。なのに錬成されたあの子は肌の色、髪の色ともに、私達夫婦から生まれるはずのない色をしていた……………何か突き止めたんだな？』

イズミの問いに、エドワードはついその場で頷いてしまう。

そして先ほど自分が辿りついたばかりのある真実について、微かに震える声で報告する。

「はい。死んだ人間は……………失われた人間は再構築できないという確信です。姉弟子の例については……………」

『そのへんは旦那から聞いた。…そうか、よかった。アルの肉体は生きているんだな』
心底安堵した様子で、ほっと息をつく声が聞こえる。

同時に師の声には、酷く悔しがるような響きも感じられる。やはり、自分がもたらした情報にシヨックを覚えているようだ。

『こっちは完璧だと思っていた錬成理論を完全否定されたよ。術師の面目丸つぶれだ』
「すみません」

『いや、あれは“通行料”だった。我々が踏み込んではいけない領域へのね』

誰にも知られていないとはいえ、恥をかかせてしまったかもしれない、とエドワードは申し訳なさに顔を歪める。

そんな彼に、イズミは受話器越しに大きく声を張り上げた。

『エド！』

「はいっ！」

『ありがとう』

不意の台詞に、エドワードはぼかんと口を開けて呆ける。どういうことか、と考える暇もなく、イズミは通話を切ってしまった。

首を傾げ、受話器を電伝虫に戻すエドワードに、アルフォンスが近づいて尋ねてみた。

「兄さん、師匠はなんて？」

「なんかわかんねーけど、『ありがとう』って言われた」

何故？と頭をかき、考え込むエドワード。

すると、アルフォンスはハツとした様子で固まり、カタカタと身を震わせ始めた。それに気づき、狼狽する兄の前で、鎧の弟はきつく拳を握りしめる。

「……ああ、そうか。あの錬成の日から今日この日まで、ボクは自分の事を責め続けていた。でも、口にするのが怖かった母さんを……」

何故師が、兄に感謝の言葉を口にしたのか。

そして何故、かつての自分達の行いの全てを否定されたというのに、こんなにも心が現れる気がしているのか。

その答えを見出したアルフォンスは、顔を両手で覆って俯いた。

「母さんをあんな姿にして殺したのはボクだ……と!!? ずっとずっと怖くて、言えなかった……!!!」

「おれもだよ」

生身の肉体があつたなら、きつとボロボロと涙を溢れさせているであろう弟に、兄は悲痛な、しかし弟と同じく安堵した表情になる。

「兄さん、ありがとう、ボクは母さんを殺していなかった……!!!」

許される事ではない。命を一つ好き勝手しようとして、失敗して地獄のような気分を味わった。

ただそれでも、両肩に載っていた重い荷の一つから解放されたような気がして、兄弟

はひたすら心で泣き続けていた。

「たとえ母さんを殺していなくても、アルをそんな身体にしたのはおれだ。逃げて許されるものじゃない。なんと罵られようと、お前の身体を元に戻すまで……」

「兄さん、あれは賛同したボクも同罪だから、一人で背負ってるような事言わないでよ。なんでも一人で抱え込んで……見てるこっちが苦しくなるよ」

顔を上げ、痛々しく顔を歪めるエドワードにアルフォンスは強く告げる。

鎧の身体に、申し訳なさそうな目を向ける兄に対して、アルフォンスが思い出すのは、これまで彼らが出会ってきた多くの人々の姿だ。

「人ならざる身体を持つてても、自分の存在に意義を持つて、奔放に生きてる人達を見て、そういう生き方もあるんだと思つたし……周りもこんな身体のボクを、人間として扱つてくれる」

ゴムの身体を持ち、全く困つた様子など見せない麦わら帽子の船長。

自分達の何倍もの背丈を持つていた、二人の巨人。

化け物と呼ばれた過去を持ち、それでも人を癒す万能薬に相応しい医者を目指す、心優しい小さな獣人。

そして、愛する男を取り戻すために、躊躇いなく両脚を犠牲にした天使の少女。

そんな彼らの姿は、俗に言う普通の人とはかけ離れていたのに、輝いて見えていた。

「普通に生きようと思えば、この身体になんの不自由もない…でも、やつぱりダメだ。もう……」

兄が苦しんでいるのだから、自分も耐えよう。決してこの弱みは口にしない。

けれど、最早我慢の限界に達していたアルフォンスは、悲痛に顔を歪める兄に、自分の本音を口にする。

「もう……一人の夜はいやだよ……!!!」

腹も減らない、眠れもしない、生物として当たり前前の行為が何も叶わず、夜はずっと一人起きていなければならない孤独。

それを思い出し、アルフォンスはどうしても苦しくて仕方がなかった。

「元に戻りたい理由はただ、それだけだ…元の身体に戻りたいよ………!!!う？」

「…おれも、お前の笑った顔が見たい。ただそれだけだ」

頷き合う兄弟。その脳裏には、また別の想いも蘇っていた。

アラバスタにおける内乱の狂気の中、数多の民が戦い苦しむ中で、ほとんど何もできなかつた悔しさと屈辱。

きつとこの先、似たような困難が待っている筈なのだ。

「でも、もう誰も巻き込またくない。だから兄さん、ボクは周りの人を守るぐらい強く在りたい!!!? もう誰一人失わない道を進んで、身体を手に入れる!!!」

「はっは！ 同じ事考えてた!!? もうグダグダ悩んでるヒマはねエ、やってやるさ」
だが、そんなこんなんに恐れをなす二人ではない。

ガシン、とエドワードはアルフォンスの胸に拳を当て、不敵な笑みを浮かべてみせる。
「真理の野郎ブツ飛ばして、あそこからお前の身体を引つ張り出してやる!!!」

そんな兄弟の様子を、ウィンリイはどこか懐かしそうに眺めていた。

自分を連れて、日々楽しく小さな冒険に赴いていた、兄弟が元の姿のままだった幼少時代。

その頃の想いが、少し蘇るような気がしていた。

「あーあ、とりあえず安心したー」

長い話に着かれたと言わんばかりに、盛大に伸びをしたウィンリイがわざとらしく眩く。

振り向いた兄弟に、にこやかに笑った彼女が告げる。

「明日、ローグタウンのお店に戻るね。部屋に戻って仕度しなくちや、じゃあね」

「おう」

片手を挙げて応じるエドワードとアルフォンスの隣を横切り、ウィンリイは部屋を後にする。

その途中、壁に背中を預けたウィンリイは、ふと脳裏に過つたエドワードの背中——
—記憶の中よりも大きなそれに、ため息をついた。

(そうだよね、いつまでも子供じゃないんだ…)

チビだチビだと言っていた幼馴染の成長に、何となく瓦気持ちを抱きながら、ウィンリイはその場を後にする。

お茶をお盆に乗せたピナコは、その様子を何やら意味深な笑みと共に見つめていたのだった。

ウィンリイが退出してから数十秒後。

エドワードとアルフォンスは再度、今後の為の事実確認を続けていた。

「問題はどうかやって扉を開けるかって事だ」

「うん。通行料があれば扉を開ける事ができる…」

「ああ、今度は何を犠牲に扉を開けるのか……」

エドワードの手足、アルフォンスの全身と同価値の何かを代償にすれば、持っていたものを取り戻すことは可能。

しかし、一体何が同等の価値を持つのか。それが目下の課題であった。

「姉弟子みたく『手足のもう一本くらい』って考えてるだろ」

自分の生身の左腕を見つめて考え込む兄に、アルフォンスがじとつとした目を向けて
 呟く。

慌てて目を逸らすエドワードに、アルフォンスは盛大に厳しい目を向けた。

「そんなの嫌だよ!!?」 一緒に元の体に戻るって約束したる!!?」

「わ…わかつてるよ!!?」 そうだよな、約束だもんな」

若干本気になっていたエドワードは、乾いた笑みを返して弟を誤魔化す。

だが、そうなることややはり代価となる何かに思い至らず、兄弟はうーんと悩ましい声を
 上げた。

「やっぱり『賢者の石』…かな」

「でも、あれ人の命使ってんだぞ!!?」

「そうなんだよね…」

アラバスタにあったマルコー・ティムの資料。そこに書かれた衝撃の事実は、未だ兄
 弟の精神に影響を残している。

何というものを目指していたのか、そしてなんととんでもないものが世界中に蔓延つ
 ているのか、と二人は天井を仰ぎ嘆きをあらわにする。

ふとエドワードは、それにまつわるある疑問を思い出した。

「…………アラバスタで戦り合った人造人間ホムンクルス。姉弟子が言うには、奴らは『賢者の石』を

核にした『進化した人間』と名乗っていた……どうやって生まれた？」

ガバツ、とソファから体を起こし、兄弟はじつと見つめ合う。

異常な再生能力を持つ、彼らの核が『賢者の石』だというのなら、どこで彼らは生まれたのか——いや、生み出されたのか。

そんな疑問にぶつかり、兄弟はゾツと寒気を覚えた。

「そうだ……それに『賢者の石』のレシピを持っていたのはマルコーさん……国家錬金術師だ」

「国家錬金術師は世界政府に認められた術者……ようは政府の研究者だ。そんな人があれだけ膨大な資料を持っていた。つまり……世界政府はそれを支援していたって事になる」

「大勢の人間を犠牲にするような実験を、政府が……？」

徐々に嫌な予感が漂い始め、エドワードは頬を引き攣らせ、冷や汗を垂らす。

だが同時に、大きな真実に辿りつこうとしているような感覚に、高揚から身を震わせてもいた。

「何かあるぜ……どデカい権力が隠そうとしている『何か』が……!!」
??

ひゆるるる……と、青い空のど真ん中から、一隻の小さな船が落下してくる。

船員の悲鳴と共に、羊の船首のその海賊船は海面に着水し、盛大な水飛沫と轟音を上げ、船員を甲板で揺さぶった。

「ぐあーっ!!?」

「痛てててて!!」

「ううわあゝゝつ!!?」

「冷てエゝゝつ!!?」

ざぼざぼと、衝撃で大きく揺れる船体。その上の船員達は、激しい波で全身びしょ濡れになってしまう。

少し波が落ち着いてから船員達——麦わらの一味は荒れた息を整え始めた。

「びっくりした、急にタコが縮むんだもん……!!?」

「どうなってるんだ!!?」

「空気もれかしら……」

ナミがそう呟き、心底安堵した様子で息をつく。

ウソツプやロビン、他の者も口々に息をつく中、ルフィは仰向けに寝っ転がり、傍らのタコローすっかかり縮んでしまったタコバルーンを持ち上げた。

「でも……何とか着いた……死なずに……お前……ありがとな……!」

ルフィがそういうと、タコバルーンは気にするなというように頭を搔く。

それにニツと笑いかけてからルフィは、そして仲間達は辺りに広がる久しぶりの青色を見渡し、感嘆の息をつく。

「海が…青い…」

「全員無事か？」

声をかけながら、一味は自分達が先ほどまでいた遥か高い空の世界を見上げる。

遠く、果てしなく遠い世界。

今思えば、もしかしたら全て夢だったのではないかと思えるほど不思議だった、大冒険の後である。凄まじい達成感であった。

「……………しかし……………すげーとこに行ってたんだな」

「落ちてみると……………また、遠い場所ね……………」

「夢でも見てみたい……………」

「夢の国だもんなー……………またいつか行けるかな」

「死にや行けるんじやねエか？ 近くまで」

「ゾロ、お前天国に行ける気でいんのか？」

口々に呟き、はーっと息を吐く一味。

そんな中、ふと仲間の姿が一つ足りていないことに気付き、ウソップが辺りを見渡し始めた。

「……………ん？ おい、エレノアはどこ行ったんだ？」

彼の一言で、そういえばと全員で車椅子に乗った仲間の姿を探す。

きよろきよろと視線を巡らせ、欄干の向こう側に目をやったルフィが「あ」と声を上げる。

ブクブクと海に沈んでいく、エレノアが座った車椅子の車輪を目にして。

「がほほほほほほほ…」

「「「ぎゃーっ!!!」」」

予想外の光景に、一味全員が悲鳴をあげる。

海中にかすかに見えるエレノアの表情は真っ青で、海上にあげられた手からは徐々に力が抜け始めていた。

「エレノアが沈んでるーっ!!!」

「引き揚げろ!!? 早く!!?」

「エレノアちや〜ん!!!」

今回の旅で、最も悲惨な目に遭った仲間の窮地に、全員が慌てて救助に向かう。

が、慌てていたせいであろうか。

約二名、自分がカナヅチであることを完全に忘却し、エレノアと同じくぶくぶくと沈んでいった。

「だからなんででめエらまで飛び込むんだよ!!」

「しゅびばせえくくん…!!?」

腹を海水でパンパンにしたルフィとチョッパーが、そう言つて泣きながらゾロとサンジに謝る。

余計に体力を消耗した二人は、船長たちと同じく救出されたエレノアを見やり、大きなため息をついた。

「何かしらね…最近どんどんエレノアの運気が下がってる気がするわ……………」

「悪イモンに取り憑かれてんじやねエか?」

「まア…実際そうだったしな」

白目を剥いて、甲板に仰向けにされるエレノアの痛々しい姿に、ナミが深刻に呟き、ゾロもウソツップも同意する。

冒険の度に重傷を負う天使に、誰もが少し危ういものを感じ、深刻な表情になつてしまつていた。

「とにかく次の島では、なるべく休ませてやろう。このままじゃ航海なんてムリだ」

「だな」

「おう」

「最近頑張りすぎだぜ、こいつ」

「ご、ごじんばいをおがげじばず…」

「あんたは寝てなさい！ 動くんじやないわよ!?？」

ぴくぴくと全身を震わせて頭を下げようとするエレノアを制し、ナミが怒鳴る。

姉を気取るせいにか、こんな状態でも動こうとする彼女は、気が抜けないほど痛々しく心配になる、とナミがまた肩を竦める。

「よーし……野朗共く!!! 帆を張れくくく!!! 行くぞ、次の島くく!!!」

「おいちよつと待てよルフイ、少しは休ませろ!?？」

「甘い甘いっ!!? そんな事言つてられる海なら、誰も苦勞しないでしょ!?? さアみんな動いて!!? ”とり舵”!!?」

「ア…アイアイサ…!!?」

「あんたは絶対安静!!! 働くなつて言つたでしようが!!!」

疲労困憊の仲間達を鼓舞するルフイに、珍しくナミが同意する。気楽に休んでいられるほど優しくないのが、この”偉大なる航路”なのである。

激痛が走る体を押しして働こうとする天使を寝かせ、指示を放つナミ。

すると彼女は、船の背後を見やって笑みを浮かべた。

「ほら来た」

「うおおああああ!!!」

「全速前進——っ!!!」

「大波だく!!!」

メリー号を容赦なく飲み込むであろう大規模な波。

その中に混じる、海を泳ぐ猿の海獣達の顔に驚愕しながら、一味の船は、再び海を進んでいくのだった。

第17章 人取り合戦

第160話 “行き先決定”

ざぱつ！と、空の彼方で作られた乗り物・ウェイバーが海に沈む。

それに乗っていたルフィは、すぐさま仲間達に救出され、涙目でメリー号の甲板に帰還した。

「ぶへ!!? ぶほ!!?」

ずぶ濡れで倒れ込み、海水を吐き出して大きく咳き込むルフィ。

その情けない姿に、救い出したゾロやウソップは呆れた視線を向けていた。

「つとに」

「だから無理なもんは無理つつつたる」

「空の海じやダメでも」よ……………ゴツチの海ならつて…思っ…………」

「医者くくくく!!! おれだくく!!?」

がくつ、と頭から崩れ落ちるルフィにチョッパーが焦り、自分で自分にツツコミを入
れる。

諦めの悪い船長に肩を竦めてから、ウソップとサンジが欄干に身を預け、海の方を見

やった。

「結局乗れるのは、この海でもナミだけか」

「ナミさ〜〜ん♡ 気をつけて〜♡」

失敗したルフィとは正反対に、空島でやってみせた時と全く同じように、巧みにウエイバーを操るナミ。

環境や浮力の違いから、上手く操縦できなくなるかと懸念していたようであるが、その心配は不要のようで彼女も一安心していた。

「チョツパー、引き上げて」

「ナミはすごいなー」

一通り波に乗り、満足したナミが甲板に戻ってきて、チョツパーが尊敬の眼差しを送りながらウエイバーを回収する。

ナミが向かう先では、ウソツプが空島で集めた沢山の貝を広げて確認を行っていた。

「〃貝〃は…〃雲貝〃だけだめだ」

「ああやって雲が形になるには、空島の環境が必要なのね…」

「他のやつでも充分珍しいぞ、よかつたじゃねエか…」

すかつ、と何も出さない雲貝を前に眉間にしわをよせるウソツプ。

敵が使い、戦場を縦横無尽に走る姿を見て便利そうだと思つたが、使い物にならない

のであればただの貝殻でしかない。

残念がるウソツプに、ゾロはパンの耳をかじりながら笑って言った。

「あつ!!? いいな、パンの耳つ!!? おいサンジ!!? おれも食うぞ!!?」

「あとだあと!!? おれは今、エレノアちゃんのを作ってんだ!!?」

「あ、悪イ」

途端に空腹を訴えだすルフィに、サンジがくわつとキッチンから声を上げ、それに素直に謝罪の言葉が返ってくる。

そのやり取りを横目にチョツパーは、車椅子に腰かけ、遠くを見つめているエレノアの傍に近寄った。

「…具合はどうだ、気分悪かったりしねエか?」

「……………ん、ああ…大丈夫。どこも変じやないよ…」

「…そうか」

ぼんやりとしていたエレノアが応えると、チョツパーは小さく息をつき、安堵したように肩を落とす。

が、次の瞬間、彼の目はギラリと鋭く光り、エレノアを睨みつけた。

「よしわかった、ベッドにぶちこむ」

「なんで!!?」

「おれはもうお前の大丈夫は信じないからな!! お前が大丈夫とか言う時は、絶対なんか不調を隠してると思っただけで接するからな!!」

「私に対する信用の低さ!!!」

普段の彼らしくない、凄まじい勢いで怒鳴りつけるチョッパーに、流石のエレノアも困惑で目を白黒させる。

他の仲間達も同意するような視線を向けていて、救いはどこにもなかった。

「大丈夫だつてば……変に動いたりしなきゃどうってことげぶはっ!!!」

「だから言っただろうがア!!!」

チョッパーを宥めようと、微笑みながら話していたエレノアが突如大量に吐血し、目を剥いたチョッパーが即座に治療に入る。

「ギャー!! エレノアが死んだー!!!」

「お前もうホントに死にかけじゃん!!! 頼むから何もするな!!! 絶対安静で引っ込んでてくれお願いだから!!!」

ギャーギャーと騒ぐルフィやウソップ、チョッパーと、ぶくぶくと血の泡を吹くエレノア。

他の者達はそんな彼らの姿を、引き攣った表情で見つめる他になかった。

「普通に過ごしてるだけでこれか…」

「これ……もうこの先の航海は無理なんじゃないの？ 死ぬわよ、この子」

「………まだまだ死にやあしないよ、くそつたれ」

真剣な顔で物騒なことを呟くナミに、どうにか意識だけ取り戻したエレノアが吐き捨てる。

ガルルル……と獣の形相で睨みつけてくるチョップパーに冷や汗を流し、これ以上怒らせてたまるかと、重いため息をついた。

「まア……次の島に着いたら充分休むさ………無茶はしない」

「だけど……」

「そもそも……無茶したのは私じゃなくて、あの人」でしよ。今後はああはならないよ」

「本当にそうか？」

心外だ、と言わんばかりの字と目を向けるエレノアに、それでもウソツプが疑わしげな視線を送る。

信用が失墜している中、その空気を換えるようにエレノアは笑みを浮かべた。

「私のことはもういいさ……やる事は他にもあるでしょう？」

彼女の視線の先にある船室、その中のあるもの。

ナミはじつとエレノアを見つめ、やがて呆れたように嘆息した。

かくして、船室に入った一同。

その前に置いたテーブルの上に、ナミが大量の金銀財宝を置いてみせた。

「さて、お待ちかねっ!!? 海賊のお宝は山分けと決まってるわ!!? これだけの黄金だもの、すごい額よ!!?」

空島での大冒険の末、手に入れた大量の宝物。

大蛇の腹の中と、探しても絶対わからなかつただろう場所から見つかったそれは、室内でも煌々と美しい輝きを放っている。

苦労の末に手に入れたそれを前にし、若き海賊達の気分は一気に上昇した。

「イよオっ!!!」

「待ってたぞーっ!!? 銅像買うんだおれは!!!」

「本買っていいか!!?」

「新しい鍋とフライパンと………食器に巨大ねずみ取り」

「飲み放題だな、コリヤ」

「義足の修理代に……治療費に……うっ、胃が……」

「それくらい普通に出すわよ……」

欲しいものを夢想する者、必要なものを計算する者、欲を出す者、険しい顔で胃を押しさえる者など、様々な反応を見せるルフィ達。

ナミは彼らを前に、集めた財宝の大半をがさつと横にどけた。

「それとは別にまず、私のへそくりが8割」

「「「いやちよつと……」」」

「冗談よ」

笑えない冗談に、途端に抗議の声が上がる一味。彼女の性格を考えるに、本気でそんなことを言っているもおかしくはないと思えてしまう。

戦慄する彼らに、ナミは自分の考えた本当の意見を口にした。

「船を？ このメリー号をか？」

「そうよ——もうボロボロじゃない」

「そりゃいい!!! ゴーイングメリー号大修繕!!! 大賛成だ!!!」

長く共に旅をしてきた、小さな海賊船の今の姿を思い返し、ルフィはナミの意見に強く同意を示す。

サンジが作った軽食を口に運びながら、ゾロがどこかしみじみとした風に頷き呟く。

「そうだな、ウソツプのツギハギ修理もさすがに限界だし」

「言つとくがな、おれは!!? 『狙撃手』だ!!?」

「ああ…本格的に造船ドックに入れて、本職の船大工に修繕して貰った方がいい…」

「へ——!!? ウソツプより直すのうまい奴がいるのか」

一同方針が決まると、それに関する想像がどんどん広がっていく。

困難や騒動の方が目立ち、どうしても忘れがちだが、普段使っている船の状態を思い出すと問題が色々と出てくる。

「考えてみりや『東の海』のおれの村からずつとおれ達を乗せて航海してくれてんだ。たまにやあしつかり労つてやんねエとバチあたるつてもんだぞ」

苦楽をずつと共にしてきたというだけではなく、幼馴染の厚意でもらった船という特別な思い入れもあり、ウソツプも強く同意を示す。

すると突如、ルフィが何か決心した様子で立ち上がり、口を開いた。

「だったらよ、『船大工』仲間に入れよう!!」

唐突な宣言に、一味は軽食を口に運ぶ手を止めて戸惑いの目を向ける。

ぼかんと固まる彼らの前で、ルフィは今思い付いた自分の考えを語り出した。

「旅はまだまだ続くんだ。どうせ必要な能力だし。メリーはおれ達の『家』で!!? 『命だぞ!!?』 この船を守つてくれる『船大工』を探そう!!?」

「……………コイツはまた…」

「ホントまれに…核心をつくよ…」

いつも思い付きで無茶苦茶なことばかり引き起こす、生粋のトラブルメーカー。なのに時々無視できない意見を口にするため、その落差に戸惑わされる。

なんにせよ、船長である彼のその意見に文句をつける者は、誰もいなかった。

「そりやそれが一番だ!!? そうしよう!!?」

「じゃあその線で!!?」

「エレノア、この先の島にそういう所ってない?」

「……おあつらえ向きのところがあるよ」

ナミが尋ねると、少し考えた様子のエレノアが答えを返す。

スツと指を立て、若干ぶるぶると痙攣しながら、メリー号の進行方向を示し、続けて口を開く。

「ちようど……記録をいくつか越えた先に造船島——『ウォーターセブン』がある」

「造船島!!?」

「ピツタリじゃねエか!!!」

「いく奴が見つかるといいいなー!!? あと『音楽家』とな!!?」

「いや、それはおいとけ」

「な!!?」

もたらされた御逃え向きの情報で、より一層の期待を抱き、声を上げて騒ぎだす一味。

エレノアはそれに、なぜか唇をきつく噛みしめ、そして物憂げな表情で虚空を見つめていた。

「……ただなあ、 “海軍本部” と “エニエスロビー” の目と鼻の先なのが不安なんだよなあ」

その眩きに反応したのは、話に積極的に関わらず、無言で佇んでいたロビンだけだった。

ギシ…ギシ…と軋む音を立てる、真つ暗な船室の中。

弾や食料、様々な物品が置かれたその部屋の中で、ある一つの人影が小さくため息をついた。

「イヤー……参ったネ」

がしがしと頭を掻き、真つ暗中で困り顔になるその男。

すぐ近くに感じる、お供の二人から呆れた視線が向けられるのを無視しつつ、その男は軽い口調で語り出した。

「まさかこっそり乗り込んだ船がこんな事になるとハ。悪い事はしちやいけないつテ、お天道さんは見てるってわけダ」

「言うておる場合ではありませぬゾ、若!! もはやこの船は沈むのを待つばかり!! 一刻も早く次の行動を決めねバ、我らも共に海の藻屑となりますゾ!!!」

「わかつてるヨー…」

少し変わった訛りで、子供の一人である老人の声が男を叱ると、男はそれに苦笑を返し、唸り声をあげて腕を組む。

あまり反省の色が見られないその態度に、老人はピキツと血管を浮き立たせ、目を吊り上げて声を張り上げた。

「そもそモ!!! 何の手掛かりもなしにこの『偉大なる航路』に挑む事自体が無謀!!! これまで一体幾人の勇者が挑ミ、そして散っていった海力!!! 知らぬ存ぜぬでは通りませぬゾ!!!」

「爺様……………!! もうそのくらいデ…でないと見つかりま」

怒涛の勢いで詰め寄る老人に、もう一人のお供がおろおろと止めに入ろうとする。

その時、彼らの頭上でギシツ…と比較的大きな軋みが響き、三人はピタツと硬直する。だからだと冷や汗を垂らし、人の声を訝しんだ誰かが探りに来ない事を確認すると、三人は一斉に安堵の息をついた。

「……………仕方がないだ口。こっちはもう後先考えちゃられないんだ…おれは我が一族50万人の命を預かってル。もう後には引けないのサ」

先ほどまでとは違う、本気の信念を感じさせる声で告げる男に、老人は暗闇の中で目を細める。

もう一人の音もが心配そうに見つめる中、老人は大きいため息をこぼした。

「……仕方がありません、ならば急ぎ、今後の方針を考えねば」
「はい」

「そうだなー……どつか別の船に乗り移ればそれがいいんだけどなー」
「そんな都合のいい事……」

後頭部で腕を組み、うんうんと考えこむ素振りを見せながら呟かれた案に、お供達からまた呆れた声が返ってくる。

男はその咎めるような声に、不服そうに唇を尖らせた。

「だけド、今のところホントにそれ以外方法がないんだヨ。上があの状態じゃ、どこかの島に着く事もできるかどうか……」

数時間ほど前に起こった、ある島におけるひと騒動。

その結果起こってしまったこの船の悲劇に、男達はどうしたものかと頭を悩ませる。

その時、天井を仰いでいた男の目が、突如くわつと見開かれた。

「……フー、ランファン。聞こえたか？」

「え……えエ、聞こえました」

「……まさか、若」

ガバツと体を起こし、お供達の方に身を乗り出す男。

急に顔を近づけてきた男に、もう一人のお供は戸惑うような、焦るような反応を返す。

老人の方は、にやりと笑みを浮かべる男に嫌な予感を覚えた。

「世話になる船を変えようカ。ずいぶん小さ船だカ……相当デキる奴等が乗つてル。かなりの強者の集まりだナ」

「若!! この辺りに行く船ナド、正規の船はあり得ませヌ!! また海賊船に乗り込むおつもりか!!!」

「まア、それならそれでしようがないじゃない?」

男の考えを察した老人が、またも反対の態度を見せ吠える。

だが、男はそれを宥め、お供達ににやりと不敵な笑みを浮かべてみせた。

「吉と出るか凶と出るカ………人生つてのはそういう賭けの連続つてもんだロ」

第161話 “ヤオ・リン”

ざぼつ、と、巨大な猿の顔が海上に現れ、麦わらの一味を見下ろす。

一瞬間まったルファイたちは、大急ぎでメリー号の操舵に回った。

「逃げろ——シーモンキーだ!!!」

「ついて来てやがったのかーっ!?」

「まずい!!? 風がねエ——っ!!?」

「じゃあ私が術で……」

「お前は安静にしてろワーカーホリック!!!」

「ヒドイ!!!」

どたばたと權を手に走り回る彼らを、シーモンキー達は大波の中に潜りながら追いかけてくる。

帆船としての能力が発揮できない今、一味の命運を握るのは全員の団結と根性だ。

その時、メインマストの上で周囲の探索を行っていたウソツプが、あるものを見つけ、て声を張り上げた。

「緊急報告!!? 緊急報告!!! 12時の方角に船発見!!?」

「何だ、敵か!!?」

「こんな時にくくくくくつ!!?」

ぎぶぎぶと必死に權を漕ぐルフィたちは、次から次へと降ってくる厄介事に苛立ちの声を上げる。

が、報告したウソツプ本人は、何とも言えない渋い顔で双眼鏡を覗いていた。

「いや…それが、旗もねエ、帆もねエ!!? 何の船だか…」

「何だそりゃ、何も掲げてねえくく!!? 何の為に海にいるんだ!?!」

「わからねエ…!!? それより乗ってる船員が………!!?」

困惑の声を上げる、ウソツプの見つめる先。

そこにあつたのは一隻の船——その甲板に虚ろな表情で座り込み、のの字を書いて項垂れる男達の姿だった。

人生全てに絶望した、まるでお通夜の如き陰鬱さだ。

「異様に少ねエし…それに…!!? すげエ勢いでイジけてるぞ!! まるで生気を感じねエっ!!」

「どういうこつた!!? 大丈夫かあの船!!? このまま波に飲まれちまうぞ!!」

「お——いお前らー!!? 大波と猿がきてるぞー!!? 舵きれくく!!!」

もたらされる情報に、一味はひたすらに困惑の反応を返す。

敵かどうか分からない以上、このまま大波に吞まれて海の藻屑になるのを見過ごすのも後味が悪いと、ルフィが叫んだ。

「……………あ…」

「船だ……………おい…海賊船だ!!!」

すると、その声でようやく我に返ったのか、虚ろだった男達の顔に生氣が戻り始める。が、それで勢いまで取り戻せたわけではなかった。

それどころか、大波とルフィ達を見て思った以上に慌てだし、ばたばたと騒ぎ始めた。

「野朗共!!? 立ちなおれ!!! 敵船だぜ、宝を奪うぞ!!!」

「波だ、待て、大波がきてる!!? 避けるのが先だ!!!」

「あの船に逃げられちまうぞ!!?」

「大砲を用意しろ!!!」

「オイ誰に命令してんだ!!?」

「てめエがやれ!!?」

「舵!!? 舵舵!!?」

「おい勝手なマネするな!!!」

仲間同士で押し合いへし合い、罵り合い、とても繋がりを感じられない態度で自分勝手に走り回る。

そんな彼らの姿を横目に、ゾロやサンジ達は呆れた視線を向け、ひたすらに權を漕ぎ続ける。

「——なんてまとまりのねエ船だ」

「宝を奪えだど。やつば敵だ、放つとけ」

さつさと大波から離れていく麦わらの一味とは真逆に、謎の船は未だに右往左往している。

中には意味もないのに大砲まで撃つ者もいて、何を考えているのか全く分からなかった。

「??？」

思わず首を傾げるルフィの目の前で、とうとう謎の船とその船員達は、大波に飲み込まれ海の中に消えて行ってしまう。

呆気なく沈んだ彼らをキヤツキヤと嗤い、シーモンキー達は去っていった。

「——ふー、おさまったか……」

「——というより、あの大波はシーモンキーのいたずらよ」

「湿度も気温もずいぶん安定してるから、もう次の島の気候海域に入ったんじゃないかしら」

穏やかになった波、そして吹いてくる風の緩やかさに安堵しつつ、一騒動を乗り越えた一味はほっと息をつく。

ルフィはやれやれと肩を回し、ウソップと役割を代わったロビンに視線を向けた。

「おいロビン、なんか見えるか?」

「島がずっと見えてるわ」

「言えよそういう事は!!!」

冷静に報告するロビンに、物足りなさそうにルフィとウソップが待ったをかける。

海賊の荒々しさを好む彼らには、今のロビンのような静かすぎる返答は流儀に反するものだったらしい。即座に掛け合いのやり直しを求めていた。

「わりと霧が深いわ」

「霧か…危ないわね。エレノア、前方確認させたわ」

「あいよ」

動けない、しかし働こうとするエレノアに一応の役割を与え、ナミは未知の島のある方に視線を送る。

そこで、訝しげな表情のウソップが、一味全員に向けて声をかけた。

「———とここで…さっきの船、気にならねエか? 船長がいねエとか…航海士がい

ねエとか…旗はねエわ帆はねエわ、やる気もねエわまとまりねエわで…海賊の一団とし

て成り立ってねエんだ!!?」

「海戦でもやって負けたんだろ——で船長が死んで……色んなもん奪われて……」

「いやいやそれがよ……!!? よく船も見たんた。そしたら戦闘の形跡もねエんだよ!」

いつもの臆病風に吹かれたと思つたのか、面倒くさそうに適当に返すゾロ。

しかしウソツプは、それはないと即座に首を横に振る。怖がつているわけではなく、強い違和感を訴えていた。

「なのに海賊にとつて『命』とも言えるようなもんがああ船には何もなかつた!!?」

「——じゃ海賊じゃねエんだろ……気にすんな」

「……………ん……………どう見ても海賊だと思うんだがな、あいつら」

「確かに……………宝を奪えだの襲えだの言つていた分を考えれば、海賊らしい反応ではあつたよね」

「……悪い予感がするぜ……」

「いつもそうだろ」

今度はサンジがウソツプの不安を否定するように答え、ウソツプはそれに難しい顔で唸る。

エレノアも彼に同意し、やや険しい視線を船が沈んだ方に向ける。

もはや彼らは海の底、確認することはできないため、考えても仕方がない事だったが、

それでも疑念は掻き消せなかった。

「さーて、町があるかなー!!? 造船所があるといいなー!!? いい船大工が仲間になつてくれるかな」

「造船所はまだまだ先だよ…次の島は確か」

「ルフィ、すぐに上陸しちゃダメよ!」

もうワクワクと興奮した様子のルフィに、一応ナミが制止をかける。

船長の性格上、ここで止めたところで何の意味もないことは間違いないが、それでも釘を刺しておかなくては気が済まなかった。

「海岸が見えた!!? イカリの準備!!?」

「オウ」

「うわっ…!!? おい、みんな聞いてくれ」

「チョッパ―! ウソツプが『島に入つてはいけない病』だ」

「それは治せねエ」

胸を押さえて蹲るウソツプに、サンジやチョッパ―が冷たく突き放す言葉を送る。

ヒクヒクと鼻を動かし、土の匂いが近づいていることを確認するエレノア。

その際彼女の嗅覚が、知らない匂いをわずかにかぎ取った。

「……………ん? 誰かの心配が…気のせいかな?」

首を傾げ、一瞬だけ漂ってきた匂いに眉間にしわをよせる。

だが気配を探ってみても、自分達以外誰も見つからず、エレノアは気味が悪いものを感じながらも気のせいだと自分を納得させる。

そして一味は、次なる島へと到達する。

そこは――。

「何もね〜っ!!」

広い広いその島。緑の草地が延々と広がる、草木がちらほらとやたらと長いものが一本二本生えているという、変化に乏しすぎる島だった。

「なんじゃここは!!? すげー!!! 見渡す限り草原だ…」

「あア…何つう色気のねエ場所だよ」

「人は住んでいるのかしら…」

「うお――!!? 大草原だー!!!」

「コラーツ!!?」

残念そうに肩を落とすサンジとは反対に、ルフィとウソップ、チョップがはしゃいで草原に飛び込んでいく。

けらけら笑いながら草原を駆け回る三人に、ナミは大きなため息をついた。

「――もー、あいつらは…得体の知れない土地にずかずかと」

「これだけ見えすいてりや、危険も何もねエだろ」

鬱蒼と茂る密林ならともかく、こんな場所で急に襲われる事もないと、ゾロがさつきと錨を下ろす。

エレノアもゾロと同意見で、然して身構える必要もないだろうと気を抜きかけていた、が。

「……………やっぱり気のせいじゃないな。誰だろう」

一度は気のせいと見逃した何者かの匂いと気配が、今再び微かに漂ってきて、エレノアは険しい顔で探し始める。

自力で車椅子を動かし、えっちらおっちらと気配を感じる方に向かった。

そして、見つけたそれにエレノアは目を奪われ、しばらくの間呆然と固まってしまった。

「……………ねエ、ナミ」

「なに？ どうしたの？」

「ボロ雑巾が転がってるんだけどどうしたらいいかな…？」

「ボロ雑巾？」

「ほら、コレ」

勝手に動いて何を言っているのか、と。

訝し気に近づいてくるナミに、エレノアはやや困った顔を見せ、見つけたそれに指を差す。

ボロボロの衣服に身を包み、腰に剣を下げた、明らかに怪しい風貌の一人の男を。

「緊急連絡!!? 緊急連絡く!!! 船に侵入者よくくっ!!!」

「何イ!!?」

「あら、大変」

途端に悲鳴をあげ、船に残った仲間に叫ぶナミに、即座にゾロやサンジが反応し駆け寄る。

ロビンだけ平常運転なのをよそに、サンジはナミとエレノアを庇うように前に出て、侵入者であるボロボロの男を睨みつけた。

「無事か、ナミさん!!? エレノアちゃん!!!」

「:!!?」

が、思った以上にみすばらしい格好のその男を見て、男達の警戒は一瞬で吹っ飛んでいった。

「何だこいつ………行き倒れか?」

「なんでウチの船で行き倒れてんだよ」

「いつの間に乗っていたの、こいつ……」

「ちよつと、おにいさん？　こんなところで寝られたら邪魔なただけど？　…もしもし？　聞いている……っっていうか生きてる？」

じろじろとうつ伏せに倒れ込む男を凝視し、口々に勝手に話し合う一味。

「らちが明かない、とエレノアが前に出て、足先で男の背中を突つつき、きつい口調で呼びかける。

するとやがて、男の身体がびくびくと震えだし、呻き声が聞こえだした。

「……………は……………」

一応の生存確認が取れ、そしてやっと聞けた声に全員が注目する。

5人の注目を集める男は、長い時間をかけてやっとある一言を口にした。

「ハラ……………へつタ……………!!?」

その瞬間、息を呑み固まっていた一味の空気が、一気に緩んでいった。

バクバクガツガツぼりぼりゴツクン！と、甲板に並べられた料理の数々が、男の腹の中に消えていく。

最後の皿を空にして、ようやく男の手が止まった。

「イヤ……危ない所だったヨ!!?　キミらは命の恩人ダ!!?　この借りは必ず返すヨ!!!」

口元に米粒をくつつけたまま、満面の笑みを浮かべた細目に黒髪の男が言う。

「が、そんな彼の飄々とした態度に、一味は苦虫を噛み潰したような険しい顔を見せていた。」

「何が命の恩人だよ……ただでさえ金欠で火の車のウチの食料たらふく食い漁りやがって……!!?」

「ルファイがキレルわよ、これ」

「どこの誰だてめエ!!! いつから乗ってやがった?!? 何が目的だ!!!」

「そんな怒らないでヨオ〜」

怒りの声を上げるゾロやサンジ、疑わしげな目を向けるナミ、冷静ながら鋭い目を向けるロビンとエレノアの前で、男はへらへら笑うばかりだった。

「おれはヤオ・リン。ある目的があつてあちこち旅をしてるんだが、思わぬ事件があつて2・3日この辺さまよつててサ……危うく餓死する所だったんだヨ。君たちに出会えて本当に良かった」

「こつちは良くねエよ」

しーしーと楊枝で歯の間を掃除する男——リンに、食費のやりくりにも苦労を重ねられているサンジが低い声を返す。

サンジの凄まじい怒気を前に、全く気にしていない様子のリン。そんな彼を見つめて

いたエレノアが、ややあつてから問いかけた。

「ねエ、その訛り……………シン皇国の人だよね？」

「ん？ おや、知ってる人がいたのかイ。そうだ、おれはシンの出身ダ」

意外そうに肩眉を上げ、リンがエレノアに振り向く。

車いすに乗った彼女に興味深げな視線が向けられ、ナミがさりげなく庇うつもりでエ

レノアの隣に寄り、耳元に囁きかける。

「シン皇国って…？」

「『北の海』にある国。一応『^{レヴェリ}世界会議』にも加盟してる国で……………錬金術とは異なる

形態の錬成術『錬丹術』を主に研究している国なの」

「おオ!!？ 思ってた以上に詳しいネ!!？」

自国の文化を知って貰えていたことが嬉しかったのか、弾んだ声を上げるリンだが、

一味の視線は変わらず冷たいまま。

ナミはますます疑いの目を向け、リンにきつい視線を向けた。

「そんな所からどうやって来たのよ…!!？」

「普通には許可が下りないからネ、『偉大なる航路』に入る船を転々としてここまで

やっと来たんだ…あー、きつかつタ」

「船ってまさか……………さっきのに!!？」

のほほんと答えたリンに、ナミはギョツと今通過した海の方を振り向き目を剥く。

他の者も大なり小なり驚きを表し、五体満足でこの船に乗っている男を信じられない気持ちで凝視する。驚愕の視線に晒され、リンは照れ臭そうに頭を掻いてみせた。

「いや、まさかあの船があんなことになるなんて思いもよらなかつたヨ。君らの船が近くを通らなかつたら、おれも一緒に海のモクスになつてただらうネ。はっはっはっは」

「……どうやってあの船からこつちに……？」

「そこにロープを巻きつけてしがみついて、根性で泳ぎ切つた。イヤ、死ぬかと思つたネ」

彼が指さす方向を見ると、確かに括りつけた覚えのないロープが垂れさがっている。おそらく、彼の言っていることは真実なのだろう。

頬を引き攣らせ、リンを凝視していたエレノアが、不意に耳をへたらせ俯いた。

「……ごめん、気付かなかつた」

「仕方がないわよ……あんた、今ムチャクチャ体調悪いんだし。あんな無茶する奴がウチの船長以外にいるなんて、誰も思わないでしょ」

「あっはっはっは、辛辣だネエ〜」

まるで妖怪か化け物でも見るようなリンに目を向け、エレノアを慰めるナミに、へら

へら笑うリンが思わず口を挟む。

まるでつかめない、謎多き男を睨みつけていたサンジが、やがて厳しい口調で問いかけた。

「……って事は、あの船で何が起こったのか知ってるのか」

「おう、バツチリ見たヨ」

「じゃあ、一体何が……」

ウソップにはああ言ったものの、多少は気になっていたサンジが、彼に代わって詳しくそんな者を問い質す。

それに応えようと、リンが真剣な表情で口を開く。だが、それは叶わなかった。

気づいた時には、ガチャン！と。

メリー号の前後は、狐の船首の海賊船に鎖でつながれた獣の足に挟まれ、行き場を完全に奪われてしまっていたからだ。

第162話 “人取り合戦”

「何だ、お前ら…!!」

「ああ……遅かったカ」

巨大な海賊船の甲板から見下ろしてくる未知の海賊達に、ゾロが威嚇の視線を向け、リンが忌々しげに頭を抱える。

警戒をあらわにする麦わらの一味に向けて、謎の海賊達の一人が名乗る。

「我々は『フォクシー海賊団』。我らの望みは…『決闘』だ!!」

「……『デービーバックファイト』か……!」

「そうだ。その戦いの火蓋は、互いの船の船長同士の合意の瞬間、切つて落とされる」

エレノアの呟きに頷き、フォクシー海賊団と名乗る男達はにやにやと笑みを見せる。

いかにも自信満々と言つたその態度に、ナミが思わず冷や汗を流す。

「今、おれ達の船長がお前達の船長モンキー・D・ルフィに戦いを申し入れている頃……!!」

「？」

「申し入れ……? 何を眠てエ事やってんだ。ケンカなら買うつつつてんだろ!!?」

「おい……お前知らねエのか? ケンカじゃねエ、『デービーバックファイト』は海賊の

ゲームだ」

胡乱気に刀を構え、闘志を見せるゾロにサンジが呆れたように止めに入る。

その隣でロビンが頷き、海賊としての時間がそう長くない年下の彼らに、丁寧に説明を行い始める。

「——そうよ、海のどこかにあるという海賊たちの楽園『海賊島』でその昔生まれたというゲーム……より優れた船乗りを手に入れる為、海賊が海賊を奪い合ったというわ」

「海賊が海賊を……？」

「ええ」

「そんな事も知らねエでよく海賊をやって来れたな」

『『デービーバックファイト』ってのは “人取り合戦” の事さ!!! おれ達が挑むのは “3コインゲーム” !!? 3本勝負だ!!!」

何も知らないゾロやナミを嘲笑い、愉しげに声を上げ、フォクシー海賊団が高らかに語り出す。

1勝負ごとに勝者は相手の船から好きな船員を貰い受ける事ができる。もらわれた船員は速やかに敵の船長の忠実な部下となる。

敵船に欲しい船員がいなかった場合、船の命海賊旗の印を剥奪する事もできる。

それが、深海の海賊 “デービー・ジョーンズ” に誓って行われるゲームであると。

「——賭ける獲物は『仲間』と『誇り』。勝てば戦力は強化されるが…負けて失うものはでかい…エゲつないゲームさ………!!!」

「じゃあ…もしかして…海で会ったあのまとまりのない妙な船…」

「そうさ……あいつらにやられたんだ」

先に説明出来なかったことを申し訳なく思うように、リンはポリポリと頭を搔いて眉間にしわを寄せる。

見れば、甲板には奪われたと思わしき船長に船員、さらには海賊旗も見えた。

「ここまで揃って移籍になると、もはや吸収合併だな」

「だな!!? ギヤははは」

「…バカバカしい!!? 私達はそんなゲームの申し入れ絶対に受けないわ!!!」

「ムダだよ、ナミ…私達にそれを止める権限はない」

奇しくも、道中でウソップが抱いた不安は的中していた。

一度、行われた戦いに敗れた船を目撃したというのに、また仕掛けたのと同じ相手に見つかり、餌食にされているのだ。

それを予測できなかったことに、エレノアが悔し気に歯を食い縛っていた。

「『デービーバックファイト』は互いの船の船長の合意によつてのみ開戦する………ルフィが領いてしまえば、私達全員がゲームの参加者となる」

「——その通りだ、ナミさん……これは海賊の世界では暗黙のルール………!!?」 逃げ
出せばこの世界で大恥をかく事になるぜ!!?」

「いいじゃない、恥かくくらい!!!」

「生き恥をさらすくらいなら死ぬ方がいい」

「右に同じ」

「何よそれ、二人共っ!!?」

「だからムダなんだってば……」

「諦めなさい……男ってこういう生き物よ……」

「んもーっ!!?」 じゃ、ルフィを止めなきゃ!!!」

危険を感じ、無理矢理にでも拒否の姿勢を取ろうとするナミだが、火がついてしまっ
ているらしいサンジやゾロは引き下がらない。

地団太を踏むナミに、ピクリと耳を震わせたエレノアが、深いため息をつく。

「……止めるのももう遅いみたい」

彼女がそう呟いた途端。

ドンッ! ドンッ!と。

二発の銃声が、島の奥の方から響き渡ってきた。

「まさか………!!!」

「あくあく受けやがった……………」

「望むところだ……………」

「面白そうね……………」

島中に響いたであろうその音が示す、海賊の遊戯開催決定の合図。

愕然とするナミや、好戦的に笑うゾロ達を見下ろし、フォクシー海賊団の面々が満面の笑みを浮かべた。

「ゲームを受諾した〜ア!!!」

「さーさーフランクフルトはいかが!?? ラムにチーズビスケットに塩漬け肉!?? 焼

ソバもあるよ〜!!?」

『開会式を始めます。みなさん静粛に』

「うるせー!!? てめエ黙れ」

「ギャハハハハ!!?」

「おいオツズつけろオ!!?」

「出場メンバーは準備を!!?」

開催決定の銃声が鳴り響いて数十分後。

島にはいくつもの屋台が並び、フォクシー海賊団の船員達が仲間を相手に商売を始め

る。

何もない草原が、祭に御詠え向きの場所となっていた。

「さ——て野郎共つ!!? 騒いじやいやん!!!」敗戦における3ヶ条を今から宣誓するわよ!!?」

1つ『デービーバックファイトによつて奪われた仲間・印・全てのものは、デービーバックファイトによる奪回の他認められない』

1つ『勝者選ばれ引き渡された者は、速やかに敵船の船長に忠誠を誓うものとする』
1つ『奪われた印は二度とかかげる事を許されない』

と、フォクシー海賊団のアイドル・ポルチェがマイクを握り、賑やかに騒ぐ男達に、祭のルール説明の為に注目を促す。

「あんた達なんで平然としてられるわけ?」

「悩んでも仕方ない事だからだよ」

「おめエまだウジウジ言つてんのか」

そのすぐ近くで、がっくりと項垂れたナミが、島の奥から戻ってきたルフィ達に恨みがましげな視線を送っていた。

リスクの高いゲームだというのに、全く悪びれる様子が無いのがこれまた腹が立つ。

そんな彼女の悩みもよそに、開会の進行は順調に進められていた。

「以上、これを守れなかった者を海賊の恥とし、デービー・ジョーンズのロッカーに捧げる!!! 守ると誓いますか!?!?」

「誓う」

「誓う!!!」

「さア、このコインを見ろ!!!」

ポルチエの再度の確認に、それぞれの一味の代表として二人の船長が告げる。

フォクシー海賊団の船長、割れた頭に尖った鼻が特徴的な海賊・フォクシーが三枚のコインを懐から取り出し、海の中に放り投げた。

「オーソドックスルールによる『3コインゲーム』を……デービー・ジョーンズに報告!!!」

開戦だア!!!」

途端にフォクシー海賊団から、盛大な雄叫びと歓声上がる。

相手が弱小海賊団であろうと関係がない、欲しいものがあれば奪いに行く、海賊冥利に尽きる遊戯の開催に、誰もが沸いていた。

「海賊が欲しいものを奪う事を……『デービーバック』ってというのは、このゲームからきてるんだよ」

かつて実在した海賊、デービー・ジョーンズの名にちなんだ遊戯。

悪魔に呪われ、深い海底に今も生きていられると言われる彼のロッカーに、海底に沈んだ

「まったく!!?」

「えらい事してくれたわね、ルフイ！」

「勝ちやいいじゃねエか！」

親切心か、それとも勝利を確信しているがための余裕か、わざわざ近づき説明しに来る敵側の海賊を、サンジが適当にあしらう。

その横で、未だ怒りが収まらないナミがルフイの鼻を掴み、事前の相談もなく勝負を受けたことを咎めていた。

「勝てば船大工貰えるかも知れねエぞ？」

「いらねエよ、あんな海賊団からっ!!?」

勝負自体は文句はないが、あの集団から新メンバーを受け入れる事はごめんだとサンジが思わずきつい口調で返す。

やや刺々しい雰囲気になる一味の間に、ルールブックらしき冊子を手にしたリンがマイペースに割って入って来た。

「勝負種目はレース・球技・戦闘だってサ」

「あんた何さらつとウチの一味に加わってんのよ」

「いいじゃんヨ!!?」 同い釜の飯食った仲だ口!!?」

「要求しただけでしようが」

いつの間にやら、さも当然のように仲間に入り込んでいる謎多き青年に、エレノアがじとりと鋭い目を向ける。

他の面々も胡乱気な視線を向ける中、ハッと振り向いたルフィが、凄まじい形相でリンに詰め寄った。

「何!!? 飯食つただと!!? ていうかお前誰だ!!?」

「遅っ!!!」

「おれはヤオ・リン。仲良くしようぜ」

「誰がするか!!! 帰れ不審者!!!」

へらへら笑いながら握手の手を差し出してくるリンに、ウソツプが目を剥いてツツコミを入れ、差し出された手を弾く。

思いきり拒否をされた青年だが、全く堪えた様子もなく、馴れ馴れしい態度でルフィに話しかける。

「メシ食わせてくれたお礼になんか手伝うヨ、戦闘でも出ようカ?」

「バカ、それはおれがいく」

「なにー!!? 待てよおれがやりてエ!!!」

「おれに任せとけ、足がウズウズしてんだ!!!」

「おれ、結構戦えるヨ。きつと役に立つからここに置いておくれヨ」

「うるせよ!!!」

ギヤーギヤーわーわーと、暴れたくて仕方がない男達の喚く声が続き、自分が自分と手が挙がる。

侃々諤々と、派手な戦いの場を求める話し合いは続けられ、十数分経ってから、ようやく次のように決着がつけられた。

第一回戦『ドーナツレース』

出場者ウソップ、ナミ、ニコ・ロビン

第二回戦『グロツキーリング』

出場者ゾロ、サンジ、トニートニー・チョッパー

第三回戦『コンバット』

出場者モンキー・D・ルフィ

見学アイザック・エレノア、ヤオ・リン

その決定に、約二名が即座に驚愕と困惑の声を上げる事となった。

「何でサ!!」

「この人はともかく私も?!!」

「当たり前前だが!!!」

「大人しくしてろ重症患者と部外者!!!」

本気で麦わらの一味に世話になる気満々の様子のリンを押し退け、抗議の声を上げるエレノア。

すると、ロビンを除く一味全員が一斉に目を吊り上げ、無茶を通そうとしている彼女に怒りの声を上げる。チョップパーなど、鬼と見間違わんばかりの形相だ。

「いいから、あんたはそこで大人しくしてなさい！ それとあんた！ 役に立ちたいんなら、その子ちゃんを見張ってなさいよね!!」

「お、おう……」

「え……」

ぎろっ！と鋭い目で睨みつけられ、リンは若干引きながらも頷く。

エレノアは完全に荷物扱いされていることに不服そうにしながらも、仕方がないとため息をつく。

が、ナミに見えない場所で、彼女の目は悪戯っぽく輝いていた。

「……ま、見学にもできる事はあるけどね」

「？」

『さアさアまずは海岸づたいの島一周妨害ボートレース「ドーナツレースー」!!!』

意味深なエレノアの呟きに、リンが訝しげな表情になる。

そんなやり取りの間にも、祭は進められ最初の協議の準備が行われていく。

与えられた三つの空樽と二本のオールのみを使用した、手作りボートで島を一周するレース。

南の海の珍鳥 “超スズメ” の背に乗る司会イトミミズの進行で、最初の競技が紹介されていく。

『まずは麦わらチーム!!? 航海士ナミ!!? 狙撃手ウソップ!!? 考古学者ロビン!!? 乗り込むボートは『タルタイガー号』!!?』

「これ沈まない?」

「だからおれは船大工じゃねえんだよ!!?」

「きつと沈むわ」

『さアそしてフオクシーチーム代表は我らのアイドル、ポルチエちゃん!!? 率いるのはカジキの魚人カポータィ!!? ホシザメのモンダ!!? 乗るボートは『キューティワゴン号』~~~~!!』

「いやん任せて♡」

片やぎしぎしと軋み、今にも分解しそうな有様の、船大工ではないウソップ手製のいかだ。

片やメンバーの一人?のサメが縄を引き、魚人とタッグを組むポルチエが乗る船。

端から大分優劣に差がつく形となっていて、すかさずナミが抗議するものの、アウエ

いな状況もあつて即座に封殺されてしまう。

「勝てよ〜!!? おめエら〜!!!」

『さア両組スタートラインへ!!!』

「沈めてあげる」

「やってみなさいよ!!!」

ルフィが呑気に応援の声を上げる先で、苛立つナミと挑発するポルチェがバチバチと火花を散らす。

両者のやる気が十分に高まったところで、イトミミズが再び盛大な盛り上げを促した。

「さアさア!!? お待ちかね、勝てば宴会敗ければ深海!!? 情け無用のデービ〜バツク!!! 第一回戦『ドーナツレース』始まるよ〜!!?』

第163話 “何でもあり”

『ここで一発、ル〜ル説明!!?』

男達の喝采が湧きあがり、波に揺れる樽ボートに乗った二組のチームに視線が集まる中、司会のイトミミズがマイクを使い語る。

島をボートで一周する、ただそれだけ。

その間如何なる妨害も策も違反にはならない、ひたすらにゴールをめざせという、実にシンプルなゲームであった。

『卑怯だ何だと抜かした奴ア一海賊の恥と知れ!!!』

「レースになるのか?」

「おうコラウソップ!!? レディ達にかあつたらためエオロすぞ!!!」

「盛り上がってきたネ〜」

「何でもありありつてわけね……」

「負けんな〜!!! ウソップナミロビン〜!!!」

「ワクワクしてきたぞ……!!?」

周りの歓声に流されてか、ルフィ達もルールのあまりの単純さを全く気にせず、開始

の合図を待つナミ達に声援を送る。

ナミは揺れる樽ボートの上でため息をつき、キツと表情を改めて前方を見据える。散々文句を言った後だが、負けたリスクの大きさを考えても、本気にならざるを得なかった。

「——とにかくやるからには、勝つわよ!!?」

「相手を沈めてもいいのよね」

「おお、頼もしいな」

意外とゲームに意欲を見せるロビンの台詞に、終始不安顔なウソツプが感嘆の声を上げる。

クールな女性という印象が強い彼女だが、こういった催しに対する興味は、意外にもそれなりにあるようだ。

そんな彼女達の元に、司会から砂時計のような何か——ロングリングロングランドの永久指針が投げ渡された。

『さて受け取れ、迷子防止の永久指針!!?』

「迷子?」

『せいぜい、島から離れすぎないようにお気をつけて。幸運を祈るよ!!?』

何故、島を一周するだけなのにこんなものが必要なのか、と訝しげな顔をするナミ。

そんな彼女を見ながら、エレノアがちらりと傍らにいたリンに目を向ける。

「ヤオ・リン。ちよつと…」

「ン？」

『位置について!!! レディ~~~~~イ』

小さな声で、エレノアがリンに何か話しかけるその後。

イトミミズの掛け声が始まり、それと同時にガチャガチャと無数の重火器が構えられる音が響く。

気づいたナミが、戸惑いで大きく目を見開いたその瞬間。

『ド——ナツ!!!』

「!!!」ギヤアアア~~~~ツ!!!」

イトミミズからの開始の合図が飛び、フォクシー海賊団の応援の場で、突然真っ赤な粉塵が巻き上がる。

轟音や悲鳴と共に、もくもくとその煙は広がり、フォクシー海賊団がそれを吸い込まれる羽目になった、すると。

「目が…目がア~~~~!!!」

「目が痛エ!!? 鼻が痛エ!!!」

「医者~~~~!!!」

煙を吸い込んだ者達は、皆一斉に顔中から涙や鼻水を溢れさせ、激痛に苦しみ泣き叫ぶ。転げ回っても薄れない、感覚器官の全てを刺激するその苦痛に、誰一人立ち上がれなくなっていた。

「おらおらア!!? キャプテン・ウソツプ特製の催涙弾をしこたま食らいなア!!! ほらヤオ・リン!!? 食べた分全力で働け!!!」

「了解サ!!? わはははははは!!!」

「何やってんのよあんたら~~~~!!!」

見れば風上で、膝の上と車椅子のすぐ横に積み上げた真っ赤な団子のような弾を、エレノアとリンが片っ端から投げ込んでいる。

ナミに驚愕の声を上げられながら、二人はその攻撃の手を止めなかった。

『両組一斉にスタート!!? かしお——つと!!? フォクシー海賊団お邪魔攻撃が麦わら一味の迎撃でしよつばなから沈んだア!!!』

「な……ちよ……ちよつとエレノア!!! 何やってんのあんた!!?」

「いや……あれでいい!!? チクシヨウ!!? 動かしちゃいけないやつに動かさせちまつた!!!」

どう見ても悪役側がやりそうな、とんでもない非人道的な妨害行為を働くエレノアに、ナミが思い切り待ったをかける。

しかしそれに対し、ウソツプは悔しそうに、ロビンは実に落ち着いた様子を見せていた。

「『妨害』は海賊競技の常識だ!!?」

「助かったけど納得いかない!!?」

「あの子の方がわかってたみたいね」

憤然とした声を上げるナミだが、彼女以外に嘆く者はいない。

海賊の催す遊戯において、正々堂々などと言う言葉ほど相応しくないものはないのだから。

「いいぞ〜〜!!! エレノア〜〜!!!」

「バカ!!?」 応援してる場合じゃねエ、おれ達も奴等の妨害を妨害すんだよ!!!」

「あんにやろう楽しみ独り占めしやがって…!!?」

「だからお前は絶対安静だと言ってんだろうが!!!」

楽しそうに声援を送るルフイに、サンジやゾロが急ぎエレノアの応援に向かい、チヨツパーが鬼の形相で怒鳴りつける。

当初に懸念していた、ゲームの観戦者からの妨害が失敗に終わったことを安堵しつつ、ウソツプは遙か前を進む敵の船を見据える。

「よし、追い上げるぞ!!?」 エレノアが作ったチャンスを無駄にするな!!!」

「だいぶ先、行かれてる」

「早くギャラリーから離れよう!!?」

大急ぎで、満身創痍で働く仲間の手助けを生かそうとオールを動かす三人。

そんな彼らを見ながら、フオクシーはにやりと、不気味な笑みを浮かべていた。

「フェツフェツ…ますます面白い一味だぜ……………!!? ……さて…我らの本領といこ

うか、ハンバーグ!!?」

「へエ、オヤビン」

敵のボートを必死に追う三人。

それを横目に見ながら、エレノアは観戦の場から引き剥がそうとしているチョツパーに振り向いた。

「もーチョツパーってば…このくらいなら問題ないって」

「大ありだバカ!!! 次勝手に動いたらお前、鎖と手錠でベッドに縛り付けるからな!!!」

「どんどん過保護になってくねあんた……………」

くわっ、と普段のかわいらしさが消え失せた凄まじい形相で告げるチョツパーに、エレノアはうんざりした顔を見せる。

チョッパーはそのままエレノアを観戦者達の輪の外に連れて行き、フンツと腕組みをして彼女の見張りに着く。是が非でも、この場から動かさない気らしい。

「やれやれ……」

「あそこまでレースが進むと、おれ達のやる事もなくなってくるネ」

「オイ兄ちゃん、休むんならこれでも食ってみろよ!!?」

「オ!!? いいネエ!!?」

まるで囚人のような扱いだと、ため息と一緒に肩を竦めるエレノア。

半目で肩を落とす彼女の元に、屋台の食べ物で両手や懐を一杯にしたリンが、上機嫌に近付いてくる。

「あんた……本気であの船に乗るつもり? 何の益があるんだか……」

「はっはっは。まーまーそう警戒しなくてもサ、仲良くやろうヨ天族サマ」

馴れ馴れしく話しかけてくるリンに、エレノアは胡散臭そうな目を向けて目を逸らす。

しばらく無言が続くが、やがて顔を上げたエレノアがリンに視線を戻した。

「……………今のうちに聞いておきたいんだけどさ」

「ン?」

「あんた……いや、貴方はなんのためにこの海にいるの? 部下でも何でも使えばいい

でしように……」

リンの格好を見るに、船乗りには見えない。彼が当初に言っていた通り、色んな船に勝手にただ乗りして旅を続けていたというのも、真実なのだろう。

それ故にわからない。見つかつて叩き出される危険や、この過酷な旅で船と一緒に沈む可能性を受け入れ、一体何を求めてこの海に挑んでいるのか、と。

「あなたの探し物って……何なの？」

エレノアの問いにリンは黙り込み、しかし徐々にその笑みを深めていく。

まるで、エレノアにそう問われることを、ずっと待ち望んでいたかのように、意味深な笑みを浮かべて、次のように呟いた。

「不老不死」

何のためらいもなく呟かれたその一言に、天使の少女は大きく目を見開き、凍り付く。エレノアのその反応を目にしたリンは、まるで探し物を見つけたかのように、細めた目を少し開き、鋭い視線を向ける。

二人の間のピンと張りつめた空気に気付いた者は、周りに警戒し話を聞いていなかった。たチヨッパーを含めて、誰もいなかった。

『さアデービーバックファイト一回戦『ドゥゥゥナツレース』!!! 今まさに決着の時を迎えようとしているよ!!? さくく勝者はどっちだ!!?』

エレノアたちの会話をよそに、レースは終盤へと近づいていた。

ウソツプの根性、ロビンの奇策、そしてナミの天才的な航海術の駆使により、麦わらチームの船は大差をつけてゴールへと近づいていたのだ。

「ナミ達が勝ってるぞ!!! やった——!!!」

「んナミさくくん♡ ロビンちゃくくん♡ スピーディな君達も素敵だくくく♡」

最初の勝負に、白星を挙げられることに歓喜の声を上げるルフィ達。

だが、それにたいして、フォクシー海賊団の面々は、ニヤニヤと不気味な笑みをこぼすばかりであった。

「おしかつたな、お前達」

「何で!!? 勝ってるだろ!!?」

「ギャハハハ、今はな…見ろ! オヤビンが来た!!?」

彼らの見る先、ゴールに向かうナミ達のちょうど真横で待つフォクシーに視線が向き、ルフィ達は訝しげに首を傾げる。

そしてこの時ルフィ達は、彼の妨害を食い止めなかったことを激しく後悔する。

もしもこの時、エレノアがすぐ近くに居たならば、この展開を防げていたかもしれないな

い。

「オヤビンもお前と同じく……『悪魔の実』の能力者なんだ」

しかしそんなものも起こる事はなく、ゴールを目指すナミ達に向けて、フォクシーの手から謎の光が迸った。

「ッノロノロビ——ムッ!!!」

『勝者!!! キューティワゴン号!!! デービーバックファイト一回戦『ドーナツレース』を制したのは!!! 我らがアイドルポルチエちゃん!!!』

「いやん♡ ありがとうみんな!!? 当然の結果よ!!!」

どっ!と高まる歓声の中、拍手喝采を受けるポルチエが笑顔で大きく両手を振る。

仲間の魚人カポティとホシザメのモンダも、向けられる喝采に両手を挙げて応えていた。

「これでまずは船員一人いただきだぜエ!!!」

「ポルチエちゃん最強♡!!?」

「ギャハハハ!!? 誰もこのフォクシー海賊団に敵わねエのさ!!!」

「おいお前ら〜〜!!?」

歓喜するフォクシー海賊団とは真逆に、ルフィ達は愕然とした様子で、樽ボートの上

で項垂れる仲間達を凝視する。

しかし絶句する彼らに構うことなく、フォクシーは愉快そうにルフィ達を見下ろした。

「ホイホイホイホイフエツフエツフエ~~~~~!!! さア~~~~~差し出して貰うぞ、おめエらの仲間を一人よ~~~~う!!!」

「……おい!!? ちよつと待て!!? 今、何しやがったんだ!!!」

納得できず、サンジがフォクシー海賊団全員に待ったをかける。

どう考えてもつじつまが合わない、あり得ない今の状況に対し、フォクシー海賊団の誰一人として疑問を抱いていない。

つまりこの現象について、彼らは全てを理解しているという事だ。

「勝つてたじゃねエか……!!! ……寸前まで……」

「寸前までな!!?」

「ぶははははははははは!!!」

「ナミさん………!!!?」

食つてかかるサンジの、その狼狽ぶりが可笑しくてたまらないと、フォクシー海賊団がみなで爆笑し始める。

ルフィはすぐさま、未だ立ち直れていないナミ達の元に駆け寄った。

「おい!!? ウソツプ、ナミ、ロビン!!? どうしたんだ!!?」
「大丈夫か!!」

ルフィ達の呼びかけに、ウソツプもナミも何も答えられない。

ロビンでさえ、愕然とした様子で項垂れ、冷や汗を流して黙り込んでいた。

「……………何がどうなったのか」

「おい…!!? おれ達ア敗けたのか!!?」

「勝ったと思っただらお前ら急にノ口くなって…!!? 抜かれちゃったぞ!!!」

「——ええ、勝ったと思った瞬間…」

三人とも、そしてそれを目撃したルフィ達も、何が何だかと言った様子で立ち尽くす。

そんな彼らに、高らかに嗤いながらフォクシーが語り始めた。

「フエ〜〜ツフエツフエツ…何も不思議がる事アねエよ、その原因は、ノロマ光子」

!!!

「ノロマ光子」だと…?」

「この世に存在するまだまだ未知の粒子だ!!?」

それは、まさに悪魔の力だった。

生物でも液体でも気体でも、その粒子を受けた物体は他の全てのエネルギーを残した

まま、物理的に一定の速度を失う。

つまり、触れたもの全てがノロくなる力を持った粒子。

それを体から発する事ができるようになったのが自分なのだと、フォクシーは語ってみせた。

「目を疑うだろう、これが…!!! ノロノ…」

デモンストレーションとして、部下が放った砲弾をノロくし、空中でゆつくりにさせてみせるフォクシー。

効果の持続時間である30秒が過ぎたその瞬間、速度を取り戻し炸裂した砲弾に吹っ飛ばされていたが、その能力の凄まじさは確かであった。

「オヤビーン!!!」

「…畜生。つまり、アレにやられたのか……」

「…あんなのでレースを妨害されたら…!!?」

「こいつらのこのゲームへの妙な自信の根源はコレか…!!! フザケた能力、持ってやがる…!!?」

「とにかくお前達!!? わかったでしょ!!? お前達は敗けたのよ!!!」

「第一回戦『ドーナツレース』!!! おれ達の勝ちだ!!!」

黒こげになったフォクシーが、どよめくルフィ達に告げる。

最初から妨害行為が認められたゲームである以上、それに反論する権利は与えられて

いない。認めるしかなく、一味は悔し気に歯を食い縛っていた。

『第一回戦、決着……!!! さアさアでは待望の戦利品!!? 相手方の船員1名!!? 指名してもらおうよっ!!? オヤビン!!? どうぞ……っ!!?』

イトミミズの進行で、仲間の交換が始まる。

フオクシーは不気味に嗤いながら、緊張で身を固くし、あるいは不安で青い顔になる相手チームを見渡した。

「まずは一人目……おれが欲しいのは……!!! お前……!!?」

彼の指が、ゆっくりと一人を示す。

リンに車椅子を押しされ、黙り込んでいるルフイたちを心配そうに見つめている、天使の翼を持った少女を。

「錬金術師!!! アイザック・エレノア!!!」

「……へ?」

唐突に名を呼ばれたエレノアは、思わず間拔けな表情で固まってしまったのだった。

第164話 “見届けやがれ”

「そんな…!!? エレノア——!!!」

「お、お」

フオクシー海賊団の船員の一人に車椅子を押され、エレノアがフオクシーの元に運ばれていく。

たまらずチョッパーが縫りつきそうになるが、慌ててウソップが彼にしがみつぎ、押しとどめさせた。

「く……当たり前か！ 天族は船乗りにとつちや吉兆の証!!? この機会を逃すバカはいねエ……」

「エレノア——つ!!!」

「だ……!! “白ひげ”の娘だぞ!!? 正気かよあいつら!!!」

「おいどうするよ……今度エースにあつた時にやおれ達ブツ殺されるぜ」

「それどころか “白ひげ海賊団”が総攻撃してくるわよ!!? いや……つ!!!」

「あいつらに大海賊の娘を囲えるような器量があんのか……?」

まさかの事態に、麦わらの一味全員が頭を抱える。

敗ければこうなる事はわかりきっていた事だが、狙われた相手が予想外だったため、そしてそれがもたらす最悪の未来に頭を抱える他にない。

「バカ言うんじゃないねエ……そんなセコいマネなんざしねエよ」

だが、そんな一味の嘆きに、他ならぬフォクシーが呆れた視線を向ける。

本気で苛立っている様子その声に、ルフイ達は思わず口を閉ざし、相手チームの船長を凝視した。

「お前達の言う通り!!? 天族は海に生きるものなら誰もが夢見!!? 追い求める存在!!! この広い海でその姿を拝めた奴ア、例外なく幸福が訪れるとさえ言われる女神に近い存在!!! 白ひげの娘だろうが誰の娘だろうが関係ねエ……貴く気高い存在だ!!!」

まるで自身こそがそうであったと語るように、フォクシーは恍惚とした表情で語る。一味がぼかんとした顔になるのも構わず、勝手に語り続ける。

そしてその表情が次の瞬間、くわっと鬼のような凄まじい形相に変わった。

「そんな女神様を……!!? こんなにボロボロにするような連中の元に置いておけるわけねエだろ!!! 大バカ野郎共!!!」

「ぐわアっ!!!」

「ぐうの音もでねエ!!!」

ぐさあつ!と心に突き刺さる事実、麦わらの一味全員ががくりと膝をつく。

あからさまな妨害やズルや騙しなど、姑息な手段で勝利を奪い取った連中の頭に正論を突き付けられ、より一層の衝撃に襲われていた。

頭を抱える一味の事を放置し、フォクシーは自軍の陣地に連れてこられたエレノアに、フォクシー一味の証であるマスクを備えさせる。

「さーこちらへどうぞお嬢さ〜ん!!!」

「エレノア!!?」

「さアさア “妖術師” エレノア、あんたはもううちの船員になったんだぜ!!? おれに忠誠を誓い!!? そして大人しくウチの設備を存分に使って傷を癒せ!!! フェフェ

フエ!!?」

「クソオ…!!? 悔しいが何も言い返せねエ!!!」

「むしろあつちにいた方が安心なんじゃ…」

「バカ言うな!!! こんな別れがあつていいわけねエだろ!!!」

口調こそ邪悪なのに、台詞は全てエレノアを心から案じるもので、ルフィ達が何を言っても彼らこそが悪役に思えてくる。

船の大きさといい人員の多さといい、深い傷を負った彼女の今後を考えるとこのままの方がいいのではないかと、そう思わずにはいられない光景である。

しかしそれを認められない者も当然いた。

「やめろくくく!! エレノアを返せよくく!!」

「落ち着けチョッパー!!? 悔しいけどこれはルールだ!!? 一方的に破るのはエレノアの名誉にも関わる…!!?」

「そんなの納得できねエよ!!? あいつはおれ達の仲間で……おれはあいつの主治医なんだ!!! 何で今更あいつらなんか」

エレノアの傷を診て、治療を続けてきたチョッパーは、急なこの別れを認められず叫び続ける。

ウソツプが必死に止めるも、じたばたと暴れる彼の勢いは止まらない。仲間への想いと医者としての意地、様々な感情が混じって、正気ではいられなかった。

その時だった。

ガンツ!と激しい音が響き、一人の男が雄々しく吠え出した。

「ガタガタ騒ぐんじゃねエ、チョッパー!!! 見苦しいぞ!!!」

飲み干した酒瓶を地面に叩きつけ、胡坐をかいて背を向けるゾロ。

彼が発した激しく、そしてあまりに冷酷な言葉に、騒いでいたチョッパーは勿論、悔し気に歯を食い縛っていたルフイ達も言葉を失くす。

エレノアを除き、もつとも長くこの一味にいる剣士は、泣き顔のチョッパーに続けて
厳しい声をぶつける。

「あいつがこの海に出たのはあいつの意志!!? こういう目に遭う可能性は十分にあった……どこでどうくたばろうと自分の責任!! 誰にも非はねエ」

「ゾロ……!?」

「…ゲームは受けちまつてるんだ!! ウソツプ達は全力でやっただろ。海賊の世界で、そんな涙に誰が同情するんだ!!」

どうして、そこまで突き放すようなことを言うのか。奪われた仲間の事はどうでも良いのか。

そんな風を受け取れそうな厳しい言葉に、ナミは怒りを滲ませた戸惑いの目を向ける。

ゾロは自身に向けられる、咎めるような視線をすべて無視し、ぎろりとチョッパーを睨みつけ、鋭い声で告げた。

「男なら……!!! ふんどし締めて、腹括って奪い返しに行け!!!」

男の覚悟を試すような、ゾロの言葉。

絶句するチョッパーは、顔中を汚す涙と鼻水の事も忘れ、呆然と固まる。

「チョッパー!!」

不意に、フォクシー陣営から響いてきた声に、ハッと振り向く。

目を見開いたチョッパーの視界に映ったのは、フォクシー海賊団の船員に囲まれなが

ら、不敵に笑ってみせているエレノアの姿だった。

「信じてるから、必ず私を取り戻してよ!!!」

疑う素振りなど微塵もない、本気で次の戦いを信じてくれている、傷だらけのまま笑う天使。

しばらくの間固まっていたチョッパーは、やがてずるる…と垂れた鼻水を呑み込み、雄々しく仁王立ちして顔を上げた。

「……………!!? 黙っておれ達の勝負、見届けやがれ!!!」

「よし!!!」

己の覚悟を示した船医に、剣士は強く頷き立ち上がる。

わずかな時間で、ただ泣くばかりだった少年を男に変えてみせた海賊達の強い姿に、フオクシー海賊団の方からもどよめきと歓声が上がりが始めた。

「うお———っ!!?」

「イカスぜあの剣士と船医!!?」

「オヤビン、次の2回であいつら貫きましょう!!?」

「嬢ちゃんも根性あるなア」

「泣けたっス、マジ泣けたっス!!?」

「よっしやゾロ!!? チョッパー!!? やっちまえこんにやろー!!! エレノア取り返せ

!!

実に男らしい、弱みを全く見せない剣士の有様に、感極まった海賊達が歓喜する。

チョッパーの覚悟とゾロの闘志、そしてエレノアの信頼を見届けたルフィも、両拳を上げて声援を送る。

「へっ……いっぱしの男見せやがって……貴重なウチの花を返してもらうぜ」

鼻を鳴らし、サンジも次の戦いへの闘志をあらわにする。一味から女性が一人減る事はもちろん、こうも焚きつけられて動かない理由はなかった。

暑苦しい高揚を見せる自分の部下や相手の一味を見やり、フォクシーは心底呆れた視線を傍らに置いたエレノアに向けた。

「へっ……バカな女だぜ」

「ゴメンね、氣遣いを無為にするようなこと言っちゃって」

「構わねエよ……そうでなくちやおもしろくねエ」

申し訳なきように頭を下げるエレノアに手を振ってから、フォクシーはにやりと好戦的な笑みを浮かべる。

柄ではないが、こういう熱いやり取りも決して嫌いではないらしい。彼もまた、少しばかりやる気を滾らせ始めていた。

『さーさー取引も終了!!? がぜん盛り上がるデービーバックファイト!!? お次は第

二回戦「グロツキーリング」!!? はくじまくるよくく!!!」

試合後の取引が終了した頃を見計らい、イトミミズが進行を進める。

草原の中心に作られていくフィールドを見据えながら、次の試合の出場選手であるゾロとサンジ、人型になったチョツパーが並んで歩き出す。

が、向いている方は同じでも、心までは全く噛み合ってはいなかった。

「何ならお前がいなくてもいいぞ」

「いえいえてめエこそどうぞクソ野郎」

「おい!!? ケンカすんなよお前ら!!?」

「あの二人にチームワークがあるとは思えないのよね…」

「仲悪いネくく」

エレノアの身柄がかかっているというのに、相変わらずのケンカ腰を見せるゾロとサンジ。チョツパーが間に入るが、改善される様子はない。

そこはかたなく感じる不安に、ナミはがっくりと肩を落とさずにいられなかった。

『ここで一発「グロツキーリング」ルル説明をするよつ!!? フィールドがあつてゴールが二つくく!!? 球をリングにブチ込めば勝ち!! ただし!!? 球はボールじゃないよ!!?』

イトミミズが説明し、フォクシー海賊団の船員がゾロ達の元に、何やらボールがつい

たヘルメットののような物を持つてくる。

『人間!!! 両チーム、まずは“球”になる人間を決めてくれ!!!』

「おめエら誰が“球”やるんだ？」

「ん」

「ホイ」

「ん？」

今一つルールを理解していないように見えたが、訪ねられたすぐその後にはゾロとサンジがチョッパーを指差し、ボール付きのヘルメットが被せられる。

少しの間を置いて、理解が追いついたチョッパーが目を剥き、ゾロ達に怒鳴りかかった。

「勝手に決めてんじゃねエよ!!!? 何でこんな時だけ気が合うんだコラア!!!」

「…チョッパー…!!!? あんただけは冷静でいてほしかった!!!?」

比較的冷静なチョッパーが、ゾロとサンジの間で上手い調整役になると思っていたのに、とナミがまた嘆き天を仰ぐ。

始まる前からすでに嫌な予感しかしない出場者達。

すると、どこからともなくフィールドを盛り上げるような、軽快な音楽が流れ出した。

「ん？」

『おつと聞こえてきた、奴らの入場テーマ曲!!? これまた「グロッキーリング」無敗の精鋭!!』

ゆつくりと開く、狐の船首の口。その中に控えていた三つの人影が、ズシンズシンと地響きを鳴らしてフィールドに降り立つ。

その姿にルファイ達は、特にチョッパーは驚愕と狼狽で目を見開き、叫び声をあげていた。

『そうだ、こいつらに敗北などあり得ない!!? その名も「グロッキーモンスターズ」!!! 今、フィールドに……!!?』

「なっ……!!?」

「おオ……!!!」

「ギャ……!!!」

『登場……オ!!!』

現れたのは、まずフォクシーと常に共にいた奇人ハンバーグ。

次がハンバーグよりさらに大柄な体を持つピクルス。

最後に登場したのは、巨人と魚人のハーフだという見上げる程の巨体を持つビッグパン。

比べる事も烏滸がましい三つの巨体が、悠然とゾロ達を見下ろして試合の開始を待つ

ていた。

『さア~~~~!!! 第二回戦「グロツキ〜リング」!!! 始まるよ〜!!!』

「フェツフェツフェ!!! 勝ってみろい!!!」

不敵に笑うフオクシーは、最早完全に自軍の勝利を確信し余裕を見せている。

フオクシー海賊団全員が、遙か巨大な肉体を有する三人・グロツキーモンスターズに一方的な声援を送っていた。

だが、それを前にしてなお、チョッパー以外の二人は一切の焦りを見せずにいた。

「……!!!」

「不足は？」

「ねエな」

愕然と、目も口も全開にしたまま固まるチョッパーを放置し、首を鳴らすゾロと煙草をふかすサンジ。

こちらも自分達の敗北を微塵も考えていない、泰然とした態度だった。

『我らの誇るグロツキーリング最強軍団に対するは!!! 一回戦で“妖術師”と共にお邪魔軍団を蹴散らした“暴力コック”!!! サンジ!!! 変幻自在の獣人ドクター!!! トニートニー・チョッパー!!! そして6千万の賞金首!!! “海賊狩り”!!! ロロノア・ゾロ!!!』

向こうに比べていささか悪意のある紹介文に、険しい表情になるサンジ。

どうでもよさそうに鼻を鳴らすゾロや、未だに固まっているチョップパーに、観客の位置に移動したルフィ達が声を張り上げた。

「ゾロ——サンジ——頼んだぞ——!!!」

「エレノアを取り返してくれ——!!! 後がねえんだ、ホントすまねえ!! 頼むぞ!!!」

「期待してるヨ——」

「『魚巨人』だって…初めて見た」

「純粹な巨人族ほど大きくはないのね」

わーわーと、周囲から上がる声援に負けないようにと声援を送るルフィ。

大勢の目に囲まれ、応援の声を受けながら、グロッキーモンスターズの三人もそれぞれで声を掛け合い、闘志を高めていく。

…のだが、身長差があるために互いの声が全く届いておらず、話が通じていない事が壺に嵌り、勝手にゲラゲラ笑い合うというおかしな空間が出来上がっていた。

「楽しそーだなー、あの3人………ていうかマジで何を笑ってんの?」

バラバラなんだか仲良しなんだか、ゾロ達に比べて雲泥の差ともいえるほど上手くやれていそうな三人に、エレノアはやや引き攣った表情になる。

どうか、何事もなくあの三人が勝ち残れますようにと、少しばかり儂くなった願いを

託しながら、傍観の姿勢に移っていた。

『シアこの楽しい勢いで~~~~!! 時間は無制限!! 一点勝負!!』

「要するにあのデケエ奴の頭を 向こうのリングにブチ込みや勝ち……!!」 チョッパ
の頭をこっちのリングにブチ込まれりや負けか……!!」

「おい、ほんとにおれで大丈夫か?!? おれでいいのか『ボールマン』!!」

『一回戦で奪われら女神様を取り返せるのか麦わらチーム!! はたまた再び船員を奪う
かフオクシーチーム!! 激突寸前!! 「グロッキ〜リング」!!! 今、笛が鳴るよ!!!』

やる気を見せるゾロやサンジとは反対に、未だ配役に不満を示すチョッパ。

そんな彼には目もくれず、イトミミズの進行に合わせた審判役のフオクシーの部下
が、大きく息を吸い込み。

ピ~~~~ツツ!!!

と、甲高く笛を吹き鳴らした。

『試合開始~~~~つ!!!』

第165話 “人間球技”

「…あれはちよつときつつかもなア」

喧々囂々と、勝負前のために素手で喧嘩を始めるいつもの二人と、それに割って入ろうとして吹っ飛ばされるチョツパー。

それを観客席から見守りながら、エレノアがやれやれと肩を竦める。

自分を本気で救い出す気があるのか、微妙にわからない三人に、大きなため息がこぼれた。

「おい、ジュース飲むか？」

「ありがと。……普段から仲の悪い犬猿二人に、実力的に不安があるチョツパー……………うまいこと間に入ってくれればいいけど」

「ねエ、甘い果物があるわ。食べてくれない？」

「どうも。……しっかし魚巨人とは恐れ入ったなア、あんなのがいるとは思ってもよらなかった」

「ほれ！フロマージュっての作ってみたんだ！ 食ってくれよ!!？」

「嬉しいよ……………つて!!！」

チューとジュースを口にし、もぐもぐと果実や菓子を口にしていたエレノアは、次の瞬間ハッと我に返る。

いつの間にやら周囲に集まっていたフォクシー海賊団の船員達、彼らが向けてくる気遣いの表情に、思わず振り向き叫んでいた。

「さつきから何!!? このひたすら私を甘やかそうとする感じは!!! 過保護か!!!」

「だってよオ!!! こんな大ケガだらけなのに仲間にハッパかけるあんたが輝いて見えて仕方ねえんだもんよ!!!」

「心配しなくても、ゲームの結果がどうなれここであんたにできることは精一杯やるからよ!!! 自分の一味だと思ってゆっくり傷をいたわれ、な!!!」

「…………どうしてこうなった」

裏の意図など何もない、完全な善意で話しかけてくる敵のはずの彼ら。

強く突き放すことなどできるはずもなく、エレノアはがっくりと項垂れるのだった。

そして、そんなやり取りの前で、ついに試合は始まる。

まず最初に動いたのは、肩当てを装着したグロッキーモンスターズの一人、ピクルスだった。

「やるぞ——!!! // 投石器タックル!!!」

猛スピードで駆け込んできたピクルスが、チョッパーに向かって突っ込んでくる。

「ギャ——来た——!!?」

「おいチョッパ、横にどいてろ!!? おれが一人で片アつけてやる」

予想通り、相手チームのボールマンを確保しに来たピクルス。迫る巨体に慌てふためき悲鳴をあげるチョッパの前に、サンジが割り込む。

言われた通りチョッパがその場から離れ、ピクルスの巨体はサンジに迫った。

「うおお!!」

「おめエにや用はねエ、狙いはお前一人だよ!!」

サンジはピクルスの突進を跳び越え、そのままの勢いで相手のボールマン、ビッグパンに向かって跳躍する。

顔面に強烈な一撃を食らわせ、さっさと頭に乘せたボールをゴールに叩き込んでやろうと、彼の腕を駆け上がろうとする、が。

「な…何だ、こいつの皮膚…ぬるぬるするっ!!」

いくら登ろうとしても、異様にヌルヌルするビッグパンの皮膚はサンジに先へ進ませない。

ドジョウの魚人の血を引いているという事実を知らなかったサンジは、いつまでもいつまでもビッグパンの二の腕の上でつるつると滑り続けていた。

「何やってんだてめエは!!! アホか!!!」

「ああ?!? 誰にアホつつつたんだコラ!!!」

「二人ともケンカすんなって!!!」

傍から見ればふざけているようにしか見えないその様に、ゾロが怒鳴り声をあげ、サンジがカチーンと怒りをあらわにする。

再び険悪になる二人に忠告しながら、チョップパーは背後から襲ってくるハンバーグとピクルスから必死に逃げ続けていた。

「ていうか………!!? 助けて~~~~!!!」

「てめエはてめエで何やってんだ!!!」

いつの間にかピンチに陥っているチョップパーに、男二人が目を剥いて吠える。

気を取られたサンジは、突っ立っていたままだったビッグパンが、ゆつくりと身構えていたことに気付かなかった。

「『パンクパス』!!!」

「ぐあ!!!」

巨人の血を引く巨体が、滑り続けるサンジに強烈な張り手を食らわせ吹っ飛ばす。吹っ飛ばされた先でサンジはゾロに激突し、凄まじい轟音と土埃が巻き起こった。

「おわー!!! お前ら~~~~!!?」

「イヒヒ!!! 『スピニングタックル』~~~~!!!」

痛恨の一撃を食らった二人を案じ、つい振り向き減速してしまったチョツパー。

そこへ、不気味に嗤ったピクルスが急接近し、高速回転したままチョツパーに激突、彼を空中へと打ち上げた。

「うわ————っ!!?」

「チョツパー——!!?」

撥ね上げられたチョツパーが向かう先には、すでにハンバーグが待ち構えていて、飛んできたチョツパーをがっちり掴んでゴールに向かう。

怪物と称される三人の敵による、息の合った連携が出来上がりつつあった。

「——この…バカマユゲ!!!」

「このクソマリモ!!!」

「決まるぞ!!! ハンバ―ガーダクだ~~~~!!!」

「ぎゃあ~~~~!!!」

両脇をがっちり掴まれ、逃れられないチョツパーが悲鳴をあげる。

助けに向かおうにも、チョツパーの居場所はフィールドの反対側で、走ったところで間に合わない。

絶体絶命のピンチに、ルフィ達が頭を抱えだした。

「ああ、この手があった」

「え?!」

が、ゴールに叩き込まれる寸前、チョツパーは獣人型に変身し、小さくなって拘束からスポーンと逃れる。

ギョツと目を見開くハンバーグをよそに、チョツパーは急いで着地し、その場から離れる。

「ゴールなんかさせるかア!!! どオリやあああ〜!!!」

「クソ剣士にフォロローされてちゃ……!!! おれの立つ瀬がねエんだよ!!!」

そしてゾロとサンジも、反撃に移る。

ゾロはピクルスの巨体を掴んで思いきり振り回し、サンジはハンバーグに向かって駆け出す。

そしてほぼ同じタイミングで、ゾロがピクルスをぶん投げ、サンジがハンバーグを蹴り飛ばし、空中で頭から正面衝突させてみせる。

終わるかと思われた試合は、まだまだ継続できることを示した。

『ノ〜オゴ〜〜〜ル!!!』
『ボールマン』
「チョツパー、一筋縄でリングをくぐつてくれそうにないよ〜っ!!!」
「グロツキーモンスターズにパワーではり合う奴らが出現〜!!!」
「壮絶なゲームが!!?」
「始まってしまったア〜〜〜!!!」

しぶとく敗北を認めないゾロ達に、観客席から盛大な喝采が送られてくる。

ひとまずノーゴールに終わったことで、知らぬうちに腰を浮かせていたエレノアが、ほっと安堵の息をついた。

「ふう……あいつら、ヒヤヒヤさせやがるよ」

「ホントに仲悪いネ、あいつら」

「……うお!!? あんたいつの間」

胸を撫で下ろしていたエレノアは、いつの間にか隣で焼きそばをすすっていたリンに気付いて目を見開く。

構わずリンは、変わらない馴れ馴れしきでエレノアに近づき、話しかけてくる。

「こりゃ本気で移籍覚悟しといたほうがいいかもしれないヨ………そんなときやおれもこっちにお世話になろうかな」

「はっ……尻の軽い事で」

図々しくも人の一味の食料を食い散らかし、それだけでは飽き足らず、別の一味にも厄介を懸ける気満々でいるリン。

すで見切りをつけている様子で、のんびりと試合の経過を眺めていた。

「……でも、あいつらは負けないよ。そう決まってるさ」

「ふうん……信用してるんだネ」

「そりゃそうさ……」

エレノアはリンにやや軽蔑したような視線を向けつつ、不意ににやりと不敵な笑みを浮かべる。

ぞくり、と。

その時、なぜかリンの背筋に寒気が走る。

「仁義あつてのこの世界、仲間を信じられなくなったら、そいつはもうこの海じゃ生きていけない………仲間を信じられなくなっても、仲間を物の様に扱う様になっても、そいつはそこで死ぬだけさ」

ある種の凄みのような物を感じさせるその眩きに、リンの焼きそばを食う手がピタリと止まる。

満身創痍で佇む天使の見せる、確固たる信念を感じさせるその姿に、興味が薄れかけていたリンの表情が少し変わっていた。

しかし、その緊迫した雰囲気も、そう長くは続かなかつた。

「ぶしし、ぶししし、ぶっしっし」

「うおお!!？」

「ぎゃああ——っ!!」

「…あれ、なんかめっちゃ逃げてる。何が…？」

試合に視線を戻せば、笑いながら、ズシンズシンとゾロ達を追い回すビッグパンの姿

がある。

その足をよく見てみると、ビッグパンの靴の底には、いつの間にか鋭くデカイ刃が備わっているのが見えた。

「思いつきり凶器使つてル〜〜!!!」

「うおおい審判〜〜!!! 武器はナシつて話でしょうが!!!」

さすがにこれは捨て置けないと、試合の公平を判断する審判に叫ぶエレノア。

だが審判は、顔中から汗を垂らしてそっぽを向き、下手くそな口笛を吹いていた。

「いや何その白々しさ!!?」

「フエツフエツ、偶然見てねエんなら仕方ねエよな——」

審判どころか人間としてもあるまじき姿に、エレノアが吠えるもフォクシーが全面的にそれを肯定してしまう。

たまらず、怒りが限界に達したサンジが、審判に蹴りを叩きつけていた。

「フザけんなア!!!」

「サンジくーん!!! 気持ちはわかるけど蹴つちやダメ〜〜!!!」

「てめエ見たろ何だその滝の様な汗は!!!」

鬼のような形相で怒鳴るサンジだが、ぴくぴくと震える審判はそれでも認めようとなない。

船長への忠誠か意地か、是が非でも自分の一味の反則負けを認めないつもりのような
だった。

「麦わらチーム、サンジにイエローカード!!」

「何だとてもエ!!」

「ま!!? 待って待って待って!!」

「……………私これ、ほんとに帰れるのかな」

「…………あれだよ、住めば都っていうしサ」

あげくの果てに、理不尽な理由で突き付けられる処分にサンジがまた怒り、ウソツプ
がそれを必死に制する。

エレノアは頭を抱えて項垂れてしまい、流星に不憫になったリンが彼女の肩を叩き、
宥める。

その後も続く、反則に続く反則。

思いきり斧を振り回すビッグパンに、鋼鉄の防具をつけて戻って来るピクルスとハン
バーグ。

それを使った一方的な暴虐を、それでも審判は認めようとしなない。

たった数十秒の間に、ゾロとサンジとチョッパーは、血だらけでフィールドに倒れ伏
す有様になっていた。

『これはもう立ち上がれないねー!!? 麦わらチーム、敵はまさに：グロツキくくく!!!』
息を呑むほどの惨状に、なおもフォクシー海賊団から上がる歓声。

卑怯・卑劣、ルールとして書かれていようと、認められなければ反則ではないという最悪の戦い方に、ルフイ達は憤慨するも手を出せない。

『——さくくくてあとは“ボールマン”をゆつくりと“リング”という名の棺桶に!!? 押し沈めれば2勝目くくく!!! 無敵!!! 強すぎる!!? グロツキくくくモンスターズ!!!』
「…おいチョッパ、コック」

わーわーと盛り上がり続ける、他に味方のいない完全なアウェイの会場。

耳障りな歓声と小馬鹿にした視線に晒される中、眉間にしわを寄せたゾロが、自分と同じく倒れ伏す二人に声をかける。

「10秒手エ貸せ」

「…妥当な時間だな」

「お前らがそう言わなかったら…おれが思いっきりぶん殴つてたところだ」

剣士の怒りに満ちた呼びかけに、コックと船医も強く目を光らせ、傷だらけになった全身に力を漲らせていった。

「あいつら…」

『もはや勝敗の行方は歴然だねエ!!? やつっぱり怪物達には敵わない!!? 善戦空

しく倒れる麦わらチームにむしろ、私実況のイトミミズ!!! 称賛の拍手をもってこの勝負を見届け……」

もはや、フォクシーチームの勝利は確定したものととして、早々に勝手に試合の終了を告げかけたイトミミズと、納得しかけるフォクシー海賊団。

しかし彼らは、次の瞬間大きく目を見開く。

散々に痛めつけられたゾロ達が雄々しく仁王立ちし、ハンバーグ達を睨みつけていたからだ。

『立った!!! 立ち上がったよ麦わらチーム~~~~!!!』

思わぬ展開に、イトミミズやフォクシー海賊団全員がどよめきの声を上げる。

反対に愕然としかけていたウソツプたちが息を吹き返し、不屈の闘志を見せるゾロ達に歓喜の声をぶつけていた。

『恐ろしく頑丈な二人、剣士ロロノア!!? コツクのサンジ!!? 船医チョッパー!!!
しかし果たしてまだ戦う力が残っているのかな~~~~!!?』

「うお——つ!!!」

「立ったー!!! やつちまえチキシヨ~~~~!!!」

フォクシー海賊団からの声も、次第に彼らを称えるような声が混じり始める。

ただやられるだけでは面白くない、力の限り抗い続ける男達の姿が、彼らの琴線に触

れ始めたようだ。

そんな熱い雰囲気は漂い始めた時、それまで沈黙していたこの男が、グロツキーモンスターズに向けて声を張り上げた。

「おいお前ら!!! ワン『モンスターバーガー』プリ〜〜〜ズ!!!」

響き渡るフォクシーからの宣告。

それを耳にしたフォクシー海賊団は、皆例外なく目と口を全開にし、フォクシーを凝視し立ち尽くしていた。

「……………な…何?」

「何かしらね……………」

『なんと…!!? オヤビン!!? 『モンスターバーガー』を注文してしまったよろよろっ!!!』

麦わらチーム絶体絶命くくくく!!!』

どよめきながら、しかし期待に満ちた声を上げるイトミミス。

そして、奴らがついに動き出す。

ハンバーグはズボンの中から鋼鉄の棍棒を取り出し、地面に叩きつけ、ピクルスは鋭いカッターラスを抜き出し、ぐるぐると回転を始める。

ビッグパンは二枚の巨大な丸い鉄の板を持ち、上下で叩き合わせ轟音を響かせる。

「ぷぷぷ……………ミンチにして、ハンバーグ……………」

「イヒヒ!!? スライスして、ピークールス♪!!」

「「ゲストは?」」

「緑のレタスに♪!!? 黄色いチーズ♪!!? そして真っ赤なシカ肉♪!!?」

「ぶししし!!? ビッグなパンではさんで潰せば♪!!」

「「ッ モンスターバーガー」!!!」

あからさまな凶器の使用、それも掠っただけで致命傷になりそうなほど、凶悪な武器を使った三人連続の攻撃。

案の定審判はそれに見ない振りをし、ズシンズシンと三人のモンスターたちが相手チームに迫っていく。

しかし、それでもゾロとサンジ、チョッパーに退く様子はなく。

そして決して敗けないという堅い覚悟を秘めた目で、無敗の怪物達を見据え続けた。

第166話 “返せ!”

「ぶぶつ!!? ミンチになれ——っ!!!」

縦に並ぶ三体の怪物達。

その先頭に立つハンバーグが、ゾロ達を叩き潰そうと棍棒を振り回す。

迫り来る鋼鉄の塊の前に、チョツパーが懐から取り出した丸葉を噛み砕き、呑み込んだ。

「ランブル!!? ウオークポイント 脚力強化!!?」

獣の姿に戻り、ザツザツと地面を搔く。

蹄を地面に突き立てたチョツパーは、次の瞬間凄まじい加速を見せ、ハンバーグの目前に急接近した。

「!!? ふ…速…」

「刻蹄『ダイヤモンド菱形』!!!」

目を見開くハンバーグの前で、チョツパーはさらなる変形を見せる。

両腕の筋肉を異様に膨張させた、必殺の形態。それから放たれる蹄の一撃がハンバーグの鳩尾に叩き込まれ、一瞬で彼の意識を刈り取った。

「リーダー!!!」

「ブクティエール木犀型斬シユート!!!」

ハンバークの後ろのピクルスが、ぐらりと体を傾がせるハンバークを案じて叫ぶ。

だがその時には既に、後ろに下がったチョップパーと交代する形で割って入ったサンジが、ハンバークの顎に強烈な襲撃を食らわせ、空中に吹き飛ばしているところだった。

「まずいど!!! おいビッグパン!!!? クラッシュを止める!!!」

「……………は?」

自分の頭上を越えていくハンバークに、ピクルスが焦りの声を上げる。

白目を剥いたハンバークはそのまま、ガシヤンガシヤンと巨大円盤を叩き合わせるビッグパンの手元に向かっていく。

直後、ハンバークはビッグパンのクラッシュに巻き込まれ、真つ平らに叩き潰されてしまった。

ひらひらと飛んでいくハンバークを目にして、ようやくビッグパンは自分の失態に気が付き、顔面を蒼白にさせ始めた。

「リーダー!!! おめエよくも!!!」

味方が一人、あまりにあっけない形でやられたことで、怒りに震えるピクルスが刃の回転を加速させる。

サンジとチョッパー、二人まとめて斬り刻もうとしたその時、不敵に笑うゾロが立ち塞がる。

「チーム戦だ、忘れるな」

「……………!!! コノ!!! 刻んでやるどオ!!!」

丸腰の剣士に一体何ができる、とピクルスは標的をゾロに変えて迫る。

しかしゾロは一切慌てる様子を見せず、手に何も武器を掴まぬまま、まるで剣を手にしているかのように身構える。

「『無刀流』……………『龍』!!!『巻き』!!!」

カッ!と目を見開き、ゾロが引き絞った両腕を振るう。

直後、ゾロを中心に凄まじい暴風が吹き荒れ、回転を続けるピクルスが勢いをそのままに空中に吹き飛ばされた。

そして宙を舞ったピクルスの刃は、ビッグパンの前身をズタズタに斬り裂いた。

「ぶしやアアアア!!!」

「!!? わあ!!!」

「ビッグパンが!!! ピクルスの回転剣の餌食に!!?」

「うわ—————っ!!! しまったと、チキシヨ~~~~!!!」

味方を自分で傷つけてしまったピクルスは、激痛で意識を混濁させるビッグパンに酷

く狼狽を見せる。

グラグラとよろめく魚巨人が、ゆっくりと背中から倒れ込みそうになる寸前、傾いたビッグパンの背中にサンジの蹴りが炸裂する。

「〃反行儀キツクコース〃!!!」

凄まじい一撃に、倒れそうだったビッグパンが無理矢理起き上がらされる。

意識も定かではない魚巨人。倒れていけば、巨体を引きずってゴールに叩き込む必要があつたのにと、ピクルスが地面に着地し歯噛みする。

ビッグパンの正面に回り込むサンジの前に立ちはだかり、ピクルスは再び刃を構えた。

「イヒヒ!!? こころは通さんどろろ!!!」

「邪魔なんだよ、お前も審判も」

「え?」

ぎろり、とサンジの目がピクルスを射抜く。

かと思つた時には、鋭い蹴りがピクルスの顔面に突き刺さり、勢いよくぶつ飛ばされていた——審判に向かって。

『客席に!!? ……いや審判に直撃~~~~!!!』

「ハア…!!! 故意にだ…!!! く…ハア…審判に…ハア、よぐも。レッドカー

「……………あれ？」

血反吐を吐き、ピクルスごと倒れ込んだ審判が、一度サンジに蹴り飛ばされたことを思い出し怒りに震える。

退場処分として、レッドカードと笛を取り出そうとするが、どこを探しても見当たらない事で焦り出していた。

「手癖が悪くて、ごめんヨ？」

わたわたと慌てる審判を見下ろし、ペロツと舌を出したリンが小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

そんな暗躍があつたことなど知らぬまま、さらに変形したチョツパーが、ゾロの剛腕とサンジの剛脚の上に乗し、発射準備を整えていた。

「〃飛力強化〃!!?」
ジャンピングポイント

「〃空軍パワーシユート〃!!!!」
アルメ・ド・レル

二人の強力な助力により、チョツパーが真つすぐに宙を進む。

最後の変形で、重量の強化を果たした彼は、未だ直立を保っているビッグパンの顔面にしがつき、全体重をかけて体勢を崩させる。

魚巨人が倒れ込む方向は勿論、相手チームのゴールのど真ん中だ。

「オオオオオ〜!!!」

「まさか!!? 無敵のグロッキーモンスターズがア!!」

「ウソだー!!!」

「ア~~~~!!!」

正気を疑う信じられない光景に、フオクシーを筆頭とした海賊団全員が目を見開き、悲鳴をあげる。

ルフィ達のみが、歓声を上げてその瞬間を待ち侘び、不敵な笑みを浮かべたエレノアが、雄叫びを上げるチョッパーに向けて鋭く吠える。

「行け!」

やがてついに、魚巨人の巨体が地面に倒れ込み、頭頂部につけられたボールがゴールの真ん中に叩きつけられる。

直後、戦いを見届けた男達の凄まじい怒号と喝采が、辺り一面から放たれたのだった。

『ゴ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ル!!!』

「やったー!!? 勝ったぞ~~~~!!!」

「やったぞー!!? うお~~~~!!? こんちきしょうお~~~~!!!」

幾つもの苦難を乗り越え、仲間の失態を払しょくしてみせた三人に、ウソップが号泣しながら歓喜をあらわにする。

悲喜こもごもの声が挙がる中、呻き声を上げる審判の元に、ナミが笛を手近づいた。

「あら審判、お目覚めね。早く笛を吹いて！」

「ホラ早く早く！」

「お…おお、そうだ!!? あいつの審判に対する態度は大反則!!? 退場させてやる!!」

促されるまま、もう片方の手にレッドカードを持たないまま、審判が力いっぱい笛を吹き鳴らす。

これにより、この試合におけるフォクシー海賊団の敗北が決定され、さらなる悲鳴と喝采が湧きあがるのだった。

『そして今、試合終了のホイッスル!!! グロツキーリング決着く!!!』

「……………!!? え?」

「じゃ、ご苦労様♡」

「え?」

『デービーバックファイト二回戦!!? 無敵のチーム、グロツキーモンスターズをくだし!!? ゲームを制したのはなくんと!!? 麦わらちくム!!! 大勝利くくくつ!!!』

イトミミズが興奮した声を上げ、敵チームであるにもかかわらず喝采が止む様子がない。

耳に刺さる程のその声に顔をしかめつつ、エレノアは深く息をついた。

「やれやれ……これでやっと戻れる」

「オイオイいいのか!!? あつちに戻ってホントにいいのか!!?」

「いーからいーから。あ、ちよつと押してくれる?」

「お、おう……」

エレノアの身を案じ、心配する声をかけてくれる一味の一人にひらひらと手を振る。釈然としない気持ちのまま、男はエレノアの手椅子を一味の前まで運んでやった。

『さ——それじゃあ二回戦の勝者麦わらチームには、フォクシー海賊団から船員1名、もしくは海賊旗を奪う権利が与えられるよ……!!? 麦わらの一味船長はだ……くれが欲しいのかな!!?』

「……………もう決まってるんじゃないか」

イトミミズの疑問の声に、ルフィは今さら何を聞いているのかと険しい顔を向ける。

最初の戦いに敗れた時から、ゾロ達は奪われた物を奪い返すために戦っていたのだ。今更別の者を欲しがるはずもなく、ルフィも最初からそのつもりであった。

「じゃあエレノ」

「ちよつと待って、ルフィ!!?」

「え……!!?」

いざその名を呼ぼうとしたその時、突如ナミがルフィの口を塞ぎ、エレノアが愕然と

した声を上げる。

いったいなぜ、とどよめく衆目の前で、ナミは先程気付いたこの戦いにおける必勝法について語り始めた。

「三回戦は一对一の決闘よね。出場選手はルフィとオヤビンだけ。じゃあ今オヤビンを取っちゃえば三回戦は不戦勝になって……もうこれ以上戦う事もなく、エレノアを取り戻せるんじゃない？」

何故こんな簡単なことに気付かなかったのか、と本気で訝しげな様子の子のナミ。

彼女のその提案に、ルフィ達は勿論、フォクシー海賊団全員が啞然とした表情で固まり、一斉に声を上げた。

『ピ……ピーナッツ戦法だ……!!!』

「見損なつたぞおめエら……っ!!?」

「このピーナッツ野郎……!!?」

『信じ難い!!! 耳を疑う悪魔の提案、人に非らずその女!!? その名も「外道」!!! 航海士ナミ……!!!』

途端に向けられる批判の声に、傷付いたナミがロビンに縋りついて泣き始める。

レディが責められる姿に、サンジが怒りをあらわにするが、女性陣以外の麦わらの一味も受け入れ難そうな表情を見せていた。

「まア……気にいらんわなア」

「向こうサンの言う通りだと思っゾ」

エレノアとリンも同じ考えのようで、じとつとした目をナミに向けて眉間にしわを寄せている。

卑怯・卑劣な手段は咎めずとも、勝負自体に譲れぬ矜持があるようで、そこからブルーイングが飛んできていた。

「うるさいってのよあんた達!!! 調子に乗ってんじやないわよ」

「すいませんでした」

止まらない批判の声に、さめざめと涙を流していたナミがついにキレる。

恐ろしい迫力に途端に声は止み、従わざるを得ない状況が出来上がってしまう。

しんと静まり返ったその空気の中で、ふとロビンがあることを指摘した。

「ねえ航海士さん。あなたの提案、確かにここで決着をつけられるけど、同時にオヤビンが仲間になっちゃうわよ」

「え」

「「「あれはいらねえ」」」

ロビンの言葉に、ナミはハツと目を見開き驚愕し、ルフィ達がそれにいやいやと手を振って拒絶を示す。

激しいショックを受けた様子で膝をついたフォクシーをよそに、気持ちを切り替えたルフィがエレノアに向けて呼びかけた。

「エレノア!!! 帰って来い!!!」

「は〜い」

「いや軽いな!!!」

まるで少しばかり遊びに出ていただけのような気軽さで返事を返し、キイキイと車椅子を押して戻ってくるエレノア。

その彼女の通り過ぎた後で、暗い顔で俯いたフォクシーが、がっくりと肩を落として重い雰囲気醸し出していた。

「うわー!!? オヤビンが気持ちの重さで地面にメリ込んでるぞー!!!」

「あいつら口を揃えてオヤビンをいらねエなんて!!?」

「いやんオヤビン、私達にはあなたが必要ですよっ!!!」

「オヤビーン!!?」

心無いルフィ達の拒絶の言葉で、戦いが始まる前から心を折られてしまった船長に、彼の部下達から励ましの声がぶつけられる。

「オヤビン!!? 三回戦のコンバットで目にももの見せてやりましょうぜ!!?」

「そうだぜ!!? 楽しみだ!!? 三回戦!!?」

「愛してるぜオヤビーン!!!」

「オヤビーン!!?」

「……………おめエら…」

数百人もの部下達、その全員が彼を必要とし、立ち上がって貰おうと声を上げる。その温かさに涙し、フオクシーの身体に徐々に力が戻って来る。

が、そんな彼らに向けて、ゾロがボソツと冷たい言葉を吐いた。

「茶番はいいから次いけよ」

「「オヤビーン!!!」」

途端にまた、フオクシーが地面に頭をめり込ませるほどに落ち込む。

またしてもグダグダになる勝負の進行に、良い影泣き合騎士始めていたエレノアがため息をこぼし、フオクシーに向けて声をかける。

「やれやれ……………オヤビンさん! 私、早く次のオヤビンさんの戦い見たいな—!」

「よし、そこまで言われちゃ仕方ねエ!!!」

「「オヤビーン!!!」」

男心をくすぐる、媚びるような響きのその言葉に、フオクシーは一瞬で復活しシャキーンと天に指を突き上げる。

わーわーと騒がしくなる一味に冷めた目を向けたエレノアは、フツと鼻を鳴らしなが

らルファイ達の方に向き直った。

「はい、復活」

「悪女ね」

「見習いたいわ」

「…女つて怖エー」

瞬く間に落ち込む男を奮い立たせてみせたエレノアに、ナミとロビンが思わず感嘆の視線を向ける。

今後、彼女のやり口を何かしらに利用する気満々でいる女性陣に、顔を引き攣らせたリンが小さく呟いた。

場の空気が落ちつき出した頃合、フォクシーがいつもの不気味な笑みを湛え、ルファイ達に振り向いた。

「ホイホイホイ、いいかお前ら…!!! 三回戦の“コンバット”、おれに勝つ事は“不可能”だと言っておく!!!」

ビシッ、と人差し指を突き付け、自信満々に告げるフォクシー。

根拠の知れないその態度に黙り込むルファイ達に、フォクシーはにやにやと小馬鹿にしたような笑みを浮かべてみせる。

「最終戦で取られた船員はもう取り返せねエ、誰が取られてもいいように…身支度を整

えておけよ……」

「何をー!?? おれがお前に敗けるかア!!!」

「フェツフェツ………ケンカとゲームは………違うんだぜ」

勇ましく吠えるルフィを嘲笑う、意味深な台詞。

異様ともいえるその自信の強さに、一味は思わず、ごくりとつばを飲み込んでいた。

第167話 “麦わらVS銀ギツネ”

『さーてさて第二回戦、誰も予期しなかった“グロッキーモンスターズ”の敗退により、両組メンバー移動はこれで0に戻ったよ!!?』

拍手喝采が鳴り止まない会場で、イトミミズの司会が続く。

呆気なく終わるかと思われた戦いが、決して諦めない男達の奮闘により覆されたことで、次の試合への期待が高まっていた。

『波瀾のデービーバックファイト!!? 最後のこの一戦が運命の鍵をにぎる!! 種目はそう、みんなもお待ちかね!!! ゲームの花形!!! “コンバット” オ~~~~~~~~ツ!!!』

「待ってたぜ——!!!」

「早くやれ~~~~ツ!!!?」

『さア~~~~ア、フィールドメイクを始めるよ~~~~ツ!!!?』

血まみれのゾロ、サンジ、チョッパーの負傷箇所、エレノアが車椅子に乗ったまま包帯を巻いていく。

フオクシー達につけられた仮面を懐にしまいながら、ホツと安堵の視線を三人に向けていた。

「おつかれ、三人共。特にあんたはよく吠えたぞ、チョツパー」

「エヘヘ、ほ、ほめたってなんも出ねエぞコノヤロ〜〜!!?」

「まあひとえに」

「おれのお陰だけだな」

「あ!?」

「やめなさい」

またしても無駄な喧嘩を始めそうになるゾロとサンジに、ナミが険しい表情で拳骨を落とす。

呻く二人に苦笑しながら、エレノアはスツと目を細めて口を開く。

「……本当に、よくやったもんだよ。ごめんね、こんな大事な時に何もできなくなつて」

「怪我人が何言つてやがる」

「そうだぞ!!! お前はむしろ動くな!!! 黙って見てろつただろ!!!」

「エレノアちゃんのためなら!!! おれはたとえ火の中でも水の中でもよオ!!!」

「ハイハイ………サンジ君、いい加減にしないとエースが殺しに来るわよ」

「そりゃこえエ」

「怒るだろうなア、エースの奴」

神妙な声を漏らして俯くエレノアに呆れた視線を返し、一味はけらけらと上機嫌に笑う。最もボロボロの姿をした者が何を気に病んでいるのやら、と。

だがその輪の中に、エレノアはいない。

明るい空気の一味を見つめ、どこか思いつめたような顔をしている天使の少女に気付いたのは、リンだけしかいなかった。

「…ようやく始まるみたいだね」

『ライン設置完了、お待たせ致しましたア!!? 本日のメ〜〜インイベントツ!!! 「コンバット」!!! ま〜〜もなくゴングだよ〜〜っ!!!』

第二回戦を終えてから始まっていた、次なる戦いの準備。

最初の砲弾で決まったフィールドを見やすくするように建てられる、巨大な観客席に案内されながら、麦わらの一味は船上を見下ろす。

『さ〜〜て今回の対戦はこの二人!!! 図らずも船長対決〜〜!!!』

最初から舞台に決まっていたセクシーフォクシー号の甲板上に用意された、二つのゲート。その奥からスチームが噴き上がり、それぞれ人影が進み出てくる。

陽の光の下に辿り着くと、人影は纏っていたマントを脱ぎ捨て、一対一の真剣勝負の

為の聖なる装いをあらわにした。

『まずは来る者拒まず!!!「コンバット」無敗伝説920勝!!? 全ての勝負に勝つ男!!!
フオックスヘッドのレフトコーナーより入場、我らがオヤビン!!! “銀ギツネ”のフオ
クシー!!!』

「フェツフェツフェ!!!」

『シアそして対するは“東の海”出身!!? 少数派海賊団のリーダー!!! 懸賞金一億B
の男!!! ライトコーナーより入場!!? 通称“麦わら”!!! モンキー・D~~~~!!?
ルフィ~~~~!!!』

「うが——つ!!?」

『デービーバックファイト、運命の第三回戦「コンバット」始まるよ~~~~!!!』
それぞれセコンドに見送られながら、甲板に現われたルフィとフオクシー。

二人ともボクサーパンツに上半身は裸、そしてグローブのみというシンプルな格好
だ。

異なる点と言えば、ルフィが被っているアフロのカツラだけだ。

「ア——イエー!!!」

『さ~~~~!!? 待ちに待ったメインイベント!!? 両選手がバトルフィールドに足を
踏み入れたよ!!!』

「ワキを締めてけ!!?　そして見せてやれ!!?　黄金の右!!!」

「オウ!!?　早くゴング鳴らせ!!!」

「オイオイやるじゃねエか!!!　ヒューウ、なんて野生的なスタイルだ!!!　敵ながら天晴れだぜ!!!」

一体どここの誰のマネなのか、奇妙な雄叫びを上げるルフィに、セコンドとなったウソップが激励を送る。

その姿を目にしたフォクシーは、思わずといった様子で感嘆と称賛の言葉を贈っていた。

「なんか通じ合ってるし…」

「……………ウソップがセコンドについたの間違いだろ」

「……………!!!」

「何ダア…ありや!!?　スゲエ…:…なんかわからんけどスゲエ!!!」

「やるなア!!?　ブラザー、魂が燃えたぎってる」

「まじめにやってほしいわ」

「ウフフ、素敵じゃない」

「ハツハツハツハ、せいぜいノド元に食いつかれねエ様に気をつけない!!!」

呆れた表情のゾロに、頭を抱えるナミとエレノア、楽しそうに笑うロビン。

そのほかの男性陣は何やら衝撃を受けた顔で固まり、キラキラと輝く目を向けてわなわなと震えるばかり。何か心が刺さったらしい。

『それではセコンド!!? 邪魔なので引ッ込んでくれよっ!!?』

「早エな!!? もう終わりかセコンドの役目は!!?」

「なんの意味があつたのそれ!!?」

騒ぐだけ騒いで退場させられていくウソツプに、エレノアが愕然とした声を上げる。

無駄としか思えないやり取りを終えてから、フォクシー号の甲板から人が引き上げ、最後の選手であるルフィとフォクシーの二人だけにされる。

『さて今回の舞台は偶然にも我らの船セクシーフォクシー号!!? 甲板も内部もその全てがバトルフィールドになつてしまつたよ~~~~っ!!! 直径100mの円から放り出されるのは一体どっちだ!!? 時間は無制限!!! 一本勝負!!!「コンバット」オ~~~~っ!!!』

より一層の歓声上がり、びりびりと空気が震える。

鬱陶しそうに自分の耳を塞ぐエレノアだが、不満を口にする野暮な真似はせず、黙つて船長同士の戦いに集中する。

向かい合うルフィとフォクシーは、それぞれの闘志を高め続けていた。

『広い決闘場に残されたのはたった二人の海賊!!!』

「フェツフェツフェ……さて麦わらのルフィ……!!? 楽しく行こうじゃねエかよう!!?こ

の船まるごと戦場だ!!! 思う存分暴れて結構!!? ウチには優秀な船大工がたくさんいるからなア!!?」

「いいなー!!?」

「頼むぜオヤビーン!!?」

「コラ麦わらア!!! ナイスファツシヨ:!!? ノされちまえエ!!!」

「ルファイ!!! 勝て!!? とにかく勝て!!!」

「ビームに気をつけるのよ!!? ビーム!!!」

「好きだけ暴れる船長オ!!? …ゲツホ」

フオクシー海賊団の面々からは、野次なのか応援なのかよくわからない声が上がリ、ナミ達もそれに負けじと声を張り上げる。

敵の声も味方の声も混じり合い、やがて巨大な轟音となって、会場中を駆け巡っていた。

『シアアシアア、会場を熱気が包み込むよつ!!? 仲間を奪るか奪られるか!!! もう後がないっ!!! デービーバックファイト最終戦!!! “銀ギツネ” のフオクシー!!! VS!!! “麦わら” のルファイ!!! 両海賊団主力対決に、その全ての命運がかかるっ!!! ——そして今…!!!』

一瞬の間の後、カーン!!と甲高いゴングの音が響き渡る。

その瞬間、ピリピリと張りつめていた糸が弾け、船長達の闘志が解き放たれた。

『決戦のゴング~~~~ツ!!!』

「いくぜイ!!!」

「おう!!!」

大勢の歓声を浴びながら始まった、二人の船長による激突。

拳を繰り出すルフィと、ビームを放つフォクシーの様子を見下ろしながら、リンが隣に座るエレノアに話しかけた。

「どう思う? あのアフロ……だっけ? あの野生の力は確かに見事だが、ヤツを倒す決定打にはならないだろ」

「……………あの髪型のどこにパワーアップ要素があるのさ」

完全に、チョッパーやサンジ同様にアフロの魅力にやられているらしい青年に、エレノアは険しい表情で肩を落とす。

深いため息をつきながら、エレノアは甲板に視線を戻し、難しい顔で語り始めた。

「ルフィは基本的に打撃が効かないゴム人間、相手は物体の移動速度が鈍くなるノロノロ人間……………同じ能力者での対決の場合、本人の実力がモノを言うけど……………それは同じ条件下にある場合のみ」

エレノアの解説に、ナミやウソップが領き、近くに座っているフォクシー海賊団の者達もなるほど顎を撫でる。

何故だか思っていた以上に視線を集めている事を訝しみながら、コホンと咳ばらいをこぼしたエレノアは再び口を開く。

「あそこは完全に向こうの陣地、何が出てきてもおかしくはない。それをどうやって攻略できるかが、この戦いの勝敗のカギを握るんだと思うよ」

それからの戦いは、エレノアの予想通りフォクシー側にばかり有利な展開が続いた。ノロノロビームで鈍くされた身体に襲い掛かる、フォクシーのラッシュ。続けて襲い掛かる船内の罫の数々。

驚異的な身体能力で躲し続けるルフィだが、予想のつかない不意打ちの連発により、決定打を撃ち込めずにいる。

挙句、フォクシーが船内に入り込んでしまったために、戦いの様子が外からは全く分からなくなってしまったのだ。

『——さて、デービーバックファイト三回戦「コンバット」!!? 我々には状況がさっぱりわからず、船の中ではおそらく壮絶な一騎討ちが行なわれているはずだよ!!』

「オヤビン!!?」「オヤビン!!?」「オヤビン!!?」

『姿は見えずとも会場に響くオヤビンコール!!?』

戦いの様子が見えずとも、観客席はフォクシーの勝利を確信している様子を見せている。

対する麦わらの一味の間には、相手が相手であるためか、ひどく緊張した空気が流れていた。

「負けやしねエよ……………!!?」

「そうさ、ルフィだもんな」

「ルフィで……………!!? アフロだからだ!!?」

「ルフィだからで充分だろ……………あんなクソギツネ」

「アフロも重要だロ」

「なんでアフロをパワーアップだと解釈してるの?」

「知らない……………私に聞かないで」

「だけど強そうに見えたわ」

ゴクリと息を呑むチョッパーやウソップ、無然と構えているゾロサンジとリン、それらにツッコミを入れるナミとエレノア。

ロビンにいたっては、楽しそうにニコニコと笑みを浮かべていた。

「いつもよりだいたい時間くつてるな」

「ゴム人間だからな」

「ゴム人間で：アフロだもんなア」

「だから何でそれ関係あるの？」

フォクシー海賊団の方でも、ルフイの底知れない力を察し始めてか、少しずつではあるがざわめきが広がっている。

勝利を確信していても、何かあるかもしれないと思い始めているようだ。

そして、姿の見えない戦いが始まってから数分が立った時、セクシーフォクシー号の甲板で大きな爆発が起こった。

『おっと甲板で動きがあったよ!!! さア形勢はどつちだ?!? はたまた勝負がついたのか
な~~~~~?』

黙々と立ち上っていく煙、そしてその中から露わになってくる人影。

片方は立ち、片方は甲板に伏しているという、優勢が一発でわかるその様子に、敵味方双方からどよめきが上がった。

『影が二つ!!? 立っているのはオヤビンだ~~~~~!!! オヤビ~~~~ン!!!』

両腕を掲げ、ニヤついた笑みを見せるフォクシーの姿に、観客席から大歓声上がる。反対に、黒焦げで倒れ込むルフイを見た麦わらの一味には、激しい動揺が広がった。

「うわー!!!」

「ルフィ~~~~!!!」

「ばかな…」

「どうしてただのパンチでコゲるのよ!!? 何したの!!?」

明らかに卑怯な罠に巻き込まれたことだけはわかったが、それを今更指摘したところで何の意味もない。

これで終わりなのか、と最悪の未来を想像し始める。

「! 見て」

しかし、ロビンがそれに気付き、ナミ達に伝える。

確定した勝利を宣言するように、悠々とその場に仁王立ちしポーズを取っていたフォクシー。

その背後で、ふらふらとよろめきながら、強い気迫を放つ目を光らせたルフィが、立ち上がって拳を構えていたのだ。

『立った~~~~!!? 麦わらのルフィ!! もうK・Oかと思いきや、立ち上がったよ~~~~!!?』

「——ギリギリじゃねエかよう、麦わらア……………」

満身創痍のルフィを嘲笑いながら、フォクシーは再びルフィに向き直る。

その手が向けられ、例の怪しい光が放たれた瞬間、エレノアがハツと目を見開いた。
「! まずい……!」

「メガトン九尾ラツシュ!!!」

鈍くされた身体に、フォクシーの拳が連発で叩き込まれる。

鈍くなっている間の衝撃が蓄積され、30秒後に同時に炸裂。強烈な一撃となつて、ルフィを吹き飛ばす。

立ち上がるだけで精一杯な彼への、無慈悲な追い打ちであつた。

『今度こそ……!!! いやまだ!!!』

だが、それでもルフィは立ち上がった。

体を揺らしながら、目の焦点をやや失いながら、それでもなおフォクシーを見据え、拳を構え続けていたのだ。

『立ったア!!! 麦わらのルフィ!!!』

「ッノロノロビくくム!!!」

メガトン九尾ラツシュ!!!」
わずかに引き攣つた顔で、フォクシーは再びビームを放ち、拳の連打を浴びせかける。
先ほどと同じように炸裂し、吹っ飛ばされるルフィ。だが、今度こそ終わったと思つた矢先、彼は再びその身を奮い立たせ、立ち上がっていた。

「まだか?」

「…おれの仲間は…誰一人…!!! 死んでもやらん!!!」

さすがに驚愕するフオクシーに、ルフィがフラフラの状態のまま告げる。

突けば今にも倒れそうな、しかしその度にも戦おうともがく不屈の意志で、青年はそこに立ち続けていた。

『恐るべき気力でまた立ち上がった、麦わらのルフィ〜〜!!! 倒されても……!!!』

倒されても立ち上がる!!!』

「何だつうんだ、おめエはよう…!!!」

『足元をふらつかせ……!!!? 息も絶え絶えに…しかし!!!? まだ目を光らせて、彼は立ち上がる!!!』

司会のイトミミズの声が、感涙で震え始める。

ちっぽけな海賊一味の若き船長が見せる、命を懸けて意志を貫き通そうとする漢の姿に、滾る気持ちを抑えられなくなっていた。

『仲間の為!!! そうだ、これが「デービーバックファイト」!!! 私、涙で…!!! 涙で前が見えませんが!!!』

「ルフィ〜〜!!!」

『ルフィ〜〜!!!』

「ルフィ——!!!」

もはや、向けられる声援に敵も味方も関係がない。

全員涙を流し、心を震わせ、強敵に立ち向かう誇り高き青年の勇姿を、雄叫びと共に凝視し続ける。

それは、一味に上がり込んだかの青年も同じ事だった。

「……面白いじゃないか、こんな男がいたとはネ……ああ、そうだ。おれはこういう奴が見たくて、この海に出てきたんだ……!!」

それはまさに、仲間を、大切なものを己の全てをかけて守り抜こうとする男の姿。

数多の人々を魅了し、遙か遠き先を見据えて覇道を歩まんとする、類稀なる力を有して生まれ出でる逸材。

ヤオ・リンが求め続ける、王の在り方そのものであった。

第168話 仲間は渡さない

「いけ——!!? 麦わらー!!!」

「……………勝て、ルファイ」

『湧き上がる会場は!!? ルファイコール!!! ——かつてこれ程までにオヤビンを苦しめた敵がいたでしょうか!!?』

拳を構え、フォクシーを見据えるルファイ。

満身創痍にもかかわらず、立ち向かおうとするその勇姿に、敵味方問わず大歓声を送られる。

しかし、それを気に入らない男が一人だけ存在した。

「てめエら何、敵の応援してやがんだよう!!!」

「……………!!? オヤビン!!?」「オヤビン!!?」「オヤビン!!?」

自分の手下のはずなのに、一瞬全員が相手である麦わらの応援をしていたことで、目を吊り上げたフォクシーが怒鳴りつける。

すぐさま自分に対する応援が変わったところで、フォクシーはルファイに向き直った。

「見ていろ、すぐに決めてやる!!!」ノロノロビームソ〜ド!!!」

そう宣告し、フォクシーは懐から棒状の何かを取り出し、能力を発動させる。

ビヨン、と伸びる光の鞭がゆつくりと動き、ルフィに絡みつく。その直後、通常のビームと同じくルフィの動きが鈍くさせられる。

スローになったルフィに、船内のギミックを利用したフォクシーが迫り、強烈な一撃を食らわせる。

真面に食らったルフィは血反吐を吐き、再び甲板へと倒れ込んだ。

『決まった〜っ!!! 全ての攻撃が!!! 麦わらを仕留めたア!!!』

「なによ……………!!! そこまでしなくても……………!!!」

ナミが思わず眩くも、観客にフォクシーを語る声は一つもない。フォクシーはまた拳を掲げ、声援を全身で受け止め続ける。

だが、声援は再びどよめきへと変わった。

『た!!! た!!! た!!! ……!!! また立ったア〜っ!!!』

先ほど以上に傷つき、フラフラになったルフィが、先ほど以上に鋭い目でフォクシーを睨みつける。

さすがに慄くフォクシーの前で、何かに気付いたルフィが小さく眩いた。

「おれの、勝ちだ」

「んなにをオ〜っ!!!? かろうじてそこに立ってる様な奴が————てめエがその気なら

!!! 倒れるまで殴り続けてやる!!!」

苛立ちが生じたか、フォクシーがルフィに向かって駆け出す。

それと同時に、ルフィも前に出て拳を振りかぶった。

「メガトン九尾……ラア……ッシュ……!!!」

「ゴムゴムの銃乱射……!!!」

同時に放たれる、目にも止まらぬパンチの連打。

双方、威力も速度も引けを取らない。ルフィの疲労や負傷具合を考えても、異常としか言いようがない凄まじさだ。

「ウウ……!!!」

「ぬウ……!!!」

『凄まじい……!!! ここへきてなお!!! 両選手のもの凄いパンチの応酬……!!!』

「ルフィ……!!! ルフィ……!!! やっちまえ……!!!」

「……このヤロ……!!! どこにこんな力が!!!」

連打は徐々に、ルフィがさらなる加速を見せ、フォクシーの顔面に幾つも決まり始める。

キツと表情を変えたフォクシーは、ある一発に自分の全力を込めた。

「この……!!? ノロノロビ……!!!」

次でケリをつける、そのつもりで放った、ビームを放つ一撃。

それはルフィが繰り出した一発と激突し、両者の動きがピタリと停止した。

「え?」

「何だ?」

「動かない……………!!?」

拳をぶつけた体勢のまま動かないルフィとフォクシーに、観客席に動揺が走る。

ざわざわと騒がしくなる周辺ににやりと笑みを向け、エレノアが小さな声で呟いた。

「策士策に溺れる……………いろんなものを事前に用意しておく財力と周到さは見習うべきものがあるけど……………それが悪手に出たね」

「ど、どういふこと!!?」

驚愕をあらわにし、振り向くナミ。

彼女の視線の先で突如、固まっていたルフィがくりと膝をついた。

『た!!? ……倒れたのは麦わら……………!!? いや!!! 違う!!? 動いたのが…麦わら!!! これは一体どういう事だア!!!』

「くう……………そお……………」

「「オ!!? ……オヤビ〜ン!!!?」」

動きがゆつくりになったフォクシーに、彼の一味から驚愕の聲が上がる。

その時、膝をついたルフィの手から、カラントと一枚の鏡の欠片が零れ落ちる。フォクシーが船内に用意した罫の数々、その一つに使われていたものだ。

それをグローブで握りしめ、ノロノロビームを反射してみたのだ。

「おお~~~~~のお~~~~~れえ~~~~~」

悔しげにぼやくフォクシーだが、鈍くなった体は動かない。

焦りをゆつくりと顔に表すフォクシーに向けて、ルフィは自分の拳を振り回し、凄まじい加速を付与していく。

「『ゴムゴムの……^{フレイル}接続鎚矛^ル』!!!」

ドゥー!と回転で威力を増した一撃が、フォクシーの顔面に叩き込まれた。

ルフィの拳が離れても、フォクシーに異変はない。棒立ちのままのフォクシーに背を向け、ルフィがゆつくりとその場を後にする。

「……あと8秒」

「え?……え!?」

ごくりと息を呑み、様子を伺っていたウソップの隣で、ゾロがぼそりと呟く。同じくサンジとロビンも、小さく笑みを浮かべてカウントダウンを開始した。

「7……」

「なに?」

「6…」

「うははは！ 5オ〜〜!!？」

戸惑うナミをよそに、カウントダウンの意味を察したウソツプが威勢よく声を上げる。

ウソツプは顔を見合わせるフォクシー一味にも目を向け、高らかに告げる。

「何してんだ、おめエらもカウントしろー!!! 4!!!」

「3!!!」

「2!!!」

「1!!!」

「0オ〜〜!!!」

やがてフォクシー一味全員からもカウントダウンの声が上がり、そして最後まで到達する。

その間、ゆっくりと顔が変形を始めていたフォクシーが、ついに限界を迎え、とてつもない勢いで上空に打ち上げられた。

「うおおおおお〜っ!!!」

『オヤビンが飛んだ〜っ!!!』

吹き飛ばすフォクシーを背後に、ルファイが全身全霊で勝利の雄叫びを上げる。

予想だにできなかったその光景に、フォクシー一味と司会のイトミミズが、同時に驚愕の悲鳴をあげた。

『落下地点は………!!! 戦場の外オ!!! デービーバックファイト三回戦!!! チームの運命を背負った船長同士の熱く壮絶な「コンバット」!!! オヤビン、920戦無敗の伝説はここに敗れ、ゲームを制したのはなんと……!!! 麦わらのルフィ………!!!』

「やったア〜ルフィ〜!!!」
「ルフィ〜〜〜!!!」

汗を握り、息を呑み、見守り続けた最後の試合。

それがついに勝利に繋がり、麦わらの一味はみんなで一斉に歓喜の方向を上げていた。

『フォクシー海賊団VS!!? 麦わらの一味!!? オースドックスルールスリーコインゲーム、デービーバックファイト!!? ここで全試合終〜了〜っ!!!』

試合終了のゴングが鳴り響き、戦いが終わったことが示される。

そして、海中に沈んだフォクシー救出のために手下全員が殺到したため、観客席は崩壊し、全員まとめて海に落下する羽目となった。

??

「……まったく無茶しやがって、こいつう!!? こいつう!!?」

「つつきすぎだ!!! 重傷なんだぞ!!! コンニヤロ——ッ!!!」

「心配ばっかりかけて…!!? 何がアフロパワーよ」

「ナミさん、アフロはスゴいんだって」

「アア! 本物の野生のパワーだったヨ!!?」

戦いが終わり、陸地に戻ってきたウソツプが、草原に寝かされたルフィの頭をつついて笑う。

チヨツパーがそれに怒り、リン達が無駄に暑苦しく語る中。

眠りこけていたルフィが、パチリと目を開いた。

「……………あ!!? 気がついた」

「ん…あ…あれ!!? ゲーム!!? ゲームは!!? ……おれ勝ったと思ったのに、夢か!!?」

「大丈夫、あなたは勝ったよ……」

はつと体を起こし、慌てて辺りを見渡すルフィに、エレノアが穏やかな声で宥める。

仲間達を見渡し、頷くのを確認したルフィは再び草原に倒れ込み、大きく息を吐いて安堵の笑みを浮かべた。

「よかった……………」

ホッと、緊張の糸が緩んだ一味が、ルフィを見下ろす。

するとそこへ、仲間に支えられながら、全身に包帯を巻いたフォクシーが、険しい表情でルフィの元に向かってきた。

「オヤビン!!?」

「まだ動かねエ方が…!!?」

「おい麦わらア……!!!! てめエ、よくもおれの無敗伝説にドロをぬつてくれたな」

敵しい声で告げ、怒りを見せるフォクシー。

じつ、と鋭い目でルフィを睨みつけていた彼は、おもむろに片手を差し出し、不敵な笑みを浮かべ出した。

「天晴れだ、ブラザー」

ルフィはフォクシーの手を見つめ、やがてにつと笑ってその手を握り返す。

ギユツと互いの手が固く握られた瞬間、フォクシーの目がキラリと不気味に光る。

「でりや——っ!!! くやしませぎれ一本背負い!!!」

戦いに負けた悔しさをぶつけようと、ルフィの手を掴んで投げ飛ばしに向かうフォクシー。

だが、相手がゴム人間であることを失念していた彼は、そのまま自ら地面に頭をぶつける事となった。

「バカかお前は」

と、ゾロが呆れた眩きをこぼす中、フォクシーがガバツと体を起こす。立ち上がったルフィに向き直り、恥ずかしさを誤魔化すように声を荒げた。

「ルールだ、さア早エトコ選べ!!! 誰が欲しいんだ!!!」

『そうだ!!? 最後の取引が待つてるよ!!? 指名権は勝利チーム船長 “麦わら”!!! “船大工” をご所望の様子だよ』

イトミミズも試合の充実ぶりに満足してか、ノリノリで一味の船大工を紹介する。

50人の船大工のボス、ソニエ。

戦う船大工ドノバン。

本能の赴くままのお色気船大工ジーナ。

その他大勢の有能な部下達が、ルフィの決断を待っていた。

『誰を選ぶも自由!!! さア決めてくれ〜!!!』

期待と不安、様々な感情が渦巻く中、視線がルフィ一人に集中する。

場が再び緊張感に包まれ出したその時、ルフィは一つの答えを口にした。

「海賊旗をくれ!!!」

「!!!何——つ!!!」

予想だにしない返答に、フォクシー海賊団全員が戸惑いの声を上げる。

麦わらの一味でも、サンジが信じられないといった様子でルフィに詰め寄っていた。

「お!!? おい、ルフィ!!? いいのか!!? お色気船大工ジーナ姉さんはいいのか!!?
? 後悔しねエか!!?」

「なんでその一択なのよ」

「欲しいもの貰ったら、何の為に決闘受けたんだかわかんなくなるもんな」
「よかった」

船長の決定に、思わずほっと安堵の息をつくナミ。

だが、フォクシー一味はその決断に納得できないでいた。

「…そんなバカな!!! 迷わずおれ達の誇りを奪おうというのか!!!」

「いいよ、帆は。それがねエとお前ら航海できねエだろ」

「ええ!!? なんて慈悲深い……!!!」

「——だが帆にも印が入ってるんだ!!! もうあれをかかげるわけには……!!?」

「情けは無用だ、奪うもんは奪って貰うぞ!!?」

そこまでして奪いたくない、と首を横に振るルフィに、フォクシー一味は食い下がる。

少し考えたルフィは、代わりとなる案を一つ提示する。

「……………わかった。じゃあマークだけ貰えばいいんだから、おれが新しいマークに描きかえてやるよ。そしたら帆まで取らなくてもいいだろ」

「麦わら……………お前って奴ア……………!!?」

ルフィの優しさに、フォクシーの目にジワリと涙が滲む。

一方的な戦いで傷つきながら、相手の事を思い遣るその心の広さに、一味全員が熱い眼差しを送る。

が、その感情は即座に吹っ飛ぶ羽目となった。

「これでよし!!?」

(((最悪ーっ!!!)))

下手くそな狐の絵が描かれた帆の前に、満足げに腰に手をやるルフィ。

予想以上にひどすぎる結末に、フォクシー一味が全員でがつくりと項垂れ、顔を伏せる。

その様に、リンとエレノアが引き攣った声を漏らした。

「ひどいネ」

「まア……迷惑料つてことで納得して貰おう」

こうして、僅かながら遺恨を残したまま戦いは終わり、フォクシー海賊団は自分達の船の元に戻る。

メリー号の進路を塞いでいた錨も回収され、ようやく自由が戻ってきた。

『勝者!!?』 『麦わら』の一味!!! 『デービーバックファイト、これにて閉会くくく!!!』

「はー、よかった!!?」 やつとメリー号が開放された!!?」

「…おい!!? 麦わらア」

困難が一つ、ようやく片づいたと安堵を見せるルフィ達。

そこへ、セクシーフォクシー号の甲板から顔を出したフォクシー達が、全員で目を吊り上げ、ルフィ達に向かって吠えた。

「おーぼーえーてーろーっ!!!」

「どこまで面白いんだあいつら」

最後の最後までノリの変わらなかつた彼らに苦笑しながら、ルフィ達は去っていく。フォクシー達を見送るのだった。

広い広い草原のど真ん中に、あるテントがあつた。

その家の主の名はトンジツト。そして愛馬のシェリー。

世界一高い竹馬に挑戦しているうちに降りられなくなり、10年もの間仲間から行方不明として扱われ、置き去りにされてしまった男である。

「シェリー……………」

「ヒヒー……ン」

「わははは、いいんだ。お前はここで10年もおれを待つてくれたんだ。今度はおれが待つ番だ」

ロングロンググランドは、十の島が輪状に並んだ島で、満ち潮と引き潮の関係で1年に一度本来の姿、輪の形を取り戻す。

その期間に移住を繰り返す遊牧民民族である彼は、次の引き潮を待つて仲間の元へ戻るつもりでいた。

「……………ん？ お前ら……………」

心配そうに見つめてくるシエリーにそう告げるトンジットは、近付いてくるルファイ達に気付く。

ルファイはトンジットに、フォクシー海賊団から奪ってきた旗を見せた。

「ブツ飛ばしてきた！」

「……………ずいぶんケガしてる」

「……………こんなの、いつもだ」

快活に笑うルファイに、トンジットも笑みを浮かべる。

傍らに座り込むシエリーは、フォクシーの悪意によって傷を負った。

その敵を討つために立ち向かい、勝ってきてくれたのだと、トンジットは心の底から感謝の意を抱いた。

「ありがとうよ……………」

「ヒヒーン」

「しし」

「成程ね、それで決闘を受けたの」

「何もなくても受けただろうけどね」

「そうね」

「失敬だな!!? お前ら!!?」

納得した様子で肩を竦めるナミとエレノアにルフィが食って掛かるが、二人とも呆れるだけで取り合わない。

ただ、彼らしいことだと互いに顔を見合わせて笑うだけであった。

その後、トンジットの事情を知らされたナミは、険しい顔で腕を組み考え込んでいた。

「——その移動しちやった村へ、私達が連れてつてあげられればいいんだけど」

「——それがよ、10の島はそもそもつながった一つの島だから、記録がとれねえんだと」

「いいんだ。そこまでやって貰う事はねえ…おれ達は気が長エから大丈夫だ。それより…そうか、これがお前らの仲間達か」

縁も何もない自分の為に、一戦やり合った後でも気を遣ってくれる青年達に、トンジットは満足げに首を横に振る。

「せっかく来たんだ、ウチへ入れ。もてなそう」

「もてなすもんねエだろ、もうチーズはいいぞ!!?」

「あはは」

せめてもの感謝を伝えねばと、トンジツトがツツコミを受けながら一味をテントに案内する。

その際、彼は入り口にあつた何かにぶつかり、どさつと尻餅をつく。

それは、白いスーツを纏った、驚くほどに長身な男だった。

第169話 // 青雉 //

「うお!!? 何だこれは…」

「人!!? ここにずっといたの!!?」

「デツカいおっちゃんだネ…」

いつの間にかテントの入り口前に立っていた大男に、ルフィ達は驚きの声を上げる。

立ったままアイマスクをし、寝息を立てていたその男は、やがて目を覚ましたのかピクリと身動きをした。

「んん!!? 何だお前ら」

「おめエが何だ!!」

思わぬ反応に、すかさずウソップからツツコミが飛ぶ。

その時、一味の後ろにいたロビンが、どさつとその場にへたり込む音が響いた。

「ロビン!!?」

「どうした、ロビンちゃん」

振り向くルフィ達だが、ロビンは息を荒げ、目の前の大男を凝視するばかりで何も答えない。

大男はアイマスクを外すと、ロビンを見下ろして意味深に笑う。

「……あらら。コリヤ、いい女になったな…ニコ・ロビン」

「ロビン!!? どうしたんだ!!! 知ってんのか?!? こいつの事!!!」

明らかに何かしらの繋がりと察し、ルフィが警戒し身構えながらロビンに問う。

空気が緊迫し、誰かがごくりと息を呑む音が響いた、その時。

「あ、クザンじゃない。お久しぶり」

大男の顔を見たエレノアが、暢気な声でそう呼びかける。

その瞬間、辺りに巡っていた緊張感の糸が、ぶつつりと切れる音がした。

「軽っ!!!」

「ん? おー、"妖術師" じゃないの……ありや、引退して男作って田舎に引つ込んだって聞いてたんだが」

「まだまだ現役……ってちよつと待て。男のくだり誰から聞いた?!?」

「軽っ!!! ご近所さんかつ?!?」

「まーまー、そう殺気立つなよ兄ちゃん達……別に指令を受けてきたんじゃねえんだ。天気がいいんで、ちよつと散歩がてら……」

大男、クザンも面倒くさそうに告げ、両手を上げて嘆息する。

先ほどの意味深な笑みは何だったのかと思うほどのダラけっぷりだった。

「指令だど!!? 何の組織だ!!」

「海兵よ、海軍本部 “大将” 青キジ」

「“大将”!!?」

ようやく少し落ち着きを取り戻したのか、ロビンがやや強張った声で告げた情報。ル
 フィ達はギョツと目を見開き、クザンから後退り距離をとる。

「何でそんな奴がここにいるんだよ!!! …もつと何億とか言う大海賊を相手にすりや
 ……つてここにいた!!!」

ウソツプは思わず抗議の声を上げようとし、後ろにいたエレノアの事を思い出して目
 を剥く。

エレノアはあまりのテンパリ様の彼に、呆れた目を向けていた。

「今さらか…」

「ど…どつかいけーっ!!? エレノアに近づくなーっ!!?」

クザンに叫ぶウソツプだが、車椅子に乗ったエレノアを盾に隠れているため、情けな
 さが非常に目立って仕方がない。

だが、当の海軍大将の一人は、彼の事を見てもいなかった。

「あらららこつちにも悩殺ねーちゃんスーパーボイン!!? 今夜ヒマ?」

「何やってんだノツポコラア!!!」

「話を聞けオラア!!!」

「おい、あんまりふざけるようなら一発きつい食らわせるぞゴルア:!!!」

近くに居たナミに興味を持ち、軽い調子で軟派をかけるクザンに、男性陣から怒号が上がる。

エレノアもあまりのクザンの気の抜けた姿に、ビキビキと血管を浮き立たせて怒りを滲ませていた。

「ちよつと待ちなさい、お前らまったく:そつちこそ話を聞いてた? おれア散歩にただけだつつつつてんじやないの、カツカすんな。だいたいお前らアレだよ、ホラ:!!? —— 忘れた、もういいや」

「話の内容グダグダかお前つ!!!」

「何なんだコイツ:!!! おいロビン!!? エレノア!!? 人違いじゃねエのか!!! こん

な奴が海軍の“大将”なわけがねエ!!?」

「いや、間違いないよ」

全く強そうに見えない、何より海兵らしい正義感のかけらもないクザンに、一味は訝しげな目を向ける。だが、エレノアはその誤解に首を横に振る。

「“大将”青キジの海兵のモットーって、『ダラけきつた正義』だし」

指摘するのも、最早面倒に思えてしまっていた。

「『ゴムゴムの』オ〜〜!!!」

「ちよつと待て待てルフィストップ!!? スト〜〜〜ストップ!!!」

そこに、鬪志に燃えるルフィの声が響き渡る。

気付いたクザンが寝転がったまま目を向けると、目を吊り上げたルフィがクザンに向かおうとするのを、ウソツプとサンジが止めているのが見えた。

「離せお前ら!!! 何だよ!!!」

「こつちからフツかけてどうすんだ!!!」

「相手は最強の海兵だぞ!!!」

「それが何だ!!! だったらロビンを黙って渡すのか!!!」

「いやだから、何もしねエって言ってるじゃねエか……………」

「ブツ飛ばしてやる!!!」

ウソツプ達が止めても、クザンが何を言おうとも、ルフィはもう敵と見定めてしまったのか止まる気配を見せない。

ようやくく止まりはしたものの、クザンに対する態度は依然刺々しいままだった。

「なんだ散歩か!!? じゃこんなところ通るな、お前!!? 出ていけ!!?」

「めちやくちやじゃないっすか」

「何となくルフィが押ししてる…」

「何この状況」

本来であれば、捕える側と捕まる側のはずの双方の立場。

なのに今この様子を見ると、クザンの方が立場が弱そうに見えるのだから、ルフィの勢いの凄まじさに驚かされるばかりだった。

「——じゃあわかった…帰るがその前に…さつき寝ながら聞いてたんだ………あんた」
「ん？」

「——おれは睡眠が浅くてね…話は大方頭に入ってる。すぐに移住の準備をなさい」
説得を諦めたのか、相手にするのをやめたのか、クザンは話題の対象をトンジツトに変更する。

キョトン、と目を丸くするトンジツトに、ルフィは険しい顔のまま叫ぶ。

「おいおっさん!!? こんな奴の言う事聞く事ねエぞ!!! こいつは海兵なんだ!!!」
ルフィがそう叫ぶと、辺りはしばらくの間、静寂に包まれる。

妙な沈黙に包まれてから、かれこれ数十秒はたった頃に、トンジツトが首を傾げながら口を開いた。

「いーんじゃねエのか？」

「い——んだ。そうだよ、い——んだ。普通海兵が味方でおれ達の方が悪者だよ」

「笑ってる場合かよ!!?」

おかしいことを言った自分を自分で笑うルフィに、ウソツプが手刀でツツコミを入れる。今日は彼にとつて、非常に忙しい日の様だ。

とにかく、ルフィのクザンへの敵意は薄れたようで、いつも通りの暢気そうな顔で一味に振り向く。

「あいつ、おっさんを助けてくれるって」

「んなコト言つてもムリだロ、それハ」

「要するに…留守中に移住しちまった村を追いかけて、3つ先の島へ行きたい。引き潮を待ち馬で移動したいが、その馬が足にケガを負っちゃったつてんだろ。違うか?」

「……それがわかってんなら、今は移住なんてできねエのわかるだろ」

先ほどその事で悩んでいたのに、と全員でクザンを睨み、どうするつもりなのかと問う。

やや疑いが混じったそれらの視線を受けながら、クザンは相変わらず寝転がったまま、怠そうな声で答えた。

「大丈夫だ」

「説得力ねエよ!!? どうしても」

「……いや」

覇気のかけらも感じられないクザンの姿に、顔を引き攣らせるルフイ達。リンも同じく、醜態をみせる男に冷や汗を流す。

二人だけを除いて、全員がクザンの言葉を疑っていた。

「その人なら出来るよ、簡単に」

平然と、当たり前のような顔をしてそう答えたエレノア。

彼女の言葉で、一味のクザンを見る目が一瞬にして変わった。

「たまには労働もいいもんだ」

「ほんとだ、いい気持ちだ!!? お前、なかなか話せるなー!!?」

「いやすまん、手伝って貰って。シアチーズでもどうだ、お口に合うか」

「やめろそれ!!」

「じゃあおれが貰っていいか?」

「やめとけ」

「結局打ち解けちゃった…」

「まア……海軍の中でもけっこう穏健派だからね、青キジは」

場所は変わり、一年に一度引き潮で道ができる、目印である柱が建てられた場所。

トンジツトのテントをまとめ、シエリーと一緒にそりに乗せた一味とクザンは、和気

藹々と語りながら海に閉ざされた先を見やっていた。

「——で？ どうすんだ？ このままおめエが馬も家も引つ張つて泳ぐのか？」

「んなわけあるか……少し、離れてろ……」

ルフィの疑問に、クザンは静かに岸に歩み寄り、海水に手を浸し始める。

その時、突如彼の目の前の海面が盛り上がり、見るからに凶悪な貌をした、巨大な肉食の生物が顔を出した。

「いかんつ!!! この辺りの海の主だ!!!」

気付いたトンジツトが叫ぶが、海の主は既にクザンに狙いを定め、鋭い牙を剥き出しにしている。

だがそれでも、クザンは岸にしゃがんだまま動く気配を見せない。まるで主に気付いていないような——あるいは、相手をしていないような、そんな態度だ。

「何だおい!!! お前、逃げろオ!!!」

「危ねエぞ!!!」

やられる、と。

血相を変えたルフィ達も叫び、危険を知らせる。

だが、それらは全て無意味に終わった。

「アイス・エイジ
「氷河時代」」

海を、そして主を見つめながら、クザンがこぼした小さな眩き。

その直後、彼を中心としたあらゆるものが真っ白に染まり、それら全てが完全に停止し——凍りついてしまった。

瞬きよりも早く、立った一瞬のうちにある。

「悪魔の実!!!」

「海が、凍った……!!!」

「自然系……『ヒエヒエの実』の氷結人間……!!?」

一気の下がる空気の中、冷や汗と共に寒さのせいではない震えを見せながら、エレノアが頬を引き攣らせて眩く。

ロピンはそれ以上の怯えを見せながら、一味にはつきりと告げた。

「——これが『海軍本部』『大将』の能力よ……!!!」

「——週間は持つだろ………のんびり歩いて……村に合流するとい………少々冷えるんで………温かくして行きなさいや………」

「………夢か、これは……」

クザンは気だるげに立ち上がると、サクサクと下野降りた草地を歩いて岸を離れる。

注意を受けたトンジツトは、目の前の光景にただ圧倒されるばかり。

だが次第に彼の顔には、満面の笑みが浮かんでいった。

「あんた!!? ありがとうなア!!! ありがとう!!? ありがとう!!! 何ちゆう奇跡だ!!!

ありがとうなア——!!!」

「ヒヒ——……ン!!?」

去っていくクザンに大きく手を振り、力の限り叫ぶトンジツト。奇跡を起こした男は、照れくさそうに頭を掻きながら、黙って手を振り返す。

その様子を、ルフイ達は満足げに見送るのだった。

「……………じゃあよ、おれ達ア行くから」

「おめエらにも何と礼を言つていいか……おめエらが来なきやおれは、いまだに竹馬の上だった」

言われた通り、氷の道を歩くために厚着をしたトンジツトに、ルフイ達が別れを告げる。

大切な家族を奪われていたかもしれない、そんな恐怖から救ってくれた青年達にも、トンジツトは心からの感謝を抱き、何度も頭を下げた。

「ありがとうな——!!! この恩はずっと忘れねエよ——!!!」

「ヒヒー……ン!!!」

「氣イつけて行けよ——っ!!!」

「元氣でな——っ!!!」

「もう竹馬には乗るなよ——!!!」

シヤリシヤリと氷を滑るそりを引き、見送るルファイ達に手を振るトンジツト。

その姿が見えなくなるまで、ルファイ達は声をかけ、大きく手を振り続けていた。

「は——っ……よかったよかった」

「うほ!!? 寒イ寒イ!!?」

「うわふ」

「すっかり冬だコリヤ」

さて、そろそろ行くかと引き返し、辺りの寒さに肌を摩り、跳ねるように岸に戻るルファイ達。

そんな自分達を、草地に腰かけ、じっと見つめるクザンの姿に気付き、ルファイが訝しげに問いかけた。

「……何だ」

「何というか………じいさんそっくりだな……モンキー・D・ルファイ……」

何となく、という様子でそんな言葉をこぼしたクザン。

その瞬間、ルフィの顔から血の気が引き、顔中の筋肉が引き攣り始めた。

「……………!!!! ……………じ……………じいちゃん……………!!!!」

「……おじいちゃん？ ルフィの？」

「ん？ おいどうしたルフィ!!？ 汗だくだぞっ!!？」

船長の異変に、驚いて慌てて心配する声をかけるウソツプだが、ルフィはなぜか誤魔化すように首と手を振る。

様子のおかしいルフィをよそに、クザンはため息交じりに続けて口を開いた。

「お前のじいさんにやあ……おれも昔……世話になってね。おれがここへ来たのは……ニコ・ロビンと……お前を一目見る為だ……」

ルフィ達を一人一人、順々に見つめていくクザン。なぜか、見透かされている気になり、一味はだんだん落ち着かなくなってくる。

妙な沈黙が漂い出し、やがてクザンははっきりとした声で告げた。

「——やつはお前ら、今死んどくか」

その目は、彼の能力と同じく凄まじい冷たさを宿したものとなっていた。

第170話 “厄介な女”

海軍大将の呟いたその一言に、エレノアが目を細め、彼を睨みつける。

ピリピリと張りつめる空気の中、車椅子に座ったままの天使の口から、冷え切った低い声が漏れ出た。

「……………どういう意味かな、青キジ」

「政府はまだまだお前達を軽視しているが……細かく素性を辿れば骨のある一味だ——
—少数とはいええ、これだけ曲者が顔を揃えてくると、後々面倒な事になるだろう」

エレノアの問いに、クザンはそう淡々と答える。

最初の気だるげな雰囲気など微塵も残っていない、鋭い刃のような眼差しで、ルフィ達を睥睨する。

「長く無法者共を相手にしてきたが、未恐ろしく思う……!!!」

「そ……そんな事急に……!!? 見物しに來ただけだつておめエ、さつき……」

「えらく思い切ったこと言うじゃないのさ……青キジ」

思わず青褪めるウソップをよそに、エレノアも険しい表情のまま言い返す。

足が使い物にならなくても関係がない、今にも飛び出していきそうな雰囲気だ。

「ここに私がいるのを忘れ…？　〝白ひげ〟海賊団や　〝火拳〟も敵に回すことになるよ。海軍大将ともあろうものが、そんな愚行に出て本当にいいのかな？」

「確かにお前さんまで殺すのは愚策だ………まアいずれぶつかるのはわかりきってるんで、交渉材料の一つとして捕らえる程度かねエ…だが今、特に危険視される原因は…お前だよ、ニコ・ロビン」

ため息交じりに答えたクザンが次に見やったのは、無言で尽くすロビン。

クザンと相對してから変わる事のない、怯えと不安で引き攣ったままの表情で、びくりと肩を震わせる。

そこに、目を吊り上げたルフィが食って掛かる。

「お前やっぱりロビンを狙ってんじゃねエか!!!　ぶつ飛ばすぞ!!!」

「懸賞金の額は何も、そいつの強さだけを表すものじゃない。政府に及ぼす　〝危険度〟を示す数値でもある、　〝天族〟　しっかりな………だからこそお前は、8歳という幼さで賞金首になった」

ルフィの劍幕も全く気にせず、クザンは冷たい声音で続ける。

一味全員から険しい視線を向けられてなお、クザンの態度に変化はない。

「そのシリの軽さで裏社会を生き延びてきたお前が、次に選んだ隠れ家がこの一味というわけか」

その物言いに、カチンとサンジのこめかみに血管が浮き立つ。

彼が何より愛するレディに對する暴言、そして反論もしない女性を責め立てるような言葉。とつくに我慢は限界を迎えていた。

「おいてめエ聞いてりやカンに触る言い方すんじやねエか!!!」 ロビンちゃんに何の恨みがあるってんだ!!!」

「やめろサンジ!!!」

「別に恨みはねエよ……因縁があるとすりやあ……一度捕り逃がしちまった事くらいか……昔の話だ。お前達にもその内、わかる。厄介な女を抱え込んだと後悔する日もそう遠くはねエさ」

やはりクザンは、サンジの怒気もまるで相手にしていない。

ずっとロビンだけに注目し、そして敵意を向け続け、揺るぐことなく睨み続けていた。「それが証拠に……今日までニコ・ロビンの関わった組織は、全て壊滅している。その女人を除いて、だ………何故かねえ、ニコ・ロビン」

「やめろお前!!!」 昔は関係ねエ!!!」

「成程……うまく一味に馴染んでるな」

ルフィが再び声を荒げ、ロビンを庇おうと拳を構える。

それすら嘲笑し、クザンはロビンに神経を逆撫でするような、挑発染みた言葉ばかり

をぶつける。

向けられる愚弄の言葉に、徐々に美女は耐えきれなくなる。

「何が言いたいの!!? 私を捕まえたいのならそうすればいい!!!」トレインタフルール「三十輪咲き!!!」

やがて、キツと鋭くクザンを睨みつけロビンが吠えた。

能力でクザンの身体に無数の腕を生やし、関節を決めてガチガチに固めてしまう。あとは少し力を入れれば、簡単に骨が折れる状態だ。

「ロビ~~~~~~~~ン!!! やめろオ!!!」

「あららら………少し喋りすぎたかな、残念。もう少し利口な女だと買い被ってた……」
「〃クラツチ〃!!!」

ウソツプの制止の声も聞かず、クザンの呆れた声も無視し、ロビンの関節技がクザンの氷の身体をバラバラに砕く。

ガシャン、と草原に崩れ落ちる氷の破片。

だが数秒もしないうちに、氷はひとりでに動き出し、元の長身の男の姿に戻ってしまった。

「んあア……ひどい事するじゃないの……」

「ギャ——ギャ——~~~~!!!」

まるで聞いていない様子のクザンに、それを目の当たりにしたチョツパーが悲鳴をあ

げて後退る。

クザンは面倒くさそうに立ち上がると、再びロビンを見据える。

「命取る気はなかったが……」

ブチブチと手近な草を引き千切ると、辺りにばらまく。

宙に散るそれらにふーつと息を吹きかけると、瞬く間に凍りついて、簡易的な一本の剣となる。

クザンはそれを両手で持ち、ロビンに向けて振り下ろす。

だが、彼の前に割り込んだ一人の男が、その一撃を寸前で受け止めた。

「おやア……? どっかで見た顔だな」

「この一味潰されちゃア、おれも困るんでネ。邪魔させてもらうヨ……!!?」

幅広で片刃の剣を抜き、ロビンを庇い氷の剣を止めるリン。

彼に続き、ゾロとサンジ、そしてルフィもクザンを止めるために飛び掛かる。

サンジとゾロ、リンでクザンの動きを止め、ルフィがど真ん中から突っ込み、強烈な

一撃を叩き込もうと突っ込んだ。

「んな!!?」

「うわ!!?」

「ぐあア!!!」

「おああああっ!!!」

だが、それは叩き込まれた一撃は、クザンに何の痛みも与えなかった。

それどころか、四人ともクザンに触れた箇所から凍りつかされ、叫び声とともにその場に倒れ込むこととなった。

「ぎゃあああ凍らされた~~~~!!!」

「あの3人がいつぺんに……!!!」

「た……大変だ!!! すぐ手当てしないと……!!! 凍傷になったら……!!! 手足が腐っちゃうぞ!!!」

一味の実力者と部外者、四人同時に攻めたというのに、全く意に介していない様子のクザン。

ウソツプとナミは愕然と目を見開き、倒れた四人を見たチョツパーが焦った声を上げる。

そんな彼らの様子を見やり、クザンがにやりと笑みを浮かべた。

「……………いい仲間に出会ったな……………しかしお前は…お前だ、ニコ・ロビン」
「違う…私はもう……………!!!」

クザンの冷酷な言葉に、首を横に振るロビン。

クザンは彼女を黙らせるため、絶対零度の自らの身体を近づけ、両手を伸ばす。

しかしその手が触れる直前、宙に舞った天使が放った強烈な蹴りが、海軍大将を勢いよく吹き飛ばした。

「エレノア!!？」

「おいおい……その身体で動けるとはね……そういうやお前さん、*“世界最強の男”*の娘なりに……あの女の娘だったわ」

「にやははは……この程度で動けなくなるほど、落ちぶれちやいないよ」

ザザッ、と草原を滑り、口元の血を拭って顔を上げるクザンに、エレノアは不敵に笑ってそう告げる。

だが、無理矢理地面に立てた両脚はガタガタと震え、全身に巻いた包帯からはじわりと血が滲み始める。虚勢であることは明らかだった。

「そういうところよく似てるわ………まったく……天族の女ってのはどいつもこいつも、覚悟ガンギマリの厄介な奴しかいねエな」

「それが私の……我等の生き様というものだ……!!？」

肩を竦め、標的を変更するクザン。

再び近づくクザンの氷の力を前に、エレノアがぶるぶると震えたまま、ボロボロの足を構えたその時。

二人の男達がガシッ、とエレノアとロビンを担ぎ上げ、全力で走り出した。

「なっ…ちよつと!!?」

「うおおお」

「やったウソツプくっつ!!!」

必死の方向を上げ、クザンから離れるウソツプとチョツパー。

唾然とした顔で、遠ざかっていくクザンを凝視するエレノアとロビンに、クザンが忌々しげな目を向ける。

「何だってんだオイ…」

「ウソツプ!!! チョツパー!!! そのまま船に走れ!!! ロビンとエレノアを守れ!!!」

「わ!!? わかった!!!」

「待って…離して!!? あんた達じゃ無理だって!!!」

「それからお前!!?」

ノロノロと動き出すクザンの前に、ルフィが立ちはだかる。

そして後ろを振り向かないまま、剣を構えてクザンを睨むリンに向かって強く吠えた。

「ン?」

「おれの船に乗っていきエなら…おれの仲間ちゃんと守れよ!!!」

「了解しタ……任せ口、シンの人間は、約束を必ず守ル!!!」

有無を言わせないルフィの命令に、リンはコクリと強く頷く。

そして踵を返し、先に行ったウソップたちの後を追って駆け出していった。

「やめとけ、その女は助けねエ方が世の為だ」

呆れた目でルフィ達を見ながら、気だるげな声で告げるクザン。

ロビンたちの後を追おうと歩き出した彼に向けて、ナミがヒュンツと天候棒を突き付け、不敵な笑みを見せた。

「お言葉ですけど、そういうのの集まりよ、海賊なんで」

「よくわかってんじやねえの………!!?」

そう返し、クザンはナミを簡単にあしらひ、先に向かおうとする。

腕と足をそれぞれ凍らされたゾロとサンジも立ち上がり、決死の覚悟でクザンを止めようと各々の武器を構える。

「待った!!! お前ら!!!」

だが、そこに再びルフィの声が響く。

ハツと振り向く一味と敵の視線を身に受けながら、ルフィは凍り付いたままの拳を構え、敵しい表情で告げた。

「お前ら手エ出すな、一騎討ちでやりてエ!!? この勝負、おれとお前で決着をつけよう」

「構わねエが………連行する船がねエんで………殺して行くぞ?」

あまりにも不利な戦いを望もうとする、若き船長。

クザンはそんなルフィに文字通り氷の眼差しを向け、呆れた顔でそう返した

「何考えてるのよこのバカ共!!!」

メリー号の甲板で、エレノアの怒号が鳴り響く。

チョッパーに包帯を巻き直されつつ、戻ってきた男達に怒りのままに吠える。

それを耳にし、ゾロとサンジは苦虫を噛み潰したような、険しい表情になっていた。

「海軍大将相手に一騎討ち!!! たかだか1億の賞金首が!!! 万に一つの勝ち目もないよ

!!!」

「———船長命令だ………」

「いくら船長命令でも……!!! お前ら薄情すぎやしねエか!!! そりやねエよ!!!?」

「黙れ!!!」一騎討ちだぞ!!! わからねエのかお前には!!!」

「おいやめろ!!! こんな時に!!!」

ウソップもエレノアと同じく、船長を死地に置き去りにしたことを責めるが、騎士道を重んじるサンジがそれに怒鳴り返す。

始まりかけた剣かを止め、ゾロは眉間にしわを寄せたまま、負傷した腕に包帯を巻き

続けた。

「今……一味の瀬戸際だ。この決断があいつの気まぐれだろうと何だろうと……もしもの時は、それに応えるだけの腹アくくつとけ!!!」

固い決意の表情で、一味全員にそう通告するゾロ。

エレノアはグツと唇を噛み締め、顔を手で覆い天を仰いだ。

「……!!! 私なら……あんた達全員が逃げる時間を稼いで……自分で逃げる事ぐらいできただ……!!! 今のルフィじゃ無理だ……今のあいつが“海軍大将”を相手取ってタダで済むわけがない……!!!」

「何言ってるのよ……あんた」

希望的観測でしかないエレノアの嘆きに、ナミはぞつと背筋が冷える感覚に陥る。エレノアの献身が、度を過ぎているように見えたからだ。

「ルフィに何かあったら……私は……!!! あの人に顔向けができない……!!!」

そして、その献身の根底にあるのが、彼女の想い人であることにより一層の恐怖を感じる。

歪みを見て、呆然と立ち尽くすナミの後ろで、リンがぼそりと呟いていた。

「……噂通りのブツ壊れっぷりだね、天族ってのハ……!!?」

——このままここで、お前を砕いちまって命を絶つのは造作もねエが……借りがある。

これでクロコダイル討伐の件：チャラにして貰おうじゃないの。

と、ある縁によって、ルフィは命を取り留める。

その後、誰もいなくなった草原に、全身を氷漬けにされたルフィが発見され、メリー号に回収されたのは、数十分も経ってからだった。

??

バタンツ！と大きな音を立て、船室の扉が開かれる。

その中から顔を出したチョップパーが、半泣きで仲間達に治療の結果を伝えた。

「ルフィの……心臓が……動いた!!!」

氷漬けになったルフィを、シャワーのお湯で温め続けること数時間。

温度を取り戻したルフィの身体は、ようやく正常な身体機能を取り戻したのだった。

「やったー!!!? うおおお~~~~い!!! ルフィ~~~~!!!」

「あのクソバカ野郎め、心配かけさせやがって!!!」

「駄目だ!!!? まだ駄目!!! 入ったら騒ぐだろ!!!」

安堵と歓喜の声が上がリ、一味が甲板上で飛び跳ねる。

歓声を上げるウソップ達にチョップパーが忠告しつつ、全員が無事に船に戻って来られ

たことを祝いあう。

そんなホツと緊張の糸が緩んだ空気の中、不意にウソツプが甲板に倒れ込んだ。

「はふ……」

「どうしたウソツプ、気が抜けたのか」

「……あんな強エのがこの先……おれ達を追って来るのかな」

訝し気に問いかけるゾロに、ウソツプは重い声でこぼす。

たった数時間前の事、すぐ目の前で起こった大事件だったのに、ほとんど何も手を出さことなく、あつと言う間に終わってしまった。

それが非常に虚しく、そして情けなかった。

「……おれはただ……バタバタ騒いで終わったよ……」

「……寝ろ、バカ。疲れてんだよ、お前」

虚ろな目で呟くウソツプに、ゾロが呆れながら告げる。

歓喜する者達、ほつと安堵する者達、今後に不安を抱く者達。

勝利とは言い難い、苦い経験を経た一味を見やり、ロビンとエレノアはお互い離れた位置に居ながら、何か思案する様子でいた。

第18章 ガレーラカンパニー

第171話 “海列車”

「う〜〜〜ん、い〜〜〜い天気！」

燦々と輝く陽光の下で、デツキチエアに寝転んだナミが、心地よさそうに伸びをする。立て続けに起こった騒動から解放され、のびのびとした気持ちになっていた。

「んヌワ〜〜ミシア〜〜〜〜〜〜ん♡」

「?」

「ジャガイモのパイユ、作ってみたのですマドモワゼル。よろしければ」

そこへ、くるくると回りながら現れたサンジが、新しく作った料理を差し出してくる。

もはや慣れたその様に、ナミは素直に料理を受け取り、パクリと一口頬張る。

「んん、おいしい」

「幸せー!!!」

「うるせエなてめエ、眠れねエだろ!!?」

笑みを見せるナミの答えに、打ち付けた波と共に歓喜の声を上げるサンジ。

彼の喧しさに、昼寝をしていたゾロが怒号を上げるが、サンジは全く気にせず馬鹿に

した顔を浮かべて背を向けた。

「はいはいすませんでしたサボテン君」

「何だと!!? ダーツ? コラ!!?」

売り言葉に買い言葉。恒例の二人の喧嘩を、ナミが呆れた目で見やる。

するとその時、船室の方からどたばたと騒がしい足音が響いてくるのが聞こえた。

「ルーフィ〜っ、ルーフィ〜っ」

「だ——っ!!?」

「うお——っ!!? 待ってました——!!!」

「凍ったおれのマネ!!!」

バタンツ、と船室から飛び出して来たルーフィが、頭から白い粉を被って全身真っ白になり、カチーンと硬直してみせる。

その姿は、数日前に大将青キジに氷漬けにされた時とそっくりで、ウソツプとチョッパ、リンが大笑いしていた。

「凍って死にかけていて…よくやるわよ、そんな事!」

「うはははは似てたか!? あれ!? おいナミ、お前何食ってんだ!!!」

「そっくり!!? そっくりだぜルーフィ——!!?」

危うくバラバラにされて、冒険どころか何もかもが終わっていたかもしれないのに、

とナミが半目を向ける。

が、全く気にしていない当の本人を見て、ますます呆れかえる。

すると今度は、同じく船室からロビンが顔を脱してくるのが見えた。

「ロビン!!? 気分はどうだ? ふさぎ込んでみたいだけ大丈夫か?」

「お陰様で……もう平気よ。それよりあなたは妖術師さんに集中してあげて」

「おう、そうだな!」

「アイツったらほんつと無茶ばかりするんだから。……まあもつとえらい目にあつたコイツがこんなにピンピンしてるのが癪に触るけど」

突如、一味を襲った圧倒的強者の襲撃。

それを乗り越えるため、今や立つ事もできないほどに傷ついていた仲間が、命懸けで戦いを挑もうとした。

勇敢というよりも、命を投げ出そうとするような異常すぎる覚悟。

ナミにはそれが、どうしても不安に思えて仕方がなかった。

「……んで、エレノアは?」

「まだ寝てるわ……相当消耗したみたい」

「ああ、だろうな」

「サンジ、エレノアが起きたら胃に優しいもの作ってやってくれ。あいつまだ、固形物と

か食べそうにないから」

「了解、ドクター」

チョツパーに頼まれ、サンジはエレノア用の別の料理を作るために、船の中に引つ込もうとする。

そこに、涎を垂らしたリングが待ったをかけた。

「おれも食つていいカ？」

「おめエはパンの耳でも食つてろ!!!」

「…ずいぶん進んだみたいだね」

窓の外に見える海を見やり、エレノアが呟く。

傍らには様子を見に来たナミと、診察に戻ったチョツパーがいて、ベッドに横になる天使をじつと見下ろしていた。

「航行に問題なし！ 順調そのものよ」

「それは何より………つていうかさ」

何も心配するな、と笑うナミに、エレノアもホツと安堵の微笑みを浮かべる。

が、すぐに彼女の目は、怒りで鋭く吊り上げられた。

「本当に鎖でベッドに縛り付ける奴があるかア!!! ガチの囚人扱いじゃないのよこれエ

!!!
」

ガツチャンガツチャンと、自分に巻きつけられた鎖を揺らして抗議の声を上げる。

メリー号に戻り、即座に開いた傷の治療が行われたのだが、終わった直後にナミ達の手によってこの有様にされてしまったのだ。

「大げさなんだってば……!!! 妙な事はもうしないって何度も」

「前回それが大ウソだつてわかっちゃったからね。チョップパー、奥においてある鎖と縄、全部持つて来ちゃつて」

「わかつた」

「うおおい!!! それでいいのか船医イ!!!」

何のためらいもなく、患者を縛り付ける手伝いに向かう船医に吠えるエレノア。自業自得と言えそうだが、文句は止まらなかった。

「とにかくおれの許可が出るまで絶対安静!!! ここから出さないからな!!!」

「え〜……」

ふん、と鼻を鳴らし、チョップパーはエレノアの抗議を完全に拒否する。

不満げに唇を尖らせるが、主治医と航海士はさつさと船室を出ていつてしまい、ぶつける相手がいなくなってしまう。

渋々諦め、暇をつぶそうと窓の外に再度目をやったエレノアだったが。

「……ん？ この『音』は……」

久々に自分の耳に届いた『音』に、ピクリと彼女の片眉が上がった。

一方、甲板ではまた新たな騒ぎが起こっていた。

風に任せ、順調に目的地に向かっていたはずなのに、突然ルフィ達がオールを漕ぎ、進路を変更してしまっていたのだ。

「……ら!!? あんた達何勝手に進路変えてんのよ!!!」

「それがおい、聞いてくれよナミ!!! でっけエ体中ケガしたカエルを見つけたんだ」

「おれ達は是非そいつを丸焼きで食いたいんだヨ!!!」

「食うのかよっ!!!」

目を輝かせたルフィとリンが、懸命にオールを動かし続ける。

メリー号の船首の方を見れば、確かに巨大な蛙が泳いでいるのが見える。しかも、見事なクローリングだ。

何がなんだかわけがわからない、とナミが目を凝らしていると、彼女の視界にある建物の影が映った。

「ん？ あれは………灯台………!!?」

「灯台だって……!!?」

「えエ…何であんな所に………って!!? あんたいつの間に!!? 手品か!!?」
「んな事アどうだつていいんだよ!!?」

いつの間にやらベッドの拘束を抜け出し、前を凝視するエレノアの姿に気付き、ナミがぎよつと目を剥く。

エレノアはナミを放置し、雄叫びと共にオールを動かす男達に声を張り上げた。

「あんた達!!? 今すぐに漕ぐのやめてバック!!? 即座につ!!? 迅速につ!!?」

「何だよエレノア、うまそうなカエル飯食わせてやろうと思つたのに!!?」

「私の為だつたの!!?」

まさかの理由に、エレノアは衝撃を受け一瞬だけ固まる。

好き勝手やっている声ばかり聞こえたルフイだったが、なんだかんだ傷付いた仲間の事を想つてくれていたらしい。が、それとこれとは話は別だ。

「いや…マジでダメだから!!? 止まってるってば!!?」

「カエルも灯台を目指してるわよ」

「カエルはまず白ワインでぬめりを消し、小麦粉をまぶしてカラッとフリート」

「ちよつとロビン!!? サンジ君」

「よつしや全速前進くっつ!!?」

「お——!!?」

「その団結力は何なのよ!!!」

恐ろしきは食欲か、仲間への想いか。

美しいフォームで泳ぎ続ける蛙を追い、男達の熱意ががちりと一致する中。

ボオオオツ…と、聞き慣れない音が聞こえてくるのに気がついた。

「あ???」

「え!!? 待つてよみんなストップ!!? 変な音がする!!?」

「ん!!? 何だ何だ!!?」

「遅かった…!!?」

ナミが声を上げると、その横でエレノアが頭を抱える。

何事か、と一味が辺りを見渡していると、突如メリー号が真下から何かに突き上げられ、推進が止まってしまった。

「うわ!!? 何かに乗り上げた!!?」

「バックバック!!? 180度旋回く!!」

予想外の事態に慌てる一味に、エレノアとナミが必死に叫ぶ。そうこうしている間に、音の主は見る見るうちに距離を詰めてくる。

何とかオールを振り回し、乗り上げた何かを押し、メリー号を海へと進めたその直後。ゴツ!と、凄まじい勢いで突き進んできた鋼鉄の何か、メリー号の後ろを通り過ぎ

ていった。

「どわあああ〜〜!!!」

「何だコリヤ〜!!!」

轟音を鳴らし、風を切り、煙を噴き上げ海の上を走る鋼鉄の塊——いや、蒸気機関車の形をした何か。

凄まじい速度で海を走り、何故か前に待ち構えていた巨大蛙を撥ね飛ばし、列車は遙か先まで走り去っていくのだった。

しばらくの間、誰もが固まっていた。

冷静なロビンでさえ、唾然とした表情で通り過ぎていった鉄の怪物を見送る事しかできずにいた。

「……船がけむり吐いてたぞ」

「もう……!!? だから止まれって言ったのに……」

「エレノア……あれが何か知ってるの!!?」

呆れた様子でため息をつき、肩を竦めるエレノアに、ナミが詰め寄る。

しかし、その問いにエレノアが応えるよりも前に、近付いていた灯台の方からにぎやかな声が聞こえてきた。

「大変だ!!? ばーちゃんばーちゃん、海賊だよ!!!」

「何!!? 本当かチムニー!!! よ——ひちよつと待つてりや」

バツ、と振り向くと、灯台の下に建物を見つめる。待合所の様に開けた底に、大小三つの人影が動いている事に気付く。

「あつ、あれは……」

「面倒だな、建物から誰か出てきた……!!? 応援呼ぶ気だぞ……」

「あ……!!? もひもひ!!?」

騒ぎすぎたために、海賊である自分達の存在を知られてしまった。

ここで海軍を呼ばれてしまえば面倒な事になると、ゾロが警戒しながら自分の刀を構える、が。

「えくくと!!? ……!!? 何らつけ!!? 忘れまひた!!! ウィくくツ!!?」

「酔っ払いかよっ!!!」

脅威どころか、日常生活もままならなさそうな声の主、制服を纏った老婆のその反応で、全員がずでつとずっこける。

思わず脱力した彼らの間を抜け、エレノアが欄干から身を乗り出し、大きく手を振つてみせた。

「おーい!!? ココロさくさん!!?」

「んん…!!? どつかれ見た顔らね」

満面の笑みで、呼びかけてくる天使の顔を見て、老婆はしゃつくりをしながら首を傾げた。

「ご紹介……こちらシフト駅駅長のココロさん。そこでこつちの二人が………えつと？」

「あたしはチムニー!!? ココロばあちゃんの孫だよ!!? こつちは猫のゴンベ」

「ニャー」

「うん、よろしくね。……ココロさんいつの間に孫が」

「んがが!!? そりやあ前に会ってからもう何年も経ってるからね」

灯台の建つ島に船を寄せ、地面に降り立ったルフィ達に、エレノアが老婆達の紹介をする。

この島で駅長を務めるといふココロは、酒瓶を手に豪快に笑ってみせた。

「おれはルフィ、海賊王になる男だ!!?」

「ホント!!?」

「ああ」

「んががが、面白いねアンタ」

ルフィがいつも通りの自己紹介をするが、ココロは然して驚きもしない。まるで慣れているかのようだ。

一応の礼儀をこなすと、ナミが一味を代表して質問を投げかけた。

「ねーチムニー、あれは蒸気船でしょ？ でもあんな形じゃ、普通航海なんて……」

「見た事ないでしょ、あんなの。世界中探してもここにしかないよ！」

「海列車」『パッフィンング・トム』の技術はすごいからねエ……」

しみじみと語るエレノアが、チムニーと一緒に説明を始める。

「海列車」とは、この先の島「ウォーターセブン」にしか存在しない蒸気機関車型のパドルシップ。

海に浮かぶ線路を掴んで、毎日決まった道を進む。物資や人を運ぶ、島の住民達に必要不可欠な代物なのだという。

そう語りながらチムニーは、ルフィ達に咎める視線を向け出した。

「仕切り」もあるのに船で入っちゃ危ないじゃない、あなた達」

「ごめんごめん……止めたのに聞かないアホ共がいたもんで」

「……すみませんでしたー!!!」

ぎろり、と車椅子に映ったエレノアがルフィ達を睨む。

忠告を聞かなかったせいで酷い目に遭ったためか、全員素直に深々と頭を下げている。

た。

だがすぐに、ルファイがチムニーに反論を返した。

「危ねエつつてもよ、カエルはそれわかんねエだろ。吹き飛ばすのはひどいぞ、お前。おれ達の獲物なのに」

「ああ…あいつは『ヨコヅナ』、このシフト駅の悩みの種なのよ」

聞けば、『角界ガエル』という種のあの巨大蛙は、力比べが好きで頻繁に海列車に挑もうとするのだという。

撥ね飛ばされても大概ピンピンしていて、時には排障器が破壊されて、乗客達に多大な迷惑をかけているのだとか。

それを聞いてルファイは、不満げだった顔をすぐに改めた。

「そうだったのか…よ——し！ おれ、あいつ食わねエ!!! 頑張り屋はおれ食わねエ!!」

「始めからそうしてよ、カエルなんて」

「えー」

「アンタは惜しがんな!!!」

ルファイの決意に、全力で食う気になっていたりんが不満の声を上げる。人の心があるのか、非常に不安になる反応だった。

一通りの説明が終わると、今度はココロがルフィ達に質問を投げかけてきた。

「そんで？ おめエら一体どこへ行ってんだい」

「いや……私達はこのままウオーターセブンへ。船の改修ができればと思つて……」

「なるほろ……確かにボロボロら」

エレノアの答えに、ココロもチムニーもゴンベも一斉にメリー号を見上げる。

今にも沈みそうなほど、そして他人の同情を買うほど、メリー号は哀れで悲惨な様相だった。

『水の都』つーくらいでいい場所だわ。何よりアンタ造船業でのし上がった都市だ。その技術は世界一ら!!! 造る船は世界政府御用達ときたもんだ、すぐエらろ」

「へ——、つて事はすげエ船大工もいるな!!?」

「んががが!!? いるなんてもんじゃないよ!!? 世界最高の船大工達の溜まり場

だ、あそこは!!!」

まるで自分のことのように、ココロが誇らしげに胸を張る。

それを聞いたルフィは、ますますウオーターセブンに対する興味がわいてくるのを感じた。

「……よし決めた!!! そこ行って必ず “船大工” を仲間にするぞ!!!」

第172話 “船大工の島”

「ほいじゃあコレな!!? 簡単な島の地図と “紹介状”、しっかりと船を直して貰いな。ウオーターセブンは広いからね、迷わねエこった」

さらさらと、小さな紙に絵と文をしたためたココロが、それをエレノアに手渡す。

駅長とその孫達は、メリー号に乗り込んだルファイ達を見上げて笑顔を送った。

「あたし達も近いうち、ウオーターセブンに帰るのよ」

「ああそうさ、もしまた会ったら行きつけの店で一杯おごるさ、んががが」

「そうか! んじやまた会えるといいな!!?」

「ウオーターセブンでの記録は一週間らよ、ゆっくりしていきな!」

海賊相手でもまつたく退かない、何ともつかみどころのない老婆たちに見送られ、ルファイ達は大きく手を振る。

少ししか話していないが、彼女達が実に気前のいい人柄であることがわかり、さつそく再会が楽しみになっていた。

「じゃ、行くわ!」

「ココロさん、また会ったらじっくり話そう」

「野郎共!!? 出航準備!!?」

「おオ!!!」

バサツ、と帆を広げたメリー号が、指針の示す先へと進みだす。

遠くなつていく羊の船首の海賊船を、ココロ達は賑やかに見送り続けた。

「やつほ——う!!! 行くぞ肉の都——!!?」

「お前何聞いてたんだよ」

「完全に『美食の町』の引つ張られてるネ」

「アンタも何よそのヨダレは!!!?」

目的地は違うというのに、イメージを完全に食に引つ張られているルフイに、ナミとリンが呆れた目を向ける。

かくいうリンもほぼ同類だったため、ナミからの鋭いツツコミが飛んだが。

「ルフイ!!!? 船大工探しはおれに任せろ!!? ものすごい美女を見つけてみせるぜ

!!!」

「バカか!!? 大工だぞ!!? 山みてエな大男に決まってるだろ。5mだ」

「おいルフイ、あんまりデケエとこの船で生活できるかどうか」

まだ島にもついていないというのに、新たな仲間を想像し興奮する男達。

そんな彼らに、ゾロが呆れた視線を向けて告げる。

「腕がありや誰でもいいだろ。その前に海賊船に乗ろうって物好きがいるかどうかが問題だ」

「やつぱりそこだよネ」

自らこの船に乗り込んできた、同じもの好きであるリンがそう言うのと、全員が何とも言えない微妙な表情になる。

それを他所にチョッパは、新たな出会いがある事に期待の目を見せていた。

「楽しみだな、また仲間が増えるのか」

「先に駅についてラツキーだったわね、地図描いて貰えたから。地図の場所に行つて、アイスバーグという人を訪ねれば」

ナミもだいたい同じ気持ちのようで、チョッパにフツと笑いかける。

できれば常識人に来てほしいと思いつながら、懐から先ほどココロに渡された手紙を取り出し、中身を確認してみる。

そこに書かれた下手くそな地図に、ナミの表情が固まった。

「成程、わかるか!!」

「あーあーいいいいよ、私が案内するから」

「それはそれでダメでしょ!!!」

「理不尽!!!」

怒りのあまり、地図をその場に叩きつけるナミにエレノアが苦笑をこぼし、宥めようとす。

が、とことん彼女を動き回らせたくないナミの非情な言葉に、エレノアは思わず涙目で叫ぶ羽目となった。

「だから、こういう奴をみんなで探すんだ!!」

「もしいたら、おれは逃げる」

「ああ、おれもだ。船があれば海へ逃げる…だが、タコの血を引いてそうだから海でも追ってきそうだ」

「……………うまそうだね、そいつ」

「オメーはどんだけ食い意地はってやがんだ!!!」

甲板では、新しい仲間はどうな奴になるかという予想大会が、妙な方向になりつつあった。

原因はルフィが書いた不気味な人物像で、それを見て恐怖を抱いたり、涎を垂らしたり、一言で言い表しがたい混沌が生み出されている。

そんな彼らを、ロビンは一人穏やかに笑いながら、じっと見つめ続けていた。

「エレノア、ウォーターセブンについて詳しいなら、知ってる人で乗ってくれそうなのと

「かいがない？」

「うゝん……あそこに集まる職人達はみんな、たつた一人について行くために精進して
るような人ばかりだからなア」

ふと上がったナミの質問に、エレノアは険しい表情で首を傾げる。

彼女の返答の意味が分からず、訝し気に眉を寄せるナミだったが、ふと視界に映つた
ウソツプの行動に、つい意識が逸らされた。

「どうした？ ウソツプ」

「——このブリキの継ぎ接ぎもよ……戦いと冒険の思い出じやねエか……これからきれいに
直つちまうのかと思うと、感慨深くもあるわけだ、おれア……」

メリー号のマストに抱き着き、頬ずりをするウソツプ。

木板を当て、鉄板を張り、釘を打ち、メリー号が傷付くたびに何度も何度も修繕を施
してきたのは、他ならぬ彼だ。

船に対する想いも、誰より強く持っていた。

「それもわかるが……特に『偉大なる航路』に入つてからのメリー号への負担は相当なも
んだ。甲板のきしみも船底の水洩れもひどい。このまま放つときや、船もおれ達も危険
だぜ」

「ああ!!? でも今はいつぱい金もあるしよ!!? 完璧に元気にしてやれるよ!!? パ

ワーアアップもできるぞ!!?」

「よし、大砲増やそうぜ!!?」

「じゃ銅像ものせよう」

「それはいらん」

危険な冒険の末、手に入れた財宝の山。それさえあればきつとメリー号も強化できると、一味全員で期待に胸を躍らせる。

そしてやがて、船の進む先に目をやったゾロが声を上げた。

「おい、アレじゃねエのか」

その声に、ルフィ達は一齐に振り向き、徐々に見えてきた島の影に目を輝かせた。紆余曲折ありながら、ようやく目的地に辿り着いたのだ。

「島だ〜っ!!! 島が見えたぞ〜っ!!!」

「よしみんな!!! 漕げ!!!」

「ムダな力を使わずな」

流行る気持ちを抑えられないのか、ルフィがオールを担いで無茶を言うのに、サンジが冷静にツツコミを入れる。

ギャーギャーとまた騒がしくなりながら、メリー号は着実に島に向かう。

そして一味は、近付いてきた島の全景に、ハッと目を奪われた。

「うおおっ!! 何だコリヤ~~~~!!」

まず目に入ったのは、島の頂上から噴き出す大量の水。

弧を描き、下の水路に入った水流は、さらに下の水路に向かって流れ落ちていく。そうして島全体に、水が流される構造になっている。

その光景はまさに、巨大な噴水を中心とした、美しい島であった。

「でつつっけ~~~~噴水だ!!」

「うは~~~~!!? こりやすげー、まさに産業都市!!?」

「『海列車』も走るわけだ」

キツチリと作られた水路、規則正しく並んだ町並み。

使用されている技術の高さを表しているかのような、美しく整然としたそれに、ル
ファイ達は皆感嘆の言葉しか出てこなかった。

「正面にあるのが駅ね。ブルー駅って書いてある。港はどこかしら……」

「この辺は政府の船も使うから、裏町に回らないとダメだよ」

「なるほど……そりやそうか」

まっすぐ進みかけたところで、エレノアの忠告が入り、すぐさま方向転換が行われる。
そうして進んだ先の景色。

町全体が水の上に浮いているかのような、道の全てが水路になっている光景に、また

も感動の声が上がった。

「わ——っ!!? すごいつ!!? 水上都市!!?」

「すげー!!? いいなここ、きれいな町だ」

これまで通ってきた島とは大きく異なる、人の営みが大きく現れた島に、一味は目の輝きを止められない。どうしてもあちこちをきよるきよると見渡してしまう。

「町が…!!? 水浸し!!! 家が海に沈んでるぞ!!?」

「違うわ、もともと沈んだ地盤に造られた町なのよ。家の下の礎を見て」

「本当だ、柱だ」

「成程…それで『水の都』」

「うほ——!!? おい、早く船着ける!!?」

チョッパーの驚愕の声に、ロビンが冷静に分析を行うのをよそに、ルフィがよりはしやいだ声を上げる。

さっそく停泊させようとしたその時、彼らを呼び止める一つの声があがった。

「コラコラおめエら!!? ここはダメだ、海賊船は」

見れば、釣り人らしき中年の男が、ルフィ達に向かって叫んでいる事に気付く。

彼もまた、しっかりと海賊旗を示しているルフィ達を恐れることなく、むしろ親しげな様子で話しかけている。

「何しに来た？ 略奪か？」

「普通に船を修理して貰いにですよ。この町に略奪しに来るようなのはとんだバカでしょ〜？」

「ははは、そりやそうだ！」

「略奪かつて聞くかフツ〜…」

エレノアと釣り人の男が朗らかに笑いあう様に、ゾロが思わず冷や汗をかく。傍から聞けば、こんなにも親しげに話す内容ではまずなかった。

「それならこの先に岬がある。とりあえずそこに停めるといい」

「ありがとうございます！」

親切にも案内をしてくれた男に礼を言い、麦わらの一味は再びメリー号の進路を変えらる。

そして言われた通りの場所、港から少し離れた、船の残骸らしき無数の木片が積み重なった箇所に、一味は到着した。

「(ト)が(ト)いい…よし！ 帆をたため〜」

丁度いい箇所を見つけ、指示に従ったゾロがロープを引こうとする。

しかしその瞬間、メリー号のマストが半ばからへし折れ、ぐらりと大きく傾き始めた。

一瞬間まったウソツプが、その光景にぎよつと目を向いて叫んだ。

「わ——!!! 何やってんだてめ——!!!」

「違……!!? おれはただロープを引いただけで」

さすがのゾロも慌て、自分の握るロープとマストを交互に見やる。

全くそんなつもりなどなかった、軽い力で起こった惨状に、彼は冷や汗を垂らして立ち尽くした。

「おどろいた……ここまでガタがきてたのか、ゴーイングメリー号……」

呆然としていたゾロは、ウソツプに後ろから何度も叩かれ、ようやく正気に戻る。そして大急ぎで、折れたマストを戻す作業に入った。

「——とここで、島の人達何で海賊を恐れないの?」

ゾロ達が必死にマストを押すのを横目に、ナミがふと疑問を口にする。

麦わらの一味が無名の海賊であることを考えても、あまりにも自分達に対する敵というものが弱すぎると思ったのだ。

「海賊だって『客』だからだろ、造船所の」

「海賊に暴れられても構わないくらいに強い用心棒がいるとか……」

「いるだろうな、それぐらい……これだけの都市だ」

「理由はそれだけじゃないよ」

それぞれで考察を語る一味に向けて、エレノアが口を挟む。

視線が自分に集中すると、エレノアはどこか誇らしげな、悪戯っぽい笑みを浮かべて語ってみせる。

「ガレーラカンパニーの船大工達はね、みくんな“戦う者”なんだよ。現場で鍛え上げた腕、精神力、体力、全てが海賊にだって引けを取らない職人の中の職人なんだ」

「へー……じゃあ強エ奴がいっぱいいるんだな」

エレノアのもたらす情報に、ルフィとウソップはさらに期待に胸を弾ませる。

大切な船を修復してくれる心強い仲間、それも強いものが入ってくれるのなら、これほど望ましい事はない。

「よし!!? ほんじゃ行つてきます!!?」

流行る気持ちをそのままに、ルフィ達はさつそく外に向かって歩き出す。

が、一步踏み出したその直後、ナミがルフィ達の頬を掴み、無理矢理その場に引き留めた。

「待ってルフィ!!? ウソップ!!? あんた達私についてきてよ!!!」

「どいこ」

「——まずはココロさんの紹介状を持って“アイスバーグ”という人を探すの。その人を頼って船の修理の手配と……あと、どこか黄金を換金してくれる所を探さなきゃ」

「……そうか」

今すぐにも町に行きたいルフィだったが、そうした方が確実なのだど理解すると、ぐつと我慢する。

ふう、と問題児達が先走らずに済んで安堵するナミ。

そこに、はいつと勢いよく、エレノアの手が挙げられた。

「アイスバーグさんなら、私面識あるよ。だいたいそんな場所も知ってるし」

「う〜ん……あんたには船でおとなしくさせとく予定なんだけどな〜」

「……………あの、義足の修繕くらいは行かせてくれてもいいんじゃないの？ どんだけ私信用ないの？」

「自分のやったことはちゃんと認めろ、バカ」

あまりに過保護が過ぎる、とエレノアがやんわりと抗議の声を上げるが、ゾロがそれをバツサリと切り捨てる。

遥かに格上の海兵を相手に、重症の身体を酷使し、足止めを担おうとしたことは、一味の中で酷くトラウマになっているらしい。

エレノアを見つめる目は、完全に疑惑で一杯になって見えた。

「今度また無茶しやがったら、お前本当に死んじまうだろ。おれは許さん」

「まーまー、何かあってもルフィがいるし、大丈夫だろ。いざとなったらおれ達で抱えて逃げりゃいい」

「何ならおれも一緒に行くヨ」

「……そうね、じゃああんたの伝手、頼らせてもらおうわ」

「よしきた！」

ドンツと胸を叩くウソツプと、ひらひらと手を振るリンの説得で、ナミは少しだけ留飲を下げる。

確かに、いつまでも船室に閉じ込めていては、そちらの方が悪化しそうだ。

「ウオーターセブンは広いから………先に貸しブル屋で二頭……いや、三頭借りていこう。こんだけの黄金の換金なら、中心街に行かないとね」

「……なんかもう、いろいろ教えて貰う事にするわ」

何の話をしているか全くわからないが、街中で不都合がないよう、色々と考えてくれている事はわかる。質問は道中にしようと言いつつ、ナミは肩を落とす。

それぞれの役割が決まったことを察すると、ルフイはニツと笑みを浮かべ、今度こそ町に向かつて歩き出した。

「よし!!? じゃあまアとにかく!!? 行こう 水の都!!!」

第173話 “ガレーラカンパニー”

水の都・ウォーターセブンでの景色は、全てがルフィ達に凄まじい刺激を与えてきた。町中に張り巡らされた水路、水の道を進むために必要不可欠な不思議な生物ブル。美しく、そして高い技術力に満ちた町は、どこからも目を離せなくなる。

あらゆるものに目を奪われ、そして時に戸惑いながらも、ルフィ達はエレノアの案内のもと、ブルに乗って町を進む。

そして少し予定を変更し、山積みになった黄金の換金のため、専用のある店を訪ねた。

「いや〜〜!!! やっぱり外の世界はイイネエ!! おれがまだまだ知らない事がたつくさん学ベル!!!」 じかに見るのに勝るものはないって事だナ!!!」

「はいはい、そうですね……」

換金所の外で暇を持て余す、エレノアとリン。

かなりテンションの高い彼に辟易としながら、適当に相槌を返す。

車椅子では入りにくいだろうという配慮と、自由に動けない彼女の護衛という名目で、二人は換金が済むまで待ちぼうけを命じられたのだ。

「時間かかっているネエ……？　なんか揉め事でも起こってんのかな？」

「さア？　どうせナミが、提示された鑑定額に納得できなくて文句つけてる処じゃないの？」

「ああ、そういうウ……………」

暇そうに壁に凭れ掛かり、空を見上げて呆けるリン。

エレノアはそんな彼に、じろりとやや鋭い視線を向け続け、しばらくしてから不意に口を開いた。

「ていうかさ……………あんた、いつまであの一味にいるつもりなのよ。探し物があるって話じゃなかったの？」

問いかけるエレノアの声は、厳しく嘘偽りを許さないという迫力に満ちている。

車椅子に乗った重傷人のはずなのに、びりつと大気が震えて感じるほどだ。

対するリンは、微塵も表情を変えないまま、やりと笑みを浮かべてみせた。

「……………おれの事、警戒してるよネ。変なこと聞いたかラ？」

「…何の事だか」

「とぼけなくてもいいヨ。おれが最初っから怪しいってのは、自分でもわかってることだからサ」

目を逸らすエレノアに、リンは不気味に笑ったまま続ける。

二人の間に漂う空気は、あつという間に張り詰め、急激に重くなる。まるで嵐の前兆のような変貌である。

「最初に質問した時に確信したヨ……表面上は何にも感情を動かさなかつたけど、目に動揺が現れてタ。おれくらい人の考えに機微じゃなきや、気付かなかつただろうけどネ……」

そういうリンの細目が、僅かに開かれる。

その瞬間、突如エレノアの喉元に、左右から一振りずつ刃が当てられる。

彼女の背後に、何の前触れもなく現れた二人の黒装束が、無音のまま刃を抜き、突き付けていた。

「『賢者の石』……知ってるんだロ？」

さすがに目を見開き、固まるエレノアに、リンが平然と告げる。

エレノアの目はすぐにジト目に変わり、不満げにリンと、彼の呼び出した黒装束達を睨みつける。

「……シンの戦士か」

「世話になつてる船の船員だガ……おれも色々背負つてるもんでネ。手荒な真似はし

たかないから、素直に質問に答えてくれると嬉しいヨ」

「……………最初から、私が目的だったの？」

「いやア？ 乗り込んだ船に天族がいたのは、ホントに偶然……………当たりくじを引いたと思ってるヨ」

咎める視線は、リンとしても望まぬものらしい。困り顔で、やれやれと肩を竦めている。

しかし、彼に退く気配はない。エレノアにどのような目を向けられても、どんな強引な手段であっても、やめるつもりは毛頭ないらしい。

「——わかっておろうが、逃げようとも、助けを呼ぼうとも思うナ。妙な事をすれば、我らはお前の首を容赦なく斬ル。若の問いに答えれば、それだけで話は済むのだ」

「…………」

「ま、そういう事だから……………話してもらえるかい？」

黒装束の一人、声からして高齢の男が強い口調で告げる。

ポリポリと頭を掻きながら、リンは表面上は申し訳なさそうに頭を下げ、しかし開かれた鋭い目は有無を言わさない圧を放つ。

「不老不死——そこに至るための方法を」

強烈な緊張感が漂う中、エレノアとリン達が睨み合う。

数秒か数分が、延々と続くかのような錯覚に陥る中、エレノアがついに口を開く。そして――

「さ……3億Bつ!!!」

換金所から、ルフイ達の驚愕の声が響き渡る。

船にため込んだ黄金の山が、そっくりそのまま札束の山に変貌したのだ。貧乏海賊団だった彼らにとっては、信じがたい光景だった。

「夢じゃねエのか……!!?」

「空島の冒険が遂に実を結んだわ!!! 大金持ちよ、私っ♡」

「私達だろ」

机の上にドンと出された札束に、ルフイ達はわーわーと騒ぐ。

喜びはしゃぐ彼らを、換金所の主はなぜか怯えた様子で、特にナミに恐ろしいものを見るような目を向け、見送っていた。

「ま……またのおこしを」

「さ……さ、〃3億〃になっちまった……!!? こ……こえエよ、おれ1億も持つのかよ」

「いや——ナミのおどしはコエーナー、あつはつはつは」

「元々これくらい価値だとは踏んでたの、そこへ1億ですもの。あんた達がそわそわ

してるからナメられたのよっ！」

それぞれ一億ずつ、用意したトランクに詰め込んだルフィ達が、意気揚々と換金所から出てくる。

ふとナミは、入り口の傍で固まっているエレノアとリンに気付き、訝しげな目を向ける。

「あれ？ あんた達どうかしたの？　なんか変な空気を感じたけど……」

「……………アー」

「んにゃ…何でもないよ。どうでもいい話だから」

言い淀むリンに変わり、エレノアがひらひらと手を振る。

気になったナミだったが、リンはともかくエレノアに変わった様子が見えないため、まあいいかと引き下がる。

どうにも、妙な雰囲気気が漂っていた気がしたが、放置することにした。

「ま——とにかくうまくいって……—あ!!？」

そんな空気に気付かないルフィは、大金にはしやぎトランクをぐるぐると振り回す。するとふざけていた罰が当たったのか、彼の手からスポンとトランクがすっぽ抜けてしまう。それが向かう先にある川に、ナミ達がぎよつと目を剥いた。

「わあ〜河に〜っ!!」

「1億Bが水に沈む~~~~!!?」

「よっ」

せつかく手に入れた大金、その3分の1が失われる、と慌ててナミとウソツプが、トランクを受け止めようと川に飛び込む。

が、惨事が起こるよりも前に、いつの間にか仕込んだのか、エレノアがトランクに括り付けた糸をくいっと引き、トランクを受け止めてみせた。

「……………どうせこうなると思つてたもんで」

「もう……!!? もう絶対よその船になんか行かないでください!!!」

「オラア!!? 頭下げろオ!!! 怪我人に働かせてごめんなさいつてよオ!!!」

「す……………すび……………すびませんでした……………!!!」

「……………船長にも容赦ないネ、君ら……」

はあ、とため息をつくエレノアに、びしょ濡れになったナミがきつく抱きつく。

その横では、ウソツプにボコボコにされたルフイが涙目で謝っていて、それを見たり
ンがドン引きした様子を見せていた。

「なア、ナミ、エレノア。やっぱ一度船に置いて来ねエか?」

「——それは手間よ……大丈夫、船大工に会いさえすれば。修理代の査定のためにすぐ船に戻る事になるから」

「そうか、それもそうだな」

一行はヤガラブルの背に戻り、次なる目的地である造船所を目指す。

一応の用心として、ルフィをトランクから離れさせたまま、水路をすいすいと進ませる。何とも悲しい光景であった。

「おい見ろ、あそこ」『水水饅頭』だつてよ!!? 1000個買おう」

「黙れ……」

当の本人は、あまり反省した風には見えなかったが。

「戻ってきたぞ、造船所の入り口!!?」

「よかった、さっきの人ばかりは消えてる」

やっとたどり着いた造船所の前で、ナミ達はホツと安堵する。

一度訪れていたのだが、その時は記者達が大勢で造船所を囲んでいて、どこにも入れる場所が見当たらなかつたのだ。

記者たちに囲まれたままでは、船の査定も修繕も、何も出来ないまま待たされる羽目になつただろう。

「とにかく探そうか、その……」

「『アイスバーグ』さん。ガレーラカンパニーの社長でこの町の市長さん。あと『海列

車」の管理もしてる人だよ」

「最強かそいつア!!! ……んでいまはどこに」

「いろんな仕事してるからなく……」

驚愕するウソツプを放置し、きよろきよろと造船所の向こうに目をやるエレノア。

すると待ちきれなかったのかルファイがさっさと歩き出し、造船所の前に置かれた柵を乗り越えようとした。

「おじやまします」

「また……」

いう前に入るといふ、お約束の厚顔不遜さを見せるルファイに、仲間達から呆れた目が向けられる。

だが、入り込もうとした彼を、ある一人の男が額を押して立ち止まらせた。

「おっと待つんじや、余所者じやな？」

「ん？」

「とりあえず外で話そう。工場内は関係者以外立ち入り禁止じやぞ」

ぐいつ、とルファイを押し、下がらせるジャージ姿の男。

工具を腰のポーチに収めた彼は、自ら柵を跨いでルファイ達の前に立ちはだかった。

「あ〜…どつこいしよ。このドックに用か？」

問いかける男を目にして、ルフィ達は驚愕で目を見開く。

その男——カクという名の彼は、角ばってはいるが非常に長い鼻という、この場にいる仲間の一人と、非常に酷似した姿をしていたからだ。

「ああ……ウソツプか」

「おれはここにいてるぞ!!? ルフィ!!!」

「そうよ、この人四角いわ」

「似てるネ……生き別れの兄弟か何かカ?」

まさかこんなに似た者がこの世にいるのか、とぎわめくルフィ達。

驚愕したまま動かない彼らを放置し、エレノアが自ら車椅子を押し、カクの前に進み出る。

「カク! 久しぶりだね!」

「ん? おお、エレノアか……久しいのう! しばらくお前さんの載った記事を見んかったからどうしたのかと思つとつたが……元気そうでなによ……」

知人が話しかけてきたことで、カクはすぐに笑顔に変わり、挨拶を返す。

しかし、久しぶりに会った知人の変貌した姿に一瞬固まり、ギョツと目を見開いて慄いた。

「おお!!? お、お前さん……その両脚はどういうことじゃ!!?」

「あははは……ちよつとドジっちゃつて。今はリハビリの意味も込めて
 “を”一から航海してんだよ」
 “ホー……そりやまた難儀じやな”
 偉大なる航路

痛々しく巻かれた包帯や車椅子を凝視していたカクは、心配そうに眉を寄せ、労わりの目を向ける。

しかし、あまりじろじろと見つめるのも失礼と思つてか、すぐに切り替えエレノアと向き直つた。

「それで？　今回は別の仲間を連れて何の用じや」

「そうだ、あの……アイスバーグさんに、会わせてほしいのっ!!？」

「はいこれ」

はっ、と我に返つたナミが答えると、エレノアが先に出会つたココロに渡された紹介状を見せる。

中身を確認したカクは、すぐに納得の表情を浮かべた。

「ほう、シフト駅のココロばーさんの紹介状じやな」

「結構な深手を負つちやつた子でね、一回診てあげて。カクならひとつ走り20分ぐらいで終わるでしょ」

「おいおい……ワシを甘く見過ぎじやぞエレノア。10分じや。まア、ちつとばかり待つ

とれ」

にやり、と笑みを浮かべたカクは、自分の道具を地面に置くと、その場で何やら屈伸運動を始める。

二人の会話の意味が分からず、ウソツプとリンが訝し気に首を傾げる。一つ走り10分とはどんな行き方をするつもりなのか。

「ひとつ走りつて… “ヤガラブル” ぞ?」

「ワハハハ、そんな事しとつたらお前達、待ちくたびれてしまうじやろ」

不敵に笑ったカクは、突如勢いよく走り出す。

その速度は、ルファイ達でさえ一瞬反応が遅れるほど。瞬く間に彼は、造船島の端まで走り抜けていた。

「速エっ!!!」

「え…でも待つて、あつちにあるのは…」

「絶壁ダ!!!」

驚愕の目で走り去ったカクを追うルファイ達は、続いて焦りで息を呑む。

彼が向かった先には何も無い、遙か下に町並みが広がる空中だった。その様は、いきなり飛び降り自殺に走ったようにしか見えなかった。

「うわ!!? 落ちた!!!」

「ンマー——!!! 心配するな」

悲鳴を上げるナミ達だが、背後からその心配を否定する声が響く。

ハツと振り向けば、胸ポケットに一匹のネズミを入れた男と、白衣を着た深い顔立ちの男、そして彼らに寄り添う二人の美女達の姿があつた。

「え？ 誰??？」

「彼は町を自由に走る、人は『山風』と呼ぶ」

いきなり見知らぬ何者かに話しかけられ、ルフイ達は困惑の視線を向ける。

それに構うことなく、謎の男達はどこか誇らしげな様子で、カクが飛び去った方向を見つめ、笑みを浮かべていた。

『『ガレーラカンパニー』一番ドック 大工職 職長 〃カク〃!!!』

宙を舞ったカクは、そのまま町並みの屋根の上を、軽々と跳躍していく。

その姿、まさに風そのもの。真下から見上げる子供達に手を振り返しながら、彼は廃船島の方向へと跳んでいった。

「いや驚いた…」

「あそこから飛ぶとは思わなかつたヨ」

「ンマー!!!? ウチの職人達をナメて貰っちゃ困る。より速くより頑丈な船を迅速に造

り上げる為には……並の身体能力では間に合わねエ」

「ね？ 言ったでしょ」

あつと驚く光景を見せつけられ、ルフイ達はもう開いた口が塞がらない。

エレノアだけが平然と、それ見たことかと言わんばかりに、悪戯っぽい笑顔を見せつけた。

「お久しぶりです、アイスバーグさん、ヴィルヘルム教授………アルモニ嬢には以前お世話になりました」

啞然としたままのルフイ達を後回しにし、エレノアはキコキコと車椅子を動かし、謎の男達に向けてペこりと頭を下げる。

その声で、ようやくナミも思考が追い付き、ん？と訝しげに首を傾げた。

「ヴィルヘルム………そういえばどこかで聞いた覚えが」

「最近の君の噂は聞いているよ…… “妖術師” エレノア君。そうか………娘に会ったのか。こちらこそ、随分世話になったようだ」

「ンマー……ずいぶん見ない間に雰囲気が変わったんじゃ………つてその脚は何事だ!!？」

「なんでみんな二度見なの……？」

最初は朗かに挨拶を躲そうとした男達、アイスバーグとヴィルヘルムだが、エレノア

の姿を見たるとたん驚愕をあらわにする。

「いい加減、全く同じ反応に飽きてきたエレノアだが、仕方がない事かと諦め、肩を竦めるだけにとどめた。

「そうか……よくは知らんが、随分無茶な旅をしてきたようだな。まーこの島の記録にはそれなりにかかる。ゆっくりしていけばいい」

「そうさせて貰うよ……」

大体の事情を察したアイスバーグの気遣いに、エレノアはフツと疲れ切った苦笑を返すのだった。

第174話 “一家とファミリー”

「よく来た、おれはこの都市のボス!!? アイスバーグ」

「はじめまして、 “麦わら” の一味の諸君……錬金術師エイゼルシュタイン・ヴィルヘルムという者だ。こちらは娘のセレネ」

「…よろしく」

堂々と仁王立ちし、名乗るアイスバーグと、静かに頭を下げるヴィルヘルムという名の男。

その傍らには、眼鏡をかけた長身の美女と、長い黒髪を垂らした美少女が、美しい姿勢で立っていた。

「そしてこのネズミはさつき拾った。名前は…そうだな、 “テイラノサウルス”。エサとカゴを用意せねば」

「手配済みです、アイスバーグさん!!?」

「ンマー!!? 流石だなカリファ」

「恐れ入ります!!?」

アイスバーグが思い付きを発すると、カリファと呼ばれた美女がすぐに頷く。きびき

びとした態度は、彼女の生真面目さをこれでもかと表している。

ルフィ達は彼女が口にした自分達の情報に、彼らが立場通りただものではない事を感じ取り、少し慄いた様子を見せていた。

「——それより10分後にチザのホテルでグラス工場の幹部と会食。その後リグリア広場での講演会。終わりましたら美食の町プッチの市長ビミネ氏と会談。その場で新聞社の取材を受けて頂き、本社へ戻り書類に少々お目通しをお願い致します」

「いやだ!!!」

「では全てキャンセルします」

「おいしいのかそれで!!!」

カリファが告げる今日の予定を、アイスバーグがぼつさり切り捨てると、目の当たりにしたウソツプが思わず声を挟む。

同じくヴィルヘルムも、親友にして同僚である彼に呆れた視線を送っていた。

「まったく君は……」

「そういう父さ……教授もこの後テック鉄鋼重役と開発中の新素材についての会議。ビヤマナ産業校での講義についての打ち合わせ。午後19時よりボーエツキ会長との会食が予定されておりますのでご準備を」

「全てキャンセルで頼む」

「……………了解しました」

「あんたもか!!」

生真面目、というよりは黙々とした態度で予定を口にするセレネに、ヴィルヘルムも同じく拒否を口にする。

全く同じ流れに、ウソツプがまた鋭いツツコミを入れる。

「こんな事ができる程の権力者だ、おれ達は」

「娘と過ごすオフの時間の方が重要でね」

「市長失格じゃねエか完全に」

一切悪びれる様子もなく胸を張る二人に、ウソツプだけでなくルフィもナミもリンも呆れた目を向ける。

唯一、エレノアだけがよく見知った様子のように、苦笑をこぼすだけだった、が。

「無礼者っ!!?」

突如、激昂した声を上げたカリファとセレネが動く。カリファがルフィ達に向けて鋭い蹴りを放ち、手袋をはめたセレネが風圧の弾丸を放つ。

間一髪、危機を察知した一味は、襲い掛かってきた二人に驚愕の目を向けた。

「何すんだお前ら!!?」

「びつくりした……………!!?」

「……………!!!」

「やるネ…」

「世界屈指の造船技術者と『十賢』に向かってアレだのコレだの何ですか!!!」

怒りの声を返したルファイ達に、カリファもセレネも厳しい視線を向ける。

しかしすぐに我に返り、慌てた様子で居住いを正し、ルファイ達に向き直った。

「はっ!!? 失礼、つい取り乱してしまいました。——ですがアイスバーグさんは市民の憧れ、あまり無礼のない様に!!?」

「……………申し訳ない…です」

「気をつけてよね。カリファさんもセレネも、見た目に反して結構激情家だから……………敬愛する上司と父親に対する無礼に関しては」

失態を見せ、冷や汗を流すカリファを見て、エレノアがくすくすと笑う。

顔の半分をカリファとセレネにやられ、ボコボコにされて半泣きになりながら。

「見境がないから」

「二二何でよりによつてそいつに攻撃当ててんだよ!!!」

「とりあえずコレ……………ココロさんからの紹介状ね」

怪我人に攻撃してしまい、カリファとセレネがはっ!!と息を呑むのを横目に、エレノアが懐からココロに渡された紹介状を取り出し、アイスバーグに手渡す。

受け取ったアイスバーグは中身を確認し……突如それを、びりびりと破り捨ててしまった。

「ああっ!!!」

「ねえ、お願い船直して!!? お金なら払えるのよ!!?」

「もう航海でポロポロなんだ、メリー号は!!! 頼むおっさん!!!」

まさか先程のやり取りが気に障って、取り合う気を失くしてしまったのか、と慌てるルファイ達。

しかし、アイスバーグは微塵も表情を変えず、彼らに答えた。

「いいよ」

「軽っ、いいのかよっ!!! じゃ、何で破くんだっ!!!」

「キスマークが不快だった」

「彼女とは昔からの飲み仲間だ……断る理由はないよ」

「ンマー!!? とはいえすでにカクが船を査定に行ってた。話は進んでる」

どうやら、ルファイ達の態度ではなく、紹介状の内容そのものが気に入らなかつただけらしい。

ホツと安堵の息をつく青年達の前で、アイスバーグはホジホジと鼻をほじりながら促す。

「どうせ今日は退屈な日だ。工場を案内しようか」

「仕事をキャンセルした男の態度かい」

「よ——し!!? じゃ行こう造船工場」

何はともあれ、これで船を直せると高揚した様子を見せるルフイ。

社長であり市長でもある男の有様に、いろいろ言いたい事もあったが、全員全て呑み込んで、彼の後をついていく。

「あ、そうだお金………」

同じく歩き出そうとしたウソップが、ふと自分達の荷物を置きっぱなしにしている事を思い出し、立ち止まり振り向く。

しかし、3億Bが入ったトランクを物色する何者かに気付き、ギョツと目を見開いた。

「え」

「あ、バレた急げ!!!」

謎の集団、サングラスをかけた妙な格好の男達と、バラバラな格好の男女十数人は、ウソップが気付くと同時に脱兎のごとく逃走する。

「えっ、何!!?」

「おい待てエ!!! 誰だてめエら!!!」

「逃げろ——!!!」

「ドロボー!!! 金返せエエ!!! 2億B〜!!!」

慌てて追いかけるウソツプだが、もう追いつけそうにないほどに差を広げられてしま
う。

そして謎の集団は、岸につけておいたヤガラブルに飛び乗り、凄まじい速度で遠ざ
かっていった。

「フランキー一家!!! ……と、あつちは？」

「グリードファミリィ!!!」

エレノアが驚愕の声を上げ、すぐに困惑の目で、もう一つの手段を凝視する。

彼女の疑問に答えるように、カリファが大きな声を上げて目を見開いた。

「待てエ!!! 待ってくれ——!!!」

「うひゃ〜!!!? 2億もあるらしいぜ!!!」

「ありがとよ——兄ちゃん!!!」

ズドドドド…!!と全速力で陸地を走り、奇天烈な格好の集団——フランキー一家と
グリードファミリィを追うウソツプ。

それを嘲笑うように、男達は奪ったトランクを見せつけた。

「パ〜〜ス!!!」

「おうよ!!!?」

「取り返せるもんなら取り返してみなく!!! ギャハハハ」

海を泳ぐことに特化した生物と、狙撃に特化した男では、端から勝負は決まっていたらしい。ウソツプは息も絶え絶えに、奪われたトランクに手を伸ばす事しかできずにいた。

「待てエパウリー!!! 今日こそは逃がさんぞ〜!!!」

「もうちよつと待ってくれつつつてんだろうがよオ!!!」

「パウリーさんのバカ〜!!!」

その時だった。

一家が逃げる方向から、大勢の挙げる怒号と、ある一組の男と少女があげる見苦しい言い訳の声が聞こえてきていた。

何事か、と視線を巡らせ、アイスバーグが眉を寄せる。

「あれは…」

「パウリーとパニーニヤです。また借金取りに追われています」

カリファの報告に、エレノアがハツと息を呑む。

そして車椅子から身を乗り出し、走る男女に向けて叫んだ。

「パウリー!!!? パニーニヤ!!!? そいつら止めて!!!」

「あん?!?」

「エレノア!!?」

名を呼ばれ、驚愕と困惑の視線を返してくる男女、パウリーとパニーニヤ。

向かう先にいる、一家とファミリーに気付いた二人は、橋の上に辿り着くと、勢いよく川に向かって飛び出した。

「〴〵ロープアクション〴〵!!!」

続いて二人は、懐から太いロープを取り出し、ひゅんつと振りかざす。

その途端、ロープはまるで自らの意思を持っているかのように動き、川の上を疾走する一家とファミリーの首に巻きついた。

「ちよつとその子達借りるよ〜!!? 〴〵ラウンドターン〴〵!!!」

「うぶげエっ!!!」

「ぐえエっ!!!」

首を取らわれた男達は、男女が操るロープに引つ張られ、空中を縦横無尽に振り回される。

そして最後には、全員が互いに頭をぶつけさせられ、ドボンツと激しい水飛沫を立てて、水中に落下することとなった。

「これでい〜い?」

「上出来!!?」

スタツ、と身軽な体さばきで、乗り手が消えたヤガラブルの上に乗ったパニーニヤが、エレノアに向けて問う。

エレノアはそれに、にっこりと満面の笑みを浮かべて頷いてみせた。

「くそーっ!!? また逃げられたっ!!」

「そいじゃ元気で! みなさん、また走りましょう。イヤ、いい所に来てくれた」

「まったくもく…あんたつて人はいつつもこうなんだから」

二人を追つてきた男達、話を聞く限り借金取りであろう男達は、去つていくパウリー達を睨んで齒噛みをする。

一息ついた風に肩を竦める彼に、パニーニヤは冷たく呆れた目を向けていた。

「よかつた、アレあんたんとこの船大工なんだろ?」

「そうだ」

「お——いありがとう、その金おれ達のだ!!!」

訳の分からない集団に、大金を取られる最悪の未来を回避し、ほつと安堵の息をつくるファイ達が、恩人であるパウリー達に向けて叫ぶ。

「え? 金?」

「あー…これか」

今ここでようやく、ヤガラブルの背に乗ったトランクの存在に気付いたパウリーとパ

ニーニヤが、じつとそれを凝視して固まる。

しばらくの間黙り込んでいた彼らは、無言のままヤガラブルの上に座り直し。

そのまま、すい〜つとヤガラブルを泳がせ、遠ざかっていった。

「いやオイ!!! 戻れ〜つ!!!」

「ふざけんなあんたらア!!!」

ネコババされた物をさらにネコババした二人に、ウソツプとエレノアの怒号が響き渡ったのだった。

「おいおい離せつ!!! 何すんだてめエは!!! 逃げやしねエよ!!! もうわかつたつてんだろう!!! 耳をはなせ」

「ごべんなしやいいい…」

逃げたパウリーとパニーニヤが戻ってきたのは、それから数分経ってからだだった。

一人のハットを被った長身の男が、まるで猫でも掴むかのように、二人の襟首を掴んで戻ってくる姿がそこにあつた。

「せつかく大金が入つたつてのに…!!!? てめエ覚えてるルツチ!!!」

『人の金で借金を返そうとするな、愚か者』

「拾つたんだこの金は!!!?」

「あたしは巻き込まれたんですく〜!!!」

「あつ!!? てめつ、ズリイぞパニーニヤ!!!」

ブランブランドぶらさげられたまま、わーぎやーと責任の擦り付け合いをするパウリー達。

そんな二人を見やり、エレノアは深いため息とともに肩を落とした。

「やれやれ…ルッチがいてくれて助かった」

「すごい大捕物だったネ〜」

「いやー、よかつたなーウソツプ」

「人事故か!!? おれ達の大金2億Bだぞ!!?」

「そうよ、だいたい何であんた一番に取り返しに行かないのよつ!!?」

「だってあのハトが『おれが行く』って……」

心底安心するウソツプに、感嘆の声をこぼすリン。その傍で、ぎろりと目を吊り上げたナミが、動かなかつたルフィに詰め寄る。

それを見たアイスバーグ達が、苦笑交じりにルフィ達に頭を下げた。

「ンマー!!? 悪かつた、身内のバカは身内でカタをつけさせてくれ。おめエらにとつ捕まりやカドが立つからな」

「フランキー一家に盗られなくてよかつたと思つて、ここは一つ……」

「まア……それはホントだけど………」

「———けど何者だい？ さっきの……あの妙ちきりんなカッコしたやつらハ」

謝罪するカリファに、ふと疑問を抱いたリンが問いかける。

公然の目もあるのに、平然と盗みを行っていた集団。相手が海賊だとしても、何の躊躇いもなかったように見えた。

その問いに答えたのは、頬杖をついて振り向いたエレノアだった。

「フランキー一家は船の『解体屋』だよ……副業で『賞金稼ぎ』もやってるの。ウォーターセブンにやってくる海賊を討ち取って賞金を得て、残った船もバラバラにして材木を回収し、売りさばく。それがあの人たちの商売なの」

「タチ悪いな、海賊団ごと解体しようつてのかわ？」

「ンマー!!? エジキになりやあ骨も残らんな」

ギョツ、と後退るウソツプに、アイスバーグも追加で語る。

しかしルフィはあまり脅威と思っていないのか、けらけらと陽気に笑ったままだ。

「だけど、あんま強そうじゃなかったよな」

「あれは手下。頭であるフランキーは……たぶん、あんたでも手こずるよ」

油断している青年に釘をさすように、エレノアがじろりと厳しい視線を向け、ルフィは困惑しながらも思わず居住いを直す。

しかし、エレノアもやがて、アイスバーグ達に訝しげな表情で振り向いた。

「……でも私、グリードファミリーについては知らないんだけど、何者なの？」

「数年前、どこからかふらりと現れた『グリード』という男を頭目に結成された、同じく賞金稼ぎ集団です。フランキー一家同様、各地で諍いを起こしている迷惑な集団です」

「初めはライバル意識があつたのか、ちよくちよくぶつかることもあつたんだが……余程ウマがあつたのか最近じゃ手を組んで暴れることが多くなつてな。こつちも手を焼いてんだ」

「ふーん……」

カリファとアイスバーグの説明に、少し興味を抱いた様子で頷く。

河に落ち、流されていった奇天烈集団の姿を思い出しながら、誰にも聞こえないような小さな声で、彼女は呟いた。

「……まあ、フランキーが気に入った人なら、そんなに悪人つてわけでもないか」

第175話 “一流の職人達”

『連れてきました、アイスバーグさん』

「耳!!? いてエ!!?’」

「ごめんってばア!!?’」

「手間かけたな、ルツチ」

ずるずると引き摺られてくるパウリーとパニーニヤ。

啞然とした様子でそれを見つめるルフィ達に、ルツチと呼ばれた男……ではなく、その肩に乗ったハト——ハットリが口を開いた。

『どうも、バカがご迷惑おかけしましたね』

「また喋った……!!!」

『クルツポー。ホラ、お詫びしろパウリー。パニーニヤ、お前も師匠の手綱くらいしっかりと握っておけ』

「ふげ!!?’」

「うえ〜い……」

ドサドサツ、と耳を引っ張られたパウリーとパニーニヤが、アイスバーグの前に放り

出される。

二人とも、あまり反省した様子は見られなかった。

「……んん？」

「相変わらずだね、パウリーもルツチも……」

「喋りまくりだな、あのハト」

「帽子の男の代弁してるみてエだ。まア……とにかく金が戻ってよかった」

ハトが喋るといふ珍事に、ルフイ達は然して驚かない。

もつと不思議な生物達が一味に居るのだから、その反応も当然だった。

「よオ、お前が持ち主か。拾ってやったぜ」

「ああ！　ありがとう」

「礼なら一割よこせ」

起き上がったパウリーが、ケースをルフイに渡しながらそう言う。

すると、彼の背後に音もなく近づいたルツチが、ガツツとハンマーで頭を殴りつける。

呻くパウリーを放置し、またハットリが喋り始めた。

『失礼、お客さん。コイツアギャンブルで借金が嵩張ってるもんで、金にガメつく礼儀を

知らない』

「だから何でお前が喋るんだよ!!!」

「この野郎…ルツチてめエもう許さん!!!」
 // ロープアクション // !!? // ボーラインノット
 // !!!」

頭を押さえるパウリーが、ぎろりとルツチを睨みつけ、そして襲い掛かる。

勢いよく放つたロープでルツチの片手を縛り、凄まじい力で空中に引き上げると、地面に向けて振り落とした。

「また始まった…!!?」

「ちよつと!!!そんな本気で…!!!」

「ンマー、いつもの事だ…」

「うお!!? おいおい!!? あれ見ろ!!!」

突如始まった乱闘に、一味は驚愕の目を、アイスバーグ達は困り顔を見せる。

その横で、息を吞んでいたウソツプは、投げ飛ばされたルツチを見てさらに目を見開いた。

「腕一本で…!!? 今の衝撃受け止めてるぞ!!!」

脳天から落下したルツチは、縛られている片方の腕で地面に降り立っていたのだ。

指が地面にめり込むほどの力で、片手で逆立ちするその姿に、ナミやウソツプ、リンはひたすら圧倒されていた。

しかし、ルフィはそれに目もくれず、真つ直ぐにパウリーに食って掛かった。

「おいゴーグルのお前っ!!?」

「!!?」

「あのなア、よく考えろよ!!? お前の事バカにしたり挑発したりしたのは全部、ハトじゃん」

ルフィの指摘に、パウリーは思わず呆れた目を向ける。ズレた反応を見せるルフィにどう反応するべきか、迷っているらしい。

「いいんだよそれは、おれを殴ったのはあのルッチの方だろ」

「ハトは自分で殴れねエからあいつにやらせたんだ!!? おいハト!!? お前ケンカは自分でやれよ!!? 何とか言え!!?」

ルフィは怒りの矛先をハトに向け、ギャンギャンと吠え立てる。

しかしハットリは我関せずといった様子で宙を舞い、平然とした顔でルッチの肩に停まりに戻るだけ。

見かねたエレノアが、ルッチに向けて話しかけた。

「相変わらず見事な腹話術だね、ルッチ。ハットリも賢いから、本当に喋ってるようにしか見えないよ」

『お褒めに預かり光栄だ、エレノア嬢。クルッポー』

ルッチは無表情のまま、ハットリが大仰な素振りて礼をし、返答する。

そのやり取りを見て、ルフイ達は全員ギョツと目を見開き、ルツチとハットリを交互に凝視する。

「え!?? 腹話術なの!!!」

「え!!! マジでか!!! 何だ、じゃあ文句言つてたのお前じゃん」

「めちやめちやうめエ!!? 気づかなかつた!!!」

「大した腕だネー!!!」

『……よせ、どうでもいい事だポッポ』

「あつはつはつは、そう!!? そいつア人とまともに口が利けねエ変人なんだ、アハハハ!!!」

つい拍手をしてしまうルフイ達に、照れたように手を振るルツチ。

相変わらずまったく口を利かないルツチに、パウリーは心底可笑しいと言つた様子で大笑いする。

エレノアはパウリーにじとつとした眼差しを向け、ため息をついた。

「パウリーも似たようなもんでしょうに……ホレ」

「え?」

「——つてぐわア!!!」

不意に、くいっとエレノアが、ナミの方を指差す。

何事か、とつられて振り向いたパウリーはナミの格好、脚を大きく露出しているがいたって健全な服装に気付き、顔を真っ赤に染めて嘔き出した。

「おいおい待て何だその女は!!! ハレンチな!!!」

「？」

「足をお前………!!!? 出しすぎだ!!! 何て格好してやがる!!! ふざけるな」

「まあパウリー、落ち着いて」

「ぶつ!!!? カリファ!!!? てめエもだ、また性懲りもなくそんな不埒な服を!!!」

「そんなのいつもの事でしょうに……ほれほれ」

止めに入ったカリファも似たようなミニスカート姿のため、パウリーの羞恥は止まらない。

それを見たパニーニヤは、いきなりニヤニヤと意地悪に笑いだす。師を困らせようとも思ったのか、自分のシャツの襟をパタパタさせ始めた。

が。

それを見たパウリーは、全くの無表情に戻ってしまった。

「あ? 何してんだお前」

「ブン殴るぞコラア!!!」

色気なしと判断されたパニーニヤが烈火のごとく怒る。

別に女として見られたくはないが、女扱いされない事は、それはそれで腹立たしかったようだ。

「何なんだ……」

「あいつも変人だ」

「にやはははは……!!?」

一貫して、おかしな癖や弱点ばかり見せられ、ウソツプはひたすら困惑する。

ウソツプとは真逆に、ルフィはけらけらと楽しそうに笑い、エレノアも同じく爆笑する姿を見せた。

「相変わらずのウブっぷりで逆に安心だよ!!? にやははは——ぶげらっ!!!」

「ぎゃー!!!」

「案の定また血イ吐いたア!!!」

病み上がりで腹を抱えて笑ったことが悪かったらしい。またしてもエレノアの口から大量の鮮血が噴き出す。

その光景に、目を吊り上げていたパニーニヤがハッと顔色を変えた。

「ギャー!!! 血……血だー!!! あたし血はダメ……ムリイイ………あふん」

「この島の船大工はこんなんばっかりか!!!」

突如ばたばたと暴れ出し、最後にはどきっと仰向けに倒れ込む少女に、我慢の限界に

達したウソツプが叫ぶ。

部下達の少し格好悪い姿に苦笑しつつ、ヴィルヘルムがコホンと、仕切り直すように咳払いをした。

「…まあ、とにかく…彼らはこれでも船に関してはプロフェッショナル。一つのドックに5人しかいない『職長』を務める程の優れた技術者だ。大いに期待していてくれ」

「ンマー、ここは職人の腕一本の世界。性格は妙でも気にするな」

「ホント妙だ」

「さア入れ、中を案内しよう」

アイスバーグが言うと、パウリーとルッチが造船所の扉に向かう。

ルフィ達の案内が始まりかけたその時、あつと声を上げたエレノアが、申し訳なきそんな視線をアイスバーグに向けた。

「ごめんねアイスバーグさん、私はここで失礼するよ」

「ん？ そうか…ンマーお前さんの怪我は深刻だからな、そっちを優先させればいい」

「あ！ だったら私ついてくよ！ パウリー、いいよね」

「おう、行つてこい」

「おれもついてこうか？」

「けっこうです…悪いねパニーニヤ」

「いいってことよ」

うんうん唸っていたパニーニヤが復活し、エレノアの車椅子を押してくれる。

リンの誘いを断り、知人と共にどこかへと去っていくエレノアに、ルフィ達が手を振って告げる。

「じゃ、おれ達先行ってるよ」

「後でね」

「…あいよ」

一時の別れを告げるルフィ達に、エレノアは一瞬、暗い表情を見せる。

しかしルフィ達がそれに気付く間もなく、エレノアはパニーニヤに後ろから押され、町の方へと向かって言った。

「さて、案内を続けようか………この一番ドックには『ガレーラカンパニー』の主力が集まり、最も難しい依頼を引き受ける」

「おお!!?」

「わあ!!?」

パウリー達の手で、造船所の扉が開かれると、途端にルフィ達が感嘆の声を上げる。広がっていた光景に、全員が目を奪われた。

「うわ~~~~っ!!! でっけ〜んだなア!!! 造船所っつーのは近くで見るとまた!!?」

まず目に入ったのは、中心で動く巨大クレーン。資材を運ぶその向こう側には、建造中らしき巨大ガレオン船の姿もある。

何より目を惹くのは、その地で働く職人の数だ。屈強な男達が木づちを鳴らし、力強く動き回る姿は、町の人達の誇りをわからされる。

「おお!!? アイスバーグさんだ!!!」

「おい、社長達がおいになつたぞ!!!」

「アイスバーグさん、ヴィルヘルムさん、おはようございます!!!」

すると、アイスバーグとヴィルヘルムの姿を目にとらえた職人達が、笑みと共に出迎えてくる。

全員、目には二人の上司に対する、底知れない尊敬の念が伺えた。

「社長、外板の出来を見て貰えませんか」

「オウ、後で回る」

「お疲れ様です、ヴィルヘルムさん」

「お疲れ様、順調かな?」

次々に話しかけてくる職人達に、アイスバーグたちは短く、しかし決して雑にならない口調で返す。堂々としたその態度は、見た目よりも大きく感じられた。

「何だ、おっさん達ずいぶん人気あるぞ」

「当たり前です。父さ……社長達のカリスマの源は、その腕前にある………ありますから」

「そう、この都市では『腕』が全て」

不思議そうに呟くルフィに、カリファとセレネが誇らしげに語る。

元々、造船業が発達していて7つの造船会社が競い合っていた時代。

天才的な造船技術で職人達を魅了し、7つの造船会社を一つに束ね発足したのが『ガラレーラカンパニー』。

彼らの造船に対する熱意等はずっと変わらないまま、職人達は彼らへの尊敬を忘れないのだ。

「職人達はその腕に誇りがあるから、海賊にも権力にも屈しない……ここはそういう場所………です」

働く父の姿を見つめ、熱っぽく語るセレネ。

彼女の目には、父の背中中は世界中の誰よりも大きく、立派に見えるのだろう。

……約一名には、あまり響いていないようだが。

「おいおっさん達、すげエ船大工なんだってな!!? おれと一緒に海賊らやねエか!!?」

「突然何を言い出してんだ……ですか!!!」

「無礼者っ!!!」

職人達の様子を見るアイスバーグ達の肩を叩き、遠慮のない勧誘を行うルフィに、秘書達の怒号が轟く。

アイスバーグもヴィルヘルムもさして気にしていないようで、ルフィの呼びかけに驚きの視線を返した。

「ンマー!!! お前らの船には大工の一人もいねエのか!」

「そうなんだ。おれ達はよ、この島に船の修理と仲間探しにきたんだ」

「そりゃ船大工はごまんというが…海賊船に乗りたくないという者がいるかどうか。希望する者がいるのなら、引き抜いても構わないがね」

「ホントか——!!? やー話がわかるなー!!? おっさん達はダメなのか」

「市長とその右腕を堂々と引き抜きにかかるとは驚いたよ」

苦笑をこぼすヴィルヘルムだが、ルフィはやはり気にしない。社長たちの勧誘も、本気だったようだ。

ふと、アイスバーグはルフィに向けて、ある問いを口にした。

「——とところで、お前の船には『ニコ・ロビン』という女が?」

「いるぞ!!? 頭いいんだ、こいつがまた」

暢気に笑うルフィだが、アイスバーグ達の向ける表情は何処か険しく見える。

続けて質問をぶつけようとした時、ナミが二人の方へ歩み寄った。

「——とところで……えつと……ヴィルヘルムさん？ アルモニのお父さんって聞いたけど……」

「ん？ ああ、君達のことは知っているよ……町からあのバギー海賊団を退けてくれたんだってね。感謝しているよ……」

「え？ ああ……ううん、それは別にいいんだけど……」

何故知っているのだろうか、という疑問を抱いたナミだが、手紙でも来たのだろうかと自身を納得させ、自分の疑問を投げかける。

「なんだってあんな遠くの海に、アルモニ一人を置いて行ったの？ もう一人の娘は一緒にいるのに……」

「うむ……」

ナミの問いに、ヴィルヘルムは突如、気まぎれに黙り込む。

眉間にしわを寄せ、唇を噛む彼の変化に戸惑いながら、ナミはじつと高名な錬金術師だという男を見つめた。

「……そうだね。人から見れば、私はひどい親に思えるかもしれない……だが、この仕事は楽な道ではなくてね」

ナミの視線が、責めるようなものに感じられたのか、ヴィルヘルムは困り顔で頬を掻く。

自分の行いが、決して人に褒められるものではない事を自覚しているためか、ナミの視線に酷く居心地の悪そうな様子を見せる。

「私は私なりに、あの子を想って距離を置いているんだ………ないがしろにしているわけじゃないんだと、誤解しないでおくれ」

「ふーん………まあ、他人様のプライバシーにあんまり首を突っ込む気はないから別にいいけど……」

誤魔化された気がするが、理由があるのならと渋々、ナミはそれ以上の詰問、もとい質問を止めた。

「こんだけスゴイ造船所なら、船の修理もすぐに終わりそうだねー」

「そうだねー！ 船大工も見つかりそうだねー！」

ナミが一人、悶々とした気持ちを持って余している事も知らず、ルフィとリンは期待にはしゃぐ姿を見せる。

するとしばらくして、査定に向かったカクが、アイスバーグ達の元へと戻って来るのが見えた。

「あつ！ さっきの人!!？ 船見てくれた？」

「ああ、見て来た。アイスバーグさん、ここにおったんじやな」

「事情はわかってる、どうだった」

アイスバグが問うと、カクはやや険しい表情で黙る。

言い辛そうな雰囲気を見せるカクに、ナミがハッと息を呑み、恐る恐る問いかけた。
「あつ…もしかしてだいたい時間がかかる?」

「…いや」

海賊である以上、金銭に限りがある状況で長居はリスクが上がる。

その点を懸念しているのか、と不安になったナミに、カクは重く閉ざしていた口を開いて、告げた。

「はつきり言うが、お前達の船はわしらの腕でももう直せん…!!!」

それはルフィ達の航海において、決して逃れられない重大な分岐路だった。

第176話 彼はもう走れない

「メリー号が直せねエって!!? 何でだ!!! おめエらすぐエ船大工なんじゃねエのかよ!!!」

パウリーが口にした非情な一言に、ルフィは血相を変えて叫ぶ。

バンバンと大金の入ったケースを叩き、決して貧乏人などではないと必死に示す。

「金ならほら!!? いくらでもあるのに!!!」

「金は……関係ないわい。いくら出そうと、もうあの船は元には戻らんのだ。よくもまあ……あの状態でここへ辿り着けたもんじやと、むしろ感心する程のもんでな」

「どういう事!?? メリー号に何が起こってるの!??」

困惑し、聞き返すナミに、パウリーは目を細める。

呆れを含んだ、少しばかりの同情を混ぜたその視線に、ナミもルフィもリンも、思わず黙らされる。

「『竜骨』ってわかるか、ハレンチ娘」

パウリーは三人に、船の基礎から教える。

船首から船尾までを貫き支える、もつとも重要な木材——竜骨。

船とはそこを中心に船首材、船尾材、肋根材、肋骨、肘材、甲板梁と緻密に組み立てていくもの。

しかしメリー号は、竜骨そのものをやられていた。

人間でいう背骨を損傷しては、もう通常の船と同じ航海は不可能となってしまうのだ。

「——だからもう誰にも直せねエ。お前らの船はもう、死を待つだけのただの組み木だ」「おい、そんな言い方ないんじゃないか?」

「知った事か、事実だ」

無慈悲なパウリーの物言いに、リンが思わず口を挟むも顔色一つ変えない。

諦めきれないルフィは、必死の表情で凄腕の船大工達全員を見す。

「……………じゃあ!!? だつたらよ!!? もう一回一から船を造つてくれよつ!!! ゴーイングメリー号を造つてくれ!!!」

『それも無理だ、クルツポー』

「!!? 何で!!!」

口を開かないルツチに代わり、ハットリがジエスチャーする。

この世に同じ船は作れない。

同じ素材、同じ設計図で作ったとしても、同じ成長をする木材が存在しないため、ど

うしても異なる部分が現れてしまうのだと。

『例えばそんな船を造ったとして、それが全く別の船であると最も強く感じてしまうのは——きつとお前達自身だ、クルッポー』

「……………そんな……—じゃあ本当にもうゴーイングメリー号では二度と航海できないの??？」

「そうなるのう、このまま沈むのを待つか……きつさと解体してしまうかじゃ」

さすがにパウリーとは異なり、氣遣う様子を見せて告げるカク。

愕然と棒立ちになっていたナミは、今この場を離れているもう一人の仲間の意味深な態度を思い出し、ハッと息を呑んだ。

「……エレノア、あいつまさか……………こうなるの知ってて」

「ンマー!!? ……船の寿命だ、いい機会じゃねエか。諦めて新しい船を買って行け」

悩み続けても仕方がないと、アイスバーグがルファイ達に促す。ヴィルヘルムも同じく、同情の視線を向けながらも、アイスバーグの言葉を否定しない。

しかし、船大工たちにそれだけ真実を突き付けられても、ルファイが納得することは、未だできなかつた。

「……………いいや!!! 乗り換える気はねエ!!!」

「ルファイ……………」

「おれ達の船はゴイングメリー号だ!!! まだまだ修理すれば絶対走れる!!! 大丈夫だ!!! 今日だって快適に走ってたんだ!!!」
「なのに急にもう航海できねエなんて信じられるか!!!」

ルフィの脳裏に浮かぶ、数々の冒険。

荒波を越え、山を登り、空を飛び、長い長い海の道を懸命に走り続けてきた、勇敢な船との想い出。

それを手放せという言葉を受け入れられるはずがなかった。

「お前ら、あの船がどんだけ頑丈か知らねエからそう言うんだ!!!」

「……………沈むまで乗れば満足かい……」

吠えるルフィに、ヴェイルヘルムが目を細める。

その眼差しは酷く冷たく、いい大人が駄々をこねる情けない様を見るようだった。

「呆れたものだ……君は、それでも一船の船長かね」

こぼれたその一言に、ルフィは思わず口を閉ざす。熱を持った頭に、急に氷水をぶっかけられたように、昇っていた血が一気に下がった。

「話は一旦終わりだな。よく考えて、船を買う気になつたらまた来い。世話してやる」

絶句し、立ち尽くすルフィ達に最後にそう告げ、アイスバーグとヴェイルヘルムは会社に向かつて歩き出す。

何も言い返せず、俯くだけの青年達は、悔し気に拳を握りしめていた。そんな時だった。

ルフィとリンの背筋に、凄まじい悪寒のような感覚が走ったのは。

「!!!」

ぎよっ!と目を見開いた二人が、慌てて走り出す。

棒立ちのままのナミの手を引き、二人は慌てて造船所の中を駆け抜けた。

「いかん、隠れ口!!! ヤベエのが来ル!!!」

「えっ、ちよっ!? 何、何なのよ!!!」

困惑するナミを黙らせ、ルフィとリンは慌てて物陰に、角材の山の裏側に潜り込む。船大工達が何事かと見てくるが、全く気にしない。

「何だア……あいつら」

「アイスバーグさん、ヴィルヘルムさん、ゲート前にお客が来てますぜ」

パウリーが訝しげに首を傾げていると、入口の方から別の職長、ルルが声をかけてくる。

妙な寝癖が目立つ彼は、それをぐっと押し込み、また別の箇所から生やしなから、アイスバーグ達の元へと近づく。

「また世界政府のお役人の様で。追い返しましょうか」

「ンマー、そうだな。いねエと言え」

「全くしつこい事だ…」

「待ちたまえ、お二方」

さつさと会社に戻ろうとしていたアイスバーグ達だが、それをある黒服の男達呼び止める。

男達を目にし、パウリーが納得の表情を浮かべた。

「ああ…これか。だがあの程度の野郎にそこまで慌てる必要もないだろうに…」

「…あんた達、よくわかったわね。世界政府の役人だつて」

確かに、政府の役人の前で賞金首がいては問題となるだろう。

顔も格好も見えていないのに、よく役職がわかったものだと、ナミも一緒に感心した声を上げる、が。

「…違う」

「そつちじゃないヨ」

「え？」

「……………もつとヤバいのがいる…!!」

振り向くと、引き攣った顔で息を殺すルフィとリンが、冷や汗を顔中に浮かべて、様子を伺っている姿があつた。

いつも呑気な二人には珍しい、まるで命の危機を前にしたような態度だ。

「ンマー!!? これアどうもコーギー、今日はおれアいねエンで」

「いるしつ!! まったく遙々海列車でやってきたのだ、嫌わないで頂きたい:」

緊迫するルフィ達をよそに、気付いていないらしい役人達がアイスバーグ達に話しかけている。

対するアイスバーグ達は、心底嫌そうな態度を隠すことなく、じろりと役人達を睨みつける。

「ンフフ:まあいい:とにかく貴方方とお話を」

「お前、嫌い、帰れ」

「子供かつ!!?:」

年齢不相応な、あまりに無礼な態度を見せるアイスバーグ。

役人が思わずツツコミ、しつこく話を続けようとした時だった。

「———まあ、そう頭を堅くせず。一方的に拒絶されては我々も傷つくというものだよ」

ある一人の男の声が、アイスバーグとヴィルヘルムの元に届く。

誰だ、と訝し気に顔を向け、近付いてくるその男——海軍の軍服に、眼帯と刀剣を備えた初老の男の姿に気付く。

そして、その場にいた全員が、驚愕の視線でその男を凝視した。

「……………!!! まさか…」

「いやはや…!!? よもやあなたが来られるとは思ってもありませんでしたな…!!?」
アイスバーグとヴィルヘルムが、まさかといった表情でその場で固まる。

パウリーやカク、ルルも目を見開き、冷や汗とともに眩きをこぼす。

「海軍本部 “大総統” ブラッドレイ・キング氏…!!!」

戦慄の視線が自身に集中する中、その男——ブラッドレイは、どこにでもいる好々爺のような笑みを浮かべ、アイスバーグ達に話しかけた。

「そう身構えないでくれ。こちらへは仕事ではなく息抜きのつもりで訪ねたのだ…
まア、コーギー君とは付き添いのつもりだがね」

ひらひらと手を振り、敵意も害意もないことを示すブラッドレイ。

何の前触れもなく現れた、今生に生きる者なら誰もが聞いたことのある名前を耳にし、ナミは顔から血の気を引かせる。

「“大総統” って…!!! 海軍最強って言われてる、めちやくちや有名な海兵じゃないのよ…!!! なんてそんなバケモノがこんなところに来てるのよ!!!」

つい最近、海軍の最大戦力である男から命からがら逃げた所なのに、とナミはごくりと息を呑む。

しかし、様子を伺っているうちに、ナミの警戒心は徐々に薄れていった。

「…でも聞いてた様な恐ろしい感じじゃないわね。なんかこう…気の良さそうなおじいちゃんみたい」

「騙されんな、ナミ…!!?」

社長達ににこやかに話しかけているブラッドレイに、そこまで危険ではないのかと思いは始めるナミ。

しかし、気を抜きかけた彼女に、ルファイが険しい顔で警告した。

「あいつは、強エ…!!! おれやゾロやサンジが束になっても…エレノアが全快の状態でも絶対勝てねエ」

「え…」

「ありやあ… “青キジ” とおんなじかそれ以上に強いネ…!!? 見つかったら、全員殺されるヨ」

身を隠し、気配を限界まで隠そうと努めるリンが、糸目を少し開けて呟く。

彼らと同じように、パウリー達も思わぬ訪問者を前にし、困惑と緊張をあらわにしていた。

「海軍最強の剣士ブラッドレイ…!!! いかなる奇策・奇襲もその目の鋭さの前では意味をなさず、片っ端からなます切りにされていくと恐れられている男…!!! 噂じゃあ、戦場にいるだけで戦況が傾くからって、海軍のどの階級にも当てはまらない地位に就いて

るって話だぜ……!!!」

「なんだってあんな化け物が」

「さて、少しお付き合いいただこうか……」

周りからの視線をすべて無視し、ブラッドレイがアイスバーグ達に促す。

高名な男の、何とも言えない雰囲気には圧されてか、二人とも渋々といった様子で会社に向かう。

社長達と役人達、そして大総統の姿が見えなくなつて、ようやく職人達はホッと安堵の息をついた。

「とんでもねエのが来たな……しかし、あんな大物がアイスバーグさんに何の用だ……」

『おれ達には関係ねエ、権力の話だろ、ポツポ』

「ブツ飛ばしてやろうか」

「やめとけ、相手は世界政府じゃぞ……」

いきなり来て、偉そうな態度ばかりを見せた役人達を思い出して、パウリー達が腹立たし気に言葉を交わす。

ルフィとリンは、圧迫感がなくなつてようやくやく息をつく。

だがその時、ルフィがある事に気付いた。

「ん？」

「何?」

訝しげな声を漏らしたルフィに、ナミが振り向く。

ルフィは傍らに置いたケース、その一つを持ち上げ、困惑の声をこぼす。

「軽い……………」

「ハ?」

「冗談やめてよ!!? 大金が入ってて軽い訳が…」

何を言っているのか、とナミが乾いた笑い声をあげる。

しかしルフィはひよいひよいと、確かにずっしりと重かったはずのケースを上下させる。

その様に嫌な予感を覚え、ナミ達は急いでケースを開いてみせる。

そして、そこにあった光景を目の当たりにして、三人一斉に盛大な悲鳴をあげた。

「ギャ……………ッ!!!」

「いや……………っ!!!」

「バカ、何騒いでんだっ!!! ぶっ!!? オイ女っ!!? てめエそういう座り方をしたら

…!!!」

「2億B、ないっ!!!」

騒がしい三人の様子を伺いにパウリーが戻ってきて、ナミの膝を抱えた体勢に顔を

真っ赤にする。

しかし、ルフィ達はそれどころではない。

ぎつしり詰まっていたはずの大金が、3分の2が丸々すり替えられ、無くなっていたのだから。

「騒がしいな。それより…カク、お前さつきフランキー一家と一緒にいなかったか？」

「ん？ 何言うとする。ワシア今日はフランキー一家など見かけてもおらんぞ」

「……………おかしいな、確かにおめエの長エ鼻を確認したんだが」

「ちよつと待つてその会話!!!」

パウリーと一緒に目を見開き、叫んでいたルフィ達は、カク達が口にしていた会話の内容に反応する。

鼻の長い男と聞いて、思い付くのはもう一人しかいなかった。

「ウソツプだつ!!!」

「フランキー一家と一緒にいたの!!!」

「一緒にいたというか…抱えられて連れてかれてたというか」

「誘拐じゃないっ!!!」

「止めろヨ!!!」

暢気に首を傾げるルルに、ナミとリンが目を吊り上げて叫ぶ。

知り合いと間違えるならまだしも、攫われてそのまま放置するとは何を考えているのかと。

すかさずナミは、ルフィに振り向き指示を放つ。

「ルフィ、急いで探すのよ!!?」

「おう!!」

「——つてちよつと待つてどこ探す気?!? ルフィ~~~~!!」

ナミが告げるのとほぼ同時に、ルフィは仲間を探しに走り出す。

しかし、手掛かりも何も無いのに飛び出してしまったため、慌てて呼び止めるも、もうルフィの姿は見えなくなってしまう。

ならば、とナミはパウリー達に振り向き、詳しい情報を求めた。

「フランキー一家とグリードファミリーのアジトはどこ!!?」

「アジトというか…解体の作業場はお前らが船停めてるつていう『岩場の岬』から、ずっと北東へ行った海岸にある『フランキーハウス』だ」

ならば、金と仲間を奪った連中はそこにいるはず、とナミは当たりをつける。

それを見たリンが、自分の胸を叩いて走り出した。

「麦わらはおれが捜すヨ!!! 人探しなら大得意なんだ!!!」

「じゃ…!! 頼んだわよ!!! あたしはこのお金、船に置きに行つてくる!!!」

大金を取り戻しに行くのに、大金を持って行つては本末転倒。

頼もしい仲間と共に守つていなければと、ナミは急いでヤガラブルに飛び乗り、岩場の岬に向けて移動を開始した。

「あいつら…!!? 絶対許さないっ!!」

きつとルフイ達なら、全部取り戻してきてくれる。

そう信じ、ナミはひたすらにヤガラブルをメリー号の元へ急がせた。

第177話 “落とし前”

「あらあらあらア~~~~? エレノアちゃんたら見ない間にとんでもない事になっちゃつてるじゃな~~~~い?」

ウォーターセブンのとある店、機械鎧の技師がいる店。

車椅子に乗ったまま、楽な姿勢になるエレノアに、大柄な店主が野太い声で話しかけていた。

「今回は一体、どこでそんな大暴れしてきちゃったのオ?」

「…………ちよつとね」

「惚れた男を助けるために、自分で両脚ぶった切ったんだつてさ」

「あらア!!! ちよつとヤダア!!! その話もつとよく聞かせて!!!」

「うおイ!!!」

興味を持つ店主・ガーフィールに、エレノアに代わってパニーニヤが答える。

盛り上がる二人に思わずツツコミを入れるが、気怠さが勝つたせいでやる気をなくし、ぼすつと背もたれに凭れ掛かる。

静かになったエレノアに、話を区切ったガーフィールが呆れた視線を向ける。

「なんだかよくわからないけど……女の子なんだからもう少しおしとやかにならなきゃだめよオ？」　「白ひげ」のおじ様だつて心配してるんじゃない？」

「たまに過保護になるからなア………正直、そういうのとは無縁の世界に生きてると思ふけど」

自嘲気味に笑い、自身の手足を見やるエレノア。

今の自分の姿を見たら、家族はどんな反応を返すだろうかと、人ごとのように考える。「とりあえず、これ以上傷付くことはないよ………そうだね、時間があつたら買い物ぐらいは行こうかな」

「だつたらあたし、付き合っちゃうわよ？　あんたのコーディネートやつてみたいって思つてたのよねエ〜♡」

「はいはい………」

ふう、と疲れた様子でため息をつくエレノアに、パニーニヤがけらけらと笑う。

友人が養生の体勢に入るのを確認し、パニーニヤがひよいつと歩き出した。

「じゃ、あたしはこれで。エレノア！　お大事に！」

「うん、ありがとう」

店から出ていくパニーニヤに、エレノアは片手を挙げひらひらと手を振る。それだけでぶるぶると痙攣が走るも、我慢してそれを押し隠す。

パニーニヤの姿が見えなくなったところで、ガーフィールがポンツとエレノアの肩を叩いた。

「じゃあ、しばらくお世話になるよ……ガーフィールさん。パニーニヤもありがとうね」
「まかせて頂戴♡」

「いいって事よ！ 気にしなさんな。……じゃ、あたしはこれで」

そういつて、ガーフィールも店の奥に引つ込み、エレノアは一人になる。

誰もいなくなった作業場に一人の頃、エレノアは天井を仰ぐ。

——大金……全部奪られた……。

………ナミ……み”んなに……会わせる顔がねエよ。

聞こえてくるのは、仲間のこぼした悲痛な声。

痛々しく、涙と血にまみれた声で、ウソツプが己を責める声を上げていた。

——やつとメリーを………!!

直してやれるはずだったのに………!!!

胸の奥に突き刺さるようなその声に、エレノアは腕で目を覆う。

そして、もうあまり感覚の残っていない自分の四肢を見やり、深い深いため息をこぼした。

「………潮時……かなア」

「ウソツプがいねエ!! ナミさんが言ってたのはこの場所のハズだぞ!!」

「確かか?! 場所、間違ってるじゃ…」

「あんたじゃないんだから…」

「ウソツプ——!!!」

町中でウソツプの姿を探す、ルフィを除く麦わらの一味の男性陣。

一億Bを持ったナミがメリー号に戻る途中、傷だらけになったウソツプを見つけたという場所に来たのだが、そこにウソツプの姿はなかった。

「見て、血だ」

「あんにやろ、勝手に動きやがったな!!」

「……………まさかあいつ……………!!!」

残っていた血痕に、全員がまさかと嫌な予感を覚える。

そこに、どこかから悲鳴のような叫び声が聞こえてきて、全員で頭上を見上げる。

「ぶべっ!!!」

「よっ」

何故か空から落ちてきたルフィが、壁に激突しそのまま水路に落ちかける。

その前にリンが割り込み、どうにか受け止めてみせた。

「あ……ありがとう、助かったぞ糸目」

「いいって事ヨ」

「何やってんだお前……」

一体どこから、そして何をしていたのかと、ゾロ達が呆れた目でルフィを見下ろす。仲間達の存在に気付いたルフィは、あつと慌てた様子で立ち上がる。

「あ!! そうだお前ら大変なんだ、ウソップが金と一緒に連れてかれて……!!」

「知ってるよ!!! 来い!! 今、そのアジトへ向かうトコだ。ウソップはやられて金を奪られたんだ。もしかしてあいつ……責任感じて一人で一家とファミリーにケンカ売ってるかもしれないエ!!」

冷や汗を滲ませるサンジの呟きに、ルフィも顔色を変える。

そして全員で走り出し、ナミに聞いたウオーターセブンの厄介者達のアジトがある場所に急ぐ。

やがて、彼らは派手な外装が目立つ目的地・フランキーハウスに辿り着く。

そしてついに、探していた青年を見つけ出した。

「息はあるか、チョッパー……」

「死んじやいない……!!? 大丈夫、助けられるよ!!? 完全に気を失ってるけど……!!?」

そこにいたのは、血塗れで倒れ伏すウソップだった。涙を流し、悔し気に歯を食い縛りながら、無残な姿で地に伏せる彼の姿が、そこにあった。

「ちよつと待つてろよ、ウソップ」

それが、ルフィ達に火をつけた。

ルフィが、ゾロが、サンジが、チョッパーが、そしてリンまでもが、その目に強烈な怒りの炎を燃やし、歩き出していた。

目指す先、フランキーハウスで騒ぐ敵に向かつて。

「あのフザけた家……吹き飛ばして来るからよ………!!!」

フランキーハウスでは、盛大な宴が開かれていた。

奪い取った2億B、そこからわけられた小遣いを盛大に使い、飲めや歌えやの大騒ぎを始めていた。

「おら、おめエの負けだア!!?」

「ギャ——!!?」

「ホラ、買い出し行ってこい!!?」

「店の料理全部買って来いよ!!?」 金はあるんだ、ぐはははははつ!!?」

「チツキショー、覚えてろ。あとで負かしてやるからな!!? ウハハハ」

カードゲームに興じていた数人が、負けた一人にそう言い、買い出しに向かわせる。

敗けた男は渋々立ち上がり、しかし上機嫌なまま、町に食べ物の買い出しに行こうと、入り口を潜ろうとする。

その瞬間、男はすさまじい衝撃で吹き飛ばされ、フランキーハウスの床に叩きつけられた。

「ぶわ——!!!」

「何だ——どうした——!!?」

突然のことに、男達は驚愕をあらわにする。

そして全員で、壊れた扉を踏み越えてくる5人の男達を睨みつける。

「誰かいるぞ!!!」

「誰だア!!? てめエらはくくく!!!」

怒りに満ちた声で吠えると、砂埃の向こう側から、その5人の顔が明らかになつてくる。

その一人、麦わら帽子を被った青年に気付き、目を見開いた。

「あれは……!!! “麦わら”のルフイ!!!」

「ゴハハハ!!? 金を取り返しに来やがったな!!? バカめ、この人数を見ろ!!! たった

4人でおめエら何しようってんだア!!!ゴハハハ!!? だがまア…!!? 来たからにや賞金の懸かったその首、置いていつて貰うゴオ!!!」

明確な敵意があると判断した、一家の中でも大柄な一人が立ち上がる。

自前の分厚い装甲を纏い、ずんずんと進み出てくる青年に備え、余裕綽々と言った態度で仁王立ちする。

「あの貧弱長つ鼻野郎のいる一味の船長だ…!!! てめエの実力の程も知れるつてモンだア!!! 来てみる、チビイ!!!」

弱者の頭は弱者と真つ向から見下し、嗤う大男。

彼に向けて、ルフィは突如その場でジャブを始め、徐々にその勢いを早く、強くしていく。

何を遊んでいるのか、と男達があざ笑っていた、その直後。

「『ゴムゴムの』…!!! 『攻城砲』!!!」

速度と威力を限界まで溜め、一気に開放した両手の拳が、大男の腹のど真ん中に炸裂する。

放たれた一撃は、分厚い鋼鉄の装甲に大きな穴を空け、纏っていた大男本人も、凄まじい痛みと苦しみをもたらした。

「三刀流…!!! 『鴉魔狩り』!!!」

「。パーティーターブルキックコース。!!!」

「。桜並木。!!!」

「我が槍は是正に一撃必倒。神槍と謳われたこの槍に一切の矛盾なシ！
神槍無二打しんそうにのうちいらす

「!!!」

ルフイだけではない、怒りに燃える麦わらの一味が、次々に一家に襲い掛かり、コテ
ンパンに叩きのめしていく。

反撃も全く届かず、男達は瞬く間に無力化されていった。

「……いつら……!! ああ長つ鼻野郎より全然強エじゃねエか!!!」

「手強いな……おれ達の出番か」

「世話が焼けるぜ……」

「!!? おお……行つてくれるか、グリッドファミリー!!!」

慄いていた一家の一人、ザンパノが鼻血を垂らしたまま後退る。

そこに、フランキーハウスの奥からのそりと体を起こす、異様な雰囲気醸し出す集
団が進み出た。

筋骨隆々の巨漢に、剣を持った小柄な男、妖艶に笑う刺青の女に、ガチガチと牙を鳴

らす大男。

彼らの登場に、一家の男達がホッと安堵の表情を浮かべだす。

「わかっていないようだな……ここはおれ達の二人の兄貴達の縄張り!! そう好き勝手
 暴れられては、あの方々の怒りを買うというものだ!!」

「てめエら死んだぜ……可哀想にな」

暴れ回るルフィ達に、剣を持った男が憐れむように呟く。

新たな敵の出現に気付き、振り向いたルフィ達の前で、ファミリーの数人がギラリと
 目を光らせる。

「おおおおおおお!!!!」

「……!!? 能力者か……」

凄まじい雄叫びと共に、筋骨隆々の大男の姿が変わる。

牛の角が生え、バキバキと筋肉がさらに隆起し、巨体がさらに威圧感を増す。

他の者達も、犬のように素早く駆けだし、蛇のようにしなる四肢を見せつけ、ワニの
 ように鋭い牙と爪を振りかぶる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

迫り来る、悪魔の実の能力者とも異なる雰囲気の異形達。

しかし、そんな彼らを前にしてなお、ルフィ達は一步も退く様子を見せず、牙と爪と
 角が迫ったその直後。

ドカン!と、強烈な一撃を持って異形の集団を返り討ちにしてみせた。

「ギャアアアア!! 全員大して見せ場もないままやられたア~~~~!!」

「余計なお世話だ……!! ガフツ……」

悲鳴をあげるザンパノたちの目の前で、床に落下した剣を持った男が、吐血混じりに返す。

一家とファミリーの戦力が次々に討ち取られていく様に、残った者達はもう震えるばかりになっていた。

「——もう喋ってくれるな……そういう事っちゃねえんだよ……」

「そうだな……もう手遅れだ」

ゴキゴキと骨を鳴らし、鋭い目で彼らを睨むルフィ達。

その目は、決してお前達を逃がさないという、燃え上がる激情で埋め尽くされていた。

「——お前ら、骨も残らねえと思え」

「追うか? フランキー」

「……………どこへだよ……」

「——まいったな。金の行方は本当にわからねえ様だ……」

数分の戦闘の後、そこはまるで廃墟になっていた。

辛うじてトレードマークだった三日月のマークは残っていたが、あとはもう木材と金

属の破片、気絶した男達が転がるだけ。

戦いが終わった後なのに、あまりにも虚しい気分には陥っていた。

「……………ここで話しても仕方ねエ、とにかく船に戻ろう。船にナミさん一人、残してきてるし…ロビンちゃんの事も…船自体の問題もある」

「だってサ、船長」

何一つ解決していないと、サンジが気怠さを交えて呟く。

そして、今後のために一度みんなが集まろうと、ルフィに促した時だった。

「船よオ……………決めたよ…」

ぼつりと、三日月の飾りの上に立っていたルフィがこぼす。

彼の呟きに、全員が驚愕で目を見開き、その場に立ち尽くす事となった。

「ゴーイングメリー号とは、ここで別れよう」

??

社長室の窓から、去っていく役人達を見送るアイスバーグとヴィルヘルム。

ふう、と重いため息がこぼれ、肩が凝るのを感じる。

社長とその右腕の男が、酷い疲労感に苛まれているのに気づいたカリファが、二人に話しかけた。

「お疲れ様でした、アイスバーグさん、ヴィルヘルムさん。お飲み物でも…?」

「そうだな、今日は紅茶を」

「入れて来ました」

「流石だね、カリファア君……」

「おそれ入ります」

相談するよりも前に準備を終えている、あまりに優秀過ぎる秘書に、アイスバーグが感嘆の声を上げる。

紅茶を入れながら、カリファアがふと気になったことを問いかけた。

「毎度、何の相談……ですか？ コーギー……氏はいつも怒ってお帰りになりますが」

「ああ、おれ達の持ち物を欲しがって、色々と条件を出して来る」

「何か大切な物なんですね」

「ンマーな、そんな物は知らんといつも突き返してる……」

ヴィルヘルムはそう呟き、また窓の外を見やる。

そこにはつきりとした嫌悪の感情が浮かんでいる事に気付き、セレネが訝しげに首を傾げる。

「面倒な男達だよ、まったく……」

彼の呟きに、アイスバーグも全く同じ表情になり、静かに紅茶を喉に流し込んだ。

??

バタンツ！と勢いよく扉が開かれ、チョップパーが顔を出す。

彼がもたらした報告と安堵の表情に、全員がほっと胸を撫で下ろした。

「お——い!!? ウソツプが目を覚ましたぞ!!?」

「ホントか!!? よかった——っ!!」

わいわいと騒ぎながら、一味はウソツプが横になるベッドに向かう。

全身を包帯で撒かれたウソツプは、ルフィ達の顔を視界に収めると、いきなりその場に土下座を行い出した。

「面目ねエ!!! 大事な金をおれは!!!」

「おいおいちよつと待て、落ち着けよ!!?」

「だげど:!!! おれアせつかく手に入ったとんでもねエ大金をみすみすあいつらにイ!!!」

「ウソツプ、まだ寝てなきやダメだ!!!」

自分の犯した失態を悔やみ、ひたすらに泣きながら頭を下げるウソツプ。

つい先ほど戻ってきたエレノアも、元気に動く彼に安堵の視線を向け、フツと微笑みを浮かべていた。

そこで、ルフィ達から奪われた2億Bについての説明が入る。

大金がほぼ戻って来ない事を知ると、ウソツプは凄まじく落ち込み、悲痛な声を漏ら

した。

「……じゃあやつぱり…金は戻らねエのか…」

「いや、それもフランキーつてのが帰って来ねエとわかんねエんだ。もしダメでもまだ1億Bもあるんだからいいよ！ 気にすんなよ!!？」

「——まったく無茶しやがる……!!？ 命があつたからよかつたものの…!!？」

「よくないわよ!!？ お金は!!？」

「………すまねエ………」

ナミの指摘に、ウソツプが罪悪感に駆られ頭を下げる。ナミもそれ以上続けられず、ばつが悪そうに目を逸らす。

そこでウソツプはハツと顔を上げ、必死の形相で仲間達全員に尋ねた。

「だけど…じゃあ船は…メリー号は1億ありや何とか直せるのか!!？ せっかくこんな一流の造船所で修理できるんだ。この先の海も渡って行ける様に、今まで以上に強い船に…!!！」

「いや、それがウソツプ」

盛大に失敗した自分を誰も責めない事に、もしかしてそれでもどうにかなるのかと期待を抱くウソツプ。

それにルフィは首を振り、ある決定事項を口にする。

「船はよ！ 乗り換える事にしたんだ。ゴーイングメリー号には世話になったけど、この船での航海はここまでだ」

その一言に、ウソツプの思考は凍り付き、大きく目を見開いたのだった。

第178話 “決断の時”

「待てよ待てよ、そんなお前……!!?」 冗談キツイぞバカバカしい」

一瞬間まっていたウソツプは、遅れて慌て始める。

船長がもたらした決定、長きに渡って連れ添ってきた船を、平然とした顔で乗り換えると告げられ、思考がまるでまとまらなくなる。

「……何だやっぱり修理代……足りなくなっただって事か?!?」 おれがあのだ億奪られちゃったから……!!?」 金が足りなくなっただら!!」 一流の造船所はやっぱ取る金額も一流で……」

「違うよ、そうじゃねエ!!」

「じゃ何だよ、はつきり言え!!」 おれに気イ使ってるのか」

「使わねエよ!!!」 あの金が奪られた事は関係ねエんだ!!!」

「だつたら!!!」 何で乗り換えるなんて下らねエ事言うんだ!!!」

失態を侵した自分を慮り、下すはずのない決定を下したのかとまた自分を責めかけるウソツプ。

しかしルフィはそれを否定し、強い口調で答える。

互いに冷静でいられず、二人とも徐々に声が荒々しくなっていく。

「おい、お前らどなり合つてどうなるんだよ、もつと落ち着いて話をしろよ!!?」
「落ち着いてられるか!!? バカな事言い出しやがって!!?」

「ちゃんとおれだつて悩んで決めたんだ!!?」

サンジが止めに入ろうとするも、頭に血が上がったウソツプはもう止まらない。

鋭い目でルフィを睨み、愚かな発言を咎めるように激しく吠える。

ついにはルフィが、ダンツとテールブルに足を置き、力の限り叫んでいた。

「メリー号はもう、直せねエんだよ!!!」

仲間達が止めに入るも間に合わず、一味にとどめを刺す一言が放たれてしまう。

ウソツプは大きく目を見開いて絶句し、ルフィを凝視し固まってしまふ。

黙つてしまった彼に、ルフィは肩を上下させながら続けて語つた。

「どうしても直らねエんだ。じゃなきやこんな話しねエ!」

「この船だぞ…今おれ達が乗つてるこの船だぞ!!?」

「そうだ…もう沈むんだ、この船は!!?」

自分の耳が可笑しくなったのか、とウソツプは問い返す。

しかし、ルフィから帰つてきた返事は同じもので、ウソツプは返す言葉を失くしてし

まう。

やがてウソップは事実から目を背けるように、ぷいっと目を逸らした。

「何言ってるんだ、お前……ルフィ」

「本当なんだ、そう言われたんだ!!? 造船所で!!? …もう次の島にも行き着け

ねエって!!?」

苦惱で顔を歪めるルフィに、ウソップはキツと目を吊り上げる。

胸中に広がるどす黒い感情に、思考は沸騰し、あつという間に制御が効かなくなっていく。

気づけば、浮かんだ考えがそのまま声に出てしまっていた。

「ハアそうかい……行き着けねエって……今日会ったばかりの他人に説得されて帰って来たのか」

「何だと!!?」

「一流と言われる船大工達がもうダメだと言っただけで!!! 今までずっと一緒に海を旅して来た、どんな波も!!? 戦いも!!! 一緒に切り抜けて来た大事な仲間を、お前はこんな所で……見殺しにする気かア!!!」

目を血走らせ、激情をありつたけ込めた慟哭を上げるウソップ。

傷口が痛むのも、息が苦しくなるのも構わず、情けない、冷酷な戯言を口にした船長に詰め寄る。

もはや彼には、ルファイが仲間を見捨てる非道な男に見えていた。

「この船は、お前にとつちやそれくらいのもんなのかよ!!」 ルファイ!!」

放たれた罵倒の言葉に、ルファイの中で何かが切れる。

誰よりも船を想っていた仲間、真向から真実を伝えるのが苦しくて明るく切り出すとしたのに、怒りの声ばかりが返ってくる。

次第にルファイの中でも、感情の歯止めが効かなくなり出していった。

「じゃあお前に判断できんのかよ!!?」

「ルファイ」

「この船には船大工がいねエから!!?」 だからあいつらに見て貰ったんじゃねエか!!」

船大工ではない自分達では、メリー号を直してやれない。だから、一流の職人が集うこの地にやって来た。

だけど、そんな彼らでもどうしようもないと言われた。そして、船長であれば何を優先すべきかと説かれてしまった。

だからこそ、自分は葛藤しながらも決断をしたのだと、ウソツプにきつく言い返す。

「だつたらいいよ!!?」 もうそんな奴らに頼まなきやいい!!?」 今まで通りおれが修理してやるよ!!?」 元々そうやって旅を続けて来たもんな」

「おい待てウソツプ!!?」

しかし、それで納得できるウソツプではない。

傷付いた船を助けてやりたいと、元気にしてやりたいと一縷の望みを託しに来たのに、諦めろと言われて受け入れられるわけがない。

だったら他人に頼ってたまるか、ウソツプは身体を引きずり道具を取りに向かう。

「お前は船大工じゃねエだろう!!! ウソツプ!!!」

「ちよつとルファイ!!!」

「おうそうだ、それがどうした!!! だがな、職人の立場をいい事に、所詮は他人の船であつさり見限るような無責任な船大工なんかおれは信じねエ。自分達の船は自分達で守れて教訓だなコリヤ!!!」

動くたびに激痛が走る、ボロボロの身体。二つのチンピラ一家に痛めつけられ、大事なものを奪われ心身共に弱った状態。

それでもウソツプは立ち上がろうとする。

自分達をずっと支えてくれた仲間を、必ず守り抜いてみせると自身を奮い立たせる。

「絶対におれは見捨ててねエぞ、この船を!!! バカかお前ら!!! 大方、船大工達のもつともらしい正論に担がれてきたんだろ!!! おれの知ってるお前なら、そんな奴らの商売口上より、このゴーイングメリー号の強さをまず信じたハズだ!!! そんな歯切れのいい年寄

りじみた答えで…!!? 船長風吹かせて何が「決断」だ!!! 見損なつたぞルフィ!!!

「ちよつと待つてよウソツプ! ルフィだつて最初は!!?」

「黙つてろナミ!!?」

激情のまま、言つてはならない言葉まで口にしだすウソツプに、ナミが慌てて口を挟む。

このままでは、決定的に何か壊れてしまう。そう直感し、焦りながら間に入ろうとするが、それをルフィがより険しい表情となつて止める。

「これはおれが決めた事だ!!! 今更お前が何言つたつて意見は変えねエ!!! 船はここで乗り換える!!! メリー号とはここで別れるんだ!!!」

「フザけんな、そんな事は許さねエ!!!」

「ちよいちよイ、その辺にしといたほうがいいんじゃないノ?」

「おいお前ら大概にしろ!!? そんなに熱くなつてちや話にならねエだろ!!!」

加熱されていくルフィとウソツプの対話。一味で最も息があつていた二人の激突に、他の者も止めに入る。

しかしそれぞれ怒りに燃える二人は、激化していく感情を、自分でも止められなくなつていた。

「いいかルフィ、誰でもおめエみたいに前ばかり向いて生きて行けるわけじゃねエ!!」

? おれは傷ついた仲間を置き去りにこの先の海へなんて進めねエ!!!

「バカ言え!!?」 仲間でも人間と船じや話が違う!!!」

「同じだ!!!」 メリーにだつて生きたいつて底力はある!!! お前の事だ、もう次の船に気持ち移してわくわくしてんじやねエのかよ!!! 上っ面だけメリーを想つたフリしてよオ!!!」

止まらない互いへの罵倒の言葉。

少し前までは、和氣藹々とした穏やかさがあつた船内の雰囲気、どんどん険しく重くなつていく中。

「いい加減にしろこのバカア!!!」

バンツ!と、それまで黙つていたエレノアが、鬼の形相で机を叩く。

フー、フーと獣のように荒く息を吐き、再発した痛みで冷や汗を流しながら、睨み合
うルフィとウソツプを睥睨する。

肺が痛み、ゲホゴホと咳き込むも無理矢理それを抑え、ウソツプを見据えて声を張り上げる。

「あんただけが辛いなんて思うんじゃないわ!!!」 全員気持ちは同じに決まつてんでしようが!!!」

「だつたら乗り換えるなんて答えが出るハズがねエ!!!」

「ルフイだって苦しんで決めた結果なんだよ!!!」それが一味を率いる船長だから!!! あんな達全員の命を背負わなきゃいけないから!!!」

じわり、とエレノアの口元に血がにじむ。

叫ぶだけで傷が開きかけ、激痛が全身を侵すも、エレノアはウソツプを睨むことを止めず、瞳孔を縦に裂き目を吊り上げる。

ウソツプはエレノアのその気迫に圧され、口をつぐむ。

しかし、やがて意を決したように歯を食い縛り、エレノアを鋭く睨み返した。

「お前だってルフイと同じだろ!!!」大人ぶって一歩引いたような位置から物を言いやがって!!! 全部わかったような物言いで!!! 本来ならお前には責任がないからな!!!」

「責任…!!!」

「お前は本当は『白ひげ』の仲間だもんな!!!」ちつぽけなこの一味がどうなろうと関係ねエ……そのうち元の一味に帰るつもりだって自分で言ってたんだからな!!!」

その瞬間、エレノアの表情が凍り付き、ひゅつと息を呑む音が響き渡る。

びきり、と。

エレノアの中の何かがひび割れる音が、その場にいた全員の耳に届いた気がする。

「お前エ!!!」それ以上バカな事言うんじゃないねエ!!!」

黙り込んでしまったエレノアの前に出たルフイが、ウソツプの襟に掴みかかる。

言つてはならない事、決して思つてはならない事をはつきりと口にしてしまったウソツプに。

「仲間じゃない」などと言う暴言を吐いてしまったウソツプに、ルフィは強烈な怒りを持って吠える。

「じゃあいいさ!!!」 そんなにおれのやり方が気に入らねえんなら、今すぐこの船から……」
「バカ野郎がア!!!」

とめどない憤怒のままに、その言葉を口にしかけたルフィに、突如サンジの蹴りが炸裂する。

ルフィとウソツプは纏めて吹っ飛ばされ、テーブルを破壊しながら床に倒れ込む。

ナミやチョッパーが騒然とするのを放置し、サンジは凄まじい形相でルフィを睨み、声を荒げる。

「ルフィてめエ、今何言おうとしたんだ!!! 頭冷やせ!!! 滅多な事、口にするもんじゃねエぞ!!!」

「……………あ……ああ……!!! 悪かった、今のは………つい」

痛みと衝撃で我に返ったのか、ルフィは消沈した様子で体を起こす。

自分が何を言おうとしたのか、その事に改めて焦りを覚えたのだろう、引き攣った声で謝罪する。

しかしウソツプは、険しい表情のまま首を横に振った。

「いや、いいんだルファイ…それがお前の本心だろ」

「!?？」 何だと……!!!」

「使えねエ仲間は…次々に切り捨てて進めばいい…!!? この船に見切りをつけるんなら…おれにもそうしろよ!!!」

吐き捨てるように放たれたその言葉に、一味全員がぎよつと目を剥く。

それは、一味において最大最悪と言える口論の勢いで、つい漏れてしまった気持ちなどとは決して言えないものだった。

ウソツプはそれを、憤怒に満ちた真剣な表情で、はつきりと口にしていった。

「おいウソツプ、下らねエ事言ってんじゃねエぞ!!!」

「いや本気だ…前々から考えてた…正直、おれはもうお前らの化け物じみた強さにはついて行けねエと思ってた!!! 今日みてエにただの金の番すらろくにできねエ、この先もまたおめエらに迷惑かけるだけだ、おれは…!!! 弱エ仲間はいらねエんだろ!!!」

そこからはもう、ウソツプの本音が次々に溢れ出る。

一味の誰よりも臆病で、力も弱く、ルファイと共に危険な旅に付き合い続ける深い理由もない。

一味の中で浮いた存在だったという意識が、ウソツプの口から漏れ出る。

「ルフイ、お前は海賊王になる男だもんな。おれは何もそこまで『高み』へ行けなくていい……!!」

誇り高き海の戦士。その夢は、上限も無ければ下限もない。

最弱と言われる東の海において、険しい冒険を経たのであれば、そう名乗っても誰も咎めないかもしれない。

ウソップは最後に、エレノアに悲痛な視線を向けてから、全員に背を向け、歩き出す。

「——思えば、おれが海へ出ようとした時に……お前らが船に誘ってくれた、それだけの縁だ……!!? 意見が食い違つてまで一緒に旅をする事ねエよ!!!」

「おいウソップ、どこ行くんだ!!!」

「どこへ行くこうとおれの勝手だ」

サンジの制止の声に鬱陶しそうに答えながら、ウソップは扉の前で足を止める。

扉を越えれば、もう後戻りはできない。ふと胸中に浮かぶ葛藤を無理矢理押さえつけ、ウソップはきつく歯を噛み締める。そして。

「おれは、この一味をやめる。お前とはもう……やっていけねエ、最後まで迷惑かけたな」
チョッパーが縋るように声を上げ、ナミが息を呑み、ゾロやサンジやリンが険しい目を向けるのを背中で感じながら、ウソップはその一言を告げる。

越えてはならない一線を越えてしまった、その感覚に身を震わせながら、ウソップは

扉を開き、外に向かって歩き出していく。

メリー号を降りたウソツプは、廃船の残骸の上で仁王立ちすると、飛び出してきたルファイ達に再度口を開く。

「この船は、確かに船長であるお前のもんだ……だからおれと戦え!!? おれが勝つたらメリー号は貰って行く!!!」

ボロボロと涙を流し、苦しそうに荒い呼吸を繰り返すエレノアに気付かない振りをし、痛む自分の心を無視し。

ウソツプは最後のけじめをつけるために、大きく吠えてみせた。

「モンキー・D・ルファイ……!!? おれと決闘しろオ!!!」

第179話 “密室の凶事”

全て、自分の所為だったと、そう思った。

——今夜10時!!!

またおれはここへ戻って来る。

そしてらメリー号をかけて、“決闘”だ。

おれとお前達との縁も、それで終わりだ!!!

自分をもっと早く、真実を話していれば。

もっと彼らのことを気にかけて、真剣になっていれば、こんな事にはならなかったのだと。

——何だかこの一味が：バラバラになつてくみたい…。

自分が怖気付いたせいで、全てが台なしになったのだと。

——怖気づかずに来たな：どんな目にあつても後悔するな!!!

お前が望んだ決闘だ!!!

——当たり前だ、殺す気で来いよ、返り討ちにしてやる!!!

もうお前を倒す算段はつけてきた!!!

彼らのことを、本当に仲間だと思っていなかったから、彼らが傷つけ合う事になってしまったのだと。

——お前がおれに!!!

勝てるわけねエだろうが!!!!

気付いた時には既に遅すぎて、何もかもが手遅れになってしまっていて。

昨日まで仲良く、笑いあっていた彼らが、全く別の方向を向いて歩き出してしまっていて。

——………メリー号は、お前の好きにしろよ。

新しい船を手に入れて、おれ達は進む!!!

——じゃあな………ウソツプ。

今まで………楽しかった。

彼のその、重く、苦しみに満ちた別れの言葉に。

エレノアの花は限界を迎え、大きく息を荒げたかと思うと——ごぼつ!!と、大量の血を吐き、崩れ落ちていた。

「………にいたのか」

ウォーターセブンの裏町、ある宿屋の屋上にて。

搜索を中断して戻ってきたサンジが、無言で集まっている仲間達を見てそうこぼす。

「せっかく宿とつたのに部屋に誰もいねエ——みんな揃って…眠れねエんだろ……ルフィは？」

「あそこ」

チョップが指を差す先には、虚空を見つめたまま動かないルフィの姿がある。

彼らしくない、元気の欠片もない沈黙した姿に嘆息していると、リンが訝し気に尋ねてくる。

「コックさん、どこ行ってたんだイ？」

「夜中中岩場の岬を見張ってた………ロビンちゃんが……帰って来やしねエかと思つてよ。………どこ行ったんだろうな、何も言わずに………」

昨日の決闘騒ぎの時も戻って来なかったロビン。

夜が明けても戻って来なかった彼女を心配し、探しに出たサンジだが、まるで手掛かりを掴めなかつたらしい。かなり落胆している。

「エレノアちゃんはどうしてる…？」

「知り合いの家に世話になるってサ。機械鎧の工房をやつて、しばらくはそこにいらつて…」

サンジに問い返され、リンは肩を竦めながら答える。

チヨツパーがそこで不意にうつむき、暗い表情でため息をこぼした。

「……診察は、いらないつて断られた」

「そうか……」

男達の空気が、また一段暗くなる。

メリー号の寿命には気づいていたのに、船を愛するウソツプはおろか、他の誰にも伝えられず苦しんでいた所に、仲違いが起こってしまった。

ただでさえ弱つていて、耐えきれなかった天使は、夥しい量の血を吐いて崩れ落ちた。その姿を思い出し、全員の表情が悲痛に歪む。

「あの量の吐血は……ちつとばかりゾツとした。ずっと船の事で悩んで、苦しんでいたんだな……」

「……責任感じる必要はないと思うんだがネ。あの船の事は、遅かれ早かれ起こつたと思うヨ。部外者のおれが言つても仕方ないことだと思ふけど……」

ガツガツばくばくと大量の料理に手を伸ばしながら、リンが険しく眉間にしわを寄せながら呟く。

それに頷きかけたゾロは、少ししてようやく異常な状況に気付いた。

「……つておめエは一体何やつてんだ!!!」

「メシ食つてます」

「ゴチになってます」

「馳走になってイル」

「おめエらにいたっては誰だア!!!」

料理を堪能していたのは、リンだけではなかった。

全身を黒衣で覆い、仮面で顔を隠した二人がリンの前に腰を下ろし、同じく料理を口に運んでいたのだ。

見知らぬ二人に、他の2人もギョツと目を見開いていた。

「こいつはランファン、こっちはフー。おれの旅に同行してくれてる……まー、護衛と
いうか臣下というカ」

「臣下だと……!!!」

「何だ!!? まさかこいつらずつと船にいたのか!!?」

「どうりで組み直した予定以上に食糧の減りが早エと思つたら……!!!」

のほほんと二人の黒装束達を紹介するリン。

思わぬ事実にも、全員の表情が引き攣る。

ぼんやりとしたままのルフイを放置し、こめかみに血管を浮かばせたサンジが、食事を止めないリンを鋭い目で睨みつける。

「連れがいるなら言えよめエ!!! もし知ってたら絶対に乗せなかったのによ!!!」

「堅いこと言うなヨ、おれ達の仲だロ？」

「赤の他人だろうがクソ野郎!!!」

無断で食料を食い荒らしていたに等しい所業を犯しておきながらこの態度。

厚顔無恥、勝手にもほどがある行為に、サンジが怒りのままに罵声を浴びせかける。

「……!!!」

「はいはいランファン落ち着ケー。ぶつちやけ非があるのおれらだからナー」

それに怒りを示し、ランファンと呼ばれた黒装束が懐に手を伸ばすも、主であるリンに止められる。

ランファンが引き下がったのを確認し、リンがため息交じりに語り出した。

「仲間内で険悪な空気になんのはやだよナ。おれも…父親のせいで実家がちよつと面倒な事になってるからわかるヨ」

「実家ア…？ 何だ、もしかして結構な金持ちだったのか？」

「まー、相手は皇帝だからナ………そいつがまいた胤のせいで、子供がみんな苦勞してるのヨ」

やれやれ、と疲れた様子で呟き、頬杖をつくリン。

じとりと疑わしげな目を向けていた男達は、ふと抱いた違和感に顔をしかめ、次いでギョツと目を見開く。

「ああ?!? 親父が皇帝って……じゃあお前は皇子って事か?!?」

「何だそれ初めて聞いたぞ!!!」

「初めて言ったからネ」

驚愕をあらわにするサンジ達に、けらけらと気楽に笑うリン。

話題の割に呑気なままの彼に、ゾロが苦虫を噛み潰したような顔を向ける。

「…皇族が海賊にたかってんじゃねエよ」

「まー、20人以上いる皇位継承者の一人だからサ、色々あんのヨ、その辺ハ」

箸を伸ばす手を止め、リンは一度サンジ達に向き直る。

フーとランファンも同じく手を止め、主に付き従うように居住いを正し、サンジ達に顔を向ける。

「後継問題でギツスギスしてるからサ……今の一族の地位を向上させて有利になるために、おれはこうして旅をしてんのサ」

「…案外お前も苦労してんだな」

「まア……最近ちよつと暗礁に乗り上げてる感はあるけどナ……」

「?」

少しだけ同情の眼差しを送るサンジ達から目を逸らし、ぼそりと呟くリン。

フートランファンも同じく、仮面越しでもわかる重苦しい雰囲気をしていて、サンジ

達は全員訝しげに首を傾げる。

その時だった。バタンツ！と大きな音を立て、屋上に通じる扉が押し開けられた。

「ルファイ!!?」

「ナミさん……………」

「大変なの。今、町中この話で持ちきりで……………!!? ルファイ……………」

息を切らし、肩を上下させながら駆け込んできたナミに、ルファイもようやく正気に戻り振り向く。

仲間達の視線を一身に受け、ナミは汗を大量にかきながら、入手した情報を口にした。

「昨日の夜、造船所のアイスバーグさんとヴィルヘルムさんが……!!」

「号外だよ……!! 号外号外イ!!」

街の中を、新聞売りが大きく声を張り上げて練り歩く。

片手に持った新聞の束を撒き散らし、街中の人間の注意を集め、一大ニュースを叫ぶ。それを耳にした者、新聞を手にしたものは全員もれなく、驚愕と困惑で表情を一変させることとなった。

「ウォーターセブンの英雄!!! 市長アイスバーグさんと『十賢』ヴィルヘルムさんに暗殺の魔の手がのびた!!! 許すまじき犯人の目的は富か権力か!!! 足跡も残さず消えた

暗殺者は何者なのか!!!」

??

「——ウソツプの言葉は正しいよ。私は……今はあの一味に世話になつてるけど、いずれは彼の言う通り“白ひげ”海賊団に帰るつもりだった。だから………あいつらへの干渉も最低限にしてきた」

誰にともなく、エレノアは虚空に向かって呟く。

工房の奥の居住空間。窓を開ければすぐ目の前に海が覗ける部屋で、一人車椅子に腰かけ風を浴びる。

ガーフィールは今、工房を離れている。エレノアの気持ちを汲み、顔を合わせないようにしてくれているのだ。

「……その結果がこれさ。誰一人傷つけたくなくて、事実を告げずに現実から目を背けた。そして全部………壊しちゃった」

大きくため息をつき、天井を仰ぐ。

胸の痛みをどうにか抑えようと、しかしどうしても薄れる事がなく、痛々しく顔を歪めるばかりだ。

（今ならわかる………あの人の葛藤が。関係を壊す事を恐れて、最後に全てを台無しにしてしまったあの人の気持ち………痛いほどよくわかる）

「全知全能の種族だなんて嘘っぱちだよ……私には、何にもできやしない」
つい最近の記憶にある、遠い先祖の記憶。

伝えなければならなかった真実を伝えられず、未練を残した亡霊の気持ちだが、今になつて胸に突き刺さる。

大人ぶつたところで、結局同じ穴の貉だと、自分の心が悲鳴をあげていた。

「……何だこれ？」

ふと、エレノアは知らない気配を感じ取り、視線を辺りに巡らせる。

きよろきよろと周りを見渡し、スツと視線を下に下げ、ん？と訝し気に眉間にしわを寄せる。

「お……」

そこには、小さな少女が横たわっていた。

黒髪をみつあみにした、10歳前後にしか見えない、薄汚れた格好の少女。傍らには、掌ほどの大きさの白黒の獣が転がっている。

少女は地面に伏し、ぷるぷると身体を震わせたまま、かすれた声をこぼした。

「お腹………すいタ……」

「なんつかこんな事……前にもあつたな」

今にも事切れそうな雰囲気を漂わせる少女を見つめ、エレノアは大きな大きなため息

をこぼした。

??

シュツ、シュツと音を立て、海列車が駅に到着する。

指定の位置で車体が停止すると、客車の扉が開いて、ぞろぞろと乗客達が降り始める。その中には、派手な仮面とマントを纏った、一人の大柄な男が紛れていた。

男は特徴的な四角い髪形をした二人の女性と共に、トランクを手に駅から町に出る。すると、駅の前で待っていた黒いサンングラスをかけた男が前に出て、仮面の男を迎えた。

「よオ、兄弟!!! 望みのモノは買えたか!!?」

「グリード……!!? わざわざ出迎えに来たのか? ご苦労なこつた」

「いやいや…実はそうじゃねエ」

「アン?」

サンングラスの男は笑いながら、仮面の男の肩を抱き顔を寄せる。

二人の女性は男達の後ろにつき、歩き出した男達に付き従う。

サンングラスの男はにやりと口角を上げ、しかしサンングラスの奥の目をギラリと鋭く光らせ、吐き捨てるように告げる。

「来りやわかるぜ……おれも、帰って初めてあの惨状を見た…」

サングラスの男の言葉に、仮面の男は訝し気に唸る。

何を言いたいのか、と訝しみながら、兄弟として信頼する男の言う通り、アジトを指し歩く。

そして目的地に着いた仮面の男は、驚愕でその場に立ち尽くす事となった。

「グリード……キウイ……モズ……おれア……おれは今夢を見てんのか……？」

「いんや、兄弟。確かにここア……お前の根城があつた場所だ」

「しかし、これはまた……」

「ずいぶんだわいな」

「どオオオオなつてんだコリヤア~~~~!!!!」

そこは——仮面の男のアジト、フラキーハウスがあつた場所は、跡形もない廃墟となつていた。

壁という壁は粉碎され、屋根は落とされ雨も防げない。辛うじて、巨大な三日月の飾りが、アジトの名残を残している。

「おれの大事な大事な子分共も……おんなじ有様だ」

「そうか……あいつらだ!!」

笑いながら、明確な怒りを表すサングラスの男と同じように、仮面の男もギリギリと歯を食いしばる。

被っていた仮面を捨て、目を血走らせながら、変わり果てたアジトを凝視する。

彼の脳裏に浮かぶのは、単身アジトに乗り込んだ一人の男。そしてその仲間であるという、大きく名を響かせる一味である。

「おのれ… 麦わら」のルフィ…!! これがおれへの報復というわけか。おれのかわいい子分達をよくも…!!」

「無残だわいな…」

「許さん…!!」

「ガツハハハ…おれもだよ、兄弟」

豪快に笑うサングラスの男だが、やはり目は笑っていない。

ビキビキとこめかみに血管が浮かび、ヒクヒクと頬の端は痙攣を繰り返す。

静かに怒りを溜め込んでいく二人の下に、突如どたどたと騒がしい足音が届き始める。

「フ…!!? フランキーのアニギ!! グリードのアニギ!! か…帰って来てたんで

すね!!」

「おう!!? お前ら無事だったのか?!?」

「ヒドイ目にあいま、しだ…!!! あいづらもうメチャクチャで…」

男達の元に現れたのは、全身包帯まみれになったフランキー一家とグリードファミ

リーの面々だった。

全員涙目になり、杖を突きながら、戻って来てくれた男達に縋りつくように駆け寄ってくる。

「どうしてもアニキ達に仇取って貰いだくて……!! 麦わら達の動向を探ってまじた

……!!??」

「どこに居るんだ……!!!!」

「あいつらが街で宿に入るとこ見つけまして、さつきそこから造船島へ向かいました……」
憐れみを誘う姿に変えられた子分達を見て、男達の怒りがさらに燃え上がる。

金を奪われたこと、仲間をボロボロにされたこと、いずれも許しがたい事であろう。

しかし、それはそれ、これはこれ。

大事な子分を可愛がられ、男達が黙っていられるはずもない。

子分たちが必死に手に入れた情報に、サングラスの男は、造船島の方角に鋭い目を向けた。

「——となりやあ、きつと昨日居た一番ドックに……!!!!」

サングラスの男は、自分の敵が待つ場所を見やり、より一層悍ましい笑みを浮かべるのだった。

第180話 “水の都の顔役達”

ばくばくガツガツバリバリもぐもぐっ！、皿の上に用意された料理が、あつと言う間に消えていく。

目にも止まらぬ速さで、料理を口の中にかき込んでいく少女はその間ずっと、だばだばと涙を流し続けていた。

「助かりました…!!? あなたは命の恩人でス!!! ありがとウ!!! ほんとうにありがとウ!!!」

「わかったわかった………とりあえず落ち着いて食べなさい。色々飛んできてるから」半目で少女を見つめ、エレノアは引きつった表情でそう答える。

ボロボロの身体で料理などできるはずもなく、仕方なく近くのレストランに連れてきた結果が、今のこの状況。

あらためて、少女の恰好と訛り、そして連れている目立った色合いの獣を見下ろし、訝し気に眉間にしわを寄せる。

「あなた…その訛りはシン国の子だよね? こんな所で何で行き倒れになってたの?」
「大時化に巻き込まれ船が沈ミ…!!? 必死に泳いで流れ着いたこの島…だけど所持金

は底をつき!!! 危うく土に還る所でしタ!!! あ、海に還るといったほうがいいですかネ？」

「…あつそ」

聞けば聞くほど、仲間の……いや、つい最近まで世話になっていた一味に、最近新たに加わった男と似たような境遇である。

「あんたみたいなお小さい子が……よくもそんな大冒険を」

「年齢に関してはお互い様でハ？」

「お黙り」

疑問をぶつける間も、少女と獣の食事の手は止まらない。

皿の上を全て平らげ、汚れまくった顔をナプキンで拭つてから、少女は居住いを直してエレノアに向き直った。

「んんツ……紹介が遅れました。私はチャン・メイ……シン国の錬丹術師です。こっちはシャオメイ」

「錬丹術師……ふうん、そっか」

「失礼ながら、〃妖術師〃 エレノアさんでハ?! 手配書を何度か見たことがあります!!」
「そりやどうも……」

キラキラ、というか若干キラキラした視線をぶつけてくる少女に、エレノアは辟易し

た様子でため息をつく。

似て非なる技術である錬金術と錬丹術。

片方において高名な術者に対し、他の術者が強い興味と関心を抱くことは多々あるが、エレノアとしては好ましい者ではなかった。

「…で？ はるばるこんな所へ、何の用で？ わざわざ死にかけてまで……」

「ええ、ちよつと……」

胡乱気な視線を向けるエレノアに臆することなく、少女はにっこりと笑ったまま、その言葉を発する。

「不老不死の法を探し二」

瞬間、ピリツ……とその場の空気が張り詰める。

表情はそのまま、鋭く貫くような視線を向け、エレノアは少女の一挙一動に気を張り巡らせる。

「……あんたもか。何？ 流行ってんの？」

「むむム……こうしてお会いできたのも、もしかしたら天のお導きかもしれません!!
あなたなら、知っていてもおかしくはないですしネ!!」

ニコニコと笑顔を浮かべるが、エレノアは一つも笑顔を返さない。

少女の手元、掌の裏に隠した刃物の気配を確信しつつ、虎の耳をピンと張り、自身の

緊張を押し隠す。

「お尋ねしてもよろしいですか？ “賢者の石” について……………」
??

場所は変わって、ガレラカンパニーの本社前にて。

突然の襲撃事件の翌日、そこはアイスバーグとヴィルヘルムの安否を知ろうと、記者や一般人など多くの人々で溢れかえっていた。

「やっぱり……スゴイ人だから……」

「そりゃあ、市長で社長な男と、その右腕が殺されかけたんだからネ……」

「造船所にも入れねえな……………どの道もつかい会わなきゃなんねえんだけどな……アイヌのおっさんには」

駅長ココロの紹介で、多少の融通を聞かせてもらえると聞いている。

使える金が三分の一に減ってしまった以上、必要な経費は少しでも節約しておきたいため、何としても二人に会う必要があった。

「ねえすいません、 “本社” の場所わかりますか」

「ああ、無駄だぞ。1番ドックの中から入るんだ。門内には関係者か、特定の記者達しか入れねえんだ」

途中にいた男に尋ねてみるものの、彼も心配した様子で、二人の安否がわからない事

に悔しさを覚えていらしい。

「なんとか一早い情報だけでも聞けねエかとこれだけ人が集まつてる。みんな心配で……居ても立つてもいられねエのさ……」

最悪の想像でもしてしまつたのか、不安気な表情で黙り込む男。

ルフィ達はそれ以上何も尋ねられず、本社を見上げて、神妙な顔で沈黙する。

リンも同じく本社を見上げ、多くの人々に囲まれている様を見て、ぽつりとつぶやいた。

「……羨ましい限りだネ」

「？」

「仕方ない。そのうち新聞でも安否はわかるわよ」

謎の一言をこぼすリンにルフィが振り向くも、ナミが切り替え、ヤガラブルを移動させ始めたため、すぐにそちらに意識を向ける。

その時、リンの背筋に凄まじい悪寒が走り、彼はさつと表情を変えた。

「……!!?! 何ダ、この気配ハ……!!?!」

かつてないほど、恐ろしく寒々しい気配を感じたリンは、きよろきよろと辺りを見渡し目を瞪る。

ルフィ達が彼の行動を訝しみ、首を傾げていると。

どこからともなく、ズン、ズンと軽快な音楽が鳴り響き始めた。

「うわあ!!? こ…このリズムは!!」

「まさか!!? そんなバカな!!」

音楽が耳に届くと、人々は何やら慌てだし、動揺の声を上げる。

ざわざわと騒がしくなる人々をよそに、音楽は止まることなく、そしてある謎の音が響き始める。

「へいお前達。おれ達の名を、今呼んだのか?」

「呼んでねエよ!!! どっかいけー!!?」

「どこにいるんだ!!! どこだ!!?」

音楽と声、恐れ嫌われているらしいその人物を探し、人々は目を見開き、冷や汗を流して焦りを見せる。

ルフィ達も何事かと困惑し、声の主を探してみる。

そしてやがて、ある建物の屋根の上にいる間にか用意された白い幕、そしてそれに四つの人影が映っている事に気付いた。

「恥ずかしがらずに聞いてみな!!? おれ達の名を!!」

「聞きたくね——!!? 消えろ——!!!」

「ガッハハハハ!!! そう遠慮するんじゃねーよ矮小なる野朗共!!!」

「遠慮なんてしてねー!!?」

囃し立てる二人の男の声に対し、人々の声は荒ぶる一方。

大勢の人々の視線を浴びながらも、一切臆することなく、むしろ目立っていることを喜んでいくかのように、謎の男達は笑い続ける。

そして男達は幕の向こう側でリズムに乗ったまま、人々の中に敵意を向け始める。

「ここに麦わらのルフィってのがいる筈だ!!? 出て来い!!!」

「おれ達やこの島に並ぶスーパーな男達!!? ウォーターセブンの裏の顔!!! そうだ、おれ達や人呼んで、ワアオ!!!」

直後、人影を遮っていた幕が、男達の手によって払い除けられる。

カッ、と太陽に照らされ、男達の姿が露わとなった。

「フランキー・アー——ンド・グリー——ドっ!!!」

両腕が異様に膨らんだ水色のリーゼントに海パン姿の男と、ギザギザの歯に黒いサングラスをした男。

見るからに真面では無い風貌の男が、左右に立った四角い髪形の女達と共に、奇妙なポーズをとってみせた。

「うわああ!!! ここに暴れ出すぞ——!!! 逃げろー!!!」

「出て来い 〃麦わら〃ア!!!」

右に体を傾け、両手の甲をくつつけるといふ謎のポーズを見せる、フランキー、グリードと名乗る男達。

彼らが姿を現した瞬間、真下にいた人々は大慌てで、彼らから距離を取り、逃げ出し始めた。

「……………何だあの変態達……」

「フランキーって……言わなかった!!?」

「……………!!? あいつが……………!!!」

逃げ惑う人々の中で、ルファイ達ははっと目を見張り、次いで二人の男を睨みつける。すぐさまルファイはポートの上に立ち、大きく息を吸い込むと、頭上に立つ二人に向けて声を張り上げた。

「おい!!! 海水。パンツ!!! 真っ黒サングラス!!!」

「あん!!!?」

「おオ!!!?」

「おれがルファイだ」

ぎろり、と二人と一人、三つの視線が交差する。

お互いにこめかみに血管を浮き立たせ、自身の連れに乱暴を働いた相手に、凄まじい殺気をぶつける。

「お前かア… “麦わら” のルフィってのア!!! 人の留守中にえらく大暴れしてくれたじゃないの、お兄ちゃん…!!!」

いまだに鳴り響くりズムに乗ったまま、フランキーが先に口を開く。

同じくグリードと彼らの左右に立つ女達も、フランキーと同じようにリズムに乗る。

「帰って来て目を疑ったぜおれア…いやいや見事に原形ないんだもんなア、おれ達の家がよ!!? 子分共もまアヒドイ目にあわせてくれやがってエ…」

「よくもまア…相手がおれ様達の子分だとわかった上であもやつてくれたもんだと……逆に関心するぐらいだ!!! あの惨状はア!!!」

「もオ…ダメだおれ、今週のおれはもうホントに止められねエ。何言ってもおめエをボロ雑巾の様にするまでは!!! この怒りはおさまらねエ…っ!!!」

ぼっ、と両手を交差させ、同時に怒りの声を上げるフランキーとグリード。

そんな彼らに呆然としていたナミが、ハッと我に返ると、自身も彼らに負けないほどの怒りを乗せて叫んだ。

「ちよつと!!! あんた私達のお金どうしたの!!! 2億B!!!」

「あア!!? そんなもん……使つちまってもう、カラツケツよオ!!! どこぞで奪ってきた金を偉そうに守ろうとすんじやねエ、海賊がア!!!」

「人様から奪うんなら…てめエも奪われる覚悟くらい決めておけ。まア……おれ達は

奪われるようなヘマはしねエがよ!!!」

にやあ、とグリードの口角が異様に上がる。

鮫のように鋭く尖った歯を見せつけながら、ギラギラと欲望に満ちた目で、ルフィ達を見下ろし吠える。

その凄まじい威圧感は、まるで人ではないようだった。

「金も欲しい!!?女も欲しい!!? 地位も名誉も、この世の全てが欲しい!!! なんせおれ様は…… 強欲^{グリード}だからなア!!!」

ゲラゲラと豪快に笑うグリードに、ルフィはキツと怒りに満ちた目を向ける。
元より、この男達と真面に話し合うつもりなどありはしなかった。

「そんなのはいい、とにかくおれはお前を!!? ブツ飛ばさねエと気が済まねエ!!!」
「気が済まねエのは、こつちだバカ野郎!!!」

ルフィの宣告に、一際凄まじい声で吠えたフランキー。

彼は唐突に大きく息を吸い込み出すと、眼下のルフィ達に向けて、口から真つ赤な炎を噴き出してみせた。

「火イ吹いた!!!」

「何!!!? あいつ!!!」

「能力者カ!!!」

間一髪躲したルフィ達だが、いきなりの先制攻撃に驚愕し、次の挙動に送れてしまう。そうこうしているうちに、フランキーとグリードは屋根の上から飛び降り、ドボンと水中に落下する。

「どうりやあア!!!」

事故で落ちたか、と訝しむルフィ達の前で、急速に浮上したフランキーとグリードが、強烈な拳を繰り出してきた。

「泳げんのかっ!!!」

「いや~~~~っ!!!」

「悪魔の実なんざ食っちゃいねエっ!!!」

その一撃で、ヤガラブルの上に乗っていた船が粉碎され、ルフィ達は大きく吹っ飛ばされてしまう。

ルフィは何とか別の船の上に降り立ち、反撃を加えようと、ゴムの腕を大きく背後に伸ばしていく。

「ゴムゴムの…:」

「効かねエよ」

しかし、繰り出した拳はグリードの掌に——光沢のある黒に変色した手に止められてしまう。

さらに次の瞬間、ルフィの腹に巨大な拳が——フランキーの腕から放たれた、鎖につながれた手によって、殴り飛ばされてしまう。

「……ああ、知らなかったのかい……お姉ちゃん達。じゃあ教えところか……」

建物の壁に激突し、ずるずると落下していくルフィ。驚愕で大きく目を見開くナミとリンに向けて、フランキーとグリードはにやりと不気味に笑ってみせた。

「おれは『改造人間』で……!!」

「おれ様は『ホムンクルス人造人間』だ」

??

再び場所は変わり、ガレーラカンパニー本社、社長室の前。

一堂に会し、重い沈黙に包まれていた職長達。

暗い表情で俯いていた彼らは、社長室の扉を開け、顔を出したカリファにバツと振り向く。

「皆さん」

「カリファ」

「静かに……部屋に入って下さい」

「え……じゃあ」

「お二人が……たった今……意識を取り戻しました」

「よかった!!?」

カリファが涙目のままもたらした吉報に、わつと職長達は笑顔になる。

普段は仏頂面のルッチでさえ、この時ばかりは頬が緩んでいる、ような気がした。

「アイスバーグさん!!?」

「……………ああ、ンマー……………心配かけた……………」

ばたばたと騒がしく室内に駆け込み、アイスバーグとヴィルヘルムがそれぞれ寝かされたベッドを囲む職長達。

意識が戻ったばかりの所為かぼんやりとしているが、受け答えにはしっかりと答えているため、大したことはないと全員安堵した。

「お父さん……!!!」

「すまない、お前を一人にする所だった……!」

「……………とにかく命があつてよかつたぜ、ゆつくりお休みなつて!!?」

「造船所の事は、あたし達が何とかしますから!!?」

「生意気言うな、ジャリガキめ」

「あでつ」

パニーニヤが胸を張つて言うのと、それを見咎めてパウリーが頭を小突く。

痛みに呻いたパニーニヤは、べーつと舌を出してパウリーを睨むも、すぐに破顔して

アイスバーグ達に視線を戻す。

安否が不安だったガレーラカンパニーの長の復活、これより喜ばしい事はない。

「ところで……………昨夜、おれ達の部屋に侵入してきた犯人だが……………」

「ああ……………それならまだ捜査中で……………」

事件の調査がほとんど何も進まないままで、申し訳なさそうに頭を掻くパウリー達。

だがそこで、アイスバーグもヴェイルヘルムも険しい表情で首を横に振り、パウリー達に視線を向けた。

「いや……………憶えているんだ」

「え……………え!!?」

「二人いた。一人は仮面をかぶった大男……………もう一人は……………黒髪で長身の女。あの鋭い瞳は……………」

薄れゆく中に焼き付けた記憶、是が非でも犯人を逃すまいと、二人が執念で手に入れた唯一の手掛かり。

途端に黙り込んだ彼らに届くよう、アイスバーグは逸る気持ちを抑え、焼き付けたその顔を脳内に映し出す。

それによる混乱に胸を痛めながら、そしてこれから自分達が巻き込まれるであろう事件に背筋を冷やししながら、二人はその名を口にする。

「ん、ロビ、ニコニコ……ん、お」

第181話 “生死問わず(デッド オア アライブ)の意味”

「ばたばたと、大勢の住民達がウォーターセブンを駆け回る。

ガレーラカンパニーに張り込んでいた記者達、彼らから受け取った信じられない情報を、他の者達に伝えるためだ。

「特報だ!!! アイスバーグさんの証言から犯人がわれたぞ!!?」

「町中に知らせて犯人達を追い込め!!! このウォーターセブンから逃がすな!!!」

鬼の形相で街を走る男達。

彼らから話を聞いた者は皆、即座に血相を変え、そして同じく険しい表情を浮かべていく。

「アイスバーグ氏襲撃事件の犯人は、海賊 “麦わら” の一味だ!!!」

その情報に、島で数少ない実力者達が、続々と腰を上げ始めた。

「ルフィ——!!? ブッ飛ばすのよ!!? そんな海水パンツ!!!」

「アニキ——!!?」

「フアイトだわいな——っ!!!」

轟音が立て続けに響く造船島で、大勢の人々の悲鳴と三人の女達の囁す声が届く。巨大クレーンが傾き、建造中だったガレオン戦が破壊された、見るも無残な光景。

その中心に立ち、ルフィとフランキー、グリードは大きく肩を上下させ、睨み合っていた。

「とにかくお前は…ブツ飛ばしてやるからな」

「ガツハハハ!! 活きがいいな、〃麦わら〃ア!!!」

「うははは!!? やってみろ、お前の攻撃なんざ効きやあしねエ!!!」

拳を構えるルフィに対し、フランキーとグリードは只管笑う。

平和だった町を荒らし、互いの身内の敵討ちのため、再び激突しようと一歩踏み出した、その時だった。

突如真横から受けた衝撃によって、三人とも大きく弾き飛ばされてしまった。

「誰だア!!!」

地面を滑ったフランキーは、すぐさま起き上がって、衝撃があつた方を睨み、吠える。ルフィとグリードも同じく、戦いに横やりを入れた何者かを探す。

「くだらねエマネしてくれたな、お前の狙いは何だ…!!! 麦わらア!!!」

現れたのは、ガレーラカンパニーの職長達だった。

ルッチ、パウリー、パニーニヤ、カク、ルル、タイルストーン。五人の職長と一人の弟子が、鋭い眼差しでルフイを睨み、進み出てきていた。

「昨日の船大工の人達…!!? こりやこっちの味方ね!!?」

「よかつた!!? 職長達が来てくれたぞ!!」

「あぶねエ!!? 造船所がフランキーとあの海賊の手で大破しちゃうとこだった!!?」

「とんだお邪魔だわいな」

町で二人を除き、もともと人気がある実力者達の登場に、住民達が安堵と歓喜の声を上げる。

彼らならばこの状況を、原因であるあの三人をどうにかしてくれる、そんな期待で目を輝かせる。

ただ一人、リンを除いて。

「……いやア、ドーにもそういう雰囲気じゃないネ…」

ぼそりと呟く彼に、ナミが訝しげに振り向く。

彼が見つめる先では、邪魔をされたことに苛立つフランキーが、さつそく職長達に絡んでいる光景があった。

「オーオー、ガレーラの兄ちゃん達、人のケンカに首突っ込んでくれたら困るじゃない。ケガしてエのか?」

「よく、そんな口がきけるもんじゃ。ウチの工場をこれだけ荒らされれば、理由がなくても止めにくるわい」

「ウオオ!!! そうだフランキー、てめエこの落とし前どうつける気だア!!!」

フランキーの返答に、邪魔なのはお前の方だと言わんばかりに怒りの声を返すカクと
マイルストーン。

今にも殴りかかりそうな彼らを、パウリーが腕で制止する。

「ちよつと待てマイルストーン、その話は後でカタをつけよう。今はもつと重要な用事があるハズだぜ……なア “麦わら” のルフィ……」

ギロツ、とパウリーは再びルフィに鋭い視線を向ける。

仲間を制止しておきながら、彼もまたすぐにでも飛び出しそうな剣幕となっている。

「身に覚えがあるだろう……!?? よく、またここへ顔を出せたもんだ」

「エレノアが世話になつてる一味だつていうから見過ごしてたけど、大いに裏切られたよ……!!?」

パウリーに続き、パニーニヤも鋭く睨みつけ、敵意を露わにしている。

昨日とは打って変わって、まるで親の仇でも見るかのような目に、ルフィはただ困惑する他にない。あまりにも、彼らの態度は急変しすぎていた。

「……………何で? おれ達、おっさんのニュース聞いて……」

「ハア……ウチの一家じゃ、コト足りず…ガレーラにもちよつかい出したのか。てめえら触れるものみな傷つける思春期か!!?」

「ガツハハハハ!!! 若エな、麦わら」

「なんもしてねエよ!!?」

フランキーの呆れた視線や、グリードの小馬鹿にした笑いも、ルフィにとつては身に覚えのない事で思わず怒鳴る。

困惑しっぱなしの彼に、やがてパウリー達は我慢の限界を迎えたように、どっと得物を構えて飛び出した。

「とぼけるんなら……締めあげるまでだつ!!!」

パウリーの自慢のロープが、真っ直ぐにルフィの首に向けて放たれる。

蛇のように宙を舞ったロープは、ルフィの首に巻き付き、ギリギリと言葉通り締め上げていく。

「ウエエツ!!! 苦しい…苦…!!! ア…ぶへ!!!」

呼吸を阻害され、うめくルフィは宙に引き上げられ、そのまま資材置き場に叩きつけられる。

咳き込みながら起き上がろうとすれば、カクとルルが続け様に襲い掛かり、再び強烈な力で吹っ飛ばす。

「この野郎共!!! 邪魔すんなったのがわかんねエのか!!! そいつに恨みがあんのはおれだア!!!」

「何だあいつら……完全に頭に血イ登ってやがる」

完全に無視される形になり、フランキーが抗議の声を上げるも、職長達は誰一人として取り合わない。

ルフィー一人を執拗に狙う職長達に、グリードは胡乱気な目で鼻を鳴らした。

「やっちまえ——!!? ガレーラカンパニー!!!」

「社内最強の5人のケンカだつ!!!」

「え☒ 何で☒ 何で船大工もみんな敵なの!??」

「風向きが怪しくなってきたネ……」

「……お……!!? おい待って!!? おれはお前らとケンカする理由が……!!?」

ナミが困惑し、リンがふつふつと湧いてくる嫌な予感に頬を引きつらせ、ルフィは攻撃の手を止めさせようと声を張り上げる。

しかし、職長達の誰一人として、その手を止めようとはしなかった。

「あのなア、おめエら人の話聞いてんのかア!?? そいつアおれの獲物だと言つてんだろうがア!!!」

我慢が限界に達したフランキーが、左腕を変形させ、職長達を狙って銃弾を発射する。

振り向きもせず、それを躲したカクは、ずっと騒ぎつばなしのフランキーに鬱陶しそうに顔を歪め、鼻を鳴らしながら告げる。

「お前につきおうとするヒマはないんじゃないや、フランキー」

「何をこの…『山ザル』がア!!!」

「兄弟!!! 後ろだ!!!」

馬鹿にした物言いに頭に來たフランキーは、カクに狙いを定め再び左手を構える。

しかしその瞬間、グリードが焦った様子で声を上げ、次いで彼ら二人に巨大な角材が叩きつけられる。

「むん!!?」

「ぐぬア!!!」

強力な一撃を受けた二人は、角材の山に頭から突っ込み、倒れる。

ルフィもまた、素早い動きで攻め込んでくるルッチに弾き飛ばされ、別の角材の山に突っ込まされる。

全身スリ傷だらけになりながら、ルフィは職長達を睨み、冷や汗を垂らした。

「……………!!? ホントに強エないつら」

襲われる理由もわからないまま、反撃もできないルフィの視界の端で、チカツと何か
が光る。

ハツと目を見開いたルフィは、パニーニヤが左脚を開き、そこから露わになった刃を振りかざしていることに気付く。

大慌てで飛び退けば、直後にパニーニヤの義足から放たれた斬撃が、ルフィの背後の瓦礫を真つ二つに切り裂いた。

「くそオ——!!! 何なんだ、理由ぐらい言えエ!!!」

「理由を知りてエのはおれ達のほうだ……!!!」

吠えるルフィに、パウリーがギリツ……と歯を食いしばりながら声を漏らす。

荒い息をつくルフィに指を突き付け、血走った目で睨みながら、大気が震えるほどの凄まじい怒号を放った。

「昨夜、本社に侵入してアイスバーグさんを襲撃した犯人は、お前らだろうが!!!」

街中に響き渡りそうなその言葉に、ルフィは呆然と目を見開き、固まる。

ナミやリン、その場に居合わせた住民達も同じく固まり、驚愕と動揺でパウリーを凝視した。

「な……何それ」

「ばか言え!!! 何でおれ達がそんな事するんだ!!!」

「犯人」を二人覚えていると、目を覚ましたアイスバーグさんが証言したんだ。政府に聞きゃあ、お前らの仲間だって言うじゃねエか……『ニコ・ロビン』って賞金首はよ!!!」

畳みかけるように放たれる情報に、ルフィ達は思わず息を呑む。

昨日からずっと戻ってきていないロビン。彼女がどこで何をしていたのか知っている者はおらず、姿さえずっと見ていない。

まさか、姿を消したその間に人を殺めたのか。

そんな想像をしてしまい、ナミは真つ青な顔で棒立ちになっていた。

「もともとアイスバーグさんの命を狙ってこの島に来たのか、昨日、お前らが彼に会った後そんな気を起こしたのか、海賊の考える事なんざわからねエがな、犯人とわかってお前らを野放しににやあしねエ……!!」

「オイオイ、それでアイスバーグの奴ア死んだのか!?!」

「こんなバカ共に殺されてたまるか!!! 生きてるからこそ……また、アイスバーグさんの命を狙いかねないコイツを、ここで始末するんだ」

フランキーの問いに怒号交じりに応え、パウリーをはじめとする職長達が再び構える。

この場で確実に仕留めるつもりらしく、常人では耐えられないような殺気を放つ。

「^{デッドオアアラライブ}生死問わず」、指名手配の意味がわかるか。お前達海賊は、誰に何をされても文句は言えん。世界の「法」はお前達を守らんとする事じゃ」

カクの非情な言葉に、言葉を詰まらせるルフィ。

しかしルフィはきつく拳を握りしめ、ぶるぶると肩を震わせながら、包囲してくる職長達を真つ直ぐに睨み返す。

「そうだ…おれ達は無法者だ、わかってるよ!!? けどな、お前らロビンを知らねエクせに、勝手な事言うなア!!!」

短くも長い時間を共に過ごし、数々の冒険を経てきた、大切な仲間。

ここにいる者達の誰よりも、彼女の事を知っているつもりであるルフィは、彼らの仲間への疑いを否定する。

どんなに証言や証拠があつたとしても、信じたくはなかった。

「アイヌのおっさんに会わせてくれ!!! 見間違いだそんなの!!? ロビンなわけねエ!!!」

「今度もまた何するかわからねエ奴を、アイスバーグさんに近づけられるか!!!」

「そうだ!!! 犯人達を縛りあげろ!!!」

「この町の英雄を殺そうとした奴らだ!!!」

「首切つたつて構わねエ!!!」

職長達のもたらした情報がようやく理解できたのか、住民達が一斉に、ルフィに敵意を向けて怒りの声を上げだす。

怒号があちこちから上がり始め、ナミが不安気に辺りを見渡していると、唐突に彼女

の手が引つ張られた。

「きやつ…!!? ちよつと!!!」

「逃げ!!! 逃げるんだヨ!!!」

ナミの戸惑いの声も無視し、リンは人混みを掻き分け、大急ぎで走る。

やがて住民達は、逃げ去っていくリンとナミに気付き、ハツと目を見開いて指を差し始める。

「見ろ!!? あいつら、麦わらのあいつと一緒にいたぞ」

「あいつらも仲間だな!!!」

「ホントか、逃がすな!!!」

声上がるや否や、住民達はリン達の後を追い、走り出す。

実際に見たわけではない者も、見たと叫んだ者の言葉を鵜呑みにし、迷うことなく二人に手を伸ばす。

あつという間に、町中は怒号と悲鳴が渦巻く惨状となつていった。

「ナミ!!! 糸目!!!」

「観念しろ!!! 情報はすぐ町中に広がる、逃げ場はねエぞ。一味全員、おれ達が仕留めてやる!!!」

助けに向かいかけたルフイは、パウリー達の殺気に圧され、その場から離れられない。

数十、数百もの追手に追われ、リンとナミは表情を引きつらせ、捕えようと伸びてくる手を必死に躲し続ける。

「捕まえろオ!!!」

「暗殺者共を逃がすなア~~~~!!!」

「こりやちよつとマズいネ…!!?」

「やめてよ!!? 私達が何したっていうのよ!!?」

「とぼけるな、暗殺者の一味め!!! よくもアイスバーグさんを、撃ちやがったな!!! 逃が

さんぞ!!!」

「止まれエ!!!」

追っ手は続々と数を増やし、右も左も囲み、どんどん逃げ場がなくなっていく。

どんなに否定の言葉を吐いても、頭に血を昇らせた住民達は聞く耳を持たない。英雄の命を狙う敵への憎悪で、ほとんど我を失ってしまった。

「くそオ!!? おい!!? やめろお前らア!!! おれ達はなんもしてねエ!!!」

「そうよ!!? だいたいロビンにだって、アイスバーグさんを狙う理由がないもの!!!」

「いつまでも言いはってるがいい」

もう止まらない事を察しながらも、ルファイ達は必死に無実を訴える。

悪党として最初から追われるのはいい。しかし、身に覚えのない罪を着せられるの

は、どうあつても受け入れられない。

しかしそんな彼らの反論を、パウリー達は一切受け付けることなく、鬼の形相で睨みつけるばかりであつた。

「とにかくお前ら三人はここまでだ。あの人に害を与えるという事は、おれ達ガレーラカンパニーを敵に回すという事——そしてこの都市、ウォーターセブンを敵に回す事だ」と思い知れ!!」

「このオ!!! 何でそんなありもしねエ事……!!? アイスのおっさんと話をさせろオ!!!」

吠えるルフイに、再び職長達の魔の手が迫る。

動けないように半殺しに、そんな勢いで迫る大工道具の数々を前に、ルフイは目を見開き、焦りで大量の冷や汗を流す。

噴き出した人々の狂気は、最早留まる方法を知らなかった。

「観念しろ、海賊」

喧噪の中で、パウリーのその宣言が、一際強く響き渡った。

第182話 “おれは信じねエ”

「ぶつ潰せ!!? ガレーラカンパニー!!!」

わつ、と周囲の街の住人達が声を上げ、職長達の勇姿を目に焼き付ける。

彼らの歓声を受けてか、パウリー達の気迫は一段と膨れ上がり、ルフィは思わず息を呑む。

「どうした、受けるばかりでいいのか?」

「だからおれは!!? お前らと戦う理由がねえんだって!!!」

必死に疑いを否定するものの、職長達はまるで耳を貸してくれない。

パウリーの放ったロープに腕をとられ、投げ飛ばされ、思い切り叩きつけられたところに、鋸を構えた他の職長達が集まってくる。

「銃はもう効かねえとわかった」

「くつそオ、やる気満々かあいつら!!?」

歯噛みするルフィに、パニーニヤが右足のズボンをまくる。

そこから露わになった大砲の前に、ルフィはギョツと目を見開き声を漏らす。

直後、ルフィがいた場所で、砲撃による大爆発が起こった。

「こりやホントにヤバイナ……仕方がない!!?」

もくもくと上がる黒煙を見やり、リンがぼそりと呟く。

自分が手を引くナミ、そして自分達を追ってくる、怒りに吞まれた住民達を振り返り、険しい顔で声を上げる。

「フー!!! ランファン!!!」

彼がそう叫んだ瞬間、彼の頭上に二つの影が飛び上がる。

住民達がそれに気づいた瞬間、影は両腕を大きく振り、鋭く尖った苦無をいくつも投擲する。

放たれた苦無は、リン達と住民達の間突き刺さり、彼らを阻む柵となった。

「おわアああ!!!」

「何だ……こりやあ!!!」

危うく足に突き刺さりかけた住民達が、慌てて後退り苦無から離れる。

一時の足止めに成功した影、フーとランファンはそのまま走り出し、主である青年に仮面越しに睨みつける。

「若!!! だから申したでしょう!!! 海賊などと共に行動すればロクな事にならぬト!!!」

「っ……!!?」

「これに関しちやしようがないだロ!!? そう怒るなヨ!!!」

苦無の柵を越え、また追いかけてくる住民達を見やり、リンが叫ぶ。

自分だけが悪いのではない、とあつかましくに吠える主に、臣下たちは大きく肩を竦めるほかに無かった。

「とにかく逃げ口!!! 援護してくれ!!! あ、殺すなヨ!!!」

「まったく…!!?」

迫り来る住民達をまくため、煙玉や火薬を用いるリン達。

あちこちで爆発や煙が上がる様は、まるで祭か何かを催しているようであったが、当然楽し気に笑う者は誰もいなかった。

ここにいる四人を除いて。

「いえ——い!!!? ガツハハハハハ!!!?」

「気分爽快だわいな!」

「そうそう、あんな奴ア吹き飛ばしちまえばいいんだ!!!? さすがはおれ達の誇り!!!
ガレーラカンパニー!!!」

どこから持ってきたのか、ちやぶ台を中心に歓声を上げるフランキーとグリード。そしてその子分モズとキウイ。

彼らは実に楽しそうに笑いながら、おもむろに立ち上がった。

「いやいやしかし、お前。その麦わらのチビは、我がフランキー一家とグリードファミ

リーの憎つき仇でよ！　まずこのケンカの先客はおれ達だったんだよ！」

「そこへきて、お前らおれ達の獲物を横取りする様なマネをすんなと……………何度言わすんじやクラア…………ア！！！！」

ガツシャーン！とちやぶ台をひっくり返し、怒りを露わにすフランキー達。

ルフィ一人に、執拗に襲い掛かる船大工達を睨みつけ、二人のならず者は獣のような唸り声をこぼしていた。

「ガレーラア……………！！！！」

「少し待っている、お前らの相手はあいつを完全に捕らえてからじゃ」

「だから…………！！？　　何でおれ達の獲物をお前らが捕えるんだ……………！！！！」

「ガツハハハ……………もういい、口で言ってもわからねエようだぜ、兄弟……」

まるで相手にされず、それどころか適当に扱われ、ビキビキと男達の血管が膨れ上がる。ピキピキと音を立て、今にも弾けそうになる。

怒りに突き動かされた彼らが、船大工をぎゃふんと言わせる一撃を見舞おうとした、その時だった。

「『いざれ彼方に至るため——今こそ此処に、一步を刻まん！』……………！！？」

凜、と鈴のような声が、不思議な響きの祝詞を刻む。

住民達の怒号の中でも聞こえるその声に、フランキーとグリード、ルフィと職長達が、

思わず手を止めたその時。

『暗雲よ、雷よ、父よ、見るがいい！』
ナ 始ケまりの蹂躪ラ制ス覇ス！！！！

カツ、と眩い光が迸り、次いで衝撃と轟音が辺りに響き渡る。

思わず目を瞑り、暴風で吹き飛ばされかけた船大工達は、ハツと息を呑み固まる。

自分達が追いつめていた海賊の前に立ちほだかる、血濡れの天使を目の当たりにしたからだ。

「エレノア!!？」

「あんた…何でここに!!！」

「ああ!!? エレノアだとオ!!！」

閃光に驚き、足を止めた住民達も、フランキー達も、突然現れた異形の少女に目を瞠る。

ナミとリン達も同じく足を止め、昨日からずっと姿を現さなかった、絶対安静が必要な少女に驚愕と不安の目を向ける。

「…そこをどけ、エレノア。大恩あるお前に敵意なんざ向けたくねエ」

一瞬目を見開いていたパウリーは、やがて表情を改め、エレノアを鋭く睨みつける。

しかしエレノアは引き下がらず、鬼のような形相の彼を真っ直ぐに見つめ返す。

「どかないよ………謂れのない冤罪をふっかけようとしてるあんた達は、放っておけな

い」

「アイスバーグさんは確かにニコ・ロビンを見たって言ったんだ!! だったらその麦わらが首謀者で間違いないでしょうが!!」

「それは……!!」

パウリーの隣で、パニーニヤが必死の形相で叫ぶ。

友人である彼女に、エレノアもまた悲痛な顔で向き合う。今にも倒れそうな体を無理矢理立たせ、知人達と真正面から相對する。

だが、説得を試みようとした彼女に迫る、ある黒い影があった。

「ガツハハハハハ!!」 ようやく見つけたぜエ……天族「ウ!!!」

突如、凄まじい速度で突っ込んできたグリードが、エレノアに手を伸ばしながら飛び掛かる。

間一髪で躲されると、グリードの手が深く地面をえぐり取る。その威力に、エレノアは体の痛みとは別に、悪寒で冷や汗を垂らした。

「何すんのよ、あんた?!」

「ガツハハハ………ちよいとあんたに用があつてなア」

初対面だというのに、異様なほどの執着のこもった目で凝視してくるグリードの姿に、エレノアは咄嗟にその場で身構える。

かくかくと足を震わせる彼女を見つめ、グリードはにやりと笑みを深めた。

「長年ずつと探してたのさア……伝説の天族の一人!!?」
 「妖術師」アイザック・エレノア!!?
 「麦わら」のことは後回しだ……!!?
 ちつとばかり一緒にきて貰うぜ!!!」

「グリード………何のつもりだ!!」

「おい!!? 何やってんだ兄弟!!!」

「お前エ!!! エレノアに近づくな真つ黒サングラス!!!」

その場にいる他の者達、ルフィやフランキーパウリーからも驚愕と不信の目で見られながらグリードは歩みを止めない。

再びエレノアを捕らえようと、鋭く尖り、黒く変色した手をゴキゴキと鳴らし、飛び掛かろうとした。

「トア———!!!」

造船所を目にも止まらぬ速さで駆けてきた小さな人影が、グリードの顔面に衝突する。

鋭い蹴りを喰らい、グリードは声も出せないまま吹っ飛ばされ、その先にいたフランキーと共に地面に倒れ込んだ。

「ふへ!!?」

「ふへ!!?」

「よってたかつて私の恩人に何をしてるんですカ!!! この変態共メー!!!」

もつれあつて地面を転がる二人に、すたつと降り立った小さな少女——メイがピシツと構えをとつて威嚇する。

猫のようにシャーッと声を上げる彼女に、様子を伺っていたナミは首を傾げる。その隣では、リンが薄目をわずかに見開いていた。

「何……あの子」

「あいつは………!」

「何しに来たのよ、あんた」

「まだ一飯の恩義を返していないのデ!!?」

現れた少女に、エレノアが思わず半目を向ける。

それにピシツと胸を張つて答えたメイは、悪態と共に立ち上がるグリードに視線を戻す。

「くそつ……何者だテメエ!!! おい兄弟、大丈夫か!!? 悪イ、硬化に夢中んなつて着地のこと考えてなかつた!!!」

「むむ!!? 多勢に無勢の様ですネ!!? ならバ……」

グリードたちの他に、パウリー達や住民達の視線も集めていることに気付き、顔を陰しくするメイ。

すると彼女は懐から五つの刃を取り出し、足元に突き刺すと両手を地面につき、祝詞を口ずさみ始めた。

『桃園仙術式目、三魂飛んで七魄霧散！ これ即ち火尖槍！ 炎上！』
ちひそうれい かせんそう
 地飛爽霊 火尖槍『!!!』

突き刺さった刃が青い稲妻を発し、円陣を作り出した直後。

ドゴオン!! と。

エレノアとメイを中心に凄まじい火炎が発生し、周囲にあるもの全てを呑み、爆発を持って吹き飛ばしてしまったのだった。

ガラガラ……と瓦礫を押し退け、モズとキウイが億劫そうに起き上がる。

二人は瓦礫の山を登り、煤だらけでひっくり返っているフランキーとグリードの元に歩み寄っていく。

「あいつら逃げたわいな、追わなくても？」

「いやア……あいつが邪魔に入っちゃまったんならもう仕方ねエ、今は見逃してやらア」
 「とんだ邪魔が入ったもんだぜ」

「お前のせいだぞ!!! わかってんのかコンニャロー!!!」

「悪かった、悪かったって……」

目を吊り上げ、吠えるフランキーにひらひらと手を振るグリード。

それに不満げな目を向けるも、やがてフランキーは姿の見えない麦わらの男の事を想い、にやりと不敵に笑ってみせた。

「次こそ消してやるさ。ウハハハハ…さすがは一億の首…なかなか骨がある」

「やってくれるわい、フランキー…」

「なんて日だ、今日は…」

同じく、瓦礫の中から這い出してきたパウリー達。

獲物を全員取り逃がしてしまったという悔しさから、全員が険しい表情となっていた。挙句、造船所はより一層無惨に破壊されてしまった。

「とにかくあいつらを逃すわけにはいかねエ…今夜は「アクア・ラグナ」、今日あと2本出る海列車を除いて、あいつらが島を出る術はねエ…」

「乗ってきた船がもう使えないんだもんね」

「ああ…情報を集めるんだ…!!!!「ガレーラ」の職人を全員島中に張りめぐらせて、日没までに決着をつけるぞ!!!」

パウリーの宣言に、無言で同意する職長達。

こうして、彼らの部下である職人達も総動員した搜索網が、張り巡らされる事となっ

た。

「死ぬかと思つた……」

「だから言わん事ない。若、いい加減ご自分の立場をわきまえなせ」

勢いで登り、身を潜めた屋根の上で寝転び、息を切らせるリンにフーが苦言をぶつける。

主の身を守る事が役目である彼らだが、当の主が厄介事に自ら首を突つ込むのであれば、文句を言いたくなくても仕方はなかった。

ふと、リンの表情が切り替わる。

普段の飄々とした雰囲気引つ込み、真剣な表情で剥くりと起き上がる。

「しかし……まさか妖術師さんがあのチビと一緒にいるとハ……」

「狙いは……我々と同じでしょうカ……？」

「おそろくナ……」

仮面に隠されているが、ランファンも大体同じような表情で黙り込んでいた。

三人の異国の者達は、腕を組んで険しい顔で考え込む。

ずっと何も喋らないままの彼らに、ふと気になったナミがじとりとした視線を向けだす。

「あんた達、さつきから何の話してんのよ？」

「ン？　アー……………これからどうすつかなくてサ」

「その事なんだけど……………」

話しかけられ、即座に雰囲気切り替えるリン。

適当に考え出した答えを返すと、ナミは心底同意するように肩を竦め、何やら準備運動をしているルフィの方を向く。

「本気で行くの？？」

「当たり前だ。船大工のおっさん達が何でロビンを犯人だと言ったのか、直接聞いてくる」

「でも、それだったらエレノアと一緒にの方が…………いや、それはダメか」

何故だかわからないが、エレノアと相對した時の職長達の反応は、ルフィの時と比べて少し異なっていた。ただの知り合いではないのかもしれない。

エレノアが間に入れば、少しは話しやすくなるかと考えるも、彼女のあの様子ではそれも難しいだろう。

そう、ナミが頭を悩ませていた時だった。

「行くならおれも連れてケ。居場所は大体わかル」

「よし、つかまれ」

「おう」

「え……」

「ハ？」

「じゃ、行つて来る」

「え……ちよつ………!!!」

ナミの決定も聞かないまま、あろうことかりんまで連れて、ルファイがびよんと腕を伸ばす。

そして止める間もなく、発射されたルファイとリンがガレーラカンパニー本社の窓を突き破り、ド派手な侵入を果たしてしまっていた。

「え!!?!」

「窓が割れた!!!」

「何事だ!!!」

「襲撃だ————『麦わら』のルファイが、本社に侵入したぞ———つ!!!」

あつという間に騒がしくなるガレーラカンパニー。

その光景を見下ろし、呆然としていたナミの肩を、フーとランファンがポン、と優しく叩いた。

本社に侵入した海賊を捕らえるため、奔走する船大工達。

彼らは突如耳にした二つの銃声に、大慌てで音がした方——社長室になだれ込む。

「銃声が」

「寝室からだ!!!」

「お二人共つ……!!!」

これ以上彼らに何かがあつてはいけない、と。

ぶち破る勢いで入室すると、煙を上げる銃を持ったアイスバーグとヴィルヘルムの無事な姿があり、ほっと安堵の息が漏れた。

「父さ……教授、社長、ご無事で」

「……ああ、真相に近づけるかと、くだらねエ希望をかけた……」

いの一番に社長室に飛び込んだセレネにそう答え、黙る二人。

険しい表情で、何かを堪えるような表情で俯いていた二人は、やがて鋭い眼差しで部下達を見据え、一つの命令を下した。

「あの一味を……全員捕えろ……」

「当然です!!!」

騒然としたままの本社から、ルフイとリンが戻つて来る。

行く時の勢いは失墜し、二人とも重く、沈んだ面持ちとなっている。明らかに、よくない情報を得てしまったのだとわかった。

「……もしかして、話せたの？ アイスバーグさん達と」

「本当にロビンを、見たって……」

「———そんな」

どかつ、と屋根の上に乱暴に腰を下ろし、自分の膝を握りしめるルフィ。

リンも眉間にしわを寄せたまま、この島のどこにいても知れない女の事を考え、知らず歯を食い縛っていた。

「……………どうしてロビンがそんな事……………」

「おれは、信じねエ!!!」

そう、力強く吠えるルフィ。

しかしその表情は強張っており、大きな迷いの渦に吞まれていることが、一目でわかった。

第19章 正義の暗殺者

第183話 “噂”

がやがやと多くの客達の声で賑わう、昼間の酒場。

牛の角のような髪型が目につく店主が務めるその店に、新たな団体の客が訪れた。

「へへへ…ああ、いらっしやい」

「アウ!!? 調子アどうだブルーノ!!! スーパーか!!?」

ビシツ、と奇妙なポーズと共に入店したフランキーとモズとキウイ。そしてグリード。彼らはそのまま、グラスを拭く店主ブルーノの方へと歩み寄る。

「へへへ…いい方だと思っよ」

「“思うよ” ってのア何だ、ハッキリしねエ野郎だな。いつものだ、満タンで頼むぜ」

「金はあるのかい」

「いいからホラ補給しろ、『コーラ』」

カウンターまで近づくと腹から瓶を三本差し出すフランキー。

疑わしげな目を向けてくるブルーノに、フランキーは鬱陶しそうに顔をしかめ、フンと鼻を鳴らした。

「客から金を取ろうなんてしみつたれた料簡で、てめエよく店を…」

「あるわいな、昨日の買物のおつりが少し」

「おつり!?」

普段から素寒貧でたかる事が多いフランキー。

今回もやや脅すような形で、酒ほど高くはないコーラをせびろうと考えていた彼に、モズが懐を探って待ったをかける。

そして、かなり分厚い札束を差し出した。

「100万B」

「何イ!!! 昨日の金がそんなに!!! 何たる醜態!!! かつこ悪!!! このおれが 宵越しの

銭〃を持つちまうとは!!!」

「やらかしちまったなア、兄弟」

目を大きく見開き、シヨックを受けるフランキをグリードが笑う。

即座に切り替えたフランキーは、モズから札束を受け取ると、店内にいる客達にばらまきだした。

「アウ!!! 客共オ!!! 運が良かったな!!!」

「てめエらの飲み代、全部おれ達のだ!!! 好きただけ飲みやがれエ!!! ガツハハハハ!!!」

「うはーっ!!? 本当家ー!!? 気前がいいな、さすがはフランキー・アンド・グリード!!?」

「ウオーターセブンの裏の顔!!? ありがとうよ!!?」

嫌われ者の彼だが、客達はすぐさま手のひらを返し、お札を拾って笑い声をあげる。思いつきり散財したことで上機嫌になり、フランキーはカウンター席に腰を下ろす。グリードもかなり気分がよさそうだ。

そんな彼らに隣の席から、駅長を務める老婆、ココロが話しかける。

「気前がイイ様らね、お前達……!!? んががが!!?」

「ぬお!!? ココロのババー!!」

「いつからいた……怪物の置物かと思っただぜ」

いきなり話しかけられ、びくっ!と反応してしまう二人。

本人に対して失礼な話だが、比較的印象的な見た目のせいで、人間として認識できていなかったようだ。

ココロの隣からは、ひよこつとチムニーとゴンベも顔を出してくる。

「ジュースおかわりしていいのー? フランキー!!? グリード!!?」

「ココア酒場だ。チビの来る所じゃねエぞ?」

真昼間から飲んでいるココロや、それについてくるチムニー達に呆れつつ、それぞれ

で好きな席に着く。コーラを待つ間、彼の気分は急降下したままだった。

「景気はいいんだがよ、気分は悪イよ、最低だ。もう今週のおれサイテーよ。ふざけた海賊のせいでよ！」

「ガハハハハ!!？」

ため息交じりに愚痴をこぼし、カウンターの肘をつく。

へたれたリーゼントが彼の心境を現していて、隣の席に着いたグリードがゲラゲラと笑っていた。

「コーラ満タンおまち」

「アウ!!？」 待つてたぜ燃料燃料——っ!!？」

やがて、戻ってきたブルーノにコーラを満タンにいった瓶を渡され、フランキーはいそいそと立ち上がる。

ボタンと腹を開き、中にコーラを入れると、機械が動いて中身をぐびぐびと吸い上げていく。

そして、コーラが全身に染み渡った直後。

「ん~~~~~!!! ス~~~~~!!!」

ポツポー!と蒸気を噴き上げ、リーゼントが復活する。

ぶるんぶるんと頭を振り、気分が再上昇したフランキーは、脳裏に思い浮かべた麦わ

ら帽子の男を睨みつける。

「くあっ!!! 復活だ!!! あんの野郎共、次会ったらみてる…!!!」

「相変わらず面白エ仕組みしてんなア、お前」

酒の注がれたジョッキに口をつけるグリードが、しみじみといった様子で呟く。

長い付き合いになる兄弟分で、自分が言えた義理もないのだが、こうも人間離れした行動を見せられると、どうしても笑いが込み上げてしまう様だ。

「……………ところでババー、なんでここに？」

「アクア・ラグナが来るんらよ」

「ああ、もうそんな時期か。どうりで風が強エわけだ」

ふと、久しぶりに会ったココロにそう尋ねてみると、納得の返事が返ってくる。

逆にココロが、昼間から酒場に踏み込んでいるフランキー達に胡乱気な視線を向けてくる。

「おめエら自分家の備えは済んらのかい？」

「イヤア、ウチアもうねーのよ」

「綺麗さっぱり瓦礫の山!!? 沈む家がねーんじや、備えも何もいらねエさ。ガハハハ」
金を巡る争いで、シンボルだけを残して粉々になってしまった我が家を思い出しつ

つ、肩を竦めるフランキーとグリード。

今夜をどうするかなど、その時になって考えるつもりはしなかった。

「今日はアイスバーグ達と飲もうと思ってたんらが……撃たれたらしいね」

「らしいな………海賊の仕業だつてんで、ガレーラも町人もカンカンだ」

「海賊の仕業？ んががが」

丁度、その犯人と思わしき奴らとやり合つて、とどめを刺しそこなつたところだと思
いながら、興味なさげに呟くフランキー。

そんな彼に、ココロは可笑しそうに笑つたかと思うと、不意に眼差しで真剣な見つめ
てきた。

「おめエ本気れそう思つてんのかい？」

その態度に、グリードの酒を飲む手が止まる。

フランキーも同じく、意味深な様子で酒を飲む老婆を睨みつけ、顔を覗き込む。意味
の分からないことを言われ、少し苛立った様子に見えた。

「なんか知つてる風じゃねエか。適当な事言うんじゃねエぞ、ババー」

「あいつらならずつと付きまとわれてんらろ？ 世界政府に……!!？」

「んん？ つて事ア何だ、あの政府役人のコーギーがやったつてのるかア？」

「暗殺向きじゃねエよ、あのドテツ腹は!!？」

「そうじゃらいよ」

訝し気に、フランキーもグリードも眉を寄せる。

しよつちゆうガレーラカンパニーの本社にやって来ては、何やら話をして怒り足で帰っていく。暗殺をするには、小物過ぎる気がしてならない。

そんな彼らを横目に、ココロはぐびりとジョッキを傾け、酒を喉に流し込む。

「闇の事件は “CP9” の仕業ら…!!? 知ってるかいブルーノ!!?」

「うわさくらいは…」

突然問いかけられ、やや戸惑った様子でブルーノは答える。

対して、フランキー達は心に呆れた目を向ける。

何やら知った風に語り出したかと思えば、酒場で酔っぱらいが口にするような噂話で、少しばかりがっかりした様子だ。

「……まったく小市民が…そういう存在もしねエ組織の噂を信じちや喜んでやがる」

「“CP9” っつのアあれか………ホントかどうかも怪しい殺し屋」

「ばからね…存在はするさ…姿は見せねえ、闇を動く『暗殺部隊』らからね」
しかし、ココロは疑う二人をきつぱりと否定する。

その恐るべき存在が、政府が抱える闇の組織の存在を確信しているような、そんな確固たる言葉に聞こえる。

フランキーは思わず、隣に座るココロをまじまじと凝視していた。

「……何だ、その自信は。…何か知ってんのか？」

「そこで聞いた」

「うわさじゃねエかよ」

結局実在するかどうかあいまいな根拠に、がつくりとずっこけるグリード。

またしても呆れ、ため息をつくフランキーに向けて、ココロは変わらず意味深に笑ったまま続ける。

「いつでも『うわさ』なのが恐エところさ、見つからずに人を消すんらあいつらは。関わったら命はないよ、んががが」

ジヨツキを傾け、氷を鳴らして告げたココロの言葉は、酒場の中で妙に響いて聞こえた。

??

「シアねエ………見てないわよオ？ この辺には来てないんじゃないかしら？」

裏町の一角、機械鎧技師ガーフィールが営む工房にて。

険しい顔でやって来た船大工達数人に対し、ガーフィールは首を傾げつつそう答える。

船大工達は数枚の手配書を手に、やや落胆した様子を見せた。

「そうか…… “妖術師” は以前、この辺りによく顔を出していたという話を聞いたんだ

がな……」

「そもそもオ……妖術師”って”白ひげ”の仲間じゃなかったかしらア？ どうして”麦わら”を追ってるのにあの娘も追ってるの？」

「最近、行動を共にしているらしい。所詮は海賊……疑わしきは捕えるのみだ！」

誰もが手を出す事を恐れる、知らぬ者はいない大海賊。

その仲間にして実の娘である女海賊に対し、船大工達に恐れる様子はない。

世界を滅ぼせる男を敵に回そうが、決して見逃す事の出来ない大罪を犯した仲間であるからだ。

「一味を一人でも目撃したら教えてくれ。島中の人間が市長の仇を取るつもりでいるんだからな」

「はいはい、わかったわ……」

熱く目を燃やし、敬愛する社長のために尽力している彼らに、ひらひらと手を振って応える。

その際、ちらりと男達を見やったガーフィールは、自分の襟元を掴んで引つ張り始めた。

「——ついでにあんた達、ウチでちよつと休憩してかない♡？」

「失礼しましたア……!!」

ぱちっ！とウインクを送った途端、船大工達は大慌てでその場から逃げ出す。

あつという間に姿が見えなくなり、足音も聞こえなくなった頃、ガーフィールは振り向き、店の奥に目をやった。

「…行つたわよオ」

ガーフィールがそう呼びかけると、物陰からひよこりとエレノアが顔を出す。

カラカラと車椅子を押し、エレノアは工房の主にし訳なさそうな目を向ける。

「ごめんねガーフィールさん、匿ってもらっちゃつて……」

「いいのよオ、大事なお客さんを差し出すなんてできないもの。…特に今のあんたは、絶对安静なもの」

ボロボロになった機械鎧。直すよりも一から作つた方がいいような状態のそれを吐く天使を見て、ガーフィールがため息をつく。

何よりも、包帯まみれで痛々しい彼女の姿を見て、義憤に塗れた男達に差し出す気になれるはずもなかった。

「それにしても、スツゴいことになつちやつたわねエ……まさかアイスバーグさんを暗殺しようだなんて、今のあんたんこの船長、大胆な事考えたわね」

ふと話題を変えようとして、外を見やつてそう呟くガーフィール。

その言葉に、エレノアは無言で首を横に振る。

「…いや、ルフィならそんな事しない。別の誰かの仕業だよ」

「あら、そうなの？ …まあ、あんたの男を見る目は確かだから、疑うつもりはないけど」
最初から然して疑う気もなかったようで、振り向くことなくそう返す。

そのうち、ガーフィールはぼんつと手を叩き、険しい表情で考え込んでいるエレノアに振り向き、口を開いた。

「あ、そうだ……だったら『麦わら』の一味の子達、全員ウチで匿ってあげましようか？
そんなに広くはないけど、5、6人くらいなら十分隠せるわよ？」

「……………いや、しなくていいよ……ううん、やめて」

名案だ、とでも言いたげな表情を見せるガーフィールだが、エレノアは俯き、また首を振る。

沈痛な表情で目を伏せ、痛みを訴える胸をきつく握りしめる。

思いつかぶのは、別れを告げた長鼻の青年の言葉。

苦しげな表情で口にした、エレノアの本音をえぐり出すようだった一言だった。

「今のみんなとは……顔を合わせられないから」

「…バカねエ」

その資格がない、というようにこぼすエレノアに、ガーフィールは大きいため息をつく。

そして彼は、項垂れる天使の前に跪き、ボロボロの身体をキュツと抱きしめた。

「大事な船だったんでしょ？寿命だなんて残酷な事、伝えられないのも当然だわ……………」
あんたの苦しみは、あたしにもよぉくくわかる…」

「うん……………」ありがとう」

こぼれそうになる涙を抑え込み、氣遣つてくれるガーフィールに頷く。

一人、心の痛みを耐え続けていた彼女にとつて、工房の主の言葉は優しく、胸にじんわりと熱を感じる。ほんの少しだけ、痛みが引いた気もした。

しかし不意に、エレノアは眉間にしわを寄せ、自分の背後でガツガツバクバクと音を立てる人物に横目を向けた。

「……………」とこころであんたは何やってんの」

「ご飯食べてます」

「んな事ア聞いてないんだよ!!」

山盛りになった皿を重ね、口の周りを汚すメイに目を吊り上げて怒鳴るエレノア。先ほどまでの優しい雰囲気台なしになる有様である。

「いつまでここに居るのかって話!!? ……まア、それは私もだけど」

「自由に動けないエレノアさんの護衛ト……………」お礼ですかネ。とんでもない事を知ってしまいましたかラ。……………」これからどうするか、きちんと考えておきたいんでス」

「だからってここで……ああ、もういい」

一言二言文句を口にしたかったエレノアだったが、顔中米粒塗れのまま至極真面目な様子で見つめてくるメイにやる気を削がれてしまう。

車椅子を動かし、メイに背を向けながら、曇り始めた空を見上げる。

その背中にどことなく寂しそうな雰囲気を感じ、手を止めたメイが声をかける。

「帰らなくていいんですか？　こんな状況で皆さん、心配してるでしょう二……」

「……………うるさいよ、放っておきな」

「ですが、今夜は『高潮』が来るそうですシ……お仲間がいるのなら、できるだけ一緒にいた方が……」

「放つといてって言うてるでしょ!!!」

苛立っているせいか、荒々しい口調で怒鳴ってしまうエレノア。

すぐに我に返るが、メイ自身もしつこかったと反省しているのか、黙り込んでしまう。

しばらくの間、工房の中が居心地の悪い沈黙に包まれていると、不意にメイが虚空を見上げて口を開いた。

「——エレノアさん、しばらく外にはいかない方がいいですよ」

「は？」

「何だか大きな……………大きな気配を発すル、化け物が来てるみたいでス」

町の方と、海の方を見やりそんなことを呟くメイ。

エレノアは訝し気に眉をひそめ、彼女と同じ方角を見やるものの、弱った身体では何の気配も感じ取れる事ができない。

ただ、そこはかたなく漂う嫌な予感に、身構えずにはいられなかった。

第184話 // 暗殺を阻止せよ //

「どこへ行った!!!」

「どつかの屋根に登ってねエか!?」

「くまなく探せ!!!」

鋸や大槌を手に、街中を駆け回る船大工達。

街の英雄を傷つけた悪魔を捕らえるべく、血眼になって一味全員を探し続ける。

そんな彼らの搜索を潜り抜け、ルフィ達はある橋の下に潜んでいた。

ルフィが橋の縁を掴み、ハンモックのようになってゾロとナミ、リン達を支える。た

だ一人耐え続けていたが、五人ともただじつと息をひそめるだけだった。

「うお!!!」

必死に、追手が遠ざかる時を待っていたルフィ。

そのとき不意に、橋の上から青鼻の異形の男が顔を出し、驚きでつい手を離してし

まって、六人纏めて川に落下するのだった。

「チョッパーお前、よくここがわかったな」

「におい」

「ああ」

ずぶぬれになった服を絞りながら、合流したチョッパーにそう呟くルフィ。

街中走り回り、ようやく再会できた一味は、辺りに人気がない事を確認してから、ほつと安堵の息をついた。

「ふう…落ちついたか…」

「落ちついたかつて…!!? あんたがあんな大勢の船大工に追われてたから、私達まで巻き込まれたんでしょ!!?」

「傍迷惑なやつだよ、まったク…」

「仕方ねエだろ。あんな数の人間相手に見つからねエ方がおかしいぞ」

無自覚な方向音痴の彼の事だ、仲間と合流するつもりで、反対に追っ手の方へ向かってしまったのだろう。

そこでふと、仲間が一人足りていない事に気付き、ルフィが辺りを見渡す。

「おい、そうだサンジは?」

ルフィの問いに、チョッパーが悲し気に俯く。

サンジと共にロビンを探し、そしてようやく見つけたと思えば、投げつけられたという信じられない言葉に。

もう一味に帰る事はないという言葉に、一味は全員息を呑んだ。

「本当に言ったのか!!? ロビンがそんな事!!」

ルフィは血相を変え、チョッパに掴みかかる勢いで問い質す。

俯いたまま何も返さない船医に、全員それが真実なのだど理解してしまい、暗い雰囲気にも包まれる。

やがて、ゾロが険しい表情のまま口を開いた。

「全員……覚悟はあったはずだ……かりにも……敵」として現れたロビンを船に乗せた——それが急に恐くなった立って逃げ出したんじや締まらねエ」

カツン、と鞘に収めたままの刀を握り、地面を叩く。

やけに響いて聞こえたその音に、ルフィ達は思わず強張った顔で目を伏せる。

仲間だと思っていた一人が引き起こしたとされる事件。

危険な相手だと一時は認識していた彼女を受け入れたのは、他ならぬ自分達なのだど突き付けられた気分だった。

「落とし前つける時が来たんじやねエのか? ……あの女は「敵」か「仲間」か……」

容赦のないゾロの言葉に、誰も何も言えなくなる。

やがて全員の脳裏に、サンジとチョッパが聞いたというロビンの不穏な言葉が蘇っていた。

——事態はもっと悪化する。

今日限りでもう……あなた達と会う事はないわ。

「……………ロビンは確かにそういつたんだな、チヨツパー」

「うん」

もう一度確認しながら、一味はしばし考え込む。

暗殺未遂という物騒な事件、その容疑者とされた女が残した言葉が、嘘や冗談だとはとても思えない。何かが起こるはずだと、確信していた。

「今日限りでもう、会う事はねエってんだから、今日中に何かまた事態を悪化させる様な事をするって宣言してる様にも聞こえる」

「市長暗殺未遂でこれだけ大騒ぎになったこの町デ…もっととヒドいことって言ったら……方法は一つしかないネ」

スツ、とリンが視線を移し、ある方向を見やる。

ガレーラカンパニー本社、アイスバーグとヴィルヘルムがいる場所だ。

「今度こそ…『市長暗殺』」

「そう考えるのが自然だな」

「——だが、おぬしらに罪を被せているとわかった以上、おぬしらを現場におびき寄せる『ワナ』とともれル……」

次にロビンが現れるのはそこだ、と一味が考えた時、それまで黙っていたフーがそう告げる。

仮面に隠した顔を険しくし、鋭い眼光でルフィ達を睥睨しながら、全く気遣う様子のない冷徹な声で言葉を紡ぐ。

「今夜また決行される暗殺の現場におぬしらがいたら、*「罪」*は簡単にふりかかろ

「ちよつと!!? それじゃあ本当にロビンが敵だつて言つてみたいじゃない!!?」

「爺さんは可能性の話をしてるんだ。おれもだいたい同じ事を考えてた」

あまりの冷たさに、思わず食つて掛かりそうになるナミをゾロが止める。

仲間にかけられた疑惑、仲間の離反、離脱。多くの事があり過ぎて、困惑しつばなしの全員を、思考を冴えさせたまま纏める。

彼の言葉で、ようやくルフィ達の気持ちも落ち着き始めた。

「信じるも疑うも…どつちかに頭を傾けてたら…真相はその逆だった時、次の瞬間の出足が鈍つちまうからな」

「…事が起こるなら今夜だね、*「現場」*へは? 船長」

「行く」

一切迷うことなく、ルフィは答える。

本人がどう言おうと、わけもわからないままに別れたくはないと、自ら事件の渦中に

突っ込むことを決める。

覚悟を決める船長を見やりながら、ナミが頬杖をついて肩を竦めた。

「行くのは構わないけど……問題があるのよね。サンジ君はロビンが誰かと一緒に歩いているのを見たと言ってたでしょ。アイスバーグさんも……同じ証言をしているの、仮面を被った誰か」って」

「そいつに悪い事させられてるんじゃないか!? ロビンは!!?」

「その考え方が『吉』、そいつとロビンが本当の仲間ってのが『凶』だ」

希望的観測でしかない、自分達に都合のいい予想。

しかしルフィ達にとってはそうである事が、この状況を乗り越えるための微かな希望であった。

「……………だけど『仮面』ってだけじゃ何の手掛かりにもならない。現場に行って何をするんだ?」

「ロビンを捕まえるんだ!!! じゃなきゃなんもわからねエよ」

「確かに……考えるだけ時間のムダだな」

「あノ……………ニコ・ロビンは世界政府が20年……捕まえようとして、未だにムリだったのでハ……」

「でも真相を知るにはそれしかないわね」

「よし！ おれも頑張るぞ！」

不安はいくつもあるが、今なせることはそれしかないと立ち上がる一味。

ぎこちなさを滲ませたまま、各々でやる気を滾らせていく彼らを見やり、フーとランファンがリンの方に振り向いた。

「若、如何すル？」

「…乗りかかった船だ。おれも手を貸すヨ」

「そうか」

一味ではないが、ここまで乗せてもらった恩、そして事件に巻き込まれた彼らへの同情もあり、このまま同行する事を決める。

彼の決意を聞き、ルフイ達も拒否することなく、共に行く事を認める。

「じゃあ、行こう」

高潮の気配が近づく中、ルフイ達は表情を引き締め、再びガレーラの本社を目的地に定めた。

??

ガシャン！と、轟音と共にカウンターが破壊される。

酒場にいた客達はギョツとし、破壊跡の中心で蒸気を噴き上げる男に、戦慄の目を向けていた。

「……………おーおー、どうしたんら急に」

隣でジョッキに口をつけていたココロが、突如拳を叩きつけたフランキーに胡乱気な目を向ける。

グリードやモズ・キウイも、突然怒りを露わにした彼に、不思議そうな目を向ける。「何だ、どうかしたのか兄弟？ 急にブチギレちまって…」

「アニキ——？」

「アアツ!!! ムシヤクシヤしてきたっ!!! そろそろもう一暴れ始めるかア!!!」

グリード達が尋ねるや否や、フランキーは大きな声で吠え、そのまま大股で酒場を出て行ってしまう。

呆気にと取られていたモズとキウイは、ハツと我に返ると慌てて彼の後を追いかける。

「あー！ アニキ、待ってだわいな!!？」

「ごちそう様だわいな、ブルーノ！」

呼びかけられるも、フランキーは一切振り向くことなく、夜の街に向かつていく。

追いついたグリードだけが、訳知り顔で肩を揺らして笑っていた。

「ガツハハハ……………まったく、我が兄弟は素直じゃないねエ」

「うるせエ!!!」

仲のいい兄弟分の揶揄いにも怒号を浴びせ、ずんずんと鼻息荒く突き進むフラン

キー。

酒場に残されたココロは、そんな彼を呆れた様子で横目で見やっていたのだった。

その夜、ガレーラカンパニーはかつてないほどの嚴重体制をとっていた。

数十から百数十人もの船大工達が整列し、本社の周りをがっちり囲み、外にらみを利かせる。

大工道具で武装したその姿は、まるで軍隊のようだ。

「隙間なく整列〜!!? ガレーラカンパニー!!?」

「「「おう!!!」」」

「ネズミ一匹中に入れるな!!!」

「「「オオ!!!」」」

本社に近づく者全てを排除する、そのつもりで集まった彼ら。

社内でも、ガレーラカンパニー有数の実力者である五人が、社長室の前で並んで椅子に座り、待ち構えていた。

「来るなら来いイ!!! ウオオオ〜〜!!!」

『うるさいポッポー、静かにしろ!!? タイルストーン!!?』

やる気を漲らせる豪傑タイルストーンに対し、ルツチの肩にとまったハットリが鬱陶し

そうに目を細める。

その隣ではカク、ルル、パウリーが同じく鋭い眼光で虚空を睨みつけ、賊が現れるその時を待っていた。

「海列車」にや乗ってねエそうだ」

「まだこの島のどこかにおるんじゃないや……しかしこれだけの護衛の中現れたらバカじゃぞ」

「今日の昼日中からバカがここへ突っ込んで来たと聞いてるぞ。常識で考えるな……！！？」

社外も社内も、凄まじい殺気で満ちる中。

少し離れた場所、本社を見渡せる位置についたパニーニヤとセレネも、敵が現れるのを今か今かと待っていた。

「さて……連中はどこから来るか……！！？」

「——ていうかパニーニヤさん、あなた血が苦手なのにここに来て大丈夫なんですか？」

「我慢する!!! 社長と教授の仇と……エレノアの信頼を裏切った報いを受けさせてやるんだ!!!」

「はア……そうですか」

暑苦しい理由でこの場に参戦しているというパニーニヤに呆れつつ、セレネも鋭く辺

りを見渡す。

父とその友人を傷つけた悪漢を赦す気は、無論彼女はさらさらなかった。

「ンマー…何もここまでして貰わんでも…」

「みなさん自発的に……………」

「まるで王様だよ……………」

社長室では、それぞれでベッドに腰かけたアイスバーグとヴィルヘルムが、外から聞こえてくる雄叫びやどごうに思わず半目になる。

カリファもやや苦笑しつつ、アイスバーグ達の最も傍に控えている立場からか、真剣な眼差しで外を見つめていた。

「……………」とところでお二人は、なぜお部屋にニコ・ロビンの手配書を？」

ふと、視界に入った一枚の手配書を見て、カリファが疑問を抱く。

アイスバーグは小さくため息をつき、自分も手配書を見やり、眉間にしわを寄せる。

「気になるかね……………」

「……………」少し

「知らん方がいい……………」

気になる、といった様子を隠さないカリファに、アイスバーグがきつぱりと告げる。

宙に向けられた彼の眼差しは、まるで悍ましい何かを見ているような、近寄りがたい剣呑さを放っていた。

「アレは……………『悪魔』だ」

「どこだア~~~~!!」 麦わらア!!!

どすどすと地面を踏み鳴らし、フランキーが怒号と共に町を練り歩く。

高潮の時機を迎え、街の住人が船大工を除いて皆家に引きこもった中を、サングラス越しに鋭い眼光を放って突き進む。

「少しは骨のある奴に見えたがな、出てきやしねエっ!!!」

「そりやよオ、兄弟…いまや連中は町中のお尋ね者なんだぜ。逃げ回んに必死なんだろうよ」

「そうだわいな」

そんな彼の後ろをついていくグリッド達が、復活した怒りが収まらない様子のフランキーを宥めるように言う。

黙っていたフランキーはふと、何故かカニのように横歩きになっているモズとキウイに目を向けた。

「……………ところでお前ら、どうした。何やってんだ」

「……………あたしら正面からの強風に弱くて！」

「やめちまえそんな髪型!!！」

四角く、板の様に広げた髪型の二人。

高潮が運ぶ風のせいでバランスをとりづらくなっている彼女達に、いい加減鬱陶しかったのかグリードが吠える。

鋭いツツコミを無視し、モズ達はフランキーに訝しげな目を向ける。

「それよりアニキ、今日は荒れ方が変だわいな！ 何かため込むなんてアニキらしくないわいな」

「うるせエ!!! おれは今週こうなんだ!!!」

怒りの由来を告げぬまま、また歩く速度を上げるフランキー。モズ達にとっては頼りがいのある彼が、今夜はなんだか違って見える。

不思議がりながら、煮えたぎる怒りを持って余しているフランキーを見つめ続けていた時だった。

「あ~~~~!!? アニキ~~~~!!!」

「グリードさ~~~~ん!!!」

どこからともなく、フランキーとグリード、それぞれの子分達の声が聞こえてくる。全身に包帯を巻き、杖を突き、ポロポロの姿のままの彼らは、フランキー達を見つけ

てよろよろと駆けよって来た。

「あいつら!!? ブチのめしてくれましたか!!?」

「いや、まだだ。とんでもねエ邪魔が入ってよ、逃げられた……!!?」

「ええ!!? 怒りのアニキ達から逃げた!!? なんて運の強エ奴等だ」

敬愛する兄貴達なら、きつと軽く一捻りにし、仕返しを果たしてくれると思つていた子分達。

仇が五体満足であることに驚愕し、どよどよと仲間内で目を見合わせた。

「———そうか、しかし、あの『弱々長つ鼻野郎』が一人で船の修理してやがったんで、てつきりアニキが他の奴らヤツちまってくれたのかと」

「あッ!!?」

愕然とした様子を見せる子分の一人、ザンパノの眩きにフランキーが反応する。

怒りに満ちていた彼の眼が見開かれ、悪意に満ちた表情に変わっていく。

我が家に単身乗り込み、しかしまるで相手にならない貧弱振りを見せた男の顔を思い出し、にやりと口角を上げていく。

「ほくくウ……いるのか、一人……」

「え……ええ、船に」

「二人いるなら話は早エ……そいつを使って全員、引きずり出せるじゃねエか……!!!」

浮かび上がった悪鬼のような笑顔に、子分達はまた騒ぎ出す。

グリードもまた、兄弟分の雰囲気が変わりだしたことで、楽しげにげらげらと嗤い声を上げる。

「うおおっ!!? アニキがワルの顔をしている!!!」

「ガツハハハ!!! いいねエフランキー!!? おれ好みの顔だ!!!」

「…じゃあおめエら、今からこう叫んで町中をねり歩け…!!!『長つ鼻を預かった!!? 海に沈められたくなかったら、橋の下の倉庫へ来い!!! フランキーより』と。おれアこれから、その通りに実行する…!!!」

「おお!!! わかりましたアニキ!!! お任せをオ!!!」

ギリリ、とフランキーの眼が光る。

屈辱を味わわせてくれた一味、その全員を叩きのめす事の出来るチャンスに、水の都の顔役達は醜悪に嗤い続けるのだった。

第185話 // 事態、動く //

双眼鏡から覗いて見えた本社前は、圧巻といつて差し支えなかった。

数十、数百人もの船大工達に囲まれたそこは、難攻不落の城の前に見えたほどだ。

見張り役を担ったチョップパーは双眼鏡から目を離し、思わずごくりと息を呑んでいた。

「みんな武器持つてて強そうだぞ!!?」

「……………そりやあそうでしょ、海賊だつてねじ伏せちやうのよ、ここの船大工達は」

「こりやあ下手に突つ込んだら大変な事になるぞ!!?」

「そうだな…!!?」

「……………どの口でそんな事を言っているル…」

真昼間から、それも真正面から窓ガラスを派手に割つて侵入したルフィとリンが眩くには、あまりに相応しくない言葉。

フーやナミが呆れてしまうのも仕方はなかった。

「何か動きがあったら、すぐ知らせろよ」

「うん、わかった」

「夜は長エが気を抜くな……今夜のチャンス逃したら……何のわけもわからぬままお別れだ。もう二度とロビンを追うアテはねエと思え……!!?」

「絶対捕まえてやるさ!!?」

たったの一言もない別れの言葉。あつたとしても到底納得できるものではない。

事の真偽を全て解き明かすため、ルフイ達はじつとガレーラにおける異変に備え、息を潜めるのだった。

そして、その時は訪れた。

『プルルルルルル……』

とある場所、とある建物の屋根の上に現れた、仮面で顔を隠した男女二人組のもとに、一本の電話がかかった。

それに、熊の被り物をした大男が応じ、受話器を手取る。

『ガチャ……準備はいいですか?』

「いいな、ニコ・ロビン」

「ええ……いつでも」

『——では私がかく乱させますので……他4名は合図の後、それぞれ任務を実行して下

さい』

無慈悲な声で、冷酷に指示が放たれる。

その声に、仮面の女——ロビンはすうっと大きく息を吸い込む。

次の瞬間、ガレ—ラ本社の前で大きな爆発が発生した。

「何だ!!? 砲撃か!!?」

「いや、どこからも飛んで来てないぞ!!!」

「セツトされてたんだ!!?」

突然の事態に、目を見開き右往左往する船大工達。

少し離れた場所にいたパニーニヤとセレネも、異変に気付き血相を変え始める。

「オラア——!!? どのどのどいつだア——!!!」

「あつ……ちよつとパニーニヤさん!!!」

血気盛んに、爆発がした方へと駆け出していくパニーニヤ。

セレネが止めようとするも、機械鎧とは思えないパニーニヤの俊足には追い付かず、

あきれ顔で虚しく手を下げる。

そしてその異変には、様子を伺っていたルフィ達の目にも映っていた。

「うわ——!!? 爆発したぞ——!!!」

双眼鏡を除いていたチョッパーが叫び、ゾロ達が身構える。

最初の事件のように音もなくやって来るのかと思えば、予想外に派手な爆発音が響いたため、どこもかしこも大騒ぎになっているのが見え、聞こえた。

「始まったようだネ……!!?」

「……………うわあ——…もうだいたい騒がしいぞ!!?」

おそらくはあの騒ぎの中に、ロビンと真犯人たちが紛れ込んでいる。

今すぐに向かいたいところだが、あの状況に飛び込んでしまえば犯人の一味と認識されるに決まっている。

緊急の事態だからこそ、落ち着かなければならなかった。

「ン? ルフィはどこダ?」

「「「えっ?!」」」

の、だが。

彼らの船長はやはり、その辺りの事情を理解していなかったようだった。

外がそう、突然の事態によって混沌とし始めた時、彼らは現れた。

何の変哲もない壁が、突如人の形に浮き上がったかと思うと、そのままドアとなつて開かれていく。

そこから現れた熊の被り物の男に、アイスバーグとヴィルヘルムはギョツと目を剥いて

た。

「……………驚いた…いずれ来るとは思ったが……………」

熊の被り物の男がドアを壁に押し込むと、ドアはピタリと嵌って、跡形もなく元に戻ってしまふ。

それが昨日の再現だと理解し、アイスバーグ達の表情が緊張で酷く強張る。

「悪魔の実の能力者だったか…」

「“ドアドアの実”だ。どんな堅い壁でもおれの触れた部分は“ドア”になる。壁さえあれば、おれはどこでも出入りできる」

不敵に告げた熊の被り物の男が、懐から取り出した銃を構える。

すると、彼は何の前触れもなく引き金を引き、ベッドに横になったままのアイスバーグ達の足を片方ずつ撃ち抜いてみせた。

「何を…合図はまだよ」

「喋る元気がある者を弱っているとは言えんな。名コックが食材の下準備を怠らない様に、約束の合図の時間までに予想に反する行動を取らせない様、手を抜かず動きを止めておくのが“プロ”の仕事だ」

呻き声をあげ、ベッドから転がり落ちる二人を見下ろし、男と共にいたロビンが咎めるような目を向ける。

それに男が平坦な声で答えると、ヴィルヘルムが齒を食いしばりながら、吐き捨てるように呟いた。

「——それが……………!!? “CP9”の…やり方か……………!!!」

「……………読みがいいな……………その通り」

その名を口にしたことが意外だったのか、思わずと言った様子で呟く謎の男。

平然と肯定の言葉が返ってきたことで、アイスバーグとヴィルヘルムは眉間にしわを寄せ、深く嘆息する。

「…悪い事したな、 “麦わら”には…」

「彼はやはり……………関わっていなかったのか…」

船大工達に向かわせ、銃を突き付け、島中に指名手配した青年達。

何も知らないと繰り返していた彼らへの申し訳なきで、二人は項垂れる。胸中はどう、彼らへの申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

ロビンはそれに、冷静な目を向けたため息交じりに呟いてみせた。

「気にする事もないでしょう? あなた達は昨夜、私を見たという事実を言っただけ」

「——それも作戦の内か……………」

「そうだ。お前達を生かし、海賊に罪を被せる為のな」

何一つ悪びれることなく、熊の被り物の男は語る。

正義のために動く彼にとって、悪である海賊をどう扱おうと一切良心は痛まない。それが人殺しの汚名を着せる事であつてもだ。

「——それにお前達を突然殺してしまつては、おれ達の目的である例の……とある船の設計図」のありかがわからなくなつてしまふ」

男の言葉に、アイスバーグ達はさらに歯を食いしばる。

もつとも知られられなかつた事、知られてはならなかつた事を見抜かれ、内心で冷や汗が滝のように流れ落ちる。

決してそれを渡してはならないのに、それが存在することを知られている事が恐ろしくて仕方がなかつた。

「——そして選んだ男が一番ドツク職長、パウリーだつた……今、彼の元に我々の同胞が行つている」

「……………全てはお前らの……思惑通りというわけか」

心の底から悔しさを表すように、床に額を押し当てるアイスバーグ達。

熊の被り物の男はそれを愉しげに見下ろし、次いで大きな騒ぎ声が響いてくる室外に目をやる。どこことなく、鬱陶しさが滲んで感じられた。

「——最後まで不備のないよう……おれは扉の外の大工達の相手をしてくる。ニコ・ロビン、この男達の始末は後はお前がやれ。パウリーから設計図を奪つたら、二人から

連絡が入る……その時点で、アイスバーグの命を取れ!!!」

その場に佇んだまま、何も口にしないロビンにそう告げ、熊の被り物の男が出入りに向かう。

扉に手をかける前に一度立ち止まり、ロビンの方を見やって再び口を開く。

「——あとは事の真相を知ったパウリーを消して、任務完了だ。その後の罪は全て〴〵わら〴〵の一味が被ってくれる」

嘲笑うような響きを声に乗せ、熊の被り物の男は、大勢の船大工達で溢れかえる室外へと踏み出していった。

そして、場面は本社の外に戻る。

突然いなくなつたルフィに戦慄しつつ、ゾロ達は騒然としたままの本社を目指す。急がなければ、船長が取り返しのつかない事をするかもしれないのだ。

「まったくも——!!? 何であいつはこう……人の〴〵助言〴〵ってものを聞けないの!!?」

「何を今更……」

「おぬしらも大変だな……」

「ちよいちよいフーじい様? 〴〵も〴〵ってどういう事?」

ゾロ達に同情の眼差しを送るフーの眩きに、リンがすかさず反応する。

しかし、嘆いてる暇はないと全員で考える。いなくなったのなら仕方がない、今後自分達はどう動くべきかを考える必要があった。

「でも…!!?」今の騒ぎの中にロビンがいるかも知れないんだよな!!? おれ達はどうするんだ!?」慎重にいかないか……!!?」

「だけど、そこがまた考え様によつてはラツキーなのよね」

焦りを隠しきれないチョッパーが問うと、ナミが考えながら呟く。

この状況でどうすることが最適か、そしていなくなつたルフィが一体どこに向かつているか、それを考えたナミはある可能性に思い至る。

「ルフィが敵陣に乗り込む場合…裏へ回つたり横へ回つたりすると思う?」

「そりやねエ」「ねエねエ」「ないネ」「ないナ」「ない」

ナミの問いに、全員で否定の言葉を口にする。

リン、フー、ランファンでさえ、それほど長く共に過ごしたわけではないのに、ルフィの思考をほぼ理解してみせていた。

「きつと今頃飛ぶか走るかで『真正面』からのりこんで、屋敷に入ったはいいものものどこへ行つたらいいかわからず、船大工達に追いかけて回されてる頃だと思わない?」

「ああ…思う」「思う思う」「確実にそうだと思う」「それ以外にないと思う」「間違いないと思う」

今度の問いには、全員で肯定の頷きを見せる。想像してみれば、一切のよどみなく言われた通りの状況を思い浮かべる事ができた。

誰一人疑うことなく、ナミの言った通りになっていると確信を持っていた。

ゾロはそこで、自分達の向かう方向を見つめながら、にやりと不敵に笑みを浮かべる。

「成程、ルフィのお陰で今、侵入の絶好のチャンスつてわけか…」

「納得だ——!!? じゃあ飛び込んで大丈夫だな」

「あの扉を飛び越えられそう!!?」

「よし、入るカ!!?」

迷うことなく、確認することなく、ゾロ達は思い切り跳躍し、ガレーラ本社を囲う鉄柵を飛び越える。

そして—— 商売道具を手に集まっている船大工達と対面し、ピシリと凍りついてしまった。

—— どころが手薄だア——!!!

ルフィの姿は、そこに影も形もありはしなかった。

ガレーラ本社内は、まるで地獄のような有様となっていた。

爆発の直後現れた、仮面を被った何者かが暴れ回り、屈強な船大工達を次々に行動不

能に陥らせていた。

職長ルルでさえ容易に捕らえられない襲撃者への恐怖と驚愕は、社長室がある3階にまで辿り着きつつあった。

「誰か!!! 社長室と寝室前に来てくれ!!! 3階の護衛が全滅してる!!!」

その声に、侵入者を捕らえようと持ち場を離れていたマイルストンやパニーニヤ、そして不安になって階を上がってきたセレネが反応する。

「どういう事ですか…?!? カクさんとルツチさんがいるはずですよ?!?」

「何があった?!?」

社内で一、二を争う実力者。

多少腕に覚えがある海賊を相手にしても、無傷で捕らえてきてしまうような者達がいるはずなのに、ここまでの暴挙を赦してしまっている。

信じられない気持ちを抱えたまま、社長室の前まで戻ってきたマイルストン達は。

血まみれで沈黙する職長達——カクとルツチの姿を目の当たりにし、愕然とその場に立ち尽くした。

「カク!!! ルツチ!!!」

「……………やれやれ、早く任務を終えねエとキリがない…連絡はまだか……………」

先ほどまで職長達が座っていた椅子、その真ん中の椅子に腰かけていた熊の被り物の

男が、手にした電伝虫を見つめて呟く。

その姿に、タイムストーンとパニーニヤの怒りが頂点に達した。

「おのれエっ!!! よくもカクとルツチを!!!」

「コンニヤロ——!!!」

仲間を、同僚達を虫けらのように蹴散らした襲撃者、その一人に間違いない怪しい装いの男に、二人の敵意が爆発し襲い掛かる。

愛用の鋼鉄の鎚、義足に仕込んだ刃を振りかざした彼らは。

「怪力が自慢か?」

ドガンツ、と凄まじい音を立てて碎けた獲物を目の当たりにして硬直し。

顔面に叩きつけられた拳により、あっさり意識を手放してしまっていた。

「タイムストーンさん!!!」

一瞬我を失っていたセレネが叫ぶも、尋常でない一撃を喰らった二人はピクリとも動かない。

血まみれで倒れる二人を前にし、セレネもカツと頭に血を昇らせ、錬成陣が刻まれた腕輪を手首に嵌めて前に出る。

「父さん達に手出しはさせない……!!?」
//サンダラー
「壊音の霹靂!!!」

バンツ!と床に手袋をはめた掌を叩きつけ、青い閃光を走らせる。

床の木材が變形し、幾丁ものライフルへと変わったそれから放たれた銃弾が、真っ直ぐに熊の被り物の男の脳天に迫る。

「無駄な事を………『嵐脚』」

だが、放たれた銃弾は容易く躲かれ、男が軽く足を振り上げる。

すると、突然セレネの胸元から鮮血が噴き出し、声も発することもできずに倒れ伏してしまった。

「ロロノア・ゾロだア!!! とうとう姿を現しやがった!!!」

「他の奴も昼間見たぞ!!!」

「絶対逃がすなア!!!」

「麦わらの一味だア!!!」

ゾロ達は只管に走る、走り続ける。

警備が薄くなるどころか、のこのこと真正面から入って船大工達の注目がたくさん集まってしまったため、自分達が必死に逃げ回る羽目になっていた。

「ぎゃあ〜!!!」

「ちよつと何でルフィいないの!!!」

「知るかよつ!!!?」

「こりやホントにマズイネ!!!」

獣状態のまま、二足歩行で逃げるチョツパーの悲鳴が響く中、ナミが半ば八つ当たりの勢いでゾロに叫ぶ。

だが、ゾロもリンも逃げるのに必死で考えている余裕などなかった。

「くつそオ……………!!? もう、こうなつちまつちやどの道おれ達ア『現行犯』みてエなもんだ……………!!?」

不意に、ゾロが逃走を止めて停止する。

腰から刀を抜き、覚悟を決めた様子で構えだす彼に、ナミはハッと困惑の目を向ける。
「え!?? ちょっとゾロ、何すんの!!?」

「屋敷の周りを逃げ回ってても仕方ねエ!!? 正々堂々正面から突破してロビンを探す!!?」

「それしかないネ…………」

ゾロが船大工達を睨みつけてそう告げると、リンもその場に留まり剣を抜く。
戦う気を満々に見せるゾロとリンに、チョツパーが思わず待ったをかけた。

「だけど相手は船大工だぞ!!? 敵じゃないんだぞ」

「大丈夫……………!!?」

「『峰打ち』にするかラ」

にやり、と笑みを浮かべ、二人は刃をきらめかせて飛び出していく。

次々に襲い掛かる船大工達に、ほぼ本気の情け容赦のない一閃を叩き込み、吹っ飛ばしていく。

あつという間にガレーラの中庭は死屍累々の惨状となり果てていった。

「道をあけるオ!!!」

「致命傷与えてますけど!!?」

ナミとチョツパーのツツコミが入るも、二人は止まらない。

意気揚々と刃を振るう男達に、フーとランファンは心底呆れた様子で肩を竦めていた。

第186話 “正義の暗殺者”

「ンマー……驚いた……正直……ここで会う事になるとは思ってもみなかった………ニコ・ロビン」

全身を隠していたロープのフードを外し、露わになった女の顔。

それを目の当たりにしたアイスバーグとヴィルヘルムは、深々と息を吐き、目を細めていた。

「——どこかでお会いしたかしら」

「昨夜が初めてだよ………だが我々はずっと……君に会いたかった」

訝し気に眉を寄せるロビンに、アイスバーグ達は意味深に呟く。

すると次の瞬間、二人と一人は懐から銃を抜き出し、互いの眉間に銃口を突き付け合う。

能力を駆使し、四丁の銃を構えながら、ロビンは険しい表情で二人を睨みつける。

「殺す為………?」

「そうだ、お前が世界を滅ぼす前に……!!」

親の仇でも見るような凄まじい敵意を持って、アイスバーグ達もロビンを見据える。

僅かにでも動けば、躊躇いなく引き金を引く気迫だ。

「『歴史の本文』を求め、研究・解読することは……世界的な『大罪』だと大昔から政府が定めている。そのくらい承知のハズだよ……!!」

「なぜあなた達が『歴史の本文』の存在を……」

「存在を知る程度なら罪にはならん……だが——おそらく今、世界中でその文字の『解読』ができるのは、君一人だけだ。だからこそ、当時8歳という幼い少女だった君の首に、政府は高額の賞金を賭けた」

困惑気味に呟くロビンに、ヴィルヘルムが冷や汗をかきながら語る。

二人の容体は、熊の被り物の男に撃たれた直後のまま。早く手当てをしなければ、出血で命にかかわるかもしれない。

だが、痛みが気にならないほど、彼らは目の前の女に集中していた。

「——君が世界で唯一……『古代兵器』を復活させられる女だからね」

「……兵器の事まで……」

ますます困惑するロビン。

市長とその右腕とはいえ、一市民が知るはずのない、政府が存在そのものを隠している恐るべき兵器について知っていることが、不思議でならなかった。

「……………『CP9』は実在の機関だったか……」

「となれば君はすでに『麦わら』の一味を離れ、『政府側』に加担しているという事になるね……政府に追われ続けているハズの女の行動としては奇つ怪ではあるが……私達にとっては関係のない話だ……」

色々と不可解な点もあるが、それに構っている暇はない。その一挙一動によつて、世界を滅ぼしうる女が目の前にいるのだ。

かつてとある島にいた、兵器復活を求めたという一団の生き残りである彼女を、放置する気はさらさらなかった。

「『歴史の本文』の解読によつて『兵器』が復活すれば、それを持つ者が正義であれ悪であれ、結果は同じだよ……兵器が人の世にもたらすものが……『平和』であるわけがない……世界は滅ぶ。過去の『遺物』など、呼び起こすべきではないんだ!!!」

その時、ロビンの目に強烈な軽蔑の光が灯る。

嫌悪と憎悪を持つて吠えたてるアイスバーグ達に対し、それと同じかそれ以上の熱を孕んだ目で睨み返す。

しかし、それはやがて諦めたように薄れてしまった。

「——そうね、そう思うわ。だけど大きなお世話……!!? 私がどういう形で歴史を研究しようとも……見知らぬあなたに口を出される筋合いはない!!?」

「——それでもねエ……おれ達もある意味、お前と立場が同じだから……」

荒い息をつきながら、悔しさを顔中に出しながら、アイスバーグは告げる。

静かに苛立っていたロビンが、一瞬で驚愕で表情を変える程の、衝撃の事実を。

「おれ達ア古代兵器『プルトン』の『設計図』を持っている!!!」

「……………兵器の設計図?」

プルトンとは、遠い昔このウォーターセブンで造られた『戦艦』の名だった。

あまりに強大な兵器を生み出してしまったかつての造船技師は、万が一その力が暴走を始めた時への『抵抗勢力』として、その設計図を代々後世に引き継がせたのである。

本来であればロビンに対して、そして政府に対しての切り札となるものであった筈なのだ。

「——政府は…:そいつを狙って…:ついにはこんな強行な手段に出やがったのさ。そんな事も知らずに、奴らに協力しているとは…:呆れたな」

愕然とした様子で立ち尽くしているロビンに、アイスバーグは鼻を鳴らしてそう言う。

どういう目的で彼女が今回の凶行に混じっているのかは知らないが、プルトンの事について何も知らなかった様子が、滑稽に見えていた。

「……………私達に設計図を託したトムという男は…:20年前『オハラ』から唯一逃げ出した少女の事をずっと気にかけていた。幼い姿はしていますが、『オハラの悪魔達』と同じ思

想を持った危険な子だと……だから製造者の意志を汲んだ私達には、君を止める責任がある……」

「設計図の存在を政府に勤づけられた今となつては……本来なら、もう燃やしちまつた方がいい様なもんだが……そうできねエのは……!!! お前が生きていて……!!! 兵器復活の可能性が消えねエからだ!!!」

銃口を突き付け、目を吊り上げ、アイスバーグとヴィルヘルムが吠える。

二人の引き金にかかった指に、ゆっくりと力が入り始めたその瞬間。

ロビンが能力を使用し、関節を極め、仰向けになつた彼らの顔にそれぞれ銃口を突き付け、抑え込んでみせた。

「死ぬ前に……言っておきたい事は……それでいい?」

ロビンは問う。

自分を殺したところで、止めたところで、設計図を奪われてしまえば結果は同じなのではないかと。

その問いに、命の危機にある二人は平然とした様子で答えた。

「……じゃあもう一言だけ、言わせてくれ……作戦にハマつたのは……!!! お前らの方だ」

アイスバーグは、パウリーにある指示を与えていた。

金庫にある設計図を預け、どこかへと持ち出してくれるようにと。

しかしそれは偽物、いざとなれば放り出して逃げると言われていたが、パウリーは応戦し捕らえられていた。

余計な時間をとられた仮面の男達は、苛立たしげに電伝虫を使用する。

『おれだ。作戦に障害が発生した。全員すぐに“寝室”へ。アイスバーグはまだ、撃つな』

計画に大きな問題が起こったことで、本社内部で暴れ待っていた四人が寝室へと集結する。

集まった忌々しい襲撃者達を前に、アイスバーグ達が見せたのは、凄まじい剣幕と罵声だった。

「帰れ!!! おめエらに渡す物などない!!!」

命を狙われ、命より重要な設計図を狙われ、アイスバーグ達の怒りと焦りは頂点に達している。

その時、羽搏きながらやってきて、仮面の集団の一人の肩にとまったそれを目の当たりにして、二人の表情が一瞬で凍り付いた。

「まず、何から話せばいいのか…死にゆくあなたに」

ため息交じりに呟き、一人が牛の仮面を外す。

それに応じ、他の者も次々に仮面を外し、各々の正体を露わにしていく。

晒された襲撃者達の素顔に、アイスバーグもヴィルヘルムも、もう微かな声もあげられなくなっていた。

「あなたにはがっかりさせられた」

「あんたが悪いんじゃないぞ……政府が大人しく申し出とるうちに……渡さんからこうなる」

「——できる事ならあなたを傷つける事なく、この町を思い出したかった」

「頑固さも師匠ゆずりか……」

そこにいたのは、アイスバーグ達を長年支え続けた優秀な部下だったはずの三人と、裏町ですっと店を構えていたはずの男。

ルッチ、カク、カリファ、そして酒場のブルーノだった。

「君達は……政府の人間だったのか……!!!」

「そう……潜伏する事など我々には造作もない任務……しかし、あなたの思慮深さには呆れて物も言えない……!!!」

絶句し、固まったままのアイスバーグ達に、これまで一度も声を聞いたことのないルッチが饒舌にしゃべる。

「古代兵器プルトンの設計図——そのありか……多くの犠牲を出す前に、お話し下さい」
忠実だったはずの彼が、軽蔑の眼差しさえ交えてアイスバーグ達を見下ろすその姿が、まるで信じられない。

悪い夢か何かだと言われた方が納得できるような、信じがたい光景。しかし、二人共撃たれた痛みが確かにあり、これが現実であることをはつきりと示している。

「我々が潜伏していたのは5年……ご安心を、仕事は手を抜かずに行いました。意気消沈お察しする……しかし——我々がこの件に費やす時間も……制限時間を迎えましたので。目的遂行の為、ここで最善を尽くす気構え。あまり考えのない抵抗ならばしない方がよろしい」

裏切った立場でありながら、いけしやあしやあと語るルッチに、次第にアイスバーグ達の顔が刺々しくなっていく。

それに構うことなく、ルッチはハットリに頼ることなく、恐ろしく残酷な事を口にしてみせる。

「——あくまで『正義』の名のもとにですが……我々は……政府に対して非協力的な『市民』への……『殺し』を許可されている」

カツ、と怒りが頭に昇ると同時に、ぞつと背筋に寒気が走る。

本来人を守るべき組織である政府。それが裏で平気で人を殺めているなど、凄まじい

矛盾にしか聞こえない。

「身勝手な……!!?」 正義と名のつく殺しがあつてたまるものか!!」

「世界政府は一部……考えを改めたのです。兵器の復活を危惧し続けるより——いつそ兵器を呼び起こし、この『大海賊時代』に終止符を打つ『正義の戦力にしよう』と……!!」

「話にならない……!!?」 兵器が復活すれば、世界はその力を奪い合う。被害は拡大する一方だ……!!?」

吐き捨てるように言い、さらに目を吊り上げるアイスバーグ。

端から話にならないとわかっていながら、ルッチは心底呆れた様子で二人にため息をつく。

「あなた方は政府を信用していない様ですね、アイスバーグさん……ヴィルヘルムさん」「私達は『人間の性』を知っているだけだよ……若僧君……」

精一杯の悪態と共に、ヴィルヘルムがルッチにそう告げる。

その次の瞬間、ルッチの放った強烈な蹴りがヴィルヘルムを吹っ飛ばし、彼は激しく壁に叩きつけられてしまった。

「ヴィルヘルム……!!?」

「慎みたまえ……いつまで上司のつもりでいる……」

アイスバーグが親友の身を案じるも、負傷した身体は上手く動かない。

呻き、身を震わせるヴィルヘルムのもとに、カクが無表情のまま歩み寄り、ヴィルヘルムの片手の脈をとり始めた。

「失礼」

「お二人とも。先程、実は我々に一つ仮説が生まれました…あなた方はただ、それを聞いていてくれればよい…きっとあなたの血が真相を答えてくれます」

「……そんなやわな作りはしていないよ、私は……」

「果たしてそうでしょうか……ああ、そうそう」

緊張と焦りによる心拍の変化により、秘密を探ろうとしているのだと即座に察し、小馬鹿にして鼻を鳴らすヴィルヘルム。

ルツチ達は、その嘲笑をまるで気に留めない。やがてルツチの眼が、少しでも嗜虐心を宿し、悍ましく歪められた。

「ご息女の事は……誠に残念です。あなたを守る為に勇敢に戦ったとだけ、お伝えしておきます」

はっ、と目を見開き、びくりと肩を震わせるヴィルヘルム。

その隙を、ルツチ達は見逃さなかった。

態々偽物を用意した意味。

ここまでされて誰にも渡そうとしない事。

その答えは、もう他の誰かに託してあるから。

その誰かとは、偽物の設計図の一部にすでに書かれている事。

その誰かは、かつて死んだと思われていたが、ウォーターセブンに今も尚暮らしている、ルッチ達全員がその名を知っている事。

その誰か、カティ・フラムは——フランキーと名を変えて、設計図を託されているという事を。

娘を手にかげられ、動揺したウイルスヘルムの脈を読み取り、カクは確信を持った。

「間違いなさそうじゃな……まさか、あいつとあんたにそんな繋がりがあったとは」

「ぐウ……!!! すまない、すまない……アイスバーグ……!!!」

「言うな……!!? 何も……!!!」

唯一といつていい弱点を見抜かれ、まんまと真実を見抜かれてしまったことで、ウイルスヘルムは顔を歪め、きつく歯を食いしばる。

アイスバーグもまた、彼にそうさせてしまったことへの申し訳なさでいっぱいになっていた。

「フランキーは確かに……調べても調べても素性の知れない男だったが……“解体屋”であるの横行ゆえ鼻にもかけていなかった……これで予測は一本の線になり——更にあなたの波打つ血が、それを的中だと告げた!!!」

まるで推理を成功させたかのように、ルツチは高らかに語る。

表情に笑みを浮かべる事はなく、ただ淡々と仕事を終えた報告をするように、長年にわたって騙していた元上司に告げる。

苦痛の呻き声を漏らす彼らに、ルツチは目を細め、続けて語り掛ける。

「なに：あなた方に罪はない：これだけ色々な事が起こる夜に動揺を隠せなくなるのは、血の通った人間ならば当然……」

「今日まで世話になりましたね。あんた達は、もう用済みじゃ」

「急いでフランキーを探しましょう」

「てめエら……!!」

恩義も仁義も、何もかもを踏み躪るような態度で任務の終わりを口にするルツチ達に、アイスバーグ達の怒りが再燃する。

しかし、傷を受けた彼らは彼らは動けない、立ち上がれない。

打ちひしがれる彼らが、せめてもの抵抗にルツチ達を鋭く睨みつけていたその時だった。

「うりやあああああ!!」

寝室の壁が二か所破壊され、巨大な穴があけられたかと思うと。

麦わらの青年と、三本の刀を持った青年が、凄まじい勢いで室内に飛び込んできたの

だ
っ
た。

第187話 “願い”

「ロビン!!! やつと見つけたぞ——!!!」

思いきり打ち空けた壁の穴を通り、ルファイが寝室に乗り込む。

すぐそばの壁に開いた穴からもゾロ達が出し、雄叫びを上げるルファイを見つけて目を吊り上げる。

「おい!!? ルファイ!!! てめエ一体どこに居やがったんだ!!!」

「ロビン!!? また会えてよかったぞ——っ!!?」

「…………でも、あんまり喜べる状況じゃなさそうだね」

「…………!!? ちよつと待つて、この状況何!?!」

いきなり別れを告げていなくなってしまうたロビンを見つけ、ほつと安堵の叫び声をあげるチョツパー。

しかし、彼女とともにいる黒服の集団を目にし、リンとナミ達がハツと表情を変え、ロビンと交互に凝視する。

「やれやれ……………」

「麦わら…………パウリー…………!!!」

「お二人とも……………こりや一体、どうなってるんですか!!!」

騒がしく乱入してきたルフィ達に、ルッチが心底面倒臭そうにため息をつく。

ルフィと共に入ってきたパウリーは、ルッチとその傍で血塗れで倒れ伏すアイスバグ達を目にし、真つ青な顔で立ち尽くしていた。

「何なんですか……………!!! まるでこいつらが……………!!! あなたの命を狙つ

た犯人みてエに……………!!! お前ら何でそんな格好してんだ……………!!!」

長年共に仕事をしてきた仲間。喧嘩を良くしたけれど、憎しみを抱いたことなど一度もなかったはずの三人。

そんな彼らが、こんな場所にいるはずがないと脳が理解を拒んでいた。

「パウリー……………実はおれ達は政府の諜報員だ。まア謝つたら許してくれるよな……………?」

共に日々……………船造りに明け暮れた仲間だ、おれ達は……」

わなわなと震えるパウリーに、ルッチが一切悪びれる様子もなく口を開く。

感情などまるで感じられない冷たい視線で、顔を強張らせるパウリーを真正面から見返す。

「突然で信じられねエなら、アイスバグの顔でも……………踏んで見せようか……………!!!」

「ふざけんな……………もう充分だ!!! ……ハア……………さっき聞いた『牛仮面』の声が……………お前の声と

一致するからな、畜生……………!!! ……てめエ……………!!!」

ぎりつ、とロープを掴む手に力が籠もる。

状況を理解し始めると、徐々に彼の中には怒りの炎が渦巻き出す。これまで共にいた日々、かけた言葉、決して短くない時間が脳内で再生され。

それが全て嘘だったのだと知らしめられ、感情が激しく爆発した。

「ちゃんと喋れんじゃねエかよ!!! バカにしゃがって!!!」

「やめろパウリー!!!」

アイスバグの制止の声も聞かず、パウリーのロープが放たれる。

喧嘩の中で何度も使用し、しかし殺意など一度も纏わせなかった一撃を、彼は今度は本気で殺す気で放っていた、だが。

『指銃』

ルッチが無情に呟いた直後、突き出された人差し指がパウリーの身体を貫く。

既に手ひどい傷を受けた体に、新たに攻撃を食らい、パウリーはその場がくりと膝をつく。

「まだ懲りないのか…? パウリー!!!」

ぼたぼたと鮮血を滴らせる指を掲げ、ルッチが呆れたように告げる。

ナミ達はその光景に絶句する。只指を突き刺しただけで、実際に人体が貫かれるなど、おかしな夢でも見ているとしか思えなかった。

「おい!!! ロープのやつつ!!!」

「無駄に耐えるな…おれ達は人界を超える技を体得してる」

長い訓練を重ね、人体を武器に匹敵させる武術『六式』。

肉体を鋼のように硬化させ、一瞬のうちに移動し、宙を歩き、あらゆる攻撃をかわし、道具を一切使う事なく暗殺をこなす。

それがルツチ達の——暗殺集団『サイファーポールNo. 9の武器だった。

「何で、お前らが……………!!!」

「まあいい、どの道消す命…悲しいが友よ…」

「ルツチ!!? 貴様ア!!!」

項垂れるパウリーに向け、ルツチがゆっくりと片足を振りかぶる。

一度は仲間であった相手に、躊躇いなくとどめを刺そうとする裏切り者に、アイスバーグが叫ぶも、男は止まらない。

パウリーの命が容赦なく刈り取られようとした、その時だった。

「そりやちよつとご遠慮願うヨ!!!」

ごうつ、と風の如き速さで動いたリンが、パウリーを抱えて素早く下がる。

彼と入れ替わるようにして、ルファイが思い切り駆け出しながら、無数の拳をルツチに向けて放つ。

「『ゴムゴムの』……………!!!」

『鉄塊』

「『銃乱打』!!!」

一発一発が強烈なルフィの連撃。

しかし、ルッチはそれらを平然と受け止め、微動だにせずに耐えきってしまった。

「何だ?!? 全然効かねエ!!!」

「……………うつとうしい、『剃』」

驚愕で目を見開くルフィの目の前で、ルッチの姿が掻き消える。

すると次の瞬間、ルッチはルフィの目と鼻の先に現れ、鋭い指の突きをルフィの喉に

撃ち込む。喉がびよんと伸び、ルフィは大きく吹っ飛ばされた。

「生身なら、首に風穴開いて即死だったな、ゴム人間」

咳き込みながら体を起こすルフィを見下ろし、詰まらなそうに鼻を鳴らすルッチ。

彼はパウリーを背に庇うリンや、敵意を埋めるルフィを見渡し、意味が分からないと

いう風に眉間にしわを寄せる。

「何のつもりだ…貴様ら」

「お前、こいつ殺す気だろ!!! 一緒に船大工やってたんじゃねエのかよ!!!」

「——さつきまでな…もう違う…」

「本当に裏切り者か!!! じやいいよ、とにかくおれはこいつと一緒に!!? アイスのおっさんを殺そうとしてる奴等をブチのめそうと約束したんだ!!!」

困惑しながらも、ルッチ達を明確な敵と認識したルフィが吠える。

ゾロやリン、フーヤランファンも各々の武器を構えるのを見やり、カクも訝しげな様子で口を開いた。

「……なぜお前がパウリーに味方するんじや…」

「おれもお前らに用があるからだよ!!! おい、ロビン!!! なんでお前がこんな奴らと一緒にいるんだ!!! 出て行きたきやちゃんと理由を言え!!!」

「そうよ!!? こいつら政府の人間だつて言うじやない!!? どうして!!!」

キツ、と鋭い目で、ルッチ達の向こう側に佇んでいるロビンを見つめるルフィ達。

ロビンは目を細め、鬱陶しそうに眉間にしわを寄せていた。まるで、ルフィ達の姿を見たくないとしても告げているような、苛立ちに満ちた表情だ。

「……………聞きわけが悪いのね…コックさんと船医さんにお別れは言った筈よ…伝えてくれなかつたの?」

「……………!!? 伝えたよ!!? だけどおれだつて納得できねエ!!? 何でだ!!? ロビン!!!」

「私の願いを叶える為よ!!! あなた達と一緒にいても、決して叶わない願いを!!! ……」

それを成し遂げる為ならば、どんな犠牲も厭わない!!!」

はつきりとした拒絶の言葉、それも信じられないほどに残酷な告白に、ナミもチョツパーも思わず息を呑む。

ゾロとリンは半ば予想済みだったように顔をしかめ、鋭い目でロビンを睨みつけていた。

「——それで…平気で仲間を暗殺犯に仕立て上げたのかイ? 願いつてのは…何ダ?」

「話す必要がないわ」

「正気の沙汰じゃねエ…!!? その女は…!!?」

凄まじい殺気を互いに放ち、睨み合うロビンとリン。

そこに、横たわっていたアイスバーグとヴィルヘルムが荒い息をつきながら声を漏らした。

「気は確かかね、ニコ・ロビン!!! 君は自分が何をしようとしているのかわかっているのか!!!」

「あなた達にはもう…何も言う権利はないハズよ」

ロビンはそう言って、ぎろりと二人を見下ろし吐き捨てる。

すると、アイスバーグ達の身体から幾本もの手が生え、二人の手の関節をきめ出す。

「黙っていなさい!!!」

「ぐあア!!!」「がはッ!!!」

「アイスバーグさん!!? ヴィルヘルムさん!!?」

苦痛の声を上げるアイスバーグ達に、パウリーも悲痛な叫び声をあげる。

何もできず、倒れたままの自分自身を情けなく思いながら、彼はその光景を見ているほかにない。

「誰にも邪魔はさせない!!!」

「おいロビン!!? 何やってんだ!!? お前本気かよ!!!」

「ロビン、どうしちゃったんだ!!? 本当にもう…敵なのか!!? ロビ——ン!!!」

謎の多い彼女ではあるが、ここまで残酷な事を平気でするはずがないと、ナミヤ
チヨツパーの困惑はますます深まる。

「悪いがそこまでにして貰おう…我々はこれから“重要人物”を探さなきゃならないんだ、急いでいる。この屋敷にはもう用もないし………君らにももう、完全に用がない」

悲痛に叫ぶルフィ達を鬱陶しく思ったのか、遮るようにルッチが告げる。

集まる殺気をもともせず、取るに足らない有象無象の様に見下し、どこか面倒臭そうに語り出す。

「突然だが…あと2分でこの屋敷は炎に包まれる事になっている」

「何だと!!」

「ほほう…? 此処にある証拠を全部消すつもりかい? 確かに有効だな…:…:全部お

れ達の所為にしテ」

「そういう事だ…君達も焼け死にたくなければ、速やかに屋敷を出る事だ」

不意に、ルツチの口元に笑みが浮かぶ。

船大工として働いていた時は見た事がない、あまりにも悍ましいそれに、ナミの背筋にゾツと寒気が走る。

「まアもちろん…それができればの話だが」

「———どうやら我らを消す気がしないナ。『ニコ・ロビン』も向こう側にいたい様だが…」

「船長、あいつの下船に納得できたかい?」

「できるかア!!!」

フーとリンの問いに、ルフイは怒りの声を挙げて応える。

何がどうしてこうなったかなど、どれだけ考えてもわからない。

しかし、このままロビンを行かせてしまえば、何も知らないまま永遠の別れになってしまうのだと、それだけは理解できていた。

「二階のいくつかの部屋から直に火の手が上がる……まア犯人は海賊なんだ……そんな事もあるだろう」

「…………お前ら…………!!!」

「人の仮面を被つて好き放題なんて、趣味悪いわね!!?」
「もともと汚れた仮面に不都合もなからう」

カクモルツチと同じく、まるで負い目を感じる様子も見せず、他人に罪を着せるつもりでいる事を認める。罵倒の言葉も、まるで効いた様子がなかった。

「——じゃ、私は先に行くわ」

「ああ、役目は果たした。ご苦労」

「待て!!! ロビン!!! 認めねエぞ!!!」

「またどこへ行くんだよ!!! やつと見つけたのに!!!」

仲間達に何も告げる事なく、その場を立ち去ろうとしているロビンに、慌ててルフィ達が止めようと駆け出す。

しかし、ルフィがロビンの手を掴む直前、ブルーノがそれを邪魔をする。

「どけお前エ!!!」

立ち塞がる敵を押し退けようと、ルフィが掴みかかるものの、ブルーノの怪力によりなかなか叶わない。

「どけって言うてんだ!!!」

怒りのままに、渾身の拳を振りかざすルフィ。

しかし、振り抜いた拳はブルーノの身体に弾かれ、反対に強烈な蹴りで吹っ飛ばされてしまう。

「ルフィ!!!?」

「小僧!!!」

「おいおい…!!!? CP9つてのアバケモノ集団か何かかヨ!!!?」

再び壁に激突するルフィを目にし、リンが思わず冷や汗をかきつつそう呟く。

悔し気に吠え、瓦礫を吹っ飛ばして起き上がるルフィを横目に、ロビンは振り向くとなく歩き出していく。

「行くなロビン!!! まだ話は終わってねエ!!!」

「いいえ、終わりよ。もう二度と会う事はない」

「ルフィ!!! 早くロビンをとっ捕まえろ!!!」

「うおお!!!」

本気で立ち去ろうとしているロビンを目指し、ルフィが再び躍りかかるも、またしてもルッチ達に邪魔され、通る事ができない。

ゾロも刀を抜き、カクと鏝迫り合いになるも、やはり押し通る事ができない。

「行かせないってノ……!!!」

すると両者の激突の隙を縫い、リンが素早く走り出し、ロビンに迫る。

ロビンの肩を掴もうと手を伸ばすリンだったが、突如目前に現れたカリファにけりを叩き込まれ、ルフィと同じように吹き飛ばされてしまった。

「若!!!」

「……!!? あークソ、ムカつくくらい**の強さダ**、まったく……!!!」

ランファンが駆け寄り、呻き声をこぼすリンを抱き起こす。

ナミは起き上がるルフィを見やり、かつてない窮地に立たされている事に気付き、戦慄に表情を強張らせる。

「……………何なの……!!? あいつらの強さ……!!!」

「何者なんだ、てめエら」

一部の相手を除いて無敵と思っていたルフィ達を、ここまで追いつめる連中のあまりの強さに、恐怖を覚え始める。

苦戦する彼らを見下しながら、ルッチは傷ひとつついていない自身の手を見せつけた。

「……環境が違う……!!? 我々『CP9』は物心ついた頃より政府の為に命を使う覚悟と『人体の限界』を超える為の訓練を受けてきた……」

ルフィは歯を食いしばり、ルッチを睨みつける。

ゾロとリンも、自身の力をもっともしていないように佇んでいるカクたちを見据え、一筋の冷や汗を垂らし息を呑んだ。

「そして得た力が、6つの超人的体技『六式』。よく身にしみたはずだ、世界政府の重要任務を任される我々4人と……たかだか一海賊団のお前達との、ケタ違いの戦闘力の差が……!!!」

積み重ねてきた戦いの経験、それに裏付けされた圧倒的な力。

それをありありと示すように仁王立ちし、ルッチはルフィ達に真正面から語った。

「——この一件は世界的機密事項。お前達（ご）ときが手を触れていいヤマではない!!？」

第188話 “圧倒的捕食者”

ルツチが立っているだけで伝わってくる迫力に、ルフイ達はもう言葉も出ない。

声すら出せず、じりじりと身構えていると、胸元から取り出した時計を確認したカリファが、ルツチに目を向けそつと囁く。

「ルツチ、発火装置も作動の時間よ。私達も急がなくては……」

「ああ……だがせっつかくだ。最期に……面白いものを見せようか……」

カリファに頷いてから、ルツチは突如、全身に力を込めるような素振りを見せる。一瞬、筋肉が大きく盛り上がったかと思うと。

めきめきと、彼のシルエツトが大きく形を変え始めた。

「ルツチ……!!! てめエは一体……!!!」

「ギャ——!!! ギャ——!!! ギャ~~~~~!!!」

四肢はより太く、身体はより逞しく、全身を黄色と黒の模様が入った毛皮が覆い、見る見るうちに巨大に変貌していく。

その光景を見たパウリーは絶句し、チョツパーは目の前に姿を現した怪物に、大きく悲鳴をあげる。

「悪魔の実」……………!!!」

「何の実だ!!」

呆然とその場に立ち尽くすルフィ達の前で、変貌したルッチ——黒の斑点模様が目立つ、野獣の姿に変じた超人が、唸り声とともに名乗ってみせた。

「ネコネコの実」…モデルレオバルド「豹」

「ヒョウ人間」カ……!!!」

「……………!!! ヤバイ…『肉食』の動物系は凶暴性も増すんだ!!」

戦慄の表情で呟くリンの傍で、がたがたと震えるチョッパーがそう叫ぶ。

草食動物としての本能が、力を一段階解放したルッチの脅威を感じ取り、けたたましく警鐘を鳴らしているのだ。

「『自然系』 『動物系』 『超人系』、得意な能力は数あれど…自らの身体能力が純粹に強化されるのは『動物系』の特性…!!? 鍛えれば鍛える程に『力』は増幅する。迫撃において『動物系』こそが最強の種だ!!!」

それは、人体の能力を極限まで鍛え上げたCP9だからこそその説得力であろうか。己の肉体を使って戦う事に特化した彼に、その力は相応しく見える。

その時、寝室の外からどたとたと足音が聞こえてくる。戦闘の音を聞きつけ、外にいた者達が駆け付けてきたようだ。

「ルッチ、職人達が上がってくるわ！」

「…なアに、来れやしない…『嵐脚』」

ルッチはそう告げ、おもむろに片足を一閃する。

ルッチの蹴りは鎌鼬を起こし、見えない斬撃となつて宙を裂く。そして、ルフィ達の背後の壁を真っ直ぐに切り裂いた。

「壁から離れる!!? お前ら!!?」

ゾロが叫んだ瞬間、切断された壁が倒れ、崩壊する。

慌てて離れようとしたナミ達だが、一拍遅れ、あわや瓦礫に押し潰されかけていた

「ナミ!!! ふぎ!!!」

「若!!? フーじい様!!?」

仲間に迫る瓦礫に気付き、チョツパーとランファンが咄嗟にナミ達の背中に向けて突進し、前に突き飛ばす。

「チョツパ——!!?」

「ランファン!!!」

押し出され、倒れ込んだ彼らの背後で、チョツパーとランファンがガラガラと崩れてきた瓦礫の下敷きになってしまう。

悲鳴交じりの声で呼びかけるも、瓦礫の山から声が返ってくる事はなかった。

「パウリー!!? 何を!!?」

「あなた達を必ずここから連れ出す!!」

「無理だ、お前そのキズで……!! どうやって!!?」

ナミ達の近くでは、痛みに歯を食いしぼるパウリーがアイスバーグとヴィルヘルムを両肩に担ぎ、運び出そうとしていた。

傷付いた身体で、それでも大人二人を必死に持ち上げ、出口に向かう。

「おやめなさい、パウリー……」

しかし、残り数メートルという距離でルッチが立ち塞がり、その巨体で壁のように道を阻む。

何の感情も浮かんでいないように見えるルッチを見上げ、パウリーは心の底からくやし気な呻き声を漏らすばかりだった。

「……おれは少なくとも……:……:……:!!? 今までお前らを本当に “仲間” だと思つてた!!!」

「お前だけだ……」

「ハトのやつ~~~~!!」

差し損ねた止めをこの場で行おうと、鋭い爪を備えた指を構えるルッチ。

狂気となる指を振り抜こうとした時、怒りの形相で飛び出したルフイが拳を携え、

ルツチに飛び掛かる——だが。

『指銃』

ドキュン、と。

標的を変えたルツチの指が、ルフィの腹を一瞬で貫く。

大きな傷を穿たれたルフィは、大きく目を見開いてよろめき、腹を押さえて血を吐く。一瞬の事で、思考がまるで定まらずにいた。

「ルフィ!!!」

「島の外まで……飛べ!!!」

ナミの悲痛な声を他所に、ルツチはふらつくルフィを片手で掴むと大きく振りかぶり、窓の外に向けて思い切り投げ飛ばす。

あつという間に、ルフィは曇天の闇の中に消えてしまった。

「ルフィ~~~~!!!」

「船長さん!!!」

「てめェ!!!」

遙か先へと跳ばされてしまった船長の姿に、激昂したゾロが無謀にも真向から斬りかかる。

しかし、大きな動揺に襲われてしまっていたためか、死角からカクが振るった刃で傷

を負い、刀を取り落としてしまう。

「ゾロ!!!」

「お前もだ…」

血反吐を吐くゾロの身体を、ルッチが掴みルフィと同じように投げ飛ばす。

あつという間に、麦わらの一味の種戦力が二人も消えてしまい、ナミは真つ青な顔でその場に棒立ちになる。

その光景に、フーが仮面の下でギリツと歯を食いしばった。

「おのレ!!!」

「待テ!!? フー!!!」

目を吊り上げ、怒りと焦りに突き動かされたフーが、刃を手にルッチ達に肉薄する。

しかし、ルッチの前にブルーノが立ちはだかり、鋼鉄のように体を硬化し、フーの襲撃を防ぐ。そして、斬撃を伴った蹴りで吹き飛ばした。

「若…………お逃げヲ…!!!」

「そんな事…できるわけあるか!!!」

倒れ込んだフーが、駆け寄ってくるリンにそう頼むも、臣下を見捨てられないリンはそれを拒否する。

誰も叶わない、戦える者がもう誰もいなくなつた。

絶望的な状況に、ナミがずるずるとその場にへたり込んだ時。

「残念だが……誰一人逃がすつもりはない」

ルッチ達の冷酷な眼差しが、残った二人を静かに見下ろすのだった。

「くそ……何て事に」

ガレーラカンパニー本社は、惨状を晒していた。

いたるところから吹き上がった火が、あつと言う間に建物全体を覆い、轟々と黒煙を噴き上げて何もかもを焼き尽くそうとしていた。

必死に消火活動に励む船大工達だったが、あまりの火の勢いにまるで追い付いていない。

「全員連れ出したかア!!？」

「もう中へは入れねエ!!？」

「完全に炎につつまれた!!？」

謎の襲撃者達に容易く突破されただけでなく、会社に火まで放たれた。

怒りと同時に、自身らに対する情けなさで、船大工達は皆険しい形相になっていた。

「アイスバーグさんもヴィルヘルムさんも、本当に避難できてるのか!!？」

「きつと無事だ!!？」 職長3人が一緒なんだ、パウリー、カク、ルッチがいて、この火事

に取り残されたと考える方が難しい」

そう仲間を勇気づけるものの、誰もが不安を顔ににじませる。

火の勢いは収まるところを知らず、誰も生きて帰って来られないのかと、最悪の結末を想像した時だ。

「おい!!?」 女が一人上階から落ちてきた!!?」

一人が建物の根元を見て、横たわる人影に気付く。

大急ぎで他の船大工達も駆け寄り、口元に血を滲ませて横たわるその女を見下ろし、ハッと目を見開く。

「こいつは……!!!」 〃麦わら〃の仲間だ!!?」

「間違いないエっ!!!」 捕まえて仲間の居場所を吐かせよう」

集まってきた船大工達から、憎悪の視線を受けながら、ナミは苦痛の表情で沈黙し続ける。

彼女のすぐそばで、建物を包む炎がより一層の激しさを増していく。

「海賊の証言は証拠にならない……——これで事件は闇の中…………」

夜の空を煌々と照らす火を眺め、本当の犯人達は平然と佇んでいた。

船大工達の怒号や叫び声も、彼らの良心にまるで刺さる事がない。ただ、ようやく仕

事が一つ終わったと、そう思うだけであった。

「アイスバーグさん：あなたがどれ程優れた造船技師であれ：大都市の市長であれ………一市民が巨大な政府に：盾つくものじゃない……!!」

ルツチが眩き、業火に飲まれる本社を——その中で縛られ、すでに焼かれているであらう元上司を嘆く。

恩も義理も最初から持たない彼らは、灰になっていく建物をただ見つめるだけであった。

「——行くぞ!!? もう一人のトムの弟子フランキ——いや『カティ・フラム』の持つ……設計図を奪いに!!!」

??

「ぎゃああああ〜う!!!」

裏町のさらに端、廃船島に繋がる巨大な橋の下から、耳を塞ぎなくなるような叫び声が響く。

誰も気づきそうにない、ひっそりとしたその倉庫から、その男は只管に痛々しい泣き声を上げていた。

「ぎゃああああ〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う!!!? アウアウアウアウ、ぎゃうアウアウ〜う!!!」

「オイオイ、泣きすぎだぜ兄弟」

「え——ん」

「東の海」から連れ添った仲間と、船の為に別れるなんてエ………!!!」

泣き声の正体は、だばだばと滝のように涙を流すフランキー。

彼と同じく感動で泣くモズ・キウイと、見つともないほどに叫ぶ兄弟分に呆れた目を向けるグリードもいて、秘密の倉庫はなかなか騒がしくなっている。

そんな彼らに、一人ハンマーを振るうウソツプが困惑と苛立ちの目を向けていた。

「何でお前らが泣くんだよ」

「バカ!!?」泣いてねエよバカ!!?」しかしおれア、そんな中一人船を守るお前に胸打

たれたのは確かだが!!?」

「泣いてねーわいな!!?」誰一人泣いてねーわいな!!?」

「何なんだコイツら」

「ガツハハハハ!!?」

どう見ても号泣しているのに、今さら何を隠しているのか。

グリードの爆笑する声を聞きながら、ウソツプは自身を半ば無理矢理連れてきた男達にキツと鋭い目を向けた。

「とにかくわかつたら!!?」おれとあいつらがもう仲間じゃねエって事が!!!」

「そんな……!!?」

きつぱりと、フランキー達の目的であるルフィのとの関係を否定するウソツプ。

フランキーはそれに何やらショックを受けた様子を見せ——なぜかギターを取り出し、じやらん……と掻き鳴らしました。

「——そんなキビしさを歌います、『仲間割れ北風チョップ』」

「いよつ!!? 待ってたぜ!!」

「アニキ……!!?」

「お前らバカにしてんのか!!?」

いきなり始まったフランキーによる弾き語りの体勢。

歓喜の声を上げるグリード達に、なんだか無性に腹が立ったウソツプが思わず声を荒げる。感動してるのかしていないのか、まるでわからなかった。

「……………泣き疲れた、泣いてねエけど」

ようやく落ち着いたかと思えば、モズ達が用意した熱い茶に驚きフランキーがひつくり返ったり、それを見たグリードがまた爆笑したりと、なかなか静かにならずにいた。

それからちゃんと話ができるようになるまで、数十分もかかってしまった。

「——じゃあさぞ、おめエー2億を奪ったおれ達を恨んでんだろうなア……………そんな大喧嘩に発展しちゃったんだ」

「——なる様になっただけだ…誰を恨んでもしょうがねエよ」

「潔いな」

言いたい事は多々あれど、それを言っても仕方がないと言った雰囲気を見せるウソツプに、感嘆の声が漏れる。

だがしかし、当人達にそれほど反省の色はないようだった。

「——そうか、あの2億は…使っちゃったけどな!!」

「ハリ倒すぞ」

「そうカツカしちやいけねエよ。おれだっておめエにそんだけの男を見せられちゃあよ、今回の一件…怒りを収めざるを得ないじゃない…」

ふざけたポーズでふざけたセリフを言うフランキー達は、ソファアに座るとそんなことを言い出す。

怒りのままに暴れるつもりだが、ウソツプの姿に多少勢いを削がれてしまったらしい。

「おれのマイホーム兼解体工場のフランキーハウス全壊——さらにウチの部下共を全滅させてくれやがっててめエらコノ野郎!!」

「アニキーっ!!? 怒りが沸き上がっちゃったわいな!!?」

「おーい落ち着けよ、フランキー」

が、やはり怒りは収まりきっていないようだ。

それをどうにか押さえつけ、落ち着いたフランキーはへらへらと笑い、作業を続けるウソツプに目を向けた。

「————というわけだお兄ちゃん、この件はお互いに怒りを鎮め合い：それでワツシヨイワツシヨイって事で手を打とうぜ」

「ドッコイドッコイだわいな」

「ドッコイドッコイだわいなアニキ」

どちらも損をし、相手側は仲間割れという大事に至ってしまった。

そんな大変な状況にわざわざ首を突っ込む野暮はしまいと、フランキー達は完全にこの件を手打ちにするつもりの方だった。

すると不意に、それまで黙っていたグリードがウソツプの方に身を乗り出した。

「ところでお前：ウチに來いよ。おれアお前の事気に入ったぜ、行くアテがねえんなら面倒見てやる」

「あつ!!?　ズリイぞグリード!!!　おれが先に誘うつもりだったのに」

「兄弟イ……おれの性格知ってんだろ」

にやり、と不気味な笑みを浮かべたグリードは、サンガラスの奥でもわかる凶暴な光を目から放ち、勢いよく立ち上がると高々と語り始めた。

「おれはすべてが欲しい!!! 金も欲しい!!? 女も欲しい!! 地位も名誉も……この世のすべてが欲しい!!!」
……だから、一度欲しくなったものは手に入れなきや気が済まねエんだよ」

鮫のような鋭い牙の並んだ歯を見せつけ、気に入った男に熱烈な勧誘を行う。

同じことを考えていたフランキーがやきもきしながらそれを見てみると、修理の手を止めたウソツプが、ギロリとグリードを睨みつけた。

「いやだね!!?」 解体屋になんかなる気はねエ、おれは一味をやめても、海賊なんだ!!!」
確固たる覚悟を伴ってそう吠えたウソツプに、フランキーとグリードはまたガーンと衝撃を受ける。

そして、どこからともなく取り出したギターを、二人同時に掻き鳴らした。

「聴いてください」

『海賊仁義』

「アニキ——!!?」

「だからバカにしてんのかお前らは!!!」

先ほどから同じ事ばかりしている気がして、ウソツプはまた怒号を上げるのだった。

第189話 “水の都の奇跡”

「“高潮”が来るって本当か？」

「ああ。“アクア・ラグナ”、この辺りじゃそう呼ぶんだ——もう裏町の歩道は海に浸かっちゃまってんだろ」

釘を打ちながらウソツプが尋ね、フランキーがそれに頷く。

廃船島でメリー号を修理していた時に、誰かは知らないが大声で叫んでいた話で、徐々に強くなる風が気になっていたのだ。

「普通の規模で民家の2階までは海に沈む。裏町や岬なんかにはちやあひとたまりもねエよ。船もここに置いときや安心だ」

「ああ…ありがとう」

「何いいんだ!!? バカ!!? 水くせエ!!?」

素直に礼を言うと、フランキーは照れたように笑う。

金の強奪に暴行と、やっつてゐることは悪辣極まりないが、本人の気質は極めて人情味あふれる男のようだ、とウソツプは思う。

「大変だな、毎年そんな水害が来るのか」

「まア年に一度の避難くらいみんな手慣れたもんだが、この町の悩みは年々上がる海の“水位”の方だ……」

「年々上がる？」

「おうよ」

グリードやモズ達が、フランキーに代わって説明する。

正確には水位が上がっているのではなく、地盤の方が下がっているという。

年に数cmと少しずつ沈み、そこに島の気候も併せて、より一層被害が大きくなつてしまふのだとか。

海列車誕生以前は、島の行き来すらままならなかつたのだから、当時の恐怖は相当なものであつた。

「そんな未来の島の不安さえ取り除いちゃつたのが“海列車”『パツフィング・トム』だ!!」

「今じゃ記録もいらず、誰でも好きな時に海を渡れるつてんだ……とんでもねエ進歩だな」

「何もかもすべて“海列車”を生み出した“トム”という偉大な船大工のお陰なんだ」

そのトムという男について語るフランキーの顔は、懐かしそうであり。

同時に酷く、寂しそうに見える。

やや気になった様子でそれを見つめていたウソツプやグリード達であったが、不意にフランキーがあつと声を漏らしたことで、そちらに意識を削がれた。

「そーいやア、5年くらい前だったか……予報が大ハズレして、一日早く波が来た事があつてな。次はいつ来るんだつてみくんな震えてたもんさ」

「そりゃあ……被害も甚大になりや恐エだろうな」

修理のための材木を買いに行く際、店の親父がかなり焦った様子を見せていたことを思い出し、ウソツプは納得する。

しかし頷く彼に対し、フランキーはなぜかにやりと不敵に笑つてみせた。

「ところがどっこい、その年の犠牲者の数は〃0〃だ」

「な……何でだ!!? 予報はハズレたんだろ!!?」

「そんなもん……おれ様と子分共、そしてある一人の天使様の活躍があつたからに決まつてんだろうが」

フランキーが得意気に語ると、モズとキウイも似たような顔で微笑む。

困惑していたウソツプは、彼が口にした単語に——脳裏に浮かんだ、かつての仲間の顔に思わず表情を変える。

「……………エレノアか」

「おれはその話知らねエな……詳しく聞かせろよ、兄弟」

「ああ……あいつはあの日『白ひげ』傘下の船の修繕に来ていな……ちようどこの時期だった。おれア相手が相手なんで、手は出さずに様子を伺うだけだったんだが……ある日、アイツは突然自分から現れた」

懐かしそうに、フランキーは語る。

まだアジトが出来上がって間もない頃、子分達と寛いでいた時にやってきた彼女との時間を。

—— たのも —— っ!!!

ウィーターセブンが誇る、裏町の顔役!!?

フランキー一家棟梁フランキーはおられるかア!!?

バーン!と扉を押し開き、翼を持った白虎の少女が声を張り上げる。

子分達はギョツと振り向き、フランキーは飲んでいた茶をブーツと吹き出し、突然の訪問者を凝視した。

—— なっ……何者だア!!!

—— こっ、こいつ……… 『妖術師』のエレノアだ!!!

—— 何イ!!?

『白ひげ』の娘で、あの『天夜叉』や『海賊女帝』とガチで殺りあつたつていう

……あの!!?

——そんなバケモノが何の用だア!!?

自分達がよく見ている手配書、その中でもかなりの高額賞金を懸けられ、親に凄まじい存在がいる少女の登場に、一家は慌てふためく。

——おいお姉ちゃん……こちらワルだが、海賊に狙われるいわれはねエゼ………!!!
 一体あんたみたいなのが、おれ様に何の用で……。

逃げ惑う子供達を庇い、フランキーが険しい表情で前に出て、天使に凄む。

内心冷や汗をかきながら、それを必死に隠し、子供達を守るために虚勢を張る。
 だがそんな彼の前で、エレノアは深々と頭を下げ、懇願を始めた。

——お頼み申します……!!!

今夜の「アクア・ラグナ」は………裏町をはるかに超えて届く!!!

このままじゃ、この島の人々が大勢海に引きずり込まれて死ぬ事になる!!!

どうか……!!!

あなた方の力をお貸し願いたい!!!

圧倒的な力、背後に巨大な勢力を控えた賞金首が、恥も外聞も捨てて頭を下げている。
 そんな彼女に、フランキーと子供達はぼかんと呆けていた。

「——その熱意に負けて…おれ達は『妖術師』の起こす『奇跡』の手伝いに走った」
ようやくゆるくなってきた茶を啜り、一息つく。

ウソツプは唾然となり、グリードはにやりと不気味に笑みを浮かべる。初めて聞いた元仲間の逸話に、驚愕で固まっていた。

「…天族の予知能力ってやつか」

「ああ。といつても、本当に未来を見透かすわけじゃねえ……………動物が本来有している危機感知能力……………それに天族の持つ膨大な知識が合わさって、限りなく未来予知に近い正確な予想ができるってだけの事だ」

「そうか……………アイツの能力はそういう事だったのか…!!？」

これまでの旅で何度も、天族の能力の凄まじさは目の当たりにしてきた。

予測不可能な嵐を予測し、近付く脅威を察知し仲間知らせ、膨大な知識で一味の未来を左右する。伝説に聞く所業と大差ない現実が思い出される。

「……………だけど、一海賊の言葉をどうやって街の奴らに信じさせたんだ？ お前らは一体何をしたんだ？ エレノアと一緒に…」

「…まあ、おれ達に任せられたのはちよつとしたイタズラ程度の手伝いだ……………アクア・ラグナが来るまで、まだ一日あると安心しきってた奴らの家に電伝虫を仕込んで、エレノアが一斉に声を届けたってだけ」

海賊程ではないにしても、街での嫌われ者であると聞くフランキー達。そんな彼らが普通に言ったところで、素直に応じて動くとも思えない。

実際にフランキーもそれを認め、その日に行った事について語る。

「ただし普通の声じゃねエ……………アイツが術で作る特殊な音、通常の声とは周波数の異なる音を発して、対象者の脳に直接伝えるって技だ。それを聞いた連中は、電伝虫から聞こえたなんて思わねエ……………虫の知らせか天からのお告げのように感じて、勝手に不安がつてくれる」

「なるほど……………見知らぬ誰かからの忠告じゃねエ、本人の直感と誤認させたってわけか……」

「そういう事だ」

一度自分の中に嫌な予感が芽生えれば、人は動かずにいられなくなる。

それを利用したエレノアの思考に、ウソツプは思わず息を呑み、グリードが納得した声を漏らしてより笑みを深める。

「……………それで、どうなったんだ？」

「正直おれア、結果を見るまで半信半疑でな……………あんまりに真剣に頼み込んでくるもんだから手を貸したが、アイツの予知はハズレだと思ってた。——で、その翌朝 アクア・ラグナ は来た」

フランキーの脳裏に、その夜の記憶が蘇る。

今でもなお、子分達と一緒に目の当たりにした光景は、彼の背筋に凄まじい寒気を齎していた。

「たまげたぜ……おれ達が事前に走り回つてた場所が、全部丸ごと海に飲み込まれてたんだからな」

ギョツと目を見開き、ウソツプはごくりと息を呑む。

見ればモズとキウイも、その時の恐怖を思い出しているのか、鳥肌が立った肌を擦っている姿が見えた。

「アイツの予知は……完璧だった。アイツが動かなきゃ……ウオーターセブンの人口は半分程度にまで減つてたかもしれねエ」

「マジかよ……」

「ガツハハハ……ますます欲しくなるじゃねエか」

グリードはそう笑うが、ウソツプはうすら寒い気持ちを隠せない。

お告げを齎し、大勢の人々の命を救うなど、天からもたらされた天使そのままの姿ではないか、と戦慄を抱く。

「そんな縁があつて、ガレーラの連中はアイツに頭が上がりかねエのよ。いい気味だぜ!!？」

「あの夜の事はよく覚えてるわいな」

「楽しくて達成感のあるイタズラだったわいな」

「……………アイツいろんな所でいろんな事やってるな」

海軍大将やら有力な海賊やら、拳句の果てに船大工達にまで顔が効く。

その理由は、様々な島に行つてはそうして大勢の人を救つたりして、返しきれないような恩を売つて来たからなのだろう。

「……………だつたらおれ達の金盗む前に気づけよ」

「悪いな、あんだだけポロポロだと一眼でわかんなかったみてエだ」

呆れた目でウソツプが睨むと、フランキーは本気で申し訳なきように頭を下げる。気づいていたなら、手を出すことはなかったはずだ、と。

「……………ところでグリード、お前、何であいつにそんな執着するんだ？」

「そりやあ兄弟、おめエ……………あいつの知識が欲しいからさ!!？」

話を振られたグリードが、突如立ち上がつて高らかに語り出す。

普段よりもずつとテンションの高い、まるで欲しいおもちゃを前にした子供のような表情で、しかし目はギラギラと欲望に輝かせている。

「おれア “人造人間” だ。 “賢者の石” のエネルギーさえ尽きなけりや、どんなキズを

負おうとも再生できる……………だが完全な不死じゃねエ。エネルギーが尽きちまえば、再生

はできなくなる」

「制限付きの不死ってわけか」

「そうよ！ だからおれア、*完全*になりたいのよ!!! 何百何千何万回殺されようと復活できる、本物の不老不死の力が!!! ……………だからこそ、全能の種族の叡智が欲しいんだ」

若干引いた様子で見つめてくるウソツプ達に、グリードは元の勢いに戻りソファに座り直す。

そんな彼を見つめながら、ウソツプは首を傾げた。

「あいつが聞いてくれるかな」

「まあそこはアレだ…根気強く通いづめてだな」

「それで攫おうとしたのか!? 呆れたぜまったく…」

エレノアのもとに直行するグリードの姿を思い出し、フランキーもつい呆れた声を漏らす。

自分の欲望を是が非でも徹そうとする、兄弟分の難儀な性格は知っていたつもりだったが、やれやれを肩をすくめるばかりだ。

「グリードのアニキはやり方が荒っぽいわいな」

「女の子を口説くんなら、もっと紳士的にやるもんだわいな」

「ガッハハハ!!!」

女性陣からの厳しい意見に、グリードは誤魔化すように笑い声をあげていた。

それが現れたのは、突然だった。

兄貴達の言う通り、長鼻の男を預かったと町を練り歩いていた時に現れた、仮面をつけた黒服の男。

その男の問いを一蹴し、嗤っていた彼らに——その男は殺戮をもたらしした。

「ぎゃああああ!!!」

「アニギ、助け……!!?」

アーマーが砕かれ、体を斬り裂かれ、あつという間に出来上がる死屍累々の地獄。

倒れていく仲間達を呆然と凝視し、ガタガタと震えていたザンパノの前に、頭から血を流した男達、ドルチェットとロアが立ちはだかる。

「逃げろお前達……!!? おれが時間を稼ぐ!!!」

「ドルチェット!!? ロア!!?」

「グリードさんとフランキーさんに伝える!!! あの人達を逃がすんだ!!!」

「ムオオオオオオオオオ!!!」

ハンマーを振り回し、剣を握り、ドルチェットとロアがメキメキと異形の姿に変わっ

ていく。

決死の形相で、猛烈な雄叫びをあげながら、仮面の男に襲いかかる。

「その必要はない。アニキ達には…おれからよろしく言っとくよ」

ポタポタと赤い雫を指先から垂らす、仮面の男。

次の瞬間、彼の背後でロア達の身体がゆっくりと傾ぎ、夥しい量の血を吐きながら地に伏した。

「——んでお兄ちゃん、本題に入るが…その船直してどうすんだ」

不意に、フランキーがウソツプに尋ねる。

話している間も、ほとんど修理の手を止めていなかったウソツプは、ポロポロのメリー号を見上げて胸を張った。

「そりや当然、コイツと一緒にまた冒険して、いつの日か故郷の『東の海』に帰るのさ!!
?」

尋ねたフランキーが無言になっている事にも気づかず、数えきれない傷を負った船を見つめ、誇らしげに笑う。

最後の最後まで共にあると決めた彼は、静かに佇むメリー号を見つめる。

「世界一周つてわけにはいかねエけど……」
「偉大なる航路」へ行ってきた船とな

りや、もう充分凱旋帰還つて事になるからな!!? おれは胸はつて……………」

「いや、帰れねエよ『東の海』へなんて!!! 遠すぎる……………」

誇らしげに語っていたウソツプに、突如フランキーが否定の言葉を告げる。

言葉を途切れさせたウソツプは、一瞬思考を停止させると、困惑した表情で背後の男を振り向く。

「アニキ……………!!?」

「——さつきここへ船を引き上げる時、そいつを見てた。その船はもうダメだ、ガレーラの査定は正しい。解体屋として…解体を勧める」

「!!? 何をくだらねエ事……………!!」

ソファから立ち上がり、ずんずんとウソツプの方へ向かうフランキーに、グリードとモズ、キウイも困惑の目を向ける。

張り詰めた空気の中、フランキーは自身の巨大な拳を鳴らし、浮かぶメリー号を見据えた。

「手伝つてやるよ…船の解体作業」

「何だと!!? てめエ…待て!!! 何する気だア!!!」

「その船の解体を手伝つてやるつて言つてんのよ」

「ふざけんな!!!」

一方的な宣言に、ウソツプは腰からパチンコを抜き、構える。

自身と船の恩人であるが、それを勝手に壊すと宣言した相手に対し、敵対の構えを取らずにいられるはずがなかった。

「そんな勝手な事させるか!!!」 メリー号は、おれの船だ!!!」

「いいや……もう、そいつは船じゃねエ!!!」

弾を備えらたウソツプに、フランキーは信じがたい言葉を放つ。

グリード達も、突如始まった緊迫した空気に戸惑いながら、睨み合う二人を見守る。

何故だか、今の二人の間に手を出してはいけない気がした。

「おれはさつき聞いたよな……『この船直してどうすんだ』……って、お前がこの船と一緒に海へ命を投げるつもりなら、おれは別に口は出さなかつた——だがこの船で『東の海』へ帰ってエなんて言うんだから、おれア止めてやるのよ、お兄ちゃん」

威圧感を伴ってそう語るフランキーに、ウソツプは言葉を返す事ができない。

大切な船を狙う相手が近づいてきているのに、思わず足が後ろに下がりそうになる。

「この船は、もう次の岸へすら辿り着けねエ」

ずんずんと歩き出したフランキーが、メリー号の外装部分に飛び移る。

ハツと我に返ったウソツプを放置し、巨大な拳で搦んだ部分に、メキメキと強烈な力を込めていき。

『こつちの岸から向こうの岸まで渡してやろう』、この「約束」をかかえて「船」は生まれる………!!! 人を向こう岸へ渡せなくなった船は、船じやねんだよ!!!」

バキバキバキツ!と。

悲痛な悲鳴をあげるウソツプの目の前で、外装をへし折ってしまった。

第190話 「わかってんだよ!」

「やめろ——!!!」

ガタン、と激しい音を立てて倒れ込む、メリー号の装飾の一部。

それを目の当たりにしたウソツプは、まるで己の身体の一部が引き裂かれたかのような悲痛な表情で、血を吐きそうな叫び声をあげる。

「おい!!! 兄弟!!!」

「アニキ——!!?」

グリードやモズたちも、フランキーの突然の行動に困惑し、声を上げる。

ウソツプは激昂し、フランキーに向けて火薬星を放ち、彼を爆炎で包ませる。

しかし、フランキーは平然とした様子で煙の中から立ち上がり、ウソツプに向かって猛然と駆けてくる。

「コノヤローが…わからねエなら…!!!」てめエの目で…!!! しっかり見てみる!!!」

ウソツプの身体を掴み、空中に放り上げ、合わせた両拳を叩き込む。

ウソツプはメリー号が浮かぶ水中に叩き落とされ、ぶくぶくと沈み、そこで——メリー号の竜骨に刻まれた、致命的な傷跡を見つける。

やがて、ウソツプは水上に這い上がると……よろよると材木を抱えて、工具を手握った。

「ごめんなメリー……すぐ直す……おれが……!!!」

板を合わせ、釘を撃ち込みながら、そう語りかけるウソツプ。

ずるずると鼻をすすり、涙を堪え、大切な仲間を生き永らえさせようと、ひたすらに足掻く。

「何度でも!!? 何度でも!!? 直してやるからな……!!!」

その姿に、モズとキウイは声を押さえて涙を流していた。グリードでさえ、痛々しさを晒し続ける彼にかける言葉を失っている。

「オイいい加減にしろ、長っ鼻!!? 船底を見たろ、ヘシ折れた竜骨を中心に外板はズレて、肋骨もボロボロ!!? そんな船体じゃあ、一波ごとに外から崩れ落ちてくだけだ!!? それをためエみてエなド素人のツギハギで……」

見ている者に苦痛を与えるその様に、見ていられなくなったフランキーが大声で吠える。

誰よりも、ウソツプ本人が苦しむ結末だと、無意味な努力を止めさせようとする。

しかし、無理矢理に止めようと一步を踏み出したその時、ガシャン!と大きな音が響き渡った。

「うるせエってんだよ!!! お前なんかにも何も言われたくねエんだ!!! 黙らねエとブツ飛ばすぞこの、チンピラ野郎!!!」

「何だと!!!」

修理のために置いていた、釘を入れていた箱を叩き落とし、悲痛な声で叫ぶウソツプ。苛立たし気にウソツプを睨んでいたフランキーは、目の前の男の眼から、ボロボロと涙が溢れ出していることに気付いた。

「ホントは…全部知ってたんだ、も」 うメリーが!!! ダメだつても知ってたんだ!!!」

突然の告白に、フランキーもグリードも訝し気に眉をひそめ、黙り込む。一体何を言っているのか、と彼らは視線でウソツプに問いかけた。

「査定の結果を聞いた時…おれはあの日のことを確信したんだ。最初は夢だと思ったし——そんなバカな事はねエと思っただけど…!!?」

ウソツプは涙で濡れた目でフランキーを睨み、その時の事を思い出す。

空島で、黄金探しを翌日に控えた真夜中に見つけた、傷だらけのメリー号の船底に寄り添う、二つの人影の事を。

——ゴメンね…ゴメンね…!!!

あなたをちゃんと直してあげられなくて…何にもできない、どうしようもない

私で……!!!

ゴメンね……!!!

カン、カン、と木槌を鳴らし、釘を打ち込む音が響いていた。

それを為すのは、頭痛と吐き気で休んでいなければならなかったはずの虎耳の天使……そして見た事のない、フードを被った小さな子供の影。

——こんなに傷ついたあなたを……!!!

助けてあげられなくて………ゴメンね……!!!

泣きながら、引き絞るような声で謝罪を口にし、ひたすらに木槌を振るう天使。苦手な修理を、子供と一緒に必死に行っていた。

その時、子供がふと手を止めて、ウソツプの方に振り向いた。

——大丈夫。

大丈夫だよ。

もう少しみんなを、運んであげる。

そんな言葉を送り、子供はにっこりと優しい笑みを浮かべてみせた。

あまりに現実離れた光景。夢としか思えない記憶。

驚愕と混乱と恐怖で気絶したウソツプは、その光景をずっと覚えていた。夢だと思お

うとしながら、どうしても忘れる事ができなかった。

エレノアと謎の子供の姿を、何故かはわからないが、決して忘れてはならないと思っていたからだ。

「バカバカしいかも知れねエが………!!? あれは……エレノアと一緒にいたあれは……メリー号の化身だったんじゃねエかと……!!」 思うんだ」

自分でも何を言っているのか、と自嘲しているのか、やけになった様子で吐き捨てる。フランキーが静かに耳を傾けている事にも気づかず、笑われる事を承知の上で、ウソップは自分が感じた想いを口にする。

「——きつとあの時、船はすでに限界で……おれ達にそれを知らせようと現れたんじゃねエかと思った。おれをイカレた奴だと思うだろ……別に信じなくてもいい……」

「信じるも何も……そいつア木槌を持った、船乗りのような姿に見えただろ」

目を逸らしていたウソップは、フランキーの言葉にハツと目を見開く。

何故知っているのか、と問う視線に、フランキーは遠い眼差しになりながら口を開いた。

「………そりやお兄ちゃん、 “クラバウターマン” を見たのさ」

クラバウターマン……それは、言わば船の妖精。

木槌を手に、船乗りのレインコートを身に着けた子供の姿をしているとされ、船の大

事には船内を駆け回るといふ。

本当に大切にされた船にしか宿らない、船乗りたちに細々と語り継がれる伝説の存在。

そう、フランキーは語ってみせた。

「正直——そいつを見たとき直接聞くのは……おれは初めてだ」

言ってから、フランキーはにやりと笑みを浮かべる。ウソツプを、静かに佇むメリー号を見上げ、どこか羨ましそうな眼差しを送る。

「……………こいつは、そうまでしてお前らを向こう岸に渡したかったんだな。人の姿で出てきてまで、お前達の助けになりたかったんだらうな……!!?」

「……………メリー……」

また、ウソツプの目尻に涙が浮かぶ。

守りたいと、死なせたくないと思っていた仲間に、これまで何度も救われていたのだと知ってしまい、熱い想いが溢れ出す。

グリードは正直に感嘆したような目をメリー号に向け、そしてじろりと鋭い目をウソツプに向けた。

「———そんなでお前…… “妖術師” がそうして苦しんでるの知ってて、決闘騒ぎまで起こしちゃったのか？ そりゃあちつとばかしやらかしてねエかい？」

「……そうでもしなきゃ、あいつはいつまでもおれ達を守るために、何度も何度も死にかけ
る羽目になる……だからおれは」

傷付いた様子で固まったエレノアの顔を思い出し、ウソツプはぎゅつと自分の胸に指
を食い込ませる。

仲間のために、自らの命さえ投げ出しかねなかつた彼女のあの表情は、ウソツプの心
にも大きく深い傷を刻みつけていた。

「……いや、ただ嫌になつたんだな。あいつに守られ続けてるのが……勇敢な海の戦士
どころか、全身ポロポロの女にいつもいつも危ない所を助けられて、おんぶに抱っこさ
れっぱなしの自分が……」

「まア………プライドなんかとつくに木っ端微塵だわなア」

「それにあいつは……メリーの事でずつと責任を感じてた。あのままじゃいつか絶対壊
れちまつてたと思うんだ………ほんとにはあんな事、言いたくなかつたよ」

自らに嘘をつき、仲間が傷付くことを承知の上で、距離をとらせようとした。

方法は絶対に褒められたものではないが、死に近すぎる仲間のためを思つてはいた言
葉には違いない。

フランキーもグリードも、孤立を選んだウソツプに呆れた目を向けていた。

「呆れたぜ………!!?」 じゃあお前さん……船の限界も「妖術師」の葛藤も知つてた上

で、仲間と大喧嘩したのか」

「……………そう割り切れるもんじゃねえんだ」

「男って奴は不器用だわいなー」

「バカだわいな——!!?」

男の意地を見たモズとキウイは、呆れながらも涙を止められない。

仲間のために嫌われる道を選んだウソツプの覚悟は、見ていだけで彼女達の涙腺を刺激していた。

しばらくの間、モズ達のぐずぐずと鼻をすする音が響く。

そんな中不意に、フランキー達の基地にある扉のうち、海側の扉を叩く音が聞こえた。

「ん？ アニキ、誰か来たみたいだわいな」

「誰か来たっておめエ…ザンバイ達しかいねえだろ。何をわざわざ『海側』から来たんだ」

「ホントだわいな…いつも上の入り口を使うのに…」

フランキーハウスが潰された今、拠点はここしかない。

しかし、わざわざ通りづらい海側から誰かが来たことに、四人とも訝しげに首を傾げる。

「麦わらを連れて来たのかも知れないわいな」

「そうだ!!? おめエをエサに麦わら達を呼びつけてたのを忘れてた!!?」

「すごいやそれが目的だったな……」

しくじった、とばかりに目を見開くフランキーの隣で、グリードも自身に呆れたように頭をパシツと叩く。

だが、頭を抱える彼らを横目に、ウソツプは首を横に振る。

「来ねエよ、あいつらはもう仲間じゃねエんだ。そう言っただろ」

理由があつたとはいえ、仲間の心を傷つけ、船長と決闘までしてしまった直後に、助けに来てくれるとも思えない。

今度こそ愛想をつかしていると確信し、ウソツプは険しい表情で目を逸らす。

投げやりになった雰囲気を感じさせるウソツプを見ていたフランキーは、やがてため息交じりに口を開いた。

「……お兄ちゃんよオ……おめエ——仲間のトコ帰れ」

フランキーの言葉に、ウソツプはキツと鋭い目で振り返る。

話を聞いていなかったのか、とでも言いたげな、やや苛立った様子のだ。

「今更そんな事できるか、おれは船長と決闘したんだぞ……!!? それに船の事も解決してねエし……」

「そうだな……色々落とし前つけなきゃいけねエのは確かだ……だがお前はそうしな

きやならねエハズだ」

フランキーに代わり、グリードがウソツプを指差しながら語りかける。

いつもの笑みを消し、サングラスの奥からじつと真つ直ぐに見つめる。その強い視線は、まるで目を逸らす事を許さないと言っているようだ。

「おれはおれの生の中で：『ウソはつかねエ』と決めている。欲しいモン、手に入れたいモンを我慢したまま自分を偽るのは大つ嫌いだな」

「じゃあ、なおさらおれとはソリが合わねエだろうよ：おれはうそつきだ」

「楽しいウソは嫌いじゃねエ……………おれが嫌つてんのは、自分を騙すウソ」だ」

一瞬にやりと笑うものの、すぐにまた真剣な表情に戻り、顔を逸らそうとするウソツプの目を覗き込む。

どうしても顔を合わせようとしないう彼にしびれを切らし、フランキーはガツと勢いよく立ち上がり、前のめりにウソツプを怒鳴りつける。

「仲間」も!!!「船」も!!! どつちも大事だから決闘なんて騒ぎを起こしたんだろうが!!! 本当はお前：全部手放したくねエんだろうが!!! 船のことはこつちで何とかしてやらア!!? だからさつさと帰れバカヤロウ!!!」

「余計なお世話だ!!! おれの問題だ!!!」

「おオよ、だからおれがお前の問題を解決してやろうとしたんだ、感謝しろ!!!」

フランキーが吠えれば、ウソップもすさまじい剣幕で言い返す。それにフランキーも、さらに声を荒げて吠え返す。

グリードもまた、頑なに意地を張り続けるウソップに、焦れた目を向けていた。

「わかんねエのか!!? 船にとつても迷惑な話だぜ!!! お前らが大好きで人の姿で現れた程のこの船が、お前らに乗せて海の真ん中で沈んじまった日にやあオイ、死んでも死にきれねエぞ!!? 成仏できねエつてもんよ!!!」

「じゃあ、お前はもう死にそんな仲間がいたら『後はせいぜい楽に死ねよ』って、そこを立ち去れるのか!!?」

「そう言うときまたお前、話が逸れるだろ」

「逸れてねエだろ!!? そういう状況だ!!!」

「だーもう!!! お前ってホントにメンドクせエな!!!」

喧々囂々、侃々諤々。どちらも自分の主張を引つ込めず、最早罵倒の勢いで互いを睨み、押し返そうとする。

耳に刺さるような怒号のぶつけ合いに、グリードはがしがしと頭を掻きむしって苛立ちをあらわにしていた。

このままこの口論が続くのか、とグリードが内心でげんなりとしていた時。

凄まじい轟音と共に、海側の出入り口から、口元に血を滲ませたモズが倒れ込んでき

た。

「なっ……」

突然のことに、ハッと振り向くフランキー、ウソツプ、グリード。

彼らの目の前で、今度は首から鈍い音を響かせたキウイが、血を吐きながら力なく倒れ伏した。

「モズ!!! キ……キウイ!!!」

「誰だア……!!! こいつらに手エ出しやがった大バカ野郎はア……!!!」

「お取り込み中失礼……お嬢さん二人が中へ入れてくれなかつたもので……」

妹分達が倒れる姿に、ごうつと怒りを燃やすフランキー、そして静かに目を血走らせるグリード。

彼らを嘲笑うように、海側の出口をこじ開けてやって来た黒服の四人組——カリフアとルツチ達が、鬱陶しそうに吐き捨てた。

「ガレーラの秘書……!!? ……ここで何やってんだてめエらア!!!」

破壊された扉、倒れた子分達。

見慣れない黒い衣装で現れた、大嫌いな町の人気者達を前にし、フランキーは額に血管を浮き立たせ、怒りを露わにする。

「……ブル……ノ……!!! てめエまで似合わねエ格好で何しに来やがった!!! オオウ

!!!!
」

ずんずんと詰め寄った際、ガツとブルーノに顔を掴まれるも、逆に顔を掴み返し、ぐ
いと無理矢理宙に浮かせる。

やや焦った様子を見せたブルーノは、スツと人差し指を立て、下から見上げてくるフ
ランキーに向けて構える。

「やめろブルーノ!!!」

人体を貫く一撃が放たれようとしたその直前、ルツチがフランキーを蹴り飛ばした。
凄まじい轟音を立てて倒れ込むフランキーに、啞然としていたグリードもやがて怒り
に顔を歪ませ、ぎろりとルツチ達を睨みつけた。

「腹話術野郎が……おれの兄弟に何してやがんだア!!!」

バキバキと黒く変色し、鋭く尖っていく両腕を振りかざし、ルツチ達に襲い掛かる。

しかし、それも前に出たカリファの蹴りによって弾かれ、さらには硬化していない顔
面に強烈な一撃を叩き込まれ、フランキーと同じく吹き飛ばされた。

「え!?? おい!!? お前ら強いんだろ!!! あいつら造船会社にいた奴らじゃ…!!?」

どうなつてんだ…!??

「何だ……!?? おれがあんな奴に……!!!」

いつも酒場のカウンターにいて、のっそりとした動作が目立ったブルーノ。

一言も口をきいたことがないルツチ。
生真面目に働く姿が脳裏に浮かぶカク。

常にアイスバーグの傍にいて、正確無比な仕事ぶりを見せていたカリファ。

力はある、しかし所詮は船大工と会社の秘書、酒場の店主でしかなかったはずの彼らに、こうも圧倒されていることが信じられない。

「おいおい………笑えねエ冗談だぜ」

頬を引きつらせながら、グリードはそう苛立ちと焦りが混ざったつぶやきをこぼした。

第191話 “トムズワーカーズ”

「何の集まりだ…神妙なツラぶら下げやがって、ずいぶんスーパーなマネしてくれじゃない…まだ嫁入り前のウチの妹分達を傷物にしてくれやがってコラ」

崩れた壁の残骸の中から立ち上がり、ルツチ達を睨みつけるフランキー。

グリードも瓦礫を押し退け、いつもの笑みを消し、鋭い目で四人を見据え、また硬化させた両腕を構える。

「お前から何でこの場所の存在を知ってる、ここはおれ達の秘密基地だ!!!」

「ああ…クソ!!? そういう事かよ…!!! ココロのばーさんが言ってた通りになりやがった…!!?」

「ババアが…? まさか…!!?」

荒ぶるフランキーに代わり、グリードはギリギリと歯を食いしばりながら呟く。

チツ、と舌打ちをこぼし、冷酷に見える表情で自分達を見下ろす彼らの前で、苦々しく吐き捨てる。

「猫を被んのがずいぶん得意なんだなア……えエ!!? サイファー・ポール!!!」

「察しがいいな、グリード…そうだ。おれ達の都市での暮らしは仮の姿、本職は世界政府

の「諜報部員」だ……!!!」

隠す必要もなくなった、とばかりに、ルッチはフランキー達に堂々と名乗る。

フランキーはギョツと目を見開き、次いでガバツと慌てて立ち上がると、巨大な拳を構える。その顔には、明確な焦燥が現れていた。

「お前にはこの意味がわかるハズだ。おれ達がここへ来た理由もな」

「……!!!」

「フランキー。我々は、もう全て知ってる。ここへ来てとぼけてくれるなよ……苛立ちが募るだけだ」

ルッチの言葉をきっかけに、場の空気が張り詰めていく。

何が起こっているのか、と戦々恐々としたままのウソツプが様子を伺う中、ルッチが冷たい目でフランキーを見据え、語り出す。

「お前の本当の名は『カティ・フラム』、8年前に死んだと言われていた、トムのもう一人の弟子だ!!?」

「ああ……? カティ・フラム……?」

「……どうやって調べたか知らねエが、見事なもんだな……同時に妙な胸騒ぎがしてきた……」

グリードが訝しげな声をこぼすのも無視し、ルッチはただフランキーの身をぎろりと

鋭く睨み続ける。

じわり、問うてきた冷や汗がこめかみを伝うのを感じながら、フランキーは引きつった笑みを浮かべ、ルツチに問いかける。

「あの……バカは………アイスバーグは……元氣か」

「殺した」

残酷なその答えに、フランキーはまるで凍り付いたように固まる。

グリードもまた、驚愕で大きく目を見開き、平然としたまま信じられない一言を発した黒服たちを凝視していた。

二人の愕然とするさまも放置し、決して逃がさないという意味表示のように、ルツチ達は四方向からフランキーを見据える。

「トムからアイスバーグへ、アイスバーグからお前へ——それは受け継がれた……長かった我々の任務もいよいよチェックメイト。さあ、世界最悪の戦艦……古代兵器」プルトンの設計図をこつちへよこせ、フランキー!!」

怒号を上げられ、脅されても、フランキーは棒立ちになったまま動けずにいた。

脳裏に過る、彼の師の言葉。

弟子を信じ、代々受け継がれてきたとあるものを託す際に告げられた言葉が、彼の頭の中で何度も反芻されていた。

「聞こえてるのか!! 渡せと言ってるんだ、カティ・フラム」

「兄弟!!!」

「てめエらに渡すもんはねエよ!!!」

グリードの声で我に返ったフランキーが、ルツチに向けて右腕を発射する。

だが……それはたやすく躲され。

瞬く間に、荒れ狂う暴力の嵐がフランキーに襲い掛かり、彼を紙屑の様に蹂躪し、先程よりも激しく壁に激突させてしまった。

「きよ……兄弟イ!!!」

「……え!!? ……!!! 何が起きたんだ……!! 何も見えなかった!!! 速すぎて……!!!」

その間、ウソツプもグリードも、全く反応することができずにいた。

まるで自分の時が止まっていたのかと錯覚するほどに、ルツチの攻撃は速く、目で捕らえる事がまったくできなかつたのだ。

一瞬でフランキーを無力化させたルツチは、彼が突っ込んでできた穴の先に広がっている空間に気付き、片眉を擡める。

「何だ……この汚い部屋は。製図室……? 設計図を隠すにはいい場所だ、探せ」

「てめエらいつまでも調子に乗ってんじや——!!!」

「カリファ」

「はっ」

フランキーが沈黙している間に、四人でその空間に乗り込もうとする。

それを阻止しようとしたグリードは、カリファの操る棘付きの鞭によって拘束され、為す術なく地面に倒れ込んだ。

「くそオっ!! チクシヨウがア!!!」

「うるさい奴じゃ…」

グリードが悔しげな声を発している間に、ルッチ達は空間——壁で塞がれた、古い製図室を調査する。

そこにあつた名札——トム、アイスバーグ、ヴィルヘルム、カティ・フラムという四つの名札がつけられた机に気付き、思わず目を細めた。

「……………さわんじゃねエ…人の想い出に…土足で踏み込むもんじゃねエぞ…——ここはおれ達の育つた場所だ」

不意に、ルッチ達の背後で怒りを押し殺した声が響く。

血を流し、傷だらけになったフランキーが、思い出の詰まった部屋を物色する黒服達を見据え、憤怒に満ちた目を向けていた。

「造船会社トムズワーカーズ。倉庫はボロいが、世界一の造船技師が…ここにいた」

過去の夢と希望を、そして後悔と絶望を。

若き頃の記憶の数々を封じた部屋を荒らされた怒りで、フランキーは鼻息荒く仁王立ちする。

「成程……—このウス汚い倉庫は……—かつての造船会社トムズ ワーカーズの……本社か」

「造船会社………?!?!」

納得がいった、という風に鼻を鳴らすルッチ。他の三人も、似たような態度でフランキーに振り向く。

ウソツプはひたすら困惑し、グリードは無言のまま事の成り行きを見守り、場はさらに重い空気に包まれていく。

「トム」 「アイスバーグ」 「ヴィルヘルム」 「カティ・フラム」、4人で造船に勤しんだ思い出の場所というわけだな——それを「秘密基地」と呼ぶとはずいぶんかわいげのある事をするんだな」

「黙れ………さっさとここから出る!!!」

「貰うべきものを貰ってからだ、船大工」カティ・フラム……」

「設計図はここにはねえよ!!!」

「………まア………当然といえば当然の答え………!!!」

頑なに、ルッチ達が求める者を差し出す事を拒否するフランキー。

ルッチは然して苛立った様子もなく、むしろ予想通りだというような顔で、製図室の机の一つを一つ、蹴り壊し始める。

バラバラにされる机を見て、フランキーの堪忍袋の緒が引き千切れた。

「オイ!!!」

怒りのままに、ルッチに殴りかかる。

しかし一步を踏み出したその時、カリファが新たに作り出したいばらの鞭にからめとられ、その場に倒れ込んでしまった。

「ヤロウ……!!? くっそ!!? 鉄のイバラなんざムカつくもん使いやがって……!!!」

「……ぐ……!!? てめエ!!!」

「別に、今すぐ答える必要もないさ。我々には切り札がある。8年も前の話だが……カティ・フラム……君は犯罪を犯してゐるらしいな」

悔し気に喚き、もがくフランキーとグリードを見下ろし、ルッチがふと呟く。

ギツ、と血走った目で睨みつけるフランキーを嘲笑うように、ひどく冷めた無慈悲な声で告げる。

「トムと同じ様に」

「フザけんな!!! トムさんは犯罪者じゃねエ!!!」

「……トム……!!? パツフィング・トム……!!!」

聞きなれた名前が聞こえた事で、ウソップの困惑はますます大きくなる。

街の裏の顔として知られる男、そんな彼の過去が続々と明かされているようだが、ウソップには何のことだかまるでわからない。

グリードだけが、意味深にフランキーとルッチのやり取りを眺めている。

「てめエなんか………わかつた風な口きくな!!!」

「犯罪者ならば、自分がどうい道を進るか………わかるはずだ」

「てめエらがどれ程………!!! このウオーターセブンを知ってるってんだよ!!!」

橋の下の秘密基地——いや、町から追いやられた造船会社。

さびれたその場所で、フランキーの怒りと悔しさに満ちた声が響き渡った。

約22年前、トムという船大工がいた。

“海賊王” ゴール・D・ロジャーの船、オーロ・ジャクソン号を造ったことで町からつまはじきになり、政府からも重罪とされた男だった。

彼はその罪を問われ、処刑されるところであったが、ある船の実現を条件に恩赦を求めた。

それが、“海列車”——高潮に苦しむ町を救う、希望の実現だった。

フランキー、アイスバーグ、ヴェイルヘルムは皆、彼の弟子であったのだ。

苦難の末、海列車は完成し、町には活気が戻りつつあった。

しかし、政府のある機関「CP5」の陰謀により、トムは政府の船を襲撃した犯人として再び連行されようとしたのだ。

他ならぬ、フランキーが作り続けた数々の船——いや、兵器を利用して。

弟子共々連れ出され、エニエス・ロビーへ連行されようとした時、トムはある願いを裁判長に申し出た。

『海列車を完成させた功績により、今日の罪を消してほしい』と。

それで最初の裁判と同じに戻っても、自分はそのことに誇りを持っていると。

彼の覚悟に心を動かされた裁判長の計らいで、弟子の三人は許された。

そして、トムはエニエス・ロビーへ連行されてしまった。

フランキーはそれを止めようと単身海列車に挑み、轢かれて生死を彷徨う重傷を負った。

彼はその後、廃船に這い上がり、そこにあつた鉄くずを利用して自身を改造、改造人間として息を吹き返した。

フランキーはウオーターセブンに戻り、アイスバーグ・ヴィルヘルムに再会。

敬愛するトムを失った最大の原因として憎しみをぶつけられながらも、トムから託された「設計図」を受け取り、名を変えて町を去ることを勧められる。

それを拒絶し、頑なに島に残り、そして今に至るのだ。

——てめエ…本当に……!!??

生きててよかつたなあ……………!!!

脳裏に浮かぶのは、再会し憎悪をぶつけられた後に漏れ出た、アイスバーグ達の悲痛な声。

嫌つていても、憎んでいても、共に船の道を目指していた兄弟弟子が生きていたことに、嬉しさを隠し切れなかつた男達の本音。

フランキーは、その時の彼らの言葉を、ずっと忘れられずにいた。

「我々の聞いているトムという男は…腕は確かだが、凶暴で手に負えない怪力の魚人。町の人間に聞いていても口をにごすばかりだ」

そんな過去の事など知らず、知る気もなく、ルッチはフランキーをやや下げ墨を交えた目で見下ろす。言葉も、全く本心には聞こえなかつた。

「そんな男をかばわなきやならない弟子も大変だな、カティ・フラム」

「言い返す気力もわかねエよ……………てめエら政府の人間はみんなクソだ!!!」

「当時、このウォーターセブンで海兵とその他役人に、100人を越える重傷者を出した…その犯人がお前だ」

身を隠すウソツプが戦慄していることにまるで気を配らず、フランキーの罪状を読み上げる。

政府が何をしたか、それをまるで悪びれる事なく、全てが彼の責任であるかのように語ってみせる。

「『世界政府』にそれだけの事をした罪は重いが、その日のうちに『海列車』の事故で死亡確認されたために、罪は無効となっていた……」

「……………それでフランキーと名を……」

「改めて犯罪者として、お前をエニエス・ロビーへ連行しよう——そこでゆっくり答えてくれるといい……『ブルトン』の設計図のありかについて……」

グリードが納得した声を漏らす中、ルッチは再度フランキーの顔を覗き込む。

しかし彼は、何も言わない。彼らには決して、何一つ語りはしないと、口を貝のように閉ざし黙り込んだままだ。

ルッチはそれに呆れつつ、ブルーノが持ってきた電伝虫をフランキーの前に示す。

「ウチの長官にこの件の報告をしたら、彼はすぐにでもお前と話したいと言うんだ」

「長官？」

「どうぞ長官」

カリファが受話器を外し、フランキーの前に構える。

電伝虫がガチャ、と声を発したかと思うと。

『うわあつちあち熱っ!! コーヒーこぼしたっ!! あつちー!!! 畜生オ!!! こんなコーヒー!!!』

そんな、慌ただしく落ち着きのない声と共に、ガシヤンと陶器が割れる音が響く。

何をしているのか、とフランキーが呆れた目を向けていると、やがて落ち着いたのか、通話の向こうで居住いを正す音が聞こえた。

『そこにいるのか、カティ・フラム……!! 久しぶりだ。まさかおめエがあれで生きていたとはな、信じられねエが……嬉しいニユースだ』

「誰だおめエは」

『この8年……キズが痛むたびに、おれはぶつけ様のない怒りに苛まれて生きて来た。自分を傷つけた犯人が、死んじまってるからさ』

受話器越しに、ふつふつとした執念の憎悪が伝わってくる。

胡乱気だったフランキーが、徐々に目を見開き始めると、通話の相手——CP9の長官スパンダムは、悪意に満ちた声でフランキーに名乗った。

『憶えてねエか!!? 8年前“CP5”で襲撃現行犯『トムズ・ワーカース』を逮捕した男さ!!』

はっ、とフランキーが目を見開く。

師と自分達に冤罪をかけ、師の名を穢し連れ去った怨敵の声に、胸中の怒りが再び燃え上がる。

「てめエ、まさかスパンダ!!」

『ムだっ!!! ワハハハ!! エニエス・ロビーでお前達の到着を心待ちにしてるぞ』

「……………おれはオマケなのか」

ぼそりとグリードが呟くものの、誰も反応を見せない。互いに憎しみを燃やす者達がいるため、誰も気に留めていない。

電伝虫を睨みつけるフランキーの歯ぎしりの音が、妙に室内に響いていた。

『さアお前ら、その犯罪者をさっさとここへ連れて来い!!!』

「了解——行くぞ」

「ううっ!!! 畜生、離せコノ…………!!!」

「クソツタレ共がア!!!」

電伝虫による通信が切れ、ルツチ達は棘の鞭で捕らえられた二人を引きずっていく。

二人は悔しげに声を上げ、しかし身動き一つ取れず、連れていかれるばかりだった。

「おい待てお前らアア!!! そいつらを放せエ!!!」

その時、一堂に待ったをかける勇敢な声上がる。

恐怖で震え、身を潜めていたウソツプが、勇気を振り絞り飛び出したのである。

そんな彼に、ぎろりと鋭い目を向けるルッチ。

凄まじい殺気に射抜かれた瞬間、ウソツプは勢いを思い切り削がれ、思わずぺこりと頭を下げていた。

「あ、ごめんなさい」

「うをいっ!!!」

「お前の輝きは一瞬か長っ鼻ア!!!」

あまりにも情けない反応に、ほんのわずかに期待を抱いていたフランキーとグリードが声を荒げて吠える。

そして、ウソツプの姿を目にしたカクが、僅かに目を細めた。

「お前確か…『麦わら』の…仲間じゃな…」

第192話 “その手は届かない”

業火が躍る、ガレーラカンパニー本社の前では、船大工達による必死の消火活動が続けられていた。

しかし強い風があり、火の勢いは収まるどころか増す一方であった。

「ダメだ、風に負けちまう!!?」

「全然火が消えねエぞ!!?」

バケツの水を懸命にぶっかける男達だが、完全な焼け石に水で全く意味がない。真っ赤に燃える建物を凝視し、誰もが諦めを抱き始める。

「まだ中に誰かいたら…!!? これじゃもう助からねエ!!?」

中にまだ残っているかもしれない社長やパウリー達を助ける事はできないのか、と無力な自分達を情けなく思い、呆然と立ち尽くす。

敬愛する社長も尊敬する職長も、事件の全て全てが炎に呑み込まれる、そう考えた時だった。

「ぬウああアアア!!!」

ガシヤアアン!と窓ガラスが割れ、四つの影が飛び出してくる。

慌てて後退った船大工達の前に現れた影——アイスバーグとヴィルヘルム、パウリーを担いだトナカイと、黒装束の二人を抱える糸目の男がドスンと降り立った。

「お……お前らは!!!」

「アイスバーグさんと……ヴィルヘルムさん!!? パウリーさんもいるぞ!!!」

突如現れたトナカイと男達に、船大工達はどよどよと戸惑いの目を向ける。

チョップパーとリンは彼らを睨みつけ、次いで遠くに倒れるナミの姿を目の当たりにし、一步を踏み出そうとし……そのまま、力なく倒れ伏した。

「す……!!! すぐに手当てを!!!」

「全員すごい火傷だ!!!」

「おい!!? こいつらどうする」

「そいつらもだ!!? 命の恩人だぞ!!!」

火傷だらけ、傷だらけの彼らに、船大工達は大慌てで手当てに入る。

気を失ったリンの表情はその間ずっと、敗北による悔しさで歪んだままだった。

??

「あア……!!?」

「あゝあ……!!? やられちゃった……!!?」

ドサツ、と膝をつき倒れ込むウソツプの姿を見て、フランキーとグリードが思わず落

胆の声を上げる。

勇ましく飛び出した方がいいが、結局全く為す術なく倒されてしまったのだ。

「アウ……………!!?」

「——つまり「麦わらの一味」は抜けたが——まだ海賊はやめておらんのかな…海賊ならば連れて行く。カリファ」

「ええ」

項垂れるウソツプを、カリファが無情にも縄でぐるぐる巻きにする。

抵抗しようにも全く力が入らず、ウソツプは悔し気に呻く事しかできずにいた。

その時、カクが水面に浮くメリー号に気付き、呆れたように顔をしかめる。

「——それとこの船、処分しておらんんだか…」

「……………おい、てめエ…!!! そいつに触るなよ!!!」

メリー号に近づくカクに、ウソツプがハツと我に返って鋭い目を向ける。

しかし、弱く身動きの取れない彼の殺気は、カク達にとってはそよ風のように弱々しく、全く応じようとしなない。

「おい!!! 聞いてんのかっ!!!」

「仮の姿とはいえ、わしらはこの町ではれつきとした船大工。ダメなものはダメだと聞き入れて欲しいもんじゃ」

「それがどうした放つとけよ、お前の船じゃねえんだから!!!」

吠えるウソツプの目の前で、カクは水量を操るレバーを倒す。

途端に水が足され、メリー号が浮かぶ水に流れが生じる。流れの先には、荒れ狂う海が広がっている。

「待て!!! バカなマネやめろよ!!!? おいつ!!!」

ウソツプの必死の懇願もむなしく、フランキーとグリードが愕然とする前で、メリー号はゆっくりと流れに沿って動き出し、そして。

「やめろオ——!!!」

荒れ狂う海に向かって、勢いよく落下していく。

捕らわれた青年は、大切な仲間の最後の姿さえ目にもすることもできず、ただくやしさに涙を流す事しかできない。

見えなくなってしまうた船に、音さえ聞こえなくなった仲間、ウソツプは胸がはち切れんばかりの苦痛に襲われた。

「メリ~~~~~!!!」

??

「……ウ……」

全身に走る痛みに呻き、アイスバーグが臉を開く。

隣に寝かされていたヴィルヘルムも体を起こし、それを見た船大工達がわつと歓声を上げた。

「アイスバーグさん達の意識が戻った!!!」

「よかった!!!」

「よかった、無事で!!!」

もう死んでいてもおかしくはない、と思えるほどに悲惨に燃え盛る事件現場を見やり、何度も安堵の声を上げる船大工達。

ひとまず安心した彼らは、沈黙したままのトナカイを見やると眉間にしわを寄せた。

「あいつらとあのトナカイのお陰だ——だがあいつら、『麦わら』達の仲間らしいぞ……」

社長達の命の恩人であると同時に、社長達の命を狙った一味の仲間であるという矛盾。船大工達はいよいよ訳がわからなくなる。

「おいこつちもだ!!!? 女が目を覚ました!!!?」

「ど……どうする!!!? すぐに麦わら達の居場所を吐かせるか!!!?」

ナミの方に集まっていた男達が騒ぎ出し、迷いがより一層を大きくする。

その時、手当てを受けていたアイスバーグとヴィルヘルムが、ふらふらと覚束ない足取りでナミの方に歩み寄った。

「あ!!!? ……ちよ、アイスバーグさん!!!? ヴィルヘルムさん!!!? まだ動いちや……!!!」

「？」

「……お前ら、おれ達から少し離れてろ。この女と……話をしてエ……」

二人の身を案じ、止めようとしたものを制し、アイスバーグ達はナミの前に腰を下ろす。

取り敢えず、今ここで捕まる心配はなさそうだと安堵するナミに、人払いを終えたアイスバーグとヴィルヘルムが深々と頭を下げた。

「まずは……ンマー……申し訳なかった……」

「君達に濡れ衣を着せてしまった。誤解は必ず後で……話にはニコ・ロビンの事だ……」

「何か知ってるの?」

重苦しい様子を見せる二人に、ナミは身を乗り出し尋ねる。

アイスバーグ達は頷き、先にナミに一つ質問をぶつける。

「——この町へ来て、あの女の様子は変わったか?」

「ええ、急に……!!?」 町へ出た後突然いなくなつて、今日の朝には——あなた……暗殺未遂の犯人になつて、仲間がやつとロビンを探し当てたら——もう私達の所へは『戻らない』つて」

ナミの脳裏に蘇るのは、アラバスタで見た時以上に冷たい眼差しと言葉。

あまりに唐突な豹変で、納得するどころか理解も及ばない間に、彼女はどこかへ立ち去ってしまった。

「私達は何が何だかわからなくて、今夜もう一度直接ロビンに船を下りる理由を聞くために、ここへ来たのよ!!？」 私達と一緒にいちゃ叶わない願いつて何？」

「……………私達の知っている事を話そう…」

ヴィルヘルムは、語る。

ルファイ達が突入する前に行った、ロビンとの会話を。

政府はアイスバーグ達の有する古代兵器の設計図を狙って、この事件を引き起こしたのだという事を。

そして古代兵器を復活させられる知識を持つロビンは、そのために利用されたのだと。

ロビンは語った。

政府が有する最強最悪の攻撃「バスターコール」が、麦わらの一味に対して向けられようとしていた事を。

その未来を回避するために、ロビンは政府とある取引を交わしたのだと。

——私を除く「麦わらの一味」の7人が、無事にこの島を出航する事。

ロビンは自らの命を賭し、仲間を救おうとした。

自ら裏切りの汚名を被り、嫌われる道を選び、仲間達に迫った凶弾を免れさせようとしたのだ。

それが、一連の事件の真相だった。

「おれ達は引き鉄を引けなかった。事もあるうに、全世界に生きる全ての人間の命より、あの女はお前達7人の命を選んだ」

ナミは明らかとなった真実に、絶句する。

アイスバーグ達は秘密を奪われた事も、ロビンを撃てなかった事も嘆き、痛々しい表情で頭を抱える。

「おれ達の方の兵器の設計図も奪われそうな今……おれ達にあの女を責める権利がねエが……!!!」

歯を食いしばり、悔しさをこれでもかと示すアイスバーグとヴィルヘルム。

項垂れる彼らは、突如ナミがどきっと倒れ込む姿を目にし、ハッと顔を上げた。

「おい、どうした!!?」

「よかった……ロビンはじゃあ……私達を裏切ったんじゃないんだ……!!!」

自分達と同じく打ちひしがれているのかと思つた二人だったが、覗き込んだナミの顔は、心の底からの安堵だった。

ナミは起き上がると、アイスバーグ達に頭を下げながら走り出した。

「早くみんなを集めて知らせなきや!!? ありがと、アイスバーグさん!!?」

「待て!!? 麦わら達もやられちまって今更、何をしようってんだ!!?」

アイスバーグが制止の声を上げるが、立ち止まったナミはそんな彼に勇ましく不敵な笑みを浮かべてみせた。

「今更ですって? 今からよ!!! ルファイ達なら大丈夫、あれくらいじゃやられない!!?」

これからロビンを奪い返すのよ!!! 迷えば誰でも弱くなるもの、助けていいんだとわかった時のあいつらの強さに、限度なんてないんだからっ!!!」

呆然と立ち尽くすアイスバーグ達を置き去りにし、ナミは走る。

そして、横たわるチョツパーの元に向かうと、その顔をヒールで踏みつけた。

「チョツパー起きて!!! みんなを探すのよ!!!」

「おいおいねーちゃんねーちゃん、そいつはすげー重傷で!!?」

「起きなさいチョツパー!!!」

「へべ!!!」

理不尽な暴力に、気絶したままのチョツパーが呻き声をあげる。周りの船大工達が止めようとするも、やる気に満ちたナミは止まる様子を見せない。

ギャーギャーと騒がしくなる男達。

目を覚まし、のそりと体を起こしてそれを眺めていたリンが、ため息をつく。

「……フー、ランファン」

「何ですか、若」

「あいつらに向けられてた凶器が、ニコ・ロビンのお陰で矛先を変えられた……その結果、おれ達の命も救われちゃったわけだ」

鋭い目で虚空を見つめ、瞳の奥に炎を燃やすリンがそう呟くと、フーとランファンの眼にも火が灯る。

為す術なく叩き伏せられた屈辱、命を救われておきながら何もできずにいる無念、それらに対する感情が激しく燃え盛っていた。

「もっペン暴れようぜ……!! 何もかも負んぶに抱っこじゃ、格好なんてつくはずもないだろ!!!」

「御意二」

にやり、と獐猛な笑みを浮かべるリンに、フーとランファンは一切の否定を返さず、深々と首を垂れる。

リンは配下の応答に満足げに頷き、騒がしいままのナミ達を見つめた。

「……あいつらの船長、羨ましいナ……」

姿の见えない麦わら帽子の男の顔を思い出し、リンは羨望に満ちた呟きをこぼした。

??

ガタガタガタ……!と、窓ガラスが揺れる。

今にも割られそうなほどに揺れるそれを見て、ガーフィールが悩ましげな声を漏らす。

「あらあら……どんどん風が強くなってきたわねエ………戸締りちゃんとしとかなくちや。エレノアちゃんも! お友達の事が心配だろうけど、いまはもう外にでちゃダメよオ?」

雨戸を閉める前に、友人に大人しくしているように告げる。

だが、いつまでたってもエレノアからの返事はなく、しんと自宅兼工房は静まり返っている。

嫌な予感があったガーフィールは、自宅のあちこちを探し回る。

「……………エレノアちゃん? エレノアちゃん!!?」

しかし、どこにも傷だらけの天使は見当たらない。

彼が机の上に置かれた「私は行きます。ごめんなさい」と書かれた手紙に気付くのは、もつとずっと後のことであった。

「フ——ッ……フ——ッ……!!!」

歯を食いしばり、口元に血を滲ませ、エレノアは体を引きずり歩く。

風雨に晒され、激痛に苦しみ、開きかけた傷口から血が零れ落ちるのも構わず、ひたすら前を目指して歩き続ける。

「行か……なきや……みんなの……所に……」

ゲホツ、と血を吐きながらも、彼女は歩みを止めない。

自らがどうなるうとも、彼らの元に向かわなければならぬと、エレノアは自身を奮い立たせる。

「私が……!!! あいつらを守らなきや……!!!」

エレノアの胸中にあるのは、強烈な後悔と責任感だった。

長く共にいた筈なのに、仁義を欠いて離れようとしたことへの悔恨が、彼女を突き動かしていた。

——ごめん……みんな、ごめん……!!!

見捨てようとして……逃げようとして!!!

勝手な理由をつけて、言い訳をして……あんた達を見殺しにしようとした……!!!

ごめん……ごめんね……!!!

どう謝ったって……何度謝ったって足りないと思う……でも!!!

体の節々が痛い。車椅子の時間が続き、鈍った身体が悲鳴をあげる。

体が痛みを訴え、今すぐに止まれと危険信号を送る。しかしそれでも、エレノアは一歩も歩みを止めなかった。

——いま助けるから……!!

今……必ずあんた達のところに行くから……!!

必ず助ける、その想いだけで仲間達の元を目指す。

やがて、煌々と燃え盛るガレーラの本社が見え始め、より一層の焦燥に駆られた時だった。

「……おや、こんな夜に一人お出かけとは……」

びたり、とそれまで止まる事のなかったエレノアの歩みが、凍り付いたように止まる。不意に聞こえた、その声。敵意などまるで感じないのに、なぜか背筋に震えを走らせる異様な気配が、エレノアの身体を強張らせる。

「夜道に君のように可憐な少女が歩くのは、ずいぶん危なく思うぞ……」
術師“殿”

ゆつくりと、声がした方に振り向いたエレノアが目にしたものは。

自分の目前に迫る、鈍い銀色の閃光だった。

「エレノアさん……!!? エレノアさん!!! どこ行っちゃったんですか……!!?」

メイは駆け足で、曇天の夜道を走っていた。

ガーフィールに頼まれ、姿を消したエレノアを探し、相棒のシャオメイと共に町を駆け回っていた。

「シャオメイ、匂いで追えませんか……?」

「……!!? ……!!!」

「そうですか……一体、どこに……ムム☒」

早く探し出さなければ、容体がまた酷くなってしまう。その前に探し出さなければ、と辺りをきよろきよろと見渡していた時だった。

暗闇の中に一人佇む、軍服を着た初老の男性に気付いたのは。

「あ……あなたハ……!!!」

「……おや、こんな夜更けに出歩く不肖の娘がもう一人……最近の若者には困ったものだ」
新聞で何度か見た事のある、世界政府における巨大戦力の顔。

海軍本部「大総統」ブラッドレイ・キング——そのような大物が、何故目の前にいるのか。

戦慄の表情で立ち尽くしていたメイは、やがて気づく。

ブラッドレイの足元に倒れ伏す——さらなる重傷を負った白虎の天使に。

「エ……エレノア……!!!」

「おや、見られてしまったか……できるだけ穏便に事を済ませたかったんだが、思った以上に抵抗されてしまったね。つつい手が出てしまった………歳はとりたくないものだ」

血濡れの少女を足元に転がし、ブラッドレイはやれやれと肩を竦める。

その様が、恩人を足蹴にされ踏み躪られているように見えて、メイの頭にカツと血が昇った。

「エレノアさんから離れなさい!!!」

「やれやれ……血の気が多い娘だ」

苦無を取り出し、投げ放とうとしたメイだが、放つ直前にブラッドレイの姿がまるで幻のように掻き消え。

次の瞬間、体中から鮮血を噴き出させたメイが、声もなく地面に落下した。

「生き急ぐなよ、若者よ………君達にはまだ、大きな利用価値があるのだから」
冷たい眼差しで少女を見下ろすブラッドレイ。

彼の放つ凄まじい覇気を前に、メイに縋りつくシャオメイはガタガタと震える他になかった。

第20章 暴走海列車

第193話 奴らを追え！ //

「じゃあ…ロビンはおれ達が嫌いなんじゃないのか——!!?」

目を覚ましたチョツパーが、キラキラと目を輝かせる。

獣型から人獣型に、まるつきり見た目が変わった彼に、彼を見ていた船大工達が呆然となる。

彼らには、トナカイが狸に変わったようにしか見えなかったのだ。

「そうよ!!? だからルフイ達を探してロビンを助けに行くの!!?」

「わかった!!? 探すぞ!!? どこにいるんだ!!?」

「それがわかんないから探すんだヨ!!?」

「よーし!!? おれ頑張るぞ——!!?」

「うおーう!!? ゴリラになったー!!!」

ナミとリンの激励にやる気を出し、人型に変わるチョツパー。

急激な体格の変化に、船大工達はさらなる驚愕で大きく後退っていたが、ナミもチョツパーも全く気にしていなかった。

「待てお前ら……」

一刻も早くロビンを救出に向かわなければ、と駆け出そうとしたナミ達。

それを、傷口を押さえたアイスバーグとヴィルヘルムが呼び止めた。

「ニコ・ロビンを追うのは勝手だが……今夜11時に政府関係者の移動便で『海列車』が出航する。ンマーおそらくだが……あいつらこれに乗る可能性が高い——つまり、ニコ・ロビンも一緒にだ」

「それを最終に『海列車』は一時運行停止になる。もうじきに『高潮』が来るからね」

「——じゃあ——つて事は……?!?!」

「これを逃してしまうと当然船も出せないし、この島から出る事もできなくなるんだ」

二人の忠告に、ハツと目を見開くナミ。

もともと急ぐつもりではあったが、制限時間が迫っていることを思い知らされ、さつと顔から血の気を引かせる。

「うそ……大変つ!!! 今何時?!?!」

「10時半だ」

「あと30分!!?!? ねエ、何とかならないの?!?!? 海列車ちよつと止めてよ!!?!?」

「ンマー、目的地エニエス・ロビーつてのは政府の人間以外立ち入り禁止の島だ。機関士も政府の人間、おれが言っても聞かねエ」

「そんな!!?」

わなわなと震え、焦りを全身に表すナミは、大急ぎで自身の頭脳を働かせる。

悩んでいる暇などあるわけがない。今はとにかく、何を最優先にすべきかを考え、行動に移さなければならない。

すぐさまチョッパーとリンに向き直り、二人へ指示を与える。

「チョッパー!!? リン!!? ルフィとゾロが飛んでった方角言うからそつちを探して!!?」

「うんよしわかった!!?」

「任せ口!!?」

「…『妖術師』はどうすル?」

「あいつなら、自分でこの騒ぎを聞きつけてやって来る!!? あいつは……ほんつと頑固だから!!? 私達を見捨てられないのよ!!! あのバカは!!!」

痛々しく表情を歪めるナミだが、頭を振って気持ちを改めると、キツと駅のある方向く。合流している暇はない、一人でもロピンの元に辿り着かねば。

その時、ずっと沈黙していたパウリーが起き上がり、引き攣った声を張り上げる。

「オイ……お前ら!!!」

「あ……!!? パウリーさん、無事で……!!!」

「このお嬢ちゃん達に、手エ貸してさしあげろ」

くいつと指でナミ達を示すパウリーに、船大工達はギョツと動揺する。

彼女達はいく数分前まで、全身全霊の敵意をもって追い回していた相手だ。なのにそれを手助けをするなど、どういう心境の変化だというのか。

当然、船大工達は納得できず、パウリーに困惑の目を向けて抗議の声を上げる。

「手エ貸すつてパウリーさん、こいつらアイスバーグさん達の命を狙った犯人で」

「まずこいつらは拘束しとくべきですよ!!? こつちもルツチさんやカクさんが行方不明で」

「暗殺犯は『麦わらの一味』じゃねエ!!! こいつらは無実だ!!! 本物の暗殺犯にハマられて、おれ達が濡れ衣着せちまったんだ!!!」

反論を返す部下達に、パウリーは大きな声で叫び、自身や真の敵への怒りを露わにする。

良いように利用され、無実の相手に罪を着せてしまったことへの罪悪感と、そうさせられてしまった不甲斐なさが、彼を責め立てていた。

「正体は知らねエが、あの仮面の奴らを相手に麦わら達は戦ってくれた!!! 現におれやアイスバーグさん達の命があるのは、こいつらのお陰だろ……!!!」

有無を言わさぬ声の強さ、そして無事に生還しているアイスバーグ達。

それらの証拠を示され、船大工達は皆何も言い返せず黙り込んでしまう。

「ルツチやカクは…探さなくていい…あいつらとはもう…会う事はねエかもな…」

「え!? ルツチさん達、どうなったか知ってるんですか!!?」

「……………里帰りだ」

「んなバカな、何で、こんな大事態につ!!」

「いいから麦わら達を探せ!!」

ガレーラで最も頼りになる者達のうちの二人が、到底納得のできない理由で消えてしまったことに、船大工達はまた抗議の声を上げる。

パウリーは一括して彼らを黙らせ、ナミにぎろりと鋭い目を向ける。

「おいハレンチ女……………!!?」

「え……………? ちよつとその呼び方」

「駅に行くんだろ!!? 案内する」

嫌な呼び方に待ったをかけようとしたナミだったが、続いて向けられた言葉に目を瞬かせる。本気で助けてくれようとしてるのだとわかり、ホッと安堵する。

「ええ……………? ありがとう」

「ゴチャゴチャ言つてねエでケジメつけろ!!」 ガレーラの名を折る気か!!!」

「…は…はい職長つ!!」

迷っていた船大工達は、パウリーの再びの一喝で我に返り、一斉に声を上げて応じる。ガレーラ中の船大工達全員が手を貸してくれる。その事実には、不安を滲ませていたナミ達はパツと表情を明るくするのだった。

「里帰りか……」

「——色々言っちゃマズイでしょうし——もう、あんな思いするのは、おれとあんだ達で……充分でしょ……」

彼らの聞こえない場所で、沈痛な表情で俯くアイスバーグにパウリーがそう語りかけ、肩を叩く。

彼らの心に刻まれた傷跡は、本当にひどいものようだ。

汽笛が鳴り、蒸気が噴き出す海列車。

本日最後の運転の前に、ブルーステーションの駅員が駅全体に放送を流していた。

『最終便ー時、「ウォーターセブン」ブルーステーション発、エニエス・ロビー行き』

誰もいない構内、人がいるのは海列車の中だけで、その中にも町の間人ではない、全員政府の間人である——ある三人を退いて。

「ここで大人しくしてろ」

「痛で!!!」

「痛でエ!!!」

「痛で——!!!」

ルツチに抱えられた、首以外を袋詰めにされた三人の男達。

ウソツプ、フランキー、グリードが頭をしこたまぶつけられ、ギロツと黒づくめの男を睨みつけ、怒号を上げる。

「てめエらもつと丁重に扱えこのバカ!!!」

「そうだバーカ!!?」

「政府のクソ共が!!!」

「いやアオイオイ」

唾を吐き散らし、吠えるフランキーとグリードだが、ルツチはまるで相手にしていない。ウソツプだけが、言い過ぎたかと青ざめていた。

『“高潮” 接近中につき、予定をくり上げ、まもなく出航致します』

「クソ…もう出ちまうのか…!!?」

刻々と迫る出航の時間に、物陰に身を潜めていた一人の男——サンジが忌々しげにこぼしていた。

風雨が吹き抜ける町の中を、三つの影が飛び跳ねていく。

屋根の上を足場に、重力がないように見える程の軽々しきで飛び越え、周囲に目を凝らし続ける。

「若ア!!! こちらには何も感じませぬゾ!!!」

「裏町の人間は全員、避難してル!!! 何かを感じたら絶対あいつらダ!!! 絶対に見逃す

ナ!!!」

「ハッ!!!」

ルフィとゾロの捜し始めてどれくらい経ったか、どこにも二人は見当たらない。

ロブ・ルッチに投げ飛ばされてそれつきりで、どこかに倒れているのかと思いきや、痕跡さえ見当たらない。捜索は難航していた。

そんな中、不意にリンがにやりと、フーに意味深な笑みを浮かべてみせる。

「しかしフー……!!? お前あんだけ関わるなっつってたのニ、手厚く協力してくれるじゃなイ!!? どんな心境の変化ダ!!?」

「……!!? 受けた恩は……必ず返すのがシンの男の在り方!!!」

賊と行動を共にすることに抵抗があつたフーであつたが、共に長くいて愛着でも移つたか、ルフィ達を真剣に探している。

フー自身、苦々しく思いつつも、手を貸すことはやぶさかではないようだ。

「何より……我らが王が決めた道ならば、最後まで付き従うが家臣の生き様!!!」

「ハツハツハ!!? 忠臣を持って幸せだよ、おれハ!!」

ふざけたように言いながら、リンはキツと前を見据える。

一体どこにいるのか、姿をまるで見せないルフィ達に苛立ちと焦りを抱き始めていた。

「おいルフィ!!! ゾロ!!! さっさと出て来ねエとロビンが連れてかれるゾ!!! 船長が仲間を見殺しにする気力!!!」

「ルフィ!!! ゾロ!!! どこにいるんだよ!!!」

別の場所で捜索を行うチョップパーも、必死に声を張り上げる。

また別の道、水路をヤガラブルの背に乗って、ナミがブルーステーションを目指していた。

「ロビ~~~~ン!!!」

強大な敵に立ち向かうためにルフィ達の下を、ロビンを敵の元に渡さないために駅を目指す。迫る時間に焦りながら、必死に先を急ぐ。

その時だった。

町中に届きそうなほどに大きな、驚愕と焦燥に駆られた声が響いたのは。

「大変だア!!! 海を見ろオ!!!」

一人の船大工が、海を凝視しながら叫んでいた。

釣られて他の者目を向けると、彼らは次第に愕然となり立ち尽くし、その場でガタガタと震え始める。

視界に映ったそれ——青い災害を目の当たりにして、身体が凍り付いていた。

「…引いた水が多ければ多い程、直、帰つて来る波もデカくなる。潮の引き方を見りやあ…高潮の規模が知れる…」

「とぶ〜!!?」

「ニヤー!!?」

「さて、今年はどう程水位が下がるかと思えば…見なア、チムニー」

海を眺め、はしやぐチムニーとゴンベを宥めていたココロが、酒瓶を傾ける。

その目に映る青——迫り来る巨大な高潮を見つめ、ぼそりと呟いた。

「海が…まるで干上がっちゃったようら…んがががが」

嘗ての町、沈んでしまった建物が露わになるほどに、干上がってしまった海。

消えたその海の質量が、そのままそっくり島に襲い掛かるのだとしたら、一体どれだけの衝撃であるのだろうか。

高潮の接近を目撃した船大工達は、呆然と固まるばかりであった。

「あれれれれれれ〜!!?」

「ニヤーニヤーニヤ〜!!?」

「ばーちゃん見て見て、なんかいるー!!? 家と家の間になんかいる〜!!?」

不意に、チムニー達が下町を見やったまま何か騒ぎ始める。

何を見ているのか、と心が訝しげに目を凝らしていると、彼女達の元に二人の訪問客が現れた。

「クソ……この辺から感じるんだガ」

「どこにも見当たりませんゾ……!!?」

息を切らせ、リンとフーがココロ達の傍を訪れる。

きよろきよろと辺りを見渡していた彼らは、ココロ達の存在にようやく気付き、驚いた様子で息を呑んだ。

「おや、おめエは……糸目の小僧」

「ココロばーさん!!?」

「ねー!!? 海賊のにーちゃん!!? ねエ!!? あそこ見て!!? なんかいるー!!?」

「なんか……?」

「さつきから何らい? チムニー……」

約一日ぶりの再会を喜ぶ前に、チムニーが下町のある個所を指差して騒ぐ。

リンは心と共に、チムニーの指さす方へ向き、じつと目を凝らしてみる、そして。

二つの建物の間に挟まる、麦わら帽子の男の姿に気がついた。

「いた——!!!」

「あんなところにいたのかあの小童メ!!!」

「ん☒ あの麦わらは………おめーらんとこの海賊王じゃねーのかい、何であんな、ん!!
?」

ココロが尋ねたその瞬間、リンが電光石火の如き速さで走り出し、下町に向かつて思
い切り飛び降りる。

嘩然としていたココロやフーは、数秒経つてようやくハッと我に返り、血相を変えて
叫んだ。

「おい!!? おめエどこ行くんらい!!? 裏町へ下りちやいけねエよ!!」

「若ア!!! おやめなさレ!!!」

「戻りなア!!! 命がいらねエのかい!!? アクア・ラグナが来るよ!!!」

飛び出したリンを追い、フーも下町に向かう。

大声を上げて彼らを止めようとしたココロだが、二人は止まる事なく、ルフィのいた
建物の方へと急ぐ。

「大変だ、糸目の兄ちゃんが………!!? 裏町に向かいやがった!!」

「仮面の奴も追いかけていきやがった!!?」

「おい戻れエー!!! 低い場所へ行くなー!!?」

船大工達もリンの暴走に気付き、驚愕と困惑の声を上げてざわめく。

迫り来る高潮が相手では、逃げない限り誰も生きて帰る事などできないという町に住む者の常識が、彼らをその場に凍り付かせる。

ランファンも思わず棒立ちとなり、下町を駆け抜ける主達を凝視していた。

「若……………何という事ヲ……………」

このままでは、大切な主君が死んでしまう。

しかし、命じられたゾロの搜索をこなせなければ、臣下としての立場がなくなってしまう。

悩んでいたランファンは、隣で固まっているチョツパーに気付き、じとりとした半目を向けた。

「……………お前はさつきから何をしてル？」

「……………イソギンチャクだ」

「ハ？」

意味不明な呟きをこぼすチョツパーに、呆れた声を漏らすランファン。

彼女の視線も気にせず、トナカイの彼は下町のある個所を凝視し続けていた。

「……こんな町中にイソギンチャクなド……………」

ため息をつき、つられてその方角を向くランファン。

しかし彼女もまた……一本の煙突の上から生えた、イソギンチャクに似た何かを目の当たりにし、チョツパーと同じく固まってしまった。

「……イソギンチャク………だナ」

「煙突からイソギンチャク………イソギンチャク?」

二人は呆然としたまま、それを凝視する。

煙突から生えるそれは、よく見れば細い三本の何かと太い二本の何かに見える。

よくよく目を凝らしてみれば……それらは、非常に見覚えのある足と鞘であることをようやく理解した。

「ゾロオ!!!」

「お前は一体何をやってるんだア!!!?」

「こら待て!!! お前らまで!!!」

イソギンチャクの正体——ゾロの位置に気付くや否や、凄まじい速度で走り出す
チョツパーとランファン。

船大工達の制止の声も聞かず、彼らは下町の煙突の元へと駆けていった。

「にーちゃんスゴイ!!!」

「バカなマネを……!!! ……手遅れになるよ!!!? 沖を見なよ……!!! もう波がそこまで来て

るんらよ!!!」

いつもの笑みを消し、険しい表情でリン達を見張るココロ。

彼女の見つめる先には刻一刻と、黒く青く巨大な災害が、命を呑み込むべく迫っていた。

第194話 “死を覚悟せよ”

「ふぬア!!!」

ズシン、と地面に降り立ったリンは、すぐさま走る。

後ろから追いかけてくるフーを放置し、麦わら帽子が覗く建物を目指す。

「麦わら——!!!」

「い……いてよめ!!!? うひろにいんのか?!」

力いっぱい叫び、青年の注意を引く。

すると、ルフイははつと目を見開き、ずりずりと何とか顔だけ振り向かせる。

「いやーおい、聞いてくれよしかしー!!? あのハトの奴に飛ばはれてよー、ほのまま飛

んれコレがうめーコトにここに…!!?」

「ふざけてんじゃねエぞ、こんな時に!!! お前がグズグズしてる間に、ニコ・ロビンが連

れてかれてんだよ!!!」

困り顔でそう語るルフイに、リンが激昂し声を張り上げる。

傍からは不真面目にしか見えない青年の態度に、ギリッと歯を食いしばったリンが、

鋭い目を開いて彼を睨みつける。

「ロビンはお前達のために……!!! 死ぬつもりなんだよ!!!」

轟音と共に、水飛沫が降りかかる嵐の中、男の叫びが負けじと響き渡る。

ルフィはリンの慟哭じみたその声を、ただじつと静かに聞いていた。

「自分一人犠牲になつてあいつは!!! お前達を政府の攻撃から守つたんだ!!! 自分がどうなるかも全部わかつて!!! ……なのにお前は……!!! こんな所で何やってんだ!!!」

ルフィを凝視するリンの表情は、どこか泣きたそうに見える。

多大な恩を受けておきながら、このままでは何一つ借りを返すこともできないかもしれないという事実には、彼の胸は悲鳴をあげていた。

「仲間は誰一人渡さねえんじゃねえのか!!!? 海賊王!!!」

ルフィは目を見開き、何も言葉を発せなくなる。

リンが大きく肩を上下させ、歯を食いしばる様をしばらくの間見下ろし、やがて口を開いた。

「じゃあやつぱりロビンは………ウソついてたのか……!!?」

「そうだ!!!」

「よかつた……!!!」

にやり、と笑みを浮かべるルフィ。

船長の闘志に再び火が灯つたことを確認したリンは、腰から険を抜き、ルフィを挟ん

でいる建物に向けて構える。

「下を斬る……!! あとは自分で抜け出せ!!!」

「おう!!!」

身構えるリンの上で、ルフィも脱出のために力を溜める。

二人の青年達が動き出した時、別の場所では三人の男女が言い争っていた。

「抜けねエよ!!? どうやって入ったんだ!!? ソロ!!!」

「いてエ!!? いででででちぎれる!!!」

「くそつ………大波はもうそこまで来るといふの………!!!」

ぐいぐいと、煙突の穴から飛び出した足を引っ張るチョッパードランファン。

しかし相当きつちりはまっているのか、まるで抜ける様子がない。

その時、痛みを訴えていたゾロが何かに気付き、訝しげな声を上げた。

「お前ちよつと待て、もしかして『鬼徹』持ってんじゃねエか……?」

「ン? これカ?」

「何でわかったんだ!!?」

「わかるんだ、そいつだけは……!!? 妖刀だから。持ってきてくれたのか、ありがとう。そ

れを手持たせろ!!? 急げ!!!」

ランファンは驚きで目を見開きつつ、背にしていた刀を鞘から抜いて手渡す。

柄の感触を確かめたゾロは、キツと煙突の内部を睨みつける。

そしてついに、*“それ”*はやって来た。

「ああ……!!? もうダメだ、間に合わねエ!!!」

「高い場所へ登れ——!!! もっと高い場所へ——!!!」

「早く逃げなア~~~~!!!」

「ルファイ!!? ゾロ!!? チョツパー!!? リン!!?」

ゴゴゴ……と轟音とともに近付いてくる、黒い影

巨大な姿でやって来て、あらゆるものを呑み込んで引き摺り込んでしまう災害。ウオーターセブンの住民達が恐れる悪魔が、その姿を現した。

「アクア・ラグナだア~~~~!!!」

見上げるほどの高さで広さを見せつける、見た事がないほどの規模の高潮。

嵐で翳った街を、さらなる闇で覆い隠そうとするようなそれが、目の前に広がる。

あまりの規模に、恐ろしさに絶句するナミの前で、彼らは動いた。

「おおおおお!!! 大・斬・元^{ダイサンゲン}!!!」

「ああああああ!!!」

気合いの咆哮を上げ、漆黒に染まった刃を振りかぶるリン。

その一撃は風を斬り、剣圧によって真空の刃と化し、強烈な一撃となつて建物の根元に食らいつく。

斬、と。一撃を受けた建物がすつぱりと切り裂かれ、微かに空中に浮かび上がる。

その瞬間を見逃さず、ルフィは左右の両手足を広げ、壁を押し退けた。

ゾロもまた、煙突の中にはまったま刀を構え、気合を込めていく。

その前に、姿の見えないチョッパーとランファンに向けて吠える。

「離れてろ!!? てめエら——!!?」

「うん!!!」

「わかつタ!!?」

「『一刀流』……『三十六煩惱』!!!」

ぐつ、と腕に力を籠め、真下に向けて飛ぶ斬撃を放つ。

煙突は真つ二つに叩き切られ、瓦礫がバラバラと飛び散る。その中で、ゾロはフツと安堵の笑みを浮かべる。

そこに迫る高潮に、やがてルフィ達は気づきすぐさま移動に移る。

「行くぞリンー!!!」

「おっシャ!!!」

「若!!? 小僧!!? 急げ!!!」

「な…何だコリヤ…」

「ランブル!!? “飛力強化”!!! 捕まって!!?」

「うおっ!!?」

「自分で跳べル!!!」

驚愕し、焦燥を表し、迫り来る災害から逃れるために町の上を跳ぶ。

ひたすらに走り、高い位置にある橋の上を目指しす。

「まだだ!!! まだアレは迫ってくるぞオ!!!」

彼らはなんとか橋の上まで辿り着き、全員で安堵の表情を浮かべる、が。

次の瞬間、波は橋の上にもまで届き、粉碎しながら、ルフィ達を纏めて呑み込んでしまった。

「麦わら達が!!!」

「アクア・ラグナにのまれたア!!!」

「嘘でしょ……!!? ルフィ……!!!」

信じがたい光景に、町の住民達やナミは目を見開き、口元を覆って言葉をなくす。災害に人が飲み込まれる悪夢のような光景に、全員恐怖に吞まれていた。

「いや、あれ見ろ!!?」

「あっ!!!」

しかし住民達は、残った橋の上に立つ人影に気付く。

歯を食いしばったパウリーが、腕に十本近いロープを巻き付け、海中に向けて伸ばし踏ん張っている。

ぐつ、と彼が力を込めると、渦の中からルフィ達が釣り上げられてきた。

「つぶほ——っ!!!」

「アギヤ!!?」「ぐえっ!!?」「うっ!!?」「く…:」「ぬウ!!?」

六人で盛大に橋の上を転がり、呻き声を上げる。

すぐさま我に返ったルフィ達は、息ができる事に気付いてまた安堵の息を吐く。

「助かっ…:」

だが、高潮の追跡はまだ終わらなかった。

残った橋の一部をも破壊し、自らから逃げ延びようとするルフィ達を捕らえようと、激流の手を伸ばしてきていた。

「ううおあああ!!!」

「まだまだ!!? 造船島へ走れエ!!!」

「急げ——!!!」

「大橋が崩れるぞオ!!!」

必死に声を張り上げ、走るルフィ達。

彼らが陸地に辿り着いた直後、凄まじい轟音と共に、一際強烈な大波が端に叩きつけられた。

「考えられねエ……ここは造船島だぞ……!!!」

「……にいてもヤバそうだ……!!!」

ゴウゴウと渦を巻く海を見つめ、住民達がごくりと息を呑む。

毎年訪れていたこれまでの高潮を遥かに超える規模に、現実かどうかを疑い始めている。

「……無茶しやがって……!!?」

「ありがと、助かったよロープのやつ~~~~」

悪態をつくパウリーに、ルフィが大きな声で礼を言う。

五体満足で船長が生きている事に安心しながら、ナミはもう一度海を見やり、ぶるりと身を震わせる。

「びつくりした、あれがアクア・ラグナ……!!! ……まだ震えが止まらない……!!?」

「……これが毎年来てたら、この島はとづくに無くなってるよ。今年のは特別だ……!!!」

気丈に振る舞いながら、緊迫した様子を見せるパウリー。

絶句する彼らのもとに、酒瓶を口に傾けるココロが歩み寄った。

「ホントに呆れたねおめエら、よく助かったもんら!!?」

「あ! 怪獣のぼーさん!!? この島にいたのか!」

「当たり前ら! あんな海の真ん中にいたら溺れて死んじまうまうわね、んがががが!!?」

「海賊にーちゃんすごーい!!?」

「ニヤーニヤー」

驚いた様子を見せるルフィに、呆れるような、感心するような、意味深な言葉をかけるココロ。

その傍で、ゾロが自分の顔面にしがみつくとチョツパーを引き剥がしていた。

「ぶはっ!!? 窒息させる気か!!!」

「こいつ…しがみついたまま気絶してるゾ」

「…何にせよ助かった、ありが——」

泡を吹いて意識を手放しているチョツパーに呆れつつ、命の恩人であるランファンに礼を言いかけるゾロ。

しかし一度振り向き、その顔を見たゾロは、ぎよつと驚愕で目を見開いた。

「…………お前、女だったのか」

「!?? しまつた、面が……!!!」

ゾロに指摘され、慌てて顔を隠そうとするランファン。

しかし、海に流されてしまったのかどこにも見当たらず、恥ずかしそうに俯く事しかできないでいる。

それを見たフーも、素顔のままに険しい表情で頷く。

「あの大波ゆエ……致し方あるまい。わしもこの通りダ」

「あれ!?? そういやゾロ、お前まで何で波に追われてたんだ? 下の町にいたのか?」

「! ……いや……別に」

「煙突に刺さっていたのダ、この男ハ」

不思議そうに問うルフィに、恥ずかしさから言いよどむゾロ。

そこへフードで顔を隠したランファンが遠慮なく告げ、ゾロに一味の視線が集まった。

「煙突にささってたってお前つ!!! あっはっはっはっはっはっ、ゾロはマヌケだなくどうやったらそんな事に」

「人を笑える立場かあんたが!!! どっちも大マヌケよ!!!」

ゲラゲラ笑うルフィだが、建物の間に挟まっていたルフィが言えた義理ではない。ナミが怒りの声を上げるも、笑うばかりでまるで堪えていなかった。

「あ……じゃあサンジとウ………サンジは!? エレノアは!」

「そうね、話す事は色々あるわ、ゾロも聞いて」

ひとしきり笑って落ち着いたのか、ハツとルフィが仲間達に問いかける。

雰囲気を切り替えたナミは表情を引き締め、ルフィ達にアイスバーグから教えられた真実を語った。

そして、聞き終えるや否や、ルフィは拳を掌に当ててやる気をあらわにする。

「考える事は何もねエじゃねエか、すぐ船出して追いかけよう!!!」

「——それ以外ねエな」

「もとよりこっちはそのつもりだったヨ」

ルフィの宣言に、ゾロとリンも頷く。

相手が何で、どれだけ困難であるかわかった上で、彼らは立ち向かう事を心に決めていた。

「おい! ロープのやつ、船貸してくれよ!!? いや、船より『海列車』はもう出ねエのか!?」

「……『海列車』ってのはこの世にパツフィング・トム一台きりだ。かつていた伝説の船大工のチームが、力を合わせてこそ完成したあれは奇跡の船なんだ」

少なくとも速さではこれ以上のものはないと、パウリーは厳しい視線で否定する。

ルフィは諦めず、船大工達全員に向けて尋ねる。

「じゃ船貸してくれ、この町で一番強くて速エ船!!?」

「いい加減にしろてめエら!!! たった今海で何を見た!!?」

「そうだぞ、今、海に出られるわけねエだろ!!?」

「バカか!!!」

無謀な事をのたまうルフィに、船大工達全員から怒号が飛んでくる。

毎年来る高潮にも耐えてきたはずの町が、今年に限って想定以上の被害を被っている。

例年通りにはいかなない状況なのに、自ら死に行こうとしているに等しい彼らを生かせる気にはなれなかった。

「朝まで待て。嵐が過ぎたら船くらい貸してやる」

「——もし朝まで待ったとして、私達の目的は果たされるの!!?」

宥めようとするパウリーに、不意にナミが口を挟む。

厳しい表情で仁王立ちした彼女は、同じく険しい表情で黙り込むパウリーを睨みつけ、告げる。

「エニエス・ロビーって私…知ってるわ。政府の島だと聞いて思い出したの、そこは正義の門がある場所じゃないの!!?」

「?」

「何だそりやア」

「政府所有の『司法の島』 エニエス・ロビー、そこにあるのは名ばかりの裁判所……!!」

そこへ連行される事こそが罪人の証とされ、海軍の領域である『正義の門』まで連れていかれる。

その先にあるのは『海軍本部』、『インペルダウン』。逃げ場など、そこへ行つた時点でなくなつてしまふのだ。

ナミのその言葉に、パウリーの否定の言葉はなかった。

「賞金首のロビンにとつてはどこへ運ばれようと、その先は地獄よ!!! こうしてる今も

ロビンは刻々と『正義の門』へ近づいて行つてるのに!!! 朝までなんて待てるわけな

いじゃないっ!!!」

「——そこまでわかつてんなら一つ教えとくが……」

パウリーは激昂し叫ぶナミを睨み、厳しい声で語り出す。

荒ぶる女を落ち着かせるため、というよりも、聞き分けのない子供打当層に諭すような、そんな苛立つた雰囲気がある。

「例えば海が今、平穏でお前らが船を出せたとしても、そこへ行くべきじゃねエ。お前ら自身海賊だつて事を忘れるな」

パウリーはさらに語る。エニエス・ロビーに挑む海賊は一人もいないと。

世界の中枢に近い場所であり、海軍の最大戦力の入り口がある場所でもあるそこに手を出せば、どうなるかは誰もが知っているからだ。

「お前ら『世界政府』の中枢にケンカでも売る気か!!」

男の咆哮に、ルフィは黙って立ち上がる。

ぎろりと船大工達を睨みつけ、ぐつと拳を構え、凄まじいまでの気迫を放ってみせる。
「じゃあ船は、奪っていく!!! おれ達は今、海へ出る!!!」

その瞬間、どばあつ!と大きな波が地面に打ち付け、飛沫と轟音が撒き散らされる。

まるで海が怒りを表すかのような凄まじい音に、船大工達は慄き、チムニーとゴンベはギョツと後退る。

「仲間が待ってんだ!!! 邪魔すんなア!!!」

一歩たりとも引く気を見せないルフィ。ゾロ達も同じく、力尽くでこの先へ向かう姿勢を見せる。

パウリーはちつと舌打ちし、ロープを手に前に踏み出した。

「いいぜ、相手になつてやる」

「パウリーさんっ!!!」

「待ちなおめエラア!!!」

一触即発の雰囲気になりかけた時、突如ココロが声を張り上げる。

ハッと振り向いたルフィ達に、ココロは酒を喉に流し込みながらため息交じりに口を開く。

「悪いのはおめエら麦わらア、パウリーの言う通りらバカたれ…」

「うるせエな、ばーさんには…」

『関係ない』な、ああ…まあ聞きな…まったくおめエら放つときや死ぬ気らね。いいかい、あのアクア・ラグナを乗り越える船がこの世に存在するとしたら、伝説の男が作った『海列車』だけら…」

「だけどそれは今ここにねエから、おれ達は船で…」

ここで待っている暇はない、今すぐにでも仲間を助けに行きたいと逸るルフィ達に、ココロは背を向ける。

一度振り向き、ココロは驚愕の一言をルフィ達に放った。

「死ぬ覚悟があるんなら…ついてきな。出してやるよ『海列車』」

第195話 “暴走海列車”

豪雨が降り注ぐ、荒海のご真ん中。

ゆらゆらと揺蕩うレールを手繰り走る海列車の客室の中で、その戦いは行われていた。

「“首肉フリット”!!!」

首を狙った蹴りを喰らい、黒服の男が吹き飛ばされる。

すたつ、と静かに直立の姿勢に戻った彼を目の当たりにして、床に横たわっていたウソップが驚きの目を向ける。

「サンジ!!? お前が何で“海列車”にいるんだ!!?」

「そりゃあ………こつちが聞きてエよ、そのの……あー、名前など存じませんが、そののキミ」

「わつぎとらしいなてめーコノ」

盛大に言い争って出ていった青年に対し、しらつと素知らぬ顔を見せるサンジ。

その様子を見ていたフランキーとグリードは、驚愕の顔から徐々に納得の表情に変わっていった。

「お前ら……つまり海賊仲間か……」

「元な」

お互い意地があるため、サンジもウソップも親しい様子は見せない。

サンジは見慣れない二人の男達に、訝し気に眉を顰める。

「誰だてめエらは」

「おれ達アウオーターセブンの裏の顔!!?」 解体屋「フランキーとグリードだ」

縛られたまま、険しい表情で体を起こし、名乗るフランキー。

後、彼らの顔面に強烈な蹴撃が叩き込まれた。

「てめエがフランキーか!!!」 クソ野郎共!!! よくもあん時やウチの長つ鼻をえらい目に

!!! 何枚にオロされてエんだコラア!!!」

「いやいやちよつと待て!!? あれから色々あったんだ!!! こいつらは一時メリー号を

助けてくれたし」

「てんめエく!!! この縄解けたら憶えてろオ!!?」

「グフツ……たいした蹴りしやがるじやねエか!!!」

端から血を流し、倒れ込むフランキー達に怒鳴りつけるサンジ。

仲間割れのきつかけになったという印象があり、最悪な初対面となった彼をウソップ

が止めようとする。

「そうだ…メリー号は………!!!」

しかし、助けられた大事な船が迎えた結末を思い出してしまったウソツプは、しゅんと表情を翳らせ俯いてしまう。

一体何事か、と振り向くサンジに、フランキーが待ったをかけた。

「おいおい待て、今しんみりしてる時か。とにかくお兄ちゃん頼む、縄を解いてくれ」

「誰がてめエの縄を解くか、一生捕まってるタコ」

「てんめエ人が下手に出てりやいい気になりやがって」

「落ち着け兄弟!!? メンチ切ってる場合じゃねエ!!?」

「おいてめエらやめろつてのに!!? グズグズしてたら、見つかっちゃうだろうがア!!!」

三人の言い争いを止めようと、ウソツプが状況も忘れて力の限り叫んでしまう。

列車の最後尾から響き渡るその声に、各車両に控える何十人もの戦士達が、その身に気迫を纏い始めた。

??

風雨が吹き荒れる中を、ココロを先頭とした一団が歩く。

ウオーターセブンの住民達も近づかない寂れた場所、その先の錆びた扉のもとを、数人で訪れる。

「この倉庫は8年も放置されてる。海列車に至っちゃ12年以上つかずら、もう動か

ねエかも知れねエな、んががが」

「おい、それじゃ困るぞ!!!」

「正面の扉にも鍵がかかって…ん？ 何ら開いてるねエ」

ガチャガチャと鍵を回そうとしたココロだが、扉はすぐに開いてしまう。

不思議に思いながらも、ココロは重い扉を開けて、もう随分使われていない明かりを点ける。

そして、光に照らされたものを見て、ルフィ達は目を見開いた。

「うおー!!! ……!!? あった!!! かっこいいぞ——!!!」

「言つとくまともなモンじゃねエよー」

そこには確かに、〃海列車〃があつた。

今まさに海を走っているものと全く同じ形状で、先頭に鮫の顔が取り付けられた鋼の船。

長く封印されていたその車体を前に、ココロはにやりと笑みを浮かべる。

「こいつの名は『ロケットマン』。とても客など乗せられねエ〃暴走海列車〃ら」

「〃暴走海列車〃!?」

「サメのヘッドは洒落でつけてあんならね」

「速そ〜〜!!!」

少年心をくすぐる列車を前に、ルフィとチョッパー、リンが目を輝かせる。

何やら不穏な単語が聞こえた気がしたが、二人ともまったく気にしていなかった。

その時一味は、列車の運転席から降りてくる、二つの人影に気付いた。

「あれ?!? アイスのおっさん!!! ビルのおっさんも!!!」

「麦わら……よく無事だったな………海賊娘の言った通りだ」

「……ココロさんが連れてきたのかい」

先頭にいるココロを見て、フツと笑うアイスバーグとヴィルヘルム。

ココロもまた、頭に痛々しく包帯を巻いたまま、工具箱を手にしているアイスバーグ達を見つめる。

「命はあったようだね、アイスバーグ。おめーこれ何してんらい……」

「……ここにいてるって事は……あんたと同じ事を考えたのさ——バカは放つとけねエもんだ」

「んががが」

考える事は皆同じか、と笑うココロに、アイスバーグ達も肩を竦める。

二人はルフィ達に目を向け、唸るような音を立てる海列車に向けて顎をしゃくる。

「使え。整備は済んだ……水も石炭も積んで今蒸気をためてる」

「おっさん準備してくれたのかー」

「喜ぶのは生きてられてからにしなさい。この『ロケットマン』は『パツフィング・トム』完成以前の『失敗作』なんだ。どう調整しても蒸気機関がスピードを抑えられず暴走するんだ、命の保証などできないよ」

「ああ!!! ありがとう、アイスのおっさん!!!」

触れる事すら憚られるような代物に、苦笑交じりで、本気で乗るのかと視線で問うアイスバーグ達。

しかしルフィは全く臆する事なく頷き、拳を掌に打ち付ける。

「よ——し!!? 行くぞお前ら、乗れー!!? ばーさん、ナミが来たらすぐ出してくれ!!!」

やる気いっぱい、初乗車となる海列車に乗り込もうとするルフィ。

しかし、タラップに足を乗せた直後、彼はふらふらとその場へあたり込んでしまった。

「ルフィ大丈夫か?!? さっきから足元ふらふらしてるぞ」

「血を流しすぎたんだろ」

「ああ、ちよつとうまく力が出ねエ……肉でもあれば……」

ロブ・ルツチとの戦いで受けた腹の傷を押さえ、顔をしかめるルフィ。

傷自体は気合いで塞いでいるが、体力は浪費されたまま回復していない。このまま戦いに赴くのは、流石に心許なかった。

「急いで、こつち!!?」

「この辺で食べたらいいじゃないか」

「私がそんなに食べるか!!! ごめん遅くなった!!?」

すると、入口の方からわーわーと、ナミを筆頭とした数人の駅員達がやってくる。

何やら荷車を引き、荷台に大量に何かを積んで向かってくる彼らに、ルフィは思わず怒りの声を上げる。

「ナミ!!? おい何やってんだお前!!? 早く乗れバカヤロー!!!」

「わっ、すごい。これも『海列車』!!?」

「どこ行ってたんだ!!? 時間がねエつつつたの誰だよ!!? その荷物何だ!!?」

「この非常時ニ…!!!」

リンも同じく、勝手に行動した彼女に対し苛立つ様子を見せる。

ナミは然して気にした様子も見せず、荷車を覆っていた布を取り払う。

「肉とお酒」

「文句言つてごめんなさい!!!」

「ご相伴に預かります!!!」

ルフィとリンは即座に謝罪し、積まれた食料をばくばくと片っ端から平らげる。ゾロも乗っていた酒に手を伸ばし、目を輝かせながら喉に流し込む。

そこでふと、辺りを見渡していたナミが、困惑気味に声を漏らした。

「ところで…エレノアは来てないの!?？」

「あ」

「そういえば、全く姿を現さねエな……………」

「来てないならそれはそれでいいのよ。今のあいつと一緒に来たって……………正直戦力になるとは思えないし」

一味に起きた騒動に、真つ先に駆けつけていてもおかしくないはずの天使。

全く見当たらない事を訝しく思いながら、その事にナミはホツと安堵の息をついていた。

「…………世話になつてるって奴に止められてんだろ。来てねエなら逆に好都合だ。あいつはここに置いて先に……………」

「——連れて行かれまじタ!!!」

待つ必要はない、とゾロが酒瓶を抱えて列車に乗り込もうとした時。

海列車を格納する空間に、突如現れた少女の、悲痛な叫び声が木霊する。

振り向いたナミは、見覚えのある顔にハツと息を呑んだ。

「あんた…あの時の」

「チャン・メイ!!!」

肩を上下させ、衣服に血を滲ませた少女は、今にも泣き出しそうな表情でルフィ達を凝視する。

困惑するルフィ達とは真逆に、リンとフリー達は少女・メイの姿を目に捉えた瞬間、得物に手をかけ身構えていた。

「……………こんな所デ、こんな状況でチャン家の皇女様に遭うとハ、神様つてのは嫌がらせの天才か何かなのかネエ」

腰に下げた刀に触れつつ、細めていた目をわずかに開けるリン。

その場にいた全員が、彼らの間に走る緊張感に気付き、口を閉ざさるを得なくなる。

「チャン家の跡継ぎガ、妖術師」と共に居たという事ハ……………狙いは我々と同じく、賢者の石“カ”

「よくもおめおめト、政敵である我らの前に出て来れたものだナ……………」

「…? お前ら、知り合いなのか?」

「人の国の事情ダ、口を挟むナ」

「何だっつてんだ、お前らはよ!!!」

ゾロが問うも、殺気を放つランファンに拒否され、つい苛立ちの声を上げる。

怒るゾロに誰も注目せず、リン達は鋭い目で凝視してくるメイを睨み返す。

「チャン家の小娘メ……………この非常時に一体何の用デ……………!!!」

「エレノアさんは……!!! 連れて行かれました!!! ブラッドレイ・キング………海軍大総統二!!!」

因縁を滲ませる彼らの警戒を無視し、涙を流してメイが叫ぶ。

リン達は彼女の告白にぎよつと目を見開き、武器を握る手からフツと力を抜いていく。

「ブラッドレイって………あのおじいちゃんに?」

「ごめんなさい……!!! 止めようとしたけど、手も足も出なくテ………!!!」

がくつ、とその場に膝をつき、痛々しい慟哭の声を上げるメイ。

ナミは仲間がここに現れない理由を知り、どうしてもつと考えなかつたのかと、悔しげに顔を歪め、掌に爪を食いこませる。

「もしあなた達がエニエス・ロビーに行くなら!!! どうか私も連れてってください!!!」

必ず役に立ちます!!! 恩人ヲ……!!! 助けたいんです!!!」

「……取り返すモンが増えたな」

「オイオイ、こいつも連れていくのかイ?」

「人では多い方がいいだろ、事情は知らんが諦めろ」

深々と頭を下げるメイを見下ろし、荒い息をつくゾロの呟きに、リンが抗議じみた声を上げる。

しかし即座に一蹴されてしまい、彼は渋々引き下がる他になかった。
「麦わらア〜!!!」

さらにそこに木霊する、どたどたと喧しい足音に男の声。

見れば、全身傷だらけになった数十人の集団、フランキー一家とグリードファミリーが、必死の形相で駆け込んでくる姿があつた。

「頼む!!! おれ達も連れてつてくれエ!!! エニエス・ロビーへ行くつてガレーラの奴らに聞いた!!! アニキ達が政府に連行されちまつたんだ!!! 追いかけてエけど…アクア・ラグナを越えられねエ!!!」

口を開いた瞬間、どぼつ、と滝のような涙を流す一家の一人、ザンバイ。

他の者達も同じく、悔し気に歯を食いしばる様が続き、運転席から顔を出したココロが声をかける。

「相手は世界政府らよ」

「誰だろうと構うかア!!!」

「アニキ達を取り戻すんだ!!!」

「おれ達はアニキ達の為なら命だつて惜しくねエよ!!!」

「頼むよ!!!」

「冗談じゃないわ!!! あんた達が今まで私達に何をしたかわかつてんの!!!」

「恥をしのんで頼んでる!!! アニキ達を助けてエんだ!!!」

懇願する一家とファミリーに、ナミは全力で拒絶の声を上げる。

一味の亀裂の原因であり、仲間に手を出した乱暴者達の願いなど、何の見返りもなく受け入れられるはずがない。

それでもと、深々と頭を下げるザンバイの前に、ルファイが仁王立ちして告げる。

「乗れ!!! 急げ!!!」

迷うことなく、一家とファミリーを受け入れるルファイ。

彼の言葉に、悲痛に歪んでいた彼らの表情がパツと明るくなった。

「麦わらア……………!!!」

「ちよつとルファイ!!!」

「ま、いいよ」

「すまねエっ!!! 恩にきる!!!」

ガンツ、と地面に額をぶつけ、心の底からの感謝を伝えるザンバイ。

ナミが抗議の声を上げるが、ルファイはにこにここと笑いまつたく気にしない。

呆れて大きなため息をつくナミの肩を、ランファンが同乗し肩を叩いていやつていた。

「でも、その車両じゃなくていいんだ!!? おれ達ア、おめエらに合わせて『キングブル』

で海へ飛び出すからよ!!? 車両の後ろにつかまらせてくれればいいんだ!! よろしく頼む!! じゃ、後で!!!」

「はい!! では後デ!!!」

「何故お前が仕切るんだ…?!」

「ムオオオオオ!!! 行くぞお前らア!!!」

「待っててくれよ、グリードさアん!!!」

参戦へのお許しが出た事を喜び、準備のためにかけていくフランキー一家とグリードファミリー。

その背中を見送ってから、ココロは運転に意識を戻した。

「んがががが、ほいじゃ行こうか」

気づけば、海列車からは蒸気が噴き出す音が聞こえてくる。

アイスバーグとヴィルヘルムが準備し、ココロが運転する最速の船が、今数十年の時を経て、再び走り出す時を迎えていた。

「さア海賊共、ふり落とされんじやらいよ!!! ウォーターセブン発エニエス・ロビー行き

“暴走海列車” 『ロケットマン』!!?」

「よし!!! 出航!!!」

ガコン……と、車輪が回り、車体が前へと進みだす。

開かれた扉の先に広がる、荒海に向かってゆつくりと、鋼の船が蒸気を噴き上げ動き出した。

「行くぞオ!!! 全部奪い返しに!!!」

ルフィの咆哮に合わせるように。

“暴走海列車”『ロケットマン』は、巨大な力に立ち向かう戦士達を乗せて、盛大な汽笛を鳴らしてみせた。

第196話 “同志よ!!?”

「水路を出るよ!!! 『ロケットマン』!!! 全員覚悟決めなア——!!!」

ココロがそう叫ぶと同時に、暴走海列車が扉を抜け、海へと飛び出す。

凄まじい速度で着水すると、その数秒後に町の水路から、大勢の男達の雄叫びが響いてくる。

「よオし “海列車” が出てきた!!?»

「こつちも出撃だ、野郎共オ〜〜つ!!!」

「「ウオオオオオ〜ツ!!!」」

気合いの咆哮が上がった直後、町から巨大な影が二つ飛び出す。

派手な嘶きと共に、その怪物達は要塞のような乗り物を引いて、空中に飛び出してくる。

「飛べ——つ!!! ソドム!!! ゴモラア〜!!!」

「何だありゃ!!!? 何か飛んできた〜〜!!!」

目を丸くするルフィの視界で、二体の怪物——縞模様が目立つ、一家とおそろいのゴーグルをつけた巨大なブル達が嘶きを上げる。

「麦わらさーん!!! フランキー一家&グリードファミリー、総勢80名!!? お世話になりま〜す!!!」

「うは——!!? でっけ——ヤガラブルだア!!!」

「キングブルさ!!? 荒波も走る最上ランクの『ブル』らー!」

大きく名乗りを上げるうと共に、フランキー一家は前を進む海列車の客車に向けて、これまた巨大な錨を発射する。

錨は真つすぐ客車の壁に食らいつくと、衝撃と共に要塞とキングブル達を海列車に固定した。

「畜生、あのヤロー共……!!!」

大きな揺れに襲われ、頭を打ったゾロがぼやきながら目を吊り上げる。

彼に向けて、要塞の中から一家とファミリーがにこやかに手を上げてみせた。

「『『『よろしく!!!』』』」

「無茶すなー!!!」

思わず怒りの声を上げるも、全く気にする様子がない。

苛立った様子で唸るゾロを他所に、客車内に備えられた音管からココロの音が響いてくる。

『運転室より緊急連絡!!? これから線路をつかむと急激に速度が上がるよ!!? 軽傷

で済むようにしつかりしがみついてな!!』

「とりあえずケガはするんだ…」

「みたいですネ…」

まったくありがたくない忠告に、ナミとメイが頬を引きつらせる。

取り敢えず言われた通りにしようと、全員が衝撃に備えて客車内のものにしがみつこうとした時だった。

「もう少し!!? ばーちゃんもう少し右〜右!!?」

「ニヤーニヤー」

不意に聞こえてきた声に、全員がハッと目を見開き、慌ててココロが窓から身を乗り出す。

すると、車体の機関部の上ではしゃぐ孫娘とペットの姿を目の当たりにする。

「チムニー!!! ゴンベ!!? おめーらついてきてたのかい!!!」

「きてた——!!? アハハハ」

「ニヤーニヤー!!?」

「何てこった、早く中に入んなア!!! 吹き飛んじまうよ!!!」

必死に手を伸ばし、車内に呼ぶココロ。

その間も、ココロの操縦によって海列車の車輪が、海面近くを漂う線路に近づいてい

く。

やがて、車輪が激しい金属音と共ににはまった瞬間。

「ゴツ!! と、海列車に乗った全員の身体に、凄まじい圧がもたらされた。

「うおおあああ〜っ!!!」

空気が強固な塊となつてぶつかり、ルフィ達はたまらず仰け反らされる。

車体の先頭に座っていたルフィも、危うく強烈な風圧で吹き飛ばされそうになる。

「ウオ!!? こりゃ外にはいらねえ!!!」

ザンバイの声で我に返った一家達は、ザンバイとスクエアガールズを残して、大急ぎで要塞の中に引つ込む。

その間も海列車は、嵐が吹き荒れる海を猛烈な速さで駆けていくのだった。

客車の中に、荒い息遣いが響く。

激しい運動を終えた後のように疲弊したルフィ達は、しんどそうに床に座り込んだ。

「あー……」

「いたたた……」

「ものすげー加速だ……!!?」

「んがが!!? 加速でなく暴走らよ」

大半の者達が、身体を客車内のどこかにぶつけたようで、痛そうに呻き声を上げる。ココロだけが唯一、平然とした様子で笑っていた。

「あーマジで恐かった」

「腰うった…」

「いやいやびびった!!?」

「あそこは特等席じゃねエな…ふつとぶかと思つたぞ」

ついメリー号に乗っていた時と同じ気分になっていたルフィは、二度と乗らないと心に決めた様子で息をつく。

取り敢えずのところ、誰も吹っ飛ばされてそのままにはなっていないようだ。

「…………ちよつと待て。この車両におかしな奴らがいるぞ」

そこでふと、ゾロが険しい表情で告げる。

車内のある数人は、誰の事を言っているのかと互いの顔を見合わせ、困惑の声を上げた。

「「おい、そりゃ誰だ」」

「お前らだよ!!!」

「あんたもでしょ!!!」

「おめエもだろ!!!」

タイルストン、ルル、パニーニヤの訝しげな声に、パウリーがまず叫び、続いてセレネが叫び、最後にゾロが怒号を上げる。

いつの間にか乗っていた彼らは、ルフィ達の驚きの目を前に平然と向き合う。

「——お前らの仲間を連れ去った『敵』は、アイスバーグさん達の命を狙った『犯人』でもあるんだ!!? —— どうせお前ら止めても止まらねえんなら……おれも参戦する!!?」

傷跡がまだ痛々しいパウリーが、決して退く気を見せずに告げる。

無謀な戦いに挑むルフィ達を放っておけないというよりも、置いていかれてなるものかという気概のようだ。

「あくまでもガレーラとは関係ねえ、おれの単独行動としてな……!!!」

「がははは。パウリー!!! おれ達は、お前にくつついて来りやあアイスバーグさん達の『敵』に会えるとふんで、一緒に炭水車に隠れてたんだ!!!」

「——案の定、そういう事らしいな……この戦い。おれ達も加えて貰うぞ」

タイルストンが豪快に笑い、ルルが静かに首肯する。

その隣で、ふんふんと鼻息を荒くするパニーニヤが口を開いた。

「エレノアが……友達が連れてかれたってんなら、行かないなんて選択肢はないよ!!? 血が怖いなんて言ってる場合か!!!」

「…父さんに手を出されて泣き寝入りするなんて、はらわたが煮え繰り返って仕方がない……………ですから」

丁寧な口調を保とうと努めているが、セレネの眼の奥にも激しい怒りの炎が燃え盛っているのが見て取れる。

集った船大工達全員が、恩人の敵への怒りに燃えていた。

「さらに——その『敵』ってのは当然、フランキーのアニキとグリードのアニキを連れ去った奴らでもある……………!!!」

「そうだわいな!!? あたしら、そいつが誰なのかもはつくりと知ってるんだわいな!!?」

「やいガレーラ!!? あんたらアニキ達に何かあつたらどう責任取るんだわいな!!!」

「黙れ!!? 一番辛いのはアイスバーグさんだ!!!」

もともとそりが合わなかった両者が、面と向かって激しく罵り合う。

それを、状況を全て理解できていないマイルストーンが怒号を持って止める。

「パウリー!!? おれ達にまず説明しろ!!!」

「知ってんだろ…真犯人」

ルルが静かに問うと、パウリーは悲痛な表情で黙り込む。

代わって、セレネが腹立たしさを隠そうともしない険しい表情で顔を上げ、激情を押し

さえた声で語り出す。

「……クマの仮面の大男にやられた後……少しだけ会話の内容が聞こえていた。腹立たしい事この上ない……!!!」

「……急に意味なく姿を消せば、察しもつくか……じゃあ、答え合わせしてやるよ」
パウリーに問われ、セレネがグツと唇をかみしめる。

何度も深呼吸をし、逸る気持ちを落ち着かせ、閉ざしていた口を開き答える。

「仮面の奴らの正体は……ルッチ・カク・カリファ……そして酒場のブルーノ——あの4人が政府の諜報部員だった……あの人達が、父さんとアイスバーグさんを殺そうとした……!!!」
生き延びたスクエアガールズが知った、あまりにも残酷すぎる真実。

町の住民達から厚い信頼を受けていた男達が、政府の命令で社長を裏切り、命を狙ったという事実。

それを改めて耳にしたルル達は——これ以上ないほどに目と口を開き、驚愕をあらわにした。

「想像だにしていなかったんかい!!! 誰だと思ってたのよあんた達!!!」

我慢ができなかったセレネが叫び、三人にツツコミを入れる。

「ここまでの訳知り顔は一体何だったのか、と言わんばかりの豹変だった。

「裏町の『マイケル』と『ホイケル』?」

「そうそう」

「だよね!!？」

「誰だよ!!!」

パウリーも一緒になって、的外れな推理を披露する三人に吠える。

ピリピリと張りつめていた空気が、完全に何処かに吹き飛んでしまっていた。

「じゃあ、まー……………!!？」 フランキー一家とも、グリードファミリーとも、ガレーラの船大工達とも、町じやゴタゴタあつたけど、この先はここにいる全員の「敵」は同じだ!!？」

空気を換えるように、ルファイが立ち上がりそう告げる。

パウリーも、ザンパノも、車内に集つた勇士達の注目を受け、確固たる意志を目に宿して仁王立ちする。

「これから戦う中で、一番強えのは特に、あの「ハトの奴」だ!!？」 あいつは必ずおれがぶつ飛ばす!!!」

「———そうだな、この戦いは奪られたモンをあの4人から奪い返す戦いだ。あいつらへ到達しなきゃ何も終わらねエ」

「………そんデ、おれ達も共闘を余儀なくされちまつたつてわけカ」

「遺憾である」

リンがメイを見やりながら眩き、フーが同意すると、メイも不満げな様子で細目を向ける。

だが、何も言わない所を見るに、共闘する事自体に文句はないようだ。

「ばーちゃんばーちゃん、高潮だー!!!」

そんな中、窓から外の様子を伺っていたチムニーが声を上げ、全員にあつ、と迫り来る災害の事を思い出させた。

「そういえばココロさん!!? 運転室から離れていいの!!?」

「んががが、言つたらろ! 『ロケットマン』は『暴走海列車』、あたしの仕事は列車を線路に乗せるまで!!? 運転しようにもスロットルが効きやしねえんら。したがって列車は常にフルスロットル!!! もう誰にも止められねえんら!!!」

「ウソ!!!」

回避も逃避も叶わないのか、とナミが慌て、ルフィに振り向く。

このまま進むだけでは、確実に高潮に吞まれて木端微塵にされてしまうのは明らかだ。

「ルフィ!!? 列車が大波にぶつかつちゃうわ!!? ルフィ!!?」

「——せつかく同じ方向むいてるもんが、バラバラに戦つちや意味がねえ」

ルフィが前に手を出し、パウリーとザンバイが互いの手首を握り合う。

三角を描く、奇妙な握手を交わした三人の男達は互いに目を合わせ、それぞれの覚悟の強さを確かめ合った。

「いいか、おれ達は同志だ!!! 先に出た『海列車』にはおれ達の仲間も乗り込んでる!!!

戦力はまだ上がる!!! 大波なんかにはやられんな!!! 全員目的を果たすんだ!!!」

ナミが、ゾロが、チョップパーが、リンが、フーが、ランファンが、メイが。

そしてガレーラの船大工達が、フランキー一家が、グリードファミリーが、全員が大切な人を取り戻すための覚悟を決め、見つめ合っていた。

目的を果たすまで、誰一人決して死なず、生きて帰ってくるのだとそう心に決めて。

「行くぞォ〜!!!」

「「「ウオオオオ——ッ!!!」」」

「んががが。さーおめエらこの波、何とかしてみせなア!!!」

雄叫びを上げる彼らの前に、それは迫る。

見上げるほどの高さを誇る水の壁の前に、男達はそれぞれで用意した武器を持ち出し、構え始める。

「『デミ・キャノン』!!!」

ドオン!とタイルストンの放った砲弾が、高潮に向かう。

しかし、その一撃は災害を前にあまりに小さく、パスンと呆気ない音を立てて呑み込

まれてしまった。

「……穴も開かねエ…当然か…!!?」

「うおおお!!?」

悔し気に歯を食いしばるタイルストーンに続き、一家やファミリー達も大砲を用意し、次々に撃ち込んでいく。

しかし、何発何十発と撃ち込まれても、高潮に穴が開く様子はなかった。

「ひるむなア!!! どんどん撃ち込め——っ!!!」

「ぬあああ!!!」

「んががががが!!? 頑張んなア!!?」

無力感に苛まれる光景だが、男達は諦めない。

質が足りないというのなら量で勝負だと、間髪入れず、ありったけの砲弾を打ち出し、炸裂させ続ける。

その様子に、ココロが酒瓶を片手に囁す声をかけていた。

「線路は多少浮上するが、アクア・ラグナは越えられないよ!!? 直撃すりやあこの『口ケットマン』もひとたまりもねえや!!!」

「ギャ——ッ!!! おれ達死んじやうのか!!!」

「んががが、らから言つたろ。覚悟決めなつて」

「え——!!?! あたし達も——!!?!」

「ニャー!!?!」

改めて自分達がとんでもない現場に乗り込んでしまったのだと気付き、チムニーとゴンベ、ついでになぜかチョッパも目を剥く。

うちでも外でもぎやーぎやーと騒がしくなる中、不意に客車内にいたルフィとゾロ、そしてメイが機関車の上に乗りに出した。

「んよっ」

「とウ!!?!」

「おい、真正面に撃ち続けろ!!!」

「お前ら何する気だ!!!」

「大砲を撃つ」

ゾロがそう言い、三人は機関車の先端に陣取る。

武器も何も持っていない様子の彼らに、ザンバイが訝しげに問いかけるも、容量の得ない答えでますます首を傾げる。

構わず三人は、目前にまで迫る高潮を睨みつけ、闘志を高めていた。

「お前までなんで来るんだよ」

「私の勝手でス!!?! そちらこそ私に任せて下がってハ?」

「ほざけ」

軽口を叩きつつ、ゾロは三本の刀を抜き、口と両手に備える。

相変わらず大砲の類の見当たらない三人に、ザンバイ達は不思議そうに眉を顰めるばかりだ。

「何やってんだあいつら」

「撃ち続けろと言ってるぞ、援護しろ!!!」

理解できずとも、言われた通りに砲撃を放ち続ける男達。

相変わらず高潮に穴が開く様子はなく、海面が弾けてもすぐに埋まってしまう。しかし諦める事なく、ひたすらに攻撃を加え続ける。

「エレノアの先祖がやったのが、こんな感じだったか…!!?」

にやり、と笑みを浮かべながら、ゾロは機関車の左端に立ち、三刀で円を描くように構える。

右端ではメイが足元に五本の苦無を突き立て、中央ではルフィが拳をシュツシュツと空中に向けて何度も打ち付ける。

「ゴムゴムの…!!!」

「三百煩惱」

「ゴッドフォース
軍神五兵!!!」

ルフィの拳は徐々に勢いを増し、ゾロの全身の筋肉が盛り上がり、メイの周囲に青い閃光が進る。

轟音と共に、巨大な高潮が全てを纏めて呑み込もうとしたその直前。

「『攻城砲』!!!」

ゴオオツ!! と。

三人が放った渾身の一発が、空気を押し退けた強烈な砲撃となり、
「アクア・ラゲナ」 高潮 “ のど真
 ん中に炸裂する。

放たれた力は水を押し退け、少しずつ少しずつ膨れ上がり、そして。

激しい水飛沫を上げて、高潮の中心に巨大な穴が開いた。

「!!!ぬ……………!!! 抜けたア……………!!!」

視界の全てを覆っていた水の壁を抜け、広がる海原を目の当たりにしたザンバイ達は、感動と安堵の叫び声をあげた。

第197話 “謎のヒーロー”

「うウ!!! う!!? うお~~~~!!! 死ぬかと思ったア~~~~~!!!」

「アクア・ラグナを抜けたぞ~~~~~!!!」

「やった——っ!!!」

弾ける水飛沫、吹き荒れる暴風を抜け、海列車は高潮を突き破り走る。

フランキー一家とグリードファミリーは自分達が五体満足でいる事に歓喜し、涙を流して雄叫びを上げる。

それほどまでに、死を覚悟した緊迫した数分間だった。

「んががが……コリヤたいしたモンら……!!! 伊達じゃねエ様らね、海賊共……!!!」

「敵に回すと恐ろしいが……味方となるとこれ以上頼もしい奴らはいねエな!!!」

「さすがに死を覚悟したぜ……何て奴らなんだ……」

町で暴れた時とは比べ物にならない強さ、懸賞金額に見合った凄まじさを見せつけたルファイ達に、同志達は戦慄と畏怖の眼差しを送る。

「氣イ抜くんじゃねエよお前ら!!! 嵐はまだ抜けちゃいねエんら!!!」

「ウオオオ~~~~ツ!!! も————恐いもんねーぞー!!!」

もうすべてに買ったつもりになっている全員に、ココロが気持ちを引き締めさせようと檄を送る。

その間に、機関車の上から降りたルフィ達が、客車の中に戻ってくる。

「ぶは、面白かった。やるなお前」

「まだまだこんなもんじゃないですよ」

「わ——!!? 麦わらー!!? スゴいわいなあんた達!!?」

「人間業じゃないわいな!!!」

満面の笑顔で出迎えるモズとキウイだが、その言葉は褒めているのか貶しているのか、いまいちわからない。驚愕のあまり、うまく言葉が見つからなかったのかもしれない。

「ルフィ!!? こつち来て!!?」

「ん?」

「サンジ君!!?」

満足げに帽子を撫でていたルフィに、ふいにナミがずっと、音を鳴らす電伝虫を差し出した。

発信音を口にする電伝虫を待ち、数秒。

風雨が打ち付けてくる客車の上に腰を下ろし、険しい表情で座り込むサンジ。

ガチャ、という音に若干のノイズが走り、すぐさま受話器を片手に身を乗り出す。

「おう、ルフィか!!?」

『サンジ——つ!!? そつちどうだ!!? ロビンは!!? エレノアは!!?』

「ロビンちゃん達は……まだ捕まったままだ。エレノアちゃんの事も聞いた……ずっと見張ってたが、そんな奴見てねエから驚いたぜ」

ロビンの離脱に何らかの理由があるとみて、一人先に海列車の傍に張り込んでいたサンジが、悔し気に眉間にしわを寄せる。

仲間の誰もロビンを連れ戻せなかった場合を考えての行動だったが、もう一人の仲間も連れ去られていた事を知り、不甲斐なさに歯を軋ませる。

「ナミさんから今、事情を聞いたところ……全部聞いた……」

『そうか……いいぞ、暴れても!!!』

サンジが必死に抑え込んでいる激情に気付いてか、ルフィは間髪入れずにそう告げる。

今すぐにでも走り出しかねない彼の様子に気付き、ゾロが即座に待ったをかけようと身を乗り出す。

『ルフィ!!? 無茶いうな!!? おれ達が追いつくまで待たせろ!!? おいコック聞こえるか!!? その列車にはヤベエ奴らが』

『いいってゾロ!!? お前ならどうした。止めたってムダだ』

ルフィの言葉に想うところがあつたのか、ぐっと黙り込むゾロ。

その様子を思い浮かべ、顔が見えない事をいいことに、サンジはにやりと小馬鹿にした笑みを浮かべてみせる。

「……………わかつてんなア。おうマリモ君、おれを心配してくれんのかい?」

『するかバカ』

「だが残念、そんなロビンちゃんの気持ちを聞かされちゃあ…たとえば船長命令でも、おれは止まる気はねエんで!!!」

そう力強く吠え、サンジは思わず持っていた受話器を握りつぶす。

破片を放り捨て、電伝虫を傍らに置くサンジに、それまで黙っていたウソップが細かい声を漏らした。

「じゃあロビンとエレノアもこの船に」

「ああ」

「おれが一味を抜けてる間に…そんな事が起きてたのか…!!?」

「ロビンちゃんはメリー号の件も、ルフィとお前が大喧嘩した事も…何も知らねエ」

理由があつたとはいえ、激情の促すままに暴言を吐いた後、信じられない事件が起こっていた事に愕然となるウソップ。

何もしなかった事に、戻らなかつたことに、今になって大きな後悔に苛まれているようだ。

「だから、お前を含めたおれ達7人が全員無事でいられる様にと、ロビンちゃんは自分の身を犠牲にしてあいつらの言いなりになってたんだ。おれ達の為に」

「ぎゃ————うあうアウアウ、ウオーウアウアウアウ!!! いい話じゃねエかア~~~~っ!!!」

「ガツハハハハハ!!! まったくだぜ!!!」

鋭い目で虚空を睨み、語るサンジのすぐ横で、フランキーが滝のように涙を流して叫ぶ。喚く。

その隣でグリードがゲラゲラと笑い、バンバンと自分の膝を叩いていた。

「何でお前が泣いてんだ。おいお前、何とかしろ」

「ムリだ。兄弟はこの手の話に弱い」

「バカ!!? 泣いてねエよバカ!!!」

おいおいと泣きじゃくるフランキーを睨み、次いでグリードを睨む。

しかし、親しい仲である彼もこうなつた彼は止められないらしく、呆れた表情でひらひらと手を振るだけだつた。

「『悪魔の女』と憎まれ嫌われた女が…それがどうだ、仲間の為のその献身。ガツハハ

ハ……思わず欲しくなるいい女だぜ」

「ロビンちゃんは目と鼻の先にいる!!? とにかくおれは救出にいくぞ!!!」

にやにやと不気味に笑い、よくない癖を再発させるグリードを放置し、サンジが立ち上がり戦闘車両の方を見やる。

その時、突つ伏して泣き続けていたフランキーがガバツと体を起こす。

「よし!!! この『フランキー一家』棟梁フランキー!!! 手貸すぜマユゲのお兄ちゃん

!!? 理由あつて実はおれも、ニコ・ロビンが政府に捕まっちゃあ困る立場にあんのよ!!!」

「おれもやるぜ……!!? ニコ・ロビンにそこまで愛されたお前らが気に入った!!! 詫びと言つちやなんだが、存分に戦わせてもらうぜ!!!」

「何よりそんな人情話聞かされちゃあ……おい!!? 長つ鼻!!! 行くぞ!!!」

元は自分達が金を奪つたが故に始まつた騒動、というわけでもないのだが、少なからず因縁があると助力を申し出る二人の男。

雄々しく仁王立ちし、やる気を見せる彼らは、一人黙り込んでいる青年にも声をかける。

「おれは………いいよ」

だが、ウソツプは背を向けたまま頷かなかつた。

明確な拒絶を示し、頼りなく肩を落とした姿で、目を伏せるだけだ。

「もう……おれには関係ねエじゃねエか。いよいよ『世界政府』そのものが敵になるんだったら、おれは関わりたくねエし……」

いつものネガティブに増して、心を折られた弱々しい姿を見せるウソツプ。

この島に来てからうまくいかない事が多く、大切なものを失ってしまった彼の背中
は、いつもよりずっと小さく見えた気がした。

「ルフイ達とも合流するんだろ……!? あれだけの啖呵きつて醜態さらして、どの顔さ
げてお前らと一緒にいられるってんだ!!! ロビンにや悪イが……おれにはもう、助けに行
く義理もねエ!!! おれは一味をやめたんだ!!? じゃあな」

そう言って、ウソツプは後方車両に向けて歩き出す。

とぼとぼと頼りない足取りで遠くなっていく彼に、グリードが険しい顔で声を上げ
る。

「じゃあなつて、お前どこにも逃げ場はねエぞ!!?」

「……………いいよ、ほっとけ」

「イジはりやがって」

「ホントに面倒くせエ奴」

何かしら仲間の事を想い、気持ちを押し殺しているであろうウソツプに、三人とも心

底呆れてしまう。

来ないものは仕方がないと、気持ちを切り替え前に進もうとした時だった。

「あ!!? 見つけた……」

「しまった」

不意に、客車の窓を開けて上を覗き込んだ黒服の一人が、サンジ達の姿を見つけて慌てた声を漏らす。

サンジ達はすぐさま、自分達を見つけた黒服の口を塞ごうと走り出す。

「メタリック・スター!!!」

だが、突如黒服の男の顔面に弾のような何かが激突し、黒服の男を海へと叩き落とすてしまう。

いきなりの事で呆然としていたサンジ達は、鋼鉄の球が発射された方向へ振り向き、キツと鋭い視線を向ける。

「誰だ!!」

「話は全て彼から聞いたよ。お嬢さんを一人……助けたいそうだね。そんな君達に手を貸すのに理由はいらない、私も共に戦おう!!」

三人の視界に、バサバサと暴風に翻るマントが映る。

背中に巨大なゴムパチンコを備え、黄色い奇妙な仮面を顔に被った一人の男が、腕を

組みながら仁王立ちしている姿があった。

「私の名は、『そげキング』!!!」

『狙撃』と『王』を掛け合わせた名を名乗り、威風堂々とした態度と声を示すその男に、サンジ達は驚く——わけでもなく。

何とも言い難い面白い面倒臭そうな表情で、互いに目を見合わせた。

「何だありやあ? 兄弟」

「言つてやるなよ、兄弟。色々考えてあなつまつたんだろ、あつたかい目で見守つてやろうや」

どう見ても正体は明らかなのに、というか隠す気があるのか疑わしい恰好なのに、思い切り格好つけている長鼻の青年。

サンジ達はあえて見破る事はせず、放置する方向で意思を固めた。

「おい、こつち来い!!?」

「あ、はい」

呼ぶと素直に青年——そげキングは応じ、サンジ達の元に近寄ってくる。

四人で集まって円になり、腰を下ろして視線を合わせ合い、ここから先の行動を決める作戦会議を始める。

「よし!!? じゃあロビンちゃん&エレノアちゃん奪回作戦を執行する!!!」

「——君達、初対面の私に何か質問などないのかね」

「——まずお前らがいたのは第6車両、残る車両はあと5つ!!? そのどれかにロビンちゃん達はある——時にお前ら……強エのか?」

「スーパ―強エぞバカヤロウ」

「今週のおれ達は特に強エ」

一人、全く関係がない話題を掲げる者がいたが、それは全員で無視し必要な事だけを話し合う。

サンジがフランキーとグリードに問うと、二人とも自信満々な顔で、決して足手纏いにはならないと胸を張った。

「最終的には2人を救出できれば勝ちだが、敵は多い。下手に先走って狭い列車の中で囲まれちまうと厄介だ」

「ムダな戦いは省いて、順序よく主力を潰すのがいいわけだな」

「そうだ、そこで一つ作戦がある。よく聞け」

そう、サンジが始める作戦の説明について聞くため、残る三人が顔を寄せた。

海列車内は、異様な緊迫感に包まれていた。

海兵達数人と、彼らを率いる海軍将校T・ボーン大佐の放つ気迫により、客車内の空

気が非常に重く感じられるようになっていた。

いるはずのない侵入者、それが徐々に近づきあるという状況に、全員が平静でいられないようだ。

「大佐……こんな狭い車両内に隠れる場所なんて……」

一人の海兵が、雰囲気には耐えられなかったのか大佐に向けて問いかける。

しかし、彼が言い切る寸前に、客室の後方の扉からコンコンとノックの音が響く。

「ん!?」

「「「んばんは」」」

振り向いた海兵達の前に、四人の男達——二人は知らないが、もう二人は現在護送中のはずの重要参考人がいる事に気付き、客室内は騒然となる。

「いた——!!!」

「扉の向こうだ!!!」

「罪人を含む不審者3名発見!!!」

即座に捕らえようと、すぐさま閉じられた扉に殺到する海兵達。

しかし、扉はまるで釘でも撃ち込まれているかのように閉ざされたままで、どんなに押しても動かない。

どんつ、どんつと拳をぶつけ、体当たりをしても、扉はまるで開かなかった。

「全隊、後部車両を固めろ!!!」

「くそっ!!! ドアを開けろ!!! 観念しろ!!!」

隣の車両にいる海兵も呼び、侵入者を捕らえる事に全力を注ぐようとする海兵達。その時、それまで沈黙を保っていたT・ポーン大佐が剣を手に進み出てくる。

「Tポーン大佐!!!」

「どいていなさい!!?」

大佐に言われ、海兵達は後ろに下がる。

剣の範囲外に下がった彼らの前で、T・ポーン大佐は両手で構えた剣を頭上に掲げ、力を蓄えていく。

「曲がった太刀筋大嫌い!!? 直角閃光!!? 〴〵ポーン空割!!!」

ザンツ!と、大佐の放った斬撃が直角の軌跡を描く。

斬撃は固く閉ざされた扉の周囲を四角く切り裂き、壁がゆつくりと外側に倒れていく。

開かれた壁の外に向け、海兵達が列をなし銃を構える、だが。

「!!? ……いないっ」

壁の破片が風に飛ばされ、ぽっかりと開かれた穴の向こうに人影はなく、海兵たちは愕然となる。

はっ、と我に返ったT・ボーン大佐は、開かれた穴から客車の上に這い上がり、遠ざかっていく四つの人影に目を見開く。

「まさか!!! 全員前方車両へ引き返せ!!! これは「罠」だ!!!」

客車に戻り、海兵達に向けて叫ぶT・ボーン大佐。

わけがわからず、しかしすぐに応じようとした海兵達だったが、向かおうとした扉が突如閉ざされてしまい、ぎよつと目を剥く。

「何だ?!? 引き返そうにも……?!? ドアを閉められた!!! 誰だ!!!」

海兵達は大急ぎで前方車両の方に向かい、扉に備わった窓を覗き込む。

そして——あつという間に遠ざかっていく前の車両に、大きな衝撃を受け絶句した。

「あ~~~~っ!!! 車両が切り離されてる~~~~っ!!!」

「何~~~~!!!?」

「遅かったか……!!!」

「畜生オ——!!! あいつらだ——!!!」

憤怒の声を上げる海兵達の中で、T・ボーン大佐が悔し気に歯を食いしばる。

視界のずつと向こうで、海列車の客車の屋根の上で手を振る仮面の男が、彼らの神経を逆撫でしまくる。

「そんじやみなさん!!? 海王類にお気をつけて!!? よい旅を!!?」
「達者でな——!!?」

遠ざかっていく海列車の後姿を前に、海兵達は呆然と立ち尽くすほかに無かった。

第198話 刺客達

「2車両分、これでざつと50人は兵士が減つたろ」

「しかしサンジ君、同じ線路上を麦わらのルフィ達を通つてくるんじゃないかね」

「まあ…何とかするだろ」

揺れる客車の上に腰かけながらそげキングが問うと、サンジは楽観的な答えを返す。

あの程度の障害物なら、仲間達がどうか突破できると見越してのこの策だ。

「こ…このヤロ——!!! ドアごと吹き飛ば——つ!!!」

「あ、外出ですか」

「ええ〜〜つ!!」

怒りの声を上げ、跳び蹴りを放つて来た黒服を、サンジが扉を開けてそのまま外へ誘う。ドボンツ、と彼は哀れにも荒海の中に落ちてしまった。

「ようしやるか、残り5車両」

犠牲者に全く気を遣う事なく、サンジ達は次なる客車の中に足を踏み入れる。

ぞろぞろと入ってくる侵入者四人を前にし、客車の中では黒服達が各々の武器を構え、表情を強張らせていた。

「て!!? てめエらただで済むと思うな!!!」

「おいCP9に報告だ!!?」

「Tボーン大佐までよくも!!?」

勇ましく吠える彼らだが、足は竦み冷や汗を噴き出させ、賊を相手にするには残念ながら頼りないという外になかった。

「//フリットアッルテイ
揚げ物盛り合わせ!!!」

「ぎゃあ!!!」

「そげキーング //ガンパウダースター
火薬星!!!」

「ぶお!!!」

サンジの蹴撃、そげキングの狙撃が次々に炸裂し、黒服達が吹っ飛んでいく。

予想以上の強さを見せる彼らに慄く黒服たちに、今度はフランキーの一撃が襲い掛かる。

「//ストロング^{ライト}右!!!」

ボンツ!と放たれた、鎖に繋がれたフランキーの拳。

それを目の当たりにしたサンジとそげキングはギョツと目を見開き、敵前であることも忘れて呆然としてしまう。

だが、驚きの光景はそれだけでは済まなかった。

「『断罪の剣』!!!」

黒く染まったグリードの腕が、黒服達を武器ごと叩き割る。鋭い歯が並ぶ口を笑みに歪め、敵を片っ端から叩きのめしていく。

不意に、暴れ回る彼に数人が銃口を向け、人体を簡単に吹っ飛ばせる威力を持つ重量弾を放つ。

轟音と共に撃ち出されたそれらは、グリードの肩や脇腹を抉り血を流させる。

「いつ……てエナコラア!!!」

しかし、グリードは多少顔を歪めただけで、近くにあつた座席を片手で持ち上げ、黒服達に向けて投げ飛ばす。

下敷きになった彼らが悲鳴をあげる様に、心底楽しそうに嗤い声をあげた。

「おい、お前ら一体何なんだ!!!」

「あ? ああ、おれは『改造人間』で……こっちは『人造人間』なのよ……」

「サイボーグ? ホムンクルス?」

あまりにも信じがたい光景が連発したことで、サンジ達は混乱した様子で二人に詰め寄る。

視線を向ければ、抉られたはず脇腹や肩の傷に見る見るうちに筋繊維が伸び、あつと言う間に元通りに再生されていく様が視界に映った。

「体中に鋼鉄や兵器を仕込んである。撃たれりや多少痛エし血が出る事もあるが——
まア効きやしねエ」

「そんでおれア、体内の核である『賢者の石』が無事ならいくらでも体を再生できる。
あとは体表をダイヤモンド並みに硬い鎧にして纏う事もできる……『最強の盾』と
人は呼ぶぜ」

にやり、と不敵な笑みを浮かべる二人の男——いや、怪物達。

自分の見たものさえ信じられないほどに、サンジは啞然とするばかりであった。

「……………そんな事があんのか…世界は広いな」

「すげ——!!?」

呆然と、安い言葉しか出てこないサンジとは逆に、そげキングは興奮した様子でフ
ンキー達に近づく。

そしてどこから取り出したのか、二人の背中にグサツと鋭利な針を突き刺した。

「いだ——ツ!!!」

「何しやがんだテメ——!!!」

すると、同時に針を喰らった二人は目を剥きながら叫び声をあげる。

針を刺したそげキングまでもが、二人の反応に驚く様子を見せた。

「えー！ 針くらい効かねェんじや」

「このボケ!!? おつそろしい実験コーナー始めてんじゃねエ!!! 硬化してない部分は普通に痛エんだよ!!!」

「言つとくが背中はずう!!! いいか!!? この改造は、おれ一人でやったからよ、後ろの面は手が届かなかつたんだ!!? 前半分が『改造人間』だ」

いきなり何をしてくれるのか、と背中を押さえながら怒号を上げるフランキーとグリード。そげキングの行動は、それほどまでに予想ができなかった。

「じゃ、もう一つついでに教えてやる。おれはお腹が『冷え性』、なぜでしょう」
「知らねエよ」

唐突に問題が出され、どうでもよさそうにサンジが応える。

そんな二人の前で、グリードがぱかっとフランキーの腹をドアのように開き、冷気に包まれたコーラの瓶を見せた。

「正解は腹にコーラを冷やす冷蔵庫があるからだ!!?」

「お!!? そりゃいいな」

「すげー!!? 暑い日最高だ」

驚かせることに成功し、ゲラゲラと笑うフランキー達の前で、サンジとそげキングも興奮で目を輝かせる。

男心をくすぐらせる、秘密基地のような仕組みに、四人の気持ち近づきかける……

が。

「「——つて言ってる場合かてめエら。もう、この車両敵いねエじやねエか!!? クリアだ次いくぞ!!?」「」

はっ、と同時に我に返り、状況も忘れてはしゃいでいた自分自身を叱りつけるように叫ぶ四人。

失態を取り消そうとするように、急ぎ足で次の列車の扉を開いた。

そこにいたのは、何とも形容しがたい姿をした、次なる刺客だった。

「ワンゼだよん、ワンゼだよ——ん、さっさっさっさっさ——!!?」

ゴーグルにもじやもじやの髪、飛び出た目に飛び出た前歯。

ローラースケートを履いて厨房内を駆け回る謎の男に、サンジ達は思わず啞然としてしまった。

「おっす、お前達つ!!? ハラ減ってる!!? おれはワンゼ!!? 給仕長だから何でも作れるよ、ラーメンにする!!?」

「……」

「じゃ、ラーメンにするけど、その前に一つ知つといてほしい豆知識があるんだよね。おれの鼻毛は!!? こう…中で網状に…網タイツみたいになってるって事ね!!!」

答えも聞かず、一方的に喧しく喋り続けるワンゼを名乗る料理人。

彼はボウルの中の小麦粉を口に含み、もごもごこね始めたかと思うと、鼻の片方を押さえて麵を押し出す。

それを器に盛り、ワンゼは出来上がったラーメンをサンジ達に差し出した。

「さア、めしあがれ」

「……いるかア!!?」

料理を舐めているとしか思えない料理を出され、即座に拒絶の怒号を吐く四人。あまりにも汚らしいものを出され、全員嫌悪で顔が歪んだ。

「時間をムダにした。ワンゼ、おれ達は人を待たせてる。先を急ぐんで……じゃあな」
「待て——!!!」

付き合う事すら面倒匂いと、サンジが男を無視して先に進もうとする。

だが、脇を通り抜けようとした彼らの前に、突如身構えたワンゼが立ち塞がった。

「この車両を通りたければ!!! おれを倒してから進め!!!」

「おれ達を止める気か?」

「止めるよ——!!! さっさっさっさっさー!!! この海列車「護送任務」!!? こういう

万が一の襲撃の為にこれはいらんだよ——!!!」

見た目も言動もふざけまくっていて、あまり強そうに見えない男の宣言に、サンジ達は訝しげな顔になる。

油断しているように見える彼らに、ワンゼは不気味に笑う。

「罪人を解放したいんだつたら、このおれの『ラーメン拳法』に、勝つて……………」

「んじや通れなくてもいいわ」

挑発するようにワキワキと腕を動かす敵であつたが、グリードはもう本気で付き合う気がなかつたらしい。

踵を返し、横に向かうと、壁に向かつて拳を振るい、大穴を開けてしまったのだ。

「何——っ!!?」

「ああ…確かにそうだ」

「真面目に真つ直ぐ行く必要はねエよな」

壁をよじ登り、上から前の車両を目指そうとしているグリードに、サンジ達は全くその通りだというように手を鳴らす。

自分を完全に無視している彼らに、ワンゼも流石に苛立ったようだ。

先ほどと同じ生地の中に合金を混ぜ、練り上げると、ワンゼは自分の鼻をサンジ達に向けた。

「行~~~~か~~~~せ~~~~——ない~~~~よ~~~~っ!!」

「またラーメン出す気かつ!!?」

「〃拉麵ビ~~~~ム〃!!」

バツ、と鼻の穴から放たれる無数の麵。それらは真つすぐにサンジ達に向かい、どすどすと勢い良く壁や扉に突き刺さっていく。

「うわあああつ!!!」

「ささる!!! 危ねエ!!!」

「うおっ」

ふざけていながら危険な攻撃に、サンジ達は慌てて左右に飛びのき身を守る。

グリードは自分だけ硬化し、ラーメンの矢はキンキンと甲高い音を立てて弾かれる。

「やめろっ!!!」

厨房の中が棘だらけになりかけた時、宙を舞ったサンジが強烈な蹴りを見舞いし、ワ
ンゼの攻撃が中断される。

そげキング達を庇うように立った彼は、ぐいっと親指で外を示した。

「コイツはおれに任せて、お前ら次の車両へ行け!!!」

この場で敵を一人相手取る事を宣言したサンジに、フランキーが頷く。

そげキングを促し、グリードがあけた穴に向かってぞろぞろと歩き出す。

「上から回るぞ!!!」

「ああ、で!!!? ではサンジ君、頑張りましたまえ!!!」

激励を残し、風が吹き荒れる外に乗り出すそげキング達に振り向くことなく、サンジ

はワンゼを見据える。それを、ワンゼは不気味に笑ったまま見つめていた。

「さっさっさっさっ!!? 逃げられたく!!!! でも、それもムダだよ!!? 次の車両に控えてるのは「ネロ」だ!!? 新入りとはいえ、正義の殺し屋「CP9」!!! あいつら死ぬよーっ!!? ネロは殺しが大好きなのさア!!! さっさっさーっ!!!」

最初から最後までふざけた顔と言葉遣いで、そして下に見た態度を見せる自称・料理人に、サンジはまた別の怒りを抱き始めるのだった。

「——で? 何なのよ、おめエは」

雨風が叩きつけられる客車の上で、ポーズをとったフランキーが問う。

彼が睨む先には、フランキー達と同じく風に晒されながら屋根の上で佇む、ハットを被った一人の男がいた。

「第3車両に控えますは: “四式” 使いCP9の新入り “海イタチ” のネロ!!! シャウ」

イタチに似た髭を伸ばし、不気味に笑うCP9の一人。

フランキーはポーズを変えながら、明らかに自分の邪魔をするつもりの手を見据える。

「しかし何だア: アンタじゃ殺すわけにはいかないねエ、大切な罪人だもんねエ:」

「おうお兄ちゃん、何でこんな屋根の上に出てきてんのよ！ 待つてりやおれ達から行く所を」

「そりゃわかんないっしょ。ズルして飛び越してたかも知んねエっしょ、シャウ!!?」
「まア警戒は大事だわな…それよりオイ、お前の後ろにあるのは何だ?」

不意に、ポーズをとる事を止めたフランキーが、ネロの背後を指差す。

急な指摘に、何事か、とつられて背後を振り返るネロ。

その直後、一気に距離を詰めたフランキーが、ネロの横面に強烈な殴打を浴びせかけた。

「ブハツ……!!? 汚エぞ!!!」

「ウハハハ!!? 結構、町じや悪党の親玉でね!!!」

「何より人の悪名を傘に暴れるわ、満身創痕の女を攫うような連中に卑怯者とは言われたくないねエ!!!」

倒れ込み、頬を押さえたネロが抗議の声を上げるが、フランキーは全く気にしない。

海賊相手に手段は択ばず、いくつもの敵を解体してきた彼にとつて、不意打ち程度子供騙しの技でしかない。

何よりも、大きな恩があり、それでいて重傷を負った女を攫って行くような相手に、手を抜くつもりなどさらさらなかった。

「はア!! 満身創痕の女を攫うって……ニコ・ロビンは怪我なんてしてねエし、第一あの女は自分から——」

「手を貸そうか……? 新入りのネロ君……」

ネロは困惑した様子で、フランキーの言葉に眉を顰める。

そんな彼に、聞き覚えのない声がかかけられ、客車の上にいる三人は一斉にそれが聞こえた方に目をやる。

バサバサツ、と音を立て、翼を持った何かが降り立つ。

その背中から、二振りの軍刀を腰に提げた初老の男が降り立った。

「あ……あんたは……」

「?」

ネロはその男を目の当たりにし、大きく目を見開き絶句する。

顔中に冷や汗を噴き出させ、そしてぶるぶると小刻みに震え始める彼に、フランキーは訝しげに首を傾げる。

グリードがいち早く、その男—— “大總統” ブラッドレイ・キングに、鋭い敵意の詰まった目を向ける。

「あア……お前がアレか。海軍最強って噂の剣士…… “大總統” ってのア」

「いかにも」

「……!? あいつが……」

子電伝虫からの連絡で聞いた、CP9に続くもう一人の敵。

現場に駆け付けようとしたエレノアを下し、連れ去った張本人であると知ったフランキーも、ぎろりと鋭く男を睨みつけた。

「この任務は実に重要なものでね……邪魔をされると非常に困るんだ。そういうわけだから……邪魔をする君達には、少し大人しくして貰いたい」

「エレノアを攫う事もか!!」

「まアそういう事だ」

一切悪びれる事なく、己の行いを自白するブラッドレイ。

フランキーはより一層の怒りを燃やし、グリードもガチガチと歯を鳴らしですが、その一方でネロは困惑したまま、両者を交互に見やる。

「お、おい大総統殿!! 妖術師」が一体なんだって……!!」

「邪魔だぜ、ザコが」

ガキン!と硬化させた両拳を打ち合わせ、前に出るグリード。

響き渡る金属音に、ブラッドレイは平然とした表情のまま、腰の剣をすらりと抜き放つ。

余裕綽々と言ったその姿に、フランキーがグリードに向けて口を開く。

「…あつちは任せていいか、兄弟。流石に一緒に戦うにはここは狭すぎらア」

「ああ、いいぜ。『最強』なんぞ持て囃される野郎がどの程度のものか………おれがきつちり見極めてやるぜ」

にやにやと、不敵に笑っていたグリードが次の瞬間——凶暴な獣のような恐ろしい形相になつて走り出す。

「おおおおおおおおお!!」

獣の咆哮のような雄叫びを上げ、宙を舞ったグリードの放った黒い爪が、ブラッドレイの剣と激突して火花を散らす。

ギーン!と響き渡る金属音が、荒海の遠くまで伝わった。

第199話 「口ほどにもない」

「^{デクバージュ}切分け^{!!!!}」

「『アルティメット・ハンマー』!!!!」

扉をぶち抜き、屋根をぶち抜き、二人の男が吹き飛んでくる。

サンジとフランキー、それぞれが相手をしていたCP9の刺客達が、見るも無残な姿で第二車両の中で倒れ伏した。

「お前な…一体どこから」

「アウ!!? おめエラーメン野郎は片付いたのか」

「丁度今な。お前の相棒は?」

「海軍のヤベエ奴と戦ってる…が、まア問題ねエだろ」

凄まじい土埃の中から立ち上がったフランキーに、思わず目を細めるサンジ。

フランキーは満足げに首を鳴らし、屋根の上を一度見上げてから、にやりと不敵に笑ってみせる。その内戻って来るだろう、という信頼の表れのような。

「急に騒がしくなったわね」

「護送の為の兵士は全滅か……」

「別に期待もしておらんがのう……」

その様を、第二車両で寛いでいたルツチ達が呆れた目を向ける。

任務を終えた彼他の手を煩わせないように配置された刺客達。その全員が、こうも容易く蹴散らされた事実には、全員が冷めた目を向ける。

「アイツらだろ、直接ロビンちゃん達をさらってつたのは」

「氣イつけろ、妙な体技使うぞ」

水の都で冤罪を吹っかけた真犯人であり、一味がばらばらになった原因の一角を担う集団に、サンジとフランキーが油断なく鋭い目を向ける。

しかし、ルツチはサンジ達の敵意など意にも介さず、足元で伏せるネロを見下ろした。

「コイツは何だ？」

「コーギーの言つとつた『CP9』の新入りじやろな。ネロとかいう『四式使い』」

詰まらなそうに応え、同じくネロを見下ろすカク。

やがて、ネロは呻き声とともに体を浮かせ、血反吐を吐きながら、ポーズを決めるフランキーを殺意のこもった目で睨みつける。

「畜生オ………!!! ハア……もう許さねエつしよ………!!? おれは戦闘の天才と言

われた男だぞ!!? もう構わねエ………殺してやる」

「……おい新入り」

「……アア……アンタ……ロブ・ルッチだな。挨拶が遅れたねエ………!!？」

顔面に強力な一撃を喰らい、すでに満身創痕に近づいているネロは、唐突に話しかけてきたルッチに軽く挨拶の言葉を向ける。

「ちよつと待つてくれよ、今あいつを殺して……」

「フランキーは生け捕りだ。感情に任せて任務を見失うとは………イヤ、もういい」

醜態をさらしたことを巻き返そうとしてか、ルッチの前で反撃を宣言する。

しかしルッチは、計画から外れた行動をとろうとしているネロにため息をつき、不意にスツと冷たく目を細める。

「3秒やるから……さっさと逃げろ」

突然の意味不明な言葉に、ネロは一瞬固まり、次いでガバツと勢いよく振り向く。

目に映る、表情一つ変えていないルッチの顔に、ネロは次第に彼が本気であることを思い知り、困惑しながらも立ち上がる。

CP9の技を使い、ルッチの前から逃げようとしたその瞬間。

彼よりも早く移動したルッチが、ネロの身体に連続の指突を打ち込んだ。

「ぐあア!!」

「何もかも半端なお前に、『CP9』は務まらない。『六式』揃ってこそ『超人』だ、坊や

……」

致命傷を負ったネ口は、そのまま物のように放り捨てられ、海列車の外に投げ出される。

それに背を向け、ルッチは気だるげに口を開いた。

「カリファ」

「はい」

「あとで長官に一報を。『新入りは弱すぎて使えませんでした』と」

「了解」

誰一人動揺することなく、常軌を逸する行動を見せたルッチを見る事もしない。まるでそれが当たり前であるかのような、そんな雰囲気がある。

サンジもフランキーも、残酷な光景を前に開いた口が塞がらない気分であった。

「——コイツらが正義の機関か……?」

「どつちが悪だかな……」

そんな彼らの眩きも、ルッチ達はまるで気にした様子を見せない。

堂々と正面から侵入し、姿をさらしたサンジ達に、心底面倒臭そうな無表情を向けるだけであった。

「お前らの用は……聞くまでもねエか、侵入者。ドアの開け方を見る限り、あまり気の長い質じゃなさそうだな……」

「ああ、育ちが悪いもんで」

「……………ニコ・ロビンの事なら諦める。お前達が首を突つ込むには問題がデカすぎる。世の中には……………死んだ方が人の為になるといふ、不幸な星の元に生まれる人間もいるもんだ……………」

ルッチはまるで、出来の悪い子供を諭すように、抑揚のない静かな声で語り出す。

ちりつ、とサンジの目に怒りの火が灯り、ひくつと彼の頬が痙攣する事にも気づかず、ルッチは淡々と語り続ける。

「例えば『世界を焼き尽くす悪魔』がいたとして……………それを呼び起こす力を持っている者が、わずか8歳の純粋な少女であった場合……………その少女は、誰かの手で人々の為に殺しておくべきだと思わないか？」

「……………何が言いてエ」

「それがニコ・ロビンという女の人生だと教えてるんだ。今となつては本物の犯罪者だが……………始まりはたったそれだけの事だった」

サンジの眼の怒りの炎が、より強く燃え上がる。

フランキーも同じく、聞くに堪えない身勝手な持論を持ち出す男に対し、強烈な苛立ちを抱き始める。

本気で引き下がらせるつもりだったのかはわからないが、間違いなく説得は失敗に終

わっていた。

「物心ついた時から、自分の存在そのものが『罪』!!! 自分が消える事でしか人を幸せにできない、そういう不幸を背負っているんだ」

まったく変わらないルツチの表情だが、どことなく嘲笑が滲んで見える。

あまりにも憐れな時間を過ごした女に対し、同情よりも強く、憐れみと嘲りの感情が湧き出しているようだった。

「本来20年前に死んでおかなければならなかった女だが、手遅れになる前にあの女が死ぬ事になって本当によかった」

「いい加減にしろてめエ!!! それ以上口を開くな!!!」

我慢の限界に達したサンジが、ルツチに向けて渾身の蹴りを放つ。

ルツチは平然とそれを受け止め、顔色一つ変えずに押し留める。そして止める事なく、再び口を開く。

「——ただし政府は、この先何年もかけてニコ・ロビンの知識・経験・頭脳の全てを絞り出すだろう。これからあの女がどれ程の苦痛の末死んでいくのか、よく噛みしめておけ」

「そんな事はさせねエよ!!!」

怒りの火に、さらなる油が巻かれてサンジは激昂する。目の前にいる男に対する憎悪

を止められず、激情が彼を前へと突き動かす。

大切な女性達を脅し、意のままに操ろうとする彼らの事を、サンジは決して許す事ができなかった。

「ロビンちゃんもエレノアちゃんも!!! てめえらクソ野郎共の好きにはさせねエ!!!」

「……何?」

「何じやと…?」

感情のままに叫ぶサンジ。その言葉に、ここで初めてルツチ達表情に変化が現れる。

思わぬ情報が舞い込んだような、それもとびきりに喜ばしくない事を聞かされたような、訝しげな表情であった。

サンジとフランキーも、予想外の反応を見せる敵に眉をひそめた、その時だ。

「おいおい待てロビン、そっちへ行ったら!!?」

バタンツ、と勢いよく扉が開かれ、厳しい表情のロビンと彼女にしがみついたそげキングが姿を現す。

五体満足で歩いてくる彼女に、サンジがホッと安堵の息をつく。

「ロビンちゃん!!! よかった、無事なのか、ケガは!? 何もされてねエか!!!」

「どういう事なの…!? 妖術師さんまで攫ってきたというのは本当なの!!!」

笑みを浮かべ、近付こうとするサンジを無視し、ロビンはサンジと対峙するルッチに怒鳴りつけるように問う。

ルッチは眉間にしわを寄せ、胡乱気な眼差しをロビンに向ける。本気で、何を言っているのかと困惑しているように見えた。

「……そのような任務は受けていないが……？」

「お前達、一体何を言うておる？」

「とぼけんじゃねエ!!! てめえら政府のバケモンってウワサの『大總統』とやらが、エレノアちゃんを連れ去ってったってこっちにや確かな情報が来てんだ!!!」

カクも同じく、全く知らない情報に対し思わず問い返す。

しかし、フランキー達にしてみればとぼけているようにしか思えず、声を荒げてルッチ達を睨みつけるばかりだ。

「おい!!? 本当にエレノアちゃんはいないのか!!!」

「あ……ああ!!? 第一車両にはロビン以外誰も……」

罫が明かない、と最も前の車両に向かったそげキングに問うも、懸命にロビンを説得していた彼は首を振る。

他にいた者といえ、途中でやって来た役人のコーギーしかいなかった。

「……………まったくこれは……あの男に詳しく聞かねばならん用事ができたな……!!!」

ルツチの表情が、苛立ちで歪む。

脳裏に思い浮かべる自らの上司——鬱陶しい笑い顔を思い浮かべ、どうしたものか
と思考を巡らせていると。

「どわ——っ!!!」

破られた客車の屋根が再び破られ、一人の男が悲鳴とともに落下してくる。

さらなる土煙が舞い上がり、後退るサンジとフランキー、ロビンとそげキングの前で、
大の字になった男——血塗れになったグリードが血を吐く。

「…は!!? え、オイどうなってるんだ!!? どうしたんだよ兄弟!!!」

「ガフツ……クソツ!!! あのジジイ………バカみてエに強エ……!!! 再生も硬化も追いつかねエってありえねエだろ!!!」

「ジジイ!!?」

体中に裂傷を刻まれ、真っ赤になったグリードがぼやく。再生がすでに始まっている
ものの、相当深い傷なのか、なかなか血が止まらずにいる。

ふと、グリードは急に体を起こすと大きく後ろに跳ぶ。

その後に、屋根の穴からもう一人、ブラッドレイが軽やかに降り立ってみせた。

「失礼……手荒な登場で申し訳ない」

「……『大総統』……!!?」

「!!? あいつが…!!?」

ナミ達から名を聞いた、エレノアを無力化し捕らえてみせた海軍最恐と謳われる剣士。

新たなる敵の出現に、サンジ達は思わずその場で身構える。姿を現すや否や襲ってくる圧に、二人のこめかみに冷や汗が伝った。

「悪イ…手エ貸してくれるか、兄弟……あのジジイが乗ってきた鳥の背に、*“妖術師”*がいるんだ…!!!」

「おオ…そういう事か…!!?」

海列車のどこにもいないと思えば、全く違う乗り物に乗せられていたのか、と納得の声を上げるフランキー。

ならば話は早い、と拳を掲げる彼の前では、ルッチが隣に立ったブラッドレイにじろりと横目を向けている様があった。

「どういう事だろうか？ 我々は*“妖術師”*まで連れて来いなどという指令は一切受けていないはずだが…」

「んん？ ああ…気にするな、これは私に下った指令だ。君達の任務とはまた別口でね……………」

そう答えるブラッドレイが、手にした剣に付着した血を布で拭い取る。

客車内の電灯で照らされ、オレンジ色にてりかえつす刃を構えた彼の片眼が、ギラりと獍猛な輝きを放った。

「——だが必要とあらば……君達の仕事を少し手伝ってやろうと思っっているのだがね……!!!」

その瞬間、ゾクリ……と。

言い表しがたい濃密な殺気に襲われ、サンジとフランキー、ロビンとそげキングの背筋に寒気が走る。

まるで敵わない、相手にすらならない敵を前にしてしまったように感じ、サンジ達だけでなくルツチ達も表情を強張らせる。

ぴりつ、と客車内の空気が重く、張り詰めだしたその時だった。

「フランキー君!! グリード君!!?? 第3車両を切り離れたまえ!!!」

「!!? 何すんだよ!!!」

「逃げる!!!」

「逃げる!!?」

一人、ブラッドレイのさつきからいち早く抜け出したそげキングが、サンジ達に向けて叫ぶ。

何をするつもりか、とサンジもハッと我に返り、叫び問い返す。

「おい、どういうこった」

「君も急ぎたまえ、勝負は一瞬だ!!!」

「させんよ、そう簡単には——」

「そりゃこつちのセリフだぜ」

抜かれては面子が立たない、とそげキングに剣の切先を向け直すブラッドレイだったが、それを止める一つの声上がる。

ブラッドレイが振り向けば、全身の傷を再生させたグリードが、ミチミチと全身を变质させながら見据えてくる姿が視界に入る。

「ア~~~~!!! これ使うとちとブ男になっちまうんであんまりやりたかないんだが………相手がためエなら仕方ねエか」

黒く、鋭く、危険な気配を纏った異形の変貌していく彼に、カリファやブルーノがぎよつと目を見開く。

全員の驚愕の視線を独占したグリードは、ゴキゴキと指を鳴らして、走り出す前の前傾姿勢になった。

「骨の10本や20本くらいは……覚悟しろよ、ジジイ」

そう告げ、平然とした顔で佇むブラッドレイに向かって飛び出すグリード。

二振りの剣を交差させて構えたブラッドレイのもとに、グリードの強烈な斬撃が襲い

掛かる。

「“制裁の槍”!!!」

ギーン!と凄まじい金属音が鳴り響き、衝撃でブラッドレイの身体が宙に浮き、後方に吹き飛ばされる。

客車内で最も強力な実力者が吹き飛ばされる姿に、ルッチ達がほんの一瞬呆然となる。

吹き飛ばされた本人は、平然と宙を跳んで床に降り立っただけだったが、それはサンジ達の命運を分ける最大の間となった。

「今だ!!! 長っ鼻!!!」

「おう!!! “そげキング 煙 星”!!!」
スモークスター

頷いたそげキングが、足元に煙玉を投げつける。

その途端、弾の大きさから想像できる以上の量の白煙が噴き出し、客車内が真っ白に染まる。

そして、人影すら見えなくなるような白煙の中から、ロビンを抱えたそげキングが必死の形相で飛び出してきた。

「ニコ・ロビンは頂いたア!!!」

「「よっしやー!!!」」

いち早く後ろの車両に引っ込み、連結部分を外す作業を行っていたサンジとフランキー、そして元の姿に戻ったグリードがガツとガツポーズをとった。

第200話 “恐怖の楔”

「やったア!!? ロビンを取り戻したぞ〜!!」

もくもくと広がる白煙、そして離れていく二つの客車。

目を見開くロビンを脇に抱え、そげキングが歓喜の咆哮を上げると、それをサンジ達
がわつと満面の笑みで迎える。

「おつどろいたぜ、しかし急にこんな逃走作戦に出るとは!!?」

「煙幕なんてくだらなすぎて思いつきもしねエよ普通」

「あんな恐ろしい奴ら、戦わずに目的が果たせるんならそれが一番だ…!!?」

政府が有する暗殺組織という、肩書だけで恐ろしく感じる相手に対し、煙幕などと言
う子供騙しの手が通用した事に驚きつつも、一同はホツと安堵する。

すると、ひとしきり笑いあつたフランキーとグリードが不意に立ち上がり、前方に続
く出入り口に向かつて歩き出す。

「……んじゃ、おれ達ちよつくら行ってくるわ」

「お前らはニコ・ロビンを守つてろ!!」

態々死地に戻ろうとする彼らに、そげキングはギョツと困惑の目を向ける。

そして、戦いの最中にグリードが口にしていた重要な情報を思い出し、ハッと息を呑む。

「……!!! そうだった!! エレノアがまだ向こうに残ってた!!!」

「妖術師の居場所もわかった……あとは力づくで取り戻しやア、おれ達の完全勝利よ」
「……………そうなるわなア、一人だけ置き去りにやできねエ」

「わ、わかった……!!! 頼むよ」

バキバキと拳を鳴らし、怒りと闘志を燃やすフランキーと同じく、グリードもガチガチと歯を鳴らす。二人とも、既に油断なく臨戦態勢に入っていた。

「何よりおれア……………散々おれをボコボコしてくれやがったあの野郎に礼をしなきゃ気が済まねエ……………!!!?」

切り裂かれた己の身体を撫で、前の車両にまだいるはずの男の顔を思い浮かべるグリード。

裏町でほぼ無敵を誇っていた自身が、老いた男に一方的に叩きのめされるだけという事実に、獰猛な笑みを浮かべ、こめかみに青筋を浮き立たせる。

その時だった。

白煙の中から幾本もの黒い何かが飛来し、サンジ達のある車両に食い込んできた。

「!?? 何だ!??」

「トゲのムチ?!」

ハッと顔を上げ、前の車両を見やり、徐々に晴れていく白煙の奥を覗き込むサンジ達。そこには、自前の棘の鞭を握り、二つの車両を無理矢理つなげているカリファの姿がある。

「伝つて来る気か?!? ムチを切れ!!!」

大慌てで、車両に食い込んでいる鞭の棘を外そうと走る出す。

しかし、サンジ達が鞭に辿り着くよりも前に、カリファの鞭をブルーノが纏めて握り、気合いの声と共に力強く引つ張る。

その途端、後方車両と一緒に引きずられ、前の車両に思いきり激突する事となる。

「おわああああ!!!」

「ぎゃ——!!! 引き戻されたア〜!!!」

「何ちゆうパワーだ」

予想外の出来事に、激しく揺れる客車の中で悲鳴と悪態が上がる。

サンジは忌々しげに顔を歪め、ずかずかと車両を移ってくるブルーノ達を睨みつける。

「煙幕とはつまらねエマネを」

「……………やっぱ無理あったか。そげキング!!! ロピンちゃんを死守しろよ!!!」

「お…!!? おう!!」

倒れ込んだロビンとそげキングを背に庇い、ブルーノの巨体と相対する。

車両同士を合わせている棘の鞭を見やり、サンジは一気にブルーノの懐に突っ込んでいく。

「せっかく引き寄せたトコ悪イが…!!」 その手離して貰うぞ!!」

構えも何も取っていない、無防備に見える腹に向けて、サンジは渾身の回し蹴りを叩き込む。

しかし、蹴ったブルーノの腹は鋼鉄のように硬く、サンジの方が鈍痛に顔を歪める羽目となる。

「何だこの硬さ」

「妙な体技を使うと言ったろ!!?」

フランキーが自分の忠告を無視された気分で声を上げると、サンジはその場で逆立ちになり、ぐるぐると自分の体を回転させる。

勢いを増す蹴り、徐々に集まっていく力が、次の瞬間再びブルーノの腹に決まる。

「粗碎…!!!」

先ほどよりも強力で、重い一撃が放たれる。

まるで鐘を突いたような轟音が鳴り響き、ブルーノはたまらず白目を剥き、ぐらりと

体を揺らがせた。

「ほう、なかなかやるじゃないか」

「ブルーノ!!? ナメてかかるな、賞金は懸かっておらんがおそらくそいつも主力の一人じゃ!!?」

感心した声を上げるブラッドレイに続き、カクも仲間にも忠告の声を向ける。

生半可な攻撃の効かない鋼鉄の身体というアドバンテージを有していたCP9達が、即座にサンジを脅威と認識し始めた時だった。

「うわっ!!? ロビンちよつと待て!!」

「〃八輪咲きクラッチ〃!!」

「ぎゃあ!!?」

背後で上がる悲鳴に、サンジがハッと振り向く。

フランキー達も同じく振り向いてみれば、ロビンがそげキングの身体に手を生やし、容赦のない関節技を極めている光景が目に入る。

「ウソツプ!!! ちよ…何で…ロビンちゃん!!!」

「何度言わせるの!!? 私の事は放つといて!!!」

「ホラどこに気を取られとる…」

悲痛な声で、助けを拒絶するロビンに、サンジ達は戸惑い動く事ができない。

その隙を狙われ、サンジはカクの蹴りを浴び、血を流して床に倒れ込んでしまう。次々に斃れていく同志達のように、フランキーとグリードの額に血管が浮き始めた。

「まったく、お前らどいつもコイツも、何でそう仲間同士で意地をはるのか!!?」

「お前ら全員面倒くせエな!!! 本当によオ!!!」

「せつかく逃げられる…チャンスだろうがア!!!」

激昂の声を上げ、フランキーとグリードが同時に飛び出す。

そのままCP9に向かう……かと思いきや、扉のある壁に突っ込み、棘の鞭やCP9事前の車両に飛び込んでいく。

おかげでサンジ達がいる車両は解放され、再びルッチ達から引き離されていった。

「フランキー!!! グリード!!!」

残った二人の事を案じ、呼びかけるサンジ。ありあわせの同志であったが、それでも敵地にたつた二人では非常に不安になる。

二人は何やら向こう側で話していたかと思うと、破壊した壁から顔を覗かせ、大きく声を張り上げてきた。

「アウ!!? おめエら!!? おれ達の事は心配すんな!!? 策がある!!? 麦わら達と

合流したら、何とか町へ引き返せ!!!」

「こっちはついでに、『妖術師』を土産に連れ帰ってやらア!!!」

頼もしい宣言を残し、フランキー達を乗せた前方車両はどんどん前へと向かっていく。

サンジもそげキングも、それを険しい顔で見送る他になかった。

「あいつら……………!!?」

「何て事を…待って!!! 私は逃げたりしないわ!!?」

「待てよロビンちゃん!!? この期に及んで何だってんだよ!!! オレ達ア全て事情も知って助けにきたんだぞ!!!」

この期に及んで、助けが来てなお敵の元に向かおうとするロビンに、サンジもそげキングも全く理解ができず、叫ぶように問い返してしまふ。

なぜこうも、自分達に救われる事を望んでくれないのかと、焦りの感情さえ浮かび始めていた。

「政府の『バスターコール』って攻撃さえ何とかすりゃ、ロビンちゃんがあいつらに従う事は、ねエハズだろ!!?」

「その『バスターコール』が問題なんだ」

そう、喚くロビンを説得していたサンジの耳に、知った声が響く。

一瞬間まり、そしてハッと強張った顔で振り向けば、直後に斬り裂かれ、サンジは再び倒れ込んでしまふ。

何もない空中に開いたドアから姿を現したブルーノによって。

「サンジイ!!! な…何だ!!? あいつ何もねエ所から現れた!!!」

不気味に開かれた扉を凝視し、そげキングが目を見開き叫ぶ。

サンジも自身の傷口を押さえつつ、得体の知れない能力を見せつけるブルーノを見上げ、睨みながら歯を食いしばる。

すると、ロビンの腕を掴んだブルーノが、呆然としていたそげキングも蹴り飛ばす。

「ウソツプ!!!」

「やめて、私は逃げる気はないわ、それでいい筈よ!!!」

「向こうからかかって来るんだ、仕方ない」

「……じゃあ、早くここを離れましょう」

ブルーノの手を振り払い、ブルーノが明けた扉に向かうロビン。

一瞬、何かを堪えるような厳しい表情を浮かべ、しかしすぐに前を向き直る彼女に、そげキングが口を開く。

「待て!!! ……………大丈夫だ……!!? ロビンお前……大丈夫だぞ……お前まだなんか、隠してんな……!!? 別に……それはいい」

息も絶え絶えに、弱々しく語りかけてくるそげキングに、ロビンは悲痛に顔を歪めながら振り向く。

明らかに、自分の気持ちを押しさえつけている彼女に向けて、そげキングは優しく語りかけ続ける。

「……ただし海賊は…船長の許可なく一味を抜ける事はできない…!! だからお前…!!? ルフィを信じろ」

そう、真つ直ぐにロビンの目を見つめ、告げる。

ロビンは言葉をなくし、グツと唇をかみしめていたが、やがて大気のドアを潜り、向こう側に立ち去ってしまった。

「ロビンちゃん!!」

「ムダだ、ニコ・ロビンは協定を破らない」

「……何でそう言える!!」

抗う姿勢を崩さないサンジ達に飽きれるような様子で、ブルーノが吐き捨てる。

その言葉を認められず、サンジが険しい顔で怒鳴りつけると、ブルーノは一切表情を変えないで、淡々と語り始めた。

サンジ達がロビンを救う事ができない、その決定的ともいえる根拠を。

「——その昔、発動された海軍の『バスターコール』によって、ある島が焼き尽くされ跡片もなく滅びる事件が起きた。その時のたった一人の生き残りが、まだ幼い日のニコ・ロビンだ」

「何だと……!?」

「——つまり『バスターコール』とは、あの女にとつてのぬぐいきれない“悪夢”。幼い頃植えつけられた恐怖の記憶そのものが仲間達に向けられていては——もはや逆らう気力も失せる」

ため息交じりにそう答えるブルーノ。

サンジもそげキングも、彼が語った真実に目を見開き、信じられないと言った顔で凍りつく。

ロビンの過去も、それを平然と語ったブルーノも、咄嗟に理解することができないでいた。

「まさか……それ全部知ってて……!!!」

「当然だ」

「どこまで腐ってんだためエらはア!!!」

幼き頃に刻まれた恐怖を、彼女を縛り付ける心の枷を、何の罪悪感もなく利用している彼らに、サンジの怒りが爆発する。

ブルーノは冷めた目のまま、ため息とともに大気のドアを潜り、ゆつくりと閉じていく。

「全ては正義の為、あの女には深く同情してる」

「ふざけんなア!!!」

激情に駆られ、大振りな蹴りを放つサンジ。

しかしその時には既にドアは閉じられ、元の何もない虚空だけが残される。

「畜生オ~~~~!!!」

大切な仲間を取り戻せなかった事、蹴り飛ばしたい相手に触れる事さえできなかった事。

その全てに、サンジとそげキングは激しい悔恨に苛まれ、叫ぶのだった。

海列車は走る。

客車を大きく減らし、よりその速度を上げながら、目的地エニエス・ロビーへ急ぐ。

「生きてる? オ…本当かそりゃあ!!!」

「……………ええ、そう言ってたわ…………」

第一車両に对面で座り、フランキーが目を見開く。

手錠をはめられ、自由を奪われた彼は、ロビンの語った事実にはばらくの間呆けていたが、やがてホッと安堵の息をついた。

「バカバグの野郎…そうか、おれア殺されたと聞かされて…………!!? よかった、そうか生きてたか」

「よかったじゃねエか兄弟」

「『CP9』は殺したつもりなんじゃないかしら……黙っておいた方がいいわよ」

「……………そういうの親切って言うんじゃねエの？」

座席の背もたれに体を預け、天井を仰いでいたフランキーがロビンのそう呟く。

サンジ達から事情を聴いてから、ロビンのこれらの態度が全て、自分を遠ざけさせるための演技にしか見えなくなっていた。

「……………しかしまあ、『兵器』の設計図を持つおれと…存在する『兵器』を呼び起こせるお前と…これで政府はまんまと『古代兵器復活』への二つの鍵を手に入れたわけだ」
「そんで実際にその『力』がこの世に出現したらだ……………当然政府は海賊達の時代を終わらせ、後に持て余した軍事力が世界を揺るがし破滅させる。頭の悪い話だ」

「それくらい脅威ある代物だ、『古代兵器』は」

世界政府、その一部であるCP9の計画に、フランキーもグリードもげんなりとした顔になる。

10年前の事件に関わっていないグリードでさえ想像するに難くない未来であり、真面に受け止めるだけで吐き気がしそうだった。

「ウチの師匠が設計図を守る為に命をはったのは、そんなくだらん未来の為じゃねエ。おれは、このまま捕まる気はねエぞ」

「しゃーねエ………ここまで来たら、最後までとことん付き合つてやらア」

「おうよ、頼りにしてるぜ、兄弟」

手錠で繋がれたまま、互いの拳をぶつけ合うフランキー達。

しかし彼らの前で、ロビンは沈痛な表情のまま俯き、黙り込んでいる。それを見て、フランキーが厳しい口調で話しかける。

「となりやおれ達だけ逃げ切れても意味はねエ、お前も何とか麦わら達のトコへ帰るんだ」

「ムリよ、私は一緒にいるだけで、彼らを傷つける…!!?」

「傷つけるのはお前じゃねエだろ? 政府の人間もお前の存在を罪というが、どんな凶器をかかえてようとも、そこにいるだけで罪になるなんて事はねエ!!?」

その資格がないというように、首を横に振るロビン。

自分を責め、苦しむ顔を見せる彼女に向けて、フランキーとグリードは同時に告げる。
「存在する事は罪にならねエ!!!」

自分の葛藤の全てを否定する、力強い言葉。

その庄に、思わず庄倒され絶句する彼女を乗せたまま、海列車は荒海の中を走り続けていった。

第21章 世界を敵に回してでも〈前編〉 第201話 “合流”

「うううわあああああカエルお前エ~~~~っ!!!」

「ゲロツ!!!」

「ゲロじゃねエよ!!? 食うぞコノヤロ——!!!」

煙を吐き、水を掻き、海を猛然と進むロケットマン。

数分前より格段に速度が下がった車両の上で、ルフィの怒声と巨大な蛙の鳴き声が上がる。

高潮を越え、海軍大佐を退け、エニエスロビーを目指して一直線に進んでいた海列車とそれに乗る一行だったが、現在彼らは迷子になっていた。

その理由は、列車の上にしがみつき、ルフィにチョップを喰らっているこの角界ガエルの所為。

列車の間に突然現れた彼、ヨコヅナが張り手を食らわせ、列車を弾き飛ばしてしまっただのだ。

「おい、一体どうなったんだよこの『海列車』は!!!」

「線路からずいぶん外れたんじゃねエかい!!?」

「ココロばーさん、エニエス・ロビーへは辿り着けるんだろうな!!?」

「うるっへーな、今頑張つてんらが…どうにも妙な海流から抜け出せねーんら」

客車の中では、ザンバイやパウリーがココロに問いかけている。

悪態をつきながら、ココロが何とか列車を線路の方へ戻そうと苦心しているが、海の状態が相当悪いようで難航していた。

「ココロさん、島の方角わかるの!!?」

「ああ、一応駅のある島の『永久指針』は標準装備してあるからね!!?」

「じゃ、平気!!? 私が見るから操縦お願い!!?」

ココロと交代する形で、ナミが窓から身を乗り出し海を調べる。

目を丸くする操縦士に、ナミは自身に満ちた表情で笑みを浮かべてみせた。

「私、『航海士』!!?」

「そうかい、そりゃ頼もしいね!!? んがが!!?」

頼もしい姿を見せられ、ココロもすぐに応じる。

だがすぐ操縦には戻らず、再び窓の外に身を乗り出し、機関部の上にいるヨコヅナを睨みつけた。

「その前に、ヨコヅナア~~~~!! おめエちよつとコツチへ来なア!!!」

「ゲロ!!? ゲロゲロゲロ!!?」

「なアにが無事でよかったら、別にアタシはさらわれたんじゃねエよ!!? 早とちりめ

!!?」

「ゲロ!!?」

ココロの姿を確認し安堵するヨコヅナに、ココロも機関部の上に乗りだして怒鳴りだす。

叱責するココロと、ぎよつとした顔になるヨコヅナの姿に、客車内から覗き込んだザンバイは唾然となっていた。

「どうした」

「さっきのカエルとばーさんが会話してる」

「じゃあ、ばーさんはカエルだったのか?」

「確かに人間よりカエルぎみ……………うっ!!?」

ザンバイの報告にチョッパー達が目を丸くし、迂闊な言葉を吐こうとしたリンの腹にフーの肘打ちが突き刺さる。

そんな彼らの視線を無視し、ココロはヨコヅナに穏やかに語り掛ける。

「おめー、8年前にトムさんを連れてかれたあの事件から、来る日も来る日も『海列車』に戦いを挑んで……………強くなりたかったんらろ……………?」

「ゲロツ!!?」

そうだ、と言わんばかりに鳴くヨコヅナ。

大好きだった人を連れ去られてから、もう二度と大切な者を奪われてたまるかと、ずっと自分を鍛え続けてきた。

だからこそ、ココロが攫われたと思ひ込み、ここまで追いかけてきたのだ。

「だったら!!?」 その修行の成果を見せる時は今ら!!! おめエが大好きなフランキーが……トムさんと同じ様に連れてかれちまったんら!!? 今、この船もあいつの下へ向かっている。一緒に来るかい!!!」

「ゲロオ——ツ!!!」

雄叫びを上げ、意欲を示すヨコヅナにココロはにっと笑う。

思わぬタイムロスに遭遇したが、結果的に頼もしい味方が一匹できる事となったのだから。

「麦わらあ、仲間一人追加ら!!?」

「わかった!!?」 へー!!? ばーさん本当はカエルなのか? やっぱ怪獣なのか?」

「んががが、どっちでもいいわねんな事ア」

不思議そうに問いかけるルフィに笑って返し、客車に戻るココロ。

そこへ、海の状態を確認し終えたナミが、進路の指示の為に振り向く。

「ココロさん8時の方角にいい潮流見つけた!!?」

「よ——し一気に行くよっ!!?」

「おい!!? ねーちゃんねーちゃん、島に到着する前にキングブルとウチの一家を拾ってくれ!!? 絶対役に立つからよ!!?」

「——だそうらよ」

「わかった!」

「それなら永久指針と同じ方角ダ!!? 大勢で固まつてる気配を感じる!!!」

「OK!」

ザンバイの頼みとリンの助言で、見失った進路を再び見出す。

操縦席に戻ったココロが操作を再開し、海列車は雄々しく汽笛を鳴らして車輪を回転させる。

「さア、だいぶロスしちまった、取り戻すよ!!?」

「ゲロオ——ツ!!」

「「「ウオ~~~~~つ!!」」」

「急げ!!! もっとスピード出ねエのか!!?」

荒ぶる海の半ばを進む、キングブルに引かれた戦車型の船。

逸れた海列車を探しながら、エニエス・ロビーを目指して突き進んでいたフランキー一家とグリードファミリーは、道中に見つけたとある二人を中に迎え入れ、事情を問いつづけていた。

「なアおい!!? じゃあアニキ達は自分を犠牲にして」

「ああ、そうだ…ロビンちゃんを助けてくれようとしたんだが…」

「うおおう、何て眩しい人だよアニキ達」

「急がねエと手遅れになるぞ」

濡れた体を拭くサンジと仮面を被った長鼻の男。

二人が語る、兄貴分達が身を呈してサンジ達を守ろうとしたという事実には、一家とファミリーは感動で目を潤ませる。

その間も船は進み、やがて進行方向上にある異様な景色が広がり始めた。

「おい見えたぞ、不夜島の光っ!!!」

「エニエス・ロビーだ!!!」

暗天と荒海の中心、雲がそこだけ晴れて、太陽の光が差し込んでいる。

その地こそ、世界政府の裁判施設がある、常に昼が続く不思議な島——一家とファミリーの目的地であった。

「見つけたぞ!!! デカヤガラ~~~~っ!!! お~~~~い!!!」

と、その時。

キングブルが引く船の元に、列車の汽笛と青年の声が届く。

振り向き確認してみれば、探していた海列車が線路を辿り、一家とファミリーの元へ向かってくる姿が目映った。

「おい!!? アレ見ろ!!?」

「ルファイ!!」

「あつ!!! サンジくく!!! と…!!? 誰だアレ!!?」

「麦わらさんだく!!!」

ルファイ達の方も、エニエス・ロビーに向かう船の姿を確認すると、大急ぎで近付いてくる。大事な戦力が、ようやくこの場で合流を果たした。

「乗り込む気満々みたい! 世界政府の『玄関』へ!!?」

「エニエス・ロビーも視界に捉えた!!! 全員、決戦の準備を!!!」

それぞれで新たな追加戦力を得つつ、集った60数人の有志達は憎き世界政府の玄関口に向け、進軍を再開するのだった。

の、だが。

新たな戦士と対面したルファイとチョッパーだけは、驚愕と興奮でその場に立ち尽くし

ていた。

「狙撃の島の『そげキング』!!?」

「…そう、ウソツプ君の親友でこの度、キミ達の手助けを託かってここにいる!!!」

仮面で顔を隠し、マントを羽織ったその男。

どう見ても知っている人物なのに、ルフィもチョッパーも目を輝かせ、彼を凝視し続ける。

「ヒ…ヒーローだ!!? マントしてるからそうじゃねエかと思っただおれは!!? すぐエヒーロー初めて見た!!!」

「そうか!!? マントしてるから、ヒーローなのか…!!! かつこいいな——!!!」

少年心に突き刺さる居住いに、思わず握手とサインを求めてしまう二人。

しかし彼ら以外の面々は、仮面の男に心底呆れた眼差しを送っていた。

(ウソツプじゃねエか)

(ウソツプ、無事でよかった)

(フランキーハウスに乗り込んできた長つ鼻だ…)

(アニキと一緒に捕まった長つ鼻だわいな)

(シフトステーションで会った兄ちゃんだ)

(ニヤァ)

(何してんだ、この兄ちゃんハ…)

(誰ですかネ、この人ハ…)

誰一人として、そげキングの正体に気付いていない者はいない。

だがあえて、わざわざ窮地に戻ってきてくれた本人の意思を尊重しようと、誰も暴くような事はしない。

ただ生温かい目で、謎のヒーローと少年達のやり取りを眺めていた。

「じゃあ…ウソツプはどこ行っただ？」

「彼は無事、全く心配御無用だ。とにかく今はロビン君救出に全力を注げと彼は言い去った」

「うん…!!? 確かにそうだ」

「そ!!? そ!!? 狙撃の島ってどこにあるんだ!!?」

「……………それは」

さらさらとサインを描くそげキングに、チョツパーが興奮したまま尋ねる。

一瞬黙ったそげキングは、ルフィとチョツパーの手をそれぞれ握ると、彼らの目を覗き込んで答えてみせる。

「君達の……………心の中さ……………」

「心……」

「どこですか」

メイの容赦のないツツコミが飛ぶが、三人ともまったく気にしない。

何とも言えない、見ているだけで恥ずかしくなる雰囲気は漂うが、やはり誰もそれ以上の茶々を入れる事はしなかった。

「——ナミさん……」

「何？ サンジ君」

「それとついでにナミさん以外のアホ共。ロビンちゃん・エレノアちゃん救出の前に、一つ聞いといてくれ」

空気を切り替えるように、サンジが真剣な表情で語り出す。

ロビンに再会し、彼女の言動や態度を見て感じ取った、彼女が隠す何かについて。

「——そういうわけで……ロビンちゃんはその『CP9に何やら過去の『根っこ』を掴ま
れちまってる」

険しい顔で、虚空を睨みつけるサンジ。

ルッチ達にやられた傷跡を押さえながら、一度敗北した悔しさに耐えつつ、自身が感じ取ったロビンの真意を思う。

「別に奪い返せなかった言い訳してエンじやねエが、これから敵地へ乗り込んだからと、ロビンちゃんがおれ達に身を委ねてくれるかはわからねエ」

「んなもん関係あるか——っ!!! 絶対許さんぞ——!!!」

「うお——!!!」

「おっシャ——!!!」

そんなサンジの悔恨をブチ破るように、ルフィとチョツパー、リンが両手を天に突き上げて吠える。

一方的にやられるだけであつた悔しき、仲間を信じ切れなかつた自分への怒り、そして何より……ロビンに対しての憤りで。

「ロビンめ——っ!!!」

「何だよ!!!」

「そうじゃねエか、何で、おれ達が助けに来るのをイヤがるんだ!!!」

「助けられた後のこの一味を心配して苦しんでんのよ、ロビンは!!?」

「そんな事まで知らんっ!!!」

ロビンの気持ちを全く考えていないように見るルフィに、苦言をぶつけるナミだが、ルフィはそれを一蹴する。

彼にとつては、仲間の重い過去など悩む理由にはならないのだ。

「放つといたらロビンは殺されるんだろぅが!!! 死にてエわけねエんだから助けるんだ!!!」

「それは勿論そうだけど……!!!」

「やめとけ……やるべき事は変わらねエよ。助けるだけだ」

「なんもかんもブツ飛ばしてやる!!!」

憤り、戦いに意欲を見せるルフイ。

なおも言い募ろうとする所をゾロに止められながら、ナミは思う。

はたして、ロビンの過去とやらを解決せずに、彼女を救い出す事が本当に可能なのか、と。

「お前ら、ちよつとコレ見ろ」

そんな中、懐から一枚の図面を取り出したパウリーが、全員に説明を始める。

かつて線路の整備に来たときの記憶をもとに描かれた図面に描かれているのは、エニエス・ロビーの大まかな全体図であった。

島の入り口はたった一つ。周りは滝に囲まれ、空でも飛ばなければ辿り着く事ができない構造となっている。

さらに島の奥に進むためには、門を二つ抜け、跳ね橋を操作し向こう岸までかける必要があるというのだ。

「とはいえ全員で島へなだれ込んでも、『CP9』に出くわして実際勝つ事ができるのは、お前達だけだ。一緒に列車に乗ってきてその強さがよくわかった」

苦々しい敗戦の記憶を辿り、パウリーが真剣な表情で告げる。

たつた4人のCP9を相手に、手も足も出せずに終わった屈辱が、逆に彼らに冷静な思考を与える。

自分達ではなくルフィ達にこそ、CP9と再戦する資格があるのだ。

「こつちはただかだか60数人、敵は2千や3千じやおさまらねエ筈」

「麦わらさん達はとにかく!!? 無駄な戦いを避けて『CP9』だけを追ってくれ!!!」

「ああ!!! わかった!!!」

パウリーの確認に、ルフィが力強く頷いて見せる。

そして説明が行われているうちに、海列車はエニエス・ロビーの正面まで目と鼻の先という距離まで迫っていた。

「シアおめエら、島の正面らよ!!! エニエス・ロビーの後ろの空をよーくごらん!!! アレが『正義の門』ら……!!!」

ココロの言葉で、車内の全員が窓から身を乗り出し、それを視界に映す。

島の遙か先に聳え立つ、巨大な扉。

カモメのマークを中心に描いた、頂点が見えないほどに巨大な壁と門が、ルフィ達を阻むように存在している。

あの先に進めば、ロビンはもう二度と日の光は拝めないのだ。

「連行された罪人を取り返してエなら、あの門を通過するまでが制限時間って事ら!!?」
ぐずぐずしてるヒマはないよっ!!」

「そんじやおれ達ア作戦通り先行する!!」 援護は任せとけ!!?」

目的地を前に、ザンバイ達はぐつと握りこぶしを掲げて意気を示す。

敵の主要人物達との戦いはルフィ達に任せ、あくまでその他の雑兵や道を作る役割に徹するらしい。

しかし、よく見ると本来ルフィ達と共に行くはずの二人まで、ザンバイ達に混ざって
いた。

「オイ、そこ二人はこつちじゃねエのか」

ゾロがぼそりとツツコミを入れるも、いつもの事なのでそれ以上何も言わない。

呆れた肩を竦めていた時、きよろきよろと車内を見渡していたリンがふと声を上げた。

「…なア、ルフィはどこ行つタ?」

「え? さつきまでここに…」

「あれ!!? 麦わらさんっ!!?」

一味の頭の姿が見えない事に、ザンバイ達はハッと表情を変えて車内を探す。

そしてやがて窓の外に見えた、ルフィが島を囲う鉄柵を支えに、ゴムの力で島の中へ

飛んでいく姿に気がつき、全員が騒然となった。

「何やってんだあいつは、勝手に——っ!!!」

「あの人、作戦全然わかってねえ~~~~っ!!!」

怒りを孕んだ声を上げ、パウリーとザンバイが叫ぶ。

効率よく、最前の手段で島の奥へ向かう方法を態々説明してやったのに、それをすべて無視した突撃を決行されたのだ。怒り狂っても仕方がない。

ただ、ゾロたち麦わらの一味は、わかり切った様子で肩を落としていた。

「……………」

「ムダだった」

『『わかった』』って言ったよな」

「5分〃待つ〃とかムリだから」

「そりやそうか」

「ありやりや〜…」

「…………お前達、大変だな」

「気持ちはわか〜…」

「んががが、気の早エ奴らね」

「ニャー」

「いけー!!? 海賊兄ちゃん!!!」

「ゲロー!!!」

それぞれ落ち込み、それを宥め、心底呆れた声をこぼす。

チムニーとヨコヅナ、そしてヨコヅナだけが元気に、ただ一人突っ込んでいったル
フィを応援する。

その声に発破をかけられたのか、ザンバイ達も島の方を睨み、各々で威勢をつけ始め
る。

「遅れをとるな、ソドム!!? ゴモラア!!!」

「バヒヒヒ〜ン!!!」

「鉄柵をよじ登り『正門』をコジ開ける——っ!!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

二体のキングブル、そして60数名の荒くれ者達が意思を一つにし、敬愛する兄貴分
を救いに向かうのだった。

第202話 “不夜島”

『こちら『正門』!!? 『正門』から『長官』及び『本島前門』へ!!!』

エニエス・ロビー本島、CP9長官スパンダムの部屋に、電伝虫による緊急連絡が入る。

スパンダムはそれに心底面倒臭そうな顔をし、気だるげに手を伸ばして受話器を取る。

「どうした、何事だ!」

『侵入者が一名『正門』を越え『本島前門』へ疾走中!!!』

「なんだ侵入者の一人くらい。落ち着いて始末しろ!!?」

『いえ、それが…』

たった一名の侵入者に何を狼狽えているのか、と鬱陶しそうに顔を歪めるスパンダムに、連絡を入れた海兵は何やら口淀む。

彼の元へ、本当然門を担当する海兵から通信が入り、同時にスパンダムにも報告が入る。

『……こちら『本島前門』、侵入者を確認……今すぐ始末します。ご安心を…』

『気をつけて対応してくれっ!!? 私が目が正しければその男… “麦わら” のルフィかと……………!!』

正門を担当する海兵がそう告げた直後。

どかんっ!と何かが爆発するような音と、何人もの海兵達の悲鳴が響き渡ってくる。通信が一気に騒がしくなり、雑音が無数に混じり始めた。

『うわア!!! え!!? ちよつと!!!』

『何?!? 今何て言っただんだ?!?』

『懸賞金一億の!!? 海賊 “麦わら” かと思われますっ!!!』

必死に報告をこなす海兵の目に映るのは、麦わら帽子を被ったたった一人の青年。

世間を騒がせる懸賞首が、鬼の形相で拳を振り回し、海兵達を次から次へと吹っ飛ばしていく。

立ち向かう海兵達が銃弾を放つも、その一切をものともせず、暴風のような勢いで島の奥へと突き進んでいく。

『エレノアとロビンはどこだア!!!』

『重ね重ね “正門” より報告を!!! 前方の鉄柵を越えて、怪物馬車に乗った不審集団が侵

入!!! 援軍求む!!!』

その言葉を最後に、正門の海兵の声がブツツと途切れてしまう。

破砕音と悲鳴が遠くから聞こえる受話器を手に、一部始終を聞いてしまったスパンダムは呆然と、その場に立ち尽くした。

「どうしたア——っ!!! 門番!!! 応答しろ!!! 何が起きてるんだア!!!」
必死な彼の声に、答える者は誰もいなかった。

『門番!!?』 状況を説明しろ、門番!!! 敵の数は? 現在地は!!! 応答せよ『正門』!!!
気絶した海兵の傍でぶら下がる受話器、その中から響く声に、応える余裕のある者は誰もいない。

誰も彼もが、海から二体のキングブルに乗ってやって来た数十名の侵入者との応戦に追われ、武器を手に走り回っているからだ。

「ロープアクション ムフィギュアオブ・エイト・ノット」!!!
パウリーの操るロープが海兵達を縛り上げ、壁に叩きつけられ、互いに頭をぶつけ合わせられていく。

ほとほと倒れていく彼らを尻目に、一番ドック職長は次なる獲物へ挑みかかる。

「バズーカバット」!!!

「ふが!!!」

「まだまだ…弾が勿体ねエわ!!!」

ザンバイは大砲を撃つのではなく、鈍器として振り回し海兵を昏倒させる。限りがある弾を温存するための、彼なりの工夫だった。

「横の扉から鍵が開くハズ、門を開ける!!!」

「オオ!!?」

「開けさせるなア——!!!」

「邪魔だわいなア!!!」

「ムオオオオオオオオオ!!!」 狂瀾怒濤!!!」

「異彩の閃光!!!」

門を開く邪魔をする海兵達を、モズとキウイが剣を振るい斬り捨てる。

その後ろでは、猛牛へと変貌したロアが雄叫びと共に突進を繰り返す。蛇の力を持つ女マーテルがナイフを一閃する。

その近くでは、海兵の鼻から寝癖を立たせたルルが隙を縫い、ドルチェットと共に刀を薙いでいく。

「余所見禁物!!!」

「獣の呼吸!!!」 獣の嗅覚!!!」 獣の視線!!!」

「竜骨折り!!!」

「発射ア!!!」 ……ヒュ血イコワイ血イコワイ!!!」

タイムストーンが怪力を駆使し海兵達の背骨をへし折り、パニーニヤが義足に仕込んだ大砲をぶつ放す。

撃つた本人が悲鳴をあげていたが、一步も退く事なく次の敵へと立ち向かう。

混沌と化する戦場を見渡し、セレネが掌に模様が描かれた手袋をはめ、地面に叩きつける。

「プレラーティーズ・スベルブック螺湮城教本“!!!”」

その瞬間、地面に眩い閃光が走り、石が歪に変形し、蛸足のようになって海兵達を叩きのめしていく。

麦わらの一味を先へと進ませるため、フランキー一家とグリードファミリー、ガレラカンパニーの職長達が立場を越えて奮闘する。

全ては大本恩ある兄貴分達と、命の恩人である白虎の天使を救い出すためだ。

「開門だア~~~~~!!」「怪力デストロイアーズ“!!!”」

「“うおおお~~~~~!!!”」

邪魔な海兵達を薙ぎ払い、閉ざされた門に飛びつくロアと三人の巨体を誇る男達。

それぞれ一家とファミリーで最も力を誇る者達が、重い扉を渾身の力を込めて押し開いていく。当然、それをよしとしない海兵達が妨害に入る。

「開かせるな——!!」「死守しろオ!!!」

「ウオオ——!!!」

「どけ、邪魔だア——っ!!!」

「なだれ込め!!!」

ゆつくりと、軋む音を立てて開かれていく扉。やってくる海兵達を大砲で吹き飛ばし、麦わらの一味が通る道を作る。

そしてついに、固く閉ざされていた道が完全に開かれ、一家とファミリーは島の奥へと入る事ができた。

「第一の門『正門』突破だア——っ!!!」

「うオっしや~~~~~~~~っ!!!」

一般人であれば誰も足を踏み入れない、裁判所に続く道の先。

周囲をぐるりと滝に囲まれた異様な景色に慄きながら、一家とファミリーは島の奥を、次の門を目指して進む。

最早、誰も自分達を止められまい、そう確信していた時だった。

『『正門』が開けられちまったぞ、オイモ』

「ああ、そりゃいけねエな……カーシー」

「寝起きでつらいが」

「仕事だ、いこう」

ふと、そんな声が頭上から聞こえてきて、一家とファミリーの足が止まる。ぎよつとした顔で顔を上げ、彼らは門の向こう側から飛び降りてくる、とてつもない巨体を目の当たりにし立ち尽くす。

勝利を信じていた彼らの表情が、愕然と強張ったものに固まってしまった。

「ふア……まだ寝足りねエなア……早エトコおっぱらつてまた寝るぞで」

「オイも」

ズシン、と地震のような揺れを起こし、着地する二人の男——いや、巨人。

それぞれ斧と棍棒を手にした、怪力デストロイアーズたちが子供のように見える程の体格差を見せつける戦士達が、一家とファミリーの前に立ち塞がる。

快進撃を続けていた一家とファミリーは、とんでもない絶望と相対する羽目になってしまったのだった。

轟く爆音、響き渡る悲鳴と怒号が、五分にも渡って聞こえてくる。

騒がしくなってきた島を眺めながら、海列車は海を進む。

ぐるりと大きく弧を描き一度離れると、島の中央を指して、操縦を担うココロが徐々に速度を上げていく。

『——さア、5分たったよ。門が二つ開いてるハズら!!?』

『突撃っ!!? 突撃っ!!?』

『ボチボチいこうかね……………』

これから始まるもう一つの突撃に、ココロも覚悟を決める。

うなりを上げ、水面を突き進む列車の一番前には、刀を構えたゾロとリンが時を待っていた。

『侍マン、鉄柵を頼むよ!!?』

『任せとけ……………!!』

「さて……………おれ達もおっぱじめるとしようカ!!」

「お久しぶりで、長官」

そのころ長官の部屋には、任務を完了させたルツチ達、CP9の4人が勢ぞろいしていた。スパンダムはそれを醜悪な笑みで迎え、大仰に手を広げてみせる。

「よく帰った!! ルツチ、カク、ブルーノ、カリファ」

「セクハラです」

「名前呼んだだけで?!」

カリファの思わぬ返答に、眼を見開くスパンダム。

むちやくちやな作戦を通させようとした長官は、やはり部下にも嫌われているよう

だ。

二人のやり取りに構わず、ルッチが代表し報告を始める。

「8年前の『ウォーターセブン』でおきた政府役人への暴行事件により、罪人“カティ・フラム”。『西の海』『オハラ』でおきた海軍軍艦襲撃事件における罪人“ニコ・ロビン”。滞りなく連行完了致しました。現在扉の向こうに」

若干の気だるさを感じさせる物言いで告げると、そこへまた別の人影が近づいてくる。

ルッチ達の同僚であり、これまで別の任務で動いていたエージェント達——ジャブラ、フクロウ、クマドリの三人である。

「懐かしいなア、ルッチ……ふてぶてしきは一段と増した様だ」

「貴様のバカ顔もな、ジャブラ」

「よさんか二人共、帰って早々何じゃ……!!?」

「よよいつ!!? そうさアやめなア二人共オ……つ!!? 5年振りのオ……再会じゃあ……あねエ……かア……つ!!?」

「チャパパ」

再会してそうそう険悪な雰囲気を見せるルッチとジャブラに、カクが呆れ、クマドリが喧しい喋り方で制止をかける。が、二人とも応じる様子がない。

それを眺めていたフクロウが、徐に手を組んで目を閉じる。

すると彼を、ルツチやカク達が突然ボールの様に蹴り飛ばし始める。

部屋中を跳ねまわるフクロウ。しかし、相当に強烈な一撃を受けても、彼は平然と立ち上がってみせた。

「さっそくやってみると思ったわ、フクロウ」

「六式」遊戯! 『手合』っ!!?」

それは、CP9に可能な実力を測り方だった。

受けた衝撃をもとに、相手の能力を数値として示す遊戯であり、久方ぶりに再会した彼らの成長ぶりを調べたわけである。

その結果示しだされた数値は——カリファが630道力、ブルーノが820道力、カクが2200道力、ルツチが4000道力というものだった。

一般的な海兵の実力が10道力とすると、異様といえるほどの強さである。

「おおい、意義ありだフクロウ!!? ルツチはともかくおれがカクに負けてるとはどういう事だ!!?」

「チャパパ、カクも強くなっちゃったー!!?」

「おう!!? いい気になってんじやねエぞカク!!? 『手合』はあくまでも体技のレベルを測る技だ。おれは実戦では『悪魔の実』の能力が加わるんだ。おめエにや負けんとい

う事を忘れるな」

ルツチやカクが自分よりも格上と判断された事が不服らしく、ジャブラが二人に食って掛かる。

しかしそれにカクは鬱陶しそうに顔をしかめ、ため息を返すだけであった。

「好きに思え。わしはそんなものに興味ないわい」

「そうさ、野良犬の話などに耳を貸すな」

「何が野良犬だルツチ……この化け猫がア!!」

ジャブラがルツチに向けて怒りの咆哮を上げた瞬間、二人の姿が変貌していく。

巨大で、鋭く尖った牙と爪に獐猛に輝く両目を持つ怪物。猛獣の力をその身に宿す二人が、互いに唸り声をあげて睨み合う。

カリファが二人を宥め、ようやくそれは止まった。

……ちなみにだが、ジャブラの子の不機嫌さの原因は、片想いしていた女に振られたためであった。

「まったく会ったとたんにくだらねエ番付なんぞ始めるからだ。お前ら全員『六式』を極めた時点で常人の域をはるかに超えているんだ!!? 道力500もあれば十分超人だろう」

「長官の道力は『9』だー」

「言うな!!? いいんだおれは、司令長官なんだから!!?」

「長官の弱さは昔から存じていますので」

「グサ!! おおくく!! お前、少し齒に衣着せたらどうだ、カリファ」

「セクハラです」

「え!!? 受け答えしたから!!」

呆れた声をこぼすスパンダムに、カリファとフクロウが容赦なく情けない事実を吐くと、彼は顔を真っ赤にしたり真っ青にしたり。偉いわりに能力はないらしい。

仲間とは思えない刺々しい会話が続く中、気を取り直したスパンダムがゆらりと立ち上がった。

「……………ともあれお前達、5年の任務実にご苦労だった…」

「それより長官……………一つお聞きしたい事があるのだが」

「まあ待て、募る話はあるだろうが今は置いておけ……………確認が先だ」

気を落ち着かせたスパンダムは、にやりとまた厭らしい笑みを浮かべてルツチ達を見やる。

自身が長年追い求めてきた二人。自身が栄光を手に入れる為の、何者にも代えがたい二つの鍵を前に、男は欲望に目を輝かせた。

「後で渡してエ物があるんだが……………とりあえず合わせてくれ……………!!? 全世界の“希望”に

!!!
」

「フフフ……ワハハハハハ!!! 最高の気分だ……!!!」

勿体ぶつたような歩き方で、スパンダムは彼らの前に近づく。

手錠で後ろ手に拘束されたロビンと、何本もの鎖で封じられたフランキー、そのついででのグリード。

古代兵器を復活させるカギを持つ超重要人物達に、スパンダムは歓喜に肩を揺らし、それぞれを満足げに眺める。

「8年前のあの事故で……よく生きていられたもんだ……!!? カティ・フラム——そして世界が危険視し、追いつめ続けた女ニコ・ロビン」

挑発するような物言いに、ロビンは眉一つ動かさない。

もう、そんな嘲りの言葉など聞きなれてしまったとでもいうような、そんな醒めた表情だ。

「世間の人間共は、今日の日の我々の働きがどれ程尊く偉大であったを知らん。それを知るの事実上まだ数年先の話になるだろうな」

自慢げに語るスパンダムを、フランキーはただ黙って睨みつける。

険しい表情で、身勝手な自慢話を吐く憎い男を、ただじっと見据え続けていた。

「おれに言わせりゃ、今の政府のジジイ共の正義は生ぬるい!!? 犠牲を出さねば目的は果たせねエ、こちとら全人類の平和の為に働いてやってんだぜ!!!」

グリードもまた、べらべらとしやべるのを止めないスパンダムに胡乱な目を向け、眉間にしわを寄せる。

ガチガチと歯を噛み合わせ、募り続ける苛立ちを示す。

「そのおれの邪魔をする愚か者共は、大きな平和への犠牲として、殺してよし!!! おれ達がよこせと言う物すら大人しくよこさねエ魚人も、正義への謀反者として殺されて当然だア!!!」

「……………!!! トムさんが命を賭けて設計図を守ったのは、ためエみてエなバカがいるからだろうがア!!!」

「ウザつてえ演説なんざ聞かせてんじゃねエぞこのゴミ野郎が!!!」

「ぎいやああああああ」

敬愛する師への暴言に、ついにフランキーの我慢が限界に達する。

不用意に近付いてきたスパンダムの頭に、同じく怒りを露わにしたグリードと共に噛みつき、歯を思い切り食い込ませた。

「た…!!! ただだっ!!? 助けろお前らア——っ!!!」

情けない悲鳴をあげ、部下に助けを求めるスパンダム。

それに、ほんの一瞬であるが嫌そうに口元を歪めたカリファが、目にも止まらぬ動きで接近し、強烈な蹴りを食らわせる。

防御もできない体勢で受けた一撃に、フランキーとグリードは血反吐を吐きながら、その場に崩れ落ちた。

第203話 `突撃!!`?

ふと、侵入者との戦いに応援に向かう途中だった海を見やった海兵が、最初にそれに気付いた。

ざざざざざと……と、波を押し退け、近付いてくる鉄の怪物の姿に、海兵は咄嗟に同僚の肩を叩く。

「……………おい……海を見ろ……………!!!」

つられて同僚達も、近付いてくるそれ——見覚えのない鮫の頭をつけた外輪船を凝視する。

既にこの島に停まっている筈の、世界に一つしかないはずの船が、こちらへ猛然と迫つて来ているのだ。

「`海列車`……………?!?」

「どういう事だ……!!!」

「こつちへまっすぐに突っ込んで来るぞ!!!」

目的の見えない新たな襲撃者に、海兵達は慌てた様子を見せながらも、すぐさま職務を全うしに動き出した。

「おいばあさん!!!」

「ん?!? 何らい!!?」

場面は変わり、エニエス・ロビーを真つ直ぐにめざす海列車。

その上で鉄柵の対処のために待機していたゾロが、運転席のココロにある事態を告げる。それを聞いたココロは、即座に客車内の全員に連絡を送った。

『おめえら、作戦変更らそうらよ!!? 全員、車両にしつかりとしがみつけと言ってるよ

!!?』

「ん?」

「おうアホ剣士!!? 何かあったか!!?」

鉄柵を斬り、先に向かったフランキー一家とグリードファミリーが開ける門を潜り中へ侵入する、という流れの筈。

しかし、まっすぐ前を見据えていたゾロは、険しい顔で舌打ちをこぼしていた。

一家とファミリーの活躍で開かれたはずの門が、再び閉じられてしまったからだ。

「『正門』を閉められた!!?」

「何だとオ!!?」

「大変だー門にぶつかるとぞ——!!!」

「え——っ!!? どうすんだ——!!?」

「よけてよけてココロさ——ん!!!」

慌てふためく客車内だが、暴走海列車が止まる事はない。

こんな所で激突して終わりなのか、と途端に客車内は絶望に包まれる。

だがそんな中で、リングがやりと不敵な笑みを浮かべてみせた。

「心配無用だ………道はちゃんとある。そう道口、ゾロ」

「ああ」

同じくゾロも、にやりと獰猛な笑みを浮かべてみせる。

そして彼は、途中で加わった強力な助っ人に自分の立ち位置を譲り、咄嗟の策を実行させる。

「柵をつっぱれ、カエル!!!」

「ゲロオ!!!」

ゾロの命令に応えたヨコヅナが、目前に迫った鉄柵に強力な突っ張りを食らわせる。それにより鉄柵は容易く半ばから曲がり、坂の様に斜めになる。

走り続ける海列車は、凄まじい速度で鉄柵の上に乗上げ、そして——。

「まさか………!!? この速度で鉄柵に乗り上げたら………!!!」

「うわ——!!?」

車内と車外から、耳に突き刺さるような悲鳴が響き渡る。

がくんつ、ととてつもない揺れに襲われ、車内の一味が浮遊感に包まれる。

唖然とした顔で立ち尽くす海兵達の目の前で、暴走海列車は彼らを飛び越え……高々と、天へ飛び立ってみせた。

「バカな!!!」

「『海列車』が……!!! 飛んだアア~~~~!!!」

予想だにしない光景に、海兵達は目を瞠る事しかできない。

敵の迎撃を想定外の形で免れた一味であったが、こちらも想定外の事態に陥ったことで完全に恐慌状態に陥っていた。

「死ぬ————つ!!!?」

「え———!!!? 死ぬのか———!!!?」

「ナミさん、早くおれの胸の中へ!!!」

「何て事してくれてるのヨ———!!!」

「滝の大穴があるのよ?!? バカー!!! ソロ、あんた着地の事考えてあんでしようね?!?」

飛びようにできていない船が、鉄柵どころか門を軽々と越えていく様に、絶望に苛まれる。

一体どうするつもりなのかと叫ぶナミに、ソロとリンは腕組みをして、力強く頷いて

見せた。

「任せろ!!!」

「運ニ!!!」

「運任せか——!!!」

考えなしの男達に怒鳴りながら、ナミも頭を抱える他に何もできなかった。

「おおおおお、おえ……」

グラグラと巨体を回される、50年に渡って門番を勤めてきた巨人。

ぐるぐると目を回した彼、オイモがよろよろと体勢を崩す姿に、海兵や黒服達から悲鳴が上がる。

「オイモがやられてる」

「うわあああー!!!」

目を見開き、頭を抱える彼らの前で、オイモがずしんとその場に倒れ伏す。

並の人間では傷さえつけられない戦士が負かされる姿に、海兵達はもう言葉も出ない。

平衡感覚を狂わされ、起き上がる事もできなくなった彼の上に、やがてぞろぞろと、奇妙な集団が姿を現すのが見えた。

「あれだ…見ろ!!?」

難攻不落の関所を越された事による怒りか、現れたその集団を海兵達は鋭く睨みつける。状況からして、侵入を果たした愚か者達の正体など、一つしか考えられなかった。

「お前らが『麦わら』の一味か!!」

「……………」

「そうだ!!?」

「そうだっけ!!?」

黙ったまま何も答えないパウリーに代わり、ザンバイが堂々と告げてスクエアガールズを困惑させる。

パウリーはそれのため息を返し、自身らを見上げてくる海兵達を見据える。

「……………どうでもいいこった。さっさと前へ進むぞ!!?」

「よっしや野朗共オ!!! あとは進めるだけ進むんだア——!!!」

「「「ウオオオオオ」」」

ザンバイの雄叫びに、他の面々も武器を片手に咆哮を上げる。

対巨人戦で倒れた三人の分も、力の限り暴れてくれると意気を高め、周囲を取り囲む海兵達に躍りかかる。

だが、その寸前——パウリーの肩に、何者かの凶刃が鋭く突き立てられた。

「パウリー——!!!」

「ウ!!? くそつ!!! ……!!?」

一瞬のうちの攻撃に、ザンバイが目を見開き声を上げる。

すぐさまパウリーが反撃に転じるが、凶刃の主は軽々とそれを躲し、天を高く舞い上がって着地する。

その相手、犬の背に乗り暗器を持った謎の男達は、血に濡れた凶刃を掲げてパウリー達を嘲笑つてみせた。

「何だア!!? てめエら!!!」

「我々は『法番隊』!!! 裁判長バスカビルの命により、この門にて貴様らを裁き討つ!!!」
侵入者を迎え撃つ増援に、パウリー達は一瞬怯んだように息を呑む。

彼らを見下す視線を繰りながら、突如現れた法番隊の一人が、倒れたオイモの皮膚に凶刃を突き刺し、怒鳴りだす。

「オイモオ!!! 何をしてる!!! こんな海賊共に開門を許すとは何事だ!!!」

オイモの巨体からすれば、小枝が刺さった程度の小さな痛み。

しかし彼を気絶から起こすには十分だったようで、オイモはギラリと両目を怒りに燃やし、ゆつくりと体を起こし始めた。

「ああ………気を失っていた………許さんぞ、貴様ら許さんぞオ~~~~~!!!」

「しまった、復活した——っ!!!」

棍棒を振り上げ、両手を掲げ、咆哮を上げるオイモ。

たった二人の巨人に危うく全員壊滅させられかけたパウリー達は、厄介な敵の復活に思わず後退ってしまう。

豆粒のように小さな彼らに仕返しをしようと、オイモは大きく棍棒を振り上げた。

だがその瞬間、彼の背中に巨大な鉄の塊が——天を貫いてきた海列車が、凄まじい勢いと威力を持つて突き刺さった。

「どへ——っ!!!」

「!!!えええ〜っ!!!」

想像だにしない光景に、海兵達もパウリー達も目玉が飛び出すほどに驚愕し、その場で固まる。

だが、驚く理由は双方別々のものであった。

「ロケットマンが…空から門を越えてきた!!?」

「!!!門開けた意味なかったーっ!!!」

あの船が通る道を造る為に、わざわざ巨人を相手取って門を開けたというのに、その努力の全てが無駄になってしまった。

愕然と、口を開けたまま棒立ちになる彼らは、鼻をひしゃげさせた海列車を凝視し、や

がて不安に苛まれ始める。

「んな……何が起きたんだ……!!!」

「こんな突入して……無事なのかあいつら……」

「……………出て来ねエ」

派手で危険な突入を果たした一味。

尋常でない強さを有しているとはいえ、それでも普通なら死んでもおかしくない光景を目の当たりにし、知らずぐくりと息を呑む。

果たして、生きているのか。その疑問に答えたのは、海兵達の方であった。

「え!!?! おい!!?! どうした」

どさ、どさつ……と次々に斃れていく海兵や黒服達。同僚達の身に起きた異変に、無事な方の海兵達がぎよつと振り向く。

そして、倒れた海兵達の中心に立っている三つの人影に、わなわなと身体を震わせだした。

「あ!!?! あの二人は何者だア!!?!」

「? ……ああ、挨拶した方がよかったか?」

「バカバカしい……………いるか!!?!」

「そーそー、遠慮もいらねエしナ!」

数秒もかからぬうちに、叩きのめした海兵達を足蹴にし、小馬鹿にした様子で笑う剣士とコックと皇子。

彼らのその平然とした姿に、ザンバイ達がわつと一斉に歓声をあげた。

「ロロノア達だアーっ!!!」

「待ってたぞ——っ!!!」

安堵と歓喜にわくザンバイ達とは真逆に、海兵達は突如現れた別の侵入者達に慄き、警戒をあらわにする。

するとやがて、ゾロの顔を見た海兵の一人が戦慄の表情で声を上げる。

「おいあの剣士!!?」 知ってるぞ、『麦わら』の手下の『海賊狩り』のゾロだ!!?」

「へっへっへ、手下だってよ」

「——じゃ、名もねエお前はそれ以下じゃねエか、海賊A」

「カチーン、あア!!!」

「じゃB」

「ゴチーン!!? てめエ…!!? おれに賞金ついたらてめエの倍はいくんだぞコラ!!」

「？」

「そういうの取らぬ何とかの皮算用って言うんだだけぜ」

「越したらア!!? 何が何でも越したらア!!?」

小さな事を気にするサンジを挑発し、ゾロがにやにやと嘲笑すると、リンがそれを宥めつつ呆れたため息をこぼす。

戦場にいるというのに、あまりに気の抜けた会話をする彼らに、客車から転がり出たそげキングが声をかける。

「おい、やめなさいキミ達っ」

「そげキング、つつこみ遠い」

しかし彼が発した声は小さく、ゾロ達に全く届いていない。

ただ、すぐ近くで警戒していた海兵達の耳に届くには十分な音量だった。

「見ろ!!? あの列車の中からまだ仲間が!!?」

「!!? ばれた」

「まだいる筈だ!!?出てくる前に吹き飛ばせ!!」

膨れ上がる殺気に慌てふためき、大急ぎで海列車から離れるチョッパーとそげキング。
グ。

彼らが駆け出した直後、海兵達が放った砲弾が海列車に直撃し、轟音と爆炎が上がる。ゾロ達が表情を変える中も、海兵達による砲撃が次々に海列車に炸裂し続ける、が。

「撃ち方やめーっ!!?」

「どうした!!?」

「あれを見ろ!!?」

不意に、ある事に気付いた海兵が声を上げ、仲間を止める。

彼の見る先には……ポロポロになった海列車の上で手を振る三つの人影、ココロとチムニー、ゴンベの姿があつた。

「やめろー!!? お年寄りらぞー!!?」

「子供と小動物だよー!!? か弱いよ——!!?」

「『麦わら』の一味に脅されて列車の操縦させられてたよー!!? ウィーッ、んがが」

「『酔っぱらつた人質がいるか!!?』」

あまりに厳しい嘘を吐くココロに、味方のはずのパウリー達から厳しいツツコミが入る。

しかし海兵達を騙すには、ココロ達の存在だけで十分だつたらしい。砲撃の手を止めて動揺し始める。

「危ない、人質まで死なせるところだつた」

「年寄り、子供、小動物をかかえ込むとは卑劣な海賊共め!!」

「ん? 何だ? 煙がまるで雲のように」

悔しげに歯噛みしていた彼らは、ふと聞こえてきたゴロゴロ……と頭上で轟く音に、

訝し気に辺りを見渡す。

いつの間には発生していた、手を伸ばせば届きそうな高さに広がる黒々とした煙、それが黒雲となつて自分達を覆つていたので。

「いいですね、それ。錬丹術に近い何かを感じます」

「でしょ？ あんたの術もスゴそうね」

「当然でス!!?」

黒雲の発生源に居るのは、新たに生まれ変わった天候棒を操るナミと、円形に並べた五本の苦無の中心で電流を走らせるメイだ。

「あ!!? ナミさん、脱出してたんだな!!?」

「ここにはほとんど敵しかいませんカラ………思い切り暴れるにはうつつでつけでネ!!」

「さア、試させて貰うわよ！ 雷の威力!!?」

五体満足で跪いている彼女達の元に、安堵と共に駆け寄るサンジ。

彼を完全に無視したまま、ナミとメイはバシツ！と電気を発生させ、頭上の黒雲に走らせる。

直後、黒雲の中で電気が増幅され、まるで爆発するように弾けた。

「千霸破雷!!!!」

航海士と鍊丹術師、二人の作り上げた雷雲が真下の海兵達に降り注ぐ。

よもやこんな、一日中晴れ続ける島で落雷に襲われるなどと考えなかつた彼らに、凄まじい光が襲い掛かる。

海兵達は避ける事も防ぐ事もできず直撃を喰らい、眩い閃光に吞まれてしまった。

「「「ぎゃああああああ!!!」」」

「「——つて無差別かーっ!!?」」

が、雷の威力が思った以上の協力で、危うくナミとメイにまで及びかける。

涙目で慌てて飛びのいた彼女達は、その勢いのまま駆け出し、倒れ込んだままのそげキングに拳骨を振り下ろした。

「いで——!!?」

「そげキング——!!! お前ら、何でそげキングをぶつんだ——っ!!!」

「いいのよ、こんな感じで」

「当然の文句でス!!!」

「私に当たるな!! 君の使い方の問題があるんだろうが!!」

理不尽な怒りを喰らい、悲鳴をあげるウソップ。

正体を隠している筈なのに、そもそも製作者の知らない使い方をしてるのに怒鳴られ、眼を見開き叫び返す。

その様子を呆れた目で見やりながら、ランファンがちらりと前を見やった。

「それにしても……すごい威力だな……だいたい倒せたゾ」

ぶすぶすと真つ黒焦げになり、倒れ伏す大勢の海兵達。

最大の懸念だった数の差が、今の一撃で大量に縮められたことに、改めて味方の頼もしさを感じる。

だが、倒れた海兵達の中に混ざる二人の味方と、自分達の主の姿を見つけ、フーとランファンは表情を変えた。

「若——っ!!」

「てめエナミ!!! 何してくれてんだ!!!」

「おれ達何か悪いことしたか!!?」

「んナミさん、おれは今君に出会った衝撃を思い出したよ!!?」

「謝りなさいよそげキング」

「お前が謝れ!!? アホかア!!!」

「何なんだあの一味は…あのねーちゃんはせいぜいサポート役かと思えば、充分な戦闘員じゃねエか!!」

ギヤーギヤーわーわーと仲間内で騒ぐ彼らに、一家とファミリーからは驚愕の目が送られる。非戦闘員と思われていたナミが凄まじい攻撃をした事で、度肝を抜かれたの

だ。

「——ところで、先に突っ走ってったあのアホはどこにいるんだ」

「さア、この島も狭くはないから探すとなると………」

「…お前達」

「あつちでス」

ふと、この場にいない青年の事を思い出し、辺りを探すゾロ。

それにフーとメイが指を差したところ、その方向で建物が崩れるのが見え、大きな轟音と大勢の悲鳴が響き渡った。

「「「あ、ホントだ」」」

疑う余地もない、船長が暴れ回る現場を確認し、行くべき方角を認識する一味。

彼を叱るよりも、ぶつよりも前に、仲間が待つ現場へ急がねばならないと、各々で武器を構え表情を切り替える。

「……それじゃ、追いかけるか」

まだ多くの敵がひしめく戦場を、海賊達の鋭い眼光が睥睨してみせた。

第204話 「ここは請け負った」

「この門の守備をおおせつかった『法番隊』!!? 未だかつて!!? 我々の背を見た者は
いないっ!!! このライン、誰一人として抜けられんぞオ!!!」

「観念せよ悪党共オ——!!!」

番犬の上に乗る、爪を構えた法番隊が、まるで津波のような勢いでゾロ達に迫る。

ナミの生み出した雷は多くの敵を削ったが、それでもまだほんの一部に過ぎなかった
のだ。

「ちよつとよく見りや敵、多すぎ!!!」

「待て!!! こつちへ乗れエ!!!」

「バヒヒヒヒ~~~~ン!!!」

あまりの敵の数にナミやそばキング、チョップパーが悲鳴をあげた時。

大きな嘶きの声と共に、二体のキングブルとそれを操るザンバイ、パウリーが駆けつ
けてきた。

「うおお——っ!!?」

「助かった——っ!!?」

「ここへ来た本分を忘れるな!!? お前らの暴れる場所はここじゃねエ!!!」

法番隊や海兵達を防ぎ、安堵する一家とファミリーをキングブル達の背に乗せながら、ゾロ達に大声で叫ぶパウリー。

その言葉に、一味はハッと顔を見合わせる。

「……そりゃそうダ」

「確かに……この数相手じゃ日が暮れる」

「ロープをつかめ!!? 今は前へ進むんだ!!! フランキー一家、グリードファミリー、全員ゴモラにしがみつけ!!! ソトムに続いて突破するぞ!!!」

キングブルの上からロープを垂らし、パウリーが一味を引き上げる。

味方が全員乗り込んだ事を確認してから、ザンバイと共に手綱を打ち鳴らし、キングブル達を進軍させる。

しかしそこに、すぐさま後を追いかけてきた法番隊が犬を跳躍させ、キングブルの背中に飛び移ろうとする。

「バカめ!!? そうはさせるか、番犬達の足はそんな魚なんぞに劣りはせんぞ!!!」

「飛びつけ——っ!!?」

「飛び乗って来る気だ!!?」

「ウソ!!?」

せつかく敵の包囲網を抜けたのに、狭いキングブルの上で戦闘になろうものなら堪ったものではない。

仕方なく、ゾロやサンジが向かってくる法番隊を迎撃しようとした時、彼らの目の前に手綱が突き出された。

「手綱をとってください」

そう告げる、鋭い目で法番隊を睨みつけるセレネとパウリー。

その眼光の鋭さに、サンジとゾロがそれぞれ目を見開き、敵をじつと見据える二人に言葉をなくす。

「お前ら……………」

「あいつらに会ったら、言つといてくれよ。てめえらクビだと」

「……………必ず」

パウリーの頼みに、ゾロは不敵な笑みを浮かべて頷く。

それを確認したパウリーとセレネ、彼らの意図を理解したルルとマイルストン、パニーニヤがキングブルの背中から飛び降りる。

「頼んだぞ!!? ガレーラ!!?」

「ハーフノット・エア・ドライブ!!」

「『聴くがいい、魔の響きを!』
 //レクイエム・フォー・デス
 『死神のための葬送曲』!!!」

パウリーとパニーニャのロープが敵を絡めとり、セレネの放った音の衝撃波が多くの敵を吹き飛ばす。

麦わらの一味に近づいていた法番隊を退け、ガレーラの船大工達が、敵に仲間の後を追わせない為に決死の殿を努める。

「!!? 何だコイツら——っ!!」

「あいつら…!!? 強エ!!?」

「……は請け負った!!!」

凄まじい勢いで走ってゆくキングブル達を背にし、ガレーラの戦う船大工達は一斉に走り出していった。

??

「ぬーっ!!! グア!!!」

全身を棘の鞭で囚われ、血を吐くフランキーとグリードが倒れ込む。

怯えた顔でそれを見守っていたスパンダムは、彼らが完全に無力化された事を察すると、引き攣った顔のまま下品に笑い出した。

「あの時から…:気性は変わってねエ様だな、カティ・フラム…」

悔し気に歯を食いしばるフランキーを見下ろし、足蹴にするスパンダム。

フランキーの隣のグリードは、兄弟分と同じように、憎々しげに敵の親玉を睨みつけ

る。

「もつと早くに、お前が生きてて設計図を持つているとわかっていりや、こうも苦勞する事アなかった：お前なら過去の罪でしょつぴく事もた易いからな!!! ——それに引きかえ、お前の兄弟子達は厄介だった」

スパンダムは……事態の元凶は語る。

なぜアイスバーグとヴィルヘルムという男達は、仇である政府と取引を行うようになったのか。

それは自分が持つ設計図を狙い、政府が再び刺客を送ってくる事を予見していたからだった。

それゆえに、相手が政府でも容易に手を出して来れないよう、政府御用達の造船会社社長、そしてウォーターセブンの町長という立場を手に入れたのだと。

それを聞かされたフランキーは、愕然とした様子で目を見開いていた。

（——それで政府と取り引きを………!!??）

「頭のいい男だったよあいつは、ワハハハ!!?」

笑うスパンダムだが、その表情には確かな苛立ちが見て取れる。

計画を簡単に済ませせなかつた男の周到さに、やはり身勝手な怒りを抱いていたらしい。だがその苛立ちも、直後に綺麗さっぱり消え去っていた。

「——だが風はおれの方に吹いてきた……!!?　ちようどシビレを切らし、強行策に出ようとしたその時だ」

それが、〃大将青キジ〃より届いた吉報。

政府が長年にわたって探し続けてきた女、ニコ・ロビンが海賊船に乗って、ウォーターセブンに向かっているという知らせだった。

悪巧みに関しては人一倍頭が働くスパンダムは、即座にある計画を思い付いた。

「おれは気を落ちつかせるため一杯のコーヒーを飲んで、『バスターコール』の許可を含む全ての状況を作戦に組み込んだ!!　シナリオに多少の変更はあったものの……見ろ!!　古代兵器復活の引き金が二人共、今ここにいる!!?」

がばつ、とフランキーとロビンに目をやり、自慢げに吠えるスパンダム。

だが当然ながら、彼の計画を称える者は誰もいない。彼の部下であるルツチ達さえ、冷めた視線を送るだけである。

「わかるか!!?　世界中の風は今、おれに向かって吹いているんだ!!?　望めばどんな大國も支配できる程の〃力〃が今、おれの手中にあるんだ!!!」

「——青キジはなぜ、あなたに『バスターコール』の権限を……?」

ゲラゲラと醜悪な姿で笑うスパンダムに、疑問を抱いたロビンが口を挟む。

政府がいくら危険人物を捕える為とはいえ、こうも性格を破綻させた男に重要な権限

を貸し与えるだろうか、と。

「このおれに質問をするなア!!! 無礼者めがア!!!」

そんな彼女の問いに、胡乱な顔で振り向いたスパンダムが返したのは、容赦ない罵倒の言葉と共に振るわれた本気の拳だった。

後ろ手に捕らえられていたロビンは踏ん張る事もできず、勢い良く地面に倒れ込み、苦し気に呻き声を漏らす。

「ワツハツハツハツ!!! 悪魔の土地オハラ忌まわしき血族め!!? 貴様の存在価値など、おれが見い出してやらねば“無”に等しいものだったんだ!!! おれには充分感謝するんだな!!!」

口の端から血を流し、眉間にしわを寄せるロビン。

フランキーやグリードが怒りに満ちた目で睨むのを無視し、スパンダムはふと思いついた様子で口を開く。

「ああ、そういえば……………さつき、そんなくだらねエお前を取り返しに来たバカがいたなア」

「!!? まさか……………!!?」

「なアに、もう今頃全員捕まってる頃だろうか……………!!? “麦わら”のルフィとその一味だ……………!!? このエニエス・ロビーの一万の兵力の前にはゴミ同然だったようだな

!!!

麦わらの青年が島に侵入したという知らせの後、報告を行った海兵からスパンダムが最後に聞いたのは、被害者は5人だけという意外なものだった。

スパンダムはそれを真に受け、来たはいいが海兵達の人数に圧倒され、逃げ回るしかなかったのだと、勝手に考えていた。

そして彼は、にやにやと性根が腐った笑みをロビンに見せながら、ある決定を聞かせる。

「まあどうせ監獄の船を出すところだ、手土産にちようどいい。このまま『インペルダウン』へ連行するつもりだ」

はっ、と息をのみ、顔を上げるロビン。

聞き間違いと信じたかったが、悪意に満ちたスパンダムの顔が、全て本気だという事を示していた。

「待って……約束が違うじゃない!!! 私があなた達に協力する条件は、彼らを無事に逃がす事だった筈よ!!!」

「……………何を必死にイキリ立ちやがって……あいつらはウォーターセブンを無事に出航して……ここへ来たんじゃないのか?!!」

必死に抗議の声を上げるロビンに、スパンダムは心底面倒臭そうに吐き捨てる。

唾でも吐きそうなほど、ロビンたちの剣幕を鬱陶しがっている彼の態度に、ロビンだけでなくフランキー達も唾然となる。

「何ですって…!!? まさか、そんなこじつけで、協定を破る気じゃ…!!!」

「……………つ、どうしようもねエクソだな、コイツら」

「仁義のかけらも持つちやいねエ…おれが一番キラいな輩だ!!!」

「何だと? 黙れこのクズ共オ!!!」

動けない分、口で怒りをぶちまけるフランキーとグリードに、頭に血を昇らせたスパンダムが何度も蹴りを浴びせかける。口答えが気に入らなかったようだ。

「そもそもめてめエら悪人との約束なんぞ、おれ達が守る必要すらねエんだ!!! 調子にのんじゃねエ!!! 海賊をダメしてとっ捕まえる事くらい、海軍ですら公然とやってる事だ!!!」

「……………ハア……………!!? 卑怯者……………ハア……………!!!」

「人を裏切り続けてきた女が…今更理想的な死を選べると思うな…!!? ハハハハ…」

数秒間ロビンとフランキー達を蹴り続け、息を切らせたスパンダムがなおも醜悪な顔で嗤う。

悪党の分際で仲間の心配をするロビン達に、心の底から呆れた目を向けつつ、次なる悪意を口にした時だった。

「話の途中のようだが……失礼してもいいかね?」

コツ、コツと革靴の音を鳴らし、一人の海兵が入室する。

片わきに赤黒い何かを抱え、温和な表情で声をかけてきた彼——ブラッドレイを、スパンダムは満面の笑みを浮かべて迎え入れた。

「おお……!!? お待ちしていた!!! 面倒な仕事を頼んで申し訳なかったな、
大總統殿……!!!」

「そう苦労はしなかったよ……ただ、少し手がかかった」

言いながらブラッドレイは、抱えていたそれをどきつと床に放り捨てる。

そこに打ち捨てられたもの……全身を斬り刻まれ、白い肌と髪、翼と尾が血塗れになったエレノアの姿に、ロビンとフランキー達が再び絶句する。

「途中何度も目を覚ましては逃げようとするものでね……その度に大人しくさせる必要があつたくらいだ」

「……!!? 妖術師さん……!!?」

「妖術師……!!!」

「てめエ……!!? そいつに何しやがったクソ野郎!!! おいエレノア!!? お前……生きてんのかオイ!!!」

がしやがしやと鞭に囚われたまま体を起こし、横たわるエレノアに呼びかけるフラン

キー。

しかし、俯せになったエレノアは沈黙したまま、ぴくりとも動かない。呼吸すら定かではなく、ロビンの背筋にぞっと嫌なものが走る。

「……こじつけすらする気がないの……!!? こんな姿に変えて……!!」

「はア……いちいち説明しなきゃいけないのか、お前はよ………コイツは『麦わら』の仲間じゃねエだろ」

怒りを声に表すロビンに、スパンダムはやれやれと肩を竦める。

わざとらしく大きなため息をこぼし、エレノアの頭を軽く足で小突きながら、小馬鹿にした態度で語り始める。

「大海賊『白ひげ』の娘が、あんな弱小海賊共を本気で守るわけねエだろ………この女はお前と同じだ。自分以外の全部を利用して生き延びようとしているクズなのさ」

エレノアの気持ちを一切聞く事なく、勝手な偏見でものを言うスパンダム。

目に余る暴言にまたフランキー達が唾然とするのを横目に、スパンダムは嘲笑の目を向けて喋り続ける。

「だからおれは約束を破っちゃいねエ……だから別件で『大総統』に頼んだんだよ、バカめ!!!」

「バカはてめエだ、スパンダ!!! お前………そいつに手を出したらどうなるかわかって

ねエのか!!？」

「スパンダムだ!!! わかっているとも…世界政府は忌々しき『白ひげ』との交渉カードを手に入れる!!! おれの功績で、大海賊の一人がおれに首を垂れる事態になるんだ!!! 最高じゃねエかよ、おい!!!」

机上の計算、いや最早妄想としか言えない未来を語るスパンダム。

あまりにも現実を無視した計画を平然と語る彼に、フランキーもグリードも顔をしかめる。両手が自由なら顔を覆っているほどの呆れだ。

「バカだ………こいつ本物のバカだ。何が起こるかマジでわかっちゃいねエ…!!？」
「とんでもねエ戦争になるぞ!!! てめエは英雄どころか世界最悪の大罪人になるに決まってるだろが!!!」

大海賊『白ひげ』の力がどれほど恐ろしいのか、知らないのか。

伝聞で知るだけで、絶対に敵対してはならないと察せる相手だというのに、何故わざわざ彼の宝物を傷つけて誘き寄せようというのか。

意図を探ろうとしたが、スパンダムの目にあるのはちんけな欲望だけ。巨大な野望や大志など、一切感じ取れなかった。

「ワツハツハツハツ…『白ひげ』を葬る事ができるなら、何やったってお釣りが来るさ。おれの行いこそが正義なんだからな…!!!」

悪魔のような顔で醜悪に告げるスパンダムに、ルッチ達もいつの間にか愕然とした目を向けていた。

自分達が受けていた任務とは全く異なる任務、その内容のあまりの軽率さに、一応の上官に対して怖気が走る。

だがスパンダムは彼らの雰囲気気付く事なく、愉快そうにロビン達を見下して告げる。

「仲良く死ねばいい………巨大な正義の前には全てが無力なのだ」

正義を騙りながら、全てが悪意に満ちたその言葉に、ロビンは何も言い返せず、項垂れる他になかった。

第205話 “行け”

「では衛兵!!? この三人を鎖でつないでおけ!!? ニコ・ロビンの “海楼石” の錠は決して外すなよ」

スパンダムの命令で、黒服達が現れて三人の拘束を行う。

だが、その誰もが青ざめた顔をしていて、スパンダムを化け物のように見る者さえいる。しかし彼は、それにすら気付く事はなかった。

「この一件で我々『CP9』に与えられる地位がとんでもねエものになる事を祝して、船で一杯やろうじゃねエか!!?」

「……………祝杯という気分でもないですね地位や権力に興味がないので…」

「何イ!!?」

啞然とした顔を元に戻し、背を向けて歩き出すルッチ。

他のCP9の面々もそれに続き、それを訝しんだスパンダムが声を上げて彼らを止める。

「我々の正義は『世界政府』に既存する。『政府』があなたを『CP9』の司令官と認める限り、その任務を完璧に全うするまで!!? 何もあなたの思想に賛同する必要もない」

「正論だが……じゃあお前らの求めるものは何だ!!？」

信じられない、といった表情で自らの欲望を否定したルッチに問うスパンダム。

彼に対し、ルッチはゆっくりと振り向き……人獣の姿に変化し、牙を剥き出しにして唸り声をあげながら、応えてみせた。

「血」ですかね。ここにいと……殺し」さえ正当化される」

悍ましいほどの殺意を込めたその言葉に、スパンダムは腰を抜き、その場にへたり込む。

だが、やがてそれは安堵の笑みに変わり、暗殺集団の背中を頼もし気に凝視するのだった。

「撃てエ——っ!!？」

「フー!!？」

「お任せヲ!!？」

海兵達の号令で、無数の大砲から砲弾が発射される。

まっすぐに宙を貫き、島の奥を目指して突き進む二体のキングブルに迫るが、寸前で真つ二つに斬り裂かれ爆発する。

その後、爆風で押し戻されたフーが、砲弾を斬り裂いた刃を仕舞い座席に戻った。

「——そんな!!? 危うく海王類の胃袋の中で死んじまう所を、ソドムとゴモラはフランキー一家に救出されて、こう言われたんだってよ。『もう腹いっぱいだから、お前らは食わねエ』。その時から命の恩人フランキーに忠誠を誓ったんだそうぞ!!?」

「バヒン!!?」

狙い撃ちされる座席を守る奮闘が繰り広げられる脇で、顔を後ろに向けたキングブルの片割れが、嬉しそうにチョッパに話している。

話を聞いたサンジは、やや呆れた表情でキングブルを見つめ返していた。

「それはお前、偶然フランキー一家が食った海王類の腹の中に、こいつらが入ってたってだけの話じゃ……………」

「バルルルルーンツ!!!」

『おれは一生アニキについていくぜ!!?』だと

「まあいいけど、前見てくれるか、危なっかしい」

「よっぽど嬉しいんだネ、言葉わかってもらえんのか…」

自慢げに鳴くキングブル・ソドムに酷な真実を告げるのも忍びなく、まあいいかと口を閉ざす。知らぬが仏という言葉もあるのだ。

『——ところで一緒にいた仮面の奴は乗って来なかったけどいいのか?』だって、え!!?」

不意に、ソドムが尋ねた言葉にチョツパーがハツとなり、次いで他の面々も息を呑む。皆で一斉にソドム達の背に乗った筈なのに、確かに仮面の狙撃手だけが姿を見つけない事のできなかつた。

「いねエ!!!」

「何で…!!!? あいつ!!? 落ちたのか?!?」

「いや、そういえば最初つからいねエ!!!」

「逃げやがったんじゃ…!!!」

辺りを見渡す一味だが、どこを探しても見当たらない。

色んな意味で最悪な想像をする彼らに、ゾロが鋭い目で前方を睨みながら口を開く。

「とにかく…乗ってねエモンは今更迎えに戻れねエ…!!? あいつはあいつで何とかやるや」

「でも衛兵だらけの島よ、ここは!!? ルフィじゃあるまいし一人でいたら命が…」

「ここに来ると決めたのは奴の意思!!? それで死んだところで本望であるウ……」

「おい、フリー…」

「ちよつと…そんな言い方!!!」

フリーもゾロに賛同し、リンに呆れた目で睨まれる。

しかし、ゾロは全く顔色を変える事なく、そして姿の見えないそげキングへの苛立ち

を見せる事なく、慥然とした態度で仲間達に告げる。

「二つ島を越える度、おれ達は全員知らず知らず力を上げてる。あいつも行く島々で毎度、死線を越えて来てんだ。ちよつとやそつとで死ぬ様なタマはウチにやいねエよ!!」
「？」

「ハハハ……大した信頼ダ!!？」

無事かどうか確かめられずとも、必ず生きていると宣言するゾロに、フーが思わず声を上げて笑う。

老臣の珍しい態度にリンが片目を開けて口笛を鳴らすのを無視し、フーは前方に見え始めた建物を見据える。

「見口、裁判所へもう一息ダ……!!」

着実に、仲間と彼女達を攫った宿敵が近づいている。

いよいよ本丸に乗り込むのだ、と全員が気合いを入れ直そうとしたその時。

ソドムの胸で突如、大きな爆発が起こった。

「しまった……!!? キングブル!!?」

「よっしや、一匹仕留めたぞオ——!!!」

「ソドム!!!」

呻き声をあげ、進む足が止まるソドム。

血を吐き、痛みには震えるキングブルの背の上で、血の気を引かせた顔でサンジ達が叫ぶ。

「ソドム!!? ふんばれ、まだ倒れるな!!!」

「お前ら、すぐにこつちへ移れ!!! ぐずぐずするな!!!」

懸命に前へ進もうと踏ん張るソドムに呼びかけていた所へ、もう一体のキングブル・ゴモラの背に乗ったザンバイ達が声を張り上げる。

重傷を負ったソドムに痛ましげな目を向けながら、しかし覚悟を決めた顔で麦わらの一味に促す。

「ソドムはもうダメだ!!! 迫撃砲で胸筋をやられた!!? 倒れる前に早く!!! お前らが進まなくて誰が報われるんだ!!!」

その気迫に、一瞬ではあるが気圧されたように黙り込むサンジ達。

そこへ、ソドムが激痛の走る体に叱咤し、彼らに振り向いて一声鳴く。

「バヒン!!!」

「『行け』って!!!」

彼の言葉を聞き、チョッパーが悔しさと申し訳なさでぐしゃぐしゃになった顔で告げる。

一味はすぐさま、ゴモラの背に次々に飛び移り、座席にしがみつく。

ゴモラはソドムの差し出した鱭に自分の鱭を当て、彼の意思を先へ引き継ぐ事を誓った。

「行くぞ、ゴモラア!!!」

「バルルルルア!!!」

ザンバイの声に、雄叫びを挙げて応えるゴモラ。

力尽き、倒れ込んだ相棒の意思を無駄にしないため、大切な兄貴分の元へ爆走を再開する。

海兵達は残ったキングブルを調べ、誰も乗っていない事に気付くと、先へ向かったもろろを集中的に狙い始めた。

「『迫撃砲』だ、避けるゴモラア!!!」

「この中央の道はマズイな…!!! 準備万端で待ち伏せてやがる!!? 道を変えるぞ!!!」

「バルル!!?」

目的の場所までまっすぐ伸びる道は通りやすいが、広い分狙われやすいと判断し、進行方向を変えるゴモラ。

凄まじい勢いで突き進む、海の巨獣の背にしがみついていたナミは、不意に胸元で震えるあるものの感触に気付き、仕舞っていたそれを取り出した。

「はい、誰?!?」

『アタシらよオ!!? ウイー』

「ココロばーさんだ」

「何の用だ?」

『よかった、まだ生きてる様らね、んががが!!?』

取り出した子電伝虫を起こし、届いたココロの声に答える。

切迫した状況に繋がった通信に、ゴモラの上にいる全員が何事かと振り向き、耳を傾けてきた。

「どうしたの!!?」

『ああ、いい忘れてた事があつたんねエ:忙しいらうからさっさと話すよ、よく聞きな』

ココロ曰く、このまま進んでもエレノアたちの元へは辿り着けないのだとか。

裁判所から司法の塔へ向かうには、間にある架け橋を下ろさなければならず、その上架け橋を動かすスイッチは裁判所に隣接する二つの塔にあるのだと。

「ばーさん、なんでそんな事知つてんだ!!?」

『昔トムさんと橋の修理に来たんらよ!!! コノ恩知らずのバカ政府が!!!』

「おれにあたるなよ……!!?」

素直に驚きの声を上げると、ココロから憤慨した声が帰つて来て、ザンバイは困り顔

で消沈する。

とにかくこの情報のお陰で、裁判所で立ち往生せずに済んだわけだと、全員が新たにできた役割について考え始める。

『それからチムニーが…』

『もしもし——っ!!? 海賊ねーちゃん聞こえる——っ!!?』

「わ!!? 何? チムニー」

次いで、ココロが何か話そうとした時、祖母を押し退けるようにしてチムニーが声を上げる。

声の大きさに驚くナミに、チムニーは興奮した様子で自身が見たものをナミ達に説明する。

『あのねー!!? ゴムの海賊にーちゃんが裁判所の屋上に登ってったの見たよー!!?』

「ほんと!!? ルフィが!!!」

『あと屋上で石が崩れるのも見えたから、何だか暴れてるみたい!!?』

「屋上で!!? ……わかった、ありがと」

勝手に先に向かい、今頃どこにいるのかと悩みの種になっていた男の動向がわかり、ナミは内心で心の底から感謝を抱く。

何処ぞで迷子になってしまいかと心配していたが、目的地の目前には辿り着いていた

ようだ。

『それと娘っ！ 電伝虫はつないどきな、こっちに状況がわかるからね』

「了解っ——だって!!？」

「これで目的地が決まったナ…!!？」

「ああ」

ココロの連絡が終わり、ゾロとサンジも不敵に笑う。

船長の居場所も、奥へ通じる道を開く鍵も同じ場所だとわかった。これで、必要最小限の戦いで強敵との戦いに臨めるといふものだ。

「頼むぞゴモラ!!! 裁判所まで!!!」

「バヒヒーン!!? バルルルア!!!」

嘶きを上げ、速度を上げ、邪魔な建物を押し潰すような勢いとなるゴモラ。

この調子ならば、すぐにでも敵の本陣に乗り込めるはず、とザンバイ達の目が期待に輝いていた。

ゴモラの首に、巨大な鉄球が激突し、背後の壁に叩きつけられるまでは。

「ゴモラア!!!!」

「オオ」——!!!」

「くそオツ……!!! 誰だあいつら!!!」

ぐらりと傾ぐゴモラの巨体に、ザンバイが悲鳴のような声を上げて慄く。

あまりに突然の襲撃。攻撃には十分注意していた筈なのに、まるであの大きさの鉄球が突然音もなく現れたようにしか見えなかった。

動揺する彼らの周囲に、海兵と黒服達が容赦なく集結し、銃口を向けて囲んでいく。

「海賊達にもう足はないぞ!!!」

「取り囲んで討ち取れエ——っ!!!」

視界一杯に集まってくる白と黒。時が来れば、彼らは軍隊蟻のように容赦なく一味を蹂躪する事だろう。

包围を狭める彼らの姿は、絶望が形を成してやって来るようにも見えた。

『エニエス・ロビー全衛兵に告ぐ!!? 南東部Dブロック中央にて海賊達の乗るキングブルを仕留めた!!! 全兵力を招集し、Dブロックを完全封鎖せよ!!!』

「マズイぞこりやア……!!!」

「大変だ!!? 敵は何千人もいるのに!!?」

「こんなところで囲まれたら!!! やられちまうよオ——っ!!!」

チョッパーの悲痛な叫びが、エニエス・ロビー全体に木霊する。

囲まれた麦わらの一味は、まさに孤立無援の絶体絶命に陥ろうとしていた。だが、たった一人の男が、敗北の運命を見事捻じ曲げてみせた。

「おおオ!!? やったア!!? オイモとカーシーが復活したぞー!!!」

「早くあいつらを踏み潰せ!!! あの5人を何とかしろ巨人共ー!!! がははは」

ズシン、と地響きを立て、二人の巨人の門番が起き上がる。

俯いた彼らの顔は、よく見えなくとも怒りに満ちている事がわかり、海兵と黒服達、法番隊は歓喜の声を上げ、反対に奮闘していた船大工達は愕然となる。

「何てこった……………!!!」

「あんなの相手にする体力なんてもうないよ……………!!?」

「……………までですか……………!!?」

「さアあの5人を殺せ——!!! 巨人共オ!!!」

体力の限界も近づき、膝をつき項垂れるパウリー達に、法番隊と黒服達が雄叫びを上げて囃し立てる。

血まみれの彼らは、自分達を散々手こずらせた侵入者が無惨に薙ぎ払われる姿を期待し、巨人達に早くしろと促す。

そんな彼らを見下ろし、オイモとカーシーはゆっくりと自身らの得物を振りかぶり、

そして。

「よくもおれ達をダメしたなアア!!!」

「「「ぎやあああああああ!!!」」」

凄まじい咆哮と共に、眼下の法の番人達を薙ぎ払う。

怒りに燃え、こめかみに大きく血管を浮き立たせながら、決して許すものかと雷鳴のように声を轟かせる。

ぼとぼと落下していく法番隊や黒服達を睨みつけ、巨人の門番達はさらに怒気を噴き上がらせる。

「お頭の無事を喜ぶ前に……無駄な歳月を悲しむ前に……」

「気の済むまで怒りのままに……!!! 暴れてくれる!!! 共にゆこう!!! 狙撃の王よ!!!」

そう、巨人達は肩に乗る一人の男に——真実を教えてくれた恩人に呼びかける。

仮面を被り、マントを羽織ったその男は、右往左往する敵を見る事なく、ただ前だけを見据えて二人に吠えた。

「くるしうない!!! 今こそ、反撃ののろしを上げろ!!! 同志達の下へ急ぐのだ!!!」

巨人の門番、オイモとカーシー。

かつての巨兵海賊団……“青鬼”のドリートと“赤鬼”のブロギーが率いる一味に属する海賊達。

決闘騒ぎから50年、戻ってこない彼らを心配し海へ出た彼らを捕らえ、海軍はある契約を結ばせた。

『我々が捕まえたドリートとブロギーを解放したくば、今後100年エニエス・ロビーの門を守り続けよ』と。

そして彼らは50年門を守り続け、そして——彼らの船長達を師と仰いだ男により、真実を知った。

故に彼らは、怒りのままに、力の限り暴れ続ける事を決める。

そんな怒り狂う彼らを引き連れ、狙撃の王は仲間達の元へ、巨大な凱旋を始めるのだった。

第206話 “最悪の事態”

それが視界に映った瞬間、ゾロとサンジは同時に表情を変える。

遙か先の建物の上で始まっている戦闘に、二人は顔に焦りを滲ませて眉間にしわを寄せる。

「おい!!? コック」

「ああ、見えた」

二人の眩きに、他の者達は何事か、と振り向いてくる。

じりじりと迫り来る海兵と黒服、法番隊に注意しながら、顔色を変えたゾロ達に視線を向ける。

「ルフィはもう…『CP9』と戦ってル……………!!!」

「え」

「せつかちな奴メ…!!?」

「ほんとか!!? しまった、出遅れた!!?」

先にたった一人で強敵と戦っていると聞かされ、ナミ達も前方に目をやり、険しい顔で歯を食い縛る。

だが、今この場で焦ってもどうにもならない。

迫り来る包囲網の前で少しでも動けば、夥しい数の敵が一気に雪崩れ込んでくる事になるのだから。

「しかしこの完全包囲網をどう切り抜けるか………!!! 何者かの鉄球を食らって、ゴモ

ラももう動けねエ!!!」

「もう道は一つしかねエだろ!!?」

「裁判所までつつきろぞ!!!」

「よし行くぞ野郎共オ!!!」

突然の強力な一撃を受け、横たわったままのゴモラを置き、先へ進もうと雄叫びを上げる一家とファミリー。

決死の形相で奮い立ち、海兵達の包囲網を突つ切ろうとしたその時だった。

「待てエ!!! 誰も降りるな!!!」

「チョッパード?」

動き出そうとしていた全員に、鬼気迫る表情で前を見つめたチョッパーが叫び、引き留める。

困惑の視線を向けられながら、彼は自身が聞き取った、ある男の覚悟の言葉を伝える。しっかり掴まってる!!! と。

血を吐きながらゆっくりと身を起こす、ゴモラの言葉を。

「怪物が……!!? 怪物がまだ生きてやがる!!!」

「迫撃砲で撃ち殺せ——っ!!!」

「怪物を撃てエ!!!」

ゆっくりと鎌首をもたげていくゴモラに、海兵達が次々に我に返り、銃を構えていく。しかし、ザンバイ達がそこへ銃撃を行い、仲間に向けられた凶弾を防ぐ。そして、ゴモラが進むべき道を作ろうとした。

「反撃しろ!!? ゴモラを援護しろ!!!」

「バルルルルア~~~~ア!!!」

仲間の激励の言葉を耳に、ゴモラが目を血走らせながら吠える。

ゴロゴロと鱗に装着されたキヤタピラを動かし、激痛が走る体に叱咤し、残る力の全てを振り絞り再びの進撃を始める。

だが次の瞬間、ゴモラはなぜか自ら壁に頭を突っ込み、さらなる傷を自身に負わせ出した。

「うわアア!!? おいゴモラ!!! お前…何自分から壁に突っ込んでんだ!!!」

「どうした!!!? やっぱりもう無理なのか?!?」

「違う…!!! 目が見えねエんだ!!! 網膜をやられて視力を落としたんだ!!!」

突然みせたゴモラの異変に困惑の聲が上がる中、瞬時にその原因に気付いたチョッパ―が息を呑む。

その間も、ゴモラは光を失ったまま走りだし、壁に体を激しく擦り付けながら爆走を始めてしまう。

その所為で背中の中の座席は凄まじい揺れに襲われ、ナミ達は大きな悲鳴をあげる羽目になった。

「何だと!!? お前…目が見えねエのか!!? ゴモラア!!」

「バルルルル!!」

ザンバイが叫ぶも、ゴモラは焦点の合っていない眼で虚空を見つめ、走り続けるだけ。仲間の声さえ聞こえなくなっているようだった。

「止まるんだわいな!!? ゴモラ!!!」

「あんたもう走れる体じゃないわいな!!!」

「バルルルルア~~~~ツ!!!」

モズとキウイも、ゴモラの暴走を止めようと呼びかけるが、速度が落ちる様子は全く見受けられない。

他の一家の面々やファミリーが同じく叫ぶも、ゴモラは咆哮を上げ、それらを掻き消してしまう。

彼の目には、彼が命に代えても救いたい大切な男達の姿しか映っていないかった。

『約束したんだ』って……!!! ソドムと!!! 『後の事はおれに任せろ』って!!! 『おれがお前の分もみんなを乗せて走るから』って……!!!」

ゴモラの咆哮を、チョップパーが通訳し痛々しく顔を歪める。

置き去りにした片割れの想いを無駄にしないために、約束を果たす為に、命を消耗する暴走を続ける。

だがやがて、爆走する彼の前には裁判所の前に聳え立つ、巨大な壁が近づいてきた。

「ゴモラ!!? 止まれ、闇雲に走るな!!! 前は行き止まりだ!!! ぶつかって死んじまうぞ!!!」

「止まれ——っ!!!」

声も届かない、意識さえほとんど朦朧としているキングブルに叫ぶも、やはり彼は止まる気配を見せない。

このまま彼を見殺しにしてしまうのか、とザンバイ達が悲鳴をこぼし。

「行き止まり? そんなもん見えるか?」

「いやア、どこにも見当たらねエな」

「そーそー、道はちやーんとある」

その刹那、三人の男達の不敵な眩きが聞こえ、目の前の巨大な壁に幾つもの亀裂が走

る。

直後、ゾロ・サンジ・リンによる強烈な一撃が炸裂し、分厚い壁が無数の破片となつて吹き飛ばされた。

「うお——っ!!! やったア!!!」

「着いたぞ~~~~!!! 裁判所だ、ゴモラ~~~~っ!!!」

目前に聳え立つ建物に、倒れ込んだゴモラの背の上でザンバイ達が雄叫びを上げる。

歓喜の声を上げ、飛び降りていく彼らの後で、ゴモラはホツと心の底から安堵した顔で眠りに就いていた。

「見ろ、ファンクフリード」

掌の上に乗せた、金色に輝く電伝虫。

それをうつとりと見つめるスパンダムが、室内にいる一頭の象に向けて話しかけていた。

「『ゴールデン電伝虫』……!!! 『バスターコール』の権限と同じく……『海軍本部』の大将以上の許可なく持つ事を許されない貴重な種だ……」

それこそが、ロビンが自らの命を賭してでも防ぎたかった、惨劇を招くたった一つのボタン。

何十隻もの艦隊を呼び、危険因子を完全に葬り去る為、全てを焼き尽くす砲撃を浴びせかける最強最悪の存在であった。

『バスターコール』発動の為、『青キジ』から預かつてはいるが、今に見ている。『兵器復活』が現実のものとなれば、これを大将から預かる事なくおれ自身がこいつを所持し、軍隊を自在に操れる男になるだろう」

まだ見ぬ、自身に都合のいい未来を夢想し、いやらしく笑うCP9長官。

そーつとポタンに指を近づけながら、ぞくぞくと背筋に走る震えを愉しみ、にやにやと絶えず笑みを浮かべ続ける。

「このポタン一つで島一つ消える。わははは……『権力』ってやつもまた……『兵器』みてエなもんだな」

「スパンダム長官つ!!!」

「うわ——つ!!! ビックリした!!! 何だ貴様ア!!! ノックせんかア!!!」

バタンツ、と勢いよく扉を開けて飛び込んできた海兵に、スパンダムはかつてない素早さでゴールデン電伝虫から指を離す。

うっかりポタンを押すところだ、とぼやきながら懐にしまい、いきなり入ってきた海兵をぎろりと睨みつけ、八つ当たり気味に怒鳴りつける。

「も……申し訳ありません。……しかし緊急を要するという事で……エニエス・ロビー『本

「島」より電伝虫が……!!?」

「何をオ!!?」 電伝虫ならこの部屋に直接かけてくれれば……おい!!? 受話器がはずれるじゃねエか!!? いつもいつも一体、誰の仕業だア!!」

自分が誤って受話器を外したままにしたただけだというのに、声を荒げて喚く。

ぶつぶつと不満を口にしていた彼は、ふと訝しげな表情でやってきた海兵に振り向いた。

「——ん? お前、今緊急の要件といったか?」

「はいっ!!?」

慌てふためきながら、スパンダムは海兵が持ってきた電伝虫を受け取る。

そして、にやりと不気味に嗤うと、上機嫌にエレノアとロビン、フランキー達がいる方へと歩いて行く。

「おい……ニコ・ロビン。エニエス・ロビー本島より緊急の報告があるらしい……緊急って程でもねエだろうが……予想はつくよなア?」

「……………!!?」

「頑張つてウチの兵士を5人もぶつとばした『麦わら』のルフィが、どうなったか」

海兵が来る前に届いた、本島からの通信の内容。

『麦わら』のルフィがたった一人で乗り込み、何百人もぶちのめして向かってきたと

いう報告が来たかと思えば、5人の間違いだつたとすぐに訂正が入つた。

のこのことやって来たはいいが、多すぎた敵に恐れをなし、逃げ回っていたのだ。

と、そう解釈したスパンダムは、それをロビンに聞かせてやろうとわざわざ電伝虫を持ってきたのだつた。

「最強の門番オイモとカーシーを前に、お前の仲間達がどうやって踏み潰されたか………世界政府に逆らつたバカ共のなれの果てを一緒に聞いてみようぜエ……」

「………最低だなてめエ……!!?」

「聞くに耐えん……!!?」

「黙れチンピラ!!? ……なア、オイどうだお前。クズのお前を助けに来た連中の末路、知りたくねエか?」

ニタニタと醜く嗤い、沈黙したままのエレノアに話しかけるが、エレノアは俯せになつたまま身動きもしない。

詰まらなそうに舌を鳴らすと、スパンダムは大仰に受話器を手にし、本当の相手に声を発する。

「オイ衛兵!!? あー……こちらスパンダムだ!!」

『あつ!!! 長官殿でありますかつ!!? よ……よかつた、やつと報告を!!? えー!!? 何から話していいやら……!!?』

「落ち着けバカ者オ!!」　いいか、情報は要点を短くまとめ、大きな声ではつきりと伝えろ!!?　「麦わら」の一味だろ?　その後どうした、うっかり殺しちまったか?　…まアそれも相手が弱エのが悪…」

そう切羽詰まる事もあるまいに、と呆れた目を電伝虫越しに相手に向ける。

結果の報告をするのに、何をそこまで慌てる必要があるのか、と訝しむ彼にもたらされたのは。

『侵入してきた海賊約60名に、現在エニエス・ロビー『本島』内最終地点『裁判所』前広場まで攻め込まれました!!』

という、あまりにも信じがたい驚愕の報告であった。

聞こえてきた声に、ロビンははっと目を見開き、フランキーとグリードは息を呑み、エレノアは微かに肩を震わせる。

はつきりと変わった空気に気付かぬまま、海兵は事実を次々に報告していく。

『エニエス・ロビー本島全部隊へ!!!　海賊達が『裁判所』前広場へ到達した!!!　全兵直ちに『裁判所』前広場へ!!!』

「たっ。」

『次いでは『本島前門』の巨人の門番、オイモとカーシーも海賊側に寝返り、只今『本島』中央付近を逆走中!!? こちらの衛兵の被害総数はおよそ2千人強!!? ——その内千人以上を一人でなぎ倒した船長 “麦わら” のルフィは忽然と姿を消した為——目下捜索中であります!!?』

思わず固まるスパンダムに、海兵もやや混乱した様子を感じさせる。

口にする情報の全てが、自分達に不利なものばかり。

悪夢か何かの間違いではないのかと疑いたくとも、響いてくる海兵達の悲鳴、全て現実だとこれでもかと思わしめていた。

『おそろくこれは——エニエス・ロビーの歴史始まって以来、他に例をみない最悪の事態かと思われまます!!!』

「うはははは」

「ガツハハハ!!?」

震えた声で響く海兵の声に、フランキーとグリードが心底愉快そうに笑う。

呆然と、立ち尽くしたまま固まるスパンダムは、顔中から汗を噴き出させ、やがてよろよろと後退り、虚空に向けて叫び始めた。

「……………どうなってんだ……………!!! 今、この島で何が起きてるんだア~~~~!!!」

『バスカビル!!! 裁判長バスカビル!!! 応答しろ、おれだア!!!』

三つの頭を持つ、異形の姿をした裁判長バスカビル。

裁判所にて罪人を待つ彼の元に、ずっと待っていた上官の声がようやく届いた。

「おお!!? スパندانム長官つ!!? こちら〃左〃の『左バスカビル』

「アタクシ〃右〃の『右バスカビル』!!?」

「そして!!?〃中央〃における、このわしこそが!!! 『中央本線一人旅』

「誰だよつ!!!」

『そつちの状況を知らせろ!!! 裁判所前の広場まで海賊達が来ているらしいが!!?』

一人、ふざけた事を口にする中央の髭面の老人に、左右の頭が頭突きを食らわせる。

持ちネタなのか癖なのか、度々起こるこのやり取りを丸々無視し、スパندانムは彼からは見えない事態について説明を求める。

「状況!!?」

「ウーム状況!!!」

「状況はン! 広場というより、まさに内部がン」

知らせろ、と言われて、バスカビルは少し悩む様子を見せる。

焦っている様子のスパندانムの為に、事態を簡潔に語る言葉を探し、彼らはある一つの単語だけを口にしてみせる。

「『最悪』かと」

『何だとオ——!!?』

スパンダム の叫び声にうるさそうに顔を歪め、棒立ちのままにいる裁判長バスカビル。

彼らの目の前では、屋内でありながら突如発生した竜巻が、何十人も海兵達を空中へ吹き飛ばす姿があった。

ぼたぼたと落下する海兵達の中で、虫の息の一人がバスカビルに手を伸ばし、か細い声で声を上げる。

「裁判長!! 報告します!! ついに裁判所の巨大石扉をも斬り崩され、海賊達が侵入して参りました!!」

「『もう見えとるわいアホたれ!!』」

今さら無駄な報告を上げる部下に怒鳴りつけ、目を吊り上げるバスカビル。

どうでもいいコントを見せる彼らを見つめ、あらゆる障害物を根こそぎ叩き切つてきたゾロが、前だけを見据えて歩み出てくる。

「意外と人数はいねエ様だ、一気に進めそうだが…」

「何だい、ありやア…」

「うおっ!!? 3つ首人間っ!!? 3つ首の番犬つてのは物語に聞いた事あるが、あい

「つは一体…!!?」

ぞろぞろと、開かれた入り口を通って裁判所の中へ入ったゾロ達は、最奥に立つ三つの頭を持つ男に驚愕の目を向ける。

どよどよと戸惑いの声上がる中、バスカビルの中央の頭が突如、声を張り上げた。

「者共静粛に!!?」
「ここは神聖なる裁きの殿堂!!?」
「覆す事叶わぬ貴様らの運命を、これより裁決してくれる!!!」

第207話 “死にたい”

目前に仁王立ちし、異形の姿を見せつける裁判長バスカビル。

神聖な裁きの場を土足で踏み荒らす、礼儀を弁えていない愚か者達全員に向け、怒りの声を上げる。

しかし、彼に対して注目する者は、侵入した数十人のうち数名しかいなかった。

「よし!!? おめエらとにかく麦わらさんのいる屋上を目指せ!!!」扉からの追手はヨコ

ヅナと数名で阻止する、おれ達アおめエらの後ろを守るからとにかく突き進め!!!」

「わかった」

「ねエアレ見て!!? 裁判が始まったみたい!!?」

「ムシしろ、面倒くせエ!!? 道はどこだ!!?」

「正面見て両側に階段がある!!? あれで上階へ」

延々としやべり続けるバスカビルを完全に無視し、跳ね橋を下げる装置を動かす為に行き先を見据えるゾロ達。

海兵や黒服達は、そんな彼らの無礼な態度に慄きながら、侵入者を排除しようと銃器を構える。

「『艶美魔夜不眠鬼斬り』!!!」

が、彼らよりも早く、ゾロがゆらりと鬼女と歪んだ刀身の幻覚を見せる構えを取り、凄まじい突進と共に切り伏せていく。

木端の如く人が宙を舞う姿に、被害に遭っていない海兵やバスカビルは唾然とするのだった。

「さア行くぞ、道があいた」

「うん」

「……………だから何であいつで船長じゃないんだ」

満足感に浸る事など一切なく、淡々と先を指すゾロに、人を率いる才覚を見たザンバイが思わず呟く。

片や身勝手な船長。片や慎重に行き先を見定める男。役割が逆なのではないかと、本気で悩んでしまうくらいだった。

と、そうして全員が先へ向かおうとした時、突如サンジが彼らを追い抜いて行った。

「あ、スーツの兄ちゃん」

「待って待ってエ!!! そこを退かんかトナカイにバカ剣士に糸目!!!? この危険な敵陣

!!!? ナミさんの進む道はこのおれが切り開くのだ!!! どけい!!!」

「うわ!!!? 危ねエ、てめエヤんのかコラ!!!」

「何でケンカ始めてんだ?!」

一人だけ目立っている事が許せなかったのか、容赦なく蹴りかかってくるサンジに、ゾロとチョッパーが咄嗟に応戦する。

ザンバイ達から困惑の目を向けられながら、サンジはナミの前を走り出す。

「ナミさんこつちだ!!! おれにのみついてきな!!!」

「あなたアホですか?!? エレノアさん達を助けに来たの二、味方内で争ってる場合です力!!!」

「おお…:そうだエレノアちゃんとおロビンちゃんが………!!? おれの助けを待ってるんだ!!! 今頃淋しくて泣いてやしねエかな」

「どんだけ都合のいい頭してるんです力!!!」

女性陣の護衛を務めようと必死になるサンジに、ナミの気持ちを代弁したメイが目を吊り上げて怒鳴る。

それでもサンジは女の事しか頭にないようで、メイはもう怒るより混乱が先に出てしまっていた。

「ん? あ——つ!!? 目を離れたスキにゾロが!!! 待てゾロそつちじゃねエよオ!!!」

その時、不意に違和感を覚えたチョッパーが脇見をする。

するとその先で、チョッパー達とは全く異なる方へ向かい、どこに繋がっているとも

知れない通路に向かうゾロの姿を見つけ、ぎよつと目を見開いた。

「階段って言ったのにどう間違ったらそっち行くのよ!!? フアンタジスタか!!?」

「うるせエ!!? お前の説明が悪いんだろ!!?」

「私が悪いわけではないでしょ!!?」

「君、どういう思考回路してるノ?」

「ロビンちゃんエレノアちゃん、今行くぜー!!!」

「お主はまずその煩惱を何とかせよ!!!」

「アんだとジジイてめエ!!!」

「チョッパ、お前今度薬を作ってやれ」

「わかった、ダメに効く薬だな!!?」

「ダメって、オイ」

慌てて後をついてくるゾロが逆ギレし、ナミやメイと怒鳴り合う声が響く。

煩惱を隠そうともしないサンジや、リン達の呆れた声が混じり、あつと言う間に収拾がつかなくなる。

侃々諤々と騒がしくなった一味に、ザンバイ達は不安気に肩を落とし始めた。

「アニキ達は助かるんだろうか」

「やる時ややるタイプなのさ、あいつら。きつと」

口ではそういうザンバイだが、騒がしいままの一味を見ているうちにだんだん自信がなくなってくる。

どう止めたらいいのか、と彼らが悩んでいた時、突如彼らの頭上に大きな影が差した。

「「この裁判長をシカトすなア~~~~~!!」」

ガシャン!と、巨大な剣を振り下ろしてくるバスカビル。

足場を砕き、刃を突き付け、三つの頭で睨みつけてくるバスカビルに、舌打ちをこぼしたゾロが立ちほだかる。

「お前ら、先行け!!? おれアコイツを片付けてから後を追う」

「手伝いハ?」

「いらん!!!」

「生意気な海賊共めが、このワシの恐ろしきを見せて…」

殿を務めようとするゾロを前に、忌々しげに顔を歪めるバスカビル。

しかし、彼は突然自らの両足を掴まれ、ずるずると真下に引きずり降ろされていく。

抵抗もむなしく、階段の下に落下したバスカビルを、ザンバイ達が不敵な笑みを湛えて取り囲んだ。

「相手はおれ達だ、ケルベロス!!?」

「……頼むヨ!!!」

殿を代わりに引き受け、敵陣に留まる事を選んだザンバイ達に背を向け、リンが一言残して走り出す。

直後、一味の背後で再び、凄まじい戦闘音が響き渡り始めた。

「んががが、あいつらやる事なす事面白いねエ」

「巨人っ♪ 巨人っ♪ 巨人が味方!!？」

「ニヤーニヤー」

「常識ある奴なら何があっても、決してこの島には手出ししねエ……」

遙か先でも見える、二つの人影。

街を破壊し、邪魔な海兵を薙ぎ払い、怒号を上げ、小さな人影を背中に乗せて裁判所を指し、突き進む巨人達。

それを眺めていたココロが思わず呟き、チムニーとゴンベが海列車の上で小躍りする。

「見てなよチムニー……結果あいつらが死のうが生きようが、過去数百年誰一人できなかった事に……この事件に世界中が驚く事になる」

ぐびぐびと酒瓶を傾け、彼女は戦火が立ち上る戦場を見つめて笑みを深める。

この大騒ぎの中心人物である青年を思い浮かべ、ココロはある確信を抱いていた。

「この戦いが終わったら……あの麦わら小僧の名は……全世界に轟くよ」

「ロ~~~~び~~~~ン!!! エ~~~~レ~~~~ノ~~~~ア~~~~!!! 迎えに来たぞオ~~~~
 っ!!!」

その声が響き渡った瞬間、スパンダムは悲鳴をあげて後退り、勢い余って後頭部から転倒する。

鼻水を垂らし、顔全体を引きつらせながら、窓の外から響く大きな声に驚愕をあらわにする。

「長官殿!!? 裁判所の屋上にて……!!? 〃麦わら〃をかぶった男が叫んでおります!!
 ? ……間違いなくあれが一味の頭、〃麦わら〃のルフィかと!!!」

「バカいえ!!! さつき、おれが見た時ア……屋上にはブルーノがいたんだぞ、見張ってたん
 じゃねエのか!!? あのバカ、肝心な時に何してやがる!!! どうなってるん!!!」

固まったままのスパンダムに、報告に駆け込んできた男が声を張り上げる。

スパンダムは慌てて立ち上がり、窓に顔を張り付けるようにして覗き込み、麦わら帽子を被った青年の姿を目の当たりにした。

「あいつか……!!? 〃麦わら〃のルフィ」

まさか本当にここまで辿り着いたのか、と冷や汗を垂らす。

そして、ルフイの後ろに横たわる、見覚えのある髪型の黒服の男の姿を確認し、さらに彼の目が大きく見開かれた。

「ブルーノ!!! まさか…そんなバカな事が……!!! 『CP9』だぞ…!!? 『六式使い』で… 『能力者』…!!? 道力800を越える超人ブルーノが…!!! あんな小僧に敗けたつてのか!!?」

「ううおおおおオ~~~~~!!!」

「ぎゃあああああ~~~~!!!」

自分の見ているものを、夢か幻と思いたい一心で頭を抱えるスパンダム。

しかしその時、拳を天に突き上げて気合いの雄叫びを上げるルフイの声を聞き、またしてもその場でひっくり返った。

「ちよ…長官!!? いかげ致しますか!!!」

「……!!? ルッチ達を呼べ!!! 全員、ここへ集めろ!!! 『CP9』に!!! “麦わら”のルフイ及び、その一味の“完全抹殺指令”を言い渡す!!!」

戸惑う海兵にそう命令し、歩き出すスパンダム。

そんな、無駄にうるさい彼と海兵達のやり取りの一部始終を聞き、フランキーとグリードは互いに目を見合わせる。

そして、二人で一緒に間にいるロビンに視線を移した。

「顔を上げる、ニコ・ロビン……あいつら遂に、こんなとこまで来やがった。おめエコリヤとんでもねエ事だぞ……」

フランキーもグリードも、正直言つて驚きを禁じ得なかつた。

高潮を越え、数万の敵を薙ぎ倒し、何の迷いもなく仲間の為に窮地に踏み込んできた。そこまですることができる者が、果たしてこの世界にどれだけいるというのか。

「お前が仲間の為に、政府から出された条件をのんで連行された事はわかつた」

「——だが、その協定つて奴もさつきあのバカ長官に破られちまつただろ。お前さんが大人しく捕まつてるからつってこの先、誰が助けるわけでもねエだろ」

「そう………もう、あいつらの助けに依じてここを脱出するしか道はねエハズだぜ……なのに——ずいぶん冴えねエ顔してるじゃない……」

そう語りかけるが、ロビンは俯いたまま何も答えない。

青ざめた顔で、今ではない未来を見ているような、冷や汗を大量にかいた怯えた表情で、フランキーの言葉を無視していた。

焦れたフランキーが、もう一度ロビンに促そうと口を開いた時だった。

「——あなたはまだ、何から逃げ回つてるの……ロビン」

弱々しい、今にも途切れそうな声で尋ねられ、ロビンがハツと息を呑む。

すぐさま視線を下ろし、血塗れで横たわるエレノアに視界に入れ、じつと見つめられ

ていた事に気付いた。

「！ エレノア……!!? 起きてたのか」

「んん………さつき起きた。身体中メタくそこに痛い」

「そりや全身切り刻まれちゃ気も失うわ」

身動きをするたびに激痛に苛まれているらしく、眉間にしわを寄せて唸る。

しかし、それでも無理矢理体を動かし、ロビンの顔を見やすいように体勢を変え、じつと真剣な眼差しを彼女に向け、エレノアは問いかける。

「もう、あいつらも後に引けないし、引く気もさらさらないよ………あんたが目を逸らしてたら、あいつらはあんたを救えない」

ぐっ、吐息を詰まらせる様子を見せるロビンだが、やはり頷こうとはしない。

しばらくの間、目を逸らしたロビンを見つめていたエレノアは、深いため息を吐くと、今度はフランキーに視線を移した。

「フランキー……悪いんだけど、もう一回手エ貸してくれる………?」

「わかった」

遠慮がちなエレノアの懇願に、フランキーは迷う事なく応じる。恩人の遠慮や躊躇いなど、彼には全く不要の物でしかなかった。

「ニコ・ロビンを『麦わら』から遠ざける!!! すぐに正義の門へ向かうぞ!!! 連中を連

れて来い!!!」

そしてその場へ、どこどかと靴を鳴らし、肩を怒らせたスパンダムが焦りの表情で向かう。

一刻も早く、頭のいかれた海賊達から離れなければ。

そんな考えだけで、ロビンとフランキーを正義の門の向こうへ連れていこうと近づいたのだが。

「ちよ……!!? 長官殿!!? しかしフランキーの……!!? ケツが膨張していきます!!!」

「うオいなんだそりゃあ!!! 便秘か!!!」

突如、部下の一人が示した光景に——フランキーの下半身が、風船のように膨らんでいる様に、スパンダムは目を見開きその場に固まる。

どよめく彼らに横目を向け、グリードがため息交じりに口を開いた。

「おお……スパンダ……兄弟はなア、ためエの命の淵を悟り、自爆つて道を選んだんだ……せめて憎たらしいためエらを道連れにな……!!!」

「何イ!!!」

「直径3kmの大爆発をもって……おれの人生の幕を引くんだ。止めてくれるな」

「漢フランキーの最後の華!!! せめて見届けてくれよ長官殿!!!」

凄まじい気迫を伴い、虚空を見据えて何やら力を込める様子を見せるフランキーと、覚悟を決めた顔で天井を仰ぐグリード。

どう見ても、本気で自ら命を断とうとしている二人に、スパンダムや海兵達は愕然とした表情で後退る。

「バカ……!!? おいバカ待てやめろ!!!」

「3……」

「助けてくれおれを巻き込むな——!!!」

「2……」

「畜生死んでたまるかア……!!!」

「1……」

「やめろオ……!!!」

始まるカウントダウンに、スパンダムたちは大慌てで走り出し、そして同じように転んで階段を転がり落ちていく。

彼らの視線がなくなったその瞬間、フランキーはロビンを両脚で挟み、グリードもエレノアの襟を咥えてロビンにしがみついた。

「ひゅんいはんひょう……!!!」

「行くぞ、ニコ・ロビン。風来……噴射!!!」

もごもごと合図を送ったグリードに領き、フランクキーは自身の腹にためたエネルギー……というかガスを思い切り解放する。

反動でフランクキー達はとてつもない勢いで飛び出し、壁を幾つも突き破っていく。そして最後には窓際のフェンスに激突し、ようやく発射の勢いが緩やかになった。

「だー待って待って兄弟!!! 飛ばしすぎだ!!!」

「あ……!!? 危ねエ!!! 落ちる!!!」

歪んだフェンスの上で慌てふためき、自身らを戒めていた鎖が外れている事を確認した二人は、ロビンとエレノアを抱えて思い切り跳躍する。

「んんんん……スーパ……!!!」

声を合わせた二人は、フェンスを踏み台に足場に飛び移り、ホツと安堵の息を吐く。

真下で暗闇の中に落ちていくフェンスの残骸にぞつと背筋を震わせながら、遙か先にある向こう岸を悔しげに見やった。

「ハア……!!? コーラあと一本ありやあ、もう一発『風来砲』で向こう岸まで行けたんだが、まあいい……『麦わら』がいるぞ」

「ホラよ。ちゃんと応えてやれや」

「お———っ!!! ロビ———ン!!! エレノア———!!! よかった!!? まだそこにいたのかア!!!」

姿を見せたロビンに気付いたルフィが、満面の笑みを浮かべて手を振る。

そこへ、エレノアたちを奪還しようとして海兵達が向かってくるが、フランキーとグリードが盾となり、それを遮る。

「ザコが、どいてろ、ウエポンス左!!!」

「邪魔すんなや!!!」

吹っ飛んでいく海兵達を背後に、立ち上がったロビンは遠くにいるルフィを見つめる。

笑うルフィとは対照的に、ロビンの表情は硬く、顔色も悪のまま。

それを訝しみながら、転がったままのエレノアはじつとロビンの返答を待ち続けた。

「よし!!?」　そこで待ってる!!!　遠いけど飛んでみる!!!　「ゴムゴムの“オ”」
「待って!!!」

距離を取り、跳ぼうとしたルフィにロビンが叫び、止める。

訝しげに目を見開いた彼に、ロビンは悲痛な声で続けて吠えた。

「何度も言ったわ、私は…!!?」　あなた達の下へは戻らない!!!　帰って!!!!　私はもう、あなた達の顔も見たくないのに!!!」

「……………!!?」

「お前、何言ってる…」

「どうして助けに來たりするの!!? 私がいつそうしてと頼んだの!!?」
ルフィ達の想いの全てを踏み躪るような言葉に、ルフィも思わずその場に立ち尽くす。

絶句するフランキー達を放置し、ロビンは自身の望みを吐き出した。

「私はもう…死にたいのよ!!!」

第208話 『生きたい!』

遠く離れた塔から、強く吐き捨てられた拒絶の言葉。

悲痛に歪んだ表情から放たれたそれに、ルフィは言葉を失い、眼を見開いて沈黙していた。

「ニコ・ロビン…!!!」

「うわ…うわはははははははは!! 面白エ!!! 何だ?! コイツら一体!!? わははは」

フランキーとグリードが、助けに飛ぼうとしたルフィを制止させ、口にした言葉に思わず目を吊り上げる。

そんな彼らの仲間割れのような姿を、スパンダムは心底楽しそうに嗤って眺めていた。

「てめエ、何のつもりだ!!! 命懸けでここまでお前を助けに来た奴らに対して…!!!」

「…彼らが勝手にやった事よ」

「何だとオ!!?」

「てめエ…ふざけんじゃ…」

激昂し、怒鳴りつけようとしたフランキー達が、次の瞬間吹き飛び、脇に退かされる。

奥から姿を見せた六人の黒装束達に、スパンダムはこれ以上ないほどに満足げに口角を上げ、彼らを出迎えた。

「わはは!!? よおしよく集まった『C P 9』——だがもう少し待て：いま「麦わら」の一味が：内部崩壊を始めた所だ、見守ろうじやねエか!!! わははは最高に面白エ!!!」

テラスに並び、ルフィと相対するルッチ達C P 9の精鋭達。

しかし、ルフィは異様な威圧感を放つ彼らに嵌めもくれず、受け入れがたい言葉を吐いたロビンだけを見据えて声を張り上げる。

「死にてエ!!!?」

「そうよ!!!」

自分の聞き間違いではないのか、と聞き返すルフィに、ロビンは迷うことなく肯定の声を返す。

そんな剣呑な雰囲気を見無視し、C P 9の一人であるジャブラがルフィ達を指差し、スパンダムに振り向き尋ねる。

「なア長官!!? さっさと行ってアレ消してくりやあ終わる話なんじやねエのかい!!?」

「まあ待て：遠路遙々救出の為追ってきて、最後の最後で仲間を助けを断られる船長。お前、こんな面白エ光景見た事あるか!!?」

伸ばした手を、無慈悲に払い除けられた憐れな海賊を着に、スパンダムは愉しくて仕方がないというように肩を揺らす。少し前の動揺などまるでないものようだ。

「ロビ——ン!!! 死ぬなんて」

「ワハハハハ……!!? 聞けっ……この悲痛な叫び!!? 一体どんな顔して……!!!」

改めて、拒絶された男がどんな顔をしているだろうか、と醜悪に顔を歪めたまま、視線を裁判所の屋上に向ける。

そして、愉悦に浸る彼の視界に入ってきたのは……。

「何言ってるんだア!!! お前!!!」

鼻をほじり、意味が分からないと言った風に眉を顰めるルフィの姿であった。

全く悲しむ様子も、怒る様子もない彼の態度に、スパンダムは啞然としその場で間拔けな顔を晒すのだった。

「あのなア!!? ロビンっ!!! おれ達もう、ここまで来ちまったから!!! とにかく助けるからよ!!! そんなア、それでも……まだ、お前死にたかったら、そしたらその時しね!!?」

ロビンの葛藤も悩みも、何もかもをどうでもよさそうに鼻をほじり続けるルフィ。

彼の後ろでは、突然発生した竜巻が天井を破壊し、吹き飛ばされてきたナミとチョッパーとメイ、できた穴をよじ登ってきたゾロが姿を見せる。

続いてサンジが天井を蹴り破って飛び出し、向こう側からはそばキングが何故か凄まじい速度で宙を飛んでくる。

そして、ガツと裁判所の屋上の端に手が掛かり、草臥れた様子のリンとフリー、ランファンが姿を現した。

「ふい〜……やつと着いたヨ」

「頼むからよ!!?」 ロビン……!!! 死ぬとか何とか……何言っても構わねエからよ!!! そう
いう事はお前……おれ達のそばで言え!!!」

各々で道を切り開き、屋上へと到達した麦わらの一味。

彼らは互いに文句をぶつけながら屋上を歩き、ルフィの隣に続々と並んでいく。

「あとはおれ達に任せろ!!!」

終結した6人をリン達が眺める中、ルフィはロビンを真っ直ぐに見据え、堂々と仁王立ちしてみせる。

息を呑むロビンを前に、ルフィ達は決してそこから退くつもりはないとでもいうような、確固たる覚悟を見せつけた。

「高潮を越えて遙々、考えたらすごいわね」

「運は良さそうだな」

「今度は殺しの許可もある」

「手加減ナシじゃと楽じゃのう」

「あんなに……!! 海賊が来たア……っ!!」

雄々しく構える6人を見やり、カリフア達が感嘆の声をこぼす横で、スパンダムは悲鳴を上げ慌てふためく。

出来上がる、海賊と暗殺部隊の対決構図。

しかし、状況は最早引けぬところまで来ているというのに、ロビンの表情は全く変わる様子を見せなかった。

「おい!!? てめエいい加減にしろ!!」

「ロビン……」

フランキーが怒号を上げ、エレノアが痛まし気に名を呼ぶ。

何の返事も返さない彼女を見下す事で、少し精神が落ち着いたようで、スパンダムはまた笑みを復活させてルッチ達を見やる。

『CP9』、いいか、お前ら。抹殺許可は出すがこの司法の塔で迎え討て!! そもそもあいつらがここへ来れる保証もねエんだ!!?」

威勢を取り戻したスパンダムは、前に出ると優越感をたつぷりと抱きながら、ルフィ達を見下ろす。

虎の威を借る狐という言葉そのままに、ルッチ達を横に率いる姿を見せていた。

「ワーッハッハッハッハッハッハッ!! このタコ海賊団!!? お前らが粋がった所で結局、何も変わらねエと思いい知れ!!! この殺し屋集団『CP9』の強さ然り!!? 人の力じゃ開かねエ。『正義の門』の重み然り!!! 何より今のおれにはこの『ゴールデン電伝虫』を使い、『バスターコール』をかける権限がある!!!」

掌の上に置いた金色の電伝虫を見せつけ、下卑た目向けるスパンダム。

ロビンが顔色を変えるのを横目に、ますます気分を良くさせた彼は、吐き気を催すような悪意を伴って言葉を吐き続けた。

「そうさちようど…20年前、貴様の故郷を消し去った力だニコ・ロビン!!! 『オハラ』という文字は…翌年の地図から消えてたっけなア…」

「やめて!!! それだけはっ!!!」

「ウゥウいい反応だぜ、ゾクゾクする。何だア!!? そりやこの『バスターコール』発動スイッチを押せて意味か? えっ!!? おい…!!?」

そろそろと指をボタンに近づけ、ロビン反応を愉しむ。

うっかり押しかねない、危険極まりない悪戯を図るスパンダムに戦々恐々としたまま、ロビンは彼を鋭く睨みつける。

「それを押せば、何が起こるかわかってるの!!?」

「わかるとも……!!! 海賊達がこの島から出られる確率が『0』になるんだ!!? この

ゴールデン電伝虫のボタン一つでな……!! 何か思い出す事でもあるか? ワハハハハハハ!!!

「そんな簡単な事じゃ済まないわ!!! やめなさいっ!!!」

必死に狼藉を止めようと叫ぶロビン。

彼女の鋭い叱責の声に、スパンダムは上がっていた気分を害されたのか、苛立たし気にロビンを見下ろし顔を歪めた。

「……………んん? 生意気な口を利くじゃねエかア……………!!!」

「地図から『オハラ』が消えたって言ったわね……!!? 地図の上から人間が確認できる? あなた達が世界をそんな目で見てるから、あんな非道な事ができるのよ……………!!!」

鬱陶しそうに見下ろすスパンダムだが、ロビンは怯む事なく、スパンダムを睨み続ける。

彼女が全てを失ったあの日に比べ、この男の脅しなど、取るに足らないそよ風のようなものだったからだ。

そう、20年前——彼女が生まれ育った島が、跡形もなく焼き尽くされた日よりも。政府にとって禁忌である、『歴史の本文』を研究する、クローバー博士を始めとする

研究者達がいた島、オハラ。

その一員であった母と幼少期に別れ、親や他者の愛を知らずに生きていたロビンは、彼らの仲間になろうと勉学に励んでいた。

その過程で、彼女はクローバー達と同じく、“歴史の本文”を読めるようになってしまった。

そんな彼らの存在を、捕えたロビンの母・オルビアによって知った政府が部隊を派遣。調査の末、島諸共の排除が決まってしまった。

“バスターコール”により燃え盛る島を、ロビンはクローバ達やオルビアに促され、オルビアを逃がした元海兵・サウロや、待機していた後の大将青キジことクザンの助けにより生き延びた。

そして彼女は、ルフィ達に出会うまで、冷たく苦しい孤独の中を、生き続けてきたのだ。

そんな悪夢の記憶が、どれだけ時間がたっても薄れてくれない。

蘇る恐怖と悲しみに歯を食い縛り、身を震わせながら、安易な考えで惨劇を引き起こしかけている男に吠える。

『バスターコール』をかければ、このエニエス・ロビーと一緒にあなた達も消し飛ぶわ

よ……!!!

「何をバカな!!? 味方の攻撃で消されてたまるか??? 何言ってるだてめエはア!!!」

「20年前……私から全てを奪い、大勢の人間の人生を狂わせた………たった一度の攻撃が『バスターコール』……!!! その攻撃が………やつと出会えた気を許せる仲間達に向けられた」

ロビンは諦めたようにスパンダムを睨むのをやめ、ルフィ達に向き直る。

その表情は、窮地に自らやつて来た者達への苛立ちではなく、危機に近づく仲間達を案じる悲痛な眼差しとなっていた。

「私があなた達と一緒にいたいと望めば望む程、私の運命があなた達に牙を剥く!!! 私には海をどこまで進んでも、振りはらえない巨大な敵がいる!!! 私の敵は……『世界』とその『闇』だから!!!」

ルフィ達はただ、それを黙って聞くばかりであった。

ロビンの背負う痛みと苦しみ、今も尚彼女を苦しめ続ける悪夢を知ってしまい、安易な言葉を口にする事が憚られる。

想像していた以上に重く暗い闇に、誰も何も話す事ができずにいた。

「青キジの時も??? 今回の事も……??? もう二度もあなた達を巻き込んだ……!!! これ

が永遠に続けば、どんなに気のいいあなた達だつて……!!? つか重荷に思う!! つか私を裏切つて捨てるに決まつてる!! それが一番恐いの!!」

隠していた自身の「願い」を懸命に吐き出し、拒絶の意を示すロビン。

再び失う事を、否定される事を恐れた女は、苦しむのはもう自分一人でいいと、伸ばされた手を掴むことを拒み続けた。

「……だから助けに来てほしくもなかった!! つか落とす命なら、私は今、ここで死にたい!!」

「ワハハハハハハ!!? 成程なア……まさに正論だ!!? そりやそうだ!!? お前をかかえて邪魔だと思わねエバカはいねーよ!!? ワハハハハ!!?」

ロビンの慟哭を、スペインダムはさも愉しそうに笑い、手を叩いて騒ぐ。

仲間を想う真剣な想いを嗤いものにし、ロビンもルフイ達もみんな馬鹿にする姿を見せる彼に、あらゆる方向から嫌悪の目が向けられていた。

「あの象徴を見る海賊共オ——!!! あのマークは四つの海と「偉大なる航路」にある170国以上の加盟国の「結束」を示すもの……!!! これが世界だ!!! 楯突くにはお前らがどれ程ちっぽけな存在かわかったか!!! この女がどれ程巨大な組織に追われて来たかわかったかア!!!」

塔の頂点に立った旗、青い十字に四つの円が描かれたマークのそれを指差し、自慢げ

に喚くスパンダム。

何を敵に回そうとしているのかを示す象徴を見上げ、これでもう齒向かう勇氣など湧きはしないだろうと、ルフイ達を見下しゲラゲラと騒ぐ。

すると、やがてルフイが鼻息を吐き、翻る旗の中の象徴を睨みつけた。

「ロビンの敵はよくわかった！ そげキング」

「ん」

風の音だけが響くようになった裁判所の屋上と、司法の塔の最上階のテラス。

同じく象徴を見上げていたそげキングに、ルフイはある指示を下した。

「あの旗、撃ち抜け」

「了解!!?」

何の躊躇いもなく吐かれた指示に、そげキングも何の躊躇いもなく頷く。

スパンダムが困惑の声を漏らすのを他所に、そげキングはギリギリと、背中に備えていた巨大なゴムパチンコを構え、傍に向けて狙いを定め。

「必殺…ファイアバードスター火の鳥星!!!」

ぼんっ!と、ただのパチンコでは出せない衝撃と轟音を響かせ、一発の弾が発射される。

弾は途中で炎に包まれ、やがてそれは鳥の姿を形取り、宙を真っ直ぐに貫く。

そして、炎の鳥は見事に旗を貫き、真っ赤に炎上させたのだった。

「あいつら……やりやがった……!!?」

「旗への攻撃の意味がわかってんのか……!!?」

「……やりやがったア……!!」

目の前で起こった凶事に、海兵や黒服達は皆纏めて目を剥き、悲鳴のような咆哮を上げる。

めらめらと炎に包まれる旗。それと相對する海賊達。

世界中の誰もやらなかった、やろうともしなかった大事をしてのけたルフィ達に、数多の愕然とした視線が集中する。

「……海賊達が……!! 『世界政府』に!! 宣戦布告しやがったア……!!」

「正気か貴様らア!!! 全世界を敵に回して、生きていられると思うなよオ!!!」

CP9の面々でさえ、驚いた様子で目を丸くする中、スパンダムがまるで化け物を見るような目をルフィ達に向ける。

そんな彼らに、ルフィはすさまじい形相で睨み返し、全身全霊で雄叫びを上げ応えてみせた。

「望むところだア——っ!!!」

誰一人、ルフィ達の凶行を咎める仲間はいなかった。

むしろ、そうして当然だともいうように、ただ真つすぐに行くべき先を向き、その場に佇んでいた。

「ロビン!!! まだお前の口から聞いてねエ」

その声には、はつとロビンが息を呑む。

自身の願いを踏みにじる、信じられない行動に出た彼を凝視し、どんな顔をすればいいのか全く分からなくなる。

しかしなぜか、怒りも悲しみも、負の感情は微塵も湧いてこなかった。

「『生きたい』と言えエ!!!」

もう、こんな事をすれば逃げてても意味はない。完全に敵と認定された彼らを、悪夢の惨劇から救う事はできない。

だが、ロビンの胸中に広がったのは——火傷しそうなほどに温かい、喜びの感情であつた。

「生きたいっ!!!」

それを自覚した途端、ロビンは溢れ出る涙を堪える事ができなかった。

無理矢理抑え込んでいた感情の堰が決壊し、生への渴望と、仲間達の元へ帰りたいと

いう想いが止まらなくなる。

彼女の心は今、愛する者達との自由を求め、ひたすらに奮えていた。

「……!!! 私と一緒に、海へ連れてって!!!」

「うお——んおめエら好きだチキシヨ~~~~!!!」

「ガツハハハハハハ!!! ガーツハハハハハハ!!! ……グスツ」

本音を吐露したロビンに感化され、フランキーが号泣しグリードが鼻を啜る。

あまりにも熱すぎる人情劇に、涙脆い彼ががまんできるはずがなく、長く彼と共にいるグリードも反応しないわけがなかった。

「跳ね橋が下りるぞ!!!」

「あいつらうまくいったみてエだな」

「ム……武者ぶるいが……」

「早く下ろせ」

「悪そうな顔……!!!」

「やるぞお前ラア!!!」

「ハッ!!!」

「オリヤー!!!」

「行くぞ!!!」

そんな彼らを放置し、大切な仲間の想いを聞き届けたルフイ達は不敵な笑みを浮かべ、各々で得物を構え、出撃の刻を待つ。

血まみれの天使もまた、彼らと同じくにやりと不敵な笑みを浮かべてみせるのだつた。

第209話 “世界を敵に回してでも”

「ロビン!!! エレノアア!!! 必ず助ける!!!」

ゴゴゴ……と地響きが鳴り響く裁判所の上で、勇ましく構えるルフィ達がロビン達に向けて叫ぶ。

下ではザンバイ達や、応援に駆け付けたパウリー達の活躍により、前方の塔に通じる跳ね橋がゆっくりと下がっていた。

しかし、突如跳ね橋の関節部分に砲撃が撃ち込まれ、稼働がピタリと停止してしまっ
た。

「跳ね橋が止まった!!!」

「くソツ!!? 中で誰か邪魔しやがったみたいダ!!!」

「何だチキショー!!? 誰だア——っ!!!」

思わぬ事態に、悔しげに声を上げるルフィ達。

それを見たスパンダムは、冷や汗まみれな顔を安堵で歪め、また下卑た声で嗤い始める。

「よ……!!? よし!!! よくやった!!! あいつらが渡って来る前に “正義の門” へ……

!!!

ルフィ達がまだ突入して来れない事を好機と、スパンダムはロビンの腕を掴み、部屋の奥の階段へと連れていこうとする。

跳ね橋を直すにしても、その時には既に彼らの手の届かない場所にいる筈であった。

「来い!!! ニコ・ロビン!!! 誰か、カティ・フラムと『妖術師』を連行しろ!!?」

「ロビン……!!!」

「フン……!!? 取るに足らん、あんな海賊……!!? こつちにや暗殺集団CP9がいるんだ!!!」

エレノアが横たわったまま声を上げ、血を吐きながら地べたでもがく。

咄嗟に抵抗するロビンだったが、力を奪われた状態では、ただ引き摺られるままになる他にない。

「兵器復活をもくろんだ学者の島の生き残り『ニコ・ロビン』と、その設計図を受け継いだ男『カティ・フラム』、世界最強の海賊の唯一の弱点『アイザック・エレノア』。この大権力を握るチャンスをも、みすみす逃してたまるか!!!」

自身の出世、名声、何不自由ない生活。

自分一人が讃えられる未来を夢想し、近付きたくもない海賊達を視界から外そうとした、その時。

スパンダム目の前に、何かの紙束を持って立つフランキーとグリードが立ち塞がった。

「!?? ぬおつ!!! カティ・フラム!!! グリード!!!」

思わずびくつ!と後退り、フランキー達から距離を取るスパンダム。

一体何のつもりで、自分の前を塞いでいるのか、と怒りを露わにしようとした時。

彼が持っているものを目にし、ハッと急激に表情が変わった。

「それは……お前、まさか……!!! 古代兵器ブルトンの設計図!!!」

「……本物だ、信じるか? ルッチ……カク……お前らわかるよな」

ばらばらと紙束を捲り、ルッチ達に確認してみせるフランキー。

描かれた無数の画、縮尺、構図を流し見ていき、彼らの表情が見るうちに変わっていく。

カクも冷や汗を垂らしながら、やがて驚愕の声を漏らした。

「まさかとは思うたが……貴様、それを自分の体の中に隠し持っておったのか」

「ほ……本物か!?? 本物なのか!?? よこせ!!! そいつをよこせ!!! おれの念願の設計図!!!」

カク達の反応で、間違いなく自分が長年探し求めていた設計図だと確信したスパンダムが、途端にやかましく喚き始める。

まるで餌を前にした犬のような意地汚さで、フランキーに両手を差し出し目を異様に輝かせる。

「ニコ・ロビン。お前が世間の噂通り、兵器を悪用しようとする『悪魔』じゃねえとわかった。…何も、ウオーターセブンの船大工が代々受け継いできたものは、兵器の造り方“なんかじゃねえんだ!!”」

だが、フランキーはスパンダムを完全に無視し、彼の傍で囚われたままのロビンに語り掛ける。

静かな、彼女の身を案じる響きの声に、ロビンはぐくりと息を呑む。

「なあ、スパンダ……トムさんやアイスバーグが命懸けで守ってきたものは、もし……!!? 古代兵器がお前みてエなバカの手に渡り、暴れ出した時……もう一つ兵器を生み出し、その独走を阻止してくれという“設計者の願い”だ!!”」

バサバサと風ではためく設計図の束を掲げたまま、目の前の憎い男に話し続けるフランキーとグリード。

よこせ、おれのものだ、とずっと騒ぐばかりの男に何の反応も返さず、鋭く目を吊り上げる。

「ニコ・ロビンを利用できれば、確かに兵器を呼び起こせる……危険な女だ。だがこいつには、その身を守ってくれる仲間がいる!!! だからおれ達ア“賭け”をする」

「兄弟……いいのか？」

「ああ………おれが今、この状況で『設計者』の想いをくんでやれる方法があるとするりゃあ、一つだ」

グリードの問いに頷き、分厚い設計図をくしゃくしゃになるほど握りしめるフランキー。

彼のその覚悟を秘めた目に、グリードはにやりと満足げに、そして楽し気に笑みを浮かべてみせる。

「ぐだぐだ言ってねエで早く渡せ!!! それはおれのもんだ!!？」

一向に設計図を渡す様子がない彼らに焦れ、額に血管を浮かべたスパンダムが怒号を放つ。

すると、フランキーがゆっくりと設計図を掲げたかと思うと。

ゴウツ!と、勢いよく噴き出された炎が、設計図を呑み込み一瞬で燃やしてみせた。

「うわああああ~~~~っ!!! てめエ!!! 何をする——っ!!! 畜生、てめエ殺してやる!!!」
一瞬、呆然と固まったスパンダムは、慌てて黒焦げになった設計図に縋りつき、崩れていくそれらを掻き集めようとする。

彼のその滑稽な姿に、グリードは堪えきれなくなった様子で、ゲラゲラと声を上げて笑い始める。

「ガツハハハ!!! 抵抗勢力」を造る為に残された設計図が、狙われちゃったんだ!!!
 こうすんのが正解だろうが!!! ガツハハハハハ!!!」

「本来、こんなもんは人知れずある物で、明るみに出た時点で消さなきゃならねえんだ!!!」

満足げに笑うフランキーとグリードに、ルッチ達から凄まじい殺気が向けられる。

5年に渡る任務の結晶、他に返る者のない重要物品を無惨な姿に変えた彼らに、常に無表情であるルッチが憎悪に燃える目を向けていた。

「——だが、これで『兵器』に対抗する力は失くなった!!? ニコ・ロビンがこのままお前らの手に落ちれば『絶望』だ!!!」

「そんで麦わら達が勝てば、お前らに残されるもんは、何一つねえって事になる。おれ達
 は、あいつらの勝利に賭けるぜ!!!」

超人たちの殺意を受けても、フランキー達が怯む様子はない。

それどころか、どうぞかかって来いとばかりに、堂々と挑発染みた言葉を吐く程であつた。

「フザケたマネを…!!? てめえらも今、ここで死にてえらしいな!!?」

崩れ、風に散っていく設計図の残骸を踏み潰し、怒りに燃えるスパンダムがフランキー達を睨みつける。

彼もまた、自身の栄光に必要な不可避な物品を失わされたことで、凄まじい激情に燃えていた。

一瞬にして張り詰める、その場の空気。

フランキーとグリードが、彼らに向けて身構えたその時、裁判所の方から幾つもの声が響いてくる。

「アニキ——!!? フランキーのアニキ——!!? グリードさん——!!?」

「おい、司法の塔にアニキ達が!!?」

「よかった無事か!!?」

「わ——!!? アニキ達だわいな!!?」

はっ、と目をも開いて振り向けば、裁判所のあらゆる窓から、大切な子分達が顔を覗かせて叫ぶ姿が目映る。

彼らは必死に、五体満足でいるフランキーに声を張り上げ、安堵と歓喜の声を上げていた。

「アニキ達助けに来たわいな——!!?」「麦わらさん達と一緒に来たぜ——!!」「ソドムとゴモラも頑張ったんだ——!!?」「アニキ、おれ達と帰りましょう」「ケガはないですか、グ

リードさ——ん!?？」

「て……………てめエら……………てめエらコノヤロー誰が助けに来いなんて……………来いな”ん”で……………だドンダンダデヨ——ウ!!!」

「ガツハハハハハ!!! さすがはお前らだ!!! よく来たア!!!」

次々に聞こえてくる子分達の声に、フランキーの涙腺がさつそく決壊する。

グリードは泣きはしなかったものの、多くの危険を乗り越えて助けに着た子分達に、最大級の狂喜を抱く。

大きな嬉声が響き渡り、同時にフランキーのなく声も煩くなり始めたその時。

「うるせエお前らア——っ!!!」

「いや鬼かつ!!!」

裁判所の上から、ルファイがザンバイ達に向けて無慈悲な言葉を吐き出す。

この状況でそれはあんまりだ、とナミ達からツツコミが入るが、ルファイは全く気にせずザンバイ達に怒鳴りつける。

「ロビンとエレノアが待つてんだ、早く橋をかける!!!」

「あアそうだな、さつさとしろてめえエら!!!」

「茶番はさつさとやめて戦エー!!!」

「そうよね!!? あんたら急ぎなさいよブツ飛ばすわよ!!?」

「そんな取りとめのないナミさんも好きだー!!!」

そういうえばそんな場合ではなかった、と我に返り、ルフィと共に無慈悲な声を上げるナミ達に、ザンバイは「ですよね」と思わずこぼす。

やがて、フランキーははずると垂れ流していた涙と鼻水を拭い、表情を整えると、堂々としたタオ度でルフィに向き直った。

「麦わらア!!! 子分達が世話になった様だな…今度は棟梁の、このフランキー様と…!!」

「グリードファミリーの頭!!? グリード様が大戦力となってやる!!! 感謝しやがれ!!!」

ここまで手を貸されて、礼もしないようでは男が廢る。

受けた恩を返さなくては、と張り切る二人だったが、ルフィは彼らにも厳しい顔を向けて怒号を放ってくる。

「勝手にしろオ!!! おれは、まだウソツプの事根にもってんだから!!!」

「…いや横にいるだろ…」

「…あいつら人間をどう認識してんだ…」

怒りを見せるルフィと、仮面をつけた長鼻の男を交互に見やり、呆れる他にないフランキーとグリード。

どう見ても同一人物だろうに……と思ったが、二人とも何も言わなかった。その時だった。

何か、金属同士が擦れ合う凄まじい音が、とてつもない速さで近付いてきたのは。

『おい!!? 海賊共ーっ!!?』

「え!!? ココロさんっ?!」

『全部聞こえてるよ、何をグズグズやってんらいっ!!?』

「グズグズって…でも、橋が半分しか…!!」

同時に、ナミの胸元の子電伝虫からココロの声が届く。

困惑する彼女に、ココロは何処か上機嫌そうな声で、ナミ達に新たな指示を与えてくる。

『半分かかってりゃ充分ら、あと4秒でそこへ着くよ!!! 思いつきり滝に向かって飛びな!!!』

「バーさんか!!? どういう事だ!!?」

「わかんないっ…!!! 滝へ…飛べって…!!!」

金属音は次第に裁判所のすぐそばまで近づき、そして汽笛の音も響いてくる。

フランキー達や、スパンダムたちも困惑の表情を浮かべ、何が起きているのかと辺りを見渡し始めた時。

フランキーの足元で、エレノアがもぞりと身動きを行う。

「……フランキー……………!!!」

「エレノア…!!?」

かすれた声で呼ばれ、すぐさま視線を下におろすフランキー。

この状況で何の用か、と訝しむ彼の前で——エレノアはカツと目を見開き、壮絶な笑みを浮かべてみせた。

「後全部託すよ……………!!!」

血塗れの天使が、そう彼に告げた瞬間。

エレノアの身体を中心に、赤く禍々しい光が迸り、直後に彼女の真下に罅が走る。

そして、ばがんつ！と轟音を立てて足場が崩壊し、その場にいた全員が空中へと投げ出された。

「ぎやああああああ!!!」

「おわーっ?!」

「これは…」

「無茶をしおる…!!!」

無数の瓦礫と共に、数十m下に向けて真つ逆さまに落下させられ、スパンダムが情けない悲鳴をあげる。

その間に、エレノアが翼を羽搏かせ、ロビンの方へ拘束を解いた手を伸ばす。

「ロビン……!!」

「妖術師さん……!!」なんてマネを……!!」

ロビンは驚愕しながら、差し出された手に向けて必死に手を伸ばす。

痛々しく、血に濡れた手を苦しげに見つめつつ、躊躇いなくエレノアの方へ向かっていく。

「——悪いが、そういうわけにはいかないんだ」

しかし、すぐにルツチ達が宙を跳ね、ロビンとエレノア、そしてスパンダムを抱え、元居た部屋へと戻って行ってしまった。

「ああっ!!! チクシヨウ、あいつ無茶しやがって!!!」

「いくぞ!!!」

フランキーとグリードだけが落ちていく姿に、そげキングが思わず悔しげな声を上げて地団太を踏む。

すると、前方を睨んだままのルフイが両腕を伸ばし、左右の仲間達を全員抱えたかと思うと、ココロの指示通りに滝に向かって飛び出す。

「まだ走れるよ!!? 『ロケットマン』は!!? 伝説の造船会社トムズワーカーズをナメんじやらいよオーっ!!!」

悲鳴をあげ、涙を流すナミ達の下に、裁判所内を暴走する海列車を操る、ココロの高揚した声が届く。

幾つもの壁を突き破り、裁判所を貫いた海列車は、そのまま下りる途中の跳ね橋を昇り、ルフィ達を受け止め、そして――。

「んががががが!!?」

「滝だ――つ!!?」

「ニャー!!?」

「!!!ああああああ!!?」

島に突入した時と全く同じように、再び空へと飛び上がってみせた。

もはやサメの船首は原型を留めていない。半ば破壊された蒸気機関を無理矢理動かし、最後の大暴走を試みさせたのだ。

――……懐かしいねえ、トムさん…。

泣き叫ぶ青年達、驚愕するチンピラ達、そして孫娘達の声を聞きながら、ココロは想う。

大切な上司だった男と、友人になった破天荒な男の事を。

ルフィによく似た、後に「海賊王」と呼ばれた大馬鹿者の男の事を。

「ロジャーの奴も……こんなバカ野郎だったねえ……——そいであんた、手貸し

てやったんらよね…性懲りもなくトムズワーカーズ総出で、海賊小僧に手エ貸しちまつてるよ…!!? んがががが」

自分でも馬鹿だと思いながら、ココロは誇らしげに笑う。

可笑しなことでも、これっぽっちも間違っていない行いだと、彼女は心の底から信じ
ていた。

——あんたでもこうしたらろ?

トムさん…。

そんな、亡き人への言葉を胸中に浮かべながら。

暴走海列車『ロケットマン』は、司法の塔の最下層へ、深々と突っ込んでいった。

第210話 “鍵を獲れ”

「来た、来たアア——っ!!!」

崩れ落ちたテラスの奥でへたり込みながら、信じがたい光景に呆然としていたスパンダムは、悲鳴をあげて後退る。

彼は直ぐにルッチ達を盾にするようにし、ロビンの手とエレノアの髪を掴んで歩き出す。

「チキシヨー!!? 来い、てめエら!!?」

「く……!!?」

「あぐ……!!?」

「ギアお前達を解放するぞ『CP9』!!? この司法の塔であいつらをギツタギタにしてしまえ!!! 惨殺を許可する!!? ルッチ!!? お前はおれと来い!!? 何をおいてもまず、おれの命を守れ!!? いいな!!? あんたもだぞ大総統!!!」

「わかつているとも……」

矢継ぎ早に指示、というよりは自分勝手な命令を放ちながら、ずんずんと先を目指すスパンダム。

途中、室内で自由にさせていた象・ファンクフリード——ゾウゾウの実を食べさせた剣を元の姿に戻させ、自身に備える。

「さア、正義の門」へ向かうぞ!!! この女共を取り返せるもんなら取り返してみろ、麦わらア!!!」

6人の暗殺者と、最強の老剣士を引き連れ、スパンダムは二人の女を引きずりながら、悍ましく啗つてみせるのだった。

ガラガラと崩れる壁の一部。

司法の塔のどてつばらに突っ込み、さらに無惨な姿に変わったロケットマンの傍で、フランキーとグリードが叫んでいた。

「…おい!!? 大丈夫か!!? ココロのババー!!? ちびどもつ!!? 何で、こんなトコにいんだよ!!!」

「生きてんのかお前ら!!? おい!!!」

「ロケットマン」なんて危なっかしいモン引っぱり出してきて!!? お……!!? おかげで助かったがよ……!!?」

自分達とロビンを救う為、遙か深くまで続く滝を越えて来たココロ達。

しかし、無茶な突撃を果たした彼女達が無事で済むわけがない。最悪の結末を想像し、フランキーの声に涙がにじみ出す。

「なアおいババー!!? しつかりしろ!!! おい頼むから…!!? 死ぬなよ!!? 死ぬなア~~~~!!!」

頼むから、これ以上大切な誰かにいなくなつてほしくない。

そんな思いから、横たわる老婆とその孫たちを揺さぶり、声を張り上げて呼びかけ続け。

「鼻血でた!!?」

「鼻血で済むのはおかしいだろうがよ!!!」

ひよこっ、と微かな傷だけ見せてあつさり起き上がるココロ達に、フランキーもグリードも目を吊り上げて怒号を上げる。

先程流してしまった涙を返せと、しかし内心でホッと安堵の息を吐いていた。

「よっしやー着いた——っ!!!」

「麦わら」

「さすがゴム人間」

「怪獣のバーさんありがとう!!? おいおめエら、さつさと立ち上がれ!!? こんなもん平気だろうが」

少し離れた場所で、瓦礫を吹き飛ばしたルフィが大声で仲間達に叱咤する。

殴られようが潰されようが、伸びるゴムの身体を持つルフィには、この程度の激突など痛くもかゆくもない。

だが、その他の仲間達はそうはいかないのだ。

「ゴ…ゴムのお前と一緒にすんじゃねエ……な……生身の人間が…こんな突入させられて…!!? 無事でいられるわけ…」

瓦礫の隙間から覗く、ぶるぶると弱々しく伸ばされる誰かの手。

無数の破片の下敷きになり、身動きの取れなくなった状態に陥っては、命ももう幾ばくも無い……と、思いきや。

「…「あるかア—っ!!」」

全員が、怒りを混ぜた雄叫びを上げて元気よく瓦礫を吹っ飛ばし、立ち上がる。

全員、それぞれ多少の擦り傷などを負ってはいたが、勇ましく吠える姿からは察するに、五体満足のようなだった。

「全員無事だ」

「お前らもたいがいオカしいからなっ」

「一応言つとくがよ」

天に拳を突き上げる彼らを見やり、満足げに頷くルフィ。

しかしフランク達にしてみれば、人間離れた頑丈さを見せつけられ、思わず困惑の一言を呟いてしまう姿だった。

一味は自身らが無事、司法の塔へと侵入できた事を確認すると、奥へ通じる道がないかを探し始める。

「ニコ・ロビンと『妖術師』の居場所ハ……んんん 何だこりヤ!!」

「階段を下がっていつてますヨ」

「だったら追いつける!! あそこに階段がある!!? 早くあいつらのとこいくぞ!!?」

気配を探る力に長けたリンとメイの協力で、エレノアたちの居場所を正確に探り当てる。

そして、門を通り抜けられる前に追いつこうと、全員が走り出そうとしたその時だった。

「待て」

不意に、頭上から聞こえてきたその声に、全員がハッと目を見開き身構える。

壁の隅、天井近くに張り付いている丸い体の大男の姿を発見し、ルフィ達は訝し気に眉を顰める。

「何だありや!!?」

「チャパパパパ……!!? 侵入されてしまった——! さっきの部屋へ行っても、もう

ニコ・ロピンはいないぞー。ルツチが「正義の門」へ連れてつたからな」

小馬鹿にする口調と態度で、やって来た一味を睥睨する男・フクロウ。

彼はチャツクの付いた奇天烈な口を嘲笑に歪め、ごそごそと懐を探り出す。

「今向かつてるところだが、行き方も教えないし、おれ達『CP9』がそれをさせない。お前達を抹殺する指令が下っている!!?」チャパパ、お前達はおれ達を倒さなければ、ニコ・ロピンを解放する事はできないのだ。これを見ろ」

ルフィ達を見下ろしたまま、フクロウは懐から小さな金属の棒——カギを取り出しえ見せつける。

何処にでもありそうなそれを前に、ルフィ達は困惑しながらも、何か得体の知れない意図を感じて表情を強張らせる。

「鍵?」何のだ」

「ニコ・ロピンを捕らえている、海楼石の手錠の鍵だ!」

優越感の混じったその声に、一味の半分がぎよつと目を見開く。

海の力を持った不思議な石、海楼石。それを使った檻や錠は、捕えた悪魔の実の能力者を無力化し、弱らせてしまう大変危険な代物だ。

故に、確かな実力者であるロピンを容易く捕えているのだと聞かされ、チョッパーなどは怒りで息を荒げさせる。

「お前達が万が一ニコ・ロビンを救い出す事があっても、海楼石はダイヤのように硬いので、その手錠は永遠にはずれる事はない。『妖術師』であろうとも、拘束を抜ける事は不可能。それでも良ければ、このままニコ・ロビンを助けに行け、チャパパ」

「じゃ、よこせ!!!」

一味を嘲笑うフクロウを見上げ、ルフィが腕を伸ばして鍵を狙う。

しかし、フクロウは目にも止まらぬ速さで移動し、ルフィの拳は宙を斬り、虚しく壁を壊すだけに終わる。

「慌てるな——…!!? まだこの鍵が本物とも言っていないぞ」

「何だとオロ!?」

「別の手錠の鍵かもしれない、チャパパパ…」

鍵を手の上で弄びながら、空中を跳ねて一味と一定の距離を保つフクロウ。

どういう意味なのか、と訝しむルフィ達を揶揄うように宙を跳ね、これでもかと鍵を見せつけ挑発を続ける。

「この塔の中におれを入れて『CP9』は5人いるが、それぞれ一つ…鍵を持ってお前達を待っている」

「じゃあ、お前らを仕留めて鍵を奪い、ロビンの手錠まで試してみるまで本物かどうかからねエって事か」

「宝探しゲームのつもりか？ ナメやがって…」

「くだらねエ時間稼ぎを…!!? そうこうしてる間にロビンちゃん達を『正義の門』へ連行しようってんだろ!!?」

フクロウの挑発もあり、サンジやゾロ達が苛立った表情で眉間にしわを寄せる。

戦う事を強制するような敵の物言いに、男達は言い返しつつも、思惑通りに戦いに赴きそうになる。

「——ですが、エレノアさん達の方が事が急ぎます!」

「そうね、まず確実にロビンとエレノア自身を奪い返して、鍵はその後でいい!!? あんなの放つといて急ぎましょ!!?」

女性陣だけが冷静に事態を見極め、フクロウを含むCP9の相手を避けるべきだと告げる。

一味の頭脳ともいえるナミの言葉に、全員が頷きかけたその時、フクロウが再び小馬鹿にするような笑い声をあげる。

「チャパパ、お前頭いいな。——でもそんな事したら、こんな鍵なんか海へ捨てちゃうぞ!!? チャパパ、パ」

悪戯を目論む悪ガキのような台詞に、一味は一斉に顔色を変える。

フクロウはその反応をも楽しみながら、強く空中を蹴り、塔の中のどこかへと姿を消

してしまった。

「おれ達はチャンスをあびてるのだ。じゃあな」

「このっ!!? 待てエ〜!!」

「おい待てお前が待て!!」

遠ざかっていく声に、激昂に駆られたルフィが咄嗟に追いかけてようとするのを、ゾロが慌てて止めに入る。

頬がびよーんと伸びるも、じたばたと暴れて全く落ち着かない。

「ふんごががが!! 放せくらア!!」

「止まれ!!? もうちよつとだけだ!!? これからの各自の動きを確認するまで待て!!!」

あからさまな挑発に乗り、どこかに消えそうになる船長をどうにか抑え込み、作戦会議に無理矢理参加させようとする。

いつも通りなルフィに呆れた目を向けつつ、一味は互いに顔を見合わせ、険しい顔で唸り声をこぼす。

「あからさまな罠だな」

「ああ……戦力を分断しつつ、1人ずつ確実に始末していく算段だろ。向こうは暗殺と戦闘のプロ、相手が1人なら余裕だとタカをくくってんだろ。胸くそ悪イ……」

敗北の記憶が脳裏に過っているのか、ギリツと歯を軋ませ、顔を歪めるリンとフー。たった一人にあしらわれた屈辱は、今も尚彼らを苛んでいるようだ。

「ルツチ」ってのはあのハト男の事か？」

「ああ、そうだ」

「そいつとロビンが一緒にいるんなら、ルフィだけでも先に行かせよう。ルフィ！お前はとにかくハト男をブツ飛ばせ!!？」

未だばたばたとその場から走り出そうとするルフィに、ゾロが告げる。

敵の陣営の最強の存在、因縁深いその一人と戦う事はルフィの目的であり、止めてもおそらく向かうであろう相手である。

そのほかの面々も非常に危険ではあるが、戦わなければ鍵は手に入らないのだ。

「ルフィを除いて、おれ達は1人——ここにいらしい『CP9』からロビンの手錠の鍵を5本手に入れ、ルフィを追う!!!」

「ロビン君が門をくぐれば全て終わる、何もかも時間との勝負だな」

「氣いつけた方がいいぜ……敵は『CP9』だけじゃない、あの最強のジーさんもいるんだからナ」

ウォーターセブンに姿を見せた、あまりに強すぎる覇気を醸し出していた老剣士の姿を思い出し、表情を引き締めるリン。

同時にグリードも、敗戦の記憶を思い出し、ガチガチと苛立たし気に尖った歯を噛み鳴らしていた。

全員が、一度は敗北した記憶を持ち、そして再戦を願っている。

奪われた物を取り戻す為、屈辱を晴らす為、反撃の為の鍵の争奪戦が始まろうとしていた。

「敗けは時間のロス、全員死んでも勝て!!」

「!!!おう!!!」

一斉に頷き、ゾロがルフィを掴む手を離す。

猛然と走り出すルフィを筆頭に、一味は塔内にいる暗殺者達を探しに向かうのだった。

「ワハハハハハハ!!? 助けは来ねエぞお前ら!!? そもそも奴らは『正義の門』へ辿り着く手段を知らねエんだ!!!」

「…君も意地の悪い事を」

ロビンの手を引きながら、ゲラゲラと下品に笑うスパンダム。

その横を、エレノアを肩に担いだルツチと、呆れたため息をこぼすブラッドレイが付き従い、門へと通じる長い通路を歩いていく。

そしてルフィは、先ほどまで彼らがいた場所を目指し、階段を凄まじい速さで駆けあがっていた。

「さっきまでここにいたんだ、どつかでぶつかるはず!!?」
 “正義の門”には行かせねエぞ——!!? エレノアー!!! ロビー——ン!!!」

「待て!!! ルフィ!!! 言つてももう居ないってあのフクロウ野郎が言つてただろうが!!!」

「若!! お気をつけヲ!!!」

人の話を全く聞いていない、さつそく時間をロスしようとしている青年に叫び、目を吊り上げるリン。

その後を、階段などまだるっこしいとばかりに壁を跳び、フーとランファンが追いかけていく。

「早いですネ、あの人……!!! とうかどこに向かつてるんですカ!!!」

その後を、段差を登るのもまだるっこしいとばかりに壁を飛び跳ね、メイが必死に追いかける。

「チャパパパパー!!? おれは噂が大好き “音無し” のフクロウ。鍵欲しいか?」

「くそツ…!!? 燃料補給前に…!!!」

戦いの前に、燃料となるコーラを補給しようとしたフランキーの前に立ち塞がるフクロウ。

決戦を前に、彼はさつそく不利な状況に陥らされる羽目になっていた。

「いねエ。いねエ。いねエ。なんだ、誰もどこにもいねエぞ…!!? わはは!!? さでは、私におしげづいたか!!?」

並んだ扉を次々に開け放ち、内心いなくてもいいと思いつつ敵を探すそげキング。

余裕を抱いたまま、最後の扉を開けた彼は。

和風に改造された巨大な部屋の中心で熟睡する、鍵を置きっぱなしにした男を前にし、驚愕で棒立ちになってしまった。

「よよいつ!!! よいよい!!! おのれ海賊、ここで会アったが100〜年〜目エ〜エ!!! あいやしぼし、あしぼし待アちゃうがれエ〜いつ!!! よよいつ!!!」
(うるさい…!!!)

奇妙な通路に辿り着いたナミは、錫杖を手にやかましい口上を垂れる大男と対峙し、

鼓膜をつくような大きさの声に胸中で毒づく。

「ここはどうかだア!!!」

「おらア!!!」

どういう因果か、同じ道を行く事になったサンジとグリードは、片やドアを蹴り破り、片や壁をぶち抜いて室内に入る。

そして、中に誰もいない事に、二人とも不満げに顔を歪める。

「クソツたれ……ここにもいねエな!!?」

「何処だ……!! あのジジイはどこにいる!!!? ……いねえんなら仕方ねエ、んじゃ次だ」

「どうぞごゆっくり」

焦りを抱き、敵の姿がない事に落胆を覚えた二人は、急ぎその部屋を後にしようとする。

だが、そんな彼らを、いつの間にか彼らの死角に立っていたカリファが、妖艶な笑みを浮かべて流し目をくれた。

「お茶でも……入れましようか」

「あ、お願いしまふ♡」

「おい」

即座に目をハートマークにさせるサンジに、グリードの冷淡なツツコミが飛んだ。

そして、とある部屋に辿り着いたゾロは二本の刀を抜き、悠然と待ち構えていたカクに不敵な笑みを浮かべてみせていた。

「もう刀を抜いとるのか…」

「血を吸いてエと喰るもんで」

一味のそれぞれが、鍵を持つ敵と相対し臨戦態勢に入る。

捕らわれた仲間が門の向こうに行くまでをタイムリミットに、決して敗けられない戦いが、新たに始まるのだった。

第22章 世界を敵に回してでも 〈後編〉

第211話 騎士道

「おれはてつきり橋でもかかかってんのかと思つてた。何だコリヤ」

司法の塔を駆け上がり、最上階に探し人達がない事によろやく気付いたルフィ。

彼はそのまま階段を全速力で駆け下り、エレノアとロビンが連れていかれた筈の橋を
目指した。

そして……その前に立ちほだかる、荒れ狂う海に
対面する事となつた。

「なんて凄まじい大渦……!!」

「小僧………これは船で渡るのはムリだゾ」

「『正義の門』は見えてんだけどなア!!」

轟々と唸る荒海を悔しげに睨み、ルフィが声を荒げる。

一体、エレノア達をどうやって向こう側に連れていくつもりなのか、ルフィには全く
見当がつかない。

「時間はねエ……!! とにかく何か方法を探すゾ!!! あいつらが行っちゃう前!!!」

リンがそう告げ、向こう岸に渡れる方法を探し出す。

主である彼を助けるため、二人の家臣もばばつと素早く飛び出し、辺り一帯を探り始めた。

そして同じ頃、司法の塔の内部のある部屋において。

「いか——ん!!! お茶なんて飲んでる場合じゃね〜っ!!!」

椅子に腰を下ろし、テーブルの上の紅茶を堪能していたサンジが、ようやく我に返って吠える。

椅子をひっくり返し、彼は床に尻餅をつきながら、優雅にカップに口をつける眼鏡の美女を睨みつける。

「魔術!!? ……魔術にかかっていた、*“恋”* という名の高潮に、おれは呑み込まれちまう所だった…!!? 危なかった!!?」

「……………もう3杯飲んだじゃない」

「お前バカだろ」

「えーい、うるさい魔女め!!? もう畏にはかからんぞ!!?」

「最初からそんなもんねエっての!!?」

部屋の入り口近くで身構えたままのグリードに呆れた声を向けられるも、サンジは全く気にしない。

偶然相方になった彼の事は、もうほとんどいないもののように扱っていた。

「海列車でロビンちゃんをひどく侮辱した『CP9』をおれは忘れねエ!!? 鍵をよこせ!!?」

「……残念、お急ぎのようね」

カリファは表情一つ変えずにそう返し、カップをソーサーの上に戻す。

立ち上がり、鋭い目で睨みつけてくるサンジを横目で見やり、妖艶な笑みを湛えて頬杖をついてみせる。

「どうぞ? 鍵ならご自由に持っていらして」

「? どこにある」

「さア……私の体のどこに隠したかしら」

その言葉に、サンジの目がカリファの全身を満遍なく凝視していく。

網タイツに包まれた白い肌、豊かな胸元、細い腰、豊満な臀部、細くしなやかな脚……暴力的な魅力を放つ女体の全てに、邪な目が向けられる。

「探してみて?」

「イ喜んで——っ!!!」

目をハートマークにさせて、プールにでも飛び込むようにカリファの元へ向かうサンジ。

しかし至近距離にまで迫った途端、カリファの蹴りが彼を軽々と吹き飛ばした。

「幸先悪いわね」

「おれのバカ野郎ウ!!?」

「お前マジでバカだろ」

足元にまで転がって来て、涙を流すサンジにグリードが心底呆れた声で告げる。この非常時にも邪な感情が先に出る哀れな男に、かける言葉が見つからなかった。

「ニコ・ロビンなら、こうしてる今も着々と『正義の門』へ近づいて行ってる——彼女にとっては『地獄』へ近づいていると言った方がいいかしら」

「わかかってらんな事ア!!! そうさ、ロビンちゃん達の命が懸かってんだ!!! 邪魔をするなら女だろうと手加減しねエぞ!!?」

再び立ち上がったサンジは、表情を引き締めてカリファに指を突き付ける。

己に貸した騎士の信条。この戦いがそれを歪める事になろうとも、ここから立ち去る気はさらさらなかった。

「ガッハハハハ!!! 痛エ目見る前にお前の持つてる鍵を渡せてこつた………覚悟しろよ、秘書女!!!」

「……ふふ……大声出したって鍵は出て来ないわよ」

大声で笑い、黒く変色した爪を見せつけるグリードに、カリファはやはり冷静な態度

を崩さない。

ガチガチとギザギザの歯を鳴らす化け物と、静かに相手を見据えるコック。彼らを見つめ返し、カリファはふっと小馬鹿にした笑みを向ける。

「——女だなんて思わなくて結構……そんな甘い世界を生きてはいないわ。抹殺命令が出ている以上、私はあなた達の命を貰うだけ」

「命はやらねエ、おれ達が欲しいのはロビンちゃん達の手錠の鍵だ」

「紅茶ティタイムは終わりでいいのね？」

睨み合いが、数秒もの間続く。

そして次の瞬間——サンジとグリードが一斉に動く。

凄まじい勢いで放たれる、黒足の蹴撃と黒爪の斬撃。

だがそれらは、カリファの体に傷をつける事は一度もなく、寸前のところで止められるか、わざとすれすれのところに叩きつけられるかでしかなかった。

「海賊のクセに……とんだ意気地なし」

カリファはそんな彼らの戦いを嘲笑い、容赦なく反撃を繰り出し、サンジとグリードを蹴り飛ばす。

二人は血反吐を吐きながら部屋の中を転がり、壁に叩きつけられてようやく止まった。

「おいグリード!!! さっきから何やってんだ!!!」
 「…人のこと言えた立場かよ」

膝をつき、悪態をつくサンジに、逆様になったグリードは舌打ちと共に言い返す。

幾度も必殺と呼ぶにふさわしい一撃が叩き込まれたが、カリファは無傷のまま。サンジとグリードのいずれも、女性に傷をつけられないでいる証であった。

「おれア悪だが……それでも通してエ意地つてのがあらア………!!! てめエの命が懸かってようと………!!! おれに女を殴る趣味はねエ………!!!」

「……あークソ、最悪だ。この状況でこんな………こんな奴と主義が一致するなんてよ」

「ガツハハハ!!!」

一味がばらばらになりかけた原因であり、否応なく共闘関係を結ばされている相手と殆ど同じ信条を持っていると知り、がっくりと肩を落とすサンジ。

グリードは笑っていたが、サングラスの奥の目には明らかな焦燥が表れていて、この状況に危機感を抱いている事を示していた。

「見えずいた威しはもうたくさん、面白い事してあげましょうか……」

そして、遂にカリファが自ら動く。

サンジのネクタイを掴み、ぐいっと引っ張って顔を近づけながら、彼が咄嗟に突き出

した足に触れる。

「反撃しなきゃ……助からないわよ」

カリファがそう呟いた直後。

サンジは自らの体に起こった異変に驚愕し、愕然と目を見開いた。

薄暗い地下の空間の物陰に、ナミは息を潜めて身を隠す。

先程遭遇した大男の姿を探し、一刻も早く離れなければと辺りを真剣に探る。

だがその時、彼女の背後でゆらりと、異形の影が音もなく近づき、無数の魔の手を伸ばしてくる。

『生命帰還』

「え!!?」

「あよいよいよいよよい!!!」

ナミが気付いた時には既に遅く、生物のように蠢く大男の髪に縛り上げられてしま
う。

必死に藻掻き、抵抗するナミだが、髪の毛とは思えない力に、徐々に呼吸が困難になっ
てくる。

「ギア……ギアのまま……!!?」

「しまつ……!!!」

「さアさアさア!!! 突き殺そうかアあアよよよい!!? あア絞め殺そうかアあアよよい!!?」

耳障りな口上を口に、だばだばと涙を流して構えを取る大男——クマドリ。

顔を紫色に染め、悶え苦しむナミを見上げて、やはりうるさい口上を述べ続ける。

「木枯し吹くこの今生でエ〜エ!!? 春の芽吹きを待つも叶わず大往生、せめて一度

真つ赤にいとしい花弁咲かせエ散らすが、おいらの義理人情つ!!! あの世に行ったらア

…おいらの死んだおつかさんに…伝えておくんなせエ…おいら…おいらア元気でエ〜

…!!? 殺つて——」

「刻蹄『桜』!!!」

「びよ!!!」

ナミの意識が闇に堕ちようとした直前、突如割り込んだ新たな異形が、クマドリに蹄の掌底を食らわせ吹き飛ばす。

放り捨てられたナミの元に、腕力の強化形態となったチョッパーが急いで駆け寄る。

「ナミ!!! 大丈夫か!!!」

「………!!? チョッパー………!!? ありがとう、助かった……」

何度も咳き込み、呼吸を整えようと努めるナミが、顔を覗き込んでくる船医に礼を言

う。

一旦危機は去った、と安堵したチョツパーは土煙の向こう側で痙攣する大男を睨み、困惑の声を上げる。

「アレ何だ!?? 能力者か!??」

「わかんない! あいつの髪タコみたいに動くから手も足も出せないの!!?」

悪魔の実の能力者であろうとなかろうと、厄介な力を持っているのは確実。

正体を掴めないまま挑むのは危険だと、ようやく呼吸が落ち着いてきたナミが立ち上がり、勢いよく駆け出す。

「——それより今の内よチョツパー!!? 早くここを離れましょう!!?」

「何で!!? あいつ倒さなきゃ鍵が!!?」

「これでしょ?」

突然のことながら、すぐに走り出してナミの隣につきながらチョツパーが問うと、ナミは懐から例の鍵を取り出してみせる。

ぎよつと目を見開くチョツパーに、鍵を握り締めつつ、走る事に集中する。

「鍵だけは気づかれずにスツたのに逃げられなくて!!? みんなの状況わかる?」

「なアなアそれ、何番って書いてある!??」

「番号?」

何やら慌てた様子のチョッパーに急かされ、手の中の鍵をひっくり返し、持ち手部分に刻まれた番号を確認してみる。

「3番」

「ダメか」

「何なの、この番号」

肩を落とすチョッパーに、何を意味するものなのか、と問う質そうとした時。

ナミとチョッパーは塔の中心部、天井までが吹き抜けになった空間に飛び出し、そして。

「うおおおおおおお!!」

突如、頭上の壁の一部が弾け飛び、中から見覚えのある黒ずくめの男が、雄叫びと共に飛び降りてくるのが見えた。

思わず制止し、後退ったナミとチョッパーの前に男——グリードは降り立ち、担いでいた何かを地面に降ろした。

「何か……落ちてきた!!?」

「あ、あんたは……!!」

「お前………たしかグリードとかいう……?」

「ようお前ら………悪いけどコイツ頼むわ」

「え!!? 人形!!?」

グリードが床に寝かせた何かを見て、チョッパーがぎよつと息を呑む。

どう見ても人の形には見えない、つやつやとした凹凸の乏しい何か……その顔の部分を見て、チョッパーはその正体によく気付いた。

「違う!!! サンジ!!! 何だ!?! この姿!!!」

元とはかけ離れた姿になり、血塗れになったサンジ。

慌てて駆け寄り、触診を試みるチョッパーだったが、見た事も聞いたこともない状態で、どうすればいいのかまるでわからない。

「ガラスの人形みたいだぞ!!! 全身ツヤツヤで……それにひどいケガだ!!? おいお前!!? 何があつたんだ!!?」

「“CP9”の女秘書にやられた。おれもこのザマだ………そいつは十分戦った。診てやってくれ」

サンジを下ろしたグリードが、そう言って自身の右腕を見せると、サンジと同じようにおかしな状態に陥っているのが見える。

彼が見上げる先、つい数秒前までサンジ達がいた部屋を見上げれば、カリファが余裕の表情で見下ろしている姿が見えた。

「……す……す……すまねエ……敗けた…鍵…奪え…ながった」

「ま…待つてろサンジ!!?　すぐ応急処置するからな!!?」

意識を取り戻したサンジが、掠れた声でナミ達に謝罪する。

まだ息はある、と安堵したチョッパがすぐに治療の準備を始めるが、その時ナミが訝しげな視線をサンジに向け、口を開く。

「あんた達…本当に、勝てなかつた…?　まともに戦つたの…?」

彼女の問いに、サンジもグリードも何も答えなかつた。

ぐつと悔し気に唇を噛み締めたまま、虚空を見つめて黙り込むだけであつた。

「相手はあの女でしょ…あんた、女に甘いもんね」

「…!!?　鍵の事は…すまなかつた」

「違うわよ!!?　そんな『騎士道』持つてる為にあんたの命まで取られちゃうつて言つてんの!!　こんな目にあつてもまだ貫くの!!?　死んだらどうすんの!!?」

「オイオイ姉ちゃん…:…:…:そいつは」

「あんたも同罪よ!!?　何よ2人して!!」

目を吊り上げ、甘い考えを抱いたままこの場にいる仲間を怒りを露わにするナミ。

グリードが恐る恐ると言つた風に止めに入ろうとするが、それを跳ねのけ、彼にも怒りの咆哮をぶつける。

「別に…死にてエとは思わねエ…:…:ただ、女は蹴つたらいかんもんだとたたき込まれて

育った。だから………」

責められながら、痛々しい姿で横たわったまま、ギリギリと歯を食い縛り、サンジは語り出す。

恩人の言葉、自分を拾い救ってくれた男の教えを——自分自身の根幹となった教えを、何が何でも貫き通すという意志を、痛みと屈辱を堪えて告げる。

「…たとえ死んでも、おれは女は蹴らん……!!!」

断固として譲れない、男の覚悟。

チョップパーとグリードも思わず感嘆の声を漏らす、男達の魂を震わせる想いの強さがそこにある。

ナミはそんな彼に心底呆れたため息をつき、パーフエクト：クリマ、タクト完成版天候棒でガンツ！と頭を叩いた。

「ばかね…ばか!!?」

「おい何すんだナミ——っ!!!」

「男の覚悟に何だてめエその態度はア!!!」

「逃げ出す事も『騎士道』に反するのなら…せめてそつちは捨てなさいよ!!?」
無駄に死ぬ事は話が別よ!!?」

目を吊り上げて怒鳴りつけてくる二人を無視し、サンジに説教する。

しかし、やがて彼女の勢いは落ち着き、ナミは不意に、苛立たし気に眉間にしわを寄せるグリードに横目を向けた。

「グリード……サンジ君を助けてくれてありがとう、あの女は私に任せて!!! 容赦しない」

サンジを庇うように、ナミがカリファの方へ数歩進み出る。にやりと不敵に笑う敵を見据え、得物を肩に担いで表情を引き締める。

階段を上がるその前に、立ち止まったナミはフツと笑みを浮かべてみせた。

「——それとあんたの『騎士道』……少し見直したわ」

「え……今……『惚れ直した』って」

「『そうは言ってねエっ!!?』」

思わぬ言葉に、とてつもなく前向きな聞き間違いを披露するサンジ。

そこへチヨツパーとグリードによるツツコミという名の頭突きが炸裂し、サンジの意識は再び闇の中に沈んだのだった。

背後のそんなやり取りを放置し、ナミはカリファに向き合う。

その目には、仲間を傷つけられた事への怒りが、煌々と燃え盛っていた。

「私は、優しくしないわよ!!?」

「私もよ、気が合いそうね……」

新たな組み合わせが出来上がった、その時。

どどどど、と通路の向こう側から見覚えのある巨体が駆け込んでくるのが見えた。

「よよい!!? 待ア~~~~~~~~てエ~~~~!!? あ、逃がしてエ……………!!! あ逃がしてなア〜

~~~~る~~~~も~~~~のか〜ア!!!」

「タコ男!!?」

「ナミはあの女を!! あいつはおれが何とかするよ!!」

「わかつた!!!」

「よろしく頼むぜ!! じゃ!!!」

「えエっ?!?」

勇ましく名乗り出て、クマドリの前にチョツパーが飛び出す。

するとなぜかグリードもその場を任せ、どこかへと走り去っていつてしまい、チョツ

パーは顔を険しく歪ませる。

「あアもう……!! // 刻蹄 // ……『十字架<sup>クロス</sup>!!!」

「よよゴオ!!!」

そんな彼の苛立ちを込めた一撃が、クマドリの体に強烈に叩き込まれた。

## 第212話 “戦手交代”

「うべばばばばばばばばばばば」

ルフィは今、溺れていた。

荒波に吞まれて破壊されたボートにしがみつき、辛うじて沈むのを防いでいるような状態で、後悔の涙を流していた。

「何してんですカー!!?」

「はばでびばばばなべびらぬがらば」

「だからさつきから無理だと言っておるだろうガ——ツ!!」

駆け付けたメイとチムニー、ゴンベが悲鳴をあげ、目を吊り上げたフーとランファンが海に飛び込んで救助に入る。

主以外は基本的にどうでもいい二人だが、今回ばかりは自発的に動いていた。

「渡れるわけないじゃんこんな海、ボートで!!?」

「あんたバカですカ!!?」

「だから今、おれ達で必死にここを渡る方法捜してんだってノ!! ちつとは待つつて事を覚えろよバカ船長!!」

ゼイゼイと肩で息をするリンが怒鳴り、話を全く聞かないルフィを叱る。

対するルフィは、まだ顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしたまま、自分を止めるリン達に抗議じみた声を上げる。

「だってお前ら、ロビンがああ門に連れてかれたんだぞ!!! 急がねエと連れ戻せなくなっちゃうよ——!!!」

「落ち着け——っ!!!」

「私達はそこへ行く方法を教えにきたんです!!! 急いで!!!」

チムニーとメイが、海とは全く異なる方向に向かって走り出す。

どういう事か、と訝しんだルフィ達は、彼女達の案内についていく。

そしてその先で口を開けて待っていた、遙か地下に通じる階段に到着し、大急ぎで段差を駆け下りていく。

「海の地下通路?!!」

「そう!!? 気配を追っているト、連中がずいぶん下に降りていったのでまさかと思いましたが……!!!」

「そうカ……!! そういう事だったのか!!!」

あの荒海を渡る方法など、どんなに頑丈な船であってもまず不可能だと考えていたら、ンファンが納得の声を漏らす。

かくして地価の通路の入り口に辿り着いた彼らであったが、鋼鉄の分厚い扉は、固く閉ざされてしまっていた。

「これか!!? ずいぶん硬エ鉄の扉だな……………」

「おそらくはこれ进行操作して開くんだと思えますけど…」

「多分この鍵穴だよ! 鍵ないけど…」

「これハ…………手持ちの火薬を使っても開きそうにないナ」

「…………お前らさがってる。ここから正義の門へ行けるんだな!!?」

開ける方法を探し、扉を探るリン達。

すると、彼らを押し退け、ルファイが拳を掌に打ち付けながら前に出てくる。

「ン? 何する気ダ!!?」

困惑の声を漏らすリンの前で、ルファイはおもむろに自分の親指を噛み、そして。

「**ギア3!!!**」

ドカン! と凄まじい衝撃が島全体に響き渡る。

ゾロとカクの戦いの余波で切り裂かれ、ズレた塔がさらにズレる程の威力の一撃が、鋼鉄の扉に炸裂する。

そして、分厚い扉はまるで粘土のように折れ曲がり、ぽつかりと奥へ続く通路を開いてみせていた。

「あいた…」

「なんて力だヨ……」

「よし…行つてくる!!!」

啞然とするチムニー達を他所に、満足げに息を吐いたルファイがてくてくと歩き出す。

だがしかし、彼のその体は先程までとは明らかに異なっており……というか、どう見ても二頭身から三頭身ほどの体型に小さくなっていた。

「縮んでル……!!!?」

「何があつタア……!!!?」

「ええ……何でチビになったのオ!!!?」

「ニヤ……!!!?」

驚愕の声を上げるチムニー達を放置し、ルファイは小さくなった体で通路を駆ける。

目を見開いたまま、彼の後に続き地下通路を走るリン達。

彼らの目の前で、走っている間にルファイの体が徐々に大きくなり、遂に元の姿に戻っていった。

「お…戻ってきた!」

「どういう構造してんだヨ、お前の体ハ…」

「よオし、待つてろよロビーン!!! エレノア〜!!! ハトの奴!!! 必ずぶっ飛ばしてやるぞ!!!」

呆れた声を漏らすリンに取り合わず、ルフィは鼻息荒く前を見据える。

自分の体の事などよりも、彼は仲間の安否だけを考え、自分が戦うべき敵との再戦を望んでいた。

「今…ものスゲエ音がしたが…：気のせいかな？ 気のせいなわけねエな!!!」

自らが通ってきた通路を振り返り、少し不安気な声をかけるスパンダム。

小心な彼を内心で嘲笑いながら、ルッチも通路を振り返り、音の正体について推測を述べてみる。

「海賊の誰かが…扉を破壊した音では？」

「ああ!! そんなバカな事あるか!! あの分厚い鉄の扉だぞ!!! 第一、奴等が扉を見つけられるハズがねエ!!!」

「——いえ、わかる筈…子供とペットが我々をつけていましたから」

「え——つ!!? な…なぜ、お前それを知ってて消さなかった!!!」

ぎよつ、と目を見開き問い質すスパンダム。



子供とペットが道を見つけただけで、海賊ごと気があの頑丈な扉を破れるはずがないと考えながらも、不安要素を放置していた部下を叱責する。

そんな彼に向けて、ルッチはにやりと不気味に嗤い、端的に答えを口にした。

「指令が………出ませんでしたので……」

「何を!!? コノ間抜けめ——!! それくらいでめエで判断しやがれ!! 何だよ、オイ

……じゃあ誰か今、ここへ向かってるってのか?!

「あまり、情けない事を言ってくれるな……スパンダム君……」

慌てふためくスパンダムに、不意にそれまで黙って護衛を務めていたブラッドレイが口を挟む。

片手でエレノアを担ぎ、じろりとそれまでの温厚さとは異なる鋭い眼差しを向け、厳しく聞こえる声を放つ。

「君はただ、そこで泰然と構えて貰わなければ、現場の我々は非常に困るのだよ……我々を統べるべき立場の者がふらふらしては、下の者はどこを向いていればいいのかわからなくなるからね」

「お……お、おオ。た、確かにその通り……すまない、ブラッドレイ殿」

「わかつてくれて助かるよ……」

にっこりと笑って、上官としての心構えを説いてくるブラッドレイに、咄嗟に頭を下

げるスパンダム。

だが、彼が顔を上げた直後、ブラッドレイは先程よりも遥かに冷たい目を向け、冷淡な声で再び告げる。

「もし、ここまで言つて態度を改めないようであれば……不幸な事故に遭つたという理由で、君には長官の座をここで降りて貰わなければならぬからね……!!」

ぞつ、と。

ブラッドレイがそう言つた途端、スパンダムとルツチ、ロビンの背筋に寒気が走る。

彼が手に掛ける軍刀に視線が集中し、まさか、とスパンダムの顔が恐怖に引きつり出すと、ブラッドレイはまたにっこりと笑つて肩を竦めてみせた。

「……………冗談だ。さア、先へ進むとしよう」

「ひ……………ひは……!!」

冗談とは思えない、本気で殺すつもりとしか思えなかつたほどの濃厚な殺気。

改めて、「大總統」と呼ばれる男の実力の一端を目の当たりにした彼らが、再び歩き出そうとした時。

「……来たか」

ふと、ブラッドレイの脇から小さな声が響く。

するとロビンが不意に立ち止まり、通つてきた通路を再度振り向いた。

「おい急げ…何を立ち止まってるんだ!!! ニコ・ロビン!!! オイ!!! この『生きてるだけで犯罪女』ア!!! 止まるなっ!!!」

振り向いたまま、動こうとしないロビンに、一刻も早く正義の門を十行つてしまいたいと思っっているスパンダムが喚く。

息を殺し、通路に目を凝らすロビンを、ルッチが片手で押して急かす。

「命令だ……進め……ニコ・ロビン」

「信じて待ちたい気持ちもわかるがね……」

「ワハハハ、バカめあんな弱そうな海賊共に本気で希望をかけてんのか。さっきの爆音も気のせいさ、ここへ来れるわけがねエ!!?」

あの強そうに見えない海賊に、ここまで来れる力も度胸もないと、スパンダムがゲラゲラと下品に嘲笑う。

未だに自分の都合のいい情報しか信じない、受け入れない彼は、しかしやはり先を急ぎたいと、ロビンの手錠を引っ張り催促する。

「今日まで生きてしまった罪を、お前らは償い続けるんだよ!!? なアニコ・ロビン!!! 妖術師!!! ワハハハ!!!」

ありえない事を、これまで何度も見せつけられている事も忘れて、スパンダムは勝利を確信したままである。

そんな彼に、海軍最恐の剣士に抱えられた血濡れの天使が、小さく身動きをし始める。  
「にやは……にやははは……はは……!!?」

「あ? 何だお前、何を笑ってる。恐怖でおかしくなったか?」

「……あんたが……私がこれまで……見てきた奴らの中で……一番……滑稽だったからさ……」

息を切らせながら、可笑しくてたまらないという風に体を揺らすエレノアの顔を、スパンダムが胡乱気に覗き込む。

エレノアはくわつと目を見開き、壮絶な笑みを湛えて答えた。

「そんなんだから……足元を掬われるのさ、クソ野郎」

「ロビ~~~~~ン!! エレノア~~~~~ン!!」

そして、通路の向こう側から叫び声が響いてくる。

それに気づいたスパンダムは、ぎよつと化け物にでも遭遇したような顔で固まり、慌ててブラッドレイの後ろに逃げ込む。

「んな……!!? 何だ今、声がしたぞ!! おい!!? 何だ今の声はア!!」

「ほう……これは、思っていたよりも早かったな」

恐慌状態に陥るスパンダムとは真逆に、ルッチとブラッドレイはどこまでも冷静に事態を把握する。

ルッチはロビンの背中を押し、ブラッドレイはエレノアを手渡し、猛然とした勢いでやってくる侵入者たちを出迎える準備を始める。

「長官はニコ・ロビンと『妖術師』を連れて…どうぞ、先をお急ぎに…」

「ちと、君の腕では重いかもしれんが…まあ、我慢してくれ」

笑みを浮かべる二人の武人達に促され、エレノアを抱え、ロビンの手錠を掴んで、スパンダムは小走りで進み出す。

長官の姿が見えなくなった丁度その頃、閉ざされた扉の向こう側から、再度騒がしい声が聞こえ始める。

「ん!? 扉? 今度のは別に鉄ってわけでもなさそうだ」

「だったら楽にブチ破れるナ!!」

「うりゃ——っ!!!」

どつ、と鋼鉄でもない扉が蹴破られ、麦わらの青年と糸目の青年が同時に飛び込んでくる。

並び立った二人の隣に、二人の黒装束と少女が立ち、立ちただかる男達を見据えて表情を引き締める。

「……なるほど、これは確かニ」

「骨が折れそうな相手ダ…!!」

一目で只者ではないと察した臣下は、無言で刃を抜き、身構える。対する最強の剣士と最強の体術使いは、現れた敵を前にやりと、獐猛な獣のような笑みを浮かべてみせた。

「……よく来た」

「あ!!! ハトのやつ〜っ!!!」

「ヨオ…!! 久しぶりだなア、”大總統”殿…!!!」

「この前はよくモ…!! リベンジマッチの時間でス!!!」

「これはこれは、随分生き急いだ若者達がやって来たものだな…!!」

逃げ場などどこにもない、地下深くの通路の終点の空間。

助けを待つ仲間が連れていかれた待つ階段を塞ぐ男達を睨みつけ、ルフイ達は静かに兜の緒を締め直した。

「急げ!!! 畜生、何てこった、こんな所まで海賊に踏み込まれるとは!!?」

延々と続く階段を駆け上り、スパンダムが悪態をつきまくる。

海兵達は役立たずで、門番は裏切り、無敵と思っていた部下の一人が無意味に倒され、届く筈もないと思っていた海賊の魔の手がみるみる迫ってくる。

こんな目に遭う為に長官になったのではない、と誰に対するものでもない恨み言を吐

き、電伝虫を起こす。

「おい!!? 全員応答しろ!!! //CP9//!!? てめエらいったい何やってんだ!!? 海賊が一匹ここへ来たぞ!!!」

弱小海賊如き、片手間でも仕留められるだろうと勝手な計算をし、それを果たせないでいる部下を語る。

しかし、何度怒鳴りつけても、誰からも返答が来ない。

まさか全員で無視しているのではあるまいか、とますます苛立ちを募らせ、電伝虫のボタンを忌々し気に何度も叩く。

「聞いてんのかおい!!! 返事くらいしやがれ!!!」

「……………おい…バカ長官……………お前……………自分が何持つてるか……………わかってんのか」

乱暴にボタンを叩き続けるスパンダムに、彼に抱えられたエレノアが顔を上げ、ぎよつと目を見開いて告げる。

訝しげに彼女を見下ろし、自分が持っているもの——金色に輝く、決して押してはならないボタンゴールデン電伝虫を凝視する。

「ええエ~~~~つ~~~~!!!」

悲鳴をあげ、目の前の景色が夢であつてほしいと何度も目を擦るスパンダム。

絶句するロビンと、呆れてものも言えなくなるエレノアを放置し、懐を漁ったスパンダムは本物の電伝虫を探し出し、通話をかける。

「おいっ!!? おいっ!!?」

『はい、長官』

「畜生、しまったこつちだ子電伝虫は!!? 何て事を!!? ウツカリした!!? よりによってゴールデン電伝虫を押しちまった!!!」

誰かは知らない、最初に答えた部下の一人に向けて、スパンダムは自分のやらかしを叫ぶ。

それが島中に伝わっていると気付かないまま、頭を抱えて考えうる最悪の事態に陥った事を、恥も外聞も捨てて喚き散らした。

「よりによつて『バスターコール』をかけちまったア~~~~っ!!!」



## 第213話 “恩義は返すもの”

「アホ過ぎる……!!?」

目の前で、スパンダムが部下達に向けて発した通信に、エレノアは思わず顔をしかめて頬を引きつらせる。

反対にロピンは顔を真つ青に染め、頭を抱えるスパンダムを睨みつけ、声を上げる。

「バカな事を……!!? 今すぐ取り消しなさいっ!!! 大変な事態になるわ!!?」

「何をオ!!? 取り消しなさいイ!!? ……オイオイ、誰に口を利いてんだためエラはア!!!」

ロピン達に命じられた苛立ちで少し冷静さを取り戻したのか、スパンダムが彼女達をぎろりと睨み返す。

しかし、すぐにその顔はまた醜悪に歪み、嘲笑が混じり始めた。

「ワハハハ、結構じゃねエか『バスターコール』!!? 何が悪い!!? そうさ……いいじゃねエか、おれはサイファーポールNo.9の長官だぞ、貴様らは無事政府へと受け渡す為『バスターコール』をかけた!!? ハハ……それでいいじゃねエか……!!!」

万が一、ここで何が起きようとも最終的には侵入してきた海賊を、確実に皆殺しにで

きる。

そんな考えで、史上最大最悪の攻撃を是とする彼に、ロビンは咄嗟に嫌悪で目を吊り上げる。

「バカな事を…言つたハズよ!!? それだけでは済まない、あの攻撃に人の感情なんてないわ!!?」

自分の過去から蘇り、当時の恐怖をそのままに味わわせてくる記憶。

何度も夢に見て、忘れる事を許さない惨劇が、ロビンが今見ている現実と混じり合っているかのような錯覚に陥らされていた。

「この『エニエス・ロビー』にある全てのものを焼き尽くす!!? 建物も人も!!? 島そのものも……!!? 何もかも犠牲にして目的を達成する、悪夢の様な集中砲火!!? それが『バスターコール』よ!!!」

必死にそれを避けようと、両腕を囚われたままスパンダムに詰め寄る。

もしかしたら、今間違っていたとこの男が報告すれば、最悪の攻撃は止められるかもしれない。そんな微かな可能性を信じ、力一杯に叫ぶ。

だが、それを見るスパンダムはただ鬱陶しそうで、応える素振りを一切見せずにいた。「20年前のオハラで何が起きたか、あなたは知らないから……!!!」

「——あア結構…政府にとってもそれだけのヤマだつて事さ……!!?」

にたり、と悪意をこれでもかと詰めた顔で嗤い、ロビンの願いを足蹴にする。

止める気を全く見せない男の顔を目の当たりにし、愕然となったロビンは、口を閉ざして数歩後退つてしまう。

「カティ・フラムのバカがプルトンの設計図を燃やしちまった今、お前の存在だけが古代兵器への手がかり。一時代をひっくり返す程の軍事力が、かかっているんだ……!!!」

よろよろと足元を覚束なくさせるロビンに、スパンダムが醜悪な顔を見せつけながら、先程とは逆に詰め寄る。

獲物を追い詰める猫を気取るように、退路を断られた女を精神的にじつくりと甚振ろうと、ギラギラと不気味に輝く目で見据えて顔を寄せる。

「そのお前を奪い去ろうとするバカ共をより確実に葬り去る為ならば、たとえ兵士が何千人死のうとも……!!? 栄えある未来の為の仕方だねエ犠牲といえる!!? 何よりおれの出世もかかっているしなア!!!」

堂々と、全てに於いて優先させる自分の欲望を口にした男に、ロビンは絶句し、エレノアはギリツと歯を軋ませる。

スパンダムに抱えられたまま、血濡れの天使はぎこちなく視線を上げ、彼を鋭く睨みつけ吐き捨てる。

「人の命を……何だと思つて……!!?」

「忘れてくれるな、CP9とは政府の暗躍機関。1000人の命を救う為に1000人の命が必要なならば、我々は迷わずその場で100人殺してみせる。真の正義にや非情さも必要なのさ。そもそも侵入した海賊共を全く止められねエ能なしの兵士共など、死んだ方がマシなんだバカ野郎共!!」

ゲラゲラと笑い、常軌を逸した発言を平然と吐く、自称・正義の組織の長官。

見ているだけで吐き気を催すような存在を見やっていたエレノアは、やがため息交じりに再び言葉を吐いた。

「……おいクソ長官……お前の子電伝虫……」通話中“だぞ”

「!? え!!? うげエっ!!! しまった!!! 今の会話つつぬけか!!?」

思わぬ指摘に、スパンダムは手に持ったままだった電伝虫を凝視して慌てふためく。

しばらく固まっていた彼は、一つ咳払いをしてから受話器を口に近づけた。

「……そ……そんなわけでおれの名は麦わらのルフィだ」

「「「ウソつけエ!!!」」」

咄嗟に思い付いた言い訳を口にするも、島中のあちこちから怒号が響き渡り、敵に成りすまず作戦は即座に失敗する。

そこへロビンが割り込み、受話器に向けて大きな声を張り上げる。

「全員、島を離れて!!! エニエス・ロビーに『バスターコール』がかかった!!! 島にいた

ら誰も助からないわ!!!」

「余計な事言つてんじゃねエよ!!!」

一人でも、自分を助けに来てくれた者も、それを阻む者も関係なく逃がそうと、事態の緊急性を伝えようとする。

しかし、スパンダムがロビンを殴りつけ、それ以降電伝虫からの通信は途絶えてしまった。

「『バスターコール』……」

島中の海兵に黒服達は、放送で伝わってきた最悪の情報に、思わず仲間同士で互いに目を見合わせる。

そして次の瞬間、蜂の巣をつついたような勢いで、島の港に向かって走り出した。

「『バスターコール』がかかったア〜!!!」

「軍艦が来るぞ———っ!!!」

それがどれだけ、何よりも危険でたいへんな事態である事を知っている海兵達は、必死の形相で避難を図る。侵入者たちの拿捕など、一切考える暇がないほどに。

「『バスターコール』だア!!!」

「『バスターコール』だア!!!———っ!!!」

「船を正門へまわせ!!? 出航準備!!? 海軍が!!! 攻めて来るぞ〜〜!!!」  
着々と近づいて来る絶望から逃れようと、彼らは只管に足を動かし続けるのだった。

「——今の何だ!! ロビンはどっから喋ってたんだ!!」

「……この扉の向こうだよ」

地下通路の最奥、端に通じる階段の前の空間で睨み合うルフィ達とルッチ達。

突如聞こえてきた放送に、ルフィが身構えながら問うと、ブラッドレイがやや呆れた様子で答える。

「が、言い切る直前にルフィ達が飛び出し、ルッチとブラッドレイに一斉に攻撃を仕掛ける。」

「『通すわけにはいかん』と、それくらい言わせる」

振るわれた拳と刃を防ぎ、ルッチがにやりと不気味に嗤う。

同じくブラッドレイも剣を抜き、目前に迫るリン、フー、ランファンに意識を傾ける。  
「どけよ、扉の奥にエレノアとロビンがいるんだろ!!!」

「邪魔しないで貰えるかい? あんたらに付き合ってる暇はないんでネ…!!?」

「いるだけだ。会えやしない、もう二度とな…」

何が何でも押し通ると意志を示すルフィと、それを嘲笑うルッチとブラッドレイ。

ビリビリと空気が張り詰め、重く肩にのしかかるようになったその時——両陣営は再び激しく激突し、凄まじい衝撃波が辺りに飛び散った。

「急げ!!? 急げ!!! 間に合わなきや意味がねエ!!? ん!!? 何か見えたぞ!!? これが出口か!!?」

そこから少し遅れて、ナミから鍵を預かったフランキーがどたどたと駆けこんでくる。

長い長い通路の先に見つけた部屋に、ようやく目的地が近づいて来たかと気合いを入れ直した時、彼の左右の壁にそれぞれ人影が叩きつけられた。

「うお!!?」

「ウガア!!!」

「コンチクシヨウガツ!!!」

壁にめり込んだ彼らは、ボコンツと自分の体を引き抜き、苛立たし気に相手を睨みつける。

突然の事に固まっていたフランキーは、ハッと我に返ると、それがルフイとリンである事に気付き声を上げる。

「麦わら!!! 糸目!!!」

「フランキー!!? 何しに来たんだコノ野郎!!?」

「おれを嫌うのも大概にしろてめエ!!」

「ルフイ、奴は今は味方ダ……とりあえずその怒りの矛先はあつちに変えとケ!!?」

色々と因縁がある男の登場に、つい敵意を湧き出させるルフイにフランキーが怒鳴り、リンが宥める言葉をかける。

再度、敵の方を見据えたルフイとリン、そして傍に戻って来たフー達と共に、フランキーは通路の前を塞ぐ二人の男達を睨みつける。

「ルツチにジーさんか……!!? あいつらに手こずってんのか!!? エレノア達はどこだ!!? 鍵を二つ持ってきた!!? 手エ貸すか!!?」

「いや……!!? それより、お前は妖術師達を追つてくれ!!? あいつらの後ろの扉から正義の門に行けれ!!? お二人さんはもう連れてかれタ!!?」

拳を鳴らし、戦意を昂らせるフランキーに、リンが首を横に振る。

五人がかりで一向に下せない敵、海軍と世界政府において比類なき強者の座に就く二人を見据え、この場で最も確実な方針を味方に告げる。

「おれ達があいつらを抑えるからよ!!!」

「スーパ―任せろ、バカヤロウ!!?」

「……………フフ」

「随分と……………熱く煮え滾っているな」



因縁を横にどかし、共闘の意思を見せるルフィとフランキー。

彼らを眺め、刀剣を弄んでいたブラッドレイは、心底愉しげに笑みを浮かべていた。

ざぶざぶと海を割り、ゆっくりと起き上がる支柱。

その上に乗った石の板が、徐々に徐々に水平になり、やがて継ぎ目が見えないほどしつかりと嵌まり、一本の通路と化す。

自分の前に姿を現したその端を眺め、スパンダムはご機嫌で肩を揺らしていた。

「ワハハハハハハ……!!」　とうとう開通だ!!?　笑いが止まらねエ………!!」

まるで自分の為に用意されたものと考えているのか、堂々と、そして傲慢な態度を見せつけて橋の上を渡る。

その際、端の上の一つも人影が見えない事に不満を抱き、再び電伝虫を起こして向こう側にいる者達に呼びかけた。

「おい!!? 『正義の門』の衛兵共!!」　出て来て敬礼はどうした!!?　英雄スパンダム様のお通りだぞ!!」

『あ……!!?　は……はい、直ちに!!?』

「……つたくバカ共め。……おいお前ら、あれを見ろ」

困惑の声を上げる海兵達だが、上官の命令に逆らう者はいない。

ばたばたと足音を響かせ、ようやく自分を迎える用意を始める彼らに舌打ちをこぼしつつ、片手で引きずるロビンと抱えるエレノアに声をかける。

「——あの小さな門こそが実質の入り口だ……!!! アレを通過する一步こそが、お前らにとつての天国と地獄の境界線!!! そしておれが歴史に名をキザむ瞬間なのだ!!!」

遙か先に見える門、ぞろぞろと何人もの海兵達が整列していくその場所を、スパンダムは真つすぐに目指す。

しかし、先へ進もうとしたその時、不意を突いたロビンが踵を返し、司法の塔に向けて逃げ出そうとした。

「おつとつとつとつとつとオ!!? 今更どこへ逃げようつてんだよ!!? ワハハハ」

見越していたのか、即座に振り向きロビンの髪を掴むスパンダム。

頭皮を引っ張られる痛みに藻掻き、苦悶の声を漏らす美女に恍惚とした目を向け、ねつとりとした厭らしい声を放つ。

「同情くらいしてんだよ、おれだって本当はよ……だが仕方ねエだろ? お前らには生きてる資格がねエんだ」

「ウウツ!!!」

「がるるるる!!!」

「痛エツ!!?」

どう聞いても馬鹿にしているとしか思えない言葉を吐き、無理矢理連行を続けようとすると、突如エレノアがスパンダムは脇腹に噛みつく。

スパンダムは痛みで思わず手を離し、ロビンは一目散に階段を目指し走り出す。

「あの女共……待ちやがれエっ!! てめエらい加減に!!？」

痛みを堪え、脇腹に噛みついたまま離れようとしないうエレノアを放り捨て、すぐさまロビンを追いかけて地面に抑え込む。

そのまま引き摺ってでも連れていこうと考えるも、ロビンは橋の縁に噛みつき、血が出るにも構わずしがみついていた。

「何て往生際の悪い女共だ!!! 忌々しい!!!」

「……にや、はははは……誰の為だと………思ってんだい………!!!」

スパンダムは驚愕と呆れを同時に露わにし、ロビンの脇腹を蹴りつけ、話させようと努める。

その時、力なく横たわっていたエレノアが声を上げ、肩を上下させる男に侮蔑を込めた冷たい目を向けた。

聞き返そうとしたスパンダムは、血濡れの天使が向ける冷酷な視線に、思わず背筋に震えを走らせ黙り込む。

「パパに対しての人質になるくらいなら……私は潔く死を選ぶ。だけどそうすりゃ……」

確実にとんでもない戦争の火種を産む事になる……………そうしたら、お前……………間違いなく死ぬよ」

「……………!!!」

「別にそうなくてもいいんだけどねエ……………そうなった時に負けるのは、あんた達”世界政府”だ……………!!!」

くすくす…と、亡霊のような気味の悪い笑い声を響かせるエレノア。

死にかけてだというのに、その自分の死さえも、目の前にいる男や自分の敵を道連れにする策に組み込んでいる。

真つ青な顔で固まるスパンダムに、エレノアがいたりと目を細め、続けて語る。

「お前はその瞬間、英雄どころか世界を終わらせた大罪人に成り下がる……………——いいのかなア…!!? そんな未来が、お前のせいで確実になっちゃうぞ…!!!」

くすくす、けらけら、けたけた。

男が迎える最悪の未来を愉しむように、不気味に嗤い続ける天使——いや、天使の姿をした化け物。

スパンダムはわなわなと震え、やがてきつく拳を握り締め、エレノアの元へ足早に近付いていった。

「う……………うるせエ!!! 何度言わせる!!! もう、お前らに希望などねエんだよ!!!」

小娘に怯えさせられた事、自分を愚か者のように吐き捨てられた事。

もう自分には後がないように言われた事への怒りを乗せ、男は血濡れの天使に、思い切り蹴りを叩き込んだ。

## 第214話 “狙撃の王様”

「おおオツ!!!」

「つしやアアツ!!!」

気合いの咆哮を上げ、ルフィとリンが猛烈な勢いで飛び出し、各々の得物を放つ。

高速で放たれる拳打と、目にも止まらぬ速さで振るわれる刃。

しかしルツチもブラッドレイも、それを難なく躲し逆に相手の懐に入り込む。

「『指銃』 “黄蓮”」

至近距離から放たれる、無数の拳。ゴムの体に打撃は通じぬも、凄まじい衝撃によりルフィは大きく吹き飛ばされる。

同じくリンも、自身を遥かに凌ぐ速さの剣撃により、咄嗟に構えた防御ごと弾き飛ばされた。

「麦わらア!!! 糸目!!!」

「若ア!!! …オノレ、小童ガ!!!」

どかん! と木箱に突っ込む二人に呼びかけるフランキー。

白煙の中に消える主の姿に、フーとランファンが激昂し刃を伴って飛び掛かる。しか

し双方向から振るわれる刃を、やはりブラッドレイは難なく防いでいた。

「いやいや、おれの使命はあの扉を抜ける事!!」

助けに向かおうかと悩むフランキーだが、彼らからの頼みごとを思い出し、首を振って駆け出す

しかしその瞬間、彼の前にはいつの間にかルッチが立ちはだかっていた。

「ムダだ」

「『ストロング』!!? 『ハンマー』!!!」

通路を塞ぐ敵を吹っ飛ばすため、鉄人は鋼鉄の拳を構え、一切の手加減なく叩き込む。だが、渾身の一撃はルッチの体を吹き飛ばす事が敵わず、それどころか一歩たりとも後退らせる事ができなかった。

「……!!? 何だ、ビクともしねエ!!? 『チャパパ』は十分吹き飛ばせたんだがな……」

「成程、フクロウを破ってここへ……だが残念、おれの道力は、奴の5倍だ」

直後、フランキーの腹にルッチの蹴りが襲い掛かり、くの字に折れ曲がる。

血を吐き、想像以上の重さに驚愕するフランキーに、ルッチは冷酷な目を向けて指を突き付ける。

「フクロウを倒せたのは見事だ。お前も十分超人の域にいる、だが……死ぬ」

人体を容易く貫く指が、フランキーめがけて振り下ろされようとする。瞬く間に迫る

窮地に、腹に走る痛みにも悶えながら、ぎよつと目を見開く。

回避する方法が全く思いつかず、迫り来る凶刃が自身の首を切断する——そう思った瞬間。

「『ゴムゴムの』……!!! 『JET銃』っ!!!」

突如、真横から放たれた衝撃が、ルツチを大きく吹き飛ばす。

思わぬ一撃を喰らった彼は、宙を跳んで体勢を整え、危なげなく着地し衝撃が来た方をぎろりと睨みつけた。

「……お前、一体!!! 何だその煙は!!!」

「『ギア2』!!!」

窮地を脱したフランキーは、全身から煙を噴き上げるルフィの姿に目を見開く。

明らかな異常で、明確に現れた強化。独自の方法で自身の戦闘能力を上昇させたルフィは、健在な敵を見据えて気炎を吐く。

「あんまり長エ時間持たねエけど、あいつを止めるから先に行け、フランキー!!? メイ!! お前も一緒に行ってくれ!!!」

異変を見せるルフィを見つめ、ルツチはにやりと不気味に嗤う。口元に垂れた血を拭くと、各々の得物を構えて再び青年達に相対する。

「は……はイ!!!」



「よし、麦わら!!? 何だか知らんが、それであいつをタタンじまえ!!」

「そうは…させんと…!!? 言った筈…!!」

駆け出すフランキーとメイだが、その前にまたルッチが立ちはだかる。しかも人の姿ではなく、メキメキと膨れ上がった異形の姿で。

初めて見る、獰猛な獣と混じり合ったその姿に、二人は思わずぎよつと息を呑む。

「ぐわー!!? てめエも能力者だったのか!!?」

「とんでもない奴ばつかりが立ちはだかりやがっテー!!」

「まずお前達を消そう!!?」

「あまり長居はできなくなつたのでね……君達の勇氣は賞賛に値するが——ここで死んでくれたまえ」

異形の前で立ち止まったフランキーに、さらに剣を振り上げたブラッドレイが迫る。

びくつと肩を震わせた彼が驚愕の表情で振り向き、前後の危険な敵を交互に見て、右往左往する様を狙っていた。

「闇の侠客、ここに参上……! じゅうめんまいふくむえいのごとく 十面埋伏・無影の如く!!!!」

しかしその寸前、割り込んだ影が刃を盾にし、ギイン!と甲高い金属音が鳴る。

自身の両腕を漆黒に染め、握りしめた刀剣も黒くさせたりんがにやりと不敵に笑い—

—その口に唾えた、いくつもの火薬の球を見せつけながら。

「お前の相手はこつちだヨ……!!!」

言つてから、リンはブラッドレイの胸に思い切り蹴りを放つ。

剣士の体が後ろに飛ばされるのと同時に、リンが放つた爆ぜ玉と、フーとランファンが投げた火薬がカッ!と光を放つ。

直後、炸裂した爆ぜ玉による衝撃波により、ブラッドレイは爆炎の中に呑み込まれる。そして煙の中で彼は、部屋の床に開いた大穴の中に落下していった。

「リン!!!」

「いいから……行け!!! あいつらの事を頼んだぞ!!!」

振り向くルフィにそう告げ、リンは迷わず大穴に飛び込む。その後をフーとランファンが続き、ひゆるる…と風切り音が遠く離れていく。

姿を消した仲間に背を向け、ルフィはルツチと再度向き合った。

「フランキー!!! メイ!!! あいつらを頼むつ!!!」

「はいつ!!!」

「スーパー任せとけ!!!」

ルフィの声にすぐさま応え、走り出すフランキーとメイ。

当然、そこへルツチが邪魔をしに動くが、それよりも早くメイが苦無を地面に突き立て、バシツと光を迸らせる。

「押し通りマス!! 『桃園仙術式目。三魄飛んで七魄霧散! これすなわち……』 // 地飛爽  
霊・火尖槍!!!」

床が動き、雷が弾けた直後、数本の炎の槍が生み出されルッチに襲い掛かる。

轟音とともにルッチの姿が炎に吞まれ、その横をフランキーとメイは全速力で抜けていく。

炎が晴れ、身体各所を焦がしたルッチが顔を出す。その顔は、非常に不機嫌そうに歪んでいた。

「あいつらの事は、フランキーとメイに任せた……!!!」

言ってしまったものは仕方がないと、ルッチは目の前の麦わら帽子の青年に意識を集中させる。

彼の放った一撃は重く、油断して何度も受けられるような攻撃ではなかった。警戒をしなければ、自身もどうなるかわかったものではない。

「ずいぶん息が上がってる様だが……!! その蒸気のせいじゃないか?」

「お前らに勝てれば、それでいい!!」

「成程……手強いな」

自身の命すら顧みない、不退転の覚悟を見せるルフイに、ルッチは実に楽しそうに笑

みを浮かべた。

「…フム、地下空間でここまで遠慮なく暴れるとは。まだ少し、君達を甘く見ていたかもしれんな」

がらがらと崩れ落ちる瓦礫の中、ぱつぱつと服に付いた誇りを祓いつつ、ブラッドレイが眩く。

暗い、得体の知れない無数の機械が転がる謎の部屋の中、彼は軽くため息をつき、自分と同じく落下してきた青年達を見やる。

「ふんツ!!! —— オイオイ……えらく深い所にも部屋があつたもんだナ。だが丁度いい。いやー、助かった助かった」

瓦礫を踏み砕き、ごきごきと首を鳴らしながら進み出るリン。

二人の家臣を左右に置き、彼はブラッドレイを見つめ返すと、薄目にしていた鋭い目を開き口角を上げた。

「あんなところで一緒に暴れたら、お互いに足を引っ張り合いそうだったもんな。河岸を変えてホントによかつタ……」

「………各個撃破のつもりかね?」

「まあ、こうするのが一番だと思つたんでネ。…付き合ってもらうぞ、  
『大總統』」

不敵に、個人に対しての宣戦布告を行うリン。

彼を見つめ、ブラッドレイもまた、実に愉し気に目を細め——キン、と自身の得物を構えてみせた。

「正義の門 “門衛” !!? 『海軍本部』護送船海兵!!? 現在CP9No.9スパンダム長

官が、司法の塔より最重要犯罪人を連行し、橋を渡られているところだ! 全員整列の上敬礼!!!」

「はっ!!!」

「ワハハハハハ!!? 見ろ、出航準備は万端だ、もう邪魔するものなど何もない!!!」

ずるずると、黒髪の美女を引きずり、血濡れの少女を抱え、一人の男が橋の上を進む。ニタニタと歪んだ貌は、人間の持つ醜さを全て詰め込んだかのように見え、引きずられる女達にいやおうなく嫌悪感を抱かせた。

「ニコ・ロビン、アイザック・エレノア。お前達に一ついい事を教えといてやろうか」  
スパンダムは語る。これまで彼が進んできた道には、無数の地雷が仕掛けてあるのだと。

通り抜ける際にそれらを全て動かし、追ってくる者が一人でもいればたちまち爆発が起ころうようにしてあるのだと。

「ワハハハ、だがその点心配すんな。階段に辿りつける奴なんざいねエよ!!?」

誰もお前達を助けに来る事はできないのだと、ゲラゲラと下品に笑いながら告げる。どんなに頑張つても無駄なのだ、ロビンの努力を全否定する。

だが、それでもロビンは、自身の表情を絶望で染め上げる事はしなかった。

「でも…門はくぐらない……………!!!」

「あア!!?」

「…『助ける』と…………言ってくれたから…!!!」

閉ざされた道の向こう、当の上から叫んだルフイの言葉が、彼女に力を与えていた。

どんな逆境が立ち塞がる事があろうとも、必ず傍に駆け付けると誓ってくれた仲間達の想いが、ロビンの心を守っていた。

「誰も来やしねエよバカ女!!」 どの時もこいつも「バスターコール」の業火に焼かれて

死ぬんだよ!!! 神聖なる旗を海賊に撃ち抜かれたという我々の赤っ恥さえ「バスター

コール」はかき消してくれる!!!

そんな彼女の想いを、スパンダムは苛立たし気に否定する。

罪を裁かれる事を、何より自分の出世を邪魔ばかりする女達を疎みつつ、甘い考えを抱く彼女達を絶望の淵に付き落とそうとする。

「20年前オハラで暴れた巨人海兵の一件の様……………!!?」

その言葉に、ロビンははっと息を呑み硬直する。

その隙に、スパンダムはロビンの襟首を掴み、力尽くで引つ張っていく。もう門までは、長い直線をまっすぐ進むだけだ。

『長官殿お急ぎを!!!』

「わアッてらうるせエな!!! 英雄だぞおれア!!!」

電伝虫越しに急かしてくる海兵に怒鳴り返し、ひたすら橋の上を歩く。

戦者ではない故に、若干息を切らせて罪人を引きずる彼は、絶句している彼女に下卑た目を向け、歪めた口で語り始める。

「てめエ……おれは何も知らねエとでも思ってたんだろ。元海軍本部中将ハグワール・D・サウロの乱行……!!? 貴様の母オルビアの事、あの時、オハラで何が起きたのか、おれは全部知ってる!!!」

「何……を……!!!」

「聞かされたからさ……!!! オハラという悪魔達の住む土地へ踏み込み、その大罪を暴き!!! “バスターコール”の合図を出したのは、当時『CP9』の長官だったおれの親父” スパンダイン”だからだ!!!」

自慢げに話されたその真実に、ロビンの思考は今度こそ凍りつく。

あまりにも救いが無いその事実、全身から抵抗する気力が失われてしまう。

「ワハハハ…あの時オハラにいた者達は全員死に絶えたもんだと、政府は逃げ出した一匹のガキを見落としていた」

スパンダムは一旦足を止め、へたり込んだロビンの顔を覗き込む。

悔しさと悲しみで、ぶるぶると震える美女の顔を見下ろし、醜悪な笑みを見せつける。「どうだった、8歳のガキが何度金目当ての大人に殺されかけた事か。寄って来る人間すべてが信用できない、安心して眠れる場所もねエ…：食う物もねエ、そんなクソみてエな20年、おれア想像もしたくねエ」

たまらず、ロビンの目からボロボロと雫が垂れ落ちる。

その隣で、地面に放り出されたエレノアは歯を食い縛り、スパンダムを刺し殺すような目で睨みつけていた。

「ハハ…!!? 泣く程不幸だったか。20年前…お前の首に賞金を懸けたのは、おれの親父だ!!! ワハハハ!!! 世界平和の為にな!!!」

「お前…：お前エ…：!!!」

「そして20年たった今…：!!? 息子のおれが、そのたった一人の生き残りを狩り…：!!? オハラは戦いは幕を閉じる!!? オハラは敗けたんだ!!!」

平和を理由に、ただ過去を解き明かそうとした者達を根こそぎ葬った男の息子。

それを自慢げに語る姿は、単純に殺しを愉しんでいる狂人のようにしか見えなかつ



た。

「まだ私が生きてる!!!」

「そのお前が死ぬんだろうがよ!!!」

ロビンが吠えたその時。

彼らが歩いてきた橋の向こう側で、突如爆発が起こる。

はつと目を見開いたスパンダムが目を凝らすと、煙に包まれ、黒焦げになった海パン姿の男が落ちていく姿が目映る。

「カ……カティ・フラム!!! 地雷か……!!! なぜあいつがここに!!!」

「フランキー……!!!」

「ああ……ワハハ!! だがかかった!!? バカめ!!! あのバカかかった!!!」

息を呑んだが、懸念していた追手が一人、荒海へ落下したことに安堵を覚え、哄笑をあげる。

エレノアが顔を歪め、堕ちていく男を凝視していると、スパンダムは彼女の翼を掴み、今度こそ離すまいと引き摺り歩く。

「こりゃいけねエ!!? 万全を期してよかった!!? 急ぐぞ!!! 来い!!! 船を出せ

海兵共、飛び乗るぞ——!!!」

『は……はい、了解。出航だア!!!』

また追いつかれてはたまらなないと、さっさと司法の島その者から離れる用意をするよう、電伝虫で命令を下す。

ばたばたと慌ただしくなる門の向こうに舌打ちをしつつ、スパンダムは悠々と歩を進める。

頭の中では、自分が英雄になった姿を夢想し、輝かしい栄光に期待を膨らませていた。

「よく見ておけ!!? この一歩こそ、歴史に刻まれる英雄の!!! 第一……」

いよいよ門が近づき、通ればだれも手が出せなくなる境界線を越えようとした、その瞬間——。

「ポガバ!!!」

突如、スパンダムの顔が爆炎に吞まれ、ロビンとエレノアを手放して吹き飛ばされる。投げ出され、横たわったエレノアとロビンは、倒れ込むスパンダムを見て困惑に目を見開く。

「何だア!!!? 何者だ!!!」

「橋には誰もいないぞ!!!」

「いないハズはない、どこかに隠れてるんだ!!!」

「探せ——っ!!!」

煙を上げるスパンダムを見て、海兵達が困惑の声を上げる。

しかし、銃を手に飛び出してきた彼らもまた、突然炎に包まれて、ドサリと倒れ込んでいく。

「うおい!!! 何やってんだためエら揃いも揃って」

「しかし長官、敵が確認できません!!!」

どこからともなく、自分達を狙撃している何者かがいる。

そう気づいたのはいいが、一体どこから狙っているのか見当がつかず、右往左往するばかり。

そしてやがて、双眼鏡を除いていた一人が、その狙撃手の居場所に気付いた。

「あ……いた……長官、あれを!!?」

「何だよ!!? どこだ!!!」

「司法の塔のてっぺんに……!!!」

「司法の塔だと!!! あんなトコから、何ができるってんだよ!!?」

そんなわけがあるか、と怒号を放つスパンダム。

貸せ、と海兵から無理矢理双眼鏡を奪い取り、彼が見ていた方向を覗き込んだ彼に。

遙か先、司法の塔の屋上で、指を天に突き付け、ポーズをとる仮面の男の姿が映った。

「何だあいつはア~~~~っ!!?」

## 第215話 “大總統”

強風の中、歌が響く。

自身を称える歌を、囚われの美女と天使を奮い立たせる歌を、司法の塔の上に陣取つた仮面とマントの男が歌い続けていた。

「この距離で風の吹く中………!!! 寸分狂わずおれ達を狙ってるのか!!! 誰だありやあ」

「長鼻君……!!?」

「にやは………にやはははは……!!! お見事、勇敢なる海の戦士よ………!!!」

驚愕の声を上げるスパンダムや海兵達とは真逆に、ロビンは涙を流し、エレノアは只管に彼の勇姿を称える。

類稀なる技を見せ、仲間を助けるその姿は——まさに英雄だった。

「みる!!? スゲエだろウチの狙撃手の力ア!!! クソザマーみやがれ!!! ロビンちゃんエレノアちゃん逃げろー!!!」

「歌う必要があんのか」

塔の下では、それぞれ難関を突破してきたゾロとサンジがいて、サンジがゲラゲラと

上機嫌に笑い、ゾロは困惑の目を向けていた。

「んぬおオのれエ〜!!! ぐばア!!?」

苛立ちの声を上げるスパンダムだが、その顔をまたしても爆発が襲う。

顔中火傷だらけの上、顔の形が変わる程に変形しており、生きて動いているのが不思議なくらいの有様となっていた。

「ツキショー!!! 何してんだてめエら、早くアレ撃ち殺せ!!!」

「やってますが銃弾なんて届きませんし、ましてや当てるなんて…!!! あの狙撃手!!? ものスゴイ腕ですっ!!!」

喚くスパンダムに、銃を持ったまま棒立ちになっている海兵達が返す。

どんなに優れた銃でも、ここまでの不利な状況の中で狙撃を成功させる謎の男の腕前は、敵であっても尊敬に値するものであった。

そして、彼らが動揺している隙に、ロビンがエレノアの襟を噛み、引きずりながら逃げ出した。

「ニコ・ロビンと『妖術師』が逃げます!!!」

「逃がすな!!! バカ共!!! 撃つていい!!? 殺さね工程度に撃ち殺せ!!!」  
「えエ!!?」

むちゃくちゃな注文を付ける上司に目を見開きながら、言われた通りに銃を構える海

兵達。

少しずつ遠ざかる背中に、無数の銃弾が食らいつこうとしたその瞬間——ロビンとエレノアの前に、何者かが立ち塞がる。

そして、突如地面が盛り上がり、銃弾を放ちまくる海兵達を下から弾き飛ばした。

「何だ!!? アレはア〜!!?」

銃弾が防がれ、生き物のように蠢く石に仲間がやられ、海兵達はどよどよと騒めく。

そんな中、窮地を脱したエレノアとロビンは目を見開き、自分達を守る大男と小柄な少女を凝視する。

「…あなた達」

「フランキー…!!? メイ…!!?」

「地雷程度平気なのよ……鉄だから」

「地雷はないですネ……長官さん」

銃弾をその身で防ぎ、にやりと笑うフランキーと、地面に手を突き青い電流を走らせるメイ。

鋭い眼光にスパンダム達が慄いていると、フランキーの懐から電伝虫が鳴らす音が聞こえてきた。

『フランキー君、メイ君、こちらそげキング』

「ムム？ この電伝虫ハ……」

『ナミから私が受け取った！ それよりその付近に小さな“赤い布の包み”が落ちてい  
るハズだ』

電話越しに聞かれ、辺りを見渡すフランキーとメイ。

二人はやがて、言われた通り落ちていいる赤い包みに気付き、中を広げてみる。

「おお……あるぞ」

『鍵が2本入ってる。君のと合わせて、鍵は全て揃うハズだ!!?』

「鍵全部……!!?」

『確かに届けたぞ』

驚愕の声を上げるスパンダムを他所に、そげキングからの連絡は途絶える。

信じられない、といった様子で喚き散らす声が聞こえてくるが、フランキーもメイも構わず、包みの中の鍵を広いエレノアたちの元に急ぐ。

「外れた!!」

1番、2番、3番……と次々に鍵を試し、偶然それぞれが最後に使った鍵が、手錠を外す。

両手が自由になった二人は、緊張の糸が切れたのか、よろよろとフランキーの腕の中に倒れ込んでしまった。



「バカなア~~~~っ!!! ほ……本物の鍵っ!!!」

「おいおいしつかりしやがれ」

「そんな……!! ……って事はおめエら!!! 司法の塔の『CP9』を全員倒したつての  
か!!? いや、そんなハズはねエっ!!! うまく奪つて逃げたな、さては!!? チキショー  
!!!」

尚も、自慢の暗殺集団が敗れたという事実を受け入れられず、ギャーギャーと喧しく騒ぎ続ける声が響く。

構わずメイがフランキーから子電伝虫を借り、司法の塔にいる者達に向けて声を発する。

「こちらメイ!!? 長鼻さん!!? ロビンさんとエレノアさんの手錠は外しました!!!」

『よしっ!!!』

「ウソツプ……!!?」

「長鼻くん……ありがとう!!?」

子電伝虫から聞こえてくる、仲間達の歓喜の声。

ロビンは目を潤ませ、遙か遠く、姿も見えないほどの遠くから自分を助けてくれた男に、掠れた感謝の声を捧げる。

『礼なら全てが済んでから、必死に鍵を集めた者達に言いたまえ。君達は紛れもなくル

「ファイ君達の仲間だ!!? もう思うままに動けばよい!!?」  
「…………ええ」

返された言葉に、ロビンは涙を拭うと静かに構えを取る。

すると次の瞬間、喚き続けていたスパンダムの体から腕が生え、強烈なビンタが幾度も食らわされる。

汚い悲鳴が上がると、今度はエレノアがボロボロの体を引きずり、パンツと合わせた両手のひらを地面に叩きつけた。

「行くぞ友よ……………命を……へ!!!」  
テルモビュライ・エノモタイア 炎門の守護者“!!!”

直後、端の表面に罅が入り、隙間から業火が噴き上がって海兵達に襲い掛かる。

炎に押され、逃げ惑う敵を睨みつけながら、エレノアもロビンも不敵な笑みを浮かべてみせる。

「存分に……!!? やらせてもらおうわ」

「よくもやってくれたな、三下!!!」

散々罵声を浴びせられた事、自由が利かないのをいい事に痛めつけてくれた事、自分が受けた痛みの全てを、そっくりそのまま返す。

枷から解放された女達は、これ以上ないほどに清々しい顔をしていた。

「オシ!!? おめエら急いでこっちへ来い!!? 脱出の準備は整えとく」

『了解した』

『早く下りて来い、そげキング!!?』

フランキーが電伝虫で呼びかけ、ゾロとサンジがそげキングに促す声が届く。

そげキングがそれにしるぶような声を返していた時。

—— 遙か遠く、島の端の鉄柵部分で、大きな爆発が起こったのが見えた。

「まずいな……そろそろ砲撃が来るよ。今のは試し撃ちつて所的那样だけど……」

「あんなのがバカスカ撃ち込まれちゃ、命はねエぞ!!?」

「渦も消えてます……!!」 門が全開になった事デ、海流が阻まれてできていた渦が全テ

……!! 軍艦でも沈みそうなあの渦がですヨ……!!」

爆煙を立ち昇らせる光景を凝視し、エレノアは顔をしかめて呟く。

隣ではフランキーがぎよつと目を見開き、メイが辺りの海を見渡して戦慄の声を漏ら

す。

海軍の軍艦でさえも通れない渦が消えた……それはつまり、軍艦を通す準備ができた

という事だ。

その時、先程よりも近い距離から爆音が響いてくるのが聞こえた。

そこは司法の塔の上部……そげキングがいた筈の場所だ。

「司法の塔が……!!? ウソップ君!!」

ガラガラと崩れ落ち、その見えない谷底へ真つ逆さまに堕ちていく塔の破片。

まさか、と最悪の想像をしたエレノアが、堕ちていく瓦礫を呼吸も忘れるほどに凝視していた時だった。

『フランキー、ロビンちゃん、エレノアちゃん、こっちは無事だ!!? 今すぐそつちへ向かう!!?』

「!! よかった…」

電伝虫から届いたサンジの報告に、ほつと胸を撫で下ろす。

同時に、あの砲撃から生き延びる豪運に呆れも抱きながら、エレノアは痛みが走る体に叱咤し、その場に無理矢理立ち上がる。

「じゃあこの場を何とか…おめエ戦力に数えていいの!??」

「勿論」

「あたぼうよ!」

「あなたは休んでくださいお願いだから!!」

「ごふつ、と血を吐きながら敵を見据え、挑戦的な言葉を吐くエレノアにメイが目を吊り上げる。

だが、彼女の負傷具合に気を配る事なく、そげキングに吹き飛ばされた海兵達が引つ込み、新たに別の海兵達がぞろぞろと橋の上に飛び出してくる。

「急げ兵士共!!! 砲撃が本格化する前に!!!」

「はっ!!!」

もう、重傷者だの何だのと気にしている場合ではない。

全員が戦う意志を見せなければ、次々になだれ込んでくる敵に捕らえられ、振出しに戻る末路しか見えない。

「橋の向こうに『護送船』があるな…あれが脱出のカギだと思わねエか？」

「あの船を奪う他に助かる道はなさそうね」

「そんじや奪いますか、海賊らしく」

「強奪でス!!!?」

拳を鳴らすフランキーと、腕を構えるロビン。

その隣で、エレノアとメイが掌を合わせ、バチバチと青い光を走らせ、闘志を見せてける。

そしてついに、数十人の海兵達が罪人の奪還のために動き出した。

「かかれエ〜!!!」

『御仏の加護、見せてやろう!』  
ごしょうさん・しやかによらいしよう  
 五行山・釈迦如来掌!!!」

めきめき、と軋みを上げ、黒く染まるつたりんの腕が、ブラッドレイの顔面に向けて

振るわれる。

しかし、ブラッドレイはそれを剣の峰で防ぎ、刃を傾けて受け流した上、身体を回しながら背後から一線を振り下ろしてきた。

「ぬおオ!!？」

咄嗟に剣を盾にし、攻撃を防ぐ。

ギャリン！と凄まじい金属音が響き、無数の火花があちこちに飛び散る中、ブラッドレイは幾度も斬撃を見舞う。

リンはそれを必死の形相で防ぎ、躲し、最後には蹴りを放って無理矢理距離を取った。

「チクシヨォー!!!」 思ってた10倍の化け物だったア!!!」

後退するリンを、ブラッドレイは執拗に追い、責め立てる。

そこにフーとランファンが参戦し、死角からの無音の攻撃を放つが、ブラッドレイはまるで後ろに目がついているように、難なく奇襲を回避し反撃してみせる。

「うヌ……!!？ よもや『大總統』なる男がここまでとハ……!!!」

「……拍子抜けだな、シン国の戦士がこの程度とは……」

ざざつ、と地面を滑り、着地するフートランファンを見やり、ブラッドレイは表情こそ変えないものの、詰まらなそうにため息を吐く。

構えも取らず、だらりと剣を垂らし、落胆の目を三人に向けて呟く。

「あれだけの啖呵を切って出てきたのだから、もう少し私の退屈を紛らわせてくれればと思っただけだが……残念だ。実に残念」

「黙レ!!!」

じやきん、とリンは懐から小さな刃を取り出し、あらゆる方向に飛ばす。

刃は回転しながら宙を舞い、弧を描きながらブラッドレイに迫る……が、やはり簡単に剣で防がれ、弾かれてしまう。未来予知でもされているようだ

「チツ……全然隙が見当たらないネエ……!!? どんな「覇気」持ってやがるんだ!!!? あの野郎!!!」

「人間業ではない………相当な手練れである事は間違いないガ……」

三人による攻撃に、隙間は一切なかった。

彼に長く仕える二人は、リンの動きに自分達の動きを完全に合わせ、攻撃を一切緩ませなかった。

だというのに、最凶と謳われるこの男を崩す事は叶わずにいた。

(そもそも何だ、コイツの気配は……!!! コイツ一人の中に無数の人間の気配が詰まっているみてエだぞ………コイツ一人で海軍の精鋭数十人分の実力がある事なのか……?)

いや………それとも違う……!!!)

剣を振るい、責め続けながら、リンは冷や汗を垂らして思考する。

自分が持つ、あらゆるものの気配を感じ取る力——それを使って尚、目の前の男の正体は全く掴めない。

まるで、人の姿をした得体の知れない化け物のようだ。

(何にせよ……コイツをルフィ達のところに行かせちゃならねエ!!?)

『闇の侠客ここに参上……!』 〃十面埋伏・無影の如く〃!!!

今度は両拳を黒く染め、目にも止まらぬ素早い連撃を放つ。

拳が放たれる度に、剣で防がれ甲高い金属音が鳴り響き、火花が辺りに飛び散る。しかしそれでも拳を止めず、リンは老剣士を歯を食い縛って責め続けた。

「おおおおおおお!!」

「仲間の為に危険な敵を足止めする……合理的な上、人間として実に好ましい自己犠牲の精神だが——…何分、実力が伴っていないな」

雄叫びと共に殴り続けていたリンの体が、突如仰向けに弾かれる。

困惑したまま、視線を前へと向ければ、剣を横薙ぎに振るった体勢で止まったブラッドレイの姿が目映る。

そして自分は、両腕を左右に開かれた無防備な状態だ。

「——まずは一人、永遠に眠ってもらおうか」

「しまっ……!!?」



「っ!!!」

「若ア!!!」

決定的な隙を見せてしまった自分に、ブラッドレイが恐るべき速さで迫り来る。

フーとランファンがハッと息を呑み、慌てて主を守ろうと駆け寄るが、明らかに刃が体を裂く方が速い。

ここで終わりなのか——一瞬の間に、リンが悔恨に顔を歪めた瞬間だった。

「——いやいや…お前みたいにな奴にや、まだまだ死なれちや面白くねエだろ」

ガアン!と。

リンとブラッドレイの前に何か突き刺さり、ブラッドレイがすぐさま後退つたのだ。

「…!! 何ダ……」

「ガツハハハハハ!!! どこに行きやがったかと思つて探してみりや、なるほどお前さんが大当たりのくじを引いたつてわけか!!!」

何事か、と尻餅をついてから我に返つたリンは、自分の命を救つた何か、やたらつるつるとした人の腕である事に気付き、息を呑む。

そして、大きな嗙い声とともに歩いてくる、サングラスをかけた男——グリードの方へ振り向き、眉を顰めた。

「あんタ……………たしか」

「その兄ちゃん、悪いがどいてもらうぜ……………そいつはおれの獲物だ」

「いや獲物とか言ってる場合じゃないだろ!!？」 お前腕どうしちやって……………——!!？」

よく見れば、男の片腕は半ばから断たれ、ぼたぼたと血が垂れている。

その状態で戦う意志を見せているグリードに、思わず制止の言葉を吐いていると。

その断たれた腕が、ものの数秒も経たないうちに完全に修復されていく様に、はっと目を奪われる。

「不老……………不死……………!!！」

「さア、そのジジイ。おれのものに手エ出して、思いつきりブツ壊してくれちやつた落とし前……………きっちりつけさせてもらわねエとなア」

言葉を失い、心なしか目をぎらつかせるリンを放置し、グリードは悠々とブラッドレイの前へと進み出る。

顔は嗙っていたが……………以前に苦汁をなめさせられた男に向けられた目は、背筋が震えるほどの濃厚な殺気を放っていた。

「……………最初から全力で、という事か。また真正面から猪武者となつて来たらどうした

ものか考えていたが…杞憂だった様だな」

「ほざけ!!! あアそうだ……前とは違うぜ、前とはな」

ガチガチと歯を鳴らすグリードの全身が、漆黒の光沢を帯びていく。

鋼を越える硬度を誇る皮膚に、何でも引き裂く鋭い爪……異形の姿に変わりながら、爛々と輝く眼光を老剣士に向ける。

「ギアやろうぜ!!! 第2ラウンドの開幕だ!!! ビビってシヨンベンチビらすんじゃねエぞ、バケモノジジイ!!!」

「……………やれやれ、諦めの悪い男達だ。いいだろう——最期まで付き合ってやる」  
悪態共に放たれたグリードの爪が、ブラッドレイの剣と激突し。

最凶同士の戦いが、再び始まった。

## 第216話 “強欲（グリード）”

「おらああああああああ!!!」

大地が轟くかのような雄叫びと共に、漆黒の異形が爪を振るう。

鋭く尖った、鋼よりも固い一撃は老剣士の剣に激突し、とてつもない衝撃波を辺りに撒き散らす。

危うく、余波だけを受けたリンとフー達が吹き飛ばされかける程だ。

「!!! 何という激突!!!」

「あの腕……『覇気』じゃないネ。間違いなくエレノアの錬金術に関わる何かだナ」  
息を整える彼らの前で、グリードが猛烈に、そして執拗に相手を攻め立てる。

ガン、ゴン、ガギン!と鉄の塊同士がぶつかり合うような鈍い音が幾度も響き、その振動がそこら中に伝わっていく。

「ふむ……件のダイヤモンド並みの硬さの皮膚か。これは確かに厄介だ」

「ガツハハハ!!! 今度は全部おれの優勢だ!!! おれのものに手エ出して、おれ様にケンカを売った事を後悔しやがれ!!!」

以前に海列車で受けた敗北、その屈辱を糧に、全身を硬化させ、一切の隙間をなくし

た状態で挑む。

鉄以上の硬さを誇る、炭素結合による「最強の盾」を有した今の彼に、二度目の敗北を喫する理由など存在しない筈であった。

「浅いぞ、小童」

しかしふと、ふっ、と鼻で笑う音が聞こえたと思つた直後。

ズバツ、とグリードの肩から胸にかけて一筋の線が走り、続いて夥しい量の鮮血が噴き出した。

「ぐ……オ……!!! てめエ……?」

「ダイヤモンドを斬つた事はないが……できないわけではない。やった事がないというだけだ」

冷たい、氷のような視線を向け、ブラッドレイは膝をつくグリードに語る。

そして——ボツ、と空気を爆ぜさせながら急接近する。

そこからはもう、ブラッドレイによる一方的な蹂躪が始まった。

電光石火の軌跡を描く斬撃が次々に振るわれ、グリードの急所を容赦なく攻め、瞬く間に数多の傷を刻んでいった。

「ぐ……うおオオオオ!!!」

「——さて、いい加減、この何の面白みもない時間にも飽きてきた。終わりにしようか、

「強欲〃殿」

必死に両腕を突き出し、刃を防ごうとするグリードだったが、斬撃は途中で曲がっているかのように、防御をすり抜け体に食らいついてくる。

そして、ギラリと目を光らせたブラッドが剣を振り上げ、自身の首を狙っている事に気付いて顔を強張らせた瞬間。

「グリード!!! 目を塞げ!!?」

不意に聞こえた声に、グリードは咄嗟に目を塞ぐ。

直後、グリードとブラッドレイの前で、視界の全てが真っ白に染まるほどの閃光が迸った。

「〃二盃吼〃!!!」  
リヤンペーコー

突然の事に、片腕で目の前を覆ったブラッドレイ。

そこへ、光の中を容易く駆け抜ける二つの影が接近し、強烈な拳打と蹴撃を食らわせ、老剣士を吹き飛ばしてみせる。

強敵との距離が離れ、グリードはすぐに後退し、戻ってきたフーとランファンにやりと笑みを返した。

「よオ、助かったぜ爺さんに嬢ちゃん」

「うるさい!!?」

「若の命令ゆえだ!!! 勘違いするでない!!!」

気さくに話しかけるものの、フーもランファンも仮面の奥で目を吊り上げ、凄まじい剣幕で怒鳴り返す。そこへ、リンがにやにやと意地の悪い笑みを見せた。

「フーじい様つたラ………さつきからずっとハラハラしてたくせ二」

「やかましいですぞ若コラア!!!」

「主人に吐く言葉じゃないネ」

茶化されたフーが今度はリンを睨み、ランファンも何か言いかけ、少し悩んで口を閉ざす。

窮地にありながら、異形と共にけらけらと笑う主に臣下達が呆れた目を向ける中、ガラガラと瓦礫が崩れる音が届く。

その音の元で、ブラッドレイは一切痛みを訴える様子を見せず、平然とリン達を見やった。

「シン国の王族と戦士が……世界政府の任務を邪魔立てするとは思ってもよらなんだ。物見遊山にしては少々おいたがすぎるのではないのか?」

「何だよ、知ってたのかイ………あいにくだガ、ああいうのを見せつけられて大人しくしてるほど、おれもあいつらも心が冷めた人間じゃないんだヨ」

冷たく見下ろしてくるブラッドレイに、リンは不敵に笑いながら返し、立ち上がる。

フーとランファン、グリードも立ち上がり構える中、刀剣を構えたリンは薄く細めた目で、必ず倒さなければならぬ敵を見据える。

「仲間の為に命を懸ける女、仲間の為に世界を敵に回す男、仲間の為に災害にさえ立ち向かう奴ら………そういう奴らを死なせるわけにやいかないのヨ、未来の皇帝としてハ  
!!!」

「……お前」

「王は民なくしてありえない!!! 民が王の為に命を張るなら、王は民の為に命を懸けるもノ………おれが作りたいのはそういう国だ」

グリードは思わず、先ほどまでの飄々とした雰囲気を消し、熱く語り出した男を横目で見つめる。

視界に映ったその横顔には……何処か、羨望のような感情が滲んで見えた気がした。

「だから……それを邪魔するお前のような奴は、ここで完膚なきまでにブツ潰す!!!」

「……クククク、ガハハハ!!! ガツハツハツハツハ!!! よしきた、おれも付き合ったらア  
!!!」

「煩い奴メ………気を引き締めんカ!!!」

闘志を燃やすリンに呼応されたように、グリードも爪をギヤリギヤリと研ぎ澄ませて吠える。



フーもランファンも鬱陶しそうにしながら……隣で戦う事に、拒否を示す事はしなかった。共に戦う許しを、行動で示していた。

「行くゾ………おとおおおお!!!」

「なんとも青臭い理想だ………覚悟は本物と受け取るが——」

咆哮を上げ、一斉に四方向から向かい、各々の武器を構えるリン達。

卑怯だなんだと拘る気は毛頭ない、誰か一人でもこの男を排する事を考え、決死の形で踊りかかる。

ブラッドレイはそれをじつと見つめ、フツとため息をこぼすと。

「あいにく、実現の為にはちと現実が見えていない」

キン……と。

甲高い金属音とともに振るわれた刃が、大きな弧を描く。

そしてその直後、左右から刃を突き立てようとしていたフーとランファンの腹から、どばつと鮮血が迸った。

「フー!!! ランファン!!!」

「爺さん!! 嬢ちゃん!! てめエ…死ね!!!」

鮮血を顔に浴びながら、グリードは地面が抉れるほどの跳躍を見せ、ブラッドレイに迫る。

だが、放った爪が敵の顔に触れるより前に、銀の閃光が目の前を走る。

直後、グリードは片腕と片足、そして片目を叩き斬られ、自らが流した血の海に沈められてしまう。

「グリードオオ——!!!

「力がなければ、民どころか己すらも守れない。全てを手に入れ、懐に置き続ける事などできようはずがない。——強欲はいずれ己の身を滅ぼすぞ」

臣下と味方の異形を襲った凶刃を目の当たりにし、冷静さを失ったリンが凄まじい勢いで走る。

倒れ込む二人に手を伸ばそうとしたその刹那、突如彼の腹に衝撃が走る。

見下ろせば、ブラッドレイが突き出した刃が己の腹を貫き、背中に切先が突き出して、いる様が目に映った。

「お、前………!!!」

「残念だが君はここで終わりだ……安心したまえ、君の仲間は今全員私が同じ場所へ送ってやろう」

ずぼつ、と乱雑に刃を抜き、リンの体をその場に打ち捨てるブラッドレイ。

彼はそのままリン達に背を向け、やれやれと肩を竦めながら、上の階に続く通路に向かって歩き去っていく。

大きな血の海に沈む四つの人から、一切の関心を失って。

「……おい、小僧………まだ息はあつか……!!?」

「ゲフツ……おオ………あるヨ……」

老剣士の背中が遠くなる中、身体を半分ばらばらにされたグリードがリンに呼びかける。

リンは大きな血の塊を吐きながら、震える体に叱咤しグリードに目を向ける。

「ガ……ガツハハハ………しくじったぜ……こりゃあ、前と全く同じじゃねエか………ガツハハ、クソツタレが……!!」

「……!! あいつら………手当、して………やら………ねエと………!!!」

「オイオイ………てめエが死にかけてるつてのに、呑気な奴だぜ……!!!」

自分と同じく、血の海に倒れるフーとランファンに向けて、リンはずると身体を引きずって近付こうとする。

重傷を負い、真面に動けないというのに、他人の命を気にかける彼のその姿を眺めていたグリードは、やがてため息交じりに口を開いた。

「………お前が助かる方法が一つだけあるぜ……賭けだがな……」

唐突な提案に、リンは這いずるのをやめてはっと目を向ける。

仰向けに倒れたまま、荒い呼吸を繰り返すグリードは、苦渋の決断なのか険しい顔で

話を続ける。

「この方法を選べば……お前は大きく寿命を削られる羽目になる………そんなでお前は人間じゃなくなる……おれと同じバケモノの仲間入りだ……!!? 最悪死んだ方がマシに思えるかもな!!! それでもいいのなら………」

「やる」

やや躊躇うように語ったグリードに、リンは話が終わるよりも前に頷く。

グリードは一瞬固まり、自分を真っ直ぐに見つめてきているリンにぎよつとした視線を返す。

「ああ!!!? 早エよ!!! もちつと悩めよ、今後延々続く問題だぞ!!!」

「ここで逃げたら!!! おれの為に命懸けてくれたあいつらに顔向けできねエだろうが!!!」

「……!!!」

信じられない、といった様子で喚くグリードに、リンは鬼気迫る表情で吠える。

その剣幕に、血反吐を吐きながら凄まじい目を向けてくるリンの気迫に、グリードは思わずぐつと息を呑んでいた。

「力が……!!? 力が欲しい!!! あのだジイに一矢報えて………臣下も仲間も……!!? みんなを守る力が!!!」

「…ガハハ、みんなと来たか。そりや……ずいぶん強欲なこつた」

「強欲で………何が悪い!!!」

自分に通じる何かを感じ、感嘆の声を漏らすグリード。

彼の揶揄うような声に、リンはゲホゴホと咳き込みながら、涙を流して懸命に吠える。  
 「50万人の民も!!! たった二人のかけがえない臣下も!!! まだ恩を何も返せてねエあ  
 いつらも!!! おれは全部守りてエ!!! じゃなきやおれは——王になれねエ!!!」

脳裏に浮かぶ、故郷の一族。近くで血の海に沈む臣下達。そして……この島で今も  
 戦っているであろう、麦わら帽子の青年とその仲間達。

彼らの笑顔が、瀕死の重傷を負った若者を奮い立たせ、立ち上がらせようとしていた。

「ガハハ………ガーツハツハツハツハ!!! いいぜ………面白エ、面白エよお前………!!! い  
 いぜ………力を貸してやらア!!!」

突如、グリードは上機嫌に笑いだし、残った腕を掲げる。

くわっ、と鋭く尖った爪を広げ、彼はいきなり、それを自らの胸に突き立てずぶずぶ  
 と沈め始める。

「後で泣いて後悔したって遅エぞオラア!!!」

ゲラゲラと笑いながら、グリードはゆっくりとまた腕を上げていく。

その手には——血のような赤色に輝く怪しい宝石が握られており、まるで脈動のよ

うに輝きを放つ。

それをグリードは、ぽーんと放り投げる。

ざらざらと崩れていくグリードの体の上で、宙を舞ったそれは、ゆつくりとリンの上へと移動する。

「……覚悟の上だよ、ばか野郎!!!」

リンは渾身の力で体を仰向けにし、大きく口を開く。

その中に、赤い宝石——賢者の石が入り込んだ次の瞬間、彼を中心に赤い放電が迸った。

「……なかなかしぶとい………気品とはまるで無縁の皇族だな」

背後で起こった放電に、ブラッドレイの足が止まる。

じろり、と面倒臭そうに歪んだ目が向く先で——ズシン、と一人の男が、地面を踏みしめる。

「——どうだい……気分は——最悪ダ。何だつてんだこのクソうるせエ空間ハ……鬱陶しくて仕方がねエヨ」

よろよろと覚束ない足取りで、老剣士の方へと進み出る糸目の男。

その口から二種類の声を発し、恐ろしく機嫌を悪くした彼は、ガチガチと尖った歯を噛み合わせ、ぎろりと鋭い目を老剣士に向ける。

「だが……まア……賭けには勝ったから別にいいカ——ガッハハハハ!!!」  
「……おかしなコンビができ上がったものだ」

リンの顔のまま、リンの声とグリードの声が交互に聞こえてくる。

歪な怪物となつて蘇つてきた敵を見据え、ブラッドレイはまたもや呆れたため息をついた。

「だが何度やつても同じ事……いい加減に飽きた。次はもう何もできぬよう、即死で終わらせてやるとしよう」

「そりゃこつちの台詞だよ——覚悟しやがれ、クソジジイ」

同じ敵の相手はもういやだ、とばかりに剣を握り直すや否や、どつ、と凄まじい殺気を辺りに広げるブラッドレイ。

濃厚な殺意を撒き散らす彼を前にして、バキバキと両腕を硬化させたリンにしてグリードである男は——不意に、自身の懐に手を突っ込む。

直後、彼は取り出したあるものを放り、瓦礫が散乱する地面に思い切り叩きつけ……大量の白煙を辺りに広げさせた。

「煙幕………小癩な、この程度の小細工で」

ブラッドレイが眩く中、白煙はあつという間に視界の全てを覆っていく。

深い穴の底の闇とは真逆の、全てが白く染め上げられた空間の中、詰まらなそうに鼻

を鳴らす。

「これは……ただの煙幕ではないのか。そこらのものよりもずつと濃い………ずいぶん長く漂っているな。まあ、それでも無意味である事は変わらないのだが」

白煙の中、ブラッドレイは無意味となった目を閉じる。

五感の一つを自ら封じ、他の感覚を研ぎ澄ませた彼は、突如自身の右横に向けて刃を振るった。

「君達の気配など、いくらでも辿れるのだよ………右眼を使うまでもなくね」

「がハッ……!!? くソツ……お前も使い手かヨ……!!」

突き出した刃は、寸分の狂いもなく男の腹を裂き、血飛沫を上げさせる。

苦悶の声を漏らすリンだが、傷口を押さえるとすぐさま飛び退り、再び白煙の中に姿を消す。

真つ白な視界を見渡し、やがてブラッドレイは嘆息すると、とある方向に向かって歩き出す。

「いつまで逃げ続けるつもりかね? どれだけ攻めて来ても……—」

「——おらア!!」

「ムダだと言うのに……」

踏み出した方向に剣を突き出し、手応えを感じると共に無数の斬撃を振るう。



鮮血が白煙の中から飛び出し、びちゃびちゃと飛び散るが、それでもリンとグリードは倒れず、白煙の中へと身を隠した。

「どうだ、不死身の怪物殿。再生が追いつくまい…君がやたら我武者羅に攻めてくる事もだが、深い傷であればその分時間もかかる。いい加減にしてくれたまえよ」

カツ、カツと靴音を鳴らし、地下深くの空間を気配を頼りに進む。

点々と続く血の臭いと共に、少しずつ弱まっていく気配を感じ取り、自分から逃れようとしているそれを追いかける。

邪魔な瓦礫を登り、退かし、やがて見つけた行き止まりのような狭い空間に辿り着く。そこに、自分が追っていた気配はうずくまっていた。

「そこか……!!? もう終わりにしてやろう——」

もう、動く余力すらないと見える二つの気配。

さっさとその苦しみを絶ってやろうと、首があるであろう一に向けて刃を振るおうとしたその時だった。

ブラッドレイは自らの両足と片腕に、冷たい刃が突き立てられる感覚を覚えた。

「ぐっ……何だと……!!?」

はっ、と目を見開き、よろめいたブラッドレイは下に目を凝らす。

そこに、少しずつ晴れ始めた白煙の中から、息も絶え絶えになりつつも、必死に刃を突き立てるフーとランファンの姿を見出す。

「ぐっ……貴様!!!」

「若の覇道を支えるのが、我らの役目……立ちはだかる敵を排除する為……この身を賭せるならば……本望……!!!」

ぐらり、と身体を傾がせながら、自身にしがみつく二人を引き離そうと藻掻く。

その際ブラッドレイは、自分が追っていたはずの場所に転がる、二本の血濡れの腕の存在に気付いた。

——右手の気配を囿に……私をここへ!!!?

その為に自らの生命活動を無理矢理抑え込み、自らの気配をも限界まで薄くしたのか!!!

視線を戻せば、自らを足止めする二人の腕が、それぞれ失われている事に気付く。

自ら断ち切った腕を布で縛って止血し、激痛をもたもたしていないように半死半生の体でそこまでの事を成したという事実、言葉が出なくなつた。

「おおおおおおお!!!」

そして、猛然と近付いてくるその気配に、ブラッドレイははっと目を見開き振り向く。

地下空間の端から、硬化させた右腕を構えて向かってくる男が、気合いの咆哮を上げて白煙を蹴散らして突き進んでくる。

「——見事」

思わず、ブラッドレイの口から称賛の声が漏れ出す。

抵抗する事すら忘れ、棒立ちになった彼の元に、リンとグリード双方の力が籠もった一撃が叩き込まれた。

「『國志無双』!!!!」

ドツ!!と、渾身の一撃がブラッドレイに炸裂し、その体が勢い良く宙を舞う。

老剣士は背後の壁に激突し、一面に大きな罅を入れ——直後、崩壊した瓦礫と、その奥から流れ込んできた海水に呑み込まれる。

怒涛の流れでやってきた海水は、がくりと膝をついたリン達とフー達をも呑み込み、地下空間の全てを埋め尽くしていった。

## 第217話 “砲撃開始”

ドドド……と、地下通路内に響き渡る震動。

薄く亀裂が走った長い通路の一角で、床の一部が不意にぼこつと盛り上がる。

がたがたと揺れていたその箇所から、やがてのそりと、老人と少女を担いだ糸目の男が顔を覗かせた。

「はア……はア……我ながらツイてるぜ、いい具合に亀裂が走つてて出られるとハ……だが、大分向こうから離れちまったナ」

よっこらしよ、と通路内に身を乗り出し、フーとランファンを下ろすリン。

ごきごきと首を鳴らし、自らア掘り進んできた道を見下ろし、はあ……と大きく安堵の息を吐く。

「ど……どうダ、グリード……おれと組んでよかった口——あア……最高の結果だぜ……スッキリしたア……ガッハハハハ」

一瞬で交代し、豪快に笑うグリード。

一つの体に二つの精神、何ともややこしい状態になったリンとグリードは、ややあつてから腰を浮かし、臣下達の方へ視線を向ける。

「おい……フー!!? ランファン!!? まだ息はあるだろうナ!!?」

「……わ、か……」

「お前らの機転のお陰で助かった……ありがとうナ」

ぐったりとした二人を見下ろし、リンがくしゃくしゃに顔を歪めて告げる。

全身に刻まれた傷、そして失われたそれぞれの腕……善戦の証というべきそれを見つめ、リンは深々と頭を下げる。

「若……我らの事は置いて行きなされ」

「この傷でハ、とてもこの先までついていけハ……」

「黙レ!!! ……生き物みな、生きてなんぼだ口。死ぬだのムリだノ、泣き言言うのは全部終わってからにしやがレ——そういうこつた」

弱々しく告げるフーに一喝し、リンは二人ともまとめて担ぎ上げる。

やや覚束ない足、疲労がほとんど引いていない身体を引きずり、水音が徐々に近づいている穴から少しずつ離れる。

「氣イ抜くのは全部終わってからだ。あのムカつく野郎の顔面にドギツイの喰らわせてから、みんなで笑って帰ろうや……ガハハハ!! ガツハハハハハ!!」

ぼたぼたと、未だ塞がりきっていない傷跡から血を垂らしながら、グリードは上機嫌に笑い、一味が待っているはずの通路の先を目指すのだった。

だが——彼らを狙う悪夢は、遠のくどころか着実に、麦わらの一味のすぐ傍へと迫りつつあった。

『「バスターコール」発動!!! 標的、海賊「麦わら」のルフィとその一味約60名!!!』  
 幾度も響き渡る轟音と、その後が続く爆発音。

政府が作り上げた正義の施設が、次々に放たれる砲撃によつて、跡形もなく崩壊させられていく。

その顔に泥を塗つた下手人達を葬る為、悪夢は少しずつ近づいていた。

『——なお、大将「青キジ」との内約により「ためらいの橋」に確認済み、罪人ニコ・ロビンのみ標的外とする!!? 現状把握不要!!? 「司法の島」エニエス・ロビー、その全てを破壊せよ!!!』

「急ぐぞ!!! 君達!!! ぐずぐずするな!!!」

通路を全速力で進みながら、そげキングがゾロとサンジに告げる。

塔は既に砲撃を受け、とうに跡形もなくなっているに違いない……この通路が攻撃を受けるのも時間の問題であつた。

が、そう語るそげキングは即席の担架に乗せられ、ゾロとサンジに運ばれているだけ

なのだから威厳も何もあつたものではなかつた。

「偉そうに喚くなてめエ!!!」

「満身創痍だ……!!? 肋骨が全部折れた!!? 6本」

「もつとあるから大丈夫だ……全く世話のやける」

司法の塔が砲撃を受ける直前、意を決して飛び降りたそげキングだったが、誰にも受け止めてもらえず、直地も失敗しこの様になつていたので。

「——とここで君達! 私の新兵器カブトの秘密を知りたいか!!? 説明しよう!!?」

そげキングの持つ武器「カブト」とは!!?」

「黙つてろてめエ、走らずぞ!!?」

運んでもらつている立場にありながら、どうでもいい情報を喋ろうとする男にゾロもサンジも目を吊り上げて怒鳴る。本気で置いていこうかと思つたくらいだ。

「勘弁してくれ、肋骨が全部折れたんだ……じ……10本……」

「もつとある」

弱々しく、瀕死の状態になつている事を訴えるが、二人とも真面目に取り合つてくれない。ちゃんと運んでくれるだけましであつたが。

その時、通路を走る二人と運ばれる一人の背後から、猛然ともう一つ、足音が響いてくるのが聞こえた。

「やーやーお三方、無事でよかったよかった!!?」

「うお!!? リン!!? 見ねエと思ったらどこから…!!」

「てめエ今まで何してやがった!!!」

「やだなーもウ、〃大総統〃とかいうヤバイやつと戦ってたんだヨ!!! 見口!!? おれとコイツらのこの奮闘の痕!!!」

「そりゃ悪かったよ…!!?」

フーとランファンを両肩に担ぎ、傷だらけの姿を見せつけるリンに、サンジがやや面倒臭そうに返す。

その時、担架の上でリンを見上げていたそげキングが、自分の欲知る一人がいない事に気付きハッと目を見開いた。

「お…おい、グリードは?!」

「おう、ここだ」

「は?」

そげキングがそう尋ねた直後、リンがくるつと振り向いて答える。

しかし、事情を知らないそげキングは、知った声がどこからともなく聞こえただけで姿が見えない事に、困惑の表情を浮かべる。

「ん? ん☒ なんか今、どこかからグリードの声が聞こえたような…」



「細かい話は後ダ！ とにかく走るんだ!!」

この非常時に呑気に話している場合ではない、と三人とも速度を上げる。

しかしその時、前方を見据えていたリンがふと、違和感を抱き眉間にしわを寄せ始める。

「——つてかサ………何だか向こうから水の音がしないかい？」

「わ…私も聞こえるぞ!!」

「あア？ 何言つてんだ」

そげキングと共に、進行方向から届く妙な音を聞いたと告げられ、ゾロもサンジも呆れた視線を返す。

前後にしか続いている通路、そこに水音が聞こえるなど、不吉にもほどがあるからだ。

「あのな…こんな地下通路に水なんか流れて来たら、おれ達ア濡れ死ぬしかねエじゃねエか」

「ゾロ君は聞こえないか、水の音!!？」

「んん確かに…妙な感じはするな…」

たしかに、いやな音は聞こえてくると二人とも少し同意を見せる。

しかし、それでも先に進むしかないのだと、全員足を止める事なく進み続けていた時

だった。

前方から逆走してくる、三人の女性と一匹のペットの姿に気付いたのは。

「あ……!!! やっぱり!!!」

「バーさんやナミ達が水に追われてるぞ!!!」

「ホラ見ろ!!! この通路は水で埋まっちゃうんだ!!!」

悲鳴をあげて駆け込んでくるナミとココロ、チムニーとゴンベの姿に、ゾロ達は咄嗟に停止し顔を強張らせる。

サンジもまた目を見開き、しかし絶望に表情を染める事はなく……両目をハートマークに換えて立ち尽くした。

「ナミさんが……!!! おれの胸に飛び込んで来る——!!!」

「ポジティブか!!!」

「まずい!!? 閉じ込められる!!?」

サンジとグリードのコントジミたやり取りを無視し、ゾロが剣を抜き、横の通路を斬りつける。

しかし、通路は表面が微かに斬れただけで、抜け道を作る事は叶わなかった。

「斬れねエ、石や鉄じゃねエのか!!?」

「海底の地下通路だ。水圧に負けね工程のクソ分厚い鋼鉄で固めてあんだろ」

「じゃ逃げ場ねエぞ〜!!!」

「おいグリード!!! 今のおれ達が飲み込まれたらどうなる!?」

(そうだな……………水中から脱出しねエ限りは状況は変わらさず…溺死と再生を繰り返す事になっから……………!!!)

仲間達が大騒ぎになる中、リンはグリードに今の状態での未来を問い質す。

グリードはリンの中で顔を引き寄せ、考えうる最悪の結末を想像させ……………途端に、リンは全員を引きずってぱつと踵を返した。

「とにかく走れお前ら〜〜!!!」

通つて来た道を全速力で引き返そうとした彼らだが。

海水の激流はすぐさま彼らに追いつき、全員を呑み込み深い青の中に沈めてしまったのだった。

「ワハハハハハ!!? おい!!? 見たか!?!? たった今あの軍艦で暴れてた麦わらが

!!?」

燃え盛る島、崩壊する建物、響き渡る轟音。

恐るべき砲撃の雨によって火の海に変わる周囲を眺め、スパンダムが嗤い続ける。その視線の先にあるのは、ルファイがルッチと戦っている塔もあった。

「コツパ微塵だ!!?　ワハハ、ザマア見る!!?　お前らの船長は死んだ!!」

「オイオイ…海兵ごと撃ちやがった…!!?」

「こいつ…!!!」

「これが!!?　おれが発動した“バスターコール”の力!!?　これが正義だ!!?　カ  
テイ・フラム!!!　シア!!?　その女共をこつちへ引き渡せ!!!　そうすればお前の罪を消  
してやつてもいいぞ!!?」

まるで、自身が全知全能の神にでもなったかのような気分で、エレノアとロビンを庇  
うフランキーに告げる。

この砲撃は自分には絶対に向かないと、謎の確信を持ったまま、絶句するフランキー  
にゲラゲラと下品に叫ぶ。

「だいたいなぜ、お前がその女を守ってやる必要がある!!?　海賊でもあるめエシ!!?  
お前は!!?　お前から凡人共を日々守ってやつてる世界政府よりも!!?　その、オハラの  
血を引く物騒な女を信用するってのか!!?　我々に逆らえば、お前もトムと同じ様に死ナ  
バス!!!」

「長官殿——つ!!!」

聞いているだけで吐き気を催すような言葉を吐いていたスパンダムは、次の瞬間フラ  
ンキーの鉄拳に殴り飛ばされる。

地面を転がったスパンダムは、苛立たし気に血を吐くと、腰に提げていた象剣・ファンクフリードを抜いて狙いを定めた。

「くらえ!!!」  
「エレファント・チョクッブ!!!」

「パオオ!!!」

スパンダムの咆哮と共に、上半身を獣の姿に変えたファンフリードがフランキーに……ではなくロビンに迫る。

刃と化した鼻がロビンに迫るその直前、メイが飛び出し地面に両手のひらを叩きつけた。

「むんツ!!!」

「バオツ……」

途端に、地面が盛り上がって拳の形となり、ファンクフリードの顔面を迎撃する。強烈な一撃を受け、象剣は白目を剥いて気を失ってしまった。

「どこまでも救えない人ですネ……」

「やるじゃねエか……小娘」

自分達ではなく、ロビンが狙われる事をわかっていたメイは、卑怯な思考ばかりを繰り返すスパンダムを睨みつけて、フンツと鼻を鳴らす。

フランキーはそれに感心した声をかけつつ、背後で膝をついているロビンに横目を向

ける。

「ニコ・ロビン、麦わら達はここへ来るか？」

「全員…必ず!!？」

恐怖が蘇り、再び真面に動く事もできなくなってしまった彼女から答えを受け取ると、再度スパンダムを睨みつける。

フランキーのその目には、かつて抱いた怒りが再び烈火のごとく燃え上がっていた。

「おれはあいつらに全てを賭けたと言ったハズだぞ、スパンダ!!？」

「何をオ!!!」

「まさかこんな日が来るとは思わなかった。あの日のおれに力があつたら、何が何でもトムさんを奪い返したかった…!!!」

脳裏に浮かぶ、屈辱の記憶。

自分の浅はかさで大切な人を奪われ、取り戻そうと一人挑むも、呆気なく跳ね返され死にかけてた記憶。

その屈辱が、今の彼にふつつつと凄まじい力を与えていた。

「エニエス・ロビーの不落の神話を知る者達の…世界政府の強大さを知る者達の!!？その常識を麦わら達はことごとくくつがえし進む!!! 仲間一人の為に、誰一人躊躇なく敵に回す!!？ 胸のすく思いだ…!!!」

「フランキーさん…!!?」

「今日までおれはトムさんの死を忘れた事はねエ!!? あの役人のバカ顔が頭をよぎる度に…!!? いつか奴をひねり潰してやりてエと思つてた!!」

がしつ、と気を失つたファンクフリードの鼻を掴み、象の巨体を振り上げる。

慌てふためくスパンダムの方へとずんずんと近づいた彼は、思い切りその巨体を振り下ろす。

「おい待てバカ!!? やめろちよつと」

「こんな風にな!!」

直後、ぐしやりとスパンダムがファンクフリードの下に潰され、その後一切耳障りだった声が聞こえなくなる。

長年に組み続けた仇敵を討ち取った彼は、清々しい気分でその場に佇み、辺りの海兵達を睨みつける。

「あいつらのお陰で……おれは思いを遂げた!!」

キツ、と目を鋭くさせ、左腕の銃器を発砲する。

慌てて飛び退く海兵達を睥睨しながら、ご操船の前に立ちほだかる敵の全てに狙いを定めていく。

「おれは昔死んだ男、麦わら達が生きてここを出る為なら、この命をなげうつても構わ

ねエ!!! 護送船を空け渡せ——っ!!! あいつらの逃げ道は、おれが作る!!!」

決死の覚悟で、恩人達の為に戦い抜く事を決めたフランキー。

その傍に、いつの間にか震えから解放されたロビンが歩み寄り、再び構えを取った。

「私もやるわ! もう大丈夫」

「ロビン……」

「オハラとは……あの時とは違うもの……!!? 恐がる事なんて何も無い!!? 私はもう……一人じゃないから!!?」

そう、エレノアを安心させるように告げ、ロビンは辺りに自分の腕を花開かせた。

沈む、沈む、沈む。

激流の中で翻弄され、意識が遠く引き剥がされそうになる。

逃げ場のなくなつた通路の中、サンジ達は必死に息を溜め、苦痛に耐え続けていた。

(何か手はねエのか!!!)

(何かしねエと!!! このままじゃ全員溺死だ!!!)

(冗談じゃねエぞ……おれは民の命を……こいつらの命を背負ってんだぞ……!!?)

(まだ足りねエ……おれの欲望は、まだ満足してねエぞ……!!!)

(……ここまでか、おれの人生……畜生!!! 結構楽しかったけど……まだ生き足りねエよ!!!)



(もう息がもたない——!!!)

(ニャー!!!)

(苦しい……!!?)

それぞれが抱く心残りを糧に、目前に迫る死を遠ざけようと藻掻く。

だが既に激闘を終え疲れ切った身体。泳ごうにも体はうまく動かず、肺の中の酸素も残りわずかとなっていく。

(目の前が、暗くなる………助けて……)

何も無い水中に手を伸ばし、何も掴めない虚しさに絶望するナミ。

やがて、全員の意識がゆっくりと遠ざかり、深い闇の中に囚われようとした——その時だった。

「大丈夫!!? 気をしつかり………!!? 死なせはしない!!?」

そんな声が、水中で不思議と鮮明に聞こえてきた。

すると、不意に自身の体が引つ張られる感覚を覚え、サンジが戸惑いに目を見開く。

——ああ、おれは夢でも見てるのか………!!?

……きつとそうだ……。

視界に映ったのは、大きな尾びれと人の姿だった。

激流の中をたおやかに泳ぐ、半人半魚の異形……あらゆる物語に登場する、美しき伝説の住人の姿。

——海にて溺るる船乗り数人

薄れゆく意識の中で見る優美な尾ヒレ

見上げると、海に揺蕩う長い髪

その姿美しく、夢幻を見るかの様

人魚伝説………どうか夢ならこのまま醒めな……。

夢にまで見た存在、死を前にした自分が見た幻としか思えず。

しかし最期に見る景色がこれならばそれもいいかと、今度こそ、しかし満足げに意識を手放しかけて——。

「特急で行くよ!!! しつかり息を止めときなア!!! んががが!!!」

そんな風に、豪快に笑いながら海中を泳ぐ老婆——というかついさつきまで一緒に流されていた者の姿を目の当たりにし、全員がごぼと残ったすべての酸素を吐き出してしまった。

—  
ジ ジ  
ユ ユ  
ゴ ……  
ン ジ  
!!!? ユ  
……  
……  
!!?  
?

## 第218話 “ココロの正体”

ボロボロになった海兵達が、悲鳴をあげてぼたぼたと橋の上から落ちていく。それを護送船の上から見下ろし、エレノアとフランキーがにやりと不敵に笑ってみせた。

「悪いな海兵諸君!!??」

「この船は私達の脱出に使わせて貰うよ！ 慰謝料代わりさ」

「さア、護送船改め “脱出船” の大掃除完了だ!!??」

「ええ」

「あとは麦わらさん達を待つのみ!!??」

「よ——し!!?? もう一踏ん張りだア!!!」

敵を一切排除した船の上で、難関を一つ越えたと喜びをあらわにする四人。

後は最大の懸念である、仲間達が暗殺集団を退けてここまで来れるか、という点。たった一つだが、これが最も困難であった。

「……………ん？ なんだこの声は……」

そんな中、ふとエレノアは虚空を見やり、何かの声を聞いた気がする。

近くに誰かいるのか、と辺りを見渡し、誰の姿も見いだせず困惑の表情を浮かべていたその時。

エレノアの目の前で、ぎばっ！と何か大きな影が海の中から飛び出してくる様を目の当たりにした。

「死ぬんじや……らいよ……!!!」

「フギャ……ッ……!!!」

急に目の前に現れた老婆を前に、エレノアは全身の毛を逆立て、大きな悲鳴をあげたのだった。

「急げ!!! エニエス・ロビーの入口は……!!? 『正門』はすぐそこだ!!!」

「もう少し!!! 頑張れ巨人……!!!」

「任せとけい!!!」

ずしずしと地響きを鳴らし、砲撃を受ける島を駆ける二人の巨人。

キングブルを一頭ずつ担ぎ、その肩の上に船大工と解体屋達を乗せたオイモとカーシーは、島の外を指指して懸命に足を動かす。

「島から出られる!!? 逃げきれぬぞ!!!」

「ウオオオオオ!!!」

とうとう、侵入者を阻む最初の門の前まで辿り着き、男達は歓喜の咆哮を上げる。これで、敬愛する兄貴分達と共に帰れる、そう希望を見出し。

門の前に揃った三隻の戦艦と対面し、男達の顔は途端に真っ青に染め上げられた。

「ウツ…」

「そんな…」

「軍艦3隻[!!]」

「先回りされた!!?」

『抵抗は無駄である!!? 海賊共!!? 動けば一斉に射撃・砲撃する!!!』

ぐいん、と動き照準を合わせてくる巨大な大砲に狙われ、オイモとカーシーはその場で凍り付く。

いくら巨人といえども、島を焼く砲撃など受ければただでは済まない。キングブルと人間達を抱えたまま、呆然と立ち尽くす。

「マズイぜこりやあ~~~~~!!!」

「ヤバイよこれ~~~~~!!!」

「確かに逃がしてくれる雰囲気じゃねエな」

「後ろは滝と…」

「燃える島…!!? 逃げ場だつてないわいな」

「前面からは銃口!!? 砲口!!?」

「どうすりやいいんだこれよオ…!!?」

船大工と解体屋達も、目の前に立ちはだかる絶望を凝視し頭を抱える。

逃げてても焼かれ、逃げなくても焼かれる。どう足掻いても死しか待つていない最悪の未来に、誰も彼もが恐怖の感情を示す。

「今、何考えてるパウリー」

「…人生の思い出」

「縁起でもない…!!?」

ぼそりと問いかけたルルにパウリーが淡々と答え、パニーニヤがくしやりと顔を歪める。

動きを止めた彼らを眺め、戦艦に乗る海兵達は、冷酷にその時を待つていた。

『海兵・役人の回収完了——各艦正門より——距離を取れ』

「おい、おめエら意識を戻せー!!?」

「起きろー!!!」

どさどさっ、と甲板の上に投げ出される九人の男女と一匹のペット。

白目を剥き、呼吸も止まっていた彼らは、エレノアとフランキーの呼びかけで少しずつ

つ意識を取り戻していく。

「「「んぶ~~~~~つ!!」「」」」

ゾロ達の口から噴水のように海水が吹き出され、辺りに飛び散る。

体の中に入っていたそれが全て吐き出されると、ゾロ達はがくりと脱力し、静かな呼吸を取り戻していった。

「奇跡としか言いようがないよ……なんかもすごい……そりやあとんでもないショックを受けて、全員仮死状態にあった。だからあんまり水を飲まずに済んでる」

「んががが、よかつたれえ」

驚愕の眼差しをゾロ達に向け、ほっと安堵で肩を落とすエレノア。

それを見やり、九人と一匹を運んできた尾びれが二股にわかれた人魚——ココロが陽気に笑う。

「仮死になる程のショックって一体何が」

「「おめエだ」」

心底不思議そうに首を傾げるココロに、エレノアとフランキー、メイが突っ込みを入れないながらぐつと親指を上を立てる。

本人に自覚はなくとも、彼女のお陰で九人と一匹の命は守られたのだ。

「おまいらね? 海賊王の小僧が助けに来た仲間……シフトステーシオンで会ったれえ、



憶えてるよ。あの時はまさか…おめえらがこんなコトしでかすなんて考えもしなかった……!!?」

ココロはゾロ達を運ぶ風呂敷代わりになっていた制服を肩に羽織り、ほっと胸を撫で下ろしていたロビンに視線を向ける。

フランキーから抗議の声上がるのも無視し、五体満足で目の前に立っている美女にけらけらと笑ってみせた。

「海賊王になるなんて笑っちゃったが…案外ホントかもしれないねえな…んががががが」  
「ふふ」

ココロのしみじみとした言葉に、ロビンも微笑みを返す。

彼女も、自分を巡る戦いがここまでの騒ぎになるとは考えておらず、改めて麦わらの船長の豪運に感嘆させられていた。

その時、沈黙していたゾロ達から、一人ずつ咳き込む音が飛び出していった。

「ゲホッ!!! ウエツホ!!!」

「……!!! ハア」

「ぶはア!!! な…な…ナミさんは無事か!?!?」

「相変わらず丈夫な奴らだな」

「本当に人間なのか疑問でス」

一体どれだけの間、激流の中で翻弄されていたのか。

溺死を逃れただけでは飽き足らず、こうも早く復活した彼らに、フランキーとメイは呆れを抱いてしまっていた。

「よく生きてた」

続々と起き上がるゾロ達を、ココロがにやりと笑って顔を覗き込む。

ゾロ達はきよんとした顔で心を見つめ返し、次いで数秒前の記憶を蘇らせ、思わずその場からずぎざぎざと後退った。

「ギャ〜〜現実だった!!! 人魚って本当はいねエんだ!!!」

『『人魚かと思ったらラジウゴンだった』って伝説は本当だったんだな』

「バカ野郎!!? まだ本人が人魚だなんて言ってるねエ!!! 夢を諦めるな!!!」

「あたしは『シラウオ』の人魚だよ」

「やめろ〜〜!!!」

そげキングが驚愕のあまり目を飛び出させ、ゾロでさえ驚愕のあまり目を見開いている。

サンジは夢に見た人魚との最初の出逢いに納得できず、ガンガンと甲板を叩いて悔しさをあらわにする。そこにココロの止めが入り、彼の絶望はより深まった。

「知らないの? 人魚は30歳を境目に尾ヒレが二股になって歩けるようになる神秘の

種族なんだよ。魚人島に行けばこういう人魚は大勢いるし」

「そ、そうなのか………つてエレノア!!! お前なんで平然としてんだ!!! まさか知つてたのか!!!」

「うん。だつて……ココロさん、時々磯くさかったりするから」

「そんなにおつてたかい!!!」

エレノアの説明と、酷く言い辛そうだった真実を聞き、ココロは慌てて自分の衣服を嗅ぐ。海水でずぶ濡れなので意味はないだろうが。

そこに、そげキングがハツとした顔でほんつと掌を叩いた。

「そうか! 100年生きた猫は尻尾が二股に割れて “妖怪化” するというぞ!!!」

「ああ……“化け猫”か」

「一緒にすんじやれえよ!!! おめエラ礼の一つも言つたらどうらい!!!?」

流石に、無礼な態度の連発も我慢の限界だったココロがゾロ達に怒鳴りつける。

ゾロ達はすぐに表情を改めると、全員で居住いを正し、ココロに向けて深々と頭を下げた。

「……ココロさんどうもありがとう……」

「んがががいいんら!」

本人からお許しが出ると、すぐさま動いた者がいた。

微笑みを浮かべたままのエレノアとロビンに向けて、唇を伸ばしたサンジが勢いよく飛び掛かる。

「んルルロオ〜〜ビンちゃあ〜ん!!! ウエエエレノアちゃ〜ん!!!」

「ロビン!!!」

「エレノア——!!!」

しかし、サンジの欲望塗れの抱擁は空振りしマストに激突してしまう。

彼より先にナミとチョッパーが二人に飛びつき、その場に押し倒さん勢いで抱き締めたからだ。

「間に合ってよかった、二人共!!!? 無事…じゃないわね」

「ボビ〜〜ン!!!?」

「ええ……お陰様で……!!!? ありがとう」

「心配かけたねエ……ありがとう」

「いいのよも〜〜ン!!!?」

号泣するナミと、力の入らない身体で喜びを見せるチョッパー。

ようやくの仲間の再会に、笑みを浮かべていたフランキーであったが、自分のよく知る男がその場にいない事に気付き、ハッと表情を変える。

「ん……!!!? おい、兄弟は!!!? グリッドはどこだ!!!?」

「!!? そーういや……姿がどこにも見当たらねエが」

「おいおいまさか……向こうの塔でまだ戦ってたつてのか!!? ヤベエあつちはもう火の山だぞ!!」

ゾロ達も味方の一人の居場所がわからず、まさかと血相を変えて辺りを見渡す。

燃え盛り、崩れ落ちていく橋の向こうを見て、顔を蒼白にさせたフランキーが、意味などないとわかつていて尚、声を張り上げて呼びかける。

「おい!!! グリード~~~~!!!」

「おう、こつちだこつち」

涙が滲むほど、不安にさいなまれるフランキー。

しかしそこに、リンが気安げに声をかけ、彼は困惑気味に振り向いた。

「……おめエは、麦わらんトコの糸目……」

「ガツハハハ……今はおれだよ、兄弟」

戸惑うフランキーに、リンは……否、リンと交代して表に出てきたグリードがいつもの笑い声を聞かせる。

それに、フランキーだけでなくゾロ達もぎよつと目を見開き、思わず腰を浮かせて彼

——彼らに詰め寄った。

「グ……グリード!!! え!? 何だ!? どうなってんだ!!」

「ちつとばかりしくじつてな……『大總統』のジジイに散々やられて、このガキと一緒に  
 おつ死んじまうところだったんだが………賭けに出てな」

詰め寄る兄弟分に、グリードはやや自嘲気味に苦笑しながら、数分前の出来事を語る。  
 それを聞いたフランキーは、思わず啞然とした顔でグリードを凝視した。

「『賢者の石』を食わせたア!!? 何つー無茶を……」

「あのジジイに対抗するには、二人掛かりじゃなく二人分の力が必要でな………とにかく  
 おれ達は賭けに勝ったってわけだ」

「………それでその………体の持ち主の糸目は？」

「ああ、そりゃあ——この通り五体満足で生きてるヨ」

フランキーが問うと、すぐさまグリードが引つ込み、リンがひらひらと手を振つてみ  
 せる。

見た目はほぼ変わっていないが、雰囲気が完全な別人である事を示していた。

「いやー……コイツつたらすぐおれの体に乗っ取ろうとしやがるもんデ……油断も隙もな  
 いよネ——とまア、この通り意識を保つてやがる。普通は『石』の方に乗っ取られる  
 はずなんだがな」

「ややこしい事に……!!!」

「全くダ……」

頭を抱えるフランキーに、リンの足元に腰を下ろしたフーが同意する。

しばらくの間項垂れ、深いため息をついたフランキーは、やがてニツと笑みを浮かべた。

「とはいえ……無事で何よりだ、兄弟!!!」

「おう!!!」

がつ、と手を握り合い、お互いの生存を喜び合う義兄弟。

片方は五体満足とまではいかないが、あの世に逝っていないだけでしたと、細かい事を抜きにして喜びを見せあう。

同じく、知った相手の生存に安堵していたそげキングが、島の方を見やってぐつと息を呑んだ。

「ゾロ、いやゾロ君!!?」

「おい、見ろアレ……とてもさつきまでいた島だとは思えねエ」

隣にいたゾロに話しかけると、彼も同じ方角を見て、顔を険しくさせていた。

全員が同じ方向を見て、息を呑む音を響かせる。燃え盛る島は、最初に見た景色を一変させ、見る者に恐怖を抱かせる景色と化していた。

「何なんだこの攻撃は……すでに火の海じゃねエか!!?」

「この砲撃は、ニコ・ロビンとエレノアを死なせねエ様に命令が下ってる様だ」

「——それでこの橋は今狙われねエのか」

フランキーの説明に納得しながらも、安堵は全くしていない。

ロビンを奪われたら最後、島を襲う砲撃が自分達に向けられる事になるのだから。

「死なせねエって事は、まだ奪い返すつもりだな」

「エニエス・ロビーを完全に破壊したら、次は白兵戦でニコ・ロビンを取りに来るだろう」

「もう、みんなポロポロな上に軍艦にやすげエのがいっぱい乗ってるだろ!!?」

チョッパは横に転がった、激闘を終えた自分達の姿を見て不安を抱く。

動けない自分は言わずもがな、強敵との戦いを終えたゾロ達は負傷も深く、体力も危険な程落ちている筈なのだ。

しかしゾロ達は、冷静に島を見つめるだけ。そこからは、凄まじい轟音が鳴り響いていた。

「この橋の一本目の支柱の上階からまだ戦塵が立ってる。相手は当然 “ハト野郎” 口ブ・ルツチだ」

「近いじゃねエか、手を貸せば」

「やめとけ。ハトの奴はただ者じゃねエ。巻き込まれてまた、おれ達がバラバラになつてどうする」

加勢を提案するそげキングだが、ゾロはそれに首を横に振る。



自身が相対したカクを越える実力者だとされるロブ・ルッチ。そんな相手に今の自分が挑んだところで、犬死するとしか思えない。

「あの軍艦の群れがいつこつちを向いても逃げ道を失わねエ様に、おれ達はここでルフィを待つ!!? それでいいんだ」

「嵐はここから……か」

「……………わかつた!!?」

状況を理解し、そげキングはゾロに深く頷く。

助けに行けないのは悔しい。だが、そうしないのが一番の助けなのだと、自分を納得させる。

「フランキー……グリード……おめエの仲間達……」

「バカ野郎、あいつら悪運だけア強エのよ!!? 大丈夫だ、うまく逃げてる!!?」

サンジの心配に、フランキーもグリードも気楽に笑って返す。

いくら状況が絶望的だからといって、簡単に死ぬような輩ではないと、ずっと近くいた頭達は信じていた。

きつと、生きてまた会えるのだと。

「ルフィ……早く出て来い!!?」

「出航はいつでも大丈夫よ!!? ルフィが来次第すぐに出せる!!?」

「ああ。だが単純に考えても…今のおれ達の頭数と…軍艦の数の倍数が同じくらいだ。いくら出航できても、ここを抜けるのは至難の業だぞ…」

島に集まった軍艦を見渡し、険しい顔になるゾロとサンジ。

いつ始まってもおかしくない、ロビン奪還の為の襲撃の時を待っていたその時。

軍艦の一隻から、電伝虫による放送が木霊してきた。

『北西「正門」より報告——エニエス・ロビーの海兵・役人達の回収完了。次いで本島より逃走中の巨人を含む海賊達約50名を「正門」に確認』

「あいつら………」

「ザンバイ達だ!!? ほらみろ!!? うまく島を逃げ出したんだ。心配なんかしちやいねエよ」

「ああそうだ。ホントに殺したって死なねエんだ、あいつらめ。ガツハハハ!!?」

思った通りだ、と半分呆れを、半分安堵を混ぜて笑うフランキー達。

これで後顧の憂いなく、思い切り暴れられると上機嫌になる二人だったが……。

『一斉砲火による完全抹消完了、全員死亡。現状、本島での生存は不可能と思われ——  
エニエス・ロビー本島における生存者〃0〃』

——彼らに与えられたのは、希望ではなく絶望であった。

## 第219話 “燃える島からの脱出”

フランキーとグリードは、凍り付いていた。

生きていると、逃げ延びていると信じていた弟分達が、目の前で燃え盛る炎に吞まれて死んだのだと聞かされたが故に。

『こちら2号艦より報告。島の南東「裁判所」および「司法の塔」、そして橋へ通じる「地下通路」全て破壊完了。残る攻撃対象は「ためらいの橋」を残すのみです』

「フランキー……」

「あいつらが……!!!」

淡々と、報告を述べる戦艦からの通信。

フランキー達に聞かせるためではない、事実だけを伝える味方内の声が、それが揺るぎない事実であると示す。

あまりにも残酷な結末に、一味は真つ青な顔で立ち尽くす。

「……ガレーラの船大工達もか……」

「オイモ……カーシー」

「パニーニャ……」

「ヨコヅナも一緒だったろうね……」

「ソドムもゴモラも……!!? みんな……!!!」

それぞれが自身と縁ある者の名を呼び、もう二度と彼らの顔を見る事は叶わないのだと苦しげに顔を歪める。急すぎる別れに、それ以上の言葉が出なくなる。

「こんなに簡単に……人つて死んでいいの?」

「地図の上から……人は見えない。彼らはただ感情もなく、世界地図から小さな島を一つ消すだけよ。それが『バスターコール』!!!」

ロビンが見た過去の光景と、今彼女が見ている光景が重なる。

世界にとつて危険だと、一方的に判断された存在を抹消する力に、ロビンは冷淡に吐き捨て、しかし鋭く睨みつける。

しばらく呆然としていたフランキー達は、やがてギリツと歯を食い縛り、支柱に向けて声を張り上げた。

「急げ麦わらア~~~~!!! 仲間がここで待ってる!!!」

「てめエ……死んだら承知しねエぞオ!!!」

「フランキー……!!! グリッド……!!!」

悲痛なその姿に、そげキングから呻くような声が漏れる。

その時、ルフィがいると思われる支柱の壁で爆発が起き、破片がばらばらと海に飛び

散った。

「ルファイ!!!」

「ルツチは…強エ…!!! ……もし麦わらがあの場所ですつとルツチを抑えてなかったら、正直おれ達ア何人死んでたかわからねエ」

戦艦の砲撃によるものではない、内部から何者かの攻撃によつてもたらされた破壊に、思わずナミ達が身を乗り出す。

実際に相対したフランキーが、険しい表情でその光景を凝視する。

そんな中、無言で佇んでいたグリードが、おもむろに口を開いた。

「なアリンよ……あのジジイ、おれにはどうも手エ抜いてやがった気がすんだ……おれも、そう思う」

交代しながら話すリンに、メイが困惑の眼差しを向ける。

未だに慣れない二重人格者の会話を見つめつつ、彼らがしている気になる会話に耳を傾ける。

「じゃなきやおれ達は………全員殺されてた様に思う——ム力つくぜ……そのお陰でおれ達や助かつてるってんだからな!!? ……そして今は………あのネコ野郎が一番危険つてわけだ」

轟音が立て続けに鳴り響く支柱。どれだけ激しい戦いが繰り広げられているのか、振

動は遙か離れたこの場所まで届いていた。

「おれ、時々思うんだ……ルフィは始めから、自分が戦わなきゃならない相手を……わかってつみただい……」

「……野生の鼻が利くだけよ、あんたよりね」

ふと、脳裏に浮かんだ表現を口にするチョッパ―に、ナミが呆れた表情でため息を吐く。

荒唐無稽な考えを抱く彼にじとつとした目が向けられ、チョッパ―は思わずグツと言葉に詰まり、黙り込む。

そんな中、その場に膝をついていたエレノアがチョッパ―を見やり、誰にも聞こえない小さな声で呟いた。

「……生まれ持った『王の資格』……か」

目を細め、支柱を無言で見つめるエレノア。

そげキングはそわそわと落ち着かない様子を見せ、仮面の下で不安げな顔になりながら、小さく震える声をこぼした。

「あいつ……死なねエよな……」

「バカか」

「何を……!?」

独り言の眩きに、隣のゾロから本気で呆れた声が返され、そげキングは咄嗟に掴みかかろうとする。

しかしその寸前、支柱と橋の間で爆発が起こる。

一隻の戦艦から放たれた砲撃が、突如橋の途中地点で炸裂したのだ。

「な…」

「橋を半分壊しやがった!!!」

「どういふことだ!!!」

砲撃の意図がわからず、困惑の声を上げて身構える一味。

その理由は、戦艦が急に動き出し、自分達がいる場所の周囲に回り込み始めた事で明らかとなった。

幾隻もの戦艦に、完全に逃げ道を閉ざされてしまったのだ。

『全艦“ためらいの橋”の周囲へ布陣。橋の上と護送船には“海賊狩り”のゾロと“妖術師”エレノア、ニコ・ロビンを含む海賊9名を確認』

「ロビンをまた奪いに来るぞ」

「そうはさせないわよ!!?」

聞こえてくる通信に、ナミは完成版天候棒に雷光を走らせながら構え、勇ましく吠える。

他の面々も背中合わせになり、ロビンとエレノアも隣り合って、近付いてくる戦艦と海兵達を見据えた。

「おい!!? あそこ見ろ!!? ルファイ君くっつ!!? ここだ——っ!!」

その時、辺りを警戒していたそげキングから声上がる。

はつと振り向いてみれば、支柱の壁がほとんど破壊され……全身から煙を上げ、荒い呼吸を繰り返すルファイの姿が目に入った。

「全員無事橋へ着いたぞ——っ!!」

「こっちは心配いらないぞ、ルファイ君!!?」

「エレノアちゃんもロビンちゃんも助けたア!!」

そげキングが呼ぶと、ルファイははつと目を見開き、橋の上の仲間達に気付く。

そげキングに合わせ、フランキーやリン達も大きく手を振り、声を張り上げてみせる。

「あとはお前!!? そいつに勝て!!! 生きてみんなでここを出るんだ!!!」

無事である……一人は重傷だが、生きてそこにいる二人の仲間の姿を目の当たりにし、ルファイはにっこりと笑って頷く。

そしてあらためて、自身が相対する最強の敵に向かい合った。

「……………あとはこっちの、耐久力勝負だな……」

一味の頭がまだ五体満足で戦っている事を確かめると、ゾロは刀を抜き、戦艦とその



上に乗る海兵達を見やる。

『少佐以下出陣不要。「大佐」及び「中佐」のみ、精鋭200名により速やかに始末せよ』  
「……スモーカー大佐と同レベルの相手か」

これまで戦ってきた島の番人とは比べ物にならない、強力な気配が無数に感じられる。

その事が、気配を感知する能力にたけたエレノアには一目でわかる。そのうちの何人かが申し訳なさそうにしていたり、悔し気にしている事も。

「やったるか!!!」

「おうよ!!! ——行くぜオラア!!?」

「船から離れなきや!!! 傷つけられたら脱出できない!」

「二度と捕まったりしないわ!!!」

「おで!!? 動げねエよ——!!!」

迫り来る敵に、一味は全員が臆する事なく闘志を燃やす。

重傷を負ったフーとランファンはもちろん、エレノアも血反吐を吐きながら、ギン、と鋭い目で敵を睨みつける。

そしてついに、恐るべき実力を誇る海兵達が、一斉に戦艦から飛び降りた。

『ニコ・ロビンを奪還せよ!!!』

凄まじい殺気を伴って、一味に襲い掛かる海兵達。

ゾロやフランキーは、やってくる彼らに果敢に挑んでいく……の、だが。

刀を突然サビでボロボロにされ、殴りかかった相手の体がブドウの粒のようにばらになるといふ異様な光景と、ゾロやフランキーは対面させられる。

「氣イつけろ!!?」 『能力者』 もまざってるぞ!!!

「それは…お互い様よ!!?」

注意を促すフランキーに、ロビンは複数の敵の体に腕を生やし、容赦のない関節技を決めていく。

ボキボキと骨が折れる音が響き、海兵達は白目を剥いて倒れていく。

「あたしら人質らよ——っ!!?」

「か弱いよーっ!!?」

「ニャー!!?」

非戦闘員であるココロとチムニー達は、自分達が狙われないように目立つ場所に立ち、大きく手を振っていた。

最早無意味かもしれないが、自分達に注意を向ける彼女達なりの支援だった。

「ルフィが来るまでこらえろ!!!」

折れた刀の代わりとして、敵の剣を奪って使うゾロ。

使い心地に違和感を覚え、徐々に押され始める仲間達に焦りを抱きつつ、向かってくる男達を片っ端から斬り捨てていく。

その時、戦闘の手を止め、支柱を凝視して棒立ちになるそげキングの姿に気付く。

「おい!!! 何ボーツとしてんだ!!! そげ…」

「ルフィ~~~~っ!!!」

怒鳴りつけるゾロを無視し、そげキングは——いや、仮面を取り外して、ウソツプが必死の形相で叫び出した。

「お前、何やってんだよオ!!! 起きろー!!! ルフィ——!!!」

険しい顔で、遙か先のルフィを——ルツチに幾度も致命傷を喰らわされ、俯せに倒れた男に吠える。

沈黙していたルフィは、ぎこちない動きで振り向き、姿を見せた長鼻の男に驚愕の視線を返す。

「ウソツプ……………!!? お前…来てたのか…!!!?」

「か……………!! 勘違いすんじゃないやねエぞ!!! お前はロビンを助ける為にここへ来たんだ!!! お前の顔なんか見に来たわけじゃねエ!!!」

意地を張り、大きく手を振って否定の言葉を吐くウソップ。

彼はルフィから視線をずらし、未だ余裕を残してこちらを見上げてくるルッチを睨みつけた。

「おいコラ『CP9』のボスネコ!! キアおれ様が相手してやる!!! かかって来い!!」

「え!!? おい……やめろ……!!!」

巨大パチンコを構え、勇ましく名乗り出るウソップに、我に返ったルフィが慌てて止めようとする。

黙って佇んでいたルッチが、おもむろに踵を返し、ウソップたちの方へと歩き出したことで、彼の焦燥はますます強くなる。

「やめろよ!! ……お前………ハア……あいつに手エ出すな………!!」

「…すでに敗北した貴様に用はない。どの道全員殺すんだ」

「よオし、来い!! ボスネコ、吹き飛ばしてやる!!!」

強烈な威圧感を放つルッチの前に、まだかなりの距離がある為か、ウソップは彼を堂々と呼びつける。

ルフィは歯を食い縛りながら、蛮行に手を出そうとしている男を強く睨み、血反吐を吐きながら体を起こそうとする。

「バカか!!! やめろウソップ、殺されるぞ!!!」

「だまれ!!! じゃあ死にぞこないのお前に、何かできるつてののか!!!」

「こいつはおれがブツ飛ばすんだ!!!」

「だったらすぐに立てよ!!! だったら!!! 死にそんな顔してんじゃねエよ!!! お前らしくねエじゃねエか!!!」

いまだ、ルフィは立ち上がれていなかった。

受けた傷と痛みが限界を超え、這いずる事すらできない程になっている。

だが、ウソップはそれを嘆きも、哀れみもしない。なぜさつさと立たないのかという苛立ちで、厳しい言葉を吐き捨てる。

「爆煙で黒くたつて空も見える、海も見える……!!! ここが地獄じゃあるめエし!!! お前が死にそんな顔すんなよ!!! 心配させんじゃねエよチキシヨ——!!!」

渾身の力で放たれた、男の咆哮。

それに、麦わらの青年は……ゆつくりと、膝を立てて体を起こし始めた事で応えた。  
「……………わかつてる……………ここは地獄でも何でもねエ……………!!!」

ゆらり、と立ち上がるルフィの体から、再度煙が激しく吹き出す。

護謨の心臓が血液を強烈に送り出し、ゴムの血管を血流が途轍もない速度で巡り、全身に力を与える。

その肉体の活動のエネルギー源は、命か、想いか。

「勝つて!!! みんなで一緒に帰るぞ、ルフィ!!!」

「当たり前だ!!!」

叫ぶように答え、ルフィは再びルッチに向けて飛び出す。

拳をぶつけ合わせ、投げ飛ばされ、相手の最強の一撃を再び体を受けて。

それでもなお、彼は倒れなかった。確固たる意志を以て、勝利を確信し背を向けた男に、鋭い目を向けていた。

「『ゴムゴムの』……」

無防備になったルッチの前に、ルフィが両拳を構える。

咄嗟に全身を鋼のように硬化させ、防御の体勢を取ったルッチに向けて——ルフィの最大最強の攻撃が放たれる。

「『JET銃乱打』ガトリング」

どつ!と襲い掛かる無数の拳、機関銃の如き勢いと数の強烈な拳の雨嵐。

血と共に吐き出される雄叫びと共に、ルッチの全身に突き刺さる拳打が、超人の鋼の盾を貫いていく。

そして、とてつもない轟音を響かせ、ルッチが大きく吹き飛ばされる。

全身に大量の傷を負わされ、白目を剥いたルツチが、支柱内の壁に激突し——そのままどさりと倒れ込む。

「ハア……終わった………これで……いいんだ……」

同じくルファイも倒れるが、しかし意識を失う事はなく、仰向けになって天を仰ぐ。そして最後の力を振り絞り、仲間達に伝える歓喜を、天高く叫んでみせる。

「一緒に帰るぞオ!!!」 ロビ~~~~ン!!! エレノア~~~~!!!

『ぜ……全艦へ報告!!!』『CP9』ロブ・ルツチ氏がたつた今……!!? 海賊「麦わら」のルファイ!!! 敗れましたア!!!』

海軍の通信すらも認める事実。

前代未聞の大騒動、誰も逆らおうとも思わない世界政府の御膝元で起こった大事件——世界に逆らった海賊が勝利したという報告に。

ロビンはポロリと、無言で喜びの涙を流した。

「ル……ルファイが!!! 勝ったア——!!!」

「ヒヤヒヤさせやがって」

「ついにやったか!!? 麦わらア!!!」

「ルファイ……!!?」

「よもや……!!!」

ウソツプを始めとし、他の面々もホツと安堵の息を吐き、あるいはやれやれと肩を竦める。

フーなどは全く信じられないと言った様子で、何度も首を横に振っていた。

「全員、すぐに脱出船へ!!! 船を出すわよ!!!」

「急ゲ、お前達!!!」

「やりましたヨ——!!! ルフィさん~~~~!!!」

海兵達を蹴散らしながら、喜び勇む男達に指示を送るナミとランファン。

その横でメイが歓喜のあまり飛び跳ね、男達が慌てて彼女達の指示通りに動こうとした時だった。

『やったぜ麦わらさ~~~~~ん!!!』

『うお~~~~!!!』

突如、どこからともなく……島のどこかから、騒がしい声が聞こえてきた。

数十もの声が、一箇所からギュツと濃縮されて響いているような、そんな音が通信から伝わってきた。

「え?」

『バ……バカお前ら、向こうまで、聞こえちまうだろ!!?』

『いいんだ、知らせてやるんだよ!!!』



『アニキー!! アニキ——!!?』

耳に届いたその声に、ウソツプ達は絶句する。

もう二度と聞く事はできないだろうと思っていた声を聞き、フランキーとグリードは  
啞然と立ち尽くす。

「この声は………!!!」

『やめろ!!? このまま逃げりやおれ達は死んだ事になったのに!!?』

強張っていたエレノアの表情が、あつと言う間に明るくなっていく。

確かに今、ここで耳にしている声が、彼らの生存をはつきりと示している……その事  
実に、一味は歓喜で声もあげられなくなる。

『ガレーラのロープは切れないよ!』

『——つたく、黙ってろつてのに』

『おれ達ア全員無事ですよー!!!』

『ゲロオ!!!』

『砲撃は全部巨人が受けてくれたわいなー!!?』

『また軍艦が来ちまう前に急げ!!!』

『早くおめエら先に登れ』

『オイも血がのぼる——!!?』

『逃走手段もあるんで、こっちは大丈夫でさア!!? フランキーのアニキ!!? グリー  
ドのアニキ!!? 後で生きて会いましょう!!?』

フランキー達に向けて、ザンバイが元気に告げる。

一度絶望を抱きかけた彼らを、また新たな希望の光が照らしたのだった。

## 第220話 〃迎えに来たよ〃

「おめーらア〜!!! バキヤロ〜、おべーらの心配なんざするかア、バガ——!!!」

「ガツハハハハ!!! ガツハハハハハハ!!! ガハハハハハハ!!!」

びちゃびちゃと涙と鼻水と涎を垂らし、これでもかと号泣するフランキー。

その横ではグリードが高らかに笑い、しかし目尻に涙を滲ませていた。

「い〜く〜!!!? 生ぎでだあのバガ共く〜!!!? 生ぎでだ!!!? よがっだ〜よがっだ嬉  
しいおうおう〜!!!」

「ああ…!!!? 本当によかった!」

「こうなつたら、アイツらの頭のお前らも生きて戻らねエと意味がないんじゃないカ!!!?」

——ガツハハハハ!!! 当たり前だア!!!」

ぐずぐずと鼻をすするフランキー達にゾロとリンが口を挟むと、二人とも何度も頷き返す。

先ほどまで彼らの中にあつた絶望など、粉微塵に吹き飛んでいた。

「すぐに正門地点へ向かいますか?!?」

「後にしろ、今はこっちだ!!!? 貴様ら何してる、さつきと任務を果たせ!!!」

「はっ!!!」

「おらア、いくらでもかかってきやがれ!!!」

上官の指示で襲い掛かってきた海兵の攻撃を、フランキーが果敢に受け止め防ぐ。そこへグリードによる拳が放たれ、海兵は大きく宙に吹き飛ばされる。

最悪の砲撃の雨の中でも生き延びる事は出来るのだと、一味が胸に希望を抱いて、戦いに臨み始める——が。

「ルファイ……どうしたのよ、早く来てよ……!!!」

不意に、敵の一人を蹴り飛ばし血反吐を吐いていたエレノアが、はっと振り向き顔を歪める。

そこに、刃を振るっていたフーも気づき、険しい顔で支柱に取り残されたままのルファイに目を向ける。

「まずイ……!!? 小僧がさつきから動かんゾ!!!」

「何だと!!?」

「ルツチとの戦いで………傷を受けすぎたんだ!!! 血の量も致死量だ!!!」

横たわったまま、微塵も動く様子を見せないルファイ。

一味はギョツと目を見開き、ウソップが慌てて橋の端に駆け寄り、大声で呼びかける。

「おい!!? ルファイ!!? 急いでこっちへ来いよ!!? 逃げなきや助からねェんだ!!!」

必死に仲間を呼ぶが、それでもルフイは動かない……いや、動けない。

息を荒げながら、焦燥に駆られた表情になりながら、自分を呼ぶウソツプや仲間達を凝視するだけであつた。

「どうしたんだよ!!? もう一息だ!!? ゴムゴムでこつちへ飛んで来い!!? 後はおれが担いでやるから!!? 周りは海と軍艦だらけだ!!? ここにいたら殺されちまうぞ!!!」

「……………ダメだ……………」

小さく、か細い声で、ルフイは呟く。

限界を超えて戦い続けた彼の体は、彼の意思を完全に無視し、ぴくりとも、身動きさえ許さない。

「体がよ……………!!? ぜんぜん……………動がねエ…!!!」

「……………バカ言つてんじやねエよ!!! 敵は倒したんじやねエか!!! ロビンも取り返した、後はもう帰るだけじゃねエか!!! 頼む!!? 頑張れ!!!」

「ウソツプ!!? ルファイのいる支柱へ船を回しましょう!!? 全員、急いで船へ!!?」

待つていても来られる状態ではないと察し、ナミがすぐに迎えに行く方針に変える。既に掃除を済ませた脱出船を使い、軍艦の間を抜けて向かおうとしたその時。

ドンッ!と突如砲撃が炸裂し、脱出船はあつと言う間に海の藻屑と化してしまった。

「しまった…!!!」

「うそつ!!? 脱出船が!!!」

「何てこつた…!!! 絶望的だ!!? あの船以外にここからの脱出手段はねえんだぞ!!!」

「ココロさん!!? チムニー、ゴンベ!!? チョップー!!!」

能力者が面々の大半を占める中、唯一の手段であった脱出船に起きた悲劇。

ゾロ達が顔を引き攣らせて悲痛な声を上げる中、ナミは先に乗っていたはずのココロ達の事を案じる。

だが次の瞬間、立ち昇る黒煙の中から、ココロ達を抱えたサンジが飛び出してきた。

「ん、何とか無事だア〜っ!!!」

「サンジ君!!? あんた一体どこにいたの!!?」

「いや悪い、ちよつとヤボ用で!!? しかしまいった!!? ドえれエ事になった!!?」

こつち側はロビンちゃんがいるから砲撃はねえと思ったのに船が!!!」

どさどさとココロ達を下ろし呼吸を整えるサンジ。野暮用で走り回り、窮地に飛び込んだ彼は肩を上下させて汗を垂らす。

「そこまでだ貴様ら!!! お年寄りを解放して大人しく殺され…」

「それ所じゃねえんらよ!!?」

隙を見せたサンジ達に一人の海兵が飛び掛かるが、ココロの蹴りを喰らってあっさり

と沈められる。

そこへ、複数の戦艦から新たに砲撃が放たれ、端に直撃する。

爆発を受けた橋は片方からみるみる崩落し、一味を徐々に追い込んでいく。

「走って!!! ここも狙われてる!!!」

「おわ!!? 危ねエ!!?」

「逃げ——!!!」

急いで走り、支柱の上に集まった十二人は、四方八方から砲門を突き付けてくる戦艦を睨み返し、頬を引きつらせる。

道もない、足場もない、船もない。全ての退路を断たれた彼らは、背中合わせになつて悔しさを顔中に表す。

「くそつ!!? とうとう橋なんかなくなつちまつた!!? 支柱に追い込まれた!!?」

「これ以上何もできんゾ!!!」

「ここでコレ全部と戦うしか……!!!」

「バカいえ!!? もつと強いのがゴロゴロ出て来るぞ!!?」

いつの間にか、一味を追い詰めていた海兵達がいなくなっている。

一味をこの場で全員抹殺するため、支柱へ追いやる直前のタイミングで、全員戦艦に戻っていた。

『第一支柱に一斉砲火用意!!? 麦わらのルフィを、ただちに抹殺せよ!!?』

「ルフォが危ねエ!!! せめてこつちに……………!!!」

「メイ!!? こつちからどうにかできないの!!?」

「こつちと向こうの間がこうも広くてハ……………!!!」

ロビンもメイも、他の者にはない力でのルフィの救出を考えるが、自分達と彼の間にある距離のせいで歯噛みするばかり。

そうこうしているうちに、ルフィの周囲にも戦艦が集まり、巨大な砲門が向けられていく。

『立てー、麦わらさーん!!!』

『エレノア……………!!!』

「しつかりしなア!!? 小僧……………!!!」

「海賊にーちやん!!?」

「ルフィ!!! 立って!!! お願ひ!!!」

「何か手はねエのかよ、ルフィ……………!!!」

これで何度目かもわからない、死が目前に迫った絶体絶命の窮地。

今度こそ光明など一切見えない、全員が本気で最期を覚悟しかけた、そんな状況の中。



「……………もう、ホントに……………!!! どうしてこんな所に来ちゃうかなア……………!!!」

エレノアがこぼした声に、仲間達が視線を向ける。

その次の瞬間、一味全員の耳に、ある者の声が届けられる。

「!?」

「誰？」

「何だコリヤ」

「下を見ろって……………!!」

「誰ダ、この声ハ……………!!」

はっと虚空を見上げ、訝し気に眉をひそめ、どこから誰が発している声なのかと耳を澄ませる。

敵か、味方か。それすらもわからない、初めて聞く何者かの声に、一味全員が困惑した顔で辺りを見渡したその時。

「海へ飛べ……………!!!」

言われた通りに下を見て、その誰かの姿を目の当たりにしたウソップが叫ぶ。

全員に行き渡るように、自分の想いが突き動かすままに、力一杯に涙を流して吠える。

「ロビン……………? メイ……………? ルフィを海へ落とせるか……………!!!」

「任せて!!?」

「へ!? あ、エ!!? りよ、了解でス!!」

「あんだ達!!? 今すぐに海に飛び込みな!!」

意図を理解したロビンが頷き、メイも困惑しながらロビンに合わせに行く。

棒立ちになったままのフランキーやグリードに向け、エレノアがやや粗い口調で告げる。

いきなりの事に、まだ理解が追いついていないサンジ達がウソツプを睨む。

「バカ野郎!!? 自滅する気か!!!」

「ヤケになっても助からねエぞ!!!」

「助かるんだ!!? 助けに来てくれたんだ!!! まだおれ達には……!!? 仲間がい

るじゃねエかアッ!!!」

ウソツプは顔中を涙で濡らし、サンジの襟首に掴みかかる。

どういう事かと戸惑うサンジの視界の端で、メイが渾身の力で五本の刃を点に投げ、ルフィの元に届かせる姿が映る。

メイの錬丹術で坂ができ、そこへロビンが腕を生やしてルフィを転がしていく。声が望む通りに、全員が海へ向かって走り出す。

「バカ……!!? ホントに……!!! バカ………海へ飛べエ——!!!」

「海へ——っ!!!」

「海へ!!?」

「海へ——!!!」

ぼつ、と麦わらの一味と同志達が、一齐に空中へ身を乗り出す。

砲撃が放たれ、彼らの頭上を通り支柱に炸裂する中、遥か下の海へ——その上を進む、もう一人の仲間の元へと飛び降りる。

——帰ろう、みんな!!?

また…冒険の海へ!!?

そこに、彼はいた。

小さな体で荒波に抗い、ぴんと張ったマストで風を受け、黒い海賊旗を確かに示して。

「メリー号に!!! 乗り込め〜〜!!!」

一味の冒険をずっと支え続けていた勇者は。

どんなに傷ついても、大切な仲間を次の岸へと運び続けた勇敢な船は、優しく笑って彼らの元へと戻ってきた。

——迎えに来たよ!!?

海へと落ちた一味は、すぐさま彼の元へ泳ぐ。

泳げないルフィとナミとチョッパー、そして重傷のエレノアはココロに放り上げられ、甲板の上に乗せられる。

そうして久しぶりに、一味は乗り慣れたメリー号の上に降り立つ事ができた。

「急げ!!?」

「メリ——!!! メリー号が生きてた!!!」

「ほんつとにもく……!!! こんな危険なところまでついて来やがってこいつめエ……!!!」

「メリーだ、メリー号だ——!!? うお——!!? おれやつぱりメリー号大好きだ

——!!!」

ゴロゴロと転がりながら、傷だらけの船の感触を確かめるエレノアとチョッパー。命の恩人となった彼に、全身全霊でそれぞれの想いを示す。

「信じられねエ……この船はあの時海に……!!?」

「一体、誰が乗って来たの!!?」

「そんな話は後にしろ!!? 航海士!!? 指示を出せ、ここを抜けるゾ!!!」

困惑するのは、この状況を奇跡と受け止めきれない頭の固さを持つ者達。

一体何がどうなって、寿命間近のこの船がここまでやって来たのかと考えるも、そこからリンが現実に取り戻す。推理している場合などではないのだ。

「ぶはー!!? 危なかった、軍艦に殺されるかと思ったー!!? おい! ロビン!!?  
 メイ!!? 助かった、ありが…ムグ!!?」

自分を支柱の爆発から救ってくれたロビンとメイに礼を言おうとするルフイ。

だがその言葉はロビンが生やした手に塞がれ、そして反対にロビンとエレノアの方が、この場に集まった全員に感謝の眼差しを向けた。

「みんな!!? ありがとう」

「本当に…!!? ありがとうね…!!!」

その言葉に、一味は皆微笑みを浮かべ、努力を誇示するような真似はしなかった。

ただ、当たり前前の事を下までだということのように、彼女達を見つめていた。

「気にすんな!!? ししし!!!」

むず痒くなったルフイが、満面の笑みを浮かべて答える。仰向けで痛々しい姿のままだが、心の底から嬉しくてたまらないという顔になる。

暖かな空気が流れる船の上であったが、不意に彼らを睥睨したゾロがため息交じりに口を開いた。

「んなくだらねエ事言うのは、ここ逃げ切つてからにしろよ!!?」

「くだらねエとは何じゃマリモオ——!!!」

「この無神経男がア——!!!」

「うるせエ!!? ここまで死んだら元も子もねエだろ!!!」

「謝レ!!? この空気をぶち壊した事を本気で謝レエ!!!」

身も蓋もない言い方をする彼に、サンジとリンが蹴りかかり、チョッパーががぶつと噛みつく。場の雰囲気を変えしにする発言に、他の面々も無言で頭を抱えていた。

「サンジ君、リン、舵とって!!?」

「ア——イ!!? ナミさ——ん♡」

「まったク………あいヨ!!!」

しかし、ナミは然して気にせず、この場を切り抜けるために全員に指示を送る。サンジはすぐにだらしのない声で応じ、リンも舌打ちをしながら従う。

絶望の中に見出した希望の糸を掴み、全員が生き延びる未来を引き寄せようとした……その時だった。

「オウオウ………冗談じゃねエ………!!? このまま逃がす気かよ………!!!」

奴が、激痛が走る体を引きずり、その場に姿を見せる。

顔を腫れまみれにし、原型を留めさせていないにも関わらず、電伝虫を起こし自身の声を辺り一帯に撒き散らす。

『逃がすくらいならば、ニコ・ロビンごと吹き飛ばせ!!!』 ——と!!? “大将” 青キジより

こことずかっている!!? 全艦砲撃用意!!!』

その声に、一味だけでなく海軍もはっと目を瞠る。

どれだけの犠牲を払っても、処刑ではなく確保を命じられていた女に対し、殺しの許可を出した大将の名に、海兵達から困惑の声が漏れ出す。

「あいつ…!!?」

「スパンダの野郎!!? 生きてやがったか!!!」

耳に届いた仇敵の声に、エレノアとフランキーが忌々しげに顔を歪める。

殺すつもりで叩き潰したというのに生きているとは、どこまでしつこく、欲望に満ちた男なのだろうか、と。

「狙って来るぞ!!!」

「右舷から風を受けて東へ!!!」

「ダメだ!!? 八方塞がれてるっ!!! こっち向いてる砲口の数もハンパじゃねエぞっ!!!」

「当たらねエなんて不可能だ!!!」

スパンダムの命令のせいで、一撃でも当たれば即死が間違いない砲弾が、あちこちから向けられる。

再び訪れる絶体絶命の窮地。助かっと思ったのに、またこんな形で終わりを迎えるのか、とウソツプが頭を抱える、そして――。

『撃て――!!!』

上官の号令と共に、放たれる砲弾の雨。

それらは真つすぐにメリー号に向かい、真つ赤な花を咲かせて木端微塵にする——  
事はなく。

それどころか、戦艦同士に砲撃を放ち、大きな損傷を負わせ合っていた。

「じ……自爆?!」

「他の弾も全然当たりませんヨ!!」

他の戦艦も次々に砲撃を放つが、照準が勝手にずれてしまい、一発たりともメリー号に当たる気配を見せていない。

その理由は、海に再び起こり始めた大渦だった。

前回になっていた正義の門がゆっくりと閉ざされ、海流に狂いが生じ始めたからだ。

「うっひょー、想像以上!!?」

「サンジ!!? まさかお前さつき!!?」

「根性だけで逃げきれぬ敵じゃねエだろ?」

異様な光景を、サンジ一人だけが満足そうに眺める姿に、ウソツプが思わず目を見開いて尋ねる。

そんな彼にサンジは不敵に笑い、自分の頭をトントンと軽く叩いてみせた。

「す……!!! すげーぞサンジ!!!」



「天才か、お前」

「でかしたぐるまゆウ!!!」

驚愕の声を上げ、眼を跳び出させるルフイとウソップ、チョップ。

全身全霊で贈られる、おべっかなどでは絶対にならない称賛の声に、サンジは思わず頭を掻いて照れる。

「喜んでばかりいらねえエ、渦潮はおれ達にとつてもヤベエだろ!!?」

「そうだ!!! しぬー!!!」

そこにゾロの声が混ざり、我に返ったチョップが悲痛な叫び声をあげる。

再び騒がしくなる甲板の上で、海の流れを見据えていたナミがぎろりと、狼狽える男達を睨みつけて声を上げる。

「おだまりっ! あんた達、私達が乗ったメリー号に越えられなかった海はないっ!!!」

「うおー!!? そうだ!!! 頼むぞ航海士!!!」

仲間が全員揃った今、最早恐れる事は何もない。

類稀なる能力を持つ美人航海士に、一味は期待の声を上げ、彼女の指示に全力で従うのだった。

## 第221話 “君想う、故に君在り”

「殺せー!!! 軍艦7隻もあつて!!! あんなハナクソ船一隻仕留められんのか!!! 能なし共!!!」

『逃がすな、撃て——っ!!!』

荒海を走る小さな海賊船に向けて、数隻の戦艦から砲撃が放たれる。

しかし、その尽くが照準がズレた事で外れ、海賊船メリー号は悠々と海を走り続けた。

中には真つ直ぐ迫り来る砲弾もあつたが、そこは麦わらの一味の戦士達の手により、完璧に防がれていた。

「見えたわ! 勝者の道…!!? チョッパー!!? 取舵いっぱい!!?」

「うおお——!!? おれも役に立つんだ!!!」

「頑張れトナカイちゃん」

「ニャー」

「九時の方角へ!!!」

ナミの指示で、復活し船室に入ったチョッパーが舵を動かし、メリー号を操る。砲弾

の雨を掻い潜りながら、戦艦と戦艦の間を指して進む。

『撃て!!! 撃てー!!! 何しとんだおめエら!!! バカか!!!?』

『渦潮の流れをつかんだ模様!!? ものすごいスピードです!!!』

『畜生!!? 畜生あいつら…!!? 『エニエス・ロビー』の全戦力をかけて、国家級戦力”バスターコール”の力をかけて!!!』

海兵達に怒鳴りつけ、地団太を踏みながら、スパンダムが喚き散らす。

決して短くない時間をかけ、ようやく手元に近づけた最悪の罪人。自分の出世の大きな足掛かりとなるはずの女が、みるみる遠ざかっていく。

自分の手足である部下達の不甲斐なさに、これ以上ないほどに憎悪の炎を燃やしていた。

『あんなちっぽけな海賊団から…!!? たった一人の女を!!! なぜ奪えねエ!!!』

そう、目を血走らせて叫んだ瞬間。

彼の全身に幾本もの腕が生える。

見覚えのあるそれにぎよつと目を睨り、慌てた時には既に遅く。

「クッラツチ”!!?”」

『ぎやあア~~~~!!!』

『長官殿オ!!!』

ロビンの合図とともに腕が動き、スパンダムのを真逆に折り曲げ、仕留めてしまう。痛々しい悲鳴をあげて、彼はようやく完全に沈黙するのだった。

だが、そんな事で軍艦は止まらない。

走り続けるメリー号の前に、二隻の軍艦が立ちほだからうとしていた。

『進路を止め!!! 敵船は、渦から逃れられやしない』

「ちよつと船体にやこたえるが……!!? 『風来…砲』!!!」

完全に退路が断たれる寸前、メリー号の後部に移動したフランキーが、自慢の空気砲を放つ。

その威力で、メリー号は勢いよく加速し、まるで砲弾のように鋭く宙を舞って軍艦の間を通り抜けていった。

「か!!? 海賊船が飛んだ!!!」

「こんな事があるのか!!?」

「艦隊の海域を抜けたぞ!!!」

「コイツの経験値を甘くみるな!!! メリー号は上空一万mを飛んだ船だ!!! 必殺!!?」

「超煙星!!!」

見た事がない光景に、海兵達から動揺の声が上がる中、たちまち濃厚な白い煙が辺りに立ち込める。

船を追おうにも、煙は分厚く中々晴れない。海兵達が船が沈まないよう四苦八苦している間に、海賊達を乗せた小さな船は、あつと言う間にどこかへ消え去っていく。

その光景を、ある男が眺めていた。

乗ってきた自転車から降り、白煙の向こう側を見やるアイマスクを被った男に、海兵達が慌てて敬礼を見せる。

「い……いらしていたとは!!? まだ追いますので!!! とてもこのままでは終われない!!!」

「……もういい。……この艦隊と島を見れば、もはや一目瞭然……」

燃え盛る島、崩壊した建物。

つい数時間前の景色をまるで想像できない惨状を見やり、青キジはスツと目を細める。

「やれやれ……とんだ目にあつたものだ」

「だ……『大総統』!!!」

「危ない所だった………つい『左眼』も使ってしまう所だった。まったく、私を本気にさせかけるとは、将来が楽しみな連中じゃないか」

そこに、びちゃびちゃと水音を鳴らし、肩を竦めながらやって来る初老の男が一人。

困り顔で濡れた体を拭く彼——ブラッドレイは、消えていく煙と海賊達が姿を消した方角を見やり、どこかうすら寒い笑みを浮かべてみせた。

「——この一件は……我々の完敗だ」

こぼれ出たその声は……悔しさよりも、何かへの期待が強く現れているように聞こえた気がした。

渦から遠ざかり、穏やかになった海を、小さな羊の船首の船は進む。

大切な宝物を何人も乗せて、船は静かに風を受け、進み続ける。

「よいしょ……これいいのかい？」

「そう……!!?　ここがおれの席だ!!?　お前のお陰で脱出できた、ありがとうメリー!!?」

ココロに運ばれ、ルフイがメリー号の船首の上に乗る。動けない身体で仲間を見下ろし、真つ直ぐな眼差しで感謝の言葉を贈る。

その言葉に返事はない。だがルフイは実に満足げに、自分達を救ってくれた船に笑いかける。

「——しかし、お前らコリヤ、とんでもねエ事しちゃったぞ……だいたいな……世界政府の旗を撃ち抜くなんて」

「取られた仲間を取り返したただけだ!!?」

そう言つて、ルフィは甲板の上を見渡す。

エレノア、ゾロ、ナミ、ウソップ、サンジ、チョッパー、ロビン、リン、フリー、ランファン、フランキー、グリード、ココロ、チムニー、ゴンベ。

決して手放したくない宝が全て、この場に揃っている。

「このケンカ!!? おれ達の勝ちだア!!!」

戦いに勝利した喜びをあらわに、世界に立ち向かった海賊達は凄まじい雄叫びを上げる。

青い空に、彼らの雄叫びがどこまでも響き渡つていった。

……なお、グリードとリンが一体化している事を知らなかったルフィは、あとで姿が見えないと大騒ぎするのだった。

「おい!!? おいおいおい!!? ウソップ知らねエか!!? いなくなっちゃった!!!」

「ウソップ——!!!」

司法の島から脱出してしばらく経ち、チョッパーと彼の肩に乗ったルフィが騒ぎ出した。

そげキングの正体がウソップだと未だ知らない彼らの前で、サンジに急かされたウ

ソップが慌てて仮面をかぶり直し振り向いた。

「安心したまえ、彼ならさつき小舟で先に帰った」

「え〜〜〜〜〜〜っ!!? なぜだー!!! 本当は今、この船あいつのもんなのに」

正体を隠したままややこしい状態になった彼を、サンジが小突く。

それを見たリンが、自分の中にいるグリードに呆れた目で尋ねてみる。

「…奴らは一人人をどう認識してんダ? —— 知らん」

疑う気がさらさらなのか、もしくは気付く頭脳がないのか。

ヒーローに憧れ続ける子供の心を持つ者達の為に、他の全員は、何も明かさなない事を決めるのだった。

いや、他の事に思考を割かれていた為かもしれない。

「やっぱり誰もどこにも乗ってない」

「…そりゃヘンだな」

船室を全て見て回ったナミが、困惑気味に仲間達に伝える。

窮地にいた為に考える余裕がなかったが、落ち着いてくると、今しがた起こった奇跡について疑うようになってくる。

一体誰が自分達を呼び、ここまで船を運んできてくれたのか、と。

「確かにおれ達を呼ぶ声は聞こえたんだが」



「そうなのかい」

「そうなんですカ？」

「呼ばれたのは確かよ」

「おれも聞いた気がするヨ——マジで言ってるのか、お前ら」

戦場で聞こえた呼び声、聞いたことのない誰かの声。

なのを知っている気がする、と互いに頷き合う麦わらの一味に、グリードが交代して胡乱気な目を向けた。

「だからおめエら言ってるんだろ、あれはメリー号の声だったんだよ!!？」

「え——!!？ 本当か!!？」

「な！ メリー!!？ しやべってみろ!!？」

チヨツパーを驚かせながら、ルフィがメリー号に呼びかける。

当然、船はただ前へと進むだけで、声を響かせる事などなかった。

「バカ、船が喋るわけねえだろ」

「……私も何だかそんな気がしたんだけど……あるわけないわよね」

ゾロに呆れた声を返され、半ばそんな考えを抱いていたナミが首を傾げる。

彼らの中で、ウソツプとフランキー、マストに背中を預けて腰を下ろすエレノアだけが、沈痛な表情で俯いていた。

その時、エレノアの耳が、ある音を捉えてぴんと立ちあがった。

「ん？ 前から船が来るぞ!!？」

「何だ!!？ 誰だ!!？」

「……………ああ、大丈夫だよ」

数時間前の戦闘のせいで、つい身構えてしまうウソツプ達に、エレノアが笑って告げる。

ふっと微笑みを見せた彼らの前に、近付いてきた船——ガレーラカンパニーの船大工達が大勢乗った船が近づいてきた。

「うお——!!？ 麦わら達だー!!？」

「生きてるぞ〜!!？」

「お前ら無事だったんだな!!」

「すげエ!!？ 高潮の海へ飛び出したのに、信じられん!!？」

「エニエス・ロビーから帰ってきやがった!!？」

わーわーと、甲板の上からルフィ達の生還に驚き、喜びの声を上げる男達。

政府の御膝元に挑み、無事に帰ってきた事実、彼らは未だ信じられないといった表情を見せていた。

「アイスのおっさん!!？ ビルのおっさん!!」

「バカバグ…ヴィルヘルム……」

「とんでもねエ奴らだ…世界政府相手に…本当に何もかも奪い返してきやがった………!!?」

見知った顔を見つけ、アイスバグもヴィルヘルムもホツと安堵の息を吐く。とてつもない奇跡を見せつけられ、嘆息するばかりになる。

そして、ガレーラカンパニーの船とメリー号の船が至近距離にまで近づいた時。メリー号の前面部分が、突如がたと割れて傾いた。

まるで、アイスバグとヴィルヘルムに対して頭を下げるようにして。

「え……」

「メリー!!!」

「みろ!!? あいつらの船が…!!?」

「おい何だ!!? どうそたんだ急に!!!」

「メリー号が!!!」

突然の事態に、一味も船大工達も困惑の声を上げる。

エニスロビーからここまで、ごく普通に彼らに乗せていたはずの船が、限界に達したように壊れたのだ。

その姿に、サンジが苦々しい表情で歯を食い縛りながら口を開いた。

「……急にも何も…!!? これは当然なんじゃねエのか?!?」  
「え」

「メリー号は、もう二度と走れねエと断定されてた船だ。忘れたわけじゃねエだろ」  
ウォーターセブンで告げられた残酷な言葉が、その瞬間ルフィの脳裏に蘇る。

彼は慌てて立ち上がると、傾いた足場で踏ん張り、アイスバーグ達に向けて懸命に叫んだ。

「おっさーん!!? やべエ!!! メリーがやべエよ!!! 何とかしてくれ!!!」

仲間をこのままにしていられるかと、ルフィは今度は船大工達の方に向く。

優れた技術を持つ職人達、彼らが手を貸してくれるなら、きつとこんな状態になったメリー号も助けてくれるはずだと。

「お前ら…!!? ちようどよかった!!? みんな船大工だろ!!! 頼むから!!! 何とかしてくれよ!!! ずつと一緒に旅してきた仲間なんだよ!!! さつきも!!? こいつに救われたばかりだ!!?」

「……………だつたらもう、眠らせてやりなさい…!!?」

必死に乞うルフィに、ヴィルヘルムが唇をかみしめながら告げる。

はつと息を呑み、止まったルフィに、続けてアイスバーグが目を瞑って語り出した。

「すでにやれるだけの手は尽くした」

彼らは思い出す。夢か幻の様にしか思えない、しかし確かに起こった出来事を。

ルフィ達が高潮の海に飛び出し、それを見送った後。

廃船島に残された彼らの船を見つけ、その状態のひどさに言葉を失っていた時だ。

——走りたい……!!??

もう一度だけ、走りたいんだ。

そんな声が、アイスバーグとヴィルヘルムに届いた。

気づけば彼らは、その謎の声に突き動かされるように、崩壊を待つだけの船の修繕を始めていた。

全てを終え、自分は何をしているのかと呆れていると。

——ありがとう。

再びそんな声が、修繕を終えた船から届いた。

船はやがて波に攫われ、勝手に帆が張られると、暗い海に向かって進みだしていた。

その光景にいてもたってもいられなくなったアイスバーグとヴィルヘルムは、船大工達の制止を振り切り、大急ぎで小さな船の後を追いかけたのだった。

そして今、役目を終えた船は自分達に首を垂れ、最期の時を待とうとしていた。

「私達は今…奇跡を見ている。……もう限界なんかとうに越えているハズの船の奇跡を」

「——長年船大工をやつてるが……おれ達はこんなにすごい海賊船を見た事がない。見事な生き様だった」

心の底から送る、勇敢なる船への賛辞。

誇り高い海賊の仲間に向けられた言葉を聞いたルフィは、小さくため息をつくど、二人に頷いた。

「わかった」

メリー号の前には、小舟に移ったルフィと、別の船に移ったほかの仲間達が整列していた。

ルフィの手には松明が握られ、燃え盛る炎がメリー号に向けられている。

「じゃ、いいか？ みんな」

「ああ」

「んん!!？」

一味をしっかりと次の岸まで運び、仲間の窮地に駆け付けた、他に二つと並ぶものがない船。

彼を見送る為に、仲間達は固唾を呑んで送り出す様を見つめていた。

「メリー、海底は暗くて淋しいからな。おれ達が見届ける!!?」

ルフィの持つ火が、メリー号に移る。煌々と輝く火が広がり、メリー号全体を包み込んでいく。

その様に、ルフィが苦笑交じりに呟く。

「ウソツプは…いなくてもよかつたかもな…あいつがこんなの…たえられるわけがねエ」

「どう思う?」

「そんな事ないさ…決別の時は来る、男の別れだ。涙の一つもあつてはいけない。彼にも覚悟はできてる」

ウソツプの気持ちちを代弁し、そげキングは腕組みをしたまま佇んでいた。

仮面の下で唇を噛みしめ、涙を堪えながら。

「長い間…おれ達を乗せてくれてありがとう、メリー号」

♪

燃え盛る炎に照らされ、別れと感謝の言葉を贈るルフィ。

彼の想いに乗せて、エレノアがその場に腰を下ろしたまま、葬送の歌を歌い始める。

これまでの感謝を、想い出の全てを甦らせながら、涙と共に歌を届ける。

——ごめんね。

その時、あの声が再び響いた。

涙を流していた一味が、はっと目を見開いて沈みかけたメリー号を凝視する。

——もつとみんなを、遠くまで運んであげたかった……。

……ごめんね、ずっと一緒に冒険したかった……。

だけどぼくは。

そんな謝罪の聲が、静かに響いてくる。

一味だけでなく、ココロ達やフランキー達、船大工達にまでその声は届き、彼らの心を打つ。

「ごめんっつーなら!!? おれ達の方だぞメリー!!! おれ」、舵へタだからよー!!?」

お前を冰山にぶつかったりよ——!!? 帆も破った事あるしよ——!!? ゾロもサンジ

もリンもアホだから”色んなモン壊すしよ!!?”

ボロボロと泣きじやくりながら、ルフィが叫ぶ。

数々の申し訳なさを抱き、力の限りに泣いて詫げる姿を見せる。

「そのたんびウソツプが直すんだけどヘタクソですよ!!! エレノアもいつも頑張っただけど!!? あいつもヘタクソですよ!!! ごめんっつーなら……」

——だけどぼくは、幸せだった。



そんな彼の後悔を、メリーは否定する。

共に過酷な冒険を切り抜けてきた事に、共に喜び合った事に心の底から感謝を抱いて彼は笑った。

——今まで大切にしてくれて、どうもありがとう。

ぼくは本当に、幸せだった。

そうして、ゴイングメリー号は海へと沈んでいった。

多くの仲間達に見送られながら、その存在を全うしたのだった。

「おやすみ、メリー……」

仲間達が崩れ落ちる隣で、エレノアは一人、優しい笑みを返し告げたのだった。

## 第23章 君の名は

## 第222話 “仁義を通す”

カン、カン、と街中に木槌の音が鳴り響く、ウォーターセブン。

政府の一部の人間の目論見によって全焼したガレーラカンパニー本社を修繕するため、多くの船大工が集まり腕を揮う。

そんな様を横目で見ながら、グリードが頬杖をついて座り込んでいた。

「あれから政府のクソ共からの音沙汰はなし………平和そのものなのアいいが、ちと退屈だな……— お前ナ、せっかくあの戦いを乗り越えたつてのにそんな事を言うんじゃないよ、全ク……!!」

物騒な事を口にするグリードに、即座に交代したリンが口を挟む。

散々ボロボロにされ、危うく死にかけ、一つの体を共有する羽目になっているというのに、どんな神経をしているのかと。

心の中で対峙し、話し合う二人。周りで聞こえてくる声が非常に鬱陶しいが、今ではさほど気にならなくなっていた。

「——グリード、お前これからどうする気ダ？」

(どうつつつてもな………これまでずっと、やりてエ事をやりてエ様にやってきただけだし、具体的に考えてたわけじゃねエ)

不意にリンが問いかけてきて、グリードは眉間にしわを寄せて考え込む。

裏町のチンピラ達を纏め、頭として好き勝手やって来た日々は、これから続けられそうにない。今後をどうするか、真面目に考える必要があった。

(兄弟の夢に興味持つて…一緒にバカやってるのが楽しかったから続けてただけだしなア……)

「ホー、そうかいそうかい………だったらヨオ」

悩むグリードの呟きに、リンはなるほどと何度も頷く。

そして、次に彼が持ち出した言葉に……グリードは目を見開き、リンに心底呆れた目を向けるのだった。

「んががが、入るよおめーら!!?」

「入るよー」

「ニヤー」

「ゲロゲロツ!!! ゲロツ」

「ヨコツナ!!? おめー外にいな!!?」

麦わらの一味の為に用意された簡易住居、通称『海賊ルーム』にココロ達が訪れる。人間用の入り口を通り抜けられなかったヨコヅナを外に待たせ、ココロ達が中へ入ると、机の上で項垂れていたナミが顔を上げた。

「ココロさん」

「全員やつと目覚めた様だね。2日間寝通して、よほど疲れてたんたね、当然らが」

むしろよく2日だけで起きたものだ、と感心するココロ。

あれだけの戦い、疲労も相当なものであったはずだと、ココロは一味の中で最も重傷を負っていた麦わら帽子の男の姿を探す。

そして、テーブルの上に詰まれた大量の料理を平らげる姿を見つけ、笑みを浮かべる。

「おや、海賊王も元気なもんらね!!?」

「ああ…アレ違うんだ」

「違うって何らしい」

「戦いの後、ぶっ倒れてメシを食い損ねるのがいやなもので」

妙に言い辛そうに、否定の言葉を吐くサンジにココロが訝しむ。

サンジは苦虫を噛み潰したような顔で、自分が並べた料理を次々に腹に収める彼を――

――鼻提灯を膨らませ、寝言をこぼす船長を見やった。

「寝たままメシを食う技を身につけたらしい」

「寝てんのかい!?? ありや!!!」

「すごい海賊にーちゃん」

「器用な男らね」

うめーうめーと本当に味わえているのか怪しい姿を晒すルフィに、ココロ達が驚愕の声を上げる。

チムニーは感嘆していたが、ココロはその執念の凄まじさに呆れるばかりであった。

「ログポースの記録はあと2日、3日でたまるらる! これからどうすんらい」

「……………たとえ記録がたまっても…………私達もう当分先へは進めないの」

本題はこつちだ、と航海士を務める女に問いかけるも、ナミが返してきたのはずんと暗い雰囲気と重い声。

曰く、メリー号に乗せていた荷物は全て宿屋に預けたままで、おそらくは高潮アクア・ラグナに吞まれて全て海に流されてしまったとの事。

大切なミカンの木までもを失い、ナミは絶望の中に囚われてしまっていたのだ。

「じゃあ表の客は…それかねエ」

「客?」

辺りの空気すら暗くさせている波を見下ろし、ココロは酒瓶を傾けながら呟く。

何の事か、とナミが顔を上げて聞き返した時、海賊ルームの扉が再び開かれ、大量の

荷物を持った二人の男が顔を出す。

そして、宿屋に預けていた全ての荷物と、ベルメールの形見であるミカンの木がそっくりそのまま運び込まれてきた。

「みかんの木……!!! もう二度と帰って来ないと思ってた!!? よかつた……!!?」

「いやあ、あんたらをアイスバーグさん達の暗殺犯だつて追ひ回してた時」

「海賊の持ち物だつて事で全部没収してたんだよ、悪かつたね」

「とんでもない!!! ありがとう!!!」

不幸中の幸い、指名手配の所為で何もかもを失ったかと思いきや、そのお陰で大切な宝物が災害から守られていたとは。

思わずミカンの木に抱き着きながら、ナミは涙を溜めて感謝の言葉を叫んだ。

「今帰ったぞ——っ!!?」

「ういゝス」

そこへ、三度扉が開かれ、今度はロビンとエレノアを伴ったチョッパー、そして二人の臣下とメイを連れたリンが戻って来る。

エレノアは腰に手を当て、胸を張りながら仁王立ちし、新品の機械鎧を備えた姿をナミに見せつけた。

「完・全・復・活!!! ……とまではいかないけど、だいぶ良くなってきたよ……」

「ちゃんと見張ってたぞ!!? ロビンも」

「よし!!? ごくろうチョッパー!!?」

「ふふつ、もうどこへも行かないったら」

「そうそう、心配しすぎ」

「お前が一番信用ならないんだっての!!! 何が完全復活だ!!!」

「顔の傷を消してから言った方がいいんじゃない?」

「二人共酷くない!!!」

不敵に笑うエレノアに、目を吊り上げたチョッパーが吠え、ロビンですらも苦言をこぼす。

涙目で抗議の声を上げるエレノアだが、顔に一文字の傷跡が刻まれた姿で言われても説得力がない。どの口が言うのか、とルフィ以外の全員が目で語っていた。

「…まあ、いいわ!! 見て、みんな!!? みかんの木が無事だったのよ。お金も荷物も全部戻った!!? これで旅を続けられるわ!!?」

「ほんとだ、よかった——!!!」

「そりゃ何よりじゃねエか…ガツハハハ」

話題を変えたナミがミカンの木や荷物を見せ、喜びに満ちた表情を見せる。

全員がほっと安堵の息を吐き、ぱっと明るい雰囲気になった海賊ルームに、四度一組

の客人が尋ねて来た。

「アウツ!!? スーパーか!!? おめエら!!? …全員…全員は揃ってねエか!!?  
まあいい」

「フランキー——!!?」

「おめエらに話がある! 聞けっ!!!」

ばーん、と激しく扉を押し開け、奇妙な構えを見せるフランキー。

彼はその場で胡坐をかくと、先ほどまでのハイテンションなどまるでなかったかのよう  
に穏やかに話し始める。

「——ある戦争をくり返す島に…」

「何だ突然!!? つまんねエ話なら聞かねエぞ」

「うるせー、黙って聞け!!!」

サンジからじれったそうな声を向けられつつ、いつの間にかその隣に腰を下ろしていた  
たグリードと共に、フランキーは話を続ける。

——その昔、ある戦争を繰り返す島に巨大な樹が生えていたような。

どんなに砲撃を受けようと、国が滅ぼうと、揺るぐ事なく聳え立ち続ける最強の樹  
……その名は『宝樹』『アダム』。

「木が…何だ?」



「その樹の一部が、ごくまれに裏のルートで売りに出される事がある。おれアそいつが欲しいんだが、2億近くもするって代物、手が出せずにいた」

「……で、そこへ現れたのが大金を抱えた海賊達……お前らってわけだ」

「てんめエ!!! おれ達の金でそんなもん買いやがったんじゃねエだらうな!!!」

「まだ聞け、話はまだ終わってねエから」

思わぬ奪われた2億Bの行方を知り、激昂するサンジをグリードがどうにか宥める。

サンジが少し落ち着き始める中、フランキーは深く項垂れ、悔恨を押し殺しているような雰囲気醸し出しながら再度口を開く。

「おれは昔……もう二度と船は造らねエと決めた事がある——だがやはり目標とする人に追いつきたくて、気がつきや船の凶面を引いてた……」

語るフランキーに、ココロが静かな眼差しを送る。

この場で、彼の過去を知る唯一の老婆は、かつて犯した罪に今も苦しむ男をじっと見下ろし、彼の言葉に耳を傾けていた。

「おれの夢は!!! その『宝樹』でもう一度だけ!!! どんな海でも乗り越えていく、夢の船を造り上げる事なんだ!!! 『宝樹』は手に入れた!!? 凶面ももうある、これからその船を造る!!?」

がぼつ、と顔を上げ、一味に真剣な眼差しを向ける。

断られるかもしれない、という不安に苛まれながら今の自分の真剣な想いを口にす  
る。

「だから完成したらお前ら、おれの造ったその船に乗ってつてくれねエか!!!」

フランキーの願いに、深い眠りの中にいるルフイ以外が戸惑いの表情を浮かべる。

荷物も金も取り戻した今、足である船をどうしたものかと考え込んでいた所だったのだ。まさに渡りに船というべき提案である。

「じゃ…お前、その船おれ達にくれるのか!?」

「そうだ。おれの気に入った奴らに乗って貰えるんなら、こんな幸せな事はねエ。元金はおめエらに貰った様なもんだしな」

にやり、と不敵な笑みを浮かべ、フランキーは一味を見つめる。

満足げに笑うフランキーに、眼を瞬かせていたエレノアもやがて、ふつと優しい笑みを彼に向け始めた。

「……そういえば、『海賊王』の船『オーロ・ジャクソン号』もその樹を使って造られたんだっけ…」

「ああ、すげエ船にしてみせる」

「ガツハハハ!!! いいぜ兄弟……おめエがやりてエ事始めんなら、おれもいくらでも力を貸すぜ!!! —— いや、この体おれんだからネ!!!」

一世一代の懇願をした兄弟分に、グリードがゲラゲラと上機嫌に笑い、フランキーの肩をばしばしと叩いて意欲を見せる。

咄嗟にリンが抗議の声を上げるが、手伝う事自体に不満を抱いている様子は見受けられなかった。

「しようがらいね……トムさんもお前も……結局同じ職人なんらね……んががが……」

「そうだな……今なら胸はって死んでったトムさんの気持ちかわかる」

ココロが苦笑を浮かべて呟くと、フランキーは深く首肯してみせる。

彼らの前では、思わぬ申し出を受けたナミ達がわつと声を上げ、宴のように騒がしく喜びの声をあげだしていた。

「お前いい奴だなア!!? 貰うぞ!!! ありがとうフランキー……!!!」

「うお、次の島に進めるぞ——っ!!?」

「嬉しい!!? ルファイ!!? 船が手に入るわよ!!!」

未だ眠りの中にあるルファイにも告げながら、冷めぬ興奮の中に吞まれる一味。

叫ぶチョッパー達を見るロビンが上品に笑う様を横目にしながら、エレノアがすつと歩き出した。

「………んじゃあ、私もちゃんと筋通しておかないとかな」

小さく呟くと、エレノアは懐に手をつ込み、一枚の古ぼけた紙を取り出す。

彼女の行動に気付いたナミ達が訝しげな視線を向ける中、エレノアは全員の視線が集まる位置に立つと。

ばんっ！とその場でしゃがんで片膝を立て、取り出した紙——自身が映された手配書を床に叩きつけた。

「改めまして!!?」 手前「偉大なる航路」は『龍の巢』生まれ!!! 大海賊「白ひげ」の娘に生まれ、東西南北あらゆる海を旅して来た若輩者にござんす!!!」

「え……」

「『火拳』のエースの導きにより、『麦わら』のルフィの船にご厄介になっておりやしたが、この度欠いていた仁義を今一度通させて貰いたく思いやす!!!」

突如始まった口上、キン…と鼓膜を震わせるその声に、ナミ達ははっと息を呑み、ルフィも思わず飛び起きる。

海賊ルームに集まった全員、そして外にこっそりとやって来ていた一人に向けて、エレノアは堂々とした名乗りをしてみせた。

「『妖術師』エレノア!!! 懸賞金は2億B!!! 改めて、『麦わら』の一味に深く詫びをしたく……そして改めてご厄介になりたく存じやす!!!」

天使の意図を察し、ナミもロビンもサンジも言葉をなくす。

チョッパーは困惑の声を上げるばかりであったが、ルフィは大きく目を見開き、徐々

に満面の笑みを浮かべていった。

「エレノア…あんだ」

「……………こうしとかなないと、私はいつまでもあんだ達の仲間じゃいられない。いつかは本当にパパの船に戻るつもりではあるけど、それは今じゃないから」

戸惑いの眼差しを向けてくるナミに、エレノアは苦笑を浮かべて肩を竦める。

いつしか胸の中に溜まっていたしこりが取れたような、これ以上ないほどに清々しい気分で、改めて麦わらの一味に向き直った。

「…仁義を欠いちや、この海は渡っていけないのさ」

そう告げると、エレノアはあらぬ方へ目を向け、ぱちりとウインクをする。

それに気づく者は誰もおらず、ただ只管に、これまで一味を支えてきた天使が、本当に仲間になってくれるという宣言に湧き上がっていた。

「じゃ…じゃあ!!? まだしばらくうちにいてくれるって事でいいの!!?」

「勿論…!!? 船長のお許しがあるならね」

「いいに決まってんじゃねエかよ!!! やったア~~~~!!!」

寝起きのルフイは歓喜の声を上げ、両腕を上げてばたばたと走り回る。

感極まったナミがエレノアに抱き着き、サンジもそれに続こうとして蹴り飛ばされ、ロビンやココロ達、フランキー達は安堵の笑みを浮かべる。

すっかりお祝いのような雰囲気になり始め、外にいる男がグツと唇を噛みしめ出した時だった。

「……………ん？　なんか覚えのある気配が…」

エレノアがそう呟いた直後。

ドカン！と。

海賊ルームの扉が壁ごと激しく吹き飛ばされた。

## 第223話 拳骨のガープ

「何だ……!!!」

「誰だア!!!」

ガラガラと転がってくる瓦礫を払い除け、ルフィとサンジ、リンとフランキーが女性陣を守るように前に出る。

同じく構えをとるフーにランファン、メイの前で、大勢の海兵達を引き連れて姿を見せた犬の被り物をした大男が、にやりと笑みを浮かべて一味を見渡す。

「お前らか…… 麦わら の一味とは。モンキー・D・ルフィに会わせたい男達がおるんじやが……おお、妖術師 もおったか……ずいぶん暴れとる様じやのう、ルフィ!!? エレノア!!」

そう言つて、大男は犬の被り物を外し、顔を晒す。

左目の上に傷跡をつけた、どことなく見覚えのある顔立ちをしたその男を前にし、エレノアとルフィがぎよつと目を見開いた。

「ガ……ガープ!!!?」

「げエ!!! じ……じいちゃん!!!」

「ルフイお前、わしに謝らなきやならん事があるんじやないか?」

初つ端から凄まじい迫力を見せる大男——祖父ガープの登場に、びくつと全身を震わせるルフイ。

彼の眩きに、リンがカツと目を見開きながら振り向き、困惑の声を漏らす。

「『ガープ』つて……海軍の英雄の名じやないのか? ルフイ! マジでお前のじいちゃんのか?」

「そうだ! 絶対に手エ出さなよ!!! 殺されるぞ……!!!」

頬に汗を垂らし、ルフイは仲間達全員に向けて険しい表情で告げる。

腕組みをし、堂々と仁王立ちする祖父を鋭く睨みつけたまま、如何なる動作も見逃さないという気迫を放ち、息を呑む。

「おれは昔、じいちゃんに何度も殺されかけたんだ」

「おいおい、人聞きの悪い事を言うな」

そんな孫の発言に、ガープは小さくため息を吐く。

そこまで悪辣に自分を語られるのは実に心外だと、過剰に怯えるルフイを見下ろし、鼻息荒く語り始める。

「わしがお前を千尋の谷へ突き落したのも、夜の密林ジャンゲルへ放り込んだのも……風船に括り付けて、どこかの空へ飛ばしたのも……!! 全て貴様を強い男にする為じや!!!」



何も恥じる事はない、と言わんばかりに胸を張り、ルフィに課したとんでもない試験について述べたガープ。

その内容に、一味は当然海兵達も心底引いた様子を見せる。

幼少期に課すにはあまりにも過酷すぎる内容に、全員がルフィに同情と戦慄の眼差しを送っていた。

「……今……ルフィの底知れねエ生命力の根源を見た気がした……!!?」

「あやつが不憫に思えてきたワ……」

「どう聞いても虐待ですからネ……」

フーでさえルフィに憐れみの目を向けていて、思わず熱くなった目頭を押さえている。気をつけなければ、人前で泣きそうなくらいの悲痛さであった。

「ガープ中将……!!? お久しぶりです」

「久しいのう、エレノアア!!! 便りがなくなつてずいぶん経つもんで、心配しとつたぞ!!?」

そんな場の空気など知つた事かと、エレノアがガープにぺこりと辞儀をする。

相変わらずの海賊らしからぬ礼儀正しさに、ガープも途端に顔を緩め、上機嫌にエレノアの背丈に視線を合わせる。

「センゴクの奴も言葉にやせんが、お前さんの事を気にしとつたぞ。ここ最近〃お歳暮

「が届かんもんじゃから」

「いや〜……………こうなつちまつたお陰で、どうもそんな余裕がなくなつてしまいました……………」

「お……………お歳暮☒」

義足を見せながら和やかに、しかし何やら奇妙な単語を混ぜて会話を始める二人に、グリードとフランキーが同時に首を傾げる。

訝しむ二人に気付いたガープが、うっかりしていたというように目を丸くして視線を彼らに移す。

「ん？ ああ、こやつが海賊にデビューした時から始まったものでな……………島を荒らす海賊や悪名高い連中を捕らえては、季節の挨拶を添えて海軍本部に送りつけておつたんじゃない」

「はア!!?」

「中には海軍が捕らえるのに難儀しとつた厄介な輩もおつてな……………海軍の面子もあつて声には出さんが、皆喜んで受け取つとつたわい」

ゲラゲラと上機嫌に笑うガープを凝視し、一味はぽかんと呆けた顔で立ち尽くしていた。

海賊にあるまじき、同業者を捉えて政府に送りつけるという信じられない所業に、全

員の愕然とした視線がエレノアに集中した。

「……………海兵に妙に顔がきくのはそのせいか」

「てへ♡」

ナミが呆れた声をこぼすと、エレノアは小さく舌を出しながら小首を傾げる。

が、本気でふざけているわけではなく、仲間達からの追及を免れるためにわざとおちやらけているようだ。その証拠に、顔中に冷や汗を噴き出させている。

「中でもエースと共に『金獅子』のシキを討ち取って来おった時は、思わず宴を開いたくらいじゃった。後でセンゴクに怒られたがの」

「金獅子~~~~!!?」

「20年も前に海軍に捕らえられてたんじゃなかったのかよ!!?」

そしてさらに思わぬ大物の名が出てきた事で、一味のエレノアに向ける視線に畏怖が混ざり出す。

一味で最も年下に見える外見のくせに、どれだけの大事件に首を突っ込んでいるのだという戦慄の目を向けられ、エレノアは引き攣った顔で頬をかくばかりであった。

「エースとお前さんがどれだけ仲良くなるうが、夫婦になるうが好きにしたらよいわ……………だがな!!?」  
ルフィ、海賊になる事を許した覚えはない!!」

「ガープ中将……………あの、あんまり大きな声でそういう事を言わないで欲しいんですけど」

鼻息荒く、ルフィの夢を全力で反対しながら、さらっと自分の願望を口に挟むガープ。エレノアが小さな声で止めに入ろうとするが、頭に血が上ったガープにその声は全く届いていなかった。

「わしは、お前を強い海兵にする為に鍛えてやったんじゃぞ!!!」

「おれは海賊になりてエツてずつと言つてたじゃねエかよ!!!」

「〃赤髪〃に毒されおつてくだらん!!!」

「シャンクスはおれの命の恩人だ!!? 悪くいうな!!!」

「じいちゃんに向かつて〃いうな〃とは何事じゃ!!!」

「ああ言つてやる!!? 何べんでも言つてやるぞ!!! もう昔のやられっぱなしのおれ

じゃねエ!!!」

額同士をぶつけ合うような距離感で、激しい口論を始めてしまうルフィとガープ。

先ほどまでの怯えようが嘘のように勇ましく挑むルフィに、しかし仲間達は彼の体に残る傷跡を見て慌て始める。

「ダメだ……!!? 今のルフィはまだ回復しきつてねエんだぞ!!!」

「大変だ——!!? ルフィが海軍に捕まったー!!!」

「ルフィー!!!」

「逃げ口、ルフィ!!! 立ち向かわずに逃げ口!!!」

激戦を終えて、ずっと眠り続けていたボロボロのままの身体。そんな状態で、伝説と称される男に真つ向から挑むなど、自殺行為にしか思えない。

徐々に白熱する罵り合いを止めようと、サンジやリンが割って入ろうとした、その瞬間。

「エレノアが嫁に来てくれなくなっても知らねエぞ!!!」

「ぐわアあああああ~~~~!!!」

と、かつと強烈な威圧感を放ちながら迸ったルフィの咆哮。

それを真向から受けたガープは、白目を剥き、血反吐を吐きながら、どたーつとものすごい勢いで仰向けに倒れ込んだ。

「「「ええええええエ~~~~!!!」」」

伝説の男がたつた一言で倒れるという、目を疑うような光景にナミ達や海兵達が目を全開にして驚愕する。

ガープはしばらくの間びくびくと痙攣していたが、やがて呻き声を漏らして体を起こし、部下達に肩を支えられながらぎこちなく膝立ちになる。

「ガフツ……!!? おのれ………小癩な事を……!!!」

「中将!!?」

「しつかりして下さい!!? そりや気持ちばかりですが!!」

「何のこれしき…わしア、孫に言い負かされるほど軟弱ではない…!!」

未だ衝撃が抜けきっていないのか、険しい表情で地を吐くガープに海兵達が同意しながら上官を励ます。

ガープにも意地があるようで、立った一撃でかなり疲弊した体に叱咤をし、再度孫と相対しようとするのだが。

「ひ孫ができてても抱っこさせて貰えると思うなよ!!」

「ゴはア!!!」

「「中将オ~~~~!!」」

ルフィの更なる追撃によって、ガープはまた大量に血を吐いて膝をつく。

伝説の男などとはもう二度と言えないような醜態をさらす上官に、海兵達は頭を抱えて嘆きをあらわにする。

「生まれて初めて…!! じいちゃんに勝った!!」

「いや…そんな勝ち方でよかったのか、お前」

ぐつと両拳を天に突き上げ、喜びをあらわにするルフィにフランキーが突っ込みを入れる。

これで勝った気になってるルフィもだが、それで律義に倒れるガープにもガープである、とナミ達は複雑な気分になる。

こんなのが海軍の中将で大丈夫なのか、という視線があちこちから向けられていた。

「おい!!! エレノアがヤベエ!!!? 恥ずかしきで死にそうだ!!!」

「しつかりしろオ!!!? あ、子供できたら私も抱っこさせて!!!?」

「追い討ちをかけないであげて下さい」

「……………私はもう貝になりたい」

ルフィの追撃はあらぬ方にも飛び火していたようで、真っ赤になった顔を両手で覆って横たわってしまっている。

ナミがそれを宥めつつ、乙女心を刺激されて余計な一言を発して、エレノアをさらなる羞恥で悶えさせていた。これにはメイも呆れるばかりである。

ルフィはその様を、しししと朗らかに笑いながら眺める。

だが、気分良く佇んでいた彼の背後にゆらりと大きな影が立ち上がり、ルフィははつと目を見開いて固まる。

「ル〜フィ〜……………!!! 貴様じいちゃんを吐血させるとは何事じゃア!!!」

「ギャー勝手にぶつ倒れたんだろ〜!!!?」

「ごちーん、とガープによる反撃が脳天に炸裂し、ルフィの視界に火花が散る。」

途端には知る激痛に、ルフィは目を回しながらその場を転げ回る羽目になった。

「痛エ〜〜!!!」

「痛エ!?」 何言つてんだ、パンチだぞ今の!!? ゴムに効くわけ…」

「愛ある拳は防ぐ術なし!!? まったく、いらん恥をかかされたわい…」

白煙を立ち昇らせる拳骨を掲げ、ガープは悶える孫を見下ろし、羞恥を誤魔化すようにぶつくさとぼやく。

いまだ元に戻らないエレノアを放置したまま、彼は大きなため息をこぼし、涙目で脳の鼓舞を押さえるルフィを睨みつける。

「そもそも『赤髪』って男がどれ程の海賊なのか解つとるのか!? お前は!!?」

「……………!!? シャンクス!?? シャンクス達は元気なのか!?? どこにいるんだ!??」

「元気も何も…………?」

ガープは脳内に『赤髪』を——この世界の海に君臨する、四人の大海賊の一角たる男の顔を思い浮かべ、苦々しく語り出す。

凄まじき力を見せつけ、そのカリスマで多くの実力者達を従え、まるで海の肯定のうにそれぞれの領海を支配する者達。

『四皇』…………ガープが属する『海軍本部』と『七武海』があつてようやく拮抗して



いる勢力の事を、今更な事と思ひながら確と聞かせる。

ルフィは話の半分も理解しないまま、なるほどと感嘆の息をこぼし、自分の麦わら帽子を見下ろした。

「よくわかんねエけど、元気ならいいや。懐かしいな——」

「……あの『赤髪』とつながりが……!?」

「ルフィの麦わら帽子、その人から預かつてるんだって。そんなにすごい人だとは知らなかった」

「……まー『白ひげ』の娘がいる時点デ、すでに相当だと思ふけどナ」

ちらり、とリンが横目を向け、未だ顔を隠したまま転がっているエレノアを見やる。

一味はもはや慣れた事と思つているのか、誰も彼女を気にかけていなかった。

するとそこへ、何やら破砕音と悲鳴が響いてくる。

ガーブが音のした方へ振り向き、近くにいた部下の一人に短く尋ねてみる。

「ん? 何事じゃい!!?」

「賞金首の『海賊狩り』のゾロですね」

「ほう……ルフィの仲間じゃな、威勢がいいのう」

聞こえてくる音はどれも激しいもので、まだ遠くにいながらしつかりとここに届いている。部屋の外に控えていたある二人の海兵に声をかける。

数十人の海兵の包囲をもともせずによつて来る男に、少し興味を引かれたガープは、

「…それお前ら…止めてみい…!!?」

「はいっ!!?」

ガープの命令に、二人の海兵の片割れはすぐさま動き、腰に提げていたククリ刀という名の刀を以て、ゾロに襲い掛かる。

相当な手練れらしく、凄まじい身軽さで宙を舞い、縦横無尽にゾロに斬撃を浴びせかけていく。

「おい!!　ゾロ待て!!!　暴れるコトねエんだ」

止めに入ろうと、ルフィが飛び出したその直後…ルフィの顎に、何者かの蹴りが衝突する。

体勢を崩したルフィは、すぐに自分を蹴り上げたもの——先程の海兵のもう片方を睨みつけ、反撃に移る。

先の戦いで見た高速移動の技によつて多少梃子摺つたものの、ルフィもゾロも難なく二人の海兵を無力化させてみせた。

「曹長!!?」

「軍曹!!!」

「ぶわっはっはっはっは、全く敵わんな!!?」

「やっぱり強いや…さすがだ!!? 参りました…」

他の海兵達から心配する声がかかる中、ガーブは豪快に笑い、倒された海兵はなぜか嬉しそうに呟く。

何やら全くと言っていいほど敵意を感じない青年に、ルファイが困惑の視線を向けていると、青年は立ち上がってルファイとゾロ、そしてエレノアに向き直る。

「この気配って…!!?」

「…………ルファイさん、ゾロさん、エレノアさん、お久しぶりです。僕がわかりますか?」  
「? 誰だ?」

青年が顔を見せた瞬間、エレノアははっと目を見開き、驚愕の眼差しを青年に向ける。やはりわからないルファイとゾロが首を傾げる中、青年は——どこか見覚えのある眼鏡を額に掛けた、ピンク色の髪をした男は、己の名を名乗ってみせた。

「ぼくです!!! コビーです!!! 覚えてませんか!?!」

## 第224話 // 納得の血筋 //

「…コビー？ コビーいゝゝ☒ コビーは友達だけど…もつとチビのコビーしか知らねエぞ、おれは」

自らをコビー…以前、少しの間共に旅をした少年だと名乗る男を前にし、ルフィは訝しげに首を傾げる。

無理もない。目の前にいるのはかなり鍛え上げられた、自身とそう変わらない背丈の男前な青年。見るからに弱そうだった彼の少年とは、雲泥の差がある見た目をしているのだ。

「そのコビーです!! 泣き虫でダメだったコビーです」

「ホントかゝゝゝっ!!?」

「うそゝゝゝっ!!?」

しかし、その過去を認めて力強く名乗ってみせる青年に、ルフィもエレノアもぎよつと驚愕の声を上げる。

ゾロもまた、東の海にいる筈の彼がここに居る事に驚き、言葉を失っていた。

「まだまだ将校にはなれてないけど…!!? 近くに皆さんがいると聞いて!!? いても

立ってもいられなくて!!? 今の僕らがいるのは皆さんのお陰ですから!!」

「フン、まあ百歩譲ってな」

一切の驕りなく、感謝の言葉を述べるコビーの隣で、奇妙なバイザーをつけた長身の男がぼそりと呟く。

彼に注目する事なく、ルフィとエレノアはコビーの前へ近づき、大きくなった彼の全身を隅々まで眺めてみる。

「色々あつて今、僕達本部でガープ中将に鍛えて貰つてるんです!!?」

「そうなのか!!?」

「しかし……大きくなつたねエ……!!? 成長期にも程があるわよ? あんたぜい肉だるつだるだつたのに」

感嘆の声を漏らし、苦笑するエレノア。

なにをどうやったら、あの貧弱を絵に描いたような少年がここまで成長するのだろうか、とガープの鍛え方を気にし、冷や汗を流していた。

「事件の後でお疲れなのにすいません」

「いいよ!!? 久しぶりだ、宴にしよう!!」

「ちよつと待てお前らー!!! おれに気づいてねエんだろ!!!」

和気藹々と、詳しく話をしようとルフィはコビーを海賊ルームに案内しようとする。

だが、そこで今まで放置されっぱなしだったバイザーをつけた男が泣きながら叫び、ルフィ達の注目を引いた。

「誰だ？」

「おれだ——っ!!? お・れ・だ——っ!!?」

「知らねエよ、誰だ」

これでもか、と自分を思い出させようとするバイザーの男だが、ルフィもゾロも全く答えが思い浮かばない。

するとそこで、何かに気付いたらしいエレノアが、はつと目を見開いた。

「……まさか」

「そう!!! 答えは……ヘルメツポだ!!? モーガン大佐の息子!!? ヘルメツポだア—

!!!」

ぱかつ、と目を隠していたバイザーを外し、なかなか特徴的な目をあらわにする男—

——ヘルメツポ。

だが、名乗られてもなお、ルフィとゾロは思い出す事ができないでいた。

「お前を磔にして死刑寸前まで追いやった男だよ!!? ロロノア・ゾロ—!!! ひえっ

ひえっひえっ!!?」

「?」

「おいおいいい加減にしろよ!!!」

「ホラ…あの七光りのバカ息子だよ」

「あ…あいつか」

「うおーい!!!」

首を傾げ続けていたルフィとゾロだったが、エレノアが辛辣な説明をしたおかげでようやく思い出す。

脳裏に以前の姿を思い浮かべ、あいつだあいつだと納得の声をこぼす。

思い出せなかったのは、彼もまた以前とは比べ物にならないほど鍛えられていて、そして何より最大の特徴であったキノコ型の髪型がなくなっているせいであろう。

「コイツら、やっぱりおれア許せねエコビー!!?」

「仕方ないよ、ヘルメツポさんも過去を受け入れなきや」

不本意な覚えられ方をされていた事に、泣きながら怒るヘルメツポ。

コビーもかつての彼の有様を思い出し、困った顔で苦笑を浮かべる。いやな覚えられ方をしていてもおかしくない所業ばかりだったからだ。

何とも奇妙な再会を果たしたルフィ達を見やっていたガープは、やがて部下達に目をやって口を開いた。

「——さて、じゃあ…お前ら」

「はっ!!?」

「この壁直しとけ」

「え——!!? そんな勝手な」

自らがブチ破つた壁を指差し、勝手な命令を下す上官に部下達が声を荒げる。上下関係などまるで構わず、激しい口調で全員が猛抗議を始めた。

「直すくらいなら、なぜ壊したんですか!!?」

「そうやって入った方がかっこいいじゃろ!!?」

「そんな理由で壊さないで下さいよ!!!」  
 「じゃ、我々直すんで、あなたも手伝って下さいよ!!!?」

「え——!!? いいよ」

嫌そうに声を上げるガープだったが、その後は割と素直に部下の言う事を聞き、釘と槌を手壁の修繕に入る。

伝説の男とはとても思えない、何とも言えない気の抜けた姿を晒す彼に、麦わらの一味がぞろぞろとルフィの傍に近寄った。

「偉いんじゃないエのか、お前のじいちゃん」

「さア、仕事の事はよく知らねエ」

身構えていた自分達が馬鹿馬鹿しく思えてくる姿に、全員ががつくりと肩を落とす。



何を警戒していたのやら、と呆れたため息がこぼれる。

するとそこで、言い忘れていたと目を見開いたガープが、ルフィの方に振り向いた。

「そういえばルフィお前、親父に会ったそうじゃな」

「え？ 父ちゃん？ 父ちゃんって何だよ……おれに父ちゃんなんかいるのか？」

「何じやい、名乗り出やせんかったのか……：：：：：ローグタウンで見送ったと言うとつたぞ  
！」

突然のガープの確認に、ルフィは訝しげに首を傾げる。

今まで考える事も無かった、自分の父の存在。急にそれについて尋ねられても、全く身に覚えがなく戸惑うばかりであった。

が、彼の仲間達は皆、興味津々といった様子でガープの話に注目し始めていた。

「ローグタウン……って、確か『海賊王』が処刑されタ」

「あの町にルフィの親父がいたのか!?!」

「……? おれの父ちゃんてどんなんだ?」

「興味ある、ルフィのお父さん……」

破天荒で無鉄砲、他に類を見ないほど身勝手ながら惹かれる何かを持つ、自分達の船長……その父親。

一体どんな人物なのだろうか、とナミ達が耳を傾ける中、ただ一人エレノアだけが

頬を引きつらせ、棒立ちになっていた。

「おい、どうした『妖術師』？ 顔が真っ青じゃねエか」

「……………まさか」

顔からさーっと血の気を引かせたエレノアに、グリードが声をかける。

しかしエレノアは何も答えず、困惑するグリードを他所に、ガープはついにそのものの名前を口にしてみせた。

「お前の父の名は、『モンキー・D・ドラゴン』、革命家じゃ」

その瞬間、辺りの空気がびしっと凍りつく。

ガープの発言を聞いた、ルフィを除いた誰もが大きく目と口を開き、固まる。

そんな中、平然としたまま槌を振るっていたガープが、今度はエレノアに視線を移した。

「それとエレノア、お前さん叔母には会えたのか？」

「あー、いえ、そうそう会えるような関係でもないですし……………ていうか、そんな簡単に会えるような人だったら、今頃あの人牢獄の中ですよ」

「ぶわっはっはっは!!! そりゃそうじゃ!!!」

引き攣った顔のまま、虚ろな目で見つめ返してくるエレノアに、ガープは豪快に笑う。場の空気が尋常でないほどに凍り付いているのも気にせず、さらなる爆弾発言をその

場に投下してみせた。

「なんせ、元『海賊王』の船員で、今や『革命軍』の幹部の一人。その上『白ひげ』のかつての妻・『白羽』オールデイの姉というややこしい経歴を持つ女………『黒羽』ニューラじゃからなア」

場の空気が、さらに温度を下げて白く染まったような錯覚まで引き起こす。

ルフィが今だよくわかっていない顔で、エレノアが遠い目で虚空を見やり出したその直後。

「「「「えエ~~~~~~~~!!?」」」」

麦わらの一味を包囲していた海兵達がみな、とてつもない悲鳴をあげ、あちこちに向かって飛び退いた。

全員が信じられないと目を見開き、ルフィとガープからずぎざぎつと大きく距離をとる。

「か…革命家ドラゴンに息子がいたのか!!?」

「ルフィさんがあのドラゴンの子!!?」

「じゃ…!!? ドラゴンはガープ中将の子!!? 何なんだコイツの家系は一体!!!」

「ドラゴンのフルネームなんて初めて聞いた!!?」

頭を抱え、自らが耳にした事実には混乱に陥る海兵達。

それはナミ達も同じ事で、ルフィとエレノアをそれぞれ凝視してぎやーぎやーと叫びまくっていた。

「『黒羽』ってエレノアの叔母さんだったの!!?」

「しかも『海賊王』の元仲間ア!!?」

「そんてかつての最強の女海賊『白羽』の姉エ!!?」

「家系図にしたらどんだけ恐ろしい事になるんデスカこの人達ハア!!?」

あまりの衝撃に、意味も無く辺りを右往左往する一味やココロ達、それにフーやランファン達。

たった一言ですさまじい混沌と化した辺りを見渡し、ルフィは隣の惨事とナミに視線を向けた。

「おい、みんな一体、何をそんなに」

「バカ!!? お前ドラゴンと『黒羽』の名前を知らねエのか!!?」

「あんたのお父さん!!? とんつつつでもない男よ!!?」

困惑するルフィに、その名を知らない事が信じられないと目を剥くサンジ達。

誰も混乱して答えを教えてくださいと、ルフィは静かに困惑している様子の口

ビンの方を向く。

「おい、ロビン」

「なんて説明すればいいかしら……」

ロビンでさえ、あまりに唐突な話にどうこたえたものか、と頭を悩ませる。

革命軍、それはある一人の男が起こした思想の集団。

世界政府を直接倒す為、世界中から同志を募り、現在までいくつもの国を斃してきた、政府にとつては危険極まりない敵。

その指導者の名こそ、謎多き男“ドラゴン”……そして、もう一人。

「そして“黒羽”といえは……“海賊王”の航海を最後まで見届けたただ一人の“天族”。“ゴールド・ロジャー”、“冥王”に次ぐ実力者で、ドラゴンと同じく政府が何年も居所を突き止めようとして、手掛かりさえつかめなかつた謎の女性だつた……のに」

「のに」

意味深なところで口を閉ざしたロビンに、ルフィが問い質す。

彼女の視線の先で、黙々と槌を振るっていたガープが——うっかりしていた、とばかりに頭を掻く姿があつた。

「あつ!!? コレやっば言つちやマズかつたかのう!! ぶわっはっはっはっはっ」

異様な程に軽い彼の態度に、一味や海兵達は再び沈黙する。

恐ろしく重大で、世界を揺るがすような秘密が明らかになった筈なのに、まるで重く感じられない空気に、全員がぼかんと呆けてしまう。

そしてガープは、絶句する彼らの前で再度その口を開いた。

「じゃ、今のナシ」

「「「ええエエ~~~~~っ?」」」

怒涛の展開に、最早誰も彼も、叫ぶほかに何もできない。

エレノアもまた、虚ろな目を点に向け、乾いた笑い声をこぼすばかりであった。

「お前はわしの孫なので!!! あと孫の嫁もいるので!!! この島で捕らえるのはやめた!!!

——と、軍にはうまく言い訳しておくので、安心して滞在しろ」

「言い訳になつてないので『逃げられた』事にしましょう」

海兵達を皆引き上げさせ、改めてルフィとエレノアに対面したガープがそう告げる。

不要な事を言いかけている上官に苦言を送る部下を他所に、ガープはコビーとヘルメツポを顎で示してみせる。

「何よりワシは二人の付きそいなんぞでな、こいつらとはまア…ゆつくり話せ。わし帰る」

「うん、じゃあな」

「軽すぎるわアー!!!」

あつさり別れの言葉を吐くルフィに、再度ガープの拳が襲い掛かる。

敵であっても孫に愛されたいと宣う、伝説の男の身勝手さに血の繋がりを感じ、エレノアは心底呆れたため息をこぼすのだった。

そしてルフィとエレノアは、本社跡地に移動し、久しぶりに会った友達との会話を始めた。

「ほんじゃお前らも、あの山越えて『偉大なる航路』へ来たのか!!?」

「あ…いえ、リヴァースマウンテンは越えてません」

「何で?」

「『本部』の軍艦は『風の帯』を抜ける事ができるので…勿論100%ではないですが」

「えー!!? ずるいじゃねエかー!!?」

「ずるくないずるくない。向こうの目的は冒険じゃなくて治安維持だから」

喚くルフィを宥めつつ、エレノアはコビーたちの話に耳を傾ける。

どこかで聞き耳を立てている航海士に気付きながら、海軍を支える高度な科学技術について詳しく尋ねた。

悪魔の実を物に喰わせるなど、普通では考えられない技術について…そしてそれを発明してみせたある天才について、次々に情報を仕入れていく。

「そういう画期的な技術の裏には必ず軍の科学者Dr.ベガパンクがいて。彼はすごい

んですよ」

「そうだ、あいつは本当にスゲエ」

「そーいやア……何度か名前を聞くよね」

「いつだであつたかどこであつたか、そこから聞く有名なその名に、エレノアは感嘆しつつ警戒を抱く。

「いつか敵になつた時にどうするか、それを考えながら、ルフィと共に友人達との会話に花を咲かせていた。

「ふーん、なんかすげーのがいんのか」

「すごい人だらけですよ!!?」 世界は!!? 僕はルフィさん達に会うまで、どれだけ狭い世界で生きていたのかをこの海で思い知りました」

目を輝かせながら、コビーは興奮気味に語る。

海に出る前の自分が想像もできないような世界にいるのだと、高鳴る気持ちを抑えられずに自身の感想を語る。

「ルフィさんがあの日……エレノアさんがあの日下から降りて来なければ、僕は今でもアルビダの船でへつらつて、雑用をしてたにちがいない」

「にやはははそうそう、アルビダの船にいたのよね」

「ホント面白かったよな、だいたい船に乗ってる理由がよ!!?」



初めての出逢いから、別れまで。

けらけらと揶揄いながら笑うルフィとエレノアに、コビーははずかしがりながらも笑顔で、ヘルメツポは憤慨の声を上げる。

実に楽しそうな彼らの声を聞きながら——電伝虫での盗聴を行っていたナミは、微笑みながら通話を切ったのだった。

## 第225話 “恨み辛みは水に流して”

「え~~~~~~~~!!? 本当にもう帰んのか!!?」

昔話に花を咲かせ、もつと楽しもうと思っていたルフィだったが、コビーもヘルメツポも本部へ戻るといふ。

それに対し、コビーは申し訳なきように頭を掻く。

「サンジ君のご飯食べていけばいいのに」

「僕らは敵同士…馴れ合うわけにはいきません」

「ガープ中将見てもそんな事言えんの?」

「それとこれとは話が別だろ!!?」

ぼそりとエレノアが思った事を呟くと、ヘルメツポが難しい顔で否定する。

海軍の英雄でありながら、孫だからという理由で海賊を見逃す男の気安さと比べられても、という気持ちながら二人の顔に表れていた。

コビーは咳払いをして空気を切り替えると、真剣な眼差しをルフィとエレノアに向ける。

「ルフィさん!!? エレノアさんは知ってるとは思いますが、この“偉大なる航路”の

…!!? 後半の海の呼び名を知ってますか」

「……?」

「“赤い土の大陸”の向こう側に広がる最後の海を人は…もう一つの名前で、こう呼びます」

その名は—— “新世界”

ありとあらゆる海の強者達、たった一つの “王” の座を巡って跋扈する、血で血を洗う戦いが繰り広げられる修羅の海。聞く者を震え上がらせる、最強にして最凶の海。

並大抵の者であれば、一步踏み入るより前に尻尾を撒いて逃げ出すような、恐ろしすぎるその世界の話。

「次の時代を切り開く者達の集う海!!? その海を制した者こそが!!? “海賊王” です!!!」

それを聞かされて尚、ルフィは笑みを浮かべている。

まだ見ぬ世界への冒険を夢に見て、いつもと同じように楽しそうに笑っていた。

「ルフィさん!!? 僕らきつとまた、そこで会いましょう!!! 今度は僕があなたを捕まえる!!! もつともつと強くなって!!?」

ルフィのその笑顔が、コビーの心にも火をくべる。

初めて出会った時に、臆病だった自分を奮い立たせてくれて、旅立つ勇気をくれた恩

人達。

彼らに見劣らないような男になりたくて、コビーは一つの願いを立てる。

「僕はいつか!!! 海軍の……た……!!! 大将」の座についてみせます!!!」

大きく響き渡る、青年の宣言。

しかしコビーはその一言を発した事で一気に勢いを削がれてしまったのか、その場へあたり込んでしまった。

「ご……ご……ごめんさい、ちよ……調子に乗りました、恥ずかしい穴があったら恥ずかしい!!? あ……あなたに会って僕、ちよつと気が大きくなつ……!!!」

「コビー!!!」

自分がどれだけ向う見ずな大言を口にしたのか、後で恥ずかしくなったコビーがばたと顔の前で手を振る。

だが、ルフィはそれを馬鹿にしなかった。にやりと不敵な笑みを浮かべて、きよとんと呆けたコビーをしっかりと見つめ返している。

「おれと戦うんだろ? だったらそんぐらいなれよ!!? 当然だ!!!」

「……!!! た……大将ですよ……?」

「今度会ったら……おれ達はもつと強エぞ、もつとスゲエ!!!」

その夢が、野望が、決して折れる事はないと心の底から信じた眼差しで、ルフィはコ

ビーに告げる。

その瞬間、コビーの両目からぶわっと、大量の涙が溢れ出した。

「何だ、泣き虫はなおってねエな、コビー」

「にやははは、まずはそれを治さなきゃね〜」

「皆さんに今日また会えて、本当によかった…!!!」

苦笑する、様子を見に来たゾロとエレノアの前で、コビーは目元を拭いながら呟く。

遥か高い地位を目指す茨の道の夢を、必ずできると信じてくれた恩人達を前に、コ

ビーはがばっと立ち上がると大きく声を張り上げてみせる。

「僕ら…!!! もっともつと強くなりますから!!! 必ずまた!!! “新世界” で会いましょう

!!!」

「覚悟してやがれ!!? お前らア!!! 今にドギモ抜いてやるぞ、ひえっひえひえ!!!」

コビーの再びの、今度はより強く意志に満ちた宣言に、ヘルメツポもククリ刀を構えて笑う。

王を目指す青年との出会いによって、大きく人生が変わる事となった二人の海兵は、さらなる意気を胸に抱いて同僚達の元へと帰っていった。

「…ルフィ、お前また…:とんでもねエ敵生み出したんじゃねエか?」

「コビーはやる男だおれは知ってたんだ、しししし!!?」

コビー達の姿が見えなくなるまで、手を振って再会を願う船長にゾロが意味深に笑う。

だが、ルフィはむしろそれを望んでまた笑う。互いにもっと強くなって、存分に戦い合えることを願って、友達の背中を見送り続けていた。

エレノアもまた、ふつと微笑みを浮かべて彼らの後姿を見つめ続けるのであった。

「頑張れよ、コビー君!!? 君の行く道は険しく厳しく……それでいて、私の望ましい未来だ」

そんな呟きを残して、エレノアは踵を返し、今の仲間達の元へと戻るのだった。

??

じゆうじゆうと音が鳴り、風に乗って香ばしい匂いが辺りに漂っていく。

串に刺した肉や野菜を完璧に管理し、最高の焼き加減を見極めていたサンジは、さっそく出来上がった数本をさらに移して振り向いた。

「んナミさ〜くん♡ 水水肉が焼けたよ〜!!」

「は——い!!?」

「んがががいいニオイらね!!?」

「うほ——っ!!」

プールで遊んでいたナミが返事をし、ココロが水中から凄まじい跳躍を行ってプール

サイドに降り立つ。

チムニーとゴンベから感嘆の声を貰いながら、待ちきれなくなった仲間達と共に串焼き肉……もといサンジの元へと集まっていった。

「よし、どんどん食えよ!!!」

「んめへへへへへへへへへへ!!!」

「んめへへへへへへへへへへ!!!」

「んめへへへへへへへへへへ、水水肉バーベQ!!!」

「そげキング、いつの間に!!?」

頬の中を肉で一杯にし、ご満悦の顔で悶えるルフィとチョッパー、そしてそげキング。いつの間にか混ざっていた仮面の男にゾロが思わず吹き出すも、彼の他に気にする者はおらず、ゾロはすぐに指摘を諦め食事を再開した。

「どお? ロビンちゃん、仕込みが違うだろ」

「ええ、おいしい」

「エレノアちゃんもどくお?」

「サイコーだよ、この焼き加減」

騒がしく串焼き肉を平らげていく男達を他所に、サンジは静かに肉をかじるロビンとエレノアの元にだらしない顔で向かう。

二人とも、明るい笑顔を見せながらサンジに頷いてみせていた。その所為でサンジの顔がよりだらしくなくなったが、いつもの事のため誰も気にしなかった。

と、そこへ何処からともなく、騒がしい足音が大量に向かつてくるのが聞こえた。

「麦わらさーん!!? 目エ覚ましたって!!?」

ザンバイを筆頭に、フランキー一家とグリードファミリー、そしてソドムとゴモラまでもがやって来る。

全員包帯まみれのままであつたが、痛々しさなどまるで感じられない元気な様子で、涎を垂らして駆け込んできていた。

「おう!!? フランキー一家!!? グリードファミリー!!? こっち来て食え!!?」

「うはー、バーベQだア!!」

「大好物——っ!!!」

「おっしやー!!? 混ぜろ混ぜろく!!!」

「騒がしい奴め…」

「この際マナーなんて二の次よ!!!」

「おい、多いなおめーら、肉追加しろよ!!!」

「バビヒヒヒン!!?」

「バビヒヒン!!?」



全員どたばたと凄まじいやつて来て、早速大皿に盛られた串焼き肉に飛び掛かる。

想定以上の勢いにサンジが苦言をこぼし、すぐに何人かが追加の買い出し係を買って出て、串焼き肉を啜えて飛び出していく。

「ハラ減つたな」

「オイも」

「ウオー!!! 麦わら!!? 起きたのか——!!!」

「バーベQ!!!」

「私達もいーれーてー!!!」

「おめエらプールで何を…」

すると、新たな客が次々にやって来る。

造船所の修理を手伝っていたオイモとカーシー、裏町の修繕を行っていたガレーラカンパニーの面々、そして職長達もぞろぞろとやって来る。

その際、ナミの水着姿にパウリーが叫ぶのだが、ここもいつも通りなため誰も気にしなかった。

「ンマー、いい匂いがするな」

「ご相伴にあずかるとしようか、娘よ」

「し、仕方がないですねエ」

さらには、アイスバーグとヴィルヘルム、セレネまでやって来るのだから余計騒ぎは大きくなる。

セレネに至つては言葉ではつんつんしつつも、頬を染めてちらちらと集まりを見やつていて、周りからは微笑ましいものを見る目を向けられていた。

「船造りは一旦、中止だわいな!!?」

「おオよ!!? 宴をケツちゃあ男がすたる!!! おれ様の席はあんだらうなア!!!」

「だらうなア、だわいな!!?」

そしていつものリズムに乗りながらフランキーとスクエアガールズまでやって来る。早速船作りに着工しようとしていたが、空腹には耐えられなかつたようだ。

そして、どどどど…!という一際大きな地響きと共に、黒い影が複数向かつてくるのが見えた。

「おれも食うゾ!!! もく我慢できネエ!!! ——つーわけであらふく食わせてもらうぜ

麦わらア!!!」

「では我らモ…」

「混ざらせてもらおうカ!!!」

「私もいいですか〜!!?」

口周りを涎で汚したリングが、グリードと交代しながら叫ぶ。

フーとランファンは口では冷静を装いつつ、眼が爛々と光っていて欲望を隠しきれていない。メイに至っては可愛い声を出しながら、シャオメイと同じく野獣のような顔になっていた。

だんだん取拾がつかなくなってくるプール。

飛び込み台の上に昇ったそげキングとエレノアが、マイクを手に下の面々を見下ろして声を張り上げる。

「一番そげキング!!! 妖術師」君と一緒に歌います!!!」

「その耳かっぱじってよく聴けエ〜!!!」

「よーし!!? 宴だア!!!」

仮面の戦士と白虎の天使、二人の歌声が響き渡る中。

激戦を共に乗り越えた同志達は、一時の休息の為、力の限り飲んで騒いで愉しみまくるのだった。

楽しい宴が終わって、しばらく経った頃。

しゅわつ、しゅわつ、と鉋が木材の表面を削り、薄い膜が辺りに飛び散る。

廃船島の一角を使って行われている作業。そんなよそこの木材とは比較にならない強度を誇る『宝樹』を相手に、フランキーが一心不乱に作業に没頭していた時だった。

「アニキ、アイスバーグ達だわいな」

「わいな」

「やってるな、フランキー」

「こりやまた妙な所で…」

キウイとモズの声に顔を上げれば、アイスバーグにヴィルヘルムがぞろぞろとやってくる姿が目に入る。

「んん？ おめエら何しに来やがった」

「ンマー…何だ、おれ達が手伝っちゃマズイのか？」

フランキーが訝しんでいると、アイスバーグは不敵に笑ってみせる。

思わぬ助力に、フランキーは思わずぼかんとした顔になっていたが、やがてにやりと意地の悪い笑みを浮かべてアイスバーグ達を見やった。

「ケツ…てめエらおれの設計について来れんのか!?」

「お前こそ、解体ばかりで腕がナマってんじやねエか？ ……図面見せてみる」

木材の量を確認し、続いてフランキーが書いた図面を確認し始める。

しばらくそれを眺めていた彼が、時折感嘆の声を上げていると、フランキー達の元にさらに助っ人が訪れる。

「『トムズワーカーズ』お揃いで」

パウリーにタイルストーン、ルルにパニーニヤ、さらにはセレネ。

彼らはフランキーの姿を確かめると、彼が作業を行っている場所を見やって顔をしかめさせた。

「いやいや……何もこんなトコで船造らなくてもさ」

「ウオ——!!? 麦わら達の船なんだってなア——!!? 手伝える事はあるか?」

「二人で急いで、仕事が雑になっちゃイカンからな」

パウリー達はそれぞれ散らばると、担いできた大工道具を地面に広げて準備を始める。

高潮の被害痕の修繕を行っているはずの彼ら、しかもその主力たちが揃ってこの場に来て来ている事に、ヴィルヘルムが意外そうな視線を向けた。

「君達、裏町はいいのかい?」

「あの燃えた海賊船に替わる船を造るんなら、おれ達だけでも手エ貸してやってくれと社員みんなが」

「腕が鳴るつてもんですよ!! 最高の船を作ってあげようじゃないの!!!」

パウリーが笑みを見せると、パニーニヤはグツと力瘤を作り、それをパシツと叩いてみせる。

フランキーが言葉を失っていると、パウリー達に続くようにまた別の影が幾つもやつ

て来る。

フーにランファン、メイとシャオメイ、その筆頭を務めるグリードに、フランキーは大きく目を見開く。

「オウ!!! おれもいるぜ、兄弟!!?」

「グリード!!? …糸目は何つつてる?」

「やらせてくれとよ。雑用でも何でもいいから、あいつらのために何かしてやりてエんだと——勝手に言うんじゃないエヨ!!! グリード!!!」

ゲラゲラと笑いながらグリードが告げると、即座にリンが表に出て来て目を吊り上げる。勝手に言われたのが恥ずかしいのか、頬は少し赤く染まっていた。

ガレーラカンパニーの誇る社長達と職長達、そして兄弟分とその臣下達。

縁を繋いだ多くの者達が、見返りを求めるつもりなど一切なく、自分を手伝おうとしている。その光景に、フランキーの目に涙が滲む。

「おめエらどいつもコイツも…足引っぱんじゃないエぞ!!?」

「よおし、一番ドックの腕つぶし見せたらア」

雄々しく吠える鉄人の声に、船大工達と助っ人達は勇ましく応える。

優れた技術を誇る彼らの手により、木材は見る見るうちに、新たな姿に生まれ変わって行くのだった。

「にやはは……やつてるやつてる」

そんな、かつてはいがみ合っていた者達が手を取り合つて、恩人の為の仕事をこなそうとしている姿に、エレノアは物陰に潜みながら笑みを浮かべる。

あの様子を見るに、旅の移動手段が出来上がるのにそう時間はかかるまい。

問題は旅の最中、今回のような強敵と遭遇した場合の対処についてだ。

(……さて、あんなだけ啖呵切つたからには、やれるだけの事はやらないとな。まずは“武装色”と“見聞色”の基礎を叩き込んで……あいつらなら体に覚えさせるのが一番かな)

造船の現場から踵を返し、歩きながらエレノアは考える。

体調も随分回復した今ならば、今後に備える——つまり、ある程度仲間達を鍛える事ができる。

(おそろく、あいつらの懸賞金額は大きく跳ね上がる……多くの有力な敵に狙われるという事と共に、数多の困難に遭遇する確率が増えるという事。今のままじゃ、それら全てを越えられるわけがない……いつか来る決戦の為に、私ができる全てをあの子達に託そう)

仲間の事を考えて、干渉は必要最低限にするつもりだった。

しかし、どこへ向かうにも強敵が並び、手を出さざるを得なくなってしまうた。

もう、こうなれば一蓮托生だと覚悟を決めていたエレノアは、やがてフツと自嘲気味に笑みをこぼしていた。

「やれやれ……やる事は山積みだな」

どうしてこうも苦勞を背負う羽目になったのだろうか。

自分の性分と仲間達の運命の複雑さを恨みながら、エレノアは軽い足取りで宿へと戻るのだった。



## 第226話 // 義理を果たす //

「おーい見ろ、今日の新聞だ——!!? エニエス・ロビーでの事が出てるぞ!!」

修繕が進むフランキー一家とグリードファミリーの拠点。

そこに戻ってきた子分の一人が、新聞を手に大急ぎで駆け込んでくる。

「つ…ついに出了か!! おい、何て書いてある!?!」

「おれ達の命運を分ける記事だ!!」

政府の御膝元で盛大に暴れた後だ。その主犯である自分達に対してどのような判断が下ったのかと、戦々恐々となっていたのだが。

「それがよ」

「そ…それが?」

「おれ達の事は…まったく載ってねえんだ…!!」

書かれていた内容に、一家とファミリーは皆目を見開いて呆ける羽目になった。

「どういう事だ? フランキー一家あんだだけ暴れたのに」

その報道は、ルフィ達の元にも届いていた。

一家とファミリーの今後を心配していたのに、手配される事などなく、放置されている事に困惑の声をこぼす。

「…お前のじーさんが『巻き込まれた一般人』とでも情報イジつてくれたんじゃねエか？」

「いやー…そういうこまけエ事は…」

「うん、しないと思う」

ガープの豪快さを思い返しながらサンジが呟くが、ルフィやナミ、チョッパーとロビンが手を振ってそれを否定する。

一人、ロビンだけが何かに気付いた様子を見せたが、誰も気づかないでいた。

「何にしてもよかった…おれ達アともかく…あいつらこの先逃亡人生じゃ可哀相だもん  
な」

「そのかわり、おれ達の事はひでエ書かれ様だ… 世界政府に『宣戦布告』、島が燃えた事までおれ達の仕業だとよ」

新聞を眺め、自らの凶行を棚に上げた冤罪の内容を見つめ得るゾロ。

だがその顔はにやりと笑みを浮かべており、自身の悪名が上がる事に喜びをあらわにしているのが、誰の目にも明らかであった。

「こりやまた懸賞金が上がりそうだな」

「お!!? おれも賞金首になれるかな」

「まア可能性はなくもねエが…大変なのはおれだよ…『巨星現る』だ」

「何で喜んでんの!!? あんた達、バカか!!?」

「ほつとけほつとけ、あいつらにとつちや名が売れるのは願ったり叶ったりなんだよ」

「……大変ですネ、あなた達……」

なるべく安全に航海をしたいナミからは、喜ぶ男達に対して呆れた罵倒が放たれる。それをエレノアとメイが宥めていたが、彼女達も似たような顔でやれやれと肩を竦めていた。

その時、海賊ルームの扉が開き、リンが欠伸をしながら戻ってきた。

「ういース、ただいマ〜」

「おう、リン!!? …いや、今はグリードか?」

「うんにや、おれだよ」

一瞬、どちらが表に出ているのかと迷ったサンジに答え、リンはその場にどつかりと腰を下ろす。隣にフーとランファンも腰を下ろし、青年はその場で寛ぎ始めた。

「どこに行つてたんだ?」

「グリードとこいつの子分達ト、この先の相談にナ……おれ達ちよつとややこしい事になつてつかラ」

「ああ、まあな……」

一つの身体に、二つの人格が同居している、数奇な人生を押し付けられた男達。

彼らの苦勞を思い、サンジは困り顔で小さく呟く。立場も生活も異なる二人なのこのような事になって、問題も色々浮上してきた事だろう。

「んで二人で決めたんだガ………おれはここでお前らと別れる事にしタ」

「えっ……!?？」

「おれ達はある目的のために旅をしてたんだガ………今回運よく手に入れる事ができて、国に戻らなきゃならなくなっタ。割と急ぎの用でネ……」

一味に真剣な眼差しを向けながら、リンは数日前、グリードと話し合って決めたところ目標について語り始めた。

『——お前、おれと一緒に“王”になる気はねエか?』

多くの子分を抱える身でありながら、別人の身体に宿る羽目になったグリードに、リンはそう提案した。

当然、どういう事かと呆けるグリードに、リンは不敵に笑いながら詳しい内容を聞かせる。

『現<sup>親</sup>皇帝の命だった“賢者の石”はお前が持つてル。おれ達アこうして一蓮托生の身に

なっちまったわけだから、お前が領くならそいつはおれ達が組んで手に入れたってこと  
 になル……そうすりや王位継承権はおれにグツと近づク。違うカ?」

こじつけ臭い考えであったが、グリードはその提案を真剣に悩んだ。

青年の野望の先を想像していると、自分の中の欲望が徐々に鎌首をもたげ始めている  
 事に気付く。そして、自分が決して不快に感じていない事にも気づき始めた。

? ガツハハハ：悪くねエ。ああ、悪くねエじゃねエか!!? おれにも子分がいる。お  
 前が奴らを全員受け入れるってんなら、おれア文句はねエぜ??

『だロ?』

ゲラゲラと笑いながら、リンの提案に良い反応を見せる。

乗り気になったか、とリンが期待したその時、リンの中でグリードは口を開き、答え  
 を口にする。

?……だが、駄目だ?

『えエ~~~~!!』

? 足りねエんだよ……一国の王じゃ、おれア グリード強欲だぞ? 与えられて満足するよ  
 うな器の小せエ男じゃねエんだよ?

領きそうな雰囲気だったのに、拒否されたリンは思わず声を上げて驚く。

がっくりと落胆した青年に向けて、グリードはリンを押し退けて表に出て、にやりと

獯猛な笑みを浮かべてみせた。

『どうせなら………世界の王を目指そうや、相棒』

そう、青年に——いや、相棒に告げると、リンは一瞬ぽかんと呆けた顔になる。そしてやがて、グリードと似た凄まじい笑みを浮かべ出したのだった。

『おいおい……ぶつ飛んでるにもほどがあんだ口!!! ——ガツハハハハ!!! 夢はでつかくねエとな!!! 男ならよオ!!! ガーッハッハッハッハ……!!!』

そんな会話があつた事を伝え、リンはルフイ達に深く頭を下げる。

フーとランファンはその行為を咎める事をせず、それどころか主と同じように、一味に向けて首を垂れた。

「……まで乗せてくれたお前らにハ、まだまだ恩を返しきれてねエんだガ……」

「何言つてんのさ、十分だよ」

「今回の事件、お前らには何度も助けられた。こつちこそ礼を言いてエぐらいだ……ありがとな!! しししし」

「……そう言つてもらえると助かるヨ。お前達に巡りあえてよかつタ……!!!」

感謝の言葉を述べると、エレノアとルフイが満面の笑顔を湛えて礼を言い返す。他の面々も同じく、大きな力になってくれた仲間に優しい目を向けている。

リンは心底嬉しそうに笑い、運命の巡り会わせに感謝しながら、仲間達との別れを惜しむのだった。

「ああ、そうそう……ルフィに伝えとかなきゃならない事があんのよ」  
「ん？」

その時、忘れていた、とエレノアが声を上げ、ルフィに振り向く。

キョトンとするルフィに、エレノアは彼が眠っていた間に起こった事を説明する。

「え？ え——！！？ フランキーが船造ってくれてんのかア！！？」

「そうか、お前寝てたもんな」

「やった——！！！！ よかった！！ 何だ、あいついい奴なんじゃねエか！！？」

「どんなもんか楽しみだな」

「そういうえぼゾロ君も外にいたんだっけ」

話すタイミングがなかったゾロも感嘆の声を上げ、ルフィはバタバタと騒がしく喜びをあらわにする。

2億Bやウソツプの件に対してのわだかまりは、既に溶けているようで、エレノアはホッと安堵の息を吐いた。

「じゃー！ その間ゆっくりお買い物でもしますか！」

懸念事項が着々と解決しつつあることに安堵し、ナミが気分転換を試みる。

が、その為に必要なケースが見当たらない事に、やがてぎよつと目を見開いて辺りを見渡した。

「……………あれ? ……………ここにあった1億Bは?!?」

「ああ…宴の時によ…肉やら酒やら買うのにやった!!?」

「やった☒ 私達のお金よ!!」

「おれ達の宴会だったじゃねエか」

「もう、ほんのちよつとしか残ってないじゃないのよ!!!」

「だろうなー、最後にや町中の奴らがいっぱい集まってきた楽しかったなー、あははは」  
宴の楽しさを思い出し、暢気に笑うルフィ。

彼を置き去りにし、仲間達が続々と離れていくのに気づかないまま、凄まじい殺気がルフィの周りに立ち込め。

ルフィの顔面に、ナミの無数の鉄拳が容赦なく襲い掛かった。

「んま!!? 船は得したんだから、いいじゃねエかつ!!?」

「やれやれ…」

「船に豪華な家具入れようと思ったのに…」

「ふふふ…掘り出し物を探しに行きましょ」

「いいもの探しに行きましょ」



顔をボコボコにされたルフィを他所に、エレノアとロビンとメイが落ち込んだナミを慰める。悲しい背中を擦りつつ、エレノアは大きなため息を吐く。

「あ！ ナミ、遊んで来るから小遣いくれ」

「あんたはナシよ!!!」

空気を読まずに話しかけるルフィに、今度はエレノアの強烈な蹴りが容赦なく襲い掛かった。

そんな騒がしさも知らず、廃船島では鉦と木槌の音が鳴り響いていた。

六人の船大工と、二人の錬金術師。そしてそれを手伝う屈強な男達と角界ガエル。

老婆とその孫、ペットに見守られながら、いがみ合いを乗り越えた男達の手によって、  
『夢の船』は産声を上げようとしていた。

??

一晩、二晩、三晩経ち、一味の傷もほほほ癒えた頃。

記録指針を確認していたナミが、ぱつと安堵の笑みを浮かべた。

「『記録』がたまった!!! 『記録指針』が次の島を指してる!!?」

「んじや、後は乗る船だな!!? 楽しみだ!!?」

「そうね、驚かせるから完成まで見に来るなって言われてるし…」

「おいグリード、お前手伝いは？」

「仕上げ前はいらねエってよ」

エニエス・ロビーに向かっている間、溜めておけなかつた磁気がようやく貯まり、次の島へいけると一味全員が期待を寄せる。

そこに、ココロが酒瓶を傾けながら口を挟んだ。

「おめエ達…その記録を辿るとどこへ着くか知ってんのかい？」

「いいえ、どこ？ …何だか少し下を向いてる様な…」

「んががが…そりやそうら、次の島は海底の楽園『魚人島』らよ!!？」

指針の若干の違和感に首を傾げるナミに、ココロが答えを口にする。

その瞬間、サンジががばつと立ち上がって、眼をハートマークにして身を乗り出した。

「えくくく!!? んぎよぎよぎよギヨ…ギヨ…!!? 『魚人島』くくく!!? ついに!!?」

「ええ!!? どうしたんだサンジ!!?」

鼻息荒く、次なる島へ並々ならぬ執着を見せるサンジに、チョッパーがぎよつと目を見開いて後退る。

それとは別にナミはかつての事を思い出し、暗い顔でため息をこぼしていた。

「魚人島か…複雑」

「そうだなア、お前の村の事があるからな」

「でもまあありや、魚人つつつても『海賊』だろ」

「その通りだよくわかってんじゃねエかクソ野郎!!? 魚人島は『偉大なる航路』の名スポット!! 世にも美しい人魚達が海上に弧を描き、魚達と共に戯れる夢の王国!!」

そう、熱く夢を語るサンジ。

しかし傍らに立つココロの姿……肥えた体にしわだらけの、酔っぱらった老婆の姿を視界に入れ、その場につくりと崩れ落ちた。

「夢見たつていいじゃねエか!!! 海賊だもの!!!」

「いるよ!!? ちゃんと若エのが!!!」

「あんた、ずつと失礼よ」

勝手に落胆するサンジにココロが声を荒げ、エレノアが目を細めて呟く。

美しい人魚伝説に憧れるのはいいが、他人にその理想を押し付けるのは如何なものかと考えつつ、今更かと諦めて肩を竦める。

「——ただ、『楽園』には簡単には辿り着けそうにないよ」

「『海底』と言うからにはナ……」

「そこはまー、行ってみりゃわかるよ。問題はそこじゃらいね」

「はい、これ」

不意なココロの意味深な言葉に振り向いたナミに、エレノアがゾロの持っていた新聞

を渡し、別の記事を見せる。

「『フロリアン・トライアングル魔の三角地帯』……『魚人島』へ到達する為には、必ず通らなきやならない海域だ

よ」

そこに書かれていたのは——とある海域で起こる怪奇現象について。

毎年100隻を超える船が消息不明になり、船員だけが消えた船だけが見つかり……或いは死者を乗せて彷徨う幽霊船の目撃情報が絶えないという、怪しい噂が蔓延る間の海があるのだと。

「オバケ出んのか——!!? コエ〜!!!」

「生きたガイコツに会えるのか——!!?」

「お前、どんなイメージだそれ」

「やだ!!? 絶対遭いたくない!!? 見たくもないっ!!? そんな気味悪い船っ!!?」

その海、何が起きるの!?」

ココロとエレノアの語る内容に、一味はそれぞれ悲鳴をあげたり期待に満ちた声を上げたり。

不気味過ぎる海に怯えるナミやチョッパーに、エレノアはにたりと薄気味悪く笑いながらくつくつと声を漏らす。

「ギアねエ………何かが起きたとしても、行った連中はその海から出てこないんだもの

…わからないんだなア、これが」

抱き合つて悲鳴をあげるナミとチョッパーを見やり、くすくす笑う。

余計な心労から解放されたからか、仲間を揶揄うその姿は実に楽しそうで、止めようとしたゾロも思わず躊躇っていた。

「騒がしい連中メ…」

「こんなんでこの先、大丈夫なんですかネ」

「霧の深い暗い海ら…気をつけな。とにかく遭難の多い危険な海ら。出航前にしっかりと準備しておく事ら」

不安がるナミ達に忠告を残し、ココロはまた酒瓶を呷る。

室内の空気が緊張感に包まれたその時、ロビンがぼそりとナミ達に呟く。

「商船や海賊船のなれの果てのゴースト船には…『宝船』の伝説がつきものよね」

「『ゴースト船』を探すのよっ!!!」

「まかせろ——!!!」

「えー!!? いやだー!!?」

「ただの遭難なら食料も充分積んでくつもりだ、心配ねエ」

「宝船か…刀もあるかな」

「いいナー、おれも行きたかったぜ——ガツハハハ!!! お前は皇帝の座で我慢しやが

れ!!!」

その瞬間、先ほどまでの怯えた表情はどこへやらやる気に満ちた声を上げるナミ。当然ルフィはそれに呼応し、次なる冒険へ夢を馳せる。

一応、注意を促したココロは彼らの陽気な姿に苦笑を浮かべ、ため息交じりに小さく告げるのだった。

「……ま、がんばんな」

## 第227話 “獅子の船”

「海賊にーちゃん達〜!!?」

「ニヤ〜」

「麦わら〜っ!!?」

ルフィ達が次なる海への期待に心を躍らせていると。

そこへチムニーやゴンベ、そしてスクエアガールズ達が息を切らせ、ルフィ達の元に駆け込んできた。

「フランキーのアニキが…!!! みんなを呼んで来いって…!!!」

「“夢の船”が完成したんだわいな!!!」

「すっごいのできてるよ——っ!!?」

海賊ルームに入ってくるや否や、ぱつと輝くような笑顔を浮かべて伝えてくる彼女達に、ルフィ達も歓喜の声を上げて出迎える。

「えー!!? もうできたのか?!? 随分早エ!!!」

「超一流の船大工が7人で夜通し造ってたんだわいな!!?」

「よし! すぐ行こうぜ!!?」

「うおお——!!!」

最大の懸念であった船が用意できた。これでもう後は荷物を運び込み、出発の準備を整えるだけだ、とさらなる期待を抱く。

新たな船が一体どのようなものか、一刻も早くその姿を拝見したいとルフィ達が胸を躍らせていた時だった。

「麦~~~~わ~~~~さ~~~~ん!!!」

大きな声を上げて、今度はザンバイを始めとして、一家とファミリーの全員が途轍もない勢いで駆け込んで来る。

全員が慌てた様子で、必死の形相をルフィ達に向けて、彼らの目の前で土下座を行う。

「フランキー一家……!!?」

「あんだ達どうしたんだわいな? 息切らして……!!?」

「実は……無理聞いて貰おうと」

顔中汗まみれにしながら、ザンバイは懐から十数枚の紙束を取り出す。

深々とルフィ達に頭を下げ、何事かと訝しげに見下ろしてくるルフィ達を凝視し、息を切らせる口を開いた。

「……手配書……!!? 見ましたか???」

「手配書?」



「あんた…!!?」 とんでもねえ額ついてるぜ!!? 麦わらさん、それに…他のみんなも追加手配されちまつてる!!? 話すより…:…:見てくれ!!? あんたら8人全員的首に賞金が!!!」

そう言つて、ザンバイが目の前に件の手配書を、現在の一味全員の顔が載つた八枚の手配書を並べる。

その中に記されたそれぞれの賞金額を目の当たりにし、ルファイ達は皆一斉に言葉を失つた。

“麦わら”のルファイ 懸賞金3億B

“妖術師”エレノア 懸賞金2億8000万B

“海賊狩り”のゾロ 懸賞金1億2000万B

“悪魔の子”ニコ・ロビン 懸賞金8000万B

“泥棒猫”ナミ 懸賞金1800万B

“わたあめ大好き”チョッパ（ペット） 懸賞金50B

“狙撃の王様”そげキング 懸賞金3000万B

“黒足”のサンジ（写真入手失敗） 懸賞金7700万B

大幅に賞金額が上がつた者、初めてで非常に高い賞金額がついた者、想像よりも遙かに低い額が提示された者、顔写真ではなく下手くそな似顔絵で示された者。

と、決して全員にとって喜ばしくない結果が続々と表示されたのだった。

「うは——っ!!? 上がったー!!! そんなでエレノアに勝ったく!!!」

「えエ〜…私今回全然暴れてないんですけど……」

「……………ま…まア心中お察しするというか……色々と言ってエ事はあるだろうが、その…ま——待ってくれっ。おれ達の頼みつてのはこつちなんだ、コレ見てくれ」

歡喜の声を上げるルフイや、不敵に笑うゾロ。愕然となるナミやチョツパー、サンジ、苦笑するエレノアやロビンを見渡し、ザンバイは同情の声を漏らす。

だが本題はそれではないと、すぐに別の二枚の手配書を取り出して一味の前に広げてみせる。

サイボーグ  
鉄人〃 フランキー 懸賞金4千400万B

〃黒鉄〃 グリッド 懸賞金4千200万B

そこに描かれた二つの顔写真を前に、一味は全員ギョツと目を見開いて固まった。ともに激戦を潜り抜けた者達が、かなりの高額で手配されてしまっていたのだ。

「フランキー!!? グリッドも!!?」

「——そうなんだ。おれ達は何とか免れたが…アニキ達はダメだった…」

「よかつたじゃないの、お前おれと合体しててヨ——へっ、名が売れるチャンスだったのによ!!?」

ルフィ達が驚きの声を上げる中、リンは意地の悪い笑みを浮かべてグリードを揶揄い、悪態を返される。

しかしすぐに二人とも真面目な顔になり、もう一枚に記された兄弟分の顔を凝視する。自分達はいいが、もう一人は間違ひなく大きな問題になるだろう。

「このウオーターセブンにいちやあアニキの命が危ねえんだ!!? 今度捕まったって：おれ達の方じゃもう助け出せねえ!! きつとアニキはおれ達が心配で島を出ようとしねえからよ…!!? そんなで話し合ったんだ…!!?」

ザンバイの言葉に、一家もファミリーも全員ぶるぶると震えながら頷く。

悲痛に顔を歪め、涙でぐちゃぐちゃにして、ザンバイは一家を代表して困惑の表情を浮かべる一味に懇願する。

「麦わらさん、頼む!!! 無理矢理でもいい!!! アニキを海へ連れ出してくれ!!! あの元々海賊の子なんだよ!!!」

部屋に置いてあつた荷物を全て背負い、忘れ物一つしていない事を確認してから、一味は水の都に別れを告げる準備を終える。

たつた一人、数日前まで仲間であつたはずの青年の事を気にしながら。

「お前ら、ウソツプの事はちゃんと腹を括つたな!?? これが『筋』ってもんだ…」

「……わかった」

ゾロの確認に、数人がまだ少し受け入れ難く思っている様子の声を返す。

その者たちは、いつまでも悩んでいられないと気持ちをどうにか切り替え、荷物を運び出す作業に集中する。

しかし、ウソツプの件とは別に悩んだまま、その場から動かなくなっている者が、一人だけいた。

「おい、いつまで落ち込んでんだ。最初からその額すげエぞ」

「うるせエ!!! 何でおれだけ絵なんだよ!!! これのどこがおれだ!?!? あア!!!」

「そんなもんだぞ、お前……」

「△□?×※◆♣\*??」

「言葉にしなさい、わかからないから」

不服しかない似顔絵の出来に、サンジは陰鬱さを顔全体に表し、言葉にならない呻き声をこぼす。同情すべき悲惨さであったが、エレノアも他の者も誰も彼を慰めなかった。

「急ぐんだわいな! アニキ達が待ってるわいな」

「もう行っちゃおうのー? 海賊ねーちゃん達」

「忘れ物すんなよ——!!! 船とフランキー貰って出航するぞ」

「サンジが動かねエ」

「放つとけ、そんなぐるぐる」

「あアア!!？」

ドタバタと慌ただしくしながら、麦わらの一味は部屋を後にする。

彼らの背中を名残惜しそうに見送り、ココロ達はゆつくりと、海辺に向けて歩き出した。

そして一味は大荷物を担ぎ、フランキー達が作業を行っていた廃船島へと辿り着く。

そこには昼夜問わず作業を続けてきたアイスバーグやヴィルヘルム、セレネや職長達が横たわり、満足げに眠りに落ちている姿があった。

「アーニキ〜!!？」

「呼んできたわいな〜!!？」

キウイとモズが声を上げ、フランキーを呼ぶ。

しかしそこにフランキーの姿はなく、代わりにアイスバーグとヴィルヘルムがぱちりと瞼を開けて起き上がった。

「ん? ……来たか」

「おお!!? でけエのがあるぞ!!? あれか——つ!!? お——い!!? 来たぞーフラ

ンキー!!! 船くれ——つ!!!」

アイスバーグ達のすぐそばに鎮座する、布に隠された巨大な何かを見つけたルフィが大急ぎで駆ける。

起き上がったアイスバーグ達は一味を迎え、出来上がったものがよく見えるように横へ退いた。

「アイスのおっさん！ ビルのおっさん！」

「来たかね…悪いがフランキーは今外していてね、でも船は出来てるよ。我々が代わりに見せよう」

「この船はすごいぞ、凶面を見た時目を丸くした。あらゆる海を越えて行ける。この船なら世界の果ても夢じゃない」

「フランキーからお前らへの伝言はこうだ、麦わら」

言いながら、同じく目を覚ました職長達とセレネに見守られ、アイスバーグとヴィルヘルムは布に手をかける。

二人がかりで布を取り払いながら、兄弟弟子から託された言葉を一味に向けて贈る。

『おまえはいつか“海賊王”になるんなら、この“百獣の王”の船に乗れ!!!』

そうして現れる——獅子の貌。

巨大な船体に、赤と白と気で鮮やかに彩られた、つぶらな瞳の獅子の船首が飾られた海賊船が、その姿をあらわにした。

「うお—————っ!!! っ!!! っ!!! っ!!! っ!!! っ!!! っ!!! っ!!!」

待ちに待った新たな船、まだ名もなき立派な仲間にして家を前に、ルフイが大歓声を上げる。

他の仲間達も同じく高揚した声を上げ、ドン、と雄々しく鎮座する船に駆け寄っていき。

「色々飛び出しそ〜〜〜!!!」

「うおお、コレくれるのか——!!!」

「へえ…メリー号の2倍はあるな!」

「おっきな縦帆!!? スループ!!?」

「キツチン見せろ!!? キツチン!!?」

「立派な船…! 船首は何のお花かしら?」

「ライオンじゃないかなア…?」

それぞれで慌ただしく騒ぎながら、全員が早速船に乗り込み中を見る。

図書室に風呂に医務室、居間もあれば立派な台所もあり、マストも帆も大きく、より勇ましい航海が期待できる構造が目立つ。

海賊船とは思えないほどに洒落て洗練された造形に、一味の興奮は全く冷めそうになかった。

「研究所!!! 私待望の研究所もあるよ!!! すごい何コレ!!!」

「夢に見た鍵つき冷蔵庫があつた〜!! 巨大オーブンまで!! フランキーありがとう、この船サイコーだぜ!!!」

「なアおっさん達、フランキーどこだ!? 礼も言いてエのにつ!!!」

「——もうお前らに会う気はねエらしい」

エレノアやサンジでさえ、見つけた部屋にきらきらと少年のように目を輝かせ、部屋の中を走り回る。

想像を超える贈り物を貰った事で、ぜひ礼が言いたいと姿の见えないフランキーを探すルフィ。だがアイスバーグ達はそれに、苦笑混じりに首を振ってみせた。

「麦わら、あいつを『船大工』として誘う気なのか?」

「うん!!? よくわかつたな!!? おれ、あいつに決めたんだ、船大工!!?」

「彼はそれを察した様でね」

困ったように肩を竦めるアイスバーグとヴィルヘルム。

この場にはいない兄弟弟子に呆れているような素振りを見せる彼らに、ルフィは訝し気に問い返す。



「イヤつて事か？」

「その逆さ。面と向かつて誘われたら、断る自信がないのさ……だから身を隠した」  
「ンマー、おそらく本心は……おめエらと一緒に海へ出てエのさ……!!？」

やれやれと首を左右に振るヴィルヘルムを見上げ、セレネが無言で目を細める。

厄介者としての意識がいまだ強い男の、真の姿のようなものを見たセレネは、複雑そうにその場に立ち尽くし、父たちの話に耳を傾けていた。

「今まで大切に温めてきたこの『夢の船』を託す事で充分わかるだろ。フランキーはおめエらの事を心底、気に入っちゃったんだ。だが、あいつはずっとこの島にいなきやならねエ、『義務』を自分に課してる」

「義務？」

「我々に言わせれば、すでにバカバカしい執着だよ」

それぞれで肩を落とし、姿を消した兄弟弟子への悪態をこぼす二人。

かつて男が犯した罪、その責任感から自分の望みに素直に従う事ができず、惑い続けている彼に対し呆れと共に悲しみも抱いているようだった。

アイスバーグ達は少しの間無言になると、ルフイ達に振り向いて真剣な眼差しを向け始めた。

「君達がもし……本当に彼を連れて行きたいんなら、手段は選ぶな。力尽くで連れて行き

なさい。それが彼を解放できる唯一の手段さ」

「ムリヤリ？ そんなんでいいのかわ？」

仲間として誘うには、思いのほか強引な方法に、ルフィは思わずきよとんと呆けた反応を返すのだった。

そして、それから数分後の事。

フランキー一家とグリードファミリーの協力により、フランキーの海パンを奪取し廃船島まで誘導。

最後は一家名物の何でも砲を使用し、フランキーを直接廃船島まで送り届けたのだが。

「……何つつー事になってんだあの野郎は」

リンと交代し、一味を見送りに来たグリードが、船の残骸の中に逆様に突き刺さっている姿を見て思わず眩く。

下半身を丸出しにした醜態は町中の人間の悲鳴と怒号を呼び、一味を見送る場はとんでもない騒ぎになっていた。

「うがア!!!」

「フランキー!!??」

わーぎやーとそこら中から声が上がる中、正氣に戻ったフランキーが起き上がり、怒りの声を上げる。

下半身を丸出しにしたまま、自分にここまで醜態をさらさせた子分達の姿を探そうとして、そこで自らが生み出した船の上に立つルフィの姿に気付く。

「船!!? ありがとう!!! 最高の船だ、大切にする!!!」

「……………ああ、お前らの旅の無事を祈ってる」

子分から渡された海パンを手に、感謝の言葉と強い視線を送るルフィ。

フランキーはにやりと不敵な笑みを浮かべ、旅立ちの時を迎えようとしている若き船長を見やる。

ルフィはそんな彼をじつと見下ろし、にっと明るく笑いながら。

「このパンツ返して欲しけりゃ、おれの仲間になれ!!!」

彼の愛用の海パンを旗のように掲げて、大きな声で告げるのだった。

## 第228話 義兄弟の誓い

町の人々から上がる悲鳴が響き渡る中、フランキーがルフィを睨みつける。

下半身を丸出しにしながら堂々と、ルフィが持つ己の海パンを見据えて声を張り上げる。

「パンツを返せ!!? 麦わら」

「じゃ、仲間になれ!!!」

「バカいえ…パンツ取ったくらいで!!? おれを仲間に行けると思うなよ!!?」

鬼の首を取ったように、得意げに笑うルフィの言葉をフランキーはすぐさま一蹴する。そして彼は、一切表情を変えぬままおもむろに動き出し。

なんのその

男は裸

百貫の

波に向かつて

立つ獅子であれ

海を背にし、いつもの派手な構えを取ってみせた。

それも、ルフィ達だけでなく町の住民達全員に、己の全てが見えるように。

「下半身丸出しでポーズを決めた!!!」

「最悪だ!!? あいつ最悪だ!!!」

「甘かった……!!? 何て気が強エんだ」

ざばつ!と盛大に水飛沫を上げる波を背にした男の奇行に、街の住民達からさらなる悲鳴が上がる。

ルフィも同じく、自分の痴態を全く恥じる様子のないフランキーに瞠目し、愕然とした顔でゾクリと背筋を震わせる。

「あいつ!!? 男の中の男だ!!!」

「ただのど変態でしようが!!?」

「あのー、ナミ? 私。パパの船で男の裸なんて見慣れてるから、目を塞ぐ必要はないよ?」

「見なくていいのよ、あんなもの!!!」

尊敬の眼差しを送るルフィの頭を叩きつつ、ナミはエレノアの両目を塞ぐ。

汚物が見えないようにされた本人は困惑するばかりであったが、ナミは頑なに手を外さず、フランキーに冷たい視線を送る。

そんな時、事態を窺っていたロビンがすつと前に出てきた。

「手荒でよければ手を貸しましょうか？」

「え？」

「〃二輪咲きグラップ〃」

ナミの返事を聞かないまま、ロビンは両手を交差させ、能力を発動する。

フランキーの腿の内側あたりから生えた二本の腕は、彼の股間に向けて指先を伸ばし……そして、そこにある二つの玉をギユツとつかんだ。

「ホデューア——っ!!!」

股間から走った途轍もない痛みにも、カツと目を見開いて絶叫するフランキー。

まるで絞殺される鶏の断末魔のような、切なく痛々しい悲鳴に、何が起こっているのか全く分かっていない住民達もどよどよとよめき出す。

「ギヤアアアアアアアアア!!! 何やってんだテメ——!!!」

「ウツ……!!? これはあまりニ……!!!」

「え——っ!!!? ちよつとロビン!!!」

「にぎった——!!!」

「潰れるぞロビン——!!! イテテテテテ」

「アアアアアアア!!!」

そして、何が起こったのか理解している者達は、男性陣と女性陣で別々の反応を見せ

る。

リンとグリードは全く同時に恐怖と怒りの悲鳴をあげ、フーも思わず呻く。ナミはただ驚くだけであつたが、ルフィやチョッパーは目を見開いて叫び、ガレーラの社長と職長達も引き攣つた悲鳴をこぼす。

「もげるわいなー!!!」

「もぎりとれるわいな——!!! みかんの様に!!?」

「やめロ」

キウイとモズも愕然とした声を漏らすものの、あまりに下品すぎたために隣のランファンに止められる。そして彼女は、フランキーにも冷めた視線を向けていた。

「おい、ロビン、男のまま仲間にしたいんだよ!!! 取んなよつ!!!」

「見てるだけでイテテテテテ!!?」

「……痛いのかな、アレ」

「ヤア……?」

悲鳴をあげるフランキーに同情し、笑みを浮かべているロビンにやめてくれるよう懇願するルフィとチョッパー。

そんな男の痛みが理解できないエレノアとナミは、未だ続いている絶叫を耳に、互いに首を傾げる他になかった。

「『宝』を目前にした海賊に『手を引け』と言うのなら、それなりの理由を言つて貰わなきゃ引き下がれないわよ」

「ぐおあ——!!? だ……だから、この島にいてエんだよおれア!!?」

股間を押さえ、藻掻き苦しむフランキーを執拗に責め続けるロビン。

船長が気に入った男が、何の理由も言わずただ一味から離れようとするだけなど、納得できないと彼女は告げる。

だが、それでもフランキーは頷こうとはしなかった。

「お……お前らにや……感謝してるさ……!!? したつてしきれねエくらいにな……!! 一緒に行つてやりてエが……おれにはここでやらなきゃならねエ事がある!!! だから船を贈つたんだ!!!」

顔中汗まみれになりながら、齒を食い縛つて尚も拒否し続ける。

一味に入る気持ちは十分にあるようだ。だが、それ以上に自分に課した役割が、彼から海へ向かわせる自由を奪っている事が伺える。

痛みとはまた異なる葛藤を滲ませるフランキーに、一味は無言で彼の独白に耳を傾けた。

「そもそもおれは船大工をやめた身だ!!? だから、そいつはおれの造る生涯最後の船になる!!? 念願だったんだ……それこそが『夢の船』だ!!!」



「待ちなさい、フランキー……」

精一杯の抵抗で、一味に入る事を断ろうとするフランキー。

だが、そこに不意にヴィルヘルムが口を挟み、アイスバーグと共にじつと咎めるような視線を向けた。

「彼はまだ——君の言う『夢の船』には成っていないハズだろう」

はっ、と目を見開き、振り向くフランキーにヴィルヘルムが告げる。

彼らの脳裏には、かつての……まだトムが存命であった時の記憶が蘇っていた。

最高の船を作りたいと夢見ていたフランキー。

それは、最高の材料と最高の技術、そして何よりも、自身が最高の船大工として乗り込み、共に旅をする事で完成するのであると、彼は語っていた。

船乗りまでこなされては自分の負けだ、とトムが笑っていたその夢を、フランキーは必死に振り払おうとする。

「やりてエ事が、変わったんだ……!!?」

「やりてエ事……!!? それは違う。お前が今、この島でやってる事は全て、『償い』だ……!!?」

アイスバーグはさらに語る、フランキーのこれまでの行いに隠された意味を。

裏町のチンピラ達をまとめ上げた事も。

賞金稼ぎとして、これまで多くの海賊達を捕らえてきた事も。

全てはトムが愛したこの町を守る事で、亡き師に償おうとしたからではないのかと。

「端からはとてもそうは見えないけどね」

「……!!? 見えねエだろうよ…そんなつもりは毛頭ねエ!!」

「大好きな船造りもやめて、自分を押し殺して生きてきた…これからもずっとそうするのかい!!?」

「——たとえトムさんが許しても、おれ達がお前を許してやつても…何も変わらねえんだろうな…」

アイスバーグもヴォルヘルムも、長らくフランキーを憎み、しかし同時にそれ以上に案じていた。

師からすでに赦されていた罪を償い続ける彼の人生を、いつまでも自分を責め続ける彼の心を、過去に縛られたままの兄弟弟子の未来を。

「もういい加減に…!!! 自分を許してやれよ、フランキー!!! ……もう、てめエの夢に生きていいだろ…?」

アイスバーグ達のその言葉に、ボロボロと涙を流し、歯を食い縛るフランキー。

そんな彼の元に突如、街の方から飛来した何かに着地し、盛大な音と船の残骸の欠片を撒き散らした。

「何だア!!? バッグ」

「旅の荷物です!!? アニキ!!!」

「アニキ〜!!! 色々…!!! 勘弁して下さい!!! ホントにすいません!!! どんな罰も覚悟の上です!!!」

中身がパンパンに詰まったカバンが足元に置かれ、困惑するフランキーに、煙を上げる大砲の傍からザンバイ達が叫ぶ。

全員がその場で土下座をし、一家の頭に精一杯の謝意を示していた。

「おれ達バカだから!!! ねエ頭振り絞って一生懸命考えたんですつ!!!」  
「ねエ頭で何を考えたってんだよ!!!」

必死に頭を下げ、フランキーを送り出そうとするザンバイ達。

しかし、フランキーはギロリとザンバイ達を睨みつけ、彼らの気持ちを余計なお世話だと払い除ける。

何が何でも旅立たせようとする、自分の意思を無視するような子分達の行為にふつつと苛立ちが募る。

「出しゃばんじゃねエよ!!? おれの人生だ!!! 全ておれが決める事だ!!! 子分共に敷かれたレールの上を、棟梁のおれが喜んで歩けるか、みつともねエ!!! 本当にくだらねエ、ねエ頭なら初めから使うんじゃねエよ!!!」

「申し訳ねエ…!!?」でも、少しくらい考えたらダメですか!!? おれ達みてエなゴロツキを拾ってくれた「大恩人」の…」

盛大に叱られ、身を縮こまらせるザンバイ達。

厚意を否定され、叱られてなお、視線を逸らすことなく兄貴分を見つめる。

口は悪くとも、何よりも自分達の事を想つてこの島を離れたがらないであろう彼の事を本気で案じ、涙を流して叫ぶ。

「あんたの幸せも考えたらダメですか!!!?」

その言葉に、フランキーは大きな衝撃を受け、よろよろとその場に座り込む。

決して否定する事などできるはずもない、子分達からの恩返し。フランキーはもう言葉も出せず、どきつと背中から倒れ込んだ。

「…つたく、世話がやけるぜ」

そんな彼を見下ろし、不意にグリードがにやりと笑みを浮かべて一步を踏み出す。

とんつ、と段差の上に飛び乗り、体勢を整えながら仁王立ちした彼は、大きく息を吸い込むとそれを力の限り声にして吐き出した。

「兄弟イ~~~~~!!!」

突如響き渡った声に、町の住民や船大工達が一斉に振り向く。

ルフィ達やフランキー達も、はっと目を見開いて振り向く中、街中に響き渡るような声量でグリードが叫び続ける。

「おれもなア!!! こいつらと一緒に“おれの道”を進む事に決めた!!! 皇帝になるつーこいつの夢に付き合つて、“王”になる事にした!!! この町とはさよならだ!!? だからおめエも……やりてエ様に生きやがれ!!!」

真つ直ぐ、一切の遠慮なく放たれた言葉に、フランキーは思わずぐつと息を詰まらせる。

以前の肉体を失い、新たな道を進まざるを得なくなつた兄弟分。そんな彼が、自分とは異なる道に向けて大いなる野望を抱いている様子に、劣等感のような者を抱いてしまふ。

「そうだ!!! てめエの人生、てめエの好きな様に生きろ!!! そうすりやア、お前の子分共も心の底から笑えらア!!!」

鼓膜を震わせる、愉しそうに笑っているかのような凄まじい声。

いつしかグリードの目からは、ボロボロと大粒の涙が溢れ出していた。

兄弟分との別れを悲しみ、過去に囚われて自由になれずにいる様を嘆き、立ち止まっている背中を蹴り飛ばす気持ちで言葉を紡ぐ。

「いつかまた……!! 夢の果て」で……!!? それぞれの世界の頂点に立つて!!! また会おうぜ!!! 兄弟!!!」

「……………!!! どいつもこいつも……………!!?」

叱られる事を覚悟でここまで連れて来てくれた子分達、自分なりの方法で奮い立たせようとして来るグリード。

彼らの気持ちが熱く伝わってきて、フランキーはボロボロと顔中を涙で濡らし、言葉にならない声をこぼし、やがて再び痛みを訴え始める。

「おおい!!? ロビン!!? 加減してくれ頼むから!!? 女になっちゃまう!!!」

「泣いてるぞあいつー!!!」

転げ回るフランキーを案じ、ルフィとチョッパー、一家とファミリーが案じる声を上げる。

それを微笑みを湛えて見つめていたロビンは無言で構えを解く。

しかし、フランキーはいつまでも泣き喚き、転げ回り、痛みを訴え続けていた。

「ん? アレ? お前、何もしてねエのか?」

「ふふつ…私がやったのは、初めの一回だけよ。ずるいわね…涙を痛みのせいにして」

子分達の手前、意地を張って歓喜で泣く姿を見せられないからと、ロビンを理由に思いきり感情をあらわにしているフランキー。

ロビンは苦笑をこぼしながら、そんな彼と子分達を眩しそうに見やるのだった。

「……てめエらおれがいなくて……生きていけんのかよ……!!?」

「オイオイ……こいつらをナメすぎだぜ、兄弟……」

「ウォーターセブンの裏の顔……!!? おれ達……力合わせて立派に受け継いでみせますとも!!!」

雄叫びを上げ、決意を口にしてみせるフランキー一家。

最後の最後まで心配の言葉をこぼす兄弟分に、グリードは顔を涙と鼻水で汚したまま笑う。せめて兄弟分が、何の後悔もなく旅立てるように。

「たとえアニキがどんなに遠くへ行こうとも!!! おれ達ア一生あんたの子分ですからね!!!」

「ウツ……!!? イデデデ!!? 涙が出る!!!」

嬉しきでまた涙が溢れ出しそうになり、フランキーはまたロビンのあたえる痛みを理由に泣き叫ぶ。

それを案じる子分達の声でまた涙が溢れるという悪循環に陥りながら、誰一人として、騒がしいやり取りに苦言をこぼす者はいなかった。

「ルファイ——つ!!?」

「あ、ゾロ、サンジ」

そこに、ゾロとサンジが慌てた様子で戻って来る。

何事か、とフランキーから視線を移したルフィに、二人はやや険しい表情となって船に駆け込んでくる。

「大変なコトになって来た!!」

「お前のじいさんが戻って来たぞ、ルフィ!!! 向こうの海岸で攻撃態勢でおれ達を探してる!!!」

「えエ!?? 何で!?? 捕まえねえんじやなかったのか!??」

「おれ達を知るかよ、出航準備急げ!!? うおっ!!? フランキー!!? てめえまだパッツはいてねエのか!!?」

下半身を丸出しにしたまま座り込んでいるフランキーに気付き、サンジが思わず声を上げる。

ルフィはその声に、自分が今だ握り締めたままの海パンの存在を思い出し、少し考えるとやがて思いきり振りかぶった。

「返す!」

フランキーに呼びかけ、海パンを投げ渡す。

フランキーがそれを受け取るのを見届けると、立ち上がった彼の頭上で仁王立ちし、不敵な笑みを浮かべてみせた。



「さア乗れよフランキー！ おれの船に!!!」

「……………へへへ、生意気言うんじやねエよ!!? ハリボテ修理しかできねエド素人共め。これだけ立派な船に大工の一人もいねエとは船が不憫だ」

再度誘ってくるルフィに、フランキーはおもむろにサングラスをかけ直すと、にやりと好戦的に笑ってみせた。

躊躇いは今、消えた。気がかりは全て兄弟と子分達が解消してくれた。

後はもう、胸の内から湧き上がる想いのままに、未知の世界に向けて一步を踏み出すだけだ。

「仕方ねエ!!? 世話してやるよ!!! おめエらの船の『船大工』!!! このフランキーが請

け負った!!!」

「いやったア~~~~!!! 新しい仲間だ~~~~!!!」

雄々しく宣言すると、麦わらの一味から歓声が上がる。

彼らの元へ向かおうと、フランキーは勇ましく一步を踏み出そうとし、しかしその前に今一度、長年世話になってきた町と住民達を振り返る。

「ちよつと行つてくらア!!!」

言葉にしきれない感謝を胸中で叫び、滂沱の涙を流しながら、フランキーはその場で変態的に尻を突き出して飛び跳ね、告げたのだった。

## 第229話 “ごめん”

「ガープ中将!! “麦わらの一味”が見つかりました。南東の海岸、廃船島で今まきに出航目前の様で!!」

「すぐに向かうぞ、全員乗れ!!」

ウオーターセブンの一角に停泊していた海軍の軍艦が、ゆっくりと動き出す。

麦わらの一味を捕らえるという任務を無視しようとしていたはずの彼らだったが、あの事情で再度ルフィ達の元に向かう羽目になっていた。

「ガープ中将、僕らルフィさん達と爽やかに別れた手前、すごく恥ずかしいんですが」  
「……」

「文句ならセンゴクに言え!! あいつに怒られて引き返すハメになったんじゃからな!

…偉そうに!! “金獅子”の件じゃ内心エレノアに感謝しとったくせに!!」

不機嫌そうな顔で腕を組むガープに、困り顔のコビーが告げ、その隣でヘルメツポも微妙な顔になる。

互いにさらなる精進を重ね、いずれより強くなつて会おうと男の誓いを果たして来たのに、ものの数日で再会する羽目になったのだから無理もない。

そこに、ガーブの傍でデツキチエアに気だるげに寝転がった青キジが、ぼそりと口を挟む。

「電伝虫で『孫だから』ってアンタ言うからでしょうが」

「やかましいわ、黙つとれ、青二才が」

それぞれ複雑な気持ちを抱えたまま、ガーブが率いる軍艦は廃船島に向かって進行を開始した。

「出航——!!?」

多くの人々に見送られて、獅子の船首の船が進み始める。

本来嫌われ、疎まれる存在である海賊達を、人々は心からの感謝を込めたを送り、見送っていた。

「アニキーお達者で——!!?」

「フランキー一家は不滅ですぜー!!!」

「しつかりやれよオ——兄弟くく!!!」

ともに旅立つ事を決意した兄貴分であり兄弟分の背中を、子分達とグリードが手を振って送り出す。

過去に前例のない暖かな雰囲気の中、進んでいく船の上で、フランキーは仲間達に振

り向いた。

「ちよつと!!? ルファイ!!?」

「ルファイ——!!!」

「本当にいいのか、麦わら。もう一人待たなくて」

ナミとチョップも同じく、ここにまだ現れていない一人を待たずに出航を決めた船長を凝視する。

それにルファイは、笑って首を横に振る。明らかに無理をしている、引き攣った顔で仲間達に決定はくつつがえらない事を告げる。

「待ってたさ!!? サンジからあの話を聞いてから、おれはあのガレーラの部屋が留守にならねエ様にあそこでず——つと待ってたけど、来なかった!!? これが答えだ!!?」

「あいつだつてよ……!!? 楽しくやると思うよ」

そう語るルファイの脳裏には、数日前にサンジからある情報が。

出て行つたウソツプが、誰もいない海岸で何やら一味に帰つた時の予行演習をしていると知つた時の様子が思い出される。

——誰一人、こつちから迎えに行く事はおれが許さん。

一味の元狙撃手に戻つて来る意思があると知り、大喜びで迎えに行こうとしたルファイ

達に、ゾロが厳しい口調でそう言い放った。

——間違つてもお前が下手に出るんじゃないやねエ、ルフィ。

おれアあいつから頭下げてくるまで認めねエぞ!!

困惑するルフィ達に、ゾロは有無を言わせぬ鋭い目で仲間達を睨みつける。

彼もウソツプのエニエス・ロビーにおいての加勢については感謝しているが、それとこれとは別だと拒絶の意思を見せる。

——ルフィとウソツプの初めの口論にどんな想いがあるうが、どっちが正しかろうが……!!

男が「決闘」を決意した以上、その勝敗は戦いに委ねられた。

そしてあいつは敗けて……!!

勝手に出てつたんだ。

痛々しい、仲間同士での戦いの光景が蘇り、チョツパーの顔が悲痛で歪む。

気持ちちは理解できるが、激情のままに船長を罵倒し、決別の戦いを挑み、そして敗北し地に沈んだ姿が全員の脳裏に蘇る。

——いいか、お前ら。

こんなバカでも肩書は「船長」だ。

いざつて時にコイツを立てられねエ様な奴は、一味にやいねエ方がいい……!!

船長が「威厳」を失った一味は必ず崩壊する!!!

普段おちやらけてんのは勝手だが、仮にもこのおれの上に立つ男がダラしねエマネしやがったら、今度はおれがこの一味を抜けてやるぞ!!!

ガンガンとルフィの頭を刀の柄で叩き、鋭い声でそう告げる。それじゃ本末転倒だと言口を挟むナミに一喝しながら、己の意思は変わらないと鋭く仲間達を睨みつける。

——あのアホが帰って来る気になつてんのは結構な事じゃねエか。

だが、今回の一件に何のケジメもつけず、うやむやにしようつてんなら、それはおれが絶対に許さん!!!

その時は、ウソツプはこの島に置いていく!!

残酷な言葉に、ナミが思わず止めようと声を漏らす、ゾロはそれを一蹴し刀の鞘を床に突き立てる。

普段は仲の悪いサンジも、今回ばかりはゾロに賛成し厳しい視線をナミに向けていた。

——エレノアだつて頭下げて詫びたんだ……そのくらいの誠意を見せねエ様な奴を受け入れる気はねエ。

もしこいつが頭を下げる事なく、おれ達の前に居座つてたんなら、おれはエレノアを追い出してた。

ぎろり、とゾロの目がエレノアを射抜き、エレノアの肩がびくつと跳ねる。

無意識のうちに、ナミと同じくウソツプを擁護する言葉を吐きそうになっていた彼女は、やがて諦めたように俯いてしまった。

——こんな事を気まぐれでやる様な男を、おれ達がこの先信頼できるハズもねエ……!!

簡単な話だ…ウソツプの第一声が深い謝罪であれば、よし…それ以外ならもう奴に帰る場所はない。

おれ達がやってるのはガキの海賊ごっこじゃねエんだぞ!!!  
ウソツプが一味に戻る事ができる条件を設定し、ゾロは鋭く言い放つ。

最後にはルフィもそれで納得し、船が完成し、出航するまでの数日間、ウソツプの反応を待つ事を決めたのだった。

そして数日間、ウソツプが一味の元に戻す事を出さなかった。

それを悲しみながら、寂しがりながら、ルフィはそれを仕方がない事だと割り切ろうとしていた。

「海賊はやめねエだろうから、そのうち海で会えるといいなー!!?」

陽気に笑おうとしつつ、やはり無理をしているのがまるわかりな様子。

いつも通りに笑えなくなっているルフィに、仲間達も暗い雰囲気醸し出しながら、何も言えず航行の役目を果たそうとする。

その時、船の近くで大きな水飛沫が立ち上り、船体がぐらぐらと大きく揺さぶられた。「しまった!!? 見つかったぞ、海軍だ!!?」

「……………!!? じいちゃん!!?」

波を掻き分け、近付いてくる犬の船首の軍艦。

その甲板の上にガーブが、拡声器を持ってルフィに声を発して来る。

『おいルフィ〜、聞こえとるかー!!? こちらじいちゃん、こちらじいちゃん』

「おいじいちゃん!!? 何だよ!!? おれ達の事ここでは捕まえねエつったじゃねエか

!!?。」

『いやあしかしまあ、色々あつてな。すまんがやつぱり海のモクスとなれ!!?』

「え〜〜つ!!?」

一方的な決定に、思わずルフィが目を剥いて声を上げる。

安心してゆつくりしていると言っていた筈なのに、正反対に意見を変えて捕まえようとして来る祖父の身勝手さに驚愕が止まらない。

なお、自身も大体似たような性分である事は、まったくもって無自覚でいた。

『お詫びと言っちゃあ何じゃが、わし一人でお前らの相手をしよう!!?』



「それはハンデじゃないよ!!? 死刑宣告つてんだよガープ!!!」

『ぶわっはっは!!? まあそう言うなエレノア!!?』

海兵達を後ろに下がらせ、上着を脱ぎ捨てるガープの言葉にエレノアが目を剥く。

人員を減らそうが手加減しようが、一人で何十何百人分もの戦闘力を有する男が相手では、ほとんど意味がないとしか思えなかった。

『拳・骨…隕石!!!』

そして、ガープが手にした砲弾が凄まじい勢いで飛来し、廢船島の一角に炸裂する。

爆発を起こしたその箇所を凝視し、サンジがぎよつと目を見開いた。

「す…素手で大砲撃った!!?」

「大砲よりよっぽど強く飛んで来たぞ、野球のボールじゃあるめエし!!!」

「ぶわっはっはっは!!? 年は取りたくないもんじゃ、最近パワーが落ちていかんわい!!?」

戦慄するサンジとゾロの耳に、豪快に笑いながら腕をさするガープの声が届く。

最近は力が落ち。ならば全盛期はさらに凄まじいものだったのか、と海軍のまだまだ底の見えない力に背筋を震わせる。

「何っつージイさんだ……——おいお前ら!!! 踏ん張れヨー!!!」

住民達の間から身を乗り出し、グリードとリンが一味を応援する。

敵に回すには明らかに危険すぎる男に狙われ、絶体絶命の窮地に置かれる仲間達に、何も出来ない自分を不甲斐なく思いながら叫び続ける。

「仕方ないっ!!? とにかく逃げるわよ!!? 新しい船が粉々にされちゃうわ!!」

「砲弾タマ1000発持って来い!!」

「はっ」

ガープの命令で、海兵達がガラガラと砲弾を乗せた台を運んでくる。

本来、大砲の傍に設置して次々に装填するための道具だが、海兵達はそれをガープを中心に配置する。

それを見て、コビーとヘルメツポも戦慄の表情を浮かべた。

「『拳骨流星群』!!!」

「あーあ、あんなのくらったら船の一隻なんてひとたまりもねエぞ!!?」

「……さア始めようか、小僧共」

ぼきぼきと拳を鳴らし、手近な位置に置かれた砲弾をつかみ取る。

それをまさに野球の球のように構える姿を目の当たりにして、ルフィ達は同時に震えあがり、慌てて動く。

「船は全速前進!! おれ達は砲弾を潰す!!」

「ああ」

「了解！」

速度を上げるため、砲弾を防ぐため、ナミが全員に指示を送る。

直後、ガーブが放った砲弾が次々に飛来し、ルフィ達は船体に直撃しそうなものを次々に破壊していく。

海面に炸裂したもので、大きな波を生じさせて船体を揺らすものだから、堪ったものではなかった。

その時、双眼鏡を手に町の方を覗いていたチョッパーがハツと息を呑み、一味に振り向いた。

「きた!!! きたぞウソツプが」

「本当!?」

「おい、みんなーウソツプが来たぞー!!?」

全員が町に視線をやれば、確かに一人の青年が何かを叫びながら、町から飛び降りて駆けてくる姿が目に入る。

しかしルフィもゾロも、彼の元に向かおうとする素振りを全く見せなかった。

「ゾロ君!!!」

「聞こえねエよ……!!」

降り注ぐ砲弾を防ぎながら、響いてくる声を無視するルフィ達。

チヨッパやフランキーがそれを咎めるが、誰も振り向こうとしない。響いてくる言葉が謝罪の言葉ではないために、決して迎えに行こうとしなかった。

「別れの言葉………二度も言わせてくれねエのかよ……!!? そつちがその気なら……最後に一つ……言わせて貰うぞおめエら……」

廃船島の縁に立ち、遠ざかっていく船を見つめて荒い息を吐くウソツプ。

何の反応も返してくれない仲間達をキツと睨み、拳をきつく握りしめると、その場で大きく息を吸い込み。

「ごめ——ん!!!」

町中と、遠ざかる船にも届くような大きな声で、そう叫ぶ。

ボロボロと涙を流し、顔をぐちゃぐちゃにした長鼻の青年の声が、ルフイ達を懸命に呼び止めようと響き渡った。

「意地はつてごべ——ん!!! おれが悪がったア——!!! エレノアア〜!!! ヒデー  
こと言つてホントにごべんよオ——!!!」

ぼたぼたと涙と鼻水を混ぜ、地面に垂らす。嗚咽で肩を震わせていた彼は、やがてその場につくりと膝をつき、土下座をしながら悲痛に泣き叫ぶ。

「今更みつともねエんだけでも!!! おれ」、一味をやめるつて言ったけど!!! アレ……!!!  
取り消すわ」けにはいかねエがなア——!!! ダメかな——!!! ……頼むからよ、お前ら

と一緒にいさせてくれエ!!! もう一度……!!!」

情けなくて、見つともなくて、それでもこれからも共にいたいという気持ちで、恥も何もかも捨てた必死の姿を見せる。

こんな形での別れなど御免だと、懸命に頭を下げて懇願してみせる。

「おれを仲間に入れてくれ」エ!!!」

海の方こうに響き渡る、自分の声。

それに応える声は何もない事に、ウソツプががっくりと項垂れかけたその時。

彼の目の前に、獅子の船の後部から伸ばされた船長の手が、大きく手を開いて差し出された。

「バガ野郎——はやく掴ばれ——っ!!!」

ふっ、と不敵に笑っていたルフィの顔が、ウソツプと同じくぐちやぐちやに崩れる。ぶわつと噴き出した涙と鼻水で、見るも無残な有様になった。

そんな船長の姿をエレノアはけらけらと笑い、目尻に涙を滲ませて大きく叫んでみせた。

「そんなの最初っから怒ってねーんだよ!!! バ————カ!!!」

「むあ……!!!」

「バカはおめエらだ!!？」

「アハハ……!!! カッコ悪いわね、あんた達っ」

途端にやかましく、しかし重苦しかった雰囲気霧散させるルフイ達にゾロ達が苦笑し、ナミが呆れて笑う。

ウソップが伸ばされた手をつかみ、まるで釣りのように引き戻しながら、ルフイは仲間達に向けて泣きながら叫んだ。

「やっと……全員揃った!!! さっさとこんな砲撃抜けて!!？ 冒険にいくぞ野郎共〜  
!!!」

「「「「「「お——っ!!!」」」」」」

一度は切れかけ、そしてあらためてより強固に繋ぎ直された絆を確かめながら。

一味は新たな海を目指して、改めて進み出すのだった。

## 第230話 “君の名は”

「行ケ——お前ラア!!! どこまでもどこまでも!!! 夢に向かつて突つ走レ〜!!! —

——ガツハハハ!!! 負けんじゃねエぞ、兄弟イ!!!」

「エレノアちゃん!!?」

「エレノア〜〜!!!」

「頑張レ!!! エレノアシン!!!」

砲弾が降り注ぐ中、遙かな水平線の向こうを目指して突き進む獅子の船首の船を見送り、水の都の住民達が声を上げる。

その中には、少しの間共に旅をした者、司法の島で共に戦った者、一味の一人と縁深い者の姿もあり、遠ざかっていく彼らを力の限り激励を送っていた。

しかし、突如一味の船で、貼られていた帆が一つ一つ畳まれていく様を目にし、リン達はギョツとなる。

「ン!?? 何してんだあいつラ!??」

「なぜ帆をたたんで…!!!」

推進力を得られない状態で、どうやって海軍から逃げるつもりなのか。

一味の謎の行動に瞠目しながら、リン達はそれを見守る事しかできずにいた。

そしてその行動は、一味の数人も首を傾げるものであった。

訝しみながら、フランキーに指示された通りに歩を畳み、ロープを結んで纏めていく。その間、速度は徐々に落ちる一方であった。

「おい、いいのかよフランキー!!?」

「バカ野郎!!? この船を信じろ!!?」

「そうだ信じろバカヤロー!!?」

「コノヤローバカヤロー!!?」

「コンニャロめー!!!」

「手伝え、お前ら!!?」

困惑の声を上げるサンジに、フランキーは踊りながら笑う。

その横では肩を組みあつたルフイ、ウソツプ、チョツパーがゲラゲラと笑っていて、ゾロに激しく叱責を受けていた。

「ウソツプあんた、ほんの数秒前まで……まあいいけど」

「気にしたら負けだよ、ナミ」

何の違和感もないように、ごく普通に一味の中に戻ってきているウソツプに何か言い



たげにしていたナミだったが、エレノアに言われてすぐに諦めた。

そして、何が起ころのかも知らないまま帆を畳み終えた時だった。

「何?!? 船の名前?!? こんな時に?!?」

「そうさ、名もねエ船じゃ出航に勢いがつかねエだろ」

「『何とかライオン号』みてエな感じか?」

不意にフランキーがあげた、この船の名前をどうするか質問に、一味の面々は首を傾げる。

急に聞かれると、意外と出てこない。海に沈んだ船、ゴーイングメリー号は製作者のメリーがつけたものであり、一から考える機会はなかつたのだ。

「よーし!!? 強そうな名前おれ考えた!!? 『クマ!!? 白クマ!!? ライオン号!!?』」

「そんな変な名前の船あるかア!!!」

いち早く手を上げたルフィだったが、案の定まるで頼りにならない。

その後も『トラ!!狼!!ライオン号』だったり『イカ!!タコ!!チンパンジー』だったり、碌な名前が一つも出てこない。その度にウソツプのツツコミが飛んだ。

「あいつに任せてたらとんでもない名前にされちゃうわ……エレノア、あんた何かない?」

「えー……つと………キキ…『キングライアン5世号』とか?」

「5世どつから出て来た!!」

急にナミに振られたエレノアが、ぎよつと慌てふためきながら浮かんだ名を上げると、またもウソツツからツツコミが飛ぶ。

恥ずかしそうに顔を伏せるエレノアを他所に、フランキーが不敵に笑みを浮かべる。

「船の名前、おれからも候補があるぜ」

それは、船の製作途中、船首部分を見たガレーラの船大工達との会話の中で上がった単語だった。

出来上がったそれを見て、船大工達はひまわりだと、アイスバーグとヴィルヘルムに至っては太陽だと勘違いし、勝手にそれに相応しい名前を考えた。

その船の名前こそ——過酷なる“千の海”を“太陽”のように陽気に越えていく船。

『サウザンドサニー号』

フランキーの口から紡がれたその名に、ルフィ達は皆わつと歓声を上げた。

「おおっ!!」

「かっこいいなそれっ!!!」

獅子の船首でありながら、太陽を元とした名前だが、一味の気質を基としたためか、ひ

どくしつくりくるように感じる。

勘違いから発生したものであったが、それ以外にないくらいに一味の心をつかんだよ  
うだ。

「おれが今考えた『ダンゴ・ゴリラ・ライオン号』よりいい!!?」

「しりとりかつ!!?」

「おれの頭をよぎった『ライオネル親方』より…いいな」

「私の『暗黒丸』より…」

「おれの『ムツシユひまわり』より…」

「気は確かかおめーら!!!」

「今日も今日とてキレツキレだねエ、ウソツプ君……」

仲間達から次々に上がる名前、あまり呼びたくないそれらにウソツプが目を見開いて  
平手をびしつと振るう。

以前の一味での彼が戻ってきたと感じ、エレノアは呆れつつもホツと安堵していた。

「千の海を越える船って…素敵ね…『太陽』も」

「待て!!? お前ら今のは序の口だ、おれの考えたこの名前こそ本命!!? 聞け!!?」

「この船の名前は…」

名前が決定しかけたそこへ、フランキーが待ったをかける。

数々の船を作り、それら全てに名前を付けてきた彼にとつては、名づけは決して譲れない儀式らしい。

が、意気揚々と告げた彼の名前の案、『ライオンギャングチャンピオン号』という名を聞いている者は、誰もいなかった。

「アイスのおっさん達のやつでいこう!!? 気に入った!!?」

『「サウザンドサニー」か、いい名前だ!!?」

「賛成!!?」

「名前が決まると出航の気が引き締まるもんだな!」

「よろしくな、サニー!!!」

ルフィ達は既にサウザンドサニーという響きを気に入り、口々に船に呼びかける。フランキーの声には気づいてもいなかった。

無視されたフランキーはそっぽを向き、唇を尖らせてブーブーとぼやいていた。

「おいフランキー、そこで何ブーブー言ってる。早く秘密兵器とやらで振り切れよ!!?」

「ああ、急げ。おめーの言う通り帆はたたんで、もう軍艦はすぐそこだ!!!」

「わかったよ、うるせエ!!」

ゾロに苦言をぶつけられ、フランキーは声を荒げて反応を返す。

そしてやがて、にやりと笑って町に背を向けている仲間達に告げる。

「?今のうちにこの美しい『水の都』を見納めとけ!!? あつと言う間に島のかげも見えなくなるぞ」

「そうか…じゃ。じいちゃ——ん!!? それから…!!? コビーと…」

ルフィは頷くと、船尾に進み出て身を乗り出し、自分達を追いかける海軍の船に向けて手を振り、祖父と友人に向けて声を張り上げる。

何発も拳骨を食らったりしたものの、滅多に会えない存在との再会に対する喜びを大きな声で伝える。

「久しぶりに会えてよかった!!!」

「呼べよ!!! おれの名を!!!」

「何じやいルフィ!!! まだ玉は残つとるぞ!!!」

名前を呼ばれなかったヘルメツポが抗議の声を上げるのをよそに、ガープは砲弾を撃ち込む。

ルフィはそれを片腕を横に薙ぐ事で弾き、難なく防いでみせた。

「ムダだ!!?」

「ん!!?」

「こつからおれ達、本気で逃げるからな!!! またどつかで会おう!!!」

追跡など何の意味もない。何と言われようと、祖父の強さにも負けない大海賊に

なつてみせると宣言するように、ルフィは堂々と告げる。

その不敵さに、ガープはカチンと怒りを抱き、目を吊り上げて孫を睨みつける。

「おんのれ、わしの子供の子供のくせに生意気な!!! ルフィく!!!」

「ガ…ガープ中将、ちよつと冷静に!!?」

拳をわなわなと震わせるガープを、ヘルメツポが必死に宥めようとし、その横でコビーはルフィの堂々とした姿にさらなる憧憬を抱く。

ガープから放たれる圧が膨れ上がる様に、ルフィは楽しそうに笑いながら、今度はウオーターセブンに向けて声を張り上げた。

「アイスのおっさーん!!! ビルのおっさーん!!! 船の名前貰ったぞ!!! いい名前ありがとう!!!」

「パニーニヤも!!? セレネも!!? ガーフィールさんも!!? ホントにありがとう!!!」

「みんな色々ありがとう——!!! おれ達行くからよ——つ!!!」  
もう、声など発しても届かないであろう遠い距離。

それでも、旅の助けをしてくれた事への精一杯の感謝を伝えたいと、一生懸命に手を振って叫ぶ。

町ではそんな彼に苦笑しつつ、一味の無事を願う暖かい視線が向けられていた。

「わしをナメとつたら、ケガするぞ——!!!」

その時そこへ、軍艦と殆ど同じほどの巨大な鉄球をガープが大きく腕を振りかぶり、振り下ろしてくる。

迫り来る鋼鉄の球体、いや最早壁と呼ぶべき凶器を前に、一味が全員そろって悲鳴をあげた、その瞬間。

「<sup>クイック</sup>風来バースト!!!」

サウザンドサニー号の後部に備わった、大きな穴。

その奥から光が漏れ出し、直後に凄まじい衝撃が発生し、船を遥か空へと飛び立たせた。

船が空を飛ぶ。これまで見た事がない光景に、一味も海兵達も全員、驚愕で目を見開いた。

「うおお——っ!!!」

「……この感覚は……!!! 覚えがある!!!」

天を突き進むサニー号にしがみつきながら、ルフィ達ははつと息を呑む。

凄まじい速度で空を舞うその感覚は、かつてメリー号と共にエニエス・ロビーから脱

出する際に感じたもの。

コーラを使ったフランキー自慢のシステム。

1 km 飛行できる前代未聞のその力を、フランキーは自慢げに語る。

「お前らの乗ってきたゴーイング・メリー号にできて、この船にできねエ事は何一つない!!? 全てにおいて上回る!!? だが、あの船の勇敢な魂は!!? このサウザンドサニー号が継いで行く!!」

海に沈んだ勇敢なる船に対して最大級の敬意を表し、その経験の全てを詰め込んだものを作った、とフランキーが笑う。

彼にも負けない海賊船にするために、フランキーはここから先の旅を望む。

「破損したらおれは完璧に直してやる!!! 船や兵器の事は何でもおれを頼れ!!! 今日からコイツが!!? お前らの船だ!!!」

「「「おおオ——っ!!!」」」

海賊達の雄々しき雄叫びと共に、獅子の船は水平線の彼方へと飛んでいく。

その様を、ガープを始めとした海兵達は驚愕と称賛の混じった眼差しで見送るのだった。

砲弾の雨もやみ、穏やかになった海。



遠く、見えなくなってしまうた一味の向かう先を眺めていたリンが、不意にため息をこぼした。

「やれやれ……騒がしい奴らが皆行っちゃった」

「いたらいたで鬱陶しい連中だったガ……どうしたものの力、あの騒がしさが恋しく思えてくるわい」

肩を落とすリンの隣で、フーも肩を竦める。

悪態をつきながらも、分かれた仲間達に対して寂しさを感じている事を察し、リンはにやにや意味深に笑う

「さてト……旅の目的は達成した。とつとと故郷くに帰ってクソ親父から玉座を奪い取るとしようカ……」

ぐいつ、と勢いをつけて立ち上がり、踵を返そうとするリン。

しかしその前に、ぼんやりと海を見つめるメイに目をやり、その傍に徐に近付いていく。

「おれアそういうつもりだから、お前も覚悟しとけよチャン・メイ。後継者争いは今日この時を持って終わル」

その言葉に、メイの肩がびくつと震える。

目指していた物を、政敵に先に奪われ、自分の旅が無意味になってしまった事に対し

て、酷く落胆を覚えていたようだ。

暗い顔で俯く少女に、リンはふんと鼻を鳴らして自分を指差した。

「んデ……………お前の部族も全員受け入れてやる」

「…エ？」

「おれはこの不死身の怪物すら受け入れた男だゾ？ 敵対部族の一つや二つすくい上げたつて、痛くも痒くもねエヨ」

平然と、時に殺し合いにまで発展しかける程に険悪な仲である政敵を受け入れる宣言をしたリンに。

メイはすさまじく険しい顔で、涙目でぶるぶると身体を震わせた。

「……………何つー顔してんだ。安心しろ、シン国の人間は盟約を決して破らねえんだゾ」

「全部だなんて強欲すぎヨ!!! ヤオ・リン!!!」

「あー…合体してるせいかグリードのが移ったか——ガツハハハハ!!!」

自分が思いのほか、同居人に影響を受けている事を自覚し、頭を掻く。

その時、交代したグリードの元に、グリードファミリーの面々が全員揃って跪き、首を垂れてくる。

「おれ達アどこまでもお供しますよ、グリードさん!!!」

「ついでにお前にも従ってやるよ、糸目!!!」

「シン国だろうがどこだろうが行ってやらア!!」

姿が変わり、時折人格が交代するというややこしい状況になりながらも、変わらず忠誠心を向けてくる彼ら。

その様に、グリードは満足そうに口角を上げ、肩を揺らした。

「ガツハハハ、頼もしいな、お前ら!!! —— さア…これから忙しくなるぜ。だがその前ニ……………」

再度リンと交代し、若き皇子は表情を切り替える。

虚空に見るのは、司法の島で相まみえた最強の剣士。

辛勝、とすら言えないようなお情けの勝利。そこから生じた悔しさが、リンにさらなる活力を与える。

「仕切り直しだ…!!!」

「「「はっ!!!」」」

王となる道を、そしてその途中に立ちはだかる数々の衝撃を幻視し、リンは新たに加わった多くの臣下に告げる。

まだ見ぬ過酷な旅を想い、そして同じだけ険しい道を進もうとしている仲間達と兄弟分を想い、リンとグリードは不敵に笑うのだった。

——その頂に流れ出る伏流の水美しく

鳴り響くのは職人氣質の槌の音

町の活気にリズムを合わせ

かなな木槌を打ち鳴らす

煙ふく鉄の列車に願いをのせて

振り返らざる——その島の名前は

“水の都” 『ウォーターセブン』

「ほんじゃあらためて……!!?」 帰ってきたエレノアとロビンとウソツプ!!? そして

新しい仲間フランキーと海賊船 “サウザンドサニー号” に!!? 乾杯だアア!!!」

サニー号の甲板の上で、ジョッキを手にぶつけ合う。

飛び散る酒の水飛沫を浴びながら、ルフイは次なる目的地に向けて、夢と期待を膨らませるのだった。

「行くぞ、次は!!? “魚人島”!!!」

## 第23・5章 白と赤と黒

## 第231話 //報せ//

「スモーカー准将!! ご苦労様です!!」

偉大なる航路のある島で、海賊との戦闘を終えた海兵達が後処理に励む中。

海楼石入りの十手を担いだスモーカーが、葉巻を啜えながら詰まらなそうに鼻を鳴らしていた。

「今の海賊が5千万だと?! ……ぬるい…軍の基準はどうなつてんだ……………」

「逆にお前は海賊に対する期待が高すぎるんじゃないやねエか?」

「うるせエよ」

傍らで手袋を外すマスタングに苦笑され、ちつと舌打ちをこぼす。

かくいいうマスタングも、より高い危険度を見せつけた一味と遭遇したがために、今回の戦闘では不満さを感じている様子である。

「……………まったくハリのねエ日々だぜ」

「スモーカーさん!!」

「ロイ!! スモーカー!! この手配書を見たか?! 妖術師達だ…!!」

そんな二人の下に、上着を脱いだたしぎとヒューズが手配書を持って駆け寄ってくる。

たしぎの方は神妙な顔つきだが、ヒューズは非常にうれしそうな顔をしているのが、大いにスモーカーの癪に障る。

「アラバスタを出発していつの間にかここまで…」

「君は誰に話しかけているんだ？」

「えっ!! あ…ごっつ、ごめんなさい!!」

「メガネをかける!! バカ!!」

まったく関係のない海兵に話しかけていた事に気付き、慌てて眼鏡をかけ直すたしぎに背を向け、スモーカーは瓦礫の上に腰かけ紫煙を吐く。

「海兵は海兵…海軍が『組織』である以上『大佐』で我を通すのには限界がある…おれ達に必要なのは『地位』だ」

「……あまり上に行っても、立場が邪魔になって現場で動き辛くなるぞ」  
「できねエ事もできる事もあらア……」

揉み消された、アラバスタでの真実を思い出して顔を険しくする海兵達。

政府にとつてただの駒でしかないという事実を嫌悪し、いいように利用されるだけの状況を憎み、自らの意思を再確認する。

「エニエス・ロビーの一件で世界中の海賊達が『麦わら』の一味に一目置き始めている。このおれの誇りにかけて、奴らを『新世界』で…叩き潰す!!!」

「止めはしないさ……存分にやるといい。私もそうするよ」

凄まじい威圧感を放ち、呟くスモーカーとそれに頷くたしぎとマスタング。

そんな彼らを横目にしながら、ヒューズは彼らに聞こえないよう、苦笑交じりに呟いた。

「……次こそ借りは作らねエ……そう言っているように聞こえるのは、何でかねエ？」

「ニコ・ロビン……あの女があいつらの船に……しかも世界政府に宣戦布告か。機械鎧の修理で足止め食らってる間に、あいつらはどんどん先に行きやがる……」

ばさつ、と広げた新聞を生身の片手で支え、一面の記事を読むエドワード。

最初はそれを誇らしげに眺めていたのだが、やがてその顔はくしゃくしゃになり、遂には新聞を放り上げて悔しさをあらわにし始めた。

「やつぱ行きやあよかつた~~~~!!」

「動くな!!? 最終調整してんだから大人しくしてなさい!!」

「兄さん……国家錬金術師の立場、完全に忘れてない……?」

目を剥き、ベッドの上で悶えるエドワードの機械鎧を弄りながら、ウインリイが怒鳴りつける。そして呆れるアルフォンス。

ローグタウンからわざわざ来た専属技師を放置して嘆く幼馴染みを睨みつつ、少女は深いため息をこぼした。

「まったく……ちよつと出掛けたかと思つたらこんな有様にして!!? 呼び出される私の身にもなつてよね!!? 海軍の船に乗せて貰つたとはいえ、ここまでくるの大変なんだから!!?」

「こっちは儲かるからいいけどねエ」

ウインリイの嘆きに、ピナコはエドワードの足の調整をしながら呟く。

にやにやと笑っていた老婆は、次いでエドワードが放りだした新聞を見やり、眼鏡の奥の目を細めて唸り声を漏らす。

「しかしあの小僧共、とんでもない事をやったもんだ。司法の島工二エス・ロビーといえば巨大な『世界政府』へとつながる玄関口……それを落としたとなれば、海軍も海賊も黙っちゃないだろう」

ローグタウンで出会った時には、ここまで大それた事をするなど想像だにしなかった。海賊と呼ぶには気がよく、只の明るい青年達にしか見えなかった。

それがここまでの事件を引き起こすのだから、印象というものは本当に役に立たない



のだと突き付けられる。

「今や、この世に知らない奴は一人もいなくなるだろうさ」

「この腕さえ直せりや、まともな体さえ戻つてくりや、おれ達もこの記事に載つてただろうによ……チクシヨウ!!」

「過ぎた事は仕方がないよ、兄さん……………」

「あんた達、本気で『国家錬金術師』の称号棄てる気?」

「その方が気楽に旅ができそうだから……国家機密も当てにならねエつてわかつちまった所だし……」

エドワードの呟きに、椅子に座つて大人しくしていたアルフォンスも俯いて黙り込む。

死に物狂いで手に入れた情報が、望まぬ物であつた。その代わりに、自分達のすぐ近くにあつた真実が希望の一端になつた。

何とも言えない皮肉さに、笑う余裕さえなくなつていた。

「……追いつきてエな。何年かかつても」

「その為にもまず……………だね」

兄弟の脳裏に浮かぶ、旅の日々。

明るく楽しく、時に激しく派手な冒険の日々——そして仲間達との関わり。

別れて時が経つにつれ、再びその時間を求める気持ちがちがんどんと強くなっていた。「どのくらいかかりそうだ？」

「最低でも1週間!!? それより短くするのはムリよ」

「そっか〜……」

ぎりぎりとボルトを締めるウインリイに尋ね、決して短くない時間に少し落胆する。だがその分、再出発に向けてのやる気が倍以上に膨らんでいった。

同時に、兄弟の中ではある懸念が強くなる。

姉弟子に忠告され、辿り着いた資料から見出した真実。そこから明らかになった、世界政府が関わった恐るべき研究。

真実の奥の更なる真実、政府が一体どのような思惑を隠しているのか。

知ってしまった兄弟は、何としてでもそれを見つけ出さなければならぬと使命感を抱いていた。

「……だったらあと1週間。その間に少しでも『真実』を掴まねエと……!!!」  
「うん、僕らにできる唯一の事だ……!!!」

片腕で拳を握り、強き意志の炎を宿した目で虚空を見据えるエドワードとアルフォン。ス。

めらめらと本当に燃えているかのような気迫を見せつける兄弟に、幼馴染の少女は心

底呆れた視線を送っていた。

「……まったく、待つてるこっちの身にもなってほしいわよね」

「はっはっは……!」

肩を落とす孫娘を笑い、ピナコは煙管の煙を燻らせる。

そして、床に落ちた新聞——その束の間からはみ出た手配書に記された海賊の名を見下ろし、眉間にしわを寄せた。

「いつの時代にも、奴らは現れ時代を揺るがす。『D』はやっぱり、嵐を呼ぶんだねエ……」

「宴だ——っ!!? 今日が宴だ——っ!!?」

「東一番の出世頭!!? 3億の首、我らがルフィにカンパ——イ!!?」

「やかましいわいお前ら!!? 恥を知れ!!?」

東の海、ゴア王国の端にあるフーシャ村、その中にある酒場『PARTYS BAR』。がしやーん、と乾杯の音頭と共にジョッキが打ち鳴らされ、若者達が騒ぐ。

それをフーシャ村の村長が睨みつけ、ガンガンと杖を机に叩きつけて怒りを露わにする。

「楽しそう、こんなにカワイイペットまで連れて……このコ達がルフィのお友達なのね」

「お友達というツラか!!! コヤツらが!!! 全世界を敵に回す様な凶悪犯が村から出たんじゃぞ!!! 世界政府にケンカを売る海賊など聞いた事もないわい!!!?」

「ほんとね」

「麦わら」のルフイの故郷であるこのフーシヤ村で、彼が17になるまでを見守つてきた酒場の女主人・マキノが村長の怒りの声に笑みをこぼす。

彼女の視線はルフイだけでなく、彼と共にある白虎の天使にも向けられていた。

「エレノアちゃんも元氣そうでよかった……!!! 元氣に歩き回れるようになったみたいね!!!?」

「イカれとるわい………あんな重傷で『偉大なる航路』に戻るなど!!!? やはり鬼の子は鬼の子か、恐ろしい血筋じゃ………」

「まアヒドい。ふふふ……」

「だいたいガープの奴は何をしとるんじや!!!? 我が孫がこんな事件を引き起こすまで放置するとは!!!? 親子3代どうかしとるわい……ダダンはこのことを知つとるのか……」

海軍中将、海軍の英雄、伝説の『海賊王』を何度も追いつめた男。

凄まじき数と質の逸話を誇る男の孫が、世界すらを敵に回した大事件を起こした。

どういう教育をしていればこんな男に育つのかと、村長はふんと荒く鼻息を吹いて虚空を睨む。

「「カンパーイ!!?」「」

「やかましい!!?」

しかし村の若者達は、そんな村長の苛立ちもともせず、有名な村の子供の勇姿を讃え続けるのであった。

「「狙撃の王様」……!!? 本当ね!!?」

「間違いないわ、ウソツプ君だよ!!?」

仮面の男が映った手配書を見つめ、カヤとロゼが明るい声を上げる。

代わった面で隠されてはいるものの、大きく目立つ特徴が中心に映っており、見間違えるわけがなかった。

「だろ~~~~!!?」

「キャプテンでしょ!!? この鼻!!?」

「村のみんな信じないんだよ!!? そりゃ3千万だもんなく!!?」

「カヤさんとロゼさんならわかってくれると思つたよ!!?」

「みんなキャプテンの凄さを知らないんだ!!?」

「キャプテンはホラを全部本当にかえる男なんだ!!?」

ウソツプを慕う三人の嘘吐き少年達が興奮気味に二人を見上げ、目をキラキラと輝か

せる。

歓喜の雄叫びを上げる三人に微笑みかけていたカヤは、しばらくすると腰を上げ、歩き出す。そうすると、ロゼも笑みを湛えてその場を離れようとした。

「あれ？ 2人ともどこいくの？？」

「帰って医者 of 勉強続けるわ！ 私も早く一人前になって……！ ウソップさんが傷ついて帰って来ても、全部治してあげられる様になつてなきや！！？」

「……それじゃ私は、お腹を空かせて帰って来たウソップ君の為に、仕込みの続きをしようかね……！！？」

にここに嬉しそうに、軽い足取りで歩き出す二人の少女。

思わず見とれてしまうような笑顔を目の当たりにした三人の少年達は、ぼーっと彼女達の後姿を見送るばかりであった。

「……………いいなー、キャプテン」

「カヤさんとロゼさんを不幸にしたらなぐろうぜ」

今日も今日とて、強く深く雪が降るドラム王国——いや、新たに生まれ変わったサクラ王国。

月が照らす中を、巨大なウサギが引くそりに乗った魔女が滑り降りてくる。

「ヒーツヒツヒツヒツヒツヒツ!!??」

「ギャ——Dr. くれはが城から降りて来るぞ~~~~!!」

「ハツピーかい!!?? ガキ共!!??」

ぼふん、と雪煙を舞い上げ着地したそりから、いつも通りの腹出しルツクのくれはと合成獣の娘・ニーナが降りてくる。

そして二人は、すぐ傍で自分達を舞っていたサクラ王国国王・ドルトンに厳しい視線を向けた。

「ドルトン! 何だい、人を呼びつけて。あたしや忙しいんだよ!!??」

「いそが、しい」

「やあ、申し訳ないDr. くれは、ニーナ。あなた方にコレをぜひ見せたくて!!??」  
苛立つ二人を前に、ドルトンは全く気を悪くした様子を見せずに歩み寄る。

しかし代わりに、ドルトンの臣下となった男がくれはを睨みつけ、声を荒げだす。

「Dr. くれは!!?? 国王に対して何だ、その口ぶり」

「何だい? 若さの秘訣かい?」

「いや聞いてねエし!!??」

悪政を敷いた専横が消えた後、国民からの支持を受けて新たに王となった男に対し、全く物怖じしない老婆。

臣下達はまだもの言いたげな表情をしていたが、ドルトンはやはり気にする事なく、元氣そうな彼女達を見つめていた。

「だいたいドルトン、お前国王らしく城に住んだらどうだい。部屋なら貸すよ」

「いや……私は住み慣れたこの村がいい。あと食べ物も栗ごはんがいい」

どうでもいい事を口にしながら、ドルトンは持っていた物を——手配書の束をくればに渡す。届くや否や、彼も我慢できず笑みを浮かべてしまった代物である。

「……おやおや、麦わらの小僧達だね……」

「先日の大事件での手配書が出まして……」

ついでに新聞を見せ、一面に映し出された大事件の記事を見せるドルトン。

そして九枚ある内の一枚、くれはとニーナにとって最も縁が深い人物の顔が写されたそれを見せると、二人の表情がすぐさま変わった。

「……………!!? おにい、ちゃん!!?」

「チヨツパー……………」

「額は何かの不手際だと思えますが」

綿あめを前に目を輝かせる、半獣の生き物。

50Bという手配書として成立しているのか疑問を抱かせるそれを見やり、くれははにっこりと優しい笑顔を浮かべてみせた。



「…ヒツヒツヒツヒ、顔が見れたら何だっていいさね…：…そうかい…：何よりの頼りだよ…」

息子が元気でやっているのだという便りは、何よりも嬉しい報せであった。

## 第232話 “白と赤と黒”

白土の島『バルティゴ』。

そこには、政府が何よりも危険視し、追い続ける組織の本拠地があった。

「『南の海』セントウレアで反乱軍が勝利しました」

「……また一国落ちたか……」

男の報告に、別の男が安堵とも落胆とも言えない呟きをこぼす。

戦いに次ぐ戦い、途切れぬ怨嗟の声。最も醜悪なる敵を倒すための組織とはいえ、多くの血が流れる事態に対して、喜びの声が上がらない。

「やりましたね!!? これで先日の『北の海』の……」

「勝利を喜ぶな!!? 戦争だぞ」

「は……はあ……すいません」

組織の中でも若い男に、組織を纏める男——顔に入れ墨を刻んだ男が厳しい口調で咎める。

安堵を露わに仕掛けて男はすぐさま大人しくなり、戸惑いながらも引き下がる。

すると、ふと刺青の男は机の端に置かれた新聞と手配書の束に気付き、手に取ってそ

の一面を凝視し出す。

「……………これは？」

「『麦わら』のルフィです。アラバスタで実際にクロコダイルを討ち取った男。エニエス・ロビーの一件で…政府もついに隠しきれない程の大型の海賊団になってきました。何でも船長は海軍のガープの…」

手配書一杯に、笑顔を遺した麦わら帽子の青年。

その顔を見下ろしていた刺青の男は、小さく笑みをこぼすと踵を返し、歩き出した。

「あ、どちらへ」

「風に当たって来る…」

困惑する若い男を放置し、刺青の男は外へと向かう。

大地の城と空の青に彩られた世界。

白土を運ぶ風を身に受け、遠い地と空の果てを見やり、刺青の男——世界最悪の犯罪者モンキー・D・ドラゴンは笑う。

修羅の海へと進み出で、大きな事件で己が名を世界に知らしめた息子を思いながら。

「思うままに生きろ、ルフィ……………時代は時として…あらゆる偶然と志気をおびて、世界に問いかける!!? 我らがいずれ出会う日も来るだろう…」

いつとも知れぬ出会い、いや再会。はじまりの町に続くその邂逅は、きつと凄まじき

波乱に満ちたものになるだろう。

“反逆竜”はただ静かに、世界の変革の時を待ち続ける。

そんな彼の姿を、物陰で佇んでいた黒豹の耳と尾、そして鷲の翼を生やした女が横目で眺めていた。

「……なア、オールデイ。お前の娘は元気に育っているよ。ちよつとばかしお転婆になりすぎちまつてるようだが……お前そっくりのいい女になりつつある」

手元の手配書、白虎の天使の顔を見つめ、うつすらと笑みを湛える女—— “黒羽” アイザック・ニユーラ。

彼女は天を見上げ、この世にいない半身に祈りを送るのだった。

「だから、さ……安心して眠っていなよ、我が愛しき妹よ……!!?」

彼女達の邂逅の時は——まだ少し先の話。

「船長、“赤髪”を迎えます!!?」

白雲が立ち込める空の下、二隻の巨大な海賊船が接近し繋がれる。

片や、竜に似た船首を持った、三本船の傷が入った髑髏の海賊旗の船。もう片方は、白牙のような髭を持った髑髏を掲げる、鯨を模した船。

それぞれ四皇「赤髪」、そして同じく四皇「白ひげ」を船長とする、猛者達を支えて来た船である。

「来るぞ、**赤髪**が」

「若エ衆は下がってるい、身が持たねエぞい」

「え…身が持たねエってのは一体…」

「いいから奥へ行ってるいっての」

白ひげの船の甲板で、やってくる**赤髪**のシャンクスを迎えようとしていた船員、マルコとジヨズが新入り達に告げる。

困惑していた新入りの一人は、隣にいた同じ新入りが突如、泡を吹いて倒れた事できらなる困惑に襲われる。

「えい!? おいお前からどうした、何が起きてんだ!?」

「ああ…もう手遅れかい。騒ぐな、氣イ失ってるだけだ…」

ばた、ばた、と次々に斃れていく新入り達を見やり、マルコがため息をこぼす。

その隣でジヨズは険しい表情で佇み、自分の肌がびりびりと震えるのを感じながら、向かってくる訪問者を見据えていた。

「半端な覚悟じゃ…あの男の前で、意識を保つ事さえできねエ…!!? 相変わらず…スゲエ**覇気**だ」

その光景は、異様だった。

たった一人、酒を担いでゆつくりと進み出てくる赤髪が一步を踏み出す度、白ひげ海賊団の若い船員がばたばたと倒れていくのだ。

存在するだけで、気の弱い者を圧倒し振じ伏せる。

世界に四人いる海の皇帝、その一角を担う男の凄まじさがこれでもかと表れていた。

「失礼、敵船につき……少々威嚇した」

根底から格の違いを見せつける威圧感を放っていた男は——甲板の奥の椅子に腰かけていた巨漢・白ひげの前に立つと、にやりと笑みを浮かべる。

敵船のど真ん中で一切臆する様子を見せないシャンクスに、白ひげはふん、と鼻を鳴らしてみせる。

「てめエの顔ア見ると、あの野郎から受けた傷が疼きやがる」

「療治の水を持参した、戦闘の意志はない。話し合いたい事があるんだ」

「〃覇氣〃をムキ出しにして現れる男の言い草か、バカヤロウ……グララララ……!!!」

以前、互いから発せられる覇気で場の空気は張り詰めたままだが、二人の男は穏やかに話す。

するとそこへ、倒れた新入り達の介抱を行っていたマルコが目を吊り上げ、シャンクスに向けて怒鳴りつけた。

「オイ、赤髪てめエ、何してくれてんだい!!?」

「お! 一番隊のマルコだな。お前、ウチに入らないか?」

「うるせエよい!!?」

全く悪びれる様子のないシャンクスに、マルコは吠えてから諦めたように視線を逸らす。

それをみやり、ジョズがやや躊躇いがちに白ひげに話しかける。

「親父……おれ達ア……」

「ああ……戦争はしねエらしい……二人にしてくれ」

白ひげに言われ、船員達はすぐさま甲板から引つ込む。

シャンクスは担いできた酒を盃に注ぐと、半分を残してそのまま白ひげに渡す。一時は難色を示す白ひげだが、然して躊躇わずにがぶがぶと飲み始め、悪くねえ、と小さく呟いてみせた。

「……おめエンとこのリスはどうした。最近噂も聞かぬエな……」

「野暮用でな………大事な宝を預けてある。少し厄介な事情があつてな……」

じろり、とシャンクスの傍らを見やり、姿の見えないもう一人の事を尋ね、彼の態度と表情から野暮な問いだと察してそれ以降は聞かない。

それぞれで酒を喉に流し込み、やがて白ひげは遠い目で虚空を見上げ始めた。

「…ロジャー…センゴク…ガープ…ニユーラ…にこら…:…:オールデイ…:…:あの頃の海を知る者はずいぶん少なくなつた」

「22年たつた…当然だ…!!?」

「おめエもよく成り上がったモンだぜ…:ゴール・D・ロジャーの船の…:ただの見習いだつた小僧がよ…:!!!」

にやりと笑い、身体も覇気も生意気に育つた若僧を見下ろす白ひげ。

歳の所為か、現役時代に目にした姿を昨日の事のように思い出しているのか、小馬鹿にした態度かつ、懐かしそうに目を細めている。

「ロジャーの船とはよく戦りあつたせいで、殺し合いの中で妙な顔馴染みになつた…:お前と一緒にいたあの面白エ赤っ鼻はもう死んだか」

「…:…:バギーか! 懐かしいな…:船長の処刑の日、ローグタウンで別れてそれつきりだ…:風の噂で、まだ海賊をやつてると聞いた」

「あつという間よ、おれにとつちやあ…:」

また酒を飲み、唸るようにため息をこぼす。

するとふと、白ひげの視線がシャンクスの左腕に——二の腕から失われた先に向けられる。十年ほど前に失くしたと聞く、男の消えない傷痕だ。

「おめエ程の男が“東の海”で腕一本落として帰つて来た時ア…:誰もが驚いたもんだ。



どんな奴にくれてやったんだ、その左腕……」

「……………コレか」

問われたシャンクスは、当時の事を脳裏に思い浮かべる。

東の海の小さな村、そこで出会った小さな少年の事を。

自分に憧れ、自分の誇りを守ろうとしてくれた彼を庇った証である痕に触れ、笑みを浮かべる。

「……………新しい時代」に懸けて来た……」

「……………くいがねエなら結構だ」

深くは聞かず、白ひげは興味を失くした様子で口を閉ざす。

代わりにシャンクスは鋭い眼差しを白ひげに向け、自らの左腕から手を離すと、自身の左目に刻まれた三本の傷に指を突き付けた。

「白ひげ……おれは……色んな戦いを越えて数々のキズを負って来たが、今……!!? 疼くのはこの傷だ……!!」

その傷は冒険の痛手でもなければ、かつてシャンクスが「鷹の目」と決闘して受けた傷痕でもなかった。

伝説の敵との戦いで受けたものなどではない——白ひげの元部下で、仲間殺しの大罪を犯して逃げた男、「黒ひげ」ティーチから受けた物だった。

「おれは油断などしていなかった。おれが言いたい事がわかるか!!?」白ひげ!!?  
 あいつはじつと機を待ってた:隊長の座にもつかず、名を上げず、自分を隠し今まで  
 白ひげ”というデカイ名の陰に潜んでいたんだ!!!”

シャンクスの劍幕に、白ひげは眉尻一つ動かさず一言も発さない。

自身に傷を与え、不気味な行動を繰り返す男への警告に対し、どうでもいい……とい  
 うよりも気にしても仕方がないというような、そんな反応を返していた。

「——そして、力”を得て:動き出した。最終的には頂点を狙って来るぞ。自分の意志  
 で!!? いずれお前の座をも奪いに来る」

「……………おれにどうしろってんだ? ——それが本題だろう」

「エースを止めてくれ!!!”

シャンクスがそう言った瞬間、それまで動く事の無かった白ひげの表情が微かに動  
 く。シャンクスの言葉が、白ひげの琴線に確かに触れたのだ。

「若くもお前の一団の二番隊隊長を任される男で、お前の娘が惚れた男だ。エースは強  
 い:!!! そんな事はわかってる……だが、その名声と信頼が話をこじらせる」

沈黙する白ひげにシャンクスは続ける。

出会ったのは一度だけ。とある島で滞在中に、弟分が世話になったからと態々挨拶を  
 しに来た事で、シャンクスとエースは関わりを持った。

そしてエースが白ひげの傘下に入り、例の事件が起こった事で、シャンクスはティーチに対する警戒をより確かな物へと変えた。

「今はまだあの二人をぶつけるときじゃない!!! 黒ひげ」ティーチから手を引け!!!? たったそれだけの頼みだ」

「……フフ……グララララ!!? ハナタレボーズが言うようになったな。そりやあ土台無理な話だぜ。エースはもう誰にも止められねエ……その資格もねエ!!!」

小馬鹿にしたように笑っていた白ひげの雰囲気が一瞬で変わる。

ずしりと空気が鉛に変じたかのように重くなり、シャンクスやその周りの人間にまで襲い掛かる。

壮絶な笑みを湛え、しかし顔中に血管を浮き立たせ、世界最強と謳われる男は目の前の若僧へ覇気の塊を叩きつけた。

「惚れた女を守りてエと吼える男を止める権利が、一体この世の誰にあるってんだ!!!」

ビリビリと震える空気の中、シャンクスは無言で白ひげを見つめる。

常人ならば一瞬で気絶するか、そのまま心肺を停止させてもおかしくない重圧感の中、冷や汗一つかかずに巨漢を見据え続ける。

「あいつの罪は…海賊船で最もやつちやならねエ。仲間殺し」だ……!!? 鉄の掟を破ったのさ。おれの船に乗せたからにやあ、どんなバカでもおれの息子よ。殺された船員むすこの魂はどこへ行くんだ……!!」

白ひげは怒っていた。一度は息子と呼んだ男が別の息子を殺した事もだが、その思惑に気付く事ができなかった自分自身に対しても。

しかもその男が、大事な愛娘まで毒牙に掛けようと目論んでいるのならば、黙っていられるはずもなかった。

「仁義を欠いちやあこの人の世は渡つちやあいけねエんだとティーチのバカに教えてやるのが、おれの責任だろうがよ……!!」

腰を下ろす椅子や甲板がぎしぎしと軋むような威圧感が、徐々に退いていく。

言いたい事を言った白ひげは、残った酒をがぶがぶと纏めて喉に流し込んでいく。

「わかったかアホンダラ、おれに指図するなんぎ100年早エ」

シャンクスは視線を落とし、しばらくの間黙り込む。だがやがて、自身の杯を一気に傾け、自分の分の酒を一気に胃に流し込む。

そして次の瞬間、二人の海の皇帝はそれぞれの得物を抜き、己の覇気を全開にして振りかぶった。

「誰にも止められなくなるぞ……!! 暴走するこの時代を!!」

「恐れるに足らん!!! おれア “白ひげ” だ!!!」

どんっ!!

と “赤髪” と “白ひげ” の一撃がぶつかり合い、凄まじい衝撃波が辺りに襲い掛かる。

二隻の船を揺らし、それぞれの若い船員達を慌てさせ、中堅の船員達を呆れさせる強者同士の激突は。

曇天の空を、真つ二つに割ってみせたのだった。

バナ口島と呼ばれる、偉大なる航路の島。

そこで、一つの大きな事件が発生していた。

「おい見ろ!!? “麦わら” の記事だ……!!? ゼハハハハ!!? とんでもねエ事やりやがった!!!」

新聞を片手に、黒い髭の男—— “黒ひげ” を名乗る海賊マーシャル・D・ティーチがげらげらと笑い声をあげていた。

映し出されているのは、先日政府の御膝元で大暴れした “麦わら” の男。

たった一度の事件で、一気に懸賞金額が跳ね上がった青年の顔を凝視し、ティーチは不気味な笑みを浮かべて騒いでいた。

「司法の島」を落としたそうだが、こりやあ賞金もはね上がるぞ!!!」

「エニエス・ロビーならウオーターセブンからの海列車が有名ですな」

「ここから遠くない、それもまた巡り合わせ」

「ウイーハハハ、行こうぜ船長!!?」

「我々の射程範囲にいるとは……憐れ、運のない奴らだ……ゴホ」

ティーチが見出した五人の男達も、今の話題を搔つ攫う青年に対しやる気を見せる。

とある目的を果たす為、己らの名を上げる必要がある彼らは、一度は取り逃がした丁度いい獲物がさらに成長した事に歓喜し、殺意を漲らせていた。

「当然行くとも、ゼハハハハハハハ!! 出航の準備をしろ!!!」

3億の男の、そしてその一味の首を奪る。

それを足掛かりに、この海の頂点に向けて駆け上がる——そんな野望を抱き、出航の準備を始めようとして。

「おい。待てよ、ティーチ。探したぞ……!!!」

動き出そうとした彼らの頭上から、怒りを押し殺した声が響く。

はつと振り向いたティーチたちの目の前で、建物の屋根の上にしやがんだ“炎”の男が、にやりと不敵な笑みを浮かべてみせた。

## 第233話 “おれの女に手を出すな”

「おお……………エース……………隊長……!!」

自分を見下ろす赤の男の姿に、ティーチは大きく目を見開いて固まる。

しかし、名を呼ばれたエースは笑みを浮かべたまま眉間にしわを寄せ、不機嫌さを前面に表して吐き捨てる。

「よせ……今更“隊長”なんて……そういうのは人を敬える奴が使う言葉だ……バカにしてやる……!!」

「……ほう、あなたが……かの“火拳”のエース」

「ああそうだ、よろしく」

ふん、とエースが鼻を鳴らすと、黒ひげの仲間である狙撃手ヴァン・オーガーが感嘆の声を漏らす。

その眩きにも律義に挨拶を返すと、エースは再度ティーチに——親友を殺して逃げた大罪人である男を睨みつけた。

「……お前ももう……立派に船長やってんだろ……? 『黒ひげ海賊団』マーシャル・D・ティーチ船長」



「ゼハハハ…何だよエース、久しぶりだな!!? どうしたんだ!!? なぜ、ここがわかった!!?」

「ティーチ、不要な問答はやめようぜ。人の倍の人生を歩んでるお前が、この状況を理解できねエわけがねエ」

上機嫌に笑うティーチに対し、エースの態度は常に厳しい。

今日、この瞬間の為に旅を続けてきたエースにしてみれば、ティーチのわざとらしい気安さは神経を逆撫でするばかりのようだ。

世間話に興じる暇がない事を察したのか、ティーチは不気味な笑みを保ったまま、一旦口を閉ざす。

「…ああ、わかった…じゃあ…一つだけ話をさせてくれ、エース!!? お前…!!? おれの仲間にならねエか!!? おれと一緒に世界を取ろう!!! おれが成り上がる手段は、もう全て計画してある!!!」

ぐつ、と拳を握り締め、熱く——否、異様な意欲を滲ませて語り出す。

それは夢を語る少年のようであり、野心に満ちた狂人のようでもあり、爛々と光る目は常人とは比べ物にならないほど狂っている。

計画とやらの全貌を聞くまでもなく、真面目な考えでない事は明らかだった。

「“白ひげ”の時代は、もう終わりだ!!! 海賊王にはおれがなる!!! まず手始めに

……この先のウォーターセブンにいる「麦わら」のルフィをブチ殺して、奴の所からエレノアを奪って、政府への手土産に——」

「……おい、もう黙れよお前」

語る途中のティーチを、エースの感情を押し殺した声が止める。

帽子のつばで表情を隠した男は、全身から凄まじい殺気を迸らせる。

訝しげに黙り込んだティーチを気にする事なく、帽子に掛けた自らの手にびきびきと太い血管を浮き立たせていく。

「お前が何を目指してんのか……この世界をどうしちみたいのか……サッチを殺しちゃった事への疑問や、おれの弟に手エ出そうとしてる事に比べりやどうでもいいこつた。……だがな、おれが今一番許せねエ事が一つある……!!!」

ゴゴゴ……と大気が震えているかのような威圧感に辺りが包まれる。

その中心で、エースはおもむろに立ち上がると、カツと目を見開きながら空中へと跳躍し、己の右拳を巨大な炎の塊へと変じさせた。

「おれの女に手エ出してんじゃねエよ!!!」

豪!と辺り一帯を真っ赤に染める閃光を放ち、エースの拳が真下に振り下ろされる。

強烈な熱と衝撃を生む一撃は、ティーチたちを狙って一直線に進み、地面に触れた瞬間に巨大な爆発を生じさせた。

「おうわア~~~~っ!!!」

一撃をもろに受けたティーチ達はごろごろと地面を転がり、周囲の家屋を粉碎し、燃え盛る瓦礫に体中をぶつける羽目になる。

「ぐわっちちちあち!!? あっ!!!」

「船長!!!」

「う、うるっせエてめエら下がってろ!!! ……くそ…」

全身を襲う熱に苦悶の声を上げるティーチだが、やがて体勢を取り戻し起き上がる。

そして、焼け焦げた町の中心で仁王立ちするエースに向け、冷や汗を垂らしながら下卑た笑みを浮かべ直した。

「…ゼハハハハハハ…ああ、わかってるよエース。おれを殺してエんだよな…そりやそ  
うだ…『仲間殺し』は大罪だ。そしてエレノアはお前にとっちや命に代えても手にし  
ておきてエ女だ」

ぐっ、と力を籠め、己の巨体を立ち上がらせる。

自身の発言でエースの怒気がより一層強まっている事を感じつつ、挑発するように大仰な素振りで喋り続ける。

その体から、黒い靄のような何かを滲ませて、海賊・黒ひげは嗤い続けていた。

「4番隊長サッチは確かにおれがブツ殺した……!!? 仕方なかったんだよ……あいつがおれの意中の「悪魔の実」を手に入れやがったんだ!!? 運がなけりや諦めたが、その実はおれの友達の手に入った……!!!」

「——それでサッチを殺して……奪ったのか」

「まあハズミさ。この能力はおれを選んだんだよ、エース」

ずるずると湧き水の如く流れ出していた靄が、徐々に勢いを増していく。

黒い靄は量だけではなく濃さまでも増し、辺りの光を呑み込むかのように広がり、ティーチの体を覆っていく。

否、その黒はティーチの体そのものであった。

「ゼハハハ!!! おれアこれで『最強』になれたんだよエース!!! 見ろ……自然系の中でもまた異質……!!! エース!!? お前の体は……火だろ!!?」

どんつ、と広がっていた黒が噴火のような勢いで天に昇る。

世界の全てを黒に染めようとするかのようなそれを生み出し、ティーチは見るも悍ましい姿をエースに晒してみせた。

「ゼハハハ!!! おれア!!! “闇”だ!!!」

ずるずると蠢く黒——闇。

極限まで濃くした墨のような、一切の光を失った夜の空のような、底も果ても見えない漆黒へと我が身を転じ、ティーチは心底愉しそうに佇んでいた。

「『闇』？」

「そうさ、エース隊長……おれはおめエにや殺されねエ……『悪魔の実』の歴史上……最も凶悪とされるのがこの能力、自然系『ヤミヤミの実』。おれア『闇人間』になつたんだ!!? その実力の程は……今すぐ見せてやる」

「……好きにしろ」

見ている者の正気を可笑しくさせそうなほどに悍ましい光景だが、エースはどうでもよさそうに鼻を鳴らすだけで表情一つ変えない。

興味の欠片もなさそうなエースに落胆する事もなく。

ティーチは己の体の闇を地面へと広げ、町全体を呑み込ませていく。

「『闇』とは『引力』!!! 全てを引きずり込む力!!! 一切の光も逃さねエ、無限の『引力』だ」

「肝心のおれに……届いてねエじゃねエか」

「まだお前にや手は出さん……!! ところで町を眺めているといい……!!  
ブラック・ホール  
 『闇穴道』」

そう告げ、ティーチが力を籠めるような仕草をした直後。

ばきばきばき……!と辺り一帯から木材の軋む音が響き、周囲の景色が歪む。

かと思えば、周囲に存在していた建物の全てが歪み、折れ、破壊され、ティーチの闇の中へと呑み込まれていった。

「闇」の引力は物体を無限の力で凝縮させ……押し潰す……!!! 消えた町なら、今見せてやる……!! そのなれの果ての姿をな……」

視界に映る建物の全てが消え去ると、ティーチの闇は彼の頭上に集まっていく。

そして、それがぶわつと空一杯に広がったかと思うと。

「リベレイション解放!!!」

闇の中から、無数の破片が——粉々に粉碎された建物の残骸が、雨のように降り注ぎ出す。

宿屋も飯屋も民家も、形ある物の尽くが跡形もない程に破壊され、見るも無残な姿を晒して瓦礫の山を築いていった。

「ゼハハハハ、わかったかエース!!! これがおれの手に入れた能力!!!」

圧倒的な力を見せつけ、ティーチは得意気に胸と腹を張って手を広げる。

その様は舞台に立つ役者が口上を述べているかのようで、作り上げた惨状も相まって凄まじい恐ろしさを醸し出す。

「『螢火』」

恐怖で声も出せなくなるような有様の中で、しかしエースは微塵も臆さず、ティーチの周囲に無数の炎の粒を舞い散らせる。

そして次の瞬間、宙を舞う無数の火の粒はティーチに向かって殺到し、憎き敵の全身を炎で包み込んだ。

「火達磨!!!」

「ぐわアア——っ!!!」

「長々とご高説垂れてその程度か……… “闇” の力の凄さつてのは。この程度の攻撃、自然系なら受け流せてもいいだろうに」

詰まらなそうに呟き、地面を転げ回るティーチを見下ろすエース。

自然そのものに変化する自然系の能力者には、能力の相性を除けば物理的な攻撃はほとんど意味を成さない。

なのにごく普通に攻撃を受け、常人よりも苦しむ様子を見せるティーチに、エースは呆れた視線を送る。

「言った筈だぞ……!!」 闇は全てを引きずり込む、銃弾も刃も打撃も火も雷も……!! お前らと違って攻撃を受け流す事などできず、おれの体はあらゆる “痛み” まで常人以上に引き込んでしまう」

すると、悶え苦しんでいたティーチの体から、エースのぶつけた火が消える——い

や、呑み込まれる。

荒い息を吐きながら、それでも不気味な笑みを絶やさず、ティーチはどこか見下したような態度を貫き続けていた。

「だが、そのリスクと引きかえにもう一つ!! 引きずり込める物があるのさ!!!」  
 「閻水<sup>くろみづ</sup>」

ティーチは片手を掲げ、エースに向けて構える。

その瞬間、強烈な引力がエースに襲い掛かり、瞬く間にティーチの目の前にまで引き寄せられ、囚われてしまう。

その瞬間、余裕だったエースの表情が明らかに強張った。

「どうだ? ……もう気付いたんじゃないやねエか? エース」

「まさか……!!」

エースが目を見開いた瞬間、彼の腹にティーチの拳が叩き込まれる。

本来であれば、すり抜けるだけの無駄な攻撃。

しかしティーチの拳は確かにエースの体に食らいつき、血反吐を吐く程の激痛を齎し吹き飛ばしてみせた。

「殴られるなんてのはずいぶん久しぶりなんじゃないやねエのか……!! おれがお前を掴んだ瞬間……!! わかった筈だ!!! ……おれの「閻」が引きずり込むもう一つのは」



悪魔の力だ!!!」

地面に叩きつけられ、苦悶の声を漏らすエースにティーチは嗤う。

炎に変じて避ける事も、逃れる事もできずただ的にさせられた事実には絶句するエースを見据え、げらげらと肩を揺らして嘲笑う。

「自然系……!! 動物系……超人系!!! 己の能力に過信するこの世の全ての能力者に対し!

おれは防御不能の攻撃力を得た!!!」

「……………エレノアに蹴り飛ばされた時の方がよっぽどキいたぜ」

「ゼハハハハハハ!!! あいつの『覇気』は確かに強エ!!! だが……!! おれの『闇』は全盛期のあいつの力すらも呑み込む!!!」

エースはぺつ、と口の中に溜まった血を吐き捨て、ティーチを睨み返す。

殴られた事自体に驚きはなく、威勢を張ってみるものの、能力を封じるといふ厄介な能力を目の当たりにし内心で冷や汗を垂らす。

決して捕まってはならない、そう考えつつも、厳しい戦いだと言覚悟を決めざるを得なかった。

「『闇水』!!!」

「『神火』 不知火!!!」

再び襲い掛かる引力に、触れられるよりも前に生み出した炎の槍で対抗する。

炎の槍が突き刺さると同時に、再び掴まり首に強烈な一撃を食らい、またも吹き飛ばされる羽目になる。

両者は幾度も激突し、辺り一帯を炎で焼き、闇で呑み込みながら、長時間にわたる戦いを繰り広げた。

「見ろ… 『闇』の前では全て無力!!?」

そして、両者が血塗れでポロポロの姿になる頃には、確と仁王立ちするティーチと膝をつくエースという、戦況の傾きが現れ始めた。

エースは悔し気に歯を食い縛り、見下してくるティーチに鋭い目を向け、荒い息と共に血を吐き出した。

「お前の強さをもつてしてもな…しかし益々、惜しい力だ…!!? エース…!!? おれの仲間になれ!! 共に来るならエレノアと一緒にしてやるぜ!!」

それは、かつての仲間に対しての最期の情か、あるいは単に利用価値を考えての最期の通告か。

大きな声で嗤い、誘う裏切者の男に対し、エースは膝をついたままにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「…『力』に屈したら、男に生まれた意味がねエだろう。おれは決して人生に『く』は残さない…!! …わかったかバカ」

「……………生きてナンボのこの世界…ハア……………まったく残念だ、エース  
 はずす…とティーチの生み出す闇が、形を成していく。

頭上で集まり、球状に変化したそれは、島の全てを飲み干さんばかりに大きく、濃く  
 なっていく。

最期の招致を拒んだ友に向けた、最後の手向けの一撃であった。

「闇に死ね!!!」

「『大炎戒』!!? 『炎帝』!!!」

ティーチが止めを刺そうとしたその瞬間、エースが再び立ち上がり、己の炎を最大限  
 に膨れ上がらせる。

煌々と輝く赤い炎を片手で支え、掲げるその様は、まるで小さな太陽を生み出したか  
 のような眩しさを放っていた。

「ゼハハハ!!? 太陽か!!? 闇か!!? 勝者は一人だ!!!」

「お前に…………エレノアは渡さねエ」

互いへの決別の言葉を吐き捨て、両者はそれぞれの最強の一撃を振りかぶる。

光と闇、相反する二つの力が激突し、島の景色を赤と黒の二色で彩る。

島を破壊したたった二人の男達の戦いの様を、島の住民達は只、呆然と見届ける他に  
 なかったという。

不意に、どこかから知った声が聞こえた気がして、自身の耳が震える。

ずつと、またいつか傍で聞きたいと思つていた声が、切羽詰まった様子で耳に届き、エレノアは戸惑いの表情で声が聞こえた方を見やる。

「……………エース？」

尋ねる声に、応える者はいない。

ただなぜか、漠然とした不安がエレノアの中に芽生え、それ以降永遠に拭い去られる事はなかった。

——『偉大なる航路』 『バナ口島の決闘』 ——

この二人の海賊の争いは、後に起こるあの極めて大きな事件の…

『引き金』として語られる事となる。

そしてその結末は——世界の行く末さえ左右する分岐点になるのだと。

この世の誰一人として、想像だにしていなかった。

外伝 Episode of STRONG WOR

LD

第壹話 最悪の冒険

「イカれとる」

「……ああ、確かにイカれとるわい」

その光景を前に、二人の老兵が呟く。

海軍本部マリンフォード、政府において最大の戦力が集うその地は今、ある海賊の襲撃を受けていた。

老兵達——ガープとセンゴクは険しい顔で、その下手人のいる空を見上げていた。

「こんなマネができる男は……わしは一人しか知らん」

忌々しげに呟くガープの目の前を、大きな影が覆う。

まるで木の葉のように宙を舞う、海軍の軍艦。それが隕石の様に落下し、町を押し潰し破壊させられる。

轟音が鳴り響き、非常事態に飛び出してきた海兵達が目を剥いて右往左往する。

「何だあの島は?!」

「船?!」

「悪魔の实の能力者か……!!」

大きな声で騒ぎ、砲撃で反撃するものの、大質量の雨霰によって真面に攻撃は届かない。砲弾は虚しく海に落ちるだけだ。

それを嘲笑うように、その船は——獅子の船首を持つ、小さな島をそのまま引っこ抜いて改造したような外見の「船」は、遥か高くからマリンスフォードを見下ろしていた。

「『海賊王』ゴール・D・ロジャー時代の生き残り………20年もどこに姿をくらませていたのか」

「まさか、海楼石の足枷を自分の両脚ごとぶった斬って脱獄するとは……イカれた奴の覚悟は計り知れん」

張られた帆と旗、そこに刻まれた舵輪と骸骨。

それが意味する船の持ち主の名を思い浮かべ、ガープら海兵達は明確な敵意を示した男を見据え、吐き捨てた。

「ジハハハハハハハハハハ!!!」

海兵達に見上げられ、哄笑を上げる男。船首の上で笑う、獅子の如き金の髪と鶏冠の

ように突き刺さった舵輪を有する老人。

かつて、世界を変えた男と何度も鎬を削り合ったという最悪の男が、政府に対して宣言布告をしてのけていた。

「大人しく伝説にでもなつてりやいいものを……今になつて何をしに来た。……今更、世界に復讐でもしに来たか……!!!」

狂った男の頭の中は、誰にも理解できない。

或いは本人にも、狂気に駆られた自分自身を量る事は出来ていないのかもしれない。た。??

荒く息を吐き、ついつい炎が漏れ出そうになるのを何とか堪え、鬱蒼と茂る草木の間を抜けて歩く。

体力は十二分にあるのだが、それでも疲弊を隠せなくなるほど歩き詰めで、青年はうんざりとした気分ですごした。

「この島に来てもう一週間か……あいつらちゃんと生きてんのか……!!」

さくさくと苛立ちをぶつけるように草を踏みつけ、歩くことまた数十分。

ようやく森の終わりに辿り着き……切り立った崖、いや、島の端から下を見下ろす。

その下には、遙か先にある青——広がる海と、その途中で浮かぶ別の島が浮かんで

いる。

青年——エースはテンガロンハットを被り直すと、最も近くにある島に狙いを定め、その場から数歩後退った。

「そろそろ次の島に移るか……よっ」

助走をつけ、勢いをつけたエースは思い切り跳躍し、何も無い空間に身を躍らせ……次の瞬間、ポツ！とその身を炎に包む。

己の体を炎へと変じ、それによる加速を得た彼は難なく隣の島の上へと辿り着き、樹々の中へと突っ込んでいった。

……そしてその後、樹海の中を全速力で爆走する羽目になった。

ある一体の巨大な怪物が、何の前触れもなくエースに襲い掛かって来たからだ。

「何だア、あの平べったいワニは!!? ソウリか!!? サンダルか!!?」

どどどどどど、と走るエースを追いかけるのは、彼の言う通り平たい草履のような姿をした鱈だ。

陸ランドゲーター鱈とでも呼ぶべき怪物は樹々を粉碎しつつ、切り裂くより磨り潰すのに向いた牙を大きく開けて、エースを追いかける。

が、その巨体に次の瞬間、しゅるしゅると太くて長い何か巻き付き、宙吊りにする。赤紫色の触手に捕らわれた陸鱈は、直後に叩き込まれた連続の殴打によって完全に沈め



られてしまう。

背後で起こった一方的な試合終了に気付かず、森を飛び出し大きな広場に出たエースは、続いて飛び出してきた追手——森蝮の姿にぎよつと目を見開く。

「……ん!!? おいおいおいマジかよ!!!」

相手の姿が異なる事に戸惑い、すぐにそんな場合ではないと首を横に振り逃走を再開する。

何もない石畳の広場、所々に移籍らしき石像が並ぶ白い大地を爆走し……前方から飛来する緑色の影に瞠目する。

「カマキリ!!?」

ばばばばば、と羽根を羽搏かせて猛烈な勢いでやって来る巨虫・ドンカマキリが鎌を振りかぶる寸前、エースは炎で加速し一気に前へ飛び込む。

一瞬の邂逅の間、ドンカマキリの放った斬撃を紙一重で躲し、擦れ違い地面を滑る。ドンカマキリはそのまま向かってくる森蝮に接近し、両腕の鎌を振り回す。

殴打の構えを以て迎え撃とうとした森蝮だったが、擦れ違った直後にその触手はばらと切り刻まれ、続いて強烈な体当たりを食らって吹っ飛ばされる。

遺跡に突っ込み沈黙した森蝮を見下ろし、勝利の雄叫びを上げるドンカマキリ。

すると、今度はその細い体に黒い毛むくじやらの腕が絡みつき、勢いよく投げ飛ばさ

れる。

地面に叩きつけられたドンカマキリの両腕を掴み、持ち上げると、異様に長く大きな手を持つ手長熊テログマは自身の胸に相手を抱え込み、後ろに仰け反って巨虫を脳天から地面に突き立てる。

びくびくと痙攣を繰り返し、やがて動かなくなったドンカマキリを離れた手長熊は、思いのほか愛らしい顔を凶悪に歪ませ、凄まじい咆哮を上げた。

そんな光景を——この島々に来てから嫌というほど見せつけられた景色を眺め、エースは深々と溜息をこぼした。

「次から次へと………この島の生態系は本当にどうなつてやがんだ」

心底面倒臭そうに肩を落とし、がりがりと黒髪を掻き巻く。毎日毎日続けられる怪物同士のバトルロワイヤルには、いい加減飽き飽きしていた。

だが、当人にやる気が湧かずとも、参加者となった事実は変わらない。

新たな標的にエースを定め、手長熊が爛々と凶暴に目を輝かせ、駆けよってくる姿が目映る。

「やる気か……？ 上等だ——ぶっ!!!」

振り返ちにしてやる、と拳を構えたエース。

が、手長熊のリーチの長さを把握しきれず、接近するよりも先に手酷くビンタを食ら

い、上半身が千切れ飛ぶ。

ぼぼつ、と炎に変じた体が元に戻ると、出鼻をくじかれた青年はじろりと通り過ぎた手長熊を睨みつけた。

「ンなるオ、挨拶もなしにさっそく一撃たア、いい度胸してんじや……………ん!?!」

今度こそ情け容赦ない一撃を叩き込んでやろうと、頬を痙攣させながら振り返る、が。突如、手長熊の腕から発せられた圧……………能力者である己にとって天敵ともいえる力を感じ取り、目を剥いた瞬間エースはどかん!と宙を舞う。

吹っ飛ばされたエースは森の中に突っ込み、樹々や岩を破壊し、最後には遺跡の壁に大の字に叩きつけられる。我ながら情けない格好だった。

「クマが『覇氣』使うとかアリかよ!!? 痛つてエ!!! くつそ……………あのジジイ絶対に許さねエぞ…!!」

ぶつ、と垂れた鼻血を乱暴に吹き、壁にめり込んだ身体を引っこ抜く。

手長熊は未だ、己を標的と見て向かってきている。

不意を突かれた一撃はかなり……………少し、そこそこには効いたが、それで心が折れる程軟な鍛え方はしていない。

「だがまア……………エレノアのしごきよりはるかに軽いぜ」

そう、不敵に呟いた直後。

ぼっ！とエースの全身から業火が噴き上がり、森を焼き払う。

立ち昇る炎を操り、右腕に収束させ、両足をその場に踏ん張って身構えたエースは、咆哮と共に両腕を振り上げる手長熊を見据え、拳を振り抜いた。

「火拳！！！！」

視界の全てが赤に染まり、空気さえも焼く熱波が手長熊を呑み込む。

毛皮を燃やし、皮膚を焦がし、強烈な爆発で吹き飛ばされた手長熊は砲弾のような勢いで吹き飛ばされ、反対側の遺跡に大の字に叩きつけられる。

白目をむき、沈黙した手長熊がその場に崩れ落ちる様を見やったエースは、満足げに笑みを浮かべて構えを解いた。

「…へっ、どんなもんだ」

復讐完了、とばかりに笑った彼は、くいつとテンガロンハットをつばを指先で上げて鼻を鳴らす。

そこでふと、ぎゅるるるると盛大に鳴り響いた自身の腹を押さえ、がっくりと肩を落として舌を垂らした。

「朝から走り回ってつからな……腹へったア。……このタコ焼きやア、ちつとは腹の足しになるか？」

全力で逃げ続け、能力を使った代償か急速に落ち込む体力にげっそりした彼は、遠く

で沈黙している森蚺を見やり、ごくりとつばを呑む。

この島における最強決定戦は取り敢えず……エースが頂点となったようだ。

ひらひらと紅葉が舞い散る、水に覆われた遺跡の道を三人で歩く。

弁当でも持つて散歩をすればさぞ気分が良いだろう場所なのに、敵があちこちで身を潜める油断ならない場所なのが口惜しい、とスカルは独り言ちる。

ふと、どこかから轟音のようなものが聞こえてきて、スカルは立ち止まって辺りを見渡す。

「……なア、なんかどつかからモノスゲエ音聞こえませんでしたかい？」

「そんなもんここのじゃしよつちゆうだよ。どうでもいいことさ……それより、早く他の奴らを探すよ。エレノア嬢ちゃんが一番心配だ」

「はア……」

前を歩く二人、銃使いの侍クークイとオバちゃんことバンシー、髭面の男オツサモンに話しかけるも、にべもなく適当にあしらわれてしまう。

確かに、皆と一刻も早く合流しなければ、と歩き出した時。

ざわざわざわざわ……と、背後から響いた足音にまた立ち止まり、振り返る。

「ん……？」

その視線の先で……わらわらと凄まじい勢いで近付いてくる黒い粒の群れ、軍隊蟻の集団を目撃し、スカルはぎよつと息を呑んで飛び上がった。

「おわ———っ!!!」

猫のように後ろ髪を逆立てて飛び上がったスカルは、悲鳴を上げて前を歩いていたクーカイ達に追いつく。

何事か、と振り向いた三人も、凄まじい速度で迫る黒い津波を目撃し目の色を変える。

「軍隊アリ……か!!!」

「この数全部を相手にすんのは無理そうだね……!!?」

「とにかく逃げろ!!!」

咄嗟に得物を構える三人だったが、一匹一匹が凶悪な上に数えきれない量で向かってくるそれらには無意味と悟り、すぐさま逃走一択に絞る。

だが、鎧兜で武装した虫の軍隊の進軍速度は異常で、走っても走っても逃れられそうになかった。

「ちよい!!! アリを追っ払う家庭の知恵ってなんかありやせんでしたかい!!!」

「あるにはあるけど、あの手のアリには効かない手だよ!!!」

「チクシヨウが!!! 家庭の知恵にも裏切られたか!!!」

一縷の希望を抱き、バンシーに問うてみるも、苦虫を噛み潰したような顔で首を横に

振られスカル・クーカイ・オツサモンドは怒号を上げる。

水の中ならあるいは、と視線を左右の水没した遺跡に向けたその時。

ざばあつ！と大きな水飛沫を上げ、巨大な緑色の影が水上へと飛び出してくる。

「うおおおおおつ!!」

「今度は何だ!!!」

思わず立ち止まり、頭上を舞う巨体を見上げる四人。

巨大な怪物——蛇のように太く長い体を持った、鉄さび色の模様の皮膚を有した鯨

が、スカル達を頭上から見下ろしてくる。

どつぱーん、と再度盛大に水柱を立ち昇らせて着水した暴鯨は、水上に背鰭と鬣を浮

かばせながら、ぐるりと旋回しスカル達に襲い掛かる隙を伺う。

「前門の蛇サメ……後門の軍隊アリか」

「どつちとやる!?」

「どつちもゴメンだね……!!!」

敢えて言うなら、まだ戦う余地のありそうな暴鯨か。

先にあれを潰して水中に潜るべきか、と三人が得物を構えたその時、一直線にスカル

達を指していた軍隊蟻達が突如進軍先を変える。

暴鯨が再度水上に飛び出した瞬間、軍隊蟻達も一斉に空中に身を躍らせ……より巨大

な獲物に食らいつく。

「……………!!!」

がしがしががしがじ！と小さな黒い軍勢と接触した瞬間、暴鯨の肉も皮膚も全てが食われ、真っ白な骨だけになっていく。

唾然とした表情で立ち尽くすスカル達の目の前で、頭から尻尾の先までを綺麗に平らげられてしまった暴鯨の骨は、どぼんと水に沈み憐れな骸を晒した。

「……………一瞬で骨になっちゃった」

「悪食にもほどがあるだろ……………!!!」

「いいな、あれ。良いドクロ口ができた」

「アレもコレクションに入れる気か!! やめておけ」

開いた口が塞がらないバンシーの隣で、スカルは顎に手をあてながらしげしげと暴鯨の骨を見つめる。ドクロマニアの悪い癖がこんな状況でも出て来たらしい。

と、呆然としている場合でもなかった。

暴鯨を食い尽くした軍隊蟻達が道に着地し、ぐるりと再びスカル達の方へ振り向いたからだ。

「まずいまずいあいつらまだあれで腹一杯になってないのかい!!!」

「いいから走れ!!! 追いつかれるぞ!!!」



喰い過ぎだ、と喚くバンシーに叱咤し、石畳の道の前に見える森を目指して足を動かす。

が、ようやく陸地に辿り着き、紅葉の中へ逃げ込もうとした彼らの前に、また別の巨体が立ち塞がってきた。

細長い顔の先の口からちろちろと長い舌を覗かせる、微妙に愛らしい顔をした珍獣だ。

「なんか前にいるぞ!!!」

「ア、アリクイ~~~~!!!」

何とも言えない絶妙なタイミングで姿を現した巨獣の前に、スカル達はキキツと急ブレーキをかけて停止。まじまじと珍獣を凝視する。

火蟻喰ヒアリクイは四人には目もくれず、自らやって来る軍隊蟻をじつと見つめると、徐に細長い口をぶくつと膨らませ。

ぼう!と、真つ赤な炎を吐いて軍隊蟻達に浴びせかけ始めた。

さすがの高熱に、凶悪な蟻達も一瞬で丸焼きにされ、からんと虚しい音を立ててその場に転がった。

「ほウ……………ウエルダン派かい? あの火力は欲しいね…」

「…取り敢えず助かったか」

「——そうでもないぞ?!」

主食が自らやってきてくれて、ご満悦で食事を始める火蟻喰を興味深そうに眺めていたバンシーにオツサモンドが叫ぶ。

大人しく食事に没頭していた火蟻喰が、ある程度軍隊蟻のソテーを食べきると、喜びをあらわにするように辺りに火を噴き散らし始めたのだ。

周りの紅葉に引火し、景色をさらに真っ赤に染めるほどの勢いで。

「「あつちやあああああ!!!」」

炎に焼かれかけた四人は大慌てでその場から跳び、水の中に頭から突っ込んで火蟻喰の放つ業火から逃れる。

地獄のような景色の中で、火蟻喰は独り、只管楽し気に傍迷惑な食事を続けるのだった

## 第貳話 // 弱肉強食世界 //

燦々と照り付ける太陽。

その光はあまりにも強く、殺傷能力を持った熱がじりじりと身体に突き刺さってくる。

見渡す限りの砂の大地、果てはゆらゆらと陽炎が踊り。

からからに渴き切った空気が全身の水分を容赦なく奪う最悪の環境で、四人の男達が覚束ない足取りで歩を進めていた。

「行けども行けども砂ばっか……!!? おい、方向これであってんのか?」

「二応、太陽の位置を目印にしてるから間違いないとは思うんだが……確かに、流石に限界だ」

気を抜くと一瞬で飛びそうになる意識を何とか留め、ゼーひゅーと荒い呼吸を繰り返す男達……ガンリユウ、キメル、アギー68、レオネロ。

男達はありあわせの布を頭からかぶり、顔に巻き付け空間を確保していた。

まだスピード海賊団として航海していた最中、夏島の砂漠を歩いた経験が生きる。あれより一段階以上過酷な環境だが、何もしないよりははるかにましになれている。

が、やはり準備不足は否めない。

突然こんな場所に放り込まれたが故に仕方がないとはいえ、全員の体力が限界に近付きつつあった。

「空に浮かぶ島だろうと、*“偉大なる航路”*の島の一つ……………方位磁石が使えねエのは痛エ」

「どう考えても同じところぐるぐる回ってんだろこれ……………」

「仕方ねエだろ、動かねエのは太陽だけなんだからよ」

東西南北、どれでもいいから目指す指針が欲しかった四人は、時計と頭上で忌々しく輝く太陽を見比べ、何とかまっすぐ歩こうとしていた。

どんなに広くとも一つの島。端に出れば別の島に移る機会が巡って来るに違いない……………そんな希望を抱いて只管進む。そこがこの島よりましな保証はないが、何もしないよりは遥かに建設的だ。

だがふと、レオネロの足が止まり虚空を見上げだす。

如何したのか、と同じく立ち止まった他の三人に向けて、レオネロは虚ろな目を向けて口を開いた。

「…なア、ここらの島って全部空中に浮いてたよな？」

「何だ、今さら……………そうだったろ」

「あア」

「おう」

確認の言葉に、三人はそれぞれぎこちなく頷く。

放り出される前、こうして何とか四人で合流する前に空中から見下ろした景色は、あの種のトラウマとしてしっかりと記憶に刻み込まれている。

何とも言えない嫌な予感を抱いたガンリユウ達三人だったが、レオネロは半ば放心した様子のまま、最悪な一言を発した。

「……………つーかこれ、もし島が回ってたら太陽あつても意味なくね?」

しん…と、辺り一帯が静まり返る。風が砂を舞い上がらせる虚しい音が響き、四人の間に吹き抜け黄土色に汚す。

無言で立ち尽くすレオネロを見つめていたガンリユウは不意ににやりと笑みを浮かべ——直後にくわつと目を吊り上げてレオネロに掴みかかった。

手長族の長い腕が、レオネロの頭をハットごと左右から挟み込みがくがくと揺さぶり出す。

「この野郎!!! 散々無駄に歩かせといてそりやねエだろオ!!!」

「うるせエ!!? おれだつて今気付いちまって愕然としてんだよ!!? イヤだつたらてめエだけで行きやがれ!!!」

「だー!!! やめろやめろ!!?」

「こんなところで不毛な争いなんてするんじやねエよ!!!」

我慢の限界に達した二人が、怒号を上げて罵り合う。

唐突に始まってしまった喧嘩にアギー68とキメルは慌てて止めに入り、しかし当人達も相当ストレスが溜まっていたのか必要以上に大きく荒々しい声上がる。

止めるつもりで、二人の引つ掴み合いに参加する体勢になってしまった。

「連中に気づかれたらどうするんだア!!!」

キメルが叫んだ瞬間、ぼん!と、彼等の立つ砂の海が爆ぜる。

そして、一点を中心に砂が動き、見る見るうちに足場が挿鉢状に傾いていく。ざざざざざざ……!と地中に向けて砂が滑り落ち、四人を凄まじい勢いで呑み込まんとする。

蠢く砂の中心には、巨大な大顎を持つ虫——サブクカゲロウ砂漠蜉蝋が四人を喰らおうと待ち構えて

ているのが見えた。

「「ぎやああああア~~~~!!!」」

「だから言っただろバカヤロウ~~~~!!!」

地中に潜み獲物を待ち構える、恐怖の地獄の主の罠にまんまと嵌り、男達は悲鳴と怒号を上げて必死に砂の坂を駆け上る。

足を取られて登り辛い坂を必死に駆け、どうにか砂漠蜉蝋の間の手から逃れようと藻

掻く。

だが、砂漠蜚蟻もただ待つているだけではない。がちがちとかち合わせていた大顎を開くと、その場でぎゆるぎゆると全身を回し、風を呼ぶ。

あつという間に、播鉢の中では強烈な砂嵐が引き起こされ、暴風と砂塵がレオネ口達に襲い掛かった。

「ダメだ、砂の勢いに負ける!!!」

「チクシヨウあの虫野郎めエ!!?」

その場に留まろうとするも、足場の砂子と空中に巻き上げられ踏ん張る事もできない。今にも吹き飛ばされ、何も出来ぬまま真下の巨虫の腹の中に納まる未来しかない。

だが、四人の中でも小柄なキメルの体が浮き上がりそうになった時、アギー68が覚悟を決めた表情で吠えた。

「お前ら、おれに掴まれ!!!」  
「バンクバレット炸裂火弾!!!」

アギー68は自らの巨体に三人をしがみつかせ、自分は左腕を——砲と一体化した義手を構え、地中の砂漠蜚蟻に向ける。

ぶわっ、と一塊になった四人の体が風に負け、空中に巻き上げられるも、アギー68は狙いを外す事なく、装填した砲弾を発射する。

放たれた砲弾は風を貫き、真つ直ぐに巨大蟻地獄めがけて進み、大顎の間の口部分に

炸裂する。

どかん！

魁皇類の相手を想定して作られた超強力な砲弾が破裂し、真つ赤な炎が噴き上がって衝撃と熱が辺りに撒き散らされる。

砲弾の破壊力により、砂漠蜚蜉は沈黙し回転も止まり、砂嵐があつという間に収まつていく。

穏やかになつた風に運ばれながら、爆発による風圧で播鉢の中から飛び出した四人は喝采を上げ、アギー68の腹をばしばしと叩いて彼の成果を讃えた。

「ひやつほくくくウ!!! お前最高だぜアギー!!!」

「うはははははは!!?」

ひゆるるる…と地面に向かって落下する四人だが、着地の事で特に心配はしていなかった。下は砂地、地面に叩きつけられるよりは遥かに安全だと、窮地を一度脱した余裕により気を抜きまくっていた。

ぼふつ、ぼふつと彼らが次々に砂地に降り立って…ぼふん!と再び砂漠が爆ぜる。

次に四人の前に現れたのは、正面の丸く並んだ牙を見せつける、蚯蚓ミヌスのような足も顔もない不気味な巨蟲の成群であつた。

「今度は何だア~~~~!!?」



「くそでけエミミズが砂掘って飛び出してきたぞ!!？」

「ふざけんな!! ミミズならミミズらしく干からびてるクソつたれ!!」

四人は驚愕と怒りと焦りがごちゃ混ぜになった表情で立ち上がり、激しい砂埃を巻き上げて追ってくる巨大ミミズ軍団から逃げ惑う。

息を吐く暇もない、戦つても倒しても、次から次へと敵は現れ襲い掛かってくる。その全てが強力で厄介な能力を持ち、己以外の生物に対する闘争心を剥き出しに向かってくる。

海賊達は心底うんざりしながら、走り続けるより他になかった。

「何なんだこの島はアアア!!!」

どカーン!

殺到してきた巨大ミミズ軍団により、四人の男達は再び空中へと吹き飛ばされ、迸った絶叫は虚しく虚空に消え去っていった。

外の景色は真っ白で、吹き荒れる雪混じりの風が冷たさを示す。

しかし、ガラス壁に覆われた温室の内側は実に快適な気温で、見ている者に窓の外が別の世界であるような錯覚に陥らせる。

外に比べれば間違いなく天国と呼べるであろう温室の中で、備わったプールの中を泳

ぐ一つの影があつた。

白と黒に彩られた髪を後頭部で纏め、背中から生やした翼で水を掻く、小柄な少女。藍色の扇情的な水着を身に纏い、水中を何周も泳いでいた彼女は、やがてプールの縁にしがみつくと苦し気に息を吐き出し、何度も激しく肩を上下させる。

「……………っは!!! はア……………はア……………!!? くっ……………やっぱり恐ろしく体力が落ちてる……………これはここを抜け出すどころか」

鰭の代わりに使っていた翼を畳み、勢いをつけてプールから上がる。その際、かしゃん、と濁いた金属音が鳴り、身体を水中から引き上げると軋む音が上がる。

自身の思うように動いてくれない両脚……………義足を睨みつけ、有翼の少女・エレノアは近くの樹に張られたハンモックに腰を下ろす。

ぎし：と揺れるハンモックの上で呼吸を整え、閉ざされた温室の内部を見渡し、物憂げな溜息をこぼす。数日経ったが、相変わらず逃げる隙も道も見当たらないとは、我ながら情けない。

悔しげに顔を歪めていた、その時だった。

どこからともなく流れてくる、音楽のリズムがあつた。

それに合わせて、温室の入り口が開き、三人の男が軽快に踊りながら姿を現してくる。一人は、青い髪と白衣姿の道化。一人はどう見ても、ピンクの服とサングラスを纏つ

たゴリラ。

そして最後の一人は、着物を纏い、両足の半ばから先を剣に換えた、獅子のような金の髪を持つ老人。何より目立つのは、脳天に鶏冠のように突き刺さった舵輪だ。

じとつと呆れた目を向けるエレノアに構わず、男達は存分に踊り切るとエレノアの前で決めポーズをとり、にやりと厭らしい笑みを浮かべた。

「決心はついたかい、エンジェルちゃん」

「……」から出して」

「ジハハハハ!!? 相変わらず気の強エ娘だ、〃白ひげ〃にも〃白羽〃にもそつくりだ……だからこそ欲しい。そういう女は嫌いじゃねエ」

何度も繰り返されてきた誘いの言葉に、エレノアがきつい態度で拒絶するも、老人——〃金獅子〃のシキは面白がるだけで気にも留めない。

その目は人に向けるものではない、懐かない気の強い猫の前に、如何なる方法を以て躡けて従順にしてみせようか……そんな事を考えている眼差しであった。

そんな時、シキの傍に控えていた道化が突如ハツと動き出す。

歩く度にぶつ、ぶつと放屁のような足音が響き、シキはみるみる顔を険しくして後ろに振り向く。

「てめエのその妙な足音はどうにかなんねエのか、D r. インディゴ!!!」

怒鳴りつけられ、道化の動きがびたりと止まる。

Dr. インデイゴと呼ばれた彼はその場で特殊すぎる足音と共に足踏みし、空中を指差し軌跡を描いては、パンツと掌を打ち合わせる。

何を言いたいかまるでわからない、パントマイムらしき動作に焦れたシキが苛立ちながら問う。

「何が言いてエんだ」

「そういえばお見せしたいものが」

「しゃべるんかい!!!」

散々パントマイムを続けていた男が饒舌に喋り出し、眼を跳び出させてシキが吠える。これまでの時間は一体何だったのか、と言わんばかりの無駄さだ。

そんなやり取りを見て、それまで黙っていたスーツ姿のゴリラ——スカーレットがパンパンと手を叩いて笑いだす。

その声に、シキは今度はハツと衝撃を受けた表情で振り向き、困惑の眼差しを向けて声を漏らした。

「ウホウホウツホツホ!!?」

「——お母さん!!!」

「ゴリラだろどう見ても!!!」



こちらが剥きになればなるほど、相手は面白がり嘲笑つてくるだけ。そう察したエレノアはちつと舌打ちをこぼすと、シキから目を逸らして温室の外の冬空を見やる。

——ここに連れて来られて、どのくらい経ったか。不自由はないが自由もなく、鳥籠の中の鳥のような扱いを受け続けている。

気丈に振る舞つてみせてはいるが、徐々に焦りは大きく、不安も強くなつてきていた。「だが迂闊な事など考えねエ事だ………ここがどこにあるか忘れたわけじゃあるめエ。その体で逃げようなんて、自殺行為にも等しい……お前さんがうんと頷きや、お前さんの連れも無事に返してやるつて言つてんだろ？」

「そんな脅しには屈さない……エース達も頷くわけがない」

「ジハハハハ……!!? そうかいそうかい、大した信用だ………その余裕の態度が  
がいつまで持つか、見ものだな」

小馬鹿にしたように笑うシキを横目で睨みつけ、小さくため息をこぼしたエレノアは、こつんと額を窓にぶつけて憂いを帯びた視線を外に向ける。

籠の中で動かずにいると、周囲の「声」が否応なく聞こえてくる。

島に住まう者達の怯える声、それを追い回す強力な猛獣達の雄叫び、破壊と闘争の音、  
そして……極限に追いやられた仲間達の悪態と、愛しい男の自分を探す声。

己の不覚の所為で巻き込んでしまった彼らの事を思い浮かべながら、エレノアは自分

の不甲斐なさにきつく歯を食い縛った。

——みんな……エース……!!?

どこにいるの……!!?

自分達がこの、空に浮かぶいくつの島々に来る羽目になった経緯。

己の迂闊さを思い出し、エレノアはただ一人、助けを待つ事しかできない自身の情けなさを呪い続けていた。

## 第参話 〃空飛ぶ船〃

時は、約一週間前に遡る——。

海原を進む炎とスピードをモチーフとした船、ピース・オブ・スパデイル号。

新進気鋭の海賊、スピード海賊団の船であり、今や大海賊 〃白ひげ〃 傘下の船である。

一味が白ひげ海賊団に敗北し、吸収される際に手放す事を考えたものの、とある事情で未だ現役を貫いているまだまだ若い船だ。

その甲板の上で、その話題は上がった。

「イースト・ブル東の海〃で……何だつて？」

心地よい風が吹き抜ける、麗かな昼間。

のんびりと流れる海の景色を眺めていた男・デュースは、仲間の眩きに反応を示す。

「東の海で街が次々に滅んでんだつてよ。原因は不明、災害なのか人災なのかもわからねエんだと」

「何だア、そりゃあ……」

眩きをこぼしたオッサモンドにばさつと新聞紙を広げて見せられ、デュースや他の面々が記事を覗き込む。



壊滅した町や村の悲惨な姿。

砲撃や放火などではない、巨大な岩々で押し潰された災害の跡が写っていた。

「何だコリヤ、隕石か？ 先生、どう思う？」

「何かはわかりませんが、とにかく巨大な何かが飛来して何もかもが押し潰されたようですね。隕石にしては、熱で焼けた痕がないのが気になりますが……」

背後に振り向き尋ねてみると、部屋の中から狙撃手・ミハールの声が聞こえる。引き籠もったままどうやって記事を読んだのだろうか。

そこでふと、デュースは厳しい表情で口を噤み、視線を移す。

一人の車椅子に乗った少女に寄り添う……いや、ぴつたりと張り付いている船長に。

「……おい、エースよオ」

デュースの咎める呼びかけに、エースはガッルル……と唸り声を漏らして周囲を睨みつけるばかり。

まるで猛犬のような危険な姿に、彼に守られる少女・エレノアの方が苦笑を浮かべていた。

「いつまでそんな獣みてエな声出して警戒してんだよ。エレノアちゃんだって困惑してんじやねエか、いい加減肩の力抜けよ」

「いやわからねエ!!? もしかしたら常に姿を消せる能力者か“忍者”がすでに潜んで

て、こいつを狙ってるかもしれないエ……!!!」

「考え過ぎ………つてわけでもねエが、そんな調子じゃ途中でバテるぞ」

「にやははは……」

ぎよろぎよろと辺りを見張り、めらめらと全身から炎を漏らすエース。

彼がそうなっている理由、うつすらとエースの胸に残っている痕を見やり、デュースは呆れ顔でため息をこぼした。

「オヤジさんに頼まれて力が入ってんのもわかるがよ。白ひげ海賊団本隊での遠征中の、愛娘の護衛だ………プレッシャーは大きいさ」

「だが『白ひげ』だぞ？ わざわざ敵に回そうなんて考えるバカが、どれだけいると思う。そりゃあ、人質に取りや交渉に使えるかもしれないねエし、伝説の『天族』の血肉は魅力的に見えるだろうが………リスクがデカすぎてそうそう手は出せねエだろ」

拳法家ダッキー・ブリーが腕を組みながらそう口にする、グローブ使いのドギヤが難しい顔で続ける。

その調子じゃ守れる者も守れない、そうエースに語り掛ける、が。

「——そのバカのせいで、こいつはおれの為に両脚を失う羽目になったんだ!!? 油断は命取りだ野朗共!!?」

「へいへい………」

目を吊り上げて吠えるエースに、仲間達は誰も何も言えなくなる。

実際、彼の言う馬鹿にエースが殺される姿を、仲間達は確かに目撃している……そして、我が身を犠牲にその運命を覆した少女の覚悟も。

「悪いねエ……カイドウ」の手下の大バカ野郎が、パパの領海ナワバリで暴れてるって知らせが急に来たもんだから、主力はみんな出向いちやって、守ってくれる人があんた達以外にいないんだよ」

「……まあ、そんなだけ認められてるって考えりや、やる気も多少は上がるか」

本当なら、世界最強の男の傍にいた方がよほど安全だ。前回の襲撃が例外中の例外だっただけで、主力から離れる方が危険性が高い。

共にいて守れると太鼓判を押されたのだ、そう思えて、元スペード海賊団の士気は高かった。

「……だがエース、お前はまずその近く奴をみんな焼き殺しかねえ鬼の形相をやめろ」

「……悪い、だいぶ頭に血が昇ってたみてエだ」

何度も宥めていると、ようやく落ち着いたエースは深く息を吐き出す。

吊り上げていた目を緩やかにしたところで、オッサモンド達の方へ真剣な表情で振り向いた。

「……………とところでお前ら、さっきなんか気になる話してなかったか？」

「そこは聞こえてたのかよ」

「これだこれ…!! 結構な事件が『東の海』で起こってるらしいぞ。エース、お前の故郷なんだろう？」

一人の家族に纏わる事で、聞き逃すわけにはいかないとエースは新聞を受け取る。

崩壊した町村、被害者の数、目撃証言。それらを流し読み、己の知る土地に関わる情報のみ、目を皿のようにして確かめる。

「……………フーシャ村は、特に異変はナシか」

「…心配？ 弟君の事とか」

「んな事アねエよ……………あいつは『海賊王』になると豪語する男だ。こんな災害程度屁でもねエき。今頃着々と出航準備を進めているところだろう」

にやり、と不敵に笑い堂々と語ってみせるエース。

今やたつた独りともいえる、己の家族。思わず笑ってしまうような、しかし大きな野望を胸に秘めた弟がそう簡単に沈むものか、とエレノアの気遣いを払い除ける。

……………ウズウズと片足を上下に揺らしながらだが。

「足、ものすごいそわそわしてるみたいだけど……………」

「……………気にすんな。次の島に着くまで待ち遠しいだけだ」

「私の事は別にいいんだよ？ 心配なら、このまま——」

「いい!!? あいつももう時期大人の仲間入りする直前だ。いつまでもおれが気にかけてちや成長なんかできねエ……!!」

「グルルル……ニヤーン」

一味のペット・コタツもエースの本音を案じて暖かな巨体を擦り付けてくるが、意地を張るエースは頷かない。

素直じゃない一味の頭に、どうしたものかと車椅子の上でエレノアが考え込んでいると。

「エース……!!」

不意に、周囲の警戒をしていたキメルが声を上げ、ばたばたと駆け寄ってくる。

何事か、と一齐に振り向く甲板の面々と、船内で作業中だった他の面々。

そんな彼らに突如……頭上から差した巨大な影と、それを生み出すこれまた巨大な物体が覆いかぶさった。

「な、な……何だありやあ?!」

「島が空を飛んでるぞ!!」

空を見上げ、男達は絶句し立ち尽くす。

そこにあったのは、確かに島だった。ごつごつとした楕円形の巨岩が、まるで水中の

泡のように軽々と上空に浮いているのである。

見間違いか、巨岩の前面には雄々しい獅子の貌が生えているのが見えた。

「噂に聞く『空島』か……!?？」

「いや……………船だよ」

見た事も聞いた事も無い珍妙な光景に、右往左往する元スペースド海賊団。

彼らの動揺と混乱の声に、エレノアがぼそりと呟いた。

「海賊旗も見える……………人の気配もある、海賊船だ。だけど、あの象徴<sup>シンボル</sup>って……………」

「何で飛んでんだ、あの船は!!？」

「悪魔の实の能力じゃねエのか……!?？」

正体はわかってても素性がわからず、ざわざわとどよめくエース達。

見極めようと、独り冷静に島船のマークを確かめようとしていたエレノアは、不意に

はっと目を見開き、異なる方向を見やって顔色を変えた。

「みんな!!? 方向転換!!? もうじき嵐がやってくる!!！」

「何イ!!？」

「急だな、オイ!!！」

声を張り上げるエレノアに、エース達は一切疑いなく動く。

青天を背景にした戯言や冗談だなどと嘲る事はあり得ない、彼女がそう言ったのだから

らそうなるのだと、全員が確信していた。

そこでふと、仲間のうちの誰かが頭上の島船を見上げて不安気に顔を歪めた。

「おい、だったらあの船もヤバいんじゃないか…?!?」

「あの規模の船でも、多分直撃したらひとたまりもないだろうね」

「だったらついでに教えてやるか…!!? お——い!!」

船長が海賊らしからぬ礼儀正しきの持ち主故か、顔も見えていない赤の他人の海賊に対して、声を張り上げてを大きく振る。

別の面々、双剣使いのセイバーが思わず疑わしげな視線を向ける。

「オイオイ…大丈夫か? 親父さんの所の敵だったりしたら…」

「その時は…その時だろ」

咄嗟に近くにいたドギヤに苦言をこぼすが、全員が然して気にした様子を見せず、天を進む島船に呼びかけ続ける。

すると、一味の声が届いたのか、島船の方から何か…橙色の巻貝がふわふわと浮いてエースたちの元へと近づいてくる。

エースが受け取り、見慣れない種類の貝殻をしげしげと見つめる。

「ん? 何だこりゃ」

「貝殻か…?」

「トーンダイヤル音貝”……………”空島”で手に入る、種類によって色々な特殊な効果を發揮する道具だよ。これは音を記録する種類のものだね」

車椅子を自分で押し、エースの疑問に答えるエレノア。

ほー、と気の抜けた声を上げ、それなりに旅をしてきた「偉大なる航路”にはまだまだ見知らぬ技術が存在するのだな、と感嘆する。

「…で、こいつはどうすりゃいいんだ？」

「貸して、ここを押すと音が記録できるから。デユース！」

「お、おう……………んっ！　こちら、”白ひげ”海賊団傘下スピード海賊団副船長マスクド・デユース!!？」

エースから音貝を取り上げ、先端の突起を押し込み準備を終えると、それをデユースに投げ渡す。

おっかなびっくり受け取ったデユースは、気取った風に咳払いをしてから貝殻の穴に声を発する。素性は不明だが、人助けに遠慮はいるまい。

「じきにサイクロンの発生が予想される!!？　進行方向より……………あー、どの方向だ？」

「9時の方向に!!？」

「了解。9時の方向にそれろ!!？　繰り返す!!？　サイクロンが来る!!？　9時の方向に逸れる!!！」



一通りの情報を貝の中に入れ終え、さてこの後はどうすればと固まっていると、音貝が独りでに飛んでいく。

ふわふわと島船の方へ消え去った音貝の行方を見届けてから、エースとデュースはエレノアに向き直った。

「…これでいいのか？」

「うん!!? 私達もここを離れよう!!? 全速力!!?」

上出来だ、と言わんばかりに満面の笑みで応え、エレノアは他の面々に指示を出す。

一刻も早く暴風から逃れなければと、元スピード海賊団はエレノアの予想した通りの方角へと舵を切るのだった。

「航海士チーム……どういう事だ？」

艦橋に立つ老人が、真下で計器を睨んでいた白衣の男達に問いかける。

対する白衣の男達は戸惑いの表情で老人——シキを見上げ、理解ができないといった表情で首を横に振る。

見知らぬ海賊の助言など信じられない、と全員の目が語っていた。

「いえいえ……そのような兆候は全くありません!! 水銀計も正常値です!!」

「奴ら、9時の方向にそれました!! スゴい脚です!!」

そんな致命的な失態を犯すはずがない、と確かな自信をもって答える部下達に、シキは胡乱気な目を向け眉を顰める。

と、その時——空が動く。

突如として黒々とした雲が広がり、あつという間に景色の殆どを埋め尽くし始めたのだ。

「お? パーマ?」

「雨雲だろどー見ても!!」

間拔けな顔でボケを晒すシキの後頭部に、後ろに控えていたDr. インディゴによるツツコミが入るが、笑う者は誰一人としていない。

目前の黒雲はさらに濃く、そして激しい風を孕んで島船に近づいていた。

「ウソだろ…!! シキ様!!」 すぐ9時の方角へ舵を!! バカでかいサイクロンです!!」

白衣の航海士達は未だ信じられないといった顔のまま、慌ててシキに振り向き懇願する。

はつと我に返ったシキは両手を交差させ、己の“能力”で操っている島船を操作する。

前面の大扉を閉め、吹き飛ばされる外にいた部下達を見捨てて室内を閉じ切る。そし

て島船を大きく旋回させ、目前のサイクロンから全速力で引き離していった。

「おわーっ?!」

「とんでもねエ勢いの風だ!!」

真下では、サイクロンの余波を喰らったスパデイル号が荒波にもまれていた。

思いきり揺さぶられる船体だが、これでもまだ嵐の中心にいるよりはましだ。予知が遅れれば、今だあの暴風雨の中に囚われ、只では済まなかつただろう。

「ぶはっ!!! 相変わらず凄まじいな……… “天族”の予知能力は」

「何度この力に助けられた事か…!!?」

水飛沫に咳き込みつつ、全員風で吹っ飛ばされる事なく揃っている事実に、幸運の女神たる虎耳の天使に何度目かの感謝の想いを抱く。

“偉大なる航路”の天候は予測不能。どんなに機材を揃えても、理不尽なまでの不運で海の藻屑となりうる海。

そんな未来をほぼ完璧に回避させられる “天族”の娘には、全員頭が上がらなかった。

「お前ら!!? エレノアをしつかり掴まえとけよ!!!」

「アイアイサー!!!」

「過保護だなア……」

「どこがだ？ お前はそこでじつとしてろ!!」

危うく傾きで海に転がり落ちそうになっていた車椅子をドギヤとオツサモンドが捕まえ、甲板に留めている様を見ながらエースが目を吊り上げる。

この女がいなければ、今頃——。

そんな不穏な考えと共に、元スピード海賊団は嵐の影響下から抜け出そうと悪戦苦闘していた。

雨雲の下から逃れ、穏やかな海へ。

背後を振り返り、未だ黒々と渦を巻く黒点と周囲の青空を見比べ、エース達はほっと安堵の息を吐いた。

「抜けたな……どうにか」

「外輪パドルでもついてりやもつと楽だったろうになア……」

「無い物ねだりしても仕方がないでしょ」

帆と舵を操るだけでは足りず、結局人力で漕ぎまくった事により、全員中々疲弊している。

「今回もお前の力で助かった……ありがとうな」

「どういたしまして。おつかれさん」

大の字に寝転がったエースに礼を言われ、エレノアも車椅子の背凭れに深く身を預ける。

雨と波に濡れた髪をかき上げ、視線を頭上の青空……そこに浮かぶ島船に向ける。

「あの船も無事みてエだな」

「ああ、致命傷を免れたな……どこの誰かは知らんが。ほんとに何で浮いてんだ……?」

肩で息をする一味全員に見上げられ、島船は沈黙したままスパデイル号の上で浮遊している。

呑気に男達が笑う中、一人だけ油断なく見据えていたエレノアは。

どこからか響いた、銃声の音を捉えた。

煙を上げる銃を手に、シキが目の前の男を睨みつける。

その先で、航海士の一人は腹に走った熱さとじわじわ広がる赤色に目を瞠り、やがて俯せに倒れ込んだ。

「真面に天候の影響を受けるこの空飛ぶ船にとって……天候の予測がどれほど重要か

……!!! もう二度と外すんじゃないぞ」

斃れた男はもう見ない。役に立たないどころか、一つの失敗で全てを無意味にしかけ

た存在など認識する価値もないと、まるで道端の塵のように蔑み見捨てる。

恐れ戦く他の航海士達が何度も頷く様を横目に、シキは先程届けられた声——その中に混じっていた若い娘の声を思い出す。

「それにしても……こいつらの予想を上回るセンスの持ち主か……」

幼く聞こえる割に、確かな経験に富んだ落ち着いた口調。

己の窮地を救ったその声に、シキはにやりと不気味な笑みを浮かべた。

## 第肆話 “伝説の海賊”

エース達は、突然の事態に酷く困惑した。

自分達の目の前に、初めて見る顔の客人が文字通り降りて来たからだ。

獅子のような髪を揺らし、和服を纏った巨体をふわふわと浮かばせて、その男は甲板に降り立つ。

キン、という音がして、よく見ると両足が剣になっている。結構な業物に見える二振りの刃だ。ますます異様な姿である。

「——さつきは助かったぜ。礼を言わせてくれ」

「……………空からおっさんが降りてきた」

葉巻を咥え、不敵な笑みを浮かべたその男・シキを前にし、エース達は返す言葉がない。初対面から衝撃の大きすぎる邂逅だ、用心するに越した事はない。

「その頭に刺さった舵輪……!! “金獅子”のシキ……!!」

「ほオ……………よく知ってるな。そうだ、おれがシキだ」

シキをまじまじと凝視していたエレノアが、該当する顔と名を瞬時に思い浮かべ、思わず息を呑む。

彼女の呟きとシキの肯定の言葉に、デューズを始めとした仲間達がざわざわとどよめき出す。

「おいおいおい……!!? “金獅子” っていやア、“海賊王” ゴールド・ロジャーと何度もやりあつたつていう……!!!」

「伝説の海賊じゃねエか!!!」

「……20年も前にマリルフォードに単独で突つ込んでいつて、その後取つ捕まつてインペルダウンに連行されたと聞いたが……!!!」

「ジハハハハ……!!? あんなもん屁でもねエキ、かるく脱獄してきてやつたよ」

海賊を名乗つていて、知らぬ者はまずいないな大きな名が飛び出してきて、場はさらなる緊張と困惑に包まれた。

それをシキ本人はどうでもいい世間話のように笑い飛ばし、エース達に向き直つた。

「改めてお前さん方にや礼を言つておこう………おれの船は天候の影響をもろに受けるもんでな、助かつたぜ」

「礼ならエレノア嬢に言つてくれ!!? おれ達やこいつの言う通りやつただけだから

よ」

「まじで“天族”の力はありがてエよな」

「天族……!!!」



大物からの礼の言葉に委縮しつつ、キメルとガンリユウが肩を竦めてそう返す。

指し示されたエレノアを見つめ、シキは微かに息を呑む。

その視線の強さにやや強張った表情を浮かべ、エレノアは小さく会釈を返す。

「ジハハハ……なるほど、お前さんエレノアか。随分昔に顔を合わせた事があるだろう。覚えてないか？」

「……………ぼんやりとは、話した事はないと思うけど」

「おれはお前さんをよく覚えてるぜ。お袋さんに抱っこされてる姿を見た」

親し気に話しかけてくるシキに、エレノアは尚も警戒を崩さない。自由の利かない身体のまま、距離を保とうとする。

そんな彼女の態度に気付かず、エースが困惑の表情のまま話しかける。

「あんた……あの船はどうなってるんだ？ なぜ宙に浮く？」

「んん……………？ あア、あれか。あれはおれの“フワフワの実”の能力だ。触れたものを重力に関係なく自在にコントロールできるんだ。そうだな……………」

問われ、律儀に答えたシキは辺りを見渡し、甲板に置かれた空樽を見つけると、近付いて表面にそつと触れる。

そして一步離れ、くいつと指先を動かす仕草を見せると、空樽はまるで羽のように軽々と浮かび、シキの操作で自由に宙を舞った。

「おおつ!!?」「こりやすげエ!!?」

「あんた! おれもフワフワできねエか!!?」

「残念……………おれ以外の人間や動物……………生きてるものは浮かせられねエんだ」

「何だ、そうか……」

驚きの光景に、一味は目を輝かせながら感嘆の声を上げる。

数人が期待に目を輝かせて請うが、本人から拒まれてがつくりと落胆する。子供のよ  
うな反応に、エレノアは思わず呆れた目を向けた。

それでも、若き海賊達は「白ひげ」と同じ時代を生きた伝説の男に興味津々で、本人  
の許しを良い事に質問攻めにしていた。

「一つ聞きてエんだが、あんたのその頭の舵輪はなんなんだ?」

「これはその昔……………うっかり刺さったもんだ」

「どんなうっかり屋さんだ!!」

「とにかくおれア、サイクロンの発生を教えてくれた礼がしてエ。どうだ? おれが支  
配している島に来ねエか?」

いい加減話が進まないと判断したのか、わらわらと寄ってくる青年達を遮るようにシ  
キが誘いの言葉を吐く。またも驚きの声上がる。

「そりゃあ……………ありがてエ話だが」

「エースさん、これは渡りに船なんじゃないですか？」

思わぬ誘いに、宴が好きなエースが洩い顔になる。

エレノアの方を見やり、頷いていいものかと好奇心とは正反対の義務感が待ったをかける。

が、そこへ黙ったままでいたミハールが近づき、エースに耳打ちをしてくる。

「…昔に海賊王とやりあつた大海賊のところなら、しばらくエレノアさんを隠せますよ」  
「そうそう。大艦隊の首領だつた男に手を出そうなんてバカヤロウはそうそういねエでしよう？」

「……………そりや確かに、いい案かもな」

ミハールの案に、魚人のウォレスも同意を示し、エースに説く。

仲間達に唐突に降つて湧いた案を勧められ、段々とエースも魅力的に思えてきたのか、警戒を徐々に解き始める。

礼を受け取り、恩人を守るのなら、一石二鳥というものかもしれない。

「そんならお言葉に甘えさせてもら——」  
「いいえ、ご遠慮させていただきます」

しかし、エースがシキの誘いに乗ろうとしたその時、突如としてエレノアが前に出てバツサリと拒否してみせる。

思わず一味全員がぎよつと目を見開き、エレノアに振り向いて凝視した。

「ウおいエレノア!!」

「私達には急ぎの用があるので……そうでしょ？ エース」

咄嗟に抗議の声を上げかけるエースに、エレノアはじつと真剣な眼差しを向けて止める。例の東の海の異変の記事を持って。

凶星を突かれたエースはぐつと息を詰まらせ、エレノアから目を逸らした。

「だからおれア……ルフィの事は心配なんて」

「ウソ、顔に全部顔に書いてあるよ。今すぐにでも『東の海』に行つて無事を確かめた………何か異変が起こっているなら助けに行きたいって」

隠していたつもりだった本心を暴かれ、青年は眉間に皺を寄せて唸る。

傍から見ればバレバレであったが、言われた通りであったエースは何も言い返せない。思いとは裏腹に責任感に縛られ、動く事ができずにいた。

エレノアは苦笑し、エースの葛藤を真つ向から否定する。

「おれ達はもう『白ひげ』の傘下だ……だが、家族の危機に駆けつけないんじや、白ひげのおやつさんも怒るんじやねエか？」

「行きましよう、エースさん!!」

「我々は別に構いませんよ？ あなたの大事な弟さんがどんな方が、少し気になってい

ますし」

「……お前ら」

エレノアだけではない。仲間達全員が、*「白ひげ」*の新たな参加としてではなく、エース個人の意思を尊重させようとしてくる。

思わず唇をぐつと噛みしめ、がしがしと頭を搔く。

そうして切り替えてから、エースは改めてシキに向かい合った。

「…悪い、*「金獅子」*の旦那。招待はありがたエけど、今は乗れねエヤ」

「ジハハハハ!!? ますます気に入った!!! そうか……… *「東の海」*はお前達の故郷か。確かにあそこは最近様子がおかしかったからな、さぞかし心配だろう………」

頭を下げ、せつかくの誘いを断ると、シキは何やら思案顔で顎をさする。

名のある海賊の一人として、情報収集は当然欠かしていないらしい。件の記事の内容を把握し、何やら考え込む。

そしてやがて、ぼんつと掌に拳を当てて笑いかけた。

「……よし、わかった!!? おれの能力でお前達を船ごと飛ばして *「東の海」*まで連れて行ってやろう」

「!!? 本当か!!? ありがたエ……!!?」

「何だよエース、やっぱり行きかけたんじゃねエか!!!」

「う、うるせーよ!!?」

さらなる思わぬ返答に、咄嗟に心からの感謝の言葉が漏れるエース。

それを茶化され、思わず顔を赤らめ憎まれ口を叩きながら、内心では深々と安堵の息を吐いていた。

「…何もそこまで」

「ジハハハ!!! 受けた恩はきっちり返すのが仁義つてやつだろう!!?」

「……………流石に、ここまで言われて断るわけにもね」

まだ少し距離を取り、しかし今度は申し訳なきような色を表情に混ぜたエレノアが呟くと、シキは豪快に笑って返す。

父の言いそうな言葉を返され、流石のエレノアも口を挟めなくなった。

海を走るスパデイル号が、ふわりと船体を浮かばせる。

シキに触れられ、重力の制限から解放された船が飛沫を垂らして海上へ、空へと突き進み、大きく旋回しながら進行方向を変える。

その前を、島船が先導するように進んでいく。その光景は、やはり夢でも見ているようだ。

「すげエな……………フワフワの実」の力……………!!!」

「海面がもうあんなに……」

空を飛ぶ、という人類の夢ともいうべき現象を直に体験し、一味はもうどのよう  
に感動を語ればいいのかもわからない。足りない語彙力に、力不足を感じざるを得ない。

空はいつもより近く、海はより遠くの水平線が見え。

普段とは全く異なる不思議な乗り心地を心ゆくまで味わい、わーぎやーと喧しく騒ぎ  
堪能する。

そうしてしばらくの間、不思議な空中航行を楽しんでいると。

「な、何だありゃあ……!!?」

不意に、デューズがそれに気づき声を上げる。他の仲間達もそれを目撃し、あんどり  
と口を開けて目を奪われていく。

それは、空に浮かぶ幾つもの島々だ。

春夏秋冬、それぞれの季節が表れた島々が十六程、海諸共に宙に浮いている。

おそらくはこれが、シキの語った自身が支配している島々。

「白ひげ」も縄張りになっている島が幾つもあるが、迫力の規模が異なる凄まじい光景  
だった。

「これもみんな、あんたの力ですか?」

「ああ……元々は海に浮かんでいた島をおれが宙に浮かべた。一旦こうして浮かべたも

のは、遠く離れていてもそのまま浮かび続ける。おれが意識を失うなりして能力が途切れるまでな」

そう言つて、シキは——にやりと笑みを浮かべ、エレノアを見る。

その笑みは先程の好々爺じみたものとは異なる……邪悪で、己が欲望のままに突き動かされる、海賊そのものを表すような笑みだった。

「ここは『メルヴィユ』!!? 冒険好きのお前らにはうつつつけの場所だろう……」  
東の海”に行く前に、ちよつと遊んでくるがいい!!」

「え——」

空を進んでいたスパデイル号が、島々の上で突如静止する。全員が嫌な予感を抱き、一斉にシキに振り向く。

エレノアが困惑の声を漏らした直後、がつ!とシキの腕がエレノアを抱え、車椅子から引き剥がす。

そのまま荷物のように担がれ、拘束される天使の姿に、異変に気付いたエース達が同時に各々の得物を構えた。

「てめエ!!!」

エースが先陣を切り、エレノアを取り戻そうと飛び出す。

だがその瞬間、シキは「どっこいしょ!!」とスパデイル号に手を翳し——能力を解



除する。

スパデイル号は一瞬で元の状態に、すなわち重力に囚われ、凄まじい速度で落下を始めた。

「『妖術師』はもらった!!! ジハハハハハ!!!」

「てめエ!!? このクソジジイ!!!」

「エレノア~~~~~!!!」

船に続いて、島々に向かって落下を始める一味を見下ろし、エレノアを抱えたシキが厭らしく啜う。

エースは諦めず、全身から炎を放ちエレノアに向かって加速する。

だが、そこへ壁が——シキに操作されたスパデイル号が迫る。

「は!! ちょ……待っ!!! ぶっ!!!」

炎と言えど、物をすり抜けるわけではない。ましてや大事な船だ、燃やしてしまいかねない。

エースは甲板に大の字に叩きつけられ、そして他の者達も船体に激突し、ばらばらの方向に弾き飛ばされてしまった。

「エ——ス~~~~~!!!」

遠く、豆粒の様に消え去った仲間達の姿に、エレノアが悲痛な悲鳴を上げる。

藻掻き、拘束を逃れようと暴れるも、傷付き体力の落ちた体では身を振る程度の事しかできない。

虚しく響くその声を掻き消すように、シキの哄笑がどこまでも響き渡るのだった。

失態を思い出し、立ち尽くしていたエレノアは、どたどたと近づいてくる足音にはつと我に返る。

「シキ様!!?」 新しい進化のカタチが出現しました!!? ご覧下さい!!?」

振り返れば、何やら大きな鳥籠を担いだDr. インディゴが、シキの前にそれを置いた。

籠の中に入っていたのは、黄色い羽毛を全身に生やした、アヒルのような大きな水鳥。やはり見た事もない種類だ。

「え? ギター?」

「鳥だろどう見ても!!」

「ハイツ!!?」

持ち込まれた謎の生物を見たシキがボケを放ち、Dr. インディゴがツツコミを入れ、また全員で雑で強引な締めが行われる。

すると、鳥籠の中から水鳥が抜け出し、シキの頭に乗っかる。

そして——バリバリバリ!と眩い雷撃を放ち、二人と一匹を仲良く黒焦げにしてみました。

「こんちきしょうが!!!」

「うおっ?」

「これが進化か?」

「はい、電撃技に特化したタイプのようにして……………」

頭に血を昇らせたシキが、水鳥を引つ掴んで投げ飛ばす。

どかつ、と頭から倒れ込んだ水鳥は、咄嗟に駆け寄ったエレノアの後ろに回り、怯えた顔で身を縮こまらせる。

まるで隠れ切れていない水鳥を庇い、エレノアは胡乱気な目をシキ達に向ける。

「進化って……………どういう事?」

「んん…? あア、そうか、エンジェルちゃんは知らなかったな」

思わず問いかけると、シキはにやりと意味深に笑い、パンツと衣服を整えて向き直る。勿体ぶるような、腹立たしい態度にエレノアは顔を顰める。

「この島にはな、おれが来る前から独特な進化を遂げた動物が数多く棲みついていて。奴らはみな危険な能力を持っていたが、見かけとは裏腹に温厚なものがほとんどだった……………その特異な進化の原因は、この島の固有種であるとある植物によるものである事

を我々は突き止めた」

そうやって取り出したのは——試験管の中に入った一輪の花。

花弁と花芯の形が丁度IとQの形に見えるそれは、エレノアであっても見た事がないものだ。

「それがこれ——」 “IQ” と名付けたこの花だ。コイツを摂取すると、動物の脳………特に防衛本能を司る部分に作用し、環境に応じた進化を促す」

「IQ……」

「そしてこの島に住み着き20年……!! IQの研究と実験を積み重ね、おれ達は新たな薬を発明したのだ!!!」

もう片方の手で取り出され、掲げられる黄緑色の液体の入った小瓶と、試験管に入つた丸薬のようなもの。

見るからに毒々しいそれに、エレノアは嫌悪の眼差しを送る。話を聞かずとも碌でもないのは間違いない。

「その名も “SIQ”!!! この薬を動物に撃ち込むとより戦闘的な進化を遂げる!!?」

大量に投与すればさらに凶暴性を増す事もできる………この島には、メルヴィユ群島にはそうした最強最悪の動物達がうじゃうじゃいるのさ!!!」

「………何の為にそんな事を」

「いづれわかるさ……おれの仲間になればな」

不気味に嗤い、変わらず一方的な勧誘を続けるシキに、嫌悪感丸出しの視線を返す。聞けば聞くほど、目的が見えない。

最強最悪の生物を生み出して、逃げ場を失くした浮島に隔離して暴れさせ、殺し合わせ。

そうまでして何を望むのか、何一つ理解ができなかった。

## 第伍話 “突撃と奪還”

「私に手を出してどうなるか、わからないわけじゃないでしょう…… “白ひげ” 海賊団を敵に回す事になるよ」

「ジハハハハ……!!? それこそ面白エ……!!? 海賊なら、他人の宝物は欲しいと思うだろ………何より大事なものならなおさらだ!!!」

普通なら、“四皇”の一角の身内に手を出そうなどと誰も考えまい。だが、そこまでやるイカれた人間が今、目の前にいる。

かつて父と、そして“海賊王”と同じ時代を生きて来た伝説の男——これまでの常識を抱えたまま接しても、雰囲気にもまれるばかりだ、と内心の焦りを悟られないように気を振り絞る。

「お前は自分から、おれに懇願するようになる………弱肉強食って言葉を知ってるか？ 弱者は強者に逆らえねエ………服従して死ぬまで利用されるか、喰われるかなんだよ。そうなるようにできてるんだ、世の中は。ジハハハハハハ!!!」

愉しそうに嘲笑う、頭の螺子が外れた老人。

実に海賊らしく他人の物を欲しがり奪いたがり、それでいて傍若無人な王のように身

勝手な支配を望む、己が最も嫌う種の人間。

相對しているだけで、背筋の震えと冷や汗が止まらなくなっていた。

「ウホ、ウホホホ、ウホッ♡」

「え？ この女をおれにくれって？ 話外れすぎだよエロゴリラ!!!」

「!?」 驚いた、おばあちゃんかと思つた」

「どんだけゴリラ顔だよ、てめエの血統は!!!」

「ハイッ!!!」

再度、二人と一匹による唐突なコントが始まるが、それに反応する余裕すらない。ポーズをとられても、点数をつける気にもなれない。

だがそれでも、この男の求めに応じる気は元より微塵もなかった。

「何を言われたって、あんたのものなんかにはならないよ——お前に私を従える器などない、小童が」

「ジハハハ………本当に気が強エ、生意気な女だ……!!!」

氣迫を放ち、真正面から拒むと、獅子と呼ばれた男は愉しげに、しかしやや苛立ちを交えて呟く。

雰圍氣の変つた男の目に、ぞくりと嫌な氣配を感じ取つたエレノアは「しまった」と胸中で己の失態を悟るが、吐いた言葉はもう戻らない。

「どれだけ虚勢を張ろうが……!! 他人を従わせる方法なんてものア、いくらでもあるんだぜ? お嬢ちゃん……!! ——特に、女はな」

キン、と刃の足を踏み出し、一歩ずつ距離を詰めてくるシキ。

ゆつくりと伸ばされる手は、エレノアの纏う水着に向けられ、何をするつもりなのか一目瞭然だ。

考えうる限り最悪の事態に、エレノアの目に初めて脅えが生まれ、そして。

「うおらあア——!!!」

突然、温室の硝子壁がガシャーン!と碎ける。

吹雪の中、業火を身に纏って飛び込んだきた何か——炎の体を持つ青年が硝子片を撒き散らしながら、伝説の海賊の前に立ち塞がった。

「……!!? エース!!!」  
「てめエは……!!?」

予想だにしない再会、あまりにも望ましすぎるタイミングの介入に、エレノアはぱつと花が咲いたように笑みを浮かべ、反対にシキは忌々しげに顔を歪める。

正と負、二種の視線に挟まれながら、エースはぎろりと鋭くシキを睨みつけ、びしつ



と人差し指を……何故かスカーレットに突き付けて吠えた。

「やいてめエ!!! そのゴリラ野郎!!? いまさつき、エレノアをてめエのものにするとか言いやがったな!!! んな事…絶対に許すわけねエだろ!!!」

「アレ!!? そつちイ!!?」

先程の緊張感も忘れて叫ぶ。野獣からの求愛どころではない、割と洒落にならない窮地にいた筈なのだが。

……まあ、助けに来てくれたのだから細かい事は不問とするべきか。

「白ひげんとこのひよつこじゃねエか……どうやってここまで来た。下は猛獣がうじゃうじやいる上に、この島は空でも飛ばなきや来れねエハズだ」

「御察しの通り……飛んで来ただけだ。おれも能力者なんぞね」

シキの問いに、エースはボツと指先を炎に変えて不敵に笑う。

障害物さえなければ、飛んで後を追いかける程度の事など他愛も無い。最初の邂逅時のような失態はもう犯すものかと、皮肉げに鼻を鳴らす。

「うつとうしい若僧が……!! 人が女を口説いてる最中に割り込むんざ、ヤボにもほどがあるぞ」

「うるせエ!!! 大事な女が危ねエところを指くわえて見てろつてか!!! そんなフヌケたマネができるか!!!」

苛立つシキの視線からエレノアを遮るように、両拳を構え、仁王立ちしたエースの上半身から烈火が広がる。彼の感情をそのまま表すような、激しく濃い炎だ。

エースの堪忍袋の緒はとつくに引き千切られ、無意識のうちに重く強い圧を発してのけていた。

「てめエにこれ以上、好き勝手やらせるかよ!!!」

ビリビリッ……と、威圧を受けた温室の硝子壁が震え、無事だった箇所がさらに割れる。

吹き曝しになった大穴から吹雪が吹き荒れ、中にいる全員の髪と衣服を颯り、ぼたぼたとはためかせる。風に押され、エースの炎がより激しく踊った。

「ジハハハハ……!! おれに盾突く度胸は評価してやるがな……その無謀が通じると思ってたのか!!? このおれ、*“金獅子”*海賊団の縄張りだよオ!!!」

若く、まだまだ経験の浅い一海賊が真正面から立ち向かう様を見せ、シキは何処か愉しげに告げる。

圧倒的な実力差を見せて叩きのめす気か、搦め手で組み伏せ、再度仲間の女を奪われる様を見せつける気か。いずれにせよ、正々堂々などありえまい。

故に、エレノアはエースの背に隠されながら、にやりと悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「——いや、押し通らせて貰うよ……!!!」

「え？」

「三十六計逃げるに如かず!!」

不意に眩き、パンツと掌を打ち合わせたエレノアに、エースが咄嗟に目を丸くして振り向く。

その瞬間、エレノアはエースのズボンのベルトを引っ掴み、ぐいつと思いつき引っ張りながら……プールの水面に倒れ込む。

と、同時に片手で水面に触れ、プールの水の一部を分解——大量の霧に変え、辺り一帯を真っ白に染め上げさせた。

「ぶわア~~~~っ!!」

「何イいいいいイ~~~~!!」

突如視界を塞がれ、声を上げて惑うシキ達と、問答無用でプールの中に引きずり込まれ、驚愕と困惑の声を上げるエース。

直後に、どぼん、ざぼん、だぼん!と立て続けに水飛沫の音が鳴り、霧の中で藻掻くシキが怒鳴る。

「くそっ……あの小娘!!? プールの排水溝が外に繋がってるのに気付いてやがったのか!!」

「自然系能力者と共に水に飛び込むとは……!!」

能力者にとっての盲点。誰もが知る弱点である水中に態々逃げ込むという自殺行為に、咄嗟の反応が遅れた。

加えて、エレノアの両足が不自由なままで、行動可能な範囲が限定されているという認識が、それに拍車をかけていた。

「探せ!!! 島中のネットワークを駆使して、あの女を探し出せ!!!」

シキの号令で、王宮中の部下達が動き出す。

怒れる「金獅子」は歯を食い縛り、憎悪の炎を目に灯し、吹き荒れる霧と吹雪の城の中で佇むのだった。

「ガボババボバボベバボボ!!!」

水中を凄まじい勢いで引き摺られ、エースは泡を吹いて悶絶する。

いつの間にか傍にいた巨大な水鳥。その長い尾にしがみつき、プールの底の排水溝から奥へと連れ込まれること数十秒。

ようやく、二人と一羽はざばつと新鮮な空気の元へと飛び出した。

「ぶはっ!!! ハア……ハア……!!? ムチャしゃがるこのや——」

必死で息を吸い込み、眼を見開きながらエースはエレノアを睨む。

排水管はどうやら、島の真下に繋がっていたらしい。咄嗟の機転に感心しつつ、何の

相談もないまま無謀な脱出を試みた事を叱ろうとして。

どぼんつ！と。

シキ達のいた島のさらに下に位置していた湖に落下し、エースは再び沈黙する。

白目を剥く青年を抱きかかえ、エレノアは水上へ急ぐ。だが、そこへ近づくと幾つもの巨大な影があつた。

固い甲殻に覆われた王海百足キンゾウミムカデ、四本腕で待ち構えてくるタガメ・大海河童オオウミガツバ、不気味に水中を漂う大魚キョリイザ。

ぎよつと目を剥き、水面を目指すも、空にも巨大な影が——ジュラチヨウ古代鳥が飛行している事に気付き、すぐさま停止する。

空からは巨鳥、水中からは三体の巨獣。

逃場がない、絶体絶命の窮地——そこに、一羽の助っ人が立ちはだかる。

バリバリバリバリツ!!

黄色い水鳥が全身から発した電撃が、水中全域に広がって全ての敵を貫く。ついでに、上空から襲い掛かる古代鳥をも感電させ、あつという間に沈黙させた。

「クオ〜ッ!!」

ざばつ、と水上に飛び出し、ぶかぶかと浮いてきた巨獣達の上に止まって雄叫びを上げる水鳥——いや、エレキ雷撃鳥。

猛獣達による唐突なバトルロワイヤルは、ひとまず彼の勝利によって片付いたようだ。

「クオ？ クオ……クオ？」

そこでふと、雷撃鳥は自身と共にいた筈の人間達の姿が見えない事に気付き、辺りをきよろきよろと見渡す。

そしてやがて、彼の背後でぶか…と力なく浮かび上がった天使と、彼女に抱えられたままの青年の姿に気付く。

「クオ——ッ!!! クオクオクオ〜!!!」

雷撃鳥は大きく目を見開き、大急ぎで二人を引っ掴んで空を飛び、陸地を目指す。

砂浜の上に二人を並べて寝かせ、しかし全く意識を戻さない事に不安気に砂の上を行ったり来たりする。

特にエレノアの事を案じ、苦しげな表情で世怠悪彼女の顔を嘴でつつき、無事を確かめようとする。

「クオ……」

「……………ん、んん……」

「クオッ!! クオ〜!!!」

すると、突かれた刺激で意識を刺激されたのか、微かに呻き声が漏れる。

雷撃鳥はぱつと表情を明るくし、味を占めたのか先程よりも強く、連続でエレノアの顔をつつきまくった。

「痛いなコリアア!!!」

がぼつ、と勢い良く体を起こしたエレノアは、しつこさに思わず拳を繰り出し雷撃鳥を殴り飛ばす。

雷撃鳥は吹っ飛ばされるも、全く気にせず泣きながらエレノアに駆け寄ってくる……全身から電撃を漏らしながら。

「クオ~~~~~!!!」

「はい、そこで止まって」

「クオ!!!? …クオ〜」

冷たく命じられ、がっくりと残念そうに項垂れる雷撃鳥。

褒めて貰えなかった事を悲しんでいるのか、切なげに目を伏せる彼を見つめたエレノアは、やがてふつと微笑みを湛えて彼の羽毛を撫でてやった。

「……………助けてくれてありがと。よくあそこで合わせてくれたねエ……………」

「クオ……!! クオ~~~~!!!」

優しく撫でられ、すぐさま機嫌が回復した雷撃鳥はまた雄叫びを上げて辺りを跳ねまわる。まるで子供のようにだ。

くすくすと笑ってそれを眺めていたエレノアは、すぐにはつと我に返ると、隣に横たわる青年に縋りつく。

まだ意識が戻っていない。それどころか、息もしていない。

「…!! ちよつとエース!! エースってば…!!」

体を揺さぶり、呼びかけるも、エースは何の反応も返さない。

ひやりとエレノアの背筋に寒気が走るも、その不安を押し殺し、少し考えるような素振りを見せるとその場で大きく息を吸い込み。

「…はむ」

自身の唇を、エースのものに重ねて、吸い込んだ息を吹き込む。

青年の炎の体。自分よりも遥かに熱いはずなのに、むしろ自分の方が火照っているよ  
うな気がして、思考がやや乱れる。

気恥ずかしさを押し退け、何度かそれを……口づけ染みた行為を繰り返して、そして。

「ブふわア?!?! …ああ!!?!?! は?!?! ンだア!!?!」

「お、起きた起きた」

「ん?!?! あ、エレノア!!?!」

口から大量の水を吐き出し、意識を取り戻したエースが飛び起きる。

傍らに寄り添うエレノアに気付くと、ほつと安堵の息を吐くが、直後に険しい表情に



変わって咎める視線を向けた。

「このヤロ、なんつー無茶しやがるんだてめエは!!!」

「エースに言われたくないよ、単身敵の親玉の所に乗り込んでくるなんて……!!!」

「そりやおめエ……!! お前があのだジイに何されるか分かったもんじやねエから……!!!」

「そういう無茶は、十分な勝算と一緒にやるもんだよ!!」

お互いにお互いの迂闊さを叱り、怒鳴り合う。

だがやがて、エレノアがピタリと口を閉ざしたかと思うと、無言でエースの胸に額をぶつけ、身を寄せる。ほっ……と安堵の息遣いがある。その場に響いた。

「……だけど、ホントにありがとう……怖かった」

「……………エレノア……………お前……………」

普段の気の強さが薄れた、弱々しい声。表情は隠れて見えないが、自身に触れる手の震えに気付く、エースははっと息を呑む。

——この女でも、恐怖で怯える事があるのかと、そう気づかされて。

「……クオ〜」

と、その時。いつの間にか近くにあった見知らぬ水鳥の存在に初めて気づき、ぎよつと目を剥く。

巨大な鳥に見つめられ、困惑に冷や汗を垂らすこと数秒。

「…クオ♡」

「何だてめエその顔は!!! 何を理解したんだ!!! つーかそもそも誰だてめエは!!!」

意味深な顔で笑う雷撃鳥。まるでエースとエレノアの関係に気付き、「どうぞ自分に構わずごゆつくり」などと言っているようだ。

エースは目を吊り上げ、にやにやと鬱陶しい雷撃鳥に吠えかかる。

それに呆れた目を向けながら、エレノアは再度、安堵の溜息を吐いた。

「はア……やれやれ……とりあえずは第一関門突破かな………」

湖の縁、盛り上がった土の坂を上るエースと、背負われるエレノア。

元は小規模の火山だったのだろう、カルデラと呼ばれる地形をえつちらおつちらと登り、坂の向こう側を目指す。

「ごめんね、エース………手間かけさせちゃって」

「気にすんな。お前は軽いから………いや、心配になるぐらいに軽いから、もうちよい食った方がいいぞ——いで」

申し訳なさそうに目を伏せるエレノアの気分を晴らそうとしてか、半ば本気の冗談を口にしたエースが小突かれる。

そんな二人の後ろを、雷撃鳥がびよこびよこついてくる。

「……おい、こいつ、どうする？　なんか懐かれちまったみてエだが……」

「害はないと思うよ。あの調子じゃ行く所もなさそうだし、好きにさせてあげよう」  
一度シキから庇ったせいも、エレノアの後ろを子のように追ってくる彼。

咄嗟に脱出の助けをもらった事もあり、邪険にはできない。

そうして、二人と一羽で坂を登りきると、今度はなだらかな下り坂が広がる。

その先に、愛船が佇んでいる姿が見えた。

「……!!　ピース・オブ・スパデイル号……!!　よかった、ここにあつたのか……!!」

「……みんなの気配は感じない。私達が最初に見つけたみたいだね」

「そっか。じゃあ……どうすっか」

見たところ、破損は見当たらない。

海まで運ぶ方法に難儀しそうだが、そこは仲間達と合流してから考えればいい——

問題はそれまでどう身を隠すか、だ。

「追手が来るかもしれない……ジャングルの中を通ってしばらく身を隠そう。ごめん、

エース。もうちょっと背中貸して」

「おう。お前こそ、乗り心地は保障できねエんで勘弁してくれよ」

軽口を叩きつつ、エースは進路を密林の中へ変える。

もう二度と、背に負ったこの女を渡してなるものか——そう心に決めて。

## 第陸話 “搾取される村”

「エ——ス——!!! エ〜レ〜ノ〜ア〜お嬢〜!!!」

切り立った崖の上で、咆哮する青い髪とマスクの男・デュース。

周囲の警戒も忘れて仲間を探す彼に、近くの桜の大樹の陰に身を潜める魚人の男・ウオレスが目吊り上げて囁き叫ぶ。

「大声出さないでくださいって……：……ほら次が来ちまったでしょオガア!!!」

息を潜め、敵をやり過ぐすつもりだったのに、声につられた猛獣が寄って来て、慌て応戦する羽目になる。こんな攻防が、何度繰り返されたらだろうか。

「いるなら返事をしろ、お前らア〜!!!」

「だから大声出さないでって……!! あア、もういいですよ、もう」

「はア……おい、火イあるか？」

仲間の身を案じるデュースの暴走を止められそうになく、肩を落とすウオレス。ドギヤが慰めるように肩を叩き、一緒に項垂れる。

それを横目に見ていた剣士コーネリアが煙草を啜えて催促していると、ババババ!と大きな羽音を響かせ、黒い甲虫・カエンカブト火炎兜が火炎と共に飛来してくる。

「こんなデケエ火はいらねエ〜!!!」

「ぎゃああああ……!!!」

熱波に囲まれ、逃げ惑うウオレスとドギヤ、コーネリア。

だが、すぐさま連携し反撃に転じた事で、火炎兜も地に伏せさせる。が、激しい戦闘はさらなる敵の襲撃を招くだけであつた。

「ス——カ——ル——!!!」

「絶対無駄な体力使つてんだろこれ!!!」

「いいから走れ走れエ!!!」

次に襲い掛かつてきた、カラフルな巨大鶏シマトリ島鶏。比較的すぐに無力化されたそれは、

調理すれば百人分は賄えようという大きさだつたが、島の生物が総じて似たような大きさであるため最早驚愕などしなかつた。

「オ〜〜バ〜〜ちや〜〜ん!!!」

「「お前はもう黙れエエエ!!!」」

間髪入れず追つてくる大芋虫オオイモトシから必死に逃げつつ、咄嗟に桜の大樹から垂れ下がった

蔓に飛び移る。

ギリギリのところ、大芋虫はデューズ達を捕らえ損ない、崖から真つ逆さまに落ちていく。蝶にでもなれない限り、助かるまい。

「……ふう、助かったぜ」

「……!!? 上、上エ〜!!!」

一難去つて、ほつと額に浮かんだ汗を拭っていると、ドギヤが目を跳び出させながら頭上を指差す。

つられて他の三人が見上げてみれば、ぎろりと睨みつけてくる鋭く長い二本牙を持つた剣齒虎トラマタと目が合う。

よく見れば自分達が掴まっている蔓のうちの一本は、剣齒虎の髭であつた事に今更ながら気づく。

「……あ、ごめんなさい」

「ガルルルルル!!!」

咄嗟に謝罪の言葉が漏れるが、それで許してくれる相手ではない。

ぐわつと振り上げられる鉤爪付きの巨腕を前にし、慌てて蔓を伝つて攻撃を逃れる。尻を爪が掠り、誰かが情けない悲鳴を上げる。

そんな中、一足先にウオレスが蔓を登り、大樹の頂上に立つと、枝から陸地に移つた剣齒虎の脳天に向かつて思い切り飛び降りる。

「魚人空手〃火華力カト落とし〃!!!」

故郷の武術の猿真似を、渾身の力で叩き込む。

地上でも十分な威力を發揮する魚人の一撃を受け、脳を揺さぶられた劍齒虎は白目を剥き、地面に亀裂を走らせながら倒れ込んだ。

「…よし!!!」

「いや『おれの考え通り!』みたいな顔やめろ!!!」

未だぶらぶらと蔓にぶら下がったままのデューズにドギヤがツツコミを入れ、コーネリアがやれやれと肩を竦める。

とにかくこれでやつと一息……と思っていたその時。

どきゅん!と銃声のような破裂音が響き、地面に突然、丸い大穴が開いた。

「今度は何だア!!!」

いきなり狙撃か、と辺りを見渡すと、見つかったのは人ではなく、大型犬ほどの大きさの牛だった。

赤い毛皮に固そうな頭部を持つ鉄砲牛カウボールが、群れを成してデューズ達に突撃——自らを砲弾にして凄まじい速度で突っ込んできた。

「う、牛!!!」

「何だそりやア〜〜!!!」

どきゅん!どきゅん!と立て続けに撃ち込まれる突進。

デューズ達は穴だらけになる地面の上を右往左往し、たがいにぶつからないようにし

ながら、どうにか致命傷を避け続ける。

「もういい加減にしてくれエ!!!」

「フザケすぎだろ、この島の生物はどいつもこいつも!!!」

ぶつくさばやくが、それで襲撃が止むわけではない。

そうこうしているうちに、猛攻を代わりに受け続けた地面の亀裂がバキバキと広がり

……そしてついにばらばらに砕ける。

「!!!」のわああああああああアアアア……!!!」

四人の男達は、無数の瓦礫に混じって空中へと落下を始める。悲鳴が虚しく響き、虚空に消え、遙か下の地面に遠ざかっていく。

そして——どぼん!

と四人は真下に広がる湖に落下し、ぶくぶくと沈む。そのまま溺死するところで、ウオレスが他の三人を抱えて水上へと引き上げる。

「ぶはア!!! ……ハア…ハア……!! ……あ?」

息を切らせ、三人を担いで陸地に上がったウオレスは、ふと視線を感じて顔を上げる。

そこには人が、集落があつた。

老いた住人達が啞然とした様子で、落ちてきたウオレス達を見つめている。

「…あ。どうも、お邪魔してます」



気まずさを誤魔化すように、ウォレスは厳つい顔を緩ませ、へらつと遜るような態度で会釈を返した。

……微かに上がった悲鳴に、繊細な彼の心は大いに傷つけられる事となる。

びゅうびゅうと吹き荒ぶ吹雪、肌に突き刺さる寒さ。

暗く厚い雲に覆われた空の下を、その少女はたった一人で歩いていった。

明らかに冬空の下に合わない薄着で、その手に一輪の花を握り締め、覚束ない足取りで雪の中を進む。その姿はあまりにも痛々しい。

その時、ごう！と一際強い風が襲い掛かる。

思わず顔を顰めさせ、立ち止まった少女の目の前で——二体の巨獣が纏れ合つてくる。

「キシヤアアアアアアアア……!!!」

「ガルルルル……!!!」

長く太い体に幾つもの小さな足を生やした蛇足ダツクと、強靱な角を生やした越冬竜エツトウザウルスの激突。

ほとんど一方的な戦いが繰り広げられる前で……少女は白目を剥き、どさつと仰向けに倒れ込む。

蛇足を噛み殺した越冬竜は物音に気付き、新たな獲物として少女を狙い、大きく口を開ける。

が、次の瞬間。

ダアン！と銃声が響き、越冬竜がゆっくりと横たわり動かなくなる。

沈黙した猛獣を横目に、双剣使いセイバーが降り立ち、少女の具合を確かめた。単に気絶しているだけのようだ、問題ない。

「グルルルル………ニヤーン」

「よし、お前はそのままその子を温めておけ。おい、マンモス!!? 鼻、貸してくれ」  
雪の中に横たわる少女のもとに、急ぎコタツが駆け寄り我が身で包む。

そこにのしりと。六本脚の巨像・マンモスデンスが近づき、セイバーに命じられた通り少女とコタツを鼻で拾い上げ、背中に乗せる。

二人と一匹を乗せたマンモスデンスは、ゆっくりと雪の中を進み出す。

優しい揺れの中で、少女はやがて意識を取り戻し、はっと我に返って辺りを見渡した。  
「もう気絶しないでくださいよ」

「!!? あ………ごめんなさい」

コタツに包まれる少女に向けて、どこからともなくミハールが穏やかに話しかける。  
……本当にどこにいるのだろうか、マンモスデンスの毛皮くらいしか見えない場所はな

いのに。

「お嬢さん…あなた、こんなところで何をしていたのですか？ 危うくこの冬山を出る前に私たちが見つつけられたから良かったものの……下手をすればあの怪物達にやられる前に凍え死んでいたかもしれませんよ？」

いつも通り引き籠もる場所を見つけたらしいミハールに問われ、少女は困り顔で俯いでしまう。

姿の見えない初対面の男にそんな風に尋ねられたところで堪えられるものか、とセイバーは思ったが、追及するのも面倒なので何も言わなかった。

「まあ、いいでしょう。あなたの家はどこですか？ ついでに送っていきましょう」

「…いいの？」

「こんなところに女の子一人を置いて去るなんて、男が廃るだろう」

「ニヤーン」

恐る恐るといった風に尋ね返す少女に、男達はふつと不敵に笑う。

少女は見ず知らずの男達に助けられて困惑するも、悪人ではないと察したのか遠慮がちに頷く。ほつ、と息を吐き、コタツの毛皮に身を委ねた。

「吹雪で道を見失った時はどうなるかと思いましたが……落ち着いて来てよかった。思いのほか狭いですね、この島は」

「冬ゾーンは半日もあれば抜けられるから……」

「ほウ…詳しいな。さては何回も同じ事してやがるな？ まったくガキが危ねエ事しやがって…」

少女の呟きに、セイバーがコタツの体越しに少女の頭を搔き回す。

何が目的だったのかは知らないが、遊びやおふざけでこんな危険な場所に来るわけがない。相当な訳ありだと、少女の無謀を諫めつつ勇気を湛える。

「助けてくれてありがとう!! わたし、シヤオ!!」

「ミハールと言います。仲間には先生と呼ばれています」

「…セイバーだ。んで、こいつはコタツ」

「グルルル………にやーん」

「…顔に比べて声カワイイ…!!」

いまだ姿を見せないミハール、ぶつきらぼうながら気遣いのあるセイバー、厳ついわりに愛嬌のあるコタツ。

不思議な組み合わせの三人に出会い、少女シヤオは少しだけ笑みを取り戻した。

濡れた体に風が当たり、寒さに思わずくしゃみが飛び出る。

その勢いで起き上がったデューズは、そこが小舟の中で、仲間達と共に寝かされてい

るのだと気付いて困惑の声を漏らす。

辺りを見渡せば、小さく簡素な家々がいくつか建っているのが見え、住民達が遠巻きに見つめてきている様が見えた。

「こんなところに人が住んでいたのか……」

茫然と呟いていると、ドギヤとコーネリアが呻き声を上げて体を起こす。

二人ともデユースと同じように辺りを訝しげに見渡し、寂しく、それでいて妙に静かな村に戸惑いの表情を浮かべる。

「気が付いたか」

「……………何だ、この村は」

「わからねエ」

村の存在そのものが、違和感の塊だ。

猛獣だらけの島にある、小さな村。

見たところ老婆や子供しか見当たらず、その上みんな痩せている。戦って村を守っているようには見えないが、猛獣達に荒らされている雰囲気も感じない。

一体、どうやってこんな劣悪な環境で生き延びられているのだろうか。

「……………気付いたか、おめエら」

「? ……ああ、確かに変わってんな……………」

コーネリアの眩きで別の箇所にも違和感を抱き、そしてその答えに辿り着く。

羽だ。住民達全員の腕に、鳥の羽根らしきものが生えているのだ。明らかに飛べそうにはないが、それでも十分不思議な見た目となっている。

が、コーネリアが言いたいのはそこではなかったようだ。

「この村……………若エ娘がいねエ」

「そこじゃねーだろ!!!」

ぐわっ、とずれた事を言う仲間を目を剥いて突っ込む。

すると、近くの家から中年の女性が顔を出し、デユース達の方へと近づいてくる。傍らにはウオレスが付き、一緒に湯気の立つカップを持ってきてくれる。

「目エ覚めたかい？ 驚いたよ……………空から降ってくるんだから。よく助かったもんだ」

「…あんたが助けてくれたのか？」

「そこに寝かせただけだよ。拾ったのはこの人さ。どこからどう流れ着いたか知らないけど、これ飲んだらとっとと出て行った方が身の為だよ」

「はい。わざわざおれ達に分けてくれたんです。飲みましょう」

中年女性に渡されたカップを手に、デユース達はぺこりと頭を下げる。

見るからに怪しい自分達にこうもよくしてくれるとは、恐ろしくお人好しな女性だ。

とにかく、有難く体を温めさせてもらおう事にする。

「悪いな……助かったぜ、姐さん」

「いやだよ、姐さんだなんて……でも悪い子達じゃなさそうだね」

歳をとつて、女性扱いされる事にむず痒さを覚えるのか、ドギヤに苦笑を返す中年女性。だがそのやり取りのお陰で、少し警戒を薄めさせてくれてようだ。

カップの中の薄いスープを啜りつつ、デューズ達は改めて村を、人を見やる。

「その腕の羽根は……？」

「これかい？ 何だろうね……ここ人間にはなぜか皆にあるんだよ」

「貧しそうな村だな。やたらと細い人間が多い……食い物が足りてねエようだが」

「ああ、男手も若い娘達もみんな王宮に召し上げられちまつてるからね」

なるべく気を使いながら尋ねてみると、中年女性は険しい表情で俯きながら答える。

事情を聞かずとも、相当苦労しているのはわかる。こんな危険な島に——あの男に支配された島に住んでいる時点で、真面目な暮らしをしているわけがあるまい。

「働き手がなくて、やっとこさその日暮らしをしているのさ。ここで取れるのは湖の小魚と申し訳程度の作物だけだし……」

「何だそりゃ、酷エ話だな。文句言つてみんなを返して貰えばいいじゃねエか」

恩人の表情を曇らせる存在に、咄嗟に悪態が口から漏れる。

すると中年女性は途端に慌てだし、必死の形相で首を左右に振る。冷や汗を垂らし、デュー스에懇願するような目を向ける。

「無茶言わないでくれ……!!! シキに逆らったら私らおしまいだよ!!!」

「シキだと……?!?!」

「あの金髪クソジジイか?!?!」

まさか、とデュース達は目を見合わせる。

空中で逃げ場のない、そして普通の方法では入ってくる事も叶わない島だ。

元々この島にいたのか、あるいは連れて来られたのか。

どちらにせよあの恩知らずで悪逆非道な男の事だ、碌な扱いをしていないのは間違いない。酷く納得し、自然と拳に力が籠る。

「そうさ……わたしらはあいつに徹底的に支配されているんだ、それに……」

沈痛な顔で項垂れていた中年女性が、急にハッと目を見開く。

と思つた直後、いきなり女性が飛び掛かつて来て、デュース達を小舟の中に押し倒す——いや、あるものから隠す。

何事か、と顔を隠しつつ目を向ければ……村の中をもそもそと動く、大きな電伝虫に気付く。

「何だありや……でけエ電伝虫が」



「あれは『自走式映像電伝虫』だよ。映像を中継できる大出力のやつさ……あの電伝虫がとらえた映像は、そのままシキの王宮に送られている」

恐怖で我が身を震わせながら、中年女性がデューズ達を庇って語る。

引き攣つた表情は、シキに対する怯えを表している。実際にどんな目に遭わされたのか、聞く事も躊躇われるほど女性の顔色は悪い。彼女の方こそ、暖を取らせ休ませた方がよさそうだ。

「もしシキに楯突くような動きがあれば、王宮での労働に酷使されている男達も、酒場で海賊達の世話をさせられている男達も、みんな見せしめに殺されちゃうんだ……?」

「シキの野郎……!!! 何つーやつだ!!!」

「……早いところエース達と合流しなきゃやべエな」

度し難い悪魔の所業に、義憤に駆られるデューズ達。

だが……今の彼らにできる事は何もない。戦力も面子も、今の状態では何もかもが足りていない。

とにかく一刻も早く、船長と仲間達、そして何より攫われた天使の居所を掴まねば——四人全員が、強くそう思った。

## 第漆話 “雨隠の蜜事”

ずし、ずし、と地響きを鳴らし、温かな山中を進んでいた巨象。

しかし突如、目を見開いた彼は顔中から脂汗を噴き出させ、元来た道を逆走し始めた。

「おわーっ!!?」

「むっ!!」

「ニヤーン!!?」

マンモステンスが走り出し、背に乗っていたセイバー達が振り落とされ地面に落ちる。ミハールも同じく、毛皮の中から乱暴に放り出された。

「くっ……何なんだあのマンモス……!!? いきなり振り落としやがって……」

「グルルルル……」

「ん? どうした?」

背中を強かに打ち付け、悪態をつくセイバー。

ふとそこで、隣に落ちたコタツが痛み以外の理由でのた打ち回っている事に気付き、訝しむ。

そこに、ミハールに抱えられて事なきを得たシャオが説明を挟んだ。

「ダフトグリーンだよ」

「だふとぐりーん……?」

「わたしたちの村はダフトグリーンという樹に囲まれてるんだ。それが動物達から村を守ってるの。動物達はみんなこの臭いが嫌いだから」

「そうか……それでコタツも」

「ニヤーン……」

端を押さえ、辛そうに悶えるコタツ。本気で辛そうで、厳つい顔がより一層凶悪になっっている。

応急処置としてコタツの鼻に栓をし、三人と一匹はシャオの案内で先を進む。

すると道の途中に植えられた、背丈が短く幹が異様に膨らんだ奇妙な植物が見つかった。

「これですか……」

「確かにこりやちよいと臭エな……だがそこまで拒否反応を示すほどじゃねエだろ?」

嫌そうに身を引くコタツを横目に、ダフトグリーンなる植物を観察するセイバーとミ

ハール。

「あまり吸い込まない方がいいよ、毒だから」

「早く言えよ!!!」

遅すぎるシャオの説明に、全員から鋭いツツコミが飛んだ。

ぱんつ、と乾いた音が鳴り、セイバーが思わずうつと呻く。

男達の見ると先では、自宅に戻ったシャオが母親らしき女性に頬を叩かれ、涙を浮かべて身を震わせる姿があった。

「あれほどダフトグリーンの外には出ちゃいけないって…!!? どうして言う事が聞けないんだい!!?」

「だって……どうしてもおばあちゃんを助けたかったから……!!!」

相当に心配していたのだろう、母親の目にも涙が浮かんでいる。

しかし、シャオが俯きながら見せた手の中の花を見て、母親ははつと息を呑み、痛ましそうに目を逸らす。

そこに、後ろのベッドに横たわっていた老婆が掠れた声をこぼす。

「シャオ……私の為に危険なマネはしないでくれ……」

「だって…!!? そのままじゃおばあちゃんが……!!!」

ぶわっ、とシャオの目から涙があふれ、止まらなくなる。それを見た母親も声を押し殺し、娘をきつく抱き締める。

命がけで祖母を救おうとした娘を、それ以上咎められなかった。

切ない親子の姿に、所在なさげに立ち尽くしていたミハール達。

気付いたシャオの母親が申し訳なさそうに頭を下げた。

「あんた達、娘の命を救ってくれて本当にありがとう。何かお礼をしたいけど……」

「いやア、たまたま通りがかっただけだしよ」

「ここで見殺しにしてしまったら、それこそうちの頭にどやされてしまいますよ」

「ニヤーン」

面と向かつて礼を言われる事などあまりない二人と一匹は、いやいやいや、と首を横に振る。

それはそうとして、とミハールが表情を変え、シャオの祖母……その顔に浮かぶ緑色の斑点に目を細めた。

「……あの病気は、何ですか」

「ダフト」という病気でね。緑色のところが硬直していつて動かなくなるのさ」

聞けば、ダフトグリーンが放つ粒子を吸い込んだり、少量ずつでも長い間吸い続けると、症状が出てくる病らしい。

弱った老婆の姿を見て、セイバーは眉間に皺を寄せて唸る。

「……………皮肉な話だな……身を守る為に植えた毒で、病にかかっちゃうなんてよ」

「唯一治せる薬はIQっていう植物から作られるんだけど……一輪だけじゃね」  
「グルルル……」

項垂れるシャオや母親の姿に、コタツもいたたまれなさそうに髭を垂らして落ち込む。どうしようもない程重い空気が、シャオの家に漂っていた。

「ごめんなさい……」

「お前が悪いんじゃないよ。悪いのはIQを独り占めしちまったシキのやつさ」  
びくり、とミハール達の頬が痙攣する。

自分達が今、彷徨っている原因の名が出て来て怒りが溢れそうになったが、病人と子供の手前、そつと我慢し黙り込む。互いの脇腹を抓って。

「二十年前まではね……この島では人と植物、動物達が上手く共存していたんだ。それをあいつが……シキが全て壊してしまった……!!」

「早く行っちゃえばいいのに、あいつら……『計略の海』へ」

顔を追い、嘆きをら羽にする母親と共に、シャオも乱暴な口調で吐き捨てる。

あまりにも悲痛な親子の、虐げられた村人の姿に、所詮は余所者でしかない男達は何も言えず立ち尽くすばかりだった。

—— シャオの眩きを、深く捉える事はなく。

「なア、あのバアさんの病氣治せねエのか？」

「見た事のない症例ですからね……下手に手を出せば、もつと酷くなる可能性もあります」

シヤオの家を後にし、ミハールとセイバーは険しい表情で村の中を歩いていった。

外の空気を吸えば、何か思いつくかも。そんな浅はかな考えを抱きつつ、ぶらぶらと流離つてみるも、当然何も浮かんで来はしない。

「まア、この村にいればとりあえずあの動物共に襲われずには済むわけか。久しぶりにのんびりさせてもらおうぜ」

「グルルルル……ニヤーン」

「お前ももう少し我慢してろよ」

鼻栓をしたまま辛そうにしているコタツに一声かけてから、二人は適当な段差に腰かけ、深いため息をこぼした。

「しかし……あの姐さんは、シキの王宮は一番上の島にあるつつつてたが……どうやって行きやいいんだ？」

「さアなア……」

坂路に敷かれた階段を登りながら、デューズが呟く。

見上げてみると、幾つも見える島々。下の島なら、飛び降りるだけで事足りるが、登るとなると方法が見当たらない。

シキやエレノアのように飛べればいいが、生憎一味には人間と魚人しかいない。

「エレノアもきつとそこだろうし……どうにかしていく方法があればな……」

「……どうしたもんかねエ……」

男四人で考えてみても、巧い考えは中々浮かばずにいた。

「あ……疲れた。少し休もうぜ」

へ口へ口の足で、ようやく見つけた人里に降りてきたガンリユウ、アギー68、レオネロ、キメル。

最早一歩も動けないと、手頃な場所にあつた段差に腰かけ天を仰ぐ。

「ここのところずつと戦いつばなしだったからな……もう一度探しに行くのは、しばらく休憩してからにしようぜ」

「賛成……」

「異議なしだ」

逃げ回つて吹つ飛ばされて、散々迷つた拳句に迫り着いた人のいる場所。

もうしばらく動きたくないと、どかつと腰を下ろして久方ぶりに寛ぐ。



そして次の瞬間、いつの間にか一箇所が集まっていた十人と一匹の男達は、ぎよつと目を見開いて互いを凝視したのだった。

「「「「……………あア?」」」」

「くそつ……!! ついてねエな……………こんな土砂降りに捕まっちゃうとは」

「クオー……」

暗く冷たい、密林の途中に開いていた洞窟の中。

突如降り注いだ豪雨から逃れる為、大急ぎで中に入ったはいいが、降り止まない雨に閉じ込められる結果となり、エースは舌打ちをこぼす。

自分はいいい、寒さなど感じない。

だがエレノアは放置してはまずい。失われた彼女の脚は、今でも強い幻肢痛に苛まれているのだ。濡れると、それが酷くなる。

「……………悪い、エレノア。まだこつから出られそうにねエ…足痛むのに無理させちまったな」

「うん……………平気だよ。我慢できないほどじゃないから」

苦笑を浮かべ、顔を歪めるエースに手を振って応えるエレノア。

だが、それが空元気である事はしつかりとエースに伝わっていた。雷撃鳥も心配そうに見つめている。

家族を心配させないために強がるのがこの女なのだ。短くも濃厚な航海の中で、エースはその事実を何度も痛感していた。

「私の方こそ……ごめんね。こんな足手まといを連れて逃げ回る羽目になって………迷惑だよな」

「い……!!? いや、そんなことはねエツて!!! 嘘じゃねエぞ!!?」

「そっか……ならいいや………ありがとうね」

だが、流石にこうも不幸が続き、気が滅入っているらしい。初めて聞く弱音、というか消極的な呟きが聞こえ、慌ててエースが慰める。

それでもエレノアの落ち込んだ表情は晴れず、エースは必死に話題を探した。

「……あー、お前その、背負ってるあいだずっと気になってたんだが………もう少し食った方が良さぞ。軽すぎる………いで」

「余計なお世話だよ」

軽口混じりにそう言うのと、エレノアが横からごりつと頬に拳を押し付けてくる。

ともかくその発言のお陰で、若干の怒りとはいえエレノアの表情が変わり、エースは内心でほっと安堵の息を吐く。

「これでもマルコやサツチに言われてちゃんと食べてる方で……つくちー」

「!!? 体冷やしちやいけねエ。濡れた服を脱げばマシに……!!」

小さくくしゃみをこぼし、濡れたままではまずいとエレノアの方を向く。

が、雨水の滴るエレノアの姿を視界に捉えた瞬間、エースはびしっと身体を硬直させ、そのままぎこちなく目を逸らした。

「い……いや、何でもねエ」

「あ……」

エレノアはそこで、自分の格好が、濡れて中々際どくなっている事に気付く。

服はスパデイル号の中にあり、途中で着替えられたものの、雨で肌が透けてほとんど意味がなくなっている。

無性に気恥ずかしくなってきたエレノアは、自分の体を抱きながらエースの方に身を寄せた。

「……エース…隣にくっついていい……? エース “火” だから……あつたかそうだ

し……」

「……お、おう」

「じゃあ失礼して……」

「……ふっ、何顔赤くしてんのさ」

「何でもねエよ。引火したくなきやじつとしてろ」

「はいはい……」

口数が少なくなったエースに、エレノアは抑揄いながら自身も頬を桜色に染める。

エースはそんなエレノアの腰に手を回し、温めながら、巧く思考が纏まらない自分自身に苛立ちを覚えていた。

——くそっ…!!

何やってんだ俺は……何に焦ってる？

思春期のガキみてエなザマ、晒しやがって……何考えてんだ、おれア。

心が落ち着かない。

女の扱いとはどうするべきなのか。そういう経験、というか欲を持った記憶がない為にどうすればいいのかわからない。

こんな風になったのは初めてだ……相手がエレノアだからだろうか、全くわからない。

初めての感覚にエースが戸惑っていると、また再びじつと見つめてくる雷撃鳥の姿が目映り。

にやつ、と厭らしい笑みを浮かべて親指(?)を立てられた。

「……グア♡」

「だから何を理解したんだてめエ!!! 何だその指!!!? どういう意味だこの野郎!!! おいちよつと待てエ!!! どこへ行く!! 何『自分、空気読みますね』感出してんだてめエは!!!」

目を吊り上げて怒鳴りつけるも雷撃鳥は毛ほども気にせず、そのまま洞窟をいそいそと出て行ってしまふ。下世話な態度にエースは怒るも、振り上げた拳の行き場がない。

「…氣イ、使つてくれたのかな」

「氣を使つたつていうか変な邪推をしただけにしか思えないんだが□ 何なんだあの鳥野郎は……」

くすくすと笑うエレノアとは真逆に、エースは唸るように溜息を吐く。

後で痛い目を見せてやる……そう心に決めたその時。

肩に寄りかかっていたエレノアが、不意にエースの膝の上に乗る、真正面から首に手を回し抱き着いてきた。

「!? お、おい……!!!」

「エース………しばらく、こうさせて」

突然の事態に慌てふためき、止めようとするエース。

いきなりどうした事か、唐突過ぎて、どんな顔をすればいいのかまるでわからなくなる。

「…早いね、鼓動。意識…してくれてるんだ」

「あ…あたり前だろ…!! お前…いきなり、こんな…!!」

エースは細心の注意を払い、エレノアの背に手を回し抱き締め返す。気を抜くと、そういう気分には陥ってうつかり燃やしてしまいそうだ。

「…お前、おれの事人畜無害な紳士だとか思っちゃいねえだろうな…!! 状況が状況だから耐えてるだけで…そういう欲もある普通の男だぞ…!!?」

「…こういう状況だから、こうしてんのさ…!!」

悪い気の迷いだ、と引き離すべきかエースが本気で悩み出した時、聞こえた呟きに目を見開く。

震えている、怯えている。

卑劣な男に真正面から立ち向かった女が、只の少女のように恐怖で縮こまっている。

「私だつてねえ…女なんだよ。怖い時や怖いさ…!! だけど一番恐かったのは…あんたの傍にいられなくなると思った時だよ」

「…!!」

「私だつて、夢ぐらい見るさ…ああいう状況に陥って、何にも感じない薄情者じゃないよ」

すつ、と体を起こしたエレノアが、真つ直ぐに目を合わせてくる。

潤んだ瞳、赤く火照った頬、不安氣に下がった眉尻。誰にも見せた事のない、弱々しいただの女としての姿。

それを見せるのはただ一人——己だけだ。その事実が、エースの胸の内に炎を灯す。

「…最後まで、言わせないでよ」

一瞬、エースは迷い、しかしやがてその小さく華奢な体を強く抱き締める。

今、自覚した。

自分はこの女に惹かれている……あの時の弟同じように、ずっと欲しくて堪らなかつた言葉をくれたこの女に、惹かれていると。

「……………エレノア、おれは」

「…答えは、今言わなくてもいいから」

出会ってから時間は、決して長くはない。

だが……それを補って余りあるほどに、強い繋がりを持った。

片や、自分の存在意義を満たす運命の相手。

片や、自分の存在を真向から肯定した、命の恩人。

物語染みた不思議な出会いから、予期せぬ敵との遭遇と逃走を経て、互いに抱く想いに大きな変化が生じた。

湧き出す想いに突き動かされるまま——エースとエレノアは、その身を一つに重ね合わせたのだった。

——あんたが「王」だからじゃない…。

あんただから、私は——。

唇に感じる暖かく優しい感触に、肌上添う熱に浸りながら、エレノアは思う。

血に刻まれた衝動が選ばせたのではない、誰かに記された運命などではない。これは全て、己自身で選んだものだ。

そう信じて——熱く燃え滾る炎を、我が身に受け止め続けた。

繋いだこの手は、絶対に離さない——そう心に決めて。

——雨が上がった後の昼間。

碧の並木に挟まれた道を、エースはエレノアを背負って歩いていた。

二人とも、照れ臭そうに目を逸らし、頬を染めて気まずそうにしている。

しかし、エレノアはきゅつと抱き着く力を強め、エースの背に自らを押し付ける。その所為で、エースがより一層ぎこちなくなっていた。



「……………あの、その…さっきのアレは……………あんまり思い出さなくてももらえると思うかな……………?」

「…お、おう」

「グア〜♡」

「くっ…コイツは全く……………」

後ろをついてくる雷撃鳥の態度に苛立ちながら、黙々と歩き続けていると。

不意に、にやにやと口角を上げていた雷撃鳥がぎよつと目を剥き、悶え苦しみ始めた。

「グ!! グアア!!! グアアア〜!!!」

「ん☒ おい、どうしたお前……………お?」

鼻を押さえ、ぎざぎざと後退る雷撃鳥。

何事か、と振り向きかけたエースは、視界の端に映った奇妙な植物——ダフトグリーンの壁に気付く。

そして、その向こう側に見えた仲間達の姿に、エレノアと共にほっと安堵の表情を浮かべるのだった。

# 第捌話 “計略の海”

「おーい、お前ら〜!!!」

雷撃鳥の鼻に栓をして応急処置をしてから、手を大きく振って駆け寄る。

デューズ達はその声にハッと目を見開き、向かってくる船長と天使の姿を確認すると、大急ぎでその近くへと集まった。

「…!!? え!! あ!!! エ…エース〜!!! お嬢〜!!!」

「無事でよかったア〜〜〜!!!」

「何だよ、待つてりやこつちから迎えに行つたのによオ!!! せつかなお嬢と船長だけ!!!」

わらわらと周りを取り囲み、安堵と喜びをあらわにする男達。

しばらくの間わーぎゃーと騒いでいた彼等だったが、不意にある違和感……エースとエレノアの間に漂う雰囲気の変化に気付き、一斉に首を傾げた。

「……なア、エースにエレノア。お前ら何かあつたのか?」

「な、にやつ、何にもやいよ!!!」

「? むちやくちや嘸んでるけど………本当かア?」

ドギヤが尋ねてみると、顔を真っ赤に染めたエレノアがぶんぶんと首を横に振って叫ぶ。

非常に気になる反応だったが、無事を確かめた安堵が勝つてか、それ以上の追及には至らなかった。ほっと安堵の息が聞こえたが、それも気にならない。

「グア〜♡」

「!!? 何だこいつは?!」

「ま、また増えている………うウ〜ん」

「おやおや、随分な大所帯になったもんだねエ」

大勢で集まるスピード海賊団と、いつの間にか混じっていた雷撃鳥の姿に、様子を見に来たシャオがまた気絶したり母親が苦笑をこぼしたり。

そんな、喧しくも和やかな雰囲気の流れる光景を。

——一匹の映像電伝虫が、不気味な沈黙と共に見つめている事に、男達の誰一人として気づかずになっていた。

薄暗く照明に照らされた、広い酒場のような空間。

とある島で開かれていたその店の中を、フィナモレ、バリー、ウブロ、ダツキー・ブリーの四人は険しい表情で見渡していた。

「エース達、いねエな……しかも見つかったのはお前らだし」

「……何だい、文句あんのかい？」

「……いえ、何も……」

探し人が不在である事に落胆し、次いで近くの椅子に腰かけるスカル達を見てため息をつくとき、バンシーがぎろりと睨みつけられ黙らされる。

視線を逸らしつつ、もう一度店の中を見渡す。

店中で飲んだくれ、好き勝手に騒ぐガラの悪い男達——顔に見覚えがある海賊達の姿に、眉間に自然と皺が寄る。

「しかし随分と同業者達が集まってやがるな。何が始まるんだ？」

「……ろくでもない事なのは、確かだかな」

「連中、みんな『永久指針』を持つてるのを見るに……誰かにここに導かれたつてのが妥当だな」

格好と持ち物を遠目から確かめ、得体の知れない集まりに警戒する八人。

その途中、ウブロが近くを通りがかった給仕の女性に無遠慮に近づく。

「あ、おねーちゃん？　ちよつとおしゃくしてつてちよーだ………ぶへら!!」

下心と共に話しかけられ、苛立った給仕の女性にウブロは容赦なく蹴り飛ばされる。

倒れ込んだ仲間に冷ややかな目を向けつつ、ふとバンシーは給仕の女性の腕に生えた

羽毛に目を向ける。

「ん？ あんた、その腕は……………？」

「え？ ああ、これ…私達、鳥になりたいんだと思います」

「なりたいたい…つて、んなもんなりたくてなれるもんじゃ」

何とも不思議な、容量の柄ない返答に困惑するも、給仕の女性はそのまま歩き去つてしまふ…………ウブロを踏み潰しながら。

バンシーはふと思う、彼女達は何だろうか。見た目もそうだが、こんな場所であんな若い娘が働いているとは。

困惑にバンシー達が首を傾げ、立ち尽くしていた時だった。

「…………お前ら、見かけねエ顔だが、ルーキーか？」

ふと、近くの席に座っていた海賊の一人が話しかけてきて、全員の意識が剥く。倒れていたウブロも、鋭い目で男を睨み返した。

「あん？」

「お前らもシキの親分と兄弟の杯を交わすんだろ」

「誰があんな野郎と…………」

名前も聞きたくない憎い相手の名が出て来て、咄嗟に反論しかけたフィナモレ。

だがそれを制し、ダツキー・ブリーが不敵に笑いながら首肯する。

「まあな、そのつもりだ」

「へっへっへっへ……いい時に巡り合えたもんだよな。こんなでけエ祭に混ざれるなんてよ」

「ここは騒ぎを起こさず、情報を得るべき。」

意図を理解したウブロは渋々黙り、八人で寄った海賊の話に耳を傾けた。

「シキの親分は、なんでまたこんな大勢の海賊と兄弟の契りを交わす気になったんだ？」  
「何でって……おめエ、とぼけんなよ!! 新聞見たろ、これ」

訝しげに肩眉を上げ、机に置いていた新聞を取り出し突き付ける男。

それを代表して受け取り、一面を広げたスカルは——ドクロの奥で、驚愕で大きく目を見開き言葉を失った。

ばたばたと村の中を駆け、シャオが自宅に飛び込む。

そして母と祖母に向けて、歓喜と興奮で輝く目を向けて喋り出した。

「ばあちゃん! お母さん! 大ニュース!!?」

気持ち先走っているのか、つつかえつつかえになりながらもどうにか紡ぐ、手に入れたばかりの情報。

それを聞いた母と祖母は、ぶわっと目を感涙で潤ませた。

「なんだって!!?」

「ほんとだよ!!? シュウちゃんとこのお父さんが帰って来たの!!! もうじきみんな村に戻って来れるんだって!!! お父さんとお姉ちゃんにまた会えるんだよ!!? おばあちゃん!!?」

「本当かい……? 夢じゃないんだろうね……!!?」

感極まり、その場に膝をついたシャオの母。祖母もベッドの上で顔を手で覆い、身を震わせる。

何やら吉事が起こったらしい一家、そして村の様子に、シャオの家で休ませてもらっていたエレノアがそつと物陰から覗く。

「て事は……!!?」

「そう、お母さん!!? やつとシキがメルヴィユを出て行くんだって!!? 恐い動物もみんな連れて……計略の海へ!!!」

満面の笑みで、心の底からの安堵を示し、シャオは告げる。

シキが、最悪の支配者が次に目指す場所……老いた伝説の男が、最も執着してきた海の名を。

「東の海へ!!!」

その瞬間、エレノアの思考は真っ白に染まり、凍り付いた。

「こいつは……!!!」

「世界政府に対する…警告…!!!　つまりシキの……親分の目的は……“東の海”の壊滅。そして世界転覆…!!!」

酒場にて、スカルが目の当たりにしたのは、東の海の襲撃事件に際し、政府に向けられた警告文。

その首謀者——シキはある理由から東の海への恨みを抱き、監獄に入れられるも脱獄を果たし、二十年の時を費やし計画を立ててきた。

それこそ、東の海の壊滅。かつて“海賊王”が生まれ、そして死んだ海を襲う事なのだ……そう、集まった海賊達全員が語った。

「今夜の総会が済んだら、“東の海”にあの動物達を送り込むんだそうだ……」

「んな事すりやあ、とんでもねエ数の人間が死ぬ事になる……!!!」

「気にすんな!!　世界政府を降伏させるためだ」

「おれ達ア、すげエお方に誘ってもらったなア!!!」

「全くだ!!　よーし、もう一度乾杯!!!」

「シキの親分にばんざーい!!!」

愉しげに嗤う海賊達に、スカル達は絶句し何も言えない。



悪党なのだ。その上、人が大勢死ぬ事態を恐れるような輩が、シキの誘いに乗って集まってくるはずもない。

だが、あまりにその姿は醜悪。同じ人とも思えぬ下卑た顔に、戦慄を禁じ得ない。

「おう、お前らそんなナリで総会に参加できると思うなよ。ビシツと決める」

「……ドレスコードってわけか」

「何でもおめエ、今夜はよ、デモンストレーションを見せてくれるって話だぜ」

黙り込むスカル達に何を思ったのか、得意げに語る海賊がそう言う。

はつと表情を変える八人に気付く事なく、集まった海賊達は心底愉しげに語り、酒を酌み交わす。

「この島に一つだけある村を潰すんだとよ!!!」

「ぞくぞくするよ実際!!」

げらげらと耳障りな笑い声が響き……そして唐突に途切れる。

鬼の形相となったウブロが、海賊の一人の襟首をつかみ、目先まで持ち上げながら凄んだのだ。

「おい!!! その村つてのァ、どこにある?!!」

陽が翳り始めた頃、物音を立てぬように注意しながら、エレノアが壁伝いに外に出る。

痛みを堪えながら、シヤオ達に見つからないように村の外を目指す。

これ以上ここにはいられない。狙われる身の自分が見つかれば、彼女達が危険にさらされる——何よりも、今すぐに向かわなければならぬ。

敵の真意を知り、一か八かの島からの脱出を試すつもりで歩いていたその時。

「来るなエレノア!!!」

不意に、エースの切羽詰まった声が響き渡り、びくつと肩を震わせて振り向く。

息を呑みながら、どうしたのかと忠告を無視して近付き、気付く。

荒野に仁王立ちし、空の一点を見据えるエース達——そしてその先で浮遊する、忌々しい仇敵の姿に。

「エンジェルちゃん、見つけ♪」

「シキ……!!!」

「つれねエじやねエか、逃げ出すなんて………傷ついたぜ、おれア」

ばたばたと金の装いを風にはためかせながら、嘆かわしいとばかりに肩をすくめるシキに、エレノアはぐつと歯を剥き出しにする。

何をいけしやあしやあと、と胸の内を怒りが煮え滾る。

そこへ、エレノア以上の怒りを燃やすエースが立ちはだかり、老人を鋭く睨みつけた。

「うるせエぞクソジジイ……!!! エレノアとおれ達にした仕打ち、何倍にしても返させ

てもらうからな」

「ジハハハハ……!! 威勢のいいこった……おれは海賊、欲しいものを奪っただけだぜ。奪われる方が間抜けなのさ。そこまでいい女もそうそういねエからな……奪われたくなけりやしつかり守れ、小童共」

エースだけではない。その場に居合わせた仲間達全員が、頭上から嘲笑うシキへの怒りに燃えている。

親切心を抱かなければよかった、などとは思わない。海賊にも仁義がある、借りを返さず踏み躪る真似をしたこの男にこそ、詫びを入れさせねばならない。

荒野に散らばり、各々の得物を構えながら、十一人と一匹は闘志を研ぎ澄ませていた。「おいジイさん……恩を仇で返された事アどうでもいいが、おれの仲間と恩人に手エだしてタダで済むと思うなよ」

「ほう、どうする気だ」

「ぶっ潰す!!」

怒りの咆哮と共に、エースが己を炎に変えて空へと飛び出す。

続けざまにデユース達も続き、四方からシキに向けて全力の攻撃を仕掛ける。

「炎戒・火柱!!」

迸る、エースの炎の柱。爆炎が真っすぐにシキを呑み込まんとし、しかし容易く浮い

て躲される。

即座にセイバーとガンリユウ、コーネリアとが左右から斬りかかり、両足の剣で防がれ弾かれる。火花が散り、二人纏めて蹴り飛ばされた。

「そのまま…!!」

引き籠もりを一旦やめたミハールが銃を構え、引き金を引く。放たれた銃弾はシキの脳天を狙うが、異様な反射神経で首をかしげるだけでそれも躲される。

「いっつけえエエエ!!!」

「グルルルル!!!」

「ふぬっ!!!」

続いて真下で構えたデユースの腕にキメルとコタツが乗り、人間砲台と化したデユースに発射される。

鋭い槍での突きに一瞬、シキの動きが止まり、さらにその背中へドギヤの連打が叩き込まれる。流石のシキも、幾つもの衝撃に顔が歪む。

「ぐっ…!!」

「くらいやがれ!!!」  
ゴングッシエル  
 「剛鐘砲弾!!!」

そしてとどめの一発とばかりに、アギーの左腕から放たれた重く堅い砲弾が放たれ、シキの腹のど真ん中に叩き込まれ——なかつた。

「調子に乗るんじゃ……ねエよ!!!」

放たれた砲弾を片手で防いだシキは、それを野球のボールか何かのように投げ返し、アギー68の顔面に叩き込む。

さらに両脚の刃を翻し、鋭く速い斬撃を放って周囲に散らばった一味に次々に食らいつかせる。

最後に残ったエースには自ら接近し……漆黒に染まった拳を思い切り頬に叩き込んだ。

「ぐあア?!」

炎の身体に拳が決まり、エースは血反吐を吐きながら凄まじい速度で地面に叩きつけられる。

どこん、と土煙あを上げて墜落した青年達を見下ろし、忌々しげに顔を歪めたシキが溜息交じりに悪態を吐き捨てる。

「不愉快な奴らだ………おれと対等にやりあえると思っていやがるとは!!! 面倒だ………まとめて相手してやる!!!」

そう呟き、徐に片手を上げていく。

すると、周囲に威圧感のようなものが広がり、カタカタと地面の小石が震える。

そしてやがて、ゴゴゴゴ……!と大地の震える轟音が響き始めた。

「?!? 何だ?!?」

「〃獅子威し〃 『地巻き』!!!」

掲げた手を翻し、ぎりつと握り締める。

その瞬間、地面が急速な勢いで隆起し、ぼこぼここと変形して数等の獅子の貌に変わる。地に墜ちたエース達を取り囲み、襲い来る、荒ぶる土塊の獅子。

言葉を失う一味の中、立ち上がったエースはかつと目を見開き、右腕から巨大な業火を噴き上げさせる。

「〃火拳〃!!!」

土塊の獅子の内の一体、その鼻先をめぐけて業火の正拳を放つ。

炎は獅子の貌を容易く破壊し、包囲網の一部を崩し、シキに通じる道を作り出す。それを伝い、他の仲間達が各々の得物を振りかぶり、一斉に攻撃を放つ。

銃、剣、槍、拳、爪。自身が持つ遠距離攻撃を一つにまとめ、全身全霊でシキを狙う

「狙いはいいが、ダメだ」

だが、迫り来る一撃を前にシキは微塵も表情を動かさず、くいつと指を動かす。

デューズ達の放った一撃は、目前に現れた巨大な岩石が盾となり、虚しく防がれてしまった。

「お前らごととき、殺す価値もないわ」

鼻を鳴らし、シキが見下す先で、土塊の獅子がみるみるエース達に迫る。

包圍網を突破しようと再度構えるが、土塊の壁はそれより早く、エース達を呑み込み押し潰す。

土塊は竜巻のように振じれ、固められ、天を衝く程の塔へと変貌する。

「ジハハハハハハ……!!? 土ん中で眠つてな、小童共!!?」

あつという間に、エース達は聳え立つ土の塔の中に閉じ込められ、完全に無力化されてしまったのだった。

「ハア……!!? ハア……!!? ……!!! みんな……」

舞い上がる土埃の中、エレノアがふらふらと荒野に飛び出す。

がたがたと覚束なし足取りで、土塊の塔……その中に囚われたエースと仲間達を救おうと、懸命に地を這い進む。

微かに覗く、デユース達の顔。

全員ぼろぼろで、誰一人意識を保っている者はいない……エースに至っては、奥底に封じられているのか姿すら見つけられない。

「待たせたなア……エンジェルちゃん」

「東の海」の事件も……あんたの仕業だったんだね」

ふわり、と悠々と降り立って来たシキを睨みつけ、エレノアは吐き捨てる。

何が礼だ、何が気に入っただ。

全てを知った上で、貸しを作った自分達を騙していたのだろうに——同じ海賊でも、嫌悪感がとめどなく湧いてくる。

「おれにとつての唯一の脅威はサイクロン、『フワフワの実』で操れねエ天候だ。未来を予知できる『天族』の力が必要な事は、お前もよくわかっているはずだ」

「……!! 私……!!? お前なんか……!!」

「ジハハハハ……!! もう少し賢く生きようぜ——目の前で奪われたくはないだろう?」

反抗的な態度を続けるエレノアの前で、シキがぐ、と手を動かす。

すると、背にした土塊の塔が微かに動き、囚われた仲間達から一斉に呻き声がかかる。はっと息を呑み、項垂れるエレノア。シキはそこに、さらに追い打ちをかける。

「家族がいるんだってなア……お前の『王』には」

選択肢を突き付け、シキは嗤う。

下るか、逆らうか。

エースの、仲間達の命だけではない。愛しい男の大切な家族の命までもが、今日の前



で天秤にかけられている。

断ればどうなるか、確定した未来を突き付けられ——エレノアはがくりと、その場に膝をついた。

「……我が忠誠を、捧げます」

「ジハハハ……!!! 歓迎しよう!!? 全知全能なる天使よ!!! 敵わねエ敵がいると知る事もまた成長だ!!!」

愉しげに嗤ったシキは、懐から見覚えのあるものを取り出し、エレノアの前に転がす。一度使い合った、音貝だ。

「おれア、誘拐犯じゃねエんだ。海賊の世界にも仁義はある!!? 今まで苦楽を共にしてきた仲間達に……ついでにあの親父にも、きつちり挨拶を残しとけ」

にやにやと厭らしく笑い、そう告げるシキ。

悔しさで、血が滲むほど唇を噛みしめたエレノアは、のろのろと手を伸ばし音貝を拾う。

「……」

シキの前で、掠れた小さな声を発し、録音する。

聞こえてきた内容に満足げに冷笑するシキを無視しながら、エレノアは役目を終えた音貝をそつと土塊の塔の麓に置く。

立ち上がった天使は、胸に走る痛みを必死に堪えながら……いま一度振り向き、消え入りそうな声で告げた。

「……さよなら」

その言葉を最後に——天使は外道に抱えられ、その場を後にしたのだった。

## 第玖話 “男達の意地”

どかん、と爆音が響き、ずんぐりとした毒の樹が吹き飛ばされる。

ぐるりと円を描いて植えられたそれらが根こそぎ刈られ、防衛壁が破壊される。それを、爆破の張本人達が不気味に嗤いながら見やり、姿を消す。

そして……どん、どん、どん、と。

シキの配下のスカーレットが胸板を叩く音が——進撃の号令が島中に響き渡る。

重い音を聞いた怪物達、好き勝手に闘争を繰り返していた彼らは一斉に動きを止め、同じ方向に動き出す。

大地を、空を、海を、地中を。山があろうが川があろうがお構いなしに、命じられた方角へ真っ直ぐに進み、破壊を齎す。

その先は、シャオ達島の原住民達が暮らす村であった。

怪物達は一切の容赦なく村に進軍し、家を破壊し、踏み潰し、焼き尽くす。

逃げ惑う人々を嘲笑うように炎は舞い、粉塵を巻き上げる。

無数の咆哮が上がり、舞い上がった炎が夜空を真っ赤に染め上げる。

土塊の牢に囚われた青年達は、意識を失くし沈黙したまま、その景色を見下ろす事し

かできずにいた。

キン、キン、と金属音を響かせ、シキが艦橋に戻る。

自身専用の玉座の前に置かれた炬燵に入ったD r. インディゴが、主の帰還に蜜柑を剥く手を止めて振り向いた。

「おかえりなさいませ」

「ああ……」

どっかりと玉座に座り、目前に映し出される映像を——無数の怪物達が暴れ回る地獄を見やる。

島の先住民たちが住まう村、それが火の海に変じている。

島を守ってきたダフトグリーンの壁を焼き払い、怪物達を誘導し、あとはもう殺戮の連続。全てを無に帰す破壊が行われていく。

そんな光景を満足気に眺めていたシキの元に……車椅子に乗った天使が近づく。

「ジハハハハ……!!? 見れば見るほどいい女だぜ」

横目を向け、やってきた天使を——ドレスコードに着替えたエレノアの姿に笑みを浮かべる。

体の線が出た黒いドレス。翼の為に背中を大きく開いた造りは扇情的で、憂いを帯び

た表情も相まって、墮天使のような背徳的な美を見せつける。

冷たい無表情でシキを見やったエレノアは、次いで目の前の映像に目をやって眉間に皺を寄せた。

「見ろよ、お前は良い判断をした……お前の愛しい男の故郷がこうならずじ済むという幸せをかみしめるといい……」

「……そう。でも、興味ないよ」

微かに唇を噛み締め、しかしそれ以上反応を示す事なく、エレノアは車椅子を動かして踵を返す。対して、シキは詰まらなそうに鼻を鳴らした。

「何だ……もつと激昂なり何なりすると思ってたんだがなア」

他人から奪った者が絶望し、苦しむ姿。

それを見られず、狂人は退屈そうに溜息をこぼし、せめてこの地獄を楽しもうと視線を前に戻すのだった。

??

「あの新聞の写真にそっくりですね……」

「ひでエ事しやがる。いずれは東の海がこうなるっていうのか……」

踏み荒らされ、焼け焦げた大地。

建物は尽くが破壊され、それに覆い被さるように怪物達の骸が横たわる。

怪物同士の闘争。敵も味方も存在しない、ただ破壊だけが齎された悪夢のような景色に、スカル達は言葉を失くし、立ち尽くしていた。

そしてやがて、その中にある奇妙な造形物を見つける。

蔓のように渦を巻き、天に伸びる土塊——その中に巻き込まれる、自分達の船長と他の仲間達の無残な姿を。

「エース!!!」

「何だこりや……?!? 一体どこの誰に……?!?」

「とにかく掘り起こせ!!? 大急ぎだ!!? おい!!! お前らもしっかりしろ!!!」

八人は慌てて土塊に駆け寄り、硬く押し固められたそれを崩していく。異様な硬さを見せる土塊を獲物や火薬を使って壊し、なんとか彼らを引きずり出す。

数十分の健闘により何とかエース達は解放され、介抱の末に意識を取り戻した。

「エース!! お前ら、しっかりしろ!!!」

「……………うっ……、ここは」

「…生きてんのか、おれらは」

茫然と虚空を見つめるエースとデューズ達。

敗北したまま気を失っていた事に愕然としているのか、声もなく項垂れる彼らに、スカル達は酒場で得た情報を語って聞かせる。

予想通り、聞き終えた全員が目を吊り上げ、怒りと悔しさに歯を食い縛った。

「あのジジイが……東の海の事件を起こした犯人だど!!」

「ああ」

険しい表情で頷くウブロ。ぎり、と歯を軋ませたデュースは、辺りに目をやりさらに眉間に皺を寄せる。

人の姿は見えない、あつてもきつと原型など留めていそうにない。

この全てが、あの男の計画通りに行われた痕なのだ……その事実には、拳に自然と力が籠る。

「あの怪物共を使って、東の海をめちゃめちゃにしようってわけか……あのジジイ、コケにしゃがって」

「……エレノアは、それを阻止するために一人でシキについて行っちゃった。おれ達の命も救ってくれたんだ……」

コーネリアアの呟きに……全員が暗く重い表情で項垂れ、黙り込む。

一人、あの小さな姉貴分が覚悟を示し、敵の元に下った——家族の元から去った。その事実には、全員が打ちひしがれていた。

その時、デュースがエース達の元に近づくと小さな人影に気付く、振り向いた。

「シャオ!!? 無事だったのか!!?」

「地下壕に隠れてたから……………」

目立った傷もなく、姿を見せたシャオ。隣には彼女の母の姿もあり、エース達に悲痛な表情を見せている。

ダフトグリーン守りがなくなった時の備えもあつたのだろう、ほつと一安心するエース達にシャオ達は近付き、愕然とした様子で口を開いた。

「それより今の話…………東の海があんたの故郷だつてのは、本当なのかい？ あの娘も…………」

「ああ、いや…………生まれはちと違うんだが、育つたのはそうだ。…弟が今もそこにいるはずなんだ」

「…………!!? 私、なんて事を…………!!!」

シャオの母の問いにエースが頷くと、彼女は顔を手で覆って崩れ落ちた。

自身が発した言葉、『さっさと東の海に行つてほしい』と告げた事で、自身を責めているのだ。

それでは、自分達の代わりに娘の恩人の故郷に滅んでほしい、と言つたも同然だ。

涙を流し、後悔するシャオ達に…………エースはふつと笑みを浮かべると、少女の頭をぽんと撫でた。

「…………お前らはすげエな。自分達の村がこんなめちゃくちやになつてゐるのに、エ



レノアの事を氣遣つてくれてよ。そんな奴ら、見た事がねエ」

「ああ……!!? ちつともひどかねエ……ひでエのはシキのクソジジイだ。お前らが氣に病む必要はねエ」

暮らしを奪われ、希望を奪われ、苦しみの中にありながら他者を慮る彼女の達の優しさに驚きつつ、称賛する一味。

慰めの言葉を発したエースは、やがてシャオの手に握られた音貝に気付く。

「それ……その貝はどうした?」

「? ああ、これは……今さっきここで拾つて……」

「見せて頂けますか?」

ミハールが手を出し、シャオから音貝を受け取る。

一味は円陣を組むように集まり、ミハールは全員の耳に届くように音貝を置き、殻張を押しした。

『——みんなの所から勝手に消えて、ごめんね』

流れてきた、天使の声……自分達が守れなかった少女の言葉。

平坦な、しかし明らかに自分の気持ちを押し殺しているであろう、強張った声が聞こえ、エース達は唇を噛み締める。

彼らの苦痛を他所に、淡々とエレノアの最後の言葉は続いた。

『私はシキの配下に入ります。『金獅子』は懸賞金30億Bの怪物………今のエース達がどれだけ逆らっても絶対に敵わない伝説の海賊。みんなが私を追ってきたら、今度こそ命を落とす事になる。……だから、最後にこれだけ言っておきます——』

一味から漏れだす、苦悶の声。歯を食い縛る音。拳の軋み。

エレノアは一息ついた後、耐え忍ぶように息を呑むと、微かな声で小さな一言を発する。

しん、と静まり返ったその場に。

ふいにざつと微かな雑音が響き、フィナモレがはつと我に返った。

「エース!!!」『白ひげ』のオヤジさんに通信が繋がったぞ!!!」

懐から取り出したのは、一匹の電伝虫。

有事の際に白ひげ海賊団と連絡が取れるように……しかし、普通ではない状況の所為かなかなかつながらずにいたそれが、ようやく持ち主の声を届けた。

『——とんだ目に遭ったな、お前ら……』

すぐさま電伝虫に意識を向けた一味に、『白ひげ』エドワード・ニューゲートが静かに告げてくる。

役目を果たせず、娘をみすみす奪われたエース達に怒り狂っていてもおかしくないだろうに、彼らにそんな感情を示す事なく、むしろ気遣う様子を見せる大海賊。

その声に安堵するどころか、エース達はより一層の怒りと悔しさに苛まれる。

『こっちはカイドウのバカとのゴタゴタが済んだ所だ……今、エレノアのビブルカードを頼りにそっちに向かってる。もう少しだけ待ってろ』

白ひげとしても、娘を奪われた事を悔やんでいるのだろう。

そこらの雑魚に負けないと自分の手元から離し、しかしその為に思わぬ敵の襲撃に遭わせる事となった。

見通しの甘さを突き付けられ、父として不甲斐なさを感じているようだ。

『前に、奴が脱獄しておれの所に来た時から、妙な予感はしてた……まさかおれの娘を攫うような大それた事をするとは思いもしなかったが……』

『とにかく、お前らが無事で何よりだ!!! 知らせてくれただけでもお手柄だ……!!? あとはおれ達に任せろ!!!』

現代における最強の海賊が向かっていると聞き、それでもエース達の気分は晴れない。

彼が来れば、事態は確実に解決するだろう。老いて病に侵される身とはいえ、最強の海賊団を相手に“金獅子”といえどただで済むはずがない。

だが、そこで自分達にできる事は何も無い——これではまるで、喧嘩に負けて親に泣きつく情けない糞餓鬼のようではないか。

黙り込むエース達を訝しみ、通信の向こう側でマルコが声を漏らした。

『……？ どうしたお前ら』

「悪イ……オヤジ……マルコ……エレノアの事を、任されてたのによ」

『気に病む事はねエよい……奴はロジャーと何度もやりあつた化け物だ。生き延びられただけでも運がよかつたとしか言えねエよい』

マルコの声からは、本心からエース達を責めていない事が伝わってくる。

相手も老いたとはいえ、白ひげと同じ時代で暴れた大海賊。エース達も十分な実力者と言えど、まだその域には達していないのに遭遇してしまった事は、不幸な事故としか言いようがない。

だが——それを仕方がないと受け入れる事は、エースにはできなかった。

「——オヤジ、頼む。おれ達がそつちへ戻るまで手を出さないでくれ」

不意に、エースが告げたのは、そんな願いだつた。

一瞬、白ひげ海賊団側で沈黙があり、続いてどよめきの声上がる。

予想だにしない返答を受けたマルコ達は絶句し、次いで慌てて電伝虫に詰め寄り、正詩の言葉をまくしたてる。

『何を言っている!!? バカな真似はやめろ!!』

『落ち着いてよエース!!?』

『今のお前達じゃ勝てん!!? 気持ちわかるが早まるな!!? おれ達の到着を待つてろ!!』

あまりにも無謀な決意。なのにエースだけでなく、他の者達からもどよめきも反対の声も上がらない。全員が、同じ覚悟を抱いている。

自棄になるな、無意味に命を捨てるだけだ、落ち着け。

と慌てるマルコ達の声を見殺し、エースはちりちりと全身から火の粉を漏らし、激情を滲ませた声で告げる。

「そうしてオヤジ達に頼って……おれ達はこの先、どうやって男と名乗れるんだ」

みしみしと電伝虫の受話器が軋みを上げ、漏れ出た炎で焦げる。

エースの全身から、怒りの感情が炎となつて漏れ出し、変じた周囲の気圧が風を呼ぶ。だが、一味の誰もその場から離れない、逃げない。

「おれア……あの時誓ったんだよ。あいつを何が何でも守るって……おれをこの世に引き戻すために両足を犠牲にしたあいつを、命を懸けて守り抜くって」

脳裏に浮かぶのは、目覚めた後に見たもの……両足を失い、高熱に苦しむ天使の姿。

痛くて苦しくて辛い筈なのに、それを押し退けて心からの安堵の笑みを浮かべる、小

柄で華奢な女。

泣き崩れ、何故だと問うエースに向けて、返した答えはあまりにも優しかった。

——あなたに生きてて欲しいから……。

理屈じゃないの……ただ……体が勝手に動いてた。

あなたに会えて……よかった。そう思えるの。

だから、守ると決めた。家族になると決めた。

自分をこんなにも愛してくれるこの女を……守りたいと、そう願った。

「約束も守れねエ腑抜けが!!! 海賊も!!! 男も!!! どんな名を胸張って名乗れるってんだ!!!?」

電伝虫は、何も言葉を発さなかった。モビーディック号の誰一人として声を上げられない様子で、息を呑む音ばかりが聞こえる。

「エレノアは必ず、おれ達が救い出す!!!」

ごう、と炎の渦を生み出し、鋭い眼光で宙を睥み。

かつての誰かを思わせる鬼のような顔で、虚空を見据えたエースが受話器を握り潰し、強引に通信を切った。

「あの野郎……!!??」

沈黙した電伝虫を見下ろし、マルコが悪態をつく。

気持ちにはわかる、自分がもし同じ立場になったら同じ事を言っただろう……だが、理想と現実とは異なる。

意地だけで挑めるほど、今回の敵は甘くはないのだ。

「無茶だ!!! 今度の相手は格が違う!!! ロジャーを何度も追い詰めた大艦隊の主だった男だぞ!!!」

「……でも、このままシキを逃がして、どこかに雲隠れでもされたら………エレノアはもうぼく達の手の届かない所に行っちゃうよ」

「ハルタ!!? バカな事言ってるじゃねエよ!!!」

「行かせてやりやあいじゃねエか………大物狩りは男の浪漫だろ?」

「そんなムチャが通じる相手じゃねエだろ、ティーチ!!」

どよどよとモビーディック号では動揺が走る。

説得して止めるべきか、急ぎ現場に向かうべきか——あるいは信じて待つべきか。

何が正解かと戸惑う息子達を見渡し、白ひげがにやりと笑みを浮かべる。

「ハナツタレ共が意気がりやがって……グララララ」

突如、普段と変わりのない不敵な笑みを浮かべ始めた父に、マルコ達は戸惑いの眼差しを向ける。

事態を然程重く見ていないように見える彼に、誰もが困惑し言葉をなくす。

そんな彼らに向け、白ひげは甲板にずん、と「むら雲切」を突き立て、大声で号令を発する。

「野朗共、出航だ!!?」 電伝虫の電波をたどって、シキのバカがいる場所を目指せ!!!

……ただし、手は出すなよ」

「「「「オヤジイ!!!」」」」

本気でエース達だけに行かせるのか、と驚愕の声を上げるマルコ達。

そんな息子達に笑みを見せたまま、未だ健在の強烈な覇気を籠めた目で海の彼方を見据え、告げるのだった。

「あいつらが男を見せようとしてんだ。信じて待つてやろうじゃねエか」



## 第拾話 “自由を求めた男”

大海賊時代幕開けより約3年前ー『海軍本部』――

『コング元帥!!?』 新世界エツド・ウォー沖にて “ロジャー” と “金獅子” が接触を!!!  
「そら来た!」

とある部屋にて “英雄” と称される男、若かりし頃のモンキー・D・ガープがその放送を聞き、動いた。

直前まで話していた自身の上司を置き去りに、速足で現場へ向かう。

それを、組織の長たる一人の男が怒鳴りつけ、止めようとする。

「ガープ、待たんか!!?」 話はまだ終わつとらんぞ!!!

「あんたがそうでもおれは終わった!!?」

制止の声も聞かず、さっさと歩き去っていくガープに上司は齒噛みし、苛立たし気にか机を拳で殴りつける。

一方で通路に出たガープの元には、大勢の海兵達がぞろぞろと集まり、同じ方向へ歩き始める。

「ガープさん、また昇格ケツたんですよ! 全くカツコイイな〜も〜」

「自由にやるにはこれ以上の地位はいらん。おつるちゃん、艦出すなら乗せてくれ!!?」  
「出撃要請出てないんだろ!!?」　すぐに艦壊すからやだよ、アンタ乗せるの」

「そう言うな、ロジャーの奴だけはおれが仕留めるんだ!!」

集まるのはクザン、つる、サウロ、サカズキなどなど。

いずれも後の世に伝説を残す実力者達ばかり。そんな彼らが、颯爽と歩くガープに続くように軍艦に乗り込んでいく。

その中には、左目を眼帯で覆った一人の剣士の姿もあつた。

「張り切っているな、ガープ。…私の分の獲物も残しておいてくれるとありがたいんだがね。最近張り合いのない相手ばかりで腕が鈍りそうなんだ」

「ぶわっはっはっは!!」　覚えてたらな!!」

「チリも残らん、これは」

後に「大總統」と呼ばれる男もまた、自由に笑うガープに合わせて朗らかに笑いつつ、軍艦に向かう。既に腰に剣を佩き、戦闘準備を整えている。

そこに眼鏡をかけた一人の海兵……後の知将「仏」のセンゴクが目を吊り上げて怒鳴りつける。

「ガープ!!?」　シキの件はおれが任されてんだ、引っ込んでろ!!!」

「あー気にするな。手柄は全部お前にやるよ」

「そういうことじゃねエ!!?」

人の獲物を満面の笑みで狙う同期に怒りを燃やしつつ、センゴクも乗り込む。

一国を余裕で墜とせそうな戦力。それが必要と判断される相手の元へ……世界最悪の犯罪者と世界最大の兵力を持つ男達の対峙する戦場、海兵達は闘志を漲らせて向かった。

「うおつ!!? センゴク大将にガープ中将、その上ブラッドレイ提督が揃って出るのか!!?」

「そりゃあロジャーだ……!!? ガープさんは放つとかねエ……!!?」

後に中将の座に就く若き海兵達は、そんな彼らの後姿に羨望と憧憬の眼差しを向ける。

いつか自分達もあのように。

そんな風に、英雄の卵達は自身を奮い立たせていた。

荒れ狂う海、渦を巻く波。

エッドウォーと呼ばれる海域において、一隻の海賊船に乗る少年が悲鳴交じりの声を上げていた。

「ロジャー船長オ……!!! 命が一番だって!!! ここは一つ一時的に金獅子の言う事聞

いてさ!!?」

大きな赤鼻の目立つ少年——後の「道化」のバギー。

彼は目前に迫る悪夢のような光景を前に、情けなく泣き顔になりながら頭を抱えていた。

「お前、いくら切られても死なねエ体になったんだからいいじゃねエか」

「弱点はいつばいあんだよ!!? バーカー!!?」

「だから日頃からもつと鍛えとけって言ったのに……」

「うっせー!! 脳筋女ア!!」

「あんだとデカっ鼻ア!!!」

同い年の少年、後の「四皇・赤髪」のシャンクスに言われてツツコミを入れ、隣に立つ栗鼠の耳と雀の翼を持つ少女と睨み合う。

「戦闘だいきつきっ娘のてめエと一緒にすんじゃねエ!!! こんなやベエ状況でへらへら笑

えるとかイカれてんのかりジーてめエコラア!!!」

「違いますー!! あんたが弱つちすぎるだけですー!! 僕に一度も勝てないあんたが情けないだけですー!! やーいロジャー海賊団の恥さらしく!!!」

「ふざけんな!!! てめエが不意打ちばつかするからだろうが!!!」

「ちはははは負け惜しみく!!!」

「仲良いなア、お前ら!!」

「どこがじゃ?!」

げらげらと、戦場とは思えない愉しそうな雰囲気が出る甲板。

ただ一人、心底死を恐れるバギーは、くるつと後ろに立つ銚を持った男、船医クロツカスに振り向き縋りつく。

「そうだクロツカスさん、船長の容体はどうだ!!? 戦わねエ方がいいよな! ドクターストップかけてくれ」

「生憎だが絶好調だ」

「諦めろ。長エ付き合いだが、おれ達がロジャーを止められた事はねエ!!?」

こきつと首を鳴らし、構えるクロツカスに合わせ、ギヤバンという名の海賊が呆れたようにバギーの肩を叩く。彼もまた、目の前の戦場に好戦的に笑ってみせていた。

最後の望み、とばかりに、バギーは背後の眼鏡の男——「冥王」シルバース・レイリーに泣きつく。

「レイリーさん!!!」

「トムの船、オーロ・ジャクソンを信じろ!!? ——ロジャーにはもう時間がない…!!」

レイリーが見やる先には……彼らの船長の姿がある。

外套を羽織り、黒い髭を蓄え……何より尋常ではない覇気を醸し出す男。

世界最悪の犯罪者にして、世界政府が最も危険視する海賊——ゴール・D・ロジャーが目前の敵と雄々しく相対していた。

「この話は何回目だ、ロジャー!!? 若エ頃にやあ色々あつたが水に流そう!!? お前が在り処を知る『世界を滅ぼす兵器』と!!! おれの兵力!!! そしておれが長い月日を費やして立てた完璧な計画があれば、今すぐにでもこの世界を支配できる!!! おれの右腕になれ、ロジャー!!!」

「おれは『支配』に興味があねんだよ、シキ!!! やりてエ様にやらねエと海賊やつてる意味があねえだろ?」

相対する男の名は『金獅子』のシキ——海軍を除いて最大の兵力を持つ、当時においても最も海賊らしい海賊。

『世界の支配』を望み、その為に幾度もロジャーを誘い続ける彼は今。

数十隻の獅子の船首の船でロジャーのオーロ・ジャクソン号を囲み、交渉という名の脅しをかけていた。

「—どんな圧力をかけて来ようとも、お前の申し出は断る!!! 『金獅子』イ!!!」  
だが、ロジャーは微塵も臆さない。退かない。

絶望的なまでの兵力差、戦力差、悪天候を前にしても、まさしく鬼のように恐ろしい

笑みを浮かべ、獅子の脅しを撥ね退けていた。

「やめてー!!? 船長くく!!? コレ何十隻いると思つてんだよオ!!!」

「にやひひひ…!!? 腕が鳴るといふものだ!!! お前も存分に暴れる、バギー!!! リ

ジー!!!」

「あいあいさー!!!」

「勘弁してくれニューラさんくく!!!」

彼の仲間は誰一人……一人を除いてだが……彼と同じく好戦的に笑い、降る素振りを見せない。

ロジャーに付き従う黒豹の耳と鷲の翼を生やした女、*“黒羽”*のニューラはより一層にやる気を見せ、ばりばりと青い閃光を走らせる始末だ。

そして、望む答えを得られなかったシキは——びきびきと顔中に血管を浮き立たせ、ロジャーを睨みつけた。

「つまりその答えは、今ここで殺してくれという意味だよな!!!?」

「てめエら全員叩き潰すつて意味だよ!!!」

ロジャーの答えは変わらず拒絶、そして、先制の砲撃。

荒れ狂う海を舞台に、男達の雄叫びと爆音が広く高く轟き渡った。

——海賊大艦隊の大親分として知られる「金獅子」のシキと後の「海賊王」ゴールド・ロジャーが激突——

世にこれを『エッド・ウオーの海戦』と呼び

絶体絶命と思われたロジャーの船は突如大きく荒れ狂う天候に救われ

結果、シキの大艦隊の半分を海に沈め——さらにシキに襲いかかった不慮の事故により

からくも痛み分けとなり戦場を突破した——。

「どうだ？ 舵輪は」

激突から数日、医務室に訪れたシキの部下・D r インディゴが医師に問う。

意識を取り戻したシキの頭頂部……割れた舵輪が突き刺さり、鶏冠のようになった頭を確かめた医師は、やがて諦めたように険しい顔で首を横に振った。

「ああ……D r. インディゴ。抜けませんね……えらく深く食い込んでいて、無理に抜けば命にかかわる」

「そうか……まあいい、よくある事だ」

「戦闘中うっかり舵輪が頭にめり込んで抜けなくなる事はそうそうありませんよ」



「しかしその生命力はさすが」

「そりや、おれは『金獅子』に例えられるほどの男だぜ」

感嘆する部下や呆れる医師に答えつつ、シキは立ち上がる。

そのまま命を落としてもおかしくないような大怪我だというのに、それを微塵も感じさせない自然な動作に、恐ろしさの方が勝る。

が、ふと鏡の前に立ったシキは、間拔けな顔で映った自分の顔を見つめた。

「あれ？ あそこに鶏が」

「おめエだよ!!!」

「ハイ!!!」

気の抜ける漫才に、たった一人の観客にさせられた医師は、曖昧に返す事しかできなかった。

約2年後——ロジャー海賊団はついに不可能と言われた『偉大なる航路』制覇を成し遂げ、ゴールド・ロジャーは『海賊王』と呼ばれる様になる。

その後、ロジャー海賊団は謎の失踪——さらにそれから1年が過ぎた頃

.....

『海賊王逮捕』のニュースが世間をあつと驚かせる。

「ロジャーが……捕まったアア!!？」

「確かな情報で……!!？」

「ウソをつけエ!!! そんな事が信じられるかア!!! あいつがどれほど強エ男か……!! てめエら知ってるハズだぞ!!!」

荒ぶるシキの咆哮と共に、どんつ!と銃声が響き渡る。

報告をした部下が足を撃ち抜かれ、痛みで艦橋を転げ回る。それに目もくれず、シキはずんずんと荒々しい歩調で踵を返す。

「親分っ!!? お静まり下さい!!?」

「いい加減な事言つてんじやねエよ!!!」

「親分!!? ……どこへ!!?」

部下達の制止の声も聞かず、シキは去った。

己の目で真偽を確かめる為に——何より、自らの手で始末をつける為に。

その日、海軍本部に衝撃が走った。

誰も攻め込むはずのない、世界政府の最大戦力の拠点・マリンプォードに攻め込む者があつたからだ。

『侵入者です!!』 場所はマリンフォード湾岸の広場!!?』

『敵の数は?!?』

『一人です!!! 敵は… “金獅子” のシキ一人!!』

マリンフォードは瞬間に血の海に染まった。

侵入者の排除に動いた海兵達を、シキは愛刀たる二振りの剣で斬り捨て、高い屍の山を築いた上に立った。

そして自身を囲む海兵達に向け、殺意に満ちた目を向け吠えた。

「ロジャーがおめエらみてエなカス共に捕まるハズがねエんだ、このおれが認めた男だぞ!!!」

狡猾に、冷静に、己の欲を満たす為の計画を念入りに練る男。

本来ならば、彼はこのような無謀な突撃に走る筈がない。襲撃を懸けるならば、年月と金をかけて兵力を揃え、策略を巡らせて襲っただろう。

そんな手段に出られなくなるほど、シキの頭には血が昇り、冷静な思考ができなくなっていた。

「海賊王?!?」 それが何だ!!! あいつがおれに手を貸せば、おれ達は全世界を支配できた!!! 適合する事はなかったが、あいつとは同じ時代をやって来たんだよ!!!」

シキには許せなかった——己の元に降らず、無様に捕らわれ死を待つだけの口

ジャーの最期が。

一度でも己が欲した者が、自分の手の届かぬ場所で無意味に消え去ろうとしているなど、受け入れられない唾棄すべき結末だった。

「いるんなら連れて来い!!! 殺すならおれの手で殺してやる!!!」

怒りと憎しみと悲しみ、あらゆる感情を混ぜてシキが吠える。

そんなシキの求めに応じるように、海軍の英雄たる二人の男達が姿を現し、怒り狂った海賊と相對した。

「センゴク大将…!!?」

「ロジャーは『海賊王』。お前との勝負なら——奴の勝ち逃げだ。処刑は一週間後奴の生まれ故郷『東の海』の『始まりの町』——『ローグタウン』」

「ガープ中将…!!?」

「ロジャーの死は、あらゆる海賊達の心をへし折るだろう」

ぎりつ、とシキは齒を軋ませ、自身にとつて残酷な決定を口にした二人を睨みつける。最弱の海東イースト・ブルーの海。大した海賊も集まらない、吐き気がする程に穏やかで平和な、支配する気にもならない何もない海。

そこであの男が、全てを手に入れた男が処刑される……それが、自分が全力で欲した男の最期だというのか。

「海賊王ロジャーの伝説が……あの最弱の海『東の海』で終わるのか、笑わせるな!!  
それはあのクソつたれに對する最期の侮辱だよな」

「最弱とは言い様だ……『東の海』は平和の象徴……!!?」

「処刑の邪魔はさせん……!!」

ガープとセンゴクは正義の外套を脱ぎ捨て、ネクタイを緩め、袖を捲る。

相手はロジャーに次ぐかもしれない最悪の海賊。さらなる増援は必要ない、居ては逆に邪魔になる。

互いを鋭く睨みつけ、闘志を全身に漲らせ、三人は同時に動き——激突した。

——「ガープ」 「センゴク」 「金獅子」。

3者の戦いはマリルフォードの町を半壊させるまでに及び、決着をみた。  
かくして海賊「金獅子」はインペルダウンへ投獄される事となる——。

## 第拾壹話 “支配を望んだ男”

—— “金獅子” のシキのマリンフォード襲撃、そして捕縛。

インペルダウンに投獄された、一週間後。

“海賊王” ゴールド・ロジャーの死と共に、 “大海賊時代” が幕を開ける。

「おれの財宝か？ 欲しけりやくれてやるぜ：探してみろ。この世の全てをそこに置いてきた」

その言葉が、処刑台前に集まった多くの者達の欲望に火をつけた。

大小問わず、多くの悪党や夢見る男達がその影響を少なからず受け、続々と海へ出た。その中には、現在に名を馳せる、若かりし頃の実力者達の姿も多くあったとか。

“海賊王” と呼ばれた男の最期を見届け、彼の右腕と黒豹の天使、そして仲間達の多くは消息を絶ち。

代わりにただの見習いであった少年少女達が、徐々に台頭し始める。

ニユースは即日全世界を駆け回り、人々の脳裏にこの先の荒れ狂う海を予感させた。

「恐ろしい時代が始まった」

とある砂漠の国では、一人の王が不穏な未来に冷や汗をこぼし、王妃と共に国を守る決意を強くする。

その国の民である夫婦も、新聞の記事に目を通し険しい表情となる。

「とんでもないニュースが出てきやがったねエ」

「ああ、しばらく海が荒れそうだ………イズミ、今日は日差しが強い。仕事はおれが……」

「いいんだよ、あんた。少しくらい助けさせておくれよ……夫婦なんだから」

「お前……!!」

「あんた……!!」

ひし、と抱き合う二人。呆れる彼女達の店の店員や、同じ町に住む住人達。

この先夫婦に襲い掛かる悲劇も、絶望も何も知らないまま、不安を抱きつつ過ごす日々が始まる。

「クリケット船長!! ロジャーが宝残して死んだって、こりやスゲー!!!」

「ロマンがあるじゃねエか!!」

「だっはっは!! 探してみっか!!」

ある海域を根城にする海賊達は、然程恐れる様子もなく愉しげに語り合う。

彼らが己の生に決着をつける決断を下すのは、まだ少し先の話だ。

影響は表の世界だけに留まらない。

最強の海賊達が集う『偉大なる航路』後半の海『新世界』……そこを縄張りとする、ロジャーと争い続けた大海賊達の元にも。

そして、一度敗北した猛者達が収監される最大の監獄インペルダウンにも、その知らせは届いていた。

「聞いたかこの大ニュース!!! 海賊王が大秘宝を残して死んだって!!?」

狂気に満ちた檻の中、囚人同士での殺人も乱闘も珍しくない、地獄を体現したような場所。

そんな場所に捕らわれる悪党達には、ロジャーの言葉は非常に強く、外の者達とは比べ物にならないほどに響いていた。

「海賊達の時代が始まったんだア!!!」

「シャバへ出てエ!!? 今すぐに…!!?」

「新しい時代が始まった!!? 新時代の海賊の海!!!」

血を見るのも、奪う事も、悪事の何もかもを好む彼らにとって、大海賊時代はまさに夢の世界。殺し合いでのし上がってきた彼らが何より楽しいと思う時代。

全身全霊で羨望の声を上げ、騒ぐ彼らを他所に。

『金獅子』のシキは、牢獄の中で手足を投げ出し、無気力な様を辺りに晒していた。

「なぜ死んだ、ロジャー」



囚人服に着替えさせられ、両足を鉄球の付いた海樓石の錠で封じられ。

凶悪な犯罪者に何もできないような処置が施された上で、悲しみとも怒りとも取れない複雑な表情で天井を仰いでいた。

「くだらねエ……………宝目当てのミーハー共が海にのさばったって邪魔なだけだ…!!? ……何が新しい時代…!!」

隣の牢で、別の牢で騒ぐ悪党達の燥ぎようが、彼には理解できない。

そんなじよそこらの雑魚とは格の違う、本物の強者達を相手に暴れ回ってきた彼にしてみれば、今海に蔓延る輩など児戯も同じ。

それらがさも物語の主人公を気取るように振る舞う事が、彼には我慢ならなかった。

「海賊は海の支配者だ…!!!! いずれわからせてやる…」  
能力を封じられ、硬く分厚い檻に捕らえられ、抵抗は叶わない。

しかし、獅子はまだ狂気を秘めていた。牙を折ったつもりで油断している看守達を見据え、喉元に食らいき自由を得る瞬間を待つ。

それを——異なる牢に捕らわれる羊の角と耳を生やした墮天使が、不気味に嗤って見つめていた。

「惜しいですね……………惜しい、惜しい……………その望みが“支配”でなければ……………まあ、見てる分には充分面白いですが。めひひひひ…!!」

身の毛もよだつ噓い声を上げ——やがて彼女の手から、小さく赤黒い閃光が迸った。

監獄内の雲行きは、それから少しして変わり出した。

「署長!!? 報告します!!? “金獅子”のシキが逃走しました!!! まだ獄内のどこかに!!!」

副署長を務める、毒の能力を持つ男が当時の署長の部屋に飛び込み、急ぎ報告する。

思いもよらぬ、未だ一度たりとも例のない報告に、監獄内で最強の座に就く署長はかつと目を見開き、尋ね返す。

「海楼石の枷はどうした、外されたのか!!?」

「いえ、枷は外れていません!!! 自分の両足を切断して……!!!」

血の滴る、足首から先だけが残された光景を思い出したのか、青い顔で背筋を震わせる副署長。署長はすぐさま、インペルダウン中の看守達全員に向けて命令を発した。

「何としても探し出せ!!! あんな大物逃がしてはコトだ!!!」

看守全員を動員し、逃げた囚人の捜索と捕縛に向かわせる。

霞の様に消え去った最悪の存在に恐怖感を抱きつつ、看守達は血眼になって施設中を探し回り。

やがて……一人の看守が、頭上から舌たる赤い雫とその持ち主に気付いた。

「ジハハハハハ……おれの剣を2本知らねエか…… 名剣だ。『桜十』、そして『木枯し』」  
 「シ……!!? シ……シ……昇格したい!!? あ!!? 間違えた!!? シキ!!」

「おめエらにやあ悪いが、ここは出て行かせて貰う……!!? 足はいらねエんだ……やるよ」  
 頭上の梁に腰かけ、どこで手に入れたのか葉巻を啜え、煙を燻らせるシキ。

未だ血を流す両脚をぶらさげ、いまだ監獄内にいるにも拘らず、凄まじい殺気と狂気  
 の笑みを湛える男に、被り物をした看守は真つ青な顔で震え上がった。

「2年間世話になったな」

「マゼラン副署長……!!? シキいました助けてエ……!!」

情けない悲鳴を上げ、上司に助けを求める看守。

捕縛よりも、己の身を守る事を優先したお陰か、彼は大した怪我を負う事なく最悪の  
 男の魔の手から生還する。

代わりに彼らは、最悪の罪人を逃すという失態を犯す羽目になる。

——そして、一度は牙を折られた海賊「金獅子」は檻を破り——再び海へと解き放  
 たれた。

『センゴクだ、休暇中悪いが……ガープ、金獅子の事だ』

「ああ、聞いた。気を付けた方が良いな……平安を求める様な男じゃない」

平和な海、東の海。

その一角……故郷であるゴア王国の端にあるフーシャ村にて、ガープは同僚からかかつてきた通話に顔を顰めた。

心身を休める気で、そしてある目的の為に戻ってきたのだが、氣力を養う暇はなくなりそうだ。

「——だが、すぐには仕掛けちゃ来んだろう。用意周到な男だからな」  
今すぐに、何かが変わる……：終わりを迎えるわけではない。

何かが始まる前にこちらでも備えておくべきだ、という結論に達し、英雄達は一度通信を切った。

その後彼は……ある男から預かった己の孫の顔を見に、山奥の山賊の根城に向かっていった。

大悪人の脱獄の凶報は、ニュース・クーを通じて世界中に報道され、多くの人々の目に、耳に入る事となる。

人々は皆、恐ろしい敵がこの世のどこかに身を潜めているという事実には怯え、海賊の増加に加えて、不安な日々を過ごす事となる。

「『金獅子』……ねエ」

「母さん、そんな大物がこんな田舎の海に来るはずないよ」

「そうかねエ…？ まア、心配するだけムダか」

とある機械鎧の工房を営む老婆と、その息子夫婦はそう話しながら、ここではない何処かで起こるかもしれない悲劇に顔を歪め。

考えても仕方がない、と不安を振り払い、失った四肢の代わりにを求める客達の相手に勤しみ。

「何だ、珍しいな。旅の船か…？」

「ヤソツプって男の評判を聞いて来たんだ。あ…おれはシャックス。こっちはアル・リジー。海賊だ」

「よろしく…!!」

ある島に住む青年の元には、栗鼠の耳を生やした天使を相棒にした赤い髪の青年が小舟で尋ね、仲間に勧誘し。

「あなた、進捗はどう？」

「ああ、うくん…何とかやってるよ。悪いね、君に負担をかけてばかりで…」

「いいのよ、家族なんだから助け合うのは当然でしょ」

「…そう…だね。ありがとう」

極寒の冬の島、医療技術の発達した国に住む錬金術師は、妻に慰められながら貧しい暮らしを捧げ研究に没頭し。



「ロジャーのいねエ海はどうだ？　——おれ達を阻む壁はなくなった。今はお前の時代の様だな。『白ひげ』……」

「つまらぬエ事を言いに来たんなら今すぐ海に沈めるぞ、『金獅子』」  
 「ジハハハハ、相変わらずムカツク野郎で安心したぜ」

ロジャーに続き『最強』の名を冠する大海賊、己を配下に父と呼ばせる変わり者の大海賊。

唐突に姿を見せ、にやにやと嘲笑うような態度を見せるシキに、白ひげは苛立たしげに顔を歪め睨みつける。

息子達はただ黙って、父とその知人の話す姿を見守るほかにない。明確な敵とわかりきっていれど、口を挟むわけにはいかなかった

「——しばし姿を消そうと思う……生ぬるいこの時代に、本物の海賊の恐さを教えてやる」

「——また何か企む気だな……」

意味深に笑うシキに、己と関係などなくも、悍ましい計画を目論む様は不快だと白ひげは吐き捨てる。

と、不意にシキの視線が白ひげの隣に向く。

白ひげの旗揚げから常に傍に寄り添い続ける、『お袋さん』と呼ばれる女傑——雪豹

の耳と尾、鷹の翼を持つ天使がそこに立っていた。

「よオ、奥さん……………相変わらずゾツとするほどの別嬪だな。旦那はちゃんと満足させられてんのか」

「殺すぞ、クソガキ。毎日毎晩アツアツだわ」

「ジハハハハハ…!!!」

神々しいまでの美貌と、凜とした佇まいを見せる女傑だが、口からこぼれた言葉は荒々しく敵意に満ちている。

シキは向けられる殺気ものともせず、女傑の腕に抱かれる幼子を——女傑によく似た顔立ちの、白虎の天使の顔を覗き込む。

「……………そいつはお前らの娘か」

「見るな、汚れるわ」

「海賊の……………それも『白ひげ』と『白羽』の娘じゃ男を探すのにも苦労しそうだな。おれが貰ってやろうか」

「下らねエ事言つてると今ここで潰すぞ…!!?」

じつと見つめられ、怯えたように母の胸の中に逃れる幼子。

冗談なのか本気なのか、判断し難い態度で娘を欲しがらるシキに、白ひげと女傑両方から凄まじい殺気が——覇気が迸る。



バリバリバリツ！と大気を震わせ、天候すら歪ませるそれを真向から受けながら、シキはげらげらと下品に、平然としたまま嗤った。

「覚えておけよ、おれア欲しいと思つたら手段は選ばねエ……せいぜい大事に……金庫にでも入れて守っておくんだな。ジハハハハ……!!」

狂気に満ちた男の嗤い声は——幼子の心に深く刻まれ、しばらくの間、母の傍から離れなくさせた。

シキはその後、ある島を訪れた。

雲に届く程に高い標高を有する島、その上に広がる密林。

鬱蒼と茂る緑の大地には、見た事もないほど大きく、強く、恐ろしい生態を持つ怪物達が棲んでいた。

「Dr. インディゴ!!? 研究は進んだか」

「発見が一つ……ありまして」

眼下に広がる光景……無数の怪物達が闊歩し、時に激しくぶつかり合い、破壊を齎す様を心底愉しげに眺める。

己に必要な物。戦力、兵力、何よりも破壊力。

煩わしいものを跡形もなく消し去れる純粋な“力”が多く蔓延る景色に、狂喜が湧き

出していた。

「どうやらこの島、いくつかの植物によつてバランスが保たれている様で、いずれも地上にはない種の……………」

「早エ話だ、インディゴ!!? おれの計画が実を結ぶのに何年必要だ」

「そうですね…10…15…いや早くても…20年」

「…………よし…………」

にやり、とシキは嗤う。

長く、入念に、どれだけ金も労力もかけようとかまわぬ——己を否定したあの男に、そしてあの男が作り出したこの世界そのものに、復讐する為ならば。

「よかろう、計画発動は20年後だ!!! 地上に地獄を見せてやる!!!」

——そして20年の時が流れる——

## 第拾弍話 〃宣戦布告〃

はた、とシキの目が覚める。

長い長い、昔の夢を見た。現実世界においてはさほど時間が経っていないようだったが、それでも己の過去を一回りしてきたところだ。

二十年という時、決して短くない時間の中で関わったあの憎たらしい顔が蘇り、何とも言えない気分になる。

憤怒、悲嘆、喪失感、様々な感情が胸中に湧き、じわりと広がる。

しばらくの間シキは、玉座に身を預けたまま無言で虚空を見上げ続けていた。

するとそこへ、聞きなれた特徴的な足音が近づいてくる。

駆け寄ってきたDr. インディゴは、いつも通りの意味不明な動作で、声を無しにして何かを伝える……ようにしてふぎけるように踊る。

しばらくの間くるくると回り続ける部下に、やがてシキは静かに口を開いた。

「そうか、わかった……すぐ行く」

ツツコミもなく、ボケもなく。

おもむろに玉座から立ち上がった支配者は、きん、きん、と両足の刃を鳴らして何処

かへと立ち去る。

Dr. インディゴはきよんとした顔で立ち尽くし、しばらくして。

「通じた~~~~~!!!?」

かつ！と目を見開き、顎を全開にして、驚愕の咆哮を迸らせるのだった。

シキは、王宮の外側に降り立ち、目を細める。

極寒の冬空の下、兵士達に捕らわれる白虎の天使。

離れていても聞こえるほど、呼吸は荒く弱り切った姿は痛々しい。

続いて見やったのは、ぐるりと王宮の周りに正方形を描くように植えていた、毒の樹ダフトグリーン。

猛獣を寄せ付けないよう、しかし毒素が内部に流れ込まないよう入念に計算し植えられていたそれらに、何かが取り付けられている。

新館で繋がれたそれらは、間違いないく爆弾。全てのダフトグリーンの幹に巻かれ、後は起爆するのを待つだけの状態となっている。

天使の意図を瞬時に読み取り、シキはにやりと意地の悪い笑みを浮かべる。

「なるほど……………ダフトグリーンを焼き払って、ここを怪物共に襲わせようというの

か。おれに忠誠誓ったのはこの為か……」

「……ハナから、あんたが……私の言う事を……聞いてくれる……なんて………思っ  
ちやいなかつたからね」

がくがくと震えながら、息も絶え絶えに吐き捨てるエレノア。

緑の斑点が浮かぶ肌を晒し、それでもぎろりと、覇気に満ちた鋭い目で敵を睨みつけ  
る。

「私が『王』に見出した男はたった一人だ……!!! それを曲げる尻軽女だと思つたか  
………バカにしている……!!! そんな安いもんじやないんだよ……!!! この想いは………!!!」  
ずしり、と空気が重くなる。

左右からエレノアを押しさえつける兵士達の方が慄き、後退る程の圧を放つエレノア  
が、犬歯を剥き出しにして凄む。

絶対的な力を見せつけられ、毒に侵されてなお、敵に挑む意思を微塵も衰えさせてい  
なかつた。

「お前に私の『王』となる資格はない………舐めるなよ、小童」

その姿は——かつて出会ってきた女傑達と同じ。

海賊の王に付き従つた女、世界最強の妻となつた女、今代の皇の一角に寄り添つてい  
た女……今も世界のどこかで名を馳せる天使達と同じ目だ。

そんな少女の首をシキはがつと乱暴に掴み、自分の目の前に掲げる。途端に、エレノアの表情は苦悶に歪んだ。

「この樹が放つ強力な毒素は誤算だったか？」

「う……………ぐ……………!!!」

「海賊が故郷だの家族だの口にしちやアいけねエよ。そんなもんの為に足引つ張られちやあ世話ねエ…!!?」

首を絞められ、藻掻く天使を高く持ち上げながら、嘲笑う。

強く、気高く、しかし海賊として……………この弱肉強食の海で生きる上で根本的な部分で間違っている女傑の想いを、シキは踏み躪り穢す。

ぶんつ、と華奢で軽い体を放り投げる。真っ白な雪の中に倒れ込む前に、周囲から引き寄せた鉄の棒を降り注がせ、天使の全身を捕らえる。

鋼鉄の棒に手足と翼を挟まれ、義足を貫かれ、身動きの取れなくなった様は檻の中に捕らわれた鳥のよう。

しん、と静まった、病魔に侵される憐れな天使を一瞥し、シキは踵を返し歩き出した。「お前に総会が終わっても生きていられる悪運があつたら……………おれの道具として一生使つてやろう。生意気な女は嫌いじゃねエ、ジハハハハ……………!!!」

襖を開け、シキは大広間へ足を踏み入れる。

中には既に百人近い者達が……シキが各地から呼び寄せた猛者達が勢揃いしている。小物から大物、大勢の傘下を抱える実力者から個人で一騎当千の働きを見せる怪物。いずれも各地で悪名を轟かせ、人々に恐れられる海賊達だ。

そんな猛者達が見な、シキに対し首を垂れている。

悪逆非道の限りを尽くしてきた彼らでさえ逆らう意志を微塵も見せず、或いは巧妙に隠し、シキの前に集っていた。

「よく集まったな、野朗共……これよりおれの配下に収まつてもらおう為の契りの盃を交わしてもらおう。なお……裏切り者には容赦しねエのでそのつもりで」

「『オオオオツ!!』」

誰一人、シキに異を唱える者はいない。

逆らつても無駄である、そして逆らう気もない程に悪に焦がれ闇に身を墮とした彼らにとつて、シキと共に向かう事は名譽だった。

準備は整つた、戦力も手駒も集まつた。

後はそれらを携えて——目的地に向かい、解き放つだけだ。

「ギア出発だ!!! 惨劇の東の海へ!!!」

??

「ゴゴゴ……と雷鳴のように重い音を轟かせ、空に浮かぶ島が動く。

十数の島全てがゆっくりりと、隊列を組むようにして、ある方角へ真っ直ぐに進み出す。それらの行き先は確かめるまでもない、東の海だ。

「島が動き出したぞ……!!?」

「シキの奴め……おっ始める気だな!!?」

ピース・オブ・スパデイル号の甲板に乗り込み、セイバーとフィナモレが声を上げる。彼らのいる場所、シヤオ達の村の残骸が残る島だけが動いていない。計画に必要ないもの、そして邪魔になるエース達はこの空域に置き去りにするようだ。

今後、この島がどうなるのかはわからない。シキが能力を解除し、島の先住民達諸共海に沈められるかもしれない。

だが、現状エース達にできる事は一つしかない——元凶を叩き、奪われたものを奪い返す事だけだ。

「……うまくいくと思うか?」

「成功して御の字……岩に叩きつけられて死ぬか、お嬢を取り戻せなくて男として死ぬかだ。どっちが嫌だ?」

「答えるまでもねエ……!!!」

用意が完了した船とその周囲を見渡し、不安気に呟くオッサモンドにバリーが返し、



煽るように告げる。

火口湖に続く坂道、そこは今や改造され、真っ直ぐな線路ができています。その上に、一味の船は設置され、静かに時を待っていた。

船の後方にはありつたけの大量の爆薬が置かれ、不気味な沈黙を保つ。

空を飛ぶ手段のないエース達がひねり出した、最後の手段。

命懸けで、おそらくは一方通行になるであろう捨て身の方法を以てして、男達は再戦を望んでいた。

「本当に大丈夫か?!」

「やるしかねエ!!! そうだろう!!? エース!!!」

甲板に集まり、各々で欄干やマストにしがみつく仲間達。

あまりに無謀で無茶苦茶な方法に不安こそ抱けど、誰一人として退く気を見せない。矜持、意地、心配、攫われた仲間への、恩人への想いに突き動かされ、逃げず留まり続けていた。

そんな仲間達を一瞥し、エースは大きく頷く。

「ああ…!!? 行くぞ、野郎共!!!」

力強く答えた直後、船の後方で真っ赤な炎が噴き上がり。

ぼんっ!!!と、巨大で強力な爆発が生じ、船体を火口湖の坂に駆け上がらせる。

竜骨が地面を滑り、岩肌をがりがりと削り揺れる感触に苛まれながら——ピース・オブ・スパデル号は、夜の闇の中へ舞い上がった。

シキの王宮は、厳戒態勢が敷かれていた。

東の海へ攻め込む前の、杯を交わす式の真つ最中。可能性は低くとも、身の程知らずに襲撃する者が居ても即座に鎮圧できるよう、数十、数百名の部下達が寒空の下を巡回する。

そんな人間が現れるわけもなく、中には暇を持って余し欠伸をこぼす者もいる中……それは現れた。

天空に浮かぶ月に現れた、黒い点。

それは徐々に大きく、いや、王宮に凄まじい速度で接近し、我に返り咄嗟に身構えるシキの部下達の目の前に勢いよく落下する。

ずしん！と響き渡る轟音。

がりがりと庭を削り、停止した一隻の海賊船の前に、シキの部下達は騒然と、しかし容赦なく銃を構え、急ぎ取り囲んでいく。

「船で王宮に乗り付けて来やがった……!?」

「どいっのどいつだ!?!」

銃口を突き付け、沈黙する炎とスパードの意匠の船を睨む。

冷や汗を垂らし、徒党を組む彼らの目の前に。

立ち昇る土煙の中からゆらりと……二十の影が姿を見せ、見下ろした。

「知つての通り、東の海は『偉大なる航路』を含めた五つの海で最弱の海……死んで惜しまれる偉人もいねエ。思う存分暴れるがいい……『金獅子海賊団』結成だ!!!」

「!!!うおおおおお!!!」

杯を片手に、吠えるシキに合わせ傘下に入った海賊達も声を上げる。

既に、猛者達は戦に勝ったつもりになっていた。最弱の海を壊滅させるなど、幾多の破壊と殺戮を齎してきた彼らにとっては赤子の手を捻るようなもの。

目的地に着くまで宴を楽しみ、そして着いたら力の限り暴れるだけ。

そんな単純な仕事なのだから。

シキもまた、憂う事は何も無いとばかりに杯に注いだ酒を煽ろうとして……突如、駆け込んできた一人の部下に気付き、顔を顰める。

「……………てめエ、何だ。こんな時に」

「申し訳ありません!!? 至急、お耳に入れたい事が!!!」

大広間に飛び込んできた部下は、息を切らせながら指揮の傍により、耳元に口を寄せ

報告する。

シキは訝し気に眉を顰めつつそれを聞き、やがてさらに困惑の表情を浮かべた。

「19と1匹……？ さつさと討ち取らねエか」

「それが……!!」

己の部下の分際で情けない、その程度の襲撃、勝手に片付けられぬものか。そう言いあげなシキに、部下が改めて説明をしようとした時だった。

——斬！

外に通じる大広間の襖に無数の光の線が走り、次いでばらばらに吹き飛ぶ。

その奥から……いくつもの黒い人影が姿を見せる。

どよどよと傘下の海賊達から困惑の声が上がリ、思わず腰を浮かせる前で、残る襖も斬り裂かれ、蹴り破られ、強引に開かれる。

外から差す真つ白な月光に照らされながら、二重の影——ドレスコードに身を包んだ男達が、ゆつくりと広間の中へ入る。

黒髪と鍛え上げられた肢体を礼服と外套で包んだ青年に率いられ……スピード海賊団はシキの前に並び立った。

「お前らだったか…!!? こりやあ驚いた…!!?」

自身の前に勢揃いした一味を前に、シキがわざとらしく目を丸くする。

多少、本当に驚いてはいた。圧倒的な力を見せつけ、未熟な若僧どもを叩きのめし、心を折ってやつたつもりだったのだ。

もう立ち上がる気力も失くなっているものと思い、再び挑みに来るなど予想できずにいた。

「東の海を襲うんだって……?」

「まあな…:そういうやお前さん、弟がいるんだったな。さぞ心配だろう…:」

「いやア、大した事ねエ……:あいつも海賊を目指す男だ。ちよつとやそつとくらしいの困難、乗り越えて貰わねエとな。おれがいつまでも守るわけにやいかねエ…:」

「そうかい、弟想いのいい兄貴だな」

は、とエースの答えをシキは鼻で笑う。

家族だの兄弟だの、海賊らしからぬ生温い関係性を見せられても、シキにとっては吐気しか感じない。

あの天使と同じく、そんな物の為に命を張るなど、彼には愚かとしか言いようがなかった。

「エレノアは無事か」

「あア……びんびんしてる」

にやり、とシキが嗤つて告げると、周囲から含み笑いが漏れる。

この場にいる傘下の全員が、何が起こったのかを理解し、それを知らないエース達を嘲笑い、小馬鹿にする。

悍ましい空気が流れる中、エース達は冷静そのものだった。

「ジハハハハ……!!! 物騒なナリしてるが……まさかたつたそれだけでこれを相手にするつもりじゃあるめエな!!!」

「……………」

「我が身を犠牲にすりゃ、惚れた男を守れると自ら下る女と……共に散りに来た無謀な特攻隊か……!!? そうやってつまらねエプライド守って、意気がって、最期にや野垂れ死んだバカな若者を、おれア飽きるほど見て来たぜ」

げらげらと上がる哄笑。大広間中から悪意に満ちた嗤い声上がり、耳障りな不協和音となってスピード海賊団を包む。

挑発か、哀れみか、一人の為に命を捨てた愚か者達に嗤し立てる。

だが不意にその中に……青年の声も混じる。

くつくつと声を漏らし、肩を揺らす黒髪の青年に、シキは嗤うのを止め、訝し気に眉を顰めた。

「バカだな、てめエは……」

「……あ？」

「一人犠牲になつた？ 違う!!? ……あいつは死にに來たんじゃねエ、先陣切つてここに戦いに來ただけだ」

語り出したエースに、シキは何を言っているのかと険しい顔になる。

見れば、エースに並び立つ他の者達も、それぞれ笑みを浮かべている。

呆れるように、嘆くように、各々で彼女に対する思いを抱えながら、それでも誰一人怒りや苛立ちを見せずシキ達を見返す。

「オヤジも手を焼くはねつかえりだからなア……アイツは。根っこはただのか弱い女のくせに、意地と根性で無理矢理威勢を張つて、何を相手にしても退かねエで……!! おれがどんな思ひしたかも知らずに、ムチャばかりしやがって……!!」

「……何を言つてやがる」

「だからこそ……おれア……おれ達、家族はあいつの想いに答えなきやならねエ!!! その為に……お前が邪魔だ……!!!」

ぎろり、と鋭い目でエースがシキを睨みつける。

人数も、火力も、持ち得る何もかもが劣り圧倒的に不利な状況にある筈なのに、まるで死んでいるように見えないその目に。

シキは何故か——己の魂がざわりと騒ぐのを感じた。

「覚悟しろよ、*金獅子*のシキ……!!!」

エースが片手を上げると、仲間達が動く。

肩に担ぎ、背負い、持ち込んだ大砲や銃の砲口を目の前の敵全員に突き付ける。

慄き、絶句する海賊達に向けて、若き海賊団はかつと目を見開き咆哮する。

「!!!!!!!!!!——おれ達が本隊だ!!!」

そう叫んだ直後、無数の爆音が響き渡り、大広間が盛大に炎に包まれる。

スピード海賊団全員が持ち込んだ、大量の火器類。

大砲、バスーカ乱射砲、ガトリング機関砲、バルカン擲弾砲、ランチャー狙撃銃、ライフル小銃、ピストルありつたけ掻き集めた重火器が一斉

に火を噴く。

本来剣や槍を得物として使う者、さらにはエースとコタツも重火器を担ぎ、狙いなど一切つけず引き金を引きまくる。

畳が爆ぜ、吹き飛び、シキの傘下となった海賊達に容赦なく襲い掛かる。

旗揚げの折、武装を一時的に解いて集まっていた彼らには咄嗟に反撃する用意がなく、襲い掛かる火の雨霰から逃れるより他にない。



あつという間に宴の席は滅茶苦茶に、海賊達は一時避難し散り散りになる。その様をシキは鬼の形相で睨み、ただ立ち尽くすだけとなっていた。

## 第拾参話 “仁義激突（ブレイクアウト）”

唐突に、砲撃の雨は止む。

かちかちと乾いた音を立てる引き金を確かめ、ウブロが担いでいた擲弾砲を放り捨てる。

「弾切れか……………」

「だが、まだまだ残つてやがんな」

「挨拶がわりだ、これで十分だろ」

ウブロを皮切りに、他の者達も重火器を捨て、本来の得物に手をかける。

この時の為に、研ぎ直してきた剣を手にしてセイバーが眩き、前を見据える。

砲撃に巻き込まれ、幾人かの海賊達は既に倒れた。しかし逃げていた他の海賊達が徐々に戻り、エース達の包囲網を作り出す。

「し…侵入者共を討ち取れエ!!!」

「!!!」

「!!!」

雄叫びと共に向かってくる海賊達。

しかし、エースは向かってくる彼らを一瞥もせず、片手で生み出した炎の燕を飛ばし難なく撃退する。

「先生!!? ウオレス!! コタツ!! エレノアを探せ!!?」

「はい!!?」

「わかりました」

「ニヤーン!!?」

傍らにいた二人と愛猫に呼びかけ、走らせる。

搜索能力に秀でたコタツを筆頭に、彼らが大急ぎで大広間から出て行くのを横目に、エースはずんずんと前だけを——仇敵の姿だけを視界に捉えて進む。

「ためエ…エレノアに…!!! おれの惚れた女に何しやがったア!!!」

ぼっ!と両足に業火を生み、宙へと跳躍する。

そしてその勢いのまま、右の拳にも真つ赤な炎を纏わせ、シキの顔面へ叩き込む。

渾身の一撃が炸裂し、しかしシキは能力で自身を浮かせ、どこかへ飛び出す。

すかさず後を追うエースの前にDr. インディゴとスカーレットが立ち塞がるが、彼らの前にも一人ずつ仲間が立ち塞がり、妨害を阻んだ。

「いっつてくだせエ、エース!!!」

「道を開ける、この野郎が!!!」

振り下ろされるDr. インディゴの剣をスカルが鉈を手に防ぎ、拳を振り上げたスカーレットをデュースが蹴り飛ばす。

火花を散らす彼らの作った道を抜け、エースは宙を貫き進む。

「頼む!!」

仲間達の無言の応援を背に、エースはシキの、逃してはならない最悪の存在の後を追った。

——鉄棒の檻の中、ぐったりと天を仰ぎ沈黙するエレノア。

じわじわと広がる体中の緑の斑点。毒に侵され、徐々に呼吸も苦しくなってくる極寒の世界で……それでもまだ、意識を保ち続ける。

ふと彼女の視界で、黄色い閃光が弾ける。

うつすらと瞼を開けてそちらを見やれば、自身を監視していた兵士が黒焦げで倒れ、気絶している様が眼に映る。

その中心で佇む、雷撃鳥エレキがエレノアを見つけ、嬉しそうに一言鳴いた。

「……やア、よく来たね……」

ふっ、と力なく笑みを浮かべるエレノアに、雷撃鳥は心配そうに顔を歪めて近づく。大丈夫?とその顔は尋ねている。

「大丈夫……へーきへーき……それよりさ……頼みたい事があるんだよ……」

ぱちぱちと眩しく放電する巨鳥を見上げ、エレノアは一言、頼む。

脳裏に浮かんだ危険な賭け。自信が危うくなるのは間違いないも……今頃王宮に近しかけている仲間達の助けになる作戦に、にやりと不敵に笑いながら。

戸惑いの表情を浮かべる雷撃鳥だったが、やがて『任せろ』というように強く頷いてみせた。

「グルルルル……!!?」

「くそつ……どこにいるんです、お嬢……!!? あいつらの様子から考えるに、何かしでかして捕まってると思っただが……」

コタツを先頭に、王宮内を走るミハールとウオレス。

途中で遭遇した兵士をミハールがいつも通りどこからともなく狙撃し、ウオレスが近づき排除する。

なるべく静かにエレノアを探し進む一同だったが、未だ見つけられずにいた。

「コタツ、ニオイでわかりませんか?」

「グルルル……ニヤーン」

「ダメっほいな……ほんのりダフトグリーンにニオイが紛れてる。コイツの所為ですか

……!!?」

頼みの綱であるコタツの嗅覚。しかし、空气中に混じるダフトグリーン of 強烈な臭いが、エレノアの匂いを覆い隠してしまっているらしい。

どうしたものか、と頭を抱える男達。

その時、ミハールの声がウオレス達の意識を引き戻した。

「コタツ!!! ウオレスさん!! あそこ!!! あそこです!!!」

「何っ?!!」

「グルッ!!!」

何かを見つけた様子 of 声に、咄嗟に辺りを見渡すウオレスとコタツ。

するとやがて、王宮の外、敷地の境目付近で輝く何かに……見覚えのある巨鳥 of 姿に気が付き、すぐさまミハールと共に王宮の外壁から飛び降りる。

ダフトグリーンらしき植物 of 壁。その中で輝くのは、孔雀らしき大きな尾羽を広げた鳥……雷撃鳥。雷光を放ち、何やらじつとしている。

その前で檻のようなものに捕らわれたエレノアの姿を目にし、二人は顔を顰める。

「あれは……何を」

ミハールが困惑 of 眩きをこぼした、その時。

雷を纏った雷撃鳥 of 嘴が足元に繋げられた導火線にぶつけられ、火がつく。孔雀はす

ぐさまその場から飛び立ち、ミハールの射程範囲から離れていく。

何を、とミハールが訝しみながらも、エレノアの元へ急ごうとダフトグリーンの間を抜けた時。

毒の樹の幹に巻きつけられた、無数の爆薬に思わず「え？」と声が漏れる。

そして次の瞬間、かつーと眩い光が迸り、次いで真つ赤な炎が辺りに撒き散らされ、続いて爆音が辺りに轟き渡る。

ウオレスとミハール、コタツは爆風で吹き飛ばされ、遠く吹き飛ばされ雪の中に埋まる。痛みで呻きながら、頭を振り辺りを見渡した。

「うごごごご……!!? な、何が起こったんで……!!?」

「ニヤーン……」

ぎこちなく周りに目をやれば、焼け焦げた地面が広く視界に映る。

そして何よりも……王宮の外を彩っていた毒の樹が、根元から押し折れなくなっている事に、一同は驚きで目を瞠る。

「ダフトグリーンが根こそぎ吹っ飛んで……まさかお嬢、このために……」

「ニヤーン!!?」

「!!??　そこか!!?　待つててください、お嬢!!!」

あの爆薬は、孔雀は、そして一人シキのもとに下ったエレノアはこれを計画していたのか。真相に気付き、息を呑んだ彼らは、同じく吹き飛んだエレノアの姿を見つけ、傍に駆け寄った。

「この痣…!!?　まずいですね、シャオさんのお婆様と同じです。治療してあげないと……」

エレノアの肌に浮かんだ緑の斑点に、険しい顔で唸るミハール。

とにかく、探し人は見つかった。こんな極寒の空の下では治療もままならない、とウオレスがエレノアを担ぐ。

——その瞬間、彼らは耳にする。

どこからともなく響いてくる、大地を揺らす無数の足音に。

「(こいつア………」

「まさか………」

びくつ、と肩を上下させて固まったミハールとウオレス、コタツ。

ぎぎぎ、と壊れた人形のように歪に、ゆつくりと振り向いた彼らは、その光景を目撃する。

王宮めがけて突っ込んでくる、島に住まう最恐の怪物達の軍勢を。



「うおわああああああ!!」

まるで、毒の樹を使つて散々利用され、押さえつけられた鬱憤を晴らすが如く、次々に壁に突つ込み王宮内へ乗り込んでくる巨体の持ち主達。

地震のような揺れの中、一同は必死の形相でエレノアを担ぎ、その場を後にするのだつた。

怪物達の進撃は、海賊達にとつても悪夢となつた。

シキの計略により押さえられていたはずの戦力が、一人の天使の尽力により枷から解き放たれ、暴れ回る。

咆哮が轟き、地面は踏み荒らされ、王宮内はみるみる破壊されていく。

命を弄んだ愚かな人間達へ天罰を下すかのように、怒り狂つた怪物達が無慈悲な蹂躪を齎した。

どごおん!と、王宮のあちこちから爆音と破砕音が聞こえる。

どこもかしこも混乱に陥り、しかしお陰で天使が拘束から抜け出し逃げている事に誰も気づいていない。

僅かに余裕を取り戻したミハールは、ウォレスの背のエレノアを簡単に診察し顔を顰

めた。

「どうです、先生……!?」

「かなり危険ですね……：……ようやく呼吸しているような状態です。一刻も早く治療をしなれば」

廊下を走り、庭を飛び越え、一時的にでも安全な場所を探す一同。エース達が全て片付けるのを待っていては、間に合わなくなるかもしれない。

その時、ミハールがはつとした顔で顔を上げた。

「そういえばあの時、シャオはバアさんのダフト病を治す為にIQとかいう花を探してましたね……」

「それだ!!?　そしてこの島の生物を怪物に進化させた薬『SIQ』の材料もIQだったはず!!」

「そいつをシキの奴が独占しているという事は……!!?」

「王宮のどこかに大量にあるはず!!」

希望が見えた、と目を輝かせた二人が速度を上げようとした時。

全速力で庭を駆けていた彼らの目の前に突如、巨大な岩の塊が落下し、進路を塞いだ。  
「わ~~~~っ!!?」

驚愕に声を上げ、停止するミハールとウオレス。急な動作だったが、何とか背中の中のエ

レノアを落とす事なく、ざざざと目の前の大岩からも距離を取る。

同じく圧死を逃れたコタツは、不意にきつと空を見上げ——そこに浮かぶ仇敵に向け、低い声で唸り始めた。

「グルルルルル……!!」

「どうしました、コタツ………つてシキ!!!」

「くつ……!!? この忙しい時に……!!?」

「やつてくれたな、小娘………よほど死にたいらしい」

びきびきと顔中に血管を浮き立たせ、凄まじい覇気を全員から放ちながらシキが告げる。

偽りの忠誠を誓われ、計画を台なしにされた上、若僧に殴り飛ばされ恥辱を味わい、王宮まで滅茶苦茶に破壊された。

虚仮にされる、という段階をとうに超えた散々な状況に、老人は憤怒と憎悪に燃えていた。

「絶望のうちに死ね!!!」獅子威し・御所地巻き!!!」

「ギャー!!!」

「ニヤーン!!!」

シキの能力により、辺りを舞い散る雪が動く。

そこから中から集められた大量の雪が一つとなり、巨大な獅子の貌を作って咆哮し、ミハール達とエレノアに襲い掛かる。

絶体絶命、せつかく助けたのにここまでか……そう思われた瞬間だった。

「『螢火』……『火達磨』!!!」

ぼほぼほぼほっ！

不意に、雪獅子の周囲に舞い上がった螢のような光。

それらが無数に集まり、一斉に弾け、最後は巨大な爆発となって雪獅子を吹き飛ばし、霧散させる。

炎の連鎖爆発から寸前で逃れたシキは、目下を睨みつけ眉間に皺を寄せた。

「まだ足掻くか、小僧………」

そこに立つ、炎の男。

エレノアと仲間達を背に庇い、シキに勝るとも劣らぬ覇気を迸らせる。

礼服を燃やし、鍛え上げられた上半身を晒し、背に刻んだ偉大なる父の海賊旗を見せつけながら……エースは背後の天使に笑いかけた。

「エレノア……あいつをブツ潰して、みんなで帰るぞ」

「……………うん」

ウオレスの背から、微かに聞こえる肯定の声。

エースはそれだけで満足気に笑い、すぐに険しい表情で頭上の老人を見上げ、炎の温度を数段階上げる。

決して自分の背後へは行かせない、そんな覚悟を示すように。

「ここは任せろ。エレノアを頼む」

「おう!!!」

「わかりました…!!?」

「どこに逃げようと、皆殺しの運命に変わりはない………ここがおれのシマである限りな」

走り出すミハール達を追わんと、シキが片手を上げて再び雪の獅子を生み出し、大岩を浮かばせ弾丸のように射出する。

しかしそれらはエースの放った火炎によつて粉碎され、逆にシキに熱波が襲い掛かる。

「おれ達の運命を………てめエが決めんじゃねエ!!!」  
 「炎戒・炎天華」!!!」

空気を焼き、周囲を赤く染め、エースの炎がシキを狙う。

是が非でも仲間の後を追わせない、愛した女の元へ行かせまいと凄む青年に、シキは嗜虐心に溢れた不気味な笑みを湛えた。

「東の海には行かせねエ!!!」

「いいぞ……その希望!!? 今、絶望に変えてやる!!!」

『——とにかくIQです!! 毒にやられたお嬢さんを助けるには、IQが必要ですよ!!  
こっちは先にお嬢さんを逃がしますんで、そっちは解毒剤を探し脱してください!!!』

「わかった……!! 氣イ付けろよ!!!」

電伝虫で入ったミハール達からの連絡に、思わずフィナモレは顔を顰める。

目的は果たした……が、新たな問題の浮上に不機嫌な唸り声が漏れる。攫うわ毒を撒き散らすわ、どこまでも邪魔をするシキに、苛立ちが募るばかりだ。

「とは言ったものの……一体どこを探しやいいのか」

「ああ……」

「……!! おい、あれ見ろ」

がしがしと頭を掻き、考え込んでいたフィナモレとレオネロにセイバーが呼びかける。  
る。

つられてフィナモレが振り向くと、確かに気になる者が視界に映り、二人は訝しげな目でそれを凝視する。

無数の箱が並ぶ部屋、薬品らしき便が幾つも入ったそれを持ち、どこかへ逃げる男達。その手に生えた羽根に既視感を覚え、フィナモレ達は息を殺して様子を窺う。

「あの腕の羽根……シヤオと同じだな」

「海賊じゃねエようだな……ほつといてもよさそうだ」

去つていく彼らの背を見送り、意識を逸らしかけた時。

セイバーがぎよつと目を見開き、男達が手に持っている物を凝視し息を呑む。

「つてちよつと待て。あの植物……IQじゃねエのか？」

シヤオを村まで送り届ける間、ずっと彼女が握り締めていた一輪の花。

それと全く同じものが、男達の手に大事そうに抱えられ、運び出されている。一輪見

つけるだけでもシヤオが死にかけたというのに、あんなにも大量にあるとは。

「なるほど……ここがIQの研究を行っていた施設というわけか」

「じゃあ、ここに解毒剤があるつて事だな!!？ ……で、どれだ？」

足音が聞こえなくなつてから、フィナモレ達は男達が出て行つた部屋へと入る。

確かに、解毒剤などいくらでも作れそうなほど薬が揃っている……どれがどの種類

で、どれが薬か毒なのかさえわかればだが。

「仕方ねエ、片っ端から持つて——」

専門知識のない彼らには、判断などしようがない。

その辺りはデユースやミハールに任せよう、と手あたり次第に持つて行こうとした時。

放屁のような足音を放つ一人の男が、彼らの目の目前に近づき立ち塞がる。

青い髪に道化の化粧をしたその男に、フィナモレ達は慄きつつ、男から漂う鼻に刺さる臭いに咄嗟に身構える。

「……………薬品の匂いが漂ってくるな。お前、科学者だろ」

「ああ!!? とびつきり優秀のなア!!!」

「そうか……だつたら話が早エ!!? ダフトグリーン<sup>①</sup>の毒素に効く薬を出せ!!!」

三叉槍を手にはレオネロが吠え、切先を突き付ける。

すると、Dr. インディゴはにやにやと馬鹿にしたような笑みを浮かべ、懐から小瓶を取り出した。

「ピロピロピロ…!!! 誰が渡すかバカ者!!! これの事だろ? 応急用にいつも持ち歩いていからなア!!!」

「ほー……………ありがとうよ、親切に見せてくれて」

ゆらゆらと小瓶の中の液体を揺らし、取れるものなら取ってみるとばかりに見せつけるDr. インディゴ。

そんな彼の後に続くように、暗闇の中に鬼火が灯る。

怪しく光る炎を眼孔から漏らしながら、髑髏の仮面を被った男が鉈を引きずり姿を現す。



「スカル……!!」

「寄越さねエなら力尽くで奪うまでよ……!!」

「奪うだとオ……!!? この弱小海賊の馬の骨がア……!!」

強烈な殺気を互いに放ち、道化と髑髏が刃を携え、ぶつかり合った。

## 第拾肆話 “大乱闘”

グオオオオオ!!

咆哮を上げ、双方向から向かってくる獅子達。

強面の貌に唐草模様の將軍獅子と、ふくよかながら力強い突進を向けてくる肥満獅子ファットライオンが牙を剥き出しにして迫り来る。

「バンバレット爆裂砲弾”!!!”

彼らを見据え、アギー68が砲弾を放って眼前で凄まじい爆発を起こす。

獅子達は衝撃で吹き飛び、周囲の海賊と兵士を巻き込みながら宙を舞う。彼らは血反吐と共に煙を吐き、ずしん、と地面に横たわった。

「狙い撃つのみ…!! “徹甲弾”!!!”

クーカイが放った弾丸が襟巻と角の生えた恐竜の土手つ腹に炸裂。鋼とほぼ同等の硬度を誇る鱗を貫き、エリマキトカゲブス襟巻角竜をその場に沈める。

クーカイの後ろには、同じようにして倒れた怪物達が何体も積み重なっていた。

「ぬう……………うらららららららららア!!!”

「ほオオ…あたアアアア!!!”

触手の先にそれぞれ硬い槌を備えた大槌磯巾着と拳闘人鳥が無数の拳撃を受けて倒れる。

ダッキー・ブリーとドギヤ、格闘家の二人組が目の前に立ちはだかつてくる怪物を一時で昏倒させ、次々に勝利を重ねていく。

その反対側では、自慢の爪を振るうバリーと剣士コーネリアが刃を翻す。

バリーと切り合う大鎌を持った辻斬鼬とやたら俊敏に動く功夫斑点蛙は、数度の激突により難なく斃されていく。

「ルーキーをナメんなよ!!!」

次々に、際限なく襲い来る怪物達を相手に、誰一人として恐れない。退かない。

真正面から、時に闇に乗じて、そして敵を巻き添えにしながら。破壊と殺戮を齎す怪物達を仕留め、敵同士で潰しあうように誘導する。

「調子に乗ってんじやないよ!!! 守婦の供!!! 『百金武』!!!」

バンシーもまた近くにいた怪物達を叩きのめし、最後の一体である糞燃蠅と相対する。

無数の金棒を交差上に投げつけ、きながら蠅叩きのようにして壁に叩きつけ、あつという間にのしてしまう。

ふう、と息を吐き、汗を拭うバンシー。

連戦で流石に疲弊した彼女の背後に、突如スーツを着た巨獣がずしんと降り立った。  
「…ウホ♡」

サンガラスの下から覗かせた目を、ハートの形に変えて。

「うらアアアアアア!!!」

どがん!と鉦を振り抜いたスカルによって、D r. インディゴが外の端の上に押し出される。

扉の破片を撒き散らしながら、D r. インディゴは刀を捨て、掌の上に緑色に光る火の玉を生み出し、ポンポンと弄び出す。

「ケミカルジャグリング!!!」

妖しく光るそれらを幾つも宙に並べ、スカルめがけて銃弾のように撃ち出す。

一発、二発は斬り捨て、躲したスカルだったが、続けざまに襲い掛かれては捌ききれず、やがて数発を喰らって爆炎に呑み込まれる。

黒煙に包まれる様に、道化の嘲笑が響き渡る。

「ピロピロピロピロ……!!! どうだ、ケミカルジャグリング」の威力は……

ぬっ!!?」

「曲芸に付き合ってるヒマはねエんだよ……!!?」

黒煙の中から、微かに体を焦がしただけのスカルの姿が浮かび上がり、D r. イン  
 デイゴは顔を顰める。髑髏に宿る鬼火は、未だ健在のまま煌々と光っていた。

「なにを~~~~~!!?! マス・ジャグリング~~~~~!!?!」

掌の火の玉を頭上で集め、巨大な一つの火炎へ変える。激昂したD r. インデイゴは  
 それを渾身の力で投げ飛ばし、スカルに正面から命中させ業火に包む。

化学反応によって生み出された特殊な炎が髑髏の男を今度こそ焼き尽くす……そう  
 思われた瞬間。

轟々と燃え盛る炎の中に、悍ましい髑髏が再度浮かび上がる……それも、幾つも。

「『奇々怪々』……」

「!!?!」

「『髑髏地獄絵図・大叫喚』……!!?!」

炎を散らし、いや、呑み込んで、姿を現す無数の悍ましい髑髏達。

げたげたと嗤う、地獄に堕ちた罪人達を周囲に従え、爛々と光る鬼火をさらに大きく  
 燃やしてスカルが鉈を鳴らす。

その姿は、まるでこの世ならざる者、冥界から這い上がってきた地獄の死者のようだ。

「のわ~~~~~!!?!」

「お前さんが犯した罪は二つだ……一つはおれ達を騙して、おれ達に受けた恩を仇

で返した事……そしておれ達からお嬢を奪った事……!!!」

悲鳴を上げ、眼を跳び出させるDr. インディゴに、怨念を籠めた恐ろしい声で告げるスカル。がたがたと震える罪人に、凄まじい殺気を伴って宣告する。

「地獄の閻魔様に代わって——おれがためエを裁くぜ」

「ひイツ!!? く……来るな!!? 来るな来るな来るなア!!!」

恐慌状態に陥ったDr. インディゴは、ありつたけの薬品を投入しより大きく危険な極彩色の炎を頭上に生み出す。自身をも巻き込みかねない大爆発を生じる一撃だが、もはや彼に落ち着く暇などない。

慌て、怯える科学者を睨みつけ、スカルは全身に怨念を纏わせたまま走り出す。

「ケミカル」

「くくく 吼吼・ずいあつしよおとし 随意圧処墮!!!」

道化の一撃が炸裂する寸前、スカルの斬撃が襲う。

ただ斬るのではない、肉を削り削ぎ落とす悍ましき刑罰をその身に食らい、Dr. インディゴは白目を剥いて悶絶し、空高く撥ね上げられる。

狂気の科学者は恐怖に苛まれたまま、自身が生み出した極彩色の炎に吞まれ、大爆発の中に消え去った。

「……………うん、今さら……………本当にマジで今更だけど、あいつしつかりおれ達の仲間だよ

な」

「あア……今聞いても否定すんのかな」

「キア……」

決着を見届けたフィナモレ達は、スカルの自負する立場の事を思い出し、目を見合わせる。自称・情報屋は、果たしていつまでそれを誇示し続けるのだろうか。

「ほれ!!? 解毒剤だ!!?」

「悪い、助かった!!?」

やがて、駆け寄ってきたスカルがいつの間にか奪つたらしい薬の瓶をフィナモレ達に投げ渡す。

大事なそれを片く握りしめ、男達は仲間達と合流すべく、激戦止まぬ王城を再び走つた。

「ようやく少し片付いたかね……!!?」

「……つたく、きりがねエな」

ズズン、と倒れ込む巨虫・戦車蜘蛛スパイダータンクを足蹴にし、デュースが息を整え呟く。

その隣の困憊雷竜ブロッキースカウルスを仕留めたキメルも、肩で息をし杖にしがみついている。戦いが始

まってもう随分経つ、仕方がない事だった。

「…!! おい、あれ見ろ!!」

ふと、仕留めた深山皇帝ミヤマエンペラーの上で天を仰いでいたガンリユウが声を上げ、頭上を指差す。デューズとキメルが指された方を…：叩く聳え立つ塔の頂上を見上げると、確かに何か動いているのが見えた。

目を凝らせばそれは、どこぞの大猿のように尖塔にしがみつくとスカーレットと、その手に捕まるバンシーだとわかる。

「ウホ♡ ウホホ、ウホ♡」

「はア!!? まさかあいつ、オバちゃんを番にでもする気なのか!!?」

目をハートマークにし、唇をバンシーに近づけ酒らえているスカーレット。

言っている言葉はわからずとも、行為と表情で大体の勘定を察したデューズ達は、驚愕と怒りで一斉に声を荒げた。

「「見境なしかてめエは!!」」

「どういう意味だい!!?」

望んだ反応ではなかったのだろう、バンシーが真下のデューズ達を睨みつけて吠える。若くはなく、美人でもないと自覚しつつも、そういう扱いは気に入らないようだ。

「このエロゴリラが…!!! うちの紅一点を奪いたきや、相応の覚悟を決めやがれ!!!」

「…あ、でも最終的には本人の希望に任せます!!」



「余計なお世話だよ!!!」

「そりやあなア!! 海賊が幸せな結婚を望んじやいけねエのはわかってる!!! だがなア………てめエらみてエな屑を拒む権利は誰にでもあるんだよ!!!」

バンシーからの怒号混じりの突っ込みを受けつつ、デュースが尖塔の内部の階段を駆け上がる。

紅一点の唇が奪われる前に、本人の尊厳を奪われる前に、疲弊した身体に鞭打ち、凄まじい速さで党の最上階まで辿り着き、スカーレットの前まで跳躍する。

「おばちゃんを離しな!! フアンクラリアット 牙狼腕鎌”!!!」

「ウホオ~~~~!!!」

出会い頭に、大猿の首に鍛え上げた腕を鎌のように叩き込む。

スカーレットは苦悶の声を上げ、衝撃でバンシーを手放し宙へと放り出す。その首に組み付きながら、デュースは真下に向けて叫んだ。

「キメル、頼む!!!」

「おっしや!! ……ふんっ!!!」

遙か頭上から落ちてくるバンシーを、下に控えていたキメルが跳躍して受け止める。衝撃を緩和し、さらにガンリユウが二人を受け止める。

無事にバンシーが救出された事を確認し、デュースはスカーレットの首から離れる。

恋敵を振り払い、怒りを露わにする野獣に、デュースは改めて鋭い目を向ける。

「大体よオ……てめエら、女の口説き方がなっちやいねエ。力尽くで攫うわ、脅して言う事を聞かせるわ、拳句の果てに徒党を組んで痛めつけるたア……!! 男の風上にも置けねエ奴等だ!!」

「ウホオオオ……!!」

「そんな屑共に……!! エレノア嬢ちゃんは渡さねエ!! くらいやがれエ!!?」

雄叫びと共に振るわれる拳。自身を叩き潰そうと迫り来るそれを、デュースは身を屈めて交わし、懐に入り込み、背後に回る。

自身を見失い、戸惑うスカーレットの腰を抱え、渾身の力で跳躍する。

「『<sup>コング・バスター</sup>猿王大落下』!!!」

空中で反転し、さらなる上空から尖塔の頂上めがけて真つ逆さまに落下を始めるデュースとスカーレット。

慌て、慄くスカーレットの顔面に屋根の先端が激突し、そのまま塔を破壊しながら地上に向かい、ずどん!と凄まじい衝撃が走る。

ガラガラと降り注ぐ瓦礫の中、デュースは沈黙したスカーレットを見下ろし、ふつと不敵な笑みを浮かべてみせた。

「——男なら、黙って背中まで口説いてみせる。……なんてな」

くるりと背を向け、颯爽と歩き出そうとしたデユース。

その肩にぼん、と。

につこり笑ったまま額に血管を浮き立たせたバンシーが手を置き、引き留めた。

「おかえり、デユース。……とりあえず、あんたも一発喰らうときな」

「え〜〜っ!!?」

目を剥き叫んだデユースに、バンシーの平手が炸裂する。

先に一撃を食らったキメルとガンリユウと共に、彼も仲良く地面に倒れ伏す羽目になった。

吹雪の止まぬ王宮内を、ウオレスがエレノアを担いで走る。

そのすぐそばを、合流したスカル達が盾となるように寄り添い走る。二度と奪われまいとした、嚴重な護衛陣だ。

「とにかく、エレノアさんの安全が第一です。くれぐれも誰かに見つかって戦闘になどならないように!」

「グルルルル…!!?」

「わかってるぜ、先生!! もうここに用はねエ!!」

ミハールはまたしても姿を消し、どこからともなく狙撃して先んじて敵を排除し、逃

走路を確保する。この混乱だ、態々捕らえに来る余裕はあるまい。

あとともうスパイデル号まで駆け戻り、船長の勝利宣言を聞くだけだ——最も、それが最も困難な役目であるのは確かだが。

「…薬が効いてきたのか、呼吸が穏やかになって来たな。何よりだ…!!」

「だがこんな所じゃ休めやしねエ。さっさと船に戻ろう」

「ああ!! 脱出の準備もしなきゃならねエ!!」

奪った解毒剤を投与し、しばらく。荒かったエレノアの呼吸も、多少ではあるが落ち着き始めているのがわかり、男達はほっと安堵の息を吐く。

その時、ウオレスの背から呻き声が聞こえ、はっと一同が視線を向けた。

「……………先生、ちよつと…待って…………」

「!!? よかった、目を覚ましたんですね。……………心配しましたよ、全く」

「にやはは……………手間をかけたねエ…」

ウオレスがほっと安堵の息を吐き、笑みを浮かべる。

年上に見えてまだまだ若い強面の顔が緩むのを見て、エレノアはまだ苦痛の滲んだ顔で苦笑する。

やがて、天使の顔が次第に罪悪感で歪むのを見て、男達はぐつと息を呑んだ。

「足手纏いになって……………ぐめ…」

「エレノアさん。私達が欲しいのはそんな言葉じゃありませんよ」

その言葉を発する直前、どこからともなくミハールが告げる。

エレノアは目を見開くと、何かを逡巡するように唇を噛み締め、ウオレスの背に顔を埋める。

静まり返った一同の中で、小さな眩きが漏れ聞こえる。

「デューズ、スカル、フィナモレ、ドギヤ、アギー、キメル、セイバー、ミハール、コタツ、バンシー、オッサモンド、ウブロ、バリー、レオネロ、ダツキー、ウオレス、クイ、コーネリア、ガンリユウ……エース」

この場を感じる、皆の気配。

父の気配は感じられない……こんな事態、来ないはずがないのに。という事は、彼らは父や兄達の助けも借りぬまま、この場へ来てくれたという事になる。

その無謀に、深い想いに、愛に——自然とエレノアの目には涙が滲んでいた。

「……ありがとう……!!」

返された心からの言葉に、全員がにやりと笑う。

礼を言われるまでもない……そのくらい当たり前だ、そう言わんばかりの暖かな雰囲気の中、一同は走り続けた。

「あとはエースがシキを倒しや全てが片付くんだが……!!？」

「相手は伝説の海賊だ。そう簡単にはいかねエだろ」

心配そうな声を上げるフィナモレとレオネ口。彼の強さを間近で見えてきて、信頼している彼らだが、相手にしている敵の実力がそれを阻む。

叶うなら加勢したいところだが、実力の足りない自分達が言ったところで足手纏いになりかねない。不甲斐なさが胸中で燻っていた。

「……待って」

その時、不意にエレノアが顔を上げ、周囲を見渡し始める。

ウォレスが思わず立ち止まると、何事かというように他の者も立ち止まる。敵陣で静止するのは危険だが、天使が見せる切迫した表情が別の危機感を煽った。

「どうした？」

「……ずいぶん気圧が下がってる。嵐が近いんだ」

「何だとオ!!？」

ぎよっ、と全員が慄き目を見開く。

天族の能力の確実さは、航海の中で恩恵にあやかり体験している。普段ならば頼もしい限りなのだが……この状況では更なる不安の種でしかない。

逃げ場のない空の上では、即座の対応ができないのだから。

「じゃあ、さっさとこの島から逃げねエと……!!？」  
「フワフワの実」の能力は天候の影響

をモロに受けるって、シキの奴が自分で言ってたんだぞ!!!」

長い年月を鍛錬に費やし、凄まじき力を発揮した悪魔の実の能力。それでも相性というものが存在し、伝説の男といえど完全な克服には至っていない。ここには間違いない。ここには間違いない。なく巻き込まれる。

右往左往する男達を横目に、不意にエレノアがにやりと意味深な笑みを浮かべた。

「…いや、この状況は利用できる」

「え?」

「王宮に戻るよ。……策がある」

未だ痛々しく病魔に侵された姿のまま。

最強の男を父に持つ天使は、父に似た不遜な表情で、堂々と男達にある考えを語ってみせた。

## 第拾伍話 “天空大決戦”

「“火銃”!!!」

拳銃の形にした両手の人差し指の先から、無数の炎の弾丸が放たれる。

宙を裂き、焼き、貫く弾丸だが、狙う先に浮かぶシキは軽々とそれを躲し、笑いながらお返しに巨岩を向かわせてくる。

前後左右から迫る岩の塊によって、エースは押し潰される。だが直後に隙間から赤い閃光が漏れ出す。

「“炎戒・火柱”!!!」

「猪口才な!!?」

巨岩を砕き、炎の柱が飛び出す。シキは周囲の岩石を集めて盾にするが、炎の柱はそれらを容易く砕き、貫き粉々に破壊する。

ほん、と凄まじい爆発が起こるが、その中心にシキの姿はなくエースは息を呑む。

その直後、いつの間にか至近距離にまで近づいていたシキが黒く染まった拳を振りかぶり、エースの顔を殴り飛ばした。

「ぐ……!! 来い!! ダチ公!!!」



「グア~~~~ッ!!!」

宙に浮く他の島々の崖に激突しながら、エースは炎を噴き出し、体勢を保つ。島の一つの岸壁に着地すると、鬪志の衰えぬ眼で遠く離れたシキを睨みつけ彼を呼ぶ。

雷撃を纏い、瞬く間に飛来する雷撃鳥の背に飛び乗り、再び仇敵に接近する。

シキもまたエースを見据え、着物の裾を翻して最接近する。

どがんと、互いの放った漆黒の拳が激突し、衝撃波で島々の岸壁が砕け散る。

ぱりぱりと、それぞれの持つ「王」の資格とされる覇気が迸り、周囲に散っていた怪物達が次々に気絶し墜ちていく。

大量の瓦礫が雨あられと降り注ぐ中、二色の金色が幾度も激突し、余波を辺りに撒き散らす。拳で、両足の剣で、互いの命を狙い容赦なく全力を振るう。

殴られ、斬られ、血を吹きながら、男達は激突し続けた。

やがて不意に、シキが停止しにんまりと不気味な笑みを浮かべた。

「ジハハハ……!! 惜しい!! 惜しいな小僧!!!」

「ああ!!? 何がだよ!!!」

「ここで殺し合つてることがだよオ!!!」

がきん、と拳と刃が激突し火花が散る。

最早何十何百と繰り返しただろうか、未だ互いの急所を捉えぬ重い一撃を食らい合わせ、目と鼻の先で睨み合う。

「お前は強エ!!! そのらのミーハーなガキ共とは違う!! 限りなくおれに近い…支配する力がある!!! 巡り会わせつてのは皮肉なもんだな!!! ……だが、あえて聞いておこう」

ぎりぎりど軋みを上げる互いの得物、齒を食い縛るエースが乗る雷撃鳥。

成長著しくもまだ戦いの経験の足りない若者と、老いて衰え始めた怪物の戦いはほとんど互角。同程度の疲労で荒く息を吐きながら、相對する。

より悪化する天候の中、シキはエースに告げた。

「“火拳”のエース!!! おれの右腕になれ!!!」

思わぬ言葉に、エースの表情がより険しくなる。自分達を騙し、大切な仲間を傷つけ、惚れた女を甚振つた男の馬鹿にしているとしか思えない言葉にかつと頭に血が昇る。

だが、シキは本気だった。

本気で、自身とここまで台頭に、長く戦いを続けられる若者を手下に望んでいた。

「お前は殺すには惜しい!!! おれと共に来い!!! この生温いクソ共の世界を支配して

……新たな時代を作らねエか!!?

「……………」

「お前の欲しいものは全て手に入る!!! 名声も!!! さらなる力も!!! お前は最初にそれを望んで、〃白ひげ〃に挑んだだろう!!? だったら…!! その欲望のままに!!! 全てを求めろがいい!!!」

シキの申し出は、海賊ならば誰しもが望むものだ。

世界の創造者達を頂点に、狂った構造に支配された吐き気の世界。見せかけの平和の為、力で下の者共を捻じ伏せたがる為政者達。

それを拒む同業者達は、〃自由〃などと甘い事を謳い、弱く脆く価値もない。

だからこそ、限りなく〃本物〃に近い力を見せるエースに対し、シキは久方振りに血が騒ぐのを感じていた。

「——そうだな…昔の…あいつらと出会う前のおれなら、それを願ったかもな」  
睨み合いの最中、重い沈黙が降りる中、エースがぼそりと声を漏らした。

エースの脳裏に浮かぶのは…：…自身が生まれ育った世界。

ある一人の男が作ったこの世界で、その生まれ故に、誰にも望まれぬまま孤独に生きて来た幼少期。

全てを恨んだ。憎んだ。自信を拒み、蔑む世界の全てを嫌悪した。

だが、そんな中で出会った者達——兄弟達。

呪われた血筋を知っても、存在を否定しなかつた彼らとの日々が、今のエースを作つた。

そして海へ出て、仲間ができて、冒険をして——家族ができた。

最恐の男に幾度も挑んでは敗北し、打ちひしがれた自身を癒し、果てにその身を代価に命を救ってくれた一人の天使。

彼女の笑顔が、エースを燃え上がらせる。心と体と魂を滾らせる。

「だが……!! 今のおれが欲しいのはそんなもんじゃねエ!!! おれが欲しいもんは……!! おれが今!! 守りてエものは!!! おれのすぐ後ろにある!!!」

類稀なる「王」の覇気を放ち、吠えるエース。

若く、未熟な、名だたる強者達の上に君臨するには程遠い威圧感。

だがシキは、大きく目を睨り息を呑む——青年に重なるように、ある男の影が浮かび上がったのを見て。

「お前がおれに何を語ろうと!!! お前の申し出は断る!!! “金獅子”のシキ!!!」

それは、一度聞いた言葉だ。

最恐にして最強を畏怖する己が唯一認めた男……配下に望み、そして最期まで手に入る事の無かった憎たらしい男。

その片鱗を、目の前に立ちはだかる小童に確かに感じたのだ。

「そうかい……だつたらもう、そろそろ終わらせようぜ………」  
 “斬波”!!!

その時シキの胸中に浮かんだのは、怒りか、懐古か。

ぎりつと歯を軋ませると、ぐつと半ば無意識に力を籠め、四方に浮かぶ海を斬り裂きエースの周囲に引き寄せ、押し固める。

海水の檻で閉じ込められたエースと雷撃鳥は為す術なく、ごぼごぼと泡を吹いて悶え苦しんだ。

「ジハハハハ………!!? 勝負あつたな、若造!!!」

息を切らせつつ、笑みを浮かべ、しかしどこか残念がるような様子を見せるシキ。

旗揚げを滅茶苦茶にし、二十年の計画を潰した若僧が藻掻き苦しむ様に落胆染みた眼差しを向けながら、その様を眺めていた時だった。

『——航海士チームよりシキ様へ!!? 緊急連絡です!!!』

「何だ………」

『至急、島を東にそらせてください!!? 嵐が来ます!!!』

突如、懐に入れていた子電伝虫から通信が入り、シキは訝し気に眉を顰める。

辺りを見渡せば確かに、黒々とした雲が目立ち、風も強くなってきた。

「嵐だと……?」

楽しい時間を邪魔された気分になりながら、シキは疑う事なく島々を操り移動を開始させた。

「……………、これで、いいんですか……………」

ぶるぶると怯えた様子で電伝虫の受話器を戻し、航海士の一人が振り向き、自身に刃を突き付ける男に尋ねる。

島船の艦橋、嵐を予測しシキに伝える役割を持つ、金獅子海賊団の心臓部。

航海士達はその場を占拠した男……スカル達に脅され、本来伝えるべきものと全く逆の指示をシキに送ったのだ。

「いいんだよな、エレノア」

「うん。これがベストだよ」

「ここは天族の“予知”に任せましょう」

スカルが尋ねると、松葉杖を使って環境を見渡すエレノアが強く頷く。

顔色は悪く、今にもまた倒れそうなほどだが、眼に宿った光は衰える事なく空を映した天井を見上げている。

「でも、大丈夫なのか？ 嵐の中に突っ込んで」

「大丈夫………想定通り、嵐の中でこの島はひとたまりもない」

「ウおおい!!!」

てつきり嵐を避けるものだと思っていたフィナモレがぎよつと目を見開き、エレノアに叫ぶ。だったらこの場にいる自分達も危ないだろうが、と目で訴えるが、エレノアの目に迷いはない。

エレノアはふつと笑みを浮かべ、徐に松葉杖をそこらに放り捨てた。

「——じゃあ、あとは伝えた通りに。私は行ってくるから……」

「お、おう!!! ……つて、ん？」

頷きかけたセイバーは、明らかにどこぞへ飛び立とうとしているエレノアに二度見をする。

他の者も戸惑いの目を向ける中、エレノアはその場で強く羽ばたき、天井に向けて一気に飛び出した。

「エレノアさん!!!」

「お嬢~~~~~!?!」

スカル達の悲鳴が響き渡る中、エレノアがぱんつと合わせた掌から閃光が走る。

ぱりぱりと迸るそれを突き出し、振れた天井をばらばらに破壊し、あつという間に開

けた穴を通り抜ける。

重傷の天使はそのまま船の外へ——激戦止まぬ極寒の空へと飛び出して行つてしまつた。

「悪魔の实の能力者には、何より炎の能力者には苦しかろうなア……が、若気の至りじゃもうすまねエぞ。東の海も、お前の弟も、あの小娘も、絶望の中で滅びゆくのをあの世から眺めてろ。」

噴き出す泡もなくなったのか、ぴくりとも動かず海中を漂うだけのエースに、シキが  
 呟く。

能力者にとって最も残酷な処刑方法。放っておけば直に死ぬが、そんな地味な最後でシキの気は収まらない。自らの手で始末してこそ、やっと多少溜飲が下がる。

「『獅子・千切谷』!!!」

エースに向けて、両足の剣を振るって生み出した斬撃を放つ。ただの剣圧ではない、覇気も込めた若僧を確実に仕留める刃を、幾つも纏めて叩き込む。

これで終わりか、という呆気なさを感じながら、斬撃に囲まれるエースを見やった瞬間。

どぼんつ、と何かが海水の塊に飛び込み、エースと雷撃鳥に覆い被さる。



直後に斬撃が直撃し、激しい水飛沫が四方八方に飛び散り視界が一瞬遮られる。

飛沫から離れたシキは、飛沫の中で落ちていくエースと雷撃鳥、そして彼らを抱き寄せる白虎の天使の姿を視界に捉えた。

「あの小娘……!!? まだ動けたのか!!? やはり天族の女の執念は凄まじいか……!!?!!」

毒の樹に侵され、真面に動く事もままならないだろうに、それでもここまで飛翔し自身の“王”を救い出すとは。それも、襲い来る斬撃の殆どをその身に受け、庇いながら。そこらの女にはできない覚悟を見て、シキが惜しいと再び思った時だった。

黒々と渦を巻く雲が、暴風を撒き散らして島に近づく様がシキの視界に入った。

「何だ……——パーマ!!?」

それに気づき、真っ先に行動に移したのは島の怪物達だった。

狂ったように暴れ、王宮内を滅茶苦茶に破壊し続けていた怪物達だったが、突如攻撃を止めて逃げ出し始めたのだ。

自身らを操っていた憎い人間達の事など放置し、黒々と広がる暗雲から離れようと走っていく。

「な……なんだ?!」

「怪物達がどんどん逃げてくぞぞ!!?」

危うく圧死しかけた海賊達はほっと安堵しつつ、何が起こっているのかと戸惑いの声を漏らす。

やがて、怪物達と同じように王宮、そして島の周囲に広がる黒雲に気付きだし、顔を蒼白にさせて震え上がった。

「嵐だ!! この島、嵐の中に向かってやがる!!」

「何だと…?! くっ…!! お前ら、侵入者の事は放っておけ!! とにかく逃げるぞ!!! 船に戻れ!!!」

慌てて逃げ出す男達だが、今さら動き出したところでどうにもならない。

ここは上空数千m、逃げ場などどこにもない。船に乗ったところで、遥か下の海面に叩きつけられ、木端微塵に砕け散るのみ。

平和で退屈な海を蹂躪しようとする悪人達は、今度は自らが理不尽に晒される羽目になり、只管逃げ惑うしかなかった。

そんな混乱の中を、一人楽し気に笑う者が居た。

とある場所から拝借した巨大な布を担ぎ、骸骨面の下で満面の笑みを浮かべ、自身の船の元に走る男……スカルが鼻歌交じりに準備を行っていた。

「うっひよっひよっひよっひよ……!!! い〜い土産が手に入ったぜ〜♪」

「何喜んでんだ…?!? さっさと準備を終わらせろ!!! 逃げられなかったらその土産も

ろとも終わりだぞ!!!」

「わかつてるって…!!?」

仲間達に叱られながら、浮かれた調子を止めないドクロマニア。持ってきた布を広げ、スパデルル号に詰んでおいた縄と結び、着々と脱出準備を整えていく。

その作業とは別に王宮内では、戦闘を止めたスピード海賊団の残る面々が王宮内を、特に薬品などが並べられた研究区画を走り回っていた。

王宮内で見つけた爆薬を抱え、導線で繋ぎ、薬品の置かれた棚という棚に乗せていく。

「爆薬、これで全部か!!」

「足りなきやもつとかっぱらうてくりやいい!! ここにあるロクでもねエ薬を全部木端微塵にしてやるんだ!!!」

「あの怪物達も被害者だ…!! せめてあのジジイの計画の邪魔ぐらいはして帰ろうぜ」

「だな!!!」

手元の物がなくなればすぐさま補充をしに、使い残しもないように。シキの作り上げてきた物、狂った計画の全てを跡形もなく消し去れるように。

人も怪物も、この一件に関わらされた大勢の無念を背負うように、男達はその瞬間が来るまで、王宮内を奔走し続けた。

——残る懸念は、この島の支配者ただ一人。

それを、我らが船長が倒し切れるかどうか……その一点にかかっていた。

浮遊する島の一つ、その岸壁。

大きく抉れ、部屋のようになった空間で、エースは意識を取り戻す。

はつと目を見開くと、急ぎ体を起こし、自分と雷撃鳥に覆い被さる白虎の天使……地に濡れた愛しい女を抱き起こす。

「エレノア……お前、こんな体で……!!」

エースがエレノアの顔を見下ろすと、微かに呻き声が聞こえ、うつすらと目が開かれる。天使は男を認識すると、うつすらと笑みを浮かべてみせる。

ぎりつ、と歯を食い縛り、悔恨をあらわにするエース。

これ以上傷つけさせてなるものかと心に決めていたのに、さらなる傷を負わせた……その不甲斐なさに、拳をきつく握りしめる。

「お前……!! もうちつとばかり、おれ達に付き合ってくれるか……!! この島を……あのジジイの支配から解き放ちてエ」

「クオ……!!」

「正直、エレノアだけでも取り戻せりゃあとはどうでもよかつたんだが……そうも言ってもらえなくなっちゃった。どうしようもなく……!! 似てんだよなア、あそこに……」

!!!  
」

思い出されるのは、とある島……この島と同じように、海賊に支配される国での事。  
ある少女との、再会の約束。

飢えに苦しむその島の住民達との交流の際、交わした誓いの事を思い出す。

—— おれ達はまた来るよ！

もつとでかい海賊団になって!!

まだ、それは果たされていない。弱い己には、果たせない。

何よりも、かつて喪った兄弟との誓いも果たせぬまま逃げ帰る事など、できるはずがなかった。

「まだ……!! 約束一つ守れちゃいねエ情けねエおれだが………筋は通して帰ってエ。何よりあのジジイを放っておきや、また必ずエレノアを狙って、『東の海』を攻めに来る……!!! おれはもう……家族を喪うのは、ごめんだ……!!!」

「……私もさ、我が王よ」

悔しさに歪むエースの頬を、エレノアの手が撫でる。

自身を微塵も責めない、勝利を疑いもしない優しい手を握り返し、唸るように息を吐く。

そして再び、互いに強い眼差しで見つめ合う。

「…まだ、飛べるか？」

「…あなたとならば、どこまでも」

痛々しく、それでも決して折れる気配のない目で見つめ、頷き返す天使。

彼らの背後で、同じく起き上がった雷撃鳥が雄叫びを上げ、大きく翼を羽搏かせた。

## 第拾陸話 絶えぬ王の血筋

嵐に捕まった島船とメルヴィユの島々。シキは鬼のような形相で天を睨み、握りしめた拳を震わせる。

言葉に表す事もできない程の怒り、屈辱、あらゆる負の感情が胸中で渦を巻き、獅子の如き金の髪を蠢かせる。

ふと、視界の端に赤い光が映り、シキはぎろりと鋭い目でそれを射抜き、吐き捨てる。

「しづと……!!!」

「火拳!!!」

さつと自身を下に移動させ、向かってきた炎の拳撃を躲す。

降り注ぐ雨を蒸発させ、風向きをも歪める炎が通り過ぎる様を横目に、真下から飛来する二つの影を見据える。

「もう終わりだ!!! 金獅子!!!」

雷撃鳥の背に立ち、傍らに白虎の天使を従え、エースが覇気を纏って吠える。

片や溺死しかけ、片や動けるはずもないほど弱り切った小童共が、まるで衰えぬ様子も見せず向かってくる姿に、ますます眉間のしわが深くなる。

二つの翼は高く舞い上がり、怒りに燃える狂った老人を遙か上空から見下ろし叫ぶ。  
「工場も、王宮も、島船も!!! 何もかも破壊し尽くす!!! お前の計画はすべて水の泡になる!!!」

「ふざけるなア~~~~~!!!」

憎悪と憤怒に燃えながら、怒号を上げ両手を広げるシキ。

周囲に浮かぶ島々の岸壁が突然砕け、無数の鋭利に尖った岩石が作られ、それらが一齐に撃ち出される。

まるで地上からの砲撃。この場で確実に殺す事だけを考えて容赦のない攻撃で、自身を見下す二人と一羽を狙う。

「貴様ら~~~~とき若造に……………このおれの20年の計画を潰せると思うなア~~~~!!!」

低い風切り音と共に迫りくる岩石の矢や槍。周囲の島々の根元から削ぎ落として集めた砲弾を、四方八方に高速で撃ち放ち逃げ場を奪う。

エースと雷撃鳥、エレノアは迫りくる攻撃を躲しつつ、時に迎撃し砕きながら宙に赤と白の軌跡を描いて飛翔する。

突如、エレノアがぱんつと両掌を叩き合わせ、青い閃光を生み出す。

ばちばちと爆ぜ、弓矢の形を作り上げていくそれを構え——シキではなく、飛翔する先に広がる黒雲に向けて放つ。



「ミストルテイン神貫宿木!!!」

青い雷の矢が宙を裂き、一直線に天に向かう。矢の後ろには雷光が木の枝の様に細かな跡となつて残り、ぱつと線香花火のように伸びる。

矢の進路上にいたシキは即座にそれを躲し、小馬鹿にした笑みをエレノアに向けた。

「こけおどしが……!!! もうそんな力しか残つてないか!!? あア!!?」

然したる威力も感じない、目晦ましにも牽制にもならない微々たる一撃に、厭らしい笑みを浮かべて再び岩石を向かわせる。

エレノアもエースもそんな挑発に乗る事なく、その横を通り過ぎ天を目指す。

いつしか、黒雲はごろごろと不気味な音を轟かせ、時折青白い雷光を走らせ出す。エレノアの放つた一矢により、雷雲が刺激されたのだという事に、シキはまだ気づいていない。

そしてやがて、雷鳴轟く黒雲の中にエースとエレノアは飛び込んだ。一瞬姿が見えなくなり、シキは鬱陶しそうに舌を鳴らす。

「死に損ないが………雷に打たれて落ちろ!!!」

「——落ちるのはためエだ!!! シキ!!!」

シキの悪態に、雷雲の中からエースが吠える声が響く。

雲の中に逃げ込んでおいて何を言うか、とシキが顔を顰めた時、雲の中から雷撃鳥が

一羽だけ抜け出してくる……その、直後。

かつ！と雷雲の中を一際大きな光が照らし、その中心に飲まれる二人の姿を映し出した。

「ジハハハハ!!! バカがア!!!」

威勢のいい言葉を並べ立てておいて、結局自滅した。雷光に包まれるエースとエレノアの姿を前にし、シキが哄笑し勝利を確信する。

げらげらと目を全開にし、盛大に声を上げて嗤うシキは、やがてその表情を一変させる。

黒雲の中から迸る光が、ぼちっ！と一瞬輝いた後、その色を変えていく。

青白い閃光が、徐々に黄色く、そして赤く……やがて黒い雲を押し退け、呑み込み、巨大な光の球体が姿を現してくる。

まるで——太陽のように。

「雷が……炎に!!?」

「『大炎戒』!!! 『炎帝』!!!」

驚愕に目を剥くシキの頭上で、エースの声が響き渡る。

どんな化学変化を齎したのか、雷撃鳥の背中から宙へと跳躍したエースの隣で飛ぶエレノアが、自然の力を丸々変質させたらしい。

大気を灼き、焦がし、景色を真っ赤に染めながら、小さな太陽を頭上に掲げ雄叫びを上げる。

「てめエに…!!! 仲間も!!? 海も!!? 家族も!!! 好きにさせるかアアアアアア!!!」

自身を照らす、あまりにも巨大な熱の塊。

茫然とその光景を見上げていたシキは、我に返るとすぐさま周囲の島々を掻き集め、自身を守る盾と為す。そして島々に纏わせた海を操り、巨大な槍に変えて撃つ。

歴戦の猛者ゆえの咄嗟の判断。だが、エースとエレノアの一撃はもう止まらない。

「果て遠き理想郷……若き王の征く道を、この一撃にて切り拓かん!!!」

ばりばりと電光を片手に纏わせ、エレノアが謳うように眩く。

迫りくる海水の槍、島々の盾、その奥に籠もるシキを——自らの「王」の道を阻む敵を睨みつけ、声を張り上げる。

「『ロンゴミアド 覇道撃槍』!!!」

エースと声を、息を合わせ、頭上に掲げた太陽を振り下ろし、叩き込む。

迎撃の為に放たれた海水は一瞬で蒸発し、島々は次々に碎かれ焼き尽くされ、ばらばらに飛び散っていく。

ものの数秒でシキを守るものはなくなり、旧時代の怪物は真つ赤な光の前に晒し出された。

「イーストブル」

「最弱の海」の男に、おれはまた阻まれるのか…!!?

シキの目に、幻が浮かぶ。かつて相對した者達の姿が現れる。

如何なる戦場であろうとその笑みを絶えなかつた、この世で最も自由な男。

その隣に最期まで寄り添い続けた、獰猛に笑う黒豹の天使。

最期まで自身に従う事の無かつた彼らの姿が、今自身を地に墜とそうと吠える若者達の姿と、重なつて見えた。

「ロジャ

金獅子の最後の咆哮が轟き渡り。

空に浮かぶ島々は、小さな太陽の中に呑み込まれていった。

!!!  
「」

「おおおおおおお!!」

「野郎共!!! しっかり掴まつてろよ〜!!!」

背後で光る炎から凄まじい速度で逃れながら、ピース・オブ・スパデイル号が宙を舞う。

間一髪、動き出した島から坂を使って下り切り、海に向かって飛び出した船は、次の

瞬間巨大な布を広げて減速する。

舵輪と獅子を基にした海賊旗<sup>ジョリー・ロジャ</sup>。金獅子海賊団の船を飾っていたそれを落下傘<sup>パラシュート</sup>に使い、見事敵の拠点から脱出してみせたのだ。

「エース……!!」

船員達の顔に、まだ安堵はない。最も危険な戦いを繰り広げていた船長と、攫われた天使がまだ戻ってきていないからだ。

天を照らした小さな太陽は、徐々にその光を弱めやがて消え去った。

あとに残ったのは、破壊されればらになつた島々だけ。その島々も、ゆつくりと海上に降下し始めている。

「…………シキの能力が解除されてるのか」

「おい!!? シャオ達は!!」

凄まじい光景に、誰もが言葉を失い立ち尽くす。

やがて、落下の島にいる筈の恩人達の事を思い出し、ぎよつと目を剥いて叫んだ瞬間。彼らは目撃する。自らの腕に生えた翼を使い、滑空する島の先住民達の姿を。

スピード海賊団の面々は言葉を失い、彼らの姿を凝視する。

彼らは言っていた、この羽根はなぜか生えていると。別の者は言っていた、きつと自分達は鳥になりたいのだろうと。

特殊な花・IQが進化を齎したのは、怪物達だけではなかった。

長年メルヴィユに住まい、共存してきた人間達にもまた、特異な変化を与えていたのだ。

恐るべき怪物達の魔の手から逃れる為の、自由の翼を。

幻想的なその光景に、海賊達はしばし見惚れる。

そして……その中に混じる、もつとも帰還を望んでいた二人の姿がある事に気付き、喝采が上がった。

「う……!!? うおおおおお〜!!! 戻ってきた〜!!!」

「二人とも無事だア!!!」

「よっしやあ!!!」

白い翼を羽搏かせ、墜ちゆく島々を後にする天使。

黒髪の青年の背に抱き着くようにして抱え、ふらふらと覚束ない飛び方で、ゆつくりとだが仲間達の元へ帰ってくる。

スレード海賊団の全員が、互いに抱き合い健闘を称え合い、喜びを分かち合っていた。

「……やったねエ……エース。これで……東の海は無事だよ」

「ああ……!!?」

広い広い海を真下に、仲間達の元を目指すエレノアと抱き着かれ運ばれるエース。

温かく、凄まじい柔らかさを背中に感じながら、疲労と空腹でそれどころではないエースはやがて、溜息混じりに肩をすくめた。

「まったく……ヒヤヒヤさせやがる」

「こつちのセリフだよ……よくもまあ、あの人数で『金獅子海賊団』に逆らったもんだ」

「何言ってるんだ……『必ず助けに来い』って言ったのは、お前だろ」

「こんだけ堂々と喧嘩売って勝つバカ野郎は、あんた達ぐらいなもんだよ、まったく……」

咎めるようなエースのぼやきに、エレノアも唇を尖らせ反論する。

助ける方も無茶なら、助けを待つ方も無茶。どちらも自分の身を顧みず、ぼろぼろで帰る羽目になっているというのに、どちらも全く反省がない。

そのうちエレノアはくすすと苦笑をこぼし、今一度エースの背中を強く抱き寄せた。

「———ありがとう……大好き」

心の底からの、全身全霊の感謝の言葉を天使が口にし。

若き『王』は「おう!!」と力強く頷き、満面の笑みを見せた。

海兵達は、目の前の光景にただ啞然とするばかりだった。

かつて監獄から逃亡した伝説の海賊、その者の恐るべき計画を阻止するため、急ぎ軍艦に乗り駆け付けた先で、それを目の当たりにする。

天に浮く島々、たった一人の海賊によつて作り出されたというそれが、徐々に崩れ海に墜ちていく。

巨大な岩の塊が海上に着くと同時に、巨大な水飛沫が波となり、島を囲む軍艦に襲い掛かつてきていた。

「島が落ちてくるぞ〜〜!!!」

「逃げろ!! この場から離れるんだ!!! 急げ〜〜!!!」

戦闘準備を万全にしてこの場に集った海兵達だったが、想わぬ状況に堪らず右往左往する。波に襲われ、押し流され、悲鳴があちこちから響く。

部隊の長を務める数人の中將達だけが、落下する島々を無表情で眺めていた。

「…まさか…あいつらがこれ全部やったのか…?!?」

一人の海兵の視界に映る、巨大な海賊旗で風を受け、下りていく海賊船。

船の造形に微かに見覚えがある。最近名を上げ、後に大海賊の傘下に入った若い海賊団のはず。

それがたった一隻で、崩壊する大悪党の根城を後にしている様を目にし、誰もがまさかと言葉を失くしていた。



「何を呆けている!!? 海賊共を拿捕しろ!!」

「えっ……!! い……今ですか!!」

「手負いの海賊共がいて、捕らえぬ馬鹿がいるか……!! 奴らは!! 旧時代の“怪物”を墜とした一味だぞ!!」

中将の一人が呆ける海兵達に怒鳴りつける。立ち尽くしていた海兵が戸惑いながら問い返すが、中将は本気の様子で部下達に命じる。

このまま放置すれば、確実に後に脅威となる……そう判断し、この場に集う全艦を向かわせようとした時。

どっ！と。

突如海が荒れ、全ての軍艦を激しい揺れが襲った。

「な……何だア!!」

「い、いきなり津波が……!!」

軍艦を動かす事もできず、困惑するばかりの海兵達。

何木とか、と中将達が揺れに耐えながら状況を把握しようとする目を見詰めた時。

「グララララ……!! おれの孝行息子達に何か用か、海軍……!!」

突如、その場に一人の男の声が届く。

はっ、と海兵全員が目を見開き、声が出た方向を振り向いて……向かってくる幾隻も

の海賊船を凝視する。

その中央、白い鯨の海賊船の船首の上に立つ巨漢の姿を目の当たりにし、海兵達は再び言葉を失った。

「し……し……し……白ひげ……!!」

「そつちは昼寝でもしてたのか……おめエらがのんびりしてる間に、おれの愛する娘と息子達がずいぶんとだけエ事をしてくれたもんだ。だがおめエら……その気分に水差す気か」

愛槍「むら雲切り」を手に堂々と仁王立ちし、笑う大海賊・白ひげ。

その後ろには名だたる実力者である息子達が集い、各々の得物や能力の一端を見せつけ見据えてきており、周囲には傘下の船が幾隻も並んでいる。

家族を攫った不埒者に仕置きをする目的で集った猛者達が、今度は野暮な真似を目論む海軍を標的に定めていた。

「力が有り余ってんなら……相手になるぞ」

荒れ狂う波を生み出した男が、覇気を滲ませ凄む。

海軍の全員がごくりと息を呑み、顔中から冷や汗を垂らしながらしんと静まり返る。

しばらくの沈黙の後、長を務める中将がぼそりと呟いた。

「……………退くぞ」

「えっ?」

「『白ひげ』の船を相手に……………この艦隊の数では心許ない。『金獅子』を回収後、速やかに海軍本部へ帰還する」

はあ、と小さな溜息をこぼし、中將は踵を返し甲板を後にする。

白ひげがにやりと意味深に笑う様を横目に、彼は苦々しい表情で艦内に戻る。

取り残された部下が、やがて正気を取り戻すと同時に、他の海兵達に向けて叫んだ。

「き……『金獅子』を捕えろオ!!」

途端に慌ただしくなる軍艦。降り注ぐ島々の瓦礫に混じり、どこかへ消えた大悪党の姿を探し、小船を出し数人が乗り込んでいく。

そんな同僚達の姿を横目にしながら。

一人の赤毛の女海兵——イスカが、どこか誇らし気な笑みを浮かべて目を細めた。

「……………やったな、エース。やはりお前は大した奴だ」

小さく呟いてから、彼女は飛び去る海賊船に背を向け、他の海兵達に混じって任務に戻ったのだった。

「お!!? オヤジ達が迎えにきてくれたみてエだぞ!!! ……………これで一安心だ。お前はしっかり体を休めろよ。おれも腹減って力出ねエヤ……」

エースは見慣れた白髭の海賊旗の船団を見つけ、エレノアに呼びかける。

とにかく自分と彼女、仲間達に必要なのは休息だ。全員無茶を通したばかり、さつさと戻って休ませなければ。

そう思ったエースは……いつの間にか、エレノアの飛び方が頼りなく、ふらふらし始めている事に気付いた。

「……………なア、おい、エレノア？ 何だか高度がどんどん下がってるみたいと思うんだが？ エレノア？ エレノアさん？」

恐る恐る、ぎこちない動きで振り向き、自分を抱えて飛ぶ天使の顔色を窺う。

嫌な予感で、冷や汗が止まらない。まさか、と顔を覗き込むと。

「……………ごめん、もう…限界……………」

真つ青な顔で、ぐるぐると目を回すエレノアが視界に入り、エースはぎよつと目を見開き固まった。

安堵で気が緩んだのだろうか、だらだらと酷く汗を流し、エースを抱える腕も震えまくっていた。

「だーっ!!! 待て!!? 待て待てもう少しだ!!! もう少しで帰れるから!!! もうちょい頑張れ!!! おい!!!」

「もう、無理です……………」

必死に呼びかけ、正気を保たせようと努めたエースだったが、時既に遅く。

ふっ、と何かの糸が切れたかのようにエレノアの翼は羽ばたきを止め、そのままゆつくりと、次第に速度を乗せて真つ逆さまに落ちていった。

「あああああああああああああ!!!」

悲鳴を上げ、しかしエレノアを確と抱き寄せたまま、エースは海上に叩きつけられ、そのまま水飛沫を上げて沈む。

スピード海賊団、そして白ひげ海賊団の面々は驚愕で硬直し、あんぐりと口を開けて呆けた。

「エレノアとエースが落ちた〜!!!」

「拾え!!! 拾え!!!」

「エ〜〜ス〜〜!!! エ〜レ〜ノ〜ア〜!!!」

やがて、正気に戻った者が大慌てで動き、舵を切り、海に墜ちた二人の元へ駆けつけるのだった。

## 第拾漆話 // 終幕と幕間 //

『——そうです。あの「妖術師」が!!? 「白ひげ」の傘下に新たに加わった一味と共に!!?』

報せはすぐに、海軍本部マリソフオードへと送られた。

元帥センゴクは無言で、電伝虫から伝わってくる現地にいる部下からの、興奮した様子の子の報告に耳を傾ける。

その顔は険しく、喜びの感情は一切存在していない。

「墜としたのか………海に出てたかだか2年弱のルーキー達が」

『現在、情報をまとめておりますので、詳細は追って報告いたします』

「……わかった」

小さく返事を返し、通信を切る。

机の上で指を組み、深い溜息をこぼし、しばらくの間黙り込んだセンゴクは、やがて眉間に深いしわを寄せて呟いた。

「我々は何もしていない………か」

ぎり、と歯を軋ませ、呻くように息を漏らし。

湧き上がる激情のまま、机に拳を叩きつけようとして。

どこからか聞こえてくる人の騒ぎ声に訝しげに片眉を上げ、思わず腰を上げた。

「酒じゃくく!!! もっと酒を持ってこんかア!!! 祝い酒じゃく!!! ぶわっはっはっはっは!!!」

「「「イヤツホくくウ!!!」」」

海軍本部のとある部屋、本来であれば事件の説明や会議の為に使われる大広間。将校達が集まり、厳肅に海賊や悪党の拿捕の為に話し合う重要な場所。

そこは今、ガープが主催する宴会の席へと変わり果てていた。

「わしの孫だぞ!!! わしの孫が『金獅子』のやつを討ち取りおった!!! ぶわっはっはっは、さすがわしの孫!!!」

「悩みのタネが一つ消えた!!? これでもう奴の捜索で時間と経費を割かずに済む!!? 過労で倒れる奴もぐつと減る!!!」

「ざまーみろシキ!!! 『妖術師』バンザーイ!!!」

「『火拳』にカンパーイ!!!」

杯を手にはげらげらと大声で笑うガープに合わせ、彼の部下や将校達も顔を真っ赤にして騒ぐ。階級などお構いなしに、肩を組んで思いつきり楽しんでる。

普段は厳しい表情で仕事場に向かうはずの海兵達が、揃いも揃って羽目を外しまくつていた。

そんな目を疑う光景に、駆け付けたセンゴクは思わず目を剥いて声を荒げた。

「何をやつとるんだ貴様らはア?!?!」

「おオセンゴク!!! お前もこつち来て飲めエ!!!」

「飲むか!!! ガープ貴様、海賊の名を称えて飲んだくれるとは何を血迷っているんだ?!?!」

「固い事言うな!!?!? ぶわっはっはっはっはっは!!!」

くわっ、と目を吊り上げて同期の老人を睨みつける。

破天荒で自由人なこの男の行動を予測する事は不可能だが、流石に見過ごせない乱れ振りにセンゴクの脳内の火山が爆発する。

そんな中、怒鳴りつけるセンゴクの背後に二人、もう一人の同期の女海兵と後輩が近づいた。

「あくらら、何だよもう始まつちやってるんですかい?」

「まったく、ジジイの酔っ払い共は見苦しいっただらないね」

「おつるさん…!!?!? この馬鹿共にもつと言つてやつてくれ。おれの言う事なんざ一つも聞きやしないんだ、こいつらは……………」

大将「青キジ」クザンに「大参謀」と呼ばれる女傑・海軍中将つる。



普段からだらけた態度が目立つクザンはともかく、穏やかならが厳しい事で知られるつるならばこの暴挙も止めてくれるだろう、という期待を抱き手招きする、が。

「ほら、もつとつめとくれ！」

「あ、これからおれも潰れるまで飲むからあとはよろしく」

「「うおおおおく!!!」」

「うおい!!! 貴様らもか!!!」

端から宴に混ざる気満々だったようで、二人ともセンゴクを追い抜いてガープの近くに腰を下ろしてしまう。裏切られた気分で吠えるが、誰も聞く耳を持っていない様子だった。

「サカズキ!!? ボルサリーノ!!? 貴様らまで加わる気ではないだろうな!!?」

「乱痴気騒ぎは性に合いやせんので……」

「わつしもそこまで暇じゃありませんからねエ……」

たまたま近くを通りがかつたらしい残る二人の大將達にも叫ぶが、こちらはちらりと宴の席を一瞥しただけでさっさと歩き去る。

が、「赤犬」も「黄猿」も片手に酒瓶と杯を携えていて、足取りも何処か軽そうに見える。

「部屋で秘蔵の酒でも開ける事にしますかいのウ」

「わっしも静かに飲みたいもんで」

「この馬鹿共がやつとる宴とほぼ同じだろうが!!!」

海軍本部の名だたる上官達が、全員飲んで悦ぶ氣でいる事にセンゴクは頭を抱えて頭垂れる。正義の軍隊がこうも抜けていていいものなのか。

すると、いつの間にか近くへ寄ってきていたガープが手を振って呼んでくる。

「お前も肩の荷が降りたじやろ!!! たまつとるもんぶちまけろ!!! 今日は無礼講じや、ぶわっはっはっはっは!!!」

「……………まつたく…!!?」

人の氣も知らず、涙を流しながら笑う同期。昔からまるで変わらない、自由奔放で無茶苦茶な男が、孫の偉業を心から自慢し、誇り、喜んでいる。

次第に怒る氣力もなくなったセンゴクは、深い深い溜息を吐いてから、どすどすと荒い足取りで歩き出し。

どかつ、とガープの隣に腰を下ろし、手近にあつた酒瓶を掴んで頭上に掲げた。

「一杯だけだぞ!!!」

「!!!うおお!!! 元帥~~~~!!!!!!」

部下達の歓迎の声に肩を竦めつつ。

ふっと笑みを浮かべたセンゴクは、酒瓶をそのままぐいつと呷った。

??

「ぎゃああああ〜…!!」

晴れ渡る空の下、青年達の悲鳴が響き渡る。

進化の島メルヴィユを離れ、撤退した海軍の前から悠々と進路を変えた白ひげ海賊団の甲板。

激戦を終え、疲れ果てたエース達全員が、白ひげからの直々の拳骨を食らい、白目を剥いて倒れ伏していた。

「がはっ……!!? 勘弁してくれよオヤジさん…!! おれ達ちゃんとシキに勝って帰ってきたじゃねエか………!!」

「バカヤロウ、コイツはおれの言う事を聞かなかった罰だ、グララララ」

大きなたん瘤を幾つも脳天に乗せたデユースが抗議の声を上げるが、白ひげは呆れた目でそれを見やり、同時に笑う。

一度は自力で決着をつける事を認めたが、それはそれ。

船長の指示を無視して勝手に格上の敵に挑んだ息子達に対して罰が無ければ、他の者に示しがつかないのだ。

「全くお前らは………無茶しねエで任せろつつたろうがよい」

「気持ちにはわかるがな、よくぞやってくれた!!?」

「エレノアがこうなってる事は減点対象だけどね〜」

はあ、と溜息を吐くマルコだが、他の兄弟達はそこまで責める気配はない。ピスタやハルタはむしろ讚えている風に見える。

一味全員が、妹分を攫ったシキに対する怒りに燃え、叶うのなら己の手で制裁をと望んでいたので。

それが、自分達よりも若い新参者ルーキィに敗れた。

ざまあみろという気分が三分の一程、さらに三分の一を安堵、残りを悔しさが占めていた。

「まーまー……みんなその辺にしといてあげてよ」

「おお、エレノア!!! もう動いて大丈夫なのか？」

「へーきへーき……」

「ダメに決まってるよい。まだ完全に解毒できたわけじゃねえんだ、もうしばらく寝てろい」

「え〜〜暇だよ〜〜」

新たに作られた車椅子を押しして、エレノアが船室から顔を出す。顔色もだいぶ戻り、いつもとそう変わらない姿を見せるが、主治医を務めるマルコがそれを止める。

不満げに唇を尖らせるエレノアに、マルコはやれやれと肩を竦めた。

「何にせよ、お前達が無事に帰ってきて何よりだ!!! ゼハハハ……説教はこのぐらいでそろそろ勘弁してやろうじゃねエか、なアオヤジ!!?」

「…仕方がねエな」

ティーチが好物のチェリーパイを頬張りながら告げ、白ひげも渋々拳骨を納め、定位置である椅子に腰を下ろす。

すぐさま看護婦達が点滴やら計器やらを繋ぎ直していくのを鬱陶しそうに眺めてから、よろよろと起き上がるエース達ににやりと笑みを浮かべた。

「しかしおめエら、あの『金獅子』を倒すとはとんでもねエ事態だぞ? …こりや相当懸賞金が上がるんじゃないか?」

「うははは…!!? 10億くらいいくんじゃないか!??」

「だとしたら、そいつがこの戦いの唯一の成果だな」

「やれやれ……何が楽しいんだかねエ」

散々絞られて頂垂れていた一同は、期待の弾む話題に目の色を変える。海賊になった以上、名が上がる事は楽しみの一つだ。それが目的で乗っている者も少なくない。

ただ、バンシーなどはあまり乗り気がしないようで、騒ぎ始めた男達に冷めた目を向けていた。

「だがよオ…あんまり名が上がりると婿の候補に困りそうだよな、オバちゃんやエレノア

は」

「あア………相当覚悟の決まった奴じゃなきや、こんな女傑を受け入れられる男なんざそうそう見つからねエだろ」

「だから余計なお世話だつてんでらろがい!!」

勝手な氣遣いを口にする仲間、遂にバンシーが切れる。本人達は大真面目に彼女の今後を案じているがゆえに、余計に質が悪い。

そうしてひそひそと囁き合う男達の背後に、不意にズシンと——砕氷船を操る、白ひげ海賊団に初期から乗り込む女海賊が仁王立ちした。

「…なアおい、そいつはあたしの前で言っつていい事なのかい?」

「ヤベツ!! 『氷の魔女』がキレた!!」

「逃げる!!」

「待ちなクソガキ共!!」

はっ、と目を見開き、口を滑らせた男達が大慌てで逃げ出す。

ホワイティ・ベイはぐつと腕捲りをし、逃走する男達の後を追いかけ始める。バンシーもそれに混ざり、モビーディック号の中から情けない悲鳴が響く。

残った者達はどつと盛大に笑い声をあげ、宴の席の様に騒ぎ始める。

白ひげは息子達の大騒ぎに楽しげに体を揺らしながら、くすくすと小さく笑みをこぼ

すエレノアを見やつて目を細めた。

「グラララララ……!! 婿選びに困ろうが、あんな野郎にウチの娘はやれねエな……お前自身が選んだ男ならまア考えるが」

「にやはは。うん……そうだね、いい男は自分で見つけるさ。見つけて……絶対離す気はないよ」

冗談交じりに語り掛け、娘の小さな頭をそつと撫でる白ひげ。

エレノアは困つたように頬を掻きつつ、父が本気で自分を案じてくれているのだと察しながら、柔らかく微笑みを見せる。

ふとその視線を、逃げ惑う仲間に囁し立てる兄弟達に混じるエースに向ける。

「——ねエ……エース？」

その表情は、明らかに白ひげに向けた物とは違っていた。

熱を帯び、潤み、兄弟達に向ける事の決してない欲の籠つた眼差し……他の誰にも渡す気のない、独り占めを望む熱い目。

見た目に似合わぬ妖艶さを持った、一人の“女”の眼差しだった。

エレノアのその顔を見た瞬間、兄弟達はしん、と静まり返る。

やがて、全員の視線がゆっくりとエレノアの見つめる先に——— さらさら顔中から冷や汗を垂らし、固まっているエースに向けられた。

「「「エースでめええええ!!! エレノアと何があつたアえええ!!!」」」

「ギャー!!! 待て待てお前ら!!? 落ち着けえ!!!」

どつ、と突如感情をあらぶらせた兄弟達がエースの周りに集まり、凄まじい剣幕で詰め寄る。

白ひげ海賊団全員の妹であり、同時に姉でもある愛おしく健気な天使が、数日の冒険の果てに色々大人になった片鱗を目の当たりにしたのだから、冷静でいられるはずがない。

その原因としか思えない、海賊団の末っ子にも等しい男は、鬼の形相で向かってくる兄弟達に恐れをなし全力で逃走する。

「何があつた!! いや何をした!!! 見た事ねエぞエレノアのあんな顔!!!」

「登つたの!! 登つちやつたの大人の階段!!! 詳しく教えるコノヤロウ!!!」

「逃げてねエで説明しろウオオオオ!!!」

「待て!! 本當に待てお前ら!!! 殺気丸出しじゃねーか、ほんとに話聞く気あんのかア!!!」

ティーチは混乱しながら、ジヨズは泣きながら猛進し、ハルタは驚愕しつつ全力で追



い、中には劍や銃を抜く者まで現れ出す。捕まえるのか仕留める気なのかまるでわからない。

本気の鬼ごっこが開催され、モビーディック号により一層の騒がしさが訪れた。

「…おいおい、マジかよい。まさかあのエレノアが…どうすんだよい、親父……………」

一人、ただ茫然となるばかりで立ち尽くしていたマルコは、顔を引き攣らせながら船上の大騒ぎを見つめるばかり。

どうしたものか、とさつきから妙に静かな白ひげに振り向くが。

「……………白無垢、ドレス……………ガープも呼ぶか…? ついでにセンゴクも……………顔を隠させりや何とかなるか…?」

「親父イ!!?! 式の計画を着々と進めるのはやめてくれよい!!!」

段階をすつ飛ばした思考に沈んでいる白ひげの姿に、マルコは思わず思いつきり突っ込みを入れてしまう。彼は彼で正気を失っていたようだ。

あつちやこつちで、どたんばたんと派手に騒ぐ家族を眺め。

特大の爆弾を放り込んだ張本人の天使は、腹を抱えて笑い転げていた。

「にやははは、バゝカ!!?」

——もう、大丈夫だと思っていた。

過保護で心配性で、だけど強く頼りになる家族の元に返ってきて、娘は心から安堵していた。

もう二度とあんな事件が起こる事はなく、平和が続くのだと。

この先もずっと、家族と騒動を起こしながらも、硬く絆で繋がれたまま生きる未来が続くのだと、根拠もないのに信じていた。

そう……思い込んでいた——あの日まで。

## 第24章 恐怖の島の支配者〈前篇〉

### 第234話 覇氣使い

空は晴天、やや強い風が帆を膨らませる。

追い風に背中を押され、ぐんぐんと紺碧の海を突き進む生まれたばかりの海賊船——「サウザンド・サニー号」。

明るく笑う獅子の船首の船の上からは、威勢のいい声が響いていた。

「おりゃー!!!」

「ハズレ」

びゅん、と宙へと伸びるルフイの腕。

それなりに本気を出して繰り出されたその拳は、ルフイの目の前を歩くエレノアには届かず、虚しく空を切った。

「どりゃあああ!!?」

「違う違う」

「そこだー!!!」

「残念」

「ぬおおオ~~~~!!!」

「まだまだだねエ」

掛け声と共に、何度も拳が飛び出す。だが、その尽くがエレノアに掠りもしない。

それもそのはず、ルフィの顔には布が巻かれ、視界が塞がれているのだ。その上、耳栓までつけられている。

そんな状態のまま、ルフィ他の感覚を……それこそ勘を頼りに、自分の周りを歩き回るエレノアを狙い撃とうとしていた。

「だアああ~~~~!!! 当たらねエ~~~~!!! チクショー~~~~!!!」

「にやはははは、まだまだ修行が足りんのオ」

やがて我慢の限界に達したルフィがその場に仰向けに倒れ込み、目隠しを取って悶え出した。その様を、エレノアが笑って見下ろす。

数日前から始まった、エレノアの指導の下の修行。

その成果は、残念ながらもまだまだ実ってはいないようだ。

「でもよオエレノア!!? こんなんじや攻撃なんて当たんねエよ!!! この目隠しと耳栓

絶対しなくちゃならねエのか!!」

『見聞色』の『覇気』の修得の為には、自分の感覚を限界の先まで極める必要があるんだよ。無茶無謀はして当たり前のことさ」

悔しそうに顔をしかめ、ルフィはまた甲板の上に寝転がる。

芝生が敷かれた甲板は昼寝に最適だが、流石のルフィも今の気分で寝ていられそうにないようだ。

二人の修行風景を横目に、近くで巨大な鋼鉄の塊を振り回していたゾロやフランキー、チョップパーがちらりと横目を向けた。

「『覇氣』……それがお前の使ってる力の名か」

「なアなア!!?」ほんとおれ達にもあんなことができるようになるのか!!?」  
「そうする予定だよ」

近くにはルフィと同じように目隠しをしたサンジやウソップの姿がある。視界を封じ、エレノアの方を音を頼りに見やっっている。

ナミとロビンは舵輪の近くに佇みながら、話自体は気になるのか耳をそばだてていた。

「私が教えられるのは二種類の『覇氣』……『見聞色』と『武装色』。『新世界』にいる海賊や武人は、大抵がこの力を持つてるよ」

「……お前と同じことができる奴がゴロゴロいるのか」

「うん、掃いて捨てるくらいいるよ」

即座に頷くエレノアに、ウソップとチョップパーが引きつった顔で呻く。

要は、エレノア並みの実力者がこの先の海にはごまんといるといふ事だ。不安になるのも仕方がない、そうウソツプは自己弁護する。

『見聞色』の覇気は、自分以外の存在の気配を読み取る力……私が遠くのものを感じてきたりするのは、これも併用しているの。空島のエネルギーも大体似たような事してたらしいね」

「そーいや、神のおっさんが言ってたな……」

「空島の戦士が使っていた『心網』……これは多分『見聞色の覇気』と同じものだと思うよ」

動きを先読みし、防ぐ厄介な力を持つていた戦士達を思い出し、なるほどと男達は頷く。そう聞くと、確かに珍しくもないものに思えてくる。

そこでふと、ウソツプが手を挙げてエレノアに問いかけ出した。

「はい!!? 質問!!?」

「何かな?」

「スモーカー大佐とか、エネルギーの奴を蹴り飛ばしたアレはどう使えばいいんだ?」

『武装色』の覇気は………ていうか覇気はそれぞれの感覚で引き出すものだから、私が伝えられるのはあくまで私の感覚なんだけど……」

ウソツプの他にも、ゾロやサンジも興味深そうにエレノアを見つめる。

エレノアは少し考え込むと、懐から一枚のタオルを取り出し、近くに置かれた水で満たされた樽の方へ向かう。

それで、ぱんつと樽の側面を強く叩く。当然、樽は微動だにしない。

「これが、『覇氣』を使つてない一撃だとすると……『覇氣』を使うと——」

エレノアはタオルを樽の中の水に漬け込み、濡らす。そしてそれを、再び樽の側面に思い切り叩きつける。

ばしん！と凄まじい音が鳴り、重い水樽が軽く揺れた。

「なるほどな……!!?」

「『覇氣』には個人差があるから、目覚めた後は自分の感覚を探さないとダメだよ。本来の自分の実力を引き出せなくなるから。無理に型にハマったものより、自分で模索するのが一番いいんだ。ま、きつかけぐらいにはなるといいけどね」

濡れタオルを絞りながら、エレノアは感心した顔の男達を見渡し、そつと激励の言葉を送り……不意に、なるほどと頷くサンジに目を向けた。

「例えば……そうだな、サンジ君はどちらかというで見聞色の方が向いてそうだから……」

サンジを見つめながら、何やら考え込むエレノア。

訝しげに眉をひそめる彼や他の者達の前で、うんと頷いたエレノアは大きく息を吸い

込み始め。

「おおつとサンジ君の後ろでナミがセクシーポーズを取ってるウ!!? 小悪魔な笑みを浮かべてくびれを強調してるぞオ!!?」

「!!?」

「……は? ちよ……ちよつと何言ってるのよ」

突如、わざとらしい大声で告げられ、サンジは困惑で辺りをきよろきよろと見渡す。

ナミは舵輪の近くに立ったままで、エレノアの言うような事は一切していない。こちらにも戸惑いの表情を浮かべている。

「その隣でロビンが前かがみになって胸の谷間を見せてるウ!!? 妖艶な色気をこれでもかと思せつけてるねエ!!」

「!!? !?? くっ…」

「目隠し外しちゃダメだよ、外したら両目抉り取るからね」

「恐エよ!!」

欲望に駆られたサンジが目隠しを外そうとするが、先んじてエレノアに止められ歯噛みする。ウソップが突っ込むも、エレノアの悪戯は止まらない。

「うわーっ!!? しかも2人とも日差しが暑いからって脱ぎ出したア!!? 下は水着だア!!! ほぼ紐みたいなえげつないヤツ!!? しかも紐が緩くて2人ともポロリし



たアアア!!!」

「うわああああああア!!!」

「いや、鬼か!!!」

男の欲を刺激しまくる誘いの声に、とうとうサンジは血涙を流して悲鳴をあげる。がくがくと体を震わせ、発狂しかねない勢いを見せた。

再びウソツプの突っ込みが飛んだ直後。

「がん、ごん、とサンジとエレノアの脳天にナミの拳骨が襲いかかり、二人は芝生の上に倒れこんだ。

「アホな修行やってんじゃないわよ!!!」

「フフ……」

「……………」、このように得意分野を伸ばすという手もあります。覚えておくように」

頭頂部から煙を上げて悶絶するエレノアを睨みつけ、ナミが鼻息荒く吐き捨て拳を震わせる。隣のロビンは、そんなエレノアにくすくすと笑みをこぼしていた。

ふん、と鼻を鳴らすナミ。彼女の脳裏に、エレノアへのある疑問が浮かんだ。

「それにしても……………」、どういう心境の変化なの？ こんな風にこいつらに修行をつけてやるなんて」

「あたたたた……………」私が通せる仁義さ」

首絵かしげるナミに、たん瘤を摩るエレノアはやや暗い表情で返す。

どっか、ルフイ達に対して申し訳なきや後ろめたさを抱いているような、そんな表情だ。

「私は前も言った様に……いつかはパパの船に戻るつもり。言っちゃあなんだけど、あんた達との力の差は確実に大きいと思ってる。このままこの船にいても、あんた達の為にならないと思つてた」

「……………事実だな」

「だけど、そうもいなくなってきた。あんた達に降りかかる災厄は、私の想像を超えてきた……この先もきつと、想像だにしない困難が襲つてくると思う」

エレノアの目が、水面の遙か先を見やる。

数多の海賊達が跋扈する、名だたる猛者達の蠱毒のような海がある方向だ。

「『新世界』に今のあんた達を置き去りにしていく様じゃ、見捨てたのと同じ事……」  
きつ、と表情を改め、エレノアはルフイ達に向き直る。

腕を組み、胸を張り、小さな体全体で勇ましく覚悟を示し、ふんと荒く鼻息を吹く。

「だからせめて、あんた達が生き残れる確率を上げる為に、私は時間が許す限り、ここにいてあんた達を鍛える。私の持つ技術と力の全てを教え込んで、あの海に立ち向かえるようにする——それが私の仁義だよ」

もう二度と見捨てない。命懸けで命を救われた天使が、まっすぐに仲間達全員を見つめて告げる。

義理堅い彼女に、一味は呆れを孕んだ笑みを浮かべ見つめ返す。

そして、船長たる麦わらの男が、拳を掌に打ち付けて勢いよく立ち上がった。

「よし!!? もっぺん頼む!!!」

「よし来た」

その後、またしばらくの間、複数人分の威勢のいい掛け声が響き渡るのだった。

「ん?」

ゾロがそれに気づいたのは偶然だった。

エレノアとの修練の後、それぞれで休憩していた時。心地よい疲労感に成長を感じつつ寛いでいると、海面に浮かぶ何かが視界に入った。

『おい!!? 海に何か浮いてるぞ』

早速、船に備わった連絡管を使って仲間に警戒を促す。

途端に、同じくそれぞれ船室で休んでいたルフィ達が何事かと甲板に集まり、船の真下を見下ろした。

「なんだなんだ」

「タル!?? 見ろ!!? 『宝』って書いてあるぞ!!」

ぷかぷかと浮きながら近づいてきたそれは、明らかに何者かがわざと漂流させたものようだった。

宝と大きく書かれた旗を背負い、かなりの年季を感じる見た目となつてゐるそれに、ルファイがあつと声をあげて目を輝かせた。

「もしかして!!? 『宝船』の落し物じゃねエか!??」

「お宝!??」

誰かが貴重なものを隠そうと海に流したのだろうか、とわくわくしながら、男手が集まつて樽を引き上げ甲板の中心に置く。

一味全員で樽を囲んでいると、ナミが訳知り顔で笑みを浮かべた。

「残念、お酒と保存食よ」

「何で見てねエのにわかんだよ!!?」

『海神御宝前』って書いてあるでしょ? これは誰かが航海の無事を祈つて、海の守護神にお供え物をする『流し樽』だよ」

びし、と樽に備えられた旗を指差し、エレノアが説明する。

すると途端に、期待していたルファイががっくりと肩を落とした。

「なんだ…じゃ拾つても意味ねエじゃねエか」

「おう、せっかく酒だろ。飲もうぜ」

「バカ！ お前、バチが当たるぞ!!?」

「お祈りすれば飲んででもいいのよ?」

「おれは神には祈らねエ」

初めて見る風習に、皆が興味津々と言った顔で樽を見下ろす。

身構えるウソップと傲岸不遜なゾロという対照的な二人を見て笑いながら、エレノアがさらに続けて語る。

「波にもまれたお酒は格別に美味しいんだよ」

「そりや味わうべきだ!!? よし、乾杯するぞ!!?」

「飲んだ後は、空樽にまた新しいお供えを入れて流すのがならわしよ」

「開ける開ける早く!」

「おい神様—!!! おやつ貰うぞ——!!!」

「空島で『神』をぶっ飛ばしてきたのはどこのどいつだよ…」

能天気な笑い、大空に向けて手を合わせるルフイに呆れつつ、ウソップが代表して樽の口を開けにかかると。

ものの数分で、固く閉ざされていた蓋は封を切られた。

「よし、開いた」

待ちきれないとばかりに、ルフィが樽の蓋を開けた——その瞬間。

どんっ、と樽の中で火が爆ぜ、天空に向けて何かを発射する。

空高く打ち上げられたそれは、ぱんつとまばゆい眩い光を辺りに撒き散らし……やがて何事もなかったかのように消え去った。

「……………!!? 何!?? どういう事!??」

「酒が飛んで光って消えた」

「『発光弾』よ」

「はっはっはっ、海の神の呪いじゃねエのか?」

「…ただのイタズラならいいけど…もしかして…」

驚くナミやチョッパーをよそに、ゾロが冗談交じりに笑う。

だが、閃光弾が弾けた跡を見上げていたロビンが、険しい顔で辺りを見渡し、呟いた。「この船はこれから誰かに狙われるかも知れない」

「まさか…そういう罠なのか!?? 樽を開けた事で、おれ達がここにいると今、誰かに知らせちまったのか!??」

ウソップがささず辺りを見渡し身構えるが、敵らしき存在は見当たらない。

信仰心や良心を利用した巧妙な罠に、息を潜めて気配と悪意を探るも、まだ修行の途中の彼には何も感じられない。

「どこにも誰も見えないぞ!!?」

「誰も…見えないけど……エレノアは?」

「……今のところは何も……」

水平線を見渡し、目を細めるエレノアが首を傾げる。

この景色のどこかに潜んでいるのだろうか、と険しい顔で遥か彼方を睨み、考え込む。

その時、辺りを見渡していたナミとほぼ同時に顔を上げ、仲間達の方に振り向いた。

「みんな持ち場に!!? 南南東へ逃げるわよ!!? “大嵐”が来る!!!」

「今から約5分後!!?」

突然の指示に驚きながら、一味はすぐさまそれに従い、サニー号の操舵を始める。

天才的航海士と伝説の天使の告げる言葉を今更疑う者はいない。すぐに船は二人に言われた通りの方角に動き出す。

だが、それでも思い通りにいかないのが“偉大なる航路”だった。

「……!!? ダメだ、完全に向かい風!!!」

進路を変えてしまわなく、サニー号は発生した嵐に捕まり、激しい風雨と荒波の中に囚われる。

なんとか抜け出さなければ、と思考を巡らせるナミに、不意にフランキーがニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「オイ!!? この船の力はこんなもんか!!?」

「そつか! みんな、帆をたたんで!!? 『外輪』出すわよ!!?」

「おお!!? アレか!!?」

「うおー!!? アレかつこいいから好きだ、やれー!!」

にわかに沸き立つ妻わらの一味。強風の中、帆をたたみ風を受けるのをやめる。

舵輪を握ったフランキーがある装置を起動させると、船体の両側の円形の扉が引き上げられていく。

開かれた船体から飛び出したのは、荒海であろうと掻き分け進む外輪だった。

『ソルジャードックスシステム』!!? チャンネル『0』!!? コーラエンジン『外輪船』

サニー号!!」

「進め——っ!!」

フランキーの発明により、凄まじい動力を発するサニー号。

一味はその力で、ぐんぐんと波の間を突き進み、嵐をいとも簡単に突破していった。

「はあ……越えた……」



穏やかな海を見下ろし、サンジが呟いた。

窮地を一つ脱した直後だが、まだ彼らの顔に安堵の色はない。

「越えたはいいが…何だこの海。まだ夜でもねエだろうに……霧が深すぎて不気味な程暗いな」

一面灰色に見えるほどの暗い景色を見渡し、ゾロが呟く。

気を抜けば、同じ甲板の上にいる仲間ですら見失いそうなほど、その霧は濃く宙を漂っている。

険しい顔で立ち尽くす一味の中で、エレノアが耳を立てたまま緊迫した声で語りかける。

「さてみんな……こっから先は常に警戒が必要だよ」

「……………もしかして……」

「そう……!!? オバケも怪物も何でもありうる魔の海……『魚人島』に向かう前のヤバい海域……………『魔の三角地帯』さ」

青い顔でナミが訊ね返すと、エレノアもやや引きつった顔で頷き、虚空を見据える。

全知全能の種族でも全てを把握しきれない海。彼らが今浮いているのは、そんな摩訶不思議な場所なのだ。

「何もかも謎に消える怪奇の海だ……!!」

## 第235話 “霧の海”

エレノアの言葉に、びくつ、とウソツプが肩を震わせ振り向いた。  
大きく目を見開き、顔から血の気を引かせ始める。

「え……オ……オバ……オババ……オバ」

「オバケ出るんだ、ここの海」

「ふざけんな——!!! 何だみんな知った風だな、おれア聞いてねエぞそんな話く

!!？」

「ココロばーさんが教えてくれたんだ。生きたガイコツがいるんだぞ」

「そりやお前のイメージだろ。ムダにビビらせてやるなよ」

楽しそうに笑うルフイに戦慄し、怯えまくるウソツプ。真逆の反応を見せる青年に呆れながら、サンジは苦笑しウソツプを宥める。

……顎の下でマツチの火を灯し、不気味な影を顔に浮かばせながら。

「いいかウソツプ、この海では毎年100隻以上の船が、謎の消失を遂げる……さらに死者を乗せたゴースト船がさ迷ってるってだけの話だ」

「やめてあげなよサンジ君」

怪談話をする時のような悪戯に、エレノアが思わずぼんとサンジの肩を叩く。怯える姿が滑稽だからと子供のような揶揄い方をする彼を、姉を気取るように咎める。

しかしそのお陰で、ウソツプの恐怖は倍增する羽目になった。

「ギャアアアアアアアいやだア!!! 先に言えよそんな事」

「言つたらどうしたんだよ」

「準備だ!!? 悪霊退散グッズで身をかためねば!!?」

「ウソツプ、おれにもかしてくれそれ——!!!」

ばたばたと甲板上を駆け回るウソツプに、やれやれと肩をすくめる他の面々。チヨツパーを除き、全員が彼から目を逸らす。

その時だ。

それが聞こえてきたのは。

「何だ…音楽…?」

はっ、とウソツプはその場で凍りつき、ぎこちなく音が聞こえる方へ振り向く。

他の者も同じく、ぎよつと目を剥きながら音の出所を探して辺りを見渡す。

そして彼らは——遭遇する。

「ヨホホホ〜…♪ ヨホホホ〜…♪」

途方もない年月を海を彷徨い、見る影もない程に朽ち果てたぼろぼろの船に——不気味な死者の船に。

「「「出たア~~~~!!」」」 ゴースト船~~~~!!」」」

数人分の悲鳴が響き渡り、真つ青な顔の青年達が飛び上がる。

いくつもの修羅場を超えてきた一味といえど、無理はない。

今にも沈みそうなのに沈まない、凄まじい負の威圧感を放つ、サニー号の十倍近い大きさの船が、ゆらゆらと目の前に現れたのだから。

「何なの!? この歌……」

「悪霊の舟歌だ!!! 聞くな!!? 耳を塞げ、呪われるぞ!!!」

「え~~~~!!?」

「ゴーストが話しかけてきても耳をかすな!!! 応えたら海へ引きずり込まれるぞ!!! 悪

霊は道連れを求めてる!!!」

「どこ情報だよ、それ……しかしやつぱり」

ぎやーぎやーと騒ぎながら、聞こえてくる謎の歌にも怯えるナミとウソツプ、チョツパー。

一味の中でも特に怖がりな彼らの情けない姿に呆れながら、エレノアは訝しげに幽霊

船を見上げた。

「……この船に……誰か乗ってるっていうの……?」

「敵なら斬るまでだ」

冷静なロビンでさえ、強張った顔になる横で、ゾロだけが好戦的に笑う。

一味全員に緊張感が走っていた、そんな中。

「ヨホホホ……ヨホホホ……♪」

不意に、まじまじと船を見上げていた白虎の天使の口から、幽霊船から流れてくる歌と同じ旋律がこぼれだす。

ウソツプがぎよつと、様子が変わったエレノアに振り向き、頭を抱える。

「エ……エレノア……!!! 何であの歌一緒に歌っちまってんだよ!!! やめてくれ!!! お前が連れてかれちまったらおれ達は……!!!」

「いやあああ……!!!」

「エレノアが呪われたア……!!!」

「ヨホホホ……ヨホホホ……♪」

ナミとチョップパーも騒がしく泣き喚きながら、歌い続けるエレノアからずぎざつと距離を取る。霧囲いのせいで、本人の歌の巧さが場の不気味さに拍車をかけていた。

「いるぞ、なにか」

悲鳴が止まない中でも、油断なく刀に手をかけていたゾロが呟く。  
鬼が出るか蛇が出るか、はたまた亡霊か。

本物がいるわけがないと否定したがりつつ、恐怖で声もあげられなくなった海賊達の前に……それは現れた。

「……………ピンクスの酒を……♪ 届けに……ゆくよ……♪」

甲板の淵に立つ、白い影。

暗い闇の中に浮かび上がる、黒いアフロヘアと真つ白な骸骨の顔。

湯気の立つ紅茶を片手に、歌い続けるこの世ならざる者が。

ゆつくりと、己を乗せる幽霊船と共にサニー号の前を通り過ぎていった。

「何で行くの!? やっぱり私帰る!!?」

「だからおれ一人でもいいって」

「ダメだ、お前がアホやっておれ達の船が呪われたらどうすんだ」

「大げさだなア……ただの白骨化した船員ってだけじゃない」

「そんな船員がいてたまるか!!」

数分後、霧の中には、幽霊船の船体の壁をよじ登るルフィ達の姿があった。

幽霊船と離れないようサニー号が固定され、甲板から垂れ下がった縄を伝ってルフィ

が中に入り込もうとしていた。

その後をナミが怯えながら、サンジが険しい顔で追い、よじ登る。彼らのそばで、エレノアがばさばさと翼を羽ばたかせる。

即断即決で、ルフィは幽霊船を冒険する事を決めた。

例えどんなに恐ろしい現象が起ころうと、彼らの船長が臆するはずがなかったのだ。

「くじ運だからな。大丈夫!!? ナミさんとエレノアちゃんはおれが守るぜ〜♡」

「ナミ、お前『宝船』楽しみにしてただろ?」

「これが『宝船』なわけないじゃない、見たでしょ!? 動くガイコツ」

「あいつが宝の番人だ。とにかくあいつを探そう!!?」

「番人かどうかはともかく、顔を見たからにはしっかりと挨拶していかないと」

「ご近所か!!!」

「肝が座ったエレノアちゃんも素敵だぜ〜♡」

見張り兼女性陣の護衛役に臨んだサンジの上を飛び越えながら、ずれた考えを語るエレノアにナミが吠える。

よくもそんな能天気と考えられるものか、と憤慨していたその時。

「あ、どうも」

ふと頭上から、エレノアの呟きが聞こえてくる。

びしり、と固まり、ゆっくりと顔を上げたナミは。

真上から自分達を見下ろす、あのアフロの白骨死体の姿を目の当たりにした。

「ギャアアアア……!!」

「悪霊退散、悪霊退散、ルファイ安らかに眠れ……!!」

響き渡る悲鳴に、サニー号に残ったウソップが即席の経を読み、犠牲になった彼女の冥福を必死に祈った。

「ごきげんよう!!! ヨホホホ!!! 先程はどうも失礼!!? 目が合ったのに挨拶もできなくて!!!」

かつん、と甲板についた杖が乾いた音を立てる。

上機嫌な笑い声をあげ、かたかたと自らの骨を鳴らしながら、アフロの骸骨紳士が預期せぬ客人達を見渡した。

「ビツクリしました!!? 何十年振りでしょうか、人とまともにお会いするのは!!?」

「ここらじゃ会う船会う船ゴースト船で、もう怖くて!!?」

「いいいえ、こちらこそ勝手に上がり込むようなマネを致して大変申し訳ございません」

「ヨホホホ!!? ではここはお互い様という事で!!? さアさアどうぞ中へ!!?」



「あつ、いえいえそんな、どうぞお構いなく」

びくびくと怯えるナミと警戒するサンジ、目を見開き輝かせるルフィをよそに、骸骨紳士と白虎の天使が丁寧に挨拶を交わす。悪夢のような光景だった。

「オヤオヤ!! お二人とも? 実に麗しきお嬢さん方!!? んビユ——テイホー!!!」

「私、美人に目がないんです!!? ガイコツだから目はないんですけども!!? ヨホホホホ!!? あ、もしやそちらのお嬢さん!! 先程歌をご一緒して下さった方では? いやア本当にお綺麗で!!」

「まあ、お上手だ事」

周囲の景色が恐ろしく陰鬱なのに、骸骨紳士の雰囲気は終始明るい。それに反比例するようにナミは恐怖で縮こまる。

エレノアのみがまともに相手をする中、ふと動きを止めた骸骨紳士が問いかけてきた。

「パンツ見せて貰ってもよろしいですか?」

「見せるかっ!!!」

予想だにしない下品な要求に、瞬時に怒りが湧いたナミとエレノアが上下から蹴りを食らわせる。

鈍い音を立てて、骸骨紳士の頭蓋骨が震え、ゆっくりと倒れ込んだ。

「ヨホホホ、オヤオヤ手厳シイ——!!! 骨身にしました!!! ガイコツなだけに!!!」

「うっさい!!!」

「うははははは!!?」

手酷い一撃を受けたというのに、相変わらず骸骨紳士の態度は明るいまま。爆笑するルフィの姿が横にあると、ナミも次第に恐れるのが馬鹿らしくなってくる。

やがてルフィも、目の前の人外にふとした疑問をぶつけ出した。

「お前、うんこでるのか?」

「それ以前の疑問が山程あんだろ!!!」

「あ、うんこは出ますよ」

「答えんな、どうでもいいわ!!!」

全く重要そうでない、確かに気にはなるが現時点において全く必要ない質問とその答えを一蹴し、サンジが骸骨紳士に凄んだ。

「まず!!? お前は骨なのになぜ生きて喋れるのか、お前は一体何者なのか、なぜここにいるのか、この船で何があったのか、この海ではどんな事が起きるのか、全部答えろ!!!」

謎しかない存在を前に、答えなければ引かないとばかりに目を吊り上げ、吠えかかる。

得体の知れない人外をこれ以上女性陣に近づかせてなるものかと、番犬のような心地で動く白骨死体を睨みつける。

……が、そんな空気をぶち壊すように、彼らの船長が前に出て堂々と言い放った。

「そんな事よりお前、おれの仲間になれ!!!」

「ええ、いいですよ」

「うおおおおお!!!」

好奇心旺盛な彼なら確実に口にするだろう、その言葉。

恐れていた事態の前に、より一層真っ青な顔になるナミとサンジを横目に、エレノアはやれやれと肩を竦めた。

「ヨホホホ!!! ハイどうもみなさん!!? ごきげんよう!!! 私、この度この船でご厄介になる事になりました。死んで骨だけブルックです!!! どうぞよろしく!!!」

遭遇した骸骨紳士ーブルックを、ルフォは早速サニー号に連れて行き仲間達に紹介する。

相変わらずの明るさで挨拶をする彼らに、当然他の面々は面食らった。

「「ふざけんな!!! 何だコイツは!!!」」

ロビンだけが、くすくすと可笑しそうに笑っている。

ゾロとフランキーが警戒心を前面に示す一方で、ウソップとチョップパーは尋常じやないくらいに慄いていた。

「ガイコツだ——っ!!!」

「ガイコツが喋って動いてアフロなわけがねエ!!! これは夢だ、絶対夢だ!!!」

「ホントか?!? よかった夢かー!!!」

「悪霊退散悪霊退散!!?」

「落ち着け」

勝手に慌てたり怯えたり納得したり、まるで落ち着かない彼らにエレノアが深いため息をつく。

そんな彼らをよそに、ブルックは一味のもう一人の美女に近づいた。

「おや、美しいお嬢さん!!? パンツ見せて貰ってよろしいですか?」

「やめんかセクハラガイコツ!!!」

ばこん、とナミが投げつけた靴がブルックの頭に炸裂する。

先ほどの蹴りよりは痛くなかったようで、ブルックは平然としたまま、陽気に笑い続けた。

ゾロはブルックに険しい目を向け、次いで他人事のようにけらけらと笑っているルフィを睨みつける。

「おいルフィ!!! こいつは何だ!!?」

「面白エだろ、仲間にした」

「したじゃねエよ、認めるか!!! おめえらは一体、何の為にいつたんだ?!? こういう

ルフィの暴走を止める為だろうが!!!」

「面目ねエ」

「まーまーそう怒らずに」

「おめエも同罪だバカ!!!」

ナミとサンジを叱りつけ、消沈させているところに、こちらも他人事のようにエレノアが宥めようとして、一層ゾロの苛立ちが募る。

騒がしくも張り詰めた空気が流れる中、事の原因が一味全員に落ち着くよう促し始める。

「ヨホホホ!!? まあそう熱くならず!!! どうぞ船内へ!!? 夕食にしましょう!!!」

「てめエが決めんな!!!」

原因に論され、宥められ、悶々とした気分になりながら。

この場で騒いでいても仕方がないと、一味は渋々言われた通りに船室へと入っていった。

「いやいや何と素敵なダイニング!!? そしてキッチン!!? これは素晴らしい船ですね!!? ヨホホ!!?」

「そうさ、スーパ―なおれが造つた船だ! おめエなかなか見る目あるじゃねエか!」  
「おい馴れ合うなフランキー」

食堂で席に着くと、ブルックは明るく洒落た内装を心から褒め称えだす。すると警戒していたフランキーも途端に機嫌をよくし、笑みを浮かべる。

サンジは呆れる他になく、あとはもう無言で調理の手を動かすばかりとなっていた。「しかしお料理の方楽しみですね。私、ここ何十年ろくな物食してないので…もうお腹の皮と背中のお皮がくつつく様な苦しみに耐えながら毎日を生きて来たのです。お腹の皮も背中のお皮も、ガイコツだからないんですけども!!! ヨホホホ!!? スカルジョーク!!?」

「……これ、笑つていいの?」

自虐というか、なんとも反応に困る冗談を口にし、ルフィだけが爆笑する。

気を遣つて笑うべきか、それとも聞かなかつたふりをすべきか、エレノアもやや反応に困つていた。

「——私、紳士ですので『食事を待つ』——そんな何げない一時が大好きで…デイ——  
——ナ〜アツ♪ デイ—— ナ〜アツ♪」

「うるせエ黙って待ってろ!!!」

「料理長!!? ドリンクは牛乳でお願ひしますよ!!?」

ナイフとフォークを両手で持ち、きんきんと鳴らして騒ぐ船長と骸骨。

子供でももう少し大人しく待っているだろうに、とフライパンを動かしながらサンジが怒鳴りつける。

その時、ルファイが忘れていたとばかりにブルックに向き合つて訪ね出した。

「ところでコロボツクル」

「あ、ブルックです私。えーと…あ、お名前まだ…」

「おれはルファイだ。ところでお前、一体何なんだ?」

「ただだけ互いを知らねェんだお前ら!!!」

「ゾロ君、適当な所で切り上げとかないと頭の血管切れるよ」

名前もまともに覚えていない…:…:…というかそもそも勧誘の時点で聞いてもいなかったルファイ。ゾロが突っ込みを入れるが、すぐにエレノアが無駄だと彼を宥めた。

そうこうしているうちに、厨房から香ばしい匂いが漂い始める。

「さア、ガイコツを追い出すのは後回しだ。ひとまず食え!」

「んまほ——!!? おいブルックいっぱい食え、サンジのメシは最高だぞ!!?」

「私、何だか…!!? お腹より胸がいっぱいで…」

完成した料理を机の上に並べ、促すサンジ。

早速手を伸ばそうとするルフイが止められる横で、ブルツクは感極まったように身を震わせ。

さらに隣に座ったロビンの皿を覗き込んだ。

「お嬢さんのお肉、少し大きいですね。変えて貰ってもよろしいですか？」

「おかありあるから自分の食え!!!」

割と凶々しく意地汚い紳士に、再びサンジの怒号が飛んだ。



## 第236話 ヽガイコツ紳士、

「〃ヨミヨミの実〃……!?」

「やっぱり『悪魔の実』だったか……そんな事だろうとは思ってたけど」

食事を堪能しながらブルックが語った内容に、驚きの声上がる。

食べ終わった食器を片付けながら、前掛けをつけたエレノアが一味に呆れた視線を向けた。

「この海で起こる不思議な現象は、大抵『悪魔の実』の力で引き起こされてる事が多い!!? それくらい予想できた事でしょように」

「お前、わかってたんなら教えてくれよ!!? ずりイぞ一人だけ落ち着いて……」

「いやいや……喋って動いてアフロなガイコツどころか、もつとんでもない奴らと  
いっばい会って来たでしょ」

じと、と文句を言う青年達を思わず睨む。

とんでもない奴らの代表格が、こうして目の前に立っているというのに。

「動く鎧やら不死身やら……あと自分で言うのもなんだけど天族とか錬金術とか、数え上げたらきりが無いよ」

「それとこれとは別だ。なんせ今度のは死者だぞ？」

「そうなのです！ 私、実は数十年前に一度死んだのです!!？」

「はいおじいちゃん、おうち拭き拭きしましょうね〜」

顔中を料理の残骸でべちゃべちゃにしながら、ブルックが頷く。どう食べればそうなるのか、という有様だ。

老いた義父の世話をする嫁のように、エレノアが甲斐甲斐しく顔を拭いてやり、改めてブルックの話が始まった。

ブルックが口にした悪魔の実、それは数多の実の中でも特殊なものだった。

最初はただ、カナヅチになるだけ。

だがその実が真価を示すのは、食った者が死んだ時……ヨミヨミの実は、黄泉がえりの能力者。つまりその者に復活を、二度目の人生を与えるのだ。

ただし、ブルックの場合は復活する環境が不味かった。

深い霧の中で彼の魂は迷い、戻るべき肉体を見つけた時には……すでに白骨死体と化していたのだとか。

「びっくりして目が点になりましたよ、目玉ないんですけども!!! ヨホホホ!!!」

「マヌケだなー、ゾロみてエな奴だ。なはは」

「あいな」

さらつと悪口を挟むルフィにゾロが苦い顔になる。

一緒にするな、とその顔は告げていたが、実際同じ状況になれば想像した通りの結果になるだろう……ルフィが言えた義理では決してないが。

「それで喋るガイコツの完成か！ 白骨でもちゃんと蘇つちまうところが『悪魔の実』の恐ろしい所だな」

「もう半分呪いじゃねエのか」

「その『実』は、もう役目を果たしてカナツチだけ残つてんだろ」

真面な人からは大きくかけ離れてしまった姿に、誰もが流石に同情の視線を送る。能力者が総じて化け物じみているとはいえ、これは別の意味で異様だ。

「しかし、白骨死体にふつう毛は残らねエよな、ガイコツがアフロつて……」

「毛根強かつたんです」

ふとしたゾロの疑問に、ブルックはきつぱりと告げる。

自分の髪に絶対の自信がありそうで、ゾロはそれ以上何も言えなくなつた。

「じゃ、お前オバケじゃねえんだな!!? つまり!!?」

「人間なのか、人間じゃねエけど!!?」

「ええ。私、オバケ大嫌いですから!!? そんなものの姿見たら泣き叫びますよ私!!?」

「あんだ鏡見た事あるの?」

「オバケ側も泣き叫んだりして」

「どうやら、魔の類のものでは内容だと安堵し始めるウソツプやチョツパーに、ブルツク自身が強く叫ぶ。

ナミが呆れた顔で手鏡を差し出し、エレノアがけらけらと笑っていると、突然ブルツクの態度が豹変する。

「ギャ——!!? やめて下さい鏡は!!?」

「え!?? おいちよつと待て!!?」

鏡を前に狼狽するブルツクに、ある現象に気づいたウソツプが手鏡の中を覗き込む。

同じくチョツパーも目を見開き、鏡面を——宇宙に浮く自身を凝視する。自分はいま、ブルツクの体によじ登っているはずなのに。

「お前何で……!!? 鏡に映らねえんだ!!?」

ぼつかりと空いた、ウソツプとチョツパーの間の空間。

異変に気付き、ルフィも他の面々もぎよつと目を見開いた。

「ほんとかー!!? スゲ——な!!!」

「バ……吸血鬼か!!!?」

「い……よく見りやお前『影』もねエじゃねエか!!!」

「うわー!!!! 本当だ!!!! お前実は何者なんだー!!!!」

がたがたと椅子を蹴倒し、後ずさる麦わらの一味。

生者どころか物質に必ずあるはずのものまで持つてない異形に、再び警戒心が跳ね上がる。

騒然とする船の中で、ブルックは優雅に紅茶を口にしていた。

「いや落ち着くところかよ!!!!」

「こつちは騒いでんだぞ、お前の事で!!!!」

「全てを一気に語るには……私がこの海を漂った時間は、あまりに長い年月……!!!! 私  
がガイコツである事と……影がない事とは、全く別のお話なのです」

ごくり、と得物に手をかけたまま取り囲む一味に、静かに語るブルック。

ゆらゆらと立ち上る湯気を見下ろしながら、沈黙を破るように再度口を開く。

「続く」

「話せ!!!!? 今つ!!!!」

不要なボケに、がくりと何人かの肩が下がる。真剣な雰囲気もまるで気にしない能天気さに、だんだん馬鹿らしさが蘇ってくる。

その横で、ロビンとエレノアが何かを思い出しかけているような、訝しげな表情を浮かべていた。

「『影』は…数年前ある男に…奪われました」

「……………奪われた？」

「……………『影』を……………」

「お前が動いて喋ってる以上今更、何言おうと驚かねエが、そんな事があんのか？」

「あります」

ブルックが言うには……………影とは謂わばもう一つの魂であるらしい。

生まれて死ぬまで本体に付き添い続け、常に同じ動作同じ場所において続けるもの——もし、これが離れた状態で、影を生み出す日の光を浴びようものなら。

その者は、消滅する事となる……………自身の目撃談と共に、そう語った。

啞然として黙り込む一味の前で、ブルックはかたかたと骨を鳴らし、舞台劇のように礼をしてみせた。

「つまり私は光に拒まれる存在で!!? 仲間は全滅、『死んで骨だけ』ブルックです、どうぞよろしく!!?」

「何で明るいんだよ!!! さんざんだな、お前の人生」

「なのに『コツコツ』生きてきました!!? 骨だけに!!!」

「うるせエよ!!!」

突っ込みを入れられても、呆れられても、ブルックの笑い声は止まらなかった。あま

りに長く続き、何事かと慄いていると、彼は両手を広げて己の感情を露わにした。

「今日は何んて素敵な日でしょう!!! 人に逢えた!!!」

はっ、とエレノアは息を呑む。

過剰なほどに明るく振る舞う彼の雰囲気流され、忘れかけていた肝心な事情を思い出したのだ。

「今日か明日か、日の変わり目もわからないこの霧の深い暗い海で、たった一人舵のきかない大きな船にただ揺られてさ迷うこと数十年!!? 私、本つつ当に淋しかったんです

よ!!! 淋しくて怖くて……!!! 死にたかった!!!」

「ブルック……あんた」

「長生きはするものですね!!! 人は『喜び』!!! 私にとつてあなた達は『喜び』です!!!

ヨホホホ!!! 涙さえ涸れていなければ泣いて喜びたい所」

声に漏れ出た想いは、間違いなく本物。

長い時間の中の悲しみも、今彼が得ている喜びも、これでもかと伝わってくる。

「あなたが私を仲間に誘つてくれましたね!!? 本当に嬉しかったのです、どうもありがとう」

楽しそうに笑うルフィに改めて礼を言うと、ルフィはさらに笑みを深める。

しかししばらくすると、ブルックは髑髏の顔を申し訳なさそうに歪め、ルフィに頭を

下げた。

「だけど本当は断らなければ!!?」

「おい!!? 何でだよ!!?」

「先程も話した様に、私は『影』を奪われ、太陽の下では生きていけない体! いまは、この魔の海の霧に守られているのです」

もつともな話に、ルフィ以外の全員が納得の表情を浮かべる。彼を連れてこの霧の海を出た瞬間、新たな仲間は塵と化してしまうのだ。

……まあ、ほつとしている者も何人かいたようだが。

「あなた方と一緒に、この海を出ても私の体が消滅するのも時間の問題。私は、ここに残って『影』を取り返せる奇蹟の日を待つ事にします!!? ヨホホホ」

「何言ってるんだよ、水くせエ!!! だったらおれが取り返してやるよ!!! そういや誰かに取られたつつつたな、誰だ!!!? どこにいるんだ!!?」

せつかく見つけた仲間間に別れを告げられ、とルフィは一切の打算なくそう告げる。いつも通り強引な船長に仲間達が頭を抱えるが、本人は全く気にしていない。

「…………あなた、本当にいい人ですね。驚いた!!? ——しかし、それは言えません」

ブルックは伽藍堂の目を丸くし、無鉄砲な優しさに呆れつつ、より嬉しさを感じながら肩を竦めた。



それでも彼は、その首を横に振るう。手を取るわけにはいかないのだと。

「さつき会ったばかりのあなた達に、〃私の為に死んでくれ〃なんて言えるハズもない」  
「敵が強すぎるって事か？ 減るもんじゃなし、名前を言うくらいいいいだろ」

「いいえ、言いません：当てもないのです!!？」 ヨホホ私の第二の人生が終わるまでに会えるかどうかもわかりません。もし次に会った時にはと：私も戦いをハラに決めていきますが」

「ここまでできたら最後まで事情を話してもらおう、とサンジが促すも、ブルックは口を割らない。

巻き込む事を忌避しているのか、敵の名を話して臆されるのを恐れたのか、それ以上ブルックは何も語らなかつた。

「それより歌を歌いましょう!!! 今日のおき出合いの為に。私は楽器が自慢なのです!!？」 海賊船では〃音楽家〃をやってみました」

「えー……っつ!!! 本当かア!!! 頼むから仲間に入れよバカヤロー!!？」 よしエレノア、歌えく!!!」

「はいはい………」

「ヨホホ!!？」 では楽しい舟歌を一曲いきましようか!!？」

おもむろに、どこから取り出したのかバイオリンを構えるブルック。

旗揚げ前から欲しがっていた人材が目の前にいると知り、目を輝かせるルフィがより一層羨望の眼差しを送る。

一緒には行けないが、せめて楽しい時間を贈ろう。そう決めたブルツクの前に。

突如、一体の半透明な“何か”が壁をすり抜け、不気味なその姿を見せた。

「ギヤアアアアアア!!! ゴ…ゴースト…!!?」

「うわ——!!? 何かいる——!!?」

悲鳴をあげ、尻餅をつくブルツク。

震える骸骨紳士の凝視する先に振り向き、ルフィ達も驚愕と困惑の声を上げる。

その直後、ずしん…!とどこか遠くから、思い何かが落とされる音が響き渡った。

「何の振動だ!!」

「何て事!!? まさかこの船はもう『監視下』にあったのか!!?」

辺りを見渡し、冷や汗を流すフランキーやサンジ。

騒然となる中、ブルツクは急ぎ立ち上がると、外に通じる扉を開けて甲板に飛び出し、海上の一点を指差した。

「見て下さい!!? 前方が門で閉ざされました!!! いまの振動はコレです!!?」

叫ぶブルツクの周りに全員が集まり、指された方角を見つめる。

そこには、巨大な口があった。サニー号やブルツクの船よりも遥かに大きな、口の形をした門が鎮座し、その左右に同じだけ高い壁が続いていたのだ。

まるで、何かに食われてしまった後のような光景だ。

「これは門の裏側!!? ……という事は!!? 船の後方を見て下さい!!!」

「あ、あれは…!!!」

ばたばたと甲板を引き返し、反対側を凝視するブルツク。

釣られて視線を背後へと向けた一味は、再度驚愕で目を見開き、立ち尽くす事となる。

「……もしやあなた方、『流し樽』を海で拾ったなんて事は?」

「あ…!!? 拾ったぞ!!!」

「それが罠なのです、この船はその時から狙われていたのです!!?」

「狙うって!!? どういう意味だ!!?」

興奮気味に説明するブルツくに、ウソップが困惑したまま叫ぶ。その目は門の反対側に釘付けになり、冷や汗が顔中から噴き出している。

突如として目の前に現れた、霧の中に不気味に佇む島を見つめて。

「この船は今、ずっとここに停まっていたのに、何で『島』がそこにあるんだよ!!!」

「これは海をさ迷う『ゴースト島』…!!!『スリラーバーク』!!!」

荒波のど真ん中で、ゆらゆらと不気味な雰囲気醸し出すその島は、まるで狂気や怨念を具現化したもののように妖しく恐ろしい。

真つ青な顔で立ち尽くすウソツプのそばで、腕の記録指針を見下ろしたナミが動揺した声をこぼした。

「さ迷う島……!?」 “記録指針” は何も反応してないわ……!?」

「そうでしよう、この島は遠い “西の海” から流れて来たのですから!」

語るブルツクの表情も、緊張し冷や汗が溢れている。

だが、彼の目に恐れはなく、むしろ島に対して並々ならぬ執念を抱いているように見えた。怯えるどころか、彼の口からは笑い声が飛び出している。

「しかし今日は何という幸運の日!!? 人に会えただけでなく!!? 私の念願まで叶う

とは!!? ヨホホホ!!?」

棒立ちのまま動けずにいるルフイ達を放置し、ブルツクはその場で高々と跳躍する。

たった一度で一味全員の背丈を越え、二度目の跳躍で帆を越える。その凄まじい跳躍力に、誰もが目を疑った。

「うお!!? 何て身の軽さ……!!?」

「ヨホホホ!!! そう!!? “死んで骨だけ” 軽いのです!!? あなた方は今すぐ後ろにそ

びえる門を何とか突き破り、脱出して下さい!!! 絶対に海岸で錨など下ろしてはいけま

せん!!!」

山高帽を摘み上げ、紳士の礼をしてみせながら、ブルックは一味に指示をする。受けた恩を全身全霊で返そうとするように、大仰な仕草で首を垂れ、そして海に向かって飛び出した。

「私は今日!!? あなた達に出逢えてとても嬉しかった。美味しい食事!!? 一生忘れません!!! ではまた!!? ご縁があればどこかの海で!!!」

「おい!!? 待てブルック!!?」

「おいおいお前能力者だろ!!? 飛び込んでどうすんだよ!!!」

海に向かって落ちていく、悪魔の実の能力者。自殺行為としか思えないその様に、ウソップが思わず悲鳴じみた声を上げる。

まさか、とルフィたちが息を呑んだその直後。

ざざざざざざ!と、海面上を凄まじい速度で駆けるブルックの姿を目の当たりにし、全員が度肝を抜かれた。

「海の上を走ってる!!!」

「うおーすげエ!!!」

まるで重力を感じさせない速さ。骨であるがゆえに軽く、速さに特化した故の走法で、あつという間にブルックの姿は波の合間に消えていつてしまう。

残された一味は、特にウソップとナミとチョッパーは青い顔で震え、船長を見つめた。「と……とにかくルフィ!!? あいつの言う通りにしましょう!!? 何が起きてるのかわからないけど!!?」完全にヤバイわ、この島っ!!?」

影を奪われた骸骨紳士、突如現れた謎の島、得体の知れない「何か」。

訳のわからない、恐ろしい現象ばかりが続き、臆病な彼らはとにかく逃げることを考えて、早急な出向を望む。

だが、じつと島を見つめていたルフィの顔は……期待と好奇心に眩しく輝いていた。「……ん? なんか言ったか?」

「行く気満々だアー!!!」

ワクワクした感情を隠しもないルフィ。

予想通りの展開に、エレノアはやれやれと肩を竦め、大きな溜息をついた。

## 第237話 魔の島へ

「…ゴ!!? ゴースト島って何なんだよ!!?」

「なアなア!!? さっきのゴーストどこいった!?? まだ船にいるのか!??」

「いや、島の方へ飛んでった。あの島の住人なんだろ」

揺れる不気味な島を横目に、ウソツプが喚き冷や汗を垂らす。

ブルックも半透明な「何か」も島に向かって消え去ってしまった、訳も分からないまま取り残されて大いに取り乱している。

一味の大半がただ戸惑う中、不意にロビンが島とは反対の方向をいて呟く。

「さっき起きた大きな振動だけど…あの「口」みたいな門が閉じた音かしら。私達はあの「口」に食べられた形になったんだと思うわ」

「食われた?」

彼女の指摘に、つられて振り向く一味。

ロビンが指差す方を見てみれば、先程見た巨大な口の左右に壁が続いており、ぐるりと視界の端まで伸びて、島の裏側まで続いて見える。

確かに、何か巨大な生物に食われたような位置に立たされているようだ。

それはつまり、一味が抜け出す隙間がなくなっていることを意味する。そう察し、エレノアがぼんと掌を叩いた。

「なるほど、周りは全部あの壁があるって事か」

「そうか…それであるのガイコツ、すぐにここから脱出しろと言つてたんだ!!?」

「じゃあこの島は人工的に海をさ迷つてゐるって事…!!? 何の為に…」

罠にしては途方も無いほど巨大な仕掛けに、ナミが思わず疑問の声をこぼす。こんなにも金も人手も掛かりそう事を、一体誰が行なっているのか。

困惑する彼女をよそに、フランキーがポーズを取りながら考え込んだ。

「『島』が動いてるとなると、ここは海の真ん中、錨を下ろせるわけもねエな」

「おいおい!!? 何停める気でいんだよ!!! 脱出するんだ、今すぐに脱出だ、呪われるぞ」

「聞いてみんな、私…!!? 実は『島』に入つてはいけない病』になつたみたい」

「おれも!!? おれもそれ!!!」

この場、この海に留まるどころか上陸を考えている新入りに、ウソツプが恐怖で足を竦ませながら吠える。ナミもチョッパーも全身で拒否感を露わにしていた。

が、そんな彼らのそばで。

ルフィは期待に満ちた顔で降り立つ準備を終えていた。



「よし！ じゃ船つけろ!!?」

『冒険準備万端病』かお前は!!!」

虫取り網に虫かご、子供の夏休み中のような格好でやる気満々といった雰囲気醸し出すルフィ。

感覚がずれまくっている彼の肩を掴み、ウソツプが慌てて待ったをかける。

「おい考え直せルフィ!!! よく見ろ、あの不吉な建て物、本物の『オバケ屋敷』だ!!! お前は『悪霊』つてもんをナメてるぞ!!!」

「何言ってるんだ。おれはちゃんと細心の注意を払いながら、さっきのゴーストを捕まえて飼うんだ」

「ナメすぎだつ!!!」

「何より大切な仲間を連れ戻さなきゃな。サンジ!!? 海賊弁当——!!!」

「仲間って…おれア反対だからな!!! ガイコツなんて仲間にいたら怖くて夜も眠れねエよ!!!」

ルフィはまるで臆する様子がなく、幽霊や怪奇に対する恐怖を母親の胎の中に忘れてきたのかと言わんばかりに堂々としている。

ウソツプが頭を抱えていると、いつの間にか船室に戻っていたロビンとサンジが弁当箱をいくつも抱えて出て来た。

「お弁当、受け取ったわよ」

「ルフイ!!? フランキー!!? おめエらしつかりロビンちゃんを守るんだぞ」

「未知の島の冒険つてにはぞくぞくするもんだな」

「にやははは……ようこそフランキー、飽きとは無縁の世界へ」

サンジ手製の弁当を受け取り、ルフイと同じく上陸の意思を見せるロビンとフランキー、笑うエレノア。

ナミはぎよつと目を見開き、島を眺める彼らを凝視した。

「エレノアもフランキーもロビンも行くの!?」

「好きなの、スリル♡」

「人生はスリルとサスペンス」

ルフイと同じく、全く怯えた様子を見せないロビンが茶目つ気たつぷりに返す。彼女が怖がる姿を想像できないナミは、やがてがつくりと項垂れた。

「よし! さてお前ら、これより小舟を使って島へ上陸するわけだが、おめエらにはまだ見せてねエとっておきのものがあるんだ」

着々と上陸の用意が整い始めた時、フランキーが一味に向かって突如語り出す。

何事か、と振り向くウソップ達は、ここまでの航海中に一度登場した仕掛けの事を思い出し、驚きの表情を浮かべる。

「0」の外輪と「1」「3」はもう見せて貰ったけど、「2」と「4」はまだ空だつてお前言ったろ」

「うははは、とっておきなんでそう言った。上陸する気のねエ奴らは試し乗りしてみろ!!?」

「望むところだ!!?」

フランキーに挑発混じりに言われ、ウソツプは意気揚々と船内に入る。その後ナミとチョップも続き、三人はその部屋に足を踏み入れる。

降りた場所はサウザンドサニー号のちょうど中央、以前使用した外輪が収まった部屋の隣の空間だ。

「ソルジャードックスシステム「チャンネル2」!!!」

サニー号の船体の中の機構が回転し、壁の数字が0から2へと替わる。

壁ががらがらと開かれ、その中から現れる小さな船。煙を吐き、歓声を浴びながら、小さな懐かしい顔が悠々と泳ぎ出た。

「出動!!? 買い出し船つ!!? ミニメリー2号!!! 4人乗り蒸気機関『外輪船』だ!!!」

蒸気を噴き上げ、外輪を回し、小さなゴーイングメリー号が海を進む。

その背に乗ったウソツプ達は歓喜の声をあげ、姿を変えて帰って来た仲間の乗り心地を堪能した。

「メリーだ、メリーが小舟で蘇った〜!!」

「こんな素敵なプレゼントが隠れてたなんて、ありがとう!!? フランキー!!?」

「やったー、ちっこいけど、またメリーに乗れるぞー!!」

涙を目に滲ませ、声を震わせながら、三人はフランキーの気遣いを褒め称える。先程まであつた恐怖など、もうほとんど掻き消されていた。

順番を譲った他の面々も、はしゃぐウソップ達を見下ろして思わず笑みを浮かべていた。

「最高の心遣いだな」

「こんな面白い出し船なら、いくらでも買い出すぞおれは」

「こりや乗らずにはいられないね!!?」

「うほーかわれ——、早くかわれー!!?」

「待て、おれ達はこれから実際に乗るんだ。ひとまずあいつらに堪能させてやれ」

待ちきれない様子のルフィを宥めつつ、フランキーは自身の最高傑作たるサニー号の能力について語る。

サニー号の中心に備わった、回転する六つの部屋。

それぞれにフランキーが作り上げた乗り物が鎮座し、状況に応じて部屋を回転させ、呼び出す。

チャンネル0、左右の外輪船機構。

チャンネル1、一人乗りウエイバー・シロモクバ1号。

チャンネル2、四人乗り買い出し船・ミニメリー2号。

チャンネル3、三人乗り潜水艇・シャークサブマージ3号。

残る一部屋にもいずれフランキーが新たな兵器を作り上げ、出番を待つ事となる。

それこそが、サニー号を守る特殊機構・ソルジャードックシステムだった。

「おれホントお前の考え方大好きだフランキー!!! このこの」

「おおよ、おれは今週も最高の男なんだぜ、んんん…：スーパー!!!」

男子の夢がいっぱいに詰まったアイデアを実現させたフランキーの肩を叩き、ルフィが心の底から絶賛する。

褒められて上機嫌なフランキーは、いつも以上に力の入った決めポーズで賞賛を受けていた。

そんな風に男達が騒ぐ中、ふとエレノアがある異変に気付いた。

「アレ？ ナミ達戻ってこないよ」

サニー号の近くを走り回っていたはずのミニメリー2号が、いつの何か姿が見えなくなっている。

どこに行っただろうか、とエレノアが辺りを見渡した時だった。

「キヤアアアアア!!!」

ナミの悲鳴と共に、何かが落下する音がエレノアの耳に届く。

はつと息を呑むエレノアと同じく、異変に気付いたサンジが慌てて欄干に駆け寄り、目を剥いてナミの姿を探す。

「!?? 今なんか落ちた音したよ!?? どこに!!!?」

「ナ!!! ナミさ——ん!!!? どうした!!!? 何があつたんだ——!!!?」

咄嗟に愛しの女性の名を呼ぶが、どこからも返事はない。サンジの声が虚しく消え去り、不気味な風音がより一層の存在感を放つ。

ルフィ達も困惑の表情で悲鳴が聞こえた方を凝視し、顔をしかめる。

「何やつてやがんだ、アイツら。霧で何も見えねえ」

「だけど島の方からよ」

「お前らア!!!」

何かあつたのか、と引きつった顔でナミ達の身を案じるゾロとロビン。

ルフィも険しい表情で、姿の見えない仲間達に向けて叫んだ。

「お————い!!! 早くおれもミニメリーに乗せてくれ——つ!!!」

「そうじゃねえだろ!!! ナミさんの身を心配しやがれ!!!」

「おめエこそあと二人の心配もしやがれ」

「いつもの事だから……」

全く状況を理解していない船長に、サンジが鼻肩しまくりの突っ込みを入れ、さらにフランキーが頭を小突く。

呆れる新入りの肩を叩き、エレノアが首を横に振って無駄だと諭した。

「今の悲鳴、ゴーストに呪い殺されたのかしら……」

「縁起悪い事言うヒマあつたら、船を近づけるぞ」

いつも通り不吉な呟きをこぼすロビンに言いながら、ゾロが船を操舵しようと持ち場に向かおうとすると。

ぴくりとエレノアの耳が動き、じろりと鋭い視線が虚空に向けられた。

「ん?」

「どうした?」

「なんか誰かがこの船に乗り込んできたみたいなんだけど……」

「誰かがア?」

きよろきよろと辺りを見渡すエレノアに、胡乱げな視線を返すゾロ。

つられて彼も視線を巡らせてみるが、別におかしなものは何も見当たらない。気のせいではないか、と言おうとしたその時。

サニー号の前部に備わった爪形の錨が、突如独りでに海に落とされた。

「え!!? 勝手に錨がっ!!!」

「錨なんて誰も触つてねエぞ!!!」

「……………!!? 造つたばつかで歯車が緩むわけねエしな…」

「とにかく巻き上げろ、船がバランスを失う!!?」

いきなりの異常現象に戸惑いつつ、荒波の中に固定されようとしている船をなんとかしなければと錨の操作に向かう。

エレノアもそれに加わろうとして……その途中、突然何もない宙を思い切り蹴りつけた。

「……………そこにいるのは誰だア!!!」

怒号と共に放たれた、鋼鉄の義足による蹴撃。虚しく空を切るだけと思われたその一撃は、どかつ!と鈍い音を立てて大気を振動させた。

何も無いはずの場所に、確かに『何か』がいたのだ。

「うおオ!!! 何だ!!? 何蹴つたんだ!!?」

「わからない……見えない何かを感じたからブツ飛ばしてみた。多分こいつがさっきの犯人だと思う…」

「…お前、最近思考がルフィに似てきてねエか?」

敵と判断したら一切躊躇わないやり方に、見覚えがあるゾロが引きつった顔でこぼ



す。彼自身何度も受けて来た理不尽な思考だ。

エレノアは一撃放っただけでは安堵せず、ぎろりと油断なく辺りを探り続け、そして駆け出すともう一度強烈な蹴りを突き出した。

「そこだア!!!」

「おわ——っ!!!」

放たれた一撃は危うくルフィの顔面を貫きかけ、間一髪躲したルフィの頭上を突き抜ける。

慌てて飛び退いたルフィは顔中脂汗を噴き出させながら、戦慄の表情でエレノアを睨みつけた。

「危つぶねエだろ!!!」

「…いや、声かけただけじゃ意味ないと思って………ごめん」

目を飛び出させながら怒鳴るルフィに、流石にエレノアも萎縮し頭を下げる。ちなみに、二発目は謎の敵にかすりもしていなかった。

「クソ!!? とにかくここが得体の知れぬエ場所だつて事は間違いないエ、なおさらナミさん達が心配だ!!! 船は、お前らに任せたぞ!!? おれは島へ3人を助けに行つて来る!!!」

姿の见えない敵、何もかもが謎の存在に狙われているとわかり、表情を引き締めたサ

ンジが海に向かって飛び出す。

どんな荒波の中でも泳いででもナミ達を救い出す、そんな覚悟を決め、颯爽途中へ躍り出たサンジは。

何かに足を引つ掛け、サニー号の船体に思い切り顔と体を叩きつけられる羽目になった。

「ほげーっ!!!」

「「え——っ!!? かつこ悪っ!!!」」

びたん、と思わず顔をしかめたくなる音と衝撃が走り、ルフィ達から落胆の聲が上がる。

だが、その表情はすぐに驚愕に取って代わった。

船体に張り付いたサンジが、逆さまになったまま宙に浮かび始めたのだ。

「うわっ!!? サンジが浮いてきた、どういうこった!!?」

「今!!? サンジ君の上に奴が………つてか足挿んでる!!?」

驚愕で立ち尽くすルフィ達の前で、サンジの体が足を中心に回る。

一味の困惑の視線の中、サンジは『何か』に投げ飛ばされ、甲板の上に叩きつけられた。

「どわ!!?」

「おい、サンジ!!!」

「……………く…!!? 何だ…今のは、畜生!!?」

「お前『ほげー』って言ったぞ」

「うっせーてめエ!!! 同じ目にあえ!!!」

気に入らない奴の情けない姿と声に、ゾロが状況をほったらかしにして擲擧い、サンジの怒鳴り声を誘う。

そんな一幕を交えながら、一味は自然と円陣を組み、未だ姿を現さない敵への警戒心を引き上げた。

「…おれ達を船からも出さねエ気か…!!?」

「目的が見えねエな…殺す気ならいくらでも攻撃できるハズだ!!?」

「だったらこつちも出て行けなくしてやる!!!」

得物を構え、能力の準備をし、どこから向かって来ても即座に対応できるよう備える。その中でエレノアはぱんつと掌を打ち合わせ、甲板の芝生に叩きつける。すると、草がそれぞれ変形し、無数のとらばさみへと変貌していく。

「この数を全部避けて逃げられるかな?!? さア…:…どつからでもかかってこい!!?」

芝生中に取り付けられた罫を見据え、凄むエレノア。

必ずどれか一つは発動する、そう確信し、敵の動きを止めようと考えた彼女だったが。

とらばさみはどれも動く事はなく、それどころか、突如発生した大波による揺れで、ほとんどが甲板から滑り落ちてしまった。

「うわア!!!」

「波だ!!? 塀の中で不自然な波が!!? 船が流されてくぞ!!! エレノアちゃん、敵は

!!?」

「くそっ……このどさくさでどっか行きやがった!!?」

立っていることすらままならない揺れの中、気配が遠ざかっていく事に、エレノアは悔しげに目を吊り上げて唸る。

次第に船は波に押され、どんどん島の方へと押し流されていった。

「おい『ほげー』 錨を上げろ、船の自由が利かねエ!!!」

「誰が『ほげー』 じゃコラ!!!」

どうにか島に近づかないよう舵を切ろうとするが、荒々しい波は一切の抵抗を許さない。一味の誇る航海士がこの場にいれば切り抜けられたかもしれないが、今の彼女は行方知れずのままだ。

「まずいまずい!!? ナミ達と逸れる!!!」

「ウソツプ、チョツパー!!? 返事しろ——っ!!!」

「おいフランキー、船の秘密兵器で何とかしてくれ!!!」

「よし、飛び出すびつくりプール”ってのがあるぜ!!?”」

「「楽しそうだなー!!? アホか!!!」」

「ふざけてる場合か!!!」

わーぎゃーと喧嘩の声を響かせながら、サニー号はブルツクの船と共に謎の島へと引き寄せられていく。

まるで、何者かの意志に導かれるように――。

## 第238話 “スリルとサスペンス”

「いやいやいや、まいったまいった…」

頭上を見上げ、思わずエレノアは独言る。

視界に入るサニー号とブルツクの船。波に押され、あれよあれよという間にそれらは流され、巨大な蜘蛛の巣に囚われ。

挙句正面には幽霊島の入り口が出迎えているという、悪意しか感じられない状況だ。

「ゴースト達の手招きまで見えてきそうだ」

「誘いに乗るしかないのがなんとも…」

「なーにをこちゃこちゃ言ってるんだ、ゾロ!!? エレノア!!? ホラおめエらも来い!!」

険しい顔で天を仰ぐエレノアとゾロが呟いていると、先に島に上陸していたルフィが待ちきれないといった様子で呼びかけてくる。

「ここにいたってヒマなんだ、行くぞ!!? 弁当わけてやるからよ、ししし!!?」

「……………あんたの心臓にはどんだけ毛が生えてんの?」

謎ばかりの幽霊島を、心から楽しんでる船長に、エレノアはただ呆れるばかりで

あった。

悩んでいても仕方がないと、一同は島の奥を目指す。

だが彼らの前にまず待つていたのは、用途の不明な溝に降りる階段だった。

「——で、何でいきなりこんな下り階段」

「ここが『入口』なんだから考えても仕方ねエ」

海より深い位置にある溝、通路と呼ぶべき広さの底を一同は然して慄く事もなく歩く。人骨が足元に転がっているが、誰も避けたりしない。

そんな中、サンジが通路の奥で動く何かに気付いた。

「ゲツ、堀の奥に何かいるぞ」

つられて、暗闇を見透かしてみるルフィ達。

じつと目を凝らす彼らの前に……それは唸り声をあげて姿を見せる。

ぼさぼさの毛並み、傷だらけの体、そして何より——三つの頭。

鋭い牙を携えた三つの犬の首……なぜか一つだけ狐の首だったが……が、涎を垂らしてルフィ達を出迎えたのだ。

伝説にのみ棲まう怪物の登場に、ルフィ達は。

「ヘエ……ケルペロスか……地獄の方が安全だろうに」

「あら、かわいいわね」

「あいつケンカ売ってねエか？」

「生意気だな……」

「私達に出会っちゃったのが運のツキってもんさ……」

「お、うめエのかな？」

と、誰一人として臆さず怯えず慄きもしない。

怪物・ケルベロスはがーんと心底衝撃を受けた様子で硬直し、しかしやがて鋭い目つきでルフィ達を威嚇し始めた。

「グルルル……!!」 ウウ……」

「何だ、やる気になつたぞ」

「じゃ、おれが」

「いや待てよ。手懐けてみよう」

戦闘の意思を見せ始めた怪物に、生意気だと言わんばかりに構える男達。

すると彼らを制し、ルフィが一切の警戒なしに、突拍子も無い思いつきを口にしながらケルベロスの前へと進み出た。

「バカ、犬つつつてもお前……犬の元締めみてエな奴だぞ……?」

「犬は犬だ、よ——しよしよし。お手」

呆れた声をぶつけるゾロを背に、片手を出し宥める声をかけるルフィ。



不用意に近づくと人間の男を睨むケルベロスは、差し出された手どころかルフイの全身に一齐に噛み付いた。

「ワンワン!!? コオン!!!」

「言われたそばから…」

異形の毛並みの中に別の意味で埋もれるルフイに、サンジが眉間にしわを寄せて呟く。

彼らが見守る先で、ルフイはケルベロスの首元を撫で、そつと宥めながら自分の体を抜け出させていく。

「よしよしいい子だ。 よーしよしよし…そうだ、 ゆっくり離せ…いい子だな…こんにやろオ!!!」

「「グギャウツ!!!」」

そして、全身が無事抜けると、渾身の一撃をケルベロスの横つ面に叩き込む。

白目を剥き、がっくりと倒れ伏した怪物を見下ろし、ルフイは再度告げた。

「ふせ」

「イヤイヤ…」

「動物虐待はんたいい」

あまりにも厳しい動物との触れ合い。

弱肉強食の海賊とはいえ、理不尽にもほどがある結末に仲間達から困惑気味な突っ込みが溢れた。

そんな困惑も、数秒もすれば男達の中から薄れたのだが。

「それにしてもひどい傷ね。生きているのが不思議だわ」

「その前に一匹キツネが混ざってる時点で、すでに生物としてどうかと思うがな」

「キズっていうか、改造跡としか思えないんだけど。どこの誰がこんな事してるんだろう」

俯せに沈むケルベロスの耳を、特に狐部分の耳を掴み、ゾロが苦い顔で呟く。常識を覆す海とはいえ、驚くものは驚く。

ロビンとエレノアは、ケルベロスの全身に刻まれた手術痕らしき傷跡をじっと見つめ、首を傾げていた。

一体どこの誰がこんな真似を、そして何故こんな改造が成立しているのか。

「入ってすぐこんなオモロい出でくんだから、この島楽しみだなー!!?」  
力尽くでねじ伏せたケルベロスを叩き、ルフィが楽しそうに笑う。

一同は項垂れるケルベロスに促し、その背にロビンを乗らせて探索を再開する。その間、ケルベロスは一切の抵抗をしなかった。諦めたらしい。

「ナミさーん、お——い!!? ナミさんどこだ〜!!?」

「元気がないわね、ケルベロスさん」

「まア…敗者に妙な同情はしねエこつた、プライドに触る」

「あーあ、かわいいそーに」

溝を進み、見つけた上り階段を上がり、その先にあつた門を潜り。

どこかの屋敷の庭のような森の中を進むルフィ達は、以前行方のわからないナミ達に大声で呼びかける。

そうして、探索と捜索を続けていた時だった。

「ん？」

ルフィがふと、ある奇妙なものを見つけ立ち止まる。

角の生えた馬と、人間の顔がついた木。

全身に手術痕を刻んだ異形が、酒を注いだ盃を酌み交わしあつていた。

「おっさんの木と…ユニコーンが一杯やつてる!!？」

驚愕に目を見張りながら、不思議なものを目の当たりにしたルフィの行動は早かつた。

即座に人面木に飛びかかり、逃げられないよう組みつきその場に押し倒した。すぐそばでは、フランキーがユニコーンを捕獲していた。

「捕まえた——!!!」

「こつちもだ!!? こりや珍しいな!!?」

「ウオオー見逃してくれー!!!」

いきなり捕らえられ、人面木は冷や汗を垂らしながら懇願する。

そんな彼らに、ルフィは期待に目を輝かせながら告げる。

「お前ら!!? おれと一緒に海賊やら」

「「フザけんア!!!」」

嫌がった他の仲間達の反対により、捕らえた異形達は即座に解放されたのだった。

「だからおめエは!!? 色んなモンを仲間にしようとすんじゃねエよ!!! ただでさえタ

ヌキだのロボだの色々いんだぞ、ウチにやあ!!!」

危うく不気味な新入りができるどころだったと、サンジはケルベロスの背の上で呑気

に笑うルフィに怒鳴る。本人はまるで反省していないが。

そして彼の怒号には、人外の一人であるフランキーが激しい反応を示した。

「おい、おれはロボじゃねエサイボーグだ、バカ野郎!!?」

「もう人間じゃねエ事は確かだろ」

「ベースは人間だつてんだよ!!?」

「ベースは変態だろうが!!?」

妙なこだわりがある新入りに、面倒臭くなったサンジが罵倒をぶつける。

怒ると思いきや、フランキーは照れた様子で身を引き、いやいやと頭を掻き出した。

「え…ああ、そこ解つてくれてるんなら…」

「いやホメてねエぞ!!」

「次は何が出るのかな〜♪ 楽しいな〜♪」

後ろのやりとりなど気に求めず、ルフイはさらなる刺激がやってこないかと、満面の笑みを浮かべて森の奥を覗き込む。

その隣で、ロビンがケルベロスに触れながら声を漏らした。

「さっきの “木の人” や “ユニコーン” にもあつたわね…」

「どうした」

「この森の奇妙な生物達の共通点は包帯、縫い傷、そして体に刻まれた番号」

「番号か…確かにあるな」

ちらり、とケルベロスの皮膚の一部を見下ろしてみると、確かにある。

刻印された数字は、先ほどの人面木とユニコーンにはそれぞれと、それぞれ異なる数字が刻まれていた。

「じゃあこれ、誰かに管理されてるって事だよね」

「そうなるわね」

番号の意味はわかったが、目的は以前不明のままであるため、一味の脳にはもやもやとした疑問が残る。

誰が何の目的でこんな怪物達を生み出し管理しているのか、全くの謎である。

その時、辺りを見渡していたルファイが訝しげに眉間にしわを寄せた。

「ん？　なんか聞こえるぞ？」

何事か、とその音の主を探そうとした時。

サニ一号で一度遭遇した、半透明の「何か」がどこからともなくぬるりと姿を現した。

それも、一体が二体、二体が三体と数を増やしながら。

「ネガティブ　ネガティブ」

「出た——!!?　ゴーストだ——!!!　踊りながら増えてくぞ、面白エ〜!!!」

ゆらゆらと不思議な踊りを踊り、空中で揺れるゴースト達。

彼らはルファイ達を嘲笑うように、舌を出し、歌い、夜の闇の中で己を見せつけていた。

「ネガティブ!!?　ネガティブ!!?」

「なんて感じの悪いかけ声なの……」

「捕まえて飼ってやる!!?　だー!!?」

エレノアが頬をひきつらせる横を、虫取り網を掴んだルファイが飛び出し、思いっきり

振り下ろす。

だが、網はゴーストに触れる事もできず、虚しく空を切るだけだった。

「完全に霊体か……よーし……ブレッシユファイア!!!」

「ホロホロホロ、ホロロロ……」

ならばとフランキーが前に出て、ゴーストに炎の息を吹きかける。

しかしこれも何の効果も与えられず、ゴーストはけたけたと笑いながら、顔をしかめたフランキーの胸をすり抜ける。

「ダメだ、効かねエ。全くダメだ、今週のおれホントにダメだ……何やつてもまるでダメ、生きていく自信がねエ……死のう」

「どこまで落ち込んでんだよ、お前は!!!」

急に顔を青ざめさせたフランキーは、みるみるいつもの明るさを失い、とうとうその場に膝をついてしまう。異様な変貌にサンジからの突っ込みが飛ぶ。

「こんなにやる!!?」

何を思ったのか、焦れたルフィが今度は手掴みでゴーストを捕らえようとする。だが案の定触れる事はできず、フランキーと同じように激しく落ち込み、深々と項垂れた。

「もし生まれ変わるのなら……おれは貝になりたい、最低だ……死のう……」

「だから何やってんだよ、おめエら揃って!!!」

普段と正反対の姿を晒すルフィとフランキーに、サンジが呆れと苛立ちを混ぜた声で怒鳴りつける。

彼らを見やり、次いで空中のゴースト達を見つめ、ロビンが一つの推測を口にした。

「もしかして、あのゴーストに触れると気が弱くなっちゃうんじゃない？」

「そんなバカな」

「……ふん、情けねエ奴らだな。普段から気をしっかり持たねエから、妙なゴーストごとに心を翻弄されんだよ!!？」

ぶつぶつとぼやき続けたままのルフィ達を睨み、ゾロが吐き捨てる。強さを求める彼にとつて、心の弱さは恥も同然なのだ。

が、そんなゾロにもゴーストは容赦なく触れ、彼は呆気なく膝をつく事となった。

「生まれてきてすいません……………」

「もういいわ!!」

何回繰り返す気だ、と目を吊り上げたサンジが吠える。

同じ情けない姿を三度続けて見せつけられ、怒気を露わにしつつ、サンジはゴースト達に戦慄の視線を送る。

「ロビンちゃんの言う通りみてエだな……………」

「ちよつとやってみるか……………おりゃあ!!」



ふと考え込んだエレノアが、ゴーストに向けて飛翔し、蹴りを放つ。

覇気を纏わせた一撃はゴーストの顔面に当たり、ぽふっと微かながら何か当たった感覚をもたらした。

「お？ 少しだが効いたか…!!?」

覇気なら通用するのか、とサンジが期待の眼差しを向けた直後。

どきつ、と。

エレノアが突然地面に落下し、四肢を投げ出し力無く項垂れた。

「生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい……」

「エレノアちゃん??ん!!?」

ぶつぶつと呪詛のように後ろ向きなつぶやきを漏らし続けるエレノアに、サンジはぎよつと目を剥いて叫ぶ。

横たわる天使をロビンが抱き上げ、深い溜息をついた。

「エレノアの症状が一番ヒドそうね」

「何か色々抱え込みやすいタチだからな……あのゴーストの攻撃が運悪く弱点になつてる感じだ」

「生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい」

一味の最たる実力者が無惨な姿に成り果てた事で、否応無く一味の警戒心は跳ね上がる。一切の抵抗も許されないのでから、慄く他にない。

「実体がない上に、触れると精神的に切り崩されるなんて…『覇気』は効くけど軽度………もし『敵』なら手強いわね。」

「確かに…」

「不思議な島」

ロビンの弦きを小馬鹿にするように、ゴースト達はけたけたと体を揺らし、闇の中に姿を消していった。

「あんのゴースト、今度現れたらもう承知しねエ!! 飼うのもやめだ!!? いらん!!?»

「弱点は必ずある!!?» 抹消してやる!!!」

数分後、ルフィとフランキーは心底憤慨しながら森を歩いていった。

手も足も出なかつた上、情けない様を晒され、怒りのぶつけどころのない二人はずんずんと荒々しく地面を踏みつけ進む。

「わははは、面白エモン見た」

「うっせエ!!!」

「生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい」

「ねエ、エレノアが全然戻らないのだけど…」

「…いい加減正気に戻さねエと自害でもしそうだな」

足として使われるままのケルベロスの尻には、未だ呪詛を吐き続けるエレノアが膝を抱えている。一緒に乗っているロビンとサンジは酷く居心地が悪そうだ。

気分を変えようと、一味は改めて島で遭遇した異形達の考察を再開させる。

「番号を持ったツギハギの生物達は一くりにできそうだけど…あのゴーストはまた別の生命体ね」

「あいつは船にもいたよな…時折現れ、おれ達を監視してる様だ…問題は…誰が糸を引いてるかだ」

「……………ずいぶん薄かったけど、あのゴースト達には確かに生命の気配はあったよ。多分生きた何者かの手先だと思う」

「あ、エレノアが復活した」

正気に戻ったエレノアが考察に参加するが、やはり考えてもわからないまま。謎は謎のままだ。

「まーいなくなった奴らについて考えても仕方ねエ」

頭を悩ませる仲間達をよそに、平常心を取り戻したルフィが呑気に笑う。

やがて一同は、開けた広場……墓地に到着する。

生ぬるい風が吹き抜ける、いかにも何か下から出てきそうな、不気味な場所のど真ん中で立ち止まる。

「あー広い墓場だ、雰囲気あるなー。おい、ここで弁当食おう!!?」

「おバカ、こんな所で食べたりしたらお弁当がマズくなるでしょ? それにナミ達のことか心配だから急がないと……」

早速弁当箱の包みを開けようとするルフィをエレノアが止める。不謹慎な彼をじろりと睨みつけ、ぐにっと頬を引っ張り叱る。

消えた仲間の安否を案じ、一刻も早く向かおうとルフィを引きずつても進もうとする。

——この後、彼らは遭遇する。

自分達の足元から迫る、命なき新たな刺客に。

## 第239話 恐怖の島の支配者

それが現れたのは、突然だった。

ルフィの足元の地面が盛り上がり、ぼこぼこ何か顔を出す。

生気のない青い肌、全身に走る手術痕、飛び出た目、腐った血肉……不気味な怪物が土を掻き分け現れた。

「あ……………」

気味の悪い呻き声を上げ、継ぎ接ぎだらけの自らの体を外へと引つ張り出す……明らかに生者ではない何か。

腐敗した体を引きずり、一体のゾンビがルフィの目の前に立つ。

ルフィはそれを目の当たりにすると……ゾンビの肩を掴み、地面の中に押し戻す。ずぶずぶとゾンビの体が再び地面に埋まり、呻き声も途切れる。

「つて帰るかアホンダラア〜!!!」

一旦は頭まで埋まったゾンビが、今度は凄まじい剣幕と共に飛び出して来る。

ルフィは改めてゾンビを目撃し、はっと目を見開いて息を呑んだ。

「大ケガした年寄り!?」

「「ゾンビだろどうみても!!!」」

怖がる事すらせず、怪物とも気づいていないルフィに、ロビン以外から鋭い突っ込みが飛ぶ。

その様はふざけているようにしか見えぬ、ゾンビの眉間に太い血管が浮き上がる。

次の瞬間、墓地のあちこちから次々に、様々な姿をしたゾンビ達が勢い良く飛び出してきた。

「ゾンビをナメやがって……!!!」

「ナメンなアア!!!」

「ウルア……!!!」

「ウオアチャ……!!!」

「ホアチヨ……!!!」

「ゾンビってこんな生き生きした奴らだったっけ!!!」

エレノアが驚愕の声を上げる前で、ゾンビ達はみるみる数を増やし、墓地を埋め尽くすほどに増える。

そして、侵入者たるルフィ達めがけて、一斉に襲いかかった。

「ゾンビの危険度教えてやれエ!!!」

「「「ウオオオオオ!!!」」」

雄叫びをあげ、凄まじい勢いで向かってくる不死者の軍勢。

墓石を蹴り倒し、十字架を踏み越え、四方八方から飛びかかり、手を伸ばしてくる人ならざる者達。

青白い軍勢の前に、しかし麦わらの一味は微塵も臆さない。

「なくんだ、やんのか」

「危険度なら……こつちだつて教えてあげるよ!!」

「ぎぎぎと拳を鳴らし、ルフィとエレノアが不敵に笑った次の瞬間。

ルフィの殴打が、エレノアの炎の剣がゾロの剣技が、サンジの蹴撃が、ロビンの関節技が、フランキーの剛腕がゾンビ達を返り討ちにする。

あつという間に、不死者の軍勢は跡形もないほどに粉碎させられた。

「「「「9億B・JACK POT!!!」」」」

「お前ら、ここぞで何してたんだ」

腕を組み、仁王立ちしたルフィが目の前で整列し正座するゾンビ達に問う。

大した活躍もなく叩きのめされたゾンビ達は、ぼろぼろの体で項垂れていた。もつとも、元から満身創痍のような姿だった。

「えーと」

「……ゾンビだし……埋まってたっていうか」

「腐ってたっていうか……」

「……腐ってた」

「おれも」

「フザけてんの？」

「「「「スンませんっ!!?」」」」

「ほんとにつ!!?」

おどおどと言葉を選びながら、仲間同士で顔を見合わせ頷き合うゾンビ達。

要領を得ない回答に、すつと目を細めたエレノアがこきりと拳を鳴らし、ゾンビ達を

震え上がらせる。

爛々と光る目に怯える彼らに、ルフィはまた異なる質問をぶつける。

「鼻の長エ男と……オレンジの髪の女……トナカイみたいなタヌキがここを通ったか？」

「ああ!!? あくくはいはいはい……」

「……でも言えねエ!!? おれ達、そういう情報関係一切、人に言えねエ事になってるんで」

負けを晒した彼らだが、それなりの矜持と義務感があるのか、ルフィの問いに簡単には答えない。姿の见えない島の主に命じられているのか、激しく首を振る。



「……ふーん、絶対に言わねエか？」

「3人通った」

だが、ルファイが拳を鳴らすとすぐさま一人が答えた。わずか数秒の鞍替えだった。

「おれの仲間だ。手エ出してねエだろうな」

「えー……!?」

「だ、出してねエ」

「おれも出してねエ」

「……出してねエ」

次なる問いに、ゾンビ達はびくつとあからさまに動揺する姿を見せる。

きよろきよろと目を泳がせ、冷や汗を垂らす様はどう見ても何かを知っている。それでも、固く口を閉ざそうとしている。

だがそれは矜恃からではなく、正直に話して怒られるのを嫌がるような、そんな雰囲気があった。

「正直に言えよ」

「コイツは出した」

現にルファイとエレノアが同時に睨むと、即座にまた別の一人が白状する。

庄に耐えかねた仲間の裏切りに、周囲のゾンビ達がぎよつと振り向き好き勝手に喚き

始めた。

「えー!!? おい、友達売るなよ〜っ!!? ちよ…お前だつて噛んだろ!!!」

「みんなで襲った」

「バカ!!? 言うな」

ぎゃーぎゃーと責任転嫁を始める人外達。

見苦しい様を見せる彼らに、次の瞬間、ルフィの拳とエレノアの蹴りが襲いかかった。

「あの屋敷に向かったみてエだ。無事でよかった」

「ブルックはわかんないみたいね」

「いなくていいよ、別にアレは」

しんと静かになつた墓地を後にし、先を指すルフィ達。

彼らの後ろには、逆さまにされたゾンビ達が無数に埋められ、なんとも言えない可笑しな景色を作り上げていた。

得るべき情報は全て得た、と一味が進もうとした目前に、突如一人の男が飛び出してきた。

「もし!!? ……ち…ちよつとあんたら……!!? 待つてくれ!!? 今…見てたぞ、あんたら恐ろしく強いんだな。少し話をさせてくれねエか!!?」

現れたのは、これまた全身傷だらけの男だった。

ぼろぼろの服を纏い、割れた洋燈ランタンを手にした、片目の潰れた痛々しい姿の老人。彼を目の前にし、ルフイが再びはっと息を呑んだ。

「大ケガした年寄り!?？」

「「だから、ゾンビだっつってんだろ!!!」」

「いや、大ケガした年寄りじゃ」

「「紛らわしいな!!!」」

ルフイに突っ込んだエレノア達は、即座に否定した老人にも吠える。

危うく、敵の増援かと思いい撃するところであつたエレノアは、内心ひやひやしながら機械鎧の刃を中に納めた。

何者か、と困惑する一味の前に、老人はよろよろと膝をつき頭を下げてくる。

「倒して欲しい男がおるんじゃ……………!!? あんたらなら、きつとやれる!!? 被害者はいくらでもおるが…倒せば全員救われる。『影』が戻れば礼ならいくらでもするし」

悲痛な声に、顔を歪めた一味はつられて老人の影を確かめる。

すると確かに、光源がわずかであつてもできるはずの影が、老人にはない事に気づく。

「ホントだ、おっさんも影がねエな。ブルックと一緒だ…!!!」

「そりや一体誰の仕業なんだ、この島に誰がいるんだ？」

「モリアという男だ。それはもう恐ろしい…!!？」

「モリア？」

知らない名に、首を傾げるルフィ。元々知識のない彼だが、他の男達も同じく訝しげに眉をひそめる。

だが、エレノアとロビンは違った。

彼女達は大きく目を見開き、老人をまじまじと凝視しだした。

「もしかして……………！」

「まさか……………ゲッコー・モリアの事!!？」

「ああ…そうさ…そのモリアじゃ!!？」

「ロビン、エレノア、知ってんのか？」

「……………名前ならよく知ってる。元々の償金額でさえ、あなたを上回る男よ、ルフィ…!!？」

ルフィに訊ねられ、エレノアが代表して語り出す。

振り返り、ルフィに向き直った天使の表情は、これまでで一、二を争う程に強張っていた。

「王下七武海の一人…ゲッコー・モリア!! 昔『四皇』の一人である『カイドウ』って

奴と互角にやりあってたつていう、バケモノ海賊だよ」

今度はルフィ達が息を呑む番だった。

これまで度々関わってきた、政府公認の海賊——比類なき強さを持つ七人の猛者達の一角であると知り、否応無く緊張感が走る。

「ホントか、お前ら!!?」

「謎の多い男よ……」

「私もまだ会った事がない………という能力者かも、どんな姿なのかも全く知らないんだ」

多くの海賊の情報を持つエレノアや知識の豊富なロビンでさえも、詳しい人物像を引き出せず、険しい表情で黙り込む。

ルフィも眉間にしわを寄せつつ、その猛者の被害者であるという老人に視線を戻した。

「そんな奴がこんなところで何やってんだ?」

「さア、わからんがわしと同じ様にこの森をさ迷う犠牲者達も少なくない……」

「他にもいるのか……!!?」

項垂れ、身を震わせながら語る老人。彼の呟きに、サンジとフランキーが思わず左右の森の中を見渡した。

「あんたならもここへ誘われた時点で……モリアに目をつけられたと思つた方がいい。この地に残り、暗い森をゾンビを恐れながら這い回る者……海へ出てなお太陽に怯え生きる者……!!? いずれにせよこんな体では生きている心地はせん……」

ぼろぼろと涙をこぼし、身を切るような慟哭を漏らす老人に、流石に同情の視線が向けられる。

世の悪の代表たる海賊とはいえ、根本的に善性を持つ麦わらの一味だ。真面な生を送れなくなった人間に対して、憐れみを抱かずにはいられなかつた。

「死ぬ前にもう一度……太陽の光の下……歩いてみてエ……!!!」

「そうなのかおめエ……!!! そりや辛エなア……!!?」

号泣する老人に、フランキーが彼以上に泣きながら歩み寄る。顔中を涙と鼻水でぐちやぐちやにしながら、うんうんと強く頷き老人の肩を叩く。

いつも通りの涙脆さだった。

「よオし!!? おれが力んなるぜ、心配すんな!!! バカ、泣いちやいねエよ」

「気持ちをわかりすぎだろ! てめエ、軽く背負い込むな」

「まったくだ、おいジジイ!!? 泣き落としは美女の特権だと思え!!! お前じゃトキメ

かねエ!!?」

「そうじゃないでしょ」

勝手に手助けを買って出るフランキーをゾロが厳しく咎め、サンジが目を吊り上げて指を突きつける。

しかし不純な理由のため、エレノアにすぱんと後頭部を叩かれていた。

温度差のある仲間達を見やり、ルフィは見る者を安堵させる明るい笑顔を浮かべてみせる。

「まーでもよ。元々、影を奪う張本人を探してたんだ。そいつがおれ達も狙ってんならぶつ飛ばす事になるし、おっさんもついでに助かるんじゃないやねエか?」

「……あ……ありがてエ言葉だ……!!? ついででも何でも希望が持てますじゃ!!!」

特に気負う事なく、気楽に考えている様子のルフィだが、老人はその言葉で充分救われたらしく、今度は歓喜の涙を流して震え出す。

ルフィが呑気に笑っていると、森の中から続々と控えめな声が聞こえてきた。

「頼んだぜアンタ!」

「頑張れ——!!?」

「モリアなんてぶつとばせ」

「トキメかなくて悪かったな!」

「聞いてたのかよ、その他の犠牲者共!!?」

ずっと一味の話を聞いていたらしい、老人と同じく影を取られた犠牲者達が各々の声

援を送ってくる。それでも結局姿は見せないらしい。

妙な頼まれ事をされた、と頭を掻きつつ、一味は再び歩き出す。

森の間を抜け、しばらく進むと、徐々に大きな建物の影が見えてくる。

すると丁度その時機に、周囲の空気の湿度が変化し、ぽつぽつと雨粒が降り注ぎ始めた。

「だいぶ降り出して来たな」

「屋敷まで走るか!?!」

少しずつ強くなる雨に、風邪をひいたりせずとも濡れるのは御免だと顔をしかめる。ぼんやりと見える屋根を目指して急ごうとした時だった。

「ちよつと待った!!?!」

不意に、ルフィが走り出そうとした仲間達を制止する。

振り向いた彼らの前で、ルフィは屋敷を……屋敷の上に見えた揺れる何かを見つめ、困惑の声を漏らした。

「屋敷の後ろに……マーク!?!?　でつけエ何かが見えるぞ!?!?　少し霧が薄れてるな……何だ……旗か!?!?」

「いや………帆だよ」

ルフィが目を見送らず隣で、彼の見ているものを見上げたエレノアが、鋭い目でそれを



見据えて答える。

言われて、他の者達も気付く。

雨でわずかに晴れた霧の中に浮かんで見える、巨大な一枚の布……そのど真ん中に、髑髏の絵がはつきりと刻まれていたのだ。

「そうなのじゃ!!?」

「まだ、ついて来てたのか!!?」

啞然とする一味の背後から、再び先ほどの老人が姿を見せて告げる。

驚くサンジを放置し、老人は伝え損ねたもう一つの情報を……今、自分と彼らがどこにいるのかを語った。

「巨大すぎて全貌などわかりませんまい、この……!!? スリラーバークは村を一つ丸ごと載せた、世界一巨大な海賊船なのじゃ!!!」

老人の指が、すつとルフィ達の目の前の屋敷の向こうを指差す。

闇の中に不気味に揺れる帆、そこに住む厄介な能力者の居場所を示し、ぶるりと今一度身を震わせる。

「屋敷の裏に見えるメインマスト、ゲツコー・モリアはそこにおります」

じめじめとしたとある部屋で、獣の唸り声が響く。

庭に集結する無数のゾンビ達、彼らの見つめる先で、突如空間が人の形に揺らぐ。

「ガルルルル…!!? さア兵士ゾンビ部隊、海賊達との決着は將軍ゾンビ共がつける!!!」

お前達はただただ立ち上がり、不死の恐怖で奴らを追い込め!!!」

「「「ウオオオオ!!」「」」」

夥しい数のゾンビ達を従え、何も無い場所から突然現れた獣の貌を持つ男が、己の部下達を鼓舞し奮い立たせる。

また別の部屋……少女らしい愛らしさに満ちた寝室に、何体ものゴースト達が集う。その中心で、ぱちりと一人の少女が目を見ました。

「さて、0時の鐘が鳴った……私達も本気でいくぞ。ホロホロホロ……ここから逃げられると思うなよ!!? マヌケ共!!? 準備はいいな!?!? ゾンビ達!!!」

可愛らしい声を悪意に満ちし、少女は嗤う。

彼女の前には、数えきれない数の不気味な異形達がひしめき合っていた。

「400!! おい」

また別の部屋……暗く静まり返った空間に、男の声が響く。

がちがちと耳障りな金属音を響かせ、暗闇の中に二つの光が灯る。

「む…なんだ」

「久しぶりの客が来たぜエ」

「そうか、今回は楽しめそうか？」

「あア…：…なかなかの上物が来てるみたいだぜ」

声に応えたもう一人からも金属音が響く。

同じく光る目を闇の中で示し、二つの影は空間の外に向かって歩きだした。

がちがちと、それぞれの愛用する得物を鳴らしながら、己の内で燃える欲望に突き動かされるように。

「げへへ…げっへっへ…：…!!? 切り甲斐のある獲物がずいぶんたくさん集まったな…

この黒髪の女とか、いい肉してやがるぜ…：…：…!!」

「落ち着け、No. 66…：…：…殺すのは契約違反だ。奪うのは影だけ…：…」

「ゲへへへへ!! わかってらア…：…」

屋敷の中で次々に目覚める、怪人達。

異質な力を誇り、異形の体を見せつける彼らが、獲物の到着を今か今かと待ち侘びる。そんな彼らを従える島の主が、縄張りの中心でにやりと不気味な笑みを浮かべた。

「成程…：…麦わら」のルフイか…：…歓迎するぞ…：…：…ここは死者達の魔境…：『スリラー

バーク』。悪い夢を見ていくがいい!!!」

森の中心に不気味に佇む、荒れ果てた洋館。

悍ましい気配をこれでもかと撒き散らすその場所に、ルフィ達は意気揚々と、微塵も恐れる事なく足を踏み入れた。

「さア行くか!!? オバケ屋敷!!!」

## 第240話 //怪物達の歓迎//

分厚く高い、洋館の扉を叩くルフィ。

そして数回叩くと即座に、家主の許可も得ぬまま扉の取っ手を掴んで引つ張った。

「ごめんくださいーい、お邪魔しまーす!!?」

「早エよ!!!」

「ん? この扉鍵が…」

礼儀正しいのかさうでないのか、いつも通り自由な船長に突っ込みが飛ぶが、本人はやはり気にしない。

がちやがちやと固く閉ざされた取っ手を回していると、やがて鈍い破碎音が辺りに響いた。

「あ…開いた開いた」

「開いたっていかお前…」

「おーい、誰かいねエかー!!? ゲツコー・モリアーくく!!?」

ぼろぼろになった扉を押し開け、ルフィは奥へと入り、他の者達も後に続く。全員が呆れた目で船長を見ていた。

だが彼らの視線はすぐに屋敷の中に移る。

不気味だが造りのしつかりした立派な建物。だが人の気配は一切なく、その上玄関は酷く荒れた様子を晒していた。

「これだけの屋敷で…使用人の一人もいねエのか？」

「何だ、この乱闘の後の様な部屋。まさかナミさんの身に…!!？」

割れた食器に倒れた家具、小火の跡やらが散乱する室内に、サンジがもしやと険しい顔で虚空を睨む。

その時、室内の探索を始めかけたルフィ達の耳にある一つの声が届いた。

「ブヒヒヒヒ…!!!! ご主人様の名を知ってなお、ここへ踏み込むとはたいした度胸」  
はっ、と振り向き視線を上げるルフィ達。

声が出た方を見れば、壁に掛けられた豚の剥製がにたと笑っているのが見つか  
る。声は確かに、それから発せられていた。

「え!?? 壁からブタが生えてる」

「歓迎してやれ、客人達を!!？」

「「ケキヤキヤキヤキヤ!!」」

ルフォが驚愕の声をあげた直後、豚の剥製が号令を出す。

その直後、部屋中から何体もの異形が飛び出しルフィ達に襲いかかる。

肖像画や絵画から上半身を伸ばし、鹿の剥製が動き出し、あるいは敷物の白熊が起き上がり、逃げ場を奪い向かってきたのだ。

「オイオイ、これもゾンビか？」

「レパートリー豊かだねエ」

「この島ではもう……どんな生き物がいても不思議じゃないわね」

先に見た生物の原型を留めていた者達とは比べ物にならないほど異様な敵の登場に、しかし麦わらの一味は微塵も動じない。

それどころか……一人は怖がらせようと向かってくる異形達に凄まじい怒りの形相を見せた。

「ナミさんを……!!! どこへ隠したア~~~~!!!」

「ベギヤアアア!!!」

絵画から飛び出した一体の顔面に、サンジの全力の蹴りが叩き込まれる。

愛しい女性がここでできっと恐ろしい目に遭ったのだという推測が、彼にいつも以上に活力を与えていた。

「大口開けてはしたないわよ、せっかく奇麗なのに」

「え？ ホント？」

「でも、額縁から出ちゃ台無し。ツイスト!!!」

「ぎいやああああ!!!」

ロビンに飛びかかった絵画の美女は、そのまま全身に腕を生やされて文字通り捻られる。ぼきぼきぼきつ、と容赦なく嫌な音が辺りに響き渡った。

「え〜〜?!? 槍が折れた!!? 何だコイツの体!!? 鉄か!!?」

「やめやめやめやめろ、何だ!!! おめエらあの弱エ〜奴らの仲間なんじゃ…」

「イエス」

「ブガア!!!」

槍と剣を突き出した二体は、折れた得物を手に呆然としているところを掴まれ、互いの脳天をぶつけ合され潰される。

鋼鉄の男に武器など使っても、何の意味もなかった。

「はーい、とりあえず全員一発ずつ折檻ね!」  
アガートラム  
 「銀腕一閃!!!」

「あばアあああ!!!」

ばちばちばち! と迸る閃光を左腕に宿し、エレノアが鹿の剥製を殴り飛ばす。

見上げるほどに立派だった角は、たったの一撃で根元からばらばらに砕かれてしまふ。どことなく私怨を感じる一撃だった。

「〃二刀流〃 『弑斬り』」

「にぎり? んまそつ」



「閃!!!」

「ま、ズがったオ、オエエ〜!!!」

愛用の刀を一本失ったゾロが、残る二刀で容易く肖像画の男を斬り捨てる。

油断もあつて実に情けない断末魔であつた。

次々に討たれ、倒れていく同胞達を横目に、敷物の熊が必死の顔で、部屋中を跳び回るルフィを巨腕で追い回していた。

「しししし!!? ホンツト面白エなこの島つ!!?」

「この…!!? すばしっこい奴め!!?」

「おれ達の邪魔しなきや仲良くやれたのに…!!? ゴムゴムの…!!! バズ——カ」

!!  
「どこん、とルフィの両手の掌底が敷物の熊の顔面に炸裂し、壁に深々と減り込まされる。

強烈な一撃を食らった異形の死人達は、ものの数秒で沈黙し、たいした見せ場もないまま行動不能に陥らされていた。

「おし、片付いた…!!?」

しーん、と静まり返った部屋の壁で、豚の剥製が呆然となる。

がたん、と壁から外れて地面に落ちた彼は、じろりと見下ろしてくるルフィ達を前に

慌てて弁明を始める。

「あつ…あつ!!? あの人組なら!!? 今、寢室でぐつすりと眠ってるぜ、よかつたな

!!? 安全だ!!?」

「んなわけねエだろ」

「ホントだつてブヒ!!? 行つて見たらいいだろ!!? その階段登つて奥へ…!!?

ブヒブヒ」

「いやもうあんたらの言い分はどーでもいいし」

顔中から脂汗を噴き出させ、命乞いじみた声を上げる豚の剥製。

聞くまでもない、とついでに片付けようとエレノアが拳を構えた時、辺りを一瞥した

フランキーがふと訝しむ声をあげた。

「ん? おいちよつと待て…——あのぐるぐるコックがいねエぞ」

「え?」

「あり? さつきまでいたのに…サンジの奴どこ行つたんだ?」

はた、と残る一味が動きを止め、確かに姿の見えないサンジに困惑の声をこぼす。先程まで確かにいたはずなのに、影も形もなくなっている。

ゾロは鬱陶しい男がいなくなった事で、やれやれと肩を竦めつつ、険しい顔で天井を

仰いだ。

「いつの間にか…なんかしやがったなコリヤ。惜しい男を失った」

「あのな」

「もつと心配してやりなさい」

「まーでもそうだな、サンジはいいか!」

「だけどこんなゾンビ屋敷じゃ、3人の方の救出は一刻を争うかもしれない」

一味は然して取り乱す事なく、今この場でいなくなつた仲間ではなく先に探している者達の身を案じる。

それが馬鹿にされているように感じたのか、豚の剥製がルフイ達を憎々しげに睨みつけた。

「ブヒブヒ…おめエらよオ…ちよつと強エからつて調子に乗つてんじや——」

「あ、そういうのいいんで」

「ブヒ!!」

脅かそうと低い声を出すものの、心底面倒臭そうに手を振るエレノアに遮られ、驚愕で絶句する。目を剥いて固まる様は、なんとも憐れみを誘う様になつていた。

「とにかく勘で進むしか方法がないわね。このコ達を脅して本当の事を喋るとも思えないわ」

「…じゃあこのブタ、案内に連れて行こう」

静かになつた豚の剥製を持ち、奥へ続く通路に向かつて歩き出そうとするルフィ。そこに、怨念に満ちた悍ましい笑い声が響く。

叩きのめされ、地に伏したゾンビ達がずると床を這い、怒りに燃える目でルフィ達を嘲笑つた。

「へ……へ……行け行け……!!? 我々のご主人様の恐ろしさを知るがいい」

「おれ達の……真の主人は『王下七武海』ゲッコウ・モリ……おお!!? 言えねエ!!? 身が凍る!!?」

「おおお……その名を口にしただけで身も凍りそうだ……!!!」

「消えた仲間達はもう無事じゃ……済まねエぞ」

「一人……また一人と仲間は減っていく……後悔するがいい……!!? 『七武海』のゲッコウ……イヤ……ご主人様の真の実力を前に誰一人、助からねエ恐怖……!!!」

げらへら、けたけた、ぎやはぎやは。

部屋中のゾンビ達だけではない。島中の異形達からも見下され、嗤われていりかのような、不気味な声が響く。

己の身の程も弁えられない愚か者を哀れむ彼らに……ルフィは告げた。

「ゴチャゴチャうるせエな……じゃあそのモリアのバカに伝えとけ!!?」

「いイ!!?」

「おれの仲間の身に何か起きたら、お前をこの島ごと吹き飛ばしてやるってな!!!」

堂々と、一切の恐怖を見せる事なく言い切るルフィに、ゾンビ達は今度こそ言葉を失くして凍りつく。

自分達の脅しがるまるつきり聞いていない様子の若造に、次なる言葉が全く無くなってしまう様子だった。

「第一サンジは放つとしても死にやしねエんだ。行こう」

ほじほじと鼻の穴をほじりつつ、ルフィは奥を指して歩き出す。

呆然としたままのゾンビ達を放置し、一味はさつきと奥の暗闇に我が身を投じるのだった。

前略、ご主人様——

何やら恐ろしい奴らが屋敷に入ってしまった。

びっくりゾンビ一同（びっくりしました）

??

ぎぎぎ……と軋む音を響かせ、巨大な扉が開かれる。

墓場の王を名乗る獣人、アブサロムがその名の下に、島に眠る特に危険で強力な兵士達を目覚めさせに来たのだ。

「ギア…獲物共はみんなおいら達の敷地内へ踏み込んだ!!? 今夜も好きただけ暴れて来るがいい!!! 目を覚ませ!!! 將軍ゾンビ共っ!!!」

そこは、墓地だ。無数の棺桶が並べられた、死者の部屋。

その棺の一つ一つが開き、中に眠っていた者達が動き出す……鎧を纏い、武装した、屈強な古代の戦士達が目を覚ます。

「蘇れ……!!? 古の戦士達!!! 海賊『麦わらの一味』わずか8名!!! 見事討ちとつてご主人様に捧げる!!! 行つて来い!!! 敷地内をどこまで逃げようとも追いつめて引き立てろ!!! 貴様ら將軍ゾンビに敵などはない!!!」

誰一人、何一つ、文句もつけずに立ち上がり、標的の元に歩き出す。

命令に忠実な戦士達を従え、アブサロムは満足げに笑みを浮かべる。

だがその近くで、一人の海賊のゾンビが千鳥足で呻き声を上げていた。

「ウゝッブ」

「ん? ……おい、ぐずぐずするな、キャプテン・ジョン! 天下にあまねし生前の悪名が泣くぞ!!!」

「アイアイ………行くよオ、フへへ!!!」

かつて最強最悪の海賊の手下となり、解散した後も凄まじい悪名を轟かせた男は、酒瓶を傾けふらふらと歩いていく。

その背を見て、アブサロムは自身の高揚感が少し萎えてしまったのを感じた。

「……………つたく、しようがねエ奴だ」

「おーおー、『墓場の王』殿は苦勞なきってるねエ…………」

溜息をつくアブサロムの背後に、がちやがちやと鎧の音が近付く。

アブサロムは、そこに立つ二人……………髑髏を模した兜の男と刀を掲げた背の高い男の二人組を見やった。

「…No. 66、それにNo. 48か。何か用か」

「なアに、ちよいとご機嫌伺いによ。……………いつんなつたらローラ嬢の求婚を受けるのか気になつてな」

「やめろ!!! 来るかそんな日!!!」

げたげたと不気味に笑い、手にした肉切り包丁を肩に当てる、No. 66と呼ばれた鎧の男。彼の言葉に、アブサロムはぎよつと目を剥いて叫んだ。

「ありやいくい女だぜエ？ そりや確かにゾンビだが、あそこまで一途に慕つてついてくる女は早々いねエよ。他の男のものになる前に娶つてやったらどうだ」

「気色の悪い事を言うな貴様ア!!!」

にたにたと兜の下の目を歪ませ、意地の悪い声を上げるNo. 66にアブサロムは心底嫌そうに吠える。

硬い鎧であるはずなのに、何故か表情豊かに動いて見えるN.O. 66に、アブサロムはぎりぎりど獣の顔を歪ませて苛立つ。

「66、よせ。そういうデリケートな話をもつと慎重にだな……こじれたら目も当てられんだろう」

「お前も余計なお世話だ!!!」

見かねたN.O. 48と呼ばれた鎧の男が止めに入るもの、求めた止め方ではなかったせいか、アブサロムはより一層怒りを見せる。

N.O. 48の方も、地団駄を踏むアブサロムを愉しげに眺めている。似た者同士、というよりは、アブサロムを揶揄う事だけに特に意気投合している様子だった。

「そもそも!! おいらは既に花嫁にすべき女を見つけた!!! ゾンビに用などない!!!」

「え〜〜」

「残念がるな!!! いいからお前達もさっさと行け!!!」

「んだよく、ノリ悪いな〜…」

ぎろつ、と二体の鎧を睨みつけ、片手を突きつける獣人。

N.O. 66とN.O. 48は渋々といった様子で歩き出し、先に行った將軍ゾンビ達に混じって標的の元へと向かっていった。

残されたアブサロムは、心底疲れた様子で深々と肩を落とした。



「……………本当に困った連中だ」

はあ、と大きな溜息をつき項垂れる。

だが、これで墓場の王としての仕事は果たし、あとは吉報を待つだけ。自分は花嫁の元へ向かおう……そう、軽い足取りで歩き出そうとして。

「結婚して——っ♡♡」

「ギャ〜〜ローラ!!!」

突如目の前に現れた、花嫁衣装に身を包んだ厭つい疣猪のゾンビの咆哮に、悲鳴を上げて後退る。

懸念していた相手の出現に、幸せな気分妄想は粉微塵に吹き飛んでいた。

——そんな背後から響き渡る怒号と悲鳴に、鎧の二人は思わず、渋い表情を浮かばせて立ち止まった。

「……………あいつ、ホントに結構苦労してるよな」

「言うな、同情は逆に奴を貶めかねん」

揶揄うのは、妙な気を遣わないようにするため。

自分達のような人外でも遠慮したくなるような相手に求婚される彼には、流石に憐れまざるを得なかった。

??

「おーい!!? お——い!!? あれ?」

長い長い、そして暗く不気味な通路を歩きながら、ルファイが名を呼び叫ぶ。

だが、呼べども呼べども、進めど進めど、彼の姿は一向に見当たらない。先の彼と同じように、影も形もなくなってしまうていた。

「おい!!? ブヒ!!? お前またなんかしやがったのか!!? 吐け!!?」

「俺は何も知らねエって言ってるんだろ!!? ブヒヒ」

「……………笑ってんじやねエか、白々しい奴だぜ…!!」

「情報源として役に立たないんなら、さっさと解剖して動く秘密を明らかにしたいんだけどね……………」

「「怖エよ!!」」

道案内役として持ってきた豚の剥製の意味深な笑みに、苛立ち拳を握りかけるフランキー。

だがその苛立ちも、すつ、と冷たい眼差しで見下ろしたエレノアの眩きで即座に引込んだ。彼女の方が苛立っているようだ。

「不思議ね…:声もなく…:絞め殺されたのかしら…:」

「あるいは瞬時に首を落とされたか…:」

「お前らの回路は何でそう、いつも不吉で過激なんだ!!?」

不思議そうに首を傾げ、そこらの恐怖物語より恐ろしい発想を口にするロビンとエレノア。屋敷や島よりよほど彼女達の方が恐ろしいと、フランキーが頬を引きつらせる。困惑の表情を浮かべ、ルフイが辺りを見渡しながら思わずこぼした。

「おっかしいなア……!!! ゾロまで消えたぞ!!?」

## 第241話 “死者達の闘技場”

がしやん、がしやん、と音を立て。

金色の鎧を纏った何者かが、暗く不気味な通路を歩き、目を凝らす。

「どこへ消えた…あいつら一体…!!? ソロもサンジもまったくよー」

ぱかつ、と面頬を開けて目を露わにしながら、ルフィがやれやれと溜息をこぼす。

その後頭部に、フランキーが呆れた顔で平手の突っ込みを入れた。

「こんな時に何やってんだよ、おめーは!!?」

「おい!!! ヨロイがそこにあつたなら!!? 着るのが男のロマンじゃねエのかよよよ

!!? お前は鉄の体を手に入れて…そんな心も失くしちまったのか!!?」

「ロマン!!? ……もつともだ、勘弁してくれ!!? おれは何も心まで鉄にかえたつ

もりはねエのに!!?」

フランキーの至極真つ当な指摘に、なぜかルフィの方が怒りを露わにして抗議する。

その言葉に、フランキーの方が衝撃を受けた顔で後ずさる。

ぐすつと目尻に涙をためた彼は、どこからともなく取り出したギターを構え、儚く奏

でた。

「——何か大切なものを失って、心に吹くのはすきま風……聴いて下さい。『サイボーグ鋼鉄旅情』」

「よっ!!? 歌えー!!?」

「広間に出たわよ……」

「んー、何とも言えない妙な気配の数々……」

「やんややんやと勝手に騒ぎ出す男達。」

彼らをよそに、通路の終わりを確認したロビンとエレノアが奥を覗いて報告する。ひどい温度差が男女間に生まれていた。

「コイツら状況わかってんのか?」

案内役として連れてこられた豚の剥製が思わずこぼすほど、ルフィ達からは緊張感というものが感じられない。

これまで屋敷を訪れた多くの者達と異なりすぎる反応に、異形はただ呆然となっていた。

そこに、一通り騒いで満足したらしいルフィとフランキーがエレノア達の方へ近付いた。

「広間? ウソツプ達は?!?」

「さア、それどころかこの広間の奥は、もう外みたいよ」

暗い通路の中から、薄暗い外へ。

そこにあつたのは広い空間で、天幕がいくつも張られた奇妙な雰囲気を感じる場所だった。

中心には円形の台座もあり、そこで誰かが立つ事を……戦う事を想定するかのよう  
な、そんな造りとなっていた。

「何これ、闘技場？」

「ブヒヒヒ、そんな生易しいもんじゃねエブヒ」

思わずエレノアがぼつりと呟いた時、豚の剥製が意味深に答える。

どういう意味か、と振り向いたエレノアが訊き返そうとしたその時。

びくつ、と彼女の耳が震え、即座に血相を変えて傍に立つ鉄の男に呼びかけた。

「フランキー!!? 上!!!」

「うお!!!」

至近距離で叫ばれ、咄嗟にその場から飛び退くフランキー。

彼が動いた直後、頭上から飛び降りてきたそれが、鋭く剣を突き立ててくる。狙いは  
外れたものの、剣の勢いは強く、衝撃がびりびりとルフィ達に襲いかかった。

「フランキー!!!」

「……!!? 誰?」

即座に身構え、襲撃者を睨みつける四人。

彼らの目の前でそれは、鎧を纏った何者かはぎちぎちときこちなく立ち上がり、再び剣を構える。

胸を貫く大槍が、それが生者ではない事を示していた。

「動くヨロイ……!!? アルの親戚か!!?」

「ンなわけあるか!!!」

「……ああ、彼のことね」

「あん!!? あんな不気味な奴が知り合いにいんのか!!?」

「……それ以上はやめたげろ……」

旅の途中で出会い、そして再会を誓って別れた数奇な運命を辿る仲間的事を思い出  
し、ルフイが叫ぶ。

ロビンはそのういえばそんな者がいたなど頷くだけだったが、顔も知らないフランキー  
は大層困惑する。遠慮のない一言に、エレノアは頭を抱えた。

「ゾンビがご立派に武装しやがって……!!? 驚かすんじゃないよ!!!」

「フランキー!!? 気を付けて!!? そいつさっきのゾンビ達よりずっと強い!!!」

不意打ちを食らいかけた苛立ちからか、フランキーが拳を振り上げ鎧の死人に挑む。  
ゆらゆらと揺れる敵の土手っ腹めがけ、一撃を叩き込む。

そこらの雑魚を容易く吹っ飛ばせる拳撃。

だが、鎧の死人はそれに耐え、即座に剣を振り上げ反撃を放ってきた。

「うおっ!!!」

十字に振るわれる斬撃をなんとか躲し、後退し、フランキーのこめかみを冷や汗が伝う。

しかし鎧の死人は攻めを止めず、先程の意趣返しのように強烈な一閃をフランキーの胴体に食らわせた。

「うわっ!!? フランキーが!!!」

どしゅつ、と飛び散る血飛沫にルファイが目を見張る。

鎧の死人は次の標的にルファイ達を見つけ、斬りかかろうとし……立ち上がったフランキーに背後から頭を掴まれ、止められる。

「やられやしねエよ……!!? こんな死人なんぞに!!!」

目を吊り上げ、荒く息を吐き、フランキーが鎧の死人を思い切り投げ飛ばす。

がしやん、と激しい金属音が鳴り響き、巨体が横たわるが、鎧の死人はすぐさま身を起こし、最初と変わらぬ様子で再度剣を構え出した。

「……まだ立ち上がるぞ……!!!」

「ラチがあかねエ……!!! 悪イ、エレノア………お前の言った通りだ。手強い……!!!」



明らかに、これまでの敵と違う。手を抜いたつもりは全くないのに、倒れた敵が平然と起き上がる。

思わぬ事態に、一味はようやく緊張感を取り戻す。厄介な性質を持つ敵に、自然と構えに力がこもる。

「ブヒヒヒヒヒヒヒヒ!!?」 思い知るがいい!!? それが本当のゾンビの恐さだ!!? 故障はあつても痛みなど感じねエ!!? 武装した將軍ゾンビ達は一人一人が生前に名を揚げた強硬な戦士達なんだ!!! ブヒ!!!」

そんなルファイ達を嘲笑い、いつのまにか離れた場所にいる豚の剥製が声を上げる。手の届かない位置から、焦るルファイ達を馬鹿にしていた。

「おめエらなんかに勝てるわけねエんだよ!!? ブヒヒヒ!!! おめエらの仲間だつて誰一人、無事じゃねエよザマー見……………」

「うるさいこ」  
げらげらと下品な声を上げる豚の剥製に、眉間にしわを寄せたエレノアがぱちんと指を鳴らす。

空気中に火の粉が弾け、みるみるうちに集まって炎の短剣へと変わり、それを豚の剥製に向けて投げ飛ばす。

「カベゾンビ!!?」

「おう」

放った一刃は、通路の上から降りてきた口を聞く壁によって防がれ、その間に豚の剥製はどこかへ逃げ去ってしまおう。

閉ざされた退路と消えた敵に、エレノアはちっと小さく舌打ちし、さらに表情を険しくする。

「道を塞がれた!!？」

「チツ……仕留め損なったか」

「塞がれたのは……後ろだけじゃないわよ」

悔しがるエレノアに、ロビンが正面を見据えて呟く。

つられて前に振り向いたエレノアとルフィ、フランキーは……片や頬を引きつらせ、片や興奮で目を輝かせる。

がしやん、がしやんと近付く重い金属音に、フランキーの目が鋭くなる。

「…おれの経験から物を言わせて貰うと…」

「うーおー!!!」

現れたのは、鎧の軍団だった。

全身傷だらけ包帯だらけの屈強な死人達が、分厚い鎧に身を包んで勢揃いしている。

中には腕が4本あったり下半身が象であったり、人の形すら保っていない異様な姿の

者までいて、全員が凄まじい敵意を醸し出していた。

「コリヤさすがに……………手強すぎるぞ……………!!!」

「ヨロイだらけだー!!!」

あつという間に、闘技場は死者の戦士達で埋め尽くされ、逃げ場がどこにも見当たらなくなる。

退路は断たれ、正面を指すしかないが、それがいかに厄介かを先ほど嫌という程見せつけられたばかりだ。

「うっわ…………あれ多分〃キャプテン・ジョン〃だな。それに〃憤怒の騎士〃オルガに〃闇纏〃テン、〃血河〃のルクセリスかな？ 若干異形になってるからわかりづらいけど

……………」

「要はとんでもねエ奴らがゾンビになって蘇ってきたって事だろ！ 気味悪い…………」

「そうだね…………胸糞悪い…………!!?」

一見してようやくわかるほど変貌した、錚々たる面々を前にし、エレノアは呆れながら嫌悪感を滲ませる。

生命を弄ぶ、真つ当な錬金術師の逆鱗に著しく触れる所業に、彼女が怒りを抱かないわけがなかった。

だが、彼女が苛立ったところで状況が好転するわけでもない。じりじりと近づく戦士

達に、場の打開のために思考を巡らせる。

「二人に対してあれだけ攻撃してもこたえねエんだ。コイツら全員まともに相手してちやこつちが消耗しちまうだけだ!!？」

「——そうか、それもそうだ。ここが最終戦じゃねエもんな」

「この広間をまつすぐ抜けると……おそらく中庭に出られるわ」

「ん！　じゃあ私達4人、一旦そこで落ち合おう。また誰か消えない様に気をつけて!!」

「ふふ……そうね」

約束を交わし、鎧の死人達の向こう側を見やる。

強固な兵士の壁で塞がれたその先を目指し、四人は眼光鋭く表情を引き締める。

「いくぞつ!!」

だつ、と一斉にばらばらに走りだし、ひたすらに先に進む。

象の下半身を持つ豪傑をフランキーが殴り飛ばし。

数体の敵の全身に腕を生やさせたロビンが関節技を決め。

ルフィが渾身の掌底を放って何体もの相手をまとめて吹き飛ばす。

四方八方から襲いかかり、武器を振り下ろしてくる鎧の死人達の間をかくぐり、あ  
るいは叩きのめし、広場の向こうへ急ぐ。

「ゾンビならこれでしょ！ 燃えろ!!?」 「アラドヴァル 屠殺陽槍」!!!

ぼちつ、と閃光が走り、エレノアの手には炎の槍が生み出される。

ごうごうと燃え盛るそれを振り回し、構え、いかにも弱点に効きそうな鎧の死人達に向けて投擲する。

かつ、と炎の中に一旦は飲み込まれる死人達だったが。

「バケツ用意!!?」

「うそオ!!?」

ざぼつ、とどこからともなく取り出したバケツをひっくり返し、用意していた水を被って鎮火する。

あまりの用意の良さに、エレノアはぎよつと目を向いて絶句した。

だが、呆けている暇はない。敵は待つてなどくれず、どんどん周囲を取り囲み逃げ道を奪っていた。

「ああもう!!?」 次から次へとうつとうしい…!!! 落ち合うのも楽しやなさそうだ…!!!

「——油断大敵」

「は!!?」

近くにいた一体を蹴り飛ばし、いつそ飛んで行くかと翼を広げる時機を見計らおうと

した時。

不意に至近距離から何者かの声が聞こえ、はつと目を見開いて振り向く。

「不意打ち御免!!!」

「ふぎやつ?!」

本能的に文字通り飛び退いたエレノアの真下を、銀の軌跡が通り抜ける。

ひゅんつと風を切ったそれは、エレノアが地面に降り立つと垂直に立てられ、微かな光を受けて鈍く光る。

同時に、新たな敵の姿をエレノアの視界に映し出した。

「ふん!!! 避けたか……」

「いきなり斬りかかるとは無作法だね……!!? ……ん?」

周囲に蔓延る異形の戦士達に比べ、人の形を保っている鎧を纏った剣士。一文字に開いた隙間から、鬼火のような眼光が漏れている。

確かな実力を感じる剣さばきに、構え直したエレノアはふと、ある違和感に眉をひそめた。

「あんた、ゾンビじゃない……よね? この気配………あんたまさか!!」

じつと目の前の敵を見つめたエレノアは、既視感のようなものを覚え、徐々に顔を強張らせていく。

似たものをどこで見たのか、誰であったか、それを思い出した瞬間、鎧の剣士が剣を翻し凄まじい速度で向かってくる。

「私はNo. 48……お前の身柄、押さえさせて貰う!!!」  
 「斬り捨て御免!!!」  
 「うわっ!!!」  
 「……………え?」

振るわれる剣撃を紙一重で躲し、防ぎ、後退するエレノア。

突然の事態に戸惑い、思考がうまく纏まらなくなったせいか、がしつと手足と翼を掴んできた敵への反応が遅れてしまう。

「ふぎやーっ!!!」

闘技場内に、焦燥に満ちたエレノアの悲鳴が響き渡った。

「おわア!!!」

大勢の死人達に追われながら、フランキーとロビンが橋の上に飛び出す。

闘技場をなんとか抜け出し、ようやく一息つけたが、まだ抜け出せていない二人に気付きはつと背後に振り向く。

「ルフィは……………? エレノアも……………!!?」

「まだ出て来てねエ様だな。振り返つてもあのバカ、ヨロイ着てやがるからどこにいるやら。エレノアは……………小せエから見えねエな」

通路を通つて追つてくる異形達の向こう側を覗き込むが、ルフィもエレノアも敵の埋もれて全く見つけれない。

探している間に、追手はどんどん二人の達の方へ迫りつつあった。流石のロビンも表情が硬くなつてくる。

「……………!!! でも、ゆつくり待つていられない。すぐにゾンビ達が追つて来るわ」

「畜生…まさかあいつらまで消えたつて事はねエだろうな。おーい!!! 麦わらア〜〜  
!!! エレノア〜!!!」

先に消えたサンジとゾロの事を思い出し、思わずフランキーはその場から大声で呼びかける。このまま全員消えるのではあるまいか、そんな想像が浮かんだ直後。

「ぎゃああああ」

「ふぎや——つ!!??」

「ちきしよう出せ!!??」

がしやん、とロビンとフランキーの頭上で音がする。

何事か、と見上げてみれば、橋の上に走らされた鎖を伝い、二つの棺桶が並んで運ばれていく様が目に映る。

がたがたと揺れるそれらからは、聞き覚えのある声がしていた。

「何だ…? 棺桶…!!??」



「……………?!? 今の声…!!?!?」

「フタを開ける!!?!? 出せ!!?!?」

「ルファイ!!?!? エレノア!!?!?」

「え?!?!? まさかアレに…あいつらが入ってんのか?!?!? 何やってんだよ、オイ!!?!? あいつら捕まりやがったのか?!?!? 追うぞ、ニコ・ロビン!!?!?」

まさかの事態に呆然となりかけ、我に帰るとすぐさま後を追いかけようとする。急いで奪い返さなければ、と走り出そうとした直前だった。

「追わせねエ…あつあつあつあつ…」

ずしん、と巨大な何かがフランキーとロビンの目の前に降り立つ。

八本の太く長い足を蠢かせ、見上げるほどの巨体を支え、ぎよろぎよろと見下ろしてくる猿の貌。

にたにたと不気味に嗤う顔が、二人の前に立ちはだかった。

「ハイヘーイ!!! モーンキモンキー!!! モンキ♪ あつあつあつあつあつあつ!!?!?」

巷で噂のスパイダーモンキーとはおれの事だ!!!」

「巨大グモ…!!!」

「昆虫の域を超えてる!!?!? 化けグモだ!!?!?」

さらなる敵の登場に、並びながら構えるフランキーとロビン。

彼らの視界の中で、船長と天使がいるらしき棺桶が橋の向こう側に消える様を前にし、より強い焦りに苛まれる。

「…おー、また一人…二人…」

「しまった棺桶が…!!! てめエらあいつらをどうする気だ!!?」

「安心しろ、どうするかはお前達も身をもって体験できる…!!?」  
せめて自分達の心配をしろ…!!?」

左手の銃器を展開し、強い口調で問うフランキー。

猿貌の化け物蜘蛛は険しい顔の彼を嘲笑し、見下しながら、愉しげに体を揺らしやがて告げた。

「——これで一味は全滅だな」

## 第242話 “No. 66”

歪に育った木々が立ち並ぶ庭園、悍ましい姿をした動物が蔓延る魔の庭。

島に迷い込み、異形達から泣き叫びながら逃げ回り、ようやく人に出会えたと思いきやゾンビまみれで。

そして……ある事実を知って囚われかけたナミ、ウソツプ、チョツパーは一心不乱に走り続けていた。

背後から迫る、ウエディングドレスを着た疣猪から逃げる為に。

「おいナミ、狙われてんのお前ばつかだな……!!?」

「ホントよ、迷惑っ」

「二手に別れて逃げねエか？」

「困かつ!! 薄情者」

庭に蔓延る動物のゾンビ達から、ある男の助力により逃げ切ったはいいものの、何故かナミを目の敵にしているらしい疣猪に命を狙われている。

疲れ始めたウソツプがぼそつとこぼした一言に、ナミが抗議の声をあげた。

「待ア~~~~てエ~~~~!!」

「イノシシこえー!!!」

二本の刀を振り回し、追いかけてくる疣猪・ローラ。

巨体と速度が合わさった突進も相まって、追いつかれれば即轢死を思わせる迫力を醸し出している。

とにかく離れなければ、と只管に足を前に振り、何とか距離を取ろうとする三人。

彼らの目前に、突如ずしんと人型の何かが降り立った。

「「キヤアアアアアアアアアア!!」」

進路を断たれ、咄嗟に悲鳴をあげて立ち止まる三人。

ずざざざざつ、と地面を滑り尻餅をついたナミ達に、現れた何者か……髑髏の兜をかぶった鎧武者が嗤い、かたかたと鎧を鳴らした。

「ゲヘゲヘ、ゲヘへ…逃げるなよオ…!!?」

……

「な…ななな…!!?」

「い…いきなり何なんだお前エ…!!?」

爛々と光る、髑髏の下の眼光。

両手に肉切り包丁を持ち、とんとんと肩を叩いたそれは、腰を抜かしかけたウソツプ

達に話しかける。

「No. 66!! お忙しそうなところ悪イが、お前らの肉を頂戴……………あア、殺しぢやならねエんだつたか。危ねエ危ねエ」

にたりと、兜で見えないはずの笑う顔が見え、ぞわつと三人の背筋に寒気が走る。

ナミ達は震えながら、何とか立ち上がり各々の武器を構えて睨みつける。

「こ、こいつもゾンビか!!」

「あア…? あんな過去の遺物共と一緒にされちやア困るぜ……………おれアまだまだ現役!! ? 生ける伝説よ!!!」

かたかたと手が震え照準がずれそうになるのをどうにか耐えつつ、ウソツプがなければの勇気を振り絞って凄む。

彼の言葉に、No. 66と名乗ったそれは苛立った様子で吠え……………徐に自分の兜に手をかけた。

「最も……………とづくに人間じゃねエけどな……………!!」

かば、と開かれる髑髏の顔……………その下には、何も無い。

真つ暗な闇があるだけで、素顔どころか鎧を纏う肉体さえ存在していない。

言葉を失う三人に、髑髏の鎧は面頬を元に戻して肩を揺らす……………悪戯が成功した子供のように啜う。

「驚いたか…?! この姿にはある理由がある……………おめエらも聞いた事あるだろ……………」

とある昔話だ」

——昔、バリーという肉屋のおやじが居ました。

バリーは肉を斬り分けるのがそれはもう大好きでした。

でもある日、牛や豚だけで我慢できなくなったバリーは……

夜な夜な街に出ては人間を解体するようになったのです。

やがてバリーは捕まりましたが、それまでに餌食になった人間は123人!!!

市民を恐怖のどん底にたたき込んだその男の行き先は、当然絞首台でした。

めでたしめでたし!

まるで実際に現場と本人を見てきたかのように、登場人物の気持ちまでもを鮮明に語る鬮體の鎧。

声も出せなくなっているナミ達を、彼はかたかたと音を鳴らして見下ろす。

「……………てのが世の中に広まつてる話。ところがこの昔話には実は続きがあつてよオ、バリーは絞首台で死んだ事になってるが、それは表向きの話だ」

「……………!!」

「奴はとある錬金術師に目を付けられ、実験台となる事で死刑を免れた……………ただし、肉体

を取り上げられ、魂の身を鉄の身体に定着させられてなア。そして流れ流れて、とある島で雇われ傭兵になった——そう!! 今、てめエらの目の前にいるこのおれだ!!!」  
 がちやがちや、げたげた。

耳障りな金属音と笑い声が響く、目の前の三人の鼓膜を震わせる。

誰もが恐れ、震え上がるような罪状を誇らしげに語り、狂人は盛大に声を張り上げた。

「<sup>ザ</sup>人肉屋バリー<sup>バリー</sup>」とはおれの事だア!!!」

死してなお、人を襲い殺す狂者。人殺しに魅入られた男。

得体の知れぬ化け物が闊歩する島で遭遇し、獲物に狙われるなど、どんなに恐怖に苛まれるか。

……と、自信満々に名乗りを上げたバリーであったが。

「よし、こいつなら平気だボコレ!!!」

「ギヤアアア~~~~ッ!!!」

急に我に返ったウソツップの号令で、三人一斉に殴り飛ばされ、蹴りつけられ。

バリーは突然の理不尽な暴力を全身に浴びる羽目になった。

混乱の渦に叩き込まれながら慌てて飛び起き、先程まで怯えていたはずのウソツップ達を愕然とした様子で凝視する。

「な……何だお前ら!!? この姿が恐ろしくねエのか!?!」

「だってお前、アルフォンスと似たような奴じゃん……」

「慣れてんのよ、こちとら」

「お前なら全然怖くねえ!!?」

「えエ~~~~!!?」

恐れるどころか、安堵と落胆が一緒になった顔で深く溜息をつかれ、バリーはがーんと凄まじい衝撃を受ける。

思わぬ展開に、もはや叫ぶ他になかった。

「そもそもお前……どつかの国で恐れられた殺人鬼なのはわかったけど……ぶっちゃけた話」

「「……………誰?」」

「ハウツ!!」

名を恐れるどころか、知ってすらいない。

まさかの事実にも、そして自分が知られていないという現実にも、がくりとバリーの膝が地面につく。無いはずの胸が酷く傷んだ。

「悪いけどおれ達、“東の海”の小さな村で生まれ育ったから他の国の事件とか知らねえんだよ」

「おれはドラム王国だ」



「ぶあ!! 田舎者!!」

だから自慢されても困る、とても言いたげなウソツプ達の微妙な表情に、バリーの心はずたずたに引き裂かれ、力無く項垂れる。

しかしすぐに自分に叱咤し、鋭い目で三人を睨み返した。

「…!! だ、だが!! それでもおれア世を震撼させた殺人鬼だぞ!!? もつとこう…ギャー!! とか わ——!! とか 何でそんな奴がこんなとこにいんだよ!! とか 応があるだろ!!」

名を知らずとも、自分でも思っていた以上に無名であつたとしても、大勢の人々を恐怖させた大悪人である事は間違いない。

それすら恐ろしくないのかと喚くバリーに、ウソツプがずいっと前に出た。

「エニエスロビーで政府の旗を燃やして宣戦布告した一味だぞこつちは」

「ギャ——!!!? 何でそんな奴らがこんなとこにいんだア!!!」

びしつ、と親指で自分を示し、胸を張るウソツプに今度はバリーの方が悲鳴をあげて後退る。

比ベ物にならない、洒落にならない大罪を犯したイかれた連中を前に、バリーの方が恐怖を抱いていた。

「おいウソツプ、それはそげキングがやった事じゃ…」

「ハッ!!　　しー!!　　しー!!　　いいんだよ、お…おれも一応現場にいたんだから」  
ふと、疑問を挟んだチョップ。パーに慌てて首を横に振るウソップ。

真実を知るナミは何か言いたげだったが、純粋な少年の夢を壊すことははばかられ、結局何も言わずに黙り込んだ。

「な…何だこいつら…動物ゾンビ共にビビって逃げ回るだけの腰抜かと思えば妙に肝が座ってやがる…!!?　あなどれねエ」

ごくり、と存在しない唾液を呑み、ありもしない冷や汗を拭うバリー。

目の前のこいつらは普通の獲物ではない、そう察した彼が、方針を変えるべく頭を切り替えようとした…その時だった。

「泥棒猫オオ〜〜!!!」

「「ギャーツ!!!」」

「うおおおっ!!!」

どしん!と、どこからともなく疣猪の巨体が落下してくる。

慌てて三人とバリーが飛び退くと、ナミだけがローラの前に倒れ込み、追い詰められる形となってしまった。

「あんななんかアブ様は渡さないわよ!!!　観念しなア〜!!!」

「いやああああ!!?　　何で私ばかりこんな目に!!!」

ぶん、と振るわれた刀を頭を抱えて屈んで躲し、急ぎ逃げ出すナミ。

すかさずローラは巨体に似合わぬ俊敏さで追いかけて、華奢な体を狙って刃を振り回しまくった。

唾然となるバリーだったが、すぐに呆けている場合ではないと後を追う。

「おい待てローラ!!? こいつらはおれの獲物だ!!? てめえなんざに横取りされてたまる……………」

「邪魔よおどき!!!」

「ブヘエっ!!!」

「ヨロイ~~~~!!!」

強引にでも止めてやる、と手を伸ばしたバリーは、ローラの横薙ぎに顔面を強打され、破片をいくつか撒き散らしながら倒れ込んだ。

「だ…大丈夫かお前っ?!」

「ア…ああ……………すまねエな…痛みはまったくねエんだが……………心が……………痛エ」

明確な敵とはいえ、流石に哀れな吹っ飛ばされ方をしたバリーに慌ててチョツパーが駆け寄り抱き起こす。

バリーもこの時ばかりは手を出さず、優しさに喜びを抱きながら、心でほろりと涙をこぼしていた。

「チクシヨオーツ!!! お前にかまけてたせいでヤベエ奴に追いつかれちまったじゃねエかよオ!!!」

「…いや、なんか………スマン」

「アブサロムは私が婿に貰うのよ〜!!!」

頭を抱え、嘆くウソツプに咄嗟に謝るバリー。

助けようにも振り回される刀が危険で、近付く事もできない。

混沌とした空気の中、ローラは知った事かとばかりに庭中を駆け回り、とうとうナミを壁際まで追い詰める。

「さア、観念しやがれエ〜!!!」

「あア!!! 上質の肉が!!!」

「ナミ〜!!!」

ナミの目前に迫る鈍色の煌きに、悲鳴をあげる男達。

絶体絶命の窮地にナミも最期を覚悟しかけ——その瞬間、ある妙案が彼女の脳内に走る。

「ちよつと待つて!!? 私…!!? 私!!!」

刃が自身の脳天を叩き斬る、刹那の間。

ローラに正面に向き直り、声音を確かめ、頭に血を登らせた暴れ猪に届くよう、必死

に声を張り上げる。

「実は男なんだぜ!!!」

「「えエ~~~~つ!!」」

「おいおいおい」

突然の、予想もつかない告白。

それを聞いたローラだけではなく、バリーと何故かチョッパも目を剥き、のけぞりながら驚愕を露わにした。

ウソツプが突っ込みを入れるが、誰も聞いていなかった。

「そ…:…:…:…:…:…:」

「そ…:…:…:…:…:…: オカマなの!!? 冗談じゃないわよーう!!?」

どこかで聞いたことのある口癖を真似て、静止したローラに堂々と騙る。

見破られないように、と胸中で必死に祈りつつ、ふと脳裏に浮かんだ言葉をびしつと指を突きつけて口にする。

「それにあんたと獣男すごくお似合いよ。私、応援したいと思ってたの!!!」

「えエ!!? ホント!!?」

「ホントよ、冗談じゃないわよう!!?」

より強い驚愕を顔に表し、ローラは絶句する。手にした武器が地面に落ち、甲高い音を立てる。

はらはらと涙をいくつもこぼしながら、暴れ猪はその場に膝をつき、震える声を漏らした。

「……今まで一度だつて後押しされた事のないこの想い、こんなに優し言葉かけてくれたのはあんたが初めてよ……!!?」

「顔を上げて! マイフレンド、友情つてこういうものよ! 私は「ナミゾウ」、ナミつて呼んで!」

「ゆ……友情……」

すつ……とローラに手を差し伸べ、慈愛に満ちた笑顔を見せるナミ。

ローラはまるで女神を前にしたかのように、歓喜に身を震わせ、差し出された手を取つてゆつくりと立ち上がる。

美しい絵だった……打算まみれな裏側を知らなければ。

「……手なずけちまつた……」

呆然と立ち尽くすバリーの呟きに、ウソツプとチョツパーがこくりと頷いた。

それから数分後、庭に置かれた机と椅子を使い、ナミとローラが向かい合つて和気

藪々と話していた。正確にはナミの言葉に、ローラがいちいち驚いていた。

「だからね、意識があるからハンコ押してくれないわけよ！ 相手が寝てる間にね…」

「寝込みを襲うの!?? いいの!?? それ人として!!?」

「ローラ、あんたゾンビじゃない」

「盲点!!? それって腐れ盲点だったわ!!?」

「寝てなくても気絶させれば充分よ」

女子の恋愛相談と言うべきか、ただの犯罪計画というべきか。

恋するローラを応援するナミが奇策を持ち出し、それに感銘を受けたローラが目を見開いて頷く。

異様な光景に、男達はただ立ち尽くすばかりだ。

「すげエな、お前らの仲間……………」

「——ところでローラ…私財宝置き場で落し物しちやつて…戻りたいんだけどどこだったかしら、道教えてくれる?」

「ドジねエ、いいわよ。あそこはペローナ様の部屋から行けば近いわ」

「あいつホントに転んでもただで起きねエな」

「…ホントに…すげエなア……………あいつ…」

バリーの眩きも聞こえない様子で、ちやつかり脅かされまくった詫びの品を手に入れ

ようと目論むナミに、ローラがにこやかに答える。

先ほどまでは確かに女神か天使に見えたのに、今やただの悪魔でしかなかった。

「おいナミ、あいつが追いついて来たぞ」

「ホント?」

その時、辺りの様子を伺っていたウソツプが獣顔の男の再訪を伝える。

はっと立ち上がったナミは、すぐさまローラの肩を叩き、襲撃者のいる方向へと促した。

「ローラ!!? アタックチャンスよ!!? 私はあいつに二度と遭わないから大丈夫!!?」

「頑張れ!!? あんた達こそベストカップルよ!!?」

「私頑張る!!! ありがとうナミ、勇気がわいてきた!!! アブサロく〜ム!!!」

「うおおっ!!! ローラ!!!」

心なしか、先ほどよりも猛烈な速度で走り出し、愛しい男に迫るローラ。

その恋の相手、アブサロムはそんな彼女にぎよつと慄き、大急ぎで停止し引き返す。あつという間に、獣二人の姿は遠のいていった。

「二人共今の内よ!!?」

「結局イノシシに何もされずに済んだぞ!!? ナミ、すげーな」

離れていく二人を背にし、三人はすぐさま走り出す。



咄嗟の機転に感嘆の声を上げるチョップパーに頷いてから、ナミはびつと親指を立てて笑みを浮かべた……目を金の形にしながら。

「話してみれば素直ないいコだったじゃない」

「だから目がおかしいだろうがお前っ!!」

金のためなら他人の恋愛事情まで利用する女。ウソップはその強かさに、やはりツツコミを入れざるを得なかった。

「……とんでもねエ奴らが来ちまつたな……」

どどどど……と走り去る三人を、ぽつんと取り残されたバリーが見送る。

いまさらもう、彼らを追う気にはなれない。これまでの獲物とまるつきり違う海賊達に、まともな反応すらできなくなっていた。

その時、不意にウソップ達が足を止め、振り向く様が目に入った。

「……………なアお前ら。こんな島だ、身を隠すところが必要になるとは思わねエか?」

「そうね……………ちようど良さそうなのが見つかったわ」

「ん? ん」

こちらを見ながら、何やらひそひそと話し合う三人に。

バリーは困惑しながら……………凄まじく不吉で嫌な予感を感じたのだった。

## 第243話 “魔人と鬼神”

二刀を手に、庭園を走り回るウエディングドレス姿の猛猪。

血走った目で辺りを見渡し、鼻息を荒くしながら、愛しい男を探して咆哮する。

「アブ様!!! アブサロムこのヤロー、出てきて結婚して!!! また消えて移動しやがったわね!!?」

凄まじい執念に燃えるローラは周囲を隈なく探し、やがて勢いよく走り出す。諦める気配はまるでなかった。

ローラがその場から姿を消した頃、物陰からそろりとアブサロムが顔を出した。

「妙だな……………他に逃げ場もねエだろうに…………」

恐るべき求婚者の追跡を逃れ、一息ついた彼は、自身が探す花嫁のことを考え、訝しげに首を傾げる。

ローラに追われた花嫁は、真っ直ぐに続く道を逃げていった。普通に考えて、途中で見つからなければおかしいのだが、その様子は見当たらなかった。

「よ、よオアブサロム……………だ、誰、探してんだ…?」

その時、不意に背後から響いた声に浴びてアブサロムはびくつと震える。

がぼつと振り返れば、雇われ衛兵の一人である生きた鎧が、どこかきこちない素振りで立っていた。

「お、脅かすなNo. 66!! ……いや、ややこしいな。バリーでいいんだったか」

「あ、あア……………で、ど、どうかしたのか」

「いや…オレンジ色の髪の美女を探してるんだが、知らないか」

「し、知って…」

何やら挙動不審な様子で、かたかたと鎧を鳴らすバリー。

不思議に思いながら、花嫁の行方を知らぬものかと質問してみると、兜の奥の目がわずかに強く光り。

次いで、ごんつと微かな音が聞こえ、バリーはその場で凍りついた。

「……………知らねエ。うん、知らねエ」

「そうか…一体どこに」

アブサロムはもう一度辺りを見渡し、花嫁を探し、求婚者に警戒し、物陰から出て行く。

その背中をじつと凝視しながら、バリーはかたかたと身を震わせ、悔しげな呻き声を漏らした。

「ちくしょうこの…!!? 悪魔共めエ…………!!」

ぎろり、と睨みつける自分の体。性格には、その中に潜り込んだ三人の敵。伽藍堂な自分の鎧の中に身を隠す、臆病な海賊達に恨み言をこぼす。

「おれの弱点全部知った上で……こんなに利用しやがって!!! あとでただじゃおかねエからなア~~~~!!!」

「うるせエ!!? 黙って行け!!? 誰かに助け求めたりしたら、お前の刻印切り刻んで消してやるからな!!!」

「チクシヨ~~~~!!!」

今すぐにも、三人とも引つ張り出してばらばらに切り刻んでしまいたい。

しかし自分が手を出すよりも前に、自身を現世に留めている刻印を傷つけられては堪らない。

強烈な怒りを持って余していると、アブサロムが振り向き尋ねてくる。

「おい、何か言ったか」

「いつ!!? ……………い、いや」

びくつ!とより強く身を震わせ、首を横に振って誤魔化すバリィ。

文字通り命を握られた哀れな殺人鬼は、三人の海賊に命じられるまま、アブサロムの後に続く他になかった。

——そんな二人のもとに突如、彼らの支配者からの招集がかかる。

「(ゴ)主人様くっつ!!? 三怪人様お揃いで!!? それと鎧のお二人も!!(ゴ)」

「……………早いな、入れ!!?」

「どうぞで、中へ!!?」

三体の小さなゾンビ達の報告に、幽霊島の支配者たる男の声が響く。

重い音を立てて開かれる扉から、三体の怪人達……アブサロム、ペローナ、ホグバツクと鎧の二人が入室し、整列する。

それを迎えるのは、青白い肌と巨体を持った不気味な大男だった。

「オウ、来たかおめエら。キシキシキシキシ!!? 早くおれを海賊王にならせる!!!」

「直に!!!」

他力本願な命令を発する大男、名をゲツコー・モリア。

王下七武海の一人にして幽霊島を支配する、カゲカゲの実の能力者だ。

そんな恐るべき男を相手に、小面で降りに入れられた鎧姿の男、ルフィがぎやーぎやーと騒ぎ食ってかかる。

「何が海賊王だ!!! 海賊王になるのは、おれだ!!! おい!!! このヒモほどけデカらっ

きよ!!! エレノアを離せ!!! ウソップ・ナミ・チョップ・サンジ・ゾロ全員返せ!!!

どこへやった!!!」

「何とも威勢のいい男だな……これが『麦わら』のルフィか」

もう剣のような勢いで吠えるルフィに、当然モリアはまるで臆さない。

むしろ、暴れるルフィの隣の檻に入れられたエレノアの方が、迷惑そうに顔を歪めていた。

「おい、麦わらのルフィ……今、だいぶ名前を連ねたが捕らえたのはまだ、お前らで3人と4人目だぞ」

モリアは片手に持った手配書を眺め、ルフィを嘲笑う。

一味全員が賞金首という特殊な海賊団ゆえに、誰を捕らえているかいないかは即座に把握できた。

ただし、サンジだけが名前を読み上げられずに終わった。

「サンジ君………不憫な」

ただ一人、下手くそな似顔絵で載せられているサンジの心境を思い、がくりと項垂れるエレノア。どうして彼だけあなのやら。

「あの3人はどうしたんだペローナ！ 確かにリスキー兄弟に引き渡したがな……」

「それがクマシーに届いてなかったんだよ、途中で逃したんじゃないか!?」

「はい……受け取ってませ……」

「口を開くなと言ってるだろ!!?」

「お前はクマシーにキビシーな」

先に島に入った三人について尋ねると、軽薄な格好の少女が苛立たしげに応え、御付きの着ぐるみのようなゾンビに八つ当たりする。

彼女の問いに、アブサロムは訝しげに眉間にしわを寄せて考え込んだ。

「だが、おいらの花嫁を含む3人組なら、お前の庭の中程で一騒動やってたぞ。なア、バリー……ん？ おい、ちよつと待てよ」

は、とある事に気付き、固まるアブサロム。

すぐさま傍の Hog バック に振り向き、凄まじい剣幕で詰め寄った。

「——つて事は Hog バック 貴様!! 一度はおいらの花嫁に手を掛けたつて事だな!! 前もってあれ程……」

「あんたに嫁は来ない」

「何を!! シンドリー」

「ウオ……!! おいおい!! シンドリーちゃん話がこじれるだろ!! それに何でおれより前に出てるんだ!!」

「あんたにも来ない」

「ぐえつ!!! ぶったまげた!!! とんだ流れ弾だぜ!!!」

「あんたにも来ない」

「何で私にもそれを言った?!?」

ホグバックを問い詰めるアブサロムだが、その前に異様なほどの皿嫌いであるゾンビメイド・シンドリーが毒を吐く。

主人であるホグバックや全く関係のないNo. 48にまで飛び火し、その場が一気に騒がしくなった。

「やめろやめろ、ゴチャゴチャと面倒くせエ!!! 海賊が逃げたんならお前らが後で何とかしやがれ!!!」

侃侃諤諤と耳障りな騒ぎ声に、モリアが面倒臭そうに止める。

鬱陶しそうに顔を歪めていた彼だったが、やがて楽しげに笑みを浮かべ、静かになつた部下達を見渡していく。

「今、おめエらを集めたのは、記念すべき大戦力の誕生を共に祝おうってんじゃねエか!!!」

モリアのその言葉に、怪人達に背筋が思わず伸びる。

幽霊島の支配者が秘する、前代未聞の最強の戦力の誕生……その時が来たのだと、誰もが息を呑み胸を踊らせる。

だがその時、がしゅんつと甲高い音が部屋の中に響き渡つた。

「ご主人様!!! 海賊が鉄の檻を食い破つて逃げます!!!」



「檻を…!!? …食い破った!!?」

「あと一人のはなんか勝手に壊れました!!!」

「んなわけあるかア!!!」

こじ開けられた檻とを打ち捨てて、ルフィとエレノアが逃げ出す。

ぴよんぴよんと糸に縛られたまま飛び跳ねるエレノアに、芋虫のようにのたうちながら進むルフィが呼びかける。

「エレノア!!? この糸どうにかしてくれ!!!」

「あいよ! 多分それ火に弱そうだな…」

どうにか動く指を合わせ、閃光を走らせるエレノア。

涙ぐましい努力の姿に、怪人達はさして慌てる様子も見せず、むしろ頼もしげにルフィ達を眺めていた。

「フォスフォスフォス、頼もしい限りだぜ」

「フフ…」

「よせ、アブサロム。部屋の中だぞ、私が止める!!?」

片腕を掲げるアブサロムを止め、ペローナが宙に浮きルフィ達を追う。

必死の形相で逃げるルフィ達に向け、彼女は体から半透明のゴーストを生み出し、向かわせてくる。

「捕まるかアホー!!!」

「あいつらは!!!」

「ネガティブホロウ!!?」

吠えるルフィとエレノアの体を、ゴーストが通り抜ける。

その途端、二人はその場にどさつと倒れ込み、しくしくと泣き言をこぼし始めてしまった。

「もし生まれ変われるのなら……おれはナマコになりたい……死のう」

「生まれて来てごめんなさい生まれ来てごめんなさい生まれ来てごめんなさい……」

先ほどの異性がまるで感じられない哀れな姿に、敵であるアブサロムも流石に哀れみの視線をルフィ達に向け、言葉をなくしていた。

「さつきまで海賊王になると言ってた男がナマコとはムゴい」

同情はするが、それはそれ。無力化された二人はゾンビ達に拘束され、床に立てた棒に縛り付けられ無理矢理立たされる。

そして二人の背後に、大きく強力な照明器具が設置される。

「光を当てろ!!!」

「何すんだチキショー、おめエら覚えてろ!!!」

「生まれて来てごめんなさい生まれ来てごめんなさい生まれ来てごめんなさい

………

「エレノア〜!!! 戻って来〜い!!!」

かつ、と光に照らされ、伸びていくルフィとエレノアの影。

何事か、と騒ぐルフィと泣き崩れるエレノアをよそに、立ち上がったモリアが徐に手を伸ばし……ベリベリベリつ、と影を地面から剥がし始める。

「うわっ、え!? 何だアレ……おれの影!?」

ぎよっ、と慄くルフィの目の前で、モリアはどこからともなく散り出した鍔で、ルフィとエレノアの影を地面から切り離してみせる。

がくり、と項垂れ脱力するルフィ達をよそに、モリアは手の中で暴れる二つの影を満足げに見下ろす。

「キシキシキシ!!? 手に入れたぞ!!? 3億と2億8千万の戦闘力!!! これで史上最強の『特別ゾンビ』が誕生する!!!」

狂気的な笑みを浮かべ、影を掲げる幽霊島の支配者。

その異様な光景を、バリーの鎧の中からナミ達のがたがたと震えながら見つめていた。

「楽しみだな……『氷の国』にてアイツらの死体を見た時は身震いがして止まらなかった。

500年の昔、こんな悍ましいものが海で暴れていたのかと息をのんだ…!!?」  
 かつん、かつん、と冷え切った通路を進む集団。

今もなおじたばたと抵抗するルフィとエレノアの影を握りしめ、モリアと部下達は長い長い通路を進む。

「討ち取った国を島ごと自分の領土へ持ち帰り、悪党達の国を築いたという世に名だたる『国引き伝説』を残した張本人がそこにいた…!!」

「これがゾンビ造りの醍醐味…」

「また伝説が一つ蘇る、キシキシ!!?」

やがて、彼らは通路の最奥に鎮座する扉の前に辿り着く。

霜が降り、凍りついたその扉は、まるで巨大な冷凍庫のようだ。

「さア……………!!?」 復活の時だ!!? 歴史に名を残す…『魔人』に『鬼神』と呼ばれた狂戦士達よ!!! 始めようか…!!?

かちこちに凍りついたその扉を開け放ち、巨大な空間に収められた二つの死体に向けて、モリアが堂々と叫ぶ。

——それは、まさに怪物だった。

片や鎖に戒められ、仁王立ちする赤い肌と山のような巨体を持つ、鬼。

片や天井から吊るされる、牛の角と尾に駝鳥の翼、それにモリアとそう変わらない巨

軀を持つ、天使。

巨大冷凍庫の中で凍りつき、沈黙するそれらに、モリアを除く全員が息を呑む。そしてバリーの中で、恐怖と寒さでがたがたと震えながら、ナミ達が絶句する。

見たことのない巨体、死してなお残る圧倒的な存在感。

目の前の死体が見せつける威圧感と共に、それを使って何をするのかという不気味さが彼女達を震え上がらせる。

「静まれ!!? 麦わらのルフィ、そして妖術師の影よ!!? おれがお前達の新しい主人だ!!?」

暴れ続けるルフィとエレノアの影に、モリアが一喝する。

すると、あれだけがいていた二体の影はびたつと動きを止め、モリアに向き直った。「今からお前がゾンビとして生きる為の声と肉体を与える。過去の一切の人間関係を忘れ去り、おれに服従する兵士となれ!!?」

こくり、と向けられた命令に従順に応じる影達。

まるでルフィ達ではない何かに変貌したように、一切の抵抗をやめてしまう。

「キシシシ、契約成立だ」

モリアは二体をそれぞれ両手でつかみ、冷凍庫の中央に向かって歩き出す。

赤い鬼を戒める鎖の上を渡り、自分の背丈とほぼ同じ大きな顔の前に立つと、ルフィ

の影を短刀のように振りかぶる。

「……さア、目覚めろ……!!! 500年の眠りから……!!!」

振りかぶった影を、鬼の額にぐさりと突き立てる。

すると、影はずぶずぶと……泥の中に沈むようにゆっくりと鬼の中に呑み込まれて行く。

続けてモリアは鬼の額に登り、吊り下げられた天使の胸に向けて、エレノアの影を同じように突き刺す。

二つの影がそれぞれ死体の中に消えると、怪人達のうちの誰かが「入った……」と呟く。変化は、徐々に現れだした。

凍りついていた二つの巨体の奥底から、微かに心音が響き、少しずつ大きくなっていく。

ぱき、ぱきと氷が割れる音が鳴り、沈黙していたそれぞれの指先がわずかに動く。

そして……ぎろっ!と。

閉じられていた瞼が、突如大きく開かれ鋭い眼光があらわになった。

「「ぎやああああアアアアア~~~~!!!」」

途端に上がる、三人分の悲鳴。そして吹き飛ぶ髑髏の兜。

恐怖と驚愕で悲鳴をあげ、体勢を崩したバリーの中から、ナミ達が目を飛び出させな

がら転がり出た。

「何だア……!!!」

「死体が動い……あ」

「おれの頭!!?」

「おいバリー!!? てめエまさか海賊達をかくまつて……!!!」

「い、いや違エ!!? 脅されてたんだよ内側からア〜!!?」

突如現れた三人に、モリア達も驚きで目を見開く。

慌てて頭を拾いに行くバリーに非難の声が集中する中、ナミ達は涙目で自身らの失態を悔やむ。

「し……しし……!!? しまった見つけたア!!!」

「声が出ちゃった……!!!」

「悪魔が目覚めたア〜〜〜!!!」

「あれはおいらの花嫁!!? なぜこんな所に!!?」

「海賊だぞ、捕らえろ!!!」

アブサロムが困惑の声をこぼす中、いち早く冷静さを取り戻したペローナが侵入者の拿捕に動こうとする。

その時、目覚めた赤鬼が自身の拘束を破りながら、ゆつくりとモリア達の方へ振り向

く。次いで、彼の頭上から猛牛の天使も戒めを砕き、赤鬼の頭の上に降り立った。

「素晴らしい……!! もはや芸術!!? 何という『威圧感』、まさに『魔人』!!」

歓喜の声をあげ、自らが蘇らせた怪物に見惚れるDr. ホグバツク。

狂気の医者と海賊達に見上げられながら、赤鬼は大きく息を吸い込み……そして。

「肉~~~~~っ!! ハ~~~~ラ~~~~ア~~~~ったア~~~~!!」

びりびりびりっ!

大気を震わせる、凄まじい咆哮。どこかの誰かそのものである雄叫びをあげ、赤鬼は天を仰ぐ。

その巨体の上で、顔をしかめた猛牛の天使が大きく拳を振り上げ。

「うるさ~~~~い!!!」

「ふげエ!!」

「「「えエ~~~~!!」」」

がごんっ!

と……強烈な拳骨を赤鬼の脳天に叩き込み、情けない悲鳴をあげさせたのだった。



## 第244話 “50年の軌跡”

どたどたどた、とせわしなく石造りの階段を駆け下りる集団。

フランキーとロビン、ウソツプとチョッパーの四人が、霧の先にうつすらと見える海に向かって急いでいた。

「この長い階段は、影を取られた者を運ぶ通路だと聞いたわ」

「そうなんだ、ルフィとエレノアが運ばれてったんだ!! おれ達はそれを追ってたらナミが……!!!」

幽霊島の秘密が発覚し、古の赤鬼と天使の覚醒の後、隙を見て逃げ出したウソツプ達三人。

脇目も振らず、ひたすらに他の仲間の元を目指し、共に逃げていたはずのナミだったが……不意を突かれ、攫われた。

透明人間・アプサロムによって見えなくされ、何処かへと連れていかれてしまったのだ。

後を追おうとしたウソツプ達は、ゾンビ達に邪魔され危うく再び囚われの身となると、駆けつけたフランキーとロビンに救われた。

そして自分達が見た秘密を語り、ナミの誘拐を説明しながら、ルフィ達が戻っているというサニー号を目指して走っていた。

「ナミ、大丈夫かなア!!」

「あいつは命を狙われたわけじゃねエ、出直して必ず助ける!! さつき上で聞こえた怪物の唸り声みてエのは一体、何だ?! おれ達はアレ聞いてかけつけたんだ」

ナミの身を案じるチョップとは別に、フランキーの表情は厳しい。

彼の耳には、ウソップ達と合流する前に耳にした音——巨大な「何か」のあげた咆哮が未だ強く響いていた。

その姿を見ていない彼らに、ウソップは息を呑みながら答え出した。

「あれは……『ルフィ』の声さ」

大勢のゾンビ達が、地下の冷凍庫への通路を大急ぎで往復する。

担いだ大量の食料を、必死の形相になりながら、今さつき覚醒したばかりの後輩のもとに運び込んでいた。

積み上げられたそれらを、赤鬼はばりばりと片っ端から食い尽くす。

「すげエ食いつぷりだな」

「バリー、ためエどういうワケで、海賊かくまってたんだよ!!」

「仕方ねエだろ!! 中から刻印消すって脅されてたんだからよオ!!!」

「全く情けない…!」

「んだとオ!!! てめエもいつペン体の中に入り込まれてみやがれ!!!」

食料の山が消え、赤鬼の腹に収められていく光景を、モリアとその配下達が満足げに、あるいは唾然として眺めていた。

視線を感じたのか、赤鬼は恐ろしい顔を向け、にやりと笑ってみせた。

「わりいなー、チビらつきよ!! おれ、誰だか知らねエのにメシ食わせてもらって!! マ

ズいし、食い足りねエけどな、しししし!!!」

「ぬア!!! てめエこのスペシャルゾンビ!!! 調子コイてんじや——」

幽霊島の支配者に向けるものではない、生意気な態度にゾンビ達全員がぎよつと目を剥く。そして、赤鬼に猛抗議を始める。

が、それが言葉になるよりも前に……赤鬼の頭上に腰かけた天使が、赤鬼の額にぐりぐりと拳をねじ込んだ。

「食わせてもらってその態度はなんだこのクソガキが…!!」

「いでででで!!! 痛くねエけど痛エ!!! ごめんっ…ごめんなさいっ!!!」

母親にされるようなお仕置きを受け、何十倍も体格差のある赤鬼が泣きながら詫びる。食事の手も止めて、本気で謝っていた。

「…で、何か言ったか？」

「「言ってません」」

気が済んだらしい天使にじろりと睨まれ、ゾンビ達や怪人達が一齐に姿勢を正し、首を垂れる。序列がはつきりした瞬間だった。

笑っているのは、二体の怪物の主人たる能力者、モリアだけだ。

「いいかオーズ、そして『鬼神』ジャービル。お前達は500年前、数々の伝説を残した大悪党。そして今、この現代の海におれの部下として蘇った」

ゾンビの命たる影を自在に操る海賊は、自らが生み出した最強の戦士達に向けて自信満々に告げる。

だが、それを聞いた赤鬼と天使は、鬱陶しそうに顔をしかめて目を逸らした。

「部下？ イヤだね、おれには夢があるんだ!!」

「そんなゾンビ見た事ねー!!!」

「私もお断りだね。お前に従う義理がどこにあるんだデブ」

「態度デカー!!! オーズよりよっぽど腐れでけエ!!!」

気怠げにモリアを睨み、舌打ちをこぼす天使。

モリアの支配がまだ及んでいないのか、それとも元の二人の我が強すぎるのか、従う素振りなど微塵も見せない。

赤鬼はずしずしと冷凍庫の中を歩き出し、ごきごきと肩を鳴らし出した。

「ここはせまくてつまんねエな、ちよつと外へ出てくる！ 海へ出て世界一周するか」

「好きにしろ…ここは意外と乗り心地がいい」

「大航海かつ!!」

「自由かつ!!」

死人にあるまじき希望に満ちた宣言に、ゾンビ達全員からツツコミの合唱が飛ぶ。

彼らの視線など一切気にせず、赤鬼はごんごんと冷凍庫の壁の硬さを確かめると、大

きく拳を振りかぶり。

「〴〵ゴムゴムの銃<sup>ピストル</sup>!!!!」

と…たったの一撃で、固く分厚い鋼鉄の壁を粉碎してしまう。

がらがらと崩れ落ちる冷凍庫の哀れな姿を目の当たりにし、ゾンビ達は目を見開いて

悲鳴をあげた。

「ちよつとちよつとちよつとアンタらア!!」

「腐れヤバく!!! オーズと〴〵鬼神〴〵が外へ逃げ出したア!!!」

「おかしいな、腕がのびる様な気がしたんだけど…まあいいか」

慌てふためくゾンビ達と、なおも動じないモリア。

赤鬼は興味をなくした彼らを後にし、自身らを保管してきた容れ物の外に出ると、拳

を天に築き上げ高々と吠えた。

「海賊王に、おれはなるっ!!!」

「揺らすなっ!!!」

「ホゲ~~~~ッ!!!」

彼の冒険の第一歩は……連れの天使による拳骨によつて、頼りなくよろめかされた。

「さっきのもの凄エ音と叫び声もそうさ！ ルフィのゾンビが叫んで大暴れしてるとしか思えねエ。急ごう」

「悲鳴も混じつてた気がするけど……」

長い長い階段を駆け下り、地上へと降り、海岸へ。

つい数時間前まで歩いてきた森の上を通り抜けた一味は、ようやく変えるべき船の元へと到着する。

「サニー号があつたぞ!!?」

「成程、ここへ通じてたのか……上へ行けばいきなりボスの部屋だったとはな。階段が下ろせる様になつてる」

巨大な蜘蛛の巣に囚われたままのサニー号を確かめ、そして行きには気付かなかつたもう一つの通路に振り向くフランキー。

わざわざ見通しのきかない遠回りの道を行くように罫にかけられていたのだと、今更になつて気付かされる。

「おい!!? ずいぶん荒らされてるぞ!!?」

「ゾンビ達の仕業ね。ドロの足跡だらけ」

「えっ!!? じゃ、まだいるかも!!?」

サニー号の甲板に上がった三人は、芝生の上に残る無数の泥の足跡に顔をしかめる。フランキーが後に続いて登り、呆れた目で侵入の跡を見やる。

「確かに荒らされてんな。別にまだ取るもんなんてねエの……—まず肝心のあいつらは……?」

「見当たらねエな……」

「おーいルフイ……!!! エレノア……!!! ソロ……!!? サンジ……!!?」

船長と剣士、コックに錬金術師。一味の実力者達がどこにいるのかと、残る一味が探し回る。

無残に荒らされた船内に苛立ちながら、四人の姿を求めてしばらく経つた頃、船室を除いたチョッパーが声をあげた。

「いた!!? ダイニングにいた、4人共だ!!?」

彼の呼び声に、急いで船室へと集まる三人。

入り口を譲られ、中を覗き込んだ三人の目に映ったのは。

……椅子の背面にもたれ掛けさせられ、顔中ハンガーや洗濯挟みで飾られた、ルフィ達の哀れな姿だった。

「完全にゾンビ達にデコレートされてるが」

「……無残ね」

「おおい!!! てめエら起きろオ!!! 寝てる場合かアア!!! 事態は深刻なんだぞ!!!」

ぐーすかと眠りこけたまま動かないルフィ達に、フランキーが情け容赦なく殴りつける。エレノアにも思い切り拳を叩き込み、四人の頭をたんこぶだらけにする。

が、どうやっても四人は目を覚まさなかつた。

「……………起きねエ…神経あんのかコイツら。仕方ねエどいてろ、バズーカで」

「いや…大丈夫だ…」

仙人掌のようになった四人を呆れながら見下ろし、左腕を構えようとしたフランキーをウソツプが止める。そして、大きく息を吸い込んで、叫んだ。

「肉持った美女の剣豪が向こうでエースを口説いてるぞ!!!」

「肉!!!」

「美女!!!」

「剣豪オ!!!」



「どこのどいつだゴルア!!!」

その瞬間、あれだけ痛みを与えられても起きなかつた四人が、ぱちつと一斉に目を開け……そして激昂する。

我欲まみれな男達と、天使の見せる愛の重さに、チョツパーが代表して呟いた。

「ダメだコイツら!!?」

……何はともあれ、船が流される前に無事目を覚ました四人。

中でもルフィは目の前に人の気配を感じると、まだ敵の居城の中と思つたのか、椅子を蹴倒して早速殴りかかった。

「このヤロおれの影を」

「静まれ、ここにモリアはいねエ!!!」

拳が繰り出される前に、フランキーがルフィの顔面をつかんで止める。

そうしてようやく相手が違うと気づいたのか、徐々にルフィは落ち着きを取り戻し、ゾロやサンジ、エレノアと共にきよろきよりと辺りを見渡し始めた。

「ん? ここは……」

「サニー号だ」

「サニー号?!? 何で元の場所に……イヤ……でも夢じゃねエ、影がなくなつて……!!!」

記憶が混濁しているらしいサンジだったが、足下を見下ろすと一気に意識をはつきりさせる。何も映らない足下に、嫌そうに顔を歪めてみせた。

「…妙な感じだ…」

「おい大変だ!!! 一大事だ!!! 食い物がなんもねエぞ!!!」

「え!?? うちの家計の九割が!!!」

自身の体に起きた明らかかな異常に怖いっていると、厨房に入っていたルフィがチーズなどの保存食を手に駆け戻ってくる。

宝石や財宝よりもよほど深刻な状況に、エレノアも思わず頭を抱えた。

「まったく面目ねエ…油断しすぎてた…!!?」

「海賊弁当も失くしちゃったくくく…チーズじゃダメだチーズじゃ」

「まんまとしてやられちゃったか…:…:我ながら情けない」

「——ところでナミさんがいねエ様だが…:…:?」

一味を守る強者でありながら、誰よりも早く狙われ囚われた事を悔やみ、項垂れる四人。ルフィだけ嘆く点が異なっていたが、誰も気にしない。

その時、ナミの姿がこの場に見えないことに気づき、サンジが問いかける。

うつ、と呻いたウソップが語り出すと、サンジの目がくわつと見開かれた。

「連・れ・去・ら・れ・た・ア!!! なぜ地の果てまで追わねエ!!! そいつはどここのどいつだ、

すぐにおれが行って、奪い返してくる!!!」

「すまねエ!!! でも追いかけ様のねエ状況になっちまって…!!! とにかく話を全部聞いてくれ!!!」

衝動のままに掴みかかってくるサンジを、ウソップは必死で宥め引き剥がす。危うく仲間の手で殺される前に、一味全員がやるべき事を確かめさせる。

「いいか! これから取り返さなきゃならねエもんは大きく分けて二つだ!!?」

「〴〵めし〴〵!!? ナミ〴〵!!?」

「違うでしょ!!! 影〴〵だよ 影〴〵!!! あんにやるー、ナメたマネしやがって…!!?」  
ルフィが思いつきり間違った答えを口にし、即座にエレノアが否定する。

まんまと罠にかかった事が相当に不服なのか、件の七武海の顔を思い浮かべ、ぎりつと歯を軋ませる。

すると不意に、エレノアは能面のような無表情に変わり、ウソップに振り向き尋ねた。  
「…で、私のエースを口説いてる命知らずなバカ女はどここの誰…?」

「待て待て悪い嘘だ、落ち着け!!! 全部説明する!!?」

光を失った虚ろな目で見つめられ、ぞぞぞと背筋に震えが走る。

目覚めさせるためについた嘘で余計な恐怖感を味わいつつ、事情を把握していないルフィ達に詳しい説明を続けた。

「んな……け……け……!!」 結婚だとオ……!!」 フザけんア……!!」 クソ許さ  
ん!!!」

「ナミと結婚して勇気あんなア……そんでおれが巨人? ゾンビってそうやってできるの  
か」

「じゃあルフイとエレノアとあのコックのゾンビは確認済みってわけだな? ウソツ  
プ」

案の定、怒りで燃え上がるサンジの横で、ルフイは困惑の表情で呆れる。普段のナミ  
を知っている分、アブサロムの行動が不思議に聞こえたようだ。

逆に冷静なゾロはさらなる情報を得ようとウソツプ達に問うが、彼らはいつの間に  
か、膝を抱えてがたがたと震え上がっていた。

「あ……あいつが『七武海』の一人だったなんて……!!?」

「急に怖くなってきた、おれ……!!?」

「知らなかったのか、おめエら」

すぐ近くにやっていた巨漢の存在に今更恐怖したらしく、涙と鼻水を垂らして怯える  
ウソツプとチョッパー。ナミがいたら、おそらく同じ状態になっただろう。

「——まあなんでもいいが、じゃあその3人のゾンビを探し出して口の中に塩を押し込  
めば影は返ってくんだな? しかしそんな弱点までよく見つけたな」

「弱点にしろ、お前らをまず救出に來た事にしろ、助言をくれたのはあのガイコツ野郎だ」

関心の声を上げるゾロに、フランキーはどこか口惜しげに答える。

その答えに、ルファイがはつと目を見開いて振り抜いた。

「えーっ!? ブルツクに会ったのか!?」

「会った……会って……ヤボな質問しちゃまってな……」

勧誘を全く諦めずにいた男が見つかったと喜ぶルファイとは正反対に、フランキーは酷く落ち込んだ様子だ。

すぐにルファイが騒ぐのをやめ、何があったのかと真剣な眼差しで問いかける。

「いや……お前が初めにアレを仲間にするのと連れてきた時や流石に存在ごと完全否定したが……あの野郎、ガリガリのガイコツのクセによ……話せばなかなか骨がある。ガイコツなだけに」

(……………、笑うと……?)

件の骸骨紳士の感性が移ったような、なんとも言えない冗談を耳にしてしまい、エレノアは思わず誰にもなく胸中で問う。

だが、そんな微妙な空気も……その後のフランキーの話で一気に吹き飛んだ。

「あいつア男だぜ!!!」

それは、スリラーバークの刺客、スパイダーモンキーとの交戦時。

苦戦していたフランキーとロビンを救い、ゾンビの撃退法を教え、去ろうとしたブルックにフランキーが投げかけた疑問。

お前はなぜ、屍の体を引きずって生きているのか。

野暮とわかりながらも、フランキーには理解ができなかった。

異形と成り果て、本人も死にたかつたと豪語しながら、自ら命を絶つ事なく今日まで在り続けられた理由が。

ブルックは笑いながら、理由を語った。

残してきた仲間がいるからだ。

——約束の岬で再会を誓った仲間の名は、“ラブーン”。

西の海からついてきてしまったアイランドクジラの子。

危険な航海には連れていけないと、岬で出会い、仲良くなった灯台守のクロツカスに預け、いつかまた会おうと約束して“偉大なる航路”に挑み。

ブルックを含めた全員が命を落とした。

その後悔と、諦めきれない気持ちを抱え、ブルックは二度目の生に全てを懸けた。

——無責任に死んでしまった我々を彼が許してくれるとは思えませんけど

身勝手な約束をして声も届かぬ遠い空から

死んでごめんじゃないでしょうに……!!!

男が一度……!!!

必ず帰ると言っただから!!!

彼らの約束は、50年の時を経てなお、生きていた。

## 第245話 // 影を取り戻せ!!? //

「こういうワケで奴は…」

話を締めくくり、フランキーは重い表情で黙り込む。

対するルフィ達も、驚愕により沈黙していた。

彼が口にした名を、ルフィ達は深く知っていたからだ。

「ラブーン」

「……………」

「あいつだ…」

「ホントかよ…」

「ウソみたい…!!?」

誰もが戸惑いに目を見開き、固まっている。

ルフィ達の異変を訝しみ、事情を知らないチョッパーがきよとんとした顔で尋ねた。

「……………あいつって?」

「……………ああ、おれ達知ってたんだ。そのクジラ」

「……………!!? 何!!? どういう事だ!!?」



「『偉大なる航路』の入り口にある『双子岬』——そこにクソでけエクジラがいて、世界を分かつ壁に頭をぶつけ吠え続けてた」

今度はフランキーが驚愕で腰を浮かせる。

神妙な顔をしながら、サンジがゆっくりと語り始めた。

——約束の岬で50年間、愛する海賊の仲間の帰りを待ち続け、吠え続けていた一頭の鯨の話。

「すでに海賊達は逃げ出したつて情報もあつたが、ラブーンはそれを信じず吠え続けてた。何とかルフィがその壁にぶつかる自殺行為だけはやめさせたが、……あいつは今も生きて、その岬で仲間を待ち続けている!!?」

フランキーも、ロビンもチョツパーも、声もあげられなくなっていた。

己が身に置き換えても、想像もつかないほどの執念。現実離れた実話を聞かされ、陳腐な感想を口にするのもできずにいた。

「奇跡だ……これはもう奇跡としか言いようがないよ……!!」

「……とんでもねエ話だ……50年も互いに約束を守り続けてたんだ……!!?」

「まさか、あのラブーンが待つ仲間の一人が……あの……ガイコツだったとは」

約束を反故にし、逃げ出したと諦められていた一味。

その生き残りが、たった一人でも存在し続けていたのだという事実、ルフィ達はた

だ絶句するばかりだった。

そしてその話を耳にし、彼の涙腺は崩壊した。

「ヴオオオ〜!!! 骨も鯨も大好きだチキシヨ〜!!!」

「うるせエよっ!!!」

過剰なほど涙を流し、叫ぶフランキーに思わず耳を塞ぐ他の面々。

それがまるで気にならなくなるほど、船長たる青年の気持ちは一層昂ぶっていた。

「うは〜っ!!!? ぞくぞくしてきた!!!? あいつは音楽家で!!!? 喋るガイコツで!!!?

アフロで!!!? ヨホホで!!!? ラブーンの仲間だったんだ!!!」

一目見て気に入った、動く骸骨で音楽家。

しかもかつて再会の約束をした友人の待ち人だったのだ。そんな話に、ルフィが興奮しないわけがなかった。

「おれはあいつを引きずってでもこの船に乗せるぞ!!!? 仲間にする!!! 文句あるかお

前ら!!!」

「ふふっ……あつたら意見が変わるのかしら?」

「俄然やる気出てきた……!!!? 邪魔するあいつら全員叩き潰してやる!!!」

「会わせてやりてエなア、あいつ!!!? ラブーンに!!!?」

「賛成だチキシヨ——ツ!!!」

「おれもだコンニャロ——ッ!!! おれもうガイコツ恐くねエッ!!!」

「そんなわかりきった事より!!? ナミさんの結婚阻止だ!!! おれア!!!」

それぞれで気持ち昂らせ、やる気を高める仲間達。

その輪から外れるように、いや急かされたように、ゾロが早速島へと再上陸していく。

「ゾロ!!? どこ行くんだ」

「さっさと乗り込むぞ。奪い返す影が一つ増えたんだろ?」

「しししし!!?」

不敵に笑うゾロに、ルフィは嬉しそうに笑う。

一度は反対した仲間も、もう彼の仲間入りを疑っていない。

あとは邪魔者を全て蹴散らして、もう一度彼に会って、仲間に誘うだけだ。

「よっしゃア!!! 野朗共っ!!! 反撃の準備をしろ!!! スリラーパークを吹き飛ばすぞオ

!!!」

「ゆけ!!?」

「あんたも行くんだよ!!!」

幽霊島に響き渡る雄叫び。散々脅かされた意趣返しをし、奪われたものを取り戻すた

め。

一味は魔の島への再挑戦に燃えていた。

そんな中、優先すべき問題を思い出し、男達が険しい顔で考え込み始めた。

「——しかし、おれ達の影の入ったゾンビっての、探し出すのは一苦労しそうだな」

「それに…!!? 本当に!!? ルファイのゾンビはとんでもねえんだぞ!!! 普通の巨人の2倍はあるんだ!!? お前らでも勝てるかどうか」

「『国引き伝説』の主犯『魔人オーズ』か……私としては、私の影の入ったっていうゾンビの肉体の方が気になるんだけど……」

実際にゾンビが生み出される光景を思い出し、またがたがたと震え始めるウソップにエレノアがふと呟く。

やや重くなる空気の中、彼らを見渡したルファイが咎めるように口を挟む。

「……………ゾンビなんか探さなくていいよ！ おれのゾンビは見てみたいけどな」  
「?」

「何言ってるんだ。おれ達やこのままの体じゃ二度と太陽の下へ出られねえんだぞ」  
ブルックが以前に口にした、影を奪われた者の末路。

光に拒まれた悪夢を見せられ続けるというのに、何を言っているのかとルファイを睨む。

だが、ルファイは今、この場の誰よりも冷静だった。

「だってお前…あの時ゾンビのおっさんが言ってたろ、ゲッコウ・モリアをぶっ飛ばせば

みんなの影が戻るって！」

ルフィがそう言った瞬間、ぐっと全員が押し黙る。

根本的問題を解決する……それ相応の危険性はあるが、確実な方法を聞かされ、サンジが悔しげに顔を歪めた。

「た…確かに言ってた…またコイツは核心を…」

「——で、あの階段登ったらモリアがいるんだろ!!?」

「うおつ!!? 確かに!!?」

「今までずっと回り道してたわけだしね……」

びしっ、と示された方向を見れば、幽霊島の支配者の元に続くまっすぐ続く階段がある。迷うはずもない一本道だ、流星にゾロも間違えまい。

「とにかくまー、おれはモリアをぶっ飛ばしに行くからよ!!? 影はそれで全部帰ってくるから、サンジ！ お前ナミの事頼むぞ」

「当ったり前じゃアア!!! 透明人間だか陶芸名人だか知らねエが霧の彼方へ蹴り飛ばしてやらア!!! 結婚なんざさせるかア~~~~!!!」

ルフィに指示され、サンジの怒りが途端に再燃焼する。

現実には全身から業火を噴き出させ、感情の限りを込めた雄叫びをあげ、仇敵のいる屋敷を見据える。

その背に、ウソツプがあ、と声を漏らして付け加えた。

「言い忘れてたがああの透明人間、風呂場でナミの裸じっくり見てたぞ」

「うんぬアアアアアにイイイイ!!?」

くわつ、とサンジの顔が異形に変じる。

目を吊り上げ、鮫のように尖った牙を剥き出しにし、怨念のこもった声でこの場にならない仇敵を呪い続ける。

その姿はまさに、燃える炎の悪魔だった。

「これ以上刺激してやるな。何かに変身しそうだな」

「『悪魔風』じゃなくて、『本場悪魔』になりそうなんだけど」

「ナミの事は、目の前で連れ去られた責任を感じてる。おれもサンジと一緒に行くぞ!!  
? 第一『七武海』なんかともう二度と会いたくねエ!!」

明らかに人を捨てかけているサンジの今後を案じつつ、エレノアも島を見やり、こきこきと首や肩の骨を鳴らす。

影も重要だが、放置できない相手がいる事を思い出したからだ。

「さて……………私はとりあえずあの鎧の人達を探すかな。直接の因縁はないけど色々聞き出したい事ができたし」

「おれはガイコツの戦いが心配だ、そこへ行く! 麦わらがモリアをぶつ飛ばせりや

そっちも解決だろうが、その前に自分の影にどうにかされちまってたら大ゴトだ」

「そこ、おれも付き合うぜフランキー。〃伝説の侍のゾンビつてのがどれ程のモンか興味をそそる」

「ナミちゃんとかイコツさんの2極…!!? 差し詰め解決を急ぐのはそこね…後は確かにモリア討伐が決着のカギ」

それぞれの理由で、相手取るべき敵を決めていく。

着々と方針を決めていく面々に、緊張の面持ちをしたチョツパーが厳しい声で注意を促す。

「お前らそんな簡単に言うけどな、相手は〃王下七武海〃だぞ!!」

「大丈夫だ、クロコダイルと同じだろ」

「へーきへーき」

「お前殺されかけたじゃねエかよ!!? 頼むから気をつけてくれよ!!」

どちらも強敵と相見え、瀕死の重傷を負ったというのに、まるで機にする様子がないルフィとエレノア。

気楽すぎる彼らを嘆きつつ、ウソツプが懐からいくつかの小さな袋を取り出し、投げ渡してきた。

「ほんじゃコレ、お前ら一袋ずつ持ってけ」

「ん?」

「何これ……つて、あア!!? 塩か!!?」

「そう!!? おれ様特製『ゾンビ昇天塩玉』だ!!?」

「あア……お前さつきコレ作ってたのか。さすがだな」

「仕事が早くて助かるよ」

ブルックから授けられた情報は、まだある……ゾンビから影を切り離す唯一の方法があるのだ。

それは、塩を食わせる事。

悪魔の実際の能力で動くゾンビは、海の力を持つ塩で浄化できるのだ。

ゆえに、ウソツプが作成した塩の弾丸こそ、ゾンビ軍団に対抗できる唯一の手段だった。

「だいたいな……危機感のねエお前らに一言言っておくが!!? この海がいくら深い霧に包まれてるとはいえ、陽の光が全く射さねエって保証はねエんだ!!? 今は夜中だから安全なだけさ!!?」

「確かにね……急な環境の変化こそこの海の特徴だ」

どんよりとした空を見上げ、月も星もまるで見えない事を確かめつつ、緩みかけた気を引き締める。いつまでも空が味方でいてくれるとは限らないのだ。



「——つまり日の昇る『夜明け』が最悪のリミットだと思え!!?」

「確かにそうだな、夜明けまでメシ食えねエなんて最悪だ!! おれ達にケンカ売った事を後悔させてやるぞ!!? ゲッコー・モリア!!」

ばんつ、と拳を打ち鳴らし、吠えるルフィ。

大切なものを取り戻す……その意思を炎に変えて目に宿し、サニー号を飛び降り島の奥へと走り出した。

「食糧は倍にして返して貰うぞ!!! 夜明けまでに!!!」

「いい加減ナミの心配をしてやんなさいよ!!!」

「『影』奪回のリミットの話をしたんだよ!!!」

「んナミさ~~~~ん!!!」

「いかか」

「おお!!!」

「勝手にしろ!!!」

意志は同じでも、全くまとまらない一味の行動に。

ウソップは早々に突っ込みを諦め、やや波々といった様子で船長の後を追っていた。

「うおおおおくくっ!!!」

「うるさいっての!!!」

「すげー、コレ船だったのかー!!!海は見通し悪イけど、おれの人生の見通しはサイコーだ」

ぎしぎしと揺れる巨大なマストを登り、周囲を見渡す赤鬼・オーズ。

頭上の天使に怒鳴られても興奮の声を止めず、きらきらとした目で遠くに見える海を見渡し、冒険の意欲を高める。

「よーし、この船で海賊王になるぞ!!!?」

「はア……勝手にしなよ。あんまり揺らすんじゃないよ」

「うい」

勝手な宣言をする連れに、猛牛の天使ジャービルはやれやれと肩を竦める。

その顔には、どこか連れへの慈愛の気持ちが見え隠れした。

「モリアはどこだア!!! メシを返せエ!!!」

「ぐわくく!!!?」

「ナミさんの風呂を覗いたクソ野郎はどいつだ出て来くうい!!!」

「ギャアアアアアア」

ルフィとサンジの咆哮が響くたび、鈍い打撃音がしてゾンビ達が吹き飛ぶ。

渡された塩を一切使う事なく、二人は自前の身体能力だけでゾンビ達を叩きのめし、戦闘不能に陥らせていた。

影を抜かずとも、ゾンビ達は普通に心が負けていた。

「とりあえず塩いらねエな。心からの怒りに満ちてる」

「影の事どうでもいいのかな」

「ま、元凶1人を叩き潰せば済む話だしね」

先に進んだ二人がほとんどの敵を排除してくれるため、後ろに続くエレノア達は気楽に走っていた。

このままモリアの元まで行けば、そんな甘い考えが浮かんだ時。

前方の様子を覗いていたロビンがはっと息を呑んだ。

「……………!!? しまった…いけない……………!!?」

「何? どうかし……………げ!!」

つられてエレノアも前を見やり、次いで嫌そうに顔をしかめる。

怒りに燃え、獅子奮迅の働きを見せていたはずのルフィとサンジが、いつの間にかがつくりと手と膝をつき、地面に項垂れていた。

彼らの頭上には、例の厄介な性質を持つゴースト達が飛び回っていた。

「ゴーストにネガティブにされてる〜!!?」

「もーだめだ、生まれ変われるならボウフラになりたい…」

「おれなんかマユゲ巻きすぎて死ねばいい…」

普段なら絶対に言わない後ろ向きな呟きをこぼし、微塵も動かなくなった二人。

そこに、それまでやられっぱなしだったゾンビ達がわらわらと集まり、ルフィとサンジを捕らえていった。

「よオし!!! 捕まえたぞ!!!」

「二人が捕まったア——!!! 何でだ!!!」

「あのゴースト達の仕業よ!!? 触れると心を折られてしまうの。今の所、解決策は何も…!!?」

「世話の焼ける…!!?」

エレノアは舌打ちをこぼし、囚われた二人の元に急ぐ。

絡みついてくるゾンビ達を蹴り飛ばし投げ飛ばし、ルフィ達から引き剥がして肩に担ぎ走り出す。彼の後にウソップ達も続く。

「急げ!!! 二人を抱えて逃げるしかねエ!!? おれ達もこうなつちや終わりだぞ!!!」

「いやだ〜!!! 全員捕まったら助からねエ〜!!!」

全力で逃げようとする一味だが、ゴースト達は四方八方から迫り逃げ場を与えない。

その上ゾンビ達が邪魔をし、道と行動を塞いでくる。

目前に襲いかかる窮地に、どうすればと瞠目したその時。

ルフィ達とゾンビ達の周囲を、何か巨大なものの影がすっぽりと覆い隠した。

「出航出航♪ —— あ」

間抜けな声を漏らし、それは……オースは階段の上に着地し、そのまま踏み砕き、潰す。

階段は超巨大な赤鬼の体重をわずかにも支えられず、赤鬼は下敷きになった無数のゾンビ達と共に、地面に落ちていった。

「……………アホか、あいつは」

しれっと赤鬼の頭上から跳んだ天使は、壁に指を食い込ませて空中に留まりながら落下した連れを見送る。

そしてやがて、凄まじい跳躍によってどこかへと姿を消していった。

後に残された瓦礫の山の麓で、白い影が動いた。

「……………あ、あだだだだ。何だつてのさ」

「おい、どうしたエレノア」

「あ、二人とも……………さつきぶり」

土埃で汚れたエレノアは、ぶるぶると顔と翼を振って汚れを払う。

その際、別の道を進んでいたゾロとフランキーが気付き、駆け寄ってくる。

そして彼らは、着地に失敗して地面に突き刺さった料理人と狙撃手に胡乱げな視線を向け、眉間にしわを寄せた。

「落ちて来たこの二人の事はまア置いといて……………どういうことだったコリヤ」

「急に道が塞がりやがった。何なんだこの壁は……………!!」

沈黙しているウソップ達を放置し、ゾロとフランキーはその横……………空から降ってきた赤い巨大な壁を見やる。

何かは不明だが、これがあつては前に進めやしない。

徐に剣を突き立て、砲撃を食らわせ、どかそうと四苦八苦する二人に、エレノアがあつと声をあげる。

「待つて待つて二人とも待つて!!?」

「お前ら何やってんだ!!」

「それがよ、急に壁ができちまつて…」

「バカ、それは壁じゃねエよ!!!」

同じく目を覚ましたウソップが、除去作業を続けようとする二人を止める。

顔から血の気を引かせ、冷や汗まみれになったウソップは、聳え立つ壁……………否、魔人を指差し、大きな声で叫んだ。

「そいつがルフィのゾンビだよっ!!!」

## 第246話 “仏の沙汰は僧が知る”

「何だこのデカさはア~~~~!!? どんかの大魔王か何かか!?? こんな巨人見た事ねエ!!!」

全貌を視界に捉えきれないほど巨大な、恐ろしい形相を持つ鬼。

いるだけで凄まじい威圧感を放つ怪物を前に叫ぶ男達のそばで、エレノアがごくりと息を呑みながら呟く。

「……!!? 当たらずも遠からず……この巨大さ、間違いない!!? こいつが“魔人オーズ”!!! 古代の巨人族だ!!!」

「これがゾンビ!??」

「これが………」

「ルファイ!??」

「ダメだ、もう終わりだア!!? おれ達を殺しに来たんだア~~~~!!!」

自分達の船長とはまるで異なる外見を持つ異形。

まともにやりあっても正気など微塵も見えない敵を前に、男達は硬直する。

やがて、赤鬼がゆっくりと動き出す。巨大な両腕を伸ばし、砕けた階段の一部を持ち



上げたかと思うと。

「おお、いいなコレ！」

かぼつ、と自分の頭に被せてみせる。

どうやら彼の目には、階段の一部が帽子にちょうどよく見えたらしい。

「よーし!!?」 気分出てきたぞ!!? おれは海賊王に腐れなる!!? いやー、建物壊れてびびった」

けらけらと笑いながら、オーズは立ち上がりどこかへと歩き去っていく。

足元のエレノア達に一切反応を見せる事なく、嵐のように破壊だけをもたらして去って行った。

「……ホントにルフィみてエな事言つてやがった。あの凶体でルフィの戦闘力は確かにヤベエ……」

遠ざかる巨体の背を見送り、ゾロが思わず呟く。

気付かずあんな怪物に攻撃を加えた自分達の行動に冷や汗が滲む。幸い、歯牙にもかけられなかったが、それはそれで腹立たしかった。

「もう……いいじゃねエか、お前らの影なんて」

「よくねエよ!!!」

「心折れんの早っ!!? ナミの救出もあんの忘れてんでしょ!!? シヤキツとしなさい

シャキッと!!」

がつくりと項垂れたウソツプが力なくこぼし、サンジ達に突っ込まれる。

最も会いたくなかった怪物に早速再会して、絶望したらしい彼にエレノアが叱咤を入れた。

だが、目の前の崩壊した通路を前に、一行は顔をしかめさせる。

「——しかし、この道をどうしたものか。橋、壊れちゃったし、迂回したらその分ゾンビ達に遭遇しやすくなるし………」

「おめエ、これ直せねエのか？」

「私一人じゃちよつとムリ。ていうか自重で勝手に壊れる。反対側にもう一人ぐらい術師がいればねエ……」

「じゃあ、飛んで運んでくれ」

「……仕方ないか……」

途絶えた道を見つめ、エレノアは渋々頷く。今後の戦闘に向けて体力は温存しておきたいが、背に腹は変えられない。

まずは重い者から運ぼう、とフランキーの方を見やると。

いつの間にか、砕けた橋に代わる新たな細い橋が出来上がっていた。

「あと30秒待てよ。この装飾が不満だ……」

「橋が出来た——!!!」

ちよつと目を離している隙に、元からそこにあつたかのような完成度を誇る橋を作り上げていたフランキーに全員が目を剥いて叫ぶ。

細部まで綺麗に整え終えたフランキーは、振り向いて仲間達に不敵に笑つてみせた。

「これだけのガレキや木片があれば材料は充分だ」

「私の立つ瀬がない!!!」

「……しかし応急にしちやあデイトールまで凝りすぎじゃあ」

「このおれに手抜き工事をやれつてののか!?!」

「いやア頼りになるぜ!!? とにかく助かった、行こう!!?」

問題の迅速な解決に男達は喜ぶが、エレノアは肩を落として項垂れた。

役目を取られた気分なのか、暗い表情で橋を渡り出したサンジ達の後に続く。こういう場面こそ自分の出番だったはずなのに、と。

エレノアの苦悶はさておき、一行は橋の向こう側へ辿り着き、屋敷の扉を開く。その先に広がる空間に、彼らは訝しげに眉をひそめた。

「……………この部屋は何だ」

「ずいぶんチャラチャラした部屋だ」

その部屋は、やたらとふわふわしたものが集まった内装だった。

無数のぬいぐるみに、可愛らしい飾りの多くついた家具。幼い少女が好みそうな、明るい色調の部屋だ。

その中心に、一人の丸い目をした洒落た服装の少女が立っていた。

「ホロホロホロホロ……階段と橋でお前らを全員ゾンビ共の餌食にするつもりだったのに、まさかオーズが降って来るとは。とんだ邪魔が入ったもんだ」

特徴的な笑い声をこぼし、腰に手を当て告げる少女。

わずかながらの不気味さの中に威厳じみたものを醸し出す少女の周囲には、これまで何度も見てきたゴースト達が浮遊している。まるで、少女を守るように。

「…あのゴースト!!? まさかあいつが操ってたのか。アレは一体何なんだ!!?」

「ホロホロホロホロ!!? すでにてめえらはこのゴーストの恐ろしさを充分わかってる筈…私は霊体を自在に生み出す、ホロホロの実」の霊体人間」

少女に合わせて、ゴースト達も笑う。

それらがもたらす効果をその身で味わっているエレノア達は、無意識に表情を強張らせた。

「このゴースト達は私の分身、人の心を虚ろにする!!? ホロホロホロ、てめえら全員ここまでだ!!!」

少女・ペローナが片手を指揮棒のように振り、ゴースト達を向かわせてくる。

重力を無視し、壁や障害物すら無視する、どんな強者でも膝をつかせる攻撃が、一斉に襲いかかってくる。

「あのムカつく、ゴーストの黒幕が、あんなキューティーちゃんだったとは!!?」

「んな事言ってる場合か!!! 全員アレくらったら一瞬で全滅だぞ」

「逃げるしか手はねエ」

「……!!? 確かにアレばかりは……!!!」

「全員!!? 一時撤退!!!」

対抗手段が全く見つかっていない敵の能力に、全員が即座に退く事を選択する。触れれば即終了、故に全速力で逃走を選ぶ。

「『ネガティブ・ホロウ』!!!」

だが、物理法則に支配されたエレノア達では、ゴースト達から逃れる事は不可能に近かった。全員が一瞬で追いつかれ、胴体をすり抜けられていく。

そして全員が、ばたばたとその場に崩れ落ちて暗い雰囲気を纏い出した。

「終わった、何もかも……」

「そうだ!!? ノラ犬などに踏まれたい!!?」

「サバ以下だ、おれという存在は……!!? 死のう……」

「みなさんと同じ大地を歩いてすいません」

「生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい生まれて来てごめんなさい  
……」

ウソツプを除き、普段は自信と覇気に満ち溢れた男達が、自害でもしそうな勢いで頂  
垂れ落ち込む。

エレノアに至っては死んだ魚のような目で地面に伏せている有様だ。

「捕らえろ!!!」

「!!!ウオオ——!!!」

「あっけねえな、後は上の奴らか」

ペローナの命に従い、異形をした動物のゾンビ達がエレノア達に襲いかかり、捕らえ  
ようとする。

大した労力もなく無力化された一味に、ペローナが落胆の溜息をこぼした時だった。

「乱れ撃ち『塩星』!!!」

突如、一人の男の声が響いた直後、動物ゾンビ達の口に白い弾丸が飛び込む。驚愕で  
目を見開いたゾンビ達は、すぐさま白目を剥いて倒れていく。

「誰だ!!?」

「!!!ギヤアアアアア!!!」

それぞれ口から影を飛び出させ、骸に還っていくゾンビ達にペローナが驚愕の声をあ

げ、振り向く。

彼女が睨む先で、大型パチンコを構えたウソツプが、勇ましい表情と平然とした様子で仁王立ちする。

「ウチの船員に手出しはさせねエ!!!」

「しまった…コイツくらったフリをしてやがったのか、ネガティブ・ホロウ!!!」

すっかり騙され、手駒が何体か浄化され役に立たなくされた事で、ペローナは失態に顔をしかめると、すぐさまもう一度ゴーストを襲いかからせる。

再びゴーストに触れられ——しかし、今度はウソツプは倒れもしなかった。

「…………おれの名は…………キャプテン・ウソツプ!!?」

今度こそ決まった、と確信していたペローナは絶句する。

困惑で冷や汗を垂らし、微塵も技が効いた様子のないウソツプを凝視し、鋭い声で問う。

「なぜだ!!! てめエ、なぜひぎをつかねエ!!! 技は当たったぞ!!? ……一体どんな手を

使って!!?」

「どんな手も何も!!!」

数多の強者の心を折ってきた、自慢の技。自身の自信の根幹でもあるそれらが歯が立たないなど信じられない様子で、少女は立ち尽くす。

そんな彼女に……ウソツプは堂々と、一切の偽りなく答えた。

「おれは元から!!! ネガティブだア!!!」

——少しも誇れる要素のない、情けない宣言。

しかし、今この状況において、その言葉は彼女を心底愕然とさせ、言葉を失わせる。がーん!と強烈な衝撃を受け、ペローナはその場で倒れ尻餅をついた。

「ゴーストのネガティブパワーをしのいだ!!?」

「とんでもねエ男だ!!!」

——人は……生きてる、それだけで前を向いてるハズなのに……この男……!!!

思わぬ事態にざわざわと騒ぎ出すゾンビ達。

ペローナはひたすら驚愕し、呆然となり、そしていつしかほろりと一筋の涙をこぼす。その衝動のままに、やがて全員が叫んでいた。

「!!!「頑張れ!!!」!!!」

「励ますなおれを!!!」

敵に励まされるという意味不明な状況に、そして不本意な慰めを受けた事でウソツプが目を飛び出させて吠える。

悶々とした気分を抱えたまま、ウソツプは背後を振り返り、屈したままの仲間達を見る。



「さア、目を醒ませてめエら、早くナミとブルツクの救出に向かえ!! お前らじゃあ……!!? お前らの力じゃああの女に敵わねエっ!! あいつはおれが引き受けた!!」  
 「……………おのれ……………!!」

いつになく自信満々に、この場で最も厄介な敵の相手を買って出る、麦わらの一味の中でも弱い部類に入る男。

その弱さで少し前まで悩んでいたのに、それを感じさせない勇ましさがあった。

「何だ、この頼れる感じ……」

「アイツ効かなかったのか」

戸惑いながら、落ち込んでいた気分が少しずつ回復し始めたゾロ達が起き上がり、動き出す。

どういう理屈かはわからないが、この場は任せるより他にない。

「だが周りのゾンビ共はカタづけてからゆけっ!!! そいつらにはおれは勝てねエ!!! きつと死ぬ!!!」

「……………私らでもムリなんであと全部お願いします……………」

「あア!!? 違う!!? ちよつと待て!!? 待ってー」

「役立たずでごめんなさい役立たずでごめんなさい役立たずでごめんなさい……………」

「……………おめエは効き過ぎなんだよ!!!」

最後の最後にひどく情けない事をこぼすウソツプを残し、エレノアを抱えたゾロ達がペローナの部屋を後にする。

ウソツプの悲鳴が聞こえなくなるまで、エレノアは虚ろな目で誰にともなく詫び続けるのだった。

「まさかウソツプのネガティブがこんな所で役に立つとは…」

最初の部屋を後にし、庭を進む一行。

復活したエレノアも自力で通路を走り、一人奮闘しているであろうウソツプのいる方を振り返り、冷や汗を垂らした。

「あいつがいなかったら、たったあれだけで一味全滅もあり得た……!!? 恐ろしい能力があるもんだ」

「適材適所とはこの事だね。いや、餅は餅屋と言うべきか………」  
「追って来てるのは妙な動物ゾンビだけだな」

これまでにない窮地を脱し、ほっと安堵の息をつく。ただの力ではどうにもならない局面を、まさかの人物が救ってくれるとは。

妙に感心したくなるのを堪え、各々のなすべき事を再確認し先へ進む。

「この庭をまつすぐ渡ればブルックのいる屋敷か。おれはここで別れてナミさんの下へ

向かう!!」

「わかった、しつかりやれよ!!」

「おおよ!! おれは『恋の狐火』!! んん〜ナミシア〜くん!!! 嫁にはやらんぜ〜」  
 「!!!」

激励を受け、ぼつと全身に炎を纏ったサンジが庭園から飛び降りる。

愛する女性を奪還するため、憎き透明人間を打倒するため、霧で包まれた橋の下へと飛翔する。

まるで躊躇いのなかったサンジの突貫に、ゾロの顔が引きつった。

「……飛んだ……結構高エンじゃねエか?!!」

「ぼつときなよ」

「——まあ人間テンション上がると、痛みも薄れるというからな……」

無事かどうかを心配する者はいない。

頑丈で、女性のためなら平気で命を張る男を心配したところで無駄だと、全員が察していた。

「とにかくおれ達ア、あの屋敷の最上階だ。研究室にガイコツがいるつ!!!」

「ああ」

とにかく、それぞれの役目を果たさなければ。そう考えながら、ゾロはまだ見ぬ侍へ

の闘志を秘め、獯猛な笑みを携えて走る。

その時、エレノアがぴくりと耳を震わせる。

そして突如宙へ跳躍し、義足の刃を展開して振りかざした。

「させるかア!!!」

ぎやりん、と甲高い音が響き、激しい火花が散る。

頭上から振り下ろされた何者かの刃を受け止め、裂帛の声と共に弾く。

エレノアはそのまま翼を羽ばたかせ、空中で自身を回転させ、同時にもう一方の義足の刃も振り回す。

回転の勢いを利用し、真横から振るわれた刃……肉切り包丁を受け流し、その持ち主ごと吹き飛ばす。

襲撃が失敗に終わった二人の敵、二種の鎧を纏った者達は、地面に降り立つとエレノアを興味深げに見つめ返した。

「ふむ、手強いな」

「げっへっへっへ……お前も勘が良いな、また避けられちゃった……」

「何だ?! またゾンビか!!?」

「ビーやら………私のお相手のようだ」

突然現れた敵、見覚えのある相手にフランキーが拳を構える。

だが、そんな彼を制止するようにエレノアが前に出て、二体の鎧を見据えて眉間にしわを寄せる。

「…おい、こいつらの雰囲気、どこかで…」

「うん、当たり前だよ……アル君と同じ、どつかの誰かが生きた人間の魂を引つpegして鎧に定着させた存在だ。ゾンビとは違う、疑似的な不死の敵……!!」

「何イ!!?」

ゾロの呟きに応え、エレノアが語る。順調に覇気の習得は進んでいるらしい、一目見て目の前の相手の違和感に気付くとは。

「あんた達、何者? どつかで死にかけて、誰かに人体錬成で鎧に定着させられて命拾いした………ってわけじゃなさそうだな」

「何だその具体的な例は!!? え、まさかさつき言つてた知り合いつて……!!?」

「げっへっへ……タダじゃ教えてやんねエよ」

エレノアの問いに、髑髏の鎧は真面に答えない。

不気味に笑い、包丁を構えるだけだ。

「影を奪った以上、お前達に用はないのだが……侵入者の排除も仕事の内なのでな。手足の一本二本は頂かせてもらうぞ」

「げっへっへ!! 死なねエ程度なら解体してもいいつて事だ!!」

「……………やり過ぎるなよ、66」

きん、きんと両手に握った二振りの包丁を打ち鳴らし、やる気を見せる鬨の兜の鎧に、もう一方が呆れながら告げる。

逃す気はないらしい。雇い主に楯突く者の排除のため、この場で全員半殺しにするのだ。

「先行つてな、こいつらは私が片付ける」

「……………ああ、なら頼む。錬金術の産物なら、お前が一番適任だろうしな」

「餅は餅屋つてか…じゃあ、頼むぞ!!!」

二体の鎧の前に立ちほだかり、ぱんつと両手を打ち鳴らすエレノア。

そのまま指を鳴らし、発された火花をあつという間に炎に、二振りの剣に変えて構える。

驚愕にがしやつと音を鳴らす鎧に向け、エレノアは翼を飛ばたかせ飛びかかった。

「色々話聞かせて貰うぞ!!! 鉄クス共オ!!!」

## 第25章 恐怖の島の支配者〈後編〉

### 第247話 “目覚める若者達”

島に置かれた崩れかけの教会、そこで行われていた結婚式。

その主役になろうと目論む獣面男が、苛立たしげに花嫁を奪わんとする黒足の騎士を睨みつける。

「貴様が欲していたこの能力に加え……守りたかった女までもおいらの花嫁となる!!？」

これ以上の敗北はあるまい!!」

す……とその姿を景色と同化させるアブサロム。

自他を透明にさせるスケスケの実の能力者の言葉に、サンジは傍で眠りにつくナミを庇いながら眉間にしわを寄せる。

「……!! ナミさんを消す気だな、渡さねエぞ」

「ガルルル……!!? ムダだ……思い知るがいい……!!」 “怪人”のパワー!!!」

本人の訓練の賜物か、微かな足音も聞かせず忍び寄り、改造によって得た剛力をサンジに振るおうとする。

ナミの側を決して離れまいとしながら、サンジは呼吸を落ち着かせ。

背後から振るわれた剛腕を躲した——目を閉じたまま。

「……!!? 避けた…だと!?? 貴様どういう手を使って!!?」

「……まったく、コソコソ隠れやがって透明人間。…もうその夢に未練はなしだ…!!」

おれはもう…透明なんかなくなれなくたって構わねエ……!! 自力で覗く」

「覗きはすんのかいつ!!?!」

不発に終わった自身の奇襲に、驚愕の声をこぼすアブサロムをよそに、サンジは苛立たしげに最低な事をのたまう。

ナミを攫われた屈辱に加え、一方的な恨みを闘志の炎にくべ、片足に業火を纏わせる。

「——ああ、最初に感じ取るのがためエの気配だと思つと、クソ腹が立って仕方がねエよ!!!」

そして、かっと見開いた目がぎらりと赤く光る。

その視線は確かに、姿を消したままのアブサロムをまつすぐに射抜いていた。

「色々獣が混ざつてんなら…:…いい挽き肉ができそうだな…!!」

「まさか…:…おいらの姿が見えて!!?」

「<sup>エクストラァッシュ</sup>最上級挽き肉!!!」

烈火の蹴撃が猛烈な勢いで放たれ、アブサロムの全身に叩き込まれる。

見えずとも、その気配をはつきりと悟られた獣面男に逃れる術はなく、血反吐と共に、



壁に十字架のような体勢で叩きつけられた。

「アブサロム様ア~~~~!!」

「女湯…いや…野獣の花嫁は…野獣で十分だ!!」

ふっ、と熱を冷ました片足を収め、サンジは呟いた……未練まみれのまま。

「必殺『黒光り星』!!」

ひゅんっ、と放たれた弾丸が少女の目前で弾ける。

中から飛び出し蠢くそれらを前に、ペローナは真つ青な顔で声を引きつらせる。

「ギャアアア~~~~!! ゴキブリ~~~~!!」

「通称『ゴキブリ星』!!?」

「気持ち悪い~~~~!!? 誰か取って~~~~!!? 助けて~~~~逃げられない~~~~!!?」

屋敷中にペローナの悲鳴が響き渡る。

霊体を操り、自身も肉体の枷から抜け出せるホロホロの実の能力者ペローナは、とりもちで自由を奪われた上に、前進を蜚に這いまわれ、泣き叫んでいた。

「ゴキブリも恐かろうがア…もつとも恐エのア…このオ…おれ様……………!!」

少女を捕らえた長鼻の狙撃手は、一体どこから取り出したのか、身の丈を優に超える鉄槌を担ぎ、少女を睨みつける。

「俺は東の海一番の怪力で知られた男」

「じゅ……10もつて……おい、お前のどこにそんな力が!!! やめろ!! 逃げ場ねエのに

そんなもの!!! 死んじまうじゃねエか!!! おい!!!」

動きは封じられ、配下の動物ゾンビは置き去り、側仕えの熊の着ぐるみゾンビは浄化され、ペローナを守る者は誰もいない。

みつともなく命乞いをする少女に向け、ウソツプは大きく鉄槌を振りかぶる。

「ゴキブリも取つて……!!? ハンマーもやめて!!! ハンマーもゴキブリも」

「ウソ………ツプ……」

「お前の仲間には手は出さねエから!!! 許して!!? お願いやめて……!!!」

「ゴ……ルデン………!!!」

「いやあ……!!!」

悲鳴をあげるペローナ、涙で顔をぐちゃぐちゃにしたその頭に、ぐわつと巨大な鉄槌が容赦なく叩き込まれる。

「パウンド……!!!」

ばあんっ!

鉄槌が少女の目前で炸裂する。

恥肉が石榴のように飛び散る……事はなく、舞い散るゴムの破片の下で、ペローナは

ぶくぶくと泡を吹いて意識を失っていた。

「オバケ屋敷のプリンセスが：『風船』と『玩具ゴキブリ』で気絶してちや世話ねエな。このおれ様に……!!』」  
 「ネガティブ」と『ウソ』で勝負を挑んだのは大間違いだ!!!」

残った柄を肩に担ぎ、拾い上げた蜚の玩具を見やり、溜息をつくウソツプ。

散々脅かしてくれた幽霊島の姫への仕返しを心ゆくまで完了させた彼は、飛び上がり勝利の雄叫びをあげるのだった。

「夜明けまで寝てろい——っ!!!」

斬、と強烈な一閃が振り抜かれ、尖塔の上半分が宙に浮く。

それを成した骸の劍豪——ブルツクの影を宿した伝説の侍のゾンビが、自らが相対する劍士を狙う。

振るわれた斬撃を躲したゾロは、両断された尖塔の屋根を駆け上がり、遥か頭上から飛び降りる。

「『一刀流』……『飛龍』」

「……『鼻唄三丁』」

竜の影をその身に纏い、ゾロは一刀を構え落下する。

侍ゾンビはそれを迎え撃たんと、斬られた事に気付かせないブルツクの劍技を備え、

ゾロに向けて鋭く跳躍する。

両者の姿が交差する刹那、刃が振り抜かれ。

「“火焰”!!!」

僅かな差で、ゾロの一閃が侍ゾンビの腹を斬り裂いた。

ぼつ、と傷口から噴き出した炎に包まれる侍ゾンビの下で、ゾロはそのまま下の屋根に落下し、ごろごろと転がっていく。

燃える侍ゾンビは刀を鞘に収め、ゾロに振り向いた。

「——かつて伝説の侍が腰にした“名刀”——『秋水』!! あなたが主人であるなら、この刀も本望でしょう」

ぐ、と手にした刀を突き出し、告げる侍ゾンビ。

一剣士としての敬意を示し、敗北を認めた彼に、戦いを見守っていたフランキーは困惑の声を上げる。

「今……何か言わなかったか? あの侍……つまり……どういう事だ?」

「……つまり……!!? 決着の様です……!!? ……こんな戦い……私、初めて見ました」

フランキーに抱えられた満身創痍のブルックが、啞然とした様子で答える。

自身に一切反撃を許さなかった剣豪が迎えた結末に、心底驚愕し失くした目を奪われていた。

「あの侍…私になんか全く本気じゃなかったんだ…!!?」

生者達に見上げられながら、侍ゾンビが刀から手を離す。

屋根を転げ落ち、ゾロの手に刀が——大剣豪が使い続けた名刀が収まるのを見届け、侍ゾンビは悔恨の声をこぼす。

「……………この侍の体に…敗北を与えてしまうとは…心苦しい……………!!」

「…恥じる気持ちがありや充分…心身共にあつてこそその剣士だ…お前が生きた時代に会いたかつたよ」

そう告げる先で、侍ゾンビの姿が炎の中に消えていく。同時に、黒い影が骸から飛び出していく。

飛び出たそれは宙返りし、ブルツクの足元に音もなく溶け込んだ。

「も…も!!?」戻ったアあああああゝゝ!!! 私に影が…戻つたゝゝゝ!!!」

「——刀は貰うが…!! 勝負はなかった事にしようぜ、ワノ国の侍…!!!」  
歓喜の声を上げるブルツクを横目に、ゾロは笑う。

彼には珍しい、強者への敬意を口にし、不敵な笑みを浮かべてみせた。

一つの戦いが収まったところで、フランキーは改めて島を見渡し嘆息する。どこからか微かに、轟音が聞こえる気がする。

「こっちは片付いたが…まだまだまだ終わりは遠いな。敵は多い」

「ま、大元を追つてゐるルフィはともかく、他は大丈夫だろ……仕組みがわかつた以上、よっぽど気を抜いてなけりや二度も奇襲は受けねエさ」

一息つき、新たに得た得物を肩に担ぐゾロがそう語る。

途中で別れた天使の姿を思い浮かべ……彼女の相手に合掌をしながら。

「むしろ、敵の方がかわいそうに思えてくるだろうな……特にあいつは、身内にも敵にも容赦がねエからよ」

どぎや、と髑髏の兜の横つ面に鋼鉄の蹴りが入る。

相応の重量を持つはずのバリーは、木の葉のように軽々と吹っ飛ばされた。

「でええええ!!」

倒れ込んだ彼の後ろでは、刃を展開したエレノアと剣を振るうNo. 48が激しく鋭い剣戟を繰り広げる。

バリーはすぐさま起き上がり、斬り合いに無理矢理割り込んだ。

「にやろオ~~~~~!! 大人しく斬られやがれつてんだ……特上の肉ウ!!」

「誰が肉だ!!」

ぶんぶんと振り回される肉切り包丁。だが殺人鬼であつて剣士ではないバリーの攻撃は避けるに容易く、エレノアは呆れ顔で身を翻す。

「ロースカット  
焼肉切!!!」

「〃斬り捨て御免〃!!!」

「遅いよ」

「ぶへエ!!?」

双方から急所を狙った一撃が放たれるが、エレノアはその場で逆立ちをすると、両足を振り回し擬似的な二刀流を繰り出す。

斬撃と共に強烈な蹴りを同時に叩き込まれ、鎧の殺人鬼達は思い切り突き飛ばされた。

「この女強エエ〜!!! 弱くなってるって話はどこいったんだよオ!!!」

「成程……多くの〃七武海〃と肩を並べた実力者と謳われていたのは確かなようだな」

戦慄の声を漏らすN.O. 48とバリー。もし彼らが生身の体なら、大きく息を荒げさせ、顔中脂汗を垂らし、顔を引きつらせていた事だろう。

「あんまり時間かけてられないからさ、さっさと吐いてほしいんだよね……どこの誰があんた達をそんな姿にしたのか」

「ああ……!!? そういやおれ達の同類が知り合いにいるんだったか。どこの死刑囚かは知らねエが、大事な秘密をバラしやがってムカつくなアオイ!!!」

エレノアの仲間がこぼしていた話を思い出し、悪態を吐くバリー。

苛立つ彼は気付かなかった。自分がこぼした言葉が、目の前の天使の琴線に触れるものだった事に。

次の瞬間、先程よりも強力な蹴りが猛然とNo. 66に襲いかかった。

「あばアあああ!!? ちよ…待っ…!!! なんて急にキレて…」

「…もういいわ、黙れ。その口で私の弟子達を穢すな…!!!」

目つきを鋭くし、相手の防御も無視して手加減なしの蹴撃を浴びせまくるエレノアが、怒りを込めた声で告げる。

そしてぱんつと掌を打ち合わせ、手の中に白く燃える炎の刃を生み出し、全身を回転させながら振り回した。

「クラウ・ソラス光輝宝剣!!!」

ごう!と炎の剣が周囲に伸び、あらゆるものを焼き斬る。

斬撃の範囲内にいたバリーとNo. 48は、上半身と下半身を真つ二つに両断され、地面に転がされた。

「あーっ!!? あゝゝゝっ!!! おれの身体がっ…!!? バラバラにイ!!!」

「……………見事、だが——!!!」

がしゅん、と地面に崩れ落ち、悲鳴を上げるNo. 66。

同じく地面に倒れたNo. 48も外れた兜から苦悶の声を漏らす、不意に光る目が



一瞬輝きを増す。

炎の剣をかき消したエレノアは、はたと顔を上げて呟いた。

「ああ、そういうえば思い出した。殺人鬼 “スライサー” には……………兄弟がいたんだっけか」

そう口にした直後、エレノアはその場から跳躍し、背後から振るわれた剣を飛び越える。

僅かに羽の先端を切り落としただけで終わった敵……………鎧の中から異なる意匠の上半身を生やしたNo. 48の下半身が、地団駄を踏んだ。

「クソツ…!! バレてたか!! おいバリー!!? てめエ、もつとバレねエ演技しやがれ!!!」

「んだとコノヤロー!!? ムチャいうなアホオ!!!」

「小細工は無用だったようだな……………いや、知った上で誘導されたか」

No. 48の下半身の文句に、転がったままのバリーが抗議の声を上げる。

残るNo. 48の上半身は悔しげに鎧を軋ませつつ、両腕で体を起こし……………片割れと真逆に下半身を生やし、立ち上がった。

二体のその様はまるで、一人が二人に分裂したかのようだった。

「その通り!!? 我らは2人で1人の人斬り “スライサー” 兄弟!!!」

「元々は兄者もおれも別々の鎧だったんだが、ちよつと前に面倒な敵とやりあつて破損してなア……作戦も兼ねて合体してたのよ。それを一発で見破りやがつて胸糞悪い!!!」

刀を構える一方……兄者と呼ばれた方が丁寧な口調で語るのに対し、弟の方はやや乱暴にエレノアを睨み吐き捨てる。

対するエレノアは、意味があるのかないのかよくわからない彼らの行為に呆れた目を向けていた。

「……あいつらが見たら喜びそうだな。ていうか、要は肩車した状態でよくあんな機敏に……」

「兄弟で息を合わせるなど簡単な事……」

思わずといった様子で呟く彼女に、どこか誇らしげに兄の鎧が返す。

兄弟鎧はゆつくりと、がしやがしやと装甲を鳴らしながら、エレノアの退路を立つように前後を塞ぐ。

「だが残念だったなア……おれ達の秘密を見破つて勝った気になつてるようだが、そりや間違いだ。てめエはただ……おれ達に切り札を引かせただけにすぎねエ」

じりじりと、凶刃を構え隙を伺う兄弟鎧を、エレノアはあまり表情を変えない見据える。

ゆっくりと天使の周囲を回っていた兄弟鎧は、やがて凄まじい勢いでエレノアに向かって突撃を開始した。

「我ら兄弟の真の力!!!」

「たつぷり味わいやがれエ!!!」

「いけーてめエら〜!!!」

鋭い斬撃を放ち、襲いかかる兄弟鎧。地面に転がったままのバリーが応援の声を上げる前で、鈍い光が天使に食らいつく——そう思われた瞬間。

「バブルムンク邪竜墜剣!!!」

突如生まれた暴風が、打撃となって左右の鎧に叩き込まれる。

腹のど真ん中にそれぞれ一撃をもらい、兄弟鎧は走行を大きく陥没させられ吹き飛ばされ、ばらばらになってしまった。

倒れ込んだ両者を横目に、エレノアは不敵な笑みを見せる。

「残念。大して意味なかったね」

「何やってんだてめエら〜!!!」

「だ…黙れ…!!?」

「チクシヨ〜!!!」

兄弟鎧と髑髏の鎧は苦悶の声をあげ、ばたばたと自由の効かない体でもがく。

仰向けになった兄の鎧の側に近付き、エレノアは兜の面頬を上げさせ、中にあった錬成陣に義足の刃を突きつける。

「く……!!?」

「動かないでよ、刻印を消されたくなかったらね」

「むウ……!!? 何たる屈辱………死すら与えられず脅されるとは……!!? だが無意味だ

………たとえ死んでも、これ以上の恥を晒すつもりはない」

「おオよ!!? おれも兄者も何も話さねエぞ!!」

鎧に魂を定着させる、錬金術の命綱を容赦なく狙うエレノア。

しかし、誇りも意地もある兄も弟も領くつもりはなく、堂々と自らの弱点を晒して両手を投げ出す。

その姿に、エレノアは面倒臭そうに目を細めた。

「ふくくん………じゃ、こっちの鎧に聞いわ」

「サーセン!!! マジサーセン!!! 何でも言う!!? 何でも喋るから命だけは勘弁してく

れエエ!!!」

「「おい!!!」

即座に尋問の標的を変え、バリーの兜の後ろ側に刻まれた錬成陣に刃を突きつける天使。

すぐさま命乞いを始めた同業者に、兄弟鎧が突つ込みの声をあげた。

「物分りが良くて結構………じゃあさっそく色々聞かせてもら——」

満足げな笑みを浮かべたエレノアが、話を聞きやすくしようとNo. 66の兜をもぎ

取ろうとし——

「——ねエ、弱い者イジメは楽しい？ あんた……」

聞きなれない声を、聞いた。

## 第248話 “鬼神”

どごん！

突如、尖塔の一階で爆発が起き、地響きと轟音が辺りに広がる。

両断された尖塔の屋根の上にあったゾロ達は、ぎよつと目を剥いて真下に振り向いた。

「何だ……!! 下で誰が暴れてんだ……?」

濛々と立ち込める土埃の奥に目を凝らし、表情を強張らせるフランキー。

何者の襲撃だ、と重傷のブルツクを傍らに置きながら、爆音の原因を探し……やがて、見つける。

地面に仰向けに倒れた、白虎の天使の痛々しい姿を。

「……!!? エレノア!!?」

「あれエ!? 天使のお嬢さん!? い……一体どうされたんですか!!?」

土埃にまみれ、苦悶に顔を歪め、ぎこちなく体を起こそうとしているエレノアを目の当たりにし、男達は驚愕で絶句する。

何よりも、それを成した相手がいるという事実が信じられずにいた。

「おい!! 大丈夫か!!? 誰にやられたんだそりや!!? まさかさっきの鎧に……!!?」

「……………んなわけあるか」

屋根の上から大声で叫び、安否を問う。

エレノアは忌々しげに顔を歪め、同時に眉間に深いしわを寄せ、ゆつくりと体を起こし膝を立てる。

鋭い眼で、自分が蹴り飛ばされてきた方向を睨み、低く唸る——そこへ。

「ぬるい……!!」

怒りと苛立ちを滲ませた声が、ずしん、と地響きと共にやってくる。

舞い上がる土埃をその身で押し分け、大きな影がゆつくりと天使に近付いてくる。

ふんつ、と。

影が吹き出した鼻息が、邪魔な土埃をまとめて吹き飛ばした。

「こんなのが私の元主人……? ふざけてる……!! こんなんにも脆弱な肉体、出られてむしろ清々するね……この程度でこの海の『王』に付き従う気では、腹立たしい……!!」

どしん、と一際大きく地面を踏み、亀裂を蜘蛛の巣状に刻み込みながら、それが荒々しく吐き捨てる。

牛の耳と角と尾、それに駝鳥の翼を背中から生やした、巨大な女。

見上げるほどの巨体を有したそれが、全く同じ顔を向けて、エレノアを鋭く睨みつけ

た。

「天族の…ゾンビ…!! そうか、お前が私の影が入ったゾンビか!!?」

「そのようだね…実物を見て、正直がっかりしてるよ」

「何だとコラア!!」

戦慄の声を上げるエレノアの目の前で、天族のゾンビは心底落胆した様子で鼻を鳴らす。エレノアが即座にいきり立つが、気にも留めない。

「でけエ!!! 大人の姿のエレノアの倍くらいあるぞ!!!」

「モリアはあんなゾンビも作ってたんですか…?! 全然天使っぽくないですけど」

現れた新たな敵の姿を前に、フランキーもゾロも、そしてブルックも大きく目を見開いて狼狽する。

無理もない、彼らが見た事のある天族はエレノア一人。

小柄で華奢な彼女とはまるで見た目の異なる、筋肉質で大柄な体型を有しているのだから。

「…顔はそっくりだな。死体とはいえ他の天族を見たのは初めてだが、あんなだったのか…!!」

見るからに戦闘に特化した天族を前にし、ゾロが思わず眩く。

それでいて全く同じ顔をしている事に気付き、別種の困惑に苛まれていた。



「ゲへへへへ…!!」 驚いたかコイツめエ!!」

「…あいつ…!!?」

「特別ゾンビはもう二体とも目覚めてんだ!!? てめえらに勝機なんて毛ほども残っちゃいねエんだよ!!」

エレノアと男達を、がらがらと転がってきた三つの兜が笑い、嘲る。

腰を浮かせ、睨みつけるエレノアを小馬鹿にするように地面を転がり、かたかたと音を鳴らして語り出した。

「そいつこそ…!!? はるか昔!! 身も凍る悪逆非道の限りを尽くした『魔人』に付き従い、数々の伝説を残したもう一人の大悪党!! 死してなお!!? 氷の大地で『王』の眠る墓を荒らす不屈き者から守り続けていると噂される最強の女!!」

バリーが我が事のように得意げに語る前で、ゾンビが動く。

エレノアからじつと視線を逸らさぬまま、片脚を地面が陥没するほどに踏みしめ、体勢を低く前に傾け。

次の瞬間、どっ!と轟音があたり一帯に響き渡る。

「名を…:ジャービル・イブ・フレイヤ、またの名を…:…:…!!」 『鬼神』 『ジャービル!!』

砲弾のごとき勢いで飛び出したゾンビ—— 『鬼神』 『ジャービルはあつという間にエレノアの目前に迫る。』

はっと目を見開く白虎の天使の前で、猛牛の天使は大きく拳を構え、振り下ろす。咄嗟に飛んだエレノアの目の前で、鬼神の拳が地面を砕き、大量の瓦礫を撒き散らした。

「ギャアアアアアアア~~~~!!!」

「ふぎやああつ!!! ……なんにやろ……………!!? 早速か!!?」

風圧により、バリーとN.O. 48の兄弟がまとめてどこかへと転がっていく。

直撃を避けたエレノアも、衝撃で空中で何度も回転し、酔って苦悶に顔を歪める。

地面に降り立ち、迎撃しようとした瞬間。

すでにジャービルはエレノアのすぐ後ろに立ち、片足を振りかぶっていた。

「は……………え!!!」

「遅い……………!!?」

突然の事に、エレノアの足がもつれる。

がくつと後ろ向きに倒れたエレノアの目の前をジャービルの蹴撃が通り過ぎ、暴風が吹き荒れる。

その圧だけで、直線状にあった屋敷の壁の一部が砕け散った。

「……………!!? これは……………死ぬ!!? 直撃したら絶対死ぬ!!!」

倒れ込んだエレノアは、真つ青な顔で真横に転がる。

直前までエレノアの頭があつた場所にジャービルの脚が突き刺さり、強烈な衝撃波が全身を強かに打ち据えた。

「ふぎやあああ!!? きよ……距離! 距離!!? 距離イ!!」

混乱に陥つたエレノアは、距離を取ろうと翼を羽ばたかせ天高く飛び上がる。

霧に身を隠しつつ反撃の糸口を探そうとして……気付いた時には、目の前に踵を高く振り上げたジャービルの姿があつた。

「へ——ふぎやあああ……!!?」

防ぐ間も無く、エレノアの肩にジャービルの踵が食らいつき、真下に凄まじい力がかかる。

めきめきと軋む音が肩から鳴るのを感じながら、エレノアは遥か下の地面にまつすぐに落下し、叩きつけられた。

「……!!? …!! 容赦……なさすぎでしょ、自分相手に……!!? 影の元の持ち主が死んだらゾンビも終わりなんじゃないの!!」

「はっ……だつたら……死なない程度に殺せばいいだけの話さ」

ぴくぴくと痙攣する体を強引に起こし、立ち上がろうともがくエレノア。

そのすぐ目の前にジャービルは降り立ち、背筋が震えるほどに冷めた、一切の慈悲を感じられない冷酷な眼で見下ろした。

「影私を取り戻しに來られても、余計なお世話……………私はもう、あんたの下には歸らな  
い」

「……………!!!」

はつきりとした拒絶、尋常ではないほどの敵意を向け、断言するジャービル……………否、エ  
レノアの影。

絶句するエレノアに構う事なく、ジャービルは拳を握りしめ、渾身の力で突き出して  
きた。

「ぬウあああああ!!!」

「ふぎやつ……………ちよ、ちよつ!!? 待つて待つて待つてエ!!! ア……………アンキレ十一天盾!!!」

顔のど真ん中を狙って放たれる正拳。

直撃する寸前に、ぱんつと掌を合わせて鳴らし、あたりの瓦礫に触れて瞬く間に錬成  
し、十一層の石の壁を盾として生み出す。

が、その盾は一瞬で破壊され、エレノアは再び風圧だけで吹き飛ばされた。

「ふぎやつ!!! ……なんなのよあのバカみたいな怪力は……………!!!」

地面に倒れ込み、ぐらぐらして込み上げてくる気持ち悪さに耐えながら、エレノアは  
もう一度掌を合わせて打ち鳴らす。

防御は無意味、ならば攻撃するのみと、大気中の元素をぶつけあわせ、電気の塊を手

元に生み出す。

「ミヨルニル雷神鉄槌<sup>〃</sup>!!!」

ばちばちと眩く光り輝く、雷の鉄槌。

それを自らの拳の前に構え、正拳突き of 要領で思い切り目の前の怪物に撃ち出す。

渾身の力を込めたエレノアの一撃は。

ぱんつ…と、ジャービルが無造作に振るつた尻尾に振り払われ、呆気なく掻き消された。

「ウソオ……!!?」

「だから生ぬるいんだっての…!!?」

呆然と立ち尽くすエレノアに、ジャービルは前傾姿勢になると再び勢いよく突進する。

ぐわっ、と牛の角が生えた頭部が目前に近付き、エレノアの視界を覆い隠す。

「ナグルファル死兵軍船<sup>〃</sup>!!!」

ずどがんつっ!!?

エレノアの視界が真っ白に染まり、意識が一瞬途切れる。

次いでばっ、と大量の鮮紅が弾け、あつという間に、とてつもない激痛がエレノアに襲いかかった。

「ふぎやあああああ!!!」 あ——っ!!? あ——っ!!? う「あ「あ「あ「あ「あ

「はア……………うるさいなア。こっちはまだ全力の一割も出してないってのに…」  
裂けた額を押さえ、地面を転げ回るエレノア。

それを冷たく見下ろし、平然としたままのジャービルが肩を竦めて呟いた。

「なんつっじゃあのえげつねエ強さは…!!? つーかあいつ、身内つーか自分自身に対して容赦なさすぎだろ!!! どうなってるんだ!!! エレノアの影じゃねエのか!!!」

「……………何があいつをああも駆り立ててんだ……………」

「コワイ!!! なんかもう見てるだけで痛い!!! 痛コワイ!!!」

目下で行われる戦い……………一方的な虐殺に、ゾロ達は震え上がる。

一味の実力者が赤子扱いされている事実よりも、敵とはいえ、あまりにも無情すぎる甚振り方をする彼女の影に、三人共すっかり怯んでいた。

エレノアもまた、苦痛で涙を流しながら自分自身に恐怖していた。

「ひっ……………ぎイ……………!!! この……………!!? 『覇氣』の硬さ……………!!?……………全盛期の私を軽く超えてんでしょ……………!!! なんつーバケモノ作り上げてくれてんだアイツら……………!!!」

咄嗟に自身も覇気で武装したのに、それを軽くぶち抜いてくる強固な覇氣。

ただ肉体が異なるだけでこうも違うのか、と驚愕しながら、そんな怪物を生み出した

者達への憎悪の炎を燃え上がらせる。

歯を食いしばって悶えるエレノアの元に、ジャービルがゆっくりと近づいた。

「やア……？ 身に染みた？ 自分の脆さ………私はもうあんたなんか必要としてない。

よっぽどいい容れ物が手に入ったんだもん、今更戻るつもりは一切ないね」

「ふざけんな………!!？」 私の影のくせに……!!」

「そう、あんたの影——人より脆くて……小さくて……軽くて……!!？ 戦いには向かない脆弱な肉体に縛られたもう一人のあんた……!!」

血塗れの顔で、それでも睨みつけるエレノアに、ジャービルは嗤う。

弱者を甚振る悦びに浸って………ではない。

自身に対しては足も出ない、無様に這いつくばっているだけの自身への苛立ちで、顔を笑みに歪めていた。

「……脆弱？」

「……誰が？」

彼女の眩きに、ゾロとフランキーが思わず目を見合わせる。

それに気付かないふりをしながら、ジャービルはエレノアの前髪を掴み、無理矢理に半身を起こさせ、自分と目を合わせせる。

瞳孔の開いた、死者の目。

そこには確かに生者の……エレノアのもう一つの感情が宿っていた。

「前はまだよかった……脆い体をガチガチに固めた覇気で守って、根性で鍛え上げた技術と体力スタミナでなんとかあの海の強者達に食らいついてた……でも今はどう？」

「……!!」

「失った両脚……衰えた体力……前とは比べ物にすらならない。リハビリなんて無意味……以前の強さは取り戻せない」

ぐっ、と一瞬、エレノアの息が止まる。

しかしそれを誤魔化すように歯を食い縛り、より鋭く目の前の敵自分を睨み返す。

「わかってんでしょ？ 自分はもう必要ないって事……あの海に、自分はもう行けないんだって、はつきりと」

「……!!!! うるさい!!」

自分の髪を掴む手を掴み返し、それを支点に蹴りを放つ。

激情のままに振るった我武者羅な攻撃は、当然容易く受け止められ、拳句ごみでも放るかのようにに投げ捨てられる。

「弱者にあの海は超えられない……そこに行く資格すらない。今度はあんたが足手纏いになる番……あんたが守ってきたつもりになってた連中に、あんたが守られる側に回る」



苦悶の声を漏らし、身を震わせるエレノアに、ジャービルは容赦無く突きつける。

落胆、嫌悪、憎悪、自分自身に抱くあらゆる負の感情を向け、ちつと鬱陶しそうに舌打ちをこぼす。

「情けない………!!? 守られてばかりの弱者……卑怯者!!! そんなだから———マ

マは死んだんだ」

「うるさいって言ってるんだろ!!!」

がぼつと飛び起きたエレノアが両手を合わせようとす。

鳴らす寸前に、エレノアの顔面にジャービルの尾の先端が鞭のように叩きつけられた。

「『王』に付き従う天族に、弱者はいらない」

ぼこんつ、とエレノアは尖塔の壁に叩きつけられる。

一向に止まない凄惨な蹂躪に、呆然としていたゾロ達はようやく我に返り、それぞれ得物を用意する。

「ヤベエ!!? このままじゃあいつ、本当に殺されるぞ!!?」

「エレノア!!! 加勢はいるか!!!」

「———いない」

だが、他ならぬエレノアがそれを止める。

自身がめり込んだ壁から抜け出し、よろよろと覚束ない足取りのまま、ぱん、と掌を打ち鳴らし飛び出す。

「こいつは私が——叩き潰す!!! ブッ潰す!!!」

「だから……………無駄だって言ってるんでしょが!!!」

青い閃光と共に生み出した大剣を振り回し、雄叫びをあげて斬りかかる。

遠心力と重力を合わせ、叩き込んだその一撃は、面倒臭そうに放たれた蹴りで粉々に碎かれ、エレノアは再び宙を舞った。

——硬いにもほどがある…!!!

腹が立つけど…………あの肉体の異常な頑丈さは本物…!!?

ていうか本気で羨ましいぐらい頑丈だなコンチクショウ!!!

ごふっ、と口から血反吐が漏れる。

意識が細切れになりそうな痛みに悶えながら、地面を転がり強引に立ち上がる。

——あれとやり合うのは、この脆い身体じゃまず不可能…………正面からぶつかつたところで潰されるのはこつちだ。

こつちも覇気で固めれば……………だけど体力が落ちてる今じゃほんの少ししか持たない……………!!?

まともに立つこともままならないエレノアに、ジャービルは絶えず圧倒的な力で蹴り

飛ばし跳ね回らせる。

全身が痛み、骨と筋肉が悲鳴をあげる。

ごぼつ、と赤黒い血の塊を吐き出しながら、必死に思考を巡らせる。

——何か……何か策を練らなきゃ……何か………!!!

ぎしぎしと軋む体に鞭打ち、敵から微塵も視線を逸らさず構える。

その時、はつとエレノアの表情が変わる。

起死回生というにはあまりに頼りない、咄嗟の思いつきだったが……脳裏に浮かんだ

ある人物が、エレノアの動きを止める。

——もしかしたら………アレなら………!!?

光が見えた気がして、エレノアが息を呑む。

だがそんな隙を見逃すはずもなく、ジャービルの足裏が鳩尾に食い込み、エレノアの

体が地面に減り込まされた。

「オイ!!! エレノアア!!!」

「くそっ……!!? 悪いが勝手に割り込ませてもらうぞ!!! 傍観してる場合じゃねエ!!!」

惨すぎる暴力に我慢ができず、ゾロが三刀を手に飛び出す構えを取る。

あとでいくらでも文句を聞いてやる、その前にあの理不尽な暴虐から救い出さなければ。

そう——彼が覚悟を決めた時だった。

「ウウオオオウウウ!!!」

凄まじい雄叫びをあげ、さらなる巨体を誇る赤鬼が屋敷を破壊し飛び出した。

## 第249話 // 進撃のオーズ //

ずしん、と地面を踏みしめる赤い足。

山か何かと見間違わんばかりの巨体を震わせ、咆哮する立派な角の生えた鬼。

再び自分達の前に現れたその怪物を前に、一味はぎよつと目を剥き息を呑んだ。

「あれは……!! ゾンビ!! ルフィのゾンビだ!!」

「あーもー厄介事が次から次へと!!」

吹っ飛んできた壁の破片を避けながら、傷だらけのエレノアが悪態を吐く。

尖塔の上のフランキー達は、赤鬼と共に飛び出してきた黒衣の男を視界に捉え、困惑の表情で騒ぎ出す。

「あそこ見ろ、一緒に出て来たのぐるぐるコックじゃねエか!!」

「アレ何ですか〜!!」

思わぬ事態に、誰もが冷静ではいられない。初めて赤鬼を見たブルックに至つては悲鳴じみた声を上げ、先程以上に震え上がっていた。

そんな彼らのもとに、エレノアがばさばさと舞い上がり、よろよろと倒れ込んだ。

「……くつ、危なかった……あいつのお陰で命拾いましたよ」

「エレノア!!! しっかりしろ!!」

ぼろぼろの彼女の身を案じ、フランキーが受け止め腰を下ろさせる。荒い呼吸と滲む血が、エレノアの苦痛を物語っていて痛々しい。

彼らの眼下では、瓦礫による圧死を免れたサンジが忌々しげに顔を歪める。

「くそ…ナミさんが…!!!」

「何やってんだあのバカコック」

五体満足な様子のサンジに、ゾロが頭上からちつと舌打ちをこぼす。

ナミの姿がない以上、奪還に失敗したのだろうと察する。

そして、狼狽しているのは麦わらの一味だけではなかった。スリラーバークの住人達も、現れた怪物に恐怖の視線を集めていた。

「腐れヤベー、屋敷から離れろー!!」

「特別ゾンビ達が戦うぞ〜〜!!」

「屋敷越しに頭が見える、何てデカさ!!」

ばたばたと駆け出し、屋敷を後にするゾンビ達。

ただ暴れるだけで凄まじい破壊をもたらす怪物の近くにいては、敵諸共に潰されるだけだと大急ぎで戦場を離れていく。

その様に、ウソップも同じようにがたがたと震え上がっていた。

「あ!! ウソツプ!!」

「チヨツパー、ロビン!! たたた大変だ!! ルフィゾンビの腕に…!! おれ達の手配書  
が張り付けてある!!!」

双眼鏡で赤鬼の腕を凝視していたウソツプは、異変に気付いて合流してきたロビンと  
チヨツパーに振り向く。

その意味を即座に理解し、強烈な恐怖で顔からさつと血の気を引かせた。

「あいつの狙いは完全におれ達だ!!!」

「出て来オ~~~~い!!! 麦わらの一味イ~~~~い!!!」

声の圧だけで、島全体が振動する恐ろしい咆哮。

衝動のままに巨腕を振り上げ、巨体をさらに大きく見せ、相対する者を更なる絶望へ  
と叩き落とす。

その姿はまさに、*“魔人”*と呼ぶに相応しいものだった。

「……あの野郎、おれ達の邪魔しようってのか!!」

「ルフィの奴、てめエの一味をてめエで潰す気か!!」

「命令が下ったのね…!!」

「本物のルフィは無事かな……!!」

「何ですかアレ~~~~い!!!」

「倒しようがあんのか、あんなモン」

「とんでもない連中を目覚めさせやがって…!!」

「面白エな…!!!」

屋敷の庭に面したあらゆる場所から、立ちほだかる難敵を見つめ戦慄する一味。

こんな敵に一体どのように立ち向かえばいいのか、と我が身を強張らせ、立ち尽くす彼らの目の前で。

とーん、と真下から跳躍してきた猛牛の天使が、赤鬼の頭頂部に踵を振り下ろした。

「うるさいつつつてんだろうが!!!」

「ギャ~~~~ツ!!!」

隕石でも落ちてきたかのような衝撃が赤鬼の頭に走り、巨体を支える両足が地面に埋まる。

悲鳴をあげる赤鬼の頭の上に乗った天使は、両側の角を掴んでぐらぐらと思いつきり揺らし始めた。

「まったく…!! どこでムダに道草食つてたのよ、あんたは!!! 私ばつかりに戦わせて

フラフラフラフラしやがって…:頭の角圧し折るぞコラ!!!」

「すびばぜエ〜ん…!!!」

「もういいから…:さっさと動く。丁度良く獲物の方から集まって来たみたいだ」



「ぐすツ……おウ!!!」

半泣きで謝る赤鬼に溜飲を下げたのか、ジャービルはどかっと相棒の頭の上であぐらをかいて座り込む。

頭上を感じる重さに、赤鬼は不思議そうに目を瞬かせた。

「…オー、何かこれしっくりくるな。何でだ？ おれ達、前にもこんな事してたっけ☒」

「……………さア？」

目を丸くして尋ねる赤鬼に、ジャービルも困惑気味に首を傾げる。

二体揃って考え込む素振りを見せるも、やがて興味をなくしたのか、まあいいやと視線を逸らした。

「……………あア、間違いねエ。あっちに入ってるのはエレノアの影だ」

「いつものあいつらの力関係そのものだな…なんかほっとした」

「どういう意味？ ねエそれどういう意味?!」

あんなやりとりばかりしていたか、と仲間達から発せられた評価の声にエレノアがぎよつと振り向く。不名誉極まりなかったが、否定する者は誰もいなかった。

そんな彼女をよそに、赤鬼の前に立ちはだかったサンジが声を張り上げた。

「おい!! そこをどきやがれ!!! てめエがおれ達の邪魔をしてどうすんだよ、ルフイ!!!」

「……………! ルファイ？ そいつはおれの敵だ。おれの名前はオーズ!! よろしく!!!」

「どうも、ジャービルと申します。どうぞお見知りおきを」

赤鬼に……赤鬼の中に入った影に向けて叫ぶが、帰ってくるのは敵意のみ。

自分より遙かに小さな存在が敵意を向けてくる様を、相棒の天使と共に見下ろし、妙に礼儀正しく挨拶を返した。

「あいつバケモノにどなりかかってんぞ!!」

「アホコックの野郎……ナミはちゃんと助けたのか?」

「小娘よりてめエの方がピンチじゃねエか!!」

「アレ何ですかア……!!? 顔がコワイ!!」

「落ちつけ、おじーちゃん」

体格差などものともせず、真正面から喧嘩を売る彼を見て、仲間達は騒ぎ出す。

反対側の建物の屋上にいるウソツプ達も、窮地に自ら足を突っ込んでいるサンジに慌てふためき出す。

「ややややベエ!! サンジがやベエ!!」

「予想外ね、私達は影だけを狙われるのかと思つてた。ちよつと暴れすぎたかしら」

「もうルフィとエレノアの影以外はいらねエつて勢いだな」

「コエ……!!! コエ……!!! あんなのと戦えねエぞ」

呆然と、様子を伺う他にない彼らの前で、オーズが動く。

自らの主人となった男、その者が用意した数枚の手配書の一枚を見つめ、真下のぐるぐる眉の男と見比べ、頷いた。

「そっくり…おめエも海賊の一人だな!!」

「…あなたの目はどうかしてるよ。後であのヤブ医者に取り換えさせ………あア、潰しちゃったんだっけ」

まるで似ていない手配書を見て納得するオーズに、同じく手配書を覗き込んだジャービルが頬を引きつらせる。

が、オーズにとっては些細な問題のようだ。標的をサンジに定め、ぐわつと右腕を大きく振りかぶった。

「『ゴームーゴームーの〜…』」

「ルフィの技だっ!!」

「まさか伸びるのか!!」

「あいつもゴム人間になったのか!!」

影の元の持ち主の技の名を口にし始め、一味は驚愕に目を見開く。

多くの困惑の視線を受けながら、オーズは身構えるサンジに向け、勢いよく右腕を振り下ろした。

「『鎌!!!!』」

像や恐竜よりも巨大な腕が地面に叩きつけられる。跳躍して躲したサンジの真下で、瓦礫まみれの地面が大きく抉られる。

腕の長さは変わらなかったものの、その一撃は凄まじい衝撃と揺れを辺りにもたらした。

「の…伸びはしなかった!! …けど」

「あんだけリーチと破壊力があつたら関係ね——っ!!」

最悪の想像が外れてほっとしつつ、事態がまるで解決していない事に目を向いて悶絶するウソツプとチョツパー。彼我の力の差が圧倒的すぎた。

「『首肉フリツ…』」

「ふんっ!!!」

跳躍し、得意の蹴撃を叩き込もうとしたサンジだが、オーズは無造作に頭を傾け、それを受け止め弾き返す。

そして地面に落下し跳ね返ったサンジをがっしりと掴んだ。

「あの巨体で何て速さ!!!」

「やベエ!! 死ぬぞあいつ!!!」

サンジが捕らえられ、敵の俊敏性に驚きつつ、ぐちゃりとトマトのように容易く潰される想像をしたフランキーが声を上げる。

早く救出せねば、と飛び出しかけたその寸前。

「揺らすなっつの!!?」

「ほげエ!!!」

ごがんつ、とオーズの頭上のジャービルが拳骨を落とし、オーズの体がぐらりと揺れる。その衝撃で、オーズの手からサンジ吹っ飛ばされる。

屋敷の壁に突っ込んでいった彼に、オーズが頭をさすりながら再び近付く。

「火の鳥星!!!」

追撃を加えようとする赤鬼に、ウソップが炎の鳥の弾を放つ。

ゾンビにとつても恐怖の対象である炎の塊が、オーズの頭を焼き尽くさんと急接近するが。

炎の鳥が触れる寸前に、ジャービルの尾が勢いよく振るわれ、炎の鳥をあつという間にかき消してしまった。

「…何か、したか?」

「……………!!!」

くるり、と振り向き、にたりと不敵な笑みを浮かべるジャービル。

絶句するウソップの目の前で、オーズもゆつくりと振り向き、今度はウソップ達の方へ迫り始めた。

「こつち来たア!!!」

「まずい!! フランキー!! エレノア!! あいつをこつちにおびきよせろ!!!」

「よしてきた!!」

「了解!!!」

どしん、どしんと徐々に近づく脅威を前に叫ぶウソップとチョッパー。

そうはさせまいと、フランキーが左腕の銃器で、エレノアが雷の矢でオーズに攻撃を加え、敵意を逸らさせようとする。

目論見通り、オーズの意識はエレノア達に向けられた。

だが次の瞬間、あつという間に接近したオーズの拳が、エレノア達のいる屋根を粉碎してみた。

「どわあああ!!!」

崩落する尖塔から、ブルックを担いだフランキーが飛び降りる。壁の窓穴にしがみついて難を逃れながら、二人は崩れていく大量の瓦礫を見やり、ぞつと背筋を震わせる。

「あ……!! つぶね!!!」

「下の屋根に降りてろ、二人共」

「ゾロはルフィ!! 私は私のゾンビをやる!!!」

「おう!!!」

降り注ぐ瓦礫を躲しつつ、エレノアとゾロは反撃に移る。

瓦礫を足場に跳躍し、翼を飛ばたかせ、それぞれで凶悪なゾンビの目の前まで一気に迫る。

「二剛力羅!! 二剛力羅!! 三刀流……!!!」

「巨人の一撃、その身で味わえ!!?」

「二剛力斬 つ!!!」

「撃退剛棍!!!」

剛力を用いた斬撃、風を極限まで集め固めた棍による打撃を、オーズとジャービルに向けて放つ。

ゾロの斬撃は、辛うじてオーズの牙の片方を斬り裂くも、顔に届く寸前でオーズが上半身を引き、両方の攻撃を空振りさせる。

「ゴムゴムの…火山!!!」

宙に浮いたゾロに、オーズが振り上げた足が直撃し、天高く打ち上げられる。

寸前でエレノアは躲せたものの、ただの風圧でまたしても吹き飛ばされ、屋敷の壁に頭から突っ込んでいった。

「くらえバケモノ共、ウエポンズ左!!!」

隙を見せたゾンビ達に向け、フランキーの重火器が火を噴く。

どれだけの巨体でも、当たれば確実に傷をつける銃弾が大量に襲いかかるが、オーズはそれも瞬時に避けてみせる。

そして近くにあつた塔をもぎ取ると、フランキーに向けて思い切り振り下ろした。

「うわア———!! フランキー!!! ブルツクー!!!」

巨大な建造物の一部が覆いかぶさり、破壊された足場と共に地面に落下するフランキーとブルツク。

頭を抱えるチョッパーの視界に、上空からみるみる近付いてくるゾロの姿が映り、はっと我に返る。

「ゾロが落ちて来るぞ!!!」

「『百花繚乱』 『蜘蛛の華』」

スパイダーネット

咄嗟にロビンが反応し、能力で生み出した腕を組み合わせ網を作り、ゾロを受け止める。網の中で、ゾロがごふつと血を吐いた。

オーズは再び、残る標的であるウソツプ達をぎろりと睨みつけ、手を伸ばした。

「……………!!! コレをくらえ!!! てめエらだつてゾンビだ!!! 必殺!!! 『塩星』!!!」

ウソツプは土壇場で冷静さを取り戻し、いかなるゾンビでも逆らえない特製の弾をオーズとジャービルに向けて撃ち出す。

だが、それらの弾も口に届く前に、ジャービルが振るった尾によって弾かれてしまっ



た。

「そんな見え見えの狙撃が効くわけないでしょ…」

「———だったら両方まとめて焼き尽くしてやる!!!」  
ヴァサヴィ・シャクティ  
 “日輪絶刺”!!!」

呆れたように呟くジャービルに、鋭い声と熱風が届く。

瓦礫の山を蹴り飛ばし、飛び出したエレノアが、業火の槍を振り回し、オーズとジャービル両方に向けて放った。

大気を焼く爆炎の槍が二体の怪物を呑みこまんとし、彼らの視界いっぱいには赤が広がる。

それを前にし、ジャービルはすうっと大きく息を吸い込む。

それを一気に吹き出し、目前に迫った業火の槍を跡形もなく吹き飛ばしてしまった。

「…ぬるい」

「……は☒ え、ちよ……!!! ウソでしょ?!!!」

つまらなそうに呟くジャービルに、エレノアは激しく狼狽し、直後にオーズにはたき落とされ地面に沈む。

どこん、と土埃を巻き上げて落とされた天使の姿に、ウソツプが血反吐を吐きながらオーズを睨む。

「て……てめエら……!!! ルファイ……!!! エレノア……!!!」

「おめエらなんか、知らねエぞ。おれ達はモリア様の部下しもべ、オーズとジャービルだ!!!」  
 動ける者は、もう誰もいなかった。

しんと静まり返った屋敷の庭の中心で、オーズはぼりぼりと頭をかき、首を傾げた。  
 「あとは……さっきの『麦わら帽子』と『オレンジ女』と『イカスヒーロー』。どこに  
 いるんだ?」

「ギア………そつちはどうでもいいや」

腕に貼り付けた手配書を再度見やり、オーズはまだ見つからない獲物を探す。倒  
 れた者には目もくれず、相棒を頭に乗せたまま屋敷に穴を開け、中を覗き込む。

「ここかな!!! 出て来い、残りの奴らー!!!」

「……ちよつとはあのデブに遠慮してやんなよ」

元からぼろぼろになっていた屋敷が、より一層悲惨な姿になっていく様子に、ジャー  
 ビルは呆れつつも止めない。

心底どうでもいいといった様子で、落胆の視線を辺りに向けていた時。  
 じやり、と。

彼らの足下から、瓦礫を踏む音がいくつも響いてきた。

「何だった? ……名前」

「えーと」

「確か…ロース」

「いや違う。最後は『ズ』だった」

「ヒューズ」

「いや、遠のいたぞ…!!」

「オース」

「…ん？ いや…!! 何か足りねエような…!!」

「『オーズ』よ」

「それだ!!」

一切の絶望も諦観も感じさせない調子で、場に似合わぬ気の抜けた会話を交わす彼ら。

その近くで、かたかたと動く白骨死体が申し訳なさそうに引き下がる。

「あ…あの私…すいません体が…」

「ああ、おめエはしようがねエ…少しは移動できるか？ ちょっとよけてろ」

ぞろぞろと、立ち上がり整列していく数人の男女。

ほとんど満身創痍の痛々しい姿で、しかし微塵も体幹を揺らがせず、闘志を維持したまま圧倒的強者たる魔人と鬼神を見上げてくる。

「おい、オーズ!! …てめエの中身がルフイの影なら」

どん、と勇ましく胸を張り、仁王立し。

若き海賊達が、自身らの船長と仲間の影が入った怪物ゾンビに、挑戦的な視線と言葉を向けた。

「てめエの仲間の底力……!!! 見くびっちゃあイカンだろう……!!!」

## 第250話 “一丸となる力”

「ふるふるふふ…!! なかなか頑丈な奴らだね…楽しみが続きそうでは何よりだ……………!!  
?」

並び立つ麦わらの一味を見下ろし、ジャービルがオーズの頭の上に乗ったまま笑う。  
その目に宿る闘争本能を爛々と輝かせ、にたりと口角を上げる。

しかしふとその顔が、きよとんと訝しげに歪んだ。

「……………ん? あれ? 私、こんな笑い方だったっけ?」

妙な違和感に苛まれた彼女は、胡座をかいたまま腕を組み、首を傾げる。

しばらくの間考え込んだものの、疑問の答えは何も出てこなかった。

そんな彼女の下で、一味はまっすぐに二体の怪物を見上げ、軽い調子で話し出した。

「一つ提案なんだが……………コイツを一丁投げ飛ばすつての、どうだ?」

「……………な…投げ飛ばす?! こんなにだけエ巨体を……………!!」

「成程…そりゃさぞ気持ちいいだろうな」

ずしん、と降り立つ尋常ではない巨体。

今まで戦ってきたどんな敵よりも大きく強い、最恐と呼ぶべき存在を前に、一人を除

いて退く様子を見せない。

「——しかし、このデカきでルフィの動きとは恐れ入る」

「その上、全盛期以上の私もいるわけだし………我ながら面倒な」

「——でも『海賊王』は似合わないわ」

「どう切り崩すかだ、作戦はいくらでもあるぜ……!!」

「何か弱点があるはずだ」

「デケエ魚は少しずつ弱らせるってのが定石だが」

「超コワイ」

それぞれで思考を巡らせ、打開策を探す。

オーズは中々斃れない一味に興味をそそられたのか、愉しげに笑いながらぴよん、と高く飛び上がった。

「潰れる!! ゴムゴムのくくく尻モチ」!!!

「そんな技ねエだろ!!!」

「散れ!!!」

凄まじい質量を伴って降ってくる巨人の尻から慌てて飛び退き、ばらばらに分かれる一味。

フランキーは一つ前に戦いで使った巨大ヌンチャクを放り捨て、怒りに目を吊り上げ

て走り出した。

「……ぬう!! おのれ麦わら……!! 一丸となる力思い知れ!!! お前ら!!」  
タクティクス・ファイティーン  
 戦略の15だ!!!」

「え? アレを☒ アレを出すのか?」

「ゾロ!! ぐるぐる!! スタンバイだ!! おれの足を支えろ!!!」

「ん?」

「何だ」

ウソツプとチョツパーに指示を下し、共に走り出す。

なぜか目を輝かせる三人はそのまま、何事かと振り向くゾロとサンジを横に並ばせ—

—『合体』する。

アロハシヤツの襟を引っ張り顔を隠したフランキーの足をゾロとサンジが支え、右手でウソツプを掴み、頭にチョツパーを乗せる。

まるで、男の浪漫たる機械の戦士が合体するかのよう。

「『パイレーツドッキング7』!!! 巨大ロボ戦士!!! 『ビッグ皇帝』エンペラーくく!!!」

どん、とほぼ組体操と変わらない一連の行動に、上半身の三人は満足げになる。が、ふと自身らの左側を見やったチョツパーがぎよつと目を剥いた。

「ちよつと待てフランキー!! 『左腕』と『翼』がまだドッキングしてねエ!!!」

「何!?!」

慌てて振り向いたフランキーは、空っぽの自分の左手を見て狼狽する。

そして辺りを見渡し、我関せずといった様子でそっぽを向いているロビンとエレノアを睨みつけた。

「おい!! 何してる!! ニコ・ロビン!! エレノア!! 早く左腕と背中にドッキングしろ!!」

「急げ」

「来い!! ロビン!! おれのようにやれ!!」

くいくいと手招きをし、二人を呼ぶ巨大ロボ戦士（自称）。

そんな彼らに、エレノアはひどく恥ずかしそうに、ロビンは心底嫌そうに顔を歪め、答えた。

「……ごめん、ムリ」

「人として、恥ずかしいわ」

まさかの反応に、上半身の三人はがーんと大きな悲しみに苛まれる。

そしてなぜか、オーズが四つん這いで身を乗り出しながらフランキー達を見下ろしており、同じように衝撃を受けていた。

「……何だ、やめんのか!?!」



「何であんたがシヨック受けてんのよ?!?」

「やれよ——!!! ドッキング——!!! わくわくしただろ!!!」

落胆をあらわにし、オーズは苛立ちをぶつけるように巨腕を振るう。

上半身の三人がその犠牲となり、激しく吹っ飛ばされ、瓦礫の中に深く減り込まされた。

「お前らさえいたなら!! ロビン!! エレノア!! ロボ戦士“ビッグ皇帝”になれたのに!!!」

「まさかの裏切りだ……!! まさかの!!!」

「ルフイなら……やってくれたぞ。エレノア……お前ならきつとなんだかんだで付き合ってくれと」

三つの人型の穴が開いた瓦礫の中から、三人の声がか細く聞こえる。

その声に、ロビンは非常に険しい表情で拒絶の言葉を吐いた。

「もう二度と……二度と誘わないで、『ドッキング』」

男の浪漫は、女性には理解が叶わないらしい。彼女の隣で、エレノアは困り顔で頬を赤らめていた。

妙な遊びに巻き込まれたゾロとサンジは、間抜けな姿を晒す三人を放置し、オーズの左右へ急ぎ回り込んで行った。

「不覚……何をやらされたんだおれは

「コノ野郎が……!! おれは早くナミさん再救出に向かわにやならねエのに!!」

「うお——!!!」

「このヤロー仕切り直しだア~~~~!!!」

サンジが牽制で瓦礫を蹴り飛ばし、オーズの腹に当てる。

巨体が振り向くのを合図にするように、ウソップ達三人も瓦礫を砕き、復活を果たした。

その横で、ゾロがフランキーの使っていた巨大ヌンチャクに刀を突き立て、担ぎ上げた。

「フランキー!! このデケエの借りるぞ!!!」

「あつ!! てめエおれのヘビーヌンチャク!!! 貸すつ!!!」

巨大な武器を担ぎ、再び走るゾロ。

彼の姿を横目に、ウソップが巨大パチンコを構え、地面についたオーズの右手を狙撃する。

「くらえ必殺『徳用油星』三連発!!!」

「ん? うわつ!!!」

油によって四つん這いになっていたオーズは体勢を崩し、ぐらりと体を傾がせる。

その隙を狙うため、ゾロがサンジの方に走り寄り催促する。

「おい、飛ばせ!!!」

「お前っ!! そんなでけエモン持つとは…」

「ムリならいいぞ」

「コノ…!! やれるわアホ!!! 空軍パワーシユート”!!!」

一瞬戸惑ったサンジだったが、挑発を受けて即座にやる気になり、ゾロを巨大ヌンチャク諸共蹴り上げる。

ゾロは一直線にゾロの顔面に向かい、巨大ヌンチャクを叩きつけた。

「“大”…“撃剣”!!!」

強烈な殴打が炸裂し、不安定だったオーズの体勢がさらに崩れる。

激しい揺れに襲われる相棒の頭の上で、面白そうに戦いを見守っていたジャービルがにやりと不敵に笑った。

「やってくれる…」

「そこ、動くな!!! 魔眼縛蛇”!!!」

そろそろ反撃するか、とオーズの頭の上から降りようとした時、頭上から無数の鋼鉄の縄が伸びる。

蛇のようにしなるそれらは、あつという間にオーズとジャービルの周りで絡まり、互

いを縛り付けてみせた。

「うわっ、なんかからまった!!?」

「うぐ……!!」  
コノ……うつつとうしいマネを!!」

「〃百花繚乱〃 『大樹』」

ビツツツリー

一纏めにされた彼らに、さらにロビンの能力が襲う。

無数の腕を一つに合わせ、巨大な枷を生み出すと、オーズの左腕を背中側に折り曲げ固定する。

そのせいで、オーズの体勢がより一層不安定になった。

「わっ!! 危ねエっ!!」  
コケるコケる!!」

「ちよっ……揺らすな!!」  
酔う酔う酔うって!!」

ぬるぬると滑る地面に右手をつき、どうにか体勢を保とうとするオーズ。ジャービルはその上で身動きが取れず、激しい揺れで目を回し出す。

一味の攻撃はまだ終わらず、オーズとジャービルの目の前にみるみる階段が伸びていく。

「とくと見よ、この即興空間階段造り!!」  
フランキ……空中散歩!!」

無数の板を合わせ、即席の階段を作りながらどんどんと近付いていくフランキーと

チヨッパ。

寿命の短い足場から飛び上がり、二人は一斉に拳を振りかざした。

「ス~~~~パ~~~~!!」

「フラツパーゴング!!!!!!」

二人の剛拳がオーズの顎に炸裂し、衝撃が頭蓋の中で浮く脳を揺らす。

それによってオーズは一時的に平衡感覚を失い、体をさらに傾け、足一本で奇跡的に立っているという奇妙な状態に陥る。

そこへ、サンジのとどめの一撃が入る。

「後の支えはその足一本だな、ルフイの化け物!!! アンチマナーキックコース!!!!」

いくら相手があんまりでもない巨体を持っていようと、不安定な体勢では抵抗など何もできない。回る駒を掬い上げるように、巨体の上下がぐるりと入れ替わった。

「……………え!!」

「マズ…待って待って待って!!! 外れな……………!!!」

「ひっくり返れ、怪物!!」

「よし行け!!」

「グーダウン」

ジャービルが慌てて拘束を外そうとしても、時すでに遅し。

一つの塊になった二体の怪物は、ひっくり返って頭から地面に倒れ込んだのだった。

「うオあがつ!!!」

「ふぎやああああ!!!」

相棒の巨体に挟まれ、悲鳴をあげるジャービル。幸か不幸か、オーズの角が隙間を作り、潰されずに済んでいる。

それでも相棒の体が邪魔で、全く身動きが取れなくなってしまうていた。

「……………!! お前らコノヤロ〜!!! もう起こった、ブツ飛ばしてやるっ!!!」

「…まずは私の上からどいて貰えないかなア…!!?」

投げ飛ばされた事に驚愕し呆けていたオーズが、ひっくり返ったまま怒りをあらわにし始める。

その下で抗議の声を漏らす、彼には全く聞こえていないようだった。

「おめエら覚悟しろよ、全員ぺちゃんこにしてやる!!! 骨も残らねエと思えエ!!!」

「だから先にどいてくれないかなア…!!?」

「ウオオオオオオ!!!」

文字通り鬼の形相に変わり、大気をびりびりと震わせる咆哮をあげる。

至近距離にいるジャービルが迷惑そうにしているが知った事ではない、自分を虚仮にした海賊達への憤怒に燃える。

凄まじい圧を受け、一味が再び各々の得物を構え、そして。

「抜けねエっ!!! ツノが」

ぐつ、と地面に手を突っ張ったオーズが、間の抜けた声を漏らす。

ずっぼりと地面に突き刺さり、抜ける様子のない自らの角を凝視し、失態に大きく目を見開いていた。

「……………しまった、ツノが思いつきり地面に……!!!」

その瞬間、きらーんと目の前で怪しい光が灯る。

麦わらの一味全員が、不気味な笑みを浮かべながらオーズとジャービルを見つめ、目を悍ましく光らせる。

そしてぞろぞろと、無言でオーズの方へと近付いていった。

「あ」

オーズが声を漏らした直後。

容赦のない暴力の嵐が、二体のゾンビ達に襲いかかった。

動けない二体に無慈悲に殴打や剣撃が襲いかかるその様には。

一方的にやられた事への報復と共に、この場にはいない麦わらの青年への日頃の恨みが混じっているように見えた。

「あ、アあああああ~~~~~っ!!!」

「あたたたたた、巻き込んでる!!! 誰に対してかは知らないけど完全に私怨混じりの攻

撃に巻き込まれてるから〜っ!!」

理不尽なまでの攻撃の数々に悲鳴をあげるオーズとジャービル。

なぜか関係ない恨みまで受けている気がして、ジャービルが制止の声をあげるが誰も耳を貸さない。只管に一味に叩きのめされ続ける。

「——って!!!」

するとやがて、ジャービルの堪忍袋の尾が切れる。

自身を拘束する鋼の縄を力尽くで引き千切り砕き、相棒の頭を両手で掴むと、強引に角を抜き放ちそのまま巨体を振り回した。

「いい加減にせんか〜〜い!!!」

「「おわああああ〜〜!!!」」

どっかん!!

オーズの全身が凶器となり、周囲一帯の何もかもを薙ぎ払う。

まるで台風。巨大な塊が宙を舞い、暴風を巻き起こし、あらゆるものを巻き上げ吹き飛ばす。

危うく暴風に吞まれ粉々にされるところだった一味は、慌てて鬼神から距離を取った。

「は〜…やれやれ、人が大人しくしてりやつけ上がやがってガキ共が…!!!」



まるで棒でも担ぐように、オーズを肩に乗せて一息つく。やれやれと肩を竦め、盛大に悪態を吐く。

その間、なぜかオーズも全く抵抗せず、直立の姿勢を保って大人しくしていたが、やがて恨みがましげに睨み始めた。

「おめー、何のためらいもなくおれを鈍器にしたな」

「…何か文句ある…?」

「アリマセン」

抗議の声をあげると、途端にぎろりと鋭い目で睨みつけられ、オーズは即座に黙り込む。

そして、オーズ以上に危険な力を見せつけたジャービルに、一味は戦慄と恐怖に震え上がる。

「あの巨体を振り回した〜〜!!! なんちゅー怪力してんだお前はア!!!」

「私じゃないんですけど!!?」

危うく死にかけてたウソップが目を全開にし、すぐ隣にいたエレノアに叫ぶ。

混乱したのかなんなのか、影の元の持ち主の方に怒鳴りつけ、エレノアは慌てて手を横に振る。冤罪にもほどがあつた。

二人のやりとりを横目に、他の面々は悔しげに歯を食いしばり、降ろされ立ち直す

オーズとジャービルを凝視していた。

「くそっ……!! 片方だけでも厄介だったのに……!!!! どんだけ頑丈な器見つけて来やがったんだ、あのラッキョ野郎め……」

「……中身も充分やベエと思うのはおれだけか?」

「何か言ったかコラア……!!?」

ただでさえ強い女が、異なる強靱な肉体を得た事でより恐ろしい存在へと進化した、と背筋を震わせる。

余計な事を口にしたゾロは、即座にエレノアに睨まれ黙り込んだ。

「くっそ……!! 麦わらがモリアをぶっ飛ばすまでの辛抱とはいえ……!! 早く影を抜け、麦わら!!」

「何でそれを待たなきやいけねエ、倒しやいだろ」

「同感」

悪態を吐くフランキーだが、それに呆れるようにゾロとエレノアが呟く。

必要以上にやる気に燃えている二人の声に、時間稼ぎだけを考えていたフランキーはぎよつと目を剥いて慄く。

「おいおい!! おれ達アこの化け物共が麦わらの邪魔しねエ様に、足止めしてんだろ!!」

お前らアレ倒す気なのか!!」

「売られたケンカは買うだけの話さ……それ以上に、私、あいつ、キライ」

「アレおめエの影だよな?!!」

がるる、と獣のような唸り声を漏らすエレノアに、チョッパーが衝撃を受けた顔で目を剥く。自分同士でどれだけ争う気なのか。

「いやなら逃げてろ、おれもルフイを待つ気はねエぞ!!」

「恐竜が踏んでもミミリも曲がらねエって、硬さ。こそが黒刀の特性と聞く……せつかく手に入れたこの『大業物』『秋水』の力、試すにやあ絶好の機会だ」

ゾロと同じく、サンジも足止め程度で終わるつもりはないらしく、目に闘志を燃やして前に出る。

新たな得物を手に入れたゾロに至っては、その力を早く全力で試したいと舌舐めずりをする有様だ。

「——今なら、やれる……」

その時、彼らの背後でエレノアが小さく呟く。

目の前の鬼神に痛ぶられ、この中の誰よりも負傷が大きい彼女は今、途切れそうな意識をどうにか気力で保っている状態だった。

だがそれ故に……その感覚を、最も近く感じていた。

(あの時と似た感じだな……エネルに散々やられて、お婆ちゃんに散々酷使されて、本

気でやばかった時………こんな風に、自分の命を強く感じてた）  
す、と瞼を閉じ、集中する。

自分の中に存在する一つの小さな炎を強く意識し——そこを、激しく燃え上がらせ  
る。

「……『グレイルフレア聖杯献火』」

どくん、と。

自らの心臓が、激しく脈動した。

## 第251話 “命の火”

「——アアああああああああああ!!!」

全身を震わせ、天を仰ぎ吠えるエレノア。

ざわざわとひとりで蠢いた髪が光を放ち、炎のように激しく輝きを放つ。

同時に、小さな体全体から強烈な威圧感が迸り、その場に集まる敵味方全員にぞっと寒気を走らせた。

「おわ——つ!!! エ……エ……エ……!! エレノアが燃え出したア……!!!」

びくつ、と震えたチヨツパーが悲鳴混じりの声をあげる。

周りのほとんどが似たような反応を見せていたが、その中の一人……ゾロだけがエレノアの変貌にはつと目を見開いていた。

「ありやあ……エレノアの先祖がやってた……」

「おい!!! お前、大丈夫なのかそれ!! なんか……なんかわかんねエけどやベエ予感があるぞ!!! おいエレノアア!!!」

何かがまるでわからないが、間違いない危険な力。

そう直感を抱いたウソツプがエレノアの身を案じ、頭を抱えて叫ぶが、エレノアは振

り向くこともせず、目の前の敵だけを睨み続ける。

「かかつて来いや……!!!」

「わかった、うおお——っ!!!」

オーズもただ事ではないと察したのか、間の抜けた返事を返しながら本気の拳を振りかぶり放ってくる。まるで隕石でも降ってきたような勢いだ。

「おい!!! エレノア避けろ——!!!」

「『武装』……!!!」

目前にあつという間に迫る巨大な拳、当たれば間違いないく跡形もなく消し飛ぶ一撃。エレノアは慌てず、己の拳を漆黒に染める。

いつも異常に固く、艶やかな黒に染まったそれを、真横からオーズの拳にぶち当てる。「ああああああああ!!!」

「ごっかん！」

思わず耳を塞ぎたくなるほどの轟音を立て、エレノアの裏拳が炸裂し——オーズの殴打が逸らされる。

驚愕に目を見開くオーズの足下で、ジャービルがひゅーと口笛を吹いた。

「へエ……そういうのもあつたんだ、私……!!!」

「次はおれが相手だ……!!!」

「はっ………邪魔だよ!!!」

不敵に笑うジャービルを、今度はゾロが狙う。

新たな得物・名刀『秋水』を片手に持ち、いつも通りに構えようとして……大きな違和感にかすかに動きを止める。

「——改めて比べると、先代『雪走』よりずいぶん重いな………黒刀『秋水』………!!!」

「よそ見してる場合かな……?!?」

「三刀流『百八』………!! 『煩惱鳳』!!!」

敵が見せた隙を突こうと、ジャービルが瓦礫を踏み砕くほどの勢いでゾロに接近する。

だがゾロは慌てず、渾身の斬撃をジャービルに向けて飛ばす。

放たれた三迅の斬撃は、一本に飲み込まれることで巨大な一撃へと変わり、ジャービルとその奥のオーズに向かう。

両者とも凄まじい俊敏さでそれを躲したが、斬撃は残った屋敷の壁に大きな傷跡を刻みつけた。

「お前らやるな、チビのくせに!!! くらったらいふ斬れそうだ」

「凶悪な得物を持つてやがる………」

流石に危機感を抱いたらしいオーズのもとに、ジャービルが跳躍しその肩に乗る。

対するゾロは、『秋水』が見せた思わぬ効果に瞠目していた。

自分が思っている以上に強力な一撃を見せつけられ、改めて名刀の凄まじさを実感していた。

「——だが斬り口に無駄な破壊が多すぎる。おれがまだ使いこなせてねエ証拠か……破壊力は数段増してるが……コイツも大人しい剣じゃなさそうだ」

まだ自分は認められていない、そう感じつつも笑みが浮かぶ。

乗りこなすのが厄介な怪物ほど、躡ける甲斐があるというもの——剣士は不敵に笑いながらそう心に決めた。

「いいモンくれたな……剣豪リユーマ……!!」

「こんなにやる踏み潰してやるーっ!!!」

予想外の反撃を見せたゾロとエレノアの頭上から、オーズが地団駄を踏むように足を振り下ろしてくる。

地面を砕き吹き飛ばすそれらを躲し、あるいは弾き、二人は後方に下がり息を整える。

「おい、ゾロ、エレノア、ムリすんな!! だってお前ら方が……!! こいつらを倒せても戻って来んのはルフィとエレノアの影だけだ!! ゾロとサンジの影はどこにいるかわからねエんだぞ!!」

闘志を納めずにいる二人に向けてウソツプが叫ぶ。



倒す気満々の彼らに冷静になってもらおうと、自分でもわかっているはずの情報を改めて語って聞かせた。

「でもルファイがモリアを倒せば全員の影が一気に返って来るんだ!! つ!!!死にもしねエ巨体ゾンビ達にわざわざケガさせられる事ねエ!! ここはルファイを信じて、足止め」に徹しよう!!」

「充分信じちやいるが、ルファイにも苦手なモンはあるだろ!! ダマシ」だ!!!」

ゾロの反論に、全員がうつと黙り込む。

一味の長でありながら、致命的なほど騙されやすく単純な彼。

ゾロの言わんとしている状況が目に見えるようで、全員が何も言えなくなっていた。

「そもそも人をおちよくる様な能力者の揃ったこの島で、敵が正々堂々ルファイと対峙してくれるかどうかさえ疑問だ」

「——確かに有り得る」

「むう…」

「そういうのに耐性ないからねエ…あいつは」

「ルファイがスカされて朝が来たら、あいつもおれもエレノアもコックも、4人共まともに戦えなくなる!!!」

ぎん、と刀を構えさらにゾロは続ける。

元より退く気はない。優先順位を見極めていた彼は、最初から最大の障害を排除する事だけを考えていた。

「——だったら夜明けまでに、ルフィとエレノアだけでも正常に戻しときゃあ、後は何とかなんだろ!!」

一味の最たる実力者二人が揃えばなんとでもなる。

そう察した全員が、やや険しい表情のままオーズとジャービルに向き直った。

「夜明けまでもう30分もねエだろうが……これだけ霧の深い海だ。朝日の届く場所は限られてる……!!」

「とうとう朝か。『霧』が唯一の救いだな。夜明け前にして……正直……やっと消滅への危機感も出てきた……」

晴れ間にさえ気をつければ、影を奪われた自分達が太陽光で消滅する危険はない。戦いづらくとも、それさえ気を付けていけばいいのだ。

そう考えていた矢先だった。

突如、スリラーバーク全体が大きな揺れに襲われ始めたのは。

「うわ!! 何だ!! この揺れ!!」

突然の異変に、戸惑い辺りを見渡す一味。

彼らの視界にやがて、空が……霧の晴れた夜明け前の空が開け始めた。

「最悪だ……!! 一縷の希望が深い霧だったつてのに……!!」

「一体、誰の策略でこのタイミングで霧が晴れるんだ!! これじゃ朝日はストレートに差してきちまう」

——どよめく彼らは知らない。

目の前にいるオーズが、スリラーバークに備わった舵を無茶苦茶に切ったせいで進路が乱れ、霧の海から出てしまったのだという事実を。

そして、さらに絶望的な展開が彼らに襲いかかった。

「キシキシシシ……!! 凶らずも清々しい夜空……もう夜明けも近いか……ぐずぐずしていいのか? 貴様ら……」

聞き覚えのある、憎たらしい声がその場に響く。

自分達を窮地に追いやった元凶、この島の支配者である男の声の出所を探し、全員が辺りを見渡し……そして、ウソツプがその姿を見つける。

「……モ……モリア!! モリアだ!! 何でここに!!? ルフィは……!」

「おい待てウソツプ、モリアがどこにいるってんだよ!!」

「いるじゃねエか!! あそこ見ろ!! 腹だ!! オーズの腹ん中!!」

「腹の中☒」

大きく目を見開いたウソツプが、オーズの腹を指差して騒ぐ。

つられて振り向いた一味は、確かにそこにモリアの姿を——まるで部屋のように改造されたオーズの腹の中を目撃し、ぎよつと息を呑んだ。

「い……いた!!!」

「じゃ、ルフィは?! 案の定スカされたのか……?!」

「あるいは……!!」

「やられやしねエよ、ルフィは!!」

船長が追っていたはずの事態の元凶が、小馬鹿にした顔で自分たちを位下ろしている様を前に、全員が愕然となる。

その顔すら、目の前のモリアは実に愉しげに眺め見下ろしていた。

「おおー!! コクピット?! 何だ、おれの腹コクピットなのか!!? すっげーイカス!!」

おれ口ボみてエじゃん!! テンション上がるなー!!」

「上げるな、そんな改造されて……仮にも人体だよね、どうなってんの?」

自分でも知らずにいた構造に、オーズがきらきらと目を輝かせる。

呆れた顔のジャービルが冷や汗を垂らして眩くがまるで聞かず、興奮したまま自分の腹の中を覗き込んでいた。

あらゆる視線を自身に集めながら、モリアは挑発気味に告げてみせた。

「キシキシ!! さア、お前ら。おれと戦うチャンスをやろう、おれを倒せば全ての影を解

放できる。全員でかかって来い!!! ——ただし、オーズとジャービルを倒せねば、このおれは引きずり出せねエがな……!!!」

「あのヤロー汚エぞ!!!」

「モリアを倒さなきやオーズを浄化できねエのに、そのモリアがオーズの中に入っちゃまった!!!」

想像だにしない困難な状況に、ウソツプもフランキーもチョツパーも真つ青な顔で頭を抱える。ロビンも厳しい表情で立ち尽くすばかりだ。

そんな中で、サンジとゾロが鋭い目で見つめた。やはり、退く様子はない。

「——かえってスツキリしたじゃねエか、標的がよ」

「やるしかねエ!!!」

戦う以外に道はない。そう覚悟を決め、改めて全員が構える。

そんな中で一人だけ。

エレノアは激しい痛みによって途切れそうになる自分の意識を保つ事に、必死になっていた。

——あつたま痛エ…ガンツガンする…!!

この状態になつたから……!!

だとしたら長時間の使用はマズいな……だけど…解除してるヒマなんてない

……!!!

“何か”を燃やしている今の力を発動してから自身を襲う、頭痛や寒気や目眩。

凄まじい反動を体験しながら、自身と船長のゾンビに反撃を食らわせる隙を窺い続ける。刻一刻と、苦痛が増していくのを感じながら。

——そもそも燃やしてるのは気力……?!? 寿命……?!?

後先考えずに使っちゃったからなア……!!!

倒れそうになる体で踏ん張り、エレノアは立ち続ける。

必ず希望を仲間につなげなければ……その気力だけでその場に立ち、命を燃やし続けていた。

——だとしても……ここでこいつらを止めなきゃ……全てが終わる!!

起死回生の一手を見つけ出さなければ、そう考えたエレノアの鼻腔が、ある匂いを捉える。

食材の匂い、そして、ありとあらゆる調味料の匂い。

「ウソツプ君、ありつたけの塩を集めて来て!! 少量じゃあの巨体には効かない!!! 私達でできる限りあいつらを弱らせておくから!!!」

「よし!! わかった!!」

先ほど狙った際はジャービルに容易く防がれてしまうほど、警戒された最大の弱点だ

が、狙わない理由はない。

大急ぎで厨房につながる道へ向かうウソップに、モリアがにやりと笑みを浮かべる。

「塩か……!! ジャービル、厨房へ行けなくしてやれ!! 長つ鼻ごと屋敷の通路を潰せ!!」

最後の希望すら粉碎してやる、そんな意地の悪い思考で自らの配下に命令を下すモリアの命に、ジャービルは。

ちっ!

と盛大に舌打ちをこぼし、オーズの肩の上で頬杖をついたままそっぽを向いた。

「うるせエ、黙れデブ」

「よし、え……!!?」

はつきりとした拒絶をくらい、一瞬呆けたモリアはぎよつと目を剥き、オーズの腹から身乗り出して叫ぶ。やはりとんでもない衝撃だったようだ。

「おい!!! いい加減にしろてめエ!!! いつまでおれの命令に逆らい続ける気だ!!! お前の今の主人はおれだって言っただろうが!!!」

「……………うざつてエ」

「えエ……!!?」

抗議の声をあげると、ジャービルは心底嫌そうな顔でそうこぼす。

自身の能力の効果をガン無視した展開に、先ほどの余裕は何処へやら、モリアはただ

叫び続けるばかりとなつていた。

「我が『王』でもないくせに命令するな。不愉快だ」

「ぐぬ……!! なんて自我の強い影だ………麦わらはとつくにおれの制御下に落ちてるつてのに、コイツだけ一向に従う素振りがねエ……面倒臭エな!!!」

ぺつ、と唾まで吐いたジャービルに、モリアは苛立ち髪を掻き巻く。

原理やら理屈やらまるでわからないが、配下が自分の思い通りにならない事がひどく彼の神経を逆撫でしていた。

「何だありや……仲間割れか?」

「何でもいいだろ、好都合だ」

「やーい、人望なし〜」

「今のうちに………!!?」

全く主人に従わないゾンビという思わぬ展開に、一味は戸惑い、一瞬構えを解いてしまふ。

その隙にと、ウソップが小走りに通路に向けて走り出した時、項垂れたモリアが大きなたため息と共に声を発した。

「じゃあしようがねエ……オーズ、お前がやれ」

「はい、ご主人様」



気怠げな命令の声に、オーズが動く。

ぐわつと巨大な腕を無造作に振るい、あつという間に通路を叩き潰し、ウソップを瓦礫の中に埋めてしまった。

そのあまりの速さと無慈悲さに、一味は完全に動作が遅れていた。

「あ!!! しまった!!! ウソップ——!!!」

「ウソップ君!!! この………てめエ!!!」

がらがらと崩れ落ちる瓦礫を目の当たりにし、慌てる面々。

気を抜いてしまった自らに怒りを抱き、かつと目を吊り上げたエレノアがオーズを止めんと掌を打ち合わせ地面を叩く。

ばりばりと足元の瓦礫を錬成し、巨大な剣を作り上げ振りかざしたその瞬間。

「ごきつー!と。」

一瞬のうちに目の前に現れたジャービルが、大剣を砕きながらエレノアの腹に蹴りを食らわせていた。

「おゴ……!!!」

「ただしお前をやるのは………私だよ」

みしつ、と音が鳴り、エレノアの体がU字に曲がる。

ごぼつと大量の血を吐いたエレノアは、白目を剥いて宙に浮き、さらに放たれた回し

蹴りによって、天高くへと吹き飛ばされていった。

「エ……エレノアちや……ん!!!」

「エレノア……!!!」

仲間達の悲鳴をよそに、エレノアの姿が闇夜の中に消える。

振り上げた片足を下ろしたジャービルが満足げに首を鳴らす様を、モリアは顔を引きつらせながら見下ろした。

「おいおい……殺してねエだろうなア……?」

「まア……それなりに手加減はしたよ。それなりに………」

はあ、と落胆の溜息をこぼし、ぱっぱと手足の埃を払うジャービル。

蚊でも潰したかのような反応を見せる彼女に、一味が戦慄の視線を向け凍りつく。

そんな彼らに、猛牛の天使はにこりと、悍ましい笑顔を浮かべて口を開いた。

「それよりあんた達………氣イ引き締めないと、死ぬよ?」

そして再び、轟音と共にジャービルの巨体が飛び出す。

そして強烈な蹴撃の嵐が、残る一味に容赦なく襲いかかった。

??

ゆっくりと、意識が浮上する。

そつと身動きしようとして、ぴきつと痛みが走って息がつまる。

全身の至る所を鈍痛に苛まれ、浮いていた意識が釣り針で思いつき釣り上げられる。

「……………んんん……………」

痛む体をぎこちなく動かし、重い瞼を開こうとして。

すぐ近くから聞こえてくる騒がしい声に、訝しげに眉をひそめる。

「ちよつとだけ時間をくれ!! お前らはおれ達の希望なんだ!! ずっと探してた!!」

「おれ達ア『ローリング海賊団』、〃求婚〃のローラ船長の子分、リスキー兄弟だ!! そ

んでお前ら、屋敷のゲツコー・モリアを倒してエんだろ?! なア!!」

ぎやーぎやーとやかましい複数の声。

それに混じるよく知る青年の声に、渾身の力で瞼を開き振り向く。

「何なんだお前ら!! おれ急いでんだって!!? 島は揺れるしエレノアは吹っ飛んでく

るし、こんなところでグズグズしてるヒマネエんだって!!」

「おれらモリアの能力の秘密を知ってんだ!!」

「お前らにとんでもねエ〃力〃をやる!!! 頼む!! あいつに勝ってくれ!!!」

見れば、ぼろぼろの格好をした何十人も男達が、麦わら帽子の青年に詰め寄り取り

囲んでいる。

それに抗議の声をあげるルフイの背中を見つめ、呆然としていたエレノアはぱちぱち

と目を瞬かせた。

「…………え、何？ 何事？」

## 第252話 希望の双星

「あら!! あんた好きよ!!! 結婚してっ!!!」

そう、桃色の髪を三つ編みにした大柄な女海賊がルフィに乞う。

出会ってまだ数秒も経っていないというのに、真剣な眼差しで目の前の青年を求め  
る。

「いや」

「破談だ——!! 4千444回目の破談だ!!!」

速攻で拒否されたが、然程気にした様子はない。だが先程の熱意は明らかに本物で、  
ルフィは訝しげに眉間にしわを寄せる。

目を覚ましたエレノアも同じく、現れた数十人の集団に困惑の目を向けた。

「……何その不吉な数字……」

「あ、エレノア!! 起きたのか」

「どういう状況? これ……」

「おめーがぶっ飛んできた後によオ、こいつらが出てきておれの足引っかけてきて  
……」

痛む頭を押さえながら問うと、ルフィも訳がわからないといった様子で答えを返す。罫があかないと判断したエレノアは、ルフィの声に耳を傾けつつ、謎の求婚女に視線を戻し、無言で尋ねた。

「そんなわけで、こちらローラ船長。つまりおれ達アみんな、影を取られて森をさ迷う」  
被害者の会だ!!」

「あんたが『麦わら』のルフィと『妖術師』エレノアね?」

「ああ…さっき話しかけてきた人達の同類か」

「おれ達も影取られて急いであんなだつて」

手短な自己紹介で、女海賊…：ローラとその一味の事情を知る。

ぼろぼろの衣服といい瘦せこけた体といい、先に出会った老人のように相当苦勞している事が窺え、エレノアの表情に流石に同情が滲む。

それに気付いてか、彼らは早速自分達の話を始めた。

「——とにかく!! このスリラーバークに、今日程激震が走った事はないわ!! モリアに使える三怪人はことごとくやられ、屋敷も既に半壊状態!! 雇われの用心棒二人も『妖術師』が一人で片付けてくれた!!」

「ああ、おれ達アおめエらが来てから興奮しきりだよ!!」

「だが敵もさるもの、遂に噂の特別ゾンビを起こしやがった!! なーに、状況は被害者

「ネットワークで全て承知!!」

「おれ達、もう3年も影ナシなんだ。一生こんな暮らしなんてまっぴらだぜ。お前らがこのままモリアを倒してくれりゃ、全員の影が戻る!!」

熱意たっぷり相手を褒めつつ、自身らの願いも混ぜて語る二人の男達。

今日この日を相当待ちわびていたのだろう、ルフィとエレノアを見つめる目は強く、決して逃すものかという気概を感じた。

「——と思つたら大変だ!! お前ら、モリアの『現在地』知つてつか!!? 腹の中よ!! あのパケモノの腹の中~~~~っ!!」

「ええ〜!! 食われたのか!!」

「そうじゃねエっ!! 腹に乗り込んだんだ」

事情を全く知らないルフィの勘違いを正しつつ、そして興奮して今にも飛び出しそうな彼をなだめ、男達は自身らが知り得る情報を全て明かす。

「つまり、お前の影の入った特別ゾンビを……!! いや、その前に『妖術師』さんの影の入った特別ゾンビを倒さなきゃ、モリアに手が出せなくなっちゃってんだよ!! 今、屋敷の中庭でおめエらの仲間らと戦ってる!!」

「そこにいるのかチキシヨ~~~~!!」

つい先程まで、モリア自身の影に翻弄され、遠く離れたこの場所まで誘き出されたル

フィは悔しげに目を吊り上げ吠える。

教えてもらわなければ、危うく島中を探し回らねばならないところだった。

「じゃ、おれホント急ぐから」

「寝てる場合じゃないなこりゃ…!! 情報ありがと!!」

「待てつつつてんでしょ!!」

速攻で踵を返し、モリアの元へ急ごうとするルフィに合わせ、エレノアも軋む体無理矢理立たせ立ち上がる。

それを、ローラが再び呼び止め、苛立たしげに子分達に振り返った。

「ええい!! まどろっこしい説明は抜きよ!! 見せてやれば早いわ!! 私らが気付いちやった『影』の秘密!!」

「ハイ!!」

ローラの合図に合わせ、ルフィに説明をしてくれた二人組・リスキー兄弟が何処かへと走り去り、少しして戻ってくる。

彼らの手には、黒い『何か』が確と捕らえられていた。

「どけどけ行くぞ〜!!」

「ん☒」

「……影?!」



じたばたと暴れる、人間の形をしたもの……影を担いでリスキー兄弟が戻ってくる。ルフィとエレノアが同時に困惑の声を出すと、男達は必死の形相で駆け寄ってきながら頷き答えた。

「そう！ 影だ!! ゾンビに塩を食わせて飛び出た影は」

「おれ達の手でも捕まえる事ができるんだ!!」

説明をしながら、ルフィの前へと向かってくる二人。

すると、突如ルフィの手足を別の男達が拘束する。そして開かれた体の前面に、リスキー兄弟が影を思い切り突き立てた。

「ぎゃああ何すんだ、影がささるー!!!」

「じつとしてろ!!」

「おいコラア!! 何勝手な事してんだあんた達!!」

「おえーやめろ、なんか意識が……」

突然の男達の奇行に、ルフィは白目を剥いて悲鳴をあげる。エレノアがすぐさま抗議するが、他の者に止められ近付けない。

そうこうしているうちに、影はずぶずぶとルフィの中へ入り込み。

どくん、と。

完全にルフィの中に同化してしまった。

「…入った」

どきつ、とルフィがその場で尻餅をつく。

呆けた顔で、しかし特に異変もない様子で目を瞬かせている。心なしか、目の周りに酷い隈が浮かんでいるように見えた。

「…どう?! 気はしつかり持つてる?」

「…ああ」

「……………ル、ルフィ? 大丈夫なの…………?」

ローラの確認の声にも、エレノアの無事を案じる声にも、呆然とした様子で答えるルフィ。

そこに、ローラが自身の背負う刀の片方を外しながら問いかけた。

「あんた、剣術使えるの?」

「…いや、おれはぜんぜん」

首を横に降るルフィに、ローラが刀を手渡す。

すると、突然ルフィの表情がすつと引き締まり、どこか慣れて見える手つきで刀を掴むと、腰を落として構え。

ズパパパパン!

……と、近くにあった木を細切れにしてみせた。

「何じゃこりや〜〜!!?」

「え!! どうなつてんだ!!」

予想だにしない展開に、エレノアだけでなくルフィ本人も困惑の声をあげる。明らかに普段のルフィの動きではなかった。

混乱する二人に、子分達と一緒にばちばちと拍手喝采を送っていたローラが得意げに笑みを浮かべた。

「ウフフフ♡ 今、あんたの体に入れた影は、海軍の手練れ剣士の影よ!!!」

「…!! まさか!!!」

「そう!! そのまさか!!!」

彼らの態度で、エレノアは悟る——影のもう一つの性質を。

死体に影を入れれば、影の持ち主の能力を持ったゾンビができる。

ならば生者に影を入れたらどうなるか……影の持ち主の持つ力が、そのまま生者に加算されるのだ。

思いもよらない事実には、ルフィとエレノアはしばらく呆けてしまった。

「——いいか、だが、これをよく覚えとけ!!」

黙り込んだ彼らに、リスキー兄弟がさらに告げる。

影での強化は、約10分という時間制限付きだと。

影を入れる体の持ち主の意識が保つ限りはいくらでも入れられるが、10分を過ぎれば必ず影は体から出てしまふ、そう欠点を語る。

だが、10分の間だけならば、あらゆる強者の力を宿した強力な戦士になる事ができるのだと。

彼らは自分の影を探す間に、この事実に辿り着いた。

そして、捕らえた影を託し、悪夢を終わらせてくれる者が来てくれることを信じ、今日まで生きてきた。

そして——ついにその時がやってきたのだ。

「わかったな、勝負は10分!!! おれ達が命懸けで手に入れた全ての影をお前らにやる!!!」

「うげ!! そんなに」

「なんつー執念………つて!! お前らつて私も!!」

ぞろぞろと、数十数百もの影を担いで被害者の会が向かってくる。

ぎよつと目を剥くルフィの横で、油断していたエレノアがはつと息を呑んで後ずさつた。ぶわつと尻尾の毛が逆立つ程に。

「空の霧も晴れちまつて、私らの行動できる夜の時間はあと20分程度!! とにかく急ぐのよ!! 気をしっかり持って!! あんたらなら20人や30人分は耐えられる筈」

晴れ始めた空を見上げ、ローラが険しい表情で呟く。

強化の制限時間もわずか、その間に決着をつけなければ全てが終わる……と、彼女達は勝負に出る覚悟を決めていた。

「やりな!!」

「……お……!!」

合図に従い、男達は次々に影を引つ掴んではルフィに、そしてエレノアに突き刺し、飲み込ませていく。

なおここまでの間に、ルフィとエレノアの意味は一切挟まつていなかった。

「うわーちよつと待て!!」

「誰もやるつて言つてないんですけど!!」

「ふぎや……!!」

拒絶の声を上げようと、男達は止まらない。耳を貸してくれもしない。

手元にある全ての影をありつたけ、ルフィとエレノアの反応が続く限り入れ続けるのだった。

——そして、彼らは生まれ出た。

「こいつら……どれだけ気力が強いのか?! スッゴイね、前例ナシ……」

「に、200人分の影が全部入った……!!」

「とんでもねえ!!! さすが希望の星!!!」

目の前に立つ、二体の巨大な二人を前にし、ローラ達は戦慄の表情を浮かべ立ち尽くす。

がたがたと震える彼らの前で、二人は、荒々しい息を吐いて虚空を睨みつけていた。

「フー……フー……」

「グルルルル……!!」

獣のような唸り声をこぼし、彼らは耐えていた。

己が身に宿った絶大な力が溢れ出るのを必死に堪え、そして同時に、仇敵への闘志を極限にまで高めていた。

「お……おい!!! 意識はどうだ?!? ちゃんとお前らか?!? “麦わら”!!! “妖術師”!!!」

「ああ……おれだぜ……!!!」

「力がア……溢れて……止まらないイ……!!!」

調子を問われ、答える声にもどこが余裕がない。

まるで自分が自分でなくなつたかのような心地で、体の中で渦巻く力を押さえつける。

「この子達、今どんだけ強いのかしら…」

「なんかおめエら…感じ変わったな…も少しチビだったよな」

「ああ…!!! 我慢できない…!!! 暴れたくて仕方ない!!!」

「戦いたくてウズウズすんぜ!!!」

「…これならいけるわ!! …さア、時間もない!! モリアの奴に『悪夢』を見せてきな!!!」

怯えていたローラの目に、希望が宿る。

想定以上、自分達の機体をはるかに上回る可能性を秘めた二人を前に、少しずつ明るい未来が見え始める。

そこへ男達があつちらおつちらと、巨大な刀を運んでくる。数人がかりで運ぶような得物も、今のルフィには丁度よかった。

「我らが希望の双星、ナイトメア・ルフィ」!!! 『ビースト・エレノア』!!!」

恨み、悲しみ、怒り、嘆き続けてきた被害者達の願いを背負い。

生まれた二体の狂戦士達は、雄叫びと共に仇敵の元へ向けて飛び出していった。

「ウオオオオオオ!!!」

「ギャオオオオオ!!!」

「ちよつと待て、屋敷はそつちじゃね〜!!!」

……願いを託した者達に、一抹の不安を抱かせながら。  
??

「潰せ潰せ!!! どいつもこいつも踏み潰せエ!!! キシキシシ!!!」

オーズの腹の中から、モリアが哄笑を上げながら命じる。

圧倒的な力を持ちつつも、中身はルフィなため賢さの足りないルフィにモリアが頭脳として加わり、その上カゲカゲの実の能力でさらなる力を得てしまったオーズは、もう誰にも止められなかった。

とある助力を受けつつ自力でアブサロムを下して逃げてきたナミも攻撃に加わったものの、もはや焼け石に水。

相対した麦わらの一味の全員が、抵抗の末に叩き潰されてしまっていた。

「はア……もう少し楽しめるかと思っただけどなア」

大暴れするオーズの肩の上で、ジャービルが嘆息する。

残る二人、他の者よりもずっと非力な男女を、オーズがモリアに命じられるまま何度も踏み潰している。

単なる弱い者虐めでしかないその光景に、鬼神がどこか切なげな顔をしていた時だった。

「おい!!! デケエの!!!」



突如響いた声に、オーズの動きが止まる。

何事か、と静止した魔人は、そしてその腹の中のモリアは声が出た方を見やり、訝しげに目を細めた。

「お前は一体、何を踏み潰してるんだ？ お前の足の下には誰もいねエゼ!!!」

「誰だ、お前」

いつの間にか、屋敷に空いた大穴の中に立っていた一人の男。

そしてその真上、屋根の上に降り立った一人の天使に向けて、怪物達は訝しげに眉間にしわを寄せる。

「……………助かった…」

「どなたか存じませんが危ねエ所…」

彼らの手には一人ずつ、ナミとウソップが抱えられていた。

何がどうなったのかはわからないが、踏み潰される前に救い出されたのだとわかった彼らは、ほっと安堵しながら救い主の顔を見上げる。

「…あんだ、誰？」

「…アイザック・エレノア」

「モンキー!!! D!!! ルファイだぜ!!!」

ジャービルの問いに、彼らは答える。

青く染まった肌に、元の何倍にもなった巨軀を有する男女——ほぼ見る影もないほど変貌した二人が、勇ましく己の名を名乗った。

「は……!! エ……エレノア……!!? どこがよ!!!」

エレノアの小脇に抱えられたナミが、変貌した彼女を凝視して叫ぶ。

顔は確かにエレノア、しかしその目は鋭く隈に縁取られ、別人としか思えないほど威圧感を放っていた。

「似てるっちゃ似てる気もするが……本当なのか?! お前らなのか?!」

「本当におれ達だぜ!!」

「いや、その喋り方も……!! 何があったんだよ!!」

「……あいつら、変身能力もあつたのか?! 天族が見た目の年齢を変えられるのは聞いた事があつたが……それとも……」

ナミの眼下でウソツプも自分を救った男に戸惑いの声を上げていて、足場に降ろされてなお慌てふためいている。

モリアも困惑の眩きをこぼす前で、ルフィは辺りを見渡し、仲間達の無残な姿を目にする。

「みんなやられたのか……」

「ああ、おれ達以外みんなあの怪物ゾンビにやられた!! ……あつちの天族のゾンビは……」

何でか全然手出ししてこなかったんだが」

モリアは困惑したものの、慌てるほどではない。見た目の変化には驚いたが、オーズとジャービルを相手に敵うわけがない。

その自信が、彼に敵を、己が戦力を見誤らせた。

「ふん!! 構わねエ、潰せ!!」

「勿論だ!! 〴〵ム〴〵ム〴〵の〴〵」

ぐんつ、とオーズが右腕をねじりながら伸ばす。

カゲカゲの実際の隠された力『影革命』により、『実体に伴い変化する影』という常識が反転したオーズは、自由自在に変形するようになった。

擬似的に得たルフィの能力を用い、オーズはルフィを排除せんと拳を振りかぶる。

「にゃはは…!!」 第2ラウンド? 上等だ…かかって来なア!!!」

オーズの肩からジャービルが飛び立ち、散々やられておきながら再び向かってきた自身の元の影の持ち主を狙う。

強力な一撃が迫り、慌てて逃げ出すナミとウソップの目の前で。

ルフィとエレノアは、放たれたそれぞれの一撃を片手で容易く受け止めた。

「ルフィは、おれ一人だぜ!!!」

そう、ルフィが告げた直後。

「反対に振るつたルフイの拳がオーズの顔面に炸裂し、圧倒的な巨体が宙に浮いた。  
「何か飛んで来るぞ」

「何だありや」

「雨雲かなんかじゃねエか？」

「でっけエ鳥かな？」

屋敷の壁を飛び越え、頭上に現れた巨体に、ゾンビ達がざわざわと騒ぎ出す。

徐々に近づいてくるその正体に気付き始めると、ゾンビ達は元から青い顔をさらに青ざめさせ、やがて一つの大きな悲鳴を迸らせた。

「「「オーズだア~~~~~!!」」」

ずしん、とオーズの巨体が逆さまに落下する。

その様を横目に、ジャービルの蹴撃を受け止めたエレノアが、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「さつきはア…悪かったねエ…!!! フヌケた様ア…見せちまって…!!!」  
ぎりぎりとせめぎ合う両者。

徐々に双方の顔が鋭く、獯猛に変化し、びりびりと視認できるほどの圧が発生し出す。

「ようやく…互角だ…!!!」

「…ぶる、ぶるふふはははははは!!!」

ジャービルの笑い方が再び変化した直後。  
がんっ！

と、二人の天使の拳が真正面から激突し、衝撃波を辺りにまき散らした。

「オオオオオオオオオオ!!!」

## 第253話 // 狂戦士対決 //

「やってるやってる、あいつらが怪物達とやり合ってる!!」

「今の内だ!!」

がこん、どかん、ぼっかーん!

天空で二体の天使が激突し、地上では青い肌の異形が魔人の鬣を引っ掴み、物のように振り回し地面に叩きつける。

モリアはその戦いに巻き込まれ、オーズの中を思い切り転げ回るばかりになっていった。

「いたぞ!! 希望の双星の一味!! みんなやられちまつてる!!」

四体の怪物達が暴れる戦場を横目に、被害者の会が動く。

屋敷のあちこちで倒れる、満身創痍の麦わらの一味を探し出し、駆け寄っていく。

「ひどいキズだ……!!」

「白骨化してる奴もいるぞ!! ムゴイ!!」

「ここに倒れてると危険だわ!! 希望の双星の一味を救え!! 安全な場所で応急処置を

!! そしてこいつら私の好みよ!!」

あまりに酷い傷跡に顔をしかめながら、ローリング海賊団の面々が一味にそれぞれ処置を施していく。

ローラは指示を出しながら、暴れ回る狂戦士達に強い懇願の眼差しを送った。

「頼んだわよ……………!! ナイトメア・ルフィ!!! ビースト・エレノア!!!」

「ギャオオオオオオオ!!!」

「あああああああ!!!」

空中で何度も、白虎と猛牛の天使が激突し大気が震える。

少し前まで、一方的にやられるだけだったエレノアだが、いまや真正面から殴り合えるほどに強化され、果敢に挑んでいた。

その様を目の当たりにし、屋敷から降りてきたナミとウソップが驚愕の表情でローラ達を凝視する。

「何だと……………!!? じゃあつまり……………!! その犠牲者200人分の影をつめ込んで、おめエ

らがルフィとエレノアをあんな風にしたのか!!!」

「その通りよ!! 希望の双星の一味!!!」

「正直、おれ達もあいつらのパワーアップにはビビった!!」

大事な仲間にも勝手な事をされ、怒りをにじませた声を漏らすウソップ。

その気持ちを十分に理解しつつ、リスキー兄弟が必死の顔で無事な二人に説明を続ける。

「だが、その強さも持つてあと2・3分!! つめ込んだ影もやがてあの体を離れていく!!」

「おめエらの船長達に勝手なマネして悪かったが、おれ達の希望を全てあいつらに預けたんだ!!」

そう言われて、ナミもウソツプも何も言えなくなってしまう。

他の仲間がやられた今、確かにあの二人だけが最後の希望なのだ。この好機を逃すわけにはいかない。

「もう夜明けも近いわ!! この数分が島中の犠牲者の命運を決めるのよ!!」

「頼むぞ麦わらア!!! 妖術師くっつ!!! おれ達ア太陽の下を歩いてエ!!!」

「もう一度!! “人間” になりてエんだよオ!!!」

片や魔人を振り回し、片や鬼神と殴り合い、数分前とは比べ物にならない恐ろしい戦いを繰り広げるルフィとエレノア。

彼らの背を見つめ、ローリング海賊団は精一杯の声援を送り続けた。

ずしん、と胸を斬り裂かれ、膝をついたオーズ。



彼はぎこちなく起き上がりながら、本来持つていないはずの剣術や怪力で自身を翻弄するルフィを鋭く睨みつけた。

「……………このヤロー……………チビのくせにイ!!! ゴムゴムの“オ:!!!”」

片腕を伸ばし、捻る。影の力で再現された必殺の一撃を叩き込まんと、目の前の小さな敵を見据える。それを、ルフィは無言で睨みつけた。

彼らの頭上では、二人の天使の激突が続く。

だが少しずつ、エレノアの呼吸が荒ぶり、均衡が片方に傾き始めていた。

「にやはははは!!! 息が切れてきたねエ!!? 力を嵩増したところで、精神がどれだけでもつかねエ!!!」

「はア……………はア……………!!? うるさい!!! ぐるぐるるる……………!!!」

「諦めなよ!!! 今のあるたじや、あの子達の旅にしがみつくと事すらままならないのさ!!!」

ごっつ、とジャービルの一撃がエレノアの顔面に決まる。

ぐらりと体を傾がせるエレノアに、影は怒りと苛立ち……………そしてどこか嘆きと悲しみをにじませた顔で告げる。

「弱き者に“王”に付き従う資格はない……………!!? どこへでも失せて!!? 陽の光に怯えながら!!? 私が代わりに使命を果たす様を眺めているがいい!!!」

片脚を振り上げ、黒く染め上げる。

強靱な肉体をさらに覇気で固め、かつてより遥かに強力な一撃を構える。

「お前はもう……どこにもいけない……!!!」

ゆっくりと落下を始める元持ち主に向け、振り上げた脚を勢いよく落とす。

肩を砕き、動く事すらできなくなるような容赦のない蹴撃を、断罪の刃のごとく振り下ろす。

「これ即ち、無双の一振り………我が王の霸道阻し慮外者共への鉄槌なり!!! 墜ちろ、半

端者!!! チャンドラハース 『羅刹王剣』!!!」

空気摩擦で、ジャービルの一撃に火が灯る。渾身の一撃は隕石のごとき威力を誇り、エレノアにまっすぐ向かう。

目前に染まるそれを、エレノアは静かに見つめ……拳を握る。

「——『流桜』」

黒く染まった拳を、振り下ろされた蹴撃に合わせて突き出す。

放たれた拳撃は、蹴撃に触れる事なく、まるで見えない壁を生み出すように蹴撃を弾き返した。

「誰にもエースは譲らない………私の『王』は私が守る。たとえ相手が……私であったとしても」

かつ、とエレノアの髪が燃え上がる。

白く輝く己の中で火を燃やし、その手でぱちんと指を鳴らし——一振りの漆黒の炎の剣を生み出す。

それを確と掴み、ジャービルの腹を思い切り薙ぐ。吹き飛ぶジャービルの前で、剣の火力をさらに強める。

「魔剣抜刀…呪い上等…!!!」

吹き飛ばされたジャービルは、ちょうどオーズの腹の前に移る。

その瞬間、オーズの一撃を弾いたルフィが、自身を回転させながら殴打の嵐を二体にまとめて浴びせかけた。

「『ゴムゴムの』!!! 『ストーム  
スレーヴァテイン』!!!」

「『鮮血呪剣』!!!」

ルフィの放った拳がジャービルに突き刺さり、オーズの腹の中に押し込み、モリアもろとも押し潰す。

次々に強烈な拳が叩き込まれ、さらにエレノアの炎の魔剣が突き刺さり、オーズもジャービルもモリアも、一緒に叩きに叩きのめしていく。

災害のような無数の暴虐に、怪物達はもはや反撃する事もできず、やがてゆつくりとその身を傾かせていった。

「ブツ倒れるわよ!! 気を付けな——っ!!!」

「うわア~~~~!!!」

オーズの巨体が、再び屋敷に倒れ込む。

その様を前に、地面に降り立ったルフィとエレノアの体から次々に影が抜け出し、天へ登ってどこかへ飛んでいく。

全ての影が抜けきると、二人は力なくその場に倒れ伏した。

「おい、ルフィ大丈夫か!!!」

「……やったわ、あいつつたら……本当に勝ってくれた」

沈黙した二人のもとに、ナミとウソップが慌てて駆け寄る。

ローラ達はそれに構う余裕などなく、同じく沈黙したオーズを凝視し、ふるふると我が身を震わせる。

「オーズと『鬼神』とモリアを倒したア~~~~つ!!! みんなの影が戻って来るぞ~~~~つ!!!」

わっ、と歓声を上げ、両手を挙げて喜びをあらわにするローリング海賊団。

動く気配のない最大の敵が沈んだ光景を前に、大いにはしやぎ、泣き、叫んでいた。

「やったぞ希望の双星!!!」

「ありがとう~~~~!!!」

「スリラーバークが!!! 落ちたア~~~~!!!」

雄叫びをあげ、ルフィとエレノアを讚える男達。

だが次第に冷静になってきたのか、起きる様子のない彼らの元にぞろぞろと集まり始める。

「無理させちつて何なんだが体、大丈夫か!!」

「おいルフィ!! エレノア!! しっかりしろ!!」

「二人とも!!」

「肉体の疲労は並じやないだろうね。それぞれで100人分の戦闘力を一人で発揮したんだ」

本来二、三人入れたら限界である、生者に影を入れる強化法。

戦闘中に意識を失っていてもおかしくなかったのに、彼らはしっかりと制限時間を使いつ切った。負担は相当だった。

「とにかく早く早く犠牲者の影を全て取り返さにやあ!!」

「そうだ、急ごう!!」

「東の空もだいぶ明るんできたぞ!! やがて朝だ!!」

全力を尽くしてくれた恩人に報いようと、未だ戻ってきていない影の事を思い出し動き出す男達。

その言葉で、ウソップがそういえばとローラに尋ねた。

「——で、どうやって影を返して貰うんだ!! ウチも5人影を取られてんだ!!」

「それもまた一苦勞ね……本当は『麦わら』にやって貰いたいんだけど」

「無理だろう、もう体は動かねエ筈」

眠ったままのルフィを見やり、険しい顔になるローラ。

聞けば、ゾンビに入った影は支配者であるモリアに『本来の主人の元へ帰れ』と命じられない限り戻らないのだという。

それに素直に応じるかどうか、沈黙している現状でははつきりとは分からなかった。

「考えてねエでやってみよう!! 何とかモリアを起こして力尽くで言わせるしかない

!!」

「影が戻って来なきや倒した意味もねエんだ」

生き延びるために、自由を取り戻すために、やれるだけの事をやるべきだ。

そう、男達がやる気を見せたその時。

ずしん、と。

彼らの周囲を、見覚えのある影が覆った。

「「「うわああああああ〜っ!!」」」

まさか、と振り向き見上げた彼らは、再び悪夢を目の当たりにする。

仕留めたと思っていたオーズが、ごきりと首を鳴らしながら、再び立ち上がった

のだ。

歓喜が絶望に変わり、男達は悲鳴を上げて後ずさった。

「……………」

オーズは無言で彼らから目を逸らし、自分の腹に手を伸ばす。

中で気を失っているモリアを掴み、引つ張り出して外に放り捨て、そして……力なく横たわる天使を、そつと掌に乗せて持ち上げた。

「……オイ……お前……………大丈夫……か……………」

「……意識は……あるよ……………いや、もうとつくに死んでるんだけどねエ……………」

ぼろぼろのオーズは、同じくぼろぼろのジャービルに安否を問う。

ふつと自重気味な笑みを浮かべた彼女は、自由の効かなくなった体を強引に起こそうとする。

「ちよつと待つて……………今……加勢に……………!!?」

そう言つて、右腕をついた瞬間。

ぼきりと、ジャービルの腕が肩から碎け、彼女は再びオーズの手の中で倒れ込んだ。

「……ああ、この体も……限界……………みたいだねエ……」

呟くジャービルの口から、ずるりと黒い影が漏れ出る。

ゾンビの魂たる影が徐々に、鬼神の中から解放されようとしていた。

「あのデブが勝とうが負けようがどうでもいいけど……このままあいつらにやられっぱなしなのも癪だな……ハア……もう少し……付き合つて貰わないと……ウツ……!!!」

薄まる意識、抜けていく力を総動員し、ジャービルは残った手を伸ばすと。

がつ、と自らの影を掴み。

それをずぶりと、オーズの掌に突き立てて見せた。

「……………!!? お前……何を……!!?」

「どうせまた死ぬなら、今度は君の助けになつておきたいのさア………どれだけ持つかはわかんないけど………悔いは……残したくないからね……」

微笑みを浮かべ、鬼神はオーズを……己の認めた「王」を見上げる。

その目を翠色に染め、それまでであった自分自身への苛立ちや嘆きを一切消し去り、彼女は申し訳なさそうに「王」を見つめた。

「あとは……頼むよ………我が王……オーズ」

「お前……!!!」

自分の中に入り込んでくる力に、オーズは大きく目を見張り立ち尽くす。

脳裏に浮かぶ知らない記憶……いや、肉体に刻み込まれた記憶が蘇り、魔人の目に涙が滲み出す。



「お前……まだ……おでを置いていくのが……!!? ずっと……ずっと一緒だど………  
誓っただろ……!!? なア!!」  
「……ごめんね」

幼い子供のように涙をこぼし、駄々をこねる魔人に、ジャービルは虚ろな目でこぼす。  
ゆつくりと「王」の肉体に混じっていく影を頼りに意識を保ち、刹那に溢れ出した感情を唇を噛み締めながら口にする。

「ごめん……ごめんね……弱くて……ごめんね……でも……今度は、君のそばにいるから……君と一緒に……最後まで……戦うから」  
そつと手を伸ばし、「王」に乞い願う。

かつての後悔と切望を影を通じて託し、最後にふっと、優しい微笑みを見せる。  
「だから……勝って」

その瞬間、ずるりと影がジャービルの中から完全に抜け出し、ジャービルの手から力が抜け、ぱたりと落ちる。

代わりに、オーズの中に影が完全に入り込んだ。

「よ……妖術師の影が……!! オーズに……!!」

眼下で敵の人間が呆然と呟く声を聞き流しながら、オーズはもう動く事もなくなつた。ジャービルを見つめ、ただ立ち尽くす。

彼の視界に、いつかどこかで見た景色が……想い出が重なった。

——やア、君がオーズ？

私はジャービル・イヴ・フレイヤ、通りすがりのちよつとやんちゃな旅人さ！

——お前、何だ？

羽生えでる……鳥か？

最初の、出会い。

宝物や美味しいものを奪い、自分の縄張りに持ち帰ろうとしていた自分に、臆する事なく話しかけてきた、変わり者。

——君はずいぶん大きいねエ……古代巨人族なんて初めて見たよ!!？

ねエ、私と一緒に自由に大暴れしないかい!!？

一緒に旅をしてくれる人をずっと探していたんだ……君みたいにスゴイヤツを!!!

——スゴイ？

おではスゴイのが？

誘いをかけられ、訝しみはしたが、褒められた事のない彼には彼女の言葉は新鮮だった。

気分が良くなり、それ以上に……面白そうだ、そう思った。

——いいぞ、何だか楽しそうだ!!!

それからの旅は、本当に楽しいものになった。

彼女は自称『ちよつとやんちやな旅人』だったが、相当な悪名があるようでいろんな敵が狙ってきた。

おかげで獲物には困らず、彼は以前よりも多くの宝物が手に入れられた。

——おで、お前と一緒にだと、楽しい!!?

おでとお前が揃えば、最強の大悪党だ!!!

——あア、そうだとも!!!

私達はこの世で一番自由でスゴいヤツらだ!!!

何よりも、彼女との旅は楽しかった。

物知りで、褒め上手で、優しくて、明るくて、今まで出会った事のない種類の女で、共にいると心も体も満たされた。

彼は心の底から……彼女の事が好きになっていた。

——ずっと一緒にだ!!!

おで達は……ずっとずっと一緒にいるんだ!!!

そんな日々がずっと続くと思っていた、愚かにも。

彼女を狙った敵が、恐るべき「力」を以つてして彼女を傷つけ、その命を奪うまでは。

——…ダメだど……死んじやダメだど!!!

大丈夫だイヴ、絶対に守ると!!!

あんな奴らにお前は連れでいがせねエがらな!!!

目を閉じたまま、動かなくなつた彼女を手に、彼は氷の大地を彷徨い歩いた。誰も来れない、二人だけの場所を求めて。

——おで達はずっと一緒だど!!!

ずっとずっと……一緒に、ずっと一緒にいるんだど!!!

もう、彼は何もいらなかつた。

宝も国も、彼女だけがいて笑つてくれるなら、それだけでよかつた。

歩いて、歩いて、歩き続けて。

彼の立つ氷の大地が、彼を支えきれず割れて砕けて、彼は遙か地の底まで落ちていった。

その手に抱いた彼女を、最後まで手放す事なく。

——絶対離さねエど……絶対、絶対——

思い出の旅から戻つたオーズは、ジャービルの亡骸を己の腹の中にそつと入れる。ま

るで、儂い硝子細工でも扱うように。

すると、ふと……びりびりと島の大地が震え出す。

オーズを震源に、スリラーバークそのものが恐怖を抱いたかのように、大きく震えだした。

「お前ら……許さねエ……!!? 許さねエどチビ共オ……!!!」

ずしん、と足元に横たわるモリアを踏み潰し。

足元に蔓延る無数の敵に向けて。

鬼神の仇討ちに燃える魔人が、憤怒の咆哮をあげて巨腕を振り上げた。

## 第254話 “陽の下へ”

魔人の咆哮が大気を、島を、全てを震え上がらせる。

怒りに燃える巨大な怪物を前に、勝利の歓喜に酔っていたローリング海賊団は、今や恐怖で凍り付いてしまっていた。

「何てこった……もうダメだ……!! “麦わら”の一味ももう、みんなやられちゃってるし……!!」

「おれ達の切り札の“影”もみんな使い切った……!! こいつをなぎ倒せる力なんてもう残ってやしねエよ!!!」

「畜生オ!!!」

悔しげな声を上げるローラだが、嘆いていても無意味だ。

オーズは自身も満身創痍の体のまま、敵を全て踏み潰すという気迫に満ちていて、とても勝てる未来が見当たらない。

「……………やっぱリゾンビに力では勝ち目はねエんだ……不死身なんだ……本当にコイツら……!!!」

「もうリミットだ……!! 今日夜が明ける……!! おれ達ア、この闇の暮らしから抜

け出す事なんて…できねえんだ」

男達の心が、ぼきりと折れる。これまでかき集めてきた力の全てが無に帰した事で目の前の全てが真つ暗に染まっていた。

もう、立ち上がる事もままならない者さえ現れていた。

「諦めよう!!! ここに居たつて死ぬだけだ………!!!」

「急いで…森へ帰ろう!! 暗い暗い…光の差さねえ森へ……!! また帰ろう…」

微かな希望を信じて戦い続けた彼らは、全身から力が抜け出るのを感じながら、巨大な怪物から逃れようと後退る。

——しかし、踵を返そうとした彼らの前に。

ざり、と瓦礫を踏み、進み出る一人の剣士の姿があつた。

「お…おめえ!!」

「……ルフィに何が起きたか知らねえが…充分な追い込みだ」

二刀を手に、ゾロが微塵も臆した様子を見せずに、オースに向かつて進む。

視線で男達を押しつけるようにして、ぼろぼろの体を揺らがせる事もなく、真つ直ぐに敵を見据えていた。

「……あの巨体の攻撃受けといて…まだ立つの………!!? …どっちがゾンビだかわか

りやしないわ……!!」

ぞつと顔を青く染め、戦慄の声をこぼすローラ。

この状況でなおも闘志を失わずにいる彼には、人外じみた悍ましさと恐ろしさを抱くほかにない。

そこへ、彼女の子分達の一部から騒がしい声が上がってきた。

「おい!! こつちに避難させといた麦わらの一味どこいった!!」

「え!! いや知らねエよ!! 意識もねエのに勝手に動くわきやねエだろ!!」

「あれ……!! ここにいた無事だった二人は!!」

「オーズが立ち上がるまで、確かにここに!!」

応急処置を施していたはずの数人と、無事だったナミとウソツプの姿が見当たらず、男達は戸惑いの声をあげ、やがてはつと目を見開く。

「まさか……!! 一早く逃げたって事は……!! あいつら全員逃げたのか!!」

愕然としながらも、内心では仕方がないと納得する。

強化された一味の船長とその仲間が全力をぶつけてなお仕留めきれない怪物に立ち向かい続けられる訳がない。

と、立ち尽くす彼らのすぐそばで、再度瓦礫を踏む音が響いた。

「え!! 麦わら!!」

「……もうちよつと……足りなかったか……!! ……あと一撃入りや……!!!」



振り向けば、先ほどまで気を失っていたルフィが目を覚まし、ずるずると体を引きずっている。その目は間違いなく、オーズを見据えていた。

さらにもう一つ、足跡が響く。

また後ろを振り向けば、燃える髪を携えたエレノアが歯を食いしばりながら立ち上がろうとしていた。

「…!!  
!!」 まだ……………燃やせるよ…!!」

「うおおお!!?」

「あんた大丈夫か!! 髪燃えてんぞ!!」

傷だらけの体以上に異常な現象に襲われている天使に、心配と困惑の混じった目を向けどよめく男達。

彼らを放置し、ルフィが体を起こしながら声を張り上げた。

「ロビン!!!」

「ええ、いるわよ」

「うわ!! 逃げてなかった」

ルフィの呼び声で、姿を消していた一味の一人が姿を現し、男達はびくつと震えてその場から飛び退く。

「上へ飛びてエんだ!!」

「じゃ、足場を作るわ」

一瞬でルフィの意図を理解した彼女は、幽霊島のマストの方を向いて両手を交差させる。

そこに、かたかたと音を立てて白骨死体が……参戦したブルックが今にも折れそうな体で立ち上がった。

「私にも……できる事があるならば……!!!」

「おわー!! 白骨死体まで動き出した!!!」

「え——何で!!!」

「よし……ブルック、頼みがあるっ!!!」

ブルックの能力を知らない男達が、悲鳴を上げて硬直する。

ルフィは立ち上がった骸骨真摯紳士に頷き、一切疑う様子を見せずに協力を求む。

するとその場に、何者かの呆れとやる気を宿した声が響き渡った。

「そう来ると思った! もう全員、サポート態勢に入ってるわ!!!」

「うおー、さっきのねーちゃんそこに?!」

「コイツらまさか!! 逃げたなんてとんでもない……!!! オーズが立ち上がった瞬間に……!!!」

間に……!!!

絶望していたローリング海賊団の面々の顔色が変わる。

もう全ての希望が潰え、再び消滅の恐怖と不自由な暮らしに苦しむ日々が始まるのだと嘆いていた彼らは、驚愕でただ叫ぶだけになっていた。

「迎撃の準備を始めてたんだ!!!」

姿の见えない他の一味の仲間も、屋敷のあちこちで動く音がする。

倒れている間に、それぞれが完全に役目を認識し、さしたる合図もないままに呼吸を合わせている。

圧倒的な絆を見せつけられ、誰もが言葉をなくしていた。

「信じられねエ……!! コイツら……微塵も諦めてねエっ!!!」

「おい!! おめエら邪魔だ!!! どいてろ!!!」

「お言葉に甘えまして……っっ!!!」

呆然としていたローリング海賊団は、ゾロの怒号にはっと我に返り、慌てふためきなから逃げ出していく。

邪魔な連中が全員離れたところで、ついにオーズが再び動き出した。

「ウオオオオオオオオ!!!」

足を振り上げ、踏みつける。たったそれだけの動作で地面は砕け、衝撃であらゆるも

のが浮き上がる。

ぐらぐらと揺れる足場に耐えながら、エレノアが天に向けて勢いよく飛び立った。

「注意を引き付ける!! その間に!!!」

「おう!!」

弾丸のような鋭さで天へ至り、ぱんつと掌を打ち合わせる。

途端に彼女の手の間で暴風が吹き荒れ、一式の弓矢を形作り、鋭い風の矢をいくつも撃ち出した。

「ガンディイヴァ 施雄神弓!!!」

ずどどどどつ、といくつもの矢がオーズを襲う。

放たれたそれらはオーズの体に小さな穴を開けるが、硬く強靱な皮膚を貫くには至らず、鬱陶しそうに払いのけられる。

その間に、ロビンがマストの壁面に無数の足を咲かせていく。

「脚場咲き!!」

「行きます、ヨホホ!!」

「頼む!!」

頂上に続く足場が出来上がり、ブルックはそれをルフィを抱えたまま跳んでいく。あつという間に、オーズの背丈を軽く超えてみせた。

「逃がすかア!!」

視界の端に移ったルフィとブルックを睨みつけ、オーズは右腕を振るう。

外壁に腕を叩きつけ、すでに半壊しかけているマストを押し折ろうと砕き、大きく揺さぶる。

その衝撃で、危うくブルックは足場を踏み外しそうになった。

「あぶつ…あぶあぶつ!! 危なアつ!!」

「なんかメチャメチャ怒ってんな、アイツ…!!」

「ウオオオオオオ!!」

焦るルフィとブルックを追い、オーズが手を伸ばす。怒りに燃える目で二人を射抜き、握り潰さんと巨腕を向ける。

その時、オーズは不意に周囲に湿り気を感じ、いつのまにか広がっている局所的な雲に困惑の目を向けた。

「ん…!! 何だこれは、煙? 雲?」

「天候は『雨』、『冷気泡』! 『レイン』テンポ!!!」

ナミの動作で、オーズの頭上にでき上がった雨雲から雨が降る。

魔法のような光景に驚き上がる中、科学の力でできた雨雲は土砂降りをおおしく見舞い、彼を水浸しにしていく。

その間に、フランキーが行なっていたマストの内部の工事が完了する。

「よーし!! 応急配管工事完了だ!!!」風・来・砲!!!」

オーズの死体を封印していた冷却装置を改造し、冷気が外に飛び出すように管をつなげたフランキーが、壁に空気砲を炸裂させる。

ちようどオーズの足元が見える位置に、大きな穴が開かれた。

「目いっぱい回せー!!!」

「回す——!!!」

「発射!! 特大冷蔵庫の超低温冷気砲!!!」

ウソップの操作で、冷却装置が起動し強力な冷気を発射する。極寒の地の吹雪のような勢いで放たれた冷気により、水に濡れたオーズの両足が瞬く間に凍りついた。

「うおー!! すっげー!!!」

「冷気で雨が凍った!!!」

「こんなモンで……おでを止められるかア!!!」

拘束が成功し、歓声をあげるローリング海賊団。

だがオーズは怒りで頭に血を昇らせ、氷の拘束を無理矢理破壊しようとして力を込める。足枷からびきびきと軋む音が上がった。

しかしそこに、巨大な二本の槍を携えたエレノアが高速で舞い降りる。

「そこから…!! 動くなつてんだよ!!」  
滅竜聖槍「!!!」

二本の槍を投擲し、凍りついたオーズの足の甲をそれぞれ貫く。氷の枷に加えて地面に深々と杭を打ち込まれ、流石の魔人も移動が不可能になる。

さらにそこへ、巨大な鎖を足に引つ掛けたサンジが飛びかかっていった。

「次はこつちだア!! 行け!!」

スリラーバークの進路を保つ舵を操る鎖を、オーズの方から脇に袈裟懸けになるように引つ掛ける。

外そうともがくオーズだが、足の自由が利かないため叶わず、さらに身動きを封じられていく。

「投げろオ!!」

「ホントに投げますよっ?!」

「大丈夫だ!! おれはゴムだ!!!」

彼の頭上では、マストを登りきったブルックがルフィを抱え上げて躊躇いの声を上げていた。

疲弊し身動きの取れないルフィの頼む通り、ブルックは覚悟を決め、ぽいっとオーズの頭上に向けて投げ落とした。

「ギア3!! 骨風船」

空中で、ルフイは自身の指に歯を立て、思い切り息を吹き込む。

残る力をかき集め、両腕を巨大化させた彼は、背後に長く伸ばして必殺の一撃を放つ準備を整える。

「ゾロ!! オーズの腹を引かせて!!!」

「任せとけ、三刀流奥義!!!」

動き出したルフイに合わせ、舵の上に移動したチョッパーがオーズの体勢を確認しながらゾロに叫ぶ。

指示通り、ゾロは三刀を構え、回転させながら自身の奥義を発動する。

「三・千・世・界!!!」

ずばつ、とオーズの腹が斬り裂かれ、衝撃で体がくの字に曲がる。

ぐらりと傾ぎかけた巨体を見下ろし、舵を操る装置の前に移動していたサンジが操縦桿を傾けた。

「今だな!! いくぞ!!」

がこん、と装置が起動し、舵の鎖が巻き上げられる。

装置の起動によって、枷と鎖にとらわれていたオーズも巻き込まれ、オーズは無理矢理体を起こされ、引き上げられていく。

「いいぞサンジ!! オーズの背骨は今まっすぐだ!!」



本来S時に曲がる事で受けた衝撃を緩和できるようになっている人の背骨。

それをまつすぐにする事で、真上から直撃した衝撃を逃がさず、より凄まじい破壊力をぶつける。

チョップパーの医者としての知識が、ルフィの放つ最大の一撃を援護する。

「行つて、ルフィ!!!」

「ゴ武運を!」

「特大の一発をくらえ!!!」

全ての準備が整い、もうあとは全力をぶつけるだけ。

みるみる迫る魔人の顔面めがけて、ルフィは渾身の力を込めた巨大な掌底を構える。

「ナメるなチビ人間!!! お前の方こそ吹き飛ばしてやる!!!」

これ以上好き勝手されてたまるか、とオーズは苛立ちに満ちた声を張り上げ、迎撃のために右腕を構える。

だが、硬く握り締めた拳を振りかざしたその瞬間。

ぼぎん!と嫌な音がして、オーズの腕がだらりと垂れ下がった。

「ウウ…!!? 動がねエ……………!!! 右腕が…!!! 畜生オ!! 動かねエ!!!」

「ゴムゴムの”オ…!!!」

蓄積した損傷により、ついに限界を迎えた右腕に狼狽するオーズ。

その隙を見逃さず、ルフィは自身の両腕にさらに力を込め、掌を前へと押し出す。

「う!! …うお、行けエ~~~~!!」

「やっちまえ麦わら~~~~!!」

「!! あれは……!!」

雄叫びと応援の声をあげるローリング海賊団を尻目に、状況を見守っていたエレノアの目ははっと見開かれる。

押し出されたルフィの両手が、突如漆黒に染まった。

エレノアの扱き、度重なる戦闘、重度の疲弊を無視しても続けた戦いにより、限界を超えたルフィの中で一つ、新たな力が覚醒していた。

強靱な硬度と破壊力を備えた一撃が、ついに魔人を打ち倒さんと放たれる。

「『<sup>ギガントパンツァー</sup>巨人の重戦車』!!!」

従来の一撃よりもはるかに強力な一撃が、ついにオーズの顔面に炸裂する。

顔は潰され、牙は砕け、体内で背骨が次々に砕け、魔人の肉体がみるみる破壊されていく。

器が破壊されていく中、オーズは唯一動く左手を虚空に伸ばした。

「……………フレイヤ……………!!!」

微かな眩きを残し、オーズの目から光が消える。

巨体はゆっくりと傾き、虚しく左手を伸ばしたまま、やがて大きな音を立てて地面に倒れる。

魔人は完全に、沈黙し活動を停止したのだった。

「……いくら何でも、あそこまでやられちゃあゾンビも立てねエ!!」

「敗けた……オーズが……!! 今度こそ完全に……!!!」

倒れたオーズの最期を目の当たりにしたゾンビ達は、ごくりと息を呑み立ち尽くす。無敵と思いつ込んでいた魔人と鬼神の敗北に、もはや言葉も出ない。

「どうなるんだ……スリラーパークは……!!」

その問いの声に、答える者は誰もいない。

瓦礫に混じり、転がったままの哀れな鎧の残骸達も、目の前の光景が信じられない様子で震えていた。

「……ウソだろ……!!?」

「あの怪物達が……一体とも敗れるとは……!!!」

単なる獲物だったはずの麦わらの一味。

彼らもたらした衝撃的な結末に、彼らの敵は絶望に、味方は心からの歓喜に満ちていた。

「勝ったわ——っ!!! 今度こそやってくれた~~~~っ!!!」

「ありがとうお前ら、最高だア!!! やっぱり希望の星だったア!!!」

喝采をあげ、恩人達讃え駆け寄ってくるローリング海賊団の全員。

その恩人達の頭に礼の限りを尽くさねば、と意気込む彼らは……見る影もないほど縮んだルフィを前に、ぎよつと目を剥いた。

「え~~~~~~~~!!?! 小っさ!!! あんた誰?!」

「う~~~~~~~~!!!」

「何で縮んだの?!」

ギア3の影響でしばらく縮んだままのルフィは、驚愕の視線を浴びながら呻くばかり。起き上がるのも億劫なほど、疲れ切っていた。

そんな騒動を横目に、チョツパーを抱えて舞い降りていたエレノアは、沈黙するオズに訝しげな視線を向けていた。

「意識がない……? 塩で浄化したわけじゃないのに……さつきも妙な事言ってたみたいだし、どうしたんだろ、アイツ……?」

横たわるオズは、まるで動く様子がない。

よく見れば、目から涙のような液体が流れた後があるように見え、勝利の余韻に浸る気分にもなれなかった。

「……………な~~~~んか、後味悪い決着だなア……」

「うん……」

エレノアに降ろされ、地面に降り立ったチョップパーも険しい表情でオーズを見やる。そばに寄ってきたロビンに、躊躇いがちに話し掛けた。

「…なア、ロビン。もしかしたら、さっきのオーズって……」

「…そうね。彼女みたい……その身に刻まれた思い出が… “彼” を動かしていたのかも…」

彼女達が戦った、D r. ホグバックに仕えさせられていたメイド……生前は舞台女優だったというゾンビ。

彼女もまた、理屈では語れないような不思議な姿を見せていた。

「肉体の支配を…影から奪い返すほどに……ほんの一時……自然の摂理に逆らって、現世に引き返すほどに…… “彼女” を想っていたのかもね」

その不思議を解き明かす事は、おそらく誰にもできないのだろう。

優れた知識と頭脳を持つ彼女でも、そう思わざるを得なかった。

## 第255話 “悪夢の終わり”

「おいルフィ!!! 早くお前らの影を取り戻せ!!! 喜んでる場合か!!! てめえら全員消滅しちまうぞ!!!」

「影……そうだ!! 急がにやあ」

縮んだまま横たわっているルフィにゾロが叫び、その場の全員がはつと我に返る。空を見れば、夜はほとんど明けてしまっている。

一刻も早くこの一件を解決しなければ、全員が最期を迎える事となる。

「さア、モリアを叩き起こして影を返して貰うのよ!!! 朝日は、もうそこまで来てる!!!」  
「起こすにや及ばねえ……………」

ローラが叫んだその瞬間、ゆらりと一つの巨体が起き上がる。

ぎよつと目を剥いて振り向いた一同の目の前で、ぼろぼろのモリアが大きく息を荒げ、ルフィ達を睨みつけた。

「モリア!!!」

「…………目……目を覚ましたなら丁度いいわ!! さア…………む…………麦わら達にまたブチのめされたくなかったら!!! 私達の影を全部解放しなさい!!!」

「そうだ、返せコノヤロー!!!」

一瞬気圧されるローラだったが、いくら七武海とはいえ、満身創痕の敵に何ができると気を持ち直し吠える。ルフィも同じくモリアに怒鳴りつける。

「キシシ……ガキのケンカじゃあるめエし………!!! 本物の海賊には“死”さえ脅しにならねエ」

だが、モリアは微塵も臆していなかった。血まみれの姿のまま、より一層不気味な笑みを浮かべてローラ達を睥睨するだけ。

傷だらけのまま格の違いを見せつけられ、ローラは今度こそ黙り込む。

「……おめエら“森の負け犬”共が関わっていたとは……麦わらと妖術師の過剰なパワーアップの謎が解けた……!!! この、おれのカゲの能力を利用するとは………忌々しい!!!」

「………う……うっさいわよ!!! 影返しなさいよ!!!」

なおも叫ぶローラだが、モリアはもう視線を向ける事すらない。

彼の憎悪に満ちた目は、ルフィに一直線に向けられていた。

「“麦わら”ア、てめエよくもおれのスリラーバークを、こうもメチャクチャにしてくれやがったな………!!!」

「お前がおれ達の航海を邪魔するからだろ!!! 日が差す前に早く影を返せ!!!」

小さくなったまま吠えるルフィ。焦りからではなく、敗北したのに負けを認めない相

手への苛立ちから顔をしかめ、声を荒げている。

最初から最後までまるで恐怖を抱いていない青年に、モリアは嘲笑の声を漏らした。「航海を続けても、ためエらの力量じゃ死ぬだけだ……新世界」にや遠く及ばねエ……!!!

なかなか筋のいい部下も揃ってる様だが、全て失う!!! なぜだかわかるか!!!」

突如、意味のわからない言葉を口にし出したモリアに、ルフィは困惑の目を向ける。

どこか、今のモリアからは狂気じみた感情が伝わってくる。今ではなく、自身の遠い過去を重ねているような、異様な様子に見えた。

「おい!!! 麦わら!!! 喋ってる時間なんてねエよ!!!」

「見ろ、空を!!! こんなに明るんできた……!!! 早く影を取り返してくれっ!!!」

「おれは体験から答えを出した。大きく名を馳せた有能な部下達を、なぜ、おれは失ったのか……!!!」

ローリング海賊団からの急かす声にも反応せず、モリアは語り続ける。

やがて、その場にいた全員が気づき始める……モリアの影が、ざわざわと不気味に蠢いている事に。

「仲間なんざ生きてるから失うんだ!!! 全員が初めから死んでいるゾンビならば、何も失う物はねエ!!! ゾンビなら不死身で!!! 浄化しても代えのきく無限の兵士!!!」

ずるん、とモリアの影が変形し、無数に枝分かれし伸びていく。まるで蛸や磯巾着の



触手のように、モリアを中心に影が広がっていく。

慌てて飛びのく生者を無視して、影は島中へ向かっていった。

「おれは、この死者の軍団で再び海賊王の座を狙う!! てめえらは影で、おれの部下になる事を幸せに思え!!」

伸びた影が、島中のゾンビ達の足に張り付く。どよめく彼らについた影は、ぞぶりと彼らの中から彼らの魂たる影を抜き取る。

影を抜かれたゾンビ達は、元の死体へと還りその場に崩れ落ちていく。

—— さア、スリラーバークの全ての影達よ……!!!

このおれの力となれ!!!

抜き取った影を吸い上げ、モリアの影が脈動する。大地から水を吸い上げる木の根のように、数多の影をモリアの中に溜め込んでいった。

//  
シャドーズ・アスガルド  
影の集合地

その瞬間、モリアの姿に異変が生じ始める。元から大きかった肉体は、風船のようにみるみる膨らむ。

異様な光景に、海賊達からどよめきの声が上がった。

「影だわ、まさか!!」

「島中の影を集めて、自分の体に取り込んでる……!!!」

慄く彼らの目の前で、モリアの姿はまだまだ膨張し続ける。二倍、三倍、いや十倍以上に巨大化し、不気味に笑い続ける。

「麦わらア……妖術師オ……!!! おめエらが取り込んだ影は……200体つてとこか……!!  
ならばおれは300……600……700……」

そうして、全ての影がモリアの中に入る。

その姿はもはやオーズ並みかそれ以上。もう元の形を留めぬほどに大きく、凄まじい威圧感が頭上から降り注いでくる。

王下七武海の一人ゲツコー・モリアは、怪物と成り果てていた。

「キシ、キシキシシ……!!! 1000体だ……!!!」

「うわああア~~~~~~~~っ!!!」

怪物を前に、ローリング海賊団の全員が一斉に震え上がる。

勝利を得て、自由を取り戻したと歓喜した直後にこの最悪の展開。もう誰にも立ち上がる気力など残ってはいなかった。

「終わった……!!! 何だよありゃあ!!!」

「もうほぼ夜は明けてんだぞ!!」

嘆いても、絶望しても、現実が変わらない。

最大の障害として命がけで立ち向かった怪物以上の怪物と相對してしまい、自ずと涙

がこぼれた。

「何だよ今更…!!! そりやねエだろオ〜!!!」

「オオオオオオオ〜!!!」

絶叫する彼らの目の前で、モリアが両手を振り上げる。

巨大な塊が掲げられ、勢いよく真下に振り下ろされると、スリラーバークのど真ん中に巨大な穴が開く。

その一撃はさらに、島そのものの岩盤を叩き割つてみせた。

「うわあああああ!!!」

「島が割れたア〜!!!」

「マストの屋敷が傾くぞ!!!」

「逃げろ!!! 森へ逃げろ〜!!!」

「今度こそ本当に、もう終わりだア!!!」

蜘蛛の子のように右往左往するローリング海賊団。

森を、日陰を目指し逃げ惑う彼らのもとに、海の向こうから差し始めた陽光が容赦なく襲いかかる。

「ぎゃあああ!!! 消える!!! 体が消える!!! 助けてくれエ!!!」

「影に入れ!!! 朝日がもれてる!!!」

「影を通つて森へ!! 建物の影を出るな!!」

慌てて建物の陰に入り、日差しを防ぐも一時的なものでしかない。

崩壊した屋敷は穴だらけで、油断すればどこから陽が注いでくるかわかったものではない。

そんな最悪の状況の中、ローラは一人、瓦礫の上で仁王立ちしていた。

「ローラ船長!! 何してんですか!! 早く!!」

恐怖で動けなくなったのか、と子分達が慌てて呼びかけるも、ローラは動かない。彼らに横目を向け、全く恐怖を抱いていない様子で彼女は語りかけた。

「あんた達お逃げ」

「……………!! 何言つてんすか!! 船長も同じでしょ」

「私は……………責任者よ……………この『賭け』のね」

真つ直ぐに見つめる先には、モリアの目と鼻の先で並び立つ麦わらの一味がいる。嗤うモリアを睨みつけ、微塵もその場から離れようとしない。

彼らのその様に、ローリング海賊団は絶句しその場に立ち尽くした。

「見てごらん、アレを。微動だにしないわ……………!! あいつらだつて影取られてんに……………!!」

「まさか……………!! まだ勝てる気で……………!!?」

「……………あいつらがまだ勝機を捨ててないのなら私も、ここを動かない!!!」

どう考えても無謀で無意味な戦い。

なのにまだ挑むつもりなのかと、希望を抱いた一味の諦めの悪さに戦慄を抱くほかなかった。

「勝手気ままに『希望の双星』と期待しといて、ピンチになったらトンズラじゃあ…私らそこらの虫ケラかなんかだよ」

「しかしこの状況じゃあ…」

「あんた達は逃げな! 船長の私が残れば仁義は通せる。あんたらは……………命を大事にね」

そうローラが告げた瞬間、瓦礫の隙間から差した日差しが彼女の頬を焼く。

じゅつと音を立て、ローラの顔が少しずつ消滅を始める。

「うわあ、ローラ船長!!! そこ…光がもれてる!! 早く影へ!!!」

「いいんだよ!!! 人の肩に希望をかけるってのは、こういう事さ!!!」

消える体に相当な痛みを感じているはずなのに、ローラは仁王立ちしたまま動かない。

女海賊の維持、そしてかすかに残った希望の眼差しを背に受けながら、元の体に戻ったルフィは立ち上がり構えた。

「おい、みんな!! もう時間がねエ!! ちよつと無茶するからよ!! その後の事は頼むっ!!!」

「よし、任せろ!!!」

「ブツ飛ばせエ〜!!!」

「コリヤ暴走に近いな…制御しきれてねエ…」

「怒りと愚かなプライドで自分をはかり損ねたようね…」

もう体力などほぼ残っていないだろうに、痛みも疲弊も押し殺し、立ち向かうルフィ。仲間達は彼の勝利を疑わない。必ず勝ってくれるはずだと、煙を上げ始める背中に櫂を飛ばす。

彼らの声を背負い、ルフィは再度モリアを睨みつけ、力強く吠える。

「悪夢を見たけりや勝手に見てろ!!! モリア!!! おれ達はお前に付き合う気はねエ!!!」

最後の戦いが幕を開ける合間も、日差しは無慈悲に降りかかる。

消滅する体を日差しから遠のけつつ、物陰に身をひそめるローリング海賊団は、なおも隠れようとしないうろらに思わず叫ぶ。

「こつちの影へ!! うろら船長!!! 死ぬつもりですか?!!」

「うろら船長!!!」

「死ぬか生きるか二つに一つよ、どう転ぼうと構わないわ!! 私は、もう…日陰には帰ら

ない!!!」

固い覚悟で、まるで動く様子を見せないローラに言葉を失う子分達。

きつ、と目を吊り上げたりスキー兄弟は、彼女の見つめる先で不転の覚悟を決める  
麦わらの一味に怒鳴りつけた。

「おい!! おめエらどこに勝機があるってんだよ!! 勝てるわけねエだろ!! 敵は千人  
力の化け物だ!!! おめエらの影だつて入っちゃまってんだぞ!!? 時間だつてもうねエし  
!!!」

「見学なら黙って見てろ……!!! モリアとの勝負には、もうおれ達が勝ってる」

諦めの言葉を吐き捨てる彼に、ゾロが冷静に告げる。

その身に受けた痛みのせいか、籠が外れたモリアは自分の限界以上の力を求めた。力  
を取り込む事はできても、抑え込むだけで精一杯になっている。

その力を無理矢理振り回し、日の出までをやり過ぎすつもりなのだ。

反射的に黙り込んだ子分達に向けて、モリアに視線を向けたままさらにエレノアが語  
る。

「今のあいつは……空気を限界以上に詰め込んだ風船……：：：：：気力で破裂を抑えているけ  
ど、それも長くは持たない……：：：：：こつちはそこを遠慮なくぶちかまさせてもらうだけ  
さ」

「ギア2!!!」

どろん、とルフィの全身から白煙が噴き出す。

激流のように速く血流を巡らせ、身体能力を極限まで向上させる技……今の状態でどれだけ持つか不明だが、日の出も近い今なら長引かせる必要もない。

わずか数秒が、この戦いの、自分達の運命を決める。

「おれ達の消滅が先か……!! モリアの自滅が先か……!!」

「ゴムゴムの……!! JETロケット……!!」

蒸気を噴き上げ、ルフィがモリアの腹に向けて突撃する。

目にも留まらぬ速さで鳩尾に一撃を食らわせると、それだけでモリアの体は傾ぎ、白目を剥いて悶絶する。

「JETバズーカ!!!」

続けてもう一発、渾身の掌底を叩き込み追い詰める。

すると、モリアの口からは血反吐ではなく、無数の影が飛沫のように飛び出し解放されていく。

その様に、犠牲者達からどよめきの声が上がりました。

「どんどん解放されてく」

「あいつの支配下にある筈の影達がなぜ……?!」



彼らが戦いを見守っている間にも、モリアはどんどん影を吐き出させられていく。限界まで膨らませた風船に穴を開けたように、次々に影が抜けていく。

「モリアの意識が薄れて、支配力が落ちてんだ……1000体の影なんて流石のモリアにも制御しきれねえんだよ!!」

理性を失い暴走したせいで、モリアは墓穴を掘っていた。

是が非でも影を返さないために、自らもどうしようもなくなくなるほどに力を取り込み、勝手に手放すようになってしまったのだ。

この気を逃す手はない、とルファイがさらなる追撃を食らわせようとした時。

「<sup>ブリックバット</sup>欠片蝙蝠!!」

モリア自身の影が無数の蝙蝠へと変じ、ルファイの周囲に集まる。

あつという間にルファイを囲う漆黒の箱が出来上がり、閉じ込められたルファイにモリアの巨大な拳が叩き込まれた。

「砕ける!!」

ぐしゃつ、と潰される箱。マストの壁ごと叩き潰され、残骸が地面に落下する。

ペしゃんこに潰された箱をさらに何度も踏みつけ、跡形もなくなるまで変形させ、その上ぐりぐりと踏みにじる。

「これは『洗礼』だ、ためエみてエな……若僧が……この海でだけエ顔するとどうなるか……」

!! “七武海”に盾つくとうなるか!!!」

募り募った怒りをぶつけ、モリアはルフィに吠える。

普通の人間ならば、ぐちゃぐちゃの肉の破片になっているであろう残酷な攻撃に、その場にいる全員から悲鳴が上がる。

「分相応に生きろ!!! 世の中つてのア…!! 出る杭が叩き潰される様にできてんだ!!!」

「ルフィさん!!!?」

「ルフィ——!!!」

ここまでされて無事で済むのか、とルフィの身を案じる声上がり、大勢が頭を抱えて目をそらす。

だが、モリアが一瞬足を退けた瞬間、ぱりつと箱を破つてルフィが顔を出す。

「若僧だろうが出る杭だろうが…おれは…誰にも潰されねエ……!!!」

平然と立ち上がり、堂々と告げるルフィに、モリアもわずかに目を見開く。

しかしそんな動揺を見せられるわけもなく、無謀な宣言をする青年を睨みつけ憎々しげに悪態を吐き捨てる。

「潰されねエ……!!! そう言いきる根拠の無さこそが…てめエの経験の浅さを…」

「ゴムだから」

シンプルな、精神論以前の正論がルフィから放たれ、モリアの頭にさらに血がのぼる。

その反応は、これ以上ない挑発のように彼に届く。

醜く膨れ上がった彼の姿を見つめ、遠い眼差しになったエレノアが小さく吐き捨てた。

「失う事がそんなにコワイか……そりやそうだ、誰だって恐いさ、今さら何言つてんだ」  
ぎり、と拳を握りしめ、瞼を閉じる。

脳裏の浮かぶのは、先程自分の影に——自分自身に突きつけられた言葉。

自身の心に突き刺さったままの悔恨、拭い切れない黒い感情の源が、否応なく蘇ってくる。

だがそれでも、エレノアは確と目を見開き、前を見つめる。

「説教なんか余計なお世話だよ……小僧。そんなわかりきった事、この海に挑んでる連中なら誰だって身に染みて理解してんだよ」

「アア……！！」

「だからこそ私達はあがくのさ。誰も失わないように、遠くにいかないように……全身全霊で、持てる全てを以て、荒波に抗い続ける」

めら、と彼女の白虎の毛並みが燃えるような光を放つ。

金色に輝く眼で敵を見据え、立ちほだかる巨大な敵に向け、闘志をあらわに吠え掛かった。

「失う恐さから逃げた臆病者が……私達の航路を塞ぐんじゃない!!!」

## 第256話 “無粋を晒すな”

「すぐに全部吐き出させてやる……………!!!」

再び突撃の構えを取り、力を込めるルフィ。

潰されても、踏みつけられても、それでもなお立ち上がるゾンビ以上の耐久性に驚きの声が上がる中、ルフィはぐつと自分の親指を噛んだ。

「……………いくぞ、*“骨風船”*!!!」

歯を立てた箇所には大量の息を吹き込み、ぼんつと一気に膨らませる。

骨の中に吹き込んだ息を胴体に移し、巨大な球体へと変形しながら、ルフィは苦しげに歯を食いしぼる。

「え?! ……おい!! その技、重ねていいのか!!?」

「お前『2』だけでこの前どんな目に遭ったか覚えてねエのか?! ルフィ!!!」

「本当にムチャダルフィ〜!!! 体がブツ壊れるぞオ!!!」

ただでさえ負担の大きい強化を二つ同時に使用しようとしているルフィに、仲間達から制止の声が上がる。

だがルフィは止まる事なく、モリアの鳩尾に再度狙いをつけ、巨体を保ったまま高速

で突進を繰り出す。

「『ゴムゴムの巨人ギガントのJET砲弾シエル』!!!」

どつ、と一際協力で巨大な一撃を喰らい、モリアの体が大きく揺れる。

途切れかけた意識の中、モリアは必死にそれを保ち、影を吐き出す自分の口を押さえ込む。

是が非でも影は返さない、無様を晒してなお、意地で体を動かしていた。

「帰って来ーい!!! 私影くっつ!!!」

往生際の悪さを見せつけるモリアに向けて、顔の半分が消えかけたローラが力の限り叫ぶ。

突然の呼びかけに、子分達から困惑の声が漏れ出た。

「ローラ船長!!」

「聞こえないの!!! 私影!!!」 生まれた時からずっと一緒だったじゃないの!!! この

世と一緒に生まれたんじゃない!!!」

影を必死に押さえ込むモリア、その中に囚われた自分の影に向けて、ローラは必死に叫ぶ。

かつては存在も気にも留めなかった。しかし今どれだけ大切だったかを理解した半身に、懸命に呼びかけ続ける。

「帰って来なさいよ!!! 3年間ずっとあんたの入ったゾンビを探してたのよ!!! 今、そこにいるんでしょ!!!? 聞こえてるなら帰って来い!!!」

「ローラ船長、もう影に入ってくれ!!! 体が無くなっちゃまう!!!」

「……だつてくやしいじゃない!! そこにいるのに!!!」

徐々に消滅が進むローラに、子分達が飛びかかり日陰に引きずり込むも、ローラは諦めきれず鳴き声をこぼす。

その声に、子分達も唇を噛み締めずにはいられず、やがてそれぞれの影に向かって叫び始める。

「おれの影にも……一言あるぞ……!!! ……!! ……!! お前つ!! 海賊王になりてエンなら……!!!」

「しっかり……!!! おれについて来いイ!!!」

数多の呼び声が聞こえる中、膝をついていたルフィが再び構え、モリアの腹に突進を叩き込む。

さらに意識の糸が引き伸ばされ、悶絶しながら、モリアは必死に影の解放を拒み続ける。

すると突如……モリアは自分の首に何者かの手がかけられるのを感じ、はつと息を呑んだ。

「無粋な真似をしないでくれないかな……小童」

ぎりつ、と締め付けられる感覚に目を剥き、硬直する。

現実の世界ではない。奪った無数の影が蠢く自分の中、精神の中ともいうべき、自身でも理解しきつていない空間で、誰かに首を締め上げられていた。

「て……てめエは……!!?」

ぎこちなく振り向き、締め付けるのが誰なのか確かめようとしたモリアは、視界にかすかに移った見覚えのある顔立ちに絶句する。

エレノアの顔をしたその誰かは、影しかないはずの世界でにやりと不敵な笑みを浮かべてみせる。

「影が……!!?」 なぜおれの支配下に堕ちていない!!? おれが主人だぞ!!!」

「元から君になど従った覚えはないよ……暴れていたのはあの子の意思さ。ずいぶん自己評価が低い子みたいだね……色々不安になるけど、ま、今後は本人次第だね」

くすくすと笑う、自身とほぼ変わらない巨躯を持つ誰か。

ようやくどこかで、モリアはそれがエレノアではないことに——立派な猛牛の角の生えた、自らが蘇らせた古の天使である事に気付く。

「その……角……!!! まさか!!!」

「一度は逝った老兵が手を出すのも無粋かもね………………だけどもア、私個人の感情は別問題。他の奴ならどうでもいいけど、君は少々凶に乗りすぎた」



ぎしっ、と首を絞める力がさらに強まり、息苦しさが増す。

咳き込みそうになりつつ、その衝撃で影を吐き出してしまわぬよう必死に堪え、相手の腕を引き剥がそうともがく。

しかし猛牛の天使は微塵も力を緩めず、ぎろりとモリアを睨みつけ鼻息荒く怒りの言葉を告げる。

「よくも私の『王』の骸を辱めてくれたな……!!! 私を守るために凍える苦痛を味わった彼を……あんな姿にしやがって——報いを受けよ……影の支配者よ……!!!」

言葉をなくすモリアの視界に、不意に一つの小さな影が映る。

全力の一撃を叩き込み、今度こそ力尽きた麦わら帽子の青年に替わり、ゆつくりと身構える白狐の天使が。

「全身全霊で、詫びて貰おうか」

「や……やめ……!!」

避けようと、逃げようともがくモリアだが、彼を捉える猛牛の天使がそれを許さない。より一層の力を込めて、内側から影の支配者をその場に縛り付ける。

「もう……!………発!!」

突如、体を硬直させ出したモリアを見上げ、エレノアが構え出す。

翼を広げ、体勢を低くし、燃える髪の間隙から標的を見据え、残る覇気を振り絞って

頭頂部に集中させる。

「名立たる英雄を乗せ……彼の船は、栄光を目指す……!!  
 // アルゴ英雄旅船//!!!」

そして、どっ!と勢いよく前へ飛び出し、自らを砲弾へと変える。

放たれた全力の突撃は、モリアの足元を通り過ぎ、そのまま彼の向こう側に聳え立つマストに一直線に突き刺さった。

「外した!!?」

「マストの中に突っ込んだしまったぞ!!?」

轟音とともに、マストの中に消えるエレノア。まさかの自体に、一味から困惑と驚愕の声が上がる。

すると、すでにぼろぼろだったマストに亀裂が一周して刻まれ。

次の瞬間、半ばからへし折られたマストがぐらりと傾き、そのままモリアを上から押し潰してしまった。

「ギャアアアアアア~~~~!!!」

超重量の凶器を頭上から叩き落とされ、押し潰されたモリアが絶叫する。

その重量に、耐えて耐えて耐えて耐え続けた彼は、とうとう限界に達した。

「麦わらア……妖術師オ~~~~っ!!! オエ……!!! てめエら……!!!」

仰向けに押し潰され、横たわるモリア。

腹に感じる強烈な圧迫感に続き、全身から口にこみ上げる嘔吐感に苛まれながら、倒れ伏す二人の海賊への呪いの言葉を残す。

「行つてみるがいい……!! 本物の『悪夢』は『新世界』にある……!!!」

そう、彼が最後に残した直後……どぼつ、と大量の影が口から溢れ出す。

噴火のように吹き出したそれらは、朝日に照らされながら、あるべき場所へと帰っていく。

その一部が、スリラーパークへと戻ってくる——だが。

「おい!! お前ら!!」

「影、ちよつと……早く!!」

影が真下に戻るよりも前に、容赦なく朝日が襲いかかる。

仁王立ちしていたゾロやロビン、サンジやローリング海賊団の面々に日差しが浴びせられ、みるみるその姿が消滅していく。

「おいゾロオ!!」

「ロビーン!!!」

「ダンジ~~~~!!!」

悲鳴をあげるウソップやチョッパー達の目の前で、さらさらと砂に還るようにゾロ達の上半身が消滅する。

ウソツプやとは頭を抱え、その光景を見ている事しかできなかった。

「体が消滅していく……!!! ルフィ……!!!」

「何でよ!!! 勝ったじゃねエか!!! おい!!! 間に合わなかったのかア……!!!」

「ローラ船長!! みんな……!!!」

勝利を喜ぶどころか、休む間も与えない無情な日の出に。

海賊達は絶望の絶叫を上げ続けていた。

「勝ったじゃねエかよ……!!! 畜生オ……つ!!!」

??

——そして、時はさらに進んだ。

水平線の彼方にあつた光が徐々に見上げるほどの高さになる頃、天に昇っていた数多の影は、あるべき場所に帰り……。

スリラーバークには、気の抜ける笑い声が響いていた。

「はっはっはっは……いやあ………」

ウソツプとナミ、チョッパードとフランキー、そしてブルックは。

目の前で笑っている三人を見つめ、呆然と立ち尽くしていた。

「生きてたな、見事に」

「一瞬、天にも昇る気持ちだったわ」

「それも良いな、ロビンちゃんと一緒なら一緒に天に昇りたいぜ!!」

手足を見下ろし、笑うゾロ。その隣で微笑むロビンといつも通りのサンジ。

完全に五体満足で生きている彼らに、ウソップが思わず目を吊り上げて叫んだ。

「笑い事か!!! アホ共!! 本気で死んだかと思つたわ!!! 頭スツ飛んでたんだぞおめエら!!!」

「恐いものみた……」

怒鳴るウソップのすぐそばで、ナミとチョップパーがぐつたりと背中を合わせてへたり込む。人が消滅する現場などという相当な恐怖を味わつたのだから当然だろう

「あつちも無事みたいだ」

「朝日だ——!!?」

「朝日、もう恐くねエ……!!?」

「影がある……!!?」

「暗い森の暮らしはもう終わりだ……!!?」

落ち着きを取り戻したチョップパーが振り向けば、同じく五体満足のローリング海賊団が歓声をあげて陽の下を走り回っている。

誰一人、消滅した者はいなかった。

「朝日を受けて『存在』が消えかけたけど、間一髪影が戻る事で実体は再生した……」

「モリアが影を変化させて実体の形を変えたのと同じ理屈だろう」  
 そんな小難しい因果の特性のおかげで助かったのだろうと、ロビンとサンジが考察する。

詳しい真実は理解しきれないが、検証など二度とごめんだった。

「安心しろ、もう一生影が体から離れるなんて面白エ事件は起きねエよ」

「とにかく誰も消えずに済んでよかった」

「あゝ……どつと疲れと眠気が襲って来たぜ。コーラねエのか……」

全員が疲れ切った表情で倒れ込み、ため息をこぼす。

武器も気力も、何もかもを使い切って手にした勝利だが、残ったのはただただ辛い疲労だけだった。

「この島に入ってから奇妙な生物や出来事は、全てモリアの見せたまやか幻夢かし。あいつが倒れた今、この島には何も残っちゃいねエ……!!」

まるで、今の今まで幻覚を相手に戦っていたような気分で、全員が気怠さに襲われ声も上がらない。

やっと休める、とゾロが愛刀達を担ぎながら悪態をこぼした。

「悪い夢から覚めた朝みてエに、みんな消えちまった……全く夕チの悪いオバケ屋敷だった……!!」

無事に安堵し、勝利に酔う二つの海賊団から離れた場所で。

「ここそと動くある人影があった。」

「起きろ!!」 アブサロム、そんなヤワな改造した覚えはねエぞ!!」

「ごん、と頭部を叩かれて、アブサロムの意識は一気に浮上する。」

「何事か、と痛む身体に叱咤して起き上がれば、自身を見下ろすホグバツクと鎧用心棒達の残骸が目に見える。」

「……………!!」 ホグバツク……………!!」 それに…No. 66に48……………!!?」 おいら一体……………!!」 どうなつたんだ!!」

「記憶を辿ろうとしたアブサロムは、やがてすぐ目の前に横たわる疣猪の死体に気が付き、びくつと身を震わせて後ずさった。」

「う……………うわっ!!」 ローラ!!」

「騒ぐな!」 もう影は抜けてる。お前がどうなつたかなんて知らねエよ、誰かに敗けたんだろ!!」 みつともねエ」

呆れて声を荒げるホグバツクに、ほっと安堵の息をつくアブサロム。

「彼らの足元で、三つの兜がかたかたと揺れて嘆きの声をこぼした。」

「チツクショーあいつらア!!?」 好き勝手やつてくれやがって!!?」 どうすりゃいいん

だよこの状態………包丁すら握れやしねエ」

「かといつて、研究所に戻ったところだな……実験動物に戻るのがオチだ」

騒ぐバリーの隣で、はあ、と溜息の声をこぼすNo. 48の兄。

身動きもまともを取れなくなった彼らを見下ろしていたホグバックが、不意にふんと鼻を鳴らしてみせる。

「そのくらいおれが何とかしてやらア」

「あ!? 錬金術は流石に専門外だろ!!?」

「何言つてやがるおれは天才医師だぞ?」

「その天才医師の最高傑作も、モリア諸共やられちまったけどな」

自信満々に胸を張るホグバックに、やや疑わしげな視線を向けながらNo. 48の弟が呟く。

その言葉に、今の今まで気絶していたアブサロムはぎよつと目を剥いた。

「モリア様が麦わらにやられた!!!」

「声がでけエっ!!! シィ——っ!!! 静かにしろオ!!! 声がでけエよバカ〜!!!」

「おめエが一番でけエよ!!!」

しー、しーと口に指を当てて最も騒がしくするホグバックに、鎧達が一斉に飛び上がった後頭部にぶつかる。



たんこぶを作ったホグバツクは、悔しげに顔を歪め歯を食い縛る。

「スリラーバークはもう使い物にならねエが…おれアこのまま一生を敗者で終える気はねエゼ!! おめエら、どうしたい?」

「……………!! どうつて……………!!」

ホグバツクの呼びかけに、一瞬悩むアブサロム。

何を望むのか、どうしたいのか。その答えを探す彼の足元で、バリーがぼそりと呟いた。

「とりあえずまともに動けるようになりてエ」

「そういう事じゃねエよ!!!」

「ルフィの奴、さっき縮んでなかったか?」

瓦礫の上で仰向けに横たわり、静かに眠り続けるルフィを見下ろしてゾロが呟く。その隣には、崩壊したマストの残骸から引っ張り出されたエレノアも眠りについていた。

「“巨人”のギアを使うと使った時間、反動で縮むんだって…」

「エレノアも髪、燃えてたろ」

「前にエレノアの先祖が使ってたが…一時的なパワーアップの代わりにえらく疲弊するみたいだな」

激しい戦いの結果、意識を失った二人を囲み、一味は険しい顔になる。

中でもウソップは沈痛な表情で、一際傷だらけになった彼らを見つめ項垂れる。

「こいつらの新しい戦闘法、体に負担をかけすぎじゃねエか？ この先の敵がもつと強力になるとしたらこいつら、ずっと無茶を続ける事になるぞ…おれは心配だ………」

彼の呟きに、誰も何も言えなくなる。

勝利の余韻にも、全員の無事に安堵する暇もなく、重苦しい雰囲気が漂い始めた時だった。

「もし…!!」

突如そこに、聞き覚えのある声が響く。

振り向けばそこには、死人と見間違うほどに傷だらけで顔色の悪い老人が立っていた。

「!! うおー!! ゾンビ!! まだ影の出てねエ奴がいたのか!!」

「いや、大ケガした年寄りじゃ」

「紛らわしいな!! もうゾンビでいいだろ!!」

つい数時間前にも同じやり取りをした事を思い出し、冷静さを取り戻す一味。見覚えのある顔に、ゾロがわずかに目を瞠った。

「墓場で会ったおっさんじゃねエか…!!」

「信じられん…太陽の下をまた、こうして歩ける日が来るとは…」

老人はぶるぶると身を震わせ、その場に崩れ落ちる。項垂れる彼の足下には確かに影があり、その上に彼のこぼした涙が幾滴もこぼれ落ちていく。

「ありがとう…どう礼をすればよいか…!!」

老人の心からの感謝の声に、はしやいでいたローラ達もようやく我に返り、慌ててルフィ達の前に集まってくる。

そして全員で一齐に、深々と頭を下げた。

「あんた達…!! 礼が遅れたわね!!」

「おれ達も心底感謝してるぜ!!! 色々と妙なチョツカイ出してすまなかつたな!!!」

「おめエらの暴れっぷりを見て、賭けるならこいつらだと勝手に希望をかけたんだ!!!」

「ありがとう、あんた達!!! スリラーパーク被害者の会一同…!!! この恩は決して忘れないわ!!!」

瓦礫の上に膝をつき、がばつと額をぶつけるような勢いで礼をする。

海賊達だけではない。老人を筆頭とした島中に潜んでいた被害者達がぞろぞろと姿を現し、首を垂れた。

「お礼に私を嫁にあげる!!!」

「「「「「いらん」」」」」

## 第257話 “暴君の蹂躪”

どこか必死な響きを持ったローラの申し出を即座に断り、一味は呆れ顔で頭をかく。礼を言われても、ただただ面倒臭いといった雰囲気だ。

「……………礼を言われてもな。ルフィが言ったよな、おっさん。おれ達はこっちの都合で戦っただけで…お前らついでに助かっただけだ」

なおも求婚を続けるローラを適当にあしらいつつ、ゾロがどうしたものかというように溜息をつく。

拒み続けようとした彼に、なぜか突如ナミの張り手が襲いかかった。

「何言ってるのよーっ!!! せつかくお礼をしたいつて人々に——っ!!!」

「おう、そうだぜ兄ちゃん、何かさせてくれ〜!!」

「ついでだろうが何だろうが、モリアに勝てた事に感謝してんだ」

「でしよー!!」

「お前」

感謝の気持ちを利用し、思い切り得をしようとする目論むナミに、ウソツプは思わず頬をひきつらせる。

だが、目をBの形にして喜んでいたナミは。

やがて不意に、その顔から血の気を引かせ、ひゅつと息を呑んだ。

「…そうだ私……!! …大変な事忘れてた……!!!」

「何だ」

「どうしたの？」

「それが!! 大変なの……!!!」

様子が変わったナミに、訝しげな視線が集まる。

連戦の後、そして命を落とさずに済んだ安堵から忘却してしまっていたある事を思い出し、慌ててそれを伝えようとして。

その場に、その声が響き渡った。

『成程な——悪い予感的中したというわけか』

「——そのようで……!!!」

『やつとクロコダイルの後任が決まった所だというのに、また一つ“七武海”に穴を空けるのはマズい』

は、と聞いた事のない声が耳に届き、ぎよつと目を剥く被害者達。

すぐさま声が聞こえた方へ振り向けば——瓦礫の山の上でくつろぎ、電伝虫を片手に誰かと話す大男の姿が目映る。

「落ちついて聞いてよ……!!? モリア達との戦いの最中で……言いそびれたんだけど、この島には……もう一人……!! いたの……!!!」

困惑する一同のそばで真つ青な顔になりながら、ナミが告げる。  
あまりにも絶望的な事実を。

「『七武海』が……!!!」

ひゅっ、とその場から音が消える。

高揚していた気分が一気に凍りつき、血の気が引いていくのを感じながら、一味は再度、目の前の大男を凝視した。

『——まだかすかにでも息はあるのか?』

「セア……」

「生きてさえいれば……回復を待ちひとまず『七武海』の続投を願いたい所。措置についてはその後だ——そう次々落ちて貰っては『七武海』の名が威厳を失う。この情報は世間に流すべきではない、全く困った奴らだ」

無表情で誰かと話す、サングラスと熊耳のついた帽子を被った大男。

通話の相手は呆れた様子を滲ませながら、溜息混じりに悪態をこぼしていた。

「……そうだわ、モリアにも劣らないあの巨体。『暴君』と呼ばれてたあの海賊……  
バーソロミュー・くま!!!」

「あいつが!! 『暴君』くま?!?」

『私の言っている意味はわかるな? モリアの敗北に目撃者がいてはならない』

絶句する一同の前で、大男——くまが通話相手からの指示を待つ。

通話の相手……おそらく政府の中でも相当高位の立場にある人物が、一切の慈悲なき冷酷な命令をくまに下す。

『世界政府より特命を下す……!! 麦わらの一味を含む、その島に残る者達全員を抹殺せよ……』

「……………た易い」

『では、報告を待っている……』

通話が切れ、黙り込む電伝虫。

それを懐にしまい込み、おもむろに立ち上がるくまを前に、海賊達はどよどよと騒めき目を見合わせた。

「え!! 今、なんか聞こえたぞ……!!?」

「ま……抹殺って、今……!!」

告げられた死刑宣告を受け止めきれず、呆然と立ち尽くすローリング海賊団。

脳の理解が少しずつ追いつき始めると共に、彼らの表情はさらに強張り、がたがたと震えが大きくなっていく。

「…そんな、『七武海』と連戦なんて…!!」

「お前ら下がってろ…おれがやる!!」

「気をつけて!! なにかの能力者よ」

絶望するウソップを押しつけ、ゾロが前に出る。体は悲鳴を上げていたが、それに構っている暇など微塵もない。

迫る危機に、ナミが自分が見たでできる限りの情報を叫んで仲間達に伝える。

場が騒がしくなり始めたその時、ぱつ、と不意にくまの姿が消え失せる。

そして気付いた時には、一同の真後ろに彼の巨体は現れていた。

「うわっ…出たア!!!」

「でけエっ!!!」

「いつの間に?!?!」

瞬く間に距離を詰めた、謎しかもたらさない相手に振り向き、ずぎぎざつと反対方向に後ずさる海賊達。

明確に感じる危機感に、誰もが絶望し、しかし諦めきれず武器に手がかかる。

「くそっ!! やつと自由になれるのに!! こんな所で死んでたまるかア!!! やつちま

えエ!!!」

「やめなお前達!!! 相手が悪すぎる!!!」



無謀は承知で、挑みかかる子分達をローラが必死に止める。

しかし、くまが虚空に向けて手を振るつた瞬間、何か放たれ、縦一列に並んだ子分達がまとめて吹き飛ばされる。

触れてもいない者まで血反吐を吐いて倒れ、犠牲者の体には奇妙な痕が刻まれている。

凍りつく海賊達の前で、再び一瞬で移動したくまがゾロの背後に立ち、不気味に見下ろし口を開いた。

「『海賊狩り』のゾロ、お前から始めようか……」

ゾロは即座に距離を取り、刀の柄を掴む。いつでも抜刀できるようにするも、まるで隙を感じられない相手に冷や汗が伝う。

「ひどい仕打ちじゃないの。何年も暗い森でモリアの支配に耐えたつていうのに、喜びも束の間……七武海がもう一人現れて、私らを全員殺すつて!!」

何も感じさせない視線でゾロを見下ろす巨漢に、ローラがたまらず叫ぶ。

救われた、と思つた直後のこの展開。誰であっても同じ感想を抱くに違いなく、子分達からも無意味とわかつていながら抗議の声が上がる。

「汚エぞ畜生オ!!! 今、麦わら達がどれ程の戦いを終えた後か知らねエわけじゃあるめエ!!!」

「分が悪くても元気の余ってるおれ達が相手だ!! 七武海が何だつてんだ!!」

「お前なんてさつききのオーズやモリアに比べりゃデカくもねエや!!」

「いいから下がってろ、お前ら!!! ご指名はおれだ!! 聞こえなかつたのか……?!」

圧倒的に不利な状況にあると理解しつつ、ゾロは背中越しに男達に制止の声を放つ。逃げる気は端からさらさらなかった。

「ケンカは買った…加勢はいらねエ。恥かかせんじやねエよ……!!」

油断なく、激痛の走る体を酷使しくまの前に立ちはだかるゾロ。

くまはやはり何の感情も悟らせぬ無表情のまま、ローリング海賊団には一切の注意を向けず、麦わらの一味を順に見やる。

「なかなか評判が高いぞ、お前達。『麦わら』のルフィの船には、腕の立つ——できた子が数人いるとな」

その言葉を聞き、ゾロ以外の意識のある一味の面々がいやいやと照れ出す。

場の緊張感が一瞬にして吹っ飛んでいた。思わずローラも恐怖を忘れて目を吊り上げる。

「二人残らず照れとる場合かア!!!」

「色々騒ぎを起こしているんだ。知らず知らず名が揚がるのは……何も船長だけではない」

ゆらり、と動くくま。その姿にはっと我に返る一味。

彼らを背に庇うように、立ち塞がったゾロは左右に回した二刀の柄を掴み、腰を落と  
して身構える。

「おい、ゾロ待ってって、無茶だろ絶対!! 骨のズイまでボロボロじゃねエかよお前つ!!!」  
「災難ってモンはたたみかけるのが世の常だ、言い訳したらどなたか助けてくれんのか  
? 死んだらおれはただ、そこまでの男……!!!」

ウソツプの制止を拒絶し、ゾロは飛び出し居合を放つ。

ずばっ、と強烈な斬撃が放たれるが、斬ったのは瓦礫だけでくまはまた一瞬で姿を消  
す。

目を瞪るゾロの背後に巨体が現れ、ゾロに向けて片手が振り上げられる。

そのまま一撃が決まる、と思われた直後、掲げられたくまの手に突然、鋼鉄の蹴りが  
放たれる。

「お……らアアア!!!」

轟音を伴い、エレノアの蹴りがくまの攻撃を外させる。放たれた何かは、ゾロのすぐ  
前を通り過ぎ瓦礫に奇妙な穴を開けた。

「てめエ……!!! 手エ出すなっつたろが!!!」

「言ってる……場合か!!!」

自分以上にぼろぼろのはずの天使に間一髪救われ、悔しさと情けなさからゾロはエレノアを睨みつけ吠える。

それに構わず、エレノアはくまにさらなる蹴撃を放とうとし、しかし相手の掌が目前に迫り慌てて飛びのく。

ぼつ、と飛んでくる何かを躲し、転がると、エレノアとゾロはその場で大きく息を荒げた。

「見ろ!! 何もしてねエのに息が上がってる…!!」

「何なの?! あいつの能力って!! ガレキについた『マーク』なに?!」

戦場に刻まれた戦いの痕。その奇妙な形にナミが困惑の声をあげる。

大きな丸が一つと小さな四つの丸でできた、獣の肉球のような痕。

それと同じ形をした皮膚の塊が、くまの掌に存在しているのが見えた。

「見ろ! あの掌!!!」

「んに…肉球?!」

「何で人間の掌に?!」

困惑の声が上がる中、ゾロがくまに斬撃を飛ばす。

くまは微塵も慌てず、放たれた斬撃に自分の掌の中の肉球を当てる。すると、ぶにと柔らかい音を立てて斬撃があらぬ方向へと弾かれてしまった。

「危ない!!!」

「うわあああああつ!!!」

弾かれた斬撃が海賊達の方へ向いてしまい、慌てて全員で逃げて身を守る。

切り裂かれ吹き飛ばす瓦礫の雨に頭を抱えながら、一味は敵の能力の凄まじさに戦慄し  
 啞然となる。

「ゾロの斬撃を手で弾いた!! そんな事できるのか!!」

「——それがてめエの能力か!」

全く全容が把握できなかった、新たな七武海的能力。

その一端を目の当たりにし、しかし微塵も安堵できず強張った声でゾロが唸る。

「あらゆるものを弾き飛ばす能力……!! おれは『ニキュニキュの実』の……『肉球人間』  
 ……!!!」

ばん、と露わにされたくまの両掌。

それぞれに人間の掌にあった肉球ができており、強さとは無縁の印象を抱かせる。

「に………!!! 肉球人間?!!」

「何だ、その和やかさ!!! 悪魔の実に『癒し系』ってあんのか?!!」

どよめく海賊達は、信じられない気持ちでその肉球を見つめる。

現実逃避なのか、ロビンは驚愕と緊張の中で、可愛い猫の肉球をふと思い浮かべてい

た。顔には一切出さぬまま。

「……!! 七武海だか慈悲深いだか知らねエが：コイツ、もしかして大した事ねエんじゃねエ：」

「大した事ない奴が七武海やつてるわけないでしょ!!」

見た目の可愛らしさから、思わずそう呟いてしまうフランキーにエレノアが振り向かずに叫ぶ。明らかに油断している彼に注意を促す。

すると今度はフランキーに何かが放たれ、彼は声もなく倒れ込んだ。

「オオ……!!」

「フランキー——!!」

「“鉄人”フランキー、お前の強度はその程度か？」

肉体の強度に自信を持ち、時に仲間の盾となってきた男が一撃で地に伏せた。その事実には仲間達は絶句し震え上がる。

怯えた視線を浴びながら、くまはその場でずしりと相撲のような四股を踏み始める。

「まったなしだ…… “つつぱり圧力砲”!!」

無数に放たれる掌底の数々。

一つ一つが十分に意識を刈り取れる威力を持つそれらを、ゾロとエレノアは必死に受

け流す。

「刀狼流し」!!!

「アイトス・キユエネ  
冥神隠兜」!!!

剣術で、風を錬成し体表で流し、どうにか直撃を避ける。

しかし身を翻し距離を取る頃には、二人とも脂汗まみれで荒い息を繰り返していた。

「コノ……!!!」

「うぎ……!!!」

「ダメだ、もうあいつら無理だつて」

「これだけ戦えただけでもう奇跡だ!!」

「あのバカでけエオーズと鬼神に死ぬ程の攻撃くらつてんだぞ!!!」

あまりにも無謀な戦いに、周囲から制止の声が上がる。

だが、一旦抜いた刃を鞘に収められるわけもなく、二人は歯を食いしばりながら敵を睨もうとし……その視界から再び、くまが消え失せる。

「ゾロ、後ろだ逃げろオ!!!」

背後に感じる気配と、ウソップの叫び声。

目を見開いたゾロが振り向くよりも前に、くまの肉球が触れようとしたその時。

「そこまでだ!! 粗碎」!!!

がん、と渾身の黒い蹴撃がくまの顔面に炸裂し、轟音が鳴り響く。それによってくまの動きも一時的に停止し、その隙にゾロが跳びのき、ついでにサンジを睨みつける。

「うおー!!! サンジ——!!!」

「肉球でハジかれてねエぞ!!!」 頭蓋骨なんかバキバキだコノヤロー!!!」

「だから余計だつての……………!!?」

もろに決まった一撃に、喝采をあげる仲間達を横目に、嫌いな相手に窮地を救われ不機嫌になったゾロがぼやく。

だが、そんな彼らの前で、サンジは苦痛の声をあげてその場に倒れ込んだ。

「おあああああ……!!!」

「『黒足』の…サンジ…お前がそうか…」

倒れたサンジの上で、傷ひとつないくまが呟く。

確かに強烈な一撃が入ったはずなのに、相手は歯の一本も折れてはいなかった。

「サンジの蹴りでビクともしねエ!!! どういうこつた、コリヤ…」

「……………!! 何だ!! こいつの固さ…!!! 顔は鋼造りか!!!」

「ひ…ひ…!!! 『火の鳥星』!!!」

激戦の後とはいえ、一味の強者達がまるで歯が立たない強敵に、焦ったウソップが炎



の弾丸を放つ。

鳥の形を作った炎弾はくまが無造作に上げた手で簡単に弾かれ、逆にウソツプ達に襲いかかった。

「……………「狙撃の王様」…大それた通り名だ……………」

「うわああああ~~~~っ!!!」

「きゃあ!!」

「…やはりこれだけ弱りきったお前達を消した所で、何の面白みもない…」

つまらなそうに呟く暴君。

そこに、ぎりつと歯を軋ませたエレノアが天高く跳躍し踵を振り上げる。

「野郎!!! ナメんな!!!」

漆黒に染まった片脚を、くまの脳天に向けて振り下ろそうとして。

ぶにつ、と横から弾かれ勢いを殺され、エレノアは空中で大きく体勢を崩された。

「それは流石に…効くな。だが、わざわざ受けてやる理由もない」

上下が反転したエレノアの腹に、くまの手が軽く当たる。

ぶにつと肉球が触れた瞬間、凄まじい衝撃がエレノアに襲いかかり、小さな体が一瞬

で瓦礫の山に消える。

エレノアはそれ以降、ぴくりとも動かなくなってしまった。

「政府の特命はお前達の完全抹殺だが……」

沈黙したエレノアを横目に、くまは徐に空中に……大気そのものに両掌を当て、押し固めていく。

少しずつ、少しずつ半透明な塊が肉球の形に集まり、やがて目に見えるほどに濃くなっていく。

作られたのは、爆弾……大気の気圧を極限まで高めた、強力な爆弾を片手に、くまは一味にある提案をする。

「お前達の命は……助けてやろう」

「……」

「その代わり、『麦わら』のルフィの首一つ、おれに差し出せ」

その申し出に、ぴりつとその場の空気が凍りつく。

明らかに不利な状況、圧倒的な力の差、それらを脱する唯一の方法として……彼は、誇りを捨てる事を求めた。

「その首さえあれば、政府も文句はあるまい」

「……仲間を売ってのか……」

険しい表情で黙り込む一味に、くまは爆弾を手に妥協案を提示する。

思い沈黙の中、くまは回答を求めた。

「サア…そいつをこっちへ」

差し出された手。悪魔のように人の心を試す提案。

その問いに、麦わらの一味は、ローリング海賊団は、島中の被害者達は——全く同じ答えを返した。

「「「「「「断る!!!」」」」」」

「残念だ、ワルスネジョック熊の衝撃」

くまがため息交じりに呟いた直後。

とてつもない衝撃波が、島中のあらゆるものを粉微塵に吹き飛ばした。

## 第258話 “なにもなかった”

爆発の余韻が響き渡る、スリラーパーク。

果敢に立ち向かった海賊達の声は、もうそこから途切れて聞こえない。

大規模な破壊をもたらしたくまは何故か、手ぶらで島を後にしようとしていた。

「いい仲間を持つてる。流石は…あんたの子供だな……………ドラゴン」

虚空に向けて話しかけながら、くまは現れた時と同じように、唐突のその場から姿を消したのだった。

「おーい…生きてるか——!! みんなア!!」

がらがらと瓦礫をかき分け、麦わらの一味とローリング海賊団が一緒に仲間の安否を確かめる。

全員ぼろぼろだが、今の所誰も死者は出ていないようで一安心していた。

「あの攻撃で私ら全員死んだと思って…帰ったのねあのクマ男!! ザマーしろ」

姿の見えないくまと、全員の無事という事実から、そんな都合のいい納得をしてほつと安堵の息をつくローラ。

彼女のすぐ横で、麦わらの一味全員が。

船長を凝視して驚愕で大きく目を見開き、あんぐりと口を開けていた。

「オイオイウソだろおめエ、どうなってんだ!!?」

「ええ〜〜!!」

仲間達の前で、ルフィがけらけら笑いながら飛び跳ねている。

一味の誰よりも傷だらけで、疲労がたまりきっていたはずの男が平然としていて、何事かと誰もが目を見張る。

「ほら見る!! 体が軽いんだよ、何でだ?」

「ウソつけ!! そんなわけねエだろ!!」

「ダメージが一周して逆にハイになったのかしら…」

訝しむ一味だが、本人がやせ我慢をしているようには見えない。

本人も不思議がっていたが、ふと傍らで眠ったままの天使を見やり、やや心配そうな表情を浮かべる。

「エレノアは?」

「気を失ったままよ…だからこそ余計に変よ、あんた。変!!」

「おい、流石に失礼だぞ」

最早心配する気にもなれず、ただの悪口を口にするナミにルフィは思わず抗議する。

自分で何かをしたわけでもないのに、と理不尽な罵倒に顔がゆがむ。

「……………何もかも無事なわけねエ。……………ハア、あの野郎どこだ？ ……………まさか……………!!」  
一人、爆発の後に辛うじて意識を保っていたサンジは、同じくまだ動いていたゾロの姿が見えない事に気付き辺りを見渡す。

歩き出し、彼の姿を探しながら、数時間前の事を思い出す。

ルフィの首を獲ろうとしたくまに一撃を食らわせ、それでも倒れない強敵に覚悟を決め、身代わりになると申し出た剣士。

それを止めようとしたサンジは彼に気絶させられ、その後の事は何も知らない。

まさか、と嫌な予感を覚えた彼はやがて、離れた森の中で一人たたずむゾロの姿を見つけ、ほっと安堵する。

「いた……!! おどかしやがって……………!! オイ!! あの七武海どこに……………!!」

憎たらしい男の元へ歩み寄ったサンジは——ようやくそれに気付く。

夥しい量の血の海の中心に立つ。

さらなる数えきれない数の傷を負った、ゾロの壮絶な姿に。

「……………何、この血の量は……………!!  
……………!!?!! オイ……………おめエ……………生きてんのか?! アイツはどこだ!!!  
……………!!」

慌てて駆け寄り、問い質す。命は取られていないようだが、身代わりを買って出た以

上ただで済むはずがない。

混乱するコックに向けて。

ゾロは雄々しく仁王立ちしたまま、掠れた声で告げた。

「……なにも!!! な” かった…!!!」

??

「よし、閉めろ……!!!」

ホグバツクの合図で、スリラーバークを囲う門が閉められる。

だが門の外には何も見当たらない。潜めた人の声だけが響き、そしてざぶざぶと波をかき分ける音だけが聞こえてくる。

「いいのか? ペローナの奴…!!!」

「探したっていいねえんだからしようがあるめエ。ハア…よし!! もういいぞ、透明解除だ!!!」

ひそひそと会話する声の後、すーっと徐々に何もなかったはずの空間に、一隻の蝙蝠の船首の海賊船が現れる。

アブサロムの能力で透明になっていた船が、島の外へと抜け出したのだ。

「脱出成功、フォスフォス………!!!」

「……あー、最後までキモを冷やしたぜ。キモなんてもうねエけど」

甲板の上で、ホグバツクが汗を拭う仕草をする。その横では鎧を元通りに修復されたバリーが胸のあたりに手を当てている。

想定外に危険な客人達から逃げ延びたモリアの配下達は、窮地を脱した事でほっと胸を撫で下ろしていた。

「とりあえずどこ行くよ。あてはあんのか?」

「まア任せろ! まずはいつらから離れることが先決だ」

甲板に横たわるモリアを横目に、ホグバツクが船を操作する。これ以上痛い目に遭うのは御免だ。

遠ざかるスリラーバークを眺めていたNO. 48がふと、思い出したように振り向き声を発した。

「…なぜスリラーバークに『暴君』くまがいたんだ?」

「それよ、スライサー兄弟……!! 実はずンビたちが消滅する前に、モリア様の使いゾンビ、ギョロ・ニン・バオの3人に話を聞いた」

人生でもそうそうあるまい、二人の七武海が同じ場所に集うという事態。

その理由について尋ねると、ホグバツクがやや興奮した様子で振り向き答えた。

「くまは元七武海クロコダイルの後任人物の名を伝えに来た………大事なのはそこじゃねエ」



「あん?」

「後釜は黒ひげつて男になるんだが、コイツのやらかした事は実にえげつねエ!!」

訝しむ獣面男と生きた鎧達に、ホグバックは懐から取り出した新聞を渡す。

受け取り、何が書かれているのかと一面に目を通したアブサロム達は、さらに訝しげに眉を顰めた。

「白ひげ海賊団2番隊長 “火拳” のエース、大監獄『インペルダウン』へ幽閉…!!?」

——導火線には、すでに火がついている。

刻一刻と、悪夢は彼女の知らないところで無慈悲に迫っていた。

「あのまま中庭で結局、みんな丸一日寝ちまったな」

「——そりゃあ寝ずに夜通し戦ってたわけだしよ」

「腹減ったぞサンジくくくくくく!!」

「チーズでもかじつてろ」

「チーズじゃダメだ!! おれはチーズじゃ動かねエ!!」

「あとでたらふく食べられるんだから、ちやつちやつ運びなさい!」

まだまだ抜けない疲労に知らないふりをし、荷物を運び出す。

騒ぐるフィを叱りつけながら、いつの何か積み込まれていた食料の山を屋敷へ向けて

運んでいく。

「被害者の会の連中、あそこを離れたがらねエだろ。あつちでメシにするんだ」

「悪いわね。何せ、みんな何年かぶりの太陽が嬉しくて…涙流して日光浴してんのよ」

申し訳なさそうに言うローラだが、一味は誰も文句など言わない。

長らく太陽に嫌われる暮らしを強いられていたのだから、そうなっても仕方がないだろうと。

「食料は足りるの？」

「奪られた分が戻って来てる上に、更に山程追加されてるんで大丈夫だ！」

「誰の仕業かしら、親切な奴がいるのね…」

実際は、モリアの配下の少女が島から逃げ出すためにサニー号を選んだだけなのだが、本人がいなくなつた今、真相を知る者は誰もいない。

唯一消えた少女の事を知っている女は、財宝の上で恍惚としていて、とうに忘却の彼方だ。

「財宝までこんなに積んでくれるなんて。100歩譲ってクリスマスだとしても景気良すぎるわ」

「幸せ…♡」

うっとりとして、食料と同じくいつのまにか積み重ねていた財宝の上に寝転がるナミ。空島

の帰り以来の黄金色に、全く離れる様子がない。

「お、なんか妙に嚴重そうな箱が……後で開けてみよ」

「お！ ガラスのバンドカッチョイイなー、おれ貰い!!」

「オイオイ、宝に勝手に手を出したら……」

彼女の横でがちやがちやと財宝を弄るエレノアとルフィに、ナミの金への執念を恐れるウソツップがあわあわと止めに入る。

が、当のナミは数個持ち出されても全く気にしていなかった。

「いいわよ、それなら宝石じゃないから。鍵開けてくれるんなら丁度いいし」

「あ……そういう事もあんのか？」

「だけど、あんたらにはひと欠片もあげないからね!!」

「恩人達の船から何も取りやしないわよ、ナミゾウ」

満面の笑顔から一転、じろつと咎めるような視線を向けられたローラが呆れた顔で首を横に振る。

その際、彼女の口から漏れた一言に、ナミは「え？」と思わず声を漏らした。ローラ本人も、咄嗟に出た名前に不思議そうに眉を寄せている。

「ん？」口について出ちゃったわ、ナミゾウって誰？ ………………そういえば変なのよね。

……あんたとはなぜか初めて会った気がしなくて……」

「もしかして………ローラ!!」

「…そうよ? 名前言つたかしら?」

困惑するローラに、ナミは驚愕で大きく目を見開きながら財宝の山から飛び降りる。自分をナミゾウと呼ぶのは、あの疣猪のゾンビただ一人。

その人格は入れられた影の持ち主と同じものになる……それならば、目の前にいるのは。

「わーっ!! そうだったの!! ローラ!! また会えて嬉しい!!」

「…ん☒ え? ナミ、それってどういう…」

がぼっ、と財宝を置き去りに嬉しそうにローラに抱きつくナミ。

彼女らしからぬ行動に、小箱をいじっていたエレノアがぎよつと振り向くが、ナミは気にも留めない。

「とりあえずコレ貰って、お礼よ!!」

「エエ☒ いいの!! お礼?」

挙句、財宝の一部をどっさり躊躇いなく渡す始末。

ありえない光景に、エレノアは再び気絶し、ルフィとウソップは声を揃えて叫んだ。

「ナミが人に財宝をあげたア~~~~!!」

……そんなにくつかの騒動があり、落ち着くのに時間をかけながら、大量の食料を持って屋敷に戻ってきたルフィ達。

燦々と降り注ぐ日の光を堪能していた男達は、彼らの姿にがばつと飛び起きた。

「お——い、メシ持ってきたぞー!!」

「麦わら」

「ああつ!! 言ってくれたら運んだのにつ!! 恩人を働かせちつた!!」

しまった、と頭を抱える男達。慌てて全員で立ち上がり、ルフィから食料を受け取ってサンジの指示通りに運んでいく。

彼らに荷物を渡しながら、エレノアが一人を捕まえて確かめた。

「ゾロ君は起きた?」

「絶対安静で……屋敷の中に」

彼が指差す方へ、一味はやや駆け足で集まる。食料や調理器具とは別に、医務室から持ってきた備品を抱え、船医の元へ向かう。

「頼まれたものも持ってきたぞ、チョッパー!!」

「お!! ありがとう!!」

「具合どうだ?」

ルフィの問いに、チョッパーは険しい、なんとも言えない表情で俯く。

治療は一通り終わり、一命はとりとめてはいるものの、未だ意識を取り戻さず、痛々しい姿で横たわったままだった。

「こんなにダメーজを残したゾロは初めてみた。命だつて本当に危なかつたよ……！！」

見たこともないほど傷つき、血を流した一味の強者。

同じ攻撃を受け、一人だけこうも重傷を追うとは考えにくい。彼だけさらに何かを受けたのだとしか思えない。

「——やっぱり何か、あつたんじやないかな。おれ達が倒れてる間に」

「確かに、あの男があのまま帰ったとは考えづらいものね」

「ルフィが異常に元気なのもおかしいよな——」

「そればかりはおれもわかんねエ、なははは」

「呑気な……！！」

けらけら笑うルフィに、思わず顔を手で覆うエレノア。

ゾロがまだここで終わるはずがないという信頼からそうなっているのだろうが、流石に空気を読めと思わざるをえない。

考え込む一味の元に、突如ローリング海賊団の二人組が飛び込んでくる。

「何が起きたか!! 実は見ちつた!!!」

「おれも見ちった一部始終くく!!」

「教えてやろう!! あの時、何が起こったか」

待つてましたと言わんばかりにやってきて、何かを話し出そうとするリスキー兄弟。彼らの態度に、サンジが突如強張った表情で立ち上がり、彼らの首に手を回して引きずっていった。

「ウブ!!」

「来い」

「ん? サンジ?」

訝しむ仲間達の視線を背に、サンジは人目のない外に二人を連れていく。

自分が見たもの、そして彼らが見たものをルフィに見せるわけにはいかなかった。

——ルフィは、海賊王になる男だ!!!

意識を失う前、くまに向けてゾロが発した言葉。

それを思い出し、止められなかった悔しさと苛立ちから荒々しく煙草の煙を吐き捨てる。

「ちよつと何で?! おめエもイカしてたぜエく!!」

「剣士より『おれの命とれ』なんて」

「うっせエ!!! 早く話せ。あの後、何が起きたんだ。おれが気を失ってその先だ……」  
喚くりスキー兄弟に怒鳴りつけ、自分の知らない真実を探る。文句を垂れていた二人は、問われると即座に語り出した。

ゾロの願いを聞き入れたくまは、ルフィの体に肉球を当てた。

弾き出されたのは、ルフィの「ダメージ」……それを本人の代わりに受けると、そう交換条件を出した。

満身創痍の体で受ければ死に至る、と告げられた多大な苦痛をゾロは受け止め——  
そして、見事に生き延びたのだとか。

「——ってわけなんだよ」

「おれア悪いが命はねエと思ったね、あの剣士」

「だから泣けちまったよ——」

「マジ泣けちまったよー!!!」

「……成程……それでルフィが元気になってゾロが、ああなったのか……ムチャしやがる……」

ようやく合点がいった、とゾロの無謀さに呆れながら溜息をつく。同じ事をしようとした自分が言えた義理ではないが、よくも生き残れたものだ。

「よーし!! 麦わらの一味男の美談、みんなに話してこよう」





「なんて幸せな船長達だ」

ぶるぶると感動やら羨望やらで震える二人。

彼らの背中にいつの間にか咲いていた女性の耳が、やがてふわつと花卉を散らせて消え去った。

「ふ~~~~ん……あんにやろうめ」

「成程」

ぱちり、と耳をすませていたエレノアが半目で呟き、ロビンがくすつと微笑みを浮かべる。

何やら訳知り顔の二人にルフィが訝しんでいると、先ほど出て行ったりリスキー兄弟が戻ってきて、彼はすぐさま手招きする。

「おい!! お前ら二人!! さつき何か知ってる様な事言つてなかったか? 何見たんだ?」

「ヤボな事聞くな」

「みんな無事で……何よりだ」

尋ねられ、しかし兄弟は口を開かなかつた。

ぐつと親指を立て、さつきとどこかへ歩き去っていく……そわそわと全身を震わせな

がら。

「？ 何だ？」

「……………さくくしてねエ」

「ふふっ」

## 第259話 “最期の大演奏”

「……いただきま——す!!!」

ずらりと並ぶ、香ばしく美味な香りを漂わせる料理の数々。

恩人達の一人が作ってくれた美食にかぶりつき、被害者達は涙を流してその味を、そして改めて自身らの無事を喜ぶ。

一度相伴にあやかった骸骨紳士も、彼らに混じって舌鼓を打っていた。

「またコックさんの料理が食べられるなんて!! ホントにほつぺたが落ちるほどおいしいです、私!! ほつぺたないんですけど——!!!」

「黙って食べてめエは!!!」

相変わらずの自虐をかますブルックに、頬袋を膨らませたフランキーが怒鳴る。他の者には思いのほか受けていた。

「ヨホホホ、ホントに……あ、失礼!! ゲツプ!! 先日も今日もお腹いっぱいごちそうになつて私……太ったかも!!!」

「骨なのにイ!!!? ってやかましいわっ!!!」

「デイス〜ナーアッ!!! デイス〜ナーアッ!!! デイス〜ナーアッ!!!」

最初から打ち合わせでもしていたのか、それともフランキーが合わせに行つたのか、呆けと乗り突つ込みにどつと全員が湧く。

挙句、変態二人で机の上で踊り始める始末だつた。

「乾杯してねエのに結局、宴になつちやつた」

未だ目覚めないゾロの看病をしながら、鼻先に肉を近付けたチョツパーがこぼす。酒の席が大好きなのに起きもしないとは、やはり相当傷は深いらしい。

そんな彼にルフィが無理に酒を飲まそうとする騒動が起きる中。

ふとその場を立つたブルックが、屋敷に置かれたピアノの席に腰を下ろした。

「さて、BGMでも…」

「……………お、この部屋ピアノあつたのか」

「妙にシヤレてるんだよなア、この屋敷」

檸檬をしゃくしゃくと頬張りながら、エレノアは演奏を始めたブルックを見やる。

軽く弾いただけで相当上手いとわかるその音色に、サンジがふと疑問を挟んだ。

「おい、お前バイオリン弾きじゃなかつたのか?」

「ヨホホホ、楽器は全般いけますよ。あの…少し話戻りますけど」

音色を響かせながら、ブルックはやがて黙り込む。

宴会を楽しみながら、その場の全員が音色を楽しんでいると、ブルックがサンジにの

み聞こえる小さな声で話しかけた。

「実は私も『見ちった』のです。お二人の行動に心、打たれました」

思い返す、七武海の襲撃の後の一幕。

船長を守るため、己が命を投げ出そうとした二人の姿に、ブルックは羨ましそうに笑う。

「仲間っていいですね……………!!」

「……………お二人って言ってくれんなよ。おれはマヌケをさらしただけだ」

「いえ……………あなたにも同じ覚悟があった」

自嘲するサンジを、ブルックは首を振って慰める。

彼の覚悟はたしかに本物で、大言を口にしたただだと馬鹿になどできるはずもない。エレノアもそんな彼ににやにやと笑みを浮かべていた。

「何か一曲…いかがですか？ リクエストがあれば…」

「へえ…何でもいいんのか？ じゃあ…」

好きな曲でいいのなら、と考えるサンジ。

しかし、ブルックは尋ねたその直後から勝手に旋律を刻み始めていた。

「あゝ、ピンクスゝの酒を〜♪」

「お前、今リクエスト求めたよな!!？」

抗議の声にも構うことなく、ブルックはその曲を……海賊ならば多くの者が知っている曲を弾く。

彼がずっと口ずさんでいた、彼の人生とずっと共にあつた歌だ。

「〳〵〵〵の酒〳〵!! やつぱ海賊が唄うならこの唄だよねエ〜」

「おいブルック!! この唄、おれ知ってるぞ。シャンクス達が唄ってた」

「昔の海賊達はみんなコレを唄ってました。辛い時も悲しい時も……!!」

ルフィが満面の笑みで手を挙げ、ピアノの天板の上に寝転がる。少年時代から耳にしていた好きな曲に、嬉しそうに耳を傾ける。

そうしてくつろいでいたルフィは、やがてブルックを見下ろしながら待ち遠しそうに口を開いた。

「お前さ、おれ達の仲間になるんだろ? な!! 影帰つて来たもんな。日が当たつても

航海できるだろ」

「………それなんです、私一つ………言つてなかつた事が……」

「何だ」

「〳〵〵〵との………約束があるんです。それをまず果たさなければ、私………男が立ちません………!!」

最初にあつたときにも話さずにいた、大切な約束の話。

誰にも譲れないその想いを告白し、心苦しさを覚えながら、もう一度口にしてくれた誘いを断ろうとして。

そんな彼に、ルフィは笑って頷いてみせる。

「ああ、ラブーンの事だろ!! 知ってるよ、フランキー達から聞いたからな!!」

「え……ああ……そうなんです。『ラブーン』……そういう名前のクジラなんですけど——あの岬に……」

「双子岬の、アイランドクジラ……でしょ?」

ブルツクの言葉を、エレノアが引き継ぐ。

はつと息を呑んだブルツクに、ルフィとエレノアは顔を見合わせ、くすくすと笑う。まるで、いたずらに成功した子供のように。

「だからよブルツク、おれ達ラブーンに会ってたんだ、本当に!!」

「……え?」

「あそこで50年、彼が仲間の帰りを待ってるのを聞いてる……だから驚いたよ、あんたがその仲間の生き残りだなんて。あんたもちちゃんと……約束を覚えてた」

「これ知ったら、ラブーン喜ぶだろうな——!!! ししし!!」

「……………ちよ……ちよつと待っててくださいよ!!」

ピアノの旋律を乱しながら、楽しそうな二人に尋ね返すブルツク。



聞き間違いではあるまいか、質の悪い冗談ではあるまいか、そんな不安に震えながら、もしやという思いから思わず身を乗り出す。

「あなた達が本当に……?! ラブーンに会ったって?!」

「うん」

「50年も経ってるのに……?! 今もまだ……!!! あの岬で待っていてくれてるんですか?!」

ラブーンは……!!! ホントですか……?」

「うん」

何も偽ることはない、ルフイは穏やかに笑いながら問われるたびに頷く。

そこに、サンジとウソップも笑みをたずさえて近付いてくる。

「おれ達も証人だ!! 確かに会ったぞ」

「ああ」

思わず振り向くブルツクの目に、真っ直ぐな青年達の眼差しがぶつかる。誰一人、嘘でからかっているような素振りは見えない。

ただ、ブルツクを驚かせようという純粋な気持ちだけが感じ取れた。

「……………!! 元気でしたか……?」

「元気だった」

「大きく……なってるんでしょね……………」

「山みたいだったねエ」

「ヨホホ……見てみたい……私達が別れた時なんかね……まだ小舟ほどの大きさで、かわいかった」

鍵盤を叩く指の速度が緩やかになり、震えが音に伝わる。

声を震わせ、未だ信じられないといった気持ち滲ませながら、ブルックはぎこちなく笑い、俯く。

「ちよつと聞きわけ悪かったけど、音楽好きで、いい子でねエ……今でも……まぶたを閉じるとその姿が。あ……私まぶたなかった」

咄嗟に脳裏に浮かぶ……出会いの記憶。

かつての仲間達と一緒に過ごし、笑い、歌った、遠い黄金の記憶。

「頭にね……浮かぶんです」

ジャアアアン！

感極まったブルックが、鍵盤を叩き雑音を響かせる。

顔を手で多い、天を仰いだ彼は——虚ろな両の目から滂沱の涙を流し、かたかたと我が身を震わせた。

「そうですか……!!! 彼は元気ですか……!!!」

掠れた雄叫びをあげ、泣き続けるブルック。信じ、足掻き続けた日々が報われた……

たまらないほどの歓喜が、彼の全身を満たしてゆく。

募り募った悲しみと苦しみが、いっぺんに浄化されていくようだった。

彼は思い出す。自分がまだ生身で、ロンバー海賊団の副船長だった時代。

西の海での航海中、群れからはぐれてついできた、小さな鯨との旅の日々を。

悲しげに泣く彼を、一味は明るく楽しい音楽で慰めた。

〳〵〵〵も笑う〳〵音楽好きばかりが紡ぎだす演奏は、子鯨の心も癒し、彼を虜にした。彼らの旅に、やがてその子鯨が仲間に加わった。

時に戦いの中で落ちた仲間を助け、時に海獣から守り、彼は陽気な旅に同行し続けた。

しかし、その同行もやがて限界がくる。過酷な旅には連れていけないと、一味は彼を西の海においていく決断をする。

音楽をやめ、声も書けず、自然と彼が離れるように仕向けた。

しかしそれでも彼は一味についてきて、とうとう〳〵偉大なる航路〳〵の入り口の岬にまでついてきてしまった。

参ったとばかりに、彼らは久しぶりに音楽を奏で、そしてある約束を交わした。

〳〵いつかの海を一周して、また会いに来る〳〵

そう約束し、灯台守に彼を託し、ロンバー海賊団は出航した。

そして、彼らは全滅した。

最初に船長と数名が謎の奇病に侵され、航路からの脱出を図り。

その後を継いだブルック達も、敵船との交戦で重傷を負い、一人、また一人と命を落としました。

そしてブルックが最後に残り……海の悪魔の力で蘇った。

50年前の約束を果たさんがために、今日この時まで生き続けてきた。

そして、ルフィ達に出会ったのだ。

「おう、何だ何だもつと弾けブルック!!」

「そうだ!! 鼻わりばしで踊るんだ!! おれは!!」

「ヨホホ、ちよつとお待ちを」

音楽が途切れてしまったことに不満を訴え、騒ぐ一味にブルックは苦笑する。

そして突如、自分の頭蓋骨の一部を掴むと、ぱかつと蓋のように開けて中身を「ごそごそ」と探り始めた。

「……………えーと」

「え——!!? そうなってるのか!!?」

「……もの入れて大丈夫なのそこ」

ぎよつ、とおののき目を見開くサンジやウソツプに構うことなく、ブルックは探し物を取り出し、ピアノの上に置く。

それは、一つの巻貝。

遠い空の海にのみ生息する貝からできた、不思議な道具だ。

「これは昔、ある商戦から買った『音貝』というもので、音を蓄え再生できるという珍しい貝です」

「おお、空島のやつだ!」

「ご存知ですか。：私、ラブーンに会えたらこれを聞かせたくて、肌身離さず持つてるんです」

「何か録音してあるのか」

「『唄』です。死んだ仲間達の生前の唄声：：!! 我々は『明るく楽しく旅を終えた』という：：ラブーンへのメッセージ」

生前の、最期の記憶。仲間達と演奏した、一世一代の大演奏。

伴奏を務めるブルックが最後に残り、倒れるまで続いた：：文字通り命をかけた力一杯の演奏が、刻み込まれている。

「今かけても構いませんか?」

「おー、聴きてエ!! そりゃラブーン喜ぶだろうな」

「では…」

ルフィに許可をもらい、*“音貝”*の殻頂を押す。

やがて流れ出す、渾身の演奏に合わせ、現在のブルックも音びつキリピアノを演奏し始める。

響き渡る陽気な、命を燃やす演奏に、ローラ達も笑顔で振り向き始めた。

「ん？…この唄なら一緒に唄うわよ!!」

「お——!!」

そうして始まる、過去と現在の二重奏。

過去の悲しみを引き連れ、争い続けた男がつかないだ、最後に生き残ったもう一人の仲間に向けて伝言。

事情を知る者も、知らない者も、分け隔てなく明るく楽しくその曲を歌う。

*“私達は最後まで陽気に歌って死んだ”*

彼が悲しまないように、悔いる事がないように。

自分たちの持ちうるすべてを込めて歌い、演奏した音が、やがて伴奏を残して消えていく。

停止した音貝を手にし、ブルックは虚空を見つめ眩く。

「かつて仲間達と共に命いっぱい唄った、この唄…ルンバ―海賊団*“最期の大合唱”*

…暗い暗い霧の海を一人さ迷った50年間…何度聞いた事でしょうか…

何度も悪夢を見た。現実が嘘で、夢が真実なのだと思い込みそうになった。

気の狂いそうな日々を、50年にもわたって続けてきた。

「二人ぼつちの大きな船で…この唄は…唯一…私以外の“命”を感じさせてくれたのです——しかし、今日限り私は新たな決意を胸に、この“音貝”を封印します」

だが、その希望にはもう継らない。

過去に依存するのではなく、まだ見ぬ明日へ。仲間と再会できる未来を信じ、女々しい想いからの卒業を心に決める。

「封印〜!!!」

「え——っ?!?!? やっぱ、そうなってんのか?!」

再びばかっと開いた頭蓋骨の中に、音貝をしまい込む。

再びぎよつと目を剥くサンジ達をよそに、ブルツクは背筋を伸ばし、憑き物が落ちたような様子で胸を張る。

「ラブーンが元気で待っていてくれるとわかった…影も戻った、魔の海域も抜けた

…!! この回に蓄えたみんなの唄声は…もう私一人が昔を懐かしむ為の唄じゃない!!

…これは、ラブーンに届ける為の唄!!」

新たな誓いを、虚空に向けて抱く。

今度こそ、この願いを叶えてみせると固い決意を抱き、ブルツクは力強く吠える。

「暗くない日などなかった…希望なんか正直、見えもしなかった」

それでも、今日まで耐えてきた。

真つ暗な闇の海を彷徨い続け、漂い続け、その先に太陽のような眩しい希望の光に出会えた。

もう、彼に恐れるものなど何もなかった。

「でもねルフィさん…私!!! 生きててよかったア!!! 本当に!! 生きててよかった!!! 今日という日が!!! やって来たから!!!」

鼻水を垂らし、歓喜する彼を一味は優しく見つめる。

苦しみ続けた男が報われた瞬間に、何人かがもらい泣きしながら、新たな始まりを告げた男を見守る。

彼はやがて…唐突にいつもの調子に戻って口を開いた。

「あ、私、仲間になっていいですか？」

「おう、いいぞ!!!」



まるで、出会ったときのやり直しのような軽い調子でのやりとり。

一瞬固まった一味は、しばらくして大きく目を見開きながら声を揃えて叫んだ。

「「「「さらつと!!! 入ったア~~~~~!!!」」」」

「ふふ!!」

ちょうどその時、遠い航路の入り口にて。

一頭の巨大な鯨が凄まじい雄叫びをあげ、心からご機嫌に笑っていたのだった。

## 第260話 “命の紙（ビブルカード）”

「改めまして!!!」

ばん、と懐から取り出したぼろぼろの手配書を見せ、ブルックが跪く。

刻まれた名は“劍侠鼻唄”のブルック、懸賞金は3300万B。

50年前にかけられた賞金だが、100年前のとある巨人達の賞金も維持されていたのだから、今も通じるだろう。

「申し遅れました……!!! 私!!! 死んで骨だけ、名をブルックと申します!!! フダツキでございます!!!」

宴がひと段落し、くつろいでいたところに威勢良く名乗りをあげる。

全員がにこり、にやりと誰一人拒む態度を見せないでいる事に喜びを抱きながら、ブルックは深々と首を垂れる。

「今日より麦わらのルフイ船長にこの命!!! お預かり頂きます!!! 皆さんのお荷物にならぬ様に!!! 骨身を惜しまず頑張りますっ!!! ヨホホホホホ〜」

「よ——し、もいっちょ乾杯だ〜!!!」

再び熱が高まり、料理と酒を求める声上がる。

海賊達の宴は、まだまだ終わらないようだ。

「よし!! ゾロも起きたし!! 出るか海へ!! 次の冒険行くぞ——!!」

「!!「おオ——!!」」

ブルツクの船に置かれていた無数の髑髏、かつての船員達をスリラーバークの一角に埋め、フランキーとウソツプが墓を建てた。

奇しくも自身らの出身である西の海から来た大地で、安らかに眠れるようにと。

仲間達の骸に別れを告げたブルツクを新たに迎え、ルフィは次なる航海へのやる気に燃える。

「気が早いのね、もう船出すの?」

「じつとしてるのキライなんだよ、あいつ…」

驚いた様子で、まだ治療の跡が目立つルフィを見やるローラに、エレノアは深くため息をつき肩をすくめる。

そこに、ブルツクの船から戻ってきたフランキーが話しかけてくる。

「おめエらはブルツクの船貰えよ、舵と帆を直しといた」

「ありがとう、何から何まで世話になるわね!! あんた達は礼を言っても言い尽くせない大恩人よ!! 結婚してあげたいわ」

「おめーは上玉だが残念、おれがスーパーすぎてつりあわねエ」

4445回目の告白も失敗に終わったが、当人に気にする素振りはない。運命の相手が現れる時を信じ続けているようだ。

「別れ難いなア、お前ら。もう2・3日宴やってこうぜ!!」

「だめだ!! 次“魚人島”なんだ!! おれ楽しみなんだ!! 面白エ奴いるんだろなく  
く!!!」

名残惜しそうに呟くりスキー兄弟に、ルフィは好奇心に目を輝かせながら告げる。冒険を前にした彼を止める手段は存在しないのだ。

彼と同じく、サンジやブルックも次なる島への期待に満ちた表情を浮かべていた。

「美しい人魚達と!! おれは戯れるんだウン♡」

「人魚さんのパンツ、見せて頂いてもよろしいんでしょうか…」

「オイオイバカな事言うんじゃないやねエっ!! 人魚は………パンツなんかはかねエよ……♡」

囁くように告げられた言葉に、ぶつと大量の血を噴く色欲の塊達。

顔の下半分を真っ赤に染めながら、三人は仲良く肩を組んでわいわいと騒ぎ、踊り始めた。  
めた。

「人魚達の美しさときたら!! かの海賊女帝ハンコックもたじたじつてもんでよ……」

「マーメイDoo☒ マーメイDoo♪」

「下半身お魚よね？」

「まアまア……夢ぐらい見せといてあげよう」

履かないというか履く必要がないというか、思わず指摘するロビンの肩を引き、エレノアが首を横に振る。

真実がどうであれ、彼らが行って悲しむ事はないだろう。

そこでふと、ウソツプがある疑問を抱きローラに振り向いた。

「何でお前から詳しいんだ？」

「ああ、3年前ここへ来んのに通ってたからな！ サイコーだぜ魚人島!!」

「あ、そうなの？ 普通に航路を進んでる途中だと思ってた」

「ローラ……あんた達『新世界』に行ってたの？」

「行つてたんじゃなくて新世界の生まれなのよ！ 私のママが海賊やつててね……」

!! あ、そうだわ……!!」

意外な事実を目を丸くするナミの勘違いを指摘したローラが、何か思い出した様子で懐から何かを……一枚の紙を取り出した。

「——コレあげる、ママの『ビブルカード』。特別よ？ ナミゾウと私は姉妹分だからね」

「紙?」

「おおお!! よかつたなオイ、ローラ船長のママはスツゲー海賊なんだぜ!!? 大事に持ってるよ、きつと後で役に立つぞ」

びりつ、と引き裂いた一端を渡され、困惑するナミにリスキー兄弟が目を見開いて羨む。

しかし渡されたものが何なのかわかっていないナミには、彼が何に興奮しているのかわからなかった。

「何? 『ビブルカード』って」

「え? 知らないの?」

「ローラ船長、ビブルカードは新世界にしかねえんすよ」

「あ、そうなの」

聞き返され、逆に戸惑うローラが納得の声をあげる。

すぐに彼女は、渡した紙——別名『命の紙』と呼ばれる不思議な『ビブルカード』についての説明を始める。

新世界の一部の店で扱われるもので、人の爪や髪の一部を使って作られるこれは、持ち主の居場所に向かって自ら動く性質がある。

それを親しいもの同士で分け合うことで、互いの無事や居場所を確認したりできるの

だとか。

「へー、不思議だなー。そんなのいっぱいあんのかなー、新世界って!!」

「便利でしょ、このママのビブルカードに私がサインしとくから、いつか何かに困ったらこれを辿ってママに会うといいわ。その時は私も元気でやってたって伝えてね」

興味深そうにビブルカードを見つめるチョッパの前で、ローラがさらさらと名前を刻む。件の母とは相当な実力者であるようだ。

そのやりとりを見ていたルフィが、ふと声を漏らした。

「おれ、それ一枚持つてるかもな、もしかして…」

「今、私もそう思った。……前にあんたがエースに貰った白い紙…同じじゃない?」

「私も持つてるよ」

以前に、アラバスタでエースと再会した際に渡された白い紙。

その正体をこの場で知る事になり、なるほどと声上がる。エレノアも例とばかりに、懐からいろいろなビブルカードを取り出し始めた。

「ほらコレが『白ひげ』のでしょ? でこっちがマルコで、こっちがビスタで、ハルくんでしょ、ジヨズにイゾウ、こっちがマクガイでこっちがドーマ、ホワイティ・ベイのがコレで……………」

「スゲエ、名だたる海賊達の名前が…」

「こつちもすげー奴の娘なんだなア……」

生ける伝説と、その息子達の名前が上がり、ローリング海賊団の男達が騒めく。こちらにも相当な人物の娘がいたと、麦わらの一味も啞然となる。

「——で、これがエースの……」

自慢げに、家族のくれた縁の証を披露していたエレノアの手が、胸元を探ったところで止まる。

唐突に黙り込んだ彼女に気付かぬまま、ルフィも麦わら帽子を探ってビブルカードを取り出した。

「そういう意味だったのか、コレだ」

ずっと触る機会もなかったそれを手に、ルフィはおや、と首をかしげる。

それを目にしたローラ達の方が、ぎよつと青ざめた顔で慄き出した。

「あ」

「ちよつとアンタ！ それ見せて」

「あり？ ちよつとコゲて小さくなってる」

あわてる彼女達に、ルフィは訝しみながらもビブルカードを渡す。

その横でエレノアもビブルカードを……端から焦げて、ちりちりと火の粉を散らせる愛しい男の欠片を取り出し、凝視した。



「……これは確かに『命の紙』……でも」

手のひらに置いたビブルカードを見つめ、ローラが険しい顔で呟く。

異様な空気に、その場の全員がルフィを除いて思わず黙り込む。

「まだ言つてなかつたけど、この紙は持ち主の『生命力』も啓示するのよ!! これ……あんたの大事な人でしょ?」

「ああ、おれの兄ちゃんまでエレノアの旦那だ」

ししし、と自慢げに笑い、普段ならばエレノアが照れて怒り出すような余計な一言を交えるルフィ。

だが、エレノアは一言もこぼさぬまま、掌の上で燃える紙片をただ見つめ続けていた。

「気の毒だけど、この人の命!!! もう……!! 消えかけてるわよ!!!」  
どくん、と。

血の気の引いた天使の中で、自分の鼓動が妙に大きく響いた。

「そいじゃあな——!! お前らー!!」

「みなさん!! 全滅にお気をつけてー!! ヨホホホ!!」

「縁起でもねエ事言うなお前!!」

「ローラ!! ビブルカードありがとう、元気でねー!!!」

ばさつ、と帆を広げ、獅子の船首の海賊船が大海原へ漕ぎ出す。遠ざかるその船影を、その船員達を、大勢の島の被害者達が大きく手を振って見送っていた。

「ママに会つたらよろしく!! 私達も、また会いましょう!! ナミゾウ!!!」

「この恩!! 一生忘れねエぞ麦わらア!!!」

「太陽を……!! 太陽をありがとう……うお……ん!!」

「大恩人、麦わらの一味の航海に栄光あれ……!!!」

声を張り上げ、全身で感謝を述べるローリング海賊団。

やがて彼らの視界は麦わらの一味を捉えられなくなり、ほのかな寂しさを抱きながら静かになる。

彼らはふと、背後の霧の中に一瞬だけ、蠢く何かの影を見た気がした。

しかし、すぐに見間違いだと探るのをやめ、麦わらの一味の武勇伝に夢中になる。

うつすらと、霧の中で浮かんだ何かの目が、離れゆく幽霊島を見送っていたのだった。

——何が起こるか誰も知らない。

謎だらけの フロリアントライアングル 魔の三角地帯

毎年100隻を超える船が霧の中で消息を絶つ——

——それは巨大海賊船スリラーパークがその海に影を潜めた10年前……

——そのずっと昔からの深き謎……

白い霧は折よく今日も立ち籠めて

海の怪奇の顔色を——白いベールで包み隠す——

風は良好、日差しも暖かく心地よい、航海日和。

ほんの少しだけ幽霊島のなまあたたかさを孕んだ風を浴びながら、ルフィは船首の上  
に腰を下ろしていた。

「ルフィ、エレノア、本当にいいの？」

「ん？ ああ……エースの紙か？ いいんだ、気にすんな」

ナミの不意の確認の声に、ルフィは笑みを浮かべて首を横に振る。

気を遣っていると思ったのか、ブルックがバイオリンを響かせながらヨホホと明るく  
笑いかけた。

「ルフィさん、私、構いませんよ!! 寄り道しても!! 今さら私とラブーンに時間などさ  
したる問題じゃありません。〃生きて〃!! 〃会う〃!!! これが大事!!」

「うおお〜っ!!! 会いに行こうぜ兄弟クジラ!!」

「ルフィ、おれ達ア全員、寄り道上等だぞ」

寄り道するなら長くなってもいいと、早く彼らの再会を見たいらしいフランキーとウ

ソップが肩を組んで笑い、ゾロもそれに賛同する。

誰も進路の変更に対して反対する者はいない。だが、ルフィはそれに頷かなかた。

「いやいいんだ、本当に!! 万が一、本当にピンチでもいちいちおれに心配されたくねエだろうし」

「エースは弱いところ見せるの大っ嫌いだもんねエ…」

「そうそう、行つたつておれ達がどやされるだけさ。おれ達が出合えば敵の海賊、エースにはエースの冒険があるんだ」

以前に再会したした時にも、同じ事を言っていた。

海の王はただ一人、王になりたい者とならせたい者がいる矛盾が生じる以上、いつかぶつかり合う運命にある。

それを理解しているが故に、引き返す選択を取らなかつたエレノアだが……その顔は冷や汗まみれでぶるぶると小刻みに震えていた。

「だから……心配なんかししてないししししし」

「動揺しまくつてんじやないのよ!!!」

「じよ、じよじよじよじよ冗談……冗談だから」

明らかに空元気というか無理をしているが、無理やり平静を取り繕う彼女にそれ言う何も言えず、ナミもそれ以上続けなかつた。

代わりに彼女達を安心させるように、サンジが後で知った事実を付け加えてくる。

「……………その『ビブルカード』ってのは本人が弱ると縮むだけで、また元氣になつたら元の大きさに戻るそうだな」

「うん、会うならそんな時だ!! その為にエースはこの紙をおねにくれたんだ!! な!!」

満面の笑みで笑いかけられ、エレノアも苦笑まじりに頷く。

今ここで身を案じていても仕方がない。死にかける事態など、自分や彼の弟も何度も味わつてきたのだから、今更だ。

脳裏に浮かぶ、自分が両足を失つた時の記憶を必死に振り払い、ゾロの方に振り向く。

「そーいえばゾロ君、あんたずつと寝てたからまだ、やつてないよね」

にやりと笑うエレノアの言葉に、思い出す面々。

厨房から運んできた器を手に持ち、酒を注いでから、恒例のようにウソツプが音頭を取り始める。

「えー、それでは改めました。新しい仲間『音楽家』ブルツクの乗船を祝してエ」

「「「乾杯~~~~~イ!!!」」」」

「お世話になりま——す!!!」

がしやんつ、と器から溢れ出す酒を浴び、歓迎を受けるブルツク。

孤独という50年の牢獄から抜け出した『音楽家』。一味の船長が最も欲しがり続

けていた人物を新たに加え、船は進む。

——その先に想像だにしない出会いと別れがある事など、想像もできないまま。

## 第26章 太古ノ王へI

## 第261話 伝説からの誘い

天候は晴れ、されど風は追い風。

やや生ぬるい風が吹く海原を進むサニー号の船室の上に立ち、ナミが記録指針をかざして顔をしかめる。

彼女の視線は、自身の手首に向けたままわずかに揺れていた。

「ん……：やっぱりちよつと変よねエ」

険しい顔で見つめる先の針。魚人島を示し、微かに下を向いていた指針。

数時間程前までは、まっすぐにぴんと進行方向を示していたはずのその見せる異変に、思わず眉間に皺が寄る。

そんな彼女の下で、軽快なバイオリンの音色が響き渡っていた。

「ヨホホホ!!! ご静聴っ!!? ありがとうございます!!! 続きましては芸術の国『ラヴェンラ』で生まれたヒットナンバー『ピバ・ピカリ』!!!」

「うおー!!! いいぞー!!! やれやれー!!?」

「ピ〜バ〜ピカリ〜♪ 気を〜〜つけろ〜♪ や〜つの〜〜芸〜術は〜

くく☒ バくくくくハツだくくく☒ ビくバくくピカリくく♪ あたり一面カラフルくくくく☒」

新たに一味に加わった最年長の音楽家が、ルフィやウソップやチョッパーからの喝采を浴びながら音楽を奏で、歌う。

不気味な骸骨の顔は、これ以上ないくらいに輝いていた。

「しかしおめエの音楽家への執念がここにきて実るとはなア。ずくつと前からおめエ次の仲間は音楽家だ音楽家だつってたよな」

「当たり前だろ、海賊は歌うんだぞ!!!」

「お前のその常識がまずどっからきてんだよ」

思えばいろんな場面でその願望を口にしていた。まず優先すべき役職があったのに口を開けば音楽家と、しばしば仲間達から突っ込みを受けるほどに。

「なんかきつかけがあんのか?」

「あア! シャンクスの船によ、スッゲー歌が上手エ音楽家がいてよ!!? ずっとそいつみたいな仲間が欲しかったんだ」

「〃赤髪〃のトコに?」

「ヨホホホ!!! ご期待に添えるよう弾かせていただきますよいくらでも!!!」

「ウオー!!! ブルックくくく!!!」



何やら気になる話をしかけたルフィにウソツプが尋ねようとしたが、ブルックが新たに音楽を奏で始めたためにそちらに意識が傾く。

やんややんやと騒がしい彼らに、ナミは額を押しさえて深く嘆息した。

「はしゃいじやつても……こっちの身にもなつてほしいわまつたく………」

「んナミすわア……ん!!! ホラー梨のタルトが焼き上がったよオ!!!」

ばたん、と船室の扉を叩きつけるように開き、飛び出してくるサンジ。

手に持ったタルトの皿を絶妙な体勢で維持したまま、ナミの元へ差し出しにくる。

「ヤロー共は後回しでいいから食べてみて……あれ? どうかしたの?」

「……記録指針の調子がおかしいのよ。ちよつとだけ針がブレてるの……壊れちゃつたのかしら……?」

いつも通りの浮かれようで厨房から出てきたサンジだが、ナミの真剣な表情にすぐに空気を読んで静かになる。

彼女の声に誘われて、ブルックにアンコールを送っていたルフィが覗き込んでくる。

「ホントだ。揺れてるな!!?」

ルフィの眩きの通り、*“偉大なる航路”*において絶対の道標であるはずの記録指針がぶれている。基本的には前を向くが、時折思い出したように左側に揺れていた。

「ねエロビン、こんな反応見た事ある？」

「前の空島の時みたいに、より強い磁場で記録が書き換えられればそういう事もありえるかもしれないけど……………あれは例外だもの。わからないわ」

知識人であるロビンに尋ねるが、彼女の知識にもこのような事態はないらしい。ちやつかりサンジが差し入れたタルトを口にしながら、真剣な表情で指針を見つめる。

「そう…………ブルックはどう？こうなつた事、ある？」

「ヨホホ、そーですわねエ……………あアそういえば、あくまで噂で聞いた程度ですが」  
次いで、一息ついたらしいブルックに尋ねてみると、いつの間にかタルトを口に運んでいた彼はたと視線をあげた。

「『偉大なる航路』の島の中には、地場の強弱が変化する特殊な島が存在するとかで……………」

「え？」

「何年、何十年に一度、指針がわずかにですがその島に引かれてブレてしまう……………という事態が起こると聞いた事があります」

見た目と同じ不気味な語り口で告げられ、ナミの顔が歪む。

恐怖体験など、先の島で十分味わつたというのにこの先にまだ続くかもしれないなど、憂鬱でしかない。

「ウソ……そんなのあるの!!? 私聞いてないわよ……!!?」

「あくまで噂ですから。………ただ、ここはまだ“魔の三角海域”の近くですから………謎多き行方不明事件や失踪事件は、この辺りでも十分起こっていますし、何かあるかはわかりません………ヨホホホホ」

「なるほど、不思議海だな!!?」

「そういう事ですね」

いつも通り『不思議』で片付ける船長に呆れつつ、ナミは欄干に頬杖をつく。ゆらゆらと揺れる指針が、不安を表しているようで落ち着かない。

「ん……そのうちおさまればいいんだけど」

この広大な海で、そして何が起こってもおかしくないこの航路で。

何度起こっても慣れない不可思議な現象に悩まされつつ、警戒を怠れず神経を張り巡らせるナミ。

そんな彼女をよそに、ルフィが甲板に向かって声をあげた。

「エレノア……? そっちはどうだ……?」

「………えつと………? ここがこうなつてこうだから……いやその前にここをこうやつてこうしてこう………あ、違う。ここがこうだからこうこうこうでこう………」

一人、甲板のど真ん中に腰を下ろして何やら作業に没頭する天使。

胡座をかき、手の中の小さな箱の鍵穴に針金を入れて弄り続けていた彼女は、やがてがばつと仰向けに倒れ込んだ。

「んア~~~~っ!!! 無理!!! ムリムリムリ!!? 無理!!! 本来のカギがなきや開かない

!!! こんな難解な錠!!! やつてられるか!!!」

「ダメだったみてエだ」

「結構粘ってたがな」

うがーっ!といつもの彼女らしからぬ荒れつぶりを披露するエレノア。

おのおの寛いでいた仲間達は、やれやれと言った様子で彼女のそばに集まった。

「それ……………確かいつの間にか積まれていた財宝の中に紛れていたんでしたっけ?」

「ああ、鍵のかかった箱はこれだけだ。他は全部中身を確認してる」

「モリアの野郎はこんな小さな物に一体何を隠したんだ?」

階段を降り、エレノアの手の箱を……随分と細かな装飾が施されたそれを見下ろ

し、フランキーが呟く。

わざわざこんな小ささのものに嚴重な封印を施す意味があるのか、と。

「こんだけお宝手に入ったんだし、それ位いいんじゃないやねエの?」

「イヤよ。たとえ小さな箱一個でも、中身がわからないままなんて気に入らないわ」

「どういうプライドだ」

愛刀達の手入れをしていたゾロが、妙な執念を燃やすナミに思わず半目を向ける。ローラに財宝を分けたという気前の良さはどこにいったのか。

「錬金術で壊すのも無理そう？」

「やったけど普通の鉄じゃなかった!!? 多分何種類かの金属を掛け合わせた。何かだね……色々試してみたけど、てんで反応がないよ」

「よし、じゃあブツ壊すか」

ぐつたりと大の字になって寝転がるエレノアが投げやり気味に答え、溜息と共に箱を持った手を投げ出す。

その箱に向けて、妙にやる気満々になったルフイが拳を鳴らして近付いた。

「ころころころころやめなさいルフイ!!! 中のお宝が壊れたらどうするのよ!!!」

「修行の成果を試してエنداよ!!? 今のおれなら今まで以上に硬エヤツでもブツ壊せる気がするんだ!!!」

「…私のプライド的に、それを許すとなんか負けた気がしてヤなんだけど…」

ふんふんと猛牛のように暴走しかけているルフイをなんとか止めるナミ。

エレノアから「覇気」を習い、着実に強化されつつある影響か、度々実践したがるようになつたルフイ。

途中まで鍵開けに奮闘していたエレノアは、彼に複雑そうな視線を向ける。

「しかしそんなに嚴重な箱なのか……小せエけど」

「それだけ貴重な宝石とかが入ってるに違いないわ…!!? あたしの勘がそう叫んでる

!!?」

「無駄骨じゃなきやいいけどな……結局お前にもエレノアにも開けられてねエし」

執念に目を燃やすナミが、どうにか開ける方法がないかと自分でも箱に触れる。次で  
実に数十回目の挑戦だ、期待は勝手に高まっている。

ふとその時、やりとりを見守っていたウソツプが「あ」と声を漏らした。

「……………ていうかよ、エレノア」

「ん?」

「さっきからずっとその棒でガチャガチャやってるけど、お前ならカギを作れば一発  
じゃねエか? 前に3の奴がやってたみたいに」

彼の指摘に、エレノアはきよとんと目を丸くして呆ける。

しばらく固まっていた彼女は、やがて針金を両手で挟むと閃光を走らせ、一本の鍵に  
変えると。

かちゃん、と呆気なく箱の封印を解いてみせた。

「……あ……開きました」

「!!!!!!」  
「おオ……!!!」  
「!!!!!!」

居心地悪そうに、鍵の空いた箱を掲げるエレノアに仲間達も引きつった顔でぎこちなく感嘆の声を漏らす。

頬を染めたエレノアは、目を逸らすと軽く咳払いをして気分を切り替えた。

「……んんっ。さてさて皆の衆、お待たせ致しましたな。早速最後のお宝のお披露目といきましようか」

「いよっ!!? 待ってました!!?」

「早く開けて!!? 早く早く!!」

長らく待たされた嚴重な宝箱の中には何があるのか。

甲板に出ていた全員がわらわらとエレノアの周りに集まってくる。

「では……………」開帳〜!!」

ぽか、と小さな箱の蓋がゆっくりと開かれる。

果たして中身はどんな宝石か、それとも装飾品か。何が日の目を浴びるのを待っているのか——期待に目を輝かせる一味の前に現れたのは。

ぽつん、と箱の底に押し込まれた、折りたたまれた紙片だった。

「紙切れ一枚って何だよ!!?」

「あつひやつひやつひやつひゃ!!」

予想だにしない結末に、全員がずっこける中ウソソップが代表して吠える。

あまりに気の抜ける展開に、ルフィに至ってはつぼに入ったのかげらげらと腹を抱えて笑い転がっていた。

「ナミ……あんたの鼻、壊れてんじゃないの?」

「こんな……こんなに辛抱強く待ったのに……ハズレ……いや!!? もうこれは誰かの悪意としか思えない……!!」

「随分と手の込んだイタズラね。暇だったのかしら?」

エレノアがじとりと睨む先で、落胆したナミががっくりと膝をつく。それを慰める口ビンも、無意味な悪戯に呆れた表情を浮かべている。

一味の期待が一気にしぼみ、なんとも言えない気だるげな空気が流れていた。

「……ん?」

その時、紙片を見下ろしていたエレノアがふと気付く。

眉間にしわを寄せ、じつと凝視していた彼女は、やがてはつと目を見開いてその場に膝をついた。

「みんな!!? これ見て!!?」

エレノアの声に、だれていた全員が何事かと振り向く。



視線の集中する中、エレノアが紙片を自分の掌の上に置くと……一味に囲まれた紙片が、ずるずるとひとりでに動き始めた。

「う……動いてる!!? これって!!」

「ビブルカード……!!」

スリラーバークでローラに、そしてアラバスタでエースにもらった『新世界』の不思議な紙。

紙片の正体がそれと同じものであると明らかになり、一味の苛立ちが引つ込んだ。

「……ん☒ そんなで……なんでこの動く紙が宝箱の中に入ってたんだ??!」

「これが動いてるって事は………これの元を持つてる人が、この先にいるって事よね？」

ローラの説明を思い出す限り」

「じゃあ……誰だそりゃ?」

「そんなのわかるわけないじゃない」

大切な人に分け与え、互いの無事を確認しあえるという不思議な道具。

それをわざわざ箱に入れて嚴重に封印するとは、誰がどういう意図でそんな事をするのだろうか、と疑問を抱く。

そこで最初に浮かぶのは、この箱の最初の持ち主の顔だ。

「普通に考えて……これを持つてた者……つまりモリアにとつて大事な人間がコレの示す



「やめて〜!! 私もうお腹いたい〜!! あ、もうお腹なかった!!」

笑いが止まらないらしく、ひーひーとしんどそうな声を漏らす男達。

あまりにも騒がしい彼らに呆れた視線を向けながら、エレノアが紙片を受け取り確かめる。

「読んでみるよ!!? モリアの惚れた女の名前が書いてあるぞ!!」

「やめてやれ」

「いぞ読め読めエ!!」

「もう………そういうの茶化すのは良くないよ」

囁し立てられ、溜息をつきながら、確かに内容が気になるエレノアが記された文字の解読に挑む。そしてすぐに、文字自体の正体に至った。

「んん〜……あア、これは文字の方が焦げて浮かび上がるタイプだね。ビブルカードは燃えないから……サンジ君、ライター貸して」

「ん? あア、わかった」

「何だよ、お前も見なかったんじゃねエか!!?」

「あんた達と一緒にしないでよ。ただ………こんだけ嚴重な入れ物に単なる女の居場所なんて残すかと思つて……」

サンジからライターを借りつつ、火を灯して紙片を炙ってみる。

燃えたりしない特殊な紙は、直火を受けても焦げ一つつかず、表面に付着した透明な塗料のみが焼かれて浮かび上がる。

やがて露わになった文章を、エレノアが読み上げる。

「お、出た出た。えーっと、なにになに………う？」

早く早くと急かしてくるルフイ達を制しながら、全員に聞こえるように声を上げて読み上げる——全員にとって、驚きの内容を。

『我これに 我が尊き宝のありかを示す』

滅亡に抗う意志ありし者あらば 心して挑め

海賊ゴール・D・ロジャー』

## 第262話 空からの訪問者

「……か…海賊王………!!??」

晴れ渡る空に、一味の悲鳴じみた声が響き渡る。

エレノアが手にした紙片を中心に、ブルックを除く8人がぎよつと目を剥きながら後退る。

「ゴール・D・ロジャー………そういえばそんなルーキーが昔いたような」

「海賊王の文字………!!? ウソ…本物!!?」

「てことはこれは……!!? 『海賊王』の残したお宝の目印??」

「スツゲエエ!!! だったらもうコレ…… 『ひとつなぎの大秘宝』じゃん!!!」

紅茶を手に物思いに耽るブルック以外が、ぎゃーぎゃーとあたりを走り回り騒ぎまくる。その中で、最初にはつと冷静に戻ったのはナミだった。

「待つて待つて、落ち着いてあんた達!!? こんな紙切れ一枚がワンピースの目印なわけがないじゃない!!? だいたいこれ、示してるのは『人』でしょ!!?」

「いや!!! 間違いねエ!!! そいつがお宝を持つてるんだ!!! 探しにいこう!!!」

「無茶言わないでよ!!!」

もうほぼ完全にお宝の……ビブルカードの示す方向に行く気であるルフイを制止しつつ、ナミは深い溜息をつく。

気になるのは彼女も同じだが、欲をかいて損をする気はさらさらなかった。

「それにね、急に進路の変更って言われても、私達は次の魚人島に向かわなくちゃならなくて、おまけにそこへ行く方法もまだ見つかってな……」

魚人島に行けなくてもいいのか、と諫めつつ。

ふと、手首の記録指針の進路を確かめたナミの目が、次の瞬間見開かれ表情が凍りつく。

まっすぐに海の底を示していたはずの指針が、びんつと真横を、まるで違う方向を向いていたのだ。

「……!!? ウソ……ヤだ!!! めちゃくちゃ針が引つ張られてるじゃない!!! どうなってるのよもう……!!!」

ありえない事態に、指針に向けて泣き言をこぼしてしまふナミ。

他の面々もわらわらと指針を覗き込み、同じく驚愕の目を向け出した。

「うわっ! …ほとんど完全にさつきと違う方向指してるな」

「……なア、ブルック。これってさつきおめエが言ってた特殊な島に近付いた前兆じゃねエのか?」

「ヨホホホ…!!? どーなんでしようか…!!? 私もこうなったのは初めて見るもので…!!!」

まさか噂が本当だったとは、と驚きの声を上げながら、ブルツクのこめかみを冷や汗が伝う。落ち着いて見えたが、内心では激しい狼狽に苛まれていた。

その時ふと、何かに気付いたエレノアがはつと息を呑んで前に出た。

「ねエ、ナミ。ちよつとその記録指針ここに置いてみて」

「え? う…うん」

「そんで、これをここに置いてみて…と」

がたごとと樽を持ってきて、一味の輪の中心に置く。

そしてその上に指針と、先ほどの紙片を並べておいてみせる。

すると——指針が示す方向にびったりと、ビブルカードがずりずりと動き出した。

「お…同じ方向を向いている…のか!!?」

「何だコリヤア…!!?」

まさかの事態に、全員が再び騒ぎ出す。

こうなると、かの「海賊王」が残した宝物の手掛かりにわずかながら期待感が湧いてきてしまう。

「見ろ!!? こいつもここにへ行けつていつてんだ!!? こうなったら行くしかねエだろ

!!!

「何言つてんのよ!!? イヤよ!!? 怪しすぎるじゃないこんな謎現象!!」

「お…おれもナミに賛成だ。持病の『異常な指針に従つてはいけない病』が………!!!」

「しつかりしろウソップ〜!!! 医者〜!!! 医者ア〜!!!」

気分上々で行く気満々になつているルフイに、ナミもウソップも全力で難色を示す。ふらりとよろける二人の間をチョップパーが無駄に駆け回る。

そんな彼らに、指針と紙片を興味深そうに見つめていたロビンが笑みを浮かべた。

「いいんじゃない? そんなに急いでいるわけでもないんだし……」

「はア………ロビンまで」

「それに……ちよつと興味があるのよ。かの海賊王がここまで嚴重に秘密にしてきた宝物が、いったいどんなものなのか」

「うおー、行こうぜ未知の島!!!」

「面白そうじゃねエか」

彼女らしからぬ、いや、遺跡を前にした彼女がよく見せる好奇心に輝く眼差しを見てしまい、ナミはがつくりと肩を落とす。

他の者も、完全に進路の変更を止める気がないようだ。

「よーし、決まりだな!!! 気合い入れろ野郎共!!! “海賊王のお宝”を探しに行くぞオ」



「!!!」

ルフィの号令に合わせ、ナミの渋々とした指示に従い、獅子の船は進路を大きく変える。

嘘か真か、本物か偽物か。

かの伝説の男が記した、宝があるという島を目指して。

??

「ふぎやあああ〜〜? 飛ぶ!!? 吹き飛ぶ〜〜!!!」

「ぎゃーーー!!!」

「私も〜〜!!!」

「何やってんだてめエら ストロング右」オ!!!」

ごう、と吹きすさぶ強烈な風雨に、危うくエレノアとチョップパーとブルック、体重の軽い三人が吹き飛びかける。

慌ててフランキーが腕を伸ばし、三人を掴んで回収に成功する。

「いや〜…助かったよアニキ。私ら人より軽いから」

「骨なので、ヨホホホ」

「エレノアは特に重傷に次ぐ重傷で食欲が落ちてるから」

「悲しい事いうな!!? 泣けてくるだろが!!!」

飛ばされないよう、欄干やらマストやらにしがみつくと三人の眩きに、フランキーはぐすつと鼻を鳴らして目を逸らす。ウソツプも同じく泣いていた。

「ナミ〜…!!? まだか〜!!?」

「もうちよつと……………!!? ていうか、急かすなら働けエ!!!」

荒波に揉まれ、大きく揺れるサニー号の甲板に踏ん張りながら、ナミは海を見渡し首を傾げる。

天才的な航海の才能を誇るナミでさえ、この海域に着いて数十分、目的地の島を見つけれずにいた。

「気候の変化からして、もうとつくに見えてもいいはず……………なのに今の所、島の影どころか何にも見つからない!!? どうなってるのよこれエ……………!!?」

「天候は時化…波は大荒れ……………!!?」

「あんまり長居すると沈みそうだな」

「だから船を停められる場所を探してるのに……………!!?」

ぼそりと呟くサンジとゾロに返しながら、目を皿にして懸命に探す。

天候を、空気を、そして記録指針を。全てを確認しながら、しかし暗く揺れる最悪の視界の中で見つけるのに難儀していた。

「もう完全にすっかり謎島の磁気に捕まってるし……………」

「……………もうこの島を見つける以外になさそうね」

「エレノア、あれ…『見聞色の覇氣』とかで気配はなんか感じない？」

「ビンビンに。…ただなんていうか……………これを感じる方角に行きたくないっていうか」

最後の頼みの綱、エレノアの『覇氣』を頼ろうとしたナミだが、本人は非常に険しい顔で一点を見据えるばかり。聞こえてくる声もやや強張っている。

「行きたくないって何よ、何かあるの？」

「んんんん……………んんんん？ 何となくくくイヤくくく予感がしてるんだよねエ」

「……………まできて何よもう!!!」

指針の向く方角と同じ方角を見つめ、眉間に深いしわを刻んで唸っている。裾から覗く尻尾が、濡れながら逆立っているように見えた。

そうして航海士と天使が悪戦苦闘していると、案の定一人が駄々をこね始めた。

「もうダメだ、腹へったア…………!!!」

「文句言うんじゃねエ、急な進路の変更で予定が狂っちゃまったんだから仕方ねエだろ。自業自得だバカ」

「ぶへエ…………!!!」

食糧に一時的に制限がかかり、ぎゆるぎゆると鳴り響く腹の虫に苛立ちながら、確かにこのままではまずいと全員が緊張し始める。

その時、不意にウソツプがびくつと肩を震わせ、辺りをきよろきよろと見渡し始めた。

「……………?!? 何だ、なんかスゲー寒気がしたぞ…?!?」

「どうせいつもの『島に入っただけ』じゃない病」

「い!!? いや!!? 今のはマジでメチャクチャイヤな予感がしたんだって…!!!」

騒ぎ出したウソツプに、呆れた視線が集中する。

また勝手に一人でびびっているのだろう、全員がそう判断し放置しかけた、その時だ。

「……………!!!」

びくん、と外套の下でエレノアの耳が動き、ぱつと空を振り仰いだ。

「総員!!? 厳戒態勢!!!」

「なんか来るぞ!!!」

「は!?!」

「え× え?!? 何?!? 何が来るの!?!」

空を睨み、身構え出したエレノアが叫んだ直後、ウソツプもおっかなびつくりといった様子で吠える。

何事か、とどよめく一味が、二人の見据える方向を向いた、その直後。

ごう！と、巨大な赤い何かが一味の真上を飛び越えていった。

「うおわあああああああ!!!」

嵐に加え、さらに吹き荒れる暴風によって大きく揺さぶられるサニー号。

危うく例の三人以外も吹き飛ばされかけ、全員が慌てて船体にしがみついた。

「……な、何だア!? ああ鳥は!?」

「デッツツケエ〜鳥だ!!」

暴風を生み、遠ざかっていく巨鳥の後ろ姿を凝視し、慄く一味。

「偉大なる航路」でもそうそう飛んではない大きさの襲撃者に、しかし普段は騒いでいそうな者達がかかり落ち着いた様子を見せていた。

「けどなんか……デカく感じなかった」

「オーズのお陰だな、いつとき大丈夫だ。ガハハ」

スリラーバークで遭遇した最大の敵のおかげで、多少の耐性があったらしいウソップとチヨップが笑う。

だがウソップの目は、それとは異なる理由で引き締められていた。

「……なあおい、ゾロ、サンジ、エレノア、あとウソップ」

「……ああ」

「わかるぜ……」

帽子を押さえ、揺れに耐えるルフィが仲間達に告げる。

名を呼ばれただけで、その全員が彼の言いたい事を理解し、同じこわばった表情で巨鳥を見上げていた。

「あれ……普通の鳥じゃない」

エレノアが小さく呟いた直後、巨鳥が動く。

ぎよろり、と通り過ぎたはずのサニー号……それに乗った海賊達の中の一人を睨み、大きく旋回しながら再び接近してきたのだ。

「キシヤアアアアアア!!!」

「ギヤ——ツ!!? こっちに來たア〜!!!」

「ごお!と再び暴風に襲われ、さらに揺れるサニー号。

先程よりも振幅が大きく、あわや今度こそひっくり返るかと思うほどの勢いに苛まれる。

舵輪にしがみつきながら、ナミが情けない声を上げていた。

「何で毎回こんなとんでもない奴に狙われなきやならないのよ〜!!!」

「微力ながら……!!? 私が!!!」

再び向かってくる巨鳥を相手に、ブルックが仕込み杖から抜いた刃を手に不安定な足場で跳躍し、首を落とそうと刃を振るう。

だが、放たれたブルツクの一閃は、激しい火花と共に甲高い音を立てて弾かれていた。  
「ヨホツ!!? 硬ア!!? 羽毛が鋼かなんかですか!!?」

決して手を抜いたわけではない、なんなら少しやり過ぎなくらいに力を込めたはずだが、それでも弾かれた。

飛ばされる前にマストに掴まったブルツクを横目に、エレノアが困惑の声を漏らす。

「あいつ……さつき私を睨んだ……?」

なぜ、と戸惑う天使を狙うかのように、巨鳥は鋭く目を光らせ、もう一度旋回し近付いてくる。

なぜか、向けられた目が怒りに燃えているように見えた。

「もう一回来るぞ!!! この嵐の中これ以上揺れるのはマズい!!! 転覆するぞ!!!」

「ロビン!!? あいつの動き止められるか!!?」

「やってみるわ……… 『百花繚乱』!!!」

ウソツプに言われ、ロビンが手を交差させて構える。

途端に、巨鳥の体の各所から何本もの華奢な手が生え、絡み合う。そしてそのまま締め上げようとするが、かすかに翼を曲げる事しかできなかった。

「重いわ、少ししか動きを阻害できそうにない……!!?」

「充分だ!!!」

「上出来…!!?」

脂汗をかくロビンに一言を告げて、ルフィとゾロ、サンジとエレノアが飛び出す。四人で同時に、向かってくる巨鳥を狙う。

「タイミング合わせて!!!」

「おう!!! ゴムゴムの”オ!!!」

「三刀流… ”蟹”!!!」

「”首肉”…!!!」

「その首頂戴、是非もなし!!!」

甲高い咆哮をあげ、鋭い爪の並ぶ足を突きつけてくる巨鳥。その目は確かにエレノアに向けられ、強烈な圧を放ってくる。

その理由を解いている暇はない。今は、船を守るのが最重要事項。

完全に動作を合わせ、ルフィの二の腕が、ゾロの剣撃が、サンジの蹴撃が、エレノアの義足の斬撃が同時に巨鳥に叩き込まれる。

「”鎖鎌”!!!」 「”獲り”!!!」 「”シュート”!!!」 「”シャステイフォル鸚鵡之懲”!!!」

強烈な衝撃が巨鳥の腹に炸裂し、怪物は白目を剥いて悶絶する。

巨体が硬直し、ぐらりと傾き——不意に、巨鳥の体の輪郭が歪み、ばらばらに崩れ出す。



「おわ——っ?!?!」

「何だア?!?!」

じやらじやらと飛び散る鈍色の欠片に吞まれ、押し流される四人。それぞれサニ一号の上に叩きつけられる。

血反吐でも吐くかと思いきや、形が崩れた上に何かの欠片になって飛び散った。

天空から降り注ぐ鈍色に、マストに掴まったルファイがあんぐりと口を開けて固まっていると。

——一人の少女が、鈍色の中からずりりと抜け出したのが見えた。

「…え?!?! 人?!?!」

目を見開き、硬直する一味の前で、巨鳥の残骸の中から抜け出た少女がゆっくりと落下を始める。

言葉をなくし、立ち尽くすルファイ達の中で、最初にサンジが我に返る。

「なんてこった…?!?! 空から…?!?!…麗しのレディが降ってきたア!!?!」

「喜ぶな!!?!」

目をハートの形にして叫ぶサンジにウソツプの突っ込みが飛ぶ。奇しくも彼のその声で、他の者達も徐々に我に返り、落下してくる少女を目に慌て出す。

「まさかあの鳥が食ってたの?!?!?」

「鳥じゃねエ!!? バケモノだありやア!!!」

「何だかよくわかんねエけど…今助けるぞオ!!!」

どういう事か、と慄く一味の中、ルファイがいち早く腕を伸ばし、少女を掴んで船に引っ張ろうと考える。

どの手が少女に触れようとしたその刹那、突如エレノアが顔色を変えて叫んだ。

「待つてルファイ!!! そいつ——人間じゃない!!!」

彼女がそう吠えた瞬間、ルファイの手が少女の片手を掴む。

突然制止され、「え?」と気の抜けた声が漏れた直後、伸びた腕が戻ろうとして……ずしっ!ととてつもない重量がルファイの腕に襲いかかった。

「うぎ?!?! ふぎぎぎぎぎぎぎ!!!」

そのまま腕が引きちぎられるのではないな、と思わんばかりの重量がかかり、ルファイは必死の形相でマストにしがみつき耐える。

空中にあつた少女がサニー号に引っ張られる、それよりも先に。

激し揺れに加えて凄まじい重量のかかったサニー号が限界に達し、ぐるりと船体がひっくり返った。

「!!!ギヤ——ッ!!!」

どばあん!と、獅子の船が逆さまになり。

青年達は、真つ暗で荒れ狂う波の中に飲み込まれていった。

??

朝靄が立ち込める、白い砂浜。

海藻やゴミが流れている、誰もいないその場に、たおやかな歌声が響く。

「——よくばりおおさま ぜんぶがほしい♪ せかいのぜんぶが なんでもほしい

……  
☒

さくさくと砂を踏み、一人の幼い少女が歩いていく。

跳ねるような足取りで、島に伝わる動揺を口ずさみ、跳ねるような足取りで上機嫌に砂地に足跡を刻む。

「れんきんじゅつしが わらつていった♪ おまえのねがいをかなえてやろう☒ よくばりおうは がまんができない♪ あくまのけいやく おろかにむすんだ……ふにゆ?」

ふと、少女の歌声が途切れる。

波打ち際にある何かに気付き、訝しげに眉をひそめながら恐る恐る覗き込む。

打ち上げられた、無数のゴミ。その中に、人が混じっているのに気付いたのだ。

「……? ……!!! た……大変……!!! おに……ちや……ん!!!」

一瞬呆けた少女は、びゃつとその場で飛び跳ね後退る。

そして大急ぎで取って返し、大好きな兄に助けを求めに走った。

## 第263話 “地図にない島”

「肉ウ~~~~ツ!!!」

がぼつ、と勢いよく布団をはねのけ、飛び起きるルフィ。

夢の中の好物をつかもうと手を伸ばし、やがて徐々に意識がはつきりし始めた。

「……………ん？ ん☒ んん…☒ ………………どこどこだ？」

しばらくの間呆け、辺りを見渡す。

馴染み深さを感じる荒屋、やや狭く苦しい部屋。

その中心に敷かれたたびれた布団に、自分は寝かされていたらしい。

「え〜と…たしかお宝島を目指して嵐の中を進んで…でつけー鳥が来て人間を吐いて……………そんでどうしたつけ？」

なぜこんなところで寝ていたのか、何があつたのか、と首を傾げながら記憶を遡り……………しかしすぐに諦め、にっこりと笑みを浮かべた。

「まあいいや、生きてるし。しししし!!？」

よっこらせと立ち上がりながら、辺りを見渡す。

何の部屋かと思えば、囲炉裏やら歪な棚があるところを見るに、漁師か猟師の小屋か

何かなのだろうと推測できた。

「誰か助けてくれたのかな……どつかの島に流れ着いたのか？ あいつらも一緒に着いてりゃいいけど……」

仲間達の姿が見当たらない事に気付き、窓を開けようとした時。

がたつ、と軋んだ音を立てて、一人の青年が網を背負いながらルフィの前に現れた。

「……!!? 目が覚めたみたいだな」

年嵩は十を超えたくらいか、まだ幼さの残る顔立ち。細いがそれなりに鍛えられていそうな体躯を持つ、焼けた肌の少年だ。

どこか大人びた雰囲気を感じさせる彼は、網を床に置き、道具を取り出しながらルフィを見やる。

ほつとしたような声を漏らす彼を前に、ルフィは無遠慮に口を開いた。

「誰だ、お前」

「この家の住人だよ。あんたこそ誰だ」

「おれはモンキー・D・ルフィ、海賊王になる男だ!!」

「……そうか」

お決まりの自己紹介を口にする、少年はさして態度を変える事なく、何やら部屋の隅で作業を始める。

ただ視線はルフィに向けられたまま、どこか警戒する様子を滲ませていた。

「もしかして、おめエが助けてくれたのか？　ありがとな〜」

「いや……………見つけたのは妹で、引っ張り上げたのも妹で……………おれは寢床をちよつと用意したぐらいで、別に、そんな」

「細けエ事はいいいよ、助けてくれたのはホントだろ？　助かった!!？」

快活に笑いながら礼を言うのと、少年はぶいっと目を逸らす。ただし、機嫌を悪くしたわけではなく、照れ臭くなったように見えた。

「ところで……………ここはどこだ？　あ!!？」　帽子——はあるな。そうだ!!!　おれの仲間もここに流れ着いてねエか!!？　サニー号!!？　思いつきりひっくり返っちまったけど大丈夫かな〜、みんな無事だといいいけどなく!!!」

「……………騒がしい人だな」

帽子を探し、すぐ近くにあるのを見つけてかぶったり、質問を重ねたりと、目覚めたルフィは忙しい。

少年が呆れた顔のまま作業を続けていると、少し思考が落ち着いたらしいルフィが少年が入ってきた扉の方を向いた。

「うっし、探しに行つてやるか!!？　お前、ホントありがとな!!？　この礼は絶対するぞ!!!」

「え、ちよつと……」

少年の呼び止める声も聞かず、ルフィはずんずんと小屋から出る。

そして、目前に広がる景色……どこまでも広がる青空と海、白い砂浜に大きな歓声をあげた。

「うお〜!!? でつけー砂浜!!? そんでもつてだ〜れもいねエ!!! しかもなんかいろ〜んなモンがあんなア〜!!」

純白に近い砂浜と、打ち上げられた何かの破片や誰かの持ち物が並ぶ様に、ルフィは目を輝かせながら見渡す。

未知のものが大好きな彼は、好奇心の赴くまま波打ち際に近付いていく。

「……………ん?」

ふと、彼はあるものに気付き、その場で振り向いた。

訝しげに向けられた視線の先、離れた砂浜、巨大な石の塊が——海を背にして鎮座する、鳥の顔が彫られた奇妙な彫像があった。

「うお——!!! なんつつつじやコリヤ〜!!! なアなア!!? 外にあるコレ、なんだ!!? カッチョい〜〜像があんぞ!!!」

「…ああ、これは昔から島のあちこちにあるものだ。何のためにあるのかは誰も知らない……………知ってどうなるわけでもないしな」



「スツゲ〜〜!! スツゲースツゲー!!? 冒険のニオイがプンプンすんぞ!!!」

少年の説明を聞きながら、ルフィは石像に近付ききらきらとした目を向ける。

鷹だろうか、それとも他の鳥だろうか。

アラバスタや空島の遺跡にあったものとも異なる、妙な雰囲気を持つ巨大な像。眼を凝らせば、遠くにも似たような像が並んでいるのが見える。

さらによく見てみれば、それぞれ異なる種類の動物が彫られているようだ。ますます好奇心が刺激される。

「ロビンが見たら何かわかんのかな〜!! ウソツプとチョツパーにも教えてやんねエと!!? ウ〜〜〜!!! じつとなんかしてらんねエ!!!」

島の住民も意図を知らない謎の石像。未知と浪漫が大好きなルフィにとつては宝石や黄金よりも重要な宝物に見えた。

今すぐに冒険したい、その衝動に駆られ、ルフィはぼつと後ろに振り向いた。

「よくしサンジイ!!? 海賊弁当だ——…っいていねエんだつた。先にあいつら探さねエとなー。しっかしあいつら、どこ行ったんだ? しよーがねエなく」

早速探検してみよう、と仲間を呼ぼうとして、自分の状況を思い出す。

島を探るにしても、先ず仲間たちと合流しなければ何も始められそうにない。

考えるルフィのもとに、少年が呆れ顔で近付いてきた。

「あんたの仲間なら、何人かその辺に打ち上げられてたのを妹が見つけてたよ。先に目覚めてたし、どっかに行ってるんじゃないか？」

「そーなのか？　そういや色々転がってるな」

「海流の影響で、いろんなものが流れ着くんだ。大抵はゴミばかりなんだけど、時々貴重なものも流れ着くから、見回りついでに拾って集めたり処分したりしてる……………たとえば、アレとか」

すつ、と少年がルフィの背後を指差す。

訝しげに眉をひそめたルフィは、背後から聞こえるずるずるという……………何か大きく重いものを引きずるような音に気付き、振り向く。

「ふんにゆ…………ふんにゆ…………!!?　ふんにゆウウ……………!!!」

それは、不思議な石像以上に異様な光景だった。

自分達の乗るサニ一号が、決して軽くなどないはずの海賊船が、ゆっくりと海に向かつて動いていたのだ。

一人の、幼い少女に後ろから押される形で。

「サニ……………!!!?」

「……………あ！　お兄ちゃん!!?」

ルフィの声に反応し、立ち止まった少女がぱつと笑顔を見せる。

ついでにぐいっと両手に力がこもり、押していたサニー号がぐんつと宙に舞い、激しい水飛沫を上げて着水する。

嘩然とするルフイを放置し、少女は兄と呼ぶ少年のもとに駆け寄ってきた。

「その人起きたんだ!!? よかったよ」

「お前が見つけて介抱したおかげだ。……………その船は?」

「陸の方に打ち上げられてたから戻そうと思つて。この人でしょ? マークがおんなじ麦わら帽子だからすぐわかつたよ」

妹の髪を撫で、それまで無表情だった顔に微笑身を浮かべる少年。

やがて素に戻ると、あんぐりと口を開けたまま固まっているルフイを見やる。

「というわけだ……………よかつたな、あんたの船が見つかつて」

「…何つっただア…!!? スンゲエ〜〜力だな、お前…!!」

「ヒナはこの島一番の怪力だから……………あれぐらいなら軽く運べるさ」

「そうなのか!!? すつげエ〜……………!!?」

ようやく我に返つたルフイが、少女を凝視して心からの驚愕の声をあげる。

シンゴよりも二つか三つは下に見える少女が、とんでもない怪力を発揮してみせたのだ、絶句するのも無理はない。

自分もそれなりに力はあると思つているが、目の前のこの遙かに幼く小さな少女は、

見た目に似合わぬ膂力の持ち主のようだ。

「おめー、おれと一緒に海賊やらねエか？」

「やめろ!!!」

思わず勧誘に走ったルフィに、少年が反射的に怒鳴りつける。

つい声を荒げてしまった少年は、気分を切り替えるように咳払いをすると、妹と共に並んで立ち、改めて島の訪問者に向き直った。

「改めて…おれはこの島の警備担当、シンゴ。こっちは妹のヒナだ」

「はじめまして!」

「おれはモンキー・D・ルフィ。さっきも言ったけど、海賊王になる男だ!!!」

「海賊? あ、そっか、あのマークって海賊なのか……そうなんだア」

再度自己紹介をすると、兄・シンゴとは異なり少女・ヒナはルフィをまじまじと見つめ出す。

海賊というものに初めて会ったのかもしれない。目が好奇心に輝いていた。

「お前がおれやみんなを助けてくれたんだってな!!? ありがとな!!?」

「気にしないで。困ったときはお互い様……ってというのがこの島のルールだから」

「そーなのか」

礼を言うと、ヒナは照れ臭そうにしながら手を振る。今までにない親切な反応に、ル

「ファイもややむず痒さを感じながら「ししし!!?」と声を上げて笑った。

「…なア、よかったら町に連れてくけど、来るか? あんたの仲間も、もしかしたらそっちに行ってるかもしれないし」

「ん? この島、町あんのか?!? てつきりお前らだけかと思ってたけど」

「…ただ離れた場所に暮らしてるだけだ。おれは島の見張り役も兼ねてるから………それで、来るか?」

「行く!!?」 ありがとうな、何から何まで!!」

シンゴに提案され、ルファイはすぐさまそれに頷く。

知らない島を自由に探検するのは好きだが、手がかりもないまま彷徨うのは本意ではない。案内してくれるに越した事はなかった。

歩き出した兄妹の後について行こうとして、ルファイの足がはたと制止した。

「あ、そうだ。ところでこの島、なんてトコだ? 宝島探してたんだけど嵐に捕まっちゃまってよ」

「………この島に、決まった名前はないよ」

尋ねられ、しばらく黙り込んだシンゴが重い口調で語り出す。

どこか投げやりな、僅かながらの落胆を滲ませた声で。

「ただ……は……島のみんなは『陽炎島』って呼んでる………なんせ、地図になんて載っ

てないからな」

「いよ——し、持ってきたぞチョッパ―!!?」

「ありがとう、そこに置いといてくれ」

照りつける日差しを遮る葉の下。飲み水に適した真水を葉の器に汲んで持ってきたウソツプに、作業中のチョッパ―が礼を言う。

ふう、と額にかいた汗をぬぐいながら、彼は濡れた布をぎゅつと絞る。

「しっかし運がよかつたなア〜…!!? 嵐の中で転覆したと思ったら、いつの間にか島に流れ着いてたとは……………」

白い砂浜と、どこまでも広がる海。

気を失う前の嵐が想像もできないほど穏やかに凪いだ海を見やり、やれやれと肩をすくめる

「えエ……アレは流石の私も死んだと思いましたがよ。あ、私もう死んでました」

「生きてりや何とかなるだろ。ま、リトルガーデンでの壮絶なサバイバルに比べりや、南国で過ごすくらいどうってこたアねエさ」

「ウソツプすげ〜!!?」

得意げに、元から長い鼻を伸ばして騙るウソツプに、濡れた布を動かすチョッパ―が

目を輝かせる。ブルツクの冗句は放置されていた。

やがて、彼らの視線はチョツパーの手元に向かう。

敷き詰められた木の葉の上に寝かされた、未だ目覚めぬ謎の少女に。

「——問題は……」

木陰の下、死んだように眠るその少女。

明るい中でようやくわかった、緩やかな波を作る髪と整った顔立ち。

そしてどこかの国の伝統技術なのだろうか、複雑な模様の施された衣服に身を包んだ、ウソツプ達とそう変わらないであろう年頃。

ウソツプ達の目が覚めて、手当を始めて数時間、未だびくりとも動いていなかった。

「なかなか起きませんねエ、こちらの方も……」

「チョツパー、こいつの具合はどうなんだ？ どつか悪いのか？」

「わからない……目立った外傷はないし呼吸も正常だ。ただ眠ってるだけに見えるけど……」

耳をすませば、確かにすうすうと呼吸の声も聞こえる。

一通り全身を診察したが、目覚めない要因に当たりそうな傷跡は何も見当たらなかった。

そこでふと、ウソツプがある疑問を抱いた。

「なア………デケエ鳥に食われてたのに何ともないつてのは逆におかしくねエか？ 見たところ服も溶けてねエぞ？」

「相当頑丈な服なんですかねエ」

「ンなわけあるか!!？」

新品同様、とまではいかない草臥れ具合だが、少なくとも胃液で溶けた様子はない。ブルツクの言うような特殊な服装でもなさそうだ。

ますます正体がわからなくなり、三人は頭を悩ませる。

しかしやがて、考えても仕方がないとチョツパーが立ち上がった。

「とりあえず、人がいるところを探そう………こいつもちゃんとした所で診てやった方がいい」

「そうだな」

仲間と船も探さなければ、とウソツプとブルツクも頷く。

少女を揺らささないよう、下に敷いた木の葉ごと引きずろうとして……ぐつ、と凄まじい重量がかかり、三人の顔が必死の形相に変わった。

「!!ぬああああああ!!」

歯を食いしばり、眼を血走らせながら、三人ははずるずると少女をゆっくり運ぶ。チョツパーも人型になったが、それでも焼け石に水といった調子だった。



「ぬアんでコイツはこんなに重イんだアア…!!?」

「でっけー鉄の塊引つ張ってるみてエだぞコレエ!!」

「ちよつとこれは骨が折れます……あ、本当に折れたら一大事ですけどね、ヨホホホ  
!!!」

見た目以上に重い少女の体。眠っているせいだろうか、想像以上に困難な運搬に、全員汗だくになりながら懸命に踏ん張る。

徐々に砂浜から移動し、森の中へ。ウソツプが方向を選ぶ先に、えっちらおっちらと足を動かし続けた。

「ルフィさんも他の皆さんも、この島に流れ着いてるといいんですが……そして代わっていたきたい…!!?」

「大丈夫だろ。近くにはいるつばいし、あいつらならなんかあつても自力でどうにかできるさ。おれ達は合流する事だけ考えよう」

「そうだな、きつと大丈夫だ!!?」

骨の体には厳しい作業に悲鳴をあげるブルツクに、ウソツプが冷静に答える。

あの化け物じみた実力の持ち主達ならどこでも生き残れるだろうし、目立つ場所待っていれば見つけてくれるだろう、そう推測していた。

そんな彼の言葉に、一瞬考え込んだチョッパーが訝しげな視線をウソツプに向けた。

「……そういやウソツプ、何で近くにいるってわかるんだ？」  
「ん？」

投げかけられた問いの言葉に、ウソツプ自身もきよとんとした顔を浮かべていた。

## 第264話 “孤島の国”

「うーおー!!? すげーでっけー町があんな!!」

森を抜け、丘を登り、辿り着いた平地。

そこに広がる広い町……島の規模からは考えられないほど発展した人里を目の当たりにし、ルフィは歓声をあげる。

「島の反対側はこんな賑わってたのか?!!?」

「島の地形が急勾配が多くて、人が住める土地は全部こつちに集中してるんだ。こつちの方は海も穏やかだし……」

「そーなのかー」

道案内をしてくれたシングとヒナの説明に耳を傾けながら、ルフィの視線は町から離れない。視界に映るあらゆるものが新鮮で、驚きだった。

魚人、巨人、腕長族に足長族。

見た事のある種族や、見た事のない種族、あらゆる外見を持った人々が、ごく当たり前のように暮らしていた。

「おんもしれ〜やつらがいっぱいいるなア!!! 魚人も巨人もなんか見た事ねエやつも

いるぞ!!? あれなんだ!!?

「ギア………そういうの詮索しないから」

未知の人種に大興奮するルフィに対し、シンゴは冷めた態度のまま。

見慣れた島の住民だからか、ひどく無関心に見えた。

「ん?」

ふと、ルフィはあるものに気付く。

町を行き交い、交流する人々……彼らの手元に、何やら小さな何か忙しそうに動き回っていた。

「はいはい、おつかれさん。コレ、お駄賃ね」

とある八百屋の女店主の元に、袋を首に下げた赤い鳥が舞い降りる。店主がそれを受け取り、貨幣らしき銀色の円盤を渡すと、鳥はどこかへ飛び立ってしまった。

またあるところでは、大工らしき魚人の元に緑色の蝗が跳んできている。

『おう、テストース。親方から連絡だ。今日はマツつあんが腰痛めたらしいからおれら2人だけで残りの箇所片付けろってよ』

「アア!!? またかよ、あのヤロウ!!? こないだもそうやって休みやがったろアイツ!!?」  
『おれに怒鳴んじゃねエよ!!?』

蝗からは野太い男の声が響き、それに相手の大工が怒鳴りつけている。電伝虫のよう

な通信能力があるようだ。

また、通りを飛び抜ける小さな翼竜を子供達が追いかけていく姿もある。

元気一杯の彼らの姿に、道端で寛ぐ老夫婦が微笑みを浮かべていた。

「いや〜……ホントこの子らは便利だねエ……ありがたいねエ……」

「そうじゃのう、バアさんや」

ルフィは唾然とした顔で立ち尽くし、その光景を凝視していた。

あちらこちらで動き回る、金属でできた小さな動物達。島の住民達は、それをまるで当たり前のように使役しているのだ。

「スツツツゲエ〜!!! なんだこの島!!? 何だ!!? おんもしれ〜モンがそこら中に!!!

なアなア!!? アレなんだ!!?」

「ハイハイわかったわかった………いいからもう行くぞ」

「あのちっこいヤツ何だ!!? 鳥のやつとかバツタのやつとか!!? おれもほし〜」

「あとで説明するつての……」

大興奮してばしばしと背中を叩かれ、シンゴは辟易した顔でルフィの手を引く。

ずるずるとその場を離れたがらないルフィを引きずっていると、兄に代わってヒナが満面の笑みで語り出した。

「アレはカンドロイドっていつてね? だいぶ前にこの島に来たどつかの偉い人だつて

いうおじさんが、島の発展のためにつけて持ってきたものなの。いろんな種類があつて便利なんだよ」

「へー、そんなもん持ってきてくれるなんて、そのおっさんはいいやつだな」

「うん！ ヒナもそう思う！」

ルフイが顔も知らぬ男を賞賛すると、ヒナは力強く頷く。彼女にとつてもお気に入り的人物のようだ。

意気投合する妹と漂流者に、シンゴは呆れて深々と溜息をこぼし。

「おい、いい加減お前の仲間を……………」

「あれ、どこ行つたら手に入るんだ？ おれも使いてエ」

「アレはねー、島のあっちこっちにある機械にコレを入れてねー、欲しいカンドロイドの下のボタンを押してー」

「……………聞けよ」

さつさと漂流者に対する役目を終わらせたのに、全くいうことを聞かない。どうしたものかと、引つ張る腕に力を込めながら額を押さえるシンゴ。

そこへ、近くの茶店の軒先に屯していた男達が、シンゴ達に気付き訝しげな視線を向けてきた。

「…ん？ よオ、シンゴ。こっちに来るとは珍しいな。……………そいつは誰だ？」

「新入り。今朝流れ着いたらしい」

「ほオ……そうかそうか、早くに馴染めるといいがな」

シンゴが簡潔に説明すると、男はすぐに事情を理解したのか何度も頷く。

同情的な視線を向けられている事に気づいたルフィは、思わず男の方に困惑の表情を向けた。

「よく荒波を生き延びてこの島に来たな……歓迎するぞ、新入り。まア窮屈な島だが、のんびり暮らす分には困らねエ。ゆっくりしていけ」

「ん？」

「町の近くは土地が足りなくなってきたから、家を建てるんなら隣の半島か山奥に行かねエと確保できねエぞ。仕事は自分でおいおい見つけてくれや」

何やら親切に色々教えてくる男。ルフィが聞き返す暇もなく、喋るだけ喋るとさつさと顔を逸らしてしまう。

咄嗟に訊ね返そうとすると、また別の島の住人が親しげに話しかけてきた。

「あら？ ヒナちゃん、そちらのお兄さんはどなた？」

「新しく流れ着いた人だつてー！」

「あらそうかい……昨日の嵐で流されて来ちゃったんだねエ、大変だったろう」

買い物帰りらしい中年の女性に今度はヒナが説明し、またしても同情の視線が向けら

れてくる。

ルフィが振り向くと、女は買い物袋の中から果物を取り出し手渡してきた。

「はい、リンゴ！ 持っておいきー！」

「ん？ お…おオ。ありがとな」

何の脈絡もない気遣いに、ルフィは呆然としたままそれを受け取る。そしてその場でしゃくりとかじる。美味いがどうにも味に集中できなかった。

すると彼らを皮切りに、近くにいた他の住人達が続々と集まり始めた。

「新入りだって？」

「久々じゃないか？」

「今回は長く持つといいな」

「仲良くやろうぜ！！？」

全員が全員、誰一人敵意を向ける事なく親しげに話しかけてくる。

魚やら野菜やら、何かしらの品を持ってきながら、ルフィの肩を叩き歓迎してくる。やはり誰しもが、労りの視線と言葉を向けてきている。

「祝いの品だ！？ 持ってきたな！！？」

「代わりに私らが困った時はぜひ助けておくれよ」

「島の新しい仲間乾杯！！？」



「遠慮なんかするんじゃないぞ!!?」

「この島はみんな誰でも助け合いだ!!?」

わらわらと住民達に集まられ、ルフィの両手はあつという間に贈り物でいっぱいになる。

好き勝手に出迎えの言葉を投げかけもてなした住民達がさつきと離れていく様を見送りながら、ルフィは改めてシンゴ達に問いかけた。

「……さつきから新入りって何の話だ? おれ別にこの島に住むつもりなんてねエけど」

何か勘違いしているのではないだろうか、と彼らしからぬ申し訳なさそうな表情を浮かべるルフィに、シンゴはどこか困り顔になって見える。

やがて、重く閉ざしていた口をかすかに開いて答えた。

「……………いずれわかる。準備だけは進めとく事だ」

「どういう意味だ?」

「あとで説明する。今は急ぎの用があるだろ」

「あ!!? そーだ!!? そーだな!!? 急いで探さねエとやべエ!!」

シンゴに指摘され、はつと我に返る。

面白いものと奇妙な歓迎のせいで、危うく大事な事を忘れるところであつたと、大荷

物を抱えたルフィが歩き出す。

案内役を置き去りにするほど焦る彼の背中を見つめ、シンゴは再び溜息混じりに呟いた。

「……………どうせ説明するなら、まとまっていた方があとが面倒じゃなくていいし」

ぼそりとこぼした、意味深な一言。

それに気付く事なく、ルフィは広大な町を己の勘と嗅覚を頼りにし、爆走を始めた。

「今いくぞ!!! メシ屋!!!」

「あれ!?!? 仲間は!!!」

「チヨ子姐さくらん!!?!? こっち酒だけ追加で頼まア!!!」

「はいは〜い☒ ちょっと待っててね〜」

とある店で、店主を呼ぶでれでれとしただらしない声が響く。

店主の女性・チヨ子はそれに不快感を示す事は一切なく、厨房で器に酒を注ぎ、飲み物を作り始める。

それを運ぶのは、麗しい少女や女性達だ。

一貫性のない、あらゆる国の伝統衣装に身を包んだ女性陣が、これまた様々な国の伝統的な名物料理を運び、客はそれを堪能している。

まとまっているのだかいなのだか、なかなか理解に苦しむ様相を見せていた。

「……………なに、このカオスな店」

「ああ…カオスだな」

思わず呟くナミの隣の席で、サンジも強く頷く。

彼の目は世界中の料理に向けられ、それ以上に、配膳し接客する女性陣にしつかりと釘付けになっていた。

「あつちにはフローラルな美女…!!! あつちにはミステリアスな美女…!!! あつちには エネルギッシュな美女!!! あちこちにおれの心をかき乱すレディが揃ってやがる!!! おれア……………おれア一体この混沌とした心をどうすりゃいいんだ!!!」

「…コイツは」

この場で最もだらしない顔になり、女性陣一人一人に心を奪われる男に、エレノアが頭を抱えて項垂れる。料理人としてそれでいいのかと。

「ま…店の内装にいちいち文句つける気はないから別にいいんだけどさ。待ち合わせ場所にさせてもらってるだけだし」

気を取り直し、後頭部で手を組んで寛ぐ。

次いで、物憂げな顔で頬杖をついているナミに視線を向け、尋ねる。

「ナミ、記録指針は？」

「……………またぐるぐるし始めちゃったわ。ほんつと意味がわからない」

ちらりと手首の記録指針を見てみると、二つの方向を交互に指し示し、なかなか定まらない。こうなつてはもう、普通の方位磁石と変わらない頼りなさだ。

はあ、と深い溜息をこぼし、ナミとエレノアは机の上に突つ伏した。

「島の外も難問だけど、私達にとつてはこつちが一番の問題なのよね……………記録指針なしにまたあんな嵐に巻き込まれたら、今度こそ終わり。それに、次の島の魚人島さえ目指しようがないわ」

気怠げな顔で、何度も深く嘆息するナミ。

飲食店、人目のある場所で見せる態度ではないが、理不尽に通せんぼされている今の状況では仕方のない事だろう。

「エレノア、あんた磁場の原因とかわからない?」

「んんん…なんか感じないかって言われたらピンピンに感じてるけど…アレをどう表現すべきか。言葉にするのが難しいんだよね」

ナミに問われたエレノアが、外套の下でぴくぴくと耳を動かし「声」を探る。そうする事で、より一層その気配が強く感じられる。

険しい表情のまま、嵐の中でも感じていた未知の気配を感じる方角を指差した。

「方向的には…あっち。太陽の位置的に東北東」

「地図でもあれば楽なんだけどなア」

「ま、その辺はみんな合流できたらおいおいね……」

原因と思わしきものがあり、取り除けるのであればすぐさまそうしたいが、指針がないのなら地道に探索する他にない。

便利さに毒された人間は、想定外の事態には翻弄される他にないようだ。

「……ていうかエレノア、あんたなんか妙に緊張してない？ 人前でフード外さないのはいつもの事だけど、今日は妙に気を張ってるっていうか……」

「……なんとなく」

ふと感じた疑問に、ナミが少し訝しげになる。種族的に目立ちたくないのはわかるのだが、今は特に嚴重に隠している気がする。

その問いにエレノアが曖昧な返事だけを返していた時だった。

「着いた——!!! メシ屋——!!!」

ばんつ、と店の扉が勢いよく開かれ、お待ちかねの麦わら帽の青年が姿を見せる。涎を垂らし、満面の笑顔を浮かべた彼の顔を見つけた途端。

ひゅん、と一瞬で姿を消したエレノアが、鬼の形相で襲いかかった。

「よくも二オイにつられてのこのこ出てきやがったなバカ船長がアアア!!!」

「ほぎゃ——!!!?」

「ギャ——!!?」

どこん、とルフィの脳天に機械鎧の踵が振り下ろされ、轟音が辺りに響き渡る。絶叫するルフィが床に叩きつけられ、それを見た兄妹が悲鳴をこぼす。

大の字に倒れ伏したルフィを見下ろし、エレノアはふんと鼻を鳴らした。

「まったく…!!? 仲間ほつたらかしにして真つ先にメシ屋に走るとは……………予想通りとはいえほんつとバカなんだから!!!」

「べんなしやい…」

「……………どういう力関係なんだよ、お前ら」

伏したまま弱々しく謝るルフィに、エレノアの説教は続く。

あれだけ自由気ままな青年が叩きのめされる様に、シンゴは戦慄し、ヒナは彼にしがみつきがたがたと震え上がっていた。

「おつ、ルフィこの野郎やつと目エ覚ましやがったのか……………悪いなシンゴ、手間アかけさせてよ」

「気にしないでくれ…助け合いが島のルールだから」

「ヒナちゃんもありがとね♡ このバカを見張つとくの大変だったでしょ?」

「平気だよ! 麦わらのお兄ちゃん、面白いから」

ずっと眠っていた船長が姿を見せたため、サンジとナミが彼の方に近付き迎える。

そして自分達を引き上げてくれた少年と少女に改めて礼を言い、頭を下げる。

そこへ、冷水を注いだ器を盆に乗せたチヨ子が満面の笑みと共にやって来る。

「あなたがエレノアちゃん達の船長さん？ 嵐の中大変だったわねエ」

「ん？ この店の奴か？ 平気だ、俺の仲間はみんな強エししぶてエからよ!!？」

「あらあら、頼もしいのねエ」

ひりひりと痛む頭をさすりながら体を起こし、強気な言葉を吐くルフィ。

本気で感心しているのか、冗談と捉えたのかは不明だが、さして目立った反応を見せる事なく、チヨ子は冷水をルフィに渡して背を向ける。

「島の暮らしに慣れるまで時間はかかるだろうけど、期限なんてものはないからゆっくりしてってね」

ぱたぱたと手を振り、その場を後にするチヨ子の背中を見つめ、ルフィはまた首を傾げる。やはり、島の住民達と同じ反応を示された。

「……………なアお前ら、この島の奴らはさっきから何の話してんだ？」

「さア？ どういう意味なのか聞こうとは思ってたんだけど、みんな当たり前前みたいによくしてくって言うてくるもんだから言い出しづらくって」

「あア……………全員が全員、妙に気安くってな。滅多にねエ事だからつい反応が鈍っちゃまった」

「どういう意味なんだろうねエ……………まるで」

島の住民達の奇妙な物言いや態度を思い出しながら、四人は首を傾げ問いかけ合う。それを見つめるシンゴの複雑そうな視線に気付かぬままに。

「私達が全員、二度とこの島から出られないみたいな…」

ひゅうひゅうと吹きすさぶ、海風。崖下に広がる広い広い海原。

遙か先まで見渡せる絶景を前に、フランキーは独り、絶句していた。

平地では見つけられなかった、島の住民達の態度の背景にある同仕様もない理不尽を前に、ただただ言葉が見つからない。

「オイオイ……………こんなもん……………どうしろってんだよ……………!!!」

彼が見下ろす先で、荒れ狂う幾つもの巨大な渦潮。

何百mも先まで続き、怪物の唸り声のような轟音を響かせるその光景を前に……………彼は、ひたすらに打ちのめされていた。

島一つをぐるりと囲む天然の牢獄の檻を目の前にして。



## 第265話 価値なき宝 //

「はい!!! // 偉大なる航路満漢全席 // お待ちどお!!!」

「うおおおお~~~~~!!! スッゲー!!!」

どんつ、と卓上に置かれた大小様々な皿、そして盛り付けられた料理。

香ばしい香りを放ち、これでもかと存在感を発する数々の料理を前に、涎を垂らしたルフィが歓声をあげる。

「これアラバスタのやつ!!! こっちはウオーターセブンで見たやつ!!? 知ってる国のメシも知らねエ国のメシもある!!! うんまそくそく!!!」

「船長さんがたくさん食べるつて聞いてたからね!!? それに新しい子がきたお祝いもしておかないと!!! さア食べて食べて!!?」

チヨ子が促すや否や、ルフィはフォークとスプーンを握りしめ食事を……というよりは捕食を始める。片っ端から腹に収めていく様は礼儀とはまるで無縁だったが、チヨ子が気にした様子は見受けられなかった。

「注文まだのハズだったんだけどな………みんな集まれてないし、先に食べちゃっていいものか」

「いいでしょ。空腹のルフィにだだこねられちゃ面倒だし」  
「そりやそうか……………」

まだ集まれていない面々の事を思い躊躇うエレノアに、先に一口頬張ったナミが宥める。随分店で待たせてもらったのに、長居するのも悪いだろう。

ならばと箸を伸ばすエレノアのすぐ横で、ルフィが満面の笑みを浮かべてまた声をあげる。

「うんめエエ〜!!! アラバスタで食つたのとまったく一緒だ!!! 懐かしいな〜〜」

「こりやマジでうめエ……………あのジジイも唸るぜこりやあ」

遠く離れたもう一人の仲間の故郷を思い出し、懐かしみながらもルフィの手は止まらない。

サンジも料理を頬張り、恩人たる料理人にも匹敵しうる味の良さに感嘆の声を漏らす。美女を讚える余裕もなくなったようだ。

「チヨ子さん、アラバスタに行った事あるの?」

「むか〜〜しにね? 料理人として武者修行をした時に行ったの。テラコッタさんっていう人と出会って仲良くなつて、お互いにお料理の事で色々と話し合ったりしたのよ」

「テラコッタさんと知り合いだったの!?」

もしや、とふと疑問に思ったナミが尋ねてみると、意外な人物の名前が出てきて思わず目を見開く。

慄くナミ達をよそに、チヨ子はどこか遠くに想いを馳せ始めた。

「懐かしいわア……15で故郷を飛び出してあつちの島へこつちの島へ………未知の島で初めて出会う食材、調理器具、お料理、料理人……!!! いろんな海兵さんや海賊さんにも振る舞ったりしたっけ………あの頃みんなはいまも元気にしてるかしら」

「ステキなチヨ子さんは思い出もステキだア………♡」

ほう、とどこか寂しげなため息をこぼすチヨ子。

憂いをにじませた横顔に、サンジがくねくねと擦り寄りながら鼻の下を伸ばす……が、チヨ子が次にこぼした一言にびしりと凍りついた。

「クック海賊団の皆さんは今頃何してるのかしらねエ」

「!!?」

驚愕に目を見開き、固まるサンジ。同じくエレノアもびくつと肩を震わせ、チヨ子を凄まじい勢いで二度見した、ぎこちなくサンジと視線を交わす。

「……あの、その海賊団ってまさか『赫足』の………」

「あら、ゼフ君の事ご存知？ 若い時に会ったきりなのよねエ。思い出したらまた会いたくなつたわ」

震える声で恐る恐るチヨ子に尋ねると、そんな呑気な返答が返ってくる。

「ごくり、と一味から息を呑む音が響き、ルフィまでもが目を見開いた状態でチヨ子を凝視した。」

「……ねエ、ゼフ君ってオーナーの事だよね……………バラティエの」

「あ……ああ、クック海賊団つてのも間違いないねエ。あの頃ジジイが率いてた一味の名だ」

「それを君呼びつて……………」

「おばちゃん、歳いくつだ」

「ウフフ♪ さア、いくつかしらね？」

足と全盛期の力を失ったとはいえ、*「偉大なる航路」*を1年生き延びた猛者の一人。多くの者が当時恐れたはずの海賊を、親しい友人のように語る彼女に、戦慄の視線が集まる。

「いったいどんな人生を送ってきたのだろうか。」

事情を深く知らないシンゴは、席には着かず一味を見つめていた。そしてぼそりと、卓上の料理を見下ろして目を細める。

「……しかしチヨ子さん、コレは流石に作りすぎなんじゃ。コイツらこの島に来たばつただぞ、いくら新人歓迎でコイツが大量に食うからつて……………サービス過多なんじゃ」

「えエ〜？ ダメ？」

「ダメでしょ。逆にこつちが気を使うでしょう………まったく気にせず食ってるやつはいますけど」

「あア、気にすんなシンゴ。このバカが食いまくってる分はきっちり払うから」

ひどく高値がつくであろう、調理法も食材も異なる美食の数々。

ルフィが店に来るとすぐに調理を始め、あれよという間に並べられたそれを見て、チヨ子の行き過ぎを疑ってしまっていた。

だが、そんな兄の心配に、サンジが苦笑しながら手を横に振った。

「流石に現金は足りないけど、船にある黄金を換金して貰えば軽く支払えるわ。気にしてくれてありがとね。助けてくれたお礼に何か一緒に奢ってあげちゃおうかしら」

「……………!!!」

「ナミが人に奢るって言ったア………?!?!?」

スリラーバークで手に入れた財宝の数々を思い出し、ナミが得意げに語る。

彼女らしからぬ誘いまで飛び出してきて、食事中のルフィがぶほと口に含んでいたものを吐き出し、エレノアはまた気絶した。

「う………支払う気でいてくれるのは嬉しいんだけど、それは多分無理だと思うわ」

「え?」

無表情でルフィの襟首をつかんだナミは、何やら申し訳なさそうな顔で頬に手を当て

るチヨ子のつぶやきに静止する。

妙な嫌な予感が脳裏に走り、どういう事かと、背筋に寒気を感じながら女店主に振り返ると。

「この島ではねエ……黄金とか財宝つてぶつちやけあんまり価値ないのよ」

かしやーん、とどこかで食器の落ちる音がする。

告げられた無慈悲な言葉に、ナミは、そして他の面々は大きく目を見開き、蒼白に染まった顔でチヨ子を凝視した。

「……………ウ……………ソ」

「ごめんねエ？　ちゃんと説明しておけばよかつたわねエ」

「え……でも、黄金よ？　宝石とかいっばいついた財宝よ？　価値がないとか……………いやいや流石にそれは」

「ん……どう説明したらいいのかしら」

まさか、と自分が耳にした言葉が現実とは受け入れられず、ひくひくと頬を引きつらせながら、苦笑するチヨ子に説明を求めた。

「欲しがる人がねエ……この島にはまずいないのよね。だから島の外でどれだけ価値のあ

る宝物を持ってこられても値段がつけられないの……悪く言うと、そこらへんの石ころにも負けるわね」

かはつ、とナミが見えない血を吐き、椅子の上に崩れ落ちる。

倒れそうになる彼女を慌ててサンジが止めるが、白目を剥いた航海士は何の反応も返さない。というか気絶している。

しんと静まり返った空間で、ルフィが戸惑いながらエレノアに問いかける。

「……………おいエレノア。つまり…どういう事だ?」

「この島、宝払いムリだって」

「えエ~~~~~!!!」

流石に事態の深刻さに気付いたらしく、ぎよつと目を飛び出させるルフィ。

頻繁に宝払いという名の食い逃げをかましている彼だが、端から駄目だと言われれば流石に慌てるらしい。

「ルフィ!!! いますぐ食うのやめて!!! マジでやめて!!!」

「悪い、もうカラだ」

「手遅れです!!!」

「ウソでしょオ!!!」

「てめエあの数秒でどんだけ食ってんだよ!!?」

意味などないかもしれないが、とりあえずこれ以上金を取られてたまるものかと、まずルフィの食事を止めさせようとし。

すでに空になった全ての皿を前にがくりと頭を抱える羽目になる。

「ナミさん……!!? 今払えるお金っていくらある……!!?」

「……………全部合わせても約1万B…………!!! どこかの島で換金しようと思つてたから油断してた……!!? ど、どうしよう……………!!!」

財布を確認し、寒々しきを感じる中身を改めて目の当たりにしナミの顔からさらに血の気が引く。よもやこんな事態に陥るなど誰が想像しただろうか。

「あら……」

「ああ……………やつぱりこうなった」

「チヨ子さん、初めて来た人にはサービス精神高すぎだからもー」

頬に手を当て、困ったように首を傾げるチヨ子に、シンゴとヒナが呆れた声を漏らす。割とよくある事態なのだろうか、慣れた雰囲気を感じられる。

もつとも、そんな彼女のうっかりに巻き込まれる方は堪ったものではないのだが。

「ん………私としては別にオゴリとかツケとかでも気にしないんだけど……」

チヨ子本人としては、騙すつもりも困らせるつもりもなかったらしく、無理に請求しようという素振りは一切ない。



が、女店主の代わりを名乗るように。

他の席で食事を堪能していた屈強な男達が、いつの間にかルフィ達を取り囲み出していた。

「おうアンちゃん達……………チヨ子さんの店で金も払わず帰るたア、どういう了見だ？ あア!!」

「まさかとは思うが…ハナから姐さんの人柄につけ込んだ食い逃げじゃねエだろうな…!!?」

「違うよな？ 違うと言えよ。じゃなきや姐さんの次の食材はてめエらになるぜ…」

ばきばきと拳を鳴らし、強面の顔で見下ろしてくる数人の豪傑達。

実力的には、ルフィ達も決して引けは取るまい。

しかしそれ以上に、決して逆らってはならないという凄まじい威圧感に包まれ、全員が言葉を失っていた。

「いやいやいやいや!!? ホント!!? ほんとに払える予定だったの!!? 財宝はほんとにあるの!!! 食い逃げする気なんてさらさら……………しよっちゆうしてるけどこのアホは」

「やべエぞ言い訳のしようもねエ……………!!?」

慌てて言いつくろうとするのだが、船長にいくつも前科があるためにそれ以上何も

言えなくなる。もう二人は庄に震え上がるばかりだった。

「あ……あの……皆さんどうか穏便に………ルフィ、とりあえず脱げ。あんたが持つてる分全部出せ。早よ、早よ」

「待て待ておれもう一銭もねエぞ?!? 小遣い使い切つちまつたし……やベエ、知らねエおっさん達に殺される………!!!」

「チクシヨウ……人が良さそうな見た目に騙された………ぼつたくりみたいなもんでしょこんなだまし討ち………!!!」

どうにかこの状況を打開できる方法はないものか、とルフィに促し、そして頭を振り絞るエレノア。

急ぐルフィは懷をばさばさと探り続け……ふと、眉間にしわを寄せ動きを止める。

「………ん? 何だコレ、なんか入ってんぞ?」

ズボンのポケットに違和感を感じ、ひっくり返して探る。

すると、途端にじやらじやらと十数枚の銀色の小さな円形の板がこぼれ落ち、ルフィの顔が訝しげに歪む。

それを——硬貨のような金属製の何かを拾い上げてみて、思わずじつと見つめる。

「……何だコリヤ? コイン? メダル?」

「なにそれ、どこで拾ったのよそんなの」

「知らねエ、なんか勝手に入ってた」

「おいルフィ、流石にそんなモン出したってどうにもならねエだろ。もつと懐探せ。最悪身ぐるみ剥がすしかねエぞ!!?」

明らかに通貨ではないものをしげしげと見つめるルフィをサンジが睨み、解決策を求め、このまま全身の毛をむしり取られる事になるのか、と内心で悲壮な覚悟を決めていたその時だ。

「あら、ちようどいいもの持つてるじゃない。支払いはそれでいいわよ?」

あつけらかんと、ルフィの手元を見やったチヨ子が明るく告げ、効果をひよいと摘まみ上げる。そして、その場の空気の張り詰めが一気に和らいでいった。

「え?」

「枚数的にちようどみたいね……まいどあり〜♪」

「何だよ、文無しとか言つといてちゃんとあるじゃねエか。おどかしやがって……」

「人騒がせな……」

じゃらじゃらと床に落ちた効果を拾い上げ、一枚二枚と数え上げたチヨ子が安心した様子で厨房に引き返していくと、他の客達もそろそろと自分の席に戻っていく。

取り残されたルフィ達は、互いに目を見合わせぽかんと呆けていた。

「……………つまり、どういう事だ?」

「セーフだつて」

「何だよ大丈夫なら最初からそう言えよなっはっはっは——…」

ひやひやした、と呑気に笑い出すルフイ。

その顔面に、ナミの拳とサンジの蹴りが叩き込まれ、青年はあつという間にぼこぼこにされる。

悲鳴が響く店内で一人、エレノアは机に頬杖をつき荒い息を吐いた。

「調子に乗るんじゃないよまつたく……!!？」

はーっ、と苛立ちなのか安堵なのかよくわからないため息をこぼし、ふと視線を机の上に残った件の硬貨に向ける。

指先で摘み、天使は胡乱げな視線で小さな金属片を見つめた。

「……………こんなものに価値があるとはねエ」

片面に掘られた、細かな模様……虎の顔を模したような紋章が、窓の外からさす光を浴び、きらりと意味深な光を反射した。

??

波の音が響く、島の一角。

鬱蒼と茂る密林の中からそびえ立つ岩山に走る、辛うじて道と呼べそうなわずかな足場を歩く二つの影。

岩山の壁に触れながら、二人組の片割れの美女がふつと笑みを浮かべた。

「…オイ、まだやめねエのか。起きてからずつとその調子だぞ」

「ごめんなさい、もうちよつとだけ……」

「何回目だそのもうちよつとは!!! いい加減にしろよ遺跡マニア!!!」

興味津々とした表情で岩肌を撫でる美女に、後ろを歩く緑髪の剣士が怒鳴りつける。

「この島に漂着し、早数時間。」

奇妙な石像を目の当たりにし、そこからこの岩山に……各所に文字が刻まれた遺跡に辿り着いたロビンの探索も、すでに随分な時間が経過していた。

「……なんて興味深い遺跡……!!? こんな形のものは、今までどこにも確認されていないわ……」

「そりや何よりだよ……」

船長よりも先に不思議なものを堪能している点を指摘するべきか悩みながら、いつの間にか付き添い役になっているゾロが肩を落とす。

ちらりと横目を向ければ、彼女の追い求める文字が——今やロビン以外に誰も読めない遙か昔の文字が当たり前のように並んでいるのが見えた。

「……………歴史の本文」 つつったか。ならこの島にも兵器の手がかりとやらが隠されて

んのか」

「可能性はあるわ。しかも、この島はまだ政府に捕捉されていない完全な手付かず  
………外界から完全に隔絶された、存在すらあやふやな環境だからこそね」

「空島みたいなもんか」

「そうね」

熱に浮かされたように、軽い足取りで壁に触れていたロビン。

その足が一瞬、足場からずれて宙に浮く。危うく落下しかけた彼女の背を、ゾロが無  
言で支えてやった。

「………つたく、気イつけろ」

「ごめんさい」

ぶつきらぼうに手を引かれ、ぼつが悪そうに謝罪を口にするロビン。

しばらくゾロの面倒臭そうな表情を見上げていた彼女は、やがて不意に、可笑しげに  
声をこぼした。

「……ふふっ」

「? 何だよ」

「いえ………少し前なら、もっと嫌な顔で助けてもらってたでしょうね」

「ちっ……下らねエ事言ってんじゃねエよ」

やや乱暴に手を引き、足場にロビンを戻す。

付き合いきれるか、と言わんばかりに踵を返し、その場を後にしようとした時、ロビンが突如強い声で彼を呼び止めた。

「…ゾロ、見て」

「あ？ ……………コイツは」

振り向いたゾロは、ロビンが触れる岩壁の一部を見下ろし、そこにあつた奇妙なものを前に訝しげに眉を寄せる。

数多の難解な文字に囲まれた中。

刻まれた蝗を模したような紋章が、考古学者と剣士の目を惹いた。

## 第266話 “オーバーテクノロジー”

「まったくヒヤヒヤさせやがるぜ。こいつがなかったら一体どうなつてたか……」  
「ついでだな、ししし!!？」

「言ってる場合か無銭飲食常習犯」

賑わう町の通りを歩きながら、サンジが半目をルフィに向ける。

危うく尻の毛まで抜かれかねない気迫を味わい、全員がほっと安堵の息をついていた。

「そもそもお前、そんなモンどこで拾ってきたんだ？ まずこいつは一体何だ？」

「さー、何だろな。なんかズボンが妙に重いなどは思ってたんだけどよ……おい見ろ、なんかカツチヨいいマーク入ってんぞコレ」

懐にまだ残っていた硬貨を掲げ、首を傾げるルフィ。

よく見れば確かに何かの紋章が……翼を広げた鳥の衣装が刻まれているのがわかった。

「こりゃあ……鷹か？ 他にも象やら虎やら動物の絵が入ってるが……ガキのオモチャみてエな代物だな」



「本当にどこで拾ってきたのやら……うわ、私の靴にも入ってら」

じやらじやらと掌の上で硬貨を弄び、サンジは眉をひそめる。

ふとエレノアが靴の中から違和感を感じ、ひっくり返してみるとさらにこぼれ落ちてくる。

「ねエヒナちゃん！ 本当に支払いはこれでよかったの？ コイツが知らないうちに持ってただけのものなだけけど」

「いいよと思うよ？ むしろみんなそれ使って買い物してるくらいだし。専門のお店があつて、そこならそれとお金を交換してくれたりするんだよ」

「フーン……変な物を欲しがっているのねエ」

チヨ子のちよつとした暴走を止められなかった負い目か、まだ案内を続けてくれている兄妹に問いかかけ、思わず唸るナミ。

金ではないのは確かだが、それがこの島では財宝より価値があるというのだから驚きだ。

「まあいいわ………ルフィ、他にこのメダルを持ってたら全部出して。可能な限り換金するわよ」

「切り替え早っ!!?」

「財宝をお金にできないんじゃないわ。ここがどこなのか把握するにも時間がか

かるだろうし、当面の生活資金を確保するためにも使えるものは使わないと。ほら跳んで。跳べ」

「カツアゲか!!!」

天候棒を突きつけ、目をBではなく謎の硬貨の形にしたナミがルフィに促す。完全によくに突き動かされたその姿に、ルフィも流石に怒りを見せる。

「交換してくれるのって、どこのお店?」

「……あそこで」

エレノアが問うと、シンゴは山の方を指差し——そこに聳え立つ硝子張りの巨大な建物を示す。

陽光を受け、燦然と輝くそれはまるで未来の城。

圧倒的な存在感を放つそれに気付き、ルフィ達ははーっと感嘆の声を漏らした。

「うお、何だあのでかい建物」

「何年か前にこの島にやってきた富豪が建てた……会社だつて。メダルを持って行ったら金や道具と交換してくれるんだ」

「ふーん……」

慄くサンジにシンゴが説明を続け、全員の視線が硝子の城に集中する。

エレノアだけは、巨大な建物をどこか胡散臭そうな眼差しで射抜いていた。

「道具ってあっちにあったいろんな道具か!? トリのやつとかバツタのやつとかか!?」

「ああ」

「スツゲーな!!! あれ作ってるのかなのか〜」

「ああ…町のあちこちで使ってるちっこい機械の動物だろ。アレと交換できんのか? そりゃいい」

途中に何度も見かけた円柱状の機械。変形して生物の形になる不思議な道具の事を思い出し、ルフィは目を輝かせサンジも羨む。

しかしそれ以上に、それだけの技術を持つ組織がこの地にいる事が不思議でならなくなる。

「なんだってまたこんな小さな島にあんなデカイ建物おっ建ててんだ? その金持ちとやらは」

「さア……おれ達、そういうのは詮索しないから」

「でもおじさんは凄く気さくでいい人だよ。お誕生日を迎えた人に絶対にケーキをプレゼントしてくれるの!!! すっごいハイテンションで」

「いい奴だな〜」

ルフィはすっかり謎の人物を気に入ったらしく、島の住民達を羨ましそうに眺めてい

る。案の定、疑う素振りなど全く見当たらない。

「よし、おれもあとでこれとあのオモチャ交換してこよ」

「おれも行ってみるか………傍目から見てもなかなか便利そうだったしな」

「何を羨ましがってるんだか………アレぐらいなら、フランキーなら自分で作れるんじゃないの?」

「男のロマンってのはよくわからんね……」

わくわくと胸を弾ませている男性陣に、女性陣が向けるのは冷めた視線だ。割と長く共に旅をしているが、彼らの感性は決して理解できないらしい。

その時、ふとナミが隣の天使が見せる違和感に気付き振り向いた。

「エレノア、あんたさつきからなんか唸ってるけど、どうしたの?」

「………いや、さつき店にいたおっさん達が、なくんかどつかで見たような気がしててさ。どこだったっけなって……」

「どつかって………賞金首?」

「多分………でもなんか違和感強いんだよなア」

時折腕を組み、考え込むような仕草を見せていたエレノアに尋ねると、彼女自身も自信がないのか曖昧な答えが返ってくる。

しばらくうんうんと悩み続けるが、なかなか答えが出てこないらしい。

「はくく……よつと。やつと運び終わったぜ、こき使いやがってアンニヤロくく………」  
「まーまー。お世話になつてゐるんですし文句はナシにしましょう。ヨホホホ!!?」  
道の真ん中で固まり、片や鼻息荒く期待を抱き、片や訝しげに眉間にしわを寄せる一団。

彼らの視界に割つて入るように、一軒の家屋から二人の男が箱を抱えて姿を現した。

「あ」

「あ」

ルファイ達が声をあげると、相手も思わず声を漏らす。

その二人、ウソツプとブルツクはルファイ達の姿を捉えると、大きな驚愕と安堵の声をあげた。

「うおおルファイ!!! 何だよこつちにいたのかよ!!?」

「みなさんご無事で何より!!! いや実はこれから探しに行くところだったんですよヨホホ!!?」

「見つかつてよかつた〜探したぞお前ら〜!!?」

「ウソつけ。いの一番にメシ屋探してたでしょ」

箱を地面に置き、ルファイ達との再会を喜ぶ二人。

調子のいい事をのたまつたルファイには、エレノアからの痛い仕置きが奮われた。

「ゾロとロビンは何？　チョッパ―とフランキーも一緒じゃねエのか？」

「ゾロとロビンはおれ達より先に目を覚まして、島を調べにいった。フランキーは知らねエが……。チョッパ―はこの診療所の手伝いしてるトコだ。あいつの診察代がわりにな」

「あいつ……？」

突如ウソップが口にした名称に、誰の事だと考える。

そしてやがて、一人の顔を——風の中、怪鳥から救い出された謎の少女の事を思い出した。

「あつ……そうだ忘れてた!!？」

「あん時の鳥に食われてたヤツ!!？」

船が転覆する寸前の出来事が一気に蘇り、はつと目を見開く。

考えてみれば、あの少女との出会いこそ、自分達がこの小さな島に流れ着く原因の一端であった。無論、最たる原因はあの巨鳥だが。

「あいつもこの島に流れ着いてたのか？」

「ああ……。今チョッパ―とおっさんが診てくれてる。まだ目は覚ましちやいねエが、別に体調に異変はないってよ」

「そっかー、そりゃよかった……ん？　おっさんって誰だ？」

化け物のような大きさの鳥に食われて無事で済んでいるなど、奇跡という他にない。本人の運の良さに思わず誰もが感心する。

そこで、エレノアがもう一人の仲間の行方について疑問を抱いた。

「なら残るメンツはフランキーだけか……どこに行っちゃったんだろ」

ぼそりと呟き、虚空に目をやって彼の安否を誰にともなく問いかけた、その時。

ぶおん、ぶおんと。

どこからか、重く激しい唸り声のような何かが響き渡ってくるのが聞こえた。

「ん？ 何、この音……」

「よおおめエら!!! いま、おれの事を呼んだかよ!!!」

咄嗟に辺りを見渡した一味は、轟音が響く方を見やりぎよつと目を剥く。

土埃を巻き上げ、近付いてくるのは、黒い塊に乗ったフランキー。

前後二つの車輪を回し、地面を削りながら、鋼鉄の騎馬が鉄人を乗せて一味の前へと向かってきていた。

「おオ〜〜!!!? フランキー!!!? 無事でよかつ………何じゃそりやカツチョ

いイ〜〜!!!」

「やつと戻ってきた………」

「お前……見ねエと思つたらそんなもん作つてたのか」

「おれも乗せてくれエ〜〜!!」

さらなる男の浪漫の出現に、ルファイが歓声をあげ駆け寄る。

フランキーは仲間達の前で鋼鉄の騎馬を止め、サングラスを外して立ち上がる。

彼は地面に降りたつと、鋼鉄の騎馬の一部を徐にぽんと押す。

すると鋼鉄の騎馬はひとりでに起き上がり、直方体の箱へと変形してしまった。

「カツチョイイ〜〜!!」

「ウハハハ、どうだすげエだろ……まア、コイツを作ったのはおれじゃねエけどな」

「え？ そうなの？」

真剣な表情に戻りつつ、フランキーはエレノア達に向き直る。ぎゃーぎゃーと鋼鉄の箱にまとわりつくルファイ達を放置したまま、難しい顔で語り出した。

「島を一回りしてみたんだが……この島、おれ達が思ってる以上に面白エモンが揃ってるぞ。ただの絶海の孤島じゃなさそうだ」

ごんごんと鋼鉄の箱を叩き、その中に収められた凄まじい技術力に感服しながらも、同時に薄ら寒さを覚え眉間にしわを寄せている。

いつになく真面目な彼の様子に、エレノア達も思わず背筋を伸ばした。

「今、町とは反対側を見て回ってるロビンとゾロが——」

「ちよつとちよつとお兄さん!!! こんな所にバイク停めてくれないでよ!!! 患者が入れ



ないでしょうが!!!」

険しい面持ちでフランキーが話していた中。

突如、彼らのすぐ目の前の家屋……ウソツプ達が出てきた建物から一人の男が飛び出し、フランキーを叱りつけた。

「とりあえず!!!　そこ!!?　そこに隙間あるから!!!　すぐ移す!!!」

「あ、スンマセン」

白衣を纏ったその男のあまりの剣幕に、その場に屯していた一味全員がびくつと固まる。

フランキーも普段の気の強さを忘れ、即座に鋼鉄の箱を運び出す。

つい数秒前の緊張感など、粉微塵に跡形もなく吹き飛んでいた。

「コイツを……ここにに入れて……」

ちやりん、と銀色の硬貨が箱に備わった穴に入れられる。

その上にある柵の中、並んだ様々な色と模様 of 円柱の中から一つを選び、真下の出っ張りを押す。

「タカ・カン!」

すると、音と共に選ばれた円柱が中で落とされ、効果を入れた穴から更に下に広がる

空洞に現れる。

落ちてきた円柱を取り出し、平たい面に備わった突起を引っ張ってひっくり返し、掌に乗せる。

すると、円柱が十字に展開し、これまで島で何度か見てきた赤い小さな鳥の機械へと変じた。

「うおオオオ……ッ!!!」

「ホー……こりや大したモンだ」

大きな変形も好きだが、小さな変形も好きなルフイとウソツプ、チョツパーが大興奮し、サンジもひゅうと口笛を吹く。

そんな彼らを、ナミがこれ以上ないくらい冷めた目で眺めていた。

「ただのオモチャじゃないのよ」

「バカヤロウ!!! ただのなんかじゃねエ!!! ものすげー技術が詰まったスーパーパー

パーテクノロジーなオモチャだ!!!」

「はいはい……すごいのはわかったから」

小馬鹿にするような言い方に、フランキーが目を吊り上げながら力説するも、暑苦しさから即座に拒否される。

面倒臭そうに目を逸らしたナミは……そのまま机の上に置かれた無数の硬貨に釘付

けになっていた。

「ところで……どうしちゃったワケ？ この大量のメダルの山は」

「目がおかしいんだが!!」

「あの子を怪鳥が吐き出した時に一緒に出てきたんだよ。まだあと何枚もあるぞ」

ぎらぎらと怪しい光を放つ目に戦慄しながら、チョッパーが一枚を摘んで説明する。

そう言われて、一味はすぐ近くの寝台に寝かされている例の少女を見やり、そして彼女を最初に見た時の事を思い出す。

確かにその通りだった。

巨鳥を仕留めたと思つた直後、ルフイ達が鈍色の何かに吞まれ、そしてその中からあの少女が吐き出されたのだ。

「あー、あん時かー」

「何でメダルなんか食つてたんだ？ あの鳥………」

「シア…カラスは光るものが好きっていうし、集めるうちに飲み込んじゃまってたんじゃねエか？」

「ついでに人肉も好きだったようですが、ヨホホホ」

硬貨の出所はわかったが、それ以上に謎が深まり頭を悩ませる。

ブルツクの笑えない冗談も適当に流され、やや重苦しい空気になった頃。

いち早く我に返ったエレノアが、少女の診察をしてくれている白衣の男に向き直り、ペこりと頭を下げた。

「ていうか……すみません伊達マルさん、診察所ほぼ貸し切るみたいになっちゃって」「あーあー、気にしない気にしない。困った事があつたらお互い様なのがこの島のルール!!? 遠慮なんざするこたねエよ」

名を、伊達マルというらしい小さな診療所の医者。

しん、と誰も駆け込んでくる様子のない静かな診療所を占領する形となった事を詫びるが、本人にまったく気にした様子がない。

にこやかに笑う彼だが、視線が少女に戻るとやや険しい表情に変わる。

「しつかし……起きないねエ、おたくらの眠り姫さんは。診た感じどつこも異常はないんだが……全然起きやしねエ」

「うん……おかしいところはどこにもない。健康体だと思う」

チヨツパーも診察に入るが、どちらも同じ答えを口にし、悩ましげなうなり声が漏れる。名医にもわからない異常らしい。

「聞く話によると、バカでかい鳥に食われてたんだろ? 異常がないとむしろおかしいんだがねエ……鳥の消化は早エ。そんな化け物鳥に食われてたんなら、多少なりとも溶かされてもおおかしかねエだろ」

「食べられたばかりだったんですかねエ……」

「さア……詳しい話は聞いて見ない事にやわからんが、こどもも眠ったまじやねエ……」

いつもの冗談じみた眩きも、少女の不可思議さを前にすると通じないようで、ブルツクは軽く落ち込んで項垂れてしまう。

いつまでたつても目を覚まさない少女に、やがてルファイが立ち上がった。

「腹でも減つてんじやねエか？ もつぺんオバちゃんトコにメシ食いに行こう！」

「それ、あんたが食べたいだけでしょ」

「待て待て、どうせ食つて貰うんならおれが作る。作りたいです」

「下心しか感じないじやないのよ!!!」

「では僭越ながら私が一曲……」

「大演奏で無理やり起こそうとすんな!!!」

「おめエらさつきから医者の前でやかましく騒ぎすぎなんだよ!!!」

わいわいがやがやと、目覚めないのをいい事に好き勝手に騒ぎ始めてしまうルファイ達。伊達マルが止めるが、まるで落ち着きそうにない。

「ああもう!!? いい加減にしなさいあんた達!!! 病人……かもしれない人の前でこんな騒いだら余計体調が悪くなるで——」

腰に手を当て、騒ぐルファイ達を一喝するエレノア。

少女を庇うように背にし、じろりと鋭い目で睨みつけ……突如、ルフイ達の声がぴたりと止む。

「? ……何よ……………!!??」

外套の下で訝しげに眉を寄せた天使は、はたと気付き振り向く。

それまで沈黙し、寝台に横になっていた少女が、いつの間にか体を起こし、自分達を見つめていた事に。

「……………(っ)(っ)…ど(っ)?」

虚ろな眼差しを宙に向け、その少女は掠れた声で問いかけた。

## 第267話 “ヴィノ・エール”

ぼんやりとした顔で、ルフィ達を見つめる謎の少女。

寝起きのためか、虚ろな黒い瞳はどこか眠たげで、波打つ髪もぼさぼさのまま。口も半開きになっている。

向けられる、感情の見えない眼差しに、ルフィは思わずぎこちない反応を示した。

「……………お……おオ……………起きたのか、お前」

「……………」

挨拶とも呼べない言葉をかけるが、少女に反応はない。

ルフィの方を向きながら、その実何も見えていないような、ただただ無言で寝台の上で佇んでいる。

「いつ起きたのかしら……………全然気配を感じなかったわ」

「ていうか……………さつきから全然動かねエぞ。じつとこつち見つめてきてるし……………」

思わず目の前でひそひそと囁き合うナミとウソップ。間違はなく声が聞こえているだろうに、それに反応を示す事もない。まるで人形のような。

「あア……レディ♡ 謎と秘密に満ちた君の瞳をようやく覗く事ができた♡ どうか教え

てほしい……憂いを帯びたその眼差しは何を見つめているのか、何を問うているのか……  
♡ 僕に君の心の鍵を開く資格をくれまいか……お茶はいかがですか？」

「……………」

すると、今が好機とばかりにサンジがゆらゆらと踊るように近付き、少女を口説きながらどこからともなく紅茶を用意する。

いつもなら、驚くか戸惑うか呆れるか、多少の反応があるはずだが。

少女は沈黙したまま、それどころかサンジに視線を向ける事すらなかった。

「……………スゲーくらい心にキタ」

「しつかりしろサンジ……!!」

「ガン無視だったね……」

「……というかマユ毛のお兄さん？ それウチの茶葉だよな？ 勝手に使うのやめてくれない？」

「ねエ」

今までにない反応、認識すらされないという結果に流石のサンジもその場に崩れ落ちる。嫌われるよりも、関心を向けられない方がよっぽど辛かった。

エレノアに慰められる彼を横目に、伊達マルが溜息交じりに少女の前にしゃがみ込んだ。  
だ。

「あー…嬢ちゃん、起きたんならちようどいい。もっぺん身体に異常がねエか診察する



ぞ。なに、簡単な質問をいくつかするだけだ」

「ら……楽な体勢でいいからな？」

「……………」

医者役目を果たさんと、伊達マルとチョツパーが質問を始める。一通り体の具合を確認した以上、残るは本人から気分や体調を聞く他にない。

そう思い二人で尋ねるのだが、少女はやはり何の反応も示さなかった。

「あー……えー……ま、まず……怠いトコとか痛いトコとかねエか？ 遠慮はいらねエ、素直に言ってくれ」

「……………」

「……あ……頭がボーツとしてるとか、吐き気がするとか、変な感じがあるなら言えよ!!？」  
大丈夫!!？ おれ達は医者だ!!？ 必ず治してやるぞ!!？」

「……………」

いくつも質問を重ねるが、どれにも反応がない。ぼんやりと虚空を見つめたまま、身動き一つせず座ったまま。

だんだんと、一味が少女を見つめる視線も胡乱げなものに変わり始めた。

「……………」おい、全然反応ねエぞこの女。やっぱどつかおかしいんじやねエのか……？」

「とすると……脳か。こりやもうちよいきつちり検査せにやならんかもなア……」

フランキーが小さな声で尋ねると、伊達マルは非常に険しい顔で考え込む。外相が見当たらない以上、残るは体内。それも頭蓋に囲まれ詳しい検査の難しい脳しかないが、一朝一夕に処置できるものではない。

どうしたものかと考え込んだ時、少女の視線がふと、ルフィに固定された。

「……………ん？ 何だ？ なんか用か？」

不思議そうに少女を見つめ返しながら、麦わら帽子に触れるルフィ。

じつと不動のままだった少女が、やがて小さく口を開き、微かな声を発した。

「アン——……………ロ…ジャー！…？」

こてん、と首を傾げながら、少女はルフィに向かって問いかけた。

本人もよくわかっていない、思い浮かんだ単語を口にしただけのようなその姿。しかしルフィ達は紡がれたその名に、はっと息を吞んで腰を浮かせる。

「……………!!? お…おい、お前さつき…!!」

「『ロジャー』って……………!!」

がたがたと立ち上がり、反射的に少女を取り囲む。

今やこの世の誰も知らぬ者の名を口にした彼女に、凄まじい困惑と疑問が湧き上がっていた。

「ロジャーって……………!!? 『海賊王』の事だよな……………!!? 何だ、このお姉ちゃん海賊

王の顔見知りか!!？」

「待て待てんなワケあるか。どう見ても年が合わねエ」

「で…でも、なんでルフィを見て…!!?」

一体どういう意味なのかと騒ぎ、ルフィと少女を交互に見つめる一味。

ざわざわと慄いている間に、少女の体からふつと力が抜け、また寝台に横になってしまった。

「あ…おい!!! さっきのどういう意味だ!!? お前、ゴールド・ロジャーのお宝について知ってるのか!!? なアおい!!!」

「だー待て待て待て!!? そのへんにしとけ!!!」

謎を残したまま眠りについた少女に、思わず怒鳴りかかってしまうルフィ。

掴みかかろうとした彼を、伊達マルが間に入って制止する。

「昏睡状態から目覚めたばっかの患者に見せる態度じゃねエだろ!!! いい加減にしろお前ら!!! 宝だの『海賊王』だの事はよくわからんが…!!? おれの診療所で好き勝手する気ならおれが相手になって——」

少女を背に庇い、少年達を叱りつける伊達マル。

自分も色々と気になる話が聞こえたがそれはそれ、医者の仕事に勝る内容ではないと、目を吊り上げて睨みつけ。

厳しい声をぶつける彼の背後で、再びゆらりと少女が起き上がった。

「——は……!!?」

最初と全く同じ顔で、ぎよつと振り向く一味と兄妹と伊達マル。

彼らの視線の先で、先程とは明らかに様子の異なった少女が息を吸い込み、そして。

「へっくちー!」

……と、大変可愛らしくしゃみをこぼし、体を揺らす。

緊張感が一瞬で霧散し、診療所の中にいた全員がどどつとその場に倒れ込んだ。

がらがらがしゃん、とやかましい音が響き渡る中。

こきこきと首を鳴らし、先程よりは人間らしい気怠げな表情を浮かべた少女が、唸り

声をこぼした。

「ア」くくく……寝てた」

「寝てたア!!」

「……………何だい、あんた達」

「それはこつちのセリフだア!!!」

胡乱げにルフィ達を見やる少女に、ウソツプが立ち上がり突っ込みを入れる。

困惑の視線を返す少女に、ルフィが立ち上がり胸を張る。

「おれはモンキー・D・ルフィ!!? 海賊王になる男だ。ゴールド・ロジャーじゃねエぞ

!!?」

「ふうん……」

「軽っ!!! 何その塩対応!?!?」

聞いておいて、実にどうでも良さそうな反応を返され、ルフィよりも先にエレノアが吠える。身構える気にもならない程の脱力ぶりだった。

「……………どこだい? 私ア……何で……………」

少女は次第に、自分が理解外の状況におかれている事がわかつたらしく、辺りを見渡しながらいかにともなく問いかけ出す。

不安さを滲ませる彼女に、ルフィが腕を組みながら尋ね返した。

「覚えてねエのか? おめー、でっかい鳥に食われてたんだぞ。食おうと思ったたらお前が出てきてよオ、助けようと思ったたら転覆しちまって大変だった」

「……………鳥」

「あとおめー、おれの事ロジャーって呼んでたぞ。知ってたのか?」

「……………ロジャー」

一つ一つ、ルフィは己が知る情報と質問を与える。謎しかない少女の秘密が、どれか一つでもわかりはしないものかと。

だが、少女はどの質問にも首を傾げるばかりで、やがて物憂げに首を横に振った。

「…覚えてないねエ」

少女の答えに、一味は思わず一斉に唸る。

謎は解明されぬまま、むしろ深まるばかり。お手上げとしか言いようがなかった。

「おいドクター共、どうすりやいいんだこいつア」

「記憶喪失か………あるいは本当に何も知らんのか。精密検査してみにや詳しい事は何もわからんな。なんせさつきまでは寝ボケてただけみたいだし」

伊達マルも頭をかき、悩む。間違いなく脳への損傷が関わっていると判明し、迂闊に手を出せないと頭を抱える他にないようだ。

「それにしても目覚めてよかった………あのまま眠ったままだったらどうしようかと  
思っていました、ヨホホホ！」

「……………」

一人、目覚めたことを喜び呑気な声を漏らすブルツクが、少女に近付き笑う。その様に、少女だけでなくシンゴとヒナ、伊達マルも黙り込み。

「「「生きたガイコツ………!?!?!」」」

「遅いわ!!!」

「ヒイ!!!」

大きく目を見開き、目の前の異形を凝視して戦慄の声をあげる。

あまりの遅さに咄嗟にナミが怒鳴るように告げ、ヒナの悲鳴を誘った。

「ガイコツ……………!? え…い、生きて……………動いて…!!? え!!?」

「な、何だお前…!?? 仮面かなんかかと思つてたらそれ本物なのか……………!!?」

「ちよちよちよちよつとちよつとやだこれうちの診療所にもとうとうガチ物が出ちゃつた感じ!!? お…お祓いつて誰に頼みやいいんだこれ……………!!?」

慌てふためき始める一同。少女の事よりも余程奇妙で驚きの事態に遭遇し、一瞬で冷静さを失つてしまう。

彼らから目を逸らし、項垂れたナミが深い溜息をこぼした。

「ああもう、また面倒な事に…」

「おいコラクソホネ!!! 怯えてんじやねエか引つ込め!!!」

「ヨホホホホ!!? どうもお嬢さん方!!? ご挨拶が遅れまして大変失礼!!? 私死んで骨だけブルックです!!! そんなに見つめられると赤面しちやいます!!? あ、私、赤面する顔なかった。ヨホホホホ!!!」

注目されていることで気分が上がったのか、いつも以上に声を上げて自己紹介するブルック。孤独が長すぎたせいかわ、驚かす事が趣味になっているようだ。

少女も呆然とブルックを凝視し、しかしすぐにすんと落ち着いた。

「……………まア、騒ぐほどの事でもないさね」

「冷めた??!」

呆気ない程の速さで落ち着いた少女に、エレノアがまた叫ぶ。

少女の雑な反応に、上機嫌だったブルックもあつという間にその場に項垂れてしまった。

「……………逆に効きますねコレ…反応がないとこんなにも……………」

「ブルック——!!!」

「…なんか私悪い事したかい?」

「気にしなくていいよ……………」

それから少しして、他の三人も落ち着きを取り戻し、ブルックをまじまじと眺め始めた。

「へ——…悪魔の実か。話には聞いていたけど、実在したのか」

見るからに生者ではない、しかしちゃんと生きている骸骨。

そんな非常識を現実にする海の秘宝を食った者と初めて対面し、シンゴは感嘆の声を漏らす。

「そういえば、他にもちらほらそれっぽいのがいるな」

「ああ、おれはゴム人間だ」



「おれは人間トナカイ」

「おれは改造人間だ」

「一流のコックだ」

「そうか…それに天狗にキノコ人間か」

「そうそうそう剣術も神通力も何でもござれよ」

「あんまり舐めてると毒の胞子を風であちこちぶちまけちゃうよって誰が化け物じゃい!!!」

常人と異形の分類の難しい麦わらの一味の中、純粹な人間であるウソップと不名誉な呼び方をされたエレノアが吠える。

ただ、どちらも見た目は確かに普通とは程遠く、ナミは何も言えなかった。

「それはそれとして……お前さん達がこの嬢ちゃん与会ったのはごく最近だったとはねエ」

「あア、びつくりした」

「ふ——む…しかも、鳥に攫われてとは。妙な話だ」

わいわいと兄妹が未知を前にはしゃぐ様を横目に、伊達マルが再度少女に視線を向け  
て唸る。

頬杖をつく彼に、ナミが近付き訝しげに尋ねる。

「島の子じゃないの?」

「いや、違う。おれは少なくとも見た事がない。こんな小さな島だ……住民の顔は大體覚えてる。この年頃の子でこの人の顔を見た覚えはないな」

「だったらホント……あんたどこから来たのよ」

「……?」

伊達マルに肩をすくめられ、ナミは途方にくれた顔で少女を見つめる。

どこから来たのか、どうやって自分達の元に現れたのか。何もかもが不明で不気味さを感じる少女は、きよとんと不思議そうに首を傾げるだけ。

考え込んでいると、伊達マルが険しい表情でナミに横目を向けてきた。

「とりあえず……どうすんの?」

「? どうつて?」

「嬢ちゃんの今後。仲間でもなんでもない、赤の他人なんだろう。連れだったんならおたくらに任せるつもりだったか……そうじゃないんなら任せるのも迷惑だろう」

「そうねエ……」

もつともな疑問をぶつけられ、ナミは悩む。

正直言つて、これ以上関わり続ける義理はない。偶然遭遇してなし崩しの助ける形になっただけで、目覚めた以上そうする必要もない。

かといってこのまま置いていくのもどうなのか、と考え込んだ時だった。

「何言ってるんだお前ら。そんなの決まってるだろ」

「あ？」

ふと、ルフィが呆れた顔でナミと伊達マルにそう言い、立ち上がる。

困惑の視線を背中に感じながら、ルフィは少女の目の前に立ち、言い放った。

「お前、おれ達と来いよ」

そう、友達を遊びに誘うかのような気軽さで、少女を誘う。

突然の展開に、仲間達は一瞬目を丸くして硬直し、次いでぎよつと腰を浮かせてルフィに振り向いた。

「大賛せ——ぶっ」

「ちよっ……!!? あんたつたらまたいきなり…!!」

「だってこの島のやつじゃねエみたいだし、何も覚えてねエんだろ? それに拾ったのはおれ達の方だぞ」

「拾ったって……捨て猫じゃないんだから」

喜び勇んだサンジを押ししのけ、抗議の声をあげるナミにルフィはまるで当たり前だと言わんばかりに答える。もう、彼の中では決定事項のようだ。

「待て待ておい待てルフィ!!? もうちつとよく考えろ!!? こんな得体の知れねエ相

手を本気で船に乗せるつもりかよ!!? そりやあ……頼りもない一人ぼっちの女をほつとくのは気分が悪いがよ」

「そうよ! 最低限何者かわからないと不安だわ。ロビンの時とは違うのよ!!?」

「あんた、あん時速攻で寶石に釣られてたじゃないの」

ウソツプも堪らず、サンジの顔を押し潰しながらナミと共に抗議する。

船長であるルフィに決定権があるのは確かだが、いきなりはいわかったと納得できるほど、この一味は安い関係ではない。

その様子を見ながら、ブルックがしみじみと溜息をつく。

「…私が勧誘された時、こんな感じだったんですかねエ」

「いや、おめエの時はもつと反発がデカかった」

小さな呟きをフランキーが拾い、即座に否定する。

ずん、と落ち込む一味の音楽家を見やっていた少女は、やがてルフィに不思議そうな眼差しを向けて尋ねた。

「行くって……どこにダイ?」

「冒険だ!!」

「……………よく……わからんよ」

自信満々に告げられ、理解ができない少女は眉間にしわを寄せる。

だがそれでも、多少の好奇心というか興味は唆られたらしく、ルフィをまつすぐに見つめて続けて問いかけた。

「何を……すればいいの?」

「一緒に面白エ事を探しに行くんだ。なんかしろとか言う気はねエ、やりてエ事を一緒にやればそれでいい!!? どうだ!?!?」

しししし!と笑みを見せるルフィに、少女はしばらくの間考え込む様子を見せると、ふい、とどこか気恥ずかしげに目を逸らした。

「……………何でもいいよ」

否定ではない、受け入れるような返答にルフィはさらに笑みを深める。

勝手にその言葉を肯定だと理解した彼は、仲間達の呆れた視線を……一人は大喜びしているが、その視線を背に受けながら、少女の顔を覗き込んだ。

「そんでお前、名前なんていうんだ?」

「……………エール。ヒノ・エールさア」

今更な自己紹介に、少女はわずかに考える素振りを見せてから、簡潔に答えたのだつた。

## 第268話 “空っぽの少女”

——じゃあ、おれ達はこれで。

またなんか困った事があつたら、相談くらいには乗るよ。

——またね!!?

——おー、いろいろありがとなー!!?

それが、今から数分前の会話だった。

最後まで面倒見のいい優しい兄妹を見送り、暫定的に新たに仲間入りした少女を連れて動向が始まった……筈だった。

「……………という感じでさわやか〜に別れたのによオ、お前らさつきから食つてばっかじゃねエか!!!」

「うんめエ〜〜!!!」

場所は町の中程にある甘味屋。香ばしく甘い匂いが立ち込める店先で。

ルフイとチョッパーがエールと共に、大量に買い込んだ甘味を片っ端から堪能しまくっていた。

「な!!? な!!? この島のメシ全部うめエよな!!! これが冒険だぞ!!!」

「ふうん……………」

「薄いなりアクシヨン?!」

もぐもぐとあげたまんじゆうを頬張るエールに尋ねるルフィだが、少女は相変わらずの無表情で口を動かすだけ。声にもまるで感動が感じられない。

「お前なア……………いくらメダルが今大量にあるから買って買ひすぎだぞ。どこで手に入るのかもわからねエのにムダ遣いしすぎんな」

「悪い悪い、こいつ目覚めたばつかだし食わせてやんねーと思つてよ!」

「そこはおれの出番だろバカ野郎」

びしり、と苦笑するルフィにサンジが甘味を口にしながら突つ込む。レディに美食を振る舞う機会を奪われ、やや不機嫌そうになっていた。

そんな彼らにあきれた様子で横目を向けつつ、団子を頬張ったエレノアが反対側の席に目を向けた。

「こつちはこつちでブツ倒れたままだし……………ナミ、大丈夫?」

「……………ムリ、立てナイ」

「こりや相当心の傷が深いね…」

ぐつたり、と席に横たわる航海士。

彼女の手には黄金色に輝く首飾りがあり、それを虚ろで悲しげな眼差しでじつと見つ

め続けていた。

実は甘味屋に寄る前、一縷の願いを込めて財宝の監禁ができる店を探したのだが――

――宝石？ 黄金？

悪いけどウチでは買い取ってないよ、ゴメンね。

――えエ〜〜ツ!!?

結果は惨敗。

町にあるあらゆる店で買取を断られてしまったのだ。

「……………!!? まさかホントに持ってきた財宝が換金できないなんて…!!? 黄金よ!!

? 宝石よ!!? なんで誰も欲しがらないのよ!!?

「んー、島の住民の感性じゃないの?」

「あーもう!!? あれだけ苦労して手に入れたお宝の山だつてのに!!! 腹立つつたらな

いわ!!?」

がばつ、と席の上で体をひっくり返し、幼子のようにじたばたと暴れ癩癩を起こす。

ばた、と脱力したナミは、すぐに表情を引き締め広々とした空を見上げた。

「はア……………こうなつたら、さつきと次の島に行く方法を見つけ出さないとね」

ナミが改めてやる気を固める横で、ルフィが最後の甘味を口にする。



口周りについた餡やら砂糖やらをべろりと舐め取ってから、立ち上がって同じく食べ終えたエールに振り向く。

「ししし!!? じゃあ行くか!!! まずはこの島を隅々まで冒険すんぞ!!? お前らもそれでもいいだろ?」

「あーはいはいわかったわかった」

「知ってた。止まるわきやねエって」

「おれは大賛成だぜルフィ!!!」

あれよあれよという間に決まった、新たな仲間。

仲間全員に知らせる暇もなくもうきめられており、サンジを除く全員が諦めた様子で肩を落とす。

呑気な船長に、ナミが今一度厳しい表情で詰め寄り鼻先に指を突きつけた。

「本当に連れてくかどうかはともかく!!? ちゃんとゾロとロビンにも伝えておくのよ!!! あと、あんたが責任持って面倒見ること!!? わかった!!?」

「わかった!!!」

「いやおかしい、おかしいよナミ。人間に対して言う言葉じゃない」

目の前で行われるやりとり、思わずエレノアが止めに入る。

拾ってきた捨て犬や捨て猫を飼うか否かを問う親子のような会話を慌てて止め、少女

に振り向く。

「あんたも文句ぐらい言いなよ！ イヌネコ扱いされてんだよ!!？」

「……………別にいいよ」

「無頓着にもほどがある!!！」

このままでは本当に扱いが犬猫になりかねない、と本人に自覚を促そうとするも、本人がまるで気にしておらず意味がない。

頭を抱えながら、傍らのチョッパパーに溜息混じりに問いかける。

「この冷めた感じはどうにかならんもんかね……………どうにもやりづらい。ねエチョッパパー、記憶喪失ってこういう感じなの？」

「いや…………おれも初めて見たしな。症例は何件か調べた事があるけど、実際に診た事は一度も……………」

万能薬を目指し名医といえど、まだまだ経験の少ない彼には判断のしようがない。少なくとも、普通ではないのは間違いないが。

少女の事情を念頭に置きつつ、ナミは肩をすくめてルファイから目を逸らした。

「……………ひとまず、あとの2人と合流するのが先ね。まア、どうセルフイがごり押しするでしょうけど」

誰が止めても同じなのだ、と疲労感を感じながら、新たな道連れであるエールの方を

見やり。

ぐにぐにとルフィに好き勝手頬を引つ張られるエールを見て、ぶつと噴き出した。

「おめーほんつとに笑わねエなア!!? 何でそんなブスツとした顔してんだ? 変なヤ

ツだなー」

「やめんかア!!!」

反応がないのをいい事にいじりまくるルフィの脳天に、ナミの拳骨が炸裂する。一撃で沈められたルフィを前に、エールも流石に引いた様子で一步分後ずさっていた。

「いや〜……私に続いて仲間が増えるとは驚きです。個人的には大歓迎ですよ! ……ですが一つだけ……お訊ねしておかねばならない事が」

「……?」

つい数分前まで一味の最たる新入りだったブルックが、エールに近付く。

初対面の衝撃を思い出し、やや身構える彼女に対し、ブルックは姿勢を真っ直ぐにしながらその問いを口にした。

「パンツ、見せていただいてもよろしいでしょうか?」

「やめれセクハラガイコツ!!!」

どごごつ、と彼の後頭部にエレノアとナミの蹴りが決まる。

吹っ飛ばされる骸骨紳士の襟首を掴み、目を吊り上げたナミががーつと獅子のごとき

咆哮をあげて怒鳴りつける。

「どいつもこいつも欲望に忠実すぎんのよこの一味は!!! 止めるこっちの身にもなりなさいよ!!!」

「……………とりあえずおじーちゃんは『紳士』って言葉をもう一度学び直そうか」

「ヨホホホホ!!! 手キビシ〜ッ!!!」

一瞬でぼこぼこにされたブルックを見下ろし、エレノアがやれやれと肩を竦める。いきなりのセクハラなど、流石に仲間入りを嫌がられても無理はないだろう。

そう思った時だった。

「……………あの」

三人の漫才の様子を伺っていたエールが、恐る恐るながら、初めて自分から声をかけてきたかと思うと。

「ぱんつつって何だい?」

そう、衝撃の質問を口にする。

びしり、と凍りついたように動きを止めた一味は、示し合わせたように目を合わせ、やがてエレノアがエールの手を引いて歩き出す。

人気のない路地裏に二人で入り、しばらくごそごそと物音を響かせた後。

エレノアはエールの手を引いて外に姿を見せ、真剣な表情で結果を口にした。

「えー、検査の結果……………この子、パンツ履いてませんでした」

その瞬間、どぼつ！とサンジとブルックの鼻から大量の鼻血が噴き出し、あたり一面を真っ赤に染めて倒れ臥した。

「サンジ……………!!!! ブルック……………!!!! 医者……………!!? 医者ア……………!!!!」

悲鳴をあげたチョップパーが二人の側を右往左往する。

騒然となる彼らを放置し、エールの両脇をつかんだエレノアとナミが恐ろしい速さで町を引き返し始めた。

「ナミ!!! 急いでどこか服屋探そう!!? 正直ここまで無頓着な子だとは思わなかった!!! あの色欲共の前にはつたらかしてたら流石にあいつらもどうなるかわかったもんじゃないよ!!!」

「わかっている!!? もういつそ子供用でも勝負用でも何でもいいわ!!? 隠す事を覚えさせないと……………!!!」

「つーかなんでこの子こんな重いのか!!? 腹の中に石でも敷き詰めてんのか!!!」

がりがりがり、と引きずられたエールの足が地面に深い轍を刻む。

されるがままの少女を連れ、女海賊達が大急ぎで少女の衣服を揃えんと服屋を探しに

行ってしまった。

「おい!!! このお荷物共をおれ達に押し付けてんじやねエよ!!!」

置き去りにされた死屍累々の惨状を前に、フランキーが手を伸ばし制止するものの、二人とも全く止まる様子がなかった。

「へー……小さな島にしては結構品揃えが……あ、この服カワイイ」

「そのへんはナミに任せるよ。私はこの子の体のサイズ測ってくる」

「あんたももう少しオシャレしたら？ 旦那様エースが喜ぶかもしれないわよ？」

「だって背中全開の服があんまりないんだもん……」  
かちやかちやと目の前に吊られた色とりどりの衣服を手に持ち、エレノアとナミがじっくりと確かめる。

自分の体に当てたりエールに当てたり、次から次へと真新しい衣服を試していく。これこれもう数十分は経っている。

「はい、一回お着替えしましょうねー」

「ほら、腕あげて。ここ押さえて。ほらもーせつかくいい素材持つてんのに……磨かなきゃもつたないでしょー！」

「……………何で怒られてんのかねエ」

女が三人よれば姦しいというように、本人よりもはしやいだ二人が無垢な少女の衣装を片っ端から変えていく。

そんな声を、服屋の店前で屯する男達が所在なさげに見やつていた。

覗きはしないが、まだかまだかと時折様子を伺っている。

「…なんかスゲー居心地悪いな」

「女の服屋はなア……………男にや用事なんざねエからな。ま、気長に待つしかねエだろ。どうせすぐには戻つちやこねエし」

頬杖をつきだれるウソツプに、フランキーがカンドロイドを弄りながら答える。しっかりと興味に興じている彼を見習い、ウソツプも暇つぶしを探し始めた。

その横で、ブルックとサンジが妙にそわそわしながら服屋の奥を凝視していた。

「……………あの布一枚で仕切られた敷居の向こう側に、お嬢さん方の花園が広がっていると思うと……………なんか正直それだけで胸が高まりますよねー、ヨホヨホ」

「右に同じ」

「変態もそこまで貫くと立派だよ」

むふ、と頬を染めて色欲まみれの感想を述べる二人にウソツプが半目を向ける。その瞬間、作業中だったフランキーが訝しげに振り向いた。

「え？」

「おめエじゃねエよ!!!」

変態と呼ばれる事に異様な誉を抱くこの男。

呼ばれたと勘違いした彼に強目に突っ込みを入れてから、ウソツプは気分を変えようと町を見渡した。

「しつかし……改めて見るとこの島、いろんなもんが揃ってんなア」

「あア……人も店も食い物も、いろんな国のものがごちゃ混ぜになってるみてエに種類豊かだ。変わってんのは確かだな」

服屋を凝視したままサンジが同意の声をこぼす。真面目に聞いているのかいないのか不明だが、声は真剣に聞いているように聞こえた。

あたりをぶらついていたルフイも、ようやくひと段落ついたのか満面の笑みを携えて戻ってくる。

「ホントに色々あるよな、見ろよアレ。砂浜にあつた石像と一緒だ」

「あア……あの鷹のやつな。そういや、向こう側の海岸にもいくつか並んでたぞ。島の守り神とかそんなんじゃないのか?」

「シンゴが言うには……島の誰もよくわかつちゃいねエって話だが……何が楽しくてあんなもん作つたんだか」

思い出される、島のあちこちに立つ誰が見ても異様な雰囲気を感じる、謎の石像。



しゃれたというより不気味な意匠のそれが、脳裏に浮かび焼きつく。

言い表しようのない不気味さを孕んだそれらがある方角に、一味の視線は自然と向けられていった。

「あのメダルいっぱい集めたらあの像買えねエかな」

「やめろ!!!」

表で男性陣が船長の暴走を止めている頃。

ナミはいくつも取り出した服を目の前に並べ、困り顔で首を傾げていた。

気に入らないわけではなく、むしろ気に入ったがためにどちらにするかを深く悩んでいた。

「ん〜ん〜……どれもこれも初めて見るデザインで、新鮮でいいんだけど……流石に全部買うと心許無くなるわね。実質タダで手に入ったものだけど、ちよつと不安ね」

「結局自分の分ばかり買う気じゃん。あ、エール。着心地どう?」

「……………窮屈……」

「記録がいつ貯まるかはわからないけど……それまでに色々出航の準備とか進めておきたいし。どうにかして稼ぐなり、このメダルを集められればいいんだけど……」

無理矢理買わされた下着の着心地に不満をこぼすエールを放置し、ナミは天を仰いで

唸る。それを横目に、エレノアは手持ちの硬貨を摘んで眼前に掲げた。

「……そもそも、何なのこのメダル？ 鉄でもなし、銀でもなし」

「また素材がわかんないの？ あんたの知識って意外と偏ってるのね」

「うるさいよ」

からかわれたエレノアがナミを睨み、再度じつくりと硬貨を凝視する。

材質は何か、どこで作られるのか、どのように作られるのか、買い物の事も忘れてつい思考に没頭する。

「……………メダル」

その時だ。悩む二人をじつと見つめていたエールがふと何かを思い出したように目を瞬かせると、袖の中に手を入れ、ごきつと音を鳴らす。

「ん」

「え？」

短く声をかけられ、二人がエールの方に振り向いた瞬間。

じやらじやらじやらっ！

と、桶の水をひっくり返すかのように、エールの袖の中から大量の硬貨がこぼれ出てきた。

「……えりっ？ ちょ……ちよつとあんたコレ!!？ どこに持ってたの!!？」

「……知らない。なんか持ってたのさ………欲しいならあげるよ」

「いいの!!? ありがと〜あとで絶対お礼するから〜!!」

床に山積みになった硬貨を、ナミは目を銀色に輝かせながら片っ端から集めていく。もう財宝を前にした時とまったく同じ執着ぶりだ。

「さっきまではたしかに持ってなかつたはずなのに………あんた、なんかの能力者だつたりしない?」

「…知らんね」

「これだからなア………ほんつと謎だわ」

エレノアは仲間の浅ましい姿に呆れながら、片腕を押さえて黙り込んだ少女に咄嗟に胡乱げな眼差しを向ける。

腕を組み考え込むエレノアに、ナミが硬貨を胸いっぱい抱えてだらしない笑みを見せる。

「いいじゃないのよ!!? ねエ!!? ホントにコレもらっちゃっていいのよね!!?」

「……別にいいよ。いらぬから」

「やった〜!!」

思わぬ収入に、まるで子供のよう飛び跳ねるナミを、エールは相変わらずの無表情で見つめる。

だが心なしか、その表情は満足げに緩んでいる……ように見えた。

「やれやれ……金銭感覚狂わせたりしなきゃいいけど………ん？」

人目も憚らずにはしゃぐナミに肩をすくめ、身持ちを崩さぬように見張らねばと人知れず決意を固めていた時。

不意に、奇妙な気配がエレノアの背筋を走る。

いつも感じる人や獣の気配——ではない、何か別の気配を感じ、自然と表情が引き締まる。

「……何、この妙な気配」

きやいきやいと騒がしいナミに背を向け、気配の主を探る。

だが、それらしい敵影は何も見当たらず、しかし警戒心はみるみるうちに膨れ上がり、外套で隠した体が強張り始める。

「ねエナミ！ そつちになんか………!!？」

「こつちがいいかな？ ああでもこつちも捨てがたいし……！ ippそのこと両方買つて………でも他にも色々準備しておきたいしなア………!!!」

ナミに注意を促すが、買物に夢中なナミはその声に気付かない。

熱に浮かされたような顔で硬貨と衣服を交互に見つめ、涎をやらさん勢いでぼんやりと思考する。

それゆえに……彼女は、その存在に気がつかなかった。

「——その欲望、解放しろ……!!」

「え……」

ちやりん、と。

硬い硬貨が入られる音が、恐ろしく近くから聞こえてくる。

そして、体の中から何かがずるずると這い出すかのような奇妙な感覚を覚えた直後、  
恐る恐る振り向いたナミは。

突如現れた、包帯まみれの異形を目の当たりにし、ぎよつと目を剥いて大きく仰け  
反った。

「おだがら……ほじイイイ……!!」

「ギャアアアアアアアアアア!!!」

## 第269話 “メダルの怪物”

どかん！

すぐそばの店の入り口が爆発し、瓦礫が辺りに撒き散らされる。

突然の異変に、町中の人々が仕事の手を止め、戸惑いの表情で轟音がした方に振り向いた。

「ああああああうちの店がア!!!」

「野郎……どこの大バカ野郎だ畜生オ!!!」

濛々と立ち込める土煙の中から飛び出してくる、服屋の女店主と表を通りがかつただけの人。

一気に騒々しくなる現場を、シンゴとヒナが不安げに見やる。

「何だ……!?? まさか………またあいつらが出てきたのか……!??」

「お兄ちゃん!!?」

帰路につこうとしていた二人は、明らかな異変が起こっている方角を見つめ、動く事ができず立ち尽くすばかり。

現場にて、吹き飛んだ服屋の入り口を凝視し、麦わらの一味も呆然と固まっていた。

「なんだなんだ……？ 何が起こった☒」

「おい!!? 大丈夫かお前らア〜!!?」

「んナミスア〜〜〜ん!!! エレノアちゅわア〜ん!!! ウェールちゅわアアアんぬ!!!」

「うるせエよ!!!」

彼らの見つめる先で、ばさつと翼を羽ばたかせたエレノアがナミとウェールを抱えて飛び出してくる。辛うじて顔は隠したままだが、焦りの感情が透けて見えた。

「——— だらアこなくそア!!! いきなりなんだってんだチクショウめ!!!」

片側に傾きそうになるのを必死にこらえ、これ以上ないくらいの悪態を吐くエレノア。

もうもうと立ち込める砂埃の奥を睨みつけていると、我に返った仲間達が近くに集まってくる。

「何だエレノア、なんかやっちゃったのか?」

「ンなわけあるか!!? ルフィじやあるまいし」

「おい!!! 失敬だぞおめエ!!!」

名指しで挑発されたルフィが目を吊り上げて抗議の声をあげるが、エレノアは取り合わず、土埃の奥の敵を見据え続ける。

戸惑う一味の目の前に……それはやがて姿を現した。

ひた、ひたときこちなく進み出てくる、人影。

全身を分厚い包帯で隠した、明らかに生者ではない何か、呻き声を上げて外に出てくる。

「何だあのヤロウは……!!?」

「ミ……ミイラか? ゾンビの次はミイラか……!!?」

散々前の島で脅かしてくれた敵と似たような存在に、ウソツプが怯えながら弱々しく構える。

彼らの目の前で、謎の異形は片手に持った大量の硬貨を口元に掲げ、じやらじやらと放り込み始めた。

「あ~~~~!!? それ私のメダル~~~~!!」

「この状況で嘆く事か……」

「だつて~~~~!!」

「何アレ……メダルを食ってる?」

悲鳴をあげるナミに呆れながら、エレノアは目を細める。こんな異様な状況でよくも自分の欲を優先させられるものだと、逆に感心してしまう。

「……ウ!!? オ、おオ……おおおオ……!!」

すると、大量の硬貨を口に含んだ異形に、変化が現れる。



全身を覆う包帯がぼろぼろと崩れ落ちたかと思うと、その下から瑞々しく逞しい肉体が剥き出しになったのだ。

まるで、蛹から成虫に変じるように、明確な変化だった。

「——ああ、まだ足りない……!!」

蠅螂に似た頭部と、鋭利な鎌を両手に宿した異形は、刃を舐めるような仕草と共に目のルフィ達を睥睨する。いつの間にか、呻き声も明白な言葉に変わっていた。

「姿が変わった……?」

「ていうか……口を利かなかったかアイツ!!」

「カマキリイ!!?」

数々の冒険を繰り広げ、不思議なものと対面してきた彼らだが、今までの経験を凌駕する相手の登場に目を剥く他にない。

そして、相手の蠅螂の異形が徐に動く。

先程のぎこちない動きが嘘のように俊敏に飛び出すと、ルフィ達に向けて容赦なく、両手の鎌を振りかざしてきた。

どおん、と遠くから響く轟音。

ルフィ達が後にした茶屋の軒先に腰を下ろしていた一人の男が、ため息混じりに団子

を食う手を止めた。

「…ふむ、今日は一日団子でも食しながらのんびりさせてもらおうかと思っていたのだが………そううまくはいかぬものか」

そう言つて、男は傍に置いた刀を挿んできん、と音を鳴らす。

また異なる場所、町で唯一の医者 の 根城からは、伊達マルが慌てた様子で飛び出していた。その手には、奇妙な形状をした銃器が握られている。

「とつとつとつと…!!? おいおい何の前触れもなく始まりすぎだろ………!!! 今日はおうちよいいヒマだと思つてたのにねエ…」

がしがしと頭をかき、深く溜息をついてから。

町医者はそれまでとは打つて変わり、鋭利で冷たい刃のような威圧感を放ち始めた。

ずばつ、と頭上を横一文字に刃が一閃される。

寸前で背中を仰げ反らせたルフィ達の背後で、斬り裂かれた建物がばらばらになり、降り注ぐ。

「おわ———っ!!?」

「うおっ………なんつー斬れ味っ!!?」

「無作法にもほどがあるよ…コイツ!!?」

「なんなのよ本当にもう……!!!」

ウソップが悲鳴を上げて頭を抱える横で、後ろの惨状を目の当たりにしたフランキーが目を剥く。

エレノアとナミが悪態をついていると、彼女達の背に庇われたエールが、異形を見つめて小さく声を漏らす。

「…ヤミー」

小さな、微かな眩きは誰にも届く事なく。

異形がさらに破壊する家屋の倒壊する音により、粉微塵にかき消された。

「野郎……!!! てめエよくもナミさんとエールちゃんを怖がらせやがったなこのクソバケモンが!!!」

ぎろり、と額に青筋を立てたサンジが異形を見据え、勢いよく飛び出す。

女性陣への暴挙のせいで、冷静さがやや失われた彼は一切の容赦なく蹴撃の構えに入る。

「サンジ君!!? 気をつけて!!? そいつなんか…ヤバい気配しかしてない!!!」

「〃首肉シユート〃!!!」

首筋を狙い、放たれた渾身の一撃。しかし返ってきた反応はあまりに硬く重く、わずかに相手の体勢を崩すだけ。

ぎらりと輝く刃を目にし、サンジはようやく相手を見誤った事を悟る。

「伏せろぐる眉!!」ストロングハンマー!!!」

「刻蹄」『桜』!!!」

異形の鎌が振るわれる寸前、フランキーとチョッパーが重い一撃をそれぞれ叩き込み、異形を仰け反らせる。

サンジに窮地を脱させてから、今度はルフィが手を伸ばし、額を漆黒に染めながら凄まじい速度で飛び出した。

「『ゴムゴムの』オ……!!?」  
『ランチャー』榴弾砲!!!」

覇気で威力を増した頭突きが異形の胴に決まり、硬く重い体が吹き飛ばされる。異形は家屋の壁に突っ込み、轟音と共に無数の瓦礫を撒き散らした。

一撃を放ったルフィは、額を抑えて険しい顔になる。

「コンニャロ……!!?」重つもいな!!?」鉄に頭突きしたみてエダ」

「ぐ……………ぬウ……!!?」

ぼやくルフィの目の前で、異形は瓦礫の中から這い出し苦悶の声を漏らす。

その際、口の部分からじやらじやらと、無数の硬貨を吐き出し続けていた。まるで、吐血しているかのように。

「……………!?!?」ありやあ……………さつき食つてたメダルか☒」

「足りない……まだ足りない……!!! もつと欲望を……もつと力を……もつと  
 ……もつと……もつとオ……!!!」

ゆらゆらと、異形は覚束ない足取りで向かってくる。

奇妙な外観といい、口から吐き続ける硬貨といい、意味のわからない呟きといい、何もかもが怪しく異質に見えた。

「不気味な野郎だ……!!?」

「おいナミ!!? あの野郎一体なんなんだ!!!」

「わ……わかんないわよ!!? いきなりお店の中に出てきて斬りかかってきて……!!!」

ホントになんの前触れもなく現れたのよ!!!」

相手の動きが鈍くなった頃合いを見計らい、ナミに詳しい情報を問うが、襲われた彼女もまるで理解ができず戸惑うばかり。

眉間にしわを寄せ、エレノアがじりじりと近付いてくる異形を前に掌を合わせる。

「能力者か………もしくはその産物か。いずれにせよ、いきなり町中で暴れるぐらいだし、ロクな相手じゃなさそうだけど」

「どうする??? やつちまうか!!?」

「できれば殺さず捕まえて、詳しい生態とか色々調べたいところだね………一体ぐらいなら何とかなるかな」

ぱりつ、と電光を走らせ、捕縛のための道具を用意しようとするエレノア。手近な材料に触れようとしたその時、不意にウソツプがはつと目を見開き、エレノアに振り向いた。

「エレノアアア!!! 後ろだア!!!」

「え……」

ウソツプが叫んだ直後、一瞬呆けたエレノアもぎよつと目を剥き、すぐさまその場から飛び退く。

その直後、エレノアの足下から巨大な昆虫の顔が飛び出してきた。

「ギユイイイイ!!!」

「ぬわ!!? くつ……この!!! 調子に乗んな!!?」

危うく下半身を食いちぎられかけたエレノアは、跳躍し逆さになると、義足の刃を展開して敵の眉間を切り裂いた。

「ギイ——ツ!!!」

「他にもいたのか?!? 大丈夫かエレノア!!!」

「おかげさまでね………だいぶ育ってきたじゃないか、ウソツプ君」

悲鳴をあげる昆虫が悶えている間に、地面に降り立ち敵を見据える。

新たに現れた敵もまた異形だった。オトシブミに似た外観だが、触角や足が人間の手

の形をしている、通常の何百倍も巨大な怪物だ。

しかも、先程エレノアに受けた傷跡からは、例の硬貨がとめどなく溢れ出している。

「何アレ……傷口からあのメダルが……!!」

「どうなってやがる……!!」

さらに現れた未知の存在に、一味はただ驚く事しかできない。

追撃を加えるよりも、その不気味さに距離を取る事を選択してしまっていた。

「正体など見当もつきませんが……あの怪物さん達の体内にあのメダルが大量に入り込んでるのは確かなようですね……」

「じゃあ……つまり……!!」

生物としてありえない生態だが、現に目の前に広がっている異様な光景に、思わず眩くブルック。そして、ナミがその眩きに大きく反応する。

「あいつら全部ブツ飛ばせば、あのメダルが全部私のもに……!!」

「やめろ!!?」

「一攫千金のチャンスだわ!!! 行くわよあんた達!!! ……あ、間違えた。行くのよあ

んた達!!!」

「「お前は!!?」」

ぎらり、と目を硬貨の形にしたナミに無茶振りをされ、男達は一斉に吠える。呆れる

ほどの欲望への忠実さに怒る気にもなれない。

するとその直後、彼らのすぐ側の家屋が突如崩壊し、無数の人影が倒れ込んできた。

「うおわあああ!!」

びくつ、と飛び退くチョッパーとウソツプの前に、それらは呻き声と共に立ち上がる。現れたのはまた異なる見た目の異形達。

猫やら鮫やら牛やら、様々な動物を無理矢理人型にしたような怪物達が、ゆつくりとにじり寄ってきていた。

「うウウ…ああ…!!?」

「おオオオオ…!!」

「!!? い……………いつの間にか囲まれてるぞ!!」

「こいつら…全部あの化け物の同類か…………!!?」

見た目は違えども、漂ってくる雰囲気と同じ危険な相手だと本能に警鐘を鳴らさせる。それが何体、何十体と現れるのだから、歴戦の海賊といえど冷や汗が垂れて止まらなくなる。

「ちようどいいじゃない…ボーナスタイムだわ!!? 倒して倒して出たメダル総取りよ

!!」

「無茶言うな!!! どんだけいると思ってんだ!!?」



「グオオオオオオオ」

騒ぐナミを押さえ、怒鳴りつけている間に、獅子の姿をした異形が唸り声をあげて襲いかかってくる。

だが、獅子の凶刃が一味に届く寸前。

破裂音が辺りに響き、異形の姿が突如真横に弾き飛ばされた。

「!!? なんだ……」

どどつ、と倒れ込んだ敵に目を丸くしつつ、一味は破裂音がした方を凝視する。

そこに立つ、煙を上げる銃器を構えた白衣の男……伊達マルの不敵な笑みを浮かべた姿に、全員があつと声をあげた。

「やれやれ……想像以上の状況になつてんじゃない」

「だ……伊達マル!!?」

「嬢ちゃん以来の急患もなく怪我人もなく、のんびりできるはずだったのにねエ。しようがない……もう一つのお仕事も始めますか」

そう言って、伊達マルは銃器の引き金を引き光弾を発射する。

放たれた銃撃を受け、フランキーのすぐ後ろに迫っていた異形がまたしても大きく吹き飛ばされた。

フランキーは大きく目を見開き、見慣れない技術を操る男をまじまじと見つめる。

「オイオイ…おめエただの町医者じゃねエのか!!? 何ださっきのすげエ威力のの銃は!!?」

「はいはい、あとで話すから。関係ない人らは下がって下がって………こつからはおれのお仕事タイムだ…!!?」

伊達マルは気怠げにそう告げ、懐から何か、奇妙な機械のついた帯を取り出し、腰に巻きつける。

そしてもう一つ、件の謎の硬貨を一枚摘み出し、ぴんつと親指で弾いてから握りしめる。

「変身」

「「「変身…!!」」」

眩かれたその言葉に、一味の男達が全員表情を変えて振り向く。

伊達マルは硬貨を腰の機械の片側に開いた穴に挿入し、反対側のつまみをきりきりと回す。

するとぽんつと音がなり、機械の中心に備わった半球が上下に開く。半球の中から飛び出した六つの球体が伊達マルの体に張り付き、展開する。

あつという間に、伊達マルの全身が機械の鎧に———絵物語の英雄ヒトロイのような雄々しい装いに包まれた。

「「うおおおおおおおおお!!」」

ルフィ達は目を子供のように輝かせ、目の前で行われた変貌に釘付けになる。女性陣がしんと無反応なのも気にせず、わーぎやーと夢のような光景にはしやぎまくった。

「さーて、一稼ぎしますか…!!? イよいしょオ!!」

空想の中に登場しそうな戦士の姿で、伊達マルはばんばんと手を鳴らす。

そして、手近にいた異形に向けて思い切り拳を叩きつけ、大きく吹き飛ばしてみせた。

「「カッチョイイ〜!!」」

「……………何者なんだよ……………ていかさつきから何なんだよこの島は……………!!?」

もはや戦う事も忘れ、伊達マルの活躍に目を奪われているルフィ達。

男性陣で唯一冷静なサンジが、現実とは思えない怒濤の展開の連続に思わずぼやく。

すると不意に、離れた場所から何やら雄叫びと怒号と絶叫が聞こえ始めた。

「ちえエイ!!!」

「おらあああ!!!」

エレノアが何事か、と振り向けば、見覚えのある男達が武器を手に異形達を返り討ちにしている様が目についた。

不気味な外観もものともせず、むしろより恐ろしい形相で異形達を次々に駆逐していつていた。

「バケモノ共が凶に乗るんじゃねエ!!!」

「片っ端から畳んだらア!!!」

「チヨ子さんの店の前で暴れてんじゃねエゴミクス共めがア!!!」

「どこん、ずばっ、どかん。」

容赦なく、無慈悲に、男達は無数の異形達を薙ぎ倒し、仕留めていく。

暴れる彼らの中には、先程ルフィ達が腹を満たした料理店で出会った強面の男達の姿も混じり、派手に大暴れしていた。

「オバちゃんのお店にいたおっさん達……!!? あんな強かったのかー!!?」

「強エ〜!!! ていうか恐エ〜!!!」

獅子奮迅の働きを見せる、ただの町人と思いついでいた男達。

想像もできない程の強さを見せつける彼らに、ルフィも思わず簡単な声をあげる。

その時、彼らを見つめていたエレノアが目を瞬かせ、やがてぎよつと目を見開いた。

「ああああああ!!! 思い出したアア!!!」

「え?」

「『六天』のナーガ!!! 『灼炎』のコア!!! 『銀河』のレム!!! あいつら全員!!? 超高額

賞金首の海賊達だ!!!」

「え——っ!?!」

鬼神の如き暴れっぷりを前に、唐突に衝撃の事実を思い出すエレノア。

あまりにもいきなりすぎる展開に、一味はもう驚き騒ぐだけの案山子と成り果てていた。

「何もんなんだよどいつもこいつもオ!!?」

## 第270話 “ハツピーバースデイ”

「ドリルアーム」

「イよいよしょオ!!!」

鎧を纏った伊達マルの右腕に、何やら機械の部品が集まる。

一瞬にして鋭利な掘削機へと変貌したそれを構え、伊達マルが鋏形虫の異形を殴り飛ばした。

「「うおおお~~~~!!」」

「何なんだあのヘンテコ鎧は……!!?」

変身に次ぎ変形、更にはドリル。

男心を擽る戦闘法に目を輝かせるルフィ達をよそに、サンジは只管に胡乱げになる。

彼が見ているのは伊達マルだけではない。

伊達マルと共に暴れ回り、次々に異形を屠っていく島の屈強な男達も訝しげに凝視していた。

「すげエ……頼もしいぞあいつら」

「さっき言った高額賞金首だけじゃない……各海で名を馳せてきた猛者達があつち

「こっちに……!!?」 でも………どいつもこいつも行方知れずになってたハズじゃ……  
 「それが何だつてこんなところに……!!?」

「んなもん私を知るか!!?」

随分と昔に手配書で見えてそれっきりな海賊達が、目の前でごく当たり前のようになつて  
 いるその姿にエレノアも困惑する。

その時、立ち尽くす彼女の後ろで、航海士が目を異様に光らせて声を荒げてきた。

「ちよつと何やつてんのよあんた達!!!」 急がないと先を越されるわ!!? せつかくのメ  
 ダルをぶん取られる気!!?」

「ナ……ナミ……?」 なんか………いつものナミと違くない……☒ 目エ血走つてるよ……」

金の亡者である事はいつも通りなのだが、今の彼女はそれがいきすぎて見える。なん  
 というか、欲が暴走しているような。

困惑していた仲間達は、不意にはつと息を呑む。

示し合わせたように一斉に飛びのいた直後、彼らの輪の中心に蠅螂の異形が斬りか  
 かってきた。

「ぎゃ——つ!!!」

「ふぎゃあああつ!!!」

危うく真つ二つにされかけたナミとエレノアが悲鳴をあげ、地面を転がる。

蠍の異形はゆつくりと立ち上がり、へたり込んだナミをぎろりと見据え、一歩一歩近づき始める。

「ナミさん!!!」

「もつと欲望を高めろ……もつと……もつとだ……!!?」

「ヒイイイ!!? ごめんエレノア!!! ルファイ!!? サンジ君!!! もう稼げとか言わないから助けてエ〜!!!」

目前に迫った命の危機に、流石に正気に戻ったナミが必死に助けを乞う。

すぐさまサンジが助けに向かおうとするが、複数の異形が割り込み壁となり、救いの手を許さない。

絶体絶命。ナミが涙目で絶叫しかけたその瞬間。

「『春一番・三葉葵』!!!」

—— 斬!

突如、聞き慣れぬ男の声が響き渡り、蠍の異形が一刀両断される。

上半身と下半身に分かれたれた異形はごぼつ、と血の代わりに硬貨を吐き、やがて無数の銀の粒に変じて四散した。

「…大事ないか、娘御よ」

ひゅん、と癖なのか刀を振ってついてもない血糊を払う、ちよんまげに着物姿の男。



上等そうな装いをした彼——通りすがりの風来坊・新ノ介は、振り返ってナミに手を差し伸べた。

「立てるか？　ここは危ない、急ぎ我らに任せて離れるのがよからう。そら、掴みなさい」

「あ…ありがとう」

おずおずと手を伸ばし、新ノ介の手を借りて立ち上がる。

そこへ案の定、遅れて異形達を蹴り飛ばしてなぎ倒してきたサンジが勢いよく向かってくる。

「コンニャロてめエ人の出番横からブン盗りやがってありがとうとよコンチクシヨウコラア!!!」

「礼を言うのか罵倒すんのかどっちかにしろよ」

「悪いな、ありがとうとおっさん!!?」

突如現れ、仲間の危機を救ってくれた男にすぐさま礼を言うルフィ。

隙も与えず、向かってくる猫の異形を殴り飛ばし、構えながら、ルフィは島の住人と思わしき彼に問う。

「なアおっさん!!?　コイツら何なんだ!!?」

「よくはわからぬ。だが、時折現れ島に悪さをするモノノケの類である事は確かだ。

……女、子供は下がっておれ、我々で片付ける」

ちき、と愛用の名刀を鳴らし、ルフィ達をかばうように異形に向かつて歩き出す新ノ介。その言葉に嫌味はなく、純粹に彼らの身を案じるものだ。

が、気の強い麦わらの一味に、その言葉は禁句だった。

かちん、と目を吊り上げたルフィ達は、新ノ介の隣を駆け抜け、真っ直ぐに敵に襲いかかる。

「ギア2”!!! ゴムゴムの”……………!!?」

「アルティメット”……………!!?」

「ディアブルジャンプ悪魔風脚”……………!!?」

「JET回転銃ライフル”!!!」

「ハンマー!!!」

「仔牛シュート”!!!」

怒りで威力を増した一撃が、重く硬い異形達にそれぞれ炸裂し、一切の容赦なく吹っ飛ばす。

異形達は硬貨を血反吐のように吐き、またも誰かの家の中に突っ込んだ。

「…ふむ。すまぬ、訂正しよう、お前達も只者ではなかったようだ」

「つつたり前だア!!!」

「ひっさびさにスーパー頭に来たぜ今の言葉はよオ!!?」

「あいわかった。いや、本当にすまぬ。悪気はなかったのだ」

「……………それ、コイツらが一番ムカつく考えだよ、お侍さん」

子供扱いされた苛立ちからか、くわつと鬼の形相で怒鳴りつけられ、新ノ介は困った顔で頭をかきつつまた失言をこぼす。

ルフィ達の単純さに呆れつつ、エレノアがやれやれと肩をすくめた。

「だア~~~~!!! “火薬星”!!? “火薬星”!!! コノ!!? コンニヤロ!!? 近付くんじやねエ~~~~!!!」

「お前らなんか恐くねエぞコンニヤロ~~~~!!?」

主力の四人のうち三人が離れたせいで、ウソツプとチョツパーが窮地に陥り涙目で抵抗する。さらには、新入りの記憶喪失の少女にまで怪物達の魔の手が迫り出す。

「ひウ!!?」

「やらせませんよ!!? “酒樽舞曲・ルミーズ”!!!」

ぷかぷかと宙を浮き、牙を見せつけるピラニアの姿をした異形を前に、小さく悲鳴をこぼしたエール。

彼らが襲いかかる寸前に、ブルックが刺突を放って異形達をなぎ倒した。

「…あ…ありがとねエ」

「お気になさらずヨホホホ!!?」

「おいブルツク! なんか気合い入ってんな!!?」

「入ったばかりの私ですが、彼女にとつては先輩という事になりますし………何よりお役に立たなければ男が廃ります!!! あ、廃るところかすでに骨ですが、ヨホホホホ!!!」

話しながら、ききんと剣を鳴らしピラニア達と斬り結ぶ。

無数に攻めてくる怪魚達だが、一体一体はそこまで硬くはないようで、貫かれるとすぐさま硬貨の山に変わっていく。

だが、この異形達の厄介な箇所は、硬さでも重さでもなく——その異様な数であった。

「きゃあああああ!!?」

「ヤバツ!!!」

逃げ遅れたらしい親子のもとに、数体の異形達が飛びかかる。

慌ててエレノアが駆け出し、ばしつと地面を叩き錬成し、真下から伸びるいくつもの石の槍を食らわせる。

石槍に貫かれ、異形達は硬貨を撒き散らして宙に舞った。

「ボーツとしない!!! 急いで逃げて逃げて!!?」

「え……!?? な………何? 何☒」

へたり込む母親に促しながら、エレノアはぱんつと掌を合わせて今度は炎を生み出す。

剣の形に変わる極熱の様に、遠くで戦闘を繰り広げていた数人の元海賊の男達がぎよつと目を見開いた。

「……………!?」

「ありやあ……………錬金術師か……………!!」

何やら意味深な反応で、外套で素顔を隠した少女を凝視する島の住民達。

向けられる視線に気付かぬまま、とうか構っている暇のないエレノアは、燃え盛る炎の剣を振りかざし蝗の異形を両断する。

「欲望の邪魔をするなアア!!」

「ふぎやつ!!」

だが、燃える同類の死骸を踏み越え、太った猫の異形がエレノアに横薙ぎを放つ。

屈んだエレノアの頭上で、猫の爪がびりびりと外套を引き裂いてしまった。

「こいつら……………!!? あったまきた!!? 全部叩きのめしてやる!!」

お気に入りの外套を無残な姿にされ、びきつと青筋を立てたエレノアは外套の残骸を脱ぎ捨て、翼を羽ばたかせる。

「……………!!? お前……………!!」

「ぶった斬る!!!」エリムサルエ「女神狩鎧」!!!クルトウツバ「女神刈鎧」!!!

なぜか一瞬、驚愕した様子で固まった猫の異形に構わず、エレノアは両手に集めた暴風を球状に固め、投げ飛ばす。

風の鉄槌は異形を殴り飛ばし、あつという間に四肢を弾けさせた。

「はっ!!?」 図に乗るんじゃないよ!!! ………………ん?」

外套の仇を取り、不敵に笑って胸を張るエレノア。

だが、いつの間にか周囲の視線が……異形も島の住民も全て含めた視線が自分に集まっているのを感じ、困惑の声を漏らす。

「天族……………」

「天族だ……………」

「悪魔の子孫だ……!!?」

「……え? え……………あの……何……………」

ざわ、ざわ、ざわ、と、周囲で蠢く異形達が口々にこぼす。

ぱちぱちと目を瞬かせ、異様な雰囲気にとらりと冷や汗を垂らした、その直後。

どごおん!

と背後から象の異形が巨腕を振り下ろし、咄嗟に飛びのいたエレノアの背後に巨大な穴を開けた。

「ふぎや——ツ!!? 何すんじや貴様アア!!」

「……………悍ましき…悪魔の一族…!!」

「悪魔……」

「悪魔の種族…!!」

抗議の声を上げるエレノアに、象の……いや、他の異形達も口々に囁くように、呪うように同じ言葉を呟き出す。

目を爛々と輝かせ、人ならざる者達が一つの塊のように蠢く。

「悪魔…?」

「忌まわしき悪魔を殺せエエ……!!」

「……ウオオオオオオオオ!!」

「え——っ?!」

一体の咆哮を皮切りに、その場にいる無数の異形達が一斉にエレノアに迫る。

覚えのない恨み、聞いた事のない罵倒の言葉に困惑している間に、殺意の漲る異形達が地響きを立てて向かってくる。

「ふぎやああああ……っ!! ちよっ…まつ…!!? 助けてエ……!!」

流星の数に、エレノアも立ち向かう事なく逃亡を選択する。

しかし距離を稼ごうにも周囲を取り囲まれ、飛ぼうにも助走距離を確保できず、必死

で彼らの魔の手から逃れる事しかできない。

「オイオイ……………どーなつてんだこりや…!!?」

「なんで急に全部から狙われてんの?!?」

「エレノアさん……………一体どこであんなに恨みを買つたんですかねエ」

「言つてる場合か!!!」

急に狙われ出した仲間の姿と敵の変貌に、一味は戸惑い思わず立ち止まる。

彼女らしからぬ展開に、咄嗟に行動が取れなくなつていた。

「ぐ…!!? 奴らめ卑怯な……………!!? あの様な幼子を大勢で追いかけて回すとは!!!」

「あーいや、違うんだアレは…」

「間違つちやいないんだがそうじゃねえんだよ…」

「呑気に喋つてんじやねえくくく助けてつつてんでしょーがア!!!!」

一人、義憤にかられる侍をなだめるルフイとウソップに、目に涙をためたエレノアが声を荒げて助けを乞う。

身に覚えのない恨みで追い回される恐怖で滲んできたようだ。

「悪魔を殺せエエエくくく!!!」

「ふぎやあああ!!!」

そしてついに、鍬形虫の異形に追いつかれ、首元を牙で狙われる。



逃げ続け、徐々に体力を削られ、避ける余力を奪われたエレノアの首と胴体が危うく離れようとした、その刹那。

「オイ、こいつを斬られちゃ困るぜ。大事なうちの船長の姉貴分だ」

ぎいん、とどこからともなく降り立った緑髪の剣士が二刀を割り込ませ、左右からの斬撃を受け止める。

ぎりぎりどつと鎧迫り合いを続けていると、異形の体から無数の手が生える。

「失礼、ちよつとお話しさせて貰える？」

幾本もの腕が絡み合い、太い腕に変わり、異形に組みつく。そしてぼぎん！と関節技をかけて一瞬で仕留める。

硬貨の山に崩れ落ちる相手を見て、エレノアはほつと安堵の息をついた。

「ゾロ!!! ロビン!!!」

「ロボビンの趣味の付き合いから戻ってみや………何だこの状況は。お前、何やらかしたんだ？」

「だからそれやるとしたらルフィでしょ」

「そりやそうか」

「おい!!! さつきから濡れ衣着せすぎだろ!!! おれだつて傷つくぞ!!?」

何の責もないのに二度も名指しで冤罪を被せられ、ルフィがまた抗議の声を上げる。

しかし日頃の行いのせいなのでやはり誰からも擁護がない。

そこへ、美女と共に登場した事が気に入らないサンジがすぐさま喧嘩腰でゾロに詰め寄った。

「オウてめエクソマリモコラア!!! ぬアに勝手にロビンちゃんとランデブー決め込んでやがんだよこの野郎!!!」

「ああ? うるつせエんだよエロコツクコラ。こつちや頼まれて付き合ってたんだ。てめエが妄想するような事は何もねえよ」

「してんだろうが現在進行形だよオ!!!」

「自由に歩き回るのに何でてめエの許可がいるんだよ!!!」

「いや、お前はいるだろ」

「うん、いる」

迷子常習犯があげる苛立ちの声に、仲間達から次々に否定の声が上がる。

ぎやーぎやーとうるさく話にならない男達を放置し、ロビンがフランキーに振り向き尋ねる。

「それで、どういう状況なの?」

「いきなりあのバケモノ共が泥棒猫達に襲いかかってきやがった! しかも何でか知らねエが…エレノアを重点的に狙ってやがる」

「ひどい事するわね……「クラッチ」!!!」

ふう、と憂いを帯びたため息をこぼしながら、能力を発動し背後に近付いていた二体の異形の背をそれぞれへし折る。

ゾロとロビンが加勢し、敵は次々に屠られていく。

だが、それでもまだ異形達の勢いにまるで衰えは見受けられなかった。

「悪魔を殺せエ〜〜!!!」

「殺せエエエ!!!」

「何でさつきから私ばかり狙われてんのよ〜〜!!!」

「ギヤーツ!!?」 だからってこっちに逃げてきてんじゃねエ〜〜!!!」

もはや恥も外聞も捨てて、エレノアは泣きながら逃げ回る。

いつのまにか途中でウソツプやエールを巻き込む始末で、わーきゃーと先程から悲鳴が鳴り止まない。

やがて、足をもつれさせたエールが転んでしまう。

「あぐつ………!!?」

「エールちゃん!!?」 クソつ!!?」 どけよ!!!」

ずしん、と相変わらず女性としては重すぎる音を響かせた少女に、サンジが今度こそと駆け寄ろうとするも、異形の壁に阻まれ近付けない。

のろのろと起き上がるエールのもとに、獅子の姿の異形がじりじりと迫る。

「ヤベーっ!!? おいルフイ!!? あいつがやべエ!!」

「逃げろエール!!! 早く走って逃げろ!!!」

「ギャーツ!!? エ——ル——!!!」

何とか追跡から逃れたウソツプが今にも倒れそうなほど荒々しい呼吸を繰り返しながら、頭を抱え悲鳴をあげる。

一味に急かされるも、少女は尻餅をついたまま動けない。

やがて、獅子の異形はエールの目と鼻の先にまで近付き、口の中から超高温の光を漏れ出させる。

「ウ……はア……!!?」

「ゴルルルルルル……!!? ガアアア!!!」

目を見開き、硬直する他にない少女に向けて、獅子の異形は大気が歪むほどの熱波の咆哮を吐き出す。

生物など容易く蒸発させる、無慈悲な光が少女を呑み込もうとした、瞬間。

紫に光る何かが、少女の胸から飛び出し目前に迫った熱波をかき消してみせた。

「ウツ……」

呻き声を漏らし、エールは目を見開く。そして、ゆっくりと立ち上がる。

彼女の目が、不気味な紫色に輝いた直後だった。

「プテラ・トリケラ・ティラノ！ プ・ト・ティラーノ・ザウルスー！」  
ばきばきばきばきっ！！？

エールを中心とした全てが、一瞬のうちに真つ白な氷に覆われた。

「——ハッピーバースデー、トゥーユー……………ハッピーバースデー、トゥーユー……♪」  
とある場所、高級感あふれる一室。

遙か高くに設けられた、島全体を見渡せる広い広い部屋で、その男の歌は響いていた。  
彼は歌いながら、いや、讚えながら手を動かす。

焼いた生地にホイップクリームを塗り、果実を飾り、チョコレートの板に文字を描く。  
島で起こる騒動を全て把握しながら、ただ讚え続けていた。

「ハッピーバースデー、ディア……………!!!」  
恐怖におののく島の住民達、驚愕に目を見開く猛者達。

そして今日初めて島を訪れた若き海賊達が呆然と立ち尽くし、それを凝視する様も全て知りながら、ただ一人を讚え続けていた。

「……………オーズ」

全てを凍てつかせる冷気を全身から放ち、あらゆるものを真つ白に染め上げる、それ

を。

紫の鎧を身に纏い、仁王立ちする少女の目醒めの日を。

「ハッピーバースデー……トウ——ユ——…:☒」

「うオあああああああああああ!!!」

誰も知らない、極地の島で。

遙か昔の「王」が、狂気の産声をあげ天を仰いだ。

## 第27章 太古ノ王〈Ⅱ〉

## 第271話 “古の悪魔”

「フウーツ………!!? フウーツ………!!? フウ——………!!!」

緑に輝く目を血走らせ、重装甲の少女が荒々しく息を吐く。

全身を覆う紫の甲冑。肩には角、腰には尾、後頭部からは翼を生やした異形じみた鎧からも、白く冷気が滲み出す。

放たれた冷気は、少女の周囲の全てを容赦なく白く染め上げていった。

「おわ——っ!!?」

「さブツ!!? 何事だア!!!」

危うく足が凍りかけたウソツプとフランキーが目を剥いて飛び退く。

薄着の男達は手足をこすり、一瞬にして気候を冬へと変えた少女に戦慄の視線を向ける。

「………!!? あの姿………あの鎧は………!!!」

「何じやありやあ………!!?」

異形達を相手取っていた伊達マルや新ノ介も思わず手を止め、突然の環境の、そして

無力そうに見えた少女の変貌に目を丸くする。

驚愕を露わにする現場の者達。

だがそれは、決して人間だけではなかった。

「この力は……!!？」

「この力は同類……!!!」

突如現れた鎧の戦士を前にして、異形達も顔色を変える。獣のような唸り声を漏らす。エールを凝視し、慄きの声を上げ、敵意を目に宿す。

「同類にして……敵!!!」

かつ、と目を見開き、異形達が一齐にエールに向けて殺到する。

それまで相手取っていた島の住民やルフイ達、エレノアを放置し、全てがエール一人に襲いかかる。

押し寄せる異形の波。

それを前にして、エールの顔が恐ろしげに歪む。

「おおおおああああああ!!!」

雄叫びと共に、エールの後頭部の翼が大きく広がる。翼竜の翼が頭から生え、力強く羽撃かれる。

途端に羽撃きから強烈な冷気の暴風が吹き荒れ、迫る異形達をまとめて吹き飛ばして



みせた。

「……………!? 鎧の形が変わった…」

「うがあアアア!!!」

絶句するロビンの見つめる先で、エールは翼を羽撃かせ、凄まじい勢いで空を飛ぶ。宙へと舞い上がりながら、今度は腰から生えた装甲が変形し、臀部で一つにまとまって一本の長い尾に変わる。

その姿は、まさに「竜」だ。

「ぐるぐるるる……………があアア!!!」

鬼の形相で吠えたエールが、異形達に向けて空から突っ込んでいく。

空中で加速し、異形達の頭上から隕石の如き勢いで落下し、敵を木の葉のように軽々と吹き飛ばす。

「ウオオオオオオ!!!」

「ぎゃあああ!!!」

エールはそのうちの一体の顔面を掴み、振り回して地面に叩きつける。

異形が激突した地面は大きく陥没し、異形の四肢がばらばらに千切れ飛ぶ。顔面などもはや原型すらない。

その仇を討とうとするかのように数体が背後からエールに迫るが、エールは振り向き

ざまに拳を振るい、異形の腹を殴りつける。

強烈な一撃が腹に決まった異形は、そのまま背中まで貫かれ、悲鳴も上げられないまま硬貨に変じて爆散した。

「がるるる……ぐるあああああああ!!!」

「あ……あいつらを一撃で……!!!? なんちゅー力してんだあいつはア!!!」

容赦なく敵を屠っていく、謎の記憶消失の少女。

自分達が苦戦した相手を瞬く間に叩きのめしていくその姿に、ウソツプががたがたと震えながら声を漏らす。

一味の全員が絶句する中、一人、異なる驚愕を露わにする少女がいた。

「……………あのメダルは……………まさか……………いや、でも……………!!!」

顔から血の気を引かせ、ぶつぶつと呟くエレノア。

彼らの凝視する先で、エールは次々に異形達を粉微塵に粉碎し、最後の一体を踏み潰す。

「がるるるる……!!?」

「ギ——ギヤアアアアア!!!」

凄まじい重量が虎の異形の頭にかかり、めきめきと顔が変形させられる。

断末魔の悲鳴が響き渡った直後、異形の顔はぐしゃりと潰され、全身が硬貨の粒に変

じて飛び散った。

「ぐるああああああ!!!」

目に映る全ての獲物を仕留めたエールは、勝利とも憤怒ともとれる咆哮を上げ、天を仰ぐ。

冷酷無慈悲な殺戮の嵐が、ようやく止まった……そう思われた瞬間だった。

「がるるるるるる!!!」

「ふぎや——つ!!?」

ぐるんつ、と振り向いたエールが、突如エレノアに鋭い爪を振るった。

あやうく真つ二つにされかけたエレノアは慌てて身を伏せ、ごろごろと地面を転がって距離を取る。

「ちよ……ちよつと!!! 何してくれてんのよあんたコラア!!! あんたまで私狙い!!!」

「ガルルルルアア!!!」

「ふぎやああああああ!!!」

咄嗟に抗議の声を上げるエレノア。だが、エールが止まる様子はない。

避けた事でより一層、エレノアへの敵意を……いや最早憎悪と呼ぶべき感情を露わにし、苛烈に攻め続けてくる。

「だーっ!!! 待つて!!? 待つて待つて待つて!!? ゴメン!!! なんかわかんないけど

流れる的にゴメン!!! だからそれ向けるの勘弁して!!?いつものエールに戻ってく!!!

「何だよ…?!? また狙われてんぞ!!!」

「何でエレノアばかり…?!?」

「考察なんざしてる場合じゃねエ!!! あの女止めるぞ!!!」

涙目で逃げ回るエレノアの姿に、ルフィ達は困惑しながら、ゾロの声で我に振り返り助けに向かう。

事情はまるで不明だが、このままでは怪我で済みそうにない。

「がるるるるるるるるるる…!!!」

「オイ止まれ!!! 止まらなくてエール!!!」

「ちよつと冷静になつてくださいエールさん!!!」

「てめエもういいだろ!!! もう充分暴れただろうが!!! もうここに敵はいねエよ!!!」

「落ち着けエールちゃん!!!」

エールが腕を振り下ろす寸前で、ルフィとブルック、フランキーとサンジが組み付き、止めようとする。

だが、エールの勢いは止まらないどころか、強引に三人を押し退けていき。

「ガアアアア!!!」

「!!!おわ——っ!!!」

やがて三人の本気の拘束を、エールはぎりつと歯を軋ませた後、彼らを思い切り振り払って抜け出してしまった。

拘束を抜けたエールが再びエレノアに迫る。

その前に、二刀を構えたゾロが立ちほだかりエールの両爪を受け止める。

「いい加減にしろよためエ……!! 何がイラついたのか知らねエが……!!? これ以上続けるってんなら——!!?»

険しい表情でエールを押しとどめようと、その場で踏ん張るゾロ。

だが次の瞬間、エールがその場で振り回した尾の一撃により、真横に吹き飛ばされてしまった。

「いや——ツ!!! ゾロオ……ツ!!!」

「ゾロがやられたア……!!!」

家屋に突っ込み、氷の破片と瓦礫の中に飲まれたゾロを見て、ナミとチョッパーが悲鳴をあげる。

突っ込んだ民家の中で、ゾロは瓦礫を押しのかながら苦悶の声を漏らす。

「ウ……!!? クソ……」

「あのバカ……!!? 傷なんざまだ塞がってねエくせに意地はりやがって……!!!」  
胸を抑えて膝をつく彼の姿が見え、サンジが吐き捨てる。

一味で一、二を争う剛力の持ち主が倒れた事で、ロビンがきつ、と表情を引き締め構える。

「手荒くなるわよ……!!?」 「シエンフルール ラナンキユラス」 百花繚乱・花金鳳花クラッチ「!!」

ぶわつ、とエールの全身から無数の手が生え、関節技を仕掛ける。

最悪、多少傷つけてでも止める、そんな覚悟で拘束を試みるが、エールは止まるどころか絡み合う腕を引きちぎりかけた。

「ウツ……!!」 ダメ……止まらない……!!」

「ウオオオオオオ!!」

「イヤ……!!?」 何でさつきから私ばかりこんな目に……!!?」

強烈な痛みにも、ロビンの力が一瞬緩む。その間に、エールは咆哮と共に走り出し、再びエレノアを追う。

「やめろオ!!! やめてくれエール!!!」

「エレノアア……!!! エレノアが殺される……!!!」

もう誰にも止められないのか、最悪の光景を幻視したウソツプとチョツパーが悲鳴をあげ、頭を抱える。

だが、彼らの目の前を見慣れた麦わら帽子が通り過ぎ、天使を背に庇った。

「ルファイ!!!」

「おい!!? 止まれエール!! やめろ!!」

「ウオアアアアア!!」

鋭い爪を振りかぶるエールに向けて、ルフィが吠える。

理性のない猛獣と化した新たな仲間を前に、微塵も退く姿勢を見せず、呼び掛け続ける。

止まらない少女の暴走に、やがてルフィの中で何かが目覚めた。

「やめろつつつてんだろがア!!!」

目を見開き、かつてないほどに強烈な感情が声に乗る。

目に見えない圧のようなものが、ルフィには自覚のないそれが真正面からエールに衝突し。

エールはようやく、静止した。

「フウ——ツ…フウ——ツ……………フウウウウ……………」

ルフィの目の前に爪を突き出した状態で、エールは止まっていた。

徐々に荒ぶっていた呼吸が落ち着き、静かになると、唐突に紫の鎧が宙に解けるように消失し、エールの身体がぐらりと傾ぐ。

「おい!!? しつかりしろ……………あ、重エ」

「ぐえ重オっ!!!」

「オイ!!!」

咄嗟に抱き留めようとしたルフイだが、エールの重さに耐えかねエレノア諸共に倒れ込む。直前の雰囲気をぶち壊す情けなさに、ウソップが堪らず突っ込みを入れる。

「なんで抱きとめようとして潰されてんだよおめエは!!! ……つてマジで重エなこの女ア!!!」

「悪い、動けねエ、助けて」

「……………締まらない奴ら……………」

慌ててフランキー達が駆け寄り、ルフイの救出に入る。

命からがら生き延びたエレノアだが、あまりの結末に礼を言う気にもなれず、潰されたまま溜息をこぼした。

「……………今のは…まさか」

わーぎやーと騒ぐ青年達を、一人静かに凝視する新ノ介。

その手を懐に当て、持っているものの感触を確かめながら、彼は静かに息を呑む。

「つたく……………何だったんだ今のア。派手に暴れやがって……………」

「すげー暴れっぷりだったな。あの化け物達の大半をやっつけちゃった。しかも見ろよ



これ……とんでもねエ枚数のメダル!!？」

「これ全部が……あいつらだったのか……?」

家屋の瓦礫を押しつけ、呼吸を落ち着かせたゾロがぼやく。

あたりに散らばる無数の硬貨の山が、先程まで生きて動いていたなど、自分の目で見ていてもまだ信じられない。

そこへ、機械の鎧を纏った町医者が気怠げに近付いてきた。

「よオ〜大丈夫かお前ら?」

「伊達マル」

「お見事な奮戦……それで悪イ、来て早々に厄介な状況に巻き込まってしまったな。しつかしまア〜暴れたもんだなアこの嬢ちゃん。おれ達の活躍が霞みそうな大暴れだったな、いつそ清々しいくらいだ」

一味と同じく周囲を見渡し、燦々たる町の有様に溜息を零す。

装甲で顔などまったく見えないが、呆れた表情を浮かべているのはよくわかった。

「それで何だったんだ? 今の姿……とんでもねエヤツだって事はよくわかったけどよ」

「さア〜? おれ達も今初めて見たしな」

「…………お前それでよく仲間になれとか言えたな」

「しししし!!?」

「笑って誤魔化すんじゃないよ、私殺されかけてんだよ……………!!?」

数人がかりでようやくどかす事のできた少女を地面に寝かせ、ルファイが呑気に笑う。止まったのだからいいや、と吹っ飛ばされた事は気にしていないらしい。

そんな彼に呆れるエレノア。

その耳がふと、周囲で交わされる囁き声を捉える。

「オイ……………今のつてよ」

「あア…間違いねエ……………」

「天族……………」

「天族だ……………」

「だが、ありやただの言い伝えじゃ……………」

ちらりと横目を向ければ、エールに、そして自分に対して向けられる介護的な視線に  
気付く。

遠く離れた位置から、島の住民達がざわざわと目配せをしあっている。

「何だ?」

「何だも何も……………そりゃああんだだけ大暴れすりや目立つし恐れられもするで——」

何やら不穏な気配が漂っている事に気付き始めたルファイ達。



まっすぐに白虎の天使を凝視したまま、不穏な眩きを漏らしている。

「私に……言ってる?」

「悪魔が再びこの島を滅ぼしにやって来おつたアアア!!! 早く……早く追い出さねばア!!? 追い出さねば破滅が降り注ぐぞオ!!!」

慄く老人の声が甲高く響き渡る。恐怖のあまりそのまま逝つてしまうのではないかといわんばかりの形相で、エレノアを指差し続けている。

すると次第に、老人以外の住民達の態度にも変化が現れ始めた。

「悪魔……」

「悪魔……!!?」

「やはり……あの悪魔か……!!!」

納得するように、住民達の口から眩きが漏れる。

全員がエレノアに振り向き、徐々にその目を鋭く尖らせていく。水が墨で染まるように、ゆつくりと敵意が満ちていく。

「やめよお前達!!? この者達は我らと同じ流れ人!!? むしろ巻き込まれた立場の者達だ!!? 悪魔などでは……!!?」

「殺せエエ!!! 悪魔と悪魔に与する者共を殺せエ!!! 急がねばア……急がねば全てが滅ぶ!!? 800年前のあの災厄のように!!!」

歯抜けのがたがたの口から泡を吹きながら、老人が力の限り吠える。

目の前にいる「悪魔」を遠ざけんとするために、自分以外の住民達に向けて吠え続ける。

やがて、エレノアに向けて硬い何かがぶつけられる。

「痛っ……!!?」

「エレノアちゃん!!? 誰だいま投げたヤツ……!!?」

「ごっ、と頭を掠め、地面に落ちた石ころ。」

はつと天使の身を案じたサンジが目を見開き、次いで住民達を鋭く睨みつけるが……返ってきたのは、彼以上の怒りと憎悪の視線と罵声だった。

「悪魔を殺せエエ……!!」

「出ていけエ!!! おれ達に近づくなア!!!」

わっ、と住民達が手当たり次第に物を投げ、ルフィ達に浴びせかけてくる。

石ころのほか、店の商品、瓦礫、硬貨などが雨のように投げつけられ、拒絶の意をこれでもかと示してくる。

すかさず、伊達マルや新ノ介が間に割って入ろうとするが、誰も止まらない。

「あだっ!!? あだだだだだ!!! ちよっ……ちよつと待てあんたら!!? いだっ!!?

あぶっ、危なっ……危ねエって!!!」

「ま…待て!!? 落ち着けお前達!!?」

「おっさん、どいてくれ。庇ってくれて嬉しいけどもうダメだ」

懸命に住民達をなだめようとする新ノ介に、ルフィが冷静に告げる。

悲しむでもなく怒るでもなく、これが当たり前だというような冷めた態度で、彼は住民達に背を向けた。

「なんかよくわかんねエけど………おれ達この島の奴らに嫌われちまったみてエだ」

「何だこのわけのわからん状況は………!!?」

「逃げるぞお前ら!!?」 必殺・超煙星!!!

降り注ぐ石ころなどを防ぎつつ、激しく戸惑いながら一味は走り出す。

途中、ウソツプが地面に向けて一発の弾を投げつけ……凄まじい量の白煙を蔓延させる。

怒号が悲鳴に成り代わり、一味はその隙に全力で逃げ出し、町を後にしたのだった。

その様子を、一軒の家屋の陰に身を潜めていた一人の男が、冷めた表情で見つめていた。

彼はおもむろに懐に手を入れると、一本の缶を取り出して栓を開け、一匹の金属の蝗に変えて口を開いた。

「……………状況報告。例の一味はその後町民に追われ、移動を開始……………中央島の森に向かいました」

ぼそりと静かに、上司に報告する男。

どこか不満げな様子を滲ませながら、一味の逃げ去った方角を見やり、報告を続けるのだった。

「折を見て接触し、誘導します」

## 第272話 “旅は道連れ世は情け”

「……………社長、町で複数のヤミーが出現。現場の住民が即座に鎮圧に動き……………」欠片

“の彼女が目覚めたとの事です”

「存じているよ!!! サトナカ君!!!」

生クリームをかき混ぜながら、一人の男が力強い声で答える。赤い生地に金糸の模様があしらわれた派手な格好をした、恰幅のいい中年の男だ。

「まさか彼らがこの島に導かれてくるとはね!!? 運命とは実に不可視で不可思議なものだ……………しかしそれゆえに!!! 限りある人生に予想外の展開をもたらす!!! ゆえに

こそ!!! 生まれる出会いは素晴らしい!!!」

報告をした赤いドレスの女性に背を向けたまま、男はボウルを片手に持つて見晴らしのいい窓辺に立ち、笑みを浮かべる。

爛々と目を輝かせ、景色ではない何かをじつと凝視し続けていた。

「さっそく招待の準備を!!? 彼らの好物をふんだんに用意しておいてくれたまえ!!!」  
「承知しました…」

女性が一礼して退室すると、男は一度調理の手を止める。そして窓の外に向けて泡立



て器を掲げてみせた。

「私達のこの出会いに……………ハッピーバースデーエイ!!!」  
??

ゼーひゅー、ゼーひゅー。

深い森の中に複数人の荒い呼吸の音が響く。

肩を大きく上下させながら、ここまで全力で走ってきたルフイ達はちらりと町の方を振り返った。

「なんとか……………逃げ切れた…な……………!!?」

「まさか……………あいつらがあんな豹変するとは……………島に来た時やあんだだけ親切だったのによ……………!!!」

突如、町の住民から向けられた敵意。

危うくそのまま鬨り殺しにでもされるのではないかと思うほど、彼らが向けてきた目は鋭く恐ろしかった。

「何だったんだありやあ。エレノアのツラを見た途端…なんかもう……………親の仇でも見るような目で……………!!?」

「お前……………この島の連中に何やったんだ?」

「ンなわけあるか?!!? 誰がそんな『白ひげ』の名を汚すマネをするか!!!」

仲間達から謂れなき疑いをかけられたエレノアが目吊り上げ、余計な事を言ったゾロを睨みつける。ふん、と鼻を鳴らし、苛立たしげに腕組みをする。

「だいたい、悪いのはあの化け物集団でしょ!? 私無茶苦茶理不尽に殺されそうになっただけだ!!! 何アイツら!!!」

「おれに怒鳴るなよ……」

一切の非がないのに、まるで親の仇かのように狙われ襲われ、憤懣やる方ないといった様子。

明らかな八つ当たりで怒鳴られ、目の前のゾロも険しい顔になる。

「正直……ワケのわからねエ事ばかりだ……記録指針は狂って役に立たず……」

「目的地かもわからない謎の島に流れ着いて……」

「化け物集団に襲われて」

「挙句悪魔呼ばわりされて追い出され……」

麦わらの一味全員が、唐突すぎる怒涛の展開についていけず、溜息混じりに眩きをこぼす。

海賊ゆえに追い回されても仕方がないが、今回は流石に急すぎる。

最後にゾロが、一際激しく息を荒げるサンジの前で横たわる、不思議な装いの少女を見やった。

「そんで極め付けは……あの女か。あのだけエ鳥に食われてた……」

「ああ、エールってんだ。何も覚えてねえんだってよ」

「この島の子だったの？」

「わかんねえ。それも覚えてねえんだと」

「妙なヤツを抱え込みやがって……」

ゾロとロビンに尋ねられるも、何も得られた情報のないルフィは首を傾げるのみ。思わずゾロは呆れた表情で深い溜息をこぼす。

「とにかく、あんなもん見せられた以上おれアこいつが仲間になるなんざ御免だ。仲間を殺しにかかるヤツなんざ乗せられるか」

「ンだとマリモてめえ……!!?」

凄まじい重量を持つ謎の少女を必死に運び、疲労困憊になっていたサンジが、ゾロが吐き捨てた言葉にぎろりと睨みを返す。

あれだけ酷い目に遭ったのに、貴重な女性陣を手放したくないようだ。

「ならエレノアがこの女に殺されてもいいってのかクソコック」

「そりやダメだ!!! 絶対にダメだ!!!」

「なら諦めろ……元から怪しすぎたんだよ、コイツは」

「んぐウ……!!!」

「どんだけ悔しいんだよおめーは!!!」

正論をぶつけられると、サンジは唇を噛み締め血涙を流し、口惜しさを全身でこれでもかと表す。

ゾロが半目で追撃しようとしたところで、チョッパーが躊躇いがちに割って入った。

「でもよオ、ゾロ……コイツ、記憶を失って大変なんだ。何も話を聞かずに追い出すのは待ってくれねエか!?」  
 「せめて本人から事情を聞くとかさ……!?」  
 「エレノアも……許してやれなんて口が裂けても言えねエけどよ」

「アウ!!?」  
 「だがそりやそうだ!!!」  
 「いっぺん拾っというて危ねエからほっぼり出すつてなア男が廃るだろ!!!」

「私、女」

「黙つてろお人好し共!!?」

フランキーまで擁護に参加し、苛立つゾロが声を荒げる。

普通の人間ならばそれでもいいだろう。だが、得体の知れない力を持ち、暴走するよ  
 うな存在が相手なら話は別だ。

「事情があるにせよ、そして何より船長であるコイツが決めた事だとしても、裏があるのならそばにどうぞ置けねエ。何かがあるんなら相応の対応をしなきゃならねエ、違うか

!?」

「そりゃあ………そうだがよ」

「んんんんんでもなア」

過酷な海を渡る一集団として当然の事実を突きつけられ、擁護派の面々は勢いが落ちる。

それでもルフイは納得できない様子で、難しい表情で天を仰いでいた。

「……どう思います？ 被害者代表として」

「殺されるのは勘弁してほしいなア………だけどそれ以上に、気になる事がある」

一味の中で一番の、というより唯一狙われているように見えたエレノアにナミが尋ねると、意外にも彼女も悩む様子を見せた。

横たわるエールを見つめ、自身の記憶を辿りながら深い思考に浸っていた。

「……あの子がああ怪物達を根こそぎブツ殺した後、あの場で私だけが狙われた事………他に人はいたのに、私だけを狙ってるように見えたのがどうにも気になる………」

「やっぱり、過去に恨みでも買ってたの？」

「いやだからそうじゃなくて!!! ……あの怪物達や島の人達が言ってた、悪魔の種族………」

本来の姿を晒した自身を狙ってきたエール。そして、謎の怪物達。

彼らを退け、どうにか無力化した後、今度は島の住民からも敵意を向けられてきた。

海賊である事を差し引いても、今までにない事態だ。

「アイツら、天族の事を『悪魔』なんて呼んでんのか？」

「……………どう見ても真逆の種族だろ。何があつたんだ…？」

『偉大なる航路』に伝わる『天族』の伝説、それは大半が幸運の象徴として語られている。

エレノア自身、敵や悪党には容赦がないが、それ以外の一般人に対して理由なく手を出す事はない、穏健派の海賊だ。

そんな種がこの島では『悪魔』と呼ばれている、確かに奇妙な矛盾だ。

「……………少なくとも、色々知りたい事ができたのは間違いない……………この島に足止めされている間に調査してみたいんだ」

「そうね……………私もすごく興味があるわ。この島の歴史に天族の関わりがあるのなら、余計にこの機会は逃せない」

エレノアがそう望むと、ロビンも同じ気持ちなのか真剣な表情で頷き出す。

己の体に流れる種族の血について、エレノアも詳しくはない。かつて起こった奇妙な現象や能力、歴史に関して、まだまだ謎が多い。

それが明らかになるやもしれないと、二人共密かに好奇心を刺激されていた。

「……………だつたらその間…コイツはどうする気だ？ 起きたらまた襲われるかもしれ

ねエぞ」

「この島の過去に……天族に関わる証人かもしれないからね。詳しい話をできるだけ聞きたい……それにさっきの暴走は……なんていうか、命の危機に瀕したときに出現する防衛本能みたいなものの気がするんだよね」

「そういえば……そうだな」

「あいつらに襲われる前はあんな危険な雰囲気は感じなかったぞ!!？」

今回の件の一番の被害者からの援護に、ウソップとチョッパーが勢いを取り戻し、うんうんと何度も頷く。

ゾロがじとつと彼らを睨むと、エレノアが宥めるように苦笑をこぼした。

「勿論、暴れても問題ないように嚴重に監視を……」

言いかけたエレノアが、突然びしりと硬直する。

いつのまにか、ゆらりと体を起こし、虚空を見つめてぼんやりしているエールに気がきき、ぎよつと目を見開いた。

「ふぎや——っ!!! 起きた——っ!!!」

「いきなりビビり倒してんじやねエよ!!!」

蛇に気付いた猫のように飛び退るエレノアの姿に、さっきまでの余裕はどうしたとゾロが突っ込みを入れる。彼女には珍しい情けない姿だ。

騒がしい彼らの前で、エールはほんやりしたままゆっくりと振り向いた。  
「……………ここア、どこだい？」

最初に言葉を交わした時のような、虚ろな表情。

嫌な予感があったブルックが、はっとエールの目を凝視して口を手で覆う。

「ちよつとまさか……………また記憶が消えてしまったのでは!!？」

「よしフランキー、頭叩け。多分それで直る」

「オウ!!？」

「直るかア!!!」

壊れた機械を直す昔ながらのやり方を試そうとするウソツプとフランキーをサンジが止める。

エールはしばらくの間黙っていたが、やがて溜息混じりに口を開いた。

「……………別に…何もしやしないよ、エレノア…………」

「あ、覚えてた」

青い顔で後ずさるエレノアを見つめ、半目になるエール。

先程とは違う平常状態に戻っている事を確かめ、ようやくエレノアは逆立てていた毛を元に戻した。

すると、ナミがエレノアの前に立ち、腰を手当てエールを見下ろした。



「ちよつとアンタ……本当に覚えてないの!!? さっきの大暴れ!!? アイツらブツ飛ばしてくれたのは感謝してるけど、ウチの守り神様殺しかけてタダで済むと思わないでよね!!」

「……よく……わからない」

「あ——もう……!!? これなんだから……」

虚ろな表情のまま、ただしどこか悲しげに俯き首を横に振るエール。

彼女の表情をじつと凝視していたゾロが、やがて眉間に皺を寄せたまま肩の力を抜く。いつの間にか触れていた刀からも手を離れた。

「……………嘘をついてるようには見えねエな……記憶喪失つてのは間違いないのか」

「その失った記憶の中に……さっきの鎧についての情報があるんだとすりや……記憶を取り戻させりゃ万事解決しそうなんだが……………」

「それができりゃ苦労しねエよ、結局怪しい謎の女のままか……」

本人に悪意の類はない、そう判断したゾロは唸るように溜息を吐く。

本当に先程の暴走は理由があつて生じたものなのだろう。そうは思うものの、だからと言つて放置できる訳がない。

しばらくの間考え込んでいたゾロは、やがて表情を引き締め、ルフィを睨んだ。

「つーわけだ、ルフィ!!? エレノアの調査とやらが片付いたらこの女しつかり元いた

トコに捨てて来いよ!!!」

「えエ〜……!!?」

「いやだから待って待って待って」

ゾロから飛び出したあまりの発言に、エレノアが手を振って遮る。

一度経験したやりとりに、咄嗟にゾロの頭をすばんつと叩いてしまっていた。

「何であんたまで犬猫拾ってきた子供の親みたいなのよ!!!? アンタも!!! い

い加減怒りなさいっての!!! 人間のプライドはないのかアンタには!!!」

「…別に、いいさ」

「嘘だろもオ〜!!!」

相も変わらず自分の事に無頓着すぎる、自意識の低いエールに頭を抱えて項垂れるエ

レノア。

だが、以前とは異なり。

エールはどこか自傷的な雰囲気滲ませ、俯いていた。

「……………何が起こったのかは…覚えてる……………気がする……………私がルフィ達を

傷つけたって事は……………わかったよ。なら……………いいよ。このまま捨てられても

……………構わないさ」

その姿はまるで、本当に捨て犬や捨て猫のようだ。

箱に入れられ、雨の中に屋根もないところに放棄された哀れな小さい獣のような、悲痛な表情で膝を抱えている。

それを見た一味は思わず、ゾロに物言いたげな眼差しを向けた。

「……………おい、何だお前らその目は。やめろオイ!!! おれ一人を悪者扱いしてんじやねエ!!!」

全員からちくちくと向けられる冷たい視線に、ゾロが目を吊り上げて吠える。

何も間違つた事は言っていないのだが、謎の少女の放つあまりの寂寥感に味方が誰一人いなくなってしまう。

やがて、ナミが深い溜息と共に肩を落とし、エールに苦笑を向けた。

「……………はア、しよーがない。今回だけ見逃してあげますか。あんたのおかげで助かった部分もあるしね」

「…次はないからね」

「ヨホホホ!!? 私、元から気にしてませんから!!?」

ふつ、と張り詰めていた場の空気が緩み、エールに対する警戒心がほんの少しだが薄れる。

エールはきよとんと呆けた目を彼らに向け、小首を傾げた。

「…いいの? 一緒にいて」

「どうせコイツが言う通りにするワケないんだもの、揉めたつてムダよ。あとはどこぞの緑髪の剣士さんのお許しが出ればいいんだけどねエ…?」

「なんでおれに矛先が向けられてんだよ…!!」

咎めるような目を向けられ、ゾロのこめかみに青筋が浮く。

まるで自分一人が駄々でもこねているかのような扱いに、ぴくぴくと頬が痙攣する。

が、やがて彼は諦めた様子で、エールから視線を逸らした。

「チツ…!!? 妙な事したら叩つ斬る!! それでいいな!!?」

「最初からそう言えばいいんだよオマリモ君」

「てめエからブツた斬られてエのかエロコック…!!?」

ゾロが折れるや否や、にたあといやらしい笑みを浮かべたサンジがそれ見た事かと小馬鹿にしてきて、さらにゾロを苛立たせる。

「おーし!!! そんじゃあゾロの許しも出た事だし!!? この島もつと探検するぞ〜〜」

!!!

「「おオ〜!!!」」

そんな男達のやりとりをよそに、ルフィ達はなんとかエールを暫定的な仲間留める事ができた喜びを露わにする。

わいわいと騒ぐ彼らを横目で見て、ゾロは改めてエールに視線を向けた。

「お前も災難だったな……………コイツに目をつけられた以上、この先苦勞するぞ」

「…そうなのかい？」

「あア。おれ達や全員そのクチだ」

厄介な事情を抱えているらしい少女に、ゾロが向けるのは同情的な視線だ。

怪しんでいるのは変わらないものの、どんな事情があるにせよ、この一味に加わってしまった以上、穏やかな日々は過ごせまい。

それをまだ理解できていない様子のエールを見つめ、ゾロはやがて訝しげに眉間にしわを寄せ始めた。

「……………何？」

「いや…………おめエのツラ、どこかで見たような気がしてな…………気のせいか…………？」

僅かに感じた違和感、いや、既視感にゾロは困惑の眩きをこぼし。

エールはただ、不思議そうに彼と、自分を受け入れた青年達を眺め続けるのだった。

## 第273話 “牢獄”

「……とにかくにも、せっかくな里が見つかったつてのに、おれ達全員追い出されちまったわけだが……どうすんだ？　これから」

「どうもこうも……記録指針がこのザマなもの、どうしようもないわ」

「いつそ適当に進むか？　そのうちどつかの島には着くんじゃねエか？」

「お黙り」

新入りの事はさておき、重要なのは今後の方針だ。

航海で最も重要な指針が狂っている状況をなんとかしない以上、野垂死にしか道はない。だが、どうにかする方法は今の所何もない。

「町を頼れねエンじゃ仕方がねエ……さいわいこんだけ深い森があるんだ。食料ならなんとかなるだろう……指針についてはまあ、動きながら考えりゃいい……」

「結局こうなるのね……今度こそそのんびりできると思ったのに」

寄る町、寄る島で毎回騒動に巻き込まれていると自覚しているナミが、肩をすくめながら深々と溜息をこぼした、その時。

一味のすぐそばの茂みが、突如がさがさと音を立て始めた。

「うおっ!?? 追手か!!? 敵襲か!?!? 戦闘配置っ!!! 総員戦闘配置につけくくくっ!!!」

「落ち着け」

まさか先程の島民達が追ってきたのか、と慌てたウソツプが飛び上がり、ぎゃーぎゃーとやかましく騒ぎ出す。

「……!!? あんた達……こんな所にいたのか」

しかし果たして顔を見せたのは、憎悪に顔を歪めた島民ではなく、一味を砂浜で拾い介抱してくれた、ぶっきらぼうな少年と優しく力持ちな少女だった。

「お前……!!? お前こそ何でここに」

「追い回されるあんた達の姿が見えたから、後を追ってきたんだ……妹がな、妹が」  
「お兄ちゃん達!!? 大丈夫!!?」

思わぬ人の登場に目を丸くするサンジに、シンゴが相変わらずの態度で告げる。その隣から、ヒナが大急ぎで飛び出しナミ達の方に駆け寄ってくる。

「ヒナちゃん……!!? もしかして心配してくれたの……!!? 島の人達、私達の事悪魔って呼ぶくらい嫌われちゃったのに……」

「私、そんなイジワルな事思わないもん。心配だったから来ちゃった!!?」

「ありがとオ……!!?」





ぶくぶくと泡を吹くエレノアに横目を向けつつ、ウソツプが兄の方に尋ねる。どちら  
も同じ島の住民なのだから、同じ嫌悪を抱いていてもおかしくはないだろうに。

そんな疑問に、シンゴは呆れた様子で嘆息する。

「…………おれはあんな口クでもない伝説、ハナから信じてないから。元々はあんだ達と  
同じよそ者だし……………あんだ達がバカみたいなお人好しだって事は、話してみれば  
すぐにわかる事だろ」

「そうか……………って誰がバカだクソガキ!!!」

さらっと混ぜられた罵倒にすっかり怒鳴り返しつつ、一味は安堵する。

詳しい事情は知らないが、この兄妹に関しては敵ではないらしい。

「なアその……………そもそも何なんだその伝説ってのは？ この島になんか謂れがあるの  
か？」

「…そんな事、今のあんだ達のいる状況に比べればどうでもいい事だろ」

フランキーに尋ねられ、シンゴはじつと彼らを見つめそう告げる。

孤立した一味を心配するというよりは、何らかの義務感が彼の表情からは伺える。

「島の連中にあれだけ敵意を持たれた以上、あんだ達はこれから大いに苦勞する事にな  
る……………おれもできれば追い出されたくはないけど、拾った以上その責任は果たすつも  
りだ。まア…可能な限りは手を貸すよ」

「拾ったって……あんたまで人を捨て犬みたいに……もういいや」

「……そりやあありがてエが、おれ達も永住するつもりなんざ一切ねエ。準備ができりやさつさと出て行つてやるよ」

「え~~~~~!!?」

「てめエの冒険病はこんな非常時にもおとなしくしやがらねエのか!!!」

ゾロの冷静な判断に、船長たるルフイが一際大きな抗議の声をあげる。何を言われようと、冒険は続けたいようだ。

いつも通り困った思考の船長に、全員が呆れ、嘆いて額に手を当てる。

——そんな一味に、少年がぼそりと告げた。

「……出られないよ」

「あ?」

「あんた達はもう……この島からは出られない……そう言ったんだ」

意味深な響きを持つ、シンゴの言葉。

一味がその意味を測りかね、全員で少年の方に視線を集める。

「オイ……そりやどういう意味で——」

はつきり言え、とゾロが少年に答えを促そうとした時。

一味の耳に、どこからか響いてくる何者かの騒ぎ声が届き、はつと目を見開いた。

「チクシヨウ!!? フザケやがって!!! あんな化け物が出てくるなんて聞いてねエぞ!!!」

ある浜に、一味が流れ着いた場所とは異なる岩場に、一隻の海賊船が浮かんでいた。その甲板の上で一人の髭面の男が声を荒げ、手下達に作業を命じている。

「こんな所に居られるか!!! 急げ野朗共!!? さつさとこなくそつたれな島から脱出だ!!! 野朗共、漕げ!!! 力の限り漕げエ!!!」

「お……おオ!!!」

数十人の手下達が長い櫂を手に、必死に船を漕ぐ。

凄まじい重労働のはずだが、誰一人文句も言わず、穂を畳んだ大きな船を一心不乱に進ませていた。

「何だありや……けつたいなヒゲのおっさん海賊だ」

「え、ウソツプこの距離から見えるの?」

「あア………なんかなんとなくわかる。ぼやっとした輪郭だけだけどな……」

その様子を、声を聞きつけた麦わらの一味が森の中から窺う。

すでに船は遠く、人の顔などまるでわからないが、ウソツプは訝しげな表情で目を細め、詳しい様子を語ってみせる。

「海賊旗は？」

「んんん……ドクロに矢印のヒゲ!!？ あ、いや……左右のヒゲの長さが違うな………時計の針みたいだ」

「だったらクロック海賊団か……まアまア名の売れた海賊かな」

狙撃手の最近の目覚しい成長に感心しつつ、エレノアは確かめた情報から海賊達の正体を探り当てる。

そのやりとりで、シンゴも彼らの事を思い出していた。

「あれは………半年位前に流れ着いてきた住民だな。最近は大入りだったんだけど………今回の一件でとうとう怖じ気付いちやったのか」

「何だ、おれ達の前にも流れ着いた奴らがいたのか？」

「………この島には、そういう奴らがごまんというよ」

誰かと思えば、自分達と同じく嵐に遭ってこの島に流れ着いた同類か、と警戒心が薄れる。

遠ざかっていく船を眺めながら、ルフィが訝しげに首を傾げた。

「で、あいつら何やってんだ？ あんなに慌てて……」

「さっきの怪物が恐ろしくなって………宝物や珍しい物、食料をありったけ積み込んでこの島から逃げ出そうとしてるんだよ………さっきまでのあんた達と一緒で」

「よーし!! 漕げエ!!? こんな島からはとつとオサラバだろ!!」

皮肉じみた言い方に、男性陣がじろりとシンゴを睨むが、本人はどこ吹く風といった様子。

そうこうしている間に、クロック海賊団はどんどん沖へと向かっていく。

「あーあー……………また無駄な犠牲者が。出られやしないのに、余計な事して…………」

「え?」

またしても聞こえた意味深な呟きに、一味が困惑の視線を向ける。

すると今度は、フランキーから「あ」と声が漏れた。

「……………忘れてた」

「え?」

「何がだよ」

「いや……………今後に関わる重要な件なんだが……………内容が内容だけにいつ言ったもんかと悩んでてな。正直今も辛い辛エんだが……………」

どうしたものか、と彼には珍しいいきこちなさに、ますます困惑が深まる。

どういふ事だ、とはつきり尋ねようとした時だった。

沖合に出たクロック海賊団の方から、何やら騒がしい、悲鳴のような声が聞こえ始めた。

「せ…船長!!? 舵がききません!!!」

「オールが持つてかれる!!! このままじゃまた転覆します!!!」

「お…おいふざけんなてめエら!!? 情けねエ事言うんじやねエ!!! もつと気合入れろ

!!! こんな荒波… “偉大なる航路” を旅するおれ達の敵じや——…!!?」

ざぼざぼ、と水音が聞こえ、船体が徐々に傾いている。

穏やかな波なのに、海賊船の下でだけ激しい水飛沫が立っているのにナミが気付いた、次の瞬間。

——バキバキバキイツ!!!

と、突如海賊船に大きな亀裂が走り、何かに握り潰されるかのようにひしやげてしまった。

「「「「ギヤアアアアアア!!!」」」」

「「「「ギヤアアアアアア!!!」」」」

クロツク海賊団と麦わらの一味、双方から悲鳴が上がる。

砕けていく海賊船は、徐々に海面に沈んでいく。海賊達は船の残骸にしがみつきながら、必死に空気を求めてもがき続ける。

だが、次第に彼らの声は、一つずつ小さくなっていった。

「ぶわアあああ!!?」

「船長オオオ——」

「おぼつ…!!? お!!? お前らア!!」

（ゴゴゴゴ）、と空気が震える音が響く。

海の魔物に引き摺り込まれながら、最後に残った船長が目を血走らせ、空へ手を伸ばし続ける。

「イ……!!? いやだ…ウソだろこんなつ…!!? クロツク海賊団の最期が………こんな………こんな……!!」

漏れ出た声も、がぼがぼと海に飲み込まれていき。

やがて、しーん…と、何も聞こえず、何も見えない、凧いだけが残された。

誰一人、何も言えなかった。

全員が真つ青な顔で、ロビンですら凍りついた表情で立ち尽くし、黙り込んでいる。

「…さて」

冷え切った空気の中、ヒナと共に平静なままでいたシンゴが、こほんと咳を一つする。

ぱくぱくと口を開閉するエールをよそに、一味に向き直った。

「入ったら二度と出られない、地図にも載っていない幻の島『陽炎島』へようこそ」

「「「ふざけんなア!!!」」」

場の雰囲気を変えようとしてか、冗談じみた紹介を今更行う少年に全員から突っ込みが飛ぶ。全く笑えない最悪の光景だ。

「な……なななな何ですかアレエエ……!!! 船が海に食べられちゃいましたよ……!!!  
あんなに凪いだ海なのに!!!」

「『陽炎』だよ」

「カ……カゲロウ!!!?」

かたかたと震え、目を見開くブルツクにシンゴが冷静に告げる。

元々、この島は外界から何も入り込めないほどに強力で広大な、渦潮の領域が広がっているのだという。

入り込もうとしても弾かれ、強引に入ろうものなら、先程のように水底に飲み込まれる。

しかし、それは普通では目に見えず、気付く事もできない。

海水温と気温の差によって、海面上に蜃気楼が発生しているからだ。

本来蜃気楼というものは、その場がない遠くの景色を歪めて見せる幻。

この海域では逆に、本来見えるものを何も無いように、島も渦潮も何も無いように見せているのだという——故に、不用意に近付こうものなら、海の悪魔が牙を剥く。



故にこの島は、こう呼ばれる。

蜃<sup>陽</sup>氣<sup>炎</sup>楼に秘された島——“陽炎島”と。

「マジかよ……………」

「そんな現象聞いた事ない…!!?」

「まア… “偉大なる航路” だから。何が起こってもおかしくはない……………だから、この島の事を外の人間は誰も知らない。辿り着けもしないし……………出る事も叶わないから」

「…その上、記録指針も狂うと」

「そう。この島の時期はとてつもなく不安定で、何年も指針を引き寄せなかつたり、僅かな磁力で航路を乱したり、逆にいきなり強く引き寄せたり……………とにかく変化に一貫性がない」

戦慄するナミに、エレノアが納得した様子で呟く。

冷や汗を垂らしながら、あまりにも残酷で無慈悲な自然の脅威に、それ以上の言葉を  
見失う。

「あんた達……………この島に着く前に嵐に遭つただろ? かなり大きい」

「あ…あア!!? 死ぬかと思つたぜありやあ…」

「この島は年に何度か……………大規模な嵐に見舞われる。」

その際に発生する気圧の変化により、海流にも僅かながら変化が生じ。

何人も受け入れない自然の檻がほんの少しだけ開かれ、船を引き寄せて閉じ込めるのだという。

脳裏に浮かんでいた疑問の答えを先に教えられ、ナミはごくりと息を呑む。

「ごくごく稀に、その嵐に巻き込まれた人間がこの島に流れ着く……そして、二度と島から出られない住民になる」

「……!!」

「島の人達があんた達を歓迎した理由……今ならわかるだろう？」

は、とルフィ達はシンゴの言葉で思い出す。

島にやって来たばかりの時、島民達が向けて来た感情は確かに……辛いと同情の眼差しばかりだった。

「あんた達はもう同類……おれ達と同じ、この島から二度と抜け出せない籠の鳥なのさ」

絶句し、静まり返った一味からシンゴは目を逸らし、虚空を眺める。

どこか虚しそうに空を眺める彼の様子に気付く事なく、ウソップ達が一縷の望みを託すようにシンゴに詰め寄る。

「あいっらどうなるんだ……?!? なアあいっらどうしちまつたんだ!!?」

「い……生きてるよな?!? あんな嵐の中でもこの島に流れ着けるくらいだし、生きてる

よな!!？」

「キア……………幻に隠れた海の下でいつまでも永遠に渦に吞まれ続けるのか……………もしかしたら季節外れの嵐が海流の中からすくい上げてくれるかもしれないけど……………」

その頃にはもう腐敗して見るも無惨な姿に……………」

最悪な光景を想像してしまい、再びウソツプ達から悲鳴が迸る。深い水底の闇の中で溺死など、考えうる中でも相当最悪な末路だ。

「なんでこんな目に遭わなきゃいけないのよ……………!!! たまたま記録指針が引き寄せられる時期で、たまたま渦潮が嵐で弱まって……………?!? 最悪の運勢じゃないのよオ!!？」

成す術が見当たらず、頭を抱えて絶望するナミ。

全員が行き先を覆い隠す暗雲を前に項垂れ、諦めかけていた時、ふとエールが口を開いた。

「……………そこまで言うほど、ツイてないかい？」

「ツイてないに決まってるでしょ!!! こんな島で一生を終えるために航海やってんじゃないのよ!!! 海図だってまだまだ描けてないしお宝だって手に入れてないし……………やりたい事まだまだたくさんあんのよこちとらア!!!」

八つ当たり気味に叫び、涙で顔中をぐちゃぐちゃにして嘆くナミ。どうしようもないほど深い絶望のせいで、いつもの気の強さは微塵も見られない。

そんな彼女に、エールは真顔のまま小さく告げた。

「だけど……生きてんじゃないかい」

項垂れていたナミは、その眩きにはたと我に返る。

涙だけでなく鼻水もたらした酷い顔のまま、他の仲間と共に彼女の方に振り向いた。

「嵐で沈んだわけでも、渦に飲まれたわけでもない………まだ、生きてる。それでもまだ、ツイてないのかイ？」

不思議そうに見つめてくる、エールの虚ろながらもまつすぐな目。

幼い子供に咎められているような気分陥り、ナミは思わず頬を赤らめて黙り込む。他の面々も同じく、ぼつが悪そうに目を逸らし出した。

「確かに……焦ったバカが自滅したところを見ただけだ。仲間も船も何も欠けちやいねエ」

「脱出の方法はまだあるハズ………試す時間も充分あるか」

「……ししし!!? そうだな!!? まあ大丈夫だろ。おれ達まだ生きてんだしよ! 生きてりや脱出する方法くらいいくらでも思いつくさ!!? エールお前、いい事言うな!!」

数々の不可能を可能にしてきた自負が、徐々に仲間達にやる気を取り戻させ、ルフィが重い空気を吹き飛ばす様に笑う。

「……………そんな彼らに横目を向け、エールは小さく、溜息をこぼした。そうさア……………生きりゃア……………いくらでも……………」

## 第274話 // 壁画とわらべ歌

「グオオオオオオオオ!!! オ!!!」

悍ましい呻き声を上げ、牛の異形が倒れ伏す。

ばらばらと硬貨へ変わって散らばるそれを見下ろしながら、一味は各々の得物を収め息をつく。

「どこでも湧いて出てくるな、コイツら」

「もういねエか〜?!」

「あア……今回は少ない群れだったみてエだな」

山のように積み重なった無数の硬貨。つい先程までなら目を輝かせて飛びついてたであろうナミも、流石に今は惜しそうにしつつも近付かない。

次いでルフイが、物陰に身を潜めた三人に振り向き声をかける。

「お前らも大丈夫か?!」

「…平気だよオ」

「あ……あア」

「ヒナは平気だよ〜!!! お兄ちゃん達ホントに強〜い!!! あ、岩じゃま……」

シンゴはおずおずと、エールはぎこちなく顔を出し、ヒナは元気よく飛び出してくる。その際、近くに転がる大岩を見やると、軽々と担いでどこかへ放り投げる。

ひゆるる…と落下していく大岩を見送り、少女はふうと額を拭う仕草をする。

「これでよし!!」

「……………おめエはともかくおめエの妹にや助けはいらなさそうだな」

「…育て方間違えた…」

一人で怪物の一匹や二匹、仕留められそうな怪力を誇る幼子。ぞつと背筋に寒気を走らせながらゾロが眩くと、シンゴは頭を抱える。

それを横目に、フランキーが一味の先頭を進むロビンに視線を向けた。

「そんで…まだ着かねエのか？ その行きたいところつてのには」

「もう少しね。私達もさつき偶然見つけたばかりなの……………見たらみんなも興味を持つと思うわ」

ロビンの提案により始まった、島の探索。

先にあちこち歩き回っていた彼女とロビンの案内のもと、一味は森を抜け、長い崖沿いの道を只管歩き続けていた。

そんな中、とぼとぼと重い足取りで歩くナミが小さな嘆きの声を漏らす。

「……………こんな時に遺跡探索なんて」

「あら、キライ？　悩み事ばかり気にしてたらずつと迷うだけよ。もしかしたら、何かヒントが見つかるかもしれないし……のんびりしちゃいましょう？」

困難に直面し、気落ちするナミが呟くと、ロビンがくすりと微笑みながら告げる。彼女なりに気遣ってくれていると気付き、ナミも自分の態度を改める。

「……まあ、気分転換にはいいかもね。どうせ出られないんだし」

一人で流れ着いたのならまだしも、ここには仲間がいる。

ほんの少しだが、気力が蘇ったナミは顔を上げ、一步に力を込めて進もうとする……が。

「絶望だ……!!?　おれ達の冒険はここで終わりなんだ……!!　このまま世間の誰からも忘れられて……カヤ達にも忘れられて……キャプテン・ウソップ冒険記は完全に消え去るんだ……!!!」

「そんなのイヤだア……!!!」

ネガティブと恐がり、弱小の二人組は先程からずつと項垂れたまま膝を抱えるばかり。どんよりとした暗く重い空気が目に見えるようだった。

「ええいウジウジ嘆いとらんでさつさと着いてきなさい男共!!!　置いてくよ!?　まったく……なっさけない奴らめ。スリラーパークじゃあんな頼もしかったのに」

「ヨホホホ……」



エレノアに叱咤され、ブルツクに笑われながら、一味は長い坂を少しずつ登る。そしてようやく坂の終点、広がる地面に辿り着くと。

全員が静かに息を呑み、視界いっぱいに映る光景に目を見開いた。

「うーおー!!? 眺めいいな〜!!? こんなトコがあつたのか〜!!!」

広々とした台地、青々とした草が生い茂る、まるで展望台のような場所。

不思議な形をした岩がいくつも立ったその高台からはさらに、島の町や森、さらには青紫に染まった海と空までもを見渡す事ができる。

公開中の不思議な景色とはまた違った絶景に、一味は久々に心を癒された。

「へエ……!!? ……ここからだと言った島全体が見渡せるんだ……!!?」

「気持ちいい〜!!? ……ただあのデカイ建物だけ邪魔だな」

「風がかなりいい感じだな………こーいうトコでメシでも食べばさぞ気分も良さそうだな………」

ナミの表情にも笑顔が戻り、髪を弄ぶ柔らかな風に目を細める。

サンジもまた楽しげに笑いつつ……唐突にぎろりと、苛立たしげな顔でゾロに詰め寄り睨め付け始めた。

「このクソマリモてめエ……!!! さてはさつきまでここでロビンちゃんと一緒だったんだなクラア!!!」

「…………この色ボケコックマジでぶった斬りてエ…………!!」

和やかな空気が台無しな男の嫉妬に、心底面倒臭そうにゾロが顔を歪める。

心の狭い男に言い返す気にもならず、剣士は刀に手が掛かりそうなのを必死に堪え続けていた。

そんな彼らには構わず、エレノアは景色をぐるりと見渡してから、そこら中に生えた奇妙な岩に注目し出す。

「うゝわほんとだ……………空島みたいな遺跡がゴロゴロしてる」

「確かに結構面白そうなところじゃねエか…………下からは全然見えなかったのに、ロビンお前、こんなのよく見つけたなア」

「あア、それは……………」

気分が戻ったらしいウソツプが、同じく岩に、謎の遺跡に興味を示しつつロビンに問うと、ロビンはちらりとゾロの方を見やった。

「はぐれたゾロを探していたら、いつの間にかこの辺りに辿り着いていたのよ」

「迷子になった結果かい!!」

「?」

地道な探索の結果だと思いきや、例の奇跡的な方向音痴の賜物なのかと思わず突っ込みを入れてしまうウソツプ。当の本人は訝しむばかりだ。

「おかげで素敵な場所が見つかったけどね……………ありがとう♡」

「…? 何でおれに礼を言うんだよ」

「いい加減おめエは自覚しろ」

もう随分前から言われているだろうに、直すどころか気付く様子もない厄介な男に、もはや何も言う気になれず肩を落とす。

男達の気の抜けるやりとりに半目を向けていたエレノアは、ふと低地の方を見やつて片眉を上げた。

「あの石像……………ここからだと全体図がよく見えるわね」

「あん? あア…あの妙な像か。こうして見ると島中にバラけて置かれてんだな。相も変わらず不気味な岩だぜ」

島のあちこちに見られる、謎の石像を見てフランキーも顔をしかめる。

やたらと顔が大きく、直立した意匠が印象的な、様々な動物の姿をした像。何の意図があるのか、島の人間すら知らない謎の建造物だ。

(…んん…………?)

そこでふと、エレノアは違和感に気付く。

島中の石像は、倒れていたり傾いていたりといった差はあるものの、その全てが海に背を向けている——の、だが。

顔の向いている方向が、島の中心からはずれてるように見えたのだ。

「なーシンゴ!!? ヒナ!!? この岩、何が書いてあんだ?」

「なんかの絵が彫られてるみてエだな……………」

「何が書いてあるのかは…………おれ達島の住民もよく知らない。何百年も大昔のものって事ぐらいしかわかってない……………何より今は誰も興味を持たない、たんなる子供の遊び場だよ」

困惑するエレノアに気付く事なく、ルフィがシンゴ達を捕まえて質問責めに行っている。シンゴもやや困った様子で、乏しい知識をルフィに答えてやっていた。

「じゃあロビンは読めるか?」

「残念ながら劣化が激しくて完全な解読はまだよ。単語ならいくつか読めるけど……」

「気候が結構激しい島みたいだしね。これだけ海風にさらされてちや、どんなに立派な遺跡であつてもこうなるわよ」

残念そうに首を横に振るロビンに、ナミが援護するように口を挟む。

言われてルフィがもう一度遺跡を見てみれば、確かに崩れてはいるし文字も薄くなつており、判別すら難しくなっている。

辛うじて見える絵のようなものに対しても、チョッパーが険しい顔で首を傾げた。

「それに何だ…………? ……なんていうか…………ぐつちやぐつちやだぞ。文字とか絵が横向いたり

ひっくり返ってたり………どういふ建て方してんだ☒」

「…境目からして、多分これは造られた後にこう積み上がったのね。何かの災害か、人為的にか………本来の形から逸脱している」

「なくんだア………」

読めないのなら仕方がない、とルフィががつくりと肩を落とす。

宝にまつわる文でも思ったのか、食事にありつけなかった時に次ぐ落胆ぶりだった。

「だけど………それでも充分歴史的価値がある」

ロビンはそう言うと、ルフィが見ていた石から離れ、また別の石の前に立つ。

そして一箇所を指差しながら、シンゴとヒナの方を振り向いた。

「ほとんど読み解けていないけど………ここ、この箇所はあなた達も知っているわ

よね?」

「え?」

「町で聞いたわ……わらべ歌。あの歌がおそらくこの削れた箇所なのよ。どちらか、歌ってみてくれないかしら?」

「わらべ歌?」

「そんなのあるのか?」

「どんなのだ？」

わらべ歌といえは、子供が遊ぶ時に歌う昔から伝わる童謡の一種。

それと遺跡になんの関わりがあるのだろうか、ルフィ達の視線が一斉に向けられ、慎吾は戸惑いの表情で立ち尽くす。

「いや、おれは……」

「いいよ!!! じゃあヒナが歌うね!!？」

吃る兄に代わって、ヒナがずいと前が出る。

ずつと兄ばかりが説明役を担い、不満が溜まっていたのだろうか。満面の笑みを浮かべ、ふんと胸を張っている。

そして興味津々といった様子の一味に向けて、朗々と歌い始めた。

——よくばりおおさま ぜんぶがほしい♪

せかいのぜんぶが なんでもほしい☒

だけどしまには なにもない♪

なのにやってくる れんきんじゅつし☒

れんきんじゅつしが わらっていった♪

おまえのねがいをかなえてやろう☒

よくぼりおうは がまんができない♪  
 あくまのけいやく おろかにむすんだ☒  
 きらきらひかる けものきんか♪  
 きんかがつくる ほしがりなまもの☒  
 くにのみんなは おおさわぎ♪  
 まものがあばれて おおさわぎ☒  
 よくぼりおおさま ぜんぶをねがった♪  
 ほしがりすぎて のまれてきえた☒  
 おろかなおおさま どこにもいない♪  
 よくぼりすぎて きえちやった☒  
 よくぼり ほしがり きをつける♪  
 えいえんのむで ひとりぼっち☒  
 おまえもとわに さまようぞ♪  
 ちやりん じゃらじやら ごうよくの♪  
 おろかなおうの ものがたり☒  
 とおいむかしの ものがたり♪

橙の光に照らされた、遺跡の散らばる高台に響き渡る少女のわらべ歌。

だがその内容はなんとも言えない残酷さと不気味さが滲み、思わず一味の表情が強張る。吹き抜く風も、なぜだか生ぬるく感じられた。

「……………どう？ どうだった？」

歌い終えたヒナは自慢げに、褒めてと言わんばかりに目を輝かせている。

子供に優しいナミも、流石に引きつった顔で固まっていた。

「……………わ、わく…ヒ、ヒナちゃん……………お歌上手ねエ……………」

「……………恐エ」

「超恐エ」

「子供の無邪気な声で歌われる童謡って何でこんなゾクゾクするの……………」

どうにか我に返り、むふーと鼻を鳴らすヒナをナミがあやしている間に、男達は群がり顔を見合わせ合う。

ただでさえ不気味なのに、子供が歌うと歌詞の邪気が余計に強調されて聞こえ、誰もが返す言葉を失っていた。

「しかも何だ……………その絶望的に夢のねエ歌は。まあわらべ歌なんざそういうもんかもしれないねエが……………」

「歌は好きだけどこういうのはヤだ……………むぐ!!!」



飾らない本音のままの感想を言いそうになつたルフィの口をブルックが塞ぎ、黙らせる。遣り切つた様子の本人に聞かせる言葉では無い。

「……………」

しん、と静まり返る一味の隅で、エールも一人黙り込んでいる。

だが彼女は無言で夕日に背を向けていて、その表情を伺い知る事はできない。どことなく、不機嫌そうに見えた。

「そんで……………結局この歌は何が言いてエんだ?」

「島では……………欲深な者を戒める教訓として伝わってる。作者は不明だけど、ずっとずっと昔から伝えられ続けてきたものなんだそうだ」

「ふーん……………だつてよ『泥棒猫』」

「だつて」

「なんでピンポイントに私だけ言うのよ!!!」

シンゴの解説に、ウソツプやチョツパーがナミに振り向き確かめる。

明らかに馬鹿にしている彼らにナミはめらめらと怒りの火を燃やし、ぴくぴくと青筋の浮き出たこめかみを震わせた。

「おそらくその伝説が…この遺跡に刻まれている過去の記録。この島にいた強欲な王が、ある時やってきた錬金術師と何らかの契約を結び……………『何か』を作らせた。そし

て失敗して……島の住民諸共、悲惨な末路を辿った」

余計な事を言った者達があげる悲鳴をよそに、ロビンが冷静に遺跡を見下ろしながら考察を口にする。

折檻を終えて気分が落ち着いたナミも、ぼこぼこにされた男達も、全員がロビンの話に耳を傾け、そして顔をしかめる。

「エレノアが『悪魔』と呼ばれたのも……その錬金術師が根本的な元凶として憎まれた結果、現代まで伝えられてきた所為だと思うわ」

「なるほど……そういうワケか」

「所々欠けているし、順番もメチャクチャで正確じゃないけど……それが、ここに刻まれた昔話……遥か昔の、歴史の一端」

ロビンがそう締めくくると、長い間重い沈黙が訪れ、全員がなんとも言えない嫌そうな顔で沈黙する。

誰かがふはつと忘れていた呼吸を再開した事で、ようやくわずかに緊張の糸が緩んだ。

「ますます救いがねエ……!!!」

「うそつきノーランドより胸糞悪イぞ」

「腹の奥がスツゴいムカムカするんですが……」

「あら、不評ね」

子供に歌わせるような内容ではない、と一味全員から苦情が上がり、ロビンはころろと愉しげに笑う。そういう反応も彼女にとっては楽しいらしい。

だが、ロビンの笑みはすぐに消え、再び真剣な視線を遺跡に向ける。

それに気付いたエレノアが、眉間にしわを寄せて再度尋ねた。

「…何か他に気になる事でもあるの？ ロビン」

「……………さつき騒いでいたおじいさん…… “悪魔” の他に “古の王” と言っていたわ。

何か引つかからない？」

言われて、一味は思い出す。

異形達がエールの手により駆逐され、暴走の後突如倒れ。

それまでの騒ぎが嘘のように静かになった時、突如騒ぎ出した一人の老人がいた事を

……そして、彼が口にしていたある言葉を。

そこでようやく、ロビンの引っ掛かりを理解する事ができた。

「あ」

『よくばりおおさま』

「そう……彼はエールを見て……………『古の王が戻ってきた』と喚いた。こじつけくさいかもしれないけどそれがどうしても気になるの」

「あんなジジイの言う事を間に受ける必要あんのか……？ どう見ても正気じゃなかったら」

ロビンの懸念に、ゾロが訝しげに顔をしかめて告げる。  
今思い返しても、あれは正気ではなかった。

目を血走らせ、息を荒げ、目の焦点も合っていたか定かではないまま、エールとエレノアを指差し騒いでいた。

「あのジジイか……あいつが騒がなきや、おれ達や追い出される事もなかったろうに」  
「傍迷惑なジジイだ」

苦い顔で、一味を悪魔の手先呼ばわりしてきた老人の事を思い出し、苦い顔になる一味。

その時、ウソツプがはっと目を見開き、次いで腰を上げてロビンに振り向いた。

「ちよ……ちよつと待てよロビン!!? お前の推理が合ってたとして………あのジーさんの言ってた『古の王』とわらべ歌の『よくばりおおさま』が同じ奴を示してたとしてだ!!!」

青年の目が、すぐ後ろに逸れる。一味から離れ、一人佇む少女の方に向けられ、ウソツプの表情は青く、強張っていく。

「だったら……コイツが……!!! エールがその『古の王』って事になるんじゃないやねエの

か……………!!?」

こぼれ出たその言葉に、一味に緊張が走る。

わらべ歌に、言い伝えに現れる欲深な王。有り余る欲で島に破滅をもたらした王――

―それが、彼女かもしれない。

ごくり、と息を呑む声がある場に響いた、次の瞬間。

「!!? 誰だ!!? そこにいるのは!!?」

エレノアをはじめとし、ルフィ、ゾロ、サンジが一斉に振り向き身構える。

何事か、と我に返り四人の睨む方を振り向く他の面々は、その場に現れた見知らぬ人物に困惑の視線を向ける。

「お静かに……………ただの遣いです」

そこにいたのは、若い女性だった。上品な装いに身を包んだ、一人の長い髪の美女が、表情一つ動かさずにエレノア達の殺気を受け止めている。

それが、麦わらの一味に向けてペこりと頭を垂れ、辞儀を試みさせた。

「麦わらの一味御一行……………そしてヒノ・エール様。当社の会長が是非、お目にかかりたいとの仰せです」

「あア……………? 会長オ……………」

拳を構えながら、胡乱げな声を上げるフランキーに。

女性は微笑一つなく、ただ淡々と伝言を告げるだけであった。

「我が社——：コウガミコーポレーション最上階にて、皆様のお探しのモノに関わるお話を伴って、お待ちしております」

## 第275話 酔狂者

「うお——っ!!! 高エ——っ!!? 速エ——っ!!?」

変化していく窓からの景色に、ルファイが歓声をあげる。

ウソツプとチョツパー、ついでにヒナも同じく、全体が硝子張りとなった壁に貼り付き、わーぎやーと騒ぎまくっている。

他の面々は落ち着きつつも、動く部屋に驚愕の目を向けていた。

「こりゃあ……エレベーターってやつだよな……? こんな高くまで登れるモンなのか?」

「ウオーターセブンにこれと似たようなのあったろ」

「原理がまるで違う、どうやって登ってんだコリヤ」

凄まじい速さで空に向かっていく部屋に、船大工であり技師でもあるフランキーが眉をひそめる。彼からしても驚異の技術力であるらしい。

「動力は電気です。詳しい構造は最重要機密ですので言えませんが、当社の機械は全て電力によって稼働しています」

「そこは言われなくてもわかる。おれだって科学をかじった人間だ……おれが気に

なってるのは燃料の方だ」

じろり、と鋭い目で、解説をしてきた一味の案内役を担う女性——敏腕秘書サトナ力を見やる。

ただの案内役だという彼女に、フランキーは終始疑いの目を向けている。

「家一個分はあるこんなデカイ箱を持ち上げられるエネルギーつてのアー一体何だ。何から抽出されてる? …まさかそれも機密事項とやらじゃねエだろうな」

「警戒するのも当然ですけど、込み入ったお話は会長に直接お聞き下さい」

大柄な男、それも海パン姿の変態に凄まれても、サトナ力は眉尻一つ動かさない。それが気に入らず、つい舌打ちが溢れてしまうのだが。

「オウフランキーてめエ::レディにんな敵ついツラで迫ってんじゃねエ::!!? オロすぞコラ」

「お前な」

「状況わかってんのかエロコックが::」

と、美女にのみ紳士なサンジが空気を読まず割り込み、フランキーに凄み返し、お前は誰の味方だ、とその場にいた全員に呆れた視線を向けられる。

エレノアも同じく溜息をこぼし、二人の間に割って入った。

「はいはいやめやめ。フランキーも熱くならないの!」



「悪い……けどどうもああいう女を見るとカリファの奴を思い出しちまってな」

「ああ……」

ウォーターセブンに秘書として潜入し、冷徹無情にかつての仲間を裏切り任務を遂行しようとした美女の事を出され、エレノアは思わず納得する。

確かに、美人で有能そうという共通点があり、身構えたくなるのも納得の怪しい雰囲気だ。

「……今更なんだが、おれ達も混ざっててよかったのか……？ たまたまあの場に一緒にいただけなんだが……」

「あそこで放っておくのも不安ですし、構わないでしょう。恩人を置き去りにしたままでは私、かつての仲間に顔向けできません。向ける顔面ないですけど」

「……もし何かあっても近くにいてくれた方が守りやすいしね」

居心地悪そうに佇むシンゴにそう返すブルック。

エレノアも同意し、頷きながら、不安げにヒナの方を何度も向くシンゴの肩を叩く。自分より妹の身を案じる兄に、思わず頬が緩む。

「……………さて、まアそれはそれとして」

そう呟き、エレノアはちらりと窓際を見やる。正確には、窓際ではしゃいでいる青年達に混じる、同じく謎多き少女に目を向ける。

「ふおおお……!!! 部屋が登ってる……!!!? 何だいこれア……!!!? 何だい☒」

「子供が増えた!!!」

「まア……さつきみたいに落ち込んでるよりはいいんじゃないのか?」

先程までの気怠げな雰囲気とは打って変わって、きらきらと目を輝かせて動く景色に興奮する様子を見せるエール。

見た目に似合わぬ幼さが垣間見え、どつと肩から力が抜けてしまう。

「……………ああしてるのを見ると、あの大暴れはなんかの間違いだったのかなって思えてくるわね。『よくばりおおさま』だなんて思えない……」

「でも何か関係があるのは間違いないわ、少なくともね……」

一瞬疑い、警戒していたナミもじつとエールを見つめて呟く。疑いが晴れた、というよりは疑うのが馬鹿らしくなった気がする。

ロビンと共に様子を伺っていると、はしゃいでいたエールは唐突に窓から離れた。

「……………うん、まア、やっぱり騒ぐほどの事でもないかねエ」

「『また冷めた!!!』」

すん、と先程までの興奮ぶりが嘘のように真顔に戻り、黙り込む。

あまりにもいきなりすぎる豹変に、側で景色を楽しんでいたルフイ達が目を剥いて驚いた。

「それで……？ その会長さんとやらは私達に何の用なのかしら。何か企んでるならムダよ、コイツらはそうそう操れたりしないし、制御なんてできると思わない方がいいわ」  
子供四人を放置し、今度はナミがサトナカに問う。すでに不思議な機械に心奪われている船長に代わって、得体の知れない相手の目論見に立ちほだかる。

しかし彼女や他の者から睨まれてなお、サトナカはやはり表情一つ変えない。

「それに……あなた達が知ってる事って、何？ 私達が何を探してるのか知ってて言ってるワケ？」

「一つや二つじゃないわよ。できる事なら、強引にでも聞き出したいくらいには気になってる」

「……その点に関しても、会長から直接お聞き下さい」

「あなたは案内するだけ？ 不親切ね」

「ご質問へのお答えは業務外ですので」

どれだけ脅しても、サトナカは何も答えない。

まるで機械のように融通が利かず、冷たい態度に、招かれた側である一味に苛立ちが募る。

「着きました。……お足元にお気をつけ下さい」

そうこうしているうちに、動く部屋は目的地、最上階へ到達して停止し、がらりと扉

が左右に開く。

颯爽と降り、歩き出すサトナカの後ろを、一味は渋々ながらついていく。

広がっていたのは、広く豪華な部屋だった。

一軒の家より余程大きく、おかれた家具も全てが一眼中で高級品とわかる上品さを備えている、海賊にはそうそう縁のない一室。

「すげ〜〜〜〜ッ!!!」

「超豪華〜〜〜〜!!?」

きらきらと輝くその部屋に、素直に驚くルフイ達以外、ナミ達は平成を取り繕いつつも内心で呻き声を上げていた。

「お待たせ致しました、会長……………皆様をお連れしました」

かつ、と靴音を響かせて立ち止まったサトナカが、部屋の奥に向けて冷静に告げる。

するとその声に、椅子に腰掛けていた一人の男が。

…………町医者者の伊達マルが、なぜかおでんを口にしながら振り向き、気軽に手を挙げた。

「よオ、さっさきぶり」

「お前かよ!!!」

まさかの人物の登場に、一味から突っ込みが迸る。

一体どんな存在か、と身構えた後の展開に、全員が目を吊り上げて吠える。

「は!?? ちょ……まさかコイツ!?? コイツが会長!!?」

「ウソだろ…!!? 全然そんな奴に見えねエぞ…!!?」

「いいえ、この方はただの当社の雇われです」

「「紛らわしいわ!!」」

ざわざわと騒めいていると、サトナカが若干面倒臭そうに眉をひそめた状態で否定し、一味は再び吠える。

勝手に勘違いしただけが、それでも誰もが怒鳴りたかった。

「だったら何でお前がこんなトコにいんだよ!!?」

「ひやー、ほれおひやつひかいひよーはんりひよはれははつはへよ。まらはんもひへへ

らふっへ」

「何言つてつかわかんねーし!!! まず食うのをやめろ!!!」

「………てかこの島、おでんあったんだ」

「もぐんぐ…なんか、前にこの島に来た奴が教えてつたらしいぞ? よくは知らねエけ

ど」

もぐもぐとおでんを頬張る伊達マルに詰め寄る一味。一度緊張を解いたせいで、気怠さがこれでもかと襲ってくる。

はあ、と項垂れ溜息をつくナミ達に、サトナカが再び冷静に告げる。

「皆様、ご静肅に……会長の御前です」

ルフィ達は改めて、サトナカが示す方に振り向く。

先程のやりとりのせいで緊張感が足りないが、油断は禁物とどうにか気を取り直し、奥に立つもう一人の男を見据える。

そしてやがれ、その男がくるりと振り向き。

「ハッピーバースデー!!! ようこそ勇敢なる荒くれ者達よ!!!」

ぐわっ、と凄まじい声量による奇妙な挨拶の言葉が、津波のごとく浴びせられる。

濃い顔立ちに浅黒い肌、がっちりした体つきという。

居るだけで暑苦しさを感じる男による、凄まじい初対面だった。

「会長が一番静肅じゃねエじゃねエか!!!」

「すまないね!!! 君達の到着を心待ちにしていたものでつい力が入ってしまった!!! 騒

がしい歓迎になってしまった事を心から詫びるよ!!!」

「常にうるせエ!!!」

きーん、と鼓膜が震え異音に苛まれながら、ウソツプが思わず吠ええると、男はその声をさらに超える爆音の声を響かせてくる。

保たれていた緊張感が、そのせいで粉微塵に吹き散らされてしまっていた。

「急な招待に応じてくれてありがとう!!! 私はこのコウガミコーポレーションの会長!!!」

コウガミ・コウセイ!!! こちらは秘書のサトナカ君だ!!! 君にはぜひ会ってみたいと思っていたんだよ、麦わらのルフィ君!!!」

「ハッピーバースデーって何だよ、今日はおれ達誰も誕生日じゃねエぞ」

「私達の出会いそのものへの祝福だよ!!! 出会いとは新たな運命の誕生!!! 異なる道歩んできた者達が遭遇する事により、人生は予想もつかない局面に遭遇する事もある!!!」

がっしやがっしやと手にした器の中でクリームを混ぜつつ、男——コウガミは濃い笑顔で語る。何かの演説でもしているようだ。

「だからこそ私は祝う!!! この出会いに!!! 私達の人生の変換点に!!! ハッピーバースデー!!!」

「落ち着きのねエおっさんだなー」

「なんか…身構えて損した気分だわ」

「お…おいおい。本人の目の前でそんな事言ったら」

がっくりと、安堵やら落胆やらで肩を落とし、悪態を口にするルフィ達。

その中ではっと、ウォーターセブンで似たような場面に遭遇した事を思い出したウソップが動揺する、が。

「やかましいのは事実なので問題ありませんよ」

「冷静!!!」

「上司が色々言われてる事に思う事はないのか!!?」

「業務内容に『会長を敬う事』は含まれておりませんので」

「忠誠心ゼロか!!!」

こちらの秘書は一切気にした様子もなく、一仕事終わったとばかりに勝手に椅子に腰を下ろしている。まるでやる気を感じられない酷い態度だ。

「…こんな秘書で大丈夫なのか…おっさん……」

「問題ないよ!!?」 いつもの事だからね!!!」

「悲しいな!!!」

気にしているのか諦めているのか、濃い笑顔のまま全く感情を悟らせないコウガミがやかましく答える。

コウガミはクリームの器を隅の机に置き、一味を部屋の中央の、無数の料理が並べられた大机へと誘った。

「さて…立ち話もなんだ!!! 私自らが用意した歓迎の食事はいかがかな?!? まず挨拶

がてら宴といこうじゃないか!!!」

「うおー!!!? おっさんいい奴だなー!!!?」

「存分に食べて飲んでくれたまえ!!! 私も宴が大好きなのだよ!!!」



「うまそー!!?」

「甘そー!!?」

食べ物と見るや、目の色を変えて評価を改めたルフイが、チョツパーを引き連れ早速机に突撃しようとする。

が、すぐにナミとエレノアがその襟首を掴んで引き止める。

「はいはいちよつと待てバカ共。ちつたア疑え」

「そうね……………ここで呑気におしゃべりする気はないわ」

言うことを聞かない愛玩動物を止める気分で、ずるずると彼らに引きずられつつ、じろりとナミがコウガミを見据える。

ここまでの相手の態度で、彼女達の疑念はますます強まっていた。

「こんな見るからお金のかかってそうな上流階級者の一室で、豪華な料理とお酒でもてなして、それで私達に会いたかっただけなんて……………ありえないでしょ?」

「…用心深いね!!」

「当たり前でしょ? こっちは海賊なのよ?」

何も信じるつもりはない、と言わんばかりに鋭く見据えられ、しかしコウガミはさして気にした様子もなく笑ったまま。

そういう反応は予想済みだ、と暗に告げているようだ。

「歓迎して油断している隙に……グサリ!!? ってな」

「一度食らったもんなア……ま、おれには無意味だったがな」

「元賞金稼ぎのおれからしても……疑う理由にや充分だな」

「そもそも歓迎される事自体ありませんもんねエ、ヨホホホ」

「知りたい事を教えるとか、求めてる答えがあるとか、そんな餌で誘つといて、結局のところ何か用事があるから呼んだんでしょ? それも……海賊を相手にしなきゃならないような、真つ当じやない何かが……」

一部を除く一味全員が同じ考えで、コウガミに対して警戒心を一切隠そうともしない。

自分達は世に言う悪人であり、世の中からすればな敵。

ここまでであからさまな懐柔の手に、思惑がないと疑わない方がおかしい……はずなのだが。

「うんめくくく!!! おいおっさん!!? このケーキすんげくうめーな!!!」

「気に入って貰えて嬉しいよ!!! 準備に何時間もかけた甲斐があるというものさ!!!」

「!!!おい!!!」

いつのまにかエレノアの拘束から抜け出していたらしいルフィが、ばくばくとワンホールケーキを丸ごと味わっている。そして知らぬ間にエールも一緒にばくついてい

る。

真剣な空気が台無しになり、ナミ達からルフィに咄嗟に抗議の声が上がった。

「さアさア君達も遠慮する事なく!!! 存分に楽しんでくれたまえ!!!」

「……………バカ船長めエ」

「会長、おれもその用事がなんなのか聞いてないんだけど」

「まア待ちたまえよ伊達マル君!!! ものには順序というものがある!!! ……………君達に会

いたかった!!! その言葉にウソはないよ!!! そして用事があるという君達の予想も正解だ!!! 是非とも君達に頼みたい事がある!!!」

頭を抱えるエレノアをなだめようとしてか、コウガミは大仰な手振りと共に語り出す。

「ぼつ、と舞台役者のように派手に手を広げ、ケーキで顔中クリームまみれのルフィに大声で問いかける。

「時に、麦わらのルフィ君——冒険は好きかね?!!」

「おう!!? 大好きだ!!!」

「ならば私と共に!!! この島の秘宝を探しに行かないかね?!!」

その誘いの声に、消えかけた緊張の意図が再び張られるのを誰もが感じる。

気付けばゾロやフランキーが各々の得物に手をかけ、抜けるように無意識のうちに動

いていた。他の者も似たような反応を見せている。

「…何が目的……? 海賊相手に一緒に宝探しだなんて……」

「私が見たいからさ!!! だが只人ではそれを目にする事も叶わない!!! 何百年もの間隠され続けてきた秘宝だ!!! 選ばれた強者にしかそれは手に入れられないのだよ!!! 彼らでさえ!!! 叶わなかった事だ!!!」

ロビンの眩きに、コウガミは一味の方に勢いよく振り向き告げる。

この場には誰かの事を語る彼に、ルフィも食事の手を止め、一味と共に視線を向ける。

「彼ら……?」

「20年以上前の話だ……!!! この島にある海賊団がやってきた!!!」

——彼らはルフィ達と同じく、航海中に嵐に見舞われ、この島に流れ着いた。

彼らはやがて、島の住民からあるものの言い伝えを聞き、それが隠された場所を突き止めた。

だが、彼らはそれを手に入れる事はできなかった。

あと一步のところまで力及ばず、再び訪れた嵐の中に消えていったという——。

「——彼らはその後、見事に『偉大なる航路』の制覇を果たし!!! 莫大な財宝を手に入れた!!! 誰もが成し遂げなかった偉業を成し遂げ!!! 恐れられ!!! 羨まれ!!! そして

妬まれた!!! 世間は彼らの長を世界最悪の犯罪者と定め、こう呼んだ——!!!

—— // 海賊王”と!!!

ごくり、と誰かが息を呑む音がする。

スリラーパークの戦利品から繋がった話に、誰もが疑うどころではなくなっていた。

「君達もまた……!!! 彼に導かれたのだろうか!!!」  
 「そして彼と同じように、その宝を求めているのだろうか!!!」  
 私には全てお見通しな事だ!!!」

本当に考えを見透かされている気がして、思わずナミが顔をしかめる。

どこまで彼の思惑の内なのだろうか。自分達がここにやって来る事も、そもそもあの手掛かりを得た事すら、彼の思惑通りだったのではないかと思えて来る。

「もう島の遺跡は見たところだろうか!!!」  
 「だが………アレはほんの一部だよ!!!」  
 「見るべき真の遺跡は……!!!」  
 「あそこにある!!!」  
 「あの遺跡に、彼が手に入れ損ねた秘宝が眠っている!!!」

「あるのか——!!!」  
 「本当に……宝が!!!」

「ある!!!」

絶句しているのはルフィ達だけではない。この場に呼ばれた伊達マルも、居合わせた

だけのシンゴとヒナも黙り込んでいる。

拒絶の意思がない事を確かめたように、コウガミは続けて彼らを誘った。

「行ってみるかね?!? いや……!!! 行くしかないだろう?!? 彼の宝を探し求める酔狂者――

――海賊“麦わら”のルフィ!!!”

ただ一人……ケーキで口の周りを白く汚したエールだけが、大仰に語る謎多き男を、冷たく見据えていたのだった。

## 第276話 遺跡に眠る秘密

「この穴の先に、王は眠っている!!!」

ある一つの大きな穴……入口の前でコウガミの声が響く。

わくわくと目を輝かせるルフイ達や、冷静に様子を伺うエレノア達、そのほか装甲を纏った集団の前で、コウガミの話が始まる。

「800年もの昔、この島に君臨し欲望の限りを尽くした人物!!! とある錬金術師を配下にし!!? この世の全てを掌握できる凄まじき力を持った秘宝を生み出させた、史上最も強欲だった存在!!! そんな王が眠る墓が、この穴の先に繋がっている!!!」

入口は、一見すればただの洞穴だ。だが暗く深い穴の奥から感じる雰囲気は確かに不気味で、油断してはならないという事をこれでもかと思えて来る。

「しかしだからこそ心してほしい!!! これはひじょくく危険な旅だ!!! 墓までの道は無数の罠でいっぱい!!! 数えきれない怪物達も跋扈している!!! 何が起るかは誰にもわからない!!! 故に何もかもに備えなければならぬ!!! 想像力の不足………」

それは即ち死を意味する!!!  
「えくくく!!!? 死ぬのかく!!!?」

「まだか……まだダメか……!?？」

「落ち着け」

「これより先へ進めるのは!!! 死に向かいながら死をも退けられる本物の勇者のみ!!!」

それが出来ない者は即刻退場!!! 浮かれた人間は足手まといだ!!! そう覚悟して進み

たまえ!!!」

早くも我慢の限界に達しかけている青年を宥める声がする。

それに応えるように、コウガミは……冒険家らしい格好にわざわざ着替えた男はがばつと入り口に向かって振り向き告げる。

「さア!!! ならば早速出発しようかね!!! かの『海賊王』ですら手にできなかつた秘宝中の秘宝を見つげに!!!」

「うおー!!!」

「おっさんが一番浮かれてんじゃねエか!!!」

形から入る気質なのだろうか、冒険家の服装はお世辞にも彼に似合っているとは言いがたい。が、そうであっても本人は気にしていなさそうだ。

感想に困りながら、頭を抱えるナミが深い溜息をこぼした。

「何でこうなるのよ……」

「ふいふ……♪」



話は、昨晚に遡る。

コウガミが持ち出した誘いの言葉に、一味はしばらくの間驚愕で黙り込み、やがてサングミが目を吊り上げて声を荒げた。

「おい……!!! でまかせ言ってるじゃねエだろうなてめエ!!?」

ずいつ、と女性陣を庇うように前に出て、コウガミを睨めつける。妄言を吐いた男を前に、若干の冷や汗を垂らしながら吠え掛かる。

「海賊王が手に入れられなかった宝だア!!? でけエ口叩きやがって……!!? 奴の見た宝ですら存在があやふやになってんだぞ!!? それを探して一体どれだけの奴らがこの海に挑んでると思ってるんだ!!!」

「無論、私は真面目だよ。ホラなど吹いてはいない」

常人を怯ませるほどに鋭いサンジの剣幕に、コウガミは顔色一つ変えない。

仲間の援護をするように、無言で話を聞いていたブルックが微かに殺気を滲ませながら口を開く。

「そう言われても……『宝があるよ』と言われて素直に信じられるほど、若くはないものでして。それに会ったばかりの怪しげな方の話……疑わざるを得ないのですよ」

「それは当然の話だ!!!」 剣侠・花唄!!! 誰だってそうだと!!!」

ブルックは思わず、コウガミを強く凝視する。生前の姿であれば、目玉がこぼれ落ちそうなほどに大きく瞼を見開いていただろう。

「…何故、私の名を……………?!? 顔だつてこんなにも変わり果てているのに」

「聞いていたからさ!!! 君達の話さ!!! 君はごく最近麦わらの一味に加わつたようだね!!! “ヨミヨミの実”の“復活人間”!!!」

ブルックは50年も昔に一度死んだ海賊。そんな彼が一味に加わつた事を、なぜこの場で初めて会つたような男が知っているのか。

その疑問を嘲笑うように、コウガミは笑みを深め、得意げに語り出す。

「私は君達を……………いやこの島の全てを監視しているのだよ!!! カンドロイドシステムによつてね!!! あれを普及させたのは、ただ住民達の生活水準を引き上げるためではない!!! 私の目になう人物を見つけ出すためさ!!!」

コウガミの声に合わせるように、部屋中から小さな影が……………件の小さな機械の生物達飛び出し、彼の側に集まって来る。彼に操られているかのように。

「……………マジの話らしいな」

「いつから覗いてたのよコイツ……………?!?」

「……………そこまでの事をやって、根拠はあるのか? その宝つてのが実在するっていう

……………」

もう随分前から、自分達はこの男に標的にされていたのだとわかり、ぞつと背筋に寒気が走るのを感じる。

彼に対する得体の知れなさが強まり、得物にかかる手の力がより一層強まる。

「君達は見たハズだ!!!」  
「王」の遺物の一端を!!! その力の極一部をじかに目の当たりにしたハズだ!!!」

コウガミはそう言って、びしつとある一人を力強く指差す。

指し示された方向、そこに立つ人物。

ケーキを口に運びながら、無表情で佇んでいた少女……ヒノ・エールを。

「……私?」

きよとん、と目を瞬かせながら首を傾げるエール。

だが他の者は、エールの持つ異常な力を実際に目の当たりにしたウソツプ達ははっと息を呑み、エールを凝視し身を強張らせる。

「その通り!!!」  
ヒノ・エール君…君が纏ったあの鎧は!!? 800年前にこの島に存在した「王」が使用していた兵器!!! 遠い海の彼方から舞い降りた錬金術師によって生み出された力!!! その一部なのだよ!!!」

「何だと…?!?」

「……!!!」

「ウ、ウソだろ……!!!」 や……やっぱエールがその『よくばりおおさま』だったのか……?」  
 疑いが確信に変わり始め、エールへの警戒心が高まる。

やはり見逃したのは間違いだったのかと、一見無害そうな少女から無意識のうちに距離を取りかける。

が、張り詰めた空気を、再び彼が切り替えさせた。

「いや、それはまだわからない!!!」

疑われた少女を擁護するように、コウガミは笑みを消し首を横に振る。

かつかつと靴音を響かせ、所在なさげに立ち尽くす少女の方へゆつくりと歩み寄る。

「何故!!!」 800年前の『王』の兵器を現代の君が持っているのか!!! 記憶を失っている君に聞いたところですぐに答えは出まい………だがしかし!!! 貴重な証人である事は間違いない!!!」

びしっ、とコウガミが再びエールを指差す。

指し示されたのは、エールの腰に備わった奇妙な鋼鉄の帯——3つの窪みを持つ謎の装具だ。

「君に宿ったその力の名は『オーメダル』!!! 無限の力を生み出す究極の存在だ!!!」  
 「おーめだる……コレか?」

コウガミの言葉に、ルフィはあつと声を上げて思い出す。

懐に入れたままの銀の硬貨を取り出し、コウガミに見せて確かめる。

「いや!!! それはいうなればオーメダルの副産物!!! エール君の持つ『コア』と称されるメダルから発生する、『セルメダル』と呼ばれるものだ!!!」

「セル……細胞?」

「セルメダルにも多少なりとも力は宿っている!!! 引き出せば相応のエネルギーを使用できるが……!!! それには限りがある!!! 使用可能なのは一枚につき一度限りだ!!! こんな風にね!!!」

コウガミはルファイから硬貨を受け取ると、ぴんつと親指で弾いて宙へ飛ばす。

弾かれた硬貨は部屋の隅まで飛ぶと、そこに置かれた大きな機械の小さな穴に綺麗に入り込む。

すると機械が突如起動し、蒸気を吹き上げたかと思うと。

下部が展開し、コウガミの手元に湯気の立つ一杯の紅茶を差し出してきた。

「うくん………素晴らしい!!!」

「茶が沸いたア!!!」

「あんなメダル一枚で?!!」

慣れた手つきで紅茶を受け取り、香りと味を楽しみ賞賛するコウガミ。

ルファイ達が驚愕と興奮で騒ぐ中、はっと我に返ったフランキーが機械を見つめ、次い

でコウガミに振り向く。

「オイ……まさか、さっきのエレベーターを動かしてたエネルギーってのァ……………」

「そう!!! この建物は全て、セルメダルのエネルギーで賄われているのだよ!!!」

「セルメダルすつげエ〜!!!」

どこがどうすごいのかはよくわかっていないが、とにかく凄まじい力を秘めているのだという事はわかったルフィがまた騒ぐ。

「……………あの『王』が……実在するのか」

偶然居合わせ、流れでこの場についてきただけの立場のシンゴもまた、驚愕で青ざめ立ち尽くす。

ただの島の伝説が実話だった、その衝撃は他人には計り知れない。

すると、それまで驚くばかりだったチョッパーが大きく手を挙げた。

「じゃあ!!? じゃあ!!? あいつらは一体何なんだ!!! あのメダルでできてた化け物

達は!!!」

「ヒナも!!? ヒナもそれ気になる!!!」

「お……おい」

「そう!!! そこが実は肝心なんだ!!! あれもまた『王』の欲望から発生した副産物

……………いや!!! 『現象』と呼んでも間違いないだろう!!!」

チョッパ―とヒナからの質問にも、コウガミはやや曖昧ながらも律儀に応える。

むしろ、本人の方が話したくて仕方がないように見えた。

「まだまだ謎が多く!!! 把握できていない部分も多いが!!! アレらもまた!!! 800年前の遺物である事が分かっている!!! 何らかの方法でセルメダルが人間の体内に入り込み、その者の欲望に取り憑く事で複製され!!! まさに細胞の様に増殖する!!! そしてやがて宿主（親）に影響を受けた意思を持ち!!! 一体の怪物へと変貌するのだよ!!!」

「…寄生…?」

「そして寄生された人間の欲望もまた増殖する!!! 金を求める者!!! 食を求める者!!! 楽を求める者!!! 宿主の欲望によつて怪物もまた異なる進化を遂げる!!!」

言われて、ナミははつと思ひ出す。

昼間に現れた硬貨の怪物……あれが現れた直後、自身に表れた異変の事を。

「…あつ!!! あ——っ!!! アレか——!!! あれつてあの化け物のせいだったんだ……!!! あくくよかつたくくく」

ほつ、と胸を撫で下ろすナミ。あれは異常が起きていただけであり、自分自身に何か問題があったわけではなかったのだ。

安堵する彼女に、しかし仲間達が向けるのは疑わしげな眼差しだった。

「いやア〜そうかア?」

「アレは割とお前の本性が滲んでた気がするが…」

「おいイ!!!」

無慈悲な感想を零すウソップ達に、ナミは即座に怒りを露わにする。

本気なのか冗談なのか判断はつかなかったが、どちらにせよあまりの物言いに、年頃の繊細な娘は咄嗟に拳を握りしめていた。

近くで起こる折檻を放置し、ゾロもまた懐から硬貨を取り出し、胡乱げな目で見つめた。

「…あんなモンを買い取って何をすんのやらと思えば。思ってた以上にとんでもねエ代物だったようだな………このオモチャは」

「そう!!! かの『王』にとつてこんなものはオモチャに過ぎなかったのさ!!! これを遙かに超越する力が!!! 遙か過去の時代に存在していた!!! そして今!!! その力はこの島で深き眠りについている!!!」

再び満面の笑みを浮かべ、コウガミは語る。

夢見る青年達を、荒くれ者達の欲望を刺激しようとするように、自身の計画に手招きをする。

「それは願いを叶える魔神か!!!? はたまた神か!!!? 長き時の果てに、それらの正体は忘れ去られてしまった!!! 知りたくはないかね!!!?」



正直言つて、信用できないし、したくない。

しかしそれでも、彼の目論見の魅力は大きく、完全に無視してこの場を去る事はできそうになかった。

「誰もが畏れ!!! 讃える偉大な海の王を!!! 超えたいと思わないかね!!!」

そう告げられた以上、差し出された手を拒む言い訳は見当たらなかった。

——結構は明日の朝!!!

それまでは宴を楽しみ、英気を養つてくれたまえ!!!

古の秘宝が!!!

我々を待っている!!!

そして時は、翌朝の現在に戻る。

浪漫に溢れた冒険の朝は、寝坊助のルフイが自然と目を覚ますという珍事を引き起こしながら、出発の時を迎えていた。

「準備は万端だろうね!!! サトナカ君!!!」

「既に。伊達マルさんも向こうで一味と打ち解けています」

「そうかい!!!」

冷静沈着に仕事をこなす秘書に確認をとり、コウガミはますます笑みを深める。興奮

しているのかいないのか、普段がうるさすぎるため端からは全く判断がつかない。

「そちらはどうかね!!? 忘れ物などはないかい!!?」

「はいはい………だいたいじょーぶだいたいじょーぶ。いいからちよつと声のボリューム下げ  
て、うるさいから。朝っぱらからルフィに叩き起こされて辛いんだよ………」

「珍しい日もあるもんだ」

普段はエレノアの方がルフィ達を起こす側なのだが、今朝に限ってルフィがいつもより何時間も早く目覚め、早く行こうと急かしてきた。

休みの日に子供に遊びに誘われる親の気分で、エレノアは何度も目元を強く擦っていた。

そんな彼らを、離れたところから見送るシンゴとヒナの姿があった。

「悪い……おれ達はここで見送るよ。気にはなるけど……お前達みたいに冒険する気にはなれない」

「おう、そうだな」

「かまやしねエ……妹の側にいてやれ」

「すまん……武運を祈る」

「え……ヒナも中見た……」

「我慢しろ!!?」

不安げに入口を見つめ、後ずさるシンゴに一味は気にするなというように首を横に振る。

幼子の兄妹を危険には巻き込むわけにはいかない。例え妹の方が行く気満々だったとしてもだ。

「…そうだ!!! 確認ついでに、君達に今回同行する私の方のメンバーを紹介しておこう!!! 伊達マル君とサトナカ君はもう存じているね!!? こちらにいるのは私の護衛達!!!」

忠実で屈強な戦士達だ!!!」

「イトーです」「ジトーです」「サトーです」「ヨトーです」「…ゴトーだ」「ムトーつす!」「ナトーです」「ヤトーです」「クトー」「トトです!」

コウガミが自身のすぐそばに控える10人の戦士達を紹介する。

爽やかそうな青年、真面目そうな眼鏡の男、神経質そうな男、気難しそうな男、ぶつきらぼうな青年、元気一杯の少年、堅苦しそうな女性、年嵩の男、大柄な男、一番若そうな少女。

一列に並び、順番に名を告げられるが、すぐさまルフィが困惑の表情で首を傾げた。

「……………あ、悪イ。覚えきれなかった。もっかい言ってくれ」

「ヨトーです」「ナトーです」「イトーです」「…ゴトーだ」「クトー」「ムトーつす!」「ジトーです」「ヤトーです」「サトーです」「トトです!」

「順番入れ替えんな!!! わかんねエだろうが!!! お前ジトーだっけ?!? イトーだっけ!!!」

「ムトーつすよ!!!」

「急な紹介になつて申し訳ない!!! 交流は道中に深めておいてくれたまえ!!!」

何の記憶遊びなのか。ややこしい紹介を続けられ、堪らずウソツプがツツコミを入れるが、コウガミはさつさと自己紹介の時間を切り上げてしまった。

「何度も言うが!!! これは非常に危険な冒険となる!!! 命の保証などどこにもない!!! 間違ひなく君達の人生で最大最難の探険だろう!!! だがだからこそ!!! 私はこの想いを堪える事が出来ない!!!」

「うおー!!! おれもだおっさーん!!!」

「私のワガママ!!! そして君達の好奇心がこの冒険のカギとなる!!! 共に心して向かおう!!!」

コウガミが大仰に語り、舞台上のように歩く。

その姿を、エレノアはやはり胡乱げな眼差しで見つめる。じとりと半目になり、怪しむ様子を一切隠さない。

「『宝』の正体!!! それが一体なんなのかも現状ではわからない!!! 相手は800年前に存在したこの世で最も強欲とされた『王』!!! 己が欲の為に島の者達を脅かした:

常人では計り知れぬ人物である事は間違いない!!! 舐めてかかれば命はない!!!」

ふと、エレノアの目が傍に立つエールに向けられる。

いつも通りのぼんやりとした無表情。だが、今朝の彼女からはどこか、違和感が感じられる気がする。

その違和感の正体を捉えきれぬまま、コウガミの演説は最後へ近付きつつあった。

「だがしかし!!! それゆえに私は見たい!!! この島に隠された『宝』とは何なのか!!!」

この島に何が起こったのか!!! 私は全てを知りたい!!! この千載一遇のチャンスを

……私は必ずモノにしてみせる!!!」

「いくぞ~~~~!!! 野朗共~~~~!!!」

「気合いを入れたたまえ諸君!!! 未知の冒険が我々を待っている!!!」

ルフイの号令に合わせるようにして、コウガミも堂々と歩き出す。

合計21人の精鋭達を連れ、遙か過去より存在する恐るべき『王』の寝所へと、勇ましく歩き出した。

「シア!!! ではそろそろ参ろうか!!! 800年もの古の時代を解き明かしに!!!」

## 第277話 “前人未踏の大迷宮”

「だ~~~~~~~~っ!!! だ~~~~~~~~さつきから言ってんじやねエか!!!」

怒りの形相でルフィが叫ぶ。

二つ別れた石積み通路の片方を指差し、ふんと鼻を鳴らす。

目の前に立ちはだかる頑固者への苛立ちで、つい先程までであったわくわくとした気分が台無しになっていた。

「迷路のゴールを指すんならこっちだろ!!! お前バカか!!!」

「バカはお前だ!!? そんなあやふやな勘で道を決められてたまるか!!! 行くならまずその根拠を示せ!!!」

「宝が隠されてるトコならなんか暗そうな方に行くのは当たり前だろ!!!」

「そんな常識があるかア!!!」

同行するコウガミの面の一人、ゴトーを相手に喚くルフィ。

迷路を進む途中、案の定いざこざが発生したのだが、その理由が道を選ぶ際の意見の相違というくだらないものだった。

しかも、全面的にゴトーの方が正しく聞こえる。

「……………うちのバカがすみません」

「あ、いえ……………うちの隊長も融通がきかないもんで」

醜態を晒す船長の代わりにエレノアが頭を下げ、ゴトーの部下のイトーも困惑気味に頭を下げる。どちらも一団の頭に苦勞している部分があるらしい。

「いい加減、落ち着いてくれゴトー隊長」

「入ったばかりで熱くなつてどうするんですか」

「……………!!! くつ……………まつたく…!!? 最初から反対だったんだ!!? 名は知れている

とはいえ、海賊なんかに助力を求めるなんて……………!!! 本来ならば我々ライドベン

ダー隊で充分だった筈なのに…」

いつまでも止まらない口論に、とうとう他の部下達がゴトーを制止し出す。

流石に彼らに情けない姿は見せられないと思つたのか引き下がるゴトーだが、悪態は止まらず、それにサンジがかちんと眉を顰めた。

「おーおー、ずいぶん好き勝手に正論突きつけてくれるもんですなア」

「こつちとしても、ロクに互いを知らねエ、背中を預けられねエ奴と洞窟探険なんざ御免なんだがな」

フランキーもゴトーの物言いが気に入らないのか、サングラス越しに男達を睨みつけ  
呟く。一瞬で、両者の間にぴりつと殺気が漂い始める。

「つーか、お前らが頼りねエから会長サマがおれ達に頼んできたわけじゃねエか。てめエらの無能を棚に上げてブツクサ文句言われてもなア……………」

「……この場で撃ち殺されたいのか貴様……!!」

額をぶつけ合うように互いに迫り、ばちばちと睨み合うサンジとゴトー。

苛立ったゴトーの部下達も今度は止めず、一触即発の雰囲気になりそうになり……………ここにずっと、なぜか牛乳缶を背負った伊達マルが割り込んだ。

「はいはいやめやめ!!!」ゴトーちゃんもお兄さん方も落ち着きなさいって……………おでんでも食って落ち着けよ」

「熱っつアア!!」

べちやつ、と、伊達マルが熱々のおでんを彼らに押し付け沈静化を図る。

顔の良い男達は白目を剥いて倒れ込み、どこぞの芸人も顔負けなほど滑稽な姿を晒してその場を駆け回った。

「ダメだ……チームがハナからバラバラだ」

「こんなんでお宝なんて見つけれられるのかよ」

迸る悲鳴と醜態に、ナミとウソップが揃って頭を抱える。

警戒せねば死ぬ、といった矢先に警戒するどころではない事態に陥り、どうしたものかと溜息が溢れる。



「…まったく…：…しようがねエ奴らだ。どいつもこいつも妙なプライドが邪魔する所為でまるで連携がなっちゃいねエ。くだらねエモンにこだわってねエでもっと大局を見据えやがれ」

「おめエはそもそも迷路にも団体行動にも向いてねエ!!」

いつの間にか、通路の横穴に入り込みながら注意を促してくるゾロにウソツプが吠える。一体どの口が言っているのか。

一縷の願いを込めて、先頭で立ち止まる今回の探検の発案者に振り向く。

「オイ会長さんよ!!! あんたが事の発端なんだからまとめるよ!!? あの兄ちゃんはどうせあんたの言う事しか聞かねエだろうが」

「最高に自由で個人的な探検隊の誕生だ!!! ハッピーバースデー!!!」

「ダメだこのおっさん!!!」

止める気が一切ない男の喧しい声に、天井を仰ぐウソツプ。こんな状況で焦りも苛立ちもしないのは凄いが、流石に気にしなすぎている。

嘆くウソツプに、コウガミは一切悪びれる様子もなく大仰に手を広げて告げる。

「なアに!!! 何も問題はないさ!!! まずは試してみなければ正解かどうかなどわかるま

い!!!? 成功という結果がどんな過程の中から生まれるかなど誰にもわからないのだから!!!」

「試す以前に……さつきから全然進んでる感じがしないんですが」

「そうね……挑戦は確かに大事だけど、ここは生死がかかった迷宮の中。使える命はそれぞれ一つだけ……慎重に行くべきだわ」

ブルックとロビン、経験豊富な大人組が果てしなく続く通路を見つめて呟く。

子供の遊びではない。道を間違えればそのまま帰れない可能性もあり、その上罠も敵もいると聞いている。選択は慎重に行わなければならぬ。

「エレノア……？ どっちがいいと思う……？」

「そう言われてもねエ……」

たまらずナミがエレノアに尋ねるが、彼女にとつても困難な選択であるらしい。険しい表情で、暗く深く続く迷路をじつと覗き込んでいた。

「宝がある方はどっちだ？ つて聞かれても、どんな気配を放つのが全然わからないから何とも言えないし……危険な方はどっちって聞かれたら、正直入った瞬間からどの道も危険としか言いようがないんだよねエ」

「肝心なところで役に立たねエな」

「お黙り」

一味の窮地を幾度も救ってきた彼女の力——見聞色の覇気。

生物の気配を探る事に特化した彼女だが、特定の物体を探す事は不得手のようだ。

悩むウソツプは、一味の端でぼんやりと佇む少女に視線を向ける。

「…なアエール？ お前、なんか思い出せないのか？ お前のあの鎧、『よくばりおおさま』の持ってたものなんだろう？ どこで手に入れたとか覚えてないのか？」

「記憶喪失の女に無茶言うなよ」

古代の「王」の遺品を持っているのなら、何か手掛かりを持っているはず。

無茶だとはわかりながら、それでも何か少しでも冒険の助けになるものがありはしないかと、記憶を失った少女に望みをかける。

誰もが無駄だ、無意味だと期待などしていなかった……だが。

「……………あつち」

エールは少し考え込んだ後、分かれ道の片方を指差す。

気怠げながら、確信に満ちて聞こえるその声に一味ははつと目を見開き、少女に振り向き凝視する。

「まさか……記憶が戻ったのか!!？」

「そういう訳じゃないシア……ただ、こっちの道は危なくない、そんな感じがした」

チョツパーが喜びかけるが、ふるふると首を横に振り否定するエールに、がつくりと肩を落とす。宝の在処より、患者の病状の方が彼には重要だったようだ。

「……どう思う？」

「コイツの第六感なのか……それともうつすらと記憶が残ってるのか……：まあ何も手掛かりがねエ以上、貴重な意見である事にや変わりねエ」

一味は囁き合い、少女の意見を取り入れるべきか否かを論じ合う。

間違っていれば、大きな時間の消費と命の危機に繋がる。素直に聞けるほど、少女への疑念も払拭できてはいないのだ。

だが、仲間達の懸念を吹き飛ばすように、ルフィが笑い出す。

「わかんねエなら行ってみりゃいいじゃねエか。間違ってたらまた戻りゃいいんだしよ」

「………だから戻れるかどうかが問題で」

行き当たりばったりな船長の思考に頭痛を覚えるエレノアとナミ。

結果的にはそれで上手くいっているのがこの「偉大なる航路」の旅だが、これに関して話が別だ。

仲間達の不安を笑い飛ばし、ルフィは歩き出す。

エールが指差した方とは異なる、もう一方の道に。

「よし!!! 行くぞお前ら!!!」

「!!?」

「「「ちよつと待てエ!!!」」」

ぎよつとエールが初めて驚愕の表情を浮かべ、大きな反応を見せる。

一味も同じく、ずんずん進んでいこうとするルフィに叫び、暴走する前に立ち止まらせる。

「何でわざわざ教えて貰った道と逆に行こうとしてんだよ!!? ソロかお前は!!」

「死んでも治らねエバカなのか!!」

「フアンタジスタ緑迷子か!!」

「お前らさつきからどんだけおれをバカにしてエんだ!!」

あり得ないくらいの方角音痴の剣士を引き添えにし、罵倒を重ねる一味。

ほとんど単なるゾロへの悪口になっているが、誰も彼の抗議に耳を貸す事はなかった。

「いい加減にしろ!!」 もし間違った道に危険な罠があったらどうする!!? 会長を危険

に晒すようなマネはおれが許さんぞ」

「そうよ!!? どうにかして安全な正解の道を見つけないと……………」

再びゴトーが苛立ち、ルフィを敵視するように睨み出す。全くの正論だと、ナミも全面的にその言葉に賛成する。

どんな彼らに、ルフィはあ…とこれ見よがしに溜息をこぼしてみせた。

「…おめー、やっぱりバカだな。ナミもよオ……………お前ら…今までのおれ達の冒険で

「一体何見てきたんだ？」

「…何よ」

何もわかっていない、とばかりに肩を竦めるルフイ。

何が言いたいのかと顔をしかめるナミに、彼はにかつと楽しそうに笑って告げる。

「『海賊王』が探して手に入んなかったスッゲーお宝だぞ?!? そんなのが安全な道にあるわけねエじゃねエか!!」

自信満々に断言する、麦わら帽子の青年。

自身の印象に基づく勝手な決めつけで、やはり確固たる根拠などないのだが。

それでも、一味もゴトー達も反論の言葉を見つけられない一種の正論だった。

「……………またコイツは核心つきやがって」

「素晴らしい!!! 夢の為に危険な橋を躊躇わずに渡るその精神!!! 勇気!!! さすが未来の海賊王だ!!!」

「つーわけだエール!!! エレノア!!! この先の一番ヤバそうな道を教えてくれ!!!」

「ええええええエ……………」

サンジが呆れていると、コウガミも全力で喜びを露わにし、ルフイの意見を採用する

流れができてしまっている。

そのまま二人の少女が方針を尋ねられ、嫌そうに顔を歪めた。

「……………」

善意を無下にされたエールは無論、膨れっ面で口を閉ざす。

エレノアもまた、ちらりと通路の奥を覗き込んでから、ぶるりと背筋を震わせる。

「一番ヤバそうな道つつたつてなア……………正直言つて、こつちの道の先は全部まるつとイヤな予感しかしないんだよ」

「イヤな予感つて…?」

「なんて言つたらいいのか……………言葉では表現できそうにないくらいマジで危ない気配」

エレノアの目には、通路の奥の闇が凄まじい不気味さを放つて見えていた。

得体のしれない怪物が口を開けて待っているような、そんな本能的な恐怖が騒いで落ち着かない。

「……………こつから私の覇気は役に立たないと思つててくれるかな? 本音を言うとな私…

この先に進みたくないんだよね」

「あんたがそこまで言うほどなんて……………」

そう言つて冷や汗を垂らす天使に、ナミもだんだん不安が強まる。

修羅場慣れした頼れる仲間の見せる、いつになく迷った態度に、一体何が待っているのかと思わず肩を抱く。

立ち止まったまま動かないエレノアに、ルフイは今度はロビンに尋ねる。

「ロビン、なんかいい方法ねエか？」

「宝を探すならともかく……迷路の攻略法なら一つ、確実なものがあるけど」

ロビンの語る、迷路の必勝法。それは迷路を壁沿いに進む事。

どんなに複雑な迷路であろうと、右か左、壁に沿って進んでいけば自然と終着点に辿り着く事が可能なのだという。

時間はかかるが、確実に難解な道を攻略できる方法だ。

「……とはいえ、これは普通の迷路の解き方。どこにどんな仕掛けがあるのかわからな  
い以上、安全な方法とは——」

「なるほど……壁沿いか!!」

ロビンの話がまだ終わっていないにも関わらず、コウガミが歩き出し壁に手を沿わせる。早速実践しようと思ったのだろう。

だが、彼が石壁に触れた直後。

ガコツ、と。何かが動く音が辺りに響き渡った。

「……………あれ？　なんか今……………壁が……………ボコつて…」



思わずその場にいた全員が、音のした方と、音を出した男を凝視する。

嫌な予感が湧き上がり、全員の表情が凍りつき。

やがて周囲から鳴り出した重低音に、コウガミはがばつと振り向き、満面の笑顔でやけくそ気味に叫んだ。

「やっちまつたようだよ!!!」

「!!!アホ~~~~~~~~ッ!!!」

予期せぬ事態に、コウガミ以外の全員が目を剥いて叫ぶ。

だが、やらかした彼への怒りを燃やすよりも前に。

一味の背後に巨大な石球が落下し、ごろごろと猛烈な勢いで転がってきた。

「!!!ギィやああああああああ!!!」

通路とちようど同じ大きさの岩が迫り、一味は大慌てで走り出す。

それぞれ目を剥き、悪態をつき、泣き叫び、顔中脂汗まみれになり、向かってくる巨岩から逃げ惑う。

「なんて事してくれてんのよあんな~~~~!!!」

「はっはっはっはっはっは!!!」

目を吊り上げて怒鳴りつけるナミに、コウガミは誤魔化すようにわざとらしい笑い声をあげながら走る。

「ゴゴゴ、と雷のような重い音が轟く中、フランキーが立ち止まり左腕の銃器を構える。  
「ナメんな!!?」ウエポンス左!!!」

がちやん、と開かれた手首から露わになった銃口が火を噴く。

無数の弾丸が巨岩に炸裂するが、表面で火花が散るだけで、巨岩はびくともしない。

「んげ!!!? やっぱ豆鉄砲じゃムリか!!!?」穴の中じゃでけエ威力の武器は崩落させかね

ねエから使えねエつてのに……………!!!」

「ちくしよーやっぱこういう目に遭うのね私達はクソツタレがア!!!」

目を剥くフランキーを引つ張りながらエレノアが叫ぶ。退路は断たれ、走りにくい通路ではいずれ追いつかれる。

せめて逃げ場を確保せねばと掌を合わせ、壁に叩きつけるが。

ばちつ、と錬金術の閃光は弾かれ、エレノアがその場でひっくり返る。

「ふぎやつ!!!? ……え!!!? あれ!!!?」何これ……………ただの岩じゃないの!!!」

「ウソだろ!!!?」錬金術でも壊せねエのか!!!」

「いいからとにかく走れてめエら!!!」

動揺する少女を今度はフランキーが引つ張り、走り続ける。

必死に前を目指す一味。だが、畏は一つではなかつた。

誰かが踏んだ仕掛けによって、今度は目の前に巨大な鉄球が振り子のように向かつて

くる。

「ギャ——ッ!!!」

「『一刀流』……!!! 『三十六煩惱』!!!」

前後をふさがれ、絶望しかけたウソツプ達の前へゾロが立ちはだかり、一閃。鉄球を真つ二つにして地面に転がす。

しかしまた別の罠が作動し、棘の生えた天井が落下してくる。

「吊り天井~~~~!!?」

「『粗碎』!!!」

悲鳴を上げてしやがみ込んだナミが圧死させられる寸前に、サンジが天井に蹴りを放ち粉砕する。

ばらばらと散らばる残骸に混じり、今度は壁に空いた穴から無数の矢が飛んでくる。

「今度は矢だアア!!! もうヤダ~~~~ッ!!!」

「つまらない洒落はやめなシヤレ!!!」

泣き叫ぶチョツパーが右往左往するのを押しつけ、義足から生やした刃を振り回しやを叩き落とすエレノア。

次から次へと襲いくる罠の数々。

息つく暇もなく、二人を除く全員が必死の形相で暗闇を走り抜く。

「あつひやつひやつひやつひやつひや!!! おんもしれエ〜〜!!! びつくり箱みてエにいろんなもんが飛び出してくんぞ!!!」

「何でこの状況で笑えるんだお前は?!!」

「はっはっはっは期待通り頼もしいね!!! 流石は総合懸賞金額9億の海賊達だぬわ——

——っ!!!

「会長オ〜〜っ?!」

楽しい遊戯施設にでもいるかのように、げらげら笑つてみせるルフイ。

コウガミも同じく満面の笑みのままルフイの後に続こうとし、しかしその途中で何かを踏み、ぼこつと地面に開いた穴に呑み込まれる。

「水——!!!」

「槍〜〜!!!」

「穴アアアア?!!」

「お〜〜〜た〜〜〜す〜〜〜け〜〜〜〜〜!!!」

どこに仕掛けがあるか、何が起こるかわからない。

次々に発動する様々な種類と数の罠により、一味は翻弄され、どこをどう通っているのかも把握できない。

悲鳴と罵声が、遺跡の中で繰り返し響き続けた結果——。

「……………いや、参つたなコリヤ」

暗い道の真ん中で、頭をかきながらルフィが眩く。

側に立つエール一人を振り返り、呑気な笑い声をこぼし、辺りをきよろきよろと見渡した。

「まゝたあいつらとはぐれちまった」

「……………」

右を見ても左を見ても、他の仲間誰も見当たらない。

暗く長い通路は前後に続き、どちらから来たのかもわからない。

ぼつんと二人きりのまま、ただただ笑い続けるルフィに、エールはやや呆れた眼差しを向けるのだった。

## 第278話 “トラップ&amp;トラップ”

「あつれ~~~~~☒ おつかし~~~~な~~~~???’」

ぱちぱちと目を瞬かせ、ルフィが大きな声を上げる。

道中で仕入れた松明を片手に、首を傾げ、目の前で幾つにも分かれる通路を凝視する。

「こつちが正解だと思っただけどなく!!? ん~~~~どーすつかない」

振り返ると、そちらもまたいくつもの分かれ道。それも前後左右だけではない、上下に分かれる道もある。

戻る道も全くわからなくなった青年に、少女が半目で溜息をこぼした。

「だからさっきのを逆に行けばよかつたんだって……………」

「でもお前の選ぶ道って危なくない道じゃん。やだぞおれ、そんな冒険じゃふかんぜんえんしょーだ」

「……………不完全燃焼って言いたいのかい…………?’」

「それだ」

ルフィとエール、二人だけの迷宮探索は、ものの数分で難局を迎えていた。

ルフィがエールの指差す方向とは逆の道を頑なに選び続けた結果、道はどんどん細

く、そして複雑になっていった。

最初は高く広かった道は、今や頭がぶつかりそうなほどに低い。

「しっかしあいつらどこ行つたんだア？ おれの言う通り行かねエからみんなバラバラになつちまうんだ。合流したら全員説教だなこりや！」

「……………どの口が言つてんだイ」

「にしてもどーなつてんだろうなこの迷路は！ ウソツプがスイッチ押しただけでいろんな罠が飛び出してきたしよオ……………あの壁が動くやつヒヤヒヤしてスリル満点だったな!!？」

他の者達が泣き叫び、逃げ回るような仕掛けの数々に襲われ、それでもルフイの顔から笑顔は絶えなかった。その様を、エールは心底呆れた様子で見やる。

「……よく笑えるね、仲間達みんな危険な目に遭つてるかもしれないのに……」

「あいつらなら大丈夫だろ。みんなしぶてーから。声のでつかいおっさんは知らねエけど……………まあおれの仲間がついてんだろうし大丈夫だ。心配いらねエ」

愉快そうに笑うルフイ。その笑みに、一味の危機を軽視しているように見えたのか、エールは少し厳しい視線を向け、ぽつりと問いかける。

「……………その自信は、何？ どうしてそう思えるの？」

「今までいろんな冒険を一緒に乗り終えてきたからな!!？ アイツらの強さはおれが

よオ〜〜知ってる!!? だから大丈夫だ!!」

「ずんずんと、またしても勘の赴くままに道を選び、歩き出す背をじつと見つめるエル。じとりと背中を見つめ、咎めるような口調でまた問う。

「ケガしないに越した事はないんじゃないのかイ…? こんな訳のわからない空間…ナメてたら死ぬよ…:…:せつかく持った命、危険に晒していいのかイ…:…:?」

「これくらいで惜しんでたら海賊やつてねエよ、ししし!!?」

その言葉に、はたと立ち止まる少女。前髪で表情を隠しながら、己の命すら軽く見ている様子の青年をじつと見据える。

そんな視線に気付く事なく、ルフィはさっさと通路の先を目指し続ける。

「楽しみだなア〜〜!!! 海賊王の秘密のお宝!!? どんなモンが入ってんだろうな〜〜く〜こんな冒険してる奴、他にいねエだろうなア〜〜!!!」

全身からわくわくと弾む気持ちに滲ませ、前進する。

遠ざかる松明の灯、陰になった背中。暗闇の中から青年を見つめながら、少女は溜息混じりに呟く。

「……………冒険、か。そんなにスリルを味わいたいんだ」

その声が、迷路の闇の中に響いた直後。

「……………」と、暗く深い闇の奥から、何かが轟く音が伝わってきた。



「ん？ 何だ？」

同時刻、遺跡のどこかにて。

三人の装甲を纏った男女が、果てしなく続く通路を睨みながら、肩を上下させていた。  
「く……!!? まさか、入って早々にバラバラに分断されるとは……!!?」

「メンバー、点呼!!?」

「二!!?」

「十!!?」

「よし少な過ぎるわバカ野郎!!!」

たった二人しかない部下に、副隊長を務めるイトーは頭を抱える。

途中の罠の連発のために、面子が八分の一程度になってしまった状況に、焦りと不安を抱く。

「会長も隊長もサトナカ秘書も無事なのか……!!? もしあの方に何かあれば、我々に明日はないぞ……」

「と、言われてもですね副隊長」

「我々ライドベンダー隊はそもそもコウガミ社長の護衛ですし、精鋭といっても迷路の探索など専門外なのですが……」

「つべこべ言うな!!! 文句ではなく打開策を出せ!!?」

どうしたものか、と頭をかくジトーとトトを怒鳴りつけつつ、内心では全く同じ不満を抱いているイトー。

分断の原因が自身らの雇い主である事もあり、嘆きたい気持ちは強かった。

「通信は?!?」

「繋がりません!!?」

「電波が阻害されているのか? 仕方がない、会長の搜索がてら、電波状態を確保できる位置を探し、再度連携を……………」

少ない人数では、何かあった際に取れる選択肢も少なくなる、とまずは他の者との合流を考える。

動き出そうとした時、彼らのもとに、何かが轟く音が近付いている事に気付いた。

「……………ねエ、まだ…なの?」

荒い呼吸を漏らし、汗で全身を滲ませながら、ナミが相手の男に問う。

頬を染め、すぎるような眼差しを向けながら、辛そうな表情で必死にしがみつく。

「ハア……………ハア……………!!! 情けねエ…事……………言ってんじゃねエ…!!! 黙って…しがみつ

て……………やがれ……………」

相手の男、ゾロもまた荒く息を吐き、筋肉を膨張させ必死に堪えている。彼には珍しい、切羽詰まった表情だ。

「早く……しな……さい……よ……!!! 私……もう……限……界……なん……だから……!!!」

「うるせエ……!!? 黙つてろ、てめエ……!!!」

同じ場所で、二人は熱い息を何度も吐き出す。

ナミは腕に力を込め、自慢の肢体をぎゅつと強く押し付けながら、時を待ち耐え忍ぶ。

「ヨホ、ヨホホホホ……わ、私」

ブルツクの声にも余裕がなく、息を荒げて喘ぐ。肺もなく心臓もない体は熱くなくとも、骸骨の顔は汗まみになっている。

かたかたと骨を鳴らして、ブルツクはゾロを見上げる。

……ナミと共に、それぞれでゾロの両足にひしつとしがみついたまま。

「さつきからもうとつくに限界近いんですけど……まだ着きませんかゾロさん……!!!」

「こんな壁くらい……!!! とつとと登っちゃいなさいよだらしないわねエ!!!」

「フザケンな!!! 誰が一番辛エと思つてんだ!!! 文句あんなら自分で登れてめエら!!!」

三人がいるのは、深い深い穴の途中。

上は遙か高く、下は暗闇で見えないほど深い、恐ろしく長い落とし穴の中腹で、ゾロが壁に手を突いて必死に耐えているのだ。

気を抜けば即座に真つ逆さまという極限の状況で、ゾロはぎりりと歯を食い縛る。

「クソ……!!! 人で楽しようとしゃがつて………元はといやアお前らが足引つ張らなきゃこんな事にやならなかつたんだぞ………!!!」

脳裏に浮かぶ、つい数分前の出来事。

罨の猛襲の中、うっかり落とし穴を発動させたナミが咄嗟にブルツクの足を掴み、ブルツクはゾロの足を掴み、団子状態で穴の中に引き摺り込まれたのだ。

底に落ちきる前にゾロがなんとか停止し、三人は落下死を免れていた。

「我慢しなさいよ……!!? 私一人分くらい軽いもんでしょ……!!? ブルツクは軽いんだから実質重りは一人分でしょ……!!?」

「あ、あ、あ、狭エ空間ででつけエ声出すんじゃねエ……!!!」

「ヨホホホ手厳シ……ッ!!!」

悪びれる様子のないナミに殺意が湧く。思えば前にもこうして道連れにされた上、足蹴にされた記憶がある。

一度思い出すとむかむかは止まらず、報復の念が湧いて出てくる

「クソ……このまま振り落としやろうかコイツら……」

本気にしか聞こえない眩きをこぼしつつ、ゾロは遙か頭上を見上げる。底の見えない下に向かうのは危険、ならば穴の入り口を目指して登るしかなさそうだ。

結局言われた通り自分が耐えるしかないのか、と悪態をついた時。

びりびりと、ゾロは自分が手をつく壁が不穏な振動を発し始めた事に気付く。

「ア?」「え?」「ヨホ?」

異変に気付いたのか、ナミもブルックも何事かと顔を上げ目を凝らす。

三人の視線の先から、ごごごと音を立て。

どばつ!と降り注ぐ大量の水が凄まじい勢いで迫ってきた。

「ギャアアアア~~~~!!」

全く同じ瞬間に悲鳴をあげた三人は、逃げる事など当然叶わず、あつという間に激流の中に呑み込まれていった。

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!」

「ああああああ助けてくれエ~~~~!!」

どどどどどど、と足音を置き去りにせんばかりの勢いで、ウソップとチョッパー、フランキーが通路を爆走する。

背後から迫る激流、もはや洪水のような規模のそれから逃れんと、必死に走り続ける。

「アニキ~~~~!!!」

「何とかしてぐでアニギイ~~~~!!!」

「チクシヨウ!!? あのバケモノ共ばかり警戒しすぎてた!!? こんな最悪の罠が張り巡らされてやがるとは!!!」

「いったいどこで間違えたのか。ばらばらに別れて以来、妙な仕掛けなど一切触れていないというのに。」

考察する暇もなく、今はただ追いつかれないようにするだけで手一杯だ。

「あの勢いじゃすぐに追いつかれる!!! 早く高台を探さねエと……………オア——!!!」

どこかに登れる場所さえあれば、と目を凝らしたフランキーは、道の途中が途切れている事に気付き目を剥く。

目の前に待つ断崖絶壁に、ウソツプとチョツパーもぎよつと目を瞠り慄く。

「あ…足場アア~~~~!!!?」

「おれに掴まれエ!!! ストロング右 オ!!!」

危うく落下する寸前で、フランキーが天井に向けて右腕を射出する。

大きく開いた手が天井に食い込み、固定されると、弟分達をしがみつかせ、空中へと躍り出る。

間一髪激流を逃れる三人。

だが、フランキーが掴む天井にびしりと亀裂が広がる。

「ぐお……!!? やべエ、落ちる!!!」

「ならばア!!! 必殺!!? ヽソツプア……ア……」

今度はウソツプが真横に腹を向け、自前の兵器を起動する。

腹から射出された鉤縄が壁へ、壁に張り付く太い根に引っかかり、三人はそのまま振り子のように壁へ急接近する。

「壁……!!!」

「チョツパ……!!! ガードだガード!!?」

「あ、そつか。 ヽランブル!!!」 ガードポイント「毛皮強化!!!」

劇薬をがりつと噛み砕き、形態を変化させたチョツパーがぼつと毛玉へと変じる。

凄まじい速さで壁に迫った三人は、チョツパーの防御のおかげで衝撃が緩和され、無傷で壁にぶら下がる事に成功した。

「……………へへ……」

「へへへ……!!!」

じやらじやらとフランキーの右腕が戻され、三人の口から笑みがこぼれる。

滝のように流れ落ちる激流の轟音を背景に、男達は安堵の息を交えながら盛大に笑い始めた。

「だ——っはっはっはっは見たかおれ達3人の超コンピネーションは!!! ス  
ゲーだろ!!!」

「人間様をナメるからだコンニャローめ!!!」

「そっだコンニャロ〜!!?」

蓑虫のようにぶら下がったまま、げらげらと豪快に笑う。誰に対してか、馬鹿にするように派手に声を上げ、拳を掲げて勝利を宣言する。

「迷宮だろがメダルのバケモノだろがどっからでもかかってきやがれイ!!! 今週もおれ様は……んんん!!! スーパ………」

いつもの構えは流石に取れず、せめて決め台詞だけでもとフランキーが一際大きな声を発し。

次の瞬間、三人のぶら下がる壁の蔓の根がべきべきと剥がれ。

三人は滝の流れ落ちる方へとすすべなく落下していった。

「「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!」

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!」

まるで遠くにいる仲間達に合わせるように、ルフィが悲鳴を迸らせながら走る。

エールと並び、一心不乱に背後から迫る激流から逃げ続ける。



狭つ苦しい道を全力疾走し、まともな思考もできないほどに追い詰められていた。

「ヤベーヤベーヤベ〜〜〜!!! 流石にこれはムリだ死ぬウ〜〜〜!!! ウソツプゾロサンジナミフランキー助けてくれエエ〜〜〜!!!」

「ねエ、スリルを味わいたいんじゃないやなかつたの？ お望み通り死がすぐ後ろにまで迫ってるのに、今度は笑わないの？」

「このワナは面白くねエ〜〜〜!!! 本気で殺す気満々の罠は楽しくねエエ!!!」  
隣を走るエールに問われ、律儀に答えるルフイ。

目を吊り上げ、なぜか息一つ乱さず隣にぴつたりと張り付く少女の問いに怒鳴り返す。

「……………大口叩いて、結局はそれか。どうせそうだと思ったよ」

どどどど、と地響きのような足音を響かせながら、エールはぼそりと呟き目を逸らし、落胆の表情を僅かに浮かべる

しかしやがて、あまりにも必死な顔のルフイに呆れた目を向け、溜息混じりに語りかける。

「何もそんな慌てんでも……………どうせどつかに流れ出るんだから流れに身を任せてりやいいんだよ……………」

「おめエ知らねエのか!!? 能力者は海に嫌われてて一生カナツチなんだぞ!!?」

「えエ~~~~ツツ?!」

くわつ、と鬼の形相で告げられ、今度はエールの方が顔色を変え、目を見開く。

先程とは打って変わって余裕が消え去り、必死の形相でルフィと共に狭い通路を駆け抜けようとする。

「何でそんな大事な事言わないんだよオ!!」

「いいから急いで逃げろオ~~~~!! 死ぬぞオ~~~~!!」

わーぎゃーとやかましく騒ぎ合いながら、通路を走る、疾る。

なぜだか今の所分かれ道もなく、心なしか通路も広くなり始め、僅かにだが逃げやすくなってきた。

だが、ルフィがそれに気付くよりも前に、エールの足が突如もつれる。

「あつ……」

少女が漏らした微かな声で、ルフィははつと気付いて振り向き、ぎぎぎと地面を削りながら停止して引き返す。

自身を抱え上げようとする青年に、エールはぎよつと息を呑み言葉を失くす。

「エール!!! 大丈夫か、オイ!!!」

「バ……!!! バカツ!!? 私の事なんか放つときなよ!!! さつさと逃げ……………!!!」

「誰がそんな事するか!!! 二度と言うな!!!」

エールの抗議の声も押しのけ、ルフィはエールを背中に背負う。

ずしつ、と凄まじい重量が肩にかかり、歯を食いしばり目を血走らせるも、なんとか根性でその場で立ち上がる。

「んぎぎぎぎ……しつかりつかまつてろオ……!!! ゴムゴムの”オ……”ロケツ”……!!!」

エールの腕を自分の体の前に回させ、固定させてから、ルフィは両腕を伸ばし、通路の天井の凹凸を掴む。

激流の届かない高所に向けて、いざ発射。

そう考えたルフィだったが……エールの想像以上の重さのせいで、ゴムの力を以ってしても全く動けなかった。

「……エールお前………重過ぎ………ギヤアアアアア……!!!」

ぎちぎちと伸びた体が軋むだけで、全く飛び立てないまま。

ルフィとエールは、瞬間間に激流の中に飲み込まれ、流されていつてしまった。

水流の中、白目を剥いたルフィが縦横無尽に翻弄される。

意識はもうほとんどなく、ごぼごぼと肺から息がどんどん漏れ出していく。

そのままこつぱのように流されていくと思われたが、力なく漂う彼の手が、不意に掴まれ引き寄せられる。

(……………)

ルフィの手を掴んだその人物は、凄まじい流れの中を平然と歩き、ルフィをどこかへ引つ張っていく。

ずんずんと流れに逆らいながら、しばらく通路を進み続け。

やがて彼女は、目の前に開かれた横穴の中へ、躊躇いなくルフィを連れて入り込んでいく。

ざぼつ、と飛沫を立て、とある空間に二つの人影が顔を出す。

引きずられる麦わら帽子の青年は、もう片方が地面に上がるとひょいっと放り捨てられ、べちゃつと力なく横たわった。

「……バカな男。他人を助けようとして自分が死にそうになるなんて……………どうかしてよ」

白目を剥いたまま、気を失っているルフィを見下ろし、エールが濡れた髪をかきあげて呟く。

心底呆れた表情で彼を見下ろし、目を細める。

「……………助けなくて良かったんだよ…私…なんて……………」

しんと静かな空間で、たった二人。

沈黙する青年の傍に腰を下ろし、膝を抱えながら、少女は吐き捨てるように呟くの  
だった。

## 第279話 “一稼ぎ”

「おーい……おーい、いい加減起きなよオ。いつまで氣イ失ってるんだイ……？」

ぺちぺちと頬を叩き、仰向けで倒れる男の顔を覗き込む少女。

白目を剥き、呼吸も止まったままと静まり返っているルフィをじっと見下ろしていたエールは、やがて深い溜息を零す。

「世話の焼ける男だねエ………!!! ふんっ!!!」

「ブウウウ……ッ?!」

唐突に、エールはその場で跳躍し、膝を抱えるとルフィの腹に自身の尻を叩きつける。強烈な衝撃で、飲み込んでいた大量の水が噴水のように吐き出された。

「ゲツホ……ウエツホ………あれ☒ 生きてる?!?」

「気分はどうだい………?」

「ん? エール? もしかしてお前が助けてくれたのか!!!」

意識を取り戻したルフィはあたりをきよろきよろと見渡し、自分の上から降りて立ち上がるエールに気付く。

返事はなかったが、すぐに察したルフィは満面の笑みを浮かべた。

「はー！ 助かった〜……ありがとなくエール!!? いや〜死ぬかと思った!!! いや、一回死んでたな!!? なははは」

外れていた麦わらを被り直し、ぶるぶると濡れた体を震わせる。

濡れた上着も脱いで絞っていると、エールも自分の纏う服の裾を握って絞り始めた。「助けるつもりだったのに逆に助けられちゃったな！ 情けねエって後でエレノアにどやされそうだ」

「……………カナツチなら最初から言いなよ、ビビった…」

「ん？ なんか言ったか？」

「……………何でもない」

苦笑するルフィは訝しげにエールを見やるが、エールは顔を背けたまま何も答ええない。

それ以上気にする事なく、ルフィは上着を着直し、いつの間にか来ていた奇妙な空間を見渡す。

半球状の広大な空間で、天井から何かぶら下がっているのが見える。袋のような、膨らんだ何かがいくつも生えた謎の部屋だ。

「流されてるうちに変なトコに来ちゃった。広つろい部屋だなア……………なんかいつぱい風船みたいなのが生えてんぞ？ 何だアレ？」

「……さア、何だろね」

天井を見渡し、不思議そうに目を丸くするルフィ。

すると彼は不意に、微かに風が吹き抜けてくるのを感じた。

「おー……？ 部屋ん中なのに風が出てんぞ………？ 変な所だな」

「……変で済ませる君も充分変だよ」

「変だけどなんか気持ちのいゝ風だ!!？ ちょうど腹減ってきたし、サンジの作ってくれた弁当……で食おうぜ」

「……本当にどういう神経してんだイ」

ひゅーひゅーと室内に流れる風が気に入ったらしく、持ってきた料理を取り出そうとするルフィ。遠足でもしている気分なのだろうか。

そんな彼に向けて、吹き抜ける風が徐々に強まり始める。

「お……お……お……？ なんか……風が強くなっ……!!!」

弁当箱を取り出しながら、ルフィは咄嗟に帽子を押さえる。

ばたばたと髪や服の裾が暴れ出し、立つのも困難になり出したと思つた直後。

「ごうっ!と。」

凄まじい暴風が襲いかかり、あつという間にルフィは宙へ巻き上げられた。

「あぎや~~~~~っ!!? な……何だこりや~~~~~っ!!?」





風に流されるだけだったのが、その影響で少しずつ安定し始めた。

「スツゲエ〜〜!!! おれ今空飛んでんぞ〜〜!!! エレノアの気持ちってこんななのかいいなア〜〜〜!!!」

「……………ふ…吹っ飛ばされてるだけじゃないかい!!! 危ないからもう諦めて外に……………」

「お!!? なんか風の乗り方がわかってきた気がする!!! 空飛ぶの面白エ〜〜〜!!!」

本人は実を楽しそうに笑っているが、依然飛ばされているだけの彼の身を案じたエールが焦りを滲ませ叫ぶ。

だがそんな彼女の気も知らず、ルフィは暴風遊びを全力で堪能し続けていた。

「あつひやつひやつひや……………あれ? 風弱くなってきた?」

やがて、ルフィを宙へと巻き上げていた風の流れが弱まり出し、それに応じてルフィの体も降下を始める。

体勢を調整して地面に降り立つと、ルフィはやや不満げに天井を見上げた。

「何だよ〜もう終わりか〜、もうちよつと空飛んでたかったのになア〜〜」

唇を尖らせ、不満をこぼすルフィ。楽しくなってきた矢先に強制的にやめさせられたのが相当気に入らなかつたようだ。

思わず、エールが険しい視線を向ける。

それに気付いたルフィが、ふとした疑問を口にした。

「ん？ エール、おめエは空飛ばなかつたんだな」

「……………え？ あ、いや……………」

何やらぎよつとした様子を見せるエールをじつと見つめ、ルフィはしばらくの間考え込むと、やがてぽんと掌に拳を当てて鳴らす。

「あ、そつか!!？ お前重いから飛ばなかつたんだな!!？ 悪イ事聞いた!!？ ゴメン」  
そのちよくご、どごつ！と。

エールが無言で繰り出した拳がルフィの顔面に炸裂し、血反吐と共に吹き飛んだ。

「……………!!! おおおオ……………オ……………!!!」

「……………口が過ぎたねエ……………流石に今のは私だつて怒るよオ……………?」

「ゴ……………ゴムなのに……………!!! ゴムなのにムチャクチャいてエ……………!!! エレノアの覇気より痛エ」

びくびくと震え、横たわるルフィを見下ろし、明確な感情を込めた声で静かに告げる。  
表情こそいつも通り乏しいが、代わりに怒りが幻影の炎なつて燃え盛っていた。

「……………乙女つて歳でもないけどね……………女はいくつになつても、そういうの気にはするんだよ。覚えておきな」

「すびばしえん……………!!!」

半泣きになったルフイは起き上がり、がっくりと肩を落としエールに頭を下げる。相当効いたようで、先程のはしやぎぶりが嘘のようだ。

それを見て溜飲が下がったのか、エールは少し躊躇ってから、徐に歩き出す。

「…ホラ、行くよ」

「…おー！ ……ん？ 今度はそっちが危なくない方か？」

気を持ち直したルフイが、エールの向かおうとしている通路を見やって尋ねる。

その問いを予想していたのか、エールは呆れた表情で首を横に振り、ふんつと鼻を鳴らしてみせる。

「…どうせ行こうとしないだろうから、今度は超危ない方向。…行くんだらう？」

「…!!？ はは!! お前も冒険がわかってきたなア!!」

さっさと通路の向こうへと向かっていくエールを、笑みを戻したルフイがすぐさま追いかけていく。

隣に並び、大股で歩きながらまだまだ続く長い道を進んでいく。

「なアエール…おめエも覇気使えんのか？ 誰に習ったんだ？」

「……さアね、気付いたら使えるようになってただけさア。あんたも……その……な  
んで『ゴム人間』なんてものになったんだイ……?」

「あ…コレは昔なア……」

ほんの少し、少女が作っていた距離が近付いたように感じながら。

二人の冒険者達は、暗闇の中へと消えていくのだった。

??

遺跡南東部。

豪雨時の川のように勢いよく流れる水路。

激しい水飛沫が上がるその中から、突如銀色に輝く何か飛び出して来る。

「クレーンアームー！」

がきんつ、と轟音を立てて壁に食らいついたそれから、剛金の綱が伸びてびんつと張る。

そしてぎばばつと水をかき分ける音の後、四つの人の顔が次々に覗く。

「ぶっは!!!」

「ぶはア!!!」

「——っはアツ!!!」

「げっほオオアア!!!」

剛金の綱を頼りに、激流の中から新鮮な空気を求めて這い上がるサンジ、ゴトー、サトナカ、そして伊達マル。

いち早く陸に上がったサンジは、他の男達を無視してサトナカに手を差し伸べる。

「お手をどうぞ、サトナカさん」

「どうも」

「オイ」

「あ、ちよ、色男クン、おれらも助けて」

「うるせエ!!? 野郎が頼るな!!!」

ゴトーの抗議と伊達マルの懇願を拒絶し、サトナカを引き上げる。

命拾いしたのは伊達マルの鎧のおかげなのだが、女性への愛を優先させるサンジには関係がない。仕方なく、二人は自力で這い上がった。

「げっほ……………あゝ……………ひでエ目に遭った」

「遺跡の中にこんなにも大規模の水路があるとは……………本当にどういいう意図で作られたんだ、この場所は……………」

畏にはまり、落とし穴に落ちた末に激流の中に放り込まれ。

なんとか息継ぎをこなしつつ、上がれる足場をようやく見つけ、伊達マルの鎧の機能で脱出に成功。

泳ぎ続けて疲弊した四人は、やれやれとその場に腰を下ろす。

「…便利な鎧だな。それもあのコウガミって野郎の会社の商品か?」

「おう。バース……………とかなんとかいう、着たヤツをなんやかんや強くしてくれるなん

かすげエ鎧だな」

「うろ覚えすぎんだろ!!! 何一つ概要がわかんねエぞ!!!」

一応は助かった事への感謝の念はあるらしく、サンジが伊達マルと鎧を見やって呟く。

が、本人はいまいちその凄さを理解し切れていない様子で、曖昧な感想に咄嗟に怒鳴ってしまふ。

「伊達マルさん…自分の持つてる道具なんだからいい加減覚えてくださいよ」

「マニュアルはどうも苦手なア…」

「……………バースシステムはコウガミファウンデーション技術研究所で開発された戦闘用生体強化スーツだ。装着者の全身をカーボンナノチューブ製の人工筋肉をアラミド繊維でコーティングし筋力を総合的に数倍に強化し、バースドライブにセルメダルを一枚投入することでボディ各部の計10か所に備わった武装拡張用ハードポイントリセプタクルオーブからバース・CクLロAウWズsと呼ばれる戦闘支援型ユニット群の中から選択したユニットを対応する箇所のリセプタクルオーブに実体化し」

「専門用語すぎてわかんねエよ!!! マニュアル大好き人間かてめエは!!!」

見かねたゴトーが説明を代わるが、今度は理解が深すぎて話の半分も聞き取れない。極端な二人に再びサンジが吠えた。

「何だお前エ!!! 人がせつかく親切に教えてやろうとしたのにその厚意を踏みじるとは何様だ!!?」

「長つたらしい無駄ばつかの説明のどこに感謝しろつてんだよ!!? つーかおめエの話そのものが邪魔臭エつつかうんだ!!!」

「邪魔臭いだと!!! 人にそういう前にまず自分のそのうつとうしい眉毛からどうにかしたらどうだ!!?」

「言いやがったなもじゃもじゃワカメ野郎てめエ塩茹でして味噌汁の具にしてやろうかアア!!!」

「あーあーお前らやめろつて!!? どんだけ仲悪いんだ!!?」

お互いにお互いのあり方が気に入らないのか、睨み合うサンジとゴトーで喧々囂々と罵り合いが始まってしまふ。

犬猿の仲となった二人に、伊達マルが割り込もうとする。

こんな調子でこの先大丈夫なのか、と内心で頭を抱えていると。

「通路の出口も入り口もわからなくなりましたが、どうされますか?」

そこへ、濡れた髪を解いて水気を切っていたサトナカが、冷静に口を挟む。

険悪な空気をものともせず、ずばつと純粹な質問をぶつけてきた彼女に、男達は思わず圧倒され黙り込んでしまった。



「……………オウ」

「サトナカちゃん……………クールだね、君」

「ここへはビジネスで来ていますので。…それで、いかがされますか？」

凶太いというか無関心というか。

要点だけを求める冷めた女性に、男達も冷静に考えざるを得なくなる。

「ドーするつたつて……………ドーしたもんかねコリヤア……………ナミさん達とはぐれちまつたし、迷路のどこに流されたのかもわかんねエしよオ…」

「ゴトーちゃん、通信はどうよ？」

「……………ダメですね。全く声が届きません」

「アチャー……………まア水没しちゃったしなア……………」

鎧を着たまま腕を組んで考え込みつつ、伊達マルがゴトーに尋ねると、荷物を確認したゴトーが首を横に振る。

案らしい案も出ないまま、沈黙する彼らに再度サトナカが問うた。

「では、どうします？ 何も手掛かりがありませんが」

「とにかく進もう。部下達が心配だ……………それに麦わらの一味の戦力もそれぞれ偏りがある。バラバラのままだと危険だ、なんとか合流しなければ……………」

「こりやもう勘の赴くままに進むしかないのかねエ…」

凶悪な罠の連続で、分断されたままではまずいという事がわかり、合流する方針は決定する。だが、集まる方法がないという問題にぶつかる。

ならばそれをどうするか、と再び黙り込むと。

それまで目を閉じ、無言で佇んでいたサンジが瞼を開き、歩き出した。

「よし、こつちだ」

「は??」

「な……い、いや……待てお前!!? 勝手な行動をするな!!! この状況で独断専行など、もしまた罠が起こったりしたら……!!!」

勘としか思えないサンジの宣言と行動に、一瞬呆けた伊達マルとゴトーが慌てて彼を制止する。

サンジは立ち止まると、深い溜息をこぼしてから彼らに不敵な笑みを浮かべる。

「ナメんじゃねエよ、おれを誰だと思つてんだ? ——麗しの美女を守る騎士<sup>ナイト</sup>だぞ。

罠は知らねエが、女性陣の居場所はとっくに見つけてんだよ」

ぎらり、と赤く輝いて見えるサンジの瞳。

鍛錬の最中にある彼の「見聞色の覇氣」が、彼に進むべき道を——他の女性陣の居場所を示す。

自信満々の彼の姿に、自然と疑いを持つ者は誰も現れなかった。

「お……おおオ!!? 頼もしいな……………」

「なるほど…流石です」

「…………ふん、役立たずではないようだな」

素直に賞賛する伊達マルとサトナカとは別に、ゴトーは認めるのが癪に触るのか憎まれ口をこぼす。

とはいえせつかくの手掛かりだと、彼の言う通り歩き出そうとした寸前で、ある違和感に気付きはたと足を止める。

「……………ん? オイちよつと待て。女性陣はつて事は……………会長やおれの部下はどうなんだ?」

「いくぞ」

「ちよつと待て貴様ア!!!」

背を向けたままさっさと歩き出すサンジ。

ゴトーが怒鳴るが立ち止まる事なく、言葉を使わずに答えを明確に示す。

心底呆れながら、そして文句と悪態をつきながら、三人がサンジの後に続こうとした時だった。

「……………生まれ、てめエら」

ぴたつとサンジが足を止め、短く低い声で告げる。

何事か、と停止したゴトー達は、サンジの睨む先、水路の暗闇の向こう側に見える歪な人影に気付く。

ぎこちなく進んでくる、包帯まみれの異形達を前に、即座に各々の得物を構えた。

「ウウウ……アアア……!!?」

「アアアアア……ア」

「ああ……忘れてたぜ。この遺跡、てめえらの巣穴になつてんだっけか……サトナカちゃん、下がってて。コイツらはおれが……」

確かな敵意を持って近付いてくる異形達を睨んだまま、サンジはか弱い女性を守るために前へと出る。

だが、彼が先制攻撃を加えようと身をかがめた瞬間。

どんっ!と、突如背後から爆音が響いた。

「うガアツ——」

目の前の闇の中で火花が散り、異形の体が吹き飛ぶ。

異形の放つ悶絶の声に瞠目しながら、サンジは後ろを振り向き、白煙の立ち上る一丁の機械的な銃を構えるサトナカを凝視した。

「…ヒュ、お見事」

「お気遣いなく。最大限の準備を整えてここに来ていますから」

「そういう事だ……おれ達をあまりナメるなよ、自称騎士」

伊達マルの賞賛を受けながら、じゃきん、と次弾を装填し構えるサトナカ。そ隣に、同じ銃を構えたゴトーがずいっと進み出る。

男の目を睨み返し、サンジはちっ、と舌打ち混じりに吐き捨てる。

「そーかよ……そんじゃ、あんま足引つ張ってくれんなよ」

「どつちが……!!!」

「「ウアアアアアアアア……!!!」」

並び立ったままばちばちと火花を散らし、それぞれがしやしやり出ようとするのを阻止しながら異形に向かう。

それを見送りながら、伊達マルは一枚の硬貨を装置に挿入し、新たな武器を呼び出す。

「さアくて、一稼ぎしますか……!!!」

【シヨベルアームー】

迫り来る無気味な怪物に向けて、鎧の戦士は左腕に備えた鋼の籠手を振り下ろした。



明が築かれていたという!!! オーマダル然り!!! 古の「王」が有していた技術は実に凄まじい!!!」

「そのトンデモ技術のおかげで全員バラバラだよこんちくしょうめ……………あいつら大丈夫かな? 特にバカ船長と最強迷子」

「さア……………何とかやるんじゃない?」

後ろに続く暑苦しい男に悪態を返しつつ、二人で逸れた仲間を案じる。

確実に迷っている、騒動を引き起こす。そう確信し、しかし身の危険に関しては全く不安がっていないかった。

「この状況下において微塵も焦らないとは!!! 流石の信頼関係だね!!!」 悪魔の子”に”妖術師”!!!」

「悩んでも仕方ないってだけだよ……………無事を祈るだけさ。心配なのはむしろ……………私達の方だよ」

コウガミに称賛されても、全く誇らしさが湧いてこない。むしろ身内のどうしようもない駄目な部分を恥じ入るばかりだ。

そして何より、後ろにいるこの男に何を言われても、心に響かなかった。

「まさかこの面子で分断されるとはねエ……………誰かしらの悪意でも混ざってんじゃない?」

「そうね」

「辛辣だねエ!!! 誰も企んでなどいないよ!!!」

「どうだか……………」

出会った当初からやたらと親し気で、協力を惜しまない姿勢。

何かを目論んでいるのは間違いないのだが、この態度が全てを隠していて、内心を悟れない。警戒しない方が無理な話だ。

「そもそもあんた……………遺跡の中が罠だらけって知ってて頼んできたんでしょように。どうせ何回か自分で調査ぐらいしてただろうし、罠の場所くらい把握しといて貰いたかったものだね」

「その通りだ!!! ……だが、そう上手くいかないのがこの遺跡なのさ!!! 君の言う通り私は何度もこの遺跡に調査隊を派遣し奥を目指そうとした!!! だがしかし!!! 何度挑んでも遺跡に拒まれ!!! 最奥に辿り着く事は叶わなかったのだよ!!!」

「……………拒まれた?」

びたり、とエレノアは足を止め、コウガミに振り向く。

彼の物言いにどこか違和感を抱き、笑みの絶えない彼の顔を睨むと、男は待っていたとばかりに語り出す。

「不思議な事に!!! 罠の位置は毎回異なっている!!! 前回調査した時には無かったス



イッチに嵌ったり!!! 以前とは異なる罠が待っていたり!!! トライ&エラーがまるで効かない恐るべし迷宮なのだよここはア!!!」

思わず、エレノアは男から数歩後退る。何か、平然と恐ろしい発言を聞いた気がする。危うく死にかけるような罠が、毎回違う場所と内容で起こるといえるのか。

「……なんつー所に連れて来てくれてんだコイツ」

「それで諦めないのが大した根性ね………さぞ無惨な死人が山のように出たでしょうに」

「怖い怖い怖いから」

平常運転なロビンの呟きで逆に安心しながら、遺跡に横目を向けて考え込む。

そうなると、自分やルフイ達はともかく、ナミ達弱小組や実力の不明なコウガミの部下達が不安だ。

一刻も早く合流しなければ、と黙り込んだ時だった。

「そちらも実に不思議な事なのだがね!!! 今の所!!! 調査中に出た死者はゼロだ!!!」

思考する二人に向けて、コウガミは驚きの一言を発する。

一瞬、何を言っているのかと呆けた二人は、眼を見開き、男の信じられないといった表情を向ける。

「……………は? ゼロ!?? そんな馬鹿な…」

「多少の怪我人こそいるけどね!!! そのほとんどは調査中に遭遇したセルメダルの怪物達との戦闘により受けたものばかり!!! 遺跡自体に傷付けられた者は一人もいないのだよ!!!」

困惑の表情で立ち止まるエレノアとロビンの間を通り抜け、コウガミは講義でもするように手振りを添えて話す。

指を折り、例を挙げながら、自身の集めた情報を二人に伝える。

「例えば激流に押し流されたり!!! 暴風に吹き上げられたり!!! 動く足場や壁に叩き出され!!! 突如開いた落とし穴によってそのまま外へ放り出され!!! どこをどう通ろうとも外に弾き出されてしまうのだよ!!!」

「ごつごつと硬く靴音を響かせ、前へ歩き、やがてコウガミは振り向く。

ぎらぎららぎとぎとと暑苦しく輝く目を優れた頭脳を持ち主達に向け、謎多き男は満面の笑みを携えて問いかけた。

「実に不思議だとは思わないかね!!! まるで遺跡そのものが意思を持ち!!! 己の中に侵入した我々を排出しようとしているかのようだ!!!」

「…なんかそのイヤな言い方やめてくれない?」

「イヤだわ、バイ菌みたい」

排出という言葉の響きが気に入らず、エレノアとロビンは全く同じ顔で抗議の声を漏

らす。下の話に繋がりそうで実に不快であった。

「……………遺跡の意思、ねエ」

その一方で、エレノアはちらりと遺跡に視線をよこし、小さく呟くのだった。

「『三刀流』……『牛鬼勇爪』!!!」

「『夜明歌・クー・ドロア』!!!」

二人の剣士による強烈な一撃が、目の前に蔓延る異形達に炸裂する。

不気味に呻く、包帯にまみれた人型の怪物達は、微かな苦悶の声を漏らし、ばらばらの硬貨に変じて倒れる。

荒く息を吐く二人に向け、後ろの物陰に隠れたナミが拳を突き上げる。

「いけーゾローブルツクー頑張れ〜!!? もう少しよ〜!!?」

「戦えてめエ!!!」

「しょうがないじゃないの!!! 狭く苦しくて『天候棒』をフルに使えないんだもの!!?

何よりか弱くて可愛い私が前に出たら一味の損失よ!!!」

意味の分からない持論で丸め込み、ナミは頑なに出ようとしなない。

事実、彼女の力の本質は周囲の環境を利用しての広範囲の攻撃。こうも狭い空間ではできる事は限られる。

だが、納得と理解はまた別の感情によるものであった。

「ヨホホホ!!! まーまーゾロさん、今はとにかくこの窮地を脱するのが先決です」

「ああクソ!!! あいつ後で泣かしてや——」

端から女性に戦いを強要するする気のないブルックは、文句ひとつ言わず次なる敵を見据えている。

もやもやした気持ちを抱えたまま、ゾロが八つ当たり気味に異形を斬り伏せようとした時。

突如、彼らのいる通路の壁が迫り出し、目の前の異形達を纏めて左右から叩き潰してしまった。

「おわ——っ!!!」

「ギヤアアアアア!!!」

凄まじい轟音の直後、巨岩の中に消える異形達に思わず叫ぶ三人。

僅かに覗く異形達の手足はばたばたと暴れ、やがてくたりと垂れた後、硬貨の欠片となつて崩れ落ちる。

「ゴゴゴ、と罌が元に戻る様を見ながら、ゾロ達は思わずぐくりと息を呑んだ。

「…ビツクリした、こんなトコにもワナなんてあつたんだ……」

「ああ……巻き込まれなくてよかった………しっかし何だコイツら、てめえらの住処の

罨に引つかかって勝手に自滅しやがった」

「場所とか把握してないんですかねエ……」

棲み処にしているくせに、危険な場所をわかっていないのなら、相当知能の方は乏しいのだろう。数と頑丈さ以外は大した脅威でもなさそうだ。

一先ず危機は去った事で、ゾロは刀を鞘に収め、行くべき道を睨む。

「まあいい……とりあえずさっさとこの場を離れるぞ。巻き込まれるようなマヌケは御免だ」

「そうね……つてエ!!!」

「そっちはさっきのコワイ罨の道なんですけどオ!!!」

先程異形達が潰された方向へ迷いなく走り出す男に、ナミとブルツクはぎよつと目を剥いて叫ぶ。

一体、この男の感覚はどうなっているのか、そう思わざるを得ない。

「あんたほんつといい加減にしなさいよ!!! なんてわざわざヤバい道選んで行くのよ!!!  
そして何より私達を巻き込むなア!!!」

「ゾロさん、本気で治療を考えましょう。頭の病気はチョツパーさんも伊達マルさんもデリケートだっておっしゃってますし、ルフィさんには悪いですが長期の治療も考えておいた方がいいかと……」

「てめエらおれを何だと思ってるんだ!!?」

立ち止まる事のない剣士を罵倒しながら、罨を案じつつ走るナミとブルック。

だが、彼らの不安とは真逆に、それ以降壁が動く事はなく。

二人は迷子の常連の後を大慌てで追い、危険地帯からの離脱に成功した。

——彼らの去った後でひとりでに蠢く無数の硬貨に、誰も気付かぬまま。

遺跡北部、下層。

ぼこぼこと泡立つ、真つ赤な沼。

溶けた鉄か岩か、とにかく凄まじい高温によって巨大な沼が真下に広がる、円形の空間。

その壁に、三人の男達が張り付き、ゆっくりと移動していた。

「オイ……!!? 大丈夫なんだろうなコレ……!!?」

「大丈夫だ………信じる………あの空島の大冒険……!! あの場で活躍したおれの発明

『オクトパクツ』!!! その吸引力を3倍にまで高めた強化版『オクトパクツ<sup>1</sup>』は完璧だ!!!」

手足に蛸足の能力を備えた靴を装着し、ウソップ達は横一列になって脱出を図る。本来手袋ではないのだが、背に腹は変えられない。

「吸盤の吸引力に、“風貝”を改造して発生させた『吸引力』をプラスし!! どんなにツ

ルツル滑らかな場所でも吸い付き、なんなら壁ごと剥がせちまう究極の兵器!!! 窮地でも落ちやしない!!! .....多分

「オイ!!!? 多分って言ったか?!? 多分って言わなかったか!!!」

作った本人がぼそりとこぼした不穏な一言に、チョツパーが目を剥き叫ぶ。

彼も自身の変形の中で最も軽い人獣型に変化しているが、下から湧く熱気ですでに疲弊している。

三人の中で最も思いフランキーは一際慎重に壁を伝い、ちらりと真下の溶岩を見下ろす。

「見ろ……下は溶岩……!!! 落ちたら間違いなく一巻の終わりだ………鉄のおれは時間がかかるだろうが、おめエらは案外早く楽になるかも……溶けて無くなるまでほんの一瞬の我慢だ……!!!」

「ロビンみてエな事言うなよフランキー……」

「やめろよ……!!! おれ、うっかり想像しちゃねエかよ……!!!?」

この状況に、流石の兄貴も堪えているのだろう。いつにない不安げな言葉で弟分達を恐れさせる。

とにかく、壁から離れてはいけぬ。それだけを考え、じつと耐え続ける。

その時ふと、ウソツプはどこからか、何かの音を捉えた気がした。

「ん？　なんか……下から聞こえて……」

壁に意識を割きながら、きよろきよろと辺りを見渡す。

やがてそれが溶岩の方から聞こえている事に気付く、恐る恐る視線を下にやってみると。

「アアアアアアア……!!!」

煮えたつ溶岩の中を、件の硬貨の異形達が漂っていた。

赤く光るどろどろの中を、溶けた腕を天に伸ばし、誰かに懇願するように呻き声を上げ続けている。

一体はやがて溶岩の中に消え、また別の一体が流れてくる。

真下で延々に続けられる地獄に、三人の男達はしばらく黙り、同時に視線を真横へ逸らした。

「よし!!! さつさとこのヤベエ場所から移動するぞ!!!　慎重くくくく!!!　かつ!!?」

迅速に!!!」

「あれがおれ達を待つ最悪の未来だ……ああなりたくなかつたら絶対に手を離すな。いいか？　下を見るな。見たら恐怖で心も体も縛られる、見るなよ？　絶対にだぞ

……!!!」

「おれ達……絶対通る道間違ってるぞ……!!!?」



見てはならない、見るべきではないものを見てしまったと、誰一人もう下に目を向けない。

気にしたら手が緩む、そして下の連中の仲間入りをする。それを防ぐために、ただだこの場を離れる事だけを考えてた。

だがその時、チョッパーがなにやら訝しげに首を傾げ出した。

「……けどなんか……なんかここ……知ってる感じがすんだよな」

「何だチョッパー、おめエモか？ おれもなんか懐かしい感覚がすんだよな……」

「オイ何だお前ら、こんなデンジャラス迷路で遊んでた事でもあんのか？」

「いやアー……そういうんじゃなくてよ……何だつたつけなく〜」

窮地にありながら、一緒になって考え込むウソツプとチョッパー。

意外と余裕があるな、と呆れるフランキーもまた、暑苦しい空間を見やりふと浮かんだ考えを口にした。

「こうしてつとなんか……胃袋ん中にへばりついた寄生虫かなんかになった気がするぜ」

「それだー!!!」

「うおっ!!?」

兄貴の呟きに、二人がくわつと目を見開いて叫ぶ。

びくつと肩を震わせたフランキーは、振り向きながらウソツプ達に咎めるような目を向け怒鳴りつける。

「いきなりどうしたためエら?!」

「なんか覚えあんなーって思ったらマジでそれだ!!!」リトルガーデン”で似た様な目に遭った時とおんなじ感覚なんだ!!! バカデケエ怪物金魚に船ごと飲み込まれた時!!!」

「おれは!!! おれはな?!? 空島でウワバミの腹ん中に入った時!!!」

——うわあ!!!

——なんか出た~~~~~っ!!!

——海王類かア!!!?

——し::”島食い”!!!?

——逃げろ~~~~~!!!

——大蛇だ~~~~~!!!

——ギャ~~~~~!!!

脳裏に浮かぶ、過去の経験。

太古の島で、出会った巨人達との別れの際、最後に立ち塞がってきた超巨大金魚。島すら食べる化け物の金魚の腹の中。

空の島で、黄金探しの冒険中に遭遇したあまりにも巨大すぎる大蛇。遺跡の一部すら

飲み込む長い洞窟のような胃袋の中。

かつて味わってきた感覚が、ウソップとチョッパーの中に蘇っていた。

「だけエ生き物の中に入ってる感覚なんだ!!! この遺跡は!!!」

ルフィ達が挑む、巨大で難解な迷宮遺跡。

それが存在する陽炎島の西側、海と珊瑚礁が広がる円形の地。

陸地からはただの景色にしか見えないそこは——真上から見ると様相をがらりと変える。

碧の海に浮かぶ珊瑚礁。

真上から見たそれは……母の胎はらの中で身を丸める人の形をしていたのだった。

??

絶え間無く押し寄せる波、雪がれる砂浜。

白く眩く、陽光に照らされ光る砂浜に、一人の男が……かつて一海賊団の船長だった男が打ち上げられていた。

「……………ア……………ア……………」

何の意味もなさない呻き声を漏らし、横たわる彼。

クロック海賊団船長チックルタクは、虚ろな目で虚空を見つめ、へらりと笑う。

「な……何も……なくなつ……ちまつ……た……へ、へへ……へへ、へへ……へへ……こ、子分共も……船も……な、何もかも……呑まれつちまつた……へへへへへへ」

たつた一度の失敗で、全てを失つた男は壊れ、笑うしかない。

仲間も船も、野望も、何もかもが大自然の驚異に叩き潰され、手元には何一つ残っていない。

笑う以外、彼にできる事は何もなかった。

「……このまま……おれア野垂れ死にか……？　へ……へへへ……へへへへ……!!!　そ……そりやちと……もつたいねエ……お……おれだけ……こんな目に……遭つて……そりや……理不尽……だぜ……」

意味のない眩きをぶつぶつとこぼし、涙ばかりが流れる。

残っているのは動かない体と残り少ない命、こんな時に限って途切れてくれない意識。ただただ、恨む事しか彼にはできなかった。

「誰でも……いい……から……道連れに……してエ……なア……」

男がそう、叶わないとわかっていながらも口にした時だった。

「そんなあなたに!!!　チャンスタイムで……すすすす」

一人の道化の姿をした女が突如姿を現し。  
瀕死の男の頭上から、場に合わない上機嫌そうな声で語りかけた。

## 第28章 太古ノ王〈Ⅲ〉

## 第281話 “記憶の廊”

陽炎島、唯一の町。

無数の家屋の瓦礫をひっくり返し、人々が復興作業に勤しむ。

その中の一人……かつて残忍極まりない海賊として恐れられた男が、腰を伸ばしながら唸った。

「……はーっ、やれやれ。まだまだ片付かねエな。まったく……こつちの苦労も知らねエで大暴れしやがって化け物共め」

「こきこきと首を鳴らし、悪態をつきながらぼやく男。

それとは別の元海賊が、すぐ近くで瓦礫を担ぐ着物を襷掛けにした男に振り向き、口を開く。

「新さん、あいつらどこ行つたかわかるか？」

「かなり濃い煙幕だったからな……森に向かつたのは間違いないが、そこから先はわからぬ。無事だといいいのだが……」

「だよなア……」

新ノ介の言葉に頷きつつ、ちらりとあたりを横目で見やる男達。

家を壊された島の住民達が、先日とは打って変わって談笑しながら瓦礫を撤去している姿に、思わず目を細める。

話題は、先日起きた一件の結末に移り出した。

「あん時やヒヤヒヤしたぜ……………よくあんな荒ぶる島民達を宥められたな。ありやもうほとんど暴徒化してただろ」

「…真摯に語り聞かせれば、どんなに心荒れた者であろうと心を通わせる事は出来るのだ……………最初から疑う者に、真に人の心を開く事など出来ぬよ」

「…実現できるあんたがすげエよ……………やっぱ経験が違うのかねエ」

彼に自慢ぶる様子も、驕る様子もない。

ただ為すべき事を為したというだけの男に、尊敬の視線が集まる。

「しかし驚いた……………普段はあんなだけ温厚なジーさんが、あの天使の嬢ちゃんを見た途端豹変しちまって……………」

「そうそう……………逃げた後も大変だったよなア、血圧上がりまくってぼっくり逝っちまわねエかと思つたつての」

脳裏に浮かぶ、白と黒の彩り。

外套で隠されていた少女の真の姿を思い浮かべ、元海賊達は複雑な表情で黙り込ん

だ。

「おれア……天族つつつたら『船乗りの守り神』って聞かされてきたからよオ、さっきの出来事にや本気で驚いたぜ」

「ああ……實在してた事にも驚きだが、『悪魔』って呼ばれてたのにも驚いた。『よくばりおおさま』つてののに加えて、相当この島の連中に嫌われてんだなア……」

男達はうんうんと何度も頷きつつ、再度新ノ介を見やる。着物の男は、男達に背を向けたまま顔を見せない。

「新さん……あの状況でよくあいつらかばう気になれたよな、下手したらアンタまで村八分にされんדר」

「……過去に何があつたのか、余所者である私には知る由もない。だからこそ、他人の言う事実を鵜呑みにする事は避けねばならぬ……知らねばならぬのだ、本当の真実というものを」

がたん、と大きな木片を横にどかし、一息つく。

虚空を見上げ、佇む彼の表情は見えないが、その背にはどこか後悔が滲んで見えるよな気がした。

「……あの時の私にそれができていれば……また違う未来があつたのやもしれぬ。今の私は……ただの浪人だ」



??

どごん、がこん、ぼごん。

天井から、壁から、床から、あらゆる方向から岩の塊が突き出し、ひっきりなしに襲いかかる。

侵入者を阻む無数の凶悪な罠の数々の間で、一つの笑い声が木霊する。

「あっひやつひやつひやつひや!!! 楽しいなア~~~~ここはホントに!!! あっひやつひやつひやつひや!!!」

侵入者を圧殺し、吹っ飛ばし、追い出す無数の仕掛け。

常人ならば心が折れるようなそれらを、ルフイは心から笑っていた。まるでおもちゃで遊ぶ子供のように。

「しししし!!? おいエール!!? 大丈夫か?!!?」

「……………おかしい、絶対おかしい。この状況でずっとヘラヘラできるあなたの精神はホントにおかしいよ」

「楽しいんだからしようがねエだろ? お前も楽しめよ、エール!!? あっひやつひや!!!」

自分の後ろを青い顔でついてくるエールにも、ルフイは笑う。

一度死にかけた事は気にしていないのか、それとも忘れたのか、迷宮の仕掛けに一々

目を輝かせている。

そんな彼の前で、通路がさらに複雑化する。

足場が分かれ、道は曲りくねり、さらに凶悪な迷路へと変貌していく。

「簡単にや行かせてくれねエか……………上等だ!!？」

「ねエまだいくのかイ…………？」

「当たり前だ!!! これは絶対…昔の『おおさま』のおれへの挑戦だ!!! 絶対クリアして

やるぞ!!!」

やる気に満ちたルフイの後ろで、エールはげつそりと肩を落とす。

はしやく青年を信じられない気持ちで凝視し、なぜか疑いの眼差しを向け始める。

「…どうしてソイツの事をそんなに好意的に思えるの? ……わらべ歌…聴いただろ

?」

「知らねエ!!? 忘れた!!?」

エールの問いに、ルフイは堂々と返す。

目の前に聳え立つ壁を凝視したまま、満面の笑みを浮かべて道の先を見据え続ける。

「昔の『おおさま』がどんな奴かはわかんねエし、知る気もねエ!!? この迷路を目一

杯冒険した先にお宝が待ってんなら、おれはそこを指すだけだ!!!」

エールの返事を待たず、ルフイはだーっと走り出す。

反り返った壁に指を引つ掛け、脇目も振らずに頂上を目指して登り始める。

「待つてろよオ~~~~!!」  
 「よくばり」~~~~~!!

顔も知らない、名も知らない過去の人物に向けて挑戦の言葉を吐き……新たな「王」を目指す青年は、挑戦を続ける。

「……本当に、変な奴だねエ」

その背を見つめ、エールが小さく呟く。

悲鳴をあげて落ちてくるルフイを見つめたまま、くすつと、微笑みの声を漏らした。

??

「生物……?!? この遺跡が?!?」

エレノアの言葉に、ロビンは大きく目を見開く。唐突すぎる断言に、彼女らしからぬ啞然とした表情を見せる。

「それ……本気で言ってる?」

「正確には………生き物みたいな何かだね!!? この感覚、巨大な生物の体内にいる時と似てる………っていうかそれそのものなんだよ」

通路を走りながら、エレノアは頷く。強張った表情で、長く登りづらい階段の先を見据えながら、静かに冷や汗を垂らしている。

「つまりこういう事かね……!! 私達がいるのは遺跡ではなく一個の巨大な生物の中で!!!」

我々を体外に排出しようとする働きに巻き込まれていると!!!」

「そうでなきや説明つかんわこんな謎迷宮!!!」

これまで探検の邪魔をしてきた数々の罠。それを思い浮かべ、叫ぶ。

それらはあまりに不自然で、単なる建物とは考えられない異常さに満ちていた。

「動く壁に移動する罠…それ以上に…!!? 入った時から感じてた不気味な気配!!! こ

こは何か巨大な意思を持つ存在の中で…:…私達を体外に排除しようとしてるんだ」

がこん、と足元が突如下に向かつて動き出す。

滑り落ちそうになったエレノアは即座に飛翔し、ロビンも能力で自身とコウガミを空

中に留まらせる。

「錬金術が通じなかったのも…!!? 対象が単なる無機物じゃなかったからなら納得で

きる」

「だとしたら…:…それこそ、ここは何? いいえ、何者なの?」

「…今考えてる可能性は…:—」

ロビンの問いに、エレノアは更に険しい表情になる。

どこか躊躇うような様子で、その答えを口にしようとした時。

「素晴らしい!!! これほどまでに巨大な迷宮がそんなにも雄大で偉大な一つの命だった

とは!!! やはり誕生とは素晴らしい!!! 惜しむらくはそれを私が知らずこれまで一度

も祝えなかつた事だ!!! ハッピーバースデーエエイ!!!  
「うるせエ!!!」

ロビンの生やした大量の腕で吊るされたコウガミが上機嫌で騒ぎ出し、思わず言葉を区切つて吠える。

思考の邪魔をされ、苛立つエレノアは再度息を吸い込み。

「シャアアア!!!」

と、背後から向かつてきた包帯の異形に向け、義足から生やした刃を一閃する。

蛇の姿をした異形はずりりと首を断たれ、続いて硬貨の欠片となつて崩れ落ちる。天井の凹凸に掴まり、エレノアとロビンはそれを見下ろした。

「だったらら!!!? 彼らは体内に棲まう免疫細胞……私達は彼らに駆逐される病原菌つてところかしら……!!!?」

「かもね……思えばコイツらが放つ気配とこの遺跡が放つ雰囲気……似たものを感じてる。本質は多分同じなんだ」

「この遺跡自体が……あのメダルの怪物つて事?」

「そういう事!!! だから奴らは……!!!? この中から際限なく現れるんだ!!!」

下へ流れる床を見下ろし、エレノアとロビンは目配せをし合う。

ロビンが手を交差させ、壁に何十本もの足を生やして足場を作り、その上を三人で跳

んでいく。

そこへ、大柄な体で必死に後を追いながら、コウガミが二人に尋ねた。

「だとすれば……!!」宝は一体どこにあるというのだね!!?」

「…案外、ルフィの思いつきが正解なのかもね」

彼の問いに、眉間に深くしわを寄せながら呟く。

長い坂を越え、入り組んだ登り道を登り、ひたすらに上を目指して進みながら、エレノアは自身の考察を口にする。

「この遺跡があのかげ物の一種……古代の『王』の産物であり、一個の意思を持つ存在なら、ここで起こる現象にも必ず何らかの意思が宿ってるはず。強欲な王が考える事といえば……」

「……自分の宝を狙う不屈き者を、排除する」

「それ。…誰も傷つけずに追い出してるのは、かつての『王』が小心者だったからかもね」

死後も宝を他者に渡さないために、いくつもの危険な罠で守る。

もし、ルフィの想像する通りの思考の持ち主ならば。

「そしてそんな奴なら……一番大事なもののほど、強固に守ろうとするでしょう?」

その考えを元に、エレノア達は罠だらけの道を進む。

主にロビンの能力とエレノアの危険察知能力を頼りに、足手纏いを連れ二人で奥へと進み続ける。

するとやがて……彼らはその場所へ辿り着いた。

「……」

坂を登り切った先に広がっていたのは、歪な円形の空間だった。

いくつも柱が並び、壁が凸凹と歪みながら、表面に何やら絵のようなものが彫り込まれている。

どこを見ても壁画ばかりという、不思議な場所だ。

「随分と雰囲気異なる場所に来たね!!! ここが宝のある場所かい!!」

「……さアてね、他と比べて特に危ない道を選んできただけだし」

コウガミの声を半ば無視し、壁画へ近づく。

何か畏でもあるかと警戒するも、触れてみてもさしたる反応は見られない。

「たくさんの壁画……まるで画廊ね。それも初めて観る意匠のものばかり……不思議な場所」

「アテがはずれたかな……どうにも妙な空間だ」

天井にまでびっしりと彫られた絵を見上げ、ロビンが呟くとエレノアも訝しげな表情で首を傾げる。

ロビンはぐるりと一周、部屋中を見渡してみる。

描かれている絵は、抽象的というかなんとかというか、一目見ただけでははつきりと表し難いものばかり。

しかしふと、何かを感じた気がして、天井に目を向けたまま口を開いた。

「——ねエ、エレノア？　ここが生物の体内なら………今私達がいるのは身体のどこ？」

「そうだね………ここはこの遺跡の……このデカイ何かの……脳のあたりかな」

「脳……ならここにるのは」

確かめ合ってから、二人は今度は絵だけでなく、部屋全体を見る。

得体の知れない、しかし何かを秘めたその空間……自分達がいる『何か』の体の中を。

「………この子の……この巨大な存在の………記憶」

小さく呟き、エレノアが黙り込む。

ロビンもそつと手を伸ばし、びっしりと刻まれた絵を一つ一つじっくりと眺めていく。

「………困ったわ。あるのは絵ばかりで文字がない。何かの記録が記されていればと思っただけ………これは時間がかかりそうね」

だが、観察し始めて早々にロビンは困惑の声を漏らす。



古代の遺物に造詣の深くとも、芸術品の全てに通じているわけではないようだ。

「流石の考古学者もお手上げかい!!? 古代の『王』もやってくれる!!! セつかく迷宮踏破の手掛かりになりそうなのに、こんな難解な謎を残していくとは!!!」

「……………別にお手上げなんて言つてないわ。ただこの手の遺物に巡り会った事がないだけよ」

コウガミに口を挟まれ、ロピンはむつとした様子で反論する。ついてくるだけの男に小馬鹿にされ、流石のロピンも顔に出る。

そんな彼女に、コウガミは相変わらざる笑顔のまま首を横に振る。

「別にバカにしているわけではないよ!!! 君はかの『オハラ』の叡智の結晶にして『歴史の本文』を唯一読み解ける世界でただ一人の女性!!! そんな君が解読に苦戦する様なら!!! それだけでこの場所の特異性は明白だとも!!!」

「……………本当になんでもお見通しって感じね」

「何でもは無理だよ!!! だからこそ私はここに來ているのだから!!!」

やかましく喋りながら、コウガミもまた壁画を見渡す。

ぎらぎらと不気味に目を輝かせながら、無数の壁画の数々を全て眼に焼き付けようとしていようだ。

「それ故に惜しい!!! ……ここまで來て過去の解明が暗礁に乗り上げた事が非常に口惜しい

!!! 歴史の果てに消え去った真実が目の前にあるかもしれないのに!!! この手の届く場所にあるかもしれないのに!!! それなのに届かない!!! 悔しいイ!!!」

「……………いつか、何か恐ろしい事態を引き起こして自滅しそうね」

誰に対してでもなく、仰々しく語るコウガミ。

彼の異様な執着を見ながらロビンがそうこぼしていると、ふと、エレノアが先程から黙り込んでいる事に気付く。

じつと壁画を見上げたまま、一言も発していない。

「…エレノア?」

「…ねエ、このへんにある壁画、外にある遺跡の絵とはずいぶん意匠が違くない?」

すつ、と天使が指差す方向を見て、ロビンもかすかに目を見開く。

示された絵の一部、かろうじて人と思われるその絵に、彼女も思わず頷く。

「そうね……………私もそこが気になっていたわ。技術や表現の問題じゃなく、この壁画は感性的に拙く……………いいえ、幼く見える。例えるならそう……………子供が作った粘土の壁画」

「なるほど、どーりで独特のタッチな訳だ」

「だから私も容易に読み解けないわ……………子供の絵にはあまり関わって来なかったからかしら? 正直に言うと、ちょっと理解に苦しむわね」

言われてみればその通りだと、今一度じっくりと絵を見渡してみる。ぐちゃぐちゃの線で出来上がったそれは、確かに子供の絵に見える。

それが大量に、それも薄暗い中に浮かび上がっていて、大変不気味に見える。

「……子供の絵」

不意に、エレノアの脳裏で何かが光る。何かが繋がる。

視界に映る絵をじっと見つめ続ける。

人らしき線の集団。鳥らしき塊。羽の生えた鼠のような何か。ほとんど何を表したのかわからないようなそれらを凝視し続け。

そしてやがて、口を開いた。

「……………あのさア会長さん。色々聞いておきたいんだけど、いいかな？」

「私に話せる事なら何なりと!!!」

「じゃさっそく……………」

許しを得たエレノアが、一瞬で動く。

じゃきん、と義足の刃を展開し、コウガミの喉元に突きつける。

薄皮一枚、少し力を入れれば容易く切り裂けるほどの距離でとどめ、男を鋭く睨みつける。

「エレノア……………!!!」

「……どういふつもりかな?!? なぜ私に刃を向けるのだね?!?」

「白々しい……わかっているくせに。どうせ丁寧な聞いたところで素直に答えないだろうから、脅させて貰ってんだよ」

微塵も動かず、殺気をぶつけながらエレノアが問う。

やはり表情ひとつ変わらぬコウガミを見上げたまま、疑いの目を向ける。

「あんた……ほんとは全部知ってんじゃないの? 『王』の宝の事とか……この遺跡の正体についてとか……全部、なにかも」

「何を根拠に……!!!」

「知り過ぎなんだよ、あんたはさ……私達どころか、島の住民すら知らない情報を……あんたはさも当たり前のように語って聞かせてきた。800年前という正確な時間すら、わらべ歌にも載ってないのに」

とぼける男の首にぐつ、と刃を押し付け、再度問う。

眉尻ひとつ動かさない相手を、そのまま首を切り落としても構わないくらいの気迫を以って、脅し続ける。

「話せる事じゃ足りない、全部語れ——お前は何者だ」

## 第282話 “その正体”

——遺跡探索開始より、5時間。

偶然8つの班に分かれた一味は、目の前に続く遺跡の道を……否、謎の巨大生物の体内をひた歩く。

数々の罟と敵、窮地を潜り抜けながら、それぞれで“王”の眠る場所を目指し、“宝”を探して進み続ける。

遺跡内——“大動脈大路”

ルフィ&エールペア

「んでよオ、そしたらナミの奴がこうきやがるんだ！『私……諦める、10億ベリ』だぞ!!? いろんな冒険の中でもあれ以上にビビった事はねエ……!!?」

「……………!!!」

遺跡内——“大腿部静脈水路”

ライドベンダー隊Bチーム

「全隊ツ、構え〜〜!! 撃てエ!!!」

サトーの号令で、三人の兵士は一斉に銃を構える。

硬貨の力で強力な銃弾が発射され、前方から迫る無数の包帯の異形達に次々に炸裂する。

「ウオオオオ……!!!」

「アアアアア……」

火花を散らし、爆発四散していく異形達。

瞬く間に数体が幾枚もの硬貨の欠片となって飛び散るが、その後ろから続々と増援が現れ出す。

「くっ……!!? 毎度毎度……あのバケモノ共はおれ達の邪魔をしやがって………!!!」

しかも毎度毎度どこから出てきやがるんだ!!?」

「あれを生物の括りに入れるのはやめておけ……!!? 我々の常識の通用しない相手だ!!? 考える時間も無駄だ!!!」

クトーのぼやきにヤトーが怒鳴るように返す。

たつた三人ですでに何十体もの敵を屠り、体力も精神力も限界に近付きつつあった。

「ダメだサトー、押し返される!!!」

「チイツ……!!? 総員撃ち方やめ!!? 先程のポイントまで撤退する!!!」

撃つても倒しても、際限なく湧き続ける異形の敵。

圧倒的不利な状況に、兵士達は悔しさに顔を歪めつつ、元来た道を大急ぎで引き返し始めた。

遺跡内——〃膀胱貯水池〃

ライドベンダー隊Aチーム

「ごごご」と振動する狭い通路を、頭を抱えて走る三人。

イトーを先頭に、二人の部下が泣き出しそうな顔で追いつがる。

「急げ急げ!!?」 通路が塞がれる前に突っ切るんだ!!」

「もう勘弁してくれよオ!!!」

「逃げる三人の後ろの通路が、消えていく。上下左右の壁がまるで粘土のようにせり出し、あっという間に埋もれていく。

足を止めれば彼らもその一部になってしまふのだ。

調査どころではなく、雇われの戦士達はもう、足を動かすだけになっていた。

「コンチクショウがア~~~~!!」

遺跡内——〃足裏縁部〃

ライドベンダー隊Bチーム

「畜生オ〜!!! やつてられないんスよこんなの〜〜!!!」

「待て貴様ア!!!」

「勝手に先に行くんじゃない!!!」

泣き出したムトーがわめきながら、通路をひた走る。

先輩二人を置き去りに、我が身可愛さに何もかもを投げ捨て、ただただ外に出ようと無茶苦茶に走り続ける。

「ボーナスもいらねエ!!!? 報酬もいらねエ!!!? あの会長のわがままにこれ以上付き合つてられないっスよ!!! もうヤダ：お母ちゃ〜〜ん!!!」

ぎゃんぎゃんと幼子のように泣き叫び、不満をここぞとばかりにぶちまける。

そんな彼の声が鬱陶しかったのだろうか。

突如、三人の足元の床がぱかっと開き、三人の体が宙に浮いた。

「「ギャアアアアア……!!!」」

ムトー達は悲鳴をあげ、穴の中を落下する。

そしてどぼんつ、と水音が三つ立て続けに起こり、それ以降何も聞こえなくなつてしまった。



遺跡内——『胃付近通路』

ウソップ・チョップパー・フランキーチーム

ぐつぐつと煮えたぎる、真っ赤に溶けた鉄の沼。

その淵に突如、がごと人の手がかかり、3つの人影がずるずると這い出してくる。

「やつつと出られたぜ……………!!? スーパー疲れたぞクソオ……………!!!」

「…2、3回三途の川が見えかけた…」

「ごわがっただア……………!!!」

壁伝いの決死行からようやく生還したウソップ・チョップパー・フランキーの三人が陸地にぐつたりと横たわる。

もう三人とも、生を喜ぶ余裕すら残っていない様子だった。

しかしフランキーは、疲れ切った体に叱咤し、立ち上がって二人に促す。

「休んでる場合じゃねエぞお前ら……………!!? これ以上コイツに食われたままなんぞ御免だ!!? さっさと出口を探してコイツの腹の中から脱出するぞ!!!」

「待て待て待てってくれアニキ……………もう少しだけ休ませてくれ……………!!!」

「消化されるのはイヤだア……………」

「甘えんじゃねエ!!!」

ぜーひゅーと荒々しい呼吸を繰り返す弟分達に怒鳴り、自分も倒れ込みたいのを我慢

して歩き出す。

洩々その後につきながら、ふと、チョッパーは首を傾げた。

「……………なアウソツプ、おれ……………ここにいるとなんか誰かの事が頭に浮かんでくるんだけど……………誰だっけ？」

「ゼエ……………ゼエ……………そんなもん……………おれが知るかよ……………」

犬のように舌を出し、喘ぐウソツプにはそんな疑問に答える余裕もない。

チョッパーは眉間にしわを寄せたまま、てくてこと二人について歩き出した。

遺跡内—— // 上腕部動脈水路 //

ゾロ・ナミ・ブルックチーム

「二刀流……………!!?」 // 二斬り //……………!!?」

きん、とゾロが構えた二刀が甲高く鳴る。

蠢く異形達に向け、鋭い刃が目にも留まらぬ速さで食らいつく。

「カンバチ貫捌……………!!!」

「// 鼻唄三丁 //…………… // 矢筈斬り //……………!!!」

異形達の首を刈り取る斬撃の近くでは、骸骨紳士の放った無音の剣技が迸る。異形達は次々に斬られ、硬貨の欠片へと成り果てていく。

「ああもう！ こっちは来ないでよ!!? サイクロンテンポ!!!」

ナミが放った攻撃の結果、強烈な暴風が吹き荒れ、異形達がまとめて宙を舞う。だが、しばらくすると起き上がり、呻き声と共に再びナミ達に向かい始めた。

「もういやッ!!! なんでアイツらこんなわらわらわら出てくんのよッ!!!」

「ゼエ……ゼエ……!!? わ、私本気で疲れてきました……!!? もうイヤッッ!!!」

「うるせエ!!? 黙って走れてめエら!!!」

このまま戦い続けてもまずいと、三人は隙をついて走り出す。

幸い、包帯の異形達はさほど速くは動けないようで、ぞろぞろと鈍く後を追ってくるだけだ。

泣き叫ぶナミとブルツクの先頭に立ちながら、ゾロはある事を考えていた。

——エレノアにしごかれたお陰で……昔はわからなかった事が少しずつわかる様になってきた……。

これまで感じたあの感覚が……明確になってきやがった。

今の経験と、過去の経験。

二つの我が身に覚え込まされた感覚が、ゾロにある確信を抱かせる。

この状況を知っている、そんな感覚を彼に味あわせていた。

——間違いねエ…これはアイツと同じ感覚だ!!!

遺跡内—— // 腸迷路 //

サンジ&伊達マル・ゴトー・サトナカチーム

『食事には礼を持って、お行儀よく』 // 行儀説法<sup>セコンボルテ</sup> //!!!

ごっ、と普段以上に鈍い音を響かせ、強力な蹴撃が決まる。

鉛のように重い折檻の一撃を受け、異形は悲鳴をあげられないまま四散する。

すたつと降り立つサンジ。その後ろで、別の異形が銃弾を受けて倒れ込んだ。

「うお!!?! てめっ!!?! 今おれごと狙いやがったな!!?!」

「のろいお前が悪い!!?!」

至近距離で炸裂する銃弾に、サンジが思わず抗議の声を上げるが、ゴトーは一切詫びず次の敵を狙い撃つ。

ぴくつ、とこめかみに青筋を立てたサンジは、だつと駆け出すと、ゴトーの顔面すれすれで蹴りを放ち、近付いていた異形を吹き飛ばした。

「……………わざとか?」

「イヤイヤたまたまさ…誰かさんと違ってな」

「ンのやらアア!!!」

「やるのか貴様ア!!!」

もう敵すら放置して睨み合い、得物をぶつけ合うサンジとゴトー。

わらわらと異形達が包囲を狭めていても気にせず、目を吊り上げて罵り合う。

【キヤタピラレツグ!】

【ブレストキャノン!】

「おーし、そこらへんさつさとどけ。一掃すんぞ〜」

そこへ、機械の音声と伊達マルののんびりした声が響く。

両足にキヤタピラを、胸に大砲を装備した伊達マルは、腰の機械にさらに硬貨を追加し、砲身の中に光を溜め込み出す。

「ちよっ…伊達マルさん!!!」

「おわ——っ待て待て待て!!!」

【セル・バースト!】

「ブレストキャノンシユート」おらア!!!」

二人が慌てて、伊達マルの前から左右に飛びのいた直後。

凄まじい轟音をたて、砲口から赤い閃光が放たれ異形達を呑み込む。

強烈な熱と衝撃に包まれ、異形達は微かな声を残して一瞬で鈍色の欠片と化し、四散していった。

「……………よし！ ケンカも襲撃も止まったな、めでたしめでたし」

「よしじゃねエよ!!! めでたくもねエよ!!! 死ぬとこだったわ!!? テメーまさか今のケンカの仲裁のつもりか!!! 扱い雑か!!!」

「だつてお前らずつと止まんねエじゃねエか」

満足げに頷く伊達マルの頭をサンジが手刀で叩く。危うく巻き込まれかけたというのに、本人に反省の色は皆無だ。

「無駄な体力をお使いになる前に、さつさと道案内をお願いできますか？ 時間の無駄です」

「…サトナカちゃんは今もう、コワイくらい冷静だね…」

「いいからさつさとやれ、エセ紳士」

「うるせエワカメ!!! てめエに言われる必要はねエ!!!」

サトナカとゴトーにそれぞれ文句を言われながら、他の仲間との合流の為に意識を集めさせる。

だが一步を踏み出しかけたその前に、また新たな影が湧いて出てくる。

「ウウウ…ウウオオオオ…!!?」

「次から次へと…!!!」

ずるずると体を引きずり、向かってくる異形達。

辟易した様子を隠さぬまま、しかしなにかの予感がした伊達マルが仮面越しに顎を撫でる。

「襲撃頻度が上がってきてんな……もしかして……遺跡の深部が近いんじゃないか?」

「その上案の定……!!? レディ達のいる方に蔓延つてやがる。連中を駆逐しねエとナミさん達が危険だ……!!?」

迷宮の踏破どころか、合流すらままならない状況にサンジの顔が険しくなる。

こうしている間に、愛する女性陣に何かあつたら、そう思うと彼は居ても立つてもいられなかった。

「でしたら……余計に皆さんとの合流が望ましいですね。罫の個数も増えています。少数のまま奥へ向かうのは危険でしょう」

「確かにな……!!? そういうワケだ!!? 頼むぞ騎士!!」

「だから野郎の声援なんざいらねエつつつてんだよ!!! 今やつてるから黙つてろ!!?」  
 気を引き締めつつ、囁し立てる伊達マルに吠える。

舌打ちと共に背を向けてから、サンジは冷や汗を垂らし、異形達遠くへ続く通路を見据えた。

……レディ達の居場所を捜す為に使うたび……!!?

おれの「見聞色の覇氣」が鍛え上げられてより広範囲の状況が詳細に感知で

きるようになってくる……!!?

野郎共の位置までわかるようになったのはまあいいとして……問題  
はそこじゃねエ。

エレノアの指導によって目覚め始めた新たな力。

他の気配を感じ取る力が使う度に研ぎ澄まされ……サンジの警戒を強めさせていた。

——人間の……生き物の……!!?

動いてるヤツの気配が尋常じゃねエ数だ……!!!

コレ全部がああメダルの化け物って事なのか……!?!?

そして……何よりも……!!?

後ろの三人に聞こえないよう、小さく息を呑みながら、その存在を探る。

比べる事すら馬鹿らしくなるほど、圧倒的な存在感を放つそれを感じ取りながら、女

性陣の一人の態度を思い出す。

——エレノアちゃんが再三……嫌な予感がすると口にしていた理由が今はつき  
りとわかった……!!!

彼女はコレを恐れていたのか……!?!?

異形達を蹴り飛ばし、粉碎し、毘を越えながらその全貌を俯瞰する。

得体の知れない不気味さが、正体を知った事で恐怖に変わりつつある事を自覚し、食



いしばった歯を軋ませる。

——ここは遺跡でも迷路でもねエ!!!

ここは……コイツは!!!

迷宮内——『脳画廊』

エレノア・ロビン&コウガミ

「——答えるのは一向に構わない!!! 黙っていたのは、君達の船長に対する遠慮の為だったからね!!! 彼はおそらく、ネタバレや種明かしなどを嫌うタチだ!!! 違うかね!!!?」

喉元に刃を突きつけられ、幾本もの腕に両腕を決められながら、コウガミはやはり顔色一つ変えずに答える。

エレノアとロビン、二人に睨まれてなお、彼の態度は変わらなかつた。

「その配慮は当たりだけど……まさかそれでごまかせると思っちゃいないだろうね」「ここまでの状況に巻き込んでおいて、それで済むとでも?」

「遠慮がないね!!! しかし本心さ!!! 欲しいものを手に入れる際!!! 障害は大きければ大きいほど手に入れた時の喜びは大きくなる!!! だからあえて言わなかつたのさ!!!」

目は正気を失って見えるのに、言葉は本心そのもの。

笑ったままのコウガミをじっと見つめていたエレノアは、やがて溜息と共に刃を下ろした。

「…まあ、そつちはどうでもいいよ。素直に話すつてんなら」

「それはありがたい!!! この状態結構辛くなってきたから!!!」

私も教えてもらいたい!!!」

ふわっ、とロビンの腕が消え去ると、コウガミは関節の調子を確かめる。

同時に、ぎらぎらと光る目でエレノアを見つめ出す。

「君が…天族が気配に敏感な特殊能力に長けているのは知っていたが!!! どうやって気付いたのだね!!!」 明らかに生物とは思えない異形の生態を相手に!!! なぜ生物だと断言できたのだい!!!」

暑苦しく、執着まみれの目で問いかけられ、エレノアは逆に冷めた目で彼を見つめる。

しばらくの間黙り込んだ彼女は、しゃこんと義足に刃を収めながら。

やがて、溜息混じりに語り出した。

「同じなんだよ……私の知り合いと」

——私達はあなた達人間より真理に近い存在。

進化をとげた新たな人間の形……でも言っておきましょうか？

——食べていい？

「この先に待っている秘宝は……かつての『王』が作らせたものは」

彼女の脳裏の浮かぶのは、つい数ヶ月前に出会い、姿を変えて別れた一人の男。

そして後二人……砂の国で遭遇した、異能を持つ男女の姿だった。

「あアン!? 思い出したって……どういうこつた!? こんな訳のわからねエ場所を他に知ってるってのか!!」

突如、背後で声をあげたチョツパーの言葉に、フランキーは心底意味がわからないという表情で振り向く。

目を剥いて立ち尽くすチョツパーは、あんどりと口を開け、わなわなと震えながら自分の発見を叫ぶ。

「知ってるっていうか……似てるんだ!!? おれ達……前にこの遺跡と似た存在と会ってるんだ!!」

「本気で言ってるのかシカゴリラおめー……!?」

本人が動揺しまくっている所為か、言語が大大おかしくなっている。

医者なのに医者が必要な状態になっている彼を案じながら、ウソツプも困惑の目をチョツパーに向ける。

「オイオイ待てよチョツパー……!!? おれの知らない間にどんな危ねエ冒険してきたん

だよ、こんな場所に迷い込んでよく無事だったな!!?」

「場所じゃねえんだ!!! お前らも会った事あるだろ!!? ていうか……………!!? フランキー!!! お前が一番よく知ってるだろ!!!」

「ア!!? おれが!!?」

指摘され、フランキーはさらに困惑に片眉を上げる。

「いよいよ治療が必要か、と思いきや、チョツパーの目は正気で狂っているようには見えない。」

立ち尽くす彼らに気付かせようと、船医はさらに続けて吠える。

「この遺跡……………!!? いや!!? おれ達が遺跡だと思ってたこの場所は!!! 生き物みたいで生き物じゃないここは!!! アイツと同じ感覚がするんだ!!!」

「アイツ!!?」

「エレノアに『覇氣』を教えて貰い始めて……………わかる様になった!!! コイツとアイツは似てる…いや!!? ほとんど同じなんだ!!!」

「だからアイツって誰だよ!!!」

騒ぐ彼らの周囲で、壁が、床が、天井がまた動く。

べきべきと岩肌が、原子の一つ一つが独りでに動き、形を変えていく……………仄かに、赤黒い閃光を走らせながら。

その様は、最強の盾を持つとある人造生命体に。

かつて一味と敵対し、後に共に戦った、強欲な人物の変形によく似ていた。

——ガツハハハハハ!!!

「グリードだよ!!! この遺跡!!? ここからする気配!!? 全部がアイツとそっくりなんだよ!!!」

「『賢者の石』………数多の命を材料に生み出される、史上最悪の兵器だ」

## 第283話 〃禁忌の術〃

「グリード?!?!?」なんでアイツの名前がここで出て来んのよ?!?!?」

通路を駆け抜けながら、ナミが叫ぶ。

四方八方から異形達が湧き出し、その度に壁や天井から飛び出す罠に潰されていく様に巻き込まれないようにしながら、ひた走る。

彼女の声に、ゾロは二刀を構えたまま振り向かずには頷いた。

「間違いねエ……〃覇氣〃で感じて確信した。ここにいるのはアイツと同じか限りなく近い存在だ……?!?!?」それに……?!?!?」

——〃傀儡兵〃!!!

ゾロの脳裏に浮かぶ、過去の戦い。

空島で出会った一人の男……不完全な不死の力を持ち、同じく死なない怪物を生み出す戦法で攻めてきた彼の顔が浮かぶ。

「グリードだけじゃねエ、〃空島〃にいた神官の1人も……同じ気配がしていた。それにここで起こってるのと似た様な事をしていた……細けエ事アエレノアでもなきやわからねエが、根本的に同じ様な存在の筈だ……?!?!?」

「だからなんでアイツとおんなじ様な奴がここにいるのよ!!?」

「おれが知るか!! そんな事!!」

何でもかんでもわかるものか、と問うてくるナミに目を吊り上げて怒鳴り返す。この状況では誰も冷静ではいられないようだ。

その横から、ブルックが困惑の表情で二人に問いかける。

「その…グリードさんって、どんな方なんですか?」

「フランキーの兄弟分で……悪魔の実の能力者じゃないけど、ダイヤみたい体に硬くできる能力の持ち主よ。なんだっけ……『賢者の石』? とかいうのを持って、いくらでも傷を再生できるんだって……」

最初の出会いが激突で、その後も利害の一致の上での共闘だったため、さして詳しいわけでもないナミは首を傾げながら、うる覚えの情報を答える。

「賢者の石……昔そんな秘宝の名をどこかで聞いた事がある様な。不老不死を得る秘薬だとか、恐るべき力を与える秘石だとか……眉唾物の伝説で、お目にかかった事はないですが」

長生きなブルックにとっても、それは非常に珍しい存在らしい。

そして、答えたナミは、そう呼ばれるものを探していたある兄弟の事を思い出し、眉間にしわを寄せる。

——ある一説にはこうある…。

『それは苦難に歓喜を、戦いに勝利を、暗黒に光を、死者に生を約束する血のごとき紅き石。

人々はそれを敬意をもって呼ぶ——『賢者の石』と』!!!

「…そういえば…エドとアルが探してると言つてたつて。エレノアに壊されたらしいけど」

「エドとアルつてどなたです?」

「エレノアの弟子達よ」

「そんな方達がいたんですね」

新入りのブルックに手短かに説明しつつ、壊されたと知つて飛び退くほどに驚いていた兄弟の姿を思い出す。いまはどこで何をしているのやら。

「だったら…この遺跡にはその『賢者の石』があるつて事!?? 確かに…:こんな普通じゃない遺跡なら何があつてもおかしくなさそうだけど」

「詳しい事ア知らねエ、だがそこに間違いはねエ」

言いながらゾロは、傍から向かってきた異形を斬り伏せ吹き飛ばす。

吹き飛ばされた異形は、血反吐の代わりに硬貨を吐き、壁に向かつて倒れていく。

すると、壁の一部に紫電が走り、突如隆起したかと思うと、倒れこんできた異形を反



対側の壁に叩きつけ、押し潰した。

ばらばらと散らばる硬貨を横目に、ゾロ達は罫の間をくぐり抜けていく。

「……………気付ける場面は多々あった……………何でこんな時になって思い出してんだおれア

……………!!!」

気付けばもう、そうとしか思えないほどよく似ていた。

エレノアが、エドワードが、アルフォンスが、そして自分が出会ってきた錬金術師達が見せた術。

この遺跡の変形は、彼らの攻撃に非常に酷似していたのだ。

「おれの大体の勘だが……………ワラワラ出てきやがるあの化け物共も……………この遺跡自体も……………!!? 全部がその『賢者の石』の力で作られてる」

遺跡の奥の奥、いわば、心臓部。

そこに鎮座する、一つの石の棺桶があった。

直方体の表面には複雑な模様が彫られ、蓋の中心には奇妙な形の取っ手のようなものが乗っている。

しん、と静まり返った棺。

それが突如、ずしんと揺れ、蓋の隙間から硬貨が漏れ出した。

「…アアアア…!!!」

硬貨は独りで棺の中から転がりだし、棺の周囲に流れていく。

生き物のように蠢きながら、漏れ出した欲望の欠片が数力所に集まり、形を得ていった。

「おいどういふ事だてめエ!!! おれの兄弟がこのハチャメチャ遺跡と何の関係があるっ

てんだ!!？」

隣を走るチョッパーに向けてフランキーが吠える。

不気味すぎる遺跡と自分の兄弟分が同じであるかのように言われ、頭に血が上ってしまっていた。

「わかんねエよ!!? でも…でも…!!? さつきからずつとしてるんだ!!! おれの体が

……!!? 体の芯がザワザワする感じが!!! グリッドから感じる気配と似過ぎてるん

だ!!!」

獣形態に変わったチョッパーが、やや怯えた表情で答える。

鬼の剣幕で吠えるフランキーではない、遺跡に対して、特に自分達が目指している最奥に不安げな表情を見せていた。

「リンの体に移った後からも感じてたあの気配が……!!! この遺跡中からずつとし

てるんだよ!!! アイツらが持つてるって言う「賢者の石」の気配が!!!」

「そもそもその………賢者の石ってのは何なんだ!!! なんかスゲーものだったのはエレノアとエドとアルの錬金術を見てりやわかるけどよ!!!?」

走る事に必死になったまま、ウソツプが自棄っぱちに問う。

航海の途中、何度か耳にした事がある謎の宝石。

途中で別れた仲間が必死で探しているものだという事は知っているが、それ以上の事は詳しくない。

「おいフランキー!!? お前なんか本人から聞いてねエのか!!!」

「いやア……兄弟分だからって何でもかんでも教えあつてたわけじゃねエしなア。ただおれが知ってる事といえ………」

吠えて多少冷静になったのか、フランキーは顎に手を当てながら冷や汗を垂らす。自信なさげに、辛うじて自分が知っている情報を脳内から引っ張り出す。

「アイツが昔とあるジジイにやベエ技術で造られた存在で、息子と呼んでおきながらその実道具扱いされるのがイヤになって家を飛び出して、あちこち漂流してる間にワケありの連中に出会って勝手に好かれて、ファミリーを立ち上げていろんな島を旅してる間におれ達に出会って、縄張り争いのケンカしてるうちに意気投合して兄弟の盃交わして今に至るってぐらいだな」

「知ってんじやねエか色々!!」

「酒を酌み交わし合った時にお互い色々々々ぶちまけてな。そんな時に知った」

思いの外べらべらと出てきた詳しい過去話に咄嗟にウソツプは叫ぶ。

勢いでそこまで喋るとは、よほどウマが合ったのか、酒の力なのか、酒に弱かったのか。

「造られた存在………つてどういう事だ!?!」

「そもそも賢者の石つてのA……高密度のエネルギーの結晶らしい。そいつを核に生み出されたのがアイツ………ホムンクルス人造人間つて話だ」

「………そんなモンを作れるやつがいんのか」

ウソツプの脳裏に、海列車での戦いが思い出される。

銃撃を受け、脇腹に大穴が開いて明らかに致命傷だと思われたのに、あつという間にそれが塞がる信じられない光景が。

自分が正体を隠してその場にいた事も忘れ、思わず振り向き再び問う。

「その高密度のエネルギーつて………何だ? 撃たれたり、深手を負つてもすぐに再生するところを何度も見たぞ?」

「おれもそこが気になって聞いてはみたんだが………『酒が不味くなる』つつつてそれ以上は何にも教えてくれなくてな」

そう答えながら、フランキーはその時の彼の表情を思い出していた。

いつもの豪快な笑みが消えた、冷たい表情を。

「……………だがアイツがそう言うって事は、相当ムナクソ悪い方法で出来てるんだろうよ」

「ム…ムナクソ悪い方法って何だよ!? 何で出来てるんだよ 賢者の石」

得体の知れない不気味さを覚え、ぞっと背筋を震わせるウソップ。

自身のまだ不完全な「才能」でも感じる不穏な気配も相まって、待ち受けているものに対する恐怖感が増していく。

「……………ムナクソ悪い方法はムナクソ悪い方法だよ、多分。アイツと同じかそれ以上に強く感じるんだ……ザワザワが」

口を閉ざしたフランキーに代わって、チョッパーがぼそりと呟く。

今すぐにもこの場から逃げ出したい気持ちを抑え、仲間に自分の心からの本音を吐き出す。

「何千何万もの蟲が……………!!! 一つの壺の中で蠢きながら…呪いの言葉を吐いてるみたいな…!!!」

無数の硬貨が転がっていく。

網目のように全域に広がる血管の通路を、壁の隙間を通って、移動していく。

やがて硬貨は数力所で集まり、融合し、異形へと変わる。

不気味な呻き声を上げながら、異形達は己の近くにある動くもの目掛け、次々に襲いかかる。

それを、銃器から放たれた光る弾丸が射抜き、容赦無く仕留めていった。

「……つまりその……何だ、よくばりおおさま”のお宝つてのはその”賢者の石”の事だつてののか？」

「今の所ただの予想だがな………少なくともこの先に待つてんのは………とんでもねえ力がこもった何かだ」

右腕に備えた機械から、ごつい鉤縄を射出し振り回す伊達マルがサンジに問いかける。

異形を蹴り飛ばし踏みつけながら、サンジは険しい表情で頷いた。

「いや……もうそのの名前はあの会長が自分で言つてたっけな」

脳裏に浮かぶ、昨晚の遣り取り。

謎の少女エールの持つ異様な力に対し、コウガミが放った一言。

——君に宿つたその力の名は”オーメダル”!!!

無限の力を生み出す究極の存在だ!!!

——おーめだる……コレか？

——いや!!! それはいかなければオーメダルの副産物!!!

エール君の持つ「コア」と称されるメダルから発生する、「セルメダル」と呼ばれるものだ!!!

ルフイの問いに答える際に、コウガミはその名を口にしていった。

端から胡散臭い代物だと思っていたが、実際にそれが見せつける力を目の当たりにし、冷や汗が止まらなくなる。

「『オーメダル』………古代の王が錬金術師に作らせたつつー兵器………あのメダルの化け物が次々に出てくる時点で気付くべきだった……!!?」

一度旅を共にしてきた兄弟の事を、海列車で出会った不死身の男の事を思い出し、歯を食い縛るサンジ。

そして何より、エレノアという不思議の塊のような存在を今更になって思い返させられ、想像力の足りない自分自身に思わず苛立たされた。

「……そんなにマズイ代物なのか、その『賢者の石』ってヤツは」

「腕が吹っ飛んでも腹を抉られても………時間があつたり勝手に再生する………敵対するとなりや厄介なのは間違いないエ」

伊達マルが仮面の奥から息をのむ音が聞こえる。

医者いらずの理不尽な能力に、現役の医者は相当な衝撃を受けた事だろう………普通の

人間でさえ目を剥くだろうが。

「…………正直、あん時アイツが味方だった事は救いだつたな。敵のままだったらまずおれ達は今この世にいねエ」

殺しても殺しても倒れない敵が相手など、考えたくもない。

だが、それが今自分達の前に立ちはだかつていると思うと、はつきり幸運とは言い難いかも知れない。

「前に一緒にいた仲間聞いた話だが…………錬金術師にとつても伝説級の代物らしくてなア…………詳しい事ア知らねエが、術の力を高める装置らしい。昔どつかの術師が創り方を生み出したらしいが…………」

彼ら兄弟と出会つた時の事を思い出す。

兄弟が探す技術の結晶が、姉弟子である少女に壊されたと知つて詰め寄つた時、彼女の姉弟子が放つた冷めた言葉。

——姉弟子として言つておくけど、アレには今後希望を持たないことをオススメするよ。

…………アレは人の手に余るものだ。

ぎ、とより一層眉間と齒に力がこもる。

他人事と思つて適当に聞き逃してしまつていたが、彼女の言葉が正しかったのだと、



今になって思い知らされる。

「……あの時のエレノアちゃんの言葉の意味が……今になってよくわかったぜ。こりやダメだ、人間が手エ出していい代物じゃねエ」

「ダメって……どういう風いだ。ちゃんと言葉で言え」

「……………口で言って表しきれぬもんじゃねエってんだよ、こんなモン……!!!」

ゴトーの催促に苛立つ余裕すらなく、サンジは吐き捨てる。

「覇氣」を鍛え出した事ではつきりとわかるようになった、その声。

強い負の念が、生者に対する恨みと憎しみ、様々な昏い感情が次々にぶつけられてくる感覚に、思わず吐き気を催す。

ふと彼の脳裏に、いまはいないかつての旅の同行者の顔が蘇る。

（リンの奴……………グリードと合体したつってたが、つまりは今、普段からこんなもん聞かされてるって事か……?!? 氣イ狂うぞこんなモン聞かされてちゃ……………!!!）

普段はへらへらしながら、胸の内に熱い魂を持つていた男の事を思い出す。

強敵を相手に死にかけて、異能の男と手を取り合う事を選んだ彼は……今まさに、この不気味さの真つ只中にいるというのか。

別れてそれっきりの皇子の事を思い出す横で、もう一人、憎たらしい顔が頭に浮かぶ。

「……………あの野郎、まさかこの事知ってたんじゃねエだろうな……………!!!」

言葉巧みに船長の興味を誘い、この遺跡に向かわせた男。

自らもこの遺跡に足を踏み入れ、挙句迂闊に罫を作動させ仲間を分断させた暑苦しい中年の顔が脳裏に浮かぶ。

「……ふざけやがってあのクソ油オヤジ……!!! 何てモン探させてやがる……!!!」  
「……………」

「何がこの先に秘宝が待つだ……!!? こんなモン……ただのバケモノ製造機じゃねエか!!!」

八つ当たりのように異形を蹴り飛ばし、叫ぶサンジ。

無尽蔵に湧いて出る怪物達。蹴っても踏んでも次々にやってくる彼らに、次第に焦りを抱き始めたその時。

敵を前に身構えていた伊達マルが、はっとした様子で肩を揺らした。

「……ちよつと待て? 装置つつったか?」

「ア?」

突如疑問の声をぶつけられ、サンジや他の二人は視線だけを伊達マルに向ける。

敵への警戒を怠らず、自然と円陣を組んだ状態になった彼らは、背後の伊達マルに何が言いたいのかと目で問う。

「錬金術師が使う装置………つまり道具なんだよな? そのグリードってやつも、体

の中にそれがあつてそれを使つてんだよな？」

「……そうだな、聞いた話から察するにだが」

「だとしたら……!!! 誰かいるんじゃないのか……!!!」

囲まれたまま、伊達マルは気付いた真実を叫ぶ。

困惑をさらに深める驚異的な事実を、他の三人にも共有する。

「この遺跡で……!!! それを使つてるやつがいるつて事だろうが!!!」

暗く、長い通路を歩き続ける二つの人影。

どこから差しているのか、仄かに明るく足下だけは見える狭い道を、ルファイが明るい声で話しながら、楽しげに行進する。

彼が語る冒険譚に耳を傾け、時折うんうんと頷きながら、エールは彼の隣を歩く。

不意に、彼女の足がぴたりと停止した。

「……………」

無言で佇んだまま、少女は背後を振り返る。

その表情は、直前までルファイに向けていたものとは明らかに異なる……思い出話に一喜一憂し、胸を弾ませていた時とは打って変わった。

——一切感情の冷え切った、濁いた無の表情だった。

## 第284話 “けもののきんか”

一つの足音だけが響く暗い通路。

通り過ぎてきたばかりの背後を振り向き、エールが無言で佇む。

じつと口を閉ざしたまま立ち尽くす彼女にルフィは気付き、話も半ばに振り向いた。

「…オイ、どうかしたか？ 腹へったのか？」

「……………別に、なんでもないよ」

平坦な声で答え、首を横に振るエール。

その表情には急に赤みが戻り、瞳に期待を滲ませてルフィに横目を向ける。

「そ……!! ………………それで、そのビビって子や、エドワードとアルフォンスとはその後、

どうなったんだい？」

「ああ……アラバスタで別れた。ビビはアラバスタが大好きだし………エドもア  
ルも体ポロポロだったからなあ」

何か誤魔化すように咳払いをする彼女を訝しむ事もなく、ルフィは請われた話の続き  
を楽しそうに、そして懐かしそうに語り出す。

「でも、あいつらとはまたいつかきつと会える。いつになんのかはわかんねエけど、絶対

にまた会いに行くんだ!!?」

「…スゴイねエ……離れてても、会えなくても……そうやって信じられるなんて」  
「仲間なら当たり前だ!!! しししし!!?」

羨望の眼差しを向けられ、ルフイは誇らしげに笑う。

と同時に、今は遠く離れている仲間の顔が強く浮かんできたのか、はーと深い溜息をこぼした。

「あー、話してたらなんかまた会いたくなってきたなー。またあいつらとも冒険してエ  
な〜」

腕を組み、語るルフイは暗闇をのんびりと進む。

過ぎ去った冒険の日々を思い出しながら、今の冒険も忘れない。

「……………いいなア」

そんな青年の背中を見つめ、エールが小さく、ぼそりとこぼす。

無意識のうちの眩きだったらしく、少女ははっと目を見開くとまた咳払いをして目を逸らす。

「ほ……………!!!! ……………他にはどんな冒険をしたんだイ? どうせずっと歩いてるだけで  
ヒマだし、聞こうじゃないかい」

「ん? おー、いいぞ。次はどうすつかなー……………どの話がいつかなー」

頬を赤らめ、つんと目をそらす少女を傍らに歩かせながら、青年は首を傾げ、次なる思ひ出話の選択を始めようとして。

ふと、壁の一部に見つけたあるものを前に、少女を呼び止める。

「なアなアエール!!? あそこに描かれてるのなんだ? サルか?」

何も無い壁ばかりが続いていた道の途中に、何かが描かれていた。

もう見上げるほどに高くなつた壁のど真ん中に刻み込まれた、何かの絵。

槍と盾を持つて宙を跳ねている、人のような形をした何者か。下手くそで分かりづら  
いが、大口を開けて笑っている事はなぜか確かに思えた。

「……………あれは、神様さア」

「神イ☒」

ちらり、と振り向いたエールが短く告げる。訝しげなルフィの再度の問いに、やや吐  
き捨てるような素振りで語ってみせる。

「いつもおどけて……………誰かを笑顔にする……………人々を自由に……………太陽の神様。強く  
て優しい……………解放の戦士」

「ふ〜ん……………空島の『耳たぶ』とは全然違うんだな」

「……………今じゃ誰も信じちゃいない……………知つてもいない、意味のない妄想さア。話を聞  
くだけムダ……………どうでもいい事だよ」

鼻をほじりながら、不思議な人物の絵を見上げるルフィ。話からして善者のようだが、どう見てもそんな大層な存在にはどうも思えない。

「……………ホラ、そんなのはもういいから、続きを聞かせてくれないかい？」

「ん？ おー、わかった」

なにやら妙な少女の態度に首を傾げつつ、不思議な壁画から目を逸らし、冒険を思い出す。

彼の見えないところで、少女はぼつりと、小さく呟いた。

「……………ながら、女々しいねエ。まだこんなものにすがろうとしてるのかイ」  
??

「この画廊を見てて…わかった事がいくつかある」

天井近くの壁、そこにある絵を見上げながら、エレノアが語り出す。

描かれた奇妙な壁画、ロビンでさえ読み解けない絵の数々を見上げ、険しい顔で告げる。

「ここにはこの遺跡……………この子の記憶が壁画として記録されてる。ヘタクソでまあわかりづらいけど……………この子から見た歴史がまるまる記録されてる」

「エレノア……………読めるの？ これが☒」

「ま、ルフィの絵をいつも見てるからね。なんとなく何が描かれてるかはわかるよ」

ロビンの驚きの視線に、これを誇つていいものかと複雑な気持ちになりながら頷く。まさか彼の独特の感性がここで役に立つとは、と明後日の方向の感想を抱きながら、それはそれとしてと気持ちを切り替える。

「それに何より……この絵からはうるさいくらいに『声』が聞こえてくるんだ。誰かに伝えたい……いや、聞かせたい強烈な感情がいくつも宿つてる」

乱雑に並んだ絵。その一つを見上げ、エレノアは目を細める。

彼女の見つめる先にあるのは、無数の棒と丸——ある一つの島に降り立った無数の人々の様子だ。

「——遙か昔、彼女達はこの島に流れ着いた」

——生まれ故郷を離れ、幾日幾夜も旅をし……辿り着いたこの島。

家を建て、暮らし始めた彼らだけ……猛獣に襲われ、ケガに苦しみ、病に倒れ、食料も手に入らない。

暮らしは乏しく、己一人も生き延びられない過酷な環境の中、次々に仲間が死んでいく。

脱出を考える者も大勢いたけど……天然の檻に囲まれた島はそれを許さず、また人が死んでいく。



そんな中、島に新しく住人が増えた。

翼を背中に生やした、不思議な姿をした白い女。

彼女は命を救われたお礼だと言って、あるものの作り方を島の住人に教えた。

それは、島に住む生き物の力を集めた、この世の全てを手に入れられる大きな大きな“力”の結晶だった。

それに飛びついたのが、住人達の“おおさま”だった。

“おおさま”は島に閉じ込められ、飢えと苦しみに満ちた暮らしに飽き飽きしていて、女が教えたものを誰よりも欲しがった。

“おおさま”は住人達に命じて、島中の生き物を集めさせた。

トリ、ムシ、ネコ、サカナ、トカゲ……ありとあらゆる獣を捕らえさせ、その力を集めた。

そうしてやがて……それは出来上がった。

数多の命を糧に生み出された、不思議な“きんか”。

無限の欲望を宿し、不可能を可能にする究極の力が出来上がった。

“おおさま”はたいそう喜んで、それを使って世界の全てを手に入れようとした。だけど、その野望が叶う事はなかった。

欲張りすぎた“おおさま”は、“きんか”の力を見誤った。

世界を手に入れるどころか、暴走した「力」に呑み込まれて虚無の中に消え去ってしまった。

「おおさま」がいた場所は棺になり、墓になり、誰も入る事のできない迷路が出来上がった。

やがて……「おおさま」の事を知る者は誰もいなくなり。

恐ろしい「だから」は永遠に歴史の闇に消え去ってしまったとき。

「……………ま、大体こんな感じかな」

読み解いた物語……記録を語り終え、ふうと息を吐くエレノア。

そこに、ぱちぱちと激しくやかましい、空気を読まない拍手の音が響く。

エレノアもロビンもうんざりした様子で、手を鳴らす中年の男をじとりと睨みつけた。

「素晴らしい!!! この壁画からそこまでほぼ完璧に読み解けるとは!!! 実に素晴らしい!!!」

「…なんか、あんたに言われても褒められてる感じしないからやめてほしいんだけど」

「これは失敬!!!」

エレノアに抗議され、コウガミはすぐさま賞賛を中断する。

本気で褒めていたのか、それとも馬鹿にしているのか、やはり判断しづらい胡散臭さだ。

「けもののきんか」……………わらべ歌にあつたわね」

「そしてそれこそが……………古代の王が作り出した……………いや、作り出させた兵器『コアメダル』。私達現代の錬金術師の言うところの……………『賢者の石』」

「その通り!!!」

断言され、エレノアの表情がくしゃりと歪む。

待ち受けているものの正体をはつきりと確定してしまい、嫌悪感が強まったらしい。

「……………あれを生み出そうってバカがそんな昔からいたなんてねエ」

「それだけ彼女からもたらされた知識は魅力的だったのさ!!! 何を犠牲にしても!!!」

代価にしても!!! 手に入れたくなかった!!! かつての『王』には劇薬といたほどに!!!」

心なしか、コウガミの機嫌が最初に会った時よりも上がって見える。同じものを語り合える知恵者が増えた事が嬉しいのだろうか、とんだ迷惑だ。

「そんでその『彼女』ってのが……………当時存在した天族<sup>私達</sup>ってわけね。なるほど……………」

うんうんと頷き、納得の唸り声を漏らす。

町でぶつけられた敵意の数々を思い出し、感じていた理不尽という思いがやや落ち着いていく。

「そりゃあ……あんなロクでもない代物を作らせようとする奴が、普通の人間に歓迎されるわけないよね」

ロビンは壁画の一部を、エレノアが「天族」だと判断した翼の生えた女性らしき絵を見上げ呟く。

美しく描かれて見えるが、その実はなんと恐ろしい悪意を秘めた人物だったのだろうか。

「彼女は何故そんな事を？」

「そこまではわかりかねるね!!! 私知ってるのは「王」自身に直接関わる事のみ!!! 古の悪魔の意図については何も知らない!!!」

油断ならない男の前に構えたまま問うと、コウガミは笑顔のまま首を横に振る。

それ以外の表情はないのだろうか、能力で脅されていてなお、焦りも恐怖も一切彼の顔に表れる様子がない。

「だがしかし!!! 「王」が行なった事実は、子孫に確と伝えられている!!!」  
—— 800

唐突に、コウガミは語り出す。

我慢の限界に達した、といった様子で、エレノアの読み解いた真実を補足する『真実』を怒涛の勢いで口にし始める。

「とある『罪』から故郷を追われた彼らは!!! 荒波に揉まれ!!! 暴風に翻弄され!!! 無数の海獣の凶牙から逃れ!!! 長い長い旅の果てにこの島へ辿り着いた!!! ……入れば二度と出られない、牢獄の島とも知らず!!!」

「罪……!!!」

「そうだとも!!! この島はいわば流刑島だったのだよ!!! 当時の住民は全員が!!! 誰一人望む事なく……!!! この天然の牢獄での暮らしを強いられた罪人達だったのさ!!!」

ぎん、とコウガミの目が壁画の一部に向けられる。

そこに描かれている、鳥なのか虫なのか猿なのか、よくわからない獣の数々。

大きく描かれたそれに、何体もの棒人間が武器を手に挑み、そして蹴散らされている。狩りの一部分のようだ。

「だがこの島には!!! 無数の強力な生物達が君臨していた!!! いずれも独自の進化の果てに生まれた強靱な生物達だ!!! 炎を纏い!!! 雷を生み!!! 光を放ち!!! 重力を操り!!! 水を操り!!! 個々が凄まじき能力を有した弱肉強食の島だった!!!」

「……!!!」

「そんな地獄に……!!! 非力な人間が生き残れるはずもない!!! 民は飢え!!! 次々に倒れていく!!! ……!!! だがしかし!!! そこにやってきた彼女のもたらした教えが、『王』の欲望をより強く燃え上がらせた!!!」

次に向けられる壁画、そこに描かれたものは、様子が異なっていた。先程為す術なく踏み潰されていた棒人間達が、今度は獣達を組み伏せ、踏みつけ、雄叫びをあげている。

手も足も出なかつた強靱な生物を下す、捕食者となつた様子だ。

次なる絵では、何やら奇妙な模様と獣が描かれ、その隣には円が描かれている。

何を表しているのか、ここまでの流れから容易く察する事ができる。

「生物達を捕らえ!!! その力の全てを抽出し!!! 様々な種の力を發揮する結晶に変えた

!!! それこそが………!!!」

「…コアメダル」

エレノアの答えに、コウガミの笑みがより一層深まる。

顔の半分が歯になって見えるほど、嬉しくてたまらない満足げな笑顔だ。

「なるほどね、『賢者の石』と似た気配を感じたのは………『原材料』が似たものだったからか」

「そういえばさつき……命が材料って……」

吐き捨てるようなエレノアの呟きに、ロビンが未だ聞けずにいた事を問う。

「碌でもないもの、と何度も口にしてる事から、倫理に反する何かだと察してはいるらしい。」

エレノアは深い溜息をこぼし、その答えを口にした。

「『賢者の石』の材料は………生きた人間だよ。複数の人間の命を肉体から剥ぎ取って結晶状に固めたもの……それが賢者の石さ」

息を呑む声がある。目を見開いたロビンは今一度壁面を、集めた生物達から何かを作り出している絵を見上げ、嫌悪で眉間に深いしわを刻んだ。

「……!! ヒドい事するわ……」

「今更な話さ……『正義』を語って大量虐殺を行う軍もいれば、地位惜しさに娘を犠牲にする父親も、人類の発展を口実に島一つ滅ぼす科学者だっている………自分の欲の為なら獣以下の存在に成り果てるのが人間だよ」

二人にとって、一味の全員にとって身に沁みる話だ。

他人の生死も厭わない性根の腐った人間がいて、その被害に遭った事も、その所業を目の当たりにした事もある。

嫌悪したところで、そういう人間は必ずどこかにいるのだ。

「まア……私もある意味人の事は言えないけどね」

自身の鋼の足をちらりと見下ろし、エレノアは独言る。

愛した男の為とはいえ、親から貰った体に消えない傷を刻んでしまったのだから、と自嘲気味に溜息をつく。

「……それが、この島で天族が『悪魔』と嫌悪される理由……」

「で？ 結局その『よくばりおおさま』の最期は、世界を獲る事もなく自滅に終わったと………だけどその結果、ロクでもない置き土産を遺していったわけだ」

話を切り替えようと、エレノアはコウガミに視線を移して告げる。

腰に手を当て、もうこの世にいないかつての『王』の代わりに愚痴るように、目の前の男を見据える。

ある一つの、まだ解決していない疑問を抱きながら。

「『王』の愚かな行いの結果生まれた『コアメダル』………この遺跡を動かす文字通りの核。<sup>コア</sup> だけどわからないのは………それがなんで使い手を失ってなお動いているのかだ」

コウガミの表情は変わらない。ただじつと動かず、エレノアを見つめ続ける。

まるで、それこそが本当に待っていた問いであるかのように。

「人造人間<sup>ホムンクルス</sup>だつて、それを使う人間がいて初めて威力を発揮する………使い手がいないやただの不気味な宝石だ。それが勝手に動く道理つて何？」

「そもそも彼らは………何なの？」

この状況の全てを解き明かしうる根本的な疑問を、嘘偽りは許さないという確固たる意志を以って問いたただす。



しばらくの間黙り込んでいたコウガミは、唐突にかつと目を見開き、大きく口を開いた。

「そうだと!! 　ただ生物の命を凝縮しただけでは………コアメダルは未完成!!」

「何……?」

「君も言っただろう!!? 　人間は己の欲望の為なら何でもすると!! 　その通り!! 　欲望こ

そがカギなのだよ!!! “賢者の石”の創造はあくまでできつけに過ぎない!!!」

謎の発言に、理解ができなかったエレノアがさらに問い詰めようとして、気付く。

何かが近付いている。

意志を持った何かが、遺跡の中心から飛び出し向かってくる気配が、エレノアの本能に伝わってくる。

「コアメダルは7つの属性、7種の生物のカテゴリごとに10枚ずつ作られた!! 　その『10』という数字から1枚を除き、『9』という欠けた数字にした!! 　——— する

とどうなると思う!!」

コウガミが語る声を背後に、エレノアがぱつと背後に振り向き、釣られてロビンも視線を向ける。

すると、暗闇の中から無数の鈍色の欠片が、塊となって宙を進み向かってくる光景が、二人の視界に映る。

「欠けた部分を補いたい、『足りないが故に満たしたい』という意志が生まれる!!! 赤子が初めに『欲しい』と泣いて求めるように!!! 自ら何かを求める存在が産声をあげる!!!」  
 じゃらじゃらと音を立て、鈍色の欠片は……無数の硬貨はエレノア達の前に降り立ち、一つの塊に変じていく。

エレノア達だけではない、他の迷宮の三つの箇所、仲間達がいる場所にも、硬貨の塊が降り立ち形を成していく。

「そうして生まれた意志が!!! 創造の力を持つ存在として誕生した!!! 己の欲望のまま!!! 世界の全てを欲する怪物達が!!! この世界の全てを食らい尽くさんと自ら動き出した!!!」

エレノア達の前に現れたのは、灰色の異形だった。

象の顔に犀の如き分厚い鎧、大猿ゴリラのように厳つい籠手に太い足という、重量系の生物を混ぜ合わせたような二足歩行の怪物。

ずん、と重い音を立てて目の前に現れたその異形を前に、エレノアとロビンは絶句し、思わず立ち尽くしていた。

「な……?」

「これは……!!」

「君達の友人…… “強欲” の名を持つ者にあやかり、私は彼らをこう呼ぼう!!!」

驚愕に声も上げられずにいる二人をよそに、コウガミはまるで変わらない調子のまま語り続ける。

目の前にいるこれこそが、自分の探し求めていた存在であるかのように。

「<sup>G r e e d s</sup>グリーズ」と!!!」





「ちよつ…危っ!!? アブアブ!!? 危なアっ!!? ちよつとちよつと何なんですかアナ  
 タさつきから一体イ!!!」

連続で振るわれる無数の爪を、並び立ったゾロとブルックが受け止め弾く。

素早く多い、雨霰のごとく向かってくる刃。受け止めるだけで精一杯で、攻撃に転じる事ができない。

無数の火花を散らす剣戟の中、一瞬間の間についてゾロが前に出る。

「『鬼』!!! 『斬り』!!!」

「『!!!』」

二刀を左右に開き、怪人の両腕を弾く。体勢を崩した敵の顔面に向け、ブルックが渾身の刺突を放つ。

だが、その一撃は届かなかった。

蛇のように蠢いた鬣が、和道一文字を軽々と受け止めていた。

「ヨホッ!!? ちよ…そんなのアリですか!!?」

慌てふためくブルックに、怪人はやはり何も答ええない。

武器を止められ、無防備を晒した骸骨紳士の胴目掛け、両爪を振るおうとし。

しかし、寸前で両者の間に割って入ったゾロがそれを受け止めた。

「……何だ、てめエは……!!?」

「……………」

「何者だつて聞いてんだよ!!!」

左右から再び迫る両爪を両手の二刀で受け、ゾロは焦燥を滲ませながら問う。無言のまま何も答えない怪人に、こめかみを冷や汗が伝い出す。

「黒剣三刀流……!!?」  
サイクル  
 「犀回!!!」

ゾロは怪人を剛力で押し返し、刃を黒く染めながら、続け様に暴風を纏った強烈な一撃を放つ。

直撃した怪人は一瞬宙を舞うが、すぐに何事もなかったかのように地面に降り立つ。その様はまさに猫そのもののしなやかさだ。

「硬エな……コイツ」

思わずといった様子で呟くゾロ。覚えたてとはいえ、覇気を纏った一撃を受けて平然としている敵の厄介さに、それ以上の言葉が出てこない。

どう戦うべきか、敵の一挙一投足を見張りつつ、再び構えた時だった。

「……フハッ」

怪人が突如、笑い声を漏らす。

それまで無言だった敵の変化に、ゾロ達の警戒心が高まる。

「フフ……フフ……フフ……フフは、ふふフハハハハ……!!!」

「な、何……!?? 何を笑ってんのよ……!??」

敵の不気味な異変に困惑したナミが、強気に問いただした直後。

かつ、と怪人の鬣が発光し、同時に強烈な熱波が放たれた。

光は遺跡内部を遠くまで照らし出し、そしてゾロ達の前身に熱波が食らいつく。

「オアアアア!!!」

「アア——ッ!!! 目が……!!! 目がアア~~~~ッ!!!」

至近距離でまさかの攻撃を受け、吹き飛ばされたゾロが苦悶の声をあげ、ブルックもその場を駆け回る。

ナミも光に目をやられ、しかし辛うじて遺跡の物陰に倒れ込む。

「ゾロ!!! うっ……なに、この強烈な光と熱……!!!」

「熱っつ……!!? 熱っつア!!! 燃えます!!? 私燃えちやいますっ!!! あ、私もうすで

に骨だけでした」

痛む目に苦しみながら、ナミは遺跡内を照らす光を睨み、呻く。

光に照らされた壁や天井がじゅうじゅうと音を立てる様に、その危険さを改めて思い

知る。

「ハハハハ……アハハハハハハ!!!」

苦しむ三人の姿を愉しむように。



猫の怪人はただひたすらに、子供のような笑い声を上げ続けていた。

「「おわ~~~~~つ!!」」

男三人のあげる悲鳴の直後、どつぱあんと大量の水飛沫が飛び散る。

冷たく思い激流を背中に叩きつけられ、ずぶ濡れになったウソツプ達は地面を転がり、次いで激流の発生源を振り返り目を剥いた。

「何っなんだあのバケモンはア!!?」

「いい加減にしてくれよ!!」

叫ぶフランキーとウソツプの睨む先で、それは啜う。

鯨の頭に蛸足の肩掛、鰻のように艶やかで細身の体を持つ、女性の人影を持った異形。こつこつと靴音を響かせながら、それはフランキー達に近付いてくる。

「……………!! オイ、チョッパ、フランキー……!! コイツ……………今までのヤツと違うぞ」

「…フフ」

冷や汗を垂らし、身構えるウソツプ。

魚の怪人は彼らのその様子を嘲笑うように微笑みをこぼすと、唐突に掌を上にして掲げる。



せる。慌てふためく青年に、怪人は笑いながら片手を掲げる。

「フフフ……ホホホホ!!!」

「ナメンじゃねエ魚女!!!」ストロング!!!」右!!!」

窮地に陥った弟分のため、背後に回り込んだフランキーが右拳を振りかぶる。

鎖で繋がれた右拳が勢いよく発射され、鋼鉄の一撃が怪人に直撃する。

だがその瞬間、怪人は一瞬にして水に変わり、無数の水飛沫に変じて拳を擦り抜けてしまった。

「えエ……!!?」

目を剥き叫ぶフランキー。その前で、飛び散った水が集まり元の異形の女性の姿を取り戻す。

動揺する彼らを見下ろし、怪人は悠々と頭上を漂ってみせる。

「何だア……今のは!!!」今コイツ……体が水になってなかったか!!!」

「フフフ……フフツ……!!!」アハハハハハハハ!!!」

呆然と敵を見上げる事しかできない男達の前で、怪人は激しく嗤う。

次の瞬間、怪人は自身を再び飛沫に変え、そして自らの体積を変え、大波となってウソップ達に襲いかかった。

「ギャ……ッ!!!」津波……っ!!!」

「どうなってんだコイツア……ぶわアア〜!!?」

考える間も、騒ぐ暇も与えず。

逃げ場のない通路を満たした激流が、男達を押し流し呑み込んでいった。

【ドリルアーム!】

「イよいしょオ!!」

右腕に備えた兵器を構え、気の抜けた掛け声と共に振るう。

目の前の緑色の異形、何種類もの虫の特徴を備えた怪人の無防備な胸に鋭い一撃が食らいつき、火花が散る。

だが、強烈で危険なその一撃を受けてなお、怪人は微塵も体勢を崩さない。

「は……!!? ン……な……!!? 硬すぎんだろコイツ!!?」

焦りを覚えた伊達マルが幾度も兵器を突き出すも、これまでの敵のように硬貨を吐き出さず、それどころか傷一つつかない。

やがて苛立ちでも覚えたのか、怪人の方が伊達マルに片腕を振るい、殴り飛ばしてみせた。

「ぐはアッ?!」

「伊達マルさん!!!」

倒れた伊達マルを案じながら、ゴトーとサトナカがきつと敵を睨み、銃の引き金を引く。

無数の光弾が放たれ、炸裂するが、怪人はそれでも一步も引かず、それどころか一步ずつ近付いてくる。

「なんだこの硬さは……ここまで効かないはずがあるか……!!?」

「どけ、てめえら!!!」

徐々に迫る敵の姿に、ゴトーのこめかみを汗が伝う。

彼らの前に躍り出たサンジが、両足に「覇氣」を込めながら、怪人に頭上から飛びかかる。

「首肉!!! 肩肉!!! 背肉!!! 鞍下肉!!! 胸肉!!! 腿肉!!!」

次々に決まる、強烈な蹴撃の数々。武装し、威力も段違いとなった一撃を何度も容赦無く急所に叩き込み、怪人を押し返す。

「醸成・羊肉シユート!!!」

最後に渾身の連撃を胸の中心に食らわせ、重く硬い体を吹き飛ばす。

まるで雷でも鳴ったかのような轟きを響かせ、虫の怪人が暗闇の宙を舞う。

だが、飛んだのは大した距離ではなく、すぐさま降り立つと、平然とした様子で元の仁王立ちに戻ってしまった。

「オイオイ今のも効いてないっぼいんだが……!?？」

「貴様何を手加減している!!？」

「………バカ、おれが食材相手に手エ抜く三流料理人とも思ってたのか」

後ろの男達からの抗議に、サンジは振り向いて怒鳴り返す余裕もない。

視線を逸らすだけで、未だ膝をつかない目の前の敵に首を奪られる、そんな予感がしていた。

「硬エし…重エ…!!! それに何よりも…!!! コイツのこの気配は…!!!」

覇気を纏っていないければ、負傷していたのは自分の方だった。

前回戦った『七武海』にも負けずとも劣らない異様な硬さに、サンジがぎりつと歯を食い縛ったその時だった。

「………だ………せ………!!!」

不意に、目の前の虫の異形が声を漏らす。

ぎちぎちと甲殻の鎧を鳴らし、頭部から生えた鋏形虫の牙を軋ませ、まるでサンジ達が見えていないかのように、憎悪の声を漏らす。

次の瞬間、怪人の目が光り、牙から緑の雷が激しく迸った。

「おれをそこから出せエエエ………!!!」

「メズール……………メズール……………!!!」

巨体を引きずり、怪人が何やら眩く。

踏み出した足が遺跡の床を砕き、跡を刻みつけ、亀裂が大きく広がっていく。

すると不意に、怪人は両腕を大きく振り回し、喚き始める。

「メズウ……………ルウ……………!!!」

幼い子供の癩癩のように、意味のわからない声を上げる灰色の怪人。

すると突如、彼を中心に何かが発せられ、周囲の瓦礫や石飛礫が木の葉のように巻き

上げられ出した。

「……………?!? 重力を…操っているの……………!!!?」

「……………!!! ロビン!!! 気をつけて!!!」

身の丈をも超える塊が宙に浮く様を、物理現象を大きく無視したその光景を目の当た

りにし、絶句するロビン。

同じく言葉を失っていたエレノアは、ある事に気付きはつと我に返る。

「コイツの中から……………『賢者の石』の……………?!? 『コアメダル』の気配がする!!!」

「メズ……………ルウ……………!!!」

「ふぎやあああつ!!!」

エレノアが叫んだ直後、灰色の怪人が片腕を地面に叩きつける。

それに応じるように、巨大な瓦礫が目前に飛来し、二人で慌てて左右に分かれて逃れる。

怪人の大暴れにより、壁画の廊が見るも無残な姿に変わり果てていく。

「壁画が……………!!!」

「おい會長!!! あれは一体何?!? 説明しろ!!!」

物陰に身を潜めながら、先にどこかに身を潜めたコウガミに向けて吠える。

瓦礫が宙を舞い、砂塵が吹き荒れ、轟音が鳴り響く。そんな中で中年の男の姿は全く見当たらないが、声だけは妙に明瞭に耳元に届いた。

「先程説明したはずだよ!!! 一枚を失ったコアメダルが意志を持った存在…… グリーズ!!!! 彼はその一体さ!!!!」

危険な状況でありながら、コウガミの声に恐怖も焦りもない。

ようやく見つけた宝物を前にした子供のようにはしゃいだ声で、実に誇らしげにエレノア達に語って聞かせる。

苛立つエレノアだが、聞き捨てならない情報に思わずまた叫ぶ。

「ちよつと待てエ!!! グリーズってこの遺跡の事じゃなかったの!!!」

「これも先程言ったのだがね……!!! コアメダルは7種作られた!!! その中の5種がそれぞれ1枚ずつ除かれ!!! 意志を得た!!!」



地響き、揺れる暴力の嵐の中、コウガミの声が響く。

飛来する瓦礫を躲し、粉塵にむせながら、エレノアとロビンは彼の声を必死に聞き続ける。

「―――群れたる虫の王」!!! 「灼き斬る猫の王」!!! 「堅く潰す重獣の王」!!!  
 溶け泳ぐ魚の王」!!! ……そして「燃え舞う鳥の王」!!! それぞれあらゆる生物の能力を有した獣の王達!!! 強欲の下に誕生した5体の怪物!!! 彼らを総称して私はグリーズと名を付けたのさ!!!」

「……こんな怪物が他に……4体も……!!?! ……なら、その棺の封印が破られて、彼らグリーズが今の世に再び動き始めたというわけ……?!?!」

ただそこにいるだけで、死をもたらすような最悪の存在が目の前に。それもただ一体だけではないと知り、ロビンの顔から血の気が引く。

そんな中、別の物陰に身を潜めたエレノアは、ある違和感を抱き、眉間にしわを寄せらる。

「じゃあこの遺跡は……!!?! こっちは何だっただんだ!!?!」

鳥でも虫でも魚でもない、未だ謎の巨大すぎる迷宮。勿体ぶったコウガミの説明では、その正体を察する事など不可能でしかない。

そんな抗議に応えるように、コウガミは見えないところで笑みを深める。

「君が読み解いた通り!!! 力を求め全てのコアメダルを取り込もうとした『王』は暴走し!!! コアメダルと島の一部をも呑み込んで自らが生み出した虚無に飲まれた!!! 王の亡骸は棺となり!!! この迷宮が出来上がった!!!」

「メズ——ル……!!! メズ——ルウ……!!!」

身をひそめるしかない人間達には一切興味がなげ様子で、一人何かを探し、暴れる灰色の怪人・ガメル。彷徨うように、廊の中で両腕を振り回し続ける。

「メズ………」

べきべきと床を踏み砕き、破壊を続ける彼は——

どごん!

と、突如両側の壁から生えてきた岩の塊に挟まれ、押し潰された。

「ウウウアアアア!!! メズ~~~~ル~~~~!!!」

「……? 何アレ………」

巨石に挟まれ、悲鳴をあげるガメル。

あれだけ大暴れし、怪力と能力を以って破壊の限りを尽くしていた怪人が、巨石に何度も何度も潰され、全身を砕かれている。

まるで、巨大な顎に無慈悲に咀嚼されているかのような光景だ。

「遺跡に……食われてる……!!!?」

「なぜ!!!」王が虚無に消えてなおこの迷宮は動いているのか?!? 外の者を拒み排除し続けるのか!!! ——その答えを!!! 私はこう考える!!!」

敵とはいえ、思わず吐き気を催すエレノアに向け、コウガミがまた語り出す。怪人の泣き叫ぶ声を背景に、強烈に光る目を虚空に向けて笑い続ける。

「王」の意志はまだここにある!!! この遺跡そのものに宿り!!! 800年経った今なお!!! 手にした究極の力を逃すまいと…欲望の怪物達を自らの中に捕らえ続けている!!!」

「……!!? まさか…」

コウガミが何を言わんとしているのか、如何なる真実を語ろうとしているのか。察してしまったロビンとエレノアは、ごくりと大きく息を呑む。

黙り込んだ彼女達に向けて、悍まじき推測が発表された。

「すなわちこの遺跡は……!!! 800年前の「古の王」そのものなのさア!!!」

## 第286話 “汝何を欲す”

——あの日、私達は全部を失った。

何もかもを奪われて、荒波の中に放り出された。

『最悪だ………なんだよこの島、何にもねエじやねエか』

『食い物もねエ……家もねエ……!!? こんなところに住めやしねエ……!!?』

『どうすんだよ……どうすんだよオ!!?』

——壊れても、継られても。

あの時の私には、何もできなかった。

『ダメだ!!! 森にや入れねエ!!! あそこは猛獣でいっぱいだ!!!』

『海も川も駄目だ!!! 近づいただけで危ねエ!!!』

『どいつもこいつもバケモノばかりだ!!? 行ったらこつちが食われちまう!!!』

——島は、私達を受け入れなかった。

私達のどんな努力も嘲笑うみたいに、牙と爪と死を向けてきた。

『今日は5人死んだ………みんな飢え死にしちまった』

『こつちは7人死んだ……森のバケモノ共にみんなやられちまった!!?』

『そんな…それじゃ収穫は?!?』

『何もねエ…!!? 畜生……犬死じゃねエか!!!』

『いつまでこんなのが続くんだよオ……!!?』

—— みんなみんな、苦しんでいた。

そしてみんな、怒り、憎んでいた。

『お前の所為だ……お前の所為だぞ!!!』

『お前が使えねエからこんな被害が出たんだ!!!』

『黙ってねエでなんとか言えよ!!?』

『なんとかするのがお前の役目だろ!!! 突っ立ってねエでどうにかしろよ!!!』

—— 怒鳴られても掴みかからられても、何も言えなかった。

どうすればいいのか、まるつきりわからなかった。

『来るなよ役立たず!!! お前がいるとみんなが迷惑なんだよ!!?』

『消えろ!!? どっかいつちまえ!!!』

『しねー!!!』

—— 罵られても、嫌われても、何を言われても。

何も言えない私は、何も言えなかった。

だから、全てを渡した。

『こ……これ……くれるのか……?!?』

『あ……あア………助かるよ』

『これでしばらくなんとかなる………天の恵みだ、神の慈悲だア!!!』

『あんたはおれ達の救世主だぜ!!!』

『助かったア!!!』

—— みんなが欲していたから、私は与えた。

みんなが望んでいたから、私がやった。

そうしたら、みんなが私を頼るようになった。

みんなが私を讃えるようになった。

だけど、何も満たされなかった。

満たされるどころか、心はどんどん渴いていった。

『どうか………どうかお助け下さい!!!』

『おれ達にやあんたしじやいねエんだよ!!?』

『なア頼むよ………見捨てないでくれ!!? もうあんたを頼るしかないんだよ!!!』

—— みんなが求めている。望んでる。欲しがってる。

だからずっと、与えてきた。

そうしないと、無くなっちゃうから。

『どうか……お願いだよ!! 我らがおおさま!!』

『おおさま!!』

『王よ!!?』

『王様よオ!!』

『おおさま~~~~!!』

——与えて、あげて、渡して、ずっとずっと施し続けて。

そうしたら……そのうち、全部が無くなった。

一体どこから、間違っていたんだろう。

「……………」

沈みかけていた意識が浮上する。

まっすぐな道をただ歩き続けていたせいだろうか、半ば微睡んでいたらしい。

隣で楽しげに話すルフィを横目に見やり、エールはふと立ち止まる。

「んでよオ、そしたらロビンが割り箸を……………」

「……………ルフィ、もういいよ」

「え〜〜!!? ここからがホントに面白くなつてくんのに〜〜」

笑い話を途中で遮られ、ぎよつと目を剥きルフィはエールに抗議する。

一番の盛り上がり邪魔され、その上冷めた目を向けられ、悲しみが心の中を占めた。「……………思い返してみると、そこまで興味があつたわけじゃなかったから。もういいよ、話さなくて」

ふい、と視線を逸らし、何も無い壁を見やるエール。

ルフィはふと、その横顔に違和感を覚え、冷めた表情を凝視する。

「うん……………いい暇つぶしにはなつたかな、それなりに楽しめたよ。たまにはいいかもね、こういうくだらない話を聞いてあげるのも」

感情の失せた抑揚のない声で告げ、エールは歩き出し、ルフィを追い越す。

やがて、立ち止まったまま困惑の目を向けるルフィに振り向き、急かすように溜息をついた。

「…どうしたんだい、先へ進むんだらう？」

「ん？ ……おう」

何とも言い難い気分のまま、ルフィはエールの後を追って歩き出す。

眉間にしわを寄せつつ、ルフィはいつの間にか高くなってきた天井を見上げた。

「なんか急に広くなってきたな……………今どの辺で？ もうそろそろゴールについてもおかしくないと思うんだけどな……………」



「……そうだねエ」

途中まであれだけ続いていた罨の数々も、今や随分大人しい。ルフィもただ長い道を歩き続けるだけの冒険に飽きたのか、歩き方も適当だ。

「………なー、エール」

無言で歩き続けるエールの背に向けて、不意にルフィが問いかける。胡乱げに振り向いたエールに、渋い表情で首を傾げてみせる。

「おめーよ、何でさつきから我慢ばつかしてんだ？」

「………何の話だい」

「だっておめエ、わざと楽しくなさそうにしてんだろ。カイチョーのおっさんとこのスゲー機械見てた時も、おれの冒険聞いてた時も、興味あるくせにないフリしてんじやねーか」

ぴくつ、とエールの方が震える。ほんの僅かに息を呑む声も聞こえる。

様子が変わった、一瞬強張った空気に臆する事なく、ルフィはじつと目の前の少女を見つめた。

「…そんなつもりはまったくないよ」

「あるだろ。見てておれ、なんかモヤモヤしてたぞ」

「………何も変じゃないでしょ。ふっと興味がなくなっただけだよ」

「ウソつけ、本当はもつとおれの話聞きてエんだろ！　まだまだたくさんあるんだぞくくおれ達の冒険!!?　おれも話し足りねエ!!?」

背を向けたまま振り向かないエールに、ルフィは笑う。

ここまでのいろんな思い出話をしながら歩いてきたが、冒険の経験はまだまだ話し足りない。一つ一つが濃くて数時間ではとても足りない。

「思い出したらウズウズしてきた……!!!　この先ももつともつとすぐエワクワクが待ってんだろうなア……!!?　どんなお宝が待ってんだろうな!!!」

体の奥から湧き上がる衝動を抑える術など、彼は知らない。

心突き動かされるまま、立ち尽くすエールを追い越して走り出す。

「よくくし!!!　気合い入れていくぞオク!!!」

「……………ねエ、ルフィ」

「ん?」

拳を突き上げ、奥を指すルフィの背に、エールが語りかける。

俯き、前髪で表情を隠した彼女は、きよとんと目を丸くするルフィを、どこか虚ろに見える目で見つめ、問う。

「そこまでして宝が欲しいの……?」

問いかける声は、冷え切っていた。呆れ、悲しみ、苛立ち、あらゆる負の感情が混ぜ

込まれたような、重く冷たい声だ。

異様な雰囲気を全身から放ち、エールはルフィだけを見つめて問い続ける。

「この先に待つてるのは……人を壊すものだよ。人の欲望を掻き立てて、理性を壊して……最後は全部をめちゃくちゃにする……悪魔の宝だよ」

「ん？　なんだ、おめエこの先にあるもの知ってんのか？」

「そんなに『力』がほしいかい……？　もう二度と外には出られやしないのに……ここで一生を終えるしかないのに……そんなものを得てどうするんだイ」

ルフィの声に、応えもしない。

子供のようににはしゃぐ青年を見つめたまま、淡々と語り続ける。

「『宝』に何の意味があるんだイ？　欲して……手に入れて何の意味があるんだイ？　この島じゃ何の役にも立たないものを持って……何になるんだイ」

しん、と静かな暗闇の中、少女の声が響く。

どこかから流れてきた水滴がぼた、ぼたと水溜りに落ちる音が響き、言い表しがたい不気味さに苛まれる。

いつしかエールは、ルフィに向けて殺気に似た威圧感を放っていた。

「……………にあるのは……」

「だー!!! やめろやめろ!!?　そつから先は何も言うな!!!　つまんねエ!!!」

少女が告げようとした瞬間、ルフィは目を吊り上げ、吠える。

エールの異様な雰囲気霧散させるほどの勢いで怒りを露わにした。

「おれはなアー……お宝そのものはどうでもいいんだよ。ナミとかは何が何でも欲しがるかもだけど、おれは宝を見つけられたらそれでいい!!?　そこまでの冒険が一番楽しみなんだ。先に答えなんか言うな!!!」

「……冒険したいから、命をかけるの……?」

「そっだ!!?　おれが欲しいのは——自由だ!!!」

困惑の目で見つめるエールに、ルフィは自慢げに語る。大きく胸を張り、堂々と仁王立ちして、何一つ奥した様子を見せずに告げる。

「おれはいろんな島に行つて、いろんな冒険をして!!!　いろんなメシ食つて!!!　……!!?　いろんな奴に会いてエ!!!　だからおれは海へ出たんだ!!!　おれは——」

彼のその姿に、エールははつと言葉をなくす。

己の眼に映る青年の姿が、とある一人の姿と重なった気がして、時が止まったような錯覚に陥る。

「おれが持つてる命全部で、精いっぱい旅して!!!　精いっぱい生きてエ!!!　それが海賊で、冒険だ!!!　楽しいぞオ〜〜!!!」

にかっ、と全身で楽しさと期待を表し、ルフィは笑う。

新たな仲間が心に宿す闇。それを本能で感じ取ったのか、それを晴らすように全身全霊で語って聞かせる。

「……せいっぱい…生きる」

無意識に、エールはルフィの言葉を反芻する。

虚ろだった目に、仄かな光が灯りかけたその時。

「……!と凄まじい轟音が鳴り始め、それまで単なる広く真っ直ぐな道でしかなかった迷宮が、いくつもの罠と仕掛けで溢れ始めた。

「うおおおおお!!? なんだ!!? なんか急にめちゃくちや罠がすげエ事になったぞ!!!

何でだ!!?」

「……中心部が近いのさア。最後の罠が、私達を入れさせないと発動したんだろうねエ」

「そうなのか!!? じゃあコレ “よくばり” の挑戦か!!? とうとう本気になりやがったんだな!!?」

何人も通すものか、と言わんばかりに蠢く仕掛けの数々に、ルフィは驚きながらもやる気に燃える。

ばしつ、と拳を鳴らし鼻息を吹くルフィ。

その隣を、エールがすたすたと横切り追い抜いていく。

「ん？ エール？」

「……………ねエ、ルファイ!!？」

くるり、とエールがルファイに振り向く。

その顔には、彼女がこれまで見せた事のない——明るい満面の笑顔が広がっていた。

「競争しないかい!!？」

年齢相応の、普通の少女と変わらない楽しげな笑顔。

突然の変化に、ルファイは一瞬あつげにとられながらも、すぐに彼女と同じく満面の笑みを浮かべ、走り出した。

「しししし…!!？」 おウ!!!

だつ、と青年と少女が同時に走り出す。

目の前の幾つもの罨めがけて、一切怯える事なく挑みかかる。

段差を飛び越え、壁を伝い、穴に落ち、壁に邪魔され、岩玉に追われ。

凶悪な罨の数々に襲われながら、二人は子供のような笑顔のまま、終着点を目指して突き進む。

楽しげな笑い声を響かせながら。

ついに、全ての罨を制覇した先の空間に、ルファイは辿り着いた。

「だ——!!!」

最後の罫を飛び越え、これまでで最も広い空間に飛び込むルフィ。

丸く、室内なのにやたらと明るい不思議な空間。どこかの宮殿の玉座の間のような荘厳さを感じる空間にルフィは立っていた。

「すげエ……着いたぞ……!!! 絶対そうだ!!! ここが迷宮のゴールだア……!!!」

迷宮を制した喜びで、思わず勝鬨をあげる。

両拳を天に突き上げ叫びながら、がばつと背後に勢いよく振り向く。

「おい見ろお前らア!!! すげエぞ……?!? なんかわかんねエけどスツゲエトコに来た……!!! つてまだ誰も着いてねエのかよ!!!」

つい、後ろに仲間達がいる気になっていたルフィは、しーんと静まり返った空間の中でがくりと肩を落とす。喜びの気分も半減だ。

「あいつらまだ迷ってんのかなア……しよーがねエ奴らだな〜」

呆れた表情で帽子に触れ、溜息をこぼす。

だが、ルフィが飛び出した入り口から、エールがゆつくりと向かってくる姿を見て、にとまた嬉しそうに笑う。

「まあいいや!!! おれが迷路クリア一番乗りだ!!? やったア……!!!」

「……おめでどう、ルフィ」

「あ!!? 見ろエール!!? おれの勝ちだぞ!!? しししし」

ひとしきり喜びを露わにした後、ルフィは終着点の空間を見渡す。

明るくひらけた場所だが、何も無い。空間の中央に台座があるだけで、殺風景な〃無〃の部屋だ。

「……」が〃よくばり〃のいるところか? 何もねエなア……」

「……やっぱり金銀財宝でも一緒に眠ってると思っただかのかイ?」

「んー? 面白かったからいい!!? でもホントに何もねエなア……でも昼寝するにはちようどいいかもなく!!? ………………ん?」

きよろきよろと辺りを見渡し、ルフィはふと気づく。

中央に置かれた台座。段々になったその上に、箱状のものが一つだけぽつんと置かれている。

見るからに古い、ぼろぼろになった石でできた棺か何かのようだ。

「おい、アレって棺桶だよな? 〃よくばり〃のやつ、あそこにいるのか?」

「……ああ、そうだよ」

「そうか……それじゃあ、まア……ごメーワクをおいのりします。ん? ごメンドウだっけ?」

「……冥福をお祈りします、かねエ」



「そう、それだ」

ぺこり、と棺に向けて頭を下げ、妙に礼儀正しいのか無礼なのかわからない挨拶を行うルフィ。

沈黙する棺を見上げ、本心から残念そうに肩を落とす。

「生きてたら礼が言いたかったんだけどなあ……面白かったって!!? 死んでたら伝わんねエよなあ。残念だな〜〜」

「…あんなたって奴は、本当に…」

800年も昔の人間に対して、生きていたらなどと呟く彼に、エールはやれやれと肩をすくめる。ほんの少し、その口元を嬉しそうに綻ばせながら。

「ん?」

棺を見上げていたルフィは、それに気付く。

棺から、じやらじやらと音が聞こえる。ルフィがそれに気付いた次の瞬間、ぶわつと鈍色の欠片が宙に舞い上がった。

「!!? エール!!!」

ルフィは咄嗟にエールの前に出て彼女を庇う。

彼らの見上げる先で、棺に開いた小さな亀裂から漏れ出た欲望の硬貨が、霧のように蠢き形を成していく。

「……僕は、どい」

現れたのは、赤い鳥の怪人だった。

鷹の顔に孔雀の羽毛の衣装、荒鷲の爪を備えた人型の異形。頭部の右半分が剥き出しで、紫の飴のような皮膚が露わになった怪物。

赤と七色に光る翼を羽ばたかせ、その怪人は虚ろに呟いた。

「…アイツ、今までのやつとちよつと違うな。………強エ」

「どい……？ どいなの………僕はどい!!」

警戒し身構えるルフイの前で、怪人が背に生やした七色の翼を羽ばたかせる。

すると、ぼつ、と無数の火が周囲に浮かび上がり。

次の瞬間、炎が突如宙を飛び、ルフイの目の前で爆発を起こした。

「あんにやろう………!! いきなり出てきていい度胸だ!!? エール!!? おめー危

ねエからちよつと下がってろ!!」

「………」

「ししし!!? あの紫のヨロイも見てエけど、お前がイヤなら仕方ねエ!!? すぐに

ブツ飛ばしてやるから待ってろよ!!」

無い袖をまくる仕草をして、前に出るルフイ。

無言で何も答えないエールに気付く事なく、視線を向けてくる赤い鳥の怪人を睨み、

拳を地面に叩きつける。

「……………!!! いた…僕だ!!?」

何かを見つけた様子で目を光らせ、動き出す鳥の怪人。

無数の羽を辺りに舞わせ、一步を踏み出す。

「何が僕だ!!! おめエなんかおれ知らねエぞ!!!」

「僕を返せ…返せエエエ!!!」

「何だかわかんねエけどやる気だな…!!? かかってこい!!! ゴギア 2…」  
セカン

相手が何かはわからないが、向かってくるなら戦い仕留めるのみ。

不気味で強力な敵を前に、戦闘態勢に入ろうとした…その時。

「失せろ」

ぼつりと、小さな眩きがその場に響き。

宙へ飛び立った赤い怪人が、真下から突き出た石柱に貫かれ、轟音と共に天井に叩きつけられた。

「……………ん?!? んん☒」

岩に潰され、消え去った敵を凝視し、ルフィは呆然とした声を漏らす。

その視線はやがて、自分の背後で何かを呟いた……怪人に向けて手をかざす少女に向けてられていく。

「……………今の……………お前がやったのか？ ………………何やったんだ？」

その問いに答える事なく、エールはざり、ざり、と足音を響かせ、ルフィの隣を追い抜き前に出る。

目を丸くして棒立ちになるルフィに、ふつ、と。

全てに興味を無くしたような、冷めた溜息をこぼして語り出す。

「……………まで付き合って貰って、名乗らないのは義理にかけるかねエ……」

棺を支える祭壇の前に立ち、エールは振り向く。

一切の感情が消え失せたような無の表情を向け、ルフィを見つめ、告げる。

「……………私が、*王*だよ」

その声が、遺跡の最奥に響く。

絶句するルフィの目の前で、エールは気怠げにその名を——自身の真の名を口にした。

「私が……………この島に800年前に暮らしていた、古の王。『よくばりおおさま』——ヒノ・エールさま」

## 第287話 “我こそが王”

轟々と渦巻く激流。鳴り響く水音。

通路の下半分を埋め尽くすその上に、ざばつと巨石が浮き上がる。

「ぶはアア!!!」

「たす……たす……助かつは……」

「し死ぬがどおぼっだア~~~~~!!?」

その上で横たわり、三人の男達が白目を剥いて荒く息をつく。

泳げるといつても、縦横無尽に押し寄せる水圧を前にして、全員危うく溺死する寸前であった。

「何だコリヤア……!?」 壁が急に足場になって……どうなってんだコイツア……」

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!」

いち早く我に返ったフランキーが体を起こし、自分達を掬い上げた何かを見下ろし眉を顰める。

答えを見出すよりも前に、彼の耳に誰かの悲鳴が届いた。

「あああああ!!! いやア!!? イヤよオ!!? もうそこに縛られるのはいやアアア……」

!!! あああああ!!!

足場からそつと覗いてみれば、激流が——自らを激流へと変えた青い怪人が、通路に空いた穴に吸い込まれ、絶叫する姿が目映った。

「…あの魚女!!? 何だあれ、何してやがんだ!!?」

「コエ~~~~!!! この迷路コエ~~~~!!!」

自分達を襲う敵が苦しむ姿に、胸が空くよりも恐怖が湧き上がる。

遺跡が動かなければ、自分達がああなっていた事だろう。

「何が何だかわかんねエけど……今のうちにここを離れた方が良さそうだ。このままだと……間違いなく死ぬ」

「スーパ―情けねエ発言だが全面的に同意だ。逃げるぞ」

「おで………おれ”も”うごごにいだくねエ~~~~!!!」

そろそろと、今もなお上がり続ける怪人の悲鳴を後にし、足場の上を音を立てないように慎重に動こうとしたその時。

ばたん、と。

彼らの真下に突如、大きな穴が開いた。

「「え”」」

ふわっ、という一瞬の浮遊感。

その直後、彼らはぎよつと目を見開き、声ならぬ声をあげて見つめ合った。

「——ちよつとゾロ!!? しつかりしなさいよ!!? ねエ!!!」

「ぐっ……」

途切れかけていた意識が、強く呼びかけてくる声で引き止められ、ゆつくりと浮上する。前身の熱さと目の痛みに呻きながら、ゾロはゆつくりと目を開く。

「大丈夫? 見えてる? 失明したりしてない? チョッパ―呼ぶ?」

瞼を開けた先に見える、骸骨。

歯を食いしばりながら、ゾロはナミの声がするそれに向けて苦笑をこぼす。

「……………いや、もう手遅れかもな……………お前のツラがホネに見える」

「よし、いっかい殴らせなさい」

「ヨホホホ!!! ご無事そうですね!!? 大事がなくて何よりです!!?」

寝覚めから失礼をかます剣士にきつと目を吊り上げ、拳を震わせるナミに、横からブルックが声をあげて笑う。

ゾロは気怠げに体を起こし、ちかちか瞬く視界で辺りを見渡した。

「状況は……………?!? あのネコ野郎はどうし……………?!?」

「——ああああああ!!!」

状況を伺おうとして、悲鳴が耳に入る。その方向へ恐る恐る振り向き、ゾロはぎよつと目を見開く。

先程大暴れし、手傷を負わせた強力な怪人が……四方八方から伸びた巨石に押し潰されていた。

四肢は既にひしゃげ、原型はほぼなく、怪人の悲鳴が響いていた。

「何……っだありやあ……!!?! どういうこつた………?!?!」

「わっかんないわよそんなの!!!」

「ゾロさんが倒れて……あの怪物にやられそうになった瞬間です。突如周囲の遺跡の壁が動き出し、あの様な凶悪な罠………!!! いいえ、もはや拷問器具と呼ぶべき変形を始めて」

ひしゃげ、磨り潰される怪人の手足。ばらばらと硬貨がこぼれ、すこしずつ怪人の体が縮んでいく。

人ではない故に、血飛沫もあがらないが、それでも十分に凄惨な光景だ。すると、次の瞬間……ぐしゃつ、と。

左右から押し寄せた巨石に頭部が押し潰され、無数の硬貨に変わり果てた。

「……………(ぎ)……ガ」

「「ギャ——ツ!!!?」





「…アイツはホントに何なんだ」

唯一この状況を楽しんでいるコウガミに思わずばやきながら、エレノアは潰されていく怪人とそれをなす遺跡を見つめる。

生物、という例えは、もう何の間違いもないように思えた。

「けど……あれを見る限り、やっぱり彼の言う通り古の『王』の意志がまだ現代に残っているという事かしら……!?」

「『賢者の石』が現にある以上……そう考えてもおかしくないけど……!? ああもうなんてトコに來ちまったんだ私のバカ!!! 好奇心とか義務感とか!!!? そういうのまるつと無視して黙ってりやよかった……!!!」

人が足を踏み入れるにはあまりに危険すぎる空間。

目の前で終わりを迎えようとしている怪物の末路に、本気で後悔を抱かざるを得ない。

「このままじゃ私達も遺跡に呑み込まれ——ん?」

こんな危険な場所からさっさと離れなければ、そう思つてその場を離れようとした時。

ばくん、と。

エレノアとロビン、そしてコウガミの足下が大きく開かれ、三人の体が宙に浮きあ

がった。

「返せよオ……!!? 僕を返せエ!!! そこに…そこにいる僕を……!!!」

「うるさい」

「ギャアアアアアアア……!!!」

きんきんと響く悲鳴に、少女が鬱陶しそうにこぼし、くいつと指を曲げる。

すると、彼女の感情に従うように遺跡が蠢き、泣き喚いていた鳥の怪人を左右から真つ二つに引き裂いてしまった。

破片がばらばらとこぼれ落ち、不気味な静寂が訪れる。

「……………どーなつてんだア。迷路がぐねぐね粘土みてエに……」

目の前で起こる光景に、ルフイはただ呆然と立ち尽くす他ない。

これまで起こつてきた遺跡の変形も十分不思議だった。だが、今起こっているのはその比ではなかった。

「おいエール!!! 今のどーやつたんだ!!? その『クイ』つてヤツか!!! スゲーな!!!」

「……………今のを見て、感想がそれかい」

恐怖するどころか、興奮した様子で目を輝かせるルフイに、エールは背を向けたまま深い溜息をこぼす。

すげーすげーと騒いでいたルフィは、やがてある事に気付き我に返った。

「そーいや、さつきも『王』とか言ってたけど……お前、思い出したのか？ キオクキョーシツ直ったのか？」

「……悪いねエ、隠してたわけでも騙してたわけでもなくて……ずっと寝ボケて記憶が曖昧になってたみたいでねエ、伝えるヒマがなかったのさア」

ルフィの問いに、エールは苦笑をこぼすと、台座を登りながら語り始める。  
頂上に鎮座する棺の蓋に腰掛け、足を組むと、改めてルフィに向き直る。

「なにせす……つと棺の中で眠る日々だったもんで、昼も夜も……春も夏も秋も冬も……なんくんにもわからなくなってたもんでねエ」

向けられる目は、冷たく醒めている。

全てのものに、冒険譚をねだっていた青年にすら興味が失せたかのような無の表情で、エールは一人佇んだ。

「……あんた一人に聞かせるのも酷だ。みんなも呼んであげるよ」

その言葉の後、不意にエールの指がぱちりと鳴らされた。  
すると、どこからともなく人の声が聞こえてくる。

「「おわアア……!!」」

長く深く狭い、人間一人がやっと入れる程度の通路、いや、穴が天井にばかりと開

く。

その中を一人ずつ、サンジ達四人が物凄い速度で落下してくる。

「ギヤアアアアアア!!!」

すぽーん、と広い空間に放り出され、どきどきと真下の地面に山積みになった。

サトナカを頂点に、三人の男達が積み重なり、直後に互いに怒号を放ち合う。

「いつまで乗ってんだためエコラ!!! 野郎に乗られる趣味なんざねエんだよ!!!」

「うるさい!!? 気色の悪い事を言うな貴様!!!」

「ちよ……ちよちよちよ待て待てお兄さん達……この姿勢地味に腰にくるんだが……!!?」

「あー! サンジ!!?」

「ああ……!!? ルフィ、なんでお前ここに………あ!!! エールちゅわアア……」

ん又♡ 無事ではかった……ケガしてない☑♡」

ぎやーぎやーと騒ぐ男達に、ルフィが目を丸くしながら名を呼ぶ。

サンジもすぐに気付き、そして壇上で一人腰掛けるエールを見つけて甘い声を出す。

「「ギヤアアア……ッ!!!」」

「おわああア!!!」

すると、天井に次々に正方形の穴が開き、そこから仲間達が落下してくる。

大抵がそのまま落下して地面に叩きつけられるが、エレノアとロビンはそれぞれ翼と能力を駆使し、危なげなく着地してみせる。

「あたたたた……ちよつと……何よココ」

「ビツツツクリしましたア……寿命が10年縮みました。あ、私、もう死んでました」  
打ち付けた尻をさすっていたナミは、見慣れない広大な空間に困惑の表情を浮かべる。

同じく辺りを見渡したゾロは、一人平然と佇む少女と船長の姿を目にし、眉間に深いしわを寄せる。

「……おいルフィ、こいつアどういうこつた」

「ん……？　ん！！？　あ！！？　あれ？　エール……！！？　何やってんだお前そんなところで！！？」

突然の自体に戸惑っていた他の面々も、次第に冷静さを取り戻していく。そして、様子  
子の異なる記憶喪失の少女に気づき始める。

そんな中、ルフィがエールに向けて声を発した。

「——エール。お前が『よくばりおおさま』って………どういふ事だ？」

ざわつ、と広大な空間に……王の墓に同様の声が響く。

全員の視線が一点に、棺のような石の塊に腰掛ける少女に集中し、空気が張り詰める。

「エールが……!?? どういう事よ……!!!」

「言葉通りの意味さア……私はかつて、この牢獄の島で世界を憎み、全てを欲し……怪物を生み出して我が身を滅ぼした、愚かな『王』だよ」

組んだ膝の上で頬杖をつき、エールは告げる。

向けられる視線に剣呑さが混じり始める中、ウソップが震えながら少女を指差す。

「お……お……おま……何言って……!!?」

「伝わらないもんだねエ……そのままの事しか言っていないのに。難しく考える事はないんだけどねエ」

何を言っているのかはまるでわからない。説明が説明になっていない。

だが一味には、少女が自分達を嘲笑っている事だけはわかった。

「楽しかったよ、あんた達との………暇つぶしは」

「何だと……!??」

「『よくばり』といえど800年は長くてねエ………たまにこうして息抜きしてない気が滅入るんだ。島の生き残りの連中の足掻きを眺めたり……外から混ざる連中で遊んだり」

くすくすと笑みをこぼし、肩を揺らす。石棺に腰掛けたまま足をぶらぶらと揺らし、まるで子供のような仕草を見せる。

「あとはそうさねエ……ガキ臭い夢を語る若僧達をからかったりねエ。おかげでそれなりに楽しめたよ。いい時に来てくれたもんさ……でも、もう充分だよ。もうあんた達で遊ぶのも飽きた」

「てめエ……!!？」

「ナメやがって……おれ達をコケにしてやがったのか……!!」

記憶喪失という辛い境遇に同情し、涙を流したフランキーが憤り、その前でゾロが刀に手をかける。

正体を明かした少女に対する敵意が、そこら中で膨れ上がる。

「『宝』はいらないって言ってくれて正直安心したよ……もしあんたが私から奪う気だったなら、ここで消えてもらわなきゃならなかったから……仮にも暇つぶしに付き合っただけの相手は殺すのは忍びなくてねエ」

「……殺すってお前」

「ほ……本気か!? や……やんのかコンニャロー!?」

エールの呟きにチョップパーとウソツプがびくつと肩を震わせる。

件の紫の鎧の恐怖が蘇ったのか、青い顔でがたがたと震えながら、ぎこちなく身構える。

だが、その中で臆する事なく前に出る者が一人だけいた。



「生憎だが!!! ここまで辿り着いて何も得ずに帰る気はさらさらないよ!!! 古代の王

“よ!!! いや…!!! 遠い遠い我が先祖よ!!!”

ずい、と満面の笑みを浮かべたまま歩み出るコウガミ。

いつも以上の狂気に輝く目で確とエールを凝視する彼に、伊達マルがぎよつと振り向いた。

「は………? ちよつと待て会長…今、何つった」

「………会長…?!? それは………どういう」

「記憶は無事に取り戻せたようだね!!! 強欲なる王ヒノ・エ————ル!!! ……私はこの時をずつと待っていた…!!! 世界を手にし、全てを統べる最強の欲望の持ち主!!! 君と語らえるこの時を!!!」

これまでで最も、より狂気的な笑みをたたえたコウガミがエールを凝視し告げる。彼の言葉に、ロビンとエレノアがはつと息を呑んだ。

「…あなた…まさか」

「やっぱりお前は——…!!!」

「遠い遠い貴殿の血を引く者としての頼みだ!!! “古の王” よ!!! どうか数刻だけでいい

!!! 私と———」

無遠慮に、一切の恐怖なくコウガミがエールの元へと進み出ようとした時。

ごっつー！

と、コウガミの目の前に巨大な石柱が降り、地面に突き刺さる。

轟音が鳴り響くそれを前に、コウガミも大きく目を見開き、凍りついたように立ち止まった。

「…悪いけど、あんたの事なんか知らない。話す事も何もないよ」

「……………!!!」

「子孫だろうがなんだろうが……私の墓で好き勝手する奴らを私は許さない。あんた達は……………全員敵だ」

コウガミが黙り込むと、満足そうにそう言つて、エールは石棺から立ち上がる。

意味深な表情と言葉、そしてゆっくりと掲げられる片手に、居合わせた全員の警戒心が何段階も跳ね上がる。

「…安心しなよ。ここまでの駄賃だ……あんた達全員を生かして帰してあげる。手ぶらで悪いけど……そっちも楽しめたんなら別に構わないよねエ」

「チツ……!!? やっぱあん時に斬つときやよかった……………!!!」

「好き勝手させてたまるか……!!?」

「おいウソだろエールちゃん……………!!!? 冗談だつて言つてくれよ……!!!」

「生憎……わざわざウソなんてつく理由はないよ……………でも大丈夫……おとなしく出てっ

てくれれば何にもしないさア。それとも……やる？ さつき見せてやっただろう  
………この迷宮の中で、私に逆らえる者なんていない」

エールが手先で弄ぶような仕草を見せると、それに呼応して遺跡のどこから重低音  
が鳴り響く。また何かが変形している。

「失せな、小僧共……!!？」 命が惜しけりやとつとと帰れ………!!!」

この場において絶対的な力。

逆らえば死ぬ、そんな考えが脳裏に浮かび、誰も動けず、呼吸すら忘れかけた……そ  
んな時だった。

「………なー、エール」

一人だけ、周囲の金箔とは異なる種類の声を放つ青年がいた。

ルフイはじつとエールを見つめ、険しい表情で何か考えながら、再度声を放った。

「お前、何でそんなウソつくんだ」

彼の目に、恐怖はなかった。騙された事への怒りもなかった。

ただただ不思議そうに、豹変し悪辣な発言を繰り返す少女を見つめ、問いかけていた。  
「何がウソだい………誰もウソなんかついちゃいないよ」

「バカ言え!!？」 そんな下手くそな作り話でおれがダメされると思ってたのか!!？ お  
前がそんなあからさまに悪イ奴なわけないだろ!!？」

「……………たった数日一緒にいただけで、私を理<sup>わ</sup>解<sup>か</sup>つた気であるのかイ？　ずいぶんな節穴の目だね」

見くびるな、と言わんばかりに目を吊り上げ、抗議の声をあげるルフィ。

胸の内の何かに触れたのか、エールの眉間にしわが寄る。

「おいルフィ……!!?　お前この状況で何言つてやがんだ……!!?」

「なーにが節穴だ!!!　おめーさつきから変だぞ!!?　我慢しなくていいのに我慢したりつまんねーウソついたり……………なんか違う事隠してんだろお前!!?」

傍のゾロから睨まれても、ルフィは止まらない。

より一層苛立った様子で、自らを見下ろす少女を咎め、問い続ける。

「私は……!!!　この島の『王』!!!　この世の誰よりも強欲で、全てを欲し食い尽くす最凶最悪の『王』だ!!!　あんた達がマヌケに見逃した……………世界が恐れ慄く存在さア!!!」

「違う!!!　お前はおれの……仲間だ!!!」

「……………聞く耳を持たない男だね、あんたは。もういいよ……………私はそんなものいらぬ。私はここで居心地よく眠ればそれでいい」

ぐつ、とかぶりを振ったエールが拳を握りしめる。めきめきとルフィ達の足元の地面が揺れ、徐々に形を変えていく。

エールと彼らの間に、見る見るうちに分厚い壁が作られていく。

「…もう、ウンザリなのさ」

「エール!!!」

「じゃあね、《海賊王》…:…さよなら…:…もう二度と会う事はないよ」

突き放すような別れを告げ、ふっと微笑む。

ルフィが手を伸ばす寸前で、壁がエールの顔を覆い…:…どこか寂しげに見える表情を塗り潰さんとして。

——突如、彼女の腹から、巨大な異形の腕が突き出された。

「…:…え?」

## 第288話 “蘇りし狂者”

夕暮れの空を、無数の鳥達が飛翔する。

いく種類もの耳障りな鳴き声を響かせ、橙色の空を黒い影が覆う。

その様は、やけに不気味だ。

「何だア……？ 妙に鳥が騒がしいな……ケンカか？」

瓦礫の撤去作業に勤んでいた町の住人の一人が、それを見上げて眉を顰める。滅多にない事に、ほのかに気味の悪さを感じる。

「地震でも来んじやねエのかア？」

「おいおいせつかく片付けたとこなのにか!!! 勘弁してくれよ……」

別の仲間の揶揄いに嫌そうに顔を歪め、それでも然程気にせず作業に戻る。大きなものは全て片付けた、あとは細かい掃除だけだ。

そんな彼らをよそに、新ノ介は険しい表情で鳥達の舞う空を見上げていた。

「どうした新さん？ 黙っちゃまって、カラスがそんな気になんのか？」

「……嫌な予感がする」

「あん？ ただの鳥だろ、どーって事アねエさ」

ぼそりと溢れた新ノ介の眩きに、住民達はまともに取り合わない。

侍が感じ取った前兆を理解する事なく、目の前の自分の事にだけ集中する。

「詳しくはわからぬ。わからんが……：妙な感覚だ。えもいわれぬ……不吉な」

警戒を絶やさず、佇む新ノ介の脳裏には、かつて見た光景が。

国を滅ぼす破壊者が舞い降りた時の景色が蘇っていた。

??

「ウ……あ……」

大きく目を見開き、エールが呻く。

自分の腹を貫く何者かの腕を凝視し、その身を震わせる。

「……………エール？」

「ア……ガ……ぐア……!!!」

ルフィの困惑した声にも反応せず、震える手でその何者かの腕を掴む。

貫かれた腹からじゃらじゃらと何枚もの硬貨が零れ落ちる中、異形の腕が曲げられ、

エールの首をきつく締め上げた。

「ガ……かハッ!!」

『——安心なされ、王……その器よ』

苦悶するエールの耳元に、声が響く。

ゆらりと背後から姿を滲み出させた何かが、下卑た笑みをたたえて少女に語りかけた。

「んな……!!? なな……な……な……な……な……何だありやあ……!!?」

「……!!? ……アイツは……!!?」

がらがらと崩れていく遺跡の壁の隙間から、ウソツプ達はその光景を目の当たりにする。

突然の事態に驚愕し、立ち尽くしながら、エールと謎の存在を凝視する。

『これよりは退屈に苛まれる事などありません……これは始まり。全てが始まり……そして終わる刻だ』

エールの背後で、影の形が揺れる。

金属音を響かせながら、徐々にそれは人の形に——豪奢な格好をした、大柄な人物に姿を変える。

エールを貫いたまま、謎の人物はもう片方の手を見下ろし笑みを深めた。

「————実に久しき……この感触。視・聴・嗅・味・触……肉体に伝わるあらゆる信号

…………生物の感覚……!!! 800年ぶりだ…………実に懐かしき肉の悦び…………

!!!」

「あ……ア……!!? ゲホツ!!!」



「ああ……姫……お久しゅうございますな。あの人なら変わらぬお姿……お懐かしゅうございます」

首を掴む手を引き剥がそうともがき、エールはぎこちなく視線を背後に向ける。そこから聞こえる覚えのある声に、見開いた目を血走らせた。

「お……前……!!! ガラ……か……?」

「えエ……えエ……えエえエえエ……!!! 左様にございます……あなたに……あなた方に全てを台無しにされた憐れな忠臣……その成れの果てよ」

丁寧ながら侮蔑の混じった口調から一転、突如憎悪の滲む吐き捨てるような口調に変わり、謎の人物の手に力が籠る。

より強く苦しむエールを見やり、謎の人物はますます悍ましく嗤った。

「クク……クククク……!!! 待っていたぞ……この時を!!? 忌々しき封印の戒めより解かれ……貴様の元に辿り着くこの瞬間……!!! 狭苦しく薄汚い石箱の中でどれだけ待ち侘びた事か」

「く……アガ……?」

「そうだ苦しめ……悶えろ……!!! 我が苦悶の時間はこの比ではないぞ……!!!」

げたげたげた、笑い声が響く。

血の代わりに硬貨を吐き出す少女の悶絶する様を愉しみ、心から悦ぶ。

その光景に……遂に彼が動いた。

「何やってんだお前エエエ!!!」

ぼしゅうつ!と全身から蒸気を噴き上げ、ルファイが前へ飛び出す。

遺跡を踏み砕く程の勢いで跳躍し、囚われた仲間とそれを苦しめる敵に肉薄する。

「おい!? 待てルファイ!!!」

「止まれバカ野郎!!!」

「ゴムゴムの”!!!” J E T ライフル 回転銃”!!!”

仲間達の制止の声にも耳を貸さず、長く引き伸ばした腕を捻り上げ、謎の人物の顔面に照準を合わせる。

速く鋭い一撃を叩き込み、仲間の救出を急いだルファイ。だが。

「凶が高いぞ、サル」

めきり、と謎の人物の腕が蠢き、次の瞬間、異様な速度と長さで伸びる。

伸びた腕は今まさに一撃を放たんとしたルファイの腹にぶつけられ、彼は壁に叩きつけられた。

「うごわア!!」

ルファイの姿が消え、壁にめり込む。一瞬遅れて轟音と破砕音が鳴り響き、壁の一部が崩れ落ちた。

「ルフイ!!? クソっ……バカ!!? 無策に突っ込んでんじゃねエ!!」

「何アイツ……!!? 誰アレ!!?」

視界から消えたルフイを追い、振り向いたサンジが思わず叫ぶ。咄嗟に動けなかった彼は、ルフイの特攻でようやく我に返っていた。

その時、ウソツプは気付く。

豪華な装いに隠されていた謎の人物の顔が……見覚えのある、時計の針のような特徴的な髭面である事に。

「……………!!? アイツ……昨日海に沈んでたヤツじゃねエか!!? 生きてたのか!!?」

「……………知っているのか、この男を。そうか、知り合いか? 友人か? ………………まアどちらでもいい」

ウソツプの同様の声を聞いた謎の人物が、ちらりと横目を向ける。

怯んだウソツプにそれ以上の興味を示す事なく、*「彼」*はおもむろに己の顔に手を添える。

「もう……お前の知るこの男は、この世のどこにもいないがな」

そう呟いた直後、*「ばちっ、と」* *「彼」*の顔に電流が走る。

すると、その顔がぐにやりと粘土のように蠢き、まるで違う顔に……若々しく、端正に整った別人に変貌する。

「顔が………変わった!?」

「今の反応………錬成反応………!?」 アイツ………錬金術師か………!?」

発生した現象に一味から動揺の声上がり、その中で同業者であるエレノアが強い反応を示す。

同時に、*“彼”*の眩きの中にあつたある単語を思い出し、顔色を変える。

「待てよ………錬金術師で………800年ぶりとか言つてたつて事は………まさか………!!?」

一つの可能性に思い至つたエレノアは、血の気の引いた顔で壇上で嗤う異形の存在を見つめる。

その背後から、別の人間の——沈黙していたコウガミの哄笑が盛大に響き渡つた。

「ハハハハハ………よもや………!!! よもや彼にまでお目にかかれるとは!!! 私は何と恵まれてるのだ!!!」

「おっさん………!?」 だ………誰だ!? アイツは誰なんだよ?」

何か事情を知っているらしきコウガミに、ウソップが怯えながら尋ねる。

ただただ危険な存在であると本能的に察してはいたが、聞かざるを得なくなつていた。

「古の錬金術師——ガラ!!!」

一味から急かすような視線を受け、コウガミはその名を口にする。

「ゴトーや伊達マルからも同様の目で見つめられながら、高々とその正体を語ってみせる。」

「800年前!!! この世で最も欲深な王に仕え!!! 究極の欲望の力を生み出した4人の錬金術師たちの筆頭!!! 世界を欲した“王”の望みに従い!!! 島中の凶悪にして強力な生物達を捕らえ!!! その力を凝縮させた“コアメダル”を創り出した最古の天才!!!」

「メダルを……コイツが……?」

「しかし!!! その才能と実力!!! “力”を生み出した実績を危惧され!!! 主人たる“王”に幽閉され命を落とした哀しき偉人!!! よもや彼が今の世に甦るとは!!!」

「エールに拒絶され、黙り込んでいた男が、別の古代の人間の登場により復活し、活き活きと喜びを露わにしている。不気味さが強まって見えた。」

コウガミの狂喜に目もくれず、他の何にも気を向けず。

「彼」は……錬金術師ガラはその手に捕らえた少女に語りかける。

「改めて………久しいな………ヒノ・エール。よもやまた相見えるとは思わなんだぞ………力なき小娘が、永き時の果てにとうに擦り切れ消え去ったものと思っていたが、中々どうしてしづとい……」

「………?」

「流石は…あの男の血を引く者か」

ぎり、と歯を食い縛り、何かを言おうとしたエール。

それより前にガラは、抵抗するエールの腕を掴み、容赦なく捻りあげる。

「あがアア!!」

「おおげさな……痛みなどとうに失われて久しかろうに。貴様のそれはただの錯覚

……ありもしない幻覚よ。何より……初めからただの物でしかないのだしな」

少女の腕が、引きちぎられそうなくらいに痛々しく捻られ、指先が激しく痙攣する。

それでも少女は、背後に立つ敵を睨みつけ、掠れた声を漏らす。

「ガラ……なんで……今……この……時代に……!!」 しかも……その……身体……

!!!

ぎろり、と凄まじい憎悪と憤怒に満ちた目で、ガラを見据える。

ガラは無言でエールを見つめ返すと、突如腹を貫く腕を引き抜き、腕を捻り上げたま

ま、エールの体を振り上げる。

エールは背後の棺の上に叩きつけられ、再び硬貨の血反吐を吐いた。

「ガハツ……アア!!」

「無駄口を叩くな……お前はただ身を委ね、明け渡せばいい。全てをな」

「誰……が……!!?? やるかア!!」

悶えながら、エールはなおもガラを睨みつけ……その目を極彩色に光らせる。

遺跡の壁が動き、いくつもの腕となってガラに襲いかかろうとし。

しかしその寸前で、遺跡はぴたりと動きを止めてしまう。まるで、ガラの前に触れられない壁があるかのように。

「なん……で……?」

「何を今更……この力を生み出したのは我だ。我が意の通りに操れぬ道理がどこにある」

戸惑うエールの前で、遺跡が勝手に引いていく。

顔を青ざめさせた少女を見下ろし、冷笑を浮かべた古代の術師は、鋭い爪の生えた腕をゆっくりと掲げる。

「お前の施した封印……捕らえ続けてきた『力』……全て我が貰い受ける……!!!」

「や……やめ……!!! やめろオ……!!!」

逃れようともがくエールだが、体の自由が利かない。いつの間にか両手足を戒める遺跡に阻まれ、逃れられない。

壇上で凶刃に晒される少女の姿は——魔に捧げられる生贄そのものだった。

「みんな逃げてエ!!!」

王の墓に集う、全ての者に向けてエールが叫んだ直後。

ガラの腕が、エールの胸と、彼女が横たえられた棺を……その中で眠る者の胸を貫く。そして、辺りに真つ赤な閃光が迸った。

??

島のある場所に開いた、ある一つの大穴。

何の変哲もない洞窟として島の住民達に知られる、小さな岩の管があった。

「ぶわアア!!!」

その穴から突如、三人の男達が大量の水に押し出され、飛び出してくる。

サトー、ヤトー、クトーの三人は激しく咳き込みながら、五体満足で生きている互いを見つめ合い、呆けていた。

「ゲッホ……ゲホッ……!!?!? ここは……外か?」

「遺跡の外に……吐き出されたのか……!!?!?」

「し……死ぬかと思った」

あれだけ危険な罠に翻弄されてきて、全くの無傷。

ほつと安堵するよりも、なぜ無事なのかと困惑が先に出て、それ以上の言葉が出ない。

「か……会長は? 他の奴らは……」

と、逸れたまま姿の見えない他の面々を探そうとした時。



ふと、足元に細かな揺れを感じ、はっと息を呑む。

地震か、津波か、と身構えていた彼らのうち、サトーがある方向を見やり、硬直した。  
「……………何だあれは」

呆然と眩く、彼の視線の先で、男達は。

島の東側の海が激しく波打ち、徐々に盛り上がるとうとしている光景を目の当たりにした。

??

「あ”あ”あ”あ”あ”あ!!」

ばちばちと青い閃光が迸り、空間を眩しく照らし出す。

胸を貫かれ、棺に縫い止められたエールは、痛々しく白目を剥き、激しく痙攣を繰り返す。

その度に、周囲の遺跡の壁や床がぼこぼここと歪に蠢いた。

「遺跡が動いている…!!? あの男がやっているの!?」

「どう見てもやべエ状況だろこりゃあ!!」

突然始まった異様な光景に、一味は立ち尽くすほかにない。

ここにははまらずいと分かり切っているのだが、どこへ逃げればいいのか見当もつかない状態だ。

「ちよつと待つてよロビン……………この遺跡はあの子そのもので、あの子が操つて動いてたワケでしょ?」

ふと、エレノアはある嫌な予感に辿り着く。

少女の言葉、目の前で起こっている現象。それらから総合した推測に、ぞつと背筋に寒気が走る。

「……………だとしたら……………!!!! だとしたら……………あの野郎は今……………!!!」

「なんだ?!? 何がどうなつてんだよオイ?!?!? アイツはなんだ?!? エールの何だ?!?!?」

おれ達の敵か?!?!? 何がどうなつてんだよオ……………!!!」

不穏な呟きを近くで聞かされ、ウソツプはもう頭を抱えて泣き叫ぶばかりだ。新たな脅威の登場に、右往左往するしかできずにいる。

そんな中、エールを凝視していたサンジが不意に全員の方へ振り向いた。

「オイ……………!!? アイツ男か女か……………?!? どっちだ……………!!!?」

「は……………?!?」

「いきなり何聞いてんだてめエは……………!!!」

「いいから答えろ……………!!!! どっちだ……………!!!?」

いきなりの意味不明な質問に、固まるその場の全員。

急かす声に困惑しながらも、閃光の中に覗くガラの顔を今一度凝視する。

「……た……!!? 多分………いや男!!? 男だ絶対に!!」

「だよな!?? よしわかった!!」

ウソツプが答えた直後、サンジは即座に飛び出す。

烈火に燃える足を振り上げ、少女を捕らえる異形の存在——敵に向けて一切の躊躇いのない蹴撃を叩き込んだ。

「『悪魔風脚』……!! 『青天霹靂シヨット』!!」

青い閃光を、一瞬だけ炎の赤が染める。異形の顔面に向けて、隕石のごとき勢いの一撃が放たれる。

だがそれは、左右から突如生えた壁に阻まれ、弾き返されてしまった。

「サンジイ!!?」

「何やってんだお前エ!!」

「………事情は全く飲み込めぬエが………一つだけ確かな事がある」

壁に防がれ、宙を舞ったサンジは、仲間達の驚愕と叱責の声を浴びながらすたつと軽やかに降り立つ。

その目に怒りを燃やし、今尚悲鳴をあげるエールと、それを捕らえる異形の男を鋭く睨みつけた。

「あの野郎はレデイに暴言を吐き………泣き叫ぶいたいけな美女を戒め捕らえ……惨たら

しく弄ぶゲス野郎。そしてなにやら……エールちゃんとの深い因縁があるいけすかねエ野郎」

ぼっ！と黒足に宿る炎が激しさを増す。

覇気の硬化に加え、自身の激情をも加えた業火をその身に纏い、女性の味方は再度宙へ飛び上がる。

「つまりあのクソ野郎はおれの敵で……!!! ヤツを許す道理は一切ねエって事だ!!!」  
怒りと決意の咆哮とともに、サンジの蹴撃が再び防壁に炸裂する。

先程よりも強く、重い一撃が決まり、硬い壁に確かな亀裂が刻み込まれた。

壁越しに衝撃が伝わったのか、ガラスの目がぎろりと、自身を睨みつけてくるサンジに向けられる。

「ギャ——ッ?!? 完全にこっちに標的が向いてるくくっ!!!」

「チツ……!!? エロコックが!!!」

「ああもう……!!! わけわかんない事起きすぎて頭こんがらがつてんのにイ!!!」

ウソツプが嘆きの声を上げる横で、眉間に深いしわを寄せたゾロと頭を掻き巻るエレノアが前に飛び出す。

独断専行に走った仲間への苛立ちを力に変え、敵を狙い撃つ。

「七十二煩惱鳳!!!」

「『<sup>シエキナ</sup>雷天遺矢』!!!」

飛ぶ斬撃と風の矢。二つの刃が混ざり、強烈な斬撃の嵐となってガラに迫る。

奇しくもそれらも壁に阻まれてしまったが、強固な防御に亀裂が走り、ぼろりと一部が崩れ落ちる。

「ちよ……ちよつとあんた達?!? どうすんのよ?!? 結局どうすりゃいいのよ!!!」

「助ける!!! 助けて……?!? ホントの事全部聞き出す!!!」

戸惑うナミに、ぼこつとめり込んでいた壁から抜け出したルフィが吠える。

全身の蒸気を強め、構えながら、仲間を捕らえ苦しめる敵を睨みつけ、目の奥で闘志を燃やす。

「野郎共!!! エールを奪い取れエ!!!」

「了解」

「事情は飲み込めませんが……アレを放置しておくのは危険なのは明白ですね、ヨホホ」

船長からの指示に、ロビンとブルックは静かに頷き、各々の獲物を構える。

臆す事なく、躊躇いも迷いもなく従う彼らの姿に、ナミは数秒顔をしかめてから、自身の天候棒を構える。

「……!!! ああもう……?!? わかったわよ?!?」

「やりやあいんだな!!? やっていいんだな!!?」

「助けていいのか!!? いいんだな!!?」

「や…やっていいならやるぞ!!! ま…ままだ文句も言いたりねエしな!!?」

残る者も次々と、やや躊躇い戸惑いを残しながら前に出る。

自分達を騙していた相手への怒りよりも、得体の知れない新たな敵への警戒心が勝つたようだ。

「ダ……ダメ……!!? 来ちゃダメ……!!?」

「エール……ちよつと待ってろ!!! 今助けるぞオ!!!」

少女のかすれた声での懇願も聞かず、異形の男をただ一つの標的と見定め。

ルフィは再び、蒸気を放ちながら宙から躍りかかっていった。

## 第289話 終わりの始まり

「ゴムゴムのツ!!!」JET 槍ランス「!!!」

全身から煙を吐き、足裏を合わせて作った突きが高速で放たれる。

音を置き去りにする程の速度で伸びる一撃だが、それは蠢く岩壁でたやすく防がれてしまう。

「JETバズーカ!!!」

構わず続けて、両手の掌底を放つ。邪魔をする岩壁ごとぶち抜く勢いで掌を叩きつけるが、鈍い轟音ばかりが響いて貫けない。

「フレイイル 接続鎚矛!!!」鐘ベル!!!」JET銃乱打ガトリング「!!!」

黒く染め、固めた拳を分銅のように振り回し打ち付け、頭突きを放ち、目にも留まらぬ連打を浴びせかける。

その尽くが防がれ、遺跡の中で爆音が響き続ける。それでもなお、ルフイは攻撃の手を緩めない。

「三刀流……」鷹波トビナミ「!!!」

「ブラフマーストラ 羅刹王斬」!!!」

ルフィとは別の方向から、岩どころか鉄をも斬り裂く剣と、燃え盛り回転する炎の刃が異形に向かう。

だがやはり、天井から生えた別の岩壁によって防がれ、虚しく霧散してしまった。

「…鬱陶しい」

「マズい…!!? やっぱりアイツ…: エールを通じてこの遺跡を操って…: いや!!! 支配権を奪って乗っ取ろうとしてるんだ!!!」

遺跡の主、いや、遺跡そのものであるエール。

囚われ縫い付けられた彼女に何か細工をし、この状況を生み出しているのだと察し、エレノアが焦りの声を漏らす。

「完全に乗っ取られたらこの遺跡の全部が私達の敵になる!!! アイツをなんとか…: エールから引き離さないと…: …!!?」

「で…: でもどうすんだ?!? あの壁メチャクチャ硬エぞ!!! エレノアでも壊せなかつたじゃねエか!!!」

最初に遺跡に分断された時の事を思い出し、喚くウソップ。

分解し再構築する錬金術も通じない壁をどうやって抜けばいいのか、と。

「だが通じてねエわけじゃねエ…: …: あの硬エ壁も無敵じゃねエ。叩き続けりや必ず碎ける!!? あのスカした野郎のツラにむけてどんでん撃ち込め!!!」



「ぬおおおオ!!!」

「クソ野郎が!!? エールちゃんに汚エ手で触れてんじゃねエ!!!」

左腕の銃器を構え、連射しながらフランキーが叫ぶ。それに応じるように、チヨツパーも人型で壁を殴り、サンジも烈火の蹴撃を放つ。

轟音が立て続けに、休みなく起こる中。

異形の術師は悠々と、少女の体に細工を続ける。

「ウ…………ア…………ア…………!!!」

「ハツ……………さアご覧あれ、姫よ。裏切り者のお前を助けようと木っ端人間共が必死に抗っているぞ。なんとも美しく……………滑稽な姿ではないか」

白目を剥き、痙攣を続けるエールにガラは嗤って告げる。

未だ一撃も届かない青年達の抗いを嘲笑い、少女の苦悶する姿を見下ろす。

「貴様も頑固な娘だ……………抵抗などせず素直に開け渡せば苦しまずに済むものを、無駄な抵抗を続けおつて……………実に度し難く愚かしい娘よ」

「……………!!! だ…れ、が……………!!!」

ぎり、と歯を食い縛る音が鳴る。みしみしと血肉を引き絞るような音が鳴る。

胸を貫かれ、体の中を弄られ、凄まじい苦痛に苛まれ続けながら。

少女は目の前の因縁の相手を、鋭く睨み吐き捨てる。

「誰が……お前に……!!! 渡す……もんか……!!!」  
「…それが愚かだというのだ」

ばりばりばりっ!

ガラの腕を中心に閃光が迸る。

体内を侵す力が強まり、堪えかねたエールの体はがくがくと尋常ではない痙攣を起す。

「ガアアアアアア!!!」

悲鳴は断末魔とほぼ変わらない、喉が裂けそうなほど痛々しい。

人ならば既に絶命しているような熱と衝撃なのに、人ではないせいか、エールは意識すら失えない。

拷問じみた行いに、ガラの顔に笑みが浮かび始めた時。

「必殺!!? ムアトラス彗星!!!」

ぼかん、とガラを中心に爆発が起こる。岩壁の防御の隙間を抜くように向かってきた弾が術師の顔面に炸裂した。

びりびりと走る振動に、ウソップはぐつと拳を握り、掲げた。

「隙間から喰らったわ……!!?」

「ウソップすげー!!!」

「ガハハハどーだバケモノめコンニャロー!!!」

ついに敵に直接的な攻撃を加えた事実、チヨツパーに賞賛されたウソツプは鼻高々とといった様子で得物を掲げる。

その空気を裂くように、冷や汗を垂らしたエレノアがぼそりと呟いた。

「…あれ、エールは?」

その言葉に、はっ!!?とはしゃいでいた男達が息を呑み黙る。

もしや一緒に、と戦々恐々としながら、振り向き爆煙の中を窺う、そして。

ゆつくりと晴れていく煙の中から——傷一つ、火傷一つないガラが、苛立った目でウソツプを睨みつけた。

「んげ!?!」

「……………黙っていれば、つけあがるなよ人間が……………!!!」

「ギャ~~~~~ッ!!!」

蠢き、変形し、巨大な手となって迫る岩壁。あわやウソツプが、巨大な手に捕まって握り潰されようとした刹那。

【クレーンアーム!】

「ほいきた一本釣り!!?」

「おわああああ!!?」

聞き覚えのある声の直後、ウソツプの襟首が何かに掴まれ、引っ張られる。

まさしく釣りのごとく、機械の鎧から発射した鉄の紐を引っ張り、ウソツプを窮地から脱出させた。

「ふい〜〜…間一髪つてとこだ」

「お…おおお…!!? た…助かったぜ!!?」

一仕事終えた、というように腰に手を当てる伊達マルに、戸惑いながらも礼を言う。釣り上げられた際に頭を強かにぶつけたが、命には替えられない。

「伊達マルさん!!? アレとやる気ですか!!?」

「状況はまだよくわからんが…:…:…:とりあえずここはお前らに協力した方が良さそうだな。…:…:アレはどう見ても悪役だ。ゴトーちゃん、サトナカちゃん、そういう感じでい〜!!?」

「くつ…!!? わかりました…!!」

「了解です。…:…:業務外労働に対する請求は会長にさせていただきます」

状況の急展開につき、様子を伺っていたゴトーとサトナカも、伊達マルの決定に頷き銃を構える。

腰の機械に鈍色の硬貨を入れながら、伊達マルは自らの背後を軽く睨む。

「ついでに会長…:…:…:大事な事色々黙ってやがった事について後できつちり慰謝料貰

うからなア!!!」

戦いの邪魔にならない、棺の間の入り口付近で無言で佇むコウガミに向け、叫ぶ。

意味深な笑みを浮かべ、身を隠す事もしない彼を不気味に思い、怪しみながら、伊達

マルは背中に新たな武器を喚び出す。

「カッターウイング!」

「あどつこい……しょオ!!!」

背中に生えた刃の翼。伊達丸はそれを引つ掴み、思い切りぶん投げる。

くの字に曲がった刃は空中を舞い、ガラを狙う。しかし岩壁の腕が横から弾き、止められてしまった。

「いい加減にしろ………しつこい虫けら共め」

ガラの苛立ちが募る。それでも、ルフイ達に対する意識の高さは足元の蟻にも劣る。

さっさと叩き潰してしまおう、そう思って再度岩壁を動かそうとした時。

「その不躰な手………いい加減離してもらえないかしら?」  
オチエンタフル「八十輪き」

ロビンの鋭い眼光がガラを射抜き、花卉が舞う。

ガラの体から八十本のしなやかな手が生え、十本ずつ四本にまとまり、大きな腕となる。

腕は互いに絡み合い、異形の首と腕をがっちり固めてみせる。

「クワトロマー四本樹クラッチ”!!!」

「ぬウ……!!!」

ぎしっ、とガラスの動きが止まる。

本来なら骨をへし折る恐ろしい技だが、強靱な異形の体は動きを止められただけ。だが、彼らはその隙を決して見逃さない。

「いくぞお前らア!!!」  
「ゴムゴムの” オ……!!!」

「三刀流……!!!」

「ディアブルジャンプ悪魔風脚”……!!!」

「グレイルフレア聖杯献火《グレイルフレア》”……!!!」

蒸気が吹き荒れ、刀身が黒く染まり、燃える脚と髪が唸りを上げる。

一斉に飛び出した一味の強者達は、目の前で盾になる岩壁の一点にめがけて、それぞれの一撃を同時に叩き込んだ。

「バレッツパンケット炎宴四重砲”……!!!」

炎と打撃と斬撃、強烈な一つの攻撃が岩壁に炸裂する。

びしびしと表面に入ったたびが深く深く食い込み、そして次の瞬間。

ばかっ!と、岩壁は無数の破片となって砕け、ガラスが一瞬無防備になる。

「よっしや——!!!」  
「砕けたア!!!」

「そのままいつちまえエ!!!」

「愚か者めらが……肝心の我に届いてもいないのに」

喜びをあらわにするウソツプ達に、ガラは舌打ち混じりに目を細め、再び手を動かす。砕けた壁の代わりの壁を作り出そうとし、はたと気付く。

「はい、そちらに気を取られてる間に斬っちゃいました」

とん、と背後から聞こえる足音。

微かに目を見開き、顔だけ背後に向けたガラは、自分の背後でゆらりと空気が揺れ、一人の長身の紳士が幻のように現れた様を目のあたりにする。

その隣には、青い棍を回す少女の姿があった。

「ミラージュ蜃気楼||テンポ||!! ガラ空きよ? 錬金術師さん♪」

「ミラージュ陽炎三丁||……||矢筈斬り||!!」

きん、といつの間にか抜かれていた仕込杖の刃が鞘に収められた瞬間。

——斬!

エールを縫い付けていたガラの腕が、二の腕から断たれた。

さすがの事態に、ガラの表情にも驚愕が浮かんだ。

「エール!!? つかまれエ!!?」

「ル………ファイ………!!!」

すかさず、ルフィがエールに向けて手を伸ばす。

壁は砕かれ、楔は絶たれた。少女を捕える檻がなくなった今こそが取り戻す絶好の機会だった——だが。

「……だから無意味だというのだ」

伸ばされた手を見上げ、腕を断たれたガラがぼそりと呟く。

その直後、ガラの口が大きく開かれ、喉奥から赤い光が漏れる。

そして、空中に留まるルフィ達に向けて、灼熱の咆哮が迸り、彼らを呑み込んだ。

「なっ……!!? ぐああああああ!!」

「痛エ!!! 熱イ!!! 何だア~~~~!!」

「くっ……!!? さっきまで炎なんて使う素振り全くなかったのに……!!」

炎に押され、ガラとエールから引き剥がされるルフィ達。

それまでと異なる攻撃を突如使い始めた敵に、体を焼く火を払いのけて起き上がったエレノアが吐き捨てる。

ふとその目が、ガラが掌の上で弄ぶ金縁の赤い硬貨を捉えた。

「あの赤いの……!!? あの鳥のか!!」

孔雀の紋章が彫られたその硬貨に気付き、ルフィが驚愕の声を上げる。

僅かな間とはいえ、一度交戦した敵の使っていた能力。見覚えのある力が再び使われ



た事で、今起こっている状況を瞬時に理解する。

「オイ……つー事はあの野郎……!!?」

「頭の足りぬ餓鬼の考えそうな事だ……奪られたくないものは隠す。それも全て同じ場所に……だからこうして簡単に奪われる。まア、おかげで手間が省けたがな」

赤い硬貨だけではない。青、黄、白、何種類もの硬貨を取り出し、掌の上で見せつけるように鳴らすガラ。

彼の頭上に、岩壁が一つ近付き、大きな何かを吐き出してくる。

「ウオオオアアアアア!!!! ウオオオ……!!!!」

ばらばらと硬貨を撒き散らし、それ……虫の異形・ウヴァが顔を出す。両腕は引き千切られ、ぼろぼろだが、憎悪の声を上げて暴れ続けている。

それを見上げ、ガラがため息混じりに呟く。

「ウヴァか……相も変わらず煩く品のない奴め」

「!!! 貴様……ガラアア……!!!」

自分の真下で佇む術師に気付いたウヴァが、ぎろりとガラを睨み襲いかかろうとして。

ずぐり、と。

異形の腕に胸を貫かれ、緑の硬貨が抜き取られる。

「静かにしろ、物の分際で。メダルだけよこせ」

容赦なく核を奪われ、ウヴァは沈黙する。そしてじやらじやらと、無数の硬貨に変じて崩れ落ちた。

それを見て、エレノアがきつと目を吊り上げる。

「アイツ……!!! エールが捕らえたグリーンズ達のメダルがここに集まるのを待って……!!  
? 漁夫の利狙いやがったな………!!!?」

「ツカ………!!? ナメた真似してくれんじやない……セコい事しやがって」

天を仰ぎ、不満を声に乗せて表した伊達マルが、仮面の下からガラを見据える。ちゃりんちゃりんと硬貨を機械に投入し、武装を次々に身に纏う。

「絶対エそのツラにどデカいのぶちかましてや………!!!」

重く硬く、我が身を機械の鎧で固める伊達マルが、反撃の一撃を加えようとしたその時。

突如、側頭部を押さえた伊達マルの体が、ぐらりと傾いだ。

「ウ………」

「どデカいのを………何だ?」

動きを止めた伊達マルに、ガラの腕が伸びる。

伊達マルは一切抵抗できないまま、突き出されたガラの腕に吹き飛ばされ、壁に激突

し動かなくなった。

「伊達マルさん!!! コノ……」

倒れた味方を案じながら、ゴトーが銃の引き金を引き異形を撃つ。

ばちばちと異形の皮膚の上で火花が飛び、しかし一切傷をつけられぬまま、再び伸びた腕がゴトーの首を掴む。

「ガ……カハツ!?」

「凶に乗るなよ、石ころが」

青年の体を持ち上げ、叩きつける。たった一撃でゴトーは意識を持っていかれ、その場で銃器を手放し、沈黙してしまふ。

倒れた二人から意識を外したガラは続いて、掌から大量の水流を発生させた。

「ぶわア~~~~っ!!! 水ウウ~~~~!!!」

「ギャ~~~~!!!」

激流に吞まれ、能力者四人が壁際まで押される。海水ではないようだが、その場の全員が激流に囚われ、身動きが取れなくなる。

「キヤア!!!」

「ナミさん!!! ……野郎よくも愛しのレディを次々と……おわ~~~~っ!!!」

流されていくナミやロビンの悲鳴に、すかさずサンジが救いに行こうとするのだが、



どぼん、激しく水飛沫を上げて沈むエール。重い体はすぐさま水底に沈み、見えなくなってしまう。

それを、壁際にしがみつきながら戦慄の表情で凝視していたナミとゾロは。突如振動を始めた岩壁に、はっと息を呑んだ。

「……………!? な、何……………!?」

「地震……………いや、違う!!!」

びりびりと震える壁、荒れ狂う激流。

閉ざされた空間の中でも……………何かが動いている、それだけはわかった。

その光景を、彼らは目撃する。

ゆっくりと、ゆっくりと隆起していた海の底の遺跡。

永き時を沈黙していた古の「王」の眠る墓が海上に、そして地上に姿を現した。

胎児に似た形をしていたそれが、変わり始める。

「何っつなんだありやあ……………!!!」

「遺跡が……………」

「セ…………セルメダルが……………!?」

遺跡が端から崩れていく。そして新たに形を成していく。

無数の、それこそ決して数え切る事のできない程の数の鈍色の硬貨へ変じた遺跡が、生物のように一塊になつて集まる。

「ありやあ…塔……いや、城か…!!?」

やがて出来上がつていく、何かの建物。

島の中心に巨大な足が立ち、頂点に尖つた何か形成される。

城にも塔にも、歪な卵のようにも見えるそれ——何か、明らかに危険な存在が住まう何かを見上げ、住民達はざわざわと戸惑いの声をこぼす。

「一体何が起ころうとしているのだ…!!?」

頭上の城を見上げ、溢れた新ノ介の眩きに答える声は、一つもなかった。

突如、地下の密室のはずの棺の間の壁が何箇所も開き、水流が流れを変え、その流れに押され、麦わらの一味は外へと流される。

「イヤ——ツ?!」

「ぎゃあああつ!!」

開かれた出口の先には、何もない。いつのまにか棺の間の外は島の上に移動しており、一味は掴まるものなど何も空中に放り出される。

真下に広がる光景に、一味はもはや悲鳴も上げられず、重力に囚われる他になかった。

「……………ゴミはやはり、流すに限る」

誰もいなくなつた空間で、ガラが満足げに呟く。

自らの邪魔をする者を一人残らず排除した達成感に満たされていた、その時。

——残つた激流の中で、二つの紫色の光が灯る。

そして、灯つた光を中心に、荒れ狂う水流が真っ白に染まり、凍り付いていった。

【プテラ・トリケラ・ティラーノ！ プ・ト・ティラーノ・ザウルース！】

「うおおおおおおおおお！！！」

氷の塊へと変じた水流を砕き、破壊し、紫の影が飛び出す。

怒りと憎悪に満ちた咆哮を上げ、巨大な竜の翼と尾を広げたそれ……………古の鎧を纏つた

エールが。

怪物の形相で古の錬金術師めがけ、襲いかかった。

## 第290話 “無の力”

「オオオアアアアアアア!!」

大気を切り裂き、押しつけ、紫の竜が飛翔する。

両手両足から生えた鋭い爪を振りかざし、羽搏きと共に冷気を撒き散らし、破壊の化身は力を振るう。

ガラはそれを一瞥し、一度手を振るい、重く巨大な防壁が目の前に迫る。だが、暴走意識を半ば飛ばしたエールは止まらない。

迫り来る岩壁に向けて凄まじい速度で爪を振り上げ、一瞬で、麦わらの一味が散々苦戦していた防壁を粉々に破壊してみせた。

「“無”のメダルか………よりもよってそれを我に向けるか」  
「ガアアアアア!!」

舌打ち混じりに呟くガラに、エールはさらに迫る。

次から次へと、右から左から向かってくる邪魔な岩壁を殴り、裂き、薙ぎ払う。自分の前に立ちはだかる全てのものを壊し続ける。

その圧倒的な力と、相性の悪さに柄は苛立たしげな声を漏らす。



「他のメダルとは異なる特殊な性質ゆえ、グリーンズ化させず保管していた6種目……  
 『恐竜』のメダル」

ずぼつ、とエールの肩から伸びる角。岩壁をたやすく砕き貫くそれを、ガラは初めて自ら動き、躲す。

「絶滅した生物……そして幻獣の力を凝縮し生み出した力……!!! 存在しないものを強引に世界に存在させたという矛盾ゆえに……その力の性質は、『無』」

ぼこぼここと蠢き、天井や壁や地面から伸びる巨岩の槍が、竜の力で尽く粉碎されていく。

硬い岩壁が、まるで鉛細工のように簡単に、跡形もなく砕かれていった。

「他のコアメダルの無限の力を『無』に還す、最も危険な力……!!! 誰からも求められず、居場所もなく、価値なき存在でしなかつた貴様に宿るとは………皮肉な話だ」

「ああああああああ!!!」

「手負いの獣そのものだな………だが」

音を置き去りにする速さで、エールはガラに肉薄し拳を突き出す。

憎悪に突き動かされ、他の何も見えなくなりながら、ただ一人の仇敵を討ち果たさんと放たれた一撃が。

反対に放たれたガラの、紫の異形に変じた腕によって防がれる。

「!!」?

「たった3枚で何ができる」

同じ気配、同じ力を感じさせる腕で、逆にエールを捕らえる。

そして一瞬、驚愕のあまり正気に戻ってしまった彼女に、至る方向から衝撃が襲いかかる。

「貴様が『王』とは笑わせる……………身の程を知れ、小娘が。元より貴様は…『器』ではなかった」

炎が、熱が、雷が、水が、重力が、そして冷気を全身に浴びせ、少女を鎧ごと呑み込む。

吹き飛ばされたエールは、その身に纏った紫の鎧を霧散させられる。仇敵に冷たく見下ろされながら、遙か空へと放り出される。

「800年……………長い時をよくぞ耐えた。もう何もする必要はない……………何に耐える必要も、何をする必要もない。お前の行いは全て水泡に帰す。お前は道端の塵と同じく…無意味に地に転がっているがいい」

エールはもう、彼を見る気力もない。

痛々しい姿のまま、地上に向けて……………今度は誰にも受け止められる事なく、一人ぼっちで墜とされた。

「さらばだ…王でも何でも無い、ただ一つの価値もなき、ただの小娘よ」  
??

「あらあら大変な事になってるわねエ…」

「どーなってるんだありやあ…!?」

聳え立つ謎の建物を見上げ、チヨ子は困り顔で小首を傾げる。他と比べると希薄だが、かなり本気で戸惑っているようだ。

どよめく人々の端で、シンゴ兄妹もそれを見上げて立ち尽くしている。

「一体何が………あ!!? ヒナ!!!」

シンゴが呆然と呟いていると、突如ヒナが走り出す。

向かう先に、聳え立つ建物の脚の一角が突き刺さっているのに気付き、慌てて引き止める。

「ヒナ!!? 待て!!? どこに行く気だ!!? 危ないだろ!!?」

「さつき見えたの!!? 麦わらのお兄ちゃん達があの変な建物の上から落ちてくるの

!!!」

「だったなおさらダメだ!!? 何に巻き込まれるかわかったもんじゃない!!!」

未だ戻らない、海賊を名乗りながら気のいい青年達の身を案じる妹に、シンゴは厳しい口調で告げ、少女の両肩を掴む。

「あの遺跡が危険な場所だつてわかつてるだろ……!? おれ達が行つても何もできない……おれ達には何の力もないんだ」

「でも……!!? でも!!!」

「アイツらは行つたけど……それで何かあつても自業自得だ!!? おれ達が助けに行く義理はない。同じ島の住民だとしても……全部を助けてやれるわけじゃない」

他人を見捨てられない心優しい妹。善人の鑑とも言えるその在り方を誇らしく思うより前に、兄は強い危うさを抱く。

「結局アイツらは……他人なんだから」

冷酷に聞こえる言葉を吐かれ、ヒナは黙り込んでしまう。

相当効いたのか、表情が見えないほど俯く。

抵抗が弱まった妹に、罪悪感を覚えながらもほつと安堵の息をつこうとしたシンゴだった。

「お兄ちゃんのバカ……ッ!!!」

「ぐあああ……!!?」

ヒナはわつと泣き出すと、そのまま踵を返し走り出す。肩を掴んだシンゴを引きずり、一目散に青年達がいるであろう場所を目指した。

兄の悲鳴に聞こえないふりをしながら、ヒナはひたすら走り、そしてやがて、見覚え

のある人影を見つける。

「あ……!!? いた!!! 麦わらのお兄ちゃ……………」

ぐったりと倒れた兄を放置し、駆け寄ろうとしたヒナは。

泥の中に上半身を埋め、じたばたともがく青年の姿を目の当たりにし、ぎよつと目を剥いて停止した。

「むゴガ……むぐ……んん……ッ!!!」

「え……!!? 何でそんな事になってんの!!?」

苦しそうにもがき、両足を振り回すルフィらしき青年。

ヒナは大慌てで泥に足を踏み入れ、ルフィの足を掴むと渾身の力を奮い、すぽーんと引っこ抜いた。

「ぶはアア……っ!!! し、死どうかと思っただア……!!!」

べちゃっつ、と泥の上に倒れ込んだルフィは涙目になりながら、自身の無事を喜ぶ。そしてすぐ、二度も自分を救ってくれた恩人に頭を下げた。

「あんがとなヒナ!!! やっぱすげーなお前のバカ力」

「えへへ………ん? ばかぢから?」

褒められ、感謝されててれるヒナは頬をかく。途中で妙な評価をされた気がしたが、言ったルフィは全く気にしていない。

けらけらと呑気に笑うルフィを、気を取り直したシンゴがきつと睨みつける。

「オイ……!!? あんた………何が起こったんだ。何をしたらあんな事が起こる!!? あんた達あの遺跡で何やったんだ!?!」

「ん? ああ……それがよオ」

妹を庇うように前に出て、詰め寄るシンゴにルフィはつい先程までの怒りを思い出し、険しい表情で向き直る。

詳しい説明を始めようとしたところで、彼ははつと、大事な事に気がついた。

「……………!!? エールは?」

「つ……!!? ういしは……………」

全身にかすかな痛みを覚え、サトナカの意識が浮上する。

冷たい床から身を起こし、辺りを見渡すと……目を疑う光景が視界に映る。

一言で言えば、豪華絢爛。

石造りの床、壁と天井、奥に据えられた玉座。それら全てが黄金に輝き、さらにそれを無数の宝石や宝物が飾っている。

どこの国の王であろうと実現は叶わないであろう、眩い空間。

先程まで確実に暗く陰湿な墓地であった場所が、完全に変わり果てていた。

そして顔を上げたサトナカは、すぐ目の前に立っている自分の雇い主に気付き、困惑の声を漏らした。

「会長……？」

「——お招き頂けるとは光栄だよ!! 古の錬金術師ガラ!!」

思わず声をかけるが、コウガミは振り向かない。

サトナカの目覚めにも、存在にも気付いていない様子で、玉座を凝視し立っている。

「わざわざ私だけここに残してくれるとは………一体どのような用件かな!!」

「お前の存在がどうにも気になってな………『王』の血を引く男よ」

贅の極み、欲望の限りを尽くした空間。

それをあつという間に作り出した存在は、意味深にコウガミを見つめ、彼をそう呼んだ。

??

ざわざわと人里でどよめきが走る。

町の中心に落ちてきた、ある一人の少女を囲み、住民達は困惑に眉を寄せ、立ち尽くす。

「お……オイ、コイツ、この間の………」

「あ……ああ、ジイさんが言ってた古代の王って………大昔にこの島をムチャクチャにし

やがったっていう……あの」

彼らが見下ろす先で、少女が——エールが力なく横たわっている。

謎多き彼女……古の恐ろしき「王」の力を持つ存在が、土に塗れ、襪褌雑巾のような格好で倒れている。

いきなりすぎる状況に、人々はただただ戸惑うばかりだ。

「何でこんなボロボロで降つてくんだよ!!? あの前な建物から落っこつてきたよな!!? コイツ……やっぱなんか関係あんじやないのか!?」

先日の怪物達の襲撃、そしてその際に起こつた少女の暴走。目に焼き付いたその光景が、住民達の恐怖感を誘う。

そんな中、最初に騒ぎ出した者がいた。

島の伝説を最もよく知り、最も恐れていた件の老人だった。

「何でもいい!!! こやつに何があつたかなど!!? 早う追い出せ!!! ここから遠ざけろ!!! 災いが……古の災いが再び起こるぞ!!!」

「そ……そうだ!!?」

「こいつは悪魔だ……危険な奴だ!!?」

「こいつが現れてからおかしな事ばかり起こってる!!? どうにかしねエとおれ達が危ねエ!!!」



老人の声で、住民達が次々に釣られ出す。

事実がどうであるかよりも、疑わしい存在への忌避感が、彼らに行動を促す。

「このガキ……!!? よくもおれ達の島を……」

エールを見下ろし、一人の大男が嫌悪の表情を浮かべ、拳を振り上げる。

激情の赴くまま、動かない少女を殴り飛ばそうとした時、隣に立っていた知人が彼の肩を掴んだ。

「ああ!!? なんだ……こんな時に……」

「……………お、おい。アレ見ろ」

「あ?」

鬱憤ばらしの邪魔をされ、不機嫌そうに停止した大男は知人が指差す方向を振り向き、硬直する。

町の入り口、大通りの始まり。

そこにいくつも人影が——騎士の姿をした何か、無数に集結していたのだ。

「なっ……何だこいつらア!!?」

道いつぱいに列をなし、行進する騎士集団。

ざつ、ざつ、と異様に揃った足音を鳴らして、向かってくるその様は不気味としか言いようがない。

「誰だ、お前ら……何の用で……………」

戸惑う住民達の中の一人、青果屋を営む男が突如、背後から現れた騎士の一体に斬りつけられ、血飛沫を上げて倒れ込んだ。

「ギャアアアア!!!」

「キ……キヤアアアアアアアア!!!」

「ぎゃああ?!」

一つの悲鳴がこだますると、次々に絶叫が上がっていく。そしてそれと同時に、無数の血飛沫が町中で飛び散り出す。

少女への怒りと憎悪は一瞬で霧散し、悍ましき殺戮が始まった。

「コイツらいつもの……あの動物もどきのメダルのバケモノ共じゃねエ!!!」

「なんなんだよ?!? 何が起こつてんだア!!!」

獣の本能のままに暴れる普段の怪物達とは異なる、整えられた武器と装備で効率的に命を狙ってくる。

まるで人間を相手にしているようだが、感じられる気配は人外のそれで、立ち向かう強者達は動揺を禁じ得ない。

「見ろ!!!? あそこだ!!!? やべエぞ島の奴らに囲まれてる!!!」

「アイツらまたエールちゃんに汚工罵詈雑言と暴力を……………!!!」

徐々に大きな声が上がります町。

そこを目指し、麦わらの一味が大急ぎで走る。

遺跡から追い出され、突き落とされ、墜ちた先の森からようやく生還した彼らは、囲まれるエールの姿に表情を変える、が。

「!?」　なんか…エールだけの騒ぎじゃないっぽいよ…!?」

「チツ…あの野郎、またなんか妙な事始めやがったな…!!!」

瞬時に異常事態に、そして騒ぎの元凶に気付いたサンジが険しい表情で歯を食い縛る。自分達がやられた直後のこの事態、勘違いの筈もない。

「ヒツ…ヒイイエエ!!」

彼らの向かう先で、老人が腰を抜かした様子でへたり込んでいた。

ずるずると後ずさる彼の前には、騎士の異形がじりじりと、剣を手ににじり寄っている。

「い…いやじゃ…た、た、たすけてくれエ…!!?　し…しし…死にたくない…死にたくない…!!!」

言葉が通じるかも怪しい相手に、老人は必死に命乞いを続ける。涙と鼻水で顔中ぐちやぐちやにし、震えながら慈悲を祈る。

しかし、そんな彼の願いも虚しく、騎士は剣を振り上げ、そして。

——ざくつ!

老人は自身に振り下ろされた剣を前に目をつぶり、身を固める。

だが、予想していた痛みはなく、やがてゆつくりと瞼を開き。

「ぐふっ…」

胸に刃を受け、苦悶の声を漏らす少女の背中を目の当たりにし、硬直する。

よろよろと後退り、膝をつくエールを凝視し、間拔けな表情で固まっていた。

「コンニャロオ!!!」

「このクソバケモンがア!!!」

エールを斬りつけた騎士は、駆けつけたルフィとサンジに吹き飛ばされる。

がしやん、とどこかに落下する異形を横目に、一味は大慌てでうづくまる少女に駆け寄った。

「エール!!! 大丈夫か?」

「チョッパ!!? 急げ!!?」

「お…おお、おオ!!! ってコレおれでいいのか? おれでどうにかなんのか?」

すぐさまチョッパが治療を試みるが、血ではなく硬貨を流す患者にどう対処すべきかと手が止まる。

そして戸惑っている間にも、また別の騎士が向かってくる。

「この非常時に……!! 失せろバケツ頭!!」

迫る生物達に、エレノアが怒りに目を燃やし強烈な蹴りを放つ。

再度あちこちに吹き飛んでいく騎士達を見やり、天使はふんつと満足げに花を鳴らす。

「うっし、おわり!!?」

「上出来だ、おれの指示どーり!!?」

「はいはい……」

「エレノア〜!!? やっぱおれじゃダメだ、診てくれ〜!!」

「ああもうなつさけない声上げないでよドクター……いやコレ、私だって何をどうやったらいいのか」

即座に泣き言をこぼ船医に呆れながら、エレノアもまた頭を抱える。

しかしどうにかして治療を施そうとしていると、それまで黙り込んでいた老人が目を見上げて。

「き……!!? き……き……きさ、貴様らアア……!! またしても現れおつたな……悪魔の使い共めらがア……!!」

一度命の危機を脱したお陰か、余裕を取り戻した老人は、自分の前に集まる青年達を睨みつけ、盛大に罵る。だが、正気ではないのは明らかだ。

「も……もも……もう終わりじゃ、破滅じゃ……破滅が目覚めおつた……この世の終わりが目を覚ましおつた……!!」 もうこの島もこの世も終わりじゃあ……!!」

「クソ……またあのジジイかよ」

「お……おお前達のせいじゃ!!! お前達が全ての元凶じゃ……!!? お前達が島に災いを呼び寄せおつたんじゃ……!!? お前達が全てを滅ぼしたのじゃ……!!!」

震える手で指差し、青年達に、彼を庇つたはずの少女すら罵倒し続ける。

誰も彼も、自分の身を守る事に必死でまるで聞いていない。だが、それでも老人は、汚く唾を撒き散らして叫び続けた。

「おぞましき悪魔と愚かな『王』が世界に破滅をもたらすんじゃあ……!!! 全て終わりじゃ!!? おしまいなんじゃア……!!!」

「おいジジイ……!!? てめエいい加減に………」

「フランキー、ダメよ……!」

我慢の限界に達したフランキーが、怒りの形相で老人に迫る。

ロビンに制止されても止まる様子はなく、この場で叩き潰さんとする勢いで一步を踏み出そうとして。

「いい加減にせよ……!!?」

その寸前で、とある声が響き渡る。

はっと我に返ったフランキーの目の前で、老人が指を突きつける手をがっしりと掴み、侍が——新ノ介が彼を厳しく睨みつけていた。

「何が悪魔……!!? 何が災い!!? 何が起こっているかもわかっておらぬくせに、勝手な想像だけで喚き散らすな!!!」

「ひい……!!?」

「この娘は今、おぬしを助けた!!! こんなにもボロボロの体で、さぞ痛かつたらうに、さぞ苦しかつたらうに……!!? 自分の身を顧みずおぬしを庇つた!!! おぬしは今、何を見ていた!!?」

新ノ介に、自分よりはるかに若い男に叱られ、しかし凄まじい剣幕に押され、老人は何も言えなくなる。

震える彼に容赦なく、侍はどこか必死さを滲ませ、吠え続けた。

「なぜ!!? 目の前のこの者を見ない!!! なぜその目で直に見てもいないあやふやな過去にばかり目を向ける!!? なぜ……何かあると疑わない!!!」

彼の姿には、後悔のような何かが滲んで見えていた。

自らの過ちを老人を通して見ているような、自らを叱りつけているかのような、そんな強い感情が見えた。

彼の剣幕に、ルファイ達も思わず黙り込んでしまう。

「おっさん…」

「す…全てこやつらが現れてからだろう!!! バケモノ共の襲撃が増えたのも!!? わしらがこんな目に遭っているのも!!! 全てこやつらが元凶ではないか!!!」

引くに引けなくなったのか、一度黙った老人は再び勢いを取り戻す。

血走った目で青年達と侍を凝視し、喚き続ける。

「敵じゃ!!! この娘もお前達もみんな敵じゃ!!? 害悪じゃ!!! 何を疑う余地がある

!!!」

「こんのジジイ…!!? いい加減黙らねエと…」

いつまでもいつまでも、無意味な罵倒をやめない。

今度こそ黙らせよう、とフランキーが再度拳を掲げたその時。

この惨劇の状況に似つかわしくない、軽快なベルの音が町中に鳴り響いた。

「静粛にお願いいたしま〜〜す」

音と合わせて、女の声がある。殺戮の中で、似合わない間延びした声が響く。

戦闘中の者も、逃げ惑っていた人々も、皆がその声をした方に振り向き、困惑する。

騎士達を従え、佇む一人の道化の少女を見つめて。

「我が主からの、お知らせでございま〜〜す」

彼らに向けて、少女はにっこりと。



どこか薄ら寒さを感じさせる笑みをたたえて口を開いた。

## 第291話 “王の落とし胤”

「我が主、ガラ様からのお言葉をお伝えいたしま〜〜〜す♪」

ベルを鳴らし、にこやかに笑う紫色の道化。

彼女が話し出すや否や、それまで凶器を振り回していた騎士達が手を止め、その場で直立し整列する。

しん、と静まり返る町中で、騎士達に追い詰められた人々がざわめく。

「んだありやあ…!?」

「ど…道化師？」

麦わらの一味もまた、突然の事態に困惑し立ち尽くす。周囲を取り囲む騎士達を警戒しながら、謎の少女を睨み身構える。

「主だと…!?」

中でもゾロは、少女が口にした不穏な単語に眉間にしわを寄せる。

得体の知れない相手が『主』と呼ぶ存在など、この状況では一人しか思い至らない。

「オイ!!? 大変だ!!? サンジが美女に反応してねエ!!!」

「はア? おいおいチョッパ、オメー何をバカな事を…えエ〜〜!!?」

サンジですら、見た目の整った少女が目の前にいるというのにいつもの反応がない。ゾロと同じ、険しい表情で棒立ちになっていた。

ただ、彼のその反応は仲間達にとっては相当な衝撃だったようだ。

「どうしたのよサンジ君!?!? いつもならどう見ても敵なヤバげな相手でも女ならすぐ鼻伸ばしてるところなのに……………!!?!? びよ…病気!?!? それともどつか頭ケガした!?!?」

「医者~~~~!!?!? 医者アア~~~~!!!」

「…おめーらおれの事を何だと思つてやがる…!!?!?」

「スケコマシ」

猛然と抗議したいところだが、そんな場合ではないと自らを律するサンジ。

自業自得だ、と彼を横目で見えるエレノアも、真剣な眼差しを少女に向け直す。

「まア冗談はさておき……………アレに警戒したのは正解だよ、サンジ君。よく気づいた」  
「散々鍛えてもらったからな……………ただそれ以上に、アレはやべエ」

エレノアとサンジの感覚、鍛え上げられた見聞色の覇気が彼らに警鐘を鳴らす。

一見人間にしか見えないあの道化の少女は。

悍ましき本性を隠した、怪物の一体であると。

「この場にお集まりの皆々様、改めましてこんにちは。偉大なる錬金術師にしてこの世

の全てを統べる王、ガラ様の忠実なるシモベ、ベルと申しまゝす。明日、正午をもちまして、この島の住民の皆様には全員……………」

ぺこりと、舞台役者のように上品に、可憐に礼をし名乗る道化・ベル。

戸惑う人々に向けて、彼女は無邪気な子供そのものといった笑みを浮かべ、軽やかに告げた。

「我が主の贄となつて、死んでいただきまゝす」

??

「……………古の王……………800年の昔、真にこの島を支配し、世界の全てを欲した……………最も愚かで強欲な男……………」

玉座に腰掛け、頬杖をつきながら、ガラは溜息混じりに呟く。

墓地から豪華絢爛な城へ。様相を一変させた空間で寛ぎながら、自らが招いた男を横目で見やる。

コウガミはただ、いつものぎらぎらとしたためでガラを見つめ返すだけだ。

「…あの男の系譜は皆、とうに潰えたと思つていた。あの娘を除いて」

「あいにく一人だけ生き延びていたのさ!!! 本人曰く!!! 紛い物の王ではない!!! 正當なる王位継承者の血がね!!!」

感慨深げに呟くガラに、コウガミは語り出す。

ガラの問いに忠実に、あるいは見返りを期待しているかのようには、喧しい声と満面の笑みで答える。

「王は生前!!! 幾人もの妻との間に子を作ったと聞く!!! 時代の王を担う存在ではなく!!! 己が没した後も己の国と宝を守り続けさせる墓守として!!! 死後も使い続けられる道具として!!! 大勢の子を残したとね!!!」

「……………そう、あの男はそういう男だ」

「しかし800年前のあの事件の際……………国を追われ多くの命が散った!!! 王の子も幾人も海の藻屑と消え!!! 僅かな生き残りがこの島に王族として君臨した!!! その一人の遙か子孫が私さ!!!」

偶然紛れ込んだ、いや、不運にも巻き込まれたサトナカは、コウガミの影に隠れるように黙っていた。

会長と自分の他に人はいない。相手の機嫌を損ねれば自分は終わる、そう察していたがために、無言で様子を伺うだけにとどめていた。

「…しかしました!!! 尊敬できる先祖ではどうやらなかったようだ!!! 先祖代々私が聞いていた話と事実はまだで違う!!!」

げらげらと笑い、肩を揺らす。状況を恐れる様子は一切なく、全てを享受している。笑う以外の感情を知らないように、コウガミの口角は上がったままだ。

「おかげで随分と振り回された!!! 言い伝えは自分に都合よく!!! 悪意のこもった解釈と伝聞!!! 何もかも自分以外の誰かに責任転嫁し罪をなすりつける困った男だった様だよ!!!」

「それがあの男の血よ……獅子の如く傲慢で、蜚ヒの如く意地汚い……欲をかきすぎたせいで全てを失い、それでもなお欲する事をやめられなんだ俗物」

コウガミから目を逸らし、ガラはうんざりしたように吐き捨てる。

遙か昔、己がまだただの人であった時の事を思い出しているのか、遠い眼差しで虚空を見やる。

「800年前のあの戦においてもそうだった……かの国々の戦いにおいて、どちらにも味方せずどちらにも敵対せず、漁夫の利を攫う事しか考えずひらひらと立場を変え続けた小物」

「……?」

「結局はどちら側にも『敵』と称され……どちらに降る事も許されず国を追われた愚か者よ」

深く深く、ガラはため息溜息をこぼす。

かつて起こった『異変』を、その中で生き延びた日々を思い浮かべ、はつと鼻で笑った。

「この世で最も強欲だった男? “よくばりおおさま”? 笑わせる…………… “こうもりおおさま”の間違いだろう」

サトナカは困惑の表情で、コウガミとガラ、双方が時折口にする単語800年前に起きたという “何か” について訝しむ。

それは閉ざされた島、そして長い時が経った今では誰も知り得ない、世界の禁忌……サトナカはただ、耳を傾ける事しかできずにいた。

「醜い……………ああ、なんと醜いのだ、人間よ」

ガラはふと、視線を外へ向ける。城の足下に蔓延る人々の町を、そこで起こる騒ぎを察知し、嫌悪の呟きをこぼす。

檻樓雑巾と化した少女を取り囲む人々の姿に、苛立たしげに声を漏らす。

「800年経とうとも……………人間という存在は一向に進化しない。どいつもこいつも強欲で意地汚く……………見るに耐えぬ醜態ばかりを晒す愚物ばかり」

「彼女かい!!? すっかり勘違いしていたよ!!! 途中からおかしいとは思っていたのだが……………記憶を失っているのならそういう事もあるかと思過ごしていた!!! いやはや実に悪い事をした!!!」

「あの娘もまた……………碌でもない血を受け継いだ哀れな子よ」

本気でそう思っているとは思えないほどの冷たい声。向ける視線もひどく冷め、同情

など一切ない。

むしろ痛々しい姿を晒す少女を、心から軽蔑しているようにも見える。

「哀れな娘だ。父に見捨てられ、民に忘れられ、他者の欲に利用されるただの道具に成り果てた無力な女……挙句永き時の果てに、父の悪名すら押し付けられ、疎まれ蔑まれる救いようのない存在に墮ちた……」  
「姫」とは名ばかりの贅

仮面のように一切変わらず、感情を一切表さなかつたガラ顔。

それが不意に、きひつと不気味な声が漏れ、醜く歪む。耳まで裂けて見える笑みが浮かび、嗜虐的な光が目点灯。

「まア……もうその苦しみからも解放されるのだ。泣いて喜ぶ事だろう……」  
くつくつと声を漏らし、肩を揺らす異形の錬金術師。悪意に満ちた顔で、歯を剥き出しにして嗤う。

サトナカが青い顔で後ずさりかけた時。

彼女の前に立つ男は一切臆さず、凶太く耳障りな大声で割って入った。

「さて!!! この際だ……私も色々聞かせて貰いたいね!!! ……一体君はいつから目を醒ましていたのだね!!」

不躰に口を挟むコウガミに、ガラは特に気にした様子はない。それどころか、彼の問いをちよūdいと感じたように、ちらりと視線を超越す。



発言の許可を得たと理解したコウガミは、後ろ手を組みながら言葉を続ける。

「此度の革命はあまりにも早すぎる!!! 前々から計画し準備を重ねていなければ、古の錬金術師といえど不可能な事ばかりだ!!! とはいえ!!! 推測できないわけではないがね!!!」

「…ならばまず、聞こうか」

興味が出たのか、ガラの顔がコウガミに向く。

びくつと肩を震わせて下がるサトナカには目もくれず、待つてましたと言わんばかりに前に出るコウガミだけに目が向けられる。

コウガミはまるで自分が主役の舞台に立ったように、堂々とした態度で語り始めた。

「島の住民達に話を聞いたところ……セルメダルの怪物達が現れ出したのはちょうど20年ほど昔!!! その時期は!!! とある者達が島を訪れた時にちょうど重なる!!!」

「……!!!」

「彼らは嵐の夜にこの島に辿り着き!!! 島を自由に冒険し!!! そしてかの遺跡を知り!!!

一切の恐れなく足を踏み入れた!!! 数々の危機と罠を乗り越え進んだ彼らだったが……!!! 彼らは結局何も手にする事なく遺跡を後にし!!! 同じ嵐の夜に島からも姿を

消した!!!」

聞き覚えのある、その話。

ぎよつと目を見開くサトナカの気配を背後に感じながら、コウガミの話は続く。

「しかし!!! 彼らは何もしなかったわけではなかった!!! 確かに最奥に!!! 王の前にまで到達してみせた!!! そして:!!! コアメダルの封印を解き放った!!!」

コウガミの目は、興奮と感動に輝いていた。

先祖の故郷に舞い戻り、いくつもの遺跡と資料を読み漁り、回り道を繰り返しながらも辿り着いた歴史の真実。

それを手に入れた、自らが欲望を叶えた事実には、只管に身を震わせていた。

「……………そう、我はその時目覚め、復活の為の計画を発動した:!!?」

「凄まじい衝撃だったよ!!! まさかかの『王』が!!! 伝説となったあの男がここまで関わってくるとは!!! 素晴らしい!!! 人生とはまさにプレゼントボックスだ!!!」

掌から血が滲む程に、拳が握りしめられる。暑く震える心の衝動のまま、その身で感動と喜びを表現し。

現代の狂人は、古の狂人の前で歓喜の声を張り上げた。

「ゴール・D・ロジャー!!! なんと素晴らしい置き土産を残してくれたのだ!!!」  
??

「な……………何だそりゃあ!!!」

「ふざけんな!!? 何でおれ達が死ななきゃならねんだ!!!」

突如、目の前の少女に告げられた宣告に、一瞬遅れて人々から抗議の声が上がる。得体の知れない奇妙な格好の女に、突然「死ね」と言われる。

どんな聖人であろうと受け入れられるはずのない、あまりにも唐突すぎる宣告だ。

「いきなり出てきて意味わかんねエ事ほざきやがって…!!? ただでさえあのガキの所為でメチャクチャになったこの島を!!」 まだブツ壊そうってのか!!!」

「そうだア!!? ふざけんなア!!?」

「そいつら諸共今すぐおれ達の前から消えろオ!!!」

危険な力を持つ少女、そしてその一味を横目で睨みながら、島の住民達は謎の道化を口汚く罵る。

敵意でいっぱいの中の町の中、ブルツクが思わずぼそりと呟く。

「なんかもう、我々完全に嫌われちゃってますね」

「誤解だつてのにもう…!!?」

島で起こり続ける異変の原因扱ひされ、ナミがうんざりした様子でぼやく。

だが、それを頭に血を登らせた住民達に言ったところで、聞き入れてくれるわけもなく、怒号と罵声が響き続ける中。

突如、道化の少女が自分の前に手をかざす。

すると次の瞬間、彼女のすぐ前の地面が、巨大な鉄球を落とされた跡のように大きく

陥没した。

「うるさくて汚いそのお口をお閉じくださ〜〜い」

轟音と共に起こった異変。人々の怒号は途端にぴたりと止まり、全員が真つ青な顔で立ち尽くす。

騒ぐ者が一人もいなくなったところで、ベルは改めて喋り出した。

「あなた方はもう『贅』です。逆らう権利も抗議する権利もございませ〜〜ん」

「もし逆らう意志がある場合は……………明日の昼を待たずにこの世から消えていただきませ〜〜す」

は、と沈黙していた住民達の顔に困惑が浮かぶ。

町の入り口で話すベル。それとは別の方向から、全く同じ声が聞こえてきたのだ。

慌てた彼らは、声がした方を振り向き……………屋根の上で佇む、もう一人のベルを凝視し言葉を失った。

「我が主は今の世を大変深くお嘆きです……………人間の欲望に限りはなく、争いは続くばかり」

「人種間には根強く差別が残り、愚かな『神の末裔』が醜く居座り暴虐非道を為す……………ひどい世の中になったものです」

「悲しくて涙が出ちやいます……………しくしく、えーんえーん」

「右も左も苦しむ人達ばかり。救いなどどこにもなく、目の前の絶望と悲しみになだれる暗い暗い未来だけが広がっています」

次々に同じ声が響く。前、後、右、左、合計四人のベルが住民達の周囲から、示し合わせたように順に喋る。

わざとらしく、人を馬鹿にしたような態度で好き勝手に語る。

「神……?」

「……………」

「その為、主は決めました……………今の人間達の世を全て消し、新たな世界を創造される事を」

妙な発言に困惑するヒナの隣で、シンゴは無言で眉間にしわを寄せる。

同じように顔色を変える数人の住民達をよそに、ベルはわざとらしい表情を一変させ、心からの笑顔を浮かべる。

「愚かな全ての人間を滅ぼし、苦しみに満ちたこの世界を終わらせる偉業を成し遂げる、真の“王”となられるので……………す!!?」

「皆様はその礎となれるので……………す♪」

「わ……………い☒」

「ぱちぱちぱちぱち……………」

楽しんで祝う道化達だが、住民達からの反応はない。

根本から普通の人間ではない事が嫌という程わかり、誰もが嫌悪を抱き、しかし何も言えなくなる。

「…正気かこの女…!!!」

「イカれてやがる……………」

ゾロとフランキーが思わず悪態を吐くが、彼らもまた動けないでいる。

彼女達の主と戦い、真面に相手もされず一方的にやられた後の今、迂闊に動けばどうなるかわかったものではない。

だが、それでも我慢できなかった麦わら帽子の青年が、憤然とした様子で口を開く。

「おいピエロ!!! お前ふざけた事言ってるじゃ……………もが」

「黙ってて…迂闊な事言ったら私達じゃなくこの島の人達が消される」

猛然と口答えをしようとしたルフィの口を、とっさにエレノアが塞いで押しつける。もがく船長を押さえつけたまま、天使は道化の一人を見据え、問いかける。

「二つ聞かせてよ……………なんで今じゃないの。明日の昼だなんて……………どうせ殺す相手にわざわざ時間を与える意味って何? あんたの主人は…何を求めているの?」

慎重に、様子を伺いながら恐る恐る問う。

その姿勢を気に入ったのか、ベル達はより一層嬉しそうに笑みを浮かべ、再び順に語



## 第29章 古代の王〈Ⅳ〉 第292話 流刑島の姫

世界から切り離された孤島に、夜の冷たい雨が降る。

暗黒の空の下、まるで死んだようにひっそりと、豪雨の中にその姿を晒す。

平和が続くと思われていた孤独な国で、終焉の刻限を伝えられた島の民はただ……悲壮な顔で家に籠るばかりとなっていた。

「クソツ……!!? あのカソメダル野郎……ふざけた事抜かしやがって……!!!」

全ての流れ者が行き着く砂浜。

そこに停められた獅子の船首の船の中で、サンジが悪態を吐く。

腹立たしい敵の顔を思い浮かべつつ、不機嫌そうに椅子に腰掛け、煙草の煙をくゆらせる。

「何が贖だ……食材にもならねエクソバケモノの分際でコックを喰おうたアいい度胸だ。先に野郎を刻んで肥やしにしてやる」

「斬り刻むんならおれにやらせろぐるまゆ。野郎にや数え切れねエくらい借りができ



てんだ、おれが仕留める」

「ああ!! 誰がてめエに頼むかへボ劍士!!! ありやおれの獲物だ、ひっこんでろ!!!」

「バカ言つてんじゃねエ、おれがぶつた斬るんだしやしやり出んじゃねエエロコック!!!」

「うるさいつての!!?」

同じく苛立っていたゾロが口を挟むと、目を釣り上げて噛み付く。

額をぶつける勢いで睨み合った二人が口汚く罵り合おうとした時、二人の頭頂部にごんつ、と拳が落とされた。

「ピーチクパーチクやかましいのよ!!? ……そんな場合じゃないでしょ」

頭頂部を抑えて悶えるゾロとサンジを睨んだナミは、やがて深い溜息をこぼす。怒りが持続するほど、彼女にも余裕はなかった。

すとな、と椅子に腰を下ろし、暗い表情で虚空を見下ろす。

「あのピエロと兵隊達………言うだけ言っていなくなっちゃったけど……ホントに私達を皆殺しにする気なの……?」

「………するかしないかと聞かれればするでしょうし、できるかどうかなら………可能でしょうね」

ナミの呟きにロビンが誇張なしに答える。

見せつけられた万物を創造する力、無限に湧く兵士。道化の少女が口にした戯言が、

真実だと突きつけてくる。

「やれやれだ……町奴らもすつかりおとなしくなつちまつてたな。負傷者を治療するつて回つてつてもだくれも出てきやしなかつた。全く困つた奴らだ」

扉が開いて、島の町医者が困り顔で戻ってくる。

鞆をどかつと机の上に置いた伊達マルは、がしがしと髪を掻きむしつて唸るような息をついた。

そんな彼に、チョッパーが案じるような視線を送る。

「それを言うならお前もだろ、伊達マル……お前、何か病気を抱えてんのか？ さつきフラついてたろ」

「あ……見てた？ あちゃー、全部片アつけるまで黙つとくつもりだったんだけどな……」

指摘された伊達マルは苦笑し、おどけた態度を見せる。が、じつと一味に見つめられ、やがて観念したように笑みを消し、自分のこめかみを指で叩いた。

「……ココに破片が詰まつてんのよ。それがおれの脳にダメージを与えてる」

息を呑む一味。目を見開くゴトー。

ざわつと騒めく船室で、フランキーが鋭い視線のまま口を開く。

「事故……いや、戦争か」

「ああ……………：戰場回つて負傷者やら戦争被害者やらを治療する流れの医者やつてた。つつても、患者が巻き込まれちゃ堪んねエから、しつかり安全を確保した場所に病院建ててそこでやってただけだな」

壁に背を預け、ずるずるとその場に座り込む。

疲れ切つたその様子は、伊達マルの外見以上に老いて見えた。

「大変だったぜ……………：敵味方の判別なんざつかねエくらいの大重傷者ばつかで、毎日毎日運び込まれ、錯乱するヤツはいるわ物資はいつも足りねエわ……………：救つても救つても救えない……………：まアそれでも激戦区よりはマシな地獄だったな」

記憶を語る伊達マルの表情は厳しい。

当時の戦況の激しき、悲惨さ。そして失われていく命の儚さ。あらゆる記憶が今でも彼を苛んでいるのだろう。

「ところが……………：安全な筈のそこがいきなり攻撃を受けた」

「……………：？」

「突然の事だった……………：何の前触れもなく、病院で大爆発が起こつた。患者も医者も……………：そんでおれも、何もかもが吹っ飛ばされた……………：おれも長い間生死の境を彷徨い、一命は取り留めたが……………：このザマだ。おれ以外の生き残りは……………：ほとんどいなかった」

はあ……………：と天井を仰ぎながら深い深い溜息を吐く伊達マル。

生きていてよかった、というような様子には見えない。むしろ、生き残ってしまった、という罪悪感と徒労感が滲んで見える。

「ロックベル夫妻にや悪い事をしちまった…子供がいるっつー話だったのに」  
「…ロックベル？」

「実を言うと、おれもそう長くはねエ。破片は摘出が困難な位置にあつて取り除けず…  
じわじわ脳を損傷させる。……自分が医者だつてのに情けねエ話だ」

聞き覚えのある名にエレノアがびくりと反応を示すが、伊達マルは気付かずそのまま話を続け、自重気味に鼻を鳴らした。

「そんな重傷で………なんでこんな島で傭兵を………」

「こんな身体だからよ」

今すぐにも入院すべきだろう、という目でウソツプが思わず問う。

その疑問にも、伊達マルはやや投げやりに答え出した。

「そこらの医者じゃ無理だ………限られた最高の名医にしかおれは救えねエ。だがそういう名医は、貧乏人の相手なんざしちやくれないのよ」

「ドラマのあのばーさんとかか？」

「おい!!!」

ぼそりとサンジがある医者の名前を出す。腕は凄まじいがその分報酬も高額になる、

やたらと元気な老婆の医者だ。

その弟子であるチョツパーが、師を引き合いに出されて目を吊り上げた。

「Dr. くれはか……いゝい医者だ、確かに頼むならそういう名医がいい。……だが結局、安全によその国に行くにも莫大な金がかかる……なんせここア『偉大なる航路』だからな」

同じ医者である伊達マルもくれはの名はよく知っているらしく、彼女を讚えつつ、彼女に頼む場合の手間と苦勞を語る。人材だけでは駄目なのだ。

「そんでまア……一朝一夕じゃ語れねエいろ〜んな事があつて、会長に会つて誘われて………1億B分のお仕事をやらせてもらつてたつてワケ。よくある話だろ？」

「そういう経緯か……お前もなかなかハードな道歩んでんな」

うーむ、と思わず唸るフランキーやウソツプ。

島にきて色々世話になつてゐる男の経歴を聞き、神妙な表情になる一味に苦笑を返す伊達マルは、ふいに甲板の方向を見やつて眉間にしわを寄せた。

「ハードといえは………」

ぎざぎざ……と滝のような勢いで降り注ぐ雨。

1 m先も見えなくなるほどの豪雨が、浅瀬に浮かぶサニー号を濡らす。

そんな中、甲板の芝部の上に一人、少女がぼんやりとした表情でぼつんと独り佇んでいた。

「おーい、エール。中入んねエのか？ ずぶ濡れだぞ」

船室の扉を開け外に出たルフイが、立ち尽くすエールの背に向けて呼びかける。

エールはゆつくりと振り向き、ルフイを見つめる。元から表情の乏しかった少女は、日中の一件以来より一層変化に乏しくなってしまうていた。

「…雨、か。わからなかったよ」

「寒くねーのか？ カゼひくだろ、お前もこっち来いよ」

「…平気さア。風邪なんかひかないし…寒くもないよ」

黒雲を見上げ、降り注ぐ雨粒に手のひらを掲げて触れるエール。

無数の大粒が痛みすら覚えるほどの勢いで皮膚に当たっているというのに、一切顔は歪まない。

むしろ、自分自身を嘲るように卑屈な笑みを浮かべてみせた。

「……………何も感じないからね」

ぐ、と徐にエールは自分の片腕を掴み、力を込める。

握り締められた右の二の腕が、僅かな抵抗の後に、ぼぎん、と音を立ててまるごと引きちぎられる。

その直後、引き千切られた右腕が、何十枚もの硬貨となつて散らばつた。

「おめー…あのメダルの奴らと一緒に体だったのか？」

「そうだよオ…私の体は全部……偽物なのさア」

目を丸くするルフィの前で、エールはまた嘔う。

散らばつた硬貨を、無機質なその輝きを蔑んだ目で見下ろし、吐き捨てる。

「グリーズは元々……物から生まれた存在だからねエ、五感が退化してるのさア。見える景色はくすんでるし、聞こえる音も濁つてる……鼻は利かないし、触れてもほとんど何も感じない……味覚なんてゼロ、砂を食べてるみたいなものさア」

じやらじやらと音がして、エールの肩が蠢く。引き千切られた残りから無数の硬貨が湧き出し、形をなす。

やがて光とともに効果が一体化し、元通りの腕に変じる。

人ならざる、それどころか生物ですらないその光景を、ルフィは無言で見つめ続けた。「満たされないから欲する、欲しても満たされないから苦しむ……そういう悲しい存在だよ」

黙り込んだエールの周囲で、雨音だけが響く。

だがその音も、エールには濁つた雑音にしか聞こえていないのだろう、終始不快げに眉間にしわがよつていた。

「そんで…それを作ったのが、おめエの父ちゃんで……ホントの『よくばり』なんだな?」

「……そうだね。全部全部アイツの所為……そして、止められなかった私の所為」  
はあ、と思いい溜息が溢れる。

体温すらも失ったエールの息は、冷たい雨の中でも白く染まることはない。

「……どうしてこんな事になっちゃったのかなア、私がやつと……役に立たんだけだと思つてたのに」

全ての記憶を取り戻した少女……遙か過去の真実を知る一握りの存在は、そう言つて島を見やる。

800年前の悲劇を、自分の犯した大きな過ちを思い出しながら。

??

——800年前、名もなき島（現在の陽炎島）

うねる渦に囲まれた孤島。あらゆる物を引き摺り込み、一切を外へ逃がさない天然の牢獄。

広く大きく、三つの円が並んだ形状のその島は——怪物達の巣窟であった。

「ギャオオオオオオ……!!!」

巨大な獅子が吠える。と同時に、鬣が光を放ち周囲の者の目を眩ませる。



雄々しき咆哮と光が弱き獲物達をねじ伏せる中、大地を踏み均す巨体が飛び出してくる。

「ブモオオオ!!!」

「キュウウウ!!!」

大木を薙ぎ倒し、角を振りかざし突進する巨大な猛牛。その後が続く、樹々を切り刻む無数に枝分かれした角を生やした鹿。

広場に出た二体と獅子は、互いに殺気に満ちた目を向けて頭から激突する。

その頭上を、一羽の鳳が飛翔し、鋭く研ぎ澄まされた爪を見せつけ急降下した。

「クカカカカカカ!!!」

ぎいんと。

まるで太刀音のような甲高い音を響かせ、猛獣達のそれぞれの得物がぶつけ合わされた。

——その島は、まさに猛獣達の蠱毒。

圧倒的な強さ、特殊能力、そして生命力…!!?

凄まじき生命を宿した無数の怪物達が、雄々しくぶつかる修羅の国。

弱き種は淘汰される、無慈悲な世界。

大地は揺れ砕け、樹々は切り刻まれ吹き飛び、破片があちこちへ飛び散る。余波だけ

で死に至りかねない、激しく恐ろしい怪物達の殺し合いの場。

そんな地獄の中を、小さな影がこそこそと、しかし早足で駆け抜けていく。

「ハアツ……ハアツ……!!? ハア………!!!」

大地に残った巨木の根元に潜り込み、身を隠し息を整える、一人の少女。

全身汗だくで、荒い息を吐きながら、そつと木の陰から裏側を……怪物達の激突の様子を伺う。

舞い散る血飛沫、迸る絶叫。

近付けば命はない恐ろしき惨劇の決闘。

そのぶつかり合いの向こう側に見える目的のもの……瑞々しく生い茂る色彩を確かめ、少女はごくりと息を呑む。

そしてじりじりと機を伺い、姿勢を低くしたまま走り出した。

地獄に向かって、意地汚く、泥にまみれてなお生きる為に。

——その島では、人もまた餌に過ぎず。

秀でた頭脳に恵まれていようと、弱肉強食の理からは逃れられない。

争いから逃げ、追い立てられ、隅で震え怯えるのみ。

「うわああああン……!!?」

島の東端、荒れた岸辺。

唯一猛獣達の気配が感じられない安全地帯に、幼子の泣く声が響く。

「泣くんじやないよ……!!?」 泣いたつてどうにもならないの……!!? お腹が空いてるの

はお母さんも一緒なんだよ……!!?」

幼子をなだめる母親の声も弱々しく、今にも途切れそうだ。

がりがりに痩せ細った身体はいっ折れてもおおかしくない。だがそんな彼女が必死に  
なだめても、幼子は落ち着いてはくれない。

「食い物……食い……もの……!!?」

「オイやめろ!!?」 そんな怪しい草食うんじやねエ!!? 死んじまうぞ!!!」

別の場所では、骨ばった男が地面に這い蹲り、固い土を掘り上げ見つけたよくわから  
ない草の根を食もうとしている。

別の男が止めようとするも、同じく痩せた彼には友人の執念を止める力もない。

「おい!!?」 しつかりしろ!!?」

「……もう……ダメだ……体が……動かねエ……」

四肢を投げ出し、項垂れる仲間必死に呼びかける男がいる。

仲間の手には粗末な鍬のような棒切れがあり、彼らの前には表面だけが掘り返された  
固い土が広がっていた。

「朝から晩まで働いて……荒地を耕して……畑を作って…………だけど、作物なんざもうまともに育ちやしねエ。頑張りたくても……食うもんなんざ何もありませんエ」

残った力を絞りきって、重い体を奮わせ努力した結果が目の前この寂しい景色。何をしようと思わされるほどの絶望が彼らを襲っていた。

「せつかくあのバケモノ共に襲われない場所を見つけたのに…………渴いた土以外何もありませんエ……!!? このままここで餓死するしかねエなんてあんまりじゃねエかよ……!!!」

「おれ達は……おれ達は……!!? 無意味に死んでく……ただそんだけなんだ」  
乾ききった体からは涙が溢れてくる。

友のそんな姿を見ても、湧いてくるのは悲しみではなく、勿体ないという感想。  
嘆く他に、彼らには何もできずにいた。

「どうすりや……どうすりやいいんだ……!!?」  
ゆつくりと死に向かう友を胸に抱いたまま、項垂れる男。泣きわめく我が子を抱きしめるしかできない母親。狂いかけた若者。

地獄から逃れた何十人もの人々が、暗い未来に絶望し項垂れている。

……だが、そんな彼らの前に、一人の救い手が現れた。

「——おなががすいてるんだね？　大丈夫!!？　もう大丈夫だよ!!!」

人々の悲痛な声とは打って変わって、希望に満ちた力強い声が響く。

はっ、と人々が顔を上げ、その声の主を見上げると、その方向から何かがころころと転がってくる。

木の実だ、果実だ。

水気に溢れた果実が、痩せ衰えた男達の前に落ちてきた。

人々は大きく目を見開き、果実を落とした人物を……両手いっぱいには幾種もの果実を抱えてやってきた少女を凝視する。

「……!!？　お……お前……!!!」

「そ………その果実は……!!!」

「諦めちゃダメ！　荒れた土地にも草は生える……過酷な場所にも生き物はいる！　たくさんの生き物が精いっぱい生きてるのに、人間が負けてる場合じゃないでしょ!!!」

漂う果実の匂いが、目に映る鮮やかな食べ物の実在を伝えてくる。

どよめく人々の前に仁王立ちし、少女は満面の笑みを携え、大きく声を張り上げて彼ら彼女らを奮立たせる。

「ギア立って!!？　一緒に頑張ろう!!？　私が手を貸してあげるから!!!」

全員分にはとても足りない、しかし確かに明日に命をつなげる糧を抱えて、少女――

―ヒノ・エールはにかつと笑ってみせた。

……頭からどろりと流した血で、上半身を真っ赤に染めながら。

「さア……!! 私採ってきた森の果物をお食べ!!」

「「うわああああああ!!」」

少女を迎えたのは称賛の声でも感謝の言葉でもなく。

恐ろしいものに遭遇した人々の、心からの恐怖の悲鳴だった。

## 第293話 “一人は皆の為に”

ばくばくがつがつむしやむしや！

目の前に置かれた果実を一人一つずつ、痩せ細った人々が掴んでかぶりつく。

口の周りが果汁まみれになるのも構わず、あつという間に瑞々しい食物を平らげ、ごくりと飲み込んで深い息をつく。

「食ったア~~~~!!!」

思わず漏れ出る安堵の声。

命を繋いだ事を喜ぶ人々の中には、涙を流す者もいた。

「あア…!!? 生き返る…!!?」

「果汁が全身に染み渡っていくぜ……」

「ありがてエ…:本当にありがてエ…!!!」

口々に感謝の言葉を漏らし、手を合わせ拜む人々。

彼らに見つめられる先で、エールはにこにこ満足げな笑みを浮かべて岩に腰掛けていた。

「やだなくも、みんな大げさなんだよオ！ ちょっと擦りむいただけで全然大した事

ないよー」

けらけら笑う少女だが、その体のあちこちには血が滲んでいて痛々しい。

そんな彼女の頭や腕、足、腹にぐるぐると、比較的清潔な布を裂いて作られた包帯を巻きつけ、1人の女性が目を吊り上げる。

「笑い事じゃないわよ!!? そんな血まみれ傷だらけで大丈夫なんて言われて信用できるわけないでしょ!!」

「平気だつてばケイちゃんたら。こんなのツバつけときや治るよホラ」

「治るか!!! 医学ナメんな!!!」

本来安静にしているべき大怪我だというのに、毛程も痛がる様子を見せない少女に吠えるケイという女性。その怒声にも、エールはただ笑うだけだ。

「いやア〜腹いっばいだ!!? おかげで命拾いし……」

そう明るく告げるのは、皮膚がだるだるに伸びた青年。しぼんだ風船のような肌の中で実際より老けて見える彼は、口周りの果汁も余さず舐めとり腹を撫でる。

が、その瞬間大きな腹の虫が鳴り、その場にいた全員がぴしりと硬直する。

「足りないみたいだね!!? もう一回採りに行つてくる!!」

「やめんかア!!!」

腹を空かせた仲間の救いを求める声に、エールがすかさず踵を返し森へ向かおうとす



る。

慌てて引き止めるケイの後ろで、腹を鳴らした青年が他の者に殴られていた。

「鳴らすな!!?」

「鳴らすな!!?」

「ごめんなさい!!!」

「ごん、ごんつ、と。」

せつかく食べた食物で得た体力を浪費しながら、痛々しい鈍い音が島に響き渡るのだった。

——名もなき島の端の端。

ここは島の安全地帯……否、見捨てられた土地。

栄養に乏しく植物も育たないこの一帯は、猛獣達も寄つて来ず、流れ流されてきた弱者達が身を寄せ合う安息の地。

しかし、争いは無いが、幸福も無い。

痩せた土地に恵みは一つもなく、集う者に待つのは飢えばかり。

誰も彼もがガリガリに痩せ細り、骨と皮だけに成り果てて。

生き残るには——命を賭して戦場に赴かねばならなかった。

「ジーちゃん、具合どう？」

固く渴いた地を蹴り、座り込む老人の元へ向かうエール。

ぼろぼろの衣服を纏った老人は、ふるふる震えながら弱々しくエールを見上げ、ぎこちない笑みを浮かべる。

「あ……あア……だいいいよ。貰った薬ですっかり元気じゃ……」

「わかった!!? じゃあまた採りに行っておくね!!? おばさん、お腹の子は元気?」

「順調よ、エールちゃんがたくさん食べ物分けてくれたから、すすく育ってるわ」

「それなら良かった!!? 今晩は冷えるみたいだから後で毛布渡すね!!? おっちゃん、脚の調子どお? ばっちゃん! 腰痛くない? チビちゃくくくん!!? 元気でしゅかくくく!!?」

1人1人と顔を合わせ、目を合わせて話しかけ、様子を伺う。

元氣一杯といった様子で跳ね回り、老若男女関係なく、エールは島の住民達の為に声を上げ、動き続けていた。

それを、薬と毛布を渡された老夫婦がじつと眺めていた。

「……優しい……いい子じゃなア」

「そうだなア……自分の事は後回しで……他人を助け続けて。島中の皆を愛して……慈

しんで……」

はつきり言つて、老夫婦の具合は芳しくない。

肌は青白く、体は骨のように痩せ、今この瞬間にぽっくりとあの世に呼ばれてもおかしくない程に弱り切っている。

だがそれでも、飛び回る少女を案じて気力を振り絞っている様子だった。

「あの日から数年……ワシらはいろんなものを失い続けてきた……国も……土地も……暮らしも……人も……何もかもを」

「正直皆が諦めてる……自分の事すらどうにもならねエこの地獄で、生きる事すら諦めてる。だが……あの子は決して折れやしない。自分の手の届く場所にいる誰かを助けようと……一生懸命に戦っている」

「エールちゃんこそ……わしらの『王』じゃ」

己よりも他人を。そして偉ぶる事なく、常に皆の前に立つて行動する。

他人の事など慮れないような劣悪な環境でそこまで行動し続けられている彼女に、誰もが心動かされていた。

……だが、そうではない者達もいた。

「…チツ、何が王だよ、くだらねエ」

人々の輪から離れ、たむろする数人の男達。

その中の一人は称賛する老人に向けて吐き捨て、次いでエールに憎憎しげな視線を向けて唾を吐いた。

「あの無能のコウモリ野郎の娘がそんな立派な奴なわけないだろ……………村八分にされたことなくて必死に人気取してるだけだ」

「……………そんな事言うもんじゃねエ。その口閉じな」

「事実を言つて何が悪いんだ……………あいつはあのクズの同類だ。信用なんかするもんじゃねエ」

他の住人から警告されても、男は罵倒の言葉をやめない。

がりつ、とエールが採つてきた果実を乱暴にかじり、汚く食い散らかすと残った芯を放り捨てる。

「お前……………? 文句があんなら食うんじゃねエよ!!? それはエールが命がけで採つて来た果物だぞ!!」

「そうだ!!? お前に食う資格はねエ!!?」

「黙れよお前!!!」

「はっ!!? 罪人がおれ達の為に食い物を調達するなんて当たり前的事だろ!!? ホントならこんなもん食いたくもねエのに我慢して食つてやってんだ!!! ありがたく思いやがれ!!?」

目に余る言動と行為に、いきり立った住人達がよろよろと立ち上がり、男を睨みつけて怒鳴る。

しかし男は臆す様子もなく、それどころかエールに味方する住人達にも敵意を向け、齧った果肉を撒き散らしてさらなる暴言を吐いた。

「いい加減に……!!??」

「やんのかてめエ!!??」

受け取った善意を無碍にする、畜生にも劣る態度。

かっとう頭に血を昇らせた住人の一人が男の襟首を掴むと、男も負けじとつかみ返す。張り詰める空気の中、互いの襟を掴む手にそつと、小さな手が被せられた。

「ケンカはダククメ。みんな仲良く…同じ島の仲間なんだから」

にこり、と先程と変わらない穏やかな笑みを浮かべ、2人を宥めるエール。

一切の邪気が感じられないその笑顔に、住人はたじろぎ勢いをなくし、反対に男は余計に苛立った顔になる。

しかし男はそれ以上何も言わず、住人の手を乱暴に振り払って踵を返した。

連れと共に何処かへ歩き去っていく男の背を見送り、エールは苦笑しながら頬をかい

「ははは……しょうがないなア」

「…気にすんなよ、エールちゃん」

「してないしてない。平気だよ」

住人の慰めの声に、エールはひらひらと手を振って答える。

住人は呆れたような感心したような、困り顔で息を吐いて、エールを置いてその場を離れる。

平然とした様子のエール。

彼女の手が、かたかたと小刻みに震えている事に、そこにいる誰も気付かずにした。

??

「……………」

荒れた岩場に集まる人々。彼らの中心で焚かれる火。

極寒の冬のように冷え込む、島の唯一の安全圏でどうにか暖をとり、何十何百日目の夜を越そうとする住人達。

それを見下ろす一羽の巨大な存在があった。

真紅の羽毛に身を包み、巨木の枝にとまって静かに佇む巨鳥。

夜闇の中でも美しく輝く緑の目は、燃える焚き火のすぐそばで、忙しそうに動き回る少女をじっと見据えていた。

「はいコレ。私の分使って……まだ寒いと思うけどないよりはマシだしね」

そう言つて、エールは手に入れて来た大きな布を一人の妊婦に手渡す。

受け取る妊婦だが、渡されたそれは暖をとるには心許ない、薄い襦袢の布で、僅かながら表情に不安が現れていた。

「あ……あア……ありがとうねエ」

「ごめんね。明日は食糧以外に何か包まれるものも見つけてくるから、それまでちょっと我慢してね？」

困り顔でぎこちなく礼を言う妊婦の表情に気づかないふりをしながら、エールは手を合わせて詫げる。

その際、発した声が白い息に混じり、エールはぶるりと全身を震わせた。

「足りないのは食糧だけじゃない……寝床も服も……このままここで暮らし続けるには何もかも足りない。どうすりゃいいんだ……」

エールのそばで縮こまり、襦袢布で足の指先まで包まって暖をとる男がそう呟く。

不安が周囲に伝播し、しんと思ひ沈黙が降りる中、首をすくめて丸くなっていた誰かがぼそりと呟いた。

「……王の部隊が戻ってきてくれりゃあ……もしや」

「……あんなのに期待すんじゃないねエ。どうせ何もできやしねエ……どつかで野垂れ死

んでやがるだろうよ」

「やめろ……そんな話」

一人がこぼし、広がった不満の意識は消える事なく、人々はそれぞれの目に暗い感情を滲ませ、黙り込んだ。

エールはじつと口を閉ざすと、やがて歩き出す。それに気づいた1人が顔を上げ、訝しげに首を傾げた。

「……………どこに行くんだ」

「目エさえちやつててねエ……………見張りも兼ねてしばらくその辺歩いてくるよ。じゃ、おやすみ」

呼び止められ、エールはにへらとゆるい笑みを返し、手を振りながら、1人森の中に向かっていった。

さくさくと草木をかきわけ、ぬかるんだ地面を進み、住人達の声が聞こえないある程度の深さまで入り込む。

そこは、幾本もの巨樹が生え並ぶ密林。

猛獣達の戦場と安全地帯、そのぎりぎりの境界に属する領域。

高々と聳え立つ巨樹の根元に立ったエールは、幹に背中を預けると、その場にずるず



ると崩れ落ちていき。

「……………ハアツ…!!? ハツ…ハツ…ハ…ハ…ハヒユツ…カヒユツ…ヒユツ…ヒユウツ…!!!」

腰を下ろすや否や、荒い呼吸が少女の口から溢れ出す。

目を見開き、顔中に冷や汗を噴き出させ、がたがたとひとりでに震えだす体を自ら抱き締める。

青ざめた顔は、決して夜の暗さによるものだけではなかった。

「……………怖かった…!!? 怖かった…こわ…怖かった…怖かった…怖かった…怖…  
 がつだ怖かつた怖がつだよオオ…!!!」

肺がうまく息を吸ってくれない。脳がまるで働かない。

がちがちと歯を鳴らし、涙をこぼし、エールは胸の内に封じ続けてきた本音を決壊させる。

氷塊を体内に入れられたような恐怖に苛まれ、少女は只管に震え続けた。

脳裏に浮かぶのは、昼間の地獄。

食料を得るために単身危険な森に飛び込み、猛獣達の目をかいくぐりながら果実のなる木を目指そうとし。

ぶつかり合う怪物達の余波に巻き込まれ、  
樹々と共に薙ぎ倒され、潰されかけ。

己の存在に気付いた猛獣に狙われ、殺されかけ。

幾度も幾度も襲いかかってきた命の危機が、窮地を脱した今でも彼女の心を苦しめていた。

「い……いいい……生きてる……生き……いい……生きてる、生きでる!!! 生きでる!!! しい……生きてる”よオ!!!”」

もはや、今この場が現実であるかどうかすらも怪しい。

心臓はちゃんと動いているか、この痛みは本物か、自分の感覚すら信じられなくなっていた。

「死ぬかと思った……死んだと思った……!!! で、でも生きてる……生きてる……!!!」  
間近に感じた『死』は、とてつもなく恐ろしかった——何もないのだ。

死ねばそこで終わり。ただ消えて無くなるだけなのだ……少女はそう突きつけられた。

「い、痛かった……スゴい痛かった……!!! 死ぬと思った……!!! 死んだと思っただ……!!! ころ……こ……ころっ……!!? 殺されると思っただ……!!!」

生存に安堵するよりも、痛みに悶えるよりも、ただひたすらに恐ろしい。

理不尽なまでの力に、人などとは比べ物にならない狂気と殺意によって、無意味に殺され潰される、そんな絶望がたまらなく恐ろしかった。

「はひイツ…はつ…はひゆつ…!!? ウツ…」

喉奥から込み上げてきたものを、エールは止められなかった。前のめりに倒れ込み、地面に手をつけて胃の中のを遠慮なく吐き散らす。

ほとんど胃酸しかない内容物がビチャビチャと落ち、酸味が口いっぱいに広がった。

「たす…けて、たすけて…!!!! だれかア…:…:…:たすけてよオ…!!!!」

堪えていた感情が溢れ出す。偽っていた心の仮面が剥がれ落ち、弱く脆い本来のエールが露出する。

だが、誰も来ない。自分から離れてきたために、誰もエールの苦しみに気づかない。

このまま苦しみに飲まれ、心も体も壊れてしまうのか…:…:そう思った刹那。

ふわりと、エールの背中を暖かい何かが包んだ。

「……………アंक」

自分を包んだそれ——赤く暖かい、燃えるような羽毛に、エールははつと我に返る。

口周りを吐瀉物で汚したまま、エールは羽毛の持ち主——つんと視線を逸らして佇む、巨大な鷹の怪物を凝視し。

やがて、くしやりと顔を歪め、ぼろぼろと大量の涙を溢れさせた。  
「わア……あ……うわあああア……!!!」

真つ暗な夜の闇の中。

痛々しく弱々しい、少女の鳴く声が長く響き渡った。

「……今日も……助けて貰っちゃったねエ………」

無言で佇む巨鳥…… “空の王” と呼ばれる怪物・アंकに寄りかかりながら、エールは疲れ切った様子で呟く。

全身全霊で泣くうちに、呼吸も鼓動もいつの間にか収まっていた。

「……もう、何度目かねエ……食料集めに森に入る度に、いつもどこかであいつらの争いは起こる……互いの肉を、縄張りを巡って毎日毎日大暴れ………」

か細く途切れそうな声で、エールは秘密の友人に語りかける。

こんな関係、住人達には絶対に見せられない。

傍らで語る彼女に、巨鳥アंकは興味がないような素振りを見せながら、静かに耳を傾けていた。

「そんな争いを、あんたは颯爽と空から現れて鎮めちまつて…… “空の王” とはよく言ったもんだねエ………」

「……………」

「おかげで私も助かったし……食料も採れた。飢えたみんなも助かった……いつもいつも……ありがとうねエ」

エールの感謝の言葉に、アंकは何も答ええない。虚空を見つめたまま、ただ隣に寄り添い続けるだけ。

エールにとつては十分な慰めだったが、だからこそ疑問だった。

「……なア、どうしてだい？ どうしてあんたは私を助けてくれるんだい？ こんな木っ端みたいな小娘一人……どうして気にかけてくれるんだい……？ それがどうにも……不思議でならないんだよ」

言葉を発さない巨鳥の思いは、何もわからない。

ただどんな考えがあろうと、自分のそばにいてくれる彼を疑うつもりは一切なかった。心が温まるのを感じながら、羽毛の柔らかさを堪能していた。

「はア……寒……アंकの羽毛はあつたかそうだねエ、もうちよつとだけヌクヌクさせ——」

森に寒風が吹き抜け、ぶるつと震えるエール。

もう少しぬくもらせてもらおうと隣の友人に抱きつこうとし。

めぎやつ、と。

彼女の顔面に巨鳥の足が当てられ、ぐいっと強引に押しつけられた。じたばたと慌てもがき、張り付いた足を払いのける。

「……ふはっ!!? は……ちよ、ちよつとアंक!!? 調子に乗ったのは悪かったけど一端の淑女にやる事じゃなくないかい!!?」

抗議の声をあげ、アंकを睨むエール。

そんな彼女にアंकはようやく視線を向けるが、その目はじとりと呆れたような冷めたものだった。

「……ヒヨロロ」

「ああん!!? 『お前のどこが淑女だ?』だとオ!!? 貴様よくも人が気にしてる事を情け容赦なく言ってくれたなア!!」

「ピィィィヒヨロロロロロロロロ」

「誰が万年ちんちくりんだア!!! 見てろよお前!!? いつかそのうちお前がびつくり仰天するくらいにいい女になってやっかなア!!?」

人の言葉など微塵も口にしていないのに、それがどんな蔑みの意味を持っているのか瞬時に察したエールは烈火のごとく吠える。

ぴーちくばーちくと、しばらくの間騒ぎ続けたエールだったが、やがて口を閉ざし、大きな溜息と共に俯いた。

「……………わかつてるよ。こんなところでいつ来るかわかんない未来の話したって仕方ない事ぐらい……………」

目を伏せ、膝を抱える。

自分の行いは、ただの自己満足。そして、自己弁護。自体の根本的な解決に至る事はできないのだ……………それを痛いほどに理解していた。

「島にいるのは女子供と動けない老人ばかり……………動ける若い人達はみんなあの戦いで死んだか……………父様が連れてつてそのまんま帰らず。……………私が何とかみんなを助けてあげないと」

「……………ヒヨロロロ」

「……………見捨てるなんて、できないよ。だって……………そうしなきゃいけないから」

苦笑し、首を横に振るエールに、アंकはさらに呆れた様子で目を細める。だがやはり、少女の行いに対し止める素振りは見せない。

「……………じゃあね」

皆を助ける、自己犠牲も厭わない心優しい強い心の持ち主、

そんな仮面を被りなおし、エールは立ち上がると、唯一の友人に見送られながら、住人達の元へと戻っていった。

??

——それは、数日後の早朝の出来事だった。

その出会いが、少女エールを……

のちの陽炎島の運命を大きく狂わせる事になる。

「今日は珍しく凪いでるねエ……昨日はあれだけ大荒れだったつてのに。…今日は釣りにしようか」

安全地帯に属する波打際。普段なら荒々しい波が打ち付け、釣りどころか近づく事もできない危険な場所。

その日の朝はなぜだか落ち着いていて、エールは手製の釣竿を担いでその場に赴いていた。

「……ん？ んんんんん」

そこで、ふと気付く。

岩場に何か引つかかっている。ずぶ濡れになった何かの動物のような、人間大の何か  
が打ち上げられている。

猛獣達の子か、と警戒しながらそつと近付いて。

それが、俯せで倒れる人間の女である事がわかり、はつと表情を変えた。

「……りやマズい……誰か……!!! ……つて、誰もこつちにや近付かないのにいるわけないよねエ……!!？」



わたわたと慌てたエールは、すぐさま女の元へと近づき、ぐったりとした体を抱き起こした。

硬い背中との感触で、女は目を覚ました。

重い瞼を強引に開き、ぼやけた視界がはつきりとしていく様を見上げる。

その際、自分のそばで腕を組んで座り込む少女の存在に気付き、訝しげに眉間にしわを寄せた。

「……あの……は……」

「……………んア？ あ…ああ、気がついたかい。おはよう…気分はどうだい？」

女が目覚め、掠れた声で話しかけられ、こっくりこっくりと船を漕いでいたエールもはっと目覚め、容態を伺う。

「あなたは……」

「あんたを拾った者さア……………じつとしてな。大人しく寝てる事さね」

ゆっくりと身を起こす女をなだめ、エールはほっと安堵の息をつく。

同時に、新たな島の住人四人に仲間入りしてしまった相手への同情を抱きながら、にこやかな笑みを浮かべた。

「私はエール。ヒノ・エールさア……………あんたは？」

エールのそんな問いに対し、女は。

鼠の耳と尻尾を生やし、鳩の翼を背中から生やした、全身真っ白な女は、血の色をした目を細めて笑みを浮かべた。

「テオフラストウス・ラケル——ラケルとお呼びください、恩人様」

## 第294話 `居場所`

匙に乗せられた、やや色の悪い粥のような物体ものが口元に運ばれる。

少し逡巡しながらもそれを加え咀嚼すると、奇妙な味わいが舌に広がり、女は顔を歪めかけ、しかし気力で押さえ込もうとした。

「……なんというか、その………個性的な味ですね」

「あはは……気にしなくていいよオ。料理はそこまで得意じゃなくてねエ………」

流木や巨樹の破片を合わせて作った、家とも呼べない必要最低限の屋根の下。

エールはその中に敷いた簡素な布団に女を寝かせ、自作の灰色の粥もどきを食べさせていた。

見た目通りの酷い味らしいが、救われている立場にある女に文句を言うつもりはないようで、黙々と差し出されるそれを腹に収めた。

「しかし驚いたよオ？ ゴミに混じって浜に流れ着いてんだもの。…しかし、こんな牢獄の島に流れ着いちまう不運な奴が他にもいるとはねエ」

「………得体の知れぬ私などに斯様なお慈悲をいただき、本当に感謝いたします」

皿を空にし、改めて女——ラケルがエールに向き直って礼を述べる。

しかし同時に、枝のように細いエールの四肢を見つめ、申し訳なきように顔を歪めた。「しかし、ここまでしていただいて申し訳ないのですが……あなた自身、あまり栄養状態がよろしくないものと思われませんが……よろしかったので?」

「ん? あー良い良い、気にしないでいいよ。好きでやつてる事だからねエ」

食器をかたかた鳴らして片付けながら、ラケルの詫びの言葉に手を振るエール。相手を安心させるように、いつものにこやかな笑みを浮かべる。

「どこの誰だろうと、どんな奴だろうと……この島に流れ着いた以上は仲間で、家族さア……助け合うのが当たり前だよ」

「………本当に、慈悲深い方ですね」

ラケルはじつとエールを見つめ、目を細める。

笑顔を保ち続ける少女に何か感づいた風だが、簡単なのか呆れなのか、形容しがたい抑揚のない声でぼつりと呟いた。

「このような隔たれた過酷な環境で暮らしているとは思えないほど……とても……不思議な方」

「不思議なのはそつちだと思っけどねエ……何なんだイ? その羽は」

エールは思わず半目になって、ラケルの姿をじろじろと不躰に見てしまう。

鼠の耳と尾、鳩の翼というあまりに奇妙な出で立ち。普通の漂流者ではない事は間違

いない。

「そういう姿をした種族なのかイ？ 初めて見たよ。なんだかおとぎ話の存在が本物になったみたいな、不思議な存在感があるねエ……………」

「不思議……………そうですね、不思議ですよね？ 私もそう思います……………」

そんなエールの疑問の声に、ラケルは思わず苦笑を浮かべていた。

ぱたぱたと耳を動かし、翼を軽く飛ばたかせ、自分の体を見下ろし撫でる。

その様はなんとというか、誰かに依頼し、作ってもらった作品を眺めるような、満足さと不満さが混ざったような奇妙な態度だ。

「何だい？ 自分の体の事だろうに……………そんな他人事みたいに。…まあ、何でもいいさ。

詮索はしないのが主義でねエ、元気になってくれさえすればそれで十分さア」

少し気になったエールだが、詳しく問い質す事はせず、視線をラケルの顔に戻す。種族がどうであれ、この島に流れ着いた以上は同類なのだ。

「そんで……………ん？」

これからどうするか、そう尋ねようとしたエールは、ふと自宅の近く……………森の入り口付近が騒がしい事に気付き、ぱつと振り向く。

声の方へ向かってみれば、他の住人達が森の入り口付近にぞろぞろと集まっているのが見えた。

「…戻ってきた?」

「お父!!?」

「父ちゃん!!! 父ちゃんが帰って来た!!?」

ばたばたと走っていく女子供、よろよろと向かう老人達。

歓声をあげ、森の入り口の周りに集まって輪を作り、わくわくと目を輝かせていた。

「……………? 何です…?」

「狩りに行ってきた奴らが戻って来たぞ!!! 迎えろオ!!!」

エールの後について外に出てきたラケルの疑問に答えるように、駆け出した男達も輪に加わる。

全員が期待に目を輝かせ、胸を高鳴らせ、そして何より……欲望に目を輝かせていた。

「戻ってきたって事は………何か成果があったんだな!!?」

「に…肉か? 食い物はあるか!!?」

「うおおおお~~~~!!! 勇者達が戻って来たぞオ~~~~!!!」

住人達の喝采の中、森の入り口に複数の人影が浮かんでくる。

薄汚れた鎧、刃の欠けた武器、泥や煤にまみれた装いをした、待っていた住人達より比較的体に肉がついた男達。

何かを引きずって戻ってきた彼らを、人々は歓声と共に出迎えた。

「……いや……アレは」

騒ぎを見守るエールの表情に影が差す。

人々も、男達が引きずっているものが目当ての収穫ではない事に……布に乗せられ、引きずられる血塗れの男である事に気付くと、あつという間に静かになった。

「父ちゃん!!? 父ちゃん!!? とう………」

一人の男児が男達の中で父を探す。

期待と誇らしさでいっぱいだった彼の表情は、引きずられてきた、ぴくりとも動かない父の姿を見てぶつりと途切れた。

「……父ちゃん? なんで寝てんの? …真つ昼間から寝てたら姉ちゃんに怒られるよ? ……ねエ、ねエってば父ちゃん……」

男児は父のもとへと、覚束ない足取りで近づき、顔の近くに膝をつく。

ぐいぐいと体を押すも、肌から血の気の失せた男は何の反応も示さず、揺さぶられるままだ。

それでも父を呼ぶ男児の痛ましい姿に、別の男、右腕の肘から先を失った男が口を開く。

「坊主……おめエの父ちゃんは………もう」

「……ウソだ、嘘だ。父ちゃん帰ってくるって言ってたもん。母ちゃんと約束したか

ら：絶対帰ってくるって言ったもん。父ちゃんはウソ言わないもん」

言葉を濁した男の言葉を男児は察し、しかしそれを受け入れる事はできず、ふるふると首を横に振って否定する。

ぼろぼろと両目から涙が溢れ、嗚咽に襲われる。

顔中をぐちゃぐちゃにしながら、しかしそれでも男児は父にしがみつき、起こそうと揺さぶり続けた。

「ど……父ちゃんは……!!! づ……づ……強いんだもん!!! 絶対おいしい肉獲つて帰つて来る”っでいっつでだもん!!!”」

そう叫んだ瞬間、男児の感情は爆発する。わつと声をあげて、父の亡骸に抱きつく。

人々は、仮に向かった男達は痛ましげに目を逸らし、唇を噛みしめる。エールもまた顔をくしやくしやくに歪め、溢れそうになる感情を封じ込めようとした。

響き渡る男児の慟哭、それが不意に途切れた。

縋り付き泣き喚く彼に近づき、小さな体を蹴り上げ突き飛ばす者がいたのだ。

「このうるさいガキをどこかへどかせ。うるさくてかなわん……!!!」

どさつ、と倒れ込んだ男児を見やり、男達を率いていた長い髭の壮年の男が吐き捨てた。

冷酷な目が、道端の汚物を見るような目で男児を見下ろし、ちつと舌打ちをこぼす。



「お……王よ、それはあまりに……」

「うるさい!! 黙れ!!? さっさとその邪魔なガキをどかせ!!? 目障りだ!!?»

見かねた住人の一人が声を上げる途中で、壮年の男の側にいた若者が目を吊り上げ、怒鳴りつける。

壮年の男によく似たその若者は、苛立たしげに歯を食いしばり、より一層声をあげて泣く蹴り飛ばされた男児を睨みつけた。

「お前もいつまでもギャンギャン泣き喚くなア!!?»

感情のままに、手にしたぼろぼろの武器を振り上げる。人々の悲鳴が上がる中、若者は男児に向けて武器を振り下ろす。

だがその寸前で、エールが男児を抱きしめて飛び退き、胸の中に庇った。

「……!!! フン……出来損ないが、邪魔をする気か」

「……兄様」

「お前に兄などと言われたくはないわ!!! 奴隷女のガキの分際で!!!」

背中に一筋の傷をつけられたエールが、痛みを堪えながら振り向く。

兄と呼ばれた若者は醜く顔を歪めて吠え、やがて強引に自分を落ち着かせ、武器を振って付着した血を払い落とした。

「チツ……お前なんかをこれ以上斬ったらおれの剣が汚れる。……命拾いしたな」

ふん、と鼻を鳴らし、武器を下ろす兄。

エールは男児を抱いたまま、彼を落ち着かせるように背中を叩き、ぐつと唇を噛み締め黙り込む。

「お……王様……そんで……成果の方は」

緊迫する空気の中、住人の一人の老人が恐る恐る壮年の男に尋ねる。

すると男—— “王” はぎろりと老人を睨みつけ、ぶんと手にした大刃の武器を突きつけた。

「黙れ愚民共!!! わかりきった事をわざわざ聞くな!!! 腹が立つ……!!? 当てつけのつもりか愚か者め!!!」

「め……めっそうもない!!? た……ただ……ただ……ただ……!!? わしらの大切な仲間が死んで何も成果がないとあつては……逝った奴らが浮かばれんと……」

目を吊り上げ、怒りを露わにした “王” の剣幕に震え上がり、首を竦める老人。ぶるぶると震え、逆鱗に触れた事を激しく後悔する。

だが、狩りに赴いた男達が武器の他に何も持つていない事実を前にすると、何かを言わずにいられなかったようだ。

「黙れ黙れイ!!! 私を怒らせるな!!? 役立たずの分際で物申すなど生意気な……何もできん木偶がしやしり出るな!!!」

「……………!!? コイツ…!!」

「よせ!!」

子供の痲癩のように喚き散らす「王」に、数人の住人達がかつと頭に血を昇らせて前に出る。

止める声も聞かず、感情の赴くままに拳を握り、振りかぶろうとした……直前に。

ごっつ!!?

一瞬のうちに振るわれた「王」の刃が、立ち向かおうとした住人達を襲い、まつぶたつに両断してしまった。

「文句があるようだな……………クズが」

しん、と静まり返る住人達。それ以降叛意を示す者は現れず、全員が心底怯えた様子で口を閉ざす。

「王」とその配下達が苛立たしげに佇む中。

ただ一人、エールがきゅつと唇を噛み締め、拳を握りしめながら、「王」の前に踏み出した。

「父様……………もう…やめよう? あの猛獣達に勝つなんてムリだよ……………強すぎるよ。父様や兄様達がいくら力があつたつて絶対敵わないよ……………!!?」

じろり、と「王」の目がエールに向く。

エールは小刻みに震えながら、必死に勇気を振り絞り、住人達に恐れられる父に申し出る。

「別の方法を考えよう？ みんなで力を合わせて……そうすれば誰も死ななくて済む——」

エールの懇願が終わらないうちに、エールの視界が真横に飛ぶ。

一拍遅れてぱんつという破裂音を鼓膜が捉え、視界の中に拳を振り切った「王」の姿が映った。

「仮にもこの私の血を引く者が腑抜けたザマを晒すな!!! この痴れ者が!!!」

「……!!!」

「我が一族に生まれた数少ない女兒だからと生かしてやっている恩を忘れて口を挟んだ上……情けない!!! それでも偉大なる王族の末裔か!!!」

倒れ込んだエールに、「王」の罵声がこれでもかとおつつけられる。

額が裂け、口の中に鉄の味が広がる。ぐらぐらと視界が揺れ、痛みと熱さに苛まれながら、エールは烈火の如く吠える父を真つ青な顔で見上げた。

「お前達にもわかつているだろう!!! あのバケモノ共を排除せねば我々に未来はない!!!  
? あやつらがこの島に君臨している限り、我々は生き残ぬ!!!? 我らの戦いは正義の戦いだ!!!」

怯えた表情で様子を伺う住人達に対しても、「王」は唾を撒き散らしながら吠える。喚く。叫ぶ。

ひたすらに傲慢で無情な王の態度を諫める者はいない。

いたとしても、すぐさま「王」の獲物の餌食となるだけなのだから。

「不愉快な………どういつもこいつも」

ぎりぎりと思い縛った歯を軋ませる傲慢な「王」。

その目がふと、倒れたエールに駆け寄ったラケルに……見慣れない他人に向けられた。

「………ソレは何だ、また拾ってきたか」

「と……父様……あの」

「愚か者めが!!! 余計な荷物を増やしおって疫病神め!!?? 役にも立たん食い扶持が一人増えるだけでどれだけ手間がかかると思っている!!! 救いようのない馬鹿が!!!」

降りかかる怒号に、エールはひゅつと首をすくめて縮こまる。何十回何百回と受けてきた理不尽な叱責に、心が完全に屈していた。

「その管理は全て貴様がやれ。出来ぬのなら……殺せ。自分で処理をしろ」

「王」は冷たく吐き捨てると踵を返し、男達を連れてその場を後にする。エールの兄、「王」の息子達もそれに続き、去り際にべつと唾を吐いた。

集団が姿を消してから数分が経ってから。

それまで必死に口を閉ざしていた住人の一人……悪態が口癖となっている男が地面を蹴った。

「……くそっ！ あの無能め……いつまで王でいるつもりだよ。威張り腐って喚き散らすばっかで、何もできやしねエのは自分のくせに」

「やめろ……聞こえたらどうする」

「言つてやりやあい!!? 全員だよ!!? てめエがどっちつかずにコロコロ立場を変えた所為で……!!? 戦いに負けたあの国と同じ様におれ達の国も滅ぼされたんだつてな!!!」

「やめろつつつてんだろ!!? ……それでもあの『王』の強さは本物だぞ」

仲間に諫められ、それでもなおお遣る瀬無さにぶつぶつとぼやく男。

彼もまた苛立たしげに踵を返し、立ち去る前に、へたり込んだままのエアールを見やつて、小さく吐き捨てた。

「……胸糞悪い王族共め」

呪いの言葉を残し、去っていく男。

それを皮切りに、他の住人達も落胆に肩を落としながらとぼとぼとその場を後にする。

取り残されたラケルは、エールに案じるような視線を向けた。

「…エールさん」

「あはは…また…説得失敗しちゃった。はは…は…は…」

少女の乾いた笑い声は、いつもよりも虚しく聞こえた気がした。

「あててててて…」

すつぱりと切り裂かれた背中への傷に、毒々しい緑色の粘液が塗られる。

一見体に悪そうだが、森に映える薬草を磨り潰し、こしだし、抽出した傷薬のようなもの。

エールが自身で命懸けで採集してきたそれを、ラケルが代わって塗りつけていた。

「やれやれ…しかし今回の遠征も失敗か。これでもう何回目かねエ…何人、何十人死んだかもわかりやしない。みんなを宥めるのもそろそろ無理が出て来るよ」

上裸になり、背中を向けたエールは痛みをこらえながら呟き、深い深い溜息をこぼす。

その声にラケルは、手ぶらで帰ってきた「王」達と、なんの収穫もない事に落胆し憤っていた住人達を思い出す。

何も成果を出さない暴君。その末路は想像に難くない。

「…また私が行かなきゃダメかねエ…」

「……………なんだか大変そうですねエ」

「ん？ あ…あア、あはははは。まア…うん、いつもの事だよ。問題ナシ問題ナシ」

どんな言葉で慰めたものか、無難な感想しか出てこないラケルに、エールはへらりと笑みを返す。

明らかに無理をしているが、エールはこれでも隠せているつもりのようなだ。

「父様はプライドが高いからねエ……………敵を作つてばかりさ。だけど同じこの島に住んでる以上、助け合わなきや待つてるのは死だけさ……………それに早く気づいてくれればいいんだけどねエ」

ラケルの指先が背中への傷を往復するたびに、酷い痛みが走っているのだろう。顔をしかめながらも、エールは泣き言一つ言わない。

今の島の状況に対しても、血が繋がっていても何の情も持つてくれない父に対しても。

「ここに流れ着いた以上、みくくんな同じ境遇の仲間……………家族さア。家族が助け合わないでどうやってこんなところで生き延びるってんだイ」

「家族……………」

「そ、家族！ ……どんなにどうしようもない人だつて、見捨てちゃダメなのさア」  
けらけら笑つて、力瘤を作つて見せるエール。



笑顔の仮面で自分の心を押し隠す、少女とは思えない少女。

ラケルはそんな彼女をじつと無言で見つめ続け、やがて目を伏せると、閉ざしていた口をゆつくりと開いた。

「……ねエ、エールさん——この世の全てを掌握できる絶対的な力に興味はありますか？」

不意に投げかけられた、謎の女性からの呼びかけ。

エールはきよとんと呆けた顔で振り向き、どういう事かと思わず視線で問いかける。

「私はあなたに恩がございます……あなたが私にお望みならば、あなたが望むものを、ご用意いたしました。過酷な島で生き抜く牙、邪魔者を屠る爪、万獣を統べる知恵……なんだってあなたにお渡しいたしましょう」

「キバ……ツメ？」

「勿論……あなたの憎い嫌いな相手も容易く降せますわ。例えば……あなたのお父上とか」

うつむき、前髪で隠れたラケルの表情が読み取れない。

微笑んでいるようだが、なぜだか薄ら寒さを感じる。穏やかな表情の裏に何か、別の

感情を隠しているような、異様な雰囲気が漂う。

黙り込んだエールに、ラケルは続けて問いかけた。

「何物もあなたに逆らえぬ……逆らわせぬ力と叡智をあなたにお贈りいたします。他人の助けなど、一切必要なくなるほどの力を」

裸のエールの肩に、ラケルの手が重ねられる。

軽く優しい抱擁のような仕草だが、側からは決してそうは見えない。

例えるならば——暗闇から音もなく近付き、獲物に絡みつき締め上げ、捕食せんとする大蛇だ。

「シア……如何ですか……？」

にこりと、とラケルが笑う。目が釘付けになるほどに美しく、同時に目を離せなくなるほどに恐ろしい笑み。

彼女の誘いに、エールは少し考え込むと。

「ん……そういうのはいらなかなア」

と、あつけらかなといった様子で首を横に降った。

ラケルの雰囲気の変化にも、表情の悍ましさにもまるで気付いていない様子で、へらつと気の抜ける笑顔を返した。

「……………いらない、とは？」

「生きてるだけでじゅーぶん、他は特になんもいらぬね。父様は……うん、まあ、いいよ。別に、殺したくはないさア」

エールの態度に、強がる様子は見られない。

本気で復讐を望まず、父や兄に対する殺意を抱いていない。

ラケルは思わず目を大きく見開き、続いて本気で呆れた様子でエールを凝視した。

「……………あんな目に遭わされても、それでも家族と呼び続けられるのですか……?」

「呼ぶよ。親がいてこそその子供だもん」

「……………憎いとは思わないのですか? たとえ親だからって……やっていい事と悪い事があるのでは」

「憎まない。憎んだって何にも解決しないからねエ……………無意味にお腹がすくだけさア。そんなのムダムダ、気にしないのがいいんだよ」

言葉をなくし、沈黙するラケル。

黙りこんだ女性を訝しみながらも、エールは自力で雑に包帯を巻き付け、いそいそと上半身に服を纏った。

「ん。これでよし。薬塗ってくれてありがとねエ。……………じゃあ、なんか困った事があつたら……なるべく頑張つて急いで戻ってくるよ。私、これから食料調達に行かなくちゃだからさ……じゃ!」

寢床にラケルを残し、エールはそういうや否やさつさと走り去っていく。

あつという間に姿の見えなくなっていく少女の背を見送り、ラケルはあ、と溜息をこぼした。

「……………あの方では、駄目そうですね」

ぽつりと溢れたその眩きからは、走り去るエールに向けられる眼差しからは。

それまで向けられていた温かみが、一切消え失せていた。

## 第295話 “力が欲しいか”

地獄を見た。

全てが灰燼と帰す、地獄を見た。

『逃げろ!!? とにかく逃げろ!!! あいつらが追つてこない遠くまで!!!』

住み慣れた国を、快樂の全てを詰め込んだ王国を捨てて逃げ惑う人々の姿が見える。

あれほど与えてやったのに、あれほど恵んでやったのに。

その全てに背を向けて、享受してきた何もかもを投げ捨てて、逃げてくる愚民達の必

死の形相が見える。

『やめて!!? お願いやめて!!? 殺さないで!!?』

『許してくれ!!! おれ達は関係ないだろう!!!』

『こうなつたのは全部あの男が悪いんだ!!! おれ達は何も悪くないんだ!!!』

背中を照らす光に向けて人々が叫ぶ、無意味な懇願を重ねる。

天から降り注ぎ、大地に突き刺さり全てを焼き払う光の雨に追い立てられながら、他

人を押し退け踏み潰し、我先にと駆けてくる。

愚民達は与えてやった全てを棄てて、憎悪に満ちた顔で睨みつけてきた。

『逃げるなコウモリ王!!? 何も責任を取らないつもりか!!?』

『お前の優柔不断さが招いた惨状だろうが!!!』

逃げながら、叫んでくる。喚き散らす。

この世の何よりも、誰よりも何よりも敬し、崇める眼差しを向けねばならない筈なのに、ぶつけられるのはその逆ばかり。

醜く汚い顔で、奴らは我・に・悪意をぶつけてくる。

『うるさい愚民共が!!! 貴様らの頭の足りなさを私の所為にするな!!! 愚か者共めら!!!?』

間違っていないかった。何もかも、私の考え通りならうまくいく筈だった。

だからこの結果は間違いだ。我が過ちではなく、他の何者かによりしくじりの所為でこうなったのだ。

負けたあの国が悪い。

我を味方と認めなかったあの連合が悪い。

我が味方するに足る価値を示せなかった両陣営が悪い。

我は何も悪くない。責められる謂れはない。

何より尊く貴い、唯一無二の我に間違いがあるわけがない。

『あの野郎を逃がすな!!? 追え!!?』

『奴と奴の一族だけを楽にさせるなア〜!!!』

だからこれにも間違いはない。

愚かなる民を置いて行つたところで、誰に咎められる理由などない。

我は生き延びなければならぬのだ。

その為に他の者を犠牲にしてもなんらおかしくなどないのだ。

それを咎め、追いかけてくる奴らがおかしいのだ。奴らが全て間違つていて、我が全て正しいのだ。

……我は悪くない。全て奴らが悪いのだ。

『おのれ……おのれおのれおのれ……!!? おのれエ〜〜!!! 許さん…許さんぞ

……勝手に滅んだ役立たずの国も!!! 私の王国を奪つたあやつらも!!! どいつもこ

いつも絶対に許さんぞ……!!!』

我の怒りは正当な怒りである。

奴らは許されぬ罪を犯した。

卑劣な行いにより、奴らは我から全てを奪つた。

ならば今度は我が奪う番だ……いや、元は全て我が得るべきだったものばかり。取り

戻すのだ。取り返すのだ。

『全てを……!! 貴様らの全てを奪い!!! 喰らい尽くしてやる!!!』

その為ならば、この傲慢な男の傀儡になる事ぐらい、  
どうという事はない。

「——ラ!! ガラ!!! 起きろ役立たず!!!」

怒声と共にぶつけられた金の杯。

額に走る痛みに思わ呻き、若き錬金術師ガラは声を抑え、玉座に就く。『王』に首を垂れる。

「貴様……!! 我の前で居眠りをこくとは何事か!!! 成果もあげられぬクズめ!!!」

「………申し訳ございません」

額に何か濡れた感触がある。おそらく先程投げつけられた杯で皮膚が裂けたのだらう。

周囲に立つ三人——他の錬金術師達から向けられる冷めた視線。

賢者の筆頭である自分の失脚を狙う彼らにとつて、この失態は酷く好ましいものなのだろう。

「……王よ、今宵は随分とご機嫌が斜めであらせられるようで」

「いいと思うか……!! 我がこんな暮らしを強いられて………機嫌がいいはずがあるか!!! 愚か者め!!!」



唾を吐き散らし、眼を血走らせ、「王」は叫ぶ。吠える。

荒々しい息を繰り返し、汗で顔中を濡らしながら、盛大に舌打ちをこぼし玉座の背凭れに体を預けた。

「……このままでは終わらさぬ……必ずや奴らに目にも物を見せてくれる……!!」

恨み言をこぼす「王」だが、その姿は覇気に反してみすぼらしい。

装いはボロボロでくすみ、痩せてこけた顔と肉体は実年齢よりも更けて見える。腰を下ろす玉座など、岩を重ねて作った簡素なものだ。

これがかつて繁栄した国の王なのだから、その転落振りには思わず笑いが込み上げそうになる。

「……………進捗は、どうだ」

「芳しくはないですな……雑魚の獣を材料にしたところで、質の悪い「石」にしかならず……………」

「王」の問いの声に、錬金術師の一人が不ぞろいの石ころを見せて答える。

襤褸布に乗せられた、赤黒い結晶。

酸化が進んだ血を固めたような、不気味ながらもどこか頼りなさげに見えるそれらに、

「王」も錬金術師達も全員険しい顔になる。

「これでは……………一度使っただけで風化しようにて」

「そのうえ効果も弱い……これでは屑石にも劣るぞ」

「やはりより強い獣の血肉でなくては……」

「だがその為には戦力が……」

「忌々しい獣共め……!!! この私がここまで骨を折っているというのに、かくも手酷く足蹴に扱っておつて……畜生共の分際でうつつとうしい……!!!」

民が誰も入れないよう、きつく告げて遠ざけた王の間で、五人の男達がああでもない、こゝでもないと言語合う。

いつまで立つても良策が浮かばず、時間だけが虚しく流れていく。

……そんな時だった。

「もし……名も無き島の王よ」

聞きなれない、凜と澄んだ声が王の間に響く。

“王”と錬金術師達は一齐に振り向き、入り口からゆらりと姿を見せた人影を——  
笑みと共に近付いてくる異形の女を睨みつける。

「貴様は……あれが拾った余所者の」

「ラケル……流れ者です。そして——錬金術師です」

鋭く睨みつけ、訝し気に眉間に皺を寄せる“王”。

女、ラケルは男達に歓迎とは真逆の眼差しで迎えられても気にする様子を見せず、遠

慮なく「王」の間正面まで歩み寄った。

「見慣れぬ種だな……………神の一族に似ているが、違うな」

「獣の耳と尾なぞ生やして、汚らわしき姿だ…」

「なんと醜く歪な姿。まるで人と獣を混ぜたかのような……………」

ガラ達はじとりと、これまで見てきたどんな人種にも当て嵌まらない不思議な姿をした女を無遠慮に蔑みながら観察する。

「…何用だ。獣が私の前にのこのこと……………下らぬ用ならこの場で殺して食らうぞ、小娘」

「おお、恐い。そのようなお顔をなさらないでくださいませ」

がつん、と傍らに立てかけていた剣を掴み、鞘で床を叩き威嚇する「王」に、ラケルは態とらしく肩を竦めてまた笑う。

「私はただ……………皆様のお望みのものを手に入れるお手伝いをさせていただきたいだけでございます」

「……………何？」

警戒する「王」達に向けて、ラケルが告げた言葉。

彼らの目論見を、欲望を見透かしたかのようなその台詞に、「王」達の警戒心が跳ね上がる……………だがそれ以上に、ラケルに対する興味が膨れ上がった。

僅かに身を乗り出す「王」達に、ラケルは妖しく目を光らせながら続けて告げた。

「賢者の石」……………欲しておられるのはそれでございましょう？」

「……………!!?」

「驚きました…まさかかの国の他にその生み出し方を知る方がいらつしやるなんて  
がたつ、とあからさまな程に反応を見せる男達。

ラケルはくすくすと肩を揺らし、笑みを深めながら、さらに彼らの方へ近づいていく。  
「ですが、どこのお師様に伝えられたものは存じませんが……………随分と面倒臭い手順  
でお造りになられようとしておりますね。まア…この島では揃えにくい材料ですから  
仕方ありませんが……………これではいつまで経つても、お望みのものは作れそうにござい  
ませんけど」

「……………何だと貴様…!!」

「事実を申したただけでございます…」

錬金術師達の筆頭という自負ゆえに、ガラが目が殺意を帯びてラケルを射抜く。だ  
が、それでもラケルが臆する様子はない。

いつそ不気味なほどに綺麗な笑顔を携えて、鼠の天使は自分の胸に手を当てた。

「いかがでしょう？ 私の知識をお使いくださいませ。さすればあなた方の求める全て  
を…用意して差し上げましょう……………国…宝…女……………何なりと」

差し出されるラケルの手。見せる蠱惑的な笑み。

汚れてはいるが、よく見れば美しく豊満な己の肉体を見せつける様にし、女は“王”を誘った。

「……!!? 世迷言を……!!!」

「小娘の虚言に決まっている!!!」

「信じるも信じぬも自由にございます……ただ私は提案するのみ。あなた方の向かう先に私の仇がある以上………私は助力を惜しみませんわ」

錬金術師達が顔を真っ赤にしてラケルを詰る。

突如この場に現れた得体の知れない存在。それが自信満々で自分を売り込みに来ている。

矜持が大いに傷つけられる行為に、男達の頭に血が昇る。

「ふざけるな!!? お前のような女に我ら以上の知識があるとでもいうつもりか!!?」

「不愉快だ!!? この場で縊り殺してくれるわ!!!」

激昂したガラ達が、左右からラケルを囲み迫る。

がつ、と両腕を掴み、捻り上げ拘束していく。ラケルはその間もまるで抵抗しようとはせず、それがますます男達を苛立たせた。

「……………待て」

本気で殺しかけた直前、不意に「王」がガラ達を止める。

余裕の笑みを湛えたラケルに、強い興味と欲望を示した目を向けている。

ガラは一瞬、「王」に対して苛立ちの視線を向けかけるが、すぐに隠して手を止める。

「……………出来ると言うのか」

「全て私の言う通りにしてくださいませば……………いくらでもお望みを叶えて差し上げます。例

えば——」

両腕を拘束されたまま、ラケルは語り出す。

……………語られた内容は、耳を疑うものだった。ガラ達は大きく目を見開き、思わず相手の手を離して後退る。

想像だにしない、する気にもならないその方法を聞かされ、彼らは完全に臆されていた。

「……………お前……………お前は……………!!? 何者だ……………!!? なぜ……………そのような知識を……………!!!」

「私は「賢者」の弟子……………出来ぬ事などありませんから」

怯えるガラが、後退りながらラケルに問う。

それに対し、ラケルは相変わらずの穏やかな微笑みを浮かべたまま返す——その目に、確かな狂気の光を灯して。

「……………代価は。お前は……………何を望む?」

ぎらぎらと、〃王〃の目がかつてない程の欲望の輝きに溢れている。

目の前の異形の女に触発され、復讐の炎が燃え盛る己が魂に大量の油を注ぎ込まれた男は、改めて相手に問いかける。

彼の問いに、ラケルは簡潔に答える。

淡々と、笑顔の仮面を張り付けたまま、何の躊躇いもなく。

目の前でその答えを耳にした〃王〃は、やがて顔を伏せぶるぶると震え出したかと思うと、がばつと大きく体を仰け反らせた。

「……ふ、ふふふ……ふふははははは……!!! 面白い……面白!!! ならば私に忠誠を誓え!!? 首を垂れ跪け!!! 貴様の従順たる姿を以つて、私との契約としてやろう……!!!」

耳まで裂けて見える程に大きく口を開け、〃王〃は笑う。嗤う。

自分の野心を、欲望を叶えるのに十分すぎる程の狂気を有した女を、〃王〃は生まれて初めて心の底から歓迎する。

愕然と、言葉も失くして立ち尽くすガラ達を他所に、ラケルは優雅に〃王〃の前に跪いた。

「王よ。我が命、あなたに全てお預けしましょう——」

??

鬱蒼と多くの巨樹が生い茂る密林の中。

一本の巨樹の根元、大きく伸びた根の間に開く穴がある。

その穴、巣穴からのそりと、巨大な虎が姿を現した。

「グルルルルルル……!!!」

一本一本が剣のように鋭く長い爪を持つ、人が見上げるほどの巨軀を持つ化け物虎。

獲物を求め、歩き慣れた縄張りを進もうとした、その時。

大地を踏みしめた己が右前脚に、何かが絡みつきあつという間に縛り上げてくる。

「ウゴツ……!?? グ……ガツ……!!!」

地中に隠されていた縄の罠が、化け物虎の足を捕らえ、折りたたむように縛り上げる。

困惑し暴れるうちに、今度は顔にまで縄は絡まり、口を開けなくなる。

複雑に張り巡らされた罠によって、化け物虎は四肢も口も拘束され、一切の身動きが

取れなくなっていた。

「グルツ!!? グルルルルルア!!!」

唸り、もがき、必死に逃れようとする化け物虎。

そこへ、周りの茂みの中からぞろぞろと、槍や剣を持った男達が姿を現し、化け物虎

を取り囲む。

化け物虎はますます困惑する。



こいつらは確か、稀に向かつてくる小さな獣達。大した力もなく、軽く払いのけてやればあとは勝手に逃げて行くだけの矮小な生物のはず。

それが何故……自分を捕らえている？

目を見開き、暴れる化け物虎。

無表情で怪物を囲み、武器を握りしめる男達の中で、最も老いた男が短く、抑揚のない声で告げた。

「――殺せ」

次の瞬間、四方八方から突き出された幾本もの刃が、化け物虎の毛皮を貫き肉を裂く。これまで傷一つつけられた事なかった化け物虎は、予想だにしない苦痛から口を封じられたまま絶叫する。

ざくざくと斬り付けられ、突き刺され。

密林の王者は一切の抵抗もできぬまま、その命の火を掻き消されていく。

「二……二……」

響き渡る化け物虎の唸り声。それに、巣穴の中から声が上がる。化け物虎の子達が、母の悲鳴を耳にしその安否を案じる。

化け物虎を襲う男達、その中の一人が歩き出す。

彼は巣穴の中で縮こまる子虎達を見下ろすと、手にした剣を掲げ……一切の躊躇いな

く、それを振り下ろした。

森の中で、恐怖に満ちた悲痛な悲鳴がいくつも重なる。

「……………何…今の声」

樹々に生えた果実を取ろうとしたエールの手が止まる。

籠の中身はまだ一割も満たしていないが、エールは何か背筋にざわめきを感じ、作業を半ばで終えて走り出す。

安全地帯では何やら住人達が集まり、困惑気味に互いに目を合わせていた。

「…ねエ、何があったの？ ……ねエってば、ちよつと」

エールは尋ねるも、誰も彼女に気づかない。

仕方なく、エールは多少強引に住人達を押しつけ、彼らが見つめる先を確かめようと割り込む。

住人達の中心には、父が……「王」がいた。

「蒙昧なる我が配下共よ……………その目を見開き確と見よ、我らが偉業を」

「王」は、いつもよりも高い位置から住人達を見下ろしていた。

周囲に配下や戦士達を並べせ、何かの上に乗っている。

それは、毛むくじやらの何かだった。黄色い毛皮を纏い、ぴくりともせず横たわる

巨大な獣の骸だった。

「…………お、おい…………あのバカでけエトラは…………!!」

「密林の主だ……………でかくて美味エ果物の実る気がある森をナワバリにしてたバケモノ虎…………」

恐ろしい形相のまま白目を剥き、横たわる巨大な虎。その横に転がる、人間の大人と変わらないほど大きな子虎。

恐ろしき力を持った化け物達が、〃王〃の足下で血まみれで倒れていた。

「貴様らもよく知る傲慢なる獣はこれ、ここに無様に屍を晒している。これまで幾人も  
の勇者が、貴様らの父や兄や夫達が挑むも誰一人叶わず、無惨に喰い殺してきた憎き獣  
がだ」

ざわ、とどよめきが広がる。

目の前の光景が未だに信じられず、声ならぬ声上がり続けている。

「これを為したのは誰か……………我らだ。貴様らが無能と蔑み、見下してきた我らが為  
した偉業だ」

絶句する人々に向けて、〃王〃が語る。

いつもの激昂ではない。そこしれない自身と野心に満ちた声で、〃王〃は人々に向け  
て告げる。

「今一度その目を確かめよ。貴様らが決して叶わぬと諦め、尻尾を巻いて逃げてきた相手が今、屍を晒しておる……………見よ!!! そして畏れよ!!? 讚えよ!!!」

「……………!!!」

「これは唯一ではない……………終わりではない。我らはこの先も、忌々しき獣共を屠り、彼奴らの縄張りを奪い取る……………全ては我らがこの島の支配者となる為に、全てを手に入れる為に……………!!!」

「ごくり、と誰かの息を飲む声が響く。

全員が瞬きを忘れ、息すら忘れ、喉奥に乾きを覚えながら、『王』の一挙一動に注目していた。

「我は宣言する……………この島を我らが王国にせんと。我が民は決して飢えず、彷徨わず、野垂れ死ぬ事はない……………欲するものはすべて我が与えよう。我への忠誠が続く限り……………!!!」

「飢える事の……………ない」

「家もか……………?」

「服も……………?」

「た……………宝も……………?」

ぽつりぽつりと、住人達から声上がる。

毎日苦しみ、悲しみ、我慢を強いられ続けてきた人々の目に、確かな欲望の火が灯り出す。

そんな彼らに向けて、“王”はより大きな声で吠える。

「すべてだ!!! 我はすべてを手に入れ!!? すべてを与える!!! 最強たる我が力をもつて：貴様らに永遠の栄華を授けてやろう!!!」

言つてから、“王”は自身の携えた剣を高く掲げ、振り下ろす。

ざん、と。

振るわれた刃が化け物虎の首を一刀両断し、ごろりと巨大な貌が転がる。

「こんな畜生ものがゴミに思える程のなア!!!」

直後、住人達からのどよめきが大きくなる。

まだ信じきれしていない。だが、それ以上に芽生えた期待から、“王”に向ける人々の目が変わり始める。

ざわめきの中、エールはただ一人。

住人達の雰囲気が変わり始めた事に、戸惑いと不安を抱いていた。

それからの日々は、劇的に変わった。

“王”と配下達は森に狩りに出て、長期間姿を消した。

その間もエールは独自に森に入り、命の危機に遭いながら食糧を集め、住人達に配って行った。

毎日毎日傷だらけになりながら、人々の為に身を粉にして働き続けた。

以前の狂気を見せる事なく、精力的に働く「王」をいぶかしみながら。

「最近よくいなくなるけど…何やってるんだイ？」

「ちよつとしたヤボ用でございませわ」

ふと見かけたラケルに話しかけてみるも、返ってくるのは容量を得ない答えのみ。困惑しながらも、エールは自分の役目を全うし続けた。

やがて、「王」達は戻ってきた。

エールの成果とは比にもならない、巨大な獣達の骸を引きずって。

それから、「王」と配下達は毎日のように隊をなし、必ず成果を上げて戻ってきた。

巨大な蛇を、牛を、時には海にも出て化け物のような鯨や鮫まで狩ってきた。どれもこれも大きく食いごたえがあり、何日分にもなる大きな成果だ。

初めは疑うばかりであつた住人達。

急に変貌した「王」達を怪しみ、並べられる獲物を受け取る事に難を示していた。

だが一度受け取り、焼いて口にすれば、言い表すのも難しい満足感を得る事ができた。次第に彼らは、「王」を崇め出す。嫌い、憎み、見下していた事を忘れ、自ら「王」

達に頼るようになっていく。

「王」の配下に加わって狩りに参加し、成果の副産物である牙や爪を加工して武器を作る者、毛皮から衣服を作る者も現れ出す。

いつしか「王」の元には幾人も民が集まり、様々なものが溢れ始めていった。

そんな中でも、エールは独自に採集を行っていた。

未だに「王」に懐疑的な者達のために、一人森に入つて命がけで食糧を集め続けていた。

「……今日は、一晚一緒にいいかい？」

「……ヒョロロ」

人には言えない泣き言を、人ならざる友人にだけこぼして。

エールは弱さを誰にも見せないまま抗い続けた。

その間も「王」の偉業は続いた。誰も勝てずにいた化け物達に連勝を続け、その成果で民の暮らしを潤わせる。

すると次第に、懐疑的だった住人達も「王」に従うようになっていった。

暴言や蔑視は鳴りを潜め、自ら首を垂れる者が現れる。

それに反比例するように、エールの微量な施しに縋る者達は、一人、また一人と人が減っていった。

一週間、一ヶ月、一年。

日を追うごとに増えていく自分の取り分を見下ろし、エールは視線を上げて目を細める。

——何もなかった島の沿岸部に、いつの間か出来上がった街を眺めて。



## 第296話 「これでいい」

ごぼりごぼり、荒れ狂う水流の中を進む。

片手で握った銚の先端を前に向け、暗い海中を探るように泳ぐ。

うねる青の中、巨大な魚影が動く。少女はぐつと唇を噛み締め、一気に加速すると、油断した獲物の鰓の中に思いつきり銚を突き立てた。

ざぼつ、と水飛沫を上げ、少女——エールが顔を出す。

ぶるぶると首を横に振り、波打つ髪から邪魔な水滴を払い除けた。

「ぶはっ!!! ひゃ~~~~!!? やア~~~~と獲れたよ……今日はアまア大漁かねエ  
?」

捕らえた成果を銚に突き刺したまま担ぎ、ぺたぺたと陸地を歩く。

エールは自宅である荒屋の前に辿り着くと、巨魚を置いて、濡れた上着を脱いで雑巾のように力一杯絞る。

「半分は干して……もう半分はどうするか。配ってもいいけど……欲しがらぬ奴はいるかねエ……?」

巨魚は一人では食べきれない大きさ。保存食にしても余るだろう。

どうしたものか、と悩むエールは深い溜息をつき、ふと視界に映った景色に……沿岸に立ち並ぶ数々の家々、そしてその中心に聳え立つ城を見やった。

「…変わったちゃったねエ、この島も」

——この島に流れ着いてから…はやくも12年。

“王”の偉業が始まってから、10年が経過していた。

「今日の獲物は『火吐きクジャク』だ!!? 脂がのった食い応えのある肉だ!!? そら買った買った!!!」

『大蛇の牙葉』は如何だいくく? やけど擦り傷腹痛頭痛くくく何にでも効くいい葉

だよオくくくくく?」

「次の狩りにはこいつをお供に!!? 『鋼大兜』を素材に拵えた鎧兜はいらんかね?!」

いつしか出来上がっていた街……いや、国。

そこはかつてからは想像もできないほど活気に満ちていた。

エールは巨魚を担ぎ、国の通りを歩く。

ちらりと視線を左右によこし、無言で足を動かし続ける。

立ち並ぶ屋台に置かれているのは豊富な食糧。だけではなく、薬も道具も、さらには

女性達を着飾る服や宝石まで揃っている。

誰もが満たされ、笑っている。その中には、かつては絶望の表情で項垂れていた者達もいた。

「ん……？ おオ、エール!!？ ……何だお前、まだ一人で意地はつて暮らしてるのか？」

「…ユイチ」

「相変わらずヒヨロツヒヨロだな。鶏ガラみたいに痩せちまつて……ちゃんと食えないだろ。今にもぶっ倒れそうぞ」

出くわしたのは、いつかは枝のように痩せ細っていた青年。今や随分と背が伸び、両手に女性を侍らせて通りを我が物顔で歩いている。

「いい加減お前もこっちに来いよ。いらぬ苦勞なんざ続ける必要ないって」

「……………」

「二度お前の親父に頭下げるだけだ、そんだけで何の不自由も苦しみもねエ暮らしに仲間入りできるんだぞ!!？」

「なんでたった一度意地を捨てることができなんだ？」

以前は「王」に対して悪態を絶やす事のなかった彼が、齎された享樂を全身で味わっている。

その変貌に、エールは無意識に目を背けていた。

「……………悪いねエ。私は今の暮らしが気に入ってんのさア。気にしないでくれ。……そんじやあ、私は今日の釣果を届けて来るから」

「ハア〜……………しようがない奴だな。そんなんじや長生きできないぞ」

「黙りな、ユイチ。余計なお世話さア」

じろり、と青年を睨み、手を振るとエールはさつさとその場を後にする。

しばらく歩き、エールはやがて店先に鮮魚が並べられた屋台の前にやってきた。

「おつちゃん、コレ！ 買い取っておくれよ!!」

「ん…？ おオ、エール。また来たのか」

店先にいた禿頭の男に声をかけると、男はエールの担ぐ巨魚よりもはるかに大きな魚をさばきながら振り向く。

「んん……………雑魚だな。まアお前が獲れる獲物つつたらこのくらいか」

エールの持つてきた巨魚をやや険しい表情で確かめ、男は店に引つ込み、小さな薬の瓶をいくつかエールに手渡した。

通貨のないこの島では物々交換が基本。エールに渡されたのは、品質が波の普通の飲み薬だった。

「渡せるのァこの位だな……………もうちよい色付けてやりてエところだが、こつちにも商売があるからな」

「あはは…悪いね。漁が下手なもので」

「ホントならコイツらも売り物にやならねエんだが…お前さんにや借りがあからな。特別だぞ特別」

以前はエールの持ち帰る果実で命を繋いでいた男。

がりがりの骨のようだった彼は、今では考えられないほどに筋骨隆々になっている。対するエールは体はそこそこ育ったものの、年齢の割に小柄なままだった。

「元気なうちに自分の生き方ア、考え直しておいた方がいいぞ。早死にしちまう」

「…参考になんて貰うよ」

男との会話を早々に区切り、エールは踵を返し歩き出す。

用事を終え、一度自宅に戻るために海岸に向かう。

とぼとぼと頼りない足取りで歩く彼女の耳に、どこからか喝采が響いてくるのが聞こえた。

「英雄達が帰ってきたぞオ〜〜!!」

「今日も大量だ!!! だけエゾウの化け物を引いてる!!!」

振り向けば、国を横断する大通りに人だかりができています。その向こうには、巨大な獣がずるずると引きずられていく様子。

森の入口へとつながる大通り。

そこから戻ってきた「王」の率いる部隊が、再び獲物を連れて帰還したようだ。

「すげエ……………何だよあのバカでかさ」

「南の森の沼をナワバリにしてた主だ……………!! 硬エ皮膚ととんでもねエ重さで何でも踏み潰しちまう怪物」

「そんな奴にまで勝つちまったんだ!!!」

「あんたさえいりゃ、もうこの島の化け物共なんて何も恐くねエ!!! アンタこそ王の中の王だ!!!」

「この世の誰よりも強くて欲張りな男!!! 強欲王」だ!!!」

引きずられる巨獣。そして、その上で威風堂々と仁王立ちする「王」。

その勇ましき姿に、民は皆目を輝かせ、心からの喜びと期待をあらわにしていた。

「「「強欲王」!!! 強欲王」!!!」

民の声に、「王」は不敵に笑いながら手を挙げ、凄まじい拍手喝采を一身に浴びる。

その時、「王」の視線が一瞬だけエールに向けた気がした。

だが彼は何の反応も見せず、何事もなかったかのように目を逸らし、そのまま去って行った。

「……………あちらに混ざらなくてもよろしいのですか?」

ぼんやりと、はしやぐ人々と称えられる「王」を見送りながら、立ち尽くすエール。

その背に、異形の女が案じるような声で尋ねてくる。

「あア……ラケルかい。久しいねエ」

「お久しぶりでございます、我が恩人エール……それで、本当によろしいのですか？」

「……行く資格はないよ。今の私は、大した働きなんか何にもできちゃいないからねエ」

悲しげに眉をひそめ、首をかしげるラケルに、エールは困り顔で頬をかく。

人々とは明確な熱量の差があるエール。彼女は人だかりを再び眺め、目を細める。

「父様が遠征で成功を収めるようになって……森の猛獣達に勝って領地を増やして、

資源が集まるようになって、この島も随分変わったからねエ」

「……ですがそれは……」

「誰も飢える事なく、凍える事もなく……誰もが笑顔で、生きる希望に満ち溢れて……そんなんでみんなが、誰かに頼る必要もないくらいに逞しくなった。あの頃の……絶望と悲しみに満ちた暮らしからは想像もつかなくらいに」

以前からは想像もできない光景だ。

エールが一人奮闘し、得ようとしていた光景がそこにある。

だが、それを成し遂げたのは自分ではない事に……自分が何も関わっていない事に気が付き、エールは深い溜息をこぼした。

「……あんただろ？ 父様を導いて猛獣達に抗う力を与えたのは」

「……………」

「……………スゴイねエ、何者なんだイ？ あんたは…たつた一人で島の連中全員を救つちまえる、そんな力や知識を持つてるなんて、只者じゃない」

妬みも恨みもせず、エールはラケルの陰の尽力を讃える。

体を張る事しか能のない自分にはできない偉業をなした女を、真正面から敬する。

「……………もうみんな、私の助けなんか求めちゃいない」

「……………余計な事をしてしまったでしょうか……………」

「んな事アないさ……………あのままじゃみんなおつ死んでたんだ。救われた事に礼を言つても恨み言なんぞ言える訳ないだろう」

「…そこへ辿り着くまでに、あなたの尽力が根底にあつたのは間違いない事だと思われませんが？」

「よしなよ……………そんな恩着せがましい考えなんか抱いちゃいけない」

気を遣われる事をよしとせず、エールは首を横に振る。

「王」達の部隊がその場を去つてからも騒がしいままの民を眺め、エールはふつと笑みを浮かべた。

「まアでも……………私のあのちつぽけの頑張りがムダじゃなかったってんなら、それでいいのさア。何も求めるモノなんざないよ」



何か言いたげなラケルを手を振って制し、エールは歩き出す。

これ以上何かを見る前に、これ以上何かを聞く前に、エールはさっさとその場を離れたかった。

「じゃあねエ、ラケル。…今後もどうか父様の痼癩に上手く付き合いながら仲良くやっておくれよ」

最後にそう言い残し、街から立ち去るエール。

ラケルはそれを、冷静に見送っていた。

「……そうさア、なあんも気にする事アない。何も……何も……」

自宅の荒屋に戻り、エールは自答する。

自分で作った下手くそな家具、すぐに壊れる狩の道具、まずい保存食。

誰かを助けるために必死に、傷だらけになりながら集め、こさえ、用意してきた数々の品に囲まれながら。

「みんなが幸せなんだから………これでいいのさア……」

自分以外に使う事のなくなったそれらを眺めながら、エールは乾いた笑みをこぼした。

— …しっかり働け!!!

ぐずぐずするな役立たずのゴミクズが!!!

何もせずにメシなど食わせて貰えると思うな!!!?

— 塵ひとつ残すなよ!!

しつかり終わるまでメシはナシだ!!!

わかったな!!?

— 当たった当たった!!

— きたねエゴミ女に当たったア。

— 下賤な奴隷のガキが…!!

おれ様の前にその汚ったねエ姿を晒すな!!!

— 貴様が我の子だなどと思い上がるなよ…!!?

今の所唯一の女だから生かしてやっているのだ……ありがたく思うがいい。

— おい見ろ…アレが噂の落とし胤か?

— また王のお戯れの産物が増えた……。

— あの方の奔放ぶりには困ったものだ……。

側妃が何人も、御子が何十人もいるというのに、

今度は奴隷の女に手を出すとは……。

血が高貴でも奴隷ではな……女であるだけ価値はあるか。

王の血を引いていようと奴隷の仔だ。

このまま何事もなければただの小間使いとして死んでいくだろうよ…。

…その顔を見せないで頂戴……!!

穢らわしい……汚い!!?

あの男の血が混ざったこの世で最も醜い顔……!!!

あんたなんて産みたくなかった…産まなきや良かった!!!

…死んだか。

チツ……金額分の働きもできんとはな。

役立たずのコイツの分も、お前にしつかり働いて返して貰うぞ……。

…王よ、お教え下さい……!!?

我々はどうすればいいのですか……!!?

敗北した我々が……着の身着のまま故郷を逃げ出し、

流れ着いたこの島は人の住める場ではございません……!!?

森は深く波は激しく……!!?

棲まう虫魚禽獣は悉く規格外の強さを持つバケモノばかり……!!?

一体……一体どうすればこのような地獄で生き延びられますようか!!!

— なんとか言えよ!!? なんとかしろよ!!?

— 全部お前のせいであんなってらんだぞ!!?

— お前がどつつかずの曖昧な態度を続けたせいで

— こんな事になってるんだろ!!?

— …オイ。

— てめエはそこで何やってんだ、クソガキ…!!?

— お前…:…あの役立たずの娘だったよな…!!!

— お前の無能な親父のせいでおれ達はよオ!!!

— 腹は減るし…!!? 凍えるし…!!?

— 獣共に無残に食い殺される奴らばかり!!!

— 全部あのクズ王のせいだ!!!

— お前もあいつと同類だ!!!

— たみに無駄に犠牲を強いるだけで何の役にも立たねエゴミだ!!!

— なんでそんなゴミがのうのうと生きてて…!!!

— おれの母ちゃんとガキ共が死ななきやならなかつたんだ!!!

— 何が王だ!!?

— タダメシ喰らいの大迷惑野郎の分際で!!?



「…ああ、そうか。私は、このために産まれたんだ」

望まれず、求められず、誰にも必要とされなかった。

だが今は、自分を憎む者がいる。嫌う者がいる。贖罪を求める者がいる。

自分が人々の憎悪を引き受け、傷つき壊れていく事で、自分はようやく誰かに求められる存在となり得るのだ。

『……皆を…助けなきや……それが…私の生きる意味なんだ……』

だから、精一杯働いた。罪を償った。

どんなに傷ついても、死にかけても、自ら望んで死地に向かい続けた。

『みんなの役に立たなきや……生きてちや……いけないんだ……!!!』

それが、自分の存在理由。産まれてきた意味。

死に行く事こそが、自分がこの世に在る意義なのだ。

……だとしたら、誰も彼もが幸福に満ち、憎悪を忘れた今。

自分が存在する意味とは、何なのだろうか。

がしゅん！

荒屋の中に破砕音が響き渡る。

自分で作った水差し、皿、器、狩りの道具。それら一切を、目につく全てを、片っ端

から破壊していく。

歯を食いしばり、眉間にしわを寄せ、涙を流して。

しばらくの間、エールは暴れ続けた。

暴れて暴れて暴れ続けて、やがて家の中の形あるものが何もなくなった頃、ようやく少女は動きを止める。

ふうふうと荒い息を繰り返し、立ち尽くしたエールは、やがてふらりと幽鬼のような足取りで自宅を後にした。

いつもより強く吹き抜ける風が、樹々の葉を揺らして騒がしい音を鳴らす。

冷たい風に撫でられ、刺すような痛みが肌を襲うが、エールは巨樹の根元で膝を抱えたまま動かずにいた。

そこへ、巨大な鳥の影が降り立つ。

無言で佇み、隣に寄り添う真紅の鷹に、エールは俯いたまま乾いた笑みを浮かべた。

「…やア、アंक。いつぶりがねエ」

相変わらず、アंकは何も答えない。

普段以上に沈んだ様子のエールを横目で見下ろしながら、話を促すだけだ。

「最近あんまりこつちに顔出さなくなつたねエ………まア、その方がいいかもしれな

ねエ。皆強くなっちゃった……森の獣達にも勝てるようになってきて、アンタだって危ないかもしれない」

「……………」

「人間が言えた話じゃないかもしれないけどねエ……アンタにだけは、無事でいてほしいのさア」

民にとっては、島に棲まう巨獣達はどれもこれもが恐るべき敵である。

かつてはただ一方的に狩られるだけであつたが、力と武器と知識を得た今ならば、巨鳥もまた美味そうな獲物である。

獣達の主、「空の王」たる彼ならば、その価値は他の獣とは比較にもならないだろう。「……………皆たくましくなつた。誰も飢えず、凍えず、笑つて明るく毎日を過ごしてる。もう……………私の助けなんか必要としないくらいに。これでいいのさ……これで……………いいのさア」

視線を落とし、丸くなるエール。ぽつぽつとこぼす言葉は、アंकに聞かせているというよりは、自分に言い聞かせているかのようだ。

「……………誰も私を必要としない。望ましい事なのに、私の願つてたことなのに……………見返りを求めちゃう。生きる理由を求めちゃう。……こんな自分が、イヤになる」

エールは今、惑っていた。



辿り着いた自身の存在意義に従って、懸命に他者のために尽力してきた。

だが、その行動も意義もたった数年の間に無価値と化した。大した縁もゆかりもない他人の善意で、全てが無意味に終わった。

「私は何をしたらいい……？ 何をしたら生きていいんだイ？ ……何の為に、何をする為に……私は……生きてんだイ……？」

アंकは相変わらず何も答えない。

だが代わりに、自ら翼を開いてエールを抱き寄せ、羽毛の中に包み込んだ。

「……そんじよそこの男より、あんたはいい雄だねエ」

島の人の事は、嫌いではない。だけど、好きでもない。

エールの施しに礼は言ってくれぬ。だが、進んでそれを手伝うような者はついで現れなかった。

何かして欲しかったわけではない。

だが、エールの心が満たされる事はなかった。

「……ねエ、アंक。アンタさ……『神様』って……信じるかい……？」

不意に、エールはアंकに問いかけた。どこまで人の言葉をわかっているのかは知らないが、気づけばその問いを投げかけていた。

「昔……聞いた事があるんだ。いつでもおどけて、人を笑顔にする……どこにいたって手

が届いて、いつだって助けてくれる……優しくして強い神様。そういうのが……この世界には本当にいたんだって」

暖かい怪鳥の羽毛の中、うとうとと微睡みながらエールは語る。

誰から聞いたのか、どこで知ったのかも覚えていない、心の何処かにこびりついた思わず笑えるような話。

実在などとうに信じていない、都合のいい物語。

「正直私は……そんなもの信じちゃいけないけどねエ……憧れちゃあ、いるのさア。そういう人に……私は、なりたかった」

——そうすれば、みんなが受け入れてくれるだろうから。

そんな卑屈な思いを口にし、エールはゆっくりと瞼を閉じる。

鞆のようなアングの呼吸と鼓動の音を子守唄に、深い深い眠りの中へ落ちていった。

「そんな願い……叶うわけないのにね」

## 第297話 “不気味な会合”

どちやつ、と海岸に引き上げられる大魚。

鋭い牙が口内に並んだ、鋼のように固い鱗を全身に纏った怪魚が、鰓に鉤を突き立てられた姿で横たわる。

その横に立ったエールは濡れた髪をかき上げ、肩で息をする。

「……よし、今日はこれだけで十分か。どうせ……私以外食べないだろうし」

他人に施すために、必死に食料集めを続けたこの10年。

体が育つて狩る量も増えた。だが島の生活が変わって住民達に求められる事も減り、自分が口にする量は増えたというのは皮肉な話だ。

「……最近、あんまり襲われなくなつたな。前はナワバリに入っただけで感づかれてめちゃくちゃ襲つてきてたのに……最近は……凄く静か」

ふと、周りに耳を澄ますと、異様な静けさが気にかかる。

凄まじい殺気を伴って向かってきた獣達が、最近はとんと姿を見せにくくなつていった。

「どうしたんだろ……この気配の薄さ」

辛うじて感じられる気配は、酷く遠くか細い。

依然、周囲に警戒しながら、エールは恐る恐る森の奥へと歩き出す。

「ギャオオオオオオ!!」

すると、突如樹々の向こう側から大気をびりびりと揺らす咆哮が響いてくる。

咄嗟に身を隠し、身を伏せながら、巨大な影が暴れる姿と小さな人影が幾つも動き回る姿を、草木の影から覗き見た。

「大人しくしろっ…!!? このバケモノめ!!!」

「口を押さえろ!!? こいつの牙は鎧を貫く!!!」

暴れているのは、岩のような硬い皮膚を誇る鱈の怪物だった。

鋼であろうと容易く噛み砕ける牙が並んだ強靱な顎を大きく開き、自身に群がる人間達を追い払おうと藻掻く。

だが、その体に鋼鉄の縄が複雑に絡まり、拘束しているのが見える。

「……あの縄…畏…アレが狩りの成功の秘訣か…」

「ガルルルア!!!」

暴れば暴れるほど、畏はより一層絡まって大鱈を縛り上げる。強力な武器である顎を封じられ、同じく強靱な尾も自由を奪われている。

動けなくなっていく大鱈の上に立ち、狩人たる男達が嘲笑を浮かべた。

「ヒヒツ…効かねエよそんな攻撃」

「大したモンだけ、この金属縄は………どんだけ力を込めようがちぎれる事もなく、火にも酸にも耐える。〃賢者サマ〃のお陰で大助かりだぜ」

「オイオイ………〃賢者〃の弟子だろ？」

「どっちでも大して変わんねエだろ、便利で賢いお嬢さんのモノスゲエ知恵つてこつた」  
くぐもつた呻き声しか出せなくなっていく大鰐の上で、男達はにやにやと緊張感のな  
いまま談笑する。

命懸けで森に入っていた頃からは考えられないほどの気の緩みようだ。

「だが…それでも生け捕りは面倒だな………余計な手間がかかって仕方ねエ。シメ  
ちやダメなのか？」

「そういう指示だ………大人しく従っとけ」

完全に身動きが取れなくなるほど縛り上げられた大鰐を、男達は総出で引き摺りどこ  
かへ運んでいく。

いいものを食っているからだろうか、以前よりも異常な程に高まった膂力で獲物を運  
んでいく。

その姿を見て、エールは身を潜めたまま納得したようなため息をこぼした。

「……アレじゃあ、私が用無しになるのも無理ないねエ……」

かつては飢えに苦しんでいた島の住人、彼らの今の逞しい姿。

それを見つめるエールの目には、言葉では表しきれないほどの切なげな感情が滲んでいた。

??

「よ——し、そのままア!! オーライオーライ……」

「倒すんじゃねーぞー! ゆっくりだ……!!?」

とんでんかん、と足場を組み立てる音が響く。

組み立てたそれを支点に、太くて頑丈な縄が張られ引っぱられ、巨大な石像が起立させられる。

鷹の意匠のその像は、眼光鋭く島の東側を見据えて立ち上がった。

「……いつの間にか、人も増えたな」

「ああ。……昔ガキだった奴がデカくなったり、時々どつかから流れ着いてきたり……あれから10年だ。変わりもすんだろ」

大勢の人間達が集い、作業を行う現場を横目に、酒場で席に着いた男達語り合う。酒の入った杯を口にしつつ、騒がしくなった島を改めて眺めた。

「ガキやジジババ……弱エ奴から次々に死んでく地獄が……今やこうして好きだけ飲み食いでできる楽園に変わったんだ。『強欲王』様サマだ」

「まったくだ!!? ああ頃からは考えられねエ!!!」

「ホントホント!!? おおさま」のお陰でおれ達や毎日満腹だ!!!」

こん、と杯をぶつけて音を鳴らす男達。

二人の会話に続き、同じ席に着いていたもう一人——見上げる程の巨体と肥えた腹を有した若者が大きな声で笑った。

大きな骨付き肉を両手に持つ彼に、男達はやや呆れた視線を向ける。

「流石におめエ……………食い過ぎじゃねエか? いくらでも食っていいつつたって限度があんだろ」

「いいだろ別に……………ガキの頃食えなかつたんだから。おれの楽しみの邪魔すんなよ」

険しい表情でぶつけられた苦言に、若者は不機嫌そうに眉間に皺を寄せる。

以前の生活……………食料も家も、着るものすらままならなかつた日々を思い出させられ、ぶちつと肉を力任せに食い千切る。

——いやア〜腹いっぱいだ!!? おかげで——

かつてはそう、他者に与えられる僅かな食料を泣いて喜んでいた少年の今の姿。

以前からは考えられないその凶太さに、男達はますます呆れた様子でため息をついた。

「皮膚が余ってだるだるだったガキが……………毎日浴びるほど食ってすっかり豚になっち

まっつて。お前とタメだった他のガキ共が今のお前を見たらなんて言うかねエ？」

「いいんだよ……!!? 働く為にたら、ふく食ってんだ、おれア!!? “戦士”が腹空かして動けなくちや意味ないだろ!!?」

ばくばくと、肉の他にも頼んで卓上に置いていた料理を口に運ぶ若者。

彼が不意にこぼした発言に、男達は目をぎよつと丸くし、思わず若者を凝視する。

「“戦士”てお前………ウソだろ」

「選ばれたのか!!? “王の部隊”に!!!」

「へへ……!!? 今晚呼ばれてんだ、王宮に!!? とうとうおれの出番が来たってわけだ  
な……!!?」

ぼん、と大きく膨れた腹を叩いて自慢げに笑う若者。

信じられないと言った様子で言葉を失くした男達は、気持ちを落ち着かせようと杯に口をつけ、傾けた。

「“王”と共に森に入つて、他とは桁違いの強さを誇る獣共を狩る“王の部隊”………昔は有志で集つてたが、今じゃ選ばれた数人しか入る事を許されなくなつた最強の団……!!? 何でお前が選ばれたんだ……!!?」

「そりゃあ、お前ら………」

ただ肥えているだけで、いかにも鈍重そうで、強者とは無縁に見える若者を見つめ尚



も疑う男達。

そんな彼らに向けて、若者は肉を削ぎ終えた骨を啜えると。  
ぼぎんつ！と。

まるで枯れ枝か何かのように容易く噛み砕いてみせた。

「強いから。理由なんかそれに尽きるだろ」

ばりばりと噛み砕かれ、こぼれ落ちる骨の破片。

狩られ、調理されてなお、異常な強さを誇る獣の骨格はそこらの岩よりも隔絶した強度を誇る。

それを破壊する力を見せられては、流石に納得せざるを得ない。

「今晚からおれは生まれ変わる……そして明日から始まるのさ!!? おれのおれによるおれの為の新しい時代が!!? その為にも気合い入れて食つてるわけよ!!!」

「単に食いてエだけだろ」

「飢えに飢えてたあの頃とは違う……!!! 弱くてちつぽけだったあの頃のおれはもうい

ねエ……今度はおれの番だ、おれがあゝの怪物達を片っ端から食い尽くしてやるのさ!!!」

にやりと口角を上げ、獯猛な笑みを見せる若者。飢えに苦しんだ過去を経たが故か、  
“食”に対して凄まじい執着と欲を見せる。

男達は圧倒されながら、それでもやれやれといった風に肩を竦めた。

「言うねエ：嬢ちゃんに養われてた頃のお前からは想像もつかねエ強欲ぶりだ」  
「嬢ちゃん？ 誰の事だ？」

「ホラお前…アレだ、海岸に家作って一人で住んでる……あの子」

男達に言われ、若者は自分の記憶を辿る。

しばらくの間食事の手を止め、虚空を見上げ、やがてようやく一人の少女の顔を思い出す。

「…ああ、いたなアそんな奴」

若者の口からこぼれた感想は、たったそれだけだった。

かつての自分の命を繋いでくれた人物の事を、顔もうまく思い出せないほど臆気にし、そしてすぐに思考から外してしまふ。

「なア…とこでよ？ ありや何の工事やってんだ？」

「ガラ様達からの指示だ。今まで狩ってきた猛獣達の鎮魂の為の像を建てるんだとよ」

「はー……そういう事考える方々だったんだなア」

酒場の窓から見える、見慣れない石像に意識を持っていかれ。

少女の事は、若者からも、話していた男達からも完全に忘れ去られていった。

「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ、ほっ」

真つ暗な夜道を、弾むような足取りで駆ける若者。

月明かりの中を進む姿は、肥えた体も相まって大きな弾が跳ねながら転がっているようだ。

腹を揺らし、両手を揺らし、やがて若者の前に篝火の明かりが見えてくる。

「ホイホイとうちやう……ん？」

「え？」

徐々に近付くその明かり、森の中に突如現れる石造りの建物——城の入り口に備えられた灯火。

その前へと飛び出し、着地した若者は、その場に居合わせた別の人物達に気付き目を丸くする。

「なんだア………他にも呼ばれてた奴らがいたのかよ」

「は？　そう言うお前ももしかして………」

若者が到着するよりも前に、建物の前には数人の男女が集まっていた。

筋骨隆々の男や豊満な身体つきの女、或いは髭面の男に若い娘。

共通点がさして見当たらない……強いて言うならば若者と同じような欲に満ちた目をしている、島の住人達が入り口の前で屯している。

「あなた達もなの？　私達も『強欲王』にお呼ばれしてて、ここで待つてるように言わ

れてたのよ」

「なんでエなんでエ、おれだけが選ばれし者だったんじやないのかよ……」

「バーカ、お前がそんなでエ期待されてるわけねーだろ」

自慢げに女が語ると、若者ががっくりと肩を落とす。自分だけが特別優秀で認められたわけではないとわからされ、落胆を抱いたらしい。

そんな若者を、筋骨隆々の中年男が馬鹿にしたような顔で鼻を鳴らした。

「力が強エだけの肉達磨に一番なんかねエ、〃王〃が求めてるのはおれみたいな経験豊富な達人なんだよ。おら、わかったら帰れ帰れ」

「はっ……何言ってるんだか。〃王〃のお眼鏡にかなったのは私よ、強く気高く美しいこのわ・た・し!!? 汗臭くて泥臭いあんた達男はお呼びじゃないのよ」

「んだと……!!? てめエ上等だコノ——」

自分こそが求められているのだ、と自負する者達が互いに挑発を始め、見る見るうちに一色触発の雰囲気になっていく。

今にも殴り合いの喧嘩が始まりかねない——そんな時だった。

「……静粛にお願いいたします」

突如、その場に居合わせた全員の耳に凜とした声が届く。

集まった住人達はびたりと静止し、次いでぎよつと目を剥きながら声のした方から飛

び退く。

いつの間にか、城の入り口の真正面に一人の女が立っている。

真つ白な外套と覆面で顔と全身を隠した、まるで怪しい占い師のような格好。体の起伏で、辛うじて女である事だけはわかる。

突如姿を見せた彼女を前にし、住人達はどよどよと戸惑いの声を上げる。

「うおっ?!? ……だ…誰だ!!」

「……………皆様、ようこそおいで下さいました。『王』の遣いで御座います。お時間になりましたので、皆様をお迎えに上がりました」

自身を取り囲み、疑わしげな視線を向ける住人達を前にして、女は微塵も臆する様子なくペこりと頭を下げる。

「なアなアお遣いさんよ、お迎え頂くのはおれだけで十分だぜ? こいつら2人にや」

王の部隊は荷が重いつて」

「うるせエ!!?」

「それはこつちのセリフよ!!?」

「ご静粛に、と申しました」

またしても騒ぎ始めた住人達に、再び女の声向けられそれを留める。

静かな一言なのに、有無を言わせない異様な威圧感があり、住人達は容赦なく黙らさ

れてしまった。

「王」は皆様全員を強くお求めです。ご存知の通り、彼の方は類稀なる強欲……欲したお方に貴賤をつける方では御座いませぬ。個々の価値観で勝手に決められてしまいますと……「王」の機嫌を損ねる事になります故……どうかご注意を」

「ウ……」

続けて告げられた女の言葉に、住人達は今度こそ文句を言えなくなる。

互いに目を見合わせ、未だ言い足りないことを胸の内に抑え込み、渋々といった様子で女に視線を戻し頷く。

それを見て、女も満足そうに頷き、半身を引いて全員に入り口を促した。

「では、こちらへ。」王「がお待ちで御座います」

篝火に照らされる通路を、女を先頭として住人達が進む。

見上げる程に高い天井と手を伸ばしても足りない程に広く、そして果てがまだ見えな  
い程に長い通路。

一体いつの間にこれ程の物を造ったのか、と驚かずにはいられない。

「ここが『強欲王』の城の中か……!!!」話には聞いてたけどやっぱりエ出来だな」

「10年の月日の間に完成したとは聞いてたが……中に入ったのは初めてだ。いつの間に

かここまでのものを作ったのか」

たった10年の内に進んだ島の繁栄、それを反映するかのような凄まじい規模の建築に、畏怖と感嘆の眩きが住人達の口から漏れる。

きよろきよろと辺りを見渡しながら歩き続ける事、しばし。

ついに通路の果てが見え、巨大な両開きの扉が住人達を迎え、重々しい音を立てて開かれていく。

「……………よく来た、選ばれし我が民よ」

扉の奥、広大な空間の最奥から「王」の声が響く。

月光が頂点から降り注ぐ円球状の空間に、住人達は女の案内の下、ぞろぞろと進み出て集まる。そして、一人一人が身を乗り出すようにして口を開いた。

「なアなア『強欲王』!!! 待ってたぜ!!? ようやくおれを部隊の一員にしてくれるんだな!!? うひひ……………今から楽しみで仕方ねエよ!!!」

「あのオ…えつとオ…♡ 部隊に入ればア、その分ご褒美も豪華だつて聞いてエ♡ 一生懸命頑張りますからア、できるだけたくさんアくさん頂きたいなつて思つてましてエ♡」

「褒美やら何やらよりも……………おれにとつて重要なのは地位と名声でしてな…功を立てた暁には、それ相応の見返りをお願いしたいのだが……………!!!」

全員が全員、自身の欲望を全面的に露わにする。食欲、物欲、承認欲求、種は違えど、是認が同程度の強さの欲を目に宿し、玉座に腰かける「王」にまくしたてる。

あからさまな無礼だが、「王」はむしろ望ましげに笑うだけであった。

「ククク……よいよい……いつもこいつも良い強欲ぶりだ。それぞれが力に満ちておる。待った甲斐があるというものよ……」

肩を揺らし、愉しげに笑う「王」。

老いた男の目が放つのは、集まった住人達も及ばないほどに鋭く、悍ましい輝き。

浮かれていた住人達は、それを目の当たりにして瞬時に勝機に戻らされた。

「どれもこれも………「材料」と申し分ない。これなら質の良い「石」が出来上がる」

「…石…?」

「失敗作ばかりであった頃がもはや懐かしい………今考えれば、粗末な材料ばかりで碌なものを作る訳がなかった。こんなに手頃に手に入る素材があったというのに、なぜ気付かんかったのか」

ぶつぶつと住人達を見下ろしながら呟く「王」。

彼が住人達に向けているのは、明らかに『人』に対するものではなく………価値を持つた『物』に対するそれであった。



「……あの、お話がよく」

ひやり、と背筋に走る寒気に気付かず、いや、考えないようにしながら、恐る恐るといった様子で住人の一人が問いかけようとする。

だが、住人達はすぐに気付く。

案内役の謎の女がいつの間にか姿を消し、通ってきた扉が重い音と共に固く閉じられ、代わりに別の扉が轟音を立てて開かれた事に。

何かが行われようとしている——それに気付いた時には、もう遅かった。

「始めろ」

「ゴルルルル…!!」

「王」が誰かに向けて短く命じる。

直後、開かれた扉の向こうから唸り声が響き、巨大な影がゆっくりと這い出し、住人達に迫った。

「「ぎやああああああ…!!」」

迸る、悲鳴。夜の闇の中に走る、眩い閃光。

絶叫は闇を斬り裂き、やがて唐突に途切れ、静寂が辺りに降りた。

「……………なんか、聞こえた…：ような」

しやり、と枝を削る手を止め、気付いた違和感に眉を顰めるエール。音がした、そう感じた方向に目を向け、鬱蒼と茂る森を見やった彼女は、ほんの少しの逡巡の後、思い切って走り出した。

(……………最近、この手の「勘」が働くようになった)

張り出した根を飛び越え、川を渡り、闇の中を軽やかに駆け抜ける。

だが、足取りに反して胸中には重い不安が渦巻いていた。

エールの予感再度々当たる。だがそれは見て嬉しいものではない——大抵が自身に迫る窮地を知らせる恐ろしいものばかりだ。

(森の猛獣達から隠れる時、海で獲物を探してる時、風や波が荒れる前……………なんとなく予感が働くようになった。これのお陰でピンチを切り抜けた事もしばしばある……………)

望んで見たいものではなかったが、結果的には命を救われた。

進んで使いたくはないが、この劣悪な環境で生き延びる為には必要不可欠な力だ。

———だけど…!!?

さっきの「予感」は普段とは比べ物にならない……………!!!

スゴく…!!!

イヤな予感がする!!!

いつも以上に静かな森の中を駆け抜け、走る走る。

夜に動く獣の縄張りが近付き、探すのも限界だ、と思われたその時。

「——つたく、めんどくせエな」

不意に聞こえた人の声に、エールは足を止めて木陰に身をひそめる。

背中を幹にぴったりと貼り付け、少しずつ身を乗り出す。

見えたのは、沼の近くで動く二つの人影。大きな塊を担ぎ、引きずって運ぶ若者達だ。

「朝から晩までクソ鬱陶しい森の中で畜生共を追いかけ回して疲れてるつてのに、何で

こんな仕事までしなきゃならねエんだ：!!？」

「こんなゴミくらい、あいつらの術でサクツと片付けちまえばいいのよ………まった  
く」

改めて耳にした彼らの声、ひどく聞き覚えのあるそれに、エールははつと息を飲む。

その時、エールの胸元に草木が引っかかり、かさりとかすかな音が鳴った。

「あ？」

「どうした？」

「なんか今物音がしたような……」

「おい、誰かに見られたんじゃないだろうな？」

じろり、と若者達——兄達の視線が向けられ、エールはとつさに身を隠して口を手

で塞ぐ。

ばくばくとうるさくなる心臓の音、嘔き出る冷や汗。

必死に息を殺し、兄達の意識が逸れる時を待つ。

「……何もいねエみてエだ。気の所為か」

「いねエいねエ、放つときやいい」

ちつ、と舌打ちをこぼし、抱えていた大荷物を地面に下ろす兄達。

けらけらと笑う彼らに、エールは細心の注意を払いながら再度身を乗り出し、彼らの行為をじつと監視する。

「……………兄様達……………？ あんな所で……………何を…」

兄達は何やら、布で追われた塊を沼の中に次々に投げ入れている。

相当な重さがあるらしい。2人掛かりで一つずつ、億劫そうに悪態をつきながら乱暴に放り捨てていく。

どぼん、どぼんと沈んでいく布の塊。

——その中の一つから、運ばれる最中に包みが解け、人の手らしきものがだらりと垂れ下がるのが見えた。

「…随分溜まったもんだな、うつつら水面に浮かんで見えるぞ」

「そりゃあ、何十回と繰り返し返してきたからな……………塵も積もれば山となるつつーだろ。コ

イツらに至つちや……今や実際にゴミだしな」

今度こそ絶句し、木陰にとつて返してへたり込むエール。

恐怖で震え上がる少女に兄達は気付く事なく、運んできた塊を……ぴくりとも動かない肉の塊を沈め終える。

仕事を終え、気怠げに肩を回しながら、兄達はにやりと醜悪な笑みを浮かべる。

「この沼がこのゴミ共で一杯になる時こそ——おれ達の計画が完遂する瞬間だ」

## 第298話 “狂気の儀式”

——都合のいい話だよなア……!!?

勝手に増えてくゴミ共を材料に……世界を手に入れる力が作れちゃうなんてよ。

走る、走る。森の中を駆け抜ける。

目撃した衝撃の事実から……聞いてしまった悍ましき言葉から逃げるように、ひたすら距離を取る。

だがそれでも、エールの耳には彼らの言葉がはつきりとこびりついていた。

——ゴミ共を1人残らず“石”の材料にしちまう……。

こんないい方法をなんで今まで思いつかなかつたんだろうな？

今まで勿体無いことしてたぜまったく……!!?

遺体を沈めながら、兄達は笑っていた。恐ろしい苦悶の表情を浮かべて沈黙する肉の塊を沼に沈めながら、下卑た笑みのままだった。

——アイツらも喜ぶだろうぜ!!?

無価値なゴミが最期におれ達の役に立てるんだからよ!!?

——オイオイ……。

ゴミなんて言い方はよせよ。

走っている間にも、彼らの表情はまぶたの裏にしつかりと浮かぶ。

人間の悪意。これまで自分に向けられてきた罵倒など、兇戯だったとしか思えないほど醜悪で、怖気が走る顔だった。

——アレは豚だ。

エサをやればやるほどぶくぶく肥え太つてく都合のいい家畜……アイツらはおれ達の食糧だ。

おれ達にはアイツらが必要なんだよ……世界を手に入れる為にはな。

血の一滴までしつかり役立って貰わないとなア……じやなきや、今まで散々食わせてやった意味がねエ。

ばたん、と我が家に飛び込み倒れ込む。

急いで扉を閉め、膝と頭を抱えて震え上がる。今この瞬間にも、彼らが追ってきて殺されるかもしれない……そんな恐怖に囚われていた。

「……あ……兄様達は………父様は……狂ってる……!!! 怨念と憎悪で………完全に  
おかしくなっちゃってる……!!!」

以前から傲慢な人格ではあった。だが、ここまで狂ってはいなかった。

自分以外の人間を下に見る、所謂良い王ではなかったが、ただの物として見るほどで

はなかつたはずだった。

「何をする気なの……?」 島のみんなを……豚つて……材料つて……みんなを……!!  
? 何に巻き込む気なの……?」

エールがいくら考えても、何が起こるのかなどわかるはずもない。

ただ、碌な事が起こらないのは間違いない。

「……………いや……違う、巻き込むんじゃない……最初からみんなで何かをする為に……父様は……………!!!」

——すべてだ!!!

我はすべてを手に入れ!!?

すべてを与える!!!

最強たる我が力をもって……貴様らに永遠の栄華を授けてやろう!!!

こんな畜生ものがゴミに思える程のなア!!!

10年前、突如森の強大な獣に勝利し、凱旋を始めた頃の父の言葉が思い出される。考えてみれば、あの言葉は違和感があった。

強欲な「王」何かを与えるなど、その見返りとなる何かを人々から巻き上げるつもりだったのではないか。

現に今、何かを奪われた人々が無慈悲に捨てられる姿を見たばかりだ。



「し……知らせなきや、みんなに知らせて……！！！！」

震える体に叱咤し、強引に立ち上がろうとする。父や兄達の所業を知らせ、皆を助けなければと衝動的に腰を浮かせる……だが。

——もう飢えとはオサラバだア!!!

——“強欲王”様サマだぜ!!?

——“よくばりおおさま”バンザーイ!!!

それ以上、体が動かない。

“王”のもたらした恵み、繁栄に喜び、心から笑う人々の顔が、声が脳裏に浮かび、体が凍りつく。

(……信じない。誰も……手離す筈がない。今を……全てが満たされているこの楽園を……真実がどうだったとしても……みんな……受け入れたりしない)

エールを頼る者は、今や誰もいない。

より裕福で、より楽で、より幸福な生活を望む彼らが、果たしてそれをもたらしてくれる“王”を疑うだろうか。

役立たずの小娘の言葉に、耳を貸すだろうか。

(みんな……私の言葉なんて……無価値な私の言う事なんて……信じない)

へなへなど、足から力が抜けて座り込む。

どうすればいいのか、何をすればいいのか。動かなければならぬのに、一度諦観を覚えてしまった体は言う事を聞いてくれなかった。

「……………どうしよう。私……………どうしたらいいの…アंक」

この場にいない友人に問いかけるも、帰ってくるのは虚しい沈黙だけだった。

??

「おれらに用ってなんだろうな、なア兄弟!!?」

「ギアてなア……………わざわざこんな真夜中に呼ぶくらいだ……………秘密で重要な話があるんじゃないか? 兄弟!!?」

真つ暗な道を歩く双子の兄弟。ほとんど同じ筋骨隆々の体に、そっくりな顔をした双子が、やかましく騒ぎながら深夜の森の道を進む。

「なんにせよ、あの『王』がとうとうおれ達『拳闘兄弟』の力を必要としたって事は確かだ。なア兄弟!!?」

「島に巢食う化け物退治におれ達の力が求められてるってわけだな兄弟!!?」

「そういう事なら仕方ねエ……………ここらで一旗あげて、この世にドだけエ記憶を刻んでやろうぜ、なア兄弟!!?」

「おうよ!!? この人生にド派手な華を咲かせてやろうぜ兄弟!!!」

意気揚々と、自分達を待っているであろう名誉と地位を目当てに、軽い足取りでどん

どん進む。

そんな双子を、木陰に身を潜めた少女が窺う。

「エールはじつと息を殺し、去っていく双子の後を細心の注意を払いながら追いかける。」

「ワダとカム……しばらく見えない間に………なんかゴツくなったねエ」

先日目撃した遺棄現場。あの場所を中心に捜索し、ようやく見つけたこの道。

一体どこに通じているのか、何があるのか、エールは飛び出し双子を呼び止めたい気持ちを抑え、監視を続けた。

「あの2人を……なんだったか…… “石” だかなんだかの材料にするのかイ……？ そもそも………人間を石にするってのアドという意味なんだイ……？」

疑問は尽きない。だが、探らなければ何も掴めない。

新たな犠牲になるやもしれない二人に申し訳なさを感じながら、エールはじつと機を待つ。

そしてやがて、双子の前に大きな建物の入り口と、見覚えのある人影が現れた。

「……ようこそおいでくださいました、御二方。私めがご案内を勤めさせていただきます」  
(ラケル……!!?)

思わぬ人物の登場に、エールはひゅつと息を呑み硬直する。

なぜ彼女がここに、何の為に。

目を見開くエールに気付く様子はなく、ラケルは双子を入り口に案内する。

「さア、こちらへ……王」が首を長くしてお待ちにございます」

静々と歩き出すラケルに、双子はそわそわ待ちきれない様子で、しかし従順に後に続く。それでも逸るのか、しきりにラケルに話しかけていた。

「なアおいお嬢さん？ 王様」は一体おれ達にどんな用があるんだイ？」

「気になつて仕方ねエぜ、お嬢さん」

「……………それは、王」より直接お話がございますゆえ、私めが勝手に話す事はできかねます」

「お嬢さん、いいじゃねエか！」

「ちつとだけ教えてくれよオ!!? お嬢さん」

「……………それは後のお楽しみ、でございます」

「えくくくく??」

謎の建物の入り口をくぐり、闇に消えるラケルと双子。

エールは恐る恐る木陰を出ると、松明に照らされた入り口の前に立つ。

秘密は、この向こうにある。例えようのない不安と恐怖が胸中を占めるが、首を振つてそれを払いのける。

意を決し、エールは自ら闇の中へと足を踏み入れた。

建物の中は、ひたすらに長く、そして難解な通路が続いていた。

深く深く降りていく階段にやたらと現れる十字路。かろうじて見えるラケル達の背中を辿らなければ、道などまるでわからなくなる。

「まったく……!!?」 呆れるくらい広いねエ……知らない間に……ずいぶんとまア贅沢な建物が建つてたもんだ」

向こうに聞こえないような気をつけながら、思わず湧いた悪態を吐く。

こんなにも意味のわからない建物を造るくらいなら、島の住民が暮らせるより頑丈な家を作つてやればいいものを。

労力は全て、自分の欲望の為。

あの父は、強欲な「王」は結局何も変わっていない。

「……「国」ができて……「城」ができて……「民」がいて……何もかもが満たされてるつてのに、これ以上何を望むんだイ……父様」

ぎり、と食いしばった歯を軋ませ、ここ数年は会話どころかまともに顔を合わせてもない父の顔を脳裏に浮かべる。

そうやって余計な事を考えていたのが悪かったのだろうか。

気付けば、ラケル達の背中はどこにも見当たらなくなっていた。

「——つてあれエ!?? 見失っちゃまったかい!?? どこ行っちゃまったんだいあいつら……!!? えくくくつと……こつちかねエ……?」

慌てて案内役の痕跡を探すが、気配を探してもまるで見つからない。

ラケルの案内に頼りきっていた為に、どこをどう通ってきたかもし思ひ出せず、戻る事もできなくなる。

仕方がなく、当てずっぽうで進まざるを得なくなっていた。

「行けども行けども似たような道ばかり……私はどこから来たんだったかねエ……? 困った事になった……!!!」

まるで同じ道を延々と歩かされているようだ。均等に作られた通路が無限に続いていくように見え、気が狂いそうになる。

頭を抱え、悩みながら勘の赴くままに歩いていた——その時だ。

「グルオオオオオオオ!!」

「ひい!?」

通路の何処かから響いてきた、凄まじい声量の咆哮。地響きがするほどに巨大なそれに気圧され、思わずエールの口から悲鳴が漏れる。

エールは怯えながらも、恐る恐る咆哮が聞こえる方へと足を進めた。

「ブオオオ!!!」

「ア”　　”!!!　ア”　　”!!!」

「キシヤアアア!!!」

覗き込んだある空間……そこは、無数の檻が並ぶ深く巨大な穴。

円形の穴の壁面にびっしりと部屋が掘られ、それぞれが鋼鉄の格子で塞がれている。

その中には、見覚えのある巨獣達が押し込められ、荒れ狂っていた。

鰻に驚、象に豹、どれもこれもエールが幾度か遭遇し、命からがら逃げてきた危険な

猛獣達だ。

「沼の王”　　”崖の王”　　”泉の王”　　”!!!　森の……海の……島中の猛獣達……なん

でこんなところに」

どれだけ頑丈な檻なのだろう。巨獣達がどんなに暴れても歪む素振りも見せない。

依然として、硬く巨獣達を閉じ込めたままだ。

「アंकは……!!!?　よかった……!!?　アイツは捕まつてないんだねエ……!!!　………で

も、こんなに危ない猛獣達を集めて何しようってんだイ……!!?」

咄嗟に唯一の友人の姿を探すが、見当たらずほっとひとまず安堵する。

だが、相変わらず疑問は解けない。わざわざ捕らえて閉じ込めておくなどなんの意図

があるのか、檻から出て暴れ出そうものならどれだけの惨事になる事か。

戸惑うエール。彼女はその時もう一つ、聞き覚えのある「声」を捉える。  
「……!?? こつちから……声が?」

「オイ!!! どういうつもりだよ「王様」よオ!!!」

「なんでおれらがいきなり取っ捕まらなきやならねエ!!!」

「王」の居城の奥の奥、玉座の間で双子の怒号が響く。

両手両足を縛り上げられ、芋虫のように身動きが取れない状態で、「王」と錬金術師達の前に晒されていた。

「この野郎、冗談でも超えちゃならねエ線があんだろ!!!? この縄とけ!!!? さっさと解放しろ!!!」

「……いつらはイキがいいな。2匹で十分か」

「左様ですな」

「しかし肝心の「欲」はどうか……」

騒ぐ二人をよそに、「王」達は好き勝手に議論するばかり。

無礼を働かれているのに相手にもされず、双子の怒りはより一層燃え上がった。

「クソ……!!!? コノ…野郎……!!! こつちが下手に出て崇めてやってりやつけあがりやがって……!!! これがためエの本性ってワケかコウモリ野郎!!!」



「騙された!!! まんまと騙されちまったぜ兄弟!!!」

「おれ達をどうしようってんだクス王め!!? 死んでもてめエの思い通りにやならねエぞ!!!」

動かない手足の代わりに、思いつく限りの罵倒を吠える。唾を吐き散らし、目を血走らせ、激情を思いつきりぶちまける。

だがそれでも、「王」は気にも留めない。

それどころか鬱陶しそうに顔を歪め、くいつと顎をしゃくつた。

「鬱陶しい……始めろ」

次の瞬間、玉座の間の左右の壁が重い音を立てて持ち上げられていく。岩を引きずる耳障りな音の後、やがて巨大な入り口が開かれる。

開かれた暗闇、その奥からいくつもの眼光が覗いた。

「クワカカカカ……!!!」

「グワアアツ!!!」

「うわああああア!!!」

ずしん、と踏み出される巨大な鳥の脚。羽搏きで生じる暴風。

民家ほどもあろう巨体で通路をくぐり、それらは——何羽もの鳥の怪物達が姿を現した。

双子の怒号は途切れ、悲鳴が迸る。

「コツ……コイツら……!!? 『原の王』に……『荒野の王』!!? なんてコイツらがここに……!!!」

「ま……まさかコイツらにおれ達を食わせる気じゃ……!!?」

「イヤだアア……!!! そんな最期は死んでもイヤだア!!! た……助けて……誰か助けてくれエ!!!」

「グアアアア……!!!」

猛獣達のうち、巨大な鶏が双子に一直線に迫る。だが、首と両足首に嵌められた鎖に阻まれ、後少しの距離が届かない。

双子は『王』への怒りも忘れ、泣き叫んで命乞いをする。恥も外聞も捨て、顔中をぐしゃぐしゃにして首を横に振る。

足の間を生暖かく濡らす彼らに、案内役のラケルが思わずため息を吐く。

「大人しくして下さいな……そう時間はかかりませんわ」

「此奴らもまたイキがいい……!!? さアさつさとやれ!!? また新たな『宝』の完成を我に見せるのだ!!!」

「………御意に……」

ラケルが呆れるほどの醜態にも、『王』はまるで興味を示さない。始終、玩具を買い

与えられる前の子供のように目を輝かせ、玉座の上ではしやぎ続ける。

ラケルは嘆息すると、たん、とその場で足を踏み鳴らす。

その瞬間、玉座の間全体の床が不気味な赤い光を発し始めた。

「ヒツ……!!?」

「た……助け」

「お悔やみ申し上げますわ……御二方」

足下が急に光り出し、怯える双子。より一層騒ぎ出す猛獣達。

複雑な模様と文字がいくつも描き照らし出された円陣の中で、人間と猛獣達が光の中に囚われる。

明らかに何か、よくない事が起ころうとしているのは確かだった。

エールは入り口の陰に身を潜めながら、呼吸も忘れてその光景に目を奪われていた。

(何アレ……!!?!? 何?!?!? アイツら何やろうとしてんだイ……!!?!? わ……私はどうしたら……)

助けなければ、だがどうすればいいのか。

異様な光景に圧倒され、まとまらない思考で必死に策をひねり出そうとして。

エールは、背後に立った何者かに気付くのが遅れた。

ど……ん!

轟音が鳴り響き、壁の破片がごろごろと玉座の間に転がり込む。

「王」やラケル、錬金術師達が何事かと振り向く中、土埃にまみれたエールがどたと倒れ込んだ。

「……うウ」

「……?!? エールさん……!!?!」

額から血を流して呻くエール。

思わぬ人物の乱入に、初めてラケルの表情が変わる。

「何だ……大事な時に騒々しい………何の用だ、ウヴァ」

乱入者にちらりと一瞥をくれた「王」は、次いで破壊された入り口から姿を見せたものの——緑の異形を睨む。

昆虫の特徴を持ったその異形は、いらだたしげに「王」を睨み返した。

「チツ……見ての通りだ………紛れ込んだうろちよろと探ってるネズミがいたから狩ってやってただけ、むしろ感謝してしかるべきだろう」

「フン……そんな出来損ない一つ放つておいても差異などないわ」

「そうかよ」

ウヴァと呼ばれた異形は心底面倒臭そうに、不本意そうに「王」に告げる。尊大な「王」の態度に、嫌悪さえ抱いているように見えた。

ウヴァアの足下で、エールは驚愕し、恐怖していた。

異形から感じる、その異様な気配に。

（何だィ…コイツは!?？ 人…虫!?？ 何だこの異様な気配は…!!! 無数の蟲が密集

して蠢いてるみたいだ…!!! こんな…こんなバケモノがこの島にいたのかイ!!?)

今まで、ここまで醜悪な気配を放つ存在と遭遇した事はない。一体だけなのに、無数の化け物に囲まれているような感覚に陥る。

これと比べれば、森の獣達が幾分可愛らしく思えてくるほどだ。

「ネズミを放つておいても差異がないなら…おれが見張りをする意味もないと思うがな。面倒な役目を押し付けられるこつちの身にもなつてもらいたいもんだ」

「無駄口を叩くな…『創造主』の意思に従え、石め」

「チツ…」

旋律の表情で見上げるエール。だがやはり「王」はほとんど注目を向けない。路傍の石と同じように、かすかに邪魔な存在としか見ていなかった。

「何だ!?？ 誰だ!!？ そこに誰か来てるのか!?!」

「誰でもいい!!! 助けてくれ!!？ 何でもする!!？」

縛られたまま動けず、何が起こったのかわかっていない双子。

それでも助けになるならと、巨鳥達の足の間から必死に呼びかける。無論、エールに

彼らを助ける余裕などない。

「王よ………如何される？ 奴隷の子と言えど一応は血の繋がりのある娘ですゆえ

…

「…構わん。これもついでに材料に加えよ」

!!?

錬金術師ガラの問いに、王は一切の躊躇いなく告げる。

ガラもまたその答えに戸惑う事なく、むしろ話が早くて助かると言わんばかりに頷き、エールの髪を掴んで持ち上げる。

痛みに顔を歪めるエールは、ガラの向ける無機質な視線に息を詰まらせた。

「ヒッ……!!?」

「喜ぶがいい、役立たず………お前はようやくやく生みの親たる私の役に立てるのだ。無意味に出来た矮小なる塵芥に……今こそ意味を与えてやろう」

そう言つて、ずるずるとエールを引きずり円陣へと向かつていくガラ。

痛みに悶えるエールはガラの手を掴んで抗うが、錬金術師は無慈悲に少女を運んでいく。その様に、我に返ったラケルが声を荒げる。

「王よ!!? それは………!!!」

「さっさと始めよ!!! 我はもう待ちきれんのだ!!? 我を至高にして唯一たる 真の王

“に至らしめる”宝の完成がすぐそこなのだ!!!

「どうかお待ちを!!?」王よ!!!

ラケルの制止の声も、王はまるで意に介さない。

円陣の淵に立ったガラは、少女の細い体を乱暴に放り捨て、エールは双子のすぐ側に押しやられる。

呻きながらエールが起き上がろうとした時、ガラの口元に笑みが浮かんだ。

次の瞬間、円陣の赤い光が強まり、毒々しい真紅の閃光が迸った。

「「「ギャアアアアアアアアアアア!!!」」」

円陣の中に囚われた双子と巨獣達、そしてエールは、突如全身に走った苦痛に絶叫する。

皮膚を無理矢理剥がされるような。

臓器を無理矢理抉り取られるような。

神経に鑢をかけられているような。

言葉では表しきれない、尋常ではない苦しみが彼らに襲いかかる。

「ア……アア……ア……!!!」

「やめ……あ………た……たす……ケ……!!?」

円陣の中で、双子と巨獣達は涙と鼻水と唾液を溢れさせ、声にならない声で助けを乞

う。呼吸すらままならず、意識がみるみる遠のいていく。

「うあ……あ、あ……!!」

白目を剥き、仰向けで胸をかきむしりながら、エールも激しく痙攣し悶え苦しむ。

何かが体から引き剥がされる、死よりも恐ろしい何かをされている。まるでまとまらない思考の中、本能で自身の終わりを直感する。

「ア……ア……アン……ク……!!」

無意識に伸ばした手が、虚空を掴もうとする。

何も触れず、掴まれず、徐々に力が抜けて、エールは虚しく崩れ落ち――

「ピイイイイ……!!」

――その瞬間、空を閉ざす天井が砕け、真つ赤な翼と甲高い咆哮が天空より舞い降りた。



## 第299話 奪われたもの

「う……ぶはア!!」

阻害されていた呼吸が一気に正常に戻り、エールは激しく咳き込む。

新鮮な空気を何度も肺に取り込み、涎と涙を流しながら、自分の傍に降り立った紅い巨影を呆然と見上げた。

「あ……アंक……!!」

「ピイイ……ヒョロロロ!!」

エールを守るように、両脚を広げて仁王立ちし、翼を広げて威嚇の声を上げる巨鳥・アंक。

羽搏く度に吹き荒れる暴風。

凄まじい殺気を伴って吠える怪物を前に、ガラ達錬金術師も驚愕の表情を浮かべた。

「……此奴は!!? 空の王!!」

「我らの罌を尽く潜り抜け……!!? 逃げ果せてきた鳥の王か!!! 何故ここに……!!」

どよめきながら、襲い掛かる暴風に吹き飛ばされまいよう踏ん張る。向けられる鋭い視線に臆し、何人かは息を呑み冷や汗を垂らしていた。

しかし凄まじい威圧を放つ巨鳥を相手に、反対に敵意を燃え上がらせる者がいた。  
「チツ…見下してんじやねエ!!!」

複眼を吊り上げ、ベキベキと甲殻で覆われた指を鳴らしたウヴァが跳躍する。

右腕から生えた蠟螂の鎌のような刃を振りかざし、目障りな紅い羽毛を斬り裂きにかかると、

アंकは異形の接近に気付くと、羽搏いて宙に浮くと片脚を鋭く突き出した。

甲高い音を立てて鋭い爪がウヴァの刃を受け止め、更に火花を散らせながら弾く。

「ピイイイ〜〜!!!」

「ぬぐつ…!!!? コノ…!!!」

弾かれたウヴァは、アंकが振るつた翼の一撃で大きく吹き飛ばされる。鉄の塊が激突したのとほぼ同じ衝撃が、異形の甲殻に響く。

ウヴァの体は玉座の間の柱を幾つも破壊し、壁に激突してようやく止まった。

「コノ………クソがア!!!」

「ピイイイイイ!!!」

ガラガラと崩れてくる瓦礫を小石のように払い除け、ウヴァが怒りの声を上げる。それに対し、アंकもまた憤怒の叫び声を返す。

双方の発した殺気が激突し、びりびりと大気が怯えたように震え続けていた。

「……………アंकク…こんなに強かったんだ」

アंकクの足元で縮こまるだけのエールは、友人が見せる凄まじい力の瞠目し、絶句する。

仮にも『王』と呼ばれる、生態系の頂点に座す存在…その力の片鱗を見せつけられ、心も目も奪われ動けずにいた。

だが、畏怖すべきその力を前にしてもなお——まるで変らぬ態度を貫く者がいた。「…素晴らしい…!!? これほどの力を持つケダモノがまだ残っておったとは……………」

「『王』よ、危険です!!? 近付いては——」

「ええい邪魔だ!!? どけ!!!」

玉座から腰を浮かせ、『王』が満面の笑みを…狂気と我欲に満ちた恐ろしい形相で浮かべてアंकクの方へ近付こうとする。

羽交い絞めにして止めようとするガスを払い除け、『王』はウヴァを睨みつける。

「何をしておるウヴァ!!! 早う其奴を捕らえろ!!? 生け捕りだ!!? 決して殺すな!!? 其奴こそ最後の1体に相応しい!!!」

「チイ…この…クソジジイが…!!!」

苛立つウヴァに気付かず、見もせず、『王』が興奮したまま喚き続ける。その力を目の当たりにしただろうに、それを欲するだけで肝心の捕らえる方法を何も考えない。

「ピイイイイイ……!!! ピイイ!!!」  
「うわっ」

じろり、と「王」を睨みつけたアंकは、不意に首を伸ばすと、座り込んでいたエールを啜え、大きく羽ばたき飛翔する。

「あ……お……おい!!! 置いていくなよオ!!?」

「おれ達も助けてくれよオオ!!!」

双子や巨鳥達が真下から叫ぶが、アंकは羽搏きを止めはしない。

あつという間に巨体は宙へ舞い上がり、凄まじい速度で彼が開けた天井の大穴へと向かう。突然の事に、エールは目を白黒させるばかりだ。

月明かりだけが照らす闇の中へ、紅き巨鳥が飛び出そうとした——刹那。

「逃がすなア!!!」

ざくっ!

と、黄色い何かが真横から鋭い一閃を放ち、アंकの巨体に大きな傷を刻みつける。

アंकは硬直し、白目を剥くと真つ逆さまに落下していった。

「うわああア!!!」

嘴から力が抜け、エールの体も離れる。ばたばたと手足を振つてもがくも、翼のない少女に為す術はない。

ずん、と凄まじい轟音を立てて墜落するアंक。そのすぐ横にエールも落下し、全身を強かに打ち付けられた。

ふっ、と一瞬意識が遠のく。次いで凄まじい痛みと熱さに襲われ、エールは強引に意識が戻り悶絶する羽目になる。

「ガ……ア………!!? ア……アン………ク……!!?」

「アハハハハ……悪いね、王様」。力加減間違っちゃった、死んじゃったかも?」

そこへ、また聴きなれぬ声が響く。

ずるずると体を引きずるエールのすぐ後ろに、もう一体の異形がゆつくりと月光の下に歩み出てくる。

猫の顔に鬣を生やし、鋭い爪を両手に備えた黄色い異形。

嗜虐的欲望を隠そうともしないそれもまた、酷く悍ましい気配を放つ得体のしれない怪物だった。

「カザリ……ふん、そう言ってまだ生かしているくせに、器用な奴め」

「結構難しいんだよオ? 死ぬギリギリ手前で止めるの………どつかの誰かさんみたいな大雑把な奴にはまア無理だろうねエ?」

「何だとしてめエ……!!!」

獲物を取られた苛立ちからか、それとも元から馬が合わないのか、ウヴァはカザリと

呼んだ猫の異形を睨みつけ悪態を吐く。

カザリもその態度に慣れているのか、むしろ彼を煽りより一層苛立たせる。ちよつか  
いをかけて遊ぶ猫そのものだ。

「…ありや、あつちの子はまだ元気だね」

ふと、カザリの目がエールに向く。

怪物達のやりとりに目を向ける事もなく、少女は必死の形相で巨鳥の元へと這いずつ  
ていた。

「つ……ふ……ウ……!!」 アンク……しっかり……すぐに……手当して……」

血を吐き、歯を食いしぼり、ずきずきと痛む全身を酷使し、動かないたった一羽の友  
人を助けたい一心でもがく。

その手がようやく、アंकの真紅の羽毛に触れようとした時。

「あらあら悪い子だこと……」 “王”の獲物を横取りしようなんて、とんだ泥棒猫ねエ  
？」

ずりずりずる……と、暗闇の中から伸びた太く長い何か——長大な蛸の足がエー  
ルの首に絡みつく。

こつこつと靴音を響かせて、さらなる異形が現れる。

鯨の顔に鰻のようなぬるぬるとした表皮、蛸足の外套を羽織った、女の外觀の青い異

形だ。

気付いたエールは抗う間も無く、首を絞められ中へと吊り上げられた。

「お仕置が必要ね」

「うぐ……ああアア!!」

青い異形が愉しそうに告げると、蛸足に一気に力がこもる。頸動脈を締め上げられ、一瞬で呼吸困難に陥る。

抵抗しようにも、痛む体はまともに動かない。苦痛に思わず上がる悲鳴も徐々に絞められか細くなっていく。

それでもどうにか意識を保とうとして……次の瞬間、エールに凄まじい衝撃が襲いかかり、壁に向けて吹き飛ばされた。

「うぐるささしい」

どこん、と轟く轟音。撒き散らされる瓦礫と粉塵。

エールを真横から吹き飛ばした者——もう一体の異形、犀と象と大猿を混ぜ合わせたような敵つい灰色の怪物が、鬱陶しそうに間延びした声を上げた。

「ウヴァ、またカザリにてがらとられた」

「黙れガメル……!!? おれがコイツに出し抜かれる訳があるか」

「だったらまずこの有様の言い訳を試してみたら? 相変わらず頭の作りは劣っているよ

うね」

「アハハハハ……言われまくつてんじやん」

月光の下、真紅の巨鳥を背後に、四体の異形が揃い立つ。

虫の異形、猫の異形、水性生物の異形、重量級生物の異形……数々の生物の特徴を持ちながら、生物としてありえない気配を放つ存在。

瓦礫に埋もれながら、エールは真つ青な顔でごくりと息を飲んだ。

「バケ……モノ……!!?」

「ほら『王様』、言われた通り捕まえたよ。さっさと実験の続きやったら?」

「言われるまでもない………手間をかけおつて『石』共め」

「えく、そりやないんじやない? せっかくアンタの言う事聞いてあげてるのに………」

戦慄の声を漏らすエール、だが誰も彼女を気に留めない。

異質な力を見せつけた怪物達を前にしてなお、『王』は相変わらず玉座に陣取つたまま、尊大な態度で話し続ける。

異形達も反抗的な態度を滲ませるが、手を出す素振りは見当たらない。

「ただの物である貴様らに意思と動く体を与えてやったのは誰だと思ってる? 創造者に従うのが貴様らの役目だ………戯けが!!」

ぎろり、と血走った目で傲慢な言葉を吐き捨てる『王』。



異形達は肩をすくめ、鼻を鳴らし、溜息をこぼし、つまらなそうに欠伸をこぼし、いつも通りといった様子を見せていた。

そんな彼らに「王」も気にした様子を見せず、エールとアंकを見やつて笑みを浮かべる。

「まあよい……今度こそ」

「お待ちを」

儀式のやり直しを命じようとしたところへ、ラケルの声が今度こそ響く。

邪魔をされ、鬱陶しそうに横目で睨みつける「王」に、ラケルは深く頭を下げる。

「その方を『石』の材料にするのはお止め下さい……どうかお待ちを」

「何を？ ラケル、貴様も邪魔するか!? ……ああ、そうか。そういえば最初に貴様を拾ったのがコレだったな。情か。我には何の関係もない……目障りな役立たずを片付ける好機、邪魔をするな」

冷たく自分の血を引く娘を見やり、察した様子で鼻を鳴らす。彼からすれば他人の情などどうでもいい、無駄な手間ではなかった。

しかし彼のその言葉に、ラケルは首を横に振った。

「……………いえ、そうではございません」

「なに？」

「その方では『石』の材料になりえないのです。島の獣を口にしておりませんので」

ラケルの否定に、『王』は疑問の視線を返す。どういう事か、と視線で問われ、ラケルは『王』の注目がようやく向いた事に安堵しながら再度口を開いた。

「最初にご説明した通り……………この『石』の生成には強靱な生物の他、深い『欲望』を持つ人間を必要といたします。…ですが両者は異なる生物であるがため、錬成の際に反発を生じさせる可能性があります」

「……………!!?」

「ゆえに、これまで島民全員に、食事を通して特殊な薬品と共に体内に同化させてきました。他の生物との融和性を高め、融合を実現しやすくするこの薬を」

エールが驚愕に息を飲む声を聞きながら、ラケルは丁寧な『王』に語る。

決して情が理由などではない……………『王』や他の錬金術師達と同じ立場からの、効率を、成果を重視しての冷酷な忠告だった。

「…ですが、エールさんはそうではありません。頑なに皆との食事を避けていたために、材料としては不十分なのでございます。無理に錬成すれば、致命的な不純物となつてしまふ可能性も……………」

「忌々しい!!! 材料にもならんというのかこのゴミめは!!! どこまでもどこまでも足を引く張るクズめ!!!」

理解した『王』は、己の娘を睨みつけて激しく喚き散らす。

足を何度も踏みつけ、痲癩を手近なものにぶつけ、子供でも見せないような醜態を晒す。

それを、ラケルはただ静かに見つめているだけだった。

「……………アंक……………だ、じょうぶ……………」

ずる、ずる、血肉を引きずる音がする。血の跡が残される。

動かない手足で芋虫のように這いずり、見ていられなくなる程見苦しい姿を晒して、

エールは友人の元を目指す。

「こん、どは……………わたしが……………アంత……………を……………たす、けて……………あげる……………から……………」

まだ間に合う、助けられる。

横たわる赤い巨体から感じる命の気配を縁に、唯一動く右腕をゆつくりと伸ばし……………

その手は、ウヴァによって無情に踏み潰され、蹴りどかされた。

「近付くなゴミが、『石』を作る邪魔だ」

が、と再び壁に叩きつけられるエール。ずるずると崩れ落ちる少女に、『王』が

唾を吐きながら吐き捨てる。

彼はそれ以降、二度と自分の娘を見る事はなかった。

「鳥がダメになる前に早う始めよ!!? 上質な材料がムダになるであろうが!!!」

「王」の命令の直後、再び床の円陣が光り輝く。異形達がぞろぞろと上から降り、残されたアंकと、先におかれた鳥の怪物達と双子に赤い閃光が食らいつく。

「ひぎやああああ……!!!」

「……ん……ん……ん……死に」方イヤ………だ……」

再び苦痛に悶絶し、叫ぶ双子と巨鳥達。今度は誰にも止められる事なく、声は徐々に途切れていき、やがて糸が切れたように崩れ落ちていく。

そして迸る閃光は、一点に収束していく。

命を食らった赤い閃光は「王」の足下におかれた石版に集い、それに開いた10の窪みの中で結晶と化していく。

物の数秒ののちに閃光は落ち着き——「王」の目の前に、10枚の硬貨が完成した。

「……………フ、フハ……!!? フハハハハハハハ!! 出来た……出来たぞ!!! 新たな「宝」が!!! ハハハハハハハハ……!!?」

完成した硬貨——赤い鳥の「ゴアメダル」を石版ごと掲げ、「王」は狂ったように

歓喜の声を上げ続ける。

錬金術師達もまた、頭上で輝くそれらに畏怖の視線と深い笑みを向けていた。

「美しい……………実に美しい。これぞ我が欲した『宝』だ……!! この輝き!! この力……!!」

全てが我が使うに相応しい!!」

「左様……………そして我らは世界に復讐する……………!!?」

「我らから故国を奪いし奴らを滅ぼし……全てを取り戻す為に……!!?」

「見える……!!? 見えるぞ!!! この力で……かつての我が王国を……………いや!!? あれ以上

の力を得た完全無欠の永遠帝国を手に入れる私の姿が!!!」

それはもう、正気の姿ではなかった。

悪魔に魂を売った愚者と、それをまるで『神』のように崇める者達……………彼らはもう、人とは言えない怪物に成り果てていた。

「私こそが『王』だ!!! この世の全てを手に入れる最も偉大な『王』となる男だア!!!」

高々と叫び、名乗る『王』。讃え崇める錬金術師達。

そんな彼らに、異形達は冷めた目を向けて、心底つまらなそうに鼻を鳴らしていた。

「『王』だつてさ……………笑えるね」

「はっ……知るかよ」

一切の興味がないうつろい様子で囁き合うウヴァとカザリ。眠そうに目を擦るガメルとそれ

を母親のようにあやすメズール。

その時、カザリが足下で聞こえる呻き声に気付き、顔をしかめさせた。

「うゝわ、まだ生きてるよこの子。ウヴァってばほんと仕事雑〜」

「はっ……知った事か。無駄に頑丈なコイツが悪いんだ」

俯せでぶつぶつと呟き続けるエール。ほぼ意識も失われているのか、漏れ出る声に意味はなく聞こえる。

びくりとも動かない彼女に、ウヴァが無言で手を伸ばし髪を掴む。

物のように乱暴に引つ張り上げ、強引に顔を上げさせた。

「それで、このネズミはどうする？　いてもいなくても同じなら捨てるも、殺すも同じだろう」

「どうでもよい……好きにせよ」

「じゃあそれ貰っていく？　退屈しのぎのオモチヤにしたいんだけど」

「あらダメよ、それなら私とガメルに頂戴な……この子つてば、あげたオモチヤを片っ端から壊してしまうのだから、新しいのが欲しかったの。使い道がないならちようどいいじゃない？」

「ヒマ……たいくつ〜」

「その子もかわいそーにね……ウヴァがさっさと殺してあげれば苦しまずに済んだのに」

「そんな義理はないな」

本人が反応を見せないのも気にせず、「王」と異形達が好き勝手に宣い合う。

面倒そうに、引きずっていかうとしたウヴァだが、その手が不意に止まる。

なぜだか重く、動かせなくなった人間の少女に、虫の異形は邪魔臭さと共に困惑を覚えた。

「下ら……ない……!!?」

ぎり、歯の軋む音が鳴る。

鋭く目を吊り上げ、髪を千切られる痛みも物ともせず、愛しい友を奪った父を……憎い仇を睨みつける。

その眼差しの凄まじさに、ウヴァだけでなく他の異形も一瞬気圧される。

「何が『王』だい……何が……完全無欠だい……!!! そんなものの為に……!!? アンクを

……!!? 島のみんなを巻き込みやがって……!!!」

「……………」

「何なんだイ……お前らは?!? 何をやってるんだイ?!? お前らは!!!」

もはや情などありはしない。

目の前で踏ん反り返っているあの男は——敵だ。

「お前みたいなの『王』がいてたまるか!!! ガキみたいに駄々を捏ねて!!! 他人から奪う

事しか考えられない……そんなクソみたいな「王」がいてたまるかア!!!」

目の前の愚かな男の欲望を、真正面から否定する。

己の死を招く発言だろうと関係ない。憎い男に決して屈さぬ意志を示すため、残された全力で本音突きつける。

その直後、ウヴァアの手でエールは地面に俯せに叩きつけられた。

「はア……馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、ここまで脳の足りん出来損ないとはな」

「う……ぐ」

「我は言った……永遠の栄華を与えてやると」

押さえつけられ、額から血を流すエール。それでも強引に顔を上げ、「王」を見据え鋭く射抜く。

しかし相手は玉座についたまま、詰まらなそうに頬杖をつき呆れた溜息をついた。

「我は初めに告げた通り……かつてないほどの贅沢を味わせ、享樂の限りをもたらし……そしてこれ以上ない満足を与えてきた。——どれもこれもゴミ共には勿体ない程の幸福だ……!!!」

「……!!?」

「それを与えたのは我だ……我はあ奴らに全てを与えてやった。奴らにとって我は即ち「神」に等しき存在となった」



深く深く、笑う。心底楽しそうに、誇らしそうに嗤う。

嘲っているわけではなく、本気でそれが人々が喜ぶ褒美だとも思っているかのようだった。

「その『神』の為に死ぬるのだ……………永遠に、我が偉大にして至高の欲を満たす道具となつてな……………!!! これ以上の名誉があるろうものか」

「うわああああア!!!」

我慢の限界に達したエールが獣のような声を上げて暴れる。

だが、手足を負傷し頭を押さえつけられている今、もがく以外に何もできない。溢れた血が涙と混じって地面に流れ落ちていく。

「ものついでだ……………お前が馬鹿にした『王』の力を見せてやろう」

悲痛なエールを、『王』はまるで狂人でも見るようにして、やがてにやりと笑みを浮かべる。

手にした石版、10の穴にはまった赤いコアメダル。

『王』はそのうちの1枚、中央にはまった鷹の意匠のコアメダルを取り外す。

「奪う事しかできぬだと？ 浅はかな……………我は全てを手に入れる男だぞ。今の我は――

――『創造』すら自在だ」

石版の中で、残る9枚のコアメダルがかたかたと揺れ始める。まるで生物のように

……意思を持ったかのように。

すると次の瞬間、石版が激しい音を立てて砕け、9つの効果が宙に飛び上がった。

「セア目覚めよ……強欲の力により生まれし怪人よ……!!! その力を以って……!!! 我  
が忠実なる下僕となるのだ!!!」

縦横無尽に宙を舞うコアメダルが、円陣の中央に舞い降りる。

赤い輝きはもう二度と動かない紅の巨鳥と鳥の怪物達に触れると、その巨体をみるみるうちに無数の鈍色の硬貨に変えていく。

じゃらじゃらと音を立てる無数の硬貨。それは徐々に動き、一つに固まっていき。

——やがて、一体の人影へと変化した。

「……………アंकク？」

現れたのは、赤い異形だった。

孔雀の尾羽などの羽毛を模した衣服を纏う、鳥の顔の異形……奇しくも、今しがた消え去った「空の王」に似た貌の存在。

一瞬呆けたエールは、再びもがきながらソレに呼びかけた。

「アंकク……!!! アंकクウ!!!」

少女の声に、赤い鳥の異形がびくりと震える。

伏せていた目をゆっくりと上げ、響く声の方向に向けた異形は、よく通る声で答えを返した。

「…誰だ、お前」

びたりと、エールの声が途切れる。

同時に、ウヴァに抵抗する力も消え去り、完全に沈黙してしまった。

「……メズール、これ、動かない」

「あらあら、遊ぶ前から壊れちゃったみたいね?」

動きを止めたエールをつんつんと突き、ガメルがつまらなそうに呟く。

黙り込んだ少女を見下ろし、カザリも落胆したように肩を落とした。

「なーんだ……もう抵抗しないんだ。つまらないな……もつと泣いたり叫んだり苦しんだりすればいいのに。ガツカリだ」

「フン……相変わらず趣味の悪い奴め」

「ふうん……あれがキミの心の支えだったのかな? それが目の前で奪われちゃったと………わア、かわいそ」

その場にしゃがみ込み、項垂れたエールの顔を覗き込む。

光を失い、ただ呼吸するだけのただの肉の塊と化した少女を前に、猫の異形はつまら

なそうに告げた。

「もういいや、これもういゝゝゝらない」

## 第300話 “神様なんていない”

ずる、ずる、ずる。

髪を掴まれ、引き摺られる。物のように、塵のように。

—— 結局……最後の最後まで役に立たなかったな。

悪夢のような儀式の後、動かなくなったエールに“王”は淡々と告げた。

その場の誰一人として、彼女に興味を示す者はいなかった。

—— 心も折れて動く気もなくなったか……

こうなつてはいよいよもう使い道がない。

—— 適当な場所に棄てておけ。

“王”の命令に、彼の息子達が渋々従いここまでエールを運んできた。

周りをちよろちよろと駆け回る鬱陶しい存在がようやくやく大人しくなった事に清々しながら、城の果てへと連れてきた。

—— 馬鹿なガキだぜ、お前はホントに……!!?

父上に逆らおうとするからそんな目に遭うんだ。

やがて辿り着いたのは、黴臭く暗い部屋。

底が見えず、闇が広がる深い穴がいくつも開けられた、不気味な空間。

「ここだったか……昔、罪人を入れておくように掘ったっていう穴ってのは」

「ああ……思つてたより何倍も深エな。だがそれ以来、使う奴もいなくて結局無駄になつたんだつたけなア……」

「そこにコイツを入れるわけか……妙な縁だ」

誰も逃れられないようにと掘られた穴は、「王」に逆らう者など他にはおらず無用の長物となつた。

そこに、無用と判断された少女が入る。歪な因果に笑みが浮かぶ。

「ここに入るときや、這い上がる事も出来ずにそのうち腐つて勝手に土に還るつてわけだ。手がかからなくていいな」

「こんなゴミに手間をかけるほど、暇じゃないからな」

光の见えない湿つた穴の底はさぞ苦痛だろう。他に訪れる者も現れるとは思えず、いずれ忘れ去られる事だろう。

ここまで一言も発さずされるがままのエアールを見下ろし、兄はまた嗤う。

「ここに入りやあ、そのうち今度こそ消えて完全にサヨナラだな……最後の最後まで運のない人生で不憫な事だ」

穴の淵にエアールを放り捨てる。死んだように沈黙する彼女は、それでももうめき声一つ

漏らさない。

横たわる彼女の腹に足を置き、兄は最後に一言告げた。

「じゃあな、役立たず」

穴に向けて、少女の体が蹴り落とされる。

一瞬間に浮き、次いで襲いかかる重力。幾度も壁にぶつかりながら、エールは深い深い穴の底へと落ちていく。

遠ざかる外の灯り。

それが、エールの見た最後の光となった。

??

「さア……よくぞ集った、忌々しき獣共より生み出されし怪人達よ」

玉座の上で踏ん反り返り、「王」が目の前に集った5体の存在に告げる。

彼らは人の姿だった。

強面の男、軽薄そうな男、蠱惑的な少女、退屈そうな男、鷹のように鋭い目つきの青年。

人の姿に変じた硬貨の異形達。ウヴァ、カザリ、ガメル、メズール……そしてアंक。

幾種数百匹もの猛獣達、そして強い欲望を備えた人間達を材料に禁忌の術で生み出された怪人達。

彼らの前で、<sup>〃</sup>王<sup>〃</sup>は実に愉快そうに啣う。

「ひい、ふう、みい……………これで5体。カカツ…!!? これで我が野望にまた一步近付いた……………!!!」

「かの国々に復讐する……………我ら虐げられし王国の悲願」

「忌々しき連合国を滅ぼす……………他の何に代えても叶うべき宿願」

「貴様らこそ我が兵器……………かの国々を滅し、すべての世界を制する為の尖兵。長き時をかけて生み出したその力……………存分に我に捧げるがいい……………!!!」

左右に4人の錬金術師を従え、この世で最も醜悪で傲慢な男は高らかに告げる。

自らが作らせた最強最悪の存在、それらが自らに従う事を当然と考えながら。

「ハッ、誰が従うかクソジジイ」

だが、それに逆らう者がいた……………怪人達の中で最も新参の赤い鳥人だ。

精悍な顔つきを忌々しげに歪め、自身に上から命令を下す気に入らない男にあからさまに不満を吐き捨て、鼻を鳴らした。

「お前が生みの親だろうがなんだろうが知ったこっちゃねエ……………『産んでくれ』と頼んだ覚えなんざ一度もねエ。お前らが何を望んでるのはかは知らねエが……………気安く命じてんじゃねエ、殺すぞ」

一瞬で、アंकの姿が赤い光に包まれて異形に転じる。



羽毛を撒き散らし、鋭い爪の揃った腕を掲げて指を鳴らし、明確な敵意を示す。ぴりりと張り詰める空気が、彼の発する殺気の強さを表す。

不遜な態度に、〃王〃は黙り込む。

不穏な沈黙に、アंकは気にせず自身の不満をぶつけ続ける。

「お前らも何の義理があつてコイツに従つてんだか………つまらねエ事におれを巻き込むんならお前らもまとめて——」

「…変身」

【タカ・トラ・バツタ】

不意に、〃王〃が何かを呟き立ち上がる——その直後。

どごん!!!

悪態を吐き続けるアंकは、気付いた時には凄まじい重力をその身に受け、床に激しく叩きつけられていた。

「ごはっ?!?」

「噂るなよ、クズが……!!!」

地面にめり込み、苦悶の声を漏らすアंक。

彼に一撃を与え、叩き潰したのもまた異形——鷹を模したような仮面、虎の爪を備えた籠手、蝗に酷似した外殻の脚。

生物のようであり、無機物のようでもある奇妙な鎧をその身に纏った「王」が、翠の目を不気味に光らせて佇んでいた。

「我が何の保険も無しに貴様らを生み出し放し飼いにしていると思つたか……!!?」  
「ぐ……!!?」

「甘いわ「石」が………我を只の人間と侮りおつて。そんなもの、我はどうに超越しておるわ、道具如きに寝首をかかれるものか、バカが」

身を起こし抗おうとするアंकだが、押さえ込まれた体は動かない。

異形の怪物すらも封じる凄まじい威力を見せつけ、「王」はさらにアंकの胸に押し付ける力を強める。

そんな「王」に、錬金術師達は讚えるようななどよめきの声を漏らしていた。

「貴様らを生み出したのは我………即ちそれは、貴様らを壊す方法も誰よりも熟知しているという事に他ならぬ……口の聞き方には気をつける事だな………!!!」

「王」の放つ強烈な威圧感に、そして現に封じられている自らに、アंकはそれ以上言葉を紡げず、苛だたしげに相手を睨みつけるしかない。

そんな彼に他の怪人達は冷めた目を向け、しかしアंकと同じように不満の視線を「王」に向ける。

繰り広げられた、「王」が自身の立場を知らしめるやりとりを、ガラは意味深な笑み

を浮かべて眺めていた。

??

「……エールさん？ まだ意識はございますか……？」

誰も近付かない、それどころかほとんどの者は存在すら知らない、罪人の入れられる大穴。

そこを訪れたラケルが、紐で吊った何かをするすると穴の中へ降ろす。

降ろしているのは盆に乗せた皿。その中身は彼女の自作の粥だ。

「お食事です……しばらく何も食べておられませんから、消化にいいものを入れておきました。……あいにく、私も料理はさほど得意というわけではありませんが」

降ろした食事が底に着いたのがわかる。だが、エールからの返事はない。

誰もいないように思えるほどの静寂だが、ラケルの耳には確かに、か細くも確かな息遣いが聞こえる。

「……最初に会った時とは真逆になったようですね、なんだか懐かしいです」

「……………」

「もし……召し上がりたいものなどございましたら仰つて下さい。すぐにでもご用意いたします。ご安心を、島の方に食べさせたものとは違って変なものはいれません」

返事は依然としてないままだが、ラケルはまったく気にした様子を見せずに語りかけ

続ける。

そこに罪悪感は……少しだけ混じっている。

ただ、悪いとは思いつつも、後悔をしている雰囲気は感じられなかった。

「……あまりここへは来られませんが、いずれここから出られるように手配いたします。それまでしばしのご辛抱を………」

「……いらないよ」

ようやく、穴の底から消え入りそうな声が返ってくる。それにいつものエールの元気はない。抑揚も力もなく、全てを投げ出し諦めたような、無力感が伝わってくる。

「……恨んでおいででしょうね。恩人の貴女をこんな目に遭わせてしまった事、反省しています。本当に……申し訳——」

「……やめてくれよ……!!」

目を伏せ、そつと寄り添うように謝罪の言葉を吐こうとしたラケルだが、エールの怒りと憎しみに満ちた声がそれを遮った。

「これ以上口を開かないでくれ……今、あんたと話してると……自分の中で真つ黒な何かが溢れそうになる。私の心を埋め尽くして……気が狂いそうになる……!!?」

びたりと黙り込んだラケルに、穴の底で膝を抱えてうずくまるエールが続けて言う。耳を塞ぎ、膝の間に頭を抱え、胎児のように丸まって全てを拒絶する。

誰よりも強くあろうとしていた彼女は、今は酷く惨めで、弱々しかった。

「『あなたを助けなきゃよかった』って……………!!! そんな最低で最悪な思いに心が支配されそうになんだよ!!!」

今度はラケルが何も答えず、エールの慟哭に耳を傾けるだけだった。

傷つき悲しむ様子もなく、ただ当然の事だと受け入れるように……………あるいは、他人の言葉に気を割く気が端から無いように。

「何なんだよ……………私の存在意義を奪って……………たつた一人の友達も奪って……………!!! 何がしたいんだイアンタは……………!!! 私がいアンタに何したってんだイ……………!!!」

「……………」

「アンタに求めるもんなんて何にもありやしないよ……………ただ……………私に二度とその顔を見せないでくれ」

告げられる拒絶の言葉に、ラケルは動かなかったが、しばらくしてゆつくりと腰を上げる。

降ろした食事はそのまま、名残惜しそうに穴に背を向ける。

「……………あア、やって欲しい事……………一つだけあったねエ」

その時、穴の底からエールの声が届く。先程よりも険の取れた、穏やかな声だ。

振り向いたラケルに、エールは穴の底で笑みを——ふっと達観したような、全てに

落胆したような濁いた笑みをこぼして告げた。

「私を殺しておくれよ」

ラケルはぐつと、唇を噛みしめる。

初めて表情を変えたラケルに気付く事なく、無気力な少女は再び頭を抱えて丸くなつた。

「そうしてくれないんなら……放つといておくれ……そうすれば、勝手に死ぬからねエ」  
それ以降、エールは口を開かず、罪人の空間はしんと静まり返る。

ラケルは無言で佇み、やがてどこか覚束ない足取りで歩き出すと、その場を後にしたのだった。

——1ヶ月後

すると紐が手繰り寄せられ、粥の器が回収される。

一口たりとも手をつけた様子がない。この一月の間、何度も何度も繰り返してきた食事の運搬だが、何の意味もなしていなかった。

「……エールさん、もう一月でございます。このままでは本当に死んで……いえ、常人ならば既に餓死しています。何か口に入れなければ本当に死んでしまいますよ……!!」

わずかに焦りを表情に表し、ラケルが穴の底に向けて語りかける。穴の底からは確かに人の気配がしている。か細くはあるがまだ呼吸は続いている。

食事を始めとする欲望を一切見せないエールに、流石のラケルも冷や汗をかいていた。

だが、ラケルの説得の声に、返答は一切ない。

眠っているのか無視しているのか、とうに心が失われているのか——やがてラケルは、諦めたように視線を俯かせた。

「……………エールさん。貴女にとって私は、悪魔のような最低な人間なのでしょね。恩を仇で返し、痛みと苦しみばかりを与える最悪の女。……………全くもってその通りでございます」

粥の器を膝の上に置き、ラケルはそつと話し出す。

返事がないのはわかりきっている。こうなればもう罵倒でも悪態でも、反応さえ返ってきてくれればそれでよかったが、半ば諦めながら語り続ける。

「私は私の望みの為に、貴女のお父上に取引を持ちかけました。人命を糧とする文字通り悪魔の契約です…最初に貴女に持ちかけた誘いもそう、私は貴女を血と泥で汚れた道へ引き摺り落とそうとしておりました」

穴の底に光は届かず、真つ暗なまま。どこにエールがうずくまっているのかもまるで

見えない。

ラケルはどこか寂しげに、切なげな表情で独り、言葉を紡ぎ続けた。

「……いずれこの身は地獄へ堕ち、永遠に終わらぬ呵責を受ける事でしょう。それだけ私の行いは罪深く悍ましい……ですが」

今一度、ラケルは穴の底を覗き込みエールを探す。

無意味な行為だと、望まれない言葉だとわかつていながらも、真摯な眼差しをじっと向け、告げた。

「あなたに恩を返したい……そう言った私の言葉には………少なくとも、嘘はごさいませんでしたよ」

沈黙、静寂が続き、ラケルの声が無意味に響く。

しばらくの間、穴の淵で動かずじっと見下ろしていたラケルは、すつと視線を逸らしその場を離れた。

…数分後、一人の男が、罪人の穴を訪れた。

「……ずいぶん弱ったな。頑丈さだけが取り柄だったあの娘が」

耳を澄まし、目を凝らし、深い穴に囚われた哀れな少女の様子を探る男——鍊金術師ガラ。



彼はその場でしゃがみ込むと、一枚の丸い石版を抱えたまま顎を撫で、何やら難しい顔で考え込み始める。

「獣に幾度殺されかけても、他者の為に愚かに命を張る馬鹿な娘も……流石に壊れたか。しかし心は壊れても身体はまだ生きている。絶食から既に一月経っているというのに、何という生命力か……皮肉な話だ」

「……………」

「反応する気力もなくしたか……余程あの鳥が大事だったと見える。人間どころか獣を番に望むとは、やはり元より人に劣る獣の娘であつたか」

好き勝手に頭上で喋り続けるガラ。その間も、エールは沈黙したまま何も答えない。やがてガラは深く笑みを浮かべると、立ち上がって手にした石版を目前に掲げる。

それには、紫に輝く10枚の硬貨が——翼竜と角竜と暴君竜を模した紋章が刻まれたコアメダルが嵌め込まれていた。

「このまま無意味に朽ち果てていく様を眺めるのも一興だが……それは惜しいな。その上目障りなああの娘のお気に入り……まだ使い所はある」

ガラは徐に、10枚のメダルのうち中央に嵌った1枚を取り外す。

途端に石版の中で残る9枚がかたかたと震え出し……次の瞬間、弾かれたように石版から飛び出し、宙を舞う。

意思を持つように浮き上がったそれらは、穴の底で横たわるエールに向かつて飛び、彼女の胸の中に入り込んでいった。

「私がお前に意味を与えてやろう」

不気味に笑うガラ。意味深な言葉。

しんと静まり返った穴の奥底で、ぎらりと、二つの紫の光が灯った。

——半年後

ごろ、ごり、ごり、ごり、延々と岩を削る音がする。

光も届かない穴の底。何も見えない暗闇の中で、弱々しくやせ細った少女が無心で岩壁を掘っている。

硬い壁は人の指では削れず、闇の中で血が滲み流れる。

「……………ねエ…あんた……………教えておくれよ」

削っているのは、いや、描いているのは、天を駆ける人の姿。

名前もまともに覚えていない、都合のいい幻想。

それでも長年焦がれ、求め続けた神に、エールは消え入りそうな声で問いかける。

「みんなを笑顔にさせる強くて優しい太陽の神様…………… “解放の戦士” ……………… あんた

は……………本当にいるのかい？ ……いないのかい？」

上手くかけているかどうかはわからない。しかし笑った横顔だけは触れる事だろうか、うじてわかる。

人々を笑顔にさせるといふその姿が……今は堪らなく、腹が立つ。

「もしいるなら……!!? どうしてダイ……!!? どうして……!!? 私のたった一人の友達を助けてくれなかつたんだい……!!?」

縫つても、願つても、祈つても、何の意味もない事はわかり切っている。

所詮は幻想、お伽話。頼つたところで応えてくれるはずがない、ただただ都合のいい妄想の存在。

それでも誰かに当たらずにはいられず、エールは涙も枯れた目で睨み、乞い続ける。

「何にも……何にもいらなんだよ……!!? おいしいご飯も……キレイな服も……あつたかい家も……私は何にも欲しくないんだよ……!!? 1人じゃなけりや

……何にもいらなかつたんだよ……!!」

がり、がりがり。

爪はとつくと剥がれ落ちた。痛いはずなのに、不思議と何も感じない。

壁に描いた八つ当たりの相手を自分の血で真つ赤に染めながら、ただひたすらに嘆き、怒りと憎しみの声を上げる。

「なの……なの……!!? どうしてダイ……!!? どうしてみんな……私から大切な友達

まで奪うんだイ……!!?」

答えはない。誰も応えない。

ただただ無意味で虚しい時間が過ぎる中、がくりと項垂れた。

「いるのなら……応えておくれよ」

冷たく硬い闇の中で、何も見えず感じない虚無の中で。

少女の声が、掠れて消え去っていった。

「助けてよ……神さまア………!!!」

—— 一年後

がらん、と乾いた音がする。

飛び散る粥を気にかける事なく、ラケルは呆然と立ち尽くし、やがてわつと顔を両掌で覆う。

「……………!!! エール様………!!?」

1年間、毎日欠かさず訪れ食事を運んできた罪人の穴。

一度も手をつけられず、拒絶され続け、それでもなお運び続けてきた相手のいる場所。

今日まで辛うじて続いていた気配が、ぶつりと。

保たれていた糸が切れていた。

ラケルは膝をつき、うずくまり、いつまでもいつまでも悲痛な嗚咽をこぼし、泣き続けた。

—— ■ 年後

ごりん、と。

何の変哲も無い地面が、抉れる。

地中から突き出した細い手が、掴んだ地面を丸ごと引き込み、穴を開ける。

「……………ようやくわかったよ、神様」

がらがらと崩れていく地面の底から、紫に輝く二つの目が覗く。ゆっくりと自らの体を押し上げ、陽光の下へと這い出る。

それは、エールだった。だが、かつての彼女の面影はほとんどない。

姿形は変わらない。だが、放たれる気配と剣呑な眼差しは、献身的だった彼女とは似ても似つかない。

「アンタは……………この世に存在しない。どこにもいない…だから助けてなんてくれないんだろう」

ぶつぶつと呟きながら、かつてエールだった少女は、感覚のずれた体でぎこちなく、一歩ずつ踏み出していく。

憎悪に満ちたその顔に、次第に自嘲が浮かび始めた。

「アレから……何年経ったかねエ。こんな気が付くのが遅くなるなんて……私って本当にバカだ、はは……はははははは……!!?」

狂った笑い声をあげ、キツと天を見据える。

腹が立つほどに広々としていて、そのくせ吐き気がする程に濁りきつた空を睨みつけ、少女は宣告する。

「だったらもう、アンタなんて求めない……助けなんて……求めない……!!? 全部……!!! いらないんだよ……!!!」

激情の赴くままに、憎い相手を体が求めて、エールはゆっくりと歩き出す。

何もかもを奪ってきた者、己を閉じ込めた者、報復の意志のままに、敵の姿を求めて彼女は歩き出した。

——しかし彼女は、やがて困惑に足を止めた。

「……………? どこだイ……ここは」

それを見て、少女は立ち止まる。

道は間違えていないはず、記憶も正しいはず。

ここにはかつて、愚かで傲慢な「王」の恩恵を受け続けてきた民が住む街があったは

ずだ。

しかし、目覚めた少女の前に広がっていたのは。

……かつての栄華も見えない程に荒れ果てた、  
廃墟の集落だった。

## 第301話 “虚の王国”

—— まあゝた雑魚だな。

んゝゝゝまあいいか：次はもつと大物獲つて来てくれよ？

海へ赴く部隊に所属し、自ら獲つてきた海の怪物を店先に並べて売買していた禿頭の巨漢。豪快な態度で接客し、エールの釣果を苦笑しながら買い取っていた男。

彼の店があつた場所には、崩れ落ちた屋台の残骸だけが残されていた。

—— “強欲王”にカンパゝゝゝゝイ!!!

—— ギヤハハハ：!!?

いつも多くの人が集まり、豪勢な料理が並べられ、酒を酌み交わす音と笑い声が響き合つていた酒場や飯屋。酔つて真つ赤になつた男達や、彼らからの悪戯を叱りつける店の娘達、黙々と調理を続け時折満足げに笑う店主がいた店。

人の姿は一つもなく、荒れ果てた建物の残骸に虚しく風が吹き抜ける。

誰もいない。どこにもいない。

目を見張るほどの発展を誇つていたはずの名もなき島の街、欲望と幸福に満ちた孤島の楽園……今はもう、影も形も見当たらない。



「……………これは……」

エールは顔色一つ変えず、廃墟の街を歩く。かつては石畳が整然と敷き詰められていたはずだが、割れて砕けて、雑草が繁殖して見るも無残な有様だ。

ひたひたと裸足の足音があたりに響く。昔は靴を履いていた気がするが、いつの間になくなっていった。

服もそうだ、囚われて以来一切変えていない。着替えの宛てもない為に当然だが、やきつきさを感じる。

乾いた風が吹き続ける中を只管歩く。だがやはり、人の気配がまるで感じられない——人間という存在そのものが消失したかのようなようだ。

「……………みんな、どこに行っただい……………う？」

エールは呆然と、消え去った人々を臙げに思い出しながら呟く。

どこかに逃げたのか、死んだのか。どれだけ探し歩いても見つからない、気配も感じ取れない。

あれだけ栄えた街を捨てていく理由があったのか、そして何よりこの閉ざされた天然の牢獄からどうやって逃れたのか。わからない事だらけで、眉間に皺が寄る。

「！」

ふと、微かな気配を感じ取る。

通り過ぎようとした家屋、屋根も壁も崩れ落ち、最早『家』と呼ぶ事もできないほどの瓦礫の塊……その中から、確かに人の気配がする。

遠慮なくエールは瓦礫を踏み越え、室内を見回す。

かろうじて確保された床、土の上とほぼ変わらない冷たいそこに、一人の老人が仰向けになっていた。

「……………知らない顔だねエ」

相手は少なくとも、エールの記憶の中には存在しない人物だった。がりがりに痩せ衰え、一瞬木乃伊と見間違えうほど無残な姿である為に、記憶などあてにはならなかったが。

しげしげと自分を見下ろす存在に、ようやく気付いたらしい老人が震えながら顔をエールに向けてきた。

「……………そこに……………誰か……………いるのか」

落ち窪んだ目の上には、元は眼鏡であったのだろう針金の残骸がかけられている。レンズは跡形もなくなっており、形だけが残っていた。

「悪いが……………もう……………目もよく見えねエ……………そこに……………誰かいるって……………くらいしか……………わからねエ……………」

「……………」

「アンタは……………誰だ……………?……………し……………島の人間の筈だねエ……………おれ達はみ

んな……………いや…もう……………誰でもいいな……………少しでいい……………話を……………聞いてくれ……………」

寝具らしき襪褌布の上で、老人は弱々しく誘う。聞こえてくるのは掠れた声で、視線もまるで見当違いの方向を向いている。

見ているだけで痛々しい、憐れな人間。生きているだけで苦痛になっただけで、惨めな姿。

ふと、彼がかけている眼鏡に既視感を覚え、直後に脳裏に一人の青年の顔が浮かぶ。

—— エールお前……………!!?

いつもいつも意地張りやがって!!?

長生きできないぞ?

遠い過去、記憶の奥に沈んでいた知った顔。

当時はしっかりと生氣に満ち、そして欲望を携えていた……………かつて自分が庇護しようとしていた者の一人。

似ても似つかないはずの彼の顔が、目の前の老人と重なる。

「……………あんたは……………」

「おれ達は……………!!! ゲホツ……………騙されてたんだ……………!!! あの「王」は……………!!? おれ達を最初から……………骨の一片まで利用し尽くすつもりだったんだ……………!!!」

喋るだけでひどい苦痛に苛まれているのだろう、震えながら老人は……かつての知己は虚ろな目で語り続ける。

しかし、記憶よりも感情が先走っているようだ。紡がれる言葉は個人に対しての罵倒ばかりで、まるで要領が得られない。

「……あんた、ここは一体どうしたんだイ？ 私の知ってる限り……この街はこうじゃなかった」

「む……昔か……そうだな……昔は……良かった……食い物に恵まれて……家を脅かされなくて……死にそうな目に遭わなくても……良かった……!!？」

かたかたと顎が震える。ほとんどの歯が抜け、残った歯もぼろぼろで歪んでいるそれが、自嘲で歪む。

引きつった笑い声を漏らし、過去の自分と周りの者を嘲り、嘆く。もう戻らない時を激しく請い、老人は枯れ枝のようにしわくちやで乾いた顔を悲痛に歪める。

「あれ以上……欲しがる必要なんかなかったんだ……!!! 求めなくても……満たされた……」

「……………」

「だのに……!!？ なのにおれ達は……!!! 間違えた……!!？ もつと……もつとと……!!？ 際限なく欲しがり続けちまった……!!!」

喋るごとに、老人の咳は酷くなる。体が大きく跳ねるほど咳き込んだと思えば、時折血を吐き濁った赤を撒き散らす。

それでも彼は、語り続ける。客人に留まって欲しいからか、それとも懺悔を聞いてもraithたいからか、もう本人にもわかってはいなさそうだ。

「あ……………あの時……………王」が言っただ。『もつと便利なものが欲しくはないか？』つて……………『意のままに動き、どんな仕事も役目もこなす駒を作つてやろう』つて……………」

少女は彼の話、無言で耳を傾ける。

眉ひとつ動かさず、老人の側に座り込んで、ただ黙つて話……………老人達の嘆きと後悔の記憶を聞き続けた。

「おれ達はその時……………おかしくなつてた……………やめりやいいのに……………もつと便利で楽になりたくで……………!!」王」の提案に乗つちまっだ……………」

「……………」

「それが……………間違いだつた……………!!」 おれ達は……………!!? 生み出しちゃいけないものを生み出ししまったんだ……………!!」

「……………お前との付き合ひも、もう随分長くなつたな」

玉座の間に、天井に開いた大穴から湿り気を帯びた風が流れ込む。そして片隅に生えた雑草や苔を撫でる。

海から来ているらしいそれは地下空間にも潤いを運び、どこからか流れ運ばれてきた種や胞子を芽生えさせ、大穴から注ぐ微かな陽光がそれを育む。

建設された当初からは考えられないほど荒れ果てたその場所で、「王」はいつも通りの位置で傍らの美女に訊ねた。

「お前ほど役に立つ人間は他にはいまい……………お前がこの島に流れてきて本当に幸運だった。神だのなんだのに祈った事はないが、これだけは褒めてやらねばならんな」

「……………左様でございますか」

くくく、と醜悪に歪んだまま戻らない顔で笑う「王」に、ラケルは冷めきった顔でそれだけ答える。動かない表情はまるで人形のようなようだ。

「それにしても……………あれからだいぶ経つというのにお前は変わらん。まるで歳をとらぬ……………いつまでも変わらず、いい女のままだ」

「……………」

「だが、雰囲気は変わったな……………前よりも笑わなくなつた。もつと喜ばばよかろう？ お前の「王」は今、実に気分がいいのだぞ」

ラケルは無言で、感情が失せたようにただただ静かに佇む。

彼女の顔は、生気が薄れていた。暗さの所為もあるが、それ以上に顔色が悪い。髪はやや荒れ、目の下にはうっすらと隈が浮いていて、いかにも気分が悪そうだ。

それに「王」は気付かない、気付こうともしない。返事がない事にも「王」は全く気にした様子を見せない。

彼の興味はラケルよりも、自分の目の前にある玩具向けられていた。

「見よ、この絶景を……!!」人間などとは比べものにならない最強の軍団……我が欲した素晴らしい力がここに集まっているのだぞ……!!」

「王」の前で蠢く無数の影。人の形をしていながら、明らかに人ではない何かの軍勢。

虎や虫や魚や牛や……様々な動物の特徴を持ち、人の顔がついた異形の群れ。生物らしからぬ姿を持ちながら、生物の気配を持つそれらが、「王」とラケルの見下ろす先で呻き声を上げていた。

「才腹……ずイダアア……!!?」「肉……もつド肉……肉……!!?」「お母ザン……お母ざん……」「イヤだ……助けデ」「金……金……金……金……」

聞こえてくる怨嗟の声。異形達の口から漏れる、人の声。

ほとんど判別できないくらいに多くの声が玉座の間に入り混じっていて、常人ならば気が狂うような悍ましい光景だ。

「＼＼ヤミー＼＼……人間の欲望より生まれし魔物。欲望が強ければ強いほど力を増し……!!? 欲望がある限り際限なく増え続ける!!? これほど我にふさわしい軍団はあるまい!!!」

そんな景色を、＼＼王＼＼は心底楽しそうに、喜ばしげに眺めていた。

見ているだけで嫌悪感が湧く化け物の群れ。それが自身の命令通りに集結し、そのうえ数え切れないほど揃っている。燥ぐ＼＼王＼＼の姿は、豪華な玩具を与えられた子供のようにも見えた。

「懸念は親……欲望を生み出す宿主が死ねばヤミーも活動が途絶えるという点だが……それもお前のお陰で解決された。よくやったぞラケル……」

「……………光栄にございます」

「ハハハ……あんな石像が何の役に立つと思っていたが、なるほど確かに意味はあったのだなア!!!」

脳裏に思い浮かべるのは、過去に狩りの後に建設を命じたいくつもの石像。仕留めた獣達の慰霊のために建てたと島の人々に語ったそれら。

事実とは全く異なる用途を持つ石像に、何も疑わずただ笑っていた人々を思い出し、



「王」は嘲りの表情を浮かべる。

「人間の精神を捕らえる結界を生み出し、肉体が死しても永遠に欲望を産ませ続ける………詳しい理屈は知らんが、実に素晴らしい技術よ。こんなもの、あの役立たず共には決して作れんかっただろうなア」

「……………」

「まア……我に叛意を抱く不忠義者など、『石』の材料になって当然だったがな——」  
愉しげに笑う『王』と、隣に控えるラケル。

彼らの他に人の姿はない………かっていたはずの四人の錬金術師達は、どこにもその姿が見られなかった。

——…『王』よ!!!

これは一体なんの真似でございますか!!?

ラケルの目に、あの時の光景が浮かぶ。

玉座の間に呼び出されたガラを筆頭とした錬金術師達。

何用か、と訝しみながら命令どおりやつてきた彼らは、突如拘束され引きずり倒され、同じく拘束された猛獣達とともに転がされていた。

——その地で彼らの術の犠牲となった者達と同じように。

『何の理由があつて我等を捕らえなさる?!?』 “王” よ!!? よく思い出してください!!  
? 我等ほど長きにわたつて貴方に仕え支えてきた者はおりませぬぞ!!』

訳がわからないといった様子で抗議の声を上げるガラ、同じく喚き叫ぶ他の錬金術師達。

必死の形相で解放を乞う彼らに、 “王” は冷酷に、一切の情がない冷めた目で見下ろし、吐き捨てた。

『戯けどもが……我が見破れぬとでも思つたか、謀反者め』

『!!?』 な……何を根拠に……』

『貴様が我に極秘で、独自に新たなコアメダルを生み出そうとしておつた事は承知の話だ』

ガラの表情が即座に変わった。そして一瞬、視線が横に逸れた。

“王” の疑惑が真実である、あるいは明確に関わっている、そう自白したも同然の反応に、 “王” は嘲笑を浮かべた。

『貴様……何のつもりでそんなものを作つた? 我の名もなく、貴様の勝手な欲望で生み出した “力”<sup>メダル</sup>で何をするつもりだつた?』

“王” は怒っていた。

自分の知らない玩具が、自分の知らない時と場所で勝手に作られていた事に。それを用いて何かを企む者がいた事に。そして……自分の思い通りに動かない者がいる事に。『し……しかし!!?』しかし我等がこれまで“王”の為に尽くして来た事は事実!!! そんな我等を本気で切り捨てなされるおつもりか!!!』

『考え直してください!!!』

『我等はこれからも貴方に尽くす所存!!?』

『どうか早まった真似は……!!?』

『いらぬわ、貴様ら如き役立たずなど』

疑惑を解くのは不可能であると察したガラ達は、口々に命乞いの言葉を口にする。だが、“王”はそれを一蹴する。

必死の形相で慈悲を乞う彼らの言葉を微塵も聞き入れず、はつと鼻で笑って見せた。

『ロクな腕も持たず……知識も配慮も足りず……長年私の時間を無駄にして来た穀潰しに何の期待をかけよというのだ……肥やしにした方がまだ有益だ』

『……!!』

『わかつたら黙るがいいわ……能無しめ』

容赦のない、本気で何も想っていない“王”の言葉。

絶句した錬金術師達は、やがてわなわなと震え、怒りに目を吊り上げ血走らせていく。

彼らに向け、**王**は最後の言葉を手向けた。

『お前はもう、いらん』

『フザケるなよ愚物がアアアアアア!!!』

我慢の限界に、積もりに積もった怒りが爆発したガラの咆哮が迸る。

立ち上がり、拘束されたまま**王**に向けて飛び出そうとした彼だが……その時にはすでに、ラケルが祈るように手を合わせ、円陣に光を点させていた。

そして錬金術師達に、深紅の閃光が襲いかかった。

『ギアアアアアア!!!?』

『おのれ……おのれおのれおのれ……おのれ貴様ア!!! 許さん……決して許さんぞ!!!?』

輝く円陣の中、悪魔の儀式に命を吸われていく錬金術師達。

悲鳴をあげ、のたうちまわる彼らの中で、ガラは怨念に満ちた目で**王**を射抜き、吠える。

『この身が朽ち果てようと物になろうと……貴様だけは絶対に許さん!!! 未来永劫……呪い続けてやる!!! 覚えておけ!!! いつの日か……貴様を地獄に引きずり落としてやるからアアアアアア!!!』

激しい苦痛の中に陥りながらも、その命が最後の一滴まで絞り尽くされる瞬間まで、ガラは「王」へ吠え続けた。

やがて光は消え、玉座の間に静寂が訪れる。

倒れ伏した錬金術師達と猛獣達の骸を見る事なく、「王」は新たに生み出された橙の硬貨を眺め、呟いた。

『……………覚える価値などあるか、クズめ』

それが、今から何十年も前に起こった事だった。

筆頭錬金術師達が消えた後も、狂気の儀式は幾度も行われた。まだ生み出されていない猛獣達を使い、強い欲望の持ち主を材料にして次々にコアメダルを作り出していった。

その度に「王」は喜び、より一層力を欲し続けた。

そして今、この名もなき島に生き延びている人間は、彼女達二人だけになろうとしている。

「……………のうラケル、私の役に立つのはお前だけだ。お前以外は何の意味も持たぬゴ

ミでしかない」

「……………」

「お前は我に付き従え……未来永劫、我が永遠の王国の王妃であれ。それを拒み逆らうのならば……死ね」

「王」の目には、未だ途絶えぬ欲望が渦巻いている……だが、その肉体は人間の寿命の限界へ迫り着かんとしている。

どれほど持つかはわからない、だが、思うがままに、欲望の限りを尽くしてきた男は……命の終わりが確かに近付いている。

無意識のうちに腹部を撫でながら、ラケルは誰にも聞こえないよう、そつと憂いを帯びたため息をこぼした。

「——お……おれ達はこの島に囚われた。島から出られないだけじゃない……死んでも死ねなぐなつだ……!!」

場所は戻り、廃墟の街の老人の住処。

何度も咳き込み、幾度も話を中断し、長い時間をかけながら老人は話を続けた。その間、エールだった少女は何も問わない。話しかけない。

いまにも途絶えそうな男の命の火が、最後まで灯り続ける邪魔をしないように、そつと側で佇んでいた。

「化け物の『親』になつた奴は狂つちまつで……島はメチャクチャになつた!!! 腹ペ

この奴は…玉みたいになつても食い続けて……宝石好きの女は……鉱山の中で埋もれて潰されで……!!?」

「……………」

「みんなみんな…おがじくなつていつで……!! さい…最後はみんな……化け物に喰われていなくなつちまつた……!!」

ごほつ、ごほつとひどくなつた咳が漏れる。

今にも途切れそうな命を、老人は意志の力のみで保ち、語り続ける。

少女はただ無言で、彼の慟哭と懺悔を聞くだけで、それ以上何もしようとはしなかつた。

「あ…あのクソツタレの『王』は!!! おれ達と島の獣達を使ってとんでもねエ物を作つてた…!!! お……お……おれ達は…!!? おれ達はただの…!!? 兵器の材料でしかなかつた……!!! おれ達は…騙されてたんだ…!!!」

「……………」

「な…なア……あんだ、だ…誰かは知らないが…助……けちゃ…くれないか…?」

もう何も見えていない目で、老人は少女を見つめる。最後の力を振り絞り、枯れ枝のような腕を震わせながら伸ばす。

助けを乞うその手を——少女は取る事はなく、じつと見つめるだけだった。

「おれ……おれ」も………さんざ………好き勝手やって来ちまつただけだよオ……!!?　せ……せ……せめ………最期だけでも……マトモでありでエんだ………!!!」

不意に、じやらじやらと音がする。

どこから出ているのか、無数の金属片が雪崩を起こすような耳障りな音が、老人の方から響いてくる。

「おれ……おれ!!?　化け物になんがな」りだぐねエヨオ!!!」

ふっと、老人の手から力が抜ける。

それと同時に、老人の腹の中から何かがずるずると這い出してくる。

白臬のような羽毛の生えた、人面の鳥人。

歪で醜い悍ましい存在が、事切れた老人の体内から誕生し、少女の前で口を開いた。

「死……タク……ナイイ」

そう呟いた直後、臬の異形は宙へと飛び上がり、襲いかかる。

音もなく急降下してくるその異形を、少女は以前変わることのない凍りついた表情で見つめ、徐に拳を構えた。

虚ろなその目が——突如紫色に輝いた。

びくり、と『王』の手が震える。



彼の備える人間離れた感覚が、自分の王国の中で生じた異変を感じ取り警告を与えてきた。

「……………!?? 我の駒が……………減った?」

“王”の呆然とした眩きに、ラケルも困惑の目を向ける。

ここにいる“王”が絶対的な支配者であり、ウヴァ達が彼の命以外の行動に出ない以上、以上が起これるとは考えにくい。

この閉ざされた島に誰かがいる、そう告げられたも同然だった。

「誰だ……!! 誰が我のものを奪った!!! 誰が我の駒を壊したア!!!」

「“王”よ、落ち着いて……………!!?」

「まだこの島に我に逆らおうという愚か者がいるのか……!!? 忌々しい……………不愉快な不届き者め!!!」

ラケルの制止にも耳を貸さず、苛立たしげに押しつけ、 “王” は久しぶりの痲癩を起す。

やがて彼は、玉座の間の隅で退屈そうに寛ぐ人影……赤き鳥人に視線を向け、唾を吐き散らしながら声を上げた。

「行け……赤の……!!! 我が欲望に楯突く愚か者を——始末して来い!!!」

名前すら呼ばない傲慢な命令に、鳥人は鬱陶しそうに振り向き。

しかし何も言わず、億劫そうに立ち上がった。

「……………」

波の音が響く、海岸。

他の騎士よりも比較的穏やかな波が押し寄せる、静かなその場所。

自ら作った簡素な墓を前に、エールだった少女は座り込み、気怠げなため息をこぼしていた。

老人以外に、人は見当たらなかった。

どこの家も崩れて、人の痕跡すらも見当たらない。

だから、墓は一つしか作らなかった。作れなかった。

作ろうにも、かつていた島の住民がどれだけいて、どんな人間がいたか、てんで思い出せなかった。

ふと、背後に気配を感じる。

少女は虚ろな表情でゆっくりと振り向き、誰もいないはずの国の後を訪れた者の姿を確かめる。

そして、わずかに目を見開いた。

「……………アंक」

ぼんやりと、無意識のうちに漏れ出たその名前。  
名を呼ばれた赤き鳥人は、無機質な緑の目で、目の前の虚ろな少女を見下ろした。